# 合わせ月の夜

天ヶ瀬夏海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
合わせ月の夜

【Ｎコード】
Ｎ２７５７Ｏ

【作者名】
天ヶ瀬夏海

【あらすじ】
エーテル（精霊波）という、特殊な力の源が大気中に満ちた異世界ファランドール。
ファランドールにはエーテルの力を使える者が二種類いた。
詠唱（ルーン）によりエーテルの力を自在に引き出す事ができるルーナー。
そして単一の属性ではあるが、先天的にエーテルの力を持つフェアリーである。
異世界ファランドールで目覚めた少年は、心の中にもう一人の意

識を宿していた。
エルデと名乗る、ファランドール人のルーナーである。
エルデは記憶の無い少年にエイルという名と、ファランドールで生きてゆく為の知識を与えた。
二つの意識は一つの体を共有しながら、それぞれの目的の為に歩き出す。
エイルは、元の世界に戻るため。
そしてエルデは自分の体を取り戻すために。

# 前文

サラマンダの山岳地帯に古くから伝わる話がある。

内容はこうだ。

「サクランボの花が咲き始める頃、
黒髪の若い旅人が町を訪れたならせいぜい気をつけろ。
そいつはサクランボの花の精で、
あっという間にその町で一番綺麗な娘の心を虜にして連れ去っていく。
サクランボの豊作と引き替えに」

これから始まる物語は、サクランボの精霊……いや、そんな様々な精霊達の存在がまだまだ人々に信じられていた時代にさかのぼる。

そう。これは「月の時代」と呼ばれる、このファランドールがまだ四つの国に分かれていた頃の話である。

# プロローグ

森には雨が降っていた。
ただでさえ鬱蒼とした原生の森の中、しかも夜である。
月も星も、遙か雲上で確かに輝いてはいるはずであったが、それさえ疑ってしまうほどの闇がその森を支配していた。
その深い闇と強い雨は、森に入り込もうとするあらゆる者を拒んでいた。

ーーだが、そんな森を行く人影があった。
闇で姿形はわからない。ただ、激しい息づかいとぬかるんだ地面を蹴る濡れた足音だけがその何者かの位置をあやふやながらも特定させている。しかしそれも強い雨音に消されがちで、ましてや暗闇の中ではとてもその「何者か」を的確に追いかけることなどかなわない状況と言えた。

森を行く影は確かに何かから逃げていた。
時折立ち止まっては後ろを振り返るのでそれとわかる。そして雨音に耳を澄ましては、再び走り出す。
いや。
耳を澄ませているだけではなかった。
人影は立ち止まる度に何かをつぶやいていた。
独り言？
そうではないようだ。
どうやら何か詩のようなものを口にしているようだった。
一体何の為に？

「駄目か」

何度か立ち止まり同じように何かの一節を詠唱し終えた後、その人影ははじめてはっきりとした声を出した。

男の声だ。

思わず口を突いて出たその言葉からは焦っている様子がうかがえた。

ややあって闇に向かって再び走り出した男に変化が起こった。

男が立ち止まったのだ。

それは何度か後ろを振り返り、まるで追っ手を確認するかのように立ち止まっていた今までとは違う。行く手にある何かに気づいて立ち止まった……そんな感じであった。

彼は歩みを止めたまま墨色の空を見上げていた。次に彼はゆっくりと深呼吸をして息を整えると、覚悟を決めたかのように肩の力を抜き、落ち着いた声で上空の闇に向かって語りかけた。

「あなたですか？イオス・オシュティーフェ」

その言葉は、まるで見上げた先に誰かがいるかのように語りかけられた。

空に？それとも樹上に？

男が声をかけて少したつと、男の前方、まさに男が見上げる漆黒の闇空に突如として淡い光が現れた。

光に照らし出された男の姿は雨でずぶ濡れではあったが、雨を含んで体に密着している着衣は一目でわかるほど立派なものだった。

その黒っぽいローブは教会関係者がよく羽織るもののように見えた。そして袖口に飾られた金糸の瀟洒な刺繍から推測すると、それはかなり高位にある者が着用する服、しかも何か特別な儀式に際して用いられる正装の法衣のようだった。

法衣を纏う男の背は高い。歳は初老といったところだろうか。かぶり物をしていない頭は禿頭だが、あごには豊かな金色のひげがたくわえられている。

整った顔立ちのようではあったが、落ちくぼんだ右目のまわりに赤黒い大きな痣が見える。
そして、その痣の横からはえる耳の先端は細く尖っていた。
アルヴだ。
右手には白っぽい石のような物で出来た背丈よりも長い杖が握られていて、その杖の上部には大きな水晶の玉……スフィアが埋まっていた。
さらに男を観察すると、おかしな事があった。
まだ雨は強く降り続いていたが、今は男に雨粒がかかっていない。
周りを見渡すと、法衣を着た男を中心としてざっと半径十メートルの範囲にだけ、雨粒が落ちている様子がなかった。つまり、男は丸い屋根の下に立っているような状態だったのだ。
だが、森に屋根や傘などあろうはずもない。
雨を避けるものがあるのではなく、それでもその男の周りにだけは雨が降り注いでいないのだ。

佇む男に向かって、ゆっくりとその光が降りてきた。
近づくにつれ光の源の正体がわかった。それは杖だった。
アルヴの男と同じような儀仗の頭頂部にあるスフィアが光を放っていた。
そして勿論、その杖を握る者がそこにいた。

「『イオス・オシュティーフェ』か。もはやその名で呼んでくれるのはお前だけだよ、「真赭の頤《まそほのおとがい》」」
光る杖の主は男にそう声をかけた。
背の高い禿頭の男はその声を聞くと身を屈めて片膝をつき、儀仗を地面に置いて深く頭を垂れた。
「お久しゅうございます。息災のご様子、なによりでございます」
「何を考えている？「真赭の頤」。いや、この場は君に倣って「シグ・ザルカバード」と現名《うつしな》で呼んだ方がいいのかな」

イオス・オシュティーフェと呼ばれた光る杖を持つ人物は、禿頭の男にそう言うと小さくため息をついてみせた。

法衣を纏った初老のアルヴを跪かせた杖の主の声は少年のものだった。身長も低い。大げさに表現するならば、初老の男の半分ほどの大きさにしか見えないほどだった。

だがその少年の前で、教会でも高位にあると思われる人物が跪いていたのだ。

少年は金糸で縁取りされた紺色のローブを纏っていた。初老の男と違い、その服には雨がかかった形跡がまったくない。短めの髪は薄い金色で、光に照らされた顔は白い。耳の先端は男と同じように先端がやや細くなっていて体格の差はあれど、種族の近似性を伺わせる。

アルヴィン……彼はそう呼ばれる種族だった。

「真赭の頤」と呼ぶ大柄な初老のアルヴを見下ろすその瞳は杖の光を受け緑色に輝いていた。

「この大雨は君の仕業かい？」

イオスと呼ばれた少年は周りの地面で音を立ててはじかれる雨の様子を見渡してそう言った。

「恥ずかしながら」

「天候を操るとは、まったく無粋だね。今夜は雲もなくて綺麗な満月が見えるいい夜だったんだよ」

「双び望月《ならびもちづき》、でございましたな」

「だからこそ『授名の儀』があったわけだけど。でも、まさかこんな雨程度で逃げ切れると思ったのかい？」

「三聖さえ不在であれば、あるいは、と」

「真赭の頤」はうつむいたままそう答えた。

「でも、君はたぶん僕に捕まると思ってた」

「御意でございます」

イオスは再びため息をつくと、今度は何かを小さく呟いた。すると「真赭の頤」の体が鈍く光り、あっという間に黒の法衣が乾き、濡れ鼠のような初老のアルヴの惨めな様子が一変した。
「君と僕の仲だ。とりあえずは話を聞こう。顔を上げておくれ」
イオスの言葉を受け、「真赭の頤」と呼ばれたアルヴの男はゆっくりと顔を少年に向けた。あたりを照らすその光は、初老の男の瞳が灰色がかった緑色であることを教えてくれていた。

「あの場はどうなりました？」
「ひどいものさ。君は一席と次席の者を合わせて四人も殺したんだよ」
「真赭の頤」は小さなため息をつくと、再び頭を下げた。
「彼らには……申し訳なく思っています」
「ふん。殊勝なことを言う割には四人とも死んだと聞いたとたん、ホッとした顔になったのはどういう事だい？」
イオスの指摘に「真赭の頤」はかすかに苦笑を浮かべて見せた。
「まあいいや。それよりひょっとして君はあの時、一緒に自分の弟子も手にかけたんじゃないだろうね？」
「いえ……我が弟子は『授名の儀』に喰われました」
「そうか」
「真赭の頤」はそれまで片膝をついたままだったが、イオスが口ごもったのを機に居住まいを正した。
両膝をついて正座をすると脇にあった儀仗を膝の前に横にして置きなおし、両手をついて深々と頭を下げた。
「申し訳ありません。私には語る言葉はございません。ここで三聖の裁きをいただきとうございます」
「シグ」
「ですが一つだけ。許されるならば一つだけ我が願いをお聞きいただきたいのです。ティーフェの王、イオス・オシュティーフェ様」
「真赭の頤」シグ・ザルカバードのその言葉を聞くと、イオスは

唇を噛んで腕組みをした。
「そうか。僕には話せない事か」
「……」
「わざわざ誰も追って来られない所へ僕を誘い出しておきながら、それでも話せない事なのかい？」
「……」
「新教会と何か関係があるのか？」
「……」
「わかった。では君のその心残りとやらをとりあえず言ってごらん」
「実は私にはもう一人、弟子がおります」
「ほう」
弟子、という言葉に興味を示したイオスの雰囲気を感じたシグは声の調子を強くして続けた。
「既にご存じの通り、私は罪を犯しました。自らの行為に悔いなどございませんが、罪は罪。そしてその罪はあまりに大きく深うございます」
「ふむ」
「私の心残りはただ一つ。その大罪人を師としてしまった、罪なき者の行く末のみ」
「「賢者の徴《しるし》」」に選ばれるだけの力がある子なのかい？」
「御意」
「だけど今日、君が推したもう一人の弟子は『授名の儀』、つまり「賢者の徴」に喰われたのだろう？君の見立てが狂うのは信じがたいけど」
「いえ、今宵の弟子はっ！」
シグはそこで声を一段と大きくした。
「喰われるべくして喰われる者だったのです」
「何だって？」
その言葉を聞いたイオスの口調が初めて険しいものに変わった。
だが、シグはすぐに声の調子を元に戻した。

「しかし、残された弟子は「賢者の徴」を受け継ぐだけの力を持った器でございます。次席、いえはじめから次席は無理でしょうが既に三席の実力は備えております。なにとぞ」

両者に沈黙が流れた。

しばらく強い雨音だけが二人の耳に響いていたが、イオスが先に口を開いた。

「次席候補の三席か。わかった。大切な友人の頼みを引き受けようとする心くらいはこんな僕にも残っているよ、シグ・ザルカバード」

「も、もったいない」

友という言葉に反応し、シグは感謝の意を額を濡れた地面に押しつける事で表した。

「弟子の現名を聞いておこう」

「我が最後の弟子はアルヴの娘で、現名をラウ・ラ＝レイと申します」

「ラ＝レイ一族の娘、ラウか。なるほど承知した。その娘は我が子として貰い受けよう」

イオスは穏やかにそう言った。

その言葉を聞いたシグはハッとして顔を上げた。視界は涙で歪んでいたが、そこにはすこし困ったような顔をした小柄なアルヴィンがいた。

シグはもちろん気付いた。イオスが「弟子」ではなく「子」と言った事を。

「何も言うな」

イオスはそう言ったが、シグは涙声で感謝の言葉を告げた。

「ありがたき幸せ。これでもう、我が一生に悔いはございません」

「シグよ」

アルヴはその呼びかけには答えず、目を伏せると居住まいを正し、厳かな声ではっきりと言った

「では猊下《げいか》。三聖としてこの「真赭の頤」の大罪に相応

の裁きを」
　そのシグの言葉にイオスは肩を落として悲しそうに小さく首を横に振った。少年のような顔立ちをした金髪のアルヴィンのそのしぐさはなぜか老人のように弱々しかった。

「猊下、か」
　自嘲的にそう呟くと小柄な少年は空を見上げた。
　杖から出る光を白く反射して大粒の雨が絶える間もなく降り続いていた。そしてそれを見上げるアルヴィンの瞳にはただ暗い闇が広がるばかりであった。

# プロローグ　二

（ウチは……ホンマに……甘いな）

月明かりに煌々と照らされた長い石の回廊を、小さな影がゆらゆらと歩いていた。

すでに思い通りの動きすらできない程重くなっている自分の体を無理矢理引きずるようにして歩きながら、独り言の主はそう自分自身を呪った。

『誰も信じるな』

頭に浮かぶその言葉を何度も反芻していた。

独り言の主はどうやら大きな怪我を負っているようで、脇腹からジクジクと流れ出る血を止める為に片手で傷口を圧迫しながら、一歩一歩前に進んでいたのだ。

長い回廊の端に月明かりが途切れる場所があった。何とかそこまで持ちこたえた小さな影は、もう一歩も歩けないと言った風情でその場に崩れ落ちるように座り込んだ。

その格好のままで何かを少し呟いたあと、今度はそれとわかるような大きなため息をついた。

―（やっぱり……ここも疑似「エア」の結界内、か）

声の主がそう自嘲気味に呟いたのかどうかは定かではない。言葉は既に声にさえなっておらず、座り込んだ場所は月明かりの陰にあり、うつむいた声の主の唇の動きを読み取ることさえできなかったからだ。

小さな影が座り込んだ場所は、巨大な石造りの建造物が複数連なる広大な敷地の一角にある回廊の角にあたり、そこにある壁のせいで月明かりの及ばない場所になっていた。つまり、遠目からはその

怪我人の姿をすぐに認めることは出来ない状況だった。
おそらくその場所がとりあえずの目的地だったのだろう。小さな影はつまり、自らの姿を闇に紛れ込ませる事にはなんとか成功したといえた。
あたりを見渡し人の気配がないのを確認すると、その小さな影は床についた左手を持ち上げて、空にかかる二つの月の光が届く場所へかざしてみた。
その手は脇腹を押さえていた手のようだった。はめた手袋が血を吸って赤黒く染まっていた。
―（フフ。こんな傷やのにぜんぜん痛うないっていうのがせめてもの救いやな……ホンマならあの時に激痛で気を失うて、何もかも全て終わってたやろし……全く……我ながら用心深いことや）
自分の血でどす黒く染まった左手を見ても、声の主である小さな影は特に動揺するでもなく、ゆっくりと深呼吸を繰り返してなんとか少しだけ息を落ち着ける事に成功した。
そして今度は右手を月光にかざした。手袋をはめていない右手は手首の辺りが少しだけ血で汚れてはいたが、あとはきれいなままだった。
中指にはめられていた指輪が、月の光を受けてキラリと光った。小さな影はその指輪を確認したのだろう。
それは木でできた質素な指輪で、白・茶・黒の三色の紐をより合わせたように塗り分けられていた。光ったのはその指輪ではなく、表面に埋め込まれている色とりどりの無数の小さな宝石のようだった。

すうっと深呼吸をすると、小さな影はその指輪に向かって小さく何かを呟いた。
すると一瞬後にはその右手に木製の長い杖が水平に握られていた。
その長い杖……儀仗は、色違い……白・茶・黒……の三本の木を撚ったような作りになっており、地面を突く下の方は細く、上部に

行くに従って緩やかに太くしつらえられていた。頭頂部は大人の拳大の大きさで、そこに色のついた水晶の玉……スフィアと呼ばれる石がいくつも埋め込まれていた。

―（まさかこれを使う羽目になるなんてな）

小さな影はそのスフィアの一つにそっと顔を近づけると、話しかけるように何かを小さく呟いた。

するとスフィアはその言葉に反応するかのように小さな紫色の光を放った。せっかく闇の中に紛れたにもかかわらず、声の主は自らの所在を教えるような行動をとったわけだが、もうそう言うことを気にかけてはいない様子だった。

―（できればこの手の呪法はもうちょっと気の利いたところでやりたかったんやけど……、ここまで傷が深いと……失血でそろそろ意識が怪しくなってきてるし……贅沢は言ってられへんって事やな）

独り言の主は左手にはめてある革手袋を外そうとしたが、右手が思うように動かないようだった。仕方なく今度は手袋を口でくわえて外そうとしたが、それすらも思うようにいかず何度も小さく咳き込んだ。一度はむせてついに吐血をした。

自分の吐いた血を見て、儀仗の主はその時初めて自分の運命を見せつけられたような切ない気分に襲われた。せっかく一度はある程度整えた呼吸は乱れ、少なくなった血を何とか有効活用しようとしているのだろうか、心臓の鼓動はめまいがするほど速かった。

それでも食いちぎるようにしてなんとか手袋をはずすと、血でどす黒く濡れたその左手の中指に填められている紫色の石で出来た指輪を、同じように儀仗の頭部で紫色に光るスフィアに翳した。

「気づいてくれ……我が師」

そうつぶやいたとたんにその紫色のスフィアの光が増し、あたりに淡い光芒を放った。いや、光だけではない。スフィアの表面に複雑な文字列が金色に浮き上がったのだ。杖の主は最後の力を振り絞るように遠ざかりつつある意識にあらがい、鉛のように重いまぶたを必死に開けてその文字を一通り読み終えると、今度は静かな微笑

を浮かべ、目を閉じて長い呪文のようなものを詠唱しだした。
「我が名は……精霊の主にして……て友……古の契約を……有し……一つ……」
長い詠唱だった。さらに言葉は度々途絶えた。だが、詠唱の後半には最後の最後の力を振り絞り、とぎれとぎれながらもはっきりとした声を発し、一つの文章を締めくくった。
「ーー全ての世界に在り我に最も近い者と……共に……祝福……されし……ファランドールに……あれ」
全てが終わると、声の主はゆっくりと目を閉じた。いや、むしろそこで力尽きたと言った方が適切な表現であろう。

数秒ほど何もない時間が流れた後、その場に劇的な変化がおこった。
スフィアの紫色の光が大きく球状に広がりはじめ、詠唱者を飲み込むほどになると、ひときわ明るく輝き、その後忽然として消えた。
さらに一瞬の静寂の後、カチンという軽い金属音を伴い、儀仗のスフィアと中指に填めてあった紫の石の指輪が同時にはじけ砕け、その破片は床に落下する前に空中に吸い込まれるように消失した。
回廊の一角にただ一人残された三色の儀仗の主の体は、やがて冷たい石の廊下にゆっくりと崩れ、俯せに横たわった。右手に握られていた儀仗は支える者の手から離れると、こちらもゆっくりと弧を描いて床に倒れていった。しかしその儀仗は床に衝突する寸前に、まるで煙のように消え去った。
二つの月が作る闇の片隅に残されたのは、沈黙を纏った小柄な詠唱者だけだった。
長い詠唱を終えた薄く小さな唇にはすでに生気はない。そして腹部の傷口からは、赤黒いものが染み出て石の床にゆっくりと水たまりを作り出していた。
生の気配は既にそこにはなく、静寂がその空間に存在するだけであった。それはすなわち一つの人間の命の終わりを示していた。

ほどなくけたたましい金属の擦れあう音を共にして五人ほどの男達がその場に駆けつけ、死者の寝所の静寂を破った。
手にした片手剣と革でできた軽い盾、うるさいくらいの金属音をがなり立てる物々しい鎧などから、一目で彼らが兵士であることが知れた。
「血の痕があるぞ。こっちだ」
崩れ落ちた影のそばで兵の一人が叫ぶ。
程なく複数の兵士が杖の主の骸を見下ろすように立っていた。
「おわ。血の海かよ」
「ー死んでるのか？」
「おい、こいつはまだ子供じゃないのか」
そう口々に言い合いながら彼らが詠唱者の遺体の近くに一歩踏み出そうとした瞬間であった。
兵達の持つ松明と、二つの月光以外には光が存在しないはずの石の回廊の一角に、今まさに真っ白な一条の光の筋が現れた。それはその場の空間を上下に分断するように面状に広がっていった。
「な、なんだ？」
横たわった遺体を確認しようとした兵達はあわてて動作を止めて立ち止まり、その光を見つめた。
だが、彼らがその光に対する感想を口にする時間はなかった。一条の光の筋は面積を得て広がり出すとすぐに小さな亡骸を覆い尽くした。
そしてそれは次の瞬間に直視できないほどのまぶしい光を放って、消えた。
まぶしさで視力を失った兵達が松明の明かりにようやく慣れた頃には、そこには何もなかったのだ。
いや、それだけではなかった。
彼らは今そこに何かが存在した事を忘れていた。なぜかその場で佇んでいたという記憶があるだけだ。

「おい、どうした？」
続いて駆けつけた一人の兵が彼らのそばまでやってきて、立ち尽くしている仲間達に不審げな声をかけた。

「あ？」
「え？」
その声に、今までそこにいた兵達ははっと我に返った。
「賊はどうした？ここに何かあるのか？」
声をかけた兵は松明を高く掲げると、棒立ちになっている兵の頭越しにそのあたりを見渡した。
「何もないじゃないか。お前達ここで何油売ってるんだ？」
「いや……」
「そうだな……俺たち何してるんだっけ？」
後から来た兵はため息と舌打ちを続けると呆れたように言った。
「さっさと探せ。あの傷じゃ遠くにはいけん」
「お、おう」
「おかしいなあ？何かここにあったような気がしたんだが」
一人の兵士がそうつぶやいたが誰もその言葉に反応はしなかった。
そんなはずはないのだから。

彼らは首をひねりながらその場を離れ、おのおの捜索を再開した。
後から来た兵は彼らが役目に戻ったのを見送った後、改めて松明を掲げて回廊の隅々を松明で照らしてみた。通路には点点と小さな血痕が続いており、そしてそれは彼らの足下まで続いて、おかしな事にそこで忽然と消えていた。その場には回廊に面した空き部屋が一つあったが、その扉は堅く閉ざされており、中の様子はわからない。
その兵は自らの思いつきに緊張するとごくりと音を立ててつばを飲み込み、その回廊に面した部屋に歩をすすめた。部屋の前で少しためらった後に分厚い木で出来た扉をゆっくりと押し開くと、充分

に警戒しつつ意を決して松明を部屋に差し入れる……。

だが、松明の揺れる柔らかい光に照らし出されたのは窓一つないカビ臭く狭い石の部屋であった。人の気配はない。

彼は念のためにその部屋に入り込んで床の隅から天井まで改めて吟味した。だがもちろんその部屋はただの無人の小部屋でしかなかった。

# 第一話　アクラムの森

＞ｉ２３４５７―１８３１＜

何度か影が舞った。

いや、舞ったように見えた、という方が正確であろう。影なのか、幻なのかさえ定かではないのだ。ただどちらにせよ、その白い影を見たものは声を上げる間もなく次の瞬間には意識は途絶えていて、影の正体を確かめることはかなわなかった。

森の中を駆けながらシエナ・フィリスティアードは生涯最大の失敗を冒したことを自覚した。味方の部隊はあっと言う間に総崩れになりつつあった。

退却の合図は既に指示済みだった。だが一向に「調べ矢」の音がしない。おそらくシエナの命令を受けた部下は矢を空に放つ前に敵の手にかかったのだろう。

シエナの部隊では誰もが「調べ矢」を所持しているわけではなかった。

「戦うな、逃げろ！」

森のどこかで誰かが叫ぶ声が聞こえる。あの野太い声は副隊長であるメビウス・ダゲットの声だろう。

―（そうだ、逃げろ）

もはや勝ち負けの問題ではなく、生き延びられるかどうかという状態に入っていることはシエナ同様に誰もが感じているはずだった。

「退却だ！」

「逃げろ！」

味方同士の声が響く中、全速力で駆けながらシエナは辺りを見渡した。

「ルルデは？」
シエナは声を出して誰にともなく尋ねた。
「どこだ、ルルデ？」

ドライアド軍とおぼしき小隊の拠点を強襲した時には傍にいたはずの弟の姿が見当たらないのだ。
シエナは焦った。
（ルルデでは）
そうだ。
―（相手が悪すぎる）
シエナは立ち止まるとためらわずに踵を返して今来た道を駈け戻った。
表情は険しい。
そしてそれは引き返すにつれ、だんだん引きつったものに変わっていった。
かなり戻ったにもかかわらず姿が見えないということは、彼の弟のルルデが退却している様子が無いことを示していた。
―（あるいは、もう）
シエナは唇を噛んだ。血が滲むのもかまわずに、強く。

「少佐」
立ち止まったシエナの側に副隊長のメビウス・ダゲットが駆け寄って来た。髭面の豪傑として鳴らしているメビウスの肩には血がにじんでいた。おそらくは矢傷であろう。まだ動けると言うことは、幸いにして毒矢ではなかったということだ。
「こっちは駄目です」
しゃがれたような声でダゲットはそう報告した。ずっと大声で退却の指示を出し続けていたに違いない。
「そうだな。数が少ないくせに敵があまりに強すぎる。勝手知ったるアクラムの森で俺達が歯が立たないとは。まさかとは思うが……

スプリガンの小隊なのか？」
「いえ」
メビウスは首を横に振った。
「今となっては繰り言ですが、スプリガンの方がまだマシだったかもしれません」
「なんだと？」
「先ほどチラリと敵のマント下を見ましたが、あの黒い軍装はドライアド軍ではありません。もちろん侯国軍でも。あの服と戦闘力から察するに、我々はおそらくシルフィード王国軍のフェアリー部隊に突っ込んでしまったようです」
「シルフィードだと！」
シエナはメビウスをにらみ据えた。
メビウスのせいで相手がシルフィード軍になったわけではないのは分かっていた。自分のいらだちをぶつける相手が必要だったのだ。
メビウスとてそんな隊長の心理は痛いほど理解していた。
「私は昔、シルフィード王国軍と合同演習を行ったことがあります。おそらく間違いありません。奴らはシルフィード軍です。それもあの軍装は海軍のものです」
「今頃なぜシルフィードの、それも海軍がサラマンダのこんな山中にいるんだ？」
シエナは絶句した。
「何かの作戦、おそらく補給の為に先行隊が駐留していたのでしょう。そして考えたくない事ですが、奴らはあのル・キリアかもしれません。『ドールがいた』と叫んでいた兵士がいました」
「まさか」
シエナは乾ききってひび割れている唇を噛んだ。ひび割れから唇の肉を割って血がにじみ、鉄の味が口中に広がった。それはまさにシエナの今の胸中にふさわしい味だった。
ドライアド王国の精鋭部隊であるスプリガンと並んで、シルフィード王国のル・キリアは間違っても戦ってはならない相手だった。

いや、シエナ隊とル・キリアとは本来なら出会うはずもない相手なのだ。

シルフィード国王直轄の特務フェアリー部隊、それも選び抜かれたごく少数の精鋭だけで組織された部隊の名がル・キリア。

そしてその名はファランドール中にあまねく轟いていた。

ドールとはその精鋭部隊のル・キリアにあってさらに特別視されている者の通り名だった。本名や階級などの詳細まではシエナも知らなかったが、ドールについての数々のおぞましい噂は当然のように知っていた。

敵の陣を迂回する形で進んでいたシエナとダゲットは、やがて切り立った崖に行く手を阻まれ歩を止めた。

「卑怯者め！」

まさにその時、前方のその崖下から声がした。

「ルルデ！」

# 第二話　ルルデ・フィリスティアード

（生きていてくれたか！）

シエナは声よりも速く体が動いていた。今聞こえたのは間違いなく、弟ルルデの声だった。

生きていた。

その思いに身体中の力が抜けてゆくような安堵を感じたのは一瞬で、代わりにシエナを襲ったのはそれ以上の絶望だった。

弟は今まさにその戦ってはならない相手、ル・キリアの兵士と対峙しているではないか。

―（逃げろ。相手は特殊な能力を持つ戦闘フェアリーなんだぞ）

シエナは声にならない声を上げながら崖の縁に駆け寄ると、声が聞こえた下方を見た。

そこには旧サラマンダ王国正規軍の赤い軍服を凛々しく纏った黒髪の少年が一振りの両手剣を右手一本で掲げ、前方の森に対して威嚇する姿があった。それはまさしくシエナ・フィリスティアードの弟であるルルデだった。シエナはルルデの剣先が示す前方を見やった。彼の弟が立っている場所は少し開けた窪地になっており、今のところそこにはルルデの姿しか見当たらなかった。

シエナが眼下の弟に呼びかけようとした時、前方の森に向かってルルデは再度大声で叫んだ。

「隠れたところからこそこそ攻撃するのがお前達のやり方なのか？そんなに俺達が恐ろしいか？お前達も戦士の端くれなら、姿を見せて名乗りを上げ、ここで俺と正々堂々と勝負をしろ！」

シエナが聞いてもルルデの言っていることは全く馬鹿げた言い分だった。

戦争に卑怯も何もない。ましてや結果論ではあるが、相手をよく確認もせずに奇襲を仕掛けたのはルルデの部隊の方なのだ。正義だ

とか正々堂々という言葉を持ち出す事が許されるとしたら、それは降りかかる火の粉を払おうとしているに過ぎない相手側にあった。

もちろんルルデとてそんな事は百も承知なのだろうが。

作戦が全くの失敗だったことは場数を踏んでいるだけにルルデもすぐ理解したし、相手がかなりの戦闘力を持った集団であることも次々に耳にする味方の断末魔で証明されていた。

つまり、まともに戦って勝てる相手でないのは分かっていた。

だが、まともに戦う前に倒れて行った仲間を見ると、自らの腕を信じ、握りしめた剣を振るう事しか残された道は無いとルルデは決心していたのだ。

せめて一矢、いや一太刀を報いたいという思いが大きすぎて、若いルルデの胸の中には逃げるという選択肢はまったくなかった。

その態度からは、恐れずに相手に向かっていく……例え恐れてもそれを押さえ込む勇気で敵に対峙する……そんな気概が伺えた。そういう性格だからこそこれまで良い戦士として成長して生き残ってこれたのだとも言える。そして勿論、その裏付けとなる剣の腕前を有している事は容易に想像出来る。

相手の底知れぬ戦闘力を前に持ち前の負けん気と勇気を総動員して、恐怖の沼に進み落ちようとした自らの足を踏みとどめる事に成功した優秀な兵士であるルルデは、前方の森に潜むまだ姿を見せぬ敵を睨みつつも彼なりに計算していた。

森の中は相手の得意とするところのようだった。

であれば、開けた場所での剣による一騎打ちでせめて活路を、と。

そう考えたのである。

背後に自分を追ってきた敵兵の気配を感じていた時から『駄目でもともと』という気持ちがあった。博打でもいいと考えてここに一気に駆け込んだのだ。

森の木に隠れて狙い撃ちされる可能性はあったがここまでくればその森からは少し距離がある。矢を見てから避けることは可能だという判断もできていた。

「俺はルルデ。ルルデ・フィリスティアードだ。サラマンダ王国軍フィリスティアード独立部隊の隊長シエナ・フィリスティアード少佐の弟だ」

ルルデの大声は楽に森の中に届いていた。

しかし、森の中からは何の反応もなかった。

「どうしたっ。怖じけづいたか」

さらに叫んで挑発するルルデに、ようやく兄が崖の上から声をかけた。

「ルルデ！やめろ。撤退だ」

「え？」

頭上からの思いもしなかった兄の声にルルデは驚き、極度の緊張の中で一瞬だけ瞳に希望の光が宿った。しかしすぐに兄が居るのが切り立った遙か高い崖の上だということを悟ると一瞬歓喜した自らの甘さに内心で苦笑した。

「兄さん、よかった。無事だったんだね」

崖の上に聞こえるように大声でそう呼びかけた。

「撤退だ、逃げろ」

兄は同じ事を繰り返した。その言葉にルルデは唇を噛んだ。

「駄目だ、兄さん。敵がそこにいるんだ。逃げ道はない。兄さんこそ早く撤退して部隊を立て直せよ」

「戦うな。降参しろ。この戦いにはもう意味がない」

その兄の一言は、ルルデの体を巡る血液を逆流させた。

「意味がないなんて言うなよっ！」

怒号だった。

シエナの耳を突き抜けるようなその叫びには、やりきれない思いが込められていた。その声は傍らの副官の胸にも響いた。

隊長が言ってはならない言葉だとルルデは責めているのだ。例え

それが真実であったとしても。シエナはしかし、その思いを振り払った。

「仲間が大勢やられたんだぞ。ここで俺が剣を投げ捨てるなんて、そんなこと、できるかよっ」

ルルデは首を振ると再び視線を前方の森に向けた。

だがシエナは、弟の命に執着した。

「バカ野郎、みすみす死んでどうする。逃げるんだ、ルルデ」

「死ぬと決めつけるなよ！」

ルルデは自分でそう口にしたものの、どう考えても勝てる気はしなかった。

その覚悟はシエナにも伝わっていた。死を覚悟しているとしか思えない弟の様子にシエナは焦った。改めてあたりを見渡すが、どこも切り立った崖で下の窪地に降りられそうなとっかかりなどはなかった。ルルデの居るところにたどり着くにはかなり迂回して森の中を通る必要がある。

「駄目です、シエナ様」

思いあまって崖を転がり降りようと決心して体を乗り出したシエナの肩を、慌てて背後からメビウスが掴んだ。

「辛いでしょうが、あなたには生き延びて我が軍の態勢を立て直す役目があります」

「言うな、メビウス」

「お忘れですか？あなたに弟がいるように、私にも妹がおります」

「メビウス……」

シエナは今日の出陣に際していつものように心配そうな顔で手を振っていた栗色の長い髪をした鳶色の瞳の少女の事を思い出していた。

「そして下にいる勇者はその可愛い妹の許嫁です。つまり彼はもはや私の弟でもあります。ですからお気持ちは痛いほど分かります」

「しかし」

「だからここは一つ私にお任せください。なあに、こう見えても運

はいい方です」
「メビウス？」
メビウスはそう言うとなんとか着地できそうな位置を吟味するためにルルデのいる窪地を見渡した。

その時である。
ルルデが睨み据えた森の中から白っぽいゆったりとしたマントのようなもの……それはシルフィードの民間人の旅装束だったが……を纏った、小さな人影がぽっかりと現れた。
それは若いダーク・アルヴの娘だった。

成人であってもかなり小柄なダーク・アルヴや同じ種族で肌の色が白いアルヴィン族の見た目をシエナやメビウスのようなデュナンのそれに当てはめて年齢を推測するのは危険だが、シエナにはその少女の年の頃は成人したて……つまり十七、八歳そこそこに思えた。真っすぐなさらりとした黒い髪は首筋のあたりまでの長さがあり、折から吹く風で小さく揺れていた。

まっすぐに前方、つまりルルデの方を見て姿勢良く直立する少女の様はゆったりとした風を纏って可憐だった。「敵」であるとか「兵士」などという単語は彼女の佇まいから連想される言葉としてはもっとも遠くに位置するものだと思えた。

二種類存在する小柄なアルヴ族の中でも少女がアルヴィンではなくダーク・アルヴの血が濃いと判断できる理由は、その髪の色と褐色の肌にあった。肌の色は個人差があり日焼けなどによってアルヴィンがダーク・アルヴに見えることもないとは言えないが、そもそもアルヴィンに黒い髪の人間はいない。少女は遠目にも鼻筋の通った相当な美少女だと知れたが、ダーク・アルヴのもう一つの証である褐色の肌は美しさに精悍さを加えていた。
おそらく彼女は無表情なのだろうが、シエナにもメビウスにもそ

の少女がまるで優しく微笑んでいるかのようにしか見えなかった。それは彼女の特徴といえる優しく垂れ下がった目尻のせいであろう。その瞳の色は濃い緑色で、その少女が間違いなくアルヴ族だけの血を引いていることを表している。アルヴやアルヴィンと言ったアルヴ族は緑の目を持つが、デュナンとの間には緑色の瞳を持つ子供は生まれない。シエナもメビウスもアルヴ族のその特徴を常識として知っていた。

だが、もちろんシエナとメビウスはその少女の優しく美しい佇まいに目を奪われている時間などはなかった。

少女の黒い髪が風で揺れ、時々あらわになる細長くとがった左耳の耳朶に付けられていた耳飾りが彼らを血なまぐさい現実に引き戻した。

その耳飾りとして揺れるスフィアに……子供の親指の先ほどの大きさの金色のそれに、彼らの目は釘付けになった。

二人は顔を見合わせて今仕入れた情報を銘々自らの記憶に照らし合わせた後、ほぼ同時に合致する符号を見つけ出して戦慄した。

「「白面の悪魔」！」

「やはりル・キリアだったのか」

メビウスの声からは少女の名前が、そしてシエナの口からはうめきに似た声が漏れた。

「あれが悪名高いル・キリアの隊長ですか。よりによって……」

メビウスの声にも絶望感が強く、そして暗くただよっていた。

「「白面の悪魔」、アプリリアージェ・ユグセル……」

一方思ってもいなかった美少女の出現に、ルルデの方は混乱していた。

混乱というより状況把握をする能力が一時的に凍り付いたと言った方がいいやも知れない。敵の出現にも関わらず、投げつけるべき言葉を失ったその一瞬の戸惑いの間に、何か別の白い影が視界の左

側をよぎったように見えた。その影を追おうとして視線を左側に動かそうとしたその瞬間、

「勝負は付いた。剣を捨てよ」

今まさに顔を向けようとしていた、その左側から静かな声がした。声のする方にそのまま視線を向ければ、それは紛れもなく金色のスフィアの耳飾りをつけた、太い眉と下がった目尻が特徴的な…褐色の肌の小柄な美少女がそこで発した声だった。

ルルデはその声に驚くべきだった。だが、心は違う驚きに支配されたままだった。

―（この小さな女の子が、俺の戦うべき敵なのか？）

それはおよそ戦場で抱いてはいけない感情であり、ましてやその少女を不思議なものを見るようにぼうっと見つめるなど言語道断の行為と言えた。

だが、ルルデはその状態に陥ってしまっていた。

―（くそっ、俺は何をしているんだ）

程なく意識を立て直したルルデは、つい今し方まで目の前で静かに佇んでいたはずのダーク・アルヴの少女が今度は自分の左手で姿勢を低くし、小型の弓に細くて短い矢をつがえてそこにいる状況を認識した。

小柄な体のほとんどを覆っていた白っぽいマントはいつの間にか脱ぎ捨てられ、黒い上下の動きやすそうな軍装に身を包んだダーク・アルヴの少女がそこに居ることは事実として理解したルルデだが、何が起こったのかがわからなかった。

目の前には確かに今の今までその黒い髪の少女が……。

間近で二人の視線が合ったその時、少女の方もルルデの顔を見て、この時初めて表情を変えた。目が大きく見開かれたのだ。それは驚きの表情だった

「黒髪に、黒い瞳？」

少女のそのつぶやきを聞くとルルデは軽く舌打ちをして、自らの記憶を裏付ける為に視線を少女が元いた場所にチラリと移した。

そこには……先ほどと同様、確かに白いマントを着た少女がいた。

――（いや、違う）

そこには確かに白い服を着た人間はいた。

だが、そこに立っている人物は黒髪で太い眉と垂れた目尻が特徴的なダーク・アルヴの美少女ではなく、肌の色が白いアルヴィンの……黒ではなく銀髪の……おまけに少女ではなく少年だった。

少年の年齢はにわかには計り兼ねた。

アルヴィンであるからという訳ではなく、顔の表情がまったく分からないのだ。

シルフィードのアルヴ兵に時々見かけることがあるが、その小柄な少年の顔にも独特の模様で戦いの化粧が赤と黒の顔料を使って顔一面におどろおどろしく施されていたためである。

佇む少年兵の手には今し方までアプリリアージェが羽織っていた白っぽいマントが握られていた。

ルルデは固まったまま、今自分の周りで何が起こったのかを理解するのに全体で数秒を要した。

少女が自分の横に移動し、その後ろに隠れていたより小柄な少年が見えたのだろうと言う一応の結論を導き出してはみたものの、腑に落ちる説明ではないことは分かっていた。

むしろ、そういう常識では説明がつかない行動をとる兵士のいる部隊に戦いを挑んだ事に改めて戦慄していた。

それにしても、少女の移動する速さは異常だった。

ルルデにはまるで空間を切り取ったとしか思えない速度だったのだ。

混乱の中で「風のフェアリー」という単語を記憶から引きずり出して、ルルデは今遭遇した現象に重ね合わせることでとりあえず事

態を了解する事にした。
「シルフィードの、フェアリー部隊か」
ルルデのその推測のほとんどは正解であったが、決定的な部分が不正解だった。
崖の上にいて全体を俯瞰していたシエナとメビウスは辛うじてルルデの不正解を訂正できる立場にあった。
シエナがアプリリアージェ・ユグセルと呼んだ少女が脱ぎ捨てたマントによる白い残像を残して移動した一瞬後に、少年が忽然と同じ場所に現れて、地面に落ちる寸前に白いマントを受け止めていたのである。少年はアプリリアージェの後ろに隠れていた訳ではなかったのだ。
「貴様、まさかピクシィか?」
少女は矢を番えたままルルデに問うた。
ルルデは今度は相手に聞こえるような音で舌打ちをした。
「俺をピクシィと呼ぶなっ!」

ピクシィ。
ルルデはよくそう呼ばれていた。敵からも、そして他の反政府組織の連中からも。原因はもちろん黒い目と黒い髪だ。
瞳髪黒色のピクシィという三千年前に絶滅したはずの人類の特徴を持っている事それ自体が嫌なわけではない。尊敬する金髪碧眼の兄と血がつながっていない事を指摘されているようで嫌だったのだ。

「いったい何者だ?」
「俺はシエナ・フィリスティアードの弟、ルルデ・フィリスティアードだ」
ルルデの怒鳴り声にもアプリリアージェは眉一つ、いや睫一本動かさなかった。動いたのは顔に彩色を施した少年兵の方だった。彼はルルデが名乗りを上げると、アプリリアージェと同じ小型の弓に短い矢を番え、何の迷いもなくルルデに的を絞ってみせた。そして

照準をルルデののど元に当てるとそのままピタリと止まった。

「あれがたぶんドールです、少佐」

少年の方を見て、メビウスがささやいた。

シエナも少年の様子を見て小さくうなずいた。間違いないと思った。

事態は最悪と思われた状態からさらに悪い方向へ落ちていく気がした。

眼下に見下ろすダーク・アルヴとアルヴィンの二人の姿を見ればもはや疑いようがない。

弟が相手にしようとしているのは……一人はシルフィードのフィエアリー部隊の中でも国王直轄と言われる特殊な独立部隊「ル・キリア」の、それも司令官であるダーク・アルヴ『白面の悪魔』。作戦時は常に白面を被っている為にその二つ名があるのだが、今回素顔なのは急襲されて面を被る時間が無かったのだろう。

風評として伝わるアプリリアージェ・ユグセルの特徴は白い半面と金色の耳飾りで、シエナとダゲットはその金色のスフィアの耳飾りで彼女を特定できたと言っていいだろう。

そしてもう一人……その後に現れたアルヴィンの少年と言えば、こと剣の腕については「ル・キリア」で一番と言われ、若くしてル・キリア副司令の肩書きを持つ人物だった。

彼にはテンリーゼン・クラルヴァインという名はあるが、無口で動くことすらほとんどなく、その表情も固まっているかのように変化しないことから、誰言うとなく「ドール」という二つ名で呼ばれるようになった。そしてその二つ名はこうして外国にも知れ渡っていた。

「最後の通告だ。剣を捨てろ。言っておくが我々は気が短い」

そう告げる澄んだアプリリアージェの声がシエナたちの耳にもはっきりと届いた。

先刻と違い、今度の声には静けさや穏やかさという雰囲気はまっ

たく無いように思えた。これは脅しでも何でもない。本当に最後の通告であることはその響きでシエナにはよくわかった。

そのアプリリアージェの声に呼応してシエナはすかさず頭上から叫んだ。もう猶予はないと判断したのだ。

もちろん、メビウスがそれを止める間などなかった。

「待て、その兵を殺すな。我々は降伏する」

頭上からの突然の声に、しかしアプリリアージェはまたしても表情一つ変えなかった。勿論ルデを狙ったまま微動だにしない。それはまるでシエナの行動を予測していたかのように思えた。

だが、シエナはそんなことに感じ入っている場合ではなかった。

彼は間を置かずに続けた。

「私はサラマンダ王国正規軍南方方面第三師団所属フィリスティアード独立部隊の隊長を務めるシエナ・フィリスティアード少佐だ。今回の作戦の指揮官でもある。隊長の名において貴官らに対しここに降伏を申し出る」

シエナの呼びかけに、素顔の白面の悪魔が即座に答えた。

「無条件降伏と言い直せ」

「ー了解した。無条件で降伏する」

一瞬の逡巡の後、シエナはそう答えたが、相手は容赦なくさらに畳みかけてきた。

「自称の一部も訂正しろ。【旧】正規軍だ。サラマンダ王国などという国は今は存在しないはずだが？」

「ーわかった。それも認める」

アプリリアージェの要請と指摘に、シエナはこみ上げる悔しさをグッと押さえて承伏した。それはもちろん、王国復興を旗印にしているシエナ達反政府ゲリラにとってはこれ以上ない屈辱であった。アプリリアージェが指摘した事柄はすべて受け入れるわけにはいかないものばかりだった。彼ら自身の存在意義を否定するものだからだ。

しかし、それをシエナは曲げたのだ。この短いやりとりはそれ程大きな意味を持つものだった。

やりとりを聞いていたメビウスは何も言わず、ただがっくりと肩を落とした。

「よし。ではシルフィード王国海軍中将、アプリリアージェ・ユグセルの名においてお前をシエナ・フィリスティアードと仮に認識し、無条件降伏の申し出を受け入れる」

そう言いながらもアプリリアージェは自分の背面上方に位置するシエナの方には目を一切向ける事なく、番えた矢はルルデを向いたままであった。

「中将、だと？」

シエナは思わず心に浮かんだ言葉をそのまま言葉に出して、しまったと思った。だがシエナが驚いたのも無理はない。見下ろす窪地で弓を番える少女が隊長であるとは聞いてはいたものの、まさかその少女の階級が提督と呼ばれる一国の軍の中枢、それも中将とは予想だにしていなかった。

シエナにしてみれば、相手が少女だという先入観が頭から離れず、その階級はせいぜい尉官、高くても自分と同じ少佐止まりであろうと決めつけていたのである。

アプリリアージェはしかし、シエナのその言葉には全く反応しなかった。

シエナは改めてアプリリアージェの後ろ姿を見つめた。

この状態で相手が普通の敵であれば、シエナかメビウスが背後からアプリリアージェを矢で射ることでルルデがおかれた窮地を脱することもできた状況だと言えた。しかし、シエナはその方法をとらなかった。いや、考えもしなかった。それはメビウスとて同様だったに違いない。なぜなら、シエナもメビウスもアプリリアージェの実力を、噂ではあるがよく知っていたからである。言い換えればシエナがアプリリアージェの事を全く知らなければ、不用意に敵に後

ろを見せたアプリリアージェに向かって躊躇なく矢を放ったに違いない。

たとえそれが少女だったとしても、相手が兵士であるならば。

しかし、今ルルデに向かって矢をつがえている濡れたようなつややかな黒髪を持つ少女はシエナの理解しているとおり、およそ普通の相手ではなかった。噂だけではない事は先ほどの目にもとまらぬ動きの速さを見ることで頭でも理解ができていた。

戦いというものが勝利を求める事柄であるのなら最初から自分たちが戦っていい相手ではなかったのだ。

彼女たちはルルデだけではなく既にシエナとメビウスをも標的として捕らえた上で一連の行動をとったのだ。自らの戦闘力の高さに奢り、袋のネズミになっているルルデを討ち取るために嬉々として森を飛び出して今のような崖に背を向けるような真似を彼らは決してしなかった。周りの状況を出来る限り把握し、獲物の上方に別の獲物の影を認めた上で綿密に取られた行動なのであろう。手を出すならよし、出さぬなら無益な殺生は避けてもいい、という事なのだろうか。ともあれル・キリアとはそう言う抜け目のない相手なのは確かと言えた。

もしもシエナたちが囮であるアプリリアージェの背中に矢を射ようとしたら?

それは愚問に違いない。

勿論、白面の悪魔は瞬きする間もなくその場を移動して矢を避け、それと同時にドールが手にした弓矢でシエナとメビウスを正確に射貫くだろう。そしてその次の瞬間には魂を失った肉と骨の固まりが二つほど地面に倒れているだけのことなのだ。

「フィリスティアード殿に尋ねる。今回の襲撃は我々をシルフィード王国の海軍部隊と知った上での戦闘作戦か?」

アプリリアージェのこの言葉で、シエナはルルデがさっさと殺さ

れなかった訳を知った。目標誤認による事故の戦闘だとすでに相手は見切っていたということなのだ。戦闘開始直後に襲撃した方が混乱状態になったのだ。おかしいと思われても当然だった。

「ーー言い訳にしかならんが、ドライアド軍と誤認した」
「やはりな。どちらにしろ正当性のある戦闘ではないがな」
「それについては反論しない」
「まあいい。隊長の誤認で部隊を全滅させたという事実だけは残る」
「責任は私にある。部下達には寛大な措置を願いたい」
「先走るな。今はまだお前達の処遇の話をする段階ではない」
このときアプリリアージェがミスを犯したとするならば、この時点で停戦の合図を相手に指示せず、自らも行わなかった事につきる。だがそれも無理からぬ事ではあった。なぜなら隊長の降伏宣言にもかかわらず、ルルデと呼ばれる目の前の少年兵はいまだ剣を構え、その殺気は全く衰えていなかったからである。彼女の認識は交渉はしているがまだ戦闘中という事だったのだ。
その事に気づいたシエナは弟に声をかけた。
「剣を捨てろ、ルルデ」
「いやだっ」
「黙れっ！これは隊長としての命令だ」
「ーーくそっ」
頭上からのシエナの声に反応して、ルルデは漸く剣を地面に投げ出した。そしてそのまま両膝からその場に崩れるように座り込むと、拳を握り締めて思いきり地面を叩いた。
「ばかやろう！なんでシルフィード軍なんだよっ！！」
その両頬には、悔し涙で何本も筋ができていた。
本来、今回の作戦は武器補給の為の簡単な小隊襲撃のはずだったのだ。だが、その作戦は当初の思惑とは違う結果を伴ってあっけなく終わった。ルルデの部隊は自らが仕掛けた戦いにあっという間に破れ、壊滅状態に陥った。しかも無条件降伏である。それはフィリ

スティアード隊がこの場で消滅することを意味しており、生き残った者は補給部隊を含め、これから捕虜として扱われることになるのだ。

ルルデはしかし敗北が悔しいのではなかった。剣を振るうことなく、それを放棄せざるを得なかったことが何より悔しかった。

相手が本来の敵ではない事もルルデのやり場のない怒りを助長していた。ルルデは戦乱の中で生きている誇り高い兵士が皆そうであるように、戦って死ぬことは少しも怖いとは思っていなかった。彼は若かったが守るべき信念があった。そして守るべき人があり、そのために命を投げ出す覚悟が既にあった。

負けることではなく、もう戦うことができなくなったことが何より恐ろしかったのだ。

ルルデは溢れようとする気持ちをなんとか抑え込むと左の二の腕で乱暴に涙を拭い、唇を噛みながら前方にぽつんと立つ小柄な少年兵を睨んだ。敵の前でこれ以上無様な格好は見せまいと決めたのだ。

アルヴィンの少年兵はルルデが剣を下ろしたのを見て、構えた弓をようやく解くと後ろに回していたフードを深く被り、顔を覆った。もともと入れ墨で顔が分かりづらかった少年の表情は、それで全くわからなくなってしまった。

メビウスはシエナの命によりルルデが剣を手放したのを見届けると、その場に崩れるように倒れ込んだ。メビウスの右肩の傷はシエナが思っていたよりも重傷で、失血もあって緊張が途切れたとたん失神したようだった。もっともそれまでメビウスが意識を保っていたのが奇跡的だったのかもしれない。

「メビウス！」

シエナが倒れ込んだ歴戦の友に駆け寄ろうとした時、この悲劇の最後の幕が上がる音がした。

ヒュウっという風を切る音が耳に届いたと思ったすぐ後に、シエナには何かがのどに当たった感覚があった。続いて痛みとも熱さとも言えない衝撃がのどを中心に突然広がるのを感じた。しかし、一体何が起こったのかを理解しようとした次の瞬間にはその視界は暗転し、同時に意識も途絶えた。

それが、シエナ・フィリスティアードの最期だった。

かつてサラマンダ軍の名将として名を馳せたシエナ・フィリスティアード少佐は千日戦争集結時に自国滅亡の立会人となった後もその事実を受け入れることを拒み、記録的にはゲリラの首領として決して長くないその生を終えた。

それを戦争という歴史の大きなうねりの中で生まれる取るに足らないありふれた悲劇の一つだと言うのはたやすい。しかし、時に小さなほころびが大事に至ることがあるように、シエナの死が歴史という物語を突然大きく転換させる引き金になった可能性があることは記憶にとどめておくべきかもしれない

今回シエナ達の敵となったル・キリアのもう一人の副官であるフアルケンハイン・レインによって立て続けに放たれた二本の矢は、正確にシエナの咽とこめかみに深く突き刺さっていた。

あまたの武勇とその人間性でサラマンダにその名が知られるシエナ・フィリスティアードは声もなく崖際で立ったままで絶命した。やがて自立できなくなった体は傾きはじめ、引力に任せてそのまま崖の下へ落下していった。すでに意識のないメビウスには上官の最後を見届ける事は叶わず、そして彼は生涯その事を悔やむ事になった。

矢が何かに突き刺さった音を聞きつけたアプリリアージェはルルデへ向けていた矢を下ろし、初めて背後の崖上に目をやった。まさにその時がシエナが崖から落ちるところだった。

―（しまった！）

アプリリアージェは今まさに矢を納めて急ぎ撤収の合図を送ろうとしたところだったのだ。それはそのほんの数秒の空白の時間の中で起こった不幸でやりきれない出来事だった。

おそらく部下の誰かがシエナを敵と認めて射たものだとアプリリアージェは即座に理解した。

ドールことテンリーゼン・クラルヴァインが事態を確認したのは全体を見渡せていた為にアプリリアージェよりも一息だけ早かった。彼は悲劇的な事態を察知した瞬間、反射的に矢筒から信号用の音が鳴る矢「調べ矢」を選ぶと、間髪入れずにそれを空高く放った。一連の的確な判断と冷静な対処は副官を名乗るにふさわしく、そしてその少年然とした姿には似つかわしくなかった。

ともあれフィリスティアード隊にとっては遅きに失した感のある停戦の合図が、悲しくあたりに響くことになった。

『キリキリキリキリ』という独特の音を発するシルフィード海軍の「調べ矢」の音がルルデの耳に届くのとほぼ同時に、ドサッという何かそれなりの重さを持った物体が地面に激突する鈍い音がアプリリアージェの背後から聞こえた。

ルルデにしてみれば、目の前の少年が放った調べ矢の音は停戦合図の信号だとすぐにわかったが、その後に続いて耳に入って来た音は彼にとっての異常事態だと直感した。そしてその直感はもう一つの嫌な予感と二人連れだったのだ。

ダーク・アルヴの後ろに倒れているのは、ルルデがよく知っている人間だった。

その人間は倒れたまま動かない。落下時につぶれた目は何も映すことなく、開いた口は言葉を発することはなかった。

「うぉぉぉぉぉぉーーーーー」

二本の矢が深く刺さったままの状態で落下した無惨な兄の姿を見て、ルルデは瞬間に激した。

押さえていた感情がそれに呼応して爆発し、ルルデは言葉にならない獣のような声を上げると、地面に捨てた剣に敏捷に飛びついた。そしてその柄を強く握りしめると空に剣先を掲げた。

シエナと自分との間に割って入ったような格好で相変わらず顔色一つ変えず、傍目には微笑を浮かべたような表情で立つのは「海軍中将」と名乗るダーク・アルヴの少女だった。

だが、ルルデはもはや相手が子供だろうが中将だろうが、デュナンだろうがダーク・アルヴだろうが、ましてやドライアド軍だろうがシルフィード軍だろうが、そんなことは問題ではなかった。目の前にいる弓を持つ兵士をただ敵と認めると、憎しみと怒りが混然一体となった激情が頂点を極め、自分の内側から何かが大きな固まりのようなものが渦音を轟かせてわき上がり、鳩尾を通って咽から噴出するかのような錯覚に囚われた。

「貴様あああっ！俺たちは降伏しただろうがあああ！！」

「冷静になれ。そして判断しろ。これは事故だ」

尋常でない形相で自分を睨みつけたルルデに、アプリリアージェは全く動じずに落ち着いた声でそう声をかけたものの、相手にはもう聞く耳はないだろうと確信していた。

判断後のアプリリアージェの対応は早かった。構えを解いていた弓を改めて引くと、剣を上段に構え向かってくる目の前の敵兵の眉間に狙いを定め、躊躇なく矢を放った。

だが、より決断が早かったのはここでもテンリーゼンだった。

最初に一矢、間髪開けず同時に二矢、立て続けに都合三本の矢をアプリリアージェより速くルルデに打ち込んでいたのだ。

「ぐっ……貴様らぁ」

テンリーゼンの放った三本の矢に続いてアプリリアージェの放った一本の合計四本の矢が全て体に突き刺さり、崩れ落ちようとする

体勢から声を絞り出したルルデの姿が赤い光に包まれたのはその時だった。

アプリリアージェは危険を察して異常な状態になったルルデに向かってすぐさまもう一本矢を放ったが、その矢はルルデの体から発せられた赤い光のようなものに触れると弾かれた。

―（光に触れてはならない！）

アプリリアージェはそれを見て本能的に危険を察知し、ルルデの側方に回り込んでその場を離れようとしたが、時既に遅く、ルルデの放つ光の膨張の速度に逃げ場を無くしていた。

テンリーゼンは味方の危機と見て続けざまにルルデに向けて矢を放ったが、すべてが赤い光のベールに弾かれ、燃え上がって消え落ちた。

喉と脇腹、そして左の胸に矢が突き刺さったルルデは、地面に倒れ込みながらもなおアプリリアージェを睨み、獣のような声を上げた。

それはまさに絶命の雄叫びであった。

叫び声が止むと同時にルルデのまわりを包む赤い光が急速に広がった。それはまさにアプリリアージェを飲み込もうとしていた。崖を背にしたアプリリアージェにもはや逃げ場はなかった。

得体の知れない強大な力を前にアプリリアージェが直観的に死を悟ったその時、ルルデの向こう側に居たテンリーゼンがその光球を突き抜けてアプリリアージェの前に躍り出た。そしてすぐさま反転し、アプリリアージェをかばうように前に立ち、両腕を広げて赤い爆発球に対峙した。

ルルデが倒れ、赤い光が膨張してテンリーゼンがアプリリアージェの眼前に立つまでは、ほぼ一瞬の出来事であった。

「だめです、リーゼ！」

アプリリアージェの叫び声と同時に両手を広げたテンリーゼンの身体が白い光に包まれた。そしてそれは迫り来るルルデの赤い光と

衝突するように拡大していった。
まるでそれは赤い光と白い光、つまり二つの光のぶつかり合いの様相を呈していた。
当初、二つの光球の力は全く互角に見えた。だが徐々にテンリーゼンの放った白い光が優勢に立ち始めた。赤い光球の広がりを白い光球が包み込むように受け止めると、今度は徐々にそれを押し返しながらさらに全体を取り囲み、やがて筒状に取り囲んだ。
行き場を制限されたルルデの赤い光はテンリーゼンの白い光と同化するように渦状に回転を始め、広がる方向を空に求めた。光球はやがて一つの光の柱に変化して共に天空へ高く昇って行き、しばしの間天と地を結ぶ巨大な柱を形成していたが、やがて空中に飲み込まれたように霧状に変化し、飛散して程なく消えた。

天に昇った光が消え、ようやく地面に倒れたルルデに意識を戻したアプリリアージェは我が目を疑った。
ルルデの体全体がボウッと紫色に光っており、それは徐々にぼんやりとした状態になっている。
それを見たアプリリアージェは慌てて駆け寄り、光る体に手を触れようとした。
しかしその時、ルルデの体はかき消すように消えて無くなり、アプリリアージェの右手は空を掴むことになった。

理解不能のままアプリリアージェは伸ばしきった右手の指先を見つめた後、そのままの格好で側に立つテンリーゼンを見やった。しかし、白い光球の主である銀髪の少年をしても何が起こったのかは理解の外にあるようで、目を伏せて首を左右に振るだけだった。

テンリーゼンと共にアプリリアージェの副官をつとめるファルケンハイン・レインがメビウスの倒れた崖の上にたどり着き、停戦の合図の調べ矢が放たれた方角にある窪地をのぞき込んだ時には、こ

の物語にようやく幕が下ろされたところだった。

ファルケンハインがそこで目撃したのは、アプリリアージェとテンリーゼンがシエナの死体の側で立ち尽くしている光景であった。

もちろん彼は、それが自分があげた悲劇の最終幕の顛末である事をまだ知らなかった。

# 第三話　赤い瞳

妹が居る。
歳は一つ下だ。
名前はマーヤ。
でも本当の発音はマアヤだ。
漢字で書くと「真綾」
いい名前だと思うけど、実はたいした由来などはない。父親の名前である「真《まこと》」と母親の名前である「綾《あや》」をつなげただけの実に単純明快で、「二人の子供です」と世間に向けて発表しているかのような気恥ずかしさに満ちた名前だ。もっとも名付けの意味の分かりやすさとしては完璧な名前だろうとは思う。
そういうわけだから、それ以上の意味だとかこじつけとか、つまりはたいした由来はない。
そんな背景はどうあれマーヤ本人は自分の名前をいたく気に入っているようで、結果として両親としては子供に恨まれることのない良い名前をつけたと言えるのだろう。
そしてオレはマーヤ自身が自分の名前を気に入っているかどうかの方が重要だと思うから、つまりはいい名前だと思っているというわけだ。
幼い頃から髪を伸ばしているマーヤの髪は長い。腰あたりまである。真っ直ぐに切りそろえた前髪の間から形のいい眉と額が時折のぞく。
黒目がちで切れ長の瞳はちょっとその歳からは想像出来ないほど大人びていて、兄であるはずのオレが見ても時々ふとマーヤの方が年上なんじゃないかとさえ思える事もあった。目を伏せた時など、ずいぶんとまつげが長いのがよくわかる。
似ていない兄妹だった。

父さん似と言われる俺とは全く違う顔。マーヤはたぶん母さん似の美人で……すましていると取っつきにくそうな感じだけど、笑うととたんに幼くて可愛い感じになって……。もちろんオレはそんなマーヤの笑顔が大好きで……。

そしてそんなマーヤは明るくて元気で……と言いたいところだが、明るいかどうかはともかく少なくとも元気な女の子ではなかった。

一度聞いたくらいではまず覚えられないような先天性の難しい名前の病気にかかっていて、医者はまだ特効薬はないと言って目を伏せていた。

だからマーヤは生まれた時からずっと病院で暮らしていた。病院が家で病室が自分の部屋だ。

一人暮らし。しかもかなり若い頃からの一人暮らしと言えばうらやましがる奴もいるだろうけれど、現実はそうじゃない。病室のベッドでずっと寝て暮らす事をうらやましがる奴なんて居ないだろう。

マーヤには友達が居ない。いや、同じように入院している友人は何人もできたろう。けれどその友人はいつか必ず去っていく。

ある者は病気を治して家族の待つ家へ。そしてある者は誰もがいつかは帰り着く場所へ一足先に旅立っていく。

マーヤを残して。

だから、マーヤにとっての一人暮らしは寂しくて悲しいだけだ。

いや、マーヤだけでなく、そんなマーヤを見ることになるオレにとっても。

でも、マーヤにも一人だけどこにも行かない友達がいる。歳が近い男友達。

つまり、オレだ。

だからマーヤは毎日オレが見舞いに行くのを楽しみに待っている。

そしてオレが話すつまらない日常の話を聞くのが好きだった。

多くの、でも似たように立ち並ぶビルと、そして少しの空。小さな病室の窓から見えるその風景がマーヤの世界の全てだから、マーヤはそれ以外の世界が確かに存在している事をオレを通して感じた

いのだろう。
オレと言えばそんな妹が嬉しそうな顔をしているのを見るのが何よりの楽しみで、時間が少しでも空けば彼女のところに通っていた。
もちろん空き地に捨てられていた猫の飼い主が見つかった事や、病院に来る途中にあるエニシダの花が咲き出したこと。実を付ける例のサクラのつぼみが色付きだしたことなど、マーヤに話してやれるちょっとした「事件」や「日常の変化」を仕入れる事にも怠りはなかった。
ある日、マーヤの容態が変わった。
高い熱が出て、何日も昏睡状態が続いたのだ。
それまでも不定期にそんな発作はあったが、その時はこれまでになく長い時間マーヤは生死の境をさまよった。
オレ達家族の願いが誰かに通じたのか、しばらくするとようやく熱も下がりはじめ、一週間もすると普段通りまで回復することができた。
オレはにっこり笑う妹の笑顔を見て胸をなでおろした。
が、安堵する俺たちに向かって医者は険しい顔でこう言った。
「そろそろ決心していただかなければなりません」
と。
マーヤには思い切った大きな手術がどうしても必要なのだと。
それは今までにも何度か提案されて、その都度先送りにしていた手術だった。でも、これがその手術を受ける最後の機会だろうと医者は告げた。
「このままでは成人式を迎えることはできないでしょう」
とも。
けれど、妹は手術を受けるのを嫌がった。
その手術は成功の可能性が極めて低いものだったからだ。
もちろん手術をすれば助かるかもしれない。
いや、違う。
妹は手術をしなければ助からないのだ。

けれど、失敗すれば妹の時間はそこで止まる。
マーヤはそれを怖れていた。
もちろん、オレだって怖くて仕方ない。そのことを考えると今でもこうして鳥肌が立つくらいだ。
だからオレはマーヤを説得はしなかった。
ーーできなかった。
それでも、当たり前だけど、オレはマーヤに生きていてほしかった。一年や半年ではなく、それからもずっと。
そう、ずっと。
だからそれだけを伝えた。
マーヤは悩んだ。
悩んで悩んで、そしてついに手術を受ける決心をした。
そんなマーヤとオレは一つの約束をした。
手術の日はずっとそばにいて待っていると。
マーヤが絶対に目を開けるのを信じて待っていると。
目を覚ますまで絶対に側を離れないと。
だから……。

だから、オレはフォウに戻らなければならない。
約束をしたんだ。
妹と。
マーヤと。
手術がいつになるのか……それはわからないけれど、出来るだけ早く。
出来るだけ急いで。

【おい】
『……』

【おい、また考え事か？妹の事やろ？】
心の中で本人とは違う声が呼びかけてきた。
『ああ、悪い。ぼーっとしてた』
若者は呼びかけたその声に応える。
【ん……いや。何でもない。兄が妹のことを考えて悪い理屈はないしな】
『そうか』
【もっともお前さんが、普通よりかなり甘～いお兄ちゃんなんは間違いのないところやけどな】
『ふん、言ってろ』

南の空には月が二つ、並ぶようにして輝いていた。
一つは明るく、そしてもう一つはやや暗いが、ともに大きさは同じ程度である。
月の輝きに気圧されて星々の輝きが影を潜めた夜であったが、それ故に夜半にもかかわらず谷間の街道でも旅人にとって歩を進める事が苦にはならなかった。

サラマンダの辺境、北部の高地にある急峻な谷あいの街道に、旅装の若者が一人歩いていた。いや、二つの月がそれぞれに作り出す二人の影を従えていた。
若者は空を見上げながらゆっくりと歩いていた。
夜とはいえ二つの月明かりは若者の姿を夜道にはっきりと浮かび上がらせている。
アルヴィンやダーク・アルヴにしてはやや大柄で、デュナンにしては身長はそれほど高くはない。体つきもまだ青年と呼べる程の成熟を見ていないようであるが、子供と言うには無理がある。おそらく成人直後、つまり十六、七歳の年齢であろうか。
その若者は二つの大きな外見的な特徴を持っていた。一つはデュナンには極めて珍しい黒い髪を持っていることであった。黒はダー

ク・アルヴにならば時折見られる髪の色だが、その若者のようなデュナンでは極めて希な例であろう。

【二つの月が結構近づいてきたな】

若者の心の中で、そうはっきりと声がした。しかしそれは彼自身の独り言とは少し違っていた。

若者の外観のもう一つの大きな特徴は、瞳の色である。空を見上げる彼の、双月が映る瞳の色がそれだった。

茶色ではなく、灰色でもない。ましてや青くも緑でも鳶色でもなく、その色は髪と同じ黒だった。黒い髪はともかく、黒い瞳はここ、ファランドールでは本当に珍しいものだ。

瞳髪黒色《どうはつこくしき》。ファランドールでは彼のような姿を持つ者をこう呼ぶ。あるいは「ピクシィ」と。

『なあ、おい？』

今度は心の中でさっきとは違う声がした。そしてこの声こがその小柄な旅人自身の心の声だった。

【ん、なんや？】

旅人の心の声の呼びかけに応えて、先ほどのもう一つの声が答えた。

『あの二つの月って、ひょっとしてぴったり重なったりするのか？』

そう。

若者の頭の中では二つの声が響き合う。

それは黒髪の若者にとってはもは日常であり、ごく自然な会話であった。

【するする。場所にもよるけど、来年には綺麗に一つに重なるところが見えるはずやで】

『そうか。そう言うのはなんて言うんだ？やっぱり「皆既月食」っていうのか。あ、でも月食っていうのは月に地球の影が映るんだからちょっと違うか』

独り言のように心の中で呟く若者の声にもう一つの声が応える。

【地球？】

『あ、いや。オレの世界じゃ自分たちの居る天体をそう呼ぶんだ』

【んー、月食っちゅう言葉は知らんけどファランドールでは二つの満月がぴったり完全に重なる天体現象を「合わせ月」って言うてるけどな。これがなかなか希な現象で、大体千年に一度くらいしか見られへんらしいな。ちなみに一部だけとか、大きさが微妙に違って重なるのは「重ね月」や。こっちはそこそこ頻繁に起こる】

『「合わせ月」と「重ね月」か。どっちもマーヤにも見せてやりたいな』

【妹さんに見せるのはムリやろ。まあ、戻れたら土産話にはなるやろけど、きっと夢の中の話で終いやな】

『わかってるよ。そうだな、オレが見た夢の話だっていえば笑って聞き入ってくれるかもしれないな』

【地方によって風習とかが違うんやろけど、月にまつわる祭礼は各地にあって、中でも盛んなんは二つの月が両方ともに満月になる二日前から三日間が「双望月祭（ならびもちづきさい）」、別名「精霊祭」っちゅう期間で、その時期には各地でいろんな月祭りが行われてるはずや】

『二つの月が同時に満月になるのも珍しい現象なのか？』

若者は歩みを緩めずに頭上にかかった月を見上げた。若者の故郷では決して見ることのない双月がかかる夜空。だがもう、彼にとってそれは見慣れた風景だと感じてきていた。

【ざっと年に四回やな。現在使われている暦、星歴の前は月歴いうてあの二つの月の動きを暦の単位にしてたくらいやから周期はほぼ一定で正確や。微妙な月の周期のズレが発見された四千年前くらいに、変異がより少ない基準星「天心星」の動きから割り出した「星歴」に変わってるけどな。天心星は昼星って言われることの方が多いけどな】

『太陽の事だな……。なるほど、ここの「星歴」っていうのはそういうものか』

【どうした？こっちに来て結構経つのにおまえが天体のことに興味を示すなんてはじめてやな】
『いや、なんとなくそんな心境になっただけだ。というか、月を眺めてきれいだななんて思えるほどこの世界になじんでしまったってことだろうな』
【ふーん。まあええわ】
『で、その双月に因んだ祭りっていうのは？』
【祭りの内容についてまでは詳しくは知らへんけど、特にここ、サラマンダ大陸では盛大にやるようやな】
『「ようやな」、か。相変わらずお前の言うことって曖昧だな』
【書物を読んで知った知識やからそういう言い方になるんはしゃあないやろ。ちゃんと見た訳やないんやから。知ってのとおり俺は世俗に交わって暮らした時間が短いさかい、そう言うのはしょせん知識の範疇でしかない、言うことや】
『ふん。で、その別名「精霊祭」ってのは、「精霊」って言う名前が付くくらいだから、満月になると精霊との間には何か関係あるって事か？』
【満月の時期は一部の精霊の力、いわゆる大気中のエーテルが普段より濃く強くなるんや。活性化すると言うてもええのかな。で、「月」に属するエーテルの力が上がる】
『こんどは「ようやな」じゃないんだな』
【そっちは身をもって検証済みやからな】
『なるほど、そりゃそうか』
【満月が二つ重なる双望月の頃になると精霊の力は概算で五割り増しっちゅう感じや】
『そりゃ豪華な話だな』
【そやな。月に属する精霊を使うルーナーやフェアリーが大いに輝く時期やな】
『月に属する精霊？』
【具体的には大地のフェアリーと水のフェアリーがそうやな。反対

に炎属性と風属性は昼星、つまり天心星に属する精霊や。昼星系のフェアリーが多いシルフィード王国なんかは月祭りもこの辺とは規模が違うはずや。御利益が少ないからな】

『ふーん。因果関係がオレにはいまいちわからないけど、まあどうでもいいや』

二人の会話が一人の心の中で繰り広げられている様は、当然外からはまったくわからない。当の本人は単に無言だからだ。もっともそれこそがこの若い旅人の最大の秘密であった。

『どうでもいいが、腹が減った』

【考えんほうがええで。余計辛なるだけや】

『そう言うけどな、グチのひとつも言わないとやってられない気分だ』

【いつもおまえさんが言うてる、何やったっけ？『剣士は食べへんでも死なへんで』とか、何たら、とちゃうんか？】

『それを言うなら「武士は食わねど高楊枝」だ。でもあれは要するに見栄っ張りのやせ我慢を美辞麗句にして揶揄っているだけさ。どう考えても自嘲気味な情けない話としかオレは思えない』

【いつもと言うてることが違うやん】

『黙れ。建前と本音という言葉があるだろ。だからそこは突っ込むな。それよりそろそろ眠って体力を温存しておく方がいいんじゃないのか？』

【さっきも言うた通り、この長い谷道は谷底の一本道で、迂回もでけへんし隠れる場所もない。さらに俺達には結界を張るだけの体力もない。この辺は反政府のゲリラや山賊みたいな連中がうじゃうじゃおるから、奴らにとったらある意味格好の狩り場や。見つかったらいろいろ面倒やし夜中に一気に通り過ぎるに限るんや。だいたい】

『だいたい？』

【大事な食料を無くしたんはおまえさんの不注意やろ？】

『オレのせいじゃない。スカルモールドが引きちぎったんだ』

【そのスカルモールドを最初の一撃で決められへんかったんはおまえさんの攻撃が中途半端やったからやろ？今回おまえさんが助かったのはまたしても俺のルーンのおかげやで】

『うるさい。だからこうして言われたとおり休まず歩いてるだろ。そもそもオレはこの「ファランドール」の知識がないんだからな。スカルモールドにもバリエーションがいろいろあるという知識を前もってオレに与えていなかったお前の失策でもあるだろ。さらに言えば、だ。基本的にお前の言うことをオレはいつも尊重してるはずだ。だからつまらない中傷はよせ』

そう心の中でしゃべって、大きくため息をついた時だった。

【しっ】

若者の心の中のもう一人の声が注意を促した。彼は思わず立ち止まった。

【立ち止まらんと、何も無かったようにそのまま歩け】

『どうした？』

【しっ】

『「しっ」て、誰にも聞こえないだろう？』

【まあ、気分や】

『気分て、お前なあ。……緊張感があるのか無いのか解らん』

【集中させろ、言うてんねん】

『またやっかいなスカルモールドじゃないだろうな？あいつらは打たれ強すぎだ。ありえない。だいたいこの地域にはスカルモールドなんか居ないと豪語したのはお前だぞ。この嘘つきめ』

【嘘つきは余計や。想定の範囲外と言うてもらおか。あるいはこの世は不思議に満ちている、でもええで】

『よく言うよ。で、何なんだ、今度は？』

文句を言いつつも若者はもう一つの言葉の忠告に素直に従い、間を置かずに再び歩き出した。

【誰かおるな。ちゃんとした意識みたいなもんが伝わるからスカルモールドやない】

『例の存在感を消す結界ってやつ、張ってなかったのか？』
【アレを維持するのは結構キツイねんで。常時かけっぱなしはまず無理や。だいたい体力使いとうない言うたんはお前さんやろ？】
『くそったれ』
【おっと。悪態つくのは後からや。どうやら挟み撃ちされたようやな】
『やれやれ、こうなるのを避けるために夜にやばいところを突破してたんじゃないのか？』
【そのグチも後から聞いたる。人生は思い通りにいかへんからおもろいんや】
『オレはそう言う自虐的かつ黒っぽい喜びにはまだ目覚めてないよ。いまのところそうなる予定もない。まったく体力温存の折に面倒な話だな。で、一体何人いる？』
【ひいふう……十人やな】
『オレの間合いまでにまだ距離があるな。でも全部やったら間違いなく倒れるぞ』
【そやな。ここはお前の嫌いな効率重視で短期決戦の方ががええやろ。替わろか】
『ああ、任せたぞ、魔法使いさん。できるだけ楽に頼む』
【魔法使いやないって言うてるやろ。「ルーナー」と呼べ】

外見からは一見なんの変化もない様に見えたが、若者の体を支配する意識が入れかわった。
彼は右手を広げて、中指にはめている黒・茶・白の三色に塗り分けられた少し大きめの指輪を見つめると、小さくつぶやいた。
「出でよ、ノルン」
するとどうだ。その指輪は一瞬で形を変え、長い木の棒に変わった。
彼が握るその棒はよく見ると一本の杖、儀仗と言われる長い杖だった。その長さは若者の身長よりも頭一つ分以上は長い。やや太く

なって曲がっている頭部にはいくつかの小さな水晶のような玉が埋め込まれていて、月明かりを受けてそれぞれが様々な色でキラリと光った。

【おいおいおい。ホンマに体、ヘトヘトやないか】

『だから言ったろ。しばらく飲まず食わずなんだからな』

【こら……ごまかして逃げるどころやないやん。そもそも高位のルーンなんて使われへんで】

『いまさら泣き言を言うな。任せたんだから、ちゃんとやってくれよ』

【とほほほ～、やな】

若者は何かを小さく呟くと、杖を左手に持ったままで再び歩き始めた。

その頃になると、気配だけではなくまだ少し離れてはいるが後ろから迫る複数の足音が聞こえてくるようになった。隠れる場所のないこの一本道である。振り返ればおそらくそこに足音の主達を見ることができるだろう。

だが、若者は振り返ることはせずに行く手の森の方をじっと見やっていた。

【前後合わせて十人。もれなく低俗な殺気というか邪気ムンムン付きやで。たぶん追いはぎ、山賊のたぐいやろうな】

声が独り言の様に呟く。もう一つの声は何も返さない。

若者は小さな声で手に持った杖にある丸い水晶玉のようなものを見ながら、何かを呟いた。

【さて。一通りの準備は完了】

『気をつけろ。正面、左後ろ側の奴が矢を射るぞ。左に来る』

心で一人が呟いた瞬間、もう一人の声が重なる。同時に何かが風を切る音がして、若者の左側の足下付近を矢が通り過ぎて後方の地面に刺さった。

片方の声が言った通り、前方の賊の左後ろの太った兵が弓を下ろすところだった。

ただ、双方の距離の短さを考えるとその矢は若者を直接狙ったものではなく、威嚇のためにわざと外したものとも思われた。
【さあて、何者やろな。山賊か、ゲリラか、ケチな追いはぎか】
『どれでもあんまり変わり映えしないけどな』
【反政府ゲリラならまだ話し合う余地はあるかも知れへんし、うまくいったら食料を分けてもらえるかもしれへんっちゅうところが他の二つとは決定的に違うな。まあけど、確かにあとは同じやな。言葉が通じへんスカルモールドよりちょっとだけマシってとこ？】
『その意見に同意するには比較対象が微妙だな。下手に言葉が通じるだけスカルモールドよりもムカつくかもな』
【うふふ。確かに】
『「うふふ」っておまえ、時々気持ち悪い言い方になるよな』
【やかましい。育ちがええんや。ほっとけ！】
『とても育ちがいいとは思えないんだけど』
【なんやて？】

「おいおい。ちゃんと狙えよ、キース。えらく外れてるじゃねえか」
前方から男のダミ声がした。
「さっきちょっと飲み過ぎちまってよぉ。的が四つくらいに見えるのさ。それに的がかなりちっちゃいしな。だがまあ見てろ、今度は外さねえ」
「待て待て。ゲリラから情報を仕入れるのも俺達の仕事だ」

『おい、さっきのは威嚇じゃないぞ』
【おーこわ。問答無用かい、こいつら】
『話す前から既にちょっとムカついてきた』
【同感や。いや、『ちょっと』やないな】
若者は後方から数人の男達が近づくのを認識しながらも、声を上げた前方の敵をゆっくりと観察した。
そこには月明かりに照らされた五人の男達の姿が見えた。満月に

近い月齢と言うこともあり、煌々と照らされる月明かりのおかげで若者は賊達の服装を確認することができた。

【おいおい、この装備……こいつらドライアド軍の正規兵やん】

月明かりで敵の様子がよく見える距離まで近づいていた。彼らは全員が黄色と黒を基調とした兵士の装備を纏っていた。

『デュナンのドライアド兵なら、たぶんサラマンダの委嘱軍の所属のはずよだな？なぜオレ達を襲うんだ？』

【フン、なるほどな。多分こいつらは分類上『ケチな追いはぎ』やな。サラマンダ軍の名を借りて、追いはぎ行為をやってるんやろ】

『追いはぎで、しかもケチって最低じゃないか。でも兵隊がなぜそんなことを？』

【簡単やん。殺したって「反政府ゲリラが抵抗した」って報告したら全部正当行為やろ？】

『なんだって？』

【言うたやろ、おまえさんのいた異世界「フォウ」と違うて、このファランドールはそういうとこなんや。特に先の大戦で負けたサラマンダは無法地帯や】

「反政府ゲリラの本体はどこだ？おとなしく教えないとお前の命はないぞ……っと。これで既成事実は作ったぞ」

近づいてきたドライアド兵の一人が声をかけた。だが、それは旅の若者に向かって言ったというよりは、仲間内に対してのそれであった。兵士の右手には既に抜き身の片手剣が握られている。その剣に二つの月が映ったが、かなり鈍くぼやけていた。

全然手入れなどしていないのだろうな、と若者はその武器を見て苦々しい気分になった。

「まあ、おとなしく教えたって命はないんだがな。ふぇっへっへ」

飲み過ぎた、と言っていた男の声だ。だらしない声色と笑い声だと若者は思った。

「オレは反政府ゲリラじゃない。ウンディーネ共和国籍の民間人だ。

人捜しの旅をしてサラマンダに居るだけだ」
若者はそう答えた。
だが、その回答は彼らには無意味だった。
「おいおい、みんな聞いたか？」
「聞いた、聞いた。反政府ゲリラだけど、アジトの位置は死んでも言えないって言ってたよな？」
「そうそう」
「だいたいそんな感じだったな」

『こいつらっ！』
【フン、思った通りや。でも、こっちも一応、既成事実は作ったったで】
『何を言っても同じってことか』
【最初から生かしておくつもりは無いんやろ。ある意味人間狩りを楽しんでるんや。いや……狩りやないな。ただの虐殺やな】
『腐ってる』
【その意見には同感や。ほな、腐ったものの処理は決まっとるな】

「キサマら、見たところ顔と頭と性根が悪いだけかと思っとったけど、どうやら耳も悪いようやな。おまけに鼻が曲がるくらい臭いときた。あらゆる基準に当てはめて見ても汚物やな。で、認定燃えるゴミっちゅうことで処理することに今決定した」
若者は大勢の兵士を前に、たじろぎもせずにそう返した。
その態度を見て、一行に少しざわめきが走った。だが、すぐに一人の兵士が高笑いをして若者に声を投げた。
「サラマンダで古語かよ。おい」
「ウンディーネの人間らしいしな。あの国の首都島のアダンあたりじゃ今でも普通に喋られてる言葉って言うじゃないか」
「おれ、古語って久しぶりに聞いたぜ」
「兄ちゃん兄ちゃん、強がってもムダだぜ。ここはウンディーネじ

ゃねえ。ましてやあの警察島アダンでもない普通の土地だ。それに何たってサラマンダで俺達に逆らう事は正義に逆らう事だ。要するにお前は反政府主義の人間だってことを証明したようなもんなんだぜ」

「それがウンディーネの人間っていうのは国際問題じゃねえか？」

「考えて見りゃそうだな。ゲリラに通じてる外国人を捕らえたとあっちゃ俺たちお手柄だぜ」

「だが、命乞いしない態度は気に入ったぜ。久々に狩りがいのある獲物じゃねえか？」

「違えねえ」

『久々に、だって？』

【こう言うことを日常的にやっとるっちゅう事やな。ほんなら、こっちも久々に正義をかざしたろか】

「まあ、殺すのは簡単だが、その前に俺たちの恐ろしさをいやと言うほど知ってもらおうじゃねえか」

「またアレをやるのか？」

『アレ？』

【どうせ反吐がでるようないたぶりのことやろ】

「曹長殿、またお願えしますぜ」

仲間に曹長殿と呼ばれた男は何も言わずに一番後ろで成り行き眺めていた、髪の長い細面の陰険な目つきをしたデュナンだった。

「その曹長殿ってのは止めろ。思い出してもムカつく」

『曹長殿』はそう言うと剣を抜いて切っ先を空にかざした。

「観念しな、小僧。すぐに涙を流して命乞いさせてやるからな」

「こいつは曹長様だったんだが、上官に反抗したカドで伍長にまで戻っちまっておまけにこんな辺境に追いやられたもんだからずっと

機嫌が悪くてな。ま、運が悪かったな、ボウズ」
「もともとは少尉だ。訂正しろっ」
『曹長殿』は不機嫌そうにそう吐き捨てると、低い声で呪文のようなものを唱え始めた。
「我はドライアドのラメルデ・ダウ。ファランドールの創造主により託されし言の葉を力に変える者なり」

『おいっ』
【こいつは驚いた。こんなシケた連中の仲間にルーナーがおったんか。っちゅーか戦闘専門みたいやからエクセラーと言うた方がええかな】
『どうするんだ?』
【ん?どうもせえへんけど?】
『大丈夫なのか?』
【誰に向かって言うてんねん】
『ま、信じましょ。あ、でも一応気をつけろ。少しでも動いたら右端のチビが向かってきそうだ』
【了解】

「フェティマ・エダーラ・ユルヴァライデアーデゴトウ・スライルガイカデアダダゴリル・ヴァラエエエアガアアアイザデデグイリュワンデ・チュポイザラウスンダ・ワジュベリリダダング」
「へえ、グラムコールはデルワか」
そして心の中でつぶやいた。

【サステアナダイグズ。空間固定と麻痺を組み合わせた中位の複合ルーンやな】
『ふーん、中位のルーンを使えるんだな』

若者の声に出した方のつぶやきを聞いた『曹長殿』は眉をピクリ

と動かしたが、それ以上は動ぜずに、早口で続きの呪文を唱えた。
「サステアナダイグズ」
それはまさに一人が心の中でつぶやいた認証文だった。
勿論そんなことは知らない『曹長殿』が最後の一言を大声で唱えると、構えた剣が薄青く光り出し、その切っ先から一条の光が若者に向かって発射された。
若者は薄青い光に包まれたが、すぐに消えた。
「ぐへへ。どうだ?」
一見何の変化もないように見えたが、ドライアドの軍服をだらしなく着た兵達はニヤニヤと笑っている。
「黙っちまいやがった。いつものこととは言えあっけないな」
「仲間にルーナー様が居るのと居ないのとでは大違いだ」
「女をやるときゃ本当に面倒が無くて助かるぜ」
「あと、妙に強そうな奴を相手にする時な」
「そうそう、偉そうにしてた奴が命乞いするのがたまんねえよな」
「それより、このガキが言ってたグラムコールってのは何だ?」
兵達が口々に話しているところを後ろから押しのけるように『曹長殿』が若者に向かって歩み出てきた。
「グラムコールってのは言ってみりゃルーナーの流派みたいなもんだ。ルーンってのはいろんな文法で書かれててな、それは流派によって全部違う。俺のグラムコールはデルワという文法で書かれてるんだ。だからルーナー同士の言い方じゃ、俺はデルワのグラムコールを持つ者ってことになる」
「文法?」
尋ねた男は『曹長殿』の言葉が理解できないと言った風にだらしなく口を半開きにしたまま、自分の横を通って若者に近づくデルワのグラムコールを持つルーナーを見送った。
「だが、契約文を聞いただけでグラムコールを正確に言い当てるなんて普通は出来ない。こいつ、ただのガキじゃねえな」
剣を片手に下げたままでデルワのグラムコールを持つルーナーは

若者の正面に立ってじろじろと観察を始めた。
「ただのガキじゃなかったかもしれんが、ルーンがかかってもう動けねえんだから、今はただのガキだろ？」
「うまいこと言うじゃねえか」
「俺は、こう見えても修辞法の成績は良かったんだ」
「じゃあこれから俺たちの部隊の報告書は全部お前が書け」
兵達のやりとりを微動だにせず聞いていた若者が小さな笑い声をたてた。
「フフフ」
真っ先に反応したのはルーナーだった。
「こいつ、口がきけるのか？」
「今までも口くらいきける奴ぁ結構いただろ？」
「だが」
問題は口がきける事ではなく、笑っていることだと『曹長殿』は思っていた。だが、他の兵達にはそんなことはどうでもいい事のようだった。

「こういう中位の複合ルーンまで使えるんやから、そこそこ才能はあるみたいやな」
「なんだと？」
「とは言え、そのていたらくを見ると大方修行が辛ろなって落伍したクチやな。ルーナー不足の軍隊にうまいこと取り入って下士官待遇で入り込んだってとこやろ？」
「このガキっ！」
若者が言った事はどうやら図星だったようだ。『曹長殿』は顔色を変えた。
「お前、最初は優等生やったやろ？たいした努力をせえへんでもそこそこ行けてたんやろけど、真面目にやってる他の奴にだんだん追いつかれてきて……。で、しょぅもない沽券がジャマして努力もできず、そんでもって気がついたら落ちこぼれ街道まっしぐら……や

ろ？」
「黙れっ」
ルーナーは剣先を若者に向かって突きつけた。
「だいたい、デルワは小器用なルーンを得意とするグラムコールやろ？その分契約文が長いんやから努力型やないと辛いんは分かってたはずや」
若者の言葉に、一人の背の高い兵が尋ねた。
「そうなのか？」
「俺が知るかよ」
尋ねられた濁った眼の色をした隣の兵はそうめんどくさそうに言うとペッと地面に唾を吐いた。
「おまえらは黙ってろっ」
『曹長殿』は振り向いて兵達を叱責すると若者に向き合った。
「いいのか？あまり俺の神経を逆なでするようなことを言ってると、体を拘束するルーンだけじゃなくて、今度はのたうち回るような苦痛を感じるルーンを懸けるぞ」

若者はその言葉を聞くとニヤリと笑って見せた。
「三流エクセラーめ」
「何ぃ？」
「俺が手に持ってる物が目に入らへんのか、言うてんねん？」
「なに？」
『曹長殿』は若者が右手に持っている三色の木の棒を見やった。その目はその三色の捩り模様よりも、頭頂部で釘付けになった。小さなスフィアがいくつも埋め込まれているのを認めたのだ。
「そいつは儀仗……グラムコールを知っている事といい、お前まさかルーナー見習いか？」
「ガキのルーナーなんているのかよ？」
『曹長殿』はさらに一歩若者に近づき、その顔を間近で見て、あることに気づいた。

「おい、こいつの目は黒いぞ？」
「目が黒いだと？」
「ほう、そいつは珍しいな」
「小柄で黒髪だからちょっと大きめのダーク・アルヴかと思ってたが、耳がとがっている訳でもなく肌が褐色なわけでもないし、すんげえ美男ってわけでもないしな。目つきも悪いし……まさかコイツ、滅亡したはずのピクシィの末裔ってヤツかよ？」
『曹長殿』の言葉に兵達がざわついた。

『美男子じゃないってのはこの際余計なお世話だ』
【まったくや。そればっかりは本人のせいやないしな。まあ、目つきについてはあいつらに同意やけど】
『お前も黙れ！』
【はいはい】

「ウンディーネにはたまーに居るらしいぜ。俺の死んだ爺さんも黒い瞳の小柄なデュナンを見た事があるって言ってたが、ありゃピクシィの生き残りだろって話だった」
「お前の爺さんの話なんて聞いてねえよ」
「俺、ピクシィの血が入ったヤツを殺すの初めてだぜ」
「これで俺達も罪深いアルヴの仲間入りってヤツだな」
「ピクシィは血も黒いっていうのは本当か？」
「切ってみりゃわかるぜ」
「幻の人類を解体したとあっちゃあ、こいつはちょっと自慢できるな、おい」
「ちげえねえ。俺達、今夜はいい獲物を見つけたな」

『例によってまたオレはピクシィ扱いか』
【しゃあない。この世界では訳ありな種族やから。ま、何言われてもほっとき】

『ああ』

【さあて、と。そろそろ茶番は終わりにしよか】

「ふん、この下郎ども、恥を知れ。骨の髄まで汚臭と腐臭にまみれたウジムシめ」

兵士達の脅しにも若者はまったく動じず、不適な言葉をポツリと呟いた。

もちろん、ドライアドの軍服を着たサラマンダ委嘱軍の兵達は若者の分かりやすい挑発に単純に色めきたった。

「おいおい、今度は『恥を知れ』と来たよ」

「しかも俺たちゃウジムシだそうだ」

「まあまあ。このボウズの言うことにも一理ある。俺達ゃ、しばらく風呂に入ってないから臭いのは事実じゃないか？」

「だが、むかつく」

「まったくだ。おいボウズ。俺達には恥ずべき事は何もない。マーリンの法を守らない無法の徒を取り締まるのが俺達の仕事だからな」

「無法の徒でもない人間を殺めるのがマーリンの法や言うんか？」

「そりゃあれだ。ほら、解釈の違いってヤツ？ふぇっふぇっふぇ」

酔っている兵士達は誰かが何か言う度にだらしない笑い声でそれに呼応した。

若者はそれを見て小さくため息をつくと、改めて落ち着いた口調で告げた。

「お前達が権威の衣を着ながら国同士で取り決めた条約も守らへん腐りきった輩や言うことはようわかった。罪深いお前らにはマーリン正教会の名において余が裁きを下したる」

若者はそれだけ言うと、険しい顔で兵達をにらみ据えて見せた。

「おい、何言ってんだ、コイツ？」

「『余』って何だ？」

「俺、耳が悪くてよくわかんなかった」

「恐ろしすぎて頭がおかしくなったんじゃねえのか？」

「おい、ボウズ、俺達にどういう裁きを下そうってんだ？」
「その棒でオイタした俺達をぶっ叩くってんだろ？」
「そいつぁ楽しみだな、おい」
「叩かれてえぇぇぇ！」
「ぶわっはっは」

そうこうしているうちに背後の数人の気配が大きくなった。だがもちろん若者は背後の気配を知っていた。つまり、彼らが近くに寄るのを待っていたのだ。
「おい、何やら楽しそうだな、お前ら」
足音が聞こえるところまで来ていた反対側の賊の一団が背後から声をかけた。
近い。

【よし、これで全員範囲内やな】
『やるのか？』
【どう見ても常習犯やろうし情状酌量の余地はないやろ】
『確かに常習かつ確信犯だろうな』
【この崩壊しかかったファランドールにも一応人が人として生きていくための法がある。それを守るべき立場の人間がやることをやるだけや】

「いいところに来たな。お前達も聞けよ」
合流した一行とはまさに仲間同士のようで、はじめからくだけた言葉でやりとりが行われた。
「なんだ？」
「いや、コイツが素っ頓狂な事をぬかすもんで、俺ら大笑いさせてもらっているところだ。このまますぐ殺すのはちょっと惜しいぜ」
「しかも『曹長殿』のルーンがかかった状態で吠えてるのさ」
「ほう、そりゃ根性だけはありそうだな」

「ケッ。見たとこただのシケたガキじゃねえか」
「違えねえ。あまり金目の物はもってなさそうだな」
「だったらある程度は楽しませてもらわねえとな」
「お前そっちの趣味があったのかよ？」
「俺はどっちでもいいんだ」
「へっ。俺には色目を使うなよ」
「残念だな。俺はそっちの方はガキ専門でな」
男達は口々に好きなことを言っては汚く笑いあった。
若者はニコリともせずに少しの間そのやりとりを聞いていたが、やがてジレたのか彼らの会話を強引に遮るように大きめの声で告げた。

『こいつらっ！』
【……】

「一度しか言わへんからよう聞いとき。とはいえ記憶しておく必要はないけどな。無意味やからな」
「はあ？何の寝言だ？」
「かわいそうに頭がちょっとイカれているらしいんだ」
「ほう」
「お前達全員をトリムト講和条約附第二十三条違反と現認し、ファランドール国際法に則り、マーリン正教会賢者の権限に於いて余がお前達全員の処刑をここで直ちに執り行う。お前達は名を名乗る必要もないし、この場で異議申し立てをする権利も認めない。以上や。あ、ついでに言うとくけど質問も認めへん。答えるんがめんどくさいしな」
若者がそう告げると、場に一瞬沈黙が走った後、爆笑が起こった。
「賢者だと？」
「このガキ、もっと気の利いた事いいやがれ」
「動けねえのに偉そうに何言ってやがる」

「いや、おまえらの言うとおり確かにコイツ、けっこう面白いぜ」
「トリムト講話条約って何だ？」
「お前、そんなことも知らねえのかよ？」
「お前知ってるのか？」
「俺達がここで何やっても許されるって言うありがたい法律じゃねえか？」
「わっはっは」

【条約は法律とは違うやろ？】
『違うだろうな』
【少なくとも、こいつらがサラマンダ侯国で何やっても許されるなんていう条約も法律も存在せえへんわ】

「それにしてもこのヤロウ、まだケツの青いガキのくせにこういう状況で落ち着き払ってるのが気に入らねえなあ」
「儀仗を持ってるけど、ルーナーってのは本当なのかね？」
「賢者様ってのも本当なんじゃねえの？」
「おい、何か唱えて見せろよ、ボウズ」
「オマエら、小銭にもならんやつにあんまり時間かけてんじゃねえよ」
「ああ、めんどくせえ。そのありがたい賢者様とやらに、そろそろさよなら申し上げろや？」
「珍しいピクシィだから目は瓶詰めに、首は剥製にしたらそっちの筋に高く売れるぜ。だから顔は傷つけるなよ」
「ちぇっ、ちょっと楽しませて欲しかったんだがな」

やるべき事が決まった後の兵士達の行動は速かった。
あっという間に若者は屈強な体格の兵士達に包囲されたのだ。逃げ道はなかった。
だが、その状況は若者にとってはかえって有利と言えたのだが、

兵士達はもちろんそんなことを知るよしもなかった。
「あばよ、ボウズ」
目の前の『曹長殿』がそう言った次の瞬間には、柄にスフィアが埋め込まれた片手剣で若者は袈裟懸けに斬り裂かれた。
人を殺しなれている人間でないと、こうも迷い無く無造作に生きている人間を斬りつけたりはできないものだ。それ程何の加減もない剣さばきだった。
だが、その剣は若者の体をすり抜けると勢い余って地面に突き刺さった。
「何だ?」
『曹長殿』は我が目を疑い、ついで若者の姿を改めて見やった。
確かに首筋に切り下ろした瞬間は手応えがあった。次の瞬間には血しぶきが上がって黒い瞳を持つ若者の体は地面に横たわっているはずだった。さらに暖かい返り血を浴びて良いはずの間合いでもあった。
「おいおい、何してるんだ、曹長殿も酔っぱらってるのか?」
「なんだなんだ?そのスフィアがはまった高そうな剣も、女子供ばかりが相手だとさび付いちまったんじゃねえのか?」
反対側にいた兵士が囃すようにそう声をかけた。
剣を斬り下ろした『曹長殿』はふと若者が手に持っている儀仗の頭にはめ込まれた一つのスフィアに目をやった。
さっきまで何の変化もなかったはずのスフィア達だが、中程に埋め込まれている小さな球体は鈍く赤い光を出しており、それがただの水晶玉ではないことが見て取れた。それよりも兵士の目を釘付けにしたのはそのスフィアに浮かび上がっていた紋章である。
『曹長殿』はその紋章に確かに見覚えがあった。
いや、彼だけではない。ファランドールにおいてその紋章……クレストを知らない人間などは皆無と言っていいだろう。
『曹長殿』はあることを確信すると同時に鳩尾《みぞおち》に恐怖がこみ上げ、思わず悲鳴に近い声を絞り出してその場を後ずさった。

「うわあああああああ」
「おいおい、どうした？」
「い、いや、こ・こ・こいつは本物だあああああ」
「ああ？」
「オ、俺は確かに斬りつけたんだ、だが、剣が体をすり抜けちまった」
「なんだと？寝ぼけたこと言ってんじゃねえ」
「このガキ、笑ってやがるぜ」
「信じられないなら、あのガキの持っている儀仗のスフィアを見ろぉぉぉ」
兵士が告げた通りに若者の儀仗に埋め込まれたスフィアと言われる球体に目をやった男達から一瞬にしてニヤニヤ笑いが消えた。
「ヤバい。こいつ、マジで教会のルーナーじゃねえのか？」
「なんだと？まさか本当に賢者なのか？」
「ガキだぜ？」
「賢者にゃ年齢なんて関係ねえらしい」
「だが、動けないんだろ？だったら俺たちの勝ちじゃないのか？」
若者は「動けない」という言葉に反応した。
「誰が動けへんねん？」
そう言って『曹長殿』に斬りかかられたあたりを手で叩いて見せた。
「う、動いているっ」
「お、おい、そ、そんなことよりあのガキのひ・ひ・額を見ろ！」
誰かがそう言った。

ドライアド正規軍の軍装をつけた男達は、月明かりを背にして立っていたために見えにくくなっている若者の額を目をこらして見つめた。
「うわあああああああああ！！」
「絶対、本物だあああああっ！」

「マ、マズい。に、逃げろ！」
若者は兵士達が大慌てでそれぞれやってきた方向を目指して走りだそうとするのを見ると儀仗を片手に握って前方に突き出し、何かを短く一言唱えた。すると逃げだそうとしていた兵士達の動きが金縛りにあったように固まって動かなくなった。
「そんなヌルいエクセラーのルーンが遙か上位のルーナーである余に効くわけがなかろう？」
そう言うと、腰を抜かして這って逃げようとしていた『曹長殿』に向かって何かを唱えた。
「ゆ、許してくれっ」
だが、若者は首を横に振った。
「お前が余に許される人間かどうかを改めて自らに問え」
そう言われた『曹長殿』は、その場でルーンを唱え始めた。
「わ、我はドライアドのラメルデ・ダウ……」
涙と鼻水を流しながら、ルーンを唱え始めた『曹長殿』を感情のない目で見つめると、若者は儀仗の頭を『曹長殿』の腹に当てた。
「今度は火炎のルーンか？言うたやろ？三流エクセラーごときが余にショボいルーンをいくらかけても無駄や」
そう言われた『曹長殿』だが、詠唱を唱えるのを止めなかった。
「よしよし、そうか。詠唱始めたら途中で終わられへんわな。ほならこういうのはどうや？お前の腹に当てたこの儀仗でお前をドドドンッと押しやるちゅうのは？」
若者の言葉に『曹長殿』の顔が引きつった。
目が見開かれて恐怖の色が濃く浮かんでいた。止めろと言っているのだろう。
だが、若者は容赦しなかった。無表情のまま、『曹長殿』の腹に当てた儀仗を無造作に押し出した。ズルッと『曹長殿』の体が動いた。
するとそれまでルーンを唱え続けていた『曹長殿』は詠唱を止め、悲鳴を上げた。

「うわあああああああああっ」
そしてそれが彼の断末魔になった。
悲鳴をあげた『曹長殿』の体はあっという間に火だるまになったのだ。

『おい、これはどういう事だ？』
【詠唱を終了せえへん間に座標軸をズラしてやったんや。要するに詠唱失敗やな】
『なるほど、それで自分に返ってきたって訳か』
【ああ】
燃え上がり、だが若者のルーンで体を動かすことが出来ない哀れな三流のエクセラーは獣のような悲鳴を上げていたが、それもやがて消えると、ただ燃えるだけになっていった。
それを見やった後、若者は他の兵士達を見渡した。
どの兵の目にも恐怖の色が浮かんでいたが、若者は同じように無表情だった。
「お前達の汚れきった肉体と魂が余のルーンに依りここで浄化される事をお前達が信じる神に感謝しろ」
兵士達が次の言葉を発する事はなかった。
そもそも悲鳴さえ聞こえずに事は終わった。
若者が何かを唱えた瞬間、彼の四方に白色の光が発生した。そして十人の兵士達はあっという間に白い炎に包まれ、声を発する間もなくその場でことごとく灰になった。それは一瞬の出来事で、そこには焼死体すら残らなかった。

若者が放ったのは圧倒的な高温を発する炎のようだった。炎の渦の中心に立っていた当の若者は黒い髪を少し揺らしただけで自らは炎の影響は全く受けていない様子だった。
局地的な竜巻のように炎が白から赤に色を変えながら渦を巻いて空に消えた後、賢者と名乗る若者はその場に残ったものを確認した。

あまりの高温の為にほとんどの物が灰になるか蒸発していたが、いくつかの残骸……多くは金属製のものだ……があった。熱で溶けて変形したままま赤く光る剣が散乱しているのを見つけると、若者は即座にまた何かを唱えた。すると今度は空気中の水分が瞬時に凍って二つの月の光を受けてキラキラと光りながら地面に舞い降りはじめた。強烈な冷気は残骸が放つ赤い光をすぐさま暗く鈍らせ、あっという間に冷え固まらせた。

赤く燃えていた鉄は元の剣に戻り、天空の二つの月を鈍く映し出してみせた。

【やれやれ】

若者は独り言を心の中で呟くと、冷たくなった金属を拾い集め、道の端の雑草の茂みにまとめて放り投げた。

『相変わらずあっけないな』

【たき火の後片付けはちゃんとやっとかんとな】

『いや、そうじゃない』

【また虐殺やとか言うて俺を責めるつもりか？別にええで。気の済むまで責めたらええ】

『さすがに、それはもう慣れたよ。慣れてしまった自分が信じられないけど、な』

【まあ、しゃあないやろ。少なくとも何が起こったかもわからんうちに、それも全く苦しまずに死んだはずや。あいつらの罪を考えるとじわじわ苦しみを味わわせて殺す方がふさわしいんやけど、今回はお前さんに免じて慈悲を与えたっちゅうやつやな。全く自分の底知れん優しさにあきれるわ】

『そもそもあんな弱い奴ら、殺すにも値しないだろ。ちょっかいを出さずに最初から全員眠らせておいてやり過ごしても良かったんじゃないのか？』

【ま、それもええ手やろな、心優しい若者よ。でもな、それは子供の論理や】

『ふん』

【これは俺の弁解やってとらんでほしいんやけど……考えてみ？この場で例えあんな奴らを生かしておいても、誰も幸せにはならへんやろ。明日には俺達の代わりにここを通りかかった誰かが犠牲になるんや。あいつらの一人が言うとったやろ？「女子供ばかり殺してた」ってな。それにこれは、俺の本来の仕事の一部でもある。知っての通り、そういう判断と権利がマーリンの賢者にはあるんや】

『さすが、聖職者様は我々一般人とは言うことが違うな』

【ええか、エイル】

『なんだよ』

【お前さんがおった世界はここでは想像でけへんような善男善女ばっかりのシアワセな理想郷やったんかもしれんけど、ここは全っ然違う。いい加減わかってるんやろ？ここはお前さんの世界、フォウとは違うんや。ここ、ファランドールではつまらん同情や甘さは他の人間の迷惑になる。そもそも即自分の死に繋がるんやで】

もう一つの声にエイルと呼ばれた若者は小さく首を振った。

『わかってるさ、この世界のデタラメさ加減は。それに、オレの世界だってお前が言うような善人ばかりだった訳じゃない。むしろ……』

【むしろ？】

『いや、いい』

【フン。それにしてもお前さん、体ちょっと疲れすぎやろ？代わった瞬間気ぃ失うとこやったわ】

『言わなかったか？本当にもう限界だったんだぞ。安全なところでとにかく休もう』

【全くもって同感や。あのデルワのグラムコールのルーナーに敬意を表して一応中位のルーンを使こたから、実はマジでもうかなりヤバイんや。ふわぁ……】

そう言うと若者は大きなあくびをして見せた。

『おい、意識を失う前にオレに替わっておけよ』
【ああ、あとは任せた……ホンマにもう限界や】

その場にしばらく立ち止まっていた若者は二つの月を見上げた。月明かりに照らされた若者の額にはなんと第三の眼が開いており、その瞳は燃える様な真っ赤な色で、そこに二つの月を映し出してていた。

若者はすべての眼をそっと閉じると、まるでその場では何事もなかったかのように再びゆったりとした足取りで、切り立った崖に両側を挟まれた谷間の一本道を歩き始めた。

谷を抜ける折からの夜風が若者の黒い髪を少し乱したが、その時にはもう額の眼は跡形もなく消えていた。

# 第四話　カレナドリィ・ノイエ

「ーーてくださいな」
遠くの方から声がした。
どうにもぼんやりとして輪郭のない……
でも、どこかで聞いたことがあるような……
それは声のする方角さえはっきりとしない不思議な声だった。
「ーーきてください」
どうやら声の主は若い女の声のようだ。
ただ、ふわふわして抑揚のない……この世のものとはとても思えない……木霊がかかったような不思議な声だった。
そう、どこか遠くの方で幾人もの同じ声をした少女が一斉に呼びかけているような……

いや。
違う。
これは現実だ。
「起きてください、大丈夫ですか？」
その声は本当にごく近くから……具体的にはエイルの頭上、いや相対的には目の前から聞こえてきた。
間違いなく声の主はこの世のものだ。
それはもうはっきりとわかった。
その声の主はこの世のもので、それも人間の、若い女の声だった。

思考がまとまるよりも前に体が動いた。
エイルはとっさに飛び起きると声のする相手に対して体術の構えで身構えてみせた。
「あら」

エイルをその急な行動をびっくりしたような目で見つめた少女だが、すぐににっこりと笑って見せた。
「でも良かった、目が覚めて」

『しまった』
【しっかりしーや】
『わかってる。でもオレとしたことが人の気配にすら気づかず眠り込んでいたのか』
【このていたらく……眠気に負けてぶっ倒れたって訳やね？】
『眠気じゃなくて、極度の疲労だっ。あんなの生まれて初めてだぞっ』
【とりあえず、お前さんの言い訳大会は後や】
『はあ？』

あまりに深い睡眠だったのだろう。体は本能的に戦闘態勢をとったものの、体が意志の下に忠実に従うどころか、意識とは裏腹にまだほとんどの部分がぼんやりと麻痺したように頼りない。様々な感覚が鈍いまま、なかなか戻ってこなかった。
そんなぼんやりとした網膜になんとか映ったのは、ちょっと驚いた顔で、でもちょっと笑って自分の方を見つめている、長く波打つ豊かな黄色、いやたんぽぽ色の髪を三つ編みにして胸側に垂らした碧眼の若いデュナンの娘だった。
年の頃はエイルと同じか少し上だろうか。逆光線で顔がよくは見えない。癖毛なのだろう。長い髪は大きくうねっていて、三つ編みに編まれた髪にはそうとうのボリュームがあった。
そしてその長く豊かなたんぽぽ色の髪は朝の逆光線で輪郭が透き通るように浮かび上がり、青空を背景にキラキラと輝いているように見えた。
その光景は昔どこかの美術館で見た一枚の絵のような懐かしさで、エイルの心を強く掴んだ。

よく見るとデュナンの娘はその輝くような顔と髪には不釣り合いと言える質素な出で立ちだった。濃いめの青い胸当てのついたツギあてだらけのブカブカの吊りズボンに、襟と袖口が擦り切れた厚手の無地の木綿の白いシャツといった、まるで農作業をする男のような格好だったのだ。

エイルは状況把握をするより先にそのデュナンの娘の事をぼんやりと考えていた。

―（この人はきっと穏やかで優しい人なんだろうな）

高原は初秋を迎えていた。

その清々しい空気の中をすうっと通って耳に達する澄んだ声がよりいっそうその娘の持つ印象を爽やかに嵩上げしたのかもしれないが、とりあえずエイルはなんとなくそう思ったのだ。

それに……。

そう、エイルはこのデュナンの娘をどうやら知っている気がしてならなかった。

もちろん知っているはずはないのだ。

エイルはこの地を初めて踏む。

だから少なくともファランドールでこの娘に出会っているとは思えなかった。

―（フォウの知り合いの誰かに似ているのか？）

エイルは無意識のうちに自分に問うたが、すぐに我に返った。

『すまん。ちょっとまだ寝ぼけてたみたいだ。……殺気はなさそうだ。えっと、まさかとは思うが、ひょっとしてお前の知り合いか何かか？』

エイルは心で問うた。

自分の知り合いでなければ、もう一人の意識の持ち主の知り合いかもしれないと考えたのだ。その印象を心の奥で共有した可能性があった。

【いや。全っ然知らん人やなあ……たぶん】

心の中でエイルの問いにもう一人の意識が答えた。

『たぶんって、頼りないな、おい』

エイルはいっこうに本格的な活動を始めようとしない脳にムチを入れ直近の記憶を辿り、現状の認識を急いだ。なぜ、こういった事態になったのかを。

ただ、視線はたんぽぽ色の髪の娘から外さない。いや、むしろ外せないと言った方が正確だった。その娘を見れば見るほど既視感が強まってくるからだ。

―（確か、そうだ。あの後、とにかく安全な場所で仮眠しようとして……とりあえずは目的地の町の方向に真っ直ぐ向かって道のない山中の藪をこいで……ちょっと開けたところに出たことまでは覚えてるな）

そしてその後の記憶が全くなかった。

おそらく空腹と疲労と睡魔に負けて道ばたで意識を失ったというところであろう。

『でも、この子をどこで見た？オレは何処で遭った？』

エイルの中ではすでにこの娘とかつて出会ったことは確信にかわっていた。

懐かしいような、でも、それでいてあやふやなような。

「私は怪しいものではありません。警戒しなくても大丈夫ですよ」

自分を睨み付けたまま何も言わない若者に、娘は少し微笑んで見せた。

「大丈夫ですか？死んだように倒れていたので、どこか具合でも悪いのかと思って棒でつつく前に声をかけたのですが」

「棒って……」

言われてふと見れば、そばに儀仗が放り出されたままだった。

（あれでつつかれるところだったんだな）

エイルの熟睡状態にあった脳細胞はようやく状況を飲み込む事に成功し、それなりに活動を開始し始めた。

おそらく娘の言う通り、いや、ほぼ間違いなく言うとおりだろうと確信することに対して一切の異論はないと判断するところまでは。

確かにエイルは目の前にいる金髪碧眼の典型的なデュナンの娘には相手に危害を加えようというような雰囲気は感じなかった。

それよりも何よりも冷静に考えればわかることがある。

そう。その気ならとっくにエイルはこの娘にやられているはずだった。全く気づかずに眠り込んでいたのだから。

それに籐で編んだバスケットを背負ったその娘が、人を殺傷するような武器を携行しているとも思えなかった。

エイルはゆっくり構えを解くと、深いため息をつき、少しバツが悪そうに頭を下げた。

「脅かしてしまったなら、すまない」

「いえ、大丈夫です。それより」

「あいにくとオレは怪我や病気じゃない。ただ、ここで野宿をしていただけだ」

そう言うと、ようやく娘から視線を外し、改めてあたりを見渡した。

「野宿って？こんなところで野宿？ここ、往来のど真ん中ですよ？」

タンポポ色の髪を揺らしながらそう言って娘は首をかしげて見せた。

「あ、ああ。そうだな……夜だったから気づかなかった」

どうやら道標の横で眠り込んでいたようだ。娘の言うとおり、三叉路になった街道のど真ん中と言っていい場所だった。道標の廻りは下草が生い茂っていて、自然の絨毯さながらになかなか快適な空間を作り出していた。周りの背の高い木々で適度に風と日差しが遮られていたが、緩やかに過ぎゆく風が葉と枝を揺らし、いくつもの光の道を作り出していた。

エイルは自分の姿を上から見下ろした。どうやら体はまだ朝露で

少し湿ったままのようだった。
「本当に病気とか怪我で倒れていたわけじゃないんですね？」
娘はさっきより一層心配そうな顔をエイルに向けた。少しのんびりとした話し口調はこの娘の特徴なのだろう。見た目よりも落ち着いた、少し低くて、それでいてすっきりと澄んだ声が耳に心地よい。
『この声にも……覚えがある……気がする』
【気のせいやろ。少なくとも俺には見覚えはないで】
『フォウにいた頃によく似た人と知り合いだったんだろうとは思う。でも』
【でも？】
『何か、少し引っかかるんだ。ただの知り合いじゃないような。オレ、ここでこの子に会えて良かったって気になってるんだ』
【フン。それ以上考えても仕方ないやろ。今のままやとお前さんにちゃんとした記憶が戻ることはないんやから】
『それはわかってる』
【そやったら、考えるだけ時間の無駄や】
『そうかもしれないけど、人の気持ちは簡単には割り切れないと言うこともお前は知っておけ』
【そこまで言うなら、アレか？フォウでは深い仲やったとか？】
『それはない』
【即答やな】
『マーヤの事で頭がいっぱいで、女の子と特別な関係になるとか、そんなことにかまっている余裕なんてないはずだ』
【どうだか】

「どうしました？」
心の中でもう一人の声と会話をしていたエイルは少女には急にぼうっとした様に見え、心配して声を掛けたのだ。
「いや、ちょっと考え事をしてた。というか、現状把握だ」
「現状把握、ですか？」

「そうなんだ。確か昨夜は歩きづめで疲れてて、腹が減ってて……この場所が見えた時には気が遠くなって」
そこまで喋って、エイルはハッと我に返った。
「いや、オレのことはどうでもいい。本当に大丈夫だからもう放っておいてくれ」
「ずっと何も食べてないんですか？」
「おまえ……いや、君には関係ない」
「あらあら、まあ。何も食べてないのは体に良くないですよ」
少女はそう言うと心配そうな眼差しでエイルの側に近寄ってきた。
エイルはそれに反応して同じだけ後ずさった。
「そんなことは言われなくてもわかってる。いや……そうじゃなくてオレの話を聞け」
「ちゃんと聞いていますよ」
少女は努めて無愛想に振る舞うエイルの言葉を聞いてか聞かずか、エイルが後ずさる速度よりも速く間合いを詰めてきた。
近くで見ると娘の大きな青い目がさらに大きく見えた。
だが、その目を細めて娘は優しく微笑んで見せた。それはまるですねた幼い弟をあやす姉のような表情で、エイルはなぜか自分がこの娘に対してすっかり安心しているのに気づいた。
「本当に賊の類じゃないんだな？」
間抜けな質問だとは知りつつ、エイルは笑っている娘に敢えて尋ねた。
娘はそのエイルの問いに今度はけらけらと声に出して笑って見せた。
「何がおかしい」
「私ってそんな風に、賊の類に見えますか？」

【女は見た目ではわからへんからな】
『男だってそうだろ？』
【いや、男はわかりやすい】

『そうなのか？』

「その、あれだ。女は見た目ではわからん……と忠告してくれたお節介な奴がいた。女で油断させておいて物騒な連中が後から現れるなんてザラにある話だ」

「ザラなんですか？」

「あ。いや。どうなんだろうな」

エイルは答に詰まって頭をかいた。

【おいおい】

『うるさいっ』

少女は可笑しそうに笑ったままだ。肩が震えている。

「あなた、そんな目に遭ったことがあるんですか？」

エイルはばつが悪そうに答えた。

「幸い、そんな経験はないな」

「うふふ。そうよね。でもホラ、私が賊ならわざわざ助け起こしたりしませんよ」

【あのな】

『なんだよ』

【どう考えてもこの娘は賊っちゅう雰囲気やないやろ？】

『お前なあ』

エイルはもう一人の声に肩を落とした。

「それもそうだな。すまん」

「いえ、そんなことはもう気にしないで下さい」

『お前、いつかぶっ飛ばすからな』

【その台詞は聞き飽きてもうたな。せや、次からは『オイブ』って言うてくれるか】

『はあ？何だよ、『オイブ』って。』

【オまえ、イつかブっとばす　の略や。そう言われたオレも面倒や

から『ハ』って答えたる。どや？かなり無駄が省けるで】
『――『オイブ』』
【『ハ』】
『――なぜだろうな。泣きたくなってきた』
【修行が足りんな】
『絶対ギタギタにしてやるからな。覚えとけ』

エイルはとりあえず心の中でもう一人の声に悪態をついた後で娘に話しかけた。
「それより君さ、その軽装だとこの近くの村から来たんだよな」
「ええ」
「村までどれくらいかかる？とにかくどこかで腹ごしらえをしたいんだ。情けない話だけど、このままだとまたすぐ倒れそうなんだ」
たんぽぽ色の長い髪を持つデュナンの娘はエイルの言葉を聞くと青い目を細めてクスクス笑いながら、何も言わずに背負っていた蓋付きの籐で編まれた背負い籠を地面に下ろした。エイルがいぶかしげに見守っているのを横目でみながら蓋を開け中を探ると、きちんと朴の葉に包まれた手のひらより少し大きなものをエイルに差し出した。
「どうぞ」
「え？」
エイルは娘の行動に面食らった。
「この道をしばらく下っていくとすぐに前方が開けて、町が谷間に見えてきます。ここからだと三十分もかからないかしら」
「近いんだな」
娘はうなずいた。
「町はランダールと言ってこのあたりじゃ一番にぎやかな町だから、宿屋や食事ができるところは何軒もあります」
エイルは娘が口にした町の名前に反応した。
「ランダールだって？あの？」

「ええ、サクランボとワインで有名な『あの』ランダールです」
「君の町ってランダールなのか。オレたちはそこに向かっているんだ」
エイルの言葉を聞くと、娘は初めて少し不思議そうな表情をしてエイルを見た。
「うん？」
エイルがどうした？という風に尋ねたが、娘は首を左右に振るとすぐにもとの笑顔に戻った。
「何でもありません。じゃあ目的地はもうすぐですね」
「そうだな。なんか気が抜けた」
エイルはそういうとため息をついた。娘はそんなエイルに朴葉の包みを差し出した。
「そんなにおなかが減ってるんじゃそこまでもたないでしょ？だから、よかったらこれをどうぞ」

【おお。ほとんどランダールまで来てたんかあ】
『お前さあ、ランダールはまだかなり先なんやーとか言ってたじゃないか』
【そっか。良かった良かった。夕べは結構距離を稼いだしやなー】
『お前も人の話を聞けっ』
【聞いてる聞いてる】
『まったく、お前の言うことは肝心な時にアテにならないよな』
【今まで何度もアテにならないヤツのおかげで命拾いしてるやないか】
『フン。まあその点にだけは感謝してる』
【そや。わかればええねん】
『いや、ちょっと待て。オレの命拾いはお前の命拾いでもあるんだろ？』
【いちいち細かいやっちゃな】

エイルは心の中でもう一人とやり合いながらも、差し出された食べ物とおぼしき包みに、不覚にも顔を輝かせた。
思わず手が出そうになったが、ぐっと堪えると微笑する娘の顔と包みとを見比べた。
「でも、これは君の食事なんだろう？」

【ふふ。腹を鳴らしておいてその言いぐさはどうかと思うで】
『う、うるさい』
手を差し出すかどうかを決めかねている様子のエイルを見ると、娘は一歩エイルに近づき、手にもった包みをエイルの胸のすぐ前に差し出した。間近で見ると娘の身長はエイルより少し高い。娘が大柄というよりはデュナンに比べるとこの世界ではエイルの方が小柄な種族なのだと言うことなのだろう。その事はエイル自身、すでに認識はしていた。
「私は朝ご飯をしっかり食べてきたから大丈夫です。それに私の用事はすぐに済むし、これはもともと非常食だから」
「非常食？」
「ええ」
娘はまた、大きな目を糸のように細めて微笑んで見せた。
「非常食が非常時に使われるのはとても正しい事だと思うわ」
エイルはそう言われて手を伸ばし、タンポポ色の髪をした人なつっこそうな微笑みを浮かべる青い瞳の美しい娘が差し出した包みを受け取ると、おそるおそるそれを解いた。
大振りな朴の葉は細めの麻の網紐できちんと結ばれていた。ただし、ほどきやすいように。
それを見たエイルの心が少し和んだ。若い女性のちょっとした気遣いというか、かわいらしい手間が感じられたのだ。たとえ自分の為といえどこう言ったちょっとした一手間があれば、やはりほっとするものだ。そのあたりの情緒を知っている女性だという事だろう。そしてそれは誰かによって優しく育まれてきたものに違いなかった。

そのちょっとした気遣いがない為に道中に大事な食料を紛失してしまうという失態をしでかしたのかもしれないと、少々自戒の念すらも頭をもたげてきて、エイルは少し落ち込んだ。

だが、そう落ち込んでばかりも居られない。

気を取り直してゆっくりと開いた包みの中身は山羊のチーズとキュウリのピクルスを挟んだライ麦のパンだった。

素朴で質素な弁当だったが、きっといい香りのするサンドウィッチなんだろうな、とエイルは想像した。チーズの香りもさることながら、きっとこのパンも今朝焼いたと思えるバターのいい香りがまだ残っているに違いなかった。

『はあ』

【ため息をつきなや。しゃあないやろ】

『きっと、天国的に良い匂いなんだろうな』

【だから禁句やって】

「普段の食事そのままだからごちそうでもなんでもないけど、おなかの足しにはなると思います。ランダールにたどり着く前に倒れたら大変だもの」

「その、君の用事ってのは？」

そのライ麦パンのサンドウィッチを見つめて大きくつばを飲み込みながらも、まだエイルは遠慮していた。

「えっと。キノコ採り。えへへ」

エイルの問いにそう答えた娘は少し顔を赤らめて恥ずかしそうに笑った。

「キノコ狩り？」

想像もしていなかった返事にエイルの思考が止まった。

『キノコ狩り？』

【キノコ狩りはキノコを採集する行為や】

『ンな事は知ってる』
【そっか、すごいなあ】
『オイブ』
【ハ】
『――やっぱ、やめないか、これ』
【なんでや？ええ感じやん】

「ええ。その藪から入ってちょっと行ったあたりにミヤマシメジの群生があって……。ちょうど今日あたりが収穫に最適な日なの。おばあちゃんに教わった私しか知らない秘密の場所」
「ミヤマシメジ？」
「ええ。とってもおいしいのよ。それに貴重品。でも私がここにキノコ採りに来たことはヒミツです。物騒だから一人で町から外に出るなってうるさく言われているの」
「ああ。それはいいけど」
「ここからだと、その場所までもうあとほんの少しなの。だから本当に私には遠慮しないで下さいな」

【気ぃつけや。毒キノコ入りかもしれへんで】
『この弁当のどこにキノコが入ってるんだよっ』
【パンに練り込んでるとか？】
『あのな、エルデ』
【はいな】
『お前、オレが思うに相当のワルみたいだしさ、まさか若い女性に毒殺されるような心当たりでもあるのか？』
【うーん、まあ、女なんてみんな敵？みたいな】
エイルからエルデという名前で呼ばれたもう一つの心の声は、エイルに対して茶化すように応えた。
『おまえって奴は』
【でもまあ、その娘の言うとおり賊や物取りなら寝てる隙にとっく

にやられてるやろし、わざわざ毒キノコ入りの食事を差し出すとか、まったくもってありえへんやろ】

『そういう事だな。だいたい毒キノコ程度じゃ死ねない体だし。誰かさんのせいでな』

エイルはそれでもパンと娘を交互に見比べていた。

「あ、パンだけじゃ食べにくいかな？飲み物もありますよ。残念ながらワインじゃないけど。でもまだお酒を飲める歳じゃないわよね」

再び籠を探ると、娘は革袋の水筒を取り出した。

「うちの裏にあるわき水なの。すごくおいしいのよ。ランダールが目的地だって言ってたから知ってると思うけど、ワインと並んで水は自慢なんです」

笑顔で差し出された水筒と手元の弁当を見比べるとエイルは目を伏せた。

「すまん。見ず知らずのオレに」

「いいんです。こんなご時世だから困っているときはお互い様。それに」

「それに？」

「あなた、見たところ弟と同じくらいの歳だから、私ひょっとしたら普段よりずっと親切かもしれません」

「君、歳は幾つ？」

「女性に歳を聞くものじゃないって教わりませんでした？」

「なぜ？」

「冗談よ。私は十七歳」

「なんだ。じゃあオレと同い年じゃないか」

「えええええ？そうなの？だってどう見ても」

「どう見ても？」

エイルは娘が思いっきり驚いた顔をしたので、ちょっとムッとした表情を浮かべた。

「あ、ごめんなさい。えっと、そういうつもりじゃなくって」

エイルの表情を見て、娘はバツがわるそうに視線を泳がせた。

「いいさ。どうやらオレはここじゃ年下に見られるようだしな」
「ここ？」
「い、いや、なんでもない」
「若く見えるっていうのは、ほら、えっと、なんていうか、元気があって見るからに若々しいから？」
「頬はきっとこけてるし、腹が減ってヘロヘロなのにか？」
「ええっと。だからほら、遠慮しないで食べて食べて」
青い瞳のタンポポ色の髪の娘はそういってチロリと舌を出すと小さく笑った。
明るい、いい笑顔だなとエイルは素直に思った。それによく笑う。
瞳の大きな人なつっこい綺麗な顔は、普通にしていても柔らかい表情で、見ている人間を優しい気分にしてくれるようだった。おそらく町では誰からも好かれているんだろうな……そうエイルは想像した。
少なくともそう思えるような、人を安心させる笑顔をした娘だった。
「ほらほら。おなかが減っているんでしょう？さ、召し上がれ」
まだグズグズと迷っているエイルに娘は声をかけた。
三つ編みのたんぽぽ色の髪の娘からすると、目の前の黒髪の若者はどう見ても年下にしか見えないのだろう。
とりあえず同い年だと知った後の娘の言葉遣いは少し親しいものに変わった。
エイルはやっとのことでうなずいて、パンをかじった。
久しぶり……おそらくまるまる三日ぶりくらいに口にするまともな食べ物だった。
一口食べては水筒の水を含む。
冷たい水が心地よく喉を通過していった。
「ゆっくり、よくかんで食べないとだめよ、ええと」

娘は笑いながらそんなエイルの仕草をみていた。
「オレは、エイルだ。エイル・エイミイ」
「エイル・エイミイ君ね。エイル君って呼んでいい？」
「ああ、オレのことは別に何とでも呼んでくれ」
「私はカレナドリィ・ノイエっていうの」
「カレナドリィか」
娘はうなずいた。
【ほう、珍しいな】
『珍しい名前なのか？』
【古代のディーネ語やな。もうほとんど知っている人間はおらへんと思っとったけど、一部の単語はまだまだ残ってるみたいやな】
『古代ディーネ語？』
【今の言語は俺が使うてる古語を含めてノーム系言語っていわれてるんやけど、ディーネ語はそれとは全く別系統の言語で大昔に廃れてる。ちなみにディーネ語にはいわゆる文字に相当するものが存在してへん。言葉や文章っていうまとまった概念を記号化するような形で残してたみたいやな。文化人類学的な考察をすると、廃れた原因はそこやな】
『象形文字みたいなものか？』
【いや、そう言うんやのうて、一見意味不明な図形の集合体なんやけど、それを一文字とすると、その一文字で本人の自己紹介が全部出来てる、という感じで、およそ普通の人間には解読不能や。たぶん相当の知能がある人間しか使いこなせへん文字やったんやろうな】
『そういうのなら、フォウにも似たような概念のものがあったような気がする』
【ホンマか？】
『あ、いや、それは人間には読めない特殊な図形なんだけどな。だからちょっと違う』
【お前さん、そう言う記憶は残ってるんやな】
『生活習慣みたいなものは結構ちゃんと記憶しているみたいだな』

【ふーん】
『それで、ディーネ語ってわかるってことはアレだろ？お前には意味がわかるってことだよな？カレナドリィっていう単語』
【『たんぽぽ』や】
『へえ』
【まさに「へえ」やな。名は体を表すというか、そのまんまやな、この娘。ひねりはないけどええ名前や】
『そうだな』
【言うとくけど、エイルっちゅうのも古代ディーネ語なんやで】
『そうなのか？お前、そんなこと言ってなかったじゃないか』
【意味もなく名前はつけへんやろ】
『で、どういう意味だよ、エイルって。教えろ』
【お前には名付け親に対する敬意っちゅうもんが感じられへんから教えたらへん】
『感じ悪いな』
【放っといてんか】

エイルは心の中で今得たばかりの知識を娘に披露した。わざわざそんなことをする自分を不思議に思いながら。
「タンポポっていう意味か？」
カレナドリィはエイルのその言葉を聞くと驚いたような顔をした。しかしすぐに満面の笑みを浮かべて大きく首を縦に振った。
「うんうん。でも、すごい。よく知ってるわね」
「たまたま、だ」
「ふーん。なんでももう廃れてしまったすごく古い言葉なんだって。お母さんがその言葉をけっこう知っていて……。ああ、お母さんの名前もその古い言葉なのよ。リザルフェルチェっていうんだけど」
【ひまわり】

「ひまわりっていう意味なの。いつも笑顔で本当にひまわりみたい

な人だったわ。でも、呼びにくいからっていう理由でリサ、リサって呼ばれてたんだけど」

【おい】

『え？』

【気ぃつけや。母親の話題は過去形やった】

『そう……だな』

「お母さんは言語学者か何かなのか？」

「言語学者？」

「いや、そんな文字も持たないような古代の言葉を知ってるなんて」

「ああ」

カレナドリィは不思議そうな顔をすぐに笑顔に変えた。

「お母さんはウンディーネの少数民族の末裔で、お母さんの一族にはまだなんとか口伝えでいくつかの言葉が残っているみたい。でも、それってみんな花の名前ばかり」

「なるほど」

【少々興味のわく話やな。どこの部族やろ】

『お前が他人にそういう興味を持つのは珍しいな』

【持ち前の学究心が目覚めてもうたかな】

『ほおー』

「それより、そんな言葉を知っているあなたの方が不思議だわ」

「まあ、ちょっとそっち方面はカジったことがあっただけだ」

【ほおー】

『し、社交辞令だっ。黙ってろ！』

「ふーん。あ、でも私の事はカレンって呼んで」

「カレン？」
「ええ。カレナドリィって言いにくいでしょ？なんか修道女みたいな禁欲生活してますーっていう感じの名前だもの。それに『カレナドリィ』って言うのは叱られる時の名前なの。お父さんも普段は『カレン』なのにお小言を言う時は必ず『カレナドリィ』」
「なるほど」
「でも修道女の禁欲生活って実際どうなのかな？エイル君は知ってる？ランダールには女修道院はないし、私にはよくわからないのよね。禁欲的っていう言葉がどうしても窮屈そうなのはわかるんだけど。でも誤解しないでね。私、自分の名前が嫌いな訳じゃないのよ。どっちかっていうと気に入ってるんだけど、カレナドリィって呼ばれるよりカレンの方が若い女の子っぽいし、だいいち気さくな感じでしょ？もっとずっと歳を取って、そうね、おばあさんになったらカレンよりカレナドリィの方が似合いそうだわ。カレン婆さんよりカレナドリィ婆さんって呼ばれた方が威厳がありそうじゃない？子供達も言うことを聞きそうな気がしない？でも今はカレンの方がいいかなって思うの。そうそう。ちっちゃい時はみんなヴィーって呼んでたんだけど、さすがにこの年になってヴィーだと子供過ぎる感じでしょ？だから今はカレン。で、実際にいつカレナドリィって呼んでもらうかは考え中なの。でも今からお婆さんになった時の事まで考えるのってちょっと変よね。うふふ。あ、そうそう。それよりもエイル君って、女の子の名前みたいねえ」
エイルはしゃべり続けるカレナドリィに毒気を抜かれていった。そしてカレナドリィのおしゃべりに合いの手や突っ込みを的確に入れるのは並大抵の事ではない、と即座に悟った。
なにしろ口を挟む隙が見えない。
カレナドリィは決して早口ではない。でも、会話に全く切れ目がないのだ。
話題に対して合いの手や訂正をしようと思っても、次の瞬間にはなぜか違う話題を喋っていて用意した言葉はもはや過去の遺物にさ

れてしまう。
　たぶん、こういう状態になってしまったら最後、カレナドリィが話しをやめるか、こっちに質問を投げかけて答えを待つ間合いを狙うしかないようだった。
　エイルの考えは当たっていた。一方的な話はしばらく続き、そしてようやくエイルに向けられた質問はしかし、彼にとってあまり愉快な話題ではなかった……のだが、不思議とカレナドリィに対してはいつものようには腹が立たなかった。
　だから、素直な答えが口から出た。
「よく言われる。だからそう言われる度にいつも名付け親を呪う事にしてる」
「呪うって……ひょっとして今も？」
「ああ、今、呪いの言葉を唱え終えたところだ」

『ったく』
【ホンマにええ名前なんやけどなあ】

「ダメよ、呪うなんて」
　カレナドリィはそう言ってエイルをたしなめた。
「綺麗な名前だもの。それに優しい響き……そんな素敵な名前を付ける人に絶対悪い人はいないわ。だからご両親を呪ったりしちゃダメよ」
「ご両親って」
「そうそう、女の子みたいな名前の男の人と言えば私が今まで知ってる中で一番ヘンだったのは」
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
「え？」
「いや、なんというか、そう。お世辞は別にいい」
　エイルはカレナドリィの終わりなきおしゃべりが再び始まるのを止めることが出来た。

『やれやれ』

【偉いな。よう止められた】

『オレも自分をほめてやりたい気分だよ』

「ううん、ホントよ。私、お世辞はいわない主義なの。でもごめんなさい。気にしてたんだ？」

「名前のことか？」

「ええ。どう考えても女の子みたい、って言ったこと」

【『どう考えても』とか言うてないやろ？】

『この子、無自覚にひどい奴なのかも』

「気にするだろ、普通。というか、ずっと気にし続けている」

「ふふ。でしょうねえ。私もダニエルとかジェイコブなんて名前を付けられたらいい気はしないし、それよりやっぱりエイル君みたいに名付け親を恨んじゃうかも知れないわね。あ、別にダニエルっていう名前は嫌いじゃないわよ。父方のお爺さんの名前だし。それにエイルっていう名前がいい名前なのは間違いないわよ。アニーだってきっとそう言うわ。アニーって言うのは私のお友達で、サクランボの農家の娘なんだけど、本名はアナハイムって言うの。でも本人はそれが気に入らなくてアニーって呼ばないと怒るのよ。でも普段のアニーはとっても優しいいい子で私は大好き。髪の毛も栗色でまっすぐで長くて、さらさらで私みたいなこんな癖っ毛じゃなくて憧れてるの。アニーの髪の毛をとかしてあげるのが私の密かな楽しみなのよ。アニーも気持ちいいって言ってくれるし二人とも楽しくなれる作業ってすごいと思わない？アニーはすごいのよ。最近サクランボの砂糖漬けの独自製法を考案したって言ってたわ。でもアニーのお父さんは絶対アニーにサクランボ倉庫に近寄らせないらしいの。鍵がかかってて、その鍵は眠る時もお父さんが肌身離さず持ってい

て、奪うことが出来ないんだって。お母さんに頼んだら『あんたの砂糖漬けは個性的過ぎてウチじゃ無理』って言われて協力してくれなかったんだって。そう言われると是非一度食べてみたいと思わない？来年の春は絶対試食しなくちゃ。だって、個性的な味なのよ。個性って、いったいどんな個性なのかしら？今から楽しみで仕方ないわ。そう言えばアニーのお母さんはウンディーネの生まれだって言うから、きっとエイル君の名前を聞いたらステキだって言ってくれると思うわ」

「そ、そいつは、どうも」

少し照れたようにそう言って目をそらしたエイルを見て、カレナドリィはにっこりと微笑むと、今度は遠慮がちに尋ねた。

「あの……それと、これもよく言われるかも知れないけど」

その言葉にエイルは即座に反応した。今し方の照れくさそうな雰囲気はかききえていた。

「オレの目の色が黒い事か？」

エイルはあからさまにうんざりしたように答えて見せた。

「あ、あの……ええ、ご、ごめんなさい。でも私、黒い瞳って見るのは初めなの。だから……。でも、気に触ったのならごめんなさい」

先ほどのお喋りの時の元気さと勢いはどこへやらと言った風にカレナドリィは背中を丸めて小さくなってうつむいて見せた。それはまるでいたずらを叱られた子供のよう姿だった。

その姿を見て、エイルは思わず苦笑するしかなかった。

「なあ、黒い目はそんなに珍しいものなのか？」

だから、無愛想を装いながらも口調が穏やかになるように気を遣ってそう尋ねた。

同時にそんな事を考えた自分にエイルは愕然とした。ファランドールに来てからこっち、相手のことを思いやって会話をするのは初めてのような気がしたのだ。

「ええ、もちろんよ。お父さん……父は見たことがあるって言ってたけど私は初めて。たぶんこの辺じゃ見たことある人はほとんどい

ないんじゃないかしら。でも、黒い瞳って実物を見ると、すごく綺麗ね。神秘的って言うか……。エイル君の瞳は茶色も鳶色も混じってなくて、本当に黒くて深くて吸い込まれそう。それにその目はあなたの黒い髪にとっても似合っているわ」

「そ、そうか」

エイルは褒められてまたもや思わず少し赤面した。

【あの、もしもし？ひょっとして照れてる？】

『お前、いちいちうるさいぞ』

【ちょっとかわいい女の子に褒められて頬を赤らめるやなんて、ウブ過ぎやろ。こっちが恥ずかしいわ】

『ええい、やかましいっ！』

「ね。ところで、ランダールには何をしに行くの？見たところ大市が目当てでもなさそうだけど。それよりどこから来たの？住んでいるところって黒い髪で黒い目の人が多いのかな？あ、ごめんね。瞳の色のこと気にしてるんだったね。だったら今のは答えなくていいから。えっとそれからね」

カレナドリィはしゃべりながら、視線をある場所にチラチラと移動していた。

エイルはその様子が気になってそれとなく視線の先を追ってみた。そこには彼の儀仗が転がっていた。

エイルの視線が杖に向かうのを、カレナドリィは見逃さなかった。

「あれ、杖よね？エイル君のもの？かなり細長いし、あれってなんか教会の司祭様とかが持っていそうよね。でも、色が三色っていうところが少し不思議ね。やっぱり山道で使うの？ひょっとして杖に見えて実はウンディーネではやっている一本弦の楽器……とかじゃないわよね？だいたいどう見てもエイル君って吟遊詩人って訳でもなさそうだし。そういえば、ウンディーネって外国だし、けっこう遠いけど、旅費もかかるでしょう？ランダールにいくのはいいけど

宿代とかちゃんと持ってるの？町の中で今日みたいに野宿とかしてたら自警団に捕まっちゃうよ」

エイルはカレナドリィの言葉を聞きながらパンに挟んであったピクルスを適当に噛んで飲み込むと、おかしさがこみ上げてきてその日初めて声を出して笑った。

「くくく」

「あら、私ヘンな事言ったかな？」

「ヘンというか、呆れた」

「呆れた？」

「いや、そうじゃない。質問はいっぺんにしないでくれ。いったい何から答えていいかわからなくなる」

「あ。ごめんなさい。私、それでいつも注意されるの。『お前はいろんな事をいっぺんに喋りすぎだ。もっとゆっくり一つずつ解決しなさい。まだ若いんだから』って。でも、若さと何の関係あるのか全然わからないんだけど。そういえばサラったら失礼なのよ。『質問ばっかりするのはまだ子供だからよ』なんて言うのよ。そりゃ私はサラより子供っぽいかもしれないけどもう十七歳だかられっきとした成人なのに。サラっていうのは広場を挟んで反対側にある宿屋の娘で、アルヴの血が混ざってるから背も鼻も高くてとっても端正な顔をしている子なの。頭も良くて学校じゃいつも一番だったのよ。彼女だって学校じゃいつも先生を質問攻めにしていたくせに、自分の質問はよくて私の質問は子供っぽいから駄目だなんてずいぶんだと思わない？でも、確かにエイル君にはいっぺんにいろいろ聞き過ぎたかもしれないわね。ちょっと反省」

そう言うとカレナドリィはバツが悪そうにチロっと舌を出した。

その様子を見て、またもやエイルは既視感に襲われた。

『やっぱり誰かに似てる。オレが忘れた記憶の中に居る誰かなのは間違いないな』

【ふーん】

「でも、エイル君、初めて笑ってくれたね」
カレナドリィはそう言うと嬉しそうににっこり笑って見せた。
エイルはそれを見て顔を赤らめると思わず目を逸らした。
「いや、笑ってない」
「えーっ？笑ってたわよ、今っ」
カレナドリィはこんどは頬を膨らませてエイルを睨んで見せた。
表情がころころとよく変わる……。エイルはカレナドリィに感じる懐かしさのせいもあって、自分の心が少しずつほぐれていくのを自覚していた。もちろんそれはファランドールへ来てから初めての感覚だった。
「覚えてない」
だが、それでもなぜか意地を張ってしまう自分が滑稽だった。

【確かに笑ろてた。珍しい事に】
『知らん』
【あらあらあ？エイル君ってば、柄に似合わずけっこう照れ屋さんやったんやなー】
『ヘンなしゃべり方をするなっ』
【う・ふ・ふ】
『だから、気持ち悪い笑い方をするなっ。それに柄に似合わずっていうのは余計だ』
【だってえ、エイル君ってば目つき悪いしぃ、普通にしてても不機嫌そうな顔やしぃ。笑うなんてチョー珍しいわぁん】
『覚えてろ、元にもどったら絶対ぶっ飛ばす』
【いやん、怖わーい】
エイルはちょっとバツが悪そうにカレナドリィから目をそらして手にした水筒の水を一口飲むと、思いついたように儀仗に手を伸ばし引き寄せ、そしてそれをそのままカレナドリィに差し出した。
【おい！】

『大丈夫だって』
【まあ、そうやけど。でもエイルはなんやかんや言うて女の子に甘すぎや！】
『そんなことはない』
【マジで、いつかホンマに寝首かかれるで】
『一応、その忠告は覚えとく』
カレナドリィはいいの？という風にエイルの顔をうかがった。
エイルはニヤリと笑ってうなずいた。
「持てるものなら、な」
長さが自分の身長以上もあるその儀仗を、カレナドリィは差し出されるままに握ってみた。
間近にそれを見たカレンは、不思議な儀仗だと思った。遠目には白と茶色と黒の三本の木を撚って一本にしていると思ったのだが、近くで見ると表面はなめらかで一本の木を三色に塗り分けたようにしか見えない。それぞれの木に継ぎ目がないのだ。どうみてもそういう模様の木を削りだして杖にしたような感じだ。
ただ、木であることは手触りの何とも言えない柔らかさと暖かさでわかった。
でも、何よりカレナドリィの目を惹いたのは杖の上部の小さな輝きだった。瘤のように太く曲がった部分に埋め込まれているいくつかの小さな色とりどりのスフィアが、木漏れ日をキラキラと反射していた。

カレナドリィは差し出された儀仗を握りしめると、そのまま持ち上げようとした。
だが、細身でけっこう軽いと思っていた儀仗は予想よりもずっしりとした重く、片手では持ち上がらなかった。試しに体勢を変えて両手で掴んで抱えあげようとしたが、それでもびくともしなかった。
それはまるで地面深くに打ち込まれた杭か大木の根のようだった。
「これ、どういうこと？」

「重いだろ？」
エイルの問いにカレナドリィはコクンとうなずくと持ち上げることを断念して儀仗から手を離した。
「エイル君って超超力持ちなの？」
カレナドリィは不思議そうにエイルを見てそう尋ねた。
「そう見える？」
「全っ然見えない。むしろ体、弱そう」
カレナドリィにそう即答されると、エイルはさすがに苦笑した。
「はっきり言うんだな」
「それもお父さん……父によく言われるわ。お前は思ったことをはっきり言いすぎる。もっと相手の事を思いやって考えてからしゃべれって。でもそういうお父さんだって友達には口が悪すぎるっていわれてて」
「ああ、わかった」
「え？」
「まあいいや。見ての通りこれは儀仗だ。山歩きと護身用を兼ねて。それから」
「それから？」
「父じゃなくてお父さんでいいんじゃないか？」
「そうね」
「カレンにはそう言う言い方の方が似合ってると思う」
「そうかな。あ、そうそう、それで儀仗って要するに杖よね。……でも、ただの杖がこんなに重いはずはないでしょう？」
「オレはただの杖だなんて言ってない」
「え？」
「この儀仗にはルーンがかかっている。持ち上げてみてわかったろ？こいつはオレ以外の人間には重すぎて持ち上げることはできない。盗難防止だ」
「ルーンって……エイル君、あなたは一体？」
「こう見えても一応ルーナーの端くれだ」

「あらあら、まあ」
　カレナドリィはよく晴れた夏空を切り取ってはめ込んだような瞳を大きく見開いて本当に驚いたという顔をして見せた。
「ルーナーの見習いさんかあ。そう言われるとこの儀仗ってそんな感じよね。スフィアが埋め込まれてるし、それっぽい」

【誰が見習いやっ！】
『まあまあ。それこそ突っ込むとややこしい話になるだろ』
【高位ルーナーの矜持にかけてその辺の見習いルーナー扱いは受け入れるわけにはいかへんっ】
『わかったわかった。そのうち訂正しておくさ』

「へえ、これがルーナーの杖かあ。見習いにしては本格的だわ。上の方のコブには大きな空洞があるのね。その周りにはスフィアがたくさん填ってよく見ると豪華ね。……このスフィアでたくさんルーン使えるんだあ、って思っちゃうし、こうやってみるとエイル君って見習いなのに杖だけは一人前っていう感じよね。それより私、子供のルーナーになんて初めて会ったわ」
「ー念の為に言っておくけど、俺は子供じゃない」
「ああ、ごめんなさい。同い年だったわよね。さっきも言ったけどあなたってどうも弟くらいに見えちゃって」
　カレナドリィはそう言って舌をチロっと出すとにこっと笑って見せた。エイルはその顔を見せられると、何でも許してしまいそうだった。
　が、次の瞬間にはカレナドリィは真顔になってエイルの目をじっと見つめてきた。
「な、なんだよ？」
「本当に私と同い年なの？」
　エイルはカレナドリィの質問にムッとしたが、素直に答えた。
「本当に十七だ」

「まあ、歳を嘘ついたって得になることはないわよね」
カレナドリィはそういうと自己完結したふうにうなずいた。
【まったく】
『確かに。それより気になる事がある』
【気になる事？】

「子供のルーナーは初めてということは大人のルーナーには会ったことがあるのか？」

【ああ、そのことか】
エイルの問いにカレナドリィはうなずいた。
「先の大戦で本物、見習い、それに老若男女問わずみんなかりだされてルーナーはめっきり少なくなっちゃったらしいけど、ランダールでも時々偉いお坊さんに付いて教会にやってくる事もあるし見たことがないという訳ではないのよ。それに少し前だけどランダールに滞在してたルーナーもいたわよ。私もその人の事は町のあちこちで見かけたことがあるわ。なんでも教会の施策で町の為に特殊な防御のルーンをかけているっていう噂だったけど、実際に何をしているのか知っている人は誰もいなくて」
「へえ」

【へえ】
『何だ、お前が知らない事か？』
【教会の施策で町を防御とか初めて聞いたなあ】
『へえ』

「少し前って、いつ頃？」
「もう二年くらい前になるかなあ。季節は今頃よ。確かあの人を見かけるようになった後で冬用の夜具の手入れをした覚えがあるから。一ヶ月くらい滞在して、その後また旅に出たみたい」

「旅？」
「ええ、それも噂よ。教会の人もその人のことはあまり詳しくは知らないみたい。なんでもそのルーナーは教会の仕事の為に全世界を回っている人で、でも町のどの教会の神父さんより位が高い人らしくてその人には誰も頭が上がらないし、質問をしてもあまり答えてもらえなかったって言う事だったわ」
カレナドリィは空を見上げながら記憶を引っ張り出しつつ、ゆっくりと話した。
「覚えているのは……私が挨拶しても鋭い目でこっちをじろじろ見て、なんか怖い人だったなあって事くらいかな。でも私、あの人はいい人だって思ってるの。道ばたの花を踏まないように避けて歩いてるのを偶然見ちゃったんだ」

【うーん】
『こんなところにルーナーなんて珍しいな』
【夕べも会うたけどな】
『ああ、そっか』
【まあ、夕べのはちょっと驚いたしルーナーが珍しいのは確かやな。路傍の花を踏まないように歩くルーナーか。でも、どっちにしろ俺らがあんまりそのルーナーの詮索をする必要はない】
『そうだな』
エイルはカレナドリィがどうしても持ち上げられなかった儀仗を軽々と持ち上げるとカレナドリィに聞こえない程度の小さな声で儀仗に囁いた。
「戻れ《ルヴ》、ノルン」
するとカレナドリィには一瞬で儀仗が消えたように見えた。だがよく見るとエイルの右手の中指に儀仗と同じような模様の指輪がはまっているのがわかった。中央に少し大きな赤いスフィアがはまっているのが目についた。カレンの記憶ではさっきまでエイルは指輪などしていなかったはずだった。つまり、どうやらそれがいままで

そこにあったあの大地と一体化しているのではないかと思えるほど重い儀仗が変化した姿なのだという認めざるを得なかった。
　カレナドリィは不思議なものを見つめるような目でじっとその指輪をみつめていた。もっともそれは実際に不思議なものだったが……。
【あほ、不用意に操作《エル》ルーンを】
『堅いこと言うなよ。これくらい』
【あのなあ】

「すごいわっ！」
　我に返ったカレナドリィが小さく叫んだ。
「言ったろ、オレはルーナーだって」
「ええ、でも本当にすごいわ。他にどんなことができるの？指先から花を咲かせられる？ハトは出る？ちがうわ。そんなのはシェスター叔父さんだって出来るんだし。えっと、そうね。杖だけじゃなくて自分の体も小さくできる？できるなら私も小さくしてもらえるかなあ？小さくなったらご飯なんか少しで済んですごく経済的よね。あ、お酒好きも少しのお酒で酔っぱらっちゃうからきっと幸せよね。住む家も小さくてすむし。あ、でも量が少ないとお店とかは安く売らないといけないから儲からなくなっちゃうわよね。あと、服の生地が少なくてすむのはいいんだけど小さい針とか細い糸がないわね。生地も目が粗いものばかりになっちゃうか。あと、外をうろうろしているとカラスとか犬に食べられちゃいそうね。うーん、小さくなるのは生活するのにはちょっと難しいなあ。だったら……」
　エイルは両の掌をカレナドリィの方へつきだして制した。
「その辺で止まってくれ」
「あら」
　カレナドリィは何故？という風にやや不満顔ながら、一応そこで話すのをやめた。
「いつもそうなのか？」

「『そう』って？
「いや、もういい」
エイルはつきだした手をだらんと垂らすと両肩を落とした。
「そうだ。弟がいるって？いくつなんだ？」
エイルは話題を変えた。
弟の話題を振ると、エイルには心なしかカレナドリィの瞳が曇ったように見えた。
「十五よ」
「オレより二つ年下か。なんて言う名前？」
「カノナールって言うんだけど、みんなカノンって呼んでるわ。カノンは……兵士になるって言ってお父さんと大げんかして家を出たの。そのままもう二年になるんだけど」
【カノナール。『蓮』、か】
『いつも思うけど、お前って物知りだよな』
【ま、まあな。賢者やし】
『賢者になるのはマジで大変そうだよな』
【まあ、少なくともお前さんにはムリや】
『そいつはどうも』

「二年前って言うと十三歳の時にか？」
カレナドリィはうなずいた。
「もともと町の自警団に入りたがっていたんだけど、ランダールの自警団には決まりがあって、弟はまだ若すぎてダメだって言われて……」
「それで年齢制限の緩い軍隊の方に志願兵で入ったってことか」
「実はランダールの自警団長って、私のお父さんなのよね」
「そりゃ決まりがなくてもダメっぽいな」
「おまけにどっちも頑固で絶対自分の意見を曲げないの」

【サラマンダ候国軍の志願兵には年齢制限なんてないのと一緒やか

らな】

『一応決まりはあるだろうに。確か十五歳だっけ？』

【フン、あんなもん本人の申告でなんとでもなるんや。どうせガキはただの雑兵でいいように使われるだけやのにな。可哀想やけどまだ生きてるのかは疑問やな】

『候国軍か。実情をカレンには言えないよな』

【言わんでええ】

「自警団がダメなら軍隊に入って町を守るとか言っていたけど。私、軍隊とか大嫌い」

「軍隊か。それはオレも好きじゃないな。ゲリラはもっと嫌いだがな」

エイルは夕べの兵士達の姿を思い出した。

『あんなのの下につけられたら大変だ』

【俺も今、同じ事を考えてた】

エルデは夕べの事を思い出していた。ルーンによって灰にされて散っていく兵士達の様が脳裏に浮かぶと、それを振り払うように目をつぶって頭を振った。

そのままゆっくりと立ち上がったエイルは、服のあちこちについた砂や泥を手で払った。さっきまで朝露で湿っていた部分も、ほぼ乾いていた。

「でも若いのに自警団や軍か。カノン、いや、カレンの弟は正義感が強いんだな。それともよほど腕に覚えがあるのか？」

エイルがそう尋ねるとカレナドリィはゆっくり首を横に振ると顔を伏せた。

その様子を見て（しまった）とは思ったが、エイルはカレナドリィに声を掛けずにはいられなかった。

「理由が、あるのか？」

少し迷ったようだったが、カレナドリィは小さな声で答えた。

「私達の母さんがね……その……誰かわからない人に乱暴されて殺されたの。カノンの目の前で……」

カレナドリィの言葉にエイルは言葉を失った。淡々と話すカレナドリィのその物言いは他人事のように平板で、その感情を抑えた口調が、エイルの心をえぐった。

もうそれ以上何も尋ねる必要はなかった。カレナドリィの弟、カノンの気持ちはエイルには痛いほどわかったからだ。

エイルは何も持たない拳を強く握りしめた。

【エイル】

『ああ、わかってる』

エルデの警句に対して吐き捨てるように答えると、エイルは目を閉じて深呼吸をした。

「悪い。イヤな事を思い出させたみたいで」

エイルには通り一遍の言葉しかカレンにかけられなかった。それが情けなくて、言った後で思わず目をそらした。

「え？ううん、もうずいぶん前の話だから。それに私、その場に居なくて……サフールにある親戚の家から帰ってきたら、もうお葬式も全部終わってて」

「わかった、もういいよ」

エイルはカレナドリィの話を途中で遮った。エイルにはその話の続きを聞くつもりは全くなかった。エルデが警告した通り、これ以上関わってはいけないのだ。いや、カレナドリィにはすでに関わりすぎていた。だから自戒の意味も込めてエイルは敢えて少し強い口調でカレナドリィの言葉を止めたのだ。

カレナドリィは優しい、けれど悲しげな微笑みを浮かべて小さな声で「ごめんなさい」というと、目を伏せた。

その表情を見たエイルは、今度は強い口調で話を遮ったことを後悔し始めていた。

『くそっ、弟の名前なんか聞くんじゃなかった』

【そうやな。万が一会った時にいらん感情が出てくる】
『ああ、オレのせいだ。すまん』
【聞いてしもたもんはしゃあないな。ま、忘れたらええねん】
『そうだな』

エイルは口調を変えた。
何事もなかったかのような、努めて普通の声でカレナドリィに声をかけた。
「弁当をありがとう。カレンのおかげですごく元気が出てきた」
エイルは服についた砂をさらに念入りに払いながらカレナドリィと目を合わさないようにした。その態度には「その話はそこまで」という意志も込められていた。
カレナドリィにそれが通じるかどうかは少々疑問ではあったが。
「エイル君はランダールが目的地って言ってたわね？その後は？」
カレナドリィは顔を上げた。
その顔はもう快活な笑顔のカレナドリィに戻っていた。

―（オレはこの娘にはかなわないかもしれない）
カレナドリィのその笑顔を見て、エイルは直感的にそう思った。
エイルの頭の中にマーヤの寝顔がよぎった。
―（そうだ。オレにも、やるべき事があるんだったな）
カレナドリィにしても当然いろいろな思いがあるだろう。淡々とした口調で母親の事、そして弟の事を話してはくれたが、すべてが思い出に変わってしまっていて、もう何も感じないなんてことはきっとないはずだ。
カレナドリィの表情の変化を見ればそれはわかる。
エイルはふと、自分の境遇をすべてこのタンポポ色の長い三つ編みの髪の娘に話してしまいたい衝動に駆られた。
自分のいた世界のこと、
そこで待つ妹のこと、

辛い旅が続いていること、
それに……
―（それに……どうした？）
言葉がのどまで出かかった。
たった今、この世界の人間に関わりすぎたことを反省したところなのになんていうざまだ。

エイルは自分の弱さを恥じた。
カレナドリィが笑う時の瞳には自分が無くした物を映し出す不思議な力があるのかもしれない。そう思うとエイルは心が少し軽くなったような気がした。

「うん。とりあえずランダールに行く。その後のことは未定だ。そうだ、さっきの質問の答えだけど、オレ達はウンディーネの田舎町からやってきた。そしてある人物を探してる途中なんだ」
「オレ達？」
カレナドリィは小さく首を傾げて見せた。
しまった……とエイルは舌打ちした。
「確かさっきも言ってたわよね、オレ達って」

【バーカ】
『うるさいよ。誰にでも失敗はあるだろ？』
【失敗ばかりやから指摘してるんや】

「いや、まあ、仲間と手分けしてて」
「へえ。じゃあエイル君自身は一人旅ってことね」
適当なごまかしに対して拍子抜けするほど素直に納得してくれたカレナドリィにエイルは心の中で頭を下げた。
『オレ、この世界に来てどれだけ嘘をついてるんだろうな』
【気にするな。ファランドールは嘘というエーテルで構築されてる

世界やさかい、それが普通や】
『それこそウソだろ』

「それで、誰を捜しているの？」
「うーんと……オレの師匠」
「師匠ってルーンの？」
エイルはうなずいた。
「師匠はもともと風来坊な性格なんだけど、ここのところ長く行方不明でね」
「名前は？あと特徴が何かない？私、知っているかも」
「カレンが？」
カレナドリィは例の顔でにっこりと笑うとうなずいた。
「実は私の家は宿屋をやっているの。だからいろんな人が来るわ。もちろんサラマンダの人が多いんだけど、それでもランダールはこの先にある北の港と南の方を結ぶ結構重要な場所にあるから、外国の人もたくさんやってくるのよ。ウンディーネの商売人はウチのお得意さんよ」
「なるほど」
エイルは合点がいった。
「師匠、たぶん偽名を使っているだろうから本名を言っても意味はないと思う。特徴は背が高くて眼光が鋭く、ちょっとスカした雰囲気でさ。あと、特徴は右目の周りにやけどの痕のある、ヒゲを生やしたつるっぱげのスケベなじいさんで……歳は、誰も正確なところをを知らないんだけど、たぶん二百歳くらいで」
「二百歳？」
カレナドリィは驚いたように声を上げるとエイルの言葉を遮った。
「あ？うん。俺の師匠ってアルヴだから」
エイルの答えにカレナドリィは納得したように肩を落とした。
「そっか。でも、アルヴのおじいさんがランダールに居たらそれなりに目立つからすぐわかるんだけど……最近のお客にはいないわね」

「特にハゲたアルヴは少ないからな。なあに、気長に探すさ」
「偽名を使うくらいなら、カツラをしているかも知れないわね」
「ああ、それはあるかもな」
エイルは頭をかくと、カレナドリィに手を差し出した。
「ありがとう、カレン。親切にしてくれて。おかげで生き返った」
「どういたしまして」
差し出された手を、カレナドリィは何のためらいもなくぎゅっと握ると、そう言ってにっこり笑った。
「重病人じゃなくて私もほっとしたわ。いくらエイル君が小柄だって言ってもさすがに自分と同じくらいの男の人を担いで町まで行くのは骨が折れるもの」

【骨が折れるけど担いではいけるっちゅうことか？】
『妙なツッコミはよせ』
【いや、この気合いの入った作業着姿といい、さっきからの軽い身のこなしといい、この娘はただもんやないような気がしてきた】
『それは、確かにそうかもな』

「それより本当に町に行ったらウチに寄ってね。『蒸気亭』っていう宿屋なの。中央広場の近くよ。値段も良心的だし私が腕によりをかけて……」
「へえ、カレンの料理が食べられるのか？」
「――きちんと掃除・洗濯をしているから部屋も夜具も清潔で綺麗よ」
「……」
「お父さんはかなり腕のいい料理人だから食事も結構いけるわ。お父さんの顔が広いっていうこともあって自慢じゃないけどこの辺りじゃちょっと有名な宿屋よ。詳しい場所はランダールの町に入ってから誰かに聞けばみんな知っているわ」
「メシがうまくて安くて有名な宿屋か。願ったりかなったりだな」

「それで、いちおう私はそこの看板娘」
カレナドリィはそれだけ言うと悪びれずにニッコリと笑って見せた。
「料理はできないけどね」
エイルはその少し懐かしいようなカレナドリィの笑顔を見ていると、また少し心が軽くなる気がした。

『ああ、まただ』
【え？】
『ーーこの子の笑顔にはルーンがかかってるのかもな』
【は？】
『あ、いや。何でもない。こっちの話だ』

「さすがは看板娘だな。宣伝文にクラっと来た」
「ふふふ。あ、でも明後日は市の立つ日で、特にこんどの市は大精霊祭にやる大市だからお客さんが多くて宿はどこもふさがっているかも知れないわね。ウチも満室だもの。でも、どこにも部屋が取れなくてもあきらめずに絶対最後にウチに来て。お父さんに私の名前を言って予約したとか言ったら死んでも何とかしてくれると思うから。私も日がが落ちるまでには帰るし、私がいれば絶対大丈夫」
「心強いな。その時は世話になるよ」
カレナドリィは大きくうなずくと、
「約束よ」
そう言った。
だが、カレナドリィがその言葉を発したとたんにエイルの顔から穏やかな雰囲気がさっと消えた。当のカレナドリィはその変化を見逃さなかった。
「どうしたの？」
「いや」
「まあ、いいわ。じゃあ約束の握手よ。ウンディーネの人は知らな

いみたいだけど、サラマンダでは約束の握手はこうやるのよ」
そう言ってカレナドリィは右手を差し出してエイルの顔の前に持ってきた。
「こうやってお互いの顔の近くに手を挙げて、右手で握手するの。そして左手はこう」
カレナドリィは今度は左の掌を相手に見せるようにして肩の横にあげてみせた。
「なんでも、もともとは左の掌に約束の言葉を書いて相手に見せ合ってたんですって。いまはそれは省略されて掌を見せるだけになっているけど」
だがエイルはカレナドリィが差し出した右手に手を伸ばさなかった。
「エイル君?」
カレナドリィは険しい表情をしたエイルを心配そうに見つめて声をかけた。
「ーー約束は、できない」
エイルは小さく深呼吸すると、意を決したようにそう言った。
【あーあ。毎度毎度めんどくさいやっちゃ】
『うるさい』
【せっかく可愛い子ちゃんとええ雰囲気かなーって思ってたのに、最後にこれや。好感度急降下って感じ?】
『黙れと言ってる』
【はいはい】

「悪いけど、オレ、誰とも約束はしないことにしてるんだ」
「え?」
「そういう主義なんだ」
「あらあら、そうなの。でも、なぜ?」
「それは……言えない」
「どうしても?」

「どうしても、だ」
「うーん」
カレナドリィは一度差し出した手を引っ込めると腕組みをして思案して見せたが、すぐに元の笑顔に戻った。
「じゃあ、約束はなし。でもエイル君にできる範囲で最大限の努力はするぞーっていうのはどうかな？」
エイルは済まなそうな顔をするとうなずいた。
「そうだな。それなら、問題ない」
その言葉にカレナドリィの表情が嬉しそうに輝いた。そしてニッコリ微笑むと再び右手を腰の高さで差し出した。
左手は上げなかった。
「じゃあ、最大限の努力をしてくれることになったエイル君の言葉を二人が忘れないようにするおまじないの握手」
「なんだよ、それ」
「いいから、ほら」
促されてエイルは差し出されたカレナドリィの細くて白い手をもう一度そっと握った。カレナドリィは遠慮がちなエイルとは逆に、ぎゅっと握り返してきた。それは女の子とは思えない程つよい力だった。
「いててっ」
「えー、そんなに痛いはずはないわ。大げさね」
そう言ってあははっと笑うと、カレナドリィは手を離して籐の籠を背負った。
「じゃあな」
その姿に向かって、エイルは別れの言葉を告げた。出来るだけ軽い別れの言葉を選んで。
「ええ。じゃあ、また後でね」
「そうだな」
「きっとよ」
「ああ。最大限の努力はしよう」

「ふふふ」
二人はお互いに手を振って別れた。
エイルは少しの間軽やかな足取りで山道を登っていくカレナドリィの後ろ姿を見送ったあと、改めて近くにあった道標を確認するとランダールへ向かう街道をみやった。
昨夜は道標の存在など気にもしていなかったが、そこにはカレナドリィの言うように、ランダールの町まで半時間ほどの距離だと言うことが表示されていた。

『さて、いくか』
【夕べまでのことを思うと、今日はけっこういい朝やな、って思ってるやろ?】
『もう昼を過ぎてるけどな』
【おまえさんが寝過ぎたせいやろ】
『おまえのせいでこんな目にあってるんじゃないかよ。昨日は殆ど道なんか無くて、ずっと藪こぎだったんだぞ。しかもオレ一人で。おまけに夜中にアレだしな』
【仕方ないやろ、近道やねんから。直線は曲線より短い、の法則や】
『なんだよ、それ』
【おかげで予想よりずっと早くランダールに着いたし』
『ったく』

「まあ、とにかく」
これは声に出した。
「今日は風呂に入るぞ。メシも食う。そして清潔で柔らかいベッドで爆睡だ」

【まったくや。お前さんは体力の配分効率がめっちゃ悪いからなぁ】
エイルは軽く舌打ちすると、歩みを早めた。
『はいはい。お前の回復ルーンのおかげでいつもずいぶん助かって

ますとも。今のオレがこうして生きているのもカラスが黒いのも全部エルデ様のおかげでございますだ』

【おおきに】

昨夜までの疲労がとれたわけではない。まだ体は重く、けだるい。しかし、目的地が近いことは気分的な負担を軽くする。そして間違いなくカレナドリィから力をもらっていると感じていた。

足を踏み出すことがおっくうではないのだ。まだ疲れてはいたが、気持ちはすっきりとしていた。

【さっきのアレな。「癒すもの」や】

突然心の中で脈絡のない話題が振られた。

『は？』

【エイルの意味】

『――そうか』

【そうや】

エイルはそれ以上は何も言わず、前方に姿を現した城塞の町へ向けて歩を速めた。

# 第五話　風のフェアリー

エイルとカレナドリィが別れて一時間も経ったろうか。
カレナドリィが街道の上で熟睡するエイルを心配そうにのぞき込んでいた、まさにその場所に六人ほどの兵士達が思い思いに座り込んでいた。
彼らはしかし、一目見て統率がとれた軍隊の一員ではないことがわかる。あまりに居住まいがだらしない。兵装すらも着装しているとは言い難いほど着崩しており、兵士の命たる剣をも抜き身で近くに投げ出したまま、思い思いに路上にきたなく寝そべっていた。
中にはそのまま街道をふさぐかのように突き出た腹をだし、大きないびきをかいて眠りこけている者もいる。つまりはあらゆる一般常識に照らし合わせても目に余る状況であると言えた。

そこへ今、少し風変わりな旅の一行が近づこうとしていた。
風変わりなのは見た目ではなく、その構成だ。
彼らは四人連れだった。
二人は青年でどちらも背が高いが、一人はもう一人の青年よりさらに頭半分ほど高い。
残りのうち一人が小柄な若い娘。もう一人はさらに小柄な少年のようだった。
全員が白っぽいフード付きの薄手のマントを羽織っていたこともあって遠目では顔立ちなどはよくわからなかった。一見してそれとわかるような武器も携えておらず、いわゆる旅の商人の一行と言えなくもない。
ただ、旅の行商人に特有の大きな荷物が入った背負子を背負っているわけでもなく、けっこうな軽装で、商人というにはそこが少し妙だ。

「リリアお嬢さん」
縦一列で歩を進めていた四人連れの先頭を行くのはデュナンの若者だった。デュナンにしては大柄で、遠目にはファランドールでは最も大柄な種族であるアルヴに見える。
その薄茶色の髪の若者は歩く速度を微妙に落とすと、後ろに続く小柄な若い娘が追いついて来るのを待ってそう声をかけた。
だが、「リリアお嬢さん」と呼ばれた娘は心ここにあらずと言った風情で、ただぼんやりと視線の定まらない顔を前方に向けているだけだった。
考え事をしているのか、デュナンの若者の呼びかけがまったく耳に入っていないようだった。
「ユグセル司令？」
若者はさらに歩く速度を落とし、すぐ近くまで来た娘に今度はやや鋭い声でそう呼びかけた。
「え？」
褐色の肌と緑色の瞳を持つ小柄な少女はハッとして若者に顔を向けた。髪の色は黒だ。整った顔立ちといい、それは二種類いる小柄なアルヴ族の一つ、ダーク・アルヴの特徴だった。
どこか遠い世界に心を漂わせていたそのダーク・アルヴはデュナンの若者の声で意識を現実の世界に取り戻す事が出来たようだった。
表情が微笑んでいるように見えるのは目尻がかなり下がった穏やかで優しそうな顔つきのせいだろう。
ダーク・アルヴの少女はその下がった目を大きく開くと焦点を前方の若者の茶色の瞳に合わせた。そういう表情をすると、特徴的な太い眉のせいも相まって意志が強そうに見える。
自らが創造した遠い世界から帰還した彼女の眼前には、鼻筋が通った聡明そうな、それで居て人の良さそうな大きな茶色い瞳をした細面のデュナンの青年が立っていた。
「あら、アトル」

「はあ……」
アトルと呼ばれたデュナンの青年はため息をついた。
「まったく。『あら、アトル』じゃありませんよ」
「ごめんなさい。あまり気候がよいのでついぼんやりしてました」
若者は「ユグセル司令」の反応を見て笑いながら頭を掻いた。
「また例のアレですか？」
「ーーええ」
デュナンの青年に問われたダーク・アルヴの娘は悪びれずに肯定すると、少し寂しそうな微笑を浮かべて冬へ向かう季節が垣間見せる澄み切った高い空を見上げた。
「きっと出会えるまでこうしてずっと考えてしまうのでしょうね」
デュナンの若者はダーク・アルヴの少女のその様子を見ると、やれやれと言った風に肩をすくめて、後ろから追いついてきた彼より頭半分背が高いがっしりとした体つきの大柄な青年を見やった。
その青年はデュナンの若者より一回り大きかった。
切れ長の目と高い鼻。緑の瞳に白い肌。額にかかる髪は金髪で、典型的なアルヴ族の特徴を持っていた。
一見するとデュナンの青年より少し年上に見える。アルヴの場合寿命がデュナンの二、三倍もあるためにデュナンの常識では実際の年齢は分かりかねるが、デュナンの若者より年上なのは確かなようだ。
アルヴの青年は、しかしデュナンの若者の仕草には反応せずに、ダーク・アルヴの少女に向かって簡潔に用件を告げた。
「どうやら小隊とおぼしき兵の一団がこの先に居ます」
ダーク・アルヴの娘はそう告げられても顔色一つ変えずに微笑んだままうなずいた。
「進みましょう」
二人の若者は何も言わずにうなずくと、歩く速度を元にもどし、一行は再び一列になって歩き出した。終始無言で佇んでいた彼らの四人目の仲間である少年も歩を合わせて歩き出した。

彼らが再び歩き出して少し経った頃、彼ら四人の姿を先ほどのだらしない格好をした兵士達が見つけた。
中でもいち早く気づいた一人の兵士が周りに声をかけた。
「おい。待ちくたびれたお味方じゃなくて、どうやら先にカモがおいでなすったぜ」
「ふん、四人か」
もう一人が小型の望遠鏡を取り出して観察する。
「構成や装備はどうだ?」
「男の一人は見たところアルヴだな。もう一人は背は高いが、あの顔だとデュナンか。後の二人は女子供だ。女は肌が褐色だからダーク・アルヴだな。もう一人のガキはうつむいててよく顔が見えねえ。たぶんアルヴィンだろう」
望遠鏡の兵士はそう仲間に告げた。
「武器は?」
「マントをしてるからよくわからねえな。でも、まともな武器はなさそうだ。せいぜい短剣か懐剣だろう」
「このご時世に無防備なこって」
「しっかり注意してやらんとならんな」
「さて、夕飯前にもうひとっ腹空かせておくとするか」
兵士たちは口々にそうしゃべると、だらだらと身支度のようなものを始めた。
「おい、起きろ。仕事だ。まったくいつまで寝てんだ」
兵の一人が街道のど真ん中で腹をだしていびきをかきながら寝ている仲間の腹を蹴った。蹴られた男はあわてて上体を起こすと目をぱちくりしながらあたりを見渡した。
「なんだ?お味方連中がやっときたのか?」
「寝ぼけてるんじゃねえ。反政府ゲリラを発見したんだよ」
「ああ……」
寝起きの男はまだ半ば混濁している意識の中で向こうに見える四

人連れの旅の一行を確認した。
「今夜の酒代か」
そう言うと右腕でだらしなく垂れ流されていた口元のよだれをぬぐった。

「ーーリリアお嬢様」
アルヴの青年がこちらを向いて並んでいる兵士達を認めるとダーク・アルヴの娘に小さく声をかけた。
青年にリリアと呼ばれた褐色の肌の少女は何も言わずに小さくうなずいた。
「ありゃどう見てもドライアドの軍服ですね。よくもまあサラマンダで堂々と……」
リリアにアトルと呼ばれた先頭を歩くデュナンの青年が呆れたようにそう言うと、後方に居たアルヴの青年がそれに反応した。
「奴らは相変わらず腐っているな」
「ーーとりあえず」
リリアは歩く速度を全く変えずに小さな、しかし一同に充分明瞭に聞こえる声で指示を出した。
「まずは向こうの出方をうかがいましょう。ダメなら、気は進みませんがいつも通りです」
「了解」
二人の青年は異口同音に短い返事をした。
どうやら一行の指揮権はその小柄な少女が握っているようであった。時折見えるマントの下はシルフィードではよく見る旅装だが、普通の安物ではなくこざっぱりとして丁寧な刺繍が縫い取られており、商人というより三人の関係はどこかの裕福な商家のお嬢様、あるいは若い女主人と付き人兼用心棒達と言った風にも見える。
だが、彼らを待ち受ける兵士が口にしたように、十年前の先の大戦のごたごたが続いて戦後処理もままならない状態が長く続くこのサラマンダ、しかもがゲリラが出没すると言われる山間を歩くには

少々心許ない装備と人数だと言えた。

そうこうしているうちにお嬢様とそのお付きの一行四人はドライアドの軍服を着た六人からなる小隊の目前にやってきた。

「おう、待ちな」

道をふさぐようにして立っている兵士達を避け、街道から脇にそれつつ通り過ぎようとした一行の目の前に、部隊のリーダー格のがっちりとした体格のデュナンの男が抜き身の剣を突きつけて制止した。

「何でしょう？」

先頭を歩くアトルがそれに対応した。

「俺たちは見ての通り軍のもんだ。ここでゲリラの掃討作戦についている」

「それはそれは。ご苦労様です」

そう言うとアトルは、洗練された物腰で恭しく会釈して見せた。

「ちょっと顔と荷物を検めさせてもらうぜ。これも仕事なんでな」

アトルはマントのフードを脱ぐと顔を出し、兵達を見渡すとやんわりと抗議した。

「私たちはこの先のランダールで開かれる今度の大市の取引のためにやってきました。ご覧の通りシルフィードの商人です。通行証にはファルコの港で領事の認証印をちゃんといただいていますし、市に参加できるサラマンダ政府公認の商業組合に発行してもらった商業手形も持っています。必要ならお見せいたします。決して怪しいものではありません」

アトルの言い分を聞いていた隊長格のデュナンの男は足下に唾を吐くと、大声で怒鳴った。

「勘違いするな。通行証や商業手形なぞ関係ない」

「しかし」

「今日落ち合う事になっている俺達の仲間がまだ現れない。ゲリラの罠にかかった可能性もあるんでな、これは委嘱軍としての公務で、

お前達は俺達の言うことに従う義務がある。言っとくが、ここじゃ通行手形とかそんなものはただの紙切れだ」

アトルは眉根にしわを寄せて困った風な顔をして見せた。

「そういう事情がおありでしたか。ですが私達は今日のところは道中に委嘱軍の部隊も見ませんでしたし、そもそも反政府勢力とも何のつながりもありませんが……」

「つながりがあるかどうかは俺たちが決めることだ。お前達は言われたとおりにしろ」

アトルは仲間内にようやくわかる程度に小さくため息をついて見せて、隣の背の高いアルヴの青年と顔を見合わせた。アルヴの青年はうなずいて見せた。

「大した荷物はありません。大口の商談をまとめる為の見本程度しか持っておりませんが」

「ガタガタ言わずに荷物を下ろせってんだよ」

後ろにいた違う兵がイライラしたように大声を上げた。

アトルとドライアド兵とのやりとりを聞きながら、アルヴの青年は注意深く周辺を観察していた。すると、足下に妙なものを見つけて、小声で後ろにいるリリアに声をかけた。

―（リリア様）

―（どうしました、ファル？）

―（私の足下、少し右のあたりをごらんになって下さい）

―（ーーこれは？）

―（ええ、多分両手剣ですね。でも、妙な具合です）

―（まるで高熱で溶けて曲がったように見えますね）

―（よく見ると周りにまだ二、三あります。道の脇の藪の中ですから、きっと彼らはこれに気づいてないんでしょう）

―（この状況を素直に判断すると、高熱によって剣が溶けた事件がここであったという事でしょうけど）

―（どう解釈したらいいんでしょう？）

―（彼らの言うその「お仲間」と関係があるのかもしれませんね）
ファルというアルヴとリリアがヒソヒソと会話をしている間、のらくらと隊長格の兵とやりとりをしていたアトルは、今度は大きなため息をついてみせた。
「はあ」
デュナンの青年アトルは再度背の高いアルヴの青年「ファル」の方をチラリと見ると、ドライアド兵の要請に負けしぶしぶと言った風情で背負っていた荷物を下ろし、中が見えるようにして見せた。
「禁制品なんか入ってませんよ」
隊長格の男は荷物を持つアトルをぞんざいに押しのけるようにすると、その背負い鞄を取り上げた。
「あ、なんてことを」
「うるせえ、静かにしろっ」
荷物にすがろうとするアトルを違う兵が剣で脅して制した。
荷物を奪った隊長格の男は、鞄の中身を地面にぶちまけた。
そこには光沢のある薄い青色をした絹の布で大事に包まれた小荷物がいくつか入っていた。
その見るからに上質な絹の布を兵は手荒く開けると包まれていた荷物を取り出した。
それは彼ら……旅の一行が着ている灰がかった白っぽい布で作られた薄手のマントだった。
「なんだ、ただのマントか？お前らこんなもんで商売しようってのか？」
「怪しい奴らだな」
荷物を開いた兵達が険しい顔でデュナンの若者を睨んだ。
「違います。それはシルフィード王国特産品、貴重なアルヴスパイアの布で作られた高級マントです」
アトルは語気を荒げて抗議した。
「先の大戦で職人が減ってしまって。だから今では流通量も少なくて大変な貴重品なんですよ。商売用の大事な見本なんですから手荒

に扱わないで下さい」
「けっ。アルヴの国のケチな商人かよ」
アトルの言葉を聞く風でもなく、しばらく何の飾りもない無地の白っぽい地味なマントをひっくり返していた隊長格の男は、やがて舌打ちをすると興味がなさそうにそのマントを地面に捨てようとした。
その様子を見た別の一人の兵が、マントを持った隊長格の男を止めた。
「待て、もったいない」
「ああ？」
隊長格の男は自分を止めた兵士を睨み付けた。
「こんな地味で貧乏くさいアルヴ用のマントが高く売れるわきゃねえだろ？」
「いや、そいつが言うようにアルヴスパイアのマントってのが本当なら、ちゃんとしたところで売ればそれ一着で俺達の一年分の酒代くらいにはなるぜ」
その男の言葉にその場の兵士達はざわめきたった。
隊長格の男も改めて自分が握っているマントに目を落とした。
「その話は本当か？」
捨てるのを制した兵は大きくうなずいた。
「何でも本物のアルヴスパイアの布は火にくべても燃えないらしいぜ。ドライアドの王侯貴族やウンディーネの金持ちが喜んで言い値で買ってくれる程の逸品だってことだ」
「マジかよ？」
さらに兵士達が盛り上がる。
「だとしたらたいしたもんだな」
「本当に本物かよ？」
「いい加減なこと言ってるんじゃねえだろな？」
「ウソじゃねえ。俺のオヤジは仕立て屋なんだ。ケチな俺んちの店なんかじゃ滅多に扱えるもんじゃねえんだが、それでも俺は一度だ

け本物を見たことがある。ちょっと見せてくれ」
兵は隊長格の男からマントを受け取ると掴んだり広げたりして吟味を始めた。
「どうなんだよ、もったいぶるなよ」
何も言わない兵にじれた他の仲間達から文句が上がる。
マントを手にした兵は顔を上げると隊長格の男に向かって興奮気味に告げた。
「触った感じがたっぷりしてるのに、この羽のような異常な軽さ……どこを探しても見つからない縫い目……間違いない。こりゃ、どう考えても本物だぜ」
吟味していた兵の言葉に歓声が上がった。
「そういや俺も聞いたことがある。雨や風は一切通さねえのになぜか汗は通して夏でも冬でもこれ一枚羽織っていれば、中は裸でも快適だそうだ」
「ホントかよ？」
「そりゃいいな。おい、お前、他にも出せ」
「埃っぽい色で高そうには見えねえが、こいつらの羽織ってるのは多分、全部そのマントだぜ」
マントを手にした兵達とは別に一行の周りをうろうろと歩き回っていた腹の出た兵士がリリアの顔をのぞき込みながらはき出す様に言った。
「顔を見せろってんだろ。聞こえないのか、コラ」
最後まで眠っていたその兵はリリアの正面から近づき、無造作に手をのばしてぞんざいにフードを下ろした。
顎から首あたりまでで綺麗に切りそろえられたまっすぐな黒髪を持つダーク・アルヴの少女の顔があらわになった。
「リリアお嬢様」は褐色の肌とともにダーク・アルヴのもう一つの大きな特徴である深い緑色の瞳の美しい少女だった。折からの谷風がそのリリアの髪を揺らし、左耳にある子供の親指の先ほどの大きさの金色のスフィアの耳飾りがちらりと見えた。

「ほう、まだガキだが、こりゃちょっと見た事がない程の上玉だな」
「その金色の耳飾りも高く売れそうじゃねえか」
リリアのフードを下ろした兵士は舌なめずりをしてリリアのあごに手をやると、リリアに上を向かせた。
「おお。確かにこいつは中々」
リリアの顔をのぞき込むと、その兵は下卑た笑い顔を作って見せた。
「俺、こんな上玉とヤッたことねえ」
「お前、ガキが趣味なのか？」
「いや、ダーク・アルヴは見た目では年齢がわからねえって話だ」
「おお、じゃあこう見えて熟女って事もありか？」
「男を二人も従えてるし、あっちの方もベテランかもな」
「そりゃいいや」
「今日はツイてるぜ、俺たち」
口々に汚い言葉を発する兵士達を前にして、しかし少女はにこやかに微笑んでいた。
「こいつ、薄笑いを浮かべてやがる」
「俺達の事をバカにしてるのか？」
「おい、何がおかしいんだ、姉ちゃん？」
「いえいえ」
リリアは首を振った。
「おかしくはありません。むしろ困っています」
「じゃあ、なぜニヤニヤしてやがるんだ？え？」
「すみません、これ、地顔なんです」
「ふざけた姉ちゃんだ」
一人の兵士がリリアの方へ歩み寄った。そして手を突き出すとリリアの顎を掴もうとした。だが、横にいた背の高いアルヴの青年が見かねてその兵士の腕を掴んだ。
「汚い手でお嬢様に気安く触らないでいただきたい」
その語気は決して荒くはなかったが、低い声にはすごみがあった。

「ぐおおお。痛え、放せこの野郎！」
手を捕まれた男は悲鳴を上げて手を引き戻した。
「抵抗したな。立派な公務の妨害工作だ。おい、こいつらを縛り上げろ」
兵達が一斉に剣を抜き、うち二人はやや後方から弓を番えた。
「おとなしく身ぐるみ置いていくならよし。命だけは助けてやる。ただし、そのお嬢さんには色々と事情聴取をする必要があるから、俺たちが一晩預かってやる」
「おい、一晩は寂しいぜ」
「俺たち全員相手じゃ一晩しかもたないだろ？」
「大事に扱えば一週間くらいは持つだろ？」
「うぇっへっへ」
兵たちは口々に汚い言葉を吐きながらリリアの頭の先からつま先まで、なめ回すように眺めていた。
「やれやれ」
若い方の青年が兵士達の汚い言葉のやりとりを聞いてうんざりしたという風に頭を掻きながらそう言った。
「本当に腐りきってますね、こいつら」
「なんだと？」
「てめえ」
「司令、もういいですか？」
動じず、デュナンの青年はリリアを振り返って許しを請うた。
「仕方ないですね。でも何度も言っていますが、司令と呼ぶのはおやめなさい、アトル」
「了解です。お嬢様」
「何トボけたやりとりしてやがる。おい、かまやしねえ。面倒だからやっちまえ」
「『お嬢様』とやらは殺すなよ」
隊長格の一言を待っていたかのように後方から矢がアトルと呼ばれた青年に放たれた。だがアトルは顔色一つ変えずに飛んできたそ

の矢を手で掴んで止めて見せた。いや、若者が掴む直前に一瞬矢が止まったと表現した方がより正確だろう。

「な、何だ、こいつ」

「やっちまえ」

アトルの技に数人が一瞬ひるんだが、戦意むき出しの一人のかけ声ですぐに血気を取り戻した兵達が剣を手に一斉にアトルと背の高いアルヴの青年に襲いかかってきた。後の二人はぎらついた目でリリアの方に向かって襲いかかろうとしたが、その兵達の突撃は空を切ることになった。そこにいたはずのリリアの姿が忽然と消えていたのだ。

何が起こったのかをじっくりと考える間もなく、二人の兵士の視界は暗転した。そして同時にデュナンの青年に襲いかかったはずの他の四人の兵士達も全員その場に崩れ落ちていた。

それはまさに目にもとまらぬ動きと言うべきものであった。

アトルと呼ばれたデュナンの青年は襲いかかる兵士達をひらりとかわすと彼らの背後に回り込み、いつの間にか手にしていた短剣で次々と兵士達の首筋を斬りつけた。首筋からは血しぶきが高く上がったが、返り血を浴びる前にアトルはその場を離れていた。

リリアを狙ったはずの二人の兵士の後頭部にはそれぞれ一本ずつごく細く短い特殊な矢が刺さっていた。そして二つの死体の後方にポツンと立つリリアの左手には異様に小型の弓が握られていた。

つまり、リリアは兵士達をかわしながら彼らの後方に回ると、続けざまに二本の矢を正確無比に兵達の急所に放ったということだろう。リリアの動きはアトルのそれよりもさらに速いと言えた。

「埋めますか？」

二人はほんの十数秒でその場にいた六人の小隊を全て葬り去っていたのだ。

アトルは二人の兵士に刺さった矢を抜くと、鏃についた血を死体

の兵装でぬぐいながら小型の弓を折りたたんでいるリリアに尋ねた。
二人の兵士を一瞬で屠ったばかりの美しい少女の顔はそれまでと変わらず、静かに微笑していた。それは地面が血で染まったその場の情景にはおよそ似合わぬ穏やかな表情だった。
少女は折りたたんだ弓を懐にしまうと、よく通る声で静かに答えた。
「作業中に誰かに見られてもまた面倒が増えますから、そのままにして少し先を急ぎましょう」
「了解です」
「まったく、この国は旅人が普通に街道も歩けなくなっているのか……それもゲリラや山賊ではなく、本来一般人を守るはずの軍の人間が一番危ない敵になっているとは」
背の高い方の男が、低い声でつぶやいた。
「戦争に負け、国が無くなるというのはこう言うことなんでしょうかね」
アトルもやりきれないという風に応えた。
「いらぬ殺生はしたくはないですが、たとえ情けをかけてこの兵士達を生かしていたとしても、この時代そしてこの場所では不幸な人が増えるだけでしょう」
アルヴの青年に向かってか、あるいはアトルに対してなのかは定かではなかったが、リリアはそう言うと、フードを被りなおし、マントの前を閉じ合わせて何事も無かったかのような歩みで街道を進み始めた。

リリアのその小柄な後ろ姿を見て、アトルは小さく敬礼した。そのアトルの肩にアルヴの青年が手を載せた。
「いつだってあの人は部下だけに手を汚させようとはしないな」
アトルは黙ってうなずいた。
どういう理由があれ、人をあやめる事に対してどうしても自戒の念が積もる。彼らの司令官の行為はそれを少しではあるが和らげる

助けになっていた。
　少し離れた後方でじっと成り行きを見守っていた小柄な少年は、リリアが歩き出すのを見るとそれに続いた。
　アルヴの青年はそれを見て、アトルの肩をポンポンと軽く二度叩いた。アトルは小さく苦笑すると頭を掻いて歩き出した。自分のいつもの位置、すなわちリリアの前へ。

「さあ、もうすぐランダールです。あそこは大粒でうまいサクランボで有名です」
　アトルはリリアに追いつくと、快活な声でそう呼びかけた。
「私がサクランボの砂糖漬けを喜ぶとでも？」
　それに応えるようにリリアもよく通る明るい声で反応した。
「あれ、お嫌いでしたか？」
「大好きですよ」
　リリアはそう言うとにっこりと微笑んで見せた。
「なんですか、それ」
「ちょっとスネてみたかっただけです。」
「わかりましたよ。もちろん他にも特産はございまして」
「あらあら」
「このあたりはサクランボだけでなく、残念ながらブドウ栽培も盛んでしてね」
「そっちを先に言ってくれなくてはね」
　アトルの言葉に「リリアお嬢様」の顔が輝いた。
「そういうわけでランダールはこのあたりのワインの集積地でもあるんです。さらに言えば生産量は少なくて流通はしてませんが、土地のビールもコクがあって美味いってので有名なんですよ。我らがノンベのリリアお嬢様」
　アトルの声は、もういつもの通りだった。
「ふふ。このところ山野での野宿続きでしたし、せっかく来たのですから特産を無視するわけにもいきませんね。ということで不本意

ではありますが今日は久しぶりに飲まなければならないでしょうね」
「いいですねえ。不承不承おつきあいしますよ」
だんだん盛り上がる二人の背後に、太い声が届いた。
「飲まれるのはいいのですが、路銀の都合にもそれなりにお心配りを」
背の高いアルヴは振り向いたリリアと視線を合わせると静かな微笑を浮かべた。リリアはいつもよりいっそう優しい表情になると部下のアルヴにこう言った。
「お金は生きているうちに使うものですよ、ファル」
そして思い出したように付け加えた。
「そうそう、大市にはあなたの大好きな骨董屋が何軒も軒を連ねているでしょうね。合流の都合で二三日は滞在する予定ですし、冷やかしがてら息抜きをしてきたらどうですか？」
ファルと呼ばれた背の高いアルヴは微笑を苦笑に変えると歩みを止めて振り返り、今まで辿ってきた道の上に青く高く広がる空を見上げた。
「そうですね。そう言われるとなんとなく掘り出し物が見つかるような気がしてきました」
秋晴れの澄んだランダール高原の青い空が彼らの頭上高くに広がっていた。

# 第六話　ランダール

＞ｉ１３０８２―１８３１＜

城塞で囲まれたランダールはこの地域の集落としてはかなり大きな町である。

それというのも二つの渓谷にある街道同士をつなぐ基点になっており、ランダール高地の要衝としての役割を古くから担っているからだ。谷間にある盆地全体が町で、三方を急峻な渓谷に守られたこの町は天然の要害といえた。ここから北に行くにも南に行くにも、あるいは東へ戻るにも、いったんはこのランダールで人々は一時の休息を取ることを常とした。またランダール高地は夏は冷涼で過ごしやすい気候ながら季節風の影響で冬期は意外に降雪が少なく、その日当たりの良さもあって農作物が安定して収穫・供給できる地域でもあった。

特に有名なものはブドウと大粒の酸味が高いサクランボで、前者は良質なワインをこの地から生み出し、後者は庶民のちょっとした贅沢品であるサクランボの砂糖漬けの原料となる。

ランダール自体には酪農家は少ないが周辺地域ではさかんな為、市には酪農製品の種類も豊富で、活気があった。

それら主となる産業はここのところ比較的安定しており、故に長く続いた先の戦乱で荒れたサラマンダ大侯国にあってささやかながらも比較的ゆとりある暮らし向きの住民が多かった。

城塞の町と呼ばれているが、すでに町に城主はおらず、代わりに城跡にはランダールの象徴とも言える二つの鐘楼が町を見守るかのようにそびえていた。

マーリン正教会がその二つの鐘楼の管理にあたっており、日中に三度、その荘厳な鐘の音を谷間に響かせている。畑仕事をする人間は、一つ目の鐘で昼をとり、二つ目の鐘で休憩をとったりその日の

段取りを調整し、三つ目の鐘を合図に帰路に就く。

城主は何度か変わったようだが歴史の記述にランダールの名が初出する九百年前には既に現在の商業組合の自治都市としての体裁をとっていたようである。サラマンダ大侯国の首都であるトリムトからは遠く離れていることもあり幸運にも常に中央での戦乱を避けてこられた事も幸運だったのだろうが、もともと独立心の強い、つまり強引な支配に対する抵抗意識が根強い山岳部族ばかりの土地でもある。従って中央からの積極的な武力介入もあまり行われなかったようである。そう言った背景もあって王国崩壊後のランダール高地は今なお活発な活動を続けるゲリラと呼ばれる旧王国軍の潜伏場所として中央政府からは要注意とされている地域でもあった。言い換えるならば町自体が旧王国軍の標的にもなり得る可能性もあり、それを反映してか、この地域の村落はどこも武装されているのが常と言えた。　ランダールでも町の出入り口や城壁の物見櫓には哨戒の私兵らしきものが立ち、平野部にある集落とは違い、物々しいと感じざるを得ない空気が漂っていた。

警備にあたっているのはおそらくカレナドリィの言う「自警団」の一員なのだろうが、エイルの目には自警団の一員というよりはちゃんとした軍の兵士と言った方がよさそうに見えた。それほど本格的な兵装の者達ばかりだった。

黒髪の少年エイル・エイミイがランダールの城壁の前にさしかかった時、丁度町から「二の鐘」の音が聞こえた。

ランダールの象徴と言われる二つの大きな鐘楼とは別に、この町には学校を兼ねた大小いくつかの教会があり、午後三時には鐘楼に合わせて町中の教会の鐘を鳴らすのが慣例であった。大小取り混ぜたいくつもの鐘が遠く近くで鳴り響き、様々な音色による競演が披露される。

ランダールの城壁を目の前にしたエイルの耳に、それはまるでおごそかな交響楽のように響いた。

【この音を聞くと、城下町というよりは門前町みたいな雰囲気やな】
『オレは宗教には全く関心ないけど、この鐘の音はいい雰囲気だとは思うな』
【この町の人達は信心深いと見るべきやろか……】
『オレに聞かれても知るかよ』
【スマンな。お前なんかに聞いた俺がアホやったわ】
『フン』

エイルは土台が石造りの頑丈そうな城壁の中に入る折に、ヒゲ面の自警団の歩哨から簡単な質問を受けた。だがそれは一人旅の黒い瞳を持った少年に対する単なる興味からのもののようで、敵愾心のあるものではなかった。

先の大戦の主戦場となったサラマンダでは人を訪ねて旅をしている者は珍しくない。したがって人を探していると答えたエイルは「そうか。早く見つかるといいな」という友好的な社交辞令とともにあっけなく通過を許された。

もともと交易の町である。武器を持たない人間には基本的に友好的なのだろう。

「あ、そうだ」

一見したところ中が通路になっていて人が一人くらい通れそうな石土台の厚い城壁をくぐろうとして、エイルは思い出したようにそのひげ面の歩哨に声をかけた。

「蒸気亭って宿屋は、ここから遠いのかな？」

「蒸気亭に泊まるのか？だったら、この先の大通りを西に入ってずっと行くと中央広場に出るから、そこいらでもう一度聞くといい。蒸気亭は広場から一本入った道に面しているんだが、説明がちょっとややこしい。だからその辺で改めて尋ねた方がいいだろう。この辺じゃけっこうな有名店だから誰に聞いても知っているさ」

「そっか。ありがとう」
「なあに、俺達のランダールの町を楽しんでくれ」
城門を後に歩き出したエイルの耳に、まだ鐘の音が響いていた。
いくつもの方向から届く色合いの違う鐘の音を聞くと、この町がそこそこの規模なのだと言うことが実感できる。ヒゲ面の歩哨が言う「この先の大通り」までも結構な距離があった。

【と。その前に】
『あ、ああ。いつものやつか』

エイルは直接大通りには向かわず、最初の路地を右に折れた。
城塞にそって町を一周しようというのだ。それが見知らぬ町に入ったエイルの習慣のようだった。
少し歩くだけで、小さな教会に出くわした。
エルデが言うように単純に考えれば複数の教会が建っているということは、熱心な信者が多いと言うことなのだろう。エイルにはその鐘の音がマーリン正教会のものなのか、クリングラ派マーリン教……すなわち新教と言われる教会のものなのかはわかりかねたが、響き合う鐘の音に、いきおい厳かな気持ちになっていった。

『カレンの言うとおり有名な宿屋みたいだな』
【まあ、自警団の代表いうたら町ではちょっとした顔役やもんな。でも、「蒸気亭」なあ……。蒸気亭、蒸気亭】
『知っているのか？』
【うーん。俺の記憶が正しければ】
『正しければ？』
【カレンというエイル好みのかなりかわいい金髪娘の店やな】
『エルデ。お前、いつか絶対ぶっ飛ばす。それからカレンがオレ好みとかっていうのは余計だ』
【早くぶっ飛ばされてみたいなー。つうかそこは『オイブ』やろ？】

『――お前、友達いないだろ？』
【俺は選民やからな。周りはみんなライバルかクズしか居らへんかったし。ま、お前さんみたいなぬるま湯の世界で育った凡人にはわからへん辛さやな】
『――言ってろ』
【おまえさんこそ、そのブアイソな性格で友達なんておったんか？】
『……』
【フン、自分のことになるとダンマリかいな。賢いことで】
『お前、オレに記憶がないのを知ってて喧嘩を売っているんだよな？』
【あ……】
『あ……じゃねえよっ』
【す、すまん……。でも、心配はいらへん。請け合ってもええけど絶対友達なんておらへんって】
『いつか絶対お前を百回くらいぶっ飛ばす』

「それにしても山間のちっぽけな町かと思ってたのに、規模も大きいし人も教会も多いし、かなりにぎやかだな」
エイルは心の中でエルデに悪態をつきながらも行き交う人々の多さに驚いて思わず声に出してつぶやいた。
【ランダールはこの辺りやと都市言うてもええくらいの規模の町やから、いわゆる『町』とは規模がちゃうな。主立った建物を見てみ。上屋こそ普通の煉瓦と木造の組み合わせみたいやけど土台はどれもしっかりした石で組んである。裕福とかそういう価値観とは違うかもしれへんけど、それなりの力をもった町なんは確かやな】
『そうみたいだな』
【大市やって言うてたな。各地から人が集まりそうやし、なんか情報があるかもしれんし、さらに言うとさすがにちょっと体も休めたほうが良さそうやし、久しぶりに何日か逗留してみよか】
【その意見には賛成だ】

『市と大市って何が違うんだ？』
【市は多分毎月やる普通の市やろけど、大市は主に商売人同士の大規模な商いが行われるのが普通やな。会場の規模も集まる物資の量も人の数も普段より多いっちゅうことやろな」
『見本市みたいなものか』
【見本市？】
『こっちの話だ』
【カレンが言うてたようにこの町はワインの出荷地としてもけっこう有名なんや。北の街道は商人の国ウンディーネ共和国への貿易拠点になっとる港湾都市モロウに通じてるし、かなりの商人が集まるやろな】
『なるほど、これから行く先のウンディーネの情報も集まるって事だな』
【そういうことやな。これから北に行く訳やし冬の装備もいるな。ついでにそっちの準備もここでしとこか】
『そうだな』
エイルは広場に行く途中で見つけた二、三軒の宿で冷やかしがてら部屋の値段と空き具合を訪ねたが、どこも満室の状態だった。

「悪いけど、今からじゃどこも難しいんじゃねえか？」
宿屋の主人達は異口同音に申し訳なさそうにそう言った。
『カレンの言ったとおりだな』
【あ、向こうに見える左側の大きな通りに入って最初の路地を右に入るんや】
じっくり時間をかけて一通り町の概要を把握したエイルは、宿探しの為に大通りをぼんやりと眺めながらゆっくりと歩いて中央広場にたどり着いた。そこで思い出したようにエルデが指示を出してきた。
『宿に落ち着く前にどこかに寄るのか？』
【うん。ルドルフってオッサンがやっている宿があって、そこでち

ょっとした『ブツ』を受け取るのがランダールに寄った最大の目的や】

『ランダールでやらなきゃいけない用事ってそれか』

【ああ、かなり大事、っちゅうか俺たちにとっても重要なものなんや】

『ふーん』

広場から一歩入った路地は、路地とは言えそれでも結構な道幅があり、大型の馬車が十分通れるほどの広さだった。表面がすっかり平らになった石畳がこの町の歴史を表しているかのようだ。

エルデの言うとおり、その路地の少し先に宿屋の看板が掛かっていた。

『ここだな』

【せや】

無骨な筆致で大きく「蒸気亭」と文字を打ち出された銅板が、やや古めかしい木製のドアにはめ込まれていた。

『エルデ』

【なにかな？エイルくん】

『知ってるなら、最初に言え。それともお前にはそのねじくれた性格障害とは別に記憶障害もあるのか？』

【いや、こう見えても俺も驚いてんねん】

『うそつけ』

【ホンマに宿の名前まで知らんかってん。聞いてた場所だけは覚えてんけどな】

『カレンの事も聞いてたんじゃないのか？』

【疑り深いやっちゃな。教わった宿の場所しか覚えてへん。嘘やない】

『全くお前さんは天才だぜ。人を怒らせる、な』

【お褒めにあずかり光栄やわ】

エイルは小さくため息をつくと、仕方なさそうにその頑丈そうな

扉をゆっくりと引いた。

# 第七話　蒸気亭

喧噪がエイルを出迎えた。

ドアの内側は旅装を解いたばかりの泊まり客の早めの夕食が始まっていたようで、すでに大勢の客で賑わっていた。

扉を閉めて見渡した店内は十五席ほどあるカウンターと二十あまりの六人掛けのテーブル席があり、さらに中央には小編成なら演奏会が開催できるくらいの空間があった。つまり外で間口を見てエイルが予想したよりも蒸気亭の店内は奥行きがかなり広いということだった。

エルデはちょうど一曲歌い終わった吟遊詩人がうやうやしく礼をするところに出くわした格好だった。吟遊詩人が手にしたつばの広い帽子の中に、客達がコインを投げ込んでいる様子が眼に入った。細身で背の高いその吟遊詩人が顔を上げた時、正面に立っていたエイルと視線が合う形になった。エイルの目に映った焦げ茶色の皮の上着を着て暗めの金髪をした吟遊詩人は思いがけず女だった。

エイルをまっすぐ見つめるのは丸く大きな灰緑色の瞳。そして白い顔。アルヴの女だった。肩の下まで伸びた長い暗金髪はゆったりとした巻き毛で、店のランプの揺れる光で鈍く輝き、その吟遊詩人の美しさに花を添えていた。

その美しさに当てられたのか、どこか不思議な気品に気圧されたのか、エイルは思わずたじろいで半歩後ずさった。

吟遊詩人はそんなエイルを見て、少しおかしそうに微笑んだ。

【何怖じ気づいてんねん?】

『いや、女とは思ってなかったんだ』

【珍しいけど、それなりにおるで。女の吟遊詩人】

『そうなのか。今まで会ったのはみんなムサい男の吟遊詩人ばかり

だったからちょっと、な』
【ウソこけ。美人やったからドキっとしたんやろ。まったく美人にはホンマに弱いなあ】
『そんなことはない』
【ウソつけ。ええか?アルヴやダーク・アルヴ、それにアルヴィンっていう所謂アルヴ系種族っていうのはみんなそこそこ彫刻みたいに整った顔やねんで。ファランドールにしばらくおったらそろそろ見飽きた頃やろ?俺は無個性に整った顔ばっかりのアルヴ族より美醜取り混ぜて個性豊かなデュナンの顔の方が味があってええと思うけどな。まあ、エイルはそういう人生の深さにはまだまだ気づかんネンネや、言うことやな】
『何だよ、人生の深さって』
【造形の向こう側にある真実の美醜を理解する境地に達する事や】
『お前の言っている事がよくわからないという事はよくわかった』
【お子様にはわからへんのやな。俺が悪うございました】
『全く』

店内を見渡すと席はおよそ七分ほど埋まっており、客の服装から地元の人間もけっこういる事がわかる。酒場としての機能も有していると言うことだろう。とはいえ旅の途中の商人といった出で立ちの連中が多いのは間違いないようだった。
エイルはカレナドリィの言っていた「大市」の影響がここでも実感としてわかった。
この宿は町の広場にもほど近い。それに食堂には結構な広さもある。おそらくここが彼ら旅の商人の情報交換の基地の一つのような場所になっているのだろう。どちらにしろこの空間は会話と笑いに満ちていて全体に活気があり、にぎやかで明るい雰囲気が漂っていた。
エイルは一安心した。

長く旅をしていると『曰く付き』で様子がおかしい宿屋に何度か足を踏み入れ、結果として嫌な気分になった経験が少なからずあるからだ。しかし、この宿には扉を開けただけで直感的に居心地の良さのようなものを感じた。そういう雰囲気があるからこそ、おそらくは常宿にしている旅の商人が多いのだろう。

奥を見やると、入り口正面にあるカウンターの中ではあごひげを蓄えた巨漢・・・おそらくは主人とおぼしき男が陶器製の器にビールを注ぎながら、カウンター席の客をあしらっている様子が見えた。地元の人間なのであろう。『ちょっと散歩がてら寄って一杯引っかけている』といった風情の軽い服装の中年男が、少し顔を赤くして何事かを熱心に訴えていた。客席の方に目を向けると、これも元気そうな三人のデュナンの中年女が給仕として忙しく動き回っていた。

エイルはカウンターに空席を認めると、マントを脱ぎ腰を下ろした。丁度『く』の字型になっている同じカウンター席のエイルから見て反対側にはさっきの吟遊詩人の姿が見えた。ちょうどその髭の主人によって黒ビールがなみなみ注がれた陶器のゴブレットが彼女の目の前に置かれた所だった。

エイルは見るとはなしにその灰緑の瞳のアルヴの女吟遊詩人が黒ビールをうまそうにすするのをぼんやりと見つめていた。

「おう、えらく若い旅人だな。この町は初めてか？」

不意に頭の上から声がした。

新しい客が席に着いたのをめざとく見つけた巨漢の主人がエイルにそう声をかけたのだ。

その声にエイルが顔を上げると、人がよさそうなにこやかな顔が微妙に変化した。

―（ちっ。またか）

エイルは心の中で舌打ちをした。

【気にしなや。お前さんの場合は仕方ない。そして相手は悪うない】
『わかってるさ』
【このおっさんがルドルフや。それよりエイル、ちょっと代わってくれへんか】
『ああ。相手が悪くないって言ってもオレの方は気分が悪いし、ここは任せた』

「いや、けっこう前になるけど一度来たことがあるんだ。全然かわってないねぇ、ここ」

『やっぱり来たことあるのかよ？』
【ちゃうちゃう。ここの情報はみんなブツを預けた知り合いのからのもんや。ここはそういうはったりで店主の気を引きつつ印象づける段階なんや。だまって見とき】
『わかったよ』

「おお、またウチを選んでくれたのかい。ありがとよ。ここは先代からのがっしりした宿だからな。十年や二十年くらいじゃほとんど変わりゃしないさ」
「寝床も清潔で快適だったよ。で、今日は晩飯と、とりあえず今夜と明日で二泊したいんだけど部屋はある？」
店主はニヤリとして小声で言った。
「お前さん運がいいな。満席だったんだがついさっき一部屋だけ空きが出たんだ。ウチじゃ一番いい部屋だぜ。もちろん豪華な朝飯が付いて前金で一泊四十エキュ五十サインだ」
店主が告げるファランドール共通通貨の金額を聞くと、エイルの体を借りたエルデは眉間に皺を寄せてすこし抵抗して見せた。四十エキュあれば、ちょっとした都市のまともな宿で一週間ほど、俗に商人宿と言われているような安宿なら三週間以上滞在できる勘定だから、一泊の金額としてはかなり抵抗があった。

「えらく高いなあ。前はたしか五エキュの部屋に泊まったんだけど」
「悪いが明後日が大市の日なんで、安い部屋からうまっちまってな。その代わり、そこは広い部屋が二部屋あるし、さらに洗面台のある附室まで付いてて、ランダールでもけっこう贅沢な部屋だぜ。安い部屋じゃないとどうしてもムリってんなら知り合いの宿屋に声をかけてやってもいいが、時間がかかるし、だいいちこの時期はウチより安い部屋の空きはないと思うぜ」
「うーん」
エルデは頭を掻いて悩む仕草をして見せた。
「お前さん、連れはいないのか？」
「ああ。一人旅だよ。だから二部屋に附室付きなんてのはいらないんだけどな」
「まあ、そりゃそうだろうな」
「四十エキュは辛いけど、かと言って疲れ果ててたどり着いたって言うのにこれから部屋を探して町をさまようのはもっと辛いし、ここのところ野宿が続いてるんでいいかげんに今日はベッドで寝たいし」
「ふむ」
「ーー仕方ない、じゃあそれで」
と、いかにもしぶしぶと言った感じで了承した。
「四十エキュ五十サイン、だ。言っておくがこれでもお得意さん割引にさらに加えて若い旅人割引まで加算した値段なんだぜ」
店主が補助貨幣の単位を付け加え、宿代の訂正をするとエルデは口をとがらせた。
「大将、見かけは豪快なのに商売は細かいね。あと五十サインくらいまけてくれてもいいじゃないか」
「税率が加算されているから細かい数字がでちまうのさ。悪いな。宿代が上がってるのもここんとこ税率がどんどん上がってるもんでね。部屋の値段も他の宿屋とのつきあいもあってなかなか自由にもいかんのだ。ランダールは帳面も組合に公開しなきゃならん決まり

があるんで誤魔化しもできん。心苦しいがその辺わかってくれ。で、四十エキュ五十サインでいいなら後で声をかけるよ。ま、とりあえずゆっくりと晩飯でも選んでくんな。ウチの自慢は白ソーセージ各種。あと今日のオススメは細切りジャガイモ黒胡椒炒め卵のせとさっとゆでた甘いホウレンソウだ。どっちもうまいぜ。俺が請け合う」

『ケッ。オススメだろうが美味かろうがこっちは胃に入れば何でも同じなんだよ』

【頼むからそういう身も蓋もない寂しいこと言いなや】

『だいたい値切れてないじゃないか。値切りの帝王エルデさんともあろうお方が今日はえらく淡泊だな』

【ふふん。お楽しみはこれからや。黙って見ててみ】

主人は別のカウンターの客にビールの追加を頼まれて、その場を離れた。だが離れ際に立ち止まってエイルを振り返ると

「それから、見かけによらずってのは余計だ」

そういってニヤリと笑って見せた。本人はニッコリと笑ったつもりだったのかもしれないが、エイルとエルデにはとてもそうは見えなかった。

『アイソがいいのも人によるな』

【まったくや】

『でもまあ、陽気で人が良さそうだってことはわかった』

【会話好きでもあるな】

『でも、やっぱりちょっと性格が細かい』

【確かに】

エルデはルドルフに頭を掻いてみせた。それを見たルドルフは満足そうな笑顔で去っていった。

【ええか、エイル？俺のグラムコールに賭けてここの宿代は絶対タダにしてみせたる】
『タダ？値切るんじゃなくて？』
【うん】
『今更どうするんだよ？それ以前にだいたいお前、ルーナーのくせにグラムコールなんて持って無いだろ』
【この野暮ちん。グラムコールの有無とかはこの際どうでもええねん。ルーナーが誓いを立てる時の常套句にいちいち文句をつけなや】
『正論を慣例で強引に否定するつもりか？』
【あのな】

エルデは小さく溜息をついた後、ゆっくりと視線を上に上げると、壁に直接しつらえてある二つ並んだ飾り絵皿の棚の間に張られている古い張り紙を見つめた。
エルデが見たものはすなわちエイルの目にも入る。
張り紙は、その厚さから紙と言うよりは羊皮紙のようだった。それはかなり古いもののようで、おそらくもともとは白っぽい色だったのだろうが今では表面が濃い焦げ茶色に完全に変色していた。だが、そこに書かれた黒くたっぷりとした太さの、そしてかなりの達筆と言えるその文字は古い羊皮紙の上でしっかりとした存在感を醸し出していた。
羊皮紙には扇動的な文章でこう書かれていた。

「英雄渇望中！！
お前たちには絶対食えない！蒸気亭の超激辛大盛りシチュー。
十五分で食い切った奴は四始祖に続く英雄だぜ！
俺はそんな英雄から宿代とメシ代は受け取れないね―（ただし一泊だけだぞ）」

『ヒュー』

それを読んだエイルは心の中で口笛を吹いた。
『こいつは！』
【な？な？まるで俺達の為にマーリンが用意してくれたような合法的無銭飲食法やろ？】
エルデはいたずらが成功した子供のようなはしゃぎようだ。
『だったらもっといい部屋でもよかったな』
【まったくや】
『いや、この宿で一番いい部屋だって言ってたっけ』
【そっか】
『なあ、あそこに書かれている四始祖ってのは？』
【昔々英雄がいて大いなる災いから人々を守り、混乱下にあったフアランドールに、それぞれが四つの国を作ったっちゅう国作り伝説やな。今ある四大国はそのそもそもその四始祖が五万年年から六万年年前に作ったって言われてる。まあ伝説というか古すぎてほとんど神話の領域やけどな。で、その四始祖がエレメンタルやったという話になるわけや】
『なるほど。どの世界にも似たような英雄伝説ってのはあるんだな』
【ま、その四始祖はファランドールではいまだに不動のアイドルや】
『その伝説の不動のアイドルに次ぐ英雄って……かなりの褒め言葉だよな？』
【ほぼ最上級やな】

「ところでルドルフ。アレ、最近誰か成功した奴いるのかよ？」
奥の方のカウンター客が、件の張り紙を指さして主人に訪ねる声がエイル達の耳に届いた。
「アレを食える奴ぁサラマンダ……いや、ファランドール広しといえどもそうそう居るもんじゃねえ」
ルドルフはうれしそうにそう言って返す。
「違いねえ。俺はもう二度とアレは口にしたくねえ」
「おいおい、その一口すら全部飲めなかった奴が偉そうに言ってる

んじゃねえよ」
「けっ。ありゃ殺人的だぜ、まったく。劇薬を客に売ってるって軍にでも通報しなきゃな」
「劇薬か。確かに俺も味見できないほどの自慢の辛さだからな。だがな」
ルドルフはそこで意味ありげに声をひそめた。
「ん？」

【ふふ】
ルドルフと客との会話に聞き耳を立てていたエルデが小さく笑った『？』
【なんでもない】

「おまえさんは二年ぶりだから知らんだろうがな。実は去年、それをペロっとくっちまった奴がいるんだよ」
「ホントかよ？」
「俺が嘘ついてどうする。しかもそいつは閉店間際にフラっと現れた一人旅のガキでよ。そうだ、ちょうどあそこにいる坊やくらいかな――（そう言ってエイル達の方をチラっと見やった）。俺は真剣に止めたんだがな。食えなかったらシチュー代の五エキュをドブに捨てるようなもんだし、食い意地が張ってるだけじゃムリだってな」
「で、食ったのか？」
「五分もかからずにペロッよ。俺は自分の目を疑ったね。すげえ奴でも三分の一くらいまでには鼻水と涙にまみれて泣きながら降参するはずなんだが、そのガキはそれを食った後に、パイとアイスクリームを追加注文して普通に食ってたんだ。さすがに大汗かいて涙や鼻水は垂らしていたが、ありゃちょっとハンパな根性じゃねえ」
「すげえやつだな。そりゃ、どこのどいつだ？」
「特徴的なガキんちょだったから今でも顔は覚えてるよ」
「特徴的？」

「ああ、腰まである長い黒髪に……」
「黒髪？ダーク・アルヴか？」
「話は最後まで聞け。黒いのは髪の毛だけじゃなくて瞳も、だったのさ」
「瞳が黒い？それって瞳髪黒色《どうはつこくしき》……」
「ああ、どうやらあそこの坊やも『それ』だぜ。だから思い出しちまったよ。多分ピクシィの血が多少入ってるんだろうな。先祖返りってやつだ」
「ほう」
「それからそいつ、言葉に古語なまりがある奴だったが、何者かはわからん。人捜しをしてる風なことは言ってたがな。ああ、そう言えばそいつに頼まれた預かり物もあるんだが、あれ以来、顔を見せやしねえ」
「ほう、預かりものか？何だい、そりゃ？」
「あ、いや。今のは聞かなかった事にしてくれ。俺としたことが口がすべっちまった。すまねえな」
その客は気にするなという風に目配せすると話を続けた。
「なるほどな。古語なまりだとすると、ウンディーネあたりから流れてきたって事かい。しかし、その場に居たかったねえ。ルドルフ、お前さんの唖然とした顔が見たかったよ」
「残念だったな。生涯一度のチャンスだったんじゃねえのか？」

『また瞳の色の話か』
【瞳髪黒色……ファランドールでは珍しいからな。というか曰く因縁付きか】
『ん？』
【あ、ううん】
『で、あの話のガキってまさかお前じゃないのか？』
【俺はピクシィなんか？】
『お前の姿形なんか知らねえよっ』

【まあ、つまりあの話の人物は俺の知り合いっちゅう事や】
『ふーん、ひょっとするとその子供があの主人に預けているモノっていうのは？』
【想像通りや。ま、ともかくそっちの話は後や】

「注文は決まったか？部屋の方は用意できてるぜ」
少しして、主人のルドルフがエルデの前にやってきた。手には盛大に湯気を放つ薬罐のレリーフが付いた真鍮製の板にぶら下げられた部屋のキーを持っていた。
「ねえ、大将」
エルデはテーブルに置いた左手の人差し指を上方に向けて張り紙を指さした。
「俺、あれに挑戦したいんだけど」
「あれだと？」
ルドルフはエルデの指さす方向を振り返った。たった今別の客と話題になっていた激辛シチューの張り紙をエルデが指さしているのを確認すると、ニヤリと笑って手を振って見せた。
「やめときな。ありゃお子様メニューじゃねえんだぞ。子供がアレを食うと死ぬかもしれねえ。だいたい失敗したら五エキュだぞ、ボウズ」
「ーーわかってるよ」
エルデは懐から茶色いスウェードの巾着型の財布を取り出すと、五エキュ銅貨を1枚、バーガンディー色に深く染まった堅い木製のカウンターの上にカチンと涼しい音を鳴らして置いた。
「本気か？マジで成功者はほとんどいねえんだぞ？」
「辛いの、大好きなんだ」
「食べ残しは水に薄めて除草剤に使えるくらいすごいんだぞ？」
「そりゃ残念だね。明日は手で草むしりしてもらわなくっちゃ」
「おいボウズ、その不貞不貞しげな態度からするとたぶんお前さんはけっこうたいした奴で、おおかた他の町でそういう店をカモって

きたんだろうが、ウチのはマジでヤバいぞ。こう見えて俺も他の町じゃちっとは名前のしれた激辛王なんだが、さすがにここのは俺でも三口食えるかどうかのシロモノだ。つまり全くの別格だぜ？作っている俺が言うんだから間違いない」

「大丈夫。なんなら、失敗したときは倍の十エキュ払ってもいいよ。もちろん、宿代とは別にね」

エルデはそういうと懐からさっきの財布を取り出して中をあけようとしたが、ルドルフがそれを制した。

「宿代は四十エキュ五十サインだ。だが、ふむ……よし。そこまで言われて挑戦者たる俺が引き下がるわけにはいかねえやな。じゃあ、その挑戦に乗ろうじゃねえか。さらに、おまえさんの挑発が気に入ったから、こっちも成功報酬は特別に二泊分って事にしてやるぜ。二泊したいって言ってたよな？」

「うん。じゃあ、交渉成立。早く食べさせてよ。実はオレ、おなかペコペコで死にそうなんだよ」

エルデはそういって屈託のないさわやかな笑顔でにっこりと笑って見せた。

「よし。後で泣くなよ？」

ルドルフはエイルの笑顔にしかし首を横に振って見せた。

「ああ、それから」

厨房に入ろうとするルドルフをエルデが呼び止めた。

「ん？」

「ボウズって呼ぶな」

ルドルフはそれには答えず頭をかく振りをして嬉しそうにニヤリと笑うと、厨房に消えた。

【よっしゃ！】

『やったな。二泊ともタダか』

【仕込みがよかったからな】

『ちょっと見直したぞ』
【ちょっとかいっ】

少しするとルドルフは厨房の中からフライパンと大きな鉄のシャモジを持ち出してカウンターの中に戻ってきた。そしてそれをガンガンと打ち鳴らし、皆の注目を集めた後、息を深く吸い込み、店中に響く太い声でイベントの開催を告げた。

「お集まりの紳士淑女の皆さん」
店中が震えるかのような太く大きな声が発せられると、それまでの喧噪は一瞬で嘘のように静まり、すべての客の視線はカウンターのルドルフに釘付けになった。
「本日もランダールの至宝、我が「蒸気亭」にお越しいただきまして誠にありがとうございます」
「なんだ？」
「どうした、ルドルフ！」
「って言うか、至宝ってなんだよ」
「痴呆の間違いじゃねえのか」
「うまいっ！」
一瞬の静寂のあと、今度は口々にルドルフに質問とヤジが飛んだ。
ルドルフは両手を挙げてそれらを制すると、店内が静まるのを待ってから言葉を継いだ。
「ご静粛にしろってんだ。とりあえず俺にしゃべらせろ！」
「客商売やってる店の主人とは思えない言葉遣いだな、おい」
「『ご』がついてるからいいんじゃねえか？」
「まあまあ。とりあえず話を聞こうぜ」
カウンターの中で仁王立ちするルドルフに対し、今度こそ話を聞こうとする雰囲気が店内に漂った。
「えー、まず、申し上げます。本日今ここにお集まりいただいた皆さんは実に幸運です。なぜなら皆さんは新しい英雄誕生の歴史的な

瞬間に立ち会える可能性を得たからです」
　そう言うとルドルフはうれしそうな顔で客の反応を確かめるように店中を見渡した。
「おい、こりゃひょっとして？」
「うほっ、まさか？」
「おお！」
「すげえ、久しぶりに命知らずのバカが現れたのか？」
「へえ、そりゃ見物だぜ。俺たちゃ、マジでツイているな」
「おい、急いでその辺の奴呼んでこい、蒸気亭で「例のイベント」があるってな」
　ルドルフはざわめく客の様子を満足そうに眺めると、エルデに向かって席を立つように促した。
「ただいまより私の目の前に居るこの若き英雄候補……ええっと」
「オレはエイル」
「お生まれは？」
「ウンディーネ」
「ウンディーネ出身、四始祖の末裔にして若き英雄候補。命知らずのエイルと、サラマンダの理想郷ランダールの偉大なる勇者、このルドルフ・ノイエの名誉と、そして宿代をかけた決闘を今ここに開催いたします」
　ここまで言うと今度は口調を変えた。
「ま、名前は女みたいだが、根性はそんじょそこらの自称豪傑が裸足で逃げ出すほどの男前だぜ」

『女みたいは余計だろ、オヤジ』
【何度聞いてもええ名前や。それより今度は至宝から理想郷になっとるな、この店】
『問題をすり替えるなよ』
【おまえさんも最初は気に入ってたやん】
『女の名前だなんて知らなかったからだろうが！』

【それはアレやな。ウマいウマいって食べてたお菓子にニンジンが入ってたって知ったガキんちょが泣き叫ぶようなもんやな】
『全然違うだろっ』
【それに言うとくけどな、エイルっていう名前を選んだんはおまえさん自身やん】
『エイルかケロンかビロンの三つのうちからどれか一つ選べって言われてほかの二つを選ぶやつなんかいねえよ！というか、あんなのは選択肢があるとは言わないだろ！』
【興奮したらムダに体力使うで】
『させてるのはお前だろ！』
【まあまあ、落ち着き。ウンディーネあたりじゃ、女性名男性名とかはあんまり関係ないんや】
『それ、絶対嘘だな。もうお前の言うことなんか信じるかよ』
【信心は大事やで】
『オレは無宗教だ』

ルドルフの宣言が終わると、店内は盛大な歓声と拍手、そして口笛で満ちた。酔っぱらいの多くはさらに床を靴で踏みならしている。
「いいぞ、ボウズ、がんばれ」
「死んだら骨は拾ってやるぜ」
「棺桶屋なら俺の叔父貴のところで頼むぜ」
「若いの、応援するぜ。ルドルフに一泡吹かせてやれ」
「燃え尽きるまで食い続けろぉ！」
「おい、珍しいな、このボウズ、瞳の色が黒だぜ？」
「おお、本当だ。先祖返りか。こいつは期待できるかもしれねえな」
「この勝負に目の色が関係あんのかよ？」
「珍しいヤツが珍しく勝つにきまってんだろ？」
「なるほど！」
「それで納得するのか？」
「伝説にそうある」

「ホントかよ？」
「そんな与太話にマジで反応するんじゃねえよ」
「俺は応援するぜ～」
「俺もだ」
「まさに現代の決闘だな」
「ああ、命がかかってるぜえ」
数杯のビールでいい具合に軽く酔った連中が、準備にの為にルドルフが厨房にこもっている間中、店内で口々に軽快な野次の空中戦を繰り広げていた。

「あらあら。いったい何事ですか？」
その時、店の扉を開けて入ってきた四人連れの旅の一団がいた。全員まだ長旅用の似たようなマントを羽織ったままで詳細な姿はわからないが、背格好からは大人が三人に子供が一人といった構成であった。フードをかぶっているので表情はよく見えないが、若い一行で、声を発したのはその中の唯一の女だった。
女の声を受けて先頭にいた一人が、フードを下ろして顔を出し、ルドルフの前口上で盛り上がっている近くの客の一人に声をかけた。
「まさかとは思うけど、ここで決闘でもあるんですかね？」
声をかけられた男は、ニヤリと笑って店の中央に作られた決闘の舞台……いや、特設テーブルを顎で示した。
「なんだ、お前さん知らないのか？ここの殺人シチューを食おうって奴が久しぶりにあらわれたんだよ。完食すると宿泊代とここでの食事代がタダになるっていうヤツさ。ホレ、あれだ」
客が指さす方向には先ほどエイル達が見ていた例の扇動的な文章が書かれた羊皮紙の張り紙があった。
「決闘って、つまり早食い競争みたいなものか。物騒な言葉が出たんでびっくりしましたよ」
最初に声をかけたデュナンの男はその張り紙に書かれた扇動文を見て、ちょっと残念そうな声でそう言った。だが、その男の隣にい

た若い女は身を乗り出すようにして店の客に尋ねた。さっきの声の主だった。

「あの、辛いんですか？そのシチュー？」

尋ねられた男はニヤリと笑うとうれしそうに説明を始めた。

「お前さん達、どうやらこの店は初めてのようだから教えといてやるが、ここの激辛シチューはな」

「超激辛だ。ノーム山の溶岩よりヤバいぜ」

隣の相棒が横合いから訂正した。

「うるせえな、お前は黙ってろ。まあ、つまりその超激辛シチューは、そんじょそこらの激辛メニューとはワケが違ってな、俺が知る限りじゃここ二十年で成功したヤツは三、四人ほどしかいねえんだよ」

「そんなに。辛いのが好きなので、あれを読んで面白そうだから私も挑戦しようかと思ったんですが」

「お嬢さん、まだ若くて綺麗なのに涙と鼻水とよだれにまみれて死にたいのかい？悪いことは言わねえよ、逝き急ぐ必要はない。まあ、あのボウズもまず完食はムリだろうが、いったいどれくらい食えるかが見物だな。一口食って泡吹いて医者に担ぎ込まれるヤツが何人もいるくらいだからな」

「うーん。想像できませんけど、まさに命がけの決闘なんですね」

「そうよ。お前さん達、本当に運がいいぜ。こりゃ滅多にない面白い見物なんだぜ」

男たちはそれだけ言うとビールのお代わりを注文にカウンターへ向かっていった。

「挑戦者は子供のようですね」

給仕に案内されたテーブルに着きながら、一行は偶然出くわしたイベントの話題に花を咲かせていた。

「ふふ。楽しそうなイベントですね。なるほど、挑戦者はあの子ですか」

声をかけられた女は、そこでやっとフード付きのマントを脱ぐと、

顎の下あたりの長さにきれいに切りそろえられた癖のないサラっとした豊かな黒い髪を左手で少し上げながら、頭を軽く左右に振って乱れた髪型を直した。その際、左耳の耳朶に金色のスフィアがキラリと見えた。

リリアであった。

そう。街道でドライアド兵を屠った一行がランダールに着いたのだ。

リリアの目は食堂の真ん中に急遽しつらえられたテーブルに向けられていた。

そこには挑戦者たるエイル……いや、今はエルデと言った方がいいだろう……がカウンター席の方から店の常連と思しき客達に激励とともに取り巻かれながらにテーブルに近づいてきた。座っている所からもはっきりとわかるほど近くなったエルデ……つまりはエイルの顔を認識した瞬間、リリアは目を見開いた。

「あの子は！」

「どうしました？リリアお嬢様」

目を見開いて思わず席を立ち上がりかけたのをようやく思いとどまり、椅子の背もたれに背中を預けて深呼吸をすると、リリアは目を閉じて呟いた。

「いえ、大丈夫です」

普段、何があっても動じない沈着冷静のお手本のようなリリアのその動揺を見て、他の仲間は少なからず驚いていた。特に最初に客に声をかけた若いデュナンの青年……そう、アトルは不安げな視線をがっしりとした体格のもう一人の若いアルヴの男、ファルケンハインに注いだ。

「リーゼ、お願い。挑戦者の顔をよく見て。そしてあなたの率直な意見を聞かせて」

歓声が大きくなった。

ルドルフが皿を携えて、テーブルにやってきたのだ。
「決闘方法は、ご存じ蒸気亭自慢の超激辛シチュー大盛りを、この砂時計の砂が落ちきる前に食べきる事。時間はだいたい十五分だ。途中で席を立ったり口に入れたものをはき出したりしたらその時点で失格。水はいくら飲んでもかまわねえ。パンのおかわりも自由だ。では皆さん。挑戦者に暖かいご声援を。そして決闘の観戦には、よく冷えたビールと当店自慢のソーセージの盛り合わせを是非どうぞ！」
噂を聞きつけて駆け込んできた立ち見客でいつの間にか店内は足の踏み場もない状態になっていた。店に響く盛大な拍手。飛び交うビールとソーセージの注文、そして声援とヤジの中、エルデはルドルフに促されて準備が整った決闘の場……いや、テーブルに着いた。
そしてついにその時はやってきた。ルドルフがエルデの前に仁王立ちになったのだ。両手で小さな鍋を抱えて。
「さあ、これが蒸気亭特製、超激辛大盛りシチューだ」
おおっというどよめきがあがる。
「気をつけろ！湯気に当たっただけで三日は寝込むぞ！」
誰かの声で店内に笑いがはじける。
両側に取っ手がついた真っ白い上等の磁器製の大きな深皿に、ルドルフの手で赤黒くて粘度の高そうな液体が今たっぷりと注がれた。遠目には中に浮いている具はよくわからなかったが、牛の舌の肉と細長い唐辛子、そしてニンジンやアスパラガスのようであった。
リリアにリーゼと呼ばれたのは、一行の中の四人目の仲間である小柄な少年だった。フードをとると、腰まで届く長い輝くような銀髪を後ろで一つに無造作にくくっているのがわかった。
リリアの依頼を受けたリーゼは振り返るようにしてエルデの顔を見ると、即座にリリアの方に向き直った。その少年が普通の少年……いや人間と違って異様なのは、目の周りを覆う仮面を付けている点にあった。フードマントの高い襟によって口元はもちろん顔の下

半分は覆われ、垂らした銀色の前髪で顔の残りのほとんどが隠されていた為それと気づきにくいが、もちろんそれは彼にしてみれば顔を隠す為の手段なのであった。

「あれは……ルルデ。……ルルデ・フィリスティアード」

精霊会話……エーテルトークと呼ばれる話法でリーゼはリリアにそう告げた。

エーテルトークとは、一部のフェアリーだけに可能な会話法で、声を発する事なく相手に言葉を伝えるものである。耳元で誰かが小さく囁くように聞こえることから、まるで精霊が耳元で言葉を伝えているようだということで、精霊会話と言われる。同じテーブルについていながらその精霊会話を敢えて使っていることから、その少年は何らかの障害で普通の言葉が喋れないと考えていいだろう。

だが、リーゼの言葉にリリアは首を振った。

「ええ。でもルルデ・フィリスティアードなわけはないわ……」

リリアの独り言のような言葉にリーゼは何も言わずに目を伏せたが、すぐに視線をエルデに向けた。

「でも、似ている……似すぎているわね」

リリアは独り言のようにつぶやくと、エルデの表情を追った。

「ルルデ・フィリスティアードって、まさか」

「シエナ・フィリスティアードの弟の？」

「アクラムで司令が倒したという、あの？」

アトルとファルケンハインがリリアにいぶかしげに訪ねた。

「ええ」

「でも、フィリスティアード弟は司令が焼け死んだと報告したんですよ」

金髪の若いデュナン、アトルは、軽く抗議が混ざったような調子でそう言った。

「たぶん他人の空似というやつでしょう」

大柄な金髪のアルヴ、ファルケンハインがそれに続く。
「けれど、他人の空似と片付けるには」
「アプリリアージェの、言う、とおり。似すぎている……彼は……あまりに。」
最後の言葉は、その場にいた全員に向けて発した、リーゼの精霊会話だった。
アプリリアージェとはリリアの本名である。彼女はその声にうなずいた。
「少し様子をみましょう。あの子が私とリーゼを見て何か反応したら、ルルデ・フィリスティアード本人と見ていいでしょう」
「まさか。確かに彼の黒い髪と瞳は珍しい特徴に違いありませんが」
「私もまさか彼が生きているとは思いませんが、何か私たちにはわからないからくりがあって逃れたのかもしれません。それくらいそっくりなのです」
「レイン副司令の言うように他人のそら似という線は？」
「くどいですよ、アトラック・スリーズ。そう思えないからこそ動揺しているんです」
アトラック・スリーズとはアトルの本名である。同様にファル……ファルケンハインの族名はレインと言う。アプリリアージェはアトラックに向けてもう一言だけ言葉を発したが、それはかなり声を抑えたものだった。

「それともう一つ。何度も言いますが、司令とか副司令という言い方は」
「失礼しました、我がリリアお嬢様」
アトラックがアプリリアージェの言葉を遮るように恭しく礼をしてみせた。
ファルケンハインは小さなため息をついた後につぶやいた。
「俺はその不毛なやりとりをもう何千回となく聞いている気がするんだが……」

ファルケンハインの揶揄にアトラックはバツが悪そうに癖のある金髪で覆われた頭をかいた。
「何千回はさすがに言いすぎでしょ？」

「いいか？諸君！じゃあ、始めるぞ」
アトラックに一言嫌みを言おうとしたファルケンハインの出鼻をくじくように店の主人であるルドルフが野太い大声を張り上げた。
彼はテーブルに置かれた青い砂が入った砂時計を取り上げると店内の観客によく見えるように掲げ、それを逆さにすると、トンという音とともにテーブルに置いた。
同時に歓声が上がり、店内の興奮は最高潮に達した。

【さて】
『かわるか？』
【いや、こういうのはコツがあるんや】
『コツって？』
【汗と鼻水が大量に出るんや。これぱっかりは摂取成分による生理現象やからどうにもならへんしな。お前さんも鼻水と汗を鼻から同時に垂らしまくる姿をこの大勢の観客の前にさらしたくないやろ？】
『ああ、コツってそっちのほうか』
【そや】

エルデはいきなり食べ始めるのではなく、まずは上着を脱いだ。
革の付属がついたウンディーネ風の上着をとると、上半身は袖のない黒いシャツ一枚の姿になった。その姿に挑戦者としての気合いを感じたのか、観衆は「おおっ」とどよめいた。もっともエルデにしてみれば単純に上着を着たままでは食べにくくて暑くなるから、というのが脱いだ理由であった。
とはいえ観客の興奮を引き出す演出の一つにはなったようだ。期待に満ちた口笛が飛び交う。エルデはそれには一切反応せずに、落

ち着いた態度で今度は荷物から手ぬぐいを取り出して皿の脇に置いた。

【汗は思いっきり出るからなあ】
『激辛だったら鼻水も思いっきり出そうだな』
【ついでに涙も出る】
『聞いてると干涸らびそうだな』
【アホやな。そやから水を飲むんやん】
『なるほど』

「おいおい、早く食わねえと時間がなくなるぜ、坊や」
「いや、ものすごい汗をかくからな、ああいう準備は正解だ。ヤツは若いが、場数を踏んでやがるな。かなりの実力者と見たぞ」
「激辛メニュー荒らしの有名人なんじゃないのか？」
「こりゃ、意外に期待できるかもな」
「だから、その辺の激辛メニューとここの猛毒とを比べるのは間違ってるって」
「そうそう、そういう腕に覚えのあるヤツが鼻水と涙を垂れ流しながら己の未熟さを呪いつつ惨めに降参するのを俺は数え切れないくらい見てきたぜ」
観客は口々に言いたいことを言いながらも、エルデの一挙一動に視線が釘付けであった。
【ほな、いくで】
エルデはスプーンを手に取ると、期待に胸を高鳴らせた大勢の観客が見守る中、ついに最初の一口に取り掛かった。ルドルフはそれをそばで腕組みをしてニヤニヤしながら見つめていた。一番興奮していたのはルドルフなのかもしれなかった。

何十個もの瞳に見つめられながらも臆することなく落ち着き払った態度のまま、エルデはついにスプーンを手にとり、スッとシチュ

ーをすくった。
息を呑む観客の視線をよそに、エルデは何のためらいもなく流れるような動作でシチューを口に運ぶと、表情一つ変えずにあっさり飲み込んで見せた。
「おおっ！」
同時に店内にどよめきが走った。
エルデはその後も無表情のままで間断なく次々にスプーンでシチューを口に運び、肉や野菜はナイフとフォークで行儀良く小さく切り分けながら食べ進んで行った。さらには途中で横に置かれたパンをちぎりつつ事を進めていった。
それは激辛メニューに挑むがむしゃらな挑戦者というよりは、かなり上品な作法で晩餐を食べ進んでいる育ちのいい少年と言った風情だった。
予想通り途中から大量に噴出してきた汗と鼻水と涙を脇に置いた手ぬぐいでこれまた品良く拭いながらも、着々とシチューを胃に落とし込んでいった。
そうやって皿のシチューが残り半分を切ったあたりでルドルフのニヤニヤ笑いが消えた。
同時に客の声援もそのあたりでトーンが落ちはじめ、残り三分の一を切る頃になると、観客は皆固唾を呑んでエルデが食事をする姿をただ見守るだけになっていた。

「ごちそうさま」
女性風の作法ではあったが上品に最後のパンで大皿のシチューを拭って口に入れ、その手で水差しから注いだ二杯目の水が入ったコップを口元に運び、コクコクと音を立てながら流し込むようにして一気に飲み干すと、エルデは横に立つルドルフにそう言ってウインクして見せた。砂時計にはまだ青い砂が半分ほど残っていた。
「そんでもって二泊の宿代と宿泊中の食事代も、ごっそさん」
あっけにとられているルドルフに向け、エルデはそう続けた。

その声を合図に、静寂の店内に爆発的な歓声が沸きあがった。
「やりやがったぜ！」
「ぼうず、お前はすげえええ！」
「俺、生きてるうちに成功する奴をこの目で見られるとは思わなかったぜ」
「大げさだな、おい」
「いや、こいつは本当に快挙じゃよ」
「若いの、お前さんはまさしく四始祖に続く英雄だぜ」
「一口しか食べられずに無念のまま死んだ俺の爺さんにお前さんの勇姿を見せたかったぜ」
「ウソつけ、お前の爺さんはまだピンピンしてるじゃないか！」
「今のルドルフのほえ面をランダールの全員に是非見せたいぜええええ」
「ちげえねえ」
ルドルフは放心したように青ざめた顔でエルデを見た。
「何ならおかわりしてみせようか？」
エルデがニヤリと笑ってそう言うと、ようやく我に返った店の主人は、信じられないと言った表情でテーブルの上に置かれたシチュー皿に少し残っていた赤黒いシチューを指ですくい、口に入れた。
「うおおおおおっ！辛いというか、痛いっ！誰かビールをくれえええええ」
そういいながら厨房の中に走りむルドルフの巨体を見て、店内にまたもや爆笑が起こった。

その歓声の中、ひときわよく通る声が店中に響いた。
「良いものを見せてもらった。では、小さな、しかし偉大なる英雄に私から一曲贈ろう」
よく通る声の主はさっきのアルヴの女吟遊詩人だった。
ポロン、という弦楽器の音がすると、店内は一瞬に静まり、つづいて拍手が広がった。

立ち上がった吟遊詩人が抱えているのは、エイルの目には小型のリュートのように映った。小型な弦楽器で、つま弾いて音を出す楽器だ。首と胴からなっており、胴の部分が角の丸い三角形で、弦の数は三本である。それはダラーラと呼ばれるいわゆる古楽器で緩めの弦が奏でる優しい音はどちらにしろエイルの知っている楽器とはやや違うようではあった。

「時は知る。英雄の姿」

その小型の弦楽器を伴奏に吟遊詩人が語り出す英雄を称える短い詩は厳かな内容にその澄んだ高い声が見事に調和して、まるで一つの世界を作り出しているかのようであった。

【吟遊詩人か】

エルデはアルヴの女吟遊詩人が弾き語りで朗々と歌う様を見ながら、そう独り言のように心の中で呟くと、すぐに囁くような何かを声に出した。

『お前、吟遊詩人の歌を聴くと必ず何かブツブツ言っているよな』

【ん。まあ、おまじないみたいなもんや。気にせんどいて】

『ふーん』

「称えよ。希なる旅人、今宵の英雄を」

歌が終わるとまたしても拍手喝采の嵐となった。

「いいぞ、姉ちゃん」

「俺は感動した」

その後は口々に今の勝負と歌の感想を話し合ったりエルデに声をかけたりと、店内はまた喧噪に包まれた。エルデは苦虫を噛み潰したような顔をしたルドルフから部屋の鍵を受け取り荷物と上着を手に立ち上がろうとしたが、そこに人の良さそうな給仕の女が現れると、小さなトレイに乗せたカップをエルデの目の前に置いた。

「これは？」

大振りの銅製のビアカップに入っていたのは、白く濁った液体だ

った。よく冷えているのは、カップについた結露でわかる。
「あちらの黒い髪をしたダーク・アルヴの上品そうなお嬢様からだよ。アンタも若いのに隅に置けないねえ、この色男」
人の良さそうな中年の給仕女はエルデの背中をドンっとたたくとウィンクして去っていった。

『暴力はよせ』
【祝福や】
『それを言うなら冷やかしだろ?』

「あちら」と言われた方を見やると、そこにはエイルと同じくらいの歳とおぼしき黒髪の美少女がにっこりと微笑んでいた。少女はエイルと目が合うと小さく手を振って見せた。
リリア……アプリリアージェであった。
優しそうに下がった緑色の目が特徴的な可憐で美しい少女だった。
エイルは思わず少しはにかむと会釈をした。

『綺麗な子だな。あれってアルヴィン、いや、ダーク・アルヴだよな?』
【ふん。まあ、ダーク・アルヴとしたらそこそこってところやろ。それよりいったい何者なんやろ?】
『お前、相変わらず女の人には辛口だな。女嫌いの変態趣味もたいがいにしろよ』
【おまえさんこそ美人に気を許しすぎや。アルヴ系の若い女を見るたびに鼻のばしてるやろ?全く、油断してると……】
『うるさいな。わかってるよ』
【ホンマにわかってんのかいな】

「激辛シチューの後には、よく冷えたヨーグルトが一番ですよ。失礼とは思いましたがいいものを見せてもらったので、お礼……いえ、

お祝いにおごらせてくださいな」
　喧噪の店内にあって凛とした澄んだ声が、かき消されることなくはっきりとエイルの耳に届いた。決して大きな声ではないものの、相手に明瞭に届く不思議な鋭さがその澄んだ声にはあった。二人のやりとり気づいた野次馬から二つ三つ口笛などで冷やかしが飛んだが、多くの客には気づかれない程度のやりとりだった。

【ふーん、声も心に響く美しさとか言うんやろ？】
『あの子……いや、あの人は』
【ん？どうした？】
『以前会ったことがある気がする』
【なんや、カレンに続いてまたそれかいな】
『いや、そう言われても』
【フォウの知り合いに似てるのか？】
『うーん』
【用心の為や。ここはもう一回俺に代わってくれ】
『ああ、そうだな』

「リリアお嬢様、あまり目立つような行動は……」
　アトラックにレイン副司令と呼ばれる、一行で一番背が高いアルヴの青年、ファルケンハイン・レインが小声でアプリリアージェを窘めた。
　フードをとったファルケンハインは、まさにアルヴと言った彫りが深い端正な美男子であった。
「いえ、確かめる必要があります。ですが」
　エルデのはにかんだ顔の屈託のなさを見ると、アプリリアージェは自分の取り越し苦労であると思いたかった。向こうは全くの初対面と言った風情であり、その証拠に取り巻くエーテル……精霊波にも特に乱れがない。状況証拠を見る限りでは取り繕っていると考えること自体に無理があるようだった。

アプリリアージェは小さくため息をついた。
「やはり……本人ではないようですね」
「そうですよ。死んだ人間が生き返ったりはしませんよ」
アトラック・スリーズがようやく運ばれてきたビールを早速飲みながら相づちを打った。
「後は、ルルデ・フィリスティアードに双子がいないかどうかですが」
「司令。まだその線から離れてないんですか？他人のそら似ですって」
「ええ、その可能性もありますが……それでも、それでも似すぎているんです。だいたい、ルルデはフィリスティアード隊長の実の弟ではありませんし」
「髪の色も瞳の色も肌の色も、デュナンの兄とはまったく違いますね」
ファルケンハインが思い出したように言った言葉にアトラックは少し肩を竦めると、ジョッキに入った残りのビールを全部飲み干した。
「ぷあーっ。このビールはうまいっすねえ。俺達、久しぶりにいい宿屋に泊まれますよ」
飲み干したジョッキをテーブルに置こうとしたとき、エイルにヨーグルトを持ってきた給仕女が代わりのビールをアトラックの前に置いた。
「やあ、お代わりまで頼んでもらっちゃって、恐縮ッス」
「いや」
早速手を伸ばそうとしたアトラックの手を払うと、ファルケンハインはまかない女にたずねた。
「頼んだ覚えはないが」
アトラックは不満げにファルケンハインとまかないの女とを見比べた。
「いえいえ。あの黒い目の英雄さまからの『お返し』ですよ。皆さ

ん全員に冷えたビールのおかわりを、だそうです」
　給仕女にそう言われた一行がエルデの方に目をやると、すでにエルデは席を立って、一行のテーブルの近くまで来ていた。
「ヨーグルトごちそうさま。でも俺、見ず知らずの人に借りを作るのは好きじゃないんで、これはお返しさ」
　そういってアプリリアージェににっこり笑って見せた。
「それはどうもありがとう。では遠慮無くいただきます。私はアプリリアージェ。リリアと呼んでくださいな」
　アプリリアージェは微笑むと右手を差し出した。エルデはためらわずにその小さな手を取った。
「俺の名はエイル。エイル・エイミイだ」
「あらあら、ステキな名前ですね」

【ホレ見てみい】
『社交辞令って言葉知ってるか？』
【素直やないと、女にもてへんで】
『言ってろ』

「でもそれって、女の名前じゃ？」
　アトラックがそう言うと、すかさずファルケンハインが肘でアトラックの脇腹を小突いた。
「い、いや、スマン。独り言だ」

『ほれ、見ろ』
【アホには言わせとけ】
『アホはお前だろ』
【なんやて？ファランドールの智の結晶と言われる俺やで】
『痴の結晶じゃないのかよ』
【微妙な字の違いを言葉で言われてもわからへん】
『わかってるじゃねえかよ！』

アトラックとファルケンハインの様子を横目で見て苦笑すると、アプリリアージェは続けた。
「エイル君は、旅行中ですか？まさか激辛料理食べ歩きの旅とか？」
「俺もエイルでいいですよ、リリアさん。いろいろあって、何というか、まあ、人捜しかな」
「なるほど」
「で、皆さんは明後日の大市で商売？見たところシルフィードの人のようだけど」
「ええ。私たちはシルフィードの特産品を見てもらう為に諸国を巡っています」

『あまり人に関わらない方がいいって言ってたんじゃないのか？』
【こいつら、シルフィードの人間やで。俺らなんかにわざわざ声をかけてきたってところが、ちょっと気になるねん。向こうが何かを探っているなら、こっちも情報収集させてもらわなな】
『わざわざカネ使って奢ってまで？』
【何言うてんねん】
『？』
【全部、あのルドルフのおっさんのオゴリや】
『あ、そうか』
【俺が自分の財布を使うかいな】
『確かに』

「へえ、シルフィードの特産品って、リリスの小物とかアルヴスパイアの服とか？」
「ええ、そうですね。織物とか、あとは小物類ですが、どれもファランドール中で人気が高い品々ですよ」
「そりゃ是非見てみたいなあ。特にアルヴスパイアには興味あるな。旅を続けてるとやっぱり羽のように軽いマントとかが欲しいんだよね。アルヴスパイアのマントは旅人のあこがれだし、安ければ買い

たいなあ」
「残念だけどウチは小売りはしてないんだ。エイル君」
アトラックがお変わりのジョッキを掲げてウィンクして見せた。
「それにこう言っちゃ失礼だが、見たところ君が買える値段の商品はウチにはないと思う」
「そっか。うーん、残念」
エルデはアトラックの方を向いてうなずいた。
「高級店向け専門の卸商売ってこと？戦争で職人が減って最近はアルヴスパイアって不足気味で滅多に流通してないから引っ張りだこじゃない？」
「だからあまり派手に動けないので、確実で堅実な伝のある業者を訪ね歩いているという訳だ」
今度はファルケンハインが話を繋いだ。
「ふむふむ。一応よくできた話だね」
「え？」
「あ、いや。こっちの話。そういや子供も居るんだね」
エルデは奥にじっと座るリーゼの方を見てそう言った。
「しかもなんとなく訳ありっぽいなあ」
「エイミイ君は私たちに興味があるみたいですね」
アプリリアージェが穏やかに微笑みながらエルデの言葉をやんわりと遮った。エイル君と言わず、敢えてエイミイ君と言った所にエイルもエルデもアプリリアージェからの牽制を感じた。
「いや、さっきから見てるとそっちが俺に興味を持っているみたいなんで、ね」
エルデのその台詞が場の空気を一瞬にして変えた。
アトラックはジョッキをテーブルに置いた。
『おいおい、こりゃまた安い挑発だな、旦那？』
【いや、マジでコイツら、ちょっと怪しいで】
『怪しい？』

【こいつらからは商売人の匂いはせえへん。むしろ血の臭いがするわ】
『お前、臭うのかよ？』
【言葉の綾、っつう言葉を知ってるか？】
『お前にそういう指摘をされると妙に腹が立つのは何故なんだろうな』

アプリリアージェはしかし、眉一つ動かさずに、それでも少し目を伏せて見せた。
「気づいてましたか……実はエイル君がある人にそっくりで、みんな驚いてたんですよ」

【ついにおいでなすったか】
『ついに？』
【いや、こっちの話】
『あ……』
【なんや？】
『いや』

「なるほど」
「エイルという名前は本名ですか？」
「俺はこのファランドールに生まれ落ちてからずっとエイル・エイミイだけど」

【嘘やないやろ？】
『ああ。というかお前、詐欺師の素質があるよ』

「誰かに似てるって言ってたけど、そのお知り合いはなんて言う名前なの？その、俺に似てる奴が何か皆さんに悪いことでもしでかしたとか？あ、もしかしたら、さてはそのアルヴスパイアの商品をち

ょろまかしたとか？」
「あなたにそっくりな人の名前はルルデと言います。ルルデ・フィリスティアードです」

『そ、それだ！』
【どないした？】
『思い出した。この女の人と、顔は見えないけど右の奥にいる小さい奴にもたぶん会ったことがある』
【会ったって、どこでや？フォウの知り合いのそっくりさんか？】
『違う。この二人はお前が勝手にオレの中に入り込んだ後に毎晩見ていた夢に出てた』
【夢やて？】
『ああ。毎晩毎晩、同じ筋の繰り返しだ。でも毎日少しずつ話が進むんだ。そう。はっきり思い出したぞ。この女の人は夢の中でもアプリリアージェと名乗ってた。族名は確かユグセル。そして向こうの子供は、仮面をかぶっているけど、夢では確かあだ名で呼ばれていた。えっと、何だったっけ……そうそう、「ドール」だ』
【「ユグセル」と「ドール」やて？】
『ああ。で、その二人は確かシルフィード海軍の兵士で、ルルデ・フィリスティアードというのは、ゲリラの少年兵だ。そして』
【そして？】
『確かに、ルルデはオレに瓜二つだった』
【なんやて？】
『そこの二人が、正確にはそこにいる子供の方がルルデ・フィリスティアードを矢で射て殺したんだ』
【夢で見たんか？ホンマに？俺と出会った後なんか？】
『ああ、そうだ。おかげで毎晩うなされた』
【そう言えばしばらく唸ってたな。慣れへん境遇で混乱してたんかと思っとったわ】
『俺もなれない境遇で混乱してそういう夢を見たんだって、今の今

まで思ってた』

【で、ホンマにそれは夢やねんな?】

『間違いない。こっちへ来て二週間くらい、ずっと見てた夢だ。最初は短くて途中で終わってたんだけど、その夢の話はだんだん進んで行って、最後に見た夢で、ルルデは戦闘中に死んだ。その後は一度も見てない。今まで忘れていたくらいだからな』

【いろいろと興味深い話やな。まあどっちにしろ、今俺で良かったな。お前やったら思い出した瞬間、動揺でエーテルが大きくぶれて怪しまれるとこや】

『エーテルってルーンの原料の?』

【原料とか言うな。そもそも俺ら人間や動物を取り巻いている生命の力って言うか、熱の揺らぎみたいなもんやな。ルーナーやフェアリーの力の源でもあり、生命の力そのものみたいなもんや。学者とかは精霊波とも呼ぶみたいやけど、一部の高位フェアリーにはその精霊波、エーテルが見えるんや。でも、こんなん常識やで。お前さんがおったフォウっちゅう世界にはそういう概念もないんやな】

『無くてわるかったな。ファランドールとオレの居たフォウは世界を構築する組成というか成り立ちというか仕組みそのものが全く違うんだよ。で、このリリアって人にはそのエーテルの動きがわかるって言うのか?』

【おそらく、こいつら全員強力なフェアリーや。これはちょっとマズいな】

「フィリスティアードねえ……。そもそもそれってウンディーネ系にはない苗字だし、知り合いとか親戚にも俺が知る限りはそういう族名持った奴はいないなあ」

「やっぱり、他人のそら似ですか」

「そのルルデという人とあんた達はどういう関係なんだい?」

「それはあなたには関係のないこと」

アプリリアージェはそういうとにっこりと笑った。とろけるよう

な優しい笑顔だったが、相手の正体を知った今、エルデはその笑顔に戦慄を覚えた。
「あ、そりゃそうだよね。俺はまた自分が殺したと思った相手がなぜか生きててびっくりしてるのかと思っちゃった。あっはっは」
『おい』
【こうなったら、しゃあないって】
エルデがそういって笑い声を上げた瞬間、アトラック・スリーズとファルケンハイン・レインが同時に立ち上がった。だがその二人を振り返ることなくアプリリアージェは左手を少し上げて二人のそれ以上の動きを制した。そしてにこやかな顔のままで静かな口調でエルデに言った。
「あなた、何者ですか？ただの辛いもの好きの旅の坊やじゃなさそうですね」
『別に辛いものはそれほど好きじゃないんだがな』
【同感や】
「あんたらこそ何者や？商売人やなんて、もう少しマシな嘘をついた方がええで。あんたらからは、さっきから隠しきれへん血の臭いがプンプンするんやけどな」
エルデは俗に南部語と呼ばれるファランドールの標準語使うのをやめて、『地』である古語なまりでそう牽制した。
『おいってば』
【もう目をつけられてんねん。後ろから刺されるのはごめんやから牽制しとかんとな……それに南部語を長く使うのは肩こるわ】
『ここで刺されたらどうするんだよ』
【まあ、見たところ向こうもお忍びっぽいからそれはないやろ】

『もめ事は極力起こすなとオレには言っているくせに、相変わらず自分勝手な奴だな。オレは知らないからな』

【はいはい、おおきに】

武器を隠しているのであろう。アトラックが懐にのばそうとした手をファルケンハイン・レインが目にもとまらぬ早業で掴んで止めた。目で問いかけるアトラックに対し、ファルケンハインはアプリリアージェを目で指し示しただけだった。

この場は司令官である彼女に任せろという無言の命である。副司令と呼ばれるファルケンハインは、アトラックとの年齢の差もさることながらアプリリアージェとの付き合いが長い。場慣れしていると言ってよかった。

エルデはそれを視界の端で捕らえ、すぐに攻撃される心配がないと判断すると落ち着いた口調で話を続けた。それはまったく子供らしくない肝の据わった態度で、この点だけでもアプリリアージェから「何者か?」と問われるだけの資質があると言えた。

「見たところ、向こうの仮面をかぶったお坊ちゃんが訳ありのお忍びで、男二人は腕に覚えのある用心棒ってところやな。で、リリア姉さんは用心棒の依頼主ってところか。どや?当たらずとも遠からずやろ?」

すでに正体をしりつつもそうトボけて見せたのは、エルデの策略だった。

だが、アプリリアージェのにこやかな表情には全く変化がなかった。

「ま。商売人気取るなら、もうちょっとそれらしい雰囲気やないと誰も信用せえへんで。いや、マジで」

エルデはそれだけ言うと、きびすを返してその場を去ろうとしたが、アプリリアージェの方が放ってはおかなかった。

「待ってください」

「まだ何か？」
エルデは立ち止まると振り返った。
「ご存じの通り私たちアルヴ族は他の種族から見れば滑稽なほど面子を重んじるタチなのです。ですから奢られっぱなしは我々の流儀に反します。だいたいヨーグルト一杯とビール四杯では釣り合いがとれないですし。そもそも私はあなたの成果に対して純粋に感動してお役に立てればと思ってやった行為ですから、お返しをいただくなんてそんなつもりではありませんでした。失礼はお詫びします」
「お。そやった。一人は子供やったな。ヨーグルトかこの辺の特産のコケモモのジュースとかの方がよかったかな。遠目やったから全員大人やと思ってん。堪忍な」
エルデのそらぞらしい返答をアプリリアージェも泰然と無視した。
「こちらもあなたの見た目が若いから子供扱いしてしまって申し訳ありません。失礼しました。あなたはなかなか鋭い観察眼をお持ちのようですが、それは長い間旅をしている経験から来たものですか？差し支えなかったら、あなたが探しているという方を教えていただければお力になれるかもしれません。私たちもそれなりに諸国に通じていますから」

【さあ、勝負や】
『勝負？』

「ふーん。そいつは、おおきに。ではお言葉に甘えて言うけど、俺が探しているのは、シグ・ザルカバードっちゅう名前の禿げたアルヴのじいさんや」
「え？」
思わず、ファルケンハインとアトラックが同じ声を発した。同時にアプリリアージェの微笑みが一瞬固まったように見えた。それはエイルとエルデがアプリリアージェの表情に初めて見る変化でもあった。

「まさか、シグの爺さんを知ってんのか？」
これは演技ではなかった。エルデは驚いてファルケンハインとアプリリアージェを見比べてたずねた。
「頼む、何か知ってるなら教えてくれ」
「エイル・エイミイ君……と言いましたね」
少し目を伏せて、すぐに顔を上げたアプリリアージェの雰囲気が変わった。そこには先ほどのにこやかな優しい少女はもう居なかった。
さっきと同様にアプリリアージェの目尻は下がっていて顔は笑っているいるように見えるのだが、どうやらそれが彼女の真顔のようだった。エルデがのぞき込んだアプリリアージェの緑色の瞳には、見るものをすくませるような光が宿っていた。
「どうやら、あなたと私達の間にはなんだか微妙な因縁がありそうですね」
「知ってんのか、知らんのか？質問に答えろ！」
エルデもそう言うと、負けじとばかりにリリアを睨んだ。
「マーリン教が誇る大賢者にして炎の術の専門家と言われる偉大なるルーナー、「真赭の頤《まそほのおとがい》」。しかし、その現名まで知る者はファランドール広しといえどもそう多くはいないでしょう」
「俺はその少ない方の人間やねんからしゃあないやろ？」
「残念ながら、実は私たちも彼の行方を追っています」
「なんやて」
エイルはエルデの視界を共有して改めてまじまじとアプリリアージェの顔を見つめた。
濡れたように光る切りそろえられた黒い髪。吸い込まれそうに明るい緑色の美しい瞳はアルヴの血が濃いことを証明している。座っているので正確な身長はわからないが、エイルより小柄に見えること、そして肌の色が浅黒いことから、一般にダーク・アルヴと呼ばれる血統にあることがわかる。

年の頃は……いや、アルヴ族は見た目と年齢は一致しない。見た目は十代半ばのほんの少女にしか過ぎないのだが、場数を踏んだ者にしか備わらないのではないかと思える沈着冷静な物腰や話す言葉などから、エイルは自分がフォウの感覚で見た目で推測する年齢より相手は遙かに上の年齢に違いないと確信していた。

ふと気づくと、黒く美しい髪の間から少し見え隠れしている左の耳には、小さいながらも金色に光る宝石が付けられていた。

アプリリアージェの表情や容姿に気をとられていたエイルに、エルデが問いかけた。

【お前さんの夢やけど、仕組みはともかく、どうやら登場人物は本物みたいやな】

『うん』

【と言うことは、や。俺達はとんでもない連中にコナかけてもうたかも、なんやで】

『言っておくがコナをかけたのはお前だろ。オレは知らん』

【ええい、ままよ。当たって砕けてみよか】

『砕けるのかよ?』

【まあ、何とかなるやろ】

「なるほど。俺としたことが気づくのがちょっと遅かったようや。今ようやくあんたらの正体がわかったわ」

「正体?」

アプリリアージェは首を傾げて見せた。

「用心棒なんて言うて申し訳なかったな……。あんたらはあのル・キリアか。リリア姉さんは金色のスフィアを持つ「白面の悪魔」。またの名を「笑う死神」。そんで、まさかと思うけど、奥のガキンチョは、血の通わん戦闘人形、「ドール」。どっちも悪名高いで。シルフィードの商売人やて?はは。冗談の才能はないみたいやな」

エルデの言葉でその場の雰囲気は完璧に凍り付いた。

だが、アプリリアージェ・ユグセルは眉一つ動かさずに相変わらずの微笑を浮かべたまま落ち着いて答えた。
「驚きました、ご名答です」
「へっ。『おどろきました』っていう顔やないやろ、あんた」
「うーん。本当に驚いてるんです。でも、残念ながら驚いてもこの顔なんですよ」
「へえ。全然普段との違いがわからへんな」
「よくそう言われます」
「ーー」

【さすがに、ちょっとムカついてきたんやけど】
『なんか、軽くあしらわれてる感じだな、オレたち……』

「あなたの持っている情報はたいしたものですね。もっとも、私たちの目的は先ほど言ったとおり、「真赭の頤」の捜索です。目的はあなたと同じですね」
「で、あんたらの正体を知った俺は秘密保持のために始末されるんか？」
「まさか。勘違いしているようですが、我々の目的は人捜しであって人殺しではありません。もっとも……」
そこで言葉を切ったアプリリアージェは、再びにっこりと甘いケーキのような優しい笑顔をエルデに投げかけた。
「私たちの邪魔をするというのであれば、もちろん排除対象です」
「おーこわ」
軽くおどけて見せるエルデを無視して、アプリリアージェは静かな調子で続けた。
「せっかくお近づきになれたので、二つ質問させてください。答えによってあなたに対する我々の行動は決まってしまいます」
「それは脅しか？このいたいけな少年を軍人がよってたかってなぶり殺すつもりか？」

「一つめの質問です」

【無視かいっ】

『無視だな』

「ルルデ・フィリスティアードとあなたの関係は何ですか？」

エルデはうんざりだという風に肩をすくめて見せた。

「二つめは？」

「もちろん、シグ・ザルカバードとあなたの関係です」

「答えなければ？」

「ご想像にお任せします」

「俺、想像力が貧困なもんで」

『おい、オレはそうでもないぞ、想像力』

【やかましい。緊張感ないんかい？】

『お前に言われたくないよ』

「これは忠告ですが、私たちは相手がたとえ非戦闘員の女子供であっても任務遂行に関しては何のためらいも持ちません」

「ま、その辺は世間のあんたらに対する噂と、あんたが持ってる二つ名でだいたい想像できるな」

「それから、これはこの二つの質問に共通する補足なんですが」

「注文が多いんやな」

「私たちは急いでいます」

エルデは再び肩を竦めてみせた。

「リリア姉さん、あんた、可愛いない女って言われてるやろ？」

『どうするんだよ』

【どうしよ？】

『考えがあってちょっかい出したんじゃないのかよ？』

【いやあ……ちょっと牽制しとこと思っただけやねんけど……話がややこしいことに】
『おいおい、夢が現実を見たものだとしたら、こいつらはかなりの腕前だぞ？』
【お前もそれなりに強いんやろ？天才剣士君】
『強いヤツとやれるのはいいけど、こんなところで大立ち回りはしたくない。というか、一対一ならまだしも多勢に無勢だろ』
【ほう。負けると？】
『ふん。ま、何ならやってやってもいい。どうなってもいいんならな』
【とは言え、ここで騒ぎを起こしてあんまり血しぶきは見とうないし、一般人巻き込むと寝覚めが悪いしな。ま、俺だけでなんとかなるやろ】
『血を見ると気分悪くなる癖を速く治せ。お子ちゃまか、お前は』
【やかましいっ。そんな話を今してる場合やないやろ】
『じゃ、とりあえず逃げるのか？』
【アホ。こいつらから逃げ切れるかいな。ル・キリアは精鋭のフェアリー部隊なんやぞ。しかも風のフェアリーの部隊やから。まあ、まず逃げられへんやろなあ】
『だったら、お得意のルーンで眠らせて時間稼げよ』
【高位フェアリーに睡眠系のルーンは効きにくいんや】
『いつも使ってる麻痺のルーンは？』
【あれは術者がちょっと離れたらすぐ切れるからなあ。まあでも、見とれって】

「陰で私がどう呼ばれているかは存じませんが、私に面と向かってそう言った人はまだいませんね」
アプリリアージェは、エルデの幼稚な嫌みを、引き込まれそうな笑顔とともにサラリとかわした。
「ほんなら、俺が栄えある最初の人間やな。あんた、ぜんっぜん可

愛いない女やで」
「それは、ご忠告どうも。気をつけます」
「二つめの質問の答えやけど、俺は「真赭の頤」にちょっとした貸しがあんねん。それをキッチリ返してもらう為に草の根分けても探し出したる、という感じでもうまる二年以上旅をしてるんや。詳細は個人的な事やから話しとうないな」
「うーん。詳細がわかりませんが、まあいいでしょう。では一つめの質問の答えは？」
「馬のフンとワインくらい無関係や。俺はそのルルデ・フィリスティアードというヤツとはしゃべったことはおろか、会うたこともない。俺には双子の兄弟もおらへん。だいたい俺は」
「だいたい？」
「いや、それもこの場では関係ない話やった。とにかく似てるから関係を言え、とかそっちの都合だけで疑われても迷惑や、っちゅうことや」
「そうですか」
「俺がウソを付いてへんことくらい、あんたほどのフェアリーやったら判ってるハズや」
アプリリアージェは、エルデの言葉に小さく苦笑しながら目を伏せた。
「確かにあなたの周りの精霊波に大きなブレはありませんね。ウソは付いていないと私も思います」
「当たり前や」
「ただし」
アプリリアージェは身を乗り出してエルデに顔を近づけると、微妙に笑みの消えた顔つきでエルデの目を見据えた。
「微妙なブレは見えます。あなたはウソは言っていないけれど、何かを知っているのではないですか？」
エルデはヤレヤレという風に首を振って肩をすくめた。
「こっちが何を言うてもペースはそっち優先かいな。怒りが高じた

らエーテル……精霊波は多少なりと揺れるやろ。まあ、何の罪もない民間人を恫喝するのがあんたら軍人のいつものやり方やもんな。一度疑ったらとことん疑う気ぃかいな。それより今度はこっちから質問させてもらうで。シルフィードの特殊部隊が、シグの爺さんをなんで探してんねん？」

「軍事機密です」

「たはー。予想通りの答えすぎて突っ込む気にもならへんわ」

隣にいる者に話すのさえ、かなり大きな声でしゃべらなければならないほど周りは喧噪に包まれていた。店の一番奥隅にあって小声で話すエルデとアプリリアージェとのやりとりが周りに聞かれている心配は皆無と言えた。

ただエイルが少し疑問に思ったのは、その喧噪の中で、そのテーブルだけが小声でもやけに明瞭にお互いの会話が聞こえることである。

おそらく端から見るとにこやかなアプリリアージェとニヤリと笑ったエルデの表情から、旅の話に花が咲いているとしか映らないだろう。時折、エルデの完食を祝福する連中が乾杯に訪れてはいたが、エルデはそれを作り笑いで適当にあしらい、アプリリアージェはそんな時、穏やかで優しそうな満面の笑顔を絶やさなかった。そんな少女が軍人と想像できる人間がいるはずもなかった。

# 第八話　委嘱軍

一人の女客の甲高い悲鳴が、「蒸気亭」の喧噪を破った。
微妙な対峙を続けていたエルデとアプリリアージェ一行の注意もその声の方向に向けられた。
エルデはすぐに店の客が注目する方へ視線を走らせた。それは店の出入り口で、そこには武装した一団が入り込み、片手剣を剥き身のまま上に向けていた。
店に入ったのは五、六人だろうか。黒と黄を基調にした軍服は一目でドライアド軍のものと知れた。サラマンダにいるドライアド軍、それはサラマンダ侯国に駐留し協定により大侯から委嘱を受け実質的にサラマンダ侯国軍として振る舞っている、いわば正規軍と呼んでいい軍隊だった。
やや派手な装飾のある丸形の板に皮を張った軽めの盾を背負ったがっしりしたデュナンの男が先頭に立っていた。彼がどうやらこの部隊のリーダーらしかった。
店内は女客の悲鳴の後のどよめきが去り、重苦しい静寂に包まれていた。彼らはどう考えてもこの場に相応しいとは思えない、つまりは歓迎されざる客であった。

「この店の主人、ルドルフ・ノイエってのはいるか？」
カウンターの中にいたルドルフは即座に答えた。
「何の用だ？ウチは武器の剥き身での入店はお断りしているんだがな。表に書いてなかったか？」
軍人の威圧的な態度にも、巨漢ルドルフは臆した風もなく、相変わらずよく響く大きな声で応じた。
「この国は未だに準戒厳令下にあるんだぞ？正規軍に対して口の利き方を間違うとマズい事になるのを知らんわけでもあるまい？」

「準戒厳令？」
エルデが訝しげにそう呟いたのを耳にして、アプリリアージェは「おや？」と思った。一般の人間がこの状況下で反応するところとしては明らかに不自然だと思ったたからだ。

「ドライアドの軍服を着たままで正規軍が聞いてあきれる。俺が読んだ条約じゃあ委嘱軍でも正規軍としての活動を行う場合はサラマンダ軍の軍装をする事になっているはずだがな」
「準戒厳令下である。軍装などどうでも良いことだ。覚えておけ。貴様のその反抗的な態度は軍部に記録される。それとも、正規軍に逆らうのはお前達が反政府ゲリラだからかな？」
「とんでもない言いがかりだな。それより何の用だ？かき入れ時なんで商売のじゃまになるような用事はさっさと済ませてくれるとありがたいんだがな」
「では言おう。我が部隊の兵が今日、南の街道で反政府ゲリラの卑怯な奇襲によって殺された。さらに行方不明者も相当数いる。我々は犯人を捜索中だ」

「おやおや」
ドライアド軍の兵士のその口上を聞いたアトルが思わずそうつぶやいた。
リリアとファルケンハインは顔を見合わせた。
「あれが連中の本隊でしょうか」
「俺たち、見られてましたかね？」
「まさか、それはない」
アトラック達のやりとりをきいていたエルデはハッとすると声を潜めて尋ねた。
「おい、まさかと思うけど、あいつらの言うてる犯人って」
エルデの問いにリリアは眉根にシワを寄せて苦笑した。それが答えであった。

「おそらくコナかけられて面倒やから片付けたんやろうけど、死体をちゃんと始末せえへんかったようやな？」
「ご明察です。まだ明るい時間帯でしたし、隠すにも谷間の一本道。死体の数も多くて埋めるには時間がかかりそうだったので仕方なく放置してきました」
リリアはそのままをエルデに応えた。

【こいつ、明日の天気の話題をしてる程度の感覚かい。あどけない笑顔でホンマによう言うわ】
『かえってゾっとするな』
【ムシケラを踏んだ程にも思ってへんのやろな。マジでヤバイ連中みたいやな】

「あなたならどうするんです？その口ぶりだと、どうやらエイミイ君も結構私たちと同じような目に遭っているんじゃないかと推理しますけど？」
「そうやな、俺なら」
「あなたなら？」
「証拠なんか何んにも残らへんように一瞬で灰にするけどな」
「へえ」
エルデのその言葉でファルケンハインとアトラックは顔を見合わせた。アプリリアージェは興味深そうに少し目を見開いた。
「でも、行方不明者の方は私たちは知りませんよ」

『おい、それって』
【そやな】

「まさか、そっちはひょっとして？」
アプリリアージェはふと思いついたようにエルデに尋ねた。
エルデはそれには答えずに、ニヤリと笑って見せた。

「ほう、それはご愁傷様としか言いようがないな。で、犯人がこの店に居るとでも？」
店主のルドルフがその兵に向かって応えた。
【ここにおるで】
『いるよな。思いっきり。しかも別々の犯人が一同に集ってるし』
【そやけど、妙やな。カンがええにも程がある】
『そうだな。なぜここに来れたんだ？』

「犯人の特定はできん。だが我々の調査の結果、この店が反政府ゲリラの連絡場所になっているという情報を得た。この店に今いる人間も反政府ゲリラに関わりがある可能性がある。よって全員その場から動くな」
「おやおや。なんだか、面倒なことになりましたかね」
緊迫した状況だと言えたが、アトラック・スリーズは落ち着いた口調でファルケンハイン・レインを見やった。
「成り行きを見守るだけだ。忘れるな。俺たちは善良な旅の商人だ」
「ごもっとも」
「打ち合わせ通りでお願いしますね」
アプリリアージェは短くそういうと、一行を見渡した。皆はアプリリアージェに小さくうなずいた。

『なんか、面倒なことになったな』
【ここはもしもの為にお前さんに返しとくわ。防御も張りなおしとく。ただし】
『わかってる。出来るだけ目立つような行動は控えるさ』
【なら、ええわ】

エルデ……いやすでにエイルに入れ替わっていた……はルドルフをみやった。

あの連中の仲間の殺害犯はともかく、そもそもこの店が反政府ゲリラの巣というのは本当の事なのだろうか……もしそうだとしたらこの店にいた我々全員もゲリラと見なされる可能性は充分にある……そうなったら……。

エイルは逃げ道の確保を最優先考えることにした。

【まあ、あれや。俺達を特定してここに来たんやないやろ】

『偶然か？』

【せやろな。町一番の有名店やから来たってとこやろ。こう言うのはようある嫌がらせや。仲間がやられたのを理由にさも正当性のあるような事を言うて証拠もなく脅して店から売り上げをピンハネしようっちゅう、みみっちい辺境部隊や】

『夕べの連中と言い、まったくひどい話だな。ドライアド軍って一応正規軍なんだろ？』

【敗戦国のその後なんて、こんなもんや。サラマンダ中どこでも見かける日常の光景って奴やな。でもまあ多少大きな町とはいえ、こんな北方の辺境までタカリにやってくるっちゅうのはご苦労なことや】

『本当に腐りきってるな』

【おいおい、あんまり熱くなりなや。お前さんの悪い癖やで】

『わかってるさ。でも正規軍は言ってみたらこの国の人達の味方のはずだろ？これじゃ、まるで敵じゃないか』

【お前さんはフォウで戦争を体験したことがないからわからへんのやろうけど、戦争下の軍なんてたとえそれが敵国のでも自国のでも、本質は変わらへん。民衆にとっては軍なんて自分たちの生活や財産や命を脅かすという点では等しく敵や。それ以外の何者でもあらへん。戦争でいつも割を食うのは平和に暮らしている普通の人々なんや】

『じゃあ、この国に暮らしている普通の人たちは何を信じればいいんだよ？』

【それは、もう何遍も言うたやろ？】
『何も信じるな、誰も信じるな……か？クソ食らえだ、そんな世界！どうやって生きていくんだよ』
【そう言う世界なんやから、しゃあないやん。お前さんが望もうと望むまいと、そのクソ食らえな世界で生きていくしかないんやからな】
『クソ。なぜオレは自分の本当の名前が思い出せないんだ……』
【その為に俺達は旅をしてるんやろ？】
『早く終わらせたい』
【同じ意見やな】

「聞き捨てならんな。反政府ゲリラだと？この店が？どこのどいつだ、そんなデマを言った奴は？ここへ連れてきてくれ。俺がぶん殴ってやる」
「ほう、シラを切る気か？」
「シラを切るも何も、俺は反政府ゲリラに知り合いはいないし、俺自身、別に政治にゃ興味がない、しがない宿屋の主人なんでな。戦争が終わってありがたいと思っている普通の庶民だ」
「お前が反政府ゲリラじゃないと言うのならその証拠を見せてもらうとするか。この店を捜索させてもらうぞ」
派手な盾のリーダー格の軍人が合図をするとさらに数人の兵士が店内に入り込んだ。
「それは断る」
「ほう。無実を証明する機会を与えてやったのに断るのか」

『なぜだ？反政府ゲリラじゃないなら堂々と捜索させればいいのに』
【アホ】
『え？ルドルフは反政府ゲリラって事？』
【お前さん、ホンマに平和ボケの世界の人間やな。ちっとは考えてみ？】

『どういう事だよ』
【家宅捜索なんてさせてみいや。本来ありもしないものを「なぜか」見つけられるに決まってるやろ？奴らの常套手段やないか】
『なんだって？卑劣な』
【言うたやろ。兵隊なんてやりたいことをやるためには権力と暴力を使ってなんでもやるんや】
『じゃあ、この場合、これからどうなるんだ？』
【さあな。俺らの知ったことやない。それよりこっちはズラかる算段しとくで。ゆっくり動いて、目立たんようにしゃがむなりして奴らの視界からはずれるんや】
『……』

「おまえらのやり方はわかってる。ありもしない証拠を見つけられて反政府ゲリラの烙印を押されるのはまっぴらなんでな」
「滅多なことを言うなよ。準戒厳令下の軍に対して使う言葉には気をつけろ」
「これでもかなり気を遣っているつもりだがな」
「では家宅捜索をせずに素直に事情聴取に応じるか？」
「冗談だろ？」

「おいルドルフ、ドライアドの兵隊は全部で十人くらいだぜ」
外の様子が見える入り口付近の客がそう声をかけた。
「あと、六頭だての搬送幌馬車が表に一台あるな」
ルドルフはうなずいた。
「静かにしろ。どういうつもりだ。お前達本当に反政府ゲリラか？」
「何度言ったらわかる。俺たちは反政府ゲリラじゃない。言いがかりはやめてお引き取り願おう」
「こりゃけっさくだ。お前、軍をナメてるな。はいそうですかと俺たちが立ち去るとでも思ってるのか？」
「お前も俺たちをなめてるな。勝手にランダールに入り込んでサラ

マンダ正規軍もないもんだ。ランダールには自治警察ってのがあってな。お前さん達のようなならず者を追い出すのも役目の一つだ」

ルドルフのその言葉を合図に、店内のあちこちから剣を抜く声が響いた。

「何？」

とたんにドライアドの軍装をした一団は色めき立ち、店内を見渡した。そこには十人を超える人間が剣を手にとり天井に矛先を向けおり、壁際には弓に矢を番えたものも四人ほどいた。

「どうするね？おとなしくこの町を出て、本来いる場所に帰るならよし。やる気なら本気で相手になる。なあに、ちゃんとした公式の手続きを踏んでこの町に赴任した正規軍ならいざ知らず、最近はドライアド軍の軍装をした反政府ゲリラも多くてな。そいつらを自治警察で退治すると政府から恩賞金がもらえるようになってるんで、俺達にとっちゃいい小遣い稼ぎになるんだがな」

「ゲリラを十人も退治したらここに居る全員分の一ヶ月分のビール代くらいにはなりそうだな、ルドルフ」

「ちげえねえ。いいカモだ」

リーダーらしき男はひるんだが剣を突き上げたまま隣にいる部下に小声で何かを命じた。すぐに一人の兵が外から大きなズタ袋を抱えてやってくると、そのリーダーの男の足下に置いた。

「とうとう正体を現したな、反政府ゲリラめ」

リーダーの男は剣を下ろし、ズタ袋に片足をかけてそう言った。

「ほう。この状況でまだそういう言いがかりをつけるのか？俺達は本気だぞ？」

ルドルフは形勢逆転という状況もあり、落ち着いた声でそれを受けた。

「いきがっていられるのも今だけだ。お前達にぐうの音も出ない証拠を見せてやろうじゃないか」

隊長の合図で、兵士が足下のズタ袋の口をくくっている綱を解い

た。袋を無造作に引きずると、中から白いシャツを着た若い娘が転がり出た。長い金髪はめちゃくちゃに乱れて、白いシャツとつりズボンは所々が引き裂かれており、泥もにもまみれていた。
服から露出した手足には、血痕とも見える赤黒い染みがいくつか広がっていた。その手足は荒縄でそれぞれきつく縛られており、片方の足は裸足だった。

『おい、あれは！』
【あの子は！】

「カレン！」
「おっと」
ルドルフは一目見るなり、そう声を上げて変わり果てた姿の娘に駆け寄ろうとしたが、兵士達に蹴り倒された。
「この娘は俺達の仲間の死体の傍にいた。おそらくは反政府ゲリラの見張り役か連絡役だ。俺達の姿を見て逃げようとしたところをひっ捕まえたって訳だ。お前の娘なんだろ？どうだ、これでも言い逃れができるつもりか？」
「お前ら、娘に何をした！」
ルドルフは起きあがりながら、憎しみに燃える目でリーダー格の兵士を睨み据えた。
「なあに、小娘にしてはあまりに抵抗が激しいんでちょっと手荒だったが眠ってもらっているだけだ。もっとも、お前達の出方によってはこのままここで処刑してもいいんだがな」
そういうと、横合いの兵士に目で合図をした。それを見た三名の兵士はそれぞれの剣をカレナドリィの喉と胸と腹に当てた。
「おとなしく武器を捨てて投降しろ、反政府ゲリラども」
「俺たちは反政府ゲリラじゃない」
「ほう。俺が脅しを言っているとでも思ってるんじゃないだろうな」
隊長格の男はそう言ってニヤリと笑うとカレナドリィに剣を突き

立てていた兵士を下がらせ、かわりに自らの剣をシャツに薄く突き刺して胸元のあたりを切り裂いた。それによって所々突かれたような青い痣が残る形のいい白い乳房があらわになった。

再び店内に悲鳴が上がった。

「俺は気が短いんだ。十数えるウチに武器を捨てろ。さもないと今度はこのかわいいおっぱいをえぐり取るぞ」

ルドルフの目は憎しみにこれ以上はないほどつり上がっていた。

「一」

リーダーらしき男が数を数え始めた。

「二……三……四……」

『エルデ、悪い。我慢の限界だ』

【何言うてんねん。ここでじっとしとったらぶっ飛ばすところやで】

『あのな』

【弁当の礼をするのは人として当然やな】

『いくぞ』

【とりあえず、ややこしなるから今はまだ殺さんとき。例によってくれぐれも血ぃ流さへん方向で頼むわ。あとのしゃべくりは任せとき】

『了解』

「五……六……」

何人かが武器をすてた。それを合図に店内で武器を捨てる音が鳴り響いた。おそらく全員が武器を放棄したに違いなかった。

「ちょっと借りるで」

エルデはそういうとアプリリアージェの横に畳まれていた白っぽいマントを取り上げ、さっと羽織った。アプリリアージェは何かを言いかけたがエイルはそれを無視して背を向けた。丁度その時、剣に続き、弓を構えていた男達がその弓を床に投げ出すのが見えた。

エイルは息を吸い込むと、大声で叫んだ。
「これでこの店の疑いは晴れたはずだろ？この人たちは自警団で、自分の町を守りたかっただけだ。ゲリラだったら武器を捨てたりしない。これ以上理不尽な事をするなっ」

【うーん。ちょっと締まらへん演説かな】
『普通だろ』
【フン。後のセリフは担当したる】

リーダーの男は突然声を発したエイルを睨みつけた。
そして声の主がまだ少年であることを確認すると、不愉快そうに怒鳴りつけた。
「ガキが何をえらそうなことを言っている」
「そっちこそいい大人のくせに幼稚な方法でセコくタカってんじゃねえよ」
エイルの言動を最初はあっけにとられて見ていたルドルフは、我に返ると叫んだ。
「お前、よそ者のくせに馬鹿なことを言って問題を大きくするな」
エルデはそれを無視すると今度は店内の客に向かって手を大きく挙げて叫んだ。
「皆んな、危ないからできるだけ入り口から離れて壁際に寄っててくれ。でないと火傷するぞ」

「リリア……」
アトラックがアプリリアージェに声をかけようとしたのを彼女は左手を挙げて制した。
「成り行きを見守りましょう。あの態度から察すると彼には充分な計算があるように見えますよ」
「ですかね」
「どちらにしろ私達が手を出す必要は全くありません」

アトラックはファルケンハインを見やって感想か意見を求めたがファルケンハインはそれには答えずエイルの方をじっと見て、つぶやいた。
「坊やが事を起こす前にわざわざ司令のマントを羽織った意味がわからん」
「マントを脱いでたのが司令だけだったからじゃないですかね？あ、サイズかな。俺達のだと大きすぎますしね」
「アトル。それは答えになっていないんじゃないか」
「ちょっと私たちでは想像できないような面白い事が起きるかも知れませんね」
「まったく。司令は本当にいつも冷静ですね」
「あら、この顔を見てくださいな。私はかなり緊張しながらもワクワクしてるんですよ。いつも冷静という言葉がふさわしいのはあなたの上司の方でしょう？」
アトラックはアプリリアージェにそういわれると頭を掻いてリーゼの方を見やり、肩を竦めた。彼の直属の上司と言うのはどうやら一行の中でも最年少、そして一見ただの子供に見えるリーゼの事らしかった。リリアの言うとおり、当のリーゼは一連の出来事の間中も眠っているかのようにまったく何の動きも見せなかった。
「クラルヴァイン副司令の場合は冷静というのとは全く違うような気もするんですがね」
アトラックはそう言うと困ったような顔をしてもう一度頭を掻いてファルケンハインの方を見やった。しかし、ファルケンハインはそんなアトラックを当然のように無視した。

「このガキ、どういうつもりだ」
兵士の一人が憎々しげにそう声に出した。隊長はそれを制してエイルとルドルフを交互に見やるとニヤリと笑って剣を頭上に高々と振り上げた。
「お前らの中に、とりあえず俺の言ったとおりにしなかった奴がい

た。こりゃ反政府ゲリラへの見せしめだ。おまえら、よく見とけ。ふん、まだ若い娘なのにかわいそうになあ！」

【いくで】

『了解』

隊長格の男は言うが早いわためらわずにその剣を足下に横たわるカレナドリィの露出された白い左胸に向けて振り下ろした。

店内にはあちこちで大きな悲鳴が上がった。

＞ｉ２３５０３―１８３１＜

## 第八話　委嘱軍（後書き）

第一巻終了
次話から第二巻になります。

# 第九話　暗珠の呪法（前書き）

第一部　蒼穹の台　第二巻スタート

# 第九話　暗珠の呪法

＞ｉ２３４５８―１８３１＜

エイルは剣が振り下ろされると同時に両手を隊長格の男の方へ伸ばし、誰にも聞こえない程の小さな声で何かをつぶやいた。

剣が振り下ろされようとした次の瞬間、店内にゴオオっという轟音がとどろき兵士達が溜まっていた入り口のあたりが大きな風圧を伴った赤い炎に包まれた。

アプリリアージェの目には、エイルがつきだした両手の先から炎が生まれ出て、それが入り口のドライアド兵を吹き飛ばすのが見えた。

すぐに次の炎が発せられた。今度はまるで何匹もの蛇がうねるように兵達にまとわりつき、表面を焦がしていった。

「この子、炎のフェアリー？」

「うわあああああ」

「助けてくれ！！」

「も、燃える！」

兵達は一瞬でパニックに陥った。

「大将、この隙にカレンを！」

床に横たわったままのカレナドリィはエルデの発した炎の影響は全く受けず、吹き飛ばされたドライアド隊から解放されていた。

エイルはアプリリアージェ一行の方を振り返り、すこし近づくと彼らにしか聞こえない程度に小さく声をかけた。

「悪いけど、皆さんしばらくその場所で立っててくれへんか？」

エルデの言葉の真意をはかりかねた一行は顔を見合わせた。

「いや、それよりさっきのは一体……」

アトラックはエイルにそう問いかけたが、エイルは背を向けた。
「悪いようにはせえへん。もっともあんた達が状況打破に協力してくれるつもりがないんやったら別にかまへんけど」
そういうとエルデは小声で何かをつぶやいた。
アプリリアージェ達の目には、瞬きする間に空手の少年が儀仗を手にしたかのようにしか映らなかった。

『さて、叩きのめすか』
【弱いものいじめやな】
『やかましい。ゴミはゴミ箱に、なんだろ?』

数秒後には炎はさっと引いた。
当初パニックになっていたドライアドの兵士達だが、たいした被害を受けていないことをすぐに察知すると武器をとってエイルを見た。
隊長格の男立ち上がりながらエイルを睨んだ。
「きさま、炎のフェアリーか」
エイルはそれには答えず儀仗ノルンをかざして隊長格の兵士に向かっていった。
「だったらどうした?とりあえず、お前はぶっ飛ばす」
「バカめ。そんな木の棒でこの俺と戦えるものか。大した威力もない三流フェアリー風情が」
隊長格の男はそう叫ぶと、走り来るエイルに向かって剣を構えた。戦いには慣れていると見えて、その剣の構えには迷いがない。それに、剣の腕にはそれなりの自信があるのだろう。その状況下でも落ち着いていた。
次の瞬間には二人の剣と儀仗が交差した。

アトラックの目には隊長格の兵士が振り下ろした片手剣が、まるで無防備に突っ込んだエイルの体を見事に袈裟懸けに切り裂いたよ

うに見えた。
だが、切り裂かれたはずのエイルの姿がおぼろげに空気中にとけ込むように消えたかと思うと、本体はすでに隊長格の兵士の脇をすり抜けるような形になっていた。アトラックは思わず目をこすった。

エイルはすり抜けた隊長格の兵士の方は振り返らず、入り口付近に集まっている兵士達に走り寄りながら、今度は儀仗を持つ手を伸ばした。
「紛れもなく炎のフェアリーですね」
食い入るようにエイルの動きを注視していたアプリリアージェがつぶやいた。
「しかし、初めて見るタイプのフェアリーです」
ファルケンハインはアプリリアージェの言葉にうなずきながらも、釈然としないものを感じていた。それはおそらくアプリリアージェとて同様のはずだった。炎の力をあのように身除けとして使う者を見たことがなかったのだ。炎のフェアリーと言えば、その破壊力が持ち味で、強大な炎の力を相手にぶつけて焼き尽くす、言ってみればやられる前にやる、というタイプの力業……すなわち攻撃に特化したフェアリーしか見たことが無かった。
それなのにエイルはまるで防御に長けた大地のフェアリーの能力を併せ持つかのような能力を見せたのだ。炎と土……二つの属性を持つフェアリーなどファランドールには存在しないのだ。
「一体、炎の精霊の力をどうやったらあのような形の防御能力にできるのでしょう」
「確かにただの炎のフェアリーとは違いますね」
「現象だけを見るとフェアリーではなくルーナーと言った方がわかりやすいですね。儀仗みたいな物も持ってますし」
「しかし、ルーナーではあり得ませんね」
「ええ。そうですね」
アプリリアージェはファルケンハインの言葉にうなずいた。

エルデが発した炎に兵士達は再び悲鳴を上げた。大した事はないと知りつつも、やはり炎に包まれると冷静ではいられなかったのだ。

エイルはそんな兵士達の真ん中に飛び込むと儀仗を両手剣のように構え、慌てふためく兵達を次々と打ち据えていった。その速度と太刀筋は誰が見ても鮮やかで軽やかで、歴戦の兵士の戦いというよりは、何かの舞と言った動きだった。

あっけにとられた一同が見守る中、エイルは一撃必殺で全ての敵をなぎ倒して行った。

全員を打ち据えたエイルは立ち止まると、儀仗を床にトンっと突き、ルドルフの方を振り返った。放った炎はすでに消えてなくなり、十人ほどいた兵士達は意識無く皆その場に横たわっていた。中には泡を吹いている者さえいる。

エイルと最初に剣を交えた隊長格の男は、剣を投げ出して俯せに倒れてぴくりとも動かなかった。

ぼうっと突っ立っている自治警察の男達を見渡しながらエルデは言った。

「さあ、今のウチにこいつらの武器を取り上げて、とりあえず縛り上げるんだ」

自治警察の男達は一瞬の出来事にまだ現状が理解できず、お互いに顔を見合わせながらどうしたものかという態度で迷っていた。だが、カレナドリィを抱きかかえたルドルフが彼らの呪縛を解いた。

「とりあえず、今はこの坊やに言われたとおりにしよう」

エイルは自治警察の男達が動き始めたのを満足そうに見やると、カレナドリィを抱いたルドルフの方に歩み寄った。

「カレンは大丈夫？」

エイルは次に口の中で小さくなにかをつぶやきながら、儀仗でさっとカレナドリィの体の上をなぞるような仕草をした。

ルドルフはそれを見て不審に思ったが、カレンの身に特に何も変わった変化がないのでその事はすぐに意識の外へ追いやった。

そんな細かな違和感より、今は他に考えることややる事が多すぎたのだ。
「ああ、打ち身だけで大した外傷はないようだ。意識が戻ったら、多分大丈夫だろう。それよりお前さん」
「ん？」
「ただの食いしん坊じゃねえな？それよりカレンを知ってるのか？」
「ここに来る途中の街道で行き倒れてたオレに弁当を恵んでくれたんで、ちょっと恩があってね。赤の他人って訳じゃなくなってたし、さすがにさっきのは見てられなかったんだ」
「そうか。あれほど町の外に出るなと言っていたのにな」
「とにかく、カレンをベッドに」
「判った。そうさせてもらおう」
ルドルフは複雑な表情を浮かべながらも目を伏せてエイルに黙礼すると、勝手口の方へ引っ込んだ。そこから自室に繋がっている様子だった。

「あの子、炎のフェアリーだったんですね」
アトラック・スリーズが感心したようにつぶやいた。
アプリリアージェはアトラックには答えず、リーゼの方をチラリと見た。リーゼはアプリリアージェを見ると、反応して小さく首を横に振って見せた。
俺に聞くな、わからない。という意味であろうか。

「で、この後どうするつもりだ？食いしん坊の旦那。まさか俺たちにこいつら全員始末しろってんじゃねえだろうな？」
口々にひそひそ声で話し合っていた客達の声がだんだん大きくなってきた頃に、ルドルフが店に戻ってくると、後ろ手に縛り上げられた兵士達を眺めながらゆっくりエイルに詰め寄った。
店の客達はルドルフの再登場を知ると口を閉ざし、遠巻きにエイルと兵士とを交互に見比べてながら二人の会話に注目した。

「あれ？そうするんじゃないの？」
「バカな事をいうな。俺たちゃ反政府ゲリラじゃないんだぞ」
「正規軍の連中にこんなことをしたとあっちゃ、俺たちはタダでは済まないだろうよ」
ルドルフに次いで、兵達の武器をひとまとめにしていた自警団の一人が言った。
「ふーん。じゃあ聞くけど、あいつらの言いなりになっていた方がよかったって言うのか？カレンが死んでもよかったのか？」
「そうは言っちゃいない」
「だよねー。まあ、悪いようにはしないさ」
「悪いようにはしない、だと？」
「ああ。今日は出血大サービス」
ルドルフは子供とは思えないエイル、いやエルデの不貞不貞しい態度に眉をひそめた。

【しもた。血はアカンかった】
『ーはいはい』

「あの坊や、まさか反政府ゲリラ……じゃないですよね？」
アトラックがどちらにともなく問いかけた。
「この後始末をどうするつもりかが問題だが。まさか……」
アプリリアージェはそう言うファルケンハインにうなずいて見せた。
「私も今、おそらくファルケンハインと同じ事を考えていました」
「というと？」
アトラックの問いにファルケンハインが答えた。
「ドライアド軍にぶつけるのはシルフィード軍だという事だ」
「条約違反している軍同士の小競り合いにするつもりってことですか？」
「この町に被害が及ばないようにするにはそれしかないだろう。そ

うでなければそれこそ本格的にこの町は反政府ゲリラの疑いをかけられて、軍隊が駐留・占拠することになるだろうな」
「でもそんなことをされちゃ……」
「万が一、そういうそぶりを見せたら、かわいそうですが私が始末します」
アプリリアージェは短くそう告げた。
「さっき見たとおりあの子はただのフェアリーではないようなので、私がもしも一撃でしとめられなかった時は援護をお願いします。最大の力を投じて一瞬で事を終わらせてください。その後、速やかにこの場から撤退して予備の宿の方へ移ります」
「了解」
「俺たちの正体を明かされる前に、ですね」
アプリリアージェの命に、アトラックとファルケンハインはうなずいた。

その間、エイルの指示により、兵士達は全員手足を縛り上げられたまま店の外にある馬車に放り込まれていた。唯一隊長格の男だけがその場に残された。
エイルはルドルフから水の入ったヤカンを受け取ると、意識を失ったままの男の頭にヤカンの水を盛大にかけた。隊長格の男はそれで簡単に正気に戻った。
「ぶはっ。何しやがる！貴様ら、やっぱり反政府ゲリラだっんだなっ？」
「元気そうだな」
「てめえっ。いいか、このままで済むと思うなよ。俺たちに手を出すと、この町は終わりだぞ。俺たちが単独で行動していると思うなよ」
「反政府ゲリラなんかじゃないって言っているのに、ホントしつこいな、アンタ」
エルデはやれやれと言った表情を見せると、薬罐の残りの水をさ

らに顔にかけた。
「やめろ、クソガキ！俺たちを放せ。放せば今度だけは多めに見てやる」
「あのさ、オジサン」
「なんだ、ガキ」
「オジサン達がたとえドライアド軍であろうと委嘱軍であろうと、今回の行動はそもそもトリムト条約違反でしょ？」
「聞いてなかったのか？はじめに準戒厳令下だと言ったはずだ」
エルデは男の言葉に腕を組んで考え事をするかのような態度をとった。
「準戒厳令下ねえ。それって条約に書かれてたっけ？俺、立場上、一応条約は隅から隅まで全部読んだんだけど、「準戒厳令」なんていう条項はないんだよね。戒厳令についての条項は確かに七条に渡ってかかれているけど、戒厳令自体はそもそも今発令されてないよね？」
「素人が知った風な事を言うな。新しい条項ができたんだよ。辺境には伝わってないだけだ」
「「シロウト」と来たか」
エルデはそう言うと大きく息を吸い、今度はいきなり儀仗の先を隊長の鼻面に突きつけた。そして態度を豹変させると大声で威嚇した。それはその場の空気を見事に一瞬で凍り付かせた。
「恥を知れ！！この腐れタコ助っ！」
「な……」
隊長はエルデのその恫喝に思わずひるんだ。
「やれやれ。ああいえばこういう、かいな。十年も前に締結された講和条約に前触れもなく今更新しい条項が追加されるわけないやろ、このすっとこどっこい。仕方あらへんな。オッサンみたいな糞虫なんかに見せるのはめっちゃもったいないねんけど」
エルデはそこでいったん言葉を句切ると、儀仗を顔の前で水平に持ち直した。

「コレが何かわかるか？」

「あ、また古語に変わった」

「南方語もしゃべれるけど、古語が地みたいですね」

「それよりも立場上ってなんでしょうかね？」

アトラックが小声で矢継ぎ早にファルケンハインに声をかけたが、ファルケンハインはそれをいつものように無視した。アトラックはそのファルケンハインのいつもの態度に別段腹を立てたり落ち込んだりという風もなく、エルデの方を興味深く探っていた。ただ、ファルケンハイン同様にその右手は懐に入れられたままだった。

エルデはそう言った後、小さく何かを呟いた。

するとエルデが手にした木製の杖の頭頂部に埋められたいくつかのスフィアのうち、目立つ三つの大きなスフィアの一つがまばゆい光を発し、店内を明るく照らし出した。そしてそのスフィアの光を受けたカウンター横の白いしっくいの壁に、幻灯のように赤い文様をくっきりと浮かび上がらせた。それは蛇が絡まった杖とツルバラが巻き付いた剣が交差した、特徴的な紋章だった。

店内がざわめきに包まれた。

それはおよそファランドールの住民ならば誰もが知っている紋章だったのだ。それだけではない。スフィアからその紋章を出す事ができる人間がいったい誰なのかも、彼らはファランドール人の常識として知っていた。

「おい、あれは」

「まさか、まだ子供だぞ」

「いや、子供も何人かいるという噂を聞いたことがあるぞ」

「だいたい、あれは年齢と関係ないだろ？」

「そういや、そうだ……」

「おい、そんなことより、ひ、額を見ろ、本物の賢者さまだ」

一人の男がそう叫んでエルデの方を指さすと、悲鳴とも歓声ともとれる声が蒸気亭の店内に一気に轟いた。
「あれは！！」
「おお！生きているウチにお目にかかれるとは」
「ありがたい……」
「ありがたい……」
蒸気亭の人々はエルデの額に突如現れた第三の目を見て、紋章を掲げた瞳髪黒色の人間が賢者であることを確信した。
中にはエルデに跪くもの、座り込んで額を床にすりつける者さえあった。

「し、司令！」
「なんてこと」
「まさか？」
アプリリアージェ一行もエルデの額の第三の目とスフィアの紋章を見て驚きに包まれていた。彼らも噂だけは知っていたが、賢者の額にあると言われている第三の眼を見るのは生まれて初めてのことだった。
しかし、一番驚いた表情をしていたのは誰あろう、カウンターの片隅に目立たず座っているアルヴの女吟遊詩人であることには誰も気づいていなかった。彼女はこの一連の騒ぎを、ずっと店の隅の目立たない所に居ながら冷静に眺めていたのだ。
（賢者の徴？それにマーリンの瞳？いったい誰？）

「こんなガキが、まさかマーリンの賢者！」
隊長格の男は、惚けたようにエイルの額にある真っ赤に見開かれた第三の目を見つめていた。
「ほお。不良軍人でもさすがにこの紋章とこの目の意味は知っているようやな」
「なぜ賢者がこんなところに」

「賢者様といえ、この下衆め」
「は、はい、け、賢者様」
「余がこんなところにいる訳を知りたいか？」
「は、はいいっ」
「うふふ。それはひ・み・つ」

『意地悪？』
【いや、問いかけはしたけど、俺は別に答えたるなんて言うてへんし】

「お、俺はどうなる。ちょっとした出来心だったんだ。な、仲間がやられた事は本当だ。街道の真ん中で六人もゲリラに殺されてたんだ。ウソは言わん、信じてくれ」

『こう言ってるけど、どうする？』
【面倒だからあっさり全員処刑】
『無抵抗のヤツを殺すっていうのはやっぱり俺はどうも』
【本当に甘いな、お前さん】
『カレンの分はぶん殴った。思いっきりぶん殴ったからあの左足はしばらくつかいものにはならないさ』
【わかったわかった、後始末はしたる】
『いや、お前に任すと全員処刑するだろ？代われ』
【もう仕込みはおわってんねん。お前さんにその回収はまだまだ無理】
『くそ』

「ふん、ええやろ。仲間がやられた事については余も多少同情はしたる。けどな、お前らの犯した罪は今ここで余に処刑されても文句は言えへんものやという事はよーく自覚しときや」
「は、はいっ」

「だからと言うてハイそうですか、ってそのままお前達を開放する訳にもいかへんなあ。うーん、そやな。じゃあまずここで余のマーリンの瞳と賢者の徴に誓え。二度とこんな事はせえへんってな。そしたらとりあえず命だけは助けてやってもええ」

「ち、誓う。いえ、誓います」

「焦ったらあかん。まだ続きがあるんやから最後までちゃんと聞け、ボケナス。糞虫の上にせっかちやな、お前」

「も、もうしわけありませんっっっ」

「それから本隊に戻ったら、おまえ達は全員、何か適当な理由をつけてすぐに除隊申請してドライアドに帰れ。全員足の骨を叩き折ってやったからどっちにしろしばらくは後方送りやろし、すぐに申請は認められるやろ。何なら余の方で上から根回ししておいてやってもええで。そのケガは……そうやな、夜に酔っぱらって全員で用足しに行ったら全員で足を踏み外して崖から落ちたとでも言うておけばええんちゃうかな。剣を使わずにわざわざ木製の杖で骨を単純に折ってやったんはそういうウソを付きやすくするためや。それとも剣で切り落としてやった方が良かったか？何やったら今からでも」

「め、滅相もありません。お、お慈悲にに感謝いたします。もちろん、ご指示には全て従いますとも」

「最後に、これが一番重要なんやけど、余の事は絶対誰にも言わんように。家族にも誰にもや。聞いて知っているとは思うけど俺たちは基本的にお忍びやからな」

「そこまで考えて剣じゃなくて杖だったんですね。さすがはマーリンの賢者」

「杖しか持ってなかったからじゃないのかしら」

「いや、手近に自治警察の奴らがが捨てた剣があったはずじゃないですか」

「最初から骨を折る程度にしたくて、だから杖が適当な武器だったんでしょう。彼からはあの時、怒りは感じられましたが殺意までは

伝わってこなかった」
ファルケンハインの言葉に、アプリリアージェは頷いた。
だが、アトラックは不満そうにつぶやいた。
「それにしても、あの杖はどこからわいて出たんですかね？」
「それは確かに謎だな」
「確かにそうですね」
「まあとりあえず、当初懸念した事態にはならずに済みましたが、それよりも彼が私たちに席を立っていろといった意味がまだわかりませんね？」
アトラックに問われるまでもなくアプリリアージェもそれを疑問に思っていた。
だが、その謎解きはすぐに行われる事になった。

エルデがアプリリアージェ達の方に顔を向けた。
「お前達、大儀であった。手を借りるまでもなく余一人だけで一件落着したゆえ、もう座ってよいぞ。」
そう言うと、エルデはアプリリアージェにニヤリと笑って見せた。
「なんと」
アトラックは驚いてアプリリアージェとファルケンハインを見やった。アプリリアージェは笑っていた。もっともいつもアプリリアージェの顔は笑っているようなものなのだが、その時はいつもより明らかに楽しそうな表情をしていた。
「そう言うことね。じゃあ、お言葉に甘えて座りましょう」
アプリリアージェは微笑むと、エイルに恭しく礼をして席に着いた。ファルケンハインがニヤリとしてそれにならい、アトラックもそれを真似た。リーゼだけは礼もせずにそのままストンと座った。
「俺たち、賢者さまのお付きの者にされちゃったってわけですか」
「光栄な事なんだろうな」
「お揃いのフードマントですから、誰も疑ってないでしょうね。賢者さまがまさか単独行動しているなんて誰も思っていないでしょう

し、お付きの者がいる方がかえって自然です。大人が複数ついていることで、子供に見える彼が本物なのだという理由付けの後押しにもなりますね」

アプリリアージェはそう言うと、おかしそうにふふっと小さく笑い声を上げた。

店内にいた人々はアプリリアージェ一行の方を振り向いて礼をしたり手を合わせたりして、感心したように一行の方を見やっていた。

「あの子、相当の策士ですね。策士というよりハッタリ屋か博打打ちといった方がいいのかもしれないわね。どちらにしろ」

ここで堪えかねたように少し小さく吹き出すと

「正教会の賢者さまなどにしておくのはちょっと惜しいですね」

そう繋いだ。

「賢者を麾下に加えたい、と？」

「誰でも欲しいでしょうね、賢者は。でも、私はあの子だからこそ興味があります」

アトラックの問いにアプリリアージェはうなずいて見せた。

エルデはアプリリアージェ達の機転の利いた反応に満足の表情を浮かべると、隊長格の男に向き直った。

「念の為に言うとく。あの者達は余の側近やけど、余にはお前の想像通り他にも忍びの護衛がけっこうな数で居る。この件はあっという間に我々の連絡網でその筋に伝わることになるやろ。サラマンダやドライアドだけやない。ファランドール中や。だから余との約束を違えるようなことがあればお前だけでなく一族郎党ことごとく……」

「わ、わかっております。誓った通りにいたします」

エルデはうなずくとルドルフの方を向いて縛を解くように指示した。

「武器も返してやってええで。本隊に戻ったときに言い訳しにくいやろうからな」

「だが」
「大丈夫や。せやな、お前？何ならマーリン正教会に古くから伝わる秘術でカエルになる呪いをかけてもええんやけど。お前が望むなら特別にウジ虫でも……」
「ま、まっすぐにドライアドに戻ります」
「だそうや。心配ない」

（カエルになる秘術だと？）
女吟遊詩人はあきれたように心の中で呟くとエイルとアプリリアージェ達を見比べた。
（別々に現れたが、単独ではなく手下か。別行動をしていてここで落ち合う算段だったという訳か）

「賢者って、カエルになる秘術も持ってるんですねえ」
「そんなもの、聞いたことがない」
「ええ？ウソですか？」
「でもあの子なら、実はそんな呪法も持っているかも知れませんよ」
アプリリアージェはそう言うとこれからの成り行きを楽しむようにエイルの方を見やった。

『おい、カエルになる呪法なんていうのもあるのか？』
【そんな愉快な事ができるくらいならお前さんを最初にカエルにしてるやろ】
『フン。カエルがルーンを詠唱できるのか？』
【あ、そっか。そうなるとゲコ語で文法を再構築して】
『何だよ、ゲコ語って？』
【知らんのか？カエルの言葉や。他にもケロ語っちゅうバリエーションもあって】
『はいはい。それより、そろそろ例の後始末しろよ。時間あくとまずいんだろ？』

【せやな】

「そうそう。大事なことを忘れてた。みんなはこれをよく見てくれ」
エルデはあたりを見渡して一同の注目が集まるのを確認した。「みんな」がいったい誰を指すものなのかは計りかねたが、エイルの言葉に従い、その場に居た全員がとりあえずエルデの方を注視した。もちろん件の吟遊詩人もつられてエルデの方を見た。いや、敢えて言われずともその場にいた者は全員、エルデを注目し続けていたと言うべきだろう。

ともかくルドルフがその直後に見たものは、エイルの顔のあたりに浮かぶ、スイカ大の柔らかい闇の固まりのような球形の光……と表現するしかないようなものだった。それがいったい何なんのかはわからなかったが、賢者であるエイルが何かの術で出したものには違いないと思った。そしてそれをじっと見つめてみるのだが「それ」は実体や遠近感がなく、どうにも捉えどころのないような感じで、何度も目をこすってみたが全く焦点が合わない。さらに目を凝らしたところで、そのスイカ大の闇色の球から突然四方八方に黒い光が飛び出し、見るものの視界をすべて闇に変えてしまった。

次に「パンっ」という、誰かが両の手のひらを叩き合わせたような音を出し、それが合図で視界が戻った。その音はエルデが発したようだった。

ルドルフは今何が起こったのかが理解ができず、エルデと店にいた客達を交互に見比べた。ルドフルと目があったエルデは、なぜかニヤリと笑っている。そしてその額にはもうあの赤い目はなかった。

ルドルフは改めて店内を見渡した。

「しかし、今年の大市はいつにも増して盛況だな」
「おうさ。何でも国外からの商人も例年以上に多くややって来てるって話だ」
「ウンディーネか？あいつらは本当に商売になると思ったらどこに

でもやってくるな」
「これがまた魅力的な商品を揃えているってんだから始末に悪いぜ」
「カアちゃんには市に近づかないようにしっかり言っとかないとな」
「まったくだ」
「あっはっはっは」

（どうしたことだ？）
ルドルフは混乱した。
一瞬の静寂後にざわめきだした店の客達は、今起こった事件の事などまるっきり無かったかのような口ぶりで、ドライアド軍が現れる前の会話の続きをそこかしこで行っていた。
店内にはビールジョッキをテーブルに置くコトンと言った音や乾杯によるジョッキ同士がふれあう音に混じり、政治情勢の勝手な憶測、今年のワインの仕込み具合、来年のサクランボの作柄の予想、大市の賑わい振りについての会話があふれかえり、空中を飛び交うビールや食べ物を注文のする声がそれにくわわり……要するにいつも通りの蒸気亭だった。
「そこちょっとどいとくれ」
給仕女の黄色い声に、ルドルフは自分の記憶を疑いはじめていた。
「こいつは……いったい」

周りを見渡して呆然としているルドルフの所にエイルが風のようにやってきた。そして耳元で囁いた。
「混乱しなくていい。みんなはさっきのことを全部忘れてるんだ」
「忘れてるって……おまえさんは一体何を」
「直接オレが痛めつけたあの兵隊連中には効果はないんだけど、娘がらみで事件の印象が強すぎるあんたも同様、術はきかないだろうと思ってたよ」
「術だって？」
「みんなの嫌な記憶を消しただけのことさ」

「神の思し召しってやつか？」
「あんた、皮肉屋だな」
「マーリンの賢者さまはそんなこともできなさるのか」
「気持ち悪いから、いきなりそんな敬語を使わなくていいよ。怪しまれるし、第一オレは見ての通りのガキだ。だから普通にしゃべってくれた方がありがたい」
「わかった」
そう言ってうなずいたルドルフのこめかみに脂汗が流れた。
「ちょっと頼まれて欲しいんだけど、いいかな？」
「何だ？」
「自治警察の代表なんだろ？だったらコイツを馬車に積んで南側の町はずれまで送り届けてくれるように誰かに頼んでくれよ」
「それはいいが……」
「大丈夫さ。言葉の脅しだけじゃなくて、別に「恐怖の暗示」も奴らの心の奥に埋め込んでおいた。変な気を起こしたら死ぬほど恐ろしい気分におそわれるようにしてある。だからこいつらがもうこの町に戻ってくることはない」
「わかった。言われたとおりにしよう」
ルドルフは、何だかわからないままだったが、エイルの指示には従うことにした。ランダールの町を大切にする彼にとって、それでこの場が何事もなかったかのように済むのであれば、それが何よりだった。

「ハンス、それにワイン、ちょっと手を貸してくれ。この兵隊さん達がつぶれちまって、馬車まで送り届けたいんだ」
「ほいきた」
「あいよ」
ルドルフに声をかけられた自治警察……一人は入り口に一番近いところで先ほど矢を番えていた背の高い褐色の巻き毛の男で、もう一人はカウンター近くで片手剣を掲げていた金髪のがっちりとした

大男だった。彼らはルドルフの指示で、入り口付近で気を失っている兵士達を外に駐めてあった大型の馬車に積み込んだ。
「あ、なんかみんなガケから落ちてケガしているらしいからそっとねー。そっと」
エイルは二人にそう声をかけると、喧噪の店内に戻った。もちろん、行く先はアプリリアージェ一行のところだった。
彼らは席について、エイルの到着を待っていた。

アプリリアージェは立ち上がると恭しく礼をして、エイルが差し出したマントを受け取った。
「恐れ入ります。賢者さま」
そう言って顔を上げたその視線は、エイルの額に向けられた。だが、もちろんもう第三の目は閉じられていた。

……噂には聞いていた。
賢者とはマーリンから三つめの目を授かった者だと。
アプリリアージェは自分の目で目撃したにもかかわらず、信じられない……いや、信じたくないと思っていた。賢者はもはや人間ですらないのだろうか？

「いや、バレるからそういう呼び方はやめといて」
ル・キリア用にエイルと再び入れ代わったエルデはそう言って頭を掻きながら一行を見渡した。その場の空気が明らかに固かった。
「予想通りやっぱりあんたらには全然効いてへんなあ。なんでか高位のフェアリーには効きにくいねん」
「あれは？」
「「忘却の暗珠（あんじゅ）」や。簡単に言うと、直前に起こった強い印象に残る事件をきれいさっぱり忘れさせる呪法や」
「ひょっとするとあれで教会は都合の悪いことを隠蔽して信徒を騙しているのではないか、と信心の浅い私などは考えてしまうのです

が」

　ファルケンハインの質問にエイルは頭を掻いたまま苦笑いした。

「いやあ、あんな事ができる人間って、その辺の教会あたりにはまず居らへんから」

「より高位の者でないと使えない、と？」

「そうやなあ。高位……いわゆる神官言うても能力についちゃ色々やし、一般的な事を言うと司教や神官程度の連中に手が出せる術やない。つまり信者に直接どうのこうのというのはないっちゅうことや。それに見てのとおり全員に効くわけやないから危なっかしいし、この術自体を習得しているヤツは少ないやろな。ルドルフのおっちゃんとかカレンなんかは術者の俺との関わりが深くなってるから効かへんしな。たまたまここにいた連中は酒が入ってたし、直近のきわめて強烈な、しかも客観的な印象やから面白いほど簡単にかかったけどな」

「マーリンの賢者なら、「真赭の頤」を探しているというのもうなずける」

「まったく。しかも賢者に炎のフェアリーがいたってのも驚きだね」

『ん？』

【そう思わせとこうや】

『何の意味が？』

【勘違いは多い方が助かる。こいつらに俺らの手の内を見せることはあらへん】

『ふむ』

「まあ、賢者と言うても色々な奴らがおるからな」

「あの剣術も構えからしてかなり独特なようだが、あれもマーリン正教会風なのか？」

「ああ……あれは……俺流かな」

「我流なのか。初めて見る構えと太刀筋だった」

「まあ、ね。それよりこれで俺の疑いは晴れたやろ？ルルデ・フィリスティアードっていう奴とは本当に会うたこともないし他人のそら似や。そんな事で俺がシルフィードの特殊部隊に付け狙われるのはちょっとごめん被りたいっちゅうか、こっちのいらぬ仕事が増えるっちゅうか」

アプリリアージェはにっこり笑うとうなずいた。

「邪魔するようならマーリンの賢者の名において排除する、と？」

「いや、そういう訳やないんやけど……こっちもあんたらの言いなりになるわけに行かん事情がいろいろあるって事や」

「失礼ながら、賢者さま。フェアリーと言ってもあの程度の力で我々四人を相手に勝てるとでも？」

これはファルケンハインだ。

顔は真顔で、声には冷静さが漂っていた。エルデは唇を少し噛んで見せた。

『あの程度ではこの連中には脅しにもならないか……』といった自嘲が混じった表情である。

だが、イヤミにはイヤミで返すのがエイル……いやエルデの流儀であった。さらにこの場では強気の方がいいだろうとエルデは判断した。

「店を焼いたらマズいから調整してたんやけど、お望みなら今ここで店の客が気づかんうちに一瞬であんたら全員を灰も残らんように蒸発させる事もできるで」

『灰にする、じゃなくて灰も残らないなんてできるのかよ？』

【俺を誰やと思ってんねん？賢者の中でもその能力の高さで一目を置かれる大賢者「真赭の頤」をしてマーリン教の賢者会始まって以来という】

『わかったわかった』

【ま、もっともそんなことしてもうたら、この店の全員を巻き込むけどな】

『そりゃマズいだろ……』
【一瞬でガチガチに凍り付かせることもできるんやけどな。そっちやと凍らせた後にガラスみたいに個別破壊できるし、結構芸術的やし、効率的かもな】
『そういや、お前が使う攻撃系ルーンって炎系が多いよな』
【見た目が派手な方がええやん？】
『は？それだけの理由？』
【もちろんや。綺麗やん、赤い炎】
『……』

「こちらも一瞬で敵ののど笛に矢を放つこともできる」
ファルケンハインの動じない応酬にエイルはやれやれという感じで苦笑した。
「さすがというか何というか、アルヴは負けん気が強いなあ。アンタ見てへんかったんか？俺に矢や刀は一切役に立たへん。いや、俺だけやのうてマーリンの賢者にはあんた達の物理的な攻撃なんか無効やと思っといた方がええで。死にたくなければ賢者には手を出さん事や。まあ、もっともその様子やと今まで賢者には会うたことがないようやな」
「なるほど。さっきの戦いはあのドライアドのならず者に向けたものではなくて、私たちに自分の力を見せる為にだったということですね」
「そうか……。考えてみればあんな回りくどいことをせずに奴らが入ってきた時に、すぐ賢者だ、やめろと言えば事は終わったはずですね」
「わかってもらえるとありがたいんやけど……。お互いに、な」

【ま、あいつをぶん殴りたかっただけなんやけどな】
『だな』

「賢者エイミイ。失礼ながら、それは我々に対する脅しですか？」
「シルフィードの国王直轄部隊……それも「白面の悪魔」を脅すなんて、そんな恐ろしいことするかいな」
アプリリアージェの静かな問いかけにエイルは肩を竦めておどけて見せた。
「確かにあなたの特権を使いマーリンの賢者の名前において我々のことをサラマンダ政府に報告すれば我々でなくシルフィード……いえ、国王の政治的な立場は国際社会でかなり悪くなりますね。ご存じの通りの今の情勢下では極力避けたいところです」
アプリリアージェは微笑みを絶やさないながらも、小さくため息混じりにそう言った。
エイルはうなずいた。
「俺もあんた達と同じであまり、というか思いっきり目立ちたくないんや。だからそこまでしようなんて思ってへん。ただ、俺が言いたいのは」
エイルは一行を見渡して真顔になると、小さく、鋭く言い放った。
「俺の邪魔をするなら、本気でぶちのめす」
そしてニヤリと笑うとアプリリアージェに軽く礼をした。
「それだけや」

【我ながらええ啖呵やなあ。惚れる？】
『言ってろ』

マーリン正教会の賢者とシルフィード国王軍の提督との、ファランドールの政治情勢にとって影響を及ぼしかねない物騒な会見が密かに行われているともしらず、辺境の商業都市にある酒場はいつもの夜の喧噪の中にあった。
ただ、カウンターの隅に座っているアルヴの女吟遊詩人だけが彼らの方をそれとなく注目していた。
（「忘却の暗珠」をエイル・エイミイか。しかし、どうにも賢者と

は思えない……いったい何者だ？）

彼女もまた、エイルの術が効いていない人物だった。

（任務の範囲外だけど、これはすこし仕掛けてみる必要がありそうね）

# 第十話　賢者とエレメンタル

マーリン正教会は全能神マーリンを信仰する宗教で、ファランドール中にあまねく信者が存在する最大規模の宗教である。だが、組織が形式化・巨大化する中で一部の神官が離反。新たな教義を掲げ、星歴三千五百年頃に分裂・発足したのが新教と言われるスクリングラ派マーリン教である。

新教会の教義を簡単に言えば、乱れた世を直し人々の救済をするのはエレメンタルであり、精霊を祀ることに依って現世利益を受けよう、という考え方である。

秘密主義の正教会と違い、実質的な教義を盛り込んだ比較的奔放自由な宗教で、各地の伝承などにある英雄や神格化された土着精霊の概念なども精霊の化身として信仰対象に加えるなど正教では異端とされるアニミズム的な考えを取り込んだ親しみやすさが特徴で、信者を増やしている。

ただし、正教会・新教会ともにいわゆる「帰依」を絶対としない上、双方ともお互いに排除行動をとらない為に、ファランドールの人々は都合のいい方を都合によって使い分けるようになっており、言ってみれば微妙な共生が行われている状況であった。

通常はマーリン正教会を正教、マーリン新教会を新教と呼び区別する。

正教がどちらかというと厳しい戒律による小乗宗教感の意味合いが強いのにくらべて、新教は救世主到来を掲げて現世的な救いを旨とする大乗的な宗教と言える。

正教と新教の間には宗教論争は一応存在するが、それほど表立った対立があるわけではない。

これは一般には正教側が静観あるいは無視を決め込んでいるからだと見られているが、ファランドールの戦争の歴史と各国の軍事事

情をある程度知る事ができる人間は違う考えを持っている。それはすなわち両教会の軍事力の差に起因する均衡だという考え方である。

国家でもない宗教が軍事力を持つと聞くと奇異に聞こえるが、現実的に両教会は一つの国家体制といえるものを持っており、自衛に特化した組織を有している。それは警備隊という言葉を当てはめるには非現実的なほど強力であり、まさしく軍と言った方が理解しやすいと言える。

正教会には「賢者」と呼ばれる教会の頂点に立つ立場の人間が百五人いると言われている。彼らは唯一神であるマーリンが「合わせ月」の日に復活すると言われている「マーリンの座」という場所を守る「三聖」の配下にあって「賢者会」という組織を成している。

特にその戦闘能力は高く、過去の歴史書には賢者十人で十万人の大軍団を全滅させた事例が公式記録として残っている。もちろんそれは表面に出た事例であり、それとは別に明かされることのない軍事介入が賢者により多数行われていた事は、いわば公然の秘密と言えた。

「賢者」には正教会配下の組織にいる者のうちから老若男女問わずずば抜けた能力を持つものが選ばれるとされているが、その内幕は全く明かされておらず、百五人いると言われている賢者の名前や素性はほとんど知られていない。

正教会側の外交窓口としては、通常「賢者会」の下に位置する「神官」と呼ばれる地位にあるものがこれにあたり、「賢者」が表に出ることはほとんどない。

正教会のすべての決定はこの「賢者会」からなされるとされているが、こちらも詳細はもちろん一切不明である。新教は主にこの「賢者」の選に漏れた不満分子である神官職が組織的に離反して作られたとされている。

新教側の組織には「賢者」職はなく「大神官」の直下に「神官」

が来る形となっている。
「賢者」の存在によりいわゆる「僧兵」を持たない正教会に対して新教会は訓練された僧兵からなる軍隊のような組織を有していることも大きな違いと言える。
大規模な軍隊組織を有しながらも新教側が弾圧活動などを一切行わないのは、賢者という存在が抑止力になっている為だと言えた。
つまり、「たった百五人」がいかに重い存在なのかという証拠でもある。
問題はその「均衡」がいつ崩れるのか、であろう。
「合わせ月」が間近に迫ってくるに従い、両者に対する各国の注目度も上がっていた。
それは近いうちに両教会の聖地である「マーリンの座」を巡る争いが何らかの形で勃発するのではないかと考えられていたからだった。

「なるほど。今まで我々は教会側の情勢については殆ど知らされていませんが、この状況下にあって実は彼らは重要な位置に立っているという事ですね」
アトラックに請われたファルケンハインが教会についての一般的な概略を披露し、アプリリアージェが自らの立場で知り得ている知識で補足を行い、ル・キリア一行は「賢者」に対する認識を共有する作業を行っていた。

「軍人は命令されたことを遂行するのが本分だからな。こういったことは司令部の範疇になる。従って俺が知っているのもこの程度にとどまる。とにかくもしも賢者の名簿があったとして、それを手に入れたら一生豪遊できるくらいの値段で取引される事だけはまちがいない。賢者とはそれほどの要人だということになるな」
「そんなものを普通の人間が手に入れてしまったら、一生豪遊どこ

ろか、それを明らかにした瞬間に誰かに奪われるでしょうね。命と一緒に」

アプリリアージェは相変わらずの微笑でそうファルケンハインにつなげると、両手を打った。

「この話はこれくらいにしておきましょう。あとは憶測にしかなりません。私たちはエイル・エイミイという賢者そのものを確保しました。内実は徐々にわかるでしょう」

何か言いたげに自分を見たファルケンハインを、アプリリアージェは目で制した。

「もちろん、彼が真実を話すとは限りません。情報を取捨選択するのが我々の役目です。ただ」

アプリリアージェはそこまで言うと窓のそばに歩み寄り、建物の間から少し見える夜空を見上げてから、言葉を継いだ。

「これは私の勝手な願いですが、できれば彼が私たちの本当の味方になってくれるといいですね」

味方にならなければいかなる手を用いてもエイルを生きて教会に返すわけにはいかなかった。それがシルフィード王国の提督、アプリリアージェ・ユグセルとしての立場であったのだ。エイルが言うように、さっきの能力は彼の持つ実力のほんの一部なのであろう。エイルと戦うことはすなわち自らを含む部隊がおそらくは無傷では済まないであろうと言うことでもあった。

目的のためには手段は選ばない。けれども、できれば何も失わずに目的を達したい……。

それがアプリリアージェ・ユグセル提督の本心であった。

【なるほどなあ。えらいリアルな夢やな】

一方、四十エキュ五十サインの部屋に落ち着いたエイルは、エルデに請われて「夢」の内容を語って聞かせていた。それはアプリリ

アージェやルルデが登場したという例の夢の話だった。
『現実のリリアさんの姿は夢で見た通りだ。ドールも』
【ふーん。ルルデ・フィリスティアードがお前さんにそっくりなだけでもびっくりするやろうけど、多分リリア姉さんが問題にしてるんは最後にルルデが放ったその大きな赤い光なんやろうな】
『いや、問題はそこじゃなくて、なんでオレがそんな夢を見たのかと言うことだろ？』
【ま、それはどうでもええけど】
『どうでもいいのかよ？』
【それより知識人にとってお前さんの夢の内容が極めて興味深いものやっちゅうのには訳があるんや】
『赤い光の部分か？』
【まあ、聞き。これは一部の学者や正教会のルーナーの間では昔から仮説として言われていることなんやけどな】
『？』
【ここファランドールと部分的につながっている異世界が存在するんやないか、という話や。それがファランドール・フォウ。単にフォウという事が多いけど、つまりおまえさんのいた世界やな】
『じゃあ、ルルデ・フィリスティアードとオレはつながっている存在だってのか？』
【他に思い当たる節はないのんか？】
『そう言われてみれば』
エイルは昔からよく夢を見ていた事を思い出していた。その殆どは他愛のないものだが、時折見慣れない町並みが登場する夢を見ていた記憶がある。それはまさに今のファランドールにある町の風景のような気がした。もちろんエイルにとってフォウでの記憶は漠然としたものが多いが、確かに見ていたという確信のようなものがあった。
【とにかく、その話を聞くとユグセル公爵がお前にご執心なのもムリのない話やな】

『ご執心？というか、公爵？』
【ああ。リリア姉さん、つまりアプリリアージェ・ユグセル海軍中将っちゅう人物はシルフィード王国の公爵さまでもあるんや。解ってるとは思うけど公爵やから、そら、かなり身分が高いお人やで。確かシルフィードの王位継承権のごく上位にも名を連ねてたような……。どっちにしろ悪名高いル・キリアの司令が公爵さまってのはすごい国やな。まあ、名前だけは知れているけど、基本は秘密部隊やしなあ】
『お前、よく知っているよな。そう言うこと』
【紳士録の上位の奴らは全部知ってる。仮にもマーリンの賢者っちゅう立場やしな。教会には諜報を専門にしとるヤツもおるし、結構な情報が集まってくる仕組みになっとるんや】
『なるほどな。マーリン教っていうのはかなり侮れないってことだな』
【世界中でもっとも敵に回したないところやろな。俺がそう思う位やから】
『他の国の連中も同じということか』
【ま、そういうこっちゃ。そういうわけでお前さんも知ってるとおり賢者はかなりの特権も持ってるしな。で、話の続きやけど、ルルデが最後に放った赤い光が次に問題になるんや】
『問題？』
【これも書物から得た知識で俺が勝手に推理した事やけど】
『なんだ？』
【そのルルデ・フィリスティアードってヤツ、ひょっとしたらひょっとしてエレメンタルやないのんかな】
『エレメンタル？』
【この世界に古くから伝わる伝承や】

エイルとエルデが一晩四十エキュ五十サインの豪華な部屋でそん

なやりとりをしているちょうどその頃、蒸気亭の離れにあるノイエ家の一室で、カレナドリィがぼんやりと目を覚ました。

カレナドリィは目覚めると、横たわったままレースのカーテン越しに二つの月で照らされて明るい自分の部屋の中をゆっくりと見回して、自分が置かれている状況を改めて確認した。

（そうだわ……ドライアドの兵隊に捕まって縛り上げられて……さっき助けてもらって、また眠っちゃったのね……ふふ、こうしているとまるで夢みたい）

そして何かを思いつくと両腕を月明かりでよく見えるように差し出した。

（剣の鞘であちこちあんなにぶたれたのにどこも痛くないのはなぜ？痣もないわ）

そこでがばっと起き上がった。

（やっぱり夢？ああ、でもすごく怖くて悔しかったし、あんなに現実的な夢なんてないわよね）

カレナドリィはゆっくり起き上がると、椅子の上に畳まれた服を持ち上げた。それは白いシャツで、ところどころ血がにじんでおり、前の部分は刃物で大きく切り裂かれていた。

（やっぱり本当にあったことなんだわ……。ああでも、本当に良かった）

そんなことを考えながら再びベッドに戻ろうと思ったその時、カレナドリィの耳に小さくポロンという素朴な弦楽器の音が届いた。

（こんな夜中に誰かが近くで楽器の練習かしら？）

そう思う間もなく、朗々とした美しい女性の歌声が、これも小さくはあったが、はっきりとカレナドリィに届いた。

高く清らかで美しい歌声は、カレナドリィが見たことのないウンディーネの島々の景観を称える有名な歌だった。

カレナドリィはいつしか、その歌を聴きながらその場で再び深い眠りについていた。

そもそもエレメンタルとは古代ディーネ語で「決定する者」という意味である。

エレメンタルについては諸説あるが、基本的にはフェアリーの中でも図抜けた能力を持つ者で、ファランドールの伝説では千年に一度同じ時代に四人のエレメンタルが生まれ落ち、二つの月が完全に重なり合う「合わせ月」と呼ばれる特別な日に四人が集い、世界を救うか滅ぼすかを決定し、それをマーリンに伝えると言われている。

四人のエレメンタルとは、それぞれ炎・大地・風・水の四種類の精霊の力を持ったフェアリーで、それは「始まりの四人」「四始祖」と呼ばれる古王国の創始者の末裔であるという。また一説では四人のエレメンタルが揃うと、大いなる力が得られるとも言われている。

エレメンタルの特定方法にも諸説あるが、エレメンタルには体のどこかに必ず「エレメンタルの徴」と呼ばれる痣があり、エレメンタルの力を使う際にはそれが輝くと言うものが一般的である。

彼らは全能最高神マーリンに祝福され、マーリンの四方にあってマーリンを守護する者とも言われている。

その力は、フェアリーの能力を遙かに超え、エーテルを使った超常能力を発揮するルーナーのあらゆる高位契約履行をも凌駕すると言われる。

古代の教典にはかつて一人のエレメンタルの力が世界の三分の二を滅ぼした記録さえあるという。

マーリンを唯一神とする正教会に対し、新教会ではエレメンタル達はマーリンと並んで直接の信仰対象となっている。

なおその当時、正教会・新教会からエレメンタルの血統であると確認されているのは古くからの系譜が確実に辿れるシルフィードの現王朝であるカラティア家のみである。

エレメンタルの徴とはエレメンタルである証しの事で、エレメンタルごとにその痣は違うとされる。一説によるとそれぞれの痣は、マーリンの言葉で、「炎」「水」「大地」「風」と書かれているという。また、その痣は常に現れている訳ではなく、力を発現する際など、特定の条件がそろったときにのみ現れるとされ、普段の生活をしている人間を痣を頼ってエレメンタルとして特定するのは難しいと考えられている。

確認されているエレメンタルの徴は、シルフィード王女エルネスティーネ・カラティアの左の掌に浮かび上がる文様のみであるが、文様の意味については宗教学者の間で諸説あり、未だ定まっていない。マーリンの言葉と呼ばれる「神痕」に最も詳しいとされる正教、つまりマーリン正教会はエルネスティーネの痣については硬く口を閉ざしたままになっていた。

「ルルデ・フィリスティアードは炎のエレメンタルではなかったのかと、私は思っています」

「ええ？」

『賢者一般』から『当面の賢者』に話題が移ると、アプリリアージェはそう言った。

一行は長かった食事を終え、予約していた部屋でようやく旅装を解いたところだった。

「目撃したのは私とリーゼの二人だけですが、あの時に見た光はおそらく「発現」であったと今も確信をしています」

「なんですって？」

アトラックは驚き、手にしたワインの瓶をあやうく取り落とすところだった。

その話は初耳だったのだ。

「それってエレメンタルの一人が……もう死んじゃったってことですか？」

ファルケンハインにとってもエレメンタル説は初耳だったらしく、もう一人の目撃者であるテンリーゼンの方に視線を向けてみた。だが、テンリーゼンはいつものように目を軽く伏せてたたずんでいるだけであった。店の中でかぶっていた黒い仮面は取られており、少しだけ見える素顔が不気味な赤と黒の文様の入れ墨で覆われているのが見えた。

「エレメンタルだからこそ、あの時本当に死んでしまって終わりだったとは思えなかったのですよ」

「だから、そのルルデ・フィリスティアードにそっくりなエイル・エイミイにあれほど固執されたのですね」

「あの場を逃げ延びて別人を名乗って生きているのだと思ったのです。それほどに似ているのです」

テンリーゼンは同意を求めるように自分を見やったアプリリアージェの言葉に反応して小さくうなずいた。

「でも、全くの別人ですよね。賢者っていうのは、先天的な才能を持った赤ん坊が特殊訓練で長い間かけて鍛え上げられてようやくなれるものでしょう？だったらサラマンダでおちおちゲリラ活動とかしてるわけないですよ」

「もちろん、あの戦いのあと復活して賢者になったとは考えられないな」

「元々賢者だったけど、ゲリラ活動もしていたという事は？」

「だとしたらアクラムで我々に簡単にやられるわけがないだろう？」

「ごもっとも」

「いえ」

ファルケンハインとアトラックのやりとりを聞いた後でアプリリアージェはようやく一行の方に振り返った。

「賢者エイル・エイミイが兵士ルルデ・フィリスティアードではないという理屈はよくわかっているつもりです。いえ、はじめから頭では理解していたのですが、それでも全くの別人とは思えないのですよ。私がどうかしているのでしょうけれどね」

「まだ完全に信じたわけではない、と？」
「ええ」
「相変わらず頑固ですねえ。まあ、そんなことより「真赭の頤」を一緒に探すなんていう取引をしても良かったんですかねえ」
「奴を敵に回すのは避けたいというのが本音ですか、司令？」
「でもどっちにしろ「真赭の頤」を見つけたら、いきなり取り合いになって戦うことになるんじゃないですか？」
ファルケンハインとアトラックの質問にアプリリアージェは少しだけ間を置いてから口を開いた。
「勘違いしてはいけません。我々が欲しいのは「真赭の頤」本人ではなくてエレメンタルについての情報です。「真赭の頤」をどうこうするしないは目的とはまた違う問題です。それよりも、もしそうなったときに賢者エイル・エイミイが我々を排除しようとするかもしれないという事の方が重要な懸案事項でしょうね。でも今はそれについて明確な対処法はありません。ですからその時が来るまで時間を稼ぎながら良い方法を考えるとしましょう。向こうも我々の情報や補給網に魅力を感じているでしょうから、しばらくは対等で居られるはず。それになんと言っても私たちは数で勝っています」
アトラックはふうむ、と唸って腕組みをし、少し考えてから再び疑問を投げかけた。
「そこなんですが、賢者さまって単独行動なんですね。信じられないけど」
「一人の方が自由に動きやすいでしょう。強大な力を持っているのであれば、中途半端なお付きの者はむしろ足手まといにしかなりませんね。我々の部隊にフェアリーでもなんでもない訓練していない普通の民間人が配属されたと考えれば容易に想像がつきます」
「宿で一人で寝ている時とか不安じゃないんですかね？」
「なんなら今夜試してみますか？たぶん、もう二度とアトルと生きて会う事はないような気がしますけど」
「か、勘弁してくださいよ」

ファルケンハインがアトラックの狼狽ぶりを見て口を開いた。
「確かに今日見せた力にしてもあの程度のものは賢者の能力のほんの一端でしかないような気もしますしね」
「あの不貞不貞しいというか、凶悪な程の自信に溢れた態度ははったりじゃないってことですか」
「あんなものは賢者にとっては児戯に等しいのではないかな」
「ふうむ。それに俺たちの攻撃が効かないというのが問題ですね」
「何か手はあるはずだ。だが、賢者十人で大軍を滅ぼしたという古代の伝説を今までは信じられなかったが、賢者エイル・エイミイを見ていると」
「事実かもしれませんね。あんなのが十人もいて本気で能力全開で戦えば、そら恐ろしいことになる気がします」
アトラックの言葉にファルケンハインもうなずいた。物理攻撃が効かない相手は極めてやっかいだった。
「それにマーリン正教会の情報網もあなどれません。司令と副司令の顔を見ただけで正体を見破るんですから」
アプリリアージェはファルケンハインの言葉に反応した。
「それなんですが、少し疑問があります」
「と、おっしゃいますと？」
「私の事はアプリリアージェ・ユグセルとフルネームで呼びましたが、リーゼの事はドールという二つ名のみ。同じ副官の地位にいるファルにいたっては何も言及されていませんでしたね」
「そう言えば」
アトラックはその時の事を思い出してつぶやいた。
「俺とレイン副司令は殆ど眼中にないという感じでしたね」
ファルケンハインはうなずいた。
「でもそれは司令の身分の問題では？さすがに各国の爵位のある人間のリストくらいは教会も持っているでしょう」
「それを言うならリーゼも男爵の爵位を国王より下賜されていますし、アトラックは子爵家の嫡子ではありませんか」

「あ……」
ファルケンハインは思い出してアトラックをみやった。
「すまんな」
「いえ、部隊では爵位なんて関係ないですから」
アトラックは頭を掻いた。
「それに、俺はもう爵位は継げませんしね」
「そうか。そうだったな」
アプリリアージェはアトラックが差し出したグラスに注がれた赤い液体を呑みながら、二人のやりとりを穏やかな微笑で聞いていたが、その液体が無くなると、アトラックの顔を見上げて話を続けた。
「これはもうカンと言うしかないのですが、賢者エイル・エイミイには我々の目的に直結するようなもっと大きな何かがあるような気がしてならないのです。彼がルルデ・フィリスティアードとそっくりだということ自体が運命的ですし、今まで数多くの作戦をこなしてきて一度も出会ったことのなかった賢者という存在に、この作戦についたとたんに出会ったという事も」
アトラックが再び注いだワインがなみなみと入ったグラスを持ち上げると、アプリリアージェはそれを一気に飲み干して見せた。
「それに、あなた達も気づいていたでしょう？」
「何をです？」
「コロコロと変化する賢者エイル・エイミイの雰囲気です。冷ややかではありますが比較的礼儀正しい言葉遣いの時の彼にはある種の少年らしい爽やかなものを感じることがありますが、不貞不貞しい言葉遣いでぞんざいな態度になったときや古語を使うときの彼からは時に禍々しいエーテルさえ感じました」
「あ、俺も思ってました。妙に雰囲気が変わるヤツだな、と。それに」
「それに？」
「正直に言いますが、なぜか得体の知れない恐怖心みたいなものがこみ上げてきました。一瞬なんですが」

「そうか、お前もか」
「お前もって、レイン副司令も？」
「気取っても仕方あるまい。あんな少年なのに、気圧されたのは確かだ」
「あれは一種の二重人格というやつでしょうか？」
「私は多少精神医学の心得がありますが、彼の場合は単純にそう言う症例というわけでもないですね。それからこれは気づいているとは思いますが、彼は激高した物言いをしていても、実は冷静です。ぞんざいで頭に血が上ったような言動をする際の方がより緻密に言葉を選んでいるのではないかと感じました」
「そう言えば、例のマントを取った事といい」
アプリリアージェは頷いた。
「あれはとっさに頭の中で台本を組み上げていたということでしょう。つまり自分の言うべき言葉も瞬時に計算されているのでしょうね」
「うーむ。考えている以上に手強いという事ですか」
「若かろうが何だろうが、マーリンの賢者だからな」

アトラックは空になったアプリリアージェのグラスに再びワインを注ぎ入れると、腕を組んで考え込んだ。
確かに彼が知る二重人格の常識ではあそこまで何の変化もなく極めて一貫した行動を行う例はなかった。二つの人格が全くの同じ目的のために助け合いながら共同作業をする事があるというならその例かもしれないが、それならそもそももう一つの人格を生み出す必要性が見えない。

「それからあの三ツ眼ですが、あれはいったい何なんでしょう？」
「俺は本当に第三の目があるとは思いませんでした。化粧で書いてるとかそう言うのだと思ってましたよ」
「確かにな。あれには驚いた」

「神であるマーリンは三ツ眼だったという説がありますからね、関係があるのかも知れません。ひょっとするとあの目こそが賢者の力の源ととらえてもいいのかも知れませんね」
「ただの噂だとばかり思っていましたけど、実際にあの眼を見てしまうと賢者が尋常な存在ではないということは頭ではなく本能でそう思っちゃうところがあって怖いですね」
「そのあたりの謎も旅を続けているとわかるかも知れんな」
「どちらにしろこの取引は「真赭の頤」に出会うまでは双方に非常に有利です。平時はシルフィードのアルヴの商人、何か事がある場合はマーリン正教会の賢者とそのお付きの者に早変わり。どちらにしろシルフィードの国家が表に出ることはない」
「そうですね。教会の神官様は全世界で特権が行使できますし、ましてや賢者様ともなるとまさに何をやってもオッケーのお墨付きですからねえ」
「いや、何をやってもオッケーなんていうお墨付きなどないだろう？」
「そうでしたっけ？」
「外交特権というのはそういうものではない。アトラック、お前国際外交官法をきちんと勉強していないな？」
「俺の専門は国際通商法ですよ」
「通商だろうと特務部隊だろうと、外交官特権の詳細くらい一通り覚えておけ。特に俗に『賢者法』と言われる第十三条はな」
「全部暗記してますよ、それくらい」
「暗記している事と理解していることは同じではない」
「いや、そりゃそうですけど」

アプリリアージェはアトラックとファルケンハインのやりとりには答えずに、思い出したようにつぶやいた。
「それより当面の問題は、明日ですね」
アトラックとファルケンハインはアプリリアージェの言葉に顔を

見合わせた。
「そうか」
「明日はシェリルが合流するんだ」
「エイルの姿を見たら」
「うむ」
「司令、どうするつもりです？」
アプリリアージェは腕を組んで目を閉じてうつむいた。
「ずっと考えていましたが」
「はい」
「ーーなるようにしかならないでしょう」
「えええええ？」
アトラックとファルケンハインは顔を見合わせた。アプリリアージェが目の前の問題に対して匙を投げるのは珍しいことだった。普通にしていても微笑んでいるように見えるアプリリアージェの表情だが、アトラック・スリーズにはその時ばかりはその美しいダーク・アルヴの褐色の眉間に縦皺が寄って見えた。
もっとも今回の「問題」とは実は軍事や作戦面での戦略・戦術という事柄ではなく、人間関係の問題だけに、アプリリアージェの能力を疑うのはまったくお門違いとは言えた。

リーゼ……テンリーゼンはというとそんな三人を尻目にその話題については我関せずといった風情で装備の点検と補充にかかっていた。
体に装備していた細い矢筒や短剣などの武器を外すと、ルドルフが用意した補給品を入念に調べながら取捨選択をし、淡々と補充作業を行っていた。

そう。
ルドルフ・ノイエはシルフィード軍と極秘に取引のあるランダールの補給係だったのだ。滅多に彼の活躍する場面はなかったが、蒸

気亭は主に秘密部隊の補給・連絡中継基地の機能を持っていた。情報拠点としては機能していなかったが、辺境にそういう拠点があることが重要だと言えた。もちろん、見返りにランダール自警団は比較的豊富な自警資金と有事の武器を得ている事も見逃せない点だ。つまり相互の利益が一致していたのだ。

アプリリアージェ一行がここに立ち寄ったのは決して偶然ではなく、むしろ「そんな場所」に立ち寄ってしまったのはエイル達の方なのだ。

「念のために言っておきますが、ルルデの最後については、何があっても私が伝えたことだけが真実です」

その後、長く続いた酒盛りが終わり、一行が司令官の部屋から引き上げようと腰を上げた時に、思い出したようにアプリリアージェはそう声をかけた。

「もちろん、承知しています」

特産のワインで頬を赤く染めた黒髪のダーク・アルヴの少女は、部下の答えにニッコリ微笑んでみせた。

# 第十一話　ティアナ・ミュンヒハウゼン

話は二週間ほど遡る。
ティアナ・ミュンヒハウゼンはその時初めてハロウィン・リューヴアークと出会った。
それは風の強い双朔月の夜の事で、ティアナはその時の事をつい今し方のことのように克明に憶えていた。

その日。
ティアナは夜半に突然、近衛軍の大元帥であるサミュエル・ミドオーバの訪問を受けた。特命があるという。
すでに眠りについていたティアナは突然の特命招聘に驚いたが、それよりも先触れなしで最高司令官が自らの寝所に単身訪れたことに唯ならぬものを感じていた。
即座に正装を始めようとした白髪の若い女アルヴを、サミュエルは制した。
「なに、おまえさんにちょっと聞いて欲しい話があるだけなんじゃよ」
寝間着のままでいいと無茶をいう大元帥に対してティアナはいくつも疑問符を頭の上に掲げつつ、さすがに最低限の身支だけは整えてから、サミュエルに従った。
「その大層な剣はいらん。それに普段着がそれというのも感心せんが……まあお前さんの真面目ぶりを今更変えろと言っても詮無いことかの」
別室から着替えて出てきたティアナの姿を見てサミュエルは苦笑したが、剣は置いていけと強く命じた。
ティアナが羽織っていたのは重めの鎧の下に着る緩衝材のような服なのだが、今では実用というよりは、高級軍人であることの記号

のような服装と言えた。ティアナは普段、好んでそれを上着代わりにしていた。

「これは本当に普段着です、閣下」

「責めておるのではない。かまわんよ」

深々と礼をするティアナを手で制すると、サミュエルは右手に持った精緻な技巧が施された彫刻を頭頂部にはめ込んだ厳めしい儀仗を少し上げて合図した。ついてこい言う事である。

先導して大股で歩き出したサミュエルに遅れまいと、ティアナな慌てて後に続いた。

近衛軍の士官用宿舎は王宮に繋がる通路を隔てた離れにあり、迷路のような地下通路で王宮に繋がっている。もちろんもしもの時の為である。

さらに所々に関門があり、当番の下士官が複数で各関門に出入りする人物を確認していた。

だが、最初に訪れた関門の担当下士官の三名は、あろう事か持ち場の床に崩れるようにして気持ちよさそうな寝息をたててぐっすりと眠り込んでいた。

「これは！」

彼らを怒鳴り付けようとするティアナを、しかしサミュエルは儀仗を上げて制止した。

「わしが眠らせた。かまうでない」

そう言うとその場をさっさと通過してみせた。

「何ですと？閣下、これは一体？」

ティアナの脳裏に一瞬考えてはならないような恐ろしい想像が浮かんだが、それを見越したかのようにサミュエルが口を開いた。

「案ずるな。お前さんが考えているような恐ろしい事をわしがたくらんでいるわけではない。詳細は陛下の前で説明する。とにかく今は黙ってついて参れ」

静かで低い声であったが、重ねて質問する事をはばかられるほどの威圧感が感じられた。

ティアナは自分がシルフィードにとって重要な事柄の渦中に足を踏み入れた事をこのときようやく感じ始めた。

門番を眠らせるような事をわざわざせずとも、堂々とどこでも通行可能な近衛軍の最高位にいる人間がその行動を誰にも悟られたくないということは、どう控えめに見積もったとしてもただごとではないのは確かである。

ティアナは口をつぐんだ。関門にいる下士官がすべて眠らせられているのを見るたびに、胸の鼓動がどんどん高まるのを感じながらも。

「ものの一分で彼らは目を覚ます。おそらく自分たちが眠っていた事すら覚えておるまいて」

シルフィード王国近衛軍の大元帥は代々ルーナー、それも国家お抱えのルーナーとしての最高位にあるバード長がそれを務める。高位のルーナーであるサミュエルは、その得意のルーンを使って彼らを眠らせたのである。

ティアナは色々と想像していた。

ルーナー対策としてルーン耐性のある者を関門の宿直に当たらせるのが常であるが、その勤務の割り当てを巧妙に操作してこの夜を待ったのだろうか？そうだとするとこれは突発的な事態ではなく、事前に計画された事になる。もしくはサミュエルはそのルーン耐性のあるフェアリー兵など歯牙にかけぬほど強力なルーンが使えるのだろうか。もしそうなら突発的な緊急事態であることも考えられる。

どちらともとれた。

だが、どちらにしろティアナにとってはっきりしていることは何もなく、つまりは何のことかはまだ全くわからないままであった。

ティアナが王の私室に入ったのは、当然のことながらその時が初めてであった。もっともそこが王の寝室であることすらティアナは知らなかったのだが、少なくともその場所が普通の兵士にとって踏

み入れることなどまずありえぬであろう場所なのだということは、感覚で理解していた。

通された部屋は、国王の部屋と言うには意外にこぢんまりとした広さしかなく、ティアナは少々驚いた。簡単な執務室も兼ねているようで、部屋の隅には大降りの樫造りの机が置かれてあり、両袖に配された大型の燭台が部屋全体を明るく照らしていた。

王の私室などというと豪華な装飾で彩られた調度品や絢爛とした天井画などを想像してしまうティアナであったが、実際に足を踏み入れたカイル・カラティア、すなわちアプサラス三世の私室は広くないだけでなく、積極的に質素と言ってもいいほど実務的な丁度しかなかった。だが、掃除は行き届いており、簡素な丁度類と相まってこざっぱりして飾らない部屋ではあった。

壁は白い漆喰と太い糸杉の柱で幾何学的に構成されていて、天井も同様であった。シャンデリアなどはなく、いくつかのすっきりとした形の燭台があるのみで、将校の部屋の方がまだ豪華に感じられるほどであった。

その部屋でアプサラス三世はサミュエルとティアナを立ったままで出迎えた。

出迎えたのは王のアプサラス三世のみではなく、王女であるエルネスティーネが父親の傍らに佇んでいた。

謁見についてもそうだが、むしろティアナが疑問に感じたのはエルネスティーネの服装だった。王宮内では普段ドレスを着用している王女であるが、その夜父親の傍らに佇むエルネスティーネはまるで町の娘のような風情だった。柄のない生地で簡素な仕立ての上下で揃えており、足下は同じく飾りのない丈夫そうな旅人用のブーツという出で立ちであった。

片方の膝をついて頭を下げようとしたティアナを、アプサラス三世は止めた。

「ティアナ・ミュンヒハウゼン中尉。かしこまった挨拶は割愛しよ

う。立ちなさい」

近衛軍に所属して城内に長く勤務していたティアナだが、国王と直接言葉を交わすのは今回が初めてであった。直接会話するという栄誉に浴している事実よりもむしろティアナが感動したのは国王が自分の名前を呼んでくれた事であった。それも族名まで含めて。この場が一体何であるのかという疑問はますます深まってはいたが、そんな事はもうどうでもよく思えるほどの感激がこみ上げてきて、ティアナは自分でもわからないうちに涙ぐんでいた。

「光栄至極でございます。国王陛下」

ティアナは立ち上がると、右腕を左胸に当て、深々と頭を垂れた。膝こそ着いてはいないが、それは近衛軍における最敬礼であった。

それを見てアプサラス三世は小さくうなずいた。

「お前の話はいつもバード長から聞いているよ、ティアナ」

続けて王はティアナにそう声をかけた。

それに対してまたもや最敬礼を行いそうなティアナをサミュエルは先に目で制すと、ティアナの代理のようにアプサラス三世に深々と一礼をした。

バード長とはもちろん近衛軍大元帥、サミュエル・ミドオーバの事である。バードとは国家所属の高位ルーナーの事で王家に伝承される様々なルーンの継承者であると同時に、国王直轄の重要な軍事組織でもあった。近衛軍大元帥はその職を兼ねていたのだ。

最高位のルーナーと言われるだけあって、サミュエルには様々な逸話があった。その一つが彼が手に持っている儀仗で、その頭頂部の飾りに因んで『星を呑む獅子』と銘がつけられており、それは彼の能力に敬意を表したマーリン正教会のある賢者から贈られたものだと噂されていた。ティアナもそれについて訪ねた事があったが、曖昧に笑うだけでサミュエルはそうだとも違うとも言わなかった。

「陛下。我が秘蔵の弟子、ティアナ・ミュンヒハウゼン中尉をお連れしました。まだ若干二十二歳ではありますが、フェアリーとして

の潜在能力は目を見張る物がございます。また能力の高さも重要なながら、ご存じ通りこやつはエルネスティーネ様を心から崇拝しております。王女の旅の供として、まさにこやつほど適任な者はおりますまい」

「旅？」

不思議な単語を耳にした、とティアナは思った。

思わずサミュエルに目を向けた。

（旅だって？……旅？……なるほど）

ティアナの中で、エルネスティーネの服装がサミュエルの言葉に紐付けできた。

そう、エルネスティーネはまさに旅装束に身を包んでいたのである。

「ティアナよ。お前がシルフィード王国に忠誠厚く、エルネスティーネの教育係の一人として、親身になって尽くしてくれていることを私は知っている。バード長の推薦もあり、今回重要な任務を余の名において命じたい」

「はっ」

「エルネスティーネの供として旅に同行してもらいたい。すでに気づいているとは思うが、これは軍事的な行動ではなく、むしろ政治的な隠密行動なのだ」

「はっ」

特命の内容はが理解した。しかし、ティアナにはまだその使命の全容が皆目不明であった。一兵卒であればまだしも、部隊を預かる立場にある将校にとって自分が命じられた作戦の方向性や意図が見えないほど不安な事はない。ティアナもまた同様の不安を胸に抱いた。しかも漠然としすぎた命令だった。

「しかも今回の任務は、単身で行ってもらうことになる」

「何ですと？」

アプサラス三世の言葉に続けて説明に入ったサミュエル・ミドオ

ーバ大元帥の最初の言葉に思わずティアナは反応した。
「ご冗談を！王女様の護衛をするのに、私一人なのですか？我が国の宝であるエルネスティーネ王女の身に何かあったらいかがなさいます？」
ティアナのその反応に、国王とサミュエルは顔を見合わせてニヤリと笑った。
「ふぉっふぉっふぉ。予想通りの反応よな、ティアナ」
「笑い事ではございません、大元帥閣下」
「近衛軍からはお前一人だけじゃが、旅の共は一人ではない、ティアナよ。ただし、凄腕の剣士やバードという訳でもないがな。まずは紹介しておこう」
そう言うとサミュエルは両手を合わせて、パンパンと二度音をたてた。
それが合図であったのだろう。部屋の奥の扉が音もなく開くと、二つの影が現れた。一人は長身の男で、金色の長い巻き毛をもつ三十代半ばといった端正な顔付きをしたアルヴだった。髭を蓄えて、高い鼻の上には丸い眼鏡がのっており、眼鏡の向こうの瞳は緑色であった。出で立ちはまさに旅人で、つばの広い帽子のくたびれ具合が、エルネスティーネのようなにわか作りではないことを示していた。
そしてもう一人は……。
「なんと！」
ティアナは二人の姿を認めて、思わず声を上げた。
「まさか、大元帥閣下。護衛というのはこの子供も、なのでしょうか？」
国王が先に口を開いた。
「紹介しよう。表向きには顔も名も出ることはないが、我が主治医ハロウィン・リューヴアーク殿と、その助手のルネ・ルー殿だ。二

人ともエルネスティーネの頼もしい道連れとなろう」
「されど」
「道中、医者は必要じゃよ。ふぉっふぉっふぉ」
「いやあ、エリーはすこぶる付きに丈夫で驚くほど健康だから、実際問題として医者はいらないかもしれないけどねえ。はっはっは。でも、ケガの方は心配だからね」
サミュエルの言葉を継いで軽口を叩いたのは、国王にして自ら主治医と言わしめたその旅装束の男であった。その言葉と態度が、ティアナにとって第一印象の悪さとなって、後々まで尾を引くことになった。

「まさか、本当にこれだけの人員で王女を護衛できるとお思いなのですか？大元帥閣下」
ティアナは殆ど怒りで声を震わせていた。
「隠密じゃ。あまり目立つような大部隊を組むわけにも行くまい？」
「護衛部隊を別働隊として組織し、守りを厚くする事くらいは可能でありましょう？」
「だーめだめ。目立つよ、そんなの。それじゃまるで、その部隊を見た人間に『近くに重要人物がいますよ』と宣伝しているようなものじゃないか」
ハロウィンがおやおや、と窘めるようにティアナに言った。
もちろん、ティアナはますます頭に来た。
「その道に長けた部隊を組織すればいいだけのこと」
「でも、相手が同じようにその道に長けてたら意味がないでしょ？」
「それは」
くってかかったては見たものの、そう切り替えされてティアナは言葉に詰まった。
「そういう部隊が入り込まないかどうかを各国の要衝ではチェックしてるでしょ？圧倒的にその部隊が優れていると決まってるならまだしも、相手がわからないのにそれは無理」

「どこに行こうと言うのだ」
「行く先はともかく少人数でまったく軍の関係者に見えない事が隠密行動には重要なんだよ」
「だが、そもそもいざとなった時にあなた達のような医者と子供に姫を守れるのですか？」
「おやあ？あなたはものすごく強い兵士だとうかがったのですが？」
「私一人ではどうにもできない事があるっ」
「じゃあ聞くけど、何人いたらどうにかできるって言うんだい？向こうが五人だったら六人いればいいのかな？相手が百人だったらこっちは百一人いればいいって事？」
「う」
「で、もう一度聞くが相手の人数って何人さ？」
「そ、それは……こっちが聞きたい事だ」

黙って暫く二人のやりとりを見守っていたサミュエル・ミドオーバ近衛軍大元帥がようやく割って入った。
「ティアナよ。この旅はすなわち、王女の正体が敵対する者にばれた時点で終わりだと思いなさい」
「なんですと？」
「もちろん、何かあった時の事を全く考えていないということではない。ハロウィン殿は医者だがただの医者ではなく呪医じゃ。そして助手のルネは、一対一で戦えばおそらくお前さんより遙かに強いよ。いや、闘いにすらなるまい」

「まさか」
ティアナはルネをみやった。
目が合うと、腰まである長く真っ赤な巻き毛をした丸顔の小さなデュナン、ルネ・ルーはティアナにニコっと笑って見せた。それはどう見ても普通の十一，二歳の子供の屈託のない仕草だった。
ティアナはサミュエルをにらみ付けた。

「お戯れを」
「ティアナ」
静かな声をかけたのはアプサラス三世だった。
「お前には隠さず言っておこう。ルネ・ルーは水の精霊の力を得たフェアリーだ」
「はっ」
「そして、ただのフェアリーではない。……この意味がわかるか？」
「いえ。ま、まさか？」
ティアナは息を呑んだ。続く言葉がすぐに出なかったのだ。
アプサラス三世はうなずいた。
「エルネスティーネがそうであるようにファランドールに千年に一度、たった四人現れる特別なフェアリーの一人なのだよ」
ティアナが続けて何かを言おうとしたところにハロウィンがそれを遮るように続けた。
「はっきり言おう。ルネは水のエレメンタルさ。そして、これはファランドール広しといえどもほとんど誰も知らない内緒の事だからね。この意味は君でもわかるよね？」
ティアナは「君でも」という言い方にカチンと来たが、口を開く事は自重した。代わりにハロウィンを睨み据えた。
そんなティアナをなだめるように、落ち着いた声色でサミュエルが補足した。
「そして未だ力の卵たるエルネスティーネと違い、この子は既に覚醒したエレメンタルなんじゃよ」
この事実を聞かされたティアナはおぼろげながらようやくここで一体何が始まろうとしているのかを理解し始めた。
「行く先は、もしや？」
ティアナは、我が師を仰いだ。
サミュエルは弟子にうなずいてみせた。
「左様。お前達がたどり着くべきはおそらく「マーリンの座」じゃ。

しかし、それはあくまでも最終目的地であって、真っ直ぐそこへ向かうとは限らん。お前達はまず他のエレメンタルを探す旅をすることになる。そして彼らとの同盟、それこそがが使命となる」

ティアナは予想していた答えが返ってきたにもかかわらず、絶句した。

「マーリンの座」

それはファランドールの歴史物語のごくはじめに登場する伝説の地であった。有史以来、訪れた者はほとんどないという。

そこは昔も今も、マーリン正教会の本山が置かれている場所の、もっとも奥にあると伝えられてはいるが、誰の目にも触れる事はないという。故に誰もその存在を証明できる者はいないのだ。

大いなる力を持つ「賢者」と呼ばれる者達に守られているというその地に足を踏み入れることができる者は大神マーリンに許された者だけだという。

だが、伝説の「許された者」が、今こうして目の前に二人もいる事実にティアナは目まいがした。

「私にそのような大役が務まりましょうか？二人ものエレメンタルさまの護衛など」

ここでようやくエルネスティーネが口を開いた。

「勘違いしないで、ティアナ」

それはティアナが知っているいつもの王女エルネスティーネの声だった。いや、ティアナはその声にむしろいつもよりも張りを感じた。

「エリー姫」

そう言うとティアナはエルネスティーネを見やった。

「あなたは私の護衛ではありません。旅の共、つまり仲間なのですよ。私もあなたも同じ仲間。この王宮を出たところから、私は王女エルネスティーネではなく、エリー姫でもないのです。今日からあ

なたの仲間の……そうね、エリーじゃなくてネスティと呼んでちょうだいな。そしてあなたも、ティアナ・ミュンヒハウゼン中尉ではなく、ただのティアナになるのですよ」

「そう言うわけにはまいりません、我が姫」

「いや、ティアナよ。エリーの言う通りだ。いや、ネスティか。なかなかいい名前ではないか」

アプサラス三世がティアナに諭すように言った。

（いや、そうじゃない）

ティアナは困惑してサミュエルを見やった。

シルフィードの王はティアナのその様子を優しいまなざしで見つめ、サミュエルに微笑んでみせた。

「ミュンヒハウゼン中尉というのはまさにウワサ通りの堅物ですな」

サミュエルは軽く一礼をした。

「そこが玉に瑕でしてな。融通が利かないと申しますか」

「あいわかった。ならばこうしようではないか」

アプサラス三世は真顔になってティアナの方に向くと、改まった声でティアナに語りかけた。

「ティアナ・ミュンヒハウゼン中尉」

「はっ」

「余の勅命である。二人のエレメンタルの護衛ではなく仲間として、マーリンの座」へと赴く旅に出てもらう。これは我が国家のみならず、アルヴ族の存亡、ひいてはファランドール全体に関わる最重要な作戦であり、失敗は許されない。道中、エルネスティーネもルネもエレメンタルであることは隠さねばならない。特にエルネスティーネは現在唯一、世界中にあまねく名の知られたエレメンタルである。王宮を出ることすなわち、多くの危険に身をさらすことに他ならぬ」

「はっ」

「故に、ただの民間人として旅をせねばならぬ。わかるな、ティア

ナ」
「は」
「ただの民間人に姫や中尉がいてはおかしかろう？そうではないか？ティアナ」
「ぎ、御意」
「突然夜中に招集したのも、すべてはこれ隠密行動の為。お前に頼むことはずいぶん前に決まっていたのだ。出発の準備は整っておる。双朔月の今夜、バード庁の房には月読達も居らぬ。すなわち闇に紛れて王宮を出でよ」
「はっ」
　国王アプサラス三世の言葉に対してティアナはただかしこまるだけであった。そんなティアナに王女が優しい声を掛けた。
「ティアナ、あなたは私たちを守ろうという重い責任を感じる必要はないのですよ。何かあったときには、仲間がみんなで力を合わせて乗り切ればいいだけの事。あなたができない事をルネはできる。きっと私にもできることがある。私たちにできないことがあなたにできるのと同じ事。それからハロウ……ハロウィン先生にも先生にしかできないことがおありで、それでみんなが助け合って旅を続けられるのではないかしら？」
「左様。まさに、護衛ではなく余の娘の旅の仲間として、お前を選んだのだよ、ティアナ。エルネスティーネのたっての頼みでもあり、バード長の推薦でもある。しかるに余も心から信頼を置いてお前にこの役を託したいと思う。我が妻がもし健在であれば同様に今夜この場所でお前の手を取り精霊の言葉でお前を祝福するであろう」
　娘の後を継いで、国王は今度は優しい声でティアナに声をかけた。
「余の一生涯の頼みだ。引き受けてはもらえぬかな？」
「陛下……」
「単なる護衛であれば軍の中から剣の腕前がたつ者を、そしてバード達の中でルーンの達人を選べば良かろう。だがそれは我が娘の共と呼べようか？だから余はお前を選んだ。その意味がわかるな？」

「――」

「我が娘が心から信じている人間こそがその娘の仲間となりうると確信しておるからじゃよ、エッダのティアナ・ミュンヒハウゼン殿」

アプサラス三世の言葉にティアナはこれ以上不可能な程、深く跪いた。

本人にも思いがけぬ事であったが、国王の言葉に思わず涙が溢れ、その一筋がほほを伝った。

国王が勅命という理由付けをしてまで、自分を信頼してくれているという思いが素直にティアナの心を打ったのだ。アプサラス三世の声はそれほど優しいものだったし、サミュエルが誇らしげに弟子の自分を見るその目にも曇りがなかった。もとより、シルフィード王国に命を捧げた身である。ティアナは深く、今一度深く頭を垂れた。

「身に余る光栄。この命にかえても」

王はティアナに優しくうなずいた。

「顔を上げなさい。それからその挨拶はもう二度としてはならぬ。お前は今から軍人ではないのだ」

「さてさて時間がない。名残惜しいが控えの間に用意してあるものに着替えて出発してもらおう。旅の装備も用意してある。これからの予定や大まかな事情は道中、ハロウィン殿に尋ねるがいい。とりあえずは急ぎサラマンダの北方の町、ランダールに行ってもらう事になる」

「ランダール……またなぜ？」

エルネスティーネの旅の装束を見ながら、あの姿で持てる武器はせいぜいマントで隠れる短剣程度であろうと計算していたティアナは、突然思ってもいなかったサラマンダの辺境の町の名を告げられて意外そうな顔を近衛隊大元帥に向けた。

「そこに、第三のエレメンタルさまが？」

サミュエルは首を横に振った。

「後の二人のエレメンタルの情報はまだない。そこでお前さんの不安を一つだけ解消してやろうというのじゃ」
「不安の、解消でございますか？」
「左様。その町でちょっと心強い味方と合流してもらう手筈になっておるのじゃ」
「お味方？」
「お前達を出迎えるのはユグセル公爵の旅のご一行じゃ」
「ユグセル公爵？」
ティアナはその名に覚えがあった。もっとも、よい印象で記憶していたわけではなかった。
「まさか、ル・キリアが護衛につくのですか？」
「ル・キリア一行と言っても、お前達に合流するのは公爵、いやユグセル海軍中将以下、四名の小隊じゃ。頭数としては安心するほどのものにはならぬが、戦力的にはお前の気苦労は軽減されるじゃろう。さっきも言ったようにお前達は民間の商人じゃ。あまり大所帯にするわけにはいかんのでな」
ユグセル中将が護衛につくと聞き、ぎりぎりまで高まっていたティアナの緊張が少し解けた。ただ、ル・キリアは近衛軍の仲間うちでも「卑怯な殺人集団」と忌み語と供に呼ばれる部隊である。王宮内が主な仕事場であるティアナはユグセル中将と直接対面したことはない。従って巷間溢れる噂だけが彼女がアプリリアージェ・ユグセルという人間をを形成する要素になっていた。つまり、いい印象は持っていなかった。
「ル・キリア！」
軍の通常司令体系には属さぬ遊撃部隊で国王直轄。実質的には王国軍大元帥ガルフ・キャンタビレイの私兵と呼ばれる一団の名である。
「目的のためには一つの村ごと、たとえそれが非戦闘員の女子供とて容赦なく皆殺しにする」とまで噂されている。ティアナにしてみれば、まさにシルフィード王国の暗部ともいえる存在だった。

「ランダールまでは道もいいし、出来るだけ目立たないように馬車だけでいくつもりだから時間はかかるけど、寝てるだけの気楽な旅さ」

軽い調子でハロウィン・リューヴアークがティアナに声をかけた。

「よろしく頼むよ、ミュンヒハウゼンさん」

「ティアナでいい。リューヴアーク先生」

大事の前というのに妙に軽くて気が抜けたような……つまりは軽薄に見えるハロウィン・リューヴアークにも、あまりいい印象は持たなかったが、ティアナは努めて平静を装う事にした。

「じゃあ、私の事もハロウと呼んでくれればいいよ。あと、『先生』はいらないさ。そこまでバカじゃないしね。」

ハロウィンはティアナにウィンクしてみせた。ティアナはそれを見てさらにムッとしたが、目を逸らしてその気持ちを悟られないようにした。

なぜこんな男が非公式な主治医として国王や近衛軍大元帥にしてバードの長である見識ある人物に全幅の信頼を置かれているのかが全く理解できなかった。

「そうそう、エリー……じゃなかった、ネスティ。出発前に念のために尋ねておくよ」

ハロウィンは少しトーンを落としてエルネスティーネに声をかけた。

「はい」

張りのある明朗な声でエルネスティーネはすかさず答えた。

エルネスティーネの声は大きくはなかったが、短い明瞭な返事はまっすぐに全員の心に響いた。ティアナはまるで青空のような心地よい声だと思った。王宮ではあまり聞けないエルネスティーネの明るい声である。

「お前はこれから始まる旅における自分の使命を本当に理解してい

るんだね？」
　先ほどまでとは打ってかわった厳しい声がハロウィンから発せられた。
　エルネスティーネは少しだけ目を伏せてうなずいた。
「私はこの時のために存在しておりました。むろん、とうに覚悟は出来ています」
「そうか、わかった。それなら、その件についてはもう何も言わない」

　エルネスティーネに対するこのハロウィンの言葉を聞き取った瞬間、ティアナは生来の勝ち気な性格が全面に出た。もちろん、それはエルネスティーネへの忠誠心からのものであった。
「こやつ、たかが主治医の分際で我がシルフィード王国の姫君に向かってお前呼ばわりとは！」
「おやめなさい、ティアナ」
　エルネスティーネはティアナの反応を予期していたような落ち着いた声で供を制した。
「ですが、我が姫」
「先ほど言ったとおり、本日いまより我らは姫とその従者ではありませぬ。あなたも私もただの旅の仲間という立場なのです」
「とはいえ、こやつからは姫を敬い、守ろうとする気持ちが感じられません。だいたい先ほどからヘラヘラ軽薄な物言い。大元帥閣下、なぜよりによってこのような不遜な者を護衛に選ばれたのですか？」
　そう言うと、ティアナは周りをはばからず、敵意をむき出しにした目をハロウィンに向けた。しかし、ハロウィンは困ったような顔で両手を広げてみせただけだった。
「口がすぎます、ティアナ」
　エルネスティーネは今度は少し強い語調でそう言った。
　サミュエルはそんなエルネスティーネを目で制すと、右手に持っていた杖を目の前に移し、両手で支えるようにしてティアナに対峙

した。
「ティアナよ」
「これが今考えられる最良の人選なのだよ」
「しかし」
「リューヴアーク先生の持っている知識はおそらくはファランドールでも屈指といえるのじゃ。そこら辺の学者や軍師風情では束になっても敵わぬわい。訳あって一つところに長くとどまらずにファランドール各地をふらふらしている風来坊故、おぬしの目からすれば多少浮世離れしている様子があるのかも知れんが、リューヴアークの家系は、実は代々カラティア家の私的な主治医であり、相談役でもある。それに、エルネスティーネを王妃さまのお腹から取り上げたのはリューヴアーク先生ご自身なのだよ、ティアナ」
「とはいえ」
「今回の旅では、エルネスティーネは姫ではなく本当に町の娘として扱われることになる。おそらくお主達の中で一番覚悟がいるのがエルネスティーネじゃろう。その覚悟を出発前に尋ねて何が悪い？」
ティアナはまだ何か言いたげであったが、確かにその通りで、激高したのは個人的にハロウィンが気に入らなかったからで、必要以上に感情が高ぶったというのは真実であった。ある意味、図星を付かれてティアナは声がなかった。

「わっはっは」
そんなティアナの激高ぶりを見て、アプサラス三世は満足そうに声を出して笑った。
「バード長。本当に心根のいい弟子を持っておられる」
サミュエル・ミドオーバは両手に持っていた杖を握り締め直すと、少し掲げて高らかな笑い声を上げた。それはまんざらではない、という意味を表しているのはティアナにはよくわかった。
「フォッホッホ。何しろ今見たとおりでございます。心はノーム山の溶岩より熱いと申し上げても過言ではありますまい。我が弟子で

は過去最高のきかん坊ですが、まあ、リューヴアーク先生とは良いコンビになるでしょうな」

「まさに。わっはっは」

アプサラス三世も楽しそうに声を上げて笑った。

「御前でのご無礼、誠に申し訳ございません」

ティアナ・ミュンヒハウゼンは国王と近衛軍大元帥の屈託なく笑う声を不思議な思いで聞きながら、深く頭を下げて再びわびた。

「なに、わしに謝ることはない。ただ、師としてこれだけはくれぐれも言っておきたい。ハロウィン・リューヴアークという人間と仲良くしろなどということは敢えて求めん。しかしな、軽薄とお主が感じているリューヴアーク先生の行動にはいつも必ず意味があると知れ。そしてリューヴアーク先生の行動は、お前さんの理解を超越した真実だと心に銘記せよ。既に覚醒した水のエレメンタルであるルネ・ルーをずっと秘匿しつつ守り育ててきたお方じゃ、信じる事じゃ。もっとも、まあ、そのあたりは付き合ってみればおいおい解ろう。あとはお前さんが与えられた任務をお前さんらしく遂行してくれればよい。いや、むしろ旅を楽しんで欲しい。長い長い旅になるじゃろうからの。これがワシからお前への餞の言葉じゃ」

「委細承知いたしました」

そう答えたティアナだが、この時ふとある疑問が湧いた。

「恐れながら一つだけお尋ねしたい事がございます」

「シルフィードの宝石、王女エルネスティーネ様がエッダから……いやシルフィードから居なくなると城のものだけでなく国民は動揺いたしませぬか？またお忍びとはいえ、エレメンタルが居なくなると言うことはすなわち何かの行動を起こしたと言うことはすぐに諸外国や教会筋には知れてしまうのではございませぬか？」

サミュエルはティアナの質問を聞いてニヤリと笑った。

ハロウィンとルネも顔を見合わせてにっこりとしている。

それはまるで、ティアナのその質問を待ちかまえていたかのよう

な雰囲気であった。
ティアナの戸惑う表情を見てクスクスとエルネスティーネが笑った。
（これは、なんだか雰囲気がおかしい）
ティアナは動悸が速くなるのを感じた。

「紹介が遅れてすまんな、ティアナ」
だが、ティアナの不安は長くは続かなかった。
アプサラス三世が微笑みながらティアナに優しくそう声をかけた。
そして続いて控えの間の方に向かってこう呼びかけたのだ。
「エルネスティーネ。入りなさい」
「え？」

「はい。父上」
控えの間から、他ならぬエルネスティーネの声がして、金色の長い髪を揺らしながら小柄なアルヴィンの少女が王の寝所へ入ってきた。その姿を一目見たティアナは絶句した。
驚きの連続と言える夜だったが、その中でもティアナが一番驚いた瞬間であった。
「う……」
ティアナのその反応を満足そうに見ながらサミュエルは声を上げて笑った。
「フォッフォッフォ。そっくりであろう？いや、むしろ本物のエルネスティーネより器量に関しては少し上かもしれんがな」
「これは？」
旅姿のエルネスティーネもクスクス笑っている。その笑っているエルネスティーネを見て、新しく入ってきたエルネスティーネも同様にクスクスと笑った。
「ねえ、ティアナ。私はだあれ？」
そこに立っていたのは、寝間着姿のエルネスティーネ・カラティ

アその人だった。だが、旅装束のエルネスティーネも間違いなくエルネスティーネであった。

「変わり身じゃ、ティアナ」

変わり身とは替え玉の事だ。だがここまで完璧にそっくりな変わり身が居るとは……。

「ティアナ。あなたは今までずっと二人の相手をしてくれていたのよ」

寝間着姿のティアナが微笑みながら声をかけた。ティアナにはその少女はいつものエルネスティーネにしか見えなかった。

「私の本当の名前はイース。イース・バックハウスと申します。ですがエルネスティーネさまが事をなし終えてお戻りになるまでこの名前を二度と使うことはないでしょう。故に……我が名はカラティア朝シルフィード王国国王アプサラス三世が娘、エルネスティーネ。隣にいる娘はエッダのネスティじゃ」

「はっ」

ティアナは短時間で合点していた。

そう、全ては本当に今日、この旅立ちの為に長い時間をかけて周到に用意されていたのだ。ティアナはこの日のために用意された変わり身と本物の区別さえ付かずに今まで仕えていた。つまり、それほどまでに完璧な変わり身だった。

バックハウス家の事はティアナの知識にあった。

カラティア家にごく近い血族で、確かカラティア朝を興した初代国王の姉オスカの血筋であるとか。シルフィード大陸南方の領地を治めていた侯爵家だったはずであった。

過去形なのはバックハウス家は少し前に家系が途絶えたと聞いていたからであった。

「普段から私たちは頻繁に入れ替わっていたのよ。日替わりと言っていいくらい。午前と午後で変わった事もあるわ。でも全く気づか

なかったでしょう、ティアナ？」
「恥ずかしながら」
「ムリも無かろう。背格好だけでなく、顔も声もそっくりじゃ。さらにお互いにお互いのちょっとした癖を真似る訓練も日々こなしておる。二人をこのように並べると……違いが多少わかるかもしれんが、その日の調子や機嫌によって表情など多少変わるものじゃ。この程度の違いがわかる人間はこの世におるまいよ」
「かしこまるな、余とてもはや見分けはつかんのじゃ」
サミュエルの説明の後にアプサラス三世もそう言って助け船を出した。
イースはいたずらっぽい表情を浮かべると、さっそくエルネスティーネの横に並んで見せた。比べると確かにイースの方がほんの少しだけ大人っぽい表情をしているように見える。だが瞳の色もその濃さも、肌の色も髪の色つやまで殆ど変わることがなかった。普段は見えない顎の裏にある小さなほくろまで全く同じだった。
「もっとも、多少のルーンは使っとるがの」
ほくろを見つめるティアナに、サミュエルはそう言って謎解きをした。
「すべて、了解いたしました」
その言葉を聞いて、アプサラス三世はうなずいた。
「エリー。いや、ネスティ。我が大切な娘よ。これは余からの餞じゃ」
アプサラス三世はそう言うと自らの懐から懐剣を二振り取りだし、そのうちの小さい方をエルネスティーネに手渡した。
「陛下、それは」
サミュエルは少しとがめるような声をかけた。予定にはない行動だったのだろう。
「案ずるな。桜花のクレストなどは入れておらん。ただ、エリーがいつも身につけるものだから出来るだけ軽くする為にリリスを使い、特別に薄く強靱にと注文を出しておったのだが、なかなか仕上がら

ずにやききもきしておった。間のいいことに今日ようやく届いたというわけだ」

「父上……」

桜花はカラティア家の紋章である。そのクレストを懐剣に刻むと言うことはすなわちそれをみれば出自がわかる可能性を示していた。貴族の持つ懐剣は多くの場合、クレストを柄に刻む。サミュエルはそれを懸念してとがめて見せたのである。もちろんアプサラス三世は承知しており、クレストのない実用本位の懐剣を仕立てさせたのであろう。

エルネスティーネは懐剣を受け取ると父親に深々と頭を下げた。

「お心遣いに心より感謝いたします」

「うむ。達者でな」

娘にそう声をかけたアプサラス三世は、今度はティアナに顔を向けた。

「それから同じく、ティアナにもこれを授けよう」

跪き、両手で懐剣を受け取ったティアナは、その柄を見ると怪訝な顔をアプサラス三世に向けた。

「これは？」

そこには見慣れないクレストが刻まれていた。

「星……これは、桜花星でございますね」

「いかにも。そしてそれはティアナ、お前に授けるものだ」

「私にクレストを？」

「法がある故、爵位を授ける訳にはいかぬ。だが、余が考案したクレストをお前に贈る事を制限した法はない。我が娘はクレストを持てぬが、お前はそのクレストを胸を張って掲げよ。そして胸に刻むがよい。『カラティア家の友の徴として国王に下賜されたものだ』と」

ティアナは感激のあまり胸がつかえて、もう何も言葉が出なかった。

クレストは本来男爵家以上が掲げられるもの。ただ例外として公爵や伯爵が功労のあった者に名誉の徴として独自のクレストを与え、本人にのみそれを使用する許可を与えることがあった。アプサラス三世はそれに倣ってティアナにクレストを「贈った」のだ。

だが、国王自らがそれを行うのは極めて異例である。ましてや与えたクレストが、王家の紋章である「桜花」と同じ意匠だと言うことがティアナの心をさらに大きく揺さぶったのだ。

桜花をクレストに用いる事はもちろん、商品の意匠などに使用することもシルフィードでは法律で厳しく禁じられていた。桜花はカラティア家のみが用いる意匠なのだ。だが、星座なら何の問題もない。アプサラス三世は一つの中心星と五つの花弁星からなる桜花星を桜花、すなわちエルネスティーネの友として選んだのである。

ティアナは心の中で胸にあふれる感謝を表す言葉をあれこれ考えては消していた。そしてそのどれもが相応しくないと思い、どれもが足りないと感じていた。

そして、こみ上げる熱い涙を頬に感じながら、しばしの沈黙の後にティアナはただ一つの言葉を口にした。

「ありがとうございます。国王陛下」

アプサラス三世は満足そうに大きくうなずくと、良く響く声で部屋にいる者全員に告げた。

「名残惜しいがそろそろ時間だ。お前達の旅に全ての精霊の祝福があらんことを」

ティアナはもう一度、今度は深く普通の礼をした。

そんなティアナの横顔を、エルネスティーネとイースは、そっくりの優しいまなざしでじっと見つめ続けていた。

# 第十二話　ハロウィン・リューヴアーク

ハロウィン・リューヴアークは呪医という触れ込みになっていた。
それは偽りではなく、彼は本当に呪医なのだが、乗り合いの馬車に揺られる彼の連れ達の顔ぶれは旅医者の道連れとしてはなかなかに異色と言えた。

腰まである赤い巻き毛が印象的な空色の瞳を持つデュナンの幼い少女は地味な旅装束にもかかわらず、その髪の色でひときわ目立っていたし、その向かいで緑色の瞳を輝かせながら背筋をピンと伸ばして車窓に流れる風景を物珍しそうに眺めているのは、いわゆる「適齢期」前のアルヴィンの少女。

そのアルヴィンの少女よりも少し落ち着いた雰囲気で隣に座っているのは肩に掛かる栗色の癖毛のデュナンの娘で、その物憂げな鳶色の瞳が特徴的だった。

その少女の斜め前、丁度ハロウィンの向かいに座っているのはアルヴの血をしっかりと受け継いでいる事がわかる長身で切れ長の瞳を持つ精悍な成人の女で、珍しい真っ白な髪が印象的だった。

呪医のハロウィン・リューヴアークの見てくれはといえばいわゆるアルヴスパイアと思われる重厚そうに見えてその実、羽のように軽い素材でできた黒いフード付きの長いマントを羽織り、癖のある長髪と豊かな髭は金髪で、その瞳は深い緑色といったアルヴらしい容貌だった。高い鼻に引っかけた小さな丸い眼鏡も特徴と言えた。
年齢は二十代半ばと言われれば納得できなくもないが、見る角度によれば四十代にも見えた。もっとも成人アルヴの年齢は外観ではわかりにくい。この細い顎をもつ端正な顔立ちの呪医の実年齢はそういうわけで不明であった。

シルフィード王国の首都エッダからやって来た、この五人組の移動は、陸路に関しては殆ど馬車によって行われていたようだった。
ようやくたどりついた城塞の町ランダールで街道馬車から降りた赤毛のデュナンの少女は両手を空に向けると思いっきり伸びをした。

「うーん……気持ちええワ！ずっーと馬車でじっとしてたからラ、体が固まるかと思うタわ」
それを見た長い金髪のアルヴィンの少女もそれを真似た。
「うーーん……。あら、本当に気持ちがいいですわ」
「あ、じゃあね、じゃあね、ネスティにこれも教えてあげるワ。気持ちええのヨ」
赤毛の少女は左腕をまっすぐ前方に突き出すとぐっと空気を握りしめ、その左腕を右腕で下側から肘あたりを抱き込むようにゆっくり手前に引っ張った。
「これを両方の腕でやるんヨ」
「こうやって」
「そうそう、こうやって」
「あら、ちょっと痛い感じがまた気持ちいいですわ。ルネは色々な事を知っているのですね。こう言うのを」
「こう言うのヲ？」
「『板の上でも全然』、と言うのですね」
「ーー『石』ヤって」
「あら、そうですの？ルネは物知りですねえ」
「えへへ。まあ、これもマーリンの思し召しやヨ」

ルネと呼ばれた独特の抑揚で喋る赤毛の少女は笑顔のネスティに褒められると、少し照れながらハロウィンの方を見上げた。ハロウィンは一行の簡単な筋体操の様子をニコニコとした顔で見守っていたが、少し離れて直立している白髪の女アルヴを認めると声をかけた。

「ティアナ、一度聞こうと思っていたのだが」
「何だ」
ティアナはさも面倒だという事を精一杯声色に含めて答えてみせた。
「ネスティがごくたまに……いや、時々用いる表現上の誤謬についてなんだが」
ハロウィンのその言葉を聞くと、白髪のアルヴは眉間に皺を寄せてその美しい顔を歪ませた。
「人には向き不向きというものがある」
「そりゃあ、そうだね」
「全くダメだったのが本物の姫の方だったとは。結構まともな時もあると思っていたが、今思えばそちらはイース様だったと言う事か」
「今のは独り言？」
「そうだ。だから突っ込むな」

ハロウィンはとりつく島もないティアナの態度に苦笑した。出発してから一貫して変わらないところが律儀でもあるな、と思うとさらに笑いがこみ上げてきた。しかし、それを悟られないように会話を続行した。
「君も体を伸ばしておいた方がいいよ、ティアナ。さすがの君も一晩中馬車に揺られるとこたえるだろ？あの馬車は私達アルヴにはちょっと狭すぎたようだしね」
「このような事できさまに指示されるいわれはない」
ティアナはそう言うと白い前髪を手で軽くハネ上げた。
「それよりゆっくり座れるソファのある店で食事にしよう。エリー……いえ、ネスティ様にはあの詰め物のない木の椅子は酷すぎだ」
「あら、ティアナ。私は平気よ。もう一日くらいなら乗っていられることよ。ほら、『メシに布団は掛けられない』って言うでしょう」
ネスティはティアナを見てにっこりと笑うと小さく首をかしげてそう言った。

「リューヴアーク殿」
ティアナは声を殺してハロウィンに囁いた。
「恥を忍んで訪ねるが、ネスティ様はいったい何の事を？」
ハロウィンは頭をかきながらすまなそうに答えた。
「たぶん、『石に布団は掛けられぬ』って言いたいんだろうけど、そもそもこの状況でそれを使う意味が私にはまったくわからない。すまん」
「いや、いい」
「と言うか、これは君のせいじゃないのか？いったいネスティに何を渡したんだい？」
「か、格言・諺パズルだ」
「ああ、あの一つの諺を三つくらいにバラした木片がしこたまあって、その中から正しい言葉を選んで諺を完成させるという、アレかい？」
「うむ」
「で、それがなぜこんな事に？」
「そのパズルをお渡しした後、すぐに私は特命を受けてしまったのだ。別の仕事で長期ネスティ様にお会いできなかった」
「ふむ」
「久しぶりにお会いしてみたら、すでにあの状態だった」
「修正は？」
「むろん試みた。しかし」
ティアナはそこで言葉を詰まらせ、苦しそうな顔でうつむいた。
「わ、わかった。もういいよ。確かネスティはかなり思い込みの激しい性格だったね。しかも思い込んだら一筋だ」
「ーー」
ティアナとハロウィンは奇しくも同時に小さなため息をついた。
ネスティはというと、もちろんそんな二人のひそひそ声のやりと

りなどどこ吹く風だった。
「それから、やっとネスティと呼んでくれるようになったというのに『様』を付けてしまうと意味がありませんわ。『様』は無しでって決めたでしょう？」
「そうそう、ネスティはただのネスティやヨ、ティアナ」
ルネは長身のティアナのそばに寄ってにっこり笑うと、ティアナのマントを引っ張った。
「ホラホラ、ティアナ。またココに皺が寄ってルで」
ルネは自分の眉間を指さして見せた。
「な……」
ティアナ・ミュンヒハウゼンはムッとした顔をすると、赤毛の巻き毛がかわいらしい小さいルネ・ルーを見下ろした。だが、そのそばかすだらけの屈託のない笑顔を見ると思わず顔が和らいだ。ルネの笑顔はティアナにはなぜか慈愛に満ちた母親の笑顔のように見えるのだ。それは心に優しくしみてくる気がした。
だが、一応ルネにも文句を言っておくことにした。もちろん、その声色はハロウィンに対するものとはあからさまに違っていた。
「とにかく、ここは朝は冷える。自覚がなくとも皆が疲れているのは確かだ。だから早く栄養のある暖かい食事をとることが必要だ」
「ティアナの言うことは正しいね。食事場所を探しながら、そろそろ移動しようか。歩くと暖まるしね」
「ここは、サクランボが特産なんヤで、シェリル」
「へえ。じゃあサクランボの砂糖漬けを使ったタルトとかいいかもしれないわね」
「私はサクランボのパイがエエなあ」
「いいわね。でも、やっぱりサクランボの砂糖漬けをそのまま暴れ食いが豪華だと思うわ」
「あ、私もサクランボの砂糖漬けは大好きですわ。でも、いつもそうたくさんは食べさせてもらえませんの」
「ふふ。楽しみヤねえ」

鳶色の瞳をした栗色の癖毛の少女はルネにシェリルと呼ばれた。
少女組では一番年長にあたるシェリルは、まだ幼いルネの手を引くと歩き出した。ネスティがその隣についた。
三人はサクランボの砂糖漬けの話題で盛り上がりながら、大人組を先導する格好で町の中心部に向かって歩き出した。
シェリル達の会話を聞いたティアナは肩を落としてボソっと独り言のようにつぶやいた。
「むう。朝っぱらからサクランボの砂糖漬けなのか？」
「おや、ティアナはサクランボは嫌いかい？」
「いや、嫌いではない。だが、朝はライ麦のパンにソーセージと卵の方がありがたいな。それに、そうだな。熱いコーヒーは欠かせない。あ、いや、そうじゃなくて私は……」
「ははは。心配ないさ。多分朝っぱらからメニューにサクランボタルトや砂糖漬けの暴れ食いだけって店はないだろうさ」
「何だと？ではサクランボの砂糖漬けの暴れ食いというメニューはあるのか？さすが名産地だな」
驚いたティアナにハロウィンは顔の前に手を持ってきて左右に振った。
「ないない」
「なん……」
「だいたい、もうサクランボの季節じゃないよ。春先のこのあたりはサクランボの花が満開でそりゃあ見事なもんだが。秋も深くなって、今はリンゴが旬だろうね。そっちもこの辺の名産品なんだよ？」
ティアナはバツが悪そうに軽く赤面すると、ハロウィンをにらみ付けた。
「そんなことはわかっている。そもそも人の独り言に突っ込むなと言っている」
「いや、ティアナの独り言はどうにも突っ込みやすいもんで」
「なんだと！」

「どうも」
その剣幕にハロウィンは肩を竦めると、二人のやりとりを聞いていたネスティに目配せして苦笑した。ネスティはその様子を見て楽しそうに小さく声を出して笑った。

失礼な男だとは思いつつも、ティアナはネスティの笑い声を聞くと幸せな気分になった。
彼女がネスティの無邪気な笑顔を見るのは本当に久しぶりだった。しかも、旅に出てからこっち、ネスティはいい笑顔でずっと笑っているような気がしていた。
まるで……。
（王宮にいる時とはまるで別人のようだ……）
そう、健康で元気のいい町の娘のような普通に楽しそうな笑顔と屈託のない笑い声。
自らの、そしてネスティの持つ使命の重さは重々承知しながらも、金髪の小さなアルヴィンが笑うたびにティアナは緊張で縛り付けられているはずの心がどんどん溶け出していくような気がしていた。

「まあ、いいか」
「え？やっぱり砂糖漬けかい？」
「なんでもない。いちいち私の独り言に反応するなと言っている」
「そいつは、どうも」
苦笑のような笑顔を浮かべて思った言葉を口に出したティアナにハロウィンは必ず反応してきた。だから次はそれを無視しようとティアナは心に決めた。
そう、そこにいないものだと思えばいいのだ。

そう思うとさらに心が軽くなったティアナは、歩きながら両腕を上げてのびをし、朝のひんやりとした空気を思いっきり吸い込んだ。
（確かに気持ちがいいな）

声に出さないように意識しながら心の中だけでつぶやくと、もう一度伸びをした。
（本当に気持ちがいい）
「ティアナ、今とってもステキな顔してルでー」
気がつけば今度はルネがティアナにそう声をかけて手を振っていた。ティアナはまた少し顔を赤らめると、ルネをとがめた。
「こら、大人をからかうんじゃない」
「えー？いちいち怒る方が子供ヤって言うてタでー」
「誰がそんなことを？」
「ハロウ！」
ルネがそう告げた後に、あははははっと言うティアナの笑い声が続いた。
ティアナは目をつり上げてハロウィンをにらみ付けた。
ハロウィンは帽子を目深に被るとティアナの睨みの視線を遮り、ごにょごにょとつぶやいた。
「いや、どうも」

今に始まったことではないがこの男だけは誰がなんと言おうと気にくわない、と心底ティアナは思った。そして何度もわき上がる同じ思いがまた彼女をとらえる。
（なぜ陛下はこんな得体の知れない男を頼るのだ？）
そもそも旅の出発時点からハロウィンの行動はティアナを不機嫌にさせることばかりだった。あの後一行に加わったシェリルの事も不満のひとつだった。ハロウィンがらみだからだ。

エルネスティーネとハロウィン、そしてルネ・ルーの三人にティアナを含めた四人で出発するものとばかり思っていたところ、王宮を出る為に入った地下にあるティアナも知らない秘密の通路の途中で、その旅装束のデュナンの娘と会った。
珍しい鳶色の瞳を持つ彼女はシェリル・ダゲットと名乗り、ハロ

ウィンに旅の仲間の一人だと告げられたのだ。
何者だ?とたずねるティアナにハロウィンは平然と言った。
「サラマンダの元山岳ゲリラさ」
「なんだと?」
またもや頭に血が上りかけたティアナに事情を説明したのは、ハロウィンではなくエルネスティーネだった。
何でもキャンタビレイ大元帥の家で一時的に預かっていたが、特赦によりウンディーネに移送された兄の元へ戻るのだという。ハロウィンは「陛下には許可をもらっているからね」と言った。
「大丈夫です。途中までです。お兄さんのもとへハロウ先生がちゃんと送ってくれますよ」
ハロウィンが居なくなるのはそれはそれで戦力低下になって、大丈夫ではないのではないのだろうか?と思ったティアナだったが、何も言わないでおこうと決めてぐっとこらえた。一言文句を言えば際限なく頭に血が上りそうだったのだ。
だがその時、ティアナのそんな決心を簡単に打ち砕く一言を、ハロウィンが言ってのけた。
「ああ、言い忘れてたけど僕は色々と忙しくてね。だから君たちとずっと一緒ってわけにはいかないんで、そこのところよろしくね」
「な、なんだと?」
ティアナの心の中には改めて不安の雲が大きく広がっていった。

# 第十三話　宝鍵の守人

朝食でにぎわう蒸気亭の食堂では、ルドルフ・ノイエとエイル・エイミイがカウンターを挟んで向き合っていた。

「そっか。良かったな」

「おかげさまでな。ただ、体中が擦り傷や青痣でけっこうひどい有様だったはずなんだが、さっき様子を見たらそれがもうきれいさっぱり消えてるんだ」

「へえ」

「顔の痣も取れて腫れもすっかりひいてるしな。まあ、さすがに疲れているのか今朝はまだ目を覚まさないが、夕べの時点ではもうすっかり元気だった」

「ひどい目にあったから体の傷より精神的な傷の方が心配だったんだけど、それなら一安心だな」

ルドルフは大きくうなずいた。

「それに関しちゃ大丈夫だ。ああ見えて芯は強い子だ。それから『賢者さま』には改めてお礼を申し上げたいそうだ」

エイルはあからさまに眉をひそめて見せた。

「おいおい、オッサン。その呼び方はナシって言ったろ」

「おっと、そうだったな。だったらそのオッサンってのもナシで頼むぜ。こう見えても俺は結構若いんだぜ？ルドルフ兄さんと呼んでくれ」

「年頃の娘を持っているくせによく言うぜ」

「なんだ？俺の娘が気になるか？ちょっと……いや相当お転婆だがお前さんも知ってる通りランダールでも評判の器量良しだからな」

エイルは肩をすくめて見せた。

「あんたがランダールでも評判の親バカだっていうのはわかった」

「わっはっは」
ルドルフは豪快に笑うとエイルの肩をバンバンと叩いた。
「ぼ、暴力はよせ」

その日、エイルは泥のような眠りから目を覚ますと、身支度もそこそこに食堂に下りた。そしてそこにルドルフを認めると真っ先にカレナドリィの容態を尋ねたのだ。
カレナドリィは術者であるエイルと直接、しかも深く関わっていたので、昨夜施した「忘却の暗珠《あんじゅ》」という呪法では記憶を失わなかった。もっとも意識に作用する呪法は気を失っている者に対しては効果がない。従ってエイルがルドルフに声をかけたのは口止めの念押しの為ではなく純粋にカレナドリィの容態を心配してのことだった。
ルドルフの話では意識が回復した時にはずいぶんと元気で、むしろドライアドの無法兵士達に自分で報復ができなくて悔しがっていたというほどの剣幕だったという。
「いや、カレンはああ見えて実は体術の方はかなりの腕前なのさ。その辺の男じゃ太刀打ちできないだろうよ。昨日はどうにも死体に気を取られて油断していたらしくてな。あっさりやられたちまったのがよほど悔しいらしい」
「そりゃまた」
「ああ。カレンと会って話したんならお前さんも知っていると思うが、普段はおっとりしてて人当たりも柔らかい見た目通りの優しい子なんだが、気に入らない事があると俺にも手に負えないくらいの負けず嫌い振りでな。いったい誰に似たんだか」
【誰に似たんか教えてやった方がええんちゃうか？】
『いや、無駄だという気がしてならない』
【そやな】
ルドルフは娘を心配すると言うよりも、むしろ娘の剣幕に苦笑し

ていた。エイルはその話が額面通りのものとは思わなかったが、それでも少し救われたような気がしていた。

【カレンのケガは心配ないって言うた通りやったやろ？】

『そうか、お前、あの時』

【さあ、何の事やら】

二人がいる蒸気亭の食堂上には回廊があり、それは客室の廊下に続いていた。その回廊の片隅に佇み、エイルとルドルフのやりとりをじっと見つめている小さな影があった。

テンリーゼン・クラルヴァインである。

屋内にもかかわらず、すでにマントを羽織り、布製とおぼしき目の廻りを覆う黒い仮面を付けていた。当時、このような布製の仮面を着用する者はそう珍しくはなかったようである。特にサラマンダでは。

それというのも戦争で目を失ったり顔に大きな傷を負うなどした者が、人前、特に公式な場に出る際には礼儀としてそれを隠す仮面を着用する習慣があった為である。そしてそれは本人にとっても廻りの人間にとっても都合の良いものだったのである。

当初はエイルの目には奇異に見えたその仮面だが、テンリーゼンと出会う頃になると、もうすっかり慣れてしまっていた。

ただし、黒い仮面は珍しかった。通常は肌の色に近い、もう少し明るい色のものが多かったのだ。

そのテンリーゼンの場所からはエイル達の会話の内容は聞こえなかったが、エイルの背中越しに見えるルドルフの表情が見て取れた。暫く笑顔を交えてやりとりしていたルドルフの表情が険しいものに変わると、テンリーゼンはそれを見て少しだけ身を乗り出した。もっとも、多少身を乗り出したからと言って声が聞こえる訳ではない事に気付いたのだろう。すぐに元の姿勢に戻ると存在感を消すかのようにその後はピタリと動きを止めた。

「なんだと?」
「今言ったとおりさ。知らないはずはないだろ?」
「ふうむ」
ルドルフは腕を組んで改めてエイルの顔をじっと見た。
黒い髪を無視すれば、デュナンに見えない事もない少年だった。
年の頃はルドルフには十四歳か十五歳に見えた。
ここまではいい。
だが、問題はルドルフをまっすぐに見つめる濁りのない黒い瞳だった。
黒い瞳の人間はファランドールには存在しない事になっている。
もちろん例外はあり、ごくまれにだが、かつて存在した人類の血を引くものには隔世遺伝で生まれてくることがある程度である。
少なくともルドルフの知識ではそう言う事になっていた。
エイルはその、かつて存在した種、すなわちピクシィという人類の特徴である黒い髪と黒い瞳を両方受け継いでいたのである。
ルドルフはもちろん、当時からさかのぼって三千年も前に絶滅したと言われるピクシィという人類を知らない。だが目の前の黒い瞳の少年はピクシィの末裔に違いないと確信していた。そしてエイルの持つ黒い髪と黒い瞳からは、その線の細い顔の作りとは裏腹に何か強い力を秘めているような感じがしていた。
だが、変わったところはその程度だった。
瞳髪黒色《どうはつこくしき》という特徴を除けば、その少年は神々しいとか、ひれ伏すほど美しいとか、およそそういった雰囲気とは縁のない普通の少年であり、昨夜の出来事がなければこの子供が世界に百五人しか存在しない特殊な力を持った異質な存在、マーリンの賢者だとは絶対に信じないに違いなかった。
ルドルフは短い沈黙の後に口を開いた。
「だが、あれは預かり物だ。お前さんのもんじゃない」
「よく思い出してくれよ。預けたヤツはこう言ったはずだ。『必ず受け取りに来る人間がおるから、ウチが来られへん場合はそいつに

渡してくれ』ってな。ついでに言うと、今のセリフ、一字一句まで正確なはずだ」

「むう。確かにその通りだ。だが」

「あいつは俺と同じ瞳髪黒色。その特徴からもわかるだろ？あいつは俺の大事な友人だ。だが、あいつは都合で自分で取りに来る事はできなくなった。それで代わりに俺がやってきたんだ。何なら預けた物が何かも言おうか？」

「そうだな。念のために言ってもらおうか」

「ハコノキでできたからくり箱だ。あれを開けられるのは預けたあいつと俺だけだ」

「確かにからくり箱だが」

エイルは肩を竦めた。

【予想以上にバカ正直な預かり役やな。つーか、とっつぁん、早よ渡せって】

『立ち寄った用事ってのはそれか？』

【うん。超重要】

『ふーん。で、その預けたヤツっていうのは本当に知り合い？』

【まあそうやな。いわくつきやけどな】

『来られなくなったって？』

【ま、ご想像にお任せするわ】

『そうか。残念だったな』

【おいおい、勝手にしんみりせんといてんか。調子狂うやんか】

「預けたヤツはこうも言った。『疑わしいと思ったらこの箱を開けて見せてもらえ。この箱は誰にも開けられない作りになっているが、そいつなら簡単に開けられるはずだから』ってな。一字一句間違いはないって訳にはいかんが、要するにあいつはそういう内容の事を言ったんだ。だからこうしよう。俺としちゃあ、俺を信用して預けてくれたヤツに対して後ろめたい気持ちを持ちたくない。お前さん

が俺の目の前でその箱を開けられたら、信用して渡そう。言っておくが……」

ルドルフはそこまで言うと周りを見渡してエイルの方に顔を近づけて後は小声で続けた。

「俺は相手が賢者様だろうが侯爵様だろうが、自分自身で納得しない事はできない性分でな」

エイルはヤレヤレと言った風に両手を広げて見せた。

「ルドルフ兄さんは優秀な預かり屋だぜ」

「おうよ。待ってな」

『箱の中には何が？』

【まあ、見てたらわかる】

暫くして戻ったルドルフの手には、一辺がざっと十センチ程度の木製の直方体が乗っていた。材質は一目見て緻密な木目の木材だという事がわかった。だがそれはエイルの想像よりもかなり小さなものだった。

「さあ、開けて見せてくれ。言っておくが持ち逃げしようなんてケチな事は願い下げだぜ」

「ああいう怖ーい人に見張られてたんじゃ、逃げようとしてもムリだろ？」

視線を一切変えず、エイルは親指を立てて後ろ側を指し示した。右手の親指の方向、つまりエイルの背後にある回廊を見上げたルドルフは、そこに小柄なテンリーゼンの姿を認めた。ルドルフの視線に気づいたテンリーゼンは、しかしそれでも微動だにしなかった。ルドルフの目には、その様子はまるで人間というよりもまるでそこに置いてある人形のように映った。

「驚いたな。お前さん、気づいてたのか」

「なんかさっきから背中が寒くてさ」

エイル……いや、いつの間にかすでにエルデに変わっていた……は振り返りもせず、木箱とルドフルを見比べてニヤリと笑った。
「開けられなかったろ？」
ルドルフは悪びれずにうなずいた。
「一年間ずっと挑戦したがダメだった。ヤツの言ったとおりだ」

【うーん、ずっとやってたんか！】
『やるなあ、この人』
【このオッサンが意外にしつこい性格やって言うのはようわかったな】
『お前の言っている意味はよくわからんが、とにかく気をつけよう』
【ついでに言うと、娘のカレンもしつこい性格やろな】
『何でカレンの話になるんだ？』
【いや、遺伝の話や。カレンの話やない】
『親子と言えば、ノイエ親子が全然似ていないと思うのはオレだけか？』
【おお！言われてみれば確かに】
『遺伝の話が聞いて呆れる』

「開けて中を見るな、とは言われなかったんでな」
「他人に開けられるわけがないからな。だから開けようとしたことは別に責めちゃいないさ」
「他人？」
「実はこの箱を作ったのは俺だから」
「なるほどな。とにかく開けて見せてくれ」
ルドルフの興味は、箱の持ち主が現れた事よりも、長らく謎であった中身の方に移っていた。
期待半分、疑惑半分と言った雰囲気のルドルフの熱い視線を受けたエルデは、箱に手をかざすとルドルフに聞こえない程度の、ため息をつくような声で何かをつぶやいた。回廊から見下ろしているテ

ンリーゼンにも、その声はもちろん聞こえていなかった。
すぐに小箱からカタッというかすかな音がした。エルデは小箱を手に取ると、無造作に両手で左右に引っ張った。ほぼ一年の長きに渡りルドルフの好奇心を刺激し続けたパズルは、エルデの手によりあっけなく解かれたのだ。
小箱にはさらに引き出しのようなものがあり、それを引き出すと、そこには透明の水晶の破片が入っていた。

『なるほど』
【これで残りはあと一つや】

「ずいぶん短いが、これはプリズムなのか？」
短い三角柱のような形をした小さな水晶片ををじっと眺めていたルドルフが顔を上げた。
「プリズムの一部だ。でもそんじょそこらのプリズムじゃないけどね」
「あの娘の形見、ということか？」
エルデはルドルフのその言葉に意外な反応をした。椅子から腰を浮かして身を乗り出し、声の主をにらみ据えた。
「勝手な詮索をしなや。本人が取りに来られへんようになったからとは言うたけど、俺は死んだとは一言も言うてない」
「こ、今度はいきなり古語かよ」
「古語で何が悪いっ！」
「す、すまん。こんな時代だし、話の流れで勝手にそう思っていた。俺が悪かった」
ルドルフはエルデの剣幕に押されたと言うよりは心底すまなそうに頭を垂れた。
その姿を見たエルデは中腰になったままで小さくため息をつくと、目を伏せた。
「いや、こっちこそついカッとなってもうてスマン。俺かてまだ生

きていると信じたいだけなんかもしれへん」
「そうか」

『女の子だったのか、親友って』
【『いわくつき』やとは言うたけど、親友とは一言も言うてないやろ？それから先に言うとくけど、絶対にお前さんが勘ぐるような仲やない】
『別に勘ぐっちゃいないって』

エルデはゆっくりと元通り、椅子に腰を下ろした。
それを見てルドルフが口を開いた。
「本当にすまん。ずいぶん器量のいい娘だったしな。話の流れで勝手に不憫な事だと思い込んじまった」
「ふうん。あいつ、そんなにカワイらしかったか？」
「ああ。いや、かわいいという表現よりは、むしろけっこうな美人だな。いや、ぞっとするような美人と言っていい。事実、マントのフードを下ろして初めてその娘の顔を見た時はぞっとしたさ。オレのかみさんも相当な美人だったんだが、ありゃ、全く違う種類の美人だったよ。大きな目をしてたが、それがどうにも人を寄せ付けない冷たい感じのする目でな。まだ成人前と言った少女にしか見えなかったが、普通じゃあの歳であの雰囲気はありえねえ。商売柄いろんな人間を見ているが、あんな奴は初めてだ。それで、この娘にいったい何かあったんだろうなと気になったのを覚えているよ。それに何というかちょっと浮世離れしているというか不思議な感じのする娘だったな。まあ、お前さんの仲間って聞いてその謎は解けたぜ。だがあんなきれいな娘があの超激辛シチューをペロリと平らげるとは思わなかった。いくら神秘的な雰囲気の美人とは言え、店主としての本心を言わせてもらえば憎らしいことこの上ないがな」
エルデはルドフルのその言葉を聞くと目を細めて昔を懐かしむような表情になった。

『死んだんじゃ、ないのか』
【わからへん。でも大丈夫やって信じてる。でも、この話はこれで終わり。くわしく話すときが来たら俺から話す】
『なあ、エルデ』
【頼む。この件については二度と訊ねんでくれ】
『わかったよ』
触れられたくない相手、つまりそれだけエルデにとって大切な人物なのだということはエイルにもわかった。エルデとその少女との関係がどういうものであったかは知るよしもないが、話の流れから推測すると相手も正教会の関係者であり、賢者仲間である可能性があった。少なくともルドルフはそう思っているようであり、エイルも同じ考えだった。
そしてその相手はおそらくは何らかの事件に巻き込まれて現在行方不明なのか、あるいは……。
どちらにしろその少女はエルデが心を許すことの出来る相手だったのは間違いない。なぜなら、これ……つまりエルデにとって大事なものを預ける事ができる人間なのだから。
でも、エイルはその少女に対する興味よりも、エルデの素顔の一つを知ったるような気がして、悪い気分ではなかった。

「それでそのプリズムは何なんだ?」
「それは秘密や。というよりも知らん方がええで、命が惜しかったらな」
「大げさだな」
「言うとくけど、冗談とちゃうから」

『ルドルフの疑問はもっともだな。あと一つなんだし、そろそろオレには教えてくれてもいいだろ?』
【これは「宝鍵《ほうけん》」。またの名を「マーリンの導《しる

べ》」。もっとも完成したら、やけどな】
『マーリンのしるべ？』
【伝説によるとファランドールに全部で四つあるとか、一二個あるとか言われてる】
『おい、それって』
【せやな、結構なモンやで】
『確かにルドルフが首を突っ込むような代物じゃなさそうだな。でも、そんなものをなぜお前が持ってるんだ？』
【長くなるさかい、それはまたおいおい話すわ。俺たちの呪縛を解いてお前さんを元に戻すためには文字通り「鍵」になるモンや、っちゅうことだけは言うとく】
『いや、そこまで言ったなら全部教えろよ。気になるじゃないか？』
【名前を教えてやったからええやろ？それよりお人形さん達のお出ましや】

エルデが目を上げたところに、丁度アプリリアージェ・ユグセルの微笑があった。そしてその後ろに少し離れて『お人形さん』ことテンリーゼン・クラルヴァインが佇んでいた。
「おはようございます。今日はよく晴れて、まさに『市日和』ですね」
「おお、ウワバミのお目覚めか。おはようさん」
ルドルフがアプリリアージェの挨拶に軽口で返した。
「おはよう。大市って明日じゃないのか？」
エイルも普通に挨拶を返す。
「隣、いいですか？」
エイルはうなずいた。
アプリリアージェは相変わらず引き込まれるような笑顔を浮かべ、「ありがとう」と言うとエイルの右隣に腰を下ろした。続いてテンリーゼンがアプリリアージェの右隣に音もなく座った。
「一応明日からと言う事にはなっていますが、準備が出来た一部の

店は今日からやっていますよ。そして早めに商談をまとめたい業者がやってくる。その業者達目当てに飲食系の店が開く、その客目当てに普通の小売り店も店開きを始める……とまあそういう具合でランダールの大市は本来の開催日の前日からやっているようなものなんですよ。商売人が今日を外すわけにはいきません」

「なるほど、さすが商売人を騙るだけあってこんな辺境の町の市にも詳しいな」

エルデは感心したような口ぶりでそう言った。

「と、オレが夕べ教えたんだがな」

ルドルフがエイルに目配せしながら言った。

「あらあら、手品のネタをバラしてはダメですよ、ご主人」

「なんだ、ちょっと感心して損した」

「いえ、大市も目的の一つですよ。だって私たちはシルフィードの商人なんですから」

アプリリアージェはさも当たり前のようにさらりとそう言った。

それを聞いて、エイルは肩を竦めた。

アプリリアージェはさらににっこり笑うと、ルドルフの方に視線をうつし、朝食の注文をした。

「私の飲み物はコーヒーではなくて紅茶をお願いします。それから私の連れのコーヒーにはミルクを多めに。砂糖は大きい方の角砂糖を二つ入れてあげて下さいな」

ルドルフは合点だと言ってうなずいた。

「あとの二人は？まさか俺の後ろで矢を番えてたりしてへんよな？」

エイルの口調が古語に変わった。すなわち、エルデに代わったのだ。

「あら、あなたには刀や矢は通用しないから問題ないのではなかったかしら？」

「結構な美人やのに、喰えないお人やな、アンタ」

「喰えないというのは心外ですね」

「美人っちゅうところは否定せえへんのやな」
「冗談はさておき、彼らはそろそろ到着するはずの別隊と合流するために先に町に出ています」
「夕べ言ってた別隊か」
「むしろ本隊かもしれませんが。彼女たちはシルフィードのエッダからここまでまっすぐ来るはずですから、本国の新鮮な情報を持っているでしょう。もしかすると『おじいさん』についての何か新しい情報があるかもしれません」
「なるほどね」

エルデとアプリリアージェがやりとりをしている間にルドルフが三人の前に朝食の皿を並べた。大皿にソーセージと卵、レタスやズッキーニ、ニンジン、タマネギといった簡単な温野菜のサラダとリンゴ・サクランボ・スグリといった三種類のジャムが乗っている。籐のバスケットに積まれたパンは、サラマンダでは比較的珍しい白っぽい丸パンで、それはまだ焼きたてと見えてかすかに湯気が上がっていた。

アプリリージェは早速それつまみ上げると顔に近づけて香りを楽しんだ。
「白いパンは久しぶりです。ジャムも新鮮でおいしそうね。いただきましょう、リーゼ」

アプリリアージェが朝食の皿を眺めて嬉しそうにそう言うと、ルドルフは満足げな笑いを浮かべた。
「あんた達のは特別に俺が今自ら調理した特製だ。白パンはウチの窯からついさっき出したばかりの焼きたてだ。さ、卵がさめないうちにありがたく食ってくれよ」

エルデはルドルフの威勢の良さに苦笑しながらフォークで炒り卵をつついて少し口に入れた。次いで丸パンを手で上下に破り分けてソーセージと卵と温野菜を適当に切り分けたものを乗せるとサンドイッチ風にしたて、そのまま手づかみで口に運んで食べ始めた。

アプリリアージェはいつもの微笑みを浮かべながらエルデのその様子を眺めてから、ようやく自分の皿に向かい、炒り卵をフォークで少し掬って口に入れた。

「あ」

卵を味見したアプリリアージェが上げた小さな声に、ルドルフが敏感に反応した。

「どうした？火傷したか？」

「いえ」

アプリリアージェはもう一口卵を少量の口に運ぶと、横でサンドイッチを食べるエイルをチラリと見た。無表情のまま、機械的にサンドイッチを口に運んでいるエイルと、自らの皿の卵を見比べると、ルドルフに尋ねた。

「三人とも同じものですか？」

「おうよ。卵は一緒に作って三等分したから、同じものだぜ」

ルドルフはアプリリアージェのフォークに乗った炒り卵を見てそう答えた。

「そうですか」

「どうした？」

アプリリアージェは今度はテンリーゼンの方を見た。テンリーゼンはまだ卵に口は付けていなかったが、アプリリアージェに促されるとフォークを手に取り、同じように少量の卵を口に運んだ。そしてそのままフォークを皿に置き、首を横に振った。

「ご主人、この卵を作るとき味見をなさいましたか？」

「味見だって？」

ルドルフはアプリリアージェの皿を引き上げると、アプリリアージェがうなずくのを確認してから指で卵をつまんで口に放り込んだ。

「ぶわっ何だこりゃ」

ここに来てようやくエイルはサンドイッチを食べるのを止めた。

『！』

【ヤバイ】

「こいつは」

ルドルフが何か言おうとするのをアプリリアージェは手で制止しエイルに声をかけた。

「あなたは平気なんですか？エイル君」

【しもたな。全くいらんことしてくれるわ、ルドルフのおっさん】

『どうする？』

【一応、ごまかしてみよか】

「いや、別に」

「こんなにベトベトに甘いのに文句一つも言わないなんて、意外ですね。甘いものが苦手な私はもとより、甘いモノが大好きなリーゼですら手を引っ込める程なのに。エイル君は甘い物も辛い物も大丈夫なのですね」

「うん。辛いのも好きだけど、けっこう甘いのも好きなんでね。こういう砂糖味の甘い卵は昔から好物なんだ」

出来るだけ平静を装いつつ無表情でそう言うと、エイルは大きく口を開けて、再び自作のサンドイッチをほおばった。

「ふーん、そうですか」

エイルのその仕草を見たアプリリアージェはルドルフに目配せした。何もしゃべるなという合図である。ルドルフは今まさに何か言おうとしていた口を閉じて、出かかった言葉を飲み込んだ。

「エイル・エイミイ。本当に謎が多い少年ですね。あなたはいったいいくつの謎を持っているのでしょうね」

エイルはそう言って自分の目をじっと見つめる若い女性の顔を改めて眺めた。その表情は慈しむように優しかった。だが、もちろんエイルはその顔の向こう側にもう一つの顔があるのを感じていた。

エイルが何も言わないので、アプリリアージェは微笑を浮かべたままで続けた。
「でも、今、その謎の一つが解けました」
エイルはさらに無言だった。
ルドルフは微笑むアプリリアージェと、対照的にやや険しい表情でそのアプリリアージェを見つめているエイルを心配そうに見比べるしかなかった。テンリーゼンは……もちろんただじっとしていた。
「味覚がないのだとしたら、あの激辛シチューを食べるのは苦でも何でもないんでしょうね」
アプリリアージェの囁くような一言にエイルの瞳が見開かれた。

『な』
【クソッ。まんまとこのお姉ちゃんに騙された】
『これ、甘いんじゃないんだな』
【つーか、このオバハン、ホンマに油断も隙もないやっちゃな】
『一瞬でお姉ちゃんからオバハンかよ』
【この状況でしょうもないところに突っ込むな！】

「ご主人が失敗して、塩バターを使ってしまったこの卵の味が、あなたは全くわからないのでしょう？」
「味覚がないだって？」
たまらず、ルドルフはそう声を上げた。そして同時にアプリリアージェの仕掛けの意味がようやくわかった。
「味覚がないヤツが超激辛シチューに挑戦したらアカンっちゅうルールはないんやろ？」
エルデは全く動じていない風を装ってルドルフに視線を向けなおすと、そう言った。そしてそのまま何事もなかったかのようにもう一口サンドウィッチをほおばった。
「それはそうだが。じゃあ、一年前ここでアレを食った、おまえさんの知り合いだっていうあの娘も」

「ーー」
「娘？エイル君のお知り合い？」
【ホンマにいらんことばっかし】
『それもバレるとマズいのか？』
【と言うか、空気を読めっちゅうねん、クソオヤジ】
『いや、いくら何でもムリだろ、それ』

アプリリアージェはルドルフとエルデを交互に見比べて、さも不思議そうに尋ねた。
「おかしな質問かもしれませんが、賢者になると味覚がなくなるのですか？」
アプリリアージェは穏やかな表情を変えずに尋ねた。
「そうや」
「そうだったんですか。意外な事実にびっくりです」
そう言うとアプリリアージェはさらにニッコリ笑って見せた。
エルデはその態度を見て一瞬で顔を真っ赤にするとアプリリアージェをにらみ据えた。

『そう、なのか？』

「んなわけないやろっ！」
「ですよねえ」
そう返したアプリリアージェは「あはは」、と珍しく声を出して屈託なく笑った。それを見たエルデは怒鳴る元気もないという風に肩をがっくりと落としてうつむいた。
「味覚がないのは俺だけの問題や。あの子の事は知らん。たまたまやろ。そもそも俺達とは何の関係もない。その話はやめてもらおか」
アプリリアージェはふむ、という風にうなずいた。そして声のトーンを全く変えずに質問を投げた。

「その味覚がない娘さんにはとても興味がありますが、これ以上突っ込んでもエイル君の不興を買うだけでしょうから、ここは質問を変えましょう。あなたに味覚がないのはもしかしてあなたが「真赭の頤《まそほのおとがい》」を捜している事と何か関係があるのですか？」

エイルはカウンターを拳で叩いた。喧噪の店内は一瞬静まりかえったが、すぐに何事も無かったかのようにざわめき始めた。

「お、おい、そう興奮するな」

ルドルフがなだめにかかったが、エルデはそれを遮るようにアプリリアージェの方に向き直ると、手に持ったサンドウィッチをその垂れた目の前につきつけた。

「あんたに、味がまったくない食事を毎日毎日続ける人間の気持ちがわかるか？」

「いえ、もちろんわかりませんし、想像するだけでも愉快とは思えないので、あんまりわかりたくもありませんねえ」

アプリリアージェは落ち着いた声でそう言うと、微笑むだけだった。

その顔に向かってつばを吐きかけたくなる衝動を抑えると、エルデは椅子を蹴って立ち上がり、そのまま店の出口へ向かった。

その背中を見ずに、紅茶のカップに手を伸ばしながらアプリリアージェは声をかけた。

「夕食はご一緒しましょうね。夕べ言ったとおり今日は仲間が増えますから、今後の打ち合わせなどしながらみんなで楽しく過ごしましょう」

そう言った顔にはいつもの微笑が浮かんでいた。

【楽しく過ごせるかっちゅーねん！あのクソ女】

『らしくないな。いつも冷静なのがお前の自慢だろう？』

【何言うてんねん。お前さんの代わりに怒鳴ったったんやろ？】

『はあ？』

【ええい、こなくそっ】

音を立てて扉を開け放つと、エイルは通りに出た。

【まったく、あの女。だんだん「悪魔」っちゅう二つ名がふさわしく思えてきたで】

『「白面の悪魔」それに「笑う死神」か。どっちもとんでもない二つ名だよな。それにしても鋭い人だな。この分だと、そのうちバレるだろうな。左の耳が聞こえてないってことも』

【ああ。正直あの顔と姿を見て無意識にナメてかかってたこっちの失策や。シルフィード国王直轄の特殊部隊の司令、いや、あの若さで人材豊富なシルフィード軍の中にあって中将の地位におるっちゅう意味をもっとよう認識しとくんやった。あの雌狐が看板に偽りないヤツやということはようわかったわ。それにしても、あんなひどい垂れ目でにニコニコ緩い顔やのに油断も隙もないって言うのはどう考えても反則やろ】

『確かにあの笑顔にはつい気が緩むな』

【フン。こっちの鼻が全然きかへん事も、すでにお見通しやろな。そして、一緒におる限り俺たちがこれから感覚を失っていくたびにあいつは全部見抜くやろ】

『下手をすると、危ないな』

【寝首をかかれへんようにせなあかんな】

『……時間がないな』

【ああ】

エイルは広場まで出ると、そこで建物に囲まれた四角い空を見上げた。秋の空は真っ青で、朝のひんやりとした空気が顔に心地よかった。

「ヤツに味覚がないというのは、いやまあ、全く驚いたな」

「そうですね。それから彼は嗅覚もないようですけれどね」

「何、本当か？」

「あれほど辛いシチューだと、普通は匂いをかぐだけで、普通の人はむせるでしょう?あの子は嗅覚も、そしてそういう刺激を感じる感覚も全くダメのようですね」

ルドルフはハタと手を打った。

「なるほど!」

「それ以外にも、麻痺している部分があるんじゃない?エイル・エイミイ君」

アプリリアージェはエイルが出てしばらくたつドアの方を見ながら、最後の一言は独り言のようにつぶやいた。そう言って三杯目の紅茶を口に運ぶその顔には、いつものように静かな微笑が漂っていた。

「たとえ賢者と言えども、スキはいくらでもありそう……ね」

# 第十四話　ミリア・ペトルウシュカ

この物語が成立するきっかけになった出来事がある。

それはトゥレフ島の田舎にある古びた納屋の奥から数枚の古ぼけた木炭デッサンが発見されたことに端を発する。

「時」に忘れ去られていたその複数の人物を描いたデッサンは相当に古いもので、専門家の鑑定によれば約五百年ほど前に書かれたものだという。それは丁度この物語の舞台である「月の大戦」頃の作という事になる。

発見されたデッサンにはまったく署名などはなく、それを偶然見つけた田舎の画学生にはその絵を下絵とした完成品を特定する事ができず、そのままに手元に死蔵していた為、一般にそのデッサンが姿を現すにはもう少し時間がかかる事になった。

発見者は『無名だが世に出ることはなかった才能溢れる田舎画家の手に依る秀作』として手元においていたが、数年後にトゥレフ島を出て芸術都市ソリュートに出向いて本格的に絵画を学び始めると、ついに木炭デッサンの作者の特定をすることができた。

彼はその数枚のデッサンを「月の大戦」の時代に生きた有名な画家の手に依るものであるとして発表した。

もちろん、彼が発見したデッサンは贋作かもしれない。いや、贋作と言うよりも練習のために誰かが模写したものと言い換えてもいいだろう。しかし、有名・著名な絵はもとより元になる絵がどの文献をあたっても存在しないこと、模写とは思えない、およそ迷いも揺るぎもない線のみで構成されている事、さらにその画家らしい奔放で大胆な構図などから、こんにちでは多くの専門家がそのデッサンが紛れもなく『彼』の手に依る本物であろうと信じて疑わない。

そうなるといきおい、なぜその絵がトゥレフの片田舎の納屋にあ

ったのかが気になるのが人情というものだろう。

もちろん答えはこの物語にある。

この物語には「歴史の教科書」、すなわち「常識」と思われている出来事から外れた記述が多いのはお気づきの通りである。なぜならこの物語は発見されたデッサンが本物であり、それを描いた画家がトゥレフ島の田舎に滞在した期間があったことを前提に『月の大戦』を再構築してできあがったものだからだ。

『月の大戦』ゆかりの地はもとより、伝説や異聞がファランドール中にちらばっている。各地に散存する書簡や手記、日記や郷土史家の仕事などをつぶさ検証すればやがて一つの仮説が浮かび上がる。そしてその仮説は「正史は事実ではない」と呼びかけてくる。

公式な歴史が事実ではないことはその歴史自身が矛盾をはらみながらも自ら証明していることである。

問題はなぜ事実が記述されなかったのか、ということになるわけだが、その答えをこの段階で羅列するといささか物語としての興が殺がれる。ましてやこれは論文ではない。

もちろん事実は一つであろう。しかし多くの歴史小説がそうであるように、この物語も事実を元にして、歴史に現れなかった真実を描くことを目的としたものである。

事実と違い、真実とは一つの事実の前後のつながりによって紡ぎ出されるきわめて曖昧な認識のようなものであり、箇条書きで事実を挙げるだけではおよそ見えてこないものではないだろうか。

先はまだ長い。

一つの歴史解釈をゆっくりと楽しんでいただければ幸いである。

では本編に戻るにあたり、まずは件のデッサンの作者とされる、ある一人の画家の紹介を行おう。

もっともペトルウシュカ兄弟のような歴史上あまりに有名な人物をここで改めて紹介するまでもないのかもしれない。だが、有名な人物ほど話に尾ひれがつきやすいのはそれこそ歴史自身が証明している事である。とはいえ全く異なる人物像をでっち上げることはこ

の物語の本意ではない。
　従ってここでは現時点において事実であろうと学術的に判明している事象については出来うる限り尊重しながら、しかしその他多くの研究者によって少しずつ明らかになっているこの人物に隠された「真実」の片鱗から導き出された姿を加味して描いていきたいと思う。

　ファランドール史上もっとも有名な兄弟であろうと思われるペトルウシュカ兄弟。その兄であるミリア・ペトルウシュカはあの「薔薇の王」エスカ・ペトルウシュカの生誕に先立つこと一年前。すなわち星歴四〇〇一年白の二月に当時のペトルウシュカ公爵であった父ドルムと母ミカに見守られてドライアドの自領エスタリアの首府ソリュートにあるエスタリア城の四龍の間に生を受けたと言われている。
　人徳家として知られている父ドルムと考古学者としても著名な母ミカに大切に育てられたミリアは、大過なく幸せな幼少時代を過ごしたものと思われる。この間について特筆される文献がほとんど無いことがそれを証明していると言い換えてもいいだろう。
　母ミカの影響であろうか、幼い頃より書物が好きなミリアは、文字の読み書きができるようになるともっぱら書庫が遊び場であったと言われている。
　しかし、ペトルウシュカ家の平和な日々が突然失われる運命の日がやがてやってくる。彼ら兄弟は突然両親を失うのである。
　星歴四〇〇九年黒の六月の事である。
　事故によりドライアドの首都ミュゼで両親が客死した後、ミリアは公爵家の嫡子として家督を継ぐ事となった。ペトルウシュカ公ミリアの誕生である。
　わずか八歳で公爵となったミリアだが、この事件を境に物静かで聡明・勤勉だった彼が一変する。

ミリア・ペトルウシュカと言えば、あの忌まわしい出来事があるまでは「ばか殿」の代名詞として有名だが、これはもちろん遊興にふけり、浪費三昧の生活を送っていた事に対して付いたあだ名であった。

「ばか殿」と呼ばれるようになった頃の彼の常軌を逸した振る舞いは枚挙にいとまがない。全国、いやファランドール中の吟遊詩人や絵描きや小説家、楽団や劇団、道化や大道芸人などを城に招き入れ、連日連夜にわたる大音楽会と観劇会、大舞踏会などを延々何十日も開催し、夜は夜で豪華絢爛な夜会続き。要するにおよそ尋常ならざる饗宴の時期が長きに渡り続いていたようである。しばらくするとその催しは不定期に開催されるようになっていった。規模は引き続き大きなもので、田舎者が初めて見たら目を丸くして腰を抜かすほどであったという。

その頃彼が行った事の中の一つに、エスタリア大吟遊会がある。三ヶ月に一度、我と思わん吟遊詩人達が集い、自慢の歌を披露するのである。観客による審査で大賞を決め、金銀宝石など多額の報酬を受け取ったと言われている。

今日ファランドールで最も由緒あると言われる「エスタリア音楽祭」はミリアによりこの時期に開催されたものを発端とする行事である。

芸術の守り人としての評価が今日でも高いミリアだが、自身も画家として著名である。「構図の魔術師」「空間表現の父」などと呼ばれるミリアはその独特な遠近感を駆使し、視点の位置を自在に操ることにより、日常の一こまを非日常に切り取って描写した。なにより優しくしっかりとした色と、時には大胆に、時には緻密な描写をする奔放な画風が見る者を魅了する。現在でもその成分が解き明かされない美しい色を出す彼の絵の具の材料もそうだが、特筆すべきはその不思議な視点から生まれる独特な構図で、地を這うほどの低い位置から煽り誇張した様や、およそ鳥の目からしか見る事ので

きない角度……すなわち人が現実には見ることのできない構図で様々な作品を描き、世に送り出した。作風はごく初期の頃から既に確立されていた感があり、ミリアがこの分野で凡才ではなかった事を偲ばせる。

エスタリアの首府ソリューートにあるミリア美術館にも比較的多くの作品が所蔵されているが、全国各地にミリア・ペトルウシュカの手によると言われる絵が多数残っている。しかしその多くは鑑定によりミリアの死後かなり経ってから制作された贋作であると指摘する専門家も多い事は付け加えておく必要があるだろう。

トゥレフ島で発見されたデッサンの例もそうだが、驚くべき事にいまだにミリアの作と言われる絵が初めて陽の目を見る事がある。

今日になってもなお真贋騒ぎが絶えないのは、驚異的とも言える彼の多作に依るものであろう。

国立中央美術館にある「月の時代館」にはいまだに最高額の紙幣の意匠として取り入れられているミリア・ペトルウシュカの代表作の一つである「銀色の髪の乙女」が所蔵されているが、これは当時のカラティア朝シルフィード王国の王女、エルネスティーネを描いたものだという説が有力視されている。ただし書簡や書き物を殆ど残さなかったミリアの場合、作品の背景を知ることは極めて困難であり、いったいモデルが誰なのかという真相は誰にもわからないと言うべきであろう。

話を彼の生い立ちに戻そう。

ドライアドでは、貴族の子息は十歳から十七歳まで、首都ミュゼにある王立貴族学校、通称「アカデミー」で寄宿舎生活を送ることが不文律となっているが、そこで彼は当時、「アカデミー始まって以来の劣等生」と言われていたようである。結局彼は入学二年目で一度落第し、一つ違いの弟であるエスカ・ペトルウシュカと同級生となった。学年次席という優秀な成績で卒業したエスカとは極めて対照的である。

この当時のミリアやエスカの学習記録は現在の国立ミュゼ大学の図書館に保管されており、展示されている実物も多い。

興味のある向きは閲覧しミリアの使った教材の多くが落書きやスケッチで埋め尽くされている様を見てみるのも一興だろう。

アカデミー卒業後の貴族の子息は通常ドライアド軍の軍籍を得る。ドライアド軍には海軍と陸軍があり、どちらかに属することになる。どちらを選ぶかに本人の意志は反映されず、「家」の政治的な事情で決められることが通例である。要するに自分の家がどちらの軍閥の系列に属しているかで決まるのである。だが子息という身分ではなく、自身が既に公爵であったミリアはアカデミー卒業後は特権で『少佐』階級が得られるにもかかわらず軍籍を取得せず故郷エスタリアに戻り、そこで再び創作と遊興にふける毎日を送る事になる。

だが、このころから既にエスタリア城内に不穏な動きがあったと言われている。具体的には劣等生で浪費癖のある現公爵ミリアよりも、快活にして頭脳明晰、かつ思慮深く剣の腕前もすこぶる付きであると評判の弟、エスカを領主に据えたいと考える一派が城内で目立つ動きを始めたのである。卒業後、陸軍の士官の地位を得て出世街道を歩む弟のエスカと家督を食いつぶしていく一方の「ばか殿」ミリアはアカデミー卒業後は一度も相まみえることは無かったようである。いや、アカデミーでさえ顔を合わせることもなく、当然ながら言葉を交わしたことすらないと伝えられている。

歴史上もっとも有名な兄弟は、もっとも仲の悪い兄弟でもあったのだ。

ミリアの帰国後、豊かだったエスタリアの財政は緩やかに傾いていった。ご想像通りミリアは自領の経営には全く無関心で、すべてを家臣に一任していた。つまり金を使う事はしても、その肝心の財政管理にはミリアはいっさい関わっていなかったのである。

だが、それが幸いしてペトルウシュカ家はかろうじて破産の危機を免れていたと言える。優秀で献身的な家臣の知恵と努力がペトル

ウシュカの最後の守りと言えた。

その侯爵家の金庫番とも言える忠臣の名は吟遊詩人によって今日に至るまで独立した美談として様々に語り継がれている、あのロンド・キリエンカである。通説では彼はエスカ派としてペトルウシュカ家の財産をミリアに気づかれることなく首都ミュゼにいるエスカの下に移動していたという。財産とは金銭だけではない。ロンド・キリエンカは何よりも「人材」を重視した忠臣である。彼がまず行った事は、ペトルウシュカが所有していたエスタリア侯爵軍の兵士の殆どをエッダのエスカの下に派遣し、これをそっくりそのまま陸軍に独立部隊として提供した。多額の持参金込みで。この事がすなわちエスカが出世街道を駆け上がったそもそもの原動力であろうとさえ言われている。

そんな華やかなエスカの出世舞台の楽屋を取り仕切っていた人物が、このロンド・キリエンカなのである。彼はペトルウシュカ家所蔵の宝物を放出するなどなりふり構わずあらゆる手を尽くして、ミリアの放蕩の始末をし、政治的にも人的な包囲網を巡らし彼の行動を徐々に狭めることに成功していった。結局二十歳になった頃のミリアが自由にできたのは、半年に一度の大吟遊会程度であり、居城のある首府ソリュートを追われ、普段はエスタリア中央部エイビタルにあるペトルウシュカ家の別荘に幽閉された格好で、半ば隠居のような生活をしていたと伝えられている。

豊かな天然資源と多くの特産物などにより元々国力のあったエスタリアだが、ロンド・キリエンカの活躍で領民に重税を課してその場をしのぐという手法をとらずにしのげた事は特筆すべきであろう。もともと長く善政を敷き、領民には「我らが殿様」と言われ尊敬され慕われていたペトルウシュカ公爵家である。そういうわけだからそこに突然生まれた「バカ殿」であるミリアを彼らは心配しながらも親しみの感情をもって見守っていたと考えられる。今でもエスタリア地方に行けばそれがひしひしと伝わってくる。特に彼が幽閉さ

れていた別荘があったエイビタル地方にずっと暮らす人々は、ミリア・ペトルウシュカについて語るとき、自らの誉れのように胸を張り目を輝かせる。そしていくつかのエピソードを語った後、異口同音にこう締めくくるのだ。

「あの方はエスタリアの誇りだよ」

気まぐれでお人好しで人なつっこく、そして芸術に深い理解と保護を行った金に無頓着な地方領主。一言で言ってしまうとそういう人物になるのであろう。

幽閉とは言え比較的自由に行動はできていたようである。彼が供も連れずに領地を気ままに散歩して、領民に気軽に声をかけて回ることは日常茶飯事で、突然行方不明になったので家臣達が舌打ちをしながら領地を駆け回って捜索してみると、ブドウ農家で泊まり込みで収穫を手伝っていたり、大勢の女達にまじって牛小屋で搾乳の手伝いをしていたり、町の日曜学校で熱心に子供達に絵を教えていたり、鉱山町の酒場で屈強な男達と裸踊りをしていたり等々、ミリア・ペトルウシュカについてのエピソードは実に多い。そしてその行く先々の多くで、彼は得意の絵を残していると伝えられる。今でもエイビタルの農家の古い納屋などからミリア・ペトルウシュカの手によるものと思われる作品が発見され、そしてそれらのが多くが真作であると鑑定されることを考えると「さすがにそれは眉唾であろう？」と思える逸話も含めて、すべてが真実なのではあるまいかとさえ思えてくる。

だがもちろん、ただの地方の人のいいバカ殿がファランドールの歴史上欠くことのできない重要人物になるはずもない。

バカ殿としてのミリア・ペトルウシュカと、その後大きく動く歴史の一つの動力源となった『殺戮者』ミリア・ペトルウシュカとの明暗差があまりに大きく、この人物を同一の視点から描くことは極めて難しい。同一人物ではないとする極端な説もいまだに根強い。

もとよりここでは「エスタリアのばか殿」時代のほほえましいエピソードを事細かく描くことが目的ではない。牧歌的な時代を懐かしむのではなく、彼が歴史に残した消えることのないその暗く深い爪跡こそが重要なのである。

「バカ殿」が、やがて「絶望の申し子」とまで呼ばれることになった背景と「破壊者」ミリアの真実の姿を我々は改めて深く掘り下げて考えて見る必要があるのではないだろうか。

「この、赤い光というのは？」

「やはり、そっちの方が気になるか」

蝋燭の明かりの中で退屈そうに報告書に目を通していたミリア・ペトルウシュカが顔をあげたのは、サラマンダ奥地アクラムでゲリラ部隊とシルフィード軍との局地戦についての項目に入ってからだった。それまで足を机に投げ出してだらけた格好でつまらなさそうに字面を追っていたミリアは椅子から立ち上がると部屋の隅の椅子に姿勢正しく腰を下ろしていた若者を見やった。

ミリアのその反応を見て、アキラ・エウテルペは満足げにうなずいて見せた。

「もちろん、あのル・キリアが極北の雷鳴の回廊で遭難・全滅したという情報もあからさま過ぎてひっかかるけどね」

「うむ」

「それより『特殊な稲妻かと思われる』って記述だけどさあ、これってどうなのさ」

「おいおい、気になるって言うのは内容じゃなくて記述についてか？」

「いや、内容だよ。下から上に上がる稲妻はいいとして、いくら特殊なんて言っても『ゆっくり』上がって行く稲妻などこの世にあるものか」

「やっぱり内容についての指摘ではなかろう、それは」

「一体君のところの将校はどうしたらこんな爆笑もののスチャラカ報告書を平気で正式文書として上に提出する気になれるのかね」

ミリアは報告書を持って部屋の中を歩き始めた。ミリアが考え事をする時のいつもの癖だった。こうなると周りの人間の言葉にまともに応えない状態だという事をアキラは知っていた。

しかし、とりあえずは弁解と補足のつもりもあり、一言だけ告げることにした。

「心配せずとも、この報告は公文書管理官に全文抹消か改編されるだろうさ。奴らは事実を記録・保管したいのではなくて、矛盾のない整然とした書架を作りたいんだろうからな。それよりそのスチャラカ文書を反古にされる前にゴミ箱から失敬してきた私の活躍について労いの一つもほしいところだがな」

部屋と言っても、そこは壁から天井、床にいたるまで回りがすべて岩でできた不思議な場所で、しかも一枚ある扉以外にまったく継ぎ目のようなものが存在しない、簡単に言ってしまえば大きな一枚岩をくりぬいて作ったような様子の場所だった。つまりおよそ普通の家の中にある部屋でないことは明白だった。

部屋自体は比較的広く、大きめの丸い、飾りなどなく質素だが頑丈そうなしっかりとした木のテーブルが中央に置かれており、ミリアは当初そのテーブルについて報告書を読んでいた。

ミリアのいで立ちはいわゆる旅装束が基本になっており、一見派手には見えないが細部に目をやるとかなり凝った刺繍が施された瀟洒なウンディーネ風の上着を羽織っていた。

ミリアは瞳の色が特徴的で、物語によっては薄い茶色と表現されることもあるが、実は殆ど金色と言ってよく、その独特の色を持つはっきりとした大きな瞳と焦げ茶色の髪を長く伸ばして後ろで一つに束ねているのが特徴のやや風変わりなデュナンの青年であった。年の頃は二十代半ばであろうか。

一方、もう一人のデュナンの若者アキラの方は金褐色の癖のある豊かな髪をもち、理知的な切れ長の目をした、ミリアと同年代の美しい青年だった。瞳の色は秋空のような深い青である。それよりも彼がミリアと大きく異なるのは一目で素性が分かるドライアドの軍服姿だったことである。年若いアキラではあるが、着ている詰め襟の軍服は将校のそれであった。それも尉官などではなく二重の金糸の縁飾のついた佐官クラスのものであり、襟の階級章をよく見ると、それが中佐のものであることが分かる。

立ち上がって部屋の中をうろうろと歩きだしたミリアを楽しそうに見やると、アキラはサイドテーブルにあるグラスを手にとった。そこに注がれていた泡立つ琥珀色の液体を旨そうに喉に流し込むと、また声をかけた。

「それともう一つ。その『ゆっくり上がる稲妻』だが、面白そうだったからとりあえず調査に当たらせている」

アキラがそう言うとミリアは立ち止まり、報告書から顔をあげた。

「スプリガンか？」

「普通の連中にやらせると爆笑もののスチャラカ報告書が増えるだけだろうからな。文書推敲部の手間を少しでも減らしてやろういう私の配慮だ。もっとも一年も前の出来事だから今更どうした、という側面は否めないが」

「よくスプリガンを動かせたな。まさかシルフィード側に何か動きでもあったのか」

「相変わらず聡いな。その通りだ。諜報にはシルフィードの複数の部隊が何らかの目的でサラマンダ・ウンディーネ・ドライアドの三国に入ったという情報が入って来ている。まあ、そう言うわけだからついでの任務をねじ込むのは楽だったというわけだ」

「シルフィードの部隊が複数か。となると例の「真赭の頤（まそほのおとがい）」の怪文書がらみだろうな」

「あれを怪文書扱いか」
「あれは考えるまでもなく怪文書だ」
「まあいい。おそらくはそれがらみだろう」
「ふむ」
「相変わらず《真赭の頤》の件についてはあまり興味がなさそうだな」
「《真赭の頤》がまだ生きているなんてバカげてるよ。表に出なくなって何年経つと思っている？しかもあんな文書を各国のてっぺんに送るなんて、突然集団発狂したのでもない限り、少なくとも正教会がやるわけがない」
「《真赭の頤》は正教会……賢者会に抹殺されていると？」
「《真赭の頤》本人どころか、ファランドール中くまなく探しても死体すら見つからないだろうね、スプリガンには悪いけどさ。そんなことより今回の報告書には一行も書かれていないけど、そっちじゃ最近の教会側の動きは掴んでいるのか？」
「どっちの教会だ？」
「勿論、どっちも」
「エレメンタルについて言っているとしたら、まだ動きはない」
「だからこそ、この稲妻情報は気になるのさ。発現だとすると少しやっかいだからね。一定の知識を持っているものがこの情報を得たとなると考えることは同じだ。だから、どちらにしろ早く見つけないとまずい」
「水か、炎か、いずれにしろ先にどちらかを見つけた陣営が有利になるわけだな」
「有利になどならないさ。それよりこのスチャラカ報告書に書かれている個人的な見解を除く部分を信じるとするなら、そしてこの光が発現だと仮定すると、そこにいたのは間違いなく炎のエレメンタルだ。というより炎のエレメンタルであるとしか考えられないな。仮にサラマンダに炎のエレメンタルが居たとすると、これで四つのエレメンタルがこの時代に存在することが確定する」

「《真赭の頤》はお前の言う怪文書に『エレメンタルの所在を知りたければ会いに来い』と書いてよこしたらしいが、本当にやっこさんの方が先に各エレメンタルの所在を確定していたなんて事はないのか？だとするとつまりは、それをすでに正教会側が知っているという事になるのだろうが……」

「怪文書に正教会が絡んでいない以上、そもそもその可能性は殆どないね。まあ、ボクの予想が外れて正教会側が最悪三人の所在を知っていたとしても四人目の特定はムリだろう」

「俺もそうは思うが」

「《真赭の頤》もしくは正教会側が知っている可能性があるのは水のエレメンタルだ。四人のエレメンタルのうち最も早期に「発現」が確認されその存在が認められていながら、その後忽然と消息が途絶えているのはどこかに徹底してかくまわれている可能性が高いからね。そんなことをやりやすいのは教会というのは自然な論法だろう？あるいは……」

「すでに死んでいるか」

「ま、それはいいっこなしでボク達は動かないとね」

「そうだな、つまらんことを言った。すまん」

「そもそも発現をしたエレメンタルがそう簡単に殺されたりするとは思えないけどね」

「そうだろうな。水のエレメンタルに会ったことはないが、私はお前の言葉を信じられるよ」

「ふむ。姿を隠しているのか匿われているのか。どちらにしても水のエレメンタルにもそろそろ動き出してもらわないとな」

「「合わせ月」の日が近づいているからか？」

「そうだな」

「ほかに理由があるのか？」

「だって大舞台の主役を演じるんだぜ？誰でもぶっつけ本番は避けたいじゃないか。だから台本を渡して事前に入念な打ち合わせをしておきたいのさ」

そうつぶやくミリアの真面目そうな顔を見てアキラは苦笑して見せた。
「では聞くが、お前が言うように《真赭の頤》を教会側が狙う、もしくはすでに抹殺したという理由は単なる造反なのか？」
「いや。ボクが得た情報から推測すると《真赭の頤》は多分、正教会……いや、賢者として何らかの掟を破ったんだろう。それは正教会からマズいものを持ち出したか、盗んだか」
「まずいもの？それこそが水のエレメンタル……ではないのか？」
「そっちの可能性がないとは言い切れないけど、僕は違う考えだ。ほら、アレじゃないか？正教会が管理していると言われているお宝……宝鍵（ほうけん）……」
「四龍（しりゅう）を呼び出すと言う、伝説のスフィアか？」
「実際はプリズムらしいけどね。下っ端賢者は見た事もないそうだよ。まあ、四龍か何かは知らないけど、それなりの価値があるものなんだろうさ」
「本当に龍がいるというのか？あくまでも伝説だろう？」
ミリアはテーブルに両肘をつき、手を組んでその上に形のいい顎を乗せると続けた。
「アキラ。エレメンタルも伝説だってことをお忘れなく。宝鍵から龍が出ようが今更驚くものか」
「それはそうだが」
「まあ、どちらにしろ」
「やはり伝説の『合わせ月』は来る、と言うことか」
「龍よりもなによりも一番恐ろしいのは、エレメンタルが伝説通りこうして四人とも存在しているとすると、マーリンすら存在しているかもしれないと言うことさ」
「うむ。唯一絶対神が我々の前に現れる可能性もあるということか」
「マーリンはともかく、エレメンタルも宝鍵とやらも、全部この手に握ってみせるさ。しかし」
「何だ？」

「それにはまだ足りない情報がある」
「何がだ？」
「アキラも知っているとおり、現在流布している伝説や神話には欠落した部分が多すぎる。そこに何か重大な事実が隠されている気がしないか？僕はそれがとても不安だ」
「たとえば？」
「そうだな。例えばドライアドだ」
「ああ、我が国の伝説の始祖だな。確か『一人の子供と三人の子供を産んだ』という記述が謎だと言われているな。三人の子供には名前があるのに一人の子供には名前が伝わっていない。有名な「神名（しんめい）の欠落」だな」
ミリアはうなずいた。
「そもそもルーンの祖、あるいはルーナーの母とも言われるドライアドには謎が多い。中でも一番の謎はその有名な「神名の欠落」だ。君はドライアドの長子に名前が伝わっていないのはなぜだと思う？」
「私は神話学も民俗学もミリアの母上のように考古学も専門ではないからそんなことを考えたこともないが、単純に考えると長い歴史の中で伝えこぼれたと言うところではないのか？たいしたことのない人物だったから特筆されず、やがて名前すら伝わらなくなったという考え方に私は賛同したいところだな。初めてルーンを使えるようになった三人の子供とその末裔については詳しく語られているのはそれぞれに特筆すべき功績があったということだろう？その長子は無能だったかあまりに普通の子だったか……ともかく重要ではなかったという事だ」
「その真逆だということは？」
アキラは肩をすくめた。
「そんな神話時代の話、気にしすぎではないのか？」
ため息とともにアキラはそう言ったが、ミリアの声は真剣そのものだった。
「名前すら伝わっていないのは重要じゃないしどうでもいい凡庸な

子供だったからじゃなくて、逆にものすごく重要だったから、重要すぎて書くと問題があったからとは考えられないか？」

「重要だったから消された、と？」

「よく考えてみろ。歴史なんていうものはその時代時代の為政者が都合の良いように作り上げてきたもの、いわば虚実入り交じった建造物の寄せ集めみたいな物なんだぞ？知られてはまずい柱は抜かれ、窓枠はねじ曲げられ、あってはならない部屋の扉は塗り込められる。それはもう誰でも知っている事だ」

「確かにそうだが」

「ドライアドの第一子が消されたのも同じ理由だとしたら？」

「ミリア」

「だってそうだろう？ウンディーネ、シルフィード、サラマンダ、そのすべての子供について全部名前が伝わってそれぞれにそれらしい逸話が残っているのに、ドライアドの長子だけだぞ、名前すらないのは」

「それはまあ、確かに妙な事実だ。だからこそ「神名の欠落」などと敢えて呼称され、長く論争の種になっている訳だが」

「このボクがファランドール中を探しに探してようやく得た物が『一人の子は四人の子をもうけた。一人の子はその四人の子に四方の番を命じた』という短い既述のみだ。それも見つけたのはシルフィードの首都エッダにあるキャンタビレイ候の私設図書館の古い古い蔵書棚だぞ？王立図書館にある全く同じ体裁の本にはその記述すらないのにだ。不自然にも程がある」

「ふむ。確かにそこまで言われてみれば完全に消さずに一子が居たことだけは書かれているのも不自然だと言えなくはないな。だがミリア、今我々がやろうとしていることにそれが直接関わるような問題とも思えんが」

「そうじゃないかもしれないということさ。ユラトとクランとキュアという三人のルーナーの祖の親であるドライアドという特殊なエレメンタルは一体何の役割を担っていたのか、という事は単なるボ

クの興味なのかもしれないけど、最初に産んだ子に命じた事が「四方の番」だという既述がどうにも引っかかる。三人の子供のもう一人の親の名前は堂々と伝えられているのに一人の子供の親の名前は秘匿されている」

ミリアは今度は手に持っていた報告書をテーブルの上に投げ出すと左手の拳を額の上部にあてながら、席を立ってまた歩き始めた。これはより深く考え事をするときの癖だった。

「すまん。この話を今ここで続けても無意味だね。話題を戻そうか」

「うむ。そう願いたいな」

アキラがうなずくとミリアはゆっくりと話し出した。

「神話の話が出たついでだ。君の現状認識とボクのそれを摺り合わせておこう」

「いいだろう」

「???発現報告の年代がもっとも古い水のエレメンタルはかつて特定寸前まで行ったものの、身柄の確保にあたった我が国の特殊工作部隊がマヌケな事に村一つ代償にしても確保できず全滅し、挙げ句の果てに一体どこに行ったやら……いまだに見つからないとくる。まったくそのとき全滅したグレンス村の人たちは浮かばれないよね」

「同意だ」

「???人物特定までガチガチにできている風のエレメンタルはシルフィードにあり、あまりに身分が高いお姫様のため、基本的に他勢力は接触できない。

???我が国の五大老が水か炎のエレメンタルを確保したという情報も、もちろんない。

???事態を静観していたはずのシルフィードが怪文書だとわかっていて《真赭の頤》を探しているフシがある。もっともシルフィードの軍がサラマンダに入ったのはドライアドの軍隊がサラマンダでつまらぬ動きをしているからだというとらえ方もあるかもしれないけど。ここまではいいかい？」

ミリアは独り言のようにつぶやきながら、そこまで言うとアキラの方を向いた。
「その認識で問題はないな。怪文書かどうかは別問題として、だが」
ミリアは頷くと歩みを止めた。
「そこでアキラ、君がもし新教側の軍師だとして、今の情勢だとどういう立場をとる？」
「なぜ新教なんだ？正教ではないのか？」
「ゲームだと思って今はとりあえず新教側の立場に立ってみてくれ」
「ふむ。よくわからんが前提はミリアが今言った情報だけ、ということであれば」
「うん」
「自軍の戦力を考えても大戦に勝ち残る為には新教会単独ではまず不可能」
「「賢者」と同等の力を持つと言われている「僧正」の存在はどう思う？」
「そんな未確認の物を戦力査定しろと言われてもな」
「うん。じゃあ「僧正」は考えないでおこう。どちらにしろ「賢者」だって未知数だ」
「そうなると、新教としてはいきおい他勢力との提携が必要だ。そして提携可能な相手はまずは四つ。正教会、シルフィード、ドライアド、それにウンディーネ」
「そう。現状ではサラマンダはイコールドライアドと考えていいから省けるね。君の言うとおりだ」
ミリアはいったん立ち止まったものの、すぐにまた部屋をぐるぐる回りながらうなずいた。

アキラはいつになく生き生きとしているミリアを目で追いながら、ミリア独特の頭の整理法とも言えるこの問答を楽しむ事にした。アキラにしてみれば誰でも同じ回答をしそうなその質問に答える事が意味のある行為だとは思えなかったが、ミリアにはミリアなりの構

築法があるようで、それに協力する事については全く異論はなかったからだ。

「こういう軍事的な提携は消去法で行くのが定石だ。となると、まず正教会は消える」

「なぜ？たとえば賢者会や賢者の誰かと通じている可能性はないかい？内部を懐柔して正教会側を一気に内部崩壊させて取り込むなんていう手は？」

「正教会側が現状ドライアドやウンディーネにかなり深く入り込んでいる事実を素直に評価するなら、正教会側には新教会と手を組む理由が見あたらない。賢者であればなおさらそう思うだろうな」

「まあ、そうだね」

「それに軍事的な戦略としてはその可能性はあるが、政治的には正教会と合流することはすなわち正教会に併呑されてしまったというとらえ方しか民衆側はできないだろう？新教会はある意味正教会があることにより存在意義を持ち続けられるわけだから、論理的かつ合理的に完全吸収ができる可能性がなければ正教会と組む目はない」

「政治的にはそうだけど、そもそも新教は正教を廃滅したがっているわけで、正教にしたって新教はただの目障りなハエでしかないからね。ここはもっと単純に考えていいさ。そもそも奴らは裏では殺し合ってる。それが全てだと思うよ」

アキラはうなずいて続けた。

「それも未確認情報だがな」

「まあ、それが確認情報になるのは何十年、いや何百年も後かもしれないさ」

ミリアは呟くようにそう言った。アキラはそれをミリアの独り言として反応せずに話を続けた。

「同じような意味で、ウンディーネと提携することも考えにくいな。ああいう連合国家の場合、トップと連携することは事実上不可能だろう。意味がないと言い換えた方がいい。国全体に対する政府機能の影響力が希薄すぎるからだが。百歩譲って首都島のアダンと連携

できるとしても、そもそも軍事力という観点からはアダンは論外だ。提携に全く意味が見いだせない」

「ウンディーネには豊富な資金があるよ。それにアダンはあれ自体が要塞だ」

「物資の補給先という意味では勿論提携する意味は大きいが、そもそも両教会とも物資の補給については問題があまりないように思えるんだがな」

「そうだね。本丸の正教会を責める直前に、圧倒的な軍事力でウンディーネ自体を殲滅するか、それこそ共和国側と和平条約などを結んだほうが話は早いからな。もともとウンディーネは中立といえば聞こえはいいが、勝った方と取引をするという、言ってみれば日和見主義の国だから、負けそうになるまでは実質的な驚異にはなるまいよ」

「そうだな。それにだいたいウンディーネの高官連中は首都島のアダンから一歩も出ないだろう」

「あの島にいる限り安全だと思っているんだろうね。まあ、そんなことは全然ないぞって言うことをボクがそのうち教えてやるさ」

さすがにアキラはこの言葉には反応した。

「何を企んでる？」

「今は内緒。手品のタネを知りたがるもんじゃないよ」

アキラはため息をつくと話を元に戻した。

「次に消えるのはシルフィードだな。これは国の体質だ」

「シルフィードの王室に近い内部の人間が通じている可能性はどう思う？」

「会話を続けているようだからシルフィードと言えども新教・正教ともに繋がりはあるだろう。だがシルフィード王国というのは他国領土に攻め入らない、という国是を守り続けて数千年の、はっきり言って特殊な価値観の国だ。少なくとも近衛軍と王国軍の両方を押さえてクーデターなどはできない話だろう」

「現国王がいなくなれば？」

「嫡子はエルネスティーネ王女か。まだ若いが側近がしっかりしているだろう」
「王女が傀儡にならないと言い切れるかい？」
「誰の傀儡になるんだ？」
「だから、新教の傀儡さ」
「本気で言ってるのか？」
「シルフィードはその名誉にかけて軍隊が自国を出る事はない、だったら大義名分を作ればいいだけの事だとは思わないか？ボクならそうするよ」
「なんだと？」
「単純な事じゃないか。もちろん、普通に考えると成功する可能性は低いけどね」
「まさか」
「そのまさか、さ。たとえば王女エルネスティーネ・カラティア、すなわち風のエレメンタルを正教会の賢者会が拉致したという事になれば、あのアルヴの軍隊は自国を出てサラマンダ大陸に出兵することはためらわないだろうね。たとえさらったのがどこの誰であっても……例えば提携している新教側の工作員であったとしても、ね」
「なるほど。つまり内部に通じてさえいれば、エルネスティーネ王女を実際に拉致する必要もない訳だな」
「拉致されたことにさえすればいいわけだからね。ついでに言えばアプサラス三世が居ないともっと都合がいい。娘の為にアルヴの軍隊の禁を破るのはけしからん、とか言い出すとややこしいからね」
「まあ、可能性の話はさておき、実際にシルフィードが出兵するにしても表だって宗教と提携する事は考えにくい。というよりも、ドライアドを蹴ってわざわざ国教というものを持たない主義のシルフィードを選ぶ理由が新教側には見あたらない。シルフィードには信徒だってほとんどいないだろう。古い国だ。むしろ潜在的には正教の信徒だけだと言っていい」
「その通りだね」

「要するに、だ。新教としてはドライアドしか連盟の相手はいないわけだが」
「君が軍師ならそういう結果になるね」
「アイク・ヘロンの動きは勿論見張っている」
「やっぱりドライアドは正教を蹴って新教と組むつもりなのかね。ボクとしては正教会と組んでほしいんだけどな。バード庁はあそこに押さえられているようなものだろう？」
「私は新教の軍師ならそろそろ逃げ出すね」
「逃げ出してどこへ売り込みに行くつもりだい？」
「ふむ」
「いや、ボクでも多分逃げ出すだろうね。現状表を向いているカードだけだとそうなるのも無理はないよ」
「ミリア、君は何を知ってるんだ？」
「こう考えたどうだい？実は新教会には切り札がある。その切り札を知らされていない軍師が君だ。さて、どう動く？」
アキラは大きなため息をついた。
「切り札があることがわかっていて、その内容がわからない状態で軍師がどう動けると言うんだ？」
「考えても見ろ。実際問題として、これから起こるであろう未曾有の規模となる大戦争ではえてして軍師などとはそう言う立場でしかない。切り札があるだろうと知り得ていること自体が奇跡的だよ」
「で、あれば話は早い。消去法どころか相手は一つだ」
「うん。聞こう」
「ドライアドだ」
「なぜ？」
「正教会と五大老が通じている可能性は低い。そもそも正教会の奴らは国際法の確認を口うるさく言うだけで政治に口出しをしようとはしないからな。事実、バード庁が五大老に政治的な接触を企てている様子は皆無だ。潔癖なものさ。私に言わせれば不思議でならないがな。奴らがその気になればドライアドなどもうとっくに正教会

側の傀儡政府になっていてもいいはずだろう？」
「そうしない訳が正教会側にはあると思うんだね？」
ミリアはここでようやく立ち止まって、アキラの言葉を待った。
「いや、実はもっと単純な話だろう。戦争を起こしたがっているのはアダンと組んで兵器産業を牛耳っている五大老のアイク・ヘロンと、新時代のファランドールにおける基幹宗教になりたい新教会だけだということさ」
「なるほど」
ミリアは感心したようにうなずいた。
「そこまで単純化できるとわかりやすいな。で、『お相手』のシルフィードはそのあからさまな誘いに乗るっていうのかい？」
アキラは意外だという顔をした。
「お前はシルフィード王国は参戦すると言っていたじゃないか」
「勿論、参戦するさ。いや、させるさ」
「お前……」
「まあ、そのあたりはもう少し慎重に情報を集めないとね。まだいろいろとコマも足りない。それよりそろそろドライアドには動き出してもらいたいんだけどね」
「新教会側とアイク・ヘロンの接触については、もう少し詳しく探ってみよう。一度ヴェリーユあたりに出向いてみてもいいかもしれん」
「それはいいが気をつけてくれよ。ボクとしてはここでアキラを失うわけにはいかないんだからね。危ないと思ったらさっさと手を引いて欲しい」
だが、アキラはミリアの注意には反応せずに、気になっている事を尋ねた。
「連盟の土産として、新教側は何か情報を持っていると思うか？」
「そう思うか？」
アキラはうなずいた。
「それが何かはわからないが、アイク・ヘロンの重い腰を上げさせ

るほどのものであることを願っているよ」
　ミリアはそう言うとニヤリと笑って見せた。
「アイク・ヘロン伯爵か……あいつはサラマンダにここ最近かなりの軍隊を派遣しているし、ウンディーネには以前何年も大使として駐留していたこともある。ウンディーネのいくつかの商港にはヤツの別宅があることはスプリガンの諜報でもすでに調べがついているし、着々と準備は進めているようには思えるんだがな」
「あいつはドライアド自体の新教国教化より先にまずサラマンダをそうするんだろうね。最近サラマンダで新教側の教会建設が増えているのは報告書で確認済みだ。これはその布石だろう。もちろん、ドライアドにも新教会を国教化する準備は進めているんだろうが、いちおう王制であるドライアドはけっこうこれが簡単にできるんだよね。我が国の王家はいまでは象徴のようなものだ。五大老の決定すなわち、王の命令だからね」
　ミリアはそこまで言うと、うれしそうに笑ってアキラの顔をのぞき込んだ。
「その上で五大老なんて組織を排除してあたらしく一人の宰相という仕組みを作るのも、王制である我が国には簡単なことなんだよね」
「アイク・ヘロンの欲には際限がないな」
「あはは。まあ我々デュナン族のどん欲さは常にアルヴの嫌悪の的だからね」
「で、アイクがファランドール全体を巻き込む戦争をすると奴はどうなる？」
「ファランドール大戦という異常事態は組織改編にうってつけだからね。しかも可及的速やかに決定できる。そのどさくさで奴が宰相になって実質的な国家権力を一手に引き込んだら、次は大量の軍隊を投入して……もちろん、新教の力も借りるわけだよね。戦争準備の軍事配備の意味もあるから一石二鳥だし……それでもってゲリラ殲滅の手柄でサラマンダあたりの国家元首になっちゃって、シルフィードとの戦争に勝ったら今度は古代から続く王制シルフィードを

あっさり帝政なんかにして初代皇帝の座についたりするんだろうね。その後はお決まりのドライアドの王家と姻戚関係を駆使し始める。つまりフェリックス……いやファルナ朝ドライアド王エラン五世は大戦後のファランドール混迷の時期に、なぜか若くしてこれもまたどさくさ紛れに病死しちゃうかなあ。そしてそのころには王位継承権についての項目が一部変更されてたりするんだよ、きっと。その辺に向けた布石というか人事的な根回しももうかなり進んでいるんだろう？」

アキラは失笑した。

「確かに五大老は丸め込んでいるようだけど、実際はそう簡単にいくものか」

ミリアはアキラの言葉を受けると冗談めかした話し口とは裏腹に険しい表情で続けた。

「歴史を振り返ればわかるさ。世界は緩やかに変わるんじゃない。変わるときにはあっという間に変わるのさ」

「だが、そういう独裁的な動きを正教会……賢者側は黙って見ていると思うのか？」

「百五人いると言われる賢者だけで一国の全軍隊を壊滅できるという噂を信じるとすれば、正教会がその気になれば抑止力にはなるだろう。ただ……」

「ただ？」

「「合わせ月」さ。今、彼らはそれにしか関心がないように思えるんだ」

「「合わせ月」の伝説に大戦が関与するかどうか、それによる、と？」

「うん。君も知っている通りアイク・ヘロンは五分五分の勝負などはしない。七分かあるいは八分ほど有利だと確信しない限り実際には動き出さないだろう。もうすこし大胆になってもらいたいところだが、そっちはボクの仕事だ。正教会の動きをじっくり観察する暇などないことを教えてやるさ」

「我々の青写真ではシルフィードに動いてもらう必要があるわけだが、シルフィードが正教会との連携はできないとすると」
「あ、そっちはもう考えてある。シルフィードにはどうしても正教会と連盟して、来るファランドール大戦に臨んでもらいたいからね」
「考えというと？」
「それはまだボクの胸の中だけにある秘密の作戦なんだけど、うっかりもののボクはもうさっきアキラにはヒントをしゃべっちゃったじゃないか」
アキラは記憶を辿った。そこに思い当たる会話の流れを見いだした彼は思わず椅子を蹴った。
「おい、ミリア。お前はまさか」
色めき立ったアキラをミリアは両掌を押し出し、苦笑しながら制した。
「アキラ、君は知ってるはずだよ。ボクの手段は目的のためにあるのさ」
「だが、しかし」
アキラは中腰のまま金色の瞳を輝かせながら人なつっこそうな笑いを浮かべる目の前の人物を見て戦慄を覚えた。
（全く、時々この男を敵に回す奴らが気の毒にすら思えるな）
ミリアは「まあまあ」という風にさらに両手をあげてミリアに椅子に座るようにすすめた。

「ル・キリアの方は？」
アキラはゆっくりと腰を下ろしながら話題を転じた。アキラは今回の対面ではむしろこちらの話題の方に興味があった。自分なりの考えはあるにせよ、これについてのミリアの見解を一応聞いておきたいと思っていたのだ。
「あの『白面の悪魔』と『ドール』が揃って討ち死に？我が国が誇るスプリガンに急襲されたとかならまだしも、たかが嵐相手に？」
「たかが海賊も侮れんがな」

「船の動きなど、手足以上に自在に操れるのが風のフェアリー達だよ？まあ、何らかの罠にかかったとするとあり得ない話ではないが、知将ユグセル公爵が簡単に部隊を全滅するようなヘマをするとは思わないけどね」
「うむ。じゃあ、誤認だと？」
「誤認か」
そういうとミリアはふと何かに気づいたように可笑しそうに小さく笑った。
「あははは。まったく君は人が悪いな。アキラはどう思うのさ？」
「ル・キリアは全滅などしない」
「それで？」
「シルフィード側にル・キリアが全滅したという風評が必要だった、と言うことだろう。いや、風評ではなくて公式な事実、と言うべきだろうな」
「うん。でもなぜ？」
「ル・キリアを自国に対しても他国に対しても隠密に使いたい事ができた」
「そうだな。ボクもまったく同意見だよ。そのうちわざとらしくユグセル公爵やドール提督の国葬なんかがしめやかに行われるんだろう」
「シルフィード王国の名を出せない作戦があると言うことだな」
「《真赭の頤》の探索なんていうマヌケな目的じゃないことを祈るがね。もしそうならシルフィード王国を我々は過大評価しすぎている事になる。もしくは全く別の意図が国内で動いているということだが。まあ、我々の予想通りだとして、感心するのはユグセル公爵だな」
「というと？」
「彼女は自領のだた一人の相続人だと聞いている。要するにユグセル公爵家の最後の一人ということだね。シルフィードの法律だとユグセル公爵の死後、領地はすべてアプサラス三世の直轄領に召し上

げられる訳だよ」
「なるほど。そこまで何もかも投げ打って当たるべき事ができたということか」
「いや、できたのではなくて、その時が来たと考えるべきだろうね。公爵が軍人の道を選んだ時にすべて計画はされていたと言うことさ。すべてに徹底しているところがあの公爵らしい」
「決まっていた事、か」
「ユグセル公爵にしてみれば、決行の日がやってきたと言うところだろう。シルフィードにとってみれば、と言うことかもしれないが」
「で、それは一体？」
「あのシルフィードが考えている事はちょっとわからんよ。デュナンにはとうてい理解できないことだけど、自国の利権や為政者の欲望だけで軍隊が動くなんてことはないんだからね。だからこれだけは言えるだろう。ドライアドの首脳陣が考えているようなファランドールの制圧に向けた行動なんかじゃないってね。もっとも」
「うん？」
「ちょっと気になるから、風のエレメンタルについての情報収集は密にしておいてくれないか？」
「王女と関係があると？」
「ユグセル公爵の動きが、『合わせ月』がらみではないとは思うが……まあ、世の中に絶対なんてないから本当に全滅したのかもしれないが、その辺の情報は引き続き頼む。我々が今当たるべきはどちらにせよエレメンタルの動向だからね」
「シルフィードもエレメンタルを探し出したとしたら？」
アキラの問いに、ミリアはニヤリと笑った。
「捜索については協力するさ。もちろん」
そう言ってウィンクをして見せた。
「つまり、急がねばならないと言うことだな」
アキラの返答にミリアは満足そうにうなずいた。
「そうさ。中途半端とはいえ、もうシルフィードは動き出している

みたいだからね。それにどちらにしろエレメンタルを二人確保した陣営が今度の大戦の鍵を握ることになる。エレメンタルを探している奴らはみんなそう思っているはずさ」

「そうだな。それはそれとして」

アキラがサイドテーブルのピッチャーを持ち上げてみせると、ミリアはうなずいた。

「まず、飲むか」

「とりあえず、今日の所は本当に存在していたに違いない四人目のエレメンタルが記述されているスチャラカ文書に乾杯といこう」

「そして、やがて訪れる新しいファランドールに」

「ついでで悪いが、我らがエスカにも乾杯しておこう」

「それはいい」

グラスが鳴る音がして、部屋は若者達の快活な笑いに包まれていった。そしてそれはアキラが何の疑問も疑いも持たずにミリアと酌み交わした最後の機会となったのだが、もとよりアキラはまだ知るよしもなかった。

# 第十五話　シェリル・ダゲット

アプリリアージェ達を残して宿を出たエイルは大市が開催される広場の外側の路地を一周してみることにした。これはエルデの癖のようなもので、ルーナーの目で見た主要な目標の周りをとりあえず確認してみない事には落ち着かないのだという。町に入った時にまず外周付近を確認したのも同じ理由からだ。ただ、今回は普段と違って調査の内容について、エルデは饒舌だった。

【いつもやってる散歩がてらの調査目的は大まかに言うて二つやな】

一つは地理的な把握である。有り体に言えば「いざ」という場合の逃げ道をある程度想定しておきたいという思いがあった。

もちろんそれはエイルとしても理解できる。ファランドールの町々、特に城塞に覆われた市街地は外敵侵入に備えて入り組んでいるところが多く、袋小路になっている道も多々ある。万が一逃げた先が袋小路になっていたら……ということだ。町の外に出る為の目印も欲しい。当初エイルが舌を巻いたのは、一度ざっと歩くだけでエルデが町のおおまかな全体地図の様なものを頭の中に構築してしまうことであった。もともと膨大なルーンを全て暗記している程であるから記憶力の良さには疑う余地はないが、その空間把握と構築能力に関してエイルはエルデの右に出るものを知らなかった。もちろん、フォウで暮らしていた時間を含めて。

そしてもう一つはルーンサークル……精霊陣の有無を確認することである。だが、エイルは今までそのルーンサークルとやらにお目にかかった事がなかった。だが、我が身を守る為に必要な儀式なのだと言う事は、エルデに言われるまでもなくエイルは理解していた。特に今回ルーンサークルについてエルデがあえて言及したのは、昨日のカレナドリィの言葉があったからだと言うことは想像がついて

いた。つまり、精霊陣は間違いなくこの町にあると言う事である。

【ルーナーは、必要に応じて精霊陣、ルーンサークルを使うんやけど】

『ルーンサークル？』

【もともとは力の弱いルーナーが己の力を増幅させるためのもんや。ルーンを唱える際により多くの精霊達の注意を集め、その力をより多く得るためやと言われてるんや。一説には精霊の目を釘付けにする為の模様とも言われているけど、まあ、そんな解釈はどうでもええことやな】

『精霊履行……ルーンの増幅装置か』

【ま、ただそれは物でできたいわゆる装置とか機械みたいなもんやなくて、術者によって描かれた図形とか文字の組み合わせたものなんやけどな】

『なるほど。フォウにも魔法陣とか呼ばれる数字や文字が丸や四角なんかのいろんな図形と組み合わされて書かれた不思議な円形があるけど、そんなものがそこかしこにあるって言うことか？』

【ルーンサークルがそこかしこにあってたまるか。恐ろしい】

『だよな。そもそもルーナーは少ないって話だったよな』

【簡単なもんやったら子供でも作れるけど、本来の意味の精霊陣をちゃんと書けるようなヤツはそうそう居てへんからな。そやからこそ、ルーンサークルをもし見つけたら何のための物かを見極めんとアカンわけや。俺達が狙われているのならば、それは新しいもんやろ？】

『まあ、確かに』

【まあ、古い新しいだけでは単純に決めつけられへんけど、地面に描かれてるようなものは言うたらその場限りですぐに使う為のもんやけど、たとえば町の広場なんかに古くから彫り込まれて描かれてるものは】

『ものは？』

【その土地にルーナーが居って、いざと言うときの防衛用に設置されてるものやと考えてええかも知れんな。防衛用言うてもそれ自体は攻撃ルーンかもしれへんけど、少なくともその町にルーナーが居るか、過去に居たか程度はわかる】

『カレンの話だと過去に居たと言うことだけど、もしルーンサークルがあったらどうするつもりなんだ？』

【精霊陣の内容を見て、危なそうなヤツはとりあえず無効化しとかなあかんやろ】

いくつかの町で固定的に設置されているルーンサークルを見たことがあるというエルデだが、この直後、広場の外側の路地で二人が見つけた物は今までとは明らかに違うものだと言う。もちろんエイルは違いなどわからない。

それが初めて見るルーンサークルだった。

「それ」をめざとく発見したエルデは、精霊陣を注視しようとするエイルを制した。さらに、「立ち止まるな」とも告げた。

『どうしたんだ？なんだか円が四重か五重になってて中にかなり細かい書き込みのあるルーンサークルだったような気がするけど？』

【アレは……ちょっとヤバ目な匂いがプンプンする……あれを作ったのがカレンの言うランダールを守るためのルーナーやとしたら、ソイツ、とんでもないヤツかもしれへんな】

『どういう事だ？』

【とりあえず、そこのカフェに入って、あのルーンサークルが見える所に座ってくれへんか。ちょうどええから食事の続きをしよ。リリア姉さんのせいでほとんど食べられへんかったしな】

『そうだな。味はわからないにしても、栄養はちゃんとつけとかなきゃな』

【楽しい時間とは言われへんけどな】

『まったく、味覚がないっていうのがこんなに辛いものだとは知ら

なかったよ』

【それは言うな】

『まあ、言葉にすると悲しさ倍増って感じだもんな』

エイルは言われたとおりに通りにテーブルをおいているカフェの座席を物色し、運良くルーンサークルが描かれたアンティークショップの看板が見える位置のテーブルにつくことができた。程なく注文をとりに来た中年の女給仕に軽い朝食を頼むと、視界の中にその精霊陣を置いた。もちろんそれを見ている事を他人に悟られないように、注視は避け、体の正面には置かない座席にしていた。

一般的な朝食の時間を少し過ぎていた事もあって、そのカフェには一段落付いた後ののんびりした雰囲気が流れていた。エイルの横の大きめのテーブルには大市目当ての客であろうか、にぎやかな一行が陣取っていて、そこから少女達のやりとりが耳に入ってきた。

「ねえねえ、アップルタルトのおかわりをしてもええかナぁ？」

『珍しいな、古語だぞ』

【ウンディーネからの客やろな】

「それは絶対に食べ過ぎよ」

「こんなのたいしたことなイって」

「ダメですよ。ほら、言うではないですか。『腹は八段目まで』って」

「ネスティさ……、いえ、ネスティ、八段もあるとすでに非常に重篤な状況です」

「そんなことより、ルネ。今あんまり食べ過ぎると、大市で素晴らしくおいしそうなお店があっても、あまり食べられなくなって後悔してしまいますよ」

「でも、ここのタルト美味しいねんもン」

「ここのタルトが気に入ったのでしたら、明日もここに食べに来ればよろしいのでは？」
「うーん」

隣のテーブルのそんな喧噪をよそに、エルデはエイルに細かい指示をしていた。
【あの看板はもうええから、店の中とか壁とか天井とかにそれらしい精霊陣がないかさりげなく見渡してくれへんか】
エイルはそれとなく体の向きを変えたりしながら店の中や商店が並ぶ通りの看板などに目をやっていた。
『さっきヤバ目って言ったよな？どういう事だ？』
【精霊陣は力のないルーナーが自分の能力を少しでも底上げするのに使うのがそもそもの目的や言う話はしたな？これは努力して深い知識は持ってるけど、悲しいかなエーテルを集力する能力の低いルーナーの場合や】
『ああ。「俺は大ルーナーやから精霊陣の力に頼る必要はあらへんねん。わっはっは」と自慢して高笑いしてたのも覚えてる』
【いらんことまで覚えんでええ】
『いや、お前の説明はなんかこう「いらんこと」の方が印象に残るんだよな。なんでだろうな』
【もうファランドールの事何も教えへんで】
『いや、精霊陣は固定された空間……つまりその精霊陣がある場所でしか効果がないから主にハイレーンが使うと効果的な手段でもある、って話もちゃんと覚えてるって。で、それで？』
【ま、そう言うわけでちょっとした質問なんやけど。簡単な話や。力のないルーナーが自分の力を増幅することができるっちゅうことは、や】
『？』
【力のあるヤツが使ったらどうなるか、っちゅう話やな】
『ものすごく威力が増す、ということか？』

【いわゆる威力の話だけやのうて、色々な応用がきくっちゅうわけや。複雑な法も施せる。たとえばその場に精霊陣を直に発動するルーナーがおらんでも、あらかじめ特殊な精霊の履行をその精霊陣に対して行っておくと、任意の日時になったら初めてその履行が発効する、とかいう技が使える】

『それって、すごいな』

【まさに離れ業、やな】

『そんなの、たとえば時限爆弾みたいなものも簡単にできるって事じゃないのか？』

【いや、そやから「簡単」になんかでけへんって。そこまでの芸当ができるルーナーなんてファランドール中探しても一握りやろ】

『そうか。びっくりさせるなよ、まったく』

【いや、そうなんやけど、「あれ」はまさに「それ」やと俺は思う】

「なんだって！」

エイルは思わず声を上げて立ち上がった。その反動で椅子が後ろに倒れ、その音が店中に響いた。

【あほ！】

『すまん』

幸い店の外にある卓に着いていたこともあり、エイルのその妙な行動はそれほど目立つことはなかった。だがさすがに先ほどからにぎやかな隣の一行はエイルの声と椅子の音で一瞬静まりかえった。

エイルはその静まりかえった隣の卓の「ご一行様」にゆっくり顔を向けると、頭を掻いて精一杯の愛想笑いを浮かべてみせた。

「あはは。すみません、ちょっと考え事に熱中してて」

一行の中でそのエイルの姿をじっと見ていた栗色の癖毛に薄茶色の髪留めをしたデュナンの少女が、エイルと同じように椅子を蹴って立ち上がった。

自分に向けられている尋常ではない表情に、今度はエイルが驚く番だった。

「ルル！」
珍しい鳶色の瞳を大きく見開いた少女は、そう叫んだ。
『え？』
【ルルって……おいおい、まさか】
『まさかって。お前、心当たりがあるのか？』
【いや、猫の名前みたいやな、って】
『ーーあのな』

立ち上がっていたのはつい先ほど馬車からランダールに降りたった呪医に随伴する一人、シェリル・ダゲットだった。
彼女は椅子に躓き、卓にぶつかりながらも、そんなことはものともせず一直線にエイルの方に駆け寄った。
その目にはみるみる涙が溢れたが、それをぬぐうこともせず、シェリルは棒立ちになっているエイルに飛びつくと、背中に両腕を回して思い切り抱きしめた。
エイルばあまりの出来事に硬直したままで、体全体を使った見知らぬ少女の突進頭突きを無防備に受けて、当然の結果として後方に……仰向けに床に吹き飛ばされた。

シェリル・ダゲットは、その名の通りメビウス・ダゲットの妹である。
彼女は兄のような戦闘員ではないが、すでに全滅したフィリスティアード隊の後方部隊に所属していた。つまり、補給や食事の係である。直接戦闘に参加したことはないが、兵士を支える仕事をする事で副官である兄メビウスや隊長であるシエナの力になっているという自覚はあった。兄と同様にシエナ・フィリスティアードを尊敬しており、他国の傀儡となっている今の政府の目をなんとか覚まして母国の再建をすることは自らの命をかけるのに値することだと考えていた。

ただ、できれば戦争はしたくなかった。

漠然と、多くの人間が平和に暮らせる世の中が来ればいいと思っていたが、それを手に入れる為に戦う事の矛盾を知りつつも、次の時代を夢見ていたのだ。

シェリルは厳しくも優しい兄が好きだった。歳が離れていた事もあり父代わりとして自分を育ててくれた兄は彼女の一番の自慢でもあった。なぜなら他の解放組織の間でも多くの尊敬を集めていたシエナ・フィリスティアードの副官を務めていたからだ。シエナに信頼されると言う事は素晴らしい事だと思っていたし廻りからも当然のようにそう言われていたから、自然に兄を誇りに思うようになっていった。

早くに戦争で両親を亡くしたダゲット兄妹は結果としてその戦争を自ら終結させることをせず、両親が守ってくれた自分たちの生を誰かを殺す事に使っているという矛盾に苦しみ悩む事もあったが、必要悪という定義で自分を納得させながら前を向いて生きていた。

彼女達のような立場の人間は多かれ少なかれシェリルのような矛盾と悩みを抱えているものなのだろう。だから彼ら、彼女達にはその心を慈しんでくれる存在が何より大切だった。その一人が兄、メビウスだったのだ。

メビウスは巨漢で髭面。一見豪放磊落な風情であったが、細かいことによく気が付く繊細な神経をしており、しかも洞察力に優れた策士でもあり、シエナでなくとも絶大な信頼が置ける人物なのは間違いのないところだった。

そのメビウス以外に、シェリルにはもう一人、大事な存在があった。ルルデ・フィリスティアードである。

副官であるメビウスの妹のシェリルと、シエナの弟のルルデの仲は単なる仲間という関係を超えており、すでに結婚を誓い合った仲だった。もっとも素直に感情を表す術をまだ知らない年頃同士ということもあり、それはただ甘い関係などというよりはむしろケンカ

相手と呼んだ方が相応しいような関係ではあったが……。

そんなシェリルにとって、一年前のアクラムで起こった戦いは人生を一変させるものだった。

隊長であるシエナの死は何よりつらく悲しかった。ある意味、死ぬことなどない人だと思っていたからだ。兄メビウスが肩に大きな傷を負って担架に乗せられて帰ってきた時も泣かなかった気の強いシェリルだが、さすがに布にくるまれたシエナの亡骸を見たときは堪えた。

そしてその直後に婚約者の死を告げられた時、堪えていた涙はもうシェリルの意思ではどうにもならず、頬を滝のように伝って流れ落ちた。そして自分でも何を言っているのかわからないような叫び声を上げながら泣きじゃくった。流れ出したこの涙は一体いつ涸れるのだろうかと自分でも驚きながら、嗚咽は一晩止まることがなかった。

そう。頭ではルルデ・フィリスティアードの死を理解していたのだ。ただ、感情がそれを受け入れることを拒否し続けていた。

「生きていたのね。私、ずっと生きているって信じてた」

自分が体当たりで吹き飛ばした相手の上に馬乗りになったままでそう言うと、シェリルは呆然としている下敷きの少年の胸に倒れ込んだ。

「良かった」

そう言うと顔をエイルの胸に埋めて、泣き出した。

「驚いたな。まさか……」

声を発したのは一行の引率者とおぼしき四十がらみのひげ面の長身のアルヴの男、ハロウィン・リューヴアークだった。

自分に馬乗りになったまましがみつくように胸に顔を埋めて泣きじゃくるシェリルとそれを呆けたように注視しているハロウィン一

行とを見比べながら、エイルはというと……途方に暮れていた。

『えーっと』

エイルは初期の混乱をようやく脱し、現状把握の為に脳神経を総動員して事態の収拾を検討し始めた。

【びっくりやな】

『猫と間違えたのかな』

【いっぺん医者に診てもらえ】

『冗談に決まってるだろ』

【冗談言うて余裕ぶっこいている場合か？】

「いや……あの……その……オレ、そのルルとかいう猫……じゃなくて人？じゃないんだけど」

そしてようやく口を出た言葉がこれであった。

エイルの言葉は確かに事実を述べていた。

「え？」

シェリルは顔を上げて自分が下敷きにしているエイルの顔を見下ろした。

「あちゃ」

「うーむ」

その時、エイルの背後で聞き覚えのある男達の声がした。

「どうやら俺達、ちょっとばかり遅かったみたいですね」

「うむ」

「というか、一番間の悪い時に来ちゃった気がしますね」

「今は状況がよくない。ほとぼりが冷めるのを待って出直すか」

「いやいやいや、さすがにそれはマズいでしょ。人として。というか、俺達がなんとかしないとほとぼりなんて冷めませんよ」

頭上でやりとりする暗い声の主を確認する為に無理な体勢で振り返ったエイルの目に映ったのは、自分を見下ろすように立っている

ファルケンハイン・レインとアトラック・スリーズの長身の二人組だった。
「ーーシェリル、しっかりしなさい。その子はルルデ・フィリスティアードじゃないんだよ」
「シェリルのその様子を見ると、リリアお嬢さんがこだわるのも無理のない話なのだな。本当にそっくりなのか」
二人はシェリルをいたわるように、交互にそう声をかけた。

【なんや、やっぱり知り合いか】
『今日合流する予定だって言ってたのはこの人たちだったのか』
【っちゅーか、ルルってルルデ・フィリスティアードの略かいな】
『またルルデか』
【略しすぎやろ】
『いや、名前は一文字しか略してないだろ。というか、突っ込むのはそこじゃないだろ』

「アトルさん……それにファルさん？」
シェリルは流れる涙と鼻水を袖でぬぐいながら、不思議そうな顔で眼下のエイルと頭上に現れた二人とを見比べた。
「何を言っているの？この子はどこからどう見てもルルデです。私のルルデ・フィリスティアードです。だいたい私がルルデを見間違えるわけありません」

『「この子」って言うなっ！』
【いや、お返しするわけやないけど、突っ込むのはソコやないやろ。というか、この子はどう見てもお前より年上やからその呼び方はアリや】
『ないよ』

アトラックは顔を曇らせて頭を掻くと、ファルケンハインの方を

見やった。ファルケンハインはアトラックの視線からあからさまに目をそらすとため息をついた。

「こういう最悪の場面はまったく想定してなかったんだがな」

「副司令。言っておきますが立場上逃げられませんよ。司令はこの場に居ないんですから、この状況における全責任は副司令にあります」

「アトル、お前にはこの後色々と『簡単な』任務を考えておくことにした」

「えええ?悪いのは俺ですか?」

「運命を呪え」

「いや、そんなとんでもない即答をしないでくださいよ。どう考えてもこれはリリアお嬢様のせいでしょ?」

「往生際が悪いぞ」

小声のやりとりの後、ファルケンハインは食い下がるアトルを振り切り、シェリルに歩み寄って隠しからハンカチを出してシェリルに渡した。シェリルは首を振ると、自分の隠しから小さなハンカチを取り出してみせた。ファルケンハインはその大きめのハンカチを差し出したまま首を振った。

「そんな小さなハンカチでは拭ききれないだろう?」

「どういう、ことですか?」

大柄なファルケンハインはかがむと、シェリルの栗色の頭を優しく撫でた。

「ルルデ・フィリスティアードはもういない。この少年の名はエイル・エイミイ。サラマンダ人ではなくウンディーネ人で、我々の旅の仲間なんだ」

店の奥で落ち着いた顔で成り行きを見守っていたハロウィンの顔色が変わった。それはファルケンハインがエイルの名前を告げた直後だった。

しかし、その変化にはその場の誰も気づかなかった。

シェリルはエイルをまた見つめた。
困惑……いや、シェリルを哀れむように見つめるエイルに、シェリルはおそるおそるという感じで声をかけた。
「ルルよね？私のルルデだよね？」

【幼なじみか】
『辛いな』
【まあ、俺たちが辛がる必要はないやろ】
『だけど』
【まあ、気持ちはわかる】
『どうする』
【お前さんが考えろ。そもそも夕べから話がややこしくなってるのは、お前さんがそのルルデ・フィリスティアードにそっくりで瓜二つで双子みたいで本人同然っちゅうのが原因なんやからな】
『おいおい、無茶言うなよ……って、それ全部同じ意味だろ』
【あんないじらしい娘さんを泣かしたらアカンで】
『いや。あの人、泣きながら突進してきたんだぞ！』

エイルはため息をつくと、シェリルに首を振った。
「のっぽのレインさんが言ったようにオレの名前はエイル。ウンディーネのエイル・エイミイだ。生まれた時からずっとね」
「うそ」
「嘘じゃない。よく見てくれ。そのルル、いやルルデ・フィリスティアードという人じゃない。言っておくけど生き別れた双子とか親戚とかそういうのでもないからな」
エイルは一気にそこまで言うと、ふうっと大きく深呼吸をした。
シェリルの様子をうかがうとくしゃくしゃになった泣き顔が見えた。
その顎からポタポタと胸に落ちる涙が目に入ると、エイルは顔を背けてさらに続けた。
「君には悪いけど、昨日からそこの二人を始め、そのルルっていう

ヤツに間違えられてこっちは結構、いやかなり迷惑してるんだ。だからもうこういうのはうんざりなんだけど」

そう言った後で、今度はファルケンハインとアトラックの方を睨んで続けた。

「あんた達、こういう事になるって昨日のうちに解ってたはずだろ？何で言ってくれないんだよ」

「いや、こういう微妙な問題は司令……じゃなくてリリアお嬢様の預かりだから」

アトラックはすまなそうにそう言って肩を竦めて見せた。

ファルケンハインは暗い顔をエイルに向けると正直に告げた。

「いや、正直に言うとこういう事は俺たちもどうしたらいいのか解らなくてな。つまり」

「うやむやになっていたって事か？」

「うむ。実はまあ、簡単に言ってしまえばそう言う訳だ。そもそもその……司令……いやリリアお嬢様がこの件からは逃げ腰でな。かなり積極的に先延ばしにしていたようだ」

「おいおい、そりゃないだろ？」

【まったく。こっちは本当にいい迷惑やな。まあ、不幸中の幸いなんは、そのルルデってやつがどうしようもないお尋ね者とかやなかった事やろな】

『おい、いくらなんでもそれは言っちゃマズいだろ』

【ここだけの話や。どちらにせよ、ソイツは死人のくせに生きている俺等に迷惑かけすぎやな】

シェリルはそれでもエイルをじっと見つめていた。

「ウソよ。見れば見るほどルルにしか見えないわ」

「確かに。私の目で見ても他人のそら似と言うにはあまりに似すぎている。たとえ双子であってもここまでそっくりなのも珍しいと言っていいだろう」

シェリルの声に呼応したのはハロウィン・リューヴアークだった。
「先生はルルデの事をご存じなのですか?」
ファルケンハインの質問に、ハロウィンは小さくうなずいた。
「少しの間、請われて医者としてシエナ隊に同行していた事があるんだ」
「なるほど」
ハロウィンはシェリルに向き直ると続けた。
「でもね、シェリル。辛いだろうが、本人じゃないのは確かなようだ」
「ですが、先生」
シェリルの白い顔はすでにぐちゃぐちゃになっていた。それはファルケンハインの予言通りにすでに自分の小さなハンカチでは役に立たない状態といえた。そんなシェリルの、すがるような眼差しを受けとめる事ができず、ハロウィンは気の毒そうに顔を伏せ、ヒゲを撫でた。
「シェリル。世の中には自分に似ている人間は三人いると言われている。納得できないような不思議な事だってたくさんある。この人は本当に偶然にルルデにそっくりに生まれたんだろうね」
「ルルはデュナンじゃないのよ?先生は瞳髪黒色の人間が何人もいるって言うの?しかも同じ顔なのよ?」
シェリルはハロウィンにそう言い聞かされても、なお何かにすがるようにエイルの顔に自分の顔を近づけた。そして思い出したように右耳の上で髪をとめていた薄茶色の髪飾りを外すと、それを両手で包んでエイルに差し出した。
「これ、覚えているでしょう?あなたが私に結婚を申し込んだ時にくれたものよ」
エイルは目の前に差し出された薄茶色の緻密な木目の髪飾りを見つめた。そこには八重に咲いた百合の花が丁寧に浮き彫りにされていた。
「ずっと私に隠れて彫ってくれていたでしょう?私の大好きな、八

重山百合の髪飾り」

『オレ、この花を知っているよ』

【フォウにもあるんか？】

『薬草なんだ。フォウではカンゾウって言う。オレ、この花の根をよく採りに行った記憶がある』

【ーーリリエデール】

『え？』

【古代ディーネ語で、この花をそう呼ぶんや。ファランドールでもリリエデールは花も茎も根も花も薬用に使われてる】

『そうか』

「これをもらった時、私がどれだけ泣いたか、あなたは覚えているでしょう？」

エイルはゆっくりと首を左右に振った。

「悪いけど、オレ、こんなに器用じゃないんだ」

エイルの言うとおり、シェリルが差し出した髪飾りの浮き彫りは見事なものだった。ルルデが自分で彫ったというのなら、器用なだけでなくその絵心もまた侮れない水準にあると言って良かった。

『なあ？』

【なんや？】

『ファランドールには「花言葉」ってあるのか』

【「花言葉」？】

『ないのか』

【なんや、それ？】

『いや、いいんだ』

「そんな」

シェリルは髪飾りを握りしめた。

「そんなはずない。あなたがルルデじゃないはずがないっ」
「リリエデール」
エイルは髪飾りを見つめながらそうつぶやいた。
「え？」
「この花の名前だよ。古代の言葉でリリエデールって言うんだ」
「リリエデール？」
「ああ。君がリリエデールの髪飾りで結婚の申し込みを受けていた頃、オレはウンディーネで古代語とか、そういう事を勉強していたと思う。悪いけど、オレは本当に君が探しているルルデ・フィリスティアードじゃない」
だが、シェリルは引き下がらなかった。
「お願い。じゃあ、右肩を見せて。ルルの右肩には大きな傷痕があるのよ。昔、カーイとつまらないけんかをしたときについた傷なの。覚えてない？私、その時傷の手当てをしてあげたじゃない。怪我はすぐ治ったけれど、大きな傷痕が残ったわ」

【ちゅうことや。助かったやん、見せたりや】
『いいのか？』
【問題あらへん。堂々と見せたり】
『肩は見せても大丈夫だったか？』
【肩くらいなら気をつければ解らへんやろ。どっちにしろおまえさんの体にはもう傷なんてないんやから】
『確かに「傷」はないよな』
【ふん】
『わかったよ』

「あのさ」
エイルは困った顔をして頭を掻いた。
「右肩は見せる。だからそろそろこの状態を何とかしたいんだけど」
ずっとシェリルはエイルに馬乗りになったままの状態だった。シ

ェリルはハッと我に返ると顔をまっかにしてバツが悪そうに飛び降りた。
「ご・ご・ごめんなさいっ」
エイルはそのシェリルの様子を見て苦笑すると、ゆっくりと立ち上がりながら言った。
「肩を見せたら納得してくれるんだよな?まあ、どっちにしろオレは絶対ルルデじゃないから」
「お願いだから、見せて」
エイルを見つめるシェリルの目からまた大粒の涙がボロボロとこぼれだした。涙と鼻水で滑舌が悪い状態で続ける。
「ぞれを見でルルじゃないって納得じたら、あなたにはもう迷惑はおかげじばぜん。もうあなだの前で二度ど泣ぎばぜん。だから」
そう言うと、シェリルの腫れた真っ赤な目からまた涙がどっと溢れて、我慢の限界がきたかのように声を上げて泣き出した。
年上に見えるシェリルのその様子はまるで小さな女の子のようで、エイルは見ていて辛かった。
エルネスティーネがたまりかねたように後ろからシェリルをそっと抱きしめた。ルネは二人の様子を見てハロウィンの顔をみやったが、ハロウィンは小さく首を横に振った。
エイルはファルケンハインとアトラックを交互ににらみ据えた。二人はエイルに済まなそうな表情をした後に……あからさまに視線をはずした。

『こいつら』
【一流の軍人もこういう事にはなすすべなしってところやろなあ。リリア姉さんも軍人としては優秀なんやろうけど、ことこの手の問題についてはどうしようもなかったってのはホンマやろな】

二人の態度にエイルは大きなため息でこたえると、やれやれと言った感じで着衣を緩めて、右肩を少し出してみせた。

「これでいいか？」
シェリルはしゃくり上げながらエイルの肩胛骨の下あたりをじっと見つめると、おそるおそる指を伸ばした。
エイルはそれを見て頷いた。それを受けてシェリルはそっと肌に触れると、肩をなで回し始めた。
本来、エイルの右の肩胛骨あたりには親指の長さほどの傷があった。周りの皮膚よりも濃い色になった小さな傷痕だったはずだ。それはエイルが幼い頃、剣の稽古で肩胛骨を折った際に一部欠けたかけた骨の破片を取り出すために手術をした事があったのだが、その痕跡だった。だがエイルがファランドールで初めて目覚めた時にはきれいさっぱり消え失せていたのだ。エルデが治癒のルーンを使い体にある傷はすべて消し去ったのだという。
おかげで小さなホクロや虫垂炎の手術痕、さらには足にあったはずのやけどの痕なども綺麗サッパリなくなっていた。

一同は息を呑んで肩をなで回すシェリルの動向を見守っていた。
傷がないのがわかってはいたが一番気が気でなかったのは当然ながら当事者であるエイルだ。意味もなく動悸が激しくなっていくのを居心地悪く感じていた。
シェリルはエイルの右の肩胛骨をさらにそっとなぞると、今度はすっと二の腕の方へ指を滑らせた。そしてゆっくり目を伏せて、大きく深呼吸をした後、また声を上げて泣きだした。涙をぬぐうその右手には、薄茶色の髪飾りがしっかりと握られていて、エイルはそれを見て思わず目をそらした。

『判定はどうなんだ？』
【この泣き虫女め、肩見せたら二度と泣かへんって言うたやろ！】
『おいおい、お前が興奮するなよ』
【俺はめそめそ泣く女は大っ嫌いやっ。しかも嘘つきやろ？】
『この子はめそめそ泣いてるんじゃなくて、号泣してるんだが』

【やかましい！！】
『ああ、もう、わかったわかった。よしよし』
【ウチはだだっ子か！】
『勘弁しろよ』

シェリルは自分の意志では必死に泣き声を押さえようとしているようで、徐々にではあるが、収束に向かっているようだった。
押さえようとしても漏れてくる嗚咽と少しの時間戦った後、なんとか勝利したシェリルは、ようやく言葉をしゃべれるようになった。そして涙声ではあったがしっかりとこう言った。
「ありがとう。ごめんなさい。傷はありませんでした。あなたがルルじゃないことは解りました。でも、もう少しだけ……もう少しだけ、涙が出てしまうのは許して下さい」
シェリルのその言葉で一行は安堵と悲しみの混じったような複雑な空気に包まれた。

ハロウィンが、ようやく肩の力を抜いたエイルに小声で声をかけた。
「ルルデ・フィリスティアードという少年の事は？」
もう知っているのか？という問いであろう。
エイルはうなずいた。
「夕べ、彼らからだいたいの事は……ただ、今日そいつの幼なじみがやってくるなんて事はまったく聞かされてなかったんだけどね」
「そうか。シェリルの事はどうか許してやって欲しい。ルルデは戦場で亡くなったんだが、実は彼女は遺体とは対面してなくてね。だから彼女としてはルルデの死をまだ受け入れられないんだよ」
そしてさらに付け加えた。
「それに、君もさっき聞いたようにルルデとシェリルは幼なじみというだけでなく、特別な関係だったようだからね」
「婚約者ってこと？」

「わかってやってくれ。彼女の心の中にあるルルデの姿はいまだに生きて元気にしているルルデだけなんだよ。つまり誰より彼の死を受け入れにくいだろう」

エイルはこの金髪で長身の髭のアルヴは何者だろう？という疑問を持ちつつも、ハロウィンの事後収集には感謝した。その状況を見てもおそらくはルルデとシェリルに深い関わりがある人なのだろうという事はわかった。

【おい、エイル。こいつには油断しなや】

『え？なんかすごくいい人そうじゃないか』

【まったくお前さんはいつまでも】

『ああ、もう。簡単に人を信用するな、だろ？わかってるさ』

【簡単に、やない。絶対に、や】

『それは人生お寒いこって』

【今後、このオッサンの言動には注意や。一筋縄ではいかんヤツっぽい雰囲気がビシビシ伝わってくるわ】

『……そうかなあ』

【リリアねえさんだけでも俺達にとっては大変やのに、もう一人油断でけへん人間と一緒かいな。予想以上に辛い道中になるかも、やな】

『お前らしくないな。泣き言か？』

【やかましいっ】

エルネスティーネは泣きやまないシェリルの髪を優しくなでてやった。シェリルはもう泣かないと約束した手前があってか、声を殺したままそのエルネスティーネにしがみついて涙を流した。エイルにはその姿は辛すぎて注視できなかった。

その様子を傍らのティアナ達が心配そうに見守っていた。彼女たちにもどうしていいかわからない……いや、どうしようもない事なのだと言うことがわかっていたからこそ、気休めの言葉などはかけ

られなかったのであろう。

ややあって、ティアナがファルケンハインの方に歩み出た。

「挨拶が遅れたが、私はシルフィードおうこ……」

ティアナがファルケンハインに対して自己紹介をしようとしたとたん、ファルケンハインはそれを遮った。

「あ、いや。お互い固い挨拶はなしだ、白髪のお嬢さん。それにここはどちらにしろ場所がちょっと悪い」

ティアナはファルケンハインに言われてハッと気づいた。このあたりは身に染みついてしまった軍人の性と言えるだろう。意識をして気をつけてはいたのだが、同じ軍人に出会うと、習性が理性を覆い隠すようだ。

「め、面目ない」

ティアナはとたんに赤面したが、すぐに素直にわびた。ただし、

「お嬢さん」という言いぐさにはちょっとムっとした。

「気にするな。俺たちはこう言うのが日常だから慣れてるだけだが、普通の者は体に染みついた習慣はなかなか変えられんよ。とにかくこれからしばらくは旅の仲間だ。お互いに仲良くやろう」

ファルケンハインは珍しく気さくな感じでティアナに声をかけると、ハロウィンの方に向いて会釈した。

「改めて。お久しぶりです、ハロウ先生」

「相変わらず元気そうだね、ファル君もアトル君も」

ハロウィンは帽子にちょっと手をあてて挨拶を返した。

「長旅、お疲れでしょう。今晩の宿は一応確保してありますのでいったんそちらでお休み下さい」

ハロウィンはありがとうといって、ファルケンハインに目で会釈してみせた。ファルケンハインの方はそれに応えて軽く会釈をしてみせた。

「君たちの方はなかなか楽しそうな出会いがあったみたいだね」

ハロウィンはエイルとファルケンハインを交互に見つめながら軽

い感じで声をかけた。
「まあ、その辺の話はお茶でも飲みながら、リリアお嬢様を交えてゆっくりと……」
「紅茶好きのお嬢さんは元気かな？彼女が喜ぶと思ってエトワール産のいい紅茶をたっぷりと仕入れてきたんだが」
「おお。そんなもの見せたら、あの人は小躍りして喜びますよ」
アトラックは真面目な顔でそう言ってうなずいた。
彼の頭の中ではきっとアプリリアージェが実際に小躍りしているに違いないのだろうな、とハロウィンは想像した。
「そいつは、歓迎されそうだな」
そして「ははははは、」と屈託なく笑うと、シェリルの肩をポンと軽く叩いた。それは、「大丈夫か？」という合図だった。
シェリルはうなずいて、顔を上げた。

そのやりとりを見ていたエイルはシェリルと目があったが、どう反応していいか解らずに、目をそらすしかなかった。
「まさかとは思うが……作戦上極めて重要な用件があるからと言ってわざわざ遠回りになるエトワール経由の船に乗ったのは、その紅茶の為か？」
低く押し殺したような声がハロウィンの耳に届いた。声のする方を見た。ティアナだった。
ハロウィンはティアナと目を合わせる前に帽子のつばをグッと下ろして顔を隠すと何事かをごにょごにょと言ってそそくさとその場を立ち去ろうとした。

と、まさにその時だった。
カフェの店内から複数の悲鳴が聞こえた。
そして次の瞬間には、店があっという間に炎に包まれていた。
「離れろ」
「あぶない」

ファルケンハインとティアナが同時に叫んだ。
ティアナは隣にいたエルネスティーネの手をとろうとして躓いた。足下には店内から泡を食って飛び出してきた商人とおぼしき男が勢いあまって倒れ込んでいたのだ。彼ら一行が居た一角は店の外とはいえ、いくつかのテーブルや椅子、壁、それに看板などの障害物が多く、逃げ出せる方角が限られていた。悪いことにその方角は店の出入り口から外に出てくる客達と合流する形になっている。いきおい、彼らは火災に驚いて店内から飛び出してきた客達とぶつかる格好になった。

「ネスティさま」
エルネスティーネを追いかけて走り出したティアナだが、もみくちゃにされる中でエルネスティーネとの距離は離れていった。あわてて客を押しのけようとしたため、彼女の行為は店から出る客の流れを遮る形になったために数で勝る怒濤のような力負けて地面に叩きつけられる形になった。
（くっ……しまった）
こういう大勢がパニックになっている状況で倒れることはすなわち無事では済まない事を意味していた。立ち上がろうにももうどうしようもない。何人かが折り重なってティアナの上に倒れ込み、足や頭は何度も思いっきり踏みつけられた。
―（姫は……姫は大丈夫なのか……誰か）
その時、強い力で誰かが肩を抱いてティアナを起こした。そして次の瞬間には自分の体重が存在しなくなったように体が軽くなり、状況把握をするより先に倒れた場所から少し離れた所に離脱していた。ティアナの体を抱く力強い腕の持ち主は、ファルケンハイン・レインだった。
（く……）
本来、窮地を助けてもらった訳であるから、ティアナはここでファルケンハイン・レインに対して感謝の感情がわき上がってもよか

ったはずだった。だがティアナはまず自らの力のなさを呪った。根っからの軍人だからであろう。無事で良かったという安堵感を自分があまり認めていない相手に助けられたという屈辱感が上回ってしまっていた。

後日、ティアナ自身が「軍人とは救いようのない愚かな存在だ」とエイルに語ったというが、おそらく彼女がそういう感情を持つに至った発端はこの出来事であろう。

「エリーさまは無事だ。安心していい。それに知ってのとおり、彼女は風のフェアリーだ」

「大丈夫か？」と最初にティアナに問いかけなかったのはファルケンハインの思慮深さである。彼はティアナが近衛隊の精鋭である事をすでに知識として知っていた。すなわち特殊部隊であるル・キリアに所属している人間に反感に近いものを抱いていることがわかっていたからのである。ティアナのプライドを傷つけないようにファルケンハインが選んだ注意深い第一声だと言えるだろう。

ティアナはその性格上、いたわりの声をかけられた際に食ってかかる言葉は用意していたが、ファルケンハインの報告に答える言葉がとっさに思いつかなかった。ただ、自分がバカな事を言わなくて済んだということに対して安堵していた。だからこそ、素直に感謝の言葉が出たのであろう。

「面目ない。感謝する」

聡明なファルケンハインはそれに対しても何も答えなかった。代わりに事務的に告げた。

「ともかくここを離れる。君の怪我の具合が客観的にわからないから念のためにもう少し無礼を許してくれ」

言うが早いが大柄なアルヴのティアナを軽々と抱きかかえると、ファルケンハインは飛ぶようにその場を離れた。それはティアナの返答を待つつもりなど全くない行動だった。

一端口を開けて何かを言いかけたティアナはすぐに言葉を飲み込む

しかなかった。そしてなぜか今まで感じたことのない感情がわき上がってくるのを不思議な気持ちで感じていた。

――（こうして誰かに守られるというのも、そう悪いものではないな）

「ひどく踏まれていたようだが、自分で立てるか確認してみろ」

ハロウィン一行が遠巻きに火災の店を不安げに眺めて集まっている所で合流すると、ファルケンハインはティアナを両腕に抱きかかえたままで声をかけた。それは本当に事務的な口調だった。ティアナにとってはそれがありがたかった。

「問題ない。足首や膝の関節部分には痛みはない。打ち身程度だろう。下ろしてくれ」

ファルケンハインはうなずくと、抱きかかえられた状態からゆっくりと地面に足が下ろせるようにティアナの体を傾けていった。

じれったい……とティアナは思いつつもファルケンハインの気遣いは痛いほど感じていた。それよりもティアナが驚いたのはもう少しだけこのアルヴの腕に抱かれていたいという思いが心の中にあったことだった。

その感情を振り払うようにティアナは途中からファルケンハインの腕をすり抜けて自分で下りると、自立してネスティの方をみやった。だがエルネスティーネの方が先にティアナを見つけて、走り寄ると抱きついてきた。

「よかった。ティアナ。私とっさにティアナを助けられなくて」

「ご無事でなによりです」

ティアナもエルネスティーネをしっかりと抱きしめた。

「どこも痛くありませんか？こんなに汚れて」

エルネスティーネはティアナの服についた土を叩きながら、いたわった。そんなエルネスティーネをティアナは制した。彼女にしてみれば立場が逆なのである。

「大丈夫です。私が人一倍丈夫なのはご存じのはず。あれくらいは何ともありません」

「ダメです。口元が腫れて……あ、血が滲んでいるではありませんか」
「この程度、ケガでもなんでもありません。すぐに治ります」
「いいえ、ダメです。後でハロウ先生にちゃんと見てもらわないといけません。『注意一秒、ケガ一丁あがり』です」
ティアナはエルネスティーネの言葉に複雑な笑いを浮かべた後、気配を感じてそばにいるハロウィンを見やった。そしてエルネスティーネに向き直るときっぱりとした口調で言った。
「それは死んでも嫌です」
「まあ、ティアナったら……」
エルネスティーネはふくれっ面をしてティアナをすこし睨んで見せた。ハロウィンはティアナのその言葉を聞くと小さく笑ってこう言った。
「ネスティ、その様子じゃ私の出番はないよ。火事場でも大したけが人はいなさそうだ」

ティアナの様子が気になるのか、エイルがファルケンハインとティアナの方へ近寄ってきた。
そしてティアナの唇の傷をじっと見つめると掌を広げてティアナの前につきだした。
「な、何だ?」」
「俺の指は何本ある?」
「はあ?」
「問題なしっ」
「え?」
それだけ言うと、エイルはさっとその場を後にした。残されたティアナとエルネスティーネは狐につままれたような顔でお互いに顔を見合わせた。
「あらっ!」
ティアナの顔をみたエルネスティーネが小さな叫び声を上げた。

「どうしました？」
「ティアナ……もう傷が治っていますわ」
「ええ？」
エルネスティーネにそう言われて、ティアナは慌てて手で唇をぬぐってみた。
痛みはない。手に血もついていない。
ティアナはハッとして顔を上げると後ろ姿のエイルをみやった。
（いやいや）
一瞬浮かんだ考えを振り払うと、今度はハロウィンの方を見やった。燃え続けている家の様子を見ているハロウィンはティアナの視線には気づかない様子だった。
―（なるほど、呪医か。今回は一応借りて置こう。それにしても少年の行動は何だったんだ？）

「火が収まりませんね」
店の近くで様子を見ていたアトラックが戻ってきて状況を告げた。
「いきなり店全体が燃え上がったような感じでしたが、何が原因でしょうねえ」

『エルデ』
【ん？】
『変な奴だと思われただろ、アレじゃあ』
【まあ、別にええやん】
『まったく。それからあの火事、例の魔法陣……ルーンサークルと関係があるのか』
【不自然な火事やっちゅうのは言えるけど、そこまではわからへんな】
『なんだよ、頼りないな』

そうこうしている所に、店の前の方から大声で叫ぶ女性の声が聞

こえてきた。
「誰か、お願いです！」
一行は一斉に声のする方向を見やった。
「中に、まだ中に人がいるんです。助けてください」
しかし、燃えさかる宿は火勢が一向に衰える気配を見せず、いつ崩壊が始まってもおかしくはない状態だった。

# 第十六話　水のフェアリー

＞ｉ１３０８２―１８３１＜

『おいエルデ！』

【わかった。しゃあないな】

声に反応したエイルはかけだした。

「おい、どうするんだ？」

背後からアトラックの声が聞こえたが、もちろんエイルは無視した。

ハロウィンは遠ざかるエイルの後ろ姿を見ながら横にいたルネ・ルーに声をかけた。

「ルネ」

「うん、任セて」

ハロウィンに名前を呼ばれたルネが、すぐさまエイルの後を追ってかけだした。

『たよりにしているぜ、賢者さま』

【フン、誰にものを言ってるんだか】

「逃げ遅れているのは何人だ？」

遠巻きにしている避難客と野次馬をかき分けてエイルは大声で尋ねた？

「店の主人と、その母親です」

助けを求めていたのは店の給仕をやっているやせぎすの中年女だった。すがるような目で声の主の方へ顔を向けたが、声の主であるエイルが子供だとわかった瞬間にその目は失望の色に染まった。

「おい、子供が無茶するんじゃない」

「危ないから、消火隊が来るのを待て」
「気持ちはわかるがなあ」
周りから口々に声が聞こえた。エイルはそれを当然のように無視して店の方を向いた。その時周りの野次馬には彼が一言二言つぶやいたようにも見えた。そして彼らはいつの間にか儀仗を手にした黒い髪の少年が意を決したように建物の中に飛び込んで行く姿を見送ることになった。

炎と煙に包まれた店内に息を止めて入ったエイルはあたりを見渡した。煙が濃くて人影を捜すどころではなかった。熱で体がすぐにも発火しそうだが、エルデのルーンに守られて実際にはダメージはない。だが、エイルの知る限り、この防御ルーンはそれほど長くはもたないはずだった。
エイル、いやエルデの口から再び短いルーンが詠唱されると、それに合わせて儀仗が水平に一振りされた。と、思った瞬間には店内は水浸しの状態で、今度は煙に取って代わって水蒸気が真っ白な闇を作り出した。
エルデの行為はまさに一瞬の出来事だった。
この一瞬の出来事を説明するのは難しいが、炎と煙に包まれていた店内の情景が、瞬きすると火は消え、そのかわりにあたりは水浸しで、至る所から炎の代わりに水蒸気があがっていたとしか言いようがなかった。
少なくともその店を取り巻いていた人々の目にはそう映ったのだ。いったい何が起こったのかを理解できる人間は当然ながらいなかった。

【ち。加減しすぎたようやな。まだ火の手があるんか】
ほとんど消えたはずの店内だったが、いくつかの場所でまだ炎が上がっているのが見えた。エルデが儀仗を構えて再び何かを唱えようとしたその時、今度は火の手が残っていた所に忽然と沸いた水の

固まりがぶつかるのが見えた。

【え？】

『ん？』

エイルは水でできた固まりが飛んできた後方を見やった。

店の外にはさっきの一行の一人である、赤毛の小さな女の子が立っていた。そして次々に腕を伸ばしてどこかを指差している。店内に目を転じると、まだ複数の白い煙が出ているところに次々に水球がぶつかっている状態だった。空中で発生した水の固まりがふくれあがり、くすぶっている炎に的確にぶつけられているのだ。

大小の水の固まりが現れては店内を鎮火していく様をエルデはぼーっと眺めていた。

「行っけー！」

ルネのかけ声に併せて空間に出現した水球はぷよぷよと浮遊したかと思うと炎の上で重力の力で落下していった。

『まるで管弦楽団の指揮者のようだな』

【このお嬢ちゃん！】

『水のフェアリーか』

【っつうか、感心して眺めてる場合やなかったな。店の親父とそのオフクロさんを探さな】

『ああ。思わず目的を忘れて見とれてたな』

エルデが建物の奥に駆け出そうと足を一歩踏み出したとき、店内に異音が走った。それは何かが裂けるような、あるいは割れるような、ギシギシともバリバリとも聞こえる大きなものが軋んでいる音だった。

その音を聞いてエルデの足は固まった。

【まずいっ】

振り返ったが、出口までは遠い。
逃げて間に合うのか？
それよりもほかの方法をとるべきか？
エルデは躊躇した。
奥に人がいることはわかっている。だが建物が崩壊しつつあるのは確かだ。

『おい、この子を』
【あ、ああ、そうやね】

エイルはエルデに店の中に入り込んで来たルネの保護を促したのだ。しかし、ルネは左の掌を大きく広げてエルデに突き出して見せた。
「ウチが行く。早う逃げテっ！」
「ええ？」
思いもしなかったルネの言葉に虚を突かれたエルデだったが、そのエルデの返事を待たずに、ルネは転がるように店の奥に駆け込んだ。
「おい、待てっ」
ルネの背中を追って一歩踏み出したとき、轟音が響いて建物が崩れ落ちてきた。

「大丈夫か？」
二人の子供が中に入ったのを見送った人々は互いに心配そうな顔を見合わせていた。
「誰か、助けてあげて」
悲痛に叫ぶ女の声が耳に届いてはいたが、火勢がどうしようもない。エルデとルネは内部の火を鎮火したものの、二階部分や外に面した炎の面倒まで見ていたわけではなかった。救助の為の経路確保が目的だから、自分の周りの炎を消して煙を排除し、呼吸できる空

気を確保する事を優先したのだ。

野次馬達からは大きな水蒸気があがるのは見えたが、内部の様子は詳しくはわからない。

消火隊の到着をいたずらに待つだけの自分たちにいらだちを感じ始めていたところへ、建物から絶望的な音が響き、次いで宿の二階の一部が崩れ落ちるのを目撃することになった。

「崩れるぞ！」

「こりゃダメだ」

人々が絶望を口にする。しかし、手の施しようがない状態は変わらなかった。いや、むしろ悪化していた。内部に入ることはもはやどうあがいても不可能だろう。

「ハロウ先生！」

そんな中で平然と腕を組んだままで成り行きを見守っているハロウィンに、ティアナがこらえきれずに声をかけた。

「ハロウと呼んでくれたのはうれしいけど、先生はいらないよ」

だが、ハロウィンの反応は落ち着いたものだった。

「もう倒壊します、ルネが……」

「あの子は大丈夫。だが」

ハロウィンはそう言うとファルケンハインの方を見た。

「私見ですが、エイル・エイミイが考えなしに突入したとは思えません」

「そうか」

二人の平然としたやりとりにティアナは切れた。

「二人とも何をのんきに構えているんですっ、私が行きます」

そう言って体を動かそうとしたが、片手を誰かに強く捕まれて動きが止まった。ティアナは振り返って自分の右手をつかんだものをたどった。

そこにはファルケンハインがいた。
「今から行くのはそれこそ無謀だ。今は待とう」
「しかしっ！」

「崩れたぞ！」
そう誰かが叫んだ。
その直後に、炎に包まれた宿は轟音を響かせて大きく崩れ落ちた。
そこここで悲鳴があがった。
すぐ近くでも……。シェリルが耳を押さえてしゃがみ込んでいた。
それを見てエルネスティーネが駆け寄り、同じようにしゃがんでシェリルの肩をだいてやった。

ティアナはそれを見て手首を掴んだままでいるファルケンハインにまた文句を言おうとした。その時、周りの空気が変化したように感じた。これ以上は熱気で近づけないという場所にいたティアナだが、その熱に焼かれた空気がサッと冷えていくのを感じたのだ。
冷えるといっても勿論寒くなるなどという劇的な変化ではなく、熱の温度が下がったように感じたのだ。崩れ落ちても火勢自体は衰えるどころか、より炎が高くあがっているくらいだ。火の勢力が衰えて温度が下がったとは考えられなかった。
「大丈夫だよ、ティアナ。もう少しだけ様子を見ていよう」
ハロウィンがティアナを振り返ってそう言うと、視線を外さずに小さくうなずいてみせた。ルネは大丈夫……そういう自信があるということのようだった。

ティアナは思い返す。
ルネ・ルーは水のエレメンタル。
エレメンタルだから大丈夫だというのか？この状況でも？
いや、火に飛び込んだのはルネだけではない。あの黒い目の子供はどうなのだ？

右手をつかんだままのファルケンハインを見た。しかし、彼は何も答えずに静かに目を伏せただけだった。
「おいっ」
声をかけた時、またもや轟音がした。

【ああっ】
エルデはルネを追いかけるどころではなくなった。一瞬のうちに何かを唱えたが、つぎの瞬間には彼が居た店のホールは落ちてきた二階を構成する部材で埋め尽くされ、空間が消滅していた。

【ふーっ】
『動けるのか？』
【幸い、この柱の直撃だけやったから防御の回数制限内で収まってる】
『で、動けるのかって聞いてるんだ。火が回っているし、下手すると酸欠か一酸化炭素中毒で死ぬぞ？』
【急かしなや】

エルデは倒れ込んで柱の下敷きになっている状態のまま、衝撃で少し離れたところにある儀仗を見やった。
「来たれ、ノルン」
そう呼ぶと、数メートル離れたところにあった儀仗が一瞬でエルデの手に握られていた。
「エラスティアダーレス」
儀仗を握ってそう唱えると、エルデの周りに白い光が放たれた。
いや、それはよく見ると光ではなく、炎だった。赤くはない。白い炎だ。その白い炎が上がると、エルデの周りの木材や壁土などがあっという間に消滅した。エルデは圧倒的に高温の炎をルーンで呼び出したのだ。それは木材などは一瞬で消滅させるほどの高温の炎

だった。
『なるほど』
【この前ドライアドの兵隊に使ったヤツよりさらに高位のルーンや。消耗が激しいけど、しゃあないな】
『それより、あの子』
【いや、もうムリやろ。俺らもあきらめて脱出するで】
『……くそっ』
【しゃあない。水のフェアリーやからって火を消しに来たんやろうけど……いや。うん、しゃあないんや。それより】
『それより？』
【どう考えてもこの火事はおかしいで。火の周りも異常に早いし、そもそも家屋崩壊するのも早すぎる。この程度の火事やのに数分で崩落とか考えられへん】
『それって……』
【ああ、誰かが仕組んだんやろ。それも、ルーンか何かを使てる可能性が高い】
『俺たちを狙って、か？』
【それこそわからへんな。狙われたんはル・キリアか、あの今日来た連中か】
『そうか』
【ともかく、出よ。助けられへんかったんは残念やけど、もう引きずりなや】
『わかってるさ』

瓦礫の中に出来た空間を出口の方に広げようとしてノルンを構えた時、エルデは奇妙な感覚に襲われて身構えた。

【え？】
『うん？』
エルデが小さくルーンを唱えるのと、その天変地異が起こるのは

ほぼ同時だった。いや、天変地異とは言い難い。なぜならその異変が起こった範囲はきっちりその焼け落ちた宿屋の体積と等しかったからだ。

エルデは水中に居た。厳密に言えば熱湯の中にいた。ただし、熱湯には触れてはいない。妙な空間に取り込まれていた。そこに水…いや湯はあるのに手を伸ばしても触れられない。もちろん普通に呼吸もできる。

「よかった、無事ヤってんね」

後方で声がした。聞き覚えがある声だ。

「え？」

振り向くと、そこには赤毛の小さな女の子が満面の笑みを浮かべて何事もなかったかのようにたたずんでいた。

「無事ヤで。宿の人も助かった」

「え？」

【えっと】

『どういう、ことや？』

【えーっと】

『おい』

「とりあえず、ここ出ヨ」

赤毛の少女、ルネ・ルーはそう言ってエルデの手を取った。すると熱湯の幕のようなものが一斉に床に広がり、あたりは水浸しになった。

「ふふふ」

ルネは戸惑うエルデを見ると可笑しそうに笑うとその手をひっぱり、当然のように出口に向かって歩き出した。

そのとき、エルデ達と入れ違いに、鎮火を確認した消火隊と思われる屈強な若者が数名、店の中に入ってきていた。
「無事か？」
二人の姿を見つけた先頭の男がエルデに訪ねた。
だが、エルデよりも先にルネが答えた。
「大丈夫。宿の人も奥に無事でおるデ。気ぃ失ってるけどケガはないと思うワ」
「そうか。あれで助かったとは信じられんが、兄ちゃん、水のフェアリーなんだな」
「延焼も食い止めてくれて助かった」
「もう大丈夫だ。あとは俺達がやる。安全なところに避難してくれ」
「ありがとよ、兄ちゃん」
消火隊はルネを怪訝な顔でチラリと見てから、銘々エルデにそう声をかけて奥に走っていった。
説明をする暇も、いや一連の出来事を説明することが出来ないエルデは、彼らの飾らぬ賞賛と感謝の言葉を居心地の悪い気分できいていた。ルネはそんなエルデに何も言わず、手をつないだままでにっこりと笑ってみせた。

「おお、よく見りゃ夕べの英雄のアンちゃんじゃないか。あんた水のフェアリーだったんだな」
「いやいや、驚いたぜ。でも助かった。外回りの後処理は俺達がやるから、この場消火隊と俺達に任せな。おっつけ加勢も来るしよ」
通りに出ると、店先で見知った顔がエルデ達を迎えた。昨夜、蒸気亭で弓を番えていた自警団の二人だった。

【お言葉に甘えて退散しよ。これ以上目立ちたくないし、長居は無用や】
『そうだな』

「じゃ、後は頼んだ」
「ああ、今日も蒸気亭に泊まるんだろ?後で一杯おごらせてくれや」
そう男は厳つい髭面でエイルにウィンクして見せた。
「ただし、ヨーグルトだぜ」
「はは」
エルデは引きつったような顔でぎこちない笑顔を浮かべると、今度は逆にルネの手を引いて小走りに通りを抜けた。エルデ達に気がついた数名の野次馬に声をかけられたが、何も答えず、振り向かずに近くの路地に飛び込むと、大回りをして野次馬の集団の後ろに出た。

「おーい、オヤジがいたぞ。おっ母さんも無事だ」
「今タンカが行く」
店の奥からの呼び合う声が聞こえた。

『ふう』
【ホンマに助かったようやな】

エイルは安心するとその場を後にしようとしたが、まだルネの手を握ったままだったことに気づいた。横合いのルネを見ると、エイルを見上げてとにっこり笑いかけてきた。
「やっぱり兄ちゃんはルルデとは別人ヤね。ルルデは水のフェアリーとちゃうもン」
「お嬢ちゃんは水のフェアリーか。さっきのはすごいな」
「『お嬢ちゃん』ヤのうて、ルネ・ルーや。ルネでええよ。それよりウチもやけど、お兄ちゃんもなかなかのもんやワ。建物を壊さへんであの火を一瞬で鎮火できるんやモん」
「それはどうも」

『って言うか、この子は建物を壊して鎮火するつもりだったのか?』

【つっこむ所はそこやないやろ。建物ぶっ壊すほどの強い能力をその子が引き出せるっちゅう事やろ。さっきの瞬間水槽状態といい、底知れんガキンチョやな】

『それ、おまえにしてはすごいほめ方だな』

【ま、まあ、あの程度の力の水のフェアリーならそこそこおるやろ】

『ふーん。お前があの時あっけにとられて固まったほどだから、俺はものすごい力なのかと思ったんだが』

【あ、いや、まあ、それほど多くはない……かな】

『どちらにしろ、お前の水芸に比べてもたいしたものだよな』

【誰が水芸やっ。つーか、確かにあれほどのフェアリーは珍しいわ。ふん】

『今度は開き直りかよ』

【あーあー、そうやとも。俺のは所詮水芸ですよ。こんなガキんちょの足下にもおよびまへん。へなちょこですんませんでしたっ】

『いや、そう開き直られても』

【冗談はともかく、確かにこんな豪快で精密な技が出せる水のフェアリーは見たことない。いや、聞いたこともない】

『へえ、お前がそう言うとすると、そりゃ最大級のほめ言葉だな』

【誰が水芸やねん】

『は？』

「おーい、気をつけろ、乾いたところからまた煙が上がりだしたぞ」

誰かが叫んだ。みると確かに数カ所から太めの白い煙があがっていた。

木材建築の火事はやっかいだ。表面上いったんは消えたものの、内部まで水が浸透していなければ熱で乾き、すぐまた発火する事はよくある。

【これでも水芸言うんか】

エルデはエイルに心の中でそう言うと、例によって小さく何事か

を口の中でつぶやいた。
「ヴェルダーリャ　クドフェルカスタ　リス」

「うおっ」
火事場を取り囲んでいた野次馬から一斉にどよめきがあがった。
それもそのはずで、空中に突然巨大な水の固まりが五つか六つ出現したのだ。それはまるで小さな池の水がそっくりそのままの状態で浮かんでいるような情景だった。

「グラヴン」
それを確認すると、エルデはまた小さくつぶやいた。するとその声に呼応するように、空中に浮いていた水の塊が突然浮力を失って、崩れるように落下した。
ドシャッという大きな水音がしたかと思うと、くすぶり始めていた建物全体が再び水浸しになった。
同様のことが、五回、六回と続き、空中に浮かんでいた水塊がすべて火事の建物に降り注いだ。建物はもちろん水浸しで、煙の立っていたところからは水蒸気しか上がっていなかった。ただ、あまりに大量の水がいっぺんに降り注いだため、あたりの道は少しの間、川のようになり、小さな叫びを上げる野次馬たちの足下を濡らした。

【どや？】
『どや？って。いや、いい。あれだ。前からそうだと思っていたんだが、今こそ是非言わせてくれ』
【うんうん。言うてみ。言うてみ】
『お前、本っ当にガキだな』
【なんやてっ！すごいやろ？ものすごいルーンやろ？さっきのガキにもひけをとらへんくらい強力で精緻な力やろ？おまけにあのガキと違ってこっちはキチっと見せ物的な要素まで取り入れて、効果と見た目にこだわった、まるで芸術のような】

『はいはい。お前の負けず嫌いには心底恐れ入ったよ。見ろ、この女の子も呆れてるだろ』

エイルの言うようにルネは目を丸くして水浸しの火事場を眺めていたが、やがてエルデに視線を戻すとまたもやそばかすだらけの顔に満面の笑みを浮かべて言った。

「いやいや、ホンマにたいしたもんヤわ、偽ルルデのお兄ちゃん。ウチの弟子にしたってもええデ。スジはええし、ウチの指導を受けたら相当なモンになると思うデ。えへへへ」

「な……」

『偽ルルデって』

【突っ込むのはソコやないっ】

『いや、そこしかないだろ?』

【ちゃうやろっ!】

『どうする?弟子にしてくれるそうだけど?』

【悪いが俺は自分より能力の劣る師匠はとらん主義なんや。というよりルーナーがフェアリーの師匠もってどうすんねん?そんなん前代未聞や。賢者連中に知れたらええ笑いもんや。つーか、今の誰にも聞かれてへんやろな?】

『混乱するなって』

【混乱なんかしてへんっ。つっこんでんねんっ!】

「おい、あれはどういう事だ?」

ファルケンハインはアトラックに声をかけた。自分と同様に彼もエイルが火災を鎮火する様子を見ていたからだが、その質問にアトラックが答えられるはずもなかった。

「いや、そんなことをオレに尋ねられても」

「答えを期待しているわけではない」

「そりゃ、どうも」

「さっきの鎮火と今の派手な演出はルネの仕業だとしても、最初に中の火を消したのは時間的にどう見てもルネじゃないな」
「エイル・エイミイって炎のフェアリー……のはずじゃなかったでしたっけ？」
「炎のフェアリーが何もないところから大量の水を出せるのか？」
「そこはそれ、賢者さまだからファランドールに百五個ある便利な神具」とやらで何でもできるんじゃないかなあ、なんて」
「バカな」
あっけにとられると言った表現がぴったり来る様子の二人のやりとりを聞いていたハロウィンが尋ねた。
「あの少年が炎のフェアリー？」
「だと思ったんです。夕べは炎を上手に使って攻撃してましたから」
「詠唱はしてなかったのか？」
「ええ。少なくとも詠唱してルーンを使っているようには見えませんでしたね」
ファルケンハインは蒸気亭でエイルが繰り出した炎の術の様子を説明した。
ハロウィンはそれを受けて振り返り、改めてエイルを見やった。そこではルネが手をつないだままなにやら楽しそうにエイルにしゃべりかけている様子が見て取れた。
「しかし、彼はどう見てもルーナーだろう」
エイルの動きを見ていたハロウィンがファルケンハインに声をかけた。
「いや、それはないはずなんですが」
「と、いうと？」
ハロウィンはファルケンハインをいぶかしげに見やった。
「炎も水も使うなら、フェアリーのはずはない。ルーナーでしかありえないだろう」
「いえ、彼は走りまわりながらどんどん炎を出せるんです。それはもう、次から次へと。さらに剣も使えますしね。アトルの言ったと

おり、詠唱している様子はないんです。少なくとも夕べはそうでした。ですからおそらくルーナーではありません」
「術を使っているときに空間座標軸を固定してない？」
「ええ。申し上げた通りです」
「ふむ」

【うーん。水のフェアリーがおるって知ってたら、もう少し炎のフェアリーのふりができたんやけどなあ】
『そのウソを突き通す言い訳とかは考えてるんだろな？』
【言い訳なあ。そろそろ飽きたかな】
『おいおい、『突き通す』ってのはたった一晩かよ』
【あと、炎を抑えるだけやったら、より強い炎を使って鎮火することもできてんけど……どこに人がおるかわからんかったしなあ】
『今更遅い』
【言い訳、言い訳。やっぱ、別にもうええかなー】
『お前が言い出したんだろっ！』
【そやったっけ？】

「君の言葉が本当なら、彼はフェアリーではないしルーナーでもないということになるんだが」
「ええ」
「ええって。複数の属性の能力を、自由自在に動き回りながら使えるなんていうのは……要するに彼は今まで聞いたことのない珍種の生物の類ということか？もしくは、神か？」
「あるいは凄腕の手品師か、ですね」
ファルケンハインとハロウィンの話題に割って入ったアトラックのチャチャ入れにハロウィンは苦笑した。
「だいたい一体彼は何者で、どうして君たちと一緒にいるんだ？」
「それは後で詳細に説明しようと思っていましたが……実は彼はその」

ここで、ファルケンハインの声はかなり低くなった。そばにいたティアナはいぶかしげにそのやり取りに耳を立てた。
「マーリンの『賢者』なんです」
「なんと？」
「なんと！」
ハロウィンとティアナは異口同音に驚きの声を上げた。
そこへルネ・ルーが駆け寄ってきた。
「すごいで、すごいで。あのお兄ちゃんはかなりすごいフェアリーや。強力な戦力ヤで」
「ルネ。お手柄だったね。ケガはないかい？」
ハロウィンがすぐにねぎらいの言葉をかけた。
「うん、大丈夫ヤ」
「でも、最後のアレは蛇足だったな。必要以上に力を使っちゃいけないよ。目立つからね」
「最後のアレはウチやないヨ」
ルネがそう言うとハロウィンの目が細まった。
「まさか、あの子がやったのかい？」
ルネはうなずいた。
「信じられん」
ハロウィンがルネから視線を外して顔を上げると、そこにはエイルがバツの悪そうな表情で佇んでいた。
ファルケンハインはルネの言葉でエイルの能力にまた驚愕してはいたが、それよりも佇むエイルの、そのバツの悪そうな表情が、まるでいたずらがばれた子供のそれのように思えて思わず目を細めた。
―（あれで『賢者』だというのだからな）
「賢者？」
ファルケンハインの心中を読んだ訳ではないだろうが、ハロウィンはそう独り言のようにつぶやくと、改めてまじまじとエイルの姿を見つめた。ウンディーネ風の何の変哲もない旅人の姿だ。儀仗も

護身用の短剣も持っていない。本当にただの子供にしか見えなかった。

もちろん、瞳髪黒色《どうはつこくしき》であることは除いて。

「賢者だからと言って、このファランドールの法則を曲げることは不可能だ。フェアリーは自らの属性の能力しか使えないし、ルーナーはルーンを詠唱し始めたら空間座標軸を固定し、一端詠唱したルーンが履行終了するまで一切その場を移動することはできない」

「はあ」

「ならばどちらかが『マーリンの徴』の力か」

「はあ」

ファルケンハインは我ながら間抜けだとは自覚しながらも、曖昧にそう答えるしかなかった。もっとも、ハロウィンの方は殆ど独り言のようではあったが。

「賢者って、正教会の、あの？」

ハロウィンの言葉が耳に届いたルネは、不思議そうにそうつぶやくとハロウィンを見上げて、その視線の先にあるエイルへと目を転じた。

「ただのフェアリーやなかったンか。ひょっとしてあの偽ルルデのお兄ちゃんがウチらが探してる賢者ナん？えらい早よう見つかったヤん」

ルネの問いかけに、アトラックはきわめてまじめな顔をして答えた。

「うーん、どうだろうな。本人は「真赭の頤」だなんて名乗ってはいないけどね」

「うん。名前はエイルやったよね」

「それは現名《うつしな》だよ、ルネ。どちらにしろ彼はアルヴでも年寄りでもないしね」

「そうヤね。どう見てもまだ人生駆け出しのガキんちょヤね」

「ルネがそう言うと何となく素直に聞けない俺がいるんだけど」

「せやかてウチはアトルよりは大人なんやモん」

「ーーまあ、それはいいとして、あいつは禿げてもいないよ」
「フサフサやねえ。いや、ボウボウって言うたほうがええかモ」
「以上の観察を元に推理すると、ヤツは「真赭の頤」とは別人だな」
「そうやネぇ」
「そうだよなあ」

アトラックとルネのやりとりを聞きながら、ハロウィンは豊かなヒゲをなでると独り言のようにつぶやいた。
「まあ、だが……」
そしてゆっくりと近づいてくるエイルを意味ありげな微笑で迎えながら続けた。
「賢者が本来の名でその辺をうろうろしているわけはないだろうからね。もちろん、今目にしている姿かたちでさえも本物かどうかは怪しいものだ」
「まさか」
アトラックは慌ててエイルの姿を頭の先からつま先までじろじろと眺め回した。
「なにやってるんだ?」
ハロウィンはそんなアトラックを呆れたような顔で見た。
「いや、尻尾でもはえてないかなと……はは」
「話は他にもいろいろとあります。リリア お嬢様もお待ちですのでとりあえず宿で落ち着いてください」
「そうだな」
ファルケンハインの一言で、一行はようやくその場を離れることにした。

火事の現場を見守る大勢の野次馬の中で唯一人、そんなハロウィン一行を目で追う者がいた。それは焦茶色のマントと、同じ色の顔が隠れるほどの大きめのつばの帽子を被った吟遊詩人であった。
そう、蒸気亭でエイル達を見ていたあの吟遊詩人である。

彼女は一行を見送った後、振り向いて通りの看板を見上げた。視線の先にはエイル達がみつけた精霊陣が掲げられていた。だが精霊陣はしかし、明らかに何者かによってすでに一部が破壊されていた。彼女はそれを確認すると、すぐに帽子のつばを深く下ろして顔を隠した。

# 第十七話　笑う死に神

アプリリアージェ・ユグセル公爵がどういう人物かを知らずとも、銘茶所であるドライアドの北部エスタリア産の最高級ブレンドティ「リリア」や、シルフィードの港湾都市エトワールの高級茶「アージュ」、さらにはファランドールワイン・コンテストにおいて毎年優秀なワインを産しているサラマンダのランダール地方の酒蔵「アプリリアージェ」を知らない者はいないはずであろう。これらはすべてワイン好きで紅茶好き（さらにビール好き）であったアプリリアージェ・ユグセル公爵の名前の一部または全部を戴いたものだ。

歴史上の人物の中でも極めて人気の高い彼女は、どの時代でも様々な手法で絵画のモチーフとされてきた。

中でも近世の人気女流画家アニーモ・フェルシスはアプリリアージェをモチーフに三枚もの肖像画を発表している。もっとも人気の高いものは真っ青な紗をまとい、片手にサンダルを持ち、砂の上に裸足のままという出で立ちで白い壁にもたれ、うつむいて寂しく微笑んでいる「金のオーヴのダーク・アルヴ」という美人画だが、これはご存じの通り五百年前にミリア・ペトルウシュカが残した「雷帝」という題名がついた国宝に指定されている絵に対するオマージュである。

ミリアの絵はアニーモとほぼ同じ構図だが、優雅で真っ白なドレスの半分以上が赤く汚れており、片手にはサンダルの代わりに小型の弓が握られている。うつむいた顔には一条の血の涙の跡があり、黒い髪の間から金色のオーヴの耳飾りが覗く。足下は踝まで水につかっていて、その視線の先の水面には頭上の雲が映り込み、雲間には稲光が見えるというものだ。

この絵が衝撃的なのは体の向こう側で陰になっている手、つまり

弓を持っていない方の腕が存在していないように見えることである。

これは勇壮な姿の絵が多いアプリリアージェ・ユグセルの絵としては極めて異色で、右腕が無いのか、それとも構図的に右手が見えにくい立ち姿を選んで描いたものなのかという議論がいまだになされているほどで、時代を超えた話題作と言える。そしてアニーモ・フェルシスはじめ、数多くの有名画家にいまだに影響を与え続けている。ちなみにフェルシスは右手はあるはずだという派に属しており、もちろん「金のオーヴのダーク・アルヴ」では右手をしっかり描いている。

しかしながら驚くべき事に今日我々が知るファランドールの歴史書にはこれほどまでに有名な名将アプリリアージェ・ユグセル公爵に関する記述はあまりない。多くの吟遊詩人に語り継がれ、様々な物語に記述されているようなアプリリアージェ・ユグセルの姿は母国であるシルフィード史においてもほとんど見つけることはできない。

彼女の軍隊での活躍についての資料がもっとも充実してるシルフィード王国の王立図書館でさえ、彼女が中将になるまでの輝かしい戦功をたどることはできるが、その多くはル・キリアに入るまでのものであり、彼女をここまで有名にし、その後ファランドールの歴史に大きく関わった出来事についてはなぜか表出してこないのである。

さらに愕然とするのは、このシルフィード軍部公式記録によるとアプリリアージェ・ユグセルはエイル・エイミイがフォウからファランドールに迷い込んだ翌年にテンリーゼン・クラルヴァインともども戦没していると記載されていることである。つまり死んでいるはずの人間がその後活躍しているのは矛盾する事になるため、一切が無視されている事になっていると言えるだろう。

簡単に言い換えるならば、公式な歴史では「その後のアプリリアージェ・ユグセルは、その名をかたった別人である」という立場を

とっていることになる。
もちろんそうでないことは既に広く知られている事実であるが、公式記録というのはいつの時代でも誤謬に満ちていると言うことをつくづく思い知らされる典型的な事例であろう。

彼女が率いたとされる国王直轄と言われる特殊部隊ル・キリアについて言えばこちらはアプリリアージェ本人よりも扱いがひどく、公式記録が一切ないと言っても差し支えない。これは軍の暗部の組織としての部隊の性格がよく表れている。もちろんル・キリアについては構成人員やその部隊名簿なども一切なく、一体どれくらいの規模の部隊であったのかすら不明である。提督という立場にある軍の上層部の人間の、現存する様々な日記を見てもル・キリアの名称は確認できるが、その実態については何も知らされていないという徹底ぶりが伺える。
国王の私兵と呼ぶのは行き過ぎだろうが、このあたりは同じ秘密部隊でも、軍隊の一部対としてきちんと組織・運営されていたドライアドのスプリガンと大きく違うところである。

この物語はアプリリアージェ・ユグセル公爵がル・キリアの司令であり、ドールすなわちテンリーゼン・クラルヴァインがル・キリアの副司令であったという口伝が事実であるという仮定に基づいて記述されていることをあらかじめ断っておく。もっともこれら物語の骨子は数多の吟遊詩人達が異口同音に語り継いできた「事実」であり、また多くの挿話については様々な物語として記述され民間では広く流布している、いわば公然の歴史である。政治的な意図をもって当時に於いては事実と違う「為政者の真実」として編纂された体裁としての歴史や、主に公式な記述文書の多寡を拠として事実を捏造しようとする頭の固い学壇の清教徒的歴史学者と違い、我々は伝承の中に確かに生きる彼女の存在を疑う事はできない。

アプリリアージェは星歴(せいれき)三九九八年黒の二月、現在はファルンガ州と呼ばれるシルフィード北方に位置するユグセル公爵の公領ファルンガの首都ユーゲンにあるファルンガ城にて産声を上げた。もちろん、あの「ファルンガ義勇軍」発祥の地のファルンガである。ファルンガ城については現在のファルンガ州知事の公邸として現存しており、一部は博物館として一般公開もしているので訪れた人も多いことだろう。

ユグセル公爵家はいわゆる北のアルヴィンと言われるダーク・アルヴの血統で古くからカラティア家の有力な家臣として他の貴族からも一目置かれていた。ユグセル家の歴史はシルフィードの各有名貴族同様に有史以前からの古いものであるが、ダーク・アルヴの血統にこだわるあまり何度も断絶の危機を迎えていたようである。

アプリリアージェの時代になると、とうとうユグセル家の血族がアプリリアージェ唯一人となった。母ニーナはアプリリアージェを産み落とした後、産後の肥立ちが悪く他界し、父王クラカもアプリリアージェが幼少の頃に滞在先の首都で他界した。アプリリアージェは弱冠八歳でユグセルの家督を継ぎ、ユグセル公爵の地位についたことになる。

なお、八歳というのは当時のシルフィード王国においては「爵位のある貴族が家督を継ぐことの出来る最低年齢」と定められていた年齢である。

アプリリアージェが類い希な能力を有するフェアリーであることは彼女がまだ幼い頃よりシルフィードの軍首脳部には知られていたようである。だが、シルフィード上層部の多くの人間は強力な力を持つフェアリーとしてではなく、むしろ「本の虫」としての彼女の姿の方が印象的であったようで、当時の要人達の日記や書簡にその様子が記されている。

十歳で領土経営を臣下マキーナ・ワルドに託したアプリリアージェは、上京して居住地をシルフィード王国の首都エッダに置いた。

当時のアプリリアージェの居室についての記録はないが、彼女を首都に招いたと言われている軍務大臣で王国軍大元帥の地位にあったガルフ・キャンタビレイの城に食客として滞在していたものと思われる。同時にこの時国王に謁見して、ファルンガ公領の上納を条件に特例としてシルフィード軍への入隊申請を行ったという記録がある。

シルフィードでは王立図書館に次いで蔵書が充実している「キャンタビレイ文庫」の資料にそのあたりの記録がある。

ファルンガ公領の移譲についてはアプリリアージェたっての願いのようだったが、当時のカラティア朝シルフィードの国王アプサラス三世はアプリリアージェの申し出をいったん「第一級懸案事項」として国王預かりにしたと記述には残っている。国王アプサラス三世はファルンガ公領の人心を鑑み「しかるべき時期に結論を下すので、しばらくは現状を維持してほしい」旨の返答をしたと文書に書かれているが、おそらくそれは事実であろうと思われる。

歴史的には、アプリリアージェが公的に死亡したとされている三年後、すなわち星歴四〇二八年に公領から正式に州となった。

軍の公式記録では、アプリリアージェの軍隊入りはこの六年後の四〇一四年白の三月となっているため、十六歳の時である。入隊までの日々の多くをアプリリアージェは王立図書館で過ごした。

多方面においての知識・造詣が深く、聡明で老獪な戦術で知られる知将の礎はこの図書館時代に築かれたものと多くの歴史学者は考えている。当時の図書館長がこの時代の彼女の師として強い影響を与えたのは想像に難くないが、当時の館長についての記録はアルフォンス・エンドアという名前が記述されている以外は一切不明であり、未だに謎の人物とされている。風説にはなるが一説には年齢不詳の呪医ハロウィン・リューヴアークの別名であろうとも言われているが、現在においてそれを証明することはすでに不可能である。

当時、国王を除きシルフィード軍史で最年少の「提督」としてつとに有名なアプリリアージェであるが、その口癖は

「たとえ百の優れた戦術があろうと、たった一つの間違いのない戦略の前には為す術はない」

というもので、こんにち広く使われる諺「百の戦術より一つの戦略」の語源であると言われている。アプリリアージェの戦略における能力の高さを伺わせる話ではあるが、皮肉なことに彼女が戦略を練る立場になった提督としての時代に彼女に求められたのは、優れた戦術が必要な戦いばかりであった。

特殊部隊であるル・キリアとは目的に対して投入される遊撃部隊であり、基本的に戦術こそを求められる組織であった。

言い換えるならば、歴史的な戦略家と言われるアプリリアージェが歴史上残したものはむしろ戦術家としての能力であったという事になる。

十六歳で入隊した彼女は当初白兵戦に於いて飛び抜けたフェアリーの能力で敵を圧倒していた。部下を持つ階級になってからはその戦術で数多の戦功を上げて昇進していったわけであり、彼女の生涯を顧みれば戦術こそが彼女の真骨頂といっても過言ではないだろう。

生涯、公式の軍団を指揮した事がないアプリリアージェ・ユグセルだが、それでも戦史家達は畏敬の念を込めて彼女をこう呼ぶ。

「戦略のユグセル」と。

アプリリアージェの人となりについては、彼女を知る多くの人々が実に多くの感想を述べている。

必ずしもそれは肯定的・礼賛的なものばかりではないが、興味深いのは否定的な感想の多くがアプリリアージェ・ユグセルの能力や戦い方に関するものではなく、彼女の容姿や服装、立ち居振る舞い

に関するものであることだろう。アプリリアージェ・ユグセル公爵が、対外的には「白面の悪魔」で通っていた事は周知の事実だが、もう一つの二つ名が「笑う死に神」であることも有名である。これはアプリリアージェの「いつも笑っているような顔」が否定派の標的となった成果物のようなものである。

また後に「ユグセル流」とも揶揄されたものにアプリリアージェが軍隊で使った「言葉遣い」がある。

そもそもシルフィード軍では男女の区別はまったくなく、もちろん特別扱いも一切ない。そう言う風土から、軍では女性も男性と同じ言葉を使うのが通例である。平たく言えば、軍では女でも男言葉を使うものというのが当時のシルフィード軍の……いや、すべての国の軍隊でも同様であろうが……一般的な常識であったのだ。だが、アプリリアージェは作戦状況下以外では、すべて普通の女性言葉で通したとされている。

「女性があえて男言葉を使う必要を感じない」と言ったとか、「ハレとケ、つまり有事と日常との差を自らで切り替える為」など諸説あるが、彼女がこの件について語ったとされる有力な記録はない。おそらく両方の理由なのであろう。今日ではむしろ当たり前の光景といえるが、軍の内部で柔らかい女性の言葉が使われるようになったのは彼女が開拓した分野なのである。

いつも笑顔で優しい女性の言葉で軍を闊歩する、公爵の地位をもつ数多の武功で彩られた美少女に、いかな公明正大で礼を第一とする気風のシルフィード軍といえど敵が居なかったと言えばウソになろう。ただ、当然ながら表だってアプリリアージェ・ユグセルを排除する動きは一切なく、単純に「なんとなく気にくわない奴」という程度の感情であったのだろうと推測する。「普通の女性言葉」はその後彼女を尊敬する女性軍人に広く支持され、それが当時「ユグセル流」と言われていたのである。

一部の歴史学者はこのアプリリアージェの一連の行いについて「意図的に自らを派手に目立つように演出していた」と唱える者がいる。

理由はアプリリアージェの最年少提督の記録を破ることになるテンリーゼン・クラルヴァインの存在をできるだけ目立たせなくする為だという事なのだが、それについては機会を設けて詳述したい。

少なくとも彼女以上に注目されるべき早さで提督と呼ばれる地位まで上り詰めた謎だらけの少年提督テンリーゼン・クラルヴァイン男爵の存在が内外それほど大きくクローズアップされなかったのは、様々な場面でアプリリアージェ・ユグセルという存在感があまりに大きかった事はたとえ結果論だと指摘されたとしても事実なのである。

一般に彼女の有名な二つ名「白面の悪魔」の由来はその容赦のない戦いぶりに依るものだと言われる。戦闘時には必ず白い仮面を付け、海賊の村を女子供誰一人容赦することなく切り裂き、皆殺しにした挙げ句火を放ったなどという話はアプリリアージェやル・キリアを語るときに必ずついて回る逸話である。目を付けた獲物にたいして冷酷で容赦のない徹底した行動をとった事が「悪魔」であると言うのだが、本書のアプリリアージェ・ユグセル像は後世発見されたアトラック・スリーズの家族へ宛てた書簡の記述にあった一文における新しい解釈に則っている事を予め断っておく。

彼女の肖像画については冒頭で少し触れたが、これについても同様に巷間出回っている多くの形式的なアプリリアージェ・ユグセルの肖像画にも大きな誤りがあるものと本書は指摘しておきたい。

それらアプリリアージェを象徴するとされる戦闘時の勇ましい出で立ちの絵では彼女はいわゆる「サイズ」と呼ばれる両手持ちの大型の鎌を武器として手に取っているものが多い。文字通り当時の「悪魔」、そしてもう一つの通り名であった「死に神」のを連想する

典型的な武器を持たされている訳であるが、アプリリアージェ・ユグセルの最も得意とした武器は実は短弓のようである。こと弓の腕前では「戦闘の申し子」と言われるテンリーゼン・クラルヴァインを上回るものだっと伝えられていることからも白兵戦では中距離からの遠隔攻撃を主体とした戦法を得意としたようだ。また、一般的な常識に照らしてもそもそも小柄で膂力のないダーク・アルヴがサイズを武器にしていたとは考えにくい。

副官のファルケンハイン・レインの獲物が大型のサイズであったことから、それと混同されて描かれているという説が有力であろう。アプリリアージェ自身は短剣をテンリーゼン・クラルヴァインにしばらくの間教授したという記録があることから、遠隔では弓を、近接戦闘では軽い短剣と小型の盾を使用していたと考えるのが自然であろう。白い仮面を付け重いアルヴ用の甲冑を身にまとい、サイズを振り上げる勇壮なアプリリアージェの姿は人気のあるモチーフであるが、本書では残念ながら合理的な史実に沿った描写になっている。小柄なダーク・アルヴ、しかも女であるアプリリアージェが屈強で強力なアルヴ用の鎧を着る事はすなわち自らの持ち味を捨てているようなものであろう。蛇足ではあるが、同様の理由でテンリーゼン・クラルヴァインが三叉の矛を背負っている絵にも本書では苦言を呈しておきたい。

どちらにしろ、そもそも「白面の悪魔」という名前が海賊の間で恐怖と憎しみの対象として伝わっていた事実があまりなく、古来より伝えられるアプリリアージェ・ユグセル像には大きな誤謬があるのは間違いないところであろう。

士官になってから後のアプリリアージェ・ユグセルは白兵戦の天才児であったテンリーゼン・クラルヴァインを常に副官として任命し、作戦行動を供にしていた。軍時代の後期においてル・キリアは提督の副官が提督という前代未聞の部隊編成を行っていたが、これなどを見ても軍部におけるアプリリアージェの発言力がいかに強く、

異例はすべて異例でなくなっていたという事がわかる。もっとも後天性の障害で言葉を発する事ができないテンリーゼン・クラルヴァインがアプリリアージェよりも早いペースで出世し、あっという間に少将と言う地位まで上り詰めることができたのはほぼ全面的に彼女の後押しがあってこそ、と言うのが軍事研究家の統一した見解でもある。

程度の差こそあれル・キリアの一員だったと伝えられる軍人の略歴をたどれば、彼女の部下が相当名はみ出しもので構成されていたかがわかる。上官より義を重んじ、たびたび命令に従わない事件を起こすため、優秀ではあるが半ば干されていたファルケンハインや、飛び抜けた記憶力で上官を煙に巻くことで文字通りどこからも煙たがられていたアトラックなどもその例の一つなのである。

すなわち人を見る目の高さこそがアプリリアージェのもっとも評価されるべき能力なのかも知れない。

そのファランドール史上でも指折りの知将と言われるアプリリアージェ・ユグセルが、蒸気亭の二階にある一室で未曾有の窮地に陥っていた。

「こっちは本当にえらい迷惑だったんだぞ。そもそもあんな重要なことをわかっていて伝えないっていうのは夕べそっちが言い出した協力関係って奴を勝手に放棄したってことじゃないのか？」

下がった目尻が特徴的な優しい顔で微笑むアプリリアージェの前で対照的に目をつり上げているのはエイル・エイミイだった。

だが、おそらく実際にしゃべっているのはエルデの方であろう。

アプリリアージェは帰ってきていきなりすごい剣幕で言い寄ったエルデを前にして困惑していた。彼女が予想していた最悪のシナリオを選んだシェリルとエイルの出会いの全容を把握することなく、ものすごい剣幕でアプリリアージェの部屋のドアを蹴破って来た闖入者を相手にせねばならなかったのである。

エイル・エイミイ……いや、エルデ・ヴァイスは怒っていた。いや、怒っている振りをしていたという方が正確であろう。怒っていたのはむしろエイルの方なのだが、エルデがこの場を貸せ、とエイルに言ったのだ。

エルデにしてみれば、怒りにまかせて何かとんでもないことをエイルにしでかされてはまずいと考えたのかもしれないが、それよりも夕べから一本とられっぱなしのアプリリアージェに対して貸しを作っておくつもりだったのだろう。

そう言うわけでエルデは必要以上の剣幕を装って見せた。

アプリリアージェと言えば、「リリア姉さん、いるんだろ？言い訳を聞かせてもらおうじゃないの」という荒い語気でエイルが部屋に近づく気配を感じていたからとりあえず身構えながらも乱暴な侵入をあえて許したのだが、これが普通の賊であったならばもちろんただでは済まなかったに違いない。

つまりエルデも彼女と剣を交えるつもりがない事を表すためにわざわざ部屋に入る前から大声で彼女に来襲を宣言していたと言うことだ。いきなりドアを蹴破って命のやりとりになる事はエルデ側としても絶対避けたい事だったからである。防御ルーンを使うにせよ、相手の初手が最大の攻撃になることをエルデは予想していたのだ。アプリリアージェの噂が本当ならまず間違いなくそうしてくるはずだった。それをわざわざ受ける必要はなかった。

『うわ』

ドアをノックもせずに文字通り足で蹴って開けたエイルは、部屋の隅でバスローブを羽織ったアプリリアージェを認めた。風呂から上がったばかりと言った風情で、まだ髪は濡れており、着衣は素肌に直接バスローブを羽織っているだけという、つまりは極めてあられもない姿であった。

客観的に見れば、エルデは独身女性の部屋をノックもなしに開け放つという愚行をしでかしたという形になった。

【ビビってるんやない。たかがオバはんの風呂上がり姿やろ】

『いや、エルデ、おばはんって……』

アルヴ族の特徴で当時二十八歳のアプリリアージェの見た目は、デュナンの見た目換算でせいぜい十代半ば程度の少女のそれであるから、エルデのいう「おばはん」という形容はエイルにとってはどう考えても無理のあるものだった。

（これが学校だったら、間違いなくオレは停学だろうなあ……下手すると退学かも）

エイルは今までと違うアプリリアージェの出で立ちにある種のときめきを抱きながらぼんやりとそう言うことを考えていた。もっとも、アプリリアージェ程の美少女がエイルの通っていたフォウの「学校」にいるかどうかははなはだ疑問ではあったが。

しかしエルデはエイルとは違った。

アプリリアージェの姿を見ても顔色一つ変えずに、テーブルに強くドンと両手をつき、先ほどの台詞を一気にまくし立てたのだ。

エイルの剣幕の原因がその台詞で特定できたアプリリアージェは、珍しく困惑した表情を浮かべた。もっとも笑っているような顔は変わらないので、端から見ると苦笑しているような表情と言えるだろう。

「笑ってるんじゃねえ！何とか言えっ！」

大層な剣幕で再びテーブルを叩いたエイルに、アプリリアージェは済まなさそうに口を開いた。

「あの」

「んだよ？」
アプリリアージェはエイルにこれでもか、というくらい美少女の武器とも言える可愛らしい笑顔を振りまくと、実に申し訳なさそうに続けた。
「その前に髪を拭いてもいいかしら？このままだとびしょびしょで風邪を引いちゃいそうなの」
そして、クロゼットの方を指さして見せた。そこにタオルがあるのだろう。
「てめえ、こんな時に！」

『いいんじゃないか』【お前なあ】

エイル……いやエルデは思わず逆上しそうになるのをグッと押さえて続けた。
「じゃあ、髪を拭きながら弁解してもらおうか」
「あら、ありがとう」
アプリリアージェはクロゼットからバスタオルを出すと、テーブルを挟んでエイルの反対側にある椅子に腰をかけて、水がまだ滴っている状態の黒い髪を拭き始めた。アプリリアージェの髪は垂らした両側が顎のあたりまでの長さで、後ろに行くに従って斜めにだんだんと短かく切りそろえられており、長くもなく短くもなくと言った具合である。後ろ姿の細いうなじがエイルの目にまぶしかった。
「そっちの出方によっちゃ、こっちにも考えがある。おっと、『どんな考えですか？』なんてトボけて聞くんじゃないぞ。質問しているのはあくまでもこっちだからな。あんな修羅場が予測できなかったリリア姉さんじゃないだろ？なぜ黙ってた？」
「うーん、これは困りましたねえ……」
アプリリアージェは髪の水分をタオルで念入りに取りながら本当に困ったような声でつぶやいた。
「『ルルデ・フィリスティアードの許嫁のシェリル・ダゲットが一

行に加わっているなんて全然知らなかったんです』という言い訳を用意していたんですが、その様子だとこの言い訳は通じないですね？」

アプリリアージェは髪を拭く手を止めて、首をかしげて見せた。

困っているという風情を表現しているのだろうか？エイルはその仕草の意味をはかりかねた。だが、エルデの方はただ怒っていた。

【くそ、このアマ】

『許嫁だって？ただの幼なじみじゃ……』

【うろたえるなって。おばはんお得意の陽動作戦かも知れへんやろ】

『むう』

【それにどっちにしろ別人やということはわかってもらえたんやからな】

「あ、ごめんなさいね。エイル君が怒るのはもっともで、それはよくわかります。でも」

「でも？」

「正直に言うと、私はただの軍人、悪く言えば戦争屋、もっと悪く言えば殺し屋稼業です。そんな私ですから、この手の類の微妙な問題は専門外だからどうしていいのかわからなくて。とりあえずシェリルの事を考えて悩んでいるうちに」

「言いそびれたっちゅうんかい？」

「いえ？」

「え？」

「まあ、黙っててもなるようになるかな、って……」

「おいっ！」

「あはは」

「あははやないやろっ！責任放棄にも程がある！」

「ええ、まあ……冗談です。エイル君には情報として教えておこうと思ったんですが、今朝の出来事で驚いて」

「忘れたっちゅうんかい？」

「忘れてはなかったのですが、さっさと出て行ったのはエイル君の方だったんじゃないかしら？」
「やかましい。そんな重要な事はそもそも夕べのウチに伝えとけや！」
「夕べはまだ考えがまとまってなくて」
エルデの目にはこの場のやりとりをまるで楽しんでいるかのようにヘラヘラと笑うアプリリアージェの顔が無性に憎たらしく映った。
「だいたい、こっちが真剣に怒ってんのにヘラヘラ笑うな！」
ドーンと再びテーブルを両手の拳で叩きつけたエイルの剣幕に、アプリリアージェは眉間に皺を寄せた。もっとも笑い顔のままであったが。
「そう言われても、これは普通の顔なんです。実は今、とても困った顔をしてますよ」
「ほう。それでか？ほな、怒ったときはどんな顔やねん？」
「こんな感じで」
「悲しいときは？」
「うーん、こんな感じですね」
「なんとなく楽しいときは？」
「こんな感じかな」
「嬉しい時」
「こう、かな」
エルデはそこまでやると突然すべてがバカバカしくなって、がっくりと肩を落とした。
「それ、全部同じ顔やないか」
「よく言われます。表情が乏しいって」
「命のやりとりをしているような戦闘時も同じなんか？」
「いちいち鏡は見てませんが、多分あんまり変わらないと思いますよ。だから一応、申し訳ないので顔を隠す為に仮面を付けてごまかしているんですよ」
「なるほど、だから白面の悪魔、そして笑う死に神、か」

「ふふ。白面の悪魔はともかくその「笑う死に神」という呼び方、実はちょっと気に入ってます」

『なんていうか、調子狂うよね、この人って』

【くそ。なんかもうどうでも良くなってきたわ。後は任せる】

『え？おい。そりゃないだろ？こんな状況にしといて』

【今回のやりとりでこのオバハンとまともにやりあるのはばかばかしいっちゅうのがわかったのがせめてもの収穫やな。もう、やめやめ】

『オバハンって』

【この女、ああ見えてたぶん三十歳は超えてるで。お前より十以上も年上や。アルヴ族の外見には惑わされなや】

「ああ、調子狂った。もうええわ」

少し間を置くと、エイルは右手で頭を掻きながらめんどくさそうにそう言った。

「せやけど、今後はくれぐれも頼むで。今回の事は一つ大きな貸しや」

「そうですね、わかりました。一つ借りておきます」

エイルはため息をつくと部屋の出口に向かった。だが、二歩ほど歩くと立ち止まってアプリリアージェの方を振り返った。

「そう言えばさっき気に入ってるって言ってたけど、死に神と言われるのが好きってことなのか？」

振り返る前と後の一瞬でエイルの雰囲気がガラリと変わったとアプリリアージェは思った。言葉遣いなどから、しゃべっているのはエルデと入れ替わったエイルなのだが、もちろんアプリリアージェにはわからないことだ。だがエイルという人格がやや特殊なものであることはすでに承知していたので、動じるでもなく、興味深く変化を観察していた。

エルデはと言えば言いようのない無力感に苛まれたのか、何か考え事をしているのか、その後しばらくは沈黙していることになったのだが、もちろんそんなことは他人には知る由もない。
「死に神と言われることが好きか、ですって？」
「さっきそう言ったよね」
「ああ」
アプリリアージェは思い出したようにそう言うとエイルからすっと視線をはずし、一瞬だけ隣のベッドルームに続く扉に視線を移したかと思うと、今度はちょっと空を見上げるような表情で短い思案をした。数秒くらいそうしていただろうか。ふと思いついたように椅子から立ち上がると髪をぬぐっていたタオルをテーブルの上に置き、バスローブ一枚の姿でエイルの正面に立った。
「私が死に神と言われる本当の理由を教えましょう」
「え？」
アプリリアージェはそう言うと後ろを向き、いきなりさっとバスローブを脱いだ。
「うわ」
その大胆な行為に思わず声を上げたエイルだったが、アプリリアージェの裸を見た次の瞬間にはその思わず上げた声を失うことになった。

くびれた腰の下には小柄な少女のような顔に似合わず意外に大きく張った、形のいい尻があった。アプリリアージェはその下の腿のあたりまでローブを下ろした。エイルの目に映った褐色の肌をした少女の均整のとれた後姿は美しかった。その佇まいは一幅の絵にもなりそうなポーズだったのだ。だがエイルは裸の少女の後ろ姿をときめきをもって見る事にはならなかった。
なぜならそこにあったのは敢えて言えば少女の裸や女の裸体などという艶っぽいものではなかったのだ。

そこには紛れもなく一体の死に神が居た。
エイルの目に映ったものは、一般にデスサイズと呼ばれる断首台で首を落とすための両手鎌を手に持った黒く禍々しい装束の髑髏の姿だった。眼球を失った眼窩は深い闇をたたえ、見ているだけで地獄に吸い込まれそうな悪寒を誘う。皮膚や肉のない骨だけの手は鎌の冷たさを感じることもなく、その骨格だけの体は荒涼とした風に吹かれて所々が腐っており、それは触れるだけで死に蝕まれると確信できるほどの嫌悪感と邪悪感に満ちていた。

そう。
広いとは言えない小柄なアプリリアージェの背中一面……いや正確には左肩から右の尻たぶまでに一体の死に神が入れ墨で描かれていたのである。そして褐色の肌に濃い青と漆黒の墨を使って彫られたその死に神は傷だらけであった。いや、死に神だけではなく、よく見ると少女の肌には大小の無数の消えない傷で覆われており、それはいくつもの修羅場を潜った無言の証人に他ならなかった。ひときわ目立つのが左の尻たぶに斜めに走った大きな傷で、綺麗な丸みのある肉に醜いギザギザの爛れを刻み込んでいた。

おそらく、その時間はほんの十秒くらいだったのだろう。だがエイルにとっては凍り付いた様なその時間は何分もの長さに思えた。その背中を見て一体何を言っていいのかわからなかった。いや、それどころかその場所から一刻も早く逃げ出したい衝動に駆られていた。にもかかわらず体は金縛りにあったようで、エイルの意志に反し全く動かなかった。エルデと言えばさっきから無言のまま何も語らず、そしてアプリリアージェも少しうつむき加減で無防備にうなじを見せたままずっと無言であった。
息苦しい沈黙を破ったのは、アプリリアージェが尻のあたりまで下げていたバスローブをするすると引き上げる衣擦れの音だった。

「いきなり醜いものを見せてしまってごめんなさい」
後ろ向きのままバスローブの前を合わせ、エイルに対峙してからアプリリアージェはようやく言葉を発した。もちろん、顔はいつもの笑顔のままであった。重苦しいエイルの気持ちがその表情でようやく少しほぐれた。とはいえ、なんと答えていいのかわからずにまごつく事しかできなかった。
「私と結婚する殿方は、おそらくは夜の闇の中でのみ私を妻としてくださることでしょうね」
何も言わない、いや言葉を失っているエイルにアプリリアージェは自嘲気味にそう言葉を継いだ。
「あの……。いや」
「軍内部で付けられた私の二つ名はもともとはこの背中の入れ墨から来ているんです。軍に入る前に彫ったものなんですが、周りが面白がってすぐに通り名になってしまったというわけです」
そう言うアプリリアージェの笑顔にはいつものように濁りがなかった。
エイルはアプリリアージェとはこういう人なのだとその時心の中で思い込むことにした。「こういう人」がどういう人なのかとエルデに問われても、その後エイルにもずっと説明ができずにいたが、とにかくその時そうやって屈託なく、そしてちょっと済まなそうな顔で首をかしげ、にっこりしているアプリリアージェが、アプリリアージェその人なのだと思ったの。ただ、その背中に背負っているものは暗く近寄りがたく、そしてどうしようもなく重いと感じていた。
「さっきの一つ借りの分ですが、これでお返しをしたということでいいでしょうか?」
「あ……。も、もちろん」
「ありがとう」
エイルの返事を聞くと、アプリリアージェはさらににっこりと嬉

しそうに笑った。その笑顔に作為や戦略的な思惑があるなどとエイルにはとうてい思えなかった。いや、もしあったとしたならば、喜んでその作為や戦略にはまってかまわないし、たとえそれで死んでもその決断に全く悔いはもたないだろうとも思った。

若い少年のこの手の感情を、思春期の胸の高まりだという人もいるのだろうが、もちろんエイルにそんな自覚はなかった。

（この人は絶対悪い人じゃない）

それが、エイル・エイミイがアプリリアージェに対して心を開いた瞬間であった。

「あ、それからこれはお願いですが……」

「え？」

「今のことは内緒で」

「はあ」

「この入れ墨は人に見せるための芸術作品などではなく、私が自らに課した戒めです。ごらんの通り見て気持ちのいい物ではないので、あまり人には見せないようにしてるんです。それに」

そこまで言うと、アプリリアージェは少女のようにいたずらっぽく緑色の瞳を輝かせると、エイルの目をのぞき込んだ。

「二人っきりの部屋で私の裸を見たなんて誰かに言ったら、多分この後いろいろ問題ですよ。すでにご存じの通り、我々一行は若い女の子が多いから」

「り、了解」

エイルは不覚にも顔を赤らめてそれだけ言うと、きびすを返してあわてて部屋を後にした。

アプリリアージェは「戒め」と言ったが、なぜ死に神の入れ墨を彫ったのかは聞けなかった。いや、エイルからその質問が出ないように、アプリリアージェは会話を誘導していたに違いない。

『あの人にはかなわない』

エイルはそう思いながらもアプリリアージェと戦う事になる可能

性があることも理解しているだけに、複雑な思いだった。そしてふと立ち止まると、今までいたアプリリアージェの部屋の扉を振り返った。

「ファランドールでは、誰も信じるな」

この世界にやってきてからエルデがエイルに対してずっと言い続けている言葉が、頭に響いた。

だが、エイルは改めて思った。信じられる人もいるのではないかと。

そうでなければ自分自身が辛すぎるのだという事に改めて気づかされた出来事だった。

「信じたいな……」

エイルはそう声に出すと、扉から視線を外した。エルデは何も言ってこなかった。だが、エルデに忠告されるまでもなく信じてしまうには恐ろしすぎる人物であることもまた理解していた。

# 第十八話　大市と黒目エンドウ

『本当にけっこう賑わってるな』

アプリリアージェに啖呵を切りに行ったものの、体よくあしらわれた格好のエイルは、その後とりあえず大市に顔を出すことにした。

火事騒ぎはあったものの、大市には特に影響もないようで、広場は活気のある喧噪に包まれていた。

【せやな。こんな辺鄙な高原地帯にしては街構えもかなりのもんやし、流通の拠点になる街っていうのは額面通りっちゅう事やな。このご時世でこの賑わい……中央からの干渉がないのがホンマに不思議なくらいや】

『それはやっぱり場所が場所だから、か？』

【それ以外には考えられへんな。もともとこの辺は昔から独立地帯みたいなもんやし、街の私設軍みたいなものもしっかりしているらしいからな。この町に入る時に見たやろ？】

『入り口の哨兵か？』

【そや。歩哨にあたっている連中の武装がちゃんとしたものやった事、それをきっちり着込んで隙がなかったこと、武器がきちんと手入れされていたこと】

『きちんと統率された組織があるってことだな』

【それに規律がちゃんとある。まあ、本物の軍隊が数でかかってきたらかなわへんやろうけど、城塞の町って言うだけあって籠城戦に入ったらかなりネバれると思うで。もちろん双方の司令官の力量差にもよるけどな】

『で、エルデ・ヴァイス司令官ならどのくらい籠城できる？』

【正確な戦力と食料や水、矢なんかの消耗備蓄品の目録があれば正確に把握できるやろうけど、この町にはふんだんに湧き水があるし、

つまりは食料が尽きるまでは大丈夫やろ。問題は】
『問題は？』
【援軍の存在やろな。付近に似たような城塞の町があれば、同盟することでお互いを助けられるんやろうけど……】
『ランダールの近くには確かにたいした街はないよな……どこも一週間くらいかかるんだろ？』
【ああ。補給線を考えると相当な覚悟がないと難しいやろな】
『ふーん。まあ、俺たちには関係ないけどな』
【そやな】
『お！』
【ん、どうした？】
エイルは色とりどりの農作物が並ぶ露天筋に入り込んでいた。店先にはエイルが知っているものもあれば初めて見るものも多かった。野菜、果物、穀物……。
その中でエイルが足を止めたのは様々な豆を扱う露天の店先だった。
『これって小豆かな』
値札には『黒目エンドウ』と書かれていた。
【アズキ？】
『オレが住んでいた地域ではどっちかというと高級豆で、祝い事なんかには欠かせないものなんだ』
【へえ。でもあまり聞いたことのない豆やな。俺も他の市では見たことないと思う。だいたい黒目って】
『ピクシィの事か？』
【単純に色合いやろうな。黒というより赤黒い感じやな。色が悪いからあんまり使われへんのかな。豆自体もちっちゃいし】
『なるほど、こっちではあまり一般的な豆じゃないんだな？』
【多分。少なくとも俺は食べたことないなぁ】
『ふーん、そうか』

その時だった。
「あら、エイル君ってお豆が好きなの？」
背後で聞いたことがある声がした。
澄んでいて明るくて、人なつっこそうな声。
とっさに振り返ると、そこにはたんぽぽ色の髪を大きく三つ編みに結わえて胸に垂らした青い瞳のデュナンの少女が微笑みながら立っていた。
「カレン！」
エイルは目を見開いた。
「も、もう大丈夫なのか？」
「見ての通り、平気平気っ」
背後に突然現れたカレン……カレナドリィ・ノイエはそう言ってエヘヘと笑って見せた。
エイルは目の前の少女の顔をまじまじと見た。確かに元気そうに見えた。
気を失っている間のことは覚えては居ないだろうが、自分の身に何が起こったのかはルドルフから聞かされて知っているだろうに、この明るさはどうだ？少なくともエイルが見る限り、出会った時に見せてくれたあの笑顔と変わらない翳りのないまぶしい顔がそこにあった。出会った時との違いを敢えて挙げるならば、それは一つだけあった。鼻の上に張られた小さなバンソウコウの存在がそれだが、しかし春の野に力強く花のようなカレナドリィの顔には、それさえがアクセサリのように愛らしく見えた。

【あ、しもたな。あの鼻の傷は見落としてたわ。あんな目立つとこやのに。っちゅーか、鼻なんて見落すわけないのに】
『だよな。オレも鼻のケガなんて気づかなかったぞ』

「そうか。でも、まだ傷が残ってるじゃないか」
「ん？」

「いや、その鼻」
「ああ！これね」
カレナドリィは自分の鼻先を見ようと目玉を極端に下を向かせて努力したが、すぐにあきらめて少し顔を赤くしてえへへと笑って見せた。
「これは、その、ニキビ。今朝起きたら真っ赤になってて……それで」
そういうとまたえへへ、と照れたような笑いをしてみせた。

【吹き出物かよっ！】
『ニキビと言ってやれよ』
【吹き出物の面倒までは見ぃひんで】
『はいはい』

エイルはその笑顔が眩しくて、自分でもわからないうちにカレナドリィから目を逸らすと今まで見つめていた豆の山へと視線を戻した。
「豆のお買い物？あ、ひょっとしてルーンに使う、とか？」
「しっ」
エイルは慌ててカレナドリィを制した。
「それ、あんまり人に言わないで」
「えーっ？そうなの？じゃあ、エイル君が実は正教会の……」
「わあああああっ」
エイルは今度は焦って両手を振ってそれ以上言うな、と制して見せた。
「ふふふふ。冗談よ。その事はお父さんにも厳重に口止めされてるから大丈夫。でも、聞いてすごく驚いちゃったわ」
そう言うとカレナドリィはまたもや嬉しそうに満面の笑みを浮かべて見せた。
エイルはというとがっくりと肩を落として心の中で悪態をついて

いた。

『おいおい、頼むぜ』

【天然なんか、策士なんかわからん子やな】

『天然ものに百エキュ』

【実は性悪女に千エキュや】

『なあ、オレ達二人で賭けをして、誰が儲かるんだ？』

【勝ったらとりあえずヒャッホーって言う気になる】

『それより』

【うん？】

「とにかく良かった。元気そうでさ」

声に出してそう言うと、エイルは気を取り直して顔を上げた。そして出会った時と同じような、男物の作業ズボンと白いシャツを無造作に着た飾り気の何もない、それでも十分まぶしいカレナドリィの細い肩にポンっと手を置いた。

「で、だ。カレンが元気なのはよくわかったから、オレのことはそっとしといてくれ」

カレナドリィは首をかしげて見せた。

「どこか具合が悪いの？」

「少し頭痛がする」

「それは大変だわ。この町にはいいお医者様もいるのよ。今から呼びに行ってくるからここで待ってて。あ、それよりも一度ウチに帰って横になっていた方がいいわね。そのあと私が」

エイルはカレナドリィの肩に置いた手を頭に置き直した。

「え？」

「オレが悪かった。頭痛というのは嘘だ」

「嘘？なぜ？」

「いや、嘘だというのはちょっと嘘だな」

「ええ？どういう事？」

「つまり、カレンの予想外の元気さに圧倒されている、と言えばわかってもらえる……か？」
「うん。よく分からないけど。あはは」
カレナドリィはケロっとそう言ってにっこり笑うと自分の頭に置かれているエイルの手を取った。
「どうせ暇なんでしょ？せっかくだから滅多にない大市を楽しみましょうよ。それに私、エイル君にお礼を言おうと思ってさっきからずっと探してたんだから。せっかくこうして会えたんだし、これも何かの縁。縁にはムリに逆らうことはせずに素直に従えっておばあちゃんがいつも言ってたわ。無理に縁を無視するとろくな事がないんですって。あと、縁についてはジェデッタおじいさんも自説を持っていて……」
「わかった。オレが全部悪かった」
「え？」
「観念して市を案内してもらうことにする。だからそのジェシカおじさんの話しは無しの方向で頼む」
「ジェシカおじさんじゃなくてジェデッタおじいさんよ。ジェシカなんて女の人の名前じゃないの。エイル君じゃあるまいし」
「いま、ちょっとムカついた」
「ふふふ。ちょっと怒らせてみました」

『ー参った』
【ま、もはや単なる縁やのうて運命の出会いやな】
『どうする？』
【俺なら】
『俺なら？』
【この場でカレンを焼き殺して速攻で逃げる】
『はあ？』
【ま、そやからここは素直に従ったらええんちゃうか？俺も市は久しぶりでちょっと楽しいし】

『へえ、市が楽しいなんて……珍しいよな、お前がそんな可愛らしい事を言うなんて』
【な、なによ】
『へ？』
【っ！なんでもあらへんっ。可愛らしいとか、言うな！】
『何だって？』
【何でもないって言うてるやろっ】
『変なやつ』

「じゃあ、案内するわね。そうだわ、豆が必要ならあっちの方にもいろいろ珍しい豆を扱っている店があるわよ。こっちに来る時に見つけたの」
カレナドリィが指さす方向には、確かに豆を扱っている露店があった。豆の種類も多そうだ。
「いや、オレはこの豆でいいんだ」
「ふーん。珍しい豆ね。それに結構値段も高い豆ねえ。なになに、黒目エンドウ？」
カレナドリィは豆の箱に刺さったの値段の書かれた札をみて首をかしげた。

「ねえ、おばさん、この黒目エンドウってどうやって食べるの？」
商品にかくれた奥の方で別の客の相手をしていた露店の主とおぼしき白髪のデュナンの老女がカレナドリィの呼びかけに二人の方に顔を向けた。
「なんだい？」
「黒目エンドウよ。私、こんなの見たことないんだけど、どうやって食べるの？」
「黒目エンドウ？」
店の主は相手をしていた小太りのデュナンの中年の女性に品物を渡し代金を受け取ると、ゆっくりとこっちへやってきた。そして二

人に並んで同じように黒目エンドウの入った豆の陳列箱を見下ろした。
「ああ」
白髪の老女はそれを見て思い出したように手を打った。
「これね、はいはい」
「うんうん。これ」
「食べ方ね」
「うんうん。食べ方」
「私ゃ知らないねえ」
「は？」
エイルとカレナドリィは思わず顔を見合わせた。そして同時に今度は店主へ怪訝な顔を向けた。
「そんな顔しないどくれよ」
「だって、おばさん専門家なんでしょう？」
「まあ、そうだけど。でもねえ、私もその豆を見るのは今回が初めてでさ」
「そうなんだ」
「ちょっと訳ありで懇意の業者から頼まれたんだけどさ。そいつもちゃんとした調理法なんて知らなくてさあ。『とにかく珍しい豆だから、欲しい奴は高値で買う』なんて言われてさ」
「で、売れてるの？」
老女は両手を広げて首を左右に振った。
「煮るのかなあ？でも一粒一粒が小さいから大豆みたいな訳にはいかないよね」
「煮ても大豆みたいな感じにはならないね。外の殻は固いし、かといって煮過ぎると中が粉状に崩れて溶け出すしね。一体何に使えばいいのか不明だよ。せいぜい煮物の彩りようにちょっと使う、なんて感じかねえ」
エイルはそこで二人の会話に初めて口を挟んだ。

「殻が、堅い？」
「ああ。結構堅い感じだね。かなり煮こぼさないと割れないよ。殻自体は歯ごたえがあるけど食べられない程じゃないね。殻が割れて崩れない程度に煮て食べるのがいいのかねえ。シチューやちょっとした煮込みあたりにいれてもいいんだろうけど豆が小さいし、そもそもあえて他の豆の代わりに使っておいしいって訳でもないしね」
「そう、ですか」
エイルはがっかりしたように肩を下ろした。

『アズキじゃないな。ササゲ、か』
【ササゲ？】
『まあ、オレが探しているアズキの代用品みたいなものさ』
【代用品ってことは、代用にはなるって事やな？】
『お前らしくなく前向きな意見だな』
【ケンカ売ってんのか？】
『オレはけっこう後ろ向きな人間なんだよ』
【まあ、お前さんが何にこだわってるのかは知らんけど、お前さん以上に熱くなってるヤツの対処は考えてるんやろな？】

「どうしたの？」
あからさまに残念そうな表情を浮かべたエイルを見かねてカレナドリィが声をかけた。
「いや、思っていた豆と違ったんで」
「そうなんだ。そう言えばエイル君はこの豆の食べ方を知ってるのよね？」
「いや、オレが知ってるのはこの豆に似た豆の食べ方だよ。形は似てるんだけどね。色もそっくりといってもいい」
「ふーん。味は？」
「比べるとそれなりに違う、はず」
二人のやりとりを聞いていた店主もあまりこの豆に対しては気が

ないようで、
「うーん、この豆に似た豆ねえ……。どこか違う国にはあるんじゃないのかね？私ゃ見たことないけどねえ。どっちにしろあまり細かい豆は使い物にならないからね」
と、まるで仕入れを失敗したと言うように自嘲気味に言った。
【で、その豆に似た豆はそんなに美味いんか？】
『美味いというか、ちょっと、な。懐かしくなって「ちょっと」、さ』
【ふーん。そうまで言われると、それこそ「ちょっと」だけ興味をそそられるやん？】
『少なくともオレは大好きだったなあ。その豆は主食とかおかずに使うんじゃなくてさ、まあその豆……小豆を使ったおやつがあってさ』
【おやつ？】
『うん。オレの国にはずっと昔から伝わる伝統の食べ物で、昔は上流貴族しか口に出来なかったとか出来たとか』
【どっちやねん？】
『まあ、その食べ物ってすごく甘いから、甘いものが苦手な奴には嫌われてるけどね。田舎くさいとか言う奴もいて、今じゃそんなにありがたい食べ物でもないんだけど、オレはけっこう好物でさ』
【甘いもの……かあ】
『今の俺たちには関係ないんだけどな』
【うん】
『でも、やっぱり「ちょっと」懐かしくてさ』
【うん】
『そう言やあ、エルデは甘いもの、嫌いか？』
【ううん】
『そうか。よかった。実はオレも甘いもの好きなんだ』
【俺もどちらかというと大好きやな】

『そんな言い方があるかよ。そうか。じゃあ、味覚が戻ったら甘いものの暴れ食いでもするか？』
【うふふ。いいね】
『変な笑い方するなよ』
【あ？ああ。あはははは】

「じゃあ、あっちに行ってみましょうよ」
似て非なる豆、という存在自体に興味を示したのか、はたまたエイルの為の親切心なのか、とにかく強引なカレナドリィの導きで市に点在するいくつかの豆屋を巡った二人だったが、結局目当ての小豆はおろか、黒目エンドウすら売っている店はなく、店巡りは徒労に終わった。

「いいんだ、カレン」
「でも」
エイル自身は別に残念がってもいなかったのだが、カレナドリィの方が落ち込んでいる様子で、それがエイルには可笑しかった。

『なんか、いつも一所懸命な人だな』
【確かに、悪人やなさそうやな】
『どう考えてもカレンは悪人じゃないだろ……』
【いや、親切をここまで押し売りできるのはかえって悪のような気も】
『人間ってそういうのが嬉しいんじゃないのか？オレはファランドールで初めて人間の温かさに出会った気がする』
【言うとくけど、妹さんの事は忘れたらアカンで】
『なんだよ突然。オレがマーヤの事を忘れるなんてあり得ないだろ』
【そやな】

「それより、あの黒目エンドウを見つけられた事がオレは嬉しいん

だよ。この先の楽しみができた」
「楽しみ？」
「うん、まあ。オレのことよりカレンもせっかく市に来たんだから、何か買い物とかはないのか？今度はオレが付き合ってやるよ」
「うーん」
カレナドリィは右手の人差し指を眉間にあてて考え込んだ。
「いや、そんなに考え込まないといけないのか？」
「そうじゃないけど、店の備品とかでそろそろ買わないといけないものがありすぎて何を優先するのか、ここんところずっと悩んでいるのよねえ。予算の問題もあるし」
エイルはまたしてもカレナドリィの言葉に苦笑した。
「あのさ」
「なあに？」
「その、カレンくらいの年頃の女の子だったら、ほら、服とか髪飾りとか首飾りとかの飾り物とか……そういうのは買わないの？せっかくの大市なんだろ？」
「え？」
カレナドリィはエイルの問いかけに足を止め、ゆっくりとエイルの方をみやった。エイルを見つめるその顔には不思議そうな表情が見て取れた。
「この格好、おかしい？」
カレナドリィはそう言うとシャツの袖を掴んで両手を広げ、自分の姿を足下から見上げていた。
おかしくはない。と、エイルは素直に思う。むしろそういう男物を着ている姿もカレナドリィを活発で明るく演出しているようでかなり似合っていると言っていいとさえ思った。
だが、もしも女物の綺麗な服を着て髪をといて整えたとしたら、カレナドリィの器量なら相当なものになるんじゃないかと思っていたのだ。
市の雑踏に目をやると普段よりちょっとおめかしをしたと思しき

娘達がたくさんいる。少なくとも男物の作業着でウロウロしている年頃の女の子はいなかった。
ただ、それでもエイルにはそんなほかの娘達よりもカレナドリィの方がひときわ輝いて見えてはいた。

【考えてみ？】
『え？』
【癪やけど、客観的に言ってカレンはかなりの器量好しや。造形的に整ったアルヴ系の静謐な美しさとは違って、デュナンらしく躍動的で生命感あふれる動的な美人やな。特に笑顔がいいし】
『え？ああ、うん』
エイルはエルデが急に何を言い出したのかわからなかった。それより、今までエルデが素直に女性を褒めたことなどなかったので、内容よりもむしろそれが意外だった。
【そんなカレンが、自分をさらに引き立たせるような服を着て、髪型を整えて、首飾りや耳飾りをして……】
『うん』
【さらに綺麗に化粧をしてみぃ】
『相当な美人……になるよな。だから、』
【だからアカン、のやろ？】
『なぜ？』
【とっくに気づいてるやろけど、ただでさえカレンはこの町の人気者や。ただの人気やのうて、ホレ、それが証拠にさっきからカレンに声を掛けるいい年頃の男の多いこと】
『ああ、確かに』

そう。
二人で市をうろうろしている間、もう何度となくカレナドリィは声を掛けられていた。もちろんみんなカレナドリィの知り合いで、蒸気亭の常連やら関係する業者の人やら、友人やら。それに混じっ

て若い男が親しげに、あるいは遠慮がちにカレナドリィに声を掛けてきていた。
「やあ、カレン。今日は一人で買い物かい？よかったら俺と。あ、こりゃ失礼」
「あ、カレン、こんにちは。あ、あの……こないだの話しなんだけど……って、あ、今日は友達といっしょなのかい……。でも、ちょっと変わった子だね？」
「よう、カレン。来週の休みに俺たちと……って、なんだ男連れかよ。誰、そいつ？見慣れないヤツだな」
等々さまざまだ。
おそらく、ではあるが、みんなカレナドリィを女として見ているということだ。つまりは男としてのそれなりの好意を持っていて、要するにカレナドリィと親密になりたがっているんだという事をエイルは感じないわけにはいかなかった。
もっともエイルはカレナドリィに声を掛ける連中の多くが自分のことを怪訝な目で、あるいは物珍しげに見やるのが不愉快きわまりなく、そちらの方ばかりに気が行っていて、カレナドリィに対する街の男達の態度にあまり多くの注意は払ってはいなかった。

『でも、だからどうなんだ？カレンならもてて当たり前だと思うぞ』
【危ない、と思わへんか？】
『危ない？』
【お前さん、どんだけ平和ぼけの世界におってん】
『言うな。ファランドール人になってもう随分経つ。オレだってそれなりに緊張感のある生活には慣れてきてるさ』
【せやったらカレンがとってる防衛策もわかるやろ？】
『防衛策？ーーあ……』
【汚れてもええし、第一動きやすそうやから仕事や作業するには便利なんやろうけど、それでも普通の女の子にはもうちょっとそれなりの作業着もあるし、普通はそっちを選ぶやろ？カレンかてお年頃

の女の子なんやし】
『わざと、目立たないような格好を選んでいる、ということか？』
【脚も肩も見せてへんやろ？上着も大きめで胸の大きさも、いや形すらわからへん。だいたい胸があるのか無いかも】
『けっこうあったろ？』
【は？】
『いや、ほら、夕べ……』
【忘れろ！】
『え？』
【失礼やろっ。あれは忘れなアカン】
『忘れろっていっても』
【何やて？忘れへんいうんやったら忘却の呪法を十万倍に増幅してお前さんにかけまくったるぞ？】
『めちゃくちゃだな、お前』
【まあ、話を戻すと、カレナドリィの格好っちゅうか服装は下賤な言葉を使うなら「色気なし」や。それに、覚えてへんか？カレンの母親の話】
『あっ……』
確か、暴漢に襲われて命を落とした、とカレナドリィは言っていた。勿論詳しい話しは聞いてはいない。
【本人が自覚してやってるんやとしたら悲しいというかいたたまれへん話しやけど、そういうご時世やしな。多分、ルドルフあたりがそうやってしつけて育てたんやろうな。器量がええのは父親として嬉しいやろうけど同時に不安もどんどん大きくなるし……男顔負けの体術を身につけてるっていうのもその一環かもしれんな】
『それって……いいこと……じゃないよな』
【自分の身を守る為には当たり前で正しい事やとは思うけど、確かに「いいこと」かと言われると答えに困るな】
『カレンみたいな女の子が心から楽しんで好きな服を着たり出来る世界に……ならないのか？』

【そんなん、俺にいいなや】
『それがファランドールの秩序を守るっていう賢者の仕事じゃないのかって言ってんだよ』
【賢者の仕事はそんなきれい事やないってわかってるくせに】
『だったら、ずっとこのままなのかよ？』
【おいおい】
『見たくないのか？カレンが綺麗な服着てさ、楽しそうに笑ってる姿』
【エイル、お前】
『間違ってる。この世界は絶対間違ってる。そして、たぶんオレ達も間違ってるんだ』
【あのな】
『わかってる。何も言うな。何か言われたら、オレ、今冷静でいられないと思う』
【そうか】

「やっぱり今回はシーツ類を重点的に行ってみるかな」
エイルとエルデの心配をよそに、カレナドリィは悩んだ末にそう決心すると屈託のない表情でにっこりと笑った。
「それより、のど乾かない？この先でお茶しよう」
エイルの返事を聞かず、カレナドリィはエイルの手をとると、駆けだした。エイルはされるがままだった。

『まったく』
【フン。まんざらでもないくせに】
『まあ、いいさ。さんざん連れ回されていいかげんのども乾いてきたところだったし』
【はいはい、そうですか】

# 第十九話　骨董屋前

一方エイルだけでなく、大市にはシルフィードから到着した一行もいったん宿に落ち着いた後に顔を出して、賑やかな催しをそれぞれが楽しんでいた。

宿の火事騒ぎは市には全く影響がないようだった。

好きに回ってきていいよ、とハロウィンから許しを得ていたエルネスティーネは、額面通り「好き」に市を楽しんでいた。

いや、表現を少し変えた方がいいだろう。

彼女の実際の行動は「好き」がさらに修飾されていて「好き勝手に」楽しんでいるように見えた。

これとは真逆に「好きに楽しませてやってくれ」とハロウィンに釘を刺されていたティアナ・ミュンヒハウゼンは言葉の額面を大幅に割り引いて「監視付きなら市を少し見に行ってもいい」と解釈していたものだから、エルネスティーネとティアナの関係は本日に限り良好とはいかなかった。

そう言うわけで、難しい顔をしてつきまとうティアナに業を煮やしたエルネスティーネが、ルネ・ルーと一計を案じたのは自然な流れと言ってよかった。

「ねえ、ルネ。ティアナとうまくはぐれる方法はないかしら」

「はぐれる？」

ルネが後ろを振り返ると、周りに厳しい視線を飛ばしまくっている白髪のアルヴの娘がいた。

どう見ても市をブラブラと流して楽しんでいるといった風情ではない。それが証拠にティアナを見た周りの客が彼女をあからさまに避けるようにしている。

ルネは視線をエルネスティーネに戻すとため息をついた。

「相変わらずヤなあ」
「でしょう？」
「了解。おやすいご用ヤ。ウチがティアナを足止めするさかい、合図したら路地に入って駆け足、ヤ」
「はい」
「ええ返事やナ。でも、ネスティは一人で宿には戻れるン？」
「うーん……大丈夫だと思うわ」
「了解ヤ。一応ネスティがどこにいてもちゃんと見つけられる術を掛けとクさかい、安心して楽しんできて」
「わあ。ありがとう」
ルネ・ルーはそう言ったが、実は先ほどティアナに声をかけられて振り返った際、めざとく視界の隅にアトラックの姿をとらえていた。彼はティアナと違い、エルネスティーネに気づかれないように目を配っているようだった。
だからネスティが路地に入り込もうが人混みの中に埋もれようが、きちんと尾行して何かあればすぐに助けに入れる体勢にあると判断した。
何しろアトラックは風のフェアリー。しかもあのル＝キリアの一員なのだ。ネスティの事は彼に任せて楽しませてあげよう。ついでにティアナもネスティの護衛から離れて市を楽しんでもらおう。
ルネ・ルーはそう判断すると再度チラリと後ろにいるアトラックの姿を確認して安心したように小さく微笑むと、上方に視線をやり、昼星の方向とは逆の空を指さした。
「あ、虹っ！」
子供の大きな声を耳にした人々はそれぞれ視線を空に向けた。ルネ・ルーの後ろを歩いていたティアナも同様にルネの指さす方向を見た。
そこには小さいながらもくっきりとした見事な虹がかかっていた。
「おお、虹だ」

「本当だ」
「綺麗だわ」
「でも、雨も降ってないのに不思議だな」
「あ、もう薄くなってきた」
人々は虹を見つけると口々に感嘆の声を上げた。
ティアナも久しぶりに見る虹に心が癒される気持ちがしていたので、薄く消えていくのを見ると残念に思った。
ネスティも残念がっているだろうな……
そう思って視線を落とした。
「あ」
そこにエルネスティーネの姿はなかった。
今し方までルネの横で並んで歩いていたはずだったのに……。

ルネはティアナが小さく発した声を聞き逃さなかった。
してやったり、であった。
「うふふフ。作戦成功」
そう言って振り向くルネのいたずらっぽい笑顔を見つけたティアナは、自分がこの小さな赤毛の女の子に一杯食わされたことに気づいた。
「あなたね、あの虹」
「忘れタん？私は水のフェアリーヤで」
「まったく。ネスティに何かあったらどうするつもり？」
「心配あらヘンって。ネスティも子供やないんヤし、第一真後ろにこんな顔した人がついてまわってたら楽しいお買い物も台無しヤん」
そういうとルネ・ルーは両手の人差し指を目尻にあてて思いっきり上に吊り上げて見せた。
それを見たティアナの目尻が本当につり上がったのでルネはちょっと驚いたが、エヘヘ、と笑ってごまかした。
「悪い輩に絡まれたりしたらどうするつもり？もう成人とは言え、まるっきりの世間知らずなのよ？」

「ああ、そっちの方は大丈夫ヤで」
「え？」
ルネの自信たっぷりの顔を見てティアナは怪訝な顔をした。
「アトルがつかず離れず見張ってくれてルし」

「え、俺が何？」
その時、二人の横合いから男の声がした。
「やあ、さっきの虹、くっきり綺麗だったね。局地的にさっと雨でも降ったのかな。山間ってそういう気象現象も珍しくないからね。でも、すぐに消えちゃったのは残念だったなあ」
「ええっ？」
ルネは我が目を疑った。その声の主はアトラック・スリーズだったのだ。今まで虹が架かっていた空の方を見て、にっこりとさわやかな笑顔で笑っている。
そのあまりのさわやかさがかえってルネのカンに障った。
「何であんたまでここで和んでンの？」
「え？」
自分に向けられたルネの剣幕にアトラックはとまどった。訳を聞かせて欲しい、と助け船を求める視線をティアナの方に投げかけたが、白髪のアルヴの娘は視線をツッと逸らすとため息をついた。
「ル＝キリアの名が廃るぞ」
「は？」
アトラックは何故自分が二人に責められているのかがわからないまま、頭をポリポリとかくばかりだった。

まんまとティアナをまくことに成功したエルネスティーネは、今まで見たこともないようなものがあふれているランダールの市を今度こそ満喫していた。店先に並ぶ一（彼女にとって）風変わりなものを物珍しそうに、そして熱心に見て回っていた。小柄なアルヴィンのエルネスティーネは敏捷で人混みをすり抜けるのも苦にならな

かったし、自分がけっこうすばしっこくてこういう場所を楽しむのに向いている事を知るとちょっといい気分になった。
　食べ物屋が並ぶ一角に入った彼女が珍しい食べ物を前に目を皿のようにしていると、気のいい主人が試食を進めてくれた。彼女はその勧めに遠慮なく従った。
　微妙な味のものもあったが、どれも今まで口にしたことがないようなすばらしい味で、試食するたびに「まあ、なんて素敵な食べ物なんでしょう！」と感嘆するものだから、どの店でもすぐに可愛がってもらえていた。

「そんなに気に入ってもらっちゃうと嬉しいねえ。じゃあ、これをあげるから、今度また買いに来とくれ」
　そういって緑の瞳を持つ長い金髪の人形のように美しい小さな娘に試食品の包みを手渡してくれる店主も多く、気がつけば両手が包みでふさがってしまっていた。

―（大市ってなんてすばらしいんだろう）
　大量の戦利品を両手で抱えたエルネスティーネがほくほく顔で別の筋に入ろうとした時、見たことのある人物が目の前のカフェのテーブルに着いているのを認めた。
―（確かあの子は、さっきの）
　朝の火事騒ぎの時にルネと一緒に取り残された人を助けた黒い髪の旅の若者。ファルケンハインとアトラックの知り合いで、シェリルの婚約者にそっくりな……。
―（確かエイル・エイミイでしたっけ。ふふ。女の子みたいな名前ね）
　よく見ると黒髪の少年は一人ではなく、同じテーブルに連れがいた。デュナンの若い娘だ。たんぽぽ色の波打つ豊かな長い髪を三つ編みにして胸に垂らしている。大きな青い瞳は明るい表情によく似合っていた。

―（綺麗な人……）

エイルに声を掛けようとしたエルネスティーネはカレナドリィの存在を認めて躊躇してしまった。

二人がどんな関係なのかはわからない。ただ、カレナドリィのざっくばらんな服装から地元で働いている娘だろうということはエルネスティーネにもなんとなくわかった。

―（あんなに綺麗なのに、なぜあんな格好をしているのだろう？）

そんな素朴な疑問が頭に浮かんだが、それよりも朝には見られなかったエイルの優しい顔が気になった。

―（さっきは困った顔と怒った顔しかみせなかったけど、笑うとあんなに優しい顔になるのね）

とうとうエルネスティーネは持ち前の好奇心といたずら心を押さえきれなくなった。何食わぬ顔で二人のテーブルの側に座ると二人の会話に聞き耳を立てた。

だが、そんなお姫様の行動はエイルの注意が及ぶ範囲の中の事であった。

『なあ？』

【あの子？】

『こっちを気にしてるよな？』

【あからさまにこっちに聞き耳を立ててるみたいやな】

『好奇心、旺盛なんだ』

【見たところ、普通の旅装束やけど、あの姿勢の良さといい、隠しきれへん育ちの良さみたいなものがにじみ出てるな。良家のお嬢さん……シルフィードやったら貴族やな……その貴族の箱入り娘って感じなんやけど】

『なんで貴族の娘がル＝キリアと合流するんだろう』

【でも、見たところ護衛無しで単独行動してるってことは「ええトコ」のお嬢さんやないんかも。うーん、漂う気品と世間知らずっぽいあの眼差しはけっこうなもんなんやけどなあ】

『チラチラこっちを見てるぞ』

【まあ、ほっとくに限る】

「ねえ、いつまでランダールにいるの？もし時間があるなら、今日だけじゃなくて明日も私、街を案内するわよ。例の尋ね人のおじいさんのことを知っている人もいるかもしれないし、いろいろ聞いてみてあげるわ。こう見えて私、けっこうこの街じゃ顔が広いのよ」

「うん。それはもう充分わかった」

「うふふ。でもお父さんがけっこう街の自治に関わっているから私の顔が広いというよりも、お父さんのおかげかな。今もそうだけど、ちっちゃい頃は道に迷ったりはぐれて迷子になっても「ルドルフの娘」って言うと何処にいても居てもすぐに家まで送ってもらえたわ。この町にはお父さんの事を知らない人はいないもの。それで小さい頃からお父さんと一緒にいろんなところに顔をだしていたから、そのうち私の事もみんなに覚えられちゃって。だから街を一回りして尋ね人の事を聞いて回ろうよ。あ、でも私、店の仕事があるからさすがに一日中ってわけにはいかないけど、この時期は手伝いの人もいるからお父さんに言えばけっこう時間はとれると思うわ。それに」

エイルは手を挙げてカレナドリィの言葉を遮った。

「そこまで」

「え？」

「たぶん、カレンと一緒に回ったら一年以上かかりそうだ」

「ええ？どういうこと？」

「いや、これでも少なく見積もってるんだが」

「あはは。へんなの」

そう言っておかしそうにカレナドリィは笑った。

本当によく笑う娘だな、とエイルは思った。カレナドリィの笑顔を見ているとこっちまで思わず顔がほころぶ。不思議な娘だ。

【不思議な娘】

期せずしてエルデが独り言のように頭の中でつぶやいた。エイルが思っていた事と同じ言葉だ。
『みんなに大切にされて育ってきたんだろうな』
【結構重い過去を持ってるし、弟とも別れて寂しいはずやのに、その気配があんまりないし、周りに大切にされたのも当然そうなんやろうけど】
『うん』
【そうやとしたら、この街はきっとええ街なんやな】
『今までの街と比べても、ここはただ平和ってだけじゃなくて人と人との関わりが深いような気がする』
エイルは夕べの自警団の結束や門で出会った歩哨の人なつこさ、カレナドリィに声を掛ける人々の優しい顔やそれに応えるカレナドリィの笑顔を思い出していた。
【ずっと平和やとええけどな】
『ああ。ずっと平和でいて欲しいな』

「ーー君？」
「え？」
エイルは思わず間抜けな返事をした。気がつくとカレナドリィの顔が目の前にあった。無意識にカレナドリィの顔に見とれていたのだ。エイルは思わず赤面して顔を引こうとしたが、そうするとカレナドリィが立ち上がってさらに顔を近づけてきて、結局逃げ場を失う格好になった。
「な、何？」
「エイル君ってなんかすぐ上の空になるのねえ」
「ああ、ごめん。いい街だなあなんて考えてボウッとしてた」
「それよりも事件発生よ」
「事件？」
「あそこのテーブルのアルヴィンの女の子が、さっきからこっちをずっと見てるんだけど、エイル君の知り合い？」

「え？」
さすがに態度があからさまで怪しすぎたのだろう、エイルだけでなくカレナドリィにもその不審な行動が見とがめられてしまったようだった。
エルネスティーネには尾行の才能はないと言って良かった。
「あ、ああ」
エイルは苦笑した。
「知り合いというか」
「知り合いというか？」
「知り合いの知り合いというか」
「そうなの？」
エイルはうなずいた。
「ふーん」
カレナドリィはそう言うと意味ありげな笑いを浮かべた。
「何だよ？」
「エイル君もなかなかどうして。隅に置けませんわねえ」
「え？」
「一人旅だなんて言っておいて、かわいい彼女がいるんだもん。なんだかちょっと騙されちゃった感じだわ」
カレナドリィはそういうとぷうっと頬をふくらませてそっぽを向いた。
「ええ？」

『あ……えっと』
【ほな、俺は寝るわ】
『待てっ』
【なんやバカバカしい展開になってきたさかい】
『おいおい』

「や、違うって。本当に今朝仲間に紹介されて、それに会ったばか

りで名前もしらないし」
あたふたといいわけをするエイルの様子を見て、カレナドリィはふくれた顔を瞬時に崩すと、腹を折って笑いこけた。
「あはははははは」
「え？」
おかしくてたまらないといった風にさんざん笑ったあげく、笑いすぎて目尻にあふれた涙を拭きながら、カレナドリィはエルネスティーネの方を向いて手を挙げて見せた。
「良かったらご一緒しませんか？こっちのテーブルにもまだ席はありますよ」
カレナドリィと視線があったエルネスティーネは反射的に目を逸らしたが、カレナドリィがそう呼びかけると、再びそっと視線をエイルの方へ戻した。エイルはテーブルに突っ伏していた。
「ね？私、あなたとお話がしたいわ」
そうやってにっこり笑うタンポポ色の髪をした少女の顔に引き寄せられるように、エルネスティーネは席を立つと、ふらふらとエイル達のテーブルにやってきてカレナドリィの隣に腰掛けた。
途中で、「あっ」と小さな声をあげて、試食品の袋の山を元居たテーブルに取りに戻りはしたが。

「私は宿屋蒸気亭の娘でカレナドリィ・ノイエと言います。カレンって呼んでね」
「わ、私はカラティア朝シルフィード……・」
自己紹介をしようとしてエルネスティーネは何かを思い出したかのように途中で言葉を止めた。
途中で言葉を止めたエルネスティーネにカレナドリィが首をかしげて見せると、深呼吸をして、あとを続けた。
「私はネスティ。シルフィードのエッダから来ました」
「ネスティ？」
「ええ。ネスティです」

「ただのネスティ？」
「えっと、族名は」
そこまで言って固まるエルネスティーネにカレナドリィがあわててフォローを入れた。
「あ、ごめんなさい。初対面なのにいろいろ聞いちゃって。じゃあ、あなたのことはネスティって呼んでいいかしら？」
エルネスティーネは人形のようにコクンとうなずいた。初対面の知らない相手に緊張しているのだろう。
「た、ただのネスティですからっ。こ、これは本当ですよ？」
カレナドリィはエルネスティーネの態度に苦笑しつつも、つとめてゆっくり、そして丁寧にエルネスティーネに語りかけた。
「大丈夫。私はネスティの事を根掘り葉掘り聞いたりしないわ。それよりもお茶を楽しみましょう。今日は大市だからお店を見て回るのも勿論楽しいけれど、こうやって一息入れながらお客さんを観察するのも結構楽しいのよ」
おそらく、エイルに対して開けっぴろげに言葉の矢を一方的に投げ続けるカレナドリィが「地」の姿なのだろうな、とエイルは思った。確かエイルとの初対面の時も最初はこういうゆっくりと、丁寧に言葉を選んで相手の言葉を待っていたっけ。
でも、今では……

【それだけこっちを信用してるってことやろ？普通の自分の姿を見せるっていうのは相手に対して安心してるわけやし】
『そうだな』
【もっとも】
『ん？』
【俺らを信用するっていう一点でカレンがアホな子やな、と言うことはようわかった】
『笑えないな、その冗談』
【フン】

「それでネスティ。あなたはこの……エイル君のお知り合い？」
ネスティはそう訊ねられた後、カレナドリィの顔をじっと見て、その視線をゆっくりエイルに移して、またカレナドリィに戻した。
「いえ、あの……ええ。知り合いと申しますか、今朝初めてお会いしました」
緊張して言葉を選んでいる様子がエイルにもわかった。
「あらあら、まあ」
カレナドリィはエイルの方をみた。
「だからそう言っただろう？」
「そうみたいね」
そう言ってカレナドリィは大きな目を細めて笑うと、チロっと赤い舌をのぞかせた。
「あ、あのっ」
エルネスティーネは顔を紅潮させてカレナドリィをじっと見据えると、決心したように口を開いた。
「カレナドリィ・ノイエさんはエイル・エイミイさんとはどういうご関係でしょうか？」
「関係？」
思っても見なかったエルネスティーネの質問に、カレナドリィは目を丸くした。
「お見受けしたところお二人はごく親しい間柄に思えます。まさに『しました仲にも礼儀あり』な関係のようです。殿方とご婦人がそのように親しくしているということは、幼少の砌より将来を誓い合われた仲ということなのでしょうか？」
「はあ？」
エイルはびっくりして顔を上げた。
「『しました仲』？」
カレナドリィは不思議そうな顔でエルネスティーネの真っ赤な顔

を見つめた。

『おい、意味がわかるか？』

【アホな子がもう一人増えた、という事はわかる】

そこには頬を紅潮させた金髪のアルヴィンの少女が真剣な顔でたんぽぽ色の髪の娘を睨んでいる図があった。

『に、睨んでる……よな？』

【ように、見えるな】

『なぜ？』

【俺に聞くな。その微妙に浮世離れしてるアルヴィンの子に直接聞いたらええやん。お前さんに聞く勇気があったら、やけど？】

『いや。そうだ、どうでもいい話だった。うん、オレには関係ない』

【意外に女難の相があるんかもな、お前さん】

『え、本当か？』

【知らんわ。俺に聞くな】

『あのなあ』

予期しない内容の質問を突然投げつけられたカレナドリィがとまどっているのを見ると、エルネスティーネは視線を今度はエイルに移した。

「確かエイルさんはウンディーネ出身の旅の方だとおっしゃっていました」

「あ、ああ。うん」

「カレンさんもそちらからいらっしゃったのでしょうか？」

エイルは大きく深呼吸するとエルネスティーネに向かって言った。

「カレンとはこの市で偶然会って、彼女はこの街に不案内なオレに市の案内をしていただけなんだが」

そして、勘違いするな、という風にやや難しい顔をして見せた。

「あらあら」

カレナドリィはエイルに向き直ると口を尖らせて抗議した。

「それは違うわ。偶然会ったのではなくて私がエイル君を追いかけて、この市でやっと見つけて、こうして捕まえたのよ」
そしてそういい終わると再び視線をエルネスティーネに向けるとにっこり笑って見せた。そんなカレナドリィの表情を見てエルネスティーネはなぜかムッとした。
でも、彼女自身はなぜムッとしたのかがわからなかった。

―（カレンはいい人だ。それは直感でわかる）
エルネスティーネは自分で自分の気持ちを吟味した。
―（でも、なぜか素直にこの笑顔を素敵だと思えない。何故か胸がざわざわする……）
そして今度はエイルのほうを見た。
―（この人にもなぜか妙に腹が立つ。でも、カレンに対するものとはちょっと違う）

カレナドリィはカレナドリィでちょっと違う気持ちでエルネスティーネを見つめていた。
―（うーん。ネスティが持っている、あのたくさんの紙袋は一体何なのかしら？）

エイルはエイルで突然訪れた沈黙にどう対処していいのかを苦慮していた。思いを巡らすように視線も同じテーブルの二人の少女から、カフェの周りの露店へと移していくと、そこに見知った顔を見つけた。
「あ」
そう思わず声に出した後で（しまった）と思ったが、もはや後の祭りであった。短時間ではあるが沈黙を守っていた二人の少女は同時にエイルの視線の先の二人連れの人物を認識していた。
「あらあら、まあ」
「あれは……ティアナ？」

二人がそう呟いた時、エイルの背後からまったく予期せぬ声が届いた。

「うわあ。あの二人、雰囲気がめっちゃ怪しなイ？」

『え？』

振り返るとそこに腰まである長い真っ赤な巻き毛のデュナンの女の子がニヤニヤ笑いながら立っていた。

『さっきの水のフェアリー！いつの間に？』

【珍しいな。背後が隙だらけやん】

『これはこれは。修行が足りずに申し訳ありません』

【き、気持ち悪い言い方しなや。それより、ちょっと代わって】

「ファルさんと白髪のあのきれいなアルヴの女性はお知り合い？」

カレナドリィは顔をエイルに近づけると、耳に口を寄せてひそひそ声でエイルに尋ねた。エルネスティーネがそれを睨むようにじっと見つめている様子を、ルネは見逃さなかった。

エイルの視線の先には品揃えがどうにもちょっと……いや、かなり怪しげな骨董屋が店を広げていた。構えはほかの店に比べてもそれなりに大きく、品揃えの質は不明だが、その量は相当なものだった。だが問題はその骨董屋ではなく、その店先で向かい合っている二人のアルヴだった。一人はル＝キリアのファルケンハイン・レイン。そしてもう一人はエルネスティーネのお目付け役ともいるティアナ・ミュンヒハウゼンだった。

エイル、いやエルデは口元を隠すと小さく何かを呟いた。

「え？」

その声が聞こえたのだろう。エルネスティーネが反応してエイルを見やった。

「何でもない。見つからないおまじない」

【フン、アレが聞こえたんか。かなり耳のええお嬢さまやな。まあ、

おまじないやのうてルーンやから、あいつ等には絶対見つからへんけどな】

『お前も物好きだな』

【いや、あのアルヴのお姉ちゃんは性格的に一筋縄ではイカン雰囲気がバシバシしてたからこれはええ機会や。無防備な姿をじっくり観察させてもらお。さらにレイン殿の素顔も今後の参考になるやろ】

『いや、どう言い訳してもただの野次馬だって』

【うるさい。黙って聞き耳立てとけ】

「まあ。そんな」

「いや、アカンで、ネスティ。こんな機会はめったにないんヤから。それになりより二人の邪魔したらアカンやろ？ここは静かに見つからんように見守ラな」

そういうとルネ・ルーは悪戯っぽい笑いを浮かべた。

「でも、これはちょっと見ものヤねえ」

「私もあんなティアナの顔、初めて見ましたわ」

「そうなんですか。私はお客のファルさんしか知りませんが、無口で無表情な方なのに、あんな優しげな顔もされるんでびっくりです」

「こ、後学のためにじっくり拝見しましょう」

エイルは一行の様子を見てため息をついた。

『全く女ってやつは』

【なんやて？】

『え？なんでお前が怒るんだよ』

【べ、別に怒ってへんっ】

『変な奴』

テーブルの一行はエルデのルーンで周りからはヴェールをかけられた様な状態でその存在感を希薄にされ、まったく気づかれることなく、骨董屋の前の二人のやり取りを一部始終観察することができた。

もちろん、エルネスティーネとルネ・ルーの二人にこの一件を見られていたことがこの後アルヴの二人に多大な影響を与えたことは想像に難くない。

ともあれ穏やかな秋の日差しに恵まれ、ランダールの大市は平和に楽しげに、そしてたいそう賑やかに過ぎていった。

＞ｉ２３５０４―１８３１＜

## 第十九話　骨董屋前（後書き）

第一部　第二巻終了です。
次回は第三巻になります。

# 第二十話　真赭の頤（前書き）

第一部　蒼穹の台　第三巻スタートです

# 第二十話　真赭の頤

＞ｉ２４４５８―１８３１＜

「真赭の頤（まそほのおとがい）」ことシグ・ザルカバードはもちろん実在した人物である。

エイル達だけでなくアプリリアージェ一行が追い求めるこの人物は当時の各国の上層部にとってマーリン正教会の賢者として名前付きで認識されているほぼ唯一の人間であった。それは先の千日戦争において教会側の交渉人として表舞台に出てきたからであるが、その姿を見た人間はほんの一握りと言われている。

文献によればシグ・ザルカバードは禿頭の大柄なアルヴで、自称二百歳だという。見た目は壮年にして周りを震わすほどの大きな声と若々しい笑顔が印象的で、物腰は柔らかいが、しかし一切の主張を曲げることなく諸国との折衝に臨んだとある。

そのシグ・ザルカバードが突然謎の書簡をシルフィード並びにドライアドの国王宛に送りつけた所から彼を捜す動きが出たのである。シルフィードではル＝キリアを鬼籍に入れるという手間までかけて秘密裏にこれに当たらせ、ドライアド側はスプリガンという諜報・特務組織を使って同様に探索に当たらせた。

シルフィード、ドライアドの各国に宛てたこの「ザルカバード文書」と呼ばれる書簡は現存しておらず、従って内容は推測の域を出ないが、緊迫状態にある二国にとって極めて重要な事が記されていた事は間違いがない。両国が彼の身柄を求めたのはすなわち「真赭の頤」がマーリン正教会内にはおらず、野にあると判断したということも容易に推測できる。

しかし、それにさかのぼること数年前にマーリン正教会本部が公に各地の教会宛に発布した通達の一部が今日までに発見されている。

それによれば「真赭の頤」がマーリン正教会内で事故により死亡した事になっており、だからこそ「ザルカバード文書」が怪文書と呼ばれる訳である。

最近の研究では各国が「真赭の頤」が生きており、しかも正教会にとって著しく不利になる事柄を漏洩しようとしたのではないかと判断した上で調査にあたらせたというのが定説と言っていい。さらに「真赭の頤」が握っていた物とは、「宝鍵」の一つであろうというのも大方の意見が一致するところである。

ここで思い出していただきたいのは、エイルが蒸気亭で手に入れた、エルデの知人の少女がルドルフに預けたという「宝鍵」である。

宝鍵はファランドールに四つしかないと言われる宝物であるが、その存在自体を知るものは少なく詳細はわかっていない。ただ、各地の伝承に「宝鍵は四龍の呼び玉である」というような内容のものがあり、四という数字からエレメンタルと深く関わりのあるものと考えられていた。

つまり、「真赭の頤」は何らかの理由でマーリン正教会が所有していた「宝鍵」を持ち出し、破門・追放され、さらに正教会側からはもちろんザルカバード捜索隊が各地に散らばったと考えられている。賢者の死亡通知をわざわざ各国の協会へ通知したのはその為だというのである。シルフィード・ドライアド両国はザルカバードが所有する宝鍵を狙って教会側より早くザルカバードを発見・確保することがこの世界情勢では自国に有利になると考えていた事は容易に想像がつく。いや、むしろマーリン正教会に発見されるのはまだいいとして、両国にとって絶対に避けたかったのは相手国に先んじられる事であった。

「真赭の頤」が宝鍵を持参してどちらか一方の国につくことは容易であったに違いないが、それが発覚する事すなわち正教会との戦闘になることは想像に難くない。未知数とはいえ、百五人の賢者を有する正教会を敵に回す事になれば、二つの勢力を相手に不利な戦争を始めなくてはならない羽目に陥るのは必至である。

また、ザルカバードの身になって考えたとしても味方になるかどうかがわからない相手の懐に転がり込むのは早計であろう。頼みとする国がマーリン正教会と通じていないとは限らないのである。それはすなわち自分の身の破滅に繋がる。

要するに両方に書簡を送った「真赭の頤」の意図は両軍の出方を観察するものであったと考えるのが妥当であろう。

いきおい、シルフィードとドライアドはザルカバードの居場所を血眼になって探すことになったのである。

もちろん、書簡に交渉の場所が明記されていないのは当然と言えた。「真赭の頤」としては教会側に見つけられる事は絶対に避けたいのである。自らを見つけることができる能力をまず問うたというところなのであろう。

その事情を含められているアプリリアージェ一行が、エイルを教会の賢者と知ってなお、共同歩行をとろうとしたのは一見奇異な行動に見える。

「真赭の頤」を探すマーリン正教会の賢者とはすなわち目前の敵と言えた。だがここにアプリリアージェの確かな状況把握能力の高さと戦略の妙味がある。

アプリリアージェはエイルをいわゆるマーリン正教会の「真赭の頤」討伐隊ではないと見ていたのである。それは最初の頃のエイルとの会話から確信していたと考えられている。エイルが賢者であることには間違いなく驚いたであろうが、一行の正体がエイルにはすでになぜか見破られていたにもかかわらずアプリリアージェの目的がエイルにはわかっていなかった事が決定打となった。エイルは教会側の賢者であったとしても、討伐隊とは一切関係なく、おそらくは私事で「真赭の頤」に会うために旅をしているとアプリリアージェは確信したのである。賢者の組織や詳細を知らないアプリリアージェだったが、人物を見抜く目については、彼女の人事登用の足跡

を辿れば疑いようがない。彼女はエイルを「敵」とは見なさなかったのであろう。むしろ「駒」として利用しようと考えたのは戦略家の面目躍如と称えるのは簡単であるが、おそらくアプリリアージェにしてみれば、エイルとそのまま別れる訳には絶対にいかなかったと言う方が正解ではないだろうか。エイルが他の賢者と連絡をとったが最後、アプリリアージェ達が教会の討伐隊の標的になることは火を見るよりも明らかなのだから。

アプリリアージェはだから、自分たちの任務の多くをエイルに情報として提供していくつもりでいた。ただし、そこは駆け引きである。いざとなればエイルを亡き者にして障害をなくしておきたかった。だからこそ細心の注意力でエイルの弱点を探ったつもりのアプリリアージェであったが、その無防備ぶりにむしろ面食らっていた。つまりはアプリリアージェにとってエイル・エイミイは「こちらから手を出さない限り当面命のやりとりをする相手にはならない」という存在なのであった。

自らの背中の入れ墨を見せるという、極めて無防備な姿をエイルの前に晒したことも、そう考えるとアプリリアージェの周到な確認手順であったのかとさえ思える。おそらく最終確認のようなものであったろう。無防備な姿を晒したとはいえ、それは賭のような運に任せたものではなく、裏打ちされた……つまり隣の部屋では弓を番えたテンリーゼン・クラルヴァインがエイル・エイミイを的に据えて居たに違いないとはこの物語だけにある想像記述に過ぎない。そしてもちろん、今ではそれを証明できる術はない。

「賢者エイル・エイミイは敵にあらず、か」

テーブルを挟んでアプリリアージェの対面に座したハロウィン・リューヴアークは髭を撫でながら独り言のようにつぶやいた。

「で、その彼は？いったんここに帰ってきてた様だけど」

「きっと大市でしょう。エリー……ネスティ達も向かったのでしょう？」

「ああ、すごく楽しみにしていたからね」
「一応、ファルケンハインとアトラックも向かわせてはいます。もっとも護衛ではなくて市を楽しんでこいと伝えましたが」
「ファルはまた例の？」
「ええ」
アプリリアージェは小さくうなずいた。
「骨董屋巡りでしょうね」
「ああ、例のリリスの飾り物探しか」
「店を持つのが彼の夢ですからね。いつか叶うといいと思います」
「そうだね」

アプリリアージェの部屋には大きな居間がある。そこには外側に開く窓があり、明るい日差しに満ちあふれていた。その居間にはこざっぱりした木のテーブルと椅子が四脚置かれていて、午後のお茶を窓の下を行き交う人々を眺めながら楽しむにはうってつけだった。
部屋には別に附室があって、そこにも椅子とテーブルがしつらえてあったが、窓がないので暗かったのだ。

テーブルには三人。
ハロウィン・リューヴアークとアプリリアージェ・ユグセル、そしてテンリーゼン・クラルヴァインが思い思いに熱い紅茶の入ったカップを口に運んでいた。
「彼の能力のすべてはそれこそ未知数ですが、今のところどう考えても私たちに敵意を持っている存在とは考えにくいのです」
「やはり、討伐隊ではないと言うことか」
「彼の口から賢者だと名乗られた瞬間には身の凍る思いがしました。あの恐怖の感覚は初めての経験かもしれません。今まで積み上げてきたものが次の瞬間にすべて灰に帰する事への絶望感というか……」
アプリリアージェの言葉をハロウィンは左手を少し上げて制した。
「君はどんな時でもそんな弱音を吐いてはいけないはずだ。そうだ

ろう？リリア」
　アプリリアージェはハッとしたように顔を上げると、口元をすこしほころばせた。
「私としたことが……先生の前だとつい甘えが出てしまいました」
　ハロウィンはそんなアプリリアージェにウィンクをしてみせると椅子を立ち上がってアプリリアージェの横に立ち、窓から通りを見下ろしながら、そっとアプリリアージェの肩に手を置いた。アプリリアージェは少しうつむき加減でその手の体温と重さを実感しているようだった。

「彼がフェアリーでなくルーナーだというのは本当でしょうか？」
　ハロウィンは通りを見やったままで答えた。
「事実だけを検証しよう。私が目撃した事実と、君が目撃した事実を照らし合わせて考えると彼は多属性の能力を有する。だから少なくともフェアリーではないことは君でもわかるだろう。つまり誰がなんと言ってもルーナーであることは間違いないが、問題は……能力の発動がルーナーの法則に則っていない事だ。今まで聞いたこともない奇妙な話だ」
「賢者とはそういう能力を持っているのでしょうか？」
「いや、賢者とは地位の名称であって、能力の名称ではない。あくまでも普通の人間達だ。まあ、もっとも賢者とは能力の名称ではないとは言ったが、その能力が普通と言っていいかどうかは疑問だが……少なくともこの世界の法則から外れる人間など存在しない。あの「真赭の頤」でさえ、ただのルーナーで、フェアリーではないのと同じ事だ」
　ハロウィンの言葉をじっくりかみしめるように聞いた上で、アプリリアージェは間を置いて言った。
「例外なく、ですか？」
　ハロウィンは思ってもいなかった質問を受けた。
「そのルーナーの法則に則らない『例』の存在……つまり例外はあ

りませんか？」
「何がいいたい？」
ハロウィンは訝しげに自分に視線を注ぐアプリリアージェを見下ろした。
「先生はご存じのはずです」
そうか、とハロウィンは納得した。
アプリリアージェが幼少の頃、エッダの王立図書館の普通では入れない書庫に特例で入り込んで長い間勉強をしていたことを思い出したのだ。
「「あれ」はもう居ないよ。三千年も前にみんな滅んでしまった」
「シルフィード軍の手によって、ですね」
「それに「あれ」は人間ではない」
シルフィード王国の負の歴史。その歴史に埋もれた出来事。
「歴史上の事実は事実として受け入れ、今は現実を見ながら将来を考える方がいいだろう」
「事実……なんですね」
「むろん、事実だよ」

しばらく沈黙があり、その話題はそれ以上継続することなく、それで立ち消えた。
アプリリアージェはハロウィンが窓際から離れてテーブルに着くと、彼のカップに古めかしい磁器のポットから紅茶を注いだ。
ゆっくりと丁寧に紅茶を注ぎ終わってから、違う話題を口にした。
「そう言えば彼は剣の腕前もかなりのものと見ました」
「ほう、剣の腕前が確かなルーナーというのもまた珍しいな。かなりのものと言うと？」
「特殊な場面で少し見ただけなので憶測の域を出ませんが」
「直感でいいよ。たとえば君と比べてどれほどのものかな？」
そうですね、という風にアプリリアージェは少し首をかしげると言葉を選ぶように続けた。

「そもそも彼の剣術自体が独特です。我々の剣術とはまるっきり違うもののようで、その能力についてはまだ見切れていません。剣のみの勝負で負ける気はしませんが、さりとて勝てるという根拠もありません」

「ふむ。君がそこまで言うとは、ただ者ではなさそうだな」

「なんと言いますか、構えも雰囲気も隙だらけなのですが、踏み込んでは危険だと本能が警鐘を鳴らすのです。これは今までにない感覚です」

「ほう」

「うち解けた頃にでも、一度アトラックあたりと試合をさせてみたいと思ってはいます」

「アトルか」

「腕を上げましたよ」

「彼はああ見えて実に努力家だからな」

「ああ見えて、ですか」

「ああ見えて、だよ」

アプリリアージェはクスクスと小さく笑った。

そんなアプリリアージェの横顔をチラリと見たハロウィンは、すぐに視線を通りに移した。

「本当に賢者なのでしょうか？」

ややあって、アプリリアージェが尋ねた。

「君も知っているとおり賢者同士はもともと名前、いや彼らの言う「現名」で呼び合う事はなく、賢者としての本名で通っているから特定はきわめてやっかいだね。百五人いると言われる賢者のうち、一般に現名が知られているのはシグ・ザルカバードくらいだからね。それとて『「真赭の頤」』という賢者名の方が彼らには通りがいいだろう。あとは各国の軍の上層部が諜報活動によって知り得た「賢者だとされる」名前がいくつかあるに過ぎない。シルフィードが持っている賢者の現名名簿の中にもちろんエイル・エイミイという名

前はないという事は確かだ。ただ、どうやら「マーリンの眼」を持っていることは間違いないようだから、だとしたら賢者の可能性は極めて高いと言うことだろう。いや、賢者の徴を持っている者は賢者以外あり得ないと言った方がいいね」

「そうそう。その「真赭の頤」の事を『じいさん』などと言ってましたね」

ハロウィンはうなずいた。

「シグ・ザルカバードの孫か曾孫か弟子か……素直に考えると弟子だろうな。もしそうだとしたら、エイル・エイミイが賢者会とは違う行動をとっている賢者だというのもうなずける」

「まさに個人的に賢者ザルカバードを探しているという事になりますね」

「君はそう思っているから、当面は敵ではないと判断したのだろう？」

「それもありますが」

「うん？」

「ふふ。彼と少し旅をすれば先生もおわかりになりますよ。あの子はあの子の事情で頭がいっぱいという感じです。謎が多い……いえ、多すぎる少年ですが、先生も気に入ると思います」

「わたし『も』」なのかい？」

「ええ。私はとても気に入りました」

「そうか。ならばきっと私も気に入るだろう」

そこまで言って、ハロウィンは思い出したように繋いだ。

「そうそう、気に入ると言えば」

「ティアナ・ミュンヒハウゼンの事ですか？」

「わかるか？」

アプリリアージェはまたもやクスクスと笑った。

「先生の事ですから、きっと大そう嫌われていらっしゃるのでしょう？」

「ご明察だ」

「大丈夫です。先生だけではなく、彼女にはきっと私たちも嫌われているはずですから」
「慰めになってはいないな」
「ふふふ。純粋で誇り高いシルフィードの生粋の戦士である若いあの子には先生はちょっと怪しすぎますし、我々……言ってみれば裏の世界の人間は謀と血にまみれて汚いもののように見えるでしょう。むしろ本来シルフィードにあってはならない人間達だと思っているでしょうね。残念ながら、それはどちらも事実ですから仕方がありません」
「そいつは、どうも」
ハロウィンは首を竦めて見せると話題を転じた。短いやりとりだったが、ティアナの事はアプリリアージェに任せておけば大丈夫だという確信が持てたのだろう。

「話しは戻って、その小さな賢者の事だが」
「ええ」
「賢者の名前は名乗ったのか？」
アプリリアージェは首を横に振った。
「いいえ、いわゆる現名のみです。私もあえて聞いていません」
「なるほど」
「気になりますか？」
「いや、実は現名の方が少し気になる」
「エイル・エイミイという名前に何か心当たりが？」
「いや、まず思い過ごしだとは思う。それに君が気にとめるような事ではないから忘れてくれていい。」
「そうですか」
「すまないな。きわめて個人的な、それに些細な事だよ」
「はい。もう忘れました」
アプリリアージェはそう言うと目を細めた。

聞くなと言うからには聞いて欲しくない事なのだろう。個人的で些細な事だというのだから、おそらくそうなのだろう。

ただ、アプリリアージェの直感のようなものが、ハロウィンが見せた小さな疑問は重大なものかもしれない、と告げていた。ただし、漠然と。

今持っている情報を総動員しても答えなどないのは当然として、関連するかもしれぬ選択肢すら一つも出ないような謎なのだ。

「ほかに彼について気になる事はあるかい？」

「そうですねえ」

アプリリアージェは考えを巡らせるように宙を見つめたが、思い出したようにつぶやいた。

「いつもではないのですが、ごくまれに表情が……」

「表情？」

「ええ。表情だけでなく雰囲気が激変します。頑なでちょっと気むずかしい面があるにせよ普段は澄んだいい目をしている普通の少年なのですが、時々とてつもなく禍々しい目つきをすることがあるのです。そのときの雰囲気は私でさえ一瞬心が凍るような気分におそわれます」

「禍々しい目つきか」

「強力な術を操る時には様々なものが出てくるのでしょうから、あまり気にすることはないのでしょうけれど、少し引っかかるのです」

「彼はたぶん我々が想像できない修羅場をくぐり抜けているんだろう。ただ、どちらにしろ普通の少年でないことだけは確かだろうね」

「そうですね。まあ、あまり気にはしていませんけど」

その後沈黙が少し続いたあと、ハロウィンが話題を変えた。

「彼のことを君が敵ではないと目利きしているのなら、君の今後の計画の遂行のためにも我々の目的の本当のところを伝えておいた方がいいだろう。特にエルネスティーネの事は隠さずに……」

「本当というのはどの本当の事ですか、先生？」

すかさず切り返したアプリリアージェの問いに、ハロウィンはしかし即答しなかった。アプリリアージェの意図をはかりかねていたのだ。

アプリリアージェは少しの間だけハロウィンの回答を待って、それが得られないのを見てこう続けた。

「ファルケンハインまでが知っている本当のところ。エルネスティーネが知っている本当のところ。リーゼや私が知っている本当のところ。きっとその上に先生だけが知っている本当のところもあるんでしょう？」

ハロウィンはアプリリアージェのその言葉にも反応しなかった。それはアプリリアージェも予想していたことで、彼女はもう一言だけ付け加えてこの話題を切り上げるつもりでいた。

「私たちって、一体いくつのウソをついているのでしょうね」

その一言を言った後、アプリリアージェは自嘲気味にクスっと笑った。

「そう言えば、同じような事をエイル・エイミイに言っちゃいましたよ、私。君にはいくつ謎があるんだ？って。彼の場合は「謎」ですが、私たちの場合は「ウソ」ですからね」

アプリリアージェのその様子を見ていたハロウィンは安心したような声で口を開いた。

「その様子じゃ、エルネスティーネの件についてはすでに手を打ってるということかい？」

「いえ。その件についてはお願いするチャンスを逸しましたが、それなりの下準備は整ってます」

「ほう」

「少しだけ本当の事を教えただけです。エイル君に」

アプリリアージェはそう言うと、ポットに入った紅茶を自分のカップに注いでから、ハロウィンを振り返った。

「先生ももう一杯いかがですか？本当にすばらしいですわ、このお茶。旅に出ていると、お茶の当たりはずれが大きくて。いえ……」

そう言ってハロウィンに目配せをしてこう付け加えた。

「また嘘をつくところでした。当たりなどなくて外れればかり、というべきですね」

その声にハロウィンはこたえなかったが、かわりに目の前に座っていたテンリーゼンがそっとカップを差し出した。それまでその場に存在していることすら忘れるほど、まさに人形のように佇んでいたテンリーゼンが久しぶりに見せた命の存在証明にアプリリアージェはただでさえ下がっている目尻をいっそう下げて本当にうれしそうにテンリーゼンに微笑んで見せると、差し出された小さなカップにルビー色の液体をなみなみと注ぎ入れた。

# 第二十一話　メッダの鐘

精霊祭に合わせた秋の大市は長い船と馬車の旅で疲れがたまっていた少女達にとって格好の気分転換になったようだった。

町の中心部にある広場のほぼ全体を使って多くの店が軒を並べていて町の人間にとってはもちろんのこと、彼女たちにとっては各地方・各国から持ち寄られた特産品や食べ物など、見たことのない物が一堂に会する賑やかなランダールの精霊祭の市は驚きの連続だったのだ。エイルの都合もあって滞在が延びて後から合流したハロウィン組は大市の最終日までたっぷり楽しんでいた。

中でもネスティ……エルネスティーネの興奮は夜になって宿に戻っても冷めやらなかった。

「明日は早朝の出発なのです。後生ですからそろそろお休み下さい」

興奮してしゃべり続けるネスティが市の話題をあらかた終えて帰り道で気付いた靴の底についた小石の組成の話にまで及んだ時、さすがのティアナもたまりかねてそう懇願したが、それはすでに日付が変わってしばらく経ってからであった。

かく言うティアナ自身も旅行者として自国……いやエッダで暮らし始めてからは首都を出ることすら殆どなかった事もあって、外国の大市は密かに楽しんでいたようである。

その証拠は翌朝、ランダールを徒歩で出立したあと、道中でエルネスティーネによって発見されることになった。

もっともそれはその時初めて発見されたというよりは例のエルデが気を利かせた？ルーンに包まれた彼女達によって目撃されていた出来事の答え合わせのようなものであったのだが……。

「あら、ティアナ。その耳飾りステキね」
ランダールの城門を出てしばらくしてからだった。左耳に付けた耳飾りをめざとく見つけたエルネスティーネが、ティアナに声をかけた。
「ええ……その……大市で」
ティアナはいつもの歯切れのよい受け答えとは違い、口ごもるようにしてそう言うと、エルネスティーネから視線をそらした。

ティアナの左耳にぶら下がっている耳飾りは細長いねじれた籠のような形をしていて、その中に小さな赤いスフィアが抱きかかえられるようにして入れられているものだった。籠の細工は実に緻密で朝の光を反射して時折キラキラとした光を放ち、ともすれば厳しい表情になりがちなティアナをいつもの何倍も明るく感じさせた。

「リリス製かしら。大胆なデザインが繊細な巧緻で見事に仕上げられています。とても可憐ですね。なによりその耳飾りはティアナにとっても似合っていてよ」
エルネスティーネは耳飾りに言及したあたりからティアナが少し落ち着きをなくしてほのかに顔を上気させているのに気づいて、内心ニヤリとしていた。つまりティアナが耳飾りについては何か事情が……それもティアナにとってはきまりの悪い事情があって出来ればあまり触れて欲しくないという風情をわかった上であえて意地悪く追求してみせたわけである。
それは、そもそも自分を飾るという事がティアナにとっては事件とも言える出来事だからであり、ティアナに何らかの変化が起こったことが容易に理解できたからであった。
からかう・からかわないという悪戯心を別にしても、エルネスティーネにとっては殆ど軍服の姿でしか会うことのないティアナが耳飾りという装飾品を付けたという行為自体がちょっとうれしくもあったのだ。

「いえ、リリスなどと……市の骨董屋で売られていたものですから、おそらくは銀の合金でしょう」
「ふふ。そんなことはどちらでもいいではないですか。ティアナは気に入っているのでしょう？」
「ええ……まあ」
ティアナの顔がさらに赤くなったのがわかった。エルネスティーネはそんなティアナの様子を見て笑いを堪えるのに苦労した。

ティアナはできるだけ平静を装いながら前を歩くファルケンハインの背中をチラリと見やった。ファルケンハインと言えば、さっきからハロウィンとアトラックの三人で並んで、ランダール周辺でとれる葡萄の種類とそれから作られるワインの話ばかりをしていた。
ファルケンハインのその様子を見たティアナは心の中で小さなため息をつくと、無意識に左耳につけたその耳飾りを左の人差し指でちょっと揺らした。すると耳元にルルル……という涼しげな優しい音が聞こえてきた。どうやら、その耳飾りは、揺らすと中のスフィアが微妙に籠の中で動いて小さな音がなる仕掛けになっているようだった。だが、その音は本当に小さく、装着した本人にしか聞こえない程度であるようだ。それが証拠に横を歩いている耳のいいエルネスティーネがそれについては何も言及しなかったのだから。

「覗き組」からは背中しか見えなかった為に耳飾りから音が鳴る事を発見した時のティアナの表情まではエルネスティーネも知る由はなかったが、実はあの時居合わせた……いや、ティアナの正面に居たファルケンハインはもちろん目撃していたのである。

……まるでおもちゃ箱をひっくり返したような、鮮やかでたらめで賑やかな市が開かれている広場の中を幼い少女の様に気まぐれに走り回るエルネスティーネを追いかけ回した結果、その横にいつも居ることは事実上不可能だという結論を導き出した。おてんばな

姫の行動力と底知れぬ体力を目の当たりにした彼女は、事前に申し出があったように広場の中でのティアナの護衛をエルネスティーネ以上に小回りのいいルネに任せる事にし、自らもしばし大市を見て回る事に決めた。

ぶらぶらとあてもなく歩いていて、ふと目に入ったのが大小様々な雑貨を売っている老婆の店先だった。ティアナ自身は多くのシルフィードの女性軍人がそうであるように特別に服や装飾品などに興味があるわけでもなく、またティアナの場合その禁欲的な性格が災いして見たこともないような珍しい食べ物にチャレンジしようという欲求もなかったので、彼女の興味は実用品だけであった。つまり今後の旅に役立ちそうな旅行用品でもあればと思って足を止めた店だったのだが、そこでファルケンハイン・レインとばったり出会うことは全くの想定外であった。

ファルケンハインの姿を認めた瞬間にはきびすを返してよそへ行こうとも思ったのだが、火事の時の事もある。それでは相手のことをあからさまに意識している事を宣言しているようで抵抗があった。いや、それよりもファルケンハイン・レインの彫りの深い顔を見つけ、その切れ長の思慮深そうな瞳を見つめて思わず顔を赤く染めた姿をすでに見られてしまっていては、いきなりその場を離れると誤解されかねないと考えた。いや、そもそも自分の方が遠慮する必要などないわけで、ここは普通に接しようと、ティアナはあえてその場にとどまり、ファルケンハインに簡単な黙礼をした。

最低限の義務は果たした、と自分に言い聞かせた後、ティアナはファルケンハインをこれ以上ないくらい意識しながら無視を決め込み、何か声をかけようとした長身のファルケンハインの脇をすり抜けると店の奥に向かい、簡易な陳列棚に所狭しと並んだ雑貨を色々と吟味してまわった。

その多少屈折したティアナの心の動きを知ってか知らずか、ファルケンハインは実にフランクにティアナに声をかけた。低く、太い

声がティアナの耳に深く染み込んだ。

「さっきネスティに聞いたが、今日が誕生日だそうだな」

ティアナは思わず顔を上げた。

思いがけない言葉だった。

いや、思いがけないのは今日が誕生日だと自分自身がすでに忘れていた事に対する驚きも含めたものかもしれなかった。

もう何年も自分の誕生日などを気にしたこともなかったが、そう言えばいつもエルネスティーネだけは誕生日を祝う言葉をかけてくれていた。

シルフィードの王宮の不文律で、特定の人物に贈答品や下賜品を与えることは禁じられていたこともあり、エルネスティーネから誕生日の贈り物と言ったものは一切もらったことがなかったが、ティアナにとってはエルネスティーネが笑顔で祝ってくれるその言葉が何よりの贈り物だと思っていた。

（我が姫……）

こんな状況でも単なる一軍人の誕生日を覚えていてくれたことに対して、神に感謝した。

だが……。

なぜ今そんな話題をファルケンハインが私にする必要があるのだろう？

精霊祭だからと言って浮かれているのか？だとしたらやはりル＝キリアなどという人殺し部隊にいる人間は軽蔑すべき存在だ……

ティアナの論理には破綻があるが、それこそティアナ自身があれほど嫌っていたル＝キリアに対して自分の先入観と実際に会って感じたものとの乖離にとまどっていた事の証拠となろう。自分が勝手に考えていた先入観にはまりそうなものは何の裏付けもなく受け入れようとする心理が強く働いていたと言えるだろう。

「そうですが、それがどうかしましたか？」
ティアナは思いがけないファルケンハインの言葉から受けた小さな動揺を相手に悟られまいとして努めて冷静に答えた。だが、冷静さを意識するあまり少し震えて妙に低いこもったような声になってしまい、思わず唇を噛んだ。
「いや、これは極めて個人的な事で失敬は承知で声をかけてしまったんだが……実は俺も今日が誕生日なんだ」
「なんと」
ティアナは思わず声を上げて、そして例によって（しまった）と思った。相手に関心があると誤解されては困るのだ。

（誤解？）
ティアナはそう自戒した後、思わず自分で自分に問いかけた。
（何を誤解されるというのだ）
ティアナは心の中で小さな何かが崩れた気がした。
そして旅装束に身を包み商人のような出で立ちをした、目の前にいる長身のアルヴの戦士を見やった。残忍で粗野で軽薄で卑怯な人殺しであるはずのル＝キリアの副官はしかし、澄んだ深い緑の瞳に自分の顔を静かに映していた。

「単なる偶然と言ってしまえばそれまでだが、同じ誕生日の人間が仲間に居ると思うと少しうれしくてな。思わず君をさがしてしまった。子供っぽいと笑ってくれてもいいが、一言だけ言わせてくれ」
「何をです？」
「誕生日、おめでとう」
「な……」
何を言い出すかと思えば。
ティアナはあまりに思いがけない一言にとまどっていた。いや、もはやとまどっているという状況ではなかった。ファルケンハインの短いその一言が引き金になり、胸の奥から何か熱いものがこみ上

げてきて、それを制御する事ができそうにもなかった。
あまりに単純な一言ゆえに、ファルケンハインの言葉はティアナの胸に深く鋭く突き刺さったのだ。

（この男……わざわざいい大人が断りを入れてまで言うセリフではないのではないのか……それに、なぜそんな優しい声で私に話しかけられるのだ？）

ティアナはこみ上げてくるものにあらがいながら思わず顔を背けた。これ以上は耐えられなかった。

「ありがとうございます。私はちょっと用事があるのでここで失礼します」

語尾が震えていたが、かまわずそのまま店を出ようとしたが、ファルケンハインに腕を捕まれて引き留められた。

「あ、失礼ついでに、少しだけ待って欲しい」

ティアナは自分の腕を捕んだ大きな手を振り解こうとせずに立ち止まった。こみ上げてきたものはすでに涙となって溢れようとしていた。強面で通っているティアナだったが、一本気なだけに感激屋でもあったのだ。つまり、ファルケンハインのささやかな一言が思い切り彼女の心を揺さぶってしまっていたと言うことであった。それだけにティアナは今の自分の顔は絶対見られたくないと思った。なぜこの男の言葉で私が感極まらないといけないのだ、と。

振り返らず、さりとて立ち去るでもない様子のティアナの後ろ姿にどうしたものかと一瞬戸惑ったものの、ファルケンハインは手に持った小さな物を、ティアナの左の耳元で小さく振って見せた。

リュルル……

微かな、しかし優しく確かな何とも言えない音がティアナの耳に届いた。

（これは！）

ティアナは思わず振り返り、ファルケンハインの持つ小さな耳飾

りを見つめた。
もちろん、涙が溢れそうになっている事は一瞬忘れてしまっていた。

ファルケンハインといえば、振り返ったティアナの瞳に涙が溢れている事に戸惑った……俺は何かとんでもない事を言ってしまったのか……そう自問自答したが、もちろん彼には思い当たる節はなかった。

「これは？」
「気づいたか？」
ファルケンハインは努めて普通の会話を心がけた。
「これは、メッダの鐘の音」
ティアナの答えに、ファルケンハインは少し微笑してうなずいた。
「君がメッダ出身だと言うこともエルネスティーネに聞いた。偶然は重なるもので、実は俺も生まれはメッダの近くの村だ。幼い頃は、夕暮れになると風で運ばれてくるこのメッダの大鐘楼の音を聞いて家路に就いたものだ」

ティアナは思わずうなずいた。
そうだ。私もそうだった。
遊び疲れて、空腹を思い出す夕刻になると、必ずこの鐘の音が耳に届いたものだ。私たちはめいめい、それぞれの母と、母が作る暖かい夕餉のシーンを思い浮かべて、一目散に駆けだした。そう、我が家へ……。

「この店先で偶然これを見つけて、矢も楯もたまらず買ってしまったのだが……」
「これは、いったい？」
「メッダの鐘の音を奏でる耳飾り……彫金師だった俺の祖父の手に

依るものだ。幼い頃に見て覚えていた。まさかこんなところで出会うとは」

「それは……すごい事ですね」

ティアナが素直に心に浮かんだ言葉を告げると、ファルケンハインはうなずいた。

「ここは不思議な町だ。ここを訪れてから驚くような偶然の出会いの連続だ」

ティアナもうなずいた。

賢者との出会いも偶然なら、火事の現場に居合わせたのも偶然で、旅の仲間になった二人の男女の出身地と誕生日が同じだった……。

さらにその町の市で、祖父の作品に出会ったという。

敢えてあげつらうにはささやかすぎる偶然もあったが、そのささやかな偶然こそがティアナにはなぜか大事に思えた。

「君を引き留めた本題はここからだ。これは俺の勝手な願いなのだが」

ファルケンハインはティアナの涙顔をのぞき込んで、少しはにかんだように続けた。

「この耳飾りをもらってくれないだろうか。誕生日の贈り物として」

「え？」

ティアナは耳を疑った。

（今、この男は今何を言ったのだろう？）

「君が我々の事をあまり好ましく思っていない事は知っている。それはもちろん君のせいではなく、我々のせいだ。嫌いな人間から贈り物を受け取る事には抵抗があるとは思うが」

「いえっ」

ティアナは強く首を振った。

そして自分自身で自分のその行動に驚いていた。

「我々の旅はおそらく辛い旅になるだろう。疲れた時に懐かしいメ

ッダの鐘の音を時々聞きたい。だが俺がまさかこの耳飾りをする訳にもいかない。できればメッダの鐘の音を知る君に付けてもらえるとありがたい。これは単に俺のわがままだろう。もちろん君にはどうでもいいことだ。だが、それを付けて欲しい理由はもう一つある」

「もう一つ？」

ここでティアナは思ってもいない物を目にした。

冷静で物事に全く動じないといった風情のファルケンハインの顔が一瞬で赤くなったのだ。

「いや、これを見つけたとき、なぜだか君に似合うと真っ先に思ったのだ……」

「え？」

「あ、いや、こんなことを言うつもりではなかった。不謹慎ですまない……」

「いえ……そんな」

ティアナは自分がここで何を言うべきなのか、もうわからなくなっていた。

また言葉にできない気持ちの固まりの様な物が胃の方から喉にこみ上げてくる……。

「受け取ってはもらえないだろうか、ティアナ。もっとも、二つで揃いのはずの耳飾りが、残念ながらこれ一つだけしかないのだが」

ファルケンハインが初めて「君」ではなく、ティアナの名を呼んだ。

ティアナにはその声が心に染みた。

エルネスティーネとは違う種類の優しい声に、心が熱いもので満たされていくようだった。

「いけません。私などにそんな大事な物を」

「君だからもらって欲しいのだ」

ファルケンハインはそう言うとティアナの左手をとり、その手のひらに耳飾りをそっと置いた。
「誕生日、おめでとう」
そしてそう言うと今度はゆっくりと耳飾りを手のひらに握らせた。
「ありがとうございます」
ティアナはもう逆らわなかった。
その時には、ファルケンハインからの贈り物を欲しいと強く思っていたのだ。
「皆には、市で自分で買ったとでも言っておけばいいだろう。ほら、耳元で振ってごらん」

ティアナは言われたとおりにその耳飾りをつまむと、左耳のそばでゆっくりと振った。
リュルルル……
優しいメッダの鐘の音が、微かに、微かに耳に届いた。その音を聞くと、ティアナは何とも言えない気持ちになった。今では殆ど感じることのない、優しい、幸せな気持ちだった。表情がぱっと明るくなり、ファルケンハインにはまぶしい程の笑顔を見せた。そしてティアナは再び溢れてきた涙に気づくと、ファルケンハインに背を向けた。
「すみません……私、いったいどうしたんだろう」
ファルケンハインは後ろからそっと手を伸ばすと、指先でティアナの髪を優しく撫でた。

「ィアナ!!」
「??」
「ティアナったら、聞いてンの?」
ルネの声だ。
「え?」

ティアナは思わず我に返ると声のする後方を見やった。
「ここで休憩ヤよ」
私としたことが……ティアナはため息をついた。
振り返ると一行は二十歩ほど後ろで一人先に行こうとしていたティアナの方を不思議そうに見やっていた。
「あ、ああ、問題ない。ちょっと考え事をしていた」
ティアナはこう言う場合にはお決まりの言い訳をすると心の中で舌打ちをした。
（本当にどうしてしまったのだ。たるんでるぞ、ティアナ・ミュンヒハウゼン）

「ティアナさん、なんだか昨日からずっとぼんやりしてますねえ」
シェリルが心配そうにハロウィンを見上げた。
ハロウィンはうなずいてティアナに声をかけた。
「おーい、具合が悪いようなら診てあげよう」
「余計な世話だ！」
ティアナはハロウィンを睨むと鋭い口調で即座に断りを入れた。
「あなたに診てもらって生き延びるくらいなら体を壊して死んだ方がマシだ」
ファルケンハインとアトラックは顔を見合わせ、アプリリアージェはいつもの笑顔に苦笑の色を少し滲ませ、ルネはニヤニヤしてシェリルの袖を引っ張っていた。エイルと言えば、なぜティアナがハロウィンをここまで毛嫌いしているのかがよくわからなかったが、アプリリアージェとは対照的な雰囲気の女の人……だと改めて認識していた。
エルネスティーネはおかしさを堪えながら、ハロウィンの表情をみやった。
「元気そうで、何よりだね……」
ハロウィンは肩を竦めると帽子のつばをちょっと触って挨拶をして見せた。

（しまった。またやってしまった）
ティアナはそう思ったが、もはや後の祭りであった。
「なーんや、ネスティ。いつものティアナやん？」
ルネはニヤニヤ笑いのままエルネスティーネに声をかけた。
「ええ、そうね。いつものティアナですね」
「ひめ……いえ。ネスティ！」
ティアナは眉間に皺を寄せてエルネスティーネを睨んで見せた。
「ティアナ」
「何です？」
「『短気はノンキ』よ」
「？？」
「？？」
ティアナはひときわ大きなため息をついた。
「とにかく、大人をからかってはいけません」
「はーい」
エルネスティーネはペロっと舌を出してそう答えたが、いたずらっぽく目を輝かせたままで下からティアナの顔をのぞき込むようにして言った。
「でも、ティアナが耳飾りなんて着けてるの初めて見たわ。似合うわよ、本当に」

「あ、ホンマやワ」
一行で一番小さい赤毛のルネがエルネスティーネの横に並んでティアナの顔をのぞき込んだ。
「ティアナ、なんかいつもよりカワイイで」
「あなた達っ！」
「はいはい。大人をからかってはいけないのです……よね？」
そういってころころと笑うエルネスティーネを見ていると、ムっとした気分も晴れるというものだが、そんなことよりも妙に顔が上

気している事を悟られねばいいが、と思うティアナだった。

『おい』
【なんや？】
『いいのか？』
【何が？】
『みんな無視してるぞ』
【だから、何を？】
『〈短気はノンキ〉ってなんなんだよっ？』
【それは勿論『短気は損気』の間違い】
『だから、何故みんな指摘しないんだよ？訂正しないんだよ？間違いだって教えてやらないんだよ？変だろ？おかしいだろ？異常だろ？というか、一国のお姫様があれでいいのか？』
【いいかげん慣れた方がええって。今からそんなんやと、この先もたへんで】
『オレはものすごーーっく、気になるんだよ』
【いや、今日だけでこのパターンはもう三回目くらいやろ？】
『いや、回数の問題じゃなくて』
【ティアナ姉さんの疲れ切った顔……それが全てや】
『ああ、でもっ』
【やかましいっつ。お前、意外に神経質な性格やな】
『それはオレも最近気づいた。でも意外ってのは余計だ』

「アトルの情報によると、ここから先は本格的な山道に入って上り坂がしばらく続くみたいです。ここでちょっと休憩してお茶にしましょう」

アプリリアージェがにっこり笑ってティアナにそう告げると、一行の話題はティアナの耳飾りから今夜の宿の事に移行した。野宿の可能性が高かったのだ。

だが、エルネスティーネにとっては生まれて初めての野宿に心が

躍っていた。
「野宿を楽しみにしている人なんて、初めて見たわ」
シェリルが呆れたように言う。
「あら。シェリルは日常みたいなものだったのでしょうけれど、本や知識でしか知らないものを自分が体験できるなんて素敵な事ではありませんか？血湧き肉躍る冒険譚には野宿がつきものですもの」
言葉遣いがまだ妙なところがあるが、エルネスティーネ自身はそんなことにはまったく臆することもなく、旅に出てからはお喋りに熱中していた。
だが「血湧き肉躍る」などという形容をエルネスティーネはいったいどこで覚えたのだろう、とティアナは少し困惑した。それと同時に自分が勝手に思っていたエルネスティーネよりも本人の方は数年大人びているのだと言うことを微妙に認識することにもなった。
ともあれ、話題が自分から外れた事にティアナは内心ほっとしたが、同様にもう一人ほっとしている人物が一行の中にいた。むろん、ファルケンハイン・レインだった。シェリルとルネとエルネスティーネの三人がアトラックの指揮の下、他愛のないおしゃべりをしながら携帯燃料を使ってお茶の支度をしている時にファルケンハインとティアナの視線が一瞬合ったが、二人とも直後に不自然に視線をそらせた。
一昨日の事があってからというもの、ティアナにはまともにファルケンハインの顔を見ることができないのだ。
（どうしたというのだ）
要するに一般的な常識を照らし合わせれば事は単純な話なのだが、ティアナにとってはただ混乱する自分をもてあますだけであった。

「今夜はまず野宿になるでしょう」
アプリリアージェがティアナとハロウィンにそう告げた。
次の村までは大人の足ならば早朝にランダールを出発すれば日が暮れる頃には到着する距離だったが、健脚とは言えない少女が数名

いるアプリリアージェ一行にはそれは無理な相談だった。
その言葉を聞いたアトラックとファルケンハインは顔を見合わせると申し合わせたようにうなずいた。
「お茶をいただいた後、俺たちは先行して野宿に適当な場所を探しておきます」
「お願いします」
「なあに、小さな貴婦人方の炭焼き小屋か避難小屋くらいは見つかるでしょう」
アトラックは明るくそう言って請け合った。

「熱いうちに召し上がれ」
一行の喧噪から少し離れ、空を眺めてぼんやりとしていたエイルは少女から声をかけられて振り向いた。
そこには湯気のたつカップを両手に持った、長く美しい金髪の少女が微笑んで立っていた。カレナドリィの、ほとんど黄色と言ってもいい金髪とはまた違い、もう少し重い色の、まさにいわゆる金色のまっすぐな髪がそよ風で柔らかく揺れていた。
「あ、姫さま」
エイルは反射的に立ち上がってぎこちなくお辞儀をした。
その姿を見てエルネスティーネは思わず吹き出した。

【おいおい】
『なんだよ』
【何緊張してんねん】
『だってさ、王女様だって聞くと緊張するだろ?』
【普通にしとけって言われやろ?】
『いや、でも、そう言われて夕べ試しにエルネスティーネって呼び捨てにしてみたら、あの人に思いっきり睨まれたじゃないか……』
エイルはチラリと視線をティアナに向けた。しかし案に反してティアナはエイルの方を向いてはいなかった。エイルはちょっと安心

する自分を感じて少しだけ情けなくなった。

「私のことを姫さまなどと呼んではいけませんわ」

エルネスティーネはクスクス笑いながらカップをエイルに差し出した。エイルは緊張に併せて今自分がとった行動をさすがに滑稽に感じて思わず顔を赤くした。それでもそっと手を伸ばしてアルヴィンの少女が差し出したカップを受け取った。その際、指先がエルネスティーネの細い指に少し触れた。

「す、すみません」

「はい？」

「い、いえ」

『どうしよう？オレ、本物の王女さまに触れちゃったよ』

【しょーもないやっちゃな】

エルネスティーネはまた可笑しそうにころころと笑った後、エイルの顔をじっとのぞき込むようにした。

「『さらば。でも行っとき』ですわ」

『い、意味がわからんっ』

【うろたえるなって。これはたぶん『茶腹も一時』って言いたいんや】

『なるほど！』

【ふー。困難な解読やったで】

『あああああ、指摘したいっ！』

【こらえるんや。男の子やろ？】

『いや、男とか女とか関係ないだろ？』

「隣に座ってもよろしくて？」

エイルが座っていた場所は大きめの切り株で大人が二人くらい楽

に腰をかけられる広さがあった。エイルはあわてて懐からハンカチを取り出すと、切り株の上に敷いた。

【あー。もしもし?】

『オレの世界ではこれがエチケットなんだよ』

【へえええええ?】

『「え」が多すぎだ。まあ、もっとも』

【もっとも?】

『それは話の中だけで、オレも実際にこんなことしているヤツは見たことないんだけど』

エルネスティーネはエイルのその行動を笑いながら見ていたが、「ありがとう」と言って座った。エイルはおそるおそるティアナの方を見やった……今度もティアナとは目が合わなかったのでほっとして横に腰掛けた。

「美味しいでしょう?このお茶」

エイルはエルネスティーネのその言葉に促されるように一口すすった。だが、エイルにはマスカットのような爽やかな香りが鼻から抜けていくことも、口の中に優しい苦みとスッキリとした渋みとほのかな甘さが広がって、スッと消えていく快感も感じる事はできなかった。

「どうですか?多分、ファランドールで最高に美味しいお茶ですわ。ハロウィン先生が、お酒の次にお茶が大好きなリリアさんの為に苦労して手に入れたものですのよ……なの」

紅茶を飲む様を見て、エイルのその感想がどういうものなのかを知りたくてたまらないという気持ちが手に取るようにわかるほど、期待に満ちた目でエルネスティーネはエイルを見つめていた。

『どう言う?』

【今更隠す事もないやろ】
『でも、なんかさ、期待を根本から裏切っちゃうようで心苦しいんだ。相手はお姫様だし』
【お前さん、周りの期待にこたえようとするあまり、その重圧につぶされるタイプやろ？】
『……』

エイルはエルネスティーネを見ると、申し訳なさそうな顔で頭を掻いた。
「ごめん、オレ、夕べ言ったように、いろんな感覚が麻痺してさ」
その言葉を聞いたエルネスティーネの顔から微笑が消えた。
「あ……」
「うん」
エイルは今度はエルネスティーネから視線を外すと、もう一口お茶をすすった。
「色々無くした中でも、味覚は最初になくなったんだ」
「ごめんなさい。ごめんなさい。私……そんなつもりではなかったのです」
「あ、いえ」
エイルはにっこりと笑って見せた。もちろんそういう笑顔を作ることに慣れないエイルの表情はどことなくぎこちなく、それはエルネスティーネの目にとても寂しそうな微笑みとして映った。
「気にしないでいいさ。味はわからなくても、熱くて、すごく体に染みるお茶だよ。ありがとう」
「我が無礼を、許して下さい」
「いや、本当に気にしないで。味覚はきっと取り戻すし、そうしたら今日のことを思い出して、きっといつかこのお茶をまた味わうさ」
うなだれるエルネスティーネにエイルは努めて明るい調子で声をかけた。食事の度に味覚がないことを思い出して、時には思わず涙がこみ上げてきた事もあったが、うつむくエルネスティーネの顔を

見て、エイルはそんな過去の自分を恥じた。

エルネスティーネはがばっと顔を上げ、とエイルの顔をのぞき込むようにすると早口で告げた。

「では約束させて下さいな。その時はきっと私が最初にお茶を入れて差し上げます」

「えええ？」

あまりに近くにエルネスティーネの顔があるものだから、エイルは思わずドギマギと赤面した。白い肌とエメラルド色の瞳から、エルネスティーネがアプリリアージェと同じく小柄なアルヴ系の種族の血を濃く引いている事はエイルにもわかった。アルヴ族は男女ともにエイルの価値観からするとかなり整った顔立ちをしているという予備知識もあった。だが、エイルのフォウ風の基準からすると、誰がなんと言おうと飛び切りの美少女にこう迫られてはドギマギせずに居られなかった。もはやお茶の事などエイルの頭から消えてなくなっていた。

「きっとですわよ。さもないと」

「さもないと？」

「極刑に処します」

「えええええ？なんで？」

エルネスティーネの真面目きわまりない顔を見て、エイルは混乱した。デタラメな論法と、親切なのか、ただのわがままなのかわかりかねる自己中心的な態度に翻弄されていたと言った方がいいだろう。

「返事をなさいませ」

エルネスティーネは眉間に皺を寄せてエイルを睨むとさらに顔を近づけた。もう、エルネスティーネの頬の産毛も見えるほどで、その息もエイルに届く距離だった。

「いや、申し訳ないですけどオレは約束はできません」

エイルはそう言うと、思わず後ずさった。
「なぜでしょう？何か問題でもおありですか？」
問題はあるようなないような。
だが、約束はできない。

「オレは誰とも約束をしない主義なんです」
「約束をしない主義？」
「ええ」
「生来の嘘つきなのですか？」
「いや」
面倒なのでそう思われてもいいかと一瞬思ったエイルだが、さすがに融通が利かなそうな相手にそれはまずいと判断すると、言葉を選んで答えた。
「オレは今、一つ約束をしています。それを果たすまで次の約束はしないと誓いました。だからたとえお姫様であろうとも約束はできません」
「どうしても？」
「どうしても、です」
「約束しなければ命を奪うと言われたら？」
「命を奪われるのは勿論いやですが、それでも約束はできません」
「融通の利かない性格なのですね」
「そうかもしれません」
エルネスティーネはエイルが真剣に答えているのがわかった。冗談交じりでも面倒だからでもなく、自分の流儀を貫こうとしているだけなのだ。であればエイルを責める道理はない。思いつきを相手に押しつけようとした自分の方に非があるのは明らかだった。

「わかりました。では、出来ればそうさせていただくということでいかがでしょう。私の希望をお伝えしたということで手を打ちませんか？」

エルネスティーネはそう言ってクスリと笑った。
エイルは「それなら結構です」と言ってため息をつくと、急にあることを思い出して、おそるおそる一行の居る方へ視線を向けた。
やっぱり。
ティアナとアプリリアージェの二人と視線が合った。

『うわ』
【目があっただけでイチイチうろたえんでええて。ホンマに情けない】
『そうは言ってもミュンヒハウゼンさんはおっかないしな』
【きわめて鬱陶しい存在なのは同感や】

ティアナはエイルと目が合うと。珍しく小さな苦笑いを浮かべて目を伏せた。一方アプリリアージェはいつもの微笑みといっしょにエイルを見つめていた。

『あれ？怒ってない……のかな』
【いちいち周りの視線に一喜一憂すんな！男の子やろ？】
『そう言うけどな』
【ええい、言い訳すんな！】
『ちぇ。まったく』

その後、エルネスティーネは今のやりとりなどなかったかのように元の通りの明るい声で、矢継ぎ早にエイルに質問を投げかけてきた。
それは本当に他愛もない会話だった。
歳はいくつなのか？
好きな食べ物は何か？
味覚が戻ったら一番に何を食べたいか？
友達はいるのか？

故郷はどこで、それはどんなところなのか？
今、世の中の若者達の関心事はなんなのか？
賢者の修行は大変だったのか？
今までで一番うれしかったのはどんなことか？
好きな花は？
好きな星は？
海はどうか？
雪を見たことがあるか？
砂漠を見たことがあるか？
今まで訪れた土地で印象に残っている所はどこか？
等々。

エルネスティーネはその性格からかおよそ曖昧な回答を甘受すると言うことがなかったので、曖昧な回答を旨とするエイルは数多くの叱責と数え切れないほどの無邪気な（そして想像するだに恐ろしい）恐喝と恫喝を受けることになったが、エイルにとってその時間はファランドールの地に降りたってからこっち、おそらく一番ゆったりとした気分で過ごせたひとときであった。いや、これほど平和で他愛のない時間はフォウでさえ過ごしたことがなかったのではないかとも思われた。

エイルは言葉遣いについても強い調子で注意を受けた。旅の仲間なのだからもっと普通に喋らないと極刑に処すというのだ。

『さっきから言ってる極刑ってなんなんだよ』
【知るか。本人に聞いてみ】
『恐ろしくて聞けるかよ』
【小心者やな】
『お前、聞けるのかよ？』
【俺は別に聞きとうないし】

そしてその時交わした会話の中でもエイルが生涯ずっと忘れられ

ないものが一つあった。
それはその時の会話の最後の方でエルネスティーネが問うた言葉だった。
「それであなたは今、誰の為に生きているのですか？」
「誰のために生きていますか？」
エルネスティーネが矢のように繰り出す他の質問についても同様ではあったが、この質問には特にエイルは回答に窮した。つい考え込んでしまった為にまた厳しい叱責に合うのかと思ったが、エルネスティーネはこの問い対する答えにだけは一切追求をしなかった。
「私たちアルヴ系の種族は誰かのために戦う事、誰かのために生きることが誇りであり生きている証なのです。自らの命は誰かの為にあり、その志を全うする事がアルヴの一番の喜びであり、魂の安らぎなのです。生そのものの意味であると言ってもいいのかも知れません」
「オレは……」
曖昧にエイルは答えたと記憶している。だがエルネスティーネはエイルのその言葉には何も答えず、自分に言い聞かせるようにポツリとつぶやいた。
「世間知らずでこんなちっぽけな私ですが、それでも私も一人のアルヴィンとして誇りをもって生きています。そして自分の信じるその『生』にこの上ない名誉と喜びを感じているのです」
エイルはその時の空を見上げるエルネスティーネの横顔をなぜかずっと心に焼き付けていた。
「でも、白状しますと、ごくたまにですけれど、くじけそうになる時もあるのですよ。その時はエイルも、弱音を吐いた私をこう言って叱ってくださいな。『思い出せ、お前は誰のために生きているのだ？』と」
そう言うと、エルネスティーネは微笑んだ。
それは自信に満ちた微笑みというよりも、エイルにはどことなく

寂しさが漂うものに感じた。
もちろん、その簡単な言葉がエルネスティーネにとってこの上なく重いものだと言うことを、その時はまだエイルは知るよしもなかった。

「妹がいるんだ」
エイルはエルネスティーネから視線を外して高く澄んだ秋空に浮かぶ羊雲を眺めながらそうつぶやいた。
「妹さん？」
「ああ。名前はマーヤって言う」
「マーヤ……素敵な名前です」
「ありがとう。妹の名前の事をそう言ってくれるとお世辞でも嬉しいよ。あいつ、自分の名前をすごく気に入ってるんだ」
「いえ、お世辞などではありませんよ。聞き慣れない名前ですが、耳に優しくてスッと心に入ってしまうような、そんな暖かい気持ちがする名前です」
「誇りとか、生とか、そんな難しい事はわからないけど、オレは多分、今はマーヤの為に生きているんだと思う」
「妹さんの為、ですか」
エイルはうなずいた。
「重い病気にかかってて、大きな手術をしないといけないんだ。それでオレが帰るのを待っている。側にいてやると約束したんだ」
エイルのその言葉を聞くとエルネスティーネの笑顔がサッと曇った。エイルは要らぬ話をしたかな、と少し後悔したが、約束の事が出れば、またいずれ話すことになるのだと自分を納得させた。早いほうがいいのかもしれない、と。

「そうでしたか」
エルネスティーネは少しだけ沈黙すると、やがて穏やかな口調でゆっくりとそう言うとエイルの手をとった。

（え？）

驚いたエイルはとっさに手を引っ込めようとしたが、エルネスティーネはそれを許さなかった。とらえた左手を両手でギュッと握られたエイルは力を抜いた。

「あなたの進む道に、幸いがありますように」

エルネスティーネはそう言って目を閉じると取った手を引き寄せてその甲にそっと口づけた。

『どうしよう？』

【う、狼狽えるな】

『お前こそ！』

【やかましいっ】

「あのような得体の知れない若い男とエルネスティーネ様が親しくされるのは私はあまり感心しません」

口を挟むような真似はしなかったが、その口調からもティアナはエイルに対して信用を置いているとは言い難かった。出発に先立って昨夜エイルの正体と目的を聞かされてはいたが、それはそれとしてたとえ相手がエイルではなくともエルネスティーネがあまり外部の人間と親しくすることにはある種の畏れを持っていたのである。ましてやシルフィードとしては教会とのつきあいに関しては一線を引いている。相手はその教会の中枢に居る人間だと知らされては警戒するなと言う方が無理であろう。

もっとも……ティアナは改めてエイルを値踏みするようにじっと見つめた。

（そう言われても、そうは思えないがな）

それが相手の「手」かも知れないとは思ったが、ティアナが見ている限り、エイルには二心あるような雰囲気は感じなかった。

「それに、あそこまで詳しく真実を話すこともなかったのではない

ですか？」

どちらもアプリリアージェに投げかけられた言葉だった。

「ティアナはエイル・エイミイが嫌いですか？」

アプリリアージェは熱いお茶の香りを満足そうに楽しみながら、いつもの微笑で逆にそう問いかけた。

「嫌いも何も、まだあのデュナンの少数民族の少年がどんな人物かすらよくは知りません。火事場での一件だけを見ると表面上は悪人とは思えませんが、あれも我々に対する点数稼ぎだったのかもしれません。賢者ともなればそう言った外交上の手練手管には長けていると考えるのが普通ではありませんか？そもそもデュナンとは自分の欲望のためには表裏を巧みに使い分けるものです」

アプリリアージェはティアナの答えを聞くと可笑しそうに微笑を深め、お茶を一口すすってからゆっくりと答えた。

「どんな人間かわからないからこそ、ああやって知り合おうとしているのではないですか？私に言わせるとネスティは実に実践的で、かつ戦略上もっとも効率のいい動きをしているように思えます。それに」

アプリリアージェは仲良く並んで座っている若い男女の後ろ姿をいつもの微笑で眺めると、続けた。

「これは個人的な考えなのですが、ネスティには同年代の異性を知ってもらいたいと思っています。そして出来ればその先に芽生える感情をも」

そう言った後でティアナの顔色が変わったのを見て、アプリリアージェはすぐにこう付け足した。

「あ、別にエイルとネスティを意図的になんとかしたいとか、そう言う意味ではないのですよ」

いきなり立ち上がらんばかりの険しい表情になったティアナを見て笑い転げたい衝動に駆られたが、なんとかそれを押さえたアプリリアージェであった。

「あなたも知っているように、ネスティは特別な存在です。私たち

は今のところ彼女を守るために存在していると言っても過言ではありません。ですが私はネスティがただ生きていてさえいてくれればいいのではなく、人間として、若い娘として色々なことを知って幸せでいて欲しいと願っているのです。いえ、知ることによって悲しむこともあるかもしれません。でも、彼女はせっかく王女としてではなく普通の娘としてこの広いファランドールに飛び出したのですから」

「それは、私とて同じ考えです」

ため息をついてティアナはうなずいた。鬼気迫る表情はもう消え失せていた。

アプリリアージェも同じようにうなずいた。

「私が言いたいのは、ネスティーはもう子供ではないという事なのですよ」

「そんなこと……」

ティアナはアプリリアージェにそう言われて改めてエルネスティーネを見た。

思えばエルネスティーネがまだまだ幼く見える頃からの警護担当だったこともあり、王女はずっとその時のままなのだと錯覚している自分がいたことを、その時改めて自覚した。そしてそれは自覚したくない事だったことも。

エルネスティーネはアルヴィンということで見かけは幼く見えようとも、齢はすでに十六歳になっており、実のところそれはシルフィードでは成人した年齢であった。すなわち結婚してもなんら不思議ではない年頃、ようするに大人と言っていい年齢なのである。

アプリリアージェの言うことは一般論としてもっともだとは思ったが、一国の王女……しかも次期国王になるやも知れぬ王位継承権第一位にある人間が誰彼かまわずあのように開けっぴろげに接していいともまた思えないのである。

「まあそうは言っても、はしゃぎすぎはいらぬ怪我のもとですから、

それなりの注意についてはお任せします。でも、くれぐれも彼女を子供扱いせずにお願いします。私にも経験があるのですが、あの歳で子供扱いされるとどうにも素直になれないものです。正しい注意が逆効果になってしまうことがあるということは重々……」

ティアナは深くうなずいた。

「心得ました」

それはティアナとて覚えがないわけではない。

アプリリアージェに指摘されてはじめて、いつの間にか自分が子供扱いされる側から子供扱いする側になってしまっていた事にとまどいを覚えていた。だが、聞こえてくる屈託のないエルネスティーネの笑い声に「それでも私はこの宝石を守らねばならない」という思いもまた強くしていた。

「でも、ネスティって私が思っていたよりかなり人なつっこい性格だったんですねえ。宮廷で澄まして佇んでいらっしゃるエリー姫と、あそこで賢者さまを困らせている悪戯っ子のネスティとは本当に別人のようですね」

アプリリアージェに言われるまでもなく、ティアナ自身も旅に出てからずっと感じていたことだが、エルネスティーネは本当に明るく元気で、不自然な言葉遣いと妙な諺さえなければ町で暮らす普通の少女のように活発で快活だった。宮廷内では見せたことのないような様々な表情を、ティアナはエルネスティーネの中に発見し続けていた。宮廷内でいかにすましていようがエルネスティーネが生来のいたずら好きであることはわかっていたが、ルネと一緒になって、またある時は一人でも「あの」ハロウィンの側に立ってティアナをからかう事もあり、最近では実はエルネスティーネには悪女の素質があるのではないだろうか？などという疑惑さえ頭をもたげていたくらいのティアナである。いきおい「このまま手に負えない娘になってしまったら、どうしよう？」という漠然とした不安が生まれてきてもいたのだが、ティアナはもともと護衛役であって本物の教育

係ではない。話し相手になることは多々あるが、そちらの方についてはさっぱり不得手であり、自覚しなければアプリリアージェが言うとおり「子供扱い」で失敗するところだったのだ。

そんなことをつらつら考え込んでいたティアナだが、アプリリアージェの一言で我に返った。

「ただ、無理をしていなければいいのですが」

そう、あまりに急に快活になりすぎてはいないか。アプリリアージェは少しそう思っていた。

「なぜです？」

ティアナは自分自身も疑問に思っていたことをこれ幸いとアプリリアージェに問うた。

「無理とは？」

「それは、私にはわかりません」

アプリリアージェは自嘲気味に言葉を濁らせるとカップに残ったお茶を名残惜しそうに飲み干してゆっくりとつぶやいた。

「私はこの年になってもまだ独身のただの軍人であって、母でもなければ姉でもなく、ましてや教育係でもありません。本当になんとなく、そんな気がしただけです」

ティアナは、一昨日蒸気亭で初めてアプリリアージェと対面した。

正確には宮廷で見かけた事があるので初めてというわけではなかったが、見たと言ってもまさに遠目にチラリとかいま見た程度であり、そんなものはおよそ出会った数には入るまい。

近衛軍や王国軍を問わず軍部では伝説的な有名人であるアプリリアージェ・ユグセルという人物は、その様々な噂ばかりが一人歩きしており、かく言うティアナもその噂を元にして自分の中で勝手に作り上げたユグセル提督像のようなものを持っていたのだが、実際にアプリリアージェの前に出てみると、正直言って拍子抜けをした。

ティアナの前に立った極めて腰の低い物静かで小柄な女提督はダ

ーク・アルヴの特徴で実年齢よりかなり若く見えてしまうが故に「女」と言うよりもまだまだ「少女」と言った方がしっくりきたし「栄えあるシルフィード軍の中将閣下」という肩書きはどう考えても悪い冗談のような居ずまいの人物だった。

ましてや初対面の時にアプリリアージェが身に纏っていたのは当然ながら提督の軍服でもなければそもそも軍人が普段着でよく着ているようなきっちりとした平服でもなく、シルフィードの旅の商人達の一見質素で実用的な旅装であったこともあり、ティアナから見た第一印象はやけに器量のいい町の娘といった風情であったのだ。

先入観のなせる業で「いつも相手をバカにしたようにあざ笑っている女」という噂を信じ切っていたティアナは「アプリリアージェは、きっと自らの能力と出世の速さを鼻にかけ、相手を見下したようなニヤニヤ笑いをするイヤな感じの若すぎる未熟な提督」くらいに考えていたのだが、実物のアプリリアージェの笑顔はニヤニヤ笑いではなくティアナ自身が見とれてしまうような優しい微笑であり、その笑顔からは少なくとも他人に嫌な気持ちを抱かせるような「見下したような態度」などは全く感じることはできなかった。

そう、旅装を解いて服装さえそれなりのものに着替えたとしたら、「育ちがよくて世間の雑事や苦労を知らない良家の箱入り娘」……と言われてもティアナとしては簡単に信じ込むしかないと感じていた。

「初めまして。アプリリアージェ・ユグセルと申します」

最初にそう挨拶がなければ、アルヴとアルヴィン、ダーク・アルヴ、そしてデュナンの四人編成の旅の一行に出会っただけだと思えたのかもしれない。

少なくともその中にあの「笑う死に神」がいるなどとは思いつきもしなかったに違いない。

それにより噂とはかくもいい加減なものなのだと、ごく当たり前

のことをティアナは思い知ることになった。

しかし、噂通りの部分もあった。

出会ったその夜は宿である蒸気亭の食堂ティアナとアプリリアージェは共に食卓を囲んだ。もっとも一気に増えた旅の仲間達全員が同じ席に着いて極めて賑やかな夕食になっていたのだが、ティアナがふと気づくとアプリリアージェの足下にはワインの空瓶が山のように置かれていたのだった。その後も本当に旨そうにぐいぐい飲み続け、それに比例して増え続ける足下の空き瓶の数をティアナは十本まで数えたことは覚えていた。しかしその後はアプリリアージェの見ていて気持ちのいい飲みっぷりにつられるかのように、いつになく飲み過ぎてしまい空き瓶を数えるどころではなかったので、実際に彼女によって消費されたワインの正確な本数は謎のままであった。まあ、一行の財布を預かるファルケンハインに訊ねれば憂鬱そうな表情をした後で教えてはくれるだろうが……。

後世、吟遊詩人達に「酒のフェアリー」とも「酒聖」とも歌われる事になるアプリリアージェの酒好きはつとに有名だが、酒豪についての噂は大げさに過ぎるのが常である。だがティアナはこの時ばかりは思っていた。世間の噂とはとうてい本物の持つ迫力には及ばないのだ、と。

さらに驚いたのは、最後の方にはさすがにかなりろれつが怪しくなるまで飲んだはずのアプリリアージェが、翌朝出会ったときには何事もなかったかのようにケロっとしていたことだ。アプリリアージェ独特のふわりとした佇まいには酒気が全く感じられず、こちらから挨拶をする前に爽やかに「おはよう」と告げた笑顔を見たときにはいろいろな意味で「ただ者ではない」と心底脱帽していた。

ティアナとアプリリアージェの初見の際の話に戻ろう。

とても軍人……しかも中枢を担う中将という重鎮には全く見えない愛想のいい町娘のようなアプリリアージェの姿を見て戸惑っているティアナに、中将は目尻をさらに下げて微笑みかけると、続けた。

次にアプリリアージェによって放たれた言葉を聞いたティアナは、ある種のとまどいの中でふと緩んでいた緊張の糸が一気に張りつめた。

「私のことは肩書きでなければなんと呼んでもらってもかまいません。リリアでも、ユグセルでも、そして……『死に神』でも」

「め、滅相もない」

ティアナはその言葉に思わず片膝をついて目上の者に対する深い礼をすると、続けた。

「ご挨拶が遅れました。近衛軍宮廷警護部隊所属のティアナ・ミュンヒハウゼン中尉です」

そして次の瞬間「しまった」と思ったのだが……彼女にとっては後の祭りであった。

ティアナはたった一言で、まるで可憐な少女と言っていいような姿形のアプリリアージェに「呑まれて」しまっていたのだった。そして「笑う死に神」の二つ名と供に思い出した言葉があった。

「希なる戦略家」

ティアナにとっては出会った際のアプリリアージェのその姿形、佇まい、声色や表情すべてがすでに戦略とも言えた。そしてその後に放たれた的確な戦術。

それは「死に神」という短い単語だった。

決して呑まれまい。そして近衛軍の矜持にかけても自らの存在感を相手に刻みつけてやるというティアナの決意は、アプリリアージェに出会った瞬間に、掠ることもなく霧散してしまっていた。

（これが、アプリリアージェ・ユグセル……『笑う死に神』か）

ティアナは敗北を認めざるを得なかった。だが、そこには不思議と悔しいという感情は沸いてはこなかった。

（この人にはかなわない）

心に浮かんだ言葉……その言葉を素直に受け入れる自分自身を不

思議に思いながらも、同時に殆どの人間がこの笑う死に神の前では自分がおよそ小者であることを自覚するに違いないという確信があった。

それはかつて若きエリートとして軍隊にその名を馳せたアトラック・スリーズがル＝キリアに配属された初日に感じたものと同じであったのだが……いや、その話は今回は割愛しよう。

ただし……その時アプリリアージェにティアナの機先を制するなどという意図があったのかどうかは全くの謎である。ただ少なくともその後ティアナはアプリリアージェに対して一目を置くことになったのは事実であり、それは困難な旅を預かる身であるアプリリアージェにとっては極めて好都合な関係であったことは想像に難くない。

ティアナにとって噂通り、想像していた通りの人間はアプリリアージェではなく、むしろテンリーゼン・クラルヴァインの方だった。ティアナが慇懃に挨拶をしても向こうからは自己紹介は一切無し。いや、聞いているのかどうかすら不明な態度に困惑した。テンリーゼンはティアナの方を見向きもせず、常に一行から一歩下がって微動だにしないことが多く、ティアナはともすればその存在すら忘れることも多々あった。

「リーゼの事は気にしない方がいいですよ。むしろ普段は居ないものと思っていた方がいいかもしれません」

「はあ」

「戦闘になったら……もっともそんな事になっては欲しくないのですが……その時になれば自ずとクラルヴァイン提督の実力はわかります」

「はあ」

「まあ、もっともリーゼの実力を知る機会など一生ない方がいいのですが」

「はあ」

ティアナは実は自分がかなりマヌケであることをこの時初めて自覚することになった。

（「はあ」としか言えないのか、私は……）

そう思っては見たものの、「はあ」と曖昧な相づちを打つことしか思い浮かばなかったのだ。

だが、このままではアプリリアージェにただのバカだと思われるのではないかという危機感に苛まれて、「はあ」以外に思いついたことをつい口にした。

「その、少将……いえ、リーゼはどれくらい強いのですか？」

そう言ったとたん、赤面した。

ああ、私は本当にバカだなとティアナは思った。

逆の立場だったらいったいどう思うだろうか。気が利くとかそういう問題以前の質問である。「はあ」と言っていた方が程度としてはまだ賢く見えるに違いない。

だが、アプリリアージェはそういうティアナの忸怩たる思いを知ってか知らずか、にっこりしたまま考えるでもなく当たり前のようにこう言った。

「そうですね。私がもしリーゼと戦ったら」

ティアナはその前振りにハッとして改めてアプリリアージェの読めない表情を見た。微笑みの表情は変わらず、やはり読めないままだったが、ウソや冗談を言うという雰囲気でもなさそうだった。アプリリアージェという軍人は、もともとは白兵戦の強さによって掴み取った前線での戦功の多さで出世した人物である。ティアナの記憶が正しければ、確か軍内の規則に則って行われる「試闘」と呼ばれる一対一の模擬戦闘において不敗という記録を持っているはずの実力者であった。噂ではアプリリアージェの体にかすった者すらまだ居ないと言われている。そのアプリリアージェとテンリーゼンが

戦うとどうなるのか。
　ティアナは思わずつばを飲んで、次の言葉を待った。
「お遊び程度の試闘ならともかく、リーゼが本気を出したら間違いなく私は瞬殺されるでしょうね」
　そう言って少し首をかしげて見せると、にこやかな笑顔をティアナに注いだ。
「ご冗談を」
　ティアナはここではじめて「はあ」以外のまっとうな返答が出来たと思った。
　テンリーゼンも試闘については無敗であったが、その回数が極めて少なかった。そもそも「試闘」とは、下士官以上の者で、かつ同じ階級同士でないと認められない競技である。テンリーゼンの場合は二階級特進などが数回もあり、出世の速度が桁外れなのである。つまり同じ階級にとどまっている時間が極端に短い為に試闘を申し込まれる機会すら殆どない状況だったのだ。さらに、准将以上の、いわゆる「提督」「閣下」と呼ばれる階級になると試闘も禁止される。そういう背景もあり、テンリーゼンの試闘の内容についてはあまり人の噂にすら上らない程度だった。「強者」と呼ばれる多くの猛者を笑顔のままで倒してきたアプリリアージェの華麗で豪華な評判に比べる、とテンリーゼンのそれはあまりに地味であった。
　もっともテンリーゼンが強いであろう事は容易に想像できる。なにしろ戦いで異常なほどの功績がなければ、あの年齢で少将などになれるはずがないのである。常識を大きく外れているのは理解できる。だがしかし、それはアプリリアージェにも言えることなのだ。相当な強者同士の二人だが、片方に言わせると自分は相手の足元にも及ばぬと言う……その足元にも及ばぬ一人の天才にティアナ自身はおそらく足元にも及ばぬであろう事を感じていただけに、アプリリアージェの話しは俄には信じられない……いや、信じたくない気持ちに支配されていたと言っていいだろう。
　振り向く先にまさに人形のように佇んだままでいる小柄な少年を、

剣の腕前に関しては相当の自負があるアルヴの戦士、ティアナは複雑な気持ちでみやっていた。

数日後に、ティアナはその話をファルケンハイン・レインにした。同じ部隊の戦友としてともに戦うだけでなく、多くの旅を通じて二人を身近なところでよく知っているファルケンハインの率直な意見を聞こうと思ったのだ。

ファルケンハインはその話を聞くと普段無愛想な顔に珍しくニヤリとした笑みを浮かべてこう言った。

「それは司令もあまりに謙遜しすぎだな」

「やはり、そうでしたか」

ティアナはファルケンハインの言葉を聞いてある意味ほっとした。だが、その安心感はほんの一瞬のもので、ファルケンハインが続けて放った言葉を聞いて戦慄が走った。聞かなければ良かったとすら思ったものだ。

「俺やアトラックならともかく、司令ほどの強さなら少なくとも三十秒か、そうだな、多少運が良ければ一分くらいならなんとか生きていられるかもしれない」

「なん……？」

驚いてのぞき込んだファルケンハインの顔はいつもの無愛想な顔に戻っていた。ファルケンハインは気の利いた冗談が言える男ではない。その男が告げる「三十秒」にはアプリリアージェのいう「瞬殺」よりもむしろ生臭い真実味があった。

「さあ、そろそろ出発しましょう。夕方になると冷え込みます。日の高い今のうちにもう少し距離を稼いでおきましょう」

アプリリアージェの言葉に、ティアナはハッと我に返った。

そんなティアナを微笑みながら見つめると、アプリリアージェは思い出したように付け加えた。

「そうそう。それからエイル君はデュナンの少数部族ではなくて、どう見てもピクシィですよ」

ピクシィ。

その言葉はシルフィードの人間には特別の意味を持つ。

だからこそそこのところをティアナにきっちりと認識させておこうとしたのであろう。

「辺境を戦場とする我々はピクシィが全滅したのではないということを知っています。勿論純粋なピクシィかどうかはもはや本人でもわからないでしょうが、少なくともいわゆるピクシィの特徴を持つ人間は少数ですがファランドールで暮らしているのです。エイル君もその一人なのでしょう」

ティアナ自身も薄々はわかっていた。

敢えて「デュナンの少数部族」という言葉を使っていたに過ぎない。

アプリリアージェがそう言ったことで自分自身の中でそのことを「府に落とす」ことが出来たティアナは、少しだけ胸の奥にある靄が晴れて気分が軽くなるのを感じた。

立ち上がるアプリリアージェに続き、ティアナはさっと身の回りの確認をすませると立ち上がった。そして周りを何食わぬ顔で見渡し誰も自分に注意を払っていないことを認めると、耳飾りを小さくはじいて、誰にも聞こえないお気に入りの音を奏でた。

それは一瞬間の、リリスとスフィアの奏でる小さな音楽会であった。

エイル達が出立する朝、カレナドリィは自分の命の恩人をルドルフとともに見送るつもりでいた。だが、目覚めがいい事については自負さえしていたカレナドリィだが、その日に限って目を覚ますことが出来なかった。それが実はエルデのかけたルーンのせいだと言

うことは当然ながら本人はわかってはいなかった。
寝過ごしたことに気づいたカレナドリィは、慌てて寝間着に薄手のガウンを羽織っただけの、年頃の娘としてはやや悩ましい姿で住居に隣接している蒸気亭の厨房に駆け込んだ。

「お父さん！」
「おう、起きたか」
ルドルフは朝食用のベーコンを長い包丁で薄くスライスしている最中だった。
「エイル君達は？」
「ああ」
ルドルフは曖昧にそう答えると言いにくそうに言葉をつないだ。
「ちょっと前に出て行ったよ。なんでも今日は道程を稼ぎたいから早めに出発したいとかでな。暖かい朝飯を勧めたんだが、夕べ用意していた弁当だけでいいってんで、大した別れの挨拶も出来ずじまいだったが」
カレナドリィは父親を睨み付けて唇を尖らせた。
「なぜ起こしてくれなかったの。私だって見送りたかったのに。それくらいお父さんもわかってるでしょ！」
「いや、何度か声をかけたが、お前全然起きる気配がなかったじゃないか」
「え？」
ルドルフは娘からまな板の上のベーコンの固まりに視線を戻すと、仕事を続けながら言った。
「お前にしちゃ珍しく寝起きが悪かったんで、まだ本調子じゃないと思ってそれ以上は起こさなかったんだ。賢者……いや、エイルもわざわざ起こすなって睨み付けやがるんでな」
「でも、私の命の恩人なのよ。それに」
「それに……何だ？あのボウズに惚れたか？」
「何を言っているのよ、お父さんのバカっ！」

カレナドリィは一瞬で顔を真っ赤に染めてそう怒鳴ると、きびすを返した。

ルドルフは店の扉を開けようとしている娘に、背中を向けたまま声をかけた。

「おいおい、今から追いかけてもムダだぞ。かれこれ二時間も前に発ったんだからな」

カレナドリィはしかしそんな父親の背中に一瞥をくれると、店のドアを開けて通りへ出た。

ルドルフは小さなため息をつくと、目の前のベーコンに集中する事にした。

カレナドリイは、もちろん扉を開ければ、そこからエイルの後ろ姿が見えるなどと思ったわけではない。ただ、外に出る事によって外の空気でエイルと繋がり、より近くに感じられると根拠もなくそう思ったのだ。

一昨日、昨日と、カレナドリィはエイルの手を引いてランダールを縦横無尽に駆け巡り、自分の大好きな町を案内して回った。それはカレナドリィが生まれて初めて感じたふわふわとした夢のような時間だった。理由はわからない。ただ、黒い髪と黒い瞳をした風変わりな少年と居ると、心が浮き立った。

不思議な力に心が惹かれたのか、神秘的な瞳髪黒色に興味を持ったのか、はたまた時々自分を優しく見つめるその顔に安らぎを覚えたのかすらもカレナドリィには分析できなかった。ただ、もう一度会いたいというのは素直な気持ちだった。そしてもう会えないだろうと思った後には、少なくとも自分の感謝の気持ちが開けた空間に出れば少しでも伝わるかも知れないと言う他愛のない子供じみた衝動になり、扉に手をかけさせたに違いなかった。

秋が深まろうとしているひんやりとしたその日のランダールの空は青く澄み渡って、それはエイル達一行の今日の旅の道程が快適な

ものになることを示しているようで、カレナドリィは寂しさに包まれながらも少しだけ安らいだ気持ちになった。

その時だった。

「おはよう、黄色い髪の綺麗な娘さん」

左手の方から突然声をかけられた。女性の声だった。張りがあり、良く通るアルトだ。

人がいるとは思っていなかったカレナドリィは驚いて反射的に声のする左の方を見やった。

だが、視界には誰も入らなかった。

不審に思って視線を戻すと右側の視界に四本弦の小さな楽器を抱えた吟遊詩人が立っているのが見えた。

「エイル・エイミイに会いたいだろう？」

カレナドリィが声をかける前に、吟遊詩人が声をかけた。

一瞬戸惑ったカレナドリィだが、思わず「ええ」と言って小さくうなずいた。そう言った後で自分がまだ寝間着姿であることをようやく思い出すと無意識にガウンの前を合わせた。

（誰？エイル君の知り合い？）

疑問が頭に浮かんだが、考えを整理する前に吟遊詩人は弦楽器を持ち上げてボロン、っと弦をひとかき鳴らした。

その楽器の音を聞いたカレナドリィの思考が、そこでピタリと止まった。それはまるで、窓のない部屋の扉が閉まるかのように。

「カレン・ノイエ。我が忠実なる僕よ。我が名に於いてお前に命を下す」

遠目には、二人の人間が単に立ち話をしたようにしか見えなかったに違いない。

ほんの二言三言しか言葉を交わさなかった二人を見た人間は、女吟遊詩人が道でも尋ねたのだろうとしか思わなかったであろう。

だがその時、女吟遊詩人の額をもし目撃した者がいたならば、腰を抜かしていたに違いない。なんとそこには第三の目が開かれていたのだから。

アルヴの吟遊詩人は、その場を慌てる風もなくゆったりした足取りで立ち去り、広場へ続く道に姿を消した。その後ろ姿を少しの間見送っていたタンポポ色の髪をしたデュナンの娘は、やがて踵を返して蒸気亭の扉の中へ消えていった。

# 第二十二話　痣

部屋の入り口のドアをノックする音がした。
遠慮がちな音ではあったがもちろんそこにいた全員がその音には気づいた。

「どうぞ、お入りください」
アプリリアージェはよく通る声でノックにそう応えた。
彼女には訪問者が誰なのかは予想できた。ノックの音と同じように遠慮がちに開いたドアからのぞいた顔はシェリル・ダゲットだった。
「いらっしゃい。久しぶりね、シェリル」
「ご無沙汰しています、ユグセル中将」
「ちょうどお茶の時間だったのよ。そうですね。あちらで一緒にいただきましょう。先生、少しの間失礼しますね」
アプリリアージェはそう言ってハロウィンに軽く会釈をすると、ハロウィンの反応など待つこともなく視線を移し、附室にあるテーブルにシェリルを誘った。

―（相変わらず「ユグセル中将」なのね）
約一年前、アクラムの森で行われたフィリスティアード隊との戦闘に負けて捕虜になった際、戦闘員はサラマンダ駐留の部隊に引き渡されたが、生き残ったメビウス・ダゲット副隊長のたっての頼みで一部の非戦闘員は秘密裏にシルフィードのエッダに送られてそこで暮らすことを許されていた。シェリルはアプリリアージェの「つて」でキャンタビレイ家にしばらくの間居候として身を置いていたのである。エッダに駐留している間は、時間があけば頻繁にシェリルの様子を見に来ていたアプリリアージェだったが、シェリルはそ

んなアプリリアージェに対して決して心の最後の扉を開くことはなく、「リリアと呼んで下さいな」とアプリリアージェが再三乞うたにもかかわらず結局最後まで「ユグセル中将」という呼称を変えることはなかった。

もちろん理由がある。

その理由をアプリリアージェも痛いほどわかっているだけにそれ以上は何も言えなかった。

シェリルは聞かされていた。アプリリアージェ本人に。

「私がフィリスティアード兄弟を手にかけました」

そう。あの二人との戦闘は公式にはすべてアプリリアージェ・ユグセルのみが関わった事になっていたのだ。

「ルルデ・フィリスティアードはあなたの婚約者だと伺いました。お気の毒です」

シェリルはあの戦いの後、ルルデの戦死を告げにアプリリアージェがやってきた時のことを思い出していた。

目の前にいる、自分よりも小柄で年下にしか見えないダーク・アルヴが口にした言葉をシェリルはしかし、まるで理解できずにいた。ただ目を見開いて、その場に立ちすくむだけで、何を言っていいのか、何をしていいのかが全く思いつかなかったのだ。

部隊を送り出してしばらくの後、シェリル達後方部隊のいる本拠が黒い軍装の一団によってあっという間に占領されたと思ったら、しばらくして目の前に現れたのがその黒髪の少女だったのだ。

緑色の眼をした黒髪の小柄な少女が、微笑みを浮かべながら告げる言葉は、およそ場違いとしか思えない内容だった。

こんな少女が告げる内容だろうか？

笑いながら告げていい内容だろうか？

そんな情景が現実であるはずがなかった。

ルルデは若いけれど剣の腕前では部隊でも一二を争うほどだし、

ルルデの兄で指導者であるシエナが戦いで負けるはずがなかった。
ましてやこんな少女に命を奪われるなど……。

「嘘です」
シェリルがアプリリアージェに向かって最初に口にした言葉がこれだった。
「それは嘘です」
シェリルがそう告げても、隊長だと名乗ったその少女は顔色一つ変えずに、優しい微笑みを浮かべたままで後ろ手に持っていた短剣をすっとシェリルの前に差し出して見せた。
「彼の遺体は損傷が激しくてとてもお見せすることはできないため、勝手ながら現地で既に荼毘にふしました。代わりにこれを」
その短剣には確かに見覚えがあった。
その日、戦いに向かうルルデが腰につけていたものだった。そしてそれは、見送る際にシェリルが手渡したものだったのだ。
「嘘よっ！」
「今はまだこれをお渡しする訳にはいきませんが、しかるべき手続きが済めば彼の形見としてお返ししましょう。それから、ルルデ・フィリスティアードの名誉のためにあえてお伝えしておきます。聞くのは辛いでしょうが婚約者として、また戦場で生き残った者の義務としてお聞き下さい」
シェリルはぶるぶると震えていた。

―（何なの、この子……何故こんな子が戦争をしているの？
隊長？
この子にルルデが殺された？
人を殺した後でなぜこんなににこやかに笑っていられるの？
そんなことは有り得ない。
私は訳のわからない夢を見ているに違いない。
そうじゃないと……）

「彼は気高い兵士でした。彼を倒せたことを同じ兵士として誇りにしたいと思います」

シェリルの受け答えにはお構いなしに褐色の肌をした愛らしいダーク・アルヴの少女はそれだけ言うと、後の事は担当兵士に尋ねるように告げ、シェリルの前から立ち去った。

残されたシェリルはその場でただ立ち尽くしていた。

そして気がついた時は床に崩れて大声を上げて泣いていた。

泣いていたはずだったが、声だけで涙が出なかった。

涙が出るようになったのはもっとずっと時間がたってからのことだったのだ。

そんなシェリルをアプリリアージェはいつも気にかけていた。

それはもちろんシェリルにもわかってはいたが、かと言って自分の許嫁と自分たちの指導者を手にかけた女に気を許すことなどできなかった。もっと積極的に言えば憎んでいた。そして、その憎んで居るはずの少女を嫌いになれない自分に嫌悪していた。

アルヴ族との接触がほとんどなかったデュナンのシェリルは、少女だと思っていた敵の隊長が自分の年の二倍近い年齢だと知らされた時にも驚いたが普段はおよそ軍人とは思えない様子にも戸惑いを覚えた。

吸い込まれるような優しい笑顔とおっとりしたしゃべり方をするこの人がなぜ、と言う思いに駆られたのだ。シェリルの部隊にも女戦士はいたし、今まで何度も女の軍人にも出会ってきた。だが、アプリリアージェはその誰とも違っていた。

本当にこの人に人が殺せるのだろうかという疑問が大きくなり、それに呼応して憎しみが薄らいでいく恐怖に苛まれた。

だからこそそんな自分の中に生まれた思い、いや疑問に蓋をする為にも敢えて呼び続けることにしたのである。「ユグセル中将」と。

「彼にはもう、会ったのでしょう?」
黙って席に着いたシェリルの前にカップを置きながら、アプリリアージェは単刀直入に切り出した。
エイルに会えば、絶対に疑問が生じる。そしてその疑問をぶつける相手は私しかいない。
シェリルの来室は必然と言えた。
だがアプリリアージェはシェリルの疑問に答える為に彼女を待っていたわけではない。シェリルを利用する為に待っていたと言った方が適切だろう。

シェリルはアプリリアージェの問いには答えず、顔を上げると強い眼差しで紅茶を注ぐ小柄なダーク・アルヴの緑の瞳を見据えて言った。
「教えて下さい。本当にルルデは死んだのですか?」
アプリリアージェはその問いには答えなかった。シェリルの問いかけなど無かったかのようにいつもの微笑みを浮かべたままで、ゆっくりと紅茶を注ぐことに神経を集中させているようだった。
笑っているようにしか見えない顔が、提督と呼ばれるこの小柄な少女の普通の表情なのだと知ったのは初めて出会ってからずっと後の事だった。捕虜の担当の兵から言われても当初は信じられなかったものだ。

「エイル・エイミイという人物に会って、あなた自身はどう思いましたか?シェリル」
シェリルの問いに対してアプリリアージェは問いかけで応えた。
しかし、シェリルはその問いに素直に答えた。
「ルルデにしか見えませんでした……。広いファランドールですから似た人はいるのでしょうけれど、あそこまでそっくりな人がいるとは思えません。教えてください。ルルデをあそこで火葬にしたというのはウソなのでしょう?」

「あの少年がルルデ・フィリスティアードだと本当に思いますか？」
またもや質問に質問で返すアプリリアージェだったが、シェリルは同じく答えた。アプリリアージェという人物はいつもそうなのだ。答えることが出来ることにしか答えてくれない。
「わかりません。肩にあったはずの大きな傷はありませんでした。治っているけど消えない大きな傷跡だったんです。でも……」
「でも？」
「どう見ても私にはルルデだとしか思えないんです。確かに雰囲気がちょっと違うし、言葉遣いもサラマンダ人とは違います。でも、私が見間違うわけがないんです。小さい時からずっと一緒だったんですよ？毎日見ていたんですよ？それに、最後の方はもう一緒に暮らしていたんです。だから」
「本人だと？」
だが、シェリルは頭を左右に振った。
「でも、傷跡は無かったんです。無理を言って見せて貰いました。でも、無かったんです」
そこまで言うと、堪えていたはずの涙がまた溢れてきて、頬を伝った。それを見てアプリリアージェは紅茶が注がれたカップを受け皿ごとそっとシェリルの方へ差し出した。
「他にありませんか？」
「え？」
うつむいていた顔を上げると、シェリルの前には、いつものように微笑んでいるアプリリアージェの小さな顔があった。
「肩の傷以外にルルデの体の特徴的なところ……。あなたはルルデの恋人、いえ婚約者だったのですよね？普段は見えない部分、もしくは本人が気づかないところに、傷やしみやほくろと言った特徴的な徴があるはずです。あなただから知っているような」
アプリリアージェの言葉に目を伏せたシェリルは何かを思い出すようにしていたが、急に顔を上げた。

「あります」
「さしつかえなければ教えてもらえますか？言いにくいのでしたらもちろん言わなくても結構です」
「いいえ」
シェリルは小さく首を横に振った。
「彼のお尻……右側の内側に小さな痣があります。本人からは見えない部分で私が指摘するまで知らないようでした」
「なるほど」
アプリリアージェはシェリルの話をきくと腕を組んで首をかしげ、少しの間考え込んだ。
「シェリルが教えたから、ルルデはもうその痣の事を知っているわけですね」
「ええ」
「そうですか」
「それが、何か？」
「確かめて見ませんか？もう一度」
「え？」
思いもしなかったアプリリアージェの依頼にシェリルは目を見張った。
「リリアさん」
アプリリアージェ微笑を深めると小さくうなずいた。
シェリルが思わず呼びかけたのは「ユグセル中将」ではなく「リリアさん」だったのだ。呼びかけられたアプリリアージェは敏感に反応したが、当のシェリルは気付いていなかった。

「あの時の事を全部お話ししましょう。その代わり協力すると約束してくれませんか？」
シェリルはゴクンと音を立ててつばを飲み込むと、ゆっくりとではあるが、力強くうなずいた。
「頭では理解していても納得していないのは実のところ私も同じで

す。つまり私もエイル・エイミイは実はルルデ・フィリスティアードなのではないかという疑問を持っていて、それを完全には拭い切れていないのです」

「それって、つまり」

「ええ。ルルデ・フィリスティアードは確かに私の矢で体を貫かれはしましたが、実は私達は彼の遺体の確認はしていないのです」

「生死はわからないと言うこと……ですか？」

シェリルの問いに、しかしリリアは否定も肯定もしなかった。

「事実のみを言います。ルルデ・フィリスティアードは矢で射られた。三本の矢は通常であれば即死と思える部位に深く突き刺さりました。生死が確認できなかった理由……それは彼がその後すぐに消滅したからです」

「消……滅？」

アプリリアージェは今度はうなずいた。

「ええ。ですからルルデはあそこで火葬にされた訳ではありません。忽然と消滅して、そのままなのです」

「ーーどういう、ことですか？」

# 第二十三話　喪失

最初に気づいたのは一行の最後尾を歩いていたファルケンハイン・レインだった。

ファルケンハインは歩みを止めると辿ってきた森の中の道をゆっくりと振り返った。

横に並んで歩いていたエイルもファルケンハインに続いて立ち止まり、不審気な目をファルケンハインに向けた。

「誰かが追いついて来るようだ。我々よりかなり速いな」

エイルが口を開くより先にファルケンハインがそう言った。その声に反応するようにル＝キリアの他のメンバーも足を止めた。

「じきに追いつかれそうですね。やり過ごしますか？」

エイルの背後で声がした。驚いたことに先頭にいたアトラックがいつの間にか最後尾まで戻ってきていた。いや、驚いたのはアトラックが戻ってきた事ではなく、気付くような音もなく近くまで来ていたことである。

『驚いたな。まるで忍者だ』

【忍者？】

『ああ、忍者って言うのは……』

【ふむふむ】

『まあ、いいや』

【待て。そっちから話し出しといて「まあ、いいや」はないやろっ】

『また今度な』

【俺はお子ちゃまか！！】

『そうやってすぐに腹を立てるところはお子ちゃまじゃないのか』

【その言葉、そっくりそのまんまお前さんに返したるわ。短気なのはそっちやろ？】

『何だと?』
【ホレ、見てみい】
『……』

「ここなら、全員が隠れることもできますね」
アプリリアージェはアトラックの言葉を受けて答えると、ハロウィンに声をかけた。
「先生、そっちはお願いできますか?」
「了解した」
ハロウィンは特に何を訊ねるという事もなくアプリリアージェの指示に即答すると横に立っているルネの赤い髪を優しく撫でた。

「じゃ、私達五人はこっちへ隠れよう」
ハロウィンがそう言って指さしたのは街道脇にある森の岩陰だった。
「五人だと?」
これはティアナだ。
「そうだ。私と、ルネとネスティとシェリル、そしてティアナ、君だよ。私が呪法で視界結界を張るけど、いざとなったらティアナの腕前を披露してもらわなくちゃ」
「ル=キリアは誰もこっちの護衛に付かないのか?」
「彼らはそれぞれ攻撃用の戦闘態勢に入るだろうからね。もともとル=キリアは攻撃専門の部隊で、動きが制限される護衛役には向いてない。防御は我々の役目で、彼らは元を絶つ役目だね」
ハロウィンは早口でそれだけ言うと、ティアナにウィンクして見せた。
「役割分担ってやつさ」
そう続けるハロウィンはすでに森へと下り始めていた。ティアナを除く一行は突然訪れた緊張に戸惑いながらも無言で、そして急いでそれに続いたが、ティアナだけはその場を動こうとしなかった。

そんなティアナに声をかけたのはルネだった。
「ティアナ、忘れタん？ウチがいるンよ」
ティアナはハッとした。
「ウチは攻守両刀ヤ。だから心配いらへん」
（そうだった）
ティアナはその構成がようやく腑に落ちた。水のエレメンタルがエルネスティーネの側にいてくれるという安心感は絶大であった。ランダールの火事の消火を見ていたティアナには、ルネが極めて強力な力とその力を精密に制御する能力を併せ持っていることに疑いは持っていなかった。そのルネがエルネスティーネのそばにいるというのは安心というより心強い。
最優先で守らねばならないはずのエルネスティーネに対しては守りの構成が薄い指示だと思ったが、そんなことはなかったのだ。さらに攻撃は最大の防御とも言う。ル＝キリアはなるほど風のフェアリーだけで構成されている特殊性を考えても、攻撃に特化した部隊であるのは間違いない。彼らが戦いやすい状況を作り出す事が結果としてもっとも安全と言うことにもなる。
ハロウィンは軍人でもなく特に彼らと事前にそういうやりとりをしたわけでもないにもかかわらず、アプリリアージェの「そっちはお願いします」という一言で全てを理解したということなのだろう。

ティアナは思った。
―（いざとなればさすがに我が国のお歴々が絶大な信頼を置くだけのことはある、ということか。ただの軽薄オヤジではない事だけは認めよう）
そして微笑みながら自分を見上げている小さいルネに真顔でうなずいてみせると、小走りにそちらへ降りていった。
その頃にはル＝キリアの四人を含め、一行は全員街道脇に姿を潜めていた。
ティアナにはル＝キリア達がどこに隠れたのかはわからなかった

が、真っ先にエルデのルーンで姿を消したエイルには全員の大体の位置関係が把握できていた。
ファルケンハインは後方から近づく未確認の人物が自分たちに数分で追いつきそうだと言っていたが、その人物は姿を見せるよりも先にその声を一行に披露することになった。そしてその声は一行を混乱させることになったのだ。

「エイルくーん」
声はまだ微かであったが、エイルの耳には確かにそう聞こえた。

『おい、ひょっとしてあの声って』
【ああ、間違いないやろな。でも】

「エイルくーん」
次にその声がしたときは、一度目よりはっきりと耳に届いた。それはその声の主が確実に近づいていることをエイル達一行に知らせていた。
彼らが辿ってきた森の中の道は屈曲しており、声の主が彼らの目の前に現れたのは、三度目の呼びかけと同時だった。
その声の主はまさしくあのタンポポ色の髪をした蒸気亭の娘、カレナドリィ・ノイエだった。
彼女は一行が姿を消したところで立ち止まると、口に両手を当てて出来るだけ遠くに届くように大きな声で呼びかけた。
「エイルくーん」

「カレン」
エイルは姿を消していたルーンを解くと、カレナドリィの目の前に姿を現した。
「ああ、エイル君。良かった」
カレナドリィはエイルを認めると、満面の笑みを浮かべてエイル

にかけより、そのままエイルの胸に飛び込むように体を預けてきた。
エイルは躊躇する間もなく、カレナドリィを抱きかかえるように受け止めた。
「全員待機。変。様子が」

「え？」
この呼びかけに思わず小さな声を上げたのはシェリルだった。すかさずルネが小さな手でシェリルの口を塞いだ。
「しーっ。今はアカン」
ル＝キリア全員の耳元にその時届いた声はテンリーゼン・クラルヴァインのエーテル・トークだった。
思いもかけぬ事態……知り合いであるカレナドリィの出現で姿を見せたものかどうかと戸惑っていた一行はその声で再び緊張の糸を張りなおした。
アプリリアージェはいち早く一行の動きを止めたテンリーゼンの声に反応して、改めて近づいてくるカレナドリィを観察した。一見するとおかしな事はない様子だったが、その足下を見て合点した。
山歩きにはおよそ似つかわしくない部屋履きのような薄い草履を履いている。それだけではなく、その足はおそらくは道中の岩や石で傷つけたのであろう。切れて、裂けて血だらけであった。固まった血に埃が付着し、さらに深い傷からは埃の隙間を縫ってまだ血が滲み続けていた。一見して相当の痛みを伴う傷だと思えた。いや、普通の人間ならば痛みで歩くともままならないはず。
しかし、カレナドリィは全速力で駆けてきた様子で、とにもかくにも普通の娘の行動としてはかなり異常だと考えていい。
アプリリアージェはそれだけでなく、同時にそのカレナドリィが纏う気配にも不吉なものを感じた。そしてその予想はすぐに正しかった事を知ることになる。すなわちテンリーゼンの静止が正しかった事を一行が認識するまでに、ほとんど時間はかからなかった。

「一体どうしたんだ」
腕の中に抱き留めたカレナドリィに向かってそう声をかけようとしたその時だった。エイルは腹部に衝撃を受けたような気がした。同時に体から力がスッと抜けていく感覚を味わった。
だが何が起こったのかを瞬時に理解出来るほど、エイルは冷静ではなかった。
事態を最初に理解したのはエルデだった。

【しもた！】
『え？何だ……オレは一体？』
【やられたんや。くそ！！おい、大丈夫か。変われ。俺と早よ変わるんや】
『やられた？オレが？カレンにか？でも、一体なぜ？』
【今はそんなことはどうでもええ、早よ変われ。腹を刺されたんやぞ。痛みは感じへんけど、この傷はかなりヤバい】
『刺された？』
【アカンっ。下は見るな。傷は駄目や。俺に血を見せたらアカンでっ】

指摘され思わず腹部を見ようとしたところを、エルデの声に制止され、エイルは落としかけた視線を再びカレナドリィに向けた。
「カレン？」
そう言うとエイルは半ば反射的に残った力でカレナドリィの肩を押して突き放した。それにより両者に距離ができた瞬間、何かが風を切るような音がしたかと思う間もなく、一本の細い矢がカレナドリィの右手の甲に突き刺さるのが見えた。
「あっ！」
カレナドリィは思わず悲鳴を上げた。

『カレンっ』

【黙れ。俺らはドジったんや。とにかく替われ】
『オレは？一体？』
【刺されたんや！】
『カレンにか？なぜ？』
【しっかりせい！カレンをよう見てみい】

エイルはカレナドリィを突き飛ばしたのが精一杯だった。それ以上は意志とは裏腹に体に力が入らず、立っていることももう出来なかった。特に下半身の感覚がおかしかった。力が入らないまま膝を折ると、その場に崩れ落ちるようにうつぶせに倒れた。続いて急激に眠くなり、それに伴って意識も薄らいでくるのがなぜか客観的に理解できた。

かすみ始めたエイルの視界に映るカレナドリィの右手の甲には短い矢が突き刺さっており、今、まさにその手が握っていた短剣が白く光りながら地面に落ちて来たところだった。短剣は乾いた音を立てて、横たわるエイルの目の前に落ちた。

「カレン……なぜ？」

【早よ変われ、死んでまうぞ】
『嫌だ。お前に任せたらあっと言う間にカレンを殺しちまうだろっ』
【エイル】

「君は……どうして？」
「フン。やはり例のアルヴの仲間連中と一緒か」
カレナドリィは負傷した手の甲を押さえると、矢が飛んできた方角を睨んで鋭く叫んだ。
「攻撃したければするがよい。私は痛くもかゆくもないのだぞ？この娘が無惨に死ぬだけだ」
それはカレナドリィの声を借りてはいたが、エイルの知るカレナドリィの口調ではなかった。

その声に対してル＝キリアはもちろん何も答えず姿も見せなかった。矢も最初の一本が放たれただけで、二本目が続く事はなかった。ル＝キリアとしてはカレナドリィに照準は合わせて様子を見守って待機していると言うことなのだろう。

アプリリアージェは警戒を周囲に広げた。

カレナドリィは「この娘」と言った。それはカレナドリィ自身は誰かに操られていると言うことを意味している。つまりそれは操っている人物が近くに潜んでいるという意味に他ならない。カレナドリィとエイルに注意を集中していると、全員があっという間に窮地に陥る羽目になる可能性があった。

ル＝キリアではこういうシチュエーションの時の役割分担が決めてあった。周囲の警戒はファルケンハインの仕事。アトラックは現場を把握し、テンリーゼンは臨機応変に行動。アプリリアージェはファルケンハインの位置を確認した上で、彼のいる場所と反対側の注意を怠らぬようにしながらも、エイルが置かれている状況をも把握しようと努めた。

―（あの傷では、エイル君はあまり長くもたない……）

カレナドリィを倒すのは、おそらく一瞬でできる。だが、背後にいる人間に攻撃の隙を狙われ、ル＝キリア側に被害が出る可能性も大きかった。だからカレナドリィを操る人物を引きずり出す事が出来れば、と計算していたのである。

「カレン」

「お前はすぐには殺しはせぬ。死ぬ前に少し聞いておきたいことがあるのでな」

【替われ。頼む、替わってくれ】

「お前は、カレンじゃないんだな？」

「この娘の事はどうでもいい。それよりもお前はいったい何者だ？何故に賢者を騙る？賢者を騙る者は死をもって償わねばならん」

―（賢者を騙る？）

カレナドリィに狙いを付けたまま二人の様子を見ていたアプリリアージェはエイルについての謎をまた一つ増やした格好になっていた。

―（エイル・エイミイは賢者ではない？とすると、カレンを虜にしている人物は本物の賢者、もしくは賢者の関係者ということになるけれど……）

【変われ。もう、お前が関与する領域やない】

『嫌だ』

【「嫌だ」じゃないっ！体をよこせっ】

エルデはそう言うとエイルから強引に体の制御を奪い去った。

もちろんそんな事を許したつもりのないエイルは驚いた。だが、すでにエイルはもう自分で自分の体を動かすことはできない状態で、エイルがどうあがこうともはや彼の体は彼の意志に従った動きをすることはなかった。とはいえエルデが強引に体の支配権を奪ったのはこの場合、正しい判断だと言えた。いや、生きながらえるためには必須の行為であったのだ。なぜならエイルにとって替わったエルデは体の主導権を握った瞬間に深みに落下するかのような感覚を覚え、危うく気を失いそうになったからだ。エイルに替わるのが後数秒遅かったならば、おそらくエイルは失神し、体の制御を奪うこともできないまま死を迎えていたに違いない。すべては多すぎる失血のせいだった。

だがエルデは入れ替わる前にそういう事態を予め予想していた。したがってその想定内の事態への対処は極めて的確で速かった。

入れ替わった瞬間、エルデは急いで何事かを小さく呟き、とりあ

えず気を確かに持つと同時にそれ以上の出血を止めた。だがすぐに今度は少しだけ収まった眠気を覆い隠すほどの猛烈な寒さが襲ってきた。いや、もうエイルは呪法の影響で痛みや寒さは感じない体だ。だから寒さそれ自体を感じたのではなく無意識の震えが全身をおそってきたのだ。それも当然ながら失血によるものだった。いったん堪えたものの、意識の低下に伴い襲ってくる睡魔もまた強まってきている。

エルデはさらに何かを呟く。

「答えろ、黒い髪と黒い目を持つ呪われた子よ。答えなければこの娘もろともお前はここで消滅することになる」

カレナドリィの声の主はそう言うと、俯せに横たわるエルデの頭を強く蹴った。切り傷と擦り傷で酷い状態になっているその血だらけのつま先で。

テンリーゼンとアプリリアージェを除く一行はその時初めてカレナドリィのその異常な足下に気付いた。

エルデはうめき声も上げず、蹴られた衝撃で仰向けに反転した。

エルデの服は、腹部を中心に赤黒い染みが大きく広がっていた。もちろん、血は地面にも大きな染みを作っていた。

誰の目にも彼が重篤な状態であることは明らかだった。

エルネスティーネはカレナドリィがエルデを足蹴にしたのを見ると我慢の限界を超えた。カレナドリィに抗議をしようと自分の腕を掴んで放さないハロウィンを振り払おうとしたが、エルデの元へ向かおうとする気持ちはしかし反対側から今度はティアナのたくましい腕に抑えられる格好になった。

「堪えてください。おわかりでしょう?カレンを操る本体たる黒幕が近くにいるのです。今出ては相手の思うつぼなのです」

―(でも、エイルが)

ハロウィンに今度は口まで塞がれたエルネスティーネは涙目でそう抗議した。いや、ティアナの心にははっきりそう聞こえたのだ。

ティアナはしかし、それでも目を伏せて首を横に強く振ると、エルネスティーネの腕を握る手にさらに力を込め引き寄せ、強く抱きしめた。

「それでも！今は……堪えてください」

ティアナは適切な行動をとってくれたハロウィンに今度ばかりは感謝しつつ、エルネスティーネにそう懇願した。エルネスティーネはティアナの決意が自分の思いと同じくらい堅く、おそらくこれ以上動くことはできないと悟ると、固く目を閉じた。その目尻からつっと涙の筋が流れて、落ちた。

「さあ、答えろ」

カレナドリィは蹴られて咳き込むエルデを見下ろしながら、さらに尋ねた。

「全く、失礼なやっちゃな。お前こそ……誰やねん？人にものを尋ねるには態度が悪すぎへんか？」

その言葉を聞いたカレナドリィの形相が険しく変わった。自分を睨み付け見下ろすその顔は、もはやエイルやエルデが知っているカレナドリィと同一人物だとは思えないほどに面変わりしていた。

「質問しているのはこっちだ。現在も、そして過去にもエイル・エイミイなどという現名の賢者は存在しない。そもそも賢者ならば現名などに意味はない。賢者であれば力を行使する際にまず正しき名を名乗る。だから答えよ。お前が持っている賢者の徴はどこで手に入れた？まさかとは思うが新教会からか？私はそれが知りたいだけなのだ」

「どうなってるんでしょう？」

いつの間にか傍に来ていたアトラックが、ファルケンハインに尋ねた。

状況はエイルとカレナドリィがいる場所だけだと言うことが彼の出した結論だった。付近を警戒したはいいが、全くそれらしい気配

が感じられないのだ。とはいえ、広く警戒は怠らないようにしつつも情報の共有の為にやってきたのだ。

カレナドリィ以外の敵の気配を付近から全く関知できないのはファルケンハインも同様で、何か不思議なものを感じていた。だからと言うこともないのだろうが、いつもならこの手の質問には無視を決め込むファルケンハインが、この時ばかりはアトラックの問いに反応した。

もっとも、積極的に会話を活発化させようとするような返答ではなかったが。

「俺がその答えを知っていると思うか？」

アトラックはファルケンハインの返事に苦笑すると頭を掻いた。期待していなかったとはいえ、会話を続ける意志があまり感じられない素晴らしい返答だった。だが、アトラックはその考えをすぐに改めることになった。

ファルケンハインが後を続けたのだ。

「それにしてもあいつ、あまりにも簡単に刺されていたな。物理攻撃が一切通じないということはなさそうだ」

アトラックはほう、と思ってうなずいた。

「言われてみればそうですね。アイツ、あれで大丈夫なんでしょうか」

「みての通りどう考えてもあのままでは長くは保たんだろう。だが、まだ強がりを言う元気だけはあるようだな」

「強がりじゃないといいですね」

「そうだな」

淡々とした受け答えだが、アトラックにはファルケンハインがじりじりとじれているのが手に取るようにわかった。本当はすぐにでも飛び出したいのだろう。むろん、アトラックとてそれは同じ気持ちだった。だからこそ会話をして気持ちを冷静に保とうとしていたのだ。

「俺達はいつまでこのままなんでしょう？」

「司令の指示がないかぎり待機だ。それにこれは俺の希望が多分に入っている意見だが、あいつが簡単にこれで終わるとは思えん」
「いや」
アトラックは大きく首を左右に振った。
「それには俺もまったく同意しますよ」
付近の警戒を続けながらも、二人はカレナドリィとエルデの姿に釘付けになっていた。アトラックはこのままだと言いつつ、既にいつでも矢を番えるばかりになっているファルケンハインの手元を見て改めてこの無表情な心優しいアルヴの戦士に心の中で微笑した。
だが、その矢であの娘を射ていいのかどうかは難しい問題だった。短剣を狙い、そしてそれを見事に叩き落とすことに成功した矢を放ったのはアプリリアージェではなく間違いなくテンリーゼンだろうとアトラックは認識していた。早期にカレナドリィの異常に気付いていたテンリーゼンのとっさの判断に違いない、と。さっさと相手の急所を射抜いて事を終わらせなかったのは、相手がカレナドリィだったからに違いない。

「フン、そういうお前は賢者なんか？」
「言うまでもない。我はファランドールの法の番人であるマーリンの賢者なり。賢者はすべての賢者を知る。故に問うのだ。我の知らぬお前は何者だ？ただのケチな騙りでないことは良くできたあの賢者の徴のまがい物が証明している。あの偽物は、誰がつくったのだ？」
「偽物やて？」
「きわめて出来がいいと褒めてやろう。知らぬ者は本物と疑うまい。だが、あのような賢者を騙る振る舞いを捨て置ける立場ではない」
「へえ。アレが偽物やて？」
「無論だ」
そこまでの会話でエルデの答えに少し間があいた。返答が無くなったことにいらついたカレナドリィが何か喋ろうとしたとき、エル

デは独り言のように、だが明らかにカレナドリィに聞こえるような声で呟いた。
「なるほど。【魅了】を操り心を喰らう者か。そうするとあの場にいて、その可能性があったヤツって……考えられるのは雰囲気的にあのアルヴの女吟遊詩人くらいやな」
「ほう。それくらいの察しが付くだけの知恵はあるようだな」
カレナドリィはおよそ本来の性格からは想像できないような陰険な顔つきでニヤリと笑うとバカにしたように答えた。だがエルデはそれを無視して続けた。
「おそらく、歌声や音楽を聞かせて術式の第一段階である下準備を行い、第二段階で鍵となる次の音楽を聴かせ、その人間を遠隔操作する傀儡（くぐつ）の呪法の一種やな。アルヴ……女……。そして賢者……」
「何をブツブツ言っている？我が問いに答えねば始末する」
「フン。わかったで、お前さんが一体誰なんか」

# 第二十四話　二藍の旋律

「何だと？」
「お前の名はラウ・ラ＝レイ」
「！」
「そうか。お前は「二藍の旋律」を継いで賢者になったんやな。でも、よりによってこんなところに現れんでもええのに」
カレナドリィの顔はそう呟くエルデの声によって強ばった。
「さすがに蒸気亭では全く気付かんかったな」
「き、貴様、我名を一体？」
「ふーん。やっぱりアタリ、なんやな」
「くっ！」
「だから言うたやろ？俺は賢者や。一応俺も賢者の名前は全部知ってんねん。まあ、実際に出会った賢者は数が知れてるし、名前と顔はあんまり一致してへんけどな」
「黙れ。賢者には」
「エイル・エイミイという現名を持つ者はおらんって言うんやろ？」
「そもそもそれすら偽名であろう。だがどちらにせよ黒い髪と黒い目をした忌むべき血を引くお前のような子供に賢者の徴は与えられておらぬ」
「目の色や髪の色がどうしてん？ええ加減やかましいで、末席め」
「な……何だと？」

【おい、いけるか？】
『いけるか？ってカレンとやれってことか？』
【はあ？この状況でカレンとやらずに誰とやんねん？地面でもぶちのめすつもりか？】
『カレンは操られているだけなんだろ？だったらカレンを傷つける

訳にはいかないだろ？』

【悪いけどな。はっきり言うとくわ。残念やけど、カレンはもうおらへん】

『え？』

【つらい事実やけどあえて言う。せやからちゃんと理解してくれ。この術者が使こてる傀儡の呪法にかかると、操られた人間の意識はもう元には戻れへんのや。目の前に立ってるのはカレナドリィやない。これはもう肉と骨でできた文字通りただの操り人形や】

『なんだと？』

【そういう術を使える賢者の名なんや、「二藍の旋律」ちゅうのは！】

『バカ言うな。何か方法があるだろ？お前も賢者なんだろ？たとえばその「ふた……」なんとかっていうあの女吟遊詩人を倒せば元に戻るんじゃないのか？よくあるじゃないか、そう言う話。元を絶てば元通りっていう』

【「二藍の旋律」や。「よくある」って何の話やねん？たとえ二流とはいえ本物の賢者の術式や。舐めたらアカン】

『……』

【言い直そか。その程度で破られる術式を使ってるようでは「二藍の旋律」なんぞ継がれへんのや。もうちょっと正確に言うと「二藍の旋律」なら実のところ末席やのうて三席、下手したら次席でもおかしない能力を持ってる。ホンマは二流なんかやない】

『だったら！違う方法があるはずだ。そうだ、お前はソイツと知り合いなんだろ？』

【ああ。よーう知っとるで。ほくろが体のどこにあるかまで、本人以上に知っとるわ】

『え？まさか？』

【ちゃうちゃう。そんな桃色の想像とはかけ離れたつきあいや】

『なら、名前を名乗って頼んでくれ。カレンを俺達のせいで傷つける訳にはいかないだろ？』

【あいつが誰かはわかっても、現時点で果たして敵か味方かもわからへんねん。せやからこんなところで名前を明かす訳にはいかへん。いや、名前を明かしたら逆効果になるかもしれんし】
『逆効果？』
【昔いろいろとイタズラを……って、そこは突っ込まんでええから】
『何か方法は無いのか？』
【残念やけど、全然無い】

「三席の私を捕まえて下っ端だと？貴様一体」
「駆け出しの賢者のくせにいっぱしの三席賢者面とはな。笑わせなや、「二藍の旋律」、いや、ラウ」
「いちいちカンに障る物言いだな。まるで」
「まるで……何や？」
「フン、まるで我が師のようだと思っただけだ」
「お前の師匠か。そいつの事もよー知っとるで。憎まれ口だけは達者で実にエラそうなエロハゲジジイ」
エルデの挑発に、カレナドリィの目が吊りあがった。
「やかましい！お前に師匠の悪口言われとうないわ！」
「お、地が出たな、ラウ」
単純な挑発に乗った相手に、さらに小馬鹿にした声でエルデは追い打ちをかけた。

「なんかちょっと風向きが変わりましたね？」
「うむ」
アトラックの問いかけに、ファルケンハインはうなずいた。
「まるで子供の口げんかのようになってきたな」
「まったくですね」
「相手も急に古語になった」
「まったくですね」
「でもまあ、あれだけ元気なら、エイルの体の心配はしなくていい

かもしれんな」
「まったくですね」
「それしか言えんのか？」
アトラックは頭を掻いた。
我ながら間抜けだと言わざるを得ない。これ以上間抜けだと言われないように彼は周りの警戒に意識を集中させた。
カレナドリィはと言えば憤然とした表情でエルデを眼下に睨み付けると、片足を上げて大きく後ろに引き上げ、勢いを付け思いきりエルデの頭を蹴りつけた。
だが、エルデはとっさに身を起こして立ち上がると、カレナドリィとの距離をとりつつ後ろに飛び去り、その間に儀仗を取り出して両手でそれを剣のように構えた。

「ばかな。動けるのか、あの深手で？！」
「お前が余裕ぶっこいとる時にこっちも余裕で体勢立て直してたんや。ツメが甘いで、三流賢者」
「三流などと言うな。イチイチ腹が立つガキめ」
「腹立ってんのはこっちや！こんなみみっちい卑怯な手ぇしか使われへんのは三流の証拠やろ？お前はそんなケチな賢者になってたんか？」
「なんやて？」
「一流なら正々堂々とウチの前に姿を見せてみぃや」

『ウチ？』
【あああ、やかましい。そこも突っ込むとこやない！】
『ふん』

一連の口げんかのような言い合いがばったりと止んだ。
カレナドリィが口を閉ざしたのだ。

「なんか、相手が二流から三流にあっと言う間に格落ちしましたね」
ひそひそと囁くアトラックに、ファルケンハインはうんざりした顔をしてみせた。勿論返事はしなかった。

【フン、さすがにそろそろこんな子供だましの挑発には乗って来んわな】
『いや、もう充分ノリノリだったように思うが』
【まあな。おかげで最低限の回復はなんとか出来た。問題はこの後ヤな仕事をせなあかんってことやな】
『嫌な仕事？』
【さあな。でも考えたらわかるやろ？まあ俺がラウ・ラ＝レイなら】
『ヤツなら？』
【カレンをお前さんに仕掛ける。ルドルフの話やと結構な体術家に習ってたらしいやん？】

心の中でエルデがそう言ったのとほぼ同時にカレナドリィが無言でエルデに正拳突きを入れてきた。
速かった。
ラウはカレナドリィの持っている能力を生かすこともできるようだった。しかも人間が無意識にもっている力の抑制が外されているので潜在能力を極限まで引き出されているはずだった。いや、引き出されているのではなく引きずり出されているのであろう。
エルデはカレナドリィの最初のその突きをかわそうとしたが、自分の意志に反して体がまったく反応しなかった。つまりカレナドリィはエルデの杖を構えた腕を掴むと同時に手前に引くようにして顎のあたりに鋭く正拳を入れてきた。さらにすぐに横に飛び退くと今度は横合いから態勢を崩したところに足払いをかけてきた。エイルと違ってもともと体術などには縁のないエルデにはまったく為す術がなかった。エイルは視界が傾くのを感じながら「かなりの体術の心得がある」という父親であるルドルフの言葉を確かに思い出して

はいたが、その時にはエルデとエイルの一つしかない体は無様に地面にたたきつけられて倒れていた。

【やれやれ】

『本当にどうにかならないのか』

【どうにもならへん。でも、できる範囲でどうにかせなあかんやろ。あんまりリリア姉さん達に手の内を見られたくないんやけどな】

エルデが誰にも聞こえない程度の小さな声で何かを短く唱えると、地面にはいつくばるエルデに対して次の攻撃に入ろうとしていたカレナドリィの動きが凍り付いたように止まった。

【言っとくけどカレンの動きを止めるだけやと何の打開策にもならへんねんで】

「貴様、奇っ怪な術を使うな」

「一流の賢者だからな」

「まだ言うか。フン、そっちがその下手な下等ルーンで抵抗するならこの娘の命はないぞ」

カレナドリィの口はそう言ってのけた。

【ま、そう言うことやな】

『どうしろってんだ？』

【言うたやろ。カレンはラウに殺されるか、それが嫌ならお前に殺されるかしかないんや】

『オレがカレンを殺せるハズがないだろ』

【ほんならラウに殺されるだけやけどな。その場合、おそらく見るに堪えへん状態でカレンは死ぬで】

『なんだと？』

【お前さん、しばらくメシなんか喉に通らへんようになるやろな】

『くそっ』
【ともかく体は返す。詠唱するから口は自由にしといてくれ】
「一体どうしろって言うんだ？」
これはエイルの声だ。
カレナドリィがそれに反応してニヤリと笑った。
「ほう、えらく甘い自称賢者だな。こんな田舎娘の命が大事か？このこと一つとってもお前が賢者などではないことは明白だ」
エイルはその言葉でカレナドリィを……いや、カレナドリィの向こう側にいるはずのラウ・ラ＝レイをにらみ据えた。
「言っておくが、オレにとっちゃお前はその田舎娘ってヤツ以下の存在だ」
「フン。頭が悪いようだからお情けでもう一度だけ言ってやろう。お前が何者かを白状し、ニセ賢者の徴をどこで手に入れたかを吐け。そうしたらこの娘の命だけは助けてやってもいい」
『名乗れよ、エルデ』
【冷静になれ。カレンはもうおらへん。あるのはあの体だけなんやで？】
『でも生きてる』
【本人の精神はもう破壊されてるんや。死んだ方がマシって事があるやろ！】
『黙れ！この世に死んだ方がいいなんて事があるわけないだろっ』
【甘いやっちゃな。ファランドールには死んだ方がええ事なんていくらでもあるんや。そんなこと言うてるとホンマにフォウに帰られへんで】
『……』
【ついでに言うとく。俺がラウやったら、こっちが名乗っても名乗らへんでも、あの娘は始末する】
『昨日もカレンといろんな話をしただろ？ランダールの街をいろい

ろ案内してもらったじゃないか？あの城壁の中、普段は入れないのにカレンの顔で俺たちまで案内付きでいろいろ見せてもらったじゃないか。カレンの友達のアニーだってすごくいい子で、味はわからなかったけど、彼女の手作りのプリンは本当にうまそうだったろ？カレンが居なくなって悲しいのはオレだけじゃない。それにお前だって夕べは楽しかったって言ってたじゃないか！』

【その代わり、大量のシーツを運ぶ手伝いさせられたやろ】

『お前が「それくらいの手伝いはしてもバチは当たらない」っていったんだぞ』

【もう、だまっとけ】

『さっきみんなで弁当を食べたろ？あれだってカレンが夕べ』

【もう言うなっ。お前に言われんでも全部わかってるに決まってる】

『本当に……本当に何とかならないのか……。お前は天才ルーナーなんだろ？それとも自称なのかよ』

【俺は天才ルーナーかもしれへんけど、残念ながら神様やない。言うたやろ？ファランドールで生き抜くっちゅうのはこういうことなんや。これくらい、歯を食いしばって耐えろっ。耐えて耐えて、この場を乗り越えたら、後でなんぼでも泣いたらええ】

『どうしようも……ないのかよ？』

【やかましいっ！できるならやっとるに決まってるやろっ！】

『エルデ……』

【頼む。もう言うな】

体を制御下においているエイルはのろのろと立ち上がると、カレナドリィを見つめたまま唇を噛んだ。

今でも覚えていた。

目を覚ましたら黄色い髪の少女がいた。

その少女は心配顔でこっちを見ていた。

緩やかな波を描くたんぽぽ色の髪が、逆光線に浮かび上がりとても眩しかったことを。

でも。
今、目の前にいるカレンは出会ったときと同じように腰まである長いタンポポ色の髪を三つ編みにしてまとめ、胸の方へ垂らしている。
でも、違う。
エイルを睨む青い瞳はあの時のいたわるような微笑みとは違い、そこには怒りと憎しみの色が浮かんでいた。

【わかるやろ?もう、カレンやない】
『……』

「答えろ。私は気が長い方ではない」
「あ、それは知ってる」
エルデが答えた。
「フン。ならば答えよ」
「俺の名前は」
「ふむ」
「エイル・エイミイや」
「もういい。では賢者の徴はどうした?」
「授名の儀の時に、「庫」で徴から選ばれたら、もれなくついてくるやろ?ラウよ、お前も賢者やったらそんなことくらい知ってるはずや」
やや間があって、厳しい顔でエイルを睨んでいたカレナドリィの口元が緩んだ。
「交渉決裂だ」
カレナドリィの口がその言葉を発したまさにその瞬間、エイルの額に第三の目が開かれた。カレナドリィはそれを見ると動きが止まった。エイル……いや、エルデはその一瞬の隙を見逃さず、水平に構えた儀仗を突き出して何かを短く唱えていた。儀仗にはめ込まれたスフィアの一つからは詠唱直後に目を開けていられない程の強烈

な白い光が放たれて、カレナドリィだけでなくエルデ自身をも包むようにして大きく広がった。
そしてそれは一瞬後にはスッと消えてなくなった。

カレナドリィが目を開けたままでその場にゆっくりと前のめりに崩れ落ちようとするのを、再びエイルの体を奪っていたエルデが慌てて近寄って支え、そっと仰向けに地面に寝かせてやった。
カレナドリィには何も反応がない。エルデは念のために脈をみたが、こちらも反応はなかった。エルデはわかっていてあえて確認をしたのだ。もちろん、エイルに認識させるために。
エルデは唇を噛むと、カレナドリィの開いたままのまぶたを手でそっと閉じてやり、深いため息をついてうなだれた。
エルデもエイルも言葉には出さなかったが、目を閉じてやるときにカレナドリィの瞳に最後に映っていた澄んだ秋空の青い色をずっと忘れないだろうと思った。

「もう終わったし、みんな出てきてもええで」
少ししてエイルはそう告げたが、立ち上がらず、カレナドリィのそばに座り込んだままだった。
いや、もちろん声をかけたのはエイルではなくエルデだった。うつむくその額にはもう第三の目はなく、普通の人間の顔になっていた。とは言ってもエルデは今回、仲間達に背を向けてカレナドリィに対峙していた為に、彼の第三の目を一行が見る事はなかった。
「心配せんでも、近くに術者はおらへん。賢者「二藍の旋律」ことアルヴの女吟遊詩人ラウ・ラ＝レイはあのままランダールの町におると思う」
肩で息をしながら大儀そうにそう言い終わったとき、そのエルデの肩にそっと手が置かれた。
音もなく傍に立っていたのはファルケンハインだった。
「確かなのか？」

「カレンを通じて今チラっとラウの様子が感じられたけど、周りは山や森やのうて町の風景やった。建物の土台が石で、上屋が煉瓦と木で出来てた。おそらくランダールの街におるやろ」

その言葉を合図に、アプリリアージェとアトラックが姿を現した。

アプリリアージェはカレナドリィの傍に片膝を付いてしゃがみ込むと、その腕をとって手首の脈を診た。彼女の左手の小さな指の腹は、いくら感覚を集中させても、命あるものを証明するあの暖かい鼓動をとらえることが出来なかった。

アプリリアージェはカレナドリィの手を大事な者を扱うようにそっと元に戻すと顔を上げ、その時目が合ったアトラックに小さく首を振って見せた。もちろん、全員に向けての知らせでもあった。

エルデはその様子を見て立ち上がろうとして上体を起こしたが、それがかえって体勢を崩す事になり、そのまま後ろ向けに倒れ込んだ。だが、地面に体が落下する前に傍らにいたファルケンハインのたくましい腕に支えられ、痛い思いをせずにすんだ。いや、痛みは感じない体であったが……。

「おおきに。流石にちょっと血を流しすぎたみたいやな。情けない事にこれ以上立ってられへんわ」

エルデは心配そうに見つめるファルケンハインにエイルの黒い目で目配せをして見せた。

ファルケンハインは首を振った。

「もう喋るな。黙っていろ」

「うん」

エルデはもう目を開けていられないという風に素直に目を閉じると息が上がった苦しそうな声でファルケンハインに言った。

「頼みがあるんや」

「なんだ?」

「悪いんやけど、これからカレンをランダールまで送ってやってくれへんか?ルドルフのおっちゃんがえろう心配してるはずやし」

ファルケンハインはチラとアプリリアージェの方を見たが、彼女が意思表示をするのを待つ前にエルデに尋ねた。
「ある意味、このまま行方知れずにしておく方が良くはないか？適当な所を探して遺体は俺達で丁重に荼毘にふしてやろう」
「確か火葬はシルフィードの慣習やったな。残念ながらサラマンダやウンディーネはまだ土葬が慣習やで」
「わかった。では適当なところに埋葬してやるとしよう」
「いや、っちゅうか、そうやのうてカレンはまだ死んでへんねん」
その言葉でその場にいた全員が一斉に固まった。
「ラウの……呪法が発動する前に……こっちの呪法でそれを止めた」
「この状態で生きているというのですか？心臓も止まっていますよ」
カレナドリィの腕をとっているアプリリアージェの問いかけに、エルデは目を閉じたまま辛そうにうなずいた。
「大丈夫。肉体は生きてる。ただ、生きてるって言うても目を覚ますことは二度とあらへんやろうけど」
「え？」
「死んでへんから腐ったりもせえへんけど、目を覚まして動き出すことはもうない。しゃべる事もない。笑うことも、泣くこともできへん」
「どういう、ことなんだ？」
「ラウの呪法にかかった時点でカレンの精神は呪法の発動現力になって消滅してもうて、その魂はここに来た時にはもう跡形も残ってへんかった。さすがに「二藍の旋律」の名を冠する賢者の呪法や。いくら俺でも解除することは不可能やから、術自体を俺の呪法で凍結した。いや、正確に言うと俺のかけた呪法の優先順位を上げた訳や。そやから俺の呪法を解いた瞬間、ラウがかけた呪法が発動してカレンの体は中から崩壊するやろ」
「崩壊？」
エルデは力なくうなずいた。
「あの術はエグい。破裂して脳みそや内蔵が四方八方に飛びだして

どうしようもなくなるやろな」

「そんな」

エルデの言葉にエルネスティーネが口を押さえて言葉を飲み込んだ。大きく見開かれた瞳からは涙があふれた。もう、ずいぶん前からエイルの姿を見て泣いていたのだ。ただ、声をたてずにいただけだった。

危機が去ったと言うことでハロウィンと共に隠れていた一行もエイルの体を囲んでいた。

アトラックと言えばエルデの言葉を聞いて思わずゴクリと唾を飲み込んでいた。思いの外大きな音で、彼はそれがみんなに聞かれたのではないかと思って思わず周りを見渡した。シェリルにいたっては何も言葉が出ないほどショックを受けていた。

「話を総合すると、お前がカレンの中にある時間を呪法で止めたという事か？」

「めっちゃ適切な表現やな。そやから、このままルドルフの元へ。あ、そうやった」

エルデは思い出したように目を開けると、右手を伸ばしてその指先を傍らに横たわるカレナドリィの足下に向けると、何事かを小さく呟いた。すると切り傷だらけでひどい状態だった足の裏や指の傷が淡く光り、みるみる回復していった。

「せめて綺麗にしてやらんとな」

「回復ルーンか」

エルデは力なくうなずくと、目を閉じて伸ばしていた右手をだらんと落とした。

「おっちゃん、悲しむやろうなあ。でも……頼むわ。礼はする、から。あと、ランダールでラウに襲われる心配も……ない。アイツはさっきので多分一週間やそこらは意識がないはずや。……視力はさらに一週間くらい回復せえへんやろ。……あ、そやからルドルフには……」

喘ぎながらなんとかそこまで言ったところでエルデの意識がなく

なった。ファルケンハインが顔を上げるよりも速く、いつの間にかエルデのそばに座り込んでいたハロウィンがエイルの手首をとった。
「呪法とは確か、ルーンとは違い、何らかの捧げ物……対価のようなものを発動現力として使うのでしたね？」
手首を終え、首筋から脇に手を挟んで脈を診ているハロウィンに、ファルケンハインは訪ねた。呪法を使ったというエルデの言葉が気になっていたのだ。
「ああ、今の二人の会話から察するにラウという賢者はカレンの精神そのものを対価に使ったということのようだな」
「では、エイルがラウにかけた呪法は何を発動現力に使ったのでしょう？」
だが、ハロウィンはその質問に答えなかった。
「脈は弱いが規則正しい。たぶん大丈夫だろう。今はできるだけ安静にしておくことが一番だろうな」
ハロウィンは顔を上げた。すると同じようにカレナドリィのそばに来て膝をついているアプリリアージェと目が合い、そう告げた。
脈をとっていた手をそっと戻すと、今度は血まみれで赤黒く染まっている着衣をまくり上げてカレナドリィに刺された傷口を確認した。
すると、傷を見たその目が何か恐ろしい物を見たかのように見開かれた。だが、ハロウィンは何も言わず、懐からとりだした短剣で血で濡れたエイルの着衣を切り裂き、肌着だけの姿にすると、アトラックに彼の荷物を持ってくるように言いつけた。
ハロウィンがアトラックから手渡された背嚢から取り出したのは、アルヴスパイアのマントと言われていたもので、つまりは一行が羽織っているものであった。
「これを彼に使ってもいいだろうか？」
「ええ。おやすいご用です。それに、お礼もしないといけませんからね」
「お礼？」

「ある意味で彼は命の恩人かもしれませんしね」
「そうかもしれんな」
そうかもしれない、とアプリリアージェも思った。
「二藍の旋律」という名の賢者がどのような力を持っているのかは知るよしもないが、ひょっとしたらここに横たわっているのは我々の中の誰かであったかもしれないのだ。

おそらく……
アプリリアージェはすでに軍人としての思考を働かせ始めていた。
二藍の旋律という賢者はエイル・エイミイという人物を偽物と決めつけて甘く見すぎていたのではないか。
だからカレナドリィを後追いさせてぶつけるという、およそ「策」ともいえない場当たりの戦術をとった。エイルが手強い相手だとわかっていたら、もっと緻密で確実な手法を選んだろう。失敗した場合に備えて二重三重に……。その場合、狙われるのは我々旅の同行者の中の複数人であろう。
そう考えると自らの想像にぞっとした。
そしてこれから自分達が関わるかもしれない敵の計り知れない強さに軽い恐怖を覚えた。
―（カレンには本当に申し訳ないけれど、今私たちが賢者の存在とその力の一端を垣間見たことは幸運だった）

一行が見守る中、ハロウィンはアトラックの予備のマントでエイルの体を器用に包み込むと額に手を当てて体温をみた。
「多分大量の失血で気を失ったんだろう。この出血じゃ今まで持ちこたえていたのが不思議なくらいだよ」
ハロウィンは血みどろの着衣とマントをまとめると、懐から皮の巾着を取り出して中に入っていた黄色い粉を振りかけて、手をかざした。
するとバッという音がして大きな炎が発生し、ゆっくりとエイル

の服を灰に変えていった。
痕跡を残さないために焼いたのだ。
「それと、ファル」
ハロウィンは小さな声でファルケンハインに声をかけた。
「なんでしょう？」
「さっきの答えだけどね。呪法のもっとも一般的な発動現力は呪者の血なんだよ」
「なんですって？」
失血死してもおかしくないような状況で、さらに血を使う呪法を行ったというのか？
「そんなことをして、こいつは本当に大丈夫なんですか？」
ファルケンハインがマントに包まれたエイルを抱いたままで尋ねた。
だが、ハロウィンは力強くうなずいた。
「この坊やが本当は何者なのかはわからないが、少なくとも外科医としての能力は私より上のようだ。何をしたのかはわからないが、驚いたことに傷口はもう跡形もなく治っている」
「何ですって？」
「君も見ただろう？今のカレンに対する足の傷の治癒といい、そうとう強力な力を持っているのだろうな、この子は」
アトラックの問いにハロウィンは大きくうなずいた。
「ただ、さすがに賢者殿でも傷口は塞げても血液はすぐには作れないようだな。血圧低下と体温低下はあるが、危機的なほどではない。本当ならもっと冷たくなっているはずなんだが、おそらくそっちの方の対策もやってあるのだろう。まったく驚愕のチビさんだよ」
その言葉を聞くとようやくファルケンハインに安堵の表情が生まれた。そして顔を上げるとアプリリアージェの方を見やった。次の指示を仰ぐためだ。
「で、どうするね？」
ファルケンハインだけでなくその場にいた全員を代表するような

格好でハロウィンがそうアプリリアージェに尋ねた。一体何が起こったのかがわからないうちに突然現れた一人の少女と、その少女によって傷ついた旅の仲間の一人がともに横たわっている傍を、数人の少女達が無言で取り囲んでいた。

「まず、ここはエイル君の頼みをききいれましょう」

司令官の言葉を聞いてファルケンハインは安堵した。

「アトル」

「はい」

「あなたはカレンをルドルフの元へ。いらぬ作り話は無用です。事情は我々が見知った範囲で包み隠さず伝えてください。それがせめてもの誠意というものでしょうから。ただし、賢者「二藍の旋律」の名前、そして姿形は一切伏せて下さい。我々が見たわけではないので嘘にはなりません。その後速やかにこちらに合流してください」

「了解」

「そしてルドルフに私からの伝言を。『絶対にラウ・ラ＝レイに手を出すな』と。普通の人間に歯が立つ相手ではなさそうです」

「委細了解」

それだけ言うと、アトラックは早くもカレナドリィを抱きかかえて肩に乗せると、強い風に押し出されるように駆けだした。

「次に我々の方ですが」

アトラックが去って行った方をしばらく見ていたアプリリアージェが、振り返ってハロウィンに尋ねた。

「エイル君は動かしても大丈夫ですか？」

「目が覚めない程度に優しく運べるなら問題はないだろう。彼に今必要なのは多分深い睡眠なんだろうからね。この子はまるで傷ついた猫のように一人でじっとして傷を治そうとしている」

「それならば私が運びますから大丈夫です」

ファルケンハインはそう言った。アプリリアージェはうなずくと今度は全員に向けて顔を上げて優しい声で言った。

「では、そろそろ出発しましょう」
それはまるでちょっと休憩していた後の合図のように何事もなかったかのような、落ち着いた爽やかな秋空によく通る澄んだ声だった。

エルネスティーネとシェリルは顔を見合わせたが何も言わず歩き出した。ハロウィンが大丈夫だというからエイルはきっと大丈夫なのだろう。それよりもエルネスティーネには目の前で起こったことがいまだに信じられないでいた。いや、何が起こったのかもよくわかっていなかった。ただただショックだった。人は何のためらいもなく他人に剣を深々と突き刺せるものなのだ。

それも、あのカレンが！

市のカフェで優しい姉のような笑顔でエルネスティーネを見つめていたあのタンポポ色の髪の美少女……。子供扱いされたけれど、エルネスティーネはいい人だと直感的に思っていた。そしてきっと好きだった。

二人に時間さえあれば、エルネスティーネはもっとずっとタンポポ色の髪をした少女の事を好きになっていたに違いなかった。

だが。

それよりも何よりもエルネスティーネはやはりエイルの事が心配だった。

エッダの城を出てから、実のところエルネスティーネは毎日が楽しかった。困難な旅であることを承知しながらも普通の人として仲間と旅をすることは想像以上に素晴らしいものだったのだ。

もちろん色々と不自由なことはある。だがそれが何だというのだ？カラティア家の姫として生まれてこなければこう言う風にこの世界を旅して回る事が日常になっていたかも知れないと思うと、今までの我が身の立場を軽く呪いたい気分にすらなっていた。

しかしこの一件でエルネスティーネは自分がいかに甘い気持ちでいたのかを思い知らされたのだ。

この旅は物見遊山でも何でもない。
文字通り命をかけた旅なのだ。今回、エイルは助かった。だがこの次危機を迎えて、その後仲間が誰一人欠けることなどないという保証はどこにもない。

―（この次ですって？）
自分の考えにエルネスティーネは愕然とした。そして固く目を閉じて首を振った。
―（叶うなら。もう二度と誰も傷つかずにいて欲しい）
そう心の中でつぶやくと、エルネスティーネはゆっくりと目を開け、目の前に伸びるなだらかに続く道を見据えた。

一方シェリルはまだうつむいていた。
ゲリラ組織にいたシェリルにとって、仲間の誰かが怪我をしたり、最悪の結果として命を落とす事はある意味日常茶飯事だと言えた。物心が付いた時には千日戦争のまっただ中にいて、血のにおいは朝の紅茶の匂いと同列の日常だった。
戦争後も新体制の反対勢力に回った兄のそばで同じく血の臭いをかぎながら、終わらない戦いの中に身を置いていたからだ。
だが、皮肉なことに部隊がル＝キリアに投降した後、つまり捕虜となってからしばらくは血のにおいとは無縁で過ごしてきた。それはともすれば自分がずっと戦場で育ったことを忘れてしまうほどゆったとりとした平和な毎日であったのだ。
名目上は捕虜という立場ながら、アプリリアージェはおよそ捕虜としてシェリル達非戦闘員を扱うことはなかった。王国軍大元帥であるガルフ・キャンタビレイのもとに預けられてからも屋敷内から一人で外に出ることはさすがに許されなかったが、その中でなら基本的に自由な暮らしをすることができたのだ。
シェリルはそこで初めて簡素ながら一通りの家具がしつらえられた付室と着替え部屋付きの明るい部屋を与えられた。そこには華美

ではないが充分に美しい服が持ち込まれ、天蓋付きのベッドでいい匂いのする夜具に包まれて悪夢のない眠りについた。そしてそんな夜を重ねるうちに、やがて夜中に突然警戒で起こされる不安と一緒に眠った事もすっかり忘れていった。

時間を重ねるごとにシェリルは戦士の一人であることよりもまず一人の若い女である自分に気付いていったのだ。

だが、シェリルの心にはぽっかりと大きな穴が空いたままだった。その穴には名前があり、彼女は今までずっとその名前を拠にして生きていた。血なまぐさい毎日で心が折れずに辛いながらも笑っていられたのは、兄の存在ともう一つの存在のおかげだった……。

そのもう一つの存在にぽっかり穴があいてしまった。

時間の経過はその穴を小さくしてくれるどころかどんどん深くしていくようだった。そして平和な毎日の中に身を置きながらいつしかシェリルはその穴に内部から自分自身が浸食されると確信するほど疲弊していた。

穴の名前はルルデ・フィリスティアード。

「ルルデは死んではいない、きっとどこかに生きている」

そう思う心がシェリルの生を食いつぶそうとしていたのだ。

もっとも周囲には、明るく振る舞う戦場を生き抜いてきた賢い娘のそんな心の闇が見えるはずもなかった。

再びサラマンダに戻って来た時、そこでルルデの生き写しのようなエイルと出会い、ルルデの死を受け入れざるを得なくなったシェリルには、もう心の穴を塞ぐだけの心の力は残っていなかった。

エイルはルルデではないかもしれない。

だが、ルルデとそっくりそのままの顔形、そして声まで持って生きている。シェリルは今、かろうじてそれを支えにして歩いていた。

だが、その杖が眼前で折れそうになるのを目撃すると、無意識のうちに押さえていたある感情が、どす黒く再びこみ上げてくるのを押さえきれなかった。

シェリルは突然立ち止まった。
後ろにいて危うくぶつかりそうになったルネ・ルーが驚いて何か声をかけようとする前に、シェリルは意を決したように踵を返して驚いた顔のルネの横を通り過ぎ、最後尾を歩くファルケンハインのそばに駆け寄った。
途中ですれ違ったアプリリアージェには呼び止められるかも知れないと思った。だが、予想に反してアプリリアージェはシェリルと目を合わせることもしなかった。

やってきたシェリルの表情を見て、ファルケンハインは立ち止まった。
シェリルの顔は、その間に涙でぐちゃぐちゃになっていた。
「うっ……うっ……。うわーっ」
シェリルはファルケンハインに抱かれて眠っているエイルの顔を見下ろすと堰を切ったように大声で泣き始めた。
ルネとエルネスティーネ、そしてティアナはその声に思わず立ち止まって振り向いた。そこへ全く表情を変えないアプリリアージェが、その微笑んだような顔のままで彼女たちを追い越しざまに呟いた。

「さあ、日暮れまでにもうちょっとだけ距離を稼ぎましょう」
三人は顔を見合わせると、しぶしぶ歩き出した。シェリルの泣き声が小さく遠ざかっていくのが辛かった。慰めたかったのだ。だが、彼女たちはアプリリアージェの言葉を思い出していた。彼女はきっとこう言ったに違いないのだ。
「そっとしておいてあげなさい」と。
とにかくエイルは無事なのだ。ハロウィンが請け合ったのだから。
シェリルは安心して、そして心配して思いが溢れてしまったのだ。それになんと言ってもエイルはシェリルにとっては普通の存在ではないのだから。

だから、そう。
私達も今はシェリルをそっとしておこう。
ルネとエルネスティーネは共にそう考えていた。

「なんか、悲しいね」
「うん」
ルネがぽつんと呟いた。そのルネの手を握って歩いていたエルネスティーネが相づちを打つ。ルネは悲しかった。だが、一体何が悲しいのかがわからなかった。
エイルの大けがなのか、シェリルの涙なのか、それとも……。

アプリリアージェ達がシェリルの泣き声が聞こえなくなるくらい先行した頃、ようやくシェリルは泣きやんだ。
両手の甲で涙と鼻水を拭うと、シェリルはファルケンハインに深々とお辞儀をした。そしてすぐに振り向き、遅れを取り戻すように駆けだしていった。
ファルケンハインはずっと何も言わなかった。いや、シェリルにかける言葉など何も持っていなかったと言った方がいいだろう。彼はシェリルにとってエイルが横たわっているベッドのような存在であり、しばしベッドの役に徹することが自分に出来る最上の行為だとわかっていた。
ベッドに礼をして駆けだしたシェリルの後ろ姿を見送りながら、ファルケンハインは大股で歩き出した。そして聞こえない事がわかっていて、独り言のようにエイルに声をかけた。
「なあ、大将。なぜカレンを助けたんだ？」
そして少し躊躇いはしたが、間を置いてこう続けた。
「これは見殺しにするより、もっとずっと残酷なことじゃないのか？」
エイルはそれには答えず青ざめた顔を半分マントに隠して眠っているだけだった。

# 第二十五話　喰らいの呪法

エイル……いや、エルデは目を伏せて腕組みをして佇んでいた。
「意味がわからないな」

エイル達一行がランダールを出発して三日目の夜のことだった。
カレナドリィに腹部を刺されて意識を失ったエイルは翌日には目を覚まし、その日のうちには歩けるようになるという驚異的な回復を見せていた。体の方は問題はなかったが、目を覚ました後のエイルは極端に寡黙になっていた。彼としては例外的な腰の低さで一同に礼を言うと、後は気配すら感じさせないほど静かに過ごす事が多くなっていた。
だから誰もそんなエイルにカレナドリィの事件の詳細について尋ねようとはしなかった。
だが、アプリリアージェはそろそろ腫れ物に触る時期だと考えていた。
エイルが動けるようになったことを確認して再出発を告げた夜、彼女は自分たちが想定していた目的地とその目的内容をエイルに告げて反応をうかがったのだ。
冒頭にエルデが口にしたその言葉は、アプリリアージェから目的地を聞かされた後につぶやいたものだった。

出立を明日に控えたエイルは、周りからはもうすっかり以前の体調に戻っているように見えた。意識が戻った当初は青白かった顔色にも血色が戻っている。もちろんそれはたき火に照らされているからだけではなかった。
エイルはアプリリアージェの話を聞くまで、たき火をじっと見つめながら、自分に関わってきた人間の事を考えていた。勿論カレナ

ドリィの事は考えまいとしても考えてしまっていたが、それよりも倒れた後に自分を看病して世話をしてくれた「赤の他人」について思いを巡らせていた。

倒れていた間、つまり意識が戻るまではシェリルが献身的にエイルの世話をしていたと聞かされた。だが、実際にエイルが目を覚ました時に側にいて、心配そうに覗き込んでいたのはエルネスティーネだった。

実のところ彼女は真っ先にエイルの世話をすることを申し出たが、看病が不慣れな人間にそれを任せられないというアプリリアージェの至極当然とも言える判断で却下され、もう一人の立候補者であるシェリルが指名された。医者であるハロウィンの補佐という意味合いではあるが、反政府ゲリラの後方部隊としての経験は実に頼もしい実績と言えた。

エルネスティーネはしぶしぶその決定に従ったが、自分で手伝えることがあったら何でもしたいと食い下がることは忘れなかった。もちろんシェリルのじゃまにならない範囲ではあったが、常にエイルのそばにいようとしていた。

アプリリアージェ達はエルネスティーネのその様子を見て、言われたことを素直に聞くだけの大人にとって都合のいい「よい子」などではなく、ただでは引き下がらない性格だと言うことを学習した。

しかしながらアプリリアージェが下したエイルの看病と身の回りの世話をシェリルに、という判断を自然な判断だと普通に受け入れたのは実のところ当のエルネスティーネとティアナだけだった。

ファルケンハインとアトラックはその場でおや？という違和感を覚えたし、ハロウィンとルネ・ルーは間違いなく判断がおかしいと思っていた。だがそのおかしい判断をアプリリアージェが敢えて選択したのだと判断したハロウィンは、すぐさま反論を口にしようとしたルネ・ルーを制して先にアプリリアージェに賛同してみせ、その思惑を尊重したのだ。

ハロウィンの見立てでもエイルが最悪の事態を回避していることは確認済みだったので必ずしも医者の助手、つまり本職とも言えるルネ・ルーを付き添わせなければならない必然性はなく、シェリルでも問題ないという判断もあった。

もっともハロウィンにしても、アプリリアージェの思惑が一体何だったのかまでは計りかねていた。ただ、看病を始めた翌朝のシェリルの様子が少しおかしかったことは認識していた。もちろんそれがアプリリアージェの思惑と関係があるだろうと言うこともわかってはいた。

エイルはシェリルがアトラックの着替えを手直ししたものを着てその上にエイルに合わせて丈を詰めたアルヴスパイアの白っぽいマントを纏っていた。

少し前まではウンディーネ風のこざっぱりした旅装だったエイルだが、今ではすっかりシルフィードの質素な旅姿になっていた。

慣れ親しんだ服とはかなり違う風情のものを身につけているおかげでけっこうな違和感を覚えてはいたが、軽くて動きやすいシルフィードの服は保温力も適度で圧倒的に快適だった。

「何の意図があるんだろう」

エイル……いや、エルデは少し考えた後でそう続けた。

「それは、どういうことだ？」

独り言とも取れるエイルの言葉に、アトラックが待ってましたとばかりに突っ込みのセリフを入れた。

エルデの方もその質問を待っていたかのように間髪を入れずに反応した。

「まず、その情報は基本的におかしい。師匠の庵は全部で七つ。俺もその庵を虱潰しに尋ねてるけど、リリア姉さんの話だと庵の数が実際より多すぎるし、第一その目的地とやらには庵なんてない」

エルデの言葉にアプリリアージェは心持ち目を細めた。

「ファルケンハイン！」
「はっ」
いつになく鋭い口調のアプリリアージェの声にファルケンハインに緊張が走った。
いきおい、有事の折りの口調になった。
だが、すぐにアプリリアージェの声は普段の調子に戻った。
「確認ですが、所謂『ザルカバード文書』に記されている庵の数は全部で十三でしたね？」
ファルケンハインもそれに呼応して我に返り、落ち着いた回答を心がける余裕を持つことができた。今現在は有事ではない。だがエルデの言葉にはそれだけ重大な意味があり、ファルケンハインもそれは既に理解していた。そしてそれは嫌な予感……推測を伴うものだった。
たぶんアプリリアージェも全く同じ事を考えているのだろうとファルケンハインは確信していた。
ファルケンハインは意識して少し間をおいた後、彼に注目する一行に向かってゆっくりと言葉を発した。
「はい。我々はル＝キリアを六つの小隊に分け、手分けして庵の確認作業を行う事にしました。我が小隊の確認場所は三カ所で、その他の隊は二カ所ずつです。つまり合計十三カ所です」
アプリリアージェは小さくうなずいた。
そんなことはアプリリアージェもファルケンハインも、もちろんアトラックとて承知のことだった。だが、あえてそう言う問いかけをしたのは、アプリリアージェが自らの考えを整理するためにやる常套手段であった。そうやることで短い間ではあるが、その間に自らと周りに冷静さを取り戻す時間を捻出する手法だった。そのわずかな時間での気持ちと意識の立て直しが次の一手に大きく影響するということをアプリリアージェは経験から知っていたのだ。そしてもちろんこの場合はエイル・エイミイ、いやエルデに対する説明という意味もあった。

ファルケンハインの説明が一区切りついた事で、周りの視線が今度はエルデに移った。
エルデは立ち上がり、たき火に両手をかざしながらファルケンハインに尋ねた。
「なあ。その手紙って、本当に師匠の手紙なのか？」
「「真赭（まそほ）の頤（おとがい）」・・・シグ・ザルカバードの直筆かどうかを我々が判断する事は不可能だ。我々がザルカバード本人の筆跡を知っているわけでもない。もっともそれは我々だけではあるまい。おそらく各国の首脳に回っているはずのその手紙が本当に賢者ザルカバードからの手紙かどうかなど誰にもわからないだろう。だから我々はそれを確認するために行動している」
ファルケンハインは淡々とした声で、エルデにそう答えた。
「疑わしきは調査する、か。――姉さん、その手紙の実物は見たのか？」
エルデは今度はアプリリアージェの方を見てそう尋ねた。アプリリアージェはそれを受けていつもの笑顔のまま首を振った。
「内容を伝えられただけです」
「そうか。俺が見たらすぐにわかるんだけどな。師匠は手紙にも必ず仕掛けをしていたんだ。筆跡なんか真似するのは簡単だし、真贋判断用のちょっとした仕掛けを、ね。だからそれを知っている俺が手紙を見れば一目瞭然なんだけど」
「仕掛けとは、一種のルーンか？」
ファルケンハインの問いにエルデはうなずくと、それ以上は言及せず、そこで話題を変えた。
「それで、リリア姉さん達が担当している三カ所の庵のウチの一つ、最初の目的がアロゲリクの渓（たに）だとして、後の二カ所はどこなんだ？」
エルデの問いに、ファルケンハインはアプリリアージェの方を見やった。アプリリアージェはうなずいて自らが二つの地名を口にし

た。
「うーん……そこも全然違う」
エルデは手をあげてひらひらと振って見せ、アプリリアージェが告げた場所をどちらも否定した。丸で話にならないと言った風情だった。
「俺が知らない庵があるとすればわからなくもないが……言っておくけど、まずそれはない」

ファルケンハインはアトラックと顔を見合わせた後、アプリリアージェの表情を見やったが、そこにあるいつもの表情を見て、上官の表情から考えを読むのは無駄だと言うことを思い出して心の中で苦笑した。苦笑しつつも、嫌な予感がこみ上げてくるのを押さえることが出来なかった。

「だいたい、「誰でも知ってる風のエレメンタル」を除く他のエレメンタルの所在を師匠が知っているなんて俺は聞いたこともない。師匠が知っているのは……」
「ふむ。知っているのは？」
「あ、いや」
ファルケンハインが思わず返した言葉に、エルデはしまったという表情で口ごもった。
「こちらも隠さず手の内を見せています。ここはお互い平等にいきましょう」
アプリリアージェはそれを受けてすかさずそう言った。

【ち】
『もっともだな。さらに俺達にはリリアさんに大きな借りがある』
【誰のせいで借りを作ったと思てんねん】
『またその話を蒸し返す気か？』
【フン】

エルデは頭を掻きながら深くため息をつくと懐から小さな木製の小箱を取り出し、皆が見やすいように少し掲げて見せた。そしてゆっくりとその箱の上に手をかざしてフタを撫でるようにした。

すると皆が見守る中、音もなく箱のフタが開いた。

その木箱の中にあったのは蒸気亭でルドルフから回収したプリズムの破片だった。

「これが何かわかるか？」

箱から出した宝鍵を手のひらにのせて顔の高さまで掲げ、一行によく見えるようにしてみせたエルデはそう問いかけると、答えを待たずに続けてすぐに何かを小さく呟いた。すると、宝鍵を持たない方の人差し指に青白い光がともった。エルデは掲げた掌の上のプリズムに、その光る人差し指を近づけると再び何かを唱えた。

すると人差し指から一条の光がプリズムに向かうではないか。

光はプリズムを透過すると、いびつに四散してあたりを広く照らし出した。

「と言うわけで、まだちゃんとした形になってへんねんけどな」

そしてそう言うと光を消した。

「プリズムですよね？」

アトラックは確認を求めるように横合いのハロウィンの顔をのぞき込んだ。特に何の変哲もない、水晶から削りだしたと思われる、いわゆるプリズムだった。ただ、それは完全な三角柱を形成しておらず、元々あるプリズムの破片といった感じのものだった。

フェアリー達がエーテルを溜めておく為によく使うスフィアは、球状でなくてはならず、普通は三角柱など他の形は考えられなかった。それは中のエーテルの膨張する力を均一に受け止める事ができる形が球だからであり、三角柱など他の形をとると破損するおそれがある為だ。

ただしプリズム自体は普通の人間やフェアリーにとっては特に珍しいものでもない。ルーナーにとっての術具として使われることも

あるとは聞き及ぶが、どちらにしろ何かわかるかと言われてプリズムだという形状そのもの以外の回答は頭に浮かばないのが普通であろう。

そしてもちろんエルデ自身も正解が得られると思って尋ねた類の質問ではないはずだった。

だが、その場で唯一そのプリズムに反応した人物がいた。

その人物……エルデの掌の上のものを見つめるハロウィンの目の色が変わっているのに気づいたアトラックは、改めてエルデの掌の上のプリズムに視線を移した。さりとてアトラックにはただのプリズムだという以外に何も回答は浮かばなかった。

「まさかとは思うが、もしやそれは？」

ハロウィンが思わず口に出したその言葉にエルデが目を見開いて反応した。

「あんたホンマに何もんや？これをぱっと見てそこまで反応するのは普通やないな」

久しぶりに古語に一変したエルデの言葉に全員の視線がハロウィンに集中した。ハロウィンは被っていたつばの広い帽子を脱ぐと、それを膝の上において今度は髭を撫で始めた。一目で落ち着かない様子だというのが見て取れる。

「参ったな。それがあれだとすると……まさかこんなところにあるとはな」

「なんなんですか、先生？」

「そうそう。ソレとかアレとか指示語は無しの方向で説明してくださいよ」

エルネスティーネとアトラックが横にいるハロウィンを見上げて説明を急かした。

「ルーナーがよく持っている、ルーン光を制御する為のプリズムではないのか？」

これはティアナだった。

その時、アプリリアージェが思いついたように言った。

「まさかとは思いますが、それは宝鍵と呼ばれるものでは」
「ホウケンだって？」
「宝鍵って、あの？」
アプリリアージェの言葉に、全員がエルデの顔を注目した。
エルデは無表情でうなずいた。
「たぶん知ってるとは思うけど、師匠、「真赭の頤」はマーリン正教会では相当上の地位にある。ただの賢者やのうて、敢えて大賢者という呼称で区別されることが多いのは意味があるわけや。一席の賢者のさらに上に君臨する四人の賢者、それがいわゆる大賢者。師匠はその一人っちゅうわけや」
アトラックとファルケンハイン、それにティアナといった軍隊組はうなずいた。
「で、その大賢者は密かにこの宝鍵の番人をやっとった。念のためにルーンでいくつかに分割して、それぞれをファランドール中に点在する七つの庵のどこかに隠してたって事や」
「おとぎ話では聞いたことがあるけど、宝鍵なんてものが本当にこの世にあったのか」
エルデの言葉にアトラックがため息を付くようにつぶやいた。
「信じられないな」

「ナあ、宝鍵って何？」
ルネ・ルーが横のエルネスティーネに小声で尋ねた。
「宝鍵、またの名を「マーリンの導（しるべ）」。それはファランドールの古（いにしえ）の伝説にあるスフィアの一種で、エレメンタルが龍を呼び出す為に必要なものだそうですわ。ですから玉ではないのですが龍珠とも言われています。伝説では四柱の龍は「合わせ月」の日まで墓で眠っているそうです。その場所、「龍墓」の扉を開ける事が出来るのが宝鍵だそうですよ」
「そしたらそのプリズムは「合わせ月」の日まで役に立たへんって事ナん？」

「それはわかりません。それから宝鍵は墓の扉の鍵でもありますが、それ自体が龍の心臓であるとも言われています」
「詳しいんやネえ。さすがエレメンタルや」
ルネは本当に感心した、という風に尊敬の眼差しをエルネスティーネに注いだ。
「いえ、歴史で習いました。私、幾何と代数は嫌いですが、歴史は大好きなんです。特に古い時代の伝説や説話はおとぎ話のようでそれはそれは面白いんですよ」
「へえ～。幾何が嫌いなンはまあええとして、ちょっと聞きたいねんけど、語学とか文法とかは？」
「大好きです。好きなのはいいことなんですよ。興味があるとより深く学べますし、集中するから上達も早いですしね。ほら、言うでしょう？『次こそマジな勝負やで』って」

【――カスっても無いところがすごいな】
『つーか今、ネスティは全力で自説を全否定したことになるんじゃないのか』
【確かに】

――（――国語が得意ヤて？）
「え？」
「まあ、下手の物好きとかいうのもあるシな。あはは」
「よくわかりませんが、そうかもしれませんね。あ、でも宝鍵のお話は文字通りおとぎ話のようなものだと思っていました。本当にこの世に宝鍵があるなんて」
エルネスティーネはそう呟くと、視線を感じてふと顔を上げた。たき火を挟んで自分の向かいにいるのはテンリーゼンだ。だが、マントに付属のフードを深々と被っているテンリーゼンの瞳が何を見ているのかはエルネスティーネにはわからなかった。とはいえ、自分を見つめていてくれたのならそれは嬉しい事だと思った。だから

エルネスティーネはテンリーゼンににっこりと微笑みかけてみた。
もちろん、予想通りテンリーゼンからはなんの反応もありはしなかったが。

「うーん、別に自ら光っているわけでもないし、それってどう見てもただのプリズムにしか見えませんけど、それが本物の宝鍵かどうかってどうやってわかるんです？」
アトラックが誰に問うでもなくそう質問した。
「「龍墓」とやらを実際に見つけて鍵穴にはめ込むしかないのか？」
これはファルケンハインだ。
「いや、それはそう言う使い方をするものではない……そうだよ」
ハロウィンがアトラックにそう答えた。
「エレメンタルが使うもの、ということですか？」
「ああ。伝説ではそうなってはいる」
「伝説では、な」
ファルケンハインの問いかけに答えたハロウィンとエルデの口調に、アプリリアージェは微妙な違和感を覚えた。伝説と現実は違うのだと言うことを暗に語るような口ぶりだったからだが、敢えてそこに言及するのはやめた。
「ふーん。じゃあネスティのモノもあるって事？」
「エレメンタルなら反応する。もっともどういう反応をするかは知らんけど……なんなら今触ってみるか？まだ欠片が一つ足らへんからアカンと思うけどな」
エルデはそう言うと「宝鍵」をエルネスティーネに向かって差し出して見せた。だが、アプリリアージェはそう言うエルデの表情に邪気のある笑みを見て取った。
またもやエルデの言動に引っかかるものを感じたアプリリアージェは、心に警鐘がなるのを感じていた。同時に確信もしていた。
――（この子は間違いなく「宝鍵」が何であるかを知っている）

「これは四つとか十二個とか言われてる宝鍵のウチの一つ。しかも本物や。そやからネスティのものかもしれへんしな」
差し出された宝鍵と言われるプリズムを見て、しかしエルネスティーネは手は伸ばさず戸惑ったような表情でハロウィンの方を見た。
「確かに伝説の「宝鍵」がエレメンタルの手に渡ったら一体どういう風に反応するかっていうのは興味がありますね」
「単なる興味ではしゃぐな、アトル。何が起こるかわからんのだぞ」
「あれ？レインさんは歴史的な事件が起こる現場に立ち会うかも知れないのに、まったく興味がないと？」
アトラックはニヤリと笑って挑発するようにファルケンハインを見やった。その目はいたずらっぽく光っている。
「いや、それは興味がないわけでもないが……」
「正直に言うと、私も興味がある。お前の言うことが本当なのかどうか、という点に、だが」
ティアナはそうエルデに向かっていった。その声にはどことなく挑戦的な響きがあった。
エルデはやれやれ、という風に肩をすぼめた。

盛り上がる一同の様子を見て、ハロウィンがその場の雰囲気をやんわり制した。
「エイル。君はその宝鍵が『誰のものか』を知っているのか？」
エルデはしかしそれには直接答えず、次のように呟いた。
「俺が見たところではプリズムに特別な印はないし、そもそもエレメンタルやない俺にはなんとも言われへんな。でも伝説通りエレメンタルであるネスティに触られて今ここでコイツがいきなりものすごい反応とかされてもちょっと困るわな」
それだけ言うとエイルは微笑してハロウィンを見やった。
アプリリアージェは、エルデの表情を見て、また警鐘が鳴るのを感じた。

―（……あれは微笑ではない。何かを知っていて企んでいる目だ）

「そうだなあ」

アプリリアージェの小さな動揺を知ってか知らずか、ハロウィンは鷹揚にうなずいた。

「それに、伝説通り例えエルネスティーネが持つべき宝鍵であったとしても『はいそうですか』、と素直に差し上げるわけにもいかへん訳があるんや。そもそも宝鍵がエレメンタルのモノなんてタダの噂や。本当かどうかも怪しいわ」

「まあ、どちらにしろ今は不用意に触らない方がいいだろう。持っていても反応しないエイル君の手にあるのが安全だろうね。だが、それにしてもなぜそんな大それたものを君が持っているんだ？マーリン正教会はこのことを知っているのか？その辺も教えてはもらえないのかな？」

ハロウィンの問いかけに、一同の視線が再びエルデに集中した。

「これは、言うてみれば卒業試験問題や」

少し間を置いて、エルデが答えた。

「卒業試験？」

異口同音に一同が返した。

「ルー……ゴホン。いや、賢者付きの弟子は一人前になるときに必ず卒業試験を課されるんや」

「一人前って、お前さん、賢者なんだろ？」

「ああ。そやけど完全な意味で一人前とは言えへんのや。賢者には席次とは別に立場的なもんがあって、俺は席次はともかく立場的には今はまだ一般賢者の「士」や。その上、つまり「師」と呼ばれるようになるには自分の師匠かもしくは同等の賢者から卒業許可、つまり独立の証をもらわへんとアカンねん。「士」のままやと弟子をとれへん半人前の賢者みたいなもんやしな。その試験に合格すると師匠が持っている最高の術式を教えてもらえて、文字通り「師」として賢者候補生の中から自分の気に入った弟子を選ぶこともできる

し、何より教会側から保証される研究費も桁違いになるから生活も左うちわっちゅうわけやねん。そのための試験や。もっとも生涯「士」の賢者もおるし、賢者同士の上下関係は席次が絶対やから「士」とか「師」みたいに立場的な物が必要ない人間にとっては必須の試験やない。さらに言えば「師」と呼ばれる賢者は実はあんまりおらへんし。まあ、そんなことよりも何よりも師匠への恩返しとしてそこは通らなアカン道っちゅうか、まあそう言うわけや」

『初めて聞く話だな。本当かよ？』

【俺も初めて言う話やからな】

『相変わらずだな』

「なるほど、賢者様は賢者様でいろいろ大変なんだな。もっと気楽な稼業かと思ってたんだけど」

アトラックが気の毒そうにそう言った。エルネスティーネはその暢気な言葉に吹き出しそうになった。

だが、エルデはアトラックの言葉で瞬時に顔色を変えた。

「大変やて？気安う言わんで欲しいな。教会に賢者候補生はようけおるけど、一体そのうちどれくらいが賢者という地位にはい上がれると思てんねん？」

自分を睨み付けるエルデの形相とその語気に気圧されて、一瞬言葉に詰まり、アトラックは周りを見渡した。もちろん特に誰からも助け船があるわけでもないのだが、とりあえず間を置いた形だ。

「け、見当も付かんが、そ、相当狭き門なんだろうな」

「そもそも百人に一人も生き残らへんねんで」

エルデは吐き捨てるように言った。

「え？」

その言葉の意味するところに気付いたアトラックは、思わず声を上げた。

「生き残らないって……賢者になれるのが百人に一人なのではなく

て？」
エルネスティーネがアトラックより先に早口でエルデに問うた。
エルデは目を伏せて静かにうなずいた。
「しもたな。思わず、いらんことまで言うてもうた」
「教えてください。賢者って……修行ってそんなに厳しいものなのですか？あなたも、そしてあのラウという人もそんな厳しい修行を受けてきたんですか？」
一同はエルネスティーネの「ラウ」という言葉に敏感に反応してエルデの方を見やった。当のエルデは一呼吸置くと、仕方なさそうに続けた。
「そうやな。賢者にも色々あるんやけど……どこから話そうかな」
そう言って腕を組んで少し間を置いた後で、目を伏せて言葉を継いだ。
「知っての通り賢者はフェアリーよりもルーナーが主体や。生まれつき器の大きさがある程度決まってるフェアリーと違うて、ルーナーはちょっと能力を見ただけではその潜在能力がわからへん。せやから能力を引き出したり上げたり、得意不得意を知った上でその対策をとったりするのが修行の基本や。もちろん結局は持って生まれた才能やセンス・能力……って全部似たようなもんやけど……はついて回るんや。要するにルーナーにとってはルーンを会得するのは命がけや言うことや。一つ高度なルーンを試す度に、どんどんふるい落とされていく。フェアリーはフェアリーで術式を会得するのに信じられへん程の努力と忍耐がいる。フェアリーの場合、それとは別にルーンが使えへんかわりにそれを補う為の呪法の会得も必須や。呪法は会得に期限が設けられる場合がほとんどやし、発動源力の問題もある。期限に間に合わへん奴は呪法に呑まれる……。そやから修行の途中で頭がおかしくなるヤツも多いな」
「呪法に呑まれるって？」
「あと、ふるい落とされるって……死ぬって事ですか？」
エルデの会話の少しの継ぎ目を見つけると、そこへねじ込むよう

にエルネスティーネとアトラックが続けざまに質問を投げた。アプリリアージェの制止が入る前に言ってしまえ、というアトラックの思惑なのだろうが、エルネスティーネにはそういう計算はない。ただ思ったことを投げかけてただけだった。

「ルーナーの場合は中位以上のルーンに失敗すると、まず無事ではすまへん。フェアリーも同様で呪法の術式を失敗したら場合によっては自分に危害が及ぶ。呪法の場合は発動現力の問題もあってかんたんなもんでもリバウンドは辛いな。ルーンの場合は回避方法がないこともないけど、呪法の失敗は下手したら死ぬか廃人や。まあ、賢者見習いにとって廃人は廃棄、すなわち死と同じ意味やけどな」

アトラックはごくりとつばを飲んだ。

「ホンマに高位の精霊履行、つまりルーンを取得できるのは数年に一人。たとえ一万人の賢者見習いがおってもそこまで行けるのは一人、よくて数人や。フェアリーの場合は少し多いんやけど、たとえ賢者になっても末席にしかなれへんという制限があるだけにいいのか悪いのかは何とも言えへん。末席賢者は要するにより上の席次にある賢者の部下扱いやしな。もともと能力以上の事がでけへんフェアリーはフェアリーの能力よりも「持ち呪法」の多彩さと強力さが求められるから、ある意味底がないんや。あと、フェアリーは剣技や体術が必須やから、むしろそっちの修行で死ぬヤツも多い。せやから最近はフェアリーで賢者を目指す人間はほとんどおらへんと思う。ルーナーについては師匠が決まると普通は師匠と同じグラムコールで固定やから、どれだけ多くの、そして高位のルーンを会得するか、で席次は決まる。勿論ルーナーの本来持ってる特性があるから、修行途中でエクセラー特化とかコンサーラ特化とか方向性が分かれている訳やけど、修行が進むとハードルはどんどん上がっていって、賢者の要求水準に達する頃にはみんな壁に突っ込んで自爆しているっていう寸法やな」

「賢者になれない人は……みんな？」

ネスティの沈んだ声にエルデはゆっくり首を左右に振った。
「もちろん全員が死ぬ訳やない。賢者ではなく違う職に就く手もあるからな。神官の多くは修行脱落者や。脱落にもいろいろあって、修行途中やと大けがが元で脱落とか、そもそも適正不足でふるいに掛けられるやつもけっこうおる。けど……俺が知ってる「師」の資格を持つ賢者の多くは、弟子に死ぬまで修行を続けさせてふるいにかけとるはずや……」
「ひどい……」
「部外者が『ひどい』なんて一言で片付けんといて欲しいな。それが普通の賢者のやり方なんや。下手に脱落して生きてもらっても賢者、つまり師の情報を外に漏らされる恐れがあるしな。同じ賢者になるか、しからずんば死を、や。極めて合理的な考えやろ？」
「合理的って」
「そやから！そやから賢者は誰一人とっても安ぅないんや。数えきれへん程の犠牲が自分の後ろに隠して生きてきてるんや。あの「二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）」も同じや。よう覚えとき」
エルデは強い調子でネスティにそう言ったが、ネスティは全くひるまなかった。
「あなたも！」
その場で立ち上がると、ネスティはエルデを睨むようにして続けた。
「あなたも、師となれば弟子を取るのでしょう？師になればそういう賢者になるのですか、エイル？」
エルデはその言葉を聞くとため息をついた。
「言いたいことはわかる。でも賢者は……そんな感情や感傷を超越してるんや」
「何のために？そもそもマーリンの教会は民衆の為にあるのではないのですか？」
エルデはネスティのまっすぐな目を見つめた。そして、その目が涙に溢れているのを見ると、目をそらした。

「教会は……そうやな。でも賢者は、違うねん……。ああ、この話はここまでや」
「どうしてです？普通の人の感傷や感情を持っていないなんて言ってるあなたは、あの時カレンを見捨てなかったではないですか？それよりエイル君がそんな感情をもっていない人間なんて嘘ですっ！」
「カレンの話はやめや。アレは俺の大失策や」
「大失策ですって？命を助けたのが大失策なのですか？」
「目覚めることなくただ生きているのが助けたことになるっちゅうんか？」
「それは……」
「俺が未熟やったから感情に流されて中途半端な事をしてもうたんや。おそらく……」
エルデはそこで言葉を切ってハロウィンとアプリリアージェの二人を見比べた。
「ここにおる大人達は俺がやったことは正解やないって思ってるはずや」
エルネスティーネは横にいるハロウィンの顔を見た。ハロウィンは、何も言わずに膝に置いてあったつばの広い帽子を被って目を伏せた。エルネスティーネは周りを見渡した。だが、大人達はエルネスティーネと視線を合わすまいと、皆目を伏せていた。つまり、それが答えだった。
「なぜです？カレンは死んだ方が良かったのですか？」
「良かったとは誰も思てへん。そやけど俺がやったことで誰も幸せにならへんのは確かや。ルドルフはこの先ずっと目の覚めへんカレンを見続けて生きて行かなあかんのやで？実の娘を見捨てるなんて親としてでけへんのやから」
【俺、何かまずいもん……踏んでもうたかな】
『いや……』

「けれど、生きていれば希望があります。目を覚ますことがないと決まったわけではないのでしょう?」

エルデは大きく首を振った。

「賢者とは何なのです?人を助ける存在ではないのですか?カレンを助けたことが失敗だというのが賢者の価値観なのですか?私には、わかりません」

「賢者についてここで議論してもしゃあないやろ?」

「なぜです?」

「ここで何を議論しようと、賢者は賢者。何も変わらへんのや。だいたい教会の価値観が宗教を禁じている国のお姫様に理解できるとは思われへん」

「ですが、決めつけないで話をしてみないと理解は始まらないのではないですか!」

「ほな尋ねるけど、人間に踏まれる虫けらの気持ちが人間にわかるとでも?」

「まさか――賢者は我々を虫けらだと言うのですか?」

エルネスティーネは憤然としてエルデを見据えた。その態度には旅姿の市井の少女とは全く違う凛とした気品と気高さが漂っていた。

エルデはエルネスティーネのその姿をまぶしそうに見やると小さく苦笑した。

彼はその場を一歩引き下がるとエルネスティーネの方を向いて片膝を付いて頭を垂れ、芝居気たっぷりに言った。

「いや、これは口が過ぎました、お姫様。少なくともマーリン正教会は人々の暮らしの味方です。ただ賢者の中にはそういう価値観で生きている者もいるのだ、程度でお納め下さい」

「あなたは!」

エルデのその態度を見たエルネスティーネの声は震えていた。その語気に気圧されてエルデは思わず顔を上げて声の主を見た。自分を見下ろすその緑色の瞳には涙が溢れていた。

「あなたもそういう価値観の賢者の一人なのですか?」

エルデはエルネスティーネの澄んだ瞳に釘付けになっていた。涙はみるみる溢れ、白い両の頬を伝って流れ落ちた。

エルネスティーネの表情を見たエルデは、内心しまったと思いつつもこの場を只丸く収めようという気にはなぜかならなかった。エルネスティーネに対しては嘘をつきたくないと思ったのだ。

「わかりません、姫。そうなのかも知れません。実のところ我々賢者は誰一人万民の為などと思って行動してはいないのですから」

エルネスティーネは首を振った。

誰も何も言わなかった。

一同はただこの二人のやりとりを見守るだけだった。

ファルケンハインは何も口を挟まず静かに微笑む自分の司令官の表情を読み取ろうとした。だが、もちろん何もわからなかった。

「エレメンタルは」

しばらく間があって、エルネスティーネが言葉を発した。涙声だった。

「いえ、私は人々の平和な暮らしの為に自らの使命を全うするだけです。――問いを変えます。賢者の使命とは一体何なのですか？」

「世界の法を守るもの。それがファランドールで認められている賢者の役割です」

「同じ事ではないのですか？」

エルデは首を横に振った。

『おい、ネスティ相手に何を意地になってるんだ？』

【意地やない】

『話がどんどんこじれてるじゃないか』

【賢者がこの手の話からいい加減に退くことはでけへん】

『それをツマラナイ意地っていうんじゃないのか』

【やかましい】

「同じ事ではありません。我ら賢者は世界の法を守る事だけが使命であり、それはいわゆる人々の平和な暮らしとは直接結びつくものではないのです。私の言っている意味がおわかりいただけますか？信じる神を持たない国の姫君？」

皮肉が混じったエルデの言葉に、しかしエルネスティーネは首を横に振った。

「わかりません。それから今はきっと茶化していらっしゃるのでしょうが私の事は姫と呼ばないでください。その言葉遣いもやめて下さい。私達は立場は違えどただのエイルとエルネスティーネ。今は旅の仲間のはず。それに……」

エルネスティーネはそこで声の調子を落とした。

「使命を全うしたとしても、私はもうシルフィードの王女に戻ることはないのですから」

「え？」

【どういう事や？】

『いや、こっちが聞きたい』

【フン】

エルデはため息をつくと立ち上がった。

「法って言うのは今も昔も、支配される側のもののやのうて、支配する側の武器やっちゅうことや、ネスティ。それは歴史が証明しとる。かくいうシルフィードの法律も例外やない」

そしてガラリと口調を変えてそう言うと、右手を顔の前に掲げてつぶやいた。

「ノルン！」

すると瞬時に指輪は三色に撚（よ）られた模様の儀仗に変わり、エルデの手にあった。

儀仗ノルンを水平に構えたエルデは、次に儀仗に向かいもう一度

呼びかけた。
「ウルド」
すると三色の木で撚（よ）られていた儀仗は、黒一色に変化した。
エルネスティーネをはじめとする一同は、エルデのその不思議な術を無言で見守っていた。
エルデは左手に乗せていた「宝鍵」を黒い儀仗ウルドの頭頂部に近づけて何かを小さく唱えた。すると儀仗の頭頂部から一条の光がエルデの掌の上に注いだ。いや、正確に記せばプリズム……「宝鍵」に向かって光線が伸びたのである。
儀仗からの光を浴びた「宝鍵」は自らが発光するかのように白く目映（まばゆ）い光を放った後、フッと消えて無くなった。
エルデは「戻れ（ルヴ）、ノルン」とつぶやき、儀仗を元の三色の指輪に戻し、一連の作業を終えた。
つまりエルデは「宝鍵」を儀仗の頭頂部に埋め込んだのだ。
一連の作業はそこにいるピクシィの少年がただの人ではないことを一同に否応なく印象付かせた。さらに言えばシルフィードの王女と言い争ったのは、少年ではなく賢者であるという自己顕示も兼ねていたと言えるだろう。超常的なことをこともなげに行ってみせる事はすなわち示威行為でもある。
「それに俺は今、教会の賢者の仕事より優先せなあかん事があるんや。国際法で認められてる賢者特権は勿論行使するけど、そやから言うてそれを正教会の名誉の為に積極的に使うことはあらへん。――ちゅうか、この話はこれまでにしようや。庵の話の続きもあるし」
エルデがそこまで言ったところで、おもむろにシェリルが立ち上がった。
「お茶を入れましょう。話は長くなりそうですし、少し冷えてきました。熱いお茶で暖まりましょう」
「まあ、嬉しい」
シェリルの言葉に即座に答えたのはアプリリアージェだった。彼

女のお茶好きはすでに旅の一行全員に認知されていた。彼女は特にシェリルの入れるサラマンダ風のお茶が大のお気に入りで、ル＝キリアのお茶番であるアトラックにしっかりと覚えるように命じていたくらいである。

「リリアお嬢様が自分で覚えればいいじゃないですか？」

「あら、アトルは知らないんですか？お茶は人に入れてもらった方が自分でいれるより何倍も美味しいんですよ」

「そんなわけないでしょ？」

「そんなわけありますよ。ずっと昔からファルンガではそう決まってるんです」

アトラックが不満そうに抗議したが、アプリリアージェは平然とそう答えて見せた。そんな決まり事をアトラックが知るよしもなかったが、もちろんそれ以上逆らうことはしなかった。もとより彼に断るつもりなどは全くなく、むしろうまいお茶の時だけお代わりをするテンリーゼンの為に請うてでも覚えるつもりだったのだ。

「絶対俺のお茶で副司令に五杯はおかわりさせてやりますよ」

後日、アトラックはファルケンハインにそう豪語したが、ファルケンハインは

「世界が亡びる前にその日が来るといいがな」

そう言ってアトラックのやる気に水を差した。

だが、今は話を元に戻そう。

「ルーナーの修行が想像を絶するものだとは聞いたことがある。だがそれで、卒業試験と「宝鍵」とにどういう関係が？」

一同の中で最初に口を開いたのはハロウィンだった。

彼はそういうと、興奮しているエルネスティーネの肩を後ろから優しく抱いて、ゆっくりと座らせた。

エルネスティーネはハッとしてうつむくと、素直にもとの場所に座り込んだ。エルデはそれを見て少し間を置くと小さくため息をつ

き、次にはっきりした口調でその場にいる全員に聞こえるように告げた。
「こうなったらついでやし、俺の試験課題を見といてもらおか」

『……いいのか？』
【ええやろ、もう。そのうちお前さんはあのおっちゃんらとは一緒に風呂に入らなアカン羽目になるんやしな。つーか、よう考えてみ？俺ら看病されてたんやで？】
『あ』
【たぶん、あのアルヴの呪医には間違いなく見られてるやろ。それと着替えとかの世話をしてくれてたシェリルも】
『そうだな。まあお前がいいならオレは何も言わないさ』

エルデはアプリリアージェの視線を探した。それはすぐに見つかり、視線が合うと目を伏せた。
アプリリアージェはエルデのその様子を見て、怪訝な表情をしたが、何も言わなかった。
エルデは焚き火を背にすると、着ていた服をゆっくりと脱ぎ、上半身、つまり背中を一同に晒した。
たき火の炎に照らされ、赤く揺れるようなエルデの背中をみて、エルネスティーネが小さく悲鳴を上げた。同時にファルケンハインとアトラックも思わずうなった。アプリリアージェとティアナは息を呑み、声を失っていた。
そこには見たことのない不規則な黒い縞が渦のように這い回っていた。絵や入れ墨ではない。文字通り「這い回って」いたのだ。模様がエルデの背中を動いていた。その模様は爛れ、一部は盛り上がり、炎の光の中で不気味に揺れていた。まるでいくつにも分かれた蛇の舌が皮膚の上をなめているかのようで、見るもおぞましい光景だった。それは誰が見てもとてつもなく禍々しいものだと一瞬で理解し、恐怖し、そして目をそらしたくなるような模様と言えた。

その模様を見て言葉を失ったアプリリアージェは、さっきのエルデの態度の意味を悟った。

【いやあ、同じ事やってもリリア姉さんのあの色っぽい背中と比べると、野郎の背中っちゅうのは全く価値が違う感じがするなぁ】

『悪かったな。色気のない背中で』

【スネなや。背中勝負では姉さんの価値は俺も認めるところやし】

『ふん』

「それは……「喰らい」の呪法だね」

ハロウィンが静かにつぶやいた。

エルデはハロウィンを見て苦笑しつつも、吐き出すように言った。

「さすがは謎の先生やな。師匠は俺にこの呪法をかけてこう言うたんや。『我が庵に解法あり。それを持参せよ。期限は三年』そしてこう続けた。『三年が経過すればお前の体のすべての感覚は消えてなくなる。そのまま腐って死にたくなければ、動ける間に這ってでも我が面前にたどり着け』ってな」

「なんてことを！」

エルデの言葉が終わらないうちに、エルネスティーネが再び立ち上がった。その声にエルデが振り向くと、そこには体を小刻みに震わせながら目に涙を一杯溜めるアルヴィンの少女の緑の視線があった。

エルデはその涙を見て顔を曇らせた。それと同時にエルネスティーネの目から涙が溢れ、頬を伝い、顎の先からしずくになって地に落ちていった。

エルネスティーネは今度は声を出し、体を震わせて泣いていた。

「師匠が……弟子にこんな恐ろしいことをするのですか？なぜです？」

それはエルデに対して発せられた問いだったのだろうか。それとも他の誰かに投げかけた問いだったのだろうか。

少なくともエルデはその問いに対する答えは用意できなかった。
エルデにとってはもうそれは日常的につきあっている普段着のような存在になりつつあったのだ。

『王女様が俺たちの為に泣いてくれてるのか……』
【フン。超お嬢様やからな。こんな恐ろしい物なんか見たことがないんやろ】
『オレ、フォウでも自分のために泣いてくれた人なんて居なかった気がする』
【自慢やないけど俺もないわ。つか、このお姫様、なんか予想外に熱血やな。もともと王宮に閉じこもっているような性格やなかったんとちゃうかな】
『うん。そうかもしれないな』

「師匠は弟子の命をなんだと思っていらっしゃるのです?!」
エルネスティーネは重ねて問うた。

【何とも思っちゃ居ないだろうさ、普通はな】
『……』

エルデをまっすぐに見つめるエルネスティーネの顔はもうくしゃくしゃだった。横にいたシェリルもつられて涙ぐんでいた。
「先生!」
エルネスティーネはエルデから今度はハロウィンに視線を移し、涙声で訴えた。
「先生のお力なら、あの程度の呪いを解くのは簡単なのでしょう?」
ルネが何かを答えようとしたのを、ハロウィンが優しく頭に手を置いて制した。
「ネスティ」
「何ですか?先生」

「世の中にはこういう理不尽な事が、それこそそこいら中に溢れているんだよ」

そう言うハロウィンはエルネスティーネと視線を合わせようとしなかった。そして揺れ動くたき火の炎の一点に焦点を合わせたような顔を動かさず、ルネの髪を撫でながら静かな口調できっぱりと告げた。

「この呪いはおそらく、術者である「真赭の頤」以外の人間が解くことは不可能だよ。呪法の原理はネスティだって知っているはずだ」

「しかし、先生」

エルネスティーネはそんなことはわかっていると言いたげに食いついた。

「呪法は、術者より高位の力を有するものがいれば解くことができると習いました。先生ならそれができるはずです」

それだけ言うと、エルネスティーネは堰を切ったように泣きじゃくり始めた。傍にいたシェリルがエルネスティーネをそっと抱きしめると、エルネスティーネはシェリルにすがりつくようにして嗚咽を漏らした。

エルデはエルネスティーネの姿を何も言わずにじっと見つめた。

そんなことは誰もがわかっていた。呪法を解く事は術者か、圧倒的に高位の呪法を使える術者でもない限り不可能な事なのだ。大賢者「真赭の頤」の用いた複雑で長時間にわたる拘束力を持つ呪法が低位な呪法であるわけがない。今まで聞いたこともないような呪法を解くほど圧倒的な力を持つものなど、もはや神以外にはいないだろう、と。

エルネスティーネ自身も理解はしていたはずである。ただ、彼女は悲しかったのだ。

この広いファランドールの野で、同じ夕日を眺めて語り合える友と出会った。だがその友は体の感覚を失いながら、理不尽な試練に立ち向かっているという。その事実を直視することが耐えられなか

ったのだ。
いや……ただ、エイルを助けたいという、素朴な思いだけがそこにあったのかも知れない。

「心配いらないよ、ネスティ」
それまでエルデに体を預けたままで沈黙を守っていたエイルが体を自分の支配下に置くと肩を震わせているエルネスティーネにそう声をかけた。
「こんな試験、天才エイル・エイミイにとっては簡単な事さ。間違いなくこの呪印は消えて無くなる運命にある」

【消えて無くなるのが俺らやないとええけどな】
『黙れ』

それを受けて、しばらく沈黙を守っていたアプリリアージェが目を伏せたままでつぶやいた。
「これでわかりました。味覚がないのも、嗅覚がないのも、左の耳が聞こえないのも、全部その「喰らい」の呪法のせいだったんですね……」
その言葉に、エルネスティーネはくしゃくしゃになった顔を上げてアプリリアージェの方を見た。
「耳が聞こえないのですか？」
エイルではなく、アプリリアージェがそれに答えた。
「ええ。左耳だけのようですけど」

『やっぱり、バレてたんだな』
【まあ、バレバレやしな】

「左耳が？」
エルネスティーネと同様、アトラックが意外そうにそう言うとア

プリリアージェとエルデを見比べた。
「エイル君は、普段から右側よりも左側をより意識しているようなので、もしやとは思っていました」
「ふん、さすがやね」
エイルから再び体を預かったエルデはそう言うと、ゆっくりした動作で元通りに服を着ながら続けた。
「この試験は、回答に時間がかかればかかるほど困難になっていくようになってんねん。徐々に一つずつ感覚が奪われていって、最後には心臓が止まるっちゅう寸法や」
「残りの時間は？」
アトラックが立ち上がった。
「試験の回答期限は三年って言ったよな。その三年目ってのはいつなんだ？」
エルデはいったん目を伏せると、すぐに顔を上げて西の空を遠く見やった。ランダールを出てからは天気が安定していて、その夜も雲一つ無い晴天だった。月はまだ昇っておらず、星の集団がまるで白い川のように夜空を横切っている。その、名も知らぬ銀河の中心のひときわ明るく光る星の少し下あたりに、その時短く光が流れた。
「「合わせ月」の日。それが爺さんの言う期限や。そして、俺はもう解法自体はほぼ手にしてる。後は爺さんに会うだけなんや」
「「合わせ月」だって？」
ハロウィンはそう言うと伺うようにアプリリアージェの方を見た。
「もう、あと一年もないじゃないか……」
「そうやな」
アトラックの方をみてエルデは小さく答えた。
「そう言うわけで、俺たちにはあんまり時間がないんや。教会がどうとか、他の賢者とかにかまってる場合やない」
『おい』

【あ……】
『お前、本当に人のこと言えないよな』
【やかましい】
『沈着冷静な天才ルーナーが聞いてあきれるぜ』

「俺……達？」
アプリリアージェはもちろんエルデの失策を聞き逃すことはなかった。だからこそ、それを聞き逃さなかったことをエルデに伝えるために、あえて繰り返して見せた。「俺たち」と言った後のエルデの小さな動揺ももちろん見逃してはいない。だが、その場でたたみかける事は避けた。
エルデとの関係は当初よりは良くなっている。少なくともエルデはいくつかの秘密を打ち明けてきた。そしてそれは嘘や偽りではないだろうと直感的に信じることができるものだった。
おそらくはエルネスティーネの涙がこじ開けたのであろうエルデの気持ちの扉に、自分から再び鍵をかけるような真似だけは避けたかった。
彼女は、アトラックがその件について何かを口にしかけるのを遮るように、間を置かずにエルデに向かって言葉を投げた。
「今はまだその時ではないと思いますが、いつか話してください。今夜はその話はこれくらいにして、そろそろ休みましょう。ネスティもみんなも、野宿が続いてそろそろ体ではなく気持ちの方が疲れてくる頃です。自覚症状が出る前に今夜は少し早く休んで、明日への英気を養いましょう」
それだけ言うと、視線をエルデからファルケンハインに移して、やや口調を固くして指示を行った。
「アロゲリク地方に入るのはいったん保留にして、情報収集のためにウーモスの町へ向かいましょう」
そしてこれは低い声で付け加えた。
「どうも嫌な予感がします」

「了解です。あそこには伝信が届いているかもしれません」

伝信とは平たく言えば手紙の事である。アプリリアージェ達のような隠密行動をとっている部隊は通常定められた任務を終了させて帰還するまで国と自分たちを結びつけるものは一切絶たれる。手紙などの通信などはもってのほかであろう。だが、今回のような長期にわたる不確かな任務については特例として国から通信による情報提供がなされる事もあったようである。判断を下す立場であるアプリリアージェ自身が部隊の一部として活動している状況ではなおさら何らかの通信の手段は確保しておくべきであろう。情報の重要性を誰よりよくわかっているアプリリアージェは、そういう仕組みを予め仕込んでいたのだと思われる。

「ウーモスには調達屋もいますね」
アトラックが少しうれしそうに言った。
「調達屋？」
シェリルがエルネスティーネを見てそう尋ねたが、彼女は首を振った。
「残念ながらそれは知りませんわ」
「歴史では習わなかったのね」
「幾何にも出てこなかったと思います」
「へえ」

「調達屋か」
「足りないものはありますか？」
調達屋という言葉に反応したエルデにアプリリアージェはにっこりと微笑んで見せた。
「ウーモスの調達屋はルーンに使う薬草類なんかも頼める規模なんか？」
エルデの問いにアトラックが答えた。

「ウーモスはちゃんとした調達屋組合があるからな。おそらくたいがいのものは揃うと思う」
「そっか。で、大所帯ご一行様はたんまり金は持ってるんやろな？」
「え？俺たちが払うのかよ？」
アトラックが不満げにアプリリアージェの方を見た。エルデはアプリリアージェが口を開く前に続けた。
「絶対に役に立つモノを作ったる。どっちにしろ俺の知っている本当の庵に行くんやろ？ほんなら必要品や」
アプリリアージェは首をかしげるような仕草でにっこりと微笑んだ。
「わかりました。喜んでお出ししますよ」
「え？だって何を作るかもわからないのに請け合っちゃうんですか？」
アトラックがすかさず抗議した。
「調達屋じゃないと揃わない程のものが必要なんでしょう？」
そう助け船を出したアプリリアージェにエルデはニヤリと笑ってうなずいた。
「さすがにわかってるやん、リリア姉さん」
「ただし……」
「ただし？」
「宿代は自分で払ってくださいね」
エルデは両手を開いて胸の前に持ち上げた。
「気前がいいのかケチなのかさっぱりわからん」
「私たちも持ち合わせがそれほどあるわけではありませんから。この先の事も考えて無駄は省かないといけません。でも……」
「でも？」
「安全がお金で買えるのであれば、出費は惜しみません」
エルデは肩を竦めて見せた。
「あ、一つだけ教えてくださいな」

寝所へ向かおうとしたエルデの背中に、アプリリアージェが声をかけた。
「庵の場所がわかっているのに、なぜそんなに時間がかかるのでしょう？」
エルデは振り向かずに答えた。
「呪法の期限の話か？」
「ええ」
アプリリアージェはうなずいた。
「庵はファランドール中に散らばってるんやで」
「なるほど……」
「それに庵に行けば簡単に中に入れるっちゅうような、そんな簡単な試験やと思ってもろても困る」
「いえ、もちろんそうは思っていません。だからこそ疑問なんです」
エルデは向き直ると続けた。
「師匠の庵には普通のヤツは入られへん。たとえ場所を教えられたとしても、そもそも普通の人間には庵を見つけることすらでけへんやろ。ファランドール中に散らばった庵、庵の入り口の特定、庵に入る方法の見定めと準備、庵の中の宝鍵を捜索する時間……凡庸な人間やったら、一カ所一年以上かかるやろな。いや、その前にそもそもあの罠だらけの庵で生き延びられるとは思えへんけどな」
「なるほど。あなたが二年で六ヶ所回ったという事が驚異だと言うことがその話を聞いてわかりました。それで、残りの庵は一つだけなんですね？」
アプリリアージェの問いに小さくうなずくと、エルデは背中を向けて自分の寝所へ足を向けた。

『で、いったい何を作るんだ？』
【飲んだら死ぬ薬】
『なんだって？』
【俺くらいの高位ルーナーやないとちょっと調合でけへん極めて特

殊な薬やで】
『それはいったい何という毒薬なんだ?』
【毒薬やない】
『飲んだら死ぬんなら毒薬だろ?』
【ただの毒薬作るのにそんなに特殊な材料がいるか?】
『それもそうだな。で、どうするんだよ、その……死ぬ薬?』
【この人達に飲んでもらうに決まってるやろ】
【人たちって!リリアさんだけじゃなくて、全員かよ?ネスティも、ルネもシェリルもか?』
【まあ、作戦内容にもよるやろけど念のために全員分は作るつもりや】
『お前正気かよ?もう、みんなは仲間なんだろ?なんでこの人達を殺す必要があるんだよ?』
【ああ!やかましい】
『おい!』
【まあ、黙って見とれって】
『死ぬ薬だろ?そんなもの黙ってられるかよ』
【頭の悪いヤツにはいくら説明してもわからへんって】
『なんだと、てめえ』
【あー、うざい】
『おい、エルデ!』

エルデが去り、見張り役のハロウィンを残し各自が寝所に戻る際、ティアナがアプリリアージェに声をかけた。もちろん、ハロウィンには聞こえないようにするのは忘れなかった。
「先ほど、嫌な予感とおっしゃいましたが?」
アプリリアージェは歩を止めて一瞬考えるようなそぶりを見せたが、ティアナの方は見ずに、
「ただの思い過ごしだといいと思っています」
それだけ告げると、その場を立ち去った。

残されたティアナはアプリリージェの背中を見送った後、ハロウィンに一睨みしてから自分の寝所へ向かった。
途中、たき火を背にして見上げた空には一面の星が輝いていた。

# 第二十六話　蒼穹の台

「ふーん。そいつは確かに自分が賢者だと言ったんだね？」
「はい」
片膝をついてそう答える旅装束の女アルヴを見下ろしながら、木製のベンチに腰掛けた小柄な少年は、あまり興味がなさそうに小さくため息をついた。
肘掛けについた手にあごを載せたまま、気のなさそうな声を出すその姿はまるで従者に対する主人と言った態度だったが、言葉に女アルヴを叱責するような怒気は含まれてはいなかった。
「で、名は？」
「名乗りませんでした」
「ふーん」
「ただ、現名（うつしな）はエイルと名乗っておりました。エイル・エイミイと」
言い終わらないうちに、ガタンと大きくベンチが鳴った。
その音に驚いて女アルヴ、ラウ・ラ＝レイが思わず顔を上げると、目の前にベンチから降りて立ち上がった金髪のアルヴィンの少年の姿があった。
「――エイミイだと？」
そう言ってラウをにらみ据える少年の瞳孔は大きく開かれていた。

アルヴィン族の少年が女吟遊詩人に訊ねた「名」とは、いわゆる「賢者の名前」である。賢者は賢者の資格を持つにいたった時に新たに名を授けられ、以降その名を本名とすると言われている。それまでの名は現名（うつしな）と呼び、賢者の名とは区別されていた。
彼女の名、ラウ・ラ＝レイとはすなわち現名であり、ランダール高地の街道でエイルがラウに呼びかけた「二藍の旋律」（ふたあい

のせんりつ）という呼び名こそが賢者としての正しい名であった。

「はい。『エイミイ』はその者が口にしていた族名に相違ありません」

目の前の少年の様子に戸惑いつつ、ラウはそう答えたが、少年の様子に心がざわめいていた。

「――ふうん」

「あの……」

ラウは遠慮がちに声をかけた

「なんだい、二藍」

「ご存じなのですか？エイル・エイミイという瞳髪黒色の少年を」

ラウの問いに、しかしアルヴィンの少年は首を振った。

「いや、全然知らないよ。ただ、その族名を名乗るとは、ちょっと面白そうなニセ賢者君だな」

「……」

「高位の水のフェアリーが居たというから楽しみにして来てみたんだけど、エレメンタルどころか、フェアリーでもなくてルーナーだったと聞いてがっかりしていたところに、そのルーナーが今度はあろうことかニセ賢者だって言うんだから、さすがの僕でも多少の興味を持つさ」

少年の答えを聞いてラウは思った。

今のは明らかにエイル・エイミイという名前に反応していたはずだ、と。それもエイルという名ではなく族名のエイミイに、である。ラウは聞いたこともない族名だったが、調べてみる必要はあるな、と感じていた。

取り繕いにもならない少年の言を指摘する立場に、ラウはいなかった。彼の否定は彼女にとってすなわち『この件についてはこれ以上追求するな』と暗に言われたようなものであり、疑問を晴らす為には自分で動くしかなかったのだ。

ラウは話題の矛先を変えた。
「新教の手の者でしょうか？」
「どうだろうね。それよりその偽賢者君に本物の賢者、しかも三席に名を連ねる君がしてやられたってわけだね？」
ラウは再び頭を垂れた。
顔が熱くなってくるのを感じる。目覚めた時の屈辱感がまたぞろこみ上げてきたのだ。ラウはどうにも自分の感情が他の賢者と比べて思い通りにならないことに対していらだちを感じていたが、屈辱感とともに今、またその未熟さをも味わっていた。
「深手は負わせたものの……いえ、言い訳でした。面目次第もありません」
「ねえ、二藍の旋律」
「はい」
「今回頼んでいた本来の仕事の方は順調なんだよね？」
「はい。ランダールで見つけた精霊陣は無効化しました。今回のものは存外と強固な陣でしたので、少し大きな炎の援護が必要になりました。それもあって陣を破壊するのに多少目立ってしまいましたが」
「宿屋を一軒焼いたという話か。そんなことはどうでもいいんだ。補償の方は「群青の矛」（ぐんじょうのほこ）がすでに現地の教会を通じて済ませている。その件についてはご苦労だったね」
「恐れ入ります」
「うん。自分の仕事を忘れていなければいいんだ。だいたいわかった。下がってお休み。君はまだ本調子ではないそうじゃないか」
「いえ、もう大丈夫です。我が師である猊下の術のおかげで視力もほとんど元に戻っております」
「しかし面白い呪法だったね。単純な複合呪法なんだけど、実に合理的でかつ高度な術式だし、その運用方法自体が繊細かつ大胆。おそらく即興で思いついたものだろうけど、ちょっと普通じゃできな

いモノだよ。興味深いのは、攻撃力を意図的に削いでいる事と、本来見込まれる効果の五割も発動していなかった事だね」

ラウが師と呼ぶアルヴィンの少年はそう言うと、じっと目の前の大柄な弟子の緑色の目を見つめた。

師のその態度は、自分に何かを問いかけているのだと、ラウは気づいていた。

――（呪法のその意味を考えろ、という事か？！）

ラウは強く唇を噛んだ。その唇に血が滲むのがアルヴィンの少年の目にも映った。

「私は、敵に情けをかけられたのでしょうか？」

少し間を置くとラウは絞り出すようにそう口を開いた。

その様子を見て、小柄な師はラウのそばに寄ると、その頭にそっと手を置いた。

「自分を貶（おとし）めるような物言いはしない方がいいよ。冷静にその当時の事を思い出してごらん。もともと相手は君を殺そうなんていう気はなかったんじゃないのかい？」

「そうかもしれません」

「それに偽賢者君は君の名前を知っていたそうじゃないか」

「はい。正直申し上げて、非常に驚きました」

「あれほど難易度の高い複合呪法を即興で構築できる術者だよ。その気になれば君を殺す呪法なんていくらでも選べたはずだろうね」

「面目次第もありません」

「そんな呪法を使える人間だ。君が傀儡にした娘がもう助からないことくらい知っていたろうに」

「ええ、おそらく」

「とにかくその子は君を殺したくなかった。だから手加減を加えた。とはいえすぐ君に追いかけられるのは面倒だから時間を稼ぎたい。そんな意図が垣間見える術だね。とても筋道の通った呪法と用法だ。感心するよ」

「やはり、能力は次席、いや上席クラスの者だということでしょう

か？」
「それはわからないけど、これだけは言える。そんな感情が働いて手加減をしたのだとしたら、その子は正教会の賢者としては甘すぎるね」
「確かに」
他人の命を思いやる賢者などあまりいない。目的が最優先なのだ。
ラウとて「二藍の旋律」を継いでからはより一層そのことを肝に銘じていた。
だからこそ今回も最も効果的だと判断して町の娘であるカレナドリィ・ノイエに術を使ったのだ。そこには目的に対する有効な手段が存在するだけだった。いや、そのはずだったのだ。
「だからその点についてだけは偽物の匂いがするね。さもなくば……」
「さもなくば？」
「いや。やっぱり新教の人間じゃないだろうね」
「そうですね。私も今ではそう思います」
「うん。新教会で「僧正」と呼ばれている上級術者連中はマーリン教の賢者が慈悲深い存在に思えるほど冷酷だと聞くからね。マーリン正教会の賢者に対しては特に、ね」

「僧正」と呼ばれる新教の高位ルーナーの噂はラウも何度か耳にしていた。
見せしめのためにマーリン教では禁忌とされている冷酷で残忍な呪法をも顔色一つ変えず平気で使う連中だということだ。
「彼がその「僧正」でなくてよかった。もしそうなら僕は一人きりの大事な弟子をとっくに失っていたことだろうね」
「師匠」
「まあ、ともかく君の言う偽賢者の件は面白そうだから僕が調査するよ。どうせ水のフェアリーとやらを調べるつもりで来たんだ。手ぶらで帰るのもつまらないしね。それに君がこの後いろいろ考え悩

むよりも僕が直接遭えば話が早いだろう？」
「……」
「だから君はこの件はもう忘れるんだ」
少年の言葉に「二藍の旋律」ラウ・ラ＝レイは息をのんだ。
それはきわめて異例な事だったのだ。
―（ひょっとしたら私はとんでもない事をしでかしたのではないのか）

「三聖たる「蒼穹の台（そうきゅうのうてな）」自らがお手を下さずとも」
ラウの震える声で「蒼穹の台」と呼ばれたアルヴィンの少年は、穏やかに微笑みながら首を横に振り、同じような静かな声で答えた。
だが、その内容は穏やかな表情とは裏腹にラウの心にグサリと突き刺さるものであった。
「だって君では歯がたたなかったんだろう？で、あれば師匠である僕が尻ぬぐいをするのは常識じゃないか」
「ですが」
「覚えておきなさい。このことが賢者会の連中に知れたらまた君は面倒な事になるよ。「真赭の頤」（まそほのおとがい）の事件後の彼らの狼狽（うろた）えぶりを忘れたわけじゃないだろう？」
そう言われて、ラウはハッとして口をつぐんだ。
「三聖」と呼ばれたアルヴィンは穏やかな表情のまま、弟子に告げた。
「なあに、それに手を下すなんて決めつけてはいけないよ。まだ偽物と決まったわけではないんだ」
「あいつが本物だとおっしゃるのですか？」
「本人が本物だと言っていたのだろう？だったら端（はな）から嘘つき扱いはちょっとひどいんじゃないかな？それに、そもそもエイミイを名乗るなんて面白すぎるじゃないか」
「蒼穹の台」は独り言のようにつぶやいた。すくなくとも後半は

弟子である「二藍の旋律」に対しての言葉ではないようだった。その証拠に「蒼穹の台」は「二藍の旋律」に向き直ると改めて口を開いた。

「僕は、君の言うその『おそれを知らぬ偽賢者』の現名に少しばかり興味が沸いたので顔を見に行ってくるだけさ。君を責めているわけでもないし、君の言っていることを信じていないわけでもない。ただ、自分で確かめたいという欲求があるだけだよ」

「エ、エイミイという族名は一体どういう？」

ラウはこれ以上詮索をしてはならないと感じながらも、自らの疑問を口にせずにはいられなかった。

「そうだね」

叱責をされるものと思っていたラウはしかし、穏やかな「蒼穹の台」の声にやや違和感を覚えた。

「古い知り合いにその現名を持っている者がいた。それだけさ」

「古い、お知り合いですか」

「うん。とても古い知り合いだ。とても、ね」

「蒼穹の台」はそう言うともう一度ラウの頭を優しくポンと叩いた。そしてそのまま身を翻してベンチの横で中に浮いている大理石で作られたように見える青白い儀仗を手にした。

話はそれで終わりだった。

三聖「蒼穹の台」は儀仗を手にラウの方に向かって、しかしラウの事は見向きもせずに歩き出した。

ラウは近づく小柄な師の為に道を空け、傍らで片膝をついて頭を深く下げた。

青白い儀仗を手にしたアルヴィンの少年はラウの前にくると立ち止まり、顔ではなく声だけをラウに向けた。

「君は次の予定地に向かいなさい。賢者としての本来の仕事と僕の頼み事をうまくやっておくれ」

「は。我が師、「蒼穹の台」の仰せの通りに」

「それから、あまり無茶はいけないよ。君は大切な僕の弟子である

と同時に「真赭の頤」から貰い受けた我が子でもあるんだからね」
「身に余るお言葉」
「それから、「群青の矛」」
アルヴィンはラウの左側に向かって声をかけた。そこにはラウとは違いかなり離れて先ほどから片膝をついてかしこまっている若い女、いやまだ少女と言っていいアルヴがいた。
「はっ」
「この先も「二藍の旋律」の事を頼むよ。今回は本当にご苦労だった」
「御意。もとより「二藍の旋律」さまは我が主でございます故」
「うん、そうだね。それでいい」
「蒼穹の台」は小さくうなずくと、ラウと群青の矛の二人を残してゆっくりと歩き去った。そして数秒後にはラウの五感からそのアルヴィンの少年の気配は綺麗さっぱり消え去っていた。
空間跳躍ができる高級賢者ならではの術であろう。三聖と呼ばれる賢者にはどの賢者も太刀打ちできない力があると言うが、空間跳躍術はその中でも有名な術式の一つだった。

ラウにとって師匠とはしばらくぶりの謁見だった。
「蒼穹の台」……後世の歴史家によってイオス・オシュティーフェという現名が確認されているこの人物もまた謎だらけと言っていい。
現代において彼の姿形の片鱗を知る術は王立博物館のマーリン正教会館に所蔵されているミリア・ペトルウシュカの手による連作「三聖」の一つである「空の王」というタイトルの一枚の絵だけであろう。
そこには紺色の長いローブのような服を纏った短い金色の髪をしたアルヴィンの少年が青白い石で出来た儀仗を手にして雲間で虚空を仰ぐ斜め後ろ姿が描かれている。空を仰ぐ表情はすなわち、見る者にはわからない。

その斜め下から仰ぎ見るような大胆な構図が当時としては画期的なものなのは間違いないが、絵の寸法が小さく、あまり注目はされなかった。

我々にとって心細いことはそもそも「三聖」という連作がミリアの設定したものではなく、後生の美術研究家の某が三枚の絵を指して「連作　三聖」と分類しただけであり、ミリアのその絵が必ずしもイオス・オシュティーフェであるとは限らないことである。彼がアルヴィンであったという根拠は口伝とミリアの絵だけであって、姿形はもちろんのこと、本当の種族すらもはや誰にもわからない。

ミリアの件の絵の裏側にはミリア自筆のタイトルはなく、イオスの絵であるということが口頭で伝えられているだけなのである。

もとより気まぐれな画家であるミリアの場合、タイトルは書いたり書かなかったり、自らの署名すら入っていないものの方が多い。ただ、タイトルのない絵には必ず口伝で題名がついているのが常で、そこから「空の王」がこの絵の題名だとする説自体には問題はない。問題は「空の王」が「蒼穹の台」を指し示すものなのかどうかであるが、時代背景を考えても空の王と呼ばれる人物は「蒼穹の台」以外にありえないとする説に根拠のある反論を示すものは現れていないのもまた事実なのである。

我々は素直に「空の王」と題されたその物悲しさを感じる後ろ姿で虚空に顔を向ける金髪のアルヴィンの少年こそ「蒼穹の台」だと想像しておこう。

その、空の王とミリアに言わしめた三聖の一人「蒼穹の台」ことイオス・オシュティーフェが「二藍の旋律」ラウ・ラ＝レイの師であったことは正教会の記録により間違いないようである。だがマーリン正教会における、いわゆる標準的な師弟の関係というよりはむしろオシュティーフェ派の賢者の一人にラウ・ラ＝レイの名が上がっているという関係と考えた方がよさそうであった。

なぜなら修業時代のラウの師は「真赭の頤」であることもまた信頼できる文献に既述されており、多くの口伝でもそう伝えられている。つまりラウは賢者になる際に便宜上の後見として師弟関係を結び、賢者としての名を頂いた後もイオスにそのまま付き、いわゆる大賢者付きとして彼にごく近いところで行動をしていたと見るべきであろう。もちろん原因は本来の師である「真赭の頤」事件による彼の権威の失墜にあることは間違いがない。

イオスの弟子であるラウはしかし、その日の師の態度には違和感を覚えていた。

本来彼女の新しい師は市井の一個人などに関心を寄せるような人物ではなかった。たとえそれが賢者を名乗るなどという国際法上でさえ死罪、ましてやマーリン正教会にとってきわめて許し難い人物であったとしても、である。

普段であればそういう些末な事象には眉一つ動かさず、ラウにはおよそ真意がわからない指令の遂行状況だけが頭にあるすべてのような態度を示すだけなのだ。

だが今回は興味を示すどころか「エイミイ」という名を告げられるとその普段まず変わることのない端正ながら無表情な顔に驚愕の表情まで浮かべ、あげくに「会う」とまで言ってのけたのだ。

ラウは今し方の不思議な会見を反芻してみた。

そう、賢者を名乗る人物が居たことについては無表情なやりとりだったが、ラウがエイル・エイミイという現名を口にすると顔色が変わったのだ。

問題は名前だった。

エイルは「二藍の旋律」のこともよく知っていた。彼女のかつての師である「真赭の頤」の事も知っているという。さらにはその現名、それもその族名が三聖である「蒼穹の台」をも起立させた。

――（一体何者なのだ、エイル・エイミイとは？）

ラウはこのまま素直に手を引くつもりにはなれなかった。
「「群青の矛」いや、ファーン」
彼女は立ち上がると控えているアルヴの少女にそう声をかけた。
「はい」
控えたままの姿勢でファーンと呼ばれた末席賢者は応えた。
「師に叱られたから言うのではないが、今回はお前の助言に従うべきだった。いらぬ世話をかけてしまったな」
「いえ。「二藍の旋律」」
「師はああおっしゃったが、私はエイル・エイミイという未知の賢者をもう少し追ってみたいと思う。どうする？お前は三聖にその事を報告するか？」
「私はもう「蒼穹の台」さまの部下ではありません、「二藍の旋律」」
「戯れ言を」
「私は末席ではございますが賢者を名乗るもの。我が「賢者の徴」にかけて誓いに偽りはございません」
ラウはファーンの回答に小さなため息をつくと帽子を被った。
「フン。では行くとしよう」
「はい。どちらに？」
「エイル・エイミイの向かう場所だ。もちろん師の指令もこなす」
「心得ました。「二藍の旋律」」
「ファーン」
「はい」
「現世で使う名は現名でいい。私はお前のことをファーンと呼ぶ。だからお前も市井にあっては賢者の名を口にすることなく私のことは現名で呼べ」
「心得ました。ラウさま」
「その『さま』もこっちの肩が凝るな」

ラウは腕を組んで少し考えた。
それを見て、ファーンが遠慮がちに提案した。
「実はかねてから考えていた呼び方があるのですが」
「何？言ってみなさい」
「はい。『ラウっち』はいかがでしょう？」
ラウは固まった。
「冗談……だな？」
「いえ、冗談ではありません。『ラウっち』」
ラウは肩を落とした。彼女としてもファーンが冗談を言うような相手ではないのはわかっていたつもりだったが、冗談であってくれた方がこの場合はまだ救いがあるように思った。ファーンの事を自分と同じ常識を共有できる相手だと勝手に思い込んでいた認識の甘さを、ラウは恥じることになった。そして、彼女はその時初めて自分には相手を見くびる傾向があるのではないかという思いに至った。

エイル・エイミイの件もそうだった。相手が偽物であると決めつけた時点で賢者の自分が圧倒的に優位にあると思い込んでいたのだ。

「わかった。やはり私が決めよう。これからは『ラウさん』と呼んでくれ」
「わかりました。ラウさん」
ファーンのその答えを聞くと、ラウはほっとしたように小さなため息を一つついた。そして忠実な部下であるファーンをあえて顧みることもせずに出口に向かった。

ラウの居た場所。そこは古びた教会だった
「行くぞ。ファーン」
「はい、ラウさん」
いつもより明らかにおだやかな調子の声で促されたファーンは、つられるように思わず明るい口調でそう返事をした。

末席賢者、「群青の矛」ことファーン・カンフリーエは音もなくすっと立ち上がると、すぐに大股で歩くラウの背中を追った。

# 第二十七話　ウーモス

ウーモスはアロゲリク山脈の最高峰、休火山であるアロゲリク山の北西の麓にあり、二つの河が合流する砂州地帯に発生した町で、サラマンダ北部の山間地帯ではもっとも人口が多い都市である。

良質の温泉が沸く事が知られており、その効用により療養地としても賑わっていた。

山間の谷あいに位置するランダールよりも地形的に開かれ、かつ平地面積が多いために各方面から人々が集い、大きな集落を形成していった。もっとも城塞の町であるランダールと違って、ウーモスは常に動乱に影響される場所でもあった。

サラマンダの北西では数少ない軍隊の駐屯地が在り、陸路からサラマンダ中央部に向かう場合の玄関口と言えた。

ウンディーネからの滞在客は本来のウーモスの町の人口よりも多いとさえ言われている。その多くは観光客で、勿論ウーモスの温泉が目当てである。つまりウーモスとはウンディーネからの交通の便が比較的良い湯治場なのである。

ウンディーネにはあまり温泉場が存在しないこともあり、ウーモスは自国サラマンダよりもウンディーネに人気のある町でもあった。

当時から見て約八百年程前に最後の噴火を記録し、今もなお休火山と認定されているとはいえ、アロゲリクは火山である。ウーモスはその恵みを大いに受け、源泉は無数と言われるほど多く、その湯量も豊富、しかも効能が違う源泉が多々あり、訪れる客にとっては楽しみが多い温泉地と言えた。

二人のエレメンタルを擁する旅の一行は夜のうちにそのウーモスに入っていた。

その翌朝、それも辺りがようやく明るくなっただけで、まだ夜が明ける前の事である。

明るくはなったものの、牛乳色の朝靄で視界がまだ確保できない時間に、ウーモスの温泉街の本通りから少し歩いたところにある人の手入れが行き届いていない林の中ほどで、黒い髪の少年が一本の楡の大木の根元に静かに正座していた。

林には道と呼べるものがなかった。つまりはおよそ人が訪れることのない場所である。もちろんその少年……エイル・エイミイにはこの土地の知識があるわけではない。おそらく人目につきにくい適当な場所を探してそこにたどり着いたのであろう。

その時その場所に居たのは、エイルだけではなかった。地面に座るエイルの遙か上方……その黒髪の少年を見下ろせる枝に同じような黒い髪をしたダーク・アルヴの少女が腰をかけていた。

それは風のフェアリー、アプリリアージェ・ユグセルの姿だった。ただでさえ身が軽いダーク・アルヴである。加えて風のフェアリーでもある彼女にとって、木の枝に上ることなどは何でもないことだった。

アプリリアージェは宿を出るエイルに気づくと、敢えて気配を消さずに後を追ったのだ。エイルはアプリリアージェの存在に気がついているだろうと思われた。だがアプリリアージェはそれでよかった。隠れて覗く事はアプリリアージェの本意ではない。ただ、見たかっただけなのだ。

彼女はいったい何を見たかったのか？

それはエイルの剣技の練習だった。

旅に出てから毎朝、エイルは早朝一人で一行の野営地から離れると、しばらくの間帰ってこなかった。当初はアプリリアージェも用を足しに行ったのであろう程度に考えていたのだが、その事について水を向けると意外にも本人があっさりと「剣の稽古」と答えたのだ。

「日課のようなもんだよ。これをやらないと一日がはじまった気が

しなくて」
「それは是非一度見学させてもらいたいですね」
「別に見て面白いものじゃないよ。まあ、見たいならお好きに。ただし」
「ただし？」
「邪魔はしないで。あとあまり近づくと危ないから。それだけは忠告しておく」
「私でも？」
「リリアさんの体にあれ以上傷を付けたくない」
「エイル君が優しい男の子だということは、よくわかりました」
「え？」
「忠告には感謝します、という意味です」
「ああ、そう」
そんなやりとりがあった上での今朝であった。

霧の為視界は限られていたが、その有視界ぎりぎりの高さにある太めの枝の根本に腰を下ろして、アプリリアージェはエイルの姿をじっと見つめていた。
エイルは正座をして背筋を伸ばして座っていた。
その膝の前、つまり地面の上には儀仗が置かれていた。
だが、エイルはその儀仗を見ているわけではない。目は閉じられているようだった。
そして……。
そして、先ほどからずっとそのままだった。

―（これが剣技の練習だというの？）
剣の稽古と言うくらいである。大きな気合いと共に様々な型を繰り返し繰り返し反芻して自ら剣の型の完成と調整を行う一般的なものを想像していたものだから、エイルのその姿はアプリリアージェにとっては奇妙なものだったのだ。

もしかしたら、自分が見ている為に普段の練習を見せたくないのかもしれない、という思いが浮かんできた。だが、エイルは見てもかまわないと言ったはずで、アプリリアージェとしてはその言葉に嘘はないと感じていた。だからこそ安心して自分の気配を気付かせて後を追ったのだ。

十五分ほどそのままの状態が続いたあたりで、アプリリアージェはあきらめの気持ちに支配されてきた。

――やはり手の内は見せたくないのかもしれない。

そう思って小さくため息をついた時だった。エイルに変化があった。

今まで微動だにしなかったエイルがそっと目の前の儀仗に手を伸ばした。それを見たアプリリアージェは思わず緊張で体を硬くした。だが、儀仗を手に取ったエイルの動作はあまりに何の変哲もないものだった。エイルは儀仗を右手に持ち正座を崩して無造作に立ち上がると、今度はゆっくりと両手でその儀仗を大上段に構え直した。そして彼はそのまま溜めも何もなく右上から左下に向かって袈裟懸けに空を切って見せた。

アプリリアージェの目には剣速が特別に速くも、特殊な気合いを入れたようにも見えなかった。無造作に振り上げた儀仗を、ただなんとなく空振りしただけにしか見えない動作だったのだ。

樹上のアプリリアージェがエイルの動作に困惑しているのを知ってか知らずか、当のエイルは袈裟懸けに切り結んだその姿勢のましばらくじっとして動かないでいた。

一分ほどその姿勢を保持したあと、ようやくエイルは構えを解いた。儀仗を右手にもち、誰もいない林に向かって一礼した。

一連のエイルの仕草をいったいどう判断していいものか、アプリリアージェにはわからなかった。

見られていると思って訳のわからない型をしてからかって見せた

のか、それとも特殊な剣技を持つエイル独特の型なのか。
どちらにしろアプリリアージェは見たままを受け入れる事にした。
だが、彼女の答えはエイルが立ち去ったその場所にあった。

エイルが去った後、地上に下りたったアプリリアージェは、地面を見つめて息を呑んだ。
「なんてことなの」
思わず声が口を突いて出た。
上から眺めているだけでは見えなかったものがそこにはあった。
答えは一枚の枯れ葉だった。
エイルはあの動作で楡の木から落ちてくる枯れ葉を切っていたのだ。枯葉はよく研いだ繊細な包丁……いや、剃刀のようなもので切断されたかのように、中心線でまっぷたつに分かれていた。それを見たアプリリアージェの背中にゾクッとした悪寒が走った。
そう。エイルはその葉を儀仗……つまり木の棒を使ってその状態にしたということなのだ。しかもただ無造作に振り下ろしただけで。決して剣の速さで切ったものではない。しかも……おそらく回転しながら落ちてくる枯葉の中心に走る葉脈を狙ってである。
「本当に不思議な子」
またもや思ったことが言葉になって出た。
アプリリアージェは足下にあるその二つの枯葉を拾い上げると、エイルが立ち去った方角を見やった。

アプリリアージェがその日に限ってエイルの稽古を見ることにしたのにはそれなりの訳がある。それはその日の午後、一行にとって重要な意味を持つある催しが行われる事になっていたからだ。それに先立ち、もし許されるのならばアプリリアージェにとって未知数といえるエイルの剣の実力の一部でも把握できればと考えたのである。

その催しを行うことになったのは昨日の事だった。
「ウーモスと言えば温泉です。久しぶりですねえ」
「温泉以前に、お風呂に入ること自体が一週間ぶりですわ」
ウーモス入りを前にはしゃぐアトラック・スリーズにエルネスティーネが微妙な皮肉を返した。王女であるエルネスティーネにとって、一週間も風呂に入らず、さりとて充分な着替えなどあるはずもなく、肌着を取り替えることすら出来ずに何日も過ごすなどと言うことは初めての経験であった。ただ、そのこと自体に不満を漏らすようなエルネスティーネではなかった。もとより彼女にとってそんなことは覚悟の上……と言うよりもむしろ取るに足らない些末な事と言えた。
エルネスティーネにしてみれば、軽口を叩くのが好きなアトラックを相手に軽く言葉の運動をしてみせたようなものなのだが、彼女のその言葉を耳にしてしまったティアナ・ミュンヒハウゼンにとってはこたえる一言であった。
一国の……それもファランドールでも大国であるシルフィードの王女であるエルネスティーネがなぜそんなことまで我慢せねばならないのかという思いを消すことができずにいたからだ。
エッダの王宮では「変わり身」であるエルネスティーネそっくりの少女、イース・バックハウスが王女として今も暮らしている。混乱を防ぐ為、対外的な意味、いろいろ理由はあるが、そもそもエレメンタルが動くというようなことが知れては一大事だからだ。
「変わり身」であるエルネスティーネ王女は、普通に人々の前に姿を露出して周りに不信感を抱かせないように振る舞っているだろう。その「変わり身」である王女が王宮でぬくぬくと暮らしていて、本物のエルネスティーネは質素な旅装束を身にまとい、何日も風呂にも入れぬような不自由で過酷な野宿を強いられている事がティアナには理不尽に思うことが多かった。もちろん、「変わり身」になっている少女がぬくぬくと暮らしているなどとは言葉の綾であってティアナ自身が本気で思っているわけではない。「変わり身」である

イースには他人には告げようのないエルネスティーネとはまた別の過酷な試練があることは想像に難くないのだが、心の中にある贔屓という利己主義ばかりはティアナにもどうしようもない。それをわかっているからこそティアナは自己嫌悪をも受け入れねばならず、どちらにしろいい気分ではいられなかったのだ。

そんなティアナの事を一番理解していたのもまたエルネスティーネだった。

彼女は自分を思い気遣ってくれるティアナの気分をもっと軽くしようといろいろと考えていた。だからであろう。旅に出てからのエルネスティーネは、ティアナに長い時間沈黙時間を与えなかった。

「ティアナも温泉につかって、その眉間の皺を伸ばさなくちゃね」

自分の一言に反応したに違いないティアナに、エルネスティーネはそうやって明るく声をかけた。

「み、眉間に皺などありません」

「ええー？？」

エルネスティーネに呼応して、いたずらっぽくルネ・ルーが下からティアナの顔をのぞき込んだ。それにびっくりしたティアナは思わず歩を止めた。

「難しい顔したらできる皺がここに三本あルでー！」

そう言うとわざとしかめっ面をして眉間に皺を作って指さして見せた。

「うん、ルネ。うまいぞ。ティアナにそっくりだ。顔はともかく眉間の皺が」

こういう場合、よせばいいのに必ずアトラックが一枚噛んでくる事になっていた。本来陽気で、こういう軽い会話が大好きなアトラックにしてみれば新しくはじまったこの旅の一行はすばらしい仲間に巡り会えたようなものであった。

なにしろ、アトラックにとってはル＝キリアの四人だけの旅だと寂しいことこの上ない。会話というものが存在しないテンリーゼン・

クラルヴァインに、寡黙でアトラックの軽口をことごとく無視するファルケンハイン・レインという手強い取り合わせなのである。唯一話相手になりそうなのはアプリリアージェくらいだが、アトラックはさすがに司令であるアプリリアージェには畏怖を持っていたので、少なくとも四六時中軽口を叩き合う相手にはなり得なかった。

従って、賑やかな一行との合流はアトラック持ち前の陽気さを炸裂させた訳である。

「なんだと！」

「おー、こわ」

ティアナは誰が見ても怒っているとしか思えない程目をつり上げてアトラックの方を睨んだ。

「ティアナ！」

エルネスティーネがそんなティアナに再び声をかけた。

「ダメですよ。ほら、言うではありませんか。『笑う顔には皺はなし』って」

「は？」

ティアナは最近どんどん暴走しているエルネスティーネの諺の本来の形が、もうあまりわからなくなってきていた。

「ククク……」

そのやりとりを見て、最後尾を歩いていた呪医、ハロウィン・リューヴアークが堪えかねたように体を小さく震わせて声を漏らした。

「そこ、どさくさに紛れて何を笑っている！」

『やれやれ。またやってる』

【飽きもせんとようやるわ。まあお互いの親睦の為にはええんちゃうかな】

『親睦？あれが？』

【仲がええほど喧嘩するっちゅうやろ？】

『うーん、そうかなあ……』
【まあ、どちらにせよネスティが創作諺の天才なんは確かや。元ネタ当て勝負とかやると盛り上がるかもしれんな】
『本人が司会をしない事が前提だな、それ』

背後で繰り広げられるティアナとアトラック、そしてエルネスティーネとルネやハロウィンまで加えたいつものやりとりを聞きながら、エイルは心の中でため息をついた。
そのままチラリと横合いをると、何を考えているのやらわからないアプリリアージェがいつもの笑顔を浮かべて淡々と歩いていた。もちろんアプリリアージェがこの手のじゃれ合いを止める事は一切無い。どうかすると彼女はもともとそんな会話すら聞こえていないのではないかと思えることがあった。
姿勢のいい姿で前を向いて歩くアプリリアージェの瞳には、朝靄が残った森の上に広がる青い空がどこまでも広がっている。それはまるで彼女には目的地などどこにもないようなそんな茫洋とした寂しささえ感じさせる表情だった。
アプリリアージェはいつも笑っているにも関わらず。

「そうだわ」
脈絡なくアプリリアージェはそう言うと立ち止まった。
アプリリアージェの顔を見つめていたエイルはもちろんのこと、一行はこの唐突な隊長の行動に驚いて歩を止めた。
「何ですか？」
アトラックが興味津々と言った表情でアプリリアージェに声をかけた。
「ちょうどいい機会ですから、一度みんなで手合わせをしましょう」
アプリリアージェはこともなげにそう言った。
「え？」
「手合わせ？」

「みんなって？」
　一行は顔を見合わせながら、口々にアプリリアージェに質問を浴びせた。
「お互いに初めて会う人間の戦闘能力を把握しておくのはとても有意義な事ですし、なにより部隊を預かる私自身が助かります。私はティアナの剣士としての腕前を知りませんし、できれば仲間であるエイル君の剣の実力も知っておきたいところです」
　そう言うと横にいるエイルには視線を移さずに、後ろにいたティアナの方へ振り返った。
「あなたも『噂』の特殊部隊の人間の実力がどの程度のものなのかを知っておきたいと思っているのではないですか？」

【おい、変な方向に話が進んでるで】
『ティアナさんはダシで、オレの剣の実力が見たいっていうのが本当のところか？』
【まあ、どう考えてもそうやろな。このオバはん、好奇心を抑えきれへんタイプみたいやし。まあ、無視してほっといたらええわ】
『いや』
【ん？まさかお前さん】
『オレ自身に、リリア姉さんやリーゼの実力を自分自身の剣で立ち会って知っておきたい興味がある』
【ええんか？優劣ついてまうで】
『忘れたのか？オレはフォウのサムライだぜ？強い相手と戦うのは望むところさ』
【あちゃ。悪い虫が】
『それに、戦術を考える立場ならやはり当然戦力把握はしておきたいというのは嘘じゃないだろう？味方が少しでも有利になる材料になるなら協力は惜しまないさ。もっとも』
【もっとも？】
『オレが実力を全開できる相手ならいいんだけど』

【ふーん、自信満々やな。ま、つきあい長いし、お前さんが弱いとは思ってへんけどな】
『心配するな』
【まあ、剣の腕前くらいならええか。リリア姉さんも「好奇心が猫をも殺す」っちゅうことわざを思い出してくれたらええねんけど】
『どういう意味だ？』
【あんまりこっちを詮索せんほうがええで、って事や】
『いや、どう考えても詮索したいだろ、普通』
【はいはい】

エイルと違い、ティアナはアプリリアージェの突然の申し出に軽くうろたえていた。
もちろん、アプリリアージェが言うように、自分の実力がこの特殊部隊と比べていったいどうなのかという興味はある。いや、自分自身の強さに少なからず自信があるからこそ、様々な噂で飾られたル＝キリアと剣を交える事は願ってもない機会だった。
だが、ここへ来てそれを突然言い出したアプリリアージェの真意がわからなかった。一週間ほど寝食を共にしたから気心が知れてきてこういう話を切り出しやすいと思ったのか……いや、アプリリアージェはそういうタイプの提督ではないと聞いている。
アプリリアージェの行動には目的遂行意識の強さはあっても、生来の腹黒さや悪意などは一切無い人物だという事は、短いつきあいの中でもティアナは既に理解していた。
だが……。

「そもそも『試闘』の軍隊内ルールをそのまま適用するつもりはありません。これは純粋に互いの腕前をある程度相互理解するための、いわば遊技の様なものですから」
そう言って初めてアプリリアージェはエイルに顔を向けた。
「是非参加してください。あなたの言う『危険がいっぱいの庵』に

全員が入れるだけの能力があるのかどうかをあなた自身で確認するいい機会でしょう」

―（そう言うことか）

ティアナは納得した。

同様にエイルの中のエルデも苦笑していた。

【そう言うことか】

『断れない理由もちゃんと用意してあるってことだな』

【同意する為の言い訳まで準備済みってか？フン、「さすがや」なんて言わへんで】

『言う必要もないってことだろ？』

【ふーん、や】

「ネスティもルネもシェリルもこの一週間野宿続きなのに文句も言わずによく頑張りましたね。事情が許せば数日はこの町でのんびり過ごして英気を養いましょう。エイル君が『時間がない～』って急かさなければ、ですけれど」

「ネスティの為ねえ」

アプリリアージェとしても一週間ワインもビールもなく過ごしてきたのだから、当然それらを楽しみにしているに違いない。少なくともアトラックはそう思ったから、そんな台詞が思わず口から出た。

エイルが見やったアプリリアージェの目尻がいつもより少し下がり気味に思えたのは、傾きかけた昼星（ちゅうせい）の位置のせいだったのかどうかは定かではない。

ただ、アプリリアージェは最後に一同に向かって嬉しそうにこう『命令』した。

「ですから、今日中になんとしてもウーモス入りしますよ」

「ええっ？」

悲鳴は勿論エルネスティーネのものだった。

ウーモスでの初日。基本的に午前中は自由行動と言うことになっていたため、朝食のテーブルにはル＝キリアのメンバーだけが揃っていた。少女達は久しぶりのベッドとの別れを惜しんでいるのだろう。誰一人顔も見せなかった。

昨夜エールのジョッキを五杯に加え、その後ワインを十本近く空けたにもかかわらず、アプリリアージェはいつものすがすがしい笑顔で一同に対していた。

「今日の「手合わせ」ですが、けが人が出るかも知れません」

朝の挨拶の前にアプリリアージェが告げた一言にル＝キリアの一同は驚いた。

「なぜですか？藁を束ねた棒を剣のかわりに使うって言ってませんでしたか？」

アトラックは不思議そうに尋ねた。

だがファルケンハイン・レインはアプリリアージェの言葉に眉根を寄せた。

「ご覧になったのですか？エイル・エイミイの稽古というヤツを？」

さすがに副官であるファルケンハインはアプリリアージェのたった一言で、その背景をある程度理解した事を示した。

アプリリアージェはうなずくと、二杯目の紅茶を一口すすってから切り出した。

「エイル君の剣は私たちの常識から外れています。彼はおそらく手にするものすべてを剣に変えてしまう能力を持っています」

ファルケンハインとアトラックは顔を見合わせた。

「それはルーンを使った特殊な剣でしょう？剣技の手合わせにルーンは禁じ手だと言うことは夕べ確認済みではないですか？」

アトラックの問いかけにアプリリアージェは目を伏せた。ファルケンハインの意見も同様なのであろう。何も言わずにアプリリアー

ジェの答えを待っていた。
「いえ、彼はルーンなど使ってはいません。もっとも保険を掛けるというのならティアナを使えばいいだけですが」
「ああ、そうでしたね」
「いったい何をご覧になったんです？」
ファルケンハインは、ただごとではなさそうだと感じていた。
「あなた達は、木の棒で木の葉を切ることができますか？」
「そりゃあ」
アトラックはファルケンハインの方を見やって言葉を継いだ。
「細い棒なら、木の葉を叩ききる位は私でもできますが」
その答えを予想していたかのように、アプリリアージェは懐からたたまれたハンカチを取り出してテーブルの上に置くと、それをそっとアトラックの方に差し出した。
「開けてご覧なさい。そっと、ですよ」
アトラックは怪訝な顔をしつつも言われるままにその包みを開いた。そこにはエイルが一刀両断した例の枯葉の片割れが入っていた。
「これは……包丁で切ったような切り口ですね。まさか？」
アプリリアージェはうなずいた。
「剣速を極限まで速めさえすれば、あなたほどの腕前なら落ちてくる枯れ葉を砕くことは可能でしょう。さらにとびきり切れ味のよい剣であれば、なんとか切断することもできるかもしれません。でも、エイル君は例の三色の儀仗を振り下ろしただけで枯れ葉をその状態にできるのです。それも、見ての通り葉脈に沿ってです」
ファルケンハインは手を伸ばすと、その枯れ葉を指でつまんで切断部をじっと見つめ、低い声で呟いた。
「アトル。これは名人が研いだ包丁を使ってもムリだ」
ファルケンハインの言葉に、アトラックはうなずいた。多少朝露を含んでいると言っても、それは表面だけで、ようは枯れ葉である。ある程度の圧力を加えたとたん、それは切断されることなく砕けるだろう。このような綺麗な切り口になる事はありえなかった。

「おそらく、麦わらで作った剣でもエイル君は同じ事ができるでしょう」

「それほどまでにエイル・エイミイの剣速は速いと？」

アプリリアージェは首を左右に振った。

「反対です。あんなにゆっくりとした剣は実践では見たことがありません」

ファルケンハインとアトラックは黙り込んだ。

アプリリアージェが言うことに嘘はないだろう。だとすれば、エイルと戦うということは真剣を相手にするのと同義であるということだった。特殊な剣技を使うとは思っていたが、ここまでとはファルケンハインも全く想像だにしていなかった。

そして、夕べアプリリアージェから手合わせのルールの説明があった折りに、エイルが確認したことを思い出していた。

『藁の剣でも紙の剣でもなんでもいいけど、それ使って怪我しても恨みっこ無しでいいんだな？』

彼は確かにそう言ったのだ。

「それなら、ランダールの蒸気亭で見せたあの立ち会いでは彼はまさに儀仗を振り回していましたが切断などしませんでしたよ」

「もちろん、自由に制御できるのでしょう」

「ですよね」

アトラックはため息をついた。

「味方同士の試合でけが人を出したくありません。ルールを変えましょう」

アプリリアージェはそう言うと、二杯目の紅茶を飲み干した。

「ルネがどこにいるか、知りませんか？彼女の力を借りることにしましょう。本当はエイル君の例の防御ルーンに頼りたいところですが、さすがに今の段階ではそこまで彼が我々に対して情報を公開してくれるとは思えませんからね」

ファルケンハインはアプリリアージェが何を言っているのかがすぐにわかった。蒸気亭でエイルがドライアドの無法部隊相手に戦った時に見せた不思議な防御能力の事を言っているのだろう。切られても全く無傷でいられる、例の能力だった。

「あれはルーンでしょうか？」

アプリリアージェはうなずいた。

「最初はフェアリーだと思っていたのでわかりませんでしたが、エイル君が上席にある賢者、つまりルーナーであることがわかった今、あの防御能力が高位のルーンだというのは間違いないでしょう」

アトラックはうなずいた。

「それにしてもルーナーのはずなのになんで詠唱時に移動できるんですかね？」

「ハロウィン先生によると賢者だから、と言うことはなさそうですね。エイル君が特別なんでしょう」

「さらに言えば、ルーナーなのに剣技も相当の腕前ですか」

「さらに付け加えるとあんな子供なのに、ですね」

最後の言葉はアトラックのものだった。

確かにその通りだった。エイルについてはその謎がある程度わかると、その向こう側にさらに新しい謎が待っているようで、いっこうに正体がつかめない。

「なんか、特別だらけですね」

「ピクシィの姿をしていますが、本当はスカルモールドが化けてるんじゃないですかね？あいつら同様、ファランドールとは違う異世界から来た魔物なのかもしれません、彼は」

ややあってポツリと漏らしたアトラックの言葉にアプリリアージェはハッとして顔を上げた。

「い、嫌だなあ、冗談ですって」

アプリリアージェの様子を見てアトラックはあわてて自らの発言を否定した。アプリリアージェがそこまでの反応をするなどとはつゆほども思っていなかったから面食らったのだ。

「いえ」

アプリリアージェはエイルに関する情報を頭の中で再構築していた。

―（私たちは、ファランドールの法則と常識に則っているから彼の能力や行動が異常に見える。彼がファランドールの人間ではなく、人外のもの、つまりスカルモールドだとすると、ある意味すべてのつじつまが合う。いや、つじつまが合うのではなくてつじつまを合わせる必要がない。なにせ異世界から来た魔物なのだから。体中に施されたあの呪印にしても、実は「真赭の頤」が高位のルーンでスカルモールドの姿をデュナン、いやピクシィの形に封じている為のものではないのか？いや、ピクシィの体の中にスカルモールドを封じているとしたらどうだろう？時々人格が入れ替わるような感じはもともと二人の人格があの体の中にいるからではないのか？我々はひょっとしたら、エイル・エイミイというピクシィの中にいるスカルモールドの呪印解除に手を貸そうとしているのではないのか？そしてそれは恐ろしい事態を招くことになるのではないのか？）

「荒唐無稽だな。そんなことを言ったら謎と言う謎は全てスカルモールドや異世界のせいにしたら解決してしまうだろう？」

ファルケンハインの言うとおり、アトラックの一言は確かに一見荒唐無稽だった。それはもちろんアプリリアージェにもわかっていた。だが、アプリリアージェはアトラックの一言は何か大きなヒントを含んでいるような気がしてならなかったのだ。それが何かが今はわからないが、エイル・エイミイという名のパズルを解く鍵の影のようなものが一瞬だが視界を横切ったような気がしたのは確かであった。

「スカルモールドなのかどうかはともかく、ひょっとすると私達は魔人と出会ってしまったのかもしれませんね」

アプリリアージェの静かな一言に、今度は二人は何も言わなかっ

た。もちろん、その場で目を伏せて、ただ座ってこの話を聞いているだけのテンリーゼンも含めて。

だが、一行の心配は杞憂に終わった。その日『試闘』が行われる事はなかったのだ。

# 第二十八話　伝信

「もう一度言ってください、アトラック・スリーズ」
「はっ」
こわばった顔のアトラックに、アプリリアージェは努めて冷静に声をかけた。
少し離れた椅子に腰をかけて弓の手入れに余念がなかったテンリーゼンの手も止まっていた。
朝食後、アトラックはウーモスにある伝信所に向かった。そこで彼が手に入れた報告は普段何事にも動じないテンリーゼンの手をも止めさせるだけの内容だった。

「ル＝キリア別動各小隊からの経過報告ですが、目標発見の報の後、結果報告は一切無く、その後も報告はとぎれたまま一切続報が入っていないとのことです。それも全小隊」
「ロールルからも、ドリヴルからも、フルネからもですか？」
「はい……」
「――フリスト隊からもなのですか？」
「我が小隊を除く全小隊、音信不通……です」

アトラックがそう答えた後、しばらくの間沈黙が続いた。
その沈黙に耐えられず、アトラックは口を開いた。
「全滅……なのでしょうか？」
「それはまだ口にしてはいけません」
「はっ」

アプリリアージェは改めてエイルの言葉を思い出していた。『ザルカバード文書』に記載されている庵は全部偽物であると。

アトラックは直立姿勢のままでアプリリアージェの次の言葉を待った。

彼の司令は全くいつもと変わらぬ様子で静かに微笑んだまま頬杖を突いて何かを考え始めたようだった。だが、そのいつもと同じはずだった様子が変化したのをアトラックはそのわずか数秒後に感じた。

部屋の空気がトゲトゲしくざわついてきたような妙な感じが肌に伝わってきたのだ。

彼はその感覚には覚えがあった。そしてそれは戦慄を伴う記憶であった。

だが、彼にはもはやゆっくりと記憶を探っているような時間は与えられてはいなかった。理性より速く本能が警鐘を鳴らしはじめ、それは鋭い爪となり冷静な思考を行おうとする努力を切り裂いた。そして次の瞬間にはアトラックを構成するすべての細胞が悲鳴を上げ、彼の意識は絶望を伴う恐怖という闇に包み込まれていた。

「司令！」

（しまった）

アトラックは心の中で舌打ちをした。彼に出来る、それが精一杯の事であった。そして同時に観念した。

―（こりゃもう、間に合わないな）

口に出る事はなかったものの、心の中であっても、形になった言葉を絞り出したことにより理性の再構築に成功したアトラックは恐怖を諦念にまで昇華させることに成功した。そしてその目にはアプリリアージェの周りでパチパチという音とともに紫とも青ともとれる不気味な光がまとわりつき始めている様が映った。

部屋の空気のざわめきはますます大きくなっていた。見るとアプリリアージェの黒髪がざわざわと逆立ち始めているではないか。

アプリリアージェが纏うエーテルが暴走を始めているのだ。それも特定の方向性を持つ力を得て、さらに増幅されていくようだった。

そして、当のアプリリアージェの表情は苦痛に歪んでいた。
―（押さえられないんだな）
アプリリアージェのそんな顔を、アトラックは初めて見た。そしてそれが絶望を意味していることは彼にはよく分かった。

その時。
「リリアっ！」
エーテル化して届くテンリーゼンの声がアトラックの耳元にも届いた。そう思った次の瞬間には白い光が部屋全体を覆うように広がり、全員がそれに包まれた。
制御しようと自らと格闘して苦悶の表情を浮かべるアプリリアージェの体の周りで光り続ける紫の光が増大するのを確認した後に訪れた白い光は、アトラックの視界を奪った。
ややあって白い闇とも言える光芒がその場を退いた後、その部屋には何事もなかったかのように三人が先ほどと同じ姿勢で佇んでいた。
アトラックにとって長い時間が経ったように思えたが、彼が司令官の異変を感じて視界を白い闇に奪われるまではほんの数秒であったのだ。

「ありがとう、リーゼ。もう大丈夫」
今し方みせた苦悩の表情は去り、アプリリアージェは普段の表情でテンリーゼンにそう声をかけると、アトラックに対しても済まなさそうに詫びた。
「ごめんなさい。またやっちゃったわね」
平静を装いながらそういう額には、玉のような汗が浮かんでいるのをアトラックは見逃さなかった。
「気にしないで下さい。まあ、正直言うと今度こそダメだって思っちゃいましたけどね」
アトラックは引きつった笑いを浮かべてそう答えるのがやっとだ

った。彼自身の額にも脂汗が滲んでいた。
だが、そつのない彼はそう言った言葉の後に、こう付け加えるのは忘れなかった。
「でも、俺の命は司令に預けていますからね。そうなったらなったである意味本望です。だからくれぐれも、気に病まないで下さいよ」
アプリリアージェはアトラックのこの言葉を聞くと、恥ずかしそうにうつむいて小さくため息をついた。アトラックの目に映るその姿は、本当に普通のか弱い少女のようだった。

おそらくテンリーゼンが居なければこの旅館ごと吹き飛んでいただろうと、アトラックは額の汗をぬぐいながら思った。
アプリリアージェのエーテルが漏れ出して暴走する事は、すなわちそのような事故を伴う事を意味していた。
もちろん、そんなことが滅多にあるわけではない。彼の記憶でも年に一度もない。
そのたびにテンリーゼンの強大なエーテルがそれを包み、アプリリアージェの力を相殺して事なきを得ているのである。
アプリリアージェが常にテンリーゼンを自分の傍に置くようにしている訳を知っているのはル＝キリアの隊員を別にするとおそらく軍の上層部のごく一部だけであろうと思われた。
類い希な能力を有する提督は、自軍を壊滅状態に追い込むかもしれないという大きな欠陥をも抱えているのである。その弱点を無くす存在がテンリーゼンの特殊なエーテル結界なのだ。アトラックは二人の提督の組み合わせをそう理解していた。
そしてアプリリアージェの向こう側にいる小さな影を確認すると改めてアトラックは戦慄する。強大な雷の力を纏うアプリリアージェの力すら一瞬で飲み込むテンリーゼンの底の知れない力に。

「とりあえず、エイル君と話をしましょう」
短い沈黙の後にそう呟いたアプリリアージェの言葉にアトラック

はうなずいた。
　彼にしてもそれしか思いつかなかった。どうやらすべてはエイル・エイミイの言ったとおりになっているのだから。
　もしもエイルに出会わなければル＝キリアの四人は最初の庵に迷わず向かっていただろう。そしてル＝キリア所属の他の五小隊と同じ運命……いや、それがどういう運命なのかは定かではないのだが……少なくともあまり愉快な目に遭ってはいなかったであろう事だけは想像できた。
　さらにアトラックの手前味噌を説明するとすれば、そのエイルと同道することを決めた司令官の先見の明にも改めて感心していた。
「エイルは副司令と調達屋に行っているはずですね。ただ、その後街をブラブラするというような事を言ってましたから、ここで待っていたらいつになるかわかりませんよ。この時間だとおそらくまだ夕べの調達屋にいるでしょうし、ここは私が迎えに行ってきます」
「そうですね。お願いします」
　司令官と共にいた部屋の扉を閉めると、アトラックははじめて大きなため息をついた。だがそれは、九死に一生を得た事に対する安堵というよりは、生を確認する為の深呼吸と言った方が良かった。
　とはいえ、アトラックの心の中には安堵だけでなく一抹の不安も同居していた。
　アプリリアージェの制御力が極端に落ちていたのである。過去の事例に比べて今回の暴走はエーテルの拡大が桁違いに速く、風のフェアリーのアトラックをして逃げる時間がないと判断するほどだったのだ。
　アトラックは彼の上官に異変を感じていた。
　だが、その不安を首を振って振り払うと、アトラックは頭を切り替えた。
　ル＝キリアが全滅したかも知れぬ事実は、さすがに司令をして冷静ではいられない事態だったのだ、と。つまり、今までにない大き

な感情のうねりがあそこまでの暴走を引き起こしたのだろうと考えることにした。

アプリリアージェの制御力に何か変化があるわけではないと。

そう自分に言い聞かせた後、アトラックはもう一度小さく深呼吸をして、大股で歩き始めた。

# 第二十九話　調達屋ベック・ガーニー

「ほらよ、待たせたな」

客に対しての言葉遣いとしてはいやにぞんざいだな、とエイル・エイミイは思ったが、隣にいるファルケンハイン・レインの眉はそんなことは全く意に介さないかのように微動だにしなかった。

エイルが持っている「ファランドール・フォウ」の、それも自分の住んでいる地域に限定した狭い常識に照らしてみれば、客が店の人間に物を売ってもらう事をお願いするなどと言うことは異常だった。

だが、要するにファランドールにおける調達屋とはそういうものようだった。

「あんた達、運がいいぜ。このあたりじゃ俺じゃないとこれなんかはまず手に入らないところだ」

調達屋ベック・ガーニーと名乗った褐色の髪を短く刈り込んだ薄青い瞳の青年デュナンは皮の巾着を持ち上げて、恩着せがましい口調でファルケンハインに向かってそう言った。

昨夜、仏頂面で応対していた人間と同一人物とは思えないほど、その日のベックは上機嫌だった。

「助かる」

短く、ファルケンハインは感謝の意を告げた。

ベックが手に持っている袋は、エイル……いやエルデが頼んでいた薬草の粉だった。単なる薬草ではなく、ドライアドでは一部の地域にしか自生していないと言われる希少な植物を月光だけで長時間かけて乾燥させて、目の細かい臼で慎重に粉末にしたものだった。

流通量は極めて少ない。だが、その理由はその希少性の為という

よりは、一般的に必要とされるものではなかったからだ。単体で使用した場合に多少の解熱作用がある事は認められていたが、解熱作用に関してはその「ウィルクーダ」という薬草をわざわざ使うまでもなく、よほど効果のある薬草が数多（あまた）存在しているからである。

「しっかし、こんな物、何に使うんだい？解熱剤なら特別いいヤツを持ってるぜ？」

「いや、解熱剤はいらん」

「ま、詮索しないのが俺たちの決まりだ。今のは聞き流してくれ。あんまり珍しい注文だったんでちょっと、な」

「いや、気にしないでくれ」

「じゃあ、コイツは確かに渡したぜ。それからそっちの黒髪の兄さんから頼まれてたもう一つの件だが」

ベックはそばかすだらけの顔をエイルの方に向けるとバツが悪そうな苦笑いをしてみせた。

「もう一つの依頼はもうちょっと時間がかかる。この町の滞在中にわからない場合は、他の町の調達屋組合で俺の名前を言って符号を見せれば情報を引き出せるように手配しておくから安心してくれ」

「そうか。オレも急いではないからそれでいい」

エイルは内心がっかりしながらも、そう言った。

「そう言ってもらえると助かる。まあ、安請け合いした俺がまだ未熟だったってことで、この件は取消しても違約金は貰わないけど、どうする？」

エイルは首を横に振った。

「いや、頼む。オレの方には全くアテがないんだ」

「了解。兄さんが生きてたら絶対手に入るようにしておくさ」

「生きてたら？」

「あ、いやいや。こういうご時世だからな」

エイルが怪訝な顔で問い直すと、ベックはしまったという表情を一瞬だけ見せた。だが、すぐに大きく手を振るとそう取り繕った。

ファランドールにおける「調達屋」とは、簡単に言うと「何でも屋」である。

物の仕入れに関する一流の識者と言うと聞こえがいいが、要するに普通の商店などでは手に入りにくい品物を独自の流通路から仕入れて顧客の要求に応える事を商売としている商売である。もちろん、扱う「モノ」は合法・非合法を問わない。

そして前者、つまり合法的なものを扱っているだけでは調達屋としての株は上がらない。それなりに「訳あり」な要求に応える事ができるかどうかが顧客にとっては役に立つ調達屋かどうかの分かれ目になる。

調達屋はファランドール中を網羅する彼ら独自の情報網・連絡網を持っており、それを通じて依頼主の様々な要求に応える体制を作り上げていた。

彼らには暗黙の了解があり、顧客の情報については守秘を徹底し、かつ顧客に対しては詮索を一切行わないというものである。

支払いは事前に決定し、半額を前金として支払い、品物の受け渡し時に残金を支払うのが一般的であった。ただし一部の仕入れが困難な物などについては受け渡し時に金額の変更を要求されることもある。もちろんそれは金額の値上げに関する要求であるが、世間の評価が商売の多寡に直結する為、法外な値上げなどを行うことはまずない。理由を説明されれば納得のいく仕入れ経費が上乗せされる程度で、それは事前に説明され互いの合意に則った範囲で行われる。それ故、値上げが取引上大きな問題になることは少なかった。言いかえるならば良心的な経営こそが商売繁盛に結びつく為、少なくとも評判の調達屋と呼ばれる者達は理不尽な値段の商売はしないと考えていいという事になる。

では翻って一流の調達屋とは何か？

一般的な商店とは違い、特定の品物にだけ知識が深くても調達屋にはなれない。つまりあらゆる方面に精通している事が第一条件で

あるが、それは一流二流の判断にはならない。
では良心的な値段で商売をする事かというとそれもさにあらず。
一流の調達屋とは必ずしも報酬が良心的だとは言えない。一般の商店ではなく、敢えて調達屋にモノを頼む顧客にとって一番重要なのは普通の商店では手に入らず、それでも敢えて欲しい物を確実に、しかも迅速に調達してくる調達屋こそが一流なのである。
彼らは調達屋同士で組合組織を作り上げていた。様々な物資を調達する経路を確保する為に自然発生的にできあがったそれら調達屋の組織は、ある意味ファランドールで一番力を持つ組織であるとも言えた。市場の表舞台には決して出ては来ないが、ファランドールの流通と情報を陰で支えているのは彼ら調達屋と呼ばれる闇の商売人なのは間違いのないところであった。

「それ、手に入りにくいってことだけど、もしかして最初に聞いた時より値が張るのか？」
エイルは卓の上に置かれたウィルクーダの革袋とベックとを交互に見ながら尋ねた。
エイルの注文品はアプリリアージェのはからいで必要経費として支払ってもらうことになっていたが、そもそも注文時に提示された値段を聞いてその高値ぶりにかなり驚いていた。ベックが値段を告げたときにはさすがのファルケンハインの眉もあからさまに動いたのをエイルは見逃さなかった。つまり、ファルケンハインとしては「想定外の出費」であり、それがさらに値上がりするとさすがに申し訳ないと思っての問いかけだった。

【他人の財布を気にしなや。肝っ玉小さいな】
『オレはお前のように無神経に育ってないんだよ』
【よう言うた。誰が無神経に育ったやて？】
『ああもう、こんなところで絡むなよ』
【お前さんは気にしすぎや。相手はシルフィード王国の国王アプサ

ラス三世の勅命を受けた部隊やで？しかもびっくり仰天、王女付きや。どう考えても金の心配なんていらんやろ？】
『でも、ファルは倹約しろって言ってたじゃないか？』
【司令官が毎晩浴びるほどの酒代使ってるのに？】
『確かにリリアさんの酒量はすごいけど』
【酒代はあるけど他の金はない？あり得へんやろ？】
『でもなあ』
【はいはい。お前さんもファルみたいに金に細かいっちゅう事はようわかった】
『いや、そうじゃなくてだな』

「いや、こう言うのは希少性もあるが、要は需要と供給の問題だ。値段は昨日言ったとおりでいい。それより、あんたらシルフィードの人間だろ？ちょっと妙な話を耳にしたんだが、興味ないか？」
ベックは周りを見渡すと、声を低くして続けた。
その様子を見て「この部屋にはどう見ても俺たちしかいないだろ、辺りをうかがうな！」とエルデが即座に突っ込みを入れたが、エイルは無視を決め込んだ。

三人が居たのは、ベックの店……表通りから少し外れたいかにもいかがわしい空気を醸し出す通りにある……昼間から酒を飲む連中が集まる猥雑な雰囲気が漂う中規模の飲み屋……その奥から地下に下りた通路の両側にいくつかある部屋の一つだった。
ー一要するに堅気の人間が寄りつくような場所ではなかった。
ファルケンハインに聞けば他の部屋は占い師だったり、娼婦の紹介窓口だったりだそうで、言ってみれば夜が似合う商売を営む様々な人間達の居場所であった。その中でもベックの部屋の扉はかなり分厚く重いものだったし、部屋には他に扉も何もないことからエルデの言う通り、ベックは当事者のみしか居ないこの場であえて声を潜めるような必要はなかったのだ。しかし、エイルとファルケンハ

インはベックにつられて思わず身を乗り出してしまった。
「シルフィード海軍所属の有名な特殊部隊のル＝キリアが全滅したらしいぜ。国王が自軍向けに正式発表したって事だ」
「なんだって？」
声を出したのはエイルの方だった。ファルケンハインの方は少しだけ眉をひそめただけでたいした反応はしなかった。
「ル＝キリアとは『あの』ル＝キリアか？全滅とは驚きだ。一体どこで誰にやられたんだ？」
ファルケンハインはまるで他人事のようにベックに尋ねた。エイルは頭の中のエルデに叱咤されていた。

【アホ。ファルが落ち着いてるのに部外者のお前さんがうろたえてどうする】
『いや、でもさ』
【ここはファルのおっちゃんの対応をじっくり観察や】
『いや、さすがに「おっちゃん」はないんじゃないか？』
【でも、なんかおっさんくさいやん。ファルの旦那って妙に落ち着きすぎてるし】
『ランダールの市でティアナさんと二人でいた時は結構ういういしい感じだったけどなあ』
【うん。つまりムッツリスケベか。ありがちやな】
『おいおい』

「話によると、任務へ向かう途中で嵐に遭い、落雷で船が難破したそうだ。何でも遺体は付近の海岸に打ち上げられて全員が本人確認された後、現地付近でシルフィードの習慣に則って荼毘に付されたとか。本国じゃすでに非公開ながら軍葬も執り行われたそうだぜ。ついでに言うと全員二階級特進だそうだ」
ファルケンハインはベックの話を聞くと腕組みをして考えるような風をみせた。

「ふーむ、難破か。北の海の海賊討伐の途中とすると、難所で有名な雷鳴の回廊付近か」
「だろうな。エッダからの近道だが、あんな恐ろしいところを通るのは海賊でも命知らずの連中か、風のフェアリーで構成されたル＝キリアくらいだろうぜ。何にせよ、海賊連中は天敵がいなくなってこれでしばらくは枕を高くして寝られるってもんだ」
「そうなるとシルフィードの北方警備はどうなるんだろうな」
ファルケンハインはまたしても人ごとのように呟いた。正体を知らなければ、本当に民間人が野次馬的な興味でうわさ話を楽しんでいるようにしか見えなかった。
「まあ、シルフィードは戦力が厚いからな。すぐに他の部隊が穴埋めに当たるんだろうな。ま、どっちにしたってすぐにル＝キリア並の働きをするって訳にはいかねえだろうがな」
「そうだろうな」
「へへ。ここまでは無料の情報だ。実はこの情報には興味深い関連情報があってな。そっちは有料だ」
『へ？』
【ほう、これが噂の調達屋の裏情報と言うヤツやな】
『金を取れるほどの情報なのか？』
【情報なんてもんの価値は、受け取る人間が決めるもんやろ】
「関連情報か。その情報は俺達の役にたつ情報なのか？」
ファルケンハインが怪訝な顔でベックに尋ねた。
ファルケンハインにとっては今までの話は既知の情報の範囲内のものであった。ル＝キリアの全滅および軍葬は彼らが今回の任務に就いた時に予定されていたものだからだ。今回の任務はこの世に既に存在していない人間が国家とは関係なく勝手に行う事になっていたのである。つまり、「真赭の頤（まそほのおとがい）」の捜索をシルフィードが行っているわけではないという形をとる為の手続き

であった。
だからこそ、ファルケンハインはベックの話を、平静に、まさに他人事のように自然に受け止めているという態度をとりやすかったのである。
だが、有料の情報にするほどの関連情報があるとなると話は別だった。
ファルケンハインは思わず横にいるエイルと顔を見合わせた。エイルに回答を求めたというわけではないが、自分が当惑しているという様子を伝えようと思ったのだ。

「役にたつって言うか、俺の予想に間違いなければ、お前さん達は知っとかないとヤバい情報だと思うぜ」
「フン。で、いくらの情報だ？」
ファルケンハインはあまり気のなさそうな声でベックに問いかけた。
ベックはファルケンハインのその態度を見てニヤリと笑った。
「百エキュ……と言いたいところだけど、ま、今回はサービスだ」
「え？」
「いやあ、知り合いのところにあったウィルクーダが長いこと不良在庫で買い叩けたんだよな。そう言うわけで思ったよりかなり儲けちまったから、客にはその差額を情報で返そうかって事さ。もっとも、情報はいらないと言ったって、金は相場でもらってるんだから返しはしないぜ」
またもやファルケンハインはエイルと顔を見合わせた。
エイルは何かを言おうとしたが、それより先にエルデがエイルの口を使ってしゃべった。
「タダなら教えてもろとこや。つーか、タダなんやから聞かなソンやろ？」
そう言うと、エルデはファルケンハインに目配せをした。
「――そうだな」

ファルケンハインは相づちを打つと、ベックに「教えてもらおう」と言った。

ベックはうなずくと話し始めた。

「ふふ。結構びっくりする情報さ。そのル＝キリアの全滅発表はどうもウソらしい」

「本当か？」

ファルケンハインは間髪入れずに小さく声を上げた。

「ヤツら、どうやら別な極秘任務で世界中に散ったようだ。死んだという発表をあえてした……要するに死んだことにしとく必要があったって事だな。それって結構な問題だと思わないか？」

「ふむ。そうかもしれんな」

「そこから出てくる答えは一つ。戦争に直結しかねない政治的な問題に関係してるって事さ。簡単に言えばシルフィード王国の名前が出たらまずい任務に着いたってことだろう？それもよほどの。こう言うのって、戦争目前っていう緊張した感じがひしひし伝わる話じゃないか？」

ベックは目を輝かせながら熱い口調でファルケンハインに語っていた。

エイルにはそんなベックがまるで戦争を待ちわびているかのように見えた。いや、戦争が始まれば彼のような商売は繁盛するのかも知れないと考えればベックの態度に納得は行くのだが、戦争を期待する人間の存在に強い違和感を覚えざるを得なかったのだ。

「まあ、確かに」

エイルはそう言って曖昧に相づちを打ったファルケンハインの顔を見た。

さっきまでと違って表情にやや曇りが見える。どうやら少なくとも調達屋のもつ情報網にはル＝キリアの行動の一部は見抜かれていたようだ。調達屋が見抜いたということは、仮想敵国であるドライアドの軍部も把握していると見ていいだろう。ある程度想定はしていたとはいえ、ファルケンハインの顔が曇るのもムリはないと言え

た。

「驚くのは早いぜ。本題はここからだ」

ベックの口調が変わった。うれしそうにゴシップをしゃべる軽い乗りであった今までと違って、いきなり真剣な表情になったのだ。

「その何らかの任務で世界各地に散らばってたル＝キリアの隊員が次々に死体で発見されてるそうだ」

「なんだと？」

「言ってみればル＝キリアの連中は二度死んでるってことだな。一度目は「振り」だったが、二度目は本当の死だ」

『え？』

【む】

ファルケンハインが思わず立ち上がった。

「な？面白い話だろ？」

ベックはファルケンハインの反応を見ると、もとの軽薄そうな表情に戻り、満足げにニヤリと笑った。

「その話の信憑性はどうなんだ？」

ファルケンハインより先にエイルはベックに質問した。

この場は本当の第三者である自分が持っている興味の範囲で質問する方がいいだろうととっさに判断したためだ。

ファルケンハインはエイルの質問を聞くと、ゆっくりと椅子に座り直した。

「信憑性って言われてもなあ。俺達の持っている情報網そのものが信憑性の基盤だからな。もちろん誤報もそれなりにあるが、今回のは死体に面通しした人間の証言があるそうだし、信憑性は高いんじゃないか？世間がそういう状況ってこともあるしな」

「面通しだと？」

ファルケンハインの問いに、ベックは待ってましたとばかりに答

えた。
「一部のル＝キリアの隊員の名前や顔形は俺達にはけっこう伝わってるんだぜ？レイン中佐」
最期の言葉に、場が凍り付いた。
ファルケンハインは再びゆっくり立ち上がるとベックをにらみ据えた。
「お前は何者だ？」

【こいつ、ファルケンハイン・レインという名前をどうやって知ったんや？】
『敵か？』

ベックは血相を変えたファルケンハインに慌てて両手を伸ばしてその掌を見せた。何もするなという合図である。
「勘弁してくれ。シルフィードの人間は調達屋を過小評価しすぎだぜ。自分たちが相当の有名人だって事を忘れない方がいい。ル＝キリアみたいな有名人は特にだ」
「まさか」
「ランダール近くの渓道で派手な立ち回りしたのあんたらだろ？世界中に散らばったとか言われているル＝キリアの噂がサラマンダじゃ全く聞こえてこなかったから、俺はもしかしてって思ってたんだ。そこへ現れたのが人相書き通りのあんたらってだけの事さ」
「軍でも俺達全員の名前を知っているヤツはいない」
「近いところの方が得てして情報規制は厳しいものさ。ル＝キリアは存在すら公式にされていなかった秘密部隊だしな。だけど、あんたらの敵方から漏れる情報はシルフィードで規制なんてできないだろう？ましてやシルフィードの敵はドライアドばかりじゃない。横の繋がりが強い海賊連中だっているんだぞ。自分たちの身を守るための情報収集作業はあんたらの想像以上だよ。奴らも命がかかってる」

「それって」
エイルはファルケンハインをみやった。
「つまり、こっちに駐屯地があるっていうドライアド軍にもその情報が伝わってるってことだろ？」
ファルケンハインはそれには答えなかった。彼は事の対処を考えていた。隠密裏に進めたと思っていた自分たちの作戦は思ったより早く発覚してしまったことは間違いない。現実に今目の前にいる市井の商人が初対面のファルケンハインを見て人物を特定して見せたのだ。ベックという調達屋だけがファルケンハインの正体に気づいたのであれば、ファルケンハインがその手を染めれば済むことだった。だが、情報が一人歩きをしている以上、ベックの口封じなどはもはや何の意味もなさない行為だった。

「どうだい？有益な情報だろ？」
ベックがそう言い終えるのを待っていたかのように、エイル達が背にしていたこの部屋の唯一のドアがいきなり開いた。
「やっぱり、まだここだったんスね」
振り返らずとも二人にはわかった。その声はアトラック・スリーズであった。
「おいおい、商談中なんだぜ。勝手に入って来ちゃ困るな、ええと」
ベックは突然のアトラックの訪問にもさほど驚いた様子はなかった。むしろうれしそうにニヤリと笑って見せた。
「アトラック・スリーズ大尉……いや、今は特佐さま、だったかな」
「え？」
勢いよく入ってきたアトラックは、ベックの一言で固まった。背中を向けているエイルとファルケンハインの表情がわからない。
アトラックは軍人としての習性で、懐に手を入れると身構えた。
―（一体この状況は？）
アトラックが何かを言いかけた時にファルケンハインが左手を挙げてそれを制した。

「何の用だ？伝信所に行ったのではないのか？」
ファルケンハインの声はすでにいつもの冷静なものに戻っていた。
アトラックはその声を聞くと落ち着きを取り戻す事が出来た。彼は余裕をもってベックとファルケンハインを見比べると、言葉を選びながら答えた。
「伝信の件について話があるので、至急お二人を呼んで来いと」
「アプリリアージェ・ユグセル公爵。いや、ユグセル中将殿がそうおっしゃったんだろ？」
ベックはそう言うと立ち上がった。
「あ、皆さん二階級特進だから、ユグセル元帥って言う方がいいのかね？それより早く扉を閉めてくれ」
アトラックはファルケンハインを見やった。だがファルケンハインはベックをにらみ据えたままだった。
「急げ！」
アトラックは何が何だかわからない状態だったが、とりあえずファルケンハインの様子から目の前にいる調達屋が火急の敵ではなさそうだという判断を下し、とはいえ警戒だけは怠らないようにして、言われたとおりに後ろ手に扉を閉めた。
「閂（かんぬき）もかけてくれ」
「閂だと？」
これはファルケンハインだ。
ベックはうなずいた。
「上下に二カ所ある。ルーンを使った仕掛けだから、外からは簡単には開かんよ」
「そんなことをしてどういうつもりだ？」
閂と聞いて、さすがにファルケンハインは気色ばんだ。アトラックはファルケンハインの様子を見て、閂の操作をする手を止めた。
「正式名称、ドライアド陸軍第五十二独立部隊」
ファルケンハインの問いにはまともに答えず、ベックは立ち上がると自ら扉に近づいてかんぬきに手をかけた。

「知ってるか？」
「――識別名、スプリガン……」
ファルケンハインではなく、アトラックが答えた。ベックはうなずいた。
「まさかウーモスの駐屯地にいるのか？」
「スリーズ特佐、あんたそいつらにきっと付けられてるぜ」

『スプリガンって？』
【確か、ドライアドの特殊工作部隊の名前やな】
『それって』
【まあ、乱暴に言うたらドライアドのル＝キリアみたいなもんやろ。もっともそれは表向きで、スプリガンは本来、エレメンタル探しの目的で設立されたっちゅう噂もあるけどな】
『そんな奴らにつけられてるって、ヤバいんじゃないのか？』
【話が本当やとすると、かなりヤバそうやな】

アトラックは上部の閂を触ったままファルケンハインを見やった。ファルケンハインは小さくうなずいた。
カチリ、という軽い音と供に上部のかんぬきが扉を固定した。つづいてベックが下部のかんぬきを同様に動かした。
「これで、この部屋の扉は外からは見えない」
「ルーンか？」
「ああ。調達屋はみんな用心のためにこういう仕掛けをなにかしらしてるもんさ」

「副司令、コイツは？」
自分の椅子に戻ったベックを見ながら、アトラックはファルケンハインに尋ねた。
「調達屋だ」
「いや、そりゃわかってます。そうじゃなくて」

「それ以上は俺も知らん」
「いや、知らんって、コイツは俺の名前を知ってたんですよ?」
「俺の名前も知っていた」
「あんた達の隊長の名前も知ってるぜ。ついでに言うと、もう一人のお人形さんもな」
「調達屋が?」
エイルはそれまで黙っていたが、我慢しきれないと行った風情でベックに声をかけた。
「じゃあ、オレは誰だ?オレの事は知っているのか?名前を言ってみろ」

【直球派やねえ】
『だって、気になるだろ?』
【ならへん】
『ウソつけ、こりゃ、一大事だろ?』

ベックは両肘を突き、併せた手の甲に顎を乗せて、エイルの顔をまじまじ見つめて言った。
「俺は有名人しか知らん。夕べ来た時から瞳髪黒色で一見ピクシィに見えるから気になってたんだが、残念ながら調達屋の情報網には名前はないな。で、何者なんだ、あんた?」
「そうか。ならいいんだ」
「ふーん。見たところル＝キリアのメンバーって感じじゃないな。アンタからは軍人特有の匂いがしない。旅の途中でたまたまル＝キリアの連中と一緒に居るだけの民間人だったら、早いこと別れといたほうがいいぞ。命が惜しかったら、だがな」
「そんなことより、スプリガンが俺達をつけてるっていうのは本当なのか?」
ベックは顎で扉を示した。
「扉に耳を当てて見な」

ファルケンハインはアトラックにうなずいて見せた。
アトラックは言われたとおりに木の扉に耳を付けて外の様子をうかがった。
何人かの人間が動いている気配がした。会話も聞こえるが、低くて内容まではわからない。

「通路に結構な人数がいます」
思わず、アトラックは小声でファルケンハインにそう言った。
「大丈夫だ。ルーンがかかっているからこっちの音が外に漏れることはないさ」

【いや、こら大丈夫やないな。警戒しときや。ルーン使うで】
『了解』

「この部屋から出られる隠し通路は？」
エイルはニヤニヤ笑うベックに鋭く尋ねた。
「そんなもんはない。見つからないんだから必要がないしな」
エイル、いやエルデはファルケンハインに告げた。
「ヤバイで。こんなしょうもない子供だましのルーンはそれなりのルーナーにはあっという間にバレバレや。相手がスプリガンならルーナーもおるはずや。それもケチなルーナーやのうて中位以上のルーンが使えるエクセラーかコンサーラが」
その言葉にアトラックの顔色が変わった。
「ここのルーンがケチだという事か？」
ファルケンハインも懐から懐剣をとりだすとエイルにたずねた。
「そやな」
エルデは腕を組んで何かを考えるような振りをすると、さも意味ありげな声色で答えた。
「この閂にかかってるんは『やさしく基礎から学べるルーナー入門』の第二章の終わりくらいに出てくる程度のルーンやな」

アトラックもファルケンハインに倣い、隠しから懐剣を取り出してエルデに言った。
「わかりにくい例え、感謝するよ」
「つまり、スプリガンにまともなルーナーがいたとしたら、ソイツには丸わかりだってことだな」
「さすがに上官は下っ端より理解力と想像力がおありのようで」
「どうせ俺はまだ正式な佐官辞令も出てないような下っ端でございますとも。あ、二階級特進ってことは俺って今は中佐扱い？いや、本来特佐って少佐みたいなもんだから、大佐なのかな？」
エルデは緊張感があまり感じられないアトラックの言葉を無視した。
「今から全員にいくつか強化系のルーンをかけるで。どのルーンも強力やけど時間制限で切れるさかい、俺が合図したら閂を開けて外に出て、とりあえず宿屋で集合や」
「強化系？」
「心配せえへんでも防御機能があるルーンもかけとく。防御ルーンは強化ルーンと同系列のしくみやから、まとめて強化系ルーンって言うんや。覚えとき。って、そんな用語説明はどうでもええ。掛けるルーンの説明しとくと、目にはみえなくなる中位の迷彩ルーンと万が一相手から物理的な攻撃を受けてもその威力を一定量ほとんど相殺させる高位の強化ルーンや。ごたごた言わずに用意しとき」
それだけ言うと、いつものように小さく「ノルン」とつぶやいた。一瞬で空手だった左手に背丈より長い儀仗が握られた。
それを見てベックはあわてて立ち上がった。
「あんた、ルーナーだったのかよ」
エイル、いやエルデはそれには答えずにいきなり閂に儀仗を向けた。
「おい、勝手に開けるな。俺までヤバイだろ？」
「せやったらお前も一緒に俺達の宿まで来たらええやろ。閂のルーンはこれから掛けるルーンのじゃまになるんや。それに俺がかける

のは範囲ルーンやから、どうせお前にもかかる。安心してええ」
そう言い終わると間髪入れずにエルデはいくつかの短い言葉を連続で呟いた。そしてその都度まばゆい光芒が部屋に満ちて、消えていった。
ベックにはエルデの発する言葉は殆ど聞き取れなかったが、最後に発した言葉だけはなんとか聞き取ることができた。
「スプマイロ」
エルデがそう唱えた次の瞬間、同様に光芒が部屋に満ち、次の瞬間にベックの視界からエルデ達三人の姿が消えた。
「おい、何だ今のは。詠唱ちゃんとしたのか？」
「やかましい。姿が見えへんようにしたったんや。さ、今のうちにズラかるで」
「え？あんた、ちゃんと詠唱してないだろ。ルーナーなんだろ？」
ベックが騒ぐ間にガタンという音が鳴り、部屋の閂が勝手に動いて外れた。
「明かりを消せ！」
ファルケンハインが短く言った。
ベックの言葉は一行からは全く無視されていた。
「早くしろ！」

ベックは命令されているのが自分だとようやく気づいた。あわててランプを吹き消す。
部屋の中が闇に包まれると、誰かが内開きの扉を空けた。
「ったく、顧客に降りかかる身の危険を教えてやろうって親切な俺様を」
「しゃべるな」
ベックはファルケンハインの短い叱責に首を竦めた。もちろん、その様子は姿が見えないので誰にもわからなかった。
ベックは少し開けた扉から薄暗い廊下の様子を見た。そこには誰

もいないことがわかると、今度は一気に扉を全開にした。
「今日はサービス・デーやさかい、オマケで足音もせえへんようになってる。せやからとにかく走れ」
エルデが小声で呟いた。

「おい、何も無いところに扉が湧いて出たぞ」
通路に出たとたん、近くでそう声がした。だが、ベックはその声の主を確認することなく、ともかく必死の思いで狭い通路を走った。途中、旅の姿をした複数のデュナンが廊下を行き来して扉を開け放っている様子が見えたが、エルデの言葉に従い、とにかく走って店の外にでる事だけを考えた。
通路は大人が二人並んでなんとか歩ける程度の広さがあったので、謎の旅装の一団をやり過ごしながら一階の飲み屋の店舗にたどり着けた。そこは混んでいて、普通にはすり抜ける事ができず、ベックは何人かにぶつかりながら外に出ることになった。
ぶつかった相手が誰かに対して文句を言う声が後ろから聞こえてきたが、勿論それにはかまわず一気に店の外に出た。

外にも目つきの悪い不審な感じがする旅姿の男達が五、六人たむろしてた。
ベックはエルデに言われた「制限時間がある」という言葉を思い出すと、男達の様子を振り返る事もせず、とりあえず息が続く限り全速力で通りを駆け抜けていった。もちろん、同じ部屋にいたファルケンハインやアトラック達が今どこにいるのかは辺りを見渡したところでわからなかった。
「宿屋」に来い、という言葉を思い出すと、ベックは思わず舌打ちをした。
エルデはベックに対してどの宿なのかを言わなかった。調達屋の情報ならわかっているだろう？という含みを持たせていたのだろう。そう思うとベックは相手のペースに乗ったことを今更ながら苦々し

く思ったのだ。

―（あのルーナー、見た目はガキのくせに、どうやらかなり高位のルーナーだな。それにしても）

足音を消したり姿を消すなどというルーンがあると言うことすら知らなかったベックは、自分に現実に掛けられたそれらのルーンが、その辺のルーナーには扱えない高位ルーンであろうことはわかっていた。だが、それよりももっと気になっていることが彼にはあった。

―（アイツは聞いたこともないようなあれほどのルーンを一瞬で詠唱し終わっていた。しかも立て続けに複数を重ねがけまでしていたっけ。こりゃ、けっこう実力のあるエクセラー、いや強化系が得意のようだしコンサーラか。って！）

だが、考えれば考えるほど混乱が増すばかりだった。

「おいおい。どれだけ高位なのかは知らないが、どっちにしろ詠唱が一瞬で終わるなんて絶対あり得ないだろ。あいつ、一体何者なんだ？」

一方ベックを遙かに引き離して風のようにウーモスの町を駆け抜けながら、しかしファルケンハイン・レインは焦っていた。

地下の通路にいた旅装束の男達を一目見て、ベックの言うことは本当だと確信していた。一見民間人風の旅の装束を身に纏ってはいたが、ある種の軍人が持つ独特の殺気を彼らは放っていた。スプリガンかどうかまでは確認できるはずはないが、少なくともベックの言うとおり、自分達のウーモス滞在が外部に漏れており、どこかの部隊に狙われているのは事実と言えた。

だとしたら……

―（ネスティ達があぶない）

アトラックも、当然その辺は理解していた。店を出てしばらく走ったところで姿が見えるようになると、目立つ事を避けるため走る

のをやめてファルケンハインの姿を探した。少し前方にファルケンハインの後ろ姿を認めると、さりげなく近づいて声をかけた。
「本隊が心配です」
ファルケンハインはうなずいた。
「司令の言うとおり、町にはいるときに二手に分かれて宿も分散したのが功を奏してくれていたらいいのだが」
「エイルが本隊の方には存在感を消すルーンをかけたとか言ってましたけど」
「信じられるな。さっき俺達にかけた高位ルーンの連続詠唱を見ただろう？あの子は本当に特殊なルーナーだ」
「ええ、驚きました。噂だけは聞いたことがある姿を消すルーンなんてものが本当に存在してたのにも驚きですが、それをまさか自分がかけられるとは」
ファルケンハインはうなずいた。
「我が国のバード達がエイルを見たらなんと言うだろうな」
「出世が難しい我がシルフィードでも、さすがにあいつならすぐに将校に昇進でしょうね」
「いや、ランダールの宿での一件を見てもわかるが、一瞬の判断であそこまでの戦略と戦術を組み立てる所を見ると、その力を発揮する機会に恵まれさえすればあっという間に提督や将軍と呼ばれるだろうな。少なくとも司令と同等に渡り合える可能性がある人間なのは確かだ」
「俺の上官と並ぶ特殊な存在ってことですかね」
「ああ、だが俺はエイルを見ていて、違う意味でこの任務が思ったよりも困難なものになるような気がしてきた」
「というと？」
アトラックは怪訝な顔をファルケンハインに向けた。
「エイルは自らの事を賢者としては一人前ではないと言っていた」
「ええ。そうでしたね」
「あの能力で、だぞ」

「そうか」
「こうなってしまうとあのエイルが一目を置く賢者がゴロゴロいるマーリン正教会の動向が気になって仕方がないな」
「国家間の戦争については調停はやるが、荷担はしないと言っていますがね」
「これからのことはわからんさ。少なくともシルフィードは非宗教国家を国是としているだけに教会側の覚えがいいはずはない。昔の事もある」
「そうでしたね」
「それに、こんなことは既に司令はわかってらっしゃるだろうし、すでに次の手をお考えだろう」
「そう願いたいですね。でも、こういう事態に遭遇すると俺はつくづく自分が凡人だと思い知らされますよ」
「ふん、今更何を言う」
「まあ、愚痴です」
「凡人の愚痴は同じ凡人として聞いてやるさ」
「そいつは、慰めになってるんですかね」
「知らん」

二人は先を急ぎながらも、人混みの中で目立った動きをしないように注意しながら、宿を目指した。もちろん、周囲にも気を配りながら。

一般に風のフェアリーは周囲の監視能力は高い。風上からの情報はかなりの精度で把握することができる反面、風下に関してはさすがに劣る。しかし神経を研ぎ澄ましたファルケンハインやアトラック程の強いエーテルを纏う風のフェアリーの警戒力は人混みの中に紛れ込んだ敵意ある相手を特定することなどは雑作もないことだった。

「まあ先のことはともかく、さっきはエイルがいて、本当に助かり

ましたね。あの狭い場所で戦うには、我々としてはちょっと不利ですしね」

「一応、あの場はまいたが……」

ファルケンハインは険しい表情を崩さずに続けた。

「これからのことを考えると、我々としてはややこしい事になった」

「司令と副司令の方は、たとえスプリガンに襲われたとしても、簡単にやられるとは思えませんが、他の部隊は、ひょっとしたらスプリガンに襲われたのかもしれません」

アトラックの言葉にファルケンハインは一瞬足を止め、すぐに我に返って歩き出した。

「他の小隊が襲われたという情報がすでに調達屋に入っていたようだが……伝信でなにか情報があったのだな？」

ファルケンハインの問いにアトラックは目を伏せた。

「司令からはまだ言うなと言われましたが、フリスト少佐の隊は全滅との事です。そしてたぶん……全ての小隊が……」

ファルケンハインは何も言わなかった。

ベックの話に信憑性があると言うことはもうわかっていた。ル＝キリアは残り四人なのだと言うことも。そしてその四人でこの場をなんとか凌がねばならないことも。

ル＝キリアの仲間達は今までも多くの修羅場を供に生き抜いてきた掛け替えのない存在であった。しかもただの兵士ではなく、風のエーテルを強く纏った精鋭達である。全滅したと簡単に言われても俄には信じられない。いや信じたくはなかった。事実を示す状況証拠を頭では認めながらも未だに全く実感が湧かないファルケンハインであった。

「問題は、ネスティ達の方ですね」

アトラックが話題を変えた。ファルケンハインも救われたようにうなずいた。

「エイルについての情報はあの調達屋も持っていなかった。あの様

子だとまだネスティ達のことは情報として伝わっていないようだ。
ここはエイルが本隊にかけたルーンの効力を信じて、何事も無いことを祈ろう」
「ですね。とりあえず俺たちはもう少し急ぎましょうか」
「そうだな」
二人は目立たないように左側にあった路地を曲がると、文字通り風のように駆け出した。

# 第三十話　スプリガン

「上手く逃げられたようです」
ウンディーネ風の旅装束を纏ったデュナンの男が小声でそう告げた。
「なんだと？」
薄暗い店の片隅で陶器のタンブラーに入ったビールを飲み干していた同じく商人風の男はそれを聞くと、不機嫌そうに音を立ててタンブラーをテーブルの上に置き、そう吐き捨てるように言った。
短く刈り込んだ男の髪は茶褐色で、がっしりとした顎が意志の強さを主張しているかのようだった。窪んだ眼窩の奥からは鋭い眼光が覗いていた。種族は同じくデュナンのようだ。
「この状況で取り逃がしたのか。ウーモスには明日にもあの鼻持ちならん若造がやってくるんだぞ？」
「た、大尉、さすがにお言葉が」
最初に声をかけた男が狼狽（うろたえ）たように周りを見回した。
「フン、何を気にすることがある。例え相手が総司令だろうが誰だろうがしょせん爵位も何もないただの雑魚ではないか。聞けば家督の継承権もない妾腹だそうな」
「しかし、総司令には絶対人事権もありますし、今回の事は少々マズいのでは」
「そこがいまいましいのだ。なぜあんな青二才がスプリガンの総司令などという立場にいるのか。ペトルウシュカ男爵の腰巾着風情のくせに」
「その男爵ですが、近々公爵家を継ぐのではないかという噂がございます」
「まあ、あのバカ公爵なら時間の問題だろうな。王の特権で強制的に爵位を剥奪されても誰も何も言うまいよ。まあもっとも、『バカだから』、という理由ではちと弱いな。弟にしても兄を失脚させる

決定的な理由が欲しいところだろうて」
「大尉も今のうちにペトルウシュカ男爵と通じておかれる方が良いのではございませぬか？」
側近の男の言葉に、大尉と呼ばれた男は見るからに不快そうに足を踏みならしてみせた。
「お前ごときにそのような事を言われる覚えはないわ」
側近の男はビクっとして肩を竦め、深々と頭を下げた。
「申し訳ございません」
「フン、お前に言われずとも手は考えておるわ。だからこそルＩキリアの首は手みやげになったものを。あそこは構成員のほとんどが尉官か佐官らしいからな。功労も大きいはずだ」
大尉はそう言って大きくため息をつくと、椅子に深々と腰を下ろした。

「で、天下のスプリガンともあろうものがなぜ失敗した？いかに風のフェアリーと言えどあの場所では袋のネズミだったろうに？」
側近の男は再び深々と頭を下げてみせた。そして、そのままの状態で答えた。
「誠に申し訳ありません、ザワデス大尉。実は」
「なんだ？」
「恐れながら申し上げます。どうやら向こうには高位のルーナーが居たようです」
「ルーナーだと？『風のルＩキリア』にか？」
「我が隊のルーナーが言うには、脱出には姿を消す高位ルーンを使ったのではないかと。廊下で姿が見えない何者かにぶつかったと言う兵士もおりましたので、転移ルーンではなく、姿を隠すルーンだろうと言うことです」
ザワデスは腕組みをして小さくううむ、と唸った。
「どちらにしろ、それほどのルーンを使えるヤツがルＩキリアにいたと言うことか？」

「あの地下へ入ったのは、フェアリーのレイン中佐と同じくスリーズ大尉、それに旅の子供の三名ですから、おそらくその子供がルーナーでしょう」
「一応、ユグセル公爵の滞在している宿はルーナー部隊に包囲させていますが、いかがいたしましょう？」
ザワデスは大振りの酒壺から手酌でビールをもう一杯タンブラーに注ぎ入れると一気に飲み干して立ち上がった。
「急襲に失敗したのだ。もう手は出すな。相手が相手だ。下手な監視はせずに全部隊を撤退させて、当初の目標に当たらせろ」
「は。しかしみすみすの手柄をよろしいのでしょうか？」
報告に来た男はおそるおそる伺いを立てた。
「手柄だと？」
ザワデスは小さく鼻を鳴らした。
「お前のその頭の中が空洞でないなら俺の言ったことがわかるはずだ」
「と、申しますと？」
「我が部隊に姿を消すルーンが使えるほどのルーナーがいるのか？」
「そういうルーンを使える若いルーナーがバード庁に居るとは聞き及んでおりますが、残念ながら我が軍にはおりません」
「その特級バードと同等のルーナーを相手に、低位のルーナーどもが一体何をどうするというのだ？」
「は」
「下手に近づくと容易に返り討ちにあいかねん。中途半端な監視も同様だ。スプリガンは完全に姿を消さねばならん。いや、スプリガンが動いたという事実は残してはならん。下手をすると政治問題になりかねんのだ」
「は。承知いたしました」
「急ぎ伝えよ、ケニック。なあに、連中の行き先はわかっているんだ。罠を張っておけばいい。今手柄を焦る必要はない」
ケニックと呼ばれた部下は深々と頭を下げると、風のようにその

場を去った。ザワデスは忌々しそうにケニックが去った方向を見つめると、軽く舌打ちをした。

「フン。ついでの手柄にしようと思ったが、さすがはル＝キリアというところか」

＞ｉ２４４６１―１８３１＜

## 第三十話　スプリガン（後書き）

第一部　第三巻終了
次話から第四巻スタートです

# 第三十一話　キャンセラ（前書き）

第一部　蒼穹の台　第四巻スタートです

# 第三十一話　キャンセラ

＞ｉ２３４７２―１８３１＜

「応急処置だけど、一応この建物全体に反射系の高位精霊陣を張った。攻撃系のルーンが来ても詠唱者に跳ね返る。まあ、精霊属性のある攻撃ルーンなら数発は耐えられるはずだ」

「数発というと？」

「数発は数発だろ」

エイルの説明にティアナが突っ込んでいた。

「曖昧だな。三発なのか四発なのかによってこちらの対処の方法が変わる」

エイルは肩を竦めてみた。

『説明してやった方がいいんじゃないのか？』

【替わるわ】

『頼む』

「ほんなら、どれくらいのルーナーが何のルーンを何人で唱えるのか教えてくれへんか？素で唱えてるんか、それとも精霊陣を整えた上で増幅されてるんか。その辺が全部わかったらこっちかて正確な事言うたるわ」

エイルに変わったエルデがムっとした口調でティアナに挑んだ。

「わかりました。回数ではなく攻撃の強さに一定の効力を持つ精霊陣ということですね」

二人のやりとりにアプリリアージェが割って入った。

エルデはうなずいた。

「一定の回数を防ぐ精霊陣もあるんやけど、厄介なことにその精霊陣を一瞬で無効にできるごく低位のルーンがあって、実戦部隊のルーナーはまず間違いなくお約束的に最初にそれを使うんや。それをやられるとこっちがかけた強化系ルーンが全部引っ張られて消えて無くなるさかい、バカなルーナーでない限り建物に回数系の防御陣は使わへんもんなんや。それこそ回数の計算が根本から狂うしな」

「二種類の防御系精霊陣は同時に張れないということですね？」

エルデはニヤリと笑った。

「さすがリリア姉さんや。目ぇつり上げてカミつくだけの誰かさんと違って実に実践的で効果的な現状把握と専門家をして極めて妥当と思える戦術分析をしはるわ」

それを聞いてエルデのすぐ横に立っていたティアナが気色ばんだ。

「なんだと。貴様、私を愚弄するのか？」

そう言うと同時にエイルの胸ぐらをぐいっと掴んで自らの方に引き寄せた。

「言うとくけど、俺に手ぇ出した瞬間にアンタ、一瞬で灰になるで」

エルデはしかしひるまず、そう切り返した。

その様子を見て、冷静を旨とするアプリリアージェが思わず中腰に立ち上がって声を上げた。

「だめです、ティアナ！」

ほぼ同時にファルケンハインとアトラックも腰を浮かせて異口同音に声を上げていた。

「ああっ！」

ティアナはアプリリアージェの言葉で夢から覚めたように表情を変えると、エルデの服を掴んでいた手を放した。そして改めて自分の手とエルデを見比べ、その手を隠すように後ろ手に回してエルデに頭を下げた。

「す、すまない」

「なんやねん、一体」
エルデは様子がおかしい事に納得がいかない風に周りを見渡した。
そして、何かに思い当たったようにハッとすると、アプリリアージェをにらみ据えてから尋ねた。
「まさか」
アプリリアージェはエルデと目を合わすと、ばつが悪そうに少し目を伏せた。
「まさか、ティアナ姉さんってキャンセラなんか？」
ル＝キリアの司令は小さく頷いた。
【くそ……くそ。まさか】
『キャンセラって？』
【直接的な精霊履行による攻撃を一切受け付けへん特殊な体質の持ち主の事や。もちろん、自分自身も精霊履行は使えへんから、いきおい兵士としては白兵戦の能力が要求されるけどな。というか、俺はキャンセラって無属性フェアリーというか突然変異やないかな、と思ってるねんけど】
『それって、エルデはティアナには歯が立たないって事？』
【ま、普通に考えるとそうやな】
『普通に考えると？』
【キャンセラやってわかってたらどうにでもなるっちゅう事や】
『そうなのか？』
【よーく考えてみ】
『うーん』
【宿題やな。それと】
『それと？』
【今、リリア姉さんはじめ、連中が狼狽えたんは、もう一つの理由や】
『もう一つの理由』

【ルーナーがキャンセラに体の一部を触られると、一定時間は精霊履行自体が無効にされるんや】
『お、おい。それって』
【ああ、むしろやっかいなのはそっちの方やな。詠唱中でも触れられると即無効っちゅうことや。履行の詠唱時に集めた精霊の力を吸い取って解放する……能力的にはそんなところやろうな】
『それだと対ルーナー戦力としてはものすごい戦力になるじゃないか』
【ああ、そやけどキャンセラなんてもうファランドールに何人もいてへんはずや】
『そうなのか』
【元々フェアリーの突然変異種やっちゅう事に加えて、先の大戦中は見つけ次第片っ端から軍に徴兵されて最前線に駆り出されて、結果ことごとく戦死したっちゅう話や。いわゆるキャンセラ狩りやな】

エルデによると各集落に軍隊がやってきて、精霊履行を詠唱するルーナーに一人一人触らせて無効化するかを試して虱潰しに探し出したという。その時見つかったキャンセラはその場で軍隊に強制徴集されたが、その後故郷に戻ってきた者は皆無だったという。

【ま、ドライアド軍はホンマにやることがえげつないっちゅう事や】
『さっき、一定時間って言ったよな？いったいどれくらい無効化されるんだ？』
【それはキャンセラの能力とルーナーの能力の相対的な力関係次第やな】
『今、まさにその確認ができるって事か』
【せやな。でも、やっかいな話や】
『いつ敵になるかわからないからか？』
【いや、それよりも怖いのはキャンセラがこうやって一人存在してるっちゅう事実やな】

『他にもいると？』
【一人いるんやから二人いても三人いてもおかしないやろ？】
『それって』
【シルフィード王国でさえ、キャンセラっちゅう駒をを持っているっちゅうことは、他の勢力にも当然いるやろうな】
『まったく油断できないってことか』
【俺は今までも油断したことはないけどな】
『ああ』
【改めて言うとくで。ファランドールでは誰も信じたらアカンのや。生き延びたいんやったらな】
『誰も信じるな、か。誰も信じずに生き延びられたとして、それっていったい生きている意味ってあるのかな』
【またその話かいな。そんなことは、とりあえず掛けられてる呪法を解いてから考えたらええ】
『わかってる。わかってるさ』
【それと、このことをリリア姉さんが黙ってたっちゅう事も忘れたらアカンで。高位やとわかってるルーナーを前に全く動じへんのはこういう切り札があったからや。今となってはあの落ち着き払って自信満々な態度もうなずけるわ】
『そうかな。リリア姉さんはあの性格だから忘れてただけかも。だって今、珍しく思いっきり慌ててたし』

エイルはそう言いつつも、苦い思いで唇を噛みしめた。
そしてふいに、脳裏に一人の少女の顔が浮かんだ。それはいたずらっぽく笑うエルネスティーネの笑顔だった。エルネスティーネはファランドールの全てを信じて生きているような少女だ。少なくともエイルはそう思っていた。
生きるために信じることを否定しなければならないエイル達とは真逆の存在といえた。エイルにはエルネスティーネの笑顔がまぶしい訳が少しわかった気がした。

『なあ、エルデ？』
【なんや？】
『オレ、本当にフォウに帰れるのかな？』
【今更そんなことを聞きなや】
『いまだに思うんだ。これは長い長い夢で、今度目が覚めたらそこはいつもの自分の部屋に違いないって』

エルデからの返事はなかった。期待などしていなかったが、それでも肯定して欲しかった。

『お前にはわからないだろ？自分の本当の名前さえ思い出せずに、見たこともない世界でこうやってさまよっている気持ちが』
【その話はまた今度、寝言として聞いたる。それより問題は今、この状況で俺のルーンが封じられてもうた事や】
『今、攻撃されると？』
【お前さんだけの力に任せる事になるな。せいぜい頑張ってや】

場には沈黙が流れていた。
ややあってアプリリアージェは口を開いた。
「さすがですね。私達のあの反応だけで即座にキャンセラにたどり着くんですから」
「近衛軍の大元帥直属で、王女の護衛についてた精鋭って言うから、普通の剣士やないとは思てたけど、キャンセラとはホンマ、流石の俺も恐れ入ったわ」
ティアナは改めて詫びた。
「すまない。非常時に味方の戦力を殺ぐような愚かな行為を犯してしまった。償えるものではないがエイルが望むそれ相当の罰は甘んじて受けたい」
そう言うとティアナは深く目を伏せて唇を噛んでみせた。守備隊

であるという責任を自らに課している彼女にとっては、あまりに大きな失策であり、誰よりも自分を責めていたのである。

「それについては責任は私にありますね。ティアナの特性については隠しておくつもりは全くなかったのですが、機を失ってそのままにしていました。いえ、正直に言うと今、ティアナがエイル君を触るまですっかりその事を忘れていました。こうなる前に予めエイル君には情報として与えておくべきでした。至らなさ、お詫びします」

そう言って目を伏せるアプリリアージェにエルデは両手を広げてうんざりだという意思表示をした。

「まったくや。今の直情的で愚かな行為がこの局面を大きく左右する事態にならへんかったらええけどな」

アプリリアージェはその皮肉たっぷりのエルデの言葉には答えずにティアナに尋ねた。

「あなたは、シルフィード随一と言われるルーナー、ミドオーバ大元帥のルーンをどれくらい封じられるのですか？」

「大元帥はバード長でもありますから、さすがに別格です。ざっと四時間ほどで回復されました」

ティアナの答えを聞くと、アプリリアージェはエルデに向かって屈託のない笑顔を向けた。だが、その笑顔にエルデはふと違和感を覚えた。いつものような覇気が感じられないのだ。アプリリアージェの笑顔には周りに及ぼす一定の力があった。場を明るくするというと陳腐な表現に過ぎるやもしれないが、少なくとも見る者の心をいやす力が彼女の笑顔には確かにあったのだ。だが、今見るアプリリアージェに限ってはその微笑が苦しそうに見える。いや、実際によく見ると顔色もかなり悪い。

【姉さん、なんや体調が悪そうやな】

『え？』

【顔色が悪いで】

「ですって、エイル君」
「は？」
「ティアナは我が国のルーナーの頂点の立場にある人を四時間封じられるそうですよ。ふふ」
「ふふ、って」
そこでようやくエイル、いやエルデの顔色が変わった。

【えっと……あー、このオバハン、大っ嫌いやあああああ】
『どうした？落ち着けよ』
【これが落ち着いていられるか！可愛い顔して、あんな笑顔で、お前の能力はシルフィードのバード長、ミドオーバ大元帥と比べてどんなもんや？って言うてんねんぞ。今俺に謝った口で、即座に今度は挑発やで？？顔色が悪いからちょっと心配してもうたけど、思いっきり損したわ。あああああっ！ホンマになんつー憎たらしいオバハンやねん！！】
『落ち着けって』

「おそらく、ですが、向こうからしばらく襲ってくることはないでしょう。スプリガンは急襲・奇襲を得意とする特殊部隊です。こちらが少人数だとはいえ、一度失敗して警戒しているに違いないであろう相手に対して面と向かって派手に攻撃してくることはないでしょう。こちらに高位のルーナーが居ることももう情報として知っているでしょうし」
アプリリアージェは自分をにらみ付けているエルデにそう言って微笑んだ。
「少なくとも、私がスプリガンの隊長なら高位ルーンを使うルーナーが居る事がわかっている敵部隊に下手な手出しはしません。いったん全隊を引いて、作戦撤回をするか、圧倒的に有利な状況を模索して作戦を立て直すでしょう。さらに言えば、我々の名前すら知っているのであれば、その戦力の噂くらい、スプリガンにも伝わって

いるでしょう。まともな軍人であれば、不用意に手出しなどできません。もっとも」
「もっとも？」
エルデは挑むように訊ねた。
「味方の損失の多寡など一切意に介さないというなら話は別でしょうが」
「フン、妥当な分析やな」
エルデはそう言うと唇を噛むのをやめて、何かを呟き、ニヤリと笑った。そして微笑んでいるアプリリアージェに向かって左の掌を突き出した。
「四時間やったな」
「え？」
「試してみるか？ティアナ姉さんの俺に対するキャンセラとしての相対能力っちゅうヤツを」
そう言うと、エルデは今度はつぶやきではなく辺りに充分聞こえる程の声でルーンを詠唱しだした。それは一行が初めて見るエイル……いやエルデの平文によるルーン全文の詠唱だった。

「我が名はエイル・エイミイ。ファランドールの大地にウンディーネの加護を受け生を得し者なり。我は精霊の主にして僕（しもべ）、家族にして友、父にして子でありそれら永遠に続く絆を尊ぶ者なり。我は創造者マーリンの名の下で古の契約を受け継ぐ権利を有し……今まさに一つの力を欲する。汝らは疾（と）く我が呼びかけに答えよ。ここに詠じるはマーリンの子サラマンダの名において古に契約されし一つの約定なり。父サラマンダが答えぬ今、子であり孫でありサラマンダ自身である汝らこそが義務を正しく履行せよ。我が手にその力を。生きとし生けるものすべてを空に帰す大いなる炎を今まさに我に与えよ」
履行の前文を終え、契約文の詠唱が始まると、ファルケンハインとアトラックが立ち上がった。攻撃系ルーンだと読んだのだ。だが、

掌を向けられたアプリリアージェはそれを制した。

「フレイル！」

エルデが短い契約文につづいて、少し間を置き、認証文を唱えた。その場の緊張がピークに達した次の瞬間、エルデの左手から一条の炎が吹き出してダーク・アルヴに襲いかかった。

「司令！」

ファルケンハインとアトラックは悲鳴に近い声を上げた。

「動くなっ！」

アプリリアージェは短くそう怒鳴ってそれをも制し、平然と迫り来る炎を待ち受けた。

炎はアプリリアージェに襲いかかり、体全体を覆ったかと思うと、一瞬で消え去った。炎に包まれて燃え上がったアプリリアージェは、しかし何事も無かったかのようにさっきと同じ微笑を浮かべて座っていた。

「四分も経ってませんね」

そして落ち着いた声でそう言ってティアナに微笑んで見せた。

「どういう事です？」

ティアナはアプリリアージェとエルデを見比べて見せた。

「ええっと……いや、さすがにさっきのはけっこうハラが立ったんで、お遊びでちょっぴり驚かせてみようと思ったんやけど、リリア姉さんは俺がやろうとした事は全部お見通しやったみたいやな……っちゅうことや」

「いえ、正直に言って大変驚きました。キャンセラと接触して四分も経たないのにルーンを使えるだなんて。我が国が誇る大ルーナーのミドオーバ大元帥は四時間ですからね」

【フン、実際はもっと早く回復しとったんやけど、ここはグッと堪えて秘密にしといたる】

『お前、本当に大したルーナーなんだなあ』
【や、やめてんか。お前に褒められるとなんか気持ち悪いわ】
『オレはすごいものはすごいと思うだけさ。お前はすごいよ』
【キャー、もっと言うて、もっと言うて】
『いや、前言撤回。お前が基本的にはバカだって事を忘れてた』
【なんやて！】

「司令、お怪我などは？」
ファルケンハインの声にアプリリーアージェは首を振った。
「ファルは気づかなかったようですが、最初にエイル君は私に何らかの強化か防御のルーンをかけてくれて、その後であの弱い炎をかぶせただけです。だから何ともありませんよ」
「でも、俺だったらサラマンダ……の下りあたりを聞いたらとりあえず逃げてますよ。いつもながら度胸ありますねえ」
アトラックは感嘆というよりも半ば呆れたという風に言った。
それを受けてアプリリアージェは手に持ったままのカップから紅茶を一口飲んで、ほっとため息をついた。
「簡単な事ですよ。考えてもご覧なさい。まず第一にエイル君が今ここで私を傷つける理由がありません。キャンセラの事を黙っていた事についてはお冠のようでしたが、そんなことで他人を殺傷するようなエイル君じゃないことはみんなもうわかってることではないですか」
アトラックは頭を掻いた。
「まあ、そりゃそうですがねえ」
「それに、エイル君が私達の前でルーンを全文詠唱して見せてくれたのは初めてでしたね。ポピュラーな低位ルーンをあえて前文からすべてわかりやすく唱えてくれたということで、エイル君の履行能力が回復しているんだな、とわかりました。気位の高いエイル君が他人にルーン詠唱を失敗する所を見られたいとは思わないでしょう。つまり彼は短時間でルーンの履行能力が回復したことを私達に派手

に演出して見せたかったと言うことです」
「でも、なぜ履行能力が回復していると言うのがエイルにはわかったんですか？」
まさに狐につままれたといった風情でティアナがリリアに尋ねた。
「それは……」
アプリリアージェはティアナにではなくエイル……つまりエルデに向かって微笑んで見せた。
「炎のルーンを唱える前に、既に何かのルーンを唱え続けてて、それが発動したのを確認してたんですよね」
エルデは苦笑いを浮かべながら両手を少し上げて肩を竦めて見せた。
「さすがにシルフィードが誇る名将ユグセル中将やな。全部お見通しっていうわけや」
アプリリアージェはにっこり笑った。
「たぶんさっき言ったように確認の為に私に保護のルーンをかけてくれたのでしょう。もしくは炎の攻撃ルーンを無効にするような中位・高位ルーンでしょうね。その後わかりやすいように攻撃ルーンを全文唱えたのは、まあ言ってみればティアナがキャンセラだと言うことを知らせていなかった事に対する抗議の意志みたいなものですね。こういう事態を想定していなかったわけではないのですが、私の不注意なのは確かですし、エイル君の怒りはごもっともです。ただ」
「ただ？」
オウム返しに尋ねたのはエルデだった。
「やることがちょっぴり子供っぽいですねえ」
「ぐっ！」
「まあまあ」
エイルの頭の中に呪詛の言葉を並べるエルデの怒りを知らぬまま、殆ど一瞬の間にそれらをすべて把握していたというアプリリアージ

ェにティアナは改めて畏敬の念を抱いた。一兵士としての戦う能力とは別に、戦いを冷静に俯瞰して現状を認識する能力、つまりは部隊を指揮統率する才がティアナの知る軍の上層部の人間達と比べても、アプリリアージェの方が一枚どころか数枚上だと思った。

それと同時に、賢者……いやエイルの底知れないルーナーとしての能力、さらにはやや子供っぽい側面も見えなくはないが、アプリリアージェと対等に渡り合おうとするとっさの判断と周到な計算力。それを実行できる大胆さにも舌を巻いていた。

――（この二人はとんでもない）

ティアナは自身のキャンセラとしての能力にかなりの自負を持っていた。ルーナーの履行能力を一定時間無効にできるという天性の力は、ミドオーバ大元帥をして「類い希な強さ」と言わしめるほどだったのだ。

ティアナのようなキャンセラは、一般に相手のルーナーとの相対的な能力差で履行能力喪失時間は決まるが、実験ではバード長であるミドオーバ大元帥を相手に安定して四時間程度の喪失時間を与えることができており、高位ルーンを複数使える「上級ルーナー」とシルフィードで称される「バード」相手では場合によっては数日以上その力を剥奪できていた事もあったのだ。

かなり特殊なルーナーだと言われていたエイルの能力剥奪時間については、密かに興味を持っていたのだが、ティアナにとってはやや残酷とも言える結果になった。とはいえ、ティアナはがっかりするよりもまず自らの驕りを恥じていた。

一方エルデの方はティアナのそんな敗北感とは全く違う意識を持っていた。

【それにしても二分近くも履行能力が奪われるとは、戦慄の能力やな】

『シルフィードの魔法使い……じゃなかったルーナーの頂点って奴

が二百四十分なんだろ？お前は百二十倍もすごいんじゃないか？』
【フン。二分は長すぎや？考えてみ見いや。一気に事が進む戦場で二分は致命的や】
『そうなのか？』
【たぶん、リリア姉さんも俺と同じ厳しい意見やと思う。ホンマにくそったれや】
『とにかくティアナにはあんまり近づかない方がいいってことだな、今後は』
【やな。でも、一連の話で一つ気になることがあるんやけど】
『ん？』
【シルフィードのバード長、ミドオーバ大元帥と言えばファランドールのルーナーでその名を知らん人間はいてへん程の大ルーナーや】
『らしいな』
【そんなオッサンが四時間？いくら俺が世紀の天才ルーナーやから言うて二分代で中和できるものを四時間もかかるっちゅうのはさすがに不自然やと思わへんか？】
『それだけお前がすご過ぎるんじゃないのか？』
【俺は確かにかなりすごいな】
「ふん。それが言いたかったのかよ？」
【いや、それは事実やから。でもな、身内を盲目的に買いかぶると痛い目に遭うで】
『じゃあ、どういう事なんだ？』
【今考えられる答えは二つやな。一つはティアナが姉さんと口裏を併せて俺らを騙しているのか】
『なんでそんなことを？』
【まあ、可能性が無いことはないんやけど、でもどっちかというともう一つの答えの方が正解かな】
『と言うと？』
【もちろん、シルフィードのバードの長、サミュエル・ミドオーバが身内のティアナを騙してるんや】

『なぜ？味方だろ？』
【何遍も言わさんといて】
『ファランドールでは誰も信じるな、か？』
【わかってたらええねん】
『でも、その大元帥って近衛軍の最高司令なんだろ？近衛軍って要するに宮廷警護だよな？』
【そんなん言われても俺は知らんがな。とにかくシルフィードのバード長ってのは自分の弟子にも正体を見せへん用心深い男やいうことがわかったってことや。この先、もしそいつと出会うことがあっても信用はでけへんで】
『了解』
【でも、リリア姉さんはそこに疑問を持たへんのかな】
『え？』
【なんでもない】

エルデの思惑に反してアプリリアージェはキャンセラの件にはそれ以上触れなかった。ティアナをそれ以上凹ます必要もないと判断したのだろう。だが、彼女にとっては実質的な収穫があった。今後万が一事故でティアナとエイルが接触することがあったとしても、四分後にはエイルのルーンの力は回復しているという実験結果を労せずして得ることが出来たのだ。周りの人間が奮戦して四分だけ時間を稼げば、この類い希と認めざるを得ないルーナーの力は回復するという事がわかったのだから。

ただ、ある疑念が生じなかったわけではない。それはもちろん、エルデと同じものであった。

だが、それも今の彼女にとっては積極的に先送りにすべき問題だと言えた。

「話を元に戻しましょう。今後について対処の仕方を少し考えてみましたが、私達はやはりこの後ザルカバード文書に書かれていたア

ロゲリクの庵に向かう事にしましょう」
　その場にいた全員……いや、正確にはアプリリアージェとエイル、そしてテンリーゼン・クラルヴァインを覗く三人、ファルケンハインとアトラック、そしてティアナはお互いに顔を見合わせた。
「なんですって？」

【今後の事があるしな。だから、俺もまあ正解やと思う。掛け値なしにこのオバハン、司令官としては優秀やな】
『なぜアロゲリクなんだ？もう完全に罠だってわかっているだろ？』
【そやから行くんや】
『は？』
【まあ、そうは言っても現状ではオバハンにはまだ解決してへん問題が一つだけあるんやけど。まあ、それでもあいつらの目的の為には最善の方法やろな】
『罠にはまるのがか？』
【そのへんの説明はこれからオバハンがたっぷりしてくれる思うからよう聞いとき】

「罠なのは明白です！」
　ティアナが抗議した。
　アプリリアージェは小さく左手を上げた。
　そういう抗議がティアナから即座にあがることは彼女の台本の中に書かれていたことのようだった。アプリリアージェが手を挙げるタイミングはまさにティアナの台詞を待っていたかのようであった。
　上官がこういう仕草をした時はすなわち私語を慎めという意味である。端的に言えば「黙れ」という絶対命令だ。ティアナはしぶしぶ口を閉ざさざるを得なかった。
　冷静に考えてみれば何しろ相手は生半可な上官ではない。提督、それも中将というシルフィードでも数えるほどしかいない地位にある人間である。本来ならば尉官であるティアナが直接言葉を交わす

ことすら困難な程、階級に差があるのだ。

「残念ですが、このウーモスで得られた複数の情報を総合的に判断すると私達以外の「ザルカバード文書」対策用に編成されたル＝キリアの各小隊は全滅もしくはそれに近い状態のようです。少なくとも我々はそれを前提にして行動すべき状況にあると判断します。詳細は不明ですがザルカバード文書に示されている庵は本物偽物にかかわらずル＝キリアの兵士が四一五人かかりでも攻略不能な目標であることがこれで予想できます。つまりそこにはル＝キリアの兵士でさえ太刀打ちできない程の罠が存在している可能性が高いと言いかえてもいいでしょう」

一同はうなずいた。

本人のせいではないとはいえ、結果として逃げ場を失った格好になった不幸な調達屋、ベックもすでに同じ宿に合流していた。アプリリアージェは例の微笑という拷問道具を使い、ベックが持っている情報をあらかた手にしていた。

そのベックはしかし、自らの立場の不幸を憂うよりも激怒する方を選んでいた。

情報屋とはいわば「不可侵地帯」である。もちろん法律で定められているわけではないが、対立状態にあるどちらの陣営にも物資や情報を調達するかわり、どちらからも圧力を受けない事が彼らの活躍できる前提であり、それは先の千日戦争時でも守られていた不文律なのだ。

だが、今回のスプリガンのとった行動は調達屋の命の安全など全く意に介さない軍事行動と言えた。ベックにとって自らの仕事は唯一従うべき神と同義である。その存在前提を踏みにじられたのだからスプリガンに対する彼の怒りは、単純に逆、つまり敵対関係にあるル＝キリアへの肩入れとなって表れたと言っていい。

あの時、エイル……いやエルデの機転でルーンを駆使した緊急離

脱という戦術をとらなかったならば、戦いに巻き込まれて最悪の事態になった可能性は高かった。すなわち命の対価としてアプリリアージェが知りたがったいくつかの情報をベックが提供する事については何の障害も存在しなかったと言える。

ベック、いや、彼ら調達屋が持っていたスプリガンの情報はアプリリアージェ達が予想していたよりも詳細で参考になるものだった。そして自分たちの戦力も含めた手元にある全ての情報を下敷きにしてアプリリアージェが導き出したこの作戦に一同は従わざるを得なかった。

とはいえアプリリアージェの選択は彼らがもっとも予想していなかった選択肢だった。アプリリアージェ自身もそれをよくわかっていたので、彼らが納得のいく筋道を示す事にしたのである。さらに言えば今回は彼女の純粋な部下だけではない人間を含めた作戦となるため、全体の意思統一を図る事は作戦の成功率を上げる為にも最優先事項の一つであるとも言えた。

そしてアプリリアージェは、作戦選択に至る一つ一つの事象を述べ、それに相づちを打たせることで一同の意志をまとめることに既に成功しつつあった。

本来、アプリリアージェという司令官の選択に大きな間違いが無いことをルＩキリアの面々は過去の実績で知っていた。当初は突拍子もない作戦だと思っても、いったん冷静になりさえすれば彼らの小さな司令官の判断は最良の選択なのだという確信に変わる。

それはもちろん、アプリリアージェが相手の戦略を戦術で凌駕せざるを得ない立場に居続けていたからこそ掴んだものに違いない。アプリリアージェは本来、戦略を練るべき立場にいる人材なのだ。だが現実は彼女を戦略家としてではなく戦術家として際だたせることになっていた。

同じシルフィードの軍人でありながら彼女とは別の軍隊組織に所

属し、ル＝キリアの一員でもないティアナは、ファルケンハインやアトラックとは違い、アプリリアージェの優秀な指揮官ぶりを身をもって知っていたわけではなかった。実際に部下として作戦行動についたのはこの旅が初めてである。従って思いもしなかった作戦、それもどう考えても最悪に思えるアプリリアージェの選択に対して、納得が行くはずもなかった。

アプリリアージェはそんなティアナの存在を意識しながら、いつもよりかなり丁寧な言い回しで作戦にたどり着いた道筋を示した。

ファルンガ州のアアク歴史資料館に収蔵されているアトラック・スリーズの日記に、その夜のことが克明に記されている。その中にはアプリリアージェの本質が垣間見える既述がある。その一部を抜粋しよう。

「これこそが『ユグセル流』と言うべきであろう。ユグセル中将はその言葉遣いや笑顔など、表面的な部分ばかりが取りざたされ、その事をさして『ユグセル流』と呼ぶ風潮がある。しかし我々が中将の姿形から学ぶべきものは微々たるものだ。『ユグセル流』とは言葉遣いではない。状況の俯瞰的な把握を言葉に紡ぐ力を持ち、それを使いこなす事、それこそが『ユグセル流』なのだと言えよう」

アプリリアージェはこの時、ティアナを納得させることがすなわち全員を納得させる事だと判断してまさに言葉を紡いでいたのである。

「翻って我々の現状は、危機的です。もっともやっかいなドライアド軍に正体が知られ、このままではネスティの護衛という目的を果たせる状況ではありません」

一同はまたうなずいた。

「むしろ我々の存在自体が危機になっていると言い換えてもいいで

しょう」
　ティアナが一番気になっているところもそこだった。どうするつもりなのか、と。
「我々が現時点で一番重視すべきは、ネスティ一行の身の安全です。我々がその役目を果たせないとしたら、我々以外の者に後をゆだねなければなりません」
　ティアナは顔色を変えた。
「まさか」
　アプリリアージェは再び手を小さく挙げた。またしても黙れという合図だ。とにかくまずは最後までしゃべらせよという強い意思表示だった。ティアナはこの手の合図による統率形態になれていなかったが、どうやらこれも「ユグセル流」であるらしかった。
　ティアナが司令官の話に口を挟むのは二度目のことだ。ここは普通ならば『黙れと言ったはずだ』と怒鳴り声が聞こえてくる場面と言えた。
　もちろん普通の部隊ならば、である。
　だがアプリリアージェは微笑みを浮かべて静かな口調で作戦内容の説明をしながら、ただ小さく手を挙げてティアナに首を傾（かし）げてみせただけった。

　ティアナはそれを見てユグセル中将という提督の懐の深さを多少なりとも垣間見た気になった。
　相手を怯（ひる）ませるのが目的ならば司令官がとるべき態度は前者であろうが、相手に自覚を与え、学習させる目的としては後者の方が勝っているのではないか。
　ティアナはそう感じた。
　少なくとも自分には向いている「教育方法」だろうと。
　力で押さえ込まれようとすると、態度はどうあれ心が反発する性格なのを、彼女は自分で理解していた。

おそらくは隊が生命の危機に陥っている時だからこそ、アプリリアージェとしても誰かの頭に血が上るようなやりとりを徹底的に避けていたのであろう。そしてそれを実行する司令官がいるル＝キリアという部隊の結束力は推して知るべしなのだと言うことも。

「申し訳ありません」

ティアナはだから素直にそう言って詫びることができた。

「ここで我々にはいくつか選択肢があります」

アプリリアージェはしかしティアナの詫びも無視すると、いつも以上に静かな口調で作戦説明を続けた。

手に持ったカップから上る紅茶の香りを楽しむように時々一口すすりながら、まるで世間話をするような柔らかな口調で、命を賭した決死の作戦が述べられていた。

エイルはその情景を老人が語る不思議な物語を聞く少年のような奇妙な気分で眺めていた。

「手っ取り早いのは、ウーモスにいるスプリガン、おそらくは一個中隊程度でしょうが、それを殲滅して口封じをすることです。この作戦はもはや発見されてかなり時間が経つので一見遅すぎるように思えますが、調達屋の話を総合すると、もともとスプリガンは我々の掃討を目的にここに駐留しているのではなく、偶然我々を「狩る」機会に恵まれたから攻撃を仕掛けてきたと考えるのが妥当でしょう。そうでなければ特殊部隊にしては作戦が目標に対して直線的すぎますし、そもそも失敗した後の詰めも甘すぎます。はっきり言えば、今回の一件は功を焦った無能な指揮官による極めて愚かな作戦でした」

ファルケンハインはうなずいた。

そうだ。「しめしめ、やってしまえ」的な作戦に違いなかった。でなければルーナーによる包囲陣や敵が逃げおおせた時の退路監視体制などがもっと緻密に行われていたはずなのだ。

「さらに……ここからは私の推測が多くを占めますが……相手の指揮官は私達の件をまだ本隊もしくは別部隊に報告していないと考えます。任務外の作戦を行ったにもかかわらず、それが中途半端で完全に失敗しているのですからね。シルフィードならともかくドライアドの軍隊の体質を考えると今回の失敗をまず報告する事はせず、別の確実な作戦でとりあえず我々を倒してから手柄として報告するのではないかと思われます。ドライアド側に被害が出ていないことからも、報告を先延ばしにする理由付けになります。愚かな指揮官とはそう言うものです。そして次の手を打つでしょう。つまり、先方は我々の人数を既に把握済みで、失敗から得た教訓、つまり我々の能力の一端も認識済みで、すでに意識調整が行われているでしょう。もともと数の圧倒的有利は知っているのですから今度は万全を期して緻密な作戦と、かつ強力な兵力をもって我々を確実に仕留めに来るでしょう」

アプリリアージェは話の区切り区切りに少し間を置いて一同の反応を見て、次に移るという話し方をしていたが、こまで話し終えた時、ようやくニヤニヤと笑っているエイル……いや、エルデと目が合った。彼女は微笑みを深めると、少し首を傾げて見せた。だが、すぐに視線をそらしてエルデには声をかけなかった。

「さて、ここからが本題になります」

そこからアプリリアージェの声色が少し変わった。おっとりとした話し方から、やや厳しい語調に変わったのだ。

ファルケンハインとアトラックはこの変化に緊張を深めた。アプリリアージェがこうなった時は、作戦の核心に入ることは間違いないと知っていたからだ。

「ベックという調達屋の話では、スプリガンに認知されているのはエイル君と我々ル＝キリア小隊の合計五人だけです。ここが今回の作戦の構築における重要な要素となっています。つまり、我々が守

るべき本隊など彼らにとっては存在すらしておらず、従って標的ではないと言うことです。これはまず間違いないところでしょう。彼らは今、こう思っているでしょう。『ザルカバード文書にル＝キリアの小隊がおびき出され、準備の為にウーモス入りをした』と。すなわち我々小隊の本来の目的は一切漏れていないということです。ここが覆っていたら極めて厄介なことになるところでした」

アプリリアージェは立ち上がり、ゆっくり部屋を歩き始めた。エイルもティアナも、旅をはじめてこのかた、こういうしゃべり方をするアプリリアージェを見るのは初めてだった。すなわちアプリリアージェの様子が変化したことをファルケンハイン達に遅れてエイル達も認識した事になる。

「ここまでの前提で我々ル＝キリアが本隊の安全をさらに確実にし、かつ今後の作戦遂行を円滑に成す為にとる最善の行動はただ一つ」

アプリリアージェはまたここで言葉を切った。

アトラックが唾を飲み込む音がエイルにも聞こえた。

「それは、ル＝キリアがスプリガンの前で消えて無くなること」

―（それはどういう事なのか？）

ティアナはそう、喉まで声が出かかった。

それは簡単に言うべき、いや、言えるような事ではないはずだ。

もちろん、アプリリアージェは気の短いティアナの性格を知っていた。だから即座に謎解きを行って見せた。

「もちろん、みすみすこの命を彼らに差し出そうというのではなく、アロゲリクで待っているであろう罠にはまることにより我々の目的があくまでもザルカバード文書であることをスプリガンあるいは第三者に強調して再認識させ、ネスティのいる本隊から完全に彼らの目をそらす事が目的です」

『第三者』と言った時、アプリリアージェの瞳はベックを捕らえていた。もちろん、ベックにはその意味するところはわかっていた。

「これについては、スプリガンだけではなくベックを通じて調達屋

の情報網で確実な物にしてもらえるでしょう。そう、ル＝キリアの真の全滅という情報です」

そう言った後、少し間を置いたアプリリアージェに対して、誰も声を発する者はなかった。ただ、エルデだけがそんなアプリリアージェをニヤニヤ顔で見つめていた。

【ここまでは思った通りやな。ホンマに優秀な司令官さんや。仲間の死さえ計算の中にちゃんと入れ込んでるしな】

『でも、ニセモノの庵は危険な罠ってわかっているんだろ？』

【その罠の正体みたいなもんを、この年増女はとっくに予想済みなんやろ。で、その予想は俺とたぶん一緒やと思う】

『罠の正体？』

【もちろん、お互いに判断材料は同じやから、ただの推測や。そやから大外れの可能性も高い。とは言え、外れたら外れたで特に問題もないと思うけどな。それより我らがアプリリアージェ中将にとって今回の作戦で一番大きな問題やと思っているのは目の前にいる俺達やで】

『それって？』

【さてな。先に言うとくけど、俺は嫌やから】

「さて、次にル＝キリアの小隊を簡単に葬る事が出来る庵の罠について、私の考えを伝えておきます」

アプリリアージェはチラリとティアナを見た。それは「わかっているわね？」という合図ともとれた。つまり、話を最後まで聞けよ、という念押しであろうとティアナは理解し、小さくうなずいた。ティアナもそこは一番知りたかったところなのだ。

ティアナのその反応に満足そうに小さくうなずくと、アプリリアージェは再び視線をファルケンハインとアトラックの方に向けた。

「結論から言えば、アロゲリクにある「真赭の頤（まそほのおとがい）」の庵は、ルーンによって罠が張られていると考えられます。

当然ながら、かなり高位かつ強力なルーンでしょう。つまり、精霊陣を使った仕掛けであろうと推理できます。そこにはルーンを発動させるルーナー自身が駐在している可能性もありますが、我々がいつ来るかなどわからないでしょうから、条件発動型の高位精霊陣が使用されている公算が高いと思われます」

アプリリアージェはそこでいったん話を切った。一同は申し合わせたようにうなずいて見せた。エルデがゆっくり頷くのを確認すると、アプリリアージェは続けた。

「ル＝キリアにはルーナーがいません。もとよりル＝キリアは速攻をこそ旨とした短期的な急襲攻撃作戦に特化した特殊機動部隊です。作戦運用にあたって単数あるいは複数の護衛が必要なルーナーの同行はル＝キリアのその性格に相反しますから、それは仕方の無いことです。そうは言っても……いえ、だからこそ各ル＝キリア小隊が事にあたる際、罠である事を前提に、精霊陣やルーンについては相当な警戒を行っていたはずです。問題は、我々が想定していた検証および回避能力をも遙かに超えたルーンがそこにあったということでしょう。それは、あの面々が向かったにも関わらず生還者が誰一人いないという事実が饒舌に語っています」

そこまで言うとアプリリアージェは立ち止まった。最後の一言は少しだけ声の調子が暗く感じられた。

『言いたくはないが言っておく』

おそらくはそういう感情が含まれていたのだろうと、その場の誰もが感じていた。

「言うまでもなくこの作戦は大変危険です。他小隊同様、全滅の可能性が高いと言う事は私も否定できません。けれども私がこの作戦をあえて選んだのには理由があります。それは勝算があるからです。すなわち……」

そう言うと間を置き、アプリリアージェは再びゆっくりと一同を見渡した。

誰もが身じろぎせず、司令官の次の言葉を待っていた。
「我々の小隊が今回編成した他のル＝キリアの小隊と明らかに違う点が三つあります。一つは、小隊の戦闘力がかなり違います。私とリーゼの組み合わせだけをとっても他の小隊との差は圧倒的です」
【うーん。自慢に聞こえへんところがかえって嫌みやな】
『そうか？』
「二番目は、他の小隊と違い、我々はその場所がル＝キリアの小隊を全滅させるほどの危険な場所であるという情報を持っている点です。そして三番目……実はこれこそが他の二つの理由などどうでもよくなるほどの一番大きな違いなのですが」
言葉を句切ると、アプリリアージェはエルデの方を向いた。
【おいでなすったで】
『え？』
「どうでしょうか、賢者エイミイ。おそらく私の作戦はすべてお見通しだと思いますが。そうであれば私の願いはすでにおわかりのはず」
エルデはニヤニヤ笑いをやめてアプリリアージェに向かうと強い口調で言った。
「リリア姉さんの作戦には問題が大小あわせて二つあるんやけど」
アプリリアージェはそれには答えず、沈黙を守った。エルデはアプリリアージェのその態度に、予想通りと言ったような微笑を浮かべると、話を続けた。
「まあそれは勿論リリア姉さんもわかっているはずやね。小さい方の問題はそのザルカバード文書ってヤツに示されてた庵の罠を一体誰が張っているのかが一切わからへん事。スプリガン、いや、ドライアド側の罠やとしたら、そもそもこの作戦あんまり意味ないよう

な気もすんねんけど？」
　エルデはそこで言葉を切り、アプリリアージェの反応を待った。
　アプリリアージェは小さくうなずいて答えた。
「賢者エイミイ、いえ、エイル君の言うとおり、もしもその罠がドライアド側から仕掛けられたものだとしたら、みすみすさらなる窮地に身を投げるようなものですから、私達ル＝キリアが彼らの前から姿を消すという目的においてはあまり建設的ではないでしょう。ですが、本隊から注意をそらす目的においてはこれ以上のものはありません。構成数が不明瞭なスプリガンをウーモスの町中で一人残らず殲滅することは不可能です。そうなると私達ル＝キリアに残された道は二つ。庵に向かうか、撤退するか、です。実は撤退という手も考えたのですが、撤退の地理的な経路を考えると、そちらの方もかなり困難を極めると思われます。持久戦になれば我々の勝ち目、いえ、生き残る可能性はどんどん減っていきます。それに、そもそも私のねらいは庵の攻略というよりル＝キリアが全滅したという事をスプリガンと庵の罠を仕掛けた敵に認識させたいと考えたのです。実はスプリガンの件がなくても、アロゲリクの庵には我々だけでも向かう腹づもりだったんです。未知の敵の罠にかかった振りをする。それができればな、とずっと考えていました。我々が実際に全滅した場合はシルフィードの上の方では次善の策が発動されるように手が打たれているはずですし、作戦が成功した場合は予定通り本隊の護衛を続けながら旅を続けることができます」
「フン。全滅するつもりもないくせに」
　エルデはニベもなくそう言った。アプリリアージェはエルデの言葉ににっこりと笑って見せた。
「もちろん、私は作戦の成功に自信を持っています。我々はかなりの戦闘力を有しています。事前に色々と脅した私が今更こう言うのも何ですが、実のところ私の考えが正しければ我々が失敗する可能性は低いのです。むしろアロゲリクの庵にたどり着くまでが勝負になるでしょう」

アプリリアージェのその言葉を聞いて、エルデは「呆れた」という風に両手を広げて肩を竦めて見せた。
「よう言うわ。ほんなら言うけど、大きい方の問題はどうすんねん？」
「と言うと？」
「わかってるはずやろ？姉さんの作戦は、俺が参加することが前提なんやから」
「もちろん。今回の作戦はエイル君抜きに成功などあり得ません」
「俺はお断りやで」

『断るのか』
【当たり前や。こいつらの手駒になる義理なんかあらへん】
『義理とか、そう言うんじゃなくてさ』
【フン】

「困りましたねえ」
笑顔のまま、アプリリアージェは言葉通り「困った」という顔をして見せてはいるようだが、例によってあまり困ったように見えないのがエルデのカンに触るところだった。
「確かに、カレンの一件では本当に世話になったと思ってる。でも、あれはあれ、これはこれやろ？この作戦は俺には利益がほとんどないし、そもそも俺達にはあんたらル＝キリアやシルフィードのお姫様はじめ本隊の連中を助けなアカンほどの義理はない。そもそもこれはあんたらの戦争や。俺には関係ない」
エルデはそう言うとソファにドカっと座り込んで足を組んだ。
アトラックは何かを言いたげにファルケンハインの方を見やったが、ファルケンハインは目で「黙っていろ」と合図をしただけだった。
ティアナもまた何かを言いたそうにうずうずしてはいたが、とりあえずはエルデを睨むだけにした。

「うーん。そう言うと思ってました。でも実はエイル君に利益がないわけでもないんですよ」
アプリリアージェの一言にエルデの眉が動いた。アプリリアージェはその反応を見ると満足そうに少し目尻を下げて続けた。
「エイル君の目的は最後の庵を攻略して、卒業試験を突破すること。いえ、かけられた呪法を解くことですよね」
「せや。そやからあんたらの戦争に荷担する必然性がないやろ？本物の庵とは明後日の場所にあるニセモノの庵をわざわざ攻略しても時間の無駄なんや」
アプリリージェはしかし顔色一つ変えずに続けた。
「いえ。もう一度言いますが、この作戦はエイル君にも利益があります。だいたいエイル君は大切な事を一つ忘れてます」
「大切な事やて？」
アプリリアージェはうなずいた。
「つけられていたわけですから、エイル君の姿形、そして名前くらいはもうスプリガンには調べが付いてますよ。瞳髪黒色の少年なんて、はっきり言ってかなり珍しいですからね。立ち寄ったと思われるランダールに調査すればそのくらいはすぐでしょう」

『確かにそうだな』
【そんなもん、わかってるわ】

「エイル君も私達とそこで命を落としたら、これからの煩わしい追求から多少なりとも逃れられますよ。さもないとただでさえ先を急ぐ旅なのに、煩わしい事で時間をとられます。だいたい、マーリンの賢者がシルフィードの軍人を逃がしたなんて事が知れたら」
エルデはアプリリアージェの言葉に何も答えなかった。
アプリリアージェはエルデが即答しないのを受けて微笑んで言葉を続けた。
「いえ、言ってしまってこういうのも気が引けるのですが、実はそ

っちの方はどうでもいいのです。エイル君の事ですからルーンでの変装や姿を隠すなんて事は簡単でしょうし。ですからここはそんな言葉の駆け引きなどは一切なしで、私から一つ交換条件を出しましょう」

「交換条件？」

エルデはこの言葉には反応した。

実際、エルデ自身も顔と名前がスプリガンに知れたであろう事には少し頭を悩ましていた所だった。髪の色を変えてごまかそうか、などという小手先の事は既に考えてはいたが、ル＝キリアのメンバーとの別れ方もまだ決めていない段階であった。

アプリリアージェはエルデにうなずいて見せた。

「この作戦で共同戦線を張って勝利に力を貸してくれたなら、今後我々はエイル君の呪法を解く事を最優先に動きます。つまり、この後は皆で行動を共にしてエイル君の目的の為に全面的な協力をするということです」

「なんやて？」

【フン、そう来たか】

『それは、願ってもない事なんじゃないのか？』

【そう思うか？】

『思うさ』

【奴らの目的は何や？思い出してみ】

『「真赭の頤」の捜索』

【そう言うことや。どっちにしろ行動は一緒やろ？騙されたらアカン】

「どうでしょう？悪い提案ではないと思いますが」

エルデはアプリリアージェの申し出に小さくため息をついた。

「それって、元々の話のまんまやないか。お互いの利害が一致しているからしばらく一緒に行動しよか？っつう現状のままやろ？それ

が俺の利益になる？」
　エルデの強い語調に、しかしアプリリアージェは全く動じることなく、静かな口調のままで答えた。
「現状のままだと、エイル君は我々に対してどんどん不利な立場になっていくでしょう。呪法による次なる麻痺が起きたとき、あなたは旅を続けられないかもしれない」
「なっ！」
「さらに言えば！」
　エルデが思わず何かを言おうとしたが、アプリリアージェは珍しくそれを遮って言葉を続けた。
「足が動かなくなったら？目が見えなくなったら？エイル君はそれでも今まで通り安全に旅を続けられますか？追っ手もいるでしょう。困難だとエイル君も認めている俺の攻略がさらに難易度を増すわけです。そうしているうちにさらに麻痺が進めば？」
「そんなこと」
「しゃべれなくなったらさすがにエイル君でもルーン自体を使えなくなるんじゃありませんか？そうなればもはやルーナーでもありませんね」
「それは」
　アプリリアージェはエルデにしゃべる間を与えなかった。かぶせるように、そして早口ながらはっきりとした力強い声で畳みかけた。
「私は、いえ私達は全面的にそんなエイル君の支援をしようと言っています。我々は俺の攻略に役にたつはずです。エイル君が一人で一ヶ月かかるのなら、我々が力を合わせれば三週間、いえ、二週間にできるかもしれません。さらに、賢者ザルカバードと対面出来た暁には、エイル君の用事の方を優先しましょう。呪法の解除がなされるまで、我々は一切賢者ザルカバードには手出しをしません。いえ、そもそも「真赭の頤」に手出しをする事などはないと今は考えていますが……」
「――」

「私達の本当の目的は、賢者シグ・ザルカバード……「真赭の頤」そのものではありません。まだ特定されていないエレメンタルの探索です。「真赭の頤」は彼らに続く近道を示してくれる道標であろうと考えたからこそ、当初の目標になっているだけなのです。ザルカバードと対峙することが目的ではなく、会うことが目的なのです。信じてもらえないかもしれませんが、我々の旅の本当の目的はいち国家の私利私欲や保守ではなく、このファランドールという世界そのものの維持という意志が根底にあります。私たちが聞いているのは、その為には「合わせ月」の日に四人のエレメンタルが一同に集う必要があるということのみ。我々はただそれを補助する。それが目的です。我々はその目的に誇りを持っているからこそ、文字通り命を賭けているのですよ」

アプリリアージェはそこで言葉を切った。

エルデは大きくため息をつくと、はき出すように言った。

「またその伝説の話か」

「その伝説を真実と信じて行動している人間が、現にここにいるのです」

『エルデ』

【ああ、もう、やかましい】

「その言葉、どうやって信じろって言うんや？俺の目が見えず、足も使えへん状態で師匠に会うたとたん、『これでアナタは用無しでーす。そんじゃねー』って言われて姉さんの剣でサックリ首を落とされへんっちゅう保証はないんやろ？そもそもファランドールの平和の維持なんて俺にとってはあんまり関係ない話や」

アプリリアージェは首を振った。

「私はファランドールの平和などと言う言葉は一言も言っていません。平和などというものは世界がそこに存在していて、その世界で人間がちゃんと生きていてこそ初めて口に出来ることですからね」

「ファランドールそのものが崩壊するとでも？……いったいシルフィード側はどこまで伝説に踏み込んでるんや？」
「私は専門家ではなく、作戦を実行するただの兵隊なのであまり詳しいことまで知らされてはいません。ただ、我々には既に味方として二人のエレメンタルが居るという事実があります」
アプリリアージェはエルデの言葉を待たずに続けた。
「もっともそんなことを私が言っても始まりませんね。エイル君の事ですからそう言うと思っていました。そしてそれはもっともな質問だと私も思います。私がエイル君の立場でも同じ問いを投げかけたでしょう。そこで私は私の提案に対して担保を付ける事を提案します」
「担保？」
「ええ。かつて私は我が国のバードから聞いたことがあります。ある特定の言葉を唱えるか、もしくは一定の動作を行うと発動する禁じられた特殊なルーンがあると」
このアプリリアージェの言葉にいち早く反応したのは、ティアナだった。
「まさか？」
アプリリアージェはうなずいた。
「特定の地位、もしくは役職にある者だけが許される高位の特殊ルーン、「死の宣告」の存在です。特定の地位と言っても、そもそもほんの一握りの限られたルーナーのみが使えるという特殊なルーンのようですね。私達は要するに正教会の賢者のみが使えると聞いていますが。一度かかった相手はそのルーナーが特定の言葉を唱えると、例えいくら距離が離れていてもルーナーからつけられた「精霊斑」と言われる徴がエーテルと反応してたちどころに死に至るというルーンです。賢者エイミイならばその手のルーンもご存じでしょう？それを全員に今ここでかけて下さい。本音を言えば私だけにして欲しいところですが……。それで足りないというのなら我らがシルフィードの兵士ならば皆喜んで作戦のために命を担保にするでし

ょう」
　エルデはさすがにアプリリアージェの言葉に目を見開いた。だが、すぐに苦虫を噛んだような渋い表情をつくり、投げ捨てるように呟いた。
「フン。そんなルーンを俺が使えるって？」
　アプリリアージェはうなずいた。
「マーリン教の賢者は神に代わり咎人に死の宣告を告げる事ができる。そしてその咎人が罪を繰り返すとき、神の言葉で黄泉に誘う。いわゆる国際法の附章に多々ある賢者特権の処刑権に『猶予ある死の宣告』と書かれている事がありますが、そのルーンの一種の事ですよね？賢者に関する知識としては半ば常識の範囲です。それともこれは間違った解釈でしょうか？」
　エルデは頭を掻いた。
「半分は正しい知識や。国際法に記述されている『猶予ある死の宣告』はルーンやのうて呪法の一種で、賢者であればその呪法が使えるのが前提やな。ただし、リリア姉さんが言うたとおりのルーンもある」
「私はルーンの方についてはさらに聞き知っています。そのルーンが発動するのは、ルーナーが特定の言葉を唱えた時はもちろん、ルーナー自身が死んだ時。すなわち、我々がエイル君の命を取る事は自殺行為そのものです。我々アルヴ族が自殺を忌み嫌い禁忌としているのはご存じの通り。そう言うわけでエイル君が死ねば我々ももろともですから、エイル君の命を最優先で守る必然性が生じます」
　アプリリアージェはここまで言うと、ちょうどエルデが座っている正面に来て立ち止まった。小柄なアプリリアージェはさらに片膝を付けて視線をエルデと同じにして、改めて問いかけた。
「この担保では足りませんか？」
『おい、エルデ！オレ達にとってはこれ以上ない申し出じゃないのか？』

【おまえさんはネスティを助けたい、とかしょーもないこと考えてるだけやろ？】
『か、関係ないだろ。どう考えてもオレ達だけで攻略するより数倍楽できるんだぞ』
【あー！もう、やかましいっちゅうねん！】

エルデは頭を左右に何度か振ってイライラした状態を押さえるような仕草をして見せた。そしてため息を一つついて、ほとんど誰にも聞こえない程度の独り言を呟いた。

―（まったく……甘すぎるわ）
「はい？」
エルデの独り言を微かに聞いたアプリリアージェが問い返した。
エルデはしかしそれには答えず、小さく深呼吸をして、こみ上げてきた感情……おそらくはエイルに対しての怒りの虫をおさめると、つまらなさそうにつぶやいた。
「わかった。そこまで言うなら、話に乗ろか。さっきはああ言うたけど正直、あの時に命を助けられた恩を全部返したとは思てへんし」
エルデの言葉にアプリリアージェの顔が輝いた。
「では？」
「交渉成立や。でも、まず最初に担保をもらうで」
アプリリアージェはうなずいた。

アトラックはファルケンハインとティアナの表情を見比べた。ファルケンハインはいつものようにアトラックを無視して無表情を決め込んでいたが、そこにはさすがにとまどいが浮かんでいるように見えた。一方ティアナはファルケンハインとは正反対に感情を押さえようともしていなかった。唇を噛み、拳を思い切り握りしめて、エルデを睨んでいた。
「では、お願いします。何か準備するものはありますか？」

アプリリアージェの問いにエルデは無言で首を左右に振った。
「行くで。まずはリリア姉さんからや」
エルデの宣告ともとれることばに、アプリリアージェはゆっくりとうなずいた。その顔には一切の変化は見られなかった。ただ、いつものように穏やかに微笑んでいるだけである。
「ふん。ええ度胸や」
エルデはアプリリアージェのその微動だにしない様子を見ると苦笑を浮かべた。だがそれも一瞬で、その目を閉じて次に開いた時にはあらゆる表情が消えていた。
エルデはアプリリアージェの緑色の瞳を見据えると、右手を広げてアプリリアージェの方に突き出して、小さく呟いた。
「ノルン！」
すると、何もなかったはずのエルデの手に、いつもの三色の木の枝で撚（よ）られた儀仗が現れた。
右手の中指にはめられている三色の指輪が、主人の呼びかけに応じて一瞬にして儀仗に姿を変えたのだ。
エルデが一同の前ではっきりと声を出してその名前を呼び、儀仗を取り出してみせた……つまりは種明かしをしたのはそれが初めてだった。
いつもは、気がつけばいつの間にかエルデが長い杖を持っている……そういう認識だったのだ。

その行為は「交渉成立」と言ったエルデの承諾書のようなものなのかもしれない、とアプリリアージェは思った。
エイルは手の内を一つ見せたのだ。

エルデはノルンと呼ぶ儀仗を強く握ると続いて違う名前を口にした。
「ウルド」
その言葉にまたもや儀仗が反応した。三色の木で撚られたノルン

という儀仗が、呼びかけに応じて一瞬で黒一色に変化したのだ。
その黒い杖が何を意味するのかは誰もわからなかったが、それがこれから行われる恐ろしいルーンの準備なのだと言うことは明らかだった。
エルデはアプリリアージェの変わらぬ静かな緑色の瞳を見据えると、詠唱を開始した。
「ウィール・デルダモデグ・ワヴド」
それだけだった。
ごく短い、まさに一瞬の詠唱が終わった瞬間、儀仗の頭頂にいくつかはめ込まれているスフィアの一つが白く輝き、そこからまばゆい光の筋がアプリリアージェに向かって放たれた。
それもまた一瞬の事で、光がアプリリアージェの胸を貫いたかと思うと、もう次に瞬きをした時には何事もなかったかのような状態で二人は向き合っているだけだった。
ルーンは発動したはずだった。だがエルデは何も言わず、詠唱を終えた時のままの姿……杖を握り、それを水平に構えたままの姿で立っていた。

アトラックは怖いものでも見るように、アプリリアージェと、そしてエルデを見比べた。何度見てもエルデはもちろん、アプリリアージェにも変化は現れていなかった。
「あの、「死の宣告」というルーンはそれで完了？」
アトラックはおそるおそるエルデに尋ねた。
エルデはアトラックの方をチラリと一瞥したが、問いには答えずアプリリアージェに視線を戻すと、声をかけた。
「リリア姉さん、気分はどないや？」
アプリリアージェは心配そうに見守るファルケンハイン・ティアナ・アトラックの表情を順番に見やった後、テンリーゼンをチラとかすめ見て視線を落とし、自分の両掌を広げて見た。
「なんだか、とてもスッキリしていい気分です」

「え？」
アトラックは思わずそう声を上げ、ファルケンハインをみやった。
「その恐ろしいルーンは、副作用で気分を高揚させたりする効果もあるものなのか」
ファルケンハインはアトラックには目をくれず、独り言のようにそう呟いた。
次は自分の番、と彼は決めていたのだ。それだけにアプリリアージェの感想には興味を引かれた。命を預けたアプリリアージェが決めた事だ。ルーンを受けるのは全くもって問題はない。喜んで受けようと思っていた。だが、望めるならルーンを受けた後に肉体的・精神的な苦痛を伴わないとありがたいと考えていたのである。もちろん、それは戦闘に差し支えるからだが……。
「うん。だいぶん顔色もようなってるで、リリア姉さん。さっきは唇なんかほとんど土気色やったしな」
エルデの言葉にアプリリアージェの太めの眉が大きく反応した。
それを見てエルデはしてやったりという顔でニヤリした。
「命を張った作戦の直前なんやろ？万全の体調とスッキリした気分でサエた指示を頼むで、司令殿」
「え？」
アプリリアージェはこれまた珍しくキョトンとした表情でエルデを見上げた。
「さっき言うたやん。これから皆さん、命を張って俺の事を守ってくれはるんやろ？」
エルデはそう言うと儀仗を床に突き、肩を竦めて見せた。
「さっさと作戦実行と行こ。時間はそんなにないはずやで」
「エイル君……」
ファルケンハインとティアナとアトラックはお互いに顔を見合わせた。

「いや、俺達へのルーンはどうするんだ？」
ファルケンハインが儀仗を指輪に戻したエルデに声をかけた。
「え？そう言われてもファル兄さんはじめ、あんたらはみんな元気そうやん？」
エルデはとぼけて答えた。
「エイル君がかけてくれたのは「死の宣告」のルーンではなくて、どうやら回復系のルーンですね」
アプリリアージェはファルケンハインに言った。

「回復系だと？」
ティアナがそう問いかけると、エルデは事務的な口調で答えた。
「我々マーリンの賢者は確かに国際賢者法で許された特権として無裁判で処刑もできるし、遅延呪法である『猶予ある死の宣告』も使える。でもそれは各条約に則した咎人に対してのみ許される行為とされている」
「それは知っているが」
エルデは悪戯っぽい笑顔を浮かべると、元の古語調で続けた。
「ほんなら、咎人でもないリリア姉さんやティアナ姉さんにそんなルーンを使えるワケないことくらいわからんか？」
「あ……でも、この場合は」
ティアナの言葉をエルデは厳しい口調で遮った。
「見損ないなや。俺はマーリンの賢者や。賢者の名において定められた法に従うだけや」
「しかし」
「しかしもカカシもないっちゅうねん。でけへんもんはでけへんねん！こう見えて賢者は自らの作った厳しい法で縛られてるんや」

『エルデ、お前』
【や・か・ま・し・いっ！】
『わかったよ。お前はそういう奴だ』

エイルは心の中で苦笑していた。
傲岸不遜で高慢で鼻持ちならない態度。人を見下し、残酷で冷徹を装う。エイルは時にエルデに対して憎しみさえ抱く事もあった。しかし、エルデの根底に流れているものは、今アプリリアージェに対してとった行為が雄弁に語っていた。
それを知っているからこそ、自分の体を任せる事が出来るのだとエイルは改めて思う。
ある意味、これほど強い結びつきはないだろう。文字通り苦楽を共にする奇妙な関係は、口先がどうあれ精神的な結びつきが強くなることは間違いない。
だからこそ、そんなエルデとの奇妙な関係が既に日常になっていることに思い至ってエイルは愕然とするのだった。

「ええっと。そう言うものなのか？」
「そう言うもんや」
どちらにしろアトラックは自分達に呪法がかけられないことを知って正直なところほっとしていた。緊張感が解けると、今度はおかしさがこみ上げてきた。

―（なんか、エイルって外向きには思いっきり意地っ張りな子供みたいですね。屈折してるというか天の邪鬼というか）
―（確かに素直ではないことは確かだな。だが、）
小声で囁くアトラックに珍しくファルケンハインが同じく小声で答えてきた。
―（悪いヤツじゃない、というのも間違いのないところのようだ）
―（まあ、目つきは悪いですけどね）
―（それよりアトルは司令の体調不良に気づいていたか？）
―（いえ、全然。あ、でも今日、例の暴走未遂があったんですよ！いろいろあって忘れてましたが）

―（そうか。体調不良と関係がありそうだな）

「これ以上はない援軍を得たところで、早速作戦の実行に移ります」

エルデの行動にさすがのアプリリアージェも一時は困惑していたが、切り替えは速かった。

一見すると布のような素材で出来た白い面を懐から取り出すと、それで顔を覆った。テンリーゼンがしている面と同じようなものだった。

顔を隠す、それだけの事だったが、微笑をたたえた顔が無表情な面に変わっただけで、アプリリアージェの持つ雰囲気がガラリと一変した。

これがいわゆる「白面の悪魔」の姿であろう。

白面を取り付けたアプリリアージェは一同を見渡した後、顎を少し上げて少し深呼吸すると、短くそして鋭く告げた。

「これより予定通り作戦に入る」

アプリリアージェの言葉遣いもまた、戦闘用に変化した。それはすなわち戦いの開幕を知らせる合図であった。柔和な笑顔で一行を和ませていたダーク・アルヴの美少女は、一瞬にして悪魔の役になりきったのだ。

「了解」

ファルケンハインとアトラックは即座に反応してシルフィードの海軍式敬礼をした。ティアナはそれを見てあわてて近衛軍式の敬礼で後に続いた。

【ほう】

『夢で見た時の怖いリリアさんの感じだ』

【ついに本性現したってとこやな】

『本性なのかな』

【「白面の悪魔」の由来になった面か。リリア姉さん、本気や言うことやな。俺達も覚悟決めなあかんな】

『もちろんだ』

# 第三十二話　脱出

「本当にネスティ……いえ、ネスティ達に会ってこなくていいんですか？」
「うん。作戦が終わったらまた会えるだろ？」
アプリリアージェはエイルのその答えを聞くと、その件に関してはもう何も言及しなかった。

「司令。今、合図がありました」
明かりの消えた部屋の窓から外の様子をうかがっていたファルケンハインが低い声でそう報告した。
彼らの宿の窓の外からは、エルネスティーネ達一行が泊まっている宿の部屋が遠くに見えていた。もちろんその位置関係は偶然ではない。そのあたりの段取りや設定はアトラックが得意とするところだった。
そのエルネスティーネ一行の泊まっているはずの部屋の明かりがいったん消え、またすぐに灯った。それは予め打ち合わせをしていたとおり、準備が出来たというティアナからの合図であった。
「では、手順通り、これより脱出する」
「了解」
エイルを含めた三人の声が重なった。

エイルは……いや、声を制御していたエルデはすぐにいくつかのルーンを連続して唱えた。足音を消すルーン、物理的な攻撃を和らげるルーン、そして低位ルーンを無効化するルーン、存在感を消すルーンなどであった。あらかじめ説明が無ければエーテル光と呼ばれる光が放たれるだけで、何が行われているのかすらわからないほど短時間で準備は済んだ。

結構な数の強化系ルーンを、しかしほとんど詠唱時間なしで重ね掛けをする様子を見て、改めてル＝キリアの一行は驚愕していた。説明を受けた高位ルーンが一瞬の詠唱で終わるような物ではないことはわかっていたからだ。

姿を消す事が出来るルーンは打ち合わせの際にアプリリアージェが却下した。敵に対する利便性よりもお互いの姿を確認出来ないという危険性を懸念したのだ。

それはすなわち彼女たちの誰か……もしくは全員が特殊な範囲攻撃を持っていると考えられた。同士討ちを避けるためにも味方の位置を把握しなければならないという事なのだろう。だが、もちろんエイルはあえてそれを確認はしなかった。

「我々の使うフェアリーの力は場合によっては味方をも傷つけるものもある。互いの気配を感じることはもちろん出来るが、それよりも我々は姿を消したままで戦った経験がないと言う事が問題だ。とまどいが生じると、その一瞬が命取りになる可能性もある。有視界で普段の実力を出す方がいいだろう」

ファルケンハインがアプリリアージェの言葉を引き継いで短い説明をしたがエルデもその意見に賛成した。

【そもそも強化ルーンの多くは、別のルーンを唱えたりフェアリーのエーテル開放があったらその時点で無効化されるしな】

『そうだったな』

【ま、世の中そんなにうまい話ばっかりやないって事やな】

エイルはエルデからの情報を自分の口で一行に伝えた。

白面のアプリリアージェは頷いた。

「足音を消すルーンですが、充分な余裕がある場合を除いて効果が切れてたとしてもルーンのかけ直しは無用。詠唱時間が短いとはいえエイル君に一瞬隙が出来る可能性は否めません。それに範囲ルー

ンは夜だとルーン発動時のエーテル光が目立ちすぎます」

『まあ、オレ達にはルーン詠唱時の隙は無いんだけどな』

【今はそこまで種明かしをしてやる必要はないやろ。まあ、隙はともかく範囲系の強化ルーンはエーテル光が目立つヤツが多いのは確かやし】

「じゃあ打ち合わせ通り経路上のヤツらはオレが眠らせるけど……本当に大丈夫なのか、ファル兄さん？」

「何がだ？」

「オレ、見た目ほど軽くはないんだぜ？結構骨が太くてさ」

「全く問題ない」

【アルヴの体力をなめたらアカン】

『そうなのか？』

【うん。ましてや鍛えられた精鋭の兵士。さらにエーテルの強い風のフェアリーやしな】

『ふーん』

【あの時も軽々と俺らを運んでくれたんを忘れたか？】

『ああ、そうか』

ランダールを出たところで負傷を負った際もファルケンハインがエイルを運んだのだ。しかも短距離ではない。目を覚ました時に場所を聞くと、信じられないほどの距離を稼いでいた。

アルヴではないデュナンのアトラックにしても、カレナドリィをランダールまで運んでいたのだ。二人とも並の体力ではない事は明らかだった。

「エイル君、最後に一つ」

一通りの確認事項が終わると、アプリリアージェはエイルに声を

かけた。その声はいつもの柔らかいアプリリアージェに戻っていた。
　表情は白面のせいで全くわからないが、おそらくその下にはいつもの微笑があるのだろう。戦闘態勢の時には軍人然とした言葉遣いと口調になるアプリリアージェだが、エイルは軍人でも、ましてや自分の配下でもない。つまりはそういう一線を引いているということに違いない。ただし、普段よりかなり早口ではあった。
「何？」
「私にさっきかけてくれた回復系のルーンの事です」
「うん」
「どのくらいの時間、有効ですか？」

【人に依るけど、おおむね半時くらいやろな】

　エイルがエルデの言った内容をそのまま告げるとアプリリアージェは数秒考えた後に、口を開いた。
「もしエイル君の方に問題が無いのなら、もう一度かけてくれませんか？」

【！】

「不安要素は一つでも排除しておきたいのです」

『おい、エルデ』
【姉さん、俺らが思っているよりも体調が悪いんやろな。だから自信が持てへん……不安なんや】

　心の中でエイルが促すよりも早く、エルデは手に持った儀仗、ノルンを掲げると前回と同様に黒い儀仗ウルドを呼び出し、その上で詠唱を唱えた。短い詠唱が終わると、再び光の筋がアプリリアージェを射た。

「ありがとう。感謝します」
「ただし」
エイル……いや、エルデは小さく礼をしたアプリリアージェに向かって右手に握ったウルドを突き出して見せた。
「次はしばらくかけられへんから、そのつもりで頼むわ。あと、これは表層的に傷を治す一般の治癒ルーンと違うて、効果が劇的な事でもわかると思うけど、実は呪法の一種や。体組織内部に入り込む類のもんやから、切れたときの反動は姉さんが思ってるより大きいで。そやから本来、重ねがけは基本的には御法度なんや」
「三回目をもしかけてしまうとどうなりますか？」
「ルーンが切れた時は……場合によっては心臓がその反動からくる負担に耐えきれずに停止するやろな」
「場合によっては、ですか？」
アプリリアージェの言葉に反応してあからさまに苦虫を噛み潰したような顔をすると
「言いかえるわ。アルヴィンやダーク・アルヴの体力ではほぼ絶命や。アルヴなら助かる可能性の方が高いけど、今度は後遺障害が残る」
そう言ってそっぽを向いた。
この件については終わり、という合図である。アプリリアージェは勿論エルデの意向を汲んだ。
「――了解しました」

『本当なのか』
【そうやって脅しとかへんと、姉さん三回目も躊躇無く頼んでくるやろ？本当にこの呪法は緊急用なんや。本来、体にええことあらへんしな】
『なるほど、そうだな』

アプリリアージェはエイルにうなずいた後、ファルケンハインと

アトラックに向かって短く告げた。
「これより我が小隊はウーモスを脱出して、半時以内に当面の安全圏を確保。その後体勢を立て直し、アロゲリクの渓にある庵とやらを目指す。詳細は打ち合わせの通りだ」
「了解」
「聞いての通り半時以内に安全圏を確保出来なかった場合は、私の行動不能が推測される。その場合は、別途指示がない限り自動的に指揮権を副官のクラルヴァイン少将に移譲する。指揮権変更時の合図は私ではなくクラルヴァイン少将が出す。なお、私が自ら指揮権の回復を告げない限り、クラルヴァイン少将の指揮権は無期限で継続されるものとする。皆、いいな?」
テンリーゼンとアトラックはうなずいたが、ファルケンハインはたまらず声をかけた。
「司令……」
だが、アプリリアージェはファルケンハインが皆まで話すことを許さなかった。
「この件についての質問は許可しない。そしてこの命令は絶対だ」
「はっ」
ファルケンハインが言いたかったことはアトラックにもわかった。アプリリアージェの体調が思わしくない事を懸念したのだろうと。そして今まで何度かあったアプリリアージェのエーテルの暴走は今日と同じようにアプリリアージェ自身の体調がかなり悪い時に起こった事なのだと確信していた。普段であれば感情の起伏があってもそれにエーテルが過剰呼応するのを普通に制御できるものなのだが、体調が悪いとそれがままならないのはどんなフェアリーであろうと同様だった。だが、本当に気を入れて制御しようとしても不可能なほどエーテルが暴走していくなど、よほどの事がない限りはありえない。言い換えると、そこまでの体調不良がアプリリアージェには時々発生し、それは慢性的に彼女が持っているものだと言うことなのだ。纏うエーテルが強力なだけに、その反動もまた比例して大き

くなっていくのである。
　ファルケンハインはそれについての懸念を口にしようとしたのだろう。アプリリアージェはもちろん、ファルケンハインの意図を察知してあえて制止したに違いない。

『さっきの話の続きだけど重ねがけが危険な呪法って二回までは問題ないのか？』
【そやな……】
　エルデはエイルの問いかけに、少し間を空けて答えた。
【それでもたぶん、どんな豪傑でもルーンが切れたときには失神するやろな】
『おい、それって』
【かけてくれ言うたんはリリア姉さんやで】
『しかし、それじゃ』
【ああ、戦闘不能や。どっちみち半時以内に安全が確保できる所まで逃げられへんかったら体調不良の姉さんは足手まといになるわけやろ？なに、大丈夫や】
『大丈夫なのか……』
【いざとなったら敵さんは俺が皆殺しにしたる】
『おい！』
【俺たちはここで死ぬわけにはいかへんやろ？】
『……』
【それとも俺たちだけ逃げて、リリア姉さん、いやル＝キリアはスプリガンに殺された方がええのか？ま、その方がいらん心配はなくなるけどな】
『意地が悪いヤツだな、お前』
【ふん。どっちにしろリリア姉さんは重ね掛けがヤバいって言うのは俺が説明するまでもなく理解してるやん。せやから時限付きの副官任命をしたんやから】
『あ、そうか』

一同を見渡したアプリリアージェは最後にテンリーゼンを見つめた。テンリーゼンは何も言わずにただ、小さくうなずいて見せた。
「いくぞ」
アプリリアージェの合図を受けてファルケンハインがエイルに声をかけた。
「よし。いくぞ、エイル」
その言葉を聞いたエイルは無言でファルケンハインの傍に立った。ファルケンハインはかがむとエイルに背中を向けた。エイルはファルケンハインの大きな両肩に手をかけると広い背中に体重を預けた。すなわち、エイルはファルケンハインに負ぶさる格好になった。

【まあ、わかってはいるんやけど、なんというか……格好悪いなあ】
『言うなよ』
【本気で移動する風のフェアリーには、俺らみたいな普通の人間はまずついて行かれへんねんからしゃあないわな】
『あの、高速移動できるルーンとかで何とかならなかったのかよ』
【ああ、あれは緊急用やもん。効果はほんの数十秒やから、こういう場合は全然役に立たへんな。一度詠唱してもうたら、再発動までかなり時間かかるルーンやし】
『やれやれ』

「しっかり捕まらないと振り落とすぞ」
そう言うとファルケンハインは開かれた窓から軽々と飛び降りた。
「うわ」
エイルは思わず小さく声を上げると、あわててファルケンハインの肩にしがみついた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

町の城壁が近づいてきていた。
一行の警戒にもかかわらず、スプリガンの姿らしい影は見えない。まるで出て行って下さいと言わんばかりだ。アプリリアージェはそれがかえって気がかりだった。
警戒しつつ城壁までたどり着いたところでエルデは手を挙げて一行を止めた。
城壁を前にして、一行は手招きをするエルデを中心に集まった。
エルデは白面のアプリリアージェに小さくうなずくと、儀仗を取り出して短く何かを唱えた後で小声で全員に告げた。
「俺が通り抜けた後、合図をしたら続いてくれ。ただし俺と同じ道を、や。少し道がズレたら命の保証はでけへんで」
エルデのその警告に再び一同が小さくうなずいた。
「ほな、行ってくるわ」

エルデは城壁を守備する警護兵を見つけると、儀仗を取り出して、再び何かを唱えた。すると程なく、二人いた警護兵は崩れるようにその場に倒れ込んだ。ルーンで眠らせたのだ。

「お見事」
「うむ」
「でもあいつ、やっぱり走りながらルーン使ってますけど、本当にルーナーなんですよね？」
「もう言うな。あいつに俺達の常識など通用せん。見たとおりに受け入れるしかないだろう？そう考えた方がスッキリとした気分になれるぞ」
「レイン副司令はスッキリしてるんですか？」
「聞くな」
「はいはい」
アトラックはそう低く呟き、隣にいたファルケンハインにうなずいた。

二人のやりとりをよそにアプリリアージェはテンリーゼンをチラリと見た。アルヴィンの無口な副司令はそれに反応して小さく首を横に振った。

テンリーゼンにはある程度の範囲の気配を感知する能力が備わっており、敵が近くにはいないと答えたのだ。

残る問題は敵が仕掛けたルーンだが、その解除役がエイルだった。

エイルは後ろ手で少し離れろと合図をした。一行がそれに従い距離をとったのを見ると満足そうにうなずいて無造作に城壁の門へ歩き出し、堂々とした態度で普通にそれをくぐり抜けた。

だが、そこには予想通りルーンを使った罠が仕掛けられていた。

エルデが門の外に一歩踏み出した瞬間に、地面から十数本の槍が突きだし、その内の一本がエイルの体を見事に下から貫いた。

……かのように見えた。

月明かりの中ではあったが、少なくとも一行の目にはそう見えた。だが実際は槍ではなく、鋭く尖った岩だった。ちょうど細い筍のような形状の物体が地面から鋭く突き出たと言えば分かりやすいだろう。その石の槍に貫かれたはずのエイルはしかし、そのまま何事も無かったかのように走り出した。

「あれは蒸気亭で見た強化ルーンですよね」

「あの時も思ったが、実際に刺さって見えてしまうところがどうにも心臓に悪いな」

「確かに」

石槍地帯を抜けたところへ、今度は頭上から真っ赤な炎の固まりが小柄なエイルめがけて正確に降り落ちて来た。その燃えさかる炎が辺りを真っ赤に染め上げると、何もかもを一瞬で灰にしてしまうような熱気が遅れてやってきた。かなり離れているはずのル＝キリア一行にも熱波が届くほどだった。

アプリリアージェはエイルの能力に疑いは持ってはいなかったが、闇の中に突然現れた炎の固まりにはさすがに息を呑んだ。「俺には

物理的な攻撃は効かない」と言っていたエルデだが、これはいわゆる物理攻撃ではない。高位の攻撃ルーンに対してはエイルは何も言及していなかったのだ。

【うっひょー！】

『派手な出迎えだな』

【これは敵さんあなどれんな。俺の予想以上の使い手が居る】

『油断するなよ』

【おいおい、俺を誰やと思てんねん】

『はいはい。天才ルーナー様でございましたね』

【わかってたらええねん】

ルーンで練り上げられた炎は目標物であるエイルにぶつかったとたん、一瞬で消えた。アプリリアージェ達は、一体何が起こったのかはわからなかったが、そこにはまるで何事も無かったかのような様子で、エイルが月明かりを受けて静かに佇んでいた。

エイル……いや、エルデはその体勢のままで再度何かを唱えながら歩を進めた。すると今度はそこに一陣の風が吹きつけ、エルデの体の一点に強い風圧が集中した。

その後にル＝キリア一行が見たのは、エルデの体が二重になり、そのうちの一つだけが上下二つに切り裂かれた様だった。だが、切り裂かれた方のエルデの体は空中でかき消えるように霧散した。

もう一つの体、エルデの本体はその場で振り返ると、一行に向かってニヤリと笑って見せた。

【おっし、これでしばらくオッケーやろ】

『さすがだな』

【この程度の突破は朝飯前やな】

エルデは門の中側にいるアプリリアージェ達に向かって手招きす

ると、きびすを返して全速力で街道を走り始めた。エイルにとっては精一杯の速度で走ったつもりだったのだが、数秒もかからず横に四人のル＝キリアの仲間の気配を感じた。

（うわっ）

そうと思った次の瞬間には、彼はファルケンハインに抱きかかえられて、顔に当たる風のいきおいで、その速度差を思い知っていた。

「お前はすごいな。あれで何ともないのか」

ファルケンハインは感心しきりと言った表情でエルデに言った。

「あの強化ルーンを全員にかけられたらええんやけど、あれほど強力なんはどれも詠唱者専用やからな」

「うむ。あれがあればまさに無敵だな」

「いや」

エルデは答えかけて言いよどんだ。

「まあ、しょせんルーンや。契約で都度能力を得るしかないから、手順が狂えば終わりやしな。先天的にエーテルを纏えるフェアリーと違うてやっぱりルーンにはいろいろ制限が多いんや」

「――そうか」

ファルケンハインはその話題にはそれ以上突っ込まなかった。エルデの強化ルーンの弱点を聞く事になるからだ。

エイルはファルケンハインのそう言うところが好きだった。ぶっきらぼうな風でいて、相手の事をかなり気遣ってくれるのがファルケンハインなのだと言う事がわかってきていた。多くは語らないが、つきあってみればその優しさが理解できた。それがたとえほんの短いつきあいであったとしても。

ファルケンハインといい意味で対極にあるのがアトラックだろう。彼は言葉での意思疎通を殊（ほか）（こと）の外一大事にしていた。ともすれば傍若無人と思えるほどズケズケと人の心の中に入り込んでくる彼の言葉にはしかし、エイル達は悪意を感じなかった。「一言多い」とファルケンハインにいつも言われながらも、その実間違いなくフ

ァルケンハインにも嫌われてはいない。それどころかファルケンハインの言動を注意深く観察していれば、アトラックへの信頼はかなり厚いと言うことがわかる。

エイルが見たところ、ル＝キリアの中でアトラックがムードメーカーになっているのは間違いないところであり、彼のそう言った社交的な雰囲気がいい意味で場の緊張をほぐすのだ。言葉数が多いと軽薄な人間ととらえかねないが、アトラックの態度にはいつも自信と信念が宿っているようにエイルには見えた。

問題は、アトラックと話しているとついつい話さなくてもいいことまで話してしまう、言ってみれば相手に油断を与えるような存在でもあることだろう。

エイルは隣を走るアトラックを見て、心の中で首を振った。

――（いいや、油断というのとは少し違うかな）

例えるならば、門や囲いのない庭の向こうに開け放たれた明るい居間が見える家のような、そんな気持ちにさせてくれる懐深い人間なのだと思った。

「すぐに追っ手が来る。側面および後方監視怠るな」

アプリリアージェが短く叫ぶ。それなりに距離が離れているにもかかわらず、彼女の声は鮮明に耳に届いた。それが風のフェアリーの持つ特殊な能力の一つだと知らされたのはかなり後になってからだった。

前方の目はエルデとファルケンハインの役目である。エルデはもちろんルーンの探索役だ。後方はどうやらテンリーゼンが索敵役を果たしているようだった。今まで見聞きした話から、テンリーゼンにはエルデほどではないにしろ簡単な防御結界を張る能力がある事はエイル達にもわかっていた。

「防御の能力があるんだが、副司令はフェアリーだからエイルとはおそらくは全く違う論理のものだろうな。とにかくテンリーゼンに

は適当な攻撃は当たらないよ」
アトラックがそう漏らしてくれた事をエイルは思い出していた。
左をアトラック、右をアプリリアージェがそれぞれ警戒しながら、一行は文字通り風のように夜の街道を駆けた。

# 第三十三話　グラニィ・ゲイツ

しばらくは何事もなく進んでいた。
エイルは緊張しながら辺りに気を配っていたが、しばらくするとさすがにその緊張が緩んだ。

『このまま上手く抜けられそうだな』
【まあ、それはムリやろ】
『え？』
【ある意味向こうには我々の行き先がバレとるしな。っちゅうか、奴らとは一戦交えへんとこっちの計画が基本的に台無しやろ】
『そうか』
【こっちの緊張が緩む機を狙ってるんやろ。襲う方としたら、まあ常套手段やな】
『わかった。オレも油断しないようにしておく』
【頼むわ。お前さん、哨戒力だけは尋常やないからな】
『まあ、俺の場合は殺気だけしか感知できないんだけどな』
【上等や】

振り落とされないようにファルケンハインの背中にしがみつきながら、エイルは空を見上げた。月はいつの間にか雲に隠れていた。

「エクセラー部隊の第一次精霊攻撃は全て突破されました」
ル＝キリアが動き出したという報から少しして届いた第二報にノガル・ザワデスは苦虫を噛み潰したような顔をさらに歪ませて怒鳴った。
彼の軍服の左胸には、オークの葉をあしらった階級章がある。そ

れはドライアド王国の陸軍の階級章で、オークの葉が一枚のザワデスは尉官であることがわかる。葉の上に並ぶ菱形の徴が三つあることから、大尉である。そしてそのオークの葉は金ではなく赤い糸で縫い取られている。すなわち通常の陸軍部隊ではなく、ノガルの所属が特殊部隊であるスプリガンだとわかる。

「我が隊のルーナー達は揃いも揃って何を遊んでいるのだっ」

伝令は畏（かしこ）まる事しかできずにいた。

「相手のルーナーはたった一人だろうが？これではわざわざ一旦包囲を解除して罠を貼った意味がないではないか」

ノガル・ザワデス大尉は何も言わずに頭を垂れる伝令に対し、床を踏みならして怒りをぶつけて見せたが、それが問題の解決にならないことは本人とてわかってはいた。

数の差では圧倒している自軍、しかも他の部隊とは違い、高位のルーナーが配されているスプリガンの部隊がこうやすやすと敵の脱出を許すことは想定の外であったのだ。もっとも敵も戦闘力では定評のあるあのル＝キリアである。ノガルもその噂はよく知っているだけに、さすがに容易に確保出来るとまでは思ってはいない。それでも最初のあの攻撃を受けて五人全員が無傷、つまり誰一人として離脱していないという事は予想外だった。

この時期にサラマンダでル＝キリアを捉えたとあれば、それは外交上ドライアド王国を極めて優位に置くことが出来る切り札になるはずだ。しかし作戦に失敗は許されない。本来の司令官の不在をいいことに勝手に部隊を使っているのだ。可及的速やかな作戦実行が必要であったという既成事実を作る為にも、こうなったらなんとしてでも最低一人は確保しなければならない。

「大尉、ここはやはり未確認の随行ルーナーがかなりの使い手なのだと見るべきでしょう。報告からすると、ヤツは強化系に特化しているコンサーラだと思われます。そうなると結構やっかいな相手です」

ノガルの少し後ろに控えて伝令の報告を聞いていたガネード・ケニック曹長がそう言って伝令に助け船を出した。
「ええい、忌々しい。エクセラーだろうがコンサーラだろうが、ルーナーはたった一人なんだぞ？」
「おっしゃるとおりではありますが」
「もういい。それで、追い込みの陣はどうなっている？」
伝令はようやく次の報告をする許可が得られた事でほっとして顔を上げた。
「はっ。エクセラーの別小隊が予定通り集中攻撃の為に行く手の精霊陣にて待機中。別途配備済みの強化ルーンがかかった小隊五つが奴らを波状攻撃しつつ、精霊陣へ追い込む手はずになっております」
「そのルーナーもやっかいだが、そもそも相手の主体は風のフェアリーだ。逃げ足だけは速い。死んでも取り逃すな、と皆に伝えろ」
「はっ」
伝令は短く答えると長居は無用とばかりにそそくさとその場を辞した。
「たった五人に何をしているんだっ」
走り去った伝令の代わりにノガルは矛先をガネードに向けた。
だが、返ってきた返事はガネードの声ではなかった。
「まったくだな」
ノガルはその声に聞き覚えがあった。それはガネードのものでも、もちろん伝令のものでもない。
今し方、伝令が走り去った出口の方をゆっくりと振り返るノガルの目に、今一番会いたくない人物の姿が映った。
「騒がしいぞ、ザワデス大尉」
そこには険しい顔でノガルを見つめる壮年のデュナンがいた。
軽い茶色の髪をいつものように綺麗に七三に分け、すでに夜だと言うのに無精髭の片鱗すら見られぬほど綺麗にそり上げられた顔の持ち主がそこにいた。
着用している軍装も、身だしなみのお手本のように隙がない。そ

れはドライアドの軍人というよりはむしろシルフィードの将校のような佇まいであった。
階級章は赤い刺繍の二枚のオークの葉に実が二つ。彼が中佐であることを表していた。
下士官を二人従え、入り口に仁王立ちしているその高級将校は、灰褐色の瞳で鋭くノガルをにらみ据えていた。
その人物の登場は、すなわちウーモスで合流する事になっていた本隊の到着を意味していた。
ノガルは本来の司令官に恭しく礼をした。
「これはゲイツ中佐……お早いお着きですな」
「わざとらしい挨拶などはいい」
顔を引きつらせながらも愛想笑いを浮かべようとして苦労しているノガルをそう一蹴すると、グラニィ・ゲイツ中佐は、大尉の脇で控えているガネードに声をかけた。
「大まかな事情は既に耳にしたが、お前の口から最新の状況を説明しろ、ケニック曹長」
ガネードはチラリとノガルの顔色をうかがうように目をやったが、予定よりも一日早い上官の登場で軽く混乱している様子の上司を見限ると、すぐに顔を司令官の方へ向けて背筋を伸ばして敬礼し、ル＝キリアとの遭遇の一件から現在の状況までをかいつまんで説明した。
既に別の部下から概況を聞き及んでいたグラニィは、ケニック曹長の報告を受けると即座に横に待機していた自身の副官の一人に命じた。
「全部隊に告げろ。我らスプリガン第二中隊は、これよりアロゲリクの渓（たに）へ進軍。目的は先行部隊の援護。陣形その他については追って知らせる。半時で出発だ。準備を急がせろ」
「はっ」
副官が急ぎ足で部屋を出ると、ようやく言い訳を思いついたのか、ノガルがグラニィに向かって一歩踏み出して最敬礼をした。

「なんだ、ザワデス大尉」
「中佐殿。これは我が国の対シルフィード外交を有利に進める為の……」
「ザワデス大尉」
「はっ」
「ル＝キリアなど、もうこの世におらんのだよ」
「は？」
「ここへ向かう際に入った本国からの伝信だ。シルフィードではル＝キリア全滅の報を流し、すでに非公開ではあるが、国葬が行われたそうだ」
「なんですと？――しかし、現に我々はっ」
「本物が居ようが居まいが、公式に死んだ者を捉えたとして、お前はそれが外交上有利な道具になると思うのか？」
ノガルは慌てた。
本国からの報、それは準公式発表とも言える。そしてそのル＝キリア全滅の報はノガルの元にはまだ届いていなかったのだ。最新情報はノガルの行動とは入れ違いに入ってきたものだった。
「し、しかし、調達屋の情報では間違いなく本物だと……」
「くどい。本物は死んだ。公式にはそれで終わりだ。我々が追いかけているのはただの旅商人だ」
「そ、そんな」
「もう一度言う、少なくとも公式には我々が追いかけているのは『そっくりさん』だ。それ以上でも以下でもない。言っておくが例え生きて捕らえて自分達が本物だと白状しても、国家が正式に死んだと言っている以上、それを聞いてがっくりと肩を落とした。
ノガルは、それすらもはや無意味なのだ」
「とりあえずお前はここに残り、明日到着する総司令をお迎えしろ」

「総司令のお迎え、ですか？」
「ありのままを報告せねばなるまい。処分は軽くはないだろう」

「処分……」
「もっとも、私の処分の方が重いだろうがな」
グラニィは独り言のようにそう言うと、口調を変えた。
「どちらにしろ今回の事は隊としての大失策だ。状況を収束させる為に前線には私が出向く。お前はウーモスに残って補給と連絡の指揮にあたれ」
「あ、しかし」
「私はこれからすぐに発つ。エウテルペ総司令にはお前の口から状況の報告をしろ。言っておくがいらぬ脚色や見解は無用だ。お前も総司令のお人柄は知っているだろう？」
「は、はい。『お前の言う真実とやらはいらん。欲しいのは事実だけだ』ですな」
グラニィは頷いた。
「今回の事は包み隠さず報告して差し上げろ。前線の状況は逐次伝令を出してこれに充てる。その伝令は総司令宛でなく、お前宛に送る。頼んだぞ」

ノガルは唇を噛んだ。
自分の思いつきは大失敗だったという事を改めて強く認識した為だが、事実と言われてもスプリガンの総司令に一体どう報告していいか思い浮かばず途方に暮れてもいた。

「ノガル」
グラニィは立ち去ろうと扉へ一歩踏み出したところで足を止めた。そしてノガルに背中を向けたままでそう声をかけた。姓でなく、名を呼んで。
「は」
グラニィは目を伏せて小さく溜息をつくと、それまでと比べてやや穏やかな口調でつぶやいた。
「小さめでも、お前には手土産代わりに手柄を何か一つ持たせた上

で軍本隊へ戻って欲しかったのだがな。これから先、機会はいくらでもあった。焦る事はなかったのだぞ」

それだけ言うとノガルの言葉を待たず、副官を制して自ら扉を勢いよく開いて大股で部屋を後にした。

ノガルは隊長が立ち去った扉をしばらく呆然と見つめていたが、はっと我に返ると、拳を握りしめて卓を強く叩いた。

「くそっ、調達屋めっ！」

「さすがに手強い」

ファルケンハインはそう呟いた。それは横にいるエイルに向かって喋った言葉なのか、独り言なのかはわからない。

わかっているのはル＝キリア小隊が苦戦しているという事実だった。

ウーモスを出た五人は、罠が仕掛けられている事を知りつつも、あえて街道を普通に駆け抜ける経路を選んでいた。

彼ら、いやエルデの示した補足計画では、どうしてもスプリガンと戦う必要があったのだ。しかも相手を殲滅してはならない。アロゲリクの渓にある庵までスプリガンには追いかけて貰わなければならなかった。

精鋭揃いで場数を踏んでいるル＝キリアとは言え、相手も名にし負うスプリガンである。その精鋭部隊同士の戦いはスプリガンがル＝キリアを数で圧倒していた。

訓練された戦士はさすがに、山賊よろしく満足な武器も持たない民間人をいたぶるだけのごろつき兵とは訳が違う。

「こっちは気にするな。自分の身だけ考えてくれ」

エイルはノルンを両手剣のように構えてファルケンハインにそう

言うと、その場を動いた。
「悪いが、とっくに自分のことだけで精一杯だ」
ファルケンハインは無表情のままで呟くようにそう答えた。
そうこうしている間にも二人に向かって矢が散発的に飛んでくる。

未だアイスもデヴァイスも顔を見せておらず、月明かりのない街道沿いは暗闇に近かった。
ファルケンハインはお互い街道を外れて林の中で戦っている形だから視界条件は同じはずだと考えていたが、それにしてはスプリガン側から放たれる矢の狙いは、かなり正確なものだった。矢羽根が湿気を纏った夜のやや重い空気を切る音を頼りに、直接体に当たりそうなもを選んで避けたり払ったりして凌いではいたが、それでも全てをさばききれず、既にいくつかの矢が体を浅くかすっていた。
一方こちらからの攻撃はというと、視界がまったくない為、矢の飛んでくる方向に向かって当てずっぽう射るだけの状態だから、成果などないに等しかった。

「――視覚を一時的に増幅する強化ルーンというやつか」
ファルケンハインは今更ながら高位ルーナーとの連携が取れる特殊部隊の力を思い知っていた。
それは作戦前にエイルから一度は提案されたものの、結局使用しなかった強化ルーンの事だった。断ったのはアプリリアージェだったが、その決断にはファルケンハインも同意していた。一部の感覚が強くなりすぎることによる感覚の狂いをアプリリアージェは懸念したのだ。
風のフェアリーにとっては感覚の鋭敏さが行動の俊敏さと密接に関わっている。普段の視界との差が大きすぎると、特に五感を極限まで活用するタイプのフェアリーにとっては各感覚の同期のようなものに齟齬を生じてその際に生じる違和感を調整する為に一瞬の隙が生まれかねない。

――だが、どうやら敵はその強化ルーンを活用しているようだった。

狙い打ってくる矢を避けているうちに、ファルケンハインはどうやら敵に行動を支配されているらしい事に気付いた。

近くにいるエイルは『物理攻撃は当たらないから心配するな』と豪語していたが、その言葉通り、今のところ襲い来る矢をものともしていないように思える。

いや、ファルケンハインが感じている感覚では、身に降りかかりそうな矢を、エルデは手にしたあの不思議な儀仗でことごとく払っているようだった。

物理的な攻撃に対し、エイルはルーンの力を使うのではなく、どうやら物理的に防御しているようなのだ。

その後の様子で、自分の予想を確信したファルケンハインは内心で苦笑した。

――（本当に、エイルの事を心配する必要はなさそうだな）

ルーナーであるエイルを守るべき立場であったファルケンハインは、今はその役目を全うする機会ではないと判断し、改めて敵にだけ意識を集中する事を決心するとエイルに向けていた集中力を一本化し、神経を聴覚に集中させた。

ヒュンっと言う音を立てて向かってくる矢羽根が、左上方からこめかみを狙った軌道上にある事を判断したファルケンハインは、回避行動をとりながら風切音が経験則的にこの大気の状態においてあまりに小さすぎると感じていた。

それはすなわち矢を的に誘導する為の風の経路を通っているという事に他ならない。すなわち、その能力を持つ風のフェアリーが放った矢だと推測される。それは的を追尾できる矢で、通常の回避行動では避けることは不可能に近い。当たらない為には払うしかないのである。

ファルケンハインは左手の甲に付けている鉄製の手甲で矢の弾道

を予測してそれを見事に払うと、間を置かずにその矢が放たれた方角へ向け、お返しとばかり目にもとまらぬ早業でに相次いで矢を二射、放った。

しかし、手応えは無かった。

敵も手練れである。矢を射た次の瞬間にはその場所を移動しているに違いなかった。　少なくともル＝キリアであればそうする。

ファルケンハインは心の中で舌打ちをすると、矢の飛んできた方角から進行方向に少しずれた位置から陰になるような木を選んで、その根元に身を隠した。間一髪、その頬のすぐ横を矢がかすめる。

果たして現状の打開策はあるのだろうのか。

ファルケンハインは少し焦りはじめていた。

敵が通り一遍の相手でないとファルケンハインは改めて感じていた。数的にも、視界確保という点においても有利なこの状態にあっても決して近接攻撃をしかけてこない事が何よりの証明だった。

遠隔では数と視界の問題で圧倒的にル＝キリア側が不利だが、近接の戦いになれば話は別だ。そして相手はそれがよく分かっていて、当然ながらその手には乗ってこなかった。

しばらくすると状況はさらに悪化した。

風が出てきたのだ。

葉擦れの音が矢の風切り音を消してしまう。

もちろんその風が自然現象で、運が悪いと考えることも出来るだろうが、スプリガンにいる風のフェアリーかルーナーの力を使った戦術だと考える方が理にかなっていた。月を隠す厚い雲の存在も、バード級の高位ルーナーの力によるものなのかもしれない。

楽観的な現状認識をする事に慣れていないファルケンハインにしてみれば、戦力差は予想以上に大きいと判断せざるを得なかった。

【このままやとマズイな】

『ファル兄さんか』
【他の連中はわからへんけど、俺らのせいで動きが制限されてたファルは最後尾や。おそらく引き受ける敵の数が一番多いやろから、かなりヤバい状況やな。一旦兄さんのところへ行こ】
途中、いくつか近くを矢がかすめたが、エルデのルーンですべてが逸れていた。
【とりあえず一発行っとく。今度矢が来たら、そっちは見るな】
『了解』

エイルが答えるのと同時に左側から矢がかすめて過ぎた。エイルは眼を逆の右前方に向けた。同時に左側に一閃、真っ赤な光が広がった。
エルデの放った攻撃ルーンだった。

『敵の位置がわかるのか？』
【いや、正確な位置がわかるくらいならとっくに作戦終了や】
『まあ、それもそうだな』
【そやから適当に範囲攻撃しといた。一人くらいケガしてるやろ】
『山火事にならないか？』
【一瞬で消えるタイプやから大丈夫やろ。でも、まあ火事になったらなんとかする】
『頼むぜ』

エルデの言うとおり、左側を見ても光も炎も見えなかった。ルーンで視界はある程度確保されてはいるが、さすがに障害物が多すぎて敵を視覚的に捕らえるのは困難だった。
だが、変化はあった。左側からの矢がぷっつりと途絶えたのだ。

【やってもうた、かな？】
『いや、まだ殺気はある。様子をうかがっているんじゃないか？』

【優秀な刺客やな。調達屋で俺らを襲った時とは別人、いや別部隊やな】
『まあ、学習能力があるって事だろ』
【ありがたない話やないけどな】

「オレだ」
ファルケンハインの気配を感じたところで、エイルはそう声を出した。もちろん誤射の回避の為だが、さすがにその必要はないようだった。
「どうして俺のところに戻った？」
ファルケンハインは非難の混ざった声でエイルを迎えた。
「命を懸けて俺を護衛してくれる手駒をこんなところでなくすわけにはいかへんからな」
「何か考えがあるということか？」

【エイル】
『わかってる。例の防御ルーンは矢が苦手だからな。そっちは任せろ。気にせず好きにやれ』
【こう言うときは相棒がお前さんで良かったとつくづく思うわ】
『そいつは、どうも』

心の中の会話の最中にもエイルは儀仗を振ってファルケンハインに命中しそうな矢を二本ほど払っていた。
「ええか、今から矢が放たれた方角を基準にして、そのあたりを照らしたる」
「そんなことができるのか？」
「しょーもない質問すんな。こんな状況で出来へん事を言うてどうすんねん」
また一本、カツンという音をたて、ノルンによって矢が払われた。
「矢は全部防いだる。せやから防御の事は一切気にせず、相手の場

所の特定に集中して、矢を射るんや。向こうが近接戦に乗って来いひんならこれで対処や。こっちも相手の姿が確実に見えたら各種ルーンが使える。とりあえずここを動かんとじり貧やで」

「わかった。やってみよう」

「ほな、行くで」

ざわざわと風が木々の枝を揺すり葉擦れの音が林中に響き、もはや音で相手の位置を特定することは困難な状況の中、矢羽根の風切り音が特定できる時には対処はすでに遅すぎるまでになっていた。

もはや考えるまでもなく、エルデの指示に従うほかに手はなかった。

「左前方」

エイルはファルケンハインにそう言うと、続けて何かを一言呟いた。

すると、驚くべき事に、指し示す方向に忽然とアイス一（月）が現れた。

いや、ファルケンハインの目には明るい月、アイスに見えたものは光る球体のようだった。それがアイスではないとわかったのは、見る見る拡大して消えていったからだ。光の球はそこにとどまるのではなくほんの五秒くらいの時間で肥大化・拡散をして消えていった。

だが、充分な時間だった。その光に映る影をファルケンハインは見落とさなかった。番えた弓から矢が放たれた。それもごく短い時間に続けて二本。エイルの耳には矢を空間に射出した後の弦が夜の空気を振るわせる音が響いた。

「次、続けてさっきより左や」

「了解だ。どんどんやってくれ」

一方、アトラックはアプリリアージェの気配を追って林の中を移

動していた。自分についてくる気配は三人だと特定できてはいたが、さすがにアトラックの方から攻撃を仕掛ける余裕はなかった。走りながら矢は何本か射ては見たものの、いたずらに自分の位置情報を与えすぎるわけにも行かず、さらに言えば限られた矢を捨てるような行為もどうかと思われたので、けん制はやめてとりあえず先に進む事にした。

ドライアドはル＝キリアそれぞれに、小隊を組んで同時に襲いかかってきた。一人に対して同時に複数名が矢を射てきたのでそれとわかる。攻撃前には最初に何らかのルーンも放たれたようだが、それは近くにいたエルデが無効化していた。

後は移動しながらの攻防という事もあり、ルーンの攻撃はなく、今のところ矢の攻撃だけを考慮していればいい状態になっていた。

ルーンは詠唱者に座標軸の固定を求める。ルーンの第一射さえやり過ごせば、移動している間は次射の心配はまずない。エルデの話では単体のルーナーが放つ攻撃ルーンの射程距離は、賢者クラスであってもそうそう長いものはなく、一射の後走り出せば詠唱時間の問題を考慮するとまず届くことはないと言っていた。どうやらその通りで、ルーンの事を心配する必要がなくなっただけでもアトラックは気が楽になっていた。ただし、こちらから攻撃しようと下手に立ち止まることは敵に囲まれる隙を作ることにもなるわけで、出来るだけ立ち止まらずに味方の誰かと合流する作戦を選んだアトラックであった。

逃げると言っても夜目が利くわけではい。訓練によりそれなりには見えているとはいえ、ただでさえ月のない夜。ましてや木々の枝で空星さえ覆われた暗い林の中、障害物を避けながら素早く移動するのは風のフェアリーの足の速さ云々を持ち出す以前の問題と言えた。勿論障害物の認識や回避行動に移るまでの時間、無駄のない体の動きなど、訓練された高い能力の風のフェアリーならではの速度はあるにせよ、である。

それにしても追っ手であるスプリガンの能力には侮れないものがあった。アトラックは自分の移動速度に対してはそれなりの自信があったのだが、相手もどうして、本気で逃げているのに振り切れないのだ。追い詰められてはいないが、こちらが一つへまをすればあっという間に致命的な形勢になることは目に見えていた。

―（まるで別の部隊のような動きじゃないか。やっぱり昼間のアレは場当たり的で相当トンマな指示で動いてたんだろうな）

暗闇に近い林の中を走りながら、アトラックがそんなことを考えていた時、前方に林の切れ目が見えた。もしや？と思った瞬間に前方から矢の気配を感じて慌てて身を屈めた。

矢は三本。立て続けに射られたもののようで、ほぼ同時にアトラックの体へ向かってきた。アトラックは二本は避けたが、一本を処理しきれず、それは肩に当たった。幸い、肩当てをこすっただけで体に傷は付かなかった。

「ちっ」

後方の敵に注意を向けすぎていて前方を油断していたのだ。少しずれていたら危ないところだった。

アトラックは前方に意識を集中する事にした。弓を畳んで懐にしまうと腰に差した短剣を手にして林の切れ目を目指し直線的に走りだす。予想通りすぐに矢の第二射が来た。今度は三本より多い。そしてその全てが自分に命中するとアトラックは判断した。

攻撃の正確さを考えると相手は強化ルーンが懸けられているか、あるいは能力があるフェアリーなのか、どちらにしろ夜目が利いているのは間違いないようだった。

全速力で矢に向かって走る格好になったアトラックだが、その軌道を認識してもなお、その矢を避けるそぶりは見せなかった。

前方からの第二射の矢は全てアトラックの体に刺さったように見えた……が、アトラックは刺さった矢を短剣で振り払うと、速度を落とさずさらにそのままっすぐに走って林の外に出た。

「やっぱり」
林と林の切れ目のような地帯に出た。すぐ近くに街道が見える。そこには雲間からのぞくかすかな星明かりの下で背中合わせに短剣を構えるアプリリアージェとテンリーゼンがいた。
「司令っ！」
アトラックはそう叫ぶと二人の足下に転がるように飛び込んだ。

「スリーズ特佐。無事だったか」
いつもの落ち着いたアプリリアージェの声を聞いてアトルはホッとした。
「遅くなりました。おけがは？」
「二人とも無事だ。お前を待っていた。壁を頼むぞ。この体勢のまま林に向かう」
「林に、ですか？視界があるここの方がいいのではないですか？」
「向こうから見えるところに居るということは、ルーナーの的になるということだ。そうなると全滅する。林の中をいったん戻りつつレイン中佐達と合流しよう」
「なるほど、我々ではルーンを防げませんしね」
「時間が惜しい。出来るだけ直線的に戻るぞ。お前は壁に集中しろ。攻撃はこちらで受け持つ」
「了解」
三人はうなずき合うとアトラックが出てきた林の方向に固まって走り出した。その一行に向かって無数の矢が放たれた。だが、三人とも避ける気配はない。
矢は……先頭を走るアプリリアージェに突き刺さったかのように見えた。だが、それは違った。矢はなんと空中で止まっていたのだ。アプリリアージェの胸の前方数十センチのところで止まって……いや、止まっているのではない。少しずつ動いてはいるが、止まっているかのように速度を失っていた。アプリリアージェは空中で突然

速度を失った矢を短剣で払い、そのまま何事もなく林の中に飛び込んでいった。
その時、少し離れた前方に明るい光が見えた。
それはエルデが放った照明ルーンだった。

「なるほど」
アプリリアージェは少し速度を落としてその光の様子を観察するとそうつぶやき、後ろの二人に声をかけた。
「こちらの手間が省けた。我々もあの光を利用するぞ」
「了解。今のはエイルのルーンでしょうかね？」
「この状況で敵が明かりを灯すとは考えられん。それよりも、エイル君とこうして共闘しているというのはどうにも不思議な気分だ」
アプリリアージェはアトラックにそう言ったあと、クスっと笑ったようだった。おそらく面の下の微笑はいつもより目を細めた笑顔に変わっているに違いないと彼は確信していた。
またアプリリアージェの言ったように、一時はどうやって倒したものかと真剣に考えてた相手であるエイルと共闘している現状に妙な感覚を味わってはいたが、それについてはもう運命のようなものなのではないかと感じていた。
「それより壁は大丈夫か？クラルヴァイン中将の結界はこういう状況向きではないから、我々の頼りの綱はレイン特佐だ」
「大丈夫ですよ。死ぬまでは持たせてみせます」
「それは心強い限りだな」

直前で止まる矢をアプリリアージェとテンリーゼンが払いつつ、三人は林の中を戻り始めた。ファルケンハインとエイルに合流するために。
いったんばらばらにされたのは不覚だったが、まとまる事ができれば何とかなるはずだった。
問題は時間だ。

「急げ」
アプリリアージェは落ち着いた声でそう言ったものの、実のところかなり焦っていた。
―（そろそろ半時だな）
行動時間制限。
『効果は半時間だ』
アプリリアージェはエルデにそう釘を刺されていた。だからもうあまり時間がない。いったんスプリガンを振り切って、アロゲリクの庵に少しでも近づいた上で結界を張らなければ作戦が失敗する。
防御の為だけなら中途で結界も張れるだろうが、そうなると予想されるのはスプリガンの増援部隊に囲まれてしまい動きがとれなる事だ。そうなると当初の計画が果たせないばかりか、いたずらに時間を無駄にしたあげく、エルネスティーネ達との合流すら困難な状況になってしまうという最悪の状態になりかねない。
だから、ここは時間勝負で何としてでも相手を振り切る必要があった。
その為の頼みの綱がエイル、いやエルデのルーンなのだ。アプリリアージェが言ったこの作戦の「要」とはまさにそういう事だった。
それだけに、スプリガンがル＝キリアを初手で散り散りにしたのは見事と言ってよかった。

そもそもル＝キリアは強襲部隊であり、今回のように組織だって狙われ追われる立場には慣れていない。風のフェアリーばかりで構成されているのも攻撃時の機動性を極限に高めるためであり、防衛作戦に従事することなど想定されていない編成なのだ。ましてや持久戦など完全に専門外の仕事だといえる。大きな作戦の場合はル＝キリアが強襲で敵陣を切り崩し、あとは補給や退路確保と言った通常作戦に秀でた正規の部隊に引き継ぐと言った戦術をとる。もっとも独立部隊であるル＝キリアが軍の部隊との連携をするなど滅多にないことではあったが。

そんなル＝キリアの中にあってアトラックの持つ能力は彼らの弱点を補うものと言えた。彼は自分の周りに「空気の壁」を作れるのだ。それは密度のある薄い空気の層を何枚も何枚も貼り合わせたような構造を作り上げる能力で、その壁に絡みつかれるようにして矢が止まったように見えた訳である。勿論その壁にぶつかる「物」の質量や速度により効果は変化する。特に質量の違いが大きいようで矢のように速度はそれなりだが質量が極端に軽い場合などには効果が高いようだった。

壁はまた一方向だけでなく全方向、すなわち平面ではなく曲面として張り巡らせることが出来るようで、彼らを狙って放たれた後方からの矢にも同じ効果を発揮していた。特に後方からの矢は速度が落ちた時点アトラックとはどんどん距離が離れ、結果として地面にそのまま落下するため、走り続けている彼らにしてみれば払う必要すらなかった。

おそらくアトラックの壁の弱点は壁を張る事に集中力の多くを取られてしまうことのようだ。先ほど林を抜ける際に前方からの第一射を受けてしまったのは注意を後方に集中させていたため前方には壁を作れていなかったためであろう。第二射が彼にあたらなかったのはすぐに対処した為だった。

アトラックは壁の生成に集中しながらも、前を行くアプリリアージェをつぶさに観察していた。先刻から違和感を覚えていたが、走る速度が遅いのだ。いくら暗いとはいえデュナンのアトラックが余裕で走れる程度の速度しか出ていないのである。急いでいるという割には言葉ほどの速度になっていない。

そして、さらにあることに気づいた。

「司令」

「何も言うな」

声をかけたアトラックにアプリリアージェは即座に反応した。

「この程度ならなんとか走れる。心配無用だ」
そう。微妙ではあるが、足の歩みが左右で違う。おそらく、矢傷を負っているのだろう。
「クラルヴァイン少将ならともかく、私一人では全ての矢を避けきれる術はない。その結果がこれだ。それ以上でも以下でもない。スリーズ特佐は壁に専念していればいい」
「しかし……」
「集中しろ。死ぬまでは保たせてくれるのだろう？」

前方にまた光があがった。
これで五回目だ。かなり近くなっている。
「そろそろ合流できる。合流後はすぐに反転だ。遅れるな」
「保つんですよね？」
「くどい」
「了解。失礼しました」

アトラックがそう答えた時、ひときわ大きな光が今度は頭上に上がった。
思わず見上げたアトラックにの目は、中天に上る月が見えた。
「司令！」
すぐに前方からひどく懐かしい声がした。ファルケンハインだった。
ついさっきまで一緒にいたはずなのだが、これほど仲間の声が心に染みるのは不思議だった。自覚しているよりは感覚の方が危機的な状況だと判断していたのだろう。
「エイル君は？」
アプリリアージェは声のする方角へ向かいながら、そう声をかけた。
「勿論無事です」
「そうか。こっちもみんな無事だ。走れるな？」

「大丈夫です」
「では固まって進むぞ。アトルの壁に入れ」
「了解」

アプリリアージェ達は反転した。
後方からの矢が前方からの矢に変わる。周りにいる敵の数は明らかに増えていた。
囲まれている格好だ。気配だけでは人数の特定は難しいが、十人以上二十人以下と言ったところだろうか。今のところルーンの攻撃は受けていないのでルーナーがいる様子がないのが救いだった。矢はアトラックの「壁」が防いでくれる。接近戦になればまだまともな戦いができそうだったが、おそらくこの状況ではスプリガンはその行動はとらないだろう。確実に有利な状況になるまでは。
とにかくル＝キリアにとっては足止めされることだけは避けなければならない。
反転して敵の気配を探りつつ進もうとしたとき、前方に光がともった。エルデの「月」だ。
それに合わせてアトラックの前方でテンリーゼンが矢を放った。だが、それは途中で止まった。「壁」は敵の矢の速度を止めるが、それは味方にとっても同様だった。
だが、テンリーゼンは再び矢を番えると、走りながらある方向に向けて同じように矢を射た。弦が震える音がして、矢は勢いよく放たれた。
今度は先ほどと違い、テンリーゼンの放った矢はアトラックの壁など存在しないかのように、普通に空気を切り裂いて林の中へ吸い込まれた。
すぐ近くでうなり声が聞こえた。テンリーゼンの矢は敵にあたったのだ。

「どうします、エイル君？」

「は？」
「死体が必要なのでしょう？」
「いや、ここから俺まで運ぶんはさすがにつらいやろ。現地調達の方向でいこ」
「了解しました」

『今のは？』
【面白い能力やな。空気の壁みたいなもんを作ってるんやな。アトルの壁って言うてたやろ？】
『でも、内側からもダメなんだろ？でも、リーゼは二発目は普通に射てた』
【この状況で一瞬壁を崩す……というのは考えにくいな】
『ということは？』
【お人形さんには壁を貫通する能力があるという事やな。一発目はうっかりしてたんやろ】
『どんだけすごいんだ、この連中』
【いやいやいや。その程度なら全部俺がルーンで再現できるって】
『……』
【なんや？】
『いや、相変わらずガキっぽいな、と思って』
【はあ？】

エイルは例によってファルケンハインに背負われていた。アトラックの壁のせいでファルケンハインは防御にも攻撃にも意識を集中する必要がなくなり、エイルの「靴」に徹していた。

「司令」
走りながら、ファルケンハインがアプリリアージェに声をかけた。
「なんだ、レイン中佐？」
「もう少し速度を上げても私は大丈夫です」

「これが最大速度だ」
「司令は足をやられてるんです。おそらく……」
「それ以上言うな、アトラック特佐」
アトラックの言葉をアプリリアージェは遮った。しかし、エルデがすぐに反応した。
「なんやて？」
「たいしたことはありません。この程度の速度であれば走れます」
エルデはファルケンハインの背中でため息をついた。

『おい』
【皆まで言うな】

「俺の護衛隊の隊長に告ぐ」
エルデは大きめの声で前方にいるアプリリアージェの背中に向けてはっきりとした声で呼びかけた。
「なんでしょう？」
慇懃な答えが即座に返ってきた。
「ガタガタ言わんと傷の部位と損傷の程度をわかってる範囲で正確に言え。今すぐに、や」

少しだけ沈黙があったが、アプリリアージェは素直に答えた。
「右の大腿部。股関節と膝の中間あたり、体の外側部分に矢が多少深く刺さりました。抜く際に少しひねる必要があったので、まだ少し出血していますが、本当に大したことはありません」
エルデはアプリリアージェの言葉の途中で既に詠唱をはじめていた。
「エスリ・フィーテ・レーテ・アナパウソ」
ファルケンハインの耳にようやく届く程度の小声の詠唱が終わると、エルデは右手を開いて突き出し、指輪状態のノルンをアプリリアージェに向けた。するとアプリリアージェの右の大腿部が霧のよ

うな鈍く白い光に包まれたかと思うと、すぐにスッと消えた。

「んじゃ、ファル兄さんの言うとおり、もうちょっと急ごか」

伸ばした右手を元通りファルケンハインの肩に置くと、エルデはアプリリアージェにそう呼びかけた。

「皆、少し速度を上げるぞ」

アプリリアージェがそう言うと、ファルケンハインとアトラックは同時に

「了解」

と答えた。

エイルはその言葉と同時に体感出来るほど上がったファルケンハインの速度のせいであやうく後方にのけぞり落ちそうになるところだった。

「エイル君」

前方から呼びかける声があった。アプリリアージェだ。

「ありがとう」

「い、いや。礼は無事に向こうに着いてから腐るほど言うてもらうし……」

エルデの照れたような返答にアプリリアージェはそれとわかる声でクスリと笑うと、

「了解」

そう言ってさらに速度を上げたようだった。

エイルは照れ隠しのように咳払いをした後、前方の道を照らす光球を作り出すルーンを再び唱えた。

# 第三十四話　ハイレーンとエクセラー

「どうだ？」
「ここまでくれば大丈夫。それなりの範囲にルーンの結界を張れたし、これでしばらく落ち着けるさ」
落ち着いた口調で事の首尾を告げたエイルに、ファルケンハインは無言でうなずくと、珍しくニヤリと笑って手を伸ばし、エイルの黒い髪をくしゃくしゃにした。
「何すんだよ」
「お前は本当に大したヤツだな」
「よせよ、今さら」
ファルケンハインの行為は最大級のほめ言葉なのだとエイルにはわかった。だから嫌がったと言うよりは照れ隠しのような非難の言葉と言えた。

【ファル兄さんの笑顔って初めて見るな】
『気持ち悪くはないな』
【あほ】

二人のそのやりとりを静かに見守っていたアプリリアージェは、落ち着いた声で一同に告げた。
「皆、ご苦労。いったん状況終了とする。全員、引き続き警戒態勢は維持しつつ待機の事。次の状況に備え、作戦指示があるまでは各自体力の回復に努めろ」
そうやって戦闘行動時の口調を終えたダーク・アルヴの小さな司令官は、大きなため息をついて白い面を外した。アプリリアージェの言葉はとりあえずの戦闘終了の合図になり、誰も何も語らぬもののル＝キリア全体にホッとした雰囲気が流れた。
「交代で見張りを立てながら、しばらくここで休みましょう」

白面を外し普段の口調に戻ったアプリリアージェがそう告げた次の瞬間だった。

「あ」

そう小さく叫んだ少女のようなアルヴィンの体がビクっと短くけいれんしたかと思うと、白い面が手からこぼれ落ちた。

それに続いてその面の持ち主が白面の上、つまり地面に崩れるように倒れ込んだのだ。

「司令！」

あわてて皆が駆け寄った。

ファルケンハインが軽々とアプリリアージェを抱きかかえたが、アプリリアージェの顔面は蒼白で、既に意識がなかった。

一同が顔を見合わせた時、耳元で誰かがささやくような声がした。それは小さいながらもはっきりとした声で、こう告げていた。

『ただ今より……小隊の指揮は……私こと……テンリーゼン・クラルヴァイン海軍少将が……執る』

一同はハッとして少し離れた場所に佇む小柄なアルヴィンの少年の方を見た。

『現状維持。現場での……些事については……各自の判断に……任せる』

「了解」

そのままの姿勢でテンリーゼンに敬礼して異口同音に返事をしたファルケンハインとアトラックは顔を見合わせるとお互いにうなずきあった。

その精霊会話はエイルの耳にも届いていた。

その場にいる全員に向けて発せられたもののようだ。

「今後の指揮はクラルヴァイン少将が執ることになった」

ファルケンハインはエイルに向かってそう言った。

「オレにも聞こえた」

エイルはうなずく。
「そうか。なら話は早いな。それよりどういう事だ?ウーモスでかけた回復系のルーンと何か関係があるのか?」
ファルケンハインはアプリリアージェをのぞき込もうとしたエイルに心配そうな声で尋ねた。

【代わってくれ】
『うん』

エイルの雰囲気が変わった事に、ファルケンハインは気づいた。
おや?と思った時にはエイルではなくエルデがすでに口を開いていた。
「あれは反動があるって言うたやろ?」
「反動って……一体どうなったんだ?」
アトラックが真顔でエイルに詰め寄る。
「ただ失神しているだけで、命に別状はあらへんから大げさな心配はいらん」
「強い薬によくある副作用のようなものなのか?」
これはファルケンハインだ。
「まあ、簡単に言うたらそうやな。けどあれかて一回だけやったらほとんど影響はないんや。今回みたいに続けてかけたり重ねがけしたりするとこういうツケが回ってくる」
「かける前に説明をくれた方が良かったな」
ファルケンハインはそう言うとエルデをジロリと睨んだ。
エルデはしかし、ファルケンハインを睨み返した。
「同じ事や。リリア姉さんはそれでもかけろ、言うたやろな。そんな事お二人さんやったらつきあい長いんやからわかってるやろ?」
そう言われるとファルケンハインは言葉に窮した。痛いところを突かれたからだ。全くもってその通りとしかいいようがない。
ファルケンハインはアトラックの方を見たが、アトラックも「確

かに……」と言った風に眉をひそめてみせただけだった。
「それよりも、お二人さん。リリア姉さんがあの時敢えて重ねがけを要求したっちゅう事がどういう事かわかってるんやろな？」
エルデの問いに再びファルケンハインとアトラックは顔を見合わせた。またもやアトラックは眉をひそめるだけだった。ファルケンハインは心の中で苦笑すると、エルデに顔を向けた。
「体調が悪かったことを言っているのか？」
エルデはうなずいた。
「しかも、相当に、や」

エルデはそういうやりとりをしながらも、ファルケンハインに抱きかかえられてぐったりした状態のアプリリアージェの脈を診たり額に手を当てたり、頬の熱を手の甲で確認したりと簡単な診察を手際よく行っていた。
「重ねて言うとくけど、あの時のリリア姉さんの状態は、ちょっとやそっとの具合の悪さやなかったと思うで。俺かて普通やったらこんな危険な呪法を重ねがけとかしてへん。俺の見たところ、気分が悪いというよりも必死で何かの痛みを堪えてる風やったな。この件についてはこっちが聞きたいんやけど、姉さんには何か持病とか疾患でもあるんか？」
ファルケンハインは目を伏せると首を振った。
「恥ずかしい話だが、今までそんなことは一切気づかなかった。普段の司令は周りがどういう状況でもいつも穏やかに笑っているだけだからな」

エルデはファルケンハインからアトラックの方に視線を移した。だが、アトラックは肩をすくめると、バツが悪そうに首を振った。
エルデはファルケンハインと同じ様に心の中で苦笑すると、今度は少し遠くで佇んでいる小さな影をみやった。だが、すぐにそれが無駄な行為だったと思いついて首を横に振ると、小さくため息をつ

いた。
「司令の忍耐強さにル＝キリアの他の面々はどっぷり甘えてて、要（かなめ）たるリリア姉さんの事を気遣う奴は誰一人おらへんかったって言うことか」
「返す言葉がない」
ファルケンハインはそう言うと目を伏せた。

ファルケンハインは唇を噛んで、過去のことを反芻していた。
確かにエルデの言うとおりかもしれなかった。アプリリアージェが人間なのだということをともすれば忘れているのかもしれないとさえ思った。
考えてみれば、アプリリアージェは全種族中もっとも体力の弱いダーク・アルヴ族なのだ。しかし、こうやって第三者から指摘されなければわからないほど、アプリリアージェから変化を読み取るのは困難な事であった。その変化を、ファルケンハインの目の前にいる黒い瞳の少年は短期間のつきあいであるにもかかわらず、一目で見抜いてしまった事実は重い。
それこそが自分たちとエイル・エイミイとの間にある決定的な違いの一つだと言うことをファルケンハインとアトラックはこの時思い知った。

「とにかく時間的な余裕がある今のうちにちゃんと治療しとく。でもその前に、このままやと体が冷えるさかい何か姉さんの体をくるむものを」
「え？」
エルデの問いかけにファルケンハインとアトラックはまたまた顔を見合わせた。
「何やねん？」
ジロリと睨むエルデにアトラックはバツが悪そうに頭を掻きながら切り出した。

「いや、その。くるんでいいのか？」
「冷えるからくるんでくれって言うた」
「治療するって？」
「ああ！解らんやっちゃな。治療するって言うたやろっ！」
「いや、だから服を着たままで治療するのか？と思ってだな」
「あ……」
エルデはようやく二人の微妙な態度に得心がいった。治療前の詳しい診断を触診で行うと思っていたのだ。通常の医者に診せるように。
エルデは溜息をつくと腰に手を当てて二人を改めてにらみ据えた。
「言われたとおり、早ようくるめっ！」

エルデの強い調子の言葉にファルケンハインは慌てて自分のアルヴ・メイドのマントを荷物から取り出し、器用に小さなアプリリアージェの体を包んだ。
「このマントは薄手だが、特殊でな。こうやってくるんでおけばメリル海域のエヒル鴨の極上の羽毛で出来た布団よりも軽くて暖かいはずだ」
エルデはそれを見てアトラックのマントも要求した。アトラックは一言の文句も言わずにエルデにそれを手渡した。エルデはあたりを吟味して平らな地面を見つけると、そこにアトラックから脱がせたマントを敷き、アプリリアージェを横たえるようにファルケンハインに指示した。

「今更こんなことを聞くのも間抜けだと自覚しているんだが」
言われた作業を注意深く行いながら、ファルケンハインはそう声をかけた。
「今度はなんや？」
「治療するとか言ってたが、お前は回復系のルーンもそこそこ使えると言う事なのか？」

「え？」
ファルケンハインの問いに、エルデの動きが止まった。
「例の強力な回復系のルーンにも驚いたが、お前はさっき、司令の太ももの矢傷も走りながら治療していたろう？さすがに賢者ともなると普通のルーナーと違って実に器用なものなのだな」
「は？」
まさに儀仗ノルンを呼び出そうとしていたエルデは、右手を前方に突き出した格好のままで不思議そうに自分を見つめるファルケンハインの表情を伺った。そして不機嫌そうな表情になると目をそらして「フン」と鼻を鳴らした。
「何トボけた事言うてんねん。俺はもともと回復専門のハイレーンや」
「何だって？」

『あ、そう言えば』

ファルケンハインとアトラックが同時に放った言葉とは別に心の中でもう一つの声がした。

『お前、その事をまだちゃんと言ってなかったろ？』
【そだっけ？】
『「今の段階では余計な情報を与える必要はないやろ～」とか言ってそのまんまだったろ』
【なるほど。一貫した秘密主義やな。我ながらあっぱれや、と思う】
『へえへえ』

「エイル、お前……攻撃系のルーナー、いわゆるエクセラーじゃなかったのか？」
「あれ？言わへんかったっけ？あはははは」
エルデは頭をかきながら作り笑いで答えた。

さすがに今まで黙っていたのはまずいと思ったのだろう。誰が見てもバツが悪そうな顔だった。
「あはははは」
「えー。要するに俺は回復が得意というか、回復特化のルーナーなんやけど？」
「だが、お前は炎の攻撃系ルーンを使っていた」
ファルケンハインの指摘に、アトラックが続けた。
「ランダールの火事の時は水のルーンも使っていたはずだよな？」
「それにさっきは逃げながら明かりだけじゃなくて周りに結構ハデな各種攻撃ルーンを使っていたような気がするんだが」
「そう。それも、結構楽しそうに」
エルデは二人の質問を人差し指で鼻の頭をかきながら聞いていた。
「それに確か氷で俺達を一瞬に凍らせる事が出来るとも言っていたよな」
「灰も残らないような高温で焼却も出来るとも言ってましたね」
「ああ、あんなもん……」

エルデはその質問に救われたようにニヤリと笑うと地面に生えている雑草の中から大きめの葉を選んで一枚ちぎり、それを見つめて小さくつぶやいた。
「ケスレイ」
そしてファルケンハインとアトラックの目の前にその葉を突き出すと、手を離した。長い草の葉はひらひらとは舞わずにそのままほぼ真っ直ぐ地面に落下するとパリンという乾いた音を立て、いくつかの大きさの葉に割れて砕けた。
それを見たエルデは、再び小さくつぶやいた。
「ドラク・エフィール」
すると、砕け散った葉が地面の上で真っ白に輝いたかと思うと、湯気を出し、そのまま消えていった。
「こういう具合や」

その様子を無言のまま見つめていた二人に、エルデはそう言った。
「この程度やったらせいぜい中位レベルの優しいルーンや。高位になると対象を結構な広範囲に広げられるものもあるし、体積が大きいものにも対応できる」
「いや」
ファルケンハインは首を振った。
「それでも、回復専門のハイレーンがあれほどの攻撃ルーンを、しかもあそこまで見事に使いこなしている話はあまり耳にしたことがない」
エルデはその言葉を聞くと、ファルケンハインを睨んだ。
「『あまり』、やて？」
「あ、いや……」
ファルケンハインはそのエルデの鋭い視線に一瞬たじろいだ。さっきのバツの悪そうな、済まなそうな態度はすでに影も形もない。ファルケンハインは自分を見据えるそのエルデの視線にゾッとしたものを感じたのだ。
「全く聞いたことがない、でいいのか？」
エルデはファルケンハインの訂正を聞くと満足そうにニヤリと笑った。その表情には、もう相手を射すくめるような雰囲気はない。ファルケンハインはその豹変ぶりに小さな混乱を覚えた。
―（こいつは一体、何なんだ？）
そんなファルケンハインの心の中など全く意に介さずと言った風に、エルデは普通の声色で説明を続けた。注意の対象はもうファルケンハインやアトラックではなくアプリリアージェに移っていて、その手をとると再び脈を診た。
「一般に回復系ルーナーであるハイレーンが攻撃系ルーンを使うとルーンの純度が汚れる……っちゅうか、分かりやすう言うと回復系ルーンの効力が落ちるとか言われてるさかい、回復系ルーナーは攻撃系のルーンを使わへん方向にあるようやけど、それはウソやで。そもそも回復系専門のハイレーンや言うても攻撃系や強化系の高位

ルーンを使えへん訳やないんや」
「なるほど、道理だな。ルーナーたるもの、同じルーンだから種類によって使えない訳はないと言うことだな」
「まあ、簡単に言うたらそう言うことやな」
「ではなぜ一般に回復系ルーナーは中高位の精霊攻撃系のルーンを使わないんだ？」
「答えは単純や。単純にハイレーンやコンサーラは攻撃系ルーンを知らんだけや」
「なるほど」
ファルケンハインはうなずいた。
「確かに簡単な答えですね」
アトラックもファルケンハインに相づちをうった。
「全部極める、ちゅうヤツもひょっとしたらいるんやろうけど、高位ルーンの習得を目指すんやったら、まずは専門系を極める方向から入らへんとそもそもムリやしな。それに、だいたい弟子は師匠の知らんルーンを会得するのが難しいわけやから、師匠がどの専門かによって弟子の方向性はほとんど決まってしまうのが普通やろ」
「では、お前の師匠のシグ・ザルカバードという賢者も回復系ルーナー、ハイレーンだということか」
「いや」
「違うのか？今のお前の話だとそう言うことになるが」
エルデは腕を組むと首をかしげながら思案するように言った。
「うーん。師匠自身は攻撃系を得意とするエクセラーって事になってるな。教会でも炎系攻撃ルーンの第一人者で通ってるしな。でも俺が思うに師匠はむしろ強化系の方が器用で得意みたいやから本来はコンサーラのはず」
「はず？」
「低位のちょい上の回復ルーン程度、つまりエクセラーでもコンサーラでも器用な奴ならなんとか使える程度のやつ。そのくらいのルーンなら師匠に直接教わってたんや。そやから本来どっちが得意な

んかまでは知らん」
「知らんって、お前の師匠なんだろ？」
「まあ、師匠はそこそこ器用なルーナーやっちゅう事がわかればええやん。少なくともハイレーンやないのは確かやな。中位、高位の回復系ルーンは俺が独学で会得したし、だいたい本人が知らんって言うてたしな。一緒におった弟子は高位ルーンも全部師匠から直接指導されてたけど」
「独学？ルーンっていうのはほとんど口伝と聞いたが」
「というか、なぜ自分の得意分野ではない師匠がハイレーンの育成をするんだ？」
「そんなもん決まってるやん。特性や」
「特性？」
「こんな事言いたないし認めてへんけど、俺は攻撃系ルーナーや強化系ルーナーとしては少なくとも師匠からは認められへんかったんやろな」
「ふーん」
「こら、そこ！今、微妙に俺をバカにせえへんかったか？」
エルデはアトラックを睨んだ。
アトラックは慌てて両手を前で振って否定して見せた。
「いや、そう言う意味じゃないって」
「フン。まあええわ」
「俺達も全属性のエーテルを使う回復系ルーンの方が単属性エーテルの制御からなる攻撃系ルーンの何倍も複雑で、そもそもルーンを発動するための能力も安定して高いものが求められる難しいものだと言うことくらいは知識として知っている。だから回復系ルーナーであるハイレーンがあまりいないということもな」
アトラックの答えにエルデは満足したような笑みを浮かべると続けた。
「独学の件については、簡単や。教会には様々なルーンが記述された文書が腐るほど眠ってるんや。実際、文字通り腐ってる文書も多

かったけどな。まあ、もっとも」
「もっとも？」
「回復系はともかく、攻撃系の高位ルーンが記述されたモンはさすがにないけどな」
「口伝というのは主に攻撃系ルーンや強化系ルーンの話か」
「あ、今、微妙に俺に対して失望したやろ？」
「そんなことはない」
「いや、言葉に残念感が漂っとったで」
「考えすぎだ。もっとも、お前が高位の攻撃系ルーンを使えることを前提に戦術を考えていたのは確かだがな……たぶん司令も同様だろう」
「言うとくけど、攻撃系の高位ルーンだけを使えるヤツはそこそこ居るけど、回復系の高位ルーンを極めた賢者は教会でも多分俺くらいやで。って言うか、教会にある回復系ルーンを全種類使えるのはファランドール広しと言えど、俺だけやろな」
「ほう」
「あ、その微妙な言い方……信用してへんな」
「いや、そうではない。ただ、今の俺達にありがたいのは攻撃系ルーナーだな、と思っただけだ」
「フン。その考え方、根本から変えさしたるわ。回復系を極めたホンマモンのハイレーンの恐ろしさ、見とれよ」
「楽しみにしていよう。だが、中位程度なら攻撃系ルーンは使えるということだな？」
「ああ、見ての通りや。通り一遍のそこそこのルーンは全部使えるで。場合によっちゃ高位ルーンも古代ルーンも使える。強化系ルーンについても体験済みやろ？」
「そうだな」
ファルケンハインはうなずいた。調達屋ベックの店から脱出した際に懸けられた姿を消すルーンなどはおよそ低位ルーンであるはずがなかった。

「攻撃ルーンなどは「真赭の頤」から？」
「いや、あの爺さん、俺には初心者用の超簡単攻撃ルーン程度しか教えてくれへんかったしな。むしろそう言うのを使うのは禁じられとった。お前は回復系ルーンの専門家であるハイレーンに向いとる、それ以外は使わんでええっちゅうて」
「では、それも独学か」
「まあ、な。ほとんどはシグの爺さんの庵で家捜しして見つけたもんやけどな」

エルデは庵を回るうちに、その庵に隠されていた様々な攻撃系ルーンが記された文書を発見し、それをその場で会得していたという。多くのルーンは契約文と認証文とが別途保管されているものだが、「真赭の頤（まそほのおとがい）」の庵にはそれが対で保管されていた。

エルデはそのおかげでルーン自体を探す時間をかけることなく独学でルーンを会得することができたのだ。もっとも、当たり前のことだが契約文と認証文が書かれているからと言ってそのルーンを会得出来るわけではない。そのルーンを唱えられるだけの能力がないルーナーが不用意にそのルーンを唱えると、履行されるどころか自らの体を傷つける事になり、ルーンの強さによっては簡単に命を落とす事になる。そもそも多くのルーナーの場合はエーテルが反応すらしないことがほとんどであろう。こともなげにルーンを会得しているエルデでさえ、内容を暗記しただけで、実際に詠唱・会得を行っていない物も多かった。それらの多くはいわゆる高位ルーンという分類をされる強力な攻撃・強化系ルーン達だ。

会得難易度では攻撃系の数倍も困難であると言われる回復系の高位ルーンを使いこなせると豪語するエルデにしてその慎重さである。ルーンの会得は安易なものではないという事を示す逸話と言っていいだろう。

また、どうやらエルデは庵で見つけたルーンが記された文書をす

べて焼却していたとも言われている。言い換えるならば、現在いわゆる高位ルーンというものがほぼ伝説化しているのはエルデのような痕跡抹消系のルーナーの仕業とも言えるだろう。また、高位と言われるルーナー程この傾向が強い。

今日においてもルーンの研究者として著名であり多くの「ルーン書」を収集し、自身も様々なルーンに関する文献を残したと言われる「真赭の頤（まそほのおとがい）」の資産がほとんど見つからないのは要するにエルデのせいであった。

なお、「ハイレーン」「エクセラー」「コンサーラ」という呼称は、本来それぞれの「高位ルーン」を複数使える者に対して使う尊称であった。つまり、中位程度のルーンしか使えないルーナーを指す呼称ではないのである。しかし、時代が下るにつれ、単に得意とする系統が攻撃系なのか強化系なのかという「専門分野」的な名称に変化していった経緯がある。

『なあ、回復系ルーナー……ハイレーンってそんなに恐ろしいのか？』

【回復系が恐ろしいんやのうて、俺が恐ろしいんやけどな】

『ち。なんだ』

【でもまあ、同じ程度の能力を持っとる攻撃系ルーナーと回復系ルーナーが一対一で対決しても、回復系ルーナーは攻撃系ルーナーには負けへんけどな】

『え？なぜ？』

【うーん。まあ、戦ったらわかるわ】

『説明がめんどくさいのかよ』

【まあ、そうやな】

『戦ったことがあるのか？』

【ある】

『で、勝ったのか？』

【負けてたら、今ここにおらへんやろ？】

『なるほど。で、相手はかなりのルーナーなのか？』
【まあ、相手は師匠やしな。負けててもここにおったとは思うけど。あと正確に言うと俺と師匠の場合、同じ程度の能力やないけどな】
『マジで「真赭の頤」と戦ったのか？』
【その話はまた今度や。面倒やから】
『まったく』
話を適当なところで打ち切ろうとするエルデに対して、これ以上いくら突っ込んでもそれ以上の情報が得られないことをエイルは知っていたので、その場は素直に引き下がることにした。

「さて、質問時間は終わり。今からリリア姉さんの治療をするで」
エルデはそう言うと儀仗ノルンを取り出していつものように水平にして前方に突きだし、小さい声でいくつかのルーンを続けて詠唱した。
詠唱が終わるとアプリリアージェはしばらく小さな山吹色の光に包まれていたが、少ししてその光が消えていくと、土気色をしていた顔に徐々に生気が戻ってきた。

「おお」
その様子を見ていたファルケンハインが驚きの声を上げた。
「劇的だな」
「言うたやろ、俺はハイレーンや」
エルデはそう言うと、心なしか胸を反らした。
「ごもっとも」
アトラックは芝居がかった大げさな礼をして見せたが、エルデは相手にせず儀仗をアプリリアージェの腹の上方にかざした。
「よしよし、計算通りや」
しばらくそうやっていたエルデはそうぽつりとつぶやいた。
「体調不良の原因が、わかるのか？」
エルデはうなずいた。

「言っちゃ何やけど、俺くらいのハイレーンになればまずそれを診断してから治療にかかるからな」

「それで、司令の体調不良は何が原因なんだ？」

アトラックの問いに、しかしエルデはしばらく口を開かず、眼下に横たわる無防備な戦士を見つめていた。

その時、ファルケンハインにはアプリリアージェを見守るエルデのまなざしに深いいたわりのようなものが浮かんでいるように見えた。時々見せる背筋が凍るような禍々しい雰囲気とはまるで違う、強いて言えばそれは対極にあるもので、ずっと見ていると引き込まれるような気持ちになる、穏やかで優しい表情だった。

―（こいつは、こんな顔もできるのか。賢者とは、かくも謎の多い存在、という事か）

心の中でそう自問したファルケンハインだが、その答えを誰かに求めようとしているわけではなかった。もちろん自ら答えを出すつもりもなかった。ただ、目の前のものを受け入れるしかない、と言う思いの方が強かった。それだけエルデが超越したものに見えていたということであろう。

ややあってエルデが顔を上げると、そこにはじっと自分の方を見つめる視線があった。視線の主は小さな人形……テンリーゼンだった。彼はいつものように、何も言わず、少し離れたところに佇んで、じっと一同の動きを見守っていたが、エルデと視線を合わせると、珍しく小さく首を横に振って意思表示を行った。

エルデはそこに「何も教えるな」というテンリーゼンの言葉を見た気がした。もちろんテンリーゼンの本心は測りかねたが、もとよりエルデはアプリリアージェの体調不良に関してファルケンハイン達には何も言うつもりはなかった。この件については司令であるアプリリアージェが直接部下に告げるべき問題だと考えたからだ。エルデはテンリーゼンに向かって小さくうなずくと、顔を上げてファ

ルケンハインに向き合った。
「患者の秘密は守るのがハイレーンやからな」
ファルケンハインは納得がいかない回答に眉をひそめた。
「それは医者の台詞だろう？」
「今は医者みたいなもんやし。というかそもそもハイレーンは医者の上位にある存在やで」
「しかし」
エルデは手を挙げて先にファルケンハインを制した。
「ファル兄さんの気持ちはわかる。でも言わへん」
「エイル……」
「ただ、これだけは言うとく」
ファルケンハインは無言でうなずくとエルデの言葉を待った。
エルデはテンリーゼンをチラリと見ると、大きく深呼吸をしてから言葉を続けた。
「命に別状あるとかそう言うんやないから安心し。姉さんはびっくりするくらいの健康体や。ダーク・アルヴとしては相当ムリしているくせにな」
ファルケンハインは釈然としないという顔をしてアトラックを見た。アトラックは仕方ないですね、と言う風に首を振って見せた。

『何なんだよ？』
【リリア姉さん？】
『ああ』
【うーん】
『おい、オレには言ってくれよ』
【まあ、ええか。ただの生理痛や】
『え？』
【姉さんもああ見えて体は普通の女という枠から出られへんっちゅう事や】
『なるほど、生理痛か』

【あの様子やとリリア姉さんのはかなり重いみたいやな。辛いんやろなあ。こればっかりは男のおまえさん等にはわからへんやろうけどな】

『フン、お前だって』

【……】

『で、治るのか？』

【痛みはかなり散らしたから和らいでるはずや。材料があったら生理痛によう効く薬を調合出来るんやけどな】

『その痛みって、しばらく続くのか？』

【医学的な一般論を述べると、アルヴやダーク・アルヴはデュナン系に比べると生理自体は軽くて期間が短いのが特徴らしいけどな。ちなみにデュナン系の月経が毎月あるのに比べてアルヴ系は二ヶ月に一回やから、単純に計算してもデュナンの半分の頻度でしかも軽いっちゅうんやから楽なはずなんやけど、こればっかりは個人差が大きいし一般論はあてはまらへんな。でもまあ原因がわかれば対処のルーンがあるから、戦闘中とかはもう心配ない。例の体全体の痛みを抑えて細胞レベルで活力を向上させる劇薬みたいなルーン……いや、血液を触媒化するからほとんど呪法やな。まあ、そういうものとは根本的に違うて極めて安全なルーンで今後は対処できる】

『そうか。でも、それくらいならみんなに話してやってもいいんじゃないのか？』

【フン、これやから女心がわからんヤツは嫌やねん】

『なんだよ、まるでお前は女心を理解してるみたいじゃないか』

【悪いけどエイル、俺はきわめて繊細な存在なんや。鈍感でがさつきわまりないおまえさんと一緒にしてもろたら賢者としての威信に関わるわ】

『好きなだけ言ってろ』

「あ、それとファル兄さん」

エルデは思い出したようにファルケンハインに声をかけた。

「次はそっちの番や」
「え？」
「かすり傷やろけど、怪我はあるよりない方がええやろ？」
エルデにそう言われて、ファルケンハインは直ぐに合点して苦笑した。
「そうだな。頼む」
そしてこう続けた。
「それから『兄さん』はいらん。ファルでいい」
「了解や、ファル」

『おい、ファルにかこつけて逃げたな？』
【俺がなんでお前から逃げる必要があんねん？】
『いや、そうじゃなくてだな』

エイルとエルデのいつもの口げんかなど全く認知できない一行はとにかくアプリリアージェの体は大丈夫だと知り、釈然とはしないながらも場には安堵の空気が流れていた。

# 第三十五話　アロゲリクの庵

「ここか」

呟くともなしに声に出た。

三聖「蒼穹の台（そうきゅうのうてな）」ことイオス・オシュティーフェは青白い儀仗を左手に持ち、岩肌が見える切り立った崖の下に居た。

アロゲリクの渓（たに）と呼ばれる場所で小柄な彼が見上げるのは、遠い昔に地殻変動で隆起し、あらわになった山の内部だった。それは長い年月をかけてその表面を削られ、磨きあげられ、美しく鍛え上げられていた。

所々に亀裂があるものの、そのむき出しの崖はどうやら一枚岩で出来ているようだった。

「はい。これが、「真赭の頤（まそほのおとがい）」が各国の首脳に送りつけたと言われる庵の一つです」

「『「真赭の頤」を騙る人物』の間違いだよ、「菊塵（きくじん）の壕（ほり）」」

「御意」

「蒼穹の台」は少し離れたところに同じように儀仗を持って佇む壮年のデュナンの男にそう答えた。

「菊塵の壕」と賢者の名で呼ばれたデュナンの男は、正教会に残る記録によれば「真赭の頤」ことシグ・ザルカバードと同じくマーリン正教会の「大賢者」という地位にある人物であった。現名（うつつしな）をシャレイ・カンフリーエと言う。族名で解るとおりファーン・カンフリーエの親族で、実の兄であったと伝えられる。兄と妹の種族が違うのは母親の違いからくるものであろう。

すなわち、ファーンは両親共にアルヴ族であり、シャレイは正確

に表現するならばどちらかがデュナンであるデュナン系の混血、「デュアル」という事になるが、詳細がわかる記録はない。

「さて、何の変哲もない一枚岩の扉に見えるけど、これを開けると一体何の仕掛けがあるのやら」

「蒼穹の台」はそう呟くと儀仗から手を放した。そして目を伏せて腕を組んで、考え込むような仕草を見せた。こういう態度を取る時の「蒼穹の台」が実際には何も考えていないことを「菊塵の壕」こととシャレイはよく解っていた。その場にいるもの、つまりシャレイの意見を聞きたがっているのである。

心得ているシャレイはもちろん、その小さな金髪の三聖に声をかけた。

「ご存じのように他の同じような庵では、シルフィード王国軍の精鋭が少数ながら突入した際は全員命を失ったと聞き及んでおります。従って何らかの設置式ルーンによる罠の可能性が高いと思われますが、ここから見たところ精霊陣もないようですし、正直申し上げまして現段階では私には皆目検討がつきません」

イオスはシャレイの言葉を聞くと顔を上げた。

「ただの空洞か、ボクの知らない未知の術が仕掛けられているのか……。どちらにせよ大賢者がしっかり調べて分からないのにボクなんかが一見した程度で分かるはずもない、か。つまり、ここはひとまず入るしかないようだね」

「では、私が」

「いや」

イオスはシャレイの申し出を即座に却下した。

「ここまで近づいても全く気配を感じないからくりには興味が湧いたよ。この身で確かめたいね」

「蒼穹の台」がこういういい方をする時は、自分の意見が受け入れられないことを「菊塵の壕」は理解していた。

つまりはこう言うしかないのだった。
「承知いたしました」
「すぐに戻る。ここで待っていてくれ」
「はい」
後ろ姿のままシャレイにそう言うと、イオスは宙に浮いたままの青い儀仗を手に取り、ずいっと岩壁に歩を進めた。
一歩、二歩。
そして手を伸ばせば岩肌に手が着くまで近寄ると、彼は青い儀仗を高く空にかざし呟くような声で何事かを唱えた。
ごく短い詠唱が終わると、イオスは今度は杖の頭で岩壁をトンっと叩いた。すると何の音もなく岩肌に、アルヴが一人横を向けばなんとか通れそうだと思われる程度の亀裂が現れた。
やはり仕掛けはあったのだ。
問題はその内部なのであろうが、イオスはしかし何のためらいもなく無造作にその亀裂の奥へ入っていった。アルヴが横になってかろうじて入れる程度の亀裂は、小柄なアルヴィンのイオスにとってはさほどやっかいな狭さでもないようで、シャレイはひょいひょいという感じで奥に歩みゆくイオスの姿を見送る事になった。

「菊塵の壕」シャレイ・カンフリーエがいわゆる「ザルカバード文書」の存在を知ったのは、おそらく各国の主立った人間がその存在を知った時期とほぼ同時期であろうと思われる。しかし、正教会の賢者会はその件を無視することに決めていた。大賢者がそう通達したからだ。
そもそも賢者会では二年前にシグ・ザルカバードこと大賢者「真赭の頤」が「処分」されこの世に居ないことは誰しも知っていることであった。従って少なくとも差出人については存在しない人間だと言うことが解っていた。
では内容についてはどうか？
「エレメンタルの所在を知っている」旨の記述があるとされる「ザ

ルカバード文書」だが、その点については正教会としても興味を持ってしかるべきである。しかし賢者会は文書自体を無視し、各国からの問い合わせには賢者会の下部組織ながらマーリン正教会の公式の代表者である大神官を使って「正教会と関係なし」という正式な見解を出していた。

だが、その実は違ったようである。

大賢者は「ザルカバード文書」に記された世界中に散らばる十三の庵の調査に、自らが当たっていたというのだ。

四人しかいないと言われる大賢者自らが行動を起こすというのは極めて異例と言えた。「真赭の頤」がその座を空けてからは後継は現れておらず、当時大賢者は三人体制であった。

いや、実は「ザルカバード文書」の調査に当たった大賢者は「菊塵の壕」ただ一人である可能性が高かった。その詳細についてはここでは記さないが、当時健在であった三名の大賢者のうち、いわゆる公務をこなしていたのは「菊塵の壕」だけであった事が正教会の記録を見ればわかる。

シャレイはいくつかの庵をあたってみたものの、見つけたものはどれもただの祠や洞窟で、そこでは特に収穫が得られなかった。

ただの徒労だと思い始めていた時に、他の庵でル＝キリアの死体が発見されたという報が入った。

シャレイはその意味するところをはかりかねていたのだが、そんな折りに突然「蒼穹の台」から声がかかった。ランダールに行くついでに、その妙な庵を見たいというのだ。すなわち一番近い場所にあったアロゲリクの渓に白羽の矢が立った格好であった。

三聖ほどの立場にいるものが直接手を下すような案件ではないと思いつつ、さりとて賢者会には任せられない重要事項である事も確かである。なにしろ「元」大賢者「真赭の頤」に関する案件なのだ。

つまりはイオスの申し出を断る理由は特になく、快く案内を引き受けたシャレイであった。

とはいえ、アロゲリクの渓にある庵についてはすでに調査済みで、

「ただの隠し洞窟」
シャレイはそう結論を出していた。
そもそも「ザルカバード文書」自体はル＝キリアの小隊が殺害されたという事実がなければ「手の込んだ悪戯」だと結論づけてもいいような案件のはずであった。隠し洞窟などファランドールには幾らでもある。それらを使った愉快犯の様なものとして看過する程度のものだと考えていた矢先であった。
ただ、「真赭の頤」と「エレメンタル」という言葉を使い、一体誰がそういう意味のない、幼稚に過ぎる悪戯をする必要があるのかは大いなる謎であった。

しかし、被害が出た。
さりとてこれと言った手がかりはない。
謎は深まる。
だから、もしや三聖なら何か手がかりを見つけられるのではないか？

そう期待もしていた。
だが、庵を目の前にざっと様子を見ただけの段階では、結局何も進展してはいなかった。
シャレイは半時ほどその場でじっと岩を見つめていたが、ようやく目の前の亀裂の奥から土を踏む足音が聞こえるのを確認した。
程なく、入った時と全く同じ青いローブ姿のイオスが現れた。表情にも特に変化はない。要するにその表情からは調査の結果は読めなかった。

「待たせたね」
「いいえ。それよりも如何でしたか？」
「わからないよ」
「そうでしたか。やはり……」

「ここの仕組みは分かった。わからないのは一体誰がこんな仕掛けを作ったのか、という事だよ、「菊塵の壕」」
シャレイの眼が見開かれた。
「仕組が、おわかりですか？」
イオスはつまらなさそうにうなずいた。
「君にはわからないはずだよ。この洞窟にある精霊陣には強力な不可視処理が施されていたよ」
「内部に精霊陣があったのですか？」
「そう。廻りにはない。内部に狭い範囲で描かれていた。ただしやっかいなことに発動するまで不可視ときている。ボクにも見えなかったよ。だからおそらく誰にも見えないだろうね」
「それを見つけられた、と？」
「何、簡単な事だよ。ボクがル＝キリアになってみれば良かったのさ。答えはそこにあった」
「と、申しますと？」
イオスはローブについた土の汚れをパンパンと叩きながら、抑揚のない声で答えた。
「いろいろやって解ったことだけどね。ル＝キリアだけが被害に遭ったと聞いて、試しに強い風のエーテルだけを纏ってみたのさ」
「なるほど、ル＝キリアになるというのはそう言うことですか」
「言い換えると、この洞窟の精霊陣は強い力を持つ風のフェアリー……ここに来る可能性がある者と言ったらル＝キリアだろう？つまりここは彼らの為にだけ作られたものだということだ」
「それは、一体？」
イオスはシャレイをちらりと見るとため息をついた。
「だから言ったじゃないか。それがわからないんだよ、菊塵」
そう言うとイオスは今し方入っていた洞窟を振り返り、青白い杖を無造作に振って見せた。すると洞窟の中から耳にかろうじて聞こえるほど低いうなりが聞こえたかと思うと、地面が揺れ、同時に土埃のようなものが亀裂から吹き出した。

「どちらにしろここが危険なものだということは確かだ。精霊陣は破壊した方が良いだろう」
「御意」
「もっとも、もうこの罠は目的を達してるのかも知れないけどね」
「設置した相手を特定せねばなりませんな」
イオスは内部を破壊した洞窟を興味がなさそうに一別すると、踵を返して歩き出した。
「「菊塵の壕」」
「はっ」
「急ぎ帰って、大賢者達にはこのことを伝えておくれ。どうやら我々が思っているよりも早くファランドールの歴史が変わる気がするんだ」
シャレイは立ち止まらずに喋る小柄なアルヴィンの後ろを追った。主人の少し後ろ、一定の距離を開けて歩くのがシャレイの定位置のようだった。
「三聖には？」
少しの逡巡の後、シャレイはイオスの後ろ姿に声をかけた。
「連絡なんかとれないだろう」
「左様ですな。それで猊下は？」
「ボクはこの近くで人に会う用がある。それが済んだらお前の後を追って「前座」へ戻ろう」
「承知いたしました」
それだけを言うとシャレイはイオスの後ろ姿に深々と礼をして、儀仗を手にイオスとは反対側へ走り出した。

イオスは背中でシャレイが遠ざかるのを感じながら、自身はゆっくりと歩を進めながら頭の中を整理していた。
―（心当たりは、あるにはあるが……）
どちらにしろ少し考える時間が必要だった。
正教会の三聖と呼ばれる彼をして、動き始めたファランドールの

歯車の音がすべて聞こえている訳ではないのだ。

イオスは林の中で不意に立ち止まると、儀仗を掲げて何かを呟いた。

すると青白い儀仗は淡い乳白色の光を拡散し、彼の体を包んだ。

そしてその光が消えた時、そこにはもう誰の姿もなかった。

# 第三十六話　黄昏の王立図書館

アプリリアージェは夢を見ていた。

いつもの夢だ。

周りの様子はぼんやりとしたものたが、そこがメッダの王立図書館の一隅（いちぐう）にある特別な個室であることはわかっていた。なぜならまだ幼い頃、アプリリアージェは来る日も来る日もそこで一日の大半を過ごしていた時期があったからだ。目を閉じればすぐにまぶたに浮かぶような、言ってみれば掌の中にある自分自身の原風景の一つと言ってもよかった。

アルヴの大人が二十人ばかり着くことが出来そうな大きくて頑丈な樫の円卓が部屋の中央に置かれており、三方の壁は書棚で埋まっていた。各書棚は十段ほどで、壁の上方には別途書架がしつらえてあった。

残る一方には書棚のない壁があり、こちらは上方に書架もない。壁のほぼ中央には明かり取りになる窓があり、そこからエッダの空が見えた。

アプリリアージェはその部屋で円卓に何冊もの文献を広げて読んでいた。

幼い頃の癖なのだろう。頁を押さえていない片方の指が、伸ばした黒髪の先をくるくるともてあそんでいた。

その小さな手と背中まで伸びた長い髪が、少女時代の自分のシンボルマークであったことを、彼女は思い出していた。

小さな指で文字列を追いながら、アプリリアージェは浮かない顔をしていた。退屈だったのだ。この頃になると、文献から新たな驚きや感動を得られくなっていたこともあるが、まだ幼いアプリリアージェにとって、一日中たった一人で文字と遊んでいる行為そのものがつまらなく思えていた時期であった。

円卓に無造作に開かれた文献の多くは歴史書で、その頃は特に戦術書や戦記、過去の戦争に関する体系的な考証が行われている検証戦記録と呼ばれるものだった。

彼女は絵本や物語などを読んでいたのではなかったのだ。

「お姉ちゃんは、いつも独りなんだね」

アプリリアージェは思わず小さな叫び声を上げると、声が聞こえた後方をおそるおそる振り返った。

そこには、見慣れぬ一人の少年が立っていた。

まだ幼かったアプリリアージェよりもさらに年下と思える焦げ茶色の髪をした幼い少年が、まぶしそうな顔をして黒い髪の少女を見上げていたのである。

種族はデュナン。

まだあどけない顔をしたその少年の瞳は珍しい金色で、その目を見ていると、不思議な事にアプリリアージェはそこに自分の顔が映っているのがはっきり見えるような気がした。

この部屋にアプリリアージェ以外の人間が入り込むことなど考えにくかった。ましてや王立図書館の機密文書庫にある個室である。子供が入り込むことなどあり得ないはずであった。

だが、アプリリアージェはなぜかそんなことを疑問にさえ思わなかった。ただ、その少年の金色の瞳に釘付けになっているだけの自分に気がついて、妙な気分におそわれていた。それは突然現れた不思議な少年に対しての驚きや警戒心を、もう一人の自分が、そんな事を思う方がばかばかしいのよ、とでも語りかけているようだったのだ。

その気持ちが一体何であるのかはわからない。ただ、アプリリアージェは、気付くと自然に微笑みを浮かべていた。

「なぜお姉ちゃんは毎日毎日そんな本ばかり読んでいるの？」

自分に向かってほほえみを浮かべた長い黒髪の少女に、少年は重ねて尋ねた。

「え？」
アプリリアージェは、少年の指摘に虚を突かれたように目を丸くして驚いた。
少年は円卓の上に乱雑に放り出されている大量の本の山を指さした。
「お姉ちゃんが読んでいるのは、人殺しの記録や戦う方法が書かれた本ばかりだね」
「そうね」
アプリリアージェは手元で開いていた分厚い文献の綴りを閉じると、小さい窓から見える夕焼けの空に視線を移した。
少女の頃のアプリリアージェはあまり笑わない子だった。アルヴ族はあまり表情が豊かではないと言われているが、彼女は特に無表情な子供だったのだ。だから普段、微笑みはない。幸いな事に彼女は目尻が少したれているせいで普通にしていると優しそうな表情の子供に見えていたが、誰も普段、彼女が笑うところを見たものは居なかったのだ。
その時も、少年に向けた一瞬の微笑はすぐに消え、すぐにいつもの無表情になっていた。
ある事に思い至ったからである。
「キミは、書いてある事がわかるの？」
少年は当たり前だという風にうなずいた。
「ここはそんな本ばかりを集めてあるところだね」
周りの書架を見渡しながら、少年はそう言った。
「向こうの部屋には、もっと楽しそうな本がたくさんあったよ」
「そう……」
アプリリアージェは不思議そうに少年の瞳をみつめた。
「あ」
不意に少年は小さく叫ぶと、扉の方を見て体に緊張を走らせた。
「ボク、もう行かなくちゃ。またね。お姉ちゃん」

そう言うとアプリリアージェが声をかける前に駆け出して、扉の向こうへ去っていった。慌ててアプリリアージェは後を追ったが、扉を開いて廊下を見渡しても、少年の姿はなかった。

その代わりに見慣れた青年の姿を認めた。図書館の館長である。

アプリリアージェに閉館を告げに来たのだ。

不思議な事に、アプリリアージェはその少年との出会いを誰にも話さなかった。本来ならば普通の人間が迷い込めるはずもない場所に少年が入り込めた事がそもそも問題になるはずだった。

だが、アプリリアージェは少年に危険を感じなかったし、何よりその不思議な出会いを自分の胸の中だけにしまっておきたい気分だったのだ。

数日後、また、突然少年が現れた。

顔を上げると、そこにいたのである。

その日の少年は満面の笑みでアプリリアージェを見つめていた。

よく見ると、どうやら後ろ手に何かを持っているようだった。

「なあに？」

「楽しい本を持ってきたよ。一緒に読もうよ」

そう言うと金色の目をした少年は、一冊の絵本を差し出した。

「絵本ね」

「鯨の話なんだ」

そう言うと少年はアプリリアージェの隣の椅子に腰掛けて、その本を円卓の上に広げた。アプリリアージェは開かれた本をのぞき込んだ。

藍色の海の中にマッコウクジラが描かれていた。子供クジラが二頭、そしておそらくその母親が一頭。

クジラの親子はエサを求めてファランドール中の海を旅していた。子クジラ達は、その道程で様々な生き物たちと出会い、見聞を広げていった。

そしてある日、見た事もない生物とであう。人間である。
絵はアルヴのようだった。
陸の見えない海の上で、小さな板きれのような小舟でたった一人、漂流していたアルヴを、子クジラが見つけ、助けるという話だった。

母クジラははじめ、アルヴを助ける事を反対した。アルヴが漁師である事に気付いていたからだ。だが子クジラ達の説得で、母親は自分の口の中にアルヴを入れて海をわたり、アルヴの住む町を探して回った。しかし、尋ね回った漁村はどこもアルヴのふるさとではなかった。
そんな折り、とある湾で眠っているところを、クジラ漁の船団に親子は取り囲まれてしまう。その船団には、なんとアルヴが乗っていた船があった。
その事を知らされた母クジラはアルヴに頼んだ。自分の命と引き替えに、子供達を逃がすように説得して欲しいと。
大きな親クジラと戦えば、漁師達にも被害が出る。クジラ漁とはそれほど危険な漁でもあった。母クジラの申し出は悪い話ではなかったのだ。
アルヴは泣きながら母親に礼を述べ、命に代えても子供達を守ると誓って、自分の船に戻った。
固唾を飲んで成り行きを見守っていると、やがて船団が左右に分かれ、湾から外海へ続く海路を開いた。クジラの為の通路である。母親は子クジラ達を連れ、おそるおそる泳ぎだし、船団の中央に来たところで、子クジラ達を先に行かせた。母親とアルヴの約束を聞いていた子クジラ達は母親との別れをいやがって泣きじゃくったが、約束を守る事はクジラ族として命よりも大事な事なのだと諭し、ようやく外海に追いやった。だが、母クジラの目の前の船の舳先に立つあのアルヴは、大声で母親に叫んだ。お前も逃げていいのだと。
母クジラは訳を聞いたが、アルヴは仲間を説得できたのだとしか言わなかった。人間がそんなに甘いものではない事を知っていた母

クジラだったが、アルヴの言うとおりに外海へ出た。船団から少し離れたところで様子をうかがっていた親子は、舳先にいたアルヴが誰か知らない他のアルヴに剣で刺されるのを見た。そしてアルヴはそのまま海に落ちた。

母クジラは、慌ててアルヴの落ちたところへ泳いでいこうとしたが、その時、耳元にアルヴの声が聞こえてきた。

「逃げろ」

アルヴの声はそう告げていた。

「私の事はもういいのです。私は海賊の一味です。仲間の大事な宝物をあるところに隠して逃げていたのです。そこで嵐に遭い、あなたに助けていただきました。だから今度は私が助ける番。私が隠した宝物のありかと引き替えに、あなたたち親子を外海に逃がす約束を取り付けたのです。だからお逃げなさい。そしてもう、人間に近付かないように、楽しく暮らして下さい」

母子はその言葉を聞くと、アルヴが落ちた場所に向かって一目散に泳ぎだした。子クジラ達もそれに続いた。

「人間よ。我らがクジラ族を見くびるな。一度助けると誓ったのだ。ならば最後まで助けるのが我らの矜持。待っていろ、今助ける」

だが、捕鯨船団は戻ってきたクジラ達に一斉にモリを打ち込んできた。

するとその時、まばゆい光に包まれて、その場に声が響いた。優しく響く声はそこにいた全員に聞こえた。

「今宵は『合わせ月』。お前達はこの特別な日に何を争う?」

声はマーリンであった。全能の神は三者の言い分を聞くと、まず捕鯨船団に申し渡した。「今後、子連れのクジラをおそう事なかれ」

次に母クジラを叱った。

「クジラには矜持はいらぬ。ただ、我が子を守る事を最優先とせよ」

そして最後にアルヴに告げた。

「海賊であった罪は死に値する」

マーリンがそう言うと、けがをしていたアルヴは息絶えた。マー

リンはしかし、そのアルヴに向かって問いかけた。
「だが、最後にお前が行った事は、まさにアルヴの矜持にふさわしい。『合わせ月』の祝いじゃ。一つだけお前に褒美をやろう。今まさにその生を再生しよう」
死んだアヴルはそれを聞くとマーリンに申し出をした。
「生き返らせてもらえるならば、アルヴではなく、クジラになりたい」
と。
マーリンはそれを聞き入れ、アルヴはクジラの姿で生き返った。
アルヴだったクジラは、母クジラと子クジラと共に、そのまま外海へ泳ぎだしていった。
それ以降、子連れのクジラを捕獲する事はファランドールでは禁じられたという話であった。

アプリリアージェはその絵本を夢中になって読んだ。
最後の頁を読み終えて顔を上げると、そこにはもう、金色の目をした少年の姿はなかった。

次の日も、そしてその次の日も、少年は現れた。
少年は毎日違う絵本をもっていた。
アリクイとアリが、アイスとデヴァイスに行って、それぞれ平和に暮らす話。
裏山にひっそりと暮らしていた夕顔の精が、農家の娘を見初める話。
リスが地面に隠したクルミが一晩で大きくなって、昼星の光を遮ってしまう、黒い森の話。
どれも「楽しい話」と単純には言い切れない話ばかりだったが、最後にはマーリンが出てきて誰もが悪くない結果にまとまるものだった。
そして、アプリリアージェは毎回いつのまにか本の内容に夢中に

なり、読み終えて顔を上げると少年が煙のように消えてしまうのを体験していた。

ばかばかしいとは思いながらも、いつしかアプリリアージェは少年の事を絵本の精だと思うようになっていた。

金色の少年とはじめて出会ってから、一週間ほど過ぎたある日。

アプリリアージェはいつもと同じ場所で、円卓に広げた文献を見て呆然としていた。それはアプリリアージェにとって忘れることの出来ないものであった。

円卓の上に広げられたのは大昔の戦争の報告書集の一つであった。そこにはかつてファランドールで繁栄していたピクシィという人類が絶滅に至ることになった経緯が詳細に記されていたのだ。

その文献に出会ったときの衝撃は例えようもなく大きなものだった。幼くして両親を亡くしたアプリリアージェだが、その両親との永訣（わかれ）の時の衝撃よりも大きかったと言えば、少女時代のアプリリアージェが受けた衝撃の大きさが多少なりとも理解できるかも知れない。

だから……少女時代の自分が開いているその頁の記述は詳細に覚えていた。

夢の中の小さなアプリリアージェは、もう何度も読んだはずの文章を小さな指でなぞりながらもう一度、さらにもう一度と読み返した。

読んでいるうちに体の奥の方が熱くなり、知らず知らずに少女の目頭にはうっすらと涙がにじんでいた。

その時である。

声がした。

「どうしたの、お姉ちゃん？」

少年の声だ。

そしてそれは目の前から聞こえてきた。

アプリリアージェは、険しい表情で窓の外を眺めながら、少し考えてから少年の方を見ずに答えた。
「私にはこの命を捧げて守ろうと決めた人がいるの。その為には何だってできる強い人間になる必要があるのよ。だから私は勉強しているの。人を守るためにはいろんな事を知る必要があるのよ。人を殺す方法もそう。だって、たとえ一度でも負けてしまえばそれで終わりだから。マーリンなんて、この世にはいないのよ。絵本の中にはいるけれど」
少年はしかしアプリリアージェの回答に満足してはいないようだった。
「お姉ちゃんが守りたい人ってそんなに大切な人なの？他人を殺してでも守らないといけないほど？」
その問いにアプリリアージェは迷い無く答えた。
「ええ。とても大切な人よ。その人を守ることは私達の住んでいるこのファランドールを守ることときっと同じ事なのよ」
「お姉ちゃんがその人の為に殺す人達は、ファランドールの一部じゃないの？」
「それは……」
アプリリアージェは驚いた顔で少年を見た。自分をまっすぐに見つめる金色の瞳を見ると、何も言葉が出てこなかった。
「ファランドールを守る為なら、一人や二人の人間くらい殺してもいいなんて、おかしいよ。ファランドールにいるみんなを守ることがファランドールを守る事なんじゃないの？」
答えあぐねるアプリリアージェに、少年は続けてそう問いかけた。問いかける少年の特徴的な金色の瞳が心なしか曇って見えた。
アプリリアージェは少年から再び窓の外に視線を移すと、ゆっくりと自分に確認しながら噛みしめるように答えた。
「そうね。あなたの言うとおり、私の言っていることはおかしいわね。私は実はファランドールなんてどうでもいいのかも知れないわ。ファランドールを守るというのは自分がこれから犯そうとしている

罪に対する言い訳なんだと思う。私はただ、その人一人だけを守ればあとの事はどうでもいいのかもしれない」

そこまで言ってから、視線を少年に戻した。

すると、アプリリアージェの言葉を聞いていたその少年の両の目から突然涙が溢れ、結んだ口がゆがんだ。

アプリリアージェはそれを見ると慌てて椅子から腰を上げた。

「どうしたの？なぜ泣いているの？」

少年はかぶりをふった。

「わからない。でもお姉ちゃんの顔を見ていると、ものすごく悲しくて、そして怖くなったんだ」

「え？」

「お姉ちゃんは、なぜそんな寂しそうな顔をしているの？なぜそんなに辛そうなの？」

「君……」

「お姉ちゃんは笑っている方がずっと綺麗だよ。ボクと一緒に絵本を読んでいる時の、あの緑色に輝く素敵な顔がボクは大好きだよ。そんな寂しい顔や悲しい顔なんてしないでよ」

少年の言葉にアプリリアージェは胸を突かれた。言葉にはならない何かが、心の奥からこみ上げてきて、そして表面に近づくとじーんと痺れるような、そんな不思議な感覚に襲われた。

「君はいったい誰なの？名前は何というの？」

アプリリアージェは初めてここで少年の存在を疑問に思った。

そしてそのことが自分でも不思議だった。

いままでなぜその少年の存在を当たり前のように受け入れ、会話をしていたのだろうか？

「お姉ちゃんの力は大きいね」

「え？」

少年は突然話題を変えた。

力とは、フェアリーの力のことなのだろうか。

アプリリアージェの持つフェアリーとしての力は、幼い頃から特別なものだと周りには言われていた。そして少年に出会う頃になると自分自身でその力が相当なものだと理解出来るようになっていた。

しかし、なぜ見知らぬ人間、それも自分よりずいぶん年下の少年がその事を知っているのだろうか?アプリリアージェの少年に対する謎はどんどん深まるばかりだった。

「その力はきっとたくさんの人を笑顔にする力なんだよ。ボクにはそれがわかるんだ。だからお願い。その力をたった一人のためだけに使わないで。その力を大勢の人の命を奪うために使わないで」

見たこともないゆったりとした仕立ての民族衣装を纏った少年はそう言うと、そのたっぷりした袖口であふれ出る涙を拭った。

アプリリアージェは少年の方に歩み寄ると、傍でしゃがんだ。小柄なアプリリアージェだったが、普通に立つとその少年より背が高かったのだ。デュナンの少年はそれほど幼かった。

少年の焦げ茶色の髪を撫でると、アプリリアージェはそのままそっと抱き寄せた。

「ありがとう、不思議なぼうや。でも、君には一体私の何が見えているのかしら」

「お姉ちゃん……」

少年は片腕をアプリリージェの背中に回して遠慮がちに抱きしめた後、もう片方の袖口で再び涙を拭った。そして目の前の黒髪の少女の緑の瞳をまっすぐに見つめて小さな声で呟いた。

「え?なあに?」

その声が小さすぎて聞き取れなかったアプリリアージェは、聞き直した。

「お姉ちゃんのその力をボクにおくれよ」

「私の力を、君に?」

少年はうなずいた。

「うん。ボクと一緒にたくさんの人を笑顔にする新しい世界を作ろ

うよ。ボク、いろんなところに行ったんだよ。たくさんの場所を回った。でも、お姉ちゃんみたいな力を持っている人には初めて会った。お姉ちゃんの力は、とても大きくて綺麗なんだ。それに、お姉ちゃんは目も綺麗だ。その黒い髪も綺麗……」

言葉が終わる前に、アプリリアージェは再び少年を抱きしめた。さっきよりも強く。

「そうね……。でも、お姉ちゃんはもう決めたの」

「決めた？」

「ええ。私はアルヴィン。自分が一度決めたことは守らなければならないわ」

「アルヴィン？」

「アルヴ族の血を引く者はそういうものなの。けれど君のその思いは素晴らしいわ。たぶん、ファランドールのみんなが心のどこかで同じ事を思っていると思う。お姉ちゃんはずっと君の事を応援しているわ。だから君はお姉ちゃんの分まで頑張って、みんなの笑顔があふれるファランドールを作ってちょうだい」

その言葉を聞いて少年の顔がまた崩れた。金色の瞳から大きな涙が溢れては頬を伝った。

「ボクと一緒にはできない？」

「そうね。今はまだ。でも、やるべき事が終わったら……」

少年の両手がアプリリアージェの腰に回された。二人は再び抱き合うような形になった。

―（暖かい）

初秋とはいえ、黄昏時だ。気がつけば部屋はいつの間にかけっこう冷えていた。それだけに抱き合った相手の体温が優しく、そしてありがたかった。

アプリリアージェは少年の体温が自分の体だけでなく心まで暖めてくれているような気分になった。そしてそんな気分を感じたのはそれが生まれて初めてのような気がしていた。

―（できれば、ずっとこのままでいたい）

そんなことさえ思っていた。
だが、その安らいだ暖かい時間は長くは続かなかった。
少年が扉の方を向いた。
「ボク、もう帰らなきゃ」
そしてそう言うと、少年はアプリリアージェの腰に回した手の力を抜いた。
「帰るって……いったい君はどこから来たの？いつもどうやってここに入るの？」
少年はアプリリアージェの問いには答えなかった。
「それでもボク、いつかきっと迎えに来るよ。だからお姉ちゃんはそれまでボクにくれた笑顔をずっと忘れないで」
「笑顔？」
「うん。絶対だよ」
少年はうなずくとにっこり笑って見せた。焦げ茶色の髪が小さく揺れた。
「お姉ちゃんが笑顔を忘れない限り、ボクもきっとお姉ちゃんの事を忘れないよ」
その言葉が終わると、それまで確かにそこあった暖かいものが、アプリリアージェの腕の中からかき消すように無くなった。
思わず辺りを見回したが、見慣れぬ民族衣装を纏った金色の瞳をした少年の姿はどこにもなかった。
アプリリアージェは呆然として、床にそのまま座り込んだ。
そして、今の出来事は現実の事ではないのだと当たり前のように感じていた。
―（白日夢……なの？）
そう思ったその時、一つだけしかない部屋の扉がノックされ、一人の男が扉を少しだけ開いて、様子をうかがうように声をかけた。
「アージェ、そろそろ暗くなってきた。今日は終わりにしなさい」
だが、いつもはテーブルにかじりつくようにして様々な文献に頭

を突っ込んでいるはずの長い黒髪の少女の姿が見えない。
　驚いて周りに視線を移すと、その少女は何もない床に座り込んで両手で顔を覆っていた。
　アプリリアージェの事をアージェと呼んだ声の主は、それを見て慌てて扉を開け、声をかけた。
「どうしたんだい、アージェ？」
「先生……」
「泣いてるのか。何があった？」
「あ……」
　声の主は当時の図書館長だった。彼はアプリリアージェが当時身を寄せていた王国軍の大元帥であるガルフ・キャンタビレイの旧知であり、言わば特例で機密文書庫を彼女に閲覧させていたのである。彼は時間の概念がないかのように「文字」に没頭するアプリリアージェの時計代わりでもあった。
　アプリリアージェは館長に指摘され、あわてて涙をぬぐった。自分が泣いていたことは指摘されるまで気付かなかった。涙は知らないうちに溢れて頬を伝い、顔を覆った指の隙間から床に染みを作っていた。
「今ここに、八歳か九歳くらいのデュナンの男の子がいたんです」
「なんだって？」
　館長は驚いた声を出した。普通の人間が厳重な監視のある場所に入れるはずはないのだから。
「焦げ茶色の長い髪で、金色の瞳をした……たくさん色を使った、見たこともない綺麗な服を着ていました」
　館長はゆっくり首を横に振った。
「いや、そんな子は見なかったよ。今日はアージェ以外は誰もこの部屋には入っていない。それは間違いないよ」
　アプリリアージェは館長の言葉を聞くとしばらく無言になったが、やがてため息をついて独り言のように呟いた。

「そうか。やっぱり私、夢を見ていたのね……」
館長は部屋へ入ると、そっとアプリリアージェの側に寄った。
「怖い夢だったのかい？」
ゆったりとした落ち着いた声で問いかける図書館長に、アプリリアージェはかぶりを振った。
「いいえ、よくはわからないけれど、悲しいような優しいような、そして暖かい夢でした」
「そうか」
アプリリアージェは自分の腕を抱きしめるようにすると目を閉じた。そこにあの少年の体温の記憶を感じられるかも知れないと思ったからだ。
だが、もうそこに少年のぬくもりはない。ただ最後の言葉が思い出された。
『いつかきっと迎えに来るよ。だからお姉ちゃんはそれまでさっきの笑顔をずっと忘れないで』
アプリリアージェはその迎えとやらを待っていたいと本気で思った。そしてそう思った次の瞬間には自らの愚かさを悟り、そのせいで再び涙が溢れ、部屋がぼんやりと溶けていった。

# 第三十七話　賢者の弟子

「私はどのくらい気を失っていましたか？」
うとうとしていたエイルは、アプリリアージェのその声でびっくりして顔を上げた。
「目が醒めたのか。良かった。気分はどう？」

【代わってくれるか】
『了解』

エルデは上体を起こしかけたアプリリアージェの体を支えてやりながらふとその顔を見ると、怪訝な顔をして尋ねた。
「なんや、リリア姉さん、泣いてるんかいな？」
「え？」
エルデがそう言った時、涙が一筋、アプリリアージェの頬を伝って形の良い細い顎から落ちていった。
アプリリアージェにはまったく自覚が無かったが、眠りながら涙を流していたのだ。
「あ……」
溢れた涙が、また一筋、頬に光る筋を作った。
「悲しい夢でも見とったんやな」
「いえ」
アプリリアージェはさらに溢れてくる涙を拭おうともせずに答えた。
「私が見たのは、とても大切で暖かい夢です」

【大切な夢、か】
『何だろうな』

【まあ、そんなもんは人それぞれやろ】
『まあ、そうだな』
【人の心にはいろんな思いが詰まってる。浅い詮索はヤボってもんや】
『お前にしちゃいいことを言うじゃないか』
【やかましい】

「その様子やと落ち着いてるみたいやな」
エルデは上体を起こしたままうつむくダーク・アルヴの細いうなじを見つめながら、小さく安堵のため息をついた。
「ふふ。私ったらまるで子供みたいですね。夢を見ながら泣いてしまうなんて」
「夢を見るのに大人も子供もないやろ。それより、ええ夢で良かったやんか」
「そうですね。ありがとう」
「まだ朝も早いし、もうちょっと横になっとき。休める間は休んだらええ。適当な時間になんか暖かいものを持って起こしにくるわ」
アプリリアージェは再び横になると、テントを出て行くエイル、いやエルデにもう一度「ありがとう」と言って見送った。
エルデの呪法が解けた反動に耐えきれず気を失っていたアプリリアージェは、驚いたことに丸一日以上目を覚まさなかった。
一行は次の作戦に移る為にアプリリアージェの回復を待ちながらそこにとどまっていた。
もちろん只とどまるだけでは追っ手であるスプリガンの格好の餌食になる可能性が高かったが、珍しく精霊陣まで使ったエルデの強力な結界で、彼らの気配は完全に絶たれていた。

「なあ、本当に火をおこしても大丈夫なのか？」
訝（いぶか）しがるアトラックに対し、エルデは憤然として言った。

「俺を信用でけへんのか！」
「いや、別にそういうわけじゃあ」
「なら、どういう訳やねん、言うてみ！」
結構な剣幕で睨み付けられたアトラックは首を竦めて謝った。
「そう噛みつくな」
「まだ噛みついてへんっ」
「抑えてくれ。我々のような普通の人間にそう言うことをすぐさま信じろと言う方が無茶と言うものだ。俺達はもともとルーナーとの接触があまりないからな」
珍しくファルケンハインがアトラックの擁護に回ったが、それは擁護と言うよりもむしろ自身も全く同じ疑問を持っていた事からくるものだろう。
エルデはアトラックが集めてきた薪用の柴をいくつか重ねると、さっと手をかざすだけで小さな火をつけた。そのたき火から空に向かって遠慮無く立ち上ってゆく煙をファルケンハインとアトラックが不安げに見送った。
「ファルやアトルが自分を普通の人って言うても全然信憑性無いけどな」
パチパチと勢いよく燃えあがってきた炎とエルデを交互に見比べると、ファルケンハインは再度口を開いた。
「絶対に見つからない結界なんだな？」
「くどい男は嫌われるで」
エルデは即答するとその場にどっかと腰を下ろし、たき火に手をかざした。
「精霊陣まで使うた俺の結界を破ることが出来るのは、俺より圧倒的に強いルーナーだけや。そんな人間はファランドールには居てへんから実質的に不可能や」
「そりゃ、大した自信だな」
ファルケンハインはそう言うと、しかしエルデと同じようにたき火の前にどっかと腰を下ろして座り込んだ。

「ふん」
自分の横に座ったファルケンハインをちらりと横目で見やると、エルデは気に入らない風に鼻を鳴らした。
「こんな子供が、とか思ってるんやろな。でもまあ、それはもうええ。ただし、これだけは言うとく。俺は自分の能力について誇張したり、出来へんものを出来る言うたりはせえへん」
「いや、エイルがすごいルーナーだって事は俺達はみんなもうわかっているさ」
そう言うアトラックをファルケンハインはチラリと睨んだ。お前のなすべき仕事をしろと言う合図である。ちなみにアトラックは簡単な食事を作る係であった。
ファルケンハインは会話を続けた。
「だが、そのエイルすらかなわない師匠が存在するという」
「何が言いたいんや」
「話は元に戻るが、つまりこの結界が本当に誰にも破られないのか、と言う事だ」
エルデはため息をついた。
「俺達はここで倒れるわけにはいかないんだ」
「そんなことは、ウチらも同じや」

【あ。しもた！】
『ばーか』

「ウチら？」
ファルケンハインは怪訝な顔をしてそう返した。
「今は、その質問には答えとうない」
エルデは声のトーンを落とすと、視線を炎に向けた。
「わかった」
ファルケンハインはそれだけ言った。アトラックは期待に満ちた目で二人の会話の成り行きを見守っていたが、核心には辿り着かな

いことを知って、いかにも残念そうに肩を落とした。
「正直言うと、俺の結界が金輪際破られへん、と言う保証はない。ただ、誤解があるようやからこれだけは言うとくけど、俺の能力は師匠を掛け値なしに凌駕する。もちろん能力以外の要素があるから、全てで上回ってるっちゅう意味やないけどな」
「ほう」
「俺が師匠から手取り足取り教わったんは、実はルーンや呪法なんかやない」
「ルーンじゃない？」
エルデはうなずいた。
「夕べも言うたけど、そもそも師匠は回復系ルーナー……ハイレーンやないし、そっちのルーンについて俺に教えられることは限られてるしな。そやから師匠が俺に指導してくれたんはむしろ精神面や」
「精神面だと？」
「ルーナーは普通、師匠について自らの力を増す為の修行をするわけや。もちろんルーンを覚える事も修行の一つやけど。でも、俺は制御ばかりやらされた」
「つまりお前は力を弱める修行をしてきたと言うことか」
「ルーン自体はただの言葉や。その言葉を読んだり暗記したりするのは誰でもできる。せやけど、普通の人間がたとえそのルーンを正しく唱えてもルーンの持つ力が発動することは無い。それは今現在の俺でも同じや。ただルーンを読むことは詠唱とは違うんや」
「なるほど」
「ルーンの発動はその内容が自分の頭の中で現象として完全に浮かび上がるかどうかが、まずそもそもの前提や。それに精霊波、つまりエーテルが呼応するかどうかっちゅう次の段階に入るわけや。つまり詠唱することによって生じるエーテルの流れとその変化を自然に理解して自分の普通の動作の一部に出来るかどうか、や。たとえば……そやな」
エルデはそう言うと耳をそばだてながらも焚き火を利用してかい

がいしくお茶を入れているアトルの方を見て声をかけた。
「アトル！」
「ん？」
エルデの思いがけない呼びかけにアトルは驚いた。
「その、手に持ってるカップを地面においてくれへんか？」
アトラックはエルデに言われた言葉の意味がわからない、と言う風にファルケンハインに助けを求めるように視線を移した。しかしファルケンハインは言うとおりにしろ、と言う風に顎を少し出して急かせた。
「こう、か？」
アトラックは言われたようにカップを地面にそっと置くとエイルの方を見やった。
「今、何を考えてカップを置いた？」
「は？」
「いや、カップを地面に置くときに、何か一生懸命その事を考えて置いたか？って聞いてんねん」
「いや、別に一生懸命考えては置いてないけど」
エルデは満足そうに微笑した。
「そう言うことや。手に持ったカップを地面に置く。テーブルの右側にあるカップを左側に置く、その動作をするときにいちいち右の肩の関節を何度、どちら側に動かして、つぎに肘をどれくらい開いて、筋肉の緊張度合いはどれくらいで、どの段階で弛緩させたら指は開くとか、その時の人差し指と親指との相対角度はどれくらいで、そもそも視点はどこに置いておくべきか……とか考えへんやろ？」
ファルケンハインとアトラックは顔を見合わせてから、改めてエルデを見てうなずいた。
「まあ、そうだな」
「ルーンも同じ事や。カップを地面に置くルーンがあるとするなら、カップを移動させる視覚的な感覚が、ルーンの詠唱。それに伴うエーテルの制御が筋肉の動きとか緊張の度合いや間接を挟んだ二つの

骨同士角度とかやな。両者が揃ってはじめて、ルーンと呼ぶんや」
「ふむ。そう説明されると何となくわかる」
エルデは頷いた。
「ルーン自体はなんやかんや言うて詠唱する必要があるから、そもそも詠唱せな事が発動せえへんけど、術者はそのルーンの文字の意味を考えながら詠唱しているわけやない。右手でカップを掴むようにルーンを使うだけや。言い換えるならそれが出来る人間をルーナーと呼ぶんや」
「なるほど」
「ルーンの修得に時間がかかるのはその意識・無意識の壁を取り除く時間の事やな。多くのルーナーはその感覚を自分のものにするのに時間をかける。特にエーテルを纏う感覚を無意識の段階まで高めるのが難儀なんや。その感覚をより自然に、まるで当たり前のように感じるまで、場合によっては何千回も何十万回も、期間も一年でも十年でも修得出来るまで鍛錬するっちゅうわけや」
「ふむ。つまり、おまえさんはそういう鍛錬がいらないということか？」
エルデはうなずいた。
「これは自慢でも何でもないやけど、俺はそのルーンを一度読むと、もうそれが自分の普通の動作として身に付いてしまうねん。そやから、普通の人間がルーン自体の修得にかける時間がほとんど必要ない。俺の問題はルーン修得そのものやのうて修得したルーンの力加減が理解でけへんことやった」
「ルーンの力加減というのは？」
「うーん、せやな……」
エルデは腕組みをして空を見上げ、その格好のまましばらく思案していたが、思いついたように言葉を続けた。
「火事場のバカ力っていう言葉があるやろ？」
「ああ。人間、いざとなったら普段では信じられないような力が出るというやつだな」

「もともと人間は自分の体を守るために、無意識のうちに自分の力を制御しているっていう話も知ってるか？」
「もちろん知っている。本来人間は種族に関係なく潜在的にかなり強い力を持っているが、その力を全て使ってしまうと関節などがその力の強さを受け止めることが出来ない為に無意識のうちに保護機能が働いて持っている力をかなり制御するように出来ている、というやつだな？」
「そう。まさにそれやな。言ってみれば俺は『この壁を殴ってみろ』って言われたら常に火事場のバカ力とやらで壁を殴りつけてるようなもんやったんや」
「それは……」
「ああ、皮膚は裂け拳からは骨が突き出て、手首は折れるし、肘の関節も外れるし、靱帯もブチ切れるわな。筋肉はもちろん断裂や」
ファルケンハインとアトラックは思わずお互いの顔を見合わせた。
「物理的な腕力とか筋力だとそう言うことだろうが、ルーンでそれをやるとどういう事になるんだ？」
エルデはその問いに対して苦虫を噛み潰したような顔をして見せた。いや、苦しそうな顔だと言った方がいいかもしれない。

だが、彼は少し間を置くと話し出した。
「例えばいわゆる攻撃系のルーナーが最初に覚える基本的な炎属性のルーンがある。俺が今柴に火をつけたのがそれやけど」
ファルケンハインは何も言わずにうなずいた。ルーナーについてある程度理解のある人間はそう言うルーンを知識として知っていた。もちろんそのルーン自体、誰でも修得できる類のものではないのだが、それでももっとも低位の攻撃系ルーンの一つとして、多くのルーナーが数年かけて修得するルーンであった。
「知っているなら話は早いな。このルーンの破壊力は平均的なルーナーで大体自分の前方三メートルくらいまでの距離にいる人間の髪の毛を焦がすか、皮膚に軽いやけどを負わせる程度のものなんや」

「主にランプや薪に火を着けたりする実用のルーンだったな」
ファルケンハインが言った。
「俺は正教会のミサかなんかで複数のルーナーが並んで儀式の景気づけにやっているのを見たことがありますよ」
アトラックの方を向くとエルデはうなずいた。
「そうやな。あまり制御せずに拡散すると前方広範囲に一瞬だけ真っ赤に燃え上がる炎やから、神秘性を演出するのによく使われてるし、ファルの言うとおり、制御してたき火を作ったりちょっとした着火用に使うこともある」
「それをお前が制御無しに使うとどうなるというのだ？」
エルデは一段と顔をしかめると唇を噛みしめてうつむいた。一体何があるのかわからないが、無制御のルーンを使ったことで何か強い心の傷を受けたことは間違いないようだった。
それは本来話したくはないことなのだろう。だが、今この話の流れの中でそれを明かしてくれようとしているエルデに対して、エイルは彼の変化を感じていた。だからこそ、先をせかそうとせずにただ待つことにした。
「あれは、師匠に最初に教わったルーンやった。俺達はまずそのルーンを教わって、いきなり一人ずつシグの爺さんの前で修得できているのかどうかを試されてん」
「俺達？」
思わずアトラックがエルデの一言に突っ込みを入れた。ファルケンハインがしまったと思って睨み付けたが、それはもう後の祭りだった。
だが、エイルは今度はこともなげにそれに答えた。
「その時、大体十人くらいいたかな。師匠が世界中から集めた賢者候補生、つまり弟子やな。「師」の資格がある賢者はほぼ十年に一度、だいたい少なくても十人、多いのが好きな師は百人くらいいっぺんに候補生を集めて修行を始める。ま、最後まで残るのは良くて一人。ほとんどは数年で脱落して賢者までたどりつけへんけどな。

それに「師」の元に来る前段階でも結構な数がふるいに掛けられているはずや」

黙って聞いていろ、とファルケンハインに睨まれたアトラックは了解して首を竦めて見せた。

「もともと師匠が集めたのはルーナーばっかりでフェアリーはおらへんかった。そしてそのルーナーも師匠の眼鏡にかなった元々素質がある人間ばかりを集めてるわけやから、粒ぞろいや。そやから普通なら最低でも数ヶ月かかっておかしくないその一番基本のルーンはほとんどみんなすぐに修得した。もっともそんなルーンは既に習得済みの奴ばっかりで、中には中位ルーンの一部を既に修得済みのヤツなんかもおったけどな」

エルデはたき火を見つめながらそこまで言うと空を見上げて少しの間沈黙した。

ファルケンハインもアトラックもさすがに続きは急かさなかった。しばらくすると視線を再びたき火に移して、話を続けた。

「それは言うてみれば試験みたいなモンで、俺はその時の弟子の中でも一番年下やった。その試験は年長から始めたから、俺の番は最後やった。ある一人を除いて全員ルーンを修得してた。俺の方は初めてルーンというものを教えてもらって、自分が果たして上手くできるのかどうか不安やった。それでぐずぐずしていた俺にシグの爺さんがイライラしながらさっさとやれ、って言うたもんやから、俺は慌ててその低位ルーンを唱えた。そしたら」

アトラックがここでごくんと生唾を飲み込んだ。もちろんファルケンハインはちらりと睨み付けたが、ファルケンハインとて同じ気持ちだった。二人ともすっかりエルデの話に引き込まれていたのだ。

「目の前が真っ赤になって、気が遠くなって意識がなくなってもうた。その時に悲鳴が聞こえた様な気がしたけど、気のせいやったかも知れへん。なんせもう十年くらい前の話やしな」

「で、どうなったんだ？」

ファルケンハインは思わず尋ねた。言った後でアトラックに対し

てバツが悪いとは思ったが、聞かずにはおれなかったのだ。
「俺が目を覚ましたのはその試験があった日から三日後やったそうや。ベッドの傍には師匠ともう一人の弟子がいて、試験で残ったのは二人だけで、あとは全部失格になったんやと言われた。その時はああそうか、と思ったんやけど、ずっと後で残りの弟子は全部死んだって言うことを知らされた」
「まさか？」
エルデはうなずいた。
「ご想像通り、ってやつや。俺がその時、あの低位ルーンで全部焼き殺してもうたわけやな。俺は力を出し尽くした反動で生死の境をさまよって、師匠の看病のおかげでなんとか生き延びたっちゅうわけや。もっとも俺はその命の恩人である師匠にも酷いやけどを負わしたんやけどな。「真赭の頤（まそほのおとがい）」の顔にある火傷痕はその時のもんや。さらに言うと、普通は制御無しにルーンを放出すると廃人になるっちゅう話や。俺が助かったのはまあ、さっき言うたようたように俺が特別やから、やろな」
それだけ言うとエルデはぷっつりと黙り込んだ。

『よくそんな話をする気になったな』

それまで沈黙を守っていたエイルの意識がつぶやいた。
エイルはエルデとのつきあいの中でポツポツと話される身の上話をいくつか聞いてはいたがその話については聞かされていなかった。こうして聞かされると胸の奥に疼くような痛みが走った。
自分の体験ではないが、それでも言葉に出来ない複雑な悲しみをエルデと共有しているような気になるのだ。

【っちゅう話をしたっけ？お前さんに】
『はあ？』
【違ったっけ？】

『おいおい、ひょっとして作り話なのかよ？』
【ちゃうちゃう。思いっきり脚色はしたけど】
『まったく』
【フン。まあみんな昔の話や】
『でもそんな話をするって事はお前はル＝キリアの連中に心を許したって事か？『誰も信じるな』、じゃないのか？』
【信じてるわけやない。こういう話をしたらこっちが心を開いたんやと向こうが油断するやろ？それを狙っての事や】
『はいはい。そうかよ』

だが、エイルはその言葉とは裏腹なエルデの気持ちを感じていた。血も涙もない殺戮集団という噂とは裏腹に、ル＝キリアのメンバーはあまりに友好的でうち解けた雰囲気の連中だった。噂がとうてい真実とは思えなくなってくるほどに。

もちろん噂を否定しているわけではない。だが、エイルには彼らの態度には偽りも裏の思惑もないと思えて仕方がないのだ。エルデはその雰囲気に釣られるかのように思わず心の内を吐露してしまったと言うことだろう。おそらくエルデは語った記憶の重さにいつも心がつぶされそうになっているのに違いない。だから人に自分の罪を話すことで、自分で自分を少しだけ許したいと思っているのだろう……。

エイルはそう思った。

「興味本位で申し訳ないんだが」
長い沈黙の後で、ファルケンハインが低い声で呟いた。
「何や？」
エルデは自然体で答えた。それは問いかけを拒否するような雰囲気の声ではなかった。
「その時、仲間というのかわからないが、同じ試験を受けている子供のうち一人だけが生き残っていたと言ったが？」

エルデはファルケンハインの質問の意図を理解した。
「相当なルーンの使い手やったんか？と言う質問に対する答えは『否』や」
「ではなぜ一人生き延びられたんだ？「真赭の頤」でさえ癒せぬ火傷を負うほどの……その、「事故」だったのだろう？」
エルデは顔の片方だけで笑っているような引きつったぎこちない笑みを浮かべた。
「ソイツは、たまたま師匠の後ろ側にいて炎を直接浴びひんかったみたいやな。あと、これは確かな記憶やないんやけど、とっさに師匠はそいつをかばったようにも見えたな。どっちにしろそいつは実はその時、唯一ルーンを失敗したヤツやったんや」
「と言うと、落第生じゃないのか？」
「まあ、結果だけで判断するとそうなるな。でも実はシグの爺さんにとってあの試験はルーンの正否を見る試験やのうて、おのおのの特性を見極める初期の検査の一つとしてしか考えてへんかったみたいやな。弟子同士が勝手に重要な試験やと決めつけてただけの話やった……というのもずっと後でわかったことやけどな」
「俺も聞きたいことがあるんだけど」
アトラックが、これはエルデにではなくファルケンハインの方を気にしながら声をかけた。エルデはいいぞ、と言うかわりに軽く手を挙げて見せた。
「その、おまえさんと違う方の生き残ったもう一人の弟子っていうのは、賢者にはなれたのか？」
エルデはアトラックの質問に、今度はいつもの不敵な笑いを浮かべて見せた。
「なれたみたいやな」
「ほう」
「と言うか、や。その生き残ったヤツには、おまえさん達全員、一度は会ってるはずやで」
「え？」

ファルケンハインとアトラックはまたもや顔を見合わせた。
「それって、まさか？」
エルデはうなずいた。
「賢者「二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）」。現名はラウ・ラ＝レイ。ランダールでアルヴの女吟遊詩人のかっこをしてたやろ？」
「ちょっと待ってくれ……」
ファルケンハインは眉間に左手の人差し指を当てて目閉じて、まるで難題で知られるパズルを解くような難しい顔をしながら尋ねた。
「そのラウ・ラ＝レイという弟子がなぜお前の事を知らないって言ったんだ？」
「まあ、言ったのはカレンですがね」
ファルケンハインはアトラックの軽口を咎めるように睨んだ。アトラックはいつものように肩を竦めて見せた。
「知らない振りなどではなく、全く心当たりがないという風だったが？」

【そらそうやろなあ】
『そりゃそうだな』

「エイル・エイミイは本名ではなく、その時とは顔形も違う、という風にしか考えられないんだが、そういう解釈でいいのか？」
エイル、いやエルデはその質問に直接答えることはせずに、逆にファルケンハインに訊ねた。
「ル＝キリアの兵士ともなればルーナーについての基本的な知識はあると思うんやけど」
「そうだな」
「俺がウーモスの宿でリリア姉さんにルーンをかけたときのことを覚えてへんか？」
「と、言うと？」
ファルケンハインとアトラックは顔を見合わせた。

「ルーンの基本的な決まり事や」
アトラックは合点したという風に手を打った。
「『契約の前文』、いわゆる前文か」
アトラックの言葉にファルケンハインもエルデの言う意味がわかった。
「なるほど。エイル・エイミイという名で前文を唱えていた」
「そう言うことや」
「前文ではまず自分の本名を名乗らないといけないんだよな。だからエイル・エイミイは本名か。だったらなぜ賢者ラウ・ラ＝レイはその名前は知らないなどと言ったんだ？」
「まあ、その辺の詳しい話はいろいろあるんやけど、今はちょっとアレで話されへんのは勘弁してくれへんかな。それより、要するにラウは血反吐を吐くような修行を何年も一緒にやってきた俺の事は認知できていない、っちゅうわけや。もっとも会うのはホンマに久しぶりやから俺も最初は全然気ぃ付かへんかったけどな。それにしても女は結構化けるなあ」
「わかった。その件についてはもう何も言うまい。では質問を変えるが、お前が「真赭の頤」に弟子入りしたのは何歳の頃なんだ？」
ファルケンハインはこの話はエイル・エイミイという人物の謎の確信に近づくものになると感じたので、深追いは避けた。今、かしめられた蓋をこじ開けるような真似はお互いにとって何ら前向きな事態を生まないと感じたからだ。話すべき時が来るまでエイルは喋らないだろうし、こちらも聞くべき時ではない。ようやく開きはじめたこの不思議な、そして強力な力を持つ賢者の重い心の扉にさらに重しを置くような愚行はなんとしても避けねばならない。さらに言えば、その役目はアプリリアージェ・ユグセルに委ねたいと考えてもいたのである。
「そうやな。俺は多分七才か八才の頃やったと思う。ラウはもういい娘さんやったな。多分十八歳とか二十歳とかやなかったかな。ま、

アルヴの歳は見た目ではわからへんからな」
「七才か八才って、あやふやだな。お前、自分の誕生日とかは知らないのか？」
アトラックの問いに、エルデは肩を竦めて見せた。
「正確な年齢なんか俺らには何の意味もないんや。ただ、ラウは一緒に入った弟子の中でも飛び抜けて年が上やったのは確かやな。普通は本当に子供しか候補生にならへんのやけど。もっとも……」
そこまで言うとエルデは一度言葉を切って、手に持った枝でたき火をつついて少し火の勢いを強めるように空気の通り道をつくってやった。
「弟子にとられた時点で、呪法をかけられてそれまでの記憶は消されるみたいやから、賢者っちゅうのは自分では本当の年とかわかっているヤツはおらへんやろうな」
「じゃあ、お前も記憶を？」
「いや、俺の呪法は解けてる。例外や」
「そうなのか」

何があったのかはわからないが、話を聞けば聞くほど、エイル・エイミイという名前の人間は例外だらけのようだった。
ルーナーとしても例外。
賢者としても例外。
さらに弟子としても例外……。

「まあ、でも」
アトラックが短い沈黙を破った。
「俺も七才とか八才の時より前の記憶なんてほとんどありませんよ」
その一言は本当に自分自身の事を言ったのか、彼一流のささやかな励ましなのかはエルデにはわからなかったが、その親切心に気持ちが少しだけ軽くなったのは確かだった。
エルデはそれには何も答えずに手に持った枝をたき火にくべると、

その場でゴロンと横になった。

「まあ、そう言うわけで、大賢者シグ・ザルカバードも真っ青の天才ルーナーである俺が張ったこの結界や。全部で百五人おるっちゅう賢者の中でもそうそう破れる奴なんかおらへんから、とりあえずここはしっかり休憩でもとってこの後の本番に備えようや。大変なんはスプリガンやのうて多分アロゲリクのニセ庵の方なんやろうから。それとも、ここまで話してもまだこの結界の力が信じられへんか？」

「いや」

ファルケンハインは首を振った。

「もとより大したものだと思っている。破れるような結界なら、多分もうとっくに追いついてきたスプリガンに破られているはずだからな。俺は全面的に信じる」

「俺も夜明けまでぐっすり眠らせてもらうよ。ところで司令……リリアお嬢様が目を覚ますのはいつ頃になるんだ？」

『目を覚ましたことは言わない方がいいんだろ？』

【へえ、わかってきたみたいやな】

『こう見えてお前とのつきあいはけっこう長いからな』

【どう見えてんねん？】

『それより、眠らせてやれよ』

「大丈夫。明け方には目を覚ますやろ」

「そうか。それもオレは信じよう」

アトラックは大きなあくびをしてみせるとそう言って横になった。

「リリア姉さんが目を覚ます前に結界の効力が切れることはない、っちゅうのは確かや。せやから上司の目がない今のうちに思いっきり惰眠をむさぼったらええんちゃう？」

エルデの軽口にアトラックは思わず苦笑を漏らした。

「いや。せっかくのお心遣い申し訳ないが、実は俺の直属の上司はお嬢様じゃなくてあっちの小柄なおぼっちゃまの方だから」
エルデはアトラックにすぐさま返した。
「その直属の上司様は誰よりも先にぐっすり眠ってるけどな」
たき火に照らされて闇の中に薄く浮かび上がっているアプリリアージェの簡易テントを背にして、その少年はうずくまっていた。

「ふふ。リーゼが眠ってると思ってるだろ？」
「違うのか？」
「リーゼが眠っているのを見た人間は居ないんじゃないか」
ファルケンハインが低い声でポツリと呟いた。
「まさか……あの子は眠らないのか？」
エイルがそう言うと、ファルケンハインはテンリーゼンを振り返った。三人がたき火を囲んでいる場所からテンリーゼンがうずくまっている所まで大した距離があるわけではない。せいぜい三メートルといったところだろう。もちろん彼らが普通の声でおこなっている会話については全部聞こえているはずの距離である。すなわちテンリーゼンは今までの会話は全て聞いていると思われた。
そのテンリーゼンがいつものように膝を抱えてうずくまり、微動だにしないのを再確認すると、ファルケンハインは無表情で視線をエイルに移した。
「休憩時はいつも眠っているように見えるから、もちろん実際に眠っているのかもしれない。それは誰にもわからないが、動く必要があるときに動かなかった事はない。もっとも必要がないのに動いたところも見たことはないが」
「行動が超合理的なんだな」
「俺は副司令がベッドに横になっているのを見たことがないんだよ。いつもああやってうずくまっているだけで、起きているのか寝ているのかわからなくて、声をかけると、本当に必要な時は必ず顔を上げて反応するのさ」

「本当に必要ではない時は？」
「もちろん、無視される」
「はは」
「もう慣れっこさ」

アトラックはニヤリと笑って肩を竦めて見せた。
エイルは思った。
テンリーゼンという兵士は察するにおそらくどこでもすぐさま浅い眠りに入れるような訓練を積んでいるのだろう。眠っているとしてもごく浅い為に外界の変化ですぐに目が覚めるようになっているに違いなかった。
付け加えるならばテンリーゼンの場合は高位のフェアリーだ。自分の周りにエーテルの結界を張って、近づくものがあれば気付くようにもできるに違いなかった。
だが、そうは言ってもエイルにはその物言わぬ小さな戦士、それも時には全くその存在すら忘れるほど静かな、まさにそこに安置されている人形のようなこの風のフェアリーがどうにも不気味で、少なくとも心を許す気にはならなかった。

## 第三十八話　テンリーゼン・クラルヴァイン

エイルがテンリーゼンの剣の腕前の片鱗を目撃するのはもう少し後の話になるが、ここで少し彼……テンリーゼンについて説明をしておこう。

テンリーゼン・クラルヴァインについての公式記録の少なさはアプリリアージェ・ユグセルの比ではない。これほど資料が少ないとなるともはや実在の人物であったのかどうかすら疑われる程であるが、その希少な公式記録の実物をつぶさに見ていくと、どうやら政治判断により削除されたような痕跡がある事に気付く。また、そもそも記録時に敢えて彼に関する項目だけが抹消されていたかの様な節もある。それだけテンリーゼンが関係した可能性がある記述項目には不審な点が多いのである。確かに存在していたはずであろうと思われる一部分……場合によっては部分ではなく数頁にわたる場合もある……が、ぞんざいに破り、千切り取られた文書・文献が多い。王立図書館に保管されている各国の公式文書など、その例を挙げると枚挙にいとまがない程だ。

従って公式にわかっている歴史上の事実としては、カラティア朝シルフィード王国における史上最年少の提督としてテンリーゼン・クラルヴァインという名前の人物が存在していた時期があったと言うことのみである。

テンリーゼン・クラルヴァインという名前については、この物語の時代における「先の大戦」である「千日戦争」からさらにさかのぼる事七年前に勃発した断続的なサラマンダとの会戦で戦死したと言われる父モーリッツの死後、クラルヴァイン家の長子として誕生した記録が存在する。クラルヴァイン家は軍でのモーリッツ・クラ

ルヴァインの活躍により男爵の爵位が与えられたばかりで、現存する当時のシルフィードのリスト―（紳士録）にはモーリッツ・クラルヴァインの生没年と並んで彼のクレスト―（紋章）であるルヴラというキョウチクトウ系の白い花の意匠が記されている。

もっともモーリッツが持っていた男爵という爵位は相続権が存在せず、家督を継いだ頃のテンリーゼンは爵位の無い貴族であった。

一説にはその飛び抜けた武功により、彼が佐官に昇進した際に報償として国王アプサラス三世より男爵の爵位が贈られる事になったとあるが、実際のところシルフィードの紳士録には彼のクレストが掲載された形跡がないため、男爵というのは誤りで事実上は無爵位の貴族だという解釈が大勢を占めている。

考えてみればこれはかなり不可思議な事である。

例を見ない速さで少将にまで上り詰めたテンリーゼンが武功を立て続けていたのは間違いない。そしてその武功は父であるモーリッツのそれに見劣りするものだろうか？

父であるモーリッツは中尉で男爵の爵位を得、戦死により特佐に特進した。

だとすれば少将にまでなったその息子に男爵の爵位が贈られない道理はない。

この不可解な出来事にも、この少年提督の存在の謎を紐解く鍵が潜んでいると考えられないだろうか？

元々病弱で産後の肥立ちが悪かった母親のイルジー・クラルヴァインがテンリーゼン誕生の数日後に他界した後は、クラルヴァインの家督はイルジーの遺言に従い、テンリーゼンごと当時の軍務大臣、すなわち王国軍大元帥の地位にあったガルフ・キャンタビレイの下に置かれることになった。

これはモーリッツにはごく近しい血縁がおらず、シルフィード軍の最高の地位にあるガルフ・キャンタビレイの次女がすなわちモーリッツの妻イルジーであった為である。すなわち、生後間もないテ

ンリーゼンは祖父を後見人としてその家に引き取られることになったのだ。

だが、ガルフの意向もあってテンリーゼンは伯爵の爵位を持つキャンタビレイの家には入らず、父モーリッツのクラルヴァインという名前を名乗り、家督を継ぐ形をとったと言われている。

祖父と孫の関係であるから、養子縁組を行っても何の問題もないはずだが、ここでもまたテンリーゼンは奇妙な待遇を受けていると言えるだろう。

だが、テンリーゼン・クラルヴァインがキャンタビレイ家に入った事は我々後世の人間にとっては実にありがたい出来事だったと言える。

テンリーゼンについて現存する資料の多くはその規模が王立図書館の別館にも匹敵すると言われるキャンタビレイ文庫に保管されていたものだからである。すなわち、キャンタビレイ家の関係者日記や書簡、雑文の束や雑多な伝票はもとより、公文書の写しまで存在するその文庫にはテンリーゼン・クラルヴァインの名が修正・削除されることなく残っており、彼が架空の人間などではなく、血の通った人間として、確かにその時代で息をしていたことを証明してくれるからである。

歴史学者の中にはキャンタビレイ文庫にある各資料の信憑性について様々な見解を持つ者も多いが、常識的な研究家ならば少なくともこの時期の政治的背景を鑑み、意図的な文書の廃棄や改ざん・抹消が行われている事が明らかな「為政者の手が入った」王立図書館の公文書などより、当時のまま保存されている文書の方がより真実に寄り添っていると考えるはずである。

そのキャンタビレイ文庫の中にあるテンリーゼン・クラルヴァインに関する記述によれば、彼は星歴四〇一一年に当時のシルフィードの首都エッダ生まれた。そして生後すぐにキャンタビレイの屋敷に移ると、それ以後はガルフ・キャンタビレイの下で軍事的・戦闘

的な英才教育を受けたとある。

ここで思い出していただきたいのは、キャンタビレイ家の食客として当時すでに同じ屋敷に住んでいたと考えられているアプリリアージェ・ユグセルの存在である。容易に想像がつくが、テンリーゼンとアプリリアージェはシルフィード軍の上官と部下という関係ではなく、ガルフの屋敷の中での食客同士、有り体に言えば「幼なじみ」という仲であったということである。

アプリリアージェがガルフ・キャンタビレイの屋敷で暮らし始めたのは星歴四〇〇八年であろうと推測されることから、まだ満足に歩行すらできないテンリーゼンをアプリリアージェがお守り役として世話をしていた可能性は高い。その後、軍内でほぼ行動を同じくする両名の関係はまさに特別なものであったと考えるべきであろう。

物語の中にあって何度も述べられている通り、テンリーゼンは後天的な障害を負っていたこともキャンタビレイ文庫の資料で事実として判明している。当時のキャンタビレイ家の主治医の一人が残した診察記録に依ると、テンリーゼンは五歳の頃に高熱で数日間寝込む大病を患っている。回復はしたものの、その時の後遺症により顔に無数の醜い痣が生じ、また声帯を痛めて声を失った「らしい」とある。テンリーゼン・クラルヴァインが声を失い精霊会話しかできない状態になったのはこれにより後天的なものだと言うことがわかるが、気になるのは「らしい」という不確かきわまりない表現である。それによりその主治医自身が直接テンリーゼンの診察・看病にあたったわけではないことが窺い知れるのだ。

テンリーゼンの二つ名である「ドール」の一般的解釈としての由来は後述するが、物言わぬ人形であるドールという二つ名の由来の発端は、テンリーゼンのこの障害にあるのだということは記憶しておくべきであろう。

テンリーゼン・クラルヴァインに関する些細な記録をつぶさに調べても、およそ純真で快活な子供らしい子供であったという記述はない。それよりも驚かされるのは、シルフィード王国の軍務大臣である大元帥ガルフ・キャンタビレイが多忙な時間を割いて、自ら長時間テンリーゼンと過ごしていた節が見られることであろう。

また、テンリーゼンの養育についてはアプリリアージェを除いてもほんのごく少数の人間のみが関わっていたようであるが、これもガルフの指示の様である。その多くはキャンタビレイ家の古くからの雇い人や関係者ではなく、クラルヴァイン家に出入りしていた者でもない。キャンタビレイ文庫にも当時の侍従長の日記に「テンリーゼン・クラルヴァイン専属の新たな雇い人が数名屋敷に入ることになった」旨の記述がある程度で、いったい誰がテンリーゼン・クラルヴァインの直接の養育担当者であったのかは今日になってもいまだ不明のままである。

キャンタビレイの屋敷内においてテンリーゼンに特別な教育がなされていたことは、彼のその後の軍での成功を見れば容易に想像がつくが、そうなるとそれは彼が文字通り年端もいかぬ頃より計画的に行われていたものだということになり、そのガルフの思惑が大いに気になるところだ。しかし、ガルフ自身の日記にはテンリーゼンに関する記述は極めて少なく、またテンリーゼン自身は当時の貴族としては珍しく一切日記などを付けない人物だったため、そのあたりは謎のままである。

彼が軍に入隊したのは若干十二歳で、これも異例のことであった。飛び抜けた能力を有したフェアリーという触れ込みで、かつガルフ・キャンタビレイ大元帥直々の推薦により特例として軍に入ることになったのは間違いないところであろう。

「英雄」と呼ばれ、男爵の爵位まで勝ち取ったモーリッツ・クラルヴァインの一粒種という背景も手伝って、当初から軍では注目されていた存在であったに違いない。

テンリーゼンは軍に入るとすぐさま実戦に投入された。それも当然のこととといえる。「特例」で入っただけの実力を早期に見せる必要があったからである。

彼は初戦から望外の戦果を部隊にもたらし、周りの疑心を払拭してみせた。千日戦争が終わった当時のシルフィード軍の軍務の多くは、スカルモールドと言われる異形の化け物を退治する事に加え、サラマンダ大侯国からの要請によるゲリラ討伐のための出兵、さらに北海付近の海賊討伐などが主であったが、どれも軍にとっては楽な任務ではない。

記録をつぶさに検証するとそれらはむしろ実際の戦争であった千日戦争よりも困難な作戦が多かったようである。降伏という手段をとらない相手ではシルフィード軍側とてそれなりの被害は免れない。

そんな戦いの中で、まだほんの子供であったテンリーゼン・クラルヴァインがどのような戦いをしたのかは想像の域をまったく出ないのだが、入隊一年後には下士官に、三年後には佐官にまでなっていたことは事実なのである。

「ドール」という二つ名であるが、これは極寒の北海の海にあっても一言の愚痴や文句を吐くどころか、どんな天候であろうと微動だにせずぽつんと甲板に佇む小柄な少年の姿を誰が言うともなく伝えたもののようである。入隊直後には物言わぬ小さな兵士である理由から「お人形さん」と呼ばれていたテンリーゼンは、北海の海賊討伐の部隊に編入されて後は本名であるテンリーゼン・クラルヴァインという名前よりこの「ドール」という二つ名の方が有名になっていった。つまり、彼は軍に入って日が浅いうちに父親の威光から完全に切り離された存在として認められていたわけである。

また、テンリーゼンについては、その詳細な顔形についての記述がほとんどない。あれほど雑多な資料のあるキャンタビレイ文庫にしてもその容姿に関する既述はほとんど見られない。

伝説において「顔中に醜悪な刺青を施された銀髪の物言わぬ小鬼」などと形容されるとおり、幼い頃に高熱の後遺症で出来た醜い痣を隠すために殆ど人前に顔を見せることはなかったという説が有力である。テンリーゼンに限っては、およそ英雄の容姿を美化するような口伝や既述がない。むしろ彼を描いた絵画の方が先に既成観念を確立しており、醜さを敢えて印象づける必要もないという配慮によるものかもしれない。

種族はアルヴィンであることは間違いがないようだが、それ以外の特徴については銀色の長い髪と緑の瞳をしていたという程度の記述しか見つからない。

理由はここまでの本文にもあるように、古代アルヴ族が戦いの時に施したと言われる茨と槍をモチーフにした―（と考えられている）曲線と直線による文様の入れ墨が顔中に描かれており、さらに平時ではその醜い顔を隠すために仮面をかぶっている事が多かった為であろう。要するに彼の素顔は不明なのである。

また、本人が顔半分に入れ墨として施していた文様も、どういう意匠のものであったのかはもはや今日では知る由もない。多く残る彼の絵画には画家により創作された意匠がそれこそ星の数ほど描かれており、その中に決定版と言われるものがない。われわれはそれらを眺めながら想像するしかないのである。

唯一の例外として、かつて高額な紙幣の意匠にもなったことがあるほど有名な「双剣の風使い」という絵画がある。それには下ろした両手にそれぞれ短剣を持ち、その長い銀髪を強い風になびかせながら、昇ったばかりの朝日を見つめているアルヴィンの美少年が描かれている。「あれこそがテンリーゼン・クラルヴァインの肖像画であり、素顔である」と主張する夢想家も多い。その絵を書いた画家というのが、同時代を生きたミリア・ペトルウシュカのであるというのが彼らの「テンリーゼン肖像画説」の最大の根拠である。

どちらにしろ想像がかき立てられる絵である事は確かであるが、今ではすべては謎のままである。

テンリーゼン・クラルヴァインの顔半分に施されていたという入れ墨であるが、それがいつ入れられたかは不明である。だが少なくとも十二歳で軍に入隊した時にはすでにその入れ墨は施されており、そのあまりの醜さの為ガルフ・キャンタビレイの許可で常時仮面装着を許されていたとある。後遺症で出来た痣の多い顔半分に入れ墨を入れ、少ない残りの半分には刺青自体は施されてはいなかったようだが、こちらは本人が常に刺青に模して化粧として文様を描いていたことから、顔は常に全体が刺青に覆われていたようなものである。

幼少にもかかわらず刺青を、それも本人の意思で施されていた理由は、高熱一（一説ではアルヴ系の第二次性徴に伴う高熱期のものだという）により顔に抜けない痣が出来たのが原因ではあるだろう。だが、それは化粧でも良かったはずである。あえて消えることのない入れ墨とし、その意匠も戦闘のための文様を選んだのは、彼が自らの生涯を戦いに捧げる事を誓い、自身が強く望んだ事のようである。彼自身がガルフ・キャンタビレイに無理を言い、我を通して施してもらったものであることがキャンタビレイ文庫に残る雑文の中に読み取れるが、この点だけを抜き出してもテンリーゼン・クラルヴァインがおよそ普通の子供ではなかったことがわかるというものであろう。

テンリーゼンが下士官になる頃には、すでに佐官となって部隊を率いる立場にいたアプリリアージェに彼女の幕僚格として招聘される事になった。

以後テンリーゼン・クラルヴァインは常にアプリリアージェ・ユグセルとともに行動することとなるわけである。

公式な文書ではアプリリアージェと同じ時期にル＝キリアの一人として戦没者名簿に名を連ねているテンリーゼン・クラルヴァインであるが、アプリリアージェと同様、彼の名前が歴史上の舞台から

本当に姿を消すのはまだ先のことになる。

# 第三十九話　神の空間

【おいおいおい】

エイルは岩肌にぽっかり開いた亀裂の前に立っていた。周りにはスプリガンとおぼしき部隊の兵達が少なくとも二十人はいた。入り口を固めている者、周りを歩き回る者など様々だが、要するに警戒にあたっているようだ。

しかし、エイルを気に懸ける者はいなかった。

そう、姿を消すルーンをかけて、エイルはアロゲリクの庵と呼ばれる岩の亀裂の前にきていたのだ。足音を消すルーンもかけているのだろう。堂々と現れ、スタスタと目的地の前まで歩いて来たにも関わらず気づかれる事はまったくなかった。

現れたのは儀仗を手にしたエイル一人で、ル＝キリアの一行はすぐ近くまで伸ばした結界内でエイルの帰りを待っているところだった。エルデが庵には一人で行くことを主張したからだ。

だが、エイルとエルデは目的地の前で絶句していた。

『これ、崩れてるよな？』

【熟睡中のお前さんくらい、崩れてるな】

『わかりにくい例え、ありがとさん』

【いや、マジでお前さんの寝相は驚異的や。この間なんか】

『今はそんな話はどうでもいいだろっ』

【へいへい】

目の前にしたアロゲリクの庵は、どう見ても洞窟の入り口まで瓦礫で埋まっているようにしか見えなかった。何者かによって破壊されたのは間違いないが、果たしてそれがスプリガンに依るものなの

かどうかははかりかねた。

【まあ、手間は省けたんかもしれんな。偽物の仕掛けがわからへんようになったのはちょっと残念やけど】

『誰がやったんだ？スプリガンか？』

【それはどーかなあ。結構な規模の崩壊やし、そもそも綺麗に中だけ崩れてるやろ】

『そうだな。中だけが完全に埋まっている感じだな』

【そこまでのルーナーかもしくは強力な大地のフェアリーがスプリガンにおるっちゅうことになるんやけど……】

『いない、と？』

【まあ、絶対やないけど、考えにくいな。そもそもスプリガンがここを壊す必要性がわからへん】

『ふむ。で、どうするんだ？』

【いや、どうするって、予定通り次の計画を実行するだけや】

『あの死体を使って？』

【今頃はリリア姉さん達も服を換え終わってる頃やろ。予定より早く済んで良かったやん】

『人を殺さずにどうにか出来なかったのか？』

【ああ、もう、その議論は無しの方向で頼むわ】

アプリリアージェが行動可能な状態に回復すると、一行はすぐに次の作戦に移った。

エイル、いやエルデは作戦に際して五体の死体を要求していた。小柄な死体が三体、大柄な物が二体。さらに矢や剣を使わない、つまりは外傷を伴わないやり方で、という細かい指示付きだった。

もっともそれは容易に調達ができた。

彼らはエルデの張った強力な結界のおかげで「こちらからは向こうは見えるが、向こうからはこちらが見えない」という絶対領域のような物を確保できていたからだ。

エルデの説明ではその効果は勿論「精霊陣の内側だけ」という事だったが、アプリリアージェが眠っている間にスプリガンの隙を見てエルデが徐々に精霊陣を外側に作り、範囲を移動・拡大させていたため、その絶対領域は結構な広さになっており、ル＝キリア得意の急襲がやりやすかったのだ。

勿論エルデのルーンで相手を眠らせるなり麻痺させればより簡単だったろう。しかし、「賢者の法」によりエルデから仕掛けることはできない相談だったのだ。賢者としての行動時であれば問題にされないが、今回はエイル、いやエルデの個人的な行動であるため、それは許されない行為なのだとエルデは説明をした。

『賢者の法』と呼ばれる都合はル＝キリアにとっては腑に落ちるようなものではなかったのだろうが、もとよりすべてエルデのルーンに頼ろうとは思ってはいなかった。そもそも発端はル＝キリアがスプリガンに狙われているという事なのだから。

エルデの機転と活躍でアロゲリクの渓谷に続く林を無事に抜けられたことは大きかった。アプリリアージェには味方の損失をある程度は覚悟していた節があった。たとえそうでなくても、とりあえずエルデというルーナーがいなければ無傷でたどり着ける事はありえない状況といえただろう。もっとも、エルデが計算に入った上での作戦であるから、エルデがいないという「もし」はなかったのだが……。

【さて、と。ほんならこんなところには長居は無用やな】

エルデは振り返ると、ゆっくりとした足取りで、来たときと同様に敵の兵が歩き回る中を堂々と歩いて去って行った。

しばらく歩くと、エルデが張った結界に入った。

見つからないとはわかっていても、エイルはホッとした。当のエルデは全く平静で、一番簡単な防御ルーンを唱えて、自分にかけていたいくつかの隠密行動用のルーンを剥がした。

「やけに早かったですね」

アプリリアージェがそう言ってエイルを出迎えた、まさにその時だった。

その少年は一同の前に忽然と現れた。

瞬きをしたら何もなかったはずのところにその姿があったと言う表現しか当てはまらない。コマ落としとはまさにこのことだろう。

緊張で一瞬にして凍り付く一同の中で、いち早く我を取り戻して対処行動をとったのは言うまでもなくアプリリアージェとエルデの二人だった

【代われ】

「あら」

エルデはまずは体の支配をエイルから受け取った。対してアプリリアージェは相手よりも先にこちらから行動を起こすことで味方の混乱を押さえ込む策をとった。そしてそれは勿論効果があるものだった。一行はいきなり起こった戸惑いの事態に対する対処をアプリリアージェに預ける事で自らを冷静に保つ一助にする余裕を手にしたのである。

「こんなところに一人でどうしたのですか？今このあたりは危険ですよ」

エイルと合流したル＝キリア一行が、次の作戦の為にスプリガンの死体を置いた場所へ向かう途中の出来事だった。

エルデの作った結界内という事で、ある程度警戒が緩んでいたのかもしれない。しかし、あまりに不自然にその少年は彼らの行く手に「出現」してみせたのだ。

忽然と現れた少年はアルヴィン、つまりエルネスティーネやテン

リーゼンと同じ肌の色が白い小柄なアルヴ族だった。肌の色の違い以外はアプリリアージェのようなダーク・アルヴとほぼ同じ種にエイルには見えた。事実、アルヴィンとダーク・アルヴは生活分布が違うだけで、生理的な特徴はほぼ同じものである。

その金髪の少年の年齢はエイルの目ではなんとも測りかねた。見た目通りの少年と言ってもいいかもしれないが、アルヴィンやダーク・アルヴという小型アルヴ族は特に男女ともたとえ老人であろうと少年・少女のように極めて若く見えるのだ。そしてその姿のままで老衰するのだという。だから後はその「人物」が纏っている雰囲気や仕草、それに着衣の特徴から見る社会的な立場や地位などから推し量るしかなかったのだが、幸いその少年は自らの身分を示すのに極めてわかりやすい姿をしていた。

それは着衣だ。

すなわち、金糸で袖口と裾に縁取りがあり、見たことのある紋章が胸に大きく刺繍された厚手の紺色のローヴを纏っていたのである。

その紋章……ツルバラが絡まった剣と蛇が巻き付いた儀仗が交差するクレストはマーリン正教会のもの。紺色の法衣はマーリン正教会では最上位の色とされている。つまり、目の前のアルヴィンは高位の僧であることがエイルにも理解できた。

少年は紺色のローブの下に薄青くゆったりした上等な絹でできた上下を着ており、その手には青白い石でできた儀仗があった。

金色のやや癖のある髪はアルヴ系種族には珍しくあまり長くのばしておらず、瞳の色は薄い緑色で、それはまっすぐにエイル、いやエルデに注がれていたが、感情の起伏を感じる程の強い意志が見えず、エイルには相手の意図が全くわからなかった。

『こいつが罠の主?』

【この姿、この精霊波……こいつ……ひょっとしたら?】

『え? 知り合いか? 賢者なのか?』

【ちょっと黙って】

エルデは小声でいくつかルーンを唱えた。
その詠唱を聞くと初めてそのアルヴィンの少年が口を開いた。
「やめた方がいい。ここでは無駄だから」

【！】
『無駄？』

「あなたは、何者ですか？」
これはアプリリアージェだ。
声をかけ相手の気を一瞬でも自分へ向けることで虚を突かれた可能性のあるエルデに対して気持ちを立て直す余裕を与える一言だった。
だがアルヴィンの少年は全くアプリリアージェのことを意に介さない風で、視線はエイルの姿をしたエルデだけに注がれたままだった。
「すでにエーテルは封じてるから、もう何を唱えても無駄だよ」
それを聞いてファルケンハインとアトラックが懐に手を入れたが、それを察したエルデが慌てて鋭く叫んだ。
「動いたらあかんっ！」
その声は普段のエルデからは聞けないほど大きく、そして切羽詰まった感じがした。
剣幕に呑まれ、一同は動きをやめた。アプリリアージェですら攻撃の構えをとろうとしていたが、エルデの言葉でそれをやめた。

「ええかっ、絶対に手ぇ出すなっ！」
念押しだろうか。さらにエルデは叫んだ。
こうまでしてエイルが焦って叫ぶ声をその場の誰もが初めて耳にすると思った。
もはやアプリリアージェだけでなく、全員がエルデの語気で危機

を直感した。ハイレーンであるピクシィの少年は、この正教会の関係者と思しきアルヴィンの……おそらくは賢者であろうこの少年を知っているのだと。

そしてその能力を知っているからこそエイルは必死で叫んだ。

――そう判断した。

その仮説が間違いないと思えるのは、相手が誰なのかを知る前よりも相手が誰なのかを理解した後の方が、緊張の度合いが明らかに高いエイルの険しい表情を見たからである。

アプリリアージェはそのエルデの様子を見て、同じ賢者であったラウ・ラ＝レイとの対決を思い出していた。

端からは絶体絶命に見えたあの時でさえ、相手が誰かがわかった後には終始余裕のある雰囲気と口調で対峙していたエイルだ。だが今はどうだ？

同じ人物とは思えないほど、今のエイルの表情には全く余裕が感じられない。

むしろその表情からは焦りと恐怖と絶望しか読み取れなかった。

そう感じた自分の直感を認めたくはなかったが……。

「まずは名前を教えておくれ、賢明なピクシィの少年よ」

少年の呼びかけに、エルデは少しの沈黙の後でゆっくりと自分の名を告げた。

「我が名はエイル。エイル・エイミイ」

青いローヴの少年は表情を全く変えずに首を横に振った。

「エイミイ、か。良い族名だね。でも」

それは独り言のように呟いただけだったが、静まりかえった空間ではその場の全員の耳に届いた。だがそんなことはお構いなしに少年はエイルに対して少し強い調子で詰問した。

「カビの生えたような現名などどうでもいいんだよ。賢者の名前をおしえてくれないか？」

「――」

ここまでくるとアトラックも今が異常事態、かつ第一級の緊急事態であることを確信していた。いつものエイルならば、こんな場合「人に名前を尋ねるなら、おまえが先に名乗れ！この無礼者め！」くらいの言葉が出て当然だった。だが見たところエイルの表情はこわばり、そんな軽口をたたく余裕さえ感じられないように見えた。

「やれやれ」

金髪のアルヴィンの少年は面倒くさそうにそう言うと、その後の口調がつまらなさそうなものに変わった。

「そう構えなくてもいいよ。僕はただ弟子から偽物の賢者がいるって聞いてそれを確認に来ただけなんだ。君を捕って食おうというわけじゃない」

「弟子？」

アトラックが思わず声を出した。

「あいつを弟子と呼ぶということは、お前はひょっとしてシグ・ザルカバードか？」

ファルケンハインが続いた。

そう。「二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）」の師匠は「真赭の頤（まそほのおとがい）」だとエイルが言っていたではないか。

エイルのことを「二藍の旋律」から聞いてやってきたということならこの状況に陥った経緯はわかる。やはりこのアルヴィンの少年は賢者だということだ。

――（いや、待て。シグ・ザルカバードは確か禿頭の初老のアルヴだということだったはず）

だがアルヴィンの少年はそんな二人の言葉にも全く反応しなかった。

ファルケンハインの質問に答えたのはエイル……いやエルデだっ

た。
「全く違う。悪いけど、みんなはちょっと黙っといてくれ」
『おい、一体誰なんだよ?』
【こいつは……でもなんで?なんでこんな事の為にわざわざ出てきたんや?おまけにラウの師匠やて?ああ、もう、何がどうなってるんやろ?】
『おい、おまえが混乱するなよ』
【あのな……一言だけ言うとく】
『え?』
【俺の予想が当たってたら、冗談抜きで絶体絶命や】
『絶体絶命って』
【スマンな。妹のマーヤにはもう会われへんかもしらん。ウチも師匠にはもう会えへんかも……スマン。堪忍や】
『お、おい、らしくないぞ?何でお前がそんな弱気になるんだよ』
【こいつは……「三聖」の一人……】
最後の言葉は声に出した。
「そう。「蒼穹の台(そうきゅうのうてな)」!」
エルデが口にした言葉に対し、アルヴィンの少年の表情が「おや?」という風に変わった
「なんだ、君。僕の事を知っているのか」
そう言うと腕を組んで記憶をたどる仕草をするが、すぐに首を横に振った。
「うーん、でもやっぱり僕の方では君のことは全く知らないんだけどねえ」
―(「蒼穹の台」?)
アプリリアージェはエルデの言葉に我が耳を疑った。
知っている名前だった。

いや、知っているどころか、国際的な見地から極めて重要な人物の名前だと言った方がいいだろう。もっともごく一部の人間しか知り得ぬ名前でもあった。さらに言えば、実在する人物の名前とは認知されていないものなのだ。

その名前を持つ人物……すなわち本人とよもやこんなところで出会うなどとは夢にも思わなかった。

国の中枢に身を置く人間だけが知るマーリン正教会の賢者の名簿がある。名簿と言っても過去、何らかの経緯で名前のわかっている一部の賢者の名前が記されているだけのものだが、その最初の項目に今聞いたその名前がある。

それとは別に一般の人間が眼にする事が出来る文献の項目からもその名を知る事だけは可能だ。文献とはもちろん、いわゆる紳士録である。

両方に共通するそれは「三聖」と書かれている項目だ。

アプリリアージェにしてみればその名前を持つ人間に会うことがあるなどとは一瞬たりとも思ったことのないような、文字の中だけで存在するはずの人物の名前だった。

そう。

冗談ではなく一生出会うはずなどない人物の名前のはずであった。

「まさか……あなたは「三聖」の一人、あの「蒼穹の台」、ですか」

アプリリアージェは思わずアルヴィンの少年に呼びかけた。だが、例によって金髪の少年はアプリリアージェにはピクリとも反応しなかった。まるでその場にいるのは視線の先のエイル……いやエルデ・ヴァイスだけと言った風情で口を開いた。

「でも君が僕の事を知っているんなら話は早い。実は「二藍の旋律」がこっぴどくやられたっていうから、ただの偽賢者じゃないとは思っていたけど、僕の顔を見て名前がわかるんだから、そりゃもう絶対、間違いなく偽賢者なんかじゃないよね」

「私は、本物の賢者です」
「蒼穹の台」はエルデのその答えににっこりと微笑んで見せた。

「私たちをどうするおつもりでしょうか？「蒼穹の台」」
アプリリアージェはエルデが敬語を使った事に反応して質問を続けた。つまりエルデと「蒼穹の台」の相対的な力の差の大きさをエルデ自身の口から聞かされたと判断したのである。だとしたらここは無視されても食い下がることが重要だと思ったのだ。理性は無駄だと告げていたが、彼女はそうせずにはいられなかった。
あの自信家で傲岸不遜なエルデの口調がこの相手に対しては敬語に一変したのだ。それは間違いなく、そこにいるのが本物の「蒼穹の台」であり、その地位と力は計り知れないものなのだと告げているということなのである。
「ああ。そこにいる連中を気にしているのかい？僕に何かしてこようとしたら消すつもりだったけど、邪魔をしなければ心配することはないよ」
アプリリアージェ達の存在にそのとき初めて気づいたと言った風情でサラリとそう言ってのけた「蒼穹の台」の言葉に、アプリリアージェの背中に冷たいものが走った。
―（おそらく、我々は危機一髪だったのだ）

アプリリアージェの想像は正しかった。
あの時エルデが叫んでいなければ、ル＝キリアの誰かは何らかの攻撃をかけていたに違いない。そしてそうなれば彼らは間違いなくやられていただろう。
「やられる」という根拠はないが、それは間違いのない感覚だという奇妙な自信がアプリリアージェにはあった。変な言葉だが、そうとしか言えない。
―（我々は戦う前に負けていたと確信できる）
そう思うほど底知れない恐ろしさをその少年は纏っていた。

―（つまり私たちは、エイル君に命を助けられたということ？）

「でも、さっき言ったように僕は偽賢者を見に来ただけだよ。だから君の名を聞いた。もう一度尋ねるけど、君は誰なんだい？」

「今は訳あって名乗れません。しかし、証拠をお見せすることはできます。これを」

エルデは一礼すると儀仗を掲げて見せた。

頭部にいくつかのスフィアがはめ込まれている。そのうちの一つが光り始めた。同時に何もなかった額に例の第三の赤い目が開かれた。

普通の人間ではなく賢者である事を証明する肉体的な特異点「マーリンの眼」だった。

そのエルデの三番目の目を見ても、「蒼穹の台」は眉一つ動かさなかった。さも当然だという風な態度でエルデの姿を見つめていた。

「うん、本物だね。だがその目の色はどうした？」

「！」

『目の色？』

【黙って】

「まあいい。でも君が本物の賢者だって言うのはさっき君がそう言った時に僕にはもうわかっていたことだけどね。君は嘘は言っていない。それにしても「二藍の旋律」は君のその目を見ても君が偽物だって言ってたのかい？」

エルデはうなずいた。

「あの子にも困ったものだね。賢者たるもの「徴」の真贋なんてすぐわかるだろうに……。まあ弟子の失礼は師である僕から詫びよう。すまなかったね」

「いえ」

「でも、わざわざ出向いてきたのにつまらない結果だったのがちょっと残念だよ。「二藍の旋律」程の使い手をやり込めた偽者は一体どれほどの奴なのかって会うのが楽しみだったんだけどね」
「先ほど「二藍の旋律」の師、とおっしゃいましたが」
「うん。彼女は今のところ僕のただ一人の弟子だよ」
「しかし、「二藍の旋律」は「真赭の頤」の弟子では？」
エルデのその問いかけに「蒼穹の台」、イオス・オシュティーフェはおや？という顔をしてみせた。が、それも一瞬ですぐに無表情になった。
「なるほど。君はあの事件を知らないのか……つまりここ数年は賢者会と直接に関わっていないということだね」
「申し訳ありません」
「いや、そう言うことを僕に謝られても困るな。その辺は賢者会の問題であって僕の管轄外だしね。なるほどそうか。とにかく彼女は今は僕の弟子っていう事になっているんだ」
「大賢者ならともかく、三聖が弟子を……ですか？」
「いろいろあってね」
「蒼穹の台」はそう言うときびすを返した。
「邪魔をしたね」
「え？」
立ち去ろうとした「蒼穹の台」に、思わず声をだしたエルデだった。
「ん？どうした？」
「それだけ、ですか？」
「蒼穹の台」はエルデにそう問われて不思議そうな表情を浮かべた。
「言っただろ？僕は偽賢者に会いに来たんだ。「二藍」をして混乱させたほどだからよほど上手に化けたんだろうし、だったら興味もあるからいろいろ聞いてみたいこともあったんだけどね。でもいざ会ってみたら本物の賢者だった。だったら僕の方にはもう何も用は

ないさ。もっとも「二藍」はもとより僕でさえ知らない賢者がいるというのは驚きだったけどね。彼女が偽物だと思うのにも一理あると言う事はわかって欲しい」

「はあ」

「そもそも君が名前を名乗りさえしていればややこしいことにはならなかったんじゃないかな？」

「それは……」

「まあ、名乗りたくないのは君の勝手だし、僕にすら名乗れないだけの相応の事情があるみたいだしね。それに実際君の名前なんて僕には興味はない。要するに結果としてはただの時間の無駄だったという事だから、後はさっさと帰るだけさ。それとも……」

そこまで言って「蒼穹の台」は言葉を切った。

そして次の瞬間、その顔に劇的な変化が起こった。一同はそれを見て固唾を呑んだ。

「蒼穹の台」の額の目が開かれたのだ。紛う事なきマーリンの眼、真っ赤な賢者の徴がそこにあった。

その第三の眼に呼応して緑色だった二つの瞳も燃えるような赤に色が変わった。

「蒼穹の台」はその三つの赤い眼でエルデを見据えた。その様子を見て、アプリリアージェを始め、その場に居た者は全員、それは「蒼穹の台」がエルデに対してとった威嚇行為だと確信し、再び一気に緊張が走った。

「「二藍の旋律」のしでかした無礼を師である僕に償ってほしいとでも？」

「できれば」

だがエルデは周りの緊張をよそに、その威嚇に臆することなく何の迷いもない眼差しをまっすぐに相手に向けて落ち着いた声で即答してみせた。

「蒼穹の台」がそのまま去ろうとしたことで、その場にはようや

くある種の安堵感が芽生えていたが、エルデの行為は、まさにその場の空気を一変させた。

いや、「蒼穹の台」がマーリンの眼を開いた瞬間に、その場にはたとえようもない恐怖のようなものが充満していたのだ。空気はすでに変わっていたという方が正しいだろう。その証拠に、アプリリアージェだけでなく、テンリーゼンの腕を見てもわかるとおり、その場にいた全員が得体の知れない恐怖とおぞましさに鳥肌を立てていたのだ。

「ふーん」

あまり表情を変えなかった「蒼穹の台」だが、エルデの一言で明らかに目つきが変わっていた。

「一応念の為……というよりここは君自身のためにも聞いておく。君はあの「二藍の旋律」よりも当然、上席なのだな？」

「蒼穹の台」の口調が変わった。

それに合わせてエルデも恭しくうなずいた。

「マーリンの名に懸けて」

アプリリアージェの目にはこの緊迫した空気の中にも関わらず、エルデの態度が先ほど見た絶望感に支配されたものとは打って変わってずいぶん余裕があるように見えた。初期の混乱を脱しただけでなく、次の手をも打てるだけの戦術ができあがっているような、そう、まるでいつものエルデの様子なのだ。

だが一行に何の危害も加えることなくその場を立ち去ろうとした底の知れない怪人を、あえて引き留めてまで挑発するだけの価値のある賭なのかは不明だった。

そう、エルデはあえて挑発したようにアプリリアージェには見えた。

それがエルデの持つ生来の負けず嫌いから出た意地のようなものでないとは言い切れなかったが、アプリリアージェにしてみればこの舞台には自分の出番がないことは歯がゆいながらもわかっていた。

観客はただ舞台の上の役者を見守るだけの存在なのだ。少なくとも幕が下りるまでは。

　ましてやこの最高潮ともいえる場面で野次などは許されるものではないだろう。それこそその場で首をはねられても文句は言えまい。

「ふん」

　険しい表情になった「蒼穹の台」はエルデのその態度を第三の赤い瞳で値踏みするように少し眺めていたが、そう言うと少し表情を和らげた。

「君は面白いね。僕の正体を知った上で敢えて僕に対してそういう強気な態度がとれるのは人間としては珍しいよ。そして賢者としては有り得ないと言っていい」

『エ、エルデ！』

【黙れっ！】

『こんな時に黙っていられるかよっ』

【マーリン正教会の三聖が一人「蒼穹の台」……奴が噂通りの性格なら、これでええんや】

『噂って？』

【そして、その噂はこれまでの行動を見る限り、間違いない】

「まあいい。どうやら君の言葉には一切の嘘がなさそうだ」

【「「蒼穹の台」は、言葉の嘘と真実を見抜く。やましき者、かの者の前では黙して語るべからず」】

『え？』

【師匠が言うてた。あいつの能力の一つや】

『心が読めるのか？』

【いや、ちょっと違う。言葉の真贋が見えるんや。そやから奴はその気になると常に質問を投げ続ける。でも、俺はさっきから嘘は全

くついてない】

「では僕は君の求めに応じて賢者の掟に従おう。上席に対する下席の無礼は本人もしくはその一族が償う。彼女の一族は師である僕一人だけだから、すなわち君が求めたものを妥当だと僕が判断できたら、それを行おう」

【「「蒼穹の台」が主（あるじ）は我らが法のみ。かの者を支配するは他に在らず」】

『なんだ、それ？』

【有難いことにコイツはくそ真面目っちゅう事や】

エイル……いやエルデは顔を上げてまっすぐに「蒼穹の台」を見つめた。

「では、恐れながら……」

そう言ったエルデは口を手で覆うと、続く言葉を声を低くして「蒼穹の台」だけに聞こえるように話した。

「妙な願いだな。それくらいならまあ、断る理由は存在しないが……」

「蒼穹の台」はエルデの依頼を一通り聞き終わると、困惑した表情を隠さなかった。

「普通は相応の「呪法の解」とかそういうものを求めるものだが、かといってそういう決まりがあるわけでもないしね。受ける方が許諾すれば問題はない」

「はい」

「なるほど、そのあたりの掟の文面も君はすべて知った上で僕に頼んでいるってことだね」

「おっしゃるとおりです」

「ふーん。さっきの言葉を撤回しよう。僕はちょっと君に興味が出

てきたよ」
「蒼穹の台」は首をかしげて少し思案する様子を見せたが、すぐに儀仗を掲げ、エルデの前に示した。
「この「蒼穹の台」、我が名に懸けて汝の要求を遂行せん」
「感謝します」
「蒼穹の台」はうなずくと儀仗を下ろした。
「念のために言質を取っておきたいんだけど、君の依頼が間接的に我が法に悖（もと）る事はないんだろうね？」
「我が真の名とマーリンの名に懸けて」
エルデの答えに「蒼穹の台」は声を出して笑った。
「ははは。今度はマーリンより自分の名前を序列の先に持ってくるとは、君はなかなか愉快なヤツだな」

一同が初めて聞く「蒼穹の台」の笑い声だった。そしてその笑いが一体何に向けられたものなのかがわかっている者はおそらく本人とエルデの二人だけだったに違いない。
「本当に君は面白いな。どうでもいいと思っていたけれど、どうしても君の名前を知りたくなったよ」
「――」
「身構えなくてもいいさ。僕は楽しみを先に取っておく主義だからね。今日はもうずいぶん楽しんだ。こんなに楽しい気分は何十年ぶりかな」
「――」
「また会えるといいね」
「蒼穹の台」はそう言うといったん踵を返したが、立ち去らずにゆっくりとエルデの方を振り返った。
「あ、そうそう。君は僕の事を知っていたのに、最後まで僕の事を『猊下』とは言わなかったね。それに」
アプリリアージェには、「蒼穹の台」のその一言で再びエルデに緊張が走ったような気がした。だが、エルデの返答を待たず、「蒼

穹の台」は後ろを向くとゆっくりとエイル達から離れていった。
「さっきはああ言ったけど君とは運命的なものを感じるから、いやでもまた会うことになる気がするよ」
遠ざかりながらそう続けた「蒼穹の台」だが、その言葉を言い終わったとたんにその気配が消えた。次の瞬間、それを待っていたかのようにエルデが何かを唱えた。一つではない。いくつかのルーンを続けざまに唱えていた。それはかなりの早業で、アプリリアージェが声をかけるタイミングよりも早かった。

「本当にあれが「蒼穹の台」なのですか？」
「想像もしていない姿でしたね」
「俺、マーリンの「三聖」って言うと勝手にヨボヨボの怪老人を想像してたんで思いっきり驚きましたよ」
「アルヴィンやダーク・アルヴにヨボヨボな外見をした者なんていませんよ」
「そういえばそうですね」
降って湧いたような異常事態が去ったことでようやく緊張感が解けた一同は口々に質問をエイル……いや、エルデに投げつけた。
「俺も実際に会うのは初めてやけど、あれぞまさしく本物の「三聖」の一人、「蒼穹の台」や。もっとも普通の賢者は一生会うこともないような文字通り雲の上の人やけどな」
「でも、これでエイルが本物の賢者だと言うことを俺たちも確認できたわけだな」
「「蒼穹の台」のお墨付きですからね」
「しかも賢者エイミイ殿は相当の上席だそうだな」
「失礼なやっちゃな。俺の言葉だけでは信じられへんかったって事かいな？」
「いや、そうじゃなくて第三者の認知は信用に厚みを加えるというか……」
「ほんなら聞くけど、俺とアイツがグルで一芝居打って信憑性かせ

いでたとしたらどうや？」
「まさか、さすがにそれはもうないって。悪かったって言ってるじゃないか」
「彼は、「蒼穹の台」はその本物の賢者であるエイル君をして、手も足も出ないほどの存在なのですか？彼は一体どんな力を持っているんです？」
「そう。エイルが止めていなかったら、あの時俺は奴の足を攻撃していた」
エルデはそう言ったファルケンハインの方を向くと深いため息をついた。
「見栄を張ってもしょうがないから正直に言うけど、今の俺では「蒼穹の台」の前では薄紙一枚程の防御壁にもならへんやろな」
「そんなに？」
「俺たちが一斉に攻撃を仕掛けても、か？言っておくが」
アトラックの言葉をエルデは手を挙げて途中で遮った。
「ル＝キリアの名声は知ってる。ここにいる四人がその中でも精鋭揃いやっていうこともう充分わかってる。でも、そこのお人形さんの矢が「蒼穹の台」の儀仗で払われる時には、全員がこの世から消えてなくなってるやろうな」
「そんなまさか。それじゃあ奴はまるで神みたいな……」
「「神の空間」。そこではまさにあいつは『神』やな」
「え？」
アプリリアージェはエルデの言葉に思い当たる記憶があった。
「エイル君がルーンを唱えようとした時に彼が言った『無駄です』というのはそれのことですか？」
エルデはうなずいた。
「さすがリリア姉さん、察しがええな。「蒼穹の台」が作った「神の空間」に俺たちが足を踏み入れた瞬間にもう勝負はついてたって事や」

『「神の空間」って？』

心の中のエイルの問いかけに、エルデは言葉に出して応えた。エイルの疑問はここにいる全員の疑問に他ならないからだ。

「さらに、あそこは「エア」でもある」

アプリリアージェとテンリーゼン・クラルヴァインがすぐに反応した。

「エアですって？」

エルデはうなずいた。

「でも、あれは……」

「超自然現象。でも「蒼穹の台」はそれを任意に作れるんや」

「まさか……」

「まさかって言われても作れてしまうんやからしょうがないやろ。現に今、俺たちはそこにおったんやから」

エルデはそういうと深いため息をついた。

「でも、俺も実際に体験するまで信じられへんかった。それが正直なところや」

『だから、そのエアって何だよ』

「「エア」って、非エーテル地帯の事ですよね？」

アトラックが確認を取るようにファルケンハインの方を見た。

「ああ。滅多に出現しないが地磁気の変化やアイスやデヴァイスなどの天体の位相、異常気象など様々な要因で不規則に出現するごく狭い空間の事だな。幸い俺はまだ出会ったことはないが」

ファルケンハインは珍しく素直にアトラックの問いに丁寧に答えた。

『それって、つまり？』

【そこでは俺たち全員丸腰ってことやな。ティアナ姉さんのキャン

セラ能力がある空間って言うたらわかりやすいやろ】
『そうだな』
【始末の悪いことにエアの場合はルーナーだけやのうてフェアリーにも影響する。そらそうやな。エーテルがないんやから】

「念のために聞いておきますが」
アプリリアージェはなにやら少し思案していたが、エルデに向かうと声をかけた。
「「蒼穹の台」が私達を攻撃してくる可能性はないのでしょうか？」
「この先、っちゅうことか？」
アプリリアージェはうなずいた。
「先のことは誰にもわからへんけど、俺の知る限り、「蒼穹の台」はガチガチの法の番人やから意味もなく攻撃してくることはないと思う。だからさっきもこちらから手を出さへん限り何もしようとはせえへんかったやろ？」
「言い換えると、意味……その法に照らして大儀があれば敵になるということですね」
「そう言うことやな。さっきの場合やと先に攻撃されたら身を守る為に行動は起こす、ということや」
「我々が今行なっていることは問題がないと？」
「「蒼穹の台」が守る法っていうのは賢者が勝手に作った自分たちの法やから、いわゆる国際法や各国の法律とかとは全然別物や。そう言う意味で今現在俺たちが賢者の法に触れている部分はない、と俺は思う」
「賢者の法をエイル君は勿論知っている？」
アプリリアージェの問いに、エルデはうんざりしたような表情で答えた。
「賢者やからな」
「そうですね。我ながら愚問でした」
「興味があるなら、あとで記憶力自慢のアトルに全文言うて聞かせ

とこか。いわゆる憲法みたいなもんやからたいした量やないし。ただ、不用意に人の前でそれを言うて、たまさか賢者に見られたりするとややこしゅうなるから取り扱いは最重要機密級でお願いしたいところやけどな。それでええなら」

「了解です。一応、お願いしておきます」

エルデはうなずくと、さあ戻ろうと言ってきびすを返して歩き出した。

一行は一瞬戸惑った。今まで向かっていた方向とは逆だったからだ。彼らは今の今まで例の偽の庵に向かって歩いていたのだが、エイルは急に向きを変えたのだ。

だが、アプリリアージェが何も言わずにエイルの後に従ったのを見て、他の三名もそれに続いた。

「それで、あの「三聖」の一人におまえは一体何を頼んだんだ？奴は何とも言えない苦虫を噛み潰したような顔をしていたが」

ファルケンハインにそれを聞かれると、エルデは耐えかねたように笑った。

「くくく」

「ん？」

エルデとテンリーゼン以外の三名はエイルの笑いを見ると互いに顔を見合わせた。

「ふふ。さすがにあのまんまやと悔しかったから、腹いせに三聖と呼ばれる重鎮に雑用を申しつけたったんや」

「雑用？」

「でもそのおかげで、たぶん今回の始末は完璧になったで。それよりもお姫様との合流にもかなりの時間短縮になるのがありがたいな」

ファルケンハインは改めてアプリリアージェの方をみやった。しかしアプリリアージェも小首をかしげて見せるだけだった。

事実、アプリリアージェにも今回の一連のエルデの言葉が持つ意味を理解することは困難だったのだ。

エルデはアプリリアージェのその困惑した表情を見ると満足そうにニヤリと笑った。
「おいおいエイル。もったいぶらずに教えてくれよ」
そうアトルにせかされるのを待ってエルデは口を開いた。
「「蒼穹の台」には、ここでスプリガンの追っ手を待ってもらい、奴らにマーリン正教会としてその場で俺たちの死体を火葬するように命令してもらう事にした」
「命令？」
「サラマンダ侯国では生きた人間は、まあ国というか政府が支配してるんやけど、死体に対する処置の優先権はマーリン正教会にあるんや。トリムト条約にきちんと明記されてるで」
本当か？というファルケンハインの疑問のまなざしを受けて、アトラックは少しの間、空に目を泳がせて記憶を探っていたが、やがてゆっくりとうなずいた。
「なるほど。これがそれですかね。第二十八条の二項に「葬儀」という項目があって、弔いに関する事が書かれていますが、それだとその場にいるマーリン正教会の識者の指導を受けて行うこと、とありますね。教会の人間がいない場合はその地の責任者で、軍の人間の優先権は全く書かれてませんね。念のために全文を読み上げますと……」
「いや、それには及ばん」
ファルケンハインがアトラックを制止したのを受けてアプリリアージェが口を開いた。
「あなたがルーンででっち上げたあの『私達の死体』を、火葬にして証拠を隠滅するということですか？」
「そう。その役は俺がやろうと思ってたんやけど、ちょうどよかったわ。「神の空間」を使ってもらえたら完璧やろな」
「エイル君は「神の空間」とはエアのようなものだと先ほど言いましたけど、今の話を聞いているとただエアを作り出すだけではなさそうですね」

「「神の空間」における神は「蒼穹の台」」
アプリリアージェの問いにエルデは短くそう答えた。
その言葉には低く、冗談でもなんでもなくその言葉通りなのだと言うことをアプリリアージェは理解した。
「「神の空間」での理（ことわり）はすべて「蒼穹の台」の言葉で決まる。奴に『おまえは犬だ』と言われた人間は、他人には犬にしか見えなくなる。今食べているパンは岩で出来ていると言えば、かじりついた奴の歯は折れて口の中は血だらけになる。そういう空間や」
「それは……」
『無敵ではないのか？』と言いかけて、アプリリアージェはやめた。彼女は立場上、そんな事を言葉にしてしまってはならない事をよく知っていた。

先頭を歩いていたエイルはアプリリアージェを振り返ると、今度はニヤリと笑って見せた。
「勿論、『らしい』という話なんやけど、たぶん間違いないやろ。少なくともあそこはエアやったし、奴が空間を解放した後はちゃんとルーンが効いた。情報の出所は同じや。信憑性は高いで」
「それ程までの力を持っているのですか、「三聖」ともなると」
「ああ。でも奴は神やない。「神の空間」にも絶対に弱点はある。敵としていきなり出てこられてたらあそこですべてが終わってたやろうけど、無傷で一度体験させてもらえたのはホンマに幸運やな。対策は俺が絶対考えて見せる」
「あなたは……」
「ん？」
「いえ」
「三聖」と渡り合うつもりなのか？と問いかけてアプリリアージェはその言葉をまた抑えた。
そして先刻のエイルの表情の変化を心の中で追いかけてみた。

……いきなり現れた際の戸惑いと驚きの表情。

虚を突く「蒼穹の台」の出現にまずエイルは先手を完全にとられ、焦燥感を持った。警戒したエイルはおそらくすぐさまいくつかの防御ルーンを唱えてみたが、全く発動しない。

そこで彼は軽い恐慌状態に陥った。だがそれも一瞬の事。エイルはすぐさま我を取り戻し、今度は敵の分析を始めた。

相手の姿形と今起こった現象を手がかりに、それを記憶と知識に照らし合わせたエイルは、瞬きを数回する程度のごく短い時間で正解を導き出す事に成功した。会ったこともない人間を記憶の海に沈む名簿に照らし合わせて特定して見せたのだ。

アプリリアージェは、改めてエイル・エイミイという賢者がただ者ではないということを認識しなおした。驚くべきはそのルーンの力の強弱ばかりではない。むしろあの状況で精神状態制御ができる強靱で冷静な意志と分析力の高さに舌を巻いた。

そしてその後、つまり、相手が特定が出来た後の対処については、運がある程度支配した結果とは言え、それを呼び込む為の行動が伴っていたことは否定のしようがなく、やはり見事というしかないと感じていた。

とっさにアプリリアージェ達の行動を抑制できたのは、状況を俯瞰できるまでに動揺を収束させていたからであるし、その時にはすでに次の手を考えはじめてもいたのだろう。

おそらく彼には「蒼穹の台」に関するそれなりの情報がすでにあった。だから彼の言動を認識し、それどころか巧妙に自分の思う方向へ導く事もできたのかもしれない。

賢者エイミイが口にした言葉の数は「蒼穹の台」に比べるとかなり少ない。相手にしゃべらせて、その方向を制御するためにもっとも効果的な言葉を選んだ。そして最後にはエイル・エイミイが主張する事が出来る権利を、相手の口からしゃべらせる事にまで成功し

たのだ。
幻の存在とまで言われるマーリン正教会の真の頂（いただき）である「三聖」を相手に、そこまでの対応が出来るとは……。しかもとっさに、である。
さらに今回、アプリリアージェ達には一つ明らかになったことがある。先日出会った賢者、「二藍の旋律」よりも、彼は賢者として「上席」だと言う事実である。
賢者どころか、マーリン正教会内での席次は絶対だという事はアプリリアージェ達のような士官以上の人間にとっては言わば常識のようなものである。なぜなら、それは軍における階級と同義であるからだ。
だが、それは同時に賢者エイミイに関する新たな謎を浮上させた。
上席ではあるが、その名は名乗らない。
たとえ「三聖」に請われても堅く口を閉ざす。
明かすのは現名のエイル・エイミイという名前だけ。
賢者にとって現名などは意味がないと言う。それなのになぜ賢者同士で名乗らないのだろう？知られてはまずい名前なのか、あるいはお尋ね者か？
いや……。
アプリリアージェは心の中で首を横に振った。
賢者の掟に触れる事はしていないとエイルは言ったのだ。それは嘘ではないだろう。「蒼穹の台」もそう思っていたから追求はしなかった。
一つ謎が解けると、違う一つの謎が生まれてくる。
――それにしても可笑しいのは……。
アプリリアージェはそこまで考えて、ある事に思い至ると笑みが大きくなってしまうのを押さえられなかった。
もともとその役はエイルが行う事で作戦は決まっていた。そしてそれは彼の言葉を借りれば「完璧に行えるもの」だという。つまり

自分がやるはずの手間を「蒼穹の台」に押しつけたのだ。
話の流れから察するに、エイルはあの時「蒼穹の台」に対してもっと「本当に役に立つ」事を依頼することが出来たはずだ。「蒼穹の台」が与えることが出来る事柄はおそらく想像するまでもなく多岐にわたるに違いない。それを全く顧みもしないで、まさに「雑用係」を言いつけて見せた。
理由は、「あとでザマアミロと言いたかったから」。
あの場合、おそらくは他の賢者仲間であったら喉から手が出るほど知りたい呪法などを無心したことだろう。だが、エイルはそれらには一切興味を示さなかった。
本当にただニヤリとしてみたかっただけなのだろう。
―（本当に子供と変わらない）
だが、その子供っぽいところのある少年は上位の賢者であると言う。
少なくとも「二藍の旋律」ラウ・ラ＝レイよりも上位であるのは彼自身が「蒼穹の台」に告げたことだ。

「今回の件でつくづく思いました」
長い沈黙の後でアプリリアージェがいきなりそう声をかけたので、エイルは思わず振り返った。
「あなたを敵に回さないでよかった」
そう言うと、満面の笑みを浮かべて小さく首をかしげて見せた。
エルデはアプリリアージェがそのとろけるような笑顔と共に口にした、くすぐったい言葉に思わず赤面して、慌てて顔を前方に戻した。
「あ、当たり前や。俺を敵に回す奴はこの世に生を受けたことを後悔するにきまってるんやからな」
「あ、勘違いしないで下さい」
「え？」
やや紅潮した顔が戻らないままでまたもやエルデはアプリリアー

ジェを振り返ることになった。
「今のは自分を褒めたんですよ」
「自分を褒めた？」
「ええ。さすがは私。なんて的確な判断をしたんだろうってね」
「くっ」
「あら、赤い顔のエイル君も可愛いですねえ」
そう言われたエイルの顔がさらに赤くなった。
ただし、今度は怒りで。

【こ、このオバハンっ！】
『よせ。っていうか、もういい加減認めるんだ。オレ達ではこの人には絶対かなわないって』
【くそっ！そんなもん認めてたまるかっ！】
『いやいやいや。無理。静まれって』
【あああああ、なんかむっちゃ悔しいっ！】

「ああやってるのを見ると……」
「ああ」
アトラックの問いかけにファルケンハインは思わず言葉に出してうなずいた。
「ただの子供だな」
「まったくですね。ただの子供のくせにとんでもない奴」
小声でそう呟くと、アトラックは優しい眼差しで先頭を行くエイルの後ろ姿を見やった。そしてハタと気づいたように後ろを振り向いた。
そこには、小柄な、もう一人のとんでもない子供が黒い仮面をつけてうつむきがちに歩いていた。
アトラックは優しい眼差しを崩さずに少年の視線を探った。アトラックが振り返っているのに気づいたテンリーゼンは少し顔を上げたが、二人の視線が交錯するとアトラックは目を伏せて小さく黙礼

し、視線を前方に移した。
――（やれやれ。本当にとんでもない子供ばっかりだな。俺の周りは）
心の中でそう呟くアトラックの顔には先ほどよりもずっと優しい微笑が浮かんでいた。だが、それに気づく者はいなかった。

アトラックは前を行く頼もしいルーナーの背中を見て、ふとあることを思い出した。
「あのさ、エイル」
「ん？」
エルデはアトラックのかけた声に振り返った。そこにはニヤリと笑う顔があった。
「あの結界さ」
「結界？」
「うん。大ルーナーのエイル・エイミイが作った結界は確か、『破れる奴はこの世にいない～』じゃなかったっけ？」
大きな危機を今し方脱したばかりだというのに、アトラックはすでにエイルをからかうネタを思いついたらしかった。
それこそがアトラックの良いところなのだろうが、もちろんエルデは苦虫を噛み潰したような顔をすると、そっぽを向いた。
「俺はウソは言うてへん」
「ほおー」
「そんな『人間』はいてへん」
「え？」
アトラックはまだ何か言いかけたが、エルデは歩く速度をあげて、アトラックから距離を取っていた。

# 第四十話　イース・バックハウス

歴史学会では後世の創作と切り捨てられていた人物であり、その存在を語ること自体がある意味禁忌視されていた時代が長く続いていた。

だがしかし、この人物の存在なしで「月の大戦」のつじつまを合わせることは不可能と言っていい。頭のお堅い学者がようやく歴史の矛盾に面と向かい始めた時、いきなり脚光を浴びだした人物、それがイース・イスメネ・バックハウス。

「月の大戦」を語る上で無くてはならない人物の名前である。

考え方によっては彼女こそ「月の大戦」が我々に残した数々の謎を解く為の最も重要なピースと言っても過言ではないだろう。

だが、その存在の重要性とは裏腹に、「月の大戦」での役柄は極めて地味である。

イース・バックハウスはエルネスティーネ・カラティアの「変わり身」である。

「変わり身」とはある要人の代わりをする為の存在である。つまり「そっくりな偽物」という訳である。

数多くの資料から見ても王女エルネスティーネが「月の大戦」の一年ほど前にエッダの王宮を離れていることは間違いがない。にもかかわらずエッダにはその後もエルネスティーネが存在し、様々な公務をこなしていた。

この矛盾を歴史学者は解決しようとしない。あろう事かつい最近までエルネスティーネはエッダを離れた事実はないとさえ公言する者まで居たのだから、学者というものがいかに度し難い存在なのかがしれるというものだ。

とにかく、エッダの王宮にはイース・バックハウスが確かにいた。

エルネスティーネにそっくりなのはバックハウス家がカラティア

家とは近い血族であったからであろう。だが、瓜二つというのはあまりにできすぎた話である。おそらく事情を知る高位ルーナー、たとえばバード長でもあった近衛軍大元帥サミュエル・ミドオーバの使う様々なルーンによって、容姿をより近しいものに「改ざん」していたと見るのが自然であろう。

歴史学者が変わり身としての存在を否定していたそのイース・バックハウスであるが、その名の人物が、かかる時代に存在していた事はほぼ間違いがない。

バックハウス家の家系図にはイースという名前は発見できないが、最後の当主としてイスメーネ・バックハウスという人物の名を見つけることができる。記録ではイスメーネはエルネスティーネより半年ほど早くバックハウス家の地元であるスッダのバックハウス城で生まれたが、十歳の頃に病で夭折したことになっている。

おそらくは「記録上殺された」であろうイスメーネは、十歳の時にエッダに呼ばれ、その頃から変わり身として機能し始めたのであろう。

エッダの王宮の深部はかなり複雑な構造になっており、ほんの一握りの従者以外に二人のエルネスティーネの存在を知られることはなかったに違いない。

こんにちでは二人は日替わりで入れ替わり、王女エルネスティーネという役割を分け合っていたと考えられている。

単純に姿形が似ているだけでは実際問題として本物の長期間の空白を埋めることは不可能であるのは容易に想像がつく。従って日常的に入れ替わって王女として振る舞うことにより、代理が代理ではなくなるほど自然な状態になっていたに違いない。変わり身ではあるが、それは本人の振る舞いでもあるのだから。

有り体に言えば、似ているからと言う理由だけで昨日今日連れてきて教育したところで、醸し出される気品や存在感をも似せること

は不可能である。違和感とはそもそも姿形だけではなく、その人間が纏う空気から感じる部分が大きい。その点でイスメーネ、つまりイースは周りに変わり身としての違和感を全く与えない「変わり身」であったと言えるだろう。

そう言ったシルフィード側の周到な戦略と精密な戦術により、エルネスティーネが旅に出た後も長い間諸外国はその事実を全く知ることはなかったに違いない。

たった一人の人物を除いては。

ここでは、そのたった一人の人物とイース・バックハウスとの出会いを紹介しよう。これは極めて小さな出会いだが、ファランドールの歴史の大きな節目となった出会いなのである。

イースはその夜、なかなか寝付けなかった。

夕食後にムリを言ってねだった熱いココアのせいだろうか？とベッドの上で意味のない寝返りを打ちながら考えていた。

そして眠れぬまま、思いはいつしか遠く旅の空にいるはずのエルネスティーネに飛んだ。

エルネスティーネとは二人でずっと暮らしてきた仲である。それぞれがそれぞれの目的を全うする為というよりもむしろ姉妹として、親友として、そして分身として過ごしてきたのだ。

その半身とも言うべき存在が居なくなってしばらく経っていた。寂しくないといえば嘘になる。だが、「エリィ」が目的のために進んでいるように、自らも目的のために強くあらねばと、イースは改めて自分自身に少し芽生えた弱音の芽を摘んだ。

そんなとりとめもない事をつらつら考えながら、ようやくうとうととした頃だった。イースは妙な違和感を覚えて浅い眠りから醒めた。

部屋の空気がさっきと違う、と思った。
イースも風のフェアリーである。様々な感覚が普通の人間よりも鋭い。
その感覚がある異常事態を訴えていた。
―（部屋に誰かが居る！）
それはまさに異常な事であった。王女の寝室にイースの許可なく入ってくる者は存在しないはずである。たとえ国王アプサラス三世であろうと、娘の許可なく寝室に入ることは許されてはいない。

イースはようやく襲ってきた眠気を一気に振り払うと、あらゆる感覚を研ぎ澄ました。
するとその気配は背後から強く感じた。
……絶対に誰か居る。
誰だ？
目的は？
いや、それよりも……
―（一体ここにどうやって入り込んだんだろう？）

王女の寝室は何重もの兵や強力な最高位のルーンによって強固に守り固められた場所のはずだった。ここに外部の者が入り込むとしたら、それはエッダの王宮が完璧に征服されたという事になる。だが、それはあまりに馬鹿げた妄想と言えた。
そもそも騒々しい音などまったくしなかった。いつもの通り極めて静かなものだ。
ではどうして？と、疑問はそこで振り出しに戻る。

どうしたらいいのかという考えがまとまらないうちに、ベッドから少し離れたところから声がした。それは若い男の落ち着いた声だった。
「お起こししてしまいましたか。申し訳ありません」

極めてゆったりとした普通の口調であった。
それは隣人が明日の天気の話題を口にする時のようにしごく当たり前で、つまりは日常的に言葉をやりとりしている間柄で行われる何気ない会話を切り取ったかのように感じられる、そんな語り口だった。
「怪しいものではございません。と申し上げつつ、そうは言っても時と場所を考えると相当怪しいというのは自覚しておりますが……。もとより金品など目当てに姫に危害を加えたり誘拐を企んでいる賊の類ではございませんので、その点はご安心下さい。訳あって少々込み入った話をしに参っただけでございます」
てらいや気負いのない自然な、そして落ち着いた口調でその声は続けた。

イースは高鳴る鼓動を押さえながら、ものすごい勢いで脳細胞を働かせていた。
今大声で叫べば、間違いなく衛兵が駆けつけるはずだ。
だがそうするとおそらく私はこの賊に傷つけられる事になる。
今、この時勢においてシルフィード王女が賊に襲われるというような事が知れるのはいろんな意味でまずいだろう。
ではフェアリーの能力を持つ私自身が戦うべきか？
いや……
ここまで入ってこれるだけの能力をもった賊に対して私の大したことのないフェアリーの能力で太刀打ちができるとは思えない。
そうだ。だいたい大声で叫んだとして、駆けつけた衛兵達がこの賊にかなうのだろうか？

イースはほんの少しの間に様々な想定を行った結果、結論を導き出した。
―（ここは、とりあえず話を聞こう）
そう決心すると不思議と鼓動は収まる方向へ向かった。

イースはゆっくりと上体を起こすと声のする方に顔を向けた。王女として毅然とした態度で賊に対峙することがエリィの為……いや、エルネスティーネとしての今の自分の役割だと心に決めて。

就寝中とはいえ部屋の中は少ないながら自光石セレナタイトの光がまだ残っており、イースのいるベッドの周りは普通に相手の姿が見える程に明るかった。

イースの目に映ったのは、こちらを向いて優しくにっこりと笑う青年だった。丸いメガネの奥の瞳は薄い茶色というよりはほとんど金色で、焦げ茶色の長い髪は後ろで無造作に一つに括ばれている。やや派手目の旅装束と思える服を纏っていたが、なによりその存在感にはなんとも言えないゆったりとした気品があった。

一見して、戦士や賊というよりは育ちのいい学者か暮らしぶりのいい芸術家と言った匂いをその青年からイースは感じた。しかも言葉遣いとその服装から、かなり家柄がよさそうに見えた。

そしてもちろん、初めて見る顔であった。

エルネスティーネと目が合うと、金色の瞳を持つメガネをかけたデュナンの青年は、片方の膝をついて深く一礼した。

「エルネスティーネ王女、突然のこのようなご無礼をお許しくださいませ」

「何者だ?」

イースの声は低く小さかったが、寝室に凛と響いた。もちろんその金色の目を持つ青年の耳にも。

その声には震えや高ぶりはなく、威厳と落ち着きのあるものだった。イースはそんな自分自身の声の響きに震えがないのを知って安堵した。

「良家の賊」は顔を上げると再び屈託のない笑顔を見せた。

「その落ち着いた声色と毅然とした力ある緑のまなざし。何より纏った気高い空気。まさしく本物のエルネスティーネ王女。変わり身の部屋に忍び込むなどという無駄足を踏まずに済みました。まさに

僥倖でございます」
「ご託はいい。我の質問に答えよ、賊。それとも望みとあらば我が声を上げ衛兵を呼ぶことにためらいはないのだぞ」
「いえ……」
賊の青年は機嫌良さそうにクスっと笑うと首を振った。
「聡明な姫はこの状況を把握なさっておいでです。すなわち今衛兵を呼んでも意味など無いことはご理解していらっしゃるはず」
「笑止」
「これは重ね重ね失礼を。こちらからお願いに上がったのですから、まず名乗るのは最低の礼儀。大変失礼いたしました」
「招かざる客としての分際をとく弁えよ」
精一杯の剣幕をぶつけたつもりのイースだが、賊には全く通じないようだった。彼は終始落ち着き払っており、かつ癪に触ることにイースの恫喝に対して反応すらしなかった。
「申し遅れました。私はミリア・ペトルウシュカと申します」
その男があくまでも自分のペースで事を進めるつもりなのだということがイースにはよくわかった。腹が立って歯ぎしりをしたい気分だった。
だが、それよりもその賊が口にした名前は彼女の興味を引いた。
「ミリア・ペトルウシュカだと？」

そう、イースの寝所に単身忍び込んだのはあのミリアであった。
イースは青年の名前に聞き覚えがあった。ドライアドの北方にある広大な領土を有する有力な、そして有名な貴族の名である。また、同時にペトルウシュカ公爵の二つ名をも思い出した。
その「バカ殿」の名前をただの賊がなぜ騙る必要があるのかが理解できない。すなわち相手の意図をもう少し知る必要性を感じていた。
いや、違う。
ただの賊であろうはずもない。しかし、海を渡ったドライアド大

陸の北の領主がこんなところに忍び込んで来るはずもない。ましてや件のバカ殿は山間の領地に幽閉状態にあると聞いている。

「戯けたことを。エスタリアの公爵殿がなぜこのような場所に単身忍び込むことができようか。何のつもりか知らぬが、我が我慢にも限界がある事を知れ」

「恐れながら姫君。我が名はまさしくミリア・ペトルウシュカ。ご存じの通りエスタリアの領主にしてドライアド国王より公爵を頂いております。もっとも……」

そこまで言うとミリアはいたずらっぽくウィンクして見せた。

――（な……私に目配せをするとはなんと破廉恥な……）

「エスタリアのバカ殿と言った方がファランドールでは通りがいいのかもしれませんが」

「まだ申すか。さらばそちがペトルウシュカ公ミリア殿であることを証明する物を示せ。示せぬのであれば観念して真実の名とここへ参った目的を包み隠さず申せ。言っておくが、我はあまり気が長い方ではない」

「証拠と申されましても……」

ミリアは苦笑しながら頭を掻くと、思いついたように両手を首の後ろに回してなにやらごそごそとしたかと思うと、首からかけていた物を外して掌に乗せ、一歩エルネスティーネの方に歩み出てそれを掲げ示した。

それはウンディーネ大金貨ほどの大きさの丸い形をしたリリス製と思しき軽く暖かい金属で出来たペンダントで、薔薇の模様が浮き彫りにされていた。

「これは？」

「我がペトルウシュカ家のクレスト、四ツ白薔薇のレリーフです。古くから伝わる物でして、私は母よりこれをもらい受けました」

賊がペトルウシュカゆかりの者から盗んで来たものなのであろうか？イースにはそれはわからなかったが、そのクレストをレリーフ

にしたリリスのペンダントが安物でないことだけは理解できた。
「我がこの先何度そちを偽物だと繰り返してもそちは自分を本物と言い張るだけなのだろうな？」
「御意。なぜなら私は本物だからです」
「この件についてこれ以上詮索しても時間の無駄ということか。ならば聞こう。ここへ来た目的を」
「かしこまりました。ですがその前に……」
「む？」
ミリアはなぜか苦笑しながらペンダントを隠しにしまうと、羽織っていた紺と金の薔薇の模様をあしらった派手なマントを脱いで、そっとエルネスティーネの傍によった。エルネスティーネは思わず身構えたが、半身を起こしているだけだったのでその場をとっさに動くことはできなかった。何よりバカ殿を名乗る青年の動きは考えられないくらい速かったのだ。しかも、極めて優雅に。

「大丈夫です」
ミリアは優しくそう声をかけると、手に持ったマントをふわりとエルネスティーネに羽織らせた。
「この先は少し話が長くなるやも知れませぬ。そのようなあられもないお姿では風邪を召します」
ミリアの一言でイースはようやく自分が今、いったいどういう姿でミリアと対峙していたのかを思い出した。
そう、イースは一糸まとわぬ全裸の状態だったのだ。ベッドに入って寝（しん）に着くときには、寝間着を脱いで素肌でアルヴスパイアのブランケットに入り込むのがエルネスティーネとイースのお気に入りの寝姿であった。冷静を装っていたつもりであったのに、ベッドにあるブランケットで体を隠すことすら思いつかないほど、つまりは緊張の極みにあったと言うことであった。
イースはかけられたマントの前を両手できつく合わせると、首のあたりまで真っ赤に上気させて思わずうつむいた。

「ぶ……無礼者……」

全て見られていた……。

イースの頭の中は一瞬の間にその事で一杯になってしまった。

もとより寝相のいい方ではないイースは、その夜のように快適な室温でベッドに入ると、何度も寝返りを打ちながら知らず知らずブランケットを脇に押しやってしまう事がよくあった。その夜もまさにそれで、ブランケットはとうに床に蹴り落とされ、イース自身は素裸のままでベッドに横たわっていたのである。

着替えを担当する付き人に素裸を見られることは日常であり特に羞恥も何も感じたことのないイースであるが、それは女性同士という大前提があるからだ。ミリアの前では今まで感じたことのない強い羞恥で頭が沸騰してしまいそうなほどであった。顔の火照りが尋常でない程になっていることが自分でわかるほど動揺していたのだ。そしてたぶん、うっすらと涙が溢れているであろうことも……。

そのあまりの羞恥に、ミリアの目をまともに見ることすらできず、うわずった声でそうつぶやくのがやっとだった。そこにはすでに毅然とした王女の姿はなく、ただ小さな少女がうずくまっているだけであった。

ミリアは王女のあまりの変貌ぶりを見て、心の中で頭を掻いていた。

――（最初に言った方が良かったかなあ……）

とはいえ、相手のことを思えばもはやその件については無視することが最善な対応策だと言うことを彼は知っていた。

「では、ここにまかり越しました件について申し上げます」

ミリアは努めて平静な調子で口を開いた。

だがイースにしてみればそれが逆にいたたまれなかった。そして何度も繰り返した問いを自らにぶつけるしかできなかった。

―（いったい何者なの？この人は？）
「ファランドールで近く、大きな戦争が始まります」
イースは何も答えずにうつむいたままじっと聞いていた。
―（そんな事は市井の幼子でも知っている）
そんな事を言う為にわざわざ来たとは思えなかった。
イースは何も反応せずに、次の言葉を待った。
ミリアはそんなイースの様子を見るとそのまま続けた。
「お聞き及びかどうかは存じませんが、その戦争は世間で言われているような、ドライアドがサラマンダを併呑する為にシルフィードとの条約を破って挙兵し、結果としてシルフィードとドライアドとの大戦になる、などという単純なものではありません」
イースは思わず顔を上げた。
「どういう事だ？」
イースとて現在の政治情勢はある程度把握してはいる。ドライアドの最近の挑発的とも言えるあからさまなサラマンダ介入についてシルフィード外交筋から緊張感のある報告が続いている。もはやシルフィードがドライアドの条約違反を容認するか、さもなくば戦うことになるかを選択する必要に迫られている状況であった。
ただ、シルフィードには国是とも言えるべき定めがあった。
シルフィードとドライアドの二大大国による戦争はシルフィード側に立つ人間の認識と言うよりはおそらくファランドール全体が予感しているものであったろう。だが、無礼なこの闖入者はその程度の戦争ではないという。
イースの問いにミリアはうなずいた。
「今度の戦争は先の大戦である千日戦争とは根本的に異なる戦争です。ドライアドとサラマンダ、それにシルフィードの間で済むものではなく、新旧両教会も積極的に介入を行うことになるでしょう。さらには永世中立を掲げるウンディーネすら巻き込まれ、事を起こさざるを得なくなります。これは文字通り、有史始まって以来の大規模な、言わばファランドール大戦になるでしょう」

イースは笑顔の向こうにあるミリアの不思議な色をした優しげな目をじっと見た。細い縁のメガネ越しに見えるその金色の瞳は深く澄んで曇りがない。イースの目にはたとえミリアが畏れを知らぬ侵入者であったとしても心根が己の欲によって汚れた、ただの賊とは思えなかった。

「たとえペトルウシュカ公であったとして、なぜ一介の地方貴族の分際で、そちがそれほどのことを言い切れる？」

「それは王女自身がよくご存じなのではないですか？」

「何のことだ？」

「時です」

「時？」

「時代と言い換えた方がいいかもしれません。今度の戦争はエレメンタルがいる時代に勃発するものです。それは普通の戦争とは根本的に違うものなのです、王女。いや、風のエレメンタル様」

イースは風のエレメンタルという言葉に思わず息を止めた。

そしてこの男の目的はエレメンタルの力なのだということがようやく合点できた。

「言っていることがわからぬ。シルフィードから出ることのない風のエレメンタルがいったいどうして世界戦争に関わるのだ？」

「シルフィードには風のエレメンタルしかおりませぬ、エルネスティーネ姫」

「どういう事か？」

「伝説によれば、同時代に出現するエレメンタルは四人居ると」

「もとより、その伝説は知っておる」

「他の三名は他国におります」

「ドライアドや教会にエレメンタルがいると申すのか？」

「まだ詳しいことは申し上げられませんが、他の三名はシルフィード以外で確認されております」

イースは実のところ、風のエレメンタルと水のエレメンタルの存在を知っている。ミリアの口ぶりではそれに加え、炎のエレメンタルと地のエレメンタルの存在をも知っているという風に聞こえる。

仮にそうだとすれば、彼はエレメンタルの探索に出たエルネスティーネ一行に先んじていることになる。だがしかし、エルネスティーネの事はともかく、イースにはあのルネ・ルーの事をミリアが知っているとは思えなかった。

「嘘を申すな」

イースは凛とした声をミリアに発した。

「嘘、とおっしゃいますと？」

「トボけるな。そちが全てのエレメンタルの居所を把握している訳がない」

イースのこの一言にミリアは内心ニヤリとした。

「我らシルフィードが他のエレメンタルの所在を知らぬなどとは考えが浅い」

「ほう」

イースは自らがしゃべった後のミリアの反応を見て（しまった）と思った。いらぬ事までしゃべったことに気づいたのだ。

「なるほど、シルフィードは水のエレメンタルを知っていると言うことですな」

イースはまた顔が赤面するのを感じた。

「そ、そうは言っておらぬ」

「ふふ。エルネスティーネ姫は人が良すぎますな」

その言葉に反応したイースに、ミリアはまたもや片手を上げて制した。

「風邪を召します」

「あっ」

イースは思わず今度はミリアの目前で仁王立ちになっている事に気付いた。慌ててそのままベッドに座り込むと、マントを拾い上げて羽織った。

羞恥で再び顔が燃え上がるように熱くなった。

「伝説通りエレメンタルが強大な力を持っているとすれば、その力に対抗できるのは、エレメンタルしかおりませぬ。今度の大戦はそのエレメンタルの力を手に入れた陣営が勝利するに違いないでしょう。その点、シルフィードには最低一人のエレメンタルがすでにおります」

「エレメンタルは戦争の道具ではない」

「それはエレメンタルが決めることではないのですよ、姫さま」

「エレメンタルの力は人間や一国の思惑のために使われることはない。少なくとも風のエレメンタルは」

イースの必死の抗議に、しかしミリアは寂しそうに首を振った。

「風のエレメンタルのお考えはそうでしょう。しかし炎のエレメンタルや地のエレメンタルが姫さまと同じ意志を持っているなどとは考えない方がよいでしょう。ましてや、シルフィードの国民が炎のエレメンタルの業火によって全て焼かれようとしている時に風のエレメンタルはそれを止めようとしないとでも？」

「炎のエレメンタルがシルフィード国民を虐殺するとでも申すのか」

「言い換えましょう。たとえば、炎のエレメンタルと地のエレメンタルが共同し、アルヴ族を根絶やしにしようとしたらいかがなされます？」

「なんと申した？」

「かつて、アルヴ族がピクシィに対してそうしたように……」

「黙れ！」

イースはミリアの言葉を強い調子で遮った。その瞬間、締め切られたはずの部屋の中を一陣のつむじ風が舞い、ミリアの髪が大きく揺れた。そしてその風が収まったと思った時、ミリアの頬に一筋、鋭い剣で薄く切ったような傷が生じた。

風のフェアリーであるイースの感情の高ぶりが風のエーテルに反応し、その怒気と呼応して空気を刃に変え部屋を巡った。その一部

が敵対している相手、つまりミリアの頬をかすめたのだ。

ミリアはメガネを指で押し上げる仕草をすると、一歩下がって深く一礼した。

「そちは我を怒らせに参ったのか?誰と話をしているのかはわかっておるのであろう?無礼が過ぎると今ここでその首を切り落とすことも我は可能なのだぞ」

ミリアは礼をしたままの姿で答えた。

「ご冗談を」

「冗談などではない。そちが今申したのだぞ?エレメンタルの力の強大さを」

「そう、エレメンタルの力は強大です」

「ならばわかっていよう。この部屋に入ったときからそちの命は我の手にある」

イースにとっては一世一代のはったりであった。だがミリアには全く動じた様子がない。

「それは姫が本当のエルネスティーネ王女であったなら、でございますな」

その一言にイースは凍り付いた。

ミリアはようやく顔を上げてイースの目をじっと見つめた。メガネ越しのその鋭いまなざしに、イースは心の中をすべて晒しているような、かつて経験したことがないような言いようのない心細さを味わった。

だが、イースは一体自分がどこでへまをしたのかが全くわからなかった。

「おとぼけにならなくても結構です。もっとも、この私ですらつい今し方まで姫がエルネスティーネ王女だとすっかり思いこんでおりました。普通の人間にはまず姫の変わり身がばれることはありますまい」

イースはその言葉で理解した。「違う」と取り繕っても、この男に対してはもう無駄であることが。
この男は見抜いたのだ。
……だが、なぜ？
いつ？

「なぜわかったのかといいたそうですね」
イースの心の中を見透かしたかのようにそう言うと、ミリアは厳しい表情を和らげて、もとの柔和な顔になった。
「おそらく本物の貴族だけが持つ気品と気高さを備え、そして澄んだ色の風のエーテルを姫は纏っておられた。ですから先ほど申しましたとおり私もすっかり騙されておりましたが、あいにく姫は先ほど不用意にフェアリーの力を漏らしてしまった」
「それが？」

―（それがどうしたというのだ？）
イースにはミリアが言わんとしていることは皆目見当が付かなかった。

「姫は弱かった」
「え？」
「そうです。姫からはとてもではありませんがエレメンタルと言えるほどのエーテルは感じませんでした」
ミリアの言葉にイースはムッとした。
「そちにはそのようなことがわかると申すのか？ばかばかしい」
「こう見えて私もフェアリーの端くれでございます、姫」
そう言うと、ミリアは右頬に出来たばかりの切り傷をそっと指でなぞった。
すると不思議なことに切り傷はまるで壁の隙間を同色の漆喰で埋めたかのように消え去ってしまったのだ。

イースは目を見張った。
「ファランドールは広い。相手の力が見える……そんな便利な道具も存在しているということでございます、姫さま」
そう言ってミリアは、メガネの真ん中を指で押して位置を直して見せた。

イースは唇を噛んだ。そして合点した。
なんと間抜けな事をしでかしてしまったのだろうかと自分を責めてみてももう遅い。制御していたはずのフェアリーの力を漏らしたことが失敗だったとは……。
いや、フェアリーの力を計る事ができる呪具があるなどと、イースはついぞ聞いたことがなかったのだから、無理からぬ事ではあった。
フェアリーの能力は先天的なもので、その能力は使う力の大小にかかわらず一定のエーテルの圧力を持つと言われている。その力の大きさを見る事ができる呪具をこの男は持っているというのだ。それは戦う前に相手の力量が推し量れるということである。ずいぶんと都合のいい呪具だな、とイースは思ったが、ミリアの言っていることは正しかった。
風属性のフェアリーだと言ってもイースはごく弱い力しか持ってはおらず、風のエレメンタルなどとは比べるべくもなく、その力は全くもって大したことがない。
さっき怒りにまかせて見せた風の刃がせいぜいだったのだ。

「話の続きをさせていただいてもいいでしょうか？」
そう言われて、イースは身構えていた緊張をフッと解いた。
肩の力が抜けると、それまでいかに強い力で体を硬直させていたのかがはじめてわかった。観念したのだ。
すると、自然と口調が普段の言葉になっていた。
「本物のエルネスティーネではないとわかった私に、あなたはまだ

話があるというのですか？」
　ミリアはうなずいた。
「むしろ好都合だと思っている私の非礼をお許し下さい。姫とこうして出会えたのはマーリンのお導きかもしれません」
　そう言ってまたにっこりと笑った。
　そんなミリアを見ると、この人は本当にいつも笑っているのかもしれないなとイースは思った。

「冗談はさておき、変わり身と言っても、姫はもはや本物となんら変わりません。私が考えるに、おそらく姫は幼少よりエルネスティーネ姫本人としてエルネスティーネ姫と供に育ってきたものとお見受けします。それも、エルネスティーネ姫の代わりとしてではなく、もう一人のエルネスティーネ姫本人として。つまり、シルフィードにはエルネスティーネ王女はずいぶんと以前から二人いたというのが正解なのでしょう。なぜなら、姿形は似せられてもちょっとした仕草や癖、さらには物言いや表情などの微妙な違いは本人にはわからなくとも周りの人間には大きな違和感として映ります。お二人は幼少の頃よりお互いを見ながら気がついた癖や仕草をそっくり真似る事もされてこられたのでしょう。あなたがエルネスティーネであるのと同じように、エルネスティーネ姫はあなたでもあると言えるでしょうね」
　イースはため息をついた。
「あなたはずっと私達を見ていたのではないですか？」
　ミリアはしかしそれには答えなかった。
「今の推理が当たらずとも遠からずと言う事であれば、これから私がお話しすることはすなわちエルネスティーネ姫に話そうがあなたに話そうが同じ事」

　実のところミリアの推理はほぼ完璧であった。
　たった一度のエーテルの漏れから発覚した「変わり身」だが、そ

れだけの材料でここまで考えが及ぶ相手に、もはや小娘である自分の小手先の嘘や言い訳は通用しないであろうとイースは観念した。

「今となっては、もはやエルネスティーネ姫には……その話は伝わらぬとしてもですか？」

ミリアは優しくゆっくりと、そして大きくうなずいた。

「変わり身であれば私がこれからお話しする計画には、むしろまたとない役者であると言えます。それに申し上げたはずです。私の目の前にいらっしゃる姫はエルネスティーネ姫と同じなのだと。それに、本物のエルネスティーネ姫……いえ、風のエレメンタルには私はいずれお会いできるでしょう」

イースは深くため息をついた。そして確信した。この男の心は私などには計り知れない物質でできている、まったく種類の違う人間に違いないのだ、と。

「そちは……いえ、あなたは不思議な方ですね。強固な護衛と鉄壁とも言われる高位のルーンによって結界を張られたこの王宮の深部にいとも簡単に入ってこれるだけでなく、侵入の目的は私との話だとおっしゃる。そしてその正体はあろう事かドライアドの、確か王位継承権までお持ちのやんごとなき公爵殿とは。これは夢だと信じ込みたいくらいです。いえ」

イースははじめてクスリと笑った。

「今夜のことを話したとしても、誰も皆、私の夢としか思わないでしょう」

イースの言葉から気負いがまったく消えた。王女としての言葉遣いではなく、一人の若い娘としての語り口に替わっていた。

ミリアにはその声がことのほか心にしみた。

「御意。ここは実に強固な守りがなされています。いろいろと悪い噂の絶えないドライアドの後宮でさえこれほどの備えはありますまい。ですからご安心を。おそらくここの結界を抜けてくることができる人物はファランドール広しと言えど何人も居ないと私が請け合いましょう。大ルーナーの誉れ高いバード長、サミュエル・ミドオ

ーバ大元帥とは相当な力をお持ちだという噂は額面通りだとお見受けしました」

ミリアの言葉を聞いてイースは少しおかしな気分になった。簡単に入ってきた男に「ここの守りは鉄壁だ、私が保証する」と真面目な顔で言われても……。

（まったく……）

イースは心の中でため息をついた。

金色の瞳をもつ不思議な青年は、出会ってわずか十分程度でイースの持っているすべての秘密を暴いてしまった。

わずか十歳の頃から数えて七年もの歳月をかけて周到に準備を行ったはずの彼女の目的と役目は突然にして宙に浮くことになったと言っていい。

だが、その相手はまだ一人だけである。

とはいえイースの心にの中には不思議と敗北感や喪失感はなかった。それは目の前にいるミリア・ペトルウシュカ公爵と名乗る涼しい目をした闖入者が、少なくとも自分やエルネスティーネ、そしておそらくはシルフィードの敵ではないように思えたからだった。

王女の寝所に雑作もなく侵入できた賊である。イースに危害を加えるなり誘拐をする目的であればおそらく―（いまだに信じられないことではあるが）それを雑作もなくやってのけるだろう。

そしてミリアは賊には見えなかった。公爵と名乗るだけの品と礼が間違いなくある。まして一人の人間としての優しさが溢れているようにイースには感じられた。

イースが浅い眠りの中で部屋の異変に気づいて目を覚まさなければ、おそらくミリアは少女の眠りを妨げる事などせずに、自然に目を覚ますまでじっと待っていたにちがいない。

―（そう。じっと待って……）

そこまで考えてイースはハッと気がついた。

―（それはつまり、寝相の悪い私があられもない姿のままベッドの上で寝返りを打ったりする様をも一部始終見られてしまうと言うことではないか……）

そこまで考えるとイースはまたもや顔を真っ赤に沸騰させてしまった。

イースは思った。

自分自信で思っている程、私は冷静でもなんでもないのだと。

―（私はまだネンネの娘なのだな……）

そう思った瞬間に自分を情けなく感じるよりも、むしろ気持ちが軽くなった。

それはおそらくこの王宮に来て以来初めて得た感覚のように思われた。

―（この人は本当に……不思議な人だな……）

イースは赤面したままで、改めてミリアの顔を見やった。

目の前に片膝を付いて控えているミリアの穏やかな顔を見ると、それはまるで実の兄に見守られているような錯覚をいだいた。

―（このような状況で馬鹿なことを考えるものだ……。そして突然顔を真っ赤にした私が何を考えているのかをもこの人はお見通しなのだろうな……）

そこまで考えるとイースは自嘲するようにもう一度小さくため息をつくと、ミリアに言った。

「うかがいましょう。ペトルウシュカ公ミリア様」

「恐れ入ります。イスメーネ・バックハウス姫」

イースは自らの本名を突然告げられても、もう驚きはしなかった。

それどころか自然に微笑が浮かぶのが自分でもわかった。

まったくこの男は何もかもお見通しではないか、と。

「イースと……」

「はい？」
「イースとお呼び下さい」
「――御意」
「イスメーネは十歳の時に死んだ者にくれてやった名。イースは附名ですが、母が付けてくれた、この世では呼ばれることのない名なのです」
「なるほど」
そう言ったミリアの優しいの目の中にうっすらと憂いが混ざったようにイースは思った。
「お母様はツゥレフ島のご出身でしたね」
シルフィードではおそらく使われる事はなく、公式にも残ることのない附名。それは死後の名とも呼ばれ、ツゥレフ島の民族のみに残る風習だった。それをもミリアは知っていた。
イースは自分の名の意味を知っている目の前の青年に、このときすでに信頼に近いものを感じていたのかもしれない。
そもそもイースがエルネスティーネの変わり身だと知った後、その変わり身である少女の正体をピタリと言い当てる事は驚愕に値する。さらにその母親の出身地の特殊な風習までにも思いを巡らせる事ができる。
つまりミリアの洞察力はそれだけの知識に裏打ちされたものだという事である。
もう何年も前に、それも幼少の頃に他界したイスメーネ・バックハウスという娘の存在など、シルフィードの王侯貴族の歴史や動向を広く深く知っていなければ頭に浮かぶこともないはずである。ましてやその知識の中から断絶した伯爵家の病死した幼女の生まれた歳がエルネスティーネに正しくたどり着く事ができる人物がお膝元のシルフィードですらいったい何人いることか……。
イースには国家間の軍事的な戦略や展望などは深く知ることも理解することもできなかったが、今この時点でこの男をシルフィードの敵にするなどと言うことがあってはならないと言うことを直感し

ていた。同時に、もしこの男がドライアドの軍を司る立場の人間だとすると、ドライアドとは想像している何倍も強いに違いないことも。

「お話を。ペトルウシュカ公」
「では単刀直入に申し上げましょう」
メガネの奥の、その金色の瞳でまっすぐにイースを見つめ、ミリアは言った。
「姫のお命を、いただきたい」

＞ｉ２３５０６―１８３１＜

## 第四十話　イース・バックハウス（後書き）

第四巻終了
次話から第五巻になります

# 第四十一話　それぞれの覚悟（前書き）

第一部　蒼穹の台　第五巻スタートです

# 第四十一話　それぞれの覚悟

＞ｉ３１９３５―１８３１＜

ル＝キリアとエイルが、スプリガンを引きつけるために作戦を開始した後、エルネスティーネのいる通称「本隊」にも少し変化が見られた。

「本当にいいんだね？」

「決心を鈍らせるような事をお聞きにならないで下さい」

ハロウィン・リューヴアークの問いに、やや怒気の混じったエルネスティーネ・カラティアの声が応えた。

ハロウィンの右手には細身の懐剣が握られ、それはろうそくの光で黄色く光っていた。そしてその左手はエルネスティーネの見事な長い金髪を一房、握っていた。

ル＝キリアが出立してから一時間程たった頃だろうか。エルネスティーネは宿の一室でハロウィンに背を向ける格好で椅子に座っていた。

エイル達の宿からティアナが戻り、彼らのとるべき道を告げられた後、エルネスティーネは顔面を蒼白にしてしばらく自室に閉じこもった。そして十数分経った後、厳しい表情で皆のいる大部屋に現れると、髪を切る事をティアナに申し出た。

だが、依頼を受けたティアナは「私には絶対に無理です」とそれを固辞した。

ティアナとしては当然の態度であろう。アルヴ系の種族は髪をことのほか大事にする。そこには良いエーテルが宿ると昔から信じられているからだ。

だがエルネスティーネの決心は固く、ティアナが話にならないと

解ると、ハロウィンにその役を半ば強制的に押しつけることに成功した。

「私、覚悟が足りませんでした。エリィとして暮らした王宮を後にして、ネスティとしてこうして旅に出る事で新しい自分になったような気でいました。でも、それはただの思い上がり……呼び名を変える事が覚悟だなんて、私は恥ずかしくて死にそうです。実際の私は着ている物がドレスから旅装束に替わっただけ。中身はこの通りエリィのまま。言葉遣いもまだあまり上手ではありませんし、お気に入りの髪型を変えることすらせずにそのままで過ごしていたのですから」

そう言って皆に頭を下げた。

「私は愚かでした。皆さんにすまない気持ちで一杯です。ごめんなさい」

それはもちろん、情報屋の情報収集能力がアプリリアージェをはじめとするル＝キリアの面々の姿形の特定をすることすらできるという事実を告げられた事を受けての申し出であった。

思い起こせば、エルネスティーネは旅に出る際にハロウィンに髪型を変えてはどうかと言われていたのだ。

だがバード長たるサミュエル・ミドオーバ大元帥の

「なに、そこまでするには及ぶまい。なぜならここには本物のエルネスティーネ姫がおられるのだからな。よもや別の場所にエルネスティーネ姫がフラフラしているとは誰も考えまいよ」

という一言でその場では何もせずに旅に出ることになった。

そしてエルネスティーネは本心では髪を切らずに済んだことに対してほっとしていたのだ。ハロウィンの言葉にハッとし、その通りだと思ったのと同時に、髪を切ることに対する悲しみがこみ上げてきていた時にサミュエルに助け船を出された事を感謝すらした。

しかし……

そもそも命を投げ出す事すら厭わないとまで心に決めた旅である。そこまでの覚悟があるにもかかわらず、髪の毛をどうこうする事にためらいを感じるなど、まさに笑止千万と言って良かった。

エルネスティーネはその時の自分を心の中で恥じていたのである。ティアナから突然告げられた話は衝撃であったが、エルネスティーネにとってはいままでの自分から一歩踏み出す大きなきっかけになっていた。

「私はもともとエルネスティーネには短い髪型の方が似合うと思っていたんだよ。では、気が変わらぬうちに私好みに切ってしまうかな」

ハロウィンは努めて自然な事のようにそう言うと、一房掴んでいたエルネスティーネの髪を持ち上げた。

「気など変わりません。甘えたエリーとは今夜で本当にお別れです。思い切り短くして本物のネスティにして下さいな」

エルネスティーネはうつむくことなどせず、まっすぐ正面を見据えてそう言った。

ティアナにはその姿がどうにも不憫でならなかった。ティアナとて一種の変装にもなる髪型の変更には以前から賛成だったのだが、髪を纏めるなり三つ編みにするなり、違う方法がいくらでもあるように思えた。長い時間をかけて伸ばしてきたエルネスティーネの見事な長い金髪が無くなるのかと思うと人ごとではなく、自らの一部が切り取られるような気持ちになった。

「じゃあ、この辺で一端切るよ。あとはルネに綺麗に揃えてもらうといい。彼女は器用だからね。いつも私の髪を整えてくれているんだ」

エルネスティーネはうなずいた。

そのエルネスティーネの横顔をチラリと見やると、ハロウィンは右手に持った懐剣をスッと髪の下側にあてがった。その次の瞬間、金色の滝の中から白く光る刃が見えたかと思うと、ハロウィンの左

手には一束の金髪が握られていた。
エルネスティーネは無表情で通そうとしていたが、一通り切られた後の短くなった髪がハロウィンの手を離れ、両頬に頼りなく戻ってきた感触に、思わず唇を噛んだ。
ハロウィンは傍らにいる心配顔のルネ・ルーに軽くうなずくと、その場所を彼女に譲った。
ルネはあらかじめエルネスティーネの後ろに置いてあった踏み台に立つとハサミを手に、エルネスティーネの髪をさらさらと撫でて見せた。
「うーん、どんな髪型にすル、ネスティ？」
ルネ・ルーは努めて明るい声でそう問いかけた。だが、エルネスティーネの横顔を見てその問いに答えられないであろう事を察知すると、すぐに言葉を続けて早速ハサミを入れ始めた。
「あ、とびきり可愛い髪型を思いついタさかい、私に任せてくれル？」
エルネスティーネは何も言わず小さくうなずいた。声を出してしまうと何かがあふれそうで……つまりはそれが今のエルネスティーネにできる精一杯の意思表示だった。
ハロウィンはエルネスティーネのその様子を見て、部屋にいたティアナと、もう一人のそばかすだらけのデュナンの青年、そう、調達屋ベック・ガーニーに目配せした。
ティアナは珍しくハロウィンと意見があった事に違和感を覚えながらもここは素直にうなずいた。ベックも軽くうなずくと、意図を汲んでハロウィンの後ろから部屋を辞した。

調達屋ベックは自分の店を出る時と同じようにエルデに姿を消すルーンをかけられ、誰にも気付かれることなくティアナと一緒にこのホテルに辿り着いていた。アプリリアージェの指示で、明け方までは「本隊」とそこに居ろ、という事だった。もちろんアプリリアージェの指示はベックの身を案じての事だったが、同時に下手にベ

ックに動かれてそこから情報が漏れることを恐れたのだ。ベックのその後の事はハロウィンに委ねるという意味もあった。

アプリリアージェからベックに対しては他にいくつかの指示……いや命令があった。

ほとんどはエイルという女のような名前をした珍しい黒い目の少年ルーナーのルーンを受けろという物だったが、それはルーンというよりも様々な耐性を得るための呪法のような物だった。その証拠に、脇腹や腋に呪印と呼ばれる班が出来たのを確認させられた。

「大丈夫。体に害はありませんよ。……たぶん」

アプリリアージェはそう言って無責任に笑っていたが、もちろんベックとしては一抹の不安がないわけでもなかった。とはいえ状況を考えるとそれはしょうがない事だとはわかっていた。

エルデが行った事はいくつかある。魅了ルーンへの耐性、命の危機が迫った時に記憶を失う呪法、自白剤、自白ルーンへの耐性と逃避呪法など、およそ副作用の博覧会のような恐ろしげな術ばかりだったが、あの場で命を失うよりはマシだった。

それよりも驚いたのは彼にしてみればかなりの大物と言えるルキリアの目的、いやその仲間の顔ぶれだった。

アプリリアージェはベックを配下にするに際し、持っている秘密を彼におしげもなく開示した。それはどれもこれも酒の席でできあがった酔っぱらいが語る与太話のようなものばかりで、俄には信じがたい話だった。

黒い目の子供が賢者だと聞かされて思わず大笑いしそうになったものの、シルフィード王女ばかりか未発見と言われている水のエレメンタルも「仲間」なのだという。それも目と鼻の先の宿にいるのだと告げられて一体それを誰がすぐに信じられるだろう。

だが、話が事の説明に及ぶ段になってそれらが全て本当の事だと理解するにつれ、ベックは瞳髪黒色の少年が賢者だと聞かされた時に敢えて見せた苦笑を引きつらせる事になった。全身の毛穴から冷や汗が吹き出て、それが肌着に染み込み皮膚に張り付き、ただただ

気持ちが悪かったのを今でも思い出す。
そう。気付けばとんでも無い大事に巻き込まれてしまっていたのだ。
だが、それでも彼はもう覚悟は決めていた。
狭いウーモスの話ではない。サラマンダすら飛び越えてファランドールを包むような大事に巻き込まれるのだという高揚感が、想像できる恐怖を上回っていたのだ。ベック・ガーニーという若者はそういう気質の人間なのだった。

ティアナが今回の経緯とアプリリアージェが立てた今後の計画を伝えると、ハロウィンは即座にほぼすべての状況を把握し、エルネスティーネがいる本隊の指揮を請け合った。ティアナも彼の命令系統に組み込まれる事について何の反論もしなかった。アプリリアージェの命令であり、彼女の指示は信頼できるとわかっていたからだ。もとよりハロウィンはアプリリアージェをして全幅の信頼を置いているという人物だ。飄々として腹が読めず、多少性格が気に入らないとはいえ作戦下においてそれは関係のないことだと割り切れるだけの余裕はティアナにもあった。また全貌ははかりようもないが、ランダールの例の火事騒ぎの際に片鱗をみせたルネ・ルーの水の精霊の力はエルネスティーネを守るにあたり、力強い存在だと確信もしていた。
とはいえ、疑問が全くないわけでもない。もちろん調達屋の件である。
ベックの存在には完全に納得してはいなかったのだが、アプリリアージェの決定を信じる事で容認する努力をしているようだった。

当のベックはエルネスティーネとルネを残して部屋から出た際、自分を睨み据えて別室に去った白髪が特徴的なティアナには最初からどうにも苦手意識をもっていた。
覚悟はしていたものの、事あるごとにあからさまに睨み据えられ

ると、やはりいい気分でいられるはずがなかった。とはいえ居心地が良かろうが悪かろうがどちらにしろこの宿で明け方までは時間をつぶす必要があった。

ベックは大きく伸びをすると、ついでに深呼吸をした。

店を出てからこっち、緊張続きで萎縮した筋肉がどうにかならなかったのが不思議なくらいなのだ。体を伸ばして、ようやく人心地をついた気分になった。

「あの」

後ろから突然声をかけられて、ベックは弛緩していた気持ちが一瞬でまた緊張側に振り切れた。

反射的に後ろを向くと、そこには肩まである栗色の髪のデュナンの娘がいた。右の耳の上に付けた木製のレリーフの髪飾りが目に入った。シェリル・ダゲットだった。

「お疲れでしょう？お茶が入りましたので、よろしければどうぞ」

ベックはその娘の清楚な表情に吸い寄せられそうな気分になった。アプリリアージェやエルネスティーネ、それにティアナと言ったアルヴ族の女性ばかりを嫌と言うほど見つめ続けていたベックの目にはデュナンのシェリルはそれ程美人には映らなかったが、利発そうに輝く珍しい鳶色の瞳と、そのどこか悲しそうな表情が気になった。

ベックからすれば特殊人間の集まりと言っていいこの集団で、初めて自分と同じ普通の人間に出会った気分になった。つまりベックはシェリルの顔を見てほっとした気分になったのだ。

「あの？」

「あ、ああ」

ベックはシェリルの顔に見とれていた自分に気付くと、あわてて視線を逸らした。

「ええっと、お、俺はベック。ベック・ガーニーだ。ウーモスで調達屋をやってる。なんかいろいろあって今日からお仲間だ。よろしく頼む」

シェリルはそこではじめてベックに笑顔を見せた。ベックはその笑顔を見て、鼓動が高まるのを感じた。

（お、おい、どうしちまったんだよ、俺……）

「私はシェリル、シェリル・ダゲットです。こちらこそよろしくお願いします」

そう言ってシェリルはぺこんとお辞儀をした。ベックはシェリルのその仕草にも心を奪われている自分に混乱していた。

「どうしました？」

自分をぼんやりした表情で見つめるベックに、シェリルは異変を認めて手を伸ばした。

「え、ええ？」

「顔が赤いですけど、熱でもあるんじゃないですか？」

シェリルは遠慮がちにベックの額に手を置いたが、ベックははじかれるように後ずさった。

「いや大丈夫。いろいろあってちょっと興奮しているだけだから」

「そうですか？」

シェリルは怪訝な顔を向けたが、すぐに自分の仕事を思い出した。

「さあ、お茶をどうぞ。冷める前にいっしょに頂きましょう。皆さんもいらっしゃいますし」

微笑むシェリルに、ベックは素直にうなずいた。その時にはベックは既に突然心の中に生まれた違和感の正体を自覚していた。

一目惚れ……。

話には聞いていたが、まさかそれが自分に訪れるなどとは夢にも思っていなかった……。

（今日は俺にとって生涯で一番思い出深い日になるかもしれないな……）

ベックにとってシェリルの言う「皆さん」というのは本隊のリーダー役をしている例のひげ面のアルヴの男と、近寄りがたい殺気を纏っていた同じくアルヴのあの女の事という認識だった。

それだけにその面々と顔を突き合わせてお茶をすするという状況を想像すると、喜色満面でという訳にはいかなかったが、少なくともシェリルともう少し話が出来る機会はありそうだった。だから彼は、お茶につられたというよりはシェリルがいたから大部屋に足を向けたのだった。

大部屋には居間があり、そのテーブルにはすでハロウィンもティアナも座っていた。ハロウィンは目をつぶって腕組みをし、右手でトレードマークの豊かなヒゲをさすっていた。ティアナはそんなハロウィンをすぐ横で不機嫌そうに見据えており、二人ともシェリルの言いつけを守ってまだお茶には手を付けてはいなかった。

「お、お邪魔します」

その場の雰囲気に呑まれまいと、出来る限り平静を装って声をかけたつもりだったが、明らさまに居づらい雰囲気が漂っているのにはベックは閉口した。

「いつまで突っ立っている」

部屋に入ったところでじっとしているベックに、イライラした声でティアナが言った。

「あ、いや」

（こいつには逆らわない方が良い）

客商売だけに、ベックは相手の持つ性格というか匂いのようなものに敏感だった。その経験とカンが警鐘を鳴らしていた。『ティアナには下手に逆らうべきではない』と。

「では失礼して」

ベックは丸テーブルの空いた椅子に腰をかけた。ちょうどティアナから一番遠い位置、つまり対面になる場所だった。対面は対決構図のようなものでお互いの親交を深める為にはいい位置関係とは言いかねたが、別にティアナと仲良くなろうなどという意図は今現在のベックにはなかった。とりあえず穏便に時間を過ごせればいいのだ。

そんなことよりも彼には考えることが多すぎた。
ル＝キリアと賢者エイミイの件はひとまず置くとして、今彼が気になっているのは「本隊」のアルヴィンの少女、つまりは一国の王女様の事だった。
当たり前だが、ベックはいまだ王族と呼ばれる人間を実際に見たこともましてや話したことなどもなかった。それだけにエルネスティーネとの出会いは彼に、いや彼の人生に大きな衝撃を与えていた。
ここへ来てから王女であるエルネスティーネの様子をじっと眺めていて、その言葉や行動に彼はある種の感動を覚えていた。
髪を切ると言い出した強い決意に満ちたあの瞳の深い緑色の輝きが今も脳裏によみがえる。勿論、はじめはただ髪を切るだけに大げさな事だと思った。だが、それはデュナンであるベックの考えだ。種族だけでなく国も違えば住む環境も身分も全く違う人間同士の価値観など同列で比較しても始まらない。問題なのはその決意の大きさと深さなのだと言うことを、エルネスティーネの言動で改めて気づかされたのだ。
ベックはその感動を通じて改めて今日の一連の出来事をじっくり反芻する余裕ができてきた。

もとはと言えば、アルヴの無愛想な青年と極めて珍しい瞳髪黒色のデュナンの二人連れが彼の店にいくつかの品を頼みに来た事が発端だった。
興味本位で彼らの姿形を情報網に問い合わせると、程なくしてアルヴの方がシルフィードの戦没名簿に載っているはずのファルケンハイン・レインという秘密部隊ル＝キリアの一員ではないかという答えが返ってきたのだ。
それというのも、最近、近辺でいくつかの血なまぐさい事件があり、ル＝キリアの一員に似た一行が目撃されているという先行情報があった為に照会に対する回答が早かったのである。ベックが問い

合わせた件は彼の手を離れ、独立した情報としてすぐにウーモスの他の情報屋の耳にも入り、程なくしてウーモスにル＝キリア一行が滞在し、どこに泊まっているのかも特定できてしまったのだ。もちろん、情報屋は請われればその情報を金で売る。スプリガンが得たル＝キリアの情報はおそらくそうやって手に入れたものであったのであろう。

その後は功を焦ったスプリガンの一隊が油断しているはずのル＝キリアを秘密裏に葬ろうとし、運悪くそれがベックの店にいる時間を狙って作戦行動が開始されたということである。

目的のためには情報屋の命も巻き添えにしようとしたスプリガンのやり方にベックははらわたが煮えくりかえるほどの怒りを感じていた。

情報屋は中立なのだ。請われれば情報は金で売るが、それはどちらかに荷担しての行動ではない。情報屋は不可侵、という暗黙の了解がファランドールの各軍にはあるはずだった。つまり、スプリガンはやってはならないことをやってしまったのである。もちろんそれはスプリガンではなく、事情に疎いザワデスの浮き足が踏み外した事なのであるが、ベックはそこまで知るよしもない。

ベックは九死に一生を得た形になったわけだが、結果論とはいえ、あの場で機転を利かせて自分を助けてくれたル＝キリア一行に対しては恩を感じていた。

そしてそれと同時に、噂では聞いていたシルフィード人の文化に触れたことで、自分の中に変化が生まれたことも自覚していた。デュナンの価値観とは明らかに違う行動様式で自らを律するアプリリアージェ達を見て、強い違和感とそれに相反するあこがれのような感情が入り交っていた。ベックは自分でもそれをもてあましている事にいまだに戸惑いを感じていた。

ベックはまず、伝説と言ってもいい提督、アプリリアージェ・ユグセルに出会い、「白面」ではない素顔の彼女を知るとともに、今回ル＝キリアがシルフィードの国益の為に行動をしているわけではなく、ファランドールという世界全体を見据えた作戦を実行している事を聞かされ、半信半疑に陥った。

ウーモスはサラマンダの町である。サラマンダやドライアドは国益・私益が第一の文化である。もちろん公益という考え方も存在するが、一国の要人である自分の命をためらうことなく世界の為に差し出そうという人間に彼は物語の中以外で出会ったことは無かった。少なくとも祖国にそんな人間がいるという話しすら聞いたことがなかった。

アルヴやダーク・アルヴが自らの命を自らの信じるものに喜んで差し出すという信じがたい意識を持つ人種だということは一般的な知識としては知っていた。だがそれは今思えば微妙な嘲笑を含んだ理解でもあった。しかしこうして、短い間であったがル＝キリアの一行と過ごした体験が、噂はちっぽけな自分の嘲笑など意に介さぬほど純粋な真実だったと言うことを証明していた。彼はそれを理屈ではなく肌で感じ、そしてその事実を目の当たりにしてめまいにも似た衝撃すら覚えていた。

ティアナに連れられてル＝キリア一行の宿を後にする際、別れ際にアプリリアージェがかけた一言が今でも彼の頭の中に響いている。

アプリリアージェはまずこう言ってベックを引き留めたのだ。

「あなたはこの後、一つの歴史が動こうとしている事を知るでしょう。それも、とても大きく動こうとしていることを」

そして、ベックが怪訝な顔をすると、にっこりと笑って送り出した。

こう続けて。

「そして波が去り、運良くあなたが生き残る事ができていたら、きっと心から私に感謝することになるでしょう」

スプリガンに一泡吹かせたい、という思いから仲間にしてくれと言い出したのはベックの方だった。もっともル＝キリアの噂を知っているだけに、秘密を知ってしまったベックを彼らが歓迎するはずはないと思って先手を打ったつもりだったのだ。

それはベックとしてみれば賭だった。文字通り、命を賭けた。

アプリリアージェはベックがそう申し出た時に、まるでその心の中を見透かしたように彼に脅しをかけていた。

「あなたはスプリガンにも狙われていますね。でも、私達も彼ら同様、あなたをこのまま生かして帰す訳にはいかないということはおわかりでしょう」

そのセリフはあのアプリリアージェの甘く優しい笑顔から出てきたものだ。それだけにベックは恐ろしさが倍増した気持ちがした。

「どちらにしろ『スプリガンに一泡吹かせてやりたい』程度の生ぬるい気持ちでは命がいくらあっても足りませんよ。我々にとってもそんな人間はただのお荷物です」

白面の悪魔……。

ベックはアプリリアージェにそう見透かされた時にその名を思い出し（もうダメだ）と一瞬全てをあきらめかけた。

だが、当然ながら彼はそんなところで理不尽な理由で死にたくはなかった。

そして、こうアプリリアージェに食い下がったのだ。

「ここで俺を味方にしなかったら、絶対に後悔するぜ。調達屋を舐めてもらっちゃ困る。シルフィードに調達屋はないから想像できないのかもしれないが、俺達の縦と横の繋がりが生み出す力は、ある意味世界を支配できる程のものなんだぜ」

ベックの言葉はまんざらハッタリではなかった。

いや、少なくとも彼は本気でそう思っていたから、その言葉には彼の誇りが生む真実の思いが込められていたのだ。

アプリリアージェと言えば精一杯の虚勢を張って自分を睨み付ける若い調達屋に悪い感情は持っていなかった。むしろ今まで出会った海千山千の調達屋とは明らかに違うものを感じていた。

アプリリアージェは啖呵を切ったベックにほほ笑みかけると、静かに問うた。

「では、あなたの覚悟を私達に見せてください」

「覚悟？」

怪訝な顔をするベックにアプリリアージェはうなずいた。

「私の周りにいる仲間は全員私に文字通り命を預けています。私の命令があればそれこそ何のためらいもなくこのウーモスの町を一夜のうちに灰にして町の住民全員を殺す事など簡単にやってのけますよ。命令とあれば幼い子供だけを選んで惨殺して、その死体を広場に並べてさらしものにすることでさえ、表情一つ変えずにできるのです」

そう言って今までと全く変わらず微笑むアプリリアージェを見てベックの背筋に改めて冷たいものが流れた。

彼も世界の情報に関わるものとして「白面の悪魔」の噂は知っていた。

ある時は自国の商船を襲った海賊を追いかけ、根城とする村の住民全員を彼らが商船に対してやったように、女子供年寄りさえ一人残らず殺し、かつ村を灰になるまで焼き払った。

またある時は降伏した海賊の長をはじめいわゆる幹部に対し即刻断罪を行い、見せしめの為に彼らの部下の目の前で白面の魔女自らが捕虜達の眼をくり抜き大鎌を振りかざして首をはねて見せた。

またある時はル＝キリアが到着する前に逃げ散った海賊の村全体を周りの畑や桟橋は言うに及ばず入り江さえも再利用出来ないように土砂や瓦礫で地形が変わるほど蹂躙したなどなど、その冷酷さや容赦のない破壊行為についての逸話は多い。

北の海の海賊達の間で「ル＝キリア」というのはかつては憎しみを込めて口の端に上がったものだが、今では口にするのも躊躇われ

るほどの恐怖の対象となっていた。
そして誰言うと無くル＝キリアを説明する為のこんな台詞が流布していた。
『ル＝キリアに交渉は通じない。逃げる事も不可能だ。獲物の選択肢は二つ。惨めに殺されるのを待つか、もしくは自ら死を選ぶかだ』
ベックはその言葉を思い出すと、いい加減な言い逃れは出来ない事を悟り、唇を噛んで覚悟を決めた。
「わかった。じゃあ俺を信用できないなら今ここで俺を殺せばいい。俺は調達屋だ。調達屋は信用が命だ。それが信じられないなら調達屋である俺を生かしておく事もないだろ？」
口調は威勢が良かったが、その実唇は青ざめ、声が少し震えているのが自分でもわかった。口の中がからからに乾いていて思ったように喋れないのである。ムリもない。この後に自分の首が胴体とくっついているという保証はないのだ。
覚悟を見せろと言われてもベックはどうしていいかわからなかった。ただ、自分が思っていることに嘘偽りなどはない。どうせ死ぬなら自分が信じる事をして死にたいと考えたのだ。上手く言葉には出来なかったが、思いは伝えたはずだった。
ファランドールを守るという事は言っていることが大げさすぎて実のところそれがどういう事かは詳しくはわからない。ただ、ベックは短い間ではあったが会話を交わし触れ合ってみて、この白面の悪魔達が悪人とは思えなかったのだ。ましてや噂にあるただの残虐な虐殺集団とも。
彼にしてみればむしろそれはスプリガンの方であった。単純な思考ではあったが、スプリガンに対するものとしてのル＝キリアの方が好ましいものに思えていた。
さらにこの先ドライアドとシルフィードが戦争状態になったとき、サラマンダ人のベックはドライアドの支配下にいたくはないという思いも強かった。ドライアドにむしり取られるくらいなら、シルフィードの厳格な社会体制の方がよほどマシだと言えた。

従って、「ドライアドではなくシルフィードを支持する」思いを「スプリガンではなくル＝キリアにつく」と言う気持ちに重ね合わせて自分がスッキリすることには何のためらいもなかったといえた。
後はベック自身の誇りの問題があった。まだ若くデュナンの気質で血気盛んな年齢でもある。間違っても命乞いをするような真似はしたくなかったのだ。

聞きようによっては「勝手にしろ」と言い放った事になるベックの言葉を、しかしアプリリアージェは即座に受け入れた。
「わかりました。あなたを信用しましょう」
「へ？」
一世一代、いや命をかけたタンカを切ったベックはアプリリアージェのあまりに簡単な、即答とも言える一言で受け入れられたことに対して、いったい何事が起こったのかわからず一瞬思考が停止した。
「私が信用したからには、その信用に値する働きをしてもらいますよ。いいですね？」
アプリリアージェのその言葉は物静かで優しい口調ではあったが、その実その中身は命令への絶対服従を強いるものだと考えてもおかしくないものだった。
「あ、ああ。そりゃ、もちろん」
ベースは明らかにアプリリアージェのものだった。
彼女はベックの薄青色の瞳を緑色の瞳でじっと見つめ、その目に濁りのないことを見て取って満足そうにうなずいた。

「珍しいですね。司令……いやリリアお嬢様があのような者を信用して配下にするなど」
ベックがティアナと部屋を出て行った後、ファルケンハインはそれを待っていたかのようにアプリリアージェに声をかけた。
ファルケンハインがそう言う質問をアプリリアージェにする事は

珍しい。それは普段はアトラックの役回りだった。
それだけベックの件は異例だったと考えるべきだろう。とは言えファルケンハインが問わなければアトラックのが尋ねていた事は間違いない。
「信用できないですか？」
アプリリアージェは静かにそう答えた。
「いえ。私は少なくともリリアお嬢様の決断を信じています」
「ありがとう」
アプリリアージェはそう言うとにっこり笑い、そしてその事についてはそれ以上何も言わなかった。ファルケンハインも同様で、ベックの件についてはもう何も尋ねる事はなかった。
アトラックはそのやりとりに関しては大いに欲求不満ではあったが、それ以上突っ込んで聞くことも出来ずに苦笑しながら頭をかいた。
つまり、ファルケンハインはこの件についてアトラックから根掘り葉掘り質問が出るのを避けるために自分から先に質問をし、アプリリアージェもそれを知ってあのような簡単なやりとりでこの件を終わらせたと見ることも出来る。
何にせよ異例の事であった事は間違いなかった。

「お茶が冷めますよ」
シェリルの言葉に、ベックは我に返った。
隣の椅子に座っていたシェリルが怪訝な顔でこちらを見上げていた。
「ふ。怖じ気づいて惚けていたか？」
向かいの白髪の女アルヴ、ティアナが挑発するようにそう声をかけてきた。
「いや、ちょっと考え事をね。店を引き払う事になるんで、その手配とかを考えてただけさ」

ベックはそう言うと目の前のカップを持ち上げて、中の赤く透明な液体を流し込んだ。
茶を注ぐ前にカップがしっかり暖められていたのだろう。のどを通るそれはまだ充分な熱さを保っていた。
「うまいな」
今は紅茶の味などわからないのではないかと思っていたが、鼻を抜けるその香りの良さと口に広がる上品な甘さをベックはしっかりと感じていた。
「良かった。お口に合って」
心配そうに見上げていたシェリルは、ベックの感想を聞くと嬉しそうに笑顔を見せた。
「いや、本当にうまいよ。こんなうまいお茶はウーモスじゃ飲んだことがない。これは君が？」
「ええ。シェリルでいいですよ、ガーニーさん」
「ああ、じゃあ俺もベックでいいよ、シェリルさん」
シェリルはベックがそう呼ぶと可笑しそうに笑った。
「さんはいりません。ただのシェリルでいいです。みんなそう呼んでくれます」
「なら、俺もベックでいいよ」
「オホン」
目の前でティアナが咳払いをした。
嫌な予感がしてチラリ、と目をやると、案の定白髪の美人兵士はベックの方を睨んでいた。
「この非常時にたいそう余裕のある様子で何よりだ」

（しまった。少し馴れ馴れしすぎたか）
ベックはハロウィンとルネ、そしてティアナについてはあらかじめ教えられていたが、シェリルの存在については予備知識を何も貰っていなかった。さらに言えば風呂に入っていたとかで顔を合わせたのはさっきお茶に誘われたのが初めてだったのだ。

服や言葉などからそもそも自分と同じドライアド人、それもデュナン同士ということでシェリルに対しては無防備になっている事は確かだった。

もちろん、それだけではなく別の感情のせいでもあったのだが……。

「お前をがっかりさせるつもりはないのだが、最初に断っておく」

「は？」

「残念ながらシェリルは人妻だ」

「ええ？」

ベックは驚いて思わずシェリルの顔を見た。シェリルはバツが悪そうに目を逸らすと、ティアナに対して批難の声を上げた。

「ティアナ！」

ティアナはシェリルのその行動は予見出来ていたようで、目を伏せたまま片手を上げた。

「すまん。悪気はない」

「もうっ！」

「いや、それは知らなかった……というか、別に俺はそんなつもりじゃ」

「今のは半分冗談だ」

ベックは慌てて言い訳のような物をしようとしたが、皆まで言わさず、ティアナはそれを遮った。

「リリアお嬢様が認めたとはいえ、チャラチャラした事をして貰っては困ると言おうとしただけだ。解ってくれたならもう何も言うまい」

目も合わさずそう言うと、ティアナは紅茶の入ったカップを口に運んだ。

ベックはと言えば、そんなティアナから視線を再びシェリルに移した。

シェリルはベックと目を合わすと、バツが悪そうに頬を上気させ

た。
「すみません、正確に言うと私はまだ人妻ではありません。そんないいものではないのです」
それだけ言うとうつむいた。
「まだ？」
ベックは何が何だか解らないという顔をして、今度は助けを求めるようにこの部屋のもう一人の客であるヒゲ面のアルヴ、ハロウィンの方を見た。
ハロウィンは一連の様子を黙ってみていたが、ベックと目が合うとやれやれという風に肩をすくめた。そしてティアナの方を向くと、おそるおそると言った感じで声をかけた。
「ちょっと今のは、その、シェリルに対して失礼な言い方なんじゃないかな」
「そうですね、確かに言い過ぎました。申し訳ありません。シェリルもごめんなさいね」
「へ？」
ティアナにしては意外とも言えるほどあっさりと折れて謝罪したものだから、ハロウィンは怪訝な顔でシェリルをみやった。もっとも、心のこもった謝罪でないことは明白だったのだが……。
ベックと言えば場の雰囲気が非常に悪くなっていることに耐えられず、そろそろ胃が痛くなりそうだった。
「ル＝キリアは命を懸けて作戦を決行しました。我々ももう甘えは許されません。いつまでもめそめそしている場合ではないし、それを甘やかす段階でもないでしょう」
ティアナはやはり、ただ謝ったのではなかった。謝った上で、言いたいことを言うぞ、という事なのだろう。批難は甘んじて受ける。だが、言うことは言う。
つまり、ティアナの本心がここで出るということだ。
「ティアナ……」
「先ほど、この身をもって思い知りました。シルフィードのバード

の力量を知る私から見てもエイル・エイミイはどう考えてもまともなルーナーではありません。いや賢者なのですからただのルーナーではないのは当然なのでしょうけれど。――つまりそのような人間がつい一年前まで反政府ゲリラのキャンプで暮らしていた少年であるわけがないでしょう？」

「それはそうだが……」

「私がいいたいのはそれだけです。もうこの話題には触れません」

ベックはたまらず立ち上がり、会話に割って入った。

「ちょ、ちょっと待てよ」

ティアナは顔を上げてベックを見た。

「俺にはまったく話が見えないんだが」

「そうか。では教えてやろう」

「待て」

ハロウィンはたまらずティアナの言葉を遮った。

その時、不意に扉が開いた。

「じゃーん」

殺伐とした部屋に、赤毛の少女がそう言ってにこやかに顔をだした。

「新型ネスティのお披露目ヤでー」

その部屋にいた四人はその声に全員がルネの向こう側へ視線を向けた。

ルネに催促されて、部屋に顔を出したのは、少し尖ったアルヴ族独特の耳まで見えるほど短くなった髪をした白い肌の少女だった。少女だが、服装を変えてしまえばアルヴィンの少年にも見えなくはない。それほど劇的な変化だった。

恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてうつむきがちに部屋に入った緑の瞳の少女は、紛う方なきエルネスティーネではあったが、それでも全く雰囲気の違う人間に見えた。

「ネスティ……」

ティアナは椅子を蹴って立ち上がると、目を細めた。
「なんて素敵なんでしょう」
「うん」
ハロウィンもネスティの上気した顔を見て、同じように目を細めてうなずいた。
だが、シェリルは椅子から立ち上がると、エルネスティーネの側をすり抜けるようにして部屋を駆けだして行った。
エルネスティーネはいったいどうしたんですか？という表情をして一同を見渡した後、ルネと顔を見合わせた。
「えーっと……」
ハロウィンは頭をかきながら助けを求めるようにベックの方を見たが、ベックは肩をすくめて首を振った。

翌日ベックは自分の構える店のカウンターに座っていた。
ル＝キリアが帰ってきたという報はまだない。だが、いつ知らせが来てもいいように出発の準備をしておく必要があり、雑事を片付けるために朝から走り回っていた。
それも一段落ついた今は人待ちをしている状態だった。

自分の店を構えている調達屋は実はそれほど多くはない。
たいがいの場合、調達屋の組合に登録すると、その組合に出入りして客の紹介を受けるのが常である。組合は調達の手数料から一定の紹介料を取って運営資金に充てるといった具合である。だがこれはウーモスくらいの規模の町になら可能であるが、小さな村ではなかなか難しい。もっとも小さな村では調達する物を仕入れることすら困難な場合が多く、これが調達屋が大きな規模の町にしか居ない理由である。

調達屋は建前としては頼まれたらあらゆる物を揃えることになっ

ているが、実際問題として仕入れ先との関係など様々な要因があり、人により得意不得意がある。調達屋組合はその辺りの緩衝材ともなっており、依頼者は調達屋個人に直接頼むよりも組合に相談する方が確実に目的の物を手にすることが可能な仕組みになっている。

従って逆説的に述べるならば、自前の店まで構えている調達屋は仕入れなどにも精通した、ある一定以上の信用と実績がある人物である、と言うことになる。

では組合などを通さずに直接店を構える調達屋に行った方がいいのではないかというとそうとばかりも言えない。これは組合との取り決めで独立した店を構える調達屋は組合の定める標準料金よりも二割から三割以上高い料金設定をしなければならないことになっているからだ。自由競争で価格を安くして客を取る方が儲かるはずだと考えるのは調達屋のことをよく知らない人間の浅考である。

調達屋とは言ってみれば人と人との橋渡しをする仕事である。ある人間の持っている物や情報、あるいは技術、ひいては人そのものを依頼人の要求に応えて用意することが目的でありそこにはどうやっても人間関係が介在する。その人間関係に安易に競争を持ち込むことは調達屋という仕組みそのものの質の低下を呼び、ひいては社会的な信用を失墜させかねない事態に陥ることになりかねない。それを避けるために彼ら自身が作り上げた仕組みが調達屋組合という制度なのである。

調達屋の仕組みはそれほど古いものではないが、ウンディーネの商人組合に対抗する組織としてサラマンダのトリムトにあるいくつかの商人組合が母体となって発展したものというのが定説になっている。

その当時、ファランドール物流の基幹を牛耳っていたウンディーネの商人組合は物の価格を長く自分たちで決めていた。その為、場合によっては不当な代金を支払わざるを得ない羽目になることが多

く、特に国が戦争で荒れ果て、長く産業が健全に育っていない状態のサラマンダにとっては大問題だと言えた。国としての政治形態が見かけ上整ったとしても、経済的な主導権が国外の人間に握られたままではどうしようもない。

そんな中、実際の商業関係の利権がドライアドの政府とウンディーネの商人組合とに牛耳られている現状に業を煮やした進取の気性に富む有力な若い世代が非公式ながらも水面下で政治的な後押しも取り付け苦労して産み落とした組織なのである。

組織が出来ると、それは首都トリムトはもちろん、一つの町や都市にとどまらず、相互に強固な関係を築き始めた。そして気がつけばサラマンダだけではなく、ウンディーネやドライアドも含めた世界規模の組織になっていた。

噂では世界中に根を張り巡らせることが出来たのはマーリン正教会の暗躍があるなどとも言われているが、もちろん証拠などはいまだに出ていない。ただ興味深いのは、マーリン正教会がその影響力を行使できていないシルフィードには調達屋の組織が存在していないという奇妙な符合があることである。

シルフィードにあるのは調達屋組合ではなく、シルフィード政府に認められた情報収集・仕入れ窓口のような出先機関だけである。

調達屋という仕組みはシルフィードの政策にそぐわないというのが一般的な見方であるが、なるほどシルフィードの国民はもとよりどんな小さな単位の社会であっても互助の精神で問題を解決する仕組みができあがっており、言ってみれば国自体が調達屋の組合のようなものであるからだという見方も出来る。そこに代金、すなわち経済的な背景が存在することがそもそもシルフィード風ではないと言うことなのであろう。シルフィード王国を評して「王制社会主義国家」と呼ぶ学者がいるが、なるほどそう言った側面を否定できないお国柄であることは確かである。

店を構えている調達屋は組合登録の調達屋よりも多めの組合費を

依頼料から支払う必要がある。会計の帳簿などは組合の指導に沿った形で揃えておかねばならず、色々と面倒が多い。多くは調達屋の細君や親類などが手伝いがてらに帳簿役をやることになるのだが、調達屋は普通の店とは違い、色々な情報を得ることになるので誰でもがその仕事に関わるということができない。例え細君であろうが子供であろうが、店で雇った人間は調達屋組合で認定され登録された人間でなければならないのだ。

従ってよほどの顧客を抱えて仕事が潤沢にある調達屋以外、つまりは多くの調達屋は面倒な手続きや維持管理費用がバカにならない独立店舗は持たずに登録制にしているわけだが、ベックは独立店舗を構えていた父親の下で幼い頃から店で働いてきたこともあり、父親の死後、そのまま店を受け継いで独立した店舗で商いを続けていた。ベックの父親はご多分に漏れず、先の大戦で命を落としていた。

ベック自身は確実な調達で高い信用を得ていた父親について長く丁稚奉公をしていたことで、すでにその若さに似合わぬ人脈を持っており、また彼ら相手に堅実な商売をしていたため信用を落とすことなく父親時代からの顧客を引き継ぎ、商売自体は実に順調だった。

しかし彼は持ち前の冒険心を押さえきれず、最近では自分が興味を持った仕事ばかりを主にこなすことにしており、簡単な調達については自分では動かず組合推薦の派遣調達屋にそれに当たらせる事が多かった。

派遣と言っても常時店にいて接客するという類の者ではなく、一日に一回店に顔を見せて仕事があればベックから受け、それをこなすという形式の雇用関係で、体のいい下請けだと思った方がいいだろう。常駐させてもよかったのだがベックがそれをしなかったのは、主に秘密保持のためである。

それというのも調達屋が調達屋を雇う場合は自分の好きに選べない。これも組合に打診し、組合から紹介された人物を雇うしか道は

ないのである。従ってベックとしては紹介された人間を完全に信用するなどと言うことは出来ない相談であった。多くの場合、同様の理由で他の店でもベックと同じ方式をとっており、特別ベックが用心深いというわけでもない。父親の店に出入りしていたベックの丁稚方式とはまた全く違うのである。

丁稚方式は年齢が十才以下から始める必要があり、それ以上の年齢になるとまずは組合登録をして研修期間に経験と実績を積んで後、正式な調達屋となる。

研修期間中は依頼人の承諾を得た上で、調達屋に依頼内容とともに紹介されるを形をとる。すなわち調達屋は依頼内容と一緒に研修生をも受け入れる必要があるのである。

この研修生受け入れについては研修生だけでなく依頼人にもメリットがある。それは研修生受け入れを承諾することにより、依頼料が一定額割引されるのである。もちろん調達屋の実入りはその分少なくなるのだが、これは取り決めで年間に一定数の研修依頼を受け入れなくてはならないことになっており、不公平などはないようにはかられている。

とはいえ、研修生には並はずれた忍耐が必要になる。一年や二年では一人前の調達屋として認められず、最低五年の下積みが必要となる。もっとも五年間辛抱すればいいのかというとさにあらず。一人前の調達屋として認められるためには様々な分野に精通した知識が求められ、かなり難関と言われる筆記と面接の試験がある。これに合格するためには相当の学習が必要であり、調達屋の手伝いをこなしながら五年程度で合格する者はごく希である。多くの場合は十年程度の下積みを経てようやく調達屋として名乗れることになる。

言い換えるならば、ほとんどの者はその間に脱落するのである。脱落した者は「回状」と呼ばれるファランドール中の調達屋組合向けに姓名・出身地・種族・目や髪の色など身体的特徴、性格や場合によっては似顔絵などその他細かい個人情報が送られ、その人間は二度と調達屋組織に関わることが出来なくなる。

このように様々な合理的な仕組みを持つ巨大な組織が調達屋達の世界である。だが調達屋はいわゆる物販だけの商売人ではない。リンゴやワインを売ったり、収穫した小麦を農家から買い取って、粉屋に卸すという普通の仕事はしない。それは商売人の仕事なのである。彼らは主に商売人の領分を侵すことのない小口の商売を行う。従って調達屋が多数食っていけるわけではないのである。ある意味細々とした商売であり、人気商売でも何でもない。だがそこには確実な仕組みと情報があり、他の商売組織との関係を持つことにより相互補完も出来、知る人ぞ知る時代の先端を行く職業とも言えた。各国の政情や天候はもとより作柄、流行や物の相場など、調達屋の情報網は驚くべき速度と正確さでファランドールを駆けめぐる。調達屋組合に属している人間であればその情報はいつでも手にすることが出来る。そしてそれに魅力を感じた人間が調達屋を情報源として重宝するようになってきた。

情報自体が金になるようになったのだ。

各地の有力な商人や資産家などはまずこの調達屋組合との繋がりをないがしろにしない。そこにはさまざまな情報があり自ら収集した情報と併せて、事業の方向性を決めていくについて欠かせないものとなっているからだ。

調達屋組合としては禁止してはいるが、特定の調達屋を顧問のように雇い、常時最新の情報を得ようとする動きは止めようもなく、中には数人の調達屋を得意分野ごとに抱え込んでいるような資産家も居たという。

組合に集まる情報は雑多で、ただ時系列に集積されるだけである。その膨大な情報をどう取捨選択するかが調達屋の情報収集能力であり、いきおい得意分野が出来てくるというわけである。

「すまん、ちょっと別件で手間をとって遅くなった」

ノックもそこそこに扉を開けた禿頭のデュナンの小男が挨拶と同時にベックの店に入ってきた。年の頃は五十がらみと言ったところだろうか。気のよさそうな初老の商売人と言った風情だが、着ている物はこざっぱりしていてそれなりに裕福そうな暮らしぶりが伺える。

ベックはこの男の訪問を待っていたのだった。

「いや、俺の方こそムリを言って悪いな、おやっさん」

「いやいや、おまえさんの頼みとあればいくら忙しくても断れんよ」

男はそう言うとさりげなく辺りに気を配りながら、扉を後ろ手に閉めた。これは彼ら調達屋が持っている習癖のようなもので、扉の開け閉め時は周りがどんな状況かを把握してから行うのが常になっている為である。もちろん、「おやっさん」と呼ばれた初老のデュナンが誰かに付け狙われているというわけではなかった。

「だが、急な話だな」

「ああ」

男はカウンターを挟んだ椅子に腰をかけるとようやく落ち着いた風情で話し始めた。

「ヤボな事は聞くまいと決めてきたんだが……」

「なんだよ水くさいな。聞くだけ聞いてみればいいだろ?」

ベックは苦笑しながら「おやっさん」に答えた。「おやっさん」はベックと同じ様に苦笑するとうなずいた。

「何があったかなんて聞いてもおまえさんのことだ。本当のことを話してはくれまいな」

ベックはその言葉に苦笑しながら応えた。

「そうだな。以前から決めていたことを決行するのは今だって思った、って所かな」

「ふむ」

男はベックが手に掲げて見せたワインの瓶を見て「いや、いらない」というふうに軽く手を振った

「すぐに組合に戻らなくちゃならないんでな。気持ちだけありがた

くもらっとくよ」
「そうか」
ベックは残念そうにワインのラベルに目を落とすと、ゆっくりとそれをカウンターに置いた。
「その気になったのはやはり例の一件か？」
おやっさんはそれでもベックの本心の一部でも聞き出したい様子で質問を続けた。ベックも木で鼻をくくるような応対をするつもりは毛頭無く、とはいえ真実は話せないだけに、むずがゆいような返答で気持ちを伝えるしかなかった。
「そうだな、スプリガンがウーモスくんだりにやってきたって言うのは確かに衝撃的だけど、俺はそれよりル＝キリアがアロゲリクで全滅したって事の方が重要だと思っている」
「というと？」
「ファランドールの力の均衡って言うのかな。それが破れたような気がして、な。もちろんドライアドとシルフィードのことだ。もともと兵の総数じゃシルフィードはドライアドの四分の一とも五分の一とも言われてるのは知っての通りだが、兵士個々の能力を加味するとほぼ同等と言われていたよな？」
「場合によっちゃそれでもアルヴ主体のシルフィードの方が上だという見方も多いな」
ベックはうなずいた。
「だが、ここのところ相次ぐル＝キリアを狙ったとしか思えないような事件の情報を見ると、ドライアドが何かの下準備を終えていよいよ事を起こそうとしているようにしか思えないんだよ」
サラマンダではシルフィードとドライアドとの間に近く小競り合い以上の衝突が起こる事は時候の挨拶のように人々の口の端に普通に上がっていた。ベックとおやっさんの会話もそこから逸脱するようなものではない。だが、その会話にベックは本心を混ぜて伝えたいと思ったのだ。事実ではないが、そこに真実を込めたかった。
「それは俺達もうすうす感じていることだ。ドライアド辺りじゃそ

ろそろ調達屋の組合にその筋からの圧力がかかり始めているらしいしな」

「だから俺は戦争前にこの町を出ることにしたんだ。ファランドールがこの先どんな方向に進むのかをこの目で見て、この肌で感じたいんだよ。時代のうねりをウーモスでただ座って待って見物してるだけじゃ、おそらく俺は後悔してもしきれないと思う」

おやっさんはベックのその言葉を聞くと何も言わずに小さくうなずき、思い出したように懐から一通のやや分厚い封筒を取り出すと、それをそっとカウンターの上に置いた。

「回状の写しと、「認章（にんしょう）」だ。おまえさんは名前を名乗ってその認章を見せさえすれば、ファランドールのどこにいても調達屋の仕事ができる」

「シルフィード以外では、だな」

ベックはそう言いながら封筒を手に取った。おやっさんはベックの言葉に苦笑した。

「そうだったな」

ベックは封筒の中身を確認せずに懐にしまうと、改まったように頭を下げた。

「いろいろ世話になった」

「なあに、おまえさんの実力なら問題はないさ。委員の中にも誰も反対する奴は居なかったさ。もっともそれはおまえさんだけの実績じゃなくて、おまえさんの父親の信用もあってのことだろうがな。そこの所は素直にオヤジさんに感謝するんだな」

「まったく、死んだ後でも色々とあのオヤジには助けられてるよ」

「おやっさん」はうなずいた。

「それに、俺は今になって思うんだけど」

「なんだ？」

「俺のオヤジはさ、先の大戦の時もし俺が居なかったら、同じように世界を見るために出発してたんじゃないかって、な」

おやっさんはベックの言葉に腕を組むと、少し考えるように目を

閉じた。
「なるほどな。おまえさんが結婚もせずにずっと独り身で過ごしてるのはそう言うことだったのか」
「言ったろ、ずっと前から決めていたことだってな」
「俺はてっきり女には興味のない種類の人間なんじゃないかと密かにかんがえていたんだが」
「よせやい、俺だって惚れた女の一人や二人」
「いるのか？」
「あ、いや。居ないことも、ない……」
「ほう、どこの娘だ？置き土産として教えていけ」
「いや、この町の人間じゃない」
「ふむ、そうか」
おやっさんは意味ありげな笑いを浮かべると、ベックの肩をポンと叩いた。
「それで、出発はいつだ？」
「この後すぐに発つつもりだ」
「そうか」

二人の間に沈黙が流れた。だがそれはそれほど長いものではなくベックがさっきのワインを手にとって男の目の前に音を立てて置くと、それは破られた。
「これは荷物整理し損なったヤツでさ。置いといても腐るだけだから、おやっさんにやるよ」
「おやっさん」はワインとベックとを見比べると小さくため息をついて立ち上がった。
「名残惜しいが、そうそう引き留めてもおけないようだな。旅のお供が待ってるんだろ？」
「なあに、ちょいちょい帰ってくるさ。戦争が終わったら、な」
おやっさんはそれには何も答えず、ゆっくり右手を差し出した。
ベックはその手を強く握ると、こちらも何も言わずにうなずいて

見せた。それを見て、おやっさんも同じく小さくうなずいた。
「達者でな。このワインはありがたくもらっておくよ」
そう言うと「おやっさん」は立ち上がって店を出ようとしたが、扉を開いたところで何かを思い出したかのように立ち止まった。
「そうだ、ベック。おまえさんは今度の戦争、どっちが勝つと思うんだい？」
「おやっさんは？」
「俺の考えじゃ、兵がいくら強くても、今のシルフィードではドライアドの敵にはならないような気がするよ」
「おれも同じ考えだな」
「そうか」
「おやっさん」はそれだけ言うと、辺りを見渡すような仕草をして、扉を閉めた。
ベックはそれを見送ると懐に入れた封筒から中にある紙と認章をとり出し、文面を確認して満足そうな顔で元通りに懐にしまい込んだ。掌の半分程の大きさの認章は首から紐で吊していた袋を取り出すと、大事そうにそこにしまった。

記録では調達屋ベック・ガーニーは星歴四〇二六年白の四月二十一日にウーモスの調達屋組合を脱退、ウーモス調達屋組合運営委員会公認・無所属の調達屋になった、とある。
『月の大戦』が勃発するほぼ一年前の出来事であった。

## 第四十二話　アキラ・アモウル・エウテルペ

剣豪としても「軍師」としても名高い「レナンス」のアキラ・アモウル・エウテルペ。

彼は歴史書や小説などでもアキラ・アモウルと紹介される事が多く、アモウルが族名であると勘違いされていることが多いが「アモウル」とは附名であり、ファランドールの一般的な呼称としては、アキラ・エウテルペが正しい。

彼の故郷であるツゥレフ島はサラマンダ大陸の南部の東、ドライアド大陸の中央部西に位置し、かつては独立した国家であった。

その国では貴族の子は誕生に際し名を二つもらう。すなわち一つは父親からもらう「一つの名」であり、もう一つは母親からもらう「死後の名」である。

これはツゥレフでは黄泉の国の入り口には門番がいて生前の罪を吟味すると言われている言い伝えに端を発する対処法であるという。

伝説のこの門番は生前の善行には一切触れず、ただ罪のみを吟味して、罪多きものにはその扉を開くことをしないという。黄泉の扉をくぐれなかった魂は混沌に飲み込まれ、やがて化け物となり、二度と人として生まれ変わることはないとされる。現在ではその化け物とはスカルモールドのことだと言われているが、念のために書き添えておくと、ツゥレフの古い伝承にはスカルモールドという表現はない。

ツゥレフの人々は輪廻信仰をもっていたから、人として生まれ変わる為には門番にぜひ黄泉の扉を開いてもらわねばならなかった。しかし人とは大なり小なり罪をおかすものである。そこで考えたのが罪をごまかすことだった。

門番は門の前にやって来た魂に問う。「汝の名を名乗れ」と。

そこで人の魂は二つ目の名、すなわち死後の名を名乗る。門番に

は嘘は通じないから適当な名前は名乗れない。しかし二つめの名は真実の名ではあるが生前使っていた名前ではないので、その名前を門番がファランドールの精霊に照会しても罪の記録はないと回答される。門番は恭しく門を開け、魂は正しく黄泉に旅立つという寸法である。

都合のいい話だが、人間の知恵は自らに困難を課した後、同時に逃げ道を作るものなのだろう。

また別の説もある。

ツゥレフを開いた最初の王と后が自分たちに最初の子供が生まれた際、お互いが自分の考えた名前を主張して大げんかをおこし、国政を顧みずに何年も争いつつけた為に国が滅びかけた。そこでようやく二人はお互いに自分達の愚行を恥じ、既に長じていたその子の提案を受け入れた。すなわち父も母も一つずつ我が子に名前を付けることになったのだ。以後は貴族達も王家のしきたりに倣った為、ツゥレフの民は二つの名前を持つことになったのだと言うのだが、おそらくは両方が正解なのであろう。

ツゥレフは古来より女性の地位が高いことがそのことを裏付けているように思える。

二つの名前のうち、通常父親が付けた名を名乗り、公式な文書や行事などでは死後の名を含めた完全な呼び名を用いる風習がある。ツゥレフ島は本来少数民族の国家であった。ドライアドに併合された後もしばらくの間はドライアドの国家様式を取り入れつつ、とはいいながらもそのころはまだ独自の風習が残っていたのであろう。

アキラは、その少数民族のツゥレフ族の末裔なのである。

彼はドライアドに併合された後に爵位を与えられツゥレフ島の領主に任命されたエウテルペ子爵家の第一子として生まれた。しかし、ドライアドの貴族法により第四妻の子であったアキラには家督の継承権はなく、現在の第一継承権は子爵と第二妻との間に生まれた三

男のユーリ・ファウル・エウテルペにある。

そのツゥレフ島のレナン城にてアキラは星歴四〇〇二年、つまりエスカ・ペトルウシュカと同じ年に生を受けた。父は当時のツゥレフ領主ケイジュ・エウテルペ子爵。母の名は三番目の側室、つまり第四妻マリィであった。母親のマリィは市井の出身で旅の吟遊詩人として生計を立てていたという。年老いた父娘の二人連れで各地を訪れていたようだが、ケイジュがミュゼから自領に帰る途中で見初めて夢中になり側室にしたとある。身元がはっきりとしないマリィを妻に迎える事について、子爵家はかなりもめたそうだが、「たとえ子が生まれてもその子には継承権を与えない」という条件で周囲に納得をさせたのであろう。そうでなければ、順番としては最初の妻のはずであったマリィが第四妻になっていることは極めて不自然である。

アキラ・アモウル・エウテルペの剣の才能はさておき、彼はまた優れた横笛の奏者でもあった。もちろんその音楽の才能はマリィの影響と考えるのが自然であろう。

アキラは忍びで全国を旅することが多く、各地で笛の名手「アモウル」の名が知れ渡っており、武人としてのアキラとは別人として扱われていることも多いようである。

若くして将軍職に就いたエスカの下で、アキラは通常の軍を率いる事をやめ、主に諜報役として活躍をしたようである。

ドライアド国王であるエラン五世、いや正確には五大老直轄と言われる秘密部隊、「スプリガン」の指揮を執るようになったのもその頃からのようである。

大佐となり、スプリガンの総司令を拝命してからもなお、彼は単身で様々な諜報活動を行っていたようである。実質的な権力は総司令として掴みながらも、自分の父親よりもまだ年かさの副司令を事務的な顔として前面に出し軍内での折衝を任せるなど、弾力的な政

治手腕はそれなりに評価されていたようである。出世の速さはいらぬ敵を作るものだが、それをやんわりと受け止める術を知っていたと言うことであろう。

だが「摂政」的な手法は政治的な駆け引きだけではなく、むしろ実質的な物を生み出すために必要な手段だと現在では考えられている。それはもちろん自らが野に出て様々な諜報活動をする時間を捻出するための方策だった。

その自由時間とも言える諜報活動時の仮の姿が、笛の名手としての名、アモウルである。金褐色の髪と、澄んだ青い目をしていたと伝えられるアキラは、白鳥のクレストが刻まれた横笛を吹く眉目秀麗な美しい青年音楽家として描かれている事が多い。

「白鳥の君」という後世の呼称から、エウテルペ家のクレストが白鳥であったという説が当たり前のように流布しているが、これは完全な間違いである。

エウテルペ家のクレストは熊をあしらったものである。つまり、白鳥のクレストとエウテルペ家とは何の関係もない。

ただ、アキラは白鳥のクレストの刻まれた横笛を愛用していたことは多くの記述から間違いのないところで、持っていた剣の柄にも同じクレストを使用していたと言う話も事実であろう。

だが、紳士録（リスト）には、アキラ・アモウル・エウテルペのクレストは掲載されていない事もまた事実である。

今日では、ミリア・ペトルウシュカの手に依る「遠き夢のレナンス」という肖像画の人物がアキラ・アモウル・エウテルペの肖像として最も古く、かつ信憑性のある姿形をあらわした絵であるという事で各方面の見解は定着している。レナンスとは「レナンっ子」と言ったような意味で、ツゥレフの首都レナンで生まれ育ち、武に篤く儀を重んじ、それでいて血気盛んな誇り高き男達に与えられる称号のようなものである。

エスタリア大吟遊会にも何度か顔を出していたであろうアキラと

その主催者であるミリアが出会っていた可能性は極めて高い。いや、出会っていなければ不自然であろう。

「多くの女性を虜にした」と言われる美男音楽家にミリアが興味を示さないはずもなく、記述に残るアキラの多くの特徴と一致するその肖像画の音楽家こそがアキラ・アモウル・エウテルペであろうという説に異論を唱えることは困難と言っていいだろう。

それまでのドライアドの歴史をひもといても、エスカとアキラという稀代の才能が手を取り合っていたような時代はない。神が本当にいるとすれば、激動の予感をはらむファランドールにあって、このような配役を行ったその周到な演出には本当に恐れ入るばかりである。

「驚いたぞ」

酒場の隅のテーブル席にお目当ての待ち合わせ相手を見つけると、アキラはさりげなく辺りに目を配り、目立たぬように向かい側の椅子に座った。注文を取りにやってきた給仕に何食わぬ顔でエールビールとソーセージを頼んだあと、再度こちらに注意を払っている人間が周りに居ないのをそれとなく確かめてから、アキラ・アモウル・エウテルペは、ようやく向かいに座った男にそう声をかけた。

「どうでもいいが、突然の呼び出しは心臓に悪い。いつもながら神出鬼没だが、ここで湯治でもするつもりか？」

アキラは少し皮肉混じりにそう付け加えた。

声をかけられた眼鏡の青年は鷹揚にうなずきつつ、苦笑混じりで答えた。

「実はボクの予想よりずいぶんと早く事態が動いたみたいなんだよ。それも大きく。だから早急に君に頼み事を伝える必要が出来てしまってね」

「なるほど、緊急事態という事か。実はこっちもつい今し方それな

りに重大な情報が手に入ったところだ」
「へえ。アキラが重大というくらいだ。その情報とやら、興味深いな」

その時、給仕からアキラの頼んだエールがなみなみと注がれたビールジョッキがテーブルに届けられた。
アキラは向かいに座っている青年の声が大きめなので、一度間を空け、目の前のジョッキに入ったビールをうまそうに半分ほど飲み干してから、再び違和感のない仕草で周りに気を配りつつ、声を低めて相手の青年を窘めた。
「少し声が大きいぞ」
絶対にこの会談は自分たちを知る人間に知られてはならないものだった。
アキラは腹心を二人、店の周りに配置して警戒をしていたが、実はその腹心すら店の中には入れなかったのだ。出来れば相手の顔を腹心にも見せたくなかったからである。
「相変わらずアキラは心配性だなあ。そんなに警戒しなくても大丈夫さ。だいたい今日、ボクがこんなところに絶対居るはずはないんだからね」
「絶対」の所を強調して笑うその声の主は、眼鏡の奥に金色の瞳を持つデュナンで、アキラが生涯の友と決めた人物……そう、当時は白の国エスタリアのバカ殿、後にファランドール史上類を見ない虐殺者とまで呼ばれることになるミリア・ペトルウシュカだった。
「いや、そもそもお前はこう言うことに気を遣わなさすぎる。大胆というか、何も考えていないというか……」
「一応考えているぞ。ボクの姿は入り口からは死角になっていて見えない。たとえ君の護衛の二人もしくはどちらかが好奇心を抑えきれずに入り口から中をのぞいたとしても君の背中が見えるだけだ。君が大げさな動きをしなければ君が彼らに告げたように一人で飲んでいると思ってきっと納得するだろうさ」

「だといいがな」
「だいたいアキラこそ、そんなに心配ばかりしていたら早死にするぞ。それにきっと禿げる」
「随分ないいようだが、心配性だからこそ、こうして生き残っているんだ」
そう答えてアキラは大げさに肩を竦めてみせると、残りのビールを一気に飲み干して、お代わりを頼むために片手を上げて給仕を呼んだ。
そしてその後で思い出したように付け加えた。
「禿げるかどうかはともかく、そもそもお前についた時点で俺の早死には決定しているようなものさ」
「おいおい、人を疫病神のように言うなよ」
「疫病神か……ある意味まったくその通りだろう？いや、死神と言ってもいいかもしれん」
今度はミリアが肩を竦めて見せる番だった。
「こっちの話はちょっと長くなるから、先に君の情報から聞こうか」
アキラはうなずくと届いた二杯目のビアジョッキを持ち上げ再び一気に半分ほど飲み干した。
「俺の話というのはその死神に関してだ」
「死神の話だって？」
アキラは怪訝な顔をするミリアを見てうなずいた。
「シルフィードでは『笑う死神』と呼ばれる人物。もっともシルフィード以外では『白面の悪魔』という通り名の方が有名だが」
「シルフィード海軍のユグセル中将か？」
アキラはうなずいた。
「その中将が死体で発見された」
「何だって？」
いつもは機嫌の良さそうな雰囲気を壊さないミリアだが、アキラの言葉を聞くと特徴的な金色の目が一瞬で気色ばんだ。だが、さすがだとアキラが思ったのは、その動揺をミリアが次の一瞬で収めた

事だ。いや、動揺は収まってはいないだろうが、あっという間に見た目はもう普段通りのミリアになっていた。少し注意力のない人間ならば、ミリアの表情が変化したことすら気づかなかっただろう。

「実に君らしい気の利かない冗談だな」

「さすがの俺も、ここまで気の利かない冗談は言わない」

「まさかそれはないとは思うが、君の所の部隊がやったのか？」

「『それはないと思う』って、おいおい、スプリガンを見くびってもらっちゃ困るな」

「見くびっちゃいないさ。ボクは冷静に戦力分析をした上で、スプリガンと言えど、あのお嬢さんをそう簡単にやっつけられるとは思ってないんだよ。そもそもどれだけ道具が高性能だろうが、それを使う人間が素人だとまともな物は作れないものさ」

アキラは苦笑しながらうなずいた。

「その通りかもしれんが、ともかくスプリガン部隊にやられたのではなさそうだ」

ミリアは微妙に眉を潜めた。

「君らしくない歯切れの悪い言い方だな。『なさそうだ』なんてあやふやな……。一体誰が中将のお相手なんだ？」

アキラは少し目を伏せると白ソーセージをフォークでつついた。答えに自信がないのであろう。言葉を選んでいるようであった。

「それが……不明だ」

ミリアはそれを見て身を乗り出して短く告げた。

「詳しく話してくれ」

アキラはうなずいた。

「シルフィード側からは全滅報告が公式に出たことは周知の事実だが、その後ル＝キリアと見られる小隊が世界各地で死体確認されているという情報を調達屋経由で仕入れた事は、もう報告済みだと思うが」

「いや、まだそれは見てないな……。そんなことがあったのか」

「それももちろんスプリガンの仕業じゃないってことは想像の通りだ」

ミリアはうなずいた。

「それと同じ事が、昨日アロゲリクの山中で起こったということさ」

「目撃者は？」

「目撃者は、ウーモスに駐留していたスプリガンの中隊だ。ただし、ル＝キリアと戦ったと見られる相手が何者かは不明のままだ。スプリガンの連中はル＝キリアの死体を確認しただけらしい。死体が確認されたのはユグセル中将率いるル＝キリアの小隊四名と彼女たちに随行していたと見られるルーナー一人の合計五人ということだ」

ミリアは手を小さく挙げてアキラの話を遮った。その上で右手の中指で眼鏡をぐいっと上げる……質問がある時にとるミリアの仕草だ。

アキラは話をやめてうなずくとミリアの質問を促した。

「ル＝キリアの目的は想像がつくが、そもそもウーモスに駐留しているスプリガンが、一体アロゲリクのような原生林なんかに何の用事があったんだ。まさか薬草採集じゃないだろうし、ザルカバード文書だとしたらさらにお笑いなんだが」

アキラはミリアの質問にため息をついた。

「そこは突っ込んでくれるな。面目ない話だが、聞けばウーモスでユグセル中将一行を認知したスプリガンの将校が色めき立ち、本隊の命令もないまま功を焦って自分の部隊でル＝キリア小隊を殲滅すべく追跡中だったそうだ」

ミリアは両手を左右に大きく広げて見せ開いた口がふさがらないと言った風の表情を浮かべたが、アキラはそれを見て手を挙げてミリアから聞かされるであろう次のイヤミを制した。

「この件については何も言うな。お前のセリフは俺の方が百倍にでもして奴らに言いたいくらいなんだからな。まあ、念のために補足しておくと、その将校はあろうことかウーモスの街中でル＝キリア

を殲滅しようとして失敗したらしい。その穴埋めの為にアロゲリクまで深追いしたというのが真相だ」

「スプリガンっていうのは既にその誉れは伝説の彼方に消え、現在同じ名前の部隊はまったく別の恐るるに足らんスチャラカな存在になってるな……」

「言ってくれるな。まあ、せめてもの救いはユグセル隊に全滅させられなかった事だが……」

「今後の軍の再編の事を考えると、無能な部隊はいっそ全滅させられた方が良かったんじゃないのかね？」

アキラは苦虫を噛み潰したような顔をしてミリアのイヤミに首を振って見せた。

「兵達に罪はない。隊長ですら気の毒な存在さ。どう考えても問題は功を焦った幕僚の一人にあるようだ。別隊との合流・業務交代の為の駐留、それも隠密のはずなのに中隊長の許しを得ずに独断で要らぬ事をした罪は重い。ましてや戦術的に貴重な比較的高位のルーナーを含む数名の部下を失っている。とはいえ件の副官は軍幹部の人間のバカ息子だから、おそらく全責任は指揮官に行くだろう」

「部隊の指揮官は一体誰だい？」

「グラニィ・ゲイツ中佐だ」

「ゲイツか。確か近衛部隊では若手で一目置かれていた戦術家だと聞いたことがあるが」

「ゲイツは子爵家の三男で家督を継ぐ方では望み薄だと考えたのか軍ではなかなかの活動家のようだ。近衛の上の連中も一目置いていて、考えたのがスプリガンに出向させて小さな手柄をいくつか挙げさせた上で、出来れば将軍として呼び返す筋書きでも作っていたんだろうな」

「金がないので爵位は買えない。その代わりに階級を上げて軍功の報償として爵位を得ようという事か？」

アキラはそれには答えずビールをまた一気に空けた。

「で？」

ミリアはアキラが入ってきてからほとんど手を付けていないジャガイモをつつきながら訊ねた。
「さっき、とりあえず謹慎を申し渡したところだ。さすがに今回で階級は上がらんだろう。それどころか降格しかねない」
「ふん」
「だから現場で既に相当の懲罰を受けた、という理由を付けてみた」
「軍高官のバカ息子は下級貴族の三男が上官だってことが気に入らなかったんだろうな。そんな上官に自分の実力とやらを誇示できる格好の機会だと舞い上がったということか。どちらにしろ統率が命の秘密部隊にそんな腐った蜜柑が紛れ込んでるのは由々しき問題だね」
「ゲイツ中佐に関する報告書には一言上申を入れておくつもりだから運が良ければ階級は現状維持って事で済むかも知れないがな」
「ふむ。確かゲイツにはこれと言った妙な後ろ盾は無かったはずだな」
「そうだな。基本的には実力はあるだろう。大した後ろ盾がなく中佐までこぎ着けている。出向とはいえスプリガンの中隊長はさすがに名前だけの中佐ではつとまらんよ。ただし、履歴を調べるとどうにも参謀に恵まれていないようだがな」
ミリアは腕を組むと天井を見上げて数秒間そのままの姿勢で何かを考えていたが、唐突にアキラに向かって身を乗り出した。
「謹慎後の処分は？」
「まあ、少なくともスプリガンの中隊長役は更迭だな。さらに減給の上訓告というところかな」
「手緩い」
「ん？」
「精鋭部隊たるスプリガンの兵士、しかも貴重な高位ルーナーをも失うとは、極めて重大な失策だ。部下の独断によるものとは言えそれを統括できない中隊長こそが全責任を負うべきだろう。よってふさわしい処罰は二階級……つまり中尉に降格。もちろん減俸の上、

本国のどこか辺境の警備部隊に肩書き無しの指揮官付き部下として配属して窓際族の名簿に加えておこう。それくらいはアキラの裁量で決定できるだろ？」

アキラはミリアの目を見た。皆まで言わせるな、というミリアの表情はアキラにはすぐにわかった。

（……なるほどな）

「ふん、それもよかろう」

「あとは、まあ、物事のわかった軍の実力者がそれなりに適当な配慮をしてくれるんじゃないか？たとえばどこかの元王国の島国の駐留軍付きなんていう閑職で冷や飯を喰らわせるとか、ね」

ミリアはそう言うとにっこり笑って目配せをした。

「わかった。そうしよう」

アキラはミリアの一言で彼の思惑を充分理解した。

ギリギリ軍規の許容範囲ながら傍目にはやや重すぎるとも言えるこの処分はグラニィ・ゲイツを将来のコマとして使うための布石であった。

もっともミリアにとっては自分の直接のコマというわけではない。それはもう少し大局を見たものであろう。

「続けてくれ。中将達の遺体はどうなった？」

「ゲイツの判断で、その場で荼毘に付したそうだ」

「そうか、遅かったか」

「遅かった？」

「いや、こっちの話だ。それで？」

「そもそも公式にはもう居ないとされている人間だからな。シルフィードに送り返す訳にもいくまい？」

「そうだな。だが、実に残念だ」

「残念？」

「ファルンガ領主のユグセル公爵とはぜひ一度会って話をしてみた

かった。こっちの準備が一段落付いた後にでも出向こうと思っていたんだけど、こうなると早く行動しておくべきだったと心底悔やまれるよ」

アキラはミリアの言葉を額面通り受け取っていいものかを思案しているかのように少し間をあけてから訊ねてみた。

「あの『白面の悪魔』が「こちら側」につくとでも？」

ミリアは苦しそうに笑って見せた。

「いや、どうだろうね。噂ではシルフィードという国家に身も心も捧げているような粉骨砕身ぶりたから、ボクの話に耳を傾けてくれたかどうかははなはだ疑問だけどね。それ相応の「正義」がボクにあればまた違うんだろうね。そんなことよりボクはただ……」

「ただ？」

「会って確かめたいことがひとつあったんだ……」

「何をだ？」

アキラの問いに今度はミリアが少し軽い苦笑をして見せた。

「なあに、本当に個人的な事さ。シルフィードにはちょっと尋ね人があってね。かつてキャンタビレイ家の食客だったと言う彼女なら知っているかと思っただけだよ」

「お前が尋ね人とは興味をそそられるな。こちらの情報網で探してやろう？それくらいの事は今の俺なら可能だ」

「いや……」

それには及ばないと言った風にミリアは手を小さく挙げて掌をアキラに見せた。

「本当につまらない事さ。そもそもまだ何もわかってやしなかった子供の頃の、ぼんやりした記憶しか手がかりはないのだから」

アキラはそう言うミリアの曇った顔を見やると、その件についてはそれ以上言及しなかった。彼は今のようにミリアが時折見せる妙に人間くさい面が少し気になっていた。的確な政情判断と時代に対する卓越した洞察力で何年にもわたる戦略を編んでいる凍った湖の様に沈着冷静なミリアこそがアキラにとってのあらまほしきミリア

の姿であり、今のように時折見せる矮小な人間的側面はミリア自身が長年にわたって築き上げている壮大な戦略に小さくはない綻びを生じさせる原因になるのではないかと密かに恐れていた。

「すまない。話の腰を折っちゃったね。そのほかに情報は？ル＝キリアに随行していたそのルーナーというのも気になるな。戦力の大小という問題以前にル＝キリアの部隊の特性を考えると機動力にまったく欠けるルーナーの同道など相容れない組み合わせじゃないか？」

アキラはうなずいた。同意する、という意味だ。

「ル＝キリアを追いかけていた中隊は小競り合いの末結局彼らにまかれ、増援の中隊が駆けつけてようやく探し当てたときには全員が例のアロゲリクの渓の庵とやらの近くで死体になっていたというのが事の全てなんだが……。ルーナーについてはまだ若いデュナンだったということしかわかっていないな。ウーモスでル＝キリアの急襲に失敗したのはそのルーナーに妨害されたからだという情報もあるから、随行していた仲間である事は間違いないようだな」

「ザルカバード対策のつもりだったのかな」

「それはわからん……。それから死体はどれも後ろから剣で心臓を一突きにされていたそうだ」

「後ろから一突きか……。ところで彼らの遺品などはどうなっている？」

「全て遺体と一緒に焼いたらしい」

「おいおい……」

ミリアはさすがに呆れたという顔でアキラを批難するように両手を広げて見せた。アキラは片手を上げてそれを制すると弁解した。

「すまん。でもそれはゲイツ中佐の指示ではなく、その場に居合わせた正教会の司祭だか司教の指示で仕方なく従ったそうだ」

「正教会だって？」

ミリアは眉をひそめて見せた。

「現場の近くに山ごもりの修行用の庵があるそうで、騒ぎに何事かと偶然顔を出したその司祭だか司教だか神官だかが死体の扱いについてグラニィに指示をしたという事のようだな」
「司祭だか司教だか神官だかって」
「それも突っ込むな。一目で高位にあるものだとわかる服装をしていたそうだ」
「いや、それは理由にならないだろう？」
「そうなんだが……」
「そいつの名前は？」
「イオスとか言う名を名乗ったそうだ。知りたいなら後で詳しい報告書を届けよう」
「まさか……イオスだと？」
ミリアは眉を潜めると、独り言のようにそうつぶやいた。
「知っているのか？」
「あ、いや」
「司祭だか司教だか神官だかというのは最初に取り次いだ兵が後からグラニィに再確認された際に、そう言ったそうだ。聞いたがうっかり忘れたらしい。ただ、確かに教会のクレストが大きく入った紺色の凝った装束を着て、その辺の坊主たちとは全く違うありがたい雰囲気が漂っていたというのは苦虫を噛み潰したような顔でグラニィも話していた」
「アルヴィンか？」
「ほう、よくわかるな。まさにアルヴィンだ。だから年齢はわからんよ。子供にしか見えなかったそうだがな」
「アルヴィンだからな。しかし、うーん」
ミリアはテーブルに両肘を付くと手を組み、その上に顎をのせて少し思案するとアキラに質問をした。
「そのアルヴィンのイオスとかいう高僧がル＝キリアをやったとは考えられなかったのか？」
「もちろん念のために付近の庵とやらは調べたそうだ。庵と言って

もただの小さな岩穴だったらしいが、そこも特に怪しいことはなかったと報告を受けた。武器なども一切持っていなかったそうだ」

ミリアは不満そうだった。

「ル＝キリアの、さらにその精鋭の小隊をまさか一人でやれるわけはない、と？」

「逆に聞くが、君はそんなことが出来る人間がいると思うのか？」

アキラの問いに、ミリアは何のためらいもなくうなずいた。

「やれるさ。ただの人間じゃなくて高位のルーナー、もしくはエレメンタルなら」

アキラは眉をひそめた。

「エレメンタルだって？まさか」

「単なる可能性の話さ。どちらにしろ修行用の庵とやらにはもう誰もいないだろうな……。ただ、エレメンタルの可能性はあるものの、それが唯一の未確認エレメンタルである炎のエレメンタルならば特性である炎で焼き尽くしているはずで、報告にあるように剣で突き刺されてやられて事切れているというのはかなり不自然な話だな。そうなると高位ルーナー説が妥当だとは思わないか？そのアロゲリクにあるザルカバードの偽庵とやらにはルーンの罠が張ってあったんだろうしね」

「だいたいそのイオスという僧がやったと決まった訳じゃないんだぞ」

「まあ、確かにそうだね。本当に山野修行の最中だったのかもしれないけど……一応現地の再確認だけはしておいてくれるかい？さっき言ったようにたぶんもう誰もいないとは思うが、その確認という意味だ」

「ミリア、お前はそいつが犯人だと？」

「直接の犯人だとは思っちゃいないけど、偶然にしても話ができすぎてる。怪しいと思う方が自然じゃないかな？」

「どちらにしろ高位のルーナーとはいえル＝キリアの中でも精鋭の人間を簡単にやれるものか？おまけにそのうちの一人はけっこうな

力を持つルーナーだというんだぞ」
　ミリアはしかし顔色一つ変えずにアキラの目をじっと見つめて呟いた。
「できるさ。最高位のルーナーなら？」
「最高位だと？」
「そう。賢者ならば」
「賢者？」
　思わず大きな声を出してしまったアキラは、慌てて周りを見渡した。幸い喧噪に包まれた店内の客はだれも二人に注意を払っている者はいなかった。
　アキラは安堵のため息をつくと肩を落とした。ミリアはそんなアキラの様子を見て可笑しそうに微笑んで続けた。
「他のル＝キリアの小隊も、全てザルカバード文書で記された偽庵で同じようにやられたんじゃないのか？そしてそれぞれの庵には高位のルーナー、おそらくバード級、賢者級の人間によって相当な罠が張られていたって考えるのが妥当だろう？」
「さっきからお前は偽庵だと断定しているが」
「ニセモノだよ。それは間違いない」
「自信たっぷりだな。裏付けを持っていると言うことか？」
「言ったじゃないか。ザルカバードなんてもうとっくに死んでるんだ」
　アキラはその件についてはそれ以上言及しなかった。ミリアがそう断定するからには、確固とした根拠を持っているという事なのだ。そしてその根拠を示さないのには理由があると言う事なのだろう。そしてミリアが言い出さない限り、それを詮索しないのがアキラの矜持であった。
「噂が本当であれば、賢者一人の力は一個大隊に匹敵するというが」
「ル＝キリアの小隊もさすがに一個大隊には勝てないだろう？もともと奴さん達は単機能の急襲部隊だし、防衛戦が得意な部隊じゃな

い」
「それじゃ、ザルカバード文書は……」
ミリアはうなずいた。
「うん。スプリガンが調査しても一切何の変化もないのに、ル＝キリアだけがやられているなど不自然にも程がある。ボクの推理が正しければ、やはりザルカバード文書はル＝キリアをおびき出して殲滅させるための罠だという事になる。数を多く書いているのもル＝キリアを細かく小隊に分断させる目的だろう。そしてそれは図に当たったと言う事だな」
「何の為に？」
「もちろん……」
ミリアはアキラの目の前の皿の白ソーセージをフォークで突き刺した。
「ル＝キリアが邪魔な奴らの仕業だろうさ」
「それはドライアドではあるまい？正教会、もしくは新教会が動いているということか」
「まだ単なる推理の段階だよ。敵は外にいるとは限らないわけだしね。どちらにしろエレメンタルが欲しいんだろう。その争奪戦にル＝キリアが絡んでもらっては面倒だとでも思ったのかな。そもそもマーリン正教会がエレメンタルを欲しがる理由がまだよく解らないし、新教会だという証拠は希薄すぎる。だから推理は推理として、教会が絡んでいるという先入観は止めておこう。ウンディーネ……いや、アダン島だって何を考えているか解ったものじゃない」
「ふむ。確かに、ミリアの視点から俯瞰すると、ファランドールの情勢が目に見えない形で動いている気がするな」
「この話についてはもう少し状況を見てから別途考えることにしよう。どちらにしろ正面から取り組む問題じゃない。その向こう側の意図が問題だからね」
「ふむ」
すんなりと納得はしかねたが、それでもアキラは頷いた。

ミリアはジョッキに残ったビールを一気に飲み干すと、トンと軽い音を立ててそれをテーブルに置いた。
「じゃあ次は今夜の本題だ。アキラ、君にボクのちょっとした難しい頼みをきいて欲しいんだよ」
「『ちょっとした難しい話』、という物がどんなものか想像がつかんが、まずは内容を聞こう」
ミリアは苦笑した。
「相変わらず、用心深いな」
「慎重派と言ってくれ。お前の『ちょっとした』系の頼みは、過去の例を見ても相当に難しいものなのは間違いなさそうだからこちらとしては用心もしたくなる」

アキラはそう言ってはみたものの、ミリアの願いは無条件にきくつもりでいた。ただミリアから出来るだけ情報は得ておきたかったのだ。ミリアの悪い癖で、全ての情報をいつも与えてくれる訳ではない。ミリアは時として全ての人間が自分と同じ能力を持っている事を前提として話をする事があった。
多くの人間にとって、彼の言葉の向こう側は理解不能な平原である事が多い。そしてその事をミリアはしばしば忘れるのである。彼の大きな欠点の一つと言っていいだろう。
「アカデミー」を主席で卒業した経歴が証明するように、頭脳の明晰さでは一頭地を抜くアキラをもってしても明後日の方向に言葉の真意を放り投げているようなミリアの考えにはさすがに届かぬ事も多々あった。

「実は夕べ、とある家のお嬢様の寝所に出向いた」
アキラは眉間に皺を寄せた。
「それは驚きだな。お前が伴侶を作るとはな」
ミリアは両手を顔の前で振ってアキラの言葉を否定した。
「いやいや、そんなつもりは全くないよ」

「では遊びか？お前らしくない気がするが」
「そっちの話題から離れてくれ」
「ふむ。では、いったい誰の家に出向いたのだ？相手はミュゼの貴族連中の娘か？」
ミリアはニヤリと意味ありげに笑うと、首を横に振った。
「シルフィードのエッダにあるカラティア家の姫君の寝所さ」
「何だと？」
アキラはミリアのその一言で、思わず腰を浮かせた。
ミリアはそのアキラの反応を見て、おかしそうに笑った。
「ははははは。少々のことでは驚かないアキラもさすがに『寝所』には驚いたろ？」

―（冗談じゃない）
アキラは心の中では机に拳を叩き付けたい気分になった。
驚くところは寝所云々という些末な場所の問題ではなく、その行為そのもののはずである。真剣な話、いや、真剣どころの騒ぎではなく内容は即国家間の戦争になってもおかしくはないほどの重大な事柄のはずなのに、ミリアのふざけようはアキラには度し難いものだった。
（いや）
アキラは考え直す事にした。
これこそがミリア・ペトルウシュカなのだと。
当然意味がある行動なのだろう。
―（やはり、これほど面白い奴はそういないだろう）
アキラはしてやられた自らを客観的に眺めて見ることにした。そうすると、ミリアに腹を立てるどころか同じようにミリアの行為に「してやった」的なおかしさを感じている自分を見つけ出した。
―（考えてもみろ）
アキラは自問自答する。
―（一国の王宮、しかもよりによって王女の寝所に侵入したと、町

の男が酒の勢いで夕べの夜這いの自慢話でもするように言ってのける人間がこのファランドールに果たしているだろうか？酔っぱらった上での冗談にしても、まさかここまでつまらないホラを吹く者はいないだろう。だが、呆れたことにミリアの言うことは冗談でも嘘でも何でもなく、しかもそれをちょっとした笑い話にまで堕とし、この俺を相手にからかいのタネにして楽しんでいるとはな）

そこまで考えて、アキラはふと以前ミリアと話した会話の記憶からある情景を思い出した。それは今までこみ上げていたおかしさを凍りつかせのに十分なものだった。

「お前まさか、王女を？」

アキラは真顔でミリアに問うた。

そう。アキラは思い出していた。

以前会った際、ミリアがアキラに言った意味深な言葉を。ミリアはこう言ったはずだ。

「目的のためには手段は選ばない」と。

ましてやこのミリアにとっては、たとえ一国の王女だろうが王妃だろうが彼の描いた設計図を構成するコマの一つに過ぎないのだ。王女だという理由で彼が遠慮などするはずがない。

「いや、まさかいきなり連れ去ったりはしないさ。今はまだ隠しておける場所もないしね」

ミリアのその言葉に、アキラはあからさまにほっとして見せた。ミリアなら「うん、さらってきたよ。今上の部屋にいるんだけど」などと言うことを平気で言いかねない。やろうと思えば、ミリアにはそれが出来るのだから。

だが、安心と同時に緊張も走った。ミリアは言った……「今はまだ」と。

―（この男は、いつかやるつもりなのだろうな）

「そう気色ばむなよ。現状把握の為の情報収集の一環としてちょっ

と話をしてきただけさ。でも、行ってみて良かったよ。いや、よくあのタイミングで行ったものだと思う。風は我に吹けりと思ったね」

「確か、事が動いたと言っていたな？」

ミリアはうなずいた。

「うん。なにせ風のエレメンタルが既にシルフィードを脱出していることがわかったんだぜ？」

ミリアはさすがにこの一言だけは声を潜めて見せた。

アキラは例によってパズルのピースのようなミリアの言葉を使い、彼が語ろうとする話を組み立てるべく脳を最大限に活性化させて解析を試みていた。

「なぜ王宮でエルネスティーネ姫に会っておきながらその姫がシルフィードを離れている事実を知るっていう事態になってるんだ？」

アキラの問いにミリアはニヤニヤと笑って見せた。

アキラの高速解析中の脳はその顔を見て一つの仮説をはじき出した。

「そのエッダの王宮にいた姫とは……変わり身か？」

「さすがはアキラだ。このボクが請け合おう。君は絶対に知将として後世に名を残すよ」

ミリアは上機嫌で軽くウィンクをした。

アキラは何らかの不満を口にしようとしたが、にべもなくミリアに遮られた。

「前置きはそれくらいで本題に入ろう」

―（今の重大な話がただの前置きなのか？）

アキラはそう突っ込みかけたが、すぐに思いとどまった。

未だアキラが全容を測りかねるミリアの描く近未来の設計図にとってはそういう事は重要ではないのだろう。そもそもその設計図にどんな名前が書き込まれているのかもアキラにはわからないのだ。

「本題というのは他でもない。アキラ、君には王宮を出たその本物の姫の監視をして欲しい。もちろんあわよくばこちら側に引き込ん

でしまえればいいんだけど、それは二次的な問題で、ボクはそもそも彼女の行動の目的や意味や彼女の考えを知っておきたいんだ。いや、彼女の人となりはボクにとってはそれほど重要ではないから、姫が向かおうとしている方向をしっかり掴んでおいてくれ。ボクがやれればいいんだけど、事態が急転した事でちょっといろいろやることが出来て時間がとれそうにないんだ。君のそのアロゲリクの話も少し引っかかるし、それにまだ知らなければならない欠けている部分を見つけないといけないからね」

「見つけろ、ではなく監視をしろということは、すでに居所を知っているということだな？」

「エッダにいる姫君に彼女の当座の行動予定は聞いた。そして今日、幸運にもそれらしい娘さんを見つけたよ。まず間違いはないだろう」

「確かに本人なのか？」

「もちろんさ。何しろエッダのお城でお会いしたエルネスティーネ姫にうり二つなんだから間違えようがないだろう？案の定、髪型は全く違ったけど、顔までは変わってなかったよ。あとは、そうだな。ちょっと見たところお付きの人間もそれなりに怪しい連中ばかりだしね。そんな連中と一緒に過ごす事は君にとっていい経験になるかもしれないよ。時間さえあれば自分の役目にしたいくらいさ」

いつもミリアには驚かされるアキラだったが、この時ほど驚かされた事は今までなかった。おそらく世界中で誰も知らない国家的な秘密を、いや、まだ秘密でさえないかもしれない事柄をこの男はあっという間に暴いて見せたのだ。

風のエレメンタルがシルフィードを離れたと言うこと。

今現在、宮殿にいるエルネスティーネ姫が変わり身だと言うこと。

そして隠密で行動する風のエレメンタルの居所をも。

驚きの為に感情の整理が追いつかないでいるアキラの事情はお構いなしに、ミリアは旨い飯を食わせる店の場所でも教えるようにエルネスティーネ一行の居る場所を宿まで特定して伝えると、二、三の注意と助言とともに後のことを託した。

「それにしても……ユグセル公爵は惜しいことをしたな……」
話が終わり、テーブルを立ち上がりかけたアキラに向けてミリアはポツンとつぶやいた。ミリアには珍しく妙に寂しそうな声が印象的だった。よほど自らの陣営に欲しい人材だったのだな、とその時アキラはそう思った。

アキラは目で別れの挨拶をすると、立ち上がってミリアに背中を見せた。
そのアキラの背中に、思いついたようにミリアが声をかけた。
「あ、ちょっと確認なんだけど」
「なんだ？」
アキラはミリアを振り返った。こちらを見る眼鏡の奥の金色の目がキラリと光っていた。
「その失敗したル＝キリア追討作戦とやらで犠牲になった兵の数は？」
「確か……」
アキラは記憶を探った。
「五名だったはずだ。それがどうした？」
「そうか。兵の遺体や遺品はすぐに遺族に送り届けられるんだったっけ？」
「それが、相手のルーナーの火炎系の精霊攻撃で全員が灰にされて殺されたそうだ。だから気の毒に遺体も遺品も存在しない。そういう報告からも解るが、ル＝キリアに同道していたルーナーはまだ若いのにかなり高位のルーンを使える者だったようだな」
「なるほど」
アキラの答えに、ミリアは眼鏡をぐいっと上げると、少しだけ唇の端を持ち上げて微笑んだ。
「いや、いいんだ。ありがとう」
アキラはミリアのその態度をあまり気にもとめずにゆっくりと出

口に向かい、扉を押した。だが、扉の取っ手を握った瞬間に、彼の脳にある一つの仮説が稲妻のように駆け抜けた。

――（まさか？）

アキラは慌ててミリアがいる奥の方を振り向いた。

確かに入り口から死角になっているミリアの席ではあった……だが、そこにはもう気配すらもなかった。まるでエールビールの泡のように消えてしまったのだ。

それは彼にしてみればいつものことで、店の給仕にしても今夜あそこの隅の席に金色の瞳をした派手な出で立ちの、人の良さそうな笑顔が印象的な旅の若者が座っていたなどと言うことを一切覚えてはいないだろう。

――すべてミリアの能力のなせる技で。

――（まさか、な）

アキラは空席から目をそらし、ついでに今一瞬脳裏に浮かんだ考えを自嘲気味に振り払って店の外に出ると、深呼吸をしてよく晴れた夜空を見上げた。

そこには二つの月、明るいアイスとやや暗いデヴァイスが仲良く並んでアキラの姿を照らしていた。

背後に二つの気配を感じたアキラは、振り返らずゆっくりと歩き出すと、最初の路地を曲がった。二つの気配も同じようにそれに続いた。

「特に不審な者はおりませんでした」

路地に入り込むと、影のようにアキラに近づく者があった。

それはデュナンの若い女で、長めの茶色の髪を無造作に一つに束ねて左に流していた。その出で立ちは軽装の旅装束と言ったところだろう。ただ、それは若い女のものというよりは若い男の服装と言った方が適当のようで、およそ華やいだ装飾一つないものだった。もっとも身のこなしや言葉遣いから、その女がただの旅人でないこ

とは知れた。
彼女はアキラの腹心の一人で、護衛役をも兼ねている人物だった。
かろうじて聞こえる程度の声でそう告げられたアキラは、軽くうなずくと、その女に呼びかけた。。
「ブライトリング大尉」
「はっ」
「大尉は賢者に会ったことはあるか？」
「賢者というと、正教会のあの賢者ですか？」
ミヤルデ・ブライトリング大尉は怪訝な表情を隠さず、そう聞き直した。
アキラは小さくうなずいた。
「戦力としてみると、一人でも計り知れぬ力になるそうだが……」
「そうですね……」

ミヤルデは当惑していた。
アキラは唐突にこういう事を尋ねる事があるのだが、それが果たして思いつきなのか、作戦に関係したものなのかがミヤルデにはわからなかった。
しかし、若くして軍のかなり深部に繋がりがある自分の上官が常に並大抵ではない戦略を頭の中で巡らしているであろう事は容易に想像がついていた。単なる副官の一人であるミヤルデは、その戦略の内容を洗いざらい話して欲しいとまでは思っては居なかったが、より深くその内容が知りたいのは確かだった。
なぜならアキラの考えていることがある程度でもわかりさえすれば、自分はもっと役にたてるはずだと、忠実な副官は考えていたのだ。
彼女の上官は、その夜のように気晴らしと称して時々お忍びで町の酒場に一人で出かけ、好物のエールビールのジョッキを数杯空けてくる事があった。もし許されるのならば、その店で一緒に杯を傾

けてアキラの話し相手をすることが出来れば……そしてそれが軍務ではなく極めてとりとめもない個人的な話であればなおさら、より深くアキラの事が理解でき参謀として、今より有能でいられるのに、とおもっていたのである。

ミヤルデはチラリと上官の様子をうかがったが、双月を眺めるアキラにはその思いは届いてはいないようだった。もちろんミヤルデとしてもそれが分不相応で独善的な願望であることは理解していたから、アキラの態度にがっかりするようなことはなかった。

そんなミヤルデにとってせめてもの救いはアキラはそのささやかな楽しみの席には、誰であろうと一切誘わないことであった。

「一部の伝説やおとぎ話では、賢者一人で一国を滅ぼした事もあるとされています。それを鵜呑みにするのはいささか浅慮に過ぎるとは思いますが、伝説になるだけの、つまりはそれなりの能力を持っていると思うのが妥当なのでしょう。先の大戦でも少数の賢者が暗躍して、いくつかの戦場で戦局を支配していたと言われています」

ミヤルデはそこまで話して、そんなことはアキラとて既に知っている事だと気づいた。そして慌てて弁明をした。

「申し訳ありません。私は賢者と言われる人間に会ったことがありませんので、大佐がご存じであろう以上の情報を持ってはおりません」

アキラは小さくため息をついた。

「別に謝る必要はないさ、ミーヤ。賢者をよく知っている人間など、教会の上層部の人間を除くと、このファランドール中を探しても賢者自身くらいだろうさ」

アキラが階級や姓でなく、そしてミヤルデでもなく「ミーヤ」と呼ぶときはいたわる言葉をかける時だった。この時も期待に答えらなかったと思い込んで恐縮したミヤルデに対して気遣いを見せたわけである。

自分の利益や出世を第一に考えるか、女と見ると欲望の相手としてしか見ないような男が多いドライアド軍の中、いつも遠くを見ているようでつかみ所のないアキラ・エウテルペは、ミヤルデの目からは極めて異色の存在に映っていた。彼女自身はそう指摘されると頭の中では否定するであろうが、おそらくはアキラという上官に心酔していたに違いない。

「その賢者がどうかなさいましたか？」

「いや……」

アキラは気がなさそうに手を挙げてひらひら振ると、この話題はこれまでと言った風にこう言った。

「なに、さっきの店の中で酔っぱらいが生きているうちに賢者様に会いたいとか、奇跡の力を持っているとか話していたのが耳に入っただけだ。そんな力があるなら我が陣営に是非欲しいものだとこちらも軽い酔いに任せて思ってしまったものだから、つい、な。まあ、気晴らしとしても興味深い与太話だったので聞き入ってしまったというわけさ」

「そうでしたか」

「それより私は明日付けである特務につく。お前達にはまたしばらく苦労をかけるがよろしく頼む」

「もとより」

ミヤルデはそう言って黙礼するとアキラの傍をすっと離れた。

彼女はアキラの参謀という立場と同時に護衛の役も兼ねていた。従ってアキラがこういったお忍びで町を歩く時にはつかず離れずの位置に身を置き、自分の役割を忠実にこなしていた。

もっとも、剣の腕前ではドライアド軍でも一目置かれているアキラに果たして護衛が必要なのかどうかは疑問ではあったが。

「特務ですか」

ミヤルデの横でもう一人の小さな影が呟いた。

アキラのもう一人の腹心、セージ・リョウガ・エリギュラスであ

る。

附名の存在が示すとおり、彼はツゥレフ島の出身である。幼少よりアキラの臣下として育ち、付き添ってきた仲であった。

階級が上がったアキラがツゥレフの軍をまとめていたセージを幕僚として招聘してからは、常に腹心として傍に置いていた。いわばアキラがもっとも信頼している人間である。

ミヤルデと並ぶセージのその小柄な影と、時折月明かりで照らされる褐色の肌は彼がデュナンではなくダーク・アルヴの血を引く種族である事を示していた。ドライアドでダーク・アルヴの兵士は珍しい存在であった。

アキラ・アモウル・エウテルペという人物は聡明ではあるが、同時に一人の剣士としての性格も強い人物であったようだ。時として戦略や戦術という理詰めの戦いよりも一対一の真剣勝負を優先させるきらいがあった。それが『レナンス』の気質と言ってしまえばそれまでだが、それこそがアキラの最大の弱点と言えるだろう。つぶさに検証していくと、ミリアはアキラのその欠点を的確に把握していた事が伺える。とはいえアキラが凡庸な人物でなかったのは、自らのその性格の欠点を認識していた事であろうか。自分の『綻び（ほころび）』を補うべき人物を腹心に据えたことがその証左であろう。

つまり、セージという人物はアキラが一人の戦士となった際、それを制御する役目を担っていたのである。

アキラのような所謂高級軍人の護衛を行える程であるから、ミヤルデだけでなくダーク・アルヴとはいえセージ自身の戦闘力もおそらくは相当なものだったに違いない。それだけにアキラの信頼も誰よりも厚かったと思われるのだが、セージは一度も筆頭の部下という地位にその身を置くことはなかった。常に二番目、三番目以降の立場にあり、その地位にふさわしく振る舞っていた。

アキラと同郷という背景もあり、特別扱いされていると見られる

事を避けた為であろう。アキラも決して特別視するそぶりを一切見せず、他の部下に対する「示し」を付けていたようである。

セージ・エリギュラスについての詳細な記録は多くないが、百年ほど前に発見され、編集された後に「月の大戦におけるブライトリング録」という題で出版されたミヤルデ・ブライトリングの個人的な日記と書簡、そして軍務として記録していた公式な日誌を混在させた資料に、血の通ったセージの姿が描かれている。それにより一躍脚光を浴びる存在となったセージだが、その点についてはここで詳細に述べるまでもないだろう。歴史や「月の大戦」文学に興味のある読者なら既にご存じの通りの人物である。

一言だけ書き添えるならば、それまでは普通の剣士だと思われていたセージだが、「ブライトリング録」で炎のフェアリーであることが記されていた。その真偽の程が専門家の間ではたびたび論争になっていたが、その既述を裏付けるような資料が近年ツゥレフ島に残る資料の山から発見されている。

ミヤルデより浅い、茶色というより栗色のくせ毛の髪をしたダーク・アルヴの中尉は、ミヤルデと並んで、のんびりと前方を歩くアキラを見失わない距離を空けて追尾していた。ダーク・アルヴの特性で一見少年にしか見えない外見はおよそ戦闘員であるとは思えなかった。目つきも穏やかで、隣のミヤルデの方が近寄りがたい雰囲気があった。

主の最終的な行き先が宿舎にしている宿であることはわかってはいた二人だが、アキラは極めて気まぐれな経路をとることが多いので油断は禁物だった。あまりに離れすぎるとたちまち見失う事になる。

「いつも通りだ。今は何もお話にならなかった。明日、詳細は聞けるだろう」

「そうですね」
上官であるミヤルデがそう告げると、セージは相づちを打った。
その上で、独り言にもとれるような小さな問いを投げかけた。
「あの酒場で、大佐は本当に一人だったんでしょうかね」
「エリギュラス中尉」
強い調子で即座にそう叱責したミヤルデに、セージは思わず苦笑した。
「聞き流してください。ただ、いつも思うのですが、どうにも大佐は我々が知らない情報を知りすぎていると思いましてね。その特務もいつ誰から受けたのでしょうね」
「その特務の為にここに来たのであろう?だいたいそれは我々が詮索すべき事ではあるまい?」
「もちろんです。何があろうと私は大佐に死ぬまでついて行くだけです。ただ」
「ただ?」
「あの方をもっと知ることが出来れば、今よりもさらにお役に立てるかもしれないな、と思っただけです」
それだけ言うと、セージはチラリと自分の上官の様子をうかがうように視線を向けた。

セージのその言葉に、しかしミヤルデは何も反応はしなかった。
ただ、一緒にアキラの警護をしている相棒である人間が、自分と全く同じ気持ちを胸に抱いている事が再確認できたようで、暖かい気持ちがわき上がってくるのを感じていた。とはいえ、その感情をミヤルデがセージに示すことはなかった。
自分の胸に浮かんできたその感情に対する照れ隠しという訳でもないのだろうが、ミヤルデは普段より厳しい口調で、部下に告げた。
「無駄話はここまでだ」
「はい」
その言葉を待っていたかのように、アキラはのんびりと歩いてい

た人影のない裏通りから、不意に路地に入り込んだ。

―（気まぐれの散歩が始まったな）

二人の護衛は気を引き締めるようにお互いにうなづき合うと、早足でその後を追った。

―（潜入か……）

一方アキラは二人の存在など頭にはないかのように、店を出てからずっとミリアの話をつぶさに吟味していた。

一国の王女が、身分を隠して他国に潜入するなど、文字通り本当に歴史の流れを大きく変えるような出来事に違いなかった。

ミリアの話からは、エルネスティーネ王女一行が一体どのような行動をとっているのかという実態を探れという目的よりも、むしろしばらく護衛しろという意味合いが強く感じられた。アキラにとってはそちらの方が当然ながら気が楽だった。

確かに今、エルネスティーネに死なれてはならないのだ。それはシルフィードの為でも何でもなく、単純にミリア・ペトルウシュカ陣営の都合と言うべき理由でである。

既にミリアによって用意されている歴史書の一頁を実現させる為に。

アキラは二杯のエールビールで少しだけほてった頬を夜風で涼めながら、ミリアに教えられた宿……もちろん風のエレメンタルが眠る宿を確認しておこうと、またもや別の路地へ曲がると、今度はその歩みを速めた。

# 第四十三話　旅の音楽家

「困ったことになったな」
一難去ってまた一難とはまさにこのことであった。
「どうだった？」
お帰りの挨拶もそこそこに、アトラックは部屋に入ってきたエイルに質問を浴びせた。
「ダメだな。ベックの言うとおりウーモスの外壁は内も外も警備がある。警備はまあ問題ないんだけど、予想通り外壁全てに感知ルーンがかけられているな」

アルヴスパイアのマントを脱ぎながら、エイルは答えた。それを見て、シェリルがそっと立ち上がった。お茶を淹れに行くのだろう。視線の隅でシェリルを見送りながら、エイルはそう思った。
シェリルはこう言うところによく気がまわる娘だった。それもこれ見よがしでなく、目立たず行動するところにエイルは好感をもっていたが、相手が相手だけに言葉を交わす事は避けるようにしていた。
だが、エイルのそういうそぶりはシェリルにも伝わっていたであろう。エイルの目に映ったシェリルの後ろ姿は、心なしか寂しそうに見えた。

「そうですか、困りましたね」
エイルの詳細な報告を受けてそう言ったアプリリアージェだが、いつものように実のところどこが困っているのか解らないような微笑をエイルに向けた。
「夜陰に紛れてなんとか出来るようなものではないのか？」
そうティアナがエイルに尋ねたが、エイルは即座に首を横に振った。

「いや、夜の方が警備は厳重になるだろうな。まあ、連中を振り切ってウーモスから出るだけでいいなら力業でどうとでもなるけど？」
「いや、それは困る」
「だろ？さすがにここまで本気かつ徹底的にやられると、気付かれずに脱出するっていう今回の主旨にはルーナーとしてはお手上げだ」
「ベックの情報だとスプリガンには本来の隊長が合流しているそうだけど、こうなるとソイツはそれなりの頭を持っているという事だな」
アトラックが肩をすくめてそう言うと、ファルケンハインが珍しくそれに答えた。
「腐ってもスプリガンだ。滅多な奴が司令官であるものか」
「腐ってるんですかね？」
「腐って無いことは身をもって知っただろう？」
「ですよねえ。まともな上官がいればたちまち噂通りの猛者っぷりでしたからね」
アトラックはそう言うと肩をすくめて見せた。
出来ればもうスプリガンとやり合うのはゴメンだといわんばかりであったが、ファルケンハインとしてもそれは同意見だった。少なくともル＝キリア以外の仲間をかばいながら戦える相手ではないことは暗黙の了解事項のようなものだった。
「で、どうする、リリアさん？」
エイルはリリアに水を向けた。
「ほとぼりが冷めるまで長期滞在もいいかもしれませんね。幸いなことにここは温泉の街。長期滞在をしていても怪しまれませんからね」
アプリリアージェはのんびりとした口調でそう言ったが、もちろん誰もその言葉を本気にしているわけではなかった。
「陽動を起こして警備の一部を手薄にして、その隙を狙うというのはどうなんだ？」

すでに当たり前のように一行に混ざっているベックがアプリリアージェの方を見て提案した。だがアプリリアージェはそれには無言で、表情も変えなかった。代わりにファルケンハインが口を開いた。

「感知ルーンは警備する兵の有無とは関係なく消えないだろうし、そもそもその陽動を逆手に取られる可能性がある、ということだ」

腕組みをしたファルケンハインはそう言って、シェリルが淹れなおした熱い紅茶をすすった。

「敵の戦術がグッと高度になってるってことだよ、ベック」

エイルはファルケンハインの言葉に補足をした。

「向こうはそんな事はもう織り込み済みだという事さ」

ベックが考えている事など、お互いに想定の範囲内なのだという事をファルケンハインは軍人的な言い回しで、エイルは敵を持ち上げることでベックに分からせようとしたわけだが、当のベックは不満そうに口をとがらせてそっぽを向いた。

もちろんバカにした訳ではないのだろうが、少なくともベックは素人扱いされたことで多少なりとも不機嫌になってしまったようだった。

一行が頭を抱えているのは、予想以上に敵が用心深い存在であることに気付くのが遅れた事に端を発していた。ル＝キリア死亡を相手に解らせた段階で作戦は終了したものだとタカをくくっていたのだが、それが間違いだったのだ。

彼らのウーモス帰還を待っていたかのように敷かれた街ぐるみの監視包囲網が極めて緻密で効果的だったことをみても、スプリガンの本来の司令官の能力がわかる。それだけにうかつな事で動くわけにはいかなかった。

アプリリアージェの当初の予定では帰還後に二日ほどウーモスに滞在して、エルデとハロウィンを交え今後の事をじっくりと相談した上で次の行動に移るつもりでいた。

まさか街の出入りをドライアド軍、いやサラマンダ委嘱軍がその管轄下に置くとは思ってもいなかったのだ。

もちろんエルデもそこまで読み切れてはいなかった。彼らはつまり、自分達の偽の遺体が荼毘に付されたことを確認した時点で「してやったり」と思い込んでいたのだ。

アロゲリクの渓から急ぎ戻ったところまでは順調だった。

打ち合わせ通りまずベックと合流したル＝キリアとエイルは、用意されていた着替えを受けとり、スプリガンの死体からはぎ取って身につけていた軍装をエルデのルーンで文字通り灰にして証拠を消した。

その後何食わぬ顔で同じくベックが手配していた規模の大きな賑やかな宿に落ち着いた後、町の様子を念のために確認した上でエルデのルーンを使って誰にも見つからないようにエルネスティーネ達が待っている宿で合流したという訳である。

無事とはいえ、一行の帰還は作戦開始からまるまる二日たっていた事もあり、エルネスティーネとシェリルの心配は相当のものだった。

その間ハロウィンは「スプリガンが戻って来ないうちは絶対大丈夫だ」と慰めていたし、ティアナもその意見をもっともだと本気で支持していた。とはいえ「こういう事」になれている人間の言葉だからと頭では理解できても、エルネスティーネは眠れぬ夜を過ごしていた。

無事に再会を果たした一行は、少年のように短く刈り込まれた髪型のエルネスティーネを見て、まずは度肝を抜かれた。絶句した後、とりあえず説明を求めようと一斉にハロウィンの方を見たが、その態度に当のエルネスティーネはいきなりお冠だった。

「ハロウ先生は関係ありません。私が決めたのです。だから何とか言って下さいな」

『えっと……誰だっけ？』
【元王女様……やな】
『元？』
【そう言う事、なんやろ。思い切ったんやな。ここはムリヤリでも褒めたらなアカンな】
『褒めるって？』
【髪型に決まってるやろっ、このスカタン】
『いやいやいや、変だろ？さすがに短かすぎるだろ？オレの世界にはああいう髪型のサル型人形があってだな……』
【黙れ！ええか？一言でもそんなこと口に出してみ？俺が許さへんで】
『なぜ？』
【ほら、グダグダ言うてんと早よ褒めるっ！】

「そ、その髪……す、すごく似合うよ、ネスティ」
【棒読み過ぎやろっ！おまけに顔が引きつってるって】

「本当に？」
だが、一行では最初に口を開いたエイルに対し、エルネスティーネは心底嬉しそうに反応した。
「エイルがそう言ってくれると、素晴らしく嬉しいです」
エルネスティーネはそう言うとアルヴィン特有の緑の瞳を輝かせて、唐突にエイルに抱きついてきた。
「え？いや、ちょっと、その？」
「ありがとう、エイル」
エルネスティーネのあまりの感激振りにエイルは狼狽（うろた）えて助けを求めるべく廻りを見やった。その時はからずもティーポットを手に持つシェリルと眼があった。栗色の長い髪をした鳶色の瞳の娘は、エイルを見て寂しそうに笑うと目を逸らした。

『なんか、元気がないな』
【そやな。でも】
『わかってる。関わらないようにするさ』

結果としてエルネスティーネの髪型は概ね評判が良かった。
実のところエイルにはかなり不評だったのだが、その事を知るものはエルデだけだった。
特にアプリリアージェは普段見せないような感情を見せた。エルネスティーネがエイルにしたように、悲鳴が上がるまでエルネスティーネを抱きしめ続けたのだ。その時、アプリリアージェの目尻に涙がにじんでいたのを、エイルは見逃さなかった。

【オレはあの髪型、悪ないと思うけどな。ちょっと少年っぽいけど、アルヴィンの整った顔立ちが引き立つやん】
『いや、そう言う事じゃなくてだな』
【ほんなら、なんやねん？】
『オレは長い髪が好きなんだよ』
【へ？】
『悪いか？』
【いや、別に開き直らんでも。でも、ふーん……】
『何だよ？』
【別っつにー】
『ふん。でも、悪くはないとは思うよ。俺の好みじゃないだけだ』
【そのセリフ、口が裂けても】
『裂けるくらいなら言うわ』
【冗談抜きに、めっちゃ思い切ったんやな、ネスティ】
『そうか』
【そうや。アルヴ族にとっては男女問わず、髪は長くて当たり前やしな】

『そうだな。リリアさんみたいにオレももっと、気持ちを込めて褒めてやれば良かったな』

【王女様は宮廷ではエリィって呼ばれていたそうやから、あの子はこれで本当にエリィからネスティになったんやと思う】

『オレのいた国でも、女の子が髪を切る時は相当の決心というか決意がいるっていう話だしな』

【フォウの事情は知らんけど、ファランドール、特にシルフィードのアルヴィンの女は髪の毛を命と同じように大事にして伸ばすもんなんや。髪を切るのは命を削る事と同じ、つまり命を捨てる覚悟をする時、って相場が決まってるんや】

『だから、リリアさんもあそこまで感激してたのか……』

【やっぱりお前さんはニブいやっちゃな】

『何がだよ？』

【その価値観はアルヴィンだけやないって事や。アルヴ系種族全般なんやで】

『だから？』

【ホンマに鈍いなあ。リリア姉さんの髪も長くないやろ？】

『あ』

【そういうことや】

エルネスティーネの決心に心を打たれた為に、アプリリアージェのいつもの冷徹な計算が鈍ったのだと言うのは簡単であろう。しかしそれでなくともとりあえずの危機が去った後である。一行の心身をほぐしてから気持ちを新たにしてウーモスを出発したいという思いが数日間の滞在を決めることになったというのが正解ではなかろうか。

だが、それを今更問題にしても仕方のないことだった。

「まあ仕方がないな」

エイルはそう言うと部屋を出ようと歩き出した。

「どっちにしろ二日くらいは滞在する予定だったんだし、丁度いいじゃないか。せっかく温泉地に来たんだから、少しのんびりしても罰は当たらないさ」

アプリリアージェはハロウィンをチラリと見やった。いつものように髭を指で弄んでいたが、アプリリアージェの視線に気付くと小さく肩をすくめて見せた。

特に妙案はないという意味であろうか。

どちらにしろ肝心のルーナーが現時点ではどうしようもないと言っているわけである。ここは慌てずにじっくり腰を落ち着けて対策を練った方が吉ということであろう。

アプリリアージェはそう判断すると、部屋をまさに出ようとしていたエイルを呼び止めた。

「待ってください」

「え？」

後ろ手にドアを閉めようとしていたエイルは振り返ると怪訝な顔をアプリリアージェに向けた。ここで反対されるはずはないと思っていたので、呼び止められたのが意外だったのだろう。

【代われ】

『了解』

エイルの意識がエルデに入れ替わった。

アプリリアージェとの交渉事にはエルデがあたる、という了解事項が既に二人の間にはあるのだろう。

そんな事は知らないアプリリアージェはにっこりと笑うと、エイルに一つの提案をした。

「せっかくですからみんなで行きましょう。温泉」

エルデはその言葉を聞いてニヤリとした。

「さすがリリア姉さん」

『なんだ』

【開き直るしかないもんな。どっちにしろこうなったら粘ったもん勝ちやからな】

二人のそのやりとりを受けて、エルネスティーネとルネは歓声を上げて抱き合って喜んだ。

「なんだかんだでまだ一回も入ってへんかったもンね」

「そうよね。いい考えが浮かばない時は気分を変えてみるのが一番よね」

「そうそう」

「こう言うのを『下手な考えより休んでニヤリ』って言うのよね」

「――そうそう。たぶん」

ファルケンハインは二人の会話に耳を傾けながら、ティアナの方を見た。ティアナも同時にファルケンハインの方を見て視線を合わせると、苦笑しながら首を振って見せた。

「あの厳戒態勢はおそらく俺達に向けられたものではないだろう。エイルとリリアお嬢さんの言うとおり、ここはのんびり構えた方がいいのかもしれんな」

「ネスティはああやって元気にしていますが、みんなの帰りを待ちわびて、ほとんど寝てないんです」

「だったら存分に湯に漬け込んで、今日はぐっすり眠って貰おう」

「そうですね」

「ティアナ！ファル！ぐずぐずしていると置いていくわよ！シェリルも急いで！」

ティアナは微笑むと、自分を呼ぶエルネスティーネの後を追って部屋を出て行った。ファルケンハインもすぐにその後を追った。

宿の外に出るとそろそろ日が暮れる頃で、空は紫色に染まり、あたりは長い影で支配されていた。賑やかな通りを、一行ははぐれないようにお互いに固まって移動することにした。

【ところで……】
『なんだ？』
温泉場に向かう道すがら、エルネスティーネの短い金髪を前方に見ながら、エルデはエイルに声をかけた。
【妹さん。マーヤの髪って確かごっつう長いんやったっけ？】
『ああ、うん』
エイルはマーヤの姿を思い起こした。長く真っ直ぐな黒髪が腰のあたりまで伸びている寝姿がまぶたに浮かんだ。エイルにとっては懐かしくも暖かい、いつものマーヤの姿だったが、その背景が病室なのが少し辛かった。
『確か、腰のあたりまでである』
【似合ってる？】
『ああ。妹の自慢しても仕方ないけど、長い髪も似合ってるし、黒目がちな目も大きくてオレが言うのも何か変かもしれないけど、相当きれいな女の子だよ。オレに似てなくて良かったっていつも思ってる』
【兄バカやな】
『ほっとけ』
【今からそんなんやったら、妹さんがお年頃になったら大変やろな】
『いや、それを言うなら、もう充分年頃なんじゃないかと思う』
【あ、そうやったな。確か一つ違いやもんな。堪忍や】
『いや、いいさ』
【で、マーヤのせいで長い髪が好みっていうわけかいな？】
『別にマーヤの髪が長いからっていう訳でもないって』
【ほな、質問を変えるわ。短い髪のマーヤと長い髪のマーヤはどっちがお好みや？】
『い、妹に好みとか言うな』
【ふーん。ほんならどっちが似合ってるか、でええわ】
『――マーヤの短い髪は全く想像できないし、似合わないとは思う

けど』

エイルは心の中でそう言うと、再び長い髪のルネと談笑するエルネスティーネを観察した。あまりに別人に見えたので再会した時は大きな違和感に襲われたのだが、当初の驚きが過ぎて見慣れてくると、ひょっとしたらエルネスティーネには短い髪の方が似合っているのではないかと思えてきた。

活発に動き回るエルネスティーネは生き生きして見えた。そんな時には長い髪が顔を隠しがちで、王宮内でじっと澄ましているだけならともかく、元々快活な性格のエルネスティーネには長い髪は少し邪魔なんじゃないかとよく思っていた事を思い出した。今回思い切って短くしたことで、豊かなエルネスティーネの表情が髪に隠れることなく全て見渡せるような気がして、エイルは少し得をしたと思えなくもない、とさえ思った。

そこまで考えると、今度は喜怒哀楽がはっきりしているエルネスティーネには短い髪型が向いているのではないかと言う気になってきたのである。

『そうだな。髪型なんて、その子に似合っていればなんでもいいさ』

【模範解答】

『え？』

【ただし、つまらん答えやな】

『ああ、そうかもな』

【という訳で、や】

『え？まだ何かあるのかよ？今度は金髪は好きか？なんて言うんじゃないだろうな』

【おお。正解や！】

『勘弁してくれよ。オレの髪の好みを聞いてどうするんだよ』

【で、焦げ茶色とかはどうや？金髪よりはずっと似合うと思うんやけど】

エルデはエイルの抗議を無視して質問を続けた

『焦げ茶色か』

エイルはエルデに付き合うことにした。別に他にする事もなかったのだ。

【やっぱり金髪がええか？それともティアナみたいな白髪も個性的やな。リーゼのような銀髪もけっこう綺麗やけど、どれもお前さんの顔にはちょっと似合わへんなあ】

『いや、だから髪型と一緒で、色もその人に似合ってればいいんだって……え？』

【なんや？】

『今、なんて言った？』

エイルはいつの間にか立ち止まっていた。

【だから、お前さんには白髪も金髪も銀髪もちょっと似合わへんから焦げ茶色くらいでどうやって聞いたんや】

「ええ？」

エイルは思わず声に出していた。

エイルの突然の奇声に、前を歩く一行が一斉に振り返った。

もちろん、エイルは何でもないという風に慌てて両手を振って歩き出したが、しばらくはバツが悪く、誰とも目を合わせないようにあらぬ方向を見ながら歩く羽目になった。

【ホンマにアホやな】

『おいおい、オレ、髪を染めるのかよ？』

【心配せんでも、染料とか使わへんから。オレがルーンで綺麗に染めたる。ついでに瞳の色も茶色で合わせよか】

『それって、マジ？』

【真面目な話や。ネスティがああやって決心したんや。瞳髪黒色っちゅう生きている化石状態のお前さんがそのままでどうすんねん？」

『言われてみれば、確かにそうだけど』

【正直言うと、お前さんの黒い髪と黒い目は俺も結構気に入ってたから、今まではまあええかと思っててんけど、な】

『確かにもう事情が大きく変わった訳だけど』
【念のために言うとくけど、気に入ったんは髪の色と目の色だけやから。その目つきの悪い顔はイケてへんわ】
『目つきが悪いのは生まれつきなんだよ。ほっとけ』
【マーヤは目つき悪うないんやろ?】
『だ・か・ら、オレに似てなくて良かったって言ってるじゃないか。でも、マーヤだって目つきは別に悪くないけど、なんとうか、こう、澄ましているとかなりキツい顔ではある、かな。リリアさんとは正反対って感じかもな』
【ふーん、キツイ顔、ね。まあ、ええやん。お前さんのその目つきもそうやけど、ヘラヘラした顔よりはマシや。言うとくけど、今のはちょっとだけ褒めてるんやで】
『そりゃ、どうも』
【ほな、とっととやろか。フード被って】
『え?ここでか?歩きながらか?』
【善は急げ、や。公衆浴場で瞳髪黒色の姿をさらす気ぃかいな?夜道やし今変わっても全然目立たへんから大丈夫や。フードは念のため、や】
突然の意外な指令にエイルは心の準備もないまま、渋々マントのフードを被った。
すると、すぐにエルデがいくつかのルーンを続けて唱えた。
【よし】
『よしって、もう変わったのか?』
【まあ、自分ではわからへんやろな。あ、ほら、着いたみたいやな。フード取って】

一行は数ある温泉場の中から、ベックが勧めてくれた比較的大型の建物を見つけると扉をくぐった。エイルも最後尾から彼らに続いた。

「あれえ？」
最初に気付いたのはルネ・ルーだった。振り返ってエイルを見ると声を上げた。
「それ、どうしタん？」
その声に一行は一斉にルネの視線の先を目で追った。
「ええーっ？」
そして、その先にバツが悪そうな顔であらぬ方向を向いているエイルを見つけると、異口同音に小さな叫び声が上げた。
口を開けたままのルネの視線の先には茶色の髪と茶色の目のデュナンの少年が、顔を赤くして立っていた。

【注目の的やな】
『うるさい』

その頃ベックは一行とは別行動をとっていた。
アプリリアージェに無言で却下された自分の陽動作戦の案が素人考えだと言うことは分かったつもりだった。だが、彼にはそれでただ引き下がらないだけの意地と調達屋としての面子があった。
ウーモスからの脱出方法について、彼なりの切り口で何かないものかと思案した末、彼らしい結論を導き出した。つまり、調達屋の組合に顔を出してみることにしたのだ。そこで新しい情報を得る傍ら、何かしら糸口でもあれば、と考えた。
問題の解がたとえ得られないとしても、最新の情報がなにかと役に立つという判断である。

「おお」
「やあ、おやっさん」
一度、別れの挨拶を済ませた相手に、苦笑いを浮かべながらベックは挨拶をした。

「ちょっとヤボ用が入って出発が延びてるんだ。それに、なんか町中が結構物騒な状況じゃないか。何か情報がないかと思ってな」
おやっさんは何の疑いもなくベックを歓迎した。
「全く物々しいな。だが、こっちの商売はけっこう忙しくなってありがたい面もあるがな。まあゆっくりしていきな」
「そうさせて貰うよ」

調達屋の組合窓口は客向きには長いカウンターと待合のソファがあるだけだが、カウンターのついたての向こう側には客の目には触れない様々な情報の資料が整然と並んでおり、ちょっとした図書館の様相を呈していた。
訪れた客はカウンターで用件を告げ、依頼の内容に応じて調達屋を紹介したり、内容によってはその場で商談を始めたりもする。もちろん依頼内容によっては別室で商談が行われることになっていた。
ベックが調達屋を訪れたのはすでに夕食の時間にかかっていたため、その時間帯に組合に詰めている調達屋は少なく、客もすでにほとんどいなかった。
ベックは見知った顔に適当な挨拶をしながらついたての中の調達屋の詰め所的なソファのある場所へ足を向けると、各地からの伝信に目を通し始めた。

「いらっしゃい」
ベックのすぐ後から客が入ってきたようだった。
「人を紹介してもらいたいのだが」
若い男の声がした。
年の頃はベックと同じか、少し上くらいだろうか。落ち着いた、それでいてしっかりと響くいい声だった。
声の主はおそらくそれなりの人物であろうと思われた。丁寧すぎる気もしたが、言葉遣いにも品が感じられる。切羽詰まった雰囲気がないところを見ると、危ない類の依頼ではなさそうだった。ただ、

言葉の抑揚がサラマンダの物と少し違う点が気になっていた。
―（品も良さそうだし、他国の人間の依頼だとすると、けっこうおいしい商売のにおいがするな）
ベックはいつもの癖でついつい依頼者の分析を始めてしまっていた。
「ええ、紹介も我々の商売です。具体的にはどういう人を？」
おやっさんもベックと同じ分析をしているのだろうか、応対する声が少し高くなっていた。
「依頼したいのは、簡単に言うと用心棒だ。このあたりは思ったより物騒で、これからの道中が不安なのでな」
「用心棒、ですか？」
「そうだ。だが、ただ腕っ節が強いだけでは困る」
「と、申しますと？」

ベックは「用心棒」という言葉に強い興味を持った。資料をめくる手を止めると、二人の会話に聞き耳を立てた。
「できれば複数で頼みたい。この付近の賊は集団が多いと聞く。さすがに一人では用心棒にもならないだろうからな。それから、さっきも言ったが腕っ節が強いだけではなくて、フェアリーのような特殊な能力を持っている人間の方がありがたい。後はいかにも用心棒だという風体の輩も避けたい。私はこう見えても音楽家だ。できれば旅は殺伐とした仲間とではなく、美しく軽やかに、かつ賑やかに行きたいものだからな」
「美しい用心棒ですか？」
「礼ははずむ」
「いや、そりゃ金は出して貰わないといけませんが、あなた、ご存じなんですか？用心棒を調達屋に頼む場合は」
「ああ、それなら心配はいらん。流しの用心棒は信用できん。だからいつも調達屋で頼むことにしている。これだ」
「これは綺麗なものですな。ほう、エスタリアの発行ですかい」

「うむ。エスタリアの領主様より頂戴した通関証だ。私と我が楽団がサラマンダとドライアドのどの関所もおとがめ無しで通ることが許されている。ここにエスタリアの領主、ペトルウシュカ公爵のサインとクレストの押印があるだろう？」
「我が楽団、ということは護衛するのはあなたお一人じゃないんですか？」
「いや、私は横笛の奏者だ。楽団など特には持たん。だが、この通関証は私が引き連れていれば楽団と見なされて軍だろうが何だろうが皆おとがめ無しだ。つまり、護衛の用心棒が楽団というわけだ」
「なるほど」
「この町もそうだが、この付近の町も物々しい警備で出入りが面倒な事になっているそうではないか？」
「左様ですなあ」
「だが、私と同道しておれば、多少スネに傷があるような護衛でもおとがめなしで行けるというものだ」
「ふむ。少しお待ちを。念のために通関証の確認をさせて貰いますよ。なに、信用していない訳ではなく、規則なんでね」
「解っている」

おやっさんが資料棚にやってくるのをベックは待ち構えていて、すぐに声をかけた。
「おやっさん」
「何だ、ベック」
「今の客……」
「ああ、聞いてたのか。ちょっと弱ってるよ。今はたいした護衛衆がいないしねえ。希望も妙な感じだし、芸術家ってのはやっぱり変わっているのが多いよ」
「その話、困ってるようなら俺が受けようか」
「受けるって……今の話きいてたんだろ？」
「大丈夫、アテがあるんだ。ともかく俺を紹介して貰えないか？勿

論手数料は無所属の正規料金でいいから」
「いや、それはまあアレだが……」
おやっさんは手にしたドライアドの通関証の見本帳をめくりながら声を潜めてベックに言った。
「もしや、あの客と一緒に町を出るつもりか？」
「相変わらずカンがいいな。客との折り合いが付けばそうなるだろうな。どっちにしろ組合の顔に泥を塗るようなことはしないさ。信頼のおける護衛をきっちり紹介してやる」
おやっさんは公爵符と呼ばれるエスタリア通関証の頁を開き、ベックに示しながら呟いた。
「わかった。でも、無茶はするなよ」
「恩に着るぜ」
「エスタリアの公爵符か。見ろ、この薔薇のクレストが金蝋で型押しされてるやつは、ドライアド王国やサラマンダ侯国はもちろん、ウンディーネ共和国でも全ての関所も関門もお調べ無しだとよ」
「本当かよ？」
「ああ。それに、まだある」
通関証の見本下に書かれた細かい注釈を追っていたおやっさんが、ため息をついた。
「こいつはたまげた。こりゃウンディーネの首都島アダンの招待市民証も兼ねてるぞ」
ベックはその言葉に驚いて、同じように見本帳の注釈を目で追った。
「たいそうな通関証を持ってる音楽家だな」
ベックとおやっさんは分厚い通関証の見本帳を間に顔を見合わせた。相手が予想以上の大物なのかもしれないと思うとさすがに緊張が走ったのだ。
「俺が見た中では一番すげえ通関証だな」
「わしもこの仕事を長年やってるが、千日戦争後の混乱で乱発されたドライアド国王赦免状という『何でもあり』の貴族用の特別な奴

を除くと、こんなすごいのは初めてだな」
「エスタリア公爵ってのはかなり顔が利く貴族なんだな」
だが、ベックはその公爵符の下のサインを見て、あることに気づいた。
「この、ミリア・ペトルウシュカという公爵さまって、確かアレだろ？」
「ああ、『白の国のバカ殿』なんて噂されているな。相当な放蕩ものらしい」
ベックはニヤリと笑うとうなずいた。
「バカ殿に気に入られた音楽家か。まあ、公爵符自体はすげえけど、本人はバカ繋がりのただのやくざな楽士ってことだろう。どっちにしろ俺達には好都合だ」
「俺達？」
「いや、今のは忘れてくれ。そうだ、ついでに有名なバカ殿の情報もたんまり仕込んで、情報として流しておくよ」
ベックはそう言うとニヤリと笑い、見本帳に開かれたエスタリア公爵符の薔薇のクレストを人差し指ですっとなぞった。

※　※　※

その会合のテーブルに着いていたのはベック、アプリリアージェ、ファルケンハイン、エイル、そして茶褐色の髪に青い目の端正な顔をしたデュナンの青年だった。
そこは大通りに面したカフェのテラスで、端から見るとその五人はテーブルを囲んで一服している旅の一行と言った雰囲気であった。
デュナンの青年は終始にこやかで物腰も柔らかく、挨拶のそつのなさやカップを持つ動作など、一見して良家のお坊ちゃんと言った雰囲気が漂っていた。
服装も普通の旅人とは違い、華美と言っていい程度に派手だった。その服装がウンディーネの都会では流行っているというのは、アプ

リリアージェが感心して尋ねた際に本人がそう答えたからであり、実のところその場の誰もそれが真実かどうかはわからなかった。ウンディーネの大きな商業都市に誰も縁がなかったのだ。

「こちらの口利き屋殿からあなた方のことを聞いた時は、どうにも話がうますぎるのでいささか眉に唾を付けておりましたが」

「調達屋だ」

音楽家の言葉をベックがすかさず指摘した。

「おっと、これは失敬」

「一般の方はご存じないでしょうが、私達はその道では名が通っています。それだけに少々値段が張りますよ」

アプリリアージェはいつもの穏やかな笑顔をその育ちが良さそうなデュナンの音楽家に向けると、そう言った。

「しかも我々は家族商売です。人数のお望みにもお応えできます」

「そりゃあいい。私は賑やかな旅が好きなのです。大勢の方が道中は何かと楽しいですからね。もっとも皆さんそれなりの腕をお持ちであれば、ですが」

音楽家はアモウルと名乗った。

アプリリアージェ達はベックから概略を聞いてはいたが、アモウルは自らも改めて自己紹介をした。

ドライアドの下級貴族の三男坊で、家督を継げるあてもないので好きな音楽をやりながらファランドール中を旅して回っているという。年に数回、エスタリアに顔をだして、そこで行われている音楽祭に出たり、公爵の前で演奏したりするのが数少ない日程が決まっている予定であり、それ以外は常に旅の空なのだと語った。

音楽家として演奏が得意なのは横笛だと言う事だが、剣技の腕前にも自信があるらしく、普段は気楽な一人旅なのだという。だが昨今のサラマンダは予想以上に治安が悪くなっており、徒党を組んだ集団による犯罪が横行している為、自衛の意味を込めて今回は念の

為に初めて護衛を頼むことになったとの事だった。

「こちらはお前をいれると十人ものちょっとした団体なんだぞ？」

ファルケンハインはベックの顔を見て呆れたような顔をしてそう言った。

ベックから昨夜提案があった作戦。それはその旅の音楽家が持つ通関証を使ってウーモスの町を正面から堂々と歩いて出ようというものだったが、もちろん出来すぎた話に一行は、かなり懐疑的な態度をとった。通関証の持つお墨付きの力そのものは魅力的な話ではあったが、あからさまに罠のにおいが漂っていたからだ。

「いっそ、そいつから通関証を奪えばいいんじゃないのか？」

「冗談はさておき」

アプリリアージェはエイルの発言を遮るように言葉を続けた。

『……オレ達は「さておかれて」しまった訳だが』

【ええい、代われ】

『オレ、また何かマズい事を言ったのか？』

【お前は一応「賢者」っちゅう設定やのに、一般常識に欠けた発言が多すぎるわ】

『無茶言うなよ。オレはファランドールの常識なんか』

【はいはい。つーか、リリア姉さんの機転に感謝しとけ】

「ともかく会ってみましょう。ベックの見立てです。無碍（むげ）にはできないでしょう」

そう言って一同を見渡した。

エルデを含めても反対するものはなく、決定をアプリリアージェに一任することで話は決まった。

旅の音楽家アモウルに会ったのはその翌日の朝の事だったのだ。

「ベックから話は聞いていると思いますが、私達にも多少の事情があります。そう言うわけで護衛の件はこれから申し上げるこちらの条件を呑んでいただくことが前提になります」

一通りのお互いの紹介のようなものが済むと、アプリリアージェはいきなり核心とも言える部分に踏み込んだ。

だが、アモウルは特に慌てるでもなく顔色一つ変えずにうなずいた。

「このご時世です。大なり小なり事情のない人間などおりますまい。まして護衛衆を生業としているなら訳ありで当然。とりあえずはそちらの条件とやらをうかがいましょう」

アプリリアージェはより目尻を下げて笑いを深くした。

「先ほども言いましたが、我々は総勢十名の、言ってみれば家族のようなものです。したがって非戦闘員も数人います。まずそれをご承知おきいただきたいのです。具体的には十人中、三人が非戦闘員です。うち二人は若い女性です。従って何かあれば残りの七人であなたとその非戦闘員を守る形になるでしょう」

アモウルは腕を組んで、少し考えた後うなずいた。

「ふむ。それは別にかまいません。それよりも錆と油と血のにおいがしない女性、しかもお若いご婦人が一座にいるというのは、想像するだに華やかで気分のいいものです。むしろ歓迎しますよ。何なら私がその女性お二人の専属の護衛になってもいい」

アプリリアージェはしかし、アモウルの軽口にもまったく表情を変えずに話を続けた。いや、軽口なのか本気なのかまでは、さすがにまだはかりかねてはいたのだが。

「ご快諾ありがとうございます。次に移動時についてですが、我々は常にあなたの前後に人員を配置させてもらいます。言い換えますと単独で先頭もしくは最後尾を歩くことはお断りします」

「なるほど」

アモウルは眉をひそめて見せた。その表情の変化をアプリリアージェがどう捕らえるのか、それを相手の表情から読み取ろうとしたが、彼の思惑はもちろん徒労に終わった。にこやかなアプリリアージェは全く同じ表情のままにこやかだったのだ。

「いや、これはお見それしました。護衛団の首領が小柄なダーク・アルヴの女性と伺って正直侮っておりましたが、なかなかどうして。その用心深さには感心しました」

「恐れ入ります」

「とは言っても正直こっちも常に後ろに物騒な人間がいるというのはごめん被りたいところですが、そのあたりの雇い主に対する保証のようなものはご呈示いただけますか？まさか私に常に首筋を晒しておけとでも？」

「それについては」

アプリリアージェはベックの方を見て言った。

「調達屋ベックの斡旋、というこれ以上ない信用が我らにはあるという事ではいかがでしょうか？」

「ふむ、そう来ましたか」

音楽家アモウル……いや、スプリガン総司令官、アキラ・アモウル・エルテルペ大佐は腕を組んだまま、また考え込んだ。今度はアプリリアージェの表情を読み取ろうとする仕草はなかった。短い時間であったが、その行為が無駄な相手であることを悟ったのであろう。

「とりあえず、その他にも何か要望があれば先に伺っておきましょう」

アプリリアージェはうなずくと、続けた。

「ではあと二つだけ。まず移動は徒歩のみで願います。次に食事は全てこちらで用意します。お口に合うかどうかはわかりませんがそれは我慢していただきましょう。しばしの間とはいえ同じ旅のお仲間になるわけですから、同じ食事を囲んで語らいましょう」

それだけ言うと例のとろけるような笑顔でアキラにニッコリと笑いかけた。
「ふむ。食事もそちら任せという事ですか」
「食事はともかく、お茶のおいしさは保証しますよ」

【さて、どう出る？】
『こいつ、本当に音楽家なのかな？』
【剣の腕前は賞金稼ぎが副業やって言うくらい自信があるんやろし、どちらにしろカタギな人間やないやろな。せやからリリア姉さんは念のためにさっき言うてたような条件を提示したんやろ。ダメなら一から作戦は練り直しやけど、ベックが見つけてきた話がおいしいのは間違いないところやな。ただ】
『ただ？』
【担保が調達屋としてのベックの信用だけっちゅうところが、どうなるかやな】
『オレがこのアモウルってヤツなら雇われる方にここまで条件付けられたら椅子を蹴ってるな』
【ファランドールでそんな短気やったら損するだけやで】
『瞬間湯沸かし器みたいなお前に言われたかないね』
【瞬間湯沸かし器って何やねん？】
『いや、説明がめんどくさいから聞くな』
【瞬間に湯を沸かす装置、か？】
『……間違ってはいない』
【なんで俺が瞬間湯沸かし器やねんっ】
『ほら見ろ』
【！】

「いかがでしょう？それらの条件を飲んでいただけないのでしたら、せっかくのベックの斡旋ですが、私どもとしてはお断りするしかありません」

「ああ、そう結論を急がないで。こちらにとってもあなたたちのふれこみが本当なら喉から手が出る程欲しい護衛なんですよ」
アキラは思わず手を挙げてアプリリアージェを制止した。
「ベック君がこの辺りでも評判のいい調達屋だと言うことは、失礼ながら調べさせたので間違いはないでしょう。私も剣士だけではなくルーナーとフェアリーのいる護衛団が心から欲しい。だが、同様に私が見たところ、あなた達も私と同行したがっているフシがある」
「と、申しますと？」
アプリリアージェが目尻を少し下げた。
「ぶしつけを承知で申しますと、あなた達はどうやら何か理由があってこの街の検問を出られない、いや出来れば検閲にかからずに通り抜けたがっているように思えますが、ちがいますか？いやいや、だからどうのこうのという訳ではありません。私もこう見えて多少はスネに傷を持つ身。このご時世、ペトルウシュカ公爵様からいただいた通関証がなければこのようなものものしい地域に足を運ぼうなどとはとうてい思いませんからね」
アキラはそう言ってニヤリと笑って見せた。

【まあ、自信過剰なんは確かやな。リリア姉さんを前に全く動揺が見られへんというのは見上げたもんや。誰かさんとは肝っ玉の出来が大違いやな】
『誰かさんって誰だよ』
【気付いてたらええねん。若者は成長する可能性があるんやから】
『剣の腕には相当の自信があるんだろうさ。賞金稼ぎをしているって言うくらいだからな。過剰な自信はそこから来てるんだろうな』
【さて、そうやったらええけどな】
『なんだよ、お前はベックの案に反対なのか？』
【いや、問題ないとは思う。ただ何となく引っかかるんや】
『何が？』

「私は護衛代をケチろうとしている訳ではない。それはわかってもらいたい。ベック君にも話したが、しっかりした信用できる相手なら、相場以上に払ってもいいと思っていますよ。もとより私はお金が欲しくて生きている訳じゃありませんしね」
「宵越しの金は持たない、と？」
「そうですね。酒の為に生きているわけでもありません。生きている実感、それさえ感じていられればそれでいいんです。今のところ私にはそれが旅であり、音楽であり、剣の道、という訳で」
「なるほど。私達のような俗物はお金の為に生きている様なものですから、達観されている方を見るとうらやましくもあり、そうでもないようでもあり……」
「あっはっは。正直に浮世離れした馬鹿者と呼んでくださって結構。しかし、デュナンならともかくダーク・アルヴから金だ金だといわれるのは妙な感じがしますね」
「一口にダーク・アルヴもいろいろですよ。横にいるファルもご覧の通りアルヴですが、女癖は悪いは金使いは荒いわで、およそアルヴとは思えませんしね」

『おいおいおいおい』
【落ち着け】
『でも、あそこまで事実と違うとさすがに気の毒だろ。むしろ金遣いが荒いのは大酒飲みのリリアさんだろ？』
【お前は本当に言葉と人間の上っ面しか見えへんのやな】
『どういう事だよ。ファルだぞ？あのマジメで堅物の見本みたいなファルだぞ？』
【あながちウソでもないんやで。冷静になってよーく考えてみ？ファルとティアナ姉さんが時折作る、他人がちょっと入り込めへん雰囲気……】
『いや、でもあれは』
【あれは確か二人が初めて会った時からやろ？お前もランダールの

カフェで二人の初々しい逢い引きの様子を盗み見したやろ?】
『盗み見とかお前が言うな』
【あと、金の件やけど、いつもリリア姉さんに飲み過ぎやー、路銀の事も考えてくれーとか文句を言うてるのも見てるやろ?】
『何が言いたいんだよ?』
【初対面にも関わらず男性経験がなさそうな女性軍人をコロっと虜にするわ、二言目には金金っていつもリリア姉さんには口うるさいわ……ちゅうことをこういう場で抗議……いやそんなええもんやないな、文句言うてるんや。反論が一切できへんこの状況で、や】
『なるほど。そう考えると、リリア姉さんってすごく腹黒い人なのか?』
【ああ。ただもんやないオバハンやからな】
エルデにそう言われてファルケンハインを注意深く観察したエイルは、微妙ではあるがその眉間に皺が寄っているのを認めて、気の毒になった。

「かといって、そちらの条件を全部呑むからお願いします、というのも雇い主としては釈然としないものがあります」
アキラはそう言うとその場にいる全員を見渡しながらこう続けた。
「しかしまあ、いいでしょう。そちらのその条件は全部のみましょう。その代わりこちらにも条件が二つあります」
「うかがいましょう」
アプリリアージェは微笑んだままうなずいた。
「一つ目は、こちらが要求した能力をあなた方が本当に持っているかどうかを見せてもらいたい。これは依頼主としては至極まっとうな要求のはずですね。金額はそれによって決めさせて貰いましょう」
「同感です」
アプリリアージェはうなずくと、エイルの方に顔を向けて、にっこりと笑って見せた。
「そんじょそこらのルーナーではない人をご所望らしいですよ」

「了解」
エイルは小さくうなずくと、右手を突き出してアキラの目の前に掌を広げて見せた。アキラからはエイルの顔、エイルの思惑的には口元が掌の陰になって見えなくなった。
「いかがですか？」
アプリリアージェはすぐにそうアキラに声をかけると、それを合図にエイルは伸ばした手を引っ込めた。

茶髪で茶色の目の、ちょっと風変わりな目つきの悪いデュナンの少年がルーナーであるということは顔見せの時に告げられていた。その彼が手を突き出して、さあこれから一体何が始まるのか？と身構えていたアキラはしかし、アプリリアージェの言葉にとまどった。
何かが行われたと言う事なのだろうか？
アキラは注意深く辺りを見渡したが、どこにも変化が感じられなかった。
（いや）
そう言う問題ではなかった。
アキラにはの目の前の少年がルーンを唱えるところを見ていないのだ。ルーナーだと紹介された少年が手を突き出したか思うと、首領のダーク・アルヴがすぐに「いかがですか？」と尋ねてきただけなのだから。

「どういう事です？」
だから、アキラは怪訝な顔をアプリリアージェに返してそう尋ねるしかなかった。
「あらあら、私としたことが。鏡がないとわかりませんね」
アプリリアージェはそう言うと懐から小さな手鏡を取り出してテーブルの上に置き、それをそっとアキラの方に差し出した。
「よくお似合いですよ。あなたにはむしろそちらの方が上品で良い感じです」

アプリリアージェの言葉にアキラはまるで狐につままれたような気分になったが、それでも素直に差し出された鏡を手に取り、それで自分の顔を映して見た。

まるで空間を切り取ったような不思議な装置……手鏡という小さな丸い小宇宙に映し出された自分の姿を見て、アキラは目眩を覚えた。

アキラ・アモウル・エルテルペは本来、金髪碧眼である。だが、いわゆるお忍びで民間人として諜報活動を行う際には髪の毛の色だけは茶褐色に変えていた。もちろん今回もその色に染めて事に及んだはずだったのだ。

だが、その鏡に映っているのは金髪碧眼の本来の自分の姿だった。

顔を上げたアキラの目の前には、今まで通りずっと微笑をたたえるダーク・アルヴの娘の視線があった。その変わらぬ微笑を再び見た瞬間、アキラは体中に脂汗が吹き出るのを感じた。それは今まで味わったことのない不気味な感覚だった。

いや、心の奥にある何かが警鐘を鳴らしてると言った方が適当な表現であろう。

―（正体が、ばれているのか？）

そして……

―（このルーナーは一体何者なのだ？）

二つの疑問が同時に腹の奥からわき上がって、額に突き抜けたような格好だった。

詠唱もなく一瞬で髪の色を元に戻して見せたルーナーがもはや「ただもの」ではないことは明白だった。

未知の相手を前に、しかしアキラは深呼吸をして自らを落ち着かせようと努めた。

レナンスの誇りを思い出したのだ。そして全ての勇気を振り絞って状況把握に全神経を集中した。

―（問題はない。俺は元々彼らに危害を加える気などない無い。ミリアはこう言った。『しばらくの間王女エルネスティーネの護衛をしてくれ』と）

そこまで考えて、アキラははたと思い当たった。

――護衛だと？

―（コイツは傑作だ）

そう思うと思わず笑いが出た。

「くくく。あっはっは」

―（ミリアのヤツめ。冗談も程々にしろ。護衛の必要がどこにあるんだ、おい？）

鏡をで自分自身を見つめていたかと思うと突然笑い出したアキラの豹変ぶりに、一同は思わず顔を見合わせた。

「すごい、コイツはすごい」

アキラは手鏡をアプリリアージェの方へ返してよこすと、エイルの方に顔を向けた。

「ベック君から『そんじょそこらのルーナーとは格が違う』とは聞いていたが、これほどとは思わなかったな。詠唱が速いだけじゃなく、こんな気の利いた事が出来るとは、道中の楽しみが増えたと言うものです」

「では？」

アプリリアージェは答えを促した。

「いや、この若いルーナーの力だけで貴方たちの実力が額面通り、いやそれ以上だというのはよく分かった。だからこそ、もう一つの条件を是非のんで欲しい」

「と、言いますと？」

「私は君たちにとても興味を持った。だからしばらく君たちに同道させてもらいたい。条件はそれだ」

「意味がよくわかりませんが」

「私の目的地などは、ある意味あってないようなものだ。放浪しな

がら感動するものに出会い、曲を奏でる。それこそが旅の目的というものだ。だったら私が思いつきで決めた目的地より、君たちが向かおうとしている場所の方が面白そうな気がする。もし君たちに特に目的地がないと言うのなら共に目的地を考えてもいい。つまり、私は君たちが気に入ったという事さ」

アプリリアージェはアキラの出した最後の条件に対する即答を避けた。

目の前に置かれた手鏡を手に取り視線を一旦アキラに注いだあと、再度手鏡に落として、妙にもったいぶったような態度でそっと懐にしまった。

そしてその場には少しの間沈黙が流れた。

【さて】

『お前、決定をリリア姉さんに素直に一任したけど。何か言いたいことがあるんじゃないのか?』

【いや、今のところは、ないな】

『ふーん。それはそうと、今の、やけに簡単なルーンだったよな?』

【ん?】

『オレの髪を茶髪に染めた時はもうちょっと色々なルーンを続けて唱えてたろ?でも、今のは一言だけだったからな。金髪は簡単なのか?』

【お前にしては鋭い】

『え?』

【今のは金髪にするルーンやない】

『そうか、コイツも茶色に染めていたって事か?』

【そう。俺がかけたのは髪を元の色に戻すルーンや。カンが当たったな。まあ、変わらへんかったら改めて適当な色、そうやな、真っ赤にでも染めてやったらええだけやしな。お前の髪の色に時間がかったんは、好みの色が出えへんかったからや】

『つまり、コイツも結構くせ者って事か。そんな奴と一緒に行動し

てもいいのか？』

【いいんとちゃうか？それより多少問題あるとすると、姉さんが仕掛けた罠の方やな】

『罠？』

【気ぃ付かへんかったやろ？姉さんが渡した手鏡、リリア姉さんの家のクレスト入りやったんやで？】

そう。アプリリアージェはユグセル家のクレストである「トネリコの大樹と双美人」の象嵌細工が施された手鏡をアキラに渡したのだ。もちろん、相手がそのクレストを見てどういう反応をするかを観察する為だった。

だが、アプリリアージェの見たところ、アキラはその手鏡を見ても鏡自体には全く何の反応も示さなかった。

「トネリコの大樹と双美人」の意匠はおよそまともな貴族ならば知らぬものはないクレストである。それは例えドライアドの貴族であっても一般的な教養のある者なら間違いなく目にしたことがある意匠であった。何故ならば、ユグセル公爵家はシルフィード王国の王位継承権を有している程の家柄であり、その家のクレストを知らないなど考えられないことだからである。それはシルフィードの貴族に、ドライアドのペトルウシュカ公爵家の白い四輪の野薔薇のクレストを知らぬ者が居ないのと同じ意味合いであった。どちらの王国ともに公爵家はそれほど数があるわけではない。従ってシルフィードでは最も有名なクレストの一つなのである。

言い換えるならば、その数少ない公爵家の一つ、ペトルウシュカ家の白い野薔薇のクレストの印が押された公爵符を持つ程の人間が、ユグセル公爵家のクレストを知らぬはずがないという前提の試験なのであった。

だが、アキラは見事にこの罠に引っかかっていた。

そう、アキラは本来気付くはずだったのだ。

「トネリコの大樹と双美人」のクレストに対して興味を抱き、それについて何かしら質問をアプリリアージェに投げかけなければならなかったのだ。

もちろんアプリリアージェはアキラの問いに対しての回答はいくつも用意してあったろう。だが、その答えを聞く機会をアキラは設けなかったのである。

沈黙の中、アプリリアージェは鏡に無関心なアキラについて考察を続けていた。

この音楽家の背景にあるものの可能性は二つ。

一つは大した観察力もなく、ファランドール有数の著名クレストさえも見逃すような注意力のない輩か、もしくは本当に無知なボンクラ青年なのか。

そしてもう一つの可能性は、はじめからアプリリアージェの正体を知っていて、そのクレストに全く違和感を覚えなかったか、である。

二つの可能性はそれぞれが正反対の回答を引き出すことになるのだが、アプリリアージェは決断に際し、今回は自分のカンを優先させる事にした。

念のためにチラリとエイルの顔色を見やったが、エイルはその視線を意識したものの、無視を決め込んだ様子にとれた。

エイルとエルデの側からすれば、今回はアプリリアージェの決定に口出しはしない、と決めていたからとった態度だった。理由は特にないが、敢えて言えばアプリリアージェの洞察力と決断力を見極めて見たかったのかもしれない。

ややあって、アプリリアージェはカンによる結論を下した。

「では、交渉成立という事ですね。出発はいつでしょうか？」

アプリリアージェから告げられた言葉に、アキラは嬉しそうな顔

をして立ち上がった。
「善は急げと言います。そちらの準備にはどれくらいかかりますか？」
「一時間もいただければ」
「では、一時間後にここで」
そう言うと、アキラはエイルの方をみた。
「すまないが、元の色に戻してはもらえんかね？私は実のところもともとは金髪なんだが、金髪碧眼のデュナンというのがどうにも陳腐で気に入らなくてね。髪の色だけでもと思って染めているんだ」

『元の色をご所望らしいが？』
【色見本があれば完璧に戻せるんやけどな】

「近い色でよければ」
エイルはそう言って頷いた。
「ありがたい」
アキラの答えを待って、エイルは同じように相手の顔に掌を付きだし、口元を目隠しすると、囁くような早口でいくつかのルーンを唱えた。
その様子を見ていたその場の人間には、アキラの髪の色がまるでコマ落としのように金から濃い茶色に変わるのを目撃した。
「いっちょあがり。もう一度鏡で確認してみるか？」
「いや、信用しているよ」
といいつつ不安げに髪を触ってみるアキラに、エイルは思いついたことを尋ねた。
「アンタは一人なんだよな？」
アキラは怪訝な顔でエイルを見た。
「もちろん」
そう言うとすぐに苦笑いを浮かべて頭をかいた。
「あ。実を言うと相棒がいる」

「相棒？」
「なあに、気のいいマーナートが一匹さ」

『マーナート？』
【ウンディーネでは確か丸ネズミとも言うな。大人のデュナンの拳大くらいのふかふかな毛皮をした可愛らしいネズミの仲間や。絶滅危惧種やねんけど、さすが放蕩ものやな。相棒が妙な小動物とは洒落てる。それより】
『ん？』
【何であんな質問をしたんや？】
『ああ、一人なのかって聞いたアレか？』
【そや】
『さっきベックの評判を調べたって言ってたろ？』
【なるほど、誰かに調べさせた……仲間がおるかもという読みか】
『ああ。まあ、単純に宿屋とかその辺の適当な連中に聞いたのかもしれないけどな。念のため、さ』
【ふーん】
『何だよ？』
【いや、俺は今ちょっとだけ自分の相棒を見直したんや】
『お前にそんな風に言われると、褒められた気がしないから不思議だよな』
【褒めてないしな】
『なんだと？』

エイルが頭の中でいつもの口げんかをしている間に、アキラは手付けの名目でドライアドのエスタリア金貨十枚をテーブルの上に重ね、すぐに身を翻してその場を去っていった。
「エスタリア金貨というと……」
終始無言だったハロウィンがテーブルの上に置かれた金貨を一枚手にとってファルケンハインに手渡した。

「金貨としては珍しい金と白金の合金で出来ていて、さらに金の純度も極めて高いと有名な金貨ですね。確かシルフィードのアプサラス金貨の三倍ほどの値打ちがあります」

ファルケンハインは説明するようにそう答えると、枚数を数えた。

「十枚と言う事は、とりあえず一人一枚、という事なのでしょうね」

アプリリアージェはそう言うと金貨の山から一枚つまんで、そのままベックに差し出した。

「あなたの取り分です。一時間後までに準備を」

ベックはうなずくと素直に手を出した。アプリリアージェはつまんだ金貨をベックの掌の上にそっと置くと、その金貨を裏返して見せた。

そこには、四輪の野バラのクレストが刻まれていた。

会合場所のカフェを後にしながら、アキラは自らの失策に頭を抱えていた。

失策に気づくのが遅すぎた。特殊なルーナーであるエイルの事で一瞬思考が停止したのであろう。それとも冷静さを欠いていたか、どちらかであった。普段ではあり得ない失策だったのだ。

もちろん「トネリコの大樹と双美人」のクレストが象嵌されていた手鏡の件である。手鏡を受け取るときに目に入ったクレストだが、アキラはそれを当たり前のように意識の外に追いやってしまった。

目の前にいた黒い髪のダーク・アルヴがアプリリアージェ・ユグセルであることがアキラには予め解っていた。だからクレストを見た際にも「やはり」と自らの推理を確信しただけで、それ以上の事を考えられなかったのである。

それよりもなによりも詠唱無しで難易度の高いルーンをサラリとやって見せた少年ルーナーに意識が集中しすぎていた。

あそこでアプリリアージェがわざわざクレストを出して見せたのは、謎かけだったのだ。アキラにはそれが解っていたはずだった。いや、解っていなければならなかったのだ。

―（おそらく、向こうも必死だ。あらゆる可能性を探っていると考えていい）

その張られた網に、アキラはまんまと絡まってしまっていた。

舌打ちを一つすると、アキラはいっそう歩を速めて手配していた宿へ急いだ。

過ぎてしまったことは仕方のないことだった。その失敗を心の中で引きずって失敗を重ねる愚を避けなければならない。そう。二度とヘマはできないのだ。

それよりも手鏡の件のうまい収拾方法を考えねばならない。それも、違和感なく、自然に納得できるような答えを用意しなければならなかった。くれぐれも焦って取り繕っているように思われてはならなかった。

―（くそっ、あいつめ）

アキラはまたしても酒場で出会った時のミリアの顔を思い出していた。

―（「それなりに怪しいお付きの人間」だと？ル＝キリアの精鋭が合流しているんだぞ？）

おそらくあの時点ではミリアとて死んだと思われていたル＝キリアまでがエルネスティーネ王女と合流するなどとは読んでいなかったに違いない。アキラから得た情報で会話途中でル＝キリアの生存については確信してはいたようだったが、あらかじめル＝キリアとエルネスティーネが一緒にいるとは思わなかったはずである。

（いや……）

アキラはそこまで考えて思わず立ち止まった。

自分の考察に決定的な誤謬を見つけたからである。

―（俺に護衛を頼むことを決めた時点では、そもそもル＝キリアがエルネスティーネ姫の護衛に付いているらしいことすらミリアは知

らなかったはずだ）

――（参ったな）

例によって極めて簡単そうに、実はとんでもなく困難な事を平気で依頼するいつものミリアの依頼内容を聞いた時にも頭を抱えたかったアキラだが、その条件が桁違いとさえ言えるほど悪い方に偏ったのだ。

相手のアプリリアージェが巷間ささやかれている通りの奸計に長けた人物であることは、アキラは身をもって認識していた。わずかな会見時間ではあったが、あの謎かけの大胆さと周到さで十二分に思い知る事になった。

方やアキラの味方であるはずの「先読み」であるミリアは「それなりに怪しいお付きの人間」のいる姫を「観察・保護」しろという。一人二人ならともかく、十人近くの護衛を既に持っている姫君に今更護衛もないものだ。

ル＝キリアがたとえ合流していないとしても、王女がそれなりに厚い防御壁に包まれている事はミリアとして重々承知していたはずである。

つまりこれもミリアがアキラに投げかけた謎のようなものなのである。

そもそもミリアからは具体的な指示はない。ただ一緒に行動して、相手の行動目的を探れというのだから、実のところ簡単なのか難しいのかという見極め自体が困難だ。

そもそもミリアに依頼された時、相手はそれなりに与（くみ）し易い連中であろうと、アキラは高をくくっていた。いや、まさかとは思ったが、ミリアが残した謎を汲んで最悪の場合ル＝キリアが加わることまでは実のところ想定はしていた。

それでもなお、自分の方が優位に立って事を進めることができるという自身がアキラにはあったのだ。

だが、その大前提が危ういものだという事をアキラは自覚してしまったのである。

アキラはそこまで考えると、ミリアが言ったもう一つの言葉を思い出していた。

――（「君の勉強になるかもしれない」か）

「あいつにはかなわんな」

そう声に出すと、アキラはさらに歩を速めた。

ウーモスの厳重警備は、もちろんスプリガン総司令であるアキラの指示だった。

アキラはミリアとの会見の後、長考した。

ミリアが最後に投げた「謎」をばかばかしいと思うか、それも「あり」だとして要素として織り込むか。町を歩き回りながらそうやって長い間迷っていたものだから、護衛役のミヤルデとセージは同じ時間振り回されていた事になる。

アキラが出した結論は「ル＝キリアは生きている」というものだった。決断に相当の決意が必要だったのは、ル＝キリアがいた場合の包囲・監視網にかなりの「金」がかかる為だった。総司令とはいえ、好きに予算を使っていいというものでもない。ましてや公式には死んでいる人間の為に「ひょっとしたら」で二個中隊の兵を動員するなど許される事ではないだろう。そこまで不確かな事に五大老にも顔が利くとはいえ、わざわざエスカの口添えを頼む訳にもいかない。下手をするとエスカの足を引っ張る事になるかも知れないからである。

つまり、アキラは長い時間を掛けて「居ると想定した場合、どういう理由でその包囲網を正当化するか」という事を考えていたと言い換えてもいい。

アキラが導き出した結論は、「正教会の高僧を名乗る賊の確保」というものだった。

それは「司祭だか司教だか神官だか」わからないその怪しい人物を今回の容疑者として断定した上で、スプリガン自体が狙われている

という判断を示して厳戒態勢を敷くという内容だった。
苦しい言い訳ではあったがもし追求があれば、当初から二個中隊で演習を行う予定にはなっていたのでそれを兼ねる、として逃れるつもりだった。
ウーモスの政治家達との折衝にはグラニィ・ゲイツ中佐に当たらせ、自分は文書を示すだけで表だったところへ出ることを避けた。勿論この計画のためである。
総司令の窓口としてミヤルデをこれにあたらせ、後の事務処理を頼んだ。

もともとアキラは短期間で片を付けるつもりだった。もちろん、エルネスティーネ一行と接触して同道するという目的を達成することだが、その為に町の出入り、主に出る事を極端に制限することによって相手の行動の自由を制限した。
相手としても追求されて万一ボロが出る事は避けたいに違いない。つまりはしばらく足止めする事ができるという計算である。ミリアの言う「それなりに怪しいお付きの人間」の中に土地の調達屋がいる事をセージの調査で知り得たアキラは、音楽家の護衛を捜しているという例の芝居を打つ事を考えついたのである。
相手が食いついてこなければそれでもいいと考えていた。
ただ、同道のきっかけを作るためにも向かう方角だけは知っておきたかった。ここでの同道作戦に失敗して密かに出発されてしまった場合は近隣の町に何人かの偵察を放って同行を探り、また違う手を考えるつもりでいた。

だが、計画自体は思っていた以上に図にあたった。
それは、ル＝キリア一行がエルネスティーネ達に合流したからだ。十人もの団体になるとどうあっても機動性が損なわれる。かなりの犠牲を覚悟してまで『死んだ』という証拠をねつ造したル＝キリアだ。通関証はのどから手が出るほど欲しいもののはずである。それ

があればこのウーモスだけではなく、この先存在している可能性のあるいくつかの関所や通関でも有効なのだ。人の通わぬ奥山や高山ばかりを辿るつもりならいざ知らず、人里をそうそう離れて行動できるとも思えない。

その読みは当たったのだ。

それだけに、画竜点睛を欠く手鏡の一件がどうにも口惜しかった。

※　※　※

一時間後。

ペトルウシュカ公爵家の四輪の白い野薔薇のクレストの押印のある通関証の威力が噂以上に絶大であることを一行は思い知る事になった。

町の入り口に堂々と進んだ十二人の楽器を持たない「楽隊」はアキラが取り出した通関証を示すだけでいかにも一癖二癖ありそうな兵に恭しく礼をされた上、文字通り何の検閲もなしに最敬礼をもって送り出されたのだ。

エイルは通関証を示す際の手続きを見て、昨夜エルデが叱責した訳がわかった。

通関証はただの羊皮紙ではなかった。

それにはルーンが駆けられていて、正しく所持するものがある部分を指でなぞると、初めてその名前が、本人の特定方法と共に浮かび上がる仕組みになっていた。

アキラが指でなぞると、そこにはアモウルとファランドールの文字が浮かび上がった。そして特定条件とは、「妙なる横笛を奏でるもの」とあった。

アキラは横笛を懐から出したが、通関に当たった担当兵は笛を一

目見ただけでそれには及ばないと、演奏しようとするアキラを制した。

おそらくそう言うものなのだろう。

そう。

本人以外に使いようがないもの。それが通関証なのだ。

奪う意味などないのだった。

【な、言うた通りやろ?】

『お前、何も言ってないだろ?』

# 第四十四話　雷神

アキラを加えた一行は、ヴェリーユを目指すことになっていた。
アキラには巡礼だと告げた。しかしその実はエイルとエルデが目指す、「真赭の頤」の七番目の庵がある場所だったのだ。もちろん本物の。
ヴェリーユはドライアドの町ではない。国境を越えたウンディーネ南部にあるマーリン新教会の本山がある重要な聖地の一つだった。
もちろん、ウーモスからヴェリーユまでは遠い。どちらにしろひとまずは街道を北上する事になった一行であった。

新しい旅の仲間は、表面上すぐに溶け込んだ。
なにせアキラは社交的で明るいだけでなく、諸国を旅しているという触れ込みだけあって話題が実に豊富なものだから、エルネスティーネは直接話をしたくてたまらないようだった。しかしそれはハロウィンにもティアナにも止められていた。もちろん、妙な言葉遣いと変な常識が彼女の出自を疑わせる事にならぬよう配慮をしたものだ。
実のところ、エルネスティーネはアキラ本人よりも、アキラが懐に入れている小動物の存在の方に気を取られていた。
マーナートという人なつっこい大きな目のネズミの虜になっていたのだ。ドライアド原産でシルフィードにはいない動物なので、存在は知識として知ってはいたものの、実際に見るのは生まれて初めてだった。
その青っぽい灰色のふわふわの毛並みは実に柔らかそうで、エルネスティーネはさわってみたくて仕方がない様子だった。
とはいえ、一行とアキラの間にはお互い最初は探り合いのような緊張感があったのもまた事実で、その緩衝役にアプリリアージェと

ハロウィン、そしてルネ・ルーが当たっていた。
歩く順番も決まっていて、先頭はファルケンハインがつとめた。次いでその緩衝役の三人がアキラを囲むようにして世間話の相手になり、その話し声が聞こえる範囲に、エルネスティーネとティアナが後ろから付き、少し遅れてテンリーゼンが続く。そして最後尾がアトラックというのが一行の行進の一応の順番だった。
ただし、ベックとエイルは自由に前後を行き来していた。

「リリアさんっていつもああなのか？」
エイルは一行の先頭を歩くファルケンハインに尋ねた。二人は他の仲間達よりも少し先行気味で、次に続くハロウィン達との間にそこそこの距離があいていた事もあって、普通にしゃべる程度の声でも二人だけにしか聞こえないほどだった。それもあってエイルは思い切ってみんなの前では聞きにくい事を口に出した。
「いつもああなのか？とは、リリアお嬢さんがいつも笑顔だということか？」
ファルケンハインは太い声で答えた。
このアルヴの若者は基本的には寡黙な男だが、エイルに対しては気軽に会話に応じていた。ウマが合うと言ってしまえばそれまでなのであろうが、アトラックの言葉を借りるならば「他人に対してあれほど友好的なレイン副司令を見るのは初めて」という事であるらしい。部下とはいえ、長く戦場で供に戦っているという間柄にもかかわらず、アトラックに対しては必要以上の会話をしようとはしないファルケンハインが、エイルに対してはどうしたわけかくだらない世間話にすら乗ってくるのである。

「あれが地顔だそうだけど、それにしてもいつもニコニコしすぎというか、いつも基本的に機嫌が良くて穏やかで優しそうじゃないか。それでいて軍人、しかも提督と呼ばれる程偉い人なんて聞くと、ちょっと想像を絶しているというか、そもそもオレ、あんな人は初め

てだよ」
「ふむ……まあ……そうだな」
ファルケンハインは妙に口ごもりながらも同意した。エイルはそんなファルケンハインの態度に不審なものを感じてさらに突っ込んだ質問をした。
「それに美人だし、エッダじゃかなりモテモテなんだろうなあ。もう決まった人とかいるのかな？なんて考えちゃってさ」
エイルはそう言った後で、それとなくファルケンハインの様子を横目で観察したが、ファルケンハインの表情には一切変化がなかった。
エイルのその取って付けたような質問は、エイルの発案ではなく勿論エルデの差し金だった。
相手の人となりをより理解して弱点を探り出せ、とうるさく言うのでしぶしぶつきあったというのがその質問の舞台裏だったが、それは文字通り敵の弱点を探り出すというよりも、エルデにしてみれば少しでもアプリリアージェを凹ませるネタがないかと思って探っているだけなのだ。エイルはそれが解っているだけに全く乗り気ではなかったのだが、エルデにしてみれば、アプリリアージェにはしてやられている事が多く、それがどうにも気に入らないようだった。
「いや、そう言った話は俺は聞いた事がないな」
「そっか。あんなに可愛いんだから、普通の男はほっとかないと思うけどなあ。シルフィードでは軍人だと結婚しにくいのかい？」
「そう言うわけではない」
ファルケンハインは積極的ではない否定の仕方をした。
作戦を遂行中の軍人に対しては少々浮いた話である事は承知していたが、実際問題、軍人同士の結婚などにはエイル自身も少なからず興味があったのだ。
だが、心配には及ばなかった。相手がアトラックであればそこでその話は終了していたところだが、エイルが相手だと一言だけで終

了することはないのだ。
「噂では昔は何度か婚儀の申し入れがあったらしいが、確かすべてリリア お嬢様の方から断っているはずだ。俺の知っている限りでは、ここ最近はそんな噂すらきかんな」
「ふーん」
気のなさそうなエイルの態度に、今度はファルケンハインがエイルに不審な目を向けた。
「なんだ？言いたいことがあればはっきり言ってみろ。アトルと違って俺はもったいぶった言い回しは苦手なんだ」
エイルはいつものくせで頭を掻いて見せた。
「いや。実はオレ、ずっと気になってるんだけどさ」
「うん？」
「リリア姉さんの本当の年齢は知らないけど、オレの見たところなんとなく歳も近そうだし、どっちも独身だし……」
ファルケンハインはエイルの言葉を遮った。
「だから何の話をしている？」
エイルはそんなファルケンハインを見てニヤリと笑うと続けた。
「いや、ファルとリリア姉さんって結婚してもおかしくない間柄じゃないのかな？と思っただけだよ。まあ、立場の問題はあるにせよ、つきあいは長そうだし、だからお互いの事をよく知っているだろうし、客観的に見ると、少なくともつきあってもおかしくはないような気がしてさ」
ファルケンハインは突然歩みを止めた。
斜め後ろを歩いていたエイルは思わずファルケンハインにぶつかりそうになった。
予想以上の反応にエイルの方が戸惑った。その顔色をうかがう為にファルケンハインを見上げると、エイルはさらに予想外のものを目にすることになった。
立ち止まりはしたが、ファルケンハインはまたすぐに歩き出した。だが、今まで無表情で、言ってみれば涼しい顔で歩いていたはずの

額には大粒の汗が浮かんでいたのだ。
「どうしたんだよ?」
エイルの問いにファルケンハインは珍しく返答をしなかった。
「オレ、何か変なこと言ったっけ?」
エイルの二度目の問いに、ファルケンハインは普段よりいっそう低い声で呟いた。
「エイル、お前は……」
「ん?」
「司令の恐ろしさをまだ何も知らないからそんなことを軽く口にできるんだ」
「え?」
「いや、いい。これ以上この話をするとまたいらぬ想像をしてしまう」
「想像って……」
「ともかく俺が言った事の意味を知りたければ、同じ質問を後ろにいるアトルにしてみるんだな」
「アトルに?」
「ただし」
ファルケンハインはエイルの方に顔を向けて、続けた。
「絶対に誰にも聞かれないようにだぞ」
そう言うとにじみ出た油汗を手甲でぬぐった。エイルには心なしかその顔が青ざめているように見えた。
「これは善意からの忠告だぞ」
「わ、わかったよ」
エルデとしてはもとより二人が男女の仲であるなどとは思っていなかったのだ。ただ、退屈だったのでエイルをけしかけて少しファルケンハインをからかうつもりだったのだが、まったく思いもしない反応をされてかなり戸惑っていた。
『妙な反応だと思わないか?』

【うん。あれは明らかに怯えてるな】
『リリアさんと結婚生活をしているところを想像して脂汗をかいたって事か？』
【たぶんそうやな。うーん、リリア姉さんには謎が多いな】
『でも、あのファルが怯えるって、考えられないんだが』
【姉さん、実はダーク・アルヴの姿を借りた化け物やったりしてな】
『まさか』
【やっぱり妙な感じやし、藪をつついて蛇を出してもうたかな……。こんな事やったら、素直にティアナとの仲をからかった方が面白かったなあ】
『やれやれ、そうじゃないかと思ってたけど、やっぱりそっちが目的かよ』
【相互理解の為の有効な手段と言うやっちゃな】
『一生言ってろ』

ファルケンハイン自らが作り上げた想像もしくは妄想を振り払うのに必死な様子を見て、エイルはこれ以上世間話などをするような雰囲気ではないと判断した。
そして歩を緩めるとファルケンハインから離れ、今度は一行の最後尾を守るように歩くアトラックの傍にやってきた。
もちろん、エイルとエルデは好奇心に負けたのだ。

「何だ？レインさんから俺宛てに伝言でもあるのか？」
アトラックはいつものように爽やかないい笑顔でエイルを出迎えた。
彼のことをよく知らなければただのお調子者ともとれるほど言葉数と冗談が多く、旅の一行の雰囲気を軽いものにしてくれていた。
とは言え彼が提供する話は井戸端会議で交わされるような醜聞の類ではなく、実体験と知識からなるファランドール各地方の珍しい風物に関する話題が多かった。道中から見える景色から端を発して

地理や風俗、植生と言った、ようするに博物学的な知識を、子供でもわかるように平易な言葉を使い、しかもついつい引き込まれてしまうほど楽しい語り口で披露してくれていた。

そもそも彼の持っている知識の量と質は半端ではないようで、その知識においてエイルが無条件に一目も二目も置くエルデをして「すごい奴やな」と手放しで言わしめるほどのものだった。特に各地の特産品の蘊蓄については驚くべきものがあり、外の世界に出るのが初めてで疑問と質問が服を着て歩いているような存在のエルネスティーネにとっては、まさに格好の話し相手でもあった。

エイルはファルケンハインに言われたとおり、同じような内容の質問をアトラックに投げかけてみた。もちろん、誰にも聞こえないように。

アトラックの変化はファルケンハインよりも劇的だった。

「えええええ?」

と叫んだ後、しばし絶句したかと思うと、顔がみるみる青ざめて額に脂汗を浮かばせ始めたのだ。

アトラックの叫び声があまりに大きかったので、前を歩く一行が一斉に振り向いた。アトラックは苦笑しながらそれに対し、何でもない、と皆に合図をした。

【なんや、聞かへん方がええような気がしてきた】

『今更それはないだろ?』

【ネスティ曰く……】

『え?』

【触らぬカメにただ飯なし】

『なんだよ、それ』

【ネスティに聞いてくれ】

エイルはため息をつくと、アトルを睨んだ。

「だから、二人ともなぜそんな反応なんだよ。ダーク・アルヴが怖いのか？」
「いや、そんなことはないさ。俺は実はデュナンよりアルヴ、いや、アルヴィン系の方が好みだ。まあ、そんなことはないだろうが、もしもダーク・アルヴの可愛い子ちゃんに誘惑されたら断り切れないという自信はある」
「自信って……」
「考えてみろ。結婚するなら断然アルヴィンかダーク・アルヴだぞ。何せアルヴと違っていくら歳をとっても見た目はずっと若い娘のままなんだぞ。アルヴだとさすがに二百歳くらいになると老人っぽくなってくるからな」
「いや、デュナンは二百歳まで生きないだろ？」
「まあ、それを言っちゃおしまいだろ。あと、アルヴは気立てはいいんだが、本気でケンカすると流血沙汰になる可能性が高い。しかも一方的にやられっぱなしのような気がするしな」
「それは確かに」
「どちらにしろシルフィード人に限るな。誇り高い人間と添い遂げたいもんだ」
「アトルの結婚感はもういいよ。ダーク・アルヴ好きなら、一体リリアさんに対する態度は何なんだよ。ファルなんて汗を拭きながらアトルに聞けって逃げたぞ？」
「いや……まあ……それは……」
アトラックもファルケンハイン同様、流れ出した汗を拭っていた。
「くそ。レイン副司令殿は俺に面倒な事を押しつけたな」
アトラックは前方を歩くファルケンハインの背中を睨みつけたが、ファルケンハインはそんなアトラックの反応を知ってか知らずか、黙々と歩を進めるだけだった。
「まさかあの優しい笑顔は死体から剥ぎ取った皮で作ったお面で、それを剥がせば実はその正体は知能のあるスカルモールドだなんて言うんじゃないだろうな？」

どこかで聞いたような話だな、とアトラックは思ったが、それについては深く追求する事はせず、眉をひそめてチラリとだけエイルを見た。しかし質問に対しての答えはしばらくなかった。
「おいおい、まさか本当に？」
【ンなわけないやろ？】
『そうだけど……』
アトラックは微妙に歩く速度を落として前方を歩く本隊であるリリア達との距離を充分あけ、さらに風向きが軽い向かい風であることを確認した上で、らしくない低くくぐもった声でエイルに言った。
「俺が言ったなんて絶対誰にも言わないな？」
つられて思わずエイルも低い声で答えた。
「もちろん。マーリンの賢者の名に誓って」
そう言うと、思わずごくりとツバを飲み込んだ。
アトラックは小さく、しかし深いため息をついた。
「賢者の名に賭けて、か。そんなつまらん物に誓ってもらってもシルフィード人の俺にとっちゃありがたくもなんともないんだが。というかお前、そもそも賢者の名前なんて名乗ってないだろ？」
「……」
「まあそんな物はどうでもいいか」
【『つまらん物』ってなんやねん？あまつさえ『そんな物』って。おい、このくそアトル！】
『まあまあ、今はそんな事はいいじゃないか』
【『そんな事』って言うな！】
『はいはいはいはい』
【「はい」は一回や！】
『めんどくさい奴だな、お前』
【『めんどくさい奴』とかいうな！！】

気が進まない様子のアトラックが語り出したアプリリアージェの話はエイルとエルデにとって驚愕の事実であった。

だが、彼らはそれによって彼女の能力の一面を知ることができたのではあるが。

「うーん……この脂汗の説明をするのに一体何から話したらいいかな……」

アトラックは目をつぶってそう言うとおもむろに腕組みをした。

エイルは何も言わずに待った。さっきのアトラックの叫び声以来、チラチラとエイル達の様子をうかがうように振り返るシェリルやエルネスティーネの顔が見えたが、さすがにかなりの距離があるので、話している内容が聞こえるおそれはない。エルネスティーネなどは単なる天気の話題にさえ割り込んでくるほどだから、まるで好奇心の塊のような存在だった。エイルはもしこっちに来たらどうしようかと危ぶんだが、それはなかった。エルネスティーネにとって王宮の外の世界はまだまだ謎に満ちた遊園地のような物である。会話に加わりたがる気持ちはわかるが、今はできるだけ王女様の気を引くようなそぶりをしないことが肝要だった。

『もしこっちに来たら『男同士の秘密の話だ』と言って追い返すというのはどうだ』

【いや、それは逆効果やと思う】

『そうか』

【それこそ男同士の下ネタを微に入り細にわたって延々と解説させられるで】

『この作戦は今、封印した』

【賢明な判断や】

「そうだな、あれは司令が確か十七歳くらいの時かな。軍属になっ

て三年というところだ。で、辺境地域のスカルモールド討伐隊に志願した時の事だと思ってくれ」

当然ながらエイルとエルデの会話が聞こえないアトラックは、難しい表情を崩さずに少し長めの沈黙をようやく破って話し始めた。

「リリアさんはスカルモールド討伐隊にいたのか？」

エイルの質問にアトラックは短くうなずいた。だが言葉でその質問に答えることはしなかった。

「考え方や意見はいろいろあるだろうが、少なくとも言葉だけは通じる人間と違って、交渉もなにもできないスカルモールドと戦うというのはもっとも危険な作戦の一つだろうな。人間相手の作戦にくらべても兵の生還率はきわめて低い。全滅もたびたびあったみたいだしな。ま、言い換えればスカルモールドの討伐において戦功を上げれば出世は速いって事さ。だから危険だとわかっていても討伐隊への志願者は少なくないんだ」

「なるほど」

エイルにはその説明で十分理解した。

ル＝キリアが海軍籍の部隊だと聞いていたエイルは、スカルモールドの討伐部隊にアプリリアージェが居たということが疑問だったのだが、目的のための手段として選んだ道だと聞けば、それ以上詮索の必要を感じなかった。

シルフィードの軍隊は実力主義だという。実力を試すための機会は色々と設けられているに違いなかった。

「我らがリリアお嬢様は十七歳という職業軍人としては若すぎるその年齢にもかかわらず、『兵器』としての性能の高さをいかんなく発揮し、各地で次々と戦功をうち立て、あれよあれよという間もなく出世して行ったわけさ」

「兵器？」

「あの人は兵器さ」

「なるほど」

「そういう事だ」
「――十七歳か。今のオレと同じくらいの歳でけっこう出世していたんだな」
「え、エイル、おまえは十七なのか？」
「ああ。十七か、十八だ」
アトラックが驚いたように尋ねるのでエイルは不審げに答えた。
「てっきり俺は十三、四歳だと思ってたぜ」
「はいはい。よく言われるよ」

『いや、十三歳はさすがに初めてか』
【よしよし】
『よしよしじゃねえよ』

エイルはそう言うとあからさまに不機嫌そうな顔をして見せた。
アトラックはエイルの意思表示を素直に受け、それ以上エイルの年齢についてからかうことはせず、話を元に戻した。
「十七歳でそこまで出世というがな、もっと大げさに驚いていい話だぞ。入隊して三年程度なんだぞ？しかもシルフィードはドライアドなんかと違って入隊したら誰であろうと二等兵士から叩き上げないと出世できないんだぞ？」
「まあ、すごいとは思うけどオレはけっこう聞く話かと思ったんだけど」

【すごいやろ、普通に考えて】
『いや、その手の話は結構オレは知っているんだ』
【お前のおった世界、「ファランドール・フォウ」では普通なんか？】
『まあ、そういう物語はよくある』
【物語って】
『はいはい。オレは世間知らずですよ』

アトラックは気のないエイルの反応に小さくため息をついた。
「ここで思いっきり驚いてくれないと次の話に続きにくいんだがなあ」
「そうなのか？」
「もういいさ。でもフェアリーとは言え、当時のリリアお嬢さんはたった十七歳の小娘なんだぜ？俺が十七歳の時なんて……」
「いや、アトルの昔話は今度聞いてやるから」
アトラックは小さくため息をついた。
「何というか、エイル、お前さんは人をがっかりさせる才能があるな」
「そいつは、どうも」
「これは自慢でもなんでもないんだが……。いいか、この俺でもシルフィード軍では一応「異例の出世街道」をばく進中なんだぜ。俺と同じ歳の連中の中じゃ、佐官は俺くらいだし、若手期待の星とまで言われてるんだがなあ。ああ、もう、まあいいや。確かにリリアお嬢様と比べられたら俺なんて本当にただの人だしな」
「へえ、そうなのか？」
「ドライアドじゃ「アカデミー」って言う貴族専門の寄宿学校を出さえすれば、いきなり准尉から軍歴が始まる制度があって、若い士官はそれこそ腐るほどいる。さらに身分と金があれば地位はいくらでも買えるらしいが、シルフィードじゃそうはいかないんだ。過去の例を見ても、俺の歳で佐官なんてそうそういないんだぜ？まあ佐官って言っても微妙な立場にある特佐だけどな。と言うか、だ。賢者ならその辺の軍隊の階級制度の事情くらい詳しく知ってるんじゃないのか？」
『そうなのか？』
【そうや。スリーズ特佐は本人の言うとおり、シルフィードにおいてはあの歳で佐官って言うのは異例やな。たとえフェアリーや言う

たかてデュナンと言うことを考えると過去の記録を紐解いても、多分ほとんどおらへんやろ。リリア姉さんもあの気味悪い人形もアルヴィン系やし、ファルは純血のアルヴやし、その辺を考慮すると、アトルはホンマにすごいと言ってもええやろな】

『ふーん。アトルの事をちょっと見直した』

「で、だ」

アトラックは気を取り直して話を続けた。

「止せばいいのに目下売り出し中と言ったそのリリアお嬢さまにちょっとしたいたずらというか、いや、ちょっかいかな。そう言う事をしてやろうと考えた上官がいたらしくてな」

「ふーん。それで？」

「ここは『ふーん』じゃなくて、『ソイツ、よくリリアお嬢様にちょっかいなど出そうと思ったもんだな。バカじゃないの？』って突っ込む所だぜ」

「少女趣味の変態上官だったのか？」

「まあ、ダーク・アルヴの十七歳なんて俺達デュナン系からみたら、ほんの子供にしか見えないしな……とはいえ、別にダーク・アルヴであろうがアルヴであろうが、十七歳ならデュナンと同様、普通にもう子供を産める体だからな」

「そうなのか？」

「は？」

アトラックはエイルの顔をのぞき込んだ。

【おい！】

『ああ！またドジったのか、オレ』

「い、いや、続けてくれよ。だいたいオレ、リリア姉さんのこと、アトルと違ってあんまり知らないから、ちょっかい出したらえらい目に遭うなんて言われてもわかりっこないだろ？」

「ま、確かにそんなことも今だから言えるんだしな。もっともその時の上司も今だったらそんな馬鹿なこと小指の先ほども考えさえしなかったろうになあ……気の毒に……」
「気の毒？」
「ああ。その上司は『明日はいよいよ決戦だ』っていう前日の夜に司令の寝所に忍んでいったらしいんだ」
「それ、実話なのか？」
思わずエイルはデュナンとしては長身のアトラックの顔を見上げた。
「それって、つまり……」
アトラックはうなずいた。
「そうそう。いわゆる夜這いってやつだな。そういう行為は当然見つかれば軍法会議。見つからなければ何のおとがめもなしっていう扱いになっているんだが。もっとも誰かに見つかる、じゃなくて実際は相手が訴えればという事になるな」
アトルの話に、エイルは憤然とした口調で抗議した。
「オレは軍人じゃないからわからないけど、そう言うのって軍隊として乱れてるんじゃないのか？シルフィードは厳格な規律があり、一糸乱れぬ統率がとれた軍隊が特徴って聞いてたんだけど」
「その噂は間違っちゃいないさ。だがスカルモールド討伐隊なんて明日の命も知れないようなものだからな。ましてやあいつらと本当に戦う前の晩なんて明日は死にに行くっていう感じなのさ。だから、最後になるかもしれない夜に、なんというか、その、自分の命を確かめる行為は、まあ、言ってみれば公然の軍規違反として認知されてるんだよ」
「認められている？」
「認められていると言うと誤解があるな。当たり前だが軍規は認めちゃいない。だが、人間同士の方は合意しているというか、双方の合意があるものなら問題にされることはないということさ」
「大人の事情ってやつか」

「広い意味ではそういうことになるかな」
「まあいいや。それで？」
「その時の上官ってのがシルフィード軍では珍しい感じの将校でさ。色事に淡泊なアルヴじゃなくて欲望に忠実なデュナンってこともあるんだろうけど、女に対してかなり派手な噂のある男だったらしい。ま、簡単に言うとスケコマシ野郎だな」
「よくそんなで将校になれたな、そいつ」
「シルフィードは実力主義だからな。それなりに優秀なフェアリーの能力を持つ将校だったんだろうな。中尉だか大尉だか知らないけど」
「リリア姉さんはその時の階級は？」
「曹長か少尉じゃないかな。当時すでに小隊を持っていたらしいから、下士官以上なのは確かだ」
「十七歳で？」
「さっき言わなかったか？リリアお嬢様が軍属になったのは十四歳だぜ。シルフィード軍の所属資格は最低年齢が十八歳と決まってる。特例でも十六歳からなんだが、国王陛下の特別の許しで許可されたそうだ。リリアお嬢様の後ろ盾が王国軍で最高の地位にあるキャンタビレイ大元帥っていう、ものすごい人物だったという事もあるが、当の本人が周りの反対を説き伏せるだけの能力を持っていないとシルフィードでは例え王子でも特例は許されない。つまりリリアお嬢様のそれは本当に特例中の特例だってことさ。もっとも特例と言っても前例があったから国王も認めやすかったとは思うけどな。それに、その後、もっとすごい人も出てきてるし」
「リリア姉さんよりもっとすごい？」
「ふ……何を隠そう異例の出世街道をばく進中の期待の星である俺の今の直属の上官さ」
「あの人形か？」
「人形か。まあいいや。そのテンリーゼン・クラルヴァインというお方なんて十二歳で入隊を許可されたんだぜ？」

「マジかよ？」
　エイルは遠く前方を黙々と歩む、小柄な少年の後ろ姿を目で追った。常に誰とも近寄らずに一人でポツンと佇んでいるテンリーゼンはエイルにとって、いやもちろんエルデにとっても謎だらけの存在だった。

「やっと素で『すごい』って表情になったな」
「いや、もうそれは充分わかったよ。それにしても、一体今いくつなんだ？あんたの上官」
「十二歳で入隊して五年目だから、確か今年で十七歳じゃないかな？」
「え？あいつ、どう見ても十二、三歳かそこらにしか……」
「おいおい、俺の大事な上官をアイツ呼ばわりするんじゃございませんよ、賢者さま」
「オレの上官じゃないからな」
「まあ、あの人はただでさえ若く見えるアルヴィンの中でもさらに小柄な方だし、特別幼く見えるな。そういえば我らがシルフィードの宝石、ネスティだって確かあれで十七歳だったはずだぜ？結構大人っぽく見えるデュナンのシェリルと比べると年齢は二、三歳しか違わないのにずいぶん年が離れているように見えるよな。十二歳のルネより少し上くらいにしか思えないのは確かだけどな」
「うーん……ファランドールの人間ってわからないなあ」
「ファランドールの人間？」

【アホ！】
『あ……ごめん』
【もう遅いわ】

「いや、オレってほら、師匠のもとから離れたことなかったから、そういう一般的な常識には疎いところがあるんだよね」

エイルは愛想笑いを浮かべてごまかした。
「俺に言わせりゃ、全然わからないのは賢者様の方だけどね」
アトルは肩を竦めた。
「話を元に戻すと、その将校は女性兵士にかなり人気があったってことだ。相当な二枚目で、かつ強かったんだろうな。シルフィードの女性兵士は、強くない相手なんて見向きもしないからな。で、部下の中でも売り出し中の司令に手をつけて……じゃないか、なんというか、まあ、自分の物にしちゃって、いや、まあ、男と女の関係になってだな……その、ほれ、自分の相対的な地位を上げようとしたんだろうなあ。ま、単に見てくれのいい人気将校といい仲になって溜飲を下げようって思惑だったんだろうがな」
「何か、強い将校というより、救えないスケベにしか聞こえないけど」
「デュナンなんて救えないスケベばっかりさ」
「おいおい、アトルもデュナンじゃないか？」
「デュナンだからわかるのさ。俺達デュナンはその辺についちゃアルヴ系の種族とは根本的に違うと思う」
「そんなものなのか？」
「アルヴとデュナンの結婚は今ではそこそこ普通になってはいるけど、実際はあまりうまくいっている話は聞かないしな」
「離婚率が高いとか？」
アトラックは立ち止まった。
「おい、お前本当にマーリンの賢者か？」

【マーリン教は新教も正教も離婚は認められてへんねん】
『だから、そういう一般常識は初期段階でちゃんと教えといてくれよ』
【やれやれや。これ以上ボロ出されたらかなわんし、替わろか？】
『いや、いい』
【フン。勝手にせえ】

『なあ、エルデ』
【なんや？】
『オレ達の事、もう話してもいいんじゃないのか？』
【うーん。確かにそうかもしれんな。信じて貰える可能性は高いしな】
『だったら』
【いや、話すにしてもシェリルと別れてからの方がええやろ。かえってややこしなりそうや】
『そうか。そうだよな』
【その機会も選んだ方がええやろしな】
『お前に任せるよ』

「まあいいや。エイルが驚異的な知識と裏腹になぜか世間知らずな不思議少年だってのはわかってるしな。だいたいその辺を突っ込むのは俺の役割じゃない」
アトルはそう言うとエイルにウィンクして見せた。
「ダーク・アルヴやアルヴィンは俺達デュナンの感覚で言うとアルヴ以上に美男美女揃いなんだが、その中でも見たとおり司令はかなりの器量良しだし、第一無表情な人間が多いアルヴ系には珍しくいつもあの笑顔だしな。結構狙われてたんじゃないかな。そっちの趣味の連中同士で『誰が落とすか』なんて賭みたいな事をしてたのかもしれないが、まあ、その辺は俺の想像に過ぎないけど」
「軍って、前線でくだらない事やってんだね」
「軍人でもないやつにそういう風に切り捨てられると、軍人である俺としてはちょっと反論したいところなんだが」
「そんなことより、その後どうなったのさ？」
「翌日の早朝、その上官は部隊の宿営地の近くの森で死体で発見されたそうだよ」
「ええ？まさか……」
「いや、そのまさかなのさ。実際には発見された死体は黒こげで、

一体誰なのかもわからない程損傷がひどかったらしい。ただ、司令の上官が行方不明だったから、きっとその死体が上官なんだろうとされたわけだ。まあ、公式にはスカルモールドにやられた事になっている。だけど、やったのが司令だということはまあ、公然の秘密になっちまっているがな」

「黒こげって」

「言い直そう。『炭』だ」

【電撃やな】

『電撃……雷か？』

【リリア姉さんは普通の風のフェアリーやのうて、いわゆる亜種やな。超が付く風のフェアリーやと思た方がええな】

『雷って風のフェアリーが操れるものなのか？』

【雷は二種類の空気の摩擦で発生するんやから、風のフェアリーの領分やろ。もっとも雷を出せるフェアリーなんてあんまり聞いたことはないけどな」

「ああ、エイルは知らないんだったな。まあ、言っても問題ないと思うけど、司令は風のフェアリーの中でも特殊でな。雷を作り出せるんだ。もっとも滅多に使うことはないけどな」

「ふーん。で、リリア姉さんはその事で咎められたりはしないのか？」

アトラックは不思議そうにエイルをまじまじと見た。

「お前、本当に不思議なヤツだな」

「どういう意味だ？」

「いや、各国が取り交わしている通商や和平に関する条約を殆ど全文空で言える程の知識を持っているくせに、軍の一般常識程度の事を知らないんだからな」

「そうか？」

「軍じゃ、夜這いをして拒否した相手にたとえ殺されようともそれ

自体は罪にはならない」
「ひえええええ？」
「生きている証の確認の為の行為なんだぜ？シルフィード的には、それほど重い行為なんだから、それだけの覚悟を持って、それでもやるならやれ、と言うことさ。そもそも軍規違反だ。訴えられて軍法会議にかけられたら最悪二階級降格の上、極刑だしな」
「そんなに厳しい事なのか」
「言ったろ？命をかけた戦場だから誰も問題にしないんだって事。それに、そもそも夜這いなんて普通はその前にある程度の合意がある相手のところにしか行かないだろ？」
「あ、そりゃそうだよな」
「その上官は相当な自信家か呆れるほど傲慢なバカかのどっちかだな。女性兵士はすべて自分の誘いを断るはずがないと過信してたんだろうさ。もっとも、明日死ぬかも知れないという状況で最後の夜を一緒に、なんてとびきりのいい男に口説かれたら普通の場合は拒否はしないだろうさ」
「そんなものなのか？」
アトラックは複雑な表情を浮かべた。
「お前も一度体験してみるといいさ。スカルモールド討伐部隊がどういうものかを」
「――」
アトラックの吐き捨てるような言葉に、エイルはしかし答えなかった。

『嫌と言うほど体験してるんだけどな』
【ま、アトルの言うとおりあんまり積極的に戦いたい相手やないわな】
『確かに』

「一般的な部隊で、スカルモールド討伐を行った場合、無傷でエッ

ダに帰還できるところはまずないだろうな。少なくとも俺は聞いたことがない」
「ル＝キリアは、どうなのさ」
「ル＝キリアはスカルモールド討伐部隊じゃない。本来は北方の対海賊急襲部隊だ」
「スカルモールドとは戦わないのか？」
「戦うさ。戦うことになると言った方がいいだろうな。奴らと戦う事はル＝キリアにとっても簡単な仕事じゃない。奴らは人間じゃないんだからな。司令の力をもってしても無傷で帰れない事もあるんだ」

『だから、リリア姉さんの背中は傷だらけだったのか……』
【おそらくこいつらも傷だらけやろうな】
『そうだな』

「その時を境に、あの人はこう呼ばれるようになったのさ。「笑う死に神」ってな」
「あれ？」
「ん？」
「いや、なんでもない。そうなのか」
「もっとも敵方には「白面の悪魔」で通ってるみたいだから、死神っていうのは味方が付けた二つ名ってことになるな」

『本人から聞いた話とは違うよな？』
【いや、たぶんどっちも本当やろ。元々はあの入れ墨で死に神とか影で呼ばれとったんやろうけど、逸話ができたさかい、それがくっついて爆発的に広がったんちゃうかな】
『なるほどね』

「まあ、司令……いやリリアお嬢様に関するそういう逸話はいくつ

かあってさ。たとえば酔っぱらってリリアお嬢様の尻を触った兵士の手が雷に打たれて腕としては使い物にならなくなったとか、あの大きな胸を思わず鷲づかみにした他部隊の兵士の鼻を笑顔のまま電光石火で削ぎ落としたとか、後ろから抱きついてきた上官の足の甲に短剣を深々突き刺して足先半分切り落としただとか、そんな話は両手で数え切れないくらいあるんだぜ」

「悲惨な話だな」

「だろ？中でも一番可愛そうなのは」

「ああ、もうわかったから。それ以上はいいよ」

「なんだ、もっと恐ろしい話をしてやろうと思ったのに」

「リリア姉さんが好色漢に対して容赦無い、って言うのはわかったけど、でも真面目に好きだって言う人間を殺したりしないだろ？だったらファルケンハインやアトラックが姉さんとつきあうこと自体は問題無いんじゃないのかい？」

エイルの問いに、アトラックはやれやれという風に目を伏せて首を横に振って見せた。

「エイル」

「何だよ？」

「お前、やっぱり本質はガキだね」

「なんだと？」

「大人の男女のつきあいとか結婚とかってわかってないだろ？」

「そりゃ」

「だいたい、女と寝たことあるのかよ、賢者殿？」

「バカな事を聞くな。オレは聖職者だぞ？」

【は？】

『え？』

【聖職者と男女の関係がなんで一緒に出るんや？】

『いや、それはこっちのセリフなんだが？』

【ひょっとして】

『ひょっとすると、こっちの坊主ってのは子供作ってもいいのか？』
【子供作らな、後継者はどうなんねん？っつーか、フォウの聖職者ってのはそっちの方は禁じられてんのか？】
『禁じられているような、そうでないような』
【どっちやねん】
『宗教や宗派による、ような気がする』
【いや、もうええわ。お前と話してると頭痛がする】
『だから、俺が異世界の人間だって事を早く言えばいいだろ』
【はいはい】

「突っ込む所だよな、それ」
アトラックは不信感を隠そうともせずエイルの顔をのぞき込んだ。
「いや……出来たら流してくれ」
目を逸らすエイルを見て、アトラックは苦笑したが、それ以上は追求せずに話を続けた。
「いいか、例えばお前がネスティと結婚したとする」
「ええ？」
エイルは驚いて逸らしていた目を思わずアトラックへ向けた。アトラックはそんなエイルの頭をポンっと優しく叩いた。
「ばか、喜ぶな。たとえば、の話だ」
「ああ……うん」
「で、だ。お前はネスティを怒らせない自信があるか？」
「そりゃ、好きになって結婚したんだから」
「生涯ずっとか？何十年も怒らせない？全く？じゃあ、聞くがおまえさんとネスティが外を一緒に歩いてて、向かいからすこぶる付きの美人がやってきたとき、おまえさんその美人から目を背けられるか？一回じゃないぞ。一生だ」
「いや……」
エイルはアトラックが説明した情景を不覚にも想像して、うつむいた。

「たぶん……ムリかも」
「ふん。それでお前がその美人に見とれたとかそういうんじゃなくて、本当に単純に視線を向けただけであったとしても、だ。鼻の下を伸ばしたとカミさんであるネスティに誤解された瞬間、文字通り容赦なく頭上に雷が落ちて来るって考えたらどう思う？」
「まさか、普通それくらいでここまでしないだろ」
「ふ。司令……いや、リリアお嬢様は」
「リリアさんは？」
「怒ると髪の毛が逆立って、周りにバチバチと雷が走り回るんだぜ？」
「それって？」
「近くにいたら感電さ」
「いやいやいや……」
「ウソじゃないさ。俺も副司令……じゃなくてレインさんも何度も巻き込まれかけてるんだ」
「き、切れやすいのか？リリア姉さん？」
「いや、普段はお前の認識通りさ。あんな風ににこやかで柔和そうに見える人なんだが、それは感情がないって事とは違う。さすがにシルフィードの公爵というか誇り高いダーク・アルヴと言うか、自らの矜持を傷つけられるような事に対しては間違いなく腹を立てる。中でも恐ろしいのは時々前触れも無く、いとも簡単に切れるって事なんだよな」
「歩いてて突然ドン、バリバリって？」
「まさか。そうじゃなくて俺達にはわからないような点でお怒り状態になる事が多々あって、それがまさに瞬間沸騰どころか瞬間蒸発って感じでな。何度か死ぬほど恐ろしい目にあってるんだよ。クラルヴァイン副司令……じゃなくてリーゼがその場にいなければ、俺なんてもう何回かは死んでるさ」
「ひえ」
「そんな人とおつきあいするだの、ましてや結婚なんて。そもそも

俺なんて人並みに美人に弱いから、結婚式にたどり着くまでに命があるかどうか」
「歩く処刑台って訳か」
「ただ……」
「ただ？」
「直接手を出してきたヤツはともかくとして、司令ほどの人がなぜ感情を制御できないまま、持っている力を漏らしてしまうのかがどうにも不思議なんだ。それに」
アトラックはそこで言葉を切ると、前方を軽やかに歩くアプリリアージェの小さく揺れる黒髪を見つめてから、静かに呟いた。
「本来、司令は敵も味方も誰も傷つけたくないって思っているような人なんだけどな」
エイルはそれには答えず、アトラックと同じように、前を歩くアプリリアージェの小さく揺れる黒髪を眺めていた。
「じゃあ、リリア姉さんは今まで誰ともつきあわず、独り身を守っているって訳か」
「そうだな。でも、考えてもみろ。あの若さで中将だぞ。そんな浮いた事をやっている暇などなかったというのが本当のところじゃないかな。俺はリリアお嬢様が休暇を取った話すら聞いたことがない」
アトラックは同情とも尊敬ともとれるような口調でそう言ったが、すぐに言葉の調子を変えた。
「あ。そう言えば男とつきあったことはないが、意中の人はいるようだな」
「え、本当か？」
エイルは思わず尋ねた。
「誰なんだ、そいつ？よっぽどすごいヤツなのか？」
アトラックはエイルのその反応を見て満足そうな表情を浮かべた。
「知りたいか？」
「そりゃ、あのリリアさん程の人が好きになる男って言うのは知っときたいだろ？」

アトラックは大きくうなずいた。
「だよな。あの人の心を鷲掴みにする程の男とは一体どんなヤツなのか……そりゃ男としては興味あるよな」
「ああ」
「悪いが、俺も知らん」
「ちょっと待て」
エイルは眉をつり上げてアトラックを睨んだ。
「何だよ、それ」
「ははは。悪いな。なんでも数回会っただけの男に一目惚れして以来、ずっと心はその人のもの、と言う事らしい」
「誰に聞いたんだ、そんないい加減な話」
「残念ながら又聞きじゃなくて、これは俺が直接本人から聞いたんだから間違いない話さ」
「へえ」
「話によると、その男と会ったのは首都エッダの王立図書館らしい」
「図書館？と言うと軍人じゃなくて学者とか学生とかか？それとも内勤の後方支援の軍人？」
「いや、不明だ」
「不明って……おいおい、本人に聞いたんだろ？」
「リリアお嬢様もそのお相手の事は一体どこの誰だか、とんとわからないそうだ。少なくとも話を聞く限りでは、出会った当時は少なくとも軍人じゃないと思う」
「なぜそう思うんだ？」
「なぜって……そのお相手は当時十二歳だったリリアお嬢様よりもさらにお若かったらしいからな」
アトラックはそう言うと、いたずらっぽく笑って目配せして見せた。
「アトル！」
「おっと。ま、そう言うことだ。不思議な少年に出会ったリリアお嬢ちゃんは、その少年にもう一度会いたいんだとさ」

「やれやれ。何だよ、それ」
「何だよって言われても俺にもよくわからん。何せ酒癖のいいリリアお嬢様がワインの瓶を相当数空けた後に、いい気分になって必ずしゃべり出す昔話だからなあ。リリアお嬢様が酔っぱらう時分なんだから俺もレインさんもそん時ゃ相当『来てる』わけだし。まぁ、そんなこんなであんまり詳しい事までは誰もわからないのさ。だいたい本人に相手がわかっているくらいなら、もう会っているだろうさ」

その時一行は森から少し開けたところにさしかかった。
風向きが変わり、エイルは後ろからそっと押されるような一陣の風を背中全体にふわりと受けた。
「おっと。風向きが変わったようだな。この話はここまでにしよう」
「了解」
エイルはその話の続きをもう少し聞きたいと思ったが、アトラックに同意して短く答えると、少し歩く速度を上げて前を行く一行との距離をつめにかかった。

# 第四十五話　エレルアリーナ

ウーモスを出て三日目は、アトラックが格好の野営地を見つけたこともあり、行程は短く、早めの夕食となった。

いつものようにシェリルが淹れる食後のお茶が振る舞われる時間になると一同の間にほっとした空気が流れる。

そしてその空気に釣られたのかは定かではないが、夕食後、ハロウィンの要望でアキラが一同に横笛を披露することになった。

本来、楽器を鳴らす行為は、目立つ行動を取りたくない一行にとっては禁止行為の筆頭と言っていい。

こんにちまで歴史にその名を轟かすような大音楽家を輩出していない事実がそれを証明していると言えるが、アルヴ族にはあまり楽器を奏でたりする習性がない。その為にル＝キリア一行からはそういった要求が出る事は今までは一切なかった。つまり、彼らにとってそれは異例の催し物であると言えた。

あまりありがたくない輩に自分達の居場所を教えるような行為をアプリリアージェが許すはずはないとエイルは思っていたが、予想に反して一行の女「首領」は、例の笑顔で

「私からも是非」

と、快諾した。

簡易とは言え、エルデが使う精霊陣による結界は、人のしゃべり声程度は外に漏らさないようだが、さすがに周波数帯も全く違う、鋭く突き抜ける笛の音のような音は防げないと言う。アプリリアージェもアロゲリクでのスプリガンとの戦いの際にその説明をエルデから受けていたはずであり、それを知っていて、敢えて許諾したということになる。

エルデはアプリリアージェのこういう大胆な行為の意図をはかりかねたが、一応、狭い範囲ではあるが、精霊陣を二重に張っておくことにした。

【気休めやけど、ないよりはマシやしな】

加えてエルデは演奏に際し用心のために「魅了」や「催眠」に対する対抗ルーンを精霊陣に乗せておくことも忘れなかった。訓練や特性でそれらの精霊催眠系のルーンに耐性があるル＝キリアはともかく、他の人間が術にかかってはたまらないからだ。

エイルもエルデも口には出さなかったが、それはもう暗黙の行為だった。

そう。カレナドリィの一件を二人が忘れるはずはなかったのだから。

ファランドール最大規模と言われるエストリアの音楽祭で、一度ならずも賞を勝ち取った事があるというアキラの笛の音は、その「自称」に違わず見事なものだった。

銀を加工して作られたと思われる彼の奏でるデュナンの二の腕ほどの長さの横笛からは、およそ、その冷たい外観に相応しくない深く暖かく、しっとりと心に染みわたる音が紡がれ続けた。

その艶やかな音色はエイルの知る「ファランドール・フォウ」の楽器、フルートやピッコロといった一般的な小型木管楽器とは一線を画すもので、どちらかというと土で作られたオカリナや竹で出来た尺八のような丸い、優しい音色に思えた。

曲はもちろんエイルは一度も聴いたこともないものだったが、アキラが奏でる印象的な美しい旋律に、すぐに心を奪われていった。

演奏直前に配られた二杯目の紅茶が丁度なくなる頃、二つの主題からなる変奏曲風の演奏が終わった。アキラの唇が、銀色の笛から離れることにより訪れた静寂に引きずられるような沈黙が少しあり、その後そこここで深いため息が聞かれた。そしてやがてそれは拍手

に変わった。
「素敵でした。これほどの演奏は生まれて初めて聞きました」
アプリリアージェが感動を包み隠さずに述べ、アキラに頭を下げて礼をした。エイルもまったく同感だった。
「まるで平原の気持ちのいい風に吹かれて、青い空を眺めているような心洗われる旋律でした。是非もう一曲」
エルネスティーネも両手を胸の前で組んで、心底感動したという思いを満面に出して追加の演奏を所望した。
アキラの演奏は、シルフィード王国の王女の心も虜にしたのである。
「まだまだ未熟ゆえ、過分なお言葉を頂きますと増長してしまいますので、ほどほどに願います」
アキラは軽い冗談とも謙遜ともとれる受け答えをすると、にっこりと笑ってこちらも改めて一同に礼をしてみせた。
「その、今のは何という曲なのだ？」
ティアナが尋ねた。
「不勉強で、あいにくと曲名は知りませんが、サラマンダの山岳地方の羊飼い達の間で伝えられている求婚の歌だそうです。美しい旋律が心に残ったので、拝借して私なりに手を加えてみました」
「その旋律は『エレルアリーナ』だな。意味は知らんがそう言われている」
ベックが短い解説を付け加えた。

『お前、そのエレルなんたらの意味がわかるか？』
【誰に向かって言うてんねん。けっこうなまってるけど、元はディーネ語やな】
『意味は？』
【エッレ　レアール　ディナ　リーナ　が正しいディーネ語やと思うけど、まあ、意訳すると『あなたが欲しい』や】
『うわ。身も蓋もない意味だな。まあ、まさに求婚の歌って感じか』

【求婚っちゅうか、直訳すると、もうちょっと生々しい感じやけど……】

『ふーん』

その時、エイルは横合いですすり上げるような声に気づいた。気づいたのはエイルだけではなかったようで、全員が一斉に声のする方を見た。

一同の視線の先でシェリルが声を殺して泣いていた。

「シェリル？」

隣に座っていたエルネスティーネがいたわるようにシェリルの肩を抱き、どうしたの？という風に顔をのぞき込んだ。

「ごめんなさい。何でもないの」

一同は顔を見合わせた。

たった今喝采を浴びたアキラも困ったような表情をアプリリアージェの方に向けたが、生憎と女首領からの助け船はなく、ただ首を小さく横に振られただけだった。

「もう大丈夫です。すみません、失礼して先に休みます」

そう言うと袖口で涙を拭いながら、シェリルは自分の寝所に去って行った。ベックがそれを追おうとして立ち上がったが、予想通りティアナに制された。

『なんか、いたたまれないな』

【もう何日かしたら、ハロウ先生が海路でウンディーネのどこやらにおる兄貴のところに送っていくとか言うてたし、それまでの辛抱やな】

『いや、辛抱とかそう言う問題じゃなくて、だな』

【また悪い癖が出てるで。ル＝キリアやネスティと違うて、シェリルは俺らが関わってええ人間やないやろ】

『そうなんだろうけど』

【それともお前、行ってシェリルを慰めるとか出来るんか？】

『出来るわけないだろ。でも、オレ達がウーモスに戻ったあたりからこっち、全く元気がないのが気になるんだよ』
【確かに、前はもうちょっと笑顔とか見せてたな】
『だろ？』
【とは言え、や】
『ああもう、わかったわかった』

「今日はここまでにしましょう。アモウルさん、またの機会にお聴かせ願えますか？」
「ええ、喜んで」
「ところで、その笛に彫られているのは、クレストですか？」
アプリリアージェはアキラの手にある銀色の笛に彫刻された紋章をめざとく見つけていた。
「ああ、これですか」
笛を持ち上げると、アキラはその紋章が刻まれた部分を見つめた。
「これはクレストではありません。この笛は大会で賞を頂いた後、褒美としてペトルウシュカ公から賜ったのですが、公爵が勝手に彫られまして『お前の紋章にしろ』と押しつけられたもので、正式な紋ではありません」
「なるほど」
アプリリアージェは頷いた。所謂紳士録に載っている有名どころのクレストは彼女もおおかた覚えていたが、その白鳥を意匠にした紋章には見覚えがなかったのだ。
公爵から付与されたクレストだとすれば納得が行く。
ただ、紳士録に掲載されていない以上、「クレスト」と言うことはできない。この場合、「自らの徴」とでも言うしかないのである。
それは、シェリルの髪飾りに浮き彫りにされたリリエデールの花の紋章と同じものと言って良いだろう。公式なものではなく、その経緯こそが本人にとって重要なものなのだ。それはある意味親から受け継いだだけのクレストよりも時によっては重いものでもある。

「とても優美な紋章ですね。その意匠を創ったペトルウシュカ公爵という方には一度お会いしたいものです」
「首領なら彼も喜んでお会いになるでしょう。ぜひエスタリアへ足をお運びください」
「そうですね」
アプリリアージェは曖昧に言うと、にっこりと笑って白鳥の紋をもう一度見つめてから立ち上がった。
「さて、そろそろ明日に備えて英気を養うことにしましょう」

アプリリアージェの言葉が合図となり、アキラの演奏会はお開きとなった。
銘々、明日に備えて寝所に向かったが、ファルケンハインとティアナの二名はその場に残り、小さなたき火を前に並んで腰掛けた。見張りの当番である。
今までは一人ずつ交代で行っていたが、アキラが一行に加わった事により、アプリリアージェは二人一組体制に変更した。

「シェリルは、今の曲に何か思い出でもあるのだろうな」
木々の枝で周りを覆われた狭い頭上視界から、それでも無数の星が光る夜空を見上げながら、ファルケンハインがぽつりと呟いた。
ティアナはつられてその視線を追って上を向いた。森の木々の合間から見える空を二つに分断する煙のような星の河が見事に白い。そしてそのまわりにも無数の光が闇に散らばる様は、ティアナを妙に感傷的にした。
「サラマンダの山岳地帯はシェリルにとっては言わば地元。それにあの曲は求婚の歌だと言う事でしたね」
「そうだな」
「それに、あの旋律は美しすぎました」
ティアナのその言葉を最後に、二人はそれ以上シェリルの事については触れなかった。

エイルは自分にあてがわれた寝所で横になると、引きずり込まれるような睡魔に襲われた。ウーモスを出てからの気疲れのせいなのだろうと自らの睡魔を分析したエイルは、その誘惑に抗うことはせず、身を任せるように意識を遠のかせた。あっさりと眠りにつこうとしているエイルに気付いたエルデが、慌てて意識の回復をはかったが、それはむなしく失敗に終わった。

【しもたなぁ……うーん、でもまあ、しゃあないか】

まるで崩れ落ちるようなエイルの眠りには多少の違和感を覚えたものの、エルデ自身も疲労の蓄積を感じていたこともあり、あっさりとエイルの覚醒は諦めることにした。

エルデの敷く精霊陣の結界には一つ大きな欠点があった。

それは、術者の意識がなくなると消滅する、というものだ。つまり効果的ではあるが、長期継続は困難だということになる。アロゲリクの戦いの際は有事であり、強化ルーンの助けもあって眠らずに行動することができていた。だが、それでも数日が限度だったであろう。

つまり、エイルやエルデを眠らせる為には見張りが必須だと言いうことになる。またエルデほどのルーナーが精霊陣の力を借りなければならない結界と言うことは、それだけエルデの消耗が激しいことは容易に想像ができる。それを知らされている一行にとっても日常的においそれと使いたくはない術なのは確かだった。

結界を使った広範囲のルーンはそういう弱点があったが、エイル自身が普段眠る時に使う結界ルーンは別で、意識が無くとも効力があるものだった。もちろんそのかわり、効果の及ぶ範囲はごく狭い。まさに一人用と言っていいものだ。眠りにつく前にはいつもそのルーンを纏ってから横になることを習慣にしていた。それは長い間一人で各地を旅してきたエルデとしてはあたりまえの自己防衛であっ

たのだ。
だが、その夜、エルデはその一人用の結界ルーンをエイルの意識があるうちにかける事ができなかった。
少し思案したエルデだったが、次の見張り当番に当たっていたため、さほど長時間でもないと判断して、そのまま眠りにつくことにした。ファルケンハインとティアナが見張りだということで安心感もあったに違いない。言い換えるならば、無意識のうちに、エイルとエルデは彼らに信頼感を持っていたということになる。
だが、間の悪い時に限って小さな「うっかり」をするものだと言うことを、エイル達はすぐに知ることになった。

エイルが眠りについてからどれくらい経ったろうか。
夢も何もない、粘度の高い泥沼のような深淵にどっぷりと浸かったかのような眠りが、寝苦しさによって覚醒した。
かなり深い眠りから一気に現実に引き戻され、エイルの頭はまだぼうっとしたままで、寝苦しさの原因特定にまで頭が回らない状態にあった。
あたりは薄暗いが、眠る前に灯しておいた自光石セレナタイトの光がまだぼんやりと残っていて、エイルのささやかな寝床廻りを照らしていた。
アトラックが昨夜見つけた一行の野営地はなかなか豪華で、高い木で覆われた階段状の岩肌にいくつもの窟がある大昔の遺跡のようなものだった。
「古代宗教関連の祈祷窟か、もしかしたら鳥葬場だという説があるようです」と歩く図書館らしい知識をアトラックが披露していた。
エイル達はその窟の一つを自室よろしく使って眠っていたのである。
窟自体は一枚岩を根気よくくり抜いたもので、人一人ならそれなりにくつろげる程度の広さがあった。それはだいたいどの窟も同じような大きさで揃っていて、体のいい宿屋のようなつくりになって

いた。
窟の高さはエイルがかがんでなんとか動ける程度だから、アルヴの三人やデュナンにしては大柄なアトラックにはちょっと低いと言っていいだろう。

エイルはようやく自分がアロゲリク地方のその遺跡の窟で眠っている事を思い出すと同時に、寝苦しさの原因である違和感をはっきりと感知することに成功した。
原因は簡単な事だった。体が動かないのだ。
いや、正確に表現するならば、そういう状態ではない。誰かがうつぶせのエイルの背中に乗っていた。
―（誰だ？）

何とか体勢を変えようとした時、エイルの耳元で声がした。
「騒がないで」
エイルはその声で、背中に乗っている人物の特定が出来た。
相手が判明した事で、とりあえず無理に動くのはやめた。自分に危害を加えるような相手ではない事を知ったからだが、代わりに違う種類の不安が襲ってきた。
『エルデっ、起きろ。つーか、起きてるか？』
エイルが目覚めると眠っていたエルデもそれに呼応するのか、たいていは起きてくる。
【ん？見張り？】
頭の中のエルデの声に、エイルはほっとした。
『まずい状況なんだ』
【え？どうしたん？】
『オレの上に』
【うん？】
『シェリルが乗ってる』
【はあ？】

『言っておくが、オレは寝ぼけてないからな』

「ごめんね。ぐっすり眠ってたから」

シェリルには訪ねた相手がぐっすり眠っていたら上に乗る性癖があるのだろうか?と、エイルは一瞬そんな事を考えて現実逃避をはかろうとしたが、それはさすがに無理な相談だった。

シェリルの声を耳元で聞いたエルデが、状況を認識すると同時に、エイルの頭の中でものすごい剣幕で怒鳴った。

【説明せえっ!】

『無茶言うなっ』

【問答無用や。裸でこんな状態になってる言うのに、言い訳なんてできへんで。ウチが眠ってる間にお前は……】

『れ、冷静になれ。裸じゃないだろ?』

【あ……そう?】

『少なくとも上は着てるだろ。この状態だとそれ以外が見えないからそれ以上の事は不明だがな』

【説明せえっ!】

『だから、無茶言うなって言ってるだろ。目が覚めたらこの状態だったんだよ。いや、この状態になったから目を覚ましたのか。いや、そんな事はどうでもいい、どっちにしろ目を覚ましたらこんな状況だったから、慌ててお前を呼んだんだろうが』

【今まさに目を覚ましたところなんか?この状態で?】

『うん』

【起きたら、シェリルが背中に乗ってた?】

『うん』

【上に乗られるまで全く気付かずに眠りこけてたって言うんか?】

『うん。まったく気付かなかった』

【お前らしゅうないやん……あっ!】

『どうしたんだよ、急に?』

【しまった、一服盛られたんか】

『盛られた？』
【あっと言う間に眠りこけたからおかしいなって思てたんや。くそ、シェリルめ、眠り薬を紅茶に入れたんやな】
『あ、そう言えば夕べは異常に眠かったっけ』
【味覚がないのを知っているから、ある意味、俺らには何を入れようが味が変わろうが、関係ないもんな】
『お前のいつもの強化ルーンも最近手抜きだったしな』
【誰も信じるな。そして何も信じるな……。信じたとたんにコレや】
『……』
【それはそうと、お前さんの寝相が悪いのが幸いしたな。仰向けで寝てたら腹の上に乗られてたところやで】
『――反論したいが、それをしてはいけないような気がする』
【アホな事言うてんと、どうするんや？】
『だからそれを相談してるんだろっ』

「お願い。じっとしてて」
耳元でまたシェリルがささやいてきた。
いつもの落ち着いた優しいシェリルの声だった。声と一緒に柔らかいシェリルの髪が頬にかかる。
右側は耳の上の髪留めで留められているはずだから、今頬にかかった髪は左側の髪だろうか、とエイルは推測した。シェリルの口元との距離もわかる。少し顔を動かせば目の前にシェリルの顔があるに違いないと思うと、エイルの緊張はさらに高まった。
「シ、シェリル」
エイルは小さく声をかけた。
「こ、こんばんは？」

【うわっ。この状況下でその質問は空々しすぎるやろ】
『じゃあどう言えばいいんだよ。文句を言うならお前が代わってくれよ』

【いや、悪いけどこれはお前の問題やろ】
『お前がこういうヤツだってわかってるのに頼るしかない自分が情けない』
【なんやて？】

「ねえ、ルル……」
当然ながらエイルとエルデのやりとりなど聞こえないシェリルは、エイルの焦りなど我関せずだった。騒がずじっとしているエイルに安心したのだろうが、もともとその声には焦りや羞恥などは感じられず、静かなものだった。
「ルルデよね？肩の傷なんてルーンがあればいくらでも消せるもの。あの恐ろしい痣だって、あの後につけられちゃったのよね？」
「いや、シェリル」
「ずっと考えてた。あなたはルルに違いないのに、なぜエイルなんて名乗ってるんだろうって」
シェリルはそう言うとエイルの背中に抱きつくような格好で重なっていた。エイルには頬にかかるシェリルの髪の匂いはわからなかったが、シェリルの体温は確実に伝わっていた。
「シェリル。オレの話を聞いてくれ」
「私の話を先に聞いて」
エイルは上体を起こそうとしたが、シェリルに鋭くそう言われると力を抜いた。
「あなたはきっと誰かに記憶を消されたのよ。そして、嘘の記憶を植え付けられたの」

『そうなのか？』
【おいおいおい】
『お前ならやりかねん』
【えらい言われようやな】

「だから、お願い。思い出して。私よ。あなたのシェリーなのよ」
シェリルの声が鼻声に変わった。
それを受けてエイルが思わず声をかけようとした時、頬に熱いものが落ちてきた。
「ねえ。こっちを向いて、ルル」
シェリルはそう言うと、両手と両脚をエイルの体の上からずらして体を浮かせ、エイルが動きやすいようにした。
エイルは意を決して仰向けの体勢になった。当然の結果として、すぐ目の前にシェリルの白い顔があった。そしてセレナタイトのぼんやりした明かりに照らされてシェリルの姿が暗い部屋に浮かび上がって見えた。

もしかしたら、とエイルもその状況を想定していた。
だが、その予想が当たった事を知った瞬間、エイルは思わず目を閉じた。予想はしていたが、対処方法は考えていなかった。ただ、それ以外に選択肢が無かっただけだった。
アルヴスパイアのマントを羽織ったシェリルは、それ以外何も体に纏ってはいなかったのだ。見てはいけない、と思って目を閉じたエイルだが、それが失敗だったことを次の瞬間には知る事になった。目を閉じたエイルに、すかさずシェリルが覆い被さると、柔らかいもので唇がふさがれたのだ。

『!』
【!!】

「ちょ、ちょっと!」

【このアホっ!何してんねんっ!!】
『オレは何もしてないだろ』
【どうしてくれんねん、ええ?どうしてくれんねん!!俺、こう見

えても初めてなんやで！！】
『と、とにかく落ち着け。オレも落ち着くから』
【これが落ち着いていられるか！よりによって……】
『よりによって？』
【いや、何でもない……。いやいや、何でもないことないわっ！】
『だから落ち着いてくれよ。お前に狼狽えられると、オレはどうしたらいいんだよ』

エイルはとにかく慌てて目を開けると、シェリルを引き離した。引き離したはいいのだが、そうすると今度はシェリルの何も付けていない白い胸が目に入った。さらに慌てたエイルは、今度は目を閉じずに顔を明後日の方向に向けることで刺激的な視界を封じることにした。
「大丈夫、恥ずかしがらないで。私達はこういう事をしてたんだから」
「いやいやいやいや」

【この女っ！】
『頼む、落ち着いてくれ。不本意ではあるが、オレはこの世界じゃお前だけが頼りなんだから』
【黙れ黙れ黙れっ、このスキだらけ男！お前なんかサイッテーや。つーか、不本意って何やねん？】
『――そこかよ』

シェリルはしかし、またしてもエイルの予想を超えた行為にでた。目を逸らしたままのエイルの手をとると、それを自分の左胸にあてがった。エイルは掌に返ってくる感触で何が起こっているのかを悟ると思わず手を引っ込めた。
エイルのその反応を見たシェリルの顔が寂しそうに崩れたかと思うと、辺りの静寂が破られることになった。

「うあああああっ」
両手で顔を覆ったシェリルは、今度は声を殺さず、声を上げて泣き始めたのだ。
「なぜ？」
「シ、シェリル、頼むから落ち着いて話を聞いてくれ」
「ルルのばか！」
「いや、ルルじゃないんだって……」

「いったいどうしたんだ？」
狼狽えたエイルが、なだめようとシェリルの肩に手をやった時、不意にティアナが現れた。
ティアナはセレナタイトの灯りにボンヤリと浮かび上がるエイルとシェリルの状況を見て数秒間固まったかと思うと、慌てて回れ右をした。
「す、済まない」
「ティアナ、あのさ……」
「み、見張りの交代を告げに来たんだが、急に泣き声が聞こえたもので、その、覗くつもりはなかった。これは本当だ。だから許して欲しい」
「誤解だ、ティアナ」
ティアナにエイルがそう声をかけると、シェリルの泣き声が大きくなった。
「いやだから、これはその……そう言うんじゃなくてさ。だから、違うんだ」
「いや、成人した男と女の事に私はとやかく口を出すつもりはない。安心しろ」
「だから違うんだって。オレ達は話し合ってただけで……」
「いや、さすがにその格好で見え透いた言い訳をするのはよくない。男のくせにみっともないぞ」
「ええ？」

エイルは改めてシェリルと、そして自分の格好を見た。
「うわっ」
上半身は肌着を着ていたが、下履きが膝のあたりまで脱がされて、シェリル同様あられもない姿になっていた。ぼんやりとしたセレナタイトの光に映し出される自分の情けない姿を見て、エイルはがっくりと肩を落とした。

『なあ、思いっきり声を出して泣いていいか？』
【何考えてんねん、このアホんだら！】
『そうだな。アホンダラだ。もう幾らでも罵ってくれ』
【死んでまえっ】
『うん。いっそ殺してくれ』
【で、これ、どうすんねん？】
『どうしようもないだろ。オレはもう終わりだ』
【逃避したらあかん。しっかりせえ】
『どっちだよっ』

「いや、マジでこれにはいろいろ深い事情があるんだ。絶対ティアナが考えているような事じゃないから。まずはオレの話を聞いてくれ」
「どうでもいいが、時間は時間だ。お楽しみの所申し訳ないが、さっさと服を着て下りてこい」
「あ、ああ。すぐにいく。って、お楽しみじゃあないって！」
「それから、何を言っていじめたのか知らんが、ちゃんとなだめてやれ。それにシェリルにも早く服を着せてやらないと、結構冷えてきたから風邪をひくぞ」
「あ、ああ」
ティアナはエイルの言葉にはほとんど耳を貸さずにそれだけ言うと、あっと言う間に気配を消した。おそらく、もうたき火のそばに下りていったのだろう。

エイルは下履きをずり上げながら思案した。
シェリルは座り込んで泣いたままだった。

『なあ？』
【なんや？】
『いいこと思いついたんだけど』
【いいこと？】
『オレがこのままシェリルと一緒にいるっていうのはどうだ？』
【え？】
『だから、シェリルのそばについててやるんだよ』
【ルルデの代わりに、か？】
『そうだな』
【やめとき】
『やっぱりそれはダメか』
【わかるやろ？】
『じゃあ、もう一つの方法しかないな』
【もう一つの方法？】
『たぶん、お前にしか出来ない作戦だ』
【？】

「シェリル」
エイルはシェリルに優しく呼びかけると、落ちていたマントをシェリルに羽織らせて前を合わせてやった。
そしてそのままギュっとシェリルを抱きしめた。

【おい、エイルっ！】

頭の中で怒鳴り声がしたがエイルはそれを無視すると、両手をシェリルの肩に置いてゆっくりと引き離してから、優しく告げた。
「全部話す。オレの知っている本当のことを全部。だから、着替え

てたき火のところまでおいで」
シェリルは泣き腫らした顔を上げてエイルを見た。エイルはその顔をじっと見つめたままで声をかけた。だが、それはシェリルにではなかった。
「リリア姉さん、そこにいるんだろ?」

【え?】
『多分今来たところだ』
【ぜんぜん気付かんかった……】

「大きな泣き声が聞こえたので何事かと思ったんですが」
やや遠慮がちなアプリリアージェの声だけが聞こえた。エイルの言ったとおり、やはりすぐ側にはいるようだった。窟の中の状況を目撃されたかどうかまでは定かではなかったが……。
「聞いていただろ?リリア姉さんにも話があるんだ。見ての通り事情があって明日じゃなくて今すぐの方がいいんだ。できたらみんなにも……」
「そうですね。でも、起こす必要はなさそうですよ」
当然ながら泣き声は辺り全体に聞こえていたのだろう。既に他の一行も様子をうかがいに集まって来ているようだった。おそらく、アプリリアージェが中を覗かないように指示をしていたに違いなかった。
「来れるよな?」
エイルがそう確認するとシェリルは弱々しくコクンとうなずくと、マントの前を合わせて立ち上がり、裸足のままでエイルの窟を後にした。

【おい、何を考えてるんや?】
『協力しろ』
【その前に俺の質問に答えろ】

『今が、その時だとオレは思う』
【――まさか】
『協力しろ。オレはもう決めたんだ』

数分後。
何事だ？という顔で一同は焚き火を囲んで座っていた。もちろん視線はエイル・エイミイに注がれていた。
シェリルは少し遅れて現れたが、エイルが手招きすると少し顔を輝かせ、素直に隣に来て無言で座っていた。その様子をベックが心配そうにチラチラと見ているのをエイルはもちろん気付いていた。
一同の中には当然ながらアキラもいた。例の泣き声騒ぎで当然ながら目を覚ましており、たき火を囲む輪の中に座っていた。
その姿を認めたエイルは、最初にアキラに声をかけた。
「アモウルさん」
「ん？」
何の説明もなくいきなり名指しされたアキラはさすがに少し身構えた。一行の間で何かがあったらしいことは雰囲気でわかってはいたが、自分が関係しているとは露ほど思っていなかった。従ってエイルにいきなり声をかけられるのは想定外の事だったのだ。
「今、何か落としましたよ」
「え？」
倒木に腰掛けていたアキラは、エイルに言われて思わず足下を見た。焚き火で照らされている地面には、しかし何もない。

――（いったい何だ？）
そう思って顔を上げた瞬間、アキラの視界は闇に落ちた。疑問が生じる前にすぐに視力は回復したが、今度は強い睡魔に襲われた。
何が起きたのかを考えようとする時間もなく、アキラの意識は急激に混濁し、そのままるで底なしの谷に落下するように意識を失った。

「この人、隙だらけだな」
エルデはその場でがっくりと頭を垂れて意識を失っているアキラに近づくと、首筋に手をあてて脈を、そして顔を上向かせてまぶたを開き瞳孔を確認した上で、自分が羽織っていたアルヴスパイアのマントをそっとかけてやった。
「あの、これは一体どういう事ですか？」
それまで誰も何も口にしなかった中で、エルネスティーネがおそるおそるエイルに声をかけた。
エイルが儀仗から黒とも紫色とも見える光を放った後、掌を広げて短いルーンを唱えてアキラを眠らせたという行為そのものは目で見て理解していた。ただ、その行為に何の意図があるのかがわからなかった。
「これから、この人にはちょっと聴かれたくない話をするんだ」
エルネスティーネに簡単にそれだけを言うと、エイルはシェリルの方を見て声をかけた。
「今からオレが言うことは、本当の事だ。誰かの記憶でもなければ作り話でもない。それを、最後まで聴いてくれるか？」
シェリルは泣きすぎてはれぼったくなった白い顔を上げると、その珍しい鳶色の瞳でエイルの顔をじっと見た。自分をまっすぐに見つめるエイルの目に焚き火の炎が揺れていた。
「なかったわ」
「え？」
シェリルが何かを呟いたが、声が小さすぎてエイルの耳には届かなかった。いや、向きが悪かったのだろう。エイルは右の耳をシェリルの方に傾けると問い直した。
「傷が、なかったの」
「ランダールで見ただろ？オレに肩の傷は、ない」
エイルの答えにシェリルは首を横に振った。
「ちがうの。太ももの後ろ側……お尻の下あたりに傷があるのよ、

ルルは」

【そうか！】

『さっきのは……』

【うん。その傷を確かめに来たんやろうな。本人には見えへん場所や】

『それで下履きを脱がされていたってことか』

【でも、裸で来ることはないやろ？】

『思い出させるなよ』

【思いださへんように、お前の記憶を綺麗さっぱり消去したろか？】

『して欲しいよ、まったく』

「そうか」

「でも、さっき見たらなかったの」

「うん。そんな傷はない」

「なぜ？なぜ傷を消すの？」

「シェリル」

エイルはシェリルの両肩に手をかけた。

「これから、その話をする。だから聴いてくれ」

シェリルは目の前のエイルを見て、エイルの後ろにいるファルケンハインを見た。そしてぐるっとその場にいる全員を見渡した。そこにいる全員が心配そうな顔で自分の方を見ているのを、シェリルは理解した。

シェリルは再びエイルに視線を移すと、小さくうなずいた。

「ありがとう」

エイルはそう言うと、シェリルの肩に置いた手を離した。身長はエイルとあまりかわらないくらいのシェリルだったが、肩は比べものにならないほど細かった。

エイルは何かを決心するようにスッと大きく息を飲み込むと、意を決したようにゆっくりとしゃべり出した。

「オレの本当の名前は、エイル・エイミイじゃないんだ」
勿論、その一言でその場には言いようのない空気が流れた。
「え？」
「え？」
エイルの一言は一行に大きな動揺を生んだ。
思わず声を上げたのはエルネスティーネとティアナだった。
ファルケンハインとアトラックは顔を見合わせ、ルネ・ルーはハロウィンを見上げた。
しかし、エイルはその様子を横目でチラリとは見たものの、それには反応せずに無言で目を見開いただけのシェリルに向かって、話を続けた。
「これは嘘じゃない」

「ここは黙って話を聞きましょう」
アプリリアージェは小声でエルネスティーネにそう言うと、腰を上げかけていた金髪の少女の肩にそっと手をかけた。エルネスティーネはその言葉に素直にうなずくと腰をおろして膝を抱えて座り直した。そしてエイルの表情を見逃すまいと目をひときわ大きく開けて、その横顔を見つめた。
「それから、オレはファランドールの人間でもない」
「え？」
今度はシェリルも声を出した。
「信じられないかもしれない。いや、すぐに信じて貰えるとはオレも思っていないけど、でも本当なんだ。オレはフォウ……正確には「ファランドール・フォウ」とこの世界の人間に呼ばれている異世界から、何かの間違いで『こっち』へ迷い込んでしまった人間なんだ」

【ええんやな？】
『頼む』

【共犯……っちゅう事で】
『どうせお前とは一蓮托生なんだ』
【ふん、あんまり嬉しないな】
『そうか。でもオレはお前が居てくれて良かったと思ってる』
【ふん】

エイルは自分を見つめるシェリルの眼をじっと見ると口の中でほとんど聞き取れないような声で何かを呟いた。そしてすぐに普通の声で話を続けた。
「でも、実のところオレはこっちにやってきた時にフォウでの記憶がかなり抜け落ちている。本当の名前も思い出せない」
少しずつ区切って喋り、シェリルの様子を見て、そしてまた話を続ける。
その繰り返しでエイルは自分の存在の唯一性をシェリルに理解して貰おうとしていた。
「都合のいい話なんだけど、重要な所はほとんど覚えていない。でも、どうでもいい記憶は鮮明に残っていたりするんだ。間違いなくオレはこのファランドールの人間なんかじゃない。それは間違いない」
一行は押し黙って、エイルの話をじっと聞いていた。
「オレはだから実は賢者じゃない。そもそもオレはルーンなんて使えないんだ。オレはフォウではこのファランドールで言う「剣士」だった。だからここでも剣は使える」
少し話すとまた、小さな声でエイルは何かを呟いた。
つぶやくのはエイルではなく、実はエルデだった。エイルの会話の間に、エルデが周りに気付かれにくいようにルーンを唱えていた。何度も。何度も。
「でも、あなたはルーンを使っていたじゃない。今だって」
そう言ってシェリルは眠っているアキラの方を見た。
「だな。あれは間違いなくルーンだ」

「どういう事？」
「かけたのはオレじゃない」
「オレじゃない？」
オウム返しのシェリルの問いにエイルはうなずいた。
「ここからはエイルに代わって俺から説明するわ」

『後は、頼む』
【フン。そもそもの予定が大狂いやけどな】
『予定なんかしてなかったくせに』
【抜かせ。俺が立てた綿密な計算は、リリア姉さんの秘密と引き替えに小出しにしていく、っちゅう壮大な……】
『リリア姉さんの秘密？』
【例えば……せやな。あれだけ大量に呑んだワインは一体あのちっちゃい体のどこに入ってるんやろ、とか】
『はいはい。確かにすごい秘密だな』

エイルの口調が一瞬でガラリと変わった。
よく観察すると、表情も少し違う。いや、そもそも纏っている雰囲気が全く別物と言えた。それがわかるものには敏感にわかるのだ。
エルデは普段、それを極力隠すように振る舞っていたが、今は隠す必要はないと判断したのだろう。そこにいる誰もが「エイルとは違う人間」をそこに認識していた。
エルデはチラリとアプリリアージェの方を見た。確認するまでもなくアプリリアージェをはじめ当然ながら全員の視線はエイルに集中していた。
もちろん、もう誰もがいったい何の為にエイルがわざわざ夜中に全員を招集したのかなどと疑問に思いはしなかった。
「リリア姉さんは多分気づいてたと思うけど、俺はこいつ、エイル・エイミイとは違う人格や」
そう言ってエルデは右手の人差し指で自分自身の顔を指さして見

せた。
「違う人格ですって？」
エイルの言葉を、シェリルがぼんやりと繰り返した。
「わかりやすう言うと、一つの体を二人で共有してるって感じや。念のために言うとくけど、この体は俺のやのうてエイル自身の体や。つまり、俺がエイルの体を借りてる形やな。あ、それからエイル・エイミイという名前はこいつがフォウからファランドールに来た時に自分の名前を思い出されへんっちゅうて泣いてたから、俺が憐れんでわざわざ付けてやった名前や。本人もこの名前が大のお気に入りなんはみんなも知っての通りや」
『ウソを言うな、ウソを』
【最初はホンマに気に入ってたやろ？せやからウソやない】
『うう……』
「エイルはフォウの剣の使い手。俺はファランドールのルーナー、エルデ・ヴァイス。俺達の正体は以上、や」
「あなたはルルじゃ……ない？」
エルデはシェリルの目をじっと見つめたままで大きくうなずいた。
「しつこいようやけど、俺の方からも言うとく。こいつは間違いなく俺が手違いでフォウからファランドールに引っ張って来てもうた異世界人で、ルルデとは徹頭徹尾、首尾一貫、正真正銘、公明正大、ついでに頭の先からつま先までまったくの別人や」
『お前、もうネスティにツッコミ入れられないぞ』
【アレはアレ、これはこれや】
『いや、意味がわからん』
「でもほら、こんなにそっくりなのに？」
シェリルは右手を伸ばして、エイルの頬に触れた。エルデはそれ

を制するでもなくされるまま、首を横に振った。
「そっくりかどうかは俺もエイルも知ったことやないけど、少なくともこいつは二年前まではフォウで違う名前を名乗って、のほほんと暮らしていたボンクラ学生や」

『知らないくせにボンクラとか言うな。それからのほほんと暮らしてたかどうかも知らないくせに』
【言葉の綾や】

「学生？」
「エイル本人がそういうてるからそうなんやろ。当然やけど、俺は見てへんから知らんけど」
「でも、剣士って言ったよね？」
「剣士は剣士でも兵士やない。本人のあやふやな記憶やと、競技剣士やそうや。ファランドールと違うて、フォウには戦争や殺し合いはない、みんな仲良く暮らすこの世の楽園みたいな世界なんやそうや。まあ、ただし、エイルの記憶やとフォウにはデュナンとピクシィしか居らへんみたいやけどな」
「シェリル、ちょっといいかい？」
口をはさんだのはハロウィンだった。
エイルにではなく、シェリルに声をかけた意図は、エルデに声をかけても先ほどのエルネスティーネのように無視されるかもしれないと考えての行動だった。
シェリルは案の定反応してハロウィンに顔を向けた。
「ハロウ先生？」
「その……何だ。異世界フォウについてはいろいろな説があるんだが、そのうちの一つに並行世界説というのがある。二律世界とも言う。時間の流れや世界の法則がずれた二つの世界が同時に存在しているという説なんだが、その説にはそっくりな人間が両方の世界に同時に存在しているというものがある。双子なんかよりよほど似て

いるエイル君の場合はそれなのかもしれない」
「並行世界……」
シェリルはそう呟いて視線をエルデに戻した。
「そっちの方は専門やないから俺からは何とも言われへんな。言うとくけどエイルに聞いても無駄やと思うで。ただ、その説は当たってるんかもしれへん。エイルは時々初対面の人間を見てどこかで会った事があるって言うてきかへん事があるからな。ひょっとしたら俺やシェリルそっくりな人間が異世界ファランドール・フォウにも居てるんかもしれへんな」
エルデはそう言うと、そこで一旦言葉を句切った。シェリルがどう反応するかを見る為だが、先ほどから細かく幾重にもかけていたルーンの効き目を確認する意味もあった。
静寂が訪れた。エイルとエルデを除いて、その場にいた全員が、今聞いた事をそれぞれの持つ常識と戦わせながらどうにか咀嚼しようともがいている状態とも言えた。
質問は山ほどあるだろう。エルデはもちろんそれも予想していたが、エルデ自身は質問に対してあまり多くを語るつもりはなかった。明かすわけにはいかない事柄がまだまだ多すぎた。
「いつか話してた妹さんも……フォウにいる妹さんなのね」
エイルはうなずいた。
「うん。マーヤはフォウにいる人間だ。だからオレはフォウに帰る為にエルデとこうして旅を続けているんだ」
「あなたは、エイル？」
「うん」
「エイル・エイミイ？」
「うん」
「そして、エルデ・ヴァイス？」
「うん。この中にいる」
エイルはエルデと同じように自分の頭を指さした。
「じゃあ……」

シェリルは一変、眉根に皺を寄せるとエイルの襟廻りを両手で掴んで立ち上がった。
「じゃあ、ルルデはどこなの？」
「シェリル」
「私は聞いたのよ、リリアさんに。ルルの体は見つからなかったって」
「え？」
エイルは思わずアプリリアージェを見た。いつもの笑顔がそこにあった。
視線が合うとアプリリアージェは小さくうなずいて見せた。

『えーっと』
【シェリルのご乱行の原動力はあのオバハンの入れ知恵やった、っちゅうわけか】
『本当にあの人は……』
【いらんことを】

「シェリル」
アプリリアージェはシェリルに声をかけた。もちろん、それはエイルから睨まれたから、といういわけではないだろう。
「やはりルルデはあの時消滅したのでしょう。死体が見つからないのはもしかしたら異世界にのまれてしまったからなのかもしれません。今まで懐疑的でしたが、異世界が本当にあるのならそう言うこともあるということなのでしょう」
「じゃあ、ルルデはフォウに居るかもしれない」
「いいえ」
アプリリアージェは静かだがきっぱりとした口調で続けた。
「ファランドールで消滅したにしろ、フォウにのまれたにしろ、どちらにしてもそれは死体がどこにあるかというだけの話なのですよ。彼はもうどこにもいないのです」

「でも、リリアさんもこの人がルルデかもしれないって……」
「ええ、言いました。でも私が考えていたのはシェリルとは少し違う事です。一体どうやって死人が甦ったのだろうか、という事なのです。いえ、誰が甦らせたのだろうと言うことでしょうか。そういう呪法もしくはルーンが存在するという伝承がありますから、エイル君の場合がそれに当てはまるのかも知れないと思ったのです。でもそこにいる瞳髪黒色の少年が甦ったルルデの死体ではないのだとしたら、答えは一つしかありません」
そこまで言うと、アプリリアージェは一端話を区切り、口調をがらりと変えてから、こう続けた。
「もう一度だけ言います。ルルデ・フィリスティアードはあの時私が殺しました」

『え？』
【話が違うな】
『オレが見たのは微妙に違うものなのか？』
【あ、いや。多分これはリリア姉さんの十八番やろな】
『十八番？』
【相手の注意は一カ所に集中、やな。対処はその方が簡単や。リーゼをこの話に巻き込んでややこしくしたないんや、きっと】
『なるほど、ここでも戦術、か』
【念のために言うとくけど】
『わかってる。夢の話は誰にも言わない。いや、言えないよな。言ったら話はさらにややこしくなる』
【お。ようやく「わかってきた」感じやね】
『何だよ、それ』

エイルの襟元を掴んでいたシェリルの手から力が抜けた。そしてシェリルはそのままストンとその場に座り込んだ。たき火の明かりが、うつむくシェリルの横顔を赤く照らしていた。

「私……何だか、疲れちゃった」
「せやな。色々あったさかい、今日はもうゆっくりお休み。明日ゆっくり考えたらええ」
エルデはエイルの声を使い精一杯優しい声でそう言うと、シェリルの頭にそっと手を置いた。するととたんにシェリルは、操り人形の糸が弛んだように、がくんと頭を垂れると、その場に崩れ落ちた。
「おい、何をした」
それを見ていたベックがたまらず駆け寄ると、動かなくなったシェリルを抱きかかえた。エルデは自分を睨むように見上げるベックを見てその目を細めた。
「大丈夫や。眠ってるだけやから」
「なんでルーンで無理に眠らせる必要があるんだよ」
「ベック、待ちなさい。今のは的確な判断だ」
ハロウィンは穏やかにベックをたしなめると、ルネに目配せをした。ルネはうなずくとシェリルのそばに来た。
「今夜はウチらが側についとクさかい、大丈夫ヤ」
ベックはルネにそう言われて視線をルネからシェリルの寝顔に移すと、しぶしぶながら小さなルネの腕にシェリルを預けた。
それを見届けたエルデは体の正面をたき火の炎の方に向けて、あらためて一同を見渡すとニヤリと笑った。
「さあ、質問を受付よか。……もっとも」
そしてこう続けた。
「まだ答えられへん事の方が多いけど、な」

# 第四十六話　鳶色の瞳のシェリル

いつものようにアトラックとシェリルが用意した朝食を食べ終わると、エイルは全員の出発の準備が整うまでの時間を、一行から少し離れた場所に座ってぼんやりと過ごしていた。

遠く連なるノーム山脈を見つめる彼の片手には、空になったカップがぶら下げられていた。

すっかり明るくはなっていたが、まだ昼星は顔を出してはいない。秋に入り、早朝の山間はかなり冷え込んでいて、エイルも例のアルヴスパイアのマントを羽織って寒さを防いでいた。

頭上を覆う木々のおかげで朝露がそれ程ひどくないのが救いだったが、そのおかげで一行の野営地はいい景色に恵まれているとは言い難かった。

そんな中で、エイルはめざとく枝葉の間から遙か稜線が臨める場所を見つけて、そこに座っていたのだ。

今朝は起きてから、エイルはずっとシェリルの事を考えていた。

昨夜エルデのルーンで気を失ったシェリルは、ハロウィンとルネのもとで一夜を過ごしたようだったが、今朝顔を見た限りでは普段と変わらぬ、つまりは一応元気そうな声で普通に挨拶をしていた。

いや、普段の通りと言うには語弊があった。

その朝のシェリルはウーモスを出発してからこっち、ずっとふさぎ込んでいたシェリルとは違い、それ以前……ランダールからウーモスへ向かう旅でのシェリルに近かった。エイルは久しぶりにシェリルの笑い声を聞いた気がしていた。ルネやエルネスティーネ達と交わす、エイルにとってはあまり意味があるとも思えない他愛の無い会話も以前のように耳にした。

『なんか、ちょっと拍子抜けだ』

【お前が望んでた状態なんやろ？】
『いや、納得して貰えたのかどうかがわからないからちょっと釈然としないんだよ』
【まあ、「ご理解いただけましたか？」とか聞きに行きにくいのは確かやな】
『今になって見ると、夕べのことは後悔してる』
【全くお前さんはやってもうた事をいつもズルズル引きずりすぎや】
『人間なんてそんなもんだろ。だから『後悔』なんて便利な言葉ができるんだ』
【まったく人間って奴は】

「ちょっといいか？」
人が近付いてきたのに気付かなかったエイルは、声に驚いて顔を上げた。そこには白い髪を無造作に後ろでまとめた女アルヴが立っていた。
彼女はエイルと目が合うと、その視線をすっと逸らしてバツが悪そうにうつむいた。
「ティアナさんか。何だい？」
「その……今は、エイルか？それとも」
ティアナは顔を背けたままでそう尋ねた。
「は？……ああ、うん」
そう。ティアナは今どちらが表に出ているのかを尋ねたのだ。ただし、ティアナは少々思い違いをしていた。エイルとエルデには表や裏は基本的にない。体の支配権は変化するが、どちらかが表に出ているときに片方は眠っているわけではなく、眼と耳と口は共用できている。つまり、両方に意識があればそれは両方に対して語っていることになる。
「基本はオレだと思ってくれていいよ。これはオレの体だし」
「そうか。改めて意識すると、相手がどちらかわからないと喋りにくいものだな。簡単な見分け方はないのか？」

「そうだな。しっぽが出てるときはエルデだ」
「なんと！しっぽまで生えるのか？」
ティアナの反応に、エイルはがっくりと肩を落とした。

『しまった。そうだった』
【踏んでもうたな】

「しっぽは生えない」
さかんに後ろ側を気にしているティアナに、エイルは気の毒そうにそう声をかけた。
「今のはウソだ。ごめん」
「なんだと？ウソをついたのか？」
「うん。だからごめん」
「お前はひどいヤツだな」
ティアナは少し残念そうに批難した。
「本当の見分け方だけど、オレは古語で喋れないから、古語の時はエルデだ」
「だが、エルデは古語だけじゃなくて普通の言葉も喋るじゃないか」
「うーん、オレ達と居るときは出来るだけ古語で喋るようにしてもらうさ。もともと地の言葉が古語らしいからな。あと、「オレ」の時はオレで、「俺」だとエルデだ」
「――それはどう違うんだ？」
「いや、ホラ、カタカナのオレがオレで漢字の俺だとエルデなんだけど？」
「言っている意味が全くわからん」
「そうか？まあいいや」
「まあ、リリアさんは雰囲気が違うからすぐ解ると言っていたが……」

【さすがに能力高いな、リリア姉さん。幼児の時から近衛軍に目え

付けられてたのもうなずけるわ】
『オレ達ってそんなに雰囲気変わるのか？本人は気づいてないけど』
【目つきが悪いのがお前で、やんごとない雰囲気が俺やな】
『そいつは、さぞわかりやすいこって』

「そんなことより、何か話があるんだろ？」
エイルがそううながすと、ティアナは頷いた。
「ちょっと長くなるかもしれない。隣、いいか？」
相変わらずエイルとは面と向かって視線を合わせようとはせずにティアナはそう言った。エイルは座っていた倒木から腰を上げると、少しずれてティアナの場所を空けてやった。
「珍しいよね、ティアナさんからオレに話しがあるなんて」
「その、ティアナさんっていうのは止めてくれ。ティアナでいい」
「ああ、うん」
「その、まずは夕べのことだが……」
「夕べ？」
「完全に誤解していた。すまん」
「あ……」
エイルは夕べの窟での一件を思い出して一気に顔が上気した。

『ヤな事思い出させてくれるね、このヒト』
【ティアナ姉さんの空気の読めなさは向かうところ敵無しやからな。俺は王女さまを超えてると見てる】
『確かに』

「いや、あれはマジで忘れて欲しいというか、おなかいっぱいですというか」
「王国軍ではたまにある事のようだが、近衛軍は基本的に内勤になるので私はその、偶然ああいった行為を目撃した事は初めてで、気が動転してしまった」

「いや、だからもういいって」
「そうは言うが謝るべきところは謝らないとこちらの気が済まないのだ。謝罪する」
「そうか。じゃあ謝罪が終わったってことでその件はこれまでにしよう。うん、そうしよう」
「そうだな。でも、シェリルがあれほど豊満な胸をしているとは予想外だった。普段はみんなゆったりした上着を羽織っているからわからないしな」
「ウーモスで確か一緒に風呂に入ったんじゃなかったっけ？」

『って、オレは何を言ってるんだあああ』
【アホ】

「いや、あの時は……その……」
ティアナは口ごもるとうつむいた。みるみる顔が上気していった。

【スカタン。そこは突っ込んだらアカンやろ。ほら、あの時はファルも何処かに消えてしばらくおらへんかったやろ？】
『ああ……。って、ええっ？もしかして二人だけで一緒の風呂に？』
【アホっ！混浴は混浴でも岩の蒸し風呂に決まってるやろ？あそこは全員タオル巻いて入る事になってたやないか】
『ああ！なるほどぉ！』
【「なるほどぉ」、やないわ】

「あ、いや、だからそう言う話はもう止めようよ」
「うむ。そうだな。ただ、アルヴはデュナンに比べると乳房があまり発達しないから、ああいう大きな乳房を見ると珍しくてつい見とれてしまった」

『オレはこの人、リリア姉さんとは別な意味でものすごく苦手だ…

…』

【いわゆる「天然」やな、こいつ】

『天然というより、アホだろ』

【あのファルといったいどんな会話しているんやろな】

『聞いてみたいような、聞くのが怖いような……』

「いやいやいや、本当にもういいから」

「そうか。謝罪を受け入れてくれるのだな。感謝する」

「感謝してくれなくてもいいって」

「それで話は変わるが、お前の方はあれで平均くらいなのか？」

「は？」

『えええええええっ？？？』

【ルーンで黙らせたろか？】

『いっそ殺してもいいぞ』

【そんなことしたらファルに寝首かかれるけど、ええんか？】

『いや、勿論冗談だから』

「この通り、こっちが謝るから、その話はもう止めて下さい」

「そうか。じゃあこれからが本題なんだが」

『今のは前振りかよ。こっちはもう精神的にヘトヘトだ』

【素で危険物やな、この姉さん】

『実は俺達の中だとティアナが最強なんじゃ？』

「シェリルの事だ」

ティアナは少し声の調子を落として話しだした。

「ウーモスからこっち、すっかり元気がなかったのには気づいていたな？」

「ああ」

勿論気づいていた。ただ、何が原因なのかはわからなかった。漠然とルルデと自分に関係していることかもしれない、くらいには思っていたが……。

「私が原因だ」

「と、いうと？」

エイルは思わずティアナの顔をのぞき込んだ。

「お前達がアロゲリクの渓から帰るのを待つ間の事だ」

「うん」

「お前の事をルルデと重ねて引きずっているシェリルを、私がきつく罵った」

「ええっ？」

【全方位的に空気を読まへんという一貫した主義主張に行動までも伴ってるわけやな。ここまで行くとむしろ好感が持てるな】

『いやいやいや』

「死んだものの為に生きている者が自分で自分の精神を追い詰めるなど馬鹿げている」

「はあ」

「それだけではなく、シェリルは現実を直視しようとしていない。むしろ現実をねじ曲げようとしているように見えた」

「うん」

「あまつさえエイルがネスティと親しく話をしている際、ネスティを射るような目で睨む事も一度や二度ではない。お前は気づいてなかったのか？」

「うーん、それは……」

「さらに言えば、シェリルに色目を使うような輩が現れた。あのベックとかいう調達屋だ。だが、シェリルは愛想良く接しているようで、あからさまに相手の目を見もしない。それでさすがに私も堪忍袋の緒が切れた、と言うわけだ」

「は？」

『途中までは理解しているつもりだったけど、最後のでオレは今混乱状態なんだが』

【安心してええで。俺も同じや】

「だからシェリルを呼び出してつい言ってしまった。『お前はここにいるべきじゃない』と。それで、泣かしてしまった」

「いや、何でそこで切れるのかわからないんだが」

「そんなもの、仲間だからに決まってる」

「え？」

「私はシェリルの事が好きだ」

「はい？」

「確かに初めて会った時は、こういう旅に戦力にも何にもならないただの民間人が何を勘違いして加わっているんだと思っていたが、旅をしてみていろいろとわかった。国王陛下が私に護衛ではなくネスティの旅の仲間になれと命じて下さった意味も、シェリルを見ていると少しわかった気がする。シェリルの穏やかな包容力というか、年下のはずなのにまるで私の母親みたいな事を言っていろいろ気に懸けてくれたり……そして色々と話をしたり彼女がネスティやルネと話をしているのを見たり聞いたりしているうちに、どうにもシェリルが好きでたまらなくなった。私の中では、もうかけがえのない仲間だ」

「だったらなぜ？」

「お前はシェリルがどんな状態でも、同情して見過ごせと言うのか？」

「いや、そんなことは言ってない」

「ランダールでお前に会ってからだ、ふさぎ込むシェリルを見ることが多くなったのは。ネスティや私が詳しいシェリルの事情を知ったのはあの出会いの時の事件の後だったが、だから何だというのだ

？」
「ティアナ」
「呼び捨てにするなっ！」
「さっきそう呼べって言っただろっ？」
「あ……ああ、そうだったな、すまん。ティアナでいい」

『オレ、もう嫌だ』
【気持ちはようわかる】

「私は正直にいってこういう事に慣れていない。だから失敗したのだと思う。あれ以来、シェリルはどんどんおかしくなっている」
「うん」
「しっかりして欲しいのだ。シェリルはもう充分悲しんだはずだろう？何も悪いことはしたわけじゃない。だからもう楽になっていいはずだ。でも、エイル。お前がシェリルの側にいると、あの子は壊れていく」
　エイルとエルデはようやくティアナの気持ちが理解できた。思いがわかってみればそれはするりと喉を通って体と心に染みた。
「シェリルはこの後、我々と別れてウンディーネで兄と落ち合うと聞いているが」
「うん」
「シェリルとは離れたくない」
「そう、か」
「かといってシェリルをこのまま危険な旅に同道させる事はもっと辛い」
「うん」
「それに、同道させるならさっき言ったようにお前が邪魔になる」
「だよな」
「さらに困ったことに、私はお前のことも結構好きになっている」
「え？」

「お前も、もう一人の賢者の方も、だ。最初はうさんくさくて危険な奴だと思っていたが、お前達はものすごくいい奴だった。まあ、お前はともかく賢者の方には性格に多少問題があるとは思うがな」
「ごもっとも」

【お前に言われとうないっ！】
『同感だよ』

「お前はネスティに必要だ。いや、我々に必要なすごい奴だ。だから、やっぱりシェリルを送り出すべきだと思う」
「――」
「でも、私は出来れば元気なシェリルを笑って見送ってやりたい。私の言いたいことはそれだ」
「そうか」
エイルは思案した。
言うべきなのかどうか。
だが、それを察したようにエルデが心の中で釘を刺した。

【言うたらあかん】
『うん。そうだな』
【少なくともティアナだけには言うたらあかんって、今確信した】
『わかるよ』

「ベックはいい奴だと思うよ」
エイルは少し間を開けるとそう言った。
ティアナはうなずいた。
「さっきはああいう言い方をしたが私もそう思っている。初対面の時はどうかと思ったが、デュナンにしてはなかなか骨があるし、なにより自分の仕事に誠実だ。矜持のあるデュナンは珍しいが、ベックにはそれがある」

「だったら、後のことはオレに任せてくれないか」
「どうするんだ」
エイルはじっとティアナを見つめた。
「シェリルが元気に、自分の人生を歩くようになるんやったら、仲間としては良かったって思うやろ？」
「そうだな。……お前は賢者の方か？」
ティアナはエイルの変化に気付くと視線を後ろにやった。
「言うとくけど尻尾はないで」
エルデは苦虫を噛み潰したような顔でそう言った。
「ないのか？」
「ンなもんないわっ」
「残念だ」
「何でやねん。って、そうや」
エルデは何かを思い出して、ティアナに尋ねた。
「さっき、シェリルが年下やって言うてたけど」
「うむ」
「ひょっとして、ティアナってリリア姉さんより年上？」
ティアナの目尻があっという間につり上がった。ただでさえアルヴ特有の端正な顔にティアナは加えて切れ長の目だ。それがつり上がるとかなりの威嚇効果があった。
「私はまだ二十代だぞ？リリアさんはああ見えてとっくに……」
そこまで言いかけて、ティアナは目の前のエイルが目の前で腕を×印に交差させたので、言葉を切った。
何事だ？と思った時、

「とっくに、何ですか？」
背後から声をかけられた？
ティアナはその瞬間、全身から血の気が引いていくのがわかった。
本人も無意識のうちに顔を引きつらせると、ティアナは恐る恐る振り向いた。そこにいたのは、とろけるような笑顔で微笑みながら

小首をかしげるダーク・アルヴの少女……に見えるアプリリアージェだった。
「い、いえ。何でもありません」
ティアナは声の主を振り返ってそれだけ言うと。そのままの格好で凍りついた。

『さっき言ったことだけど』
【ん？】
『やっぱりどう考えてもティアナじゃリリア姉さんにはかなわないんだな』
【そんなもん当たり前やろ。それよりこのティアナの引きつった顔、しっかり記憶しといた方がええで。今度何か言われてムっとしたら、陰で思い出して笑ったるねん】
『なあ？これは本当に親切心から言うんだけど』
【ん？】
『お前、本っ当にその性格は直した方がいいぞ』
【なんやて？！】

「紅茶のおかわりはどうですか？」
一人のアルヴが凍り付いた現場に、第三の女が現れた。
ポットを持ったシェリルが、そこに立っていた。にっこりと笑う視線の先には、エイルと同じように空になったカップを持って立っているアプリリアージェがいた。

エイル達一行の旅も通算するともうそこそこの日数になっていた。そうなるといきおい、それぞれの役割のようなものが確定してくる。
基本的に一行の旅の食事は携行食主体の簡素なものだったが、それでも朝食には火を使った暖かいスープやあぶったベーコンが添えられるなど、その日一日の始まりにあたってささやかな、そしてそれでも気分が多少なりとも贅沢になる一品が用意されるのが普通だ

った。もちろんそれはアトラックの気配りであった。
アトラックはそれを全く嫌がらず、むしろそれこそが自分に与えられた天職かのように機嫌良く当たり前のようにその役目をこなしていた。
火を熾すのはエルデがルーンを使って一瞬で済ませていたので、アトラックの仕事の何分の一かは軽減されているのは間違いないが、毎回皿代わりの大笹にパンを切って並べたり、その上に切り取ったベーコンをナイフにさしてあぶり、それをまた各自のパンの上にきれいに並べたり、場所によっては手に入る木苺やスグリなど自然の恵みをパンに添えたりするのはすべて早起きのアトラックが一人でこなしていた。
聞けばル＝キリアでも彼がいつもその担当だったというからエイルは彼のまめまめしさに頭が下がる思いだった。
あまりに関心したので、エイルはその件についてアトラックと話をしたことがあった。
「仕方ないだろ。俺のいる小隊の異常な構成を見ろよ。俺以外は中将と少将と中佐だぜ？佐官とはいえ一番下っ端の俺がやらなくちゃならないのさ」
そういうアトラックの口調はしかしやらされているという義務感が漂っていない。
「それに、なんというか俺はこういうのが嫌いじゃないんだよ」
そう言って目を細める。
「司令……じゃなくてリリアさんがおいしいと言って笑ってくれたり、ファルさんが無言でがっついてくれたりするとなんかこう、ものすごくうれしくなるんだよな。それに、リーゼが俺の出したもの全部食べてくれると『よし、やったっ』って気分になる」
「そう言うものなのか？」
「ああ、俺はそういう細々とした日常仕事をするのが好きなのかも知れないな」
「たしか、アトルって貴族の出とか言ってたよな？」

「ああ、俺も軍に入るまでは全部やってもらってた方だ」
「天啓を受けたってやつ？」
「さすがにそれは大げさだな。俺がやっているのは簡単な食事の準備をするだけだ。料理人じゃないんだからちゃんとした調理ができる訳じゃないさ」
「でも、部隊に無くてはならない人間、だろ？」
「まあ、俺がいないと単純に三食冷たい携帯食料になるだけで、困ることはないだろう」
「いや、それはきっとものすごく味気ない食事だって。みんなアトルには感謝してると思う」
「感謝されるとかそういうのはどうでもいいけど、一つだけ自慢できることはある」
「何だ？」
「シルフィードの将校は数多居るが、佐官で俺よりベーコンを薄く切れる奴は居ない」
「はあ？」
「お前のベーコンは薄すぎる」
話し込んでいたエイルとアトラックの後ろをたまたま通りかかったファルケンハインが、アトラックのその言葉を聞いていたのだろう。通り過ぎざまにそう一言つぶやいて去っていった。
アトラックはファルケンハインの後ろ姿を見ると肩をすくめて愚痴を言った。
「ティアナにもそれとなく同じ嫌みを言われたな。まあ、メッダあたりの人間はベーコンは厚ければ厚いほどいいと思ってるんだよ。俺に言わせるとわかっちゃ居ないね。サラマンダのベーコンは塩が強目で熟成期間が長いのが多いから薄めにしてさっと炙って食う方が風味を味わえて一番うまいんだぜ」
【――どうでもええ】
『ベーコンの薄さの事はともかく、アトルが妙に細かいところにう

るさいって言うことはわかったな』
【いや。俺たちには風味というか、味とか関係あらへんし……】
『思い出して落ち込むから、そう言うことを言うな』
【はあ～】

当初はそんなアトラックをシェリルが手伝おうとしたが、ゲリラ組織に居たとはいえ、シェリルの腕前は基本的にそれなりの調理器具やちゃんと皿の形をした食器などがある環境で発揮される正統派のそれである。皿もなく普通の鍋もなく何もかもが特殊な状況を前にして、初日から途方に暮れるシェリルの様子を見かねたアトラックは一計を案じた。すなわちシェリルを紅茶専門の料理番に任命したのである。

アトラックから小さな鍋をお茶専用品として与えられ、うまい紅茶を淹れる事を命じられたシェリルは、困難な状況の中にあっても喜んで与えられた使命に正面から格闘し、すぐにその課題を克服してみせた。

それは一行の隊長的な立場であり、かつ紅茶の味には一家言を持つアプリリアージェをして「すばらしいわ」と恍惚の表情を浮かべさせるほどのできばえであった。

そしてその朝、いつも通りの簡単な食事が済んだ後に、珍しく二杯目の紅茶をアプリリアージェにすすめに来たシェリルだった。
「まあ、うれしい。二杯目がいただけるなんて、なんていい朝でしょう」
アプリリアージェは本当にうれしそうにそう言うと、目を細めて手に持っていたカップをシェリルに差し出した。重ねて収納できる携行用の簡易なカップだが、そのカップのおかげでお茶を楽しむという少しだけ優雅な時間を持つことができる、極めて大事な装備品と言えた。これもアトラックが揃えたものだった。
「あっ」

シェリルは差し出されたカップに紅茶を注ごうとして、手元を狂わせた。そのため少し紅茶が地面にこぼれたが、幸いに熱い液体がアプリリアージェの体にかかることはなかった。

「ご、ごめんなさい」

「いえいえ。気にしないでください」

シェリルは動揺したのか、手元を震わせながらも今度は慎重にカップに注ぎ終わると、ペコンと小さく礼をして、半ば駆けだすかのように急いでその場を去って行った。

その様子を見たアプリリアージェが不審そうな顔をしたのもムリはなかった。シェリルはアプリリアージェのすぐ近くに座っていたエイルとティアナにはお茶をすすめるでもなく、まるで敢えて無視するように視線も交わそうとせずに素通りをしていったからだ。手ぶらのティアナはともかく、エイルは空のカップを所在なげにぶら下げていたにもかかわらず。

シェリルが手に持っていたポットの中にはたっぷり四人分程度のお茶が入っていたであろう事を注がれるポットの角度でアプリリアージェは確認していたからだ。

アプリリアージェはそっとカップに顔を近づけるとその香りを深く嗅ぎ、目を伏せて何かを吟味するように数秒の間じっとしていたが、顔を上げるとカップには口をつけず、立ち去ったシェリルの後ろ姿を目で追った。

エイルも今の不自然なやりとりを怪訝に思っていた。アプリリアージェを見上げると、視線を感じたのかダーク・アルヴもエイルに顔を向けた。

当然目があった。だが、その時のアプリリアージェの表情はいつもの穏やかな微笑みとは少し違っていた。眉間に皺を寄せて、少し困っているような、もしくは悲しんでいるように、エイルには見えた。

アプリリアージェはエイルに何かを言おうとして口を少しだけ動かしたが、開きかけた唇はしかしすぐに閉じられた。それを見てエ

イルが声をかけようと息を吸った時にはアプリリアージェはエイルから視線を逸らして、手に紅茶が入ったカップを持ったままでアトラックとシェリルが後片付けをしている方に向かってゆっくり歩いて行った。

『おい』

【ああ、ちょっと様子が変やな】

『リリアさんのあんな顔、見たことがない』

【エイル……】

『うん』

エイルは立ち上がるとリリアの後を追った。ティアナもその後を追った。

シェリルはアプリリアージェが背後に近づくのに気付かない様子で、紅茶が入っていた小鍋を片付けようとしている所だった。

周りを見渡したアプリリアージェは、少し離れたところにある地面の染みを見つけた。

「残りの紅茶は捨ててしまったんですね」

後ろから不意に声をかけられたシェリルは大きくびくっと体を震わせた。

「ちょっと……ええ、そう。虫が入り込んでしまったから」

後ろを振り返らず、シェリルはそう答えた。声が震えていた。

「リリアさん？」

その時、追いついたエイルがリリアに声をかけたが、すぐにシェリルの様子がおかしいことに気づいた。小鍋を持つ手が小刻みに震えていた。しかし、後ろからはシェリルの表情まではわからなかった。エイルはシェリルに声をかけるべくさらに一歩踏み出したが、アプリリアージェが手を横にあげてそれを制した。

エイルが怪訝な顔でみやったアプリリアージェの表情は先ほどと

違い、そこにはいつもの穏やかな微笑みがあった。
「そうでしたか。エイル君にはおかわりを聞かずに行ってしまったので、いったいどうしたのかな、と思ってしまいました」

『何の話なんだ？』
【妙な雰囲気やな】

「私だけ特別というのも申し訳ないですね。エイル君、私と半分ずつ分けませんか？」
普段よりも大きな声でアプリリアージェはそう言うと、紅茶の入ったカップを掲げて見せた。
だが、そう言うアプリリアージェの顔はエイルの方を一切向いてはいなかった。ただ、シェリルをじっと見つめていた。
「ダメです！」
周りが驚くような大きな声で、シェリルはそう叫んで振り向いた。
「いえ……すぐに皆さんの分を淹れますから、わざわざ分けなくても……」
シェリルの顔は青ざめていた。唇には血の気が無く全身が小刻みに震えている。誰が見ても様子がおかしいのは明白だった。
アプリリアージェはシェリルのその様子を見ても全く動じないどころか、さらににっこりと笑いかけた。
「わかりました。ではせっかくですからこれは私一人でいただくことにしますね」
アプリリアージェはそう言ってカップを掲げてシェリルにウィンクをしてみせた。
シェリルはしかし、アプリリアージェの視線を避けるようにうつむいた。その時になるとシェリルの肩と腕は大きく痙攣するように震えていた。
「私をよく見ていて下さい、シェリル」
アプリリアージェはがたがた震えるシェリルに穏やかな声をかけ

た。
　シェリルは言われるままにゆっくりとアプリリアージェを見上げた。その顔は蒼白と言っていいほど血の気がなく、ただでさえ白いシェリルの顔にはまったく生気がなかった。いつもは柔らそうな赤い唇は見る影もなく真っ青で、大きく見開かれてた鳶色の瞳には涙がたまっているように見えた。
　アプリリアージェはそんなシェリルにほほえみかけたままカップを口に運ぶと、一気にそれを飲み干して見せた。
　それを見たシェリルは、まるで火がついたように泣き出した。
「うわあああああーっっっっっっっっ」
　顔を両手で隠し、その場に座り込んで泣き叫ぶシェリルを微笑を浮かべたままで見下ろすアプリリアージェ。
　エイルは何が何だかわからないまま、そして二人にかける言葉が何も見つからないまま、ただ呆然とその場に立ち尽くしていた。

　そんなエイルの周りに、シェリルの泣き声に反応した一行が、すぐに集まってきた。
「どうしたんだ？」
　シェリルの声に最初に反応してかけつけたのはベックだった。
　彼は様子のおかしい二人に近寄ろうとしたが、アプリリアージェはまたもや来るな、という風に手を挙げてベックの歩を止めさせた。そしてゆっくりとしゃがんで両膝を突き、視線をシェリルと同じ高さにすると、そっと手を伸ばしてシェリルの栗色の髪を撫でた。
「ゴメンなさい、シェリル。私達ル＝キリアはこの毒では死ねない体なのですよ」
　引きつったように泣いていたシェリルは、アプリリアージェのその言葉を聞くと顔を上げて自分の目の前にいる褐色の肌をした小さな風のフェアリーを見つめた。目の前の、顎のあたりまである黒い髪が朝の光を反射してつややかに輝くのが見えた。そして自分を見つめるアプリリアージェの表情がいつものように穏やかな微笑みを

たたえていて、でも少しだけ寂しそうにしているのをみとめた。
「ゴメンなさい……ゴメンなさい……」

【毒を……盛ったんか？】
『シェリルが、なぜ』
【どう考えてもお前さんがらみやな】
『オレがらみって』
【誰がルルデを殺した事になってるんやったっけ？】
『あ……。でもそれは』
【もちろん逆恨みや。そんなもんシェリルも頭では解ってるんやろ】
『解ってるなら……』
【解ってもどうにもならへんかったんやろな……。きっとどうしていいかわからへんかったんや。たぶん、ずっと……辛かったんやろうな】
『エルデ……』
【楽になりたかったんとちゃうのかな】

「辛かったのでしょう？」
アプリリアージェは優しい声でそう声をかけると、まだガクガクと震えたままでいるシェリルを引き寄せて自分の胸にそっと抱きしめた。
「私は大丈夫。命には別状ありませんよ。だから、これでもう終わりにしましょう。……ね？」
アプリリアージェはそれだけを言うと目を閉じた。そしてそっとシェリルから体を離すと、そのままゆっくりと俯せに地面に倒れ込んだ。
苦悶の表情を浮かべて倒れたアプリリアージェの姿を見たシェリルの泣き声は、さらに大きくなった。

「リリアさん！」

呆然とする一同の中でエイルは一番に反応した。
アプリリアージェに駆け寄ると抱き起こして声をかけた。だが、返事はない。その状況はアプリリアージェにはすでに意識がないことを告げていた。
脈を診ようと触れた腕がやけに冷たい。見ればその額には汗が噴き出していた。
「リリアさん、しっかりしろ！」

【代われ！】
『頼むっ、エルデ』

ファルケンハインは座り込むシェリルと倒れたアプリリアージェを見比べ、アプリリアージェの脇に落ちている空のカップを拾い上げて、少しだけ残っている紅茶を指につけてなめてみた。
「そうか」
そしてそれだけ言うと立ち上がった。
ファルケンハインはそこで起こった事をそれですべて理解した。
状況を把握した後のファルケンハインは次に想定される事態に対処する準備ができていた。だから、不意に立ち上がったシェリルがそばの片付け途中の調理荷物の中にあった中型のナイフを手に取ろうとした時に、後ろからその手を振り払う事ができたのだ。
「離して！離してよ！」
「ダメだ。落ち着け、シェリル」
「うわあああああ！！」
泣き叫びながら振り返るシェリルを羽交い締めにすると、ファルケンハインはもう一度「落ち着け」と声をかけた。だが、極度の興奮と混乱状態にあるシェリルは羽交い締めにされても暴れるのをやめなかった。宙に浮いた足を振り回して、ファルケンハインの足を踵で何度も蹴った。
一刻を争う……そう決断したファルケンハインは「スマン」と言

った後に手刀でシェリルの首筋をドンと打ち、失神させることに成功した。
猛獣の雄叫びのような泣き声が止み、あたりに静寂が訪れた。

「そちらの容態は？」
シェリルの体をゆっくりと横にしてやりながら、ファルケンハインはアプリリアージェを抱き抱えているエルデに声をかけた。
「毒……やな。それもかなり強力な奴や。けっこうな即効性とこの体温の低下振りから見て、たぶん自生してるゲルデの根から抽出したやつやろうな。矢に塗ってもよし、飲ませても良しの呼吸困難を引き起こして死に至らしめる万能毒で、入手のしやすさから反政府ゲリラがよう使うやつやな」
エルデの言葉に一行は凍り付いた。
反政府ゲリラ……それはシェリルがいたところだ。
「まさか……嘘でしょう？」
エイルの言葉を聞いたエルネスティーネが改めて倒れている二人……アプリリアージェとシェリルを見比べてうめいた。
「だって」
「騒ぐな、ネスティ。リリア姉さんは死んでへん。そやから今は冷静になれ」
エルデは今にも泣き叫びそうなネスティの機先を制して怒鳴ると、その目をじっと見つめた。ネスティは声が出そうな自分の口を両手で塞ぎ、あふれようとする涙をこらえるように目を大きく開けて、エイルにうなずいてみせた。
「よし、ええ子や。ファル、そっちは？」
ネスティが混乱を自制できたのを確認すると、エルデはファルケンハインに顔を向けた
「舌を噛まれるとマズいと思ったので失神させただけだ。怪我はしていない」
ファルケンハインはエルデが望む答えを的確に伝えた。

「こんな事はやりたないけど、念のために猿ぐつわを噛ましとこか」
「仕方がないだろうな」

『おい、エルデ……』
【シェリルが舌噛んで自殺してもええんか？】
『いや……それよりシェリルがリリアさんに毒を……って言うことなんだよな？』
【この状況で他に何が考えられる？我々の中で真っ先にそれを理解して冷静に動いたのはファルや。さすがやな】
『なぜ……』
【それはこれからわかる。それより】
『大丈夫なのか？』
【飲んだ量にもよるけど、ゲルデの毒は少量でも服用すれば、普通に死ねる】
『死ぬって……おい』

エルデはエイルとの会話をそこで打ち切った。そしてすぐに儀仗ノルンを取り出すと、矢継ぎ早にいくつかのルーンを唱えた。ルーンとルーンの合間には額と頬、そして腋に手を当てルーンの効果を確認しながら次の詠唱に入った。
何度目かの詠唱の後、同じように額に手を当てているエルデに、アトラックが声をかけた。彼は倒れたシェリルを抱きかかえ、エルネスティーネを促してティアナやハロウィン達が居た少し離れたところへ連れて行っての帰りだった。
「様子はどうだ？」
エルデはアトラックをチラっと見やった。
隣にはハロウィン・リューヴアークが険しい表情で立っていた。
「こんな事はいいたないんやけど」
「どうした。はっきり言ってくれ」
「えろう落ち着いてるんやな、お前さん達」

エルデの嫌みともとれる言葉に、アトラックはバツが悪そうに応えた。
「ゲルデの毒なら、大丈夫だと思う」
「え？」
思いがけないアトラックの言葉に、エルデは思わず儀仗を持つ右手を下ろした。
ハロウィンはエルデのそばにしゃがみ込むとアプリリアージェの左手をとり、その手首で脈を診ながらアトラックの言葉を引き継いだ。
「俺達には耐性がある」
その言葉を聞いたエルデは安堵のため息をついた。
「なるほど、そうか」
その「なるほど」にはいろいろな意味があった。
ファルケンハインやアトラックがそもそも予想以上に落ち着き払っていたこと。介抱をエイルに任せて、すぐに上官のそばにつくという行為に及ばなかった事。それよりも自分たちが今できる仕事を優先させたこと。そもそもあの様子だとはじめから紅茶に毒が入っているのをわかっていたにも関わらず、ためらうことなくアプリリアージェが飲み干したこと。
解毒の為のルーンが不思議とニブい反応しかしないこと、等々。
「それで、お前の見立てとして、実際の様子はどうなんだ？」
それでもやはり心配は心配なのだろう。アトラックは神妙な顔でエルデを見た。
「一般的な解毒用ルーンがあんまり効かへんさかい、ちょっと強力なルーンを使おうかと思てたとこや。その話を聞いたら納得できた。容態自体は脈と呼吸の低下にともなう体温低下が少しあるくらいで、落ち着いてる」
「そうか」
アトラックは良かったという風にうなずいて見せた。
「そう言うことなら解毒やのうて、やることは別の事やな。ルネ・

ルーを呼んでくれへんか？」
「ルネを？」
「あの子やったらできるやろ。ちょっと水のフェアリーの力を借りたいんや」
「ハイレーン一人ではできない事、なのか？」
「もちろん俺一人でもできるんやけど、こっちも体力に限りがあるしな。できたら楽して効果を上げたいんや」
「わかった」

『それって、かなり力を使うルーンなのか？』
【というより、ルネを触媒にしてルーンをぶち込んだ方が効率よさそうやしな】

おそるおそるやってきたルネはエイルの要求を聞くと黙ってうなずいた。そしてすぐにアプリリアージェに覆い被さり、そのまま優しく体全体を抱きかかえるようにした。
やがてルネの体がぼうっとした鈍い光で包まれ始めると、儀仗ノルンを手にしたエルデがいつものように短くルーンを唱えた。
一同にはいったい何が行われているのかはわからなかったが、エルデが短い詠唱をした後、数秒でその効果が現れた。アプリリアージェが目を覚ましたのだ。
「ルネ・ルー？」
自分の名を呼ぶ声に、ルネは顔を上げた。
「あ、起キた」
「ええ、大丈夫です。これは？」
「もう大丈夫ヤね」
そう言うとルネ・ルーはすぐに体を起こし、そっと立ち上がった。
途中でルネの体を覆っていた鈍い光が消えていくのをアプリリアージェはじっと見ていた。
「シェリルは？」

直前の記憶を取り戻したアプリリアージェは、おもむろに上半身を起こすと周りを見渡した。
そこでようやくエイルとハロウィン、それにアトラックの存在を認識した。
「そっちも大丈夫や。ベックがついてる」
エイルの言葉を聞くと、アプリリアージェにようやくいつもの微笑が戻ってきた。
「そうですか。少し酷な事をしてしまいました」
そう言うと正面で自分を見つめているルネに声をかけた。
「あなたが治癒を？」
ルネは首を振った。
「治したのはエイル……えっと、そやなイな。エルデのルーンや。ウチはリリアの体中の水分の流れをよくしただけヤ」
「そうでしたか。気を失うなんて、想像以上に毒の濃度が高かったんですね。油断しました。飲み干さずに一口二口くらいにしておくべきでしたね」

『いや、そう言う問題じゃ……』
【そう言う問題なんやろな、この人にとっては】
『そうなのかな。それより、エルデ』
【わかってる。ある意味、覚悟を決めさせてくれたのはシェリル自身やな】
『そうだな』

「取り込み中のようだが……もし私に出来ることがあれば何でも遠慮なく言って欲しいのだが」
ふと気づくと、アキラが心配そうに傍らに立っていた。夕べの事はエルデのルーンで全く覚えておらず、今朝は普通にいつもの屈託のない笑顔とともに起きていたのだ。
「ああ、ちょっとリリア姉さんが腹こわしたからハロウ先生が治療

を」
「いや、とても腹をこわした程度には見えなかったんだが……」
「細かいことは気にせんといて。これは俺らの問題や。アモウルさんには迷惑はかけへん」
「う、うむ」
「ただ、仲良うなったとこで悪いんやけど、シェリルと、あとひょっとしたら二、三人ヤボ用が出来たんでここでお別れかも、や」
「え？」
「大丈夫や。それでも十分な戦力は残る」
「いや、それは別にいいのだが、やけに突然だな？」
「まだ決まってないけど、たぶんもうすぐ突然決まると思う」
「何だって？」
エルデはそれだけ言うと、それっきりアキラを見もせずに立ち上がった。
「さて、と。シェリルにお別れしに行くとするかな」
エルデの独り言を聞いたアプリリアージェが、エルデの背中に声をかけた。
「何をするつもりです？」
エルデは振り返るとニヤリと笑った。だが、アプリリアージェにはエルデの笑いがいつもの不敵なそれではなく、妙に寂しそうに曇っていたのが気になった。
「うーん。簡単に言うと「二藍の旋律」のマネ、かな」
「何ですって？」
珍しく……いや、エイルは初めてアプリリアージェの怒気を含んだ声を聞いたと思った。
「もう、終わりにしよ」
歩みを止めず、振り返りもせずにそう告げるエルデをアプリリアージェは立ち上がって追いかけてきた。
「お待ちなさいっ」
だが、アプリリアージェがそう動くのは想定していたのだろう。

「パラス！」
エルデは振り向きもせずにさっと儀仗を掲げると、はっきりとした声で一瞬の詠唱によるルーンを唱えた。その詠唱とともにアプリリアージェの体全体がその場の空間に縫い付けられたように全く動きを止めた。
アプリリアージェは声を出そうとしたが、それも出来なかった。
―（しまった！）
一瞬でルーンを発動させてしまう特異なルーナーはやっかいだと言うことは解っていたが、こういう形で身をもってそれを確認することになるとは思っていなかった。
臍を噛むとはまさにこのことだと思った。しかし動きようがない状態では噛みようもない。アプリリアージェは心の中で自嘲するしかなかった。
「かんにんや。ほんのちょっとだけ、そこでそうしといてくれるか」
振り向いたエルデはアプリリアージェが完全に動きを止めたことを確認すると、無表情な顔でシェリルの側まで歩き、すぐ横で膝を突いた。
そして側にいたベックの顔を見上げると、声をかけた。
「今から、少し複雑なルーンをシェリルにかける。俺が『もうええで』って言うまでおとなしくしといてくれるか？約束してくれたら何もせえへん。自信がない言うんやったらリリア姉さんみたいにルーンで空間座標に縫い付けたる」
ベックはなんと答えていいのかわからなかった。シェリルにルーンをかけると言われてもそれがどういうものなのかわからない。治療ならいい。でもエルデの様子が少しおかしいとはベックも感じていた。
「いろいろ考えたんやけど、シェリルを助けるにはもうこれしかないんや。できたら仲間を拘束したない。解ってくれ」
「本当だな？シェリルを助けてくれるんだな」

ベックは少し考えて、それだけ言った。結果だけを求める言葉だった。
エルデはベックの目をまっすぐに見つめると、ゆっくりうなずいた。
「わかった」
ベックの返事を受けてエルデはすぐさまシェリルの猿ぐつわをほどくと、儀仗を持たない左手を額に当て、何事か唱えた。するとシェリルはすぐに目を覚ました。
「シェリー」
エルデはシェリルの顔をのぞき込むと、そう呼びかけた。
「はい」
「俺が誰かわかるか？」
「ルル……デ？」
「そうだな」
「ルル！」
「そうだ。いつものように抱きしめてくれ」
エルデがそう言うと、シェリルは何のためらいもなく両手を伸ばして、エルデを抱きしめた。
「どうだ。暖かいだろ？」
「うん。暖かい」
「よく眠っていたな」
「うん。変な夢をたくさん見たわ」
「嫌な夢？」
「いろいろ。でも最後はあの花畑にいたの」
「花畑？」
「嫌ねえ、リリエデールの花畑よ。丘が全部夕焼け色に染まるくらい、リリエデールが咲き誇っていた、あの花畑よ」
シェリルの言葉に、エルデの目が大きく見開かれた。だがそれは誰にも知られることはなく、すぐに目を閉じると、エルデはシェリルを抱く腕に力を入れた。

「ああ……覚えてるさ」
「ルル、あなたは私がリリエデールが大好きだって知ってたから、わざわざあんな丘を見つけて来てくれたのよね」
「ああ」
「あの丘を見た時、それだけでも涙が出るくらい嬉しかったわ。でもその後、ルルは私をもっと泣かせた……」
「そうだったかな」
「髪留めを差し出された時には何が起こったのかわからなかったわ。ううん、ルルが私の為にリリエデールの花を彫ってくれていた事を知って、髪留めをもらったことよりもそっちの方が嬉しかった」
「そうか……」
「髪留めを女の子に贈るのは求婚の意味だって……そんな事、バカバカしいなんて言ってたくせに、なんでそんなものをくれるのよ、って思ったわ」
「リリエデール……」
「え？」
「目を閉じて、シェリル。そうすれば今でもきっとその丘が見えるよ。俺も目を閉じる。一緒に眺めよう」
エルデの言葉に、シェリルは素直に頷くと、目を閉じた。
「見える？」
「ええ。見えるわ。ルル、あなたが顔を赤くしてそっぽを向きながらこっちに髪留めを突き出してるわ」
「照れ隠しだ」
「うん、わかってる」
「俺、その後何か言ったっけ？」
「言って欲しかったのに、何にも言わなかったじゃない」
「そうか。ごめん。じゃあ、せっかく花畑に来たんだ。あの時をやり直そう」
「やり直す？」
「うん。あの時に戻るおまじないを教えてやる」

「おまじない？」
「うん。俺が言う通りに言ってみて。それだけでいいから」
「わかったわ」
エルデは抱きしめたシェリルの耳元に口を寄せると、ゆっくりとささやいた。
「『私は私のあるべき場所へ』」
「私は私のあるべき場所へ」
シェリルは言われたとおりエルデの言葉を繰り返した。それがルーンだとは知らずに。
「『あなたはあなたのあるべき場所へ』」
「あなたはあなたのあるべき場所へ」
「『夢は夢へ、闇は闇へ』」
「夢は夢へ、闇は闇へ」
「『過去は過去へ、今は明日へ』」
「過去は過去へ、今は明日へ」
「『悲しみと苦しみと痛みはすべて私の夢』」
「悲しみと苦しみと痛みはすべて私の夢」
「『夢は夢へ』」
「夢は夢へ」
「『夢は私の夢』」
「夢は私の夢」
「『そして、私は私のあるべき場所へ』」
「そして、私は私のあるべき場所へ」

極めて特殊な詠唱が終わった。ルーナーと被術者が平文を繰り返して完成させる不思議なルーンだった。
「ルル？」
沈黙が長く続いた為、シェリルは少し不安になってエルデに声をかけた。
「おまじないは終わり？」

「うん。終わりだ」
そう言うとエルデは抱きついているシェリルを自分の体から引き離した。二人は見つめ合う。
「あれ？ルルってば、なぜ泣いてるの？」
シェリルの目に、声を上げずに涙を流しているエルデ……いや、入れ替わったエイルの顔が映った。
「ねえ、ルル？」
「さよなら……シェリー」
「え？」
エイルはそれだけ言うと、今度は心の中でエルデに声をかけた。

【別れは済んだか？】
『ああ。後は頼む』
【うん】

エルデは心の中でエイルにうなずくと、再び体の支配権を全て受け取った。そして右手に持った儀仗ノルンの頭頂部を不思議そうな顔をしたシェリルの頭上にかざし、一連のルーンを完成させる最後の認証文をゆっくりと詠唱した。
「ファルデルエ・スレア・デュナミス」
すぐにシェリルの動きが止まった。エルデはそれを確認すると、エイルの時に流した涙を袖口で拭ってから、シェリルの右の耳の上にあるリリエデールの髪飾りをそっと外した。その間もシェリルは全く無反応だった。
エルデは手に取った髪飾りをじっと見つめた後で懐に入れると、今度はベックに顔を向けた。
ベックと言えば、一連の行為をただぼうっと見つめていただけだった。
そんなベックにエルデは少し強い調子で声をかけた。
「しゃんとせえ、調達屋。この先はお前が頼りなんやで」

「え？」
「シェリルはしばらくこの状態やと思う」
「この状態って？」
「シェリルは今、再起動中や」
「え？再起動？」
「エイルが言うにはこういう状態をフォウではそう呼ぶらしい」
「だからどういう状態なんだよ」
「たぶん、我ながらうまくいったと思う。エイルの要求は複雑すぎて緻密な設計はせなあかんし百個以上のルーンを使わなあかんし、ルーンとルーンの間に時間を空けなあかんしで、前準備からいろいろと大変やったわ」
「お前、なめてんのか。俺の質問に答えろ。シェリルは大丈夫なのか？」
「それは何とも言えんな」
「なんだと？さっきお前は」
エルデにくってかかろうとしたベックの鼻先にエルデはノルンの頭頂部を突きつけてそれを制した。
「お前さん次第やっちゅう事や」
「え？」
「今更こんなこと聞くのも何やけど、ベック、お前、シェリルに同情してるんやろ？」
「同情って……いや……まあそりゃしてるさ」
「そうか。ほんならもう少し突っ込んで聞くけど、その同情がもう少し強い思いになる可能性はあるんか？」
「どういう意味だ？何がいいたいんだ？」
「あんまりはっきり言うたら身も蓋もないし、人によって言葉のとらえ方は様々や。そやから曖昧な聞き方をしてる。言葉は言葉だけの意味や。結論を聞いてるんやない。それに質問してんのはこっちやで。サクサク答えーや」
ベックはシェリルに目を落とした。

「まあ、そりゃ……。いや、もちろん同情以上になりかけていないこともなかったり……いや、もう既に単に同情とかいうんじゃ……」
「はい、そこまで」
「は？」
「それを聞けたらもうええわ」
「いや、さっきから意味がわからないぞ、お前」
「シェリルが『再起動』するまで、手を取ってやってくれ」
「え？」
「早よう」
ベックは言われるままに、エルデから差し出されたシェリルの力のない手を握った。
「目が覚めたら、とりあえず名前を呼んでしっかり抱きしめたり。そうしたらシェリルは元気になる」
「はあ？」
「と言うことや。シェリルの事は頼んだで。俺はちょっと後始末してくるさかい。あ、くれぐれも自然に目が覚めるまで声かけたり揺すったりしたらあかんで。死ぬから」
「えええええ？」
「そう言うことで」
「待て待て待て！」
ベックは批難の声を上げたが、シェリルを残してさっさとその場を去るエルデを追うわけにも行かず、両者を見比べた後、覚悟を決めてシェリルの前にあぐらをかいて座り込んだ。
シェリルはその間も瞬き一つせず、そのままの格好でベックに手を預けるだけだった。

「説明を聞きましょう」
エイルの謝罪の言葉と共にルーンの拘束を解かれたアプリリアージェは批難の言葉一つ投げかけるでもなく、いつものように穏やかな笑顔のままでそう言った。

エイルはうなずいた。
「その前に、オレとリリア姉さんはこの場所を少し離れよう。そこで話をするよ。それからハロウ先生も一緒に来て欲しい」
ハロウィンとアプリリアージェは顔を見合わせたが、さっさと歩き出したエイルの後を慌てて追った。
彼らにはすぐにエイルとエルデの意図がわかった。アキラから離れようというのだ。

シェリルは、その朝のうちに一行と別れてハロウィンと共にトゥセークの港を目指す事になった。トゥセークがウンディーネ行きの航路がある一番近い港だったのだ。
シェリルとハロウィンに加え、ルネ・ルーとベックも同行することになった。もともとハロウィンはシェリルをウンディーネの兄の元へ送り届ける役目をおっていた。ルネは保護者であるハロウィンと別れるわけにはいかないようで、ベックはエイルが強く要請して、本人がそれを承諾した形で同行する事になっていた。
ベックが同行すると聞いて、それまで寂しそうにしていたシェリルの顔が輝いたのが印象的だった。
別れに際して一番取り乱したのは、大方の予想に反してエルネスティーネではなくティアナだった。
いや、エイルは例外だった。
辺りをはばからず号泣してシェリルに抱きつくティアナの姿を見て、それは納得できる光景だと思っていた。その日の朝にティアナの心の内を聞いていたからだ。
強面で真面目で、だから融通が利かず短気で口が悪いティアナだったが、その外面とは裏腹に、一度仲間になってしまうと相手のことを際限なく好きになってしまう性格なのだと言うことが、もうわかっていた。

『ティアナってさ』
【うん？】
『ちょっとお前に似てるな』
【はあ？】

「あーあ、全然解放してやらないからシェリルが困ってる」
「まったく、困ったものですね」
エイルはアプリリアージェと並んで、寝所にしていた窟のある山肌の通路に腰をかけていた。そこは生い茂った枝の隙間から丁度シェリルを見送る一行が見渡せるようになっていた。もちろん、その場所から見渡せるところで一行が別れの挨拶をするようにアプリリアージェとアトラックが打ち合わせていたのだが、それは誰も知らないことだった。

「それにしても、前日から仕込んでいたとは驚きました」
「かなり複雑怪奇なルーンやから、失敗できへんしな。加えて特殊な手順が必要なルーンやったからな」
「なぜ事前に相談してくれなかったんですか？」
「相談したら、賛成してくれたか？」
「いえ」
ファルケンハインが半ば強引にティアナをシェリルから剥ぎ取るように引き離すのが見えた。アプリリアージェは大きな壁からようやく解放されたシェリルが涙を拭いながら、本日何度目かの別れの挨拶をしているのを優しく眺めながら首を振ると、きっぱりと言った。
「絶対に認めなかったでしょうね」
「せやろな」
「――どうでもいいですが、一言ごとにエイル君とエルデ君が入れ替わるのはさすがにめまぐるしすぎませんか？」
「そうだな」

「会話酔いしそうです」
「三人で話していると思ったらいいじゃないか」
「雰囲気が違うのでそれもいいかもしれませんが、声が全く同じなのでさすがにムリがありますね」
「そっか」
ルネがエルネスティーネと抱き合って、離れた。
それが最後の挨拶のようだった。
「もう、シェリルは元には戻らないんですね？」
「うん」
「さっき、私達が顔を見せるのはまずいと言っていましたが……？」
「俺……というかエイルとかリリア姉さんが今会うてしまうと、シェリルにはたぶんまだゴミのように残ってる印象の破片をつなぎ合わせて強烈で根強い情景を再構築しようとするやろな。そうなるとその印象を合理的に受け止める事が出来る記憶も感情もないシェリルはその体の中から沸き上がる警鐘みたいなもんを沈めることが出来へん。そうなるとただでさえ人格がまだちゃんと定着してへん今の状態やと、どうなると思う？」
「精神が崩壊……するかもしれませんね」
「正解」

シェリル達は手を振る一行を後に歩き出したが、しばらく歩くと振り返って手を振った。さっきからそれが三回ほど繰り返されている。そのたびにティアナは声を上げて泣いているようだった。
「オレ達がしたことは、たぶん……いや、絶対許される事じゃないと思う。経緯は違うけど、行為そのものはあの「二藍の旋律」という賢者がカレンにやったことと似たようなものだし」
「――」
「これでも結構話し合ったんだ、エルデとは。でも、シェリルを楽にしてやれる方法を他には思いつかなかった」
「シェリルを楽にする……耳障りのいい言葉ですね」

「あ……」
エイルはそう言われて絶句した。
「そうじゃないでしょう？」
エイルは唇を噛んで隣に座っている小柄なアプリリアージェの横顔を見た。首までの長さの黒い髪が前屈みになったダーク・アルヴの微笑を半分ほど隠していた。
「ああ。一番目の理由は勿論、オレ達が楽になりたかったからだな」
「カレンに対する罪滅ぼしにでもなると思ったんですか？」
「リリアさんにはかなわないな。正直に言うとそれもちょっとあった。でも、それより何より、これ以上苦しむ仲間を見たくなかったんだ」
かなり遠くになったシェリル達の姿が見られるのももうわずかだった。道は四人が大きく手を振る場所からは、緩やかに下り続ける。あと十歩も歩けば、顔が見えなくなるだろう。
だが、エイルはもうその前にあふれる涙で四人の姿が見えなくなっていた。
「それでも」
「え？」
アプリリアージェはエイルの方を見やったが、すぐに視線を元に戻した。
「覚悟を決めて、最良の方法なんだって決心してやったはずだったのに、何であんなことをやったんだろうって、今も思ってるんだ。オレはなんて取り返しのつかない事をしてしまったんだって」
「そうですね」
「自分が楽になりたかったからやったことなのに、全然楽になれないんだ。苦しくて悲しくて胸がはりさけそうで……」
「でしょうね」
「もう二度とやりたくない」
「ええ」

一行はついに見えなくなった。
だが、ティアナ達はその場を動こうとはしなかった。
「シェリルは、お兄さんに会ったらどうなりますか？」
「一週間もすれば人格は安定してるから、合う時分にはもう何があっても大丈夫らしい」
「大丈夫……ですか」
そう言うとアプリリアージェはゆっくりと立ち上がった。
「私は先に降りて出発しています。落ち着いたら後から合流して下さい」
「あ」
「アモウルさんには適当に言っておきます」
「うん。そっちは頼む」
アプリリアージェはうなずいた。
「それからこれだけは言わせて下さい」
そう言ってアプリリアージェはエイルの後ろに立ち、その頭にそっと手を乗せた。
「あなたは自分の弱さに負けて人としてやってはいけないことをやってしまいました」
「ああ、わかってる。でも」
「でも」
言いかけたエイルの言葉をアプリリアージェは止めるように続けた。
「あなたが、いえ、貴方たちが私の仲間で本当に良かったと心から思っています」
エイルは思わず顔を上げた。そこにはいつもと同じ穏やかな微笑みがあった。
「だから、一緒に行きましょうね。マーヤさんのところに帰るのでしょう？」
エイルは唇をきゅっと結ぶと、うなずいた。
その鼻先から、涙が二粒、地面に落ちていった。

覚醒したシェリルには、多くのものが欠けていた。
ルルデ・フィリスティアードの記憶。
エイル・エイミイの記憶。
エルデ・ヴァイスの記憶。
アプリリアージェ・ユグセルの記憶。
そしてそれにまつわる様々な記憶も。
だが、紛れもなくシェリルそのものでもあった。
茶色い巻き毛、白い肌、そして特徴的な鳶色の瞳。
シェリルが笑うとそれを見た者はほっとした気分になり、側でシェリルの声がすると何故か安心できた。
それに何より、シェリルはベックのことを知っていた。エルネスティーネの事も、ルネのことも、ティアナのことも。
それに何より自分がどこから来てどこへ行こうとしているのかをも。

「気分はどうだ？」
手をつないで横を歩くシェリルに、ベックはそう声をかけた。
「別に普通よ。さっきから何回も同じ事を聞くのね」
「いや、まあ今日も山歩きだし、ムリはしない方がいいからな」
「ベックったら、変なの」
そう言うシェリルはつないだベックの手を少し強く握った。
「いいお天気ね。今日はしっかり距離を稼がないといけないわね」
「そうだな」
「そうそう、ベック。私、素敵な事を思いついたわ」
明るい声でそう言うシェリルを、ベックは複雑な気持ちで見つめた。
「さっきうとうとしている時に、とても素敵な名前を思いついたのよ」

そう言ったシェリルの白い頬に急に朱がさすのを、ベックは見逃さなかった。
「素敵な……名前？」
ベックの動悸が速くなった。そして同時に汗が全身から噴き出してきた。
「ええ。とても素敵な名前だから、もし私に将来子供が出来たらその名前を付けたいなって思ったわ」
「そうか」
ベックはエルデのルーンが失敗ではないのかと懸念した。
立ち止まり、思わず後ろを振り返ったが、もう一行の姿は全く見えなかった。
「聞いてくれる？」
「ああ。なんて言う名前だ」
「リリエデール」
「え？」
「リリエデールよ。いい名前でしょう？なんだか夢の中で突然思いついたの」
「そうか」
「ベックはどう思う？」
「どうって……いい名前だとオレも思うよ」
「ふーん」
自分を見上げるシェリルの顔はいっそう赤くなっていた。だが、ベックはもうそれがエルデのルーンの失敗ではないことを理解していた。
シェリルはそんなベックの目をじっと見つめながら続けた。
「それって、自分の子供に付けてもいいって思うくらい？」
「そうだな……」
ベックはほっと胸をなで下ろすと、シェリルの手を握りしめた。
「俺も、できたら自分の子供にその名前を付けたいな」
ベックの答えにシェリルの鳶色の瞳が輝いた。

「ねえ、ベック。それって……」
「ちょ、ちょっと急ごうぜ。俺達、ハロウィン先生達からずいぶん遅れちまってる」
ベックはそう言うとシェリルの手をひいて、少し早足に歩き出した。シェリルは何も言わずベックの手を強く握り返すと、再び並んで歩き出した。

個人毎の記憶を都合良く消せるルーンなどはない。
最初にエイルからシェリルの記憶を消すルーンがあるかと尋ねられた時、エルデはそう答えた。
人間が形成する断片的な記憶と、記憶が複雑に関わりあって大まかな時間的、空間的なつながりが構築される事によって人の頭の中ではじめて「過去」が構築される。そしてそれは事実とは限らない。だが、人はそれぞれ自分の記憶が真実だと思い込む。
そこでエルデはシェリルの記憶の配列をいくつかに区切り、その区切りごとにルーンをかけ、該当する人物に関する反応が多い部分を他から隔離した上でそこに「無」の情報を流し込んだ。
存在する記憶を何もない状態で上書きしたようなものだった。そしてそこに他の区切りにある情報を複合させて流し込み、本人としてのつじつまを合わせる手法をとった。そして念のために一番古い記憶から順番に「無」と混濁させて曖昧な物にしておいた。
エルデが理解していて、かつ実行可能な精神操作系のルーンの概念と実行手順のようなものをエイルが聞き、何をどう組み合わせれば効果的なのかを考えて提案したものだった。エルデは最初は猛反対したが、食い下がるエイルと長い話し合いをする中で、既存のルーンに大幅な修正を加えることでエイルの提案がほぼ実現可能な手順を作り上げることに成功したのだ。そしてエルデが長い沈黙の果てに再構築した壮大な複合ルーンが、シェリルにかけられた一連のルーンの正体だった。

「普通のルーナーが唱えたら一ヶ月以上喋り続けなアカンやろな」
皮肉とも自慢とも取れる言葉をエイルにつぶやくと、エルデはルーンの完成を告げたのだ。
だが、実行するかどうかについては二人とも揺れていた。もちろん、それはもはや禁忌同然の行為なのだと言うことを理解していたからだった。
とはいえ、シェリルの精神状態が混乱しているのは明らかだった事もわかっていた。
それを二人が確信したのは最後の術を掛ける直前だった。

シェリルは、ファランドールでは通常『八重山百合』と呼ばれる花のことを「リリエデール」だと言ったのだ。それは彼女がエイルに出会うまでは知らない言葉のはずであった。
なぜならシェリルが見た夢は、エルデがルーンで見せたものだった。もちろん話の筋を事細かく指定したわけではない。過去にもっとも強い印象がある場所に退行させるようなルーンである。八重山百合が咲き誇る丘はシェリルが無意識に選んだ物なのだ。
それがルルデとシェリルの婚約の場であった事は、その時はじめて知ったことだった。
だがシェリルはその時「八重山百合」とは言わず、エイルと出会った時にはじめて知らされたディーネ語の名前「リリエデール」と言ったのだ。
シェリルの中では、様々な事象が混濁し時系列を無視した融合が始まろうとしていたのである。
エイルとエルデはその時にようやく全ての迷いを振り払うことに成功したのだとも言えた。

一人の人格を完全に消してしまうのはむしろ簡単だが、部分的な書き換えルーンなどはなかった。ランダールの蒸気亭で使った「忘

却暗珠」は直近の出来事に関する記憶を消す呪法で、記憶の表層にあるものを光でさっと覆うようなものだから、これも全く違うものだった。

さすがに一つのルーンで事を済ますわけにはいかず、何回もに分けてルーンをかける必要があった。

エルデは夜の間に記憶の層を不安定にするルーンやその記憶層を区切る壁のようなルーンなどをかけておき、さらに上書き消去する部分を探る為の反応ルーンも仕掛けた。

その状態でしばらく時間を空け、仕上げに特定された場所を上書き消去する実行ルーンを唱えたのだ。

だが、そのルーンにはある条件が必要だった。術者と被術者の共鳴のようなものなのだが、この場合はその条件はほぼ満たされていると言ってよかった。被術者を何のためらいもない状態に置き、術者に全てを委ねた上で同じルーンを唱える事で、確実な履行が行われたのだ。

それがエルデとシェリルが交互に唱えたあの平文によるルーンであった。そしてそれはエルデが作り上げたルーンなので、詠唱文はエルデが考案したものだった。

本来は平文での認証文などはあり得ないのだが、内容をシェリルが理解した上で唱えなければならなかったために敢えて平文で認証文を作り上げたのだ。

もちろん、術者のエルデを触媒に、その平文はエーテルに呼応できる信号に変化するのだとエルデはエイルに説明した。こう書くとルーンを作り出すのは簡単に聞こえるかもしれないが、それはエルデだから出来たことだと考えるべきである。

星暦が始まって長い年月が過ぎたが、その間にまったく新しいルーンが生まれたという記述はない。

いくつかあるルーンを組み合わせたものとは言え、それまで存在しなかったものを作り上げることに成功したエルデの能力が普通ではないと言う事の証左である。

記憶が虫食い状態のままでその空白部文を曖昧に補完する形で再構築された記憶の集合体であるシェリルという人格は、外界から大きな影響を受けない限り、やがてそれらの記憶を元に補完された部分を強固に安定させた人格になるはずであった。

だが、それは本当にサラマンダのメビウス・ダゲットの妹、昨日までのシェリル・ダケットという人間と同じ人間なのかどうかは、もう誰にもわからない。

確かなのは、目を覚ました時に、最初に目に映ったベックという青年をシェリルは好きになるという事だけだった。最後の最後にシェリルに対してエルデがそっと唱えたルーンは、実はそう言うルーンだったのだ。

『あれだけは、口が裂けても誰にも言えないな。特にベックには』
【そもそも禁忌やしな】
『犯罪者め』
【言うとくけど、共犯やからな】
『もうこうなったらヤケだ。お前となら、共犯でもなんでもつきあってやるさ』

エイルはそう言うと握りしめていた拳を開いた。

そこには、リリエデールが精緻に浮き彫りにされた、薄茶色の髪飾りがあった。

公式な記録にシェリル・ダゲットという名前はみつからない。

膨大なミリア・ペトルウシュカの創作の中にも現在のところシェリルをモデルにしたような絵は見つかっていない。もっともミリアがシェリルと出会っていたとは考えにくいのでそれは問題ではないだろう。

しかし、多くの吟遊詩人が行方不明の婚約者を追って異世界フォ

ウヘ旅立って行ったシェリルという娘の歌を今でも歌う。
そして多くの器楽演奏者が今でも好んで奏でる、暖かく心に染み渡る美しい旋律を持つ曲がある。
曲の名はご存じ、「鳶色の瞳のシェリル」
「エレルアリーナの主題による変奏曲」と呼ばれる事もあるが、「鳶色の瞳のシェリル」という曲名の方が通りがいいだろう。
サラマンダだけでなく、ファランドールの各地で今でもこの曲を相手に捧げる事が、求婚の意味を持つとされているのは周知の通りである。

＞ｉ３１９３６―１８３１＜

## 第四十六話　鳶色の瞳のシェリル（後書き）

第五巻終了
次話より第六巻が始まります

# 第四十七話　ツイフォン（前書き）

第一部　蒼穹の台　第六巻スタートです

# 第四十七話　ツイフォン

＞ｉ２３４７４―１８３１＜

二杯目のコーヒーに口をつけようとした時に「二藍の旋律」（ふたあいのせんりつ）ことラウ・ラ＝レイは正面に座るアルヴの少女に声をかけられた。声の主は彼女の部下である末席賢者の「群青の矛」（ぐんじょうのほこ）ことファーン・カンフリーエだった。

「猊下からお呼び出しです」

眼下にこぢんまりとした港を見下ろすテラスの片隅のテーブルに二人はいた。

「何事？」

「私にはなんとも」

「そうだったな」

「では、お手をどうぞ」

彼女たちの立場、すなわち賢者が「猊下」と呼ぶ相手はこの世に三人しか存在しない。それは三聖と呼ばれる者の事であり、そして彼女たちがただ「猊下」と呼ぶ場合、それは「蒼穹の台」（そうきゅうのうてな）の事を指していた。

多少の名残惜しさと共にコーヒーカップを皿に戻したラウは、周りに人の気配がないことを確認すると、差し出されたファーンの左手を両手でとり、そのまま包むように握りしめた。

時を置かず、ファーンの額に第三の赤い眼が現れた。同時にファーン自身の二つの眼も赤く染まる。

「「二藍の旋律」。君かい？」

しゃべっているのはファーンだったが、口調は「蒼穹の台」ことイオス・オシュティーフェその人のもののようだった。

「はい。目の前におります」
「少し情勢が変わった。特定精霊陣の消去作業はひとまず中止して、急ぎで調べてほしいことがある」
「中止、ですか？」
「今言ったとおりだよ。もうそんな悠長な事を君に頼んでいる場合ではなさそうなんでね」
「そんな場合では、ない？」
「世界はゆっくり変わると思っていてはいけないという事さ」
「――承知しました。して私が調べるものとは一体？」

端から見ると、ラウとファーンが普通に会話をしているようにしか見えないが、これはファーンを媒介として「二藍の旋律」と「蒼穹の台」が遠隔的に会話をしている状態だった。その間、媒介であるファーンは体の自由がきかない。また、ファーンにはその間、意識もない。テンリーゼンの使う遠隔話法である「精霊会話」とは全く別のものだ。

テンリーゼンのものはせいぜい有視界を限度とした近距離用の能力であるが、これは特殊な体質を持つファーン・カンフリーエと高位のルーンに精通した「蒼穹の台」の組み合わせで初めて成り立つ「ツイフォン」と呼ばれる超長距離用の会話ルーンだった。いや、呪法に近いとラウはイオスに聞かされていた。

ただし、いつでもどこでも会話ができるというたぐいのものではなく、制限が多いのも特徴だった。

文献によると、ツイフォンとは
・双方が存在する連続的な空間の大気が安定していること
・媒介一（この場合はファーン）の精神が安定していること
・媒介に肉体的な損傷がないこと
・術式が行われる際の媒介に自我があること
・術者一（この場合は「蒼穹の台」）が媒介にツイフォンのルー

ンをかけて、一定の期間内であること
・前回の術式から一定の時間が経っていること
加えて
・媒介の精神的な消耗が激しく、会話はごく短時間に限られる
とある。
つまり、連続した大気の状態が安定している必要性から、遠距離とはいえ、事実上その距離には限度があった。また、ルーンの効果期間は術者と媒介の能力次第であるから、これもあまり遠く離れてしまうと不確定要素が多すぎて不可能だと言えるだろう。
ファーンはかつて「蒼穹の台」の部下であった。それはその特性を見込まれて部下として選ばれたのかもしれない。そう考えるとラウにファーンを部下として与えたのは連絡手段の確保としてイオスにとっては極めて合理的な判断と言えた。

「君は今、どこにいるんだい？」
「昨夜、サラマンダの北西に位置するトゥセークの港町に入りました」
「トゥセークか。なるほどシルフィードに渡るつもりだったんだね。船に乗る前に連絡が取れて良かった。じゃあ、悪いけどそこから内陸部に戻ってもらうことになるね」
「承知しました」
「君はジャミールの隠れ里の事は知っているね？」
「ジャミール……ですか」
ラウは里の名前を聞くと口ごもった。

かつてシルフィードが国内から追放した部族がサラマンダに安住の地を求めて移住し、多くは隠れ里と呼ばれる外界から隔絶された土地で生活を始めた。
だが、移住したと言われる部族はすでにほとんど残ってはいなかった。

その現存する数少ない隠れ里の一つがジャミール族の隠れ里である。

当時サラマンダに残っていた隠れ里の多くは基本的にマーリン正教会の信心深い信徒が共同体のように一族の営みを続けている排他的な集落で、ドライアドに移り住んだ後、正教会の保護を受けているところもあった。ジャミールも正教会の定期的な観察集落として末席ながら名を連ねている。

正教会の賢者であれば、そういった正教会の付随活動についても知識があり、賢者特権により閲覧も自由だ。ラウも当然ジャミールの名前は知っているはずだった。

だがラウは、そういった正教会側の人間と同じ目の高さでジャミールを知っているわけではなかった。

「ちょっとした事件があってね。この間、現存する「真赭の頤」の研究施設も一通りつぶさに調べさせて貰った。結構面白いことがわかったよ。妙な物も発見した。まあ、それはいいけど、だから僕は君がジャミールとは多少の関係がある事もすでに知ってるよ」

「蒼穹の台」が何のことを言っているのかは、当事者であるラウにはすぐわかった。だが、その少なからず因縁が「あった」隠れ里に今更三聖がどんな用があるというのだろうか。ラウはそこが解せなかった。

「ジャミールで私は何をすればよろしいのでしょう?」

「捜し物をしてもらいたい」

「捜し物、ですか?」

「君に捜して欲しいものは、炎のエレメンタルだ」

ラウはさすがに我が耳を疑った。「蒼穹の台」はまるで置き忘れた眼鏡の捜索を頼むかのような淡々とした口調でさらりと『炎のエレメンタルを捜してくれ』と言ったのだ。

もちろんそれはラウの聞き間違いなどではなかった。

「炎のエレメンタルと……おっしゃいましたか?」

「僕が冗談を言っているとでも思っているのかい？」
「いえ、滅相もない」
ラウは思わず、ファーンに頭を下げた。
「もちろんジャミールの里の人間を片っ端から捕らえて身ぐるみを剥いで「エレメンタルの徴」を探し回れなどと言っているわけではないよ」
「は、はい」
「『それ』には一目見てわかる特徴がある」
「特徴、ですか」
「黒い髪と黒い瞳を持つ少年だ」
「炎のエレメンタルとは瞳髪黒色（どうはつこくしき）の者なのですか？」
「どうやら君はよほどピクシィには縁があるようだね」
「いえ、それについてはなんと申し上げてよいか」
「それから、その少年が本当に炎のエレメンタルかどうか確認する為にわざわざ「徴」を見つける必要はないよ。ただ、ジャミール族の里にピクシィの少年がまだいるのかどうかだけを確認してきて欲しいんだ」
「ジャミールにピクシィの少年が何人も居たらいかがしましょう？」
「ダーク・アルヴだけの隠れ里にピクシィの少年がそう何人もいるものか。とはいえ君の言いたいことはわかる。一応そのピクシィの名前を伝えておくが、その名前が正しいかどうかはわからないよ。どちらにしろ、もしピクシィが複数人いたら何人いたのか数えてくれればいいさ。簡単だろう？」
「御意」
「炎のエレメンタルの名はルルデだ。くれぐれも言っておくけど、その少年には絶対に手を出さないように頼むよ。僕からの注意はその一点だ」
「はい」
「それから、たぶんあの里にはまともに入ることは出来ないと思う

けど、その辺の問題は君の判断に任せるよ。一から十まで僕が指示したんじゃ三席賢者の名前が泣くだろうしね。君には「群青の矛」がいる。彼女を上手く使いなさい。里人と出会ったら、「真赭の頤」の使いだと言えばいい。里人には君が決して敵ではないと言うことは知らせておかなければならないよ。争いに行くわけではないのだからね。「真赭の頤」の名前で話が通じなければ「深紅の綺羅」（しんこうのきら）の手の者だと告げればいい。もちろんその名を出す事によって生じるすべての責任はこの僕がとる」

「「深紅の綺羅」様の手の者と言って良いのですか？」

「心配はいらないよ。そもそも君は間違いなく「真赭の頤」の関係者だ。堂々とそう言えばいい。「深紅の綺羅」の件は僕を通じた間接的な依頼だと言うことで君の中で了解したまえ」

「はい」

「僕以外の三聖の名を使うからと言って何も萎縮することはない。君は深紅と会ったことは？」

「いえ」

「深紅の綺羅」

三聖の一人である。

「蒼穹の台」と同じく生前の「真赭の頤」シグ・ザルカバードとは旧知の仲であった。

その「深紅の綺羅」がシグの研究所、いわゆる庵には度々足を運んでいたことをラウは知っていた。だが、ラウが三聖の顔を見たことは結局一度もなかった。

そもそもまだ賢者でもない弟子の分際で三聖とまみえるなど考えたこともなかった。「真赭の頤」自身も決して弟子の前に引き合わせる事はせず、先触れである大賢者が三聖の来訪を告げると、シグはいつもルーンで外界から遮断された特別な未知の部屋に直接通していた。

つまりラウは「深紅の綺羅」の存在は知っていても、影どころか

ついぞその足音すら耳にしたこともなかったのだ。

「そうか。そう言えば僕も君とはあの出来事があるまで出会ったことはなかったのだったね」

詳細は次回会った時にでも話すという事でイオスはラウに多くは語らなかったが、炎のエレメンタルの存在に関しては「真赭の頤」ことシグ・ザルカバードと「深紅の綺羅」が何らかの関与をしているようだ、と言う事だけは理解した。

「ただ、どちらにしてもいろいろあって今回僕がなんとか辿り着いたものはそれなりに古い情報だ。君にいらぬ先入観を与えて、見えるものまで見えなくなるのは困るんだけど、それでも敢えて僕の推理を言わせてもらえるならば、もうジャミールに件のピクシィの少年などいないとは思っている。わかりやすく言えば、ジャミールの里にはエレメンタルがもういないことを確かめて来て欲しいという依頼なんだよ。申し訳ないんだけどね」

「いえ。委細承りました」

腑に落ちない事だらけだったが、ラウは自分がとんでもないやっかいごとに首を突っ込み始めている事を直感的にかぎ取っていた。

例の特定精霊陣の無効化についても、師であるイオスは多くを語ろうとはしなかった。何度かそれとなく尋ねてはみたが、イオスはその度に「その時が来れば教える」と言うばかりだったのだ。

どちらにしろ師であるからというよりは三聖の命令を断る選択肢はラウには、いやラウに限らず賢者にはありはしないのだ。

ただ、心の奥底に得体の知れない不安が広がるのを止める方法を教えて欲しかった。

しかしラウの願いはかなわず「蒼穹の台」はその後ファーンの声を借りていくつかの付随情報と、今後の自分への連絡方法を伝えたにとどまった。

「ピクシィと言えば、別件だが君に伝えておくことがあるんだ」

「と、申しますと？」
「エイル・エイミイの件だよ。君が偽賢者だと言っていたルーナーだ」
「あ……」
イオスから今その名を聞くとは思わなかったラウは絶句した。
ラウはあの後、密かにエイルの行方を追っていた。ウーモスに入った辺りまではたどれたものの、その町で得た情報から、ル＝キリアと黒い髪の少年がアロゲリク渓谷で遺体で見つかったと知らされ、謎を解明できないままその相手を失ったと思い込んでいたところだったのだ。
「エイル・エイミイはアロゲリクで同行していたシルフィードのル＝キリア小隊とともに遺体で発見され、その場で火葬されたと聞いております」
「ふうん。耳が早いね」
「す、すみません」
「いや、いいよ」
「蒼穹の台」はファーンの声でそう言った後、少し間を開けた。
ラウは不審に思ったが、そのうちファーンがおかしそうにクスクスと笑い始めたのを見ると、我が目を疑った。
ファーンが笑っているということは、つまり「蒼穹の台」が笑っていると言うことだ。ラウは自分の師が声を上げて笑うのを見たことがなかった。
「ああいう子供だましは単純なだけに、かえって有効な場合もあるんだね。偽装の片棒を担がされた身としては本来悔しがるところなんだろうけど、なかなかどうして痛快じゃないか」
「は？」
ラウには「蒼穹の台」が言っている意味がわからなかった。いや、いったい何がおかしくて笑っているのかが皆目わからなかったのだが、偽装という言葉を聞いて反応した。

「猊下はもしやエイル・エイミイに？」
ファーン、いやイオスはうなずいた。
「会ったとも。君の言うそのアロゲリクの渓でね」
「先ほど、偽装とおっしゃいましたが」
「うん。ちょっと話が脱線したね。結論から言えば彼は生きてる。随行のル＝キリアと思われる一行も同様にね」
「私はウーモスの調達屋から、確かな情報として死亡と聞き及びました」
「その現認を行ったのはスプリガンというのだろう？」
「その通りです」
「彼、つまりエイル・エイミイに頼まれて僕がその偽装をしたからね。スプリガンの部隊に偽の遺体を火葬するように指示したのも僕だよ。それより二藍、彼はれっきとした賢者だよ。しかも予想通り君より上席だ」
「それは」
「まあ、色々事情があるようだから、賢者の名前は聞かなかった。だけど彼が一体誰なのかはおおかた予想がついている」
「お教え願いますか？」
「そうだね。でも、それは君が直接聞いたが方いいかもしれない。どちらにしろ君は彼にもう一度会うべきだ」
「会えばわかると言うことですか？」
「君次第……いやむしろ彼次第だろう。念のために忠告しておくけど彼とはもう二度と事を起こさないでほしい。妙な雑用をさせられるのはあれっきりにしたいからね」
「雑用、ですか？」
「いや、それはもういいんだ。この間も言ったけど、僕はたった一人の弟子である君を失いたくない。それに君は僕のたった一人の娘でもある」
「私では歯が立たないと言うことですか」
ラウはしかし食い下がった。

「君よりも上席だと言ったろう?僕の予想が正しければ、君は彼には絶対かなわない。それより、そもそも彼は君の敵などではないんだよ。そこのところは僕を信じておくれ」
「はい」
「さて、長くなりすぎた。さぞや疲弊しているだろうな。できれば群青をいたわってやって欲しい」
「もとより、承知しております」
「ありがとう、二藍」

会見はそこで終わりだった。
程なくファーンの額の眼が閉じられて消えると、本来の瞳の色も赤から緑に戻った。
ファーンの瞳の色の変化をじっと見つめていたラウは、エイルに初めて会ったランダールの蒸気亭で感じた違和感を思い出した。
―(そうだ。あいつの目は、黒いままだった)
賢者は第三の目であるマーリンの眼を開くと、その赤い瞳に呼応するように残る両眼も赤く染まる。第三の眼を閉じれば元に戻るが、マーリンの眼を開いて賢者の力を解放している状態では、全ての眼が赤く染まるのだ。それは「二藍の旋律」ことラウ・ラ＝レイに限らず、三聖である「蒼穹の台」とて同様であった。
エイルを見て、これは偽物だと理性ではなく感覚的に判断してしまったのは、瞳の色の変化が無いことによる違和感だったのだ。
そんな事を今更気付く自分のふがいなさに、ラウは苛立ちを覚えた。先にわかっていれば、イオスにその訳を尋ねることも出来たのだ。
ラウは賢者になってからずっと「蒼穹の台」の命で単独行動をとっていた。賢者同士のつきあいが浅いこともあり、他の賢者がマーリンの眼を開く場面を見る機会がそうあるわけではない。だから改めてファーンの変貌を見て思い至った訳なのである。

―（だが、それでも奴は本物の賢者であるという。しかも私が会わねばならない相手だと？）

イオスの命令自体は単純なもののようでいて、その言葉の中身については謎だらけだった。しかし、どちらにしろ生きているとわかった以上、ラウはエイルにはもう一度会うつもりであった。関わるな、と言われていた状況から一変して「会え」と言われた訳である。これで師に対して後ろめたい思いを抱くこともなく、また部下に無理を強要せずともよくなったわけでもある。ラウとしては喜んでいい話のはずなのだが、いざこう言う状況になると素直に喜ぶ気分にもなれなかった。

そんなことを考えていると、目を閉じてじっとしていたファーンがテーブルに崩れるように突っ伏した。

イオスのツイフォンが完全に切れたのだ。

「大丈夫か、ファーン？」

ラウは慌てて椅子から立ち上がると、顔面が蒼白なファーンを抱き起こした。

# 第四十八話　ジャミールへ

シェリル達と別れてから、十日ほどが経った。
それぞれが様々な思いに入り込んでしまっていた彼らは、活気ある音楽一座という看板とはほど遠い雰囲気であった。しかし、時間が経過するにつれ、それでも次第に現状を受け入れる気持ちの方が強くなってきていた。
別れはしたが、二度と会えないという訳でもなかった。
ハロウィンとルネの二人とは、シェリルを送り届けて様子を見届けた後、当面の一行の目的地であるウンディーネのヴェリーユで合流することになっていたし、ベックについても各地で彼らのために情報や物資などの手配行動をして、同じくヴェリーユで一度落ち合う手はずになっていた。
エイルはしばらくの間シェリルと一緒に過ごすことを強く勧めたが、ベックはもとより大きな変革を迎えようとしているファランドールをその目で見て回る為にウーモスの暮らしを捨てたのだ。
「オレが事をやり終えたと思うまでは、責任とって付き合ってもらうぜ」
彼の決心は固かった。
つまり、シェリルを除く三人とはいずれまた会える。

一番ふさぎ込んでいたエルネスティーネはそう思って前向きに考える事にした。
シェリルに会えないことは彼女にとっても寂しくはあったが、生きていればいつか会える可能性がある。それに本来の予定ではシェリルとはそろそろ別れる事になっていたのだから、それが数日早まっただけなのだと思う事でどうにか自分を納得させる事ができたのだ。

ルネとシェリルという同性の話し相手が減ってしまったことは寂しかったが、そもそもエルネスティーネの旅は、そんな贅沢を言っていいようなものではなかった。それになによりアトラックとエイルが側にいた。彼女にとってはルネやシェリルと同様に彼らはいい旅の仲間であり、話し相手だった。

一方ルネやシェリルが居なくなった反動で、エイルと一緒にいる時間が長くなった事は、本人の自覚はどうあれエルネスティーネにとっては全く違う種類の楽しさと今まで味わったことのないときめきを感じさせてくれる時間が増えたことに他ならなかった。

とはいえ、好事魔多しとはよく言ったもので、肝心のエイルはどうにも人気者で、エルネスティーネがたとえそれを望んだとしても一日中側にいられるというものではなかった。現にエイルは今、エルネスティーネの前を歩く新しい旅の道連れであるアモウルという自称賞金稼ぎ兼横笛の奏者と、さっきから何事かを熱心に語り合っているようだった。

「機嫌が悪いようですが、どうかしましたか？」

ティアナはさっきから口を尖らせるようにして黙りこくっているエルネスティーネを見かねてそう声をかけた。

「別に機嫌など悪くありません」

エルネスティーネは言葉とは裏腹に機嫌の悪さを隠そうともせず、そう言うとそっぽを向いた。

ティアナはエルネスティーネの前を歩くエイルとアモウルの後ろ姿を見て苦笑した。

「とまあ、昔の大吟遊会はそれはそれはものすごいものだったのさ」

「いや、エスタリアの公爵様ってのがどれほどの金持ちかは知らないけど、さすがにそれはやり過ぎじゃないのか」

エイルはアキラからドライアド王国の北部に広がる「白の国」エスタリアで行われていた大吟遊会の話を興味深く聞いていた。

最近は規模が縮小されてしまったが、以前は訪れた誰しもが呆れて開いた口がふさがらないほど豪華絢爛な催しであったこと。振る舞われる酒や食事はファランドール中から選りすぐって集められたもので、その量もさることながら贅を尽くした食材による何百種類もの料理の名前を全て知るものは当然ながら、半数を知る者さえ居なかった事、才能ある者には城の部屋を無償で貸し与えるばかりか、多額の旅費を持たせて創作の旅を奨励するのはあたりまえで、大会で賞を勝ち取った者へ与えられる賞金のあまりの額に目を回す者が何人も居たこと。そしてそれはただ一人、ペトルウシュカ公爵という人物の鶴の一声で取り仕切られていた事などなど、エイルは当然ながら、エルデでさえも知らないことばかりだった。

アトラックとはまた違って、アキラの極めて芝居がかった大げさな語り口が話と合っていたこともあって、ついつい引き込まれ、エイルはまるでその会場に居るかのような気分になって聞き入ってしまっていた。

「だが、私は今になって思うのだ。そうやって大金を得た芸術家の多くは自らの創作を顧みなくなり、自らの芸を磨かなくなる。つまり、あれはその芸術家の才能が果たして本物かどうか、限界が浅いのか深いのか、その者の芸術に対する信仰や思いの深さ、そして一番大事な誇りの厚薄をも見抜く……いや、自らで確認してみろという公爵からの過酷な問いかけではないのかとね」

エイルはアキラが語る白の国エスタリアの公爵に対する評価が様々な表現を用いられるものの、首尾一貫しているのを感じていた。世間では「ばか殿」という侮蔑の入った二つ名で呼ばれるペトルウシュカ公爵は、アキラの口を借りたとたん、同じ事象を語るにしろその対象は深遠なる哲学者の姿に変貌してしまうような気がするのだ。

「世間では『ばか殿』ってことになってるけど？」

「まあ、巷間ささやかれるように本当に愚かでバカなだけなのかも

しれんがね。そう言えばあれはもう何年前だったか……、町の酒場の片隅でビア樽を抱きかかえて幸せそうに眠っている姿をこの目で見た時はさすがの私も驚愕を通り越して腹の底から笑わせて貰ったものさ」

「そりゃすごい公爵様だな」

エイルの反応に、アキラは嬉しそうな笑顔を見せた。

「全くだな。しかし、この話で特筆すべきはそこだけじゃない」

「というと？」

「ビア樽を抱えた公爵様には、毛布が掛けられていたのさ。しかもぞんざいに放り投げたような状態ではなく、きちんと、ね」

「へえ」

「しかも、その店の入口には大きなビラがぶら下げてあって、そこにはこう書かれていた。『珍獣注意。お静かに！！』とな」

「それって」

アキラはうなずいた。

「少なくとも市井の者には人気のあるお人だよ。ともあれ現実は厳しい。実際問題あの方の放蕩が過ぎて公爵家の財政を傾かせたのは事実のようだしな」

だが、そう言うアキラの言葉には批難の色も批判の響きもない。むしろ子供の飛び切りの悪戯を自慢げに語る親のような口ぶりだとエイルは感じた。

「ふーん。一度会ってみたいな、その公爵さんには」

だから、正直な気持ちがそう言葉に出た。

「そうか。ならば来春に行われる春の大吟遊祭に共に行こう」

「でも、オレはただの平民だぜ？いきなり行って偉い貴族様に会えるのか？」

「私の紹介ならば公爵に直接会うことは簡単だ。ちなみに私の持つ公爵符は本人が不在だろうがビヤ樽と結婚していようが公爵のお屋敷で無期限に食客として居座れる権利も付いている。つまり宿代や食事代の心配もいらないと言うことだ。さらに君がその気なら身の

回りの世話をする美女もよりどりみどりだ」
「美女？」
「美女だ」
「うーん、美女か」
「そりゃあ、美女さ」

【アカン】
『え？』
【行ったら焼き殺すで】
『おいおい』

「うーん」
「なんだ、君はそっちか？」
「いやいやいや」
放っておくとどんどん違う方向へ話が進むのもアキラの話の特徴だった。
勿論アキラから見れば自分よりも相当若く見えるエイルを年の離れた弟よろしくからかっているのだと言うことはエイル自身も解っていたが、およそ二心などないように思える笑顔を見せられると、いつの間にかアキラが古い仲間のように思えてくるのだった。
「来春の事はまだわからないけど、考えておくよ。だけどその公爵さん、財政を傾かせたって言うだけで幽閉状態というのはさすがにちょっと気の毒だな」
「ふむ。ドライアド王国の首都ミュゼでは公爵家の実権はやがて弟のエスカ様のものになるだろうという噂で持ちきりだがね。ドライアドではシルフィードと違い、高級爵位は基本的に生前移譲はない。命まで狙われねばいいのだがな」
「そりゃ物騒な話だな。でも兄弟でそう言う血なまぐさい事になるっていうのはどんな気分なんだろう」
「ルーナー殿はご兄弟は？」

「ああ、うん。妹が一人いる」
「仲は良いのか？」
「よくわからないけど、いいと思う。それよりその『ルーナー殿』はやめてくれ。エイルでいい」
「では私もアモウルで一つよろしく頼みたい」
ウーモス脱出を経験しているだけにアキラが持っている公爵符の通関証としての効力には疑いはなかったが、出来る限りそれを使うことは避けるというのが、アプリリアージェの考えだった。
すなわち一行は、通関が行われている可能性のある町を通らない経路を選んでいた。アプリリアージェとしてはアキラに対する疑いが払拭されない以上、例え通関証で簡単に出入りできる事が解っているとしても周到に準備されているかもしれない罠の中に入ることは避けたかったというのが本心であろう。その代わりに目的に対して最短の経路を選ぶことは出来た。
とはいえ、背に腹は代えられない。手持ちの食料がつきる前に補給する必要があったし、秋の深まりに加え標高が上がる事により気温が大幅に下がりつつあった。ヴェリーユに着くのはまだまだ先になる。であるなら冬の装備も必要だった。
「ヴェリーユには最短経路で行きたいんだ。だから陸路で国境を越えることになるらしい」
今後の経路をエイルとアキラが話題にした時、エイルはそうアプリリアージェとの合意事項を告げた。
「すると、まさかノーム越えか？」
エイルはうなずいた。
「結構困難な旅になるだろうな。ちゃんとした道なんかないそうだよ」
ノーム山脈はサラマンダ候国とウンディーネ共和国からなるノーム大陸と呼ばれるファランドール最大の大陸の北部を東西に走る大山脈で、大陸を完全に南北に分断する急峻な山々からなっている。

アトラックに依れば世界最高峰のノーム山を筆頭に、一万メートル級の山が十数個あり、それぞれが急峻な峰峰を従えて重なり合うように続いている大山脈だと言う。もちろんまともな登山道などが整備されているわけでもなく、そこを超えようとする酔狂な者はまず居ないのである。

したがってこのノーム山脈は地続きであるはずの一つの大陸を南北二つの陸地として隔てる自然の壁として存在し、それはそのままサラマンダとウンディーネの国境線となっていた。逆説的ではあるが、文字通り国境に沿って壁が作られているようなものなのである。

一行はその「ファランドールの屋根」と呼ばれるノーム山脈を越える経路を選んでいたのだ。

エルデが「真赭の頤」シグ・ザルカバードの七番目の庵の所在地だというヴェリーユは、ウンディーネ共和国領内、しかも中央南端の町だ。すなわち東西どちらの海岸線からも遠く、南にノーム山脈を戴く麓の平野部に位置している。

出入りの検閲がことのほか厳しいであろう海路の町を経由してウンディーネ入りしても、そこからまた大陸最深部までの距離を歩くことを考えると、直線的にヴェリーユを目指した方がいいというのがアプリリアージェの判断である。

それに切実な問題もあった。豪雪地帯で知られるヴェリーユは、冬になると雪のせいでそもそも町の出入りが不可能になるという。一般的な経路だと確実に雪の壁に阻まれるであろう。

さらに言えばノーム山脈の国境線には通関所など存在しない事も重要だった。

「こっちはそれなりの覚悟ができてるけど、アモウルに不都合があるならリリアさんに相談してみるといいよ」

「私は君たちと旅をする事自体が目的だから問題はないさ。いや、不都合があると言えばあるにはあるな」

アキラは煮え切らない物言いをすると、腕組みをした。

「ふうむ」
「言いにくい事なのか？」
「いや、ここ数日冷えてきたからな。山にはそれなりの冬支度をしてから向かいたいものだと思ってな。私は南国の育ちで寒さがどうにも苦手でね。君たちのその贅沢極まりない便利なマントを私は持っていないしな」
アキラはそう言うとエイルが羽織っているアルヴスパイアのマントを指さした。
「色は沈鬱だし美しい刺繍もない。機能優先で形も野暮ったい。つまり自分ではたとえ頼まれたとしてもとても着たいとは思わないが、正直に言ってその反則とも言える機能はうらやましい。私の美学には反するが、背に腹は代えられないというものだ。できれば私も同じものを手に入れたいのだが、そうなるとそれ相応の大きな町に行かねばならないな」
「冬の装備についてはアトルが補給の段取りを考えてるはずだ。たぶん心配はいらないさ」
「そうか。ならそれはアトル殿に頼るとして、心配事はもう一つ」
「何だ？」
「ノーム越えともなると結構本格的な山登りになるのではないか？」
「結構というか、かなり、だろうな。オレも初めてだからわからないけど、空気も薄いだろうし道なき道どころか垂直な崖を上るなんて事になるみたいだ」
「だとすると、私はネスティお嬢様が少々心配でね。彼女は君たちのような戦闘要員ではないのだろう？」
アモウルはそう言うと、後ろをチラリと振り返った。ティアナと並んで歩いているエルネスティーネの金髪が見えた。
『いや、オレだって別に戦闘要員ってわけじゃないんだが』
【剣士はどう考えても戦闘要員やろ】
『やっぱり？』

【しかも、俺はどう考えてもファランドール屈指の……】
『はいはい』

「まあ、ネスティはああ見えても風のフェアリーだから。ファルもいるし大丈夫なんじゃないかな。彼女は自分から音は上げない性格みたいだしね。というか、楽しみにしているくらいだよ。でもまあ、その辺もちゃんとリリアさんは考えていると思う」
「そうか。それならいいのだがね」
「それより、ネスティと言えば、本当にいいのかい、あれ」
エイルはチラリと後ろを振り返ってエルネスティーネの様子を見てそう言った。
「アレ？ああ、アレか。ははは」
二人がアレというのは、どうやらエルネスティーネの肩に乗っている毛むくじゃらの丸い物体の事を指しているようだった。
「すっかり彼女に懐いてしまったようだね。なあに、いい女に振られるのは男の勲章さ」
「あいつ、メスなのか？」
「いや、マーナートの雄雌は素人にはまずわからんらしい」
「ふーん」
「まあ、アレが自分の主人をネスティ嬢だと決めたのなら、ここは潔く身を引くのが私の美学というものだ」
「そうか。ネスティも発狂しそうなくらい気に入っているようだし、そう言って貰えてオレも安心したよ」
「ほーお」
ホッとしたような顔でそう言うエイルを、アキラは意味ありげなニヤニヤ笑いで見た。
「何だよ？」
「いや。君はまるでネスティ嬢の兄のような物言いをするのだね」
「あ、いやいやいや。今のはそう言うわけじゃないって」
エイルは顔を赤くすると、あわててそう否定した。

アキラが愛玩動物として飼っているマーナートというデュナンの成人のこぶし大ほどの大きさのネズミは、今ではすっかり本来の主人のもとを離れ、エルネスティーネのもとで一日の大半を過ごしていた。

丸ネズミとも呼ばれるマーナートは人慣れするので飼いやすく、大きなクリクリした目とふわふわした絹のような手触りの長毛、そして短い手足といった外観が特徴で、誰が見ても普通はかわいらしいと思う小動物だ。ネズミの仲間らしいが野外で放し飼いが出来るほど人に懐く、まるで犬のような性格の動物だという。

エイルは記憶にあるフォウの動物をあれこれ頭の中で検索してみたが、似たような動物を探し当てることは出来なかった。

滅多に鳴かず、従って犬と違い極めて静かである。もちろん大声で吠えることが出来ないので番犬にはならないだろう。しかし食べ物にも好き嫌いはなく雑食で、旅に連れ出すには犬や猫などよりも適した相棒と言えた。ただ、神経質なところもあり、特に籠や檻など狭い場所を極端に嫌い、そういう環境下で無理矢理に飼うとすぐに死んでしまうという。したがって放し飼いをせざるを得ず、そうなると天敵とも言える犬や猫がいる家では一緒には飼えない。

一部の動物学者によるとマーナートは犬や猫と同等以上の知能を持っていると言われ、寿命もほぼ犬と同等で小動物としては異例に長寿と言える。

またドライアド南部ではマーナートは精霊の一種であり、長く生きた個体はルーンが使えるようになると信じられ、神聖な動物とされている。

しかしかつて良質な毛皮の原料として乱獲され、自然界では個体数が激減しており、月の大戦の時代には既に珍しい動物になっていたと思われる。

そのマーナートがエルネスティーネのもとへ来た経緯は簡単な事である。

アキラが食事の時に自分の分を少し残して「旅の相棒」に与えている様子を食い入るように見ていたエルネスティーネに、触ってみるか？と飼い主が差し出したのがきっかけだ。

エルネスティーネはおもちゃを与えられた子供のように顔を輝かせてマーナートをそっと撫でてやり、自分の食事や道中拾った木の実などを事あるごとに与えてやった。

マーナートは一部のネズミに見られるものと同じような頬袋を持っており、ここに当座の食料などを蓄えておける。受け取った食べ物をどんどんそこにため込んで、自分の本来の体の二倍ほどにまでふくれあがる様を見て笑い転げているエルネスティーネを見たアキラは別れる覚悟を決めざるを得なかった。

そのうち近くでエルネスティーネの声がすると、彼女の声に反応してアキラの懐から顔をのぞかせるようになったものだから、エルネスティーネとしては大感激で、いろいろと理由をつけてはマーナートを見にアキラのもとへ行く事が多くなった。

ティアナはと言えば、アキラとエルネスティーネが接触することには極端に難色を示していたが、エイルがそこに一緒に居ればいいだろうというアプリリアージェの条件をのむ事で渋々ながら承諾していた。

「アモウルさん、この丸ネズミちゃんのお名前はなんと言うのですか？」

「名前ですか」

エルネスティーネがアキラにマーナートの愛称を尋ねると、アキラはバツが悪そうに苦笑して頭をかいた。名前はまだ付けてないと言う。

それを聞いたエルネスティーネはすかさず自分が名付け親になることを申し出たが、なんとそれはあっさりと受理された。

「ありがとうございます。お礼にファランドールで一番ステキな名前を考えます」

そしてその日一日丸ネズミを懐に入れたり肩や頭に乗せたりして名前を考え続けたエルネスティーネは、夕食の時に極めてもったいぶった態度で一同にその「ファランドールで一番ステキな名前」を披露した。

「『マナちゃん』に決めました」

『ファランドールで一番ステキな名前、なんだよな』

【カラティア家の情操教育については、一度ティアナの忌憚のない意見を聞いてみたいもんやな】

『いや、やめといた方がいいと思うぞ』

その名前を聞いた一同が、エルネスティーネにはある特殊な命名の才能があることを認識したのは言うまでもないが、アキラだけは例外で、即座に「素敵な名前だ」と褒めそやした。

そして彼の不用意なその一言は、一同に芸術家としてのアキラの素養に多少の欠陥が存在しているのではないかという疑問を生じさせるのには充分だった。もちろんアキラ本人にそのような自覚は一切ないようではあったが。

それからはもうなし崩しであった。

マーナートの「マナちゃん」の実質的な飼い主はエルネスティーネになったのだ。

「元々あの『マナちゃん』はそれほど私に懐いてはいなかったようだからね。馬が合う相手が見つかってよかったと思っている」

「なぜ名前をつけてなかったのさ」

「名前を付けてしまうと情が湧くじゃないか。そうなると別れが辛くなる」

「変わった人だね、アモウルは」

「君にそう言われるのはなんとなく心外だが、ここはまあ褒め言葉と受け取っておこう」

その頃になると一行のアキラに対する警戒心はそれなりに緩んでいた。あのシェリルの事件があった夜にエルデが思わず漏らしたように「隙だらけ」に見えたし、表面上は「いいお兄さん」であった。既に述べたように話題も豊富で「面白い奴」でもある。横笛の演奏は相変わらず感動的であり、加えて怪しい素振りなどは一切ない。

アプリリアージェとエルデも毎晩アキラについてはお互いの情報をもとに密かに確認しあっていたが、ル＝キリアがその気にならずとも、エルネスティーネでさえ後ろから矢を射て横笛の名人の命を取ることなど極めて容易に思われた。

「強いて言えば、怪しくないところが怪しいのかもしれません」

アプリリアージェと一緒に見張り当番になった夜に、彼女がエルデにそう言ったが、エルデも同意見だった。

要するに怪しくないのだ。

勿論警戒は怠らないにせよ、である。

『ヴェリーユまで本当についてくるつもりなんだろうな』

【そうやな。でもまあ、ヴェリーユではあの公爵符が何より役にたちそうやから非常にありがたいんやけど】

『そうなのか？』

【ああ。あそこは特殊な町やからな】

ヴェリーユまではまだまだ遠かった。つまりはしばらくの間アキラは旅の仲間として彼らと同行することになると言うことだった。

そしてシェリルと別れて十日目の昼食の時である。

アトラックはもったいぶった咳払いの後、一行に提案をした。

「毎日脅していたけど、物資がそろそろ本当に底を尽きかけてます。このシチューがちゃんとした食事としては最後になるでしょう。それから予め言っておきますが明日の朝のベーコンはなし。干し肉入りのおかゆで我慢してもらいます」

「あんなに薄く切っていれば一年分くらいあるのではないのか？」
　ティアナがわかりやすい嫌みを言ったが、ことベーコンの話題になるとアトラックはひるまなかった。どうやら二人の間にはベーコンの厚みに対する根強い確執があるようだった。ちなみにこの件に関してはファルケンハインもまたアトラックの強敵である。
「俺が『適切に』切っていたからこそ、ここまでもったんです。いいですか、足りない分は各自の非常食の乾パンで補って下さい。で、提案はここからなんですが、食料補充については選択肢が二つあります。一つはグワンデの町に入ること。ここからだと明日の夜には到着します。ただ、あの町はサラマンダ軍、つまりドライアドの委嘱軍の駐屯地でもあります」
「兵隊は嫌いだ」
　エイルが言う。
　ティアナも同調した。
「私もだ」

【よう言うようになったな、この根っからの軍人さん】
『けっこう融通がきくようになった、というか崩れてきてる気がするな』
【涙もろいっちゅうのはわかったけど】
『そう言えば最近、ネスティと話し込んでいても睨まれる事が無くなった気がする』
【ファルのおかげやないんか】
『ネスティの件はそうかもしれないけど、涙もろいのは素質だな』
【兵隊嫌いなのは？】
『それはたぶん冗談ってやつだろ』

「もう一つの選択肢は、目と鼻の先にあるダーク・アルヴの隠れ里です。こちらはサラマンダ軍の駐屯地もないし、今日の夕方には到着します。さてどうしますか？」

すかさずアキラが手を挙げた。アトラックがどうぞ、と促す。
「つかぬ事を尋ねるが、選択肢などないような気がするのは私だけだろうか？」
アトラックはアキラの質問を待ってましたと言わんばかりに嬉しそうに頬を緩ませた。
「近い方は多少山道が険しいのと、『ダーク・アルヴだけの集落』というのがあるという噂が存在するだけで他には確実な情報がないのが問題でして」
サラマンダの山岳地域の地理や情報に詳しいアトラックがそう言うのだ。山道は相当険しいのだろうし、ダーク・アルヴの隠れ里の様子は本当に不明なのだろう。
「でも今日は、そこでちゃんとした寝床にありつけるかもしれませんよ」
アトラックは、「山道が険しい」と言った後にエルネスティーネの顔が曇ったのを敏感に察知すると、その短い金髪のお姫様の方を向いて明るい声でそう言った。

「サラマンダにダーク・アルヴの里か。珍しいな」
ティアナがつぶやいた独り言に、横あいのファルケンハインが説明した。
「隠れ里だ。おそらくサラマンダでは知られておらず、むしろシルフィードの方がその存在を把握しているのではないかな」
そして少し間をおいて低い声で付け加えた。
「ただ、今もあるかどうかはわからないらしいが」
「というと？」
「こちらの情報筋の話だとこの五年ほどは確認情報がないらしい」
「村があるかどうかも定かではないと言うことですか？」
ティアナはやや不満気にそう言ったが、なかった場合には引き返すという選択肢もありだとは思った。それにアトラックの口ぶりからは問題なく存在しているような妙な自信が感じられたのだ。可能

性が低ければ最初からグワンデに向かうと思われた。
　さらに、地理に詳しいアトラックによれば
「その里の奥にある洞窟を抜ければ、グワンデ側から谷を迂回する経路より一週間から十日は稼げますよ」
　と言うことだった。
「しかも、ル＝キリアの足での換算です」
　そう付け足したアトラックに目配せをされたティアナとしてはもう断る術はなかった。ル＝キリアの小隊の足で一週間分も稼げるのだ。エルネスティーネの足の一月分にも匹敵するのではないか。
「安全であるなら、私に異存はない」
　そう言っていったん会話を句切ったティアナだったが、少し間をおいた後、何かに気づいたようにファルケンハインを見上げて訪ねた。
「そもそもその村は何なんです？ダーク・アルヴならシルフィードで暮らせばいいものを。こんなところではアルヴ族であるこというだけで迫害にあうこともあり得るのではないのですか？」
　ティアナの言葉にファルケンハインは顔を曇らせた。
「――なるほどそうか、異教徒の村、ね」
　二人のひそひそ話をすぐ側で聞いていたエイル……いや、エルデがつぶやいた。
　ファルケンハインの言葉をエルデが持つ知識に照らし合わせて導き出された答えだ。
『異教徒の村？』
【方々にある。マーリン正教会、新教会に属さへん宗教もしくは亜流・傍流の教義を信奉している一族の村や】
『マーリン教じゃないと隠れないといけないのか？』
【まあ、マーリン教国やと弾圧されるやろな。おまけに自国であるシルフィード王国は宗教団体を一切認めてへんからな】

『自国って、もともとシルフィード王国の人たちなのか？」
【そういうこっちゃ】
『なんだ。排除しているのはマーリン教だけじゃないのか』
【全部や。そやないと不公平やろ？】
『不公平、か。そうだな』
【新旧マーリン教だけがアカンのやったら適当に違う名前の宗教団体作って、同じ活動したらええだけやしな】
『ふむ』

異教徒の村、というエルデの言葉を聞いたティアナはその一言で合点がいった。

三千年も前から、シルフィードでは宗教活動は御法度になっていた。だが、それを捨てきれない人々がいるのもまた事実である。

シルフィード政府はしかし例外は一切認めず、宗教活動を捨てられない人々については平和的に国外への退去を求めた。

もっとも表向きには「要請」だが、実質は強制退去に近かったのは想像に難くない。なぜなら、常識的に考えて、退去を要請されても動こうとしない者の方が多かったに違いないからである。

この頃……月の大戦前夜のシルフィードの法律には、信仰については一切触れられておらず、宗教活動のみを禁じる事になっていた。教会や偶像はもちろん、他人の前での祈りや供物の寄進なども禁じられていたようだ。だが、心の中で自分の信じるものに祈ることは止められていない。いや、誰にも止められはしないだろう。だからこそ、信仰の禁止ではないのである。宗教活動の一切の禁止なのであった。

退去させられた者達は、多くの場合国外に一つの集落を作って暮らす事になった。新教・正教などのマーリン教のようなファランドールでも主流になる宗教の場合は国外で普通にその教会に受け入れられたであろうが、問題は土着の小規模な宗教や本流から眉をひそ

められた傍流宗教の集落である。
外国に行っても彼らは単なる異教徒に他ならない。宗教というものは一般的には多くの場合排他的である。異教徒を自分たちの社会の中に受け入れるおおらかな素地は少ないといえる。いきおいそういう小規模な宗教団体は迫害を受けて離散・消滅するか、さもなければ人里離れた場所で細々と暮らすかのどちらかの道を歩むことになった。
シルフィードが宗教活動を禁じてすでにかなりの歳月が流れていた当時、存在していた宗教集団の隠れ里はそれほど多くはなかったと推測される。
その数少ない残された「隠れ里」の一つが、彼らが向かおうとした場所であった。

エルデが口にした言葉に対してファルケンハインはあえて肯定も否定もしなかった。そしてティアナもそれ以上重ねて尋ねる事をしなかった。シルフィードの人間としてはあまり触れたくない内容であることは間違いないところだからだ。しかもそれは政治的な話題になる。軍人である彼らが外国人であるエイルとアキラの前で口を閉ざすのは当然と言えた。
体制側の近くにいたティアナにとってはそもそもこの話題の向こう側にある別の様々な問題について語るべき言葉を持っていなかったのだ。
アキラはしかし、委細かまわずに続けて質問した。
「その隠れ里の名前は？」
「ジャミール」
「ジャミールか。名前もいい。一曲出来そうだ」
アキラはそう言うと懐の笛をポンと叩いた。

【ジャミールやて？】
『何かあるのか？』

【いや……ああ】
『どっちなんだ？』
【聞いたことはあるけどよう知らん、というのが正確な答えやな】
『はっきりしないな』
【この辺やったんか。どうにも因縁めいた感じ、やな】

「それではさっそく快適な寝床に向かって出発しましょう」
元気よく声を上げたのはエルネスティーネだった。
エルネスティーネとて、シルフィード王女として自国の歴史やそれに伴う現状を知らぬはずがない。宗教活動の廃絶に伴い生まれた、幸せとはいえないその経緯についても認識があったのは間違いないと思われる。ただ、彼女は知識と現実の持つ重さとの間にある溝というものをまだ知らないでいた。
ともあれ、一同はエルネスティーネのかけ声を合図に目的地をジャミールに定め、出発の準備に取りかかった。そしてまずは当面の得物としての、目の前に立ちはだかる山をなんとかこなす事になった。

「俺、快適な寝床とは一言も言ってないんだけどな」
「チラつかせるエサはおいしそうなほどより効果が高いものなのですよ、アトル。ほら、言うでしょう？『豚もおだてりゃキリキリ舞い』って」
アトラックがエルネスティーネの解釈に訂正を加えると、短い金髪の少女は口をとがらせて抵抗をして見せた。強力で難解な「たとえ」を添えて。
「き、期待はずれだったときの落胆が大きいのも問題だろう？」
どう反応するのか期待に満ちた一行が注目する中、アトラックはかろうじて「たとえ」を無視することに成功した。
「その時は改めてみんなで寄ってたかってアトルに文句を言いまくりますから、全然大丈夫です」

「いや、何が全然大丈夫なんだか」
アトラックは敵が強大すぎた事を悟ると、敗北感を背中に漂わせながらため息をついた。

このとき一行が訪れたダーク・アルヴの里はノーム山脈の支脈にあるレイジノ山中にかつて存在したと言われるジャミールの里だと伝えられている。だが、もちろん現在その所在を確かめるすべは我々にはない。ダーク・アルヴ族は石の家や建築物をあまり好まず、木造の建物をもってよしとしていた。同じアルヴ系の種族とはいえ石像や石の建築物が好きなアルヴとは好対照といえるだろう。
ダーク・アルヴのみで構成されていたと言われるジャミールの里も木材で造られた集落であったと推察される。山火事も多い地域ではその風習から痕跡を探す事は困難であると言えるだろう。さらにジャミールの里があったとされる地域には「月の大戦」以降、大きな火山噴火が数回記録されている事から、遺跡があったとしても堆積した火山灰のはるか下になっていると考えられる。

「そういえばシェリルがジャミールの里を知っていると言ってたな」
ファルケンハインは誰とはなしにそう呟いた。
「シェリルの話ですか？」
アトラックがそれに反応した。エイルはシェリルという名前で、思わず聞き耳を立てた。
「うむ」
エイルがチラリとみやったアプリリアージェの様子は……いつもと全く変わらない。微笑が浮かんでいるだけだった。
アトラックは歩みを早めて前を行くファルケンハインに並んだ。
秋が深まって気温が下がりつつあるとはいえ、日中の山道の登りではさすがに汗をかく。風のフェアリーであり、かつ体の鍛え方が一般人とは違うル＝キリア一行は見事に汗一つかいてはいなかった

が、ティアナの額にはじっとりと汗がにじんでいた。アルヴのティアナにしてその様子だから、体力のないアルヴィンのエルネスティーネに至っては、早くも息とあごが上がっていた。

エルネスティーネのその様子を見ていたアトラックは以前から時々不思議に思っていた事を口に出した。それはファルケンハインだけにしか聞こえない程度のつぶやきのようなものであったが、ファルケンハインは珍しく反応して見せた。

「ネスティーは風のフェアリー、いやその上を行く風のエレメンタルなのに、普通のアルヴィン並ですね、身のこなしというか、動きが」

「さすがに普段から鍛錬をしていないと言うのはきついものなのだろうな。それにネスティーはフェアリーの力を使うことを封印されているんだしな」

「ああ、そうでしたね」

アトラックは、ハロウィン・リューヴアークから説明を受けていた事を思いだした。なんでもまだ力の制御ができないエレメンタルがその力を使い、それが万が一暴走すると、その力がある種のルーナーやフェアリーには、距離に関係なく関知されてしまう可能性があるのだ言う。

「何にせよ、力を封じられるのは辛いでしょうね」

「そうだな。俺達もフェアリーの能力を封じられたら、いったいどれほどの戦力低下になるのかと思うとぞっとする」

「俺はデュナンだからアルヴ以上に深刻ですよ」

アトラックのエルネスティーネに対する興味は長く続かなかった。シェリルについてファルケンハインが何かを言いたがっている事を思い出したからだ。

「それで、さっきのシェリルの話ですが」

ファルケンハインはうなずいた。

「シェリルはゲリラに所属していたから、特にサラマンダの山中の隠れ里や集落についての知識や情報には驚くべきものがあった。彼

女は頭のいい人だから、情報に対する認識も深い。俺はシェリルとはけっこう有意義な会話を交わせたと思っている」

「へえ。いつのまに」

アトルの若干からかいが込められた合いの手に、しかしファルケンハインは当然ながら無視を決め込んでいた。

「いつだったかルルデの思い出話から、偶然これから向かうジャミールの里についての話になった」

「ルルデ・フィリスティアードとジャミールの里の間に、何か因縁でも？」

ファルケンハインはうなずいた。

「うむ。けっこうな因縁話だ」

そう言うとすぐ近くにエイルがいるのを確認した上で、彼には聞こえる程度まで声の調子を落として話を続けた。

# 第四十九話　峠道で

「その隠れ里の名は、確かジャミールと言いました」
その話題は、ルルデ・フィリスティアードの思い出話を問わず語りに話すシェリルが、隠れ里について言及した時に出たものだった。

「なるほど、ジャミールの事まで知っているとは、反政府ゲリラの情報網は我々が考えている以上に侮れないということか」
「こう見えても私は反政府組織の情報の中枢に長く居たんですから」
シェリルはジャミールの里を知っていた。ファルケンハインは彼女が所属していた反政府組織であるフィリスティアード少佐率いる部隊の事を改めて思い出していた。
反政府組織同士の横のつながりによる、特に地理的な情報の共有は思っている以上に精密だということがシェリルから聞いた話の端々からもファルケンハインには理解できた。
おそらくサラマンダで人が入り込める場所の情報は彼らはほぼ共有しており、そしてそれはドライアドの軍隊……つまり委嘱軍の有する情報とは桁違いの量と質であろうことも。
そしてその存在自体が知られている宗教集団の隠れ里については、ゲリラ組織であれば真っ先に把握しておかねばならない情報でもあった。もちろんいざとなったときに彼らが敵になるのか味方になるのか、そしてあるいはどちらでもないのかを把握しておく必要があったからだ。なぜなら多くの隠れ里は武装しているものだからだ。
もっとも、残存する里には多くの場合ルーナーや能力の高いフェアリーがいて、巧妙に里の存在を隠蔽していたから、すべての里が彼ら反政府組織の前に姿を見せていたわけではないだろう。中には対話の席を設けることすら不可能な里もあるに違いない。従ってシルフィードを追われた宗教のつながりを母体とする隠れ里の全貌ま

では知るよしもないにしろ、多くの里の、そのだいたいの位置や規模程度の情報についてはそれなりに信頼に足るものと思われた。
「私は直接ジャミールの人に会ったこともあります」
「ほう？」
「ずっと前ですけど、ジャミールの里から来た人が兄の元で数日滞在していました」
「ふむ」
「ファルさんも面識があるのでご存じかもしれませんが、兄のメビウスはああ見えて結構な世話好きですから、そう言ったお客様のお世話はほとんど我が家でやっていました」
「まあ、その訪問者を疑うわけではないにせよ安全面を考えても指導者の下から離しておくのは納得のいく判断だな。副官だった兄さんの家なら理想的だろう」
「そうですね。でもその方のお世話はだいたい私に回ってくるんですよ」
「なるほど。シェリルの気持ちはわかる」
「いえ、別に私もお客様がいらっしゃるのは賑やかで好きですから愚痴というわけではないんです。ただ隠れ里の人は結構風変わりな人が多くてさすがに気疲れしちゃうんです」
「そうか。宗教がらみだから、いろいろとありそうだな」
「あ、まあそれもいいんです。どちらにしろそういう訳で反政府組織は横のつながりが結構あって、部隊への人の出入りは皆さんが想像しているよりも激しいんですが、中でもそのジャミールから来た人はアルヴィン……いえ、肌が褐色だったからユグセルさんと同じダーク・アルヴですね。どちらにしろ小型のアルヴ系の方はサラマンダでは珍しい種族ですからあの時のことはよく覚えてます」
「その話、もう少し詳しく聞かせてくれないか？」

フィリスティアード部隊の副隊長であるダゲットのもとに現れたダーク・アルヴはメリドと名乗る端正な顔立ちをした少年戦士だっ

た。もっとも小型アルヴ、つまりアルヴィン系の種族はアルヴ以上に見た目で実年齢はわからない。シェリルの眼にはせいぜい十五歳くらいにしか見えなかったが、実際は百歳を超えているということも考えられる。だが、見た目の年齢などはどうでもいい話だった。

メリドと名乗った訪問者は戦士とはいえ装備は質素で腰に下げた軽めの片手剣と背負った小型の弓が武器のすべてといえた。メリドは自分たちの里の付近一帯についての幾ばくかの最新の情報をフィリスティアード隊にもたらした。メリドが訪れた基本的な用向きはダーク・アルヴの里は人助けはするが政府・反政府にかかわらず政治的な立場は表明しないというものだった。

いくつかの反政府組織を不定期に回っているようで、おそらくジャミールの外交官のような役割を負っていたのだろうとはシェリルの意見だった。

「彼はこう言っていました。『我々の里はマーリンに祝福されし巫女・ラシフの強大な結界で守られています。悪しき魂を持つ者には里の姿はその目に映らず我らが友となる魂を持つ者には里へ続くただ一つの道が示されましょう』」

メリドはその言葉を最後の公式な発言として残し、去って行ったという。

「でも、本当にその目的だけで来たのかしら、って今もちょっと疑問に思っていることがあるんです」

「疑問？」

「メリドさんが少佐、いえシエナさんと話しているのを偶然聞いてしまったんですが」

「うん」

「メリドさんはシエナさんに確かに尋ねていました。『ルルデは元気にやっているか？』って」

「ルルデと面識があったと言うことか？」

「念のために後でルルデに聞いたんですが、彼はメリドさんの事は知らないって言ってました」

「うーむ」
「ファルさんもご存じでしょう？ルルデはシエナさんの本当の弟ではないんです」
「ああ。シエナは金髪碧眼の正真正銘のデュナンだった。対してルルデはエイルと同じ瞳髪黒色。肌の色も違う」
「ええ。ですからシエナさんはルルデを自分の子供ではなく弟だと言うことにしたんです。義理の親子だと言うよりも義理の弟にした方が関係が深いように思ってもらえますから」
「確かに子供ということになるとシエナの妻は何者だろうと言うつまらない詮索が始まるが、兄弟なら両親はもう死んだと言えば話をそこで切ることもできる」
「そうです。それから兄さんによると、子供と言うことにしてしまうと両方に甘えが出るからかもしれない、とも言っていました」
「なるほどな」
「ルルデは赤ん坊の時にどこかの戦場でシエナさんに拾われたって聞いています。シエナさんでは世話が出来ないからということで兄が家に連れてきたそうです。そういうわけですから、物心ついたときから私とルルデは同じ家で姉弟のように育ってきました。つまり」
「メリドがルルデに会っていたなら、シェリルも当然知っていると言うことだな」
「ええ」
「シエナには直接そのことを尋ねなかったのか？」
「その後すぐに小さな戦闘が続いたりして、そのことはすっかり忘れていました。本当に今の今まで」
「なるほど。となるとルルデは自分では知らないところで隠れ里と何らかの関係があったという事か」
「ジャミールの近くで戦闘があって、そこで拾われたのかもしれません」
「うむ」
「ジャミールに行って、メリドさんにそのことを確かめてみたいで

す」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「結界だって？」

エイルはアプリリアージェに呼ばれて、ファルケンハインの話の途中で一行の最後尾までやってきていた。アプリリアージェは前方を一人で歩くアキラの様子をうかがった後、エイルに向きなおりうなずいてみせた。

「私の持っている古い情報ではラシフ・ジャミールという族長は話のわかる人物だとは聞いているんですが」

そして続けた。

「結界についてはエイル君もいますし、それ程気にする必要はなさそうですね。それからル＝キリアが持っている情報をもう少しお伝えしておくと、ラシフ・ジャミールは「地」のフェアリーだそうです」

「地のフェアリーの張る結界ねえ」

エイル……いや、呼ばれたのは自分だと判断したエルデはなんとなく腑に落ちないという風に呟いて見せた。

「何か気になる事がありますか？」

「正教会の持ってる情報やと、そのジャミールの族長はルーナーなんやけどな」

「エルデ君はラシフ・ジャミールの事をご存じなのですか？」

「いや、そう言う訳やないねんけど。ただ」

「ただ？」

「ほとんど知られてないんやけど、ジャミールは実は古来からのグラムコールでもあるんや。しかも文法的にはルートの一つ、キュア

のグラムコールの直系に近い」
「一族の名前がそのままグラムコールと言うことは？」
「ホンマに地のフェアリーかもしれへんけど、グラムコールがあるっちゅうことはもともとはルーナーの家系が中心となって形成された一族や。その一族の長がフェアリーというのは普通に考えておかしいやろ？キュア直系なんて今時珍しい。たぶん特殊な高位ルーンを流出させへんために閉鎖的な集団になっていったんやろうな。もともとは隠れ蓑的な意味合いやった宗教の一派のような教義が長い年月の上に一人歩きをはじめて、それが宗教団体的に変化していったっちゅうとこやろ。そう言うところに伝わってる特殊なルーンはやっかいなもんも数多くあるはずや」
「なるほど。ルーナーの存在を隠すためにフェアリーだという情報を流していたと考えると納得が出来ます。ひょっとするとジャミールの里人全員がルーナーだという可能性もある、ということですね」
「族長はそれなりに高位ルーナーやろうし、それ以外にもけっこうな力を持ってるルーナーの存在は否定出来へんな」
「なるほど」
「あ、それと」
「え？」
「エルデ君、はやめて。エルデでええ」
「わかりました、エルデ」

『さっき、因縁って言ってたよな？』
【うーん。混乱してきた。一方ではシェリル情報でルルデの話も出てきてるし】
『オレってそのルルデって奴の呪いでもかかってるんじゃないのか？』
【可能性あるなあ】
『おいおい、そこはきっぱり否定してくれよ』

アプリリアージェの話はそれだけだった。
いざというときには頼りにしているぞ、と言う程度の軽い声かけのつもりだったのだろう。情報が少ないと言うことはアプリリアージェにとっても不安材料なのだ。

エルネスティーネの疲労の度合いを見ながら小さな休憩を挟みつつ、それでも一行は順調に高度を稼いでいった。やがて薄く噴煙を上げる活火山であるレイジノ山の中腹が臨めるところまでやってきた。眼下の谷あいには川も流れていて、気持ちのいい場所であった。
アトラックの言葉を借りるならば「ここまでくれば後は楽勝」という事だったが、そろそろ限界が近いと思われるエルネスティーネがそれを聞いて安堵のため息をついたのを合図に、一行はアプリリアージェの提案によりそこで大休止を取ってお茶の時間としゃれ込む事になった。

「このあたりには温泉が湧き出るところもあるみたいですよ」
お茶の準備をしながらもアトラックは雰囲気作りの会話を忘れない。
「それはいい。久しぶりに沐浴がしたいものだ」
アキラがそれに嬉しそうに答えた。
「この川にも温泉が湧き出ているところがあって、部分的に水が暖かくなっているところもあるそうです。まだ陽も高いですし、湯冷めもしないでしょう。適当な場所があったら汗を流すとしましょう」
「それは素晴らしい提案です」
アトラックの温泉情報はへばっていたエルネスティーネを大いに元気付かせた。
「是非そうしましょう」
「それも良いかもしれませんが、目的は沐浴場所を探すことではありませんよ」
アプリリアージェが、そんなエルネスティーネをいつもの微笑で

たしなめた。彼女としては相手の出方がわからない場所で無防備な行動を取りたくないのが本音であろう。エルネスティーネに微笑みかけた直後にすかさず、いらぬ事を言ったアトラックに一瞥を入れるのを忘れなかった。

「分かっています。でももし途中で温泉があったら」

すがるようなエルネスティーネの熱い視線に、アプリリアージェはにっこり笑ってうなずいて見せた。

「大丈夫ですよ。その時は真っ先に私が入りますから」

「それはちょっとずるいです」

一同は頬を膨らませて抗議するエルネスティーネの抗議に、思わず声を上げて笑った。だが、エイルは髪が濡れる程の汗でびっしょりなエルネスティーネを見て、一抹の不安を覚えていた。もうかなり一緒に旅を続けているのだ。彼女が決して弱音を吐かず、少々無理をする傾向にある性格であることがわかっていたからだ。王女という背景を考えた場合、そんなところもエイルには不思議に思えた。だが、それはエイルの認識不足というものであった。アルヴ系の種族は弱音を吐くことをよしとしないのである。

一休みした一行は、またゆっくりと歩を進め始めた。「楽勝」というアトラックの情報とは裏腹に、最後の峠に続く道は一段と険しくなった。

歩き始めは緩やかな傾斜でのんびりした山歩きを楽しむことが出来た道は、やがて登山道を名乗るにふさわしい様相を呈していった。それが一歩を踏み出す為にはちゃんと意識をしていないと簡単につまづくほど勾配になってくると、エルネスティーネの息が上がりはじめた。しかし、それはまだほんの序の口だった。たとえ急な勾配であろうが、そこに道があるだけましな状態といえた。標高を稼ぐにつれて道はあやふやになり、そしてついに消えてしまった。少なくともエルネスティーネの目の前には、もはや道は存在していなかった。その荒れた山肌を、アトラックは何の迷いもなく、まるで勝

手知った土地であるかのように突き進み、そこに足跡という道を作り出していた。

その頃になるとすでにエルネスティーネは踏み出す自分の足に鎖でも付いているのではないかと思うくらい一歩一歩が重く感じられるようになっていた。

歩き始めこそティアナと軽口を交わしながら余裕のある表情を見せていたが、勾配がきつくなってからは会話が途切れた。もちろん「マナちゃん」にかける話し声も聞こえなくなり、エイルが心配して振り返って見れば、エルネスティーネは既に地面ばかりを見つめて歩くようになっていた。

「下を向くと余計に辛くなるぞ」

見かねたエイルにそう声をかけらると、エルネスティーネは素直にうなずき、時折深呼吸を混ぜながら、出来るだけ顔を上げて周りを見ながら歩くように努めた。

だが、それとて体力の回復に効くわけではない。

その後、しばらくがんばっていたエルネスティーネだが、どうしようもなく辛くなって顔をさらに上に向けた。すると坂の先を行く先頭のアトラックの後ろ姿が目に入った。そしてその少し後ろを淡々と歩いているエイルの後ろ姿も。

だが、そのエイルの視線は地面を向いていたのだ。

エルネスティーネにしてみれば、さっき自分に助言をした当の本人がへばって同じ状態になっているのは一体どうしたことかという思いに駆られるのは当然だった。

頭に浮かんだ疑問を長くそのままにしておく習慣のないエルネスティーネは、要するにとっさに浮かんだ疑問を相手にそのままぶつける大胆さを持っていた。

「エイル」

「え？」

エルネスティーネの呼びかけに、エイルは立ち止まると振り返った。
「ちょっと、元気が、ないように、見えますけれど、顔を、上げて、歩いた、方が、いいのでは、ありませんか？」
息が上がっているエルネスティーネの途切れ途切れの問いかけに、エイルは驚いたような顔で言葉の主を見つめた。
『えっと』
「辛いのなら、私が、話し相手に、なりましょうか？きっと、気が、紛れ、ますよ」
【何言うてんねん、このお姫様】
『ちょっと考え事してたのを疲れてると勘違いしたのかな』
【どう見ても他人の心配をしてる余裕はないように見えるんやけど】
『このお姫様は自分の事より他人の心配をしちゃう体質なんだろうな』
【性格やったらどうにかなるかもしれへんけど、体質やと改善は難しそうやな】
『いや、逆だろ？』
【まあでも、この間の発言は取り消すわ】
『この間の発言？』
【うん。諺の件はさておき、この娘はええ情操教育を受けたんやと思う】
『ああ、なるほど』
【ま、名付け親になるのはちょっとアレやけどな】
『そうだな』
当たり前ながら、二人の会話など聞こえないエルネスティーネは真剣だった。

肩で息をしながらも、無言のままでいるエイルにさらに続けて話しかけてきた。

「私達は、仲間では、ないですか。それに、エイルと、私は、もう、お友達、同士です。だから、苦しい、時や、悲しい、時には、力に、なりたいのです。さっきは、私を、励まして、くれたでは、ありません、か。今度は、お返し、です。はあっ、はあっ」

「いや、ちょっと考え事をしていただけだから。大丈夫だ」

「シェリルの、事、ですか？」

思いがけない名前がエルネスティーネの口から出た。エイルは反射的に眉間にしわを寄せた。

【藪から棒やな】

『……』

「もし、シェリルの事で、思い悩んで、いるの、なら、その気持ちを、癒す、助けに、私は、なりませんか？」

【もういっぺん言うわ。「何言うてんねん、このお姫様は」】

『……』

「私達は、仲間では、ないですか。だから、力に、なり、たいのです」

「シェリルの話はするな」

エイルは敢えて不機嫌そうな顔をエルネスティーネに見せると、冷たい口調でそう言った。エイルはもうシェリルの事を自分なりに心の中で処理をしたつもりだった。だからそれを他人にほじくり返されたくなかったのだ。乾かないかさぶたを無理に剥がされているような痛みが心に走った。

無邪気すぎる、それもどうしようもない勘違いから生み出された善意による思いつきでその話題を出して欲しくはなかった。だから

エイルのその拒絶の言葉は、短くはあるもののエルネスティーネに対する警告のつもりだった。
だが、エルネスティーネにはエイルの思惑などは全く通用しなかった。
「そうは、いきません。苦楽を、分かち合うのが、旅の、仲間、という、ものではないですか。そうそう、『蛇（じゃ）の道はヘヴィ』と、言います。シェリルも、仲間です。今でも、私は」
「うるさい！」

【おい、エイル？】
『……』

エイルは思わず小さく怒鳴った。
その態度に、エルネスティーネは思わずビクっと体を緊張させはしたが、それもつかの間、すぐに口をへの字に曲げて応戦してきた。
「いいえ、やめません。私達は、仲間ですから」

【やめとけ、エイル】
エルデは心の中でエイルにそう忠告したが、エイルはその警告を無視した。

「仲間か。そうだよな。オレ達は仲間さ。オレも仲間、ネスティも仲間。そしてシェリルも仲間？そうだな。その通り。そしてオレ達の仲間のシェリルは、同じ仲間のリリア姉さんを殺そうとしたんだぞ。たいした仲間だよな？」
「エイル？」
「わかったら、もうシェリルの事はオレの前で二度と口にしないでくれ」
エイルは自分を見上げる小さなアルヴィンの少女に強い調子でそう怒鳴った。その態度と言葉はエルネスティーネがさしのべた手を

拒絶する事と同義だった。
　さらにエイルは付け加えた。
「そして、リリアさんは仲間が自分を殺そうとすることを予想していた。つまり、いつも警戒していたって事だろ？」
「それは……」
「そんな集団が仲間だなんて、よく言えたもんだ。さすが世間知らずのお姫様だな」
　それだけ言うと、エイルは前を向いて歩を速めた。エイルの言葉に狼狽したエルネスティーネだが、持ち前の負けん気は強力だった。すぐに気を取り直すと、同じように歩を速めてエイルを追いかけ、後ろから声をかけた。
「エイルは、一事が、万事だと、いうのですか？私のことも、信じられませんか？」

【なあ、もう止めとけ】

　エイルはエルデの呼びかけをふたたび無視し、背後についてくるエルネスティーネを振り返ると、その小柄な金髪のアルヴィンの緑色の瞳を睨み据えて吐き出すように問いかけた。
「信じろだって？じゃあ聞くけど、ネスティはオレにウソはついていないんだよな？全く、何一つ、ウソを言っていないと、自分の名前にかけて誓えるのか？」
　自分の名とは、すなわちエルネスティーネ・カラティアの名前に誓うという事である。
　エルネスティーネはその言葉に虚を突かれた。
　とっさに答えるべき言葉が見つからなかった。
「ほら見ろ、オレたちはやっぱりウソで塗り固めた関係じゃないか。旅の仲間だなんてとんでもない。だからオレもリリアさんのようにここにいる連中にいつ殺されるのかって用心したとしてもそれは仕方ない事だろ？なれ合いはもうごめんなんだよ」

エイルの口をついて出る言葉は、どれも自分が本心からは思ってもいない事ばかりだった。そんな言葉を口にしながら、そしてその言葉をエルネスティーネにぶつけている自分を心の底から罵り、呪いながらも、それでも口を閉ざす事ができなかった。要するにシェリルの一件を心の中で消化してはいなかったのだ。

『何でオレは、ネスティに無邪気な笑顔でシェリルの名前を出されただけで、なぜこんな気持ちになるんだよ?』

【もう止めとき。どうしたんや、エイルらしゅうないで?】

『オレらしいって何だよ?』

自分で自分が混乱しているのがわかっているエイルだが、気持ちの制御が思うようにいかなくなっていた。いきおいその矛先はエルデにも向かってしまう事になった。

さらなる自己嫌悪にさいなまれることを知りながら。

『答えろよ、オレらしいって何だよ』

【エイル】

『オレは自分の事なんてほとんど思い出せないんだぞ?ちゃんと覚えているのはマーヤの事くらいだ。どうでもいい事は覚えているのに、大事な事は思い出そうとすると頭の中に濃い霧がかかったようになってわからなくなるんだ。そんなオレのオレらしさって一体何なんだよ?知っているなら教えてくれよ』

【エイル、それは】

『その名前だってそうだ。お前が勝手にオレにつけた偽物の名前じゃないか。自分の本当の名前すら知らないオレのオレらしさっていったい何だよ、知っているならケチらず教えてくれよ。そうしたらオレはそういう風に振る舞ってやるさ。どうなんだよ?』

【……】

『クソっ』

「オレは約束は一切しない。知ってるよな?」

黙り込んだエルネスティーネの答えを待たず、エイルは続けて質問を投げた。
「ええ」
「なぜかわかるか？」
ネスティは力なく首を横に振って見せた。
「裏切りたくないからさ」
「え？」
「約束をしたら、それを守らなくちゃならない。それを破ったら約束をした相手を裏切ることになる」
「それは」
「オレは誰も裏切りたくないんだ。オレは約束は守る。守りたい。いや、絶対に守る。でも、どうしても守れない時は」
「エイル……」
「どうしても守れない時もある。でも、それでも守れなければ、裏切りだ」
「それは違います」
「違わない！」
否定したエルネスティーネに、エイルはものすごい剣幕で応酬した。それは思わずエルネスティーネが後ずさるほどの語気と険しい表情だった。
「でも」
「オレはそれが嫌なんだ。裏切りたくない。もちろん裏切られたくもない。なのにこのファランドールは」

【エイル。マーヤの事を思い出せ。お前のそんな姿を見たら、間違いなく泣いて悲しむで！】
エルデの声が頭に大きく響き渡った。同時にエイルの脳裏には長い黒髪の少女の姿が大きく浮かんだ。
悲しそうな顔をしたマーヤが、小さく首を横に振っていた。
しまったと思った。

今の自分の姿を見たら、妹は間違いなく悲しむだろう。
エイルは唇を噛むと、自分の目の前の緑色の瞳の少女を見つめた。
長かった金髪を短く切りそろえたエルネスティーネの両の目に涙がたまっているのが見えた。
その顔がエイルにはまぶしすぎて、思わず目を閉じた。

『くそっ。オレは何で』
【エイル】
『すまん、エルデ』
【その言葉はネスティに掛けたり】

エイルは自分の存在を唯一証明するマーヤの記憶をたぐり寄せる事でようやく落ち着く事ができた。溢れてきた気持ちを抑えきれなかった自分を悔いたが、それはもう後の祭りだった。
シェリルがいなくなって、ずっと押さえていたものがなぜか今、逆流して溢れてきたのだ。それは飲み込んだつもりで、その実、魚の骨のように嫌な感じで喉に引っかかっていただけだったのだ。そしてそれはまるでエルネスティーネの言葉を待っていたかのように、小さな刺激で簡単に口から吐き出されてしまった。
エイルは自分の矮小さを呪った。

『よりによってオレは、いつも自分に微笑んでくれるこの優しい女の子に向かって……』
【もうええ。自分を責めるよりやるべき事があるやろ?】
『ああ。自分の愚かさに泣けてくる』

エイルはエルネスティーネをまともに見る事が出来ず、うつむいたまま小さい声で呟いた。
「ごめん。言い過ぎた」
それだけ言うと踵を返した。だがその袖口をエルネスティーネが

捕まえた。
「エイルは、私達に、たった一つの、ウソも、言っていませんか？」
少し涙声になってはいたが、その声は落ち着いていた。相変わらず息はあがっていたものの、激高していたエイルとは違い、静かな口調だった。
「いえ、私が聞きたいのは、そんな事では、ありません。質問を、変えます。エイルには、信じられる人は、いるのですか？」
エイルが何か言おうとするのを遮るように、エルネスティーネはそう続けて質問を翻した。
「このファランドールで、エイルが信じられる、信頼できる人は、一人もいませんか？」
純血のアルヴ族の証明であるエルネスティーネの緑色の目は、まっすぐにエイルの瞳を見つめていた。
いつかエルネスティーネはエイルの黒い瞳を神秘的だと言ったが、エイルにしてみれば、エルネスティーネの明るい緑色の瞳の方が百倍も千倍も神秘的だと思っていた。
その緑色の瞳にまっすぐに見据えられたエイルは、激して乱れた心が、少しだけ軽くなった気がした。
「ああ、いる。たった一人だけ」
少し間を置いた後でエイルはエルネスティーネの問いに素直に答えた。
「――良かった」
エイルの答えを聞いて、エルネスティーネは手を胸に当てて少し目を伏せた。
「良かった？」
エルネスティーネはうなずいた。
「ええ。私は、思うのです。この世に、信頼できる人が、一人もいない事ほど、悲しくて、不幸な事は、ないと」
「――」
「怒らずに、聞いて下さい。たぶん、シェリルには、そんな人が、

ルルデ以外に、いなかったのでは、ないでしょうか。そして、リリアさんには、きっとたくさん、いるのだと思います。だから、安心して、シェリルと笑って話が、できたんですよ」

「ネスティ」

「もしよろしければ、エイルが信頼するというその方がどんな方なのか教えて貰えませんか？」

「聞いて、どうするんだ？」

「もしその方に会えたら、考えてみたいんです」

「考えてみる？」

エルネスティーネは涙目でにっこりと笑って見せた。

「エイルが、信頼する、この世でたった一人の、人です。きっと世間知らずな私には、見習うことが、多いに、違いありません。そして、エイルが、なぜその人のことを、信頼、できるのか、わかればいいな、と思います。そしてそして、どうすれば、そういう、人になれるのかを、考えて、みたいんです」

「――」

「だから、迷惑でなければ、教えて、ください。いえ、待って、下さい。名前は、言わないで、下さい。誰であれ、今の私だと、きっとその人を、たぶん、嫉妬して、しまいそうですから」

「嫉妬って」

「だから、名前ではなくて、エイルにとって、その人が、どういう人なのか、それだけ、教えて、下さいな」

そう言われてエイルは目を閉じた。そして少しして目を開けると、エルネスティーネの目をまっすぐに見て答えた。

「その人は、そうだな。いま、混乱して取り乱したオレをいさめて我に返らせてくれた人だよ」

「今？」

「うん」

「そう、ですか」

「うん」

【エイル】
『う、うるさいな』
【えっと……マジで？】
『し、信頼してなきゃ大事な自分の体を任せたり出来ないだろうが？』
【あ、ははは。そ、それもそうやな。変な事するかもしれへんし、そら、信頼でけへんかったら、体全部預けるっちゅうのはちょっと無理やわな】
『ヘンな事って、おい』
【せやからそう言うことは何にもしてへんって言うてるやろ】
『ふん。どうだか』
【何やねん、その態度。言うた唇が乾かんウチにもう疑惑の目かいな？それから念のために言うとくけど】
『はいはい』
【エイル？】
『わかってるさ』
【何を？】
『何をって、オレはお前にだな』
【そやのうて、さっきのセリフ、たぶんネスティは思い切り誤解してるで】
『ええ？』

「あ、あの、私、なんと言っていいか……。嫌だわ。気持ちの準備が……。ああ、胸がすごくドキドキしてきました」

【ほら】
『うわ』
【オレは知らんで】

「あ、あのさ。この話はここまでにしよう。さっきは本当に悪かった。ちょっと興奮して言い過ぎた。ああ言ったけど、オレはみんなを信用していない訳じゃないんだ。それは信じて欲しい」
エルネスティーネは少し溢れていた涙を拭うと微笑んで見せた。
そして、左手を胸に当てて目を伏せた。
「私も、エイルの事を、信じています。あなたの今の言葉は、私の胸に、永遠に刻まれ、この先、どんな困難に、直面しても、私を、勇気づけて、くれることでしょう」
「えっと」
「こんな気分になったのは生まれて初めてです。私ったら、どうしましょう」
「あ、いや」
苦しい息の中でそう言ってにっこりと笑う金髪の少女は、乾きかけていた目尻に溢れた最後の涙をもう一度拭うと、精一杯明るい声で続けた。
「近くに、温泉が、あるかもしれない、そうですよ。仲直りの、しるしに、もし見つけたら、一緒に、入りましょうね？」
「ええ？」
「えへへ。冗談、ですよ」

『じ、冗談にも程がある』
【いや。やっぱりええお嬢さんやな。よし、ちょっとだけ代わって】

エルデはエイルから体を借りると、エルネスティーネの無邪気な挑発を完全に無視して、なじるような口ぶりで返事をした。
ただし、古語ではなく南部語で。もちろん、エルデであることを隠す為の工作だった。
「そんなことより山道に慣れず、青息吐息ですっかりお荷物状態のお姫様は、いい加減意地を張るのを止めて、ファルに泣きついて肩に乗せてもらった方がいいんじゃないのか？」

そのエルデ一流の悪口は、あっという間にエルネスティーネの笑顔を奪い、その顔を曇らせることに成功した。誇りを傷つけられること、それはアルヴ族の一番嫌うことだからだ。エルデはそこを狙って敢えて言ってみたのだが、エルデの言葉は予想以上の効果をもたらしてしまった。

「――意地悪な、ことを、いうのですね」

そうつぶやいたエルネスティーネはまた目頭が熱くなってくるのを感じた。

エルネスティーネはエイルと仲直りができたと思っていた。だがそれは勝手な思い込みのようで、また相手の気持ちがわからない状態に逆戻りしてしまった事がせつなかった。

いや、逆戻りではなく、前より離れてしまったような気がして、今まで感じたことのない不安におそわれたのだ。手を伸ばしたら相手の体温が肌で感じられるほど近くなったと思った次の瞬間に足場が崩れ、気付けば真冬の海に投げ出されていたような気分だった。

だがそれはエイルに対する失望などではなかった。たった一言、意地の悪い言葉を投げかけられただけで、そんな後ろ向きな気持ちになっていく自分のあやふやな心がどうにもみっともなく思えて悲しくなったのだ。

しかしお姫様の心は、この日はまだまだ元気が残っていた。後ろ向きな思いを押さえ込み、自分を奮い立たせるだけの気力を引き出す事ができたのだ。

（ここでうつむいてはいけない）

エルネスティーネはそう自分に言い聞かせると、強く唇を噛んで小さな拳を握りしめ、こみ上げてくる孤独感を封じ込めた。

【失敗したかな～】

一方、うつむいて黙りこくってしまったエルネスティーネを気にして、エルデは珍しく自分の嫌みに対して少しだけ後悔していた。

『お前はいっぺん死ね』

そんなエルデの気持ちを察したのかどうかはわからなかったが、エルネスティーネは自分に何か声をかけようとしたエルデの顔を不意に見上げると、いきなり舌を出して片方の目尻を指で下げておかしな顔をしてみせた。

「べーっだ」

エルネスティーネはそれだけ言うと、エイルに向かって手をひらひらと振って、後方に居るティアナ達のところへ去ろうとした。

しかし、その小さな体を、すかさずエルデが空間に縫い付けた。

みれば一瞬の間に儀仗ノルンがその右手に握られていた。

「パラス」

短く唱えたのはいつもの金縛りルーンだった。

「な、何を？」

体の自由が全くきかなくなったエルネスティーネは思わず抗議の声を上げた。

振り向いてエイルを見ることは出来ないが、声だけは出せるようだった。

声だけは出るようにルーンを加減したようであった。その調整は周りから見るよりも繊細・微妙なもののようで、エルデ程のルーナーにして空手では無理なのであろう。儀仗ノルンを出したのはその制御の補助のようであった。

「何をするんです！」

エルデはエルネスティーネの抗議には応えず、儀仗に向かって小さくつぶやいた。

「ベルザンティ」

すると、手に持った三色の木を撚って作られた儀仗が、一瞬で茶色一色の儀仗に姿を変えた。それを確認すると、エルデは改めてエルネスティーネの背中に向かって少し長めの別のルーンを、同じく小さな声で唱えた。そして詠唱が終わったと思った瞬間に、エルネ

スティーネの体は再び彼女自身の支配下に戻された。
「いきなりルーンをかけるなんて卑怯ですよ！エルデっ！」
体が動かせるようになったエルネスティーネは、思いっきり頬を膨らませてエイル、いやルーナーであるエルデを振り返り、両足で地面をしっかり踏みしめて腰に手を当て、精一杯目尻をつり上げてそう批難した。
しかしエルネスティーネの目に映ったエルデの顔はそれまでの沈んだ顔でも人をバカにしたようなニヤニヤ笑いでもなく、時々エイルが投げかける優しい笑顔だった。
それに気付いたエルネスティーネは、立て続けにもう一言二言文句を言ってやろうと構えていた尖った気持ちが溶けていくのを感じた。そして開きかけた口を閉じた。
「ファルの肩に乗るのが嫌なんやったら、もう少しがんばってもらわなな」
エルデはエルネスティーネに向かって自分であることを相手に示すために、今度は古語でそう言うと、軽く片手を上げて山道を再び登り始めた。

「え？」
エイルを追いかけようとしたエルネスティーネは、その時になって自分の体の変化に気付いた。
「どうかしましたか、ネスティ？」
丁度追いついたティアナが、ぼんやりエルデの背中を見つめる短い金髪の少女にそう声をかけた。
「いえ」
エルネスティーネはいつも自分のことを気にかけてくれる心優しい白髪のアルヴに何でもないと言うと、大きく深呼吸をして、彼女にとっては相当に手強そうな山道を見上げた。
「もう一がんばりね。さあ行きましょう」
そう言って歩き出したエルネスティーネの顔がやけに晴れ晴れし

ているのをティアナは不審に思ったが、もちろん暗い顔をしているよりは何百倍もいいわけで、それ以上その事について詮索をするのは止めた。

本人に果たして自覚があるのかどうかはわからなかったが、ここ最近のエルネスティーネの情緒の安定・不安定は、エイルとの距離感でめまぐるしく変わる事はもうティアナの見立てでも間違いのないところだった。

つまり、なにやら楽しそうで、しかもさっきと違って見違えるように元気になっているのは、エイルのおかげなのだろうと察しが付いたというわけである。

「そうですね。もう一がんばりしましょう」

ティアナは軽やかな足取りで先を行くエルネスティーネにそう言うと、自分でも無意識のうちに微笑んで、その後を追った。

『まったく』

【人の気持ちを考えずにズカズカ入り込んでくる傍若無人さがあるかと思えば、けっこう繊細な気配りも持ってるやんか。しかも子供っぽさ全開ときたもんや】

『いや』

【ん？俺とは違う意見か？】

『どっちかというとああいうのはフォウでは「自爆系天然ボケ」と言う』

【いや、こっちでも言うやろ、それ。でも、うん。確かにそうかもしれんな】

『でも、ものすごくいい子だと思う』

【まあ、ウソはついてるみたいやけどな】

『お姫様だからな。ウソというより、いろいろ隠さないといけないことはあるんだろうな』

【そう言うんとは違うんやけどな。もっと根本的というか根源的というか】

『え？』
【何でもない。お前さんは知らんでもええ事や】
『ふん。それより、温泉があるそうだぞ』
【そやったな。湯船につかったら、またちょっと代わってくれるか？】
『了解』
【ほなら、クヨクヨせずに行こか。そうせんとまた脈絡なく天然にグサリと絡まれて、こっちが自爆する羽目になりそうや】
『すでに今やり過ぎて自爆したヤツに言われたくないが、まあその通りだな』
【それはそうと】
『ん？』
【一瞬、期待したんやろ？】
『何を？』
【シルフィード王国のお姫様と一緒に入る風呂や】
『バーカ』
【ふふん、どうだか】
『――ま、正直言うとちょっとだけ、な』
【最低！】
『何だよ、お前だってちょっとくらいは興味あるだろ？』
【ぜーんぜん。俺はあんな発育不良には興味がないねん】
『発育不良って、あれだけあれば普通だろ？』
【ほう？よう見てるんやな】
『ち、違うって』
【まあファランドールの成人女性としてはアレはほとんど最低ランクやな】
『ウソつけ』
【賢者はウソはつかへん。冗談は言うけどな】
『もういい。お前が健康な若者でないことに気づいておくべきだった』

【健康な若者やってんけどなあ】

エイルは水先案内人である先頭のアトラックに追いつくべく、少し歩を速めた。

『それにしても、今のはちょっと意外だった』

【何が？】

『お前、ネスティに回復ルーンをかけたんだろ？』

【ああ、あれか。結構息が上がってたから足手まといになられても日が暮れてまうしな】

『ふん、全くお前はオレの思っている通りのヤツだよ』

【そいつは、どうも】

『微妙な返事だな』

【それより、エイル】

『なんだよ』

【と言うわけで、ちょっと消耗したから、後はしばらく任せた】

『眠るのか？』

【ふ。さっきネスティにかけた奴、実はかなり高位の回復・強化の複合ルーンで、今日いっぱいくらいは全力疾走で山道を駆け登っても息一つ切れへんっていう超絶豪華なすごいヤツやねん。お前さんの体やと素では使えへんくらいのヤツや】

『わざわざノルンを取り出したのは、そういう事か？』

【そ。わざわざベルザンディに変えんと心許ないくらい強力なヤツ】

『でも一日全力疾走って、そいつはいくらなんでもちょっと豪勢すぎだろ？』

【お姫様、今夜は目がギンギンで眠られへんやろな】

『いやいやいや。それは何か違うルーンだろ？』

【何にせよ、豪勢な気にさせてくれるくらい暑苦しいお姫様やったって事や。まあ、ともかくそういう訳で俺はそろそろ限界や。しばらく休ませてもらうから、あとは頼むわな】

『本当にそんなに消耗したのか？』
【その場しのぎの一時ルーンやのうて、ただでさえ高位の随時回復ルーンやで。それも持続時間をあれだけ長ごうするとなると、けっこうな力を使うんや】
『え？じゃあ、マジで夜はギンギンなのかよ？』
【アホな事言うてんと、後は頼んだで。アトルの話やと今日は素敵な寝床で眠れるそうやから、お姫様はほっといてお前さんはせいぜいぐっすり眠ってや】
『とうとう『素敵』にまで上り詰めたのか、アトルの言う寝床は』
【ひどい寝床やったらアトルへキッチリお仕置きしといてや。あと、温泉あったらたたき起こしてええから】
『わかった。もう寝ろ。というかだな、眠っているお前をどうやってたたき起こすんだよ？』

エイルとエルデが入れ替わったのは周りにはわからない。
だが、ここでエルデがエイルの心の中で眠りについてしまったことが、その後一行を窮地に陥れることになった。

# 第五十話　エア

『非エーテル域』もしくは『精霊の墓場』などと呼ばれることもある一種の特殊な空間・地帯を指す普通名詞が「エア」である。

「エア」がなぜ特殊な空間であるかと言うと、そこには精霊波、いわゆるエーテルが存在しない。つまりエーテルをその力の源として能力に換えているフェアリーやルーナーは「エア」ではその力を発揮できない事になる。もちろん力の強弱には関係なく、意識・無意識に関わらずである。そもそも「エーテルが皆無」なのだから。

エーテルの満ちた世界であるこの『ファランドール』でなぜそういう空間が存在するのかについては残念ながら定説がないのが現状である。

一説では『エーテルの存在しない世界』すなわち『異世界』との干渉により生じた歪んだ空間であろうと説明されているが、何にせよ「エア」は特殊な自然現象の一種としてとらえられている。

有名な「エア」としては、当時のウンディーネ連邦共和国の首都島アダンを含む一帯が挙げられる。しかしこんにち、その付近にはもはや「エア」は確認できない。もちろん人為的に作り出すことも不可能だとされている。

三聖「蒼穹の台」が使った『神の空間』と呼ばれるものはこの「エア」を人為的に作り出した例だという説があるが、これも多くの伝説と同様でそれを証明できる術はない。

ではそのエーテルが存在しない空間である「エア」を任意で作り出すことができる人間が存在するとしたらどうだろう？

まず戦争においては、戦闘能力できわめて優位に立てるフェアリーは普通の人間と同等となる。いや、むしろ先天的に持っている能力を頼りに戦っている事が多いフェアリーの場合、その力を失えば普通の人間の兵士よりも戦力としては低下する場合が多いと考えら

れる。
　例えば、力はないがその超人的な移動速度を武器としていたアルヴィンやダーク・アルヴといった小柄な種族の風のフェアリーの兵士がいたとしよう。その圧倒的な移動速度という武器をもぎ取られた兵士はただの小柄で腕力のない雑兵に成り下がるわけである。
　三聖「蒼穹の台」以外にこの「エア」を人為的に作り出せる者がいたという話はいくつかある。その一つに今では伝説となっているサラマンダのダーク・アルヴの隠れ里の一族が挙げられる。
　その話が事実であったとしたら、その里人達はいわばフェアリーとルーナーの天敵と言っていい存在であろう。

　大休止の後に結構な標高を稼いだ一行が、そろそろ一度小休止をとろうかと考え始めた時だった。その時最後尾を歩いていたアプリリアージェとファルケンハインが二人同時に歩みを止め、お互いに顔を見合わせた。
　アプリリアージェはすぐにそのよく通る声で前を行く一行に声をかけた。
「止まって下さい」
　いつにないアプリリアージェの鋭い声色に一行は何事かと一斉に歩みを止めて声の主を振り返った。
「おかしいのです」
　アプリリアージェの言葉に反応して早速駆けつけたティアナが何かを問いかけたが、それよりも先にファルケンハインが続けた。
「同じところを歩いてる」
　ファルケンハインの言葉を聞いたエイルは、はっとした。
「結界か？」
「ええ、おそらく」
　アプリリアージェはうなずいた。
「それに、もう一つ悪い知らせがあります」
　そう続けたアプリリアージェの顔は珍しく苦笑しているように見

えた。
「エイル君は気づいていないのですか？」
「え？」
「どうやら、これは方向感覚を狂わせるただの結界ではなく、「エア」のようです」
「「エア」だって？」
「確かに、感覚が違いますね」
アトラックは今そのことに気付いたようにそう言うと、自分の手を見た。

「「エア」……というと、あのアダンの？」
一連の会話を聞いていたアキラはそう言うとル＝キリアの一行とエイルを順番に見渡した。
誰も答えない。だが、それが答えのようなものだった。
ウンディーネ連邦共和国の首都島アダンの事を知っているなら話は早いという訳である。アキラに改めて「エア」について詳しく説明するまでもなかった。
アプリリアージェにああ言われたものの、エイル自身は全く違和感は覚えなかった。もちろんルーナーでもフェアリーでもないエイルがエーテルの存在を感じる事はない。したがってそれは無理からぬ事ではあったが、それでもエイルは面目ないという風に目を伏せた。
「いえ、この場合は術者を褒めるべきでしょう」
エイルの様子を見たアプリリアージェはとりあえずそう言ってエイルがそれ以上の謝罪や言い訳をする事を制した。
だがエイルにしてみればまさに臍を噛む思いだった。エルデが起きていれば結界に入る前にそれと気づいていたかもしれないのだ。

『エルデ！』

エイルは少し前に眠りについた意識の中のもう一人の人格を呼び出そうとしたが、自らの意志で深い眠りについたエルデにはその声は届かなかった。今までもルーンを使い過ぎて疲弊した時、何度か同じ事があった。

ただ、これまでの例であればエルデが眠りにつく場合は確実に安全な場所を確保して、自らに結界を張った後に眠りに入るのが常だったが、今回は油断があった。ル＝キリア一行が一緒という事で安全だと判断したのだろう。いや、少なくとも大した危険はないと判断したのは間違いない。

眠る直前のエルネスティーネとのやりとりで、仲間という言葉に気持ちがゆるんだのかもしれない。あるいは身をもってそれを実行したかったのだろうか。

だが、今更そんなことを言っても始まらない。今回、初めて移動中に眠りについた事実はもう取り消せないのだ。

普通の眠りと違いルーンなどで消耗した際の眠りに入ると、エルデはたとえエイルが呼びかけようとも答えない。おそらく外界からのあらゆる刺激に無反応になるのだろう。だから結局は本人が自然に眠りから覚めるのを待つ他にないのである。

エイルは一度体をつねったり、自分で自分の頭をたたいたり、はたまた窒息する寸前まで息を止めてみたりした事もあったが、全て徒労に終わっていた。

『くそ。よりによって……』

エイルは右手の中指にはめられた黒・焦げ茶・白の三色の指輪を見つめた。

「何か策でも？」

めざとくその様子を見ていたアトラックがエイルにそう声をかけた。だがエイルは首を横に振った。

そして小さく「ノルン」と呟いてみた。

すると、例によって右手の中指に填められていた指輪は一瞬で儀

仗に変化して、エイルの手ににぎられた。
それを見たアプリリアージェは、一瞬眉根に皺を寄せた。
儀仗はエイルでも出し入れ自体は可能になっていた。なぜならエルデがエイルの言葉に反応するようなルーンを儀仗にかけていたからだ。
そもそも「ノルン」はエイルの物理的な武器でもある。本来は剣士であるエイルは、そうは言っても普段は剣などの武器を持っていない。必要に応じてエイルがノルンに呼びかけ、それに反応して武器になるように予め設定されているのである。エルデによれば、それが「極めて合目的的な処置」と言う事だった。
エイルが儀仗を取り出したその様子は、一行にはエルデがルーンを普段通り使っているようにしか見えていない。

アプリリアージェの違和感はそこにあった。
―（「エア」であっても、あの儀仗の変化には関係がない……という事は、あの儀仗の変化はエーテルを使ったものではないと言うこと？）

出来れば今回のようにルーンが使えない時間があると言うことを知られたくないエイルにとって、ノルンの取り出しはそれをごまかす為のいい判断だと言えた。どうしてもルーンが必要な状況が発生しなければ、という但し書きがつくのはしかたのないことではあるが。
とはいえエイルは迷っていた。
素直にエルデが眠っていることを告げるべきか否か。
だが、この状態でそれを告げることはアキラにエイルとエルデの秘密を知られる事につながる恐れがある。隙だらけではあるが極めて頭脳明晰な人物であることは、アキラと普通にしゃべっていればすぐにわかる。それだけに適当な理由でごまかせるような相手とは思えなかったし、こちらが適当にごまかしていることが知れれば不

信感をもたれかねない。ただでさえ普通ではないルーナーだと思われているからなおさらである。

（あ……）

そこまで考えて、エイルはようやくアプリリアージェと同じ疑問につきあたった。

――（ルーンは使えないけど、予めかけておいたルーンは発動するのか？）

いや、かつてエルデに聞いた「神の領域」についての説明では、あらゆるルーンは無効化されるという事だった。では、「エア」と「蒼穹の台」が作り出す「神の領域」との間には何か大きな違いがあるのだろうか？

だが、その質問をぶつけるべき相手は今、そこに存在していない。

エイルは考えた。

「エア」であるとアプリリアージェが認識したと言うことは、少なくともフェアリーの能力は無効化しているということだった。

フェアリーとルーナーで構成されるエイル達一行の戦闘力の基盤はエーテルだ。そのエーテルがない空間であるにもかかわらず一部の組み込みルーンは発動した。

ひょっとしたらルーンだけは使える特殊な「エア」なのかもしれない。

だが今は、どちらにしろそのルーンを使える唯一の人間はいないのだ。

つまり、現時点での一行の戦力は、考えられないほど低下している状態だということだった。

この状態で何かが起こったら？

今は何もまだ起こってはいない。しかしエイルは、なぜか全身で感じる嫌な予感に思わず唇を噛んでいた。

儀仗を取りだしたエイルを見て、それにならい武器を手にすべく懐に手を入れたティアナとアキラを、しかしアプリリアージェは制

止した。
「相手がどういうつもりで結界を張ったのかがまだわからない段階で、我々に敵意があると思われてはいけません。武器にはまだ手を付けないでください」
「しかし……」
アキラは不満そうにアプリリアージェを見た。
「儀仗と剣とでは根本的に意味が違います」
そう、正確に言えばエイルは武器を手にしたというわけではない。傍目には、ただ仗を手にしただけなのだ。
例えそれが今に限ってはルーンの為ではなくティアナやアキラが握った剣と同じく、エイルの武器そのものだったのだとしても。
「もちろん、用心はしてください。いいですね？」
アプリリアージェらしく、その声は穏やかではあったが有無を言わせぬ強制力のある強い響きをもって一同の耳に届いた。
「了解」
ティアナは目礼をすると懐に入れた手を抜いた。
「安心して下さい、アモウルさん。こう言うときのために我々を雇ったのでしょう？」
懐に手を入れたままのアキラに、アプリリアージェはそう言うとにっこり笑いかけた。
その声に反応したアトラックがアキラのそばにつき、ティアナとファルケンハインがエルネスティーネの両脇を固めた。
「私達は、ジャミールの里人達に歓迎されてはいないのでしょうか？」
エルネスティーネは不安げにファルケンハインに尋ねた。
ファルケンハインはエルネスティーネの肩にそっと手を置いた。
「心配はない。『仲間』を信じるのがネスティの仕事だろう？」
ネスティはうなずいた。
「そうでした。もとより信じています」
「では、俺達の仕事はそんなネスティを信じることだ。だから安心

しろ」
ファルケンハインにしても「エア」での戦闘は未経験だった。
「蒼穹の台」が作り上げた「神の空間」は経験したが、あれは戦闘状態にすらならなかった。従って今回がル＝キリアにとって初めて経験するであろう「非エーテル地帯」での戦闘態勢だと言えた。
したがってファルケンハインがエルネスティーネにかけた「安心しろ」という言葉には普段のような自信に裏打ちされた根拠はない。
むしろ、自分に言い聞かせる言葉そのものだった。

立ち止まった一行は、それぞれがその場所に留まって全身に緊張を纏っていた。
いったいどうするのか？
進むのか？
戻るのか？
それとも……

「来るぞっ」
突然、エイルが叫んだ。
最初に異変を察知したのは彼だったのだ。
身の毛もよだつこの感じ。全身から脂汗が一気に吹き出すような恐怖。
エイルは確信して怒鳴った。
「構えろっ！スカルモールドだ」
その言葉の意味を一行が咀嚼している時間はなかった。間を置かず、一行のちょうど真ん中あたりの土が一瞬の間に身の丈の数倍にも盛り上がったのだ。
まさに不意を突かれ、慌てた一行は体勢を整える前にそれぞれが逃げるべき場所へ逃げ散るのが精一杯だった。
それが、間違いだった。
その場に現れたスカルモールドは四体。その四体によって一行は

完全に二つに分断されてしまった。
エルネスティーネとファルケンハイン、ティアナ、そしてアキラ。その四人は身の丈が軽く三メートルを超える、土気色をした人型の化け物の襲撃を受けた。
残りの四人は三体の襲撃を受け止める形になり、エルネスティーネ達の側に近寄ることもできなかった。
アプリリアージェの顔から微笑が消えた。そしてその唇は緊張で真一文字に結ばれた。

スカルモールド。
その化け物が文献に初めて登場するのは物語の時代から遡ること百年ほど前である。したがって太古から存在する伝説の化け物などではなく、ある日忽然と現れた異形の怪物と言っていいだろう。
その出自は未だに不明で、月の大戦の終結と呼応するかのように、発見報告がピタリと止まっている。

スカルモールドは人型の化け物で、大きいものは三メートルを軽く超え、総じてアルヴの体格に似るとある。体の組成は骨格に土くれがへばりついた泥人形の様だと記されているものが多いが、学術的に信頼が置けるとされているいくつかの模写を信じるならば、骨と筋だけで出来上がったような細長い手足と胴を持ち、頭部には茶色い頭髪もある。眼窩には瞳のない白目だけの眼球のようなものが入っていて、全体に土色で口はだらしなく開き、同じく土色の歯をむいている。
大まかには人型と言って間違いではないが、明らかに異形なのはその腕だ。通常は二本のようだが、三本あるもの、四本あるもの、中には八本も描かれている絵もあり、およそ人間とは言い難い。
意志があるのかないのか、言葉は喋らず、ただ人を襲う。その動きは「獣のように敏捷」と言われ、成人のアルヴより遙かに速く地上を走るとも言われている。

スカルモールドに斃された人間は枯れ枝のような指でまず両目をくりぬかれた後、頭を割られて脳を啜られる。ついで内臓を食い破られ、やがてその強靱な顎で骨までかみ砕かれて、地面に大量の血痕を残すのみ。後はこの世から綺麗さっぱり消え去る運命にある。

スカルモールドが忌み嫌われるのは、その圧倒的な腕力と腕や足が無くなっても殺戮をやめようとしない執念深さにある。ただ首をはねても死ぬことはない。体を切り裂いてみても心臓はもとより内臓など一切なく、頭部には脳すら存在しない。脳はいくつかに分散して体の任意の場所に隠されている。その場所は個体によって違い、肉体的にはいわゆる共通の急所や弱点というものは存在しないとされている。

すなわちスカルモールドに勝利するということは、体のすべての部位の活動を止める事が出来た時初めてそう言える。

四肢……いや、場合によっては八肢、十肢であろうか……ともかくそれらをすべて胴から切り離し、可動部位である関節をつぶし、かつ首を刎ね、噛み合わせが出来ぬように顎を割り、脊椎を寸断して初めて事が終わるのである。

しかもスカルモールドの強靱な肉体は普通のアルヴ程度の腕力ではいかな剣を振るっても切断することなどかなわないと言われている。

だが、そのスカルモールドにも大きな弱みがある。彼らは地上に出ると一時間程度しか活動できないようなのである。

これらはスカルモールドに最も被害を受けたシルフィード王国の軍隊記録にある公式な記述であり、特に活動時間の制限については信憑性が高い。それが証拠に、もしもそれ程の強さを持つスカルモールドが地上に居続けられるのならば、被害は想像するだに恐ろしいものになっていなくてはならないはずである。スカルモールドによって村一つが全滅したという記録はいくつもあるが、いずれも連続的かつ広範囲な事件には至っていない。単発的、散発的であり、

いかなる記録を紐解いてもスカルモールドの一群が、人間を食い散らかして一国を蹂躙したなどという記述を見つける事はできない。

生きている……いや、活動しているスカルモールドも、倒されればらばらになったスカルモールドも等しく一定の時間が経つとすべて土のかたまりに変化して風と雨でファランドールの自然に還り、その痕跡を一切残さないのである。

すなわちスカルモールドを倒すだけの力がないものは、一定時間逃げ切る事さえできれば生き残れるというわけだ。だが、それが困難であることは既に述べたとおりである。

とはいえ人間には知恵がある。そしてその知恵は時に恐ろしい行為を選択する。

複数の人間が一体のスカルモールドから逃げる場合、一人をスカルモールドに喰わせることで、残りの人間が逃げ延びる可能性が高まる。二体のスカルモールドに出会ったときは二人食わせれば残ったものには生への可能性が与えられる。

人が考えることとはつまりはそう言うことである。

だが、エイル達には当然その選択肢は存在しない。

『起きろっ、エルデっ！』

無駄だと理解しつつも心の中でそう叫んでエルデに呼びかけたエイルは、同時に三色の儀仗ノルンを構えて一番近くのスカルモールドに気合い一閃、飛びかかった。視界の隅に同じく短剣や弓を番えたル＝キリア三人の姿を捉えながら。

スカルモールドの発見事例の多くはシルフィード大陸の北部、それも東地域に集中している。少数ではあるが、ウンディーネやドライアドにも被害報告が記述されているが、サラマンダでの正式な発見記録は残っていない。それもあってエルデはエイルにサラマンダでスカルモールドに遭遇することはないと言っていたのであろう。

だが、実際にエイル達はル＝キリアに出会う前にドライアドの山中でスカルモールドに遭遇していた。

当然ながらエイルは常に単身でスカルモールドと対峙し、これも当然ながらそれまでその全ての戦いに勝利していた。したがってスカルモールドに遭遇した際の動揺は、ル＝キリアよりも相対的には少ないと言えるだろう。要するにエイルは彼なりにスカルモールドとの戦い方を会得していたのである。

だが、今回はルーンによる強化が一切期待できないという大きな違いがあった。

それでもエイルは両手で持ったノルンを正眼に構え、狙いをつけた相手の胴体のある一点に向けて躊躇うことなく突きを放った。

狙い違わず、儀仗ノルンの先端がある一点を鋭く打った。しかし胴体に突き刺さるわけではなく、エイルはすぐにスカルモールドから離れた。

間合いの外にいったん出ると、エイルは続けて次の攻撃を放つ体勢をとった。

エイルの突きで動きを一瞬止められたスカルモールドは、己の獲物に体を向けようとした。だが、土塊（つちくれ）の化け物がエイルに向かって一歩踏み出そうとした時、その巨体は体勢を崩し、前のめりに倒れ込んだ。そこへエイルはすかさず続けざまにいくつかの打撃を与えた。数回打ち、離れる。そしてまた間合いを見て打撃を与え、次に離れた時には、なんとスカルモールドの二本の脚と四本の腕、そして唯一の頭はすべて土の色をした胴体から分離し、地面に落下していた。その状態でもまだエイルに近づこうと関節をうごめかせてはいたが、当然ながら移動速度は極端に落ちていた。

これは『魔人』エイル・エイミイを題材にした吟遊詩人の英雄篇のいくつかで謡われている通り、異世界人である彼にはある特殊な才能があったようである。

長く戦っているファランドールの人間ですらわからないスカルモ

ールドの弱点が彼には見えていたと言うのだ。たった一本の木の儀仗で、あっと言う間にスカルモールドを無力化する事が出来る程の。

エイルは最初の対戦相手であるその一体に見切りを付けると残りの二体……いや仲間の戦況をようやく把握できる状態になると、急いで振り向いた。

だが、短時間で自らに与えられた仕事を全うしたエイルと違い、エーテルの力をはぎ取られたル＝キリアの面々は彼の予想以上に苦戦していた。

エイルが振り向いた時には、仲間の戦果として地面には二本の腕と一本の脚がうごめいていたが、スカルモールド本体はまだまだ健在で、三人の中で一番動きの鈍いデュナンであるアトラックを次第に追い詰めつつあった。

アルヴィンとダーク・アルヴ、それにデュナンの構成ではスカルモールドに一度捕まってしまうと、その力に抗って脱出できる腕力のある者はいない。アルヴのファルケンハインやティアナであれば可能性はあるかもしれないが、片腕、あるいは片足を捕まれた時点でトカゲのように片足を切り離して逃げでもしない限り、ほとんどの場合は死が彼らを待っていると言えた。

したがって今の彼らにできる戦法は、できるだけ手が届きにくい方向から確実な一撃を与えつつ即座に化け物の間合いの外に離脱する事を繰り返しながら、一本ずつ腕や脚を奪っていく事しかないのだ。

三人は戦闘開始と共にすでにマントを脱ぎ捨てていた。マントの端でも掴まれてしまえばそれで体勢を崩すのは必至であり、マントを捨てるのは当然の戦闘態勢だといえるが、強い引き裂き耐性を持つアルヴスパイアを捨てた代償もまた大きい。鎧などを着ているわけではない平服の彼らの防御はスカルモールドの攻撃力に対しては紙にも等しい。それを証明するかのようにエイルの眼にははアトラ

ックの両脚とアプリリアージェの右腕がすでに赤黒いものによって染まっているのが映った。

アプリリアージェは当初の緊張が解けたのか、戦闘が始まるといつものを微笑を浮かべてはいたが、その唇が歪んでいるのが見えた。つまりは、かなりの苦痛を伴うケガを負っているのは間違いなかった。

ウーモスの件でエイルは理解していた。

アプリリアージェであれば、少々の事は涼しい顔でやり過ごすはずである。だが、今はそれが出来ない程の痛みがあると言う事なのだ。

そうしている間にも二体のスカルモールドは脚にケガを負ったアトラックに襲いかかっていた。

懸命に逃げるアトラックを援護するように、背後と側面からそれぞれ一体ずつのスカルモールドに攻撃を仕掛けるアプリリアージェとテンリーゼン。

アプリリアージェは短剣を利き腕ではない左手で握っている。ただでさえ力のないダーク・アルヴが利き腕でもない手で中途半端に切り込んだ剣が、その文字通り岩のように堅いスカルモールドの体に損傷を与えられる訳がなかった。

化け物のうち一体はアプリリアージェの攻撃を受けた瞬間に、自分を傷つけた相手に三本残ったうち一本の腕を振り下ろした。

渾身の攻撃後、すぐさま間合いから離脱しようとしたアプリリアージェだったが、『エア』の為に風のフェアリーとしての速度を得ていない状態では、想定以上に体が重く感じられていた。翼をもぎ取られた鳥にとって、巨体を誇るスカルモールドの制空圏は絶望的に広く、子供の胴体より大きいのではないかと思える大きな掌がアプリリアージェのあまりに小さな肩に無惨に打ち下ろされた。

「ぐっ！」

その瞬間、声にならない悲鳴を上げたアプリリアージェはそのまま数メートルも飛ばされ、防御の態勢をとる間もなく頭から地面に

勢いよく叩きつけられた。土の地面とはいえ、まともに頭から叩きつけられるようにぶつかってはたまらない。アプリリアージェは果たしてそのままピクリとも動かなかった。

そこへ、目標をアトラックから自分の近くに飛んできた、動かぬ獲物に変更した一体のスカルモールドが、うめき声を上げながら横たわるダーク・アルヴに近づいた。もちろん、食らう為である。

「リリアさんっ」

エイルはそのスカルモールドの背を追った。

『くそっ！目を覚ましてくれ、エルデっ！！』

エイルはその時、エルデの存在がいかに頼もしいものだったかを心底思い知った。

エルデのルーンがあれば、あの、ほとんど詠唱時間なしに発動させることができるありとあらゆる『魔法』……エルデはそう言うと絶対に『魔法やのうてルーンや』と訂正するが……それさえあればアプリリアージェの命を救うことができるかもしれなかった。「エア」であろうが何であろうが、エルデならきっと何とかしてくれるはずだ。

そう思わずにはいられなかった。

だが……

風のフェアリーでも兵士でもない、平凡な体力しかないエイルの瞬発力は、当然ながらスカルモールドの速度には追いつかなかった。

触れることすら躊躇われるほど醜悪なその化け物の背中に、エイルには一点の弱点が見えていた。そこに儀仗を使って一撃を入れようと走りもがく目に、しかし絶望的な光景が広がった。

その光景とはスカルモールドの一本の忌々しい長い手が地面に伸び、それはそこに横たわったまま全く動かなくなってしまった黒い髪をした小さな体の一部……アプリリアージェの傷ついた右腕をわ

しづかみにして今まさに肩の付け根から無造作にねじ切ろうとしている光景だった。

「やめろお！」

エイルはそう叫ぶと、思わず唇を噛んで眼を閉じた。恐ろしくてそれ以上は直視できなかったのだ。だが、たとえ目を閉じていても聴覚がまだ残っている片側の耳には、分厚い布が引き裂かれるような湿った鈍い音に続き、何かが地面に落ちる重い音が無情に届いた。

エイルは今度は耳から入ってくる音の恐怖に耐えかね、たまらず目を開けた。

そこにあったもの……それは、アプリリアージェの体からむごたらしくねじ切られた右腕を喰らうスカルモールドの姿……

いや、そうではなく、巨大な土塊だった。

さらにそこにはエイルにとって未知の物体がもう一つあった。

そこにあったもの。それは巨大な土の塊と、そしてその上にスッと立つエイルの知らないアルヴの少女の姿だった。

そこにいるのが普通の少女ではない事はエイルでなくとも一目でわかった。

茶色の長い髪を先端で一つにまとめているその少女はしかし、アルヴの特徴である緑色の目ではなく……。

そう。

エイルにはその少女がいったい誰なのかは皆目わからなかったが、何者なのかはすぐにわかった。

真っ赤な両目。そして額にもうひとつ、同じく真っ赤な第三の眼を持つ存在。その手には濃い青色をしたルーナーの証である儀仗がしっかりと握られていた。

「賢者？」

エイルの疑問形の問いかけに、しかし少女は何も答えない。ただエイルを一瞥すると軽やかな身のこなしでスカルモールドであった

土塊からひらりと飛び降りると、視線を自分の足下に向けた。そしてそこに横たわっているダーク・アルヴ、すなわちアプリリアージェ・ユグセルの背中に儀仗の頭を当てて、何かを呟き始めた。

賢者が儀仗を手に詠唱するもの。すなわちルーンである。

「やめろっ、リリアさんに何をするつもりだ？」

エイルはそう怒鳴ると慌ててその賢者に駆け寄ろうとしたが、背後からの声がそれを制した。

「「群青の矛」はハイレーンです。任せておけば大丈夫です」

その声は聞き覚えのある女の声だった。

エイルは立ち止まり、ゆっくりと声のする方を振り返った。

そこには黒い装束に身を纏った女アルヴがじっとエイルを睨むようにして立っていた。その女アルヴ越しに、地面に座り込んだアトラックと、仮面をつけ、珍しく肩で息をする銀髪のアルヴィンの少年が見えた。テンリーゼンだった。

二人の側にも別の崩れかけた土の塊があった。エイルには何が起きたのかよくはわからないものの、土塊がスカルモールドのなれの果てであることは理解できた。

アトラックの足の傷はともかくテンリーゼンはどうやら無傷なようで、エイルはひとまず安堵した。

だがそれと入れ替わるように心の底に沈ませていたはずの怒りとも憎しみともわからない感情が込み上げてくるのは抑えきれなかった。

「ラウ・ラ＝レイっ！」

のどの奥から血の塊を引きずり出すかのような声でエイルはその女アルヴの現名を呼んだ。

「「エア」か。まったくやっかいなものだな」

エイルの呼びかけには取り合わず、つい今し方までスカルモールドであったはずの土塊を見下ろしながら、アルヴの女賢者は独り言のようにそう呟いた。

「これは何の真似だ？」
エイルはこみ上げる怒りを理性でかろうじて抑えながら、改めて「二藍の旋律」……ラウ・ラ＝レイに声をかけた。
そしてその視線を再びアプリリアージェと「群青の矛」ファーン・カンフリーエに戻す。
ファーンの青い杖全体からぼんやりとした白い光が放たれて、アプリリアージェの全身を覆っているのが見えた。
「そう身構えないでもいいでしょう。今日は話をしに来ただけです」
「お前に話す事なんかない！」
ラウの口調には以前と全く違う雰囲気を感じて妙な違和感に捕らわれたが、エイルは大きな声でそう叫ばずにはいられなかった。
ラウはそれを受けて小さく溜息をついた。
「言い方を変えます。こちらにはあなた方と争うつもりは毛頭ありません」
ラウはそれだけ言うと、驚いたことになんとその場に片膝をついてエイルに頭を下げた。

エイルは混乱した。
―（何がどうなっているんだ？）
スカルモールドが消え……いやおそらくはあの「群青の矛」と呼ばれるアルヴの少女が倒したのだろうが……今度はラウ・ラ＝レイが現れ、一難去ってまた一難と身構えたところが、相手は争うつもりはないと言う。
口だけではなく、膝を突いて。
―（まるで主人に対する従者のような態度じゃはないか）
おかしいのはそれだけではない。「エア」の内部にいるにも関わらず「群青の矛」と呼ばれた賢者は治癒のルーンを今まさに使っている。
やはりここはフェアリーの力だけを吸い取る特殊な「エア」で、ルーンは問題なく使えるのだろうか？

いや、それよりもなによりもエイルは二藍、いやラウの態度が腑に落ちなかった。
もしや？
（そうか）
エイルは一つの事に思い当たった。
―（こいつが「エア」を作ったのか？スカルモールドもこいつのせいなのか？）
そうだとすれば辻褄が合うような気がした。

「どういう風の吹き回しだ？」
ゴクンとつばを飲み込み『冷静になれ』と二度自分に言い聞かせた後で、エイルはゆっくりとラウにそう声をかけた。
わからないことだらけのこの状態では、まずは現状を理解するしかなかった。今ここにいるのは自分だけだ。アプリリアージェはいまだにぐったりしたままで意識がない。アトラックも脚の傷で動けない様子で、テンリーゼンは……。
―（リーゼは多分問題外だな）
エイルの呼びかけに、ラウは頭を下げたままで答えた。
「あなたが間違いなく本物の賢者であることは、我が師「蒼穹の台」より聞きました」

―（おいおい、「あなた」だって？）
エイルは心の中で一人でそう突っ込んでみた。いつもならエルデと会話ができるはずだったのだが、今はそれは望めない。だが、そう言わずには居られなかった。もちろん声には出さずに。
だが、そう言った直後にエイルは思わず苦笑しそうになって慌てて唇を噛んだ。
いつの間にかエルデと意識の中で会話をする事が日常になっていて、それが出来ない事を寂しいと思っている自分に気付いたのだ。
エイルは首を振ってつまらない考えを振り払うようにすると、ラ

ウとの会話に集中する事にした。

「今更何を言ってるんだ？」

ラウの言葉に鼻白んだのは間違いない。だからエイルは、吐き出すようにそう言った。掌を返したようなラウの態度に面食らいはしたものの、それがかえってラウに対する敵愾心を刺激されるようで、儀仗ノルンを握る力を緩めるのに苦労さえしていた。

だがラウはエイルのそんな心情など知らぬ顔で、無表情のままで続けた。

「そしてあなたが私より上席にある賢者だと言うことも聞いています。勘違いとは言え先走った我が行為を今は恥じております。遅くなりましたが、先だっての無礼に対し謝罪いたします。この通りです」

ラウは再度頭を、より深く下げた。

その態度を見て、エイルはこみ上げる怒りに対しての歯止めがとうとうきかなくなった。思ったことがそのまま口から出る。

「今更謝ってすむものか！オレじゃなくてカレンに謝れっ！」

「カレン？」

ラウは顔を上げると不思議そうにエイルを見た。その態度と自分を見つめる濁りのない緑色の瞳を見て、エイルはようやく理解した。ラウが謝罪したのはエイルに対する攻撃についてであり、はなからカレナドリィの存在などこの賢者の眼中には無いのだと言うことを。

目的の為に迷い無く行使される強大で圧倒的な暴力。そこには人間の生に対する敬念や死に対する畏怖と言ったあらゆる感情は存在していなかった。右足の次には左足を前に出して歩くような、そんな当たり前の行為の単なる結果に人が勝手に殺戮という言葉を後付けしたかのような錯覚にすら囚われるほど淡々とした行為。

エイルはそれを知っていた。嫌という程。

ファランドールにやってきてしばらくの間、目の前、いや自分自身が繰り広げていた行為そのものであったからだ。エルデの唱える

ルーンがもたらす結果の前に、エイルは何度も吐き気を催したものだった。
そして、ラウの表情を見て、その時初めてエルデがやってきたこととラウがカレナドリィに対して行った事が同義なのだと言うことに気付いたのだ。
要するに賢者とは、そう言うものなのだ。

エイルは忘れていた感覚を思い出し、鳩尾の下から急激な吐き気が頭をもたげるのを何とか堪えると、ラウから目をそらした。
「ああ、あの宿屋の娘ですか」
ラウはようやく思い至ったと言う風にそう言った。
「『ああ』、じゃねえよ！なんだよ、お前は？カレンにあんなことをして今思い出したようなその態度は」
「はい。おっしゃる通り今思い出しました。結果として確かにあれもまた私の失策でした」
ラウの言葉に対し、エイルはこみ上げる怒りにまかせて手にした儀仗で地面を思いっきりドンっと突いた。
「返せよ」
「え？」
「カレンを返せ」
「それはムリです。すでにご存じでしょうが、あの呪法は本人の魂を発動現力として消費させ成立させる呪法です。呪法が発動したからには……」
「そんなことはわかってる！」
「ムリだと理解されているのに返せとおっしゃるのですか？」
「何を言ってるんだ？」
エイルはそう言うと、今度こそ感情を抑える事に失敗し、儀仗ノルンを大上段からラウの頭に向けて打ち下ろそうとした。
だが、エイルとラウの間に、先ほどのアルヴの少女が割って入った。

「なりません」
「どけっ」
儀仗を振り上げたまま、エイルは少女をにらみ付けると怒鳴った。
「引けません」
「お前には関係ない」
「いえ、関係は大いにあります。主を守るのが私の務め」
「主だって？」
「はい。ラウっちは私の主です」
「ラウっち？」
「はい。ラウっちです」
ファーン・カンフリーエの言葉に、エイルは何となくばかばかしい気分になってきていた。目の前に立ちふさがる長い髪の少女には表情がない。「蒼穹の台」にもほとんど表情らしいものはなかったし、さらに言えばラウの顔からも何の表情も読み取れなかった。
エルデの本当の体をエイルは知らなかったが、その顔は同じように何の表情もないのだろうか？
また、思いはエルデの事に飛んだ。
―（賢者とはそう言うものなのか？）
だが、少なくとも今のエルデはもう最初に出会った頃の誰もいない冷え切った冬の部屋のような雰囲気はなかった。
だから、本当の体を取り戻しても、目の前の二人のように無表情ではないと思いたかった。

エイルはゆっくりと儀仗の構えを解いた。
「今は「二藍の旋律」でいい、「群青の矛」」
「はい」
「――それからラウっちではなく、ラウさんだ。何度言ったらわかる」
「申し訳ありません、「今は二藍の旋律」。しかし……」
「しかし？いや、「今は二藍の旋律」ではなく「二藍の旋律」だ」

「恐れながら我が主に申し上げます。以前はそうでもありませんでしたが、今の主は『ラウさん』より『ラウっち』の方がお似合いではないかと思うのですが、「二藍の旋律」」
「いままでも、これからもずっと『ラウさん』だ」
「――一つのご意見として、承りました」
無表情なファーンだが、最後の言葉は確かに「いかにも不承不承」といった顔をしながら喋っていた事を、エイルは見逃さなかった。
感情がないわけではないのだ。
さらに、ファーンの言った言葉にも引っかかっていた。「二藍の旋律」の雰囲気が以前と今とでは変わっている、と確かに言っていた。
――（何なんだ、この二人は？）

「エイル、ここは冷静になれ。気持ちはわかるが、堪えてくれ」
すぐ後ろで声がした。
見ると、小さなテンリーゼンにもたれかかるようにしてアトラックが近づいていた。相変わらずテンリーゼンはこういう状況でも無表情極まりない。
テンリーゼンを見てしまうと、同じ無表情でもエイルには賢者であるファーンの方が百倍も暖かみのある人間に感じられて不思議な気分になった。
「無茶言うなよ、アトル。カレン殺しがここにいるんだぞ？」
「俺だってはらわたが煮えくり返るほどだ。カレンを抱きかかえてルドルフの元へ返しに行ったのは俺なんだぞ？」
「だったら！」
「今そこでソイツを殴り倒してカレンが戻ってくるのなら、俺ももちろん喜んで加勢するさ」
「でも」
アトラックは脚に受けた傷の苦痛で顔をゆがめながらも、ムリに笑って首を横に振って見せた。

「賢者「二藍の旋律」は話をしに来ただけだと言っている。争いに来たわけじゃない」
「そんなこと、信じられるか！」
吐き捨てるように言うエイルに、今度はラウが答えた。
「賢者が賢者に対して、ましてや自分よりも上席だと解っている相手に対して嘘などつきません」
その言葉を受けて再びラウの方に顔を向けたエイルに、聞き慣れた優しい声が届いた。
その声はたしなめるように言った。
「話を聞きましょう、エイル君」
顔を上げる、ラウ越しに今まさに上体を起こそうとしているアプリリアージェが目に入った。
「リリアさん！」
エイルは慌てて走り寄ると、その小さな体を抱え起こした。
「ありがとう。私はもう大丈夫です。それよりアトルの言うとおり、今は冷静になりましょう」
アプリリアージェは落ち着いた声でそう言って、いつもの微笑でエイルを見ていた。エイルがとっさに観察した限りでは、大事になりそうな外傷はないようだった。頭からの出血もなく、右腕もちゃんと肩と繋がっていて、血を吹き出していた裂傷はもうふさがっていた。
その様子をみてエイルはほっとため息をついた。
「よかった……」
ただ、スカルモールドの爪が引っかかったのだろう。着ている服が大きく裂け、上半身のうち右半分の肌が露出している状態だった。それに気付いたエイルは慌てて目を逸らすと急いで自分の上着を脱ぎ、それを無言のままアプリリアージェに差し出した。
「ありがとう」
アプリリアージェはエイルのその姿を見てニッコリ笑うと、素直にそれを受け取った。

彼女にとっては少し大きめの服をゆっくりとした動作で羽織りながら、エイルに静かな調子で言葉をかけた。
「恥ずかしながら失神してしまって少し記憶が飛んでいますが、見たところ我々は賢者「二藍の旋律」に窮地を救われたようですね。それが今ここで起こった事実だとまずは認識すべきです」
「でも、それとカレンの事とは別問題です」
アプリリアージェが無事とわかって、エイルはまたラウに対する怒りがこみ上げてきた。だが、そのエイルの肩に手を置いたアプリリアージェは
「同じです。賢者の論法で行くなら賢者が誤って関係のない市井の人を殺めた場合、それは賢者の法でこそ罰せられるべき事。いつもの賢者エイミイならそう言うはずですよね？」
言い聞かせるようにそう話しかけた。
賢者がエイル・エイミイではなく、すでにエルデ・ヴァイスだと知っているアプリリアージェが敢えて「賢者エイミイ」と強調して言った事に、もちろんエイルは気付いていた。それはアプリリアージェが極めて冷静であるという証拠でもあり、エイルに対して同じく冷静になれ、と言う「言葉の中にあるもう一つの意味」を含んだものだという事も。
「でも」
「それにエイル君はともかく、我々アルヴの血を持つ者は例え相手が親の敵であったとしても、このような場面に際してまずは賢者「二藍の旋律」に礼をする事こそ矜持と言うものなのです。あなたが「二藍の旋律」の話を聞けないと言っても我々は聞かせて貰う事になるでしょう。つまり……」
「つまり？」
「それでもあえて今、戦意のない賢者「二藍の旋律」に殴りかかり、こちらから争いに巻き込もうというのなら、エイル君はここにいる我々三人の軽蔑を受ける覚悟が必要です」
「え？」

「おそらく色々と聞いて知っているとは思うのですが、我々アルヴ族はあなたたちから見れば滑稽なほど名誉を重んじる種族です。シルフィード国民であれば、なおさらその気質は強い。そして私達は賢者エイミイの、自らの矜持に対する真摯な態度にこそ共感しているのですよ」

微妙に回りくどいいい方ながら異世界フォウの人間であるエイルがエルデを通じて学習している事を再確認させ、ラウ達の手前そのエルデの現名（うつしな）を出さず、賢者エイミイと呼んで引き合いに出して激高しているエイルを牽制してみせたアプリリアージェは、完全にいつもの冷静さで事態を把握しつつ頭を高速に回転させているようだった。

アプリリアージェはいったん言葉を句切った後で、エイルににっこりと笑いかけて、短く続けた。

「私たちを失望させないで下さいな」

エイルはその言葉を聞くと、固めた拳を地面に思い切り打ちつけた。

「くそっ」

アプリリアージェの言うことは理性に語りかけるもので、それは認めざるを得ない。だが、理屈はわかっていても、それを飲み込める人間ばかりとは限らない。エイルはそこに自分とアプリリアージェとの間に横たわる大きな溝のようなものを見た気がした。

「さらに戦術的な事を言えば、ここでこの状態の我々が二人もの賢者を相手に戦っても無傷で居られるとは思えません。ですから、ここは一つ」

「わかったよ」

もちろんわかっていた。でも、わかってなどいなかった。

だがこの場で暴れても仕方のないことだけはエイルとしてもどうしても認めざるを得ない事実だったのだ。

「つきましては、はじめに一つだけ教えて欲しい事があります」

話の区切りがついたと判断したのだろう。今までエイルとアプリリアージェの会話をじっと聞いていただけのラウが、エイルに声をかけた。
「何をだ？」
エイルはぶっきらぼうに答えた。そのエイルの肩に手を置くと、アプリリアージェがラウに声をかけた。
少し話をさせろと言うことだろう。
エイルの反応を待たずにアプリリアージェはラウに向かって声をかけた。
「すみません。重要なお話の途中だとは承知していますが、少し割り込ませて下さい。私達にとっては最優先事項なのです」
アプリリアージェの態度で、エイルもハッとした。
そうだ、分断されて一匹のスカルモールドと戦っていたはずの残りの四人はどうなっているのだろう？
アプリリアージェの窮地とラウの出現で頭に血が上って何も考えられていなかったことを、エイルは密かに恥じた。

「我々の連れが別に四人ほど居るのですが」
「ああ、なるほど」
ラウは鷹揚に答えると部下に声をかけた。
「「群青の矛」」
「はい」
「スカルモールドは全て倒したのだったな？」
「はい。ですがここで倒した二体以外はすでに戦闘不能な状態でしたので、倒したというよりは、私が止めをさしたというのが正確な表現です」
さっきの会話からも垣間見えてはいたが、エイルはファーンがかなり几帳面な性格であることをその答えで確信した。
「その場にいた四人はどうした？」
「いえ、その場にいた人間は一人だけです」

「一人だって？」
エイルはファーンに向かって叫んだ。
「四人いるんだ」
「いえ、その場にいたのは子供とおぼしきダーク・アルヴが一人でした。私を見るなり何らかの呪法を使おうとしたので、とりあえず機能を停止させました」
「ダーク・アルヴですか？」
アプリリアージェは険しい表情になった。
エイルはそっちよりもファーンの言う「機能停止」という言葉が気になったが、口を挟むのは止めてこの場はアプリリアージェに譲る事にした。また感情が高ぶりかねないと思ったからだ。言い換えるとそう考えられるほど冷静になってきていたという事でもあった。
それにしてもエイルの一行にダーク・アルヴはアプリリアージェ一人しかいない。とすればファーンが言う『子供のダーク・アルヴ』とは、エイル達には関係のない人間だった。
「ジャミールの人間か？」
ラウの問いに、ファーンは首を横に振った。
「いえ、私にはそれは判断できません。なぜなら……」
「いや、もういい」
「はい。ご指示とあれば消去しますが？」
「いや、以前の失敗もある。つまらぬ争いの種を蒔くのは自重しよう」
「私も同じ意見です。「二藍の旋律」」
「その場で、そのほかに変わったことはなかったか？」
「死体もありませんでした。多少血の匂いが残っていましたが、かなり薄いものでした。さほどの時間が経過していないと考えると、出血による生命の危険についての懸念は無用でしょう」
「他に気付いた事は？」
「あの場には複数の人間の匂いが残っていましたが、機能停止させたダーク・アルヴと同じような匂いを纏う者がもう一人居たようで

す」

ファーンの言葉に、エイルとアプリリアージェは顔を見合わせた。

# 第五十一話　精霊石

「残念だが骨折しているようだ。とりあえずは動かない方がいいだろう」

アキラはそう言うと足下に散乱している矢を三本ほど手にした。そしてその矢羽根をむしり取って束ねた上で慎重にダーク・アルヴの少年の右腕に当てた。それを添え木とし、布で巻き込むように包んでしっかりと固定した。

「少し我慢しろ。緩んでずれると後がやっかいだからな」

さすがに痛みに耐えかねたのか少年は呻いて差し出していた手を引っ込めようとしたが、アキラは無情にもそれを無視し、布を巻く力を緩めようとはしなかった。

その様子を見ていたエルネスティーネは、ただはらはらするばかりだった。さすがについ先日まで王女として過ごしてた彼女には、戦場を経験しているアキラのような応急処置の方法は知るよしもない。治療を受けるダーク・アルヴの少年を見てエイルが倒れた時もどうしようもなくて悔しかった気持ちを再び思い出して唇を噛んだが、勿論そうしたからと言ってどうなるものでもなかった。

「手際がいいな」

同じようにアキラの仕事を見ていたティアナがそう言った。嫌みや軽口などではなく素直に感心して出た言葉だった。

ティアナの場合、感情がわかりやすい。しばらくともに過ごした事で、アキラもこの不器用な白髪のアルヴの女戦士の性格がわかっていたから、その言葉がティアナにとってはかなりのほめ言葉なのだと理解していた。

いったんその性格がわかってしまえば、ティアナほど付き合いやすい相手もいないと言えた。駆け引きなどせずに、まっすぐに気持ちをぶつければいいだけなのだから。そして少なくとも自分が認め

た相手には、ティアナからは自分の飾らない気持ちを無防備に投げてくる事だけは確かだった。
「なに、命のやりとりをしているとこう言うことは嫌でも覚えてしまうものだ」
これでよし、と言ったアキラが布を巻いたところをポンと叩いたが、当のダーク・アルヴの少年にしてはたまったものではなかった。低いうめき声を上げて、体をよじった。
「こいつは失敬。しかし私達が君に必要以上に優しくするいわれはない事は覚えておけ」

アキラ達一行は地下の洞窟のような空洞でひとかたまりになっていた。光が届かない為に天井はよく見えないが、それだけにかなり高いようだと言う事がわかる。
アキラが持っていた自光石セレナタイトのぼんやりした光はあまり広い範囲は照らせないが、一行のいるあたりを中心に丸く光の結界のようなものを作り上げていた。
一行がいるその場所はかなり広い地下空洞になっている事は彼らには既にわかっていた。だが、ファルケンハインとティアナが偵察したところ「洞窟」ではあるようだが、どこにも通じていない、つまりそこは出入り口のない箱のような空間と言えた。

「さて、いくつか質問に答えてもらおうか」
手に持った片手剣を傍らにいるダーク・アルヴの少年の眼前に突き出すと、アキラはそう脅しをかけた。
しかし、
「いけません。剣はもう必要ないでしょう、アモウルさま」
エルネスティーネがそう言ってアキラを批難した。
「おやおや。これは私としたことが」
指摘されたアキラはそう言うと叱責の主に軽く会釈をしてすぐに剣を鞘に収めた。

「つい癖でしてね。特に命を狙われたりした後では必要以上に攻撃的になってしまうものです」
「それはわかりますが、その人は左腕を折っている上に既に武器も取り上げられています。もはや私達を傷つける事もできないのではないですか？」
「武器では、ね」
アキラが危惧しているのはその手の物理的な反撃ではなく、むしろルーンや呪法と言ったものだったが、エルネスティーネには敢えて反論しなかった。こう言うことに慣れていないと思われる彼女が必要以上に興奮しないよう丁重に相手をすることにしたのである。ただし目の前の敵の様子には細心の注意を払いながら。
もちろん何かあればすぐに対処できる態勢はくずしてはいなかった。
「さて」
洞窟の壁を背にして座っているダーク・アルヴの少年に、アキラは改めて問いかけた。
「我々は今のところ君に危害を加えるつもりはない。だから君も変な考えを起こすな。いいな？」
威嚇するというよりは、上官が部下に語りかけるような口調でアキラがそう言うと、ダーク・アルヴの少年は添え木が当てられて応急処置が施された自分の左腕を見てため息をつき、観念したように目を閉じてうなずいた。
「最初の質問だ。なぜ私達を襲った？」
「お前達が里に災いをもたらす者だからだ」
ダーク・アルヴの少年兵は黙秘せず、アキラを睨み付けると吐き捨てるようにそう言った。
「それはとんでも無い誤解だな。我々は君達の敵ではない。ただ一夜の宿を甘えようと里に向かっていた旅の芸能一座にすぎない」
「嘘をつけ。フェアリーだけではなくルーナーまでいる旅の一座などあるものか。芸能が聞いて呆れる。血の匂いがぷんぷんする奴ら

ばかりではないか」
「ほう、フェアリーやルーナーがいるということが解るのか？」
少年は不敵な顔でうなずいた。
「そんなこと、我らジャミールの人間にとっては当たり前のことだ」
「ふむ。確かに君達は不思議な力を持っているようだな。では次の質問だ。エアを作り出したのも君か？」
「俺ではない。我等が族長、ラシフ様だ」
「ほう。では続けて尋ねる。あの忌まわしいスカルモールドを呼び出したのも君たちの族長様なのか？」
アキラがそう尋ねると、少年はとたんに口をつぐんだ。
その様子を見たアキラとファルケンハインは顔を見合わせた。まさか人間がスカルモールドを呼び出せるとは思っていなかったのだ。
思いつきの質問をしたに過ぎなかったアキラだが、どうやら彼らはその考えを改めねばならないようだった。
「いや、あそこでスカルモールドを呼んだのは俺だ」
ダーク・アルヴの少年の答えに、アキラは思わずゴクリと唾を飲み込んだ。
「スカルモールドを呼び出すのはいいが、奴らを呼び出した後、その化け物の制御もできるというのか？」
「いや、制御まではできない」
アキラの眉根が寄った。それは誰が見ても不機嫌そうな表情だった。そしてそれはエルネスティーネ達にとっては初めて見るアキラの怒りにに彩られた表情だった。
「君は制御もできないであの化け物を呼び出したというのか？」
「スカルモールドは時間が来れば消える。俺達は奴らを呼び出した後、こうやって穴を通じて違う場所に逃げ込めばいいだけだ。問題はない」
「問題はないか。なるほど」
スカルモールドが都合良く出現したからくりがこれである程度はわかったが、どちらにしろアキラにとっては未知の事柄が多すぎた。

エルネスティーネをチラリと見たアキラは少年の体をさぐり始めた。もしや、と思ったことがあったのだ。

「フェアリーやルーナーを見ると、君達は誰彼かまわずああやって殺しているのか？」

「あの道から来る者はまずは敵と見なす。それが里の決まりだ」

少年は懐に手を入れられると体をよじって抵抗しようとしたが、アキラの巧みな押さえつけに観念してすぐにおとなしくなった。

「これは？」

少年の懐の奥で指先にあたる堅いものがあった。アキラはそれを取り出すとセレナタイトの光の下で観察した。

「石……ですか？」

同じようにのぞき込むエルネスティーネがいくつかある石をアキラの掌からつまみ上げた。それは金貨ほどの直径をした丸く平たな石で、表面に解読不能な文字が記されていた。

「この文字は神痕……つまりこれは精霊石と呼ばれる物ですね」

エルネスティーネはこの石に見覚えがあった。そう、呪医ハロウィンが治療時に使う物だと言って見せてくれた物と酷似していたのだ。

既に廃れて久しいとされる古代の文字、神痕。その文字はそれ自体がルーンを纏うと言われており、ある種の石に術者が血を使って神痕を記すことにより、ルーンが込められた石ができあがる。その石を精霊石もしくはルーン・ストーンと呼ぶ。アキラの掌の上に置かれたその白っぽい石はまさにその精霊石だったのだ。

「まさか君達ジャミールの人間は、こんなものでスカルモールドが呼び出せるのか？」

アキラの疑問はもっともだった。通常、精霊石はエルネスティーネの認識の通り、呪医が簡単な治療の為に患者に持たせたりして使うくらいで、あまり強いルーンは練り込めないはずだった。そもそも精霊石に攻撃ルーンなどが込められているという話はきいたこと

もない。ましてやそれで怪物が呼び出せるなど考えようもなかった。
だがアキラの問いに、少年は不敵な笑いで答えた。
「お前達の知るその辺の精霊石と一緒にするな。これはマーリンの三聖「深紅の綺羅」（しんこうのきら）さまがお作りになった特別な精霊石だ」
「しんこうのきら？」
エルネスティーネのオウム返しを待たずに、ティアナとファルケンハインは顔を見合わせた。アキラはというと、険しい顔をいっそう険しくしてダーク・アルヴに詰問した。
「三聖だと？そんなものが実在するとでもいうつもりか？」
ダーク・アルヴの少年はアキラがそう言うと声に出して笑って見せた。
「これだから何も知らぬ人間は愚かだというのだ。お前達が我々の味方でないこともこれでわかった」
「何だと？」
ファルケンハインはティアナにうなずいてみせると、気色ばむアキラに声をかけた。
「アモウル殿。実のところ三聖は存在する」
アキラはその声を聞くと、視線をゆっくりとファルケンハインの方へ向けた。横にティアナの顔も見えた。そしてそのティアナと目が合うと、彼女は小さくうなずいた。
「本当なのか？三聖などと言うものは伝説上の存在ではないのか？」
ファルケンハインは少し逡巡すると、口を開いた。
「おそらくリリアお嬢様にはお叱りを受けるだろうが、非常時ということでアモウル殿を信頼して話すが……」
アキラはうなずいた。
「君の信頼にこたえる矜持を、私は持っていると自負している」
「いや、疑っているわけではない。とはいえ他言無用で願いたいが、我々もつい先日、その三聖と呼ばれる一人の賢者に出会ったところだ」

「なんと！」
アキラは大きく目を開き、心底驚いた顔をした。
「それは本当なのか？偽物にだまされたなどというありがちな落ちではなく？」
ファルケンハインは首を振った。
「この三人の中では実際に彼に会ったのは俺一人だが、さっきはぐれた残りの仲間は皆その場所にいた。あれは間違いなく三聖。その名を「蒼穹の台」（そうきゅうのうてな）と言うそうだ」
「なんだと」
アキラは再び目を見開いて驚いた。だがその言葉に驚いたのはアキラだけではなかった。左腕を負傷していたダーク・アルヴの戦士もファルケンハインの言葉を聞いて思わず上体を起こしていた。
「きさまは「蒼穹の台」様に会ったと言うのか？それは本当の話なのか？」
ファルケンハインは顔色を変えたダーク・アルヴにうなずいて見せた。
「間違いない。三聖「蒼穹の台」が作り出した「神の空間」と呼ばれる結界で我らは相まみえた」
アキラは絶句した。
三聖の存在などもはや伝説だと思っていた。少なくともアキラ自身とミリアはそう思っていたのだ。実際にいるなどと言う情報はドライアドのかなり深い部分の情報を閲覧できるアキラですら知らなかった。
この情報が本当だとすると、出来るだけ早急にミリアにその事を伝えなければならない。
様々な修正が必要なはずだった。
「三聖と面識があるなどと、君たちは一体、何者なんだ？」
アキラは怪訝な顔で改めてファルケンハイン達を見渡した。エルネスティーネはアキラと目が合うと下を向いた。何も話せないという意味だとアキラはとり、視線をエルネスティーネからファルケン

ハインへ移した。
「もはや隠すこともないと思うので言うが、我ら一行に同道しているルーナー、エイル・エイミイは、アモウル殿も薄々感じているようにただのルーナーではない」
「と、言うと？」
「あいつはマーリン正教会の賢者だ」
「馬鹿な！」

次々に口にされる驚愕の新事実にアキラの思考は即座に反応できない状態だった。スカルモールドが出現してからこっち、今まで持っていた認識が覆る展開が速すぎた。
「賢者というと、あの賢者、なのだな？」
「すぐに信じられないのも無理はないが、嘘ではない。彼は「マーリンの眼」を持つ本物の賢者だ」
ティアナがそう言って念押しをした。
「マーリンの眼というと噂に聞く第三の眼の事だな？それも見たのか？」
アキラの問いにファルケンハインはあっさりとうなずいて見せた。
「ち、ちょっと待て。お前達の仲間にいたさっきのルーナーは賢者様だと言うのか？それは本当に本当か？」
アキラは続けて何かを尋ねようとしたが、その前にダーク・アルヴの少年がファルケンハインに向かって質問を投げた。
「言ったとおりだ。我々の仲間には賢者がいる。それも末席などではなく、かなりの上席にいる賢者だそうだ。本人の言だけではなく、件の三聖「蒼穹の台」も認めていた。だから間違いない」
「賢者の一行がなぜ、我々の里に来るのだ？」
「それはさっきも言ったとおりだ。俺達は食料の補給ができればと、その存在を知っていたジャミールの里を目指しただけだ」
「本当の賢者なら、あの道から来るはずはない」
「と言うと、他にも道があるというのか？」

「蒼穹の台」の名前が効いたのか、一行を賢者の付き人と勝手に思い込んだのだろう。ダーク・アルヴの少年の態度が少し変化した。
「「深紅の綺羅」様や賢者様は、いつも「龍の道」からいらっしゃるのだ」
「龍の道？」
「ここと同じような洞窟だ。ただし、もちろん行き止まりではないがな」
「なるほど」
「「深紅の綺羅」様は族長ラシフ様にこうおっしゃったそうだ。『自分達の仲間はこの道を通じてのみここへ来る。普通の道から来る者は排除しろ』と。そしてそのために結界の精霊石を下された」
「ふむ」
どう思う？とアキラが目で問うと、ファルケンハインは首を横に振った。
「三聖「深紅の綺羅」がこの里に肩入れをしていたということか？」
アキラも同意見だった。
だが、何の為に？
「あの、ひょっとしてルルデに関係しているのではないですか？」
エルネスティーネがふと思いついたようにそう言うと、ダーク・アルヴの反応は驚くほど早かった。
「ルルデを知っているのかっ？」
見つめるその目の真剣さに、エルネスティーネは思わず身を引いた。
「え、ええ。知っているというか、知らないというか」
「どっちなのだ？ルルデは今どうしている？フィリスティアード隊が委嘱軍につぶされたという情報はあったが、詳しい内容がまったくわからず、ルルデの消息がぷっつりと途絶えたままなのだ」
エルネスティーネはどうしましょう？というふうにファルケンハインを見た。勿論ファルケンハインはその後を受けた。
「ルルデのことは知っている。知っている事は教えてもいい。だが、

一つ条件がある」
「なんだ？」
「ルルデとは何者だ？なぜお前達が彼を知っている？それを教えてくれれば我々が知っているルルデ・フィリスティアードの情報を包み隠さず教えよう」
ダーク・アルヴの少年は悩んでいる様子だった。しばらく無言でいる彼に、しかしアキラを始め一行は何も言わなかった。そしてようやく開いた口から聞かされた事柄は、アキラよりも多少なりともルルデのことを知るファルケンハイン達を驚かすのに十分な内容だった。

「ルルデはもともと「深紅の綺羅」様から託され、匿うようとに命じられた赤ん坊だったのだ」
もともとジャミールの里は賢者と関係があった。ある賢者の保護と協力を受けていた。理由はルートの一つであるキュア系列のジャミールというグラムコールを持つルーナーを多く有していたからだった。勿論、賢者候補生をジャミールの里から選ぶ為である。そしてその「ある賢者」の名が彼らにとっては問題だった。
「「真赭の頤」（まそほのおとがい）様だ」
その名前が出た時にはさすがにアキラを除く三人全員が唸った。何という符合の一致だろうか。

ダーク・アルヴは続けて語る。
ある日、その大賢者「真赭の頤」とともに里に現れたのが三聖「深紅の綺羅」。
その胸には一人の赤ん坊が抱かれており、この子を里で匿えという。
それが普通の赤ん坊でないことは一目見てわかった。瞳髪黒色、つまり黒い髪と黒い瞳を持つ大昔に絶滅したはずのピクシィの赤ん坊だったのだ。

族長は一切理由は聞かず、その赤ん坊を受け取ると、一族で大事に育てることを誓った。
それを聞いて満足そうにうなずいた三聖「深紅の綺羅」は、褒美としていくつかの精霊石を族長に与えたのだという。

「それが君が使ったこの精霊石か？」
「そうだ、ただしその時いただいたのは結界を張るものだけだ」
「それはジャミールの里にとっても重要なものなんじゃないのか？君はそれを使える立場にある兵士だということか？」
アキラの問いかけに、ダーク・アルヴの少年はうなずき、初めて自分の地位と名を明かした。
「俺はジャミールの兵士長、メリドだ。言っておくが俺はデュナンのお前をハナタレ小僧と呼んでもいい程の年齢だ。お前にはどう見えているかは知らんがな」
ダーク・アルヴの少年は、少年ではなく既に齢四十歳だという。年齢もそうだが、それよりも、ファルケンハインはその名前に反応した。聞き覚えのある名前だったのだ。
「メリドと言ったな。シェリルの言っていたメリドとはお前の事だったのか？」
ファルケンハインの言葉にメリドは顔を輝かせた。
「おお。お前はシェリル・ダゲットを知っているのか？」
「ああ、知っているとも。シェリルからお前の名前を聞いたことがあるんだ」
「そうか、シェリルとも知り合いだったのか。彼女の淹れる紅茶はずいぶんとうまかったのを覚えている」

アキラは二人のやりとりを聞いて、懐から剣を取り出した。
それを見ていたエルネスティーネが何かを言いかけたが、アキラはそれを制すと、その剣でダーク・アルヴの兵士、メリドの足を縛っていた布を切り、拘束を解いた。

「お互い、敵味方ではないという確認ができたのだ。もうこれは必要ないだろう」
そう言うと切り取った布を遠くへ放り投げて見せた。メリドは何も言わずに解放された足を動かした。
「では聞くが、なぜルルデをゲリラ部隊に預けたのだ？」
ファルケンハインの問いに、メリドはふむ、と言って目を伏せた。
「あれはルルデを預かって誰が育て親になるかを協議していた時だ。つまり、預かって間もなくということになるな。再び「深紅の綺羅」様がお越しになった。そしてこう命じられたのだ。事情が変わったので今すぐルルデを里から遠ざけ、信頼できる軍師に預けろ、と」
「なぜ？」
「この里が新教会にかぎつけられたかも知れないのだと言われた。それは暫しの間で、しかるべき場所を別途用意してすぐに迎えに行くともおっしゃった。かなり緊急のようで、多少なりとも武装した集団に預けた方がいいだろうというお考えだったのだろう」
「新教会？ルルデには新教会に追われるような理由があったのか？」
メリドはうなずいた。
「それは我らにもわからない。「深紅の綺羅」様は、その時にスカルモールドを呼び出す精霊石を我らに与え、新教会が攻めてきた時はそれを使ってしのげとおっしゃった。そして我々は命じられるまま、即座に動いた。すでに親交があり相応の人物だと信じたサラマンダのフィリスティアード少佐こそ、その預け先だったのだ」
それがルルデに関する情報のすべてだとメリドは言った。
「「深紅の綺羅」様にはルルデのことはすぐに忘れろと言われたのだが、実際にこの手で手渡した身だ。気になって時々様子を見に行っていたのだが、ルルデのもとに「深紅の綺羅」様が現れた形跡は一切無いのが気になっていた」
ファルケンハインはメリドの話を受けて、今度は彼が持っているルルデ・フィリスティアードの情報を伝えた。だがそれはメリドにとっては衝撃の事実であった。

既にルルデがこの世にいない事を知ったメリドの落胆は相当のものだった。

「我らはいったい「深紅の綺羅」様になんとお詫びすればよいのだろうか……」

だが、戦闘集団に預ける限り、それは諸刃の剣である。命に関わる事が起こる可能性が高いと言う事は「深紅の綺羅」とて想定していたはずである。

すなわち「深紅の綺羅」は本当に短期間のうちに迎えに来る予定だったという事なのであろうとエルネスティーネは話を聞いてそう思った。そしてその場にいた全員がおそらく同じ考えであったろう。

つまり、「深紅の綺羅」には迎えに行けない事情があったのだ。

「メリドさんのせいではありません。あまり自分を責めないで下さい」

そう言って慰めるアルヴィンの少女を不思議そうな顔で見上げるメリドに、アキラは言った。

「ネスティ嬢はこういう方だ。敵も味方もない。あるのはただ目の前にいる人間を思う優しい心だけだ」

「詳しいことは申し上げられませんが、私達はこのような争いがこれ以上起きないようになればと、ある目的のためにこうやって旅をしているのです」

「それは、同道されている賢者様のお考えなのか？」

メリドの言葉にエルネスティーネは何も答えられなかった。ファルケンハインの方を見たが、彼とてその問いに答えられるものはなにもない。

「正直に申しますと賢者エイミイの目指す先の先までは私たちにはわかりません。ですが、少なくとも今はあの人の目指すところを我々も見ています」

「そうでしたか」

エルネスティーネの言葉でメリドの態度がまた少し軟化した。言

葉遣いも穏やかになり、少なくともう敵対する相手としてアキラ達を見る事はなさそうだった。
「そう言うわけで、俺達が敵ではないことを解ってくれるとありがたい」
ファルケンハインは続けた。
「わかったら、頼むからここから出してくれ。地上に置いてきた仲間が心配なんだ」

あれから既に一時間以上は経っていると思われた。一般的にスカルモールドが既に消滅している時間ではあった。問題はそれまで一行が持ちこたえているかどうかである。何せ「エア」の中だ。フェアリーもルーナーも力が封じられている状況で、三体ものスカルモールドをたった四人でどうにか出来たとは考えにくい。だが、それでもあの面々なら切り抜けているに違いないとも思っていた。
だからこそこれまでそのことには触れなかった。それよりも自分達の状況を考える事の方を優先すべきだと思っていたからである。だがこちらの状況がある程度一段落すると、さすがに心配になってきたのは確かだった。
しかし、アキラ達の思惑に反してメリドの答えはあまり歓迎できないものだった。
「悪いが、脱出は無理だ」
「どういう事だ？お前が連れてきたのだろう？」
「ここは見ての通り八方が行き止まりの空洞だ。中からは外へ出られない。つまり、体のいい地下牢と思って貰った方がわかりやすいだろう」
「なんだって？」
「冗談ではない。族長ラシフ様のルーンでしかここに通じる経路を開く事は出来ない。それまではただこうしているしかないのだ」
「それって、エイル達を助けにはいけないということ？」
エルネスティーネが問うまでもなく、つまりはそう言うことだっ

た。この場所を動くことすら出来ないのだ。
アキラは大きなため息をつくと、その場にどっかとあぐらをかいた。
「どうやらここは、腹を決めて待つしかないようですな」
とは言ったものの、その実アキラは焦っていた。
この場で得た膨大な情報をできるだけ早くミリアに伝える必要があった。どれ一つとってもミリアの計画に影響しかねないものばかりだったのだ。
何より文句の一つも言いたかった。
アキラに言わせれば、そもそも今回のミリアが「思いついた」作戦は困難が多すぎた。
ミリアに依頼された通りエルネスティーネ達の一行に紛れ込んだまでは良かったが、アキラにとってはその後が問題だった。
ミリアには長期不在になる覚悟で準備しろと言われてはいたが、一行の目的地が予想以上に遠く、成り行きとしてまさにその通りスプリガンの総司令が長期不在になりそうだと言うことがまず大きな問題だった。
次に、加わった一行にはアキラの予想を遙かに上回る人材が居たことも問題だった。アキラの後を一定間隔を開けて追随しているはずの二名の部下、すなわちミヤルデ・ブライトリングとセージ・リョウガ・エリギュラスに対して思うように密な連絡が取れなかったのだ。
はじめから疑われているのは確かだった。
いや、誰であろうと疑うのがアプリリアージェ・ユグセルの仕事なのだ。なにしろ一国の王女の護衛なのだから。
しかもただの王女というわけではない。もっともただの王女というものはどんな王女なのかという議論の余地はあるにせよ、エルネスティーネに関してはファランドールの命運を握ることになるやもしれないエレメンタルの一人でもあるという付加価値がついている。

どのような経緯であれ、その重要人物に近づこうとするよそ者に対して警戒しない護衛など存在しないと言っていい。

そして、その護衛たるアプリリアージェはアキラの目から見ても類い希と言って差し支えない程の優秀な人材だと確信できる人物だった。

その尋常ではない観察眼と洞察力を前に中途半端に尻尾を出すような真似は絶対にしてはならないことだった。下手をすると一瞬で命を落とす事になりかねない。

アキラとしては自分とアプリリアージェが白兵戦を行った場合の相対的な力の差を掴みかねていたが、それは向こうも同じだろうと思っていた。

アキラが多少有利な点は、アキラの方ではアプリリアージェの正体をよく知っているが、相手はアキラの事をまだ認知していないことだった。だからと言って事が起こった際にアプリリアージェが油断して手加減をするとは思えなかったが、有利になる要素は無いよりも一つでもあった方がいいに決まっている。

また、アプリリアージェだけを気にしていればいい訳でもない事も、アキラの頭痛の種であった。

うわさ通りである故に全く未知なものになっているテンリーゼンの存在もその一つだった。

しゃべらない、存在感や気配がない、見るとただ不気味にそこにいると言った風情はまさにうわさ通りで、本当につかみ所もなにもない。しかし戦闘能力に対する噂の方は全く不明なのである。腕力のない小柄なアルヴィン、しかもまだ年端もいかない少年兵にしかみえない。殺気もなく、アプリリアージェをはじめとする他のルヰキリアのような強い戦士が纏う特有のエーテルの圧力のようなものも全くない。アキラの知る兵士とは一線を画する全く異質な存在、それがテンリーゼンだった。

だからこそ不気味で、一瞬の油断もできないと思わされた。

そして極めつけの問題は、今まで見たことも聞いたこともないよ

うな特殊なルーナーが一行に居たことだった。
ル＝キリアと違いスプリガンにはルーナー部隊が編成されていた。従ってアキラも当然ながらルーナーというものをそれなりに理解しているつもりであった。スプリガンのルーナー部隊には特別にドライアド国王直轄の高位ルーナー、すなわちバード職に就いている者も何人かが配属されている。つまり多少強力なルーナーを見てもさほど驚くことなどないはずだったが、エイルのルーンを見た時にはさすがに驚愕した。あまりの驚愕の為に思わず笑いが出たほどだった。
複雑なルーンをほぼ瞬時に発動させるルーナー。それもこともなげに。
そのルーナーがその気になれば、何もかも自白してしまうルーンをかけられる可能性もあった。もちろんそう言うルーンが存在するのかどうかまではアキラは知らなかったが、ドライアドのバード達が何十年もかかって習得するようなルーンですら、世にあるルーン全体の百分の一にも満たないと言われている。どんなルーンがあろうが不思議ではない。ましてやそのルーナーが実は賢者だとわかったからにはその未知の恐怖は増すことはあっても減ることはなかった。
予想を大きく上回る敵地へ単身乗り込んだアキラは、エルネスティーネ一行に合流して、すぐに考え方を根底から変えることにした。素性がわかった時点で死は確定的だ。であれば、死を恐れずに彼らと付き合おう、と考えたのだ。
つまり、あえて隙を見せる。隙を隠さない。無防備な背中を常に晒し、反面自分の能力の高さも隠さない。
それが殺気を伴わない限り、何かを仕掛けられても、それを防がない。
つまり、相手に「いつでも殺せる相手」だと思わせる態度をとる事を戦略として選んだのである。

それらはすべて極めて勇気のいる行為ではあったが、それがアキラが最初におかした失策を埋め合わせることができる唯一の起死回生策だと思えた。

――最初の失策。

それは初めて出会った時にアプリリアージェが踏み絵のように差し出した手鏡に彫り込まれていたトネリコの大樹と双美人のクレストを無視してしまったことである。

世界を回っていると豪語する音楽家が、あの特徴的なユグセル家のクレストを知らないはずはない。意匠が特徴的なだけではなく流通量は少ないとはいえ、ファルンガ金貨という貨幣にも刻まれているクレストである。ドライアドだろうがウンディーネだろうが、目にすることはあるはずなのだ。もちろん、ユグセル公爵家以外のものが同じ、もしくは似たクレストを使用することは国際法でも禁じられている行為である。そのクレストが入った手鏡を持つダーク・アルヴがユグセル家以外の人間のはずがない。

だが、その後いつまで経ってもアプリリアージェから直接その話題が向けられる事はなかった。一切触れない意味はまだはかりかねていたが、どちらにしろアキラにとっては毎日がある意味針のむしろのようなものだ。

勿論、既に無難な言い訳はその時の状況に応じたいくつかを用意していた。どれもわざとらしくなく、自然な答えだ。間違いなくあのアプリリアージェにも受け入れられるだろうと思われた。ただ、その答えのあとでアプリリアージェがどういう行動を取るかまでは予測外であった。アプリリアージェの腕が生半可なものではないことは解っていたが、今のところその実力の片鱗すら目にする機会がなかったのも不確定要素として不安に加味されている。

つまり、相手のの行動が読めない限り、アキラは後手に回らざるを得ないわけであった。

――それらもろもろ全ての状況を踏まえながらアキラはなんとか部下に連絡する必要があった。

もちろん予め、いくつかの連絡方法を打ち合わせてはいた。

まずは手紙。アキラ達にだけ解る目印をつけて経路上に残しておくこと。

同じく経路上の石や樹木に連絡事項を記しておくこと。

だが、それらを含めその他一般的な連絡方法は無理だろうと言うことも想定はしていた。相手はスプリガンと同じく『そう言った事に慣れている連中』なのだ。下手な素振りをしたとたんにアキラはその立場を危うくするだろう。ドライアドが使っている暗号にしてもすでにル＝キリア程の連中なら解読済みの可能性もある。

そこでアキラが採った連絡方法は笛の音によるものであった。一定の組み合わせで簡単な指示をするのだ。

音による連絡は確実で簡単ではあったが、複雑な意思伝達にはあまり向かない。さらに言えば通常だと笛の音の到達する範囲はそう広いわけではない。天候にも左右される。勿論それなりの範囲には届くが、問題はル＝キリアの索敵圏との兼ね合いだった。ミヤルデとセージに届き、かつル＝キリアの索敵範囲を超える音であることが必要だった。

だが、実はこれはすでに解決済みであった。なぜならアキラの使っている笛は特殊なルーンを練り込んで仕上げられた音の伝達範囲が特別に広いものだったのだ。

出所はもちろんエスタリアのバカ殿で、アキラの要望に答える形で彼がしつらえさせたものだった。白鳥のクレストもその時ミリアが勝手に彫り込んだものだった。

『どう見ても君には熊より白鳥の方が似合うよ』

そう言ってさりげなくミリアは公爵としてアキラにクレストを贈ったのである。

子爵家を継ぐ事は出来ず、さらにいまだに爵位すらないアキラのそのクレストが紳士録に載る事は無かったが、それが今回は功を奏

した。男爵の爵位をもらっていたら白鳥のクレストを登録していたに違いなく、その音が遠くに響く特殊な笛を使う事が出来なかったからである。

とは言えその笛の音での連絡も自由に行う事は避けなければならないのは言うまでもない。最悪の事態としては一切吹けないことも考えられたが、それは初日に演奏依頼をされたことによりあっさりと受け入れられることになった。勿論めったやたらと吹くわけには行かないが、頼まれてお許しが出れば吹く程度であれば感づかれることもない。

そしてその連絡方法はこうだ。

アキラの横笛は二分割されている。そしてその繋ぎ部分は可動式で、つまりはその長さを調節することで音階の調律を行う事ができるようになっていた。気温や湿度あるいは高度なども音に関係する。二分割あるいは三分割と言った笛を好む演奏者は特にそういう微妙な変化に合わせて頻繁に楽器の調律を行う。アキラはそこに目を付けて、調律の音出しの際の音の組み合わせで簡単な連絡を取るようにしていたのだ。

組み立てる際に調子を整えるのはもちろんのこと、アキラの場合は一曲毎に確認の意味でざっと調律をすることが既に癖になっていた。したがってこの方法であれば不自然さは何もないわけである。

もちろん、その連絡方法はその微妙な音階を理解できる受け手が居て初めて成立する手法だったが、アキラにはその絶対音感能力を持ったセージを副官として側に置いていた。子供の頃からのつきあいで、互いに音には非凡な才能がある事を知っていた。子供の頃は自然・人工を問わず耳に聞こえるあらゆる音を音階で表現したり、玩具代わりに遊んでいた間柄なのである。その頃から大人を出し抜く事を目的にして遊びのように行っていた二人の間だけでわかる暗号はいくつもあった。

そしてそのアキラの思惑は今のところうまくいっているようだった。

とはいえ、連絡事項が特に何もない日が続いていた。
「異常なし。現状を維持せよ」
アキラがセージに送る内容はそれだけだったのだ。

そんなわけで連絡方法は何とか確保できた。
続く問題は、いかにしてシルフィード王女、エルネスティーネと親しくなれるか、である。
別に今回の仕事では必ずしも目標と親しくなる必要はない。彼らの目的を探る事が主眼だからだ。だが、それだとミリアの依頼を額面通りにとる事で生じる不具合を生む可能性をはらんでいた。
アキラの見立てでは、ミリアという人間は少しおかしいのだ。
相手が自分と同じ方を見て、同じ情報を持ち、かつ同じ理解力を持っているという前提に立ってごくごく簡単な言葉だけで指示をする。つきあいが長く、かつ凡人ではないアキラにしてそう思うのである。
普通の人間にとってそれは、初めて現れた見知らぬ客に「いつものやつ」と注文される料理屋の主人にでもなったようなものだろう。
だからアキラはいつもミリアの言葉を反芻し続ける事が習慣のようになっていた。
今回のミリアの指示はもちろん風のエレメンタル一行の目的を探る事だろう。何を目的に危険を承知で動き出したのか？
もちろんその言葉を額面通り受け取ってもそれは間違いではない。だが、ミリアとアキラの共通目的を忘れてはならない。それは、「エレメンタルを味方につける」という事だ。勿論目的はさらにその先にもあるわけだが、当面の問題としてエレメンタルを確保する、あるいは違う陣営の手に渡さないようにすることが最優先事項であった。
で、あれば、風のエレメンタルを見つけた時点でミリアがそれを確保しておけば話は速いが、勿論そういうわけにはいかない。相手はエレメンタルだ。抵抗された場合にはなすすべはないだろう。だ

から話をしてまずは納得して貰う必要がある。いや、その前にこちらの話を聞いて貰える環境を整える必要があった。

ミリアにアキラが期待したのは彼らの目的と、もう一つ、自分達の存在と、できれば目的を認識して貰う事だと考えていた。

エレメンタルについてはまだまだ未知の部分が多い。長い間その研究をずっと行っているミリアにしてその全容がつかめているわけではないという。

で、あれば、まずは腹を割ってお互いを知ることから始めるのが王道ではないか？

そうアキラは結論づけたのである。アキラには自分が相手に嫌われないという自信があった。ミリアもそう思っているからこそアキラに今回のこの極めて重要な仕事を依頼したに違いない。ミリアの持つ駒……つまり彼の陣営には他にも優秀な人材がいる。その中から自分が選ばれたと言うことは特に信頼されているということなのだろう。ならばその信頼に応えるべく最大限の努力をするのが義と言うものである。

アキラはそう考えていたのである。

常識的な考えでは一国の王女と、どこの馬の骨とも解らぬやくざな旅の音楽家が親しく会話することをたとえお忍びであろうとも護衛が喜んで許すはずもなかった。したがってアキラは自分から声をかけて話をすることは想定しない方向で作戦を立てることにした。

もちろん確実な解があるわけではない。確実な解がないのであれば、今までの経験に物を言わせ、その可能性を高めるしかないのである。

ウーモス出発前に、アキラは急いである物を手配させていた。

それがマーナートだったのだ。

残念ながらウーモスではマーナートは手に入らず、取り寄せる為には多少の時間がかかる事を知ったアキラの決断は大胆であった。電光石火の早業で強引にウーモス完全封鎖をやってのけた。つまり、

あれはその時間稼ぎの意味合いも兼ねていた。

マーナート導入に至った経緯は極めて単純である。

若い女性、しかも野に出るのは初めてという世間知らずのエルネスティーネの気を惹くのは「自分自身」ではない方がいい。そうすると残るは「物」か「人間以外の生物」に限られる。王女相手に「物」は難しい。相手を知らないのだからなおさらである。従って消去法で「生物」を使う事になったのである。

生物、すなわち愛玩動物にもいろいろとある。シルフィードでは珍しく多くの人々にいやがられる事のない、小型であまり目立たず危険もなく怪しまれず、アキラでも維持が簡単である事も肝要であった。

当初アキラは小型犬を考えたが、犬ではどうにも目新しさに欠け、かつ世話も面倒だ。それ以前にアキラは犬嫌いであった。

猫も鳥も適当とは思えず、辿り着いたのがマーナートであったのだ。

そしてアキラのマーナート作戦はまんまと成功した。

ただ、あっという間にマーナート自体がアキラの手を離れてエルネスティーネの「もの」になってしまったのは想定外ではあったが……。

ともあれマーナートを話題のきっかけにしてエルネスティーネとの会話が出来るようになったことは作戦が成功したと言えた。

会話はもちろん、当初はマーナートの事ばかりだった。一般的な飼育の注意や、何を食べるのか、何が好みなのか、どうやったらもっと懐いてくれるのか――（ただし、アキラはそれ以上懐いてもらう必要はないのではないかとしか思えなかったのだが……）等々。

そうやっているうちに本人だけではなく周囲の警戒も次第にゆるみ、今では普通に旅の仲間として会話が出来るようになっていたし、会話をしているのをあからさまに警戒され、遮断されるような事もなかった。

もっとも多少釘を刺されていようが、そんなことはお構いなしに話しかけてくるのはエルネスティーネの方なので、アキラとしてはそれに普通に受け答えしていればいいだけだったのだ。

そう言うわけで多少の懸念はあるものの状況は順調だと言えた。暫定目的地もウンディーネにある新教会の聖地、ヴェリーユだと言うこともわかった。後はヴェリーユへ行く目的を知ることだったが、何度話を向けてみても「着いてみればわかる」の一点張りで、それ以上の進展はなかった。

そこへこの事態である。

スカルモールドとの突然の遭遇は一行を二分し、図らずもアキラはエルネスティーネの側にいることが出来た。アキラはスカルモールドとの直接の対戦は初めてだったが、情報だけは知っていた。その情報があったおかげで善戦することが出来たのだ。ただし、アキラ達の方へ向かってきたスカルモールドがただ一体だけだったのが幸運であったことは否めない。

その一体を行動不能にした直後、アキラは近くでこちらを伺っているダーク・アルヴを見つけた。一見少年に見えるが、実際の年齢についてはデュナンのアキラとしては判定しかねた。

ただ、短剣を持っているばかりか手甲や臑当てをつけ、弓矢も装備している事から見ても兵士であることは間違いがないと判断した。

そのダーク・アルヴの兵士にアキラが飛びかかった時、相手は懐から何かを取り出しそれを地面に投げつけた。すると不思議なことに瞬時に地面に穴が空き、兵はそこに跳び込んでいったではないか。

既に相手に飛びかかっていたアキラはもちろんの事、ダーク・アルヴの兵士が空けた「穴」は予想以上に大きく広がり、ファルケンハインやティアナだけでなく、エルネスティーネをも飲み込んで、やがて閉じた。

「穴」が果たしてアキラ達がスカルモールドと戦っていた地面の直

下であるのか、はたまた全く違う場所に通じているのかはわからなかったが、多少の落下感を伴った後、彼らは全員暗闇に放り出された訳である。

ダーク・アルヴの少年、すなわちメリドはアキラと絡まって落ちた際にアキラの体の下敷きになった格好で、運悪く左腕を骨折していたのだ。

# 第五十二話　リリスの懐剣

「さて、では一応装備を点検しておこう。メリド殿の矢が二三本あるが、あとの矢はもう尽きた。剣も私のものはどうやら使い物にはならないようだ」

アキラの呼びかけで各自が自分の武器を点検した。ファルケンハインの剣はその先が折れ、刃もボロボロの状態だった。ティアナの剣も状態はファルケンハインと似たようなもので、かろうじて半分程度が残っている程度だった。

「ふむ。ファル殿にはメリド殿が持っていた短剣を使って貰うとして、さしあたりティアナ殿の獲物がないな」

「私なら、心配は無用です」

ティアナはそう言って懐の奥にしまった包みを取り出した。そして袋を大事そうに広げると、そこには一振りの懐剣があった。

アキラはその懐剣の柄を一目見た瞬間に、「ほお」と声を上げた。その懐剣が、制作者の並々ならぬ技量をもって丁寧に作られたものだと察したからだ。

まず存在感がまるで違う。鞘の造りも秀逸だった。形には何の変哲もないが、木の削り物を貼り合わせたような安手な物ではなく、軽く丈夫なドライアドの三月竹を薄く削った皮を編んで何層もの漆で塗り固めた美しく気品のある造りがなされた逸品であった。だが、それら以上に目を惹くのはその鞘と柄に銀打ちされたクレストだった。

「ティアナ殿は爵位をお持ちであったか」

アキラはめざとくそれを見てそう言ったものの、彼の記憶にはない図柄なのが気になった。そのクレストの意匠は一度見たら忘れる事はないものだったからだ。

「いえ、これはある高貴な方から個人的に頂いた私個人のクレスト

です。ミュンヒハウゼン家にはクレストはありません。ただの商家です」

「そうでしたか。私の白鳥紋と同じようなものですかな」

自分が知らないクレストであることの合点はいったが、誰が与えたものなのかが気になった。

「その図柄は……もしや星座ですな」

ティアナはうなずいた。

「桜花星です。我が誇りとともにあるこの剣を使う時が来たと言うことでしょう」

ファルケンハインは勿論その話を初めて知った。そして、そのクレストの意匠を聞いた時に誰から授かったものかをすぐ理解した。だが、ティアナがまずい事を口にしたとはもはや思わなかった。

近衛軍の人間であることの誇りを、国王から下賜されたクレストを偽らず誇ることを、この場面で止める事はアルヴ族であるならばできるわけはない。アキラに何事かを知られる可能性があるにせよ、それはおそらくアプリリアージェであっても看過するであろうと思われた。

ティアナが鞘から抜きはなった懐剣のリリス製の刃が、セレナタイトの光で涼しく光った。

「リリスの剣とはまた豪勢な」

刃を見たアキラがそう嘆息したが、ファルケンハインは材質ではなくその曲線に宿る既視感に胸がざわついた。

「ティアナ、すまないがその剣を少し見せて貰えないだろうか？」

ティアナはファルケンハインの方を向くと、うなずいてアプサラス三世から授かった懐剣を差し出した。見た目よりもずいぶんと軽い懐剣は大きなアルヴの手に丁度合うように設えられていた。

ファルケンハインはその懐剣の柄の尻を見た。そこには、わかるものだけがわかる記号のような物が記されていた。

「父さん……」

「え？」
　ファルケンハインの声に、ティアナは驚いた声を上げた。エルネスティーネとアキラは思わず二人で顔を見合わせた。
「もしやその懐剣の刀工はファル殿の父上、ということか？」
「剣を見ただけでわかるのですか？」
　ティアナはファルケンハインの祖父がリリスの飾り物を作れる程の腕前を持つ彫金職人だとはきいていた。現に今も耳に付けているランダールの大市で売られていた耳飾りがその祖父の手に依るものだという。しかし、父親が刀工だという話は聞いていなかった。もとよりそんなことを尋ねたこともなく、また敢えて相手が話すようなことでもないだけに知らずとも無理もないことではあった。
「実は元々祖父も腕のいいリリスの刀工だった。だが、あるときから武器を作ることを一切止めたと聞いている」
　ぽつぽつと話し出したファルケンハインの説明によると、祖父と父親が大げんかをしたのち、父親が家を捨てて出て行ったのだという。親子げんかの原因は父親が装飾加工ではなく武器職人になると言うのを、父の師でもある祖父が頑として許さなかった為だという。
　もともと祖父が武器を作らなくなったきっかけは、父親が祖父に弟子入りをした事にあったようで、父親はそれが気に入らず、ことある毎に武器の作り方を教えてくれるように祖父に頼んでいたが祖父は頑なに拒み続けていた。
　だが若く血気盛んであった父親は、祖父の目を盗んではいくつか店の倉庫に残っていた祖父の剣を手本に独学でリリスの剣を作るようになった。それがある日祖父の目にとまり、大げんかの末に家を飛び出した。妻と、息子であるファルケンハインを残して。
　その後、ファルケンハインは一度もその父親とは会っていないのだという。
「その剣の刃の曲線は父さん……父が祖父をまねているうちに自分

のものにしたと言っていた独特なものだ。子供心にオレはそれを美しいと思って眺めていたから忘れようもない。そして、父はいつも柄の尻にこの記号を彫っていた。ファルケンハイン……俺の頭文字だ」

そこまで話すと、手にした懐剣をティアナに返した。

「だが妙だな。風の噂では父は確かシルフィードを飛び出し、ウンディーネに渡ったと聞いたのだが。わざわざそんな遠くの刀工に依頼せずともエッダにも腕のいい武器職人は山ほどいるだろうに」

「よほど名の知れた刀工になっておられたのではないのかな？リリスを扱える武器職人は山ほどはいないでしょう」

アキラはそう言ったが、ファルケンハインは漠然とした疑問が澱のように意識の底に沈殿していくのを感じていた。

一方、ファルケンハインの話を熱心に聞いていたティアナは、運命とはなんと不思議なものなのだろうと思っていた。

一世一代の使命を帯びて出た旅で出会った人物が、はたして同郷、さらには同じ誕生日だという。ファルケンハインとの縁はそれだけに止まらず、国王がクレストとともに下賜されたこの懐剣を作った人物が、あろうことかそのファルケンハインの父親だというではないか。そしてその懐剣の柄には、人知れず剣の銘が刻まれており、それはファルケンハインの名であったという事実。

ティアナは思わず手にした懐剣をぎゅっと握りしめた。

「陳腐な言葉しか思い浮かびませんが、今ほど運命という物を感じたことはありません」

「そうだな」

感極まったようなティアナの言葉にファルケンハインは素直にうなずいた。そして少し逡巡した後で、低い声で、こう続けた。

「でも俺は実はランダールでティアナに出会った時にそれを感じていた」

「ランダールで？」

ティアナはファルケンハインと初めて出会った時の事を思い出して、バツが悪そうに顔を赤くしてうつむいた。その様子をエルネスティーネは見逃さなかった。

「それは、運命の出会いという意味ですね？」

ファルケンハインは思わず苦笑すると頭をかいた。

「俺としたことがつまらないことを喋りすぎたようだ」

「いや、ファル殿。差し支えなければその話、是非私も伺いたい。なに、今のところ我々に出来るのは待つことだけ。時間はある。是非お話を伺いたいものです」

「いや、そうは言うが」

「いえいえ。聞かせて下さいな。それにその話をおそらく一番知りたがっているのは当のティアナ本人だと思いますよ」

ティアナの様子を見て、エルネスティーネもそう言って話をせがんだ。

アキラもさらに追い打ちをかける。

「ええ。ネスティ嬢のおっしゃるとおり。良い話となれば知り合いの吟遊詩人に話して聞かせましょう。男と女の物語は、彼らにとっていくつあっても困らぬ物ですから。きっと私は彼らに感謝されるに違いありません」

「頼むから歌になどしないで欲しい」

「では、歌にしても良いかどうかはファル殿からうかがった後、ここにいるネスティ嬢に判定して貰うと言うことではいかがでしょうか？」

自分でまいた種とはいえ、とんでも無い事になったとファルケンハインは後悔した。だが、

「き、聞かせて下さい。是非」

顔を赤らめながらティアナにそう懇願されてはファルケンハインも覚悟を決めるしかなかった。

「俺は小さい頃からメッダにある祖父の店に遊びに行っていた。し

ばらくするとそれはもうほとんど店番のようなものになっていた」

意を決して、ファルケンハインは語り出した。

「俺の店番が板に付いてくると、彫金師の祖父は昼間はほとんど工房に引き籠もって仕事をするようになった。俺の仕事は店番として掃除などをしつつ、客が来たら用件を聞いて必要であればそれを祖父に知らせる役目だった。そしてそうこうしているうちに、俺は自然に祖父の彫金の仕事に興味を持ち、店を閉めた後はすぐに家に帰らず祖父の工房でその仕事を眺めるのが日課になった。祖父の仕事を見ているのは楽しかった。何の変哲もない板や針金が子供心にも美しいと思える形に整えられていくのはまるで夢の世界の出来事のようだった。

やがて俺の興味が長続きしていると思ったのだろう、祖父が仕事を少しずつ俺に教えてくれるようになった」

エルネスティーネはファルケンハインの話を聞きながら、ふと側にじっとしているメリドの方をみやった。彼女の視線を感じたとたんダーク・アルヴの兵士は慌てて視線を床に移したが、それまではじっとファルケンハインの方を見ていたようだった。その様子を見てニッコリと微笑むと、エルネスティーネは視線をファルケンハインに戻した。

「俺はそれが嬉しくて、簡単な道具を持ち出して店番がてら彫金のまねごとをするようになっていった。

そんなある日、ふと気づくと女の子が店の飾り棚を熱心に見ている姿が目に入った。気をつけていると、その女の子はそれからもちょくちょく来ては、外からガラス張りの飾り棚を熱心にのぞいていくようになった。

いったいその子は、いつも熱心に何を見ているんだろうと好奇心にかられた俺は、ある日、彼女が去った後に彼女が見ていた飾り棚を見て、それがリリス製の繊細な耳飾りだと気づいた。そんな日がしばらく続き、気がつくと俺はその子が店先をのぞきに来るのを心

待ちにしている自分に気付いた。そして祖父に教わる彫金も、耳飾りばかりを作るようになっていた」

「その子って」

エルネスティーネが目を輝かせてファルケンハインを見つめた。

ファルケンハインはしかしそれには何も答えず、話を続けた。

「その女の子には大きな特徴があった。俺は一目見ただけですぐに顔を覚えてしまった。少し吊り目で気の強そうな顔をしていたが、飾り棚を見る時の表情はいつも上気していてまぶしかった。時折町で見かけるようにもなったその子は普段は気位が高そうなツンとした顔をしているくせに、実はあんなにも優しい笑顔で笑える女の子なのだな、と思ったものだ。そして俺は子供心にその女の子にどんどん惹かれている自分を感じていた。

そう、その子の髪はアルヴにしては珍しい白髪で、俺はその子の白髪をなんて美しいんだろうと思っていたんだ」

「ティアナ！」

ファルケンハインの話をそこまで聞いたエルネスティーネが、もう我慢できないと言った感じで、惚けた顔をしているティアナに飛びついた。

「ステキなお話ね。ううん、素晴らしいお話だわ。ずっと以前に二人は出会っていたのね。いいえ、違うわ。二人はランダールで出会う運命があったから、子供の頃にはちゃんと出会えなかったのかもしれないわね」

「い、いえ、それは……」

ティアナはどうしていいかわからないと言った感じでエルネスティーネの態度をもてあましていた。その頬はセレナタイトのぼんやりした光でもすぐに解るほど赤く染まり、よく見ると目頭に涙が滲んでいた。

「違います」

ティアナは小さな声でそう言った。

「え？」
エルネスティーネはティアナが何を言ったのかが解らず、聞き直した。
「違うのです。私は、あの店で耳飾りを見ていたわけではないのです」
「え？」
エルネスティーネはキョトンとした顔をしてティアナを見た。
ティアナはそんなエルネスティーネの顔をまともに見られないといった風にうつむいた。エルネスティーネは、ティアナが耳まで赤くしているのを見るとなぜか優しい気持ちがこみ上げて、それを押さえられなくなりそうな自分を感じていた。
「ネスティ嬢、それは多分」
アキラはそう言うと、目でファルケンハインを示してみせた。
「え？」
「え？」
アキラのその仕草に、エルネスティーネだけでなく、ファルケンハインも異口同音にそう言った。
「え？そうなの、ティアナ？」
エルネスティーネは少し間を置くと、アキラの意図することが腑に落ちた。そしてうつむいたティアナに確認するようにその顔をのぞき込みながら尋ねた。
ティアナはエルネスティーネの視線から逃げるように顔を背けたが、少し間を置いてうなずいた。
「ええ。私は、ずっと店の中で熱心に彫金をしている若いアルヴを見つめていたのです」
「ティアナ……」
ファルケンハインは思わずそう声をかけたが、その後に何を言っていいのかがわからなかった。
「はじめに見た時は、目つきが鋭くて気むずかしそうで近寄りがたい感じだったので、なんであんな愛想の悪そうな人が店番をしてい

るんだろうといぶかしんだものでした。次に覗いた時、真剣に彫金の練習をしている真面目な姿と、作業が思う通りに出来た時に見せる嬉しそうな笑顔を見て、その……ときめいてしまったのです。それからは、遠回りをして時々通うようになりました。臆病な私は目が合いそうになると飾り棚を見ているふりをしてごまかしていたのです。あまり長い間そうしていると変に思われると感じて長時間居座るのは止めようと思っていたのですが、次第に毎日足を運ばずにはいられなくなり、やがてあの店に行くことが一番の楽しみになっていきました。思えばあれが私の……」

「俺は」

ティアナが言いかけた言葉を遮るようにファルケンハインが声をかけた。

「ランダールで出会った時に、すぐにわかった。だが一応確認の為にエルネスティーネに君の出身地を聞いたんだ。間違いないと解った時は、状況的に不謹慎だとは知りつつも心が躍った。二度と会えないだろうと思っていたから、その嬉しさはひとしおだった」

「嗚呼！」

ティアナは小さくそう叫ぶと、今度は自分から小さなエルネスティーネを抱きしめた。

「ち、ちょっとティアナ？」

「こんなに嬉しいことはありません、ネスティ。みんなあなたのおかげです」

「ちょっと、ティアナったら。痛いです。だいたいなぜ私が関係しているのです？って、痛い痛い。このままだと私、つぶれてしまいますっ」

それでもティアナはエルネスティーネの体に回した腕の力を弱めようとはしなかった。エルネスティーネは最初はもがいていたが、自分の首筋に暖かい物が流れているのを感じると、目を閉じて自分からもティアナを抱きしめた。

「ねえ、ティアナ。あなたが嬉しいと私もこんなに嬉しくなってしまうのはどうしてでしょう？」
「私には、わかりません」
そう言うとエルネスティーネを抱きしめる両腕に一層力を入れた。
「でもきっとネスティが嬉しいと私が嬉しい気持ちになるのと、多分同じなのだと思います」
「ティアナ……」

その二人の様子を複雑な表情でじっと見ていたファルケンハインに、アキラはそっと声をかけた。
「ネスティ嬢の判定がどうあろうと、この話は私が頂きました」
「いや、本人にとっては感動的で劇的な話だが、客観的に見ればよくあるただの偶然で地味なものだろう？頼むから人に喋るのは止めて欲しいのだが」
アキラはしかし、ファルケンハインの哀願をにべもなく断った。
「大丈夫です。こんないい話、吟遊詩人達が放っておくわけはありません。心配せずとも彼らが話を百倍にも膨らませて派手な感動の物語に仕上げてくれるでしょう」
「わかった。喋ってしまったものは仕方がない。潔くあきらめよう。その代わりにと言っては何だが、この話はアトルとリリアお嬢様には絶対にしないでくれ」
「それは私からもお願いする」
ティアナが鼻を啜りながら、アキラの方を見てそう言った。
「特にアトルには」
ティアナを除く三人は、その声を聞いて思わず声に出して笑っていた。それは地下空洞に落ちてから、初めて響く笑い声だった。
そんな一行のやりとりを聞いていたメリドは、笑いあうアキラ達一行の様子を不思議な物を見るような気持ちで眺めていた。

# 第五十三話　二人の賢者

エルデ・ヴァイスの名前は正教会の記録に残っている。

それに依れば星歴四〇二三年黒の二月「授名の儀」にて不適格と判断され消滅したとある。

歴史上のいわゆる公式な文書にエルデ・ヴァイスの名前が出るのは、このたった一行のみである。だが、今日その名を知らぬものがいないのはご存じの通りである。

「授名の儀」とは、師である賢者が自らの弟子のうち「この者であれば賢者として相応しい」と判断し、推薦した賢者見習いが挑む最後の難関である。

今となっては儀式の詳細は全く不明だが、その儀式において弟子は賢者の徴を得、初めて第三の眼を開くと言われている。つまり「第三の眼」とスフィア「賢者の徴」を得る為の選考が「授名の儀」だと考えられる。それは「第三の眼」である、あのマーリンの眼を委ねるのに適格かどうかを問われる儀式なのであろう。

伝え聞くところによると、通常その儀式の立ち会いは五人で、うち一人は必ず大賢者でなければならないとされている。もっとも授名の儀に携わる賢者はごく上席の、それも一部の者に限られていたようではある。

正教会の記録を信じるのであれば、星歴四〇二六年にジャミールの里近くでラウと出会った人物はエルデではない。没後二年も経過している事になるからだ。

しかし、その後様々な場所でエルデは存在の痕跡を残し、人々の記憶に止められ、ミリア・ペトルウシュカの絵画にも描かれていることから、星歴四〇二三年以降も実在した人物として歴史さえそれを認めている。

であれば、考えられる事は二つ。

正教会が何らかの意図をもって事実に反する記録を残したのか、あるいはただの間違いか、である。

現存する授名の儀に関する記録は特に改ざんされたような点も見受けられず、また本当にただの箇条書きのような記録であることから、そこに妙な意図を反映させるようなものでもないと捉えるのが素直な見方であろう。

つまりこの場合、「誤記」が正解であろうとするのが多くの歴史学者の見解である。おそらくはそれが真実であろう。

しかしながら、ただの誤記ではない。それには正教会陣営ではない人物の意図が込められていると考えた方がよい誤記である可能性が高い。

その意図を込めた人物とは誰あろう、エルデの師匠であるシグ・ザルカバードこと「真赭の頤」である。彼はエルデ・ヴァイスをそこで死んだ事にしたかったのである。そして彼には「授名の儀」に立ち会った自分を除く四人の賢者を殺してまでそう仕向けなければならない理由があったのだ。

もちろん、その話を今ここで明らかにするつもりはない。だが、ラウ・ラ＝レイがエルデ・ヴァイスは死んだものだと思っていた事は確かであった。

とはいえ、エルデ・ヴァイスの存在については歴史的な空白期間があることは事実である。だが、まるでその空白を埋めるように、もう一人の謎の賢者が忽然と歴史に現れる。

賢者の名を持たない賢者。エイル・エイミイである。

「魔人」と呼ばれるエイル・エイミイ。

実在しない伝説上の勇者ならともかく、正史上の「存在した」と言われる重要人物が事もあろうか「魔人」と形容されるのはファランドールの歴史において後にも先にもエイル・エイミイ只一人である。

彼の出生については全くの謎となっている。だがエイル自体は確かに実在の人物であったことは間違いないようだ。エイル・エイミイが歴史上に忽然と現れるのが確認できる限りでは星歴四〇二四年であり、これはエルデ・ヴァイスが「授名の儀」で死亡した翌年にあたる。

記録当時のエイルの年齢は十七歳とも十八歳とも、また十六歳とも言われている。種族はデュナンの少数民族に似ているとも、絶滅したはずのピクシィの末裔であったなどと言う記述も多々あるが、謎が多く定かではない。

髪や瞳の色にしても黒であったという既述が多いが、茶色であったとする説も有力であり、不確かな事この上ない。共通しているのはごく若い青年もしくは少年であったという事だけである。

通説によるとエイルは正教会の施設に預けられた孤児であり、その後の幼少時を「真赭の頤」の下で過ごしたとされる。本人がその生い立ちを語ったという記述がアトラック・スリーズの書簡集をはじめ各国にいくつか残存するようだが、肝心の正教会の施設関連の記録には一切それを裏付けるものはない。

本人は終始一貫して「「真赭の頤」の弟子」と名乗っていたそうだが、多くの賢者と同様に複数の弟子を持っていたことが記録に残っている「真赭の頤」の管理簿はもとより、書簡や日記などにもエイル・エイミイやエイルに相当するような人物の存在を伺わせるものは一行もない。

また、全く別の説もある。そもそもエイル・エイミイは賢者などではなく、未知の異能者だと言う説である。

吟遊詩人が伝える英雄譚において、彼は「異世界「ファランドール・フォウ」から迷い込んだ魔人」あるいは「フォウからの救世主」として扱われているが、彼が持つ特殊な能力と謎に満ちた出自を見ると、そう考える人間が居ても不思議ではないだろう。

エイルという名前は古い時代から主にウンディーネの女性に見られる名前である。だが、記述によるとエイル・エイミイがピクシィだったかどうかの真偽はともかく、若いデュナン系の『男性』であったことは間違いがないようである。それなのになぜ女性名が付けられているのかは全く不明だが、口伝によると本人は自分の女のような名前を少しも気に入っておらず、何かにつけ気にしていたようである。

エイルが賢者であったかどうかは議論の余地があるが、相当な実力を持つルーナーにして凄腕の両手剣の使い手でもあった事に異論を唱える者はいない。

彼を描いた肖像画には三角柱型のスフィアを頭頂部にあしらった黒い儀仗や、細身でやや刀身が弧を描くようにして曲がった、白く輝く独特の形をした両手剣を持っている姿などが描かれている。ファランドールにはそれまでこの形の剣は伝えられておらず、つまりはエイルが使っていた剣は当時でも特殊なものであることは間違いがない。その剣を当代に復活させようとして、腕に覚えのある刀工が何度も制作に挑戦したものの、細身で薄い刀身は同じ材質で作られた普通の片手剣や両手剣と刃を交えるだけでたちまち破損する程に脆弱で、およそ実戦には向かず兵士達に使用されることはなかった。その後は主に個性的な姿とその刀身の持つ優美さから装飾品として作られていた時期がある程度で、現在に至っては殆ど目にすることもないようだ。

「杖をルーンで剣に変え、縦横無尽に戦場を駆けめぐりながらあらゆるルーンを自在に唱える事ができた」という既述や口伝は数え切れない程あるが、これがエイル最大の謎となる。

ルーナーは精霊履行を行う際、その場に自らを触媒とする陣を形成する。ルーナーはこれを指して「座標」あるいは「座標軸」を固定するという言い回しをするが、つまりルーナーは自分自身をルーンの触媒としてエーテルに作用させる為に、体をある一つの地点に

固定する必要がある。ルーンの履行中は一切移動ができないということはファランドールの摂理なのである。

移動制限は履行の詠唱から履行が発動するまで続き、高位の精霊履行を行う際は何分もの間その場を動くことができなくなる。だが、エイル・エイミイはルーンを使いながら自由に移動することが可能であったというのである。彼以前も、当然彼以降もそのようなルーナーは全く存在しないことから、伝説になる過程で誇張されたものだという研究家も多いが、それができたからこそ「魔人」と呼ばれる事になったのではないだろうか。つまり、それは素直に事実だと考えた方がすっきりする。

エイルはその剣の腕前についても相当のものであったようで、吟遊詩人が彼を主人公として歌ういくつかの英雄篇によると「オーギ」という技を複数使いわけ、一対一の対決では相手を寄せ付けなかったとある。

剣の腕前と言うことになると、彼と旅を供にしたと言われている双剣の剣士テンリーゼン・クラルヴァインの名前を引き合いに出さないわけにはいかない。

両者を比較して一体どちらが強かったのか？などと言うと酒場の定番の与太話になってしまうが、両者の剣の質が全く異なる為に単純な比較は非常に困難であろう。

たっぷりと風のエーテルを纏い、その圧倒的な速度を武器とするテンリーゼンに対し、誰も見切れなかったと言われるほどの技を持つエイルという図式になるからだ。

また話をややこしくしているのが、両者とも純粋な剣の腕前だけで話が済まない事である。フェアリーの能力を戦いに活かせるテンリーゼンと同様に多彩な精霊履行を攻撃強化として組み込む事ができる高位ルーナー、エイルなのである。

世が世なら両者の勝負を試合形式で是非とも観戦したいものだが、残念な事に我々はもうそれを想像で楽しむしかないのである。

ともあれすでに記したようにマーリン正教会の正式な記録には賢者エイル・エイミイの名前はなく、登場した時と同じく消滅も突然で、彼の正体についてはいまだに謎のままである。

だがしかし、エイル・エイミイが賢者の徴と言われるスフィアと「マーリンの眼」を持っていたことは間違いないようである。

ここまで見事に記録がないとエイル・エイミイはよほど教会側にとって存在すると都合の悪い人物であったのか、内部的なごたごたの中で偶然が重なって記載漏れが生じたのかは今となっては知るよしもないが、賢者の徴と第三の眼の存在はすなわち彼が賢者であったことを何より雄弁に語っているのである。

だがこの物語の読者は既に知っている。賢者エイル・エイミイが教会の記録に存在しない理由を。

そしてその理由を確認する一人の賢者が、その時エイルの目の前に居た。

ラウとファーンを含む地上に残った一行は、捕らえたダーク・アルヴの子供に話を聞くためにファーンの言う「機能停止させた」場所へ移動した。

その子はただ拘束されていただけではなく意識がない状態だった。

「眠っているのか？」

エイルの問いに彼の後ろにいた賢者「群青の矛」ことファーン・カンフリーエは首を横に振った。

「正確に言えば眠っているのではなく、生命活動の殆どが停止している状態です」

それを聞いたエイルが眉をつり上げて何かを言おうとしたのを見て、「二藍の旋律」、ラウが先にファーンに声をかけた。

「状態の説明はいい。このダークアルヴの娘にかけたルーンを言え、「群青の矛」」

「私が唱えたルーンは、『エリクダート・キシエル』です」

「冬眠させたのか」

そう言うとラウは呆れたように部下を見た。
「はい。正確に言えば生命維持活動が可能な最低限の状況まで体温を下げるべく心臓活動を制限し……」
「わかった。説明はいい。なぜ眠らせずに冬眠させたのだ？」
「睡眠導入ルーンよりもこちらの方が詠唱時間が短く済むからです、「二藍の旋律」。この選択によって短縮された時間を具体的に言いますと……」
「いや、よくわかった」
ラウはそう言ってファーンの言葉を遮るとエイルの方を見て黙礼をした。
そのラウの態度は『ファーンにいらぬ質問をするな』と警告しているように取れた。律儀な性格のファーンは尋ねられた質問に律儀に答えすぎるきらいがあるのだろう。
とはいえ、その会話でエイルはダーク・アルヴの子供の命には別状が無い事を知って内心ほっとした。
その時である。
彼の視界に小さな影が飛び込んできた。それはこぶし大程の茶褐色の物体で、道の脇の草むらから結構な速度でこちらに向かってきた。
エイルはとっさに儀仗ノルンを構えたが、その物体が自分の方に向かっているのではなく、すり抜けて後方に飛び去るのを見送ると儀仗を下ろした。
エイルの少し後ろには大柄なアトラックが小柄なアルヴィンのテンリーゼンに支えられて歩いていた。
エイルが肩を貸そうとしたのだが、エイルより腕力も体力もないはずの小さなテンリーゼンが先にアトラックの腕を取っていた。もう片方はファーンが受け持っていた。
その三人組に向かって突進した件の小さな茶褐色の丸い物体は、足下からテンリーゼンの体を駆け上がると、その頭に乗って停止した。

「マ・マナちゃん？」
眼下の物体を見てアトラックが驚いたような声を上げた。
そう。それはアキラの、いやエルネスティーネの飼いマーナートの「マナちゃん」のようだった。
マナちゃんは迷うことなく一目散にテンリーゼンの頭を目指し、その上に乗ると、とたんに寛いだように毛繕いを始めた。
テンリーゼンはと言えば、マナちゃんが駆け上がろうが頭の上に乗ろうが一切お構いなしと言った風情で指一本動かしてはいなかった。
いや、指は一本も動かしてはいなかったが、珍しく息を上げていた。さすがに大柄なアトラックの体を支えるのは辛いのだろう。フェアリーの能力が使えないこの空間では体力のないアルヴィンにとって、重労働にちがいない。
エイルはその様子を見て初めてテンリーゼン・クラルヴァインが人間だったのだと認識したような気がした。

「マーナート？あの子が世話をしているのですか？」
ラウは不思議そうにその様子を見ていたが、ありがたいことに「マナちゃん」の名前の由来について尋ねられることはなかった。エイルは心の中で安堵のため息をついていた。
どうやら「マナちゃん」はスカルモールドに遭遇した時にエルネスティーネの肩か頭から放り出されたか逃げ出したかして、一行とはぐれた様子だった。
そしてエイル達が近寄ってきたので飛び出してきたのだろう。
しかし、それがなぜ他の仲間には目もくれずよりによってテンリーゼン目がけて駆け上ったのかはエイルにはさっぱりわからなかったが、ともかく小さい仲間が無事だったのは嬉しかった。
「お前、ネスティ達を知らないか？」
一応、エイルはマナちゃんにそう尋ねてみたが、マーナートは大きな瞳でエイルを見つめると首をかしげただけだった。

ファーンが捕らえた子供のダーク・アルヴは、長い茶色の髪の持ち主だった。その髪には様々な色の付いた紐のようなものをくくりつけて綺麗にまとめてあった。

アルヴィンやダーク・アルヴは男女ともに髪は長く伸ばすのが基本である。それに顔立ちがもともと整っていることもあり、目を閉じて寝ているだけではその子供が男女どちらなのかはエイルには不明だった。頭から被って着るゆったりとした長い服は薄黄色の地に幾何学的な染め絵が描かれており、男物か女物かもわからない。そもそもその形の服はエイルが初めて見るものだった。また、例によってダーク・アルヴの年齢は外見ではよくわからないのだが、アプリリアージェを比較対象として引き合いに出すまでもなく、エイルの目では成人しているようにはとうてい見えなかった。それは実際には十七歳だという事だが、エイルの目には十代前半にしか見えないエルネスティーネが結構なお姉さんに思える程で、要するにそのダーク・アルヴはまだ子供のようだった。

「女です」

エイルが性別を訪ねると、ファーンはこともなげにそう言った。

「わかるのか？」

ファーンはうなずいた。

「アルヴの私にもダーク・アルヴやアルヴィンの子供は見た目で性別はわかりづらいのですが、私には匂いですぐにわかります」

「へえ。匂いで男女がわかるんだ」

「もちろんです。私にはそういう能力が備わっているのですから。こうやって目を閉じていても、ここに男女がそれぞれ何人いるのかもすぐにわかりますよ。そう、ここには……」

「それより、この子はこのままにしていて大丈夫なのですか？」

アプリリアージェは、いきなり得意げにその人間離れした嗅覚自慢を始めようとしたファーンを苦笑しながらやんわりと制した。

「大丈夫というのが生命の危険に関することであれば答えは『はい』です。付け加えるならばルーンをかけたのみでその他の危害は加えていませんので肉体の損傷はありません」

そもそもその場にいる人間の男女比など、エイルでも見たらわかる話なのだ。もちろん、ファーンのその特技自体は驚嘆に値するものだとは言えたが、やろうとした事に意味があるとは思えなかった。

もっともファーンのその特技、いや特殊な能力がルーンによるものなのか賢者として得た資質なのかは不明だったが、どちらにしろ目の前のアルヴの少女が見た目通りの子供っぽさをかいま見せた事に、エイルはある種の親近感のようなものを感じていた。

無表情に佇む情景ばかりが目に焼き付いていたのだが、賢者はみな老人のように達観した精神状態にあるというのは、エイルが勝手に思いこんでいただけのものかもしれなかった。

考えてみれば、エイルの身近、いや内部にいる賢者は子供っぽさではファーンなど足下にも及ばないかもしれないのだ。

ファーンの解説によるとその「冬眠ルーン」は瞬時に仮死状態に持って行く力はなく、意識を失わせた後に時間をかけて完全な冬眠状態にするものだという。つまり、やっかいなことにまだゆっくりと深い仮死状態に向かっている坂の途中であり、下がりきってから蘇生させないと身体能力に著しい異常が生じる可能性が高いのだと言う。しかも「上り」、つまり蘇生には「下り」の二倍程度の時間が必要であるらしかった。

「言い訳ではありませんが、私の採った方法は今回の場合、合理的であったと自負しています。ここは「エア」の内部ですから、使えるルーンがどうしても限られるのです。拘束系ルーンは詠唱時間が短くていいのですがルーナーとの距離が離れると効力を失いますし、睡眠系は詠唱時間がやや長く、そもそも外界からの刺激で簡単に目が覚めます。放置する予定でしたからそれは不適当だと考えました」

ファーンの説明は続く。無表情な外見から勝手に無口だと思い込んでいたが、意外に饒舌な少女のようだった。

「あの時私が「二藍の旋律」から受けた命令は二つです。『彼らを助けろ』そして『急げ』。両方を並行してこなすには手持ちではあのルーンこそ完璧な選択だったのです」

「な、なるほど」

無表情な顔で妙に熱の入った一見合理的に思える説明をされると、もはやエイルにはファーンに対する非難の気持ちなどすっかり萎えていた。もしくはファーンにはそのダーク・アルヴの子供……少女に対する殺意など無かった事が嬉しかったのかもしれない。あるいは目的遂行の為には障害物となる人間など物と同等にしか扱わないラウ、いや賢者の価値観に怯えていたとも言えた。

ファーンの説明を聞き流しながら、アプリリアージェは何らかの方法で四人は拘束されて連れて行かれたものと結論づけていた。要するに捕虜である。言い換えるならば、はぐれた仲間達は当面の間は生命の危機から脱してるという判断であった。

スカルモールド相手ではどうしようもないが、相手が人間であればまだ言葉は通じるのだから多少なりとも状況は好転していると考えられなくもない。

「下手に動いても意味はありません。私たちには情報が必要ですし、この子の目が覚めるまでここで待ちましょう。どちらにしろ私とアトルは今は動けませんしね」

エイルはエルネスティーネ達をすぐにでも追いかけようと考えていたのだが、アプリリアージェにそう言われると従うしかなかった。

ラウはと言えばその間何も言わずに辛抱強くエイルとアプリリアージェのやりとりを聞いていた。そしてこの場にしばらくとどまる決定がなされたのを機に、エイルに改めて問いかけた。

「先ほどの話の続きをしたいのだが、いいだろうか？」

ラウはまずはアプリリアージェに対してそう訪ね、例のとろけるような笑顔の快諾を得ると、エイルに向き直った。

「あの時、あなたは私が誰だかを言い当てました」

「ああ、うん」
エイルはうなずいた。
あの時とはもちろん、カレナドリィ・ノイエがエイルの前に裸足で現れた時の事だった。確かに「あの時」、エルデは少ししてラウの名を言い当てて見せた。
「賢者であれば私の名を知っていてもおかしくありません。しかしあの時、あなたは先に私の現名の方を言い当て、その後で私の術を解析してみせるような口ぶりの後、思いついたように賢者の名前を特定しました」
「そうだったな」
エイルはラウが何を聞きたがっているのかはもうわかっていた。
「さらに言えば師匠の事もよくご存じでした。この場合、今の師である「蒼穹の台」ではなく、前の師である「真赭の頤」の事ですが……。いみじくもあなたの言った『エロハゲジジイ』とはまさに言い得て妙……いや、それはどうでもいいのですが」
「――」
そう言えばそう言うことも言っていた、とエイルは思い出していた。

――（「真赭の頤」、いやシグ・ザルカバードはどうやら本当にエロハゲジジイみたいですね）
アトラックは横でファーンが治癒ルーンを唱えるのを聞きながらも、二人のやりとりに反応してアプリリアージェに小声でそう言った。
――（ええ。ドキドキしますね）
――（え？）
いつもならこう言う場合の相手役はファルケンハインだったが、その場合、ほとんどは無視される事になっていた。だが今回、ファルケンハインの役回りを受け継いだアプリリアージェはしかし、アトラックが思いもしない反応を返し、彼を絶句させる事に成功した。

「私はランダールの酒場であなたのマーリンの眼を見た時は違和感が先に立ち本物の賢者だとは思えませんでした。ですが、あなたに直に会った三聖「蒼穹の台」があなたの事を間違いなく本物の賢者だと言いきりました。つまり、あなたは賢者に間違いありません」
「それはさっき聞いた。というか、本物だってずっと言っているだろ？」
エイルは不機嫌そうな態度を崩さずにそう言った。だが、実際のところ、ラウに対する怒りや憎しみといった感情が変化してきている事を感じていた。危ないところを助けられたからだけではない。ともに行動している賢者仲間のファーンとのやりとりの中にエイルが心の中で勝手に構成していたラウ・ラ＝レイとは全く違う人格を見たような気がしたからだった。
「はい。そして我が師である「蒼穹の台」は私に向かってこうも言いました。『君は彼にもう一度会うべきだ』と」
「あいつがオレに会えって？」
エイルが「蒼穹の台」を「あいつ」と言った時に「二藍の旋律」の眉が少しつり上がったが、それについては何も言葉には出さなかった。
「それらの事を考え合わせると、私には特定できる人物が一人だけいます」
「――」
「まさか、とは思いました。でも、どう考えてもその人しか思いつかない」
「だから？」
「共に「真赭の頤」の下で長く暮らし、最後まで生き残った弟子」
エイルはゴクリとつばを飲んだ。
「だが、見た目が全く違う。いえ、違うどころか全くの別人です。さらに言えばその人は既に死んでいるはずなのです。少なくとも私は絶対に嘘がつけない人物から死んだと告げられたのです」

「死んでいるだって？」
エイルは訝しげにラウを見た。
おそらくラウはすでにエルデに辿り着いていると思われた。
その姿形が違うのは当然だが、既に死んでいるというのはどういう事なのか。
エルデがエイルに対しても自分のことを多く語らないのは、色々と複雑な事情があるに違いない、とまではもちろん想像できていた。だが「死んだ事になっている」とは一言も聞いていない。
そもそもそんなバカな話はないはずだった。
―（それともオレは、成仏できないエルデの浮遊霊にでも憑依されたって言うのか？）
「答えて欲しい。あなたはエイル・エイミイなどではなく、本当はエルデ・ヴァイスなのでしょう？」
エイルは『来た』、と思った。
ある意味その通りだが、今はそうではない。ラウの目の前にいるのはエイル・エイミイに他ならない。
（いや）
エイルはそこまで考えると思わず首を左右に振った。
―（そもそもエイル・エイミイって誰なんだ？）
エイルは自分の本当の名前を知らないのだ。だから胸を張って自分がエイル・エイミイなどと名乗るのはおかしい気になってきた。
だが、今はそんなことを悩んでいる場合ではなかった。悩むべきはそれを今、エルデに断り無く答えてよいのかどうか、であった。
「これは「二藍の旋律」として尋ねているのではありません。ましてや師である「蒼穹の台」に名前を確認してこいと命令されたわけでもありません。ラウ・ラ＝レイ個人としてどうしても知りたい事なのです。あなたがあのエルデ・ヴァイスなのだとしたら、その能

力からして私の上席にある賢者である事はもはや疑う余地はない。そしてあの時、私の命を奪うことなく、ただ眠らせただけだった訳もよくわかります」

「ラウ・ラ＝レイとして聞きたいんだな？」

ラウはうなずいた。

「そうです。今、私がここにこうしていられるのはエルデのおかげです。エルデは同じ「真赭の頤」の弟子であり、私の命の恩人でもあるのですから」

「え？」

それは初耳だった。

「まさかお忘れではないでしょう？ユート・ジャミールの事件です」

「ユート・ジャミール？」

エイルは、ジャミールという名前がアトラックの口から出た時にエルデが驚いていた事を思い出した。

あの時エルデははぐらかしていたが、エルデと、そして目の前にいるラウ・ラ＝レイはどうやら一つの「合い言葉」で繋がっているらしかった。

「ジャミール」という名の合い言葉で。

チラリとアプリリアージェを見たエイルは、彼女と目が合うと小さく首を横に振って見せた。『オレは知らない話だ』という意思表示をしたつもりだった。アプリリアージェがそのエイルの意志を理解したかどうかはわからなかった。ただ、アプリリアージェは小首をかしげると右手の人差し指で耳を指し示した。

『その話を聞きたい』と言っているのだろうか。もちろんエイルも聞いてみたかった。エイルの知らないエルデの謎が一つでもわかるかもしれなかったのだ。

「私は今の師である「蒼穹の台」からエルデは死んだと聞かされていました。「蒼穹の台」は三聖の身。決して嘘はつけぬ事になっています。だが、あなたがエルデでなければ今までの辻褄が合わない。

そのような姿をしている理由までは聞きません。ただ、私はエルデが生きているのかどうかを知りたいのです」

エイルは悩んだ。

エルデはまだ目覚めない。

エルデのルーンがあればネスティ達が囚われることもなかったかもしれない。だが賢者「二藍の旋律」と「群青の矛」が現れなければ、エイルはここで仲間を失っていたかも知れなかった。

アプリリアージェに言われるまでもなく「二藍の旋律」にはもはや大きな借りが出来ていた。だが、その代償としてここで簡単に名乗ってもいいのだろうか。エルデの許可なしに。

エルデはエルデ・ヴァイスというその現名をも口にすることを嫌っていた。なぜそこまで？と問うても、その都度はぐらかせるばかりで納得のいく説明を受けたことはなかった。賢者の名に至っては一切口をつぐんで片鱗すら匂わせない。

そんなエルデの秘匿癖を考えても、うなずいて今ラウにそれを明かす事は相当に躊躇われた。

だが……。

だが、エイルはすでにル＝キリアには正体を明かし、その現名も伝えた。

あの時もエイルは自分で決断をした。それをエルデは文句を言いつつも受け入れてくれた。

で、あれば。

今回も自分で決断してもいいのではないか。

そう、エイルは思いつつあった。

『うすうすは、いや、もう多分感づいてるとは思うしな』

エルデはそう言っていた。エイルがまさか異世界フォウの人間とまではわからなかっただろうが、二つの意識が同居していると言われてもあからさまに雰囲気も言葉遣いも変わる人間を前に卒倒するような驚愕を与える事もないだろう。

あの時と同じと考えてもいいのかもしれない。
つまり、隠せれば隠したいが、ばれてしまったのならしょうがない。エルデはいつもそういう覚悟でいたのかもしれなかった。
ラウが既に感づいているのなら、もうシラを切っても仕方がないことなのかもしれない。ならば、素直に答えるべきではないのだろうか？
そもそも本当に「二藍の旋律」は敵ではなさそうだった。それに、彼女がエルデにこだわる訳も少しはわかった。
エイルは小さく深呼吸をすると、アプリリアージェ達の方を見やった。アプリリアージェはいつものように微笑んでいる。アトラックは地面にあぐらをかいて心配そうにじっとこっちを見つめていた。
テンリーゼンは……。
テンリーゼンはいつの間にか脱ぎ捨てていたマントを羽織り、いつものように顔を隠してじっと佇んでいた。
「そうだな、わかった」
『エルデっ！』
エイルは念のために心の中でエルデを呼んだ。
『いいな？言うぞ？』
しかし、答えはなかった。
『一応、断ったからな。後で文句を言っても知らないぞ？』
（よし）
何がよしなのかは自分でもわからなかったが、エイルは顔を上げてラウをじっと見つめた。
ラウはラウで緑色の瞳でじっとエイルを見つめていた。
「オレの名はエイル・エイミイ」
エイルがそう言うと、ラウは憤然とした表情をして、食い下がった。
「しかし」
エイルはそれを制した。
「人の話は最後まで聞いてくれ。お前の悪い癖だぞ」

「――わかりました」
「オレの名はエイル・エイミイ。そしてオレの中にいる自称天才ルーナーさんの名前は、確かにエルデ・ヴァイスだ」
「中に、いる？」
不思議そうな顔で尋ねるラウに、エイルはうなずいた。
「どうにもややこしいから、詳しい話は後でエルデが起きたときにでも聞いてくれ。今、アイツはぐっすり眠ってるんだ」
「その体に、二つの人格が同居していると言うことか？」
「さすが賢者だな。早い話が、そうだ」
「なるほど」
ラウは理解した、という風にうなずいた。
――（え？『なるほど』なのか？）
エイルはラウの態度に拍子抜けしたが、賢者ともなるとそういう呪法などには詳しいのだろう。とはいえ相手がさほど不思議に思わない事が不思議だったが、賢者の視点ではこの程度のことを不思議だと思うことが不思議なのだろう。
エイルは無理矢理にそう納得することにして、それ以上考える事を止めた。

「これで姿形が全くの別人になっている謎が解けた。エルデが死んだという「蒼穹の台」の言葉にウソはないが、生きているという私の確信、いや「蒼穹の台」の推理もまた真なのだ」
「納得してもらえたところで、オレからも一つ聞きたいことがある」
「何だ？」
相手がエルデではないとわかったとたんにラウの言葉遣いが変わった事にエイルは心の中で苦笑した。そして苦笑をしている自分に驚いていた。さっきまであんなに憎いと思っていた相手に対する感情が、短時間でこうも変化するものなのだろうか？
「さっきの話を聞かせてくれないか？」
「さっきの話、というと？」

「エルデがお前の命の恩人だという話だよ」
「ふむ」
ラウはエイルをじっと見ると、しばらく思案した後、うなずいた。
「いいだろう。特に誰の名誉を傷つけるという話でもない」
「頼む」
「私達は他にも何人かの弟子と共に修行をしていたのだが、その中の一人に飛び抜けて優秀なルーナーがいた。それがユート・ジャミール。つまりこの里出身のルーナーだ」
「なるほど」
「そのユートというルーナーがある日、師に断り無く分不相応な高位のルーンを使ったのだが、それが暴走した」
「え？」

何処かで聞いた話だった。
いや、何処かで、ではない。エルデから聞いた話に似ている。問題は、状況が似ているだけでその話の主人公が全く違う事だった。
「高位ルーンは詠唱失敗に終わり、ルーンが暴走してその場にいた弟子全員を巻き込んだ。その時、その暴走ルーンの相殺用に別のルーンを唱えてくれたのがエルデだった。だが、残念ながら助かったのはエルデを除くと私一人だけだったのだが」
「なんだって？」
エイルは思わず絶句すると、再びアプリリアージェと顔を見合わせた。
話が違う。
しかしそれは、エルデの本質が少しだけ見えた気がするような「違い」だとエイルは思った。

【おいおいおいっ】
『おお、起きたのか』
【『起きたのかっ』やない。どうなってんねん？って……ラウの横

にいるヤツは誰？……アイツも賢者か？】
『まあ、そう言うことでバラした』
【バラした？】
『じゃ、後は任せたぞ。もうオレはしらん』
【ちょ、ちょい待ち】

「どうかしたのか？」
話の途中で急に様子が変わったエイルにラウが不審げに声をかけた。
「いや。エルデが起きた。代わるよ」
「エルデが起きた？」

【くそーっ。このアホンダラエイルめ】
『今頃起きてきたお前が全部悪い。こっちは大変だったんだ』
【何がどうなってんねん？他の連中は？】

「ええっと……久しぶり、やな。ラウ」
「エルデか？本当にエルデなんだな？」
「まあ、そう言う名前で呼ばれとった、かな。あはは。っとと……ええ？」
「会いたかった！」

「二藍の旋律」、いやラウ・ラ＝レイはいきなりエルデに抱きついてきた。それを見たアプリリアージェとアトラックのみならず、ファーンまでもが我が目を疑ったのは言うまでもない。
「あんたのご主人様って、冷血女かと思ってたんだけど、なんか意外に熱いね」
アトラックは自分の治癒を続けているファーンにそう言って気取りのない笑顔を見せた。敵ではないとわかった相手にはだれにでも気さくなアトラックらしい問いかけだった。

意外だったのはファーンがアトラックに反応した事だった。
「その意見にはおおむね同意です。私もラウっちは、かねてからあまり賢者らしくなく、感情の起伏が大きい方だと思っていました」
「ラウっち、ねえ……」
小柄なピクシィを大柄なアルヴがかがむようにして抱きしめる図……体のほとんどをラウに包み込まれ、それでもただじっとしているエルデ。
それはその場にいた誰もが想像だにしなかった光景だった。

「話は大体わかった」
抱きついたまま一向に解放してくれそうもない大柄なアルヴの体を引きはがすようにして落ち着かせると、アプリリアージェとアトラック、そしてラウから情報を得、ようやく状況を把握したエルデはそう言ってうなずいた。
「要するにみんなその子に助けられたっちゅうワケやな」
そう言ってラウの横で静かに座っているファーンを見て頭を下げた。
「おおきに。助かったわ」
「いえ。私は主である「二藍の旋律」の命令に従っただけです。つまりこの場合、おそれながら上席様は「二藍の旋律」にこそ礼をするべきかと提言いたします」
「いや、両方に礼をするのが筋やろな」
そう言ってラウの方を向くと、彼女は首を左右に振って見せた。
「いえ、礼には及びません。スカルモールドの排除は本来の我々の仕事の範疇です」
「あ、そやったな」
「それよりも」
「いや、ちょっと待って。最初にどうしても聞いときたいことがあるんやけど。それ聞かなこれから気になって眠れへんし」

「何でしょう？」
「決まってるやろ、何でこの「エア」の中でその子……ええと」
「「群青の矛」です。上席様」
自分を見たエルデに、ファーンが自ら名乗った。
「現名はファーン。ファーン・カンフリーエです」
そう補足したのはラウだ。

「カンフリーエ……」
エルデはファーンの族名を声にしてしばらく記憶を辿っていたが、ポンと手を叩いた。
「思い出した。確か今は「蒼穹の台」の守護一族の役やったな」
「確かにおっしゃるとおり我が兄がお役を拝命しておりますが……上席様はなぜそんな事をご存じなのですか？」
ファーンは無表情な顔を崩すと、驚いたようにエルデを見た。
「まあ、そういう知識に関してはちょっと詳しいんや」
「そうなのですか」
「あ、それからその上席様って言うのはやめて欲しいな。エルデでええから」
「了解しました。賢者エルデ・ヴァイス」
「守護一族？」
ラウは初めて聞く言葉のようだった。
「それは一体何の事だ、群青？お前の兄というのは大賢者「菊塵の壕（きくじんのほり）」」
「――それは、私の口からは申し上げられないことになっています」
ファーンはそう言うと目を伏せた。
「申し訳ありません」
「ウチから言うわ。守護の一族っちゅうのは、三聖の血筋を守る為に存在する特殊な一族の事や。お前は十二色って聞いた事があるか？」
「じゅうにしょく？」

「その様子やと知らんようやな。まあ、カンフリーエ家はその十二色と呼ばれる特殊な十二の家柄の一つやっちゅうことや」

ファーンはきつく口止めされているのであろう。自分で言い出した事もあり、ごまかすわけにも行かないと思ったエルデがファーンに変わって説明したと言う事は、つまり賢者として知ってはならない類の知識ではないという事であろう。

「三聖の血筋を守る一族。それが十二色？」

「いや、実際は守るのは八つの家系やから八色なんやけど、あんまりそのへんは俺達が知る必要はない事や。そうか、守護一族で賢者と言うことは、ファーンはラウつき言うよりは「蒼穹の台」の配下っちゅうことか」

「いえ、以前はそうでしたが、今は「二藍の旋律」の直属の部下です。それにそもそも私は末の妹ですからあまりカンフリーエの家とは関係が深くありません」

「そうか。まあその話はここまでにしとこ。それで話は元に戻るけど、お前は何で「エア」でルーンが使えるんや、ファーン？」

そう、それはその場にいた一同全員が聞きたい事だった。

エーテルが存在しないと言われている「エア」という特殊な空間でなぜエーテルが必要なルーンが発動しているのだろうか。

「それは……」

エルデの質問に、ファーンはラウの方を見た。答えていいのかという問いかけのようだった。

「「蒼穹の台」の話によりますと、「群青の矛」は特殊な体質だと言う事です。彼女はツイフォンの媒体にもなりますし、能力はかなり限定されるようですが「エア」でのルーンも発動するのです。ただ、その理屈については私は知りません」

「ふーん。で、群青はその理屈というか仕組みを知ってるんか？」

エルデの問いにファーンは首を横に振って答えた。

「私も、「蒼穹の台」様にお前の体質は特殊なのだと説明されただ

けです」
「特殊な体質ねえ」
エルデは腕を組むと、少しの間目を閉じて考え込んだ。
「賢者エルデ・ヴァイスでもそう言う事は初耳なのですか？」
アプリリアージェが遠慮がちにそう声をかけると、エルデは目を開けた。
「初耳も初耳。ルーンの法則が根底から覆されるような事象やな。でも、理屈の推理はできる。なあ、「群青の矛」、いやファーン」
「はい、賢者エルデ・ヴァイス」
「イオス・オシュティーフェ、つまり「蒼穹の台」のとこにおったとき、あいつに何かされへんかったか？」
「何か、と申しますと？」
「うーん、体を改造されたとか、何かを埋め込まれたとか、一回殺されたとか」
「まさか！」
ファーンよりもラウの方が驚いて反応した。だが、当のファーンは例によって真面目に答えた。
「いえ、そのようなことは、少なくとも私の記憶にはございません」
「そっか」
「それどころか猊下からは指一本触れていただいたこともございません」
「ふむ。「エア」攻略の糸口でも見つかるかと思ったけど、アカンか」
「賢者ヴァイスのお役に立てず、申し訳ありません」
ファーンは本当に済まなそうに頭を下げた。エルデは苦笑するとそれを止めた。
「群青……いや、ファーンが謝ることは何もあらへん。気にせんといて。それより、もう一つだけ教えて欲しいんやけど、その「エア」でもルーンが使えるっちゅうのは生まれたときからなんか？まあ、生まれたときからルーンが使えたわけやないやろけど、守護一族や

ったら物心ついたときにはもうルーンの修行をしてたやろ？」
「はい。あ、いえ、そう言えば以前は「エア」に入るとルーンは使えませんでした。一度アダンに行ったことがありますが、あそこでは私のルーンは完全に封じられていました」
「ふーん」
エルデはファーンの話を聞き終わると、ニヤリと笑ってアプリリアージェを見た。
「やはり「蒼穹の台」が何か知っている、と？」
アプリリアージェはエルデにそう問いかけたが、エルデは首を横に振った。
「それだけやない。多分、「蒼穹の台」だけが知っているからくりやないやろな、と言うところまでわかった」
「ルーンですか？」
「いや、どう考えても呪法の類や。問題は、多分俺には出来へん呪法やということやな」
アプリリアージェはそれ以上質問しなかった。その様子をみて、エルデはラウに声をかけた。
「さて、さっき何かを言いかけてたな？」
「ええ。何故あの時名前を名乗らなかったのですか？？」
「ああ。あの時、か」
エルデは少し考えると声の調子を変えて「二藍の旋律」に向かって言った。
「そうそう。その前にこっちからも聞きたいことがあるんやった」
「え？」
「「蒼穹の台」が言うてた。「二藍の旋律」は弟子やって」
「そうです。今は「蒼穹の台」の弟子です」
「じゃあ、シグの師匠はどうしたんや？」
エルデのその問いにラウは絶句した。顔には何とも言えない表情が浮かんでいた。
「何や、その反応？」

「知らないのですか？」
「何を？」
ラウはチラとアプリリアージェ達を見やった。
「まあ、いいでしょう。この件についての箝口令など聞いたこともないですし」
「もったいぶってないで教えてや」
「我らの師匠、大賢者「真赭の頤」は、エルデ・ヴァイスの授名の儀があった後、すぐに処刑されました」
「ええ？」
今度はエルデが絶句する番だった。
アプリリアージェ達も顔を見合わせた。
それほどラウの言葉は衝撃的だった。
少しの沈黙の後、エルデが怒鳴った。
「なんでやねんっ？！」
「なんでも何も、上席と次席の賢者四人を殺害した罪です」
「え？いつ？」
「ですから、エルデ・ヴァイスの授名の儀に立ち会っていた賢者を、「真赭の頤」がその場で全て殺害したのです。そう私は聞いています」
「ちょ……ちょっと待って。ウチの授名の儀やからそれって二年前やろ？」
「そうです」
「そんなはずは……そやかてあの時」
「「蒼穹の台」がそう言っていました。だから嘘はないでしょう。ちなみにご存じだとは思いますが」
「わかってる。賢者を処刑できるのは三聖だけやからな」
「そういう事です」

又しばらく沈黙が流れた。エルデは自分の中の混乱を何とか押さえようとしているようだった。

「それで、ラウはその後、「蒼穹の台」に拾われたっちゅう事か？」
「大罪人の仲間という理由で上席賢者に拘束され、私刑にあう寸前で助けられました。そして私はしばらく三聖・「蒼穹の台」に匿われた後、そのすぐ次の双朔月（ならびさくづき）に授名の儀を経て「二藍の旋律」を継いだのです。賢者になった事でようやく他の賢者から攻撃されるおそれがなくなりました」
「なるほど……話を聞く限りはホンマっぽいな」
「賢者が賢者に嘘は言いません。ましてエルデに嘘を言うわけがありません」
「そうやな」
「言っておきますが私にも謎だらけなのです。授名の儀で一体何があったのです？「真赭の頤」の事件を知らないようですが、エルデはそこにいた当事者じゃないですか。知らないとはどういう事ですか？」
「何があったって……。そもそも何も……いや。あ、そうか。あの後か」
「教えてください？私には知る権利があると思います」
「ラウ、すまん。悪いけど覚えてへんわ。授名の儀の後、ウチはすぐに意識を失うてん」
エルデはそう言うと苦笑いをして見せた。
「嘘……ではないようですね」
「うん」
「じゃあ、授名の儀が終わった後、エルデはどうしたのですか？その場にはいなかったのですか？」
「うん。気がついたらドライアドにある師匠の庵におったんや」
エルデはそう言うと済まなそうに小さく頭を下げた。
「この通りや。ウチは何も出来へんかったみたいや」
「そうですか。師匠の死も知らなかったということは詳しいことを覚えていないのも無理もありませんね。」
「堪忍や」

「エルデが謝る必要はありません。そうなると真実は知っているのは「蒼穹の台」だけなのかも知れませんね。もしくは真実などないか」
「真実がない、か」
エルデはラウの言葉を反芻するように小さくそうつぶやいた。
「それでも、エルデに会えて本当に良かった」
「あああ、それはそうと、なんでここに？こっちの行動は「蒼穹の台」には筒抜けという事なんか？」
また抱きつこうとしたラウを慌てて制すると、エルデはそう訪ねた。
「捜していたのは確かですが、ここで会ったのは偶然です。「蒼穹の台」の指示でジャミールに行くように言われたのです。もちろんエルデがいるからではなくて、全くの別件です」
「そうか」
「エルデは……その……例の？」
「ユートの事、か。いや、実は俺の方も偶然なんや。まあ、ジャミールに寄るって決まった後は、もちろんユートの母親に会えたらええかなとは思ってたけどな」
エルデはそれだけ言うと、再びアプリリアージェの方へ顔を向けて声をかけた。
「リリア姉さんからラウに何か聞きたいことはあるか？答えられへん事は答えられへんと思うけど、賢者は思ってるほどケチやないから問題ない事には答えてくれるで。例えば、『「蒼穹の台」がお前に命じたこととは何ぞや』とかは聞いてもムリやけどな」
アプリリアージェはうなずくと、さっそくラウに質問を投げかけた。
「私達が何者かは知っていますか？」
ラウはアプリリアージェを見て、アトラックを見て、テンリーゼンを見た。そして改めてエルデを見て、逆に質問を投げた。
「どこぞの教会の者を部下にしたのではないのですか？」

エルデは意外に思った。
「蒼穹の台」はル＝キリアの事は知っているはずだった。あの偽物の死体を処理する役を引き受けた際にからくりを全て見知ったはずだったのだ。だが、その事は弟子には告げていなかった。
その理由として、エイルは回答候補を三つほど用意してみた。
一つは教えられない事情が彼にあるのかもしれない事。
もう一つはル＝キリアなどに全く頓着していない事。
三つ目は単純に伝え忘れたか、ラウが聞き逃したかだが、エルデはおそらく二番目だろうと思っていた。
「ラウも聞いたことはあるやろ？シルフィード王国軍の特殊部隊ル＝キリアの小隊や」
「ル＝キリア？なるほど、そう言えば」
「という、すっごい秘密を教えたんやから、そっちもここへ来た目的を教えてくれへんか？」
「秘匿事項だとは言われていませんし、上席賢者の要請があるなら答えても問題はないと思いますが」
ラウはファーンの方をチラリと見た。
「おそれながら私の忌憚のない意見を申し述べます。賢者の法には触れませんが、個人的には好ましくないと思います」
ファーンは無表情なままで素っ気なくそう言った。
「では問題はないと言う事だな。看過しろ」
ラウも素っ気なくそう答えた。
「この子はお前のお目付役も兼ねてんのか」
エルデは不思議そうにラウとファーンを見比べた。
「いや、そういう事ではないはずなのですが、こういう性格の為に、なぜかなんとなくそう思えてしまうのです」
「先ほども申しあげた通り私は「二藍の旋律」だけの部下です。三聖「蒼穹の台」様の部下ではありません。よって私には三聖「蒼穹の台」様への報告義務は存在しません。つまり、私はお目付役などではないという結論に辿り着きます。この件については同意してい

ただけると思います」
「と言うことなんですが、いろいろ厳しく私の行動に口を挟んでくるのです」
「お言葉ではありますが、それは賢者として、そして「二藍の旋律」の部下として当然の勤めだと考えています」
「せやな。ファーンは極めて優秀な部下やな。でも、素でもけっこう堅物やったラウちんもああ言うてんねん。そやからファーンもここはちょっと『ま、ええかな』位言うてもらえると喋りやすいんやないかな」
「『ラウちん』ですか？」
ファーンは妙なところに反応した。
「恐れながら賢者ヴァイス。個人的にはそれはどうかと思います。『ラウっち』の方がしっくり来ると思うのですが？」
無表情な雰囲気はなりを潜め、ファーンは身を乗り出すと熱い目でエルデに語りかけた。
その変化に戸惑ったエルデに、ラウは無言で説明を促されたが、苦虫を噛み潰したような顔をして見せただけであった。
「なるほど。そう言われると確かに『ラウちん』より『ラウっち』の方がこいつには似合ってるな」
「上席様にご賛同いただき、この「群青の矛」、恐悦至極に存じます」
「よし。俺もラウっちで行く」
「それは素晴らしいお考えです」
「素晴らしくなどない！」
二人の話は妙な方向へ脱線し始めたが、ファーンが折れる事により一行はラウからジャミール来訪の目的を聞き出すことが出来た。
「それってさ」
アトラックが口を挟んだ。
「ルルデ・フィリスティアードの事じゃないのか？」

その場に居た全員がアトラックと同じ事を考えていた。言わばアトラックの投げかけた言葉は全員の代弁とも言えた。

確かにラウの言う「ピクシィの少年の存在確認」とは、かつてジャミールにいたのではないかと思われるルルデ・フィリスティアードの事をさしているように思えた。

果たしてラウはアトラックに対してうなずいた。

「その通りだ。お前はルルデというピクシィを知っているのか？」

「ルルデは……ルルデ・フィリスティアードは残念ながら一年前に死亡していますよ」

ラウの問いかけに、アトラックではなくアプリリアージェが間を置かずに答えた。

「一年前に死んでいる？」

「ええ。詳細は省きますが、彼のいた反政府組織と戦闘状態になり、不本意でしたが私がこの手で」

「それは本当だろうな？」

ラウの目つきが変わった。相手を射るような目に変わったのだ。

その目はアプリリアージェの言っている内容を値踏みするかのようにじっと黒髪のダーク・アルヴの少女を見つめたが、彼女の微笑に変化が見られない事を知ると、すぐに鋭さが緩んだ。

「つかぬ事を聞くが、その顔は地顔なのか？」

「ご明察」

「なるほど。お前の二つ名の訳がこれでわかった。その緊張感のない顔を戦場では面で隠しているのか」

「またまたご明察です」

「白面の悪魔の正体は垂れ目の緩い笑顔をしたニコニコ少女とは恐れ入った」

―（いやあ、ぜんぜん少女じゃないんだけどねえ）

アトラックは思わず小声でそう呟いたが、幸いにもアプリリアージェの耳には届かなかった。

「嘘ではないようだな。徒労だったか」

残念そうにそう言うラウに続いて、エルデがため息混じりに呟いた。
「また、ルルデか」
「また、と言うと？」
「なあ、ルルデって何者なんや？何で単なるゲリラの兵士風情を正教会の三聖が賢者を二人も使うて捜してるんや？」
「三聖「蒼穹の台」の話では、ルルデは炎のエレメンタルだと言うことだ」
「え？」
あっさりとそう答えたラウの言葉に、エルデとアプリリアージェ、それにアトラックまでが異口同音にそう言った。
『えええええ？』
【落ち着け】
『いや、だって』
【お前が落ち着かへんかったら俺が暴れられへんやろっ】
『なんだよ、それ』
「えっと、マジ？」
これはエイルの声だった。
「私がそのような嘘を言う意味がわかりません」
「だよね」
少し離れたところでアプリリアージェが独り言のように呟いた。
「やはり、彼は炎のエレメンタルでしたか」
【俺も今、同じ事を思っとった】
『そういやお前、ずっと前にそんな事をいってたな』
「やはり、というと？」
ラウの質問にアプリリアージェはアクラムの森でルルデを倒した

時の様子を簡単に説明した。テンリーゼンの事は綺麗に隠して。
「あの時、あれは『発現』ではないのかと思ったのです」
「なるほど」
「どうする、ラウ？「蒼穹の台」のお使いはここで済んでもうたみたいやけど」
「それはそうですが、エレメンタルが一人すでにこの世にいないというのは由々しき問題ですね」
「由々しき問題かどうかは別にして、俺にはそれよりも「蒼穹の台」がどうやって炎のエレメンタルの情報を知ったのか、が謎や。エレメンタルはそもそも『合わせ月』までに全員が生き残ってた試しがないんやから一人二人淘汰されてても驚かへんけどな」
エルデがそう言うと、ファーンが反応した。
「恐れながら賢者ヴァイス。マーリン正教会の賢者としてそのお言葉はいささか不謹慎かと存じますが」
エルデは頭をかいた。
「そう言えば賢者の仕事の中にエレメンタルの守護という項目もあったな。でもまあ、守護することと敬うことは同義やないからな。死んでしもたもんはしゃあないやん」
「それはそうですが」
「わかったわかった。俺が悪かった。以後ファーンの前では口を慎むから堪忍してくれ」
「いえ、そのようにおっしゃられてはまるで私が賢者ヴァイスを叱咤したかのようです」

【したやろ】
『したな。ビシっと』
【でもこの子には逆らわんどこ】
『なんで？お前らしくないな』
【何か俺のこと誤解してへんか？って、まあええわ。それより今、ここで『力』を持ってるのはファーンだけやからな】

『そうか』

（アトル）

アプリリアージェは隣のアトラックをつつくと、耳に口を寄せてヒソヒソと呼びかけた。

―（はい？）

―（以前エルデ君が言っていた賢者の法にはエレメンタルの保護義務のような一文があるのですか？）

―（ええ。確かになにやら細かいことをあげつらった後に『しかるべくエレメンタルの守護と覚えよ』という一文がありますね）

―（どうして早くそれを言わないのです？）

―（え？）

―（それはエルデはネスティとルネを守護する役目も負っているという事ではありませんか？）

（そうですね）

―（彼との交渉の際、こちらに有利な一文と言えませんか？）

（そうですかねえ）

―（エルデ君だけじゃなく、場合によってはここにいる「二藍の旋律」と「群青の矛」という二人の賢者を味方につけることも可能性としてあるのです）

―（それはまあ確かに。でも、ネスティやルネの事を話すんですか？）

―（それは今のところエルデ君次第ですが、彼はそれを話そうとはしていませんね。私としてはまだ一切秘密にしておきたいのですが、ここはもう少し様子を見ましょう）

「炎のエレメンタルが存在したことがわかった現時点で、まだ確認されていないのは大地のエレメンタル一人になりましたね」

ラウは独り言のようにそう言うと、何かを思い出したようにエルデに向き直った。

「エルデ」
「ん？」
「話を元に戻しますが、ランダールの宿屋の娘、カレン・ノイエの件です」
「ああ、その話はもうええ。つーか、済んだことや」
「いえ、先ほどその、もう一人の……」
「この体の持ち主のエイルか？」
「はい。相当興奮して私を非難していましたので」
「そうか。そうやろうな」
「つきましてはその件について釈明を」
エルデはラウの言葉を制した。
「もうええ。元はと言えば賢者の名を名乗らずに賢者の振る舞いをしたこっちのせいでもあるしな」

『エルデ』
【これ以上カレンの事で苦しまんとこ。俺達はもうラウを責められへんのを忘れたらアカン】
『シェリルか』
【うん。どうしてもラウを憎みたかったら俺を憎んだらええ。ラウに偽賢者の誤解を与えたのは事実なんやから】
『お前が？』
【言うてへんかったけど、蒸気亭で賢者の特権を使うた時……あの時賢者の名前を名乗ってたら、あの場で事は済んでいたと思う】
『……それ、いつもはぐらかされる話題だけどさ、何で名乗れないんだよ』
【悪い。もう少しだけはぐらかされといてくれへんかな。後生やさかい】
『相変わらずズルいヤツだな。オレにお前を憎んだりできない事を知ってて言ってるだろ』
【ウチもお前に憎まれとうはないけど、でも……】

『もういい。でも……いつか、カレンに償え。ただし、その時はもちろんオレも一緒に償う』

【うん。……うん】

「では多くは申しません。ただ……もう意味はないかもしれませんが、既に解呪を行い、あの娘の保護者にはそれなりの補償は手配しておりますので」

「そっか」

「それからもう一つ。エイル・エイミイに請われた事で一つ心当たりがありますので、少し時間をいただいてそれを調べることにします」

「請われた？何を？」

「エイル・エイミイは私に『カレンを返せ』と言いました」

「はあ？その心当たりって、なんや？」

「深紅（しんこう）の……」

「止めときっ！」

ラウが三聖の一人の名を口にしたとたん、エルデは顔色を変えて立ち上がりラウに名前を皆まで言わせなかった。

その怒りと憎悪に満ちた形相はラウならずともその場にいた全員が驚いた。

「何かまずいことを言いましたか？」

すぐに冷静さを取り戻したラウは目を伏せてエルデにそう訪ねた。

「お前の言う心当たりって言うのは「反魂の呪法」やろ？」

「さすがエルデです。私は呪法の内容については詳しくは知りませんが、でもあれを使えば」

「アカンっ！あれは絶対に使うたらあかん。あれで幸福になる人間なんておらへん。ましてやカレンの体に使うとか言語道断やっ」

「そう……なのですか？」

まるで親の敵に出会ったかのように目をつり上げて怒りと憎悪の表情を浮かべるエルデに、ラウはさすがに怯んだ。

「知らへんのやったら教えたる。お前はカレンに「幸福な傀儡（こうふくなくぐつ）」を使った本人やからようわかっていると思うけど、対象であるカレンの魂は呪法の発動現力として既に完全に消費されてもうた後や」
「はい」
「「深紅の綺羅」が使う反魂の呪法は空の入れ物にその辺の適当な魂を抜いて、エーテルでつぎはぎした後にその入れ物にはめ込むだけの術や。そこに入るのは人間の魂である保証すらない。言うてみればスカルモールドみたいなもんになるだけや」
「なるほど。「深紅の綺羅」が使う秘呪「第二の生」とはそういう呪法なのですか」
「だからもう、カレンの事はそっとしといてやって欲しい。カレンの体をあのままにしたのはラウやのうてウチの罪や。後の事は……お前の罪も含めて……いつかウチが償う」

『エルデ、お前』
【俺達も、もうカレンの話はやめとこ】
『……』

エルデはそう言って目を閉じると自分の胸のあたりに片手をそっとあてた。
だが、急に目を見開いた。
「そうか！そう言うことか」
「え？」
「いや……なんでもない。こっちの話や。ちょっと別件で、ある事を思いついただけや」
「はあ……？」

【スカルモールドの秘密がわかったかもしれん】
『マジかよ』

【もうちょっと検証する必要があるけど、一部はたぶん解明できると思う】
『どっちにしろ、それってすごいことじゃないのか？』
【すごいっちゅうか、めっちゃヤバいかもしれへん】
『どういう意味だよ』
【いや、そやからもうちょっと考えさせてくれ】
『なんだよ、それも秘密かよ』
【ダダをこねんといてんか】

「まあそう言うわけでお前さん達の仕事はここで一応終わったという事や。ウチらは仲間を助ける用事があるし、二人とはここでお別れ、やな」
「あなたがエルデとわかったからにはもう敵としては会うこともないでしょうね」
「同感や。あ、ファーンにもう一つだけ尋ねたいことがあるんやけど」
「はい」
「ファーンは「蒼穹の台」以外の三聖に逢うたことがあるか？」
ファーンは首を横に振った。
「「蒼穹の台」さまだけです。後のお二人はほとんど「前座」にはいらっしゃらないご様子で、守護の者すら見かけた事はございません」
「それ、三聖やのうてほとんど一聖状態やな」
「確かに、三聖の仕事はすべて「蒼穹の台」さまがこなしてらっしゃいます」
「その一部の仕事を弟子の私が代行しているというわけです」
「なるほど。吟遊詩人の格好であちこち回ってるのは「蒼穹の台」の指示で仕事をしているっていう訳やな。ま、仕事の内容までは聞かへんどくわ」
「それは色々な意味で助かります」

ラウはチラとファーンを見た。ファーンは知らぬ顔をしている。
「そやろな。それはそうと、ランダールにちょっと不気味な精霊陣があったんやけど。あれ、火事の後に消えとったな」
ラウの頬がピクリと動いた。
「って、まあ今のは独り言や。壊したのが誰かはわかってもうたけど」
「相変わらず人が悪い」

「お話の途中ですが、そろそろ日を覚まします」
一同はファーンの言葉で一斉にダーク・アルヴの少女の方に顔を向けた。

## 第五十四話　ラシフ・ジャミール

ラシフ・ジャミールについての記録はアアクにある記録よりも同じシルフィード大陸ファルンガの州都ユーゲンにある州立博物館所蔵のワルド文書と呼ばれるマキーナ・ワルド子爵の日記に記されているものがもっとも詳細であろう。

生年は不詳。ジャミール一族の長として政治・経済・教育・宗教を全て掌握し、一族の尊敬を一身に集めていたとある。

現在は消滅して跡形もないジャミールの里だが、サラマンダ大陸のノーム山脈東部にある活火山レイジノ山の麓に広がる谷間に集落を形成していたと言われている。

ジャミール一族はシルフィードの宗教活動禁止令が施行されて後も長期にわたってシルフィード本土で暮らしていたようだが、月の大戦の千年ほど前に摘発を受けサラマンダに流れたようである。紳士録からはすでに抹消されているものの、かつては伯爵であったとも子爵であったとも伝えられており、その証拠にクレストもある。

異教徒の里と呼ばれてはいるが、実はジャミール一族の宗教はマーリン教の分派と言っていい。ただし、いわゆる正教会の唯一神マーリン信奉、新教会のエレメンタル信奉とは違い、おおざっぱに説明すれば精霊信仰とも呼ぶべき宗派である。

マーリンやエレメンタルを神格化、準神格化しつつ、それに加えて現世は精霊の力で均衡が保たれており、その均衡を守ることこそが人間の本分であるという独自の解釈を加えてある。自然現象全てに精霊が関わっており、自然と人間をつなぐものがマーリンから授かったルーンそのものであり、ルーナーこそが現世でもっとも人間らしい人間だと教えられている。したがって彼らのマーリン正教会の三聖や賢者に対する尊敬は推して知るべしであるが、反面新教会とのつながりはなく、ほぼ正教会派の傍流と言っていいだろう。

その他にも独自の教義が多く、族長は世襲ではなく族長の死後、

その時にもっとも高い能力を持つルーナーでなければならない。

神職につく女は重婚が許されており、またその神職はルーナーとしての力が強いもので固められるがあくまでも兼業であり、通常の狩猟採集栽培などの仕事にも普通に従事する。

重婚についてはより強い力を持つルーナーを産むためのものだと考えられるが、ワルド文書には「重婚は許されてはいるが実際に重婚をしている神職は現在はいないようだ」と記されている。

また、長老と言われる職業が設定されており、引退した神職がそれに当たる。彼女たちは子供達の教育係で、今日の学校の教師のような存在だろう。ルーナーの素質がある子供はその能力を伸ばすべく別途特別な教育を施される。

そういう背景があるためであろうか。今日すでに消滅してしまっているが、ジャミールは独自のルーン詠唱用文法であるグラムコールを持っている。

そういう特殊な環境の一族であることからジャミール族は何人かの賢者を排出している。つまり古くから正教会との関係があることは間違いないが、その詳細は明らかになってはいない。

サラマンダに移住してもマーリン教に組み込まれることなく世間から隔絶した隠れ里として存在し続けたのは、おそらくは「独自のグラムコールを持つルーナーの一族」という特殊な存在を隔離しておく必要があった為だと思われる。

ルーナーが軍事力として高く評価されていたことを思い出して欲しい。正教会としては自陣営にあるその大事な軍事力を大っぴらにしたくなかったということなのだ。しかも正教会の記録にはほとんどジャミールの記述と思われるものが発見されないことから、この里の管理・保護についてはかなりの上層部がそれに当たっていたと考えるのが妥当であろう。すなわち、賢者である。

簡素だがしっかりした立て付けの木造高床式の建物の中にジャミール族の族長、ラシフはいた。長く伸ばした薄茶色の髪を、四色の紐を使い一つに編み込んで後ろにそのまま垂らしている。着ている服はゆったりとした袖のある動きやすそうなもので、黄色い糸で織られた布地に、矢羽根を重ねた文様が染め抜かれており、縁には髪を束ねているものと同じく赤・青・白・黒の四色の糸を使った刺繍が施されていた。

彼女が座っている高床式のその建物はそう大きくはない。ただ、その形は独特で、真上から見ると正八角形になっていた事がワルド文書には記されている。彼女を中心に総勢五人の人間がその八角形の建物の中にいたが、それぞれがゆったりと座ると、内部はそれでほぼいっぱいと言った感じであった。

出入り口が一つあるだけで外からの光を取り入れる窓などもなく、独特の甘い匂いがする植物の油を使った灯りが、その部屋を照らす照明であった。

ラシフは簡素な祭壇のようなものを前に正座していた。祭壇には部屋を照らす灯りとは別に二本の蝋燭が点っていたが、そのうちの一本が今まさに消え行こうとしていた。

その蝋燭の光を、ラシフとともにその場にいた数名のダーク・アルヴが無言で見つめていた。いや、光が消えるのを待っていたと表現するべきであろうか。

ややあって、最後の大きな揺らぎの後、一筋の白い煙を残してその蝋燭は役目を終えた。その様子見つめていたラシフが口を切った。

「「エア」も消えたか」

顔を上げた彼女の瞳は深緑でアルヴ系の血を現していたが、例によってダーク・アルヴの姿形は見た目で年齢が推測しにくい。

一見すると少女にしか見えない。

もとよりラシフ・ジャミールについての詳細な記録は残ってはお

らず実際の年齢は不明である。

「メリドが……まだ戻りません」

ラシフから一番遠い場所、出入り口に近いところに目を閉じて座っていたダーク・アルヴの女がそう声をかけた。どうやら彼女は特定の人間を探知する役目のようだった。

よく見るとその場に居合わせた人間はラシフをはじめ皆、女だった。着衣の形ははラシフと同じだが色が黄色ではなく、矢羽根の文様も小さめだ。服の色は彼女たちダーク・アルヴの肌の色に近い黄褐色だった。刺繍もラシフより少なく、それはそのまま彼女たちとラシフとの地位の違いを表しているように見えた。

「メリドが？」

ラシフは座ったままで今報告したダーク・アルヴの方を振り返った。

「はい。ただ……」

「どうした、はっきりと申せ」

ラシフの少し強い口調に女ダーク・アルヴは頭を下げた。

「申し訳ありません。実はメリドとともに里を抜け出たものがおりまして」

「何だと？聞いておらんぞ」

「も、申し訳ありません。我が夫メリドと共に、ルーチェの気配が消えておりました。気づいた時はすでにラシフ様が結界の精霊石をお使いになっている最中でしたので」

「言い訳はいい。ルーチェも戻らんのか？」

「いえ、その、ルーチェの気配だけが今戻りました」

「何だと？父親と一緒ではないのか？」

「申し訳ありません」

「母親のお前を責めるつもりはない。あの跳ねっ返りも、もう成人しておる。母親ではなく族長の私から直接叱責をせねばなるまい。メリドは他に用ができて娘を先に帰したのだろう。ともかくイブロ

ド、お前はまずルーチェをここに連れて参れ」
「承知いたしました」
イブロドと呼ばれたメリドの妻が頭を下げてそう答え、その場を立ち上がろうとした時だった。締め切られた扉の向こうにドヤドヤと大勢の人間が押しかける様子がして、すぐにラシフに呼びかける大きな声がした。
「筆頭副兵士長ヒノリ。至急ラシフ様にお取り次ぎを」
「騒々しいな。何事だ?」
ラシフはよく通る声でそれに応えた。
「は。『現世（うつしよ）の道』から客人がお見えです」
「何?」
ラシフは合図して近くの者に扉を開けさせると立ち上がった。陽はかなり傾いてはいたが、それでも外の光はまぶしく、薄暗い部屋を蝋燭の明かりとは比べものにならないほど力強く照らし出した。
ラシフは光の方へ歩み出た。扉のすぐ向こうにあるちょっとした舞台のように突き出した露天の板間には、槍を構えた兵士が片膝を就いて控えており、その向こう側の階段の下には彼の部下である兵士達が十数人、同じように控えていた。
「客人だと?」
「は」
「何者だ?」
「それが……」
「さっさと申せ!」
「賢者とその付き人だと申しております」
「賢者……だと?」
副兵士長の言葉にラシフは動悸が速くなるのを感じた。
戻らぬメリド。「エア」と共に張った迷いの結界をくぐり抜けたばかりか、おそらくはメリドの放った「防御の手段」さえ押さえてやってきた賢者と名乗る一行。

「して、その賢者様の名は？」
「それが……」
ラシフの問いに、副兵士長は答えを言いよどんだ。
「どうした、申せ」
ラシフの胸中には不吉な言葉が浮かんでいた。
新教会。
そしてかつて三聖「深紅の綺羅」が彼女に告げた警句、
『新教会の手の者がこの里を襲うことになるやもしれぬ』
いよいよその時が来たのかもしれなかった。だとするとそれは賢者などではない。僧正と呼ばれる恐ろしい殺戮者である可能性が高かった。
―（狙いは勿論「アレ」であろうな）
だが、副兵士長が次に口にした言葉は、また違う窮地を告げるものだった。
「その者は大賢者「真赭の頤」様の弟子、賢者エイミイと名乗っております。ただ、どうやらルーチェ様が、その賢者の人質になっているご様子でして」
「なんだと？ルーチェが人質というのは間違いないのか？」
「はい。ルーチェ様は意識がないご様子で、賢者と名乗る者の付き人であるデュナンの兵士に拘束されております」

なんと言うことだ。
ラシフは情報を整理しようとした。だが、部下はその暇を与えてはくれない。
「賢者エイミイは至急ラシフ様にお会いしたいと申しております。さもなくば」
「さもなくば、何じゃ？」
「『皆まで言わへんでもわかるやろ？』と、古語で」
「古語？」
古語はともかく、大事なルーチェを放っておくわけにはいかなか

った。
「その賢者殿はどのような気色だ？」
「小柄な若いデュナンです。正教会のローブではなく灰色のブカブカのマントを羽織って……その、あまりよいお姿ではなかったので、つい無礼な言葉をかけてしまいましたが。……申し訳ございません」
「それは私から謝っておく。気に病むな」
――（怪しい。しかしどうする？とりあえずは）

「それともう一つ、賢者エイミイはこれも伝えてくれと申しておりました。『精霊石は一切使うな』と」
それはラシフが今まさに行おうとしていた事であった。賢者であれ僧正であれ、エーテルの力をまず封じておこうと思ったのだ。残り少なく、消費型であるためにあまり無駄に使うわけにはいかない精霊石だが、今使わずしてどうするのだと決めたところだった。その間少しだけ時間を稼ぐべく何か手立てを考えようとしていたまさにその出鼻をくじかれた格好だった。
「「真赭の頤」様の使いであれば、『現世の道』から現れるのは解せぬ」
「そうですね」
「そのもの達はメリドの事は何か申しておったか？」
「いえ、兵士長の事は何も。ただ、一緒にいたはずのルーチェ様があのご様子ということは」
「言うな」
「はっ」
ラシフは苦悩の表情を浮かべて、唇を噛んだ。
「ともかく会うしかあるまい。私が出向く。とりあえずお前は先触れとしてその客人には私の方から出向く旨を伝え、そこで待機させよ」
そう言った後、少し考えると立ち上がった副兵士長を呼び止めた。
「ヒノリ」

「は」
副兵士長は立ち止まって自分の名を呼ぶ族長を振り返った。
「念のためじゃ。全員、コンサーラ堂で強化ルーンを一式かけてもらってから向かえ」
「はい」
「それから私が行くまで彼らには攻撃はもちろん、ルーンも一切使うな。くれぐれも刺激してはならん」
「承知しました」
ヒノリは深く礼をすると、部下を従えて走り去った。

「ラシフ様」
呼ぶ声に振り向くと、そこには高床式の建物の中にいた四人の女ダーク・アルヴが心配そうにラシフを見つめていた。中でもひときわ心配そうな顔をしているイブロドを認めると、
「案ずるな、イブロド。我らには三聖「深紅の綺羅」様のご加護がある」
そう言って少し微笑んで見せた。

エイル達一行は里の入り口にある木でしっかり作られた門の外側で出迎えを待っていた。
門の左右からは里をぐるりと囲う木の城壁が伸びていたが、それはエイルの腰ほどの高さしかなく、防御のための役目というよりはむしろ境界線のような意味合いで作られているように見えた。門の上部に目をやると、そこには〇に二つの矢羽根を交差した紋章が彫り込まれていた。

「クレストのようなものがありますね」
その紋章を最初に見つけたアプリリアージェがそうつぶやいた。
「ジャミールという一族は、その昔は侯爵だったか子爵だったかの爵位があったらしいですよ。なんでも辺境を視察していた当時の国

王が化け物に襲われている所を通りかかった腕のいい射手に助けられたという事です。国王はその褒美として爵位とクレストを与え、あまつさえ連れていた王女を妻として与えたなんていう民話もありますからね」

アトラックはアプリリアージェの隣に立ち、同じようにその紋章を見上げながらその記憶力を披露した。

「その童話なら私も知ってます。『金布（きんぷ）の民』の話ですね。確かその若者は普通の人間を妻にする気はないと言って国王の申し出を頑なに拒むのですよね」

「そうです。で、娘がその言葉を聞いて悲しみのあまり病気になってしまって、若者が気の毒に思って仕方なく承諾したら病気はすぐに治って二人は末永く幸せに暮らしたとか暮らさなかったとかいう話です」

【暮らしたか暮らしてへんのか、どっちやねん？】

『まあまあ』

「あれはジャミール一族の事だったのですか？」

「そう言う説もある、という事ですよ。伝承の解釈なんて星の数ほどありますからね」

アプリリアージェはにっこりと微笑むともう一度ジャミールのクレストを見上げながらつぶやいた。

「でもきっとそれはジャミールの事ですよ」

アプリリアージェには、重なる矢羽根のクレストがその伝承を誇らしげに伝えているように思えたのだ。

『ちょっとやり過ぎじゃないのか』

【そうか？俺はごちゃごちゃしてへんでええ意匠やと思うけどな】

『そっちじゃなくて、こっちだ』

エイルが指さしたのは、アトルの腕の中で寝息を立てているダー

ク・アルヴの少女だった。
『あれじゃまるで人質を取ってます、って言っているようなもんじゃないか』
エイルはそう言うと手を伸ばし、そのダークアルヴの少女、ルーチェの頭をそっと撫でてやった。
『おまけに睡眠ルーンまでかけちゃって』
【いや、もともと眠ってたやん】
『でも、かけた』
【「エア」が消滅したしな】
『そんなことを言っているんじゃない』
【はいはい。ここで交渉をしている間にルーチェに目を覚まされたら、『こっちの主張は全部通すぜ、なーんちゃってルーちゃん人質大作戦』がおじゃんやろ?】
『何が大作戦だよ。どうでもいいけど、さっきのあのセリフはマジで思いっきり敵愾心を買ったぞ。平和的話し合いをするんじゃなかったのかよ』
【勿論、平和的話し合いをするつもりや。少なくとも俺はルーチェを人質に取っているなんて一言も言うてへんで。「なーんちゃって」やからな】
『そうだけど』
【そうでもせんと、また「エア」の結界張られでもしたらやっかいやろ?あの便利な「群青の矛」、ファーンはもういてへんねんし】

「しかし、この子が族長の孫娘だったとはねえ」
アトルが腕の中の少女を大事そうにそっと抱き直しながらそう言った。
「全く食べちゃいたいくらいかわいい顔で眠ってくれてるよ」
「食べてはいけませんよ、アトル」
「俺はスカルモールドですか!」
「食べると言えば……」

アプリリアージェは周りの景色をざっと見渡すとつぶやいた。
「この辺りは標高の高い高地のはずですが、食用になる木の実や果実が成る木が豊富ですね」
アトラックはうなずいた。
「その辺はクチナシの群落ですね。そろそろ実が熟してます。火山地帯ですから地熱のせいでしょうね」
「隠れ住むにはいい土地なのかもしれませんね」
「まあ、クチナシは食べられませんが」

【クチナシか】
『クチナシがどうかしたのか？』
【今思い出したけど、クチナシは古代ディーネ語で】
『うん？』
【おっと、おいでなすったで。代わろか】
『ああ。了解』
エルデはエイルから体の支配権を受け取ると、アプリリアージェをチラリと見た。アトラックをからかっていたアプリリアージェはすでに正面を向き、いつもの通りの落ち着いた微笑をたたえていた。
「んじゃ」
「ええ。お任せします」
二人は視線を絡ませると小さくうなずき合った。

先触れがあってからそれほど待たされずにジャミールの族長がその姿を現した。ダーク・アルヴという事で予想はしていたが、現れた族長はエイルの想像以上に小柄で、およそ「堂々とした風貌」とは言い難かった。彼の目測ではその身長は同じ種族のアプリリアージェよりさらに頭一つ低く見えた。
族長ラシフ・ジャミールは今までエイルが見たこともない民族衣装を着ていた。ゆったりとした黄色い衣装は真新しく綺麗なもので、門の上に刻まれていたクレストを染め上げている。地面に届こうか

という薄茶色の長い髪はきれいな紐でまとめられている。おそらくこれが族長としての正装だろうと思われた。一行の待ち時間はすなわち彼女の着替えの時間だったのだろう。

族長は露払いなどを配さず一団の先頭を堂々と歩いてやってくると、一行の手前で立ち止まった。すぐ後ろに付き従う四人の女ダーク・アルヴもラシフ同様、綺麗な衣装に身を包んでいた。ルーチェの服もそうだが、この里の民族衣装にはどれにも丁寧な刺繍が施され色彩感覚に富んでいて、美しいものだった。

里の入り口でエイル達に一応睨みを利かしている兵を別にするとラシフは新たな兵を従えては来なかった。

緊張感溢れる会見の場に最初に響いた声はラシフのものだった。

「私がジャミールの族長、ラシフだ。まずは客人の用向きを伺おう」

エイルにとってはどう見ても少女と思える顔形だが、その態度にはやはり威厳を感じた。口調も堂々としていて、確かに一族を束ねる立場にある者なのだろうな、という気になった。

族長は射るような目をまずはエルデに向けてエルデ達の反応を待った。

「余はマーリン正教会の賢者、エイル・エイミイ。訳あって現名のみで失敬する」

「ふん」

エイルの自己紹介にもラシフはその警戒した態度を崩さずに、重ねて問うた。

「我らを田舎者と馬鹿にするでない。名を名乗らぬ賢者など賢者ではない事くらい赤子でも知っておる。ましてや大切な里の人間を人質にするような真似をする賢者など前代未聞」

「なんやて？」

エイルが気色ばんだが、ラシフの方は全く怯む様子はなかった

「用があるならさっさと言うがいい。ただし、ダーク・アルヴの誇りを正しく受け継ぐ我らに脅しは無用だ」

その言葉にカチンと来たのだろう、エルデは手にした儀仗で勢いよく地面を突き、ドスンと大きな音を立てると、同時にごく小さな声で何事かを唱えた。

すると、エルデとラシフとの間、つまりは両者の目の前五メートルほどのところにズドンっという音と共に小さな雷が落ちた。

『お、おい、平和的な話し合いじゃなかったのかよ』

【うるさい。賢者とちゃうやろ？とか言われたから賢者やろ、って返事したまでや】

『やれやれ』

それには里の一行はさすがに驚いた。詠唱も何もなく「客人」がいきなり雷を落としたのだ。しかも族長の目前である。それは明らかに脅しだったが、次は自分たちの上に落ちるかもしれないと思った兵士達は、一斉に武器を手に身構えた。

ラシフもかなり驚いてはいたが、さすがに兵士達よりは腰が据わっているようで、それでもまだ怯まなかった。

「フン、賢者でもなければルーナーでもない。ただのフェアリーか。化けの皮が剥がれたな」

「ほう。そう思うのか？」

「お怒り」状態のエルデは右手に持った儀仗ノルンを空高く掲げ、もう一度何かを早口で唱えた。振りかざした儀仗に注意を逸らされているジャミールの里の人間にはエルデが何かを小声で唱えている事は気づかれていない。つまり、ルーンを詠唱しているようには見えていないということだった。

そしてその振り上げられた儀仗がグルグルと回り始めると、すぐに兵達の上に水滴が降り注いだ。

「雨だ」

誰かが叫んだ。

敢えて言わずとも、誰の目にも明らかだった。それは雨に他なら

なかった。
　そして、快晴の空から降るその雨が自然現象ではない事も明かであった。
「これでも余がフェアリーやと言い張るつもりか？ええ、どうやねん、オバハンっ！」
　エルデにそう言われる前にラシフはすでに言葉を失っていた。風の属性である雷と水の属性である雨とを両方操れるフェアリーなど存在しない。複数の属性の力を操れるのはルーナー以外にありえなかった。
「それでも疑うんやったら、これをよう見ろ。そして自らの言動を恥じてひれ伏せ！」
　そう言うと、ラシフをにらみ据えるエルデの顔に変化が起こった。額には赤い眼が、あの第三の眼が見開かれたのだ。
「これでも余の事を賢者やないと言い張るんやったら、こっちにも考えがあるで。客として世話になるつもりやったから一応下手に出てやってるんやっちゅう事を理解して、分をわきまえろ、このスカタンが！」
　赤く光るマーリンの瞳に見据えられたラシフは、思わず片膝をついた。
「申し訳……ありません」
　第三の眼は決定的だった。ましてや第三の目を過去に見た事がある者にとって、見た事がない者よりもその効果は大きかった。
「頭が高い」
　エルデはマーリンの眼を見開いたままの状態で続けて怒鳴った。放心状態になっていたジャミールの兵達はその声で我に返ると、副兵士長の筆頭という立場にあるヒノリが両膝をついて頭を下げたのを合図に一斉に同じ姿勢をとった。
「それでええんや。言うとくけど、余は師である「真赭の頤」と違うて気は短いし、温情の欠片もないから、今後も態度には特に気ぃ

つたほうがええで」

―（リリアお嬢様）

アトルが小さくため息をついてアプリリアージェに小声で声をかけた。

―（奴らのせいで結構ひどい目に遭って危うく死にかけた俺がこう言うのもなんですが、族長が気の毒になってきましたよ）

アプリリアージェはマントで顔を隠してクスクスと笑った。

―（敵に回すとこれほど腹立たしい相手もいないでしょうね。でも今は味方ですから、実にスカっとする事を言ってくれたと思います。溜飲が下がるとはこういう事を言うのでしょうねえ）

―（こんな時にノンキですね）

―（いえいえ、いつもの通りエイル／エルデの二人組にはドキドキさせられます。ただ、『オバハン』はいただけません）

―（そうですね、いくら何でも族長ですから、あれは言い過ぎですよ）

―（いえ、手ぬるいですよ。あそこは『クソババア』と言うべきでしたね）

―（……そ、そうなんですかね。俺には年頃の女の子にしか見えないんですが）

―（ダーク・アルヴやアルヴィンは他の種族から見ると年齢と外見の不一致が甚だしい種族のようですからね。でもたぶん、ラシフは軽く百歳を超えていると思いますよ）

―（マジっすか？俺はてっきりリリアお嬢様より）

―（私より……何ですか？）

そう言ったアプリリアージェは右の金色のスフィアがついた耳飾りに指先を触れた。するとまたもや大きな音がして、エルデ達とラシフの中間地点の地面に何か巨大なものが落ちるような衝撃が走った。

「うわあああああ」
　またしても落雷だった。そしてそれはエルデが先ほど放ったものより大きく、しかも地面が濡れていた為に電流が辺りに流れ、兵の何人かが衝撃を感じて悲鳴を上げていた。
「ごめんなさい。今のは私です」
　アプリリアージェは悪びれずにそう言うと、ラシフに向かいにっこりと笑って小さく会釈をしてみせた。

―（ああ、スッキリしました）
　アプリリアージェはにこやかな笑顔をアトラックに向けた。
―（で、私より……何ですって？）
―（い、いえ。何でもありません。そりゃもう、何でもありませんとも）
　アトラックはそう言ってひそひそ話を切り上げると、アプリリアージェから視線を逸らして額に吹き出した脂汗をぬぐった。

【ったく、危ないやろっ、オバハンっ！打ち合わせにないことすんなっつーねん】
『そんな細かい打ち合わせをしたか？』
【やかましい】
『いや、でも初めて見たな、リリアさんの噂の雷』
【せやな。でもあれは許せへん】
『なんで？お前としちゃいい脅しになったって事じゃないのか？』
【示威行為はもう充分やっちゅうねん。というかや、許せへんのはそう言うことやのうてやな】
『じゃなくて？』
【俺より強力な雷をわざわざこれ見よがしに落としたっちゅう事に決まってるやろ！】
『なんだ、そんなことか』
【そんなことやない。あのオバハンの性格の悪さを象徴するような

仕掛けや。こうなったら、こっちはもっとでっかい雷落としたるっ！】

『やめろって。それこそ今やったら地面が濡れてるから全員感電死するって』

【くっそー、腹立つー。賢者さまよりお付きの者が目立ってどうすんねん！】

アプリリアージェとアトラックのやりとりを知らないエルデの憤懣やるかたない気持ちはもちろん表には出ず、毒舌として全部エイルの方へと向かったが、エイルとしてはもう慣れっこになっていた為に相手にせず、さらっと話題を変えた。

『なあ？』

【なんやっ？】

『最初から「眼」を見せてたら話が早かったんじゃないのか？』

【何言うてんねん。ひどい目に遭わされたんやろ？】

『あ、ああ』

【それやったら、ちょっとはイジメたらな気が済まへんやろ？】

『いや、話をややこしくするんじゃないのか？』

【心配あらへん。少なくともサクっと平和的に話し合いに入ったりしたら、リリア姉さんに絶対嫌みを言われるで】

『いやいやいや、それはないだろ』

【フン、お前はわかってへんな、姉さんの本質を】

『本質って』

【それに】

「ん？」

【あのラシフという族長の態度、なんか昔の自分の姿を見せられてるみたいで何となくイラっとする】

『そうなのか？』

【うるさい】

『お前が言ったことだろ！』

その時、不意にラシフの前に数人の人影が現れた。
「ラシフ様をいじめるな！」
どこからとも無く現れた人影は、十人ほどの幼いダーク・アルヴ達だった。子供達はラシフの前で両腕を精一杯広げて並び、エルデ達との間に三重ほどの人壁を造って立ちはだかった。

【ガキめ】
『おい！』
【わかってるって】
『だったらいいんだ』

「ルーチェ様を返せ！」
「お家に帰れ！」
「化け物め！」

【化け……物やて？！】
エルデは儀仗を持つ手に力を入れた
『止めろ、何をする気だ』
【何もせえへん……大丈夫や】
『エルデ……』

「ラシフ様をいじめるなら、私たちが許さない」
「そうだそうだ」
「お前たち！」

子供達の突然の出現に慌てたのはむしろラシフ達だった。
エルデのために立ちふさがる子供達は皆緊張のためか目に涙を浮かべ、唇を噛みながらも目の前の闖入者をにらみ据えていた。見れば儀仗を手にしている子供も数人いる。
大人達の尋常ではない様子で事を知ったのか、たまたまエルデ達

がやってきていたのを見ていたのかはわからない。ただ、彼らは姿と足音を消すルーンを使い、族長を守るためにやってきたのだった。

「お前たち、何をやっている」

立ち上がったラシフは慌てて子供達の側に近づいた。

「ラシフ様！」

「俺達、ラシフ様を守るんだ」

「ばか者……」

ラシフは思わず声を詰まらせたが、エルデの方を見た後に後ろに控えるイブロド達に声をかけた。

「何をしている。この子達を早く控えさせろ」

ラシフの言葉にようやく我に返ったイブロド達「四人組」と呼ばれる側近は慌てて子供達の所に走り寄ってきた。それを見て同じく走り寄ろうとしたヒノリを、ラシフはしかし制した。

「兵隊は前に出るな！」

そして改めて膝を突いて指導者格と思しきやや年齢の高い子供二人をそっと抱くと叱責した。

「来てはならん。これは大事な大人の話だ」

「いやだ。俺達も戦う」

「私も！」

「俺も」

「ならんっ！」

いきり立つ子供達に向かい、今度は大きく鋭い声でラシフは叱責した。

「戦ったりはせぬ。我らは賢者様と話をしているだけだ」

「でも」

「何度も言わせるでない。族長の言う事が聞けぬと申すか？」

「ラシフさま……」

「族長の命令が聞けぬ里人は追放だぞ？」

「でも」

「ラシフ様、化け物に食べられちゃうよ」
エルデはまた「化け物」という言葉に反応して儀仗を持つ手に力を入れた。そしてその気配は、その場に居た全員に伝わった。
ラシフは思わず顔を上げてエルデを見た。子供達もそれを敏感に感じ、ラシフにつづいて視線をエルデに向けた。
だが、それは一瞬だった。
子供達が見上げたエルデは、さっきから一歩も動かず、何も変わった様子はなかった。
――ただ、子供達よりも一瞬早くエルデを見ていたラシフの顔は蒼白になっていた。
ラシフはエルデから視線を離さずに、ゴクリと唾を飲み込むと、しゃがれたような声で子供達を諭した。
「戻るのだ。私は食われもしない。お客様をお迎えしているだけだ。わかるな」
子供達はお互いに顔を見合わせると、ラシフとイブロド達四人組の顔を見比べて、顔を伏せた。
「下がらせろ。くれぐれもきつく叱ってはならんぞ」
「かしこまりました」

「さて」
イブロド達に連れられて子供達が去るのを見送ると、エルデはそう言って赤く燃える「眼」を閉じた。
「申し訳ありません。非礼、心よりお詫びいたします」
ラシフはそう言うと深々と頭を下げた。
「ふん」
エルデは手に持った儀仗を地面に軽くトンっと突くと一同を見渡した。
「兎にも角にもこれでニセ賢者の誤解は解けたようやし、まずは余の付き人を解放してもらおか」
「付き人？」

ラシフは顔を上げると怪訝な顔でエルデを見上げた。
「しらばっくれてるとさすがにキレるで」
「い、いえ。本当に我々はなにも」
慌ててそう言ったラシフは後ろに控える副兵士長を見た。
「ヒノリ」
「はっ」
「どういう事だ？」
「いえ、私にも何のことかさっぱり」
そこへアプリリアージェが会話に遠慮がちに割って入った。
「賢者エイミイ」
エルデはそう言うアプリリアージェの目配せに、小さくうなずくと、視線をラシフに戻した。

「おそれながら、我らには預かり知らぬ事のようでございます、猊下」
ラシフはエルデに促されてそう説明すると、再び頭を垂れた。
「そうか。ではメリドという者はどこにいる？この娘、ルーチェの父親だと聞いているが」
エルデがそう質問すると、ラシフのすぐ後ろに控えていた四人組の一人が顔を上げて答えた。
「戻っておりません。賢者さま、我が娘の命をどうかお助け下さいませ」
そしてそう言うと頭を地面にこすりつけた。
「なにとぞ」
「控えろ、イブロド」
ラシフがすぐに叱責をしたが、エルデはそれを制した。
「かまへん。イブロドと話をさせろ」
「は、はい」
エルデはイブロドの顔を上げさせるとラシフの脇を通り過ぎ、無造作に四人組の側まで歩み寄って声をかけた。

「イブロドと言うたな？」
「はい」
その声は今までの調子とは明らかに違い、暖かみのあるものに変わっていた。ラシフならずとも、その変化はその場にいた全員がわかるほどのものだった。
「ルーチェの母ということは、お前がルーチェの兄、ユート・ジャミールの生みの親なのか、イブロド？」
イブロドは目を見開いてエルデの顔を見つめた。そこにはつい今し方までの不機嫌そうな表情はもうない。一瞬見せた背筋が凍るような邪気もない。おだやかな、それでいて少し寂しそうに見える茶色い瞳で自分を見つめる小柄なデュナンの少年が静かに立っているだけだった。
「はい。ユートは、私の息子でした」
「そうか」
「ユートを、ご存じなのですか？……あっ」
イブロドは思い出した。
目の前の賢者が大賢者「真赭の頤」の弟子だと名乗った事をである。
そう、イブロドの息子を賢者候補生として連れて行ったのは誰あろう「真赭の頤」であった。

「余とユートとは「真赭の頤」の弟子同士やった。歳はだいぶ若いけど序列は余が上やった。そやけど年上で面倒見のええユートに、修業時代はようかわいがってもらってたんや」

『かわいがってもらってたのか。お前が？』
【やかましい！】

「も、もったいないお言葉でございます」
イブロドはそう言うと再び額を地面にこすりつけた。

「頼むから顔を上げてくれへんか。余は偉そうにする為にここに来たわけやないんや。もっとも今回ジャミールに来たのはホンマに偶然やってんけど、ジャミールの里に訪れる機会があれば是非お前に会いたいと思ってた」

「私に、ですか？」

おそるおそる顔を上げたイブロドにエルデはうなずいた。イブロドにはその顔が少し微笑んでいるように見えて、不思議な気持ちになった。

「ユートはホンマに優秀なルーナーやった。もう聞いてるんやろうけど、あの不幸な事故がなかったら、賢者になれたと思う」

「過分なお褒めの言葉、ありがとうございます」

「いや、余は世辞なんか言わへん。ホンマの事や」

「それこそが、ありがたきお言葉でございます」

「ユートはこの里の事や、生みの親のお前の事を余によう話してくれた。お前と一緒に木の実や果実を収穫する為に森に入るのがどれだけ楽しかったか、糸を紡ぐ手伝いをさせられるのが退屈で嫌だったこと、ルーンの修行になるといつもは優しい母親が鬼のように厳しくなって閉口したこと、料理上手な母親の作る食事が毎日いかに楽しみだったか。そして実の母親が族長を守護する四人組の筆頭であることがどれほど誇らしかったか。里を離れる事がどれだけ寂しかったか。そして、どれくらいお前の事を大切に思っているかを、な」

エルデの声には抑揚がなかった。ただ静かにイブロドに話しかけているだけであった。だが、その言葉の一つ一つはイブロドの心に染み込んだ。そして染み込んだその声がユートの笑顔を心の奥から浮かび上がらせた。

エルデはゆっくりと続けた。

「通常、賢者候補生は過去の記憶を消される」

「はい。そう伺っておりました」

「我が師「真赭の頤」はな、少し変わっていて、そうしない事も多

々あった。ユートは記憶を消されず、そしてその思い出を余に語ってくれたという訳や」
「あの、もしや、猊下は？」
「いや」
エルデは首を振った。
「お前は余を哀れに思ってくれるのか？」
「いえ、滅相もございません」
「いい。お前はユートの言うとおり、優しい、ええ母親やな」
エルデはそこでいったん言葉を切った。そしてチラリとアプリリアージェの方を見やったが、すぐにイブロドに視線を戻した。
「余にはユートのような思い出がない。だからユートの話はうらやましかった。そして楽しかった。兄とはこんなものなんやろうなあ、なんて感じてたんやろな」
「賢者さま」
「ちゅうことで、ユートには世話になった。だからイブロド、母親であるお前に礼を言わせてもらう。おおきにな」
「め、滅相もございません」
「それから、ルーチェやけど、心配か」
「は、はい」
「でも、心配はいらへん」
そう言うとエルデはアプリリアージェの方を見てうなずいた。その合図を受けたアプリリアージェは、アトラックに抱かれているルーチェの両方のこめかみにそれぞれ親指を当てると、ぎゅっと押した。

「お目覚めですよ」
アプリリアージェの言葉が終わらないうちに、アトラックの腕の中で眠っていたルーチェが小さくむずがるような声を出して目を覚まし、辺りを見回した。
「立てるか？」

アトラックの問いかけにコクンとうなずくと、ルーチェはその腕からストンと滑り降り、自分の一族の方を見て首をかしげた。
「族長さまと賢者エイミイの会談の席です。今はお母様に声をかけられているところなのですよ。」
アプリリアージェは、キョトンとしているルーチェにそう状況の説明をした。
「ルーチェ！」
エルデの横でその様子を見ていたイブロドがたまらず娘に声をかけた。
「母上っ！」
ルーチェはゆったりした服をひらめかせながら、自分を呼ぶ声の方へ駆け寄ると、一旦エルデの前で立ち止まり、簡単な会釈をした後で母親に抱きついた。
「ルーチェ、無事だったのですね」
イブロドもそんな娘をそっと抱きしめた。だが、そのすぐ後にハッとして顔を上げ、エルデに申し訳なさそうに黙礼した。エルデはそんなイブロドに「遠慮はいらぬ」とばかり、微笑して小さく首を振って見せた。
「ごめんなさい。黙って父上についていって」
「怪我はありませんか？」
「ええ。でも、私達はとんでもないことを」
「あ、もうその話はええで、ルーチェ。誤解はもう解けてん。せやな、ラシフ殿？」
ラシフはエルデのその言葉を受け、改めてイブロドとルーチェ、そしてニヤリと笑って自分を見下ろしている茶色い髪の目つきの悪い少年を見上げた。
「これは一体どういう事でしょう。ルーチェは人質では？」
「人質？誰が？誰を？」
「しかし先ほど確かに」

「人聞き悪いなあ。余は一言もルーチェが人質やなんて言うてへんで」
「え？」
ラシフはヒノリを睨んだ。
「いえ……そう言えばその言葉は一言も……」
ヒノリはそう言うとバツが悪そうに目を伏せた。
「悪いけど最初の出会いが最悪やったから、こっちも敵やと思うてルーチェにはちょっと眠ってもろたんは確かや。で、ルーチェにそのルーンをかけた駆け出し賢者が微妙に気の利かんやつでな。知ってるルーンの中で詠唱時間が一番短いから言うて睡眠やのうて冬眠のルーンをかけてもうたもんやから、目覚めた後もルーチェはネムネム状態っちゅうわけや。でもそれも心配ない。余があとであんじょうしといたるわ」
「最初から人質にするつもりはなかった、と言うことですか？」
エルデはそういうラシフの側に儀仗ノルンをトンっと突いた。
「確かにルーチェが眠っているのを利用はさせてもろた。お前にまた「エア」を張られたらやっかいやしな。でも、それだけや。こっちに敵意がないのがわかってもらえて、そっちもこっちを普通に賢者とその連れとして迎えてくれればそれでええねん」
エルデの言葉にラシフはがっくりと頭を垂れた。ルーチェが無事に戻った事がわかって緊張が解けたせいもあるが、自分たちがスカルモールドを使って賢者を殺そうとしていたことを悟ったからだった。それも、おそらくは本当に「真赭の頤」の弟子を。
「しかし猊下はなぜ「現世の道」から里に入ろうとされたのですか？これは言い訳になってしまいますが、私は三聖「深紅の綺羅」様および大賢者「真赭の頤」様より、「龍の道」から来る者以外は里の敵と見なして排除せよと申しつけられております」
エルデは溜息をつくと、独り言のように呟いた。
「だから、俺がここに来たのは偶然なんやって言うてるやん。そもそも近くに迷い込んだくらいで、何であの忌まわしいスカルモール

ドまで使うて殺されるような目にあわなあかんねん。全くあの師匠はいらんこと言うてくれるわ」

「あのう……」

それまでのやりとりをじっと見守っていたアプリリアージェが遠慮がちに声をかけた。

「それで、私達の仲間のことなんですが？」

「あ、そやった」

アプリリアージェの催促を受けて、改めてエルデはラシフに訪ねた。

「本当に知らへんのか？メリドがあの場から余の仲間と一緒に消えたのは確かなんや」

ラシフはエルデにすぐには答えずに、ルーチェに訪ねた。

「それでお前の父親はどうしたのだ、ルーチェ？一緒にいたのではないのか？」

「それが……」

ルーチェは父メリドに結局追いつくことが出来ず、合流する前に見失っていたのだ。件の場所にたどり着いた時には既にメリドとアキラ達は消えた後で、そこには土塊になったスカルモールドの上に仁王立ちになっているアルヴの少女、つまりファーンがいたのだという。青い儀仗を持っていたのが見えたのでルーナーだとは思ったが、まさかその少女のアルヴが賢者とは知らず、火柱の精霊石を使おうとして懐に手を入れたところで意識がとぎれたのだという。

「火柱の精霊石だと？」

「ごめんなさい、ばばさま。もしもの時の為にいくつか。あれだと詠唱が早くて済むから実戦向きだと思ったのです」

ルーチェはそう言うと少し舌を出して見せた。

「なんと言うことだ。お前達、精霊石の保管はどうなっているのだ？」

ラシフは呆れてものが言えないという感じで四人組を睨み付けた。彼女たちはお互いに顔を見合わせるとうなだれるだけだった。中でもイブロドは誰よりも深くうなだれた。

「そんなことよりばばさま。「エア」でもルーンを使える賢者様がいらっしゃいました」

「なんだと？」

「ああ、そんな話は後にしよ。話が長なるから。それよりメリドがどこにいるのか見当つかへんか？あの場所の近くに隠れてるというのは考えられへん。何せ娘のルーチェが道ばたで眠りこけてるのに一切助けに来た形跡はないんや」

「なるほど。その場から消えたのだな」

ラシフはルーチェに念を押して確認すると、エルデに顔を向けた。

「だとするとおそらくは「龍の檻」かと」

「「龍の檻」？」

ラシフはうなずいた。

「私が作る結界によってのみ開かれる空間です。何が起きたのかはわかりませんが、メリドはおそらく猊下の手の者と一緒にそこに落ちたのでしょう」

「落ちる、というと？」

「そこは、地下にあるのです。精霊石があれば入り口はどこにでも開く事が出来ます。しかしそこには出口はなく、私が通路結界を開くまで閉じこめられたままになります」

「なるほど。結界牢ってヤツやな。ほな、早速連れ出してもらおうか」

ラシフは「龍の檻」の通路結界を開く為には精霊殿と呼ばれる例の高床式の建物に出向く必要があると言った。

「牢の鍵を用意する為に少し準備もあります。皆様の部屋を急ぎ用意させますので、それまでそちらでおくつろぎください」

通路結界を開く為の鍵とは、要するに精霊石の一種であるらしかった。

【石とは限らへんけどな】
『なあ、ここの人間ってルーナーと言ってもその精霊石とかばかり使うみたいだけど？』
【特殊な発達をしてるみたいやな。キュア系とは言うてもかなり独特なグラムコールを持ってるし、さっきのガキどもも精霊石の補助を受けたんかもしれん。でもユートは石無しでもかなりのルーナーやったのは間違いないし、いわゆる詠唱ルーンもちゃんとある。精霊石の存在はたぶん、そやな】
『たぶん、何だ？』
【この里は閉鎖された村で、その村の住人はルーナーだけやないから、というのが理由やな】
『そりゃ、全員がルーナーの素質を持っているとは思えないし、そもそもお前から教わった話じゃ、アルヴ系の人間はフェアリー特性が高くてルーナー特性は遺伝的に低いっていってなかったか？だとしたら普通の人間の方が多い可能性があるな』
【確かにその通りや。そやから普通の人間やフェアリーがルーンを使えるようにする方法をずっと研究してたんやろな。それが単独発動型の精霊石っちゅうわけやな】
『なるほど。精霊石を使えば普通の人もルーンを使えるっていう事か』
【使える。ただし、もちろんその力は弱い。ルーナーが使うのとはその効果は比べものにならへんやろな】
『でも、使える』
【うん。使えへんより使える方がええに決まっている】
『精霊石を作り出せるルーナーの里か』
【ただし、たぶんこの里の今現在の問題は族長を見たらわかる】
『どういう事だ？』
【ラシフはたぶんルーナーとしての力が弱い。それでも里で一番なんやろうな】

『そう、なのか？』
【おそらく自覚もあるはずや。そやから精霊殿なんちゅう精霊陣の力を借りなアカンし、加えて精霊石まで使わな通路結界を開くっちゅう高位ルーンが使われへんのやろな。そう言うことは立場上誰にも言われへんやろうし、結構頑なな性格みたいやし、結局自分が全部抱え込んでるんやろうな。気の毒な話ではあるな】
『そうか。族長なら一族を守らないといけないっていう重圧感もあるだろうし』
【さっきの態度がまさにそうなんやろうな。自分の孫を人質に取られたいうのにあの毅然とした態度は正直格好良かったな。いや、さすがにアルヴ系というべきなんかもしれんけど】
『そうだな』
【さてさて。で、結界通路を造るのに一体どのくらいの精霊石が必要なんやろ】
『なあ、その通路結界だけど』

「その通路結界ですが、賢者エイミイが代わりに開ける事はできないのですか？」
今まさにエイルがエルデに尋ねようとしていたことをアプリリアージェが代わりに口にした。
『そうそう、それ』
エルデ達は四人組とルーチェに先導されて里の中をゆっくりと歩いていた。簡素なものだが城壁に囲まれた村は予想よりもかなり広く感じた。住居の区画は整然としていて、どの家も木造、木製の瓦葺きで同じような大きさ、作りのようだった。

「里人は皆この住居区に済んでいます。私達もおつとめがない時はこちらが自宅です」
四人組の筆頭だというイブロドが、ルーチェと並んで歩きながらエイル達の質問に答えた。ルーチェと共に里の案内役も仰せつかっ

ていたのである。
「狩猟や栽培は共同で、皆で手分けしてやります。兵役も交代で当番制になっています。兵士長はメリド一人ですが、副兵士長は四人いて順番に班を作って警備に当たることになっています。先ほどのヒノリは副兵士長を束ねる筆頭役に就いております」
エイルにはこの里にそうそう侵入者があるとも思えなかったが、防衛体制がきちんととられている事に、この里が潜在的に持っている緊張感や危機感といったものが垣間見える気がしていた。

「通常、結界牢はルーンをかけた人間にしか解放する事はでけへん」
エルデは里の作りを注意深く観察しながらアプリリアージェの問いに答えた。
「図抜けて強力なルーナーの力を持ってしても、ですか？」
エルデはうなずいた。
「鍵がいるからな」
「その、さっきからラシフ族長も言っている鍵というのは具体的には何ですか？」
「血、や」
「ち？」
「血液。ルーナーは自分の血を触媒にしてある種のルーンを唱えることで、それを結界の鍵にできるんや。そうしておけば、たとえ賢者あたりがきてもそうそう破られるようなことはないからな」
「なるほど。血、ですか」
「精霊石もルーナーが血で神痕を書くことによって作られるんやけど、それは血にエーテルを定着させるためで、鍵とは意味が違う。ラシフがやろうとしてるのは、精霊陣に血を流して発動現力とする呪法に近いルーンや。たぶん、『準備がいる』言うてたのはそれに使う精霊陣が複雑で描くのに時間がかかるからやろうな。もしくは」
「もしくは？」
聞き直したアプリリアージェにエイルは眉をひそめて見せた。そ

の態度に珍しく微笑が変化して怪訝な顔をしたアプリリアージェだったが、すぐににっこりとうなずいて見せた。
「なるほど」
アプリリアージェはそう言って納得した、という風にうなずいた。そしてすぐにイブロドの横を歩いているダーク・アルヴの少女に声をかけた。
「ねえ、ルーチェ」
呼ばれたルーチェはすぐに振り返り、駆け寄ってきた。
「アトルが、あなたともっと話をしたいそうなんです。私もルーチェにいろいろと里のことを聞きたいですし、もし迷惑でなければもうしばらく一緒にいてもらえませんか？」
「え？」
アトルが驚いて声を上げようとしたところに、後ろにいたテンリーゼンが短剣の鞘でその背中をドンと突いた。
「痛っ」
慌てて振り返ったアトルは、続いて耳元で誰かが囁くような声を聞いた。
「話を、合わせろ」
テンリーゼンの精霊会話だった。
振り返ったそこには、まさに肩の上にマナちゃんを乗せて無表情に歩いている小さな声の主が歩いていた。
テンリーゼンがそういう行動をとることは極めて珍しかった。アトラックは「リリアお嬢様の計略」が発動したのだと理解して小さくうなずくと視線を元に戻した。
そこには自分を見上げるルーチェの顔があった。
「アトルは私と話がしたいのか？」
アトルはにっこり笑ってうなずいた。
「ああ。さっきは途中で眠っちまったろ？ルーチェも外の世界の事を聞きたくはないのか？」
後半は周りの里人に聞こえないように、かがんでルーチェの耳元

で囁いて言った。「外の世界」という言葉にルーチェは反応したようだった。顔を輝かせるとうなずいた。
「私ももうちょっと話をしたいと思っていました。賢者さまが迷惑でなければ今夜はもう少しアトルと一緒にいたい」
「そりゃ嬉しいな」
「海の話もしてくれますか？」
「海の話は得意だ。こう見えても俺達は実はけっこう船乗りっぽい人間なんだぞ」
アトラックは本当に嬉しそうに笑うと、ポンっとルーチェの頭を優しくたたいて見せた。

『船乗りっぽい……って何だよ？』
【忘れたんか？ル＝キリアは海軍籍やで】
『あ、なるほど』
【いずれにしろ『船乗りっぽい』という表現は微妙やな。見てみ、リリア姉さんがそれこそ微妙な顔してるわ】
『確かに』

アトルとルーチェの会話を聞いていたアプリリアージェは、確かに複雑な表情を浮かべていた。微笑をしつつ、眉間に皺を寄せ、かつ片方の唇の端が少しつり上がり、小さく痙攣していた。
「さっきはでけへんかったから、ルーチェにかけられたルーンの後遺症も消しとかなアカンしな。迷惑どころかこっちがお願いせなアカンくらいや」
アプリリアージェの表情を盗み見ながら、エルデもルーチェにそう声をかけると、軽く目配せをしてみせた。それを見てルーチェは満面の笑みを浮かべると、アトラックの横に並んで、その手を遠慮がちにとった。

『えっと。なあ？』

【さすがリリア姉さん。こう言う時の察しの良さには惚れ惚れするわ】
『だから今のやりとりはいったいどういう意味だよ？』
【あのやりとりを聞いてもわからんヤツにはいくら説明してもムダやな】
『いやいやいや、ちゃんとわかるように説明しろよっ！』

その時だった。
地面が大きく揺れ、地鳴りのようなものが響いてきた。
アトラックはとっさに隣にいたルーチェをしっかり抱きかかえるとその場に座り込んで丸まった。
「うわっ」
「地震だ！」
悲鳴に混じり、誰かがそう叫んだ。
住居区の方でいくつか悲鳴があがる。しかし、相当な揺れで、声のする方に駆け出そうとする兵達の足下もおぼつかない。
エルデ達もとりあえず、その場で姿勢を低くしたままで、ひとまず様子をうかがう事にした。
ドンとした大きな縦揺れの後、グラグラとした横揺れを感じた。
その後も中規模なものも含めて余震が続いていた。

―（さて、どうしたものかしら）
いつでも動ける体勢で混乱状態になっているジャミールの里人の様子を見ていたアプリリアージェは、エルデの様子がおかしいことに気付いた。
とりあえず意見を聞こうとエルデの方を見ると、彼が地面に突っ伏しているのが目に入ったのだ。それは揺れに備えて姿勢を低くしているのではなく、明らかに何らかの肉体的な問題を抱えている様子で、目を閉じ、歯を食いしばって小さく呻き声さえ上げてその顔を苦痛に歪ませていた。

>i2350 8—1831<

## 第五十四話　ラシフ・ジャミール（後書き）

第六巻終了です
次話より第七巻がスタートします

# 第五十五話　祈るな。願え（前書き）

第一部　蒼穹の台　第七巻スタートです

# 第五十五話　祈るな。願え

＞ｉ２３４７５―１８３１＜

「一つわからないことがある」

メリドが談笑するアキラ達に向かって声をかけた。メリドのすぐ側にいたアキラが何だという風に振り返った。

「お前はなぜ「エア」の中でスカルモールドを一撃で行動不能にできたのだ？」

メリドはアキラとスカルモールドが戦っているのを離れたところで観察していて、どうにも不思議に思っていた。

アキラは戦闘が始まった当初はファルケンハインに向かったスカルモールドの動きを観察する行動をとっていた。ファルケンハインとティアナが打撃を与えては離脱するという戦法をとりながら敵を少しずつ削っていたが、思ったように相手にダメージを与えることができないままに形勢がだんだん不利になっていく様子を見て取ると、ようやく自分も攻撃に加わった。

アキラは敵の攻撃を二度ほどかわした後、スカルモールドの注意を引きつけるようにファルケンハインに指示すると、アルヴに気を取られているスカルモールドの後ろに回り込み、確信を持って背中のある部分に剣を突き刺したのだ。

すると、不思議なことにその一撃でスカルモールドの動きが止まった。

その隙を逃さずアキラ達三人は関節部分に集中攻撃を浴びせかけ、手足を付け根から叩きちぎり、まずはスカルモールドの行動能力を殺いだ。さらにアキラは麻痺状態で地面に倒れたスカルモールドの背中に何度か剣先で打撃を与え続け、ファルケンハインとティアナには引き続き四肢を破壊するように指示していた。

そうこうしているうちに、少し離れたところにいたメリドがアキラによって発見されたのだった。

「『なぜ』と問われてもな」

そう言って腕組みをするアキラとメリドの顔を見比べるように視線を移すと、ファルケンハインは両者の会話に口を挟んだ。

「俺も実はその事を疑問に思っていた。フェアリーの力を失ったとは言え、我々はアルヴだ。失礼ながらデュナンのアモウル殿より力ははるかに強い。だが、アモウル殿ははた目にはそれほど強くない打撃一つでスカルモールドの動きを止めたように見えたのだが」

「アモウル殿はスカルモールドの弱点を知っているのか？」

ファルケンハインに続いてティアナも間髪を入れずにアキラにそう問いかけた。ティアナも同じ疑問を持っていた。

だが、当のアキラは今度は苦笑して見せた。

「いやいや。私はスカルモールドの実物を見たのは今回が初めてなのだが。――なるほどそうか、あの闇雲な攻撃といい君たちには見えていないということか」

アキラの言葉にファルケンハイン達三人は顔を見合わせた。

「私はルーナーでも、ましてやフェアリーでもない、ただのデュナンだ。だが、剣については幼い頃から何人もの手練れに手ほどきを受けている。そして今ではそれなりの腕前だと自負もしている。音楽家の傍ら賞金稼ぎをしているくらいだ、それなりの自信がなければできない相談ではないか？」

「それはそうだな」

ティアナはうなずいて見せた。

「横笛の腕前には疑う余地はないが、正直に言うと今日のあの戦いを見るまでは剣の腕前の方は眉唾ものだと思っていた。この通り、失敬を詫びよう」

言わなくても良いことを白状したティアナは右腕を左胸に当て、頭を小さく垂れた。これはシルフィードの近衛軍における正式な礼

である。
アキラは職業柄その型を知っていたので、ティアナの礼に彼女の実直な性格を垣間見た気がした。
腕前を披露する機会など無かったのだから、ある意味では疑って当然だった。だからティアナ達が疑っていたことも勿論想定していた。できればヘボ剣士と見られた方が潜入活動をするには有利だと言えたが、こと剣の腕前に関してだけは譲れないものがアキラにはあった。だからこそその腕前を素直に褒めてもらえた事でティアナのまっすぐな人柄を確認できたように感じていた。

「何せ私はレナンスだ。レナンスを名乗る者の剣はその辺の兵士とは別格だと思ってほしい。こう言う事を言うのは君たちにとっては心外かもしれないが、つまりはその差なのではないかな」
「その差？」
ファルケンハインの問いにアキラはうなずいた。
「君たちのようなフェアリー、特に力の強いアルヴにはおそらくわからないことかもしれない。フェアリーの能力があることが当たり前で、アルヴの腕力がそれに加わっている。そこには私達デュナンが渾身の力を込めて振り下ろした両手剣を、鼻歌を歌いながら片手でそれを受けられるほどの差があるだろう。だからフェアリーでも何でもないデュナンはその差を埋めるために剣の技を極めようとしている。特にレナンスは他人に負けることが大嫌いな気質だから、自ずと剣技については上達する風土があると言うことだ」
「剣の技を極めると、スカルモールドの弱点が見える、のか？」
ファルケンハインはアキラの説明には納得がいかないと言った顔でさらに尋ねた。
「もちろん、レナンスを名乗る者全てが私と同等と言うわけではないだろう。さらに言えばレナンスの中にはフェアリーの力を持つ剣士も多くいる。スカルモールドに限らず、相手の弱点が見える人間はむしろ少数かもしれんな。だが、剣技をある程度極めれば、見え

てくるものもある。わかりやすくたとえるなら、相手の次の動きがわかるような状態が常だと言うことだ。そこを動く前に叩く」

「ふむ」

「スカルモールドの場合、その弱点が探りにくかったのは確かだ。それはおそらく『あれ』には人間のようなはっきりした意志が無いからなのだろうな。それでも何度か相手の動きを見ていれば、動く際に支点のようになっている場所がわかる。あとはそこを突けばいいだけだ。幸い奴らは人間と違って服を着ていない。さらに言えば弱点である部分を庇うという知恵はないようだから、一度見切れば、後はむしろ人間の相手をするよりも簡単だ」

アキラはそう言った後、メリドの方を向いて続けた。

「これで君の質問に対する答えになっているかな？」

メリドは首を横に振って見せた。

「お前が言っていることは俺にはよくわからん。だが、お前があのスカルモールドをたった一撃で地面に倒し込んだのは確かにこの目で見た」

ファルケンハインとティアナもまったくメリドと同じ感想だった。それよりもファルケンハインが愕然としたのは、自らの剣の腕前がフェアリーの能力に甘えたものだと言われた事だった。今までそんなことを考えたことはなかったが、エアという特殊な空間でフェアリーの力がはぎ取られた際の自分の動きがいかに鈍重なものに変わるのかは嫌と言うほど味わった。だからアキラの言葉は身にしみて痛かった。

「リリアさん達は大丈夫なのでしょうか？」

会話が一段落ついたと思ったのだろう。エルネスティーネがおそるおそるという感じでファルケンハインにそう尋ねた。

「向こうの面子は確か風のフェアリーが三人、ルーナーが一人だったね。「エア」でまったく役に立たないルーナーは頭数には入らないだろうし、残る三人のうちの二人が、デュナンよりも力のないア

ルヴィンとダークアルヴと来ている。戦術家としての君たちの首領の能力には疑う余地はないが、そもそもそう言うものが通じる相手ではないだけに、苦戦していない事を祈るしかないだろう」

アキラの言葉にファルケンハインは首を横に振った。

「いや、凄腕の剣士が一人いる」

「剣士？はぐれたのは確か四人ではなかったかな？」

「そうだ。だが、どうやらアモウル殿は我々に対する戦力分析が多少甘いようだ」

「というと？」

「あの賢者様だよ」

「賢者様？ルーナーだろう？」

「ルーナーだが、ああ見えて実は剣士でもある」

アキラはファルケンハインの言葉に思わず眉をひそめた。

「何だって？ルーナーで剣士？賢者とはそういうものなのか？」

「その辺の事情は俺も知らん。ただ、事実としてエイルが剣士なのは確かだ。それも、我らが首領をして恐怖を感じる程の腕前だという」

そこでいったん言葉を切ったファルケンハインは、心配顔のエルネスティーネに向かって言い聞かせるように付け加えた。

「もし、アモウル殿の言う通りある程度以上の剣技の達人であるなら、エイルもアモウル殿のようにスカルモールドの弱点を知っている可能性がある。だとすれば何とかなっていると考えたい。それにこれは重要な事だが……」

「重要な事？」

「向こうには悪運の強さにかけては神がかっている『あの』アトルがいる。俺達は信じていればいい」

エルネスティーネはファルケンハインの精一杯の慰めに、微笑してうなずいた。

アキラと言えば、またしてもミリアに伝えねばならないことが増

えてしまった事で少々頭が痛くなっていた。
ただのルーナーであればその力が多少強かろうがどうしようが怖くはない。だが、エイルは詠唱時間なくルーンを使えるばかりか、剣技が達人級だという。もし賢者が皆そうだとすると、ミリアはマーリン正教会の戦力を完全に見誤っている事になる。どんな事を起こすにせよ、彼らを味方に付けられないまでも、敵に回さない戦略が不可欠だと考えざるを得なかった。
いや、ミリアはアキラにさえ自分の考えを全て明かす事はない。ひょっとしたらすでにそれさえ回避できる策が用意されているとでもいうのだろうか？
そんなことをアキラが考えていたときだった。
地の底から大きな物が地面を割ってせり出してくるような低い響きがしたと思った瞬間、不意に地面が大きく揺れた。
エルネスティーネが小さく悲鳴を上げた。
「地震だ」
アキラはそう叫ぶと地面に伏せた。
「大きいぞ。とりあえず体を低くして頭を守れ」
地下の空間である。冷静に考えれば隠れる場所など無い事はわかっていた。ましてや安全な場所など存在しようがなかった。天井が崩れ、上から岩が降れば、あるいは大きく地盤が崩れるような事があれば彼らになすすべはない。
とは言え一行はアキラの指示に従ってとりあえずはその場に伏せた。
ティアナとファルケンハインは二人でエルネスティーネを庇うように上から覆い被さっていた。
まるで地中で大きな岩が転げ回っているような低い地響きが続く中、最初の大きな揺れに続いて揺り戻しのような、やや大きな揺れが数度やって来た。それに対処するためにしっかりと四肢で地面を捕らえていたアキラは、暗く視界の悪い土埃の向こう側に広がる信じられない光景を目撃していた。

今までそこにあったはずの地面が裂け始めたのだ。地震が生んだ大地の亀裂はまっすぐにアキラの体の下に向かって走り始めた。いわゆる地割れの発生であった。

考える間もなく、その地獄の口はあっと言う間に拡大した。アキラはとっさに動いて亀裂に飲み込まれるのを避けたが、体の動きが悪いメリドは逃げ遅れて足場を失うと、そのまま地割れの中に滑り落ちた。

メリドがその時思わず伸ばした左手が壁面の引っかかりを掴んだ。彼はかろうじて滑落を免れていた。

だが大地はいまだに揺れ続けており、体を支えている壁面がいつ崩れるとも限らない。

メリドは足下を見た。だが、セレナタイトの光が届かない亀裂の底はただ闇が広がるばかりだった。

「下を見るな」

その声に反応して顔を上げると、そこには体を乗り出して自分の方に手を差し伸べるアキラがいた。セレナタイトにぼんやり照らされてその表情が見える。ずいぶん落ちたように感じていたが意外に数メートルの滑落ですんだようだった。だが、もちろんアキラが伸ばした手がメリドに届く距離ではなかった。

「じっとしていろ」

メリドの状態を確認したアキラはそう声をかけると、今度はファルケンハインの方を振り向いた。

「すまんが、そのマントを貸してくれ」

ファルケンハインはアキラの意図がわかった。すぐに丸めて放り投げる。

「俺が体を支えよう」

「それは助かる」

ファルケンハインはティアナにネスティを預けると、揺れの中を体を低くしてアキラの横まで移動した。地震で生じた亀裂を並んで

覗き込むと、途中にある唯一の引っかかりのような岩肌にメリドがなんとかしがみついているのが見えた。だが、思ったより遠い。
「私が身を乗り出してこのマントをロープ代わりに彼に投げる。君は私の足首を押さえていてくれないか」
「おやすいご用だ」
「彼は右腕を骨折している。だから片腕しか使えない。自分で上る事は無理だろう」
「どうする？」
「こちらから引っ張り上げる必要がある。ここにアルヴがいて良かったよ」
「了解した。アルヴの腕力の見せ所という訳だな」
「期待している」
アキラの言葉に大きくうなずくと、ファルケンハインは後方の仲間に声をかけた。
「ティアナっ！」
同時に彼はアキラの後ろに回ると、上体を亀裂に突っ込んだ横笛奏者の足首を掴んだ。
「手伝えることがあれば何でも言って下さい」
ファルケンハインは二人に移動を指示した。
「ネスティが動けるようなら二人でこっちへ来てくれ。引き上げるのに君の助けがいる」
「了解です」
「私の事は心配ご無用です」
二人は同時にファルケンハインに答えると互いにうなずき合い、中腰になって移動を始めた。

「こらえろ、今マントをそっちへ投げる。このマントはアルヴスパイアと言って、その辺のロープよりよほど丈夫にできている。だから安心してつかまれ」
上体を亀裂に突っ込んだアキラはメリドにそう叫ぶと、マントの

下端をしっかりと掴み、フードの方をメリドの方へ垂らした。その拍子にアキラの懐から何かが飛び出し、重力の法則に従い亀裂の底へ自由落下していった。それは複数の小さな物体で、一度亀裂の外壁に当たって乾いた音をたてた後、メリドの目の前をかすめて墨を流したような深淵に飲み込まれるように消えていった。

「しまった」

アキラは思わず舌打ちをした。

「今のは……まさか精霊石か？」

メリドは頭上少し離れたところに垂れているファルケンハインのマントの端と、それ越しにこちらをのぞき込むアキラを見上げながら尋ねた。

「そのようだ」

落ちていった石はしかし、いまだに底に達した事を示す音を発していない。つまりこの亀裂がどれだけ深いかはわからなかった。

「里にとっては貴重な精霊石だったのだぞ。全て落ちたのか？」

「――ああ。後で返すつもりだったのだが、悪いことをした。それより急げ。また大きな余震がくれば、この亀裂もどうなるかわからんぞ」

「わかった」

「まさかとは思うが、あの石が衝撃で発動してスカルモールドが出てくると言うことはないだろうな？」

「大丈夫だ。確かに衝撃を与えると発動する精霊石だが、持っていたのは全てエアの結界を張る精霊石ばかりだ。能力が高い者が発動させた訳ではないから、この深さだと結界の広さはここまでも届かないだろう」

「そうか、安心した。この状況でスカルモールドが壁を上ってくるとお手上げだからな」

「確かにアレならこの壁を力任せに上ってくることも出来そうだな」

メリドは軽口を返したものの、実際のところどうやってアキラが垂らしてくれたマントを掴むか思案していた。

メリドのいる場所は少し内側に抉れたようになっていて、アキラがマントを垂らしても、メリドからは離れたところにしか届かない。

手を伸ばせばなんとか届くかもしれない。だが伸ばしたところで右腕は骨折していて使えない。かといって左腕は崖にある突起にかろうじて引っかけているだけだった。左手を離した瞬間、支えのない体は落下してしまうだろう。

足がかりがあるか、せめて顔にマントが垂れていてくれればそれを歯で咥えて体を支え、その後左手でマントを握り直す余裕ができるのだが、身を乗り出すアキラもそれ以上は限界のようだった。

「すまんが届きそうにない」

メリドは正直にそう告げた。そうしている間にも余震が辺りを揺らす。メリドが片手で体を支えるのもそろそろ限界だった。

おそらくこれが自分の最後なのだろうとメリドは覚悟を決める事にした。アルヴ系の種族の気質はこう言う場合、死の恐怖よりも無様な死に方をしないようにと考える方に意識が行く。従って彼はこれ以上この少ない引っかかりに文字通り命を引っかけた状態で自らの命を惜しむ為に見ず知らずの人間、それも自分たちが一旦は殺そうとまでした相手の慈悲にすがるような行為を是とはしなかった。

「お前達の親切心には心から感謝する。正直言ってこのメリド、心を打たれた。だがもういい。俺は運命に従う」

これから自らが落ちて行くであろう焦点の合わない闇の深淵を見ながらアキラにそう告げたメリドに、すかさず頭上から怒声が届いた。

「アルヴの一族たるもの、そのような愚かな事を軽々しく口にしてはなりません」

闇が支配する閉鎖された空間に凛と響く涼しい声は思いがけずエルネスティーネのものだった。

メリドが虚を突かれたようにハッとして上を向くと、そこには頭だけを覗かせた小さなアルヴィンの影があった。セレナタイトの光は彼女の背後から注がれているためにエルネスティーネの表情まで

は見えない。だがメリドには目を見張り、眉をつり上げた金髪の利発そうな少女の顔が見えたような気がした。

「私は、この程度の事で音を上げるダーク・アルヴの戦士など聞いたこともありません。あなたにもし人並みに恥という感情があるのなら、やれるだけのことをやり切ってからさき程のセリフを言うべきです」

エルネスティーネの言葉にメリドは口を開いて何かを返しかけたが、彼女はその暇を与えなかった。

「よろしいですね？先ほどのセリフは冥府の出迎えの者にでもお言いなさい。少なくとも我々はあのような言葉、金輪際聞く耳を持ちません」

少しの沈黙があった。だんだん感覚がなくなってくる左手を見つめながら、メリドは答えた。

「お前の言うことはもっともだ。俺が出来ることがまだあるのなら、それをやり尽くすのみ」

「ご立派です。しかし、やり尽くす前に必ずお助けします」

「アモウル殿、ティアナのマントも使いましょう」

二人がやりとりをしている間に、ファルケンハインはアキラを一端引き上げてそう提案した。二つをつなげれば、少なくとも長さは足りるはずだった。それを揺らすなどしてメリドの方へかぶせることが出来ればどうにかなるかもしれないと考えたのだ。

エルネスティーネの言うとおり、彼らには迷っている暇はなかった。

アキラはうなずくと、もう少し待て、とメリドに告げた。

「だが、長さが足りても、右手に体を支えるだけの力が残っているとは限らないな」

ティアナのマントを自分のマントにつなぐ作業をしているファルケンハインを見てアキラはそう言った。

「そうだな。それが問題だ」
「ならば私が行きます」
二人の会話を聞いて、エルネスティーネが提案した。
「これを私の腰に巻いてください。そしてアモウルさんの代わりに長身のティアナが体を乗り出してくれれば長さは充分足りると思います。私がメリドさんを両腕で、いえ、両手両脚を使ってきっちりと捕まえます。それをファルとアモウルさんで引っ張り上げて下さい」
アキラとファルケンハインは顔を見合わせた。
「しかし」
「迷っている暇はないと申しあげたはずです。我々は我々がやれることをやらねばなりません。メリドさんの握力にも限界があります」
アキラは睨むように真剣に自分の方を見るエルネスティーネの決心に心を打たれた。
「できるのかい、ネスティ嬢?」
エルネスティーネは大きく首を横に振った。
「失礼な事を尋ねるものではありません。アルヴ族はやると言ったらやるだけなのです」
「そうは言うが……」
アキラがティアナにまだ何かを言いかけたが、それをファルケンハインが制した。
「急ごう。ネスティの言う通り時間がない」
アキラもうなずいた。
「わかった。彼の命は君にかかっている。頼んだぞ」
ファルケンハインはエルネスティーネの細い腰に自分の頑丈な革製のベルトを巻いた上で、そのベルトにマントの一端をくくりつけると、下をのぞき込んでメリドに救助の手順を簡単に説明した。メリドはわかったと言って小さくうなずいてみせた。
「少し苦しいと思うが、我慢してくれ」
アキラがそう言ってエルネスティーネをいたわるように声をかけ

たが、エルネスティーネは首を横に振った。
「大丈夫です。それより時間がありません。早くして下さい」
上でのやりとりを聞いていたメリドが上を向いて大きな声を上げた。
「せめて、俺からその娘の無事をマーリンに祈らせてくれ」
シルフィードが宗教活動を禁じている為、一応許しを請うたのだ。自分の信じない神に祈られても相手にとってはありがたくはないだろう。メリドなりに気遣った発言であった。
だが、それをエルネスティーネが諫めた。
「祈ってはなりません！」
「え？」
メリドは面食らった。そこまであっさりと拒絶されるとは思っていなかったからだ。

「『祈るな。願え』か」
アキラがそうつぶやくと、エルネスティーネはうなずいた。
「そうです。それこそが宗教活動を禁じている我々シルフィードの国民の矜持なのです」
「願え、だと？」
「マーリンに頼ってはなりません。あなたが今どうありたいか、どうなりたいのかを自分自身に言い聞かせなさい。その思いが真実なら、それは必ず届くのです」
「届く？誰に届くのだ？」
メリドの問いに、エルネスティーネの代わりにアキラが答えた。
「この場合はネスティ嬢の言う通りだな。助けるのは私達、助かるのはお前だ。お前はそれをここにいない誰か、ましてやどこにいるやもわからない神などに祈るのではなく、そうなることを願い、やれる事をやるべきだだろう」
エルネスティーネが最後を継いだ。
「その通りです。そしてその願いこそが、この場にあるエーテルを

私達の力に変えるでしょう」

「――わかった」

メリドはそれ以上、もう何も言わなかった。

祈りと願いの差など言葉遊びのようなものかもしれない。だが、アキラとエルネスティーネの言葉のもつ強い力はメリドに伝わった。

――（神であれなんであれ、自分の信じた誰かに頼む事が祈りなのだとすれば、彼らの言う願いとは、自分自身、あるいは自分達の力を信じ、より高みに上ろうとする強い意志を固める為の短い詠唱なのかもしれんな）

今までメリドは信じる神がいない者を不幸な人間だと思っていた。だが、ほんの小さな言葉で、それが必ずしもそうではないことに気づいたように思えた。おそらく今のシルフィードでは多くの人間はそうやって自分を確認しながら生きているのだろう。

それもいい。

だがそれが出来ない人間の為に神はいるのだ。

シルフィードでは、願うことができない人間はどうしているのだろう。

メリドはそこまで考えると答えのない問答に陥りそうになった自分を見つけて、思わず苦笑した。

――（『祈るな。願え』か）

一方アキラは作業に集中しつつも内心ではエルネスティーネの態度には心底驚いていた。

王女にしてはかなり気さくだが、それでもやはりいかにもどこかのお嬢さんと言った風情は隠せず、要するに彼はエルネスティーネの事を甘やかされて育った子供だと思い込んでいた。少なくとも今のような行動を起こすような少女だとはおよそ想像もしていなかったのだ。

今回の旅にしても良質なお付きのアルヴに守られているだけの弱

い存在だと見ていたが、こういうギリギリの状況、つまり窮地において実に的確な判断ができる人物であったのだ。実行力もあり、何より決断が早い。アキラもエルネスティーネが王女でなければ提案していたであろう手段だったが、それと全く同じ事をあの切羽詰まった状況の中で自分で考えて導き出せる状況判断能力と冷静さが備わっている事には素直に感心するしかなかった。

（いや）

アキラはいったんそう結論づけた自分の考えをすぐに否定した。

―（こう言う状況だからこそ、持っているものが出るのだろう。危険に身を挺してまで今し方まで敵だった者の命を救おうとするとはな。……この王女様はたいしたものだよ、ミリア）

そう言えば、とアキラは思い起こした。旅は基本的に野宿ばかりである。快適な寝床などはなく、一般の人間にしても過酷な環境下であると言えた。食事ばかりではない。湯浴みなど望むべくも無く、その他にも不自由な事は多々あるにも関わらず、それについての不満や不平をエルネスティーネの口から一言たりとも聞いた事が無かった事に今更ながら気付いた自分を恥じた。

―（大したものとは失礼な言いようだったな。世が世であり、この方が我が姫であったなら、私は喜んで命を差し出すだろう）

「行くぞ。しっかりつかまれ。それから、感覚が狂うから下をじっと見つめるな」

ファルケンハインの合図で、ティアナはエルネスティーネをゆっくりと地面の亀裂で出来た穴に降下させた。女とはいえデュナンであるアキラよりかなり背が高いアルヴのティアナは当然彼よりも手が長い。ティアナのマントをつないだ事もあって、エルネスティーネは彼女の思惑通りメリドと同じ高さまで余裕で降下することが出来た。

「すまない」

メリドは本当にそろそろ限界だった。苦しそうなその顔が逼迫した状況を現していた。エルネスティーネはいいえ、という風に首を横に振った。そして、もう少し近くへ自分の体を寄せるよう、上を向いて上体を乗り出して自分をぶら下げているティアナにそう指示を出した。

長身のアルヴであるティアナは軽いアルヴィンを楽々とぶら下げてはいたが、揺れているエルネスティーネの振り幅が大きくならないように慎重にマントにかける力加減を合わせなければならなかった。その状態で正確にエルネスティーネをメリドに近づけるのはさすがに苦労していた。断続的に訪れる地震が地面を揺らし、その作業をさらに困難にする。せめて地割れでできた亀裂がきれいに垂直に割れていればエルネスティーネに壁に手を突くなりさせて安定させることも可能だったのだが、内側に抉れたような壁面ではそれもかなわなかった。

ダーク・アルヴの体力や筋力は肌の色が違うだけで同型種族のアルヴィンと同じくファランドールの四種族の中でもっとも弱い。もちろんメリドは兵士長と言うだけあって相当に体を鍛えていたし、その辺のデュナンよりはよほど力が強いダーク・アルヴだと言ってよかった。しかし、さすがに片手だけで全体重をそう長い間支えきれるものではない。

彼の握力の終演は突然訪れた。

メリドの左手の力が尽きたのは、ティアナが間合いをはかりながらメリドの方へエルネスティーネを寄せようとした時だった。

断続的に揺れていた地面が、ひときわ大きく揺れた。メリドの握力はその衝撃に耐えられなかったのだ。心の中で（あっ）と思った時にはすでに左手は壁の突起を離れていた。手を伸ばすエルネスティーネが息を呑む音が暗闇に聞こえたような気がした。

（ここまでか）

メリドが思わず目を閉じた時だった。細い枝状のもので下から背中が思い切り押し上げられたような衝撃を受けた。ほんの数センチ

落下した後、メリドの体はその下からの力によって自由落下を一端中断したような状態になったのだ。そこに今度は横合いから柔らかいものがぶつかってきたと思う間もなく、体が何かに強く縛られるような感触があった。

「やったぞ！」

頭上から声がする。

メリドは目を開けた。

落下していない。それどころか目の前に誰かがいる。暗くてよくはわからないが、柔らかくそして暖かいものが自分の体にしっかり巻き付いている。

「メリドさん、はやく私に捕まってください。私、そんなに力が続きません！」

その柔らかくいい匂いのする拘束物は、エルネスティーネだった。力のないエルネスティーネが例えメリドの腕をつかんだとしてもその体重を支えられるわけがない。彼女はそれをよくわかっていたからこそ、両手両脚を使ってメリドの体全体を絡めるように抱きついていた。

目をきつく閉じ、歯を食いしばりながら自分を力一杯拘束している少女のその表情を見て、メリドは瞬間的な思考停止状態から我に返った。

間に合ったのだ。

「失礼する」

メリドはそう断る前に、すでに動く方の左腕をエルネスティーネの背中に回して絡めるようにしてしっかりと抱え込んだ。握力はもうなくなっていたが、何とか力になれるはずだった。

その左腕の中の金髪の少女の小さな体は細く華奢だった。ティアナによってゆっくりと引き上げられていく感覚の中でメリドはしかし、かつてこれほど頼りになる感触があっただろうかと感じていた。

そして、とても暖かいと思った。

メリドはもちろん生涯この時のことを忘れなかった。そして後に自分の命を助けた小さなアルヴィンの少女が実は一国の王女だった事を知ると、エルネスティーネやネスティ、あるいはエリーという名前をその後生まれてくる子や孫はおろか親族にも強要し、多くの者のひんしゅくを買ったという。

「なぜ、メリドは浮き上がったんだ？」

引き上げられたメリドが一息つくのを待ってから、アキラはあの落下時におこった不思議な現象についてファルケンハインに尋ねた。それは当の本人であるメリドが一番疑問に思っていた事だった。

下から細い棒のような何かで強く押し上げられるような感触。あれはエルネスティーネの手足ではなかった。エルネスティーネは押し上げられた後にメリドを捕捉したのだ。

「とっさにやったことだ。「エア」が解除されていて助かった」

ファルケンハインはそれだけを言うとこちらもホッとしたように、横にいるエルネスティーネの頭を撫でてやった。ティアナの腕の中でへたり込んでいる小さな英雄に。

「私……もっと……体を鍛えなければ……ですね」

息を上げながらそういうエルネスティーネに、ティアナは優しい声で答えた。

「そうですね。これからは毎日私が鍛えてあげましょう」

「ええ。でも……今日はもう、ちょっとムリ……かも」

小さな英雄はさすがにお疲れの様子だった。

アキラはその様子を見てかつて無いような穏やかな気持ちになるのを感じながらも、頭の中ではファルケンハインの言ったことを冷静に分析していた。

相手の戦力分析は初歩の初歩だ。少しでも多くの情報を得ておくに越したことはないのである。

「ファル殿は風のフェアリーと伺っていたが、なるほど空気を固形化できる能力を持っているという事か」

ファルケンハインは素直にうなずいた。
「俺の力は、元来どれだけ強く、しかし薄くするかが勝負とも言えるものだ。今回はそれを逆にできるだけ太くしてみたが、もし失敗していたら奴さん、今頃は亀裂の底に叩き付けられる前に体が真っ二つになっていたかもしれないな」
そしてそういうとメリドの方を意味ありげな顔でみやった。
「生きていてくれて良かった。失敗しているとさすがに夢見が悪かったと思う」
「いや……」
メリドはまだ誰にも礼を言っていないことに気づいていた。助け上げられた後は呼吸を整えるのと、骨折した右手も込みで思い切り抱きついてきたネスティのお陰でわき上がる痛みに堪えるのに精一杯だったのだ。痛みがなんとか収まってみると、礼を言う時機を逸してしまったようで居心地の悪い状態にあった。もはや敵ではないとはいえ、今更素直に謝って礼を言うのもなんとなく面はゆい気がして逡巡を続けていた。そこへファルケンハインが水を向けた格好になった。
「感謝している」
「礼なら」
アキラはそういうとティアナに抱きかかえられているエルネスティーネの方を指さした。
「あのお嬢様に言うんだな」
メリドは改めてぐったりとしているアルヴィンの少女に目をやった。
「いえ、こんな時は助け合うのが当然です。メリドさんだって……きっとそうしていましたよ」
今まで使ったことがないくらい、思い切り力を入れた事もあるだろう。だがそれよりも人の生き死にに関わるきわめて責任重大な仕事をやったことで体中から力が抜け、さらに当初は痙攣もおこしていた。だがそれも幾分落ち着いたようで、エルネスティーネは少し

元気な声を出してメリドが何か口に出す前にそう言った。

メリドは思った。

俺が逆の立場だったら敢えて助けただろうか。

（いや）

十中八九助けなかったに違いない。

だが、エルネスティーネはさも当然と言った風に誰でもそうするものだと簡単に言ってみせたのだ。

誰でもができるわけではない。

今までの言動から察するにエルネスティーネはおそらくは世間知らずのお嬢様なのだろうとメリドは思った。だが、そのお嬢様の世間知らずともいえる無防備な確信に満ちた考えが今自分を救ったのだという事実をもてあましていた。

「俺にもその子と同じくらい、いや、少し歳上の娘がいる」

感謝の言葉の代わりに、メリドはそう言っていた。

「ハネっかえりな子で、実現できないような正論ばかりを大人たちにぶつけてくる困った娘だ。名前はルーチェと言うのだが、あの子ならそちらのお嬢さんと同じ事をいうのだろうな」

メリドの声は大きくはなかったが、その閉鎖された岩でできた空間では誰の耳にもよく届いた。一同はセレナタイトの淡い光に照らされたダーク・アルヴの戦士の顔をじっと見ていた。それは一同が初めて見るメリドの穏やかな表情だった。

「良い名ですね」

エルネスティーネはそう呟いた。

「会って話をしてみたいものです」

メリドはそれには答えず、話を続けた。

「ルーチェの名は、マーリン正教会のやんごとなきお方から授かったものだ。今はなきいにしえの言葉で『優しい』と言う意味だそうだ」

そこまで言ってから、メリドはエルネスティーネに訪ねた。

「ネスティという名に、何か謂われは？」
「はい」
エルネスティーネは返事をすると、ゆっくりと答えた。
「父がずっと昔に飼っていた鳥の名前です」
「え？」
反応したのはティアナだった。だがそれをすぐにエルネスティーネは目で制した。
「鳥の名前？」
「ええ」
エルネスティーネは続けた。
「ちっぽけな鳥でした。それでも心優しい父はその鳥をたいそうかわいがっておいででしたが、ある日かごの扉を開いて逃がしてしまわれました」
「逃がした？」
「なぜだと思いますか？」
思わぬ問いかけにメリドは戸惑った。エルネスティーネの真意はわからない。だからここは思いついた事を素直に答えることにした。
「可哀想だと、思ったのだろう」
しかし、予想に反してエルネスティーネはうなずいてみせた。
「そうかもしれません。カゴに入れたままだと飼っている大きな猫に取り殺されてしまうと思ったのかもしれません。でも、どちらにせよ父はその鳥を大事に思っていたからこそ空に帰したのだと思います。その鳥の名前がネスティだったそうです」
エルネスティーネがどういうつもりでそんな作り話をしたのかはファルケンハインにはわからなかった。もちろんティアナにも。
二人は複雑な表情でお互いに顔を見合わせた。
もともとエルネスティーネとは豊穣の祭を司る精霊の名前だと言われ、シルフィード王国では古代より良妻賢母を願って与えられて

いるものだった。
もちろんエルネスティーネという本名を明かしその説明をする事は論外にしろ、少なくとも今の例えはエルネスティーネが自分の名前の由来として語るには適切なものではないように思えてならなかった。
だが続くネスティの言葉を聞いて、ファルケンハインは思わず唇を強く噛むことになった。
「おそらく父は、例えそれが一時であったとしても、自分の娘に自由に羽ばたく翼を持たせたかったのではないでしょうか。私は、そう思うのです」
「――」
「カゴで育った鳥は、自らが考えている程、うまく飛べるわけではありませんから」
ファルケンハインは何かを言いかけて、そしてやめた。何も言葉にならなかったのだ。
「それに、父は知っていました。少なくとも空には、その鳥の仲間がいることを」
メリドはこの不思議な一行がいったいどういう繋がりと目的をもっているのかはわからなかったが、単純に賢者とそのお付きの者ではなさそうだと感じていた。
少なくとも自分を必死になって助けようとしたこの少女には彼が知っている賢者の部下に特有のあの突き放したような空気がない。いや、この少女だけではなかった。その少女を優しく抱いている白髪の若い女アルヴや、落下する自分を特殊なフェアリーの力で助けた長身のアルヴにしても、戦士としての迫力は感じるが、まとう雰囲気に黒いものがない。もっとも、残るデュナンについては何を考えているのかがわからない、油断できないものを感じてはいたが、どちらにしろ彼らには共有する和やかな空気があった。
だからこそ不思議でならなかったのだ。
なぜ、賢者と一緒にいるのだろうか？

メリドはどうやらここへ来て彼らに強い興味を持ってしまったようだった。

「ぶしつけな事を訪ねるが、母上は？」

「いえ。母はおりません。私がまだ幼い時に他界しました」

「すまない。嫌なことを思い出させてしまった」

「いいえ。もう昔の話ですし、まだ幼かった私は記憶もあやふやで、実のところ絵でしか母の顔を知りませんから。それよりルーチェの話を聞かせてくださいな」

メリドはうなずいた。

「娘はルーナーだ。俺のような二流に毛の生えたようなルーナーではなく、あれは間違いなく一流の力を持っている。だからルーチェはおそらく、次期族長になるだろう」

「それは、すごいですね」

エルネスティーネは思わず感嘆の声を上げた。

だが、メリドはゆっくり首を横に振って見せた。

「だが、ルーチェはそれを嫌がっている。しかし少なくとも今のジャミールの里で娘を超える力を持つルーナーはいない。継ぐしかないのだが……」

メリドはそこまで言うと口をつぐんだ。

それは言ってしまっていいものかどうかという迷いのためだった。

だが、少し間を置くと、話の続きを語り出した。

「継ぐしかないのだ。だが、その前に賢者の修行をする必要がある。ルーチェはその修行が始まる日を待ち続けている」

アキラをのぞく三名は互いに顔を見合わせた。エルネスティーネはもうほとんど普段の息づかいに戻っていた。もっともまだ体に力は入らないようではあったが。

「賢者の修行って、あの？」

エルネスティーネの問いにメリドは首を振った。

「『あの』が何を意味するのかはわからないが、相当の覚悟がなけ

れば賢者にはなれない事は知っている。ルーナーとして素質があろうとも、あの術を使うには賢者になれるほどの知識と力がないとムリなのだ」

「あの術、というと？」

これはアキラであった。ジャミールの里の持つ謎の一つに迫ったに違いないと反応したのだ。

そのアキラの顔を鋭い視線で見たメリドだったが、それでも覚悟を決めたように話し出した。

「このあたりでは今のような地震はたびたび起こる。そしてレイジノ山がそろそろ噴火を始めるのだが、それを防ぐ為の強力なルーンがこの里には伝わっている」

「なるほど、そのルーンを使うために力がいるというわけか」

メリドはうなずいた。

「失礼ながら現在の族長では？」

ファルケンハインがそう質問した。メリドは苦しそうな顔をすると首を横に振った。

「ラシフ様には残念ながらそこまでのお力はなかった。だから素質のある者を賢者の弟子にして鍛える必要があるのだ。しかる後、里へ帰還し族長を継いで、いにしえのルーンを唱えて里を守る義務が、ルーチェにはあるのだ」

「それはよほどの術なのだろうな」

「ああ、そうか。なるほど」

アキラは思わず声を出してそう合点した。

「ジャミールの里の守りが尋常ではないのは、そのルーンを盗まれないように、なのだな？」

メリドは無言でうなずいた。

「なるほど」

ファルケンハインも納得したようにそう言った。

「そこまでして守らなければならないほど強大なルーンだということか」

「たとえ賢者といえども、上席かあるいは大賢者程の力がないと使えないルーンだと言われている」

「ちょっと待って下さい」

エルネスティーネが会話に割って入った。

「その、上席賢者か大賢者になる必要があるということですか？あなたの娘さんのルーチェが？」

メリドはうなずいた。

「私はルーチェの事は知りません。素質があるのでしょうけれど、でも、仲間の賢者に話を聞いたことがあります。百人に一人も生き残れないと。賢者になれるのが百人に一人なのではなくて、生き残れるのが百人に一人なんだそうです」

「その辺の話は俺も聞いている」

切羽詰まったようなエルネスティーネの口調に押されながらメリドは答えた。

「それに、身をもって知っているのだ」

「え？」

「ルーチェの兄……俺の息子は賢者になれずに修行半ばで命を落とした」

メリドの言葉にエルネスティーネは息をのんだ。

「本音を言えば俺も妻も、これ以上自分たちの子供を失いたくはない。いや、失う可能性がある場所に行かせることなどできない」

「じゃあ」

「それでもルーチェは行かなければならない。あいつは族長にはなりたくないと言っていたが、進んで賢者候補生にはなると言っている」

「なぜ？」

「村を守るためだ。放っておけば村は噴火で消滅する。一族は一瞬で全員命を失う。それを防ぐことができるのはあの古代ルーンだけなのだ。だから」

「だったら」
エルネスティーネは思わず上体を起こしていた。だが力が入らず、支えた腕がすぐに崩れ落ちた。そこへティアナが腕を出して支えた。
「違う場所へ行けばいいじゃありませんか」
「ネスティ」
ファルケンハインがエルネスティーネの肩に手を置いた。
「それがムリだから、彼らはここにいるんだ」
エルネスティーネは思わずファルケンハインを睨み付けた。だが、ファルケンハインはエルネスティーネの口が開く前に静かにこう言って聞かせた。
「異教の里人は、ここを出た瞬間に全滅の危機に晒される。彼らは行き場所がないからこそ、平和に暮らせるこの場所でじっとしているんだ」
「訳を話して、どこかほかのところに住まわせてもらえばいいではないですか？」
「誰に話すのだ？」
「それは」
「サラマンダもドライアドも政府には教会がからんでいる。異端を保護する事などありえない。ウンディーネには彼らが住むような土地を割譲しようだなんていう領主はまず居まいよ。彼らはジャミールの里人を奴隷としてしか受け入れないだろう」
「そんな」
「そして我がシルフィードはどうだろうか？」
「それは……」
エルネスティーネは言いよどんだ。自分の国が彼らを追い出したのだということをあらためて思い知ったのだ。彼らのような境遇の人々をこういう過酷な運命に追いやったのはそもそも自分の直系の先祖だった。
エルネスティーネは自分がルーチェという娘を賢者候補生という地獄に向かわせているような気持ちになった。

「ルーチェも早く行きたいと言っている。あの子は里のために自分の力が役に立つならこんなうれしいことはないと本心で思っている。そういうところが、お嬢さんに少し似ているかもしれない」
メリドにそう言われたエルネスティーネは溜まらず叫んだ。
「そんなことはありませんっ！私は……私なんて」
「ネスティ！」
高ぶったエルネスティーネをティアナが抱きしめて落ち着かせた。続けて何かを言おうとしていた小さな少女は、言葉を嗚咽に換えた。
どうしたのだ？という問いかけるようなメリドの視線がファルケンハインに向いた。彼はしかし、それに答える言葉を持っていなかった。
「あの子は情が……とても、深いのだ」
それだけを言ったファルケンハインに、メリドはそうか、とうなずいた。
「いいお嬢さんだな」
そしてそう付け加えた。
ファルケンハインはうなずいてみせた。
「俺もそう思う。だから、ネスティに似ているというおまえの娘もきっといい子なのだろうな」
「ありがとう」
メリドは今度は何のてらいもなく感謝の言葉が素直に口から出た。自分でも意外だったが、それもエルネスティーネの力なのだろうと、会った事もない他人の為に肩を震わせる小さなアルヴィンに優しいまなざしを送った。

「賢者の修行が始まるのを待っていると言ったが、その日は決まっているのか？」
ティアナが、エルネスティーネの頭を撫でながらそう訪ねてきた。
メリドはそれに首を振って答えた。

「お預けしようと思っている賢者様がしばらく顔をお見せにならないのだ」
「そうだったか」
「師として、これ以上は望めないほどの方なのだが」
メリドの答えを聞いて、ファルケンハインはもしや、と思った。
今までのメリドの話をつなぎ合わせると、様々な点が有機的につながってくるような気がした。
「その賢者だが、ひょっとすると「真赭の頤」（まそほのおとがい）という名前ではないのか？」
メリドは息をのんだ。
「そう、なのだな？」
「どうして、それを？」
「忘れたのか？」
驚愕を隠しきれないといった風のメリドに、ファルケンハインは苦笑をして見せた。
「さっき、俺たちはシェリルを知っていると言ったな？」
「ああ」
メリドはうなずいた。
「そうだった」
「つまり」
ファルケンハインは大きく息を吸うと、低い声で断定するように言い放った。
「俺たちは全員、運命的な何かで繋がれているんだ」
「なんだと？」
「我々の一行にいるという賢者だが」
「うむ？」
「「真赭の頤」の弟子だ」
「え？」
メリドが思わず立ち上がろうとした時、その声はまるでその空間

全体から聞こえてくるような響きで彼らの耳に届いた。
「おしゃべりが過ぎるようだな、メリドよ」
メリドには聞き覚えがある声だった。
「ラシフ様！」
メリドの呼びかけに応えるように、空間の頭上に一人のダーク・アルヴの姿が浮かび上がった。黄色いゆったりとした服をまとったダーク・アルヴの少女。足下に届くかと思われるほどの薄茶色の長い髪は、その先端部分を四色の紐で束ねられていた。
まさしく族長ラシフ・ジャミールの姿が、一行の前にぼんやりとではあるが浮かんでいた。
「お主、その怪我はどうした？まさか……」
メリドの首から吊られた右腕を見ると、ラシフは一歩前に足を出し、少しうろたえたような声でそう訪ねた。
「いえ、ご懸念なさいますな。ここへ落下する際に打ち所が悪かったのです。しかし大事はございません」
「そうか」
ラシフは安心したようにそう言うと小さく深呼吸をしてあらためて一同を見渡すようにした。
「あなたが族長のラシフ・ジャミールですか？」
ラシフが口を開く前にアキラが問いかけた。
「我らはあなたたちの敵ではございません。どうか我々をここよりお出し下さい。メリドの傷はたいしたことはないとはいえ骨折です。応急処置はしてありますが、発熱もあります。できるだけ早く医師に診せ、しかるべき処置をされた方が良いと思われます」
ラシフはうさんくさそうにアキラを見やると、アキラの問いかけには応えず代わりに質問をしてきた。
「お前達には怪我はないのか？」
アキラはティアナに抱きかかえられている格好のエルネスティーネの方をチラリと見ると、
「一名、具合の悪い者がおります。どうか」

そう言った。だが、その具合の悪い者は
「私は大丈夫です。それよりメリドさんの手当をしっかりしないと駄目です。お願いです。メリドさんだけでも早くここから出してあげて下さい」
アキラは思わず舌打ちをしかけたが、それはすぐに苦笑に変わった。エルネスティーネを見くびってはいけないのだった。高潔な精神を持つ少女をつまらないダシに使おうとした自分がまるで小物に思えた。
「先ほどの地震で精霊殿が破壊された」
ラシフはメリドに向かうとそう言った。メリドはそれを聞くと身を乗り出した。
「里は？皆は無事ですか？」
「案ずるな。けが人が何人かは出たが大事ない。それよりそう言うことでお前には申し訳ないが、今しばらくここで待っていてもらうことになる」
「曖昧だな。しばらくとは、実際にはどれくらいなのだ？」
これはティアナだった。
ティアナとすればできるだけ早くエルネスティーネをここから出してやりたかったのだ。向こうの都合でそれを無期延期などされてたまるかといった気分だった。そしてそれがいつもの事ながら、言葉の調子に素直に出てしまった。
ラシフはあからさまに不快な表情をティアナに向けた。
「全くお前達は揃いも揃って初対面の、それも年長者に対する礼儀というものを知らぬようだな」
この言葉にアキラの眉がピクリと動いた。
「すると、我々の仲間はそちらに？」
ラシフはうなずいた。
「案ずるな。皆無事だ。お前達が無事だという事は伝えておこう」
「いや」
アキラは食い下がった。

「状況を伝えるより現物を持って行った方がいいのではないか？それともこの里は賢者の従者をそういう風に扱うのか？」
　ラシフはアキラに、忌々しく……かつ苦々しいことこの上なく、まるでこの世で一番嫌なものを見たというような顔をしてみせた。
「できるのならばとっくにそうしている。できないからできるように準備をしておる。むろん急がせてはいる。だが少なくともあと一日ほどかかる。それだけの話だ」
「あと一日も？そんなにかかるのか？」
「水などはメリドに頼め。やつはルーナーじゃ。こうやって思念をこちらに持ってくるのが今は精一杯で食料の面倒は難しいが、ここから出れば馳走でもてなしてやるから一日くらいは我慢してもらおう。何せ『あの』賢者の従者達だからのう。それからメリドよ」
「は」
「こやつらの言うとおり、里にお出でのその賢者様は大賢者「真赭の頤」様のお弟子だそうだ」
「そうでしたか」
「お付きの者達に対して、粗相のないようにな」
「はい」

　そこまで言ったところで、ラシフの姿が薄くなった。ただでさえぼんやりとした姿だったものだから、表情などがもうわからなくなっていた。
「そろそろ限界じゃ。頼むぞ」
　メリドが頭を深く下げたところで、ラシフの姿が消えた。
「どういう事だ？」
　アキラの問いかけに、顔を上げてメリドは応えた。
「ルーンで飲み水は作り出せるから安心しろ」
「そうか。簡単な保存食はある。一日くらいは大丈夫だろう。それはいいとして」
「通路結界だが、ラシフ様が精霊殿が壊れたとおっしゃっていた」

「その精霊殿とやらが壊れるとまずいということか？」
「ラシフ様はあれがないと通路結界を繋ぐルーンが唱えられないのだ」
「やれやれ」
アキラはそう言うと仰向けになった。
「結局待つしかない、か。じゃあ、とりあえず水を一杯くれないか？」
「そのことだが」
ファルケンハインが二人の会話に割って入った。
アキラが顔を向けると、ファルケンハインはすまなそうに小さく頭を下げていた。
「すまん。だが、あのときは仕方がなかったのだ」
なぜかファルケンハインの横でティアナがそう言って本当にすまなさそうに小さくペコリと頭を下げて見せた。
アキラとメリドにはそれがどういう意味なのかがわからず、思わず二人で顔を見合わせた。
「お前のルーンは……当分使えない」
「なんだと？しかしファル殿、さっき確かエアは終わっているとかなんとか」
「違うんだ」

そう、ティアナはすでにメリドに触れていた。
「無のフェアリー」と言われるティアナのキャンセラ能力。ティアナに触れられたルーナーは一定時間、ルーンが使えなくなってしまう。
つまりティアナはファルケンハインの指示で、すでにメリドの体に触り、彼のルーンを封じていたのだ。

「嘘だと思うなら試してみたらいい」
メリドにはアキラと違い、キャンセラに対する知識がなかった。

だから当然試してみた。短いルーンを唱え、何も発動しないのを確認した。

「まさか、本当にそんな能力の人間がいるというのか」

メリドは生まれて初めてその存在を学習することになった。自分の体で。

「どのくらいだ？」

メリドはティアナに尋ねた。

ルーナーにとってルーンが使えない事ほど恐ろしいことはない。それはまるで裸で猛獣が闊歩する森に放り出されるようなものだった。これが戦場ならば、おそらくどんなルーナーでも恐ろしさと心細さで冷静では居られなくなるだろう。メリドにとって幸運だったのはそこがもはや戦場ではない事と、地震の揺れがかなり収束してきたこと、そして何より一緒にいる人間が敵ではないことだった。

「それは、私とお前との相対的な力関係で変わるから、一概には言えない」

「因みに言っておくと」

ファルケンハインはティアナの言葉を継ぐように言った。

「我らの賢者様は三分程だった」

「そうか」

メリドはホッとした。ならばそれほど長時間ではあるまいと思ったからだが、続くティアナの言葉がその安堵を無残に打ち砕いた。

「我がシルフィード王国が誇るバードの一人は一週間ほど使えなかったがな」

「なんだと？」

メリドは思わず激昂して立ち上がりかけた。それほど驚いたのだ。

ティアナが冗談を言っているのではないことは、短いが、今までの会話を聞いていてもわかる。だからこその驚愕だった。

バードとは国家の持つ最上位のルーンを受け継ぐ職であり、要するに国が管轄する範囲においては最も能力が高いルーナー達である。

それが一週間も能力不全になるということは……。

「キャンセラの事は噂には聞いたことがあるが、全くもってすさまじい能力だな。なるほどそれなら」

アキラは感想を素直に口に出し、しかしそれを途中でやめた。

「それなら？」

「いや、失敬。なんでもない」

それなら戦時中にかり集められて利用した後は抹殺されたという理由も理解できる。アキラはそう言おうとして口をつぐんだのだ。

キャンセラという特殊な力を持つ者は、もはや絶滅しているとは聞いていた。

（これでまた）

アキラはしかし、もう考えないことにした。

―（ミリアのあっけにとられた顔を思いっきり拝ませてもらわねば割に合わんな）

そう心の中で嘆息するしかなかった。

一気に黄昏れたアキラとメリドを一瞥すると、ティアナは視線をエルネスティーネに戻し、のんびりした声でこういった。

「それにしても、お父上がそのような名前の鳥を飼っていたとは初めて聞きました。良いお話ですね」

「え？」

今度はエルネスティーネとファルケンハインがティアナの言葉でアキラ達と同じように小さく肩を落とすことになった。

# 第五十六話　キュアの本

アプリリアージェは大きく息を吸ったところで、それを止めた。地面に崩れ落ちているエイルを見て反射的に大声で呼びかけようとしたのだが、強靱な理性に裏打ちされた計算が働き、それをかろうじて押さえつける事に成功した。

「リーゼ」

代わりにすぐ横にいる仮面をつけた長い銀髪の小さな仲間に小声で呼びかけた後、類い希なこの知将は滑るようにエイルに近づくと、脇に従うように寄り添った。そしてルーンで茶色く染まった頭を、自分のマントを広げて隠すように覆った。

それに一瞬遅れる形でエイルの反対側の脇を同じように固めたテンリーゼンがマントで下半身を覆った。

「エイル君！」

大きな地震に右往左往しているジャミール兵の様子を視野に置きながら、アプリリアージェはマントの下に隠れたエイルに小さくそう声をかけた。

「ぐっ」

エイルは目を固く閉じ、歯を食いしばった状態で自分を自らの両腕で抱きかかえるようにしていた。その顔は蒼白で、額には玉のような汗が浮かんでいた。

「大丈夫ですか？まさか連中にルーンをかけられたのですか？」

アプリリアージェの問いかけに何かを答えようと口を開けるが、それよりも苦痛を堪えることに必死と言った格好で、とても会話ができる状態ではなさそうだった。ただ、唯一の意思表示として頭を横に振っていた。

【くっ、こんな時に！】
『エルデ、オレに代われ』
【代われって、何で？】
『いいから。オレに考えがある。だから早く代われって』
【何の考えか知らんけど、ムチャ辛いねんで】
『わかってる。そんなことわかってるさ。だから言ってるんだ。とにかく急げ』
【ようわからへんけど、わかった】

エルデから体の支配権を受け取ったエイルは、変わった瞬間に思わず大きなうめき声を上げると大きく身をよじった。
それを見たアプリリアージェは背中をさすろうとしてエイルにその小さな手を触れたが、そのとたん、ピクシィの少年はやけ火箸でもあてられたかのようにのけ反り、さらに大きなうめき声を上げた。
「――ごめん、発作……なんだ。触らず……そのままに……しといてくれ」
苦痛に身もだえながら、とぎれとぎれにそれだけを言うと、エイルはまた口を真一文字に閉じて歯を食いしばった。
「わ、わかりました。発作と言う事は、それはじきにおさまるんですね？」
エイルはその問いに小さくうなずいて見せた。
アプリリアージェにはエイルに何かの緊急事態が起こっていることだけはわかった。同時にエイルの言葉から、それが見た目の重篤さとは裏腹に生き死にすぐかかわるようなものではなさそうだという推理もできた。
エイルは「発作」と言ったのだ。彼にとっては既知の症状であり、「発作」なのだからやがては治まるという意味であろう。
だが、それは同時にアプリリアージェにある事も推理させることになった。
――（とびきりのハイレーンが唱えるルーンでさえ対処できないもの、

という事ね）

エイルはすでに痛みの感覚を失っていると言っていた。あの忌まわしい呪法のせいで。それはあらゆるルーンを寄せ付けぬ呪法で、もちろんエイルにはその解法はなく、唯一術者である「真赭の頤」（まそほのおとがい）によってのみ取り除く事ができるという。で、あれば。

アプリリアージェは羽織っていたアルヴスパイアのマントを脱ぐと、エイルの上にそっとかけた。体を「くの字」に曲げているエイルは小柄なアプリリアージェのマントでもすっぽりと覆い隠す事が可能だった。

アプリリアージェが今とるべき行動は一つ。時間を稼ぐ事。

もちろん、エイルが元の状態に戻るまで、である。それがどのくらいかかるのかはわからないが、どれだけかかろうとその時間を捻出する事が現状において彼女が掲げうる唯一の目的だと言う事は確かだった。

アプリリアージェは自らの脳を常態の何倍も活性化させて打開策を構築していった。

相手、つまり族長であるラシフ・ジャミールが完全に味方だと言う事がわかってさえいれば、問題はなにもない。だが現時点でその選択肢を選ぶ事はあり得なかった。

エイルも先ほど、それとなくアプリリアージェにその事を確認して見せたではないか。直接言葉には出さなかったが、エイルはこういったのだ。

「時間稼ぎの可能性がある」と。通路結界を作るのに時間がかかると言った時だ。それはアプリリアージェ自身も感じていた事だった。だからあの時エイルは「油断はするな」ときわめて婉曲な表現で隊を掌握する立場にある者に警告をして見せたのだろう。いや、念を押したと言うべきか。

もちろん、敵ではない可能性のほうが高い。嘘を言っている訳で

はないかもしれない。だが、少なくともラシフが我々一行を快く思っていない事は間違いない。

アプリリアージェにしてもその原因の一つには荷担しているわけで、ただ相手だけを責めるのは都合が良すぎるとは思っていたが、今になって思えばエルデのラシフに対するあの傲岸不遜な態度は相手に本当の悪意があるならあからさまにさせておこうとする戦略かもしれなかったのだ。

―（いや、それはないかな）

アプリリアージェそこまで考えて自分の意見を苦笑とともに否定すると、改めて現状を俯瞰した。

これでひとまず自陣の切り札ともいえる賢者の異変を彼らの目から隠す事は出来た。無理矢理ではあるが、地震に備えて従者が最大の防御の姿勢を取っていると見せられないこともない。少なくとも苦しみもがいている姿を見せるよりは幾らかましなのは間違いなかった。

あとはエイルの発作が治まるのを待つか、あるいはエイルが何らかの指示をするまで待機するしか手はなかった。触れられると辛い状態である以上、闇雲に動かすことは得策とは言えない。この場で待つしかない。

後は「もしも」の際の為の陣形だ。

エアが消えている今なら、ここにいる三人は普段の力が出せる。スカルモールドが出てこなければという前提ではあるが、ここの兵士であればエイルをかばいながらでも三人でしばらく持ちこたえる事はできそうだった。問題は遠隔攻撃ができるルーナーの存在だが、どちらにしろ戦闘が始まってしまえば苦しもうが悶えようがエイルを移動させるしか手はない。移動を続けていればルーンの直撃を受ける事はないだろう。その上でルーナーらしき者を各個撃破していけば何とか活路はありそうだった。

「こちらは心配はありません。それよりも里の人の救助作業を優先

してください」
　ようやく「客人」の様子に気付いた一人の兵が近づこうとするのを、アプリリアージェはそう言って追い返した。
「何かあれば指示してください。それまでは私がなんとかします」
　アプリリアージェの呼びかけに、エイルは歯を食いしばったまま、うなずいた。

【なあ、どうした？何か考えがあったんちゃうんか？おい、エイル！】
『前の時も……こんなに辛かったっけ？』
【「喰らいの呪法」が発動したんやから、こんなもんやろな。それより対処法って何や？】
『ないよ、そんなもん』
【え？でもさっき】
『少なくともお前はこの痛みから解放されただろ？ならオレの対処法は大成功だ』
【まさか】
『賢者様に恩を売っとくと何かいいことがありそうだしな』
【あほっ！そんなもんあらへん！】
『それから戦術的には、お前がこの痛みでヘロヘロになるよりオレがその役を請け負う方が合理的だろ？お前がいつも言っている事じゃないか。きっとリリアさんもそう言うと思うぞ』
【エイル……】
『あ、あと恩を売るってのはちょっとだけホンネな』
【くそ。そのまま悶えて死んでまえっ】

　エイルは痛みであまり思考が働かない状態だったが、この痛みは何に例えたらいいのだろうかと考えていた。後でアプリリアージェ達に説明する時に適切な表現があれば理解して貰いやすいだろうなと思ったのだ。

要するにそんなどうでもいいような事を真剣に考えるほど思考力が低下していたと言うことなのだが、もちろん当のエイルにはそこまで冷静な自覚が出来る状態ではなかった。

――（まるで……全身が歯の神経になって、それを針山で突き刺されまくっているような痛みだよな）

フォウで虫歯の治療をした時の記憶が甦ったエイルは、そんな事を考えて涙を流しながら身もだえるしかなかった。出来ることはただ痛みに耐えること。そしてそれが去るのを待つ事だけであった。

どんな麻痺・覚醒ルーンも受け付けない、「継続する失神寸前の痛み」……いや、痛みで失神したとしても、その痛みで覚醒してしまう、それほどの痛み。痛みはいずれは去る。だが、去った後にはまた一つ、何かの感覚が失われているのだろう。

――それがエイルの背負った「喰らいの呪法」による浸食現象だった。

そうこうしているところへ、ひょっこりとルーチェが現れた。母親のイブロドとともに居住区へ向かっていたが、大きな揺れがある程度収まったと判断したのだろう。客人の様子を見に現れたのだ。

「賢者様はどうされたのですか？」

一目見て普通の様子ではない事はルーチェにもわかった。小さなうめき声も聞こえている。

しかしアプリリアージェはこの状況下における対処法をすでに構築済みだった。想定される様々な状況下で最良と思える対処法を高速に、それでいて綿密に構築できる才能、それが「希代の名将」と呼ばれる所以であった。例えそれは軍団や師団を指揮する大きな軍事作戦などではなく、こんなちっぽけな状況であっても、それを等しく行える才能こそが偉大なのである。

それは本当に綿密な対処戦術で、ルーチェに対して語りかけるアプリリアージェ自身の台詞までもがすでに彼女の頭の中には用意されていた。

「ルーチェにお願いがあります」
そのセリフをアプリリアージェは読み始めた。
「はい、なんなりと」
マントの下の「賢者様」を気遣うような眼差しで見ながら顔を上げてそう台本通りに返事をしたルーチェににっこりと微笑みながら、アプリリアージェは台本に書かれた次の台詞を読んだ。
「実は賢者様は大変な地震恐怖症なのです」
「え？そうだったんですか」
驚くルーチェ。
台本通りの素晴らしい演技……いや、反応だった。
「ええ。でもその事を賢者エイミイは大変気にしておられます」
そして顔をルーチェに近づけると、声を潜めて耳元でささやいた。
―（普段がああいったちょっと偉そうな態度の方です。この事がバレると威厳がなくなりますからね）
―（あ、それはそうですよね）
つられてルーチェも同じようにひそひそ声で応えた。
「そこで相談なのですが、あまり人目に付かず落ち着ける場所はないでしょうか」
「だったら、迎賓殿がすぐそこです。もともとばばさま……いえラシフ様もそこにご案内しようとしていたのだと思います」
ルーチェが指さす「迎賓殿」と言われる高床式の木造の建物は今居る大通りの向こうの端の角に位置していた。確かに近い。ここからだとざっと二百メートルもないだろう。
「ありがとう。では勝手に上がらせてもらっていいですか？それから我々が入る際、誰にも見られないようにあらかじめ人払いをお願いしたいのですが」
「人払い？」
「ええ。賢者様ともあろう方が、付き人に抱きかかえられて入るなどというところは兵には見せられませんからねえ」
「うふふ。そうですね。では先に行って命じておきます。少し経っ

たらお越し下さい」
　ルーチェはそう言うと、余震が続く中、中腰になりながらダーク・アルヴらしい軽い身のこなしで迎賓殿の方へかけていった。それを見てアプリリアージェはアトラックに声をかけた。
「アトル」
「はい」
「合図があったら、エイル君をマントにくるんだまま抱きかかえて一気にあの迎賓殿に入って下さい」
「了解です」
「念の為に言っておきますが」
「わかってますとも。エイルが暴れようがもがこうが、火を吹こうがあの建物に入るまでは容赦しません」
　アプリリアージェはアトラックの言葉を聞くとにっこりと微笑んで見せた。
「口をふさぐのも忘れないで下さいね。火を吹かれると大変です。短時間ですから息などできなくても大丈夫でしょう」
「合点です、首領」
「うふふ」

『うふふ、じゃねえっ！』
　二人のやりとりを聞いていたエイルは焦った。この状態で抱きかかえられるなど言語道断、いや、絶体絶命だった。もしそうなれば地獄のような痛みにさいなまれるのは確実なのだ。
　エイルにとっては彼らの会話は救出の為の手はずなどではなく、拷問の相談に興じる悪魔の姿に等しかった。そしてエイルにとってそれは断じて阻止しなければならない計画と言えた。
　だが。
　言葉にすることができなかった。痛みに耐えて意識を保つのが精一杯だったのだ。
　痛みの波が小さくなった時、「やめろ」と言おうとしたが、その

時頭上からアプリリアージェの拷問開始を告げる声が非情に轟いた。
「今です」
次の瞬間に全身の神経という神経を無数の釘で打ち付けられたような激痛が体全体に走り、エイルはあっけなく意識を飛ばした。

意識を取り戻した時には、あたりは薄暗くなっていた。どうやら建物のようだった。それだけ認識した直後に、再びあの痛みが走り、エイルは小さなうめき声とともに再び意識を失った。

エイルが次に意識を取り戻したときには、幸いな事に痛みは去っていた。発作が収まっていたのだ。だが、視界がはっきりしなかった。
高い板作りの天井が見えた。
ぼんやりとした明るさだが、物を識別できないというほど暗いわけでもない。天井の板張りだけでなく、柱や壁もすべて木でできていることから、そこが洞窟の中などではなく木造の建物の中なのだと言う事はわかった。寝かされているのは比較的広めの板張りの部屋で、そこに厚手の敷物が敷かれ、エイルはどうやらその上に横たわっているようだった。体の上には薄い布団のようなものもかけられている。

いったん目を閉じる。
そして再び開ける。
エイルが目覚めたことにいち早く気づいたのだろう。左側にアプリリアージェが微笑しながらのぞき込んでいるのが彼には見えた。
その横にいるのは銀髪の少年……何かものすごい模様が顔に見える……そう、テンリーゼンだった。その肩にはちょこんと丸く茶色いぬいぐるみが……いや、それは「マナちゃん」に違いなかった。

「気がつきましたか」

アプリリアージェが声をかけた。
その声の主とは反対側にいる人物に顔を向ける。アトラックだ。
こちらはアプリリアージェと違い、やや心配そうな顔でのぞき込んでいる。
「驚いたぞ。もうなんともないのか？」
そう声をかけるデュナンの青年の横では、茶色の長い髪をお下げにしたダーク・アルヴの少女が思い切り心配そうな顔でのぞき込んでいた。
「目が……」
ルーチェは開かれたエイルの目を見て驚いたようにそうつぶやいた。
横になっていた賢者の髪の色が茶色から黒に変わっていた事にも驚いたルーチェだが、茶色い瞳が黒く変わっていたのには、さすがに息を呑んだ。

『今の反応……失神している間に髪の色と目の色が元に戻っているみたいだな』
【それはええけど、エイル、もう一回ゆっくり目をつぶってみ】
『いや、もう決まりだろ』
【くそ！】

「体に異変は、ありませんか？」
何も返事をしないエイルに、アプリリアージェが再度そう声をかけた。
エイルはいったん目を閉じるとそれをゆっくりと開き、上体を起こした。アトラックがそれを補助する。
「ごめん、リリアさん」
「え？」
「ルーナーの方は問題ないんだけど、剣士の方は、もうあてにしてもらえないかもしれない」

顔を見合わせるアプリリアージェとアトラック。
「右目が、やられた」
目覚めたときから視界が狭かった。
左側にいたアプリリアージェ達の姿はそのままで見えたが、右に座っていたアトラックとルーチェの顔は、頭を少し右に曲げなければ視界に入らなかった。
右手を開き、目の前に持ってくると、それをゆっくり右側に移動させてみた。そしてあるところでそれを止める。
「この辺で消えるのか」
そう言うと手を下ろして小さくため息をついた。
「そうですか。やはりあの呪法の発作でしたか」
気の毒そうな声色でアプリリアージェがそう言うとエイルはうなずいた。
「覚悟はしてたつもりなんだけど、片眼が死ぬとさすがに凹むな」
アプリリアージェは小さくため息をつくと、アトラックを見やった。
こう言う時に慰める役としては自分ではなく彼が最適だと思ったのであろう。何か慰めろと水を向けたのだ。
さすがにアトラックにも事態は飲み込めていたが、とは言えいったいどう声をかけていいのかわからなかった。何を言っても慰めにはならないような気がしたのだ。
アプリリアージェもその辺の気持ちはアトラックと同様だったが、彼女がアトラックと違うのは相手を心から気の毒に思っていようと、冷静に判断ができる本質を持っている事だった。
「でも良いのですか？ルーチェもいるのですよ」
片眼が見えなくなった事をルーチェの前で言ってしまうということは、ラシフ達に知れるという事だった。相手の出方がまだよくわからない現状において味方の弱みを知られる事は不利になる事はあっても有利に働く事にはならないと考えるのは自然な事であろう。

だが、エイルはわかっているという風にうなずいた。
「ああ、エルデがそうしろってね」
「なるほど」
エルデにはそれについて考えがあるという事を聞いて、アプリリアージェはひとまずは安心した。
ジャミールの里や賢者との関わりなど、アプリリアージェ達にはおよそ考えが及ばない次元でエルデが思いを巡らせているのは確かなようだった。勝手知らぬ里にあっては知識のある者に従うべきだというのも又アプリリアージェの戦術の一つだった。

「あいつに代わるよ。ルーチェに回復ルーンもかけないとね」
エイルはそう言うとルーチェの方を見て寂しく笑って見せた。ルーチェは今目の前の賢者がいったい何を話しているのかが理解できず、ただきょとんとするしかなかった。
だが、目の前で上半身を起こしている賢者が纏う空気のようなものが一瞬でガラリと変化した事は彼女にもわかった。それまでの憂いを帯びたどことなく脆さを感じるような人間が一瞬で人を寄せ付けない氷のような凍気を放っているような錯覚にとらわれたのだ。
いや……。
ルーチェは自分の全身に鳥肌が立っているのを自覚した。
それを知って思わずごくんと音を立ててつばを飲み込んだ。錯覚などではなく、今感じたものは恐怖なのだとその時確信した。
自分を見つめるその黒い瞳に宿る力は強く、そこには表現しがたい狂気のようなものが潜んでいるのではないかと思えるほど深く輝いていた。
エルデの変化を感じていたのはルーチェだけではなかった。アプリリアージェとアトルも今までにないエルデの雰囲気に戸惑っていた。
「案ずるな、ダーク・アルヴの幼きルーナーよ」
意志とは無関係に思わず後ずさったルーチェを見てエルデは落ち

着いた声でそう言った。古語ではない。南方語、すなわちファランドールでの標準語でそう言った。

「余を見て本能的に恐怖を感じたのであろう？」

そう言うエルデの眼差しはさっきと代わらず強く、見た事もない不思議な黒い瞳はじっと見つめていると吸い込まれるようだったが、それでもその落ち着いた声を聞くと鳥肌が少しずつ治まってくるのを感じた。

ルーチェは首を横に振って見せた。

エルデはそのルーチェの様子を見ると、苦笑して見せた。

「子供の方が敏感なんやろな。ちょっと油断するとこうなるんや。かんにんな」

【エイル？】

『ん？』

【起きてるか？】

『ああ。なんか一瞬気が遠くなったけどな。さすがに疲れたのかな』

【そっか。気をしっかり持って大好きな妹の事でも考えとき】

『はあ？なんだよ、それ？』

【なんでもええねん】

『お前、時々わけがわからん事をいうな。って、時々でもないか』

【まあ、そうかもな。で、マーヤは元気か？】

『知るかよ。いや、元気でいてくれないと困るけどな』

【美人、なんやったな】

『何度も言ってるだろ、妹だからいいけど、あれが他人だったら美人過ぎてビビるくらいなんだぜ？少なくともこっちから声なんかかけられないだろうな。まあ、だから兄貴としてはいろいろと心配なんだよ。こうしている間にも……』

【ふーん】

『ふーんって、お前なあ』

【聞いてるこっちが恥ずかしなる位の兄馬鹿振りやな】

『何なんだよ』
【べつにぃ】

「もっと近くへおいで」
エルデはそう言うとルーチェにそっと左手を伸ばした。
ルーチェは差し出されたその手とエルデとそしてアトラックの顔を見比べた。そしてそのアトラックがにっこりと笑ってうなずくのを見ると自分も小さくうなずき返してみせ、すぐに視線をエルデに戻して手が届くところまで近づいた。

アトラックはルーチェのその姿を見ながら、どうにも複雑なものを感じていた。
彼はなぜか自分がルーチェに懐かれているのを自覚していたが、懐かれる理由がよくわからなかった。
ラウ・ラ＝レイやファーン・カンフリーエ達が見守る中でルーチェが目を覚ました時に、最初に彼女の目に写ったのが、覆い被さるようにしていたアトラックの顔だった。
ぼんやりとした目に映ったアトラックは、目が合うとすぐににっこり笑いかけた。そしてこう言ったのだ。
「心配すんな。俺たちは敵じゃない」
その声は何の抵抗もなくルーチェの心にすうっと吸い込まれるように染み渡った。
「むしろオレはお前の味方だ。だから怖がる事は何にもないぞ」
次のその言葉もストンと心にまっすぐ落ちてきた。ルーチェはもやがかかったような記憶を回復するよりも前にアトラックの二つの言葉を先にはっきりと心に刻みつける事になったのだ。
ルーチェはその言葉の主である優しい笑顔に向かってふらふらと手を差し伸べていた。アトラックはその手を迷わず取ると、ルーチェの体をそっと抱き起こした。
「怖がる事はないさ。俺たちはお前に何もしない。だから安心して

目を覚ませ」

アトラックには年の離れた妹や弟が多くいた。言ってみれば子供をあやすのは得意技の一つだったのだ。だから真っ先に声をかけて安心させようとしたのだが、それがルーチェの心のツボにはまったのであろう。

ジャミールの里ではルーチェは次期族長として扱われており、母親でさえ手放しの愛情を垂れ流しにするような事はもはやなかった。

だがアトラックはそんな背景を知るよしもない。

ただ、子供だと思っていた少女が腕の中で微笑むその顔に、アトラックはどうにもただの少女とは思えない色気のような物を感じて、その後ずっと戸惑っている自分の気持ちを持て余しつつあった。

「冬眠」からさめて徐々に正気を取り戻したルーチェは周りにいる人間を見渡した。その中の三人もの人間が三眼を持っていたことにまず驚かされた。

それはエルデの指示で全員が賢者である事をルーチェに対して視覚的に示すためにそうしていたのだが、それは図に当たり気を失う直前の記憶がすべて戻る頃には彼女は冷静に現状を把握する事ができていた。周りの人間が敵ではないという事がわかったからである。ルーチェも又「真赭の頤」と出会った事があり、賢者が三眼を持つ者である事を知っていたのだ。

そしてその話の間中、ずっと自分の肩に手を置いてくれていたアトラックの手の温もりを好ましいものだと感じて、いつしか無意識にアトラックの温もりを追ってしまうようになっていた。

ルーチェは賢者を除くと里人以外の人間を見た事も、ましてやデュナンを見たのもこの時が初めてだった。つまりはアトラックに対する大いなる好奇心と自分に注がれる笑顔からくる安心感が、男性に対する好意に変わるのはルーチェの中ではあっという間であったと考えられる。

だからエルデの「気」に圧倒され、恐怖に駆られたルーチェは思

わずアトラックの腕を抱き、その顔を見てしまったのだ。
だが、もちろん目の前の賢者に恐怖する理由はルーチェにはない。
自分が恐怖心を感じた事を恥じ入りながら、彼女はのばした自分の手をエルデがそっと取るのをじっと見つめていた。
「ファーデュ・アーデ」
ルーチェが気づかないうちに取り出していた三色の儀仗を右手に持ち、いつものようにそれを水平にかざすように構えると、エルデは相手によく聞こえるようにはっきりとした声に出してルーンの認証文を唱えた。
そして唱え終わった後で、握ったルーチェの手の甲に儀仗ノルンをそっと当てた。
「終了。これで眠気やけだるさはもう無いはずや」
ルーチェはエルデにそう言われて思わず手を頭に当てた。確かに今までのぼんやりした気分が消えていた。気を抜くとおそってくる眠気もなく、頭も軽い。
自分に冬眠ルーンがかけられていたとは聞いていたが、その後遺症のせいか目覚めてもどこかふわふわぼんやりしていて油断するとスッと眠りに入るような状態だったのだが、それが回復しているのは間違いないようだった。

「ありがとうございます」
ルーチェは思わずそういうと深々と頭を下げた。
「かしこまる必要はないで。ウチらはもう友達やろ？」
「滅相もございません、賢者さま」
ルーチェはそう言ってかしこまったまま顔を上げなかった。

森にある「現世の道」で目を覚ました時に見たエルデの姿は異形の三眼だった。だがさほど恐ろしいとか神々しいとか、ましてや邪悪などという感情はわかなかった。三人の賢者のうち、一人エルデだけが笑いかけてくれていたし、その笑いには普通に人としての優

しさが感じられたからだ。
だが、今目の前にいる賢者はあの赤い第三の目こそ開いてはいなかったが、何かが決定的に自分たちとは違う気がしていた。恐ろしさはもう感じていなかったが、それでもおよそ「友達」などと言う関係に居られる訳はないのだと理性ではなく本能が確信していた。
エルデはルーチェのその態度を見て小さくため息をついた。ルーチェを威嚇するつもりなど全くなかったのだが、どうしようもない怒りを制御する事ができないまま、エイルから体を預かった事が悔やまれた。
すでに人間関係ができているアプリリアージェやアトラック、それに人間関係は全くできてはいないものの長く一緒にいるテンリーゼンの三人については特に問題はないにしろ、ルーチェがエルデに心を開く事はもはやないだろうと思うと寂しかったのだ。
だが、そこまで考えた時、エルデは思わず小さな笑いを漏らした。その笑いは小さいが声に出た。
その笑い声を耳にしたルーチェは思わず顔を上げて黒い髪と黒い瞳の少年の顔を改めて見つめた。うつむきがちなエルデの瞳はとても寂しそうで小さな笑い声をたてたはずの口元は片方だけが持ち上がっていた。その表情を見て、ルーチェは今耳にしたものが、笑い声ではなく、すすり泣きではないかと錯覚した。
その微笑はエルデの心の深淵にある闇のようなものだった。自分の正体を目の前に突きつけられたような気分に陥る時に生じる投げやりな苦笑。

『どうした？ちょっと変だぞ』
【いや、ホンマに何でもない】
『そうか』
【それにしても片目が見えへんのはさすがに距離感とかわかりにくいな】
『だな。慣れるまではいろいろと気をつけないとな』

【そやな】

「ああ、すまんすまん」

エルデはすぐに真顔に戻り、ルーチェの頭にそっと手を乗せるとゆっくりとした声で切り出した。

「聞きたい事があるんやけど、ええかな？」

ルーチェはこくりとうなずいた。すでにエルデに対する畏れに取り込まれている彼女の中には、エルデの言葉に対して拒否するという選択肢は存在していなかった。

エイルがエルデに変わった際の雰囲気の変化はルーチェにはそれほど大きな影響を与えたと言う事なのであろう。

「俺はユートに恩返しをしたい」

できるだけ落ち着いた声で、エルデはそうルーチェに話しかけた。

え？と小さく声を出すと、ルーチェはエルデを驚いたような顔で見つめた。

エルデはそんなルーチェに、にっこりと笑いかけながら続けた。

「ユートとは兄弟弟子やった。あいつは次期族長候補で、族長の孫やっていうのは聞いてた。それに、妹が居るとも言うてたな」

「兄様の事をご存じなのですね」

エルデはうなずいた。

「もうずいぶん昔の話やけどな」

「私は兄が里を出た当時、まだ子供でした。兄がやろうとしている事はわかっていましたが、恥ずかしい事に事の重大さについては全く認識していなかったのです。修行中の兄はどんな様子だったのでしょう？」

「間違いなく優秀なルーナーやった。不幸な事故がなければ今頃はこの里を救う事ができてたやろな」

「おそれながら、賢者様は先ほど『恩返し』とおっしゃいましたが？」

「うん」

エルデは目を細めると、遠くを見るようにルーチェから視線を外した。
「歳が離れてた俺の事を気に掛けて、ずいぶん可愛がってくれた。そのお礼をしたいんや」
「お礼、ですか」
「ユートは里を救うためにルーンの修行をしてた。賢者になるのが目的やのうて、高位のルーンが使いこなせるだけの力を得るために来たと言うてた。つまり、ユートの代わりに俺がその役目を引き受けたい、という話や」
ルーチェはびっくりしたように目を見開いた。
「でも、あれは」
「知ってる。古代ルーンなんやろ?それも門外不出で代々の族長にしか伝えられへんっちゅう話やな。あ、もちろんユートがそんなことをぺらぺらしゃべったんやのうて言葉の端々に出る情報を元に俺が組み立てた推理に過ぎひんのやけど。どや?間違ってないやろ?」
「その辺で我が孫娘を解放しては下さいませぬか」
ルーチェが返事をかえそうと口を開いた時に、床に届こうかという長さの薄茶色の髪をふわりと揺らしてラシフが先触れもなくふいに現れた。それを見たアプリリアージェは感覚を研ぎ澄まして部屋の外の様子をうかがったが、やはり供を連れている気配はなかった。入り口に待機させているのかも知れないが、どちらにしろ珍しい行動だと判断していいようだった。
「ご病気か?」
エルデが床に入っているのを見ると、ラシフは眉をひそめて怪訝そうに尋ねた。
「ああ」
エルデは肩をすくめた。
「どうやら俺は地震が苦手らしいんや」
そう言うと恨めしそうな顔をアプリリアージェに向けた。

「具合が悪いようでしたら医者を呼びますが？」
「必要ない。もう治った」
エルデはそう言って首を横に振った。ルーチェはエルデとラシフを見比べながら、自分はどうしたものかと思案していたが、ラシフがエルデの横に少し離れて正座するのを見て、自分は後ろに下がる事にした。
その様子に気付いたアトラックが手招きすると、ルーチェはそれまでこわばっていた顔を俄にパッと輝かせ、自分を招いた大柄なデュナンのそばに滑るようにやってきた。その様子をアプリリアージェがいつもの微笑みを浮かべながら、じっと見ていた。

「お仲間は無事のようです。我が里の兵士長と共にいるのを確認しました」
ラシフはルーチェの様子をあまりおもしろくなさそうな顔で追っていたが、それについては何も言わなかった。
「そうか。戻ったのか？」
エルデの問いにしかしラシフは首を横に振った。
「結界通路を開いたわけではなく、向こうを覗いただけです。先ほども申し上げました通り結界通路を開くには精霊殿の力が必要なのです。修復は急がせておりますので今しばらくお待ちを」
「さっき言うてた鍵はどうなったんや？」
「そちらはもう整えました」
「そうか。さっきの地震で民家のほうも被害が出てるんとちゃうのか？」
エルデのそれは「精霊殿もいいが、そちらの修復も大丈夫か？」という問いかけだったが、ラシフは要らぬ世話だという風に首を振って見せた。
「ご心配には及びません。もともと地震の多いこの土地。よほどの事がない限り大きな損害は出ない造りになっております」
「そやのに精霊殿は壊れた」

「あれは……」
ラシフは痛いところを突かれて唇を噛んだ。
エルデの指摘はもっともだった。先ほどの地震はここのところでは最大規模の地震だった。民家にもそれなりの被害が出ていたのだ。そもそも精霊殿のような大事な建物は一番の地震対策がとられているはずであった。
―（やはりこちらの考えるような下手な小細工やごまかしはきかぬ相手ということか）
ラシフは観念することにした。
慣れぬ自分の駆け引きが通じる相手ではないと判断したからだ。
もちろんその判断は正しいと言えた。ラシフの認識外ではあるにせよ先天的な駆け引きの才能があるとしか思えないエルデとは別に百戦錬磨のアプリリアージェという別の存在もある。外界と断絶して外交という言葉とはおよそ無縁だったラシフが敵う相手でない事は明らかだった。
「あと一時ほどで食事の用意が整います。隣の座敷に用意をさせますので今しばらくお待ち下さい」
「ふん」
エルデは腕を組んだ。ラシフには右側に座られたため、その表情を見るためにすこし顔を曲げる角度が必要になった事が少し煩わしかったが、それよりもこの里の人間が敵にならないという保証を取り付けられるかどうかが解らない今、ラシフの訪問の意図が気になっていた。
「そんな事をいいに来たわけやないんやろ？族長が先触れも供もなくわざわざ出向いてくるというのはなんか重要な用件があるからやないんか？」
アプリリアージェは小さくうなずいた。全く同意見だった。
彼女は個人的にラシフに尋ねたい事がいくつかあったのだが、エルデと状況把握が共有できている事が解ったので、この場はしばら

くエルデに任せる事にした。ただ、念のために部屋の外への注意を怠らないようにテンリーゼンとアトラックには目配せをした。
「それでは単刀直入に申し上げます。この里へ来られた目的を伺いたい」
ラシフは伏せていた目を上げてエルデと正対するとしっかりとした口調でそう告げた。
「さっきも言うたやろ。そもそも偶然なんやって。近くまで来たさかい寄って見よか？っちゅうノリで足を向けただけや。それやのにいきなり殺されかけるとかあり得へんやろ？いや、はっきり言うけどその辺の奴らやったら全滅やろな」
「スカルモールドを退けた、ということですな」
エルデはうなずいた。
「「エア」の中で、ですか？」
「ルーチェが言うてたやろ？「エア」の中でもルーンを使える賢者がおったんや。もっともこっちには凄腕の剣士がおるからルーンがのうても時間さえあればスカルモールドを行動不能にする事自体はできるんやけどな」
「賢者様というのは「エア」でもルーンが使えるのですか？」
エルデは首を横に振った。
「「エア」を作り出すルーンストーン……精霊石の力はたいしたもんやと思うけど、万能やないっちゅう事を知っとく方がええ」
ラシフは精霊石による「エア」が意味をなさない相手がいるという事実に動揺を隠せないでいた。エルデは顔色にそれが出たのを見て少し声色を和らげた。
「まあ、それでも有効や。「エア」で普通に詠唱が通るルーナーはそうそう居るわけやないからな」
「はあ」
「と言うわけや。俺はお前の知ってる「真赭の頤」の弟子で、さらにお前の孫にあたるユートと一緒に修行した事もある。その旧知の里に挨拶でもしよかな、って思うて何が悪い？」

「いえ、それは」
「それに、今ルーチェに話してた事や。聞いてたんやろ？俺でできる事があれば手助けをしてやろうかな、っちゅう気まぐれも込みや」
「その件ですが、さすがにそれを賢者様にお願いするのは申し訳がございません」
エルデは目を細めてラシフを見た。
「ユートはただ『里を救うための高位ルーン』と言うような事しか言うてへんかった。でもさっきの地震でわかった。活火山の麓の里で頻発する地震。それを抑えるルーン、それも相当高位のものがあるっちゅう事やな？」
エルデの問いかけに、ラシフはうなずいた。
「その通りです。しかし、それは里人にしか伝えてはならぬと言われている禁術でございます」
「だがお前にはその術は使えへん。そやろ？」
ラシフはまたもやうなずいた。
「恥ずかしながら」
「それも解っている。そやからそのルーンを使える可能性があったユートを修行に出したっちゅう訳やな。そやけど里人限定とかに拘らずに「真赭の頤」になぜ頼まへんかった？」
「それは」
「答えにくかったら俺から言うたろか？マーリン正教会の人間に里を救ってもろうたら族長としての沽券にかかわるからやろ？おおかた族長しか唱えたらあかんっちゅうような但し書きが付けられて里の秘宝みたいに扱われてるんやろな。で、それがあまりに強力なルーンやから、その秘密を知った誰かに奪われるんを恐れてる、と。で、それが俺らやないかと怪しんでる。ちゃうか？」
ラシフには返す言葉がなかった。エルデの推理はすべて当たっていたのだ。沽券云々はともかく、たとえ大賢者と言えど、里人以外の人間に依頼するという事は族長の立場としては簡単にできるものではなかった。

「で、どうすんねん？さっきの地震の具合からするとそうそう時間がないんとちゃうんか？ルーチェは自分が「真赭の頤」の弟子になる予定や言うてたけど、今から修行して間に合うと思てるんか？」
「……」
「さらに言えば、や。たとえばルーチェが十年修行したとして、そのルーンを詠唱できる高位ルーナーになれるという保証はあるんか？」
「ルーチェは、ルーナーとしての能力は里で一番ある」
「ユート以上の、か？」
ラシフはエルデの指摘に言葉を失った。
「聞きとうないかも知れへんけど、敢えて言うとく」
エルデはそんなラシフの様子を見て続けた。
「ルーチェは確かに素性のええルーナーやと思う。けどな、「真赭の頤」に師事してたとえ今から二十年修行したとしても、ユートを超える事はまず出来へんで」
エルデがそうピシャリと言うと、ラシフは端から見ても解るほどがっくりと肩を落とした。
アトラックはエルデのある意味容赦のないルーチェ評を聞いて、思わずそばにいる本人の顔色をうかがったが、当のルーチェはそんなアトラックの気持ちに気付いたのか、少し寂しげな顔でにっこり笑い返しただけだった。
つまりエルデが指摘した事はルーチェ自身も、そしてラシフにもわかっていた事なのだ。現在の里人の中では飛び抜けて潜在能力が高いとは言っても、ルーチェには兄であるユートほどの力はないということを。
そしてその事が何を意味するのかも、もちろんわかっていた。
しかし、だからこそラシフはある決心を胸に「賢者様」の前に現れたのだ。
「猊下にはすべてお見通しのようですね」

ラシフは少しの沈黙の後、本題を切り出した。エルデは「やっとか」という顔でラシフの次の言葉を待った。
「勝手とは存じますが、その件についてお願いがございます」
エルデはうなずいた。
「大賢者「真赭の頤」さまにお取り次ぎ下さい」
ラシフはそう言うと指先を綺麗に揃えて両手をつき、額が床につくほど頭を低く下げた。長い薄茶色の豊かな髪が小さな両肩から滝のように流れ落ちると、それはまるで扇のような形を描いて床に広がった。
エルデはしかしあからさまに不機嫌な声色で答えた。
「おいおい、お願いって言うのはそっちか？」

『想定外？』
【うーん】
『よっぽど嫌われたみたいだな。まあ、族長の気持ちは痛いほどわかる』
【言うとれ】
『こうやって頭下げるのもものすごい屈辱だって思ってるんだろうな。なんかオレ、申し訳なくなってきた』
【にしても、や。あくまでも我々は信用でけへん、っちゅう事やな。頑ななこって】
『もちろん助けてやるんだろ？』
【そのつもりなんやけど、な】

ラシフは頭を下げた姿を崩さずに、続けた。
「ご推察の通り、レイジノ山の大噴火は明日にも起こるやも知れません。さらには猊下のご指摘の通り、おそらく我々にはルーチェが賢者の力をつけるまで待つ猶予などないのでしょう」
「そやから大賢者の力を借りたい、っちゅうことやな。目の前の駆け出しの賢者ではお話にならんわ、と言うわけか？」

エルデの怒気を含んだ言葉にラシフは体を硬くした。
「決してそう言うわけではございません。ただこの里の事をよくご存じの大賢者様におすがりしようと考えたのです」
「この期に及んでまだそういう詭弁を使う余裕があるんやな。ご立派な事や。でもな、その願いを聞き届けるわけにはいかへんな。理由は……」
ラシフはエルデの言葉に一瞬体を強ばらせたが、沈黙を守った。
エルデはいったん言葉を切るとラシフのその様子を見て目を閉じ、小さく深呼吸をして話を続けた。
「大賢者「真赭の頤」は死んだ」
さすがにその言葉はラシフの顔を上げさせるのに充分だった。視線の先に自分を見つめるピクシィの少年の苦しげな顔があった。その表情で、今の言葉が冗談ではないという事がラシフにはわかった。
喉元まで出かかった言葉を飲み込むと、族長は強くまぶたを閉じた。

「二藍の旋律」ラウ・ラ＝レイにそう聞かされたばかりのエルデにとって師の他界を違う人間に事実として伝える事にはさすがに抵抗があったのだろう。だからエルデは出来ればその事は言わずにいたかったのかもしれない。頭では事実だと理解していてもそれを納得できないでいる状態で第三者に「真赭の頤」シグ・ザルカバードが死んだと伝える事……それは自分自身の中でそれを事実として定着させる事にもなる。だから自らの目でそれを確かめるまでは保留にしておきたかったのだ。
だが、エルデは目の前にいる頑なな族長を説得させる材料の一つとして「真赭の頤」の死を利用する事を選んだ。
エルデはラシフを決心させる為には選択肢を狭めてやる以外に方法はないと判断していたのであろう。

「確かや。俺も人づての話やから詳しい事は解らへんけど、どうや

ら師匠は賢者の法に触れたらしい。だから報いを受けた、という話や」

「まさか、法に触れたとおっしゃいましたか？」

「それは部外者が口を挟むべき問題やない。そやろ？」

ラシフの言葉を途中で遮るとエルデはそう言って追求を拒絶した。

「納得してもらう為にもう少しだけ付け加えると、師匠は三聖の一人「蒼穹の台」に処刑されたそうや」

ラシフは一度あげた顔が下がっていくのを感じた。三聖は唯一賢者を裁く事が出来る存在だということはラシフも知っていた。

―（いくら待っても来ないはずだ）

これで「真赭の頤」がもう何年も里に姿を見せない事の説明がついてしまった。賢者がそう簡単に死ぬはずがないという思い込みをしていた自分が愚かで滑稽だった。

―（しかし、これでは）

「ラシフ・ジャミール」

がっくりと頭を垂れたラシフに、エルデが改まった声で呼びかけた。ラシフは慌てて顔を上げた。

「はい」

「お前には――いや、ジャミール一族に今ある選択肢は二つや」

エルデはラシフとルーチェを見比べると言葉を続けた。

「俺にその古代ルーンを委ねるか、もしくはこのまま火山の爆発に巻き込まれて全滅するか、や」

「しかし」

エルデの言葉を予想していたのだろう。ラシフはすぐに反応した。

「恐れながら猊下の力を我々は存じません。あの古代ルーンは……」

エルデは黙れ、という風に手のひらをラシフの方へ突き出した。

「まだそんな事を言うてんのか？」

ラシフはエルデの剣幕に気圧されて、再び頭を下げた。

「一応言うとくけど、俺はお前が知ってる大賢者「真赭の頤」よりルーナーとしての力は上なんやで。こう言う事で賢者は嘘は付かれ

へんっちゅう事くらい三聖や賢者と付き合いがあるんやったら知ってるやろ？」

「それは――存じております」

「そやったら、俺で不足は無いはずや。そもそもこれはそっちから頼まれてる事やのうて、こっちがやりたいって言うてる事やろ？俺とルーチェのやりとりを聞いてたんやったら解ってるはずや。俺はお前のためとか里のためにやりたいんやない。ユートの為にやりたいって言うてんねん。それともお前は里がこのまま滅んだらええと思てるんか？」

エルデはそこまで強い調子で一気にまくし立てると息を継いで声の調子を落とし、もう一言付け加えた。

「お前はもう十分生きたから自分はいつ死んでもええと思てるんやろ？」

ラシフはさすがにこの一言には反応した。

「そんな事はありません！」

思わず激してそう言うとラシフは顔を上げた。だが、ラシフの予想に反して目の前の賢者は優しい顔で激高した小さなダーク・アルヴを見つめていた。

「――申し訳ありません」

ラシフは慌てて頭を下げて謝った。言葉の真意を考えず、単純に感情をあらわにした事を後悔していた。

――（これではどっちが年長者なのかわからんではないか）

ラシフは床を見つめながら唇を噛んだ。

初対面が最悪の状況だった事もあり、ラシフは賢者エルデに対していい印象が持てずにいた。まだ若く、賢者になって日が浅いにもかかわらず必要以上に見せる尊大な態度は彼女の常識ではおよそ二流の小物がとる態度であった。大賢者と言われる「真赭の頤」でさえ族長であるラシフに対して敬意を表す事はあっても上から見下すような態度をとった事は一度もなかった。だがその弟子を名乗る『若造』は、およそ賢者が使うとも思えない汚い言葉でラシフを罵り、

まるで「ちんぴら」がやるような下品な威嚇まで行って見せた。
ラシフにしてみればそんな相手を心から信頼しろという方が無理な相談だった。
だが、その鼻持ちならない若造が見せた今の表情は優しさに満ちていた。それもまた、「真赭の頤」からは一度も感じた事のないものだった。
その二つの対比はラシフの中に混乱を生んでいた。
―（この賢者は何かがおかしい）
その混乱を収めるためにラシフがひねり出した結論がそれだった。
エルデが言っている事はラシフとしても信じたい。いや、賢者の持つ力にすがりたいのが本音だった。本来ならば門外不出の古代ルーンを大賢者であろうが委ねる事など族長としては許してはならない事だが、いよいよもって里の存亡にかかわるところまで来てしまった現在、自分の独断で「真赭の頤」の力を借りるべきなのだという決心をしたばかりだった。
だがその道も閉ざされた。そして新たに彼女に提示されたものは得体の知れない賢者に委ねるかどうかという選択肢だった。
「迷う事はないやろ？そもそもそっちに何の不利益もないはずや。成功したらもちろん万々歳、万が一失敗しても割を食うのは詠唱者である俺一人だけ。ダメやったらダメで族長であるお前はまた次を考える事が出来る」
エルデの言うことはもっともだとラシフにもわかっていた。そしてそれくらいの計算はすでにやっていた事だ。だが、ラシフにとっての問題は「エルデが本当に賢者なのかどうかが一切わからない」事だったのだ。ラシフはあの第三の目を見てもなおそう思わせるだけの「違和感」をエルデに対して抱いていたのである。
ラシフが感じた違和感の種。それは同じ賢者であるラウ・ラ＝レイが感じたものとはまた違うものであった。
彼女が感じた違和感は、エルデがまったく「賢者らしくない」と

いう事だった。

「ほんならこうしよか」

沈黙するラシフに対してエルデは出口へ続く一つの道筋を提案した。ラシフのそういう態度もエルデにとっては予測の範囲だったのかもしれない。その証拠にエルデの態度にいらだちや怒りといったものは感じられなかった。

「人質を解放する事を条件に俺が古代ルーンを唱えるっちゅうのはどうや？」

「は？」

思わず声を出して自分を見たラシフに、エルデはニヤリと笑って見せた。

「方便や」

「方便？」

「あんまりガタガタ抜かすようならジャミールの族長にそう脅迫された言うて賢者会に報告するぞっちゅう事や。もちろん賢者がそんな脅しに屈することはない」

「脅迫をされたという脅迫をするわけですか？」

「不名誉やろ？一族は滅亡するわ族長は何にもしてへん賢者の従者を問答無用で人質に取るわ、あまつさえそれを盾に賢者を脅したと来た日には」

ラシフは怒ると言うよりあきれたような目でエルデをみていた。

「あまりにむちゃくちゃな論理ではありませんか？」

「そやな」

エルデは悪びれずにそう言うと、今度は真顔になって一歩膝をラシフの方へにじり寄せた。

「そやからそろそろ最後の交渉に入ろか？」

「最後の、交渉？」

エルデはうなずくと顔を上げて視線をラシフの後方、アトラックの横にいる少女に向けた。

「まずはルーチェに尋ねたい」
「は、はい」
ルーチェはまさか自分にいきなりお鉢が回ってくるとは思っていなかったのだろう。うろたえたような声で返事をすると賢者に向かって深く頭を下げた。
エルデはその様子を目を細めて見ていた。
「俺の質問は単純や。『はい』か『いいえ』で答えてくれたらええ」
「あ、えっと……はい」
ルーチェの返事に満足そうにうなずいたエルデは何か言いかけたラシフを手を挙げて制して話を続けた。
「この里が火山の噴火で壊滅するのは嫌やろ？」
「はい」
最初の問いにルーチェは即座に答えた。
「ジャミールの里人が滅亡するのは嫌やろ？」
「はい」
「ではお前はこのジャミールの里を救えるんか？今すぐに」
この質問に対してはルーチェは即答を避けた。顔を上げて目の前にあるラシフの背中をじっと見つめたあと、視線をエルデに向けた。
「いいえ」
「よし」
エルデはルーチェに大きくうなずいて見せた。
「お前はまだまだ若いけど賢明な族長になるやろ。俺が保証するわ」
「賢者さま」
さすがに我慢がならないという風にラシフが声を上げたが、
「もう少し黙っといてくれ」
と即座にエルデに遮られた。
「そこで俺からルーチェに一つ提案がある。これも『はい』か『いいえ』で答えたらええ」
「はい」
「俺ならここの里人を救える。何でかと言うと俺は大賢者「真赭の

頤」よりも強い力を持つ大ルーナーやからや。この里に伝えられているっちゅう古代ルーンを使うことくらい、はっきり言うて何の造作もない。ここまではええか？」

「はい」

「そこで問題や。お前も今見た通り族長ラシフは俺を信用でけへんからその古代ルーンを教えてくれようとはせえへん。このままやとはっきり言うてジャミール一族が滅亡するのは時間の問題や。そこでラシフ族長が俺にどうしても古代ルーンを教えたくなるようにする必要があるんやけど、それにはルーチェの助けが必要なんや」

「わ、私に出来ることでしたら何でもやります」

エルデの話をそこまで聞いたルーチェは思わず身を乗り出してそう言った。

「ばばさまは頑固すぎます。私たちは賢者さのお力を借りるべきだと思います」

これはラシフに向けての言葉だった。

エルデは手を上げて「そこまで」とルーチェの言葉を止めた。

「『はい』か『いいえ』でええんや、ルーチェ」

ルーチェはエルデのその言葉に頭を下げた。

「申し訳ありま……はい」

「よっしゃ。ほんなら本当にこれが最後の提案や。ラシフ族長が俺にどうしても古代ルーンを教えなあかん理由を作ろうと思う。ルーチェ、お前俺の人質にならへんか？」

「え？」

思わずそう声を出したルーチェに、エルデはいたずらっぽく笑って見せた。

「『はい』か『いいえ』や。ええか？俺がルーチェを人質に取る。そしてラシフにこう言う。『ルーチェの命が惜しかったら古代ルーンを教えろ』ってな。そこでルーチェは続けてこう叫ぶ。『ばばさま、助けてー』するとラシフは『どうか孫の命だけは助けて下さい』っちゅうて古代ルーンを教えてくれるという筋書きや。どや、完璧

やろ？」
「待て」
ラシフは今度こそたまらずに声を上げた。
「賢者が人質をとるなど許されるものか」
「いやいや。別に俺が直接人質に取る必要はないやろ。俺の代わりにそこにおる雷姉さんが人質に取ったら賢者が人質を取った事にはならへんわけやし」
あっけらかんと当たり前のようにそう答えるエルデに、ラシフは思わず歯ぎしりをした。
「私が、それでも断ったらどうするおつもりか？」
そう言うラシフの必死の形相にもエルデはニヤリとしてみせた。
「そんなん決まってるやん。ルーチェ一人であかんのやったらこの里全体を人質に取ったらええだけのことやろ？」
「そんなことが」
「出来るんか？って言うんか？」
「そ、そうだ」
「アホやな。最初に会った時に見たやろ？この里全体に雷の雨を降らすなんて簡単な事や。俺らをここに入れた時点で里人全体が人質になったようなもんや」
「――そんなことが」
「賢者を舐めんなっ！」
エルデは怒鳴ると立ち上がった。ラシフが見上げるエルデの額には、再びあの赤い第三の目が開かれていた。

『なあ？』
【なんや？】
『お前、なんでそんなに積極的なんだ？こう言っちゃアレだけど』
他人とかかわるな』って言ってるお前とは別人みたいだぞ』
【うるさい。もう関わってしもたんや。それに俺はやるって一回決めたら、何があっても絶対やるんや】

『ふーん、なるほど』
【なんやねん、その微妙な反応は？馬鹿にしてるんか？】
『いや、逆だ』
【逆？】
『今のお前は嫌いじゃない』
【な、何やねん、突然】
『それにオレ、このラシフっていう族長も嫌いになれないんだよな』
【そうか】
『そう言うことならオレに出来ることがあれば協力させてくれって言ってるんだよ。たとえ悪人だろうが人を裁いたりする仕事よりよほどいい』
【エイル……】
『それに、どう考えても今のお前の方が賢者っぽくてカッコいいぜ』
【あ、アホっ。何言うてんねん】
『照れるなって』
【て、照れてへんわ！】

沈黙が続く中、一同の視線はラシフに注がれていた。
ラシフはじっとしたまましばらく熟考していたようだったが、決心がついたのか顔を上げてエルデを見つめた。その目は挑むように鋭く、エルデとしてもとても友好的な態度だとは思えなかったが、ラシフはそのまま頭を下げた。
「明日の朝、お迎えに参ります」
エルデはうなずいた。
「絶対期待は裏切らへん。それから悪いけど、明朝は族長一人だけで来てもらおか」
ラシフはしかしエルデの言葉には何も応えず、立ち上がると再度一礼をしてその場を後にした。

# 第五十七話　古代ルーン

エイル・エイミイについては「高位精霊履行を一瞬の詠唱で終了させた」という言い伝えが数多くある。もちろん我々はそれがエイル・エイミイではなくエルデ・ヴァイスがエイルの体を使っておこなったものだと知っている。

しかし既に述べたようにほぼすべての文献にエルデ・ヴァイスという人名はない。従ってエイル・エイミイは今日でもルーナーとして認知され続けている。

だが現在では人物特定や謎の検証はともかく、ルーンについての研究はそれなりに進み、エルデが行った「一瞬の詠唱」が「エイリアス」という極めて特殊な手法を使うことにより理論上は可能であると言う学説が認められている。ただし「理論上」であり、何人ものルーナーがこのエイリアスの実地検証に取り組んだが、未だにエイル・エイミイのような使い方を実践してみせたルーナーが存在したという報告はない。

エイリアスとは理論上可能だと言われる履行方法で、簡単に説明するならば、履行を行う際に履行文を短縮して詠唱する手法である。

だが、履行文とはすなわち精霊波に呼びかける為の「言葉」であり、契約書の文面であるから、勝手な短縮が通用するわけではない。ましてや一語違うだけで履行は発生しないほど厳密で精密な設計図のようなものがルーンなのである。使用するルーンがいくつかに限られている場合を除き単純に省略形などができるわけはないのだが、ある履行を使って言葉を読み替え、かわりにルーンを履行する「もの」を作ることが可能だという。

その「可能である」とする論理によると、ある特定のものに対して、「ある音を違う音に変換させる」履行を行う。それは定着ルー

ンと言って、その履行の内容が一定の時間で切れてしまわない種類の難度の高いルーンを使用することで可能である。それによりそのある「もの」は一種の変声装置になることが知られている。

エイルが行っていたのはこのやり方を基本にしたもので、ある言葉を発すると、違う言葉に置き換わるような仕組みを作り上げたのではないかと言うのである。誤解を恐れずに書くならば、それはもはや変声装置ではなく翻訳装置に他ならない。エイル・エイミイは独自の、それも完璧な言語体系をも自ら創造していたということになるのである。それも、膨大な言葉をごく短い言葉で置き換えられるような、である。

そういうわけで理論上可能であろうと言われているものの、はたしてそれが実践的かどうかはおおいに疑わしいと言わざるを得ない。

ルーナーの契約履行を目の当たりにした者は知っているとおり、精霊履行文、すなわちルーンには、

一．前文
二．契約文
三．認証文

の三つの部分で構成されているものが多い。

前文は各ルーナーによってすべて異なっており、ルーンの詠唱が許されたルーナーであることをその場にある精霊波、すなわち「エーテル」に対してまず宣言するという文章になっている。

前文においては名付け親がきちんとあり、かつ家族名まで含んだ正式な本名しか使用できないとされる。つまり普段いくら偽名を使っていても、ルーンを唱える時には本当の名前を口にしなければならないということである。

そして多くのルーンには、詠唱の最後に唱えるごく短めの、意味不明な言葉の羅列が必ず付加されている。特に高位と言われるルー

ンには必ずそれが存在する。
　高位ルーンを文書で伝授する場合には簡単にそれが他者に盗まれないようにするために、いわゆる三つ目の履行文である「認証文」は書かれていない場合が殆どである。契約文と最後の「認証文」は別途保管されており、組み合わせが違うとルーンは発動されないのである。
　ご存じの通り履行を失敗すると、「リバウンド」という現象が起こり、大きなダメージが履行者であるルーナーに降りかかる。これもまたマーリンと精霊との間にかわされた「契約」なのだ。
　リバウンドの強さはルーンの「地位」に比例する。つまり高位ルーンの失敗は死に直結するのである。したがって複数の契約文と認証文を別々に手に入れたとしても、その組み合わせを順番に試して正しいルーンの全文を探るなどという事は現実的にはそもそも不可能な仕組みになっている。
　こんにち、一部の高位ルーンが「古代ルーン」と呼ばれ殆ど残っていないのは長い歴史の間に契約文か認証文のどちらかが散逸してすでにファランドールから失われていたり、二つの組み合わせを知るものが居なくなったりした事によるものである。

　契約文について触れたこの機会に、ここでグラムコールと呼ばれるものについても少し説明をしておこう。
　本来、前文と契約文は最後の認証文とは違い、いわゆる不明な音の文字の羅列のようなものではなく、その言語を知ってさえいれば内容がわかるものである。
　その「言語」がグラムコールと呼ばれるものである。
　今日標準語として我々が使っている「ファランドール南方語」を起源とする言葉とはその言語体系を異にするものである。
　これはもともと古代に於いて契約文として使われていた平文を簡略化して詠唱時間を縮めようとして作り出されたものである。
　言語体系であるグラムコールが、ではなぜ普通の言葉として伝わ

らなかったのかというと、完成した言語体系ではあっても、それはあくまでも「古代語を短縮する事を第一義として作り出された」ものであるからである。言葉を短くする事には長けていても、お互いの気持ちを伝える会話に用いる言語としては適さなかったことが一つ目の理由。

次に、グラムコールはその種類が多すぎた事も理由として挙げられる。

ルーナーは高位のものを頂点にして履行文、つまりルーンを囲い込む事に注力し、互いに知識を持ちよってよりよいものにするという方向には向かわなかった。

いきおい、無数のグラムコールが生まれる事になり、それぞれは公開ではなく秘匿される方向に向かった。つまりはそれが生活の為の言語として発達する事などあり得なかったのである。

そのグラムコールだが、無数に存在はしたが、さすがに言語体系を一から作り出せるルーナーがそうそう居たわけではなく、その殆どは元をたどると三つのグラムコールの派生である事がわかる。

その三つのグラムコールを特に「ルート」と呼ぶ。

ルートのグラムコールとはすなわち、クラン、ユラトそしてキュアの三つである。

伝説によるとその三つのルート・グラムコールは、四始祖の一人であるドライアドの子の名前である。

彼らはマーリンから授かった長い長い「神の言葉」の契約文を効率化させ、短い詠唱時間で使えるようにする為に競い合い、その一生を費やして独自のグラムコールを完成させたと言われている。

フェアリーの始祖がいわゆる四始祖だとすると、ルーナーの始祖はいわばドライアドの三人の子と言う事になるのであろうか。

ある程度高位のルーナーになると、グラムコールを聞けばどのルートの系統なのかはすぐにわかるという。もはや原文である「古代語の平文」というものが存在しない現在ではグラムコールにおける

文法の詠唱時間の短縮効率がどれほどなのかはわかりようもないが、一説ではおおよそどのルートも百分の一から十分の一位の詠唱時間になったと伝えられている。

エイル・エイミイがもしも伝説通りにルートとは全く違うグラムコールを、それもルートであるドライアドの三人の子供達が地団駄を踏んで悔しがるほど高効率のグラムコールを自由自在に操っていたとするならば、すなわちエイル・エイミイ、いやエルデ・ヴァイスというルーナーの尋常ではない知力の証明になる。それこそまさに「魔人」の名にふさわしいと言えるのだろうが、ここはやはり素直になって事実はもっと他にあると考える方が妥当であろう。

もちろん、ルートとは全く違うグラムコールを使うルーナーは皆無ではない。だが、ルート以外のグラムコールを用いるルーナーはいわゆる普通のルーナーではなく、限られた術しか使えないルーナーで、ルーナーとしての格が低く見られるのが普通である。それぞれが言語として完璧な文法体系を築いているとされるルートのグラムコールは当然ながらありとあらゆる契約文を唱えることができるが、独自で作られたグラムコールはそこまでの柔軟性や緻密さを持ってはいない事が常である。

そう言う背景もあり、いわゆるルート以外の系列のグラムコールをルーナー達は「ペダン」と呼んでルート系列のグラムコールとは区別している。

ちなみにペダンとは、古代ディーネ語で「異端」という意味である。

・・・・・・・・・・・・・・

『どうだ？』

手渡された、見るからに古そうなルーン書をぱらぱらとめくるエルデに心の中でエイルが尋ねた。

【見たところかなり古いものやな。まさに古代ルーンや。グラムコールも派生グラムコールのジャミールやのうて、ルートのキュアそのものやからルーンとしての純度は極めて高いやろな。それにざっと見たところ文法にも誤りはないし、どうやら本そのものにルーンがかけられてるし、写しとは思われへん。結論としてはホンマもんやろうな】

『そうか』

翌朝であった。

朝食の後、一行は里から歩いて小一時間ほどのところにある切り立った崖の上に立っていた。もちろんラシフ・ジャミールが案内した場所だ。

ラシフの先導でしばらく歩いた後に落葉広葉樹がうっそうと茂った森を抜けたと思ったら、眼前には噴煙を上げるレイジノ山がそびえ、その向こう側には幾重にも重なる険しいノーム山脈に連なる峰峰が競うように天を目指していた。

崖の上はちょっとした眺望台と言ってもいい程の広さがあり、そこから見える景色はまさに雄大の一言に尽きた。

壮大な風景にに見とれているエイルに、ラシフは無言で一冊の小さな本を差し出した。それこそが「古代ルーン」が記された里の秘宝そのものだったのだ。

「ルートのグラムコールで書かれた契約文を見るのは久しぶりやな。それもキュアとは珍しいな」

エイルと入れ替わったエルデは、すぐには本に手を伸ばさず、まず族長にその本を開くように頼んだ。ラシフはエルデの言葉通り本を開き、一頁目をエルデに示した。

それを見て、エルデは感心したようにそうつぶやいたのだ。

「見ただけでキュアだとわかるのですか？」
エルデはラシフに、自分に対して敬語など使う必要はないと告げていたのだが、エルデに対するラシフの態度は変わらず堅かった。
「俺をバカにしたらあかんで。枝葉末節の劣化グラムコールは知らんけど、文法がまともなグラムコールは全部ここに入ってる」
そう言うとエイルは右手を上げて自分のこめかみを人差し指で押すようにして見せた。
「というか、ルートのグラムコールはルーナーとしての基本やろ？ジャミールがキュアの派生やっちゅう事も知ってるで。ジャミールのグラムコールはよう出来てるからさすがにペダンやとは言わへんけど、ルーナーたるもの独自のグラムコールしか知らんのはどうかと思う」
「どちらにしろ、これを一目、それも一瞬見ただけで純粋なルートで書かれたものだとわかる奴がそうそういるものか」
エルデがニヤリと笑って小馬鹿にしたような口調で答えたものだから、ラシフの口調もあっという間に変化した。
「ここにおるやん」
「――」
素の感情はかしこまった言葉からは出ない。エルデはラシフに対してはそう思っていた。族長らしい普段の言葉遣いをした方がラシフも言いたい事が言いやすいだろうと考えていた。だからその日の朝、敬語は使うなと告げていたのだ。
そしてそれをも拒否しようとしているラシフのつまらない壁を崩すべく、エルデはさっそく仕掛け、ラシフはまんまと乗せられた格好だった。
さらに何かを言おうとしたラシフを無視して、エルデは今度は真顔で尋ねた。
「念のために聞いとく。もちろん完本なんやろうな？」
「疑うなら詠まなければ良かろう」

ラシフは開き直ったように、憤然とした顔でそう答えた。
エルデはそれを聞くと満足そうにうなずいた。
完本とは、契約文と認証文が分けられておらず、両方とも記載されたルーン書の事である。
ただし完本と呼ばれるルーン書にかかれているルーンの場合、認証文は契約文をすべて完全詠唱した後でなければ出現しない仕組みになっていることがほとんどだった。それがルートと呼ばれるグラムコールで書かれた古代ルーン書の常なのだ。
認証文が書かれた本や封じ込まれている本……つまり完本に対して契約文だけが書かれたものは「写し」または「半本」と呼ばれ区別されている。

「詠まへんかったらジャミールの里は終わりやって何回言わせんねん」
「率直に言おう。私はお前を信用しているわけではない」
「賢者をお前呼ばわりするお前に信用されても嬉しないけどな」
「こやつ」
「ま、バアさんがどうなろうと知ったこっちゃないけど、ルーチェが体を張ってもこの里を守りたい言うてんねんから俺はあの子の願いを受けてその古代ルーンを詠唱するだけや」
ラシフはエルデの挑発ともとれる台詞に顔色を変えて素直に反応した。
「くそっ。私がこの本を詠めさえすればこんな奴に」
「ああ、無理無理。『詠む』だけなら多少古代文字を勉強さえしたら誰でも出来るけど、ここまで高位のルーンをきっちり『使える』奴はそうそうおらへんって。マーリンの賢者でも間違いなく一握りや。お前さんやとそもそも発動の「ハの字」にもいかへんやろな」
エルデはラシフが震えるまで力いっぱい両の拳を握りしめて怒りを抑えているのをちらりとみやると、笑いをこらえるのに苦労しながらそう軽口を叩いた。

「吠えておれ。それよりもこれで本当に火山活動が止まるのだろうな？」
「噴火活動が活発になる度に、ルーナーがこれを詠んで止めてたんやろ？」
「そう聞いている」
「他のルーナーが出来てたことを俺がでけへん道理はない」
エルデはそう言うと真顔に戻ってラシフの視線をまっすぐに受けた。ラシフはその視線を真正面から受け止めると睨むように眉間にしわを寄せて吐き捨てるように言った。
「口では何とでも言える」
「ほんならグダグダ言っとらんとしっかり見とけ」
「言われなくてもそうさせて貰う」
エルデは「ふん」と鼻を鳴らすと、ラシフから預かったルーン書をアプリリアージェに持つように頼み、無造作に一頁目を開いた。
続いて口の中で小さくつぶやくと、儀仗ノルンを取り出した。
「ほな、行くで」
契約文が書かれた最初のページをエルデが注視して、まさに詠唱を開始しようとした時、遠慮がちにアプリリアージェが声をかけた。
「あのう」
「ん？」
呼びかけに反応して本から顔を上げたエルデに、アプリリアージェは微笑んだまま首をかしげて尋ねた。
「私はこうやってただぼーっと突っ立って本を持っていたらいいのですか？」
「退屈やろけどリリア姉さんは重要な書見台役やから、そうやってもらわなアカンな。他の連中は……そうやな、そしたら俺が詠唱している間、そのオバハンが変なちょっかい出さんように見張っててもらえるか？このルーンの詠唱はちょっと骨が折れるし、詠唱時間自体も結構長いんや」
「ええっと」

キョトンとしているアプリリアージェに、エルデは説明を追加した。

「キュアの本は三つのルートの中でも特に凝った作りになってて、契約文を一頁目から順番に読んでいけばいいっちゅう訳やないんや。まずは一頁目の契約文が書かれているページを広げて、きちんと唱え終わると真の二頁目が案内されるっちゅう仕組みや。本そのものがパズルっいう感じやな。そやから一頁目から順番に頁を読んでも契約文にはなってないっちゅう、結構イケズな本やねん。つまり間違い一つなく最後までたどり着くには結構な集中力が必要になってる仕組みなんや。もちろんそれぞれの頁に書かれている文章自体はさっき見て覚えたんやけど、その順番まではわからへん。ご丁寧に頁毎に文章として意味が完結してて、さすがの俺でもこの一冊を組み上げるパズルを完成させることはでけへん」

「なるほど。次の頁を案内する合図も見逃せないし、詠唱済みのルーンへの集中力も残しておかないといけないし、精神的にいろいろ忙しいというわけですか」

アプリリアージェは合点が言ったという風にうなずいて見せた。

「いつものようにささっと認証文だけを唱えて終わると思っていたので書見台役なんて言われて戸惑いました。さすがに古代ルーンというのは複雑なものなのですね」

エルデはうなずいた。

「そうやな。そやからたとえこれがその辺の高位ルーナーに盗まれたとしても、そのルーンを反応させるだけの力がないと正しい順番で頁が開く事がでけへん。認証文に辿り着くどころか二頁目を呼び出せる奴すらまずおらへんやろな。全くもって結構な隠蔽工作や」

「――私は今、自分がルーナーでなくて良かったとつくづく思っています」

アプリリアージェの言葉にエルデは思わず苦笑した。

「まあ、そういうわけやからきちんと本のページをめくりながら詠唱をせなあかんし、俺の意識はほぼ全部本に集中する。どれだけ高

位のルーナーやろうとその間は無防備や。俺も例外やない。それにこの本の頁数を見て分かる通り詠唱時間も相当長い。その間、俺の座標軸固定の妨げになるものがあったら姉さん達の方で排除してもらう方向で」

「なるほど。その件については了解しました。でも座標軸固定が必要なのですか？いつもあなたは動きながらルーンを詠唱しているではないですか？」

アプリリアージェの問いにエルデはしまったという顔をしたが、すぐに真顔に戻った。エルデのその小さな動揺を艶やかな美しい黒髪を持つこのダークアルヴの戦士は見逃さなかった。しかし、エルデはアプリリアージェが今感じた疑問をあっさり解消して見せた。

「さすがに観察力が鋭いな。その通りや。種明かしをすると、俺でも初見のルーンは法則に則らなあかんねん。ただし、二回目からは他のルーンと同様に認証文だけでルーンを発動させられる」

「なるほど。そういう事でしたか。でも、どちらにしろあなたは不思議なルーナーですね」

アプリリアージェはそう言ってにっこり笑った。

そこへ二人のやりとりをすぐ横で聞いていたラシフが口を挟んできた。

「認証文だけでルーンを使える、だと？ばかな」

エルデの代わりにアプリリアージェが答えた。

「族長も彼が一瞬でルーンを発動させるのをすでに何度かごらんになったでしょう？彼はそういうルーナーみたいですよ」

「『みたいですよ』と簡単に言われてもな。そんなルーナーなど聞いたことがない」

アプリリアージェはラシフの言葉をやんわりと遮るように胸のあたりに片手を上げた。

「私も実際に彼に会うまでは聞いたことも見たこともありませんでしたよ。でも彼は現実にここにいます」

「むう……」

「ついでに言うと、お聞きの通り彼は歩きながらルーンを唱えられるのです。我々の持っているルーナーの常識など彼の前では意味がありません。いえ、彼はひょっとしたらルーナーなんかではないのかもしれませんね」
「……」
「でも、今の彼の話だと今回については座標軸固定が必要のようです。初見のルーンを習得する際には彼であってもファランドールの法則に則らざるを得ないようですね。言い換えるなら、一度習得したルーンについては前文も契約文も端折れて、かつ座標軸固定のくくりすらも消えてしまうという事です」
「――信じられん」
「信じるも信じないも、真実はそこにあるのですから仕方ありません」
「そう言われても」
「どちらにしろ彼はあなたが考えているような一般的なルーナーの範疇からは大きく外れた存在なんですよ」
「外れた……存在？」
「ふふ。面白いですよね。世の中には信じられないような事がまだまだあるものなのですねえ」
二人のやりとりを珍しく黙って聞いていたエルデだったが、長くなりそうだと思ったのだろう。業を煮やしたように割って入った。
「あんまり人の秘密をペラペラ喋るんは関心せえへんな」
「あら、秘密だったんですか？だったらそう言って下さらないと」
「フン」
「もちろん、しゃべる必要のない相手に対しては私は死んだ貝のように無口になりますよ」
「それ、口が堅いんか柔らかいんかわからへんやろ？」
「そうですか？」
「はいはいわかった、もうええ。ほならいくで」
エルデは儀仗を持たない方の手を大きく振って無駄話の終了をそ

う宣言すると、改めてアプリリアージェの持つ本に正対し、なんともあっさりと詠唱を始めた。

その古代ルーンは古めかしい革表紙の本に約五十頁にわたって書かれていた。特に急ぐ必要もない場面だけに、普段は早口でルーンの認証文を唱えるエルデも、前文に続きゆっくりと、そしてはっきりとした大きめの声で契約文を詠唱しだした。すると、不思議な事に途中からエルデの詠唱に合わせて文字が鈍く光り出すのを、その場にいた人間は目撃することになった。詠唱が終わった文字は光り続け、未詠唱の文字はそのままだった。頁を繰っても詠唱済みの頁は光ったままだ。「ルーンで作られた特殊な本」というのはまさにその通りだった。

エルデが言う「キュアのグラムコール」で綴られたその古代ルーンの意味が理解できる人間はそこには一人も居ない。彼らにとっては無意味な音の羅列がただ続くだけだった。

「まったく、アイツはどれだけ優秀な頭脳をしてるんだか」

アトラックがその様子を見て、うらやましそうにつぶやいた。横に並んでエルデの様子をじっと見守っているラシフはしかし、それには答えなかった。

アトラックは気にせずラシフを話し相手に決めると続けた。

「あれでエクセラーやコンサーラじゃなくて実はハイレーンってんですからねえ」

「何、ハイレーンだと?」

ハイレーンという言葉にラシフは反応した。

「え?そうですよ。少なくとも本人はそう言ってましたし、実際彼の治癒能力は相当なものです」

ラシフは目を見開いてアトラックを睨んだ。

「そんなことは聞いておらん。ハイレーンだと?そんな奴があの強力な古代ルーンを使えるわけがない」

アトラックは気色ばんだラシフを目の前にして肩をすくめて苦笑してみせた。
「大丈夫ですよ。あいつはその辺のエクセラーが束になってもかなわない程のルーナーなんですから」
「しかし、所詮ハイレーンなのだろう？」
アトラックは口の前に人差し指をもってきた。黙れと言う合図だ。
「あいつに『所詮』、とか言うとえらい目に遭いますよ」
「――」

エルデの前で人間書見台の役目を負っているアプリリアージェは二人のやりとりを聞いていて脳裏に一抹の不安が過（よ）ぎった。
だがそうしている間にもエルデの長い詠唱は淡々と進んでいった。やがて書かれているほとんどの文字が鈍い光を発して、とうとう本全体がぼうっと淡く輝きはじめた。
そしてとうとう最後の頁が開かれた。でたらめな順番に頁が割り振られた本だが、どうやら最初と最後は装丁通りのようだった。エルデの詠唱に呼応して最後の頁に書かれた文字がすべて光ると同時に詠唱がすっと途切れ、その場に静寂が訪れた。
契約文の詠唱がすべて終わったのだ。
アプリリアージェを中心としたその場の全員が固唾をのんで見守る中、彼女が持つキュアのグラムコールで書かれたルーン書が輝きを増しはじめた。
エルデはその様子を眉一つ動かさずにじっと見つめていた。
だが……。
その後には何も起きなかった。
少なくともエルデの口からは最後に唱えられるべき認証文はまだ詠唱されていない。
そうこうしているうちに古代ルーンが書かれた本の輝きが鈍くなり始めた。それを見たエルデはそれまでの不動の状態から一変、慌ててアプリリアージェが持つ本の頁を繰ろうと手を伸ばしたが、契

約文を詠唱し終わった本は、最終頁からどの頁にも戻れなくなっていた。のり付けされたかのように一体化していて、頁を繰る事が不可能なのだ。

次にエルデがしたことは裏表紙を見たり表表紙を逆さにしたり、背表紙を撫でてみたりと、まるで手探りでたらめな作業だった。

つまり、エルデは本当に焦っていたのだ。その間に本の光はだんだん鈍くなっていった。

エルデは手に取った本をアプリリアージェの手に戻すと、険しい表情でラシフの方をにらみ据えた。

アプリリアージェはエルデのその様子を見て、ようやく事態を察した。

「認証文が出ないのですね？」

アプリリアージェの問いかけにエルデはラシフを睨んだまま無言でうなずいた。

詠唱者であるエルデは認証文を唱える前に声を出すわけにはいかないのだ。

アプリリアージェはもちろん自分の役割をよく理解していた。

「完本では無かったのですか？」

ラシフに向かってそう問いかけた。

だが、ラシフは首を横に振ってみせた。

「完本だ」

「じゃあ、なぜ」

普段とは違う強い調子の声で詰問するアプリリアージェに、ラシフは平然と答えた。

「これでこの本は完本なのだ。認証文は口伝で族長だけが知っている。ジャミールに残るルーン書はすべてその体裁だ」

「何ですって？」

「あんな子供の言うことを多少なりとも信じた私が愚かだった。いくら高位のルーナーだと自慢しようが、たかがハイレーンなどに我らが大切な古代ルーンを教えてなるものか。リバウンドで消えて無

くなれ」
「なんと言うことを！」
ラシフの答えにアプリリアージェの特徴的な太めの眉がつり上がった。緑に輝く目も大きく見開かれ、普段は垂れた目尻も心なしか眉と同じようにつり上がっているように見えた。
もちろん、それは怒りの顔だった。
アトラックはアプリリアージェのそんな顔を初めて見たと思った。

『ああ、くそ……ここで裏切られるとは』
【言うたやろ、これがファランドールなんや。ちゅーか、しもたな。ハイレーンはこのお婆ちゃんには禁句やったんか】
『どうするんだ？』
【お前も知ってるやろ？いざとなったら、俺はルーンを強制的に中断するやり方を会得してる。そやけどそれは術の暴走を外部に分散する方法やから、術の大きさを考えるとここにいる全員がおそらく……】

「認証文を！」
アプリリアージェは叫んだ。
「あなたは知ってるのでしょう？それを早く伝えて下さい。賢者エイミイはルーンの中断ができる術者なのですよ」
アプリリアージェの言葉に、ラシフの顔色がさっと変わった。
「中断だと？」
アプリリアージェはラシフを睨み据えたまま早口で怒鳴った。
「あなたは彼だけを切り捨てたつもりなのでしょうが、それは大間違いです。彼はいざとなったらルーンの強制中断を行うでしょう。でもそれは彼によると契約文により構築した術を消し去るものではないそうです。ただ、自分に逆行、俗に言うリバウンドが及ばないようにルーンに対する絶対防御結界を張ることだと聞いています。そんなことになったら我々、いやこの辺り一帯がどうなると思いま

すか？」
「逆行するルーンは……」
「行き場を失って暴走するだけ、だそうです」
「なんだと？」
アプリリアージェは目を伏せた。
「術の力がどれほどのものかわかりませんが、火山活動を止めるだけの力があるのでしょう？私たちがここで倒れるだけでなく、このままではこの里全体がつぶれる可能性があるのですよ？強力なルーンならリバウンドも強力だということは子供でも想像できる理屈でしょう？」
「詠唱中断ができるとは……こいつはなんというルーナーなのだ」
「早くっ」

だが、ラシフの決心は間に合わなかった。
エルデはついに絶望の台詞を口にした。
「もう遅いっ」

# 第五十八話　認証文

詠唱者が認証文とは違う言葉を発した時点をもって、履行中の古代ルーンは中断された。
エルデは中断と同時に例の第三の眼を開くと、その赤い瞳で夜が明けたばかりの空を三つの視線で貫くように睨んだ。
そしてその姿勢のまま、まったく違うルーンの認証文が早口で唱えられた。
「ギガストローマ」
続いて持っていた儀仗の色を変えた。
「スクルド！」
呼びかけに応じて一瞬で白くなった儀仗を掲げ、早口で唱えた呪文は少し長いものだった。
「ファルモニアード・デルエージュ・アーシャス」
『おいっ！』
【やかましっ、気が散る！】
エルデがルーンを唱え終わった瞬間、その場に居合わせた全員が異変を感じた。
皮膚がざわつく感覚だ。
その場に間違いなく何かの異常、それも想像も出来ないほど大規模な異常が起こっていることを告げる予感のようなものだった。
ルーンの暴走……それも封印されるほど強力な古代ルーンの暴走とはどんなものなのか、その場にいた誰もが想像すらできなかった。
その恐ろしさを知っているのはおそらくエルデただ一人だったであろう。
そしてそのエルデの周りにはすぐに劇的な変化が起こった。
スクルドと名付けられた白い杖を空にかざすエルデのはるか頭上

に、真っ黒な雲で出来たような渦が巻き始めていたのだ。
「これがリバウンド……ルーンの逆行現象か」
悲痛なラシフのうめきを消し去るように、空に向かってエルデは叫んだ。
「すべての精霊よ、余の下に集え。主の徴である余の目を見よ。されば持てるすべての手と足と尾と翼をあらん限りに伸ばし、広げ、余の命に従え。そしてそれこそがお前たち精霊の存在意義だと知るがいいっ！」

黒い渦はますます成長し、細かくルーンを唱え続けるエルデの儀仗の遙か上空を中心として竜巻のようにうごめき始めていた。それを見上げるエルデの表情は厳しく、ざわついた髪はまるで静電気を帯びたように逆立ち始めていた。さらには、そよとした風しかなかったはずなのに、彼が着ている服さえもまるで下から風にあおられているかのようにはためき揺れていた。
エルデのその様子を見てアプリリアージェは「おかしい」と思った。
―（本人には返らないのではなかったの？）
アプリリアージェの言う通り、髪や服装に変化が起こっているのは第三の眼を開いた賢者エイミイだけだった。アプリリアージェとて肌にざわついた雰囲気は感じるが、それ以外に特に変化はない。
（もしや）
黒い竜巻はますます肥大化して、まるで圧縮される様にどんどん高度を下げていた。それはまるでエルデに向かって襲いかかるように見えた。
アプリリアージェは後ろに控えているはずのテンリーゼンを振り返った。その視線を受けたテンリーゼンは少し顔を上げると小さくうなずき、両手を広げた。
すると、その場に白い光を放つ半球状の空間が生じた。
それは風のフェアリーであるテンリーゼンが持っているあの能力、

アクラムの森での会戦時にルルデ・フィリスティアードがエレメンタルとして発現した時に、その暴走を止め、さらにはウーモスでアトラックをアプリリアージェの雷から守った光の結界だった。
白い光を放つ結界はその場の全員を取り込んだところでその膨張を止めた。
目を閉じて短い認証文をいくつも唱え続けているエルデには、しかし苦悶の表情が走り始めた。
テンリーゼンの結界の中にいるにも関わらず、髪と服の揺らめきは収まるどころかだんだんと激しくなり、まるで暴風雨に曝されているかのような状態だった。
歯を食いしばり、苦悶の表情を浮かべながらもエルデはルーンの詠唱をやめず、儀仗スクルドを空に向かって高く掲げ続けた。
その様子を見てアプリリアージェは悟った。テンリーゼンの光の防御壁は、少なくともこの古代ルーンのリバウンドに対しては無力である事を。
エルデは目を開けた。そしてついに断続的に唱えていた一連のルーンの最後を締めくくるかのように、ひときわ大きな声で認証文を唱えた。虚空に向かって。
「フェルヒメル！」
エルデのルーンに、その巨大な黒い竜巻のようなうねりはすぐに反応した。渦状になっていた霧のようなものが、形を崩すと一斉に拡散したのだ。
あっという間に空全体がその黒い霧に覆い尽くされ、明けかけていた東の空はファランドールの自転が逆行したかのように一瞬で夜に覆われた。
この後すぐに何か大きな変化が起こる――訪れた闇の中で、誰もがそう予感した。
だが、意に反して劇的な変化は何も起きなかった。
テンリーゼンの結界が放つ光でお互いの姿は見えるが、エルデの姿にも変化はない。

「どうなっているんです？」
たまりかねたアプリリアージェの問いに、しかしエルデは答えなかった。一旦閉じた目を開けて黒い霧に覆われた虚空をじっとみつめているだけだった。
「黒い霧が薄くなってきました」
アトラックが指さす方角が確かに白んでいる。
「晴れてきましたね」
アプリリアージェの言う通り、世界を覆い尽くしたかのように思えた黒い霧が、徐々にその密度を低めているようだった。
「成功……やな」
エルデはそうつぶやくと、目を閉じたままでその場に座り込むようにして倒れた。
「エイル君！」
一番近いところにいたアプリリアージェは、手に持った古代ルーンの本を放り投げると、風のフェアリーらしく目にもとまらぬ早さで倒れた賢者の側に駆け寄り、ゆっくりと抱き起こした。
だが、目を閉じたエルデはその時すでに意識がなく、体は汗でびっしょり濡れ、アプリリアージェの腕に伝わる体温は異様に低かった。
「何が起こったんですか？」
自分に向けて放り投げられた本を手に、遅れて駆け寄ってきたアトラックがそう問いかけたが、アプリリアージェにも正確な状況などわかるはずもない。すべてがわかっている人間がいるとすれば、それはエルデ本人のみであろう。
アプリリアージェはアトラックの問いに首を横に振った。
だが、アプリリアージェにも確実に一つだけ言えることがあった。
「今わかっていることは、私たちは助かったということだけです」
「それって……ルーン中断の逆行現象をエイルが自分で引き受けたという事ですか？」

アプリリアージェはうなずくと、テンリーゼンをみやった。それを合図に、周りの光の結界は消滅した。

「リーゼ、大丈夫ですか？かなり長時間でしたが」

アプリリアージェの問いに、テンリーゼンは頷いてみせた。結界の維持には力を使うという事なのであろう。だが、テンリーゼンは息を乱す事もなく、無表情のままで佇んでいた。アプリリアージェはその様子を見て安心したように小さくため息をついた。

「それで、我らが賢者殿は？」

アプリリアージェが抱きかかえるエイルの顔をのぞき込んで、アトラックはそう訪ねた。

「わかりません。気を失っているだけならいいのですが」

「火山活動を抑えるほど強力な古代ルーンだぞ。その子供は、その逆行を受け止めたというのか？」

一行の側に青ざめた顔のラシフもやってきた。

「ラシフ様からすれば彼はまだ子供かもしれませんが、私たちはこれほど頼りになるルーナーを見たことも聞いたこともありません。我が国が誇るバードの中にも彼を超えるルーナーがいるとは思えません。あなたもご存じだと思いますが、この子はあの「真赭の頤」の弟子にして師を超える力を持つルーナーだそうですよ」

「『自称』であろう？」

アプリリアージェはうなずいた。

「それはそうです。でも今の力を見たのなら納得できませんか？あなたも彼と同じルーナーなのでしょう？」

「しかし、大賢者を超えるなどと」

アプリリアージェはため息をつくと、エイルの額にかかった髪をそっと払いのけてやった。

「あなたは自分の目で見たことを信じられない人間なのですか？」

「私の理解を超えておる」

「では敢えて言いましょう。あなたは、いえ、あなたとジャミールの里人はこの少年に命を救われたのです。それが今起こった事実で

す」
「それは……」
「これだけ言ってもまだ認証文を教えてもらえませんか？彼がジャミールの秘宝と言われる古代ルーンを欲しがっているわけでは無いことはいくらなんでももうおわかりでしょう？そんなルーンなど別に彼には必要なものではなく、ましてや欲しいなんてきっと小指の爪の先ほども思ってもいないでしょう」
「このルーナーにとってはそんな力を持つまでもない、という事か」
アプリリアージェの話を聞いてラシフは考え込むように腕を組むと、うつむきがちに目を閉じた。
「それで」
ややあってラシフは目を開くとアプリリアージェに問いかけた。
「その子……賢者エイミイ殿は大丈夫なのか？」
アプリリアージェは首を振った。
「先ほど申しあげた通り、私にはわかりません。今回、詠唱を始めるにあたり、彼は自分の体を守るための強化ルーンを一切唱えることなく、あっさりと始めたように見えました」
「それが？」
「用心深い彼にしてはあまりに無造作に事に臨んだのです。この意味がわかりませんか？」
「意味、だと？」
「私にはわかります。彼はあなたを信用していたのですよ。ルーン書が完本であることを。つまりルーンを詠唱しきれることを、です。そしてそれを請け負ったあなたの言葉を」
「解せぬ。私が彼を嫌っておる事は知っていよう。それなのになぜ、そう簡単に信用したのだ？」
「彼の口癖は『誰も信じるな』です。けれど、実際に彼はそれを言葉通り実行しているとはとても思えない」
「甘い、と言うことか」
「ええ、甘いのです。彼の警句はこのファランドールでは正しい。

しかしそれを彼自身が実行出来ない。つまり彼は甘すぎるのでしょう。でも」
「でも？」
「だからこそ、です。私達はそんな彼にだから無防備な背中を預けることができるのですよ」
「……」
「彼はあまり人と関わらないようにしているようです。ですが、一度関わってしまった相手に対してはこちらが呆れるほど無私な人間になってしまうのです」
「無私？」
「関わってしまった相手を放っておけないたちなのでしょう。自分の身の危険すらどこかへ忘れてしまうほど深く関らずにはいられない性格なのです」
アプリリアージェはそこで言葉を句切ると、懐から何かを取り出した。そしてそれをラシフに差し出した。
「これは？」
ラシフは差し出されたものを手にすると不思議そうにアプリリアージェを見た。
「我々は賢者エイミイの従者ではありません。従者だと思い込んでいたあなたには自己紹介の機会もいただけませんでしたが、まあそれは賢者エイミイが仕組んだことでもありますからとやかく言うつもりはありません」
「それとこれと何の関係があるのだ？」
ラシフは手にした白い面とアプリリアージェとを見比べた。
「ですから、ここで自己紹介をさせていただきます。我ら三人、そして龍の檻とやらに閉じ込められているもののうち一人は世間ではこう呼ばれています。シルフィードの『ル＝キリア』と」
アプリリアージェの言葉にラシフは大きく息をのんだ。
「私は国王アプサラス三世陛下より直々にル＝キリアの司令を拝命しているアプリリアージェ・ユグセル。軍における階級は中将です」

ラシフは白い面を握ったまま絶句していた。
「世界情勢の情報収集はなさっているようですから、ル＝キリアの名はご存じでしょう？」
ラシフはゆっくりうなずいた。それを見るとアプリリアージェは満足そうににっこりと笑って見せた。
「では私の二つ名の方はご存じでしょうか？」
ラシフはごくりとつばを飲み込んで、しゃがれた声で答えた。
「は、白面の悪魔」
「光栄ですわ」
「天下に悪名高いル＝キリアがなぜ正教会の賢者と」
「そこはそれ、いろいろとございまして。それより私たちと賢者エイミイは同じ目的を遂行する為に契約を交わして一緒に行動はしていますが、そもそも双方はいつ敵同士になってもおかしくない立場にあります」
アプリリアージェはそこまで言うと確認するようにラシフを見た。ラシフは言うことはわかる、という風にうなずいて見せた。
「当初はそういう緊張状態から始まった我々の関係なのですが、賢者エイミイはすぐに我々を仲間として接してくれるようになりました。わかりますか？彼はいったん自分の仲間だと思ったら最後、本人は自覚していないようですがそれはもう笑ってしまうほど隙だらけで無防備な状態になるのです」
「何が言いたいのだ？」
アプリリアージェはラシフの問いに悲しそうに首を横にふった。
「わかりませんか？だからこそ、事が起こった場合、私たちは何のためらいもなく彼に背中を預けることが出来るのです」
「名にし負う最強部隊の司令官がこの少年に背中を預けると言うのか」
「ええ。そして、私が言いたいのはその彼が今回はあなたに背中を預けたということです。その意味まで私に言わせますか？」
「……」

「彼はあなたに会う前に、もうすでにジャミールと関わっていたのですよ」
「ユートの事か」
「何度も言いますが、ここを訪れたのは本当に偶然です。他意が入り込む余地などありましょうか？」
アプリリアージェの強い調子に、ラシフは目を伏せた。
「彼はもうあなたを、いえジャミールの里人全員をすでに身内だと思ってやってきたようなものなのです。さらにユートの妹、ルーチェとも知り合ってしまいました。そのルーチェが大切だと思っている人は彼の価値観では仲間なのでしょう。もちろん、口と態度が思い切り悪いのは否定できませんが、あれは彼なりの照れ隠しのようなものだと考えられませんか？」
「そう……なのか？」
「そろそろ私が本当に言いたいことをご理解いただけませんか？」
「何を理解しろと？」
アプリリアージェは側に控えているアトラックに目で合図し、抱きかかえたエイルの体をその大柄なデュナンの青年に預けると、自分はラシフの正面に立った。
「認証文を教えて下さい。さもなければたとえエイル君が今回の事であなたを許しても……いえ、彼は間違いなく口汚くののしるでしょうが、言葉とは裏腹に絶対にあなたを傷つけるなんて事はしないでしょう。けれど我々ル＝キリアが彼と同じ価値観で生きているわけではない事をそろそろ理解するべきだと言っているのです。彼は我々にとって大切な仲間です。しかしあなたはその狭量故に生じたつまらぬ猜疑に支配され、この小さな、私たちの大切な仲間を姑息極まりない計略をもって死の淵に誘った」
「それは」
「事実でしょう？こんなことになってもなお彼は間違いなくあなたを許すでしょうが、私は許しはしません。ですから私はこの場であなたを切り捨てて、早々にこの里を去りたい気分なのです。そもそ

もこの里がどうなろうと我々が知ったことではないのです。我々は単に賢者エイル・エイミイの気まぐれにつきあっていただけなのですから」

「なんだと」

「あ、心配しなくても大丈夫です。私達はご存じの通り人殺しの専門家です。短い間でしたが食事と床の世話にもなりましたし、すでに知らぬ仲でもありません。もちろん苦しまないように一瞬で楽にしてあげますよ」

そう言っていつもの微笑をうかべたまま、アプリリアージェは小首をかしげて見せた。

―（何を考えているのかわからない女）

ラシフがアプリリアージェを見た第一印象がこの時反復された。優しく穏やかに微笑んでいるようにしか見えない同族であるダーク・アルヴの美少女。特徴的な目尻が下がった表情はあどけなく、今の氷の刃のような台詞がこの人物から発せられたなどと言っても、当事者以外は誰も信じないだろう。

もとより、この小柄な黒髪の少女が何百人、あるいは何千人もの人間を手にかけてきたなどと言ったら頭を疑われるに違いないとさえラシフは思った。

「血生臭い仕事は、賢者エイミイの意識が戻らないうちに済ませておきたいところです」

アプリリアージェが続ける淡々とした脅迫に、ラシフは唇を噛んだ。

「私を殺して……里の人間はどうするつもりだ？まさか」

アプリリアージェはラシフの言葉に、微笑ではなくニッコリと笑って答えた。

「もちろん、後顧の憂いがないようにするだけです。ル＝キリアの噂はご存じでしょう？ここにいるのは、ル＝キリアでも選りすぐり

の三人です。そして何よりあなたは私の能力の片鱗をごらんになっている」

「あ……」

ラシフはアプリリアージェの言葉で、里の入り口で最初に出会った際、示威行為として落とされた雷の事を思い出した。

「私たちが全力を出せばあの程度の規模の村なら、本当に数分で動いているものはいなくなるでしょう。ついでですからきれいさっぱり焼き尽くしてあげますよ」

「なんだと？」

「もちろん、私達にも情けはあります。あなた同様、出来るだけ苦しまないようには最善をつくしますので安心して先に逝かれてけっこうです」

ラシフは怒りと恐怖で絶句した。

「悪魔」と呼ばれるこの人物は、間違いなく言った事をその通りやってのけるだろう。

そう確信した。

ラシフはアプリリアージェの通り名を二つとも知っていた。

そして思った。

―（「白面の悪魔」の素顔はまさに「笑う死に神」か。敵も味方も、この女の事を端的にうまく表現したものだ）

「そう言うことで、エイル君が起きる前に済ませましょう。これが最後です。認証文を」

「わかった」

ラシフは手を上げてアプリリアージェの言葉を遮った。観念したのだ。

「認証文を教えよう」

「そうですか。それは残念です」

「え？」

「いえいえ。面倒だからもう教えて下さらなくてもいいと思っていたんですが……」

サラリとそう言ってのけるアプリリアージェの優しい笑顔が、ラシフにはこの世のものとも思えない恐ろしいものに見えた。長く生きていたラシフだが、その時初めて、本当に背筋が凍るような感触というものを味わったと思った。

「私の命など今更惜しくはないが、里の人間を皆殺しにされてたまるものか。それに、この里は我々の先祖がずっと守ってきた場所なのだ。本当に鎮めてもらえるのなら、この命一つくらいは先ほどの代償としてくれてやる。この言葉に偽りはない」

アプリリアージェはラシフの言葉に頷いた。それを見て、ラシフは続けた。

「さっき教えなかったのは賢者だろうが口ばかり達者な少年、それもハイレーンと聞いて強大な古代ルーンが使えるとはとうてい思えなくなったからだ。たいしたことのないルーナーに用はないのだ」

アプリリアージェは首を横に振って見せた。

「だから言ったではないですか」

「何？」

「あなたは賢者エイミイ……いや、エイル君を信用しなかったのだと。エイル君はあなたを信用したのに、です。いったいどこの誰が履行出来もしないルーンの詠唱を進んでするんです？」

「ううう……」

「失敗したら無事ではすまないんですよ？」

「――」

「あなたは、あなたを信じて命をかけて戦っている相手の顔にツバを吐きかけたも同然です。エイル君の口癖ではないですが、恥を知れ、と言いたいですね」

「――」

「正直に言いましょう。あなたが契約文を言わなかった為に賢者エイミイの唱えるルーンが途中放棄で失敗した時、その場であなたを殺したい衝動を押さえるのにずいぶん苦労しました。たぶん、あの話を聞いていなかったらそうしていたでしょうね」

「あの話？」
「あなたのお孫さんの事です。「真赭の頤」の下にルーン修行に出したという」
「ユートがどうしたというのだ？」
「エイル君はそのユート君の兄弟弟子だったんですよ」
「それは、聞いた」
「人の話は最後まで聞いた方がいいですね。狭い村に長くいると本当に人間の価値観は小さく狭くなっていくのですね」
アプリリアージェは挑発とも言える言葉を投げつけたが、ラシフは唇を噛んでこらえた。ここで癇癪を起こしては取り返しのつかないことになるような気がしたからだ。同時にアプリリアージェの言葉からは今までのエイルの憎まれ口とは全く違う種類の……本当の敵意のようなものをひしひしと感じていた。とろけるような微笑を向けたまま落ち着いた口調で話すアプリリアージェに比べると、目をつり上げて声を荒げて口汚く罵るエルデの方が、よほど友好的だったと、まるでおかしな事を考えていた。つまり、それほどの恐怖を喚起させるものをアプリリアージェは纏っていた。
まるでそれが本来のル＝キリアの司令としてのアプリリアージェの姿であるかのように。

アプリリアージェはラシフが唇を噛んで出かかった言葉を飲み込んだのを確認すると話を続けた。
「ユート君はルーナーとしては才能があり、実に優秀だったようですね。けれど、彼は焦りすぎていた」
「――」
「ルーナーとして早く一人前になりたい一心だった彼は、ある日、身の丈に合わない高位のルーンを師匠の許可無く使ってしまった」
「知っているのか……ユートの事を？」
ラシフがそう訪ねた。
だが、アプリリアージェは首を横に振った。

「いえ、直接賢者エイミイから聞いた話は違うものでした。ですが、それはどうやらユート君をかばう為に彼がでっちあげた嘘の話だったようです。でも今お話ししたのはユート君と同じ時期にエイル君と共に「真赭の頤」の弟子だった、もう一人の賢者から聞いた話です。おそらくこちらの方が真実だろうと思っています」

ラシフは目を閉じた。

「我々は「真赭の頤」から、修行途中の事故で命を失ったとだけ知らされた。知っていたら教えてくれ。ユートはなぜ死んだのだ？」

「彼の身内の方にとっては辛い話になりますが、覚悟はいいですか」

ラシフは当然だという風にうなずいた。

「かまわない」

「ではお教えしましょう。ただし、私が言ったことはエイル君には内緒です。ただでさえ今でもオバハン呼ばわりされているのに、それに加えておしゃべりババアだなどと悪態をつかれるのは避けたいですからね」

ラシフは眉根を寄せるともう一度うなずいた。

「本当に口が悪い奴なのだな。あきれたものだ」

アプリリアージェはクスリと笑った。

「そりゃもう、ルーンの才能よりもそっちの方が天才的なんじゃないかと思えるくらいですから」

「わかった。口は堅い方だ。そちから聞いたことは言わぬ。約束しよう」

微笑んだままアプリリアージェはゆっくりとうなずいた。

「それは不幸な事故だったそうです。当時の大賢者の弟子は全員がその場に居て、弟子の筆頭格であるユート君が唱える新しいルーンが一体どういうものなのかを見守っていた……」

そこまで話すと、アプリリアージェは視線をラシフから外して、アトラックの腕の中で目を閉じているエイルの方をじっと見た。

「ユート君が唱えたのは炎の精霊の力を借りる高位の攻撃ルーンで

した。詠唱は問題なく進んでいるように見えました。そしてユート君が認証文までをすべて詠唱し終わった時、ルーンが発動し炎が出現しました。けれどそれは詠唱者の制御を全く受け付けようとはせず、なすすべもないままにあっという間に部屋全体を覆ってしまったという話です。まあ、想像すると平和な普通の部屋が、一瞬にして溶鉱炉に変わってしまったようなものなのでしょうね」

「な、なんだと？」

にわかに険しい表情になったラシフが一歩踏み出したのを見て、アプリリアージェは手を上げてそれを制した。

「「真赭の頤」の弟子達……いや、ユート・ジャミールにとって不幸中の幸いだったのは、その場にエイル・エイミイというルーナーが居合わせた事です」

まるでその場を見ていたかのように冷静に語るアプリリアージェが手を上げて制したことで、ラシフの興奮はさっと冷めた。アプリリアージェが語っているのは昔の話なのだと言うことを思い返す事ができたようだった。

ラシフの肩から力が消えたのを確認すると、アプリリアージェは続けた。

「けれども、弟子とは言えまだ幼く、かつエクセラーとしての訓練や修行を全くさせてもらえていなかったかったハイレーンであるエイル君がその時に使えたルーンは、同じ炎のルーンでも初歩の初歩のもの。ルーナーであれば誰でも使うことの出来るイロハのイのような取るに足らない攻撃ルーンだったそうです。でも彼はとっさにそのルーンを詠唱しました。結果……」

「どう……なったのだ？」

ラシフはゴクリとつばを飲み込んだ。

「知りたい、ですよね？」

「そこまで話しておいて、今更何を言う。覚悟は出来ている」

アプリリアージェは今度は何も反応せずに話を続けた。

「結論から言いましょう。ユート君が起こしたその事故は、その場

にいた「真赭の頤」の弟子をすべて死に追いやりました」
「何だと？」
「ただし、例外がありました。二人だけがその事故から生還したそうです。もちろん一人はエイル君です。そしてもう一人は、その事故の時にエイル君の後ろにいた弟子で、彼女はエイル君のとっさの判断で奇跡的に助かったのだそうです」
「もう一人……とは？」
「私にこの話をしてくれた人物です。すでに賢者となり「二藍の旋律」と名乗っていました。昨日のことです。我々と一緒にジャミール入りはせず、急ぎの用があるということで別れました」
「生き残った二人は、ともに賢者になれたということか」
「そうですね」
アプリリアージェは相づちを打った。
「エイル君も、その生き残った弟子の一人である賢者「二藍の旋律」も口を揃えて『生きていたならば、ユート・ジャミールは間違いなく賢者になっていたよ』と言っていましたよ」
「そうか。それでユートは、その時？」
アプリリアージェはうなずいた。
「エイル君はあまり詳しい話をしませんでしたが、あの時は自分と自分の後ろの人間を守るだけで精一杯だったのでしょう。何しろ彼がたったの八歳くらいの時の話だそうですからね。でも、そのたった八歳のエイル君はその時唯一知っていた初歩の炎のルーンを使い、比べものにならないほど高位のルーンで生み出された炎の暴走を押し戻したということです。部屋全体が溶鉱炉と化す前に、ね」
「その話が本当ならば、あやつはなんと言う……」
「エイル君がいた場所がユート君に近ければ、助かった人はもっと多かったのでしょう。すべては一瞬の事でしょうから、迷っている時間などありはしなかったにちがいありません。彼はその時、彼ができる最良の選択をしたのだと私は思います。私も話を聞いただけですが、普通に考えて本来誰一人生き残ってなどいない事故だろう

な、と思いました」
「そんなことがあったのか」
そう言ってうなだれるラシフをアプリリアージェは少しの間見つめていたが、両手を腰にあてて強い調子でラシフに言った。
「わかっていますか？全部あなたのせいなのですよ」
「え？」
思ってもいなかったアプリリアージェの突然の批難にラシフは思わず顔を上げた。そこにはいつもと変わらぬ微笑みをたたえた黒髪のダークアルヴが立っていた。
「ユート君をそこまで焦らせたのはあなたのせいではないですか？過度の期待は簡単に人を殺せるんです。それは相手に才能があればあるほど」
「私がユートを追い詰めていたというのか？」
「あなたにそんなつもりがなくとも、ね」
「……」
「ユート君はこのルーナーの里でもその血筋がら、才能もあり、事実きわめて優秀なルーナーだったのでしょう？」
ラシフはうなずいた。
「だからこそ期待した。何百年かぶりに代々伝わる古代ルーンを使えるルーナーになってくれるに違いないと。そしてユート君もその期待に応えようとした」
「そうだな」
「それだけの事なんです。簡単な事。でも、その因果として、今エイル君がそこで倒れているんですよ。あなたはそこまで理解すべき立場にいる人間なのです」
「あ……」
「「二藍の旋律」もそうでしたし、もちろんエイル君もユート・ジャミールを責めるつもりなどないのでしょう。むしろ彼がやろうとしていたこと、なぜ焦っていたのかをここに来て初めて知り、思いを果たせずに散った彼の意志を継ぎたいと純粋に思った……。そう

は、思いませんか？」
「わかった」
「そのエイル君を、あなたは殺そうとしたんですよ」
「わかった。もういい」
ラシフは声を荒げたが、アプリリアージェはかまわず続けた。
「私があなたを殺したいと思った事もわかっていただけましたか？」
アプリリアージェの言葉には直接答えず、ラシフは首を横に大きく振ると独り言のようにつぶやいた。
「愚かなのだな、私という存在は。ユートを送り出した時も、そして今も」
「これが普通の馬鹿な親ならまだ話もわかりますが、一族を率いる立場にある者がそこまで愚かだと、これはもう万死に値しますね。でも、そんなあなたにエイル君は身を挺してもう一度機会を与えてくれたのですよ」
ラシフは地面を見つめたまま、しかしもう何も反論はしなかった。
「エイル君は自信たっぷりに自己礼賛する通りの天才的なルーナーですけど、それ以上に天才的なあの口の悪さですから、あなたが好意を抱けないのも理解できます。かくいう私もオバハンと言われていったい何度悲しい気持ちになったことか」
アプリリアージェはそこまで言うと、ため息をついた。
―（もっともらしいことを長々としゃべってましたけど、結局司令は最後のあの愚痴を族長に聞いて欲しかっただけなんじゃないですかね？）
（……）
アトラックは隣にいるテンリーゼンの耳元に小声で話しかけた。
だが、もちろんテンリーゼンは全くの無反応だった。とはいえそんなことはアトラックとて百も承知なので話に乗ってこなくてもがっかりなどはしなかった。
残念ながらこの場にはこう言うときの彼のよき話相手であるファ

ルケンハインもエルネスティーネもいなかった。背に腹は代えられないという事なのだろうが、返事はなくとも誰かに話すことがアトラックにとっては重要のようだった。

―（なんというか、ああなるともはや手の込んだ嫌がらせのようなものですよね）

（……）

―（よっぽどオバハン呼ばわりが頭にきてるんでしょうね）

（……）

―（どこで間違いが起こるかわかりませんし、俺、絶対に口にしてはいけない言葉として、未来永劫「オバハン」は封印することにしますよ）

（……）

テンリーゼンは微動だにしなかったが、その肩に乗った「マナちゃん」は首をかしげ、不思議な物を見るような目でアトラックをじっと見つめていた。

「ヴォリトス・エル・デア・キキルナ・セロ」

少しの沈黙のあと、顔を上げたラシフはいきなり意味不明の言葉を口にした。

「ヴォリトス・エル・デア・キキルナ・セロ」

小さいが、はっきりとした声で、ラシフはもう一度そう声に出した。

「ヴォリトス・エル・デア・キキルナ・セロ」

アプリリアージェはその言葉を復唱して見せた。

それが、認証文だった。

「アトル、念のために覚えておいて下さい」

「もう覚えましたよ」

アトラックがすかさずそう言うと、アプリリアージェは彼を振り返ってニッコリと微笑んで見せた。

「そうそう。嫌がらせだなんて人聞きが悪いですよ。私はこの里を

救いたい一心で心を鬼にしてお話ししたのですから」
アトラックの顔から一瞬で血の気が失せた。
「嫌がらせ？」
アプリリアージェがアトラックにかけた言葉に対して怪訝な顔でラシフが尋ねたが、ダーク・アルヴはいつもの微笑で
「いえいえ、こっちの話です」
そう言って軽く受け流した。

「さて、どうしたものでしょう……」
アプリリアージェがそうつぶやいた時、アトラックの腕に抱かれたままだったエイルが小さいうめき声を上げて、目を覚ました。
「エイル、大丈夫か？」
アトラックは真っ先に声をかけた。
目を覚ましたのはエルデのようだった。
強く握ったままだった白い儀仗を持ち直すと、頭を上げて当たりを見回した。
自分がどういう状態なのかを把握するのに数秒を要したが、アトラックに介抱されている事を認識すると、
「大丈夫や。スマンな」
そう声をかけて自分の体で立とうとしてみせた。アトラックは何も言わずにそれを手伝ってやった。
「気分はどうですか？体はなんともありませんか？」
「ああ、一応は大丈夫みたいやな」
アプリリアージェにそう答えると、エルデは何とか二つの脚で自立し、大きく深呼吸をした。

【おい、エイル】
エイル……いやエルデは体の本来の主に呼びかけた。
【エイル？】
答えがない。

【答えて、エイル。エイル・エイミイッ！】
【おいっ、エイルッ！】
エルデの呼びかけに、やはりエイルからの返事はなかった。エルデに焦りが広がった。だが、もちろんそんなことは周りの人間にはわからない。
「遅れましたけど、お礼を言っておきます。おかげさまで助かりました」
アプリリアージェはエルデの焦りに気づくでもなくそう言うとニッコリ笑いかけた。それを受けてエルデは苦笑を浮かべてみせた。
「いや。ひょっとしたら……大丈夫やないかもしれん」
「え？」
「いや……って、お前っ！」
アプリリアージェの後ろに立っていたラシフを認めると、エルデは形相を変えて噛みついた。
「よくもやってくれたな。おかげでえらい目に遭わせてもろたわ。ホンマにおおきに！」
ラシフはうなだれた。
「悪かった。実は」
「あ、念のために確認しておきますけど」
ラシフが何か言おうとしたのに気づき、アプリリアージェがそれを遮るようにした。
「さっきまでの話は全編他言無用ですよ。あなたもこれ以上賢者エイミイに嫌われたくはないでしょう？」
ラシフはアプリリアージェの言葉を受けてうなずいた。
「何の話や？」
「ラシフさんは自分のしたことを悔いて、認証文を教えてくれました。私が覚えています。もちろんアトラックに聞けばいつでも教えてもらえるようにもなっています」

「一回十エキュな」
アトラックはすかさずそう言うと、ウインクをしてみせた。
「高すぎや！」
「大丈夫。一回目はお試しで無料です」
「なんやそれ、思いっきりいかがわしそうな認証文やな」
エルデはあきれたようにそう言うと、改めてラシフをにらみ据えた。
「本物の認証文やな？」
「今までも私は嘘はいっていない」
「フン。まあ、確かにそうやな」
完本か？と尋ねたら完本だと答えた。それは嘘ではなかった。
ただそれは特殊なルーン書で、契約文を間違えなく最後まで詠唱した場合、ある条件を持つものだけが読める文字が浮かび上がるようになっていたのだ。
そしてその文字が読めるのは族長であるラシフだということなのであろう。
特定の血族か、あるいはその文字を読むための別のルーンがあるのかもしれないが、どちらにしろ完本ではあったし認証文を教えるという話は事前に確約していた訳ではなかった。
そう言う意味では確かにラシフは嘘はついていないと言えた。
エルデは視線を再びアプリリアージェに戻した。
「認証文と引き替えに例の話をしたんか？」
「例の話、だと？」
ラシフはエルデの言葉に敏感に反応したが、アプリリアージェは首を横に振った。
「いえ。それは、まだ」
「そっか」
エルデは深くため息をつくとラシフ達に背を向けて再び火山に対峙した。背筋を伸ばし顎を引いて幾重にも連なるノーム山脈の山影を従えてそびえ立つレイジノ山の噴煙を見やると普通の声で杖に呼

びかけた。
「ウルド」
白かった儀仗はエルデの呼びかけに、今度はその身を黒い姿に変えた。
エルデは皆に背中を見せたままで呼びかけた。
「認証文を」
「ヴォリトス・エル・デア・キキルナ・セロ」
エルデの呼びかけにラシフが反応して口を開いたが、彼女が声を出すよりも先にアトラックのよく通るいい声がエルデの耳に届いた。
「つぎは十エキュな」
アトラックが続けてそう言うと、エルデは「ふん」と答えた。
その口元は笑っているようだった。
エルデのその様子を見ていたラシフはようやくあることに気づき、慌ててエルデに声をかけた。
「まさか、今すぐにやるのか？」
「え？」
エルデはラシフを振り返った。
ダーク・アルヴの族長を見つめる黒い瞳は、まるで「お前は何を言っているのだ？」と言わんばかりにラシフには思えた。
「その、大丈夫なのか？」
ラシフは振り向いたエルデにそう声をかけた。
「意識が戻ったばかりではないか」
ラシフがそう言って自分の体の調子を不器用に案じている事を理解したエルデは「なあんだ」と言ったふうに、ニヤリと笑って見せた。
「別件の方がちょっとやばいかもしれへんけど、この古代ルーンの詠唱には問題ない。さっき契約文を詠唱して逆行現象を受けてみて、このルーンがだいたいわかった。こんなもん、文字通り朝飯前やって、朝飯は食ったんやったな」
エルデはそれだけ言うと、再び火山と対峙した。

「あれで、わかるのか？それから、本を開かないでいいのか？」
ラシフはアトルが手に持ったままのキュアのルーン書を指さした。
「契約文はもう覚えている。その本の役目は終わったんや。まったく……俺を誰やと思てんねん」
「賢者さま……と言えば答えになるのか？」
「くっくっく」
エルデはラシフの言葉を聞くと背中を見せたままおかしそうに肩をふるわせて笑った。
「まあ、見とき」
そう言って右手に持った儀仗ウルドを水平に構えて見せた。
「ま、待て」
詠唱を唱えようとしたエルデに、ラシフはまた声をかけた。
「今度は何や？」
エルデは振り返らずに答えた。
「いや、その……古代ルーンを唱える前に強化ルーンなどをかけておかなくてもいいのか？」
「はあ？」
エルデは思わず儀仗を下ろした。
「そこにリリア姉さんがおるやろ？」
「え？ああ」
「リリア姉さんはいつもの通り笑ってるやろ？」
「――確かに、微笑んでお前を見守っている」
「実はあれ、笑ってるんやのうて、普通の顔やねん。知ってた？」
「何？微笑んでいるのではないのか？」
「いや、あれが真顔やねん」
「そうなのか？」
「そやねん。ちょっと怖いやろ？」
「怖いというか、確かに変わった人物だというのはわかる」
「まあ、そのリリア姉さんが俺に警句を発せへんのやから、強化ルーンの必要なんかないやろ？」

「さっきと同じではないのか？」
「いや」
エルデは首を横に振った。
「さっきは警句を告げてくれてたんやけどな。俺が無視した」
「そうなのか？気付かなかったが」
「めんどくさい人やからな。素直な言葉では言わへん。姉さんと一緒におると、いつも色々試されてるみたいで大変なんやで」
「あら。私はいつも会話を楽しんでいるだけですよ」
「なるほど。お前達は本当に信頼し合っているのだな」
「信頼？」
エルデは意外そうな顔をした。
「いや、確かな情報として利用しているだけや。だいいち、認証文が本物なんやからそもそもそんな心配はいらんやろ？」
「それは、つまり私を」
「もうええやろ。始めるで」
ラシフの言葉はエルデに中断されたが、彼女はもうそれ以上何も言わなかった。何も言わず、ラシフは初めてエルデの背中に向かって心からの礼をした。
エルデにその様子が見えているはずはない。だが、ラシフにはその時エルデが小さくうなずいたように思えた。
それを見たラシフは突然、目頭に熱いものを感じた。それは何の前触れも意識もなく襲ってきたような、不思議な感覚だった。
そんなラシフの心の変化を知ってか知らずか、エルデは小さい深呼吸をした後、黒い儀仗ウルドを掲げて詠唱を始めた。
契約文を唱えるエルデの口調は恐ろしく早かった。
『もう覚えている』
そう言ったエルデの言葉は掛け値なしに本当の事だったのだ。順を追って契約文を浮かび上がらせる必要があったため、初回は本に沿ってルーンを唱えていたエルデだが、今は認証文も手元、いや頭の中にある。後は暗唱するだけであった。

だが、それにしてもエルデの詠唱は本当に速かった。早口な人間は何人も知っているアプリリアージェでさえ、エルデの早口には舌を巻くしかなかった。

そうやって感心している間に、契約文の詠唱はあっけなく終了した。

エルデはそこで少し間を置くと火山に向けて少し大きな、そしてゆっくりとした口調でアトラックに告げられた認証文を唱えた。

「ヴォリトス・エル・デア・キキルナ・セロ」

ルーンはこれで完成した。

はずであった。

事実、今度は認証文を唱えても何も起こらなかった。

何も起こらないということは、少なくともルーンの履行は成功した事を意味する。

だが、あまりに何も起こらないのも、傍観しているものにとっては物足りない。いや、限りなく不安であった。

「えっと……終わり？」

おそるおそるアトラックがエルデにそう声をかけた。

ラシフに尋ねようかエルデに尋ねようか迷った末、声をかけやすい方を選んだアトラックだった。

「うん。終わりや」

アトラックの問いかけが合図だったかのようにエルデは水平に構えていた黒い儀仗をゆっくりと下ろすと振り向いた。

「成功なのか？」

アトラックはエルデに向かって続けてそう問いかけながら、しかし視線はラシフに向けていた。エルデはアトラックの視線を追うようにしてラシフの方を見た。

「ご意見は？」

だが、先にラシフに声をかけたのはアプリリアージェだった。

ラシフは首を横に振った。

「手応えは術者にしかわかるまい？」
「フン。おっつけ煙も消えるやろ。でも、ちょっとええか？」
エルデは目が見える左側からチラリと背後の火山を振り返るとそうラシフに声をかけた。
「何だ？」
「心配せんでええ。ルーンは問題なく発動してる。けどな」
「けど？」
「――どちらにしろこの里は捨てた方がええな」
「何だと？」
ラシフは思わず一歩身を踏み出した。そのあまりの剣幕にエルデは思わず一歩後ずさると、話を続けた。
「最後まで唱えて確信したけど、このルーンは一種の冷却ルーンや。それもある一定以上の温度の物体にしか反応せえへん特殊な冷却術やな。まさに火山のマグマをさますのにぴったりや」
「で、あるならなぜ里を捨てろと？まさかルーンの発動が不十分だったのか？ハイレーンだからか？」
「なんや？またハイレーン叩きか？」
「いや、しかし」
「ルーンはもちろん大成功や」
「ではなぜ里を捨てろと言うのだ？」
「冷やしすぎた」
「は？」
黒い瞳のルーナーは珍しく卑屈な笑いを浮かべると、バツが悪そうに頭をかいた。
「最初やから加減したつもりやったんやけど、手応えからすると、どうもちょっと冷やしすぎてもうたみたいやねん」
エルデのその言葉にアトラックとラシフはお互いに顔を見合わせた。一歩下がったところに立っていたアプリリアージェは腕を組んで片手を頬にあて、考え中と言った風に首をかしげていた。
「たぶん、今までの術者の力で発動させていたこのルーンは、この

火山の直下の一部分だけを冷やして膨張を押さえていたんやと思う」
「うむ」
「つまり、その下のマグマだまりまでは個体化せず、体積が減ったことでマグマの通り道も確保されてて、それはこの次大きな膨張が起こったときでも一応誘導路として働いてこの火山付近が噴火するような形になるわけや」
「なるほど」
アプリリアージェはそこでポンと手を打った。
「エイルの言ってる事がわかったんですか？」
アトラックの問いにアプリリアージェはうなずいた。
「実際にそうなるかどうかは事が起こらないとわかりませんが、エイル君はかなり広範囲に、しかもかなり深くまでマグマだまりを冷やして個体化してしまった……つまりあの火山への溶岩の誘導路を含めて全部塞がってしまったと言う事ですね？」
「おお。ご名答」
エルデはそう言って手を叩いて見せた。
「それよりも問題は個体化による体積の収縮で、このあたり一帯の地下に広大な空洞が出来てしまったという事なのでしょう？要するにこのあたりの地下は今現在、スカスカ状態と言うことですね」
エルデはうなずいた。
「マグマの勢力がある程度回復して、塞がった通路が使えずにむずがる地下のマグマ活動に誘発された大小さまざまな地震が発生したら、このあたりの地盤は一帯どうなる事やら」
「なんだと？」
「そりゃもう地割れなんかも簡単にできるやろうし、そうなると今まではあのレイジノ山の火口でガス抜きしてた誘導路がなくなってる訳やから、新たな隙間……噴火口候補なんてその辺に無数に生まれちゃうかも～やな」
エイルはそう言うと舌を出して肩をすくめて見せた。
「貴様、なんと言うことをしてくれたのだ！」

ラシフは目をつり上げてエイルに詰め寄った。だが、それをアプリリアージェがやんわりと制した。
「落ち着いて下さい、族長」
ラシフは立ち止まって振り向き、制したアプリリアージェをにらみつけた。
「これが落ち着いていられるかっ」
「大丈夫です。そう言うことが起こるのはもう少し後でしょう。エイル君はかなり冷やしてしまったそうですから、地表にマグマの勢力が及ぶまで回復するにはそれなりの間隔があくということではないでしょうか？」
「少なくとも、上っ面を冷やした程度で次を待つ……つまり、今までよりは長いこと安定してるやろ」
「そ、それを早く言え」
ラシフは肩を落とすと大きなため息をついた。
「お前達と話をしていると冗談抜きで寿命が縮む」
アプリリアージェはラシフの言葉を受けてクスッと笑った
「さっきは尽きかけていましたね、寿命」
「何の話や？」
「こっちの話ですよ」
エルデににっこり笑いかけると、アプリリアージェは珍しく小さくチロリと下を出して見せた。
エルデはそれを見て気の毒そうな顔をラシフに向けた。身も凍るような脅しをかけられたに違いないことを直感したのだ。およそ交渉術に長けているとは思えないラシフである。アプリリアージェにかかっては赤子も同然にしてやられたに違いなかった。
エルデは認証文をラシフが口にした経緯を何となく想像して、族長に対して気の毒に思う気持ちが沸いてくるのを止められなかったのである。
「まあでも、安心ばかりもしてられへんで。広範囲にマグマが冷えたことで別の問題も出る」

「たとえば？」

「たとえば、このあたり一帯に湧出していた温泉が枯れる可能性がある。温泉だけやのうて、湧き水自体が地表に出る前に新たに生まれた空洞に飲み込まれてしまう事は簡単に予想できるやろ？空洞に水が飲み込まれまくると池や湖なんかもなくなるかもしれへん。つまり、飲み水の問題がまずある」

「そうなのか」

エルデは腕組みをして少しうつむくと続けた。

「あとは植生やな。昨日からこの付近の様子を見てて思たんやけど、このあたりは高地やのにそれほど寒うないし、存外作物がよく育ってるんやないか？それにこの標高にしては不自然に広葉樹、それも落葉灌木が多い。察するにこれは全部地熱のせいやな」

ラシフはエルデに言われてがけの縁まで進み寄ると、辺りをゆっくりと見渡した。

「場所にもよるが、確かに冬でも雪がつもらない地域もけっこうある。そこでは長く作物も作れる」

「そう言う場所が熱を失う。それはもう今すぐに、や」

「――」

「もう少し大きな話をするなら、地熱が関係しているこの付近一帯の気温自体が変化する可能性も高い。いや、間違いないやろな。この地の上昇気流が無くなると、この地域の気流自体が変わる。つまり気候が激変する。ちゅうことは、や。間違いなくこの冬は今までにない厳しさに見舞われるやろ」

エルデはそこまで話すと言葉を切り、里に続く森を見下ろすラシフの背中をじっと見守った。

ラシフは眼下に広がる山肌を眺めていた。秋も深まり様々な色に染まった山肌はもう何年も見慣れた光景で、そしてそれはラシフにとってこの先もずっと続くものとして信じて疑わない人生の背景のようなものだったのだ。

――（不自然に大きなルーンを使い続けたツケが今頃になって回って

きたという事か）

ラシフはそう心の中で自問すると、ゆっくりとエルデを振り返った。

「わかった。どちらにしろ……決断しろということだな？」

エルデはラシフに注いでいた視線をアプリリアージェに移した。

アプリリアージェはエルデの視線を受けて微笑んだままで小さくうなずいた。

エルデはそれを見て同じようにうなずくとラシフに向き直った。

「そもそも話を聞いてたら、族長のところの一族は一つの宗教というよりも、族長の持つルーンの力に対する尊敬によってまとめられてるような集団やろ？」

エルデの言葉に、ラシフは眉をひそめた。いや、いきなり話の方向性が変わった事に驚いたと言った方が正解だろう。

「だが、シルフィードではそれでも弾圧されたと伝え聞く」

「アトル」

エルデはラシフを見つめたままで傍らに控えるアトラックに声をかけた。

「なんだ？」

「シルフィードの現行法でこの形態の部族を取り締まるようなものがあるんか？」

「そうだな……」

アトラックは腕組みをして少し考えた後、こう答えた。

「個人が唯一神マーリンを信じて崇拝すること自体はシルフィードでも禁じてはいない。というか、個人の信条など黙っていればわからないんだし、取り締まりの対象にできるはずもない。問題は崇拝行為を第三者に見せる為に行事化したり、複数の人間が集まって崇拝行為を行うなどを禁じているだけだ。人に強要したり勧誘するのももちろん御法度だな」

エルデはラシフを見つめたままで、アトラックの回答にうなずいた。

「この一族はマーリンの力というよりも火山を神格化してそれを制御するルーン、いやそのルーンを使うルーナーを自分たちの指導者とする習慣があるだけやと見たけど？」

アトラックはエルデの問いに答える前にアプリリアージェの方を見やった。視線を感じたアプリリアージェはアトラックと視線を交えるとゆっくりと、しかしはっきりうなずいて見せた。アトラックはそれに小さくうなずき返すと口を開いた。

「同感だな。この集落がシルフィードにあったとして、今言った御法度を遵守し、かつ属する地区の法律やシルフィードの法律に則った暮らしをしていれば特に取り締まれる法律は存在しないと思う。あとは……そうだな、ここの場合は外から入ってくる旅行者やよそから入って来て問題のない手順を踏んで定住したいと言う者を自分たちの非認定法、つまり「掟」とかいうもので排除する事をしなければ何ら問題はないだろう。残る問題、つまり今行っている神事や行事を当たり障りのない物、つまり創立記念祭や収穫祭などに置き換えればそちらも解決する。事実、そうやってシルフィードに残っている集団は多いんだ」

「それに、スカルモールドを来客にけしかけるんも無しで頼むわ」

「それは、もう謝った」

「謝って済む問題かいな……普通の人間やったらイチコロで死んでるで」

「いや、スカルモールドを普通に剣で倒せるお前はともかく、ファーンが来るのがあと少し遅かったら俺達の方はどうなっていたかわからないがな」

「それはウチやのうてエイルの特殊な能力やな。今みたいに俺一人やったらエアの中ではどうしようもなかったやろな。ある意味真っ先にやられてたかもしれへんわ」

「いや、エイルには驚いたぞ、だいたいあいつは」

「俺一人？」

エルデとアトラックの会話に割り込もうとしたラシフの質問を遮

るように、アプリリアージェが口を開いた。
「族長という名前を捨てて、里人に選ばれた村長という立場になればいいのではないですか？そしてその土地を国王から預かって統治している領主がその村長の立場を認めれば、その集落は緩やかな自治を存続できます。それにアトラックが言ったようにあからさまな宗教色のある行事でなければ、収穫祭などはそれこそ各地が自由におこなっていますし、村長がそれを積極的にとりまとめていくようにすれば一族の文化はある程度継承できると思います」
エルデがそれに続けた。
「もちろん、外部からの血は入ってくるやろ。ダーク・アルヴ純血というわけにはいかんようになるやろな。反対に集落から出ていくやつもきっと出てくる。それを掟とかで縛って止めることもできへんわけやから、血の濃さを求めるのならムリやろうけど、同族ばかりで婚姻を続ける弊害は……知ってるな？」
ラシフはうなずいた。
「我々は血族であることや純血のダーク・アルヴであることを第一義としているわけではない。シルフィードの法に村ごとただ追い出されただけなのだ」
「たぶん、デマと誤解でこういう悲劇は国中でおこったんやないのか？」
エルデはアプリリアージェを見やった。アプリリアージェはエイルとは目を合わせずラシフに声をかけた。
「昔の話を我々がどうこう言う立場にはありません。ですから私達があなた方に対して謝る事も何か違うと考えます」
「我々も今更お前達に謝って貰おうなどとは思っていない」
「そう言っていただけるとこれからの話がしやすいです」
「これからの話？」
アプリリアージェはうなずくと首をかしげ、にっこりと笑って見せた。それはいつもの微笑ではなく明らかに笑顔であり、その邪気のない美しい表情にラシフは思わずハッとした。

アプリリアージェは表情を崩さずにはっきりとした声でこう言ったのだ。
「シルフィードにお帰りになりませんか？」
アプリリアージェ・ユグセルがこの時ラシフ・ジャミールに対して告げた言葉は短い言葉だったが、ジャミールの一族にとっては歴史の一頁を綴るほど……いや、新たに一冊の本を編纂する程、重く大きな言葉だった。
アプリリアージェは声を失っているラシフにゆっくりと歩み寄ると、その小さな手に握られたままの白い面……アプリリアージェの二つ名の由来となったあの面を受け取るべく手を差し出した。
ラシフは無言のまま素直に差し出された手に白い面を返した。
アプリリアージェはエルデの方に顔を向けると白面を持った腕を差し出した。
「燃やしてくれませんか？」
「ええのか？」
「よく考えたら、『白面の悪魔』はアロゲリクの渓で死んでました」
エルデはさらに何かを言おうとして少し口を開きかけたが、それをすぐに閉じると儀仗ノルンを持ち上げ、頭頂部を差し出された白面にそっと当てると小さい声で短いルーンを唱えた。
「ウェルカ」
何も起きない。
だがエルデはそのまま表情を変えず、続けてもう一つのルーンを唱えた。
「エリフ」
唱えると同時に今度は白面から炎が立ち上がった。白面はあっという間に灰に変わり、アプリリアージェの手からこぼれ、風に乗って崖の向こうへ消えていった。
「白状しますけど、使う事があるかもしれないと思っていたんです」
「ウチも白状するけど、使われると嫌やなって思ってた」

「使う必要なんて、とっくになかった事を思い出したんですよ」
「俺が意識失うてる時に何かあったな？」
エルデはそう言うとアトラックとラシフを交互に睨んだ。
アトラックはあからさまにあらぬ方向を向き、ラシフは怪訝な顔でエルデを見返した。
アプリリアージェは反芻したのだ。ラシフに対して語ったエイルとエルデの話は、実は自らにも言い聞かせる言葉だった。
白面の役割が終わった事。いや、終わっていた事を、ラシフに語りながら自覚したのである。
燃えた灰が風で運ばれた方角を目で追いながらアプリリアージェは思った。
最後に使ったのが、戦闘の為でなくて良かった、と。

しばらくその場を支配していた静寂を破ったのは、一行の声ではなかった。
「ラシフ様ー！」
その声は崖に続く森の中から聞こえてきた。ラシフがすぐに反応した。
「ヒノリのようだな」
その言葉を証明するように副兵士長の筆頭であるヒノリが、姿を現した。
彼は一行からある程度の距離まで近づくと片膝をついて短剣を地面にそっと下ろして頭を下げた。
「どうした？」
族長に促され、ヒノリは頭を上げて一行にとって重要な情報を告げた。
「精霊殿の修復がほぼ完了いたしました」

# 第五十九話　帰還

「本当にあの時は肝が冷えました」

結局、精霊殿は最終的な調整の為の手直しに思いのほか手間取り、通路結界を構築できる状態に修復したのは正午を大きく回っていた。

それから『鍵』と呼ばれる、ラシフの血で神痕を描いた紙を所定の位置に寸分の違いもなく設置されると、ようやく「通路」を確保する為のラシフのルーン詠唱が始まった。

そんなこんなでル＝キリアの仲間達が合流できたのは「天中星」と呼ばれるファランドールの太陽がすでに長い影を作り出す時間帯に入っていた。

約一日ぶりに地上に出て来たエルネスティーネはエイル達の心配をよそに、たいそう元気だった。

地震の際「龍の檻」に地割れが発生し、運悪くメリドがその亀裂に飲まれた時の様子を身振り手振りを交え、彼女にとって良い聞き手であるアトラック相手に興奮気味に説明していた。

「そんな時、今度は突然ラシフ様が現れたのですが、あの時には一体どうなることかと思いました。まさにあれこそ【一男去って次女、三女】でした」

「そ、そりゃ大変だったね……」

アトラックはエルネスティーネの話に相づちを打ちながら、助けを求めるようにチラリと上官の方を見やった。だが、アプリリアージェはアトラックの予想以上に薄情であった。彼女はアトラックにあからさまに背中を向けると、ファルケンハインとアキラを相手にこの間の事情を尋ねていた。ティアナはエルデの手伝いをアプリリアージェに指示されて別の部屋に逃れていた。

「アトル、私の話をちゃんと聞いてますか？」
恨めしげな視線をアプリリアージェに注ぐアトラックをなじるようにエルネスティーネが文句を言った。
彼女にははぐれていた仲間達に話したいことが山ほどあった。だが彼女が一番話したい相手であるエイルはなぜかエルネスティーネとはあまり目を合わせようともせず、ファルケンハインに抱きかかえられたダーク・アルヴ、すなわちメリドの骨折の治療を理由に側に張り付いていたため、かわいそうなアトラックは唯一残された人間としてエルネスティーネ監修の長い長い、そして劇的な物語の聞き手になっていた。

アプリリアージェの指示でエルデ達にあてがわれていた迎賓殿にある一番広い部屋に、メリドは横たえらていれた。
「結構時間がかかるのですね」
正座したままメリドの側で儀仗ノルンを構え続けるエルデに、一通りの情報収集を済ませた黒髪のダーク・アルヴはそう声をかけた。
「かなりひどい骨折なのですか？」
アプリリアージェはそう尋ねると、エルデの横に同じように正座してメリドの表情をうかがった。
地表に上がってきた時のメリドは骨折に伴うかなりの高熱で意識が朦朧とした状態だったのだ。その様子を見たルーチェはさすがに取り乱して父親に取り付いたが、エルデが大丈夫だからとりあえず触らずそっとしておけと言い聞かせて許可があるまで近づかせないようにした。
一方、妻であるイブロドはさすがにしっかりしていた。
彼女は「命には別状はない」というエルデの言葉ですぐに冷静さを取り戻し、治療の手伝いを申し出てラシフの許可をとっていた。
エルデとしても断る理由などなく、すぐに夜具の用意を頼んだ。
アプリリアージェがメリドの床にやってきたときには、そのイブ

ロドはエルデの依頼を受け、薬の材料を調達するためにティアナを従えて部屋を出たところで、その場にはいなかった。
エルデは隣に座ったアプリリアージェの方に顔を向けると、口元に手を当てて耳打ちをした。
「とっくに治療は済んでるんや」
アプリリアージェは可笑しそうにクスっと笑うとうなずいた。
「考える事は同じですね。アトラックには悪いとは思いますが」
エルデは頭をかいた。
「さすがは名にし負う戦術家やね」
二人がそんな会話をしているところへ、次の間にいるエルネスティーネの大きな声が聞こえてきた。
「それはもはや「由々しき鍋に敷物なし」という気分としか言いようがありませんでした」
アプリリアージェはその声を聞くと右のこめかみを中指で押さえる格好をした。
「もはや原型すら留めていませんね」
「俺は原形を留めてるのか留めてへんのかすらもわからへん。でも」
「でも？」
「ネスティが元気や、いうのはようわかる。正直言って、ホッとしたわ」
エルデはそう言って小さくと笑うと、それまでずっと握っていた儀仗ノルンをそっと床に置いた。
「骨はもう完全にくっついて元通りや。でも解熱はせえへんことにした。骨折から一昼夜以上経ってるそうやしな。今無理に熱を下げると本来持っている免疫反応まで収まって、感染症が起きるかもしれへん。そうなると面倒や」
「驚きですね」
「いや、熱が出るのには訳があるんや。そやから無理矢理下げたらあかんのは常識やろ？」
「いえ」

アプリリアージェはゆっくり首を横に振った。
「以前言ったことがあるかもしれませんが、私は一応医療関連の知識もそれなりに持ち合わせていますが、古今東西、骨折をあっという間に直すハイレーンなど聞いたことがありません。我が国のバード達がこの事を知ったら大騒ぎでしょうね」
「そっちか」
「ですから、骨折がもう元通りになっているなんて夢にも思っても見ませんでした」
「ハイレーンはハイレーンでも、ただのハイレーンとちゃう言うてるやろ？」
「そうでしたね」
おどけて胸を反らせるエルデにアプリリアージェは素直にそう言ってうなずいた。だがすぐに珍しく少し険しい顔をしてエルデの目をじっと見た。
「な、なんやねん？」
急に様子が変わったアプリリアージェの表情に、エルデは思わずたじろいで少し上体を反らした。
「あの時はラシフが居たので聞けなかったのですが」
アプリリアージェは膝をずいっとエルデの方に向けた。
「？」
「あなた……つまりエルデ君が精霊逆行（リバウンド）回避で気を失って、その後目覚めた時、最初に言った言葉です」
「――ああ、あれか」
「『大丈夫じゃない』とはどういう事ですか？」
「……」
「もしかして、エイル君に関係がありますか？」
エルデは目を見開いてアプリリアージェを見た。その目は素直に驚きに満ちていた。だがすぐにその顔は苦笑に変わった。
「リリア姉さんが期限付きとは言え敵やのうてウチらはホンマに幸運やな」

「それはお互い様です。それより、あれから一切エイル君が表に出ない。私の記憶ではこんなに長い間エルデ君のままだったことは今までありませんでした」
「――今更隠しても仕方ないから言うけど」
「はい」
「エイルの意識が戻らへんねん」
その一言で、エルデにはアプリリアージェの特徴である下がった目尻が一瞬上がったように見えた。
「それは……どういう解釈をしたらいいんでしょう？」
「このまま目覚めへんかったら、エイルの人格は消えるやろな」
「それじゃあ……」
「ずっと呼びかけてる。でも返事はない」
「それって」
「いや、まだ手はある」
「手、ですか？」
エルデはかすかにうなずくとゆっくりと頭を下げた。
「少し、面倒をかけるかもしれへん。姉さんにはこれからそれを頼もうかな、と思ってたんや」
「そんなこと」
アプリリアージェはすっと伸ばした手をたエルデの膝に柔らかく置いた。
「今更私があなた達の寝首をかくとでも？」
エルデは顔を上げて力なく苦笑した。
「リリア姉さんは照れ隠しの方は得意種目やないみたいやな」
「それもお互い様ですね」

それから少し沈黙があった。
次にエルデが口を開いた時の彼の表情からはアプリリアージェは何も読み取れなかった。
「俺はしばらくの間、意識を消す」

アプリリアージェはそれには答えなかった。エルデはそれを待たずに話を続けた。
「つまり、しばらくの間ここに逗留してもらう事になるんやけど」
これにはアプリリアージェは即座に答えた。
「それは好都合です」
エルデはある程度その答えを予期していたのであろう。うなずくと尋ねた。
「例の件、本気なんやな？」
「ええ、もちろんです。先行して動いておきますよ。明日の朝にでもファルケンハインとティアナに走ってもらおうと考えています」
「そっか。なら甘えさせてもらうわ」
アプリリアージェはいつもの微笑を浮かべたまま目の前のピクシィの少年の黒い瞳をじっと見つめると、思い出したように尋ねた。
「その目と髪、もういいんですか？あなたの姿を見たアモウルさんが口をあんぐり開けて驚いていましたけど」
「あ、ああ」
エルデは自分の前髪をちょっと引っ張って色を確認するような仕草をした。
「発作で元に戻った後、かけ直すのをすっかり忘れてたわ。ヴェリーユに入る前まではもうええやろ。エイルはこっちの色の方が好きみたいやしな」
「なるほど。……それで、しばらくと言いましたが、それははっきりとした時間がわからないという事ですね？」
「エイルが起きるまで、やな」
「了解しました」
それだけ言うと、アプリリアージェはスッと立ち上がった。

ル＝キリアと出会った当初、エイルとエルデはアプリリアージェが今のように音もなく自然に立ったり座ったりが出来るのは風のフェアリーの能力だろうと思っていた。だがそれはアプリリアージェ

とテンリーゼンだけが持っている能力だと言うことはしばらく経ってからわかったことだった。
ファルケンハインにせよアトラックにせよ武人とは思えないその立ち居振る舞いの優雅さは並のものではなかったが、アプリリアージェやテンリーゼンのように無音という訳ではなかった。
では、風のフェアリーの能力を持つ、もともと身が軽いダーク・アルヴやアルヴィンの持つ特性なのかとも思ったが、風のエレメンタルであるアルヴィンのエルネスティーネと出会って、それも違うという事を認識した。そしてそれは個人の能力だという結論に達していた。
エルネスティーネは王宮仕込みのきわめて優雅で美しい立ち居振る舞いを見せてくれたが、それは動作の形における洗練であって、まるで体重がそこに存在しないかのようなアプリリアージェ達の動きとは全く違うものだった。
そよ風に舞い上がる水鳥の羽毛のような軽やかさで立ち上がったアプリリアージェに、エルデは声をかけた。
「理由は聞かへんのか？」
「ええ」
アプリリアージェはそう答えてにっこり笑った。
「イブロドが来ました。私はそろそろ覚悟を決めてアトラックに助け船を出しに行くことにします」
エルデはそれには答えず、苦笑を浮かべて見せた。

「失礼します」
アプリリアージェの言う通り、部屋の入り口でイブロドの声がした。その後ろには結構な荷物を抱えたティアナが控えていた。
その声を合図にアプリリアージェはその部屋を後にした。
イブロドは会釈するアプリリアージェの為に道をあけると、深く頭を下げた。
そしてその後ろ姿を少しの間見送っていたが、エルデに促されて

我に返った。
「どうした？遠慮せずに入ったらええで」
「これは……失礼しました」
「リリア姉さんがどうかしたか？」
礼をして部屋に上がりながらも、さらに一度アプリリアージェを振り向いたイブロドにエルデは怪訝な顔でそう声をかけた。
「いえ、あの方は高名な軍人だとうかがっていたのですが」
エルデはニヤリとした。
「族長がそう言ってたんか？」
「はい」
「そうは見えへんやろ？」
イブロドはコクンとうなずいた。ラシフの実の娘だけあって、近くで見ると族長によく似た愛くるしい顔立ちだとエルデは思った。ラシフの顔をさらに柔らかく優しく手直しするとこうなるのではないかと思われる伏し目がちの眼差しがイブロドの特徴と言えた。
「この方はわかりやすいエーテルを纏っておいでですが」
イブロドは後ろのティアナを見上げた。
「ああ、やっぱりな」
「やっぱりとは何だ、やっぱりとは」
ティアナは二人のやりとりにムッとして文句を言った。
イブロドはクスッと笑うと
「でも、あの方には全く殺気のようなものがなく、穏やかというか、複雑ですが静かなエーテルに包まれています。ですから軍人と言うよりも、巫女だと紹介された方がまだ納得できます」
エルデはイブロドの表現に思わず苦笑した。
「その直感はある意味的を射てるな」
「え？」
「俺が思うに、あの人は自分の守るべきものに帰依した存在や」
「守るべきもの、ですか？」
それが何かをイブロドは問うたのだろうが、エルデはそれには答

えず、アプリリアージェが去った方に改めて視線を向けた。
イブロドもそれをなぞるように再び振り返った。

「「遠くの珍説より近くの仮説」という言葉をしみじみと感じました……あ、リリアさん」

エルネスティーネは部屋に入ってきたアプリリアージェをめざとく見つけると、頭に「マナちゃん」を載せたまま飛びついてきた。反動で「マナちゃん」がアプリリアージェの顔に張り付いた。

「アモウル様には本当に助けられました。その話を今アトラックにしていたところです」

アプリリアージェは顔に張り付いたマナちゃんをゆっくりと引きはがすと、エルネスティーネの頭の上にそっと載せなおし、微笑んだままアトラックに視線を移した。

憔悴しきった部下の向こうにはアキラとファルケンハイン、そして仕事が無くなった為、いったんイブロドの助手をお払い箱になったティアナが今まさに加わり、三人が車座を形成して座っているのが見えた。

アキラが何とも言えない妙な表情でいるのが可笑しくて、アプリリアージェはたまらずクスっと笑いを漏らした。だが幸い、それは彼らには気づかれなかったようだった。

アキラの向かいにいるファルケンハインも、彼にしては珍しく苦笑を浮かべている。おそらくはエルネスティーネの不思議ことわざ攻撃に面食らっているアキラの戸惑いをどうやって納得させたものかと困っているところなのだろうとアプリリアージェは察した。

「みんな無事だったのですから、良しとしましょう」

アプリリアージェはエルネスティーネの短い金髪を撫でながらそう言った。エルネスティーネは仲間と無事に再会できた興奮がさめやらず、まだしゃべり足りないようだったが、その言葉には素直にうなずいた。

「本当にそう思います」
「そうだな。特に今回はネスティの機転があればこそ、みんな無事に帰ってこれた」
ファルケンハインは自分の上官に軽く黙礼をすると、ようやくおとなしくなったエルネスティーネをそう言って持ち上げた。
「聞きました。私はシルフィードの人間としてネスティを誇りに思います」
アプリリアージェはそう言うと改めてエルネスティーネの頭を優しく撫でてやった。エルネスティーネはくすぐったそうに目を細めて見せたが、すぐに思い出したように訪ねた。
「メリドさんとエイルは？」
アプリリアージェはその問いにはすぐに答えず、エルネスティーネの頭に手を置いたままでアキラに声をかけた。
「そのことで我らが雇い主様に相談があります」
「改まって私に相談、ですか？」
アキラは思いも寄らないお鉢が回ってきたと言いたげに、わかりやすく体全体を使って『さも驚いた』ような態度をして見せた。
こういう芝居がかったところが芸術家らしいとアプリリアージェは思った。だが、決してそれを疎ましいとは思わなかった。アキラがそうすることは自然な事だと思えたのだ。それだけアキラの立ち居振る舞いと纏う雰囲気が彼らに受け入れられていたということなのだろう。

アプリリアージェは一応部下達を目で牽制した上で話し始めた。口を挟むな、という意味だが、もちろんエルネスティーネとティアナには通用しないであろう事は想定済みだった。
「お急ぎの旅ではないという事でしたので、少し甘えさせていただきたいのですが……」
改まった口調でそう言うアプリリアージェに、アキラは顔から微笑を消した。

「首領らしくもない。単刀直入に願いたい」
アプリリアージェはいつもの微笑のままでうなずいた。
「お言葉に甘えます。このジャミールの地に短期逗留をしたいのです」
「ほう」
アキラは良いとも悪いとも言わず、アプリリアージェの次の言葉を待った。アトラックとファルケンハインは顔を見合わせた。
「我らがルーナーにしばらく休養が必要なのです」
その言葉に、案の定アキラよりも先にエルネスティーネが反応した。
「エイルがどうかしたのですか？やはりはぐれていた間に大変なことがあったのですね。一見元気そうでしたが私にろくに声もかけなかったのは調子がたいそう悪いのを隠すためだったのでしょうか？」
目を大きく見開き、もう少しでべそをかきそうなほど顔を崩したエルネスティーネが一気にそうまくし立てるのを見ると、アプリリアージェは気の毒になった。そして「彼は実は興奮して連発される難解なことわざ攻撃を避けるためにエルネスティーネに近寄らなかっただけだ」とは口が裂けても言ってはならないと改めて決心した。
「まあ、いろいろありましたが大丈夫です。ただ、古代ルーンの精霊逆行（リバウンド）回避とメリドの骨折治療でかなり消耗してしまったようで、その消耗回復の間、特殊な睡眠を取る必要があるそうなのです」
アプリリアージェはそう説明した。
もちろんエルデと打ち合わせをした訳ではない。だが、彼女はその辺の一切をエルデから頼まれたと解釈していた。で、あればアプリリアージェ風にそれすら利用させてもらおうと考えての説明だった。
「メリド殿は命には別状はないとの話だったはずだが」
アキラがそう言うとアプリリアージェはうなずいた。
「ええ。ですがエイル君は彼の骨折をもう完全に治してしまったん

ですよ。骨折により内部に入った細菌などの免疫作用である熱については敢えて冷まさず、本来の治癒能力を嵩上げする措置をとったそうなので今夜一晩熱が出ますが、それも明日の朝には収まって、メリドさんはまったく元通り元気になるそうです」

「なんと、折れた骨を瞬時に修復することが出来るのか？」

アキラは驚きを隠さない顔で感嘆した。そこには演技臭などはない。少なくともアプリリアージェはアキラの驚きを素直なものと感じた。

「賢者という事もあり、その名こそ知られてはいませんが、おそらく彼はファランドール屈指のハイレーンでしょう」

「なるほど」

アキラはアプリリアージェの説明に納得したようだったが、即答はせずに腕を組んで考え込んだ。

「ご都合でも？」

「いや」

アプリリアージェの問いにそう答えたアキラだが、その顔を上げると、アプリリアージェではなくそこから見える里の外に広がる深い森に視線を向けた。彼らが座っている部屋続きの板敷の露天舞台のような場所は森に近く、その森の上にはそれぞれアイスとデヴァイスという名を持つ二つの月が輝いていた。

「もとより急ぎの旅でもない」

「では」

「ただ、このあたりの土地の独特の雰囲気があまり私には馴染めぬので気乗りがしないのですよ」

アプリリアージェは早とちりを自省するように目を伏せるとうなずいた。

「我らがルーナーによれば、このあたりの土地全体に方向感覚を狂わせるような仕掛けが施されているそうです。それも相当強力なもののようで、感受性が高い人ほど違和感を覚える期間が長いのだそ

うです」
「結界か」
「しばらくすると慣れるそうですよ。でも、もしお気に召さないのであれば、もちろんアモウルさんを優先します。ただ、賢者の世話係として私ともう一人ほどここに残る事はご承知いただきたいのですが」
「いやいや、それには及びません」
アキラは手を上げてアプリリアージェを制した。
「私としたことが先に繰り言が出てしまった。許していただきたい」
「と、言うと？」
アキラはうなずいた。
「私としてはこれ以上この旅の道連れが減るのは寂しい限り。アトラック殿の推薦口上のとおりここは清潔で快適な寝床もあるし、逗留する間は朝食のベーコンの薄さに落胆する事もなさそうだ。この館にはなんと温泉もあるそうだし、こちらもルーナー殿が回復するまでのんびりする事についてやぶさかではありませんよ」
アキラはそう言うとアプリリアージェに微笑んで見せた。アプリリアージェはそれを受けてゆっくりと頭を下げた。両側の髪が顔にかかり、耳に付けた金色のスフィアがころんと揺れ、白い月「アイス」の光を反射して小さく光った。

「いや、ベーコンについてはこの里が良識派であれば俺のと変わらない厚さだと思いますよ」
交渉は成立したと判断したのかベーコンの話題に黙っていられなくなったのかは不明だが、アトラックが話に割って入った。
彼としてはこれ以上朝食ベーコンにおける「厚切り派」の増長を許すことは出来なかったのだろう。
「で、あれば、俺はこの里が良識派でないことを祈ろう」
同様にアトラックの反論に釣られたのかどうかは定かではないが、ファルケンハインがいつものようにベーコンの厚さについては断固

とした異論を唱えた。
　そのやりとりを見ていたアプリリアージェは、微笑したままでアトラックにこう言った。
「安心していいですよ、アトル。この里では朝食にベーコンは出ませんから」

「あの……」
　その場を再び立ち去ろうとするアプリリアージェの背中にエルネスティーネが声をかけた。アプリリアージェはかすかな緊張を背中に走らせたが、すぐに振り向いた。
「エイルは、その……本当に大丈夫なのですか？」
　エルネスティーネのその問いに、アプリリアージェは微妙な緊張を解いた。不思議な「ことわざ」を投げつけられるのかと思って身構えていたのだ。
　考えてみればエルネスティーネが「エルデ」ではなく「エイル」の心配をするのは至極自然な事だった。だが、アプリリアージェはその言葉の意図を無視することにした。
　いや、彼女は正確なことを答えられる立場になかったのだ。
　だから、不確実な真実ではなく、認知している事実を告げた。
「少なくとも口の方は達者ですね」
　アプリリアージェの言葉にエルネスティーネはほっとしたようにため息をついた。
「よかった。でも、話を聞くとハイレーンは高位になるほど消耗が激しくなるということなのでしょうか」
「そうですね。今まで我々は彼のここまで高位の治癒ルーンを目の当たりにした訳ではありませんからなんとも言えませんね。傷口の治癒と違って骨折を瞬時に治してしまう程のルーンになると、負担は桁違いなのかもしれませんね」
　アプリリアージェはこの場で事情をつまびらかにする気は毛頭なかった。ル＝キリアやエルネスティーネに対して隠す必要はもはや

なかったのだが、アキラにはまだエイルとエルデの秘密は話してはいない。もともと彼に秘密を告げることを避けたのはエルデなのだから、彼らの口から話すまでは秘密にしなければいけないことだった。それにまだラシフに説明する段階でもないと思っていた。

アプリリアージェは続けた。

「彼自身は大丈夫だと言ってます。だから大丈夫ですよ」

「そうですね」

エルネスティーネはそう言ったが、その声は寂しそうだった。

「話がしたいですか？」

エルネスティーネは、アプリリアージェの問いに素直に首を縦に振って答えた。

メリドをダシにエルネスティーネを遠ざけたエルデの戦術は単純なだけに効果覿面で、アプリリアージェはその効き目に思わず苦笑した。そして目の前に寂しそうに佇む、まるで普通の娘にしか見えない「ネスティ」が自らが忠誠を誓う国の王女であることを「思い出す」自分が何とも言えず滑稽に感じられた。

世が世であれば出会うことなどないはずだった一国の王女と不思議な旅のルーナーが出会い、離れがたい存在として今ここにこうやっている事には、何か大きな意味があるのではないかと言う事に、アプリリアージェはこの時初めて思い至った。

少なくともアプリリアージェには、二つの月を背負うようにしてこちらを見上げる金髪の少女にとって、エルデ……いや、エイル・エイミイという存在が予想以上に大きなものになっている事を強く認識していた。

それを止めるべきなのか、ただ見守るべきなのか。あるいは積極的に応援すべきなのか……。アプリリアージェは運命という時の流れが持つ力が、自分にどれを選択させようとしているのかをまだはかりかねていた。

少なくとも彼女が与えられた使命にそのような項目はない。エイ

ル・エイミイとエルデ・ヴァイスがエルネスティーネの敵でない限り排除する理由は存在しなかった。つまり、アプリリアージェにとって、現状ではそれが手持ちの要素のすべてだった。

「手が離せるかどうか聞いてきましょう。でも、すっかり元気になったエイル君とゆっくり話す方がいいのではないですか？お話をしている相手が眠そうな顔だとネスティもつまらないでしょう？」

「……それはそうですけど」

見るからに不満そうに口をとがらせるお姫様を見て、アプリリアージェはただでさえ下がっている目尻をさらに下げた。

「『もう子供ではないのですから』とティアナなら言うでしょうね」

アプリリアージェは軽くからかったつもりだったが、ティアナの名前を持ちだした効果は予想以上だった。エルネスティーネは思い切り頬を膨らませると、恨めしそうにアプリリアージェを睨み「わかってます」と小さく文句を言ってきびすを返した。

――（エルデには相当の感謝をしてもらわないと割に合わないわね）

アプリリアージェはクスクス笑いながらその場を後にした。

その背中に、アキラが吹く笛の音が朗々と響き渡り、思わずアプリリアージェは立ち止まった。

族長には許可をもらってあった。一行の疲れた気持ちを癒せるなら、とアプリリアージェが進言し、その旨アキラに伝えておいたのだ。

良い音色だ、と改めて歩き出したアプリリアージェは思った。その音色を聞いていると、安心感に満たされたような気分になり、ともすればアキラがもう長い間旅を共にしている大切な仲間のように思えてくるのだった。

その笛の音を、アプリリアージェ以上の安心感をもって聞き入っている者がいた。それは一人ではない。二つの人影だった。

彼らは糸杉の大木のかなり上部にある手頃な枝に腰掛け、白い月アイスが作る光から姿を隠して笛の音のする方を見つめていた。

「本当に良かった」

つぶやく一つの影にもう一つの影が応えた。

「何度もそう申し上げたではありませんか」

「うるさい、黙れ。部下が上官の心配をして何が悪い」

小さくそう叱りつけたミヤルデ・ブライトリング大尉の声に、しかし怒気はなかった。アキラの腹心の一人であるセージ・リョウガ・エリギュラス中尉は笛の音が聞こえる前、つまりつい今し方まで五分と間を開けずに「どうなさったのだろう」「何かあったのだろうか」と落ち着かずにあたりを行ったり来たりしていた上官の姿を思い出して笑いをこらえるのに苦労をしていたのだ。

それがバレた時の上官の逆上ぶりを想像してなんとか笑いをこらえると、セージは話題を変えた。

「しかし、いつもながら見事に仲間になりきりますね、大佐は」

「まったく困ったものだ」

ミヤルデは安心した反動からか、いつになく上司に対して毒舌を使った。

「楽士の方が天職だとおっしゃっていたが、ここまで見事に風来坊を演じられると、もはや冗談には聞こえぬな」

セージはまたも苦笑を隠すのをこらえる困難に直面していた。

「ともかく、だ」

セージがうつむいて苦笑しているのに気づいたのだろう。ミヤルデは少し声を大きくして同じ腹心の一人である相棒に言った。

「指示通り、我々はこれよりヴェリーユへ向かう」

「ヴェリーユですか。船旅になりそうですね」

「それにあそこは内陸だ。本格的な冬支度が必要だな」

「そろそろ双朔月（ならびさくづき）です。この辺にはもう冬が来ますからね」

セージの言葉を聞いて、ミヤルデは葉陰から顔をだして二つの月を仰ぎ見た。月齢が進み、アイスもデヴァイスも、もうかなり細くなっていた。このあたりでは秋の双朔月が過ぎると降る雪が根雪となり、本格的な冬が到来すると言われていた。

「そうと決まれば善は急げです。早々にこの忌々しい森を出ましょう」

ミヤルデはうなずいた。

妙な結界が敷かれているせいで、方向感覚が全くきかない状態が続いていた。ごく近くにいるセージすら見失うことも度々であった。だからこそぷっつりと連絡が途絶えた上官の安否を気遣っていたのだが、風が運んできたゆったりとした笛の音を聞いて安心したとたん、徹夜続きの疲れが急に両肩にのしかかってきた。セージの言う通り、とりあえず森から出て、適当な場所で早く休みたかった。

そんなミヤルデの気持ちを察したのかどうかはわからないが、セージが魅力的な提案をした。

「今夜は実に月が美しいですね。申し訳ありませんがあの月を堪能したいので、今夜は私にずっと見張り役をさせてもらえませんか？」

「――かる」

「え？」

聞き取れないほど小さな声でミヤルデが何かを言った。それを聞き直そうとしたセージはミヤルデに怒鳴られた。

「それで良いと言ったのだ。何度も言わせるな！」

「す、すみません」

セージはしかし、怒鳴られてもニヤニヤ笑いが止まらなかった。なぜなら、彼にはちゃんと届いていたのだ。

最初にミヤルデが言った「助かる」という声が。

# 第六十話　もう一つの帰還

「そろそろお返事をいただきたいのですが」
一同が車座になってそれぞれの席に着くと、間を開けずにアプリリアージェが切り出した。
前振りも何もなくちょうど真向かいに座っているラシフに向かって挨拶をするような何気ない口調でそう声をかけた。

両者の会合場所はラシフの希望もあり、「族長の屋敷」と呼ばれる私邸の客間で行われていた。
ラシフにしてみれば客人の宿舎である迎賓殿ではなく私邸に彼らを招き入れた理由は、警備の都合ではなく会合に参加する人数を制限したかったからのようだった。それはその日の会食の後、ラシフ自身の口からアプリリアージェに対し「部屋は広くないから全員を入れることは出来ない」と釘を刺していたことからも容易に察することが出来た。
アプリリアージェはエルデと相談の上、会合に出席する人数を五名とした。すなわちアプリリアージェ、エルデ、ファルケンハイン、ティアナ、そしてアキラだった。
ファルケンハインとティアナにはアプリリアージェからの特命があり、会合に出席する必要があった。アキラを敢えて会合に加えることについてもエルデとアプリリアージェでは意見の対立はまったくなかった。
エルデはアプリリアージェの提案に頷くと
「必要最低限かつ最良の人選やと思う」
そう言っただけだった。
エルネスティーネは主にエイルと一緒に居られるという理由からもちろん参加したがったが、アプリリアージェがたしなめる前に「

今夜はゆっくり休め」とエルデにたしなめられた。
さらにエルデは「よく眠れるまじないだ」と言って、緩やかな睡眠導入の効力があるルーンをかけたものだから、エルネスティーネにはそれ以上まぶたの重さに逆らえる力は残っていなかった。

ジャミール側の参加者はラシフを除くと次期族長がすでに決定しているルーチェ、族長補佐役である「四人組」から次席のシスカ、そして筆頭副兵士長であるヒノリの三名を加えた総勢四名が出席していた。

四人組筆頭であるイブロドがラシフの命でメリドの看病に当たっている為に、次席であるシスカが、同様にメリドの代わりにヒノリが兵士代表として出席した格好だった。

エルデは出席した面々を見渡し、それがラシフの型にはまった性格を表しているように思えた。

――（四角四面やねえ）

そう思ってアプリリアージェの方を見た。

彼女は何も言わなかったが相手が誰だろうと話す内容は同じだという風にいつもの微笑をたたえていた。

「詳しい話は後で、という事だったはずだ」

いきなり核心である返答を要求され、不意を突かれた格好のラシフはしばしの沈黙の後、そう言った。

「あら。私は返答は後でいいですよ、と言ったのです。詳しい話も何も私の申し出を断るか受けるか、きわめて単純なお話のはずです」

エルデはラシフの左右に座っているジャミール側の面々を観察していた。そして今の二人の受け答えを聞いたルーチェの戸惑った表情を見て確信した。

どうやらラシフは仲間にはまだ何の説明もしていない様子だった。おそらくこの場で改めてアプリリアージェ側から正式な要請と詳細説明がなされると思っていたのだろう。それはすなわちラシフがま

だ結論を決めかねている事に他ならなかった。

エルデは頭をかくとさも嫌そうに口を挟んだ。

「面倒やから最初から話をした方がええかもしれへんな」

アプリリアージェは頷いた。

「そうですね。さっさと決めて後の面倒な事はファルに任せて久しぶりに心ゆくまで飲もうと思っていたんですが」

そう言うとアプリリアージェは再度一同を見渡すとゆっくりとした口調で告げた。

「改めて説明しましょう。私ことアプリリアージェ・ユグセルは、我が名に於いてジャミール一族の族長ラシフ・ジャミールに対しシルフィード王国への里人全員の帰還を要請しました」

その言葉はアキラを除く全員に一瞬の静寂を、そしてアキラには大きな動揺をもたらした。アキラはアプリリアージェに声をかけようとしたが、それはジャミール側の混乱で無視される格好になった。しかし、アプリリアージェはそんなアキラの様子をしっかりと視界におさめていた。

「シルフィードへ帰れだと?」

静寂を破る大きな声。これはヒノリだった。

「ええ」

ヒノリの方に顔を向けると、大声に全く動じた様子もなくアプリリアージェは微笑んだままそう答えた。

「我々を故国で処刑するおつもりなのでしょうか」

おどおどしたシスカの問いには

「まさか、そんな面倒な事はしません。処刑をするならここでやりますよ」

平然とそう言って、さらににっこりと笑いかけた。

「お前が言うと冗談に聞こえんからやめてくれ」

苦々しげな表情でラシフがアプリリアージェをなじった。

「冗談ではありませんよ。今朝方も言いましたが私は面倒な事が嫌

いなんです」
　アプリリアージェはにっこりと笑ったままラシフに向き直るとこう続けた。
「もちろんシルフィードに帰りましょうというお話の方も冗談ではありません」
　簡単に説明を受けていたファルケンハインとティアナとは違い、アキラにしてもこの話はまさに寝耳に水だった。礼儀正しく手を上げて発言をしようとするアキラをめざとく見つけたエルデが、小さく手を上げ、目を伏せて左右に首を振った。後にしろ、という意味だったが、アキラはそれに素直に従った。
「冗談ではないという言葉を信じた上で尋ねる」
　ラシフもエルデと同様に身内に一瞥をくれると発言を制し、一同を代弁するかのような質問を始めた。
「帰れと言うが、今更どこへ帰れと言うのだ？我々の土地など、千年も前に奪われ、今はもうないのだぞ？仮にその土地の利権を主張してもそれが『はいそうですか』と認められると思っているほど私はバカではない」
　アプリリアージェは首を横に振った。
「そんなことは問題ではありません。族長がジャミール一族をシルフィードに帰還させたいのか、この集落の皆さんがシルフィードに帰る事に同意するのかどうかだけが問題です」
「なんだと？」
「皆さんの新しい里はこの私が用意します」
　そう事も無げに言ってにこやかに微笑むアプリリアージェをラシフは真顔で見つめた。
「シルフィード軍の提督には、そこまでの力があるとでも言うのか？」
　ラシフの言葉に今度もアキラは反応して、一同を値踏みするように見渡した。
　アプリリアージェは視界の端でアキラのその様子を押さえつつも、

すぐに視線をラシフに戻した。その太い特徴的な眉の後端を下げ、少し困ったような笑顔を作って。
「さすがにいち提督にはそんな権限はありません」
「ではなぜさも簡単そうに請けあうのだ？」
怪訝な表情を崩さず食い下がるラシフと、相変わらず腹が読めない笑顔のアプリリアージェのやりとりにそわそわと落ち着かない様子だったアキラだが、たまりかねたように割って入った。
「ちょ、ちょっと待ってほしい」
ラシフは忌々しそうな顔をアキラに向けた。
「何だ、お主は？」
「いや、一応自己紹介はしたはずですが」
「そんなことを言っておるのではない。一介の楽士がなぜこのような場に連なっているのかを聞いておる」
「私も今彼女にあなたと同じ質問をしようと思っていたところですよ、族長さま」
「なんだと？」
そう言ってラシフの次の言葉を詰まらせたアキラは改めてアプリリアージェに向かうと堅い口調で問いかけた。
「首領は今、族長さまに『シルフィードの提督』と呼ばれていた気がするのだが」
その言葉にアプリリアージェは困ったような顔を作って首をかしげて見せた。
「さらに、先ほど確かに『ユグセル』と族名を名乗っておいでだ」
「ばれてしまいましたね」
そう言うとダーク・アルヴの娘は黒髪を揺らしてにっこりと笑った。
「そうか」
アキラはそうつぶやくと目をしっかりと閉じた。
「最初に出会ったあの時に、気づくべきだったのだな」

「ユグセル」という族名を自分の前でアプリリアージェが自ら口にした時、アキラは瞬時に『その時』が来たと判断した。
アプリリアージェの正体がアキラの前で初めて明かされたのだ。
アキラは思った。
相手が言おうがこちらが指摘しようが、ここで正体が明かされることは全て彼女の計算なのだと。
わざわざ首脳会談とも言える場に正体を知らぬはずの者を招き、無防備と言ってもいいような状況でいとも簡単に自分の本当の肩書きを明かして見せたのである。
アキラにしてみれば最初の出会いの時にアプリリアージェが差し出した手鏡にあったユグセル公爵家のクレストが意味する謎を見落とすという失策を犯していただけに、この場で同じ失敗を繰り返す愚は避けねばならなかった。
だから、間髪入れずに対応した。
用意していた対応だ。声をかけたタイミングも不自然ではないはずだという自信があった。

アキラのその問いに答えたのはエルデだった。
横道に逸れて話が込み入ることを恐れたエルデは、アキラではなく族長ラシフの質問に答えるという形で話の軌道修正にかかった。
「族長は『白面の悪魔』の事は知ってるのに、面をとった悪魔の素顔に興味がなかったようやな」
「白面?!」
アキラは思わず立ち上がった。これも彼が準備していた行動であった。併せて用意していた言葉を続けようとしたが、エルデが片手をあげてそれを制した。
「『白面の悪魔』の、別の肩書きだと?」
ラシフはアキラの無礼な振る舞いにチラリと睨みを走らせたが、相手にするのはやめてエルデに向き直った。
「この場でもったいぶるほどの、殺戮者のもう一つの肩書きがある

というのか？」
　エルデはいつもの人をバカにしたようなニヤリとした笑いを浮かべた。
「ファルンガ領主ユグセル公アプリリアージェ。それがシルフィード王国海軍中将とはちゃう、もう一つのリリア姉さんの肩書や」
「ファルンガだと？しかも公爵？」
　ラシフの目が、これまでにないほど見開かれた。シスカとヒノリも同様で、二人はお互いに顔を見合わせた。
「『白面の悪魔』がユグセル公爵だと言う事を知っている人間などそれほど多くはないぞ、賢者殿」
　アキラは、ゆっくりと自分の席に座り直しながら、エルデにそう言った。
「ふーん。で、アモウルも知らなかったと？」
「諸国をただ旅しているわけではない。普通の人間では知り得ないようなそれなりの情報も耳にする。しかし、ル＝キリアの司令の正体がユグセル公爵だなどという話は聞いたこともない」
　そう言った後でアキラはアプリリアージェをしげしげと見つめながら続けた。
「すまないが、レナンスの私でもさすがにこの状況に少々混乱している」
　アプリリアージェは腕組みをしたアキラを見ていつものにっこり顔で事も無げに言った。
「あらあら。聡明なアモウルさんのことですから、私の事などはもうとっくにお気づきだとばかり思っていました」
「いやいや、それはない」
　慌てて大きく手を振って、アキラはそうシラを切った。手鏡を見逃した手前、シラは切り通すしかないのだ。
「諸国を巡る旅の音楽家、それもドライアドの公爵符を持つほどの方でしたら、それなりの事情通のはず。まさか我がユグセル家のクレストを知らぬなどと言う事はないでしょう？あなたの言う『あの

時』にすでに気づいていてしかるべきだと思っていました」
アプリリアージェにしてみれば、この問いかけは来るべき時の為にとっくに用意していたアキラに対する最後の謎かけであった。
最初は言葉通りアキラの登場は変だとは思った。だがその後同道しながらつぶさに観察をしたつもりだったが、実のところ怪しいそぶりは一切なく、今回の出来事に至っては身を挺して仲間を助けるほどの動きをして見せた。敵であればもうとっくに正体を現してしかるべきだと判断していたのだ。ただ、それを不動のものとするために敢えて網を張ってみたに過ぎない。アプリリアージェにしてみれば最後の保険のようなものだったのだろうが、アキラにしてみれば同道を始めてから最大の難関を突然突きつけられたようなものだった。

「あの手鏡は盗品だと信じて疑わなかったのだ。あのような特別な品物を入手できる力を持った一団だという宣伝のようなものだと理解していた。素直にユグセル家の方ですか？などと思える訳があるまい？」
即座に返したアキラの口調には怒気が含まれていた。もちろん彼一流の演技だったが、アプリリアージェは眉を普段よりいっそう下げて見せた。
それはアキラの返事に満足したという表情だった。
「ここまで来たからには事情の一部は後ほどお話しします。つきましては当面の面倒な仕事を片付けたいのですが？」
アキラはアプリリアージェの言葉に大きくため息をついてみせた。
「よろしく頼むよ。私はまったくとんでもない連中に護衛を頼んでしまったものだ」
「すみません」
アプリリアージェはそう言うと自分達の雇い主に軽く頭を下げて、改めてラシフに向き直った。もちろん、微笑をたたえながら。
「話を続けましょう」

ラシフは自分を見て微笑んでいるアプリリアージェからアキラ、エルデ、ファルケンハイン、そしてティアナへと視線を移した。腕組みをして目を閉じたアキラはともかくとして、ファルケンハインはラシフの視線に反応して小さく頷き、ティアナは大きく頷いた。

その視線が今度はエルデと交錯すると、黒髪のルーナーは言葉で反応した。

「知らんと思うから付け加えといたるわ。ユグセル公爵は現在シルフィード王国の王位継承権第五位や」

ラシフはしかし、もう驚かなかった。肩書きを聞いたからと言って向こうの態度が変わるわけではないことが彼女にはもうわかっていた。

「この顔で、か？」

ラシフはにこにこ笑うアプリリアージェの方を指さして見せた。

「そう、あの顔で」

エルデも同じようにアプリリアージェを指さすとそう言って頷いた。

「ファルンガはのんびり暮らすには本当にいいところですよ」

『この顔』と言われた、目尻の垂れたいつも優しげな微笑を宿す黒髪の小柄な少女は、二人に指をさされても全く反応せず、さらに笑いを深めたように見えた。

「もっとも首府ユーゲンのど真ん中に広大な敷地をよこせと言われても困りますが、火山地帯にあるこの谷間より安全で暮らしやすい土地を皆さんに用意するのは簡単です。もちろん新しい村を開墾するわけですから皆さんにはそれなりに汗を流してがんばって貰わねばなりませんが、ファルンガにはそういった事が得意な州兵もいます。集落作りなどは彼らにも手伝わせましょう。もちろん、お望みならば族長の指揮下で動くように指示しておきますよ」

淡々と受け入れについて説明を始めたアプリリアージェの言葉に対し、ラシフが何かを言おうとしたのを見てエルデは敢えてその言

葉をさえぎった。
「忘れたらアカンで。ユートはこの土地を守りたいと言うたんやない。里のみんなを守りたいって言うてたんや。力を付けてみんなが平和に暮らせる助けになりたいってな」
ユートという名前を聞くとラシフは言葉を発しかけていた口を閉じ、視線を床に落とした。
「ユートは」
ラシフは俯いたままで小さくつぶやいた。
「ユートは……お前に二度救われたことになるのだろうな」
そう言うとラシフは顔を上げた。
だが、ラシフのその言葉を受けるべき瞳髪黒色の少年の視線は、垂れ目のダーク・アルヴの少女に向かっていた。ラシフにはエルデがアプリリアージェを睨んでいるように見えたが、はたしてその通りだった。
「『ラウっち』には口止めされていませんでしたから、ちょっと喋っちゃいました」
アプリリアージェはそう言うとエルデにチロっと舌を出して見せた。エルデはその態度を見ると目を閉じて両肩をすくめ、深いため息をついた。
「まったく、皆さん人の過去を詮索するのがお好きなこって」
ラシフはそんなエルデに重ねて尋ねた。
「ユートの話を私にも聞かせてはくれぬか？あの子は修行中、辛そうにしてはいなかったか？あの子の肩に背負い切れぬほどの荷物を預けたのはこの私だ。できれば兄弟弟子であるお主の口からあの子の本音を聞いておきたい」
エルデはすぐには何も言わず、しばらく思案した後に口を開いた。
「ユートはイブロドとルーチェがみんなと一緒に幸せに暮らせる里にしたいといつも言うてた。そりゃもう、こっちが洗脳されるくらいに、な」
「そうか……」

「ああ、そうそう思い出した。そう言えばそんなことも言うてたな」
「何だ？」
「母親に海を見せてやりたいなあ、って」
その言葉を聞いたラシフの表情が急に崩れた。
厳しい表情の象徴のような鋭い目が潤んだと思う間もなく、その両の眼からは涙があふれ、それは太い筋を描いて頬を伝うと族長の装束である黄色い着衣の膝のあたりに次々と落ちていった。
「そうだ。あの子は……時々私にも言っていた。『一度でいいからババさまとお母様を連れて海というものを見に行きたいものです』と」
ラシフは明らかに涙声だった。その場に居たヒノリとシスカも初めて見る族長の涙を複雑な思いで見つめていた。
「『海が見たい』なんてちっちゃい夢やな。でもこの土地でこうして隠れて暮らす限り、それは叶えられへん夢のまた夢なんやろ？」
エルデはそれまでの厳しい声色を変え、さらに子供に言い聞かせるようなゆっくりとした口調でそう言った。
「――」
「ウチらの修行場のいくつかは、海岸の近くにあってな。ユートはそこに居る時は、暇があれば海が見える場所に行ってたな。みんなに広い海を見せたいって何度も言うてた。――なあ、この里の人間は一生海を見たらアカンのか？」
「しかし」
なおも言い訳を探そうとするかのように言いよどむラシフを見て、エルデは深いため息をつくと、少し間を開け、思い出したように言った。
「そうそう、話は変わるけど族長は忘れてへんやろな？」
「忘れる？何をだ？」
ラシフは思わず顔を上げた。頬に幾筋もの涙の跡があったが、それを隠そうともしなかった。
「俺がマーリン正教会の賢者やっちゅう事を、や」

「言われずとも覚えている」
「ジャミールの一族は単純に異教徒やって言われてるけど、その実態は準マーリン教信徒と言うた方がええんちゃうんか？長い世間との断絶で正教会の系列から外れてるだけや」「そうだ。我らはマーリン正教会の教徒だと思っている」
憤然とした表情で間髪入れずに答えたラシフに、エルデはニヤリとして見せた。
「それを聞いて安心したわ。そんなら、俺の立場を使うて一つ言わせてもらおか」
「何をだ？」
「マーリン正教賢者会の賢者として、ジャミール族にサラマンダ侯国の退去を命ずる」
「なんだと？」
「まあ、そう言う訳やから、とっとと里のみんなを引き連れてシルフィード、いやファルンガへ行ってもらおか」
「な……何を根拠にお前にそんな命令が出来るのだ？」
気色ばむラシフにエルデは肩をすくめて見せた。
「何を今更。というか、どうやら全然わかってないようやから敢えて教えたる」
「言ってみろ」
「教会の賢者会の許可なく禁忌の古代ルーンを使うた罪、に決まってるやん」
「な、何？！」

―（ひょっとして彼の言い分は言いがかりではないですか？）
いままでまんじりともせず黙って成り行きを見守っていたティアナだが、ラシフにそう言いきったエルデのいたずらが成功した子供のようなうれしそうな顔を見て、たまりかねたように小声で隣のファルケンハインに耳打ちをした。
―（いや、あれは明らかに職権濫用というヤツだろう）

―（そもそも禁忌のルーンを使ったのはエイル……いやエルデでしょうに）
―（いや。禁忌の古代ルーンはそのルーン書を開く事自体が罪と見なされるそうだ。以前エルデがそう言っていた。禁忌のルーンに対する協会側の戒めはそれほどだと聞く）
―（ということは最初に開いたのはラシフ族長という事ですか？）
―（エルデの事だ。その辺は抜かりなく族長に最初に開かせていたんだろう。なるほど、切り札の仕込みとはこういうものか。ふふ。我らの司令がエルデの立場でも間違いなく同じ罠を張ったに違いないな）
―（まさか？すぐ頭に血が上るような子なのに、そこまで考えて行動してるんでしょうか？）
―（考えてみろ。マーリン正教会の信徒だという族長自らの言質を取った後で切り札を出したんだ。いや、あれが手持ちの札が切り札に変わった瞬間……違うな。ただの手札を「切り札に変えた」瞬間だったのだろうな。つまり、あいつの詰めに向かう用意周到さには恐れ入るしかないということだ）
（なるほど）
―（ヤツを見ていると、俺は我らが司令とやり合える人間に初めて出会った気がするよ）
―（敵でなくて良かったという事ですか）
―（ここまでつきあって奴が俺たちの敵ではないことはもうわかっている。それに）
―（それに？）
―（最近の司令を見ていると、ヤツとのやりとりを心から楽しんでいるように見える時がある。司令、いやリリアお嬢様は好敵手、もしくは仲の良い喧嘩友達を見つけたのかもしれないな）

ル＝キリア側ののんびりした反応とは裏腹に、ジャミール側の反応は大きく激しいものだった。

「禁忌のルーンですか？」
「まさか、アレをお使いになったのですか、ラシフ様？」
側近の思わぬ反応にアプリリアージェの方が反応した。
「まさか、まだおっしゃってなかったのですか？」
ラシフは唇を噛んでいた。
「お前達には後で詳しく説明するが、今朝早く、あのルーンはなされたのじゃ」
「本当ですか？」
「では、この村は安泰なのですね？」
二人の顔が驚きから喜びに変わったのを見て、ラシフが言葉を発する前にエルデが声をかけた。
「その場にいた俺らが証人や。族長の決心のおかげでルーンはなされ、無事発動した。そやけどルーンが効き過ぎたせいで新たな問題が発生したっちゅうわけや」
「新たな問題ですと？」
ヒノリが賢者に問いかけた。
「冷えすぎてこの辺一体の気候が大幅に変化する事になってもうたんや。地熱の恩恵が一切なくなり、この冬からこの里は厳しい豪雪地帯に飲み込まれるやろ」
「何ですって？」
悲鳴のような声を上げたのはシスカだった。
「それで、族長とシルフィードのファルンガ領主との間で里人全員のシルフィードの帰還についていろいろと打ち合わせをやろうというのがこの会合の趣旨っちゅうわけや。せやな？ラシフ族長」
ラシフは唇を噛みながらも頷くしかなかった。
「改めて賢者として言わせてもらうわ。ラシフ・ジャミールは自らが率いる里人の為に偉大な決意をもって一族の秘伝である古代ルーンの開示を行い、それを全うした。しかして立会人の余としても決まりは決まりとして正しく執行せなあかん。そこに助け船を出したのが故国のシルフィード王国でも有力な貴族ユグセル公爵や。王位

継承権の上位にあってこの先も有力な後ろ盾になるかもしれへん人の顔をつぶさへん為にも、万難を排して、しかも冬が来る前に早々に事を起こさなあかんはずやろ？それに」

「いや、しかしそれは私だけではなく一族全体の運命にかかわることだ。ファルンガの土地を開墾兵付きで用意するなど、そんな虫のいい話が」

さすがに我慢できないといった風にラシフはエルデが言い終わらないうちに口を挟んだ。

「私が信用できない、と？」

今度はアプリリアージェが反応した。

「しろという方が無理だ。そもそもそんな……」

「族長」

アプリリアージェは口調を改めて言った。

「あなたにはもう一つ義務があるんですよ。お忘れですか？」

「義務？」

「これは族長としてではなく、人としての義務です。いえ、我がダーク・アルヴの一族としての誇りをかけた義務です」

「何の事だ？」

「エイル君の無償の信頼に、あなたは信頼を持って答えねばなりません」

「信頼に……応えろ？」

「エイル君の言葉にお気づきなのではないですか？私がそれを説明してしまったら、エイル君の機転の利いたお節介が台無しではないですか？」

「……」

もちろんラシフは気づいていた。エルデはこの場で一切「自分がルーンを唱えた」とは言っていない事を。

当然ながらラシフが唱えたとも言ってはいないが、普通の人間ならばさっきのエルデの説明を聞けば、ラシフが古代ルーンを唱えた

と考えるはずだった。エルデがそう「誤解」するように言葉を選んでいたのだから。

そこまで考えて、ラシフはようやくあることに思い至った。今朝の待ち合わせに際しエルデは最初から「族長一人で来い」と指示をしていた。それはこういう事をはじめから計算していたと言うことだったのだ。

ラシフは改めてエルデをみつめ、そして無言のまま目の前にいる公爵を名乗る同族の顔に視線を移すと、喉まで出かかった抗いの言葉を飲み込んだ。

ラシフのその沈黙は観念した合図だと理解したアプリリアージェは、守るべき物が重すぎて臆病になっている小さな族長の背中をやさしく押す事にした。

「もちろん、あなたたちがこのサラマンダの辺境に移り住んで長い年月がたっていることは重々承知しています。アルヴ系種族としての誇りなど取るに足らないものになっていたとしても仕方がありませんが、もしそうなら我々はあなた方を誇り高きアルヴの血族などとは今後一切認めないでしょう。それはシルフィードの人間だとかサラマンダの人間であるとかそういった問題以前の話です」

アプリリアージェの突き放したような物言いには、案の定ラシフは即座に反応した。

「アルヴ族としての矜持を忘れたことなどはない」

矜恃を問われて即座に答える……アプリリアージェはそれでこそアルヴ族だと思った。ラシフのその剣幕に、しかしにっこりと笑ってアプリリアージェはこう言った。

「ファルンガには海が見える、いい場所があります。私のとっておきの土地です」

その言葉にエルデが即座にこう付け加えた。

「必要なら俺がマーリン正教会の賢者としてシルフィード国王宛に経緯を含めた紹介状を書いてもええ。賢者法はファランドール国際

法や。シルフィード王国でも批准されてるから親書を国王が読んで返答をせえへんわけにはいかへんっちゅうことになってるんや」

アプリリアージェの口調も、それに続いたエルデのそれも、この日で一番穏やかなものだった。

ラシフはエルデが話し終わる前に俯いていた。

「これでは……そもそも……私には……選択肢などないではないか」

そう言ったラシフ・ジャミールの声はまたもや涙声になっていた。

「おいおい、似合わへん声出さんどいてんか。調子狂うやん」

それを見たエルデが早速茶化し、ラシフは顔を上げると素直にそれに反応して見せた。だが口から漏れたそれは、もうエルデを批難する言葉ではなかった。

「なぜお前達はそこまでしてくれるのだ？誤解とはいえ、我々はお前達の命を狙ったのだぞ？」

ラシフにとってはもっともな疑問だった。その引け目が心の底にあったからこそ、エルデ達一行を心から受け入れる事が出来なかったのだろう。

「我々一族に対する哀れみか？だとしたら……いや、だとしてもあまりに話がうますぎる」

ラシフの言葉の最後は、自問のように小さな声になった。

「うーん……」

アプリリアージェは少し困ったような顔をして腕を組み、しばらく考えてから顔を上げてこういった。

「こう言うのはどうです？実は私達は賢者エイミイに脅迫されてるんですよ。『言うことを聞かないとシルフィード軍が隠密行動してるぞってサラマンダやウンディーネやドライアドに言いふらすぞ～』とか言われちゃってます。――という答えならどうですか？納得できますか？」

「ファルンガの領地の件は、賢者……殿の口添えなのか？」

ラシフはおどけたアプリリアージェの言葉の中に真実が一つある

ことを聞き逃さなかった。
　ラシフのその問いに、アプリリアージェは一瞬真顔に返ると頷いた。
「それに加えて土地もお金もたっぷり持っている、とある放蕩貴族の単なる気まぐれがあったという事ですよ。その気まぐれに素直に乗ってみるのも良いのではありませんか、ラシフさま？」
　ラシフはそう答えて微笑むアプリリアージェからエルデに視線をゆっくり移すと、改めて賢者と名乗る不思議な少年を見つめた。

「あの話とは、この事だったのだな？」
「あの話？」
「今朝、お前が古代ルーンを唱える前に……」
「さあ、何の事やろ」
「ふん」

　ラシフにはもうわかっていた。
　認証文と引き替えに話したのか？というエルデの問いにアプリリアージェは首を振った。あの時の「あの話」とはすなわちジャミールの丸ごとの移転の事だったのである。
　エイルとアプリリアージェは、古代ルーンを唱える前に、既に移転話をまとめていたのだ。それは古代ルーンで火山の噴火が収まろうが収まるまいが用意されていたものだったのだろう。
　いや、エルデの事である。古代ルーンの詠唱を失敗するなどとは毛ほども思っていなかったに違いない。その上でなおジャミールをシルフィードに帰す途を用意していた事になる。
　そして同時に、アプリリアージェが認証文を聞き出すための交換条件にこれを使わなかったのは、誰の為でもない、ラシフに敬意を表していたからだと思い至った。
　そう。
　交換条件になど出されていたとしたら、ラシフは間違いなく誇り

を傷つけられたと感じたであろう。すなわち即座に断ったことは想像に難くない。

そしてそれはジャミールの里人の未来を完全に閉ざす呪いの言葉になってしまったはずだった。

ラシフは自分が幾重もの助けの手に包まれていた事を改めて理解すると、忸怩たる思いに溺れそうになった。

ルーンの力は多少あっても、所詮はただの小童だと思っていた少年が持つ懐の深さは、彼女が覗き得る程度のものではなかったのだ。

ラシフは美しい黄色い布で出来た服の袖でそっと涙を拭うと、居住まいを正してエイルにその顔を向けた。

その少年と最初に出会った時は茶髪と茶色い目だった為、全く気付かなかったが、偽装を解いた賢者は全滅したと言われるピクシィそのものの姿形であった。

黒い髪と黒い瞳。瞳髪黒色と言われるピクシィの神秘的なその瞳の奥は深く遠く、見つめているとただ吸い込まれそうな気分になった。

目の前の、この成人になったばかりといったまだまだ若い目つきの悪い少年が、自分の、いや自分を含む一族全員の運命を大きく変えてやるという。

いや、自分だけではない。自分が存在する目的といっていいもの……この里自体の運命の歯車を違う方向に回してやると、尊大な態度で告げている。いや、突きつける。

このまま死ぬか？

それとも従うか？

違う。

このまま死ぬか、それとも生きる道を選ぶか、なのだ。

彼らは強要などしていないのだから。

「ふふふ」

ラシフは小さく笑い声を漏らした。
―（結論などはじめから出ている事ではないか）
だだをこねているのは自分の方だと言う事を、ラシフはようやく認める事にした。

「本当にお前はいちいち……癪に障るガキだな」
ラシフの声も穏やかなものになっていた。族長としての立場で語る口調ではなく、それはむしろ肉親にかけるいたわりの言葉にも似た暖かさが感じられる言葉だった。
だが、ラシフのその声には部屋全体の空気を柔らかくするだけの力がこもっていた。それはエルデやアプリリアージェがいくら望んでも得られないラシフが持つ彼女ならではの力だと言えた。族長として里人達の事を強く深く思う心が生んだ力であった。
エルデにもその暖かさが伝わったのだろう。ガキと呼ばれたにも関わらずその顔は笑顔のままで、そして少しはにかんだ表情さえ浮かんでいた。
「そ、そら良かったな。族長や言うてふんぞり返ってたら誰も癪に障るような事、言うてくれへんやろ？ありがたく思いや」
「ありがたくなどないわ」
「賢者様に対して『お前』とか『ガキ』とか平気で言う人間は普通考えられへんで。さらにその物言い……癪に障る奴に癪に障るって言われても……なあ、クソババア？」
「ク……クソババアだと？まったくお前は汚い言葉を……」
「丁寧に言い直そか？ええっと……うんこ婆さん？」
「丁寧に言うな！」
「どっちやねん！」
さすがにクソババア呼ばわりには複雑な表情を見せたラシフだが、すぐに表情を崩すと、含み笑いを始めた。
「ふふふ」
釣られたわけではないだろうが、エルデも小さく笑い始めた。

アプリリアージェは……当然ながらいつものように笑っていた。
「ふふ。まあええわ。ウチは賢者様って呼ばれたい訳やない。お前さんかて族長と呼ばれたい為に族長をやってるわけやないんやろ？」
「当たり前だ」
「だったらその証拠を見せなあかんやろ。族長らしい事をやってみせな、な」
「族長らしいこと？」
「癪に障るついでや。明日の朝にでもみんなを集めて里のみんなの前で俺のことを恭しく紹介してもらおか。族長の決定を告げる前にこの地域の現状を『あの』マーリン正教会の賢者様の口から伝えた方が話は早いやろ？族長様の事は賢者様の言葉で思いっきり持ち上げたるわ。癪やけどな」
エルデはそう言うと改めてニヤリと笑って見せた。
だがその勝ち誇ったようなエルデの笑い顔は、ラシフにとってもう嫌なものではなくなっていた。それはエルデが仲間に見せる笑顔なのだという事をようやく理解したのだ。
「それこそよけいな世話だ。やると決めたからには里人達の事はこのラシフにまかせてもらおう」
エルデはその言葉を聞いてにっこりと笑うと、うなずいた。
「それはいいが、そもそも里人全員を短期間でファルンガに移送するのは困難であろう？じっくりと手はずを整えて準備もせねばならん。するとどう考えても来年の春を待ってから……」
「やれやれ。ようやく本題に入れそうですね」
しばらくエイルとラシフの会話を黙って聞いていたアプリリアージェだが、ラシフのその言葉を待っていたかのようにそう言ってラシフの言葉を遮った。
「それなら心配には及びませんよ」
アプリリアージェのその言葉は、またもやラシフの目を丸くさせる事に成功した。
「冬が近づいています。エイル君の予想では、双朔月を過ぎると寒

波が訪れて本格的に雪が降り始めるそうです。そして訪れる冬はこの里が今まで経験した事もないような厳しいものになるでしょうね」
「つまり冬が来る前に出来ると言う事なのだな？」
アプリリアージェは例の微笑を浮かべてうなずくと、ファルケンハインとティアナを改めてラシフに紹介した。
「この二人がまず動きます。二十日……、いえ。二週間でこの村を猫の子一匹居ない廃村に変えて見せましょう」
「二週間だと？無理だ」
ラシフは目を丸くした。側にいたヒノリとシスカも顔を見合わせた。その様子からもアプリリアージェがいう二週間という期限があまりに短い事が知れた。
「海までは結構な道のりだ。シルフィードに渡るための船も相当の数が必要なはず。三千人からいるのだぞ、この村には。体一つで村を捨てろとも言えぬ。皆、多少の荷物もあろう」
そう言うラシフに、しかしアプリリアージェは手を上げて皆まで言うなと制した。
「シルフィード王国の公爵たる私を『おおぼら吹き』だとおっしゃるのですか」
そう自信たっぷりに言ってみせるアプリリアージェに対して反応する言葉をその夜のラシフはもはやもってはいなかった。

# 第六十一話　招かれざる者

石畳が敷き詰められた街の中心部に向かう大通りの一つには巨大な屋根があった。通りを挟んだ両側の建物は石造りの三階建てで、町の条例によりその高さはきれいに揃っていた。その建物の屋根に当たる部分から木製の庇が大きく張り出していて、その庇同士をつなぐように帆布が渡されている。いわゆるアーケードである。

アーケードは約四キロメートルにも渡って伸びており、当時のファランドールでは最も長いアーケードだったという者もいる。

通りの一方は馬車の為に用意された広大な車止めの為の広場に続き、もう片方はその街の中心にある広場へと抜けていた。街の中心部の半径にあたるほどの長さを持つそのアーケードは簡単に言えば商店街で、十二頭立ての馬車がゆったり四台は並んで走れるほど広い通りの両側には、様々な商店が軒を並べていた。

シルフィード王国の首都エッダの中央広場には、四つの大通りがつながっている。すなわち「ヴェルディエ通り」「ヘカテラーグエ通り」「ツェルダーチェス通り」「ユリスカラント通り」である。その中でも最も広い通りが、王宮の正面から伸びる「ユリスカラント通り」であり、アーケードのあるその通りの名であった。昼間は四つの大通りの中でも一番賑やかな場所になる。

ユリスカラントとはもともとエッダのあるこの地域を支配していた一族の名である。

シルフィード王国は五百年に一度遷都を行うことで知られている。シルフィード王国の建国の際に尽力した五つの有力諸侯に敬意を表し、順番にその領地に都を置く事にしたのが起源だとされるが、実際に遷都法が定められたのは建国から千年以上経ってからである。

遷都が行われるのは五つの都市と定められており、首都が置かれた順番に、スッダ、メッダ、エッダ、ノッダ、ヴェッダである。その為首都候補であるそれぞれの都市は王家直轄領とされているが、

それは便宜上であり実際はその土地を治める貴族が管理・運営を行っている。

遷都は五つの都市を順番に巡る為、遷都法が制定されてからエッダが首都として機能するのは当時で二回目であり、それはまた二度首都となった初めての都市でもあった。

星歴四〇二六年当時のエッダは遷都五百年を三年後に控え、来るノッダへの遷都の為の準備が緩やかに行われていた。各大通りを抜けたところに馬車のための広大な車止め広場が作られたのもその一環である。もちろん遷都準備で流通が頻繁に行われるようになった為であった。もちろんユリスカラント通りを抜けたところに整備された車止め広場も同様で、こちらは主に人を運ぶ大型幌馬車の乗降基地になっていた。

その車止め広場を背に、一人のアルヴィンの少年がアーケードのあるユリスカラント通りを中央広場に向かってゆっくりと歩いていた。

薄い色の短めの金髪に緑の瞳。種族がアルヴィンなのでアルヴ族よりさらに見た目では年齢がわかりづらい。成人しているのは間違いないが、それが十代後半なのか百歳を超えているのかは不明だった。

ただ、その服装と持ち物で少年の素性はある程度推し量る事は可能だった。

少年の手には彼の身長を遙かに超える長さの青白い色の石で出来た儀仗が握られている。

儀仗はすなわちルーナーであることを示す制服のようなものである。儀仗が無くとも当然ルーンは使えるが、多くの場合は儀仗を手にしてルーンを唱える。儀仗が精霊波をより多く捕らえ、放つルーン自体も増幅する力を持つからだが、より積極的な使用理由は使うルーンの制御がやりやすくなるからだと言われている。

杖自体の形状や材質はルーナーの好みや得意な属性などによりま

ちまちだが、例外なくスフィアが埋め込まれている。スフィアは儀仗の核のようなもので、精霊波……エーテルと呼ばれるファランドールの大気に満ちる力はそのスフィアを通る事でルーナーの制御を受けやすくなるのだ。従ってルーナーの多くは一つあるいは複数のスフィアが頭頂部に埋め込まれた儀仗を平素から肌身離さず持っている事が普通であった。もちろんルーナーであることを隠す必要がある者は、通りをゆったりと歩くそのアルヴィンのように目立つような儀仗は持たず、懐に入る小さな儀仗を利用する。

またルーナーは複数の儀仗を適宜選ぶという使い方はまずしない。それというのも儀仗はルーンを使えば使うほど持ち主であるルーナーとの一体感を増してくるからだ。ルーン増幅器、制御器としての使いやすさは使い込むほど高まり、比例するように他のルーナーのルーンを受け付けなくなってくる。つまりルーナーの儀仗とは持ち主専用品と言っていい。従ってほとんどのルーナーは気に入った一つの儀仗を生涯大事にする。

材質は様々だと書いたが、少年の儀仗のような石づくりのものはきわめて珍しい。理由はもちろん重くなるからだが、その青白い石の儀仗の持ち主である少年は、腕力のないアルヴィンであるにも関わらず、何の苦もない様子で、きわめて普通に儀仗を握っていた。

ルーナーであるそのアルヴィンの身分を、さらに特定させているのが着衣だった。

まず、もともと一年中温暖な気候のエッダにあってローブ、それも厚手のものを纏っていること自体が奇異だった。さらにその深い紺色のローブには袖と裾に金糸で細かい刺繍がなされていて、一見して高級な物だとわかる。そしてそのローブの形と金糸の縁取りの模様から、マーリン正教会の関係者であるということも見て取れる。

さらに決定的なのは胸に大きく施されたマーリン正教会のクレストの刺繍である。

「蒼穹の台」（そうきゅうのうてな）。
アルヴィンの少年は、マーリン正教会でそう呼ばれる人物だった。
三聖という教会最上位の立場にある人間が、宗教活動を一切禁じているシルフィード王国にこうして居るということ自体が普通ではない状況だが、見たところ「蒼穹の台」は一人だけでゆっくりと大通りを歩いており共がいる気配がまったくない。
だが、ユリスカラント通りを行き来する大勢の人々は、目立つ格好をしたその、シルフィード王国とすれば間違いなく国賓扱いになる人物に誰も関心を示さなかった。
――いや、関心を示さないのではない。よく見ると全く視界に入っていないようであった。その証拠に、今も歩きながら大声でやりとりをしている二人連れのアルヴの商売人が、対向から歩いてくる「蒼穹の台」イオス・オシュティーフェに目もとめず、危うくぶつかりそうになっても何の反応もしていない。幸い、イオスの方が軽やかな身のこなしで道を空けて事なきを得ていたのだが、よく様子を見ているとイオスは自分に全くかまわず向かってくる人々を縫うようにするりするりと通りをジグザグに歩いていた。
つまり、人々にはイオスの姿は見えていないという事である。だから彼の姿を見て誰も歩みを止めたり奇異な物を見るような目で見つめたりすることはない。
イオスはそういうルーンを自分にかけていたと考えていいだろう。

「十年振りか」
人混みを縫うようにして歩いていたイオスは一件の店の前で立ち止まると、通りに向かって掲示されている看板を見上げて独り言をつぶやいた。
「リリス全般」
看板には丁寧な文字で素っ気なくそれだけが書かれていた。多くの商店は看板には店の名前とそこが何の店かがわかるような絵……アイコンを並べて掲げているものだが、その店にはそれが無かった。

一見では一体何の店なのかがわかりにくい。展示窓らしいものもなく、ガラスの窓越しに見える店内には十分な明かりすら無い状態で、そこに置かれている物もよく見えないようなありさまだった。

イオスは樫で出来たさほど大きくない扉の取っ手に手をかけると、無造作に店内に入った。

扉が開く音で顔を上げて出入り口を見た店の主らしき老デュナンはそこに誰かが立っているような気配は感じたが、ぼんやりと透けて見える扉の前に立つ小柄な人物らしき「もの」の正体はさっぱりわからなかった。

異常事態を感じた店主が懐に手をやろうとした時、ぼんやりとした影は短い言葉をつぶやいた。するとその場に忽然と、紺色のローブを纏ったアルヴィンが現れた。

「そ、蒼穹……」

「久しいな、「潤の鈎」（うるみのかぎ）」

「潤の鈎」と呼ばれた老デュナンは、被っていた毛糸編みの帽子を頭からむしり取ると、ひざまずいてうつむいた。

「お久しぶりでございます。息災のようでなりよりでございます」

禿げた頭をイオスに向けたまま、「潤の鈎」はうやうやしくそう挨拶をした。

「そうかしこまるな。外の者達に見られたら変に思われる」

「は」

「以前来た時はもっと商売っ気があったような気がしたが、何か変化でもあったのか？」

イオスは店の中を見渡すとそう声をかけた。

店内には陳列用のガラスがはまったテーブルが四つと壁一面にしつらえられた飾り棚があったが、そこに陳列されているリリス製とおぼしき小物はまばらで、すべてを数えても両手で足りた。しかも窓を含めガラスというガラスは埃だらけで曇っていた。つまり、およそ商売をやっている店とは思えない状態と言えた。

「最近はリリスの流通はあまり活発ではないようでして」
「潤の鈎」はそう口ごもるように言うと、額にあふれる汗をぬぐった。
「そうか」
イオスは素っ気なくそう言うと、踵を返した。
「邪魔をした」
そう言って扉の取っ手に手をかけようとしたイオスに「潤の鈎」が慌てて声をかけた。
「「蒼穹の台」様自らエッダにお越しになるような……何か大事が起こったのでございますか？」
イオスはゆっくりと「潤の鈎」を振り返った。老デュナンは跪いたままだったが、顔を上げてイオスの方をおびえるような顔でまじまじと見つめていた。
イオスはその顔を見て低い声で呟いた。
「これから起こるのではないのか？」
「え？」
「「潤の鈎」よ」
「は」
「ノッダへは行くつもりなのだろう？」
「はい。遷都に合わせて移動する予定ではおりますが」
「早めに逃げた方がいい」
「何ですと？」
潤の鈎はイオスの言わんとしていることがよくわからないという風に怪訝な顔をして見せた。
「大事が起きれば首都は混乱するだろう。それだけだ」
「戦争……ですか？」
イオスは問われて頷いた。
「実のところ、もう始まっているのかもしれぬがな」
「まさか」
「一応、忠告はしたぞ。「潤の鈎」」

「はい。ありがたきお言葉」
イオスはそれだけ言うと掴んだままの取っ手を押して扉を開いた。
「お、お気をつけて」
背後で自分を送り出すほっとしたような「潤の鈎」の声を背中で聞いたイオスは、店の外に一歩足を踏み出したところで再び歩みを止めた。
「そうそう、忘れていた」
イオスは振り向かずにそう言った。その声に反応して背後の「潤の鈎」に緊張が走るのが彼には手に取るようにわかった。
「クレハはどうしている？しばらく顔を見ていないのだ」
「――それは……そ、息災でございます。とはいえいつも行方をおっしゃらないので今どこでどうしているかは存じません」
「そうか。久しぶりに会えたら、それも一興かと思ったのだが、またにしよう」
「はるばるお越しいただいたのに申し訳ありません」
「何、お前が気にする必要はない。……それよりも「潤の鈎」よ」
「はい」
「お前はいつから「深紅の綺羅」の現名（うつしな）を知っている？」
イオスの声の調子はきわめて平静だった。だが、その言葉を聞いた「潤の鈎」の目は一瞬でつり上がった。彼は一気に高鳴った動悸をイオスに悟られないかと恐れながら、数秒で頭に上った血を落ち着かせた。
「こちらに来てしばらく経った頃でしょうか。昔の事です。どういう拍子でお話くださったのかまでは覚えておりませんが」
「そうか。いや、そう言う事であればいい。――邪魔をしたな」
イオスはそう言うと今度こそ店の外に出て扉を閉めた。
そして、そこで小さくルーンを唱えた。
目の前を行くアルヴの下級近衛兵二人はチラともイオスに視線を投げかけない。例の姿を隠すルーンを唱えたのだ。

イオスは改めて、今出てきたばかりの店の看板を見上げた。

イオスの気配が扉の外から消えたのを感じた「潤の鈎」は吹き出す汗も拭かずに上ずった声で店の奥に呼びかけた。

「ジルバール」

「はい」

呼びかけに即座に答えたのは女の声だった。

「バード長に伝えろ。「蒼」（あお）色が来たと」

「はっ。ミアダンテ様はどうされるのですか」

「潤の鈎」はジルバールにそう言われてようやく極度の緊張から脱出する事ができたようで、浮き出た大量の汗を袖口で拭った。

「緊急事態だ。とりあえず荷物をまとめて、私はいったん身を隠す。連絡はこちらからする」

「承知しました」

「急げよ」

「はい」

声の主は姿を見せないままそう返すと、次の瞬間には気配を消していた。

―（念のためだ）

「潤の鈎」は思いついたように懐から懐剣を取り出した。その柄にはスフィアが埋め込まれていた。それは賢者「潤の鈎」の儀仗でもあった。

彼は早口でルーンを唱え始めた。それはおそらく強化系のルーンだったのだろう。だがそのルーンを唱え始めたとたんに、ミアダンテの視界は一瞬で真っ赤に変わった。

彼には一体何が起きたのかはわからなかった。なぜなら次の瞬間にはすでに絶命していたからである。

「火事だぞっ」

「誰か防火隊に連絡しろ」

「ばかやろう、火事の始末は消火隊の方だっ」
「いきなり大きな火が出たぞ」
「中に人がいるんじゃないのか？」
「近づくな。この火勢じゃ中に入るのはムリだ。消火隊を待つしかないだろ」
道を行く人々が口々に叫びながら「リリス全般」と書かれた商店を遠巻きにしていた。中にはバケツに入れた水を遠くからかけようとする者もいたが、熱の為にあまり近寄れず、かけた水が店まで届かないありさまだった。
両隣の店の人間も転がるように外に出ると、不安げに「お隣さん」の様子を見守っていた。
昼下がりの賑やかなユリスカラント大通りは、この小さな商店の出火により一瞬にして混乱に陥り、燃え上がる店を取り巻く人々の輪はそうやってどんどん広がっていった。

「言っただろう？早く逃げた方がいい、と」
人々から離れた場所でその喧噪を見ていたイオスはそう言うと、火事場を後にした。
彼の向かう中央広場のその先には、シルフィードの王宮、通称エッダ城がそびえていた。
広場を挟んだ向こう側を目指して、彼は無表情のままで何事もなかったかのような泰然とした足取りで火事場に向かう人々を縫うように進んでいった。

「先ほどユグセル中将率いる小隊が全滅したとの報が入りました」
「そうか、ティアナは元気にしているようだな」
報告を受けた初老のデュナンはそれだけ答えると、ゆっくりと立ち上がって机を離れた。
彼はそのまま部屋で唯一の縦に細長い窓に近づくと、遠くへ視線

を向けた。よく晴れた明るい青空には一点の雲もなく、遠くに見える湾では波が揺れ、陽光を反射して白くはためく藍色の海と視界を二分していた。

「これでル＝キリアは二度目の、そして今度こそ真の意味で全滅したことになりますな」

報告の後にそう続ける若い男も同じくデュナンで、身につけている服装から軍人、それも士官であることが知れた。

「さすがに感傷的におなりですか」

彼の言葉に何も反応せず窓の外をただ見やるだけの初老の男に、若い士官はそう言って水を向けてみた。その口調には言葉の字面ほど皮肉めいた感情は含まれてはいなかったが、初老の男を見つめる訝しむような鋭いまなざしが印象的だった。

若い士官から呼びかけられた初老の男はゆっくりと声の主を振り返った。その身に纏うゆったりとした白い制服は、シルフィード王国近衛軍のものであった。そしてその制服に飾り付けられた階級章の縫い取りの厳めしさから察するに、初老のデュナンの地位がかなり高いことを示していた。

「ミドオーバ中佐」

近衛軍所属の初老の男は同じデュナンの若い士官に向き合うと、その名を呼んだ。

「はい、父上」

若い士官に父と呼ばれた初老のデュナンは小さくため息をついた。ため息の主の名はサミュエル・ミドオーバ。シルフィード王国のバード長、ミドオーバ大元帥その人であった。

「ル＝キリアはワシの配下ではないし、ユグセル中将とは大した面識もない。従って感傷などない。ただ……」

「ただ？」

「そうじゃな。ワシは少々怖じ気づいておるのやもしれんな」

「父上ともあろう人が怖じ気づくなどと、お戯れを」

『ミドオーバ中佐』はそう言うと肩をすくめた。
だが、彼の父は首を横に振った。
「お前は何も感じぬのか、カテナよ」
「これは異な事を」
カテナと呼ばれた青年将校の軍服は、シルフィード王国陸軍のものだった。中佐と呼ばれたことからも、見た目の年齢に似合わずかなりの戦果を上げた強者であることは間違いない。シルフィード軍では大元帥の息子という肩書きだけでは出世などできない。実力のみが全てである。つまり中佐という階級を彼は実力で勝ち取っていたのである。
従ってカテナが自らの実力を自負していたとしても、おそらくそれを誰も否定することなど出来ようがないだろう。もちろん彼の若さもあるのだろうが、父親に対する彼の言葉からは怖いものなどこの世に存在しないとでも言いたげな絶大な自信がうかがえた。
カテナは計画通りに事を運んでいる父親がここへ来て「怖じ気づく」という弱気な言葉を使った事が気に入らないようであった。
「直接手にかける事が困難な、言わば障害物であったル＝キリアをこちらの駒を一切減らすことなく、きわめて安全な方法で排除できたのですぞ？これで我らは次の計画に移ることが出来ると言うもの」
「そうじゃな」
そう言って彼の言葉を肯定した父親の声が、しかし沈んだままなのがカテナは気に入らなかった。
「父上がおっしゃっていたのですぞ。もっとも警戒すべき相手はユグセル公だと。その相手が消えたのです。後はあのスズメバチのみ。士気が高まりこそすれ怖じ気づくなどあり得ません」
「そうではない」
強い調子で自分をなじるカテナに、サミュエルは苦しそうな顔で再び小さく首を横に振った。そして再び視線を窓の外に向けた。
「ではどうなさったのです？」
「ユグセル公も我らも、全てはこのファランドールという舞台で寸

劇を演じる役者に過ぎん。そんな役者が即興で物語を勝手に進める事はどこまで許されるのだろうな」

「即興は真に力のある役者にこそ許される技能。それに我らが目指すものは寸劇などではありません」

「悠久の物語の中では、我らのやっている事はどう考えても寸劇であろうな」

「父上」

カテナは改まったように声色を変えた。

「もとよりこの舞台、筋書きなどありましょうや？」

「そうじゃな」

サミュエルは素直にうなずいた。

「歴史を塗り変えてしまうかもしれぬ事態に本当に自分自身が荷担してしまった事に対して怖れでも感じたのであろうな。まあ、それを感傷というならばワシは今、感傷に浸っておるのかも知れん」

「今度は歴史ですか」

「そうだ。カテナ、お前も間違えてはならんぞ。我々がやろうとしていることは決して正義などではない。ただ『ファランドールの未来かくあれかし』と願ってのもの。その意志にブレはない」

「御意」

「だがこうして実際に歴史書の頁をめくる役を与えられた今になると戸惑いがある。ワシが開こうとしている頁には一体どれほど過酷な出来事が書き込まれるのであろうかと、な」

サミュエルの言葉に、カテナは鼻を鳴らして抗議した。

「炎に続き二人目のエレメンタルをも抹消しようとなさっている方が今更怖がるなど笑止千万。さらに父上がこの次にめくる頁に記されるであろう事を考えれば、そのようなつまらぬ怖れは早々に捨て置かれますよう注進いたします」

「まさに、そうじゃな」

サミュエルは曖昧にうなずくと窓の外から視線を外して、自分の机に戻った。

「おまえの方はそろそろ動くのであろうな？」
サミュエルは両肘を机に突くと、その上に顎を乗せて息子を見た。
「偽物の件ですな？」
「あれは偽物ではないのだがな」
「今は偽物です」
「まあ、よい。手はず通りだ。そっちは任せる」
「ヴェリーユにはすでに手を回しています。そう遅くないうちに始末出来るでしょう」
「くれぐれも遺体はあまり損なわぬようにするのだぞ。特にお顔はな。最悪の場合は首だけでもよい」
「委細承知しております。死体とはいえ……いえ、死体になったエリー様だからこそできる重要なお仕事がございますからな」
「エリー様には罪はない。強いて言えば風のエレメンタルなどになられたことが罪のようなものか」
「発現していないとはいえ、エリー様はエレメンタルです。もしもの事を想定して私が手駒としているバードを五名ほど使いますが、よろしいですかな？父上の術を信用しないわけではありません。まあ、保険のようなものです」
「バードは貴重な人材。無駄に五名も無くすのは惜しいが、事が終われば掃除はきちんとしておけ」
「了解しておりますとも」
カテナは陸軍式の敬礼をすると部屋を出て行こうとしたが、サミュエルがその背中に声をかけた。
「せめてもの情けじゃ。出来れば二人とも楽に死なせてやってくれ」
カテナは振り返るとニヤリと笑った。
「計画通りであれば、本人には何が起こったかわからぬ内にお付きのキャンセラの女が事を済ませるでしょう。その女には労を労う意味でも、同様に何が起こったのかわからぬうちに事を済ますようにくれぐれもバード達には含めておきましょう」
サミュエルは息子の答えに小さく頷いた。

カテナは改めて大元帥の部屋の扉の取っ手に手をかけようとしたが、今度は扉越しに足音が聞こえたために伸ばした手を止めた。ただの足音ではなく、こちらに向かって走ってくる靴音だったからだ。宮廷内、しかも大元帥の間に続く廊下を走る事など平時では許されない行為である。つまりそれは、異変の先触れと言えた。

カテナのその直感は当たった。走ってきた者は、迷うことなく大元帥の部屋の前で止まると同時に扉を大きく五回叩いた。

その音に反応したのはサミュエルだった。彼は立ち上がると扉の向こうに声をかけた。それも大きな声だった。

「かまわん、入れ」

その声にカテナはさっと身を引いて扉の脇に移動した。それと同時に扉が開いた。そこには近衛隊の士官の制服を着たアルヴィンが敬礼をして立っていた。

「最重要事項です」

アルヴィンの士官はそう言ってサミュエルの様子をうかがった。最重要事項、すなわちきわめて重要な事柄を伝えに来たという事だ。それを今しゃべっていいのかどうかを問い合わせたのだ。

「入れ」

サミュエルはそう言って伝令に来たアルヴィンの士官を招き入れた。そしてすぐ横にいたカテナを気にする彼に向かって続けた。

「かまわんでいい。いったい何事だ?」

「二つございます」

「早く申せ」

「はい。一つ目は大元帥閣下に謁見したいという者が来ております」

「なんだと?」

カテナが士官の言葉に反応した。だがサミュエルは手を挙げてそれを制した。

「面会者が来たことが最重要事項なのか?」

「いえ、そうではありません」

「では特別な面会人ということか」
アルヴィンの下士官はうなずくとチラリとカテナを見やったが、すぐにサミュエルに向き合い、こう答えた。
「はじめ衛兵は、おおかた胡散臭い『はぐれルーナー』が閣下のお名前を聞き及び、職でも無心しに来たのだろうと相手にもせず、すぐに追い返そうとしたようなのですが、彼の者はこちらの言うことには耳を貸さず「バード長に取り次げ」の一点張りのようで」
「お前達近衛軍の衛兵は下士官の中でも選りすぐりのルーナーなのであろう?そんな者の言うことなどに取り合わず問答無用で追い払えばよいではないか」
カテナはバカにしたような言い方で士官をなじった。だがサミュエルは不機嫌に息子を制した。
「おまえは少し黙っておれ」
そしてアルヴィンの下士官に続きを話すように促した。
「はい。むろん我々も中佐殿のおっしゃるようにルーンで壁を張って制止させ、それ以上こちらに入ってくるようならはじき飛ばしてやろうと思っておりました。しかし……」
「できなかったと?」
サミュエルの問いにアルヴィンの士官は唇を噛みながら頷いた。その様子は端から見てもいかにも悔しそうで、さすがにカテナも士官をそれ以上責める気は起きなかった。それよりもそこまでの力をもつその「面会者」が問題だとようやく悟ると、父の様子を見た。
サミュエルはいつの間にか報告に来た士官の前に仁王立ちになっており、その顔はいつになく青ざめているように見えた。
「お前達のルーンが何も通じなかったのじゃな?」
「はい」
「だいたいわかった。その者は名乗ったか?」
下士官は再びうなずいた。
「面会者に名を問うたところ、本人はこう名乗っております。『「蒼穹の台」』と」

「なんだと？」
カテナは思わずそう言ったが、それ以上声が出なかった。いや、瞬間的に思考が停止したような状態だった。およそ想像もしていない人物の名前が告げられたのだ。
士官はサミュエルが何も言ってこないので、おそるおそる続けた。
「私も冗談が過ぎると思いましたが、本人は至って真面目な顔で、こちらの再度の問いかけにも同じ名を繰り返したのみです。おそらく頭がおかしいのでしょうが」
「どんな奴だ？」
「は。種族はアルヴィン。薄い金髪と緑色の目を持つ成人の男子です。袖と裾に金の縫い取りがある濃紺のローヴを身に纏い、青白い石で出来たような長い儀仗を手にしておりました。そして、胸には一応正教会のクレストが縫い取られておりました」

「カテナ」
サミュエルは士官ではなく、先に棒立ちになっている我が息子に声をかけた。
「この件は近衛軍、いやワシの受け持ちじゃ。お前は急ぎ特命に着け。一刻の猶予もならん」
「しかし……」
「急ぐのじゃ！ヴェリーユへ迎え。堂頭の元へ」
何かを言おうとしたカテナを、大元帥が一喝した。部屋を揺らすかと思える怒気を含んだその大音声はカテナのみならず、その場で膝をついて報告に来た近衛軍の下士官をも震え上がらせるほどだった。
「しかし、父上は？」
「ワシのことは案ずるな。こういう時が来る事も想定内じゃ」
「では」
「行け。吉報を待っておる」
カテナは律儀に陸軍式の最敬礼をした後で、小走りに部屋を出て

行った。
「面会人の件はあいわかった。それでもう一つの報告とはなんじゃ？」
「はっ。実はこちらの方が先の要件だったのですが……」
「前置きはいい。簡潔に申せ」
「は。面会人が来る少し前にユリスカラント通りで火事がございました」
「火事だと？」
サミュエルは眉をつり上げた。たとえ王宮から数キロの距離とはいえ、火事程度をいちいち最重要事項として大元帥に報告に来る訳がない。
案の定、士官はすぐに話を続けた。
「それが普通の火事ではないようなので、私の一存で閣下にご報告申し上げる事にいたしました。
「申せ」
「おかしな火事です。出火元はユリスカラント通りの中程にあるリリスの雑貨などを商う小さな商店との事ですが……」
士官がそこまで言うと、サミュエルの顔が一瞬で青ざめた。だが報告に来た士官には大元帥の動揺は悟られることはなかった。
「一瞬で炎上し、店は全焼に近い状態だったらしいのですが、両隣はじめ延焼が全くないまま、消化隊が到着する頃には嘘のように鎮火してしまったとの事です」
「――そうか」
「呪法か、あるいはルーンによるものではないかと」
「それで、店の人間はどうなったのだ？」
「それが第一報では遺体のような物が二体発見されたとだけ。損傷がひどく人種も男女の別も不明とのことです」
報告を聞いたサミュエルは自らを落ち着かせるかのように大きく息を吸い込んだ。
「わかった。確かに特殊な火事のようだな。そちらの方は調査班に

報告して事にあたらせよ。私がそうしろと言った旨、申し添えてかまわぬ」

「かしこまりました。しかして三聖を騙る者の処遇についてはいかがいたしましょう」

「三聖殿は今どちらにおられるのだ？」

「それは」

士官はサミュエルに答えるべくそこまで言ったところで言葉を切った。

その後の沈黙が妙に長い事に不審を感じたサミュエルが、いぶかしげに士官を見下ろした時、片膝をついていたアルヴィンの士官はゆっくりとその場に崩れ落ちるように倒れ込んだ。

「これは」

その様子を見てサミュエルが絶句した時だった。

すぐ側で聞き慣れない声がした。

「この城の人間は、遠路遙々やってきた客人に、茶の一つも出さないように行儀良くしつけられているみたいだね」

サミュエルが顔を上げると、扉の内側にいつの間にか濃い紺色のローブを纏ったアルヴィンが青白い儀仗を手に立っていた。

「蒼穹の……台！」

サミュエルは何とかそれだけをのどの奥から絞り出すと、ゴクリと音を立ててつばを飲み込んだ。

「久しぶりだね、バード長。いや、大元帥かな？まあ、どっちでもいいよね。とにかく元気そうで何よりだ。でも、以前会った時よりは老けたようだね」

サミュエルは無言でゆっくり後ずさると自分の机の後ろにまわった。

「大丈夫だよ。彼は眠っているだけだ」

無表情なまま、「蒼穹の台」ことイオス・オシュティーフェは足下に倒れ込んだアルヴィンの士官を見ようともせずそう言った。その声にも抑揚はなく、それが逆に三聖の力を知るサミュエルをぞっ

とさせた。
「はるばるエッダまでお越しになるとは。先触れを下されば粗相無くお迎えできたものを」
サミュエルは自分の椅子の横に立つと、机の上に置かれていた黒い木製の儀仗を手に取りそう言った。イオスはサミュエルが手にしたその儀仗の頭頂部にある優雅な彫刻に目を留めた。
「「星を呑む獅子」か。確か『彼』から譲り受けたものだったね」
「御意。我が命より重き儀仗でございます」
「最近、彼とは会ったのかい？」
サミュエルは大きく首を横に振った。
「これを頂戴したのが最後でございます」
そう言うと、サミュエルは頭頂の飾りを見つめた。イオスはその様子を無表情なまま目で追いながら話を続けた。
「正教会の公式な訪問行事なら君たちに恥をかかせない為にも、もちろん先触れと鳴り物を用意したろうね。でも今日は古い友人の顔を見たくて気まぐれに寄っただけだよ」
「それにしましてもこのようなむさ苦しいところにお越しいただくのは心苦しゅうございます」
「いや、それよりもこの王宮は警備が少し手薄なのではないか？」
「過度の警備は陛下がお嫌いでしてな。しかし猊下の助言とあらば再考なさるでしょう」
「案ずるな。僕はアルヴの王になど用はない」
「ではマーリンの座の番人とも呼ばれる「蒼穹の台」様が一体このジジイめに何事でしょう？」
サミュエルは儀仗を握りしめて全身に緊張を漂わせたまま努めて穏やかな声を繕いつつそう言った。だがその心臓は本人の意志に反して先ほどから早鐘のように打ち続けていた。それはまさに「警鐘」のように。
「君も知っている通り僕は、いや僕らは君たちの政治には興味がない」

イオスの方には何の緊張も見られない。端からは無表情で体の力を抜いてただ立っているだけのように見えた。
「存じております」
「だから君たちのような政治的な駆け引きとやらにも縁がない」
「御意」
「単刀直入に用件を言う」
「何なりと」
「「深紅の綺羅」を迎えに来た」
イオスの声は、大した抑揚もなく淡々と響いたが、もう一人の三聖の名を告げられたサミュエルの鼓動は極限まで跳ね上がった。
「知っているとは思うけど、ムダだよ、バード長」
イオスはそう釘を刺した。もちろんそれが「神の空間」の事を指しているのだと言うことはイオスと「旧知」であるシルフィードの近衛軍大元帥にはわかっていた。
三聖「蒼穹の台」の持つ特殊な能力、「神の空間」はイオスの周りに「エア」を作る術である。儀仗を手にしようが何をしようがサミュエルにルーンが使えるようになるわけではない。さらに、その「神の空間」ではイオスの言葉に誰も逆らえなくなる。だからこそ、その能力には「神」の名が付けられていた。
「たとえ「エア」などなくとも、私程度の力では猊下の眉一つ動かすこともかなわぬ事などもとより承知しております。それにしても「深紅の綺羅」様を迎えに来られたとはまた妙なお話ですな」
儀仗を握りしめたままそう言いながら、サミュエルはイオスに気取られぬよう彼の足もとに注意を払った。

シルフィード王国近衛軍の最高司令官である大元帥の部屋は三日月型をした王宮エッダ城の西翼、中央部分に位置し、比較的ゆったりとした広さが確保されてあった。
部屋の大半は書棚によって占領されており、彼の執務空間は部屋全体の五分の一程度の広さでしかなかった。その他の王宮の部屋と

同じように部屋の天井と壁は白い漆喰で覆われており、床から丁度イオスの身長程の高さまでがよく磨かれて艶を放っている腰板で覆われていた。

そしてサミュエルがさりげなく注意を払っている床は濃淡二色の茶色い木製タイルが市松模様に敷き詰められている。それは垂直と水平を基調にした書架の雰囲気と相まって訪れた者に幾何学的な規律のような空気を感じさせる一因となっていた。

書架のない部分の一角には両袖付きの古めかしい紫檀の机があり、その前方に来客用のこれまた紫檀の骨組みにビロードのクッションをしつらえた大振りの二人掛の長椅子が二つ、向かい合わせに置かれていた。長椅子はその部屋の唯一の出入り口である扉からアルヴィンの歩幅で十歩程度のところにあり、サミュエルの視線はイオスの立っている位置からソファまでの距離を床のタイルの数で測っているかのようであった。

「何か大きな誤解があるようですな。詳しいお話を伺いましょう。すぐに冷たい飲み物でもご用意します」

当初よりは幾分落ち着いてきた鼓動だが、血流により体が熱を持ってきているのをサミュエルは実感していた。冷たい飲み物はむしろ彼に必要なもののようだった。

イオスはしかし無表情のままでそれを無視した。

「まさかシルフィード王国が君のような獅子身中の虫を飼っていたとはな」

「一体何のお話でしょう？先ほどから申し上げておりますが、どうも猊下は何か大きな勘違いをされているご様子」

サミュエルは平静を装い、努めてゆったりとした動作で自分の大机を離れた。対面した二つのソファのうち自分は一方のソファの横に立つと片手を広げて見せ、イオスにもう一つのソファを指した。

「エレメンタルにちょっかいを出しているのも君の差し金だね？」

「エレメンタル？我が姫君の事ですかな？」

「あくまでもとぼけるつもりかい？」
イオスはそう言いながらもサミュエルの勧めに従い大振りなビロード張りのソファまで歩むと、その中央にスッと腰を下ろした。それはアルヴィンらしく体重を感じさせぬかのような軽やかな動きだった。
「猊下が一体どこから何を知って自らエッダまでお越しになったかが私には解せませぬ。しかもお供すらつけず……ですな？」
イオスがソファに座るのを見届けるとサミュエルは恭しく一礼して自分もソファにゆっくり腰掛けた。

「一年ほど前、サラマンダ中央にあるアクラムの森で発現前の炎のエレメンタルをル＝キリアを使って葬ったのは君だろう？複数の海軍特務部隊の補給作戦をわざわざ中央山岳地帯で行っていた事は調べがついてる」
「ドライアド側に要らぬ勘ぐりをされては面倒ですからな。補給と部隊同士の連絡をあのような山中で行うのは珍しいことではありません」
「海軍が、か？」
サミュエルは相手がごまかしのきかない相手であることを重々承知していた。だから最初から知らぬ存ぜぬという戦術を使うことは考えなかった。相手が話を切り出した以上、それ相応の情報を持っているのは間違いのないことなのだから。
「しかも念の入ったことにル＝キリアの中隊を先行させて配備した上で、合流部隊を些細な理由で別の場所で足止めまでしている」
「あの時は確かル＝キリアの小隊同士の合流を主目的とした補給作戦だったのではないですかな。他部隊が合流に遅れたのはル＝キリアとの連絡に重きが置かれていなかったからでしょう。どちらにしろ私は近衛軍の担当。王国軍の作戦については最高司令官であるキャンタビレイ大元帥が統べております故、作戦の詳細については私の関与するところではございません」

「よく言う」
「猊下は一体どこの誰からその妙な話を吹き込まれたのですか？」
イオスはしかしサミュエルの質問を無視した。
「王国軍の要所要所に君の息がかかった人間をあらかじめ配備していたであろうことくらい、三つ子でも思いつく。たぶん、実に単純な計略だったのだろうね。発現前の炎のエレメンタルがサラマンダの反政府ゲリラの部隊にいる事を知った君もしくは君の息がかかった人間が、そのゲリラの部隊にニセの情報を流した。情報はこうだ。『ドライアドの小部隊が補給作業の為に無防備に野営をしている。武器などの物資は豊富だ。しかも合流前で相手は少人数』。そして彼らはその情報に飛びついた。念の為に斥候を操って『情報に間違いなし』と言わせれば普通は疑わないだろう。敵の人数も少ないし楽な急襲作戦だと思わせておいて、実はファランドールでも指折りの実戦部隊にゲリラをけしかけた」
サミュエルは両手を広げて心外だ、という表情を示した。
「猊下はあの時の反政府ゲリラに炎のエレメンタルが居たとおっしゃるのですか？」
イオスはうなずいた。
「いたさ。未確認と思われていた炎のエレメンタルは「深紅の綺羅」に保護され、あのゲリラの指導者の下で暮らしていた」
「ほう、それはそれは」
「まさかゲリラにそんな大事な人間がいるなんて誰も思わないだろうね。でも、『戦略・戦術の知識と剣の技術の無いものは指導者たり得ない』と言うのが口癖の「深紅の綺羅」らしい隠し場所だね。もっとも僕はその炎のエレメンタルがピクシィだったと言う事実にちょっと驚いたけどね」
「ふむ。それもまた興味深いお話ですな」
「風のエレメンタルはもはや君の手の内にある。それ以外のエレメンタルは君にとって邪魔者以外の何者でもない。所在がわかった炎のエレメンタルは発現前だけに潰しやすかったろう？」

「……」

「まず一人目のエレメンタル抹殺に成功した君は次に地固めに入った。自分の意に沿う可能性がきわめて低く、その強大な戦闘力故に事が起こった場合には大きな障害として立ちふさがりそうな存在。ましてや直属ではない為に利用さえ難しいル＝キリア、いや具体的にはユグセル中将が次の標的になった。とはいえル＝キリアは司令官に忠誠を誓う誇り高き精鋭。下手に恨みを買えば、たとえ一人きりであってもその戦闘力が脅威になる。そこで君は巧妙な餌を使って四散させ、バード長という立場を最大限に活用した罠を張り、そして計画通りことごとく屠ってみせた」

「おやおや。そんな都合の良い餌などあるのですかな？」

「「真赭の頤」を騙った文書はいい餌だと思うよ。しかもシルフィードだけでなく各国に送りつけた。巧妙なのはここだね。怪しいとわかっていても他国が動くかもしれないのなら、動かざるを得ない。さらに言えば「真赭の頤」が既に死んでいる事を、なぜか君は知っていたからこそあんな文書を作れたことも間違いがない」

「大賢者「真赭の頤」が？」

とぼけるサミュエルを、しかしイオスは無視して話を続けた。

「君がでっち上げた「庵」の探索に、ドライアドは間違いなく精鋭のスプリガンを使うだろう。となれば対抗上シルフィードはル＝キリアを使わざるを得ない。出来るだけ多くを出動させ、しかもそれを分散させる為、目標物を多めに置いた」

そこまで言うとイオスは言葉を句切り、今度は射るような目をサミュエルに向けた。

「違うかい？」

サミュエルは苦笑して見せた。

「三文芝居のような台本ですな」

「従わせる自信がないル＝キリア……いや、幼少の頃にはその圧倒的なフェアリーの能力により風のエレメンタルではないかとまで噂されていた人物。そしてその人物と行動を同じくするきわめて強力

な力を持つもう一人の風のフェアリー。たぶん君はその二人を恐れていた。これからやろうとしている事を成就させる為には最大の脅威となると判断したからだ。つまり君にとってはキャンタビレイ卿に匹敵するやっかいな存在だと言うことなのだろう。それに、調べてみると奇しくもその二人はキャンタビレイ卿の屋敷で直接薫陶を受けた者達だそうだね。だから君は二人の提督の暗殺を謀った。君をしてあのような『手の込んだ子供だまし』をでっち上げなければならないほどの人物だと知ると、彼女達には僕も少し興味がわく」

「それはユグセル中将とクラルヴァイン少将の事ですかな？」

「二人は「雷鳴の回廊」で航海中、死んだ事になっているようだけど、なぜかユグセル公爵領であるファルンガには未だに次の相続者が現れていない」

「あれは陛下がなぜか棚上げにされていらっしゃるご様子でしてな。内政大臣がいつもこぼしておられる」

サミュエルの言葉にイオスは初めてフンっと鼻を鳴らした。無表情ではあるが、その仕草にはある程度の苛立ちが感じられた。

「そうやって表面上は君の思惑通りにつじつまが合った暗殺劇が演じられている訳だけど、そろそろ次の犠牲者が出そうだね」

イオスはそう言うと右手に持った儀仗の頭をサミュエルに向けた。

「「約束」通り、僕は君たち人間のやることにはあまり口も手も出さないつもりだ。だが、だからといってあまり僕を怒らせない方がいい」

「やれやれ」

サミュエルは肩をすくめて見せた。その目はイオスが座っている足もとを確認していたが、もちろん気取られぬように自然に視線を移動させることには抜かりがなかった。

「誰に聞いたかはわかりませんが、正確過ぎて恐ろしい程ですな」

その言葉にピクリと動いたイオスの眉を見て、サミュエルは続けた。

「話は変わりますが、先ほど私の部下を手にかけたのは猊下ですか

な」
「部下？」
「サンテ・ミアダンテ……いや、現名より賢者名の方が猊下にはわかりやすいですかな。「潤の鈎」の事です。彼は来るべきファランドール帝国を創世するという大いなる志の元に集った我が同志。猊下はそれをまるで虫けらのように焼き殺してしまった」
「心外だな。虫けらの命を粗末にする趣味は僕にはないよ」
「「潤の鈎」は虫けらにも劣るとおっしゃるのですか？」
「それよりも来るべきファランドール帝国とは何の事だ？」
イオスはサミュエルの問いにはまともに答えず、質問を返した。
ここへ来てサミュエルはもうすっかり落ち着いていた。

イオスがソファに座った時点で実のところ彼は心の中で快哉を叫んでいたのだ。だから彼の声には企図せず余裕めいたものが漂っていた。
イオスも話の途中からはそれに気付いてはいた。当初見せた狼狽の色はすっかり姿を消し、サミュエルの様子は途中からはまるでイオスの謎解きを心から楽しんでいるかのようだった。
「人間のやることには手を出さないとおっしゃいましたが、それならば「潤の鈎」が、何か『賢者の法』に触れることをしたのですかな？」
サミュエルもイオスの問いを無視して自分の質問を続けた。
「神の空間」に捕らえられた者は空間の支配者である「蒼穹の台」イオス・オシュティーフェの命令には逆らえない。だがまだイオスはサミュエルに「命令」はしていない。彼が口にしたのは質問だけだった。回答を命ずる事を敢えてせず、通常の会話の中でサミュエルから自発的な答えを得ようとしているイオスのその態度は、サミュエルからしてみれば自分を遥か上位に存在すると思い込んでいる者がとるきわめて傲慢で不遜な態度にしか見えなかった。
もちろん所属母体が全く違う者同士である。両者の立場の上下な

どはあまり意味をなさない。とはいえ一国の軍事部門の最高位に立つとはいえ、国を統べる立場にはないサミュエルが、小さいながらもそれなりの領地を有し、シルフィードを除く三大国……いや、ある意味シルフィードにさえきわめて強い影響力を持つ、つまりは単なるいち宗教団体にとどまらず、一つの準国家としか言いようのないマーリン正教会を統べる立場にある「三聖」と同等であるとは言い難い。しかし、それでも遙か彼方に見下ろされるような存在ではないという自負が、サミュエルにはあった。

だが目の前でソファに腰掛ける濃紺のローヴを纏う小柄のアルヴィンがサミュエルに注ぐ視線はどうだ？蔑みの目だ。いや、蔑む感情さえわかないと言わんばかりの、目の前の人間には何の価値も見いだせないと言ったその唯我独尊振りがサミュエルには許し難かった。

老大元帥にその時生まれた感情は言葉にしづらかった。世の中の高みという高みをすべて見下すかのような視線を持つそのアルヴィンの表情をどうにかして崩したいという思い……いや、もう少し具体的にはその孤高を気取る顔に憎しみや恐怖といった感情を表に出させ、引きつらせてみたいという衝動のようなものだったのかもしれない。

どちらにしろバード長と近衛軍大元帥を兼任し、かつ長く国王アプサラス三世の相談役として勤め上げてきた思慮深き老人が持つ感情としてはあまりに薄暗く稚拙なほど残虐なものだと言えるだろう。立場というものを超越して彼にそれだけの感情を抱かせるにはもちろん彼なりの理由が存在する。

その理由がつまびらかにされるのはもう少し後になるが、サミュエルに当初生まれた恐怖の感情を上書きする別の感情が生まれた外的な理由は一つしかない。彼がイオスに対して優位な立場にあったことである。その優位性は必ずしも客観的なものである必要はない。彼自身がそう思っていたという事が重要なのだ。

「神の空間」における術者イオスの絶対的な優位性。それが崩れる事など少なくともイオス自身は塵ほども思ってはいないはずだった。

イオスの敗因は自らの絶対有利を短絡的に持ち出すことをしなかった点に尽きる。彼は自分の絶対優位を毛ほども疑う事なく、悠然とサミュエルとの会話を続ける事を選んでいたのだ。そしてサミュエルはそんなイオスの態度こそが許せなかった。

「バード長。いや、サミュエル。君は何か勘違いをしているようだが、正教会内の事で僕がしたことに口出しできる人間など、三聖以外にこの世に存在はしないんだよ」

やや怒気を含むイオスの声に、しかしサミュエルはひるまなかった。

「勘違いされているのは猊下の方ではありませんかな？このエッダは我がシルフィード王国の領土、しかも国王のお膝元ですぞ？確かに我が国も賢者法を批准してはおりますが、一国に仕える人間を勝手に殺されて一言もない上官など存在しません。他国の事は存じませんが、少なくともここシルフィードでは」

「君が「潤の鈎」の上官だって？」

「さようでございます、猊下。サンテ・ミアダンテは我が近衛軍にあって准尉の地位にある将校です。それももう、何年も前から」

サミュエルにはイオスの眉が少し動いたように見えた。だが、イオスの声は以前同様、何の抑揚もないものに戻っていた。

「賢者になったものは死ぬまで賢者の法から逃れられない」

「ミアダンテ准尉は我が国の将校です、猊下」

「くどい」

イオスはサミュエルの言葉を遮るようにそう言うと、ソファから腰を上げ手にした青白い石で出来た儀仗を掲げた。

業を煮やしたのか、サミュエルのと会話に興味を無くしたのかはわからない。しかしイオスがサミュエルに都合の悪い何かの行動を

起こそうとしたことは間違いない。――少なくともサミュエルは自分の言動がイオスの感情に何らかの影響を与えた事に満足した。思いが満ちたと言い換えてもいい。

そしてそれは彼が待っていた「その時」でもあった。

彼はずっと機を伺っていた。そしてそれは今この瞬間だと判断した。

バード長は迷い無く手に持った儀仗「星を呑む獅子」で、足もとの濃い色のタイルを強く突いた。それはイオスが声を出す前になされた。

タイルにぶつかる儀仗の先がコンっという軽い音を立てたかと思う間もなく、サミュエルの目の前で立ち上がったはずのイオスの体から、何かが裂けるような音がしたかと思うと、そのアルヴィンは鈍い音を立ててその場に崩れ落ちた。

それきりイオスは動きを止めた。

ほんの少し遅れてイオスの手にあったはずの青白い儀仗が、その持ち主の数倍の重量を感じさせるようなドスンという重い音とそれに伴う衝撃を部屋中に響かせた。見た目以上に重量があった事を証明するかのように、その儀仗は床板のタイルに深い傷を残して横たわった。

儀仗の落下音が収まると部屋には静寂が訪れた。

ソファに座ったままのサミュエルは目の前に横たわる紺色の僧服を着た金髪のアルヴィンを無言で見下ろしていた。見ればアルヴィンの背中からは先端が鋭利に削られた手首ほどもある太さの木の杭が突き出ており、それは哀れなアルヴィンの鮮血によって真っ赤に染まっていた。

「忌まわしい化け物め」

サミュエルは長い沈黙の後……それはイオスの体からしみ出す血溜まりが広がり切った頃だった……その亡骸を見つめながら吐き捨

てるようにそう呟くと、自分の儀仗を手にしたままで、いくつかのルーンを立て続けに唱えた。

それはイオスが作り出した「神の空間」の消滅を確認する為の行為であると同時に念の為に自分にかけておく強化ルーンのようだった。

確かにルーンが発動した感覚を得ると、老デュナンはゆっくりと立ち上がった。そして横たわるイオスの体へ一歩近寄ると片方の膝をつき、動く事をやめた三聖の一人に語りかけた。

「「深紅の綺羅」様は大した方です。「神の空間」の弱点を正しく把握されておられる。おかげ様で最もおそれていた猊下をこうして亡き者にすることができました」

そこまで言うと一度言葉を切り、立ち上がった。

「どうぞ安らかにお眠りくださいませ。猊下が案じていらっしゃった「深紅の綺羅」様は我々が手厚く弔うことにいたします故、ご心配には及びません」

それだけ言うと、サミュエルは手にした儀仗「星を呑む獅子」を掲げ、今度は長めのルーンを唱えはじめた。そして低い声でその認証文を唱え終えると、掲げた儀仗をイオスの遺体に向けた。

すると三聖「蒼穹の台」の体は青白い炎に包まれ、音もなく燃え上がったかと思うまもなく、一塊の灰に姿を変えた。高温で人体だけを焼却できるルーンのようだった。そして主人が灰になると同時に、床に横たわっていた青白い石の儀仗に無数のひびが入り、やがてそれも細かい砂と化した。

サミュエルはそれらをすべて見届けると部屋の窓を開け放ち、新たなルーンを唱えた。ルーンによって呼び込まれた空気の流れは、その開け放たれた細長い窓から入り込み、つむじ風となって灰を巻き上げると、再び空へと戻っていった。

「さて」

風が去った空を見上げながらサミュエルはゆっくりと窓を閉めた。

「蜂退治の前に、気は進まぬが成すべき事を成さねばなるまい」

＞i23509—1831＜

## 第六十一話　招かれざる者（後書き）

第七巻終了です

次話より第八巻（第一部最終巻）スタートです

# 第六十二話　歩み出す者（前書き）

第一部　蒼穹の台　第八巻スタートです

# 第六十二話　歩み出す者

＞ｉ２３４７７―１８３１＜

夜明けを待たず、ファルケンハイン・レインとティアナ・ミュンヒハウゼンはジャミールの里を発つことになった。アプリリアージェの指示で朝の弱いエルネスティーネには声をかけない事にしていた。もちろん、本当の理由は泣かれて出発が遅れてしまうことを避ける為だが、本人以外は全員アプリリアージェの意図がわかっていたので、本当に朝が弱い王女様は見送りの場に顔を出すことは出来なかったのだ。

その代わりというわけでもないだろうが、ルーチェがアトラックの隣に、その腕をしっかりととって立っていた。

時間を申し合わせていたわけではなかったが、見送りの場所にはラシフ・ジャミールが供も連れずに一人で現れた。

アプリリアージェは一分の隙もない族長の出で立ちを見て最敬礼をもって出迎えたが、族長はそれには軽く答えただけで、まずアトラックの隣にいるルーチェに声をかけた。

「いい年の娘が暗い中を出歩くのは感心せんな。ちゃんとイブロドに用件を告げてきたのだろうな？」

ルーチェはコクンとうなずくと、なぜかそのままうつむいた。

「大丈夫ですよ」

その様子を見てアプリリアージェが助け船を出した。

「アトラックが護衛についていましたから」

そしてその視線をラシフからアトラックとルーチェに移して、

「帰りも送っていくのですよね？」

そう言ってにっこりと笑いかけた。

「え、ええ、もちろん」

「一応、朝食までには帰ってきてくださいね」
つづけてそう釘を刺すと、アプリリアージェはラシフに改めて礼をした。

「アルヴが二名か。頼もしいな」
光と影が紫を織りなす夜明け前の独特の空間の中、旅装を整えて出発するばかりのファルケンハインとティアナを見上げながらラシフはそうつぶやいた。小柄なダーク・アルヴのラシフからすると、間近にアルヴが二人並ぶ様はまさに壁の前に立つようなものだった。
「我々の仲間では一番体力と持久力のある二名です。デュナンのアトルではティアナの二倍の時間がかかってしまいますから」
そのラシフより頭半分ほど背が高いアプリリアージェはそう答えると、いつもの通りにっこりと微笑んでみせた。
ダーク・アルヴ族、いやジャミールの人々の中でもラシフはやや小柄に見えた。そう言えば実の娘だというイブロドも四人組の中では一番背が低い。血筋なのだろうなと、アプリリアージェはラシフを見て思った。

「これは俺からの餞別や。イブロドのおかげで何とか間に合った」
そう言ってエイル……いや、エルデが二つの小さな巾着袋を差し出した。アルヴの二人は顔を見合わせた後、一つずつそれを手に取った。
「いや、さすがにルーナーだらけの里やな。薬草の種類も豊富できちんとした管理もされてるし、おまけに質もええと来た。材料がええとこっちも気合いが入るしな。久しぶりに会心の調合が出来たで」
エルデの言葉にファルケンハインとティアナは再び顔を見合わせた。
「念のために尋ねるが、これは一体何だ?」
ティアナがおそるおそるその木綿製の巾着袋を開けながらエルデに尋ねた。

「高位ハイレーンにしか作れへん、溜まった疲労をたちどころに解消する丸薬や」
それを聞いたファルケンハインもティアナに続いて巾着袋を開けた。その中には数十個の小さな深緑の丸薬が入っていた。
「妙な匂いがする」
ティアナは丸薬を一つ摘まんで手のひらに載せると、鼻に近づけて匂いを嗅いでいた。ファルケンハインもそれに倣った。
「確かに妙な匂いだ。これは？」
眉間に皺を寄せてそう尋ねたファルケンハインに、エルデはニヤリと笑って返した。
「それはたぶん、薬効効果が高いジャミールの現族長の腋毛を配合したからやな」
「なんと！」
ティアナはエルデの説明に、目を丸くして驚いた。
「腋毛には疲れをとる効果があるのか」
「アルヴやデュナンのではアカンで。効果があるのは五百年以上生きたダーク・アルヴの女の腋毛だけなんや」
「そうか。なるほど、奥が深いな。さすがは高位ハイレーンの知識だ。勉強になる」
ティアナは本当に感心したようにそう言うと、再度匂いをかいで頷いていた。
「おい」
ラシフはエルデを睨みつけると低い声でそう呼びかけた。
「しかしラシフ様は長寿なのですね。五百年以上生きておられるとは思えぬ若さです」
儀仗を握りしめエルデを睨みつけているラシフに、ティアナは精一杯の畏敬の念を込めてそう声をかけた。だが、今度はティアナが目をつり上げた憤怒の形相をしたラシフに睨みつけられる番だった。
「誰が五百歳だ！」
ラシフはそう言うと持っていた儀仗の先をティアナの鼻先に突き

つけた。
「ち、違うのですか？」
「お主、本気でそう思っていたのか？」
「え？」
「私はまだ百歳にもなっておらん」
「そ、それではラシフ様の腋毛には薬効がないということですか？」
「いや、そうではなくてだな……」
ラシフはどうにも会話が噛み合わないティアナに業を煮やして、真っ赤な顔をエルデに向けた。
「服用法は？」
二人のやりとりはどこ吹く風と言った風に、手に持っていた丸薬を巾着に戻しながらファルケンハインはエルデに尋ねた。
「昼食後と寝る前に飲んだらええ。アルヴィン用の調合やから、アルヴのお二人さんは一回二粒や」
「了解した」
ファルケンハインはうなずくと、珍しく苦笑いをみせた。そして右手を伸ばしてエルデの髪をそっと撫でた。
「あまり族長様をからかうもんじゃない」
エルデはくすぐったそうに肩をすくめたが、いやがる風でもなくファルケンハインに髪を触らせたままにやりと笑うとその視線を自分を睨みつけるラシフに移した。
「いやあ、毎度毎度こんなにおいしい反応してくれるから族長いじめはやめられへんわ」
「貴様というヤツは！」
「なるほど、合点がいった。腋毛は薬効成分ではなくて、香り成分なのだな？」
ティアナが「わかった」とばかりに手を打ってそう言うと、ラシフは再びティアナを振り返り、怒鳴った。
「私に腋毛などない！」
「えええ？」

「あの……腋毛の話はそろそろやめにしませんか？」
一歩下がってしばらく状況を見守っていたアトラックがたまりかねて声をかけた。
彼にしてみれば誰かがいい加減この下世話な話を止めに入るのを待っていたのだが、期待していたアプリリアージェと言えばはニコニコしているだけでいっこうに割って入る様子がない。いや、アトラックの目にはむしろラシフの興奮する様をエルデ同様に楽しんでいるようにしか見えなかった。あまつさえこういう話題には良識を見せるはずのファルケンハインですらエルデを積極的に止めようとしているとは思えないのだ。
普段は自らが雰囲気作りを買って出る為に、ともすれば脱線が大きくなってたしなめられる役であるはずのアトラックだが、立場が逆になると楽しむどころか不安が先に立つようだった。
「貴様、そのビロウな話を私が好きでやっているとでも申すのか！」
矛先が自分に向いた事で、彼は声をかけるべき相手を間違っていた事にその時気付いた。
「あ、いえ、その、そ、そいつはどうも……」
助け船を出したはずのアトラックがラシフに怒鳴られるのを見て、エルデはそろそろ潮時だと判断した。
「悪い。俺のカンチガイや。その匂いはマリートの雄蕊を乾燥させたモノをすりつぶすと出てくる匂いやったわ」
エルデがそう声をかけると、ラシフの『お怒り状態』に戸惑ったような顔をしていたティアナがほっとした表情を見せた。
「そうか。植物の匂いなのだな」
「ああ。その丸薬は植物だけで調合されてる。毒薬耐性の為の訓練をしてて薬の類が効きにくいファルでもちゃんと効くようなルーンも練り込んである」
「そこまで考えてくれているとはさすがだな」
ファルケンハインは本当に感心したようにそう言ってエルデを見

た。
「――ル＝キリアご一行様には毒耐性があるって事については例のシェリルの一件でわかってたさかいな」
「そうだったな。いや、そんなことより、それは実にありがたい。丸薬と聞いてそこがちょっと気になっていたんだ」
　ファルケンハインはエルデがシェリルの名前を口にしたとたん、少し目を伏せたのを見逃さなかった。だから普段よりも声の調子を少し高めてそう答えた。
「本当にありがたい。私も心から感謝するぞ」
　そう言って思わず近衛軍式の敬礼をしたティアナの肩に、ファルケンハインがポンっと手を置いた。
「だまされてはだめだ、ティアナ。あいつは『これを飲んだら疲れないから、夜も昼も馬車馬のように働け』と俺たちの尻を鞭で叩いたようなものなんだぞ？」
「そうなのか？」
「人聞き悪いな。ティアナに早く帰ってきて欲しいからに決まってるやん」
「そ、そうなのか？」
　エルデを睨んだティアナは、しかしすぐに懐柔されて照れたようなとまどったような表情を見せた。
「まあ、ティアナはできるだけ長い間帰ってきとうないんかも知れへんけどな」
「な、何を言いだすのだ？」
「そろそろ出発した方がいいですよ、ティアナ」
　顔を真っ赤にしてエルデをにらみ据えたティアナに、アプリリアージェがそう告げた。これではエルネスティーネを眠らせていた意味がない。
　それを受けて、ファルケンハインもそっとティアナの肩に手を置いた。
「くれぐれも、頼みましたよ」

ファルケンハインはそう言うアプリリアージェとその横に立つラシフに向かって一礼した。

ティアナは慌てて自分ももう一度普通の礼をした。

「では行って参ります」

「任務は任務で重要ですけど、二人にとっても重要な……ではなくて楽しい旅になるといいですね」

アプリリアージェはそう言うと、ティアナに向かって意味ありげに思い切りにっこりと微笑んでみせた。ティアナはどうしていいか分からず、きょろきょろと周りを見渡したが、結局真っ赤な顔でうつむくしかなかった。

だが、何かを思い出したかのようにすぐに顔をあげた。しかし、ティアナが口を切るよりも早くアプリリアージェはそれに答えて見せた。

「ネスティの事は心配ありません。この里は安全です。それにあなたがいない間は、何かあっても私が命を張って守り抜いて見せますよ」

ティアナは開きかけた唇を閉じると、上気した顔のままで大きくうなずいた。

「この場にふさわしい言葉が思い浮かばんが、そち達に再びまみえることを心から願っておる。くれぐれも無事で帰ってきて欲しい」

アプリリアージェに続いてラシフがはなむけの言葉を口にした。

ラシフ自身は事の詳細を聞かされていたわけではなかったが、ジャミールの里の住民すべてをシルフィードのファルンガに移住させるための手はず全般を整えるために目の前の二人のアルヴが強行軍を行う事は当然ながら知っていた。だからこそできるだけの感謝の意を表したかったのだが、彼女はそれを素直に伝える表現が思いつかず、そしてそんな自分がどうにも歯がゆかった。

二人組のアルヴはラシフに改めて一礼すると、すぐに踵を返し、そのままあっさりと歩き出した。ラシフは何かもう一言声をかけよ

うと二人の背中に向かって思わず手を伸ばしかけたが、誰かの手がラシフの肩にそっと置かれ、それを止めた。
ラシフは挙げかけた手を下ろして横を向いた。
そこには予想通りアプリリアージェが微笑んで二人の背中を見送っていた。
「大丈夫です」
「え？」
「無理に言葉を見つける必要はありません」
「だが」
「どちらにしろ、あの二人も不器用な表現しかできませんから」
「その通りやな」
気付くとアプリリアージェと反対側にエルデがラシフと並ぶように立っていた。
「隠れ里の族長と言えば一国の主みたいなもんやろ？その人がこんな早朝に、わざわざ見送りに来てくれたんや。それも一人だけで。あまつさえ黄色のシャンとした服を着て、な。それ、正装なんやろ？」
「そうだが……別に私は」
「わかってる。でも多分、彼らは思うたやろな。『こんな名誉な事はない』って。そやから、充分伝わってるって」
「しかし」
「相変わらずめんどくさいやっちゃな！二人とも絶対に感動してるって。特にティアナは一見強面やけど、実はとんでもない感激屋やからなあ。感動しすぎて出発前に変に泣かれたら困ると思ってチャチャ入れたんやけど」
「それでか。貴様という奴はまったく……」
「よし分かった。言い方を変えるわ。少なくとも俺がそんな事されたらめっちゃ感激する。それは嘘やない」
エルデの言葉にラシフは口をつぐんだ。

「さあて」
二人の姿が見えなくなり、うっすらと明けてきた空に残る星を見上げながら、エルデはつぶやいた。
「ラシフ様には賢者の威光は必要ないっちゅう事やし、里人の事は任せて、俺はそろそろ眠るわ。リリア姉さん、後は頼んだで」
「あらあら、ネスティがとても話をしたがっていましたよ。せめて朝食まで待てませんか？」
「ネスティが話をしたがってるのは俺やないやろ？俺自身は別にネスティと話しとうないしな」
「なるほど」
目をそらすエルデを見て、アプリリアージェはクスリと笑うとうなずいた。
「わかりました。では後は我々に任せて、安心して眠ってください」
「おおきに」
「くれぐれも、エイル君を頼みます」
アプリリアージェは最後の一言をエルデにだけ聞こえるように小さくささやいた。エルデはそれに応えるように軽く手を挙げると、一人で迎賓殿に向かってゆっくり歩き出した。

「いくらメリドが主寝室を使っているからといっても、よりによってあいつはなぜあんな倉庫に寝床を作らせたのだ？なんなら私の屋敷の客間でも良かったものを」
エルデの後ろ姿をしばらく見送っていたラシフがアプリリアージェにそう声をかけた。
「賢者様はいろいろあってお疲れなのでしょう。少し長く眠るのだそうです。奥の夜具部屋であれば日中もまず光は差し込みませんし、何より居間から遠くて静かです。部屋の体裁よりその方がいろいろと都合がいいとの事で」
「納得が行くような行かぬような……万事において風変わりなヤツじゃ」

ラシフはあきれたような声でそう言うとため息をついた。
「こっちはそれに、いいように振り回される」
「お察しします。でも」
「ん？」
笑い声が混じったアプリリアージェの声に、ラシフは反応してそのやわらかい笑顔を見つめた。
「それについては一つ質問があります」
「唐突に何じゃ？」
「ラシフ様はこの里で長く族長の立場にいらっしゃるわけですが、昨日今日ほど怒鳴り散らした事がおありですか？」
思ってもいなかったアプリリアージェの質問に、ラシフは思考が一時停止した。
「いや、それは」
「我々ダーク・アルヴはアルヴ族の一員です。だからその気質もあるのでしょう。里の人々は族長を本当に尊敬している。それはこの里に入る時に子供達の態度で実感しました」
「あ、あれは本当に済まぬ事をしたと思っておる」
「いえ。あの時にエイル君はあなたを、いえこの里を守ろうと決めたのではないでしょうか？」
「そんな……」
「族長は私の見立てでも、厳しいようでいて、実のところ相当にお優しい。あの子供達を引き合いに出すまでもなく、側近の四人組の皆さんの雰囲気を見ていてもそれはわかります」
「私は里人や側近には恵まれておる。それだけだ」
「たとえそうであっても、それに応える器がないと族長など決して務まりません。私も提督と呼ばれる立場なので少しではありますがラシフ様のお立場がわかるような気がします」
「何か持って回ったような口ぶりだな？何が言いたい？」
「質問をもう一つ。口げんかをするのは何年振りですか？」
「え……」

そう言われて改めて思い返してみるが、もとよりラシフにはそんな記憶はすでに無かった。
「私には思いっきり怒鳴った後のラシフ様が、なんとなくですが、いつもすっきりした顔をされているように見えましたよ。嫌味ではなく」
ラシフにしてみれば、確かに本気で激高した記憶はもはやあやふやで、思い出せない程遙か遠くの話と言えた。それなのに、里の入り口で賢者を名乗る風変わりな若者と対峙してからいったい何回怒鳴り散らしただろうか？
「私は」
ラシフはそう言って深いため息を一つついた。
「自分がこれほど短気で怒りっぽい人間だと言うことをあの者に出会って初めて知った」
「いえいえ、ラシフ様は別に短気でも怒りっぽいわけでもないと思いますよ。お気の毒ですが、相手が悪すぎるんです」
「相手か。確かに、あの者は二言目には私を小馬鹿にするような事を申す」
「でも、口げんかも楽しいのではないですか？」
「馬鹿を申せ。里の一大事が係わっていることで楽しいと思えるわけがない」
「それはそうですけれど、先ほどのものはどうですか？」
「まあ、確かにそう言われてみれば先ほどのあれはまるで子供の言い争いのようなものだな。もっとも、感心せん話題だが」
「私には仲の良い友人同士がじゃれ合っているようにしか見えませんでしたよ」
アプリリアージェにそう言われると、ラシフは自分の両の掌をじっと見つめて小さく笑い声を漏らした。
「ふふふ。見よ、掌に爪の跡がついておる。ムッとして思いっきり拳を握ったのであろうな。こんな事もいままでにはなかった」
そして今度はじっとその爪を見た。薄い桃色の綺麗な爪だった。

「今まで通りの爪では、少し長すぎるのやもしれん」
「昨日も言いましたが、彼はラシフ様と同じでとても優しい子なんです。表現が不器用な所もそっくりです」
ラシフはゆっくりとうなずいた。そして
「そうかもしれん」
そう言うと、再び掌をじっと見つめた。
だが、ラシフはその掌を急に握りしめた。爪の跡がくっきりとつくほど、強く。
「しかし、ムカつく！」
そう言ったラシフの唇は横真一文字に結ばれて、顔には悔しさがにじみ出ていた。
「うふふ。わかります。その気持ち」
「おお、そちもわかってくれるか？」
「もちろんです。彼とはもう結構なつきあいですからね」
ラシフはアプリリアージェに向き合うと、その細い両肩を掴んだ。
「私は悔しいのじゃ。何というか口ではどうあってもあの者に敵わぬ」
「でしょうね。彼と口げんかをして勝てるのは私くらいでしょう」
「そう。そこでじゃ」
ラシフはアプリリアージェの肩に置いた手に力を入れた。
「あの者をぎゃふんと言わせる方法があれば、こっそり教えてはくれぬか？」
「うーん……『ぎゃふん』ですか」
アプリリアージェはラシフにそう言い寄られると、眉根を少し下げた。
「そうですねえ、エイル君をぎゃふんと言わせる方法はちょっと無理ですが、『おいおい』泣かせる方法なら知っていますよ」
「そ、それでいい。是非教えて欲しい」
肩に置いた手にさらに力が入った。アプリリアージェはさすがにたまりかねたのかラシフの腕に自分の手をそっと置くと、力をゆっ

くりと入れてその腕を下げさせた。
「任せてください。ただし」
「ただし？」
「その代わりと言っては何ですが、私も二つほど頼みがあります」
「交換条件か」
「私は慈善事業家ではありません。当然の要求です」
「とんでもない慈善事業家が何を言う」
「いえいえ。税を搾り取りますから長い目で見た投資です」
「お主達はまったく」
「どうしますか」
「うーむ」
ラシフは腕を組んで少し考えると、すぐに顔を上げた。
「その頼みというのを先に聞こう」
アプリリアージェはラシフの言葉を予測していたかのようににっこり笑ってみせた。
「皆さんの出発前に、我々と剣技の稽古をしませんか？一対一の実戦形式で。もちろん怪我などしないように完璧に安全な方法で行います」
「実戦形式の剣技の稽古じゃと？」
「シルフィード王国軍では「試闘」と呼ぶ決闘方式の試合のようなものです。ルーナーとしての力はともかく、里の兵士達の戦闘員としての技量が我々シルフィード軍現役の兵士と比べて一体どのあたりにあるかは族長としても知っておいて損はないでしょう？ご存じの通りこのところの政情は不穏です。皆さんはこの後、その技量を実際に使わねばならないかもしれません」
アプリリアージェの申し出は一理ある、とラシフは思った。ファルンガ領とはいえ、いわゆる外の世界に出るわけである。里の中での武術の優劣は意味を成さなくなるのは確かだった。それにアプリリアージェが言うように族長という立場で兵の技量を把握しておく

必要はもちろんだが、それ以前に兵士達が自分の実力を『外』との比較で認識しておくことはそれ以上に有意義に違いない。

「安全は確保する、と言ったな？」

決心がついたように顔を上げてそう尋ねたラシフに、アプリリアージェは自信ありげにうなずいてみせた。

「私にいい考えがあります。と言ってもエイル君の持っている便利なルーンを使ってもらうだけなんですけどね」

「あやつ……あの者はハイレーンのくせに我が里の高位のコンサーラでも知らぬような強化ルーンを使えるというのか？」

「昨日の事といい、ラシフ様はハイレーンをかなり低く評価されているのですね」

「ハイレーンとは所詮、エクセラーにもコンサーラにもなれなかった者が仕方なく薬草の調合方法などを覚えて治療などにあたる者だ。ルーナーの落伍者とまでは言わんが、能力が相対的に低い者であることは確かだ。もちろん里にとってもハイレーンは大切な存在ではあるが、だからといってルーナーとしての高い評価を与えろと言う方が無理と言うものであろう？」

「なるほど、そういうご理解でしたか」

ラシフはうなずいた。

「私は高位にあるルーナーという者の本当の実力を知らぬ。古代ルーンを詠唱するルーナーなど、初めて見たのだからな。そして今ではあの者がハイレーンやエクセラーという呼称があまり意味を成さない別格の存在じゃという事はもう理解しておる」

「では、その件は信用していただくと言うことで」

「わかった。やるからには旅に出る前の壮行試合として、盛大に執り行おう」

「言っておきますが我々もアルヴの一族。矜持にかけて戦います。手加減はできませんよ？」

「むろんじゃ。むしろ里の兵にそなた達の実力を見せつけてやって

欲しい。我らはぬるま湯にいたと言うことを知るべきなのだ」
　アプリリアージェは満足そうにうなずいた。
「では二つ目のお願いです。こちらは簡単ですよ。エイル君が目覚めるまで、ラシフ様とイブロド様以外には迎賓殿には誰も来させないで下さい」
「ルーチェは行きたがるだろう？」
「普段はこちらからラシフ様の私邸に出向くようにいたします。ご迷惑でなければ、ですが」
　ラシフはうなずいた。
「かまわぬ。我が家のように振る舞うがいい」
「ありがとうございます」
「条件は呑んだ。では教えてもらおう。『おいおい泣かせる』方法と言うヤツをな」
　アプリリアージェはうなずくと、少し離れた所にいるアトラックとルーチェの方にチラリと顔を向けた。
　目が合うと、アトラックは何も言わずに肩をすくめてみせた。
「お耳を拝借」
　アプリリアージェはアトラックには聞こえないように、ラシフの耳元で何かをひそひそと囁いた。それを聞いていたラシフの表情が微妙に変わっていった。だんだん眉間に皺がよって来たのだ。
「本当にそれだけでいいのか？」
「はい。その代わり、上っ面で言っても駄目ですよ」
「それは……たぶん大丈夫だ」
「だったら問題ありません」
「ふむ。間違いなく『おいおい泣く』のだな？」
「誰だって泣きますよ」
「そちも、泣くか？」
「私はたぶん、そんな感情は持ち合わせていませんから」
「貴様という奴は……。だが、そちがそこまで言うのなら信用しよう」

「光栄です」
「騙されたような気もするがな」
「あら、なんなら……」
「皆まで言うな。貴様が機会を与えてくれた事くらいはわかっておる」

「夜が明けましたよ」
ひそひそ声でなにやら話をしている二人のダーク・アルヴに向かって、アトラックはそう声をかけた。
声に反応してアプリリアージェとラシフは陽が昇る方へ同時に顔を向けた。それはアトラックの言うとおり熟した柿の実のような色をした昼星が、ノーム山脈に連なる峰の間から顔を出す瞬間であった。

# 第六十三話　前座

「猊下！」

前屈みに椅子から崩れ落ちたアルヴィンの体を「菊塵の壕」（きくじんのほり）が慌てて抱き留めた。

長い間眠ったように目を閉じて身じろぎもしていなかった「蒼穹の台」イオス・オシュティーフェが、突然弾かれたように椅子から立ち上がったと思ったら、そのまま倒れ込んだのだ。

「猊下、お体の方は？」

「菊塵の壕」シャレイ・カンフリーエは小柄なイオスを軽々と抱き起こすと、肘当て付きの頑丈な造りの椅子へ座らせた。イオスの意識はしっかりしてるようだったが、シャレイはここまで憔悴した様子の三聖の姿を見たことがなかった。

そこは床も壁も天井も、すべてが岩で出来た部屋だった。天井は高く、ちょっとした町の中央広場ほどもあろうかという空間のほぼ真ん中に、緻密な木目が見る者の目を引く四脚の大振りの椅子が並べてあり、その右端にイオスは座っていた。

「いやはや、まんまとやられたよ。菊塵」

イオスは目を閉じたままそう言うと辛そうに体を折り曲げ、肘掛けに上体を預けるようにして一息ついた。

「と、申しますと？」

「僕の全エーテルの四割も割いて作った『エーテル体』がものの見事に消滅させられた」

イオスの言葉にシャレイは息を呑んだ。

彼はイオスの行動を知っていた。それだけに、その言葉が信じられなかったのだ。

だが「蒼穹の台」がどのような場合にも冗談をいうような存在で

はないこともまた、彼は知っていた。
「やはりサミュエル・ミドオーバ大元帥、でございますか？」
イオスは目を閉じて背もたれに頭をゆだねたままでうなずいた。
「どうやら想定していた中でも最悪の状況のようだ。まったく彼はやっかいな事をしでかしてくれる」
「では、「深紅の綺羅」様も？」
「バード長は倒れた僕に向かってこう言った。『我々が手厚く弔う』とね。つまり、間違いなく囚われていて、今のところはまだ生きていると言う事だね。そもそもバード長は僕の守護役の君ですら知らない「神の空間」の弱点をちゃんと知っていたんだからね」
「なんと」
「「深紅の綺羅」の持っている知識をバード長は何らかの方法で全て手にしている、と考えた方がいいね。さらに言えば僕たち三聖と自分の守護者以外には絶対に明かすことのないはずの「深紅の綺羅」の現名を向こうは知っていた。これがどういう事かわかるかい？」
「「深紅の綺羅」様はただ囚われているのではなく……」
「そう言うことだろう。何があろうと三聖が人間ごときの命令で口を割ることはあり得ない。そう言う意味では「深紅の綺羅」は無事ではないのかもしれない」
イオスはシャレイの言葉を途中で遮ると肩を落としてため息をついた。シャレイにとってそれはほとんど見たことのないような「蒼穹の台」の苦悩する姿であった。
「大賢者を招集いたしますか？」
「それには及ばないよ。そもそも招集できる大賢者は君を除くと一人だけじゃないか。大賢者が四人揃っているのを最後に見たのはいつだったろうね」
「左様にございますな」
「それに丁度いい。彼らは僕が消えたものと思っているだろう。だったらこのまま正教会の連中からも姿を隠して行動することにするよ」

「サミュエル・ミドオーバを制裁されるのですか？」
「いや。「深紅の綺羅」の件もあるからそちらに対しては下手に動けない。それよりこうなったからには先に『彼』に会おうと思う。それに「菊塵の壕」。君も気付いていると思うけど、もはやファランドールだけでなく、マーリン正教会も虫食いだらけのようだ。今思えば「真赭の頤」が起こしたあの事件はこの事を僕に警告してくれていたんだろうな。ここを空座にすることをおそれるばかりに大きな潮流が何も見えていなかったとはね。まったく僕は浅はかな男だよ」
「「蒼穹の台」様……」
イオスは青白い儀仗にすがりながらゆっくりと立ち上がると、数多くのルナタイトで煌々と照らされた「前座」と言われる岩の空間をゆっくりと見渡した。彼が座っていた椅子の正面には四つの扉が見える。イオスはそのうち一番右にある扉に歩いていった。
「戦争は……避けられないのでございますか？」
遠ざかるイオスの背に、シャレイが声をかけた。
「そうだね」
イオスは杖に体を預けるようにして立ち止まると、そう答えた。
「シルフィードが、事を起こすのでしょうか？」
「シルフィードじゃなく、サミュエル・ミドオーバが『誰か』に最初の弓を引かせるという台本じゃないかな。人間の国のどこが勝とうが僕達には関係はないけど、そう言えば彼は少し気になることを言っていた」
「気になること、でございますか？」
「それが何かを僕は知らねばならない。事と次第によっては我々が介入する必要があるかもしれないし、その為にも久しぶりに『彼』をなんとか見つけ出して話をしなければならないだろうね」
「あの方が最後にこの『前座』に姿をお見せになってから、もうかれこれ五十年にもなりますが」
「そうだな。でも、どちらにしろそろそろ時が来る。草の根を分け

てでも探し出して会わねばなるまいよ」
「そうでした。来年は『合わせ月』の年ですな」
イオスはうなずくとのろのろとした動作で再び歩き出した。
そして目的の扉の前まで来ると、ゆっくりと振り返り、シャレイに改めて呼びかけた。
「「菊塵の壕」」
「は」
「君は急ぎ『彼』の足跡の情報を集めておいてくれないか？これは大賢者の君にしかできないだろう」
「御意」
「それから賢者会には一切伝えないでくれ。ただし「深紅の綺羅」の守護には事実のみは伝えておくべきだね。まさか妙な行動を起こすとは思わないけど、念のため僕の指示としてくれぐれも今は手出しは無用ということも付け加えておいておくれ。聞き分けがいい子だといいのだがな……」
「かしこまりました」
「確かずっとドライアドにいるのだったな」
「はい。一族当主の「天色の楔」（あまいろのくさび）は、以前から密かにバードとしてミュゼの王宮に入り込んでおります」
「僕はまだ会ったことがないが、新しい天色はたいそう若いと聞く。『人の筆頭』足る者が未熟な子供でなければ良いがな」
「『十二色』のひとつ、タ＝タンの者です。若いとは言え人の筆頭を名乗る家の当主。間違いはありますまい。もっとも『十二色』を名乗る者自体がほとんど居なくなりましたが」
「それを言うのならば、もう『十二色』を知っている者などほとんどいないよ」
シャレイには、そう言ったイオスの声が笑っているように聞こえた。
「なるほど。深紅の守護者は主……いや、僕なんかより血筋だけはいいということか」

「……」
「ふん。そうなると「天色の楔」とやらが僕の指示に素直に従ってくれるか怪しいものだな」
「何をおっしゃいます。三聖と我々は全く別の」
「現に！」
シャレイの言葉をピシャリと遮ったイオスの声色は強い調子に変わっていた。
淡々としつつも格式張らないおだやかな語調さえ、その姿を潜めた。
「守護一族の当主でありながら、守るべき「深紅の綺羅」が人間ごときに囚われているのをどう釈明するのだ？」
「それは」
「それは前当主の不始末。わかってはいるよ。現「天色の楔」はおそらく「深紅の綺羅」の手がかりを掴む為にドライアドに潜入しているのだろうな」
イオスは珍しく自分が激したことに驚いていた。本人が頭で考えているよりも、サミュエルとの会見はイオスに影響を与えていたのである。
とはいえ、それ以上に驚いていたのはシャレイだった。彼は守護一族の当主として三聖「蒼穹の台」に仕えてから、語調を荒げる主を見たのはそれが初めてだった。
だが次に口を開いたイオスの口調はいつも通り、ゆったりとした穏やかなものになっていた。
「――少し、気分が優れないようだ」
「申し訳ございません。出過ぎたことを申しました」
「いや、いい。別に僕は「天色の楔」の釈明を聞きたいわけではないんだ。それより頼んだよ。僕は少し休んでから、『彼』の手がかりがつかめるまでは本腰を入れて残る二人のエレメンタルを探すことにするよ」
「残るは三名……ですかな」

「そうだね。「二藍の旋律」の報告は間違いないだろう。つまり炎は滅した。風はシルフィード王国……いや、サミュエル・ミドオーバの手元にある。僕は行方知れずの二名、いやどうあっても水のエレメンタルだけでも見つけ出さねばなるまいよ」

イオスはそう言うと珍しくむせて咳き込んだ。イオス本人も自覚していなかったが、咽が異様に渇いていた為だ。自身を内から構築するエーテルを四割も失う事は三聖「蒼穹の台」にとっても大きな損傷であったのだ。

その様子を見て、たまらずシャレイは駆け寄ろうとしたが、察したイオスが手を挙げてすぐに制した。

「猊下、食事をとられてはいかがですか？もはや契約は破棄されたも同然なのですから」

「……いや」

イオスは少し逡巡して見せたが、首を振ると大きな木の扉を開いた。

「相手がどうであれ、僕が『約束』を破るわけにはいかない。「深紅の綺羅」の件はまだわからないことが多すぎる。だから今はやめておこう」

「もう一つだけ伺ってもよろしゅうございますか？」

もう一度咳き込みでもしたら、命に背いて肩を貸す決意を胸に、シャレイはそう声をかけた。

「何だい？」

「例の……出所不明の瞳髪黒色（どうはつこくしき）の賢者はいかがいたしますか？」

「瞳髪黒色の賢者？ああ……」

イオスは少しだけ口の端を曲げた。

シャレイにはそれがイオスが見せる苦笑の表情だと言うことがわかっていた。

「君としたことが、まだ気付いていないと言うことか」

「と、申しますと？」

シャレイにはもちろん、イオスが何のことを言っているのかはわからなかった。だが、イオスの言い方ではエイル・エイミイと名乗る謎の賢者が一体何者なのかを、彼の主は当たり前のようにわかっているという事のようだった。

「僕に考えがある。それに彼には二藍と群青を監視につける。心配はいらないよ」

それだけ言ってゆっくりと扉の奥に消えるイオスを、シャレイは恭しく礼をして見送った。

イオスを飲み込むかのように木の扉が重い音を立てて閉まると、その部屋のルナタイトの灯りが一斉に消えた。

# 第六十四話　初めての料理

おだやかに雲が流れている。
白い雲だ。
ずっと遠くに見える地平線は、青と緑の二つの色を区切る為にだけ存在しているかのようだ。
青い色は白い雲の背景になり、緑色は足もとまで近づいて、そよ風にたなびく風草にとなって後方に広がり行く。

そして、この視点の中心にオレがいる。

それだけだ。
オレ以外には誰もいない。
何もない。
見上げればただ雲がゆっくりと流れ、頬を風がすり抜け、ざわざわと風草が波打つ。
オレはそれをずっと眺めているだけだった。

何のために？
ここはどこだ？
オレは……。

――オレは誰だ？
掌を見る。
だがそれは半分透き通っていた。
時折向きを変える風に呼応して、そのたなびく方向を変える風草が作るうねりが掌を通してぼんやりと透けて見える。

これは何だ？
オレは……。
オレはなぜこんな所にいる？
いや、それよりも、
オレの名前は？

――（――お兄ちゃん）

背後から、そう小さな声がしたような気がした。
オレは迷わず振り向く。
だが、そこにあるのは風草の海。その海の果てにある地平線。そしてまた青い空と白い雲。

――（お兄ちゃん）

よりはっきりとした声が、今度は頭上から降ってきた。
見上げる。
距離感がつかめないほど底抜けに青い空がそこにある。
真上を向くと焦点を合わせるものがない。
そして平衡感覚が悲鳴を上げ、オレは倒れそうになる。
慌てて地平線に近いところに浮かぶ雲を見た。

やはり声の主は居ない。

「ここにいるわ」

今度は真横で声がした。その声はさっきよりずっとはっきり聞こえた。
少女の声だ。

「お兄ちゃん、私よ」

声のする方に顔を向けた。
そこには右手があった。
右手だけがあった。
細い指をオレの方にのばしている。
「忘れたの？私よ、お兄ちゃん」

―（お前は誰だ？）
オレはそう言おうとしたが、声にならなかった。
思わず首に手を当てる。
だがそうしたところで声が出るわけではなかった。

―（お前はオレを知っているのか？だったら教えてくれ。オレは誰なんだ？）
「お兄ちゃんはお兄ちゃんじゃない。何を言っているの？」

声に出してはいないのに、少女は答えた。
少女の手には細い腕が続いていた。
「思い出して。私のことを」

少女はオレを『お兄ちゃん』と呼んだ。
妹なのか？
―（妹？）
「そうよ。お兄ちゃんの妹。思い出して」
オレには妹がいる。
名前は……。

「私の手を取って。お兄ちゃん」
（でも）

「大丈夫」
少女は促す。
「大丈夫だから」

オレは差し出された右手に、自分の右手を重ねるようにして、長く形のいい『妹』の指をそっと握った。
――ひどく冷たい。しかし、柔らかかった。

「それでいいわ。もっと強く握って」
――（こうか？）
オレは握った手に力を入れた。
『妹』の手は少しだけ握り返してきた。
「ええ。そしてそのまま私を引っ張って、お兄ちゃん」
オレは言われるままに握った手にさらに力を入れると、少女をぐいっと引き寄せた。
すると、何もないはずの空中から、腕の先が現れた。
腕の持ち主。
やはり少女だ。
白い薄衣を纏った、腰まである長い黒髪の少女。
前髪は切りそろえられ、黒目がちの切れ長の大きな目でオレをじっと見つめている。
それは、ぞっとするほど美しい少女だった。
だが、少女の青白い顔色がオレは気になった。

「思い出した？」
オレはうなずいた。

妹だ。
オレの妹。
（マーヤ）

「うん」
少女はうれしそうに頷くと、にっこりと笑った。
大人びた顔が笑うと、とたんに幼く見える。
マーヤの不思議な魅力だと、オレは思う。
――兄バカなのかもしれないな。
「さあ、戻りましょう」
「戻る？」
いつの間にか声が出ていた。
マーヤはうなずく。
「ここはお兄ちゃんの居る場所じゃないわ。私との約束を忘れたの？」
「ああ……いや、忘れるものか」
そうだ、マーヤとの約束があった。
「私にはあまり時間がないの」
そうだった。
こんな所でぼんやりしている時間はない。
「忘れるわけがないじゃないか」
オレがそう言うと、マーヤは満足そうにうなずいた。
「じゃあ、帰りましょう。目を閉じて」
「ああ」
オレはマーヤに言われるままに目を閉じた。
握りしめたマーヤの手は、いつの間にか温かくなっていた。
「目を閉じたら、自分の名前を言うの。いい？」
「わかった」
オレはうなずいた。
「じゃあ、教えて。お兄ちゃんの名前はなあに？」
オレは目を閉じたまま、小さく深呼吸をしてはっきりとした声で自分の名前を言った。

「オレの名は、エイル・エイミイ」

そこでエイルは目を覚ました。

暗い。

暗いが、暗闇ではない。周りの様子がぼんやりとわかった。

エイルはすぐに自分が布団部屋のような場所で眠っていた事を認識した。

『えっと、ここは？』

【お早いお目覚めで】

『エルデか』

【エルデか、はないやろ。一体どんだけ眠ったら気が済むねん、このねぼすけ】

『いや、ねぼすけとか言われても……えっと、確か』

「そうだ！」

エイルは声に出すと、がばとばかりに寝床から起き上がった。

『大丈夫だったのか？古代呪法、詠唱失敗したんだろ？』

【「失敗」やのうて「途中解除」と言うてもらおか。というか、大丈夫やなかったら、今頃こうして生きてへんやろ？】

『いや、まあ、そうなんだろうけど、その時のショックか何かで俺たち寝込んでたのか？』

【俺たち、やない。お前だけや】

『オレだけ寝込んでた？』

【そういうこと。まじめな話、今回はホンマに心配したわ】

『そうか』

エルデはエイルに眠っている間のいきさつを、かいつまんで説明

した。
エイルは長く意識を失っていたとは思えないほど頭の中がすっきりしていて、エルデの話をすんなり飲み込むことが出来た。
『で、オレは何日くらい眠り込んでたんだ？』
【それはオレにもわからへん。そやから確認がてらリリア姉さん達に挨拶しにいこか。みんなも相当心配してたしな】
『そうだな』

このときのエルデの眠りはいわゆる普通の眠りではなく、特殊なルーンを使った意識の閉鎖だった。新陳代謝を極限まで落として出来るだけ長く生命が維持できるようにしてあった。ファーンが使った「冬眠ルーン」と同じ系統のルーンである。
おそらく目覚めたすぐ後にエルデのルーンによって覚醒されていたのだろう。意識は驚くほどはっきりしていたものの、体の方は言うことをきかなかった。
ただでさえ「食らいの呪法」の追加発動により右目が見えない状態である。当初はまっすぐ歩くことすらままならない程であった。加えて極度の空腹の為に胃がむかついて、だんだん気分が悪くなってきていた。
廊下を辿った突き当たりにある居間に相当する広い部屋には、エルネスティーネが一人でいた。
エイルはそのアルヴィンの少女を見た時、はじめはそれがエルネスティーネだとは気付かなかった。ジャミールの里人と同じ平服を身に纏っていたからだ。そしてその服を纏った姿には、何の違和感もなかった。
もとよりダーク・アルヴとアルヴィンは外見上は肌の色が違うだけの同種族である。黄色いリンゴと赤いリンゴのようなものだ。ジャミールの服は独特な意匠で作られているとはいえ、同じ種族がその長い文化で培った民族衣装である。アルヴィンのエルネスティーネに似合わないはずはなかった。

「エイルっ！」
部屋の入り口で突っ立ったまま、ぼうっとエルネスティーネを眺めているエイルの気配に振り向いたエルネスティーネは、そこに懐かしい黒髪の少年の姿を認めると目を丸くして驚いた。そして手に持っていた大量のサラシのような布の山を放り投げて駆け寄ってきた。
「やっと起きたのですね」
エイルには、短く切りそろえたエルネスティーネの髪が、記憶より心なしか伸びている気がした。
「うん」
「大丈夫ですか？体は何ともないですか？」
「う、うん」

【うれしそうな顔したり、泣きそうな顔したり、忙しいやっちゃ】
『そうだな』
【ふーん】
『なんだよ』
【なんでもない】
『おかしなヤツ』
【おまえに言われとうないわ】

エルデの言う通り、エルネスティーネはエイルの顔を見たとたんに顔を輝かせ、まるで何もなかった荒れ地にぱっと花が咲いたかのような笑顔を見せて飛んできたが、間近でエイルの顔を見ると、今度は眉根を下げ泣きそうな顔で何かを訴えるような表情になった。
「本当にもう大丈夫だよ、ネスティ」
エイルは思わず苦笑しながらそう言った。
「良かった」
エイルの言葉を聞いたエルネスティーネは安心したようにそう言

うと、何のためらいもなくエイルに抱きついてきた。
「お、おい」
驚いたのはエイルの方だ。
「心配しましたよ。今日でもうまる一週間も眠ったままだったのですよ」
そういうエルネスティーネの声は心なしか涙声だった。
「まさに『待てばカイロに火がついた』です」
「いやいや……」

【火ぃついたんかいっ！！と言うかやな、エイルに対する積極性が五割増しくらいになってへんか、このお姫様？】
『積極性って、どういう意味だよ』
【わからんヤツには教えへん】
『わからないから聞いてるんだろうが』
【絶対に言わへん！】

「もう、目を覚まさないかもしれないって、くじけかけるところでした」
そう言って背中に回した腕にいっそう力をいれた。エイルは目の前にある金髪の頭に顔を埋める格好になっていた。
―（きっとネスティは日だまりのような匂いがするんだろうな）
エイルはそう思ったが、彼の臭覚にそれを確かめる力はない。ただ、エルネスティーネにこれほどの態度をとらせてしまうくらい自分が心配をかけていたのだという思いに胸が詰まった。
確かに一週間は待つものとしては長い時間だったろう。エイルはそれを自分と妹マーヤに置き換えて想像して改めてぞっとすると、思わず自分もエルネスティーネの背中に腕を回し、ぎゅっと抱きしめた。
「あっ」
エルネスティーネがエイルに抱きしめられて思わず小さく声を上

げると、エイルは我に返った。とっさに腕の中の少女から離れようとしたが、エルネスティーネはそれを嫌がるように強く抱きついてきた。

「あ、あのさ」

いつまでもこのままでいるわけにはいかないと焦りだしたエイルは、話題を探した。彼にしてみれば、この状態をティアナに見られたらと思うと気が気ではなかったのだ。

「何？」

「何か食べるものはないかな？腹が減ってて」

その時、本当にいいタイミングでエイルの腹の虫が音を立てた。

それを聞いたエルネスティーネは顔を上げるとエイルと目を合わせ、エイルを拘束していた力が緩められた。

二人はどちらからともなく声を出して笑い合った。

「あらあら」

「賢者さま！」

背後で二人の声がした。

振り返ると、そこには次期族長とその母親が驚いた顔で立っていた。

「丁度良かったです。イブロドさんにお願いが」

エルネスティーネはそう言うと、ルーチェの母親の手を取った。

「エイルに何か食べさせてあげたいんですけど」

「かしこまりました。急いで支度をいたしましょう」

イブロドはにっこり笑うと踵を返そうとしたが、エルネスティーネはそれを呼び止めた。

「あ、違うんです。作るのは私です」

「ネスティ様が？」

「はい。ですから、その、私に作り方を教えていただけないかと…」

そう言うエルネスティーネの語尾が弱々しく消えていった。イブ

ロドはいぶかしげにネスティの顔をじっと見た。目の前の金髪のアルヴィンは、耳まで赤く染めていた。
「母上」
ルーチェがイブロドの袖を引っ張った。
「あ、ああ、そうね」
イブロドは我に返ると、できるだけ普通の笑顔を作った。
「ええ、もちろん喜んでお引き受けします」
イブロドの返事に、エルネスティーネは赤く染まった顔を上げた。
「お忙しいでしょうに、本当によいのですか？」
「ええ、でもこれからご一緒に作ると言っても」
イブロドは腕を組んで少し考えた後、ルーチェに材料をいくつか告げて自宅から持ってくるように命じた。
「猊下は空腹のご様子だから、急いでね」
「まかせて頂戴」
ルーチェはうなずくと鉄砲玉よろしく部屋を飛び出していった。
目を細めてその後ろ姿を見送ると、イブロドはエルネスティーネを振り返り、改めてにっこり微笑んだ。今度はごく自然な、イブロドらしい優しい笑顔で。
「さあ、では我々はルーチェを待つ間、厨（くりや）で準備をしておきましょう」
エイルに深々と礼をすると、イブロドはエルネスティーネを引き連れて居間を出て行った。

『えっと……』
【いや、何も言わんでええ】
『オレたちが眠っている間、特に何事もなさそうだったと言うことはよくわかったよ』
【何よりやんか】
『ファル達は帰ってきてるのかな』
【一週間か。リリア姉さんの啖呵が嘘や無いんやったら、そろそろ

やろな】
エイルは食事が用意されるまで外の様子を見ようと居間に続く板張りの露天舞台のような場所に出た。

『あ』
【族長やな】

露天舞台からは、里の通りが一部見渡せた。
二人が言う通り、通りには薄茶色の長い髪を優雅に揺らしながら歩くラシフの姿があった。ラシフは両手で大きなカゴのようなものを抱えてゆっくりと通りを歩いていた。カゴの中身は遠目でよくわからなかったが、形から布のようなものが大量に入っているように見えた。小柄なラシフが大きなカゴを抱えて歩いている様は思わず手伝いを申し出たくなるような図ではあったが、その必要はなさそうだった。
ラシフの周りには数人の子供達がまとわりつくようにしてラシフのカゴを持ち上げていたのだ。その子供達の中にはエイルとエルデが知っている顔もあった。
ラシフはそんな子供達に優しい笑顔を向けながら、うなずいたり、話しかけたりしながら遠ざかっていった。
エイルは次第に小さくなって行くラシフの後ろ姿をしばらく見つめていた。
心の中ではエルデは何も言わなかった。
そして、エイルも何も言わず、ただ後ろ姿を見送った。
ラシフの姿が消えると、エイルはその場でどっかりとあぐらをかいて空を見上げた。まだ陽は高く、風のないその場所は晩秋にもかかわらず暖かかった。

『なんか、落ち着くな』
空を見上げたままで、エイルはようやく心の中に話しかけた。

【何事もなければ、この里は本当に快適なんやろうな】
『うん。それもあるけど』
【ん？】
『オレ達、今までこんなにぽっかりって言うかゆったりした時間を過ごしたことがあったっけ』
【そうやな……】
『こうしてるとさ。右目が利かないし、いろいろ不自由だけどここでしばらく暮らすのもいいかな、って気になった』
【おい、エイル！俺たちは】
『わかってるって。心配すんな』
【だいたい、お前は妹の為にやな】
『だからわかってるって言ってるだろ。それに、オレをここに引き戻してくれたのはそのマーヤだしな』
【そう……か】
『ああ。ちょっと言ってみただけだ。こんなこと言えるのもお前にだけだしな』
【お前さん、なんや時々ツボを突いて来るなあ】
『ツボ？』
【こっちの話や。それよりこれから先はまた俺達二人だけの旅になりそうやで】
『え、なぜ？』
【シグの爺さんが死んでたって事がわかったんや】
『え？』
【つまりはそう言う事やろ？】
『ああ、そうか』
エイルは思い出した。
ル＝キリアの目的は、いわゆるザルカバード文書と言われる怪しげな書簡を送ってきたと思われる賢者「真赭の頤」ことシグ・ザルカバードに会うことだったのだ。庵の探索はル＝キリアにとっては「手法」であって「目的」ではなかった。「二藍の旋律」ことラウ・

ラ＝レイの情報が正しければ、つまり、ル＝キリアは「目的」を失ったのだ。

『いや、待てよ。それはオレ達も一緒じゃないのか？』

【ちゃうちゃう。俺達の目的は『宝鍵』を完成させる事や】

『え？話が違うだろ？シグ・ザルカバードに会って呪法を解いてもらうって話だったろ？』

【『食らいの呪法』の解呪だけやったら『宝鍵』が完成すれば、別にシグの爺さんは必要ない。これが宿題の答えなんやからな。師匠に会おうとしたのはそっちの方が手っ取り早いと考えたからや】

『その欠けたプリズムが完成すれば、本当に呪法が解けるんだな？』

【解ける】

『わかった。信用してやるよ。って言っても、もともとオレに選択肢なんか無いんだしな』

エイルとエルデが人には聞こえないそんな会話をしているうちに、エルネスティーネが食事を載せた盆を持って現れた。

イブロドと一緒に厨に消えてから、それほど経っていないはずだった。エルネスティーネの手際が相当にいいのか、イブロドの教え方が超人的なのか、そもそも即席で作れる食事なのか……。

エイルは三番目だろうと当たりをつけると、ゆっくりと立ち上がった。

「お待たせしました。どうぞ召し上がれ」

エルネスティーネはエイルのすぐ横に来ると正座をして盆を床に置いた。

そこには木でできた椀に入った白濁した液状の物が入っていた。

「え？」

盆の上に載っている料理らしきものはそれだけだった。

不満そうなエイルの顔をみて、エルネスティーネは苦笑しながら説明した。

「イブロドさんが言うには、一週間も何も食べてないのにいきなり普通の食事は体に悪いと言うことで、これを作りました」
エルネスティーネのいう「これ」が一体何なのかがわからないエイルはなんと答えてよいものか迷っていた。ただ空腹は切実で、正直言ってそれなりの量を腹にいれたかったのだが、イブロドの言うこともっともだと思い直し、ここは素直に従った方がいいと判断した。
エイルは納得することにしてさっそく盆に手を伸ばしたが、その手を途中で止めた。
匙がない。
「えへへ……」
その様子を見て楽しそうに笑うエルネスティーネを見ると、その手には木でできた匙が握られていた。
「え？」
驚いた顔をしたエイルに、エルネスティーネはきっぱりと言った。
「病み上がりのエイルはじっとしていて下さい。これは私が食べさせてあげます」
「いやいやいやいや」
エイルは後ずさりしながら、匙を持つエルネスティーネの指を見ていた。

『おいおい、さすがに』
【ふん、まんざらでもないくせに】
『ンなことはない。そうだ、じゃあお前代わってくれ』
【ヤだ】
『というか、病み上がりじゃないんだけど』

「はい、あーん」
エルネスティーネはドロリと白濁した流動体を椀からひと匙すくうと、上気した頬をふくらませてフーッと息を吹きかけて熱を冷ま

した。
「あのさ」
「何です？」
食べさせようとしたのに手を出して止められたエルネスティーネは、ムッとしてエイルをにらんだ。
「それ、いったい何？」
「見ての通り白濁した流動食です。名前は聞き忘れました」
「『流動体』じゃないんだな」
「え？」
「いや、食べ物なら、いいんだ」
「味見をさせてもらいましたが、意外においしいですよ」

『ああ、しまった……謎の食べ物に対する恐怖が先に立って、突っ込むべき所を間違った』
【観念したらええんちゃう？】
『なんか冷たいな、お前』
【フンっ】
『それよりお前、気付いたか？』
【ああ。ネスティの指先やろ？なんや結構手荒れしてるな】
『さすが、エルデだな』
【お前さんが気付いて俺が気付かへんとか、あり得へんから】
『はいはい』
【さっきもそこにある布を運んで選別してたみたいやし、あのジャミールの作業着姿といい、なんかあるな】
『ああ。ってあれは作業着だったのか？』
【みたいやな】
『ジャミールの人たちの服装って、なんか作業着まで優雅だな』
【それについては同意やな】

「じゃあ、はい。あーん」

気がつけばエルネスティーネの顔は息がかかる距離にあった。
エイルはほんの少し躊躇したが、自分とエルネスティーネ以外に周りには誰もいないことに気付くと、観念したように目を閉じて口を開けた。
「はい、どうぞ」
口の中に差し入れられたスプーンをくわえると、その中の『白濁した流動食』をおそるおそる飲み込んだ。味覚がないとどうやら食感も鈍くなるようで、いったいそれがどういうものなのかがわかりかねたが、とにもかくにもその得体の知れない『流動食』はするりと咽の奥に落ちていった。

『なあ』
【うん?】
『聞くけど、胃の調子なんかお前のルーンで簡単に回復できちゃうんだろ?』
【もちろん】
『だったら』
【いや、今はやめとこ】
『何でだよ?オレ、ちょっと困ってるんだけど』
【ネスティのその顔を見たら、何となく邪魔するんも悪いかなあって】
『はあ?』
【ま、ちょっとの間の辛抱や。というかやな、一国のお姫様に「あーん」ってしてもらえるなんて、フツーあり得へんで。いや、多分普通の姫君というヤツは結婚相手にもそんな事はせえへんはずや】
『へいへい、そりゃもう光栄ですとも。オレはこれを一生の思い出にして、墓の中までもって行きゃいいんだろ?』
【そやな、ただし!】
『え?』
【許すんはここまでや。これ以上の甘えすぎは御法度やで】

『なんだよ、それ』
【この後、『膝枕でしばらく休んでください』とか言われても毅然とした態度で断らなアカンっちゅう事や】
『お前、結構妄想派だな』
【誰がや！】

エルネスティーネは次の一口を同じように冷ますと、本当にうれしそうな笑顔でまた「あーん」と言ってエイルの口を開けさせた。
「白い粉のような物を椀に入れて、イブロドさんが何かの果物の皮を何種類か粉にしたものを少し加えた後に、熱湯を注いで手早くかき混ぜたものです。私も初めて見ました」
「なるほど」
エイルはそれを聞いて『白濁した流動食』の正体がなんとなくわかった。彼に残るフォウの記憶は重要な事に関しては曖昧だが、どうでもいいような事柄については意外に鮮明に残っていた。

『――葛湯か』

「私、お湯を注いだんですよ。初めての料理は本当に緊張しました」
「お湯を？」
「ええ」
「……」
それを料理と言っていいのか？と言う言葉が、思わずのど元まで出かかったエイルだが、エルデの言うように確かに『こんなにいい顔をされたら何も言えない』と思わざるを得ない笑顔が目の前にあった。
それほど少し上気したエルネスティーネの笑顔は幸せそうだった。
その笑顔を見て、エイルはエルネスティーネの二つ名を思い出していた。
『シルフィードの宝石』

エルネスティーネはそう呼ばれていたと言う。おそらくそれはこの笑顔に対して付けられたものなのだろうと、この時エイルは思った。

【葛湯？】

『フォウ、というよりオレの国では昔からある流動食さ。葛の根からとる澱粉で作るんだけど、葛は高価だから普通の家庭じゃ芋なんかからとれる澱粉で代用する事が多いけどな』

【ほお。得体の知れんモンやないってことやな】

『そういうこと。ジャミールにちょっと親近感が生まれた』

【実は俺もけっこうこの里は気に入ったな。ラシフもからかいがいあるしな】

『お前、それは止めとけって』

エルネスティーネは何も言わずにエイルがどんどん食べるのが楽しくてしょうがないといった感じで、実に上機嫌で次々と匙を運んだ。

木の椀に半分ほど入っていた葛湯風の流動食はすぐになくなった。

「どうでしたか？」

最後のひと匙を飲み込んだエイルをのぞき込むようにエルネスティーネはそう声をかけた。

「香りもいいし、おいしいでしょう？」

「うん……」

「あ！」

困ったように言いよどんだエイルの表情を見て、エルネスティーネは笑顔を一瞬で無くした。そしてみるみる両の目に涙を溜め始めた。

「あ、いや、全然気にしないでいいから」

あわててエイルがそう言ってなだめたが、すでに涙はエルネスティーネの頬を伝い落ちていた。

「ごめんなさい。私、知っているはずなのにうっかり無神経な事を」
「いやいやいや、本当に気にしなくていいから。これ、食べやすくてよかった。えっと、その、ネスティに食べさせてもらったから、すごく楽しい食事だったよ」
「本当？」
エイルの言葉に、ネスティの顔がまた輝いた。
「本当だって。ちょっと照れくさかったけど」
「じゃあ、お詫びに夕飯も私に世話をさせてくださいな」
「え？いや、それはちょっと」
エイルが言いよどむと、ネスティの顔が曇った。それを見てエイルは即座にうなずいた。
「うんうん、是非よろしく」

【思うんやけど】
『なんだよ、うるさいな』
【まだ何も言うてへんやろ】
『だいたいわかる』
【いや、お前さんを責めようとしたんやない】
『じゃあ、何だよ？』
【前にも言うたかもしれへんけど】
『何を？』
【ネスティって、実はリリア姉さんをも上回るほどの超一流の策士なんとちゃうんかな】
『まさか』
【そやなかったら俺を超える天才やな】
『へ？』

エイルがリリア達に会ったのはその食事から少し経ってからであった。昼間は族長の館を拠点にしていた一行に、ルーチェがエイルの目覚めを知らせたのだ。

アキラも含めた一行は、エイルが眠っている間は里人の移住作業の手伝いをして過ごしていた。

仕事は山のようにあった。彼らは旅装束を解き、ネスティ同様イブロドが用意したジャミール族の服を着ていた。

同じダーク・アルヴのリリアにはその服は実に似合った。一見するとおっとりとした器量良しのジャミールの娘にしか見えない。

アトラックとアキラは主に力仕事にかり出され、特に大柄で力のあるアトラックはどこへ行っても重宝されていた。アキラは族長の許可が出ていた為、休憩時間には得意の横笛を披露し、こちらも大した人気者になっていた。

エルネスティーネは本人のたっての希望とやらで里の女性軍に混じって洗濯をしたり保存食を作ったり衣類や細かい日用品を整理・分別・梱包したり、毎日埃まみれ、汗まみれになって走り回っていたようだった。

『今、保存食を作ってたとか言わなかったか？』

【お湯を注いでた、の間違いやろ】

『でも、手荒れの訳がこれでわかった』

【なんやかんや言うて、心配やったんやろ？】

『王女様なのに、えらいよな』

【王女様は普通に偉いやろ？】

『チャチャ入れはよせ』

【ネスティがええ子やっていうのは、もうわかってるって】

『そうだな』

テンリーゼンは言葉がしゃべれない為、アプリリアージェの手伝いに回っていた。つまり、手伝いの手伝いといったところだろうか。ルーナーが多いこの里ならば精霊会話を受けることが出来る人間の方が多いだろうが、テンリーゼンは顔の入れ墨の事もある。里に入ってからは例の黒い面をしていることが多かったが、どちらにしろ

あまり里人に顔を見せなくてすむような仕事をアプリリアージェのもとでこなしていたようだった。
テンリーゼンの事を気にかけつつも実質的にアプリリアージェはこの「ジャミール移転」という大事業に関しての統括責任者のようなもので、ラシフの相談役として族長の館に駐留していることが多かった。

「で、何でマナちゃんがリーゼの肩に乗ってるんだ?」
目が覚めたときに見たエルネスティーネの近くにもマーナートのマナちゃんがいなかったのをエイルは不思議に思っていたのだが、その小動物はテンリーゼンの肩に乗って現れたのだ。
「まさか持ち主が変わった?」
「いえ、これは」
食品や衣類に触れる仕事をするのにこのような小動物がいるのを里人が嫌うだろうというアプリリアージェの判断で、仕事中はテンリーゼンに預けておくことになったようだ。
当のマナちゃんもなぜかエルネスティーネと同じくらいテンリーゼンには懐いているのだという。
「マーナートってアルヴィン好きなのか?」
エイルがそう尋ねると、アキラは苦笑して首を振ってみせた。
「聞いたことはないな」
「あら」
アプリリアージェが会話に割って入った。
「リーゼは人間には敬遠されがちですが、動物には結構好かれてますよ。森でも休憩していると頭によく鳥が止まりにきますしね」

『いや、それって』
【人間扱いされてへんってことやな】

アプリリアージェによれば、里人達の移住の準備のめどは立った

という。どちらにしろ持って行けるものは限られている。食料や備蓄物などはそもそも里全体の財産として一括管理されており、全体把握の手間をかけることもなく、準備の大半は梱包とその梱包物の管理に割かれていた。

田畑の作物も、丁度入れ替えの前だったこともあり大半はムダにせずに済むようだった。

収穫の秋は実りの季節でもある。手の空いたものは、保存食になる木の実や果実を集めるために毎日山に分け入っていた。好天が続いたのも彼らにとっては幸運だったろう。

そんな順調な準備の中で、目下の懸案事項はあまり多くはない家畜をどうするべきかということと、もう一つ「宝物殿」の中身なのだという。

「族長は大した物はないとおっしゃるのですが、その中でもいくつかあるルーン書については一度賢者様に見てもらった上で、破棄すべきか持って行くかの判断をしたいそうです。だからエイル君の目覚めを首を長くして待っておいででしたよ」

エイルはうなずいた。

「この後すぐに会いに行ってくるよ」

「いえ、夕食時に会えます。今は別の用事で忙しくしていらっしゃるでしょうし、その時でも遅くないでしょう。私達、食事は族長の家でとるようにしてるんですよ」

「へえ、そうなのか」

「我々がこっちで食事をすると、食事時間にルーチェが消えるのでラシフ様は寂しいそうだ」

この説明はアキラだった。

「アトルだけ向こうで食事をすればいいだけの話なんですけれどね」

アキラの説明に続けてアプリリアージェがにっこりと笑ってそう付け加えた。エイルがアトラックの方を見ると、その横に当たり前のようにルーチェがちょこんと座っているのが見えた。エイルと目

が合うと、アトラックは罰が悪そうに頭をかきながら釈明した。
「いや、この非常時にわざわざ俺達のために厨の人員をこっちに派遣したりする余裕がないから向こうで一緒に食事を取ってるんだって。一緒に食べれば作る量は増えるけど、作る手間は一度ですむだろ？合理的ってことだよ。変な話を真に受けるんじゃないぞ」

『いや、そう言われても……』
【あの二人、眠る前より親密な感じやな。こりゃ相当気に入られてるようやな】
『冬眠ルーンから目が覚めた時に見たアトルの笑顔がよほどルーチェのツボにはまったんだろうな』
【一説によると、冬眠ルーンをかけられた人間は、物凄く人恋しい状態で目を覚ますそうや】
『本当かよ？』
【俺はかけられたことがないから知らん】
『オレはどうなるんだよ？お前がオレにかけたのも同じような冬眠ルーンなんだろ？それとも例の禁忌の惚れ薬系のルーンみたいなものか？』
【ルーンの構造上、あれは強烈な暗示で意識に書き込みをする類のもんやけど、冬眠系のルーンは全く別や。つか、お前さん目覚めて最初の異性って……】
『まさか、ネスティかよ！』
【アカン。そら、アカンで】
『アカンって言われても……あ、でも、ネスティじゃなくて、俺はマーヤの顔を見ながら目を覚ましたんだった』
【そっちか。兄バカに拍車がかかりそうやな】
『言ってろ。でも、大丈夫なのかな』
【何が？】
『いや、あまり仲が良くなりすぎるとアトルと別れるのが辛くならないかなって思ってさ』

【アトルがジャミールの里に残ればええやん】
『おいおい』
【そうすればゆくゆくは族長、いや村長の夫か。軍の人脈を携えて政界に進出ってな感じやな】
『はいはい』
【まあ、多少泣くかもしれんけど、相手は子供やからすぐ忘れるやろ】

一通りの近況報告が終わった一行は、迎賓殿にある浴場でそれぞれ汗を流した後、服を作業用ではなく少し格式のあるものに着替えてラシフの屋敷に向かった。ルーチェの説明によると、その深緑の衣装は黄色と並んで本来は族長だけが身につけることの出来る色なのだという。
「族長は黒の月には黄色の服を、白の月には深緑の服を着るのです」
今は黒の六月。ラシフは黄色の服を身につけていた。

【黄色と緑か。やっぱりな】
『やっぱりって、何が？』
【どっちも同じ原料を染料として使うんや】
『それが、何なんだ？』
【いや、こっちの話や】
『変なやつ』

アプリリアージェがルーチェの説明に補足した。
「誰かが族長の家に上がり込んで同じ食事の卓を囲むというのはジャミールではあり得ない風習らしいのです。そこでラシフ様が一計を案じたという訳です」
「ふーん、なるほど」
「ちなみに、この服は全てラシフ様自らが織った布で仕立てられたものだそうです」

「へえ」
エイルは改めて自分の来ている深緑色の綺麗な服を見渡した。素人目にもしっかりとした布地を丁寧に縫製されたものだというのがわかった。
「メリド殿やヒノリ殿に言わせると、族長はジャミールの歴史に残る名織手だそうだ。少し意外だったがな」
「いや、確かに意外だよ」

【織手の件は意外やけど、一緒の食事の件については、なるほど、やな】
『そうだな』

エイルは合点した。
ラシフはルーチェをダシにしてアプリリアージェ達と一緒に食事がしたいのだろう。
今の話でそれは簡単に想像できた。おそらくラシフはいままでずっと食事は一人でとっていたに違いなかった。ルーチェが居なくて寂しいのではなく、きっと一人になるのが寂しいのだ。
自分が織った布を使った服、それも本来族長しか着ることが出来ないものを与えたとなれば、これはもう国賓扱いだ。館に招き入れる口実としては完璧だと思われた。ただし、その口実はラシフが思っているような里人に対して有効なのではなく自分自身に対してであろうが……。
「これを機に」
アプリリアージェは少し間を置いてそう続けた。
「彼女はそういうつまらない風習も変えていきたいと思っているのかもしれませんね」
エイルはその時、ラシフと出会った時の事を思い出していた。
エルデがラシフの態度を見て「昔の自分のようだ」と言った事を。

『なあ、エルデ』
【ん？】
『お前はこうなることを予想していたのか？』
【何の話や？】
『いや、いいんだ』

族長の館へ続く道は、二つの月明かりで白く浮かびあがっていた。

ファルケンハインとティアナがジャミールに戻ったのは、翌日の昼頃だった。

エイルとエルデはジャミールにいる主立ったハイレーンを集めて、薬草蔵の中で粉まみれになって奮闘している時にその知らせを受けた。

「良い報告と悪い報告があります」

エイルが族長の屋敷に顔を見せると即座に旅の報告が始まった。どうやら彼が最後のようだった。

旅装も解かずにいる、二人のアルヴの表情はエイルが今まで見た事もないほど硬いものだった。それは良い情報よりも悪い情報の方がより重要だと言うことを意味していた。

「人払いが必要ですか？」

アプリリアージェは一応、ファルケンハインにそう尋ねた。

その場にいたのはアキラを含むエイル達一行とラシフ、そしてイブロドをはじめとする四人組だった。

アプリリアージェの言葉に反応してラシフはすぐに立ち上がったが、アプリリアージェはそれを制した。

「何にせよ族長様にはこの場にいていただきましょう」

少し迷った様子を見せたが、ラシフはうなずくとイブロド達に目配せをした。四人組はそれを見て一礼すると、速やかにその場を辞した。

彼女たちも今では、族長が一人だけで異邦人と一緒に居ることに対して抵抗を感じなくなっていたのだ。
イブロド達が出て行くのを見送ったファルケンハインはチラリとティアナを見やった。
「出来れば」
ティアナは顔を上げるとアプリリアージェに懇願するように言った。
「まずはリリアお嬢様にだけ報告をしたいのですが」
アプリリアージェはティアナの言葉に珍しく眉間に皺を寄せた。
微笑はしているが、困惑した表情は隠せなかった。

『どうしたんだろう』
【ただ事やないっちゅうのはわかる。まさかもう戦争が始まったんか？】
『オレ達、出て行った方がいいのかな』
【いや、わざわざ離れた薬草倉におった俺らを呼びに来たくらいや。それはないやろ】
『それもそうだよな』
【どちらにしろここはひとまずリリア姉さんの指示待ちやな】
『了解』

アプリリアージェの逡巡は長く続かなかった。表情をいつものおだやかな微笑にもどすと、ティアナをじっと見つめて首を横に振った。
「今ここにいる全員の前で報告してください」
ティアナはそう言われてエルネスティーネの方に視線を投げた。
もちろんアプリリアージェは目ざとくそれを見ていた。
「ネスティ」
「は、はい」
「何があっても取り乱さない覚悟はありますか？」

「え？」
「もしその覚悟がないなら、私が呼ぶまでこの部屋から出ていなさい」
いつもよりやや堅い調子の声がエルネスティーネの耳に刺さった。だが、彼女はきっぱりと言い切った。
「何が起ころうと、もとより覚悟は出来ています」
アプリリアージェはティアナを見つめたままでうなずいた。
「聞きましたね、ティアナ」
「はい……」
ティアナはそう答えたが、すぐに顔を伏せた。その伏せた顔先にある床の上に、小さな染みが一つ、出来た。
アプリリアージェはティアナのその様子を見ると、強く目を閉じてそう言った。
「ファル、お願いします。まずは悪い情報から」

# 第六十五話　訃報

「カラティア朝シルフィード王国国王、アプサラス三世陛下が……崩御されました」

何の感情もこもらない、淡々とした抑揚のない声でファルケンハインはそう告げた。

「なんだって！」

瞬間的に声を上げて反応したのはアトラックとアキラだった。ラシフも立ち上がっていた。だが、アプリリアージェはいつもの表情を変えることもなく無言でそのままの姿勢を続けていた。

それはまるで、わかりきっている報告を聞いているような様子だった。

エイルはハッとして横にいるエルネスティーネの方を見た。アプサラス三世と言えば、要するに彼女の実の父親の事なのである。

まさにその時、エルネスティーネは目を閉じ、エイルの方に崩れるように倒れかかってくる瞬間だった。

「ネスティ！」

エイルは声をかけると慌ててエルネスティーネを抱き止めた。体に力がない。明らかに失神だった。

その様子を見たティアナは思わず立ち上がろうとしたが、拳を握りしめ、何とか自分を抑えることに成功した。その代わりに恨めしそうな顔でアプリリアージェを見たが、アプリリアージェはいつにも増して落ち着き払った声でファルケンハインに報告を促しただけだった。

「続きを」

「はい」

史実に依れば、アプサラス三世は星歴四〇二六年黒の六月九日に

崩御したことになっている。享年五八歳。エッダ王宮医師部の記録には急性心不全と記されている。

翌十日、王位継承権第一位にあった王女エルネスティーネは戴冠式を終えて王座に着いた後、一年間の喪に入る宣言を行った。

イエナ三世の誕生である。

歴史上は史上初のエレメンタルの王の下にカラティア朝シルフィード王国が継続したという事になっているが、すでに記した通り、この物語は前提としてそれを否定している。

この物語ではアプサラス三世の死をもって悠久の時を刻んだカラティア朝の終焉とし、エルネスティーネの変わり身であるイース・イスメーネの戴冠は即ちバックハウス朝シルフィード王国の誕生であるという立場をとることになる。

だがもちろん、この物語においてもそれはただの事実であって「真実」ではない。歴史における普遍的な真実とは、あくまでもイエナ三世が戴冠したという事のみなのである。

ファルケンハインとティアナがジャミールの里に戻ってくるのは予想よりも少し遅かった。それというのも情報収集に時間を割いた事が理由だった。国家の一大事とも言えるその事件とその顛末についての詳細を少しでも知り得た上でアプリリアージェに報告したかったからだ。もちろん、彼らの今後の行動に直結する情報に違いないからである。

「お疲れ様。素晴らしい仕事をしてくれました。さすがです」

ファルケンハインの報告を一通り聞いたアプリリアージェは、そう言って副官をねぎらった。

「では、良い方の報告をお願いします」

アプリリアージェとファルケンハイン以外は誰もが口をつぐんでいた。

一行にとって、いやジャミール一族にとってもファルケンハイン

がもたらした報はたとえようもなく激しく大きな衝撃だった。
　エルネスティーネにとっては実の父親の突然の死を告げられたのだ。心が受けた衝撃は一番大きいと言えた。エイルはエルネスティーネを抱きかかえたままファルケンハインの報告を聞いていた。アプリリアージェはエルネスティーネの介抱について何も指示はしなかったが、それは抱きかかえているのが他の誰でもなく治療の専門家であるハイレーン、それも彼女の知る限り最も信頼が置けるハイレーンだという事を含んだ上でのものなのだろうとエイルは考えていた。

『大丈夫なのか？』
【脈も安定してるし体温の低下もあんまりない。多分昼間の慣れへん肉体労働の疲労蓄積もあってきれいに落ちたんやろな】
『なんかえらいことになったな』
【変わり身が即位か。バレる前に急いで本物が帰国するのが一番ええんやろけど】
『けど？』
【ネスティは王女という立場を捨てて国を出てきたん、やろ？】
『そうだったな』
【うーん。イエナ三世が死んだら次は誰やったっけな……】
『おい、不謹慎だろ』
【いや、リリア姉さんも同じ事を考えてると思うで】
『ファランドールではそんなもの、なのか？』
【それだけきな臭い話やっちゅうことやろ】
『きなくさい？』
【……】

「全行程に渡り天気と風向きが良かったので当初の目的である船の手筈については極めて順調に事が運びました。予定よりも数日以上短縮できています。具体的には明日ここを出発しても大丈夫でしょ

う」
「それは素晴らしいですね」
アプリリアージェはその前の報告が無かったかのような明るい声でそう言うと、ラシフに向かってにっこりと笑いかけた。
「それから、鳥を使った伝信が成功してワルド卿ともすでに連絡が取れています」
「あらあら、まあ」
「伝信をお伝えします。『ファルンガはラシフ様ご一行の帰郷を心より歓迎します』と」
「それだけですか？」
「いえ。もう一つ。『お嬢様は檸檬が恋しいお年頃でしょうから、くれぐれも帽子を風で飛ばされぬように』と」
ファルケンハインの二つ目の言葉を聞くと、アプリリアージェはフフフと笑い声を声に出した。
「相変わらずマキーナには詩の才能がありませんね」
そしてラシフに向かっていつもと変わらない微笑を向けた。
「安心して下さい。今度の里にもクチナシの群生があるそうですよ」
「知っておったのか？」
「新しい里でも、その美しい黄色の布を作って下さい」
ラシフは目を閉じると、アプリリアージェに小さな礼をした。

アプリリアージェの配下であり、同時にシルフィード王国の子爵でもあるマキーナ・ワルドについて少し記しておきたい。
彼の家は元を辿ると当時既にユグセル公爵領であったファルンガの南方に隣接する地域を治めていた地方豪族であるという。
シルフィード王国成立の後は長く子爵として直接国王に仕えていたが、ある時期に持っていた土地のほとんどをユグセル家に割譲して家臣的な立場をとるようになった。
シルフィード王国の法律では無償・有償にかかわらず、貴族同士が勝手に土地のやりとりをすることは禁じられている。国王と軍の

代表によるいわゆる元帥会議で認められた場合のみ許可されるという。それはたとえ婚儀や養子縁組などから生まれる姻戚関係や親族関係が生じていたとしても例外ではない。

その理由をドライアド的な価値観に照らし合わせてわかりやすく説明するならば、中央集権国家にあって、地方に強大な勢力を作る隙を与えないようにする為であるが、シルフィードの価値観を通すと違う答えが返ってくる。

シルフィードにおける貴族とは、領民達を保護し、その生活を豊かにするために命を張るべき存在である。つまり土地や資産の問題ではなく、貴族が矜持にかけて守るべき領民を他の人間に簡単に委ねるという行為そのものが背徳だと思われているのだ。

だが何事にも例外が存在するように、ワルド子爵家の場合にもそれが当てはまった。これについてはいくつかの逸話があるが、ここでは信憑性が高いものを紹介しておこう。

当時のワルド家の当主はアルヴにはよくあることだが血気盛んでさらに腕自慢であった。彼は領地の経営もそこそこに軍隊を編成しては討伐遠征に明け暮れていた。

そんなある年、ファルンガを含むその地方一帯に暴風雨が襲った。天から滝のように注ぐ雨と山からの濁流で作物は全滅し、海の水を巻き上げた風は大地を塩漬けにした。ただでさえ度重なる遠征の為に重い税に苦しんでいたワルドの領民達には満足な蓄えがあろうはずもなく、あっという間にワルド領の広い地域が未曾有の飢饉状態に陥った。

そんな出来事も知らず、しばしの休息を求めて戦地から自領に戻ったワルド子爵を迎えたのは、目の前に広がる荒れ果てた農地と幽霊屋敷のような我が屋敷であった。

そんな彼の下へユグセル領主からの使者が訪れる。

ワルド家の領民の多くをファルンガで保護しているという。

自分の領民を奪われたと思い込んだワルド子爵は、激高してあろう事かその場で使者の首をはねると戦地から戻ったばかりの疲弊した軍隊の尻を叩き、ユグセル公爵領に向けて出陣した。

夜になりワルド子爵一行は領境で待ちかまえていたユグセル公爵と相まみえた。領民を誘拐し我が物にした罪を問う巨人のようなアルヴのワルド子爵に対し、大軍に囲まれた小柄な少年のようなダーク・アルヴのユグセル公爵は言う。

「子爵殿の申すこと至極もっとも。されば我が身を持って償うべし。ただし我が身を貫くは貴殿の持つあまたの剣の中でも、誠の剣のみと知るがいい」

「片腹痛いわ」

腰にさしていた片手剣を鞘ごとその場に置くと、丸腰で自分の方に向かって悠然と歩いてくるダークアルヴ……後に『北の大樹』と呼ばれることになる……オスカ・ユグセル公爵に対し、ワルド卿は手に持った両手剣を振り上げた。

その時、ユグセル公爵の周りに控えていた一群が二人の間に割って入った。

それを見たワルド子爵は驚いた。夜でよく見えなかった為に今の今までファルンガ軍だとばかり思っていたその集団、つまりユグセル公爵を取り巻いていた人々は、実はワルドの領民達だったのだ。

松明で照らし出された顔を見れば、旧知の農民も大勢いる。さらに目を凝らせば子爵邸に仕えていた使用人の姿も一人二人と言わず、そこにあった。

彼らはその場に座り込むと子爵に頭を下げ、口々にこの間の嵐の被害とひどい飢饉の報告をした。

そして善意から主が不在中の隣国の被災状況を視察するためにやってきたユグセル公爵が彼らの状況を見かねて自領に招き入れたこと、そこで暮らす場所を用意してくれたこと、翌春にはワルド領の荒れた農地を回復させるためにその人手としてファルンガ中からの有志を集める算段が順調に進んでいたこと、さらには三日と明けず、

国外れの避難村に公爵自らが慰問に訪れてくれたことを。
そしてワルド子爵帰還の情報を受けて、こうして領民らが声を掛け合って国境まで迎えに来たことを。
その場に兵が一兵たりともいないことに気付いたワルド子爵は、そこではじめて自らの犯した過ちの大きさを知った。ワルド子爵は確かに器量としては近視眼の典型とも言える貴族ではあったが、根はアルヴの気質を強く持つ正義の人である。

彼は抜いた剣を持ち替えた。
ワルド子爵はユグセル公爵に歩み寄ると、その前でひざまづき、自らはその手に剣先を握り、そして柄をユグセル公爵に差し出した。そして驚くユグセル公爵に、使者の首をはねてしまった事を告げ、この場で自分を処刑してくれるよう懇願した。
「我が狭量ここに極まれり。ワルドの土地は殿下にあってこそ安寧たりえましょう。我が領民はすでに公爵の器量を知っておりましょう。その忠誠、我が命に換えて保証いたします」
ユグセル公爵は使者の死を知ると心から悲しんで涙を流したが、子爵を一言たりとも責めはしなかった。もちろん土地譲渡の申し出も受けなかった。
ワルド子爵はそんなユグセル公爵に深々と頭を下げると、領民と彼の軍隊のことをユグセル公爵に委ね、すぐさま単身で首都へ向かった。
彼は登城すると国王に領地譲渡の許可と公爵家の使者を殺害した罪に対する罰を請うた。
当時のシルフィード国王は領地譲渡の願いをたちどころに却下した。だが、使者殺害については最大級の罰を与えた。
すなわち、ワルド子爵家の所有する領地の大部分を賠償としてユグセル公爵家に譲り渡す事、さらにワルド子爵家は今後ユグセル家の臣家（しんけ）としてこれに仕えること。
こうしてその願いをことごとく国王に聞き届けられたワルド家は、

その後長きにわたってユグセル公爵家の筆頭臣家として忠義を尽くしているという。
アプリリアージェ時代のユグセル家に仕えていたワルド家の当主マキーナこそ、そのワルド子爵直系の子孫なのであった。

ファルケンハインはアプリリアージェの独り言には反応せず、そのまま公爵のクスクス笑いが収まるのを待って、さらに付け加えた。
「少し補足をします」
「ええ」

アプリリアージェのクスクス笑いにどんな意味があるのかは、彼女のみが知ることであったが、一つ言える事は、その場の誰一人としてそれが不謹慎なものだとは感じなかった。むしろその笑いはアプリリアージェの泣き声であるかのように心に染み込むような気がしていた。
少ししていつもの表情に戻ったアプリリアージェは、その後は淡々とファルケンハインの報告を聞いていたかのように見えた。しかしその場にいた数名だけが気付いていた事があった。
アプリリアージェはクスクス笑いを止めると無意識に左耳に着けた金色のスフィアを指で触り始めていたのだ。
それにまず気付いたのは誰あろう、ラシフだった。彼女はアプリリアージェがその仕草の後に目の前に落としてみせた落雷の衝撃の大きさを体で覚えていた。直接腹の奥に届くような鈍い音の波の後、地面が揺れた。不吉に折れ曲がる白い光がくっきり焼き付いていて、しばらくの間は目を閉じてもまぶたの裏にアプリリアージェの雷が描く軌跡が見えていたほどであった。
だからこそラシフはアプリリアージェのその仕草を良いものとして認識できなかった。
一方エイルとアキラもその仕草には気付いていた。

彼らはラシフと違い、まずアプリリアージェから出る「気」の変化を感じた。それは一部のフェアリーやルーナーが感じるエーテルの変化などではなく違う種類の波動で、一般には『殺気』などと呼称されあるいは既述される種類のものだった。

アプリリアージェが発したその殺気に驚いた二人は、その次に珍しく彼女が耳飾りをしきりに触っている事に気付いたのだ。

アキラはアプサラス三世崩御の情報を聞いて、その時すでに居ても立っても居られない状態になっていた。すでにミリアには情報として伝わっているだろうとは思ったが、出来るだけ早く会って情勢の分析と今後の戦略について相談すべきだと思ったのだ。ウーモスからの旅で自分が知り得た新たな情報は、ミリアに取って未知の物が多いはずで、それは即ち激動が走ったファランドールの今後の事について様々な対策を練る為のいい材料になるはずだった。

だが、アキラは地理的にも立場的にもすぐには動きようのない状態にあった。今はただ自国と、そしてミリアが拙速な判断をしないことを祈るのみであった。

ファルケンハインの補足とは、出立港の変更に関する事だった。

当初計画していたクヴェン港は小さいながらも国外航路を持っていたため、アプサラス三世崩御の影響でサラマンダ軍、すなわちドライアド軍の監視範囲に入る可能性が高かった。そこでファルケンハインは往路で発見していた小さな入り江を出立港とする計画変更を独断で決めた。その事後報告であった。

その決断は、彼が長く海軍籍であり、港湾や船舶に対する深い知識と経験があってこそのものであった。

「少しだけ険しい道がありますが、あそこまでなら丸二日以上時間短縮にもなります。砂浜も少しですが存在しますし、船は入り江に入り込むと外海からは見える事はありませんから、落ち着いて乗船作業が可能です。外洋で往復船を使うよりも安全で確実と判断しました」

「極めていい判断です」
ファルケンハインの報告を聞いたアプリリアージェは、スフィアを触るのをやめた。だが、アキラとエイルが感じた殺気はいっこうに収まる気配がなかった。

「いかがされるのですか？」
アキラはたまらず、アプリリアージェに声をかけた。
「立場上、一度お帰りになる事になりますか？」
「帰る？立場上？」
アキラの質問に、アプリリアージェはそう質問で返すと、微笑みを横笛奏者に向けた。
「そうです。大葬等の国儀もございましょう？」
アプリリアージェは大きなため息をついた。それも珍しい行為だった。
「公式には「雷鳴の回廊」で死に、非公式にはアロゲリクでもう一度死んだ人間が、葬儀などに出られるわけがありません」
「それはそうだが、首領はどうにも先ほどから珍しく何かにイラついていらっしゃるようだ。気にかかることがあるなら帰国された方がいいのではないかと思いまして」
アプリリアージェは再びふっと息を吐くと少し肩を落とした。
「さすがはスカルモールドを一撃で行動不能にするという剣技の持ち主ですね。私の揺れている心がお見通しでしたか」
そう言うと今度は視線をエイルに向けた。
「エイル君も、ですか？」
エイルは素直にうなずいた。
「リリアさんは国王が亡くなったという事に、何か気になることがあるんじゃないのか？」
エイルの問いかけにアプリリアージェは眉をひそめた。だがそれは一瞬で、すぐにもとの静かな微笑に戻った。そして低い声でこういった。

「さすがに情報が少ない現時点で、立場上私が『国王陛下の死についての疑惑を口にする』事は思慮を欠く判断だと言わざるを得ません」

【おい】

『ああ』

アプリリアージェの言葉に、その場の全員が凍り付いたのは言うまでもない。

彼女はアプサラス三世の死因が自然死ではない……つまり極めて婉曲ではあるが暗殺されたのではないかと言ってのけたのだ。

それは言い換えるならばアプリリアージェにはその首謀者に心当たりがあるという事に他ならない。

アプリリアージェは続けた。

「従って皆さんもその話題について口にするなどという軽率な行為はくれぐれも控えるように願います」

その言葉を聞いた全員が互いに顔を見合わせた。

「とりあえずは我々の計画には何も変更事項はありません。出立港が変わった事くらいですね」

こともなげにそうまとめると、アプリリアージェはラシフに一礼した。

「そろそろ食事にしましょう。この二人の分もお願いできますか？」

「あ、ああ。むろんだ」

あまりに日常的な会話にラシフは面食らいつつも、黒い髪の間から見える金色のスフィアにちらりと目をやってから、卓の上にあった呼び鈴を持ち上げた。

それはお世辞にも楽しい食事風景とは呼べない情景だった。

エルネスティーネはエルデの指示で控えの間に敷いた夜具の上に横になっていた。それ以外の人間は言葉もなく、のろのろと料理を

ただ口に運んでいた。

「ええ機会やから確認しときたいことがあるんやけど」

ティアナはエルデが口にした『ええ機会』という言葉に反応した。

「何が『いい機会』なのだ？」

「は？」

【あちゃ】

『うーん』

だが、ここはアプリリアージェの対応が速かった。

「過剰反応はいけません、ティアナ。エイル君がどういう人間かまだわからないなどとは言わせませんよ」

ティアナはさっきのアプリリアージェの一言が気になっていた。それは彼女の胸の中に言いようのない不安感のような物を目覚めさせていた。自分でもはっきりとわからないのに、ざわざわとした物がどんどん広がっていくような居ても立ってもいられない焦燥感にも似た感覚だった。

彼女の中にある不安を増殖させているもの、それは彼女がエッダを出発した、あの夜のアプサラス三世との謁見を思い出した事により彼女自身が生み出した闇のようなものだった。

その可能性を否定する自分と闇に踏み出した片足を引き抜こうとしない自分との狭間で揺れていたのである。

だからエルデの言葉に、簡単に心が乱れたのだ。

「申し訳ありません」

ティアナは素直に詫びた。その肩をファルケンハインがポンと優しく叩く。

「でも、エイル君もティアナの性格を考えた発言を心がけるべきでしたね。もっとも私が原因になっているのは自覚しています。ごめんなさい」

「いや、配慮が足りん発言やったんは認める。でも、こっちも大事な話やから聞いて欲しい」
エイル……いや、エルデはそう言うとティアナをちらりと見やってから切り出した。
「確認事項や」
「なんでしょう？」
エルデは全員を見渡すとゆっくりと話し出した。
「ジャミールの皆んなが出発するのを見送った後、オレは予定通りヴェリーユへ行く」
それだけ言ったところでアプリリアージェが制した。
「待ってください」
「え？」
「何を言いたいのかは今の一言でわかりました。でも我らが賢者様は私がさっき言ったことを聞いていなかったのですか？」
エイルとエルデの人格が一つの肉体に同居しているという事をその場にいる全員が知っているわけではない。だからアプリリアージェはそう言う場ではエイルであろうとエルデであろうと、普段は『エイル君』と呼び、特にエルデに対して呼びかけたい時は『賢者様』という言い方をしていた。つまり、この場合は「エルデ」と呼びかけたのである。
「というと？」
「『計画は何も変わらない』そう言いました」
「あれか」
「はっきり言って心外ですね。お忘れですか？私たちはあなたに「緩やかな死の呪法」をかけられたのですよ？」
エルデが何かを答えようと口を開いたが、アプリリアージェはその言葉を待たずに続けた。
「もちろんそれは脅しで、賢者様が実際に私にかけたのは極めて優れた回復呪法でした。でも、同じ事です。あの時私はここにあなたの呪印を刻み、私は対価として絶対の守護を誓ったのですよ」

「リリア姉さん……」
「確かに「真赭の頤」が亡くなったと聞いた時点で我々が彼に会うという目的は消えました。でもあなたの目的は消えていない。当初の予定通り、最後の庵に向かうのでしょう？違いますか？」
エルデは両手を挙げると首を横に振った。しかし、アプリリアージェは引き下がらなかった。
「私はウーモスであなたにこう言いました。『今後我々はエイル君の呪法を解く事を最優先に動きます』と。念のために言っておきますが、『我々』の中にはもちろんネスティも入っています。くれぐれもそのことを忘れないで下さい」
「いや、しかし」
「我々アルヴの一族が立てた誓いをなめるなっ！」
アプリリアージェはそう言って一喝すると、卓をドンと叩いた。
それは決して大きな音ではなかったが、その場に居た全員の体中に響いた。
そしてそれはエイルとエルデが初めて聞いたアプリリアージェの怒声であった。
度肝を抜かれたエルデが何も言えないでいると、ダーク・アルヴの稀代の戦術家はすぐににっこりと笑ってピクシィ姿の賢者の前に人差し指を一本立てて見せた。
「一人、デュナンがいますけどね」
アトラックがそれに反応してはにかんだような顔で小さく手を挙げて見せた。
「体はデュナンだが、俺の心はアルヴと同じさ」

【エイル】
『ん？』
【後は任せた】
『ええ？おい、この状況でそりゃないだろ！』
【やかましいっ！任せたっちゅうたら任せた】

『いや、一体どうするんだよこの雰囲気』

「えーっと……」

エイルは頭をかきながらアプリリアージェに愛想笑いをしてみせた。

「どうやらバツが悪いみたいで……たぶん照れてるんだと思うけど」

エイルのその言葉にアプリリアージェは思わずくすっと笑って見せたが、そのやりとりを見ていたラシフが怪訝な顔で声をかけた。

「なんだ、その人ごとのようなごまかし方は？」

「ですよねー」

エイルはそう言うと一同に頭を下げた。

「反省してます。この通り！」

「それでいい」

そのことがきっかけで、場が少し和らいだ。さすがに『和やかな』とまではいかないにしろ、食事の場に少し会話が戻ってきた。

ファルケンハインがもたらした訃報はジャミールで穏やかな労働生活にいそしんでいた一行に激震をもたらした。特にシルフィード出身の者達は誰しも人生観が変わったかのような思いに囚われていたのは間違いないだろう。

この件についての部外者でしかないエイルは客観的に彼らを観察できたのかもしれないが、多かれ少なかれ一行の雰囲気が変化したのを感じていた。

仮面で顔を覆い隠している一人を除いて。

# 第六十六話　守るべきもの

しばらくして目覚めたエルネスティーネはファルケンハインとティアナを呼び、彼らが知る範囲の情報を得た後、ティアナに抱きついて長い間幼い子供のような声を上げて泣きじゃくっていたという。

だがエイルが翌朝会ったエルネスティーネはいつもの『ネスティ』だった。

ただ、全く同じというわけではなかった。

エイルはいつも通りにっこり笑って駆け寄ってくるエルネスティーネの姿に違和感を覚えた。何かが違うのだ。

肩にいる『マナちゃん』……はいい。普段通りだ。あの細くて小さな肩の上でよく毛繕いができるものだと見ていていつも感心するが、それよりも今までエルネスティーネが身につけていなかった物がその細い腰にぶら下がっていた事が違和感の原因であった。

「ネスティ」

普段通りの明るさにも戸惑ったが、およそ似合わない物が腰にぶら下がっているのを見てエイルは朝の挨拶も忘れてエルネスティーネの顔と腰の物とを見比べた。

「ああ、これですか？」

エイルの視線に気付いてエルネスティーネは腰に差している物に手を当てた。

「今回の旅立ちにあたり、父上から授かったものです」

いわゆる短剣の一種だが、より小振りで懐剣と呼ばれる種類のものだった。普段は懐にいれておいて、いざという時に使ったり眠る際枕元に忍ばせておく物だと聞いていた。

「我が国の風習だ。剣を持つものが喪に服する時の徴（しるし）だ」

エイルの横で同じようにエルネスティーネを見つめながら、ティアナがそうエイルに教えた。見ればその腰にも同じような懐剣が刺

さっていた。
「本来、肉親が喪に服する場合は紫色の服を着るか、もしくは紫色の装飾品を身につけておくのが風習なのですが、私の場合そう言うわけにもいきません。私は兵士ではありませんがこうやって形見の懐剣を身につけることで冥福を祈りたいと思います」
【『そういう訳にもいきません』……か】
『オレはどうすればいい？』
【え？】
『オレ達、ネスティに何かしてやれないのか？』
【そやな。こういう時に男の子がとる態度は一つと相場が決まっとる】
『というと？』
【黙ってそっと抱きしめるしかないやろ？】
『ば、馬鹿なことを言うなっ』
【もちろん冗談や】
『あ、あたりまえだ。だいたい今そんなことやったらティアナにあの腰の懐剣で刺し殺される』
【あ、それはお前さんには珍しく推理として完璧やわ】
『まったくお前ってヤツは』
【冗談はともかく、俺達にしてやれることなんかないやろ。そもそも何かをしてやりたいなんて思うことが傲慢かもしれへん】
『お前に傲慢とか言われたくないがな』
「えへへ」
エイルとエルデの会話が聞こえないエルネスティーネは、二人の思いなどお構いなしにそうやって笑うとエイルの腕を取った。それも今までとは違う事ではあった。
「さあ、お食事にいきましょう。きっとお腹を空かしたラシフ様が首を長くして待ってますよ」

「え？ちょ、ちょっと」
エイルは横から身に覚えのある殺気を感じたが、恐ろしいので確認するのをやめた。
エイルの右腕を抱きしめるように絡め取ったエルネスティーネは、なぜか上機嫌でエイルを引っ張って族長の屋敷へ向かった。

「アトル」
少し遅れて合流したアプリリアージェはラシフに遅れた詫びを入れた後で食卓に着くと、アトラックに声をかけた。
卓には燕麦のパンと細かい野菜がたっぷり入った熱いスープが並べられていた。
「これは……どういうことですか？」
旅立ちの準備を進めるうちに、食事の内容が質素になってきているのは仕方ない。それでも暖かいスープがあるのはうれしいことだった。
「荷造りが進んでいるということでしょう。種類は少ないですが量は充分にありますよ。まあ、俺好みのベーコンがないのはいつものことですしね」
「いえ」
アプリリアージェは別に食事の内容に不満を漏らしたのではなかった。だがアトラックにしてみれば、ここの所のアプリリアージェの言葉の端々から、ベーコンの厚さに関してはどうも「厚切り陣営」に属しているのではないかという疑いがぬぐい去れなかった為、けん制の為にそうやって水を向けてみたのだ。
いや、実のところそうではなく、その場は敢えてアプリリアージェの質問の意図を曲げて解釈したと言った方が正しいだろう。
もちろんそれだけの理由がその場にあったからである。
「そうではなくて、アレはどういう事かと聞いています」
アトラックは「やっぱり」と言わんばかりにため息をついて見せた。

「俺に聞きますか？」
アトラックにそう言われたアプリリアージェは視線をすぐ近くにいるラシフに向けた。二人の会話をそれとなく聞いていたラシフは慌てて両手を顔の前で振った。
「私に聞くな」
アプリリアージェは何も言わずににっこりと笑ってそれに答えると、視線を変えた。
彼女の視線の先では、ある珍しい見せ物が繰り広げられていた。エイルの横にピッタリと寄り添ったエルネスティーネが、手に持ったスプーンからなにやら流動食のような物を食べさせていたのだ。
「餌付け、ですか？」
アプリリアージェの問いかけに、アトラックは首をすくめた。
しばらくその様子を眺めていたアプリリアージェはいつもよりいっそうにっこりとしたした笑顔でイブロドが取り分けてくれたスープを口に運びはじめた。
その様子を子細に見ていたアトラックは、アプリリアージェに変化が起きているのを今更ながらに気付いて驚いていた。
アプリリアージェはいつも笑顔だが、それは地顔のようなものである。その口調はいつも穏やかだが、常時機嫌がいいわけではない。すなわち、アプリリアージェの笑顔は「真顔」なのである。彼の「中将」は感情を表に出す事はまれで、声を出して笑うことも滅多になかった。
だが、ランダールから始まったこの旅で、アトラックはル＝キリアに配属されてから今までに聞いた回数の何倍ものアプリリアージェの笑い声を聞いているような気がした。今も自然に「笑って」エイルとエルネスティーネのやりとりを目を細めるようにして見つめている。
「うーん」
そんなことを考えていると、アプリリアージェは普段の顔に戻っ

て小さな声で唸った。
「どうかしましたか、司令」
「喪失感があります」
「は？」
「エイル君をネスティに取られてしまったかのように感じる自分を見つけて、今愕然としたところです」
「それって……まさかヤキモチってヤツですか？」
アトルは目を見開いた。そんな言葉がすんなりとアプリリアージェの口から出てくるとは思ってもいなかったからである。
「そう言うのではなくて、気に入っていたおもちゃを取られたような残念感というか……」
「そっちですか」
アトラックは再び肩をすくめた。
「でもまあ、ネスティがしっかりしているようで安心しました。反動は大きそうですが」
アプリリアージェはエルネスティーネの腰に刺さっている短剣を見てそう言った。

『言っとくけど、これっきりだからな』
【それは同感や。これで勘弁してもらわなな】

「そうそう、アトル」
「はい？」
「今後一切『司令』はやめてください」
「あ。つい……すみません」
「忘れたのですか？我々はアプサラス三世直属の部隊です。つまり、もう部隊は存在しないということです。存在しない部隊の司令など存在しないのですよ」
「いや、しかし」
「それに、見ていたでしょう？私はもう面を捨てました『白面の悪

魔』はこの世に二度と現れることはないのです」
そう言われてアトラックは思い出した。ラシフの前でアプリリアージェはエルデに白面を焼いてもらっていたのだ。
あの行為にいったいどういう意味があるのかをアトラックは考えていた。今この時点でうがった考えをするならば、アプリリアージェはあのときすでに今の状況を見越していたと言えなくもない。それは夕べの不穏な発言にも絡んで、アトラックを急に不安にさせた。
「ですから」
そんなアトラックの心中を知ってか知らずか、再び目を細めてエイル達を見ながらアプリリアージェは告げた。
「これからは『笑う死に神』一筋で行くことにします」
「は？」
アトラックはいつもの事ながら、アプリリアージェの言葉の意味をはかりかねた。
「『一筋』って……ええっと」
「これからは私は自分の意志で行動するという事です。『笑う死に神』として」
その言葉でアトラックは合点がいった。
アプリリアージェにとって、白面は「軍人」としての象徴のようなものだった。作戦指揮を執る時、ユグセル中将は必ず白面を着用していた。その白面を捨てると言うことは軍人としてではなく個人として、兵士ではなく戦士として行動すると言う事を決めた自分に対するけじめのような行為だったに違いない、と。
だが。
「わかりませんか？ルーチェと一緒にファルンガに行ってもいいですよと言っているのですよ？」
「はああ？」
アトラックはそう叫んで思わず席を立った。もちろんその場にいた全員が驚いてアトラックとアプリリアージェの方を見た。

「どういう意味です、司令……じゃなかったリリアお嬢様」
「その『お嬢様』も、もうなしにしましょう。これからは、そうですね、あのファーンを見習って『リリアっち』でお願いします」
「ふざけないで下さい！」
アトラックは両手で卓を叩いた。
「残念です。では、『リリアさん』でいきましょう。ファルもティアナも、いいですね？」
「そうじゃなくて！」
「どうしたんだ、アトル？」
普段と様子が違うアトラックを見かねて、ファルケンハインが声をかけた。
「いえ……すみません、さすがにちょっと興奮してしまって」
アトラックはうつむくと一つ深呼吸をした。それで幾分落ち着いたのだろう。今度は直立の姿勢でアプリリアージェに向かうと努めてゆっくりとした口調で皆に聞こえるように質問した。
「今の言葉はたとえ『リリアさん』といえども聞き捨てなりません。シルフィードの人間として、アトラック・スリーズとしての矜持にかけて納得の行くお返事をいただきたく」
アプリリアージェはそれまで平然と微笑みながらスープを口に運んでいたが、アトラックがきちんと直立した時点でスプーンを置いて、立ち上がった部下の顔を見上げていた。
「ずいぶん立派になりましたね、アトラック」
アプリリアージェは、アトルとは言わず、スリーズ特佐でもなく、『アトラック』と呼びかけた。
「はじめて会った時はまだオシメもとれていなかったのに」
「――ル＝キリア配属時にはオシメはとれていました。誤解されるといけませんので訂正して下さい。……と言うか、もう一度いいます。ふざけないで下さい」
アプリリアージェは苦笑すると「ごめんなさい」と謝った。そして全員が注目する中でゆっくり立ち上がった。

『何が起こるんだ?』
【俺に聞くな。見てたらわかるやろ】
『そうだけど』

「この先、私といると死にますよ」
「――そんなことですか」
アトラックは『笑う死に神』という言葉をアプリリアージェが持ち出した理由を察した。だが、意味はわかったが納得はできない。
「覚悟など、とうにできています」
「同胞に殺されても納得して死ねますか?」
「え?」
「この先私は、風のエレメンタルを守るためなら、あなた達を平気で見殺しにする事を決めたのです。もちろん、賢者エイル・エイミイの呪法を解くまでは守るべき対象が二人になるわけですが」
「もとより承知」
「わかっていませんね。私は自分の意志通りに忠実に動く手駒しか要らないのですよ。『私を守るために盾になって死ね』と言われたら迷うことなく忠実に従う僕（しもべ）しかいりません」
「俺は今までもそう言う心づもりでしたし、これからも変わりません」
アトラックがそう答えるとアプリリアージェはイライラしたようにあからさまにため息をついた。上司がそんな態度をするのもアトラックは初めて見た。
「ラシフさま」
「な、なんだ?」
急に矛先が自分に向いたラシフは驚いて思わず声をうわずらせた。話の展開にまったくついていけず、ただ呆然と成り行きを見守っていただけなのだから。
「ルーチェはもう成人していると聞きましたが、間違いありません

か？」
「あ、ああ。それは間違いないが？」
ラシフはそう言うと隣に座っているルーチェと顔を見合わせた。
「それはルーチェはもう結婚出来るという理解でよろしいのですか？」
ラシフとルーチェは再び顔を見合わせた。……が、ルーチェの方は何かを思いついたようで、顔を真っ赤にするとうつむいてしまった。
そんなルーチェの様子を妙だとは思いつつも、ラシフはアプリリアージェの方に向き直り、うなずいた。
「そう言うことになるな」
「ルーチェには許嫁でも？」
「いや」
ラシフは首を横に振った。
「結婚に関してジャミールは昔ながらのダーク・アルヴの風習そのままじゃ」
「というと？」
「男は心通わせた相手のもとに通うのじゃ。女が閨（ねや）の窓を開けてそれを受け入れればよし。あとは女の親が認めれば正式な婚礼の儀式を執り行える」
「認めなければ？」
「正式な婚儀はできん。だが親も成人の結婚に口出しはできん。それも子が生まれれば族長の名のもとで正式な婚儀が執り行われる事になる」
アプリリアージェはうなずいた。
「ルーチェはもう自室を？」
「もちろんじゃ。成人したダークアルヴの娘は夫となる者を迎えるべく扉のある自室を与えられるのがジャミールの風習じゃ」
「アトラック」
ラシフの回答を受けて、アプリリアージェは改めてアトラックに

向き合うとその名を呼んだ。
「はい」
「夜な夜な迎賓殿を抜け出す人影がいるのを私が知らないとでも思いましたか？」
「！」
にっこりと笑いながらそういうアプリリアージェの前に直立して立っているアトラックの顔は上気し、その額には汗がにじみ出ていた。

『えええ？』
【び、びっくり仰天や】
『昨日も、かなり仲が良さそうだなあとは思ってたんだけど、まさか』
【ウチらが一週間眠りこけてた間にそんな桃色な出来事があったとはな。おちおち寝ても居られへんな】
『桃色って……』

「ちょ、ちょっと待て」
その場で一番うろたえたのはラシフだった。アプリリアージェの発言は彼女を嵐の大海原へ放り込んだような形になった。
「あらあら、そのご様子では『ばばさま』はご存じなかったのですね？」
アプリリアージェはいつもののんびりとした口調でそう言ったが、ラシフはそれに反応する余裕すらなかった。
「き、聞いておらん。ルーチェ！」
ラシフはすっかり頭に血が上っていた。
もちろんルーチェがアトラックに懐いているのは彼女自身も知っていた。
だがまさか……。
ラシフに呼びかけられても、ルーチェは耳まで真っ赤にしてうつ

むいているだけだった。
それを見たラシフは矛先を変えた。
「イブロド！」
「はい」
声がかかることをすでに予想していたのだろう。イブロドは意外に落ち着いた声で返事をした。
「お前は知っていたのか？」
「――もちろんです、母上」
イブロドは少し間を置くと、そう答えた。
『ラシフ様』ではなく『母上』と。
ラシフは娘のその態度を見て頭から血が噴き出しそうなほど興奮した気持ちをなんとか抑えることに成功した。孫の方はうつむいていて比較ができなかったが、おそらくその時のラシフの顔はルーチェよりも真っ赤になっていたにちがいない。
顔からゆっくりと血が引いていくのを感じながら、ラシフは自分を真っ直ぐ見つめるイブロドの顔に昔の出来事を重ねていた。メリドがイブロドの夫になった頃のことだった。メリドはルーナーとしての資質は低い。ラシフは、ルーナーとして、より力のある男と娘を一緒にさせたかったのだ。その思いを裏切られたように思ったラシフは二人の婚儀に反対した。
目の前の娘の表情はその時の事を言いたいのだろうと理解した。ラシフは自分の過保護振りを十数年ぶりに、しかも同じ娘に指摘されたようなものだった。

「ルーチェ」
孫に呼びかけるラシフの声は普段の調子に戻っていた。
「はい」
「お前は次期族長に決まっておる」
「こ、心得ております」
ルーチェは顔を上げて、現族長にそう答えた。案の定顔は見たこ

ともないくらい真っ赤で、その緑色の目は恥ずかしさと興奮の為か、涙で少し潤んでいた。

ラシフはチラリとアプリリアージェの顔を見た。ムダだろうとわかりつつも顔色に変化がないか探ろうと思ったのだ。だが目が合ったアプリリアージェはラシフに向かってゆっくりと頭を下げて見せた。

表情がわからないどころではない。ラシフは言葉以上の思いを投げかけられた事を、いや、投げかけられてしまった事を思い知った。

そしてそれは大きな意味での「命」なのだと言うことも。

「婿殿は優しくしてくれるか？」

ラシフは視線をルーチェに戻すとそう問いかけた。

「ばばさま……」

「乱暴な男にろくなヤツはおらんのだぞ」

「いえ」

ルーチェは少し戸惑ったあと、アトラックの方を一瞬見て

「とても優しくしてくれます」

小さくそれだけ答えると、再びうつむいた。

「そうか」

ラシフは優しい声でそう言うと、孫の頭をそっと撫でてやった。

「元気な子を産むのだぞ」

『なんか、ものすごく生々しい会話だと思うのはオレがフォウの人間だからか？』

【空気を読め。と言うか黙っとけ！】

『――怒るなよ』

【そんなことより、これで外堀は埋まってもうたな】

『え？』

【アトルとはここでお別れやっちゅう事や】

『あ……』

「さて、アトラック」
アプリリアージェの呼びかけにアトラックは直立の姿勢のままで……しかし無言だった。
「あなたの守るべきものは私と行く道の先にはありません」
「ですが」
「ティアナは命をかけてネスティを守るでしょう。ファルケンハインはそんなティアナを全霊をかけて守るでしょう。私も風のエレメンタルに命を捧げることは以前から決めたとおりです。では、あなたの守るべきものは？」
「お願いです、司令」
「人は、守るべき物のために生き、守るべき物のために死ぬことこそがその本懐です」
「……」
「ルーチェは大事な存在ではないのですか？」
「……」
言いよどむアトラックに、アプリリアージェは助け船を出した。
「今はあなたの人生で一番素直にならねばならぬ時なのですよ」
一同は言いようのない緊張で、沈黙が破られるのを待った。
ここでアトラックがルーチェを選ぶのか、敢えて風のエレメンタルの護衛役を選ぶのか。
だがおそらく、沈黙を一番長く感じていたのはルーチェであろう。次期族長が里人全員を捨ててアトラックと共に旅に出ることは出来ないのだ。つまりそれは別れを意味する。もちろん、ルーチェとてわかってはいたが、考えようとしなかった事であった。
「――ルーチェは、物凄く大事です」
アトラックのその言葉で、ルーチェが弾かれたように顔を上げた。
「ルーチェの為になら、死ねますか？」
アプリリアージェのこの問いに、アトラックはもう躊躇しなかった。
「喜んで」

そして、アプリリアージェの前で直立してから、初めてルーチェの方へそっと顔を向けた。アトルと目が合ったルーチェは思わずラシフの顔を見上げた。ラシフは苦笑すると孫の背中に手をやってそっと押した。

もちろんルーチェはその場を飛び出し、アトラックは薄い黄色の固まりが自分に向かってぶつかってくるのを視界の端に捕らえることになった。

ジャミール族の民族衣装を纏った金褐色の長い髪のダーク・アルヴの少女は、大柄なデュナンの胸に飛び込むようにして抱きついた。

アトラックは少し戸惑っていたが、意を決したようにその守るべきものを自らの手で抱きしめた。

それを見ていたアプリリアージェは海軍式の最敬礼をすると、明るく声をかけた。

「今まで本当にご苦労さまでした。アトラック・スリーズ特佐」

「し、司令……」

「シルフィード王国軍、海軍中将、アプリリアージェ・ユグセルの名において、今ここにあなたの任を解きます」

「くっ」

「私はあなたのような部下を持った事を生涯誇りに思います。あなたには何度も命を救われましたね。心から感謝しています」

「そんな、俺こそ」

アトラックはこの時にはもう悟っていた。自分に懐いてくるルーチェの真っ直ぐな緑色の瞳に惹かれ始めた時に、この別れは決まっていたのだということを。

いや。

アトラックは小さなルーチェの体温を感じながら苦笑混じりのため息をついた。

―（俺がジャミール行きの提案をした時に、別れが決まったんだな）

「良い話だな」

今までじっと成り行きを見守っていたアキラがぽつんとそう言った。

「二人を祝福して一曲奏でたいところだが、昨日の今日だ。それは少し遠慮しておこう。しかし、もし事情が許せば出立までに機会を設けてもらいたい」

エイルはその言葉を聞いて横にいるエルネスティーネの様子を見た。だが予想に反してエルネスティーネは柔らかな微笑を浮かべてアトラックとルーチェを見守っていた。

「何でしょう？」

エイルの視線に気付いたのだろう。顔を上げたエルネスティーネと視線が絡まったエイルは慌てて目をそらした。

「いや、寂しくなるなと思って」

「そうですね」

エルネスティーネはうなずいた。

「でも、まだエイルもティアナもファルもいます。リリアさんも」

「うん」

「それに、生きていればアトルにだってまた会えます」

エイルはその言葉に絶句した。

「ネスティ……」

気の利いた言葉を探そうとしたが、エイルはあきらめた。エルネスティーネはそのエイルの手をとるとぎゅっと握りしめた。

「エイルは、私を守ってくれますか？」

「え？」

「私はエイルといると悲しさや辛さが消えていくのです。側に居てくれると、とてもいい気持ちになります。だからこの先もずっと……」

「もちろん、一緒にいるさ。アトルの分まで」

「嬉しいです」

とっさにそう答えたエイルだが、エルデは何も言わなかった。

寄り添うようにして体重をエイルに預けてきたエルネスティーネ

は、エイルを見上げて耳元でささやいた。
「今度合う時はきっとアトルは父親ですよ」
「……」
エルネスティーネが告げた父親という言葉に、エイルは思わず体を固くした。
「エイルは私に気を遣いすぎです」
「いや、つかうだろ、普通、こんな時は」
「大丈夫です。本当の事を言うとまだ泣いてしまうかもしれませんが、それでも私、結構強い方ですから。それにこうしているとなんだか安心します」
腕を抱きしめるようにしたエルネスティーネは、そう言ってにっこりと微笑んだ。
エイルはいったいどう答えていいものやらわからず、ただ唇をかんでいた。

「こうなると二人を引き合わせてくれた「群青の矛」、いえファーンには感謝しないといけませんね」
「そうですね」
アプリリアージェの言葉に、アトラックは素直にうなずいた。
「女の子が出来たら、ファーンという名前にしますよ」
アプリリアージェはアトラックの軽口ににんまりと笑って見せた。
「この先もしファーンに出会う事があったら、伝えておきます。それに彼女にはこの件では私からも言っておきたいこともありますしね」
「言っておきたい事、ですか？」
「おかげさまで私にとって掛け替えのない人材を一人失いました。手足をもがれたようなこの痛みをいったいどうしてくれるんだこのやろう……ってね」
「司令……」
そう言ったアトラックの声は、鼻声になっていた。いや、もう聞

き取りにくいほど言葉はつまっていた。
「そのお言葉……このアトラック……一生涯の誇りと……させていただきます」
大事な人がそう言った後、ルーチェは額と髪に暖かいものが落ちるのを感じた。
「アトル……」
ルーチェはそう言うと、その顔をさらに深く埋めた。
暖かく、大きな胸に。

# 第六十七話　式典の朝

結局、ダーク・アルヴの一つの隠れ里の住民達が住み慣れた辺境の山奥を離れる準備が整ったのはそれから三日の後であった。
アプリリアージェがラシフに対して啖呵を切って見せた日から数えて都合二週間弱。
彼女は公言通りに事を運んでみせた。

エイルとエルデは残り少ない時間を全て薬作りに充てた。ただ、昼食はずっとアトラックの側で過ごす事にした。ルーチェには悪いと思ったが、そもそも夜は二人きりで過ごせるのだから昼食くらいは大目に見てもらうことにした。
そこでアトラックの口から事前の段階では知らされいなかった移住の細かい手筈について、その詳細を聞く事になった。
目を丸くしたというのはこの事だろう。エイルとエルデは戦術家や策士と言った方面とは違うアプリリアージェの『本当の力』を思い知らされた気がした。弓や剣を構えて戦う強さではなくアプリリアージェ・ユグセルという人物が持つ名前の力だった。
もちろん、それは眠っていて得る家柄や財産といったものもあるのだろうが、その時アプリリアージェが駆使したもっとも大きな力は、どうやら自らの力で得たもののようだった。

ジャミール移住に関してラシフから承諾を得たアプリリアージェは、その場で書状を二通用意した。それをファルケンハインとティアナに持たせ、そのたった二枚の書状と二人の部下を使って二週間後には実際に移住が始められる状態になったのだから、その力の持つ意味は計り知れない。
しかも海を隔てた別の大陸の内陸部に居ながらにして、である。

「ファルさんの言っていた入り江は地理的にワデュカ湾の端にある。あの辺りは全部氷河の跡で水深が深いから、大型の船が入っても問題ないだろう。ファルさんはいいところを見つけたと思うよ。あそこからなら天候さえ安定していれば海路一週間程でファルンガの入植予定地付近に上陸が可能だろう」

アトラックは日に日に質素になっているスープの具をつつきながらエイルに説明した。

「おそらくいずれ本国に対して正式な手続きが必要になる可能性もあるが、公爵領への客人として招かれる事については現状でも法的にはまったく問題はないんだ」

「そうなのか？」

「ああ。なぜならこの手の許可は貴族法によると公爵の裁量範囲だからな。忘れたか？リリアさんは一応まだ公爵領ファルンガの領主なのさ」

シルフィードの貴族が管理するいわゆる領地にはいくつか格付けがあり、公爵領は特別扱いになっている。

陸軍・海軍は言うに及ばず、近衛軍であろうと公爵の許可なしに領地に入ることは許されていない。ゆえに公爵領の治安維持はいわゆる公爵軍、一般には領兵と呼ばれる独自組織の軍が行う。

とはいえ現在シルフィード王国にある九つの公爵領のうち七つまでは領地もそれ程広くなく自治とは名ばかりで実態は政府に管理委託をしているようなものである。従ってそれらの地域は王国軍の一部を公爵領軍として「貸与」されている。つまり実質的には軍隊が駐留しているわけだが、公爵という立場を尊重する為便宜上あくまでも「領軍」を名乗る。

また、貸与される領軍は近衛軍の管理下にある。

ユグセル家が統治するファルンガは領地が広大なこと、また土地が豊かで各種産業も盛んであることから経済的に余裕があり、公爵軍、いわゆる領軍を自前で持っていた。ユグセル家が並の貴族と違

うのは、その領軍をまかなう為の経済的な循環機関をも設定していた事である。領軍は交代制で生産を主とする仕事に従事し、対価を生み出す。また領内では領軍の為の軍需産業もあり、生み出した対価はそこに流れる。単純な言い方をするならば、領軍に関する物資については領地外にカネを出すことなく賄っていたのである。

ファルンガ領軍の規模はもちろん王国軍とは比べものにはならないが、所属する兵達の士気の高さや能力は王国軍でも高く評価されている。公爵推薦として王国軍に抜擢されたものは領軍での実績、つまり階級を考慮され、ほぼ同等の地位に就ける程である。完全な能力主義のシルフィード軍に階級付きで配属されることは通常ではあり得ない事なので、いかにユグセル公爵軍が一目置かれる存在なのかをうかがい知ることが出来る逸話と言えるだろう。

ファルンガ領軍、正式名称ユグセル公爵軍は殊に海軍が有名で、北方の海峡にあって約半分の戦力で百戦錬磨の海賊達と堂々渡り合っていたという記述は数多く残っている。

「入植地に近づけば公爵軍の船団が迎えにくるだろう。しかもリリアさんが信頼する人物が窓口ということだから文字通り大船に乗ったつもりで居られるってものさ」

「『向こうに着いたらその者に何なりとおっしゃってください』っていう感じ？」

「勿論、要望がすべて通るわけではないが、ワルド子爵が『人物』であることについて疑いはまったくないよ」

それにしても、エイルは気になっていた。

アプリリアージェは書状を二つ用意したと言っていた。

一通はマキーナ・ワルド子爵宛だとして、もう一通は一体誰宛のものなのか？

そう。アプリリアージェが自ら作り出した力とはつまりその手紙の先にあるものだった。

それを尋ねると、アトラックはニヤリと笑って目配せをした。
「今は秘密だ」
「けち」
「まあ、そのうちわかる時も来るさ。ちなみに言っておくと、二通ともワルド子爵宛じゃないぜ」
ワルド子爵には伝信所から鳥を使って連絡を取ったという。なんでもアプリリアージェとマキーナとの間には、ある暗号が取り決めてあり、ファルケンハインは指示されたとおりそれを使って連絡を取ったのだという。
そして残り二通はティアナがマキーナの返事を待つ為に待機している間にファルケンハインが別の場所へ届けたということだった。五千人以上の人間を運ぶ移送船団はそこからやってくると言う。
ほんの数日でそこまでの数の船を用意できる人間。しかもたった二通の書簡で、である。
アトラックがポツンと言った。
「故アプサラス三世でも不可能だと俺は思うよ」

『移送船団って、シルフィード船籍じゃないんだ』
【いくら何でもシルフィード籍の船、いや船団を勝手にドライアド領に近づけるわけにはいかんやろ?】
『言われてみればそうだな』
【それでもユグセル公爵がその気になれば軍隊でもない数千人規模の人間をここまで短期間で移動させられるっちゅう事やな。悔しいけど、ここは素直に心の底から驚くしかないな】
『そうだよな』

「大丈夫ですよ。マキーナ・ワルド子爵は私の守り役だった者です。相当歳はとっておりますが、アルヴですからまだまだ壮健です。族長のわがままに多少振り回されてもそうそう倒れることはないでしょう」

夕食の席で受け入れ先の話題が出ると、アプリリアージェはそう答えた。
「そなたの守り役か」
ラシフはそう言うと腕組みをして考え込んだ。アプリリアージェはその様子を見て首をかしげた。
「私の守り役だとご不満ですか？」
「いや、マキーナ・ワルドなる人物とは是が非でも懇意になり、そなたの幼少の頃の恥ずかしい逸話など聞いて慰みにしたいものだと思ってな」
「そんなこともあろうかと既に手は打ってありますよ」
「なんだと？」
「族長が変なことを尋ねてきたら……」
「尋ねてきたら？」
「いえ、さすがの私もあまりに残酷な事なのでこの場で口にだすのもはばかられます」
そう言って珍しく片側の口を持ち上げるようにして笑って見せた。
「――お前が言うと冗談に聞こえん」
「冗談ではありませんから」
ラシフはそう言って笑うアプリリアージェを恨めしそうに睨むとため息をついた。

そしてついに里人達の準備が完全に整った。
出発の日が来たのだ。
ラシフは不安がったが、最終検分を行ったアプリリアージェの強い要請で最終的には各自の荷物は身の回りに必要な最低限のものに制限された。食料も一人あたり一週間分を基本として後は里に置いていくようにすすめた。数日とはいえそれなりに長い行程を歩かねばならない。アルヴならともかく、体力のないダーク・アルヴが持つ荷物は出来るだけ軽い方がいいのは間違いない。「移送船に乗っ

てしまえば、食事の心配は一切ない」という説得で、ラシフはしぶしぶそれを承諾した。さらに入植地に着けばしばらくの間の衣・食・住に困らないような準備が整えられているという。

各自の荷物はいったん里の入り口にまとめて置かれていた。里人達は身軽になると夜明けを合図に全員が広場に集まった。

出立の日はジャミールで一番盛大な式典の日になった。

広場には式台が置かれ、すでにそこでは族長が静かに里人を待っていた。

だが、そこにいたラシフの様子が普段とは違った。

『あれ？』

【ほう】

族長ラシフは黄色い民族衣装を纏っていた。

それは特に問題はない。だが、いつもと違うのは頭からすっぽりとかぶり物をしていたことだった。それは頭巾のような形で……ただ、異常に長かった。なぜなら地面に届こうかと言うほど長い薄茶色の真っ直ぐな、ラシフの象徴とも言える髪を全て被っていたからだ。当然頭巾の先は地面に達していた。

多忙な日が続いた為だろうか、少し憔悴したような表情をしたラシフだったが、儀式にあたっては毅然としていて強い存在感を示した。

エイルには普段小さなラシフの体が、その日は二倍以上大きく、そしてまぶしく見えた。

全員が集まるのを待って、まずは先祖の霊の供養が行われた。

ジャミールには多くの墓がある。それらを捨てて出て行くのである。それなりの儀式が必要だった。そこでエルデの出番となった。

エルデははその最初の儀式には計画段階から進んで参画していた

のだ。実際の式典にあたっても、賢者としての立場を効果的に使い、人心をまとめあげることに成功した。
何しろ賢者の徴である赤い第三の目は実に説得力のある存在だったのだ。

法要や宗教行事は本来賢者がやる仕事ではない。マーリン正教会においてオラクルと呼ばれる神官や司祭あるいは司教などの立場にあるものの役目であった。だが、賢者であるエルデが唱える教典の一節や儀仗の一降りできらびやかな光を降らせるルーンには、住み慣れた里を捨てる事に対する人々の心にある後ろめたさを軽くする絶大な効果があった。

「マーリンの眷属、賢者の名において、この地に眠る汝らの偉大なる祖先の永遠の安寧を保証しよう。たとえこの地が溶岩に覆われたとしても、その祝福と安らぎは未来永劫変わることはなくこの場所と共にあり、このファランドールの糧となるだろう」

「賢者エルデがこんなに慈悲深く親切な事を口にする人だとは思いませんでした」
法要が終わった後でアプリリアージェがそう言ってからかうと
「『死に神』が人を生かすのに尽力するっちゅうのもどうかと思うけどな」
そうエルデが返した。
アプリリアージェはそれを聞くとうれしそうにふふふ、と笑った。

法要の後には、里人が楽しみに待っていた行事があった。アプリリアージェとラシフの間で取り交わされた「壮行試合」がそれである。
ジャミールの兵と賢者エイミイ側の戦士それぞれ六人ずつが小隊を編成し、一対一で勝負をして勝者の数が多い小隊が勝ちである。

勝負は真剣で行い、致命傷を浴びせたと判断された者が勝者となる。

審判長はラシフだった。

真剣での試合が可能なのは、もちろん事前にエルデが強化ルーンをかけることになっていたからである。

当初の予定と少し違う点があるとすれば、それはアトラックがジャミールの兵として出場することだった。

【予想外やないんかもな】

『え？』

【いや、こうなることもリリア姉さんは織り込み済みやったんかもな、って思って】

『まさか』

【まさかとは思うけど、ジャミールに一勝の可能性が出たわけやろ？】

『……』

双方の代表が一列に並んで向かい合った。

代表と言っても賢者側はエルネスティーネを除く全員がそこにいた。アプリリアージェがウーモスでやろうとして頓挫していた『試闘』が、形を変えてこんな場所で実現するというのはさすがの彼女でも予測していなかったことに違いない。

『賢者側』にはアキラの姿もあった。彼はアプリリアージェにその話を持ち出された時、話が終わらぬうちに是非自分も出してくれと懇願していたくらいだから、実にうれしそうな顔で参列していた。おそらく側近のミヤルデが上官のその様子を見たら、間違いなく苦虫を噛み潰したような顔でセージに愚痴を並べる姿を見る事が出来たであろう。

ジャミール側には完璧に傷が癒え、体調も万全のメリドがいた。隣には筆頭副兵士長のヒノリもいる。後の四人もダーク・アルヴな

がら見るからに屈強の戦士と言った面構えの兵士が並んでいた。

第一試合にはエイルが出た。

最初にかける強化ルーン以外、ルーンは一切使わないという決まり事だったので、エルデの出番はない。純粋に剣士エイルの実力だけの勝負だった。

エイルは武器の選定について試合前に少し悩んだが、近くに生えていた木から細い枝を折り、それを手にしていた。

儀仗ノルンを使わなかったのは相手がそれを見て賢者だと萎縮してしまうかもしれないというエルデの判断があったためだ。

だが試合前に一悶着あったのは言うまでもない。

「剣なら武器庫より好きなものを選べば良かろう？」

エイルが持つ枝を見咎めたラシフにエイルは首を振った。

「いや、オレはこれが使いやすいんだ」

剣での試合という名目だったが、ジャミール側の剣士も承諾したため、変則として認められることになった。

第一試合に最も注目していたのは他ならぬ味方のアプリリアージェだった。

スカルモールドと戦った時にはエイルの剣技を見る余裕などなく、蒸気亭の戦いはルーンを併用しており、そもそも相手の技量が低すぎて参考程度にしかならなかった。あとは稽古をしている姿を一度見たきりである。

エイルの相手は茶色の髪をした精悍な顔つきの兵士で、細身の片手剣と木と革で出来た軽い盾を持っていた。

「はじめ」

双方、ジャミール式の礼をすると試合が始まった。

この試合はこの日でもっとも地味な戦いと言えた。

「うおおおりゃあああああっ」
開始と同時にダーク・アルヴの兵士は突進した。
枝が剣ならば枝ごと切り倒してやる、という意志が会場中に伝わるかのような力の入った突進振りだった。
だが迎え撃つエイルは微動だにしない。
相手の兵士はエイルの右目が見えないことは知らない。もちろん左耳が聞こえないことも伝えていなかった。知っていれば有利に戦えたかもしれないが、戦場で相手がそれぞれ自分の弱点を言ってくれるわけではない。それに気付いて戦い方を工夫するかどうかは現場だけで通用する問題であった。
勝負の方はあっけなくついた。
勢いをつけて切りかかる相手に対し、エイルは枝でそれを受けようなどとはしなかった。相手の剣が自分の体に突き刺さる直前に必要最小限だけ動いてそれを避け、そしてすれ違う際には手にした枝を相手の胴に当てていた。
剣を避けようとする相手の動きが見えれば、動いた方向へ剣を向け直すものである。事実ジャミール側の剣士もエイルが直前で避けようとしたのを確認した上で修正は行っていた。だが、その修正の外側にエイルはいたのである。

「ほう……」
それを見ていたアキラは思わず感嘆の声を漏らした。
「賢者殿が腕の立つ剣士だという話は本当だったのだな」
声をかけられたファルケンハインはしかし、アキラ以上に驚いた顔でエイルを見ていた。
「不思議な剣だ。てっきり相手の剣で貫かれるものと思ってしまった」
「必要最小限の動きで相手を倒す。口で言うのはたやすいがそれを実践できるものは我らレナンスを名乗る者にもそういないだろう。まだ若いというのに」

ラシフの隣で試合を観戦していたエルネスティーネは、相手の兵士がエイルに斬りかかった時、思わず腰を上げ、悲鳴を押さえるために両手を口に当てていたが、エイルの勝利を見て、腰を抜かしたかのように音を立てて椅子に座り込んだ。

「勝者、賢者エイミイ」

ラシフは高らかにそう告げると席についてぐったりしているエルネスティーネに話しかけた。

「賢者殿はあれほど確かな腕を持っておるのに、自らの剣を持たんのか？」

ルーナーは通常儀仗を持つ。だがルーンを使える剣士はまれにいる。現にジャミールの場合、多くの剣士はルーナーでもある。彼らは剣にスフィアを埋め、それを儀仗としている。エイルの儀仗が出し入れが自由な不思議なものだと言う事をラシフは知っていた。であれば、剣を腰に差していても問題はないように思えた。

「そう言えば何も持っていませんね。実は私もエイルの剣術を見るのは初めてなんです」

「なるほど、そうか」

ラシフはそう言うと何か考え事をするかのように腕組みをしたが、すぐに側に控えていたイブロドを近くに呼んで何事かを耳打ちした。

イブロドはラシフの言葉に少し微笑んで頷くと、一礼して審判席を後にどこかに駆けていった。

二番目の試合はアプリリアージェのものだった。

本来は剣士ではなく射手であるアプリリアージェだが、試合の決まり事により短剣で臨んだ。もちろん短剣の使い手としても優れているのは間違いのないところであろう。

彼女の試合はこの日でもっとも華麗な試合で、かつエイルの時よりもあっけなく終わった。

開始の合図が告げられた数秒後には相手の兵士は背後からアプリ

リアージェに剣を突き立てられていた。
合図と同時に二人は一斉に相手に向かって動いた。そして斬り合う際に、アプリリアージェは相手の兵士が振り下ろした剣を避けたかと思うとまるで舞い上がるようにその剣を握る手首にトンっと足を乗せ、相手を前のめりにさせると同時にひらり地面に舞い降り、同時に振り向くことなく背後の相手に剣を突き出したのだ。
相手の兵士がしまったと思い、体勢を立て直そうと思った時にはすでに勝負がついていた。

観衆は味方の里人の兵士が負けたことよりもむしろ相手のダーク・アルヴらしい身軽さを最大限に生かした戦い振りに感銘を受け、ラシフによって勝ち名乗りを上げたアプリリアージェにやんやの喝采を送っていた。

三番目に出てきたファルケンハインの勝負はその日でもっとも豪快な勝利となった。
ただし、ラシフから物言いがついた為仕切り直しというおまけ付きではあったが。
ファルケンハインは伸ばすと自分の身長程の長さになる伸縮式の棒を手にしていた。普段は折りたたんで懐に隠しているという。
彼は試合の合図を受けるとその棒の先に三日月の形に湾曲した白い刃を作り出した。風のフェアリーである彼の持つ特殊な能力がそれだった。ただの棒が一瞬で巨大な鎌の姿になったのだ。それもただの鎌ではない。その刃の長さが尋常ではなかった。彼は試合開始と同時にその白く光る鎌を一振りして相手の胴を真っ二つにして見せた。もちろんエルデのルーンで本当に真っ二つになったわけではなく、エーテルを纏った刃が体を上下に切り分けるようにすり抜けたのだ。ファルケンハインの鎌の刃渡りは試合会場の半径にほぼ匹敵し、かつ文字通り風のように空間を切り裂いた。従って相手の剣士に逃げ場など存在しなかった。

ラシフの『物言い』はファルケンハインの武器が「剣」でなかった事に対してだった。
「あくまで剣技の試合じゃ。お主の特殊なフェアリーの力はよくわかった。だが得物を剣に変えて剣の試合として再戦してはくれまいか？」
おそらくラシフの意図はファルケンハインのフェアリー能力によるあの攻撃ではただの惨殺劇だと里人に判断されかねないという点にあったものと思われる。ファルケンハインは快く武器を両手剣に持ち替えて再試合に臨んだ。
だが、それでもファルケンハインの強さは相手を圧倒した。お互いに切り結んだと思われた瞬間には、小柄なダーク・アルヴの体は吹き飛ばされてしまったのだ。アルヴとダーク・アルヴという体重差はあまりに大きい。さらに歴然とした腕力の差もあった。目には見えなかったが、剣を振り抜く際にフェアリーの能力で後押しをするような力をかけた可能性も高かった。
ラシフは会場の端まで飛ばされた兵が尻餅をつく様を、口をぽかんと開けまさに呆然と眺めるだけで、しばらく勝者の宣言をすることさえ忘れてしまっていた。

次に賢者側の戦士として登場したのはアキラだった。
対するジャミールの相手は「弓では劣るが、剣技に関しての実力は兵士長であるメリド以上かもしれない」と評判のヒノリ。
エイル達にとってもアキラの試合は興味をそそられるものだった。ましてや相手がジャミールで一、二を争う使い手となると嫌が応にもそれなりの高みにある試合が見られるという期待がつのる。ジャミールの里人にすればいよいよ期待の実力者が出てきたわけで、こちらも興奮気味だった。
試合場を埋め尽くす群衆のあちこちから、そろそろ同胞の勝利を期待する声援があがっていた。

この日で一番長い試合がこのアキラとヒノリによる対戦であった。
アキラは試合開始の合図とともに前に出た。手にした武器は片手用の長剣だった。
ヒノリも相手の出方を待つことはせず、両者は広場の中央でぶつかると、互いの剣を交える形になった。
二度、三度、二人の剣が互いの剣を受け、あるいは責め、断続的な金属音をその日初めて会場に響かせた。それは嫌が応にも観衆の緊張と興奮を高めていった。
試合開始当初はいつもの微笑を浮かべてはいたが、アプリリアージェはやがて心なしか鋭い目つきで、アキラの足もとに視線を注いだ。

【アモウルはスカルモールドを一撃で行動不能にしたって聞いてたからお前さん並の腕やと思っててんけど、なかなかどうして、ヒノリの兄ちゃんもやるやんか】
『いや』
【違う？】
『足もとを見てみろ』

エイルに言われてエルデは注意を足もとに向けた。

【あ】
『わかったか』
【名人芸っていうヤツか？】
『どうだろう。少しヒノリが気の毒な気がするな』

試合は一見、互いに打ち下ろす剣の応酬合戦とつばぜり合いが続く緊迫感あふれるもののように見えた。だが、試合が長引くにつれ、ヒノリの息が次第に上がってくるのが観衆にもわかった。対するアキラには全くその兆しがない。

腕に覚えのある者はアキラとヒノリの動きに相当の違いがある事を見て取っていた。つまり、アキラは余裕をもってヒノリと対していたのである。

「まるで師と弟子の稽古のようだな」

そう言う者もいた。そしてそうこうしているうちに観衆の中にもアキラの足もとに気付くものが現れはじめた。

「あれは」

あちこちである事に気付いた者達がそう口にし出した。その声を聞いた者は、試合場狭しと攻防を繰り広げる二人の剣士の足もとに注意を向けた。

そこには、いつの間にか巨大な図形が描かれていた。

それはきれいな円の形をなしていたのだ。

もちろん、アキラがヒノリと斬り合いながら移動しつつ、足を使って巧みに書かれた円だった。しかも誰もが円の形の美しさに唸っていた。普通に円を描こうと思ってもそれほど綺麗な円を引く事は難しいと思われた。

アキラのやっている事を認識した観衆がざわめき始める中、ひときわ大きな金属音が会場に鳴り響くと一振りの短剣が宙を舞った。それは回転しながら落下し、地面に落ちる前に、勝者の手に受け止められた。そしてその時、足もとの円は最後の一書きがなされ、一本の線で描かれた円が完成した。

「そこまで。勝者、アキラ・アモウル」

勝者を告げるラシフの声が心なしか震えていた。

彼女はアキラが行ったことを、格下の相手をもてあそぶ行為だと取ったのだ。

つまり「全力で戦う」というアプリリアージェとの約束がなされなかった事に対する怒りを感じていたのである。

ダーク・アルヴにとってそれは屈辱的な事で、アキラが闘いながら円を描いた事は皮肉にしかとれなかった。

勝者が宣言された後も、会場は静寂に包まれていた。観衆もラシフと同じ気持ちの者が多かったのは間違いがない。

観衆の注目の中、族長であるラシフは言うべき事を言わねばならないと思い、立ち上がった。彼女の非難の目はまずアプリリアージェに向けられた。圧倒的な力で蹂躙される方が敗者の傷にならない。同じダーク・アルヴの血を受け継ぐ者同士、その事は重く捉えてくれている。そう考えての批難だった。

だが、緊迫したその場の空気を変えたのはその敗者であるヒノリだった。

彼はもちろんラシフと、そして観衆の思いがわかっていた。だから当事者として釈明をしなければならないと考えていた。それがこの試合の敗者のつとめだとも。

ヒノリは肩で息をしながらアキラの前に歩み寄ると、片膝を着いた。次に左手を右手の肘に当て、アキラに深く一礼をした。それはジャミールの兵士における最上級の礼だった。

「完敗、いえ、感服いたしました。あなたを我が剣の師として目標にすることをお許しいただきたい」

その一言で観衆はどよめいた。それもまたダーク・アルヴの気質なのである。

すなわち、負けた本人が屈辱を感じていないということは、つまりはそう言うことなのだと了解したのである。

アキラ・アモウル・エウテルペは、後世、天才軍師という肩書きと共に語られる名前である。要するに策士である彼がこの場でダーク・アルヴの神経をあえて逆なでするような事は考えにくい。従ってその試合についても彼は彼なりの計算で相手の技量を受け止めた上で、彼なりの美学を付加した戦略を織り込んでいたのかもしれない。

アキラはヒノリの言葉を受け、同じように片膝を突いた。そして左手を右手の肘に当て、ヒノリと同様のジャミール式最敬礼をした

上で言葉をかけた。
　これは期せずして「片膝をつき、剣を持った方の肘を持たない方の手で掴み、深く一礼する」というジャミールの本来の形をとっていた。剣を持つ手を拘束し、礼をするという型なのだ。
　ヒノリは空手でこれを行っていた。言わば略式である。もちろん彼の剣がアキラの手にあったからである。
　対するアキラはジャミールの最敬礼の型など知らずに、ヒノリの型を真似る事で正式な最敬礼をとることになった。
　アキラのこの行為は里人達の心証を大いによくしたのは言うまでもない。

　アキラはヒノリに語りかけた。
「最初の一太刀であなたはすでに負けを悟っていた。だがそこであきらめず、次の攻撃ですぐに太刀筋を変えてきた。その後も一度として同じ太刀筋の切り込みはなかったのは見事だ。創意工夫にあふれるよい剣だった。この後、励めばより高みにいける事を我が剣に賭けて保証しよう。再び見（まみ）えんことを楽しみにしていますよ」
　そしてゆっくりと右手に持ったヒノリの剣を差し出した。
「族長様」
　剣を返したアキラは、そのままの姿勢で立ち上がったままじっと二人の様子を見つめていたラシフに呼びかけた。
「申せ」
　アキラは一礼すると申し出た。
「剣も笛も、私はまだ修行の身。弟子は取らない主義です」
「ふむ」
「しかし、一人の剣士として才能ある剣士に師と呼ばれるのは名誉なことです。しかもそれが誇り高きジャミールの兵士であればなおのこと。族長様にお許しいただけるならば、我が剣と我が名を彼に与えとうございますが」

アキラの言葉に、ヒノリは顔を輝かせた。

この場合『名を与える』とはつまり一門に加えるという意味である。あまつさえ剣までもとなるとそれは「お前は我が一番弟子である」という意味であった。

「私からもお願い申し上げます。ひょっとすると皆は誤解しているかもしれませんが、アモウル師は最初から最後まで我が剣を全霊で受け止めてくださいました。まるで鏡に自分の未熟な剣が映し出されたかのような、今まで感じたこともない夢のような試合でございました。なにとぞ、我が願いお聞き入れ下さいませ」

ヒノリはそう言うと、深々とラシフに頭を下げた。観衆は息を呑んでラシフの裁量を待った。

ラシフはチラリとアプリリアージェの変わらぬ微笑みを見た後で、アキラに向かい、こう言った。

「将来ある我らが兵士に送るその名と剣。それは我らにもこの上ない餞（はなむけ）となろう。族長ラシフ・ジャミールの名において申し出を心より感謝する」

歓声とどよめきが会場を揺るがした。それはまるでヒノリが試合に勝ったかのような盛り上がり方であった。

「しかと受け取るがよい、ヒノリよ」

アキラは歓声の中、腰の剣を鞘ごと差し出した。ヒノリはそれを両手で恭しく受け取ると、ラシフと、そして次に観衆にかざすとアキラにもう一度礼をした。

おそらくアキラは相手の兵士の心・技をはじめの一太刀で理解したのであろう。一定の高みにある人間にはそう言った特殊な能力があると言われている。ヒノリが自分の意図を汲める相手だと判断した上であのような稽古まがいの試合を構成したと考えていいのかもしれない。

【いや、長い鍔迫り合いはええとしても、あの円は蛇足やろ？とい

うか、みんな騙されてるって！】
『あれは多分、それなりの腕前の人に多い、常人には理解不能なこだわりというか美意識なんじゃないか？』
【それ、変人ってことやな？】
『否定はしない。変わった人だよな』

大歓声の中、あっという間に成立した族長公認の師弟が肩を並べて退場した後、いつの間にか会場の中央に立っていたのはジャミール族の兵士長であるメリドと、ル＝キリアでもっとも存在感のないテンリーゼンだった。
「一切の手加減無用、持てる力を全て出して倒すように言ってあります。『一応』ですが」
いつの間にかラシフの横にアプリリアージェがやってきて、そう告げた。
「子供ではないか。もし我らが誇る兵士長をからかっているのなら今度こそ文句を言わせてもらうぞ？」
「私は『メリドにはそちらで一番の剣士をあてがえ』というラシフ様の命令に素直に従っただけですよ」
「この狸め。言っておくが、メリドはそちらが思っているよりは強いぞ」
「リーゼも多分、観客の皆さんが思っているよりは強いですよ」
「ふん。そちは相変わらずじゃの」
「ラシフ様こそ」
二人のやりとりを隣で聞いていたエルネスティーネは思わずクスクスと笑いを漏らした。
「そちは知っておるだろう？あの人形のような小童はリリア殿の言うように強いのか？」
ラシフから質問が飛んでくるとは思っていなかったエルネスティーネは慌てて作り笑いをすると、大きく頭を横に振った。
「いえ、私も知りません。でも」

「でも？」
「族長様とルーチェには申し訳ありませんが、きっとリーゼが勝ちます」
「――その根拠不明の自信、とくと見せてもらおう」

テンリーゼンとメリドの戦いは、微妙な雰囲気の中で執り行われた。要するに顔を入れ墨だらけにして、その上に黒い面を被った物言わぬ不気味な子供が、自分たちの一番の使い手の試合相手であることがどうしても不満だったのだ。

だが審判席の族長を見ると、落ち着き払って成り行きを見守っているだけで隣の客人に不満の一つをいう風でもない。ここは一つ試合を見るしかないか、と周りの者と互いに了解を取り合っているようなざわめきがいつまでも収まらなかった。

その試合はその日もっとも短く、そしてもっとも不思議な戦いだった。

メリドはダーク・アルヴとしては珍しく両手剣を。そしてテンリーゼンは左右の手に一振りずつ短剣を握っていた。
「双剣使いか」

テンリーゼンの姿を、二人の人間が食い入るように見つめていた。エイルと、そしてもちろん噂の「ル＝キリアのドール」の実力をこの目で見て判断したいと思っていたアキラだった。

エイルは風のフェアリーとしての力が封じられた状態でのスカルモールド戦でその姿をチラリと見ただけだった。だから完全な状態のテンリーゼンの「実力」に並々ならぬ興味を持っていた。アプリリアージェから壮行試合の話が持ちかけられた時、エイルが最初に思ったのは「リーゼの試合が見られる」という事だった。

そのテンリーゼンが、今目の前でジャミールの兵士長と向かい合っていた。

大勢が固唾を呑む中、試合開始を告げる声が会場に響き渡った。
「はじめ！」
そして……響き渡ったラシフの声が途切れた時には……試合はすでに終わっていた。
「な、なんじゃ、今のは？」
ラシフには何も見えなかったのだ。「はじめ」の声がする前には確かに双剣を持ったテンリーゼンはメリドと五メートルほどの距離を取って向かい合わせで立っていた。だが、その声が発せられた次の瞬間には動く気配のなかったその黒い面を着けた小さな『人形』が持つ二本の剣は交差する形でメリドの首に押し当てられていた。
だが、一番戸惑ったのは当事者であるメリドだった。
試合開始の合図が告げられたと思った時には目の前に黒い面があり、双剣が自分の首に触れていた。一歩も動けないどころか、構えた両手剣を握る手に力を入れる暇すらなかった。
これが戦場であれば、メリドは自分が死んだ事すらわからないまま空を見ながら、あるいは近づく地面を見ながら血しぶき上げて倒れているに違いなかった。

「ラシフ様。勝者を告げて下さい」
アプリリアージェに促されて、ラシフはようやく自分の役目を思い出した。
「し、勝者、テンリーゼン・クラルヴァイン」
その声を合図に、会場は歓声ではなく、どよめきに包まれた。

アキラはテンリーゼンの戦い振りを見て、背筋に寒いものを感じていた。
―（こいつは、危険すぎる）
短い時間で今の戦いを分析し、アキラは自分とテンリーゼンが戦った場合の両者の動きを頭の中で何度も何度も繰り返していた。
だが、何度やっても自分の剣がテンリーゼンの体に届く前にアキ

ラ自身が絶命していた。
勝てなかったのだ。
いや、戦わずに相手の双剣を振り払って逃げる術も検証してみたが、生き延びる道すら見えてこなかった。
少なくとも何の戦術もなく一対一で戦ってはならない相手……それがアキラが出したテンリーゼンに対する結論だった。
そしてアキラは自分ではなく、もう一人の人間とテンリーゼンとの対戦を頭の中で検証し、その結論をも得ていた。
絶望の色を込めて、アキラは無意識のうちに小さくつぶやいていた。
「あいつが相手では、ミリアですらも命はない」
だがもちろん、その声は誰に聞こえるでもなかった。

【聞きしに勝る速さやな。お前さんの目から見てどうや?】
『今のオレの状態じゃ勝てない』
【右目の事か?】
『ああ』
【まさかそれは、右目が見えたら勝てるっちゅう事か?】
『右目が見えてかつ、こんな『試合』形式だったら初戦は間違いなく勝てる』
【やけに細かい設定がないと勝てへんのやな】
『わかってないみたいだな。これだから剣を知らないヤツは困るんだよな』
【その言い方、むっちゃむかつく】
『いつもオレがルーンについてお前に言われている事をそのまま言っただけだ』
【そんなことどうでもええから説明せえ】
『言い換えると、試合形式でも二回続けて戦ったら二回目に勝つ自信はないってことさ。ついでに言うと、『試合』じゃなく実戦だと初戦でも勝てる気はしない』

【わからへんっ】
『実戦だったらリーゼは寸止めにする必要ないだろ？』
【あっ……】
『わかったか？お前のルーンがかかっているんだから、あのとんでもない速度をつけたまま駆け抜けるように首を切ってもよかったはずだろ？』
【なるほど。言いたいことはようわかった】

不親切なエイルの説明を補足するならば、テンリーゼンは突風のような速度で駆けるだけでなく、その速度を一瞬で止めることが出来たということである。それも寸止めが出来るほど精密な制御で。

多くの場合、物体に速度を加えることよりもそれを止めるべく制御する方が難しいとされている。人でも馬でも全速力で走っている場合、急に止まろうとしても不可能だ。テンリーゼンとてそれはさすがに無理だろう。ましてやあの速度である。

つまり、動き出してすぐに速度を緩め始めたということになる。エイルはそこが言いたかったのだろう。今の速度ならなんとか勝てる。しかし、テンリーゼンの持つ本当の速度はあんなものではないのだと言うことを。

だが、それよりもそのほんの一瞬の試合でエイルが得たテンリーゼンについての情報はその強さよりも欠点の方が多いように思えた。その太刀筋は直線的で素直で、言ってみれば相手の急所にあまりに正確すぎることだった。それは速度に絶対的な自信がある為だろうが、それがなくなった時にどうなるか、である。つまり、速度を封じれば凡百の剣士以下に堕するかも知れないのだ。

一方次の試合に備え、会場のすぐ側で観戦していたティアナは、かつてアプリリアージェが口にした言葉を思い出していた。『私とリーゼが戦ったらあっという間に敗れる』という言葉だ。その後フ

ァルケンハインにも同じ事を尋ねたが、そこでもクラルヴァイン少将の剣の腕前が尋常ではないという証言を得ていた。そして今、その証言が決して大げさでも何でもなかった事を自らの目で確認して呆然としていた。

その時のティアナの中にあったのは驚きとも恐れとも尊敬とも違う感情だった。何か異質なものを見た時に多くの人間が感じる、適当な表現や評価がすぐには思い浮かばない、あの感じだった。

「ティアナ・ミュンヒハウゼン、いでよ」

そんなことを考えていたものだから、自分の名前を呼ばれるまでティアナはすっかりぼうっとしていた。

大事な最後の試合を自分が受け持っていたことを思い出すと、ティアナは両手で自分の頬を張り、口を真一文字に結んで決戦の場に向かった。

相手はあのアトラック・スリーズ。本来なら同じ陣営としてこの壮行試合に臨むはずの相手だが、ある意味、自分の剣の腕前を試すには『望むところ』とも感じていた。

そしてティアナとアトラックの最後の試合は、その日初めて試合前に選手同士による舌戦が繰り広げらる事になった。

「君が相手とはねえ。とにかくよろしく頼むよ」

ジャミールの兵士の装束に身を包んだ見慣れぬ格好のアトラックが、いつものように屈託のない笑顔でティアナにそう声をかけた。

「なかなか似合うぞ。弱そうだがな」

アトラックのその服は、ルーチェが急いで縫い上げたものだった

「俺の大事な人が夜なべまでしてこさえてくれた晴れ着を侮辱するのは許せないな」

「ほう。許せないならどうする？」

「挑発方法が陳腐だって言っているのさ。温室育ちでぬるい近衛軍の人間ならどうかわからないが、海軍、少なくともル＝キリアじゃ

通用しない」
　アトラックがそう言うと、ティアナの表情が一変した。
「よく言った。貴様は今の一言を墓場の中で後悔する事になるだろう。手加減はせん」

　観覧席でそれを見ていたファルケンハインが小さくため息をつくとポツンとつぶやいた。
「あれさえなければな」
「ティアナ殿は性格が真っ直ぐすぎますな。そこがいいところでもあるが」
　隣に立っていたアキラがそれに反応する形でそう言った。
「ティアナにはあまり実戦経験がない。しかし、あれでアトルを挑発するつもりだったんだろうか」
　ファルケンハインはそう言うと苦笑した。

「そう願いたいね。手加減なんかしたらあっという間に俺が勝っちゃうよ」
「なんだと？」
「これが普通の稽古なら手加減するところなんだが、今回は俺も立場上負けられないし、ルーンもかかってるし、そもそも思いっきりやれという我が族長からの命令もある。悪いけど手加減なしで思い切り行かせてもらうよ」
「手加減などされてたまるか。近衛軍の剣技をなめるな。貴様がさっき言った事は必ず取り消させてやる」
「元、だけどル＝キリアの名が伊達じゃないってことを体で知ってもらおうか」
「どの口がそんな面白い事を言うのだ？」
「いや、まあ善戦を期待しているよ」
「私は今、この試合に真剣が使えることを感謝している」
「おーこわ」

二人は腕を組み、中央付近でにらみ合うようにしていたが、試合開始の位置に着くようせかされると、互いに回れ右をした。

観衆はというと、ジャミール側の兵士として紹介されて登場したものの、よそ者であるアトラックを応援してよいものやら戸惑っていた。

確かに自分たちの民族衣装、それもかなり格式のある形の兵装、しかも特別な色である深緑の布が使われた服を着込んでいるのである。

そもそもなぜ賢者の付き人であるデュナンがジャミールの兵士として、それも最後を飾る重要な役目を負って出てきたのかが不明だった。族長は一切それについて説明をしなかったからだ。

従って、その試合はひそひそ声が醸し出すざわめきの中で始まった。

審判席でじっとアトラックの様子を見つめていたルーチェは、いよいよという段になると、たまらずに立ち上がり、両手を胸の前で祈るように組んだ。隣に座っていたイブロドは娘の袖をそっと引っ張った。

「大丈夫よ」

ルーチェはうなずくと、素直に座り直した。

「はじめ」

両者とも両手剣を手にしていた。デュナンとしては背が高いアトルとアルヴのティアナが対峙すると結構な迫力があった。

そのティアナはアルヴ特有の豊かな腕力を生かし、高々と振り上げた剣を頭上から相手に向かって高速で振り下ろした。

アトラックは剣先を地面に向けたままの格好で振り下ろされるティアナの豪快な一撃をまともに受けようとしていた。

「もらった！」

ティアナはそう叫びながら渾身の力を込めた。アルヴの力なら、

受けた剣ごと切り倒す事が可能だったからだ。
だが……
ティアナの剣はアトルの体はおろか、剣にすら届かなかった。それどころか、剣が空中で何かに絡め取られたかのように動かない。
ティアナは混乱した。闘いの最中に自分の身に何が起こっているかわからない程恐ろしいことはない。混乱の中、ただ闇雲に剣を持つ腕に力を入れるばかりだった。
そしてようやく剣が見えない壁のような物を突き抜けたと思った時には、アトラックにより下から振り上げられた剣先が自分の脇腹を深々とえぐった事を認識していた。

【ファルはアトルの能力を教えへんかったんやな】
『ファルらしいと思う』
【うん。そやな】

「勝者、アトラック・ジャミール」

一瞬の静寂の後でラシフがそう告げると、ルーチェがその場で立ち上がった。彼女は真っ直ぐにアトラックを見つめると拍手を送った。
観衆ははじめは戸惑っていた。だが、ルーチェに倣って拍手をする者が増えていき、やがてそれは会場全体を包む大きな拍手の音になって戦いを終えた二人に降り注いだ。
それはアトラックに対してのものか、その日の『壮行試合』全体に捧げるものなのか、それともダーク・アルヴには不可能なほど巨大で美しく、そして速い一撃を振り下ろしたティアナをも称えていたのかはわからない。わかっているのはアトラックの族名をジャミールと呼んだ事だけであろう。

「聞いていなかったみたいだな。俺の能力」

膝をついたままのティアナに手を差し出しながらアトラックは声をかけた。
「たとえ教えると言っても断った」
「それでこそ俺が心から尊敬して止まないアルヴの戦士のセリフだな」
ティアナは差し出されたアトラックの手を取ったものかどうか躊躇していた。
「俺はデュナンだが、アルヴの考え方を尊敬している。そしてシルフィードが好きだ。この力を使ってジャミールのみんなを守り抜く事を今日のお前との試合に誓おう」
ティアナは苦笑すると差し出された手を握った。そしてアトラックがその手を引っ張ってティアナを立ち上がらせようとした時、彼は逆に思いもかけない力でティアナに引き込まれて思わずよろめいた。ティアナはすかさずつんのめったアトラックを抱き止めると、腕力に物を言わせてそのまま軽々と自分の肩に載せた。
「お、おい、ティアナ」
油断していたとはいえまさかそんな事をされるとは思ってもいなかったアトラックは驚いて抗議した。だがティアナは離そうとはしなかった。
「それなら、必ず守り切れ。アルヴの心を持つデュナンよ」
「ティアナ……」
「絶対だぞ。お前はルーチェに命をかけたのだからな」
誇り高いアルヴ族は、守るべき物の為に生き、そして死ぬ存在だと言われている。そのアルヴ族に認められることはアルヴ族の国に生きるデュナンのアトラックにとっては最高の勲章と言えた。そして誰あろう、誇り高きアルヴの戦士を地で行くようなティアナにそう言われた事が感激だった。
抵抗をやめたアトラックを肩にのせたティアナが剣を空に掲げる

と、初めて大きな歓声が沸き起こった。会場を大きく廻り観衆達のすぐ近くを通りながら、ジャミールの民族衣装を着たアトルは、勝者として敗者のアルヴを尻の下に従えながらその雄姿を披露し、そして最後に審判席にいるルーチェの前にやってきた。

婚約者の前でようやく解放されたアトラックは、族長ラシフの前に歩み寄り、膝をついてジャミール式最敬礼をもって勝利の報告をした。

「我が勝利をラシフ様に捧げます」

歓声がひときわ高くなる中、ティアナは最前列で自分たちを見つめるルーチェを見つけると、先ほどまで物凄い形相で両手剣を振り上げていた戦士とはとても同一人物と思えないほど穏やかな笑顔で声をかけた。

「お前の夫はデュナンだがアルヴより強い。里人にはせいぜい自慢するのだな」

それに対し、ルーチェは首を横に大きく振った。

「いいえ、それでは里のみんながアトルを好きになってしまうので困ります」

「これはしたり。デュナンは浮気が仕事のような種族なのだぞ？」

「おいおい、ティアナ。頼むからルーチェに変なことを吹き込まないでくれ」

「大事な行事の最中じゃ。私語は慎め、バカものめ」

ティアナ達のやりとりをしばらく聞いていたラシフは該当者達をそう叱責すると立ち上がった。

族長は試合の勝者を称え、敗者のさらなる鍛錬を奨励し、その日の試合を新たな土地に旅立つジャミール一族全員の健康と安全に捧げられると宣言した。

広場に集まった多くのジャミール一族に気付くものは少なかったが、この日のラシフが行った行事は今後のジャミール族にとって大

きな意味を持つことになる。
賢者まで引っ張り出して執り行った最初の儀式は唯一神マーリンの名を使った完全な宗教行事だった。
ジャミール一族の誇りと共に土に帰った多くの先人の為の鎮魂の儀式は、彼らの精神世界であったジャミールが守ってきた神事こそが相応しい。それはラシフだけでなく里の誰もがそう思っていた事であった。
だが、次に行われた壮行試合において、ラシフは一度もマーリンという言葉を使わなかった。そして壮行試合という儀式を里人全員の為のものだと宣言したのだ。
そもそもその儀式には賢者ですら一戦士として参加者全員と対等の立場で里人と戦ってみせたのである。これは、ジャミールの里が変わったという事を、儀式を使い、ある種の目に見える様式として全員に宣言した瞬間でもあった。
この演出をラシフが一人で考えたのか、あるいはアプリリアージェの底知れぬ叡智が主導したのかは知るよしもないが、生まれて初めて独裁者としてのその力を行使し、鶴の一声で今ある里を捨て新たな地へ移住する事を宣言したラシフは同時にシルフィードに渡った後、一切の宗教的な行事を廃止し、それに変わる祭礼を行う事も伝えてあった。
里人は族長に従う以外の選択肢は持たなかったが、宗教行事がなくなり祭礼に置き変わる事が一体どういう事なのかという実感が得られないでいた。
その一つの答えが壮行試合という『儀式』で参考提案されたということなのだ。

族長の総評を聞きながら、エイルはそっとエルネスティーネの姿を探した。彼女は審判席でラシフの隣に座り、穏やかな表情で前方を見ていた。その視線の先にいたのはルーチェだが、そのルーチェを穏やかに見つめるエルネスティーネの笑顔は気高くさえあると、

エイルは思った。

【どうした、ネスティがまだ心配なんか？】

『そりゃあ、な』

【言葉遣いは置いといて底抜けに気さくやからついつい忘れがちになるけど、ネスティは広大な領土と強大な力、それに悠久の歴史をもつ大国の王女や。しかも誇り高きアルヴの一族、アルヴィンなんやで】

『そんなこと言われてもオレなんかにはピンとこないだろ？』

【ならハッキリ言うたるわ。ネスティはお前なんかより百倍しっかりしてるし精神的にもお前の視界に入らへんくらい高みにある。そんな足もとにも及ばへんやつに心配されてると知ったら、さぞ屈辱やと感じるやろな】

『そこまでオレはけちょんけちょんかよ？』

【それだけネスティとお前は釣り合わへん存在や、言うてんねん】

『まあ確かに、な』

エイルはルーチェを見つめるエルネスティーネが今何を考えているのかが気になっていただけだった。訃報の件はエイル自身がじたばたしてもどうしようもないことだったからだ。それにエイルにはエルネスティーネを慰めるだけの覚悟も自信もなかった。

『なあ』

【何や？】

『オレはこのファランドールに係わってもいい存在なのかな？』

【なんやねん、藪から棒に】

『誰にも係わるな……それが俺達の合い言葉だったろ？』

【そやったな】

『ランダールでリリアさん達と出会ってから……いや、違うな。あの道でカレンに出会ってから、オレ達、かなり他人と係わった生活

をしてるよな』
【それも、命のやりとりまで発生する深〜い関係になってもうてるな】
『このままファランドールに関係を持ち続けて、オレはフォウに帰れるのかな』
【なるほど】
『それに、お前が言わないから聞かなかったけどずっと気になってることもある』
【だいたい予想してるけど……一応言うてみ？】
『シグ・ザルカバードは死んだそうじゃないか？』
【うん】
『お前はもう一つ方法があるって言ってたよな？』
【ああ】
『それって、気休めなんだろ？』
【気休めでもでまかせでもない。ちゃんともう一つ方法があるんや】
『誰も信じるなって言う奴の言葉を信じろっていうんだな？』
【信じろ。絶対お前をファランドール・フォウへ帰したる】
『わかった。よし、じゃあ、オレも決めた』
【決めたって、何を？】
『フォウに帰るまで、オレはネスティの騎士になる』
【騎士？何やそれ】
『知らないのか？』
【知らんわ】
『ほら、よくあるだろ、姫君に付き従う護衛の剣士というか……フォウでは騎士（ナイト）って言うんだけど……』
【それは下僕の事やろ？】
『下僕って……ファランドールにはないのかよ、その概念』
【ないない。だいたい専属護衛やったらティアナがおるやろ】
『ティアナみたいな存在は何て呼ばれてるんだ？』
【そやから専属護衛】

『他にいい呼び名はないのか？』
【いや、他にとか言われても……あ……】
『あるのか？』
【あ、いや、ないない】
『嘘つけ』
【ホンマに知らんわ！それよりなんでお前がネスティの護衛役にならなあかんねん。俺は絶対嫌やで】
『だからお前には頼まないって。だいたいお前はティアナに触れないんだから連携しにくいだろ？俺とティアナなら剣士同志だしな』
【そこまで言うなら勝手にしたらええけど、絶対反対の立場は変わらへんで】
『というかだな、何でお前はネスティ相手だと意地になるんだよ？』
【なってへん！】
『なってるだろ！』
【なってへん、言うたらなってへんねん！】
『はいはい、さよですかい』
【ふん】

総評を終え、壮行試合の終了を宣言すると同時に、ラシフはその日の最後の仕上げにかかる事にした。

「さて、続いてこれより本日最後の儀式を執り行う」
ラシフのよく響く声に、観衆のざわめきは波が引くように収まった。
普段のラシフは普通、いやむしろ声は小さいくらいであったが、この行事では終始大勢の観衆の後ろの方まで届く程の溌剌としたのびのある声を出していた。
それを不思議がるエイルにエルデが説明したところによると、『そういうルーン』があると言うことだった。

【風属性の中位ルーンや。ちょっと前にこれと似たような体験したことあったやろ？ほら、蒸気亭のあの喧噪の中でリリア姉さんの小声だけが明瞭に聞こえてたやろ？あれは風のフェアリーの能力の一つやけど、ラシフのルーンはそれと似たようなもんや】

『なるほど』

「ルーチェ、こちらへ」

ラシフは観衆の見守る中、ルーチェの手を取ると今まで白熱した戦いが繰り広げられていた会場の中央へ連れ出した。

『何が起こるんだろう』

【さあな。あ、ひょっとしてあのオバハン、族長の座をこの場で孫に譲るつもりかも】

『なるほど、あり得るな』

「我らが旅立ちにあたり、大いなる祝福を共に得んが為、ここで今、我が後継者ルーチェの婚儀を執り行う」

『え？』

【えええええ？】

# 第六十八話　幾千の問いを込めて

驚いたのはエイルやエルデばかりではなかった。
ほとんどの観衆は騒然となった。もちろん、突然に婚儀が行われる事自体もそうなのだが、それより何より観衆の多くの興味はルーチェの相手だった。
騒然となった観衆を眺めながら、ラシフは珍しくいたずらっぽい笑顔を浮かべていた。
「我らが共有する祝福は多ければ多いほど、大きければ大きいほどよい。すなわちルーチェと共にこの場で婚儀を執り行いたいものはここに参れ」
住民達は当初、ラシフの言葉の意味がわからず、顔を見合わせあった。もちろんラシフとてそのあたりは承知していたのだろう。絶妙な間をとった後に補足した。
「婚儀と申しても旅装のままで晴れ着も着ずに挙げるものだ。だが新しい土地に着けば様々な仕事がそれこそ山のように待っていよう。とてもきちんとした婚儀を上げられるような状態ではない。いきおい婚儀は先延ばしになるであろう」
それを聞いた里人は、ふむ、と頷いた。
「しからばこの住み慣れたジャミールの里で仮の婚儀を行おうと言うのだ。そして次なる里に我らが馴染んだ頃、その新しい里で新しい家族の為に新しい様式の婚儀を改めて執り行おうではないか。それに……」
ラシフは一気にしゃべると、そこで言葉を句切り観衆を見渡した。全員が自分を見つめていることを確認すると、満足した顔で続けた。
「旅に出るのに楽しみは多い方がよい。祝福というものは、いくらあっても荷物にはならぬ。さあ、この場で婚儀を行いたいものは、互いに手を取り合い我が元へ参れ。言っておくが、むろん資格のあ

る者だけだぞ？」

会場はざわめきの坩堝と化した。

エイルの近くでまさにその婚儀の資格を持つと思われる巻き毛の娘が親に何かを懇願している様子が見えた。

ジャミールの婚儀は女の家の許可によって成立するとラシフが言っていたのをエイルは思い出した。巻き毛の娘はまだ許可をもらっていなかったのだろう。

両親は顔を見合わせるとうなずき合い、苦笑して娘を抱きしめた。

成り行きを見守っていたエイルがほっとする間もなく、巻き毛の娘は両親を置いてその場を駆けだした。だが彼女の疾走はすぐに終わった。近くで不安そうな顔をして様子を見ていた少年一（にしか、エイルには見えなかった）を見つけると素晴らしい笑顔で少年の手を取った。

「いきましょう」と言ったのだろうか。

声までは聞こえなかったが巻き毛の娘は目の前の少年に何かを言うと、すぐ未来の夫となる人を引っ張ってラシフの元へと再び走った。

彼女達が参加する頃には、かなりの数の男女がラシフの周りに集まっていた。

見れば、中には子供を抱いている者もいた。

「婚儀は本来、春に行うものなのです。娘親に認められずとも子供が出来た者は婚儀で一族に祝福されます。彼らはそういう者達なのですよ」

かけられた声に振り向くと、そこにはイブロドが立っていた。側にメリドもいる。

「この場合、『おめでとうございます』……でいいのかな？」

エイルは二人を見比べて、おそるおそる尋ねた。

「ジャミールでは婚儀が終わった後、娘の両親に皆こう言います。

『良き働き手でうらやましい』と。」

【言うとくけど、ここは女系家族やからな】

『なるほど』

「それより賢者様、そろそろ」

「え？」

イブロドはそう言って会場中央のラシフの方を見た。エイルもそれに倣って目を向けると、そこにはこちらを見て小さく手招きをするラシフがいた。

【儀式。賢者。効果。祝福。演出】

『なんだ、それ？』

【今すぐ俺に代われっちゅうことや】

エイルはラシフのもとへ歩きながらエルデと入れ替わった。手には儀仗ノルンがもう握られていた。

見ればラシフの周りには二十組ほどの男女が集まっていた。その中にはエイルの見知った顔もあり、目が合うと照れたように微笑んでみせた。

―（合図をするから、一つ何かハデなヤツを頼むぞ）

エイルを出迎えるように近づくと、ラシフは礼をしながら耳元でそう囁いてきた。

―（経やとアカンのか？）

同じようにエルデも返す。

エルデはその時、その日はじめてごく近くでラシフの顔を見たが、族長の体調がおかしいことに一目で気付いた。

【どうしたんやろ？】

『聞いてみる？』

【うーん。場合が場合やからな。気はしっかりしてるみたいやし、後にしよか】

―（経など、絶対に読んでくれるな）
―（んじゃ、ありがたい説教は？）
―（それもいらん。そもそもお前の説教はありがたくない）
―（わかった。最後くらいは族長に花を持たせたるわ）
―（頼む。だが……）
―（『だが』……何や？）
―（私はもうお前にはたくさん花を持たせてもらっておる）
―（え？）
―（頼んだぞ）

ラシフは目の下にクマのある蒼白な顔を上げるとルーチェの隣に戻った。ルーチェは一同の中央に一人でいて、その隣には微妙な空間が空いていた。もちろん結婚相手の為の場所なのだろう。

エルデは主役達から少し後ろ側に下がったところに控えてラシフの合図を待つことにした。

「ルーチェ、お前の夫となる者の名を皆に告げ、ここへ呼ぶのだ」

ラシフはルーチェの肩に手を置くとそう命じた。ルーチェは頷くと観衆……この場合は参列者、あるいは立会人と呼ぶべきだろうか。つまり一族全員を見渡した後、緊張に少し震える声で夫となる者の名を口にした。

「我がもとへ来たれ、アトラック」

緊張していたのはジャミール一族の人々も同様だった。一体誰の名が呼ばれるのか固唾を呑んでルーチェを見守っていたのである。

そこへ告げられたのは誰あろう、賢者の付き人の一人、デュナンの剣士だったのだ。観衆の驚きは並大抵のものではなかった。そして人々はその時初めて悟った。壮行試合の順番と、彼がジャミールの名で闘い、勝利した意味を。

会場の隅でそのまま控えていたアトラックは、バツが悪そうに中央に進むとラシフの指示に従いルーチェの正面に立った。
儀式の始まりだった。

「幾千の問いを込めて、今汝らにひとつを問う」

ラシフの声が広場に朗々と響いた。この婚儀に相応しい、それは胸の奥底に染みこむような声だった。
ラシフはまず、ルーチェとアトラックに向かい合った。
「汝ら、今日から共に歩む長き旅の伴侶に自らの命を捧げることを誓うか？」
そして手に持った儀仗をまず、新婦の頭にそっと載せた。
「ルーチェ」
「はい。我が母と父と先祖の名にかけて誓います」
「よし」
次はアトラックの番だった。
同じように族長の儀仗が頭に当てられた。
―（私と同じ事をいうのです）
ルーチェが小声でそう囁いた。だが、それを聞いたラシフは小声でそれを制した。
―（いや、お前はお前の言葉で答えよ）
アトラックはルーチェをちらっと見てからラシフに頷いた。

「アトラック」
ラシフの問いかけにアトラックは右手を胸にあてて答えた。
「はい。我が矜持にかけて」
アトラックの答えは、この後そのままジャミールの婚儀で新郎が答える言葉として伝わることになる。本来ダーク・アルヴなどのアルヴ族は命よりも誇りを大事にする種族である。その命よりも大事なものをかけて誓うと言うのだから、これ以上の誓いはない事にな

る。
　ラシフはアトラックの機知に富んだ対応に満足げな表情をすると、次の二人に移った。
　同じように儀仗を頭に載せ、同じ問いをする。新婦はルーチェの言葉を、そして新郎は今聞いたばかりのアトラックの言葉を復唱した。
　それを眺めていたエイルはあることに気付いた。ラシフはその場に並んでいる全員の名前を何も見ずに呼びかけていたのだ。子供がいる二人の儀式の前には赤ん坊の名前を呼んで「元気そうじゃな」「夜泣きは治ったか」などと言葉をかけたりもしている。

【たぶん一族全員の顔と名前を覚えてると思う】
『すごいな』
【お前が考えてるより、ラシフはまじめで熱心で心根の優しい人やと言うことや。おまけに里人に本当に尊敬されてるな】
『お前もそんなことを言うんだな』
【俺は最初からあのおばあちゃんの事は好きやで】
『え？』
【意外そうやな】
『いや、そりゃそうだろ』
【まあ、向こうがこっちをどう思っているかは別にして、最初に会うた時に『何があってもこの村を守るんやーっ』ていう思いが顔中に出てたから、あの時点で憎めんようになってもうたんや】
『そう言えばお前、あの時……』
【おっと、話はここまで。そろそろ出番や】

　そうこうしているうちにラシフは全員の婚儀を終えた。二十組の男女は、族長の前で数千の誓いに匹敵する『一つの誓い』をおこなったのだ。
　ラシフは再び中央に歩み出ると、夫婦となった二人に向き合って

互いに手を取り合うように命じた。二人だけの男女はそれぞれ両方の手と手を取り合い、すでに家族のいる男女は父親が片手で子供を抱き、空いた手を子供の母親が両手で握った。

ラシフはその様子を穏やかな微笑で一通りゆっくりと眺めた後で、チラリとエルデの方を見た。エルデはそれに小さく頷いて見せた。

族長ラシフはその場にいた全員を抱きかかえるように両手を広げ、婚儀を締めくくる言葉を告げた。

「我らの未来を紡ぐ、この者達に大いなる祝福あれ」

それは飾りのない短い言葉であったが、それだけにその場にいた全員の心に素直に響いた。

エルデはその言葉が終わると同時に儀仗ノルンを水平に構え、短い認証文（ルーン）を二つ、続けざまに唱えた。それはエルデのルーンにしては珍しくハッキリと発音され、近くに居た者達の耳に届いた。

「シエル・エリュネ・ナダ・リューン……ラント・フルエ・マリミュール」

「まあ！」

程なくあちこちで歓声が上がった。

人々は空を見上げていた。ラシフもその声で空に目を向けた。

そこには、空全体を覆ってしまうほど大きな虹が架かっていた。しかも、一つではない。重なるように無数の虹が半天を覆っていたのだ。

「おお」

ラシフは思わず自らも感声を漏らした。演出家の方を振り向くと、すでにノルンを指輪に戻したエルデが、ややはにかんだように笑っていた。

「完璧だ」

アキラは虹を見上げながらそうつぶやいた。

「良くできた演劇をあまた見てきた私ですら、ここまで完璧になされた演出は見たことがない」

アキラが感心していたのはもちろん虹についてではない。三部構成ともいえるこの日の一連の儀式が一つの目的に沿って和声を奏で、美しく調和していたからだ。

第一部の慰霊と感謝の儀式が今までの価値観における過去の清算行為だとすると、第二部にあたる壮行試合は新しく向かう世界における自分たち一族の立ち位置を認識し、新たな価値観の胎動を示唆するものと言えるだろう。そして第三部の合同婚儀は、この里と新しい里の両方で都合二度行われると宣言された。つまり二つの里をつなぐものとして捉え、新しい夫婦をその祝福と希望の象徴として一族全員の祝福の中で示して見せた。

「予祝」という言葉があるが、第三部はまさにそれにあたるだろう。そして儀式の最後を飾ったのは見たこともないような豪華な虹の饗宴である。虹は美しい希望の象徴となり、今日のこの日は「良き日」として人々の心に印象深く刻みつけられたに違いない。

「そうだな」

アキラの独り言にファルケンハインが反応した。

「完璧で、美しい」

結婚式に虹が出ると、その二人は末永く幸せに暮らせるという言い伝えがファランドール各地にある。その原典はさだかではないが、エルデがルーンで作り上げたこの虹から伝説は始まったのかもしれない。

もちろんジャミールの人々の間では、この日の事は様々な尾ひれ付きで長く長く語り継がれたという。

# 第六十九話　リリアのルーン

里人達の出発はすなわちエイル達の旅立ちでもあった。
婚儀が終わると興奮冷めやらぬジャミールの人々は今行われた儀式について語り合いながら里の出入り口に向かった。それぞれの荷物を背に、あるいは手にして。
エイル達も急いで荷造りを済ませると皆の出立を見送るために里の出入り口に向かった。入る時には歓迎されなかった、あの出入り口である。
一足先に準備を終えていたラシフは里人達を従えた格好でエイル達を待っていた。
ラシフ自身もそれなりの荷物を背にしており、見れば後ろに従うイブロドもルーチェもそれぞれの荷を背負っていた。その姿でこれから数日かけて入り江まで歩き続けるのである。
ただ、どうにも様子がおかしい。ラシフは例の儀式用と思しき長い頭巾を被ったままの姿なのだ。

【相変わらず顔色も悪いし、なんか妙やな】
『確かに』

アトラックがルーチェとともにアプリリアージェのもとへ挨拶の為にやってきた。仲間一人一人と声を掛け合った後、最後にエイルの前に立ち止まった。

「魔人エイル。みんなを頼んだぞ」
「魔人？」
「剣も名人、ルーンも別格。歩きながらルーンは唱えられるわ、スカルモールドの動きを一撃で止められるわ、おまけに正教会の賢者

としての権威もある」
そう言った後でエイルの耳元に口を寄せると
―（さらに、異世界の人間ときた）
とささやいた。
「それが魔人じゃなくて何て呼ぶんだよ」

【神と呼べ、神と】
『おいおい』
【ついでに崇めろ】
『ついでかよ』

「アトルも元気でな。でも」
「何だ？」
いきなり腕を組んで悩むような仕草をして見せたエイルに、アトラックは何事かと眉をひそめた。
「オレの居たところ……フォウではさ、アトルみたいなのをこう呼ぶんだ。『鬼畜』ってな」
「は？何でオレが鬼畜なんだよ」
気色ばむアトラックに、エイルはそっとルーチェを指さして見せた。
「子供相手にその……既成事実を作ったりするヤツのことだよ」
「子供相手って……」
アトラックはそう指摘されて自分の妻とエイルを見比べた。
「おい、ルーチェはちゃんと成人してるんだぞ」
「ジャミールの成人は一三歳かよ！」
「こんな時に何をもめているんですか？」
ひそひそ話をするエイルとアトラックを見かねたのか、アプリリアージェが側にやってきた。
「いえね、こいつがルーチェの事を子供だと言ってオレを責めるんですよ」

アトラックは口をとがらせるようにしてアプリリアージェに文句を言った。
「あんたは弟のいたずらを母親に言いつける兄貴かよっ」
エイルはアトラックの告げ口にムッとして口を尖らせた。
「あらあら」
アプリリアージェはにっこりと笑うと、二人を無視してルーチェに尋ねた。
「実は私もちょっと気になっていたんです。ルーチェは実のところおいくつですか？」
尋ねられたルーチェはにっこりと笑い返すと屈託のない声で答えた。
「十二歳」

「ぶっ」
「えええええ！？」
エイルとアプリリアージェ、そしてアトラックの三人は、一瞬の沈黙のあと、異口同音に叫んだ。
「おい、ルーチェっ！」
アトラックの顔はひきつっていた。そしてエイルはその時初めて凍り付いた表情をしたアプリリアージェを見る事になった。
もちろんその場には異様な空気が張り付いていた。

「これこれ、その若さで年を偽るものではないぞ、ルーチェ」
話を聞いていたラシフが今度は首を突っ込んできた。その顔色はまだ悪いままだった。
「ほ、本当は何歳なんですか？」
少しほっとしてエイルはラシフに尋ねた。
「誕生日がくるまではまだ十一歳だ」
「えええええええ？」
「嘘に決まっておる。うろたえるな」

「うろたえるわっ」
「お前がまだ半人前だからうろたえるのだ」
ラシフは勝ち誇ったような顔をすると、恨めしそうな顔を向けるエイルにそう言ってからかった。
「春が来ればルーチェはもう二十歳だ。花嫁としては少々薹がたってきていた所だ」
「は、二十歳だって？」
エイルはむしろ、十二歳と言われた事よりも驚いていた。
「これは本当だぞ」
「私は一人前のつもりなのですが、さすがにうろたえてしまいました」
アプリリアージェはそう言うと参ったという風にラシフに頭を下げた。
「わはは。どうやら私の家系の女は実年齢よりも少々幼く見えるようだな」

『少しじゃないって』
【よくて一四歳くらいかなとは思ってたけど、もう二十歳なんか……】

「十九歳って、オレより年上だぞ。というか、十七歳のネスティより年上にはとても見えないだろ？どっちもアルヴィン系の種族なんだろ？」
「いやいや。次期族長ともなると里の男共は怖じ気づいてなかなか近づこうとせんようでな。このままでは生涯独り身かと案じておったのだ」
「ばばさまが『ハンパなヤツが来たらこの私が叩き殺すから覚悟しておけ』っていつも里中に触れ回っているからではないですか」
ルーチェは不満そうにそう文句を言った。
「何を言う。その私のおかげでお前はこの男と結ばれたのだろうが

？」

「そ、それはそうだけど」

ラシフの反撃に、ルーチェは真っ赤になって白旗を揚げた。ラシフの論理に釈然としないモノを感じつつも、一行は何も言えなかった。

どうやら今日のラシフは体調は悪そうだが舌戦においては絶好調のようだった。

「ところで、賢者殿にいくつか渡すものがある。受け取ってはもらえぬか？」

ラシフは改まった口調になるとエイルにそう言った。エイルのもとへやってきた本来の目的はどうやらその件のようだった。

「渡すもの？」

「皆の前で手渡したい」

エイルはなぜかラシフに手を取られて、里人達の前に引っ張り出された。

そこにはイブロドとメリドが控えていて、メリドは黄色い布で包まれた細長い物を二つ、イブロドは黄色い布がかかって中身が見えない盆をそれぞれ両手で掲げていた。

「渡す物は三つある。まずは一つめだ。これは本人のたっての頼みでな」

ラシフはそう言ってメリドに目配せをした。メリドはラシフに一礼すると、エイルの前に歩み出て、膝をつき頭を垂れた。両手には黄色い棒を掲げたままだ。

「不肖メリド、族長の許可を得、ヴェリーユまでの道案内として賢者様のお供をさせていただきます」

「え？」

エイルはびっくりしてメリドを見た。そしてラシフを見て、最後

にアプリリアージェの方に顔を向けた。そういう話が出来ていたのかと思って確かめたのだ。
だが、アプリリアージェは「私、知りません」という風に小さく首をかしげて見せた。
「すでに道順は説明したとおりなのですが『龍の道』は想像以上に複雑に入り組んでいていかな賢者様といえども初めてでは道に迷いましょう」
メリドはエイルにそう説明をした。
整った精悍な顔の少年兵と言った風情のダーク・アルヴの兵士は、確かに頼りになりそうに見えた。
「でも……」
「さりとてメリドは我ら一族にとって大事な兵士長。新しいデュナンの副兵士長が凄腕とはいえ、肝心の兵士長を失うわけにはいかん。そんなことになればイブロドが泣き叫ぶだろうしの」
「母上！」
ラシフの軽口をイブロドがたしなめた。珍しい構図だった。
「コホン。公の場では族長と呼べ」
「公の場で要らぬ事をおっしゃる方が悪うございます」
「そ、そう言うわけでヴェリーユまでの期限付きだ。遠慮せずに役に立ててくれ。それに」
「それに？」
「先ほども言うたが、何かの形でお前達の役に立ちたいというのはメリドのたっての希望でな。叶えてやってはくれぬか？」

【なるほど】
『恩返し、か。アルヴの一族らしいな』
【まったくやな。断ったらややこしなりそうや】
『ふふ』

「じゃあ、喜んで世話になるよ」

エイルの言葉に、メリドは深々と頭を下げた。
「ありがたき幸せ」
「そのかわり、堅苦しいのはなしって事で頼むよ」
「承知」

『ちょっと信用できないな』
【同意や】

「二つ目は品物だ。これはジャミール一族全員からの贈り物になる」
ラシフの合図でメリドが手に持っていた細長い包みをラシフの前に差し出した。ラシフは二つある包みのうち、長い方を手にとった。
「皆に許しを得て、我ら一族に伝わる妖剣『ゼプス』を賢者に託したい。よいかの？」
「妖剣？」
「『ゼプス』は昔この里の族長でもあったセロドニという伝説の刀工がルーンで鍛えた妖剣だ。妖剣は二振りあって、一つは『ゼプス』もう一振りを『ミュインモス』と言う。二つの剣は一対になっておるのじゃが『ミュインモス』は女用、『ゼプス』は男用の剣と言われておる」
実とのところエイルは妖剣という言葉よりむしろ『一族に伝わる』という方に反応していた。大事な剣だということは、族長しか身につけることが許されていないという服の色と同じ布で丁寧に包まれているのを見ればわかった。
「それって……」
エイルはラシフの手にした袋を受け取るのをためらった。
「『里の宝』とか言うヤツなんじゃないのか？そんな大事な物はいくら何でも受け取れない」
「勘違いするな」
エイルの遠慮は予想していたのだろう。ラシフは用意していた言葉を告げた。

「『里の宝』とは里人そのものであるべきだ。物であっていいはずがない」

理屈はそうかもしれない。だが、それでもエイルは躊躇していた。

「実のところ屋敷に眠っておったこの剣を新しい里に持って行ったものかどうかを悩んでおったのだ。今まで一度も使わなかった剣だしの。この里の守り刀として置いて行く事も考えておった。何にせよ里人は皆私に一任すると言うてくれた。その私が決めた事だ。それは里の総意。それにお前、聞けば剣士のくせに剣を持っておらぬそうではないか？」

【お前の場合、ある意味剣とか要らんしな】

『そうだな』

【でも、今日の試合は失礼千万やったと、俺も思う】

『何故？』

【剣士は剣で戦うもんやろ？結果は一緒やから言うて木の枝とかあり得へんと思うけどな】

『剣は、持ちたくないんだ』

【その理由が俺にはようわからんけど、ファランドールでは礼儀や作法の一環として剣は男女とも必要なもんや】

『そう、か』

【ネスティの懐剣を見たやろ？】

『あ……ああ、そうだな』

「儀仗や枝を剣代わりに使うのは実践ではよいかもしれぬ。だが、しかるべき場所・もしくは場合によっては相手に対し失礼にもあたろう。要らぬ諍いの種にもなりかねん。賢者であろうが無かろうが男子たるもの公式の場では正装として必要な場合もある。飾りに使うにしろ仕立ての良い剣を一振りもっておくのは剣士としてのたしなみではないか？」

「言っている事は、わかる」

「それに、『ゼプス』と『ミュインモス』がなぜ妖剣と呼ばれておるか知っておるか？」
「いや、オレが知るわけないじゃないか」
「ならば教えよう。相当の達人でないと『ゼプス』と『ミュインモス』に宿った真の力は発動しないそうじゃ」
「真の力？」
「言うたじゃろう？高位のルーナーが秘伝のルーンを練り込めて鍛えた特殊な剣だ。こうやって手に持つと羽のように軽い。剣士ではない私でさえ、この剣がただものではない事がわかるほどだ。それともお前程度の腕ではこの剣は使いこなせぬか？」
わかりやすい挑発だったが、エイルは悪い気はしなかった。
「仮にお前が自信がないとしても、私はお前なら使いこなせると信じておる」

【もらっとき】
『え？』
【これはもう剣とかそう言う見た目のものとは意味が違う】
『どういう事だよ』
【相変わらず鈍いやっちゃな】

「ええい、面倒くさいやつだな。里人の総意だぞ？むげに断るつもりか？」

『脅迫だろ』
【まあまあ……それに、いにしえの名工の妖剣っていうのは研究対象として興味深いと思わへんか？オマケに名前も気が利いてる】
『例の古代ディーネ語なのか？』
【ご名答】
『なんて意味なんだよ？』
【『ゼプス』は「夢」。『ミュインモス』は「希望」や】

『妖剣なのに夢っていう名前なのか』
【ルーンで鍛えた剣を妖剣って言うんや。だいたい剣らしくない銘やと思わへんか？俺は剣嫌いのお前が持つのにふさわしい名前やないかと思う】
『――負けたよ』

「正直に言うと、オレは剣が怖いんだ」
「怖い、とな？剣士のくせにか？」
「理由は言えない。だからいつも儀仗を使っているんだ。さっき、枝を使ったのもそのせいだ。失礼な事をしたと反省している。許して欲しい」
ラシフは首を横に振った。
「言いたくなければ理由は聞かぬ。だが」
「でも、その剣だけはありがたく頂戴するよ」
エイルがそう言うと、ラシフはうれしそうに顔を輝かせた。期せずして見守っていた里人達からも安堵の声が漏れた。

『この人でもこんな顔するんだな』
【この顔が見られただけでも、もらって良かったっちゅう気にならへんか？】
『そうだな……うん、そうだな』

エイルはエルデの指示で小柄なラシフと視線を合わせる為に片膝をついた。そして両手を差し出して、ラシフから黄色い布に大事に包まれた妖剣「ゼプス」を受け取った。それは本当に軽く、剣だと言われなければ矢が一本入っているだけなのかと思うほどだった。
剣を渡したラシフは一仕事終えた安堵の表情を見せたが、それも一瞬の事で、エイルに注いでいた視線を外すと、アプリリアージェの顔を探した。
目的のダーク・アルヴはラシフの前方、すぐのところにいた。ア

プリリアージェはラシフの青白い顔を見るとにっこり微笑んで小さく頷いた。
ラシフはそれに答えるように同じく小さく頷いて見せた。

「ずっと気になっていたんですが」
アトラックがその様子を見て、アプリリアージェに小声で尋ねた。
「何です？」
「ファルとティアナを見送った朝、リリアさんはラシフ様にどんな入れ知恵を吹き込んでたんですか？」
「あら」
アプリリアージェも小声で答えた。
「人聞きが悪いですね。吹き込んでなんていませんよ。私はただ……」
「ただ？」
「族長に秘伝のルーンを一つ、教えて差し上げていたのです」
「え？」
「それだけです」
「ルーンって、司令、いやリリアさんが？」
「言ったとおりです」
「でも、フェアリーがルーナーにルーンを教えるって……それも秘伝って……なんですか秘伝って」
「私もルーンの一つくらい知っていますよ。もっとも私が使えるわけではないですけどね」
「どんなルーンなんです？」
「見ていればわかります」
そう言われるともう何を聞いても答えてくれることがないのは、アプリリアージェとつきあいの長いアトラックにはわかっていた。
ここは成り行きを見守るしかないと素直に二人に視線を戻した。

「さて、最後だ。これは私個人からお前に贈るものだ」

そう言うとラシフはイブロドに合図をした。
イブロドは持っていた盆をエイルの前に掲げた。
それを見たティアナが、エイルの横に来て両手を掲げた。さっきもらった剣を一時的に預かるという合図だった。その辺りに気が利くのは近衛軍籍だからこそであろう。王宮の儀式の多くは近衛軍の預かりなのである。
エイルは頷くとティアナの手に黄色い包みを渡した。

ラシフは改めてエルデに向かって口上を述べた。
「最初に出会った時から気になっておったのだが、そのマントはお前には丈はおろか大きさがそもそも合っておらんな」
ラシフはエイルのアルヴスパイアのマントを指さした。
確かにエイルが羽織っていたのはもともとはアトラックが着ていたアルヴサイズのマントで、手直しを加えられているとはいえ、収まりがいいわけではかった。
だが、エイルはラシフが唐突にマントの悪口を言い始めたのかが理解できなかった。
「かっこ悪くても、こいつは性能がいいんだ」
「うむ。そのマントの性能は聞いた。そこでだ」
ラシフは盆の上にかけられた黄色い布をとった。そこには薄茶色の柔らかそうな布がきちんと折りたたまれていた。
「お前の背丈に合わせてマントを仕立てた。これを代わりに羽織ってはくれないか？」
「いや、そう言われてもアルヴスパイアに代わるマントは」
エイルは正直に言ってこれはありがた迷惑だと思った。
「性能については案ずるな。アルヴスパイアもよい生地だが、これはそれよりさらに性能がいい」
「え？」
「嘘は言わん。同じ強度ならより薄く、同じ厚さならより強い。汗は通すが雨や風は通さず、火にくべても燃えぬ。切りや裂きにはめ

っぽう強く生半可な剣ではこの布に傷一つ付けることすら出来ぬ。さらに雨をはじき水に浮く。気候よく邪魔になれば、こうしてまとめるとごくごく小さくもなる」

「へえ……」

エイルは興味を持ってマントを手にとった。ラシフの言うとおりアルヴスパイアのマントより断然軽かった。

「確かに軽いし、手触りがなめらかで気持ちがいいな」

【もらっとこ】

『なんか、特別製っぽくて悪いよ』

【特別製やからもらっとかなアカンと思うで】

「是非お納め下さい、エイル様」

盆を掲げたイブロドがエイルにそう進言した。控えめなイブロドがそう言う態度をとるのは意外だった。

「ラシフ様はそのマントをお作りになるのに二晩も夜なべをされたのです。我々の手伝いを断りこれは自分一人だけでやるのだとダダをこねられてまで」

『……』

【それで顔色が悪いんか。ルーンもたっぷり使うたんやろな】

『オレ……』

「いらぬ事を言うでない、イブロド」

ラシフは鋭い声で娘を叱った。

「て、手伝いを断ったのは、私にしか出来ぬ細工やルーンが多々あったからだ。いや、そう言うことはどうでもいい事。そう言うわけで性能は私が保証する」

「……」

「もし遠慮しておるなら、それは無用だ」

「でも」
「是非に使ってはくれまいか？お前には感謝しても仕切れないほどの恩がある。むろんこれでそれが返せたと思っているわけではない。そもそもこれは恩返しの為ではない。ただ、純粋にお前に着て欲しいと思って作ったのだ」
なかなか受け取ろうとしないエイルの態度に、ラシフは不安そうな顔をして懇願するような声になった。
「気持ちというものは、いざとなるとうまく言葉では言えぬものだな。つまり、私はお前が着たら似合うだろうな、と思いながら仕立てたのだ」

【何迷ってんねん】
『どうしていいかわからないんだよ！』
【何でやねん】
『オレ、こんなに親切にしてもらった事、初めてなんだ』
【……エイル】
『それに、おいエルデ』
【ん？】
『代われ』
【え？俺にこの場の雰囲気引き受けろ言うんか？】
『ラシフとの人間関係はお前の担当だろ？俺はほとんど寝てたんだぞ』
【いや、そやかて】
『か・わ・れっ！礼儀なんだろ。俺は剣をもらった。充分だよ。だから今度はお前だ』
【うう】

エルデはエイルから体を受け取ると、一度そっと目を閉じてから、着ていたマントを脱いだ。横にいたティアナがその脱いだマントを受け取った。

それを見たラシフはまるで少女のように嬉しそうな微笑みを浮かべると、エルデが持っていたマントを受け取って広げ「後ろを向け」と言った。
エルデは無言のまま素直にそれに従い、ラシフに背中を向けた。
ラシフは広げた薄茶色の布で出来たフード付きのマントをそっとエイルにかけてやった。
その時だった。ラシフの体がグラリと傾いた。
「母上！」
ラシフのその様子を見ていたイブロドはそう叫ぶと盆を取り落とした。
里人からどよめきがあがった。ティアナがイブロドを抱き止めようと動き出したが、誰よりもエルデの反応が早かった。
エルデは倒れる寸前でラシフを抱き止める事に成功した。小柄で、案の定ラシフは子供のように軽かった。
「大丈夫か？」
エルデはラシフを抱き上げるようにして立たせた。幸い、ラシフには意識があった。
「心配は無用だ。ただの立ちくらみだ……すまんな」
そう言ったラシフだったが、自力で立とうとしても体に力が入らないようだった。

【思てたより、そうとうヘバってる】
『大丈夫なのか？』
【命には別状無いやろけど……】

エルデはしっかりラシフの体を支え直そうと腕を背中に回した。
だがその拍子にラシフが被っていた例の長い頭巾に引っかかり、そのままうっかり頭巾を剥ぎ取るような形になってしまった。
ラシフの頭を覆っていた頭巾が地面に落ちると、廻りに大きなざわめきが起こった。

エルデはラシフの姿を見て息を呑んだ。
そこにはもうラシフの象徴とも言えたあの地面すれすれまであった豊かで長い髪はなかった。薄茶色の髪は首の下あたりで切りそろえられ、つまりはすっかり短くなっていた。
ただ、それをごまかす為なのだろうか、耳の近くの両脇の髪だけは房にして長いまま残し、髪飾りを編み込んで前に垂らしていた。
頭巾を被りながらもその長い髪を前に垂らして見せていたので、誰も気付かなかったのだ。

「本当にただの立ちくらみだ。もう、大丈夫」
「族長、あんた……」
エルデはもちろん既に察していた。ラシフの髪の行方を。
「バレてしもうたな。お前には秘密にしておくつもりだったのだが」
「――自慢の髪やったんやろ？」
「自慢などしとらんわ」
「あんなに長くてきれいな髪やったのに……」
「ふふ。お前がそんなことを言ってくれるとはな」
「何でそこまでして……ウチなんかに……」
「賢者様ともあろうものが、妙な格好をしていてはおかしかろうと思ってな。お節介とは思うたが、私にはそれくらいしか思いつかぬ故」
エルデは羽織った薄茶色のマントの手触りを確かめるようにそっと撫でてみた。
「これ、髪の毛とは思われへん……特殊な布やな」
「私のとっておきのルーンを使った、それこそ自慢の布だ。他の誰にもこれは出来ん。縫製ができるのも私のルーンだけだ」

【アホめ……】
『エルデ』
【こいつのことや。たぶんルーンを強化する為に自分の血をかなり

使うたんやろな】
『そう、なのか？』
【そやなかったらあの血の気が多いラシフがこれほどまで消耗せえへんやろ。……くそ！】
「うん……ええ出来やな」
「着てくれるか」
「もちろんや。ありがたく、着せてもらうわ」
「そうか。うむ。よかった」
「その代わり、もうこんな真似は二度としたらアカンで」
「最後までこの私に説教か」
「ああ、こんな説教やったらナンボでもしたる」
エルデはラシフを抱えたままイブロドを見た。
「イブロド！」
「はい」
「この暴走癖のある族長をちゃんと見といてくれ。ウチからのお願いや」
「はい。でも今度の事は大目に見て上げて下さい。私もまったく止めるつもりはありませんでしたよ」
「ホンマに、この里の連中は……」
エルデは言葉を切ると、ラシフを抱いたまま右手にノルンを呼び出した。
「な、何をする気だ？」
気配を察したラシフが体を硬くした。
「ええ子やからじっとしといてや」
そうラシフに声をかけると、エルデは素早く短いルーンを唱えた。その回復ルーンは詠唱が終わるとすぐに効果が現れた。ラシフの顔に朱がさし、腕に力が入るのがエルデに伝わった。
「立てるか？」
エルデはラシフに尋ねた。ラシフはうなずいた。

「大丈夫だ。しかし……」
「ん？」
「もう少しこのままでいさせてくれぬか？」
「え？」
「こうしておるとけっこう心地よい」
「族長……」
「お別れだな」
ラシフがぽつりと言った。
「そやな」
エルデも改めてその事に思い至った。おそらくここで別れたら、もう二度と会うこともないだろう。
「不思議だな。こうしているとなぜかお前とは、ずっと以前からの知り合いのような気になってくる」
里人達は、咳払い一つ立てずに、二人のやりとりに耳を澄ませていた。
「出会ってからまだ一月も経っておらんというのにな」
「そやな」
「おまけにその間お前は一週間も眠っておったのだから、実質は顔を合わせたのはもっと短い」
「そやな」
「お前とはもう少しゆっくりと話がしたかった」
そういうラシフの声は小さく震えていた。
「……」

【そやな】
『そうだな』

思えばエルデにしてもエイルにしても、落ち着いてラシフと二人きりで話をした記憶があまりない。雑事に明け暮れていたラシフにはもとより時間がなく、目を覚ましたエルデもラシフ同様に結構多

忙だった。里の豊富な備蓄薬材を使い、手が空いているジャミールのハイレーン達を集めて里人の為の常備薬の調合・作成の指揮を執っていたのだ。

結局、二人が顔を合わせるのは食事の時間くらいだった。そしてもちろんその場は二人だけというわけではない。

「向こうに着いたら、家を建てるつもりだ」

「あ、ああ？」

ラシフは突然話題を変えた。

「ここと違って、一年中暖かな場所らしい」

「らしいな」

「気候が良いのなら質素な家でよいと思っていたのだが、実は皆にわがままを言って、一部屋余分に作ってもらうことにした」

エルデにはラシフが何を話そうとしているのかがわからなかった。だから黙って話をきいた。しかし、ラシフはエルデが考えるよりもくせ者だった。

「それがどういう意味かわかるか？」

そうやっていきなりわかるはずもない質問をしてきたのだ。

「え？」

ラシフはしかし、エルデに回答を期待してたわけではなかった。

「ニブいヤツだな。それではこの先、とうてい若い女子（おなご）にはもてまいて」

「わ、悪かったな。ほっといてくれ」

エルデは思わずムッとしてそういったが、ラシフはそれに反応しなかった。

その代わりにエルデの背中に回した腕に力を入れ、強く抱きしめると自分の頬をエルデの頬に重ねた。その様子に誰もが小さく驚きの声を上げた。

族長ラシフ・ジャミールがそう言うことをするのを見るのは初めてだったのだ。

びっくりしたのはエルデも同様だった。だが、その次の一言にはもっと驚いた。
「一緒に来ぬか？我らと向こうで暮らさぬか？」
「え？」
ラシフの声は明らかに鼻声になっていた。族長のそんな声を聞くのもこれまた多くの里人にとっては初めてのことだった。
「私はお前のことが大嫌いだ。里はお前のおかげですっかり変わってしまった。そもそもこの里を失うた」
「……」
「それだけではないぞ。お前は私の事もすっかり引っかき回してしまった」
「……」
「私はお前に会うまであんなに腹を立てたことはなかった。私はあんなに悔しい思いをしたことはなかった。だが、あんなに爽快な気分になったこともなかった」
エルデの顔のすぐ横に、ダーク・アルヴの褐色の頬があった。そしてその頬はもうすでに涙で濡れて、それはエイルの頬をも同時に濡らしていた。
「わかっておるのか、この小童め。私はお前と別れとうないと言っておるのだ」
ラシフはそう言うとエイルを抱いた腕にいっそう力を込めた。
「増やした一部屋はお前の為の部屋だ」
「あ……」
「お前専用の家を建てるほどの余裕はない。だから部屋でがまんせい」
「ウチは」
「わかっておる。お前にはお前のやるべき事があるのは、端からわかっておる」
寂しそうなラシフの言葉に、エルデは小さく頷いた。
「うん」

「だが、寂しいのだ。お前と別れるのがこんなにも辛いのだ。こんな気持ちも……初めての事だ。私をこんな気持ちにさせるお前はいったい何者だ？」

エルデは目を閉じた。もう、まぶたを開けていられなかった。ラシフのそのあまりに無防備な心は鋭い楔のように、エルデの心の深くに届いていた。

エルデは少しためらったが、両手をラシフの細い腰に回すと、ゆっくりと力をいれた。ラシフは自分がエルデにしっかりと抱きしめられたことを感じると、思わず小さく嗚咽が出た。

「だから、無理は言わん。その代わり、お願いだ。やるべき事が終わったら必ず里に顔を見せてくれ」

完全に涙声になっていたラシフのその言葉は不明瞭で、少し離れた里人の耳にはもうとどかなかった。だが、それでも里人達は肩を震わせている自分たちの小さな、そして大事な族長を優しく見守っていた。

「二つで揃いの妖剣の一方をお前に託したのは、あの揃いの妖剣はたとえ離れても必ずもう一度出会うという言い伝えがあるからだ。だから、必ず新しいジャミールの里に来い。そして色々な話をしよう」

「うん。そうやな」

「お前に聞いて欲しい話がたくさんある。いや、向こうに行けばもっともっと増えるだろう。お前達には聞かせられないようなアトラックの恥ずかしい話もルーチェから山ほど仕入れておく」

「そいつは……めっちゃ楽しみやな」

「その時は、お前の話もたくさん聞かせてくれ」

「わかった」

「だからそれまで、くれぐれも息災であれ」

「族長こそ……もう歳やねんから、今回みたいなことして俺に心配かけさせんといてくれ」

「年寄り扱いするな。私はまだ若い。それにダーク・アルヴは長命

だ。ピクシィが心配することではないわ」
「そうやったな」
「だが、できれば出来るだけ早く来て欲しい」
「うん。必ず行く」
「そうか。なんなら来週でもいいぞ。それが駄目なら来月でもいい。それが駄目なら……」
エルデはたまらなくなってラシフを抱いた手に力を入れた。
ラシフの言葉はそこで途切れ、また一つ嗚咽が漏れた。
「すまぬ。もう駄々はこねぬ」
「うん」
「そうだ、忘れておった。最後にもう一つだけ言わせてくれ」
エイルは頷いた。というのも、実のところエルデはもう言葉を出せなかったのだ。声を出して、自分がどういう状態なのかを知られるのが嫌だった。
ラシフは改めてエルデの体に回した両腕に力を入れると小さくため息をつき、黒髪に埋まった耳元に口を寄せて短い言葉をつぶやいた。
「ありがとう」
そして一瞬ためらった後に少し体を引くと、エルデの濡れた頬に小さく口づけ、もう一度ささやいた。
「本当に……ありがとう」
その言葉を聞いたエルデは、離れようとした小さなぬくもりを思わず引き寄せると、その体を再び抱きしめた。
「会いに行く。ウチの方こそ、おおきに、や。大事にするわ、このマント」
「うむ……。うむ……」
ラシフの言葉は、しらずしらず暖かい掌で心を包まれるようなぬくもりをエルデに与えていた。どこかしら懐かしい、そして大切な気持ちで満たされるような気がしたのだ。すでに熱くなっていた目頭から涙があふれているのがわかった。だが、頬を濡らしているの

はほとんどラシフのものだった。
「必ずだぞ？」
そう言って念を押すラシフはエルデに抱かれて泣いていた。自分もエルデの体を抱きしめながら。
「待っておる」
「うん」
「お前が私をこんなに泣かせたのだぞ？だから詫びを入れに来るのだぞ」
「うん」
「里人にこのようなみっともない姿をさらしたのもお前のせいなのだぞ？」
「うん」
「『うん』ばかりだな」
「うん」
「ばかたれ」
それだけ言うと、ラシフはエイルの胸に顔を埋め、今度は声を上げて泣き始めた。
「ばかたれ……」

「リリアさん、秘伝のルーンって言うのは、まさか」
「まさか、ですよ」
「ですか」
「ルーンとはもともとは思いがこもった言葉だそうです。であれば、あれも立派なルーンでしょう？言葉は思いを伝えるもの。簡単な言葉ほど、純粋な気持ちが強くつたわるのだと思いませんか？」
「まあ、そういうものですかね」
「そういうものですよ。でも」
「え？」
「今回はそれさえも、蛇足だったようですね」
アトラックは改めて目の前の二人を見守った。そのアトラックの

手を、ルーチェが黙って握りしめた。

「嘘つきめ」

別れ際に、ラシフはアプリリアージェにそう言った。

「おいおい泣いたのは私の方ではないか」

「あらあら」

アプリリアージェはそう言っていつもの微笑でこう答えた。

「私は『おいおい』泣かせる方法を教えるとは言いましたが、『エイル君をおいおい泣かせる方法』とは言ってませんよ」

「詭弁にもほどがある」

ラシフは憤慨したようにそう文句を言ったが、アプリリアージェはにっこりと笑って首をかしげて見せた。

「でも、エイル君も泣いてましたよ」

【泣いてへんわ！】

『嘘つけ！』

別れの時がやってきた。

「達者でな。また会おう」

エルデのルーンが効いたのだろう。すがすがしい顔をしたラシフが短くなった髪を翻した。

「言い忘れたけど！」

ラシフの後ろ姿を見たエルデは思わずその背中に声をかけた。

「なんだ？」

そう言うとラシフは立ち止まったが、背中を向けたままだった。

「長い髪も綺麗やったけど、その髪型も似合ってると思う。少なくとも俺は好きやで」

ラシフは無言だった。イブロドがそっとその族長の横に寄り添った。

背中を向けたままでラシフは小さく手を挙げると、ゆっくりと歩

き出した。
　ラシフの表情はわからなかったが、一つだけ確実な事があった。
アトラックの先導でジャミールの一族が踏み出した一歩は、歴史的な第一歩であると言う事を。

　エイル達は最後尾をつとめるラシフの姿が見えなくなるまでずっと見送っていた。
　エルデは無言で、何度も何度も振り返るラシフの顔をまぶたに焼き付けていた。

「殺されかけた相手だというのに、エイル君達はすっかりラシフ様のとりこですね」
　ラシフの姿が見えなくなってもまだぼうっと立っているエルデに、アプリリアージェが嫌みとも言える言葉を投げた。
「そろそろネスティがヤキモチを焼いてしまいますよ？」
「え？」
　エルデはアプリリアージェの視線をはずしてエルネスティーネの方を見た。だが、エルネスティーネもエルデと同じように消え去った森の入り口をじっと見つめていた。
「みんな、無事に着くといいですね」
　一行の視線に気付いたエルネスティーネは、そう言って微笑むと、当たり前のようにすっとエルデの隣に寄り添った。

【そろそろ代われ】
『やだよ』
【代わらんとキレるで。泣くで？叫ぶで？】
『おいおい』

　アプリリアージェはネスティのその様子を見て可笑しそうに小さ

くクスっと笑うと、瞳髪黒色の少年の肩をポンっと叩いた。
「さあ、そろそろ私達も出発しましょう」

シルフィード王国のファルンガ地方南東の温暖な海岸沿いに「アアク」という小さな町がある。
そこの住民にはジャミール姓が多く、カラティア家の血を受け継ぎ、歴史上何人もの賢者を排出した一族の町として伝えられている。
町の人々の多くは果樹の栽培や漁業で生計を立てているが、特産と呼べるのはやはりその美しい織物で、特に金布と呼ばれるつやのある見事な黄色の布は「ジャミールの金」と呼ばれ、珍重されている。町の周りにはその布を染めるための染料となるクチナシの群生があり、「クチナシの町」とも呼ばれる。
また、檸檬の栽培も盛んで、量は多くないものの、その香りの高さはファランドールでも一、二を争うと言われている。
町の歴史は比較的新しく、『月の大戦』の直前に開墾によって作られた町だという。当初、人口の多くはダーク・アルヴで、町の行事には今でもその頃の名残が残っている。
普通の結婚式とは別に年に一度、黒の六月に執り行われる「合同婚儀」は秋の収穫祭を兼ねた盛大なもので、遠くに済むアアク出身の人間がわざわざ駆けつける事もめずらしくない。式の進行は町長の役目で、黄色い民族衣装を纏った町長の前で、夫婦はそれぞれ長く伝えられている誓いの言葉を口にする。
町史を紐解くと、そこには初代町長としてラシフ・ジャミール、翌年就任した二代目にはルーチェ・ジャミールの名を見つける事ができる。ルーチェ・ジャミールの任期は二十年に及び、それを継いだ三代目の町長の名はファーン・ジャミールである。

# 第七十話　龍の道

「お前、ルーンはもう使えるのか？」
一行を先導していたダーク・アルヴは、ファルケンハインにそう声をかけられると、振り返った。だが、その視線はファルケンハインではなくティアナに注がれていた。
「一昨日、ようやくだ」
そういうメリドの表情は恨めしげであった。
「それは、すまなかったな」
「いや」
ティアナが素直にあやまると、メリドはばつが悪そうに口ごもり、再び前を向いて歩き始めた。
文字通り人っ子一人いなくなったジャミールの里をラシフ達と反対側に向かって歩き出した一行は、里を抜けて山道に入り込んでいた。
ファルケンハインがメリドに声をかけたのは、里の入口でラシフと別れて小一時間程経った頃であった。
一行は『龍の道』と呼ばれる地下通路の入り口に向かっていた。それはノーム山脈を越える必要のない、ヴェリーユへの最短経路であった。
その『龍の道』の入口は三聖「深紅の綺羅」による結界が施されており、常人に見つける事はまずムリだと言う話であった。

「ここだ」
メリドはそう告げると何の変哲もない山道の途中で立ち止まった。そこは針葉樹林の中の獣道で、周りの風景には特に特徴的な物は何もない。
「特に何もないようだが」

アキラはそう言って地面を強く踏み込んでみたが、もちろん何の変化もなかった。
「あなたにはわかりますか？」
アプリリアージェに問われて、エイル、いやエルデはしかし首を横に振った。
「さすが三聖の結界と言うべきやろな。族長が念のためにメリドを付けてくれたのは大正解や」
アプリリアージェはエルデの言葉の中に微妙な悔しさが滲んでいるのを感じていた。つまり、本当に強い結界に守られていると言う事である。
「出来るだけ俺に近づいて、ひとかたまりになれ」
一行は顔を見合わせたが、とりあえず案内役のメリドの言う通りにした。
ずっとエイルの横を歩いていたネスティは自分の体をぴったりエイルに寄り添わせると戸惑うエイルの袖を掴んでぎゅっと引っ張った。ティアナはメリドとエイルに触れないように慎重に立ち位置を選んでいた。ファルケンハインはそんなティアナの様子を見て苦笑した。
「では、ゆくぞ」
そう言うが早いが、メリドは懐から小さな石……神痕が書かれたルーンストーンを取り出すと、短いルーンを唱えて地面に叩き付けた。

一瞬後、一行は暗闇の中にいた。
とはいえすぐに視界はひらけた。エルデのルーンにより儀仗ノルンの頭頂部から光が発せられたのだ。
「これを」
エイル、いやエルデはあらかじめ用意していたルナタイトに穴を開けて紐を通した首飾りを各自に渡した。
「首からぶら下げるもよし、手に持つもよし、棒に巻き付けるもよ

しや。ええか？」
　一同は言われたとおりにまず首にそれをぶら下げた。それを見届けると何かを呟きながらエルデが儀仗を一振りした。すると細かい光が辺りに降り注ぎ、同時に全員のルナタイトが光り出した。

　ルナタイト。
　すなわち自光石と呼ばれる石の一種である。衝撃を与えて光るセレナタイトとの違いは、発光させる為にはルーンが必要であること、ルーナーが明るさを調整出来ることと、そしてルーナーの意識がなくなると消えることだが、なんと言っても最も大きな違いは、ルナタイトはセレナタイトと違って消費型の発光石ではない事だ。
　便利な石だがその分高価で、そもそも石を制御できるルーナーは限られているのが問題であった。

「ここが『龍の道』ですか」
　アプリリアージェがルナタイトを掌に巻き付け直しながら柔らかい灯りに浮かびあがった壁や天井を見渡してつぶやいた。それを見習って各自が思い思いにルナタイトの取り付け場所を変えた。灯りを首からぶら下げると手ぶらになるのは良いのだが、顔が下から照らされてかえって足下の視界が悪くなる事に気付いたのだ。
「ここは私たちが閉じ込められていた『龍の檻』と似た感じですね」
　エルネスティーネがそう言うとファルケンハインはうなずいた。
「そうだな」
　周りは全て岩。足もとも岩だが意外に平坦で、二頭立ての馬車程度であれば通れるほどの広さの道が続いており、歩くのには全く支障がなさそうだった。
　その道は緩やかに曲がりくねってずっと奥へと続いているようだった。もちろん、ルナタイトの光が届かない奥の方は暗闇で先はわからない。
「ずっとこんな様子だ。ただ周りの岩は場所によって種類が変わる。

この道を伝ってヴェリーユまでいける」
「ざっとどれくらいの行程なのだ？」
ティアナは携行食糧の心配をしていた。水の心配は要らないといわれていたが、それでも各自水筒が二つだけというのは安心できる量ではなかった。
「そうだな……」
メリドはチラっとエルネスティーネを見てから答えた。
「それなりに歩きづめで三日もあれば着くだろう」
「なるほど。道案内、頼りにしている」
ティアナはそう言ってうなずいた。三日ならば……余裕を持って四日だとしても水以外は心配なさそうだった。
「ではそろそろ行こう。絶対にはぐれないようにしてくれ」
メリドがそう言った時だった。全員のルナタイトが一斉に消えた。だが、声を出す間もなく再び光り出した。
何が起こったのか……アプリリアージェはすぐに原因を特定したが、声よりも先に息を呑む音がすぐ側のエイルの耳に届いた。
次いで、呻くような声が全員の耳に届いた。

「蒼穹の……台！」
アプリリアージェの視線の先、一行の後ろ側にその少年は青白い色の儀仗を持って静かに立っていた。
「やあ、また会ったね」
例によって「蒼穹の台」（そうきゅうのうてな）は、エイル以外の随行者には一切関心を示している様子がなく、その真っ赤に開かれた三つの目はただ真っ直ぐに目の前に立つピクシィ……儀仗ノルンを握りしめているエルデに注がれていた。
突然の三聖の出現には、さすがのエルデも言葉を失っていた。
ルナタイトの灯りがいったん消え、そして再び灯った現象は、すなわちエアの中である事を示していた。エルデのルーンが「神の空間」によって消され「蒼穹の台」イオス・オシュティーフェが改め

て灯しなおしたのである。

「『会った』ではなく、正確にいうと、『待っていた』かな。いや、『見つけた』、がより正しいのかもしれないね」

『おい』

【もう遅い。「神の空間」の中や】

『こいつ……いつもいつも突然なんだよ』

【お前が気配を感じられへんのやから、しゃあないやろ】

『殺気が全然無いんだ。今だってまったく感じない』

【そやな、前の時も敵意はなかったしな】

『なのにこんなにヤバイって思うのは何故なんだ？』

【……】

「蒼穹の台」ことイオス・オシュティーフェを睨むエルデの袖を、エルネスティーネはぎゅっと握ったまま、しかしその目は初めて見る三聖の姿に釘付けになっていた。エルネスティーネに限らず、その場に居た全員の視線は小柄なアルヴィンの少年に注がれていた。

そして誰も動こうとしなかった。動けなかったのだ。もちろんイオスがルーンで彼らを縛り付けていたのではない。濃い紺色のローヴを纏ったアルヴィンの少年の出現は、一行の時間をそこで切り取ったように止めてしまっていた。

「待っていた？」

エルデがようやく声を出した。

「うん。待っていたよ、賢者エイル・エイミイ。いや……」

イオスはそこでいったん言葉を切ると、手に持った儀仗の頭の部分をエルデに突きつけるようにして続けた。

「賢者エルデ・ヴァイス」

「！」

それを聞いたアプリリアージェは全身から力が抜けて行くのを感じた。緊張がほぐれたのではなく、力が入らなくなったのだ。
「蒼穹の台」は瞳髪黒色の少年賢者の現名を言い当てた。エイル・エイミイではなくエルデ・ヴァイスだと。
―（全てを見抜いている？）
もしそうであれば、初めて会ったあの時と今が決定的に違うということを示していた。三聖「蒼穹の台」は賢者エルデ・ヴァイスの情報を得た上で、こうやって会いに来たのだ。
アプリリアージェにしても「蒼穹の台」からは今のところ敵意や憎悪は感じていなかった。だが相手は普通の人間の常識などおそよ当てはまらないと思われる三聖である。賢者ですら普通の人間に対して感情の揺らぎを見せる事はないといわれている。エルデのような例外はあるが、アプリリアージェが知る他の二人の賢者、「二藍の旋律」ラウ・ラ＝レイと「群青の矛」ファーン・カンフリーエに関してはそうだった。だがエルデとて「その気になれば」そんなものを押さえるくらいは容易な事なのだろうということは想像に難くない。三聖ともなれば言わずもがなである。

「ここにいるという事は「真赭の頤」（まそほのおとがい）の庵へいくつもりなのだろう？」

【くそ。行く先までお見通しか】
『ここで待っていたってことは、そうだよな』

「そのつもりです」
エルデは感情を抑えた声で、しかし素直に答えた。「神の空間」では嘘をついても意味をなさないからだが、そもそも隠し立てする意味もないと判断してのことであった。
「そうか。でも、君が欲しいものはもうそこにはないよ」
「え？」

イオスはエルデに注いだ視線を動かすことなく懐に手を入れると、そこから何かを取り出した。
「儀仗を掲げなさい」
イオスの言葉の調子が変わった。それは命令口調と言うほど強くは無かったが、相手に有無を言わさない力があった。
エルデは言われるままに儀仗ノルンを顔の高さで水平に構えた。だが、それはイオスの命令に盲目的に従ったのではない。そもそも「神の空間」においてはイオスが命令したことは「本当」になる。であれば、強制的に命令に従わせられるより自発的に行動した方がいいというエルデの意地が働いたものだろう。
そもそもイオスの態度や言葉に危険のようなものは感じなかった。「三聖」たるイオスがこうしてわざわざ自分達の前に姿を現してまで何かを伝えようとしているのである。それが一体何なのかを知りたいという好奇心が働いていた事も否定できない。
「へえ。変わった儀仗だね……なるほどルーンで撚り合わせているのか」
エルデはルーンを唱える時のいつもの格好のまま、これも正直に答えた。
「私の血をもって育てた三本の宿り木を、ルーンで一体化してあります」
「簡単に言うけど、これはかなり複雑なルーンが仕掛けてあるね。大した技物だ。それに何より、美しい」
イオスはエルデの儀仗「ノルン」を感心したように見つめるとそう褒め称えた。「三聖」がわざわざ世辞を言うことは考えられない。本当に感心しているのであろう。

『すごいんだ、儀仗ノルン』
【あ、当たり前や】
『でも、お前の血で育てた木で出来ているとは知らなかったな』
【聞かれてへんのに答える筋はないやろ】

『でも、お前は今聞かれてないのに答えたじゃないか』

【あ】

イオスは懐から出した物をエルデに示した。

イオスが手に持っている物を認識したエルデの顔色が変わった。

エルデが何かを言おうとする前に、イオスはエルデの方に向かって下手からゆっくりその小さな物体を放り投げた。

それは弧を描くように空（くう）を泳ぐと、まるで吸い寄せられるかのように正確にエルデの持つ儀仗の頭頂部に当たった。

すると次の瞬間にはその儀仗ノルンに埋め込まれていた一つのスフィアが強く輝きだした。それは今までエルデが灯り代わりに使っていたスフィアの青っぽい輝きとは全く違う、真っ白な強い光だった。

『！』

【これは】

「確かに渡したよ、君が探してる「宝鍵」の欠片だ」

ただ息を呑むだけのエルデに、イオスはこともなげにそう言った。

「これを取りに行くつもりだったんだろう？」

エルデとしてはただ頷くしかなかった。

「でも……なぜ？」

そしてかろうじてそれだけ問いかけることができた。イオスとの会話では言葉は慎重に選ばなければならない。ここは彼の『神の空間』なのだから。

「「真赭の頤」が君に託したものだ。心配しなくても取り上げたりはしないよ」

「……」

「使い方は知っているね？」

イオスの問いに、しかしエルデは無言だった。

「そう構える事はないよ。とは言え『ここ』じゃ君は使えないだろうから、ここから「龍墓」への道は僕が示そう」

そう言うとイオスは自分の青白い儀仗を掲げ、小さく何かをつぶやいた。それは本当に囁くような小さな声だったが、静寂が支配するその場においては全員の耳にはっきりと聞こえた。

「青の番人「蒼穹の台」の名において命ずる。ここにある赤き龍の口を示せ」

その声に呼応するように、儀仗の頭頂部から強く青い光が放たれた。

『今のって、例のプリズムなんだよな？』

【そやな】

『プリズム……「宝鍵」が四つあるって言ってたのは本当なんだ』

【そやな】

エイルの言うように光を放つスフィアの形は小さなプリズムのように見えた。丁度エルデの持つプリズム、いや「宝鍵」と同じくらいの大きさである。

同じくそのプリズムの光を見つめるアプリリアージェの状況把握は、実のところ処理する情報が多様過ぎて理解が追いついているとは言い難かった。優秀な頭脳は猛烈な速度で整理・演算をしているのだが、あっと言う間に次の状況が生まれ、そしてそれは変化していく……。

アキラとてそれは同様だった。

イオスをみとめて剣に手をやろうとした瞬間、アプリリアージェにそれを止められた。その時思わず見つめた黒髪のダーク・アルヴの目に宿る緊迫感をいまだに感じたままだった。アプリリアージェの気に一瞬で気圧されたのだ。

絶対に動くな！

その目はそう告げていた。そうなると彼の選択肢は成り行きを眺める事、それだけだった。

アキラにとってエイル・エイミイの本当の名前がエルデ・ヴァイスだということなどはこの際どうでもいいことだった。それよりも状況が全く飲み込めていない事が焦燥感をあおった。伝説の「宝鍵」や「龍墓」という名前が当たり前のように告げられている状況も異常であったが、それよりもなによりも同じく伝説上の人物と思われていた三聖の一人「蒼穹の台」本人を目の当たりにしていること、そして確実に何か大きな流れが動き始めたことを感じながらも、今自分には何も出来ないという苛立ちが彼を苛み、それは汗という形をとって背中を伝った。

イオスが自らの「宝鍵」を使って放った青い光は当初は拡散していたが、やがて一つの地点を指し示すかのように光を収束させていった。

その一点とはエルデ達の前方十メートルほどの地点で、そこには光が全て吸収されてしまったかのような真っ黒な空間が宙に浮いていた。

その空間の出現を確認すると、イオスが口を開いた。

「時間はあまりない。「宝鍵」を受け取る必要はないにせよ、「真赭の頤」には会いたいだろう？」

「え？」

【い、今、なんて？】

『確かに言ったぞ。「真赭の頤」に会いたいかって』

「「真赭の頤」は……」

「死んだはず、だと？」

エルデはうなずいた。

「ラウ……いえ「二藍の旋律」に聞きました」
「二藍の言った事は間違いではない。「真赭の頤」は僕がこの手で処刑したんだからね」
　こともなげにそう言ったイオスの言葉が生んだ、何とも言えない空気がその場に流れた。無言のままのエルデだったが、ノルンを持つ手が小刻みに震えているのがアプリリアージェには見て取れた。その震える手元を見て、イオスは静かな口調のまま続けた。
「でも、今言った事も本当だ。君が師匠に会いたいのなら急いだ方がいい。「宝鍵」を持っている君であれば、その入り口から入れる。「龍墓」……『時のゆりかご』へね」
　そう言うと、改めてイオスは青白い儀仗の先で黒い空間を指し示した。
「それからもう一つ。「真赭の頤」の死をラウに聞くまで知らなかったということは、彼が三聖である僕に処刑されなければならなかった事件の事を知らないという事だね？」
　エルデはうなずいた。無言だった。
「君をあの場から逃がす為に、彼は「授名の儀」の立会人である賢者を四人も殺害したんだよ」
「え？」
「賢者である君も知っている通りだ。「三聖」は法に背き罪を犯した賢者を裁く。それが僕のやった全てだよ。あの日、君の師は弟子である君の「授名の儀」に立ち会った賢者を全て殺した。それが「真赭の頤」が犯した罪。そしてあの日の夜、僕は君を見つけられなかった。「真赭の頤」は僕にこう言ったんだ。『弟子は授名の儀に喰われた」とね。彼は賢者を殺害し、僕に嘘をついた。僕から言えるのはそれだけだ、名簿にない名を持つ賢者、エルデ・ヴァイスよ」
　イオスの話を聞いて、エルデは震えが止まってきた。頭の中でイオスから得た情報と断片的にしか残っていない『あの日』の記憶が有機的に繋がり始めたのだ。

エルデは深呼吸するとノルンを握りしめた。
今は……
そう、どちらにしろ今は「蒼穹の台」の助言に従う事が最良の道だと決めたのだ。

「わかりました。『時のゆりかご』に入ることにします」
エルデの言葉にイオスは満足そうにうなずいた。
「「真赭の頤」の庵はこの「深紅の綺羅」（しんこうのきら）の「龍墓」と一部が融合しているようだね。全く彼らのルーンに対する研究と技巧には恐れ入るよ。「龍墓」に設置された彼の庵がヴェリーユに通じている。ヴェリーユは知っているね？」
エルデはうなずいた。
「つまりここから「龍墓」へ入ればヴェリーユの町中へ直接行ける。君は師匠に会った後、ヴェリーユへ行くといい。ヴェリーユには「二藍の旋律」を待機させている。あそこで彼女達と落ち合って話を詳しく聞くべきだからね。ファランドールが今、どうなっているのかを」
「ファランドールが？」
イオスはうなずくと儀仗を下ろした。
「三聖「蒼穹の台」」
会話に割って入る事を承知でアプリリアージェがそう声をかけた。
呼びかけられたイオスは驚いたことに素直に声の方へ顔を向けた。
「今のお話はアプサラス三世が崩御されたことと何か関係があるのでしょうか？」
イオスは間を置かずに返答した。それもまたアプリリアージェの予想に反していると言えた。拍子抜けする程普通に会話ができたのだ。
しかし、イオスの言葉はアプリリアージェが欲しかったものではなかった。
「ずっと山中に籠もっていたものとばかり思っていたけど、君たち

はある程度の情報は持っていると言うことだね」
「いかがでしょう？」
答えることは答えてもらったが、話の核心信じる物を決めるといいには触れず適当に煙に巻かれそうだと思ったアプリリアージェは食い下がる事にした。
「聡明そうなダーク・アルヴの娘よ」
イオスはそう言うと強いまなざしで自分を見つめるアプリリアージェの方に体を正対させた。
「君もヴェリーユへ行き、―《二藍の旋律》に話を聞いた後で、改めてそこで信じるものを決めるといい。正しいものを探そうとするのではなく、信じるものを決めるんだ。これから先はそうしないと何もかも見失ってしまうだろう」
「それは、どういう意味なのでしょうか？」
「君は今、シルフィードの軍人なのだろう？ル＝キリアの「笑う死に神」」
「！」
イオスの口から出た自分の二つ名に、アプリリアージェの顔から微笑が消えた。
「シルフィードの軍人だから、もちろんシルフィードを信じていた。それが今までの君だ。違うかい？」
「いえ……」
「つまりそう言う事さ。僕から言えるのはそれくらいだ。「僕たち」はあまり人間の事には介入できないものでね。後の事はみんな自分たちで決める事さ」
「猊下はシルフィードを信じることを考え直せ、とおっしゃっているのでしょうか？」
だが、イオスはもうアプリリアージェの問いには答えなかった。
彼はエルデに向きなおると黒い入り口を再度指し示した。
「君はあそこへ向かい、君の信じる物を見つけておいで。そして縁があったらまた会おう」

イオスは言葉をいったんそこで切ったが、何かを思いついたようにエルデの顔をじっと見つめた。そして首をかしげ、最後は独り言のようにつぶやいた。

「ひょっとして僕は何か……そうだな、何か大きな思い違いをしているのか？」

だが、自らの思いつきを否定するかのようにすぐに首を横に振った。その仕草は極めて人間くさく、およそ「三聖」と呼ばれる存在とは思えない程頼りないものだった。アプリリアージェはイオスのその態度にもちろん違和感を持った。

「まあいい。この次会うことがあればそれもわかるだろう」

「蒼穹……」

エルデは喉から出かかった言葉を途中で止めた。イオスの言葉に思わず何かを言いかけたかのようだった。

「『真赭の頤』……いや、シグによろしく伝えておいてくれ。『まんまと騙された』と言ってイオスが苦笑いしていた、とね」

それだけ言うとイオスは現れた時と同様、一瞬で姿を消し、同時にルナタイトの灯りも再び消えた。

「あれはどういう仕組みなんだ？」

アキラはイオスが今まで存在していた空間を凝視したままそう尋ねた。

だが、もちろん誰も答えなかった。

―（この旅は）

アキラは唇を噛んだ。

―（風のエレメンタルの目的を探るのではなく、未知なる脅威を知る旅のようなものだな）

「どうするつもりですか？」

その場の沈黙を破ったのはアプリリアージェだった。問いはもちろんエイルとエルデに向けられたものだった。

「――聞いてたとおりや。「龍墓」に向かう。もともとそこが本当の目標やし、「蒼穹の台」が言うてたとおり手間が省けたわ。概算するとあいつのおかげで一ヶ月くらい短縮できた計算や」
「我々もそこに入れるんでしょうか？「蒼穹の台」は、「宝鍵」を持っているからあなたは大丈夫という意味のことを言っていましたが」
エルデはハッとしたように自分の儀仗の頭頂部を見た。
「それに、二つの「宝鍵」はそれぞれ色が違うようでしたね」
先ほどから白い光をあたりに放つエルデのプリズム……「宝鍵」を見ながらアプリリアージェは付け加えた。
エイルは視線をイオスが開けた暗い入り口に向けた。
「ここから先は俺一人やな。「龍墓」に入れるんは「宝鍵」所持者だけや」
「うーん……」
アプリリアージェは腕組みをして唸った。
「「真赭の頤」には私たちも是非お会いしたいのですが」
エルデはそう言うアプリリアージェの顔を見た。珍しくその微笑みがぎこちない。
「不本意ながら思い切り押しつけがましいことを言わせてもらいます。ここまで一緒に来た仲間じゃないですか。何か方法があるなら教えてください」
エルデはため息をついた。

『あるのか？』
【ある】
『じゃあ』
【いや】

「方法は一つある。でもおすすめはせえへん」
「その口ぶりで困難そうなのはわかりました。でも、判断はこちら

にさせてください。だからもったいぶらずに教えてくださいな」
「「時のゆりかご」は……元来生きた人間には入れへんところや」
エルデはそう言うと体の向きを変え、暗い入り口を背にして仲間と向かい合う格好になった。
「それは、つまり……」
思わずそう言ったアキラに、エルデはうなずいて答えた。
「死体になれば俺が触れている限り、それを「時のゆりかご」に持って行ける」
「なるほど」
アプリリアージェは落ち着いた声で尋ねた。
「では疑似死体でもいいわけですね。つまり仮死状態であれば行けるという訳ですか？」
エルデは苦笑いをした。
「さすがやな、リリア姉さん」
「では「群青の矛」ファーンがルーチェに使ったような冬眠ルーンのようなものを私たちにかけて下さい。そうすれば」
エルデはアプリリアージェに皆まで言わさなかった。儀仗の先を振り上げて首を大きく左右に振って見せた。
「あれはあくまで冬眠。生体維持活動を極限まで下げるルーンや。仮死やのうて思いっきり生きた人間やからな。ただ、もちろん仮死ルーンはある」
「だったら」
「アカン！」
食い下がるアプリリアージェをエルデは珍しくピシャリと否定した。
「仮死ルーンは元の状態に戻すのにルーンがいる。両方とも高位、それもかなりの高位ルーンや。そして「時のゆりかご」では「エア」程やないけど使えるルーンが制限される。エーテルが極端に少ない空間やと言い換えた方がええかな。要するに「時のゆりかご」の中に入ったが最後、仮死を解除するルーンは発動でけへん」

「――その口ぶりだとあなたは「龍墓」に入ったことがあるのですね？」

エルデは素直にうなずいた。

「それは「宝鍵」なしに、ですね？」

エルデはその問いには答えなかった。

「今さら私はあなたに『お前は一体何者だ？』などと問うつもりはありません。でもあなたほどの人なら、何かよい方法をご存じなのではないですか？」

エルデは一行を見渡した。全員がエルデを見つめていた。そしてその中でもひときわこちらを心配そうに見つめる緑色の瞳を見つけた。

その瞳の持ち主は肩にマーナートを載せ、訴えるようなまなざしでエルデを見つめていたのだ。

「一つだけ、方法がないでもない」

エルデはそう言うと懐を探って皮の巾着袋を取り出した。

「もしもの時を考えて作ったものなんやけど……」

そう言うと皮の巾着袋を開けて中にある丸薬のような物を掌に出した。

「これを飲めばたちどころに死ねる。そんでもって一定時間経てば自然に蘇生する。どや？便利やろ？」

そう言ってニヤリと笑って見せた。

一同は顔を見合わせた。エルデの性格を多少なりとも知っているファルケンハインとアプリリアージェは素直に嬉しそうな表情が出来なかったが、アキラやティアナなどは「おお」とばかりに顔をほころばせていた。

『その薬って、もしや？』

【ああ、ベックから手に入れたウィルクーダを使うて作ったヤツや】

『なるほど。毒薬だって言ってたからびっくりしたけど、仮死状態にする薬か』

【それは、どうかな】
『え？』

「効能は理解しました。では念のために、その薬の但し書きを読み上げてくださいな」
アプリリアージェはそう尋ねた。
たとえ高位ハイレーンの調合だと言っても、そんな都合のいい薬が何の副作用もないとは思えなかったのだ。ましてや薬の説明をした時に見せたエルデの笑いが気になる。
「そうそう。薬は用法だけやのうて、きちんと副作用の事も理解した上で飲まんとエラい目にあうさかいな。さすがはリリア姉さん。ええ心がけや」
そして再度一同を見渡すと、真顔になって続けた。
「この中でこの薬が使えるのは、ファル、ティアナ、アモウルの三人やな。理由はアルヴィンやダーク・アルヴでは体力的な問題で蘇生できる可能性がきわめて低いからや」
エルデの言葉に一同はざわめいた。
「さらに！」
それを制するかのようにエルデは続けた。
「たとえアルヴでも、蘇生率は七割くらいやで」
その言葉に今度はざわめきが消えた。
だが静寂は長く続かなかった。
「俺は行く」
ファルケンハインだった。
「な、ならば私もだ」
ティアナが続く。だがファルケンハインは叱責した。
「お前は駄目だ」
「なぜです？」
ティアナはそう抗議したが、ファルケンハインはアゴでエルネスティーネを指した。

「ネスティの護衛はどうする？彼女は行けない」
「それは……」
ティアナは一番痛いところを突かれたと思った。だが、ファルケンハインにとっては何かあった時のために常に用意していた切り札でもあった。その使い所も完璧と言えた。
しかしその切り札は想定外のカードで無効化された。
「わ、私も飲みます。可能性は低くても全くないわけではないのでしょう？」
さすがにエルデもエルネスティーネの申し出には困惑した。とはいえ、もちろん承諾できるものではなかった。
「もちろん全く無いっちゅうわけやないけど……。でもリリア姉さんやメリドならともかく、ネスティの場合は完全にない。俺が保証する」
「やってみないとわからないではないですかっ」
「世の中にはやって見いひんでもわかることもあるんや！」
「嫌です。私も絶対連れて行ってください！」
「わからんやっちゃな。無理なモンは無理やっちゅうてんねん！」
「意地悪。だからエルデは嫌いよ！」
「ああ、嫌いで結構。お前なんかに好かれとうないわ！」
「今、『なんか』って言いましたね？『なんか』って？」
「言うたがどうした？」
「エルデにはもう頼みません。エイルっ、お願いです。連れて行って！」
アプリリアージェはこれには思わず頭を抱えた。

「エルデと……エイル？」
さすがにアキラはエルネスティーネとエルデとのやりとりに違和感を覚えて、頭を抱えているアプリリアージェに問いかけた。
「「蒼穹の台」もエルデ・ヴァイスという名前を口にしていたが、どういうことなんだ？エイルとはただの偽名ではないのか？」

「立場上か便宜上かはわかりませんが」
アプリリアージェはいくつか用意していた言い訳の一つを引き出しから取り出して使うことにした。
「賢者は違う性格を使う必要があるようですね」
「二重人格者、という訳か？」
アプリリアージェは苦笑すると片手をひらひら振って否定した。
「そんな類の物ではありません。ただ、私が分析するにエルデ・ヴァイスは賢者としての本名。エイル・エイミイは賢者であることを隠して現世で活動する際の剣士としての名。それぞれの性格を演じ分けているうちにそれが結構きれいに固定化されてしまったんでしょうね。彼の特技は一人で両方の性格を使って会話出来ることです。しかも鬱陶しい事に両方ツッコミ役です」
「なるほど」
つじつまはあっていた。いや、アキラにはそうとしか考えられなかった。
「古語と南方語が入り交じっていたのはそう言うわけか」
「秘密にしていたわけではありませんが、まあ、話がややこしくなりますし説明することも増えてしまうので面倒だな、と」
「ははは。首領……いや、リリア殿らしい」
同じような疑問を持ったメリドも、二人の会話を聞いて納得した。

そもそもすでに色々な事は知られている。今さらエイルとエルデの事が発覚してもアプリリアージェにとって大きな問題ではなかったはずだが、正直に話すとファランドール・フォウの概念まで持ち出さなければならない。そうすると文字通り「説明が面倒」だと思ったのかもしれない。

「この際、エイルは関係ないやろ。だいたいあいつはただ甘いだけで、その場の判断が将来にどういう結果を引き起こすか想像する頭が全然ない。まあ、そういうところはネスティと同じやな」

「本当にあなたという人は意地が悪い事を平気で言えるのですね。エイルとは大違い」
「ふん」
「本当に意地悪です。意地悪ですけど、それでもエルデがいい人だと言うことはわかっているつもりです。本当になんとかならないのですか？」
「脅しの次は泣き落としか？」

「じゃあ、こうしましょう」
リリアは「龍墓」への入り口がさっきよりも少し狭くなっているのに気付くと、事態収拾に乗り出すことにした。
「ここで二手に分かれましょう。「時のゆりかご」へはエイル君、ファル、そして私の三人で向かいます」
「ちょっと待ってください」
エルネスティーネが抗議したが、リリアは手を挙げてそれを制した。
「話を最後まで聞きなさい！」
アプリリアージェの強い調子の声に、エルネスティーネは口をつぐんだ。
「そもそもネスティは自分の目的を見失っています。あなたは「時のゆりかご」へ行く為にシルフィードを後にしたのですか？」
「あ……」
一番痛いところを突かれた形のエルネスティーネは、それ以上何も言えずうつむいた。
「ネスティの護衛にはティアナとリーゼを残します。申し訳ありませんが我々にもしもの事があった場合、アモウルさんにはヴェリーユで三人が滞在する際の世話係を頼みたいのです。ハロウィン先生とルネ・ルーがヴェリーユで合流する事になっていますから、彼らと落ち合うまでで結構です。こういうときにアトルがいればいいのですが……。世間慣れしていないティアナとネスティだけでは不安

があります。あなたを見込んで、ぜひ」

そう頼まれてみたものの、実際問題としてアキラは悩んでいた。

「龍墓」に入りたいという純粋な興味は尽きない。戦略的に考えてもそれをこの目で見てミリアに伝えることが出来れば、それは大きな成果だと言える。しかしエルデの言葉を信じる限り、それはあまりに支払うべき代償が大きい冒険であった。まだ死ぬわけにはいかないのだ。それに焦ってもいた。アプサラス三世の崩御という衝撃がおそらくはファランドール中を駆け抜けている今、情勢が急速に変わりつつあるのは間違いない。なんとしても一度直接味方と連絡を取り合う必要があった。そして幸いな事にヴェリーユには腹心達がいるはずだった。笛の連絡がついていれば、ではあるが。

加えてアプリリアージェとエルデがいないと言う事は隙が大きくなるということである。連絡の取り方も容易になる可能性は極めて高かった。

「デュナンだと蘇生率はどれくらいなんだ?」

アキラは決断の為の要素をもう一つ欲した。

「そうやな。五分五分、やな」

「ふむ」

腕組みをして悩む風情を演出してはいたが、アキラはしかしすでに結論を出していた。

「興味はあるが五分五分ではさすがに分が悪い。さらに言えば私には「真赭の頤」とやらに会わねばならない理由はない。ここは一つリリア殿の提案に従って、風のエレメンタルの護衛の役を仰せつかることにしましょう」

アキラの言葉に、その場にいた全員が注目した。

「ご存じだったのですか?」

顔を上げたエルネスティーネがおそるおそる尋ねた。アキラは苦

笑しながらうなずいた。
「さすがに、リリア殿がユグセル公爵その人だということを知った後だと、一緒にいる育ちの良い世間知らずのお嬢さんの正体にたどり着くのは簡単です。私はとんでもない人達と旅をさせてもらって光栄ですよ」

【ま、敢えて聞かれへんかったけど、一連の流れやとさすがにバレてるわな】
『自分の正体を教えたのもそのつもりだったんだろうな、リリアさんも』
【最後には口封じするかな、と思ってたんやけど】
『まさか』
【いやいや。お人形さんをあっちへつけた意味はそれもあるんかもしれへんで】
『あ……』

「「エスタリア公爵符」の威光も期待しています」
「もとより承知。委細了解しましたよ」
「道案内、よろしくお願いします。メリドさん」
アプリリアージェはメリドに軽く一礼するとエルデと対峙した。
「ええんか？」
「出来れば基礎体力が上がるルーンなんかをかけてもらった後で飲みたいのですが」
その言葉を聞いて、エルデはニヤリと笑って見せた。

【そこまで計算済みということか。ホンマに敵に回しとうない人やな】
『できるのか、そういう事』
【心配せんでええ。絶対二人とも無事に蘇生させたる】
『お前が絶対というなら俺は信じるしかないな』

【おおきに】

「では、ヴェリーユで落ち合いましょう」
「あ、一つ補足や」
エルデは思い出したように言った。
「「龍墓」は普通とは全く違う空間なんや。流れてる時間の概念もかなり違う。それでついた別名が「時のゆりかご」や」
「それはつまり、どういう事ですか？」
「たぶん、順調に行っても、俺らの方がヴェリーユに着くのはかなり遅れる」
アプリリアージェはうなずいた。
「『もしもの時』の判断期間は？」
「余裕を見て期限は今から一ヶ月後。つまり来月の同じ日を期限にしよ。それを超えたら別働隊は独自の行動をとる。それでどうや？」
即座に答えたエルデの言葉に、全員が無言でうなずいた。

# 第七十一話　時のゆりかご

一言で言い表すならば、そこは静かで暗い「巨大倉庫」と言った風情だった。

いや。ただ「空間」と言った方が適切かもしれない。

つまりそこは適当な言葉が見つからない場所だった。

様々な記憶を頼りに一番近い表現を探していたエイルがたどり着いたのが「巨大倉庫」という言葉だ。

そこが巨大倉庫だと仮定しても明かりが届く場所だけが認識できるすべてで、その認識できる空間の外はただの闇だった。だから「巨大倉庫」も適切な言葉とは言えないだろう。

本当の大きさ……広さも天井の高さもわからない。かろうじて認識できるのは、床が大きな大理石の、おそらくは一枚の板で出来ているように見えるということだけ。けれど、それもはたしてどこまでが一枚で出来ているのかがわからない。

だがエイルが「倉庫」という表現を選んだように、そこは決して何もないがらんどうのような空間ではなかった。その場所には様々な大きさの、そして色とりどりに自発光……といってもきわめてぼんやりとした光だが……しているシャボン玉のような球状の物体が空中にふわりと浮いていた。

球……スフィアは浮いてはいるが移動はしていない。ただその場にじっと浮いているだけだ。

小さなものはエイルが両手で抱えられるかどうかの大きさ。大きな物はサラマンダの平均的な農家をすっぽり飲み込むくらい巨大なものだった。

スフィア同士には余裕のある間隔がとられているようで、見える範囲では重なり合ったり触れ合ったりしているものはないようだった。

位置は様々で低いところにもあるが、しかし決して地面には接しておらず、かといって果てが見えない高さがある空間にもかかわらずエイルの手が届かない程高い位置に浮いているものもない。
その球状の物体が放つ光のおかげで、ルナタイトやエルデのルーンを使わなくとも視界の確保には困らなかった。

『本当にここが「龍墓」、または「時のゆりかご」とか呼ばれている場所なのか？』
周りを見渡しながら様子をうかがっていたが、危険はないようだと悟ったエイルは少し大胆になった。
『墓というくらいだから、この球体はひょっとして何かの死体か？』
エイルはおそるおそるそのスフィアの一つに触れようとして手を伸ばした。
だが……。
「え？」
伸ばした手は何の抵抗もなくスフィアの外壁を突き破り、中に入っていった。しかし、不思議な事に手は球体の中に入っているのではないようだった。
球の外壁は半透明で、近付けば何が入っているのかはぼんやりとではあるがわかる。だがその内部に差し入れた手が見えない。

「おかしなスフィアですね」
すぐ後ろでアプリリアージェの声がした。
振り返るとそこにはあの暗い空間に一緒に入ったファルケンハインとアプリリアージェが並んで立っていた。
（そうだった）
目を覚ますとそこはあまりに不思議な空間だったので、仮死状態だったはずの二人のことをすっかり忘れていたのだ。
「良かった。二人とも無事に蘇生できたんですね」
エイルの言葉にアプリリアージェとファルケンハインは同時に

っこりと微笑んだ。
「おかげさまで」
「良かった。不安だったんだ」
「正直に言ってしまうと、あの薬を口に含む時は相当の勇気が必要でした」
「蘇生できない、とか言われるとオレも不安でした」
エイルの言葉にアプリリアージェはゆっくりと首を横に振った。
「いえ、それは別にどうでもいいんです」
「え？」
「エルデがニヤリと笑って差し出した薬ですよ？本当に仮死するならいいんですが、飲んだとたんに裸踊りや腹踊りをやり出す薬だったらどうしようと思うと不安で不安で……」
「は？」
「それはいいとして、このスフィアの中はどうやらここことは全く違う空間のようですね」
「違う空間？」
言われてみればそうかもしれないとエイルは思った。球の中はぼんやり見える。だがそこに手を突っ込んでも中の物には触れられない。
「リリアさん」
横合いからファルケンハインの声がした。彼は指示通り「司令」という言葉はもう一切使わいようになっていた。
二人は一斉に声のする方に目をやった。するとそこにはごく小さなスフィアに腕ごと突っ込んでいるアルヴの姿があった。
異様なのはそのスフィアに手を突っ込んだ姿だ。
スフィアのちょうど反対側に手は突き出ていた。いや、突き出ていたのではない。それではファルケンハインの腕が長すぎる事になる。
ファルケンハインはそのスフィアには肘のところまで突っ込んでいるように見えるが、その肘は球の中ではなく、スフィアの反対側

に突き出ていた。まるで……

そう、まるで切断した腕をスフィアの反対側に取り付けたような格好だ。もちろん切断されていないのはファルケンハインが指を自由に動かせていることでそれとわかる。

そこに物体があるのにそれはそこに存在するように見えるだけで、実はファルケンハインにしてみればないのと同じなのだった。

この部屋に入ってから、エイルの中のエルデはまだ何も言葉を発していない。

その事が気になりながらも、エイルは少し奥にある白い光を放つ大きめのスフィアに吸い寄せられるように近寄った。

その時だった。

あたりにざわざわと風のようなものが吹いた気がした。まるで「時のゆりかご」と呼ばれる空間が意思を持っていて、長い眠りから目を覚ましたかのようだった。だがそのざわめきが実際に風だったのかはわからない。とはいえ、エイルは肌に風圧のような力を感じた。

それはエイルの錯覚ではなく、そこにいた三名全てが同じ感触を得ていたようだった。

一行は申し合わせたように立ち止まると、辺りをうかがった。

【代われ】

突然エルデの声がした。

【代われ】

『どうしたんだ?』

【「真赭の頤」の気配がある。対応するのはウチやないと無理や】

『え?』

【急げ】

『ちょっと待て。この部屋はなんなんだ?この球体、ちょっとおかしいぞ』

【代わってくれへんのなら、仕方ないな】
『エルデ、お前……なんかいつもと雰囲気がちがうぞ？』
エルデの声に抑揚がなくなっている。そしてエイルの問いには何も答えようとしなかった。
すぐにエイルは体の支配権がなくなるのを感じた。エイルが許可しなければエルデに体を支配されることはないずだった。
いや……
以前も同じ事があったのを、エイルは思い出していた。

【エイル・エイミイ】
体の支配権を得たエルデは、一転して感情のこもった声で呼びかけてきた。
『エルデ？』
だが、エイルはそのエルデにすら違和感を持っていた。こんなに静かな声で呼びかけられたのは初めてだったのだ。
その違和感はエルデの次の言葉を聞いて頂点に達した。そして自分が今どこにいるのかさえ一瞬忘れてしまうほどの衝撃をエイルに与えた。
【今まで、おおきに】
『え？』
【お前さんとの旅は、けっこう楽しかったと、思う。ううん……たぶん生まれて一番楽しい時間やった】
『変だぞ、お前。いったい何を言っているんだ？』
しかし、エルデはエイルの問いには答えなかった。
【今から「真赭の頤」に「喰らい」の呪法を解いてもらう。長い間不自由かけたな。それから、その後すぐにウチがお前にかけた憑依の呪法も解く。そしたらお前は全ての呪縛から解放される。ウチが封じてたファランドール・フォウの記憶を取り戻すことができる。もちろん自分の本当の名前も思い出すし、自分についての詳しい事もすべて元通りのはずや】

エルデの言っている事はおかしかった。今まで説明されていたことと何か違うのだ。

『オレの記憶を封じてたって……お前がか？おい、それって』

【そしてお前はここからフォウへ帰れる。おそらくウチが憑依の呪法を発動させた時と同じように、今度は解呪と同時に二つの世界を繋ぐ扉がここに開く】

『扉だって？』

【その扉の前に立って自分が本来居るべき世界の名前と場所、そして自分の本当の名前を唱えたら、それでええ。世界の意思は齟齬を生じた異分子を元に戻してくれるやろ。そうしたらお前が存在するべき場所であるフォウがお前を引き寄せてくれる。それでフォウに帰れるんや】

『ちょ、ちょっと待ってくれよ。頭の整理ができない』

【待てへん。急がんと手順が狂うんや】

『手順って……おい、エルデ』

【言うたやろ？絶対帰したるって】

『いやいやいや。待て。待ってくれ。何をするつもりだ？』

【さようならや、エイル。最後にお前の本当の名前を呼べへんのが残念や。ウチもそれは知らんねん】

『待てって、エル……』

だがそこで、あっさりとエイル・エイミイの意識は飛んだ。

「エイル君？」

静かになって佇むエイルに気付いたアプリリアージェは心配そうに声をかけた。

「スフィアには触るな」

エイル……いや、エイルの体を支配したエルデは振り向きざまそう言った。

「エルデ君、なの？」

エイルでもなくエルデでもない、明らかに異質の雰囲気をピクシ

ィの少年がまとったのをアプリリアージェは敏感に感じた。
「説明してくれ。このスフィアは何だ？どうやら書物が入っているものが多そうだが……あとはがらくたか」
ファルケンハインの問いに、だがエルデは答えなかった。
「悪い。二人ともしばらくの間眠っといてくれるか」
その言葉に対してアプリリアージェが何かを言おうとした時、エルデがルーンを短く唱える口の動きが彼女には見えた。だがそう思った時には視界には全く何も映らなくなり、何かに吸い取られるように意識が消失していった。だが、意識が消える瞬間もアプリリアージェは「しまった」とは思わなかった。エルデからは危害を加えられるというおそれを全く感じなかったからだ。だから薄れゆく意識の中で「大丈夫だ」と自分に言い聞かせていた。そしてそんな事を感じている自分を奇妙だと思う自分がいて、さらにそれを見ている自分が別に存在している……そんな不思議な感覚に見舞われた。何が不思議なのかがわからぬまま……。

アプリリアージェにしてみればエルデに悪意はないと言うことを信じ切っている自分に少し驚いていたということなのだろうか。だが、その考察をする前に彼女は完全に意識を失い、底のない闇の世界に落ちていった。むろん、ファルケンハインも同様に。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「それはなりません」
「なんでや。ウチが決めたことや。いや、最初からそうするつもりやったんや」
「絶対になりません。いかにあなたのご指示と言え、こればかりはとうてい承諾するわけにはまいりません」

アプリリアージェが深い眠りから覚めた時、視界に飛び込んできたのは大理石の奔放で複雑な模様だった。

どうやら横たわっているのはよくわらを膨らませたふかふかのベッドではなく、冷たい石の床のようだった。

視界はまだぼんやりしていた。だが、それは自分の視力のせいではなく今自分が置かれている環境、つまりこの場所の特徴のせいだろうということをすぐに認識した。

アプリリアージェとファルケンハインはさっきまで自分たちが外から見ていたのと同じもの……要するにスフィアの中に閉じ込められていたのだ。

試しに手を伸ばしたが、中からは外に出ることは不可能だった。スフィアの内側には堅い殻があった。

「何を言おうと承諾してもらう」

「あなたはご自分が何者かをご存じのはず」

「わかってる。全部理解した上での結論や」

「相手はあなたなどと違う、ただの人間なのですよ？」

「そんなことはよくわかってる」

「いやいや。おわかりになっているとは思えません」

激高したやりとりではないが、誰かが言い争うような声が聞こえる。

―（確かあれは……。いや、あれは誰だろう？）

落ち着いた深い響きの男の声はアプリリアージェの記憶にはなかった。初めて耳にする声の主はおそらく若くはない。

声は二つで、もう一人の声を彼女は知っていた。

―（エイル・エイミイ、そしてエルデ・ヴァイスの声）

意識を取り戻して数十秒ほど経っただろうか。ある程度の空間状況把握をしたアプリリアージェはあたりの様子をうかがいながら慎

重に、できるだけ音を立てないようにしてゆっくりと体を起こした。
体に痛みはない。
四肢がすべて正常に動くのを再確認する。足首などにも特に拘束はないようだ。
だが、周りを何か得体の知れない幕のような物で覆われていて視界がゆがんでいる。まるでできの悪い再生ガラスを何枚も重ねて窓の外を見ているかのようで、無理に焦点を合わせようとするとめまいがしそうだった。
アプリリアージェが体勢を整えた頃、すぐ近くに横たわっていたファルケンハインも意識を回復し出したようで、そのままの姿勢でゆっくりと辺りをうかがう気配がした。
見たところ仲間にも外傷はなさそうだった。
一安心したアプリリアージェの意識は再び少し離れたところにいる二人の人物の会話に向けられた。
そう離れては居ない。
ぼんやりとであるが二人の姿の概略は把握できた。
エイルと話をしているのは禿頭のアルヴ。羽織っている黒っぽいローブはマーリン正教会風に見えた。そしてその手には白い儀仗が握られている。
―（おそらくはあれが「真赭の頤」、シグ・サルカバード）
アプリリアージェは直感的にそう確信した。
―（本当に生きていたというの？）

ザルカバードの声には語気の強さはなく、穏やかで優しい響きさえ感じる。その声が作り出す雰囲気は会話の相手だけでなく少し離れたところにいるアプリリアージェをも包み込むようだった。言うなれば彼はその声でその場の空気を支配していると言えた。敵であるとか味方であるといったそんな陳腐な相対的な関係をもはや超越して、「真赭の頤」の存在感は圧倒的だった。三聖「蒼穹の台」の持つ得体の知れない『恐怖』とは違い、それは強大で異質な『力』

に思えた。そしてその力は対峙するまでもなく相手と自分との格の違いをアプリリアージェに自覚させるほどのものだった。

だがそんな圧倒的な存在感を持つ大賢者「真赭の頤」に相対して立つちっぽけなエルデ・ヴァイスには、ザルカバードをおそれる様子は微塵も感じられなかった。それどころかまっすぐに師を見据えているだろうエルデの言葉には、師の存在感を上回るほどの強力な意志の力さえ感じた。

いや……それよりも何よりも気になることがあった。シグ・ザルカバードはエルデに対して敬語を使っている。弟子に「あなた」と呼びかけている。

不自然ではないか？

アプリリアージェはそう思った。

「真赭の頤」はエルデの師……ではないのか？エルデ・ヴァイスとは「真赭の頤」の弟子なのではないのか？

何より「真赭の頤」はマーリン正教会でも大賢者と言われる三聖に次ぐ地位にある者だと聞く。その高い位にある者が、いくら上席と言えども自ら「駆け出し」と称する若き一賢者に対してあそこまで敬う態度をとるとは一体……。

実のところ、二人の関係はどうなっているのだろうか？

アプリリアージェがそう思った時、エルデがある行動に出た。「真赭の頤」の前で正座をしたのだ。さらに頭を下げた。

「頼む。この通り」

「そのような事はなさらないで下さい」

それを見たシグは慌てた様子で自分も正座をした。

「なあ師匠。もう終わりにしてもええんと違うか？」

「何をおっしゃいます。それでは我々が長きにわたって守ってきたものがすべて無駄になります」

「無駄とは言わへんけど……。ほんの十年ほど前に時間が戻るだけの話やろ？ただそれだけのことや。もともとウチはすでにこの世に

は存在してないはずのモノやったんやし」
「だが、あなたはもうここにこうしていらっしゃるのです」
「ウチの気持ちをわかってほしい。後生やさかい」
「その少年の代わりなど幾らでもいますが、あなたの代わりはもういないのです」
「その物言いはよせ」
「よしません。冷静にお考え下さい。ようやくこれで」
「せやから！ウチはもともとこの世におらへんかった。それでええやないか！」

アプリリアージェ達は師と弟子という通り一遍の価値観を、どうやら再構築しなければならない事に気付き始めていた。少なくともエイルとシグの関係は彼女の価値観の範囲を逸脱していた。
『師匠にかけられた呪法を解いてもらう』
そうエルデは言っていた。
だが二人の間で交わされた会話にはそれ以上の意味合いが込められているのは確かだった。「真赭の頤」ことシグ・ザルカバードがエルデの師と言えるのであれば、であるが。
「師」であるシグは弟子の前で困惑の表情を浮かべて何度も首を左右に振り、弟子はそれでも強く何かを懇願していた。あれほどなりふり構わない様子の賢者エルデ・ヴァイスを二人とも初めて見た気がした。
ノルンと呼ぶ不思議な儀仗を足もとに投げ出し石の床の上に正座して、さらには両手まで突いて……。
視界の悪い巨大なスフィアのようなものに閉じこめられてはいても、耳のいい風のフェアリー達には二人の会話は概ね聞こえていた。聞こえていたからこそ余計に混乱していた。
視界は水面を通して見るように時折揺らめいていたが、それでも伝わる空気からエルデの心の表情が手に取るようにわかる。

「本当にウチは、もうええんや」
―（何が……「もういい」のだ？）
「はじめはそのつもりやった」
―（当初の目的が変わったのか？でも、目的って？）
「さっき言うたように覚悟はとっくにできてるんや」
―（覚悟？一体何の？）
「それでもウチには出来んかったんや。師匠にはそれがなんで理解でけへんねん？」
―（何をやろうとしていたのだ？そしてそれは成し遂げられなかった？）
『出来ないことはない』と豪語する傲岸不遜な賢者エルデの言葉とは思えなかった。
エルデの哀願とも取れる呼びかけに、シグもしかし頑に首を横に振り続けていた。
「もう一度申します」
そう言うとシグは続けた。
「ご自身の立場をお忘れではありますまい？」
その声は今までよりも強目で、まさに師が弟子に言って聞かせるような風情があった。
「言いたくはありませんが、あなたの存在がどれほどの犠牲の上に成り立っているのか……ご自身もおわかりのはずではありませぬか？」
師にそう言われた弟子はうなずいた。
「勿論忘れへん。忘れとうても忘れられへん。けど、それが今更何やっちゅうねん？考えて見ぃや？ウチ一人が居ようが居まいが、この大きな時代のうねりがさほど変わるものでもないやろ？ウチは…

…もはや過去の遺物なんや」
　シグはひときわ大きく首を左右に振った。
「あなたはそのたった一人の取るに足らぬ命を救う為に何億、何十億もの人々の命を危険にさらす選択をなさるおつもりか？」
　シグの強い調子にエルデはしかし憤然と反論した。
「取るに足らぬ命とか言うな！」
「しかし」
「こいつがウチに教えてくれた事があるんや。それはたぶんウチらが遠い昔にどこかに置き忘れてきた大事な事なんや」
「伺いましょう」
「人っちゅうのは、本当はたった一人の人間の為に生きていく事こそが幸せなんやと。たった一人を全力で守ること、それがすなわちより多くの人を守る力に繋がる事になるっちゅう事や』
「甘い」
「やかましい！甘くてもええねん」
　エルデが初めてシグに怒鳴った。
　大理石で出来た床をドンドンと叩き続けるエルデの両の拳が、やがて血でにじんでくるのをアプリリアージェは認めた。手加減などせず力一杯殴った証拠であるそれは、エルデの想いの強さを表す赤い証明書であった。
「ウチの命は誰のものでもあらへん。ウチが心から守りたいと思う人の為に使いたいんや。命っちゅうのはそういう物やってわかったんや」
「しかし」
「確かにこの異世界からの客人の考えは浅い。しかも直情的や。伝える言葉は稚拙やし、不器用きわまりない」
「所詮はただの人間です」
「そやけど……いや、そんなら納得行くように教えてくれ。取るに足らん存在の言葉が、行動が、叫びやつぶやきや、涙や笑顔が……ウチの心を突き動かすのは一体どういうわけや？」

「それは……」
「ウチが取るに足らん存在とやらに教えられる事が多いのはなんでや？共感してしまうのはなんでや？」
「いや、ですから」
「この人間が取るに足らん存在やと言い張るならそれもええやろ。ならばその存在に共鳴してしまうウチも取るに足らぬ存在や」
「それは詭弁というものです」
「黙れ！」
「しかし」
「聞けっ。我が理解者にして偉大なる師である「真赭の頤」よ」
「は、はい」
「師がどうあってもウチの頼みを拒否するつもりやったら、ウチはウチ自身の力を使うて違う方法で同じ事をするまでや」
「なんですと？」
「ウチの力を知らん訳でもないやろ？まずはじめに今ここでこいつを目覚めさせる。意識が二つとも覚醒している状態でウチが強力な解呪法を使うたら、さて一体どうなるか』
「ば、馬鹿なことはおやめ下さい」
シグは慌ててそう言った後、今度はしばらく黙り込んだ。
エルデも何も言わなかった。ただ、黒く深い濡れたような瞳で師と呼ぶ初老のアルヴを睨み付けていた。
弟子のその目をじっと見つめていたシグは、やがて深いため息を一つつくとうなだれて重い口を開いた。
「これでは私は、はじめから負け戦に挑んでいる愚かな道化のようなものでございますな」
「「真赭の頤」……」
「もう他人行儀はおやめ下され。師としてではなくいつも通り現名で呼んでくださいませ」
「わかってくれて、おおきに。シグ」
「いいえ、わかった訳ではありませんぞ。人質を取られ、さんざん

脅されたあげくにしかたなく、です」
「それでもええねん。おおきに」
「言っておきますが、成功の可能性はほとんどありません。そして成功したとしても一体どのくらいの時間保つかは本当にわからないのですぞ。一年か十年か、それともたった三日か」
「くどい。言うたやろ？そんなことはもとより承知や。ウチは自分で出来ることをやるまでや。こいつの思いを継いで』

「わかりました。爺ぃめはもう何も言いますまい」
しばしの沈黙の後、シグはついに折れた。
「シグ」
「ただし、名目上とはいえ弟子に脅されていいなりのままというのはさすがに師としての立場の方がうまくありません」
「今更、何を？」
「ですから、あなたの我が侭をお聞きするかわりに我が決意も承諾して欲しいと申し上げております」
「決意？」
「交換条件と言う奴ですな。あなたの得意技ではありませんか。ですがまあ、そっちの話は後にしましょう。成功してからの話しです」
「わかった」
「決めたからには急いでやってしまいましょう。もう長くはもたないのでしょう？」
「うん。頼む」
「――くどいと言われるの承知で今一度たずねますが……本当によいのですな？」
師の問いに、弟子は迷い無く無言で大きくうなずいた。

アプリリアージェ達はスフィアの中に閉じこめられている為に身動きの取れない状態にはあったが、しかし言葉は交わせるようだった。だがそれでもアプリリアージェとファルケンハインは二人の何

やら緊迫したやりとりを目の前にして、交わす言葉自体を失っていた。
だが、これから何か重大な事が行われるとわかってようやく気持ちが切り替わった。
先にファルケンハインが口を開いた。
「ひょっとしてエルデは俺達の命乞いをしてくれてるんでしょうか？」
「いえ。全く別件でしょうね」
アプリリアージェは穏やかにそう答えた。
ファルケンハインはアプリリアージェが泰然としているのを見て不思議に思った。彼にしてみればどう見ても自分たちは虜にされていて危機的な状況に置かれているのは間違いないわけである。エルデにいきなり何らかのルーンで失神させられたのだ。そして気がつけばスフィアに閉じこめられていた。
油断の中でかつ不意を突かれたとは言えルＩキリアの精鋭二人に手も足も出させない早業には脱帽せざるを得なかったが……。
「たぶん、心配は要りませんよ」
アプリリアージェはファルケンハインの不安を見透かしたようにそう言った。
「賢者エルデは私たちを気絶させる前に小さな声で『堪忍やで』と言いました。その古語の意味は『不本意だけれど止むに止まれぬ事情がある。ついては申し訳なく思うが、できれば許して欲しい』という内容になります」
「いや。それくらいはわかりますが……えらく長くて細かい訳ですね」
「古語とはそういう微妙な心情の機微のようなものを深いところで表現している言葉だったそうです」
「なるほど」

アプリリアージェは続けた。
「その声には賢者エルデにしては妙な優しさというかいたわりのようなものを感じました。ここからは我々に下手に動いてもらいたくないから悪いけど少しの間固定する、眠らせるというかそういう意味あいが一つ。もう一つはおそらくそのままだと現れた「真赭の頤」によって直後に我々が何らかの攻撃を受ける可能性があったのであらかじめ拘束して安全地帯に退避させておいたという事でしょう」
「それはそうかも知れませんが……今エルデが話していた内容は……」
アプリリアージェはうなずいた。
「そうですね。でも私たちの事を話しているのなら、一度くらいこちらの方を見るなり指さすなりするはずでしょう？「真赭の頤」にしてもそうです」
言われてみればそうだとファルケンハインは思った。エルデは我々がそこにいないかのように師に何かを訴えていた。

「では、始めましょう」
「はい」
シグは一呼吸置くと立ち上がり、正座をしたままのエルデにゆっくり歩み寄ると右手でそっとその髪をなでてみせた。慈愛あふれる表情で。
その様はまるでかけがえのない我が子を愛撫する父親であった。
アプリリアージェとファルケンハインは再び顔を見合わせた。
「あ、忘れるとこやった。申し訳ないけど少しだけ待ったって」
エルデは思い出したようにアプリリアージェの閉じこめられているスフィアの方を見やるとノルンという例の儀仗を手にした。そしてそれをアプリリアージェ達の入っているスフィアの方に付きだして少し口を動かした。これまた口元を読む事に長けたアプリリアージェでさえ何を唱えたかまではわかりかねる小さな口の動きだった。
次の瞬間、彼らを覆っていたスフィアは消え去り、これで一行の

呪縛はすべて解かれた。
シグはそれを受けて初めてアプリリアージェ一行に直接声をかけた。
「安心しなさい。危害は加えん。だがしばらくはその場で動かぬように」
穏やかだが有無を言わせない強い口調だった。
「我が弟子がこの後起こる事をしかと見ていて欲しいというのでな」
「呪法の解除ですか？卒業試験の？」
アプリリアージェが尋ねた。
「卒業試験？」
怪訝な顔で師は弟子に尋ねた。
「いや……色々と事情があって……気にせんといて」
「ふむ」
エルデの苦笑にアプリリアージェは違和感を覚えた。だが、それよりも妙に穏やかなエルデの顔を見て嫌な予感が走った。
だが、だからと言ってこれ以上何も言える状況ではなかった。
「もう一度念のために言う。余がよいというまで動くでない。もし動けば容赦はせん」
シグはアプリリアージェ達を一瞥してそう言った後、改めてエルデに向かい合った。
「始めましょう」
エルデは何も言わずに小さくうなずいた。
ファルケンハインの目には、エルデのその姿がなぜかはかなく見えてしかたがなかった。だが何も言えなかった。師と弟子の間に他を寄せ付けぬ何かしら厳粛な雰囲気を感じていたからなのかもしれない。
シグはおもむろに儀仗を天井にかざした。すると周りに漂っていたいくつかのスフィアのうち、比較的大きな一つがエルデに寄り添うように近づき、ピタリと止まった。

# 最終話　マーヤ

その後シグが行った儀式……それが儀式と呼べるものなら、ではあるが、あっけないほど短い時間で終了した。

「真赭の頤」シグ・ザルカバードは小さく何かを唱えたかと思うと儀仗の頭部をエルデの額に当てた……。

儀式はたったそれだけだった。

儀仗を額に受けたエルデは正座をしたまま即座に意識を失ってその場に崩れ込み、同時に横にやってきていた大きなスフィアが白く光ったかと思うとその外郭が消え失せ、かわりに木製の質素な寝台が一つ現れた。

いや、正確には寝台に仰向けに寝かされた長い黒髪の少女が現れたのだ。

アプリリアージェは紗（うすぎぬ）を纏い横たわるその少女をつぶさに観察した。

意識がなく、目は固く閉じられていた。自分の腰よりも長い豊かな髪は黒く、大小のスフィア達が放つ光を受けてまるで濡れたように光っていた。

「これは」

瞳が開かずともアプリリアージェには分かった。

黒髪の少女はデュナンでもダーク・アルヴでもアルヴィンでもない。間違いなくピクシィの血を引く人類だった。

アプリリアージェとファルケンハインは再び顔を見合わせた。

意識を失い倒れたエルデ。

スフィアから現れた瞳髪黒色の少女。

彼らの推理に役立つ手がかりはそれだけだった。

つまりは一体何が行われたのか全く分からなかった。

エルデはこの後目を覚ますのだろうか？

そもそもなぜエルデは意識を失ったのだろうか？

いや、エルデは何の為に意識を失わされたのだろうか？
いったいシグ・ザルカバードは何をしたのだろうか？
そして、それら全ての疑問にシグ・ザルカバードは何かしらの説明をしてくれるのだろうか？

今し方シグは言った。『よいと言うまで動くな』と。
そのシグの視線は寝台の少女ではなく足下に崩れるように倒れ込んだエルデに注がれている。
彼ら、すなわちエイルとエルデが求めていた「解呪」を行ったのだろうか？
そしてそれはまだ終わってはいないのだろうか？

沈黙がその不思議な空間に流れていた。
どれくらい待っただろう？
もどかしさの中でそれは永遠にも感じられる時間だった。だが実際には儀式が始まってから数分しか経ってはいないのだろう。
「う……くそ」
見守る一同の重い沈黙を破ったのは瞳髪黒色の少年の方だった。
彼は周りを見渡しながら立ち上がった。そして自分の目の前にシグ・ザルカバードが立っていることを認知すると驚いたように足もとにある儀仗を手にし、身構えた。

『エルデ！』
エイルは心の中で呼びかけた。
『エルデ？』
返事がない。
『おい！』

「少年よ、気分はどうだ？余の顔がしっかり見えるか？どうだ？」
とまどうエイルにシグがゆっくりと声をかけた。

その口調は先ほどまでのエルデに対するものとは明らかに違う。
そしてその顔は無表情だった。
「あ、ああ。貴方はいったい？」
曖昧な返事をしてシグの表情から何かを探ろうとして、エイルは気づいた。
この黒っぽいローヴを纏った長身の初老のアルヴが「真赭の頤」に違いないと。
ここがエルデの言う目的地であることはこれで証明された。
だが、肝心のエルデの意識がない。
―（また深い眠りについているんじゃないだろうな？）
エイルは焦った。
―（目の前にあれほど会いたがっていた師匠がいるんだぞ？オレだと何を話していいやらわからないじゃないか）
端から見ても動揺しているということがわかるエイルに、シグは言った。
「その顔だと余が誰かは既にわかったようだな」
動揺を悟られまいとして、エイルは努めて平静を装った。
「「真赭の頤」、シグ・ザルカバード」
大賢者はエイルの答えに小さくうなずいた。
「危害は加えぬ。構えを解くがいい」
言われて気づいた。
儀仗を正眼に構えたままだったのだ。エイルは大きくため息をつくと、構えを解いた。緊張が少し緩んだことで周りの状況がつかめてきた。
と、同時に重大なことに気づいた。緊張でそのことに気づかなかった自分が滑稽だった。
そう。
もうとっくに忘れかけてた懐かしい感覚がそこにはあった。
「これは！」

エイルは大きく息を吸い込んだ。二度、三度。
そして今度は自分の手のひらをじっと見つめた。
そして、次には何を思ったのか左の手の甲をペロリとなめた。

「戻ったのね」
アプリリアージェがつぶやいたとおりだった。
今まで見えなかった右の目にもちゃんと視力がある。だからもちろん遠近感もある。両方から音が、声が聞こえ、舐めた手の甲はかすかに汗のしょっぱい味がした。
「見える」
シグはエイルの様子を見るとうなずいて見せた。
「エイル・エイミイ……と言うのだったな?」
「はい」
「それはエルデ・ヴァイスに付けられた名だな?」
「そうです」
「名と、記憶の多くは失っておったのだな?」
「はい」
「では、今はどうだ?お前自身の本当の名はわかるか?」
「――いや……」
エイルはシグの問いに自分の頭の中を探った。
ある程度の記憶が戻ってはいた。しかし一気に全てが明瞭になるというものではないようだった。少しずつほぐれてきている気はするが、ややじれったい。
それはまるで水底からわき上がる泡が水面ではじけるように、ぽつん、ぽつんと沸くように心の池に広がりゆくようだった。
意識を無くしていた間にエルデとシグの間で何のやりとりがあったのかがわからないが、あの忌々しい呪法はようやく解除されたようだった。
「「喰らい」の呪法は解いた。お前はもう普通の体じゃ。いくつか封じられていた記憶も戻っておろう」

「――封じられていた？」
そうだ、思い出した。エルデも同じ事を言っていた。
―（いや、質問よりまずここは礼を言うべき何だろうか？
でも……
ああ、やっぱりオレじゃ対応不能だよ。
エルデの野郎、肝心なときにどうしたんだ？）
「瞳髪黒色の少年よ。お前はもう自由じゃ」
「自由？」
―（どういう意味だ？呪法から開放されたという意味なのか？）
『エルデ、おい、エルデ。起きてくれ。オレ、どうしたら？』
どうにもまだ状況が掴めなかった。
それにしてもアプリリアージェ達が遠巻きにこっちを見ているのはなぜだろうか？
「同時に憑依の呪法も解けた。従ってお前が有るべき世界への扉は既に開かれておる」
そういうと大賢者は儀仗を高く掲げた。
それに呼応して、またもや一つのスフィアがどこからともなく現れ、エイルの近くに寄り添った。そして青白い光を放つと同時に外郭がすっと消えさった。
そこに現れたのは大きな石造りの、厳めしい装飾が施された扉だった。
その扉は扉と枠だけで出来ており、「こちら側」と「向こう側」とを分けていた。扉の「こちら側」は明瞭に見えるが、向こう側は空間と闇が融合したようにぼやけていてどうにも焦点が合わない。
「オレが有るべき世界？」
オウム返しにそういうと、エイルはハッと顔を上げた。
気付いたのだ。

「まさか、オレは帰れるのか？フォウへ。元の世界へ？」
シグは今度はアプリリアージェ達にもわかるくらいはっきりとうなずいて見せた。
「「喰らい」の呪法と同時に憑依の呪法も解かれた。憑依が解呪された事により呪法によってファランドールにつなぎ止められていたお前は解放され、自分の有るべき場所、すなわちファランドール・フォウへの道が開かれた。さあ、扉を開いて征くがよい」

唐突だった。
つい数時間前に感じていたラシフの体のぬくもりがまだ残像のように残っている。それなのに突然「さあおうちにお帰り」と言われても何だか現実のこととは思えなかった。
「この扉で？」
「扉を開き、そこに現れる混沌の前で自らのあるべき世界の名とそこでの本当の名前を唱えよ。さすればその名はあるべき場所へ誘われる」
「オレの……本当の名前を言うのか」
ずっと思い出そうと何度も何度も懸命に考えていた。しかし、濃いもやがかかったように何の手がかりも得られなかったフォウでの自分の名前……。
――（オレの名前は……）

「よくわかりませんが、これでようやくわかりました」
アプリリアージェが独り言のようにつぶやいた。
「え？」
ファルケンハインには何が行われているのか見当もつかなかったが、アプリリアージェは推理の構築がある程度できたようだった。
「今、目を覚ましたのが、エイル君」
「はい」
「解呪されたエイル君はフォウへ戻る事になった。あの扉の向こう

がフォウなのでしょう」
「え？」
「問題は……」

「ちょ、ちょっと待って」
エイルは片手を額に当ててもう片方の手のひらをシグにつきだした。
「本当にこれで、終わりなのか？オレは本当に開放されたのか？」
シグは再びうなずいた。
「ここでの出来事は、長い夢だったと思えばいい」
エイルは強く首を横に振った。

―（いや、そうじゃない）
エイルは拳を握りしめた。
―（夢なんかであってたまるか）

「エルデは？」
「心配か？」
問いかけたエイルにシグはそう返した。
「当たり前だ」
「そうか」
シグは微かにため息をついたように見えた。
だが表情は変えず、手に持った儀仗を少し揺らした。
するとエイルの後方に浮いていた寝台がゆっくりとシグの近くに寄ってきた。
そこには紗をまとった長い黒髪の少女が横たわっていた。歳はエイルと同じか少し上に見えた。
エイルはその少女の顔をひと目見て凍り付いた。
目を閉じていてもわかる、その恐ろしい程美しい顔立ちに、エイルは見覚えがあったのだ。

忘れようもない。
その少女の顔は……
「マーヤ！」
エイルは思わず少女の名を叫んだ。
そして寝台に取り付くと、横たわるその黒髪の少女の顔を凝視した。

エイルが叫んだ少女の名。それはエイルのたった一人の妹の名前であった。
大切な妹。そして彼にとってただ唯一記憶に残っている大切な名前。
だが……
――（マーヤが、なぜこんなところにいるんだ？）

アプリリアージェは珍しく眉根にしわを寄せてそんなエイルの行動を吟味していた。
――おかしい。
そう思っていた。
「違う」
「え？」
思わず口を突いて出たアプリリアージェのつぶやきに、ファルケンハインは驚いたようにもう一人の黒髪の娘に視線を移した。
「違う？」
だが、アプリリアージェは小さく首を振っただけだった。

寝台にとりついていたエイルはゆっくりとその手を離すと、その場から一歩後ずさり、アプリリアージェと同じ言葉をつぶやいた。
「違う」
――（そうだ。違う。これはマーヤじゃない）
それは彼の妹ではなかった。

妹であるはずがなかった。
エイルには、既にフォウの記憶がかなり戻っていた。
だからこそ理解した。
なぜなら……

エイルは少女の寝台の側で、少し肩を落として立ちつくした。そして我に返ったようにシグに顔を向けた。
「これは誰なんだ?」
その質問は、もちろんシグ・ザルカバードに投げられたものだった。
ファルケンハインはエイルのその声を聞くと、息を呑んで再びアプリリアージェの顔を見た。だがアプリリアージェは何も答えず、ただエイルの目の前の黒髪の少女を見つめていた。

シグはうなずいた。
「左様。そのピクシィの娘はファランドールの人間だ」
「なぜ……なぜおれはこの子を妹だって思い込んでいたんだ?」
そう問いかけて、エイルはある事を思い出して自問した。
「思い込まされて、いたのか?」
シグはその問いには無言だった。
「エルデが、この子をオレの妹だって思い込ませていたんだな?」
エイルは悔しさで唇を噛んだ。
理由はわからない。だが、悔しさがこみ上げてきていた。
「なぜ騙したんだ?なぜ、エルデはこの子をオレの妹だなんて思い込ませたんだよ?」
「だいたい、よりによってなぜ名前がマーヤなんだよ?この子はマーヤっていう子なのか?」
エイルの続けざまの問いかけに、シグは無表情のままで首を振った。
「マーヤという名は知らぬ。ただ、この娘の現名はお前も知ってい

るはずだ」
エイルはゴクリと唾を飲み込んだ。
「現名、だって？」
「この瞳髪黒色の少女は、現名をエルデという」
エイルは再び混乱の沼に意識を持って行かれた。

「やはり、ね」
アプリリアージェはしかし、シグの言葉に小さくうなずいていた。

「エルデだって？」
「左様」
「エルデが、オレの妹として、マーヤと名乗っていたというのか？」
「そのようだな」
そのようだと言われても、エイルにはにわかには信じられなかった。いや、意識にこびりついた少女の映像が目の前の少女は彼の妹以外にありえないと、いまだに訴え続けていた。
確かに頭の中にいたマーヤという名前の妹はそこに横たわる少女そのものの姿形だった。その顔はもはや記憶や意識どころか、エイルのまぶたの裏に焼き付いていて間違いようがないほどだ。
だが、エルデの憑依呪法が解けた事によりフォウの記憶を取り戻しつつある今は、それが妹ではない事はわかっていた。
なぜなら……

「オレには、妹なんていないんだぞ」
いや、それどころかエイルにはそもそもマーヤなどという名前の知り合いはいなかった。
「教えてくれ。いったいオレは何をされたんだ？なぜ……」
だが、エイルの言葉はそこで途切れた。
気配がしたのだ。木のベッドから。
「おお」

シグは思わず声を上げるとベッドの側に近寄った。
「戻られたか！」
驚きと喜びの感情をむき出しにすると、シグはその両目から涙を流した。
シグの様子にも驚いたが、それよりもエイルにはその少女が動き出した事の方が重要だった。
それまでその場を動かずに様子を見守っていたアプリリアージェはファルケンハインと小さくうなずき合うと、自分達も少女が横たわる寝台に近づいた。

アプリリアージェが見たベッドの上の少女はむずがるような仕草で体を動かしていた。見れば体を覆っているのは紗一枚のみで、体はほとんど透けて見えていた。
「ん……」
小さくため息のような声が少女から漏れた。その少女は間違いなく生きていた。
八つの瞳が注視する中で黒髪の少女はやがてゆっくりとまぶたを開けた。予想通り、その瞳は黒く、そして大きかった。
少女はその切れ長の大きな目を開き終えた。
それはまさにエイルの記憶の中で笑い、泣き、怒っていたマーヤのものだった。だが、現実の少女のその顔は意識の中のそれよりも数倍美しく、そして恐ろしかった。
そう。ゾッとするような美しさだったのだ。
ファランドールではアルヴやアルヴィン、あるいはダーク・アルヴと言った彫刻を思わせるような整った顔に見慣れていたエイルだったが、その瞳髪黒色の少女の顔はそれらとは異質の美しさを纏っていた。
エイルは息を止めたままだったことにようやく気付くと、大きく深呼吸をした。
「ここは？」

少女はまだ焦点が合わないような頼りない視線を宙に漂わせながら、誰にともなくそう尋ねた。

その声は混ざり気のない銀で出来た鈴のように、軽やかに澄んだ音で一同の耳に届いた。

これほどまでに耳に心地よい声があったろうか？

エイルはそう思わずにはいられなかった。そしてそれはもちろん、彼が頭の中で作り上げていたエルデ・ヴァイスという「少年」の声とは似てもにつかないものだった。

「ご自分が誰か、おわかりになりますかな？」

少女を覗き込んでいたシグ・ザルカバードが流れる涙も拭かず、優しい声でゆっくりとそう尋ねた。

少女は視線を自分に声をかけた初老のアルヴへ移した。そして今度はゆっくりと自分の両の手をその視界に入るところまで挙げると、ほっそりとした形のいい指を開き、その掌をじっと見つめた。

少女はぼんやりとした表情で、心の中に沈んでいるものを思い起こすように再び目を閉じた。

だが、すぐにその薄い唇は小さく開いた。

「我が名は……」

一同が固唾を呑んで見守る中で再び目を開けた少女は、小さいながらもしっかりとした声でつぶやいた。

「我が名は、『白き翼』」

「合わせ月の夜」　第一部　蒼穹の台　完

＞i235102—1831＜

## 最終話　マーヤ（後書き）

「合わせ月の夜」　第一部　蒼穹の台　完結です。

第二部　深紅の綺羅　へ続きます。

こちらからどうぞ。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ２９４３ｏ／

なお、ウェヴサイトでは毎週月曜日に最新話を掲載中です。

ａｉｒ－ａｍｙ．ｃｏｍ　（ケータイ未対応）

# 第一話　エスカ・ペトルウシュカ（前書き）

第二部スタート
通巻第九巻

# 第一話　エスカ・ペトルウシュカ

＞ｉ２３４６４―１８３１＜

仏頂面を絵に描いたような主人の表情を見て、執事長であるロンド・キリエンカは苦笑をこらえるのに苦労していた。

それは星歴四〇二六年の冬を迎えたとある早朝の事で、公務の為に叩き起こされた彼の主人はことのほか不機嫌であった。

ドライアド王国の首都ミュゼでの話である。

王宮を中心とする都心からは少し外れた森の近くに、彼の主人の屋敷はあった。

屋敷とは言ってもミュゼ在住の貴族、しかも男爵という爵位を持つ者が住まうにはいささか質素で、使用人の数も併せて考えると十分な大きさであるとは言い難かった。

そもそもそこは借家であった。とはいえその仮住まいに腰を下ろしてからもう結構な時が経っており、我が家と言うべき愛着も湧いている。より広い屋敷に移るべきであることはわかってはいるが、そうは言ってもなかなか重い腰が上げられない状況にあったと言っていいだろう。

そのぐっすり眠れる静かな立地にある屋敷で平和な眠りの中にあった主人を直接叩き起こしたのはロンドの仕業であったが、その原因を作ったのはミュゼにある王宮であった。すなわち主人の仏頂面が向けられている先は王宮であったのだ。

まだ夜が明け切らぬ頃、屋敷の扉をけたたましく叩く者があった。

王宮からの使者が馬車を飛ばして郊外にあるエスカ・ペトルウシュカの仮の屋敷の門の前で馬を止めたのだ。

使者が携えていたもの。それはエスカに対する緊急の招聘状であった。

――五大老からの。

「うーん」

先ほどからエスカは窓の外から聞こえてくる声をしきりに気にしているようで、見事な金髪をぼりぼりとかき回しながら側に控えている執事長に声をかけた。

「おい、ロンド」

「はい」

「稽古か鍛錬か知らねえが、いくら何でも早過ぎやしねえか？」

『早過ぎる』とは、窓の下から聞こえてくる声の事であろう。

声は二人分で、一つは野太い男の声。もう一つが若い女の声で、男はなにやら指示を、女は返事とそして主に掛け声を発していた。

「まあ、日課でございます故」

「日課ぁ？」

エスカは驚いた顔で窓の外に向けていた顔を上げて、ロンドを振り返った。

今し方までの安眠をむしり取られた不機嫌さを思う存分仏頂面に込めていたエスカだったが、ロンドの答えに今度は鳩が豆鉄砲を食らったような顔に豹変したのを見るとその見事な変わりぶりがどうにもおかしくて、ロンドはついうつむいた。

エスカ・ペトルウシュカという人物はアルヴの血が入っていないデュナンとしては異例と言っていいほど整った顔立ちをしていた事で知られている。現存する多くの肖像画を見てもそれが定説なのは間違い無い。また様々な史実からも彼が相当な美貌の持ち主であった事はおそらく事実なのであろう。

無機質で表情の変化に乏しいアルヴと違い、エスカは喜怒哀楽が人一倍はっきりとしていた人物であったようで、側付きのロンドにとっては主人の顔の変化ぶりは楽しみの一つだったに違いない。

「毎日やってるって言うのかよ？」
「はい。毎日やらないと日課とは言いません」
「――正論過ぎて、今ムッとした」
「恐れ入ります」
「でもまあ、こいつぁ驚いたな。ここに来る途中でチラっと見たがよ、あいつ、この寒いのにもう汗だくだったぜ？」
「ミュゼに来てからのあの子にとって、朝の鍛錬が一番のごちそうなのでしょう。そしてその後でいただく朝風呂が二番目のごちそうのようです」
エスカが再び顔を窓の方に向けた気配で、ロンドはようやく顔を上げた。
見ればエスカは寝間着を脱ぎ散らかしている最中だった。
「下手の横好きっつーか、あいつのあきらめの悪さはハンパじゃねえな。だがよ、お前からもちょっと注意しといてもらえねーか？」
「と、申しますと？」
「俺はあいつに確かに言った。『いつでもかかって来いや』ってな」
「それは存じております。その場には私も同席しておりました」
ロンドは脱ぎ散らかされた寝間着を拾い上げながら、クロゼットに向かうエスカの後を追った。
「だがな、こっちが眠ってるときに襲っていいと言った覚えはねえ」
「はあ」
ロンドはまたか、と思った。
「俺だからいいがよ、普通は犯罪だぜ？」
「はあ」
「つーか、こっそり忍び込むとか物陰に隠れてとか、お前の娘にゃそういう知恵はねーのかよ？」
「――また、ですか？」
エスカは肩をすくめた。
「おうよ。真夜中に扉を叩くわ、扉を開く前に断りを入れるわ、開けたら開けたで今度は自分の名前をあのぼんやりした声で棒読みよ

ろしく名乗った挙げ句、槍で床をドンっと鳴らしてから抑揚のない声で『お覚悟』ときたもんだ。なんで俺がやかましいのかやかましくないのかよくわからんめんどくせえ幽霊のような奴の相手をしなきゃならんのだ？」

「それはそれはいかにも正調な。行儀作法はしっかりしておりますな。ああ見えてあの子は我が一族ではおそらく最もアルヴの気質が強いのでしょうなあ」

「『でしょうなあ』って、感心してる場合じゃねえだろ。あれじゃそのうち風呂場とか便所とかにもやって来て『勝負』とくるぜ」

ロンドはエスカが落とした服をすべて回収すると、彼の眼前にあるクロゼットの扉を開けた。エスカはクロゼットの中を一瞥すると今度は暗い顔をして目を伏せた。

そのクロゼットは王宮に「上がる」際に着る服、つまり公式の場で装うべき礼服や軍服などが目的に応じて並べられてあった。そしてそこはまた、エスカの美意識と相反する服の宝庫でもあった。

「それで、我が娘の槍の腕前は上達しておりますか？」

落ち込んでいたエスカの表情が一瞬で苦笑に満ちた顔になった。

それを見てロンドはいつも思う。主人の顔を見ていると飽きない、と。

少なくともエスカほど表情が豊かで、かつ猫の目のようにころころ変わる人間を彼は知らなかった。

「ひいき目に言ってお前の娘にゃ槍の才能はこれっぽっちもねえよ」

「ひいき目に言って、ですか？」

「忌憚のない意見を述べると、だ」

「はあ」

「あんな下手な奴はファランドール中探してもなかなかお目にかかれるもんじゃねえな」

「さすがにそれほどでは……」

「いや、謙遜する所じゃねえだろ。だがまあ、最近思うんだが、あいつが剣じゃなく槍を選んだのは正解じゃねえかな」

「ほう。槍は多少の適正がある、と？」
「いや」
エスカは今度は哀れむような顔でロンドを見た。
「剣は絶望的なんだよ。オレが足の指で握った方が上手い」
「それはそれは」
「あいつの手は武器には向いてないんだ。料理はあんなに上手いじゃないか。そっちで身を立てさせろ」
「そうは言っても聞く耳は持ちますまい。何しろ頑固な娘でございますゆえ」
「まったくだ」
ロンドは主に下着を渡し、クロゼットから着るべき服を迷わず選び出すとエスカの脇にある姿見の横の衣装掛けに吊した。
「頑固なだけじゃねえ。融通も利かねえ。だいいちあのぼーっとした顔で口うるさく言われるとこっちの調子がくるっちまう」
「ぼんやりしているように見えるのは地顔ですから仕方ございませんな。あれは母親似でして。しかし、ぼうっとしているようでも、元気な子でございますから」
ロンドはそう言って苦笑した。
「まあ、元気なのは間違いなさそうだがな」
エスカはロンドを横目で見るとため息をついて、ようやく着替えに取りかかった。
「あの子は護衛としてお役に立ちたい一心なのでございます」
「とは言え、あいつは俺の護衛をやりたい訳じゃねえしな」
エスカはそう言いながら浮かぬ顔のままでのろのろと身支度を始めた。いや、浮かぬ顔どころかその時にはもう積極的に憂鬱な表情といって差し支えない顔になっていた。
「どのみちあの子にはエスカ様の護衛はさせませぬ故、ご安心を」
「そう願いてえな」
「護衛の話が出たついでと言っては何でございますが、例の話、そろそろ本気でお考えくださいませんと」

「――付き人の件か？」
ロンドはうなずいた。
その件はロンドの最優先事項ではあるが、にも関わらず乗り気でない彼の主人が先延ばしにしていた問題であった。

その頃すでにドライアド陸軍において大佐の地位にあったエスカ・ペトルウシュカは、ドライアド国王エラン五世より男爵の爵位を下賜されていた。ペトルウシュカ公爵家を継ぐ立場にないエスカにとって男爵とはいえ爵位の存在は有形無形に便利なものと言えた。
そのペトルウシュカ男爵の問題は、公務中に常に側に控える腹心と呼べる人物がまだいない事だった。ロンドはなによりそれを心配していたのだ。
もちろん生まれたときからペトルウシュカ家の家臣であるロンドがその役目を引き受けるのが自然ではあったが、ドライアドではアルヴという種族は好まれない。特に宮廷内や軍部にアルヴを家臣として引き連れていては上からの心証が良いはずがない。つまり出世に響くのである。さらに世間体というものもある。
ロンドはそれがわかっていたからこそミュゼに来てからは決してエスカと一緒に外出する事はなかった。彼がエスカの為にエスタリアから連れてきた選りすぐりの家臣達の中にも数人のアルヴ系の人間がいたが、同じように言い含めてあった。
もちろんデュナンの家臣もいたが、エスカの腹心とするだけの能力を有する人物かというとさすがにその要求水準をすべて満たす事は難しかった。
出来れば軍の中でエスカの眼鏡にかなった「これ」という人物がその役に座ることを望んでいたのだが、エスカ自身が積極的に動こうとしておらず、やきもきしている所だった。
ただ、エスカの心中は理解していた。彼の意中の腹心は貴族学校（アカデミー）時代からの僚友であるアキラ・エウテルペであることは間違いない。
だがアキラはスプリガンの総司令に任命されている重鎮である。

それをいち大佐の部下に引き抜くわけにはいかなかった。
では彼に替わる人物を見つける努力をしているのか？
それがロンドのいう「例の話」なのである。

「まあ、そう急かすな。外れを引くわけには行かねえんだからよ」
「左様ですが」
「それよりお前、どう思う？」
エスカが尋ねたのは王宮からの急な呼び出しの内容である。こんな事は異例であった。
「さて……五大老様からの早朝呼び出しは初めてでございますね」
「まあ、老人どもは朝が早いからいいんだろうが、若いこっちの身にもなれってんだ」
エスカはあくびをしながらも、着替えをする手は緩めなかった。
「情勢の変化、でしょうな。それも極めて大きな何か、という匂いがします」
「お前の方には何もないのか？」
「残念ながら、これと言った情報は」
「まったく、こんな時にアキラはどこで油を売ってやがるんだ」
「特殊なお立場ですからな、エウテルペ様は」
「まったくどいつもこいつも。だが今のところ一番忌々しいのはコイツだな」
エスカは着替えの吟味をするためにロンドが用意した大きい姿見の前に立つとそう言った。
ロンドが用意したものは普段の軍服ではなく、礼装だった。
ドライアド王国の行政を実質的に司るのは国王の側近衆である五大老と呼ばれる五人の侯爵家の合議であった。公爵でも伯爵でもなく侯爵によって構成されているところが奇異に映るが、王家そのものが弱体化しているドライアドに於いて、血族の公爵家や姻族の多い伯爵家は既に名ばかりとなっており、実質的には軍部を掌握している五大老という有力な貴族が牛耳って久しい。

国王の実権は殆ど無きに等しく、まさに王制を維持する為の儀式用の飾りのようなものであった。

現国王エラン五世はまだ若く貴族の子息達の為の上級教育機関である貴族学校（アカデミー）でエスカと同級であった。

もちろん出世を狙うエスカが当時皇太子であったフェリックスに近づかないはずはない。持ち前の社交性で入学数日でフェリックス皇太子をして「親友」と言わしめるほど親しい関係を築いていた。

皇太子は自分の周りにいる形式と虚栄と虚飾に厚塗りされた人間達に辟易していた事もあり、公爵家の人間として完璧な気品と優雅きわまりない容姿をまといながら、まるで庶民と違わぬようなざっくばらんで感情を直接的に表現するエスカに出会い、あっと言う間に虜になった。フェリックスがもしも女性であったならば、出会って数日のうちに婚儀の話にまで発展していたに違いない。

それほどエラン五世にとってエスカは重要な人間であったのだ。

卒業後のエスカの異例の出世にはそういう背景が存在するのは間違いない。エスカはアルヴではなくデュナンである。またドライアドはシルフィードではない。エスカは持っている力は遠慮なく利用したし、ドライアドの組織はその力を簡単に行使できる場所であったというだけの話である。

だが、力はそれに見合うだけの反力を伴う。エスカの場合も例外ではなく、彼を疎ましく思う存在を無視する事は出来なかった。

その当面の敵が五大老という存在であると言ってよかった。

国の行政に対して影響力の低い国王ではなく、彼は是非とも五大老の力を我がものにする必要があった。だが、もともと上級爵位の家の人間を排除する事を是としてる五大老の中に?を打ち込む事はエスカといえども容易ならざる問題であり、その決定的な突破口を見いだせぬまま月日が過ぎていたのである。

五大老の一人と姻戚関係を結ぶ事が手っ取り早い方法ではあったが、エスカにはそれを選べない事情があった。

幸い、まだ五大老からその類の話が持ちかけられる事はなかった

が、ぐずぐずしていると逃げ道が無くなるであろうという事もわかっていた。
そこへ五大老からの緊急の呼び出しである。
エスカ達としても、構えないわけにはいかなかった。
姿見を眺めるエスカの胸中には、そういう様々な思いが去来していたのである。

宮廷で五大老に謁見するということはすなわち国王が同席する格式であることを意味する。つまり有事でない限り、それには最正装で臨まねばならない事を示していた。
それは思惑通りに事が運んでいない状況に併せ、彼に頭痛の種を提供していた。
エスカは儀式用の佐官用軍服の華美な意匠が好きではなかったが、それよりもジャラジャラとうるさく、そして重い勲章を左胸に全て並べなければならないことに対していつも閉口していた。
いや、「閉口」とは正確な描写ではない。その証拠にロンドの耳にはエスカが放つ呪詛の言葉が先ほどから間断なく届いていた。

「このこけおどしとしか言いようのない慣習はなんとかならねえのか」
呪詛の言葉は質問系ではあったが、さりとてロンドに答えを求めているわけではなかった。
「俺はこの格好をする度に、自分がいかに俗物でつまんねえヤツなのかを思い知れ、って言われているみたいでいい加減ムカつくんだよな」
呪詛の言葉はこのような独り言の形をとることも多い。
だが、幸せなことに、エスカにはどちらであろうとその愚痴をいつもしっかりと聞いてくれるロンドという相手がいた。ロンドは自分がいなければ、主人はきっと自らの溜息で溺れ死にするに違いないと確信していた。

だから時には呪詛の言葉に反応もする。それはロンドの思いやりである。

「めっそうもございません。エスカ様のそのお姿は実に気高くご立派であらせられます。亡き父上がご覧になられたならば我が息子の晴れ姿に感涙を禁じ得ぬ事でしょう」

見え透いた言葉であればあるほど、呪詛の言葉を止める効果が大きかった。さらにいえばエスカによく効くのは肉親、それもエスカの記憶にはない両親を引き合いに出すことだった。

ともかくロンドはそう言ってエスカの愚痴を優しく窘めた。エスカは最後の仕上げに詰め襟の鈎金具をカチっと音を鳴らしてとめるとロンドを振り返った。

「父上が？」

「はい」

「ふん。俺の記憶にねえ父上や母上のことはわからねえけど、あのバカ兄貴がこのザマを見たらきっと腹を抱えて笑うこったろうよ。いや、床を転げ回るだろうな。そしてきっとこう言うぜ。『エスカ、お前は軍人に飽きて道化に転職か？それにしてもよく似合っているぞ』ってか？くそ、勝手にホザいてろ、バカ兄貴。――いや、あのネジの外れたバカ兄貴の事だ。意外と心から喜んでくれるかもしれねえな。『今度の大吟遊会にはお前の道化舞を所望する』とかなんとか真顔で言ってくる姿がどうにも目に浮かんできてムカつくぜ」

エスカはそう言いながら姿見に映った自分の立ち姿を上から下まで検分した後、改めて深いため息をついた。

ロンドはもちろん、主人のため息を無視した。

「そう言えばミリア様におかれましては、最近は以前のような破廉恥極まりない酒宴は謹んでおられるようです。吟遊会も『エスタリア大吟遊会』という名前を付けて、日程を短縮した上で三ヶ月に一度に改められた模様でございます」

「ほーお」

エスカはロンドに怪訝な顔を向けた。

「まさかあのバカ兄貴が自発的にそんな気遣いを見せたわけじゃねえよな？」
「ご想像にお任せいたします」
「まあいい。ロンド、お前もミュゼにいながらど田舎のソリュートの事にまで神経を遣ってるとそのうちハゲるぞ」
「それこそが我が喜びでございます、エスカ様」
「ハゲ好きだったのか？」
「いえいえ。それよりも以前に比べるとミリア様の理不尽なわがままもすっかり影を潜め、最近はエイビタルのアトリエに閉じこもって絵を描いていらっしゃる事が多いと聞き及んでおります」
「絵か」
エスカは姿見に後ろ姿を映して最終の吟味に入った。
「掛け値無し、というかざっくばらんに言ってバカ兄貴のヤツは公爵だの領主だのという立場よりは百万倍も絵描きに向いてる。あのぶっ飛んだ性格も芸術家だと思えば腹も立たねえ……」
エスカはそこで言葉を切って、視線を宙に泳がせたが、すぐに床をドン、と音を立てて踏みならした。
「いや、どう考えても腹は立つぞ！」
「エスカ様……」
「俺も絵だけはあのバカの足下にも及ばねえ。それは認める。あの馬鹿の絵はどれを見ても思わず引き込まれそうになる。だからあの才能だけは素直に認めねえ訳にはいかねえんだよな。まあ俺としては出来れば一生好きな絵を描くだけにしといてくれればと思うんだがよ」
エスカの喜怒哀楽の変化がどうあろうと、ロンドは鷹揚にうなずいて軽く返すだけであった。エスカもその気のない返事に腹を立てたりはしない。これもまた日常の光景なのだ。だが、その日のエスカは日常よりも二割増し愚痴が多かったのは確かで、それもこれもそのドライアド陸軍の佐官用の礼服と、予想が出来ない五大老の呼び出しに原因があることは明白だった。

エスカ・ペトルウシュカについてここで多くを書く必要はないであろう。

「赤い薔薇の王」の若い時代の名である。

別名「隻眼の獅子」とも呼ばれる彼は、文字通り片目を瞑っている姿で描かれている肖像画が多い。

彼が右目の視力を失ったのはとある事件が原因であるが、その原因についてはここでは割愛しておこう。

エスカはエスタリア領主、ミリア・ペトルウシュカ公爵と同じ父と母の間に生まれた一歳違いの、そして唯一の実弟であった。

武についての才能を全く発揮しなかった兄と違い、弟のエスカは剣の腕前に長けていたようである。また気さくでおおらかな人情家という人柄もあり、人臣から圧倒的な信任を得ていたとされる。

同じ両親から生まれた兄ミリアと違う点として剣術と性格以外では、その境遇が挙げられる。

地元エスタリア生まれのミリアに対し、エスカは両親の留都期間にミュゼで産声を上げた、ミュゼっ子である。また、貴族学校（アカデミー）卒業後に仕官せず帰郷した兄と違い、年少組と呼ばれる予備学校時代からミュゼに移り住むと、その後アカデミー卒業後もついにエスタリアの地を踏む事はなかった事実も忘れてはならない。

すなわちエスカは本来地元であるはずのソリュートで暮らした期間がかなり短い。出生後もしばらくミュゼで育った彼は、ソリュートで暮らした期間は二年ほどであろう。それ故にこれほどまでに人望のある存在でありながら、唯一エスタリア地方での人気に於いては兄に後塵を拝している。

元々性格が違いすぎる上に、境遇の違いによる世界観の相違まであれば、両者が対立するのは時間の問題であった。

自領エスタリアの経営を巡る意見の食い違いに端を発したと言われるミリアとの不仲は様々な説話になっているほどつとに有名であ

るが、実際問題としてアカデミー卒業後もミュゼに留まって軍に籍を置いたエスカと、仕官もせずさっさと自領に戻ったミリアとの間で直接的な口論がそれほど多くあったとは考えられない。

アカデミー卒業後、兄弟はついに相まみえることはなく、それぞれの波乱に富んだ人生を閉じた為、あまたの説話として伝えられているような「正義の弟と悪の兄」という図式の兄弟喧嘩が果たして本当に長く繰り広げられていたのかどうかは怪しい限りであろう。

もっとも、兄についての批判や不満をエスカが隠そうとしていなかったことは様々な記述にあるように疑いがないようである。エスカが兄を排斥したがっていた事もまた事実であろう。ただ、後生の人間として違和感を覚えるのは、ミリア側に立った資料の中にはエスカを兄が批判する記述が一切見られない点である。

ファランドールの歴史上「もっとも仲の悪い兄弟」として有名なこの二人であるが、その実態は大いなる謎に包まれていると言うべきではないだろうか。

放漫経営であらゆる価値観に照らし合わせても無能と呼ぶしかない領主であったミリアに対してとった弟エスカの言行は、これまたあらゆる常識に照らしても是とすべきものであり、むしろエスカはミリアに対して比較的温情的な態度でこれにあたったと言ってもよいほどであろう。

口さがない人々の中には、「自分が気に入っていた侍女を寝とられた恨みがエスカの口を悪くしたのではないか？」などという者もいるようだが、例えそう言う事実があったにせよミリアに対してエスカが行動を非難する根拠としては春霞程度の重さもないものであろう。

アカデミー卒業後、ドライアドの法に従い一番下の尉官、すなわち准尉からはじまった軍におけるエスカの地位は、わずか三年で少佐にまで上がっていった。

王室にとっては重要と言っていいペトルウシュカという家柄の良さという強力な威光に加え、豊富な知識や熱心な研究の成果が功を奏したとも言えるが、それを有効に利用する能力に併せ、自らを周りに認めさせることが出来るだけの好機にも恵まれ続けた彼の類い希な強運あってこそとも言えるだろう。もちろん実力があってこそ、好機を生かせるわけではある。

戦略論や戦術論についてはアカデミーの歴史の中でも極めて優秀な上位の成績を収めていた事がそれを実証している。

彼は与えられた好機を逃すことなく掴み、傍目からは順風満帆な状態で頭角を現していたと考えられるが、詳しく分析すると彼が軍の上層部に認められたのは好機に恵まれる強運に併せ、時のドライアド国王エラン五世と個人的につきあいが深かったという事情もあるようで、事実その後押しが尋常ではなかったことは後世の研究でかなり詳らかになっている。

人心把握については彼自身のものだけではなく、彼がミュゼに呼んだエスタリアの優秀な家臣達の活躍がそれを支えていた事も忘れてはならないだろう。自領の力をどんどん低下させるミリアをミュゼに居ながらにして幽閉状態に追い込むことに成功した彼は、ミリアから取り上げた自領の蓄えの多くを自らの出世の為に惜しみなく使ったと言われている。上納する税には常に規定額に加え相当の上乗せを行い、王や五大老、政治や人事において要となる人物にはそつなく気の利いた贈り物を欠かさない、その際出来る限り使者を送らず自らが出向くなど、まめな彼の外交的な性格がかいま見える。自領で抱えるエスタリア兵を五大老の土地へ派遣し、海賊討伐やサラマンダから流れたと見られる山賊討伐に当たらせるなど経済・軍事的に様々な手法を用い、表に、そして裏に彼の出世工作は巧みに続いたと考えられている。

特にエスタリア軍の存在は大きい。

各貴族達も私兵を抱えてはいたものの、経済的な理由から辺境の

治安維持には常に頭を悩ませていた。その問題を自分たちの身銭を一銭も使うことなく、かつ手も汚すことなく解決してもらったという事実はエスカの存在感を高める上で大きな要因になったに違いない。

また、遠征で各地を訪れた「四連の白野薔薇」のクレストを染め上げた旗を掲げるエスタリア兵の規律ある行動は先々で人心を掴んだ。それは彼らを称える歌や説話がいまだに語り継がれている事でもわかる。

エスカが巧みなのは、そう言ったやや目立ちすぎるとも言える出世工作に眉を潜める立場の連中、いわゆる政敵と言える存在の人間達に対しても周到な外交作戦を有していた事である。

彼は五大老の領地の一通りの治安維持活動を終えると、エスタリア軍そのものをそっくり国王に献上してみせた。これはその地方領の軍としてはいささか強力な部隊に懸念をもたれる前にあっさり放棄してみせることで自らが国家に対して全く他意が無いことを示すとともに、さらに自らの存在を認めさせる行為となった。なぜならその献上軍の維持費については、可能な限り自領エスタリアの財政の中でやりくりをするという「おまけ」まで付けていたのだから驚くしかない。

さらにエスカは「学友」である国王に対してこう耳打ちしたとされている。

「この兵を今度は僕の政敵連中の土地で起こっている政情不安地域の平定に使ってくれないか。兵力要請をされていなくてもいい。もちろん出兵費用は僕が持つ」

と。

これにはエスカの政敵連中達も驚いたに違いない。

彼らには選択肢は二つあった。

もちろん受け入れることと断ることである。

断るのは簡単である。ただし断った瞬間に、抱えている内憂につ

いて国家の力を利用して解決する道は閉ざされることになる。と言って受け入れるのは容易に見えるが、それはすなわちエスカとの出世争いに対して後れをとる事を意味する。

なぜなら兵を受け入れる事はすなわち自らの領地に内憂を抱えていることを公に国王に告白しているようなものであり、それは自領平定もできずにミュゼでのうのうとしているのか？と思われることにもなる。

また、エスカの巧みな根回しにより部隊の指揮系統は国王直轄とされ、要するにそれはエスカの息のかかった指揮官によって統率されるエスカの軍隊であり、決して自分たちの思い通りになる無料の兵隊達というわけではなかったのだ。

断るにしても各地の不穏な動きは国家もある程度把握しており、知らぬ存ぜぬでは済まない状況にまで発展している所も少なくはない。

エスカはそのあたりを国王に指摘される前に五大老の領地では問題部分を既に平らげており、彼らの領地が検討地域に上がることがないように環境を整えていたのだ。問題視されるのは政敵達の領土のみであった。

この、多くの犠牲と金を湯水のように使ったエスカの戦略は功を奏し、彼のとんとん拍子の出世を強力に支え続けた。

五大老に対しては自らの野心を外向きにあからさまにする事でかえって安心されていたふしもある。すなわち彼が目指す最終目標は、軍の相当の地位と供に、「公爵領の正式拝命」であるという事であろうと思わせる事であった。

兄が継いでいる公爵の爵位を何らかの手段で自らの手に奪い取りたいという野心をそれとなく見せることで五大老達が自らの地位を脅かす存在ではないと思わせるようにし向けたのである。その点で兄との確執という分かりやすい構図はエスカにとってまさに好都合な「環境」以外の何ものでもなかったと言えるのではないだろうか。

史実としては五大老に対しエスタリアの継承権をミリアから剥奪し、自らに与えて欲しいと訴えたという事になっており、その裏付けとする記録も確かに存在する。それは当時の五大老の日記に記された文で、その訴えの後エスカはまず男爵の爵位を得、自らのクレストを紳士録に掲載する事になったのだが、その掲載されたクレストの意匠はペトルウシュカ公爵家のものと同一であった。ただし、色を変えて。

長く四連の白い野薔薇がペトルウシュカ公爵家のクレストであったのだが、ペトルウシュカ男爵は赤い四連野薔薇をクレストとした。知っての通り、現在ペトルウシュカ家のクレストとされているのは、この赤薔薇の方である。

数十年に一人の逸材と言われ、優秀な成績をアカデミーに残したエスカだが、実は次席卒業であった。理由は不幸なことに同じ学年に百年に一人の逸材と言われる人物が存在していたからである。名はアキラ・アモウル・エウテルペ。

常にアカデミーでの成績を争っていたエスカとアキラは良き政敵としてお互いに切磋琢磨していたようである。当時のエスカの日記を見ても、アキラを称える言葉と自らを叱咤する言葉が多い。反対にアキラへの苦言や批判はもちろん、嫉妬ともとれる記述は無きに等しい。実の兄であるミリアに対する批判や嘆きはかなり目立つところを見ても人格者エスカにして落第して同級生となっていた兄の行動は当時にしてすでに彼の容認の範囲を遙かに超えていたのであろう事は想像に難くない。

数十年に一人の逸材であるエスカと百年に一人の逸材であるアキラの両者の競争はその後のアカデミーでもしばらくの間語りぐさになっていた様である。二人の違いは、どちらかと言えば天才型のア

キラに対し、努力型のエスカという図式であったようだが、持ち前の社交的な性格と人柄の良さ、さらにはドライアドでは並ぶもののない家柄の良さという圧倒的な背景を武器に、こと人気に関してはエスカに集中していたようだ。現存する当時のアカデミーの成績表を見ると、一般教養や軍事学などではほぼ満点で拮抗していた両者だが、法律学ではエスカがやや上回っていた。ただし剣技・白兵戦実戦課程などでは後に「剣神」の名前で呼ばれるアキラにはさすがのエスカも歯が立たなかったかようで、両者の差には一朝一夕では埋められないほどの差がある。当時は剣技などの実戦課程に重きを置かれる風潮があった為、年間評価でエスカが次席になったのも推して知るべしであろう。それよりも驚くべきは現存する成績表や評価一覧などを見ると、有力貴族のエスカにも家督相続権のないほとんど平民、しかもドライアドのデュナンとは文化の趣を異にする他民族のアキラにもアカデミーはけっこう客観的な評価をしていたように思えることである。公爵家の人間であるというエスカの評価を上げる事について細かいさじ加減はあったのかもしれないが、少なくともアキラの評価を不当に下げてはいないことは確かである。

当時のドライアドの腐敗した凡百の貴族であれば、平民相手ということで家の面子の為にアカデミーに何らかの圧力をかけていたと思われるのだが、ペトルウシュカの家はそういう「政治的調整」を全く行使していなかったという事なのであろう。

卒業後エスカはアキラと同時に軍に入隊し、二人は同期の軍人として今度は軍を舞台に競争をすることになるのだが、アカデミーと違いそちらの舞台ではエスカは自らの持つ力を出し惜しみしなかった。公爵家の次男であり、社交界へのいわゆる伝手（つて）の多さに併せ、堪能な法律の知識と歴史学への深い造詣をも背景にして得たであろう政治的な工作に長けたエスカが頭一つ出世が早くなるのは時間の問題であった。階級が上になるとこれまた根回しをよくして即座にアキラを腹心として招聘する事に成功した後は、好敵手を常に手元

に置くようになった。アキラは以後しばらくの間は幕僚長としてエスカの出世にその能力を惜しみなく使う、押しも押されもしない副官、いや腹心になるのである。

アキラ・アモウル・エウテルペの例を持ち出すまでもなく、エスカ・ペトルウシュカという英雄の一番の長所を挙げろと言われたなら、歴史学者達は迷わず「人材を集める能力」だと言うだろう。彼はアカデミー時代に自分の政敵を含め、多くの人材をすでに自分の麾下（きか）に付けることに成功していたのである。この点でも腹心とおぼしき人物に背信されつづけた兄ミリアとの対比が興味深い。

エスカ・ペトルウシュカという不世出の英雄であり稀代の野心家を評価する一つの切り口として、彼のアカデミーの卒業論文主題が実に興味深いと考える学者もいる。

「茶葉の交配に及ぼす標高と霧、あるいは火山性空中浮遊物の成分の過多に関する一考察」

普通に読むとエスタリア特産の茶葉を研究した植物学の論文なのだが、そもそもある意味軍事学校であるアカデミーの卒業論文に戦略論や戦術論ではなく、ただの茶葉の研究を取り上げている事が異質と言える。言い換えると不真面目極まりない主題ともとれるのだが、その内容を全く異なる視点で見るとエスカ・ペトルウシュカの兄ミリアに対する隠された彼の本心が見て取れると言うのである。それは茶葉の研究論文を装った、後世へ残そうとした意思だったのではないか、と。

この論文の評価であるが、現存する評価一覧を見ると、当時のアカデミーの植物学の教授の採点でなんと優のさらに上にあたる秀となっている。この年、秀の評価をとった卒業論文はこのエスカ・ペトルウシュカただ一人であった。

ちなみに、優等の評価を得たと記録にあるアキラ・アモウル・エウテルペの卒業論文の表題は
「エッダ攻略の可能性と実現の為の四種の軍事戦略」
であった。
ただ、残念なことにこの国際問題にも発展しそうな表題を持つ物騒な論文は「月の大戦」の混乱のおりに散逸して現在は内容を確かめる術がない。戦略家としてのアキラ・アモウル・エウテルペを知るための素晴らしい資料となる事は間違いないだけに、実に悔やまれる。

エスカは再度姿見の我が出で立ちを見やると暗い声を絞り出した。
「なあロンド。エスタリア式の礼服で謁見するわけにはいかねえか？エスタリアの礼服は今のファルナ王朝の式服なんかよりよっぽど伝統と格式があるんだぜ？」
アルヴの従者は首を横に振った。
「エスカ様はもはやエスタリアの人間ではございません。ペトルウシュカ公爵の弟君エスカ・ペトルウシュカではなく、国王陛下の臣下、ドライアドのペトルウシュカ男爵でございます。お気持ちは私めにもよーーーくわかりますが、大事な時期でございます。お控え下さいますよう」
エスカは姿見を眺めたままで肩を竦め、またもや大きなため息をついて見せた。ロンドがわざわざ長く伸ばして指摘した言葉でドライアドの礼服の趣味が最悪だという事を再確認したからだ。
「ロンド、お前、ひどいヤツだな」
「エスカ様の為ならば、ひどいヤツと言われるのは我が勲章でございます」
「やれやれ」
ロンドとてエスカの気持ちは重々わかっていた。

ドライアドの将校の軍服はエスカの美意識にそぐわない。いや、ロンドの美意識に照らしてもひどいものとしか言いようがなかった。エスタリアは美意識に溢れた文化を持つ土地だったのだということを、ロンドは首都ミュゼにやって来て実感していた。

特にエスカはペトルウシュカの血を引いている。つまりいわゆる芸術家気質なのである。醜悪な物にたいする嫌悪はロンドのそれとは比べものにならないに違いなかった。

画家でもあった兄のミリアとは違い、エスカは自ら創作を行うことは一切なかったが、後世彼は芸術活動に対し、自らの私財を投じてその育成と普及に尽力したとされている。ミュゼ芸術学院の創始者であるエスカは兄と違い作品ではなく「人」をつくろうとしたのである。当時としては芸術・芸能に対する「力ある理解者」の一人であったことは間違いない。

ミリアの弟であるという血の問題もあろうが、もともと芸術の国と言われるエスタリアの出身である。芸能や芸術に力を入れたとしてもそれは自然な成り行きと言えるだろう。

兄を毛嫌いしていたエスカだが、芸術に対しては偏見を持たない人物であったことは、その兄ミリアの絵の多くが自身の命により設立した国立美術館に所蔵されていることからも伺い知ることが出来る。兄を憎み、疎んじ、その刃を向けたエスカ・ペトルウシュカではあったが、画家としての兄、いや兄の絵については賞賛を惜しまなかったという。

アカデミーを卒業して後、ミリアはついぞ弟のエスカとは会うことなく決して長いとは言えない生涯を閉じたが、「エスカ・ペトルウシュカの肖像」というエスカの全身を描いた三枚の連作肖像画を残している。あまりにも有名なこの三枚のエスカの肖像こそ今日我々がエスカ・ペトルウシュカの往時の正確な姿を知る最高最良の資料である。それによると既述の通りエスカ・ペトルウシュカが相当

に端正な顔立ちをしたデュナンであったことがわかる。その絵を前にすると「絶世の美男子」とはエスカの為にあるような言葉だと誰しもが思うに違いない。

ミリアは一切自画像を描かなかった。その為、彼自身の顔形は他筆によるしかないが、それらを見てもペトルウシュカの兄弟はあまり似ていなかった事は事実のようである。多くの証言や文献もそれを後押しするものばかりであり、容姿がかなり違う兄弟であった事は間違いのないところであろう。

実の兄の手になるものとは言うものの、件の三枚のエスカの連作はエスカ本人を前にして描かれたものではないようである。

それというのもすでに何回となく記している通りミリアは軍に入った以降の弟とは一度も会ってはおらず、その後に成長した姿を知らないはずである。記憶と想像で「その後」のエスカを描いたと考えられている。

その証拠にミリアの描いたエスカの右目は、普通に開かれているからである。

国宝でもある三枚の有名な「エスカ・ペトルウシュカの肖像」にはそれぞれ「赤のエスカ」「白のエスカ」「黒のエスカ」という題が後世に付けられているが、そのうち「赤のエスカ」こそはドライアドのエスカ・ペトルウシュカ男爵の佐官時代の儀式用陸軍式礼装であろうと言われている。金糸の縁取りに紺と銀の模様があしらわれた真っ赤な軍服の胸には様々な勲章がそれこそ無秩序にぶら下がっており、長剣を鞘ごと素手で掴んで無造作に立っているエスカの眼差しはどこか憂鬱そうで、見る者に不安と少々の憐憫の情を沸き立たせる。

おそらくこの日、五大老に謁見する前のエスカの表情はその絵にそっくりであったに違いない。

「我が軍は」

エスカの愚痴はまだ続いていた。

「軍の組織体系だけでなく、軍服もシルフィードのものを真似りゃ良かったんだ。いや、むしろ組織体系なんかどうでもいい。参考にすべきは軍服だ」
「失礼ながら」
ロンドはその愚痴については相手をせず、勲章の位置を無意味にのろのろといじっているエスカに苦笑しながら声をかけた。
その声色は事務的なものではなく、優しい響きがあった。
「そのような駄々のコネ方はミリア様とそっくりでございます」
エスカは勲章をいじる手を止めた。
「何だと?俺も兄貴に劣らぬ『うつけ』の才能があるってことかよ?」
エスカは両の掌を広げてじっと見つめた。
「血か?この体に流れる血のせいか?まずいぞ。思いっきりまずい事態じゃねえか」
ロンドはしかしまともにエスカの相手をするつもりは毛頭ないようであった。
「昨今の貴族の奥方衆のお茶の話題として『ひょっとしたら男爵にご婚姻の話が出るやも知れぬ』という噂が囁かれております」
「ふん」
エスカはロンドの言葉に鼻を鳴らして抗議した。
「ペトルウシュカ公爵の位を譲り受けた後ならまだわかるが、クレストがあるってえだけの爵位でしかない男爵ごときの俺にそれ相応の相手が用意されるほど甘かねえだろうよ」
「同感でございます」
「まさかその為に今日俺を呼んだわけでもあるまいが、何かの交換条件かついでの命令のようにその話は出るかも知れねえな」
「私もそれが気にかかっておりまして」
「へっ。おおかた五大老の誰かが俺を青田買いしておこうとでも考えてるんだろうが、そんな手に乗るわけねえっての。安心しろ」
「おっしゃるとおりです。お相手は慎重にお選び下さらねば。ただ

……」
「『ただ』、何だ？」
「エスカ様のお歳ですと既に通じ合う特定の女性が一人や二人、居てもおかしくございません。いえ、積極的に申しあげると『なぜ独身なんだ』と口さがない連中が言うのももっともだと言わざるを得ません」
「ンなこたあ、百も承知してるってーの」
「まあ、それはそれとして、最近はエスカ様の性癖に疑いを持つものも多いと聞き及んでおります」
「性癖？」
「女人（にょにん）に興味がないのでは、と」
エスカはがっくりと肩を落とした。
「だから俺、あからさまに娼館通いしてるだろ？」
その芝居がかった姿に、またもやロンドは笑いがこみ上げてきた。ロンドの位置からは見えないがおそらくエスカの表情は態度以上にやれやれと言った顔をしているに違いないと思ったからだ。
「あからさま過ぎて嘘っぽい、と」
「そう思われてるのか？」
ロンドは苦笑しながらうなずいた。
「娼館に入っても、ただ大騒ぎしているだけだというのはもう、知れ渡っておりますよ」
「やれやれ」
「まあ、世間体のいい話ではありませんな。せめて別宅をつくり、そこに側女（そばめ）などを置いて大々的に」
「おいおい、ロンド」
「これは失敬」
「側女ねえ。まあ、俺も女は嫌いじゃねえけどよ」
「敢えて申しあげておきますが、そういう過程がめんどくさいということであれば、手近で済まされてもよろしいかと。なあに、私に遠慮なさる事はございません」

「実の娘を主人の側女として差し出すってのか？」
「望外の喜びでございます」
「俺、まだ死にたくねえんだがな」
「抵抗するでしょうなあ」
「俺はデュナンだぞ？いくら女だって言ってもアルヴの腕力にかなうわけねえだろ？押し倒した瞬間に、殴り殺されるか絞め殺されるだろうな。いや、押し倒せるかどうかがそもそも問題だぜ」
「まあ、私は興味本位でそういう場面を一度見てみたいだけでございますが」
「お前、見かけによらず相当屈折した性格してんな」
「冗談でございますよ」
「冗談にも程がある。だいたい俺は他の男に首ったけの女を奪う趣味はねえ」
「まあ、世間向けの形の話でございます」
「心配すんな。実はそっちの方はフェリックスにこっそり頼んである」
「陛下に、ですか？」
ロンドは難しい顔をしてエスカを睨んだ。そんな話は聞いていないという抗議の意味だったが、エスカはロンドの顔を見ようとはしなかった。
「バードの中で都合の良さそうな女を見繕ってくれと言ってある。そいつを防波堤にするつもりだ」
「左様ですか。陛下は面食いですから、器量の良い方を選んでいただけそうですな」
「俺もそれだけはちょっと期待してる」
「その美貌のバードに骨抜きにされるやもしれませんな」
「されて見てえもんだな。ま、防波堤だけじゃ面白くねえから、宣伝用の人形にもなってもらうつもりだがな。だから見栄えがいい方がいいのは確かだ。その辺はフェリックスにそれとなく念押しをしてる」

「ほう。もしや、それは？」
エスカはうなずいた。
「ああ。場合によっては俺の側近として置いとく。どうせアキラが戻るまでの代役だ。だったら女でバードなら一石三鳥だろ？副官の問題、幕僚にバードを加える事、俺の性癖の噂の打ち消し」
「相変わらず、エスカ様らしい虫のいい計画でございますな。感服しました」
「嫌みはよせ。むしろ合理的と言え。まあ、だからフェリックスにはバードとしての力の強さなんかより、とにかく美形でできるだけ若い女って事で頼んである。バード庁はまだ五大老の力が及ばない組織だから、あいつの発言力が強い」
「まあ、バード庁はマーリン正教会との繋がりで、その力を維持しておりますからな」
「そう言う事だ。だから、少なくとも今日、ジジイのお下がりなど差し出されようものなら、こっちもそれなりの抵抗をしねえとな」
「言葉にお気をつけ下さいませ」
ロンドの叱責にエスカは「わかっている」と言った感じで手を振って見せた。
そつのない会話と適切な言葉選びで、五大老をして「若いのに油断ならない」と言わせるほどのエスカである。品のない下世話な物言いによる毒のある軽口がこの場だけのものであるのはもちろんのことではあったが、それにしてもそういう本音がエスカの口から発せられるという事は、すなわち自分が隙を見せる事のできる相手だと思われている証左であり、ロンドとしてはエスカが時折見せるその絶妙な気遣いにいつも眉間に皺を寄せながらも小さなため息で何もかも許してしまえるのであった。

キリエンカ家はペトルウシュカ公爵家に古くから使える執事家で、元々はデュナンの血の一族であったという。種族の融合が推奨された時代にアルヴの血が混じると、その後はむしろアルヴ系の氏族と

して名を残している。
　ペトルウシュカ家の執事家は世襲制で、その氏族はいくつかあるが、筆頭がキリエンカである。つまりロンド・キリエンカは本来ペトルウシュカ公爵であるミリアの側に控えていなければならないはずであったが、ミリアの無能ぶりに業を煮やした側近達がエスカと共謀してミリアをエスタリアの中部山岳地帯にある田舎町エイビタルの避暑用の別荘にほぼ軟禁状態にした後、息子達にソリュートの城を任せ、ロンド本人は首都ミュゼに赴き、公然とエスカに仕えるようになっていた。公爵家領地のいわゆる台所事情を一手に抱える立場のロンド・キリエンカはミュゼに居ながらエスタリアの経営を切り盛りしており、すでに領地の実権はエスカ側に移行していると言って良かった。
　側近のほとんどに離反された形のミリアだったが、名目上キリエンカ家の者が従者として仕えていた。それは既に家長を息子のロンドに譲り引退した立場になっている老フィドルことフィドル・キリエンカであった。

「時に、フィドルの方はどうなんだ？気まぐれなバカ兄貴の世話は辛いだろうな」
　エスカは思い出したように言った。
「お気遣い、いたみいります。父は齢すでに七十ではございますが、ご存じの通りいたって壮健でございますゆえ」
「ははは。フィドルは確かに剛の者だよな。俺もガキの頃、何度フィドルにぶん殴られた事か。あの真っ赤な顔で怒鳴られるのを想像すると、今でもチビりそうになるぜ」
「エイビタルには父、ソリュートの城には我が息子のフレクトやフェルンもおります故、ミリア様も安心して創作活動に専心できましょう」
「そのフレクトとフェルンだがよ」
　エスカはそう言うと、その日初めてまじめな顔になってロンドを

見つめた。
「バカ兄の様子次第だが、問題ねえようならとっととミュゼに呼んだほうがいいぜ。正直、ファランドール情勢に変化が起こる前に呼んでおきたかったんだが、そろそろ実行しとこうぜ。もう兄貴の近くに置いておくわけにはいかねえだろ」
「は。それはありがたきお言葉なれど、そうなりますと、その」
ロンドは口ごもった。
「わかってるよ。この屋敷が手狭ならどっか適当な屋敷を借りればいいだろ？なんなら今日、五大老に格安物件をねだってみるのも一興じゃねえか？飼いネコがひっくり返って腹を見せやがって、くらいに思ってくれりゃ思うつぼだしな。ま、今日の雰囲気次第だが」
「承知しました。では、仰せのままに」
「兄貴のお相手はもうお迎え間近なジジイ連中だけでいいだろ。フレクト達だけじゃなくそろそろ他の人材も目立たねえように随時呼び寄せとけ。その辺は任せる」
「ではエスタリア側の手配はそのように」
「ああ」
エスカはうなずいたが、ロンドはじっと主人を見つめたまま動こうとしなかった。
「どうした？言いたいことがあればはっきり言え」
「御髪（おぐし）を整えられた方が……」
ロンドはそう言うと櫛をエスカに差し出した。エスカは鼻を鳴らしてそれを受け取った。
「そう言う事はもっと早く言いやがれ。というか俺の髪なんかどうでもいいんだよ。『エスタリア側』じゃない「側」について言いたいことがあるんだろ？言っとくが、これから先はほんのちょっとした機会喪失で情勢はガラッと変わっちまうぜ？言いたいことは今言わないと後悔することになるだろうよ」
ロンドは肩をすくませた。エスカには心の迷いがお見通しだったのだ。

「恥ずかしながら申し上げます。ミリア様のお世話周りの手前もございますが、我が父からいきなり話し相手を取り上げるのも酷でございますので、愚息達の替わりに我が娘を遣わしとうございますが？」

ロンドの申し出に、エスカはしばらく無言で手に取った櫛を見つめていた。

「ミリアさまとの約束を違える事になってしまいますが、ご存じの通り我が娘の性格はあの通りでございます。無理矢理ミュゼに連れては参りましたが、かえって逆効果のようでして以前にも増して無口・無表情になっております」

「あの時は大騒ぎだったな。あいつがあんなになりふり構わず抵抗するなんて思ってもみなかったぜ。結局バードに頼んで眠らせて運んだそうだな」

「三つ子の魂百までとはよく言ったものです」

「そうだな」

エスカはさらに少し考え込んだ。

窓の外、中庭に当たる場所からはいまだに稽古の声が聞こえていた。

「お嬢様は槍の才能がないのですから、巧く突こうなどと言うスケベ心を持ってはいけません」

「はいっ」

「返事だけは相変わらず師範級ですな」

「はいっ」

「ではもう一度！」

「はいっ」

稽古の様子に耳を傾けていたエスカは、やがてポンッと手を打ってロンドに目配せをして見せた。

「よし。お前の申し出は実にいい考えだ。あいつならフィドルも退

屈はしないだろ。奴も槍の使い手だし。エイビタルでも十分稽古はできるってもんだ。うわっはっは」
「エスカ様」
「なんだよ？」
「あからさまに嬉しそうですな」
「そりゃそうだろ？これで安心して便所にこもれるってもんだ」
ロンドは苦笑いを禁じ得なかった。
「私もいい加減、我が娘の思い詰めたような顔を見るのが辛くなりました。苦悩に彩られた長寿より、短くとも幸せな笑顔を残してくれた方が良いのもしれないと。あの子の父親としては複雑な心底ではありますが」
ロンドの言葉にエスカはニヤリと笑ってみせると、実に嬉しそうにつぶやいた。
「こうなったのも全部あのバカ兄貴の勝手なわがままのせいだしな。この際あいつとの約束なんざどうでもいい」
「約束は約束です。それを破るのはさすがに胸が痛みます」
「大丈夫だ。俺たちゃアルヴじゃねえんだ。必要なら約束の一つや二つ喜んで破ってやるさ。スノウが目の前に現れた時のバカ兄貴の驚いた顔が目に浮かぶぜ。いや、怒り狂うかもしんねえな」
「さすがにお人が悪うございますぞ」
そう主を諫めつつ、しかしロンドもエスカと同じ事を考えていた。だが、その場面を想像しあって楽しむ時間がないことを、この優秀な執事はわかっていた。
「その話はまたの機会に」
時間だった。
「わかってる」
エスカはうなずくと、ニヤニヤした顔を瞬時に真顔に戻し、背筋を伸ばした。
玄関の車止めには気をもんで悶々としている使者がいるはずだった。

ロンドはエスカから櫛を受け取ると、歩み去る主人に深々と礼をして見送った。

エスカは玄関の車止めに駐まっていた迎えの馬車に優雅な身のこなしで乗り込んだ。

そしてすぐに窓をおろした。

それを見た御者は、馬にムチ入れ、馬車をゆっくりと発進させた。

屋敷の門を抜ける際、あたりに咲き誇る木犀の香りが車内に入った。その香りを逃がさぬようにするためなのか、エスカは開けたばかりの窓を引き上げた。

目を閉じる。そのまま右手を腰に滑らせると、短剣の柄に象眼細工された薔薇のクレストをそっと指で撫でさすった。

それは彼が男爵の爵位を得た時に「紳士録」に登録したペトルウシュカ男爵のクレストであった。意匠はペトルウシュカ公爵家のものと同一。違うのは薔薇の色である。

白の公爵家に対し、男爵の四連の野薔薇は真っ赤であった。

エスカはそのクレストに心の中で話しかけた。

(答えろ、バカ兄貴。なぜ、俺なんだ?)

そして赤い薔薇のクレストを隠すようにその柄を握りしめた。

# 第二話　五大老

ファルナ朝の歴代の王は無駄に華美なものを好んでいた事で知られる。それはミュゼの王宮に入ればすぐにわかる事だ。

一般の人間であっても王宮の門の両脇に目をやればその一端を理解するのは簡単である。もはや軍服とも呼べないほどばかばかしい姿をした衛兵の姿がそこにあるからだ。だが一度でも王宮に足を踏み入れた人間であれば、それがほんの序章に過ぎない事も知っている。

王宮に一歩足を踏み入れるとその意味がわかる。およそ普通の感覚を持つ人間が目の当たりにするのは飾る為に飾っているとしか思えない無秩序な装飾で表面が埋め尽くされている柱、至る所にあるおびただしい数の彫像や置物が歴史背景や手法などおよそ何の脈絡もなくただ収集され並べられている様など。

当時の貴族が陰で「世界一カネのかかった物置」と呼んでいたと言えばある程度の想像がつくだろうか。

常軌を逸しているのは置物だけではない。説明しよう。

広間の前室には横合いに靴拭いの部屋があり、訪れたものはそこで丹念に泥を拭わねば入室さえ許されない。広間の床にはガラスやタイルで極彩色のモザイク画が描かれているからだ。そしてその床に描かれた一枚絵はあまりに巨大すぎて一体全体どんな絵が広間を埋め尽くしているのかを正確に知っている人間はいないとさえ言われている。少なくともエスカが出入りの貴族連中に尋ねても何が描かれているのか知っている者は一人もいなかった。

このばかばかしい宮殿の現当主であるエラン五世ですら見たことがないとエスカには漏らしていた。

それもそのはずである。その広間には一階部分しか存在せず、その床絵の全体を眺めようとするならば壁から屋根を伝って天井の明

かり取りになっているステンドグラスの窓を突き破って首を中に突っ込むしか方法はない。それゆえ「ガラス拭きの為の絵」などと陰口をたたく者もいるほどであった。

来客にとっては広間はまだ何が書かれてあるかわからないだけ、ある意味で都合がいいものと言えるかも知れない。大変なのは王族の肖像画が掛けられている謁見の間や回廊で、ここには無秩序という言葉以外に適当な表現が見あたらないほどおびただしい肖像画が並んでおり、否が応でも目に入る。

それというのも歴代の王は競うように自らの肖像画を前王よりも大きな号数で描かせたからである。時代が下がるにつれ大きさにも限界が来たようで、最近の王はもっぱら枚数を増やす手段に訴えはじめていたものだから、一人あたり数枚の肖像画をいたる所に飾るようになっていた。例え肖像画と言えども王の前では最敬礼をしなければならないという不文律があるため、これだけ肖像画が多いと来客はたまったものではなかった。絵と目を合わさぬよう、うつむいて歩くしか手段がないのだ。

玉座もひどいもので、椅子自身が翡翠の巨岩をくりぬいて作られているのはまだしも、その表面には所狭しとあらゆる宝石が埋め込まれており、それは座面にまで及んでいる。

その嘲笑の対象たる玉座を造らせたのはファルナ朝の三番目の王であるエクラ二世だが、座面に加工した宝石を埋め込んでいたために座ると尻が痛くなるという構造上の欠陥が生じてしまった。玉座のお披露目の日、その「仕様」に気づいた当のエクラ二世はたまらず立ち上がると、その場の末席に参列していた痔瘻を煩う臣下から麻の尻敷を二枚とも奪い、それをそのまま玉座に敷いて尻を降ろしたという言い伝えがいまだに残っている。それもあってこの玉座は貴族連中にとっては常に笑い話と二人連れで語られるのである。

もちろん現在では臣下の粗末な麻布などではなく金糸でファルナ家の大鷲のクレストが刺繍された真っ赤なビロードのたっぷりと綿の詰まった尻敷に取って代わられているが、要するにこの王宮は万

事において節度というものを感じられない過度な装飾に彩られたものの集合体と言えた。

エスカは例の玉座を前にして、心の中でその日何度目かの深いため息をついていた。

膝をつき頭を垂れて五大老を引き連れたエラン五世が現れるのを今や遅しと待っていたのだ。いや、現れるのを渇望していた。ばかばかしい空間に長くいると自分自身もばかばかしい存在であるような思いに駆られてくるのである。その思いが確信に代わり、それに伴って人生観が変わってしまう前に事を済ませてしまいたかった。

多少の慰めになっていたのは彼の価値観で言うところの「死んだ方がまし」なマントを脱ぐことが出来たことである。

重くて仰々しい縁飾りがついた佐官に支給されている屋外儀式用の白いマントを着ずにすんでいるからこそ正気でいられるのだろうな、とエスカは真剣に考え始めていた。だがそうやって頭を垂れていると胸に貼り付けた無数の勲章が垂れ下がり、あらゆる価値観に照らしてみても相当みっともない格好になっていた。

ドライアドの場合、例によって勲章の形や大きさに脈絡など一切無く、特に国王から下賜される勲章にいたってはその勲章を定めた国王が好き勝手な大きさや形にしたものだから、エスカが付けている一番長いものなどは頭を垂れると床に着きそうになるのだ。もちろん国王から賜った勲章を床につけるなどあってはならぬ事であり、かといって頭の垂れ方が浅いと王に対する忠誠心が低いとなじられる。不敬を避けるには微妙な腰の角度に神経を使う必要があった。

（一体どうしろってんだ）

心の中でそんな呪詛の言葉を呟いた頃、玉座の奥の扉が開く音がして先触れが王の到来を告げた。エスカは勲章がギリギリ床に着かない距離まで腰を曲げ、首の角度をさらに深くして頭を出来るだけ低く下げる格好をした。

（さっきロンドにはああ言ったが、最悪なのは軍服ではなくて勲章

だな。後で訂正しておくか）

「しばらくぶりだな、ペトルウシュカ男爵」

玉座についたエラン五世がエスカに声をかけた。

エラン五世はまだ若い王であった。エスカとは貴族学校の同期である。若いのも道理だ。

そう挨拶をしたエラン五世だが、その日の彼の役割はそれが全てであった。

あくまで五大老とエスカの謁見であり、国王は立会人であった。いや、実際は立会人ですらなく、玉座が暖まる間もなく国王は立ち上がるとその場を五大老に譲る内容の宣言をして謁見の間を退出する事になっていた。

「忙しかろうが、たまには茶でも飲みに来い。余はそれなりに退屈をしておる」

「身に余るお言葉でございます」

国王はエスカにそう声をかけると何かを言いたげな顔を投げかけたが、それ以上は何も告げずに短い逡巡の後、そのまま謁見の間を辞した。

通り一遍の挨拶をしたエスカは再び最敬礼の姿勢で五大老の言葉を待つことになった。

五大老。

わかりやすく説明するならばドライアド摂政組織である。

名目上全ての権力が国王に集中しているドライアドにおいて政治の実質を牛耳っている言わば実行機関が五人の侯爵によって組織される五大老と呼ばれる組織であった。ファルナ王家が公爵家を地方へ封じた後、公爵家の姻戚からなる有力な侯爵家がミュゼに入り、力を蓄えて宮廷内に確固とした地位を築いたのが始まりであったと言われる。そもそもは有力な公爵家のミュゼ出張所のような意味合いが強かったそれぞれの侯爵家だが、歴史の流れの中で立場が逆転

し、当時においては五つの侯爵家が実質的にすべての貴族の頂点に立っていたと言える。
「公爵家は政治に不介入」という法律がドライアドにあったことが、彼らの力を揺るぎないものにしていた。
「大老」とあるが、もちろん老人の組織というわけではない。その証拠に当時の五大老の筆頭と呼ばれていたヘロン侯爵ことアイク・ヘロンは四十歳そこそこの若さであり、最年少のプロコ侯爵などはまだ二十歳になったばかりであった。

エスカはその日の五大老の招聘にある予感めいた物を感じていた。だからこそロンドに対し様々な重要事項について指示を出した上で屋敷を後にしたのである。

「待たせたな、男爵。さっそく本題に入ろう」
最初に声をかけたのは、そのアイク・ヘロン侯爵であった。
「男爵をこんな時間に呼び出したのは他でもない。緊急を要する事があってな」
「は」
緊急という割には五大老に緊迫した空気は読み取れなかった。だがエスカはこの場が重要な局面であることには違いないという確信を持っていた。だからこそ一言も聞き漏らすまいと緊張を持って耳を澄ませた。
「単刀直入に言おう。近く出兵がある」
「は」
とりあえずそう返事はしたものの、この後どう答えていいかはまだわからなかった。エスカにとってここでヘマをするわけにはいかないのだ。
どちらにしろ現時点で彼には何の情報もない。ここは下手にしゃべるわけにはいかなかった。
「耳の速い男爵だ。何か聞き及んでおるのではないか?」

「――出兵の理由についてならば、否。出兵命令についてであれば早朝の招聘を頂いた時点でもしや、と踏んでおりました」
「ふん」
アイク・ヘロンは面白くなさそうな顔でそう言うと話を続けた。
「つまらん返事だな。まあいい。実はシルフィードの国王が替わった」
「え？」
エスカはさすがに一瞬我が耳を疑った後、息をのんで目を見張った。
もとより冗談ではないはずだった。しかも生前の王位継承を行わないのがシルフィード王国のしきたりである。
意味するところは一つ。
「アプサラス三世が崩御？」
ヘロン侯爵はあいまいにうなずいた。
「病死という事だ」
死因などはどうでもいいことだった。
いや。死因などどうにでも発表できることだと言い換えた方が適切な表現であろう。
エスカはそれについては何も質問をしなかった。
アイクの言葉はアプサラス三世の死を確実に認識させるだけの意味しかなかったことになる。もちろん、この時点でエスカから口を出すべき事柄はまだ見つからなかった。
ただひとつ確信したのは予想通り今この時が彼にとって大きな人生の山場になるということだった。
「今度の国王は女王だ。しかもまだ十七歳と聞く」
「王女のエルネスティーネ様が即位されたと言うことでございますね。ここは傀儡と見るべき、でしょうか」
エスカはとりあえず軽い探りを入れるべく、そう発言した。
「感心せんな、男爵。一佐官が公式の場でめったなことを口にするものではない」

だが、ここでエスカは引かなかった。
「出過ぎた言葉は承知しておりますが、不謹慎ながらこの情勢はわが身にとっては千載一遇の好機。なにとぞ、しかるべき命をいただきとう存じます」
「相変わらず欲を隠そうともせんな」
「私には家督がございませぬ故、すぐに焦ってしまいます」
「まあいい。そういうわけで、サラマンダの兵を増強しておく必要がある。お前はおそらくその第一陣に任命されるだろう。とは言え、今すぐというわけでもない。それについては元帥庁から追って詳しい沙汰があろう」
「は。しかと承りました」
エスカは訝った。
簡単で単純すぎる内容だったからだ。「追って沙汰」をするくらいなら未明に叩き起こしてまで招聘した意味がわからない。
もちろんもたらされたアプサラス三世崩御の報は重大きわまりないものだが、それにしては指示内容が通り一遍すぎる。しかもこの内容であれば招聘されたのがエスカ一人であることも腑に落ちなかった。
「何か言いたそうだな、男爵？」
アイクが向けた水を受けるべきどうかでエスカは一瞬悩んだ。
だが、この機会を逃すと五大老、いやアイクと直接対話できるのはいつになるかわからなかった。
（ここで博打を打たず、いつ打つよ？）
エスカはそう決心すると口を開いた。
「おそれながら」
「うむ。言ってみろ」
エスカの言葉に、心なしかアイクは嬉しそうな声でそう言ってうなずいた。
「この機に出兵という事になれば我が身の処遇について何かお言葉があるやも知れぬと思いつつ本日は参上いたしました。もしそのよ

うな機会があれば私の方からお願いしたい事案もございます。そのあたりは如何に？」

「フン」

アイクは肩をすくめた。

「相変わらず食えんヤツだな、ペトルウシュカ男爵」

「恐れ入ります」

「朝っぱらから腹の探りあいは疲れる。どれ。先にお前の頼みとやらを聞こう」

エスカはゆっくりと息を吸い込んでから、静かに話し出した。

「これはかねてより進めていた計画でございますが、このたびようやく当方の準備が整いまして」

「前置きはいい。要点を申せ」

「は。わがペトルウシュカの領地、エスタリアの半分を陛下に献上したいと考えております」

その場の数人が息を呑む気配があった。だが誰も声は出さなかった。それはそうである。彼らも五大老の最高権力者であるヘロン侯爵の出方を伺っているのだ。

当のヘロン侯は案の定、眉ひとつ動かさなかった。だが、さすがにエスカの意図をはかりかねているのであろう。沈黙が長かった。要するにエスカの話は彼らにとって想定外の事柄であるということがそれで判明すると同時に、すなわち場の主導権を握れる可能性を示していた。

少し間を置くとエスカは続けた。

「来年は陛下も戴冠五周年。相応の引き出物になればと企図しております。つきましてはそのおとりなしを五大老様にお願いしたく」

そこまで言うと、エスカは深く頭を下げた。

そして五大老側の反応を待つべく、そのまま控えた。

やや間があって、やがてヒソヒソとなにやら意見を交わす声が頭を下げたままのエスカに届いた。話の内容までは聞き取れなかったが、エスカの真意をはかりかね、いったいどう対処すべきかを話し

合っているのは間違いないところだった。
「男爵」
やがてヘロン侯爵がエスカに声をかけた。
「は」
「何が言いたい？そのような見え透いた下心を報告したいわけではあるまい？そもそもお前には領地など存在せぬであろう？それとも我ら五大老に謎をかけてほくそ笑むのがそちの趣味か？」
「め、滅相もございませぬ」
エスカは狼狽した風を装うと顔を上げて両手を大きく広げて弁明した。
「ならば真意はなんだ？アプサラス三世亡き後の対応は急を要する。戯れ言につきあっている暇はない」
「お許しを頂戴し、申し上げます。ペトルウシュカ公領の献上の議については私には二心ございます。もちろん一つはいうまでもなく国王陛下のご関心を引かんが為。されど本心は別にございます」
そこまで言うと、エスカは意味ありげな目でアイクを見上げた。
「遠慮はいらん。申してみよ」
「は。ご存じの通り我が領地は兄ミリア、つまりペトルシュカ公爵の手にございます。実弟とはいえ、私には庭付きの屋敷一つ所有物はございません。これは土地割譲をよしとせぬペトルウシュカ公爵家の決まり事でございして、その点はどうにもなりませぬ」
「聞き及んでおる」
「しかし、でございます。私が公爵家を継げば、家の決まり事はすなわち我が胸先三寸。さらに言えば近頃我が兄の体調が思わしくなく別荘にて静養中なのですが、聞けば医者もすでに匙を投げているような事態でございまして……」
「貴様……」
ヘロン侯爵はエスカの言葉をさえぎるように立ち上がった。だがエスカはそこで言葉を切ることはしなかった。
「さらに申し上げるならば、直接国王陛下に所領を献上しても旨味

はさほど持続しませぬ故、どうせやるならば事は最大限に利用するのがわが流儀。すなわち、先ほど申しました我が領地の半分は五大老を経由して献上させていただければと愚考した次第でございます」

エスカは一気にそこまで言うと、そのつもりで見れば解る程度の薄ら笑いを浮かべて頭を下げた。返答を待つ態度である。

（言っちまったぞ。さてさて、どう出る？）

エスカは賽を振った。

後は出た目を確認するだけであった。アイクの出方次第で彼の今後の動きが決まる。できればエスカがお膳立てした形で進めたい計画であったが、今回のアプサラス三世崩御という状況の大変化は間違いなく歴史の分岐点になる。この機を逃すな、と彼の中の何かが叫んでいた。

とはいえ目算はあった。

エスカにしてみれば、ここまで言って「謎」が解らなければそれだけの相手だと判断し、違う手を打つべく行動を開始すればいいだけであった。

だが、そのエスカの思惑はまたもや思い通りには通用しなかった。彼が投げた劇薬のような言葉に最初に反応したのは当面の目標であるアイク・ヘロンではなかったのだ。

# 第三話　特級バード

「なるほどな。エスカ・ペトルウシュカ男爵、やはり面白い男だ」
その声にエスカは虚を突かれて思わず顔を上げた。
アイクの声ではないどころではない。その声そのものがエスカの記憶にない。要するにその声の持ち主は五大老にはいなかった。
彼の言葉に反応したその声は若い女のものだったのだ。

（誰だ……まさか変装か？）
油断していた。
エスカは舌打ちをした。まさか相手がそこまで用心深くこの場を用意していたとは思ってもいなかったのだ。
鼓動が高まるのを感じながら、エスカはそのままの状態であたりに気を配ったが、女の姿はない。謁見の間にはいくつかの隠し扉があり、その向こうに護衛が潜んでいるのはままあることだが、今の声は壁越しの大声などではなく間違いなく目の前から聞こえたものだった。
この状況にどう対処すべきかを考える時間はそう長くはなかった。
エスカは五大老以外の人間に今の話を聞かれたことで今回の作戦が失敗したことをもはや自覚していた。
有り体に言えばエスカは填められたのだ。今の声に対して五大老の誰も動揺を見せないことが何よりの証拠と言えた。
残された次善の策は、要するに沈黙以外にないとエスカは判断せざるを得なかった。
平静を装いながらも、心の中でエスカはほぞを噛んでいた。

「無理をするな。驚いたであろう？エスカ・ペトルウシュカ男爵」
アイクが口を開いた。
「？？はい。このエスカ、大げさではなく寿命が十年は縮まりまし

た」
「わっはっは。お前の提案はわかった。では今日の本題に入ろうか」
アイクはそう言うと、椅子に座ったままの他の五大老に合図して起立させた。
「男爵が胸襟を開いてくれたのだ。我々も本音を言うのが礼というものだな」
一番奥に居たアイク・ヘロンは自らも立ち上がり、五大老の面々と顔を見合わせるとそう言ってうなずいた。
それを見て、エスカは思わず音を立ててつばを飲み込んだ。
「男爵は大佐でありながら一個大隊を指揮する身。なれど幕僚長を定めておらぬそうだな」
「は……田舎者ゆえ、なかなか気心を通わせてくれる人物を見つけられずにおります」
「よく言うわ。生まれてこの方ほとんどミュゼで暮らしている事くらい知っておる」
「恐れ入ります」
「戯れ言はいい。そこでペトルウシュカ大佐には我ら五大老が信頼する人物を幕僚長として推挙しようと言うことになった。すでに元帥庁にも許可をとってある。わかるか?要するに我々の監視役を副官としてお前の側に置けという命令だ」
エスカはアイク・ヘロン侯爵の顔をまっすぐに見た。
「監視役とはこれまたいかなる事でしょうか?いったい私の何を監視されるとおっしゃるのでしょう?」
「実の兄を毒殺するなどと抜かす人間にはどう考えても監視が必要であろうが?」
「これは異な事を」
エスカが意義を申し立てようとするのをアイクは手を挙げて制した。
「これがお前の申し出に対する返答だ」
エスカはそれを見て一礼した。

なるほど、とエスカは合点した。
エスカに先に話をさせたのはアイクの戦術だったのだ。何を言うにしろ、監視役を付ける事を条件として提示するつもりだったのであろう。もとよりエスカの話がなくとも命令として伝えれば同じ事である。つまり、アイクにやや出し抜かれた格好と言えた。
とは言え、彼の首はつながったと言える。その場で反逆罪で捕らえられても仕方のない状況であったのだ。エスカとしては少なからず借りができたことは間違いなかった。
アイク・ヘロンがただの強欲貴族ではない事は理解していたが、それでもやや相手を侮っていたことを自戒したエスカは、そこで先ほどの声がアイクの話と符号する事に気づいた。
「もしや？」
「さすがに察したか。まんざらただのバカでもないようだな」
アイクはエスカの反応に満足そうな笑い顔を浮かべた。
「ペトルウシュカ大佐から部隊増強の要請が陛下の後押し付きで再三元帥庁に出されていたのは私も知っておる。特にバードの小隊の要請はもうずいぶん以前から出し続けておるな」
「は。対ルーナー戦に於いて物量で処するやり方は得策とは言えません。効率と効果の詳細につきましてはあらゆる場面を想定した試算を書面にて出しております」
「アカデミーの秀才らしいもっともらしい資料には私も目を通した。元帥庁としても今回の事変を受けて重い腰を上げたようだな。しかし大佐の申し出に許可が下りなんだのはひとつ大きな問題があるからだ」
エスカはうなずいた。
「認識しております」
「うむ。たとえ陛下の肝入りとは言え、他の者との均衡や優先の問題もあってなかなか希望通りに、という訳にはいかんのだ」
「御意。されど」
「そこで、だ」

アイクはエスカの言葉を遮った。
「これは失敬を」
「よいか？大佐でありながら大隊の指揮官というのはそもそも異例だ。それだけでもいらぬ風当たりの種となろう。そこへ特級バードの派遣まで行うとなると立場上他の者が黙ってはおらぬ。だが、それが大佐でなく少将の要請だとしたらどうだ？」
「……」
「わからんか？これは取引だ。ペトルウシュカ大佐は五大老の後押しを受けて少将になるかわりに、我らの飼い犬として動けと言っておる」
エスカは内心ホッとした。今のところ表向きの利害は一致していると向こうはとってくれたのである。いや、とっている「フリ」はしてくれたといいなおしたほうがいいのかもしれない。
「それは……望外の幸せでございますが」
エスカはしかし、脳のすべての回路を全開にして計算を働かせていた。
二階級特進という話がうますぎるのは間違いない。さらに言えばたとえ国王と五大老の肝入りであろうと元帥庁が何の見返りもなく大佐を二階級も昇進させるとは思えなかった。ヘロン侯爵の話の核心はここからのはずであった。
「お前が今考えているとおり、もちろん何の見返りもなく元帥庁が我々の要請を呑むわけはない。そこで我々は元帥庁に餌を与えた」
「餌、ですか？」
「左様。正教会との仮同盟を条件に出したのよ」
「何ですと？」
さすがにこの言葉には、エスカは演技を忘れて思わず素の状態で驚愕の表情を見せた。思わず口を開いたままでアイクの顔をまじまじと見るばかりだった。
（ばかな……）

エスカが暖めていたいくつもの台本を探っても、その筋は書かれていなかった。
マーリン正教会が特定の陣営につくなどあり得ない話のはずだった。
だが……。
（あり得ないなどと決め付けること自体、自らの視野を狭める最も愚かしい行為だということか）
エスカは、このとき、アイク・ヘロンを要注意人物として初めて強く意識することになった。外面を陳腐な権力者の仮面で装うのは味方だけだと思い込んでいた自らの驕りもきっぱりと捨て去った。
アプサラス三世の死は、彼の周りにかけられていたいくつものベールを剥がす力を持つ出来事だったのだ。

「驚いたか？」
「はい。このエスカ。生まれてこの方これほど驚いた事はございません」
「今度は何年寿命が縮んだのだ？」
「十五年ほどは……」
「悪びれずにいけしゃあしゃあと抜かしよるわ、食えぬ男よ。だがまあ、いい」
エスカは改めて深く頭を下げて礼を尽くして見せた。
「それで、正教会の仮同盟とやらと私の昇進とにどのような因果関係が」
「急かすな。物事は順を追って行かんとな。まずは紹介しよう」
アイクはそう言うと五大老がいる場所の反対側、具体的には玉座から見て右側の方へ顔を向け、何もない空間に声をかけた。
「そろそろよろしいでしょう」
エスカは目をこらしてアイクの対面の空間を見回したが、もちろんそこには誰もいなかった。
だが、その空間からは再びあの声がした。

「ありがたい。そろそろ飽きてきたところだ」
その言葉がエスカの耳に届いた直後の事だった。
何もなかったはずの空間に忽然と人影が現れたのだ。エスカは思わず瞬きをしたが、間違いなく人がそこに立っていた。
「紹介する。今日、いやたった今から、お前の幕僚長に就任するタ＝タン大佐だ」
ヘロン侯爵に紹介されたタ＝タン大佐はエスカをまっすぐに見据えて、よく通る声で自己紹介をした。
「ニーム・タ＝タンと言う。便宜上大佐だが、まあ名目だけだ。私は見ての通りの特級バードだ。今日からよろしく頼む」
そう言って不敵な笑みを浮かべるその人物は、まさにドライアドのバード、それも最上級職の出で立ちであった。
金糸の刺繍が入った白いローブをまとい、手にはルーナーの証である儀仗が握られていた。それは半透明の鉱物のようなもので出来ており、その頭頂部にはいくつものスフィアが埋め込まれていて謁見の間の天井にあるステンドグラスを写して輝いていた。
声の主が忽然と現れたことにも驚いたが、大佐職にあると言うそのバードが、まだ子供だった事の方がエスカにとっては驚きだった。
（うそだろ？）
エスカは言葉を失っていた。ヘロン侯爵の手の込んだ冗談に違いないと思おうともしたが、さすがにお互いそこまでの間柄とはいえない。
エスカは記憶の書架にあるバードに関する項目が書かれた書類を片っ端から検索し始めた。
ニーム・タ＝タンと名乗ったバードは一見するとデュナンの少女だった。焦げ茶色の髪は首にかかるほどの長さで、瞳は茶色。年の頃はせいぜい一二、三歳と言ったところだろうか。少なくともまだ成人には見えなかった。
それにしては物言いが少女のそれではなかった。表情もそうだが、特に最初に発した言葉は完全にエスカを見下したような語り口で、

エスカはそれ相応の年齢の女性を想像していたのだ。

「タ＝タン殿が若いので面食らっておるようだな」

ヘロン侯爵はエスカの表情を楽しむようにニヤニヤと笑いながらそう言った。

「アルヴィンの血が入っているそうだ。つまりは見た目の年齢などあまり意味はない」

「は」

「話はここまでだ。別途雑事もあるが、詳細はタ＝タン殿に聞け」

「え？」

「ほ。その間抜け面もなかなか良いな、男爵殿？いやいや、今日は社交界でも評判の美男子のアホ面をいろいろ拝めて楽しいひと時であった。わっはっは」

アイクはそう言うと恭しくニームに一礼し、その場を立ち去ろうとした。

「お待ちを、ヘロン侯爵」

エスカは慌てて呼び止めようとして立ち上がったが、ニームがそのエスカとアイクの間に入って儀仗を突き出すとエスカの行く手を塞いだ。

「この先の話は私の預かりだ」

立ちはだかる小柄な少女に、エスカは踏み出すべき足に力を入れるのを止めた。今は深追いは無用。少女の瞳はそう告げており、エスカの心の声も同じ考えのようだった。

「この部屋はどうにも息苦しい。続きは場所を変えてゆっくりと行おう。のう、ペトルウシュカ少将？」

エスカはもう一度アイクの後ろ姿をみやった。去りゆく執政官の後ろ姿を認めると、それ以上の問いかけは無駄だと判断した。

改めて目の前の小柄な少女を見つめると、エスカは恭しく挨拶を行った。

「紹介が遅れました。私はエスカ・ペトルウシュカ男爵。以後お見

知りおきを。タ＝タン大佐」
「私を肩書きで呼ぶ必要は無い。ニームでいい。それから一応言っておくが、私が特級バードだからと言ってそのとってつけたような敬語もいらん。猫かぶりはかえって不愉快だ」
「いや、しかし……」
「この私がヘロン侯爵の代わりに男爵の疑問をいくつか解決してやろうというのだ。断るのは得策ではあるまい？」
「それはそうですが……」
「ではさっそく落ち着いて話ができるところ……そうだな、どうせこれから世話になるのだし、直接男爵の館に案内してもらおう」
ニームはそう言って眉根に皺を寄せるエスカの顔を見上げながら不敵な微笑を浮かべた。
「世話になる？」
「言ったであろう？私は幕僚長という立場と同時にペトルウシュカ男爵の監視役でもあるんだぞ？」
そして、少し声を潜めて付け加えた。
「さらに言えば男爵は陛下にバードの中から器量のよい側室を見繕ってくれるように頼んでいたそうではないか？そのあたり、全て織り込み済みだと思っていたのだがな。少なくともこちらは織り込み済みでここにこうして居るわけだが」
「いや、それは確かに……」
エスカはロンドに告げた一石三鳥という言葉を思い出していた。
「側室扱いはあまり愉快ではないが、必要とあらば閨をともにすることは無論覚悟の上だ」
エスカは大きくため息をつくと、くるりときびすを返した。
「委細了解した。では遅れずついてこい、ニーム」
ニームは口の端でニヤリと笑うと、エスカの後ろ姿を追った。
「それでいい。私も男爵の事はエスカと呼ばせてもらう」
「好きに呼べばいい。言っとくが俺は歩くのが速い。遅れるなよ、チビ」

「猫をかぶらないとそれか。なかなか面白い。だが、チビはよせ、チビは」

エスカはニームの抗議を受け流すと、頭をかきながら、謁見の間を後にした。

## 第四話　ハンネ＝ローレ回廊の闘い

ラクジュ街道はシルフィード大陸の東部中央に位置する王国の首都エッダと、大陸北部に位置する遷都を控えた古都ノッダの間を最短で結ぶ大動脈である。

その道を、夜半にも関わらず十数台もの馬車が速掛けで走り続けていた。

各馬車には王国軍の中にあって特殊な存在を示すスズメバチの意匠が記されていた。

その馬車群の中央には、通常の四翅ではなく六翅のスズメバチの紋章が描かれた小型の馬車があった。

当時のシルフィード王国に於いて六翅のスズメバチのクレストは王国軍最上位の人物を表す表札のような意味を持っていた。

すなわちその馬車はシルフィード王国軍大元帥、ガルフ・キャンタビレイの乗る馬車であった。

「あと三時間ほどでバランツに到着します。そこで馬を交換しますが……」

六翅のスズメバチのクレストを胴に施した馬車の中にはアルヴが二人、向かい合って座っていた。豊かなひげを蓄えた眼光鋭い初老のアルヴと、まだ若い青年のアルヴである。その青年のアルヴが上官である初老のアルヴに声をかけたのだ。

「どうした?」

部下の言いよどむような言葉に、上官は眉をひそめて尋ねた。

「バランツには営舎もあります。そこでご休憩されてはいかがかと」

「無用だ」

間髪入れずに却下された部下はしかし、あっさり退却はしなかった。

「しかし」

「何度も言わせるな、アンセルメ少尉。今は一分一秒でも無駄にはできん。一言で言うなら『不眠不休で走り続けろ』だ」

眼光鋭い老アルヴ、ガルフ・キャンタビレイ大元帥は太い眉を吊り上げると、威圧感たっぷりの野太い声で副官をそう叱咤した。

だが大元帥の前の席に座るアルヴの副官は、上官のその脅しには全く動じる気配すら見せなかった。それどころか顔を突き出して睨み返して来た。

「いいえ、このリーン・アンセルメ。たとえどのようなおしかりを閣下から頂戴しようとかまいません。聞いて下さるまで何度でも申しあげます。バランツにて少しでもお休み下さいませ。いったい何日、およそ拷問にも等しいこんな速掛け馬車で駆け続けているとお思いですか？」

ガルフは両手で支え持っていた剣の鞘でドンと馬車の床を突いた。

「儂は十日寝ずともいっさい問題はない。王国軍を預かる人間が陛下崩御の報を受けて、道中でのうのうと眠って居られるとでも思っておるのか？」

リーンも負けてはいなかった。剣のかわりに拳を、床のかわりに己の膝を使い、鈍い音を鳴らして食い下がった。

「バランツには我が手の者が参じているはず。その者が携える情報を整理する時間があっても問題ありますまい？さらに言えばここへ至る道中、閣下の指示で車速を落とさなかったばかりに、路面の悪い場所を無理矢理駆け抜けねばなりませんでした。その意味はおわかりでしょう？重なる無理がたたって馬車の車体がきしみ始めております。安全に、かつ確実にエッダに到着するためにも一度職人に見せる必要があるのです」

「またその話か。一言で言うなら『聞き飽きた』わい」

ガルフは、アプサラス三世崩御の第一報を受けた直後にリーンと激しくやり合った事を思い出していた。

第一報は正式な情報ではなかった。

リーンがエッダに駐在させている配下の者が早馬でアプサラス三世が崩御したという事実だけを伝えに来たのである。

「なぜ、身罷られたのだ？」

ガルフにとって青天の霹靂とはまさにその事だった。

特に持病などのないアプサラス三世はそもそもまだ若く壮健で、ノッダへの遷都を前に各地を歴訪するなど、ますますその壮健振りを示していたところであった。

総領事として一年前からノッダに駐留して王宮と政府の受け入れ体勢を整えることに邁進していたガルフは、ほんの二月（ふたつき）ほど前にノッダで王と酒を酌み交わしたばかりであったのだ。

居ても立っても居られない気持ちであったろうが、大元帥もさすがに第一報では動かなかった。だがそれはリーンがそう注進したからではなく、総領事を拝命している手前、公式な知らせを待たずにノッダを空けるわけにはいかなかったからである。

悲嘆に暮れた姿こそ部下の前では見せなかったが、リーンの目にはそんなガルフの憔悴しきった様子が見て取れた。上官のその痛々しい姿は見るに忍びない程で、さしものリーンもしばらくは声一つかけられない程であった。

やがてリーンの情報網は第二報、第三報をもたらした。報告が回を追うごとに詳しい情報がわかり、アプサラス三世の死因が急性の心不全による死である事までは判明した。そしてその頃になると国王急逝の報が何かの間違いではない事も受け入れるだけの余裕が生まれていた。ガルフだけでなくリーンにも、である。

リーンの情報網に遅れること約二日で正式な近衛軍の伝令が訃報を携えてやってきた。

伝令は佐官であった。佐官を伝令に使うなど通常ではありえない。それだけ特別な内容であることが知れた。もはや事実は動かないという意味であった。

近衛軍の佐官が恭しく差し出した王国軍大元帥宛ての親書は二通

あった。一通は新しい女王の名で仮戴冠の日程が、そしてもう一通は近衛軍大元帥サミュエル・ミドオーバの名前で「急ぎ帰京されたし」と大書されていた。

伝令を下がらせた後で、リーンは初めてガルフにこう注進した。

「今は戻るな」と。

ガルフは当然ながら理由を問うた。対してリーンは「嫌な予感がする」としか答えなかった。

副官の「嫌な予感」だけで近衛軍大元帥の申し出を断る事はできない。ましてや今回はただの依頼ではなく、国王崩御という国家の一大事に直結した依頼である。その前にはもはやノッダ総領事としての務めという理由など薄紙ほどの重みも持たなかった。

ガルフ・キャンタビレイは王国軍の最高位である大元帥であると同時にシルフィード王国の侯爵の爵位を持つ。

そのキャンタビレイ侯爵家は古い家系が多いシルフィードの貴族の中でも別格と言って良い名門で、遙か古よりエッダの都の北方に肥沃で広大な領地を所有していた。

いわゆる名ばかりの名門ではなく、カラティア朝シルフィードの長い歴史の中でもキャンタビレイ家は事実、重要な役割を演じている。

家門の歴史が長いにも関わらずカラティア家との直接的な姻戚関係は結ばず、歴史上幾度かあった公爵家としての格上げの打診を全て断っていた。

シルフィード王国の法では公爵家は国王の親族であることが前提であるから、どのような武勲や功労があろうと公爵家となるには当主がカラティア家の直系の人間と婚姻し、カラティア家の傍系で既に断絶した公爵家の家名のどれかを継ぐか、既存の公爵家の直系の者と婚姻し、その家の名前を名乗る必要があったが、キャンタビレイの当主達はそのどちらも是としなかったのである。

その当時の当主でなければ公爵家になる事を固辞した本当の理由

などわかるはずもないが、エッダの侯爵屋敷の敷地内にその答えを見つけることができる。

そこには石造りのいかめしい個人図書館があり「キャンタビレイ文庫」と呼ばれる侯爵家に伝わる膨大な量の蔵書が眠っている。そこにはかなり古い時代の家臣の日記までが収蔵されており、内部からの視点ではあるが「戦記」としての資料性が高いものが多い。それらを読むと我々はいにしえの空気に少しだけ触れる事ができる。

もちろん、公爵家へ格上げするという打診を断った背景も浮かび上がってくる。

理由（こと）の発端は例の有名な伝説的な逸話である。

様々な改変や脚色が多い為、文献から導き出される客観的な出来事のみをここで改めて紹介しておこう。

それはシルフィード王国の黎明期にまでさかのぼる。

まだ公爵や伯爵などという爵位が存在しなかった時代に、当時シルフィード王国の首都であった大陸西部の古都ヴェッダを拠点としたカラティア家の兵がある重要な作戦を携えてドライアド大陸に攻め込む事になった。王家からの呼びかけに応じて合力を申し出た大陸東部の有力貴族であったキャンタビレイの軍が名乗りを上げた。大軍を擁する指折りの貴族であるキャンタビレイ軍とカラティア王朝の直轄軍が連合して合同軍を編成し、ドライアド大陸に出兵した折りの話である。

上陸後、大陸内の移動について連合軍の二人の司令官、つまりカラティア王国の直轄軍を任されたカラティア家の長子とキャンタビレイ軍の指揮を執るキャンタビレイ家の長子との間に言い争いが起きた。

記録では戦術的な意見の相違と言う簡単な記述になっているが、従軍した下士官の日記の一つにその言い争いの内容が克明に記されている。それを信用するならば、要するにある分岐点に来た合同軍が、その先の経路を右にするか左にするかで意見が対立し大騒動に

まで発展したというのである。

カラティア家の司令官は左、つまり南側の温帯寄りの道を、キャンタビレイ家の司令官は右、つまり熱帯地域の湿地帯を通る経路を主張し、どちらも自説を曲げようとはしなかった。その議論はやがてつまらない言い争いにまで発展し、双方が率いる軍同士の雰囲気は一触即発になっていった。

カラティア家の司令官は学者として一流で、その知識を背景に自説を推す。すなわち地形学的・気象的な見地から、右の経路が不適当である事を説いた。

ドライアド王国首都のミュゼへ西進するにあたり、北回りの進軍は中途に広大な沼や大小の河川、深い森など自然の障害が多数あり、この先すぐに訪れるであろう雨期には突発的な湖の発生や大雨による水害が待ち受ける可能性が高く、ヘタをすれば軍隊が孤立する羽目にも陥りかねない。つまり右の経路を征くには多くの労力を伴うとして、比較的平坦で整備された街道を多く含む左回り、すなわち南側の回廊を主張した。昔から集落や都市もある地域であり、故に道路状況などの情報もそれなりに得やすい。温帯域であるから、雨期にあっても地形変化の可能性が無い為に進軍の計画が立てやすく、見通しの良い場所も多く軍の展開に有利だとし、どうあっても左周り、すなわち南側経路しかあり得ないと主張した。そもそも当初の戦略では南回りの経路をとる事になっていたのである。

対するキャンタビレイ家は南の経路からラダ・スズメバチが飛来したのを兵が発見したという理由だけで当初案をなぞる事に反対していた。

要するに北回りを積極的に選んでいたのではなく、南回りの危険性を危惧して、その対案としての北回りを主張していたようである。

客観的に見てもそれだけの理由ではキャンタビレイ家の案がカラティア軍の司令官を納得させるにはおよそ説得力に欠けると言わざるを得ない。

結論を出せないまま長く続く堂々巡りは双方の軍の末端兵にまで

影響を及ぼし始め、やがて味方であるはずの兵士同士が言い争いを始めた。やがてそれは取っ組み合いにまで発展し、ついには剣を抜き対峙するまで混迷した後、ようやく収束を迎える事になった。

キャンタビレイの司令官が折れたのである。

そもそもラダ・スズメバチが飛来した方角を避けるべきだという主張が、カラティア家の司令官にとってはおよそ重要視すべき現象だとは思えなかったのである。

ラダ・スズメバチは、ドライアドの温帯を中心に亜熱帯域まで広く分布するファランドール最大のスズメバチで、通常の働き蜂でも成人デュナンの人差し指ほどの大きさがある。雄蜂にいたってはアルヴの人差し指ほどの大きさを誇るという。

黒と黄で彩られた巨大な蜂の姿は勇猛で「蜂の王」と呼ばれているが、他のスズメバチとは違い攻撃的な性格ではない。むしろ姿形に似合わず温厚な蜂と言える。また腹の先から突き出した体長の半分にも及ぶ長い針には毒がない事が知られている。少なくともラダ・スズメバチに刺された人間が死亡したり重篤な状態になることはなく、巨大で恐ろしい蜂に刺されたという事実に驚いて人間が勝手に失神する事があるだけのようで、そもそも何もしない人間をラダ・スズメバチが襲ってくる事はない。

好物はミツバチと同じく花の花粉と蜜で、意外なことに肉食性はない。スズメバチという名が付いてはいるが、ラダ・スズメバチはその実いわゆる一般的なスズメバチとは全く違う独立種なのである。亜種はなく、現存するのはラダ・スズメバチただ一種である。

ただし温厚とは言え、巧みに隠してある巣をひとたび攻撃されると猛烈な攻撃形態を成し、標的を完全に駆逐するまで戦い続ける。巨大な蜂がその怖ろしく長い針で「敵」を闇雲に刺し続けるのである。それは相手が動かなくなるか、自分自身が動けなくなるか、あるいは巣から一定の距離まで敵が敗走するまで執拗に行われる。これにはさすがのクマも太刀打ちできず、蜂蜜好きの彼らをして絶対にラダ・スズメバチの巣だけは襲わないとまで言われている。

少数部族の中にはこの蜂を神聖化して祀っているところもあるほどだが、周知の通り、今日絶滅が危惧されている種の一つでもある。

個体数の減少理由はラダ・スズメバチの特性である「極度の嫌人性」に拠るところが大きいようだ。ラダ・スズメバチはいわゆる「渡り」の習性がない。女王蜂の寿命が近くなれば巣分けが行われ、その際に大規模な移動がある程度である。彼らは人里から遠く離れた所にしか生息していないのが普通で、開墾などにより人間による集落ができると、付近に巣を持つ女王は特殊な音波を発し群れに対して巣分けを促すという。

既に飛ぶ為の翅（はね）を持たぬ女王蜂は食料を運ぶ部下さえ失い、結果そこで命の営みを終えるが、彼女の忠実な子供達は卵やさなぎを大事に抱えて新天地で彼女の遺伝子を継ぐ新しい女王を選び、育て上げるのである。

「渡り」の特性のないラダ・スズメバチの群が飛来するという事は、その方角に人間がいる可能性を示唆している。シルフィード軍の持つ情報では南回りの経路上にしばらくは大きな集落はない。つまり大量の人間がラダ・スズメバチの縄張りに進入している可能性、つまりは待ち伏せの罠が存在するというのがキャンタビレイ家の大将の主張の根拠であった。

だが、その主張はたった一度目撃されただけのハチの動きから推測されるあやふやな可能性であり、物理的な地形の特性から導き出された論理的な選択を主張する者を納得させるだけの力を持たなかった。

またカラティア家の長子といえば、すなわち王位継承権の第一位にある存在である。その時の嫡子はアルヴィンの女であった為、第一王女と言う事になる。同じく嫡子ではあるものの、臣家であるキャンタビレイ家の人間としては、最後の段階では王家の意見を尊重する必要もあった。

ましてや士気にほころびが出始めた自軍をそれ以上混乱させぬ為にも、十歳程歳上であったキャンタビレイの大将側が折れたのは自

然な流れであったろう。

果たして左、つまり南回りの経路には敵の待ち伏せがあった。通路の両端を深い森で、そして側面を谷と山で囲まれた場所に差し掛かかり、軍が長く伸びきった時点で森の中に配備されていた敵軍に前後を挟み撃ちにされたのである。

「それみたことか、小賢しい小娘め」

唇を噛みしめるカラティア家の第一王女は、馬を並べたキャンタビレイの司令官にそう罵られる事を覚悟した。名誉を重んじるアルヴ系種族としては、これ以上の屈辱はない瞬間であった。

しかし、横に並ぶ大柄なアルヴの猛将から投げられた言葉は意外なものだった。

「殿下、今こそ本物の勇気が必要な場面ですぞ。ここはマーリンの名にかけて、我らが食い止めます。殿下は我らがシルフィードの軍を率い、反転してご退却を」

その申し出に第一王女は即座に反応した。

「何を言う。我が矜持にかけて、余はここで敵を殲滅する」

「なりません」

「何故だ?余を女と軽視しているならば、許さんぞ!」

「冷静になられよ。真の過ちとは一度の過ちにあらず。多くの場合は一つの過ちを引きずる事により生まれる二つ目の過ちを指すものです。我らが次代の王ともあろうお方が、その愚を犯してはなりませぬ」

「しかし、そちを残して余一人で退却するなどカラティア家の嫡子として許される事ではない。我が桜花のクレストに賭けて、余はこの場に残り心ゆくまで戦う所存じゃ」

学者とはいえ、若き王女は勇敢にして血気盛んであった。既に腰の短剣を抜き放っていた。

しかし、キャンタビレイの嫡子は努めて落ち着いた声でそれをいさめた。彼は第一王女が掲げた剣の刃を素手で握り、力を込めてそ

れを下ろさせた。驚いた第一王女は素直に剣を支える腕の力を抜いた。

「勘違いされては困ります」

「何だと？」

「我らは王女の為に壁となるに非ず。キャンタビレイ家はすなわちシルフィードという国の為にあるのです。万が一殿下がここで斃れるような事があれば、シルフィード大陸は混乱しますぞ。我らは我らの務めを果たすだけ。同様に殿下は殿下の務めを果たされよ」

シルフィードの軍人にとって戦わずに退却するということは矜持に関わる。だがそれを「勇気を持て」と敢えて進言し、かつ「うぬぼれるな」とたしなめてもみせた。

この後二人にどのようなやりとりがあったのかは詳らかではないが、カラティア家の司令官である第一王女は結局大軍を率いて来た道を戻り、後方に待ち受ける敵軍を突破した。

この時のキャンタビレイの司令官の言葉には重要な意味がある。キャンタビレイ文庫に現存する複数の戦記によれば、当時のカラティア朝には直系の、いわゆる嫡子はその第一王女のみであったというのだ。

ドライアド王国との戦況は依然混迷しており、カラティア王家の家訓に則り最前線に立って戦っている現王の身にひとたびなにかあれば、さらに唯一の嫡子である王女がここで死ねば、それはすなわちカラティア朝の滅亡を意味する。

当時は王位継承権の明確な順位を決める法律などもなく、一つの王朝の滅亡が国の混乱を招く事は他国の例を見るまでもなく容易に予想が出来たであろう。

前方に布陣する大軍を前に「後方の壁」として残ったキャンタビレイの司令官はここに残り自軍撤退の時間を稼ぐ壁となるべく共に戦う者を募った。キャンタビレイ軍は全員が手を挙げたが、彼はその中からたった二十名ほどを指名した。多くは彼に近い親族だった

が、選ばれた者の中には共にこの闘いに戦士として従軍していた若い彼の妻もいた。選りすぐりのアルヴで構成されたキャンタビレイ軍は前面の敵と対峙すると、本隊が退却を始めたのを合図に前方の大軍へ向かい馬を走らせた。かくして後に「ハンネ＝ローレ回廊の闘い」と呼ばれる壮烈な戦闘は幕を開ける事になった。

キャンタビレイ隊にとって不幸中の幸いだったのは、そこがかなり狭い街道であった事である。自軍も前後に長く展開させられてしまったものの、敵方も左右には展開できず、数を利して一気に責める作戦が不可能だったのだ。

キャンタビレイ軍はシルフィード軍の本隊が後方の敵軍を破って森の中へ入り込み、退路を確保したのを見届けると、キャンタビレイ率いる猛者達はようやく撤退をはじめた。

デュナン主体のドライアド軍に対して、アルヴで固めたキャンタビレイの精鋭達は個としては圧倒的な戦力差を誇ってはいたが、当然ながらやがて数の差が個々の力の差を上回り始めた。

そうこうしているうちにキャンタビレイの精鋭部隊はカラティアの本隊に突破された残軍とぶつかり、後方から追ってくる敵本隊とに前後を塞がれた。当然ながら彼らが退却すると言う事は王女が突破した別部隊に遭遇すると言う事なのである。

多勢に無勢。それも圧倒的な差である。さらに前後を閉ざされては、壁となったさすがの猛者達も、全滅は時間の問題となった。シルフィード王国の記録に依ればドライアド軍の数は六万。ドライアド王国の記録では五万五千とある。対してシルフィード王国の合同軍の数は二万であったと伝えられている。キャンタビレイの精鋭達は二万の兵を逃がすためにたった二十人で二千倍もの兵を相手にその場を持ちこたえて見せたのである。一騎当千とはまさにこのことであろう。

殿（しんがり）

だが、それもそこまでであった。狭い通路のおかげで一対一もしくは二対二程度の闘いを交代でこなしてなんとか時間を稼いでいたのだが、前後を攻められてはさすがに全滅は時間の問題と言えた。

シルフィードの人間であること、そしてキャンタビレイ軍の一員であることを恥じぬよう最後の一兵まで戦い抜こうと彼らが誓い、決戦に際して鬨の声を上げたその時、戦局が一変した。

いったん退却したはずのシルフィード軍本隊が再反転して後方側の待ち伏せ部隊に襲いかかったのである。つまり敵・味方双方がお互いにお互いを挟み撃ちする形になった。

シルフィード軍はただ戻ってきたのではなかった。聡明で鳴る王女は、短時間の間に戦術を練っていた。戦場の狭さはいかんともしがたいが、シルフィード軍はドライアド軍と違いフェアリーの兵が多い。彼女は部隊をフェアリーの属性ごとに編成しなおし、戦場を立体的に活用する戦法を編み出していた。風のフェアリーはその身軽さを活かし森を駆けて敵の後方部隊を側面から攻撃し、大地のフェアリーの部隊は堅牢な盾の部隊となりドライアド軍を力で正面から押し戻し、水と炎のフェアリーが遠隔的な攻撃でそれを補助すると言った具合である。

闘いは壮絶を極めたが、ドライアド側の指揮官が自軍の消耗を嫌い休戦を申し出る事により、ついにその闘いは幕を下ろす事になった。

わずか数時間の、しかも辺境で起きた小競り合いとも言える闘いであったが、その闘いの名が歴史に残っているのは、もちろんキャンタビレイ軍の壮絶な闘い振りがあったからである。

数で上回り、戦術的にも戦略的にも圧倒的に有利に事を進めたはずのドライアド軍は、兵の三分の一を失う予想外の結果に茫然自失であったという。「双方いかなる優位をも主張せずおのおのの軍を完全に撤退させる」といういわば引き分け宣言で闘いは終わったが、客観的な評価としては殆どドライアド軍の敗戦と言って良い状態だ

った。

死傷者の数がドライアド側よりも圧倒的に少なかったシルフィード軍だが、それでも犠牲は少なくはなかった。彼らが自国シルフィードに持ち帰った戦死者の名簿にはキャンタビレイの司令官の妻の名が記されていた。

キャンタビレイ家嫡子の妻の名は、ハンネ＝ローレ。

以降、ドライアド大陸の東海岸と西海岸のミュゼをつなぐその南側の経路をシルフィードでは「ハンネ＝ローレ回廊」と呼称し、その闘いは「ハンネ＝ローレ回廊の闘い」と呼ばれる事になった。

特に経路に名前などを付けていなかったドライアド側でもその呼称を使っているのは、停戦交渉時にシルフィードの王女が相手側に唯一求めた条件であるという話も残っているが、それは定かではない。

シルフィード本国に「凱旋」した王女は、翌月には戴冠し女王となった。

「ハンネ＝ローレ回廊の闘い」と時期を同じくした別の闘いで負傷を負った父王が逝去し、その跡を継いだのである。そもそも彼女の闘いは父王の軍隊の作戦を脇で補佐する為の陽動作戦であったのだ。大軍を首都に向かわせ、敵を攪乱させつつ、シルフィード軍の本隊がドライアドの首都を攻めるというものであった。

キャンタビレイ文庫にある記述では、その女王の名こそ後の歴史において「賢王」として記される事になるイエナ二世その人であるという。

彼女はシルフィード王国の現在の国家組織の土台を構築した名君として名高く、爵位の整備や領地法など、多くの仕組みを近代化し法律の整備に努めた。一説にはシルフィード独特の遷都法を定めたのもイエナ二世であるという。

彼女は戴冠の儀式に際し、側に控える役目、すなわち側臣にキャンタビレイ家の嫡子を指名した。その嫡子こそ、後のイエナ二世を

名乗ることになった王女を守る為に獅子奮迅の闘いを演じた人物である。すなわち彼の地で力尽きた誇り高きアルヴの戦士、ハンネ＝ローレの夫であり、イエナ二世の血気に逸る突出を諫め、シルフィード軍二万の兵を守ったたキャンタビレイの司令官その人であった。

戴冠の際の側臣の役割とは、王が「マーリンの知恵の冠」と呼ばれるシルフィードの建国当時から伝わるとされる王冠を頂く前に、腰から外した剣を受け取る役である。剣を預けると言うことはすなわち新しい王が命を預けるという意味である。それはもっとも信頼する者、つまり臣家の筆頭者として王が認めた人物であると言うことになり、その儀式は無言のうちに列席者にその事を認知させるという意味があった。

戴冠してイエナ二世を名乗った女王は、その場で側臣としたキャンタビレイの嫡子に恩賞を与えた。

それこそが今日まで長く続くキャンタビレイ家のクレスト「六翅（ろくし）のスズメバチ」である。つまり故事に拠ればキャンタビレイのクレストに描かれているのは普通のスズメバチではなく、ラダ・スズメバチであるという事である。

通常四翅であるスズメバチになぜ六翅を与えたかは定かではないが、四翅を超える存在、つまりスズメバチの王という意味合いを持たせたのではないかと思われる。

また当時のキャンタビレイ家のそのススメバチのクレストには銘文が付記してあったという。イエナ二世が戴冠の儀においてクレストを縫い取った旗章を下賜した際に言葉にし、その後国王自らの血でその言葉を章旗に書き加えたという曰く付きの銘文である。

キャンタビレイ家の本家のみが許される赤いクレストの所以はイエナ二世の血の色が由来である事は容易に想像がつく。

ではその銘文にまつわる逸話を紹介しておこう。これを記さずして、この話を中途で終えるわけにはいかない。

章旗と共にそのクレストを下賜する直前、すなわち戴冠の儀の直後にイエナ二世は驚くべき行動をとった。

それはその場に居合わせた列席者すべての人々、すなわち自国のお歴々や参列した多くの国民のみならず、他国から祝儀に駆けつけた要人達全員の度肝を抜く行為であった。

彼女は預けた剣を側臣から受け取る際、あろうことか、その側臣であるキャンタビレイの嫡子になんといきなり婚儀を申し込んだというのである。

戴冠の儀の会場はいったい女王が何を口にしたのかが理解できず、ひとまず水を打ったような静けさに包まれたという。しかしそれもつかの間、たちまち会場は大混乱に陥った。

察するに一番面食らったのは当のキャンタビレイの嫡子であろう。だが、誰よりも早く正気と冷静さを取り戻したのもまた彼であったようだ。

王女は婚儀の申し出に続いて彼の妻ハンネ＝ローレが先の闘いで命を失った事に触れ、彼女に対して最上級の感謝の意を唱えた。そしてその上で自らの申し出を極めて真剣なものである旨、重ねて強く念押ししたという。

大騒ぎの列席者や観衆達は、すぐにその行為の「とんでもなさ」よりも一人の若い娘の婚儀の申し出に対し相手の男がどう答えるかという一点に興味が移ったようで、やがて喧噪は静まり、その場は固唾を呑んで答えを待つ者達の期待と不安で異様な雰囲気につつまれていた。

一人のアルヴィンの娘から婚儀の申し込みを受けたアルヴの男は、静かな声でこう答えたという。

「もとより我が身も我が心もシルフィード王国のものなれば、今更ながらの念押し、無用でございましょう」

新しい女王はその言葉を聞くと、目を閉じて天を向き、長い長いため息をついた。やがて何も言わずに側臣が掲げる剣を黙って受け

とると、若き女王はその剣を腰に差した。そして何事もなかったかのように列席者に凛とした顔を向け、式次第に則った戴冠の挨拶を行った。

その後ざわめき始めた観衆をよそに、イエナ二世は予め用意してあった例のラダ・スズメバチのクレストをキャンタビレイに下賜した。

銘文は、その際に女王が求婚した相手に贈った言葉なのである。

イエナ二世は自らの指先に剣の刃をあてて傷を付けると、その指で今口にしたことを書き綴った。

銘文とはすなわち、

『キャンタビレイは永久にシルフィードのキャンタビレイであれ』

と言うものである。

側臣はその銘文が記されたクレストを見て両膝をつき、深々と頭を垂れて礼を尽くしたという。

さて、そのやりとりを見ていた観衆の殆どはカラティア家とキャンタビレイ家との婚儀を心から祝い、対して残りの一握りの者はこの歴史的な珍事の顛末に胸をなで下ろしていた。

そう。

キャンタビレイの嫡子は女王の求婚の言葉を、あの一言で王と臣家の絆に対する誓いという話にすり替えてみせたのである。

有り体に言えば女王の求婚は断られたのであるが、それは女王としての威厳を損なうことなくなされた。まさに側臣にふさわしい彼の機転である。

列席していた観衆に対しては一聴すると承諾とも取れる言葉となり彼らの熱を奪うことなく、さらには式を本来の進行に戻す間を女王に与えたのである。

キャンタビレイ家の嫡子のこの時の立ち居振る舞いは、その言葉のやりとりの意味を理解していた列席の貴族達に大きな感銘を与えた。以来、戴冠の儀において側臣を務めるのはキャンタビレイ家の

人間であることが、シルフィード王国の不文律となった。

『キャンタビレイは永久にシルフィードのキャンタビレイであれ』という銘文は、現在でもエッダにあるキャンタビレイ文庫の扉の上に刻まれている。

この言葉の解釈については諸説ある。単純に解釈するならば、「ハンネ＝ローレ回廊の闘い」に於いて、たとえ相手が次期国王といえどその意見に盲目的に従う事はせず、状況に即した冷静な判断と深い知識で自軍を導く事を矜持にかけて進言した行為は、王や王子といった権力ある人間を超越し、シルフィード王国という国の為を第一に考えた国の忠臣として素晴らしい。今後もそうあれかし、という程の意味であろう。

だがそこには女王としてではなく、一人の娘がそれこそ一世一代の舞台で、おそらく必死の思いでおこなったであろう求婚を、ものの見事に誤魔化され断られたことによる……よく言えば一人の適齢期である娘の寂寞たる裸の気持ち……悪く言えば精一杯の意地悪が込められていると考えるのはうがち過ぎであろうか？

要するに、こう意訳出来ない事もないのである。

「この私の申し出を断っておいて、他の女と結婚なんかしたら絶対許さないわよ」

と。

言葉の真意はどうあれ、キャンタビレイのその嫡子は家督を継いで侯爵となった後も再婚することは無かったのは事実である。

どちらにしろキャンタビレイの一族は以降イエナ二世の血で記されたその言葉を唯一無二の家訓として、時にはその後の国王の言葉よりも上位に置く事になった。

彼らはキャンタビレイという族名を重んじたが為、他の名前の中で埋没する事をよしとせず、名を変える事になる公爵の爵位を何度も固辞してキャンタビレイ侯爵でありつづけたと言うわけである。

『名より実』という言葉があるが、キャンタビレイの一族に限って

は『実より名』と言っても良い程の徹底ぶりである。
そしてもちろん、それは彼ら一族にとっての誇りであり続けたのである。

デュナンの価値観で客観的に見た場合、そんなキャンタビレイ家に生まれると言う事は結構な不幸ではないかと思える。もしくは相当な覚悟が強いられる事になると思われる。
「武ならキャンタビレイ」と言われる程、その侯爵家の歴代の当主は当時の貴族の中でも特筆できる功労を残し、長きにわたりカラティア王朝から厚い信頼を受けていた。長く続く平和な時代の中にあっても、彼らが軍の中枢に存在感を示し続ける事ができたのは、弛まぬ努力という通り一遍の言葉では修飾しきれぬ労があったに違いない。

キャンタビレイ家のそういう家風は、必ずしも長子が家督を継ぐ事を是としなかった。兄弟姉妹で切磋琢磨し、最もふさわしいと思われる人物が後を継ぐ事が暗黙の了解であったのだ。

このあたり、長い歴史の中では様々な軋轢が存在したと考えるのが妥当なのであろうが、アルヴ系の純血を守っている旧家だけの事はあり、記録に残っている限りでは「お家騒動」が勃発した気配すらない。

この辺りもドライアド王国をはじめとする他の三大国との国家気質の差が見て取れる。有史以前より、ただ一つの王朝であるカラティア朝が長く存続したのも、国民全員に大なり小なりその気質が脈々と流れているからであろう。

シルフィードの「王国軍親衛隊」も実はイエナ二世の治世下に発生した制度である。これは実は国王の親衛隊ではない。歴代の王国軍の大元帥の立場にある人物の身辺を固める為の組織なのである。国王の親衛隊は別にあり、そちらは近衛軍の管轄で「近衛軍親衛隊」と呼ばれ区別されている。他国からすると特殊な慣習ではあるが、

シルフィードでただ「親衛隊」と呼ぶ場合はその歴史の古さゆえ、近衛軍ではなく王国軍の親衛隊を指すのが常である。

ちなみに国王の親衛隊の歴史はせいぜい一千年と言われており、大元帥の親衛隊と比して、かなり歴史が浅い事を付け加えておこう。

親衛隊は王国軍の軍章とは別に四翅のスズメバチをあしらった黄色い部隊章を身につけた槍使いなので、すぐにそれとわかる。もちろんそれはキャンタビレイ家のクレストの意匠であり、六翅を四翅に変えたものである。

親衛隊は皆、ドライアドでイエナ二世率いるシルフィード軍を撤退させる為の盾として名乗りを上げ、キャンタビレイ軍の大将と共に長槍を掲げて壮絶な闘いを繰り広げた二十名の豪傑の末裔達である。多くはキャンタビレイ家の親族・姻族であったため、イエナ二世の命により四翅のスズメバチの部隊章を掲げる事になったという。

リーンをはじめ、速駆け馬車を駆ってラクジュ街道を行く部隊の三分の一はその「親衛隊」と呼ばれる兵士達であった。

彼らが守るガルフ・キャンタビレイは炎のフェアリーであると伝えられているが、フェアリーの能力よりはむしろ文字通り一騎当千とも言えるその武功で名高い。

ガルフという名は伝説の当主から受け継いだものである。それはもちろんイエナ二世の後方の壁となって戦い、戴冠式でそのイエナ二世に求婚されたあのキャンタビレイの名である。

彼もまた、リーンが仕える大元帥と同様、炎のフェアリーであると伝えられている。

「『その話』がお気に召さないのならば、畏れながらこのリーン、敢えて言わせていただきましょう。先の私の言葉は閣下のお体を気遣ったものではありません」

ラクジュ街道を南東に向けて走る馬車の中にはシルフィードでは

並ぶ者のない名誉と名声を背景にし、自身も現在の王国軍で最も尊敬される存在であるガルフ・キャンタビレイを睨みつける若い士官の姿があった。

「何？」

「閣下が休まねば部下が休めるわけがございません。我が隊はアルヴだけの部隊ではございません。気力でもってはおりますが、アルヴィンやダーク・アルヴ達の体力はもう限界です。ですからここではっきり申し上げましょう。いや、問いましょう。いざとなった時に役に立たぬ兵隊を増やす事が大将としての矜持であるか否か」

「こやつ、儂に説教をするつもりか？」

「閣下もガルフという大それた名を名乗っておられるのならば、血が上ったままのその頭でシルフィード王国の窮状を救う事が出来るかどうかの判断をすべきではありませんか？」

「リーン！」

リーンの言葉に、ガルフは顔を真っ赤にすると、椅子から腰を上げ、上から部下をにらみ据えた。

しかしリーンも然る者である。同様に腰を上げると、大元帥の睨みを堂々と受けてみせた。

それだけではない。ガルフよりさらに大きな声でピシャリと言ってのけた。

「今の我が言葉、決して取り消しはしませんぞ」

リーン・アンセルメはキャンタビレイ家の姻族で、シルフィード大陸南端にある古都スッダの近くに小さな領地を持つ子爵家の二男であった。

幼い頃に我が子の利発さを見抜いた母親が、エッダのガルフに推薦状と共に我が子を送り出したという。彼の母親であるアンセルメ子爵の正室リューズは、ガルフの孫で、クラルヴァイン男爵の下に嫁ぎテンリーゼンを生んだとされる母親の姉に当たる人であった。

つまり、リーン・アンセルメとテンリーゼン・クラルヴァインは従

兄弟同士という事になる。

ちなみにその従兄弟同士は共にキャンタビレイ家の屋敷で暮らした事はあるが、同時に過ごした時期はなかったようである。

ガルフは聡い「ひ孫」であるリーンをすぐに気に入ると英才教育を施した。

力は弱いながらも水のフェアリーでもあるリーンは、しかしどちらかというと武人というよりは知略に優れており、ガルフは武人として訓練することより参謀としての特性を行かす方向で育て上げた。

ガルフの功績は自分自身の功労もさることながら、リーンをはじめとする能力ある者を多く育てた事にあるのかもしれない。

キャンタビレイ家の屋敷にはいわゆる食客が引きも切らず、一種寄宿学校のような様相であったと伝えられている。

そのいわゆる『キャンタビレイ学校』の出身者でも一、二を争うと言われる知略の持ち主は、ともすればガルフのそれを上回り、彼はいっそうひ孫であり部下である青年に対する信頼を深めていった。

ガルフがリーンを信頼するのは、頭の良さからだけではない。なによりその心根が素直で一本気である事が、大元帥の眼鏡にかなったのだ。また、相手がたとえ自分よりはるかに階級が上であろうが、高い爵位を持っていようが、相対しても阿らない強い心を持っている事も重要だった。それは時としてガルフをしても腹に据えかねる場面を招く事になるのだが、最後には大元帥という肩書きに決して屈しないその姿に眼を細めるのであった。

ただ、それだけにリーンは常に大きな影を背負う事になっていた。周りの人間が、すべて彼の理解者であるとは言えなかったからである。むしろ彼の理解者はほんの一握りであると言えた。ガルフが彼を側近として使い続けている一番の原因もそこにある。本来であればその知謀知略をもって事に当たれば、より高い地位に就いているはずであったからだ。しかしリーンには部下の心を掌握しその士気を高めるだけの存在感の魅力や求心力というのものに欠けていると言わざるを得ず、さらに本人が一切それを望もうとしない事にガル

フとしてはもどかしい気持ちを持たざるを得なかったのである。
リーンはそう言う話がガルフの口から出る度に同じ言葉を繰り返した。
「私の能力は司令官に能わず。それにバカな司令官の下につくくらいなら、田舎に帰って民と共に土に鍬を入れ、汗を流す生き方を選びます」
まさにとりつく島もないのである。
ガルフ・キャンタビレイ大元帥をして「当代一の頑固者」と言わせた人物こそ、このリーン・アンセルメ少尉なのであった。

「言ってみろ」
しばらくにらみ合いをしていた上官と部下であったが、先に視線を外したのは上官の方であった。
ガルフは座り直すと、若い副官に尋ねた。
「お前はいったい何を焦っている？」
「この際ですから、率直に申し上げます」
リーンもガルフに倣って椅子に腰を落ち着けた。
「よく言う。お前が率直に物を言わなかったためしなどない」
「この件、陰謀の匂いがします」
ガルフが放った軽い嫌みを涼しい顔で無視すると、リーンは核心を突く言葉を口にした。
大元帥はあからさまに不機嫌な顔でリーンをたしなめた。
「アンセルメ少尉。率直なのは結構だが、人前で滅多な事を言うものではない」
「いかに冗談好きな私でも、素面でこんな事は言えませんよ、キャンタビレイ大元帥」
向かい合う両者の間に再び沈黙が流れた。
「言っておきますが、私は今、素面ですから」
リーンの言葉にガルフは肩をすくめただけだった。
「もちろん私の推測はいくつかの理由によって成り立つものです。

決定的だったのは、エルネスティーネ王女が、よりにもよって『イエナ三世』を名乗られた事なのです」

## 第五話　封名「イエナ」

イエナ二世以降シルフィード王国の女王となった者は多いが、彼女たちは誰一人としてイエナの名を継ぐことはなかった。

数々の組織の改編と当時施行されていた全ての法を近代化するべく尽力し、かつそれを成し遂げたイエナ二世。後世『賢王』の名で尊敬の対象になったイエナの名はしかし、子孫に名を継がれる事のない悲運の名でもあったのだ。

戴冠の直後、そしてまだ戴冠式の最中にもかかわらず目の前の側臣に求婚するという、乱心ともとれる前代未聞の行為も敬遠される理由の一つではあろう。しかし本当の原因はもう一つの理由であろう。イエナ二世伝説に必ずついて回る醜聞、王女の出産疑惑である。

醜聞の内容は単純なものである。簡単に言ってしまえばイエナ二世の後を継いだ女王、クラリッセ五世は、イエナ二世が生んだ子供ではないと言う噂である。

イエナ二世は戴冠の一年後に遠縁にあたるブラウアー侯爵の三男、ゴットリープ・ブラウアーと結婚し、生涯の間に二子をもうけた事になっている。しかしその二人は仲が良くない国王夫婦の筆頭とされる程であった。ゴットリープは女癖の悪さで有名で、イエナ二世は長く夫の浮気の処理に頭を悩ませていたという。

当のゴットリープはと言うと、ブラウアー侯爵家の人間に「俺はあの冷血女と閨を共にした事は一度もない」と愚痴をこぼした事があるらしく、ここから女王とその子供との間に血縁疑惑が生じたのであろう。

ではクラリッセ五世はゴットリープが王宮の使用人の女や貴族の娘に生ませたとされる四人の子供のうちの一人であるかというとさに非ず。コットリープの子供達については皆それぞれ詳細な記述が残っており、どれも信憑性に足る。このあたりはイエナ二世の厳命があったと見るべきであろう。それほど完璧で客観性の高い調査書

が残っているのである。

もちろんイエナ二世が二人の子供を処女懐胎で出産したわけではないだろう。ではクラリッセ五世の出自はどうなっているのかというと、それはマーリン正教会からの貰い子であるというのが現代にも伝わる噂の真相と言う事になっている。

当時のシルフィード王国はマーリン正教会との繋がりが極めて強かった為にそういうまことしやかな噂が囁かれたのであろう。現に正教会の協力下で近衛軍下にバード庁という組織を確立したのはイエナ二世その人である。おそらくその事があった為に後付けされた噂ではなかろうか。

また、自身は大した力のない水のフェアリーであったイエナ二世の娘クラリッセ五世が、なぜか強力な風のフェアリー能力を持っていたことも、非血縁説の信憑性を上げる為に一役買っていたのであろう。

どちらにしろ婚儀に対して物議をかもした上、円満な夫婦関係を築く事も出来ず、娘の出生疑惑を数千年経った後にも引きずらせるほどの、言わば醜聞がついてまわる女王の名を、いくら功績があったと言えど名乗る者はあらわれなかったのである。

もちろんイエナ三世を名乗りたいと事前に家臣団に相談しようものなら、全員一致で即座に却下される事は間違いない。

したがってエルネスティーネがイエナ三世を名乗ったのは、おそらく打ち合わせを無視した独断である事が簡単に予想できるのだ。

それは家臣団全員、あるいはその一部とエルネスティーネとの間に何かしら大きな溝がある事を示唆しており、前王の急死という異常事態と相まって「王室には何かがある」と考えざるを得ない。

そして「イエナ」は、当然ながらキャンタビレイの家と深く関係する名前なのである。

リーンの言葉に対し、その顔に大した驚きを表さなかったガルフ

は、その可能性を自身の中でも推測の一つとして持っていたと言う事であろう。

リーンが恐れている陰謀とガルフが想定の範囲として持っている可能性が果たして同一のものなのか……それを摺り合わせる機会がようやく訪れたわけだが、しかし、それが少々遅すぎたのを、二人はすぐに知る事になった。

話の続きを口にしようとしたリーンは、大きな衝撃を受けた。何が起こったのかわからぬうちに彼は馬車の床板にその高い鼻をしこたまぶつけていた。

体が馬車の前方に貼り付けられているような状態は、要するに馬車が急減速したことを示していた。

馬車自体は特にブレもなく走ってはいた。つまり破損したり何かにぶつかったわけではなく、何らかの理由で御者が馬車を急減速させたに違いない。

「大丈夫ですか、閣下？」

リーンは何とか起き上がる、同じく床に投げ出されたガルフが無事なのを確認してからいすに助け起こした。

次いで乱暴に御者側の壁に作られた小窓を開いて、御者役の兵士に怒鳴るように尋ねた。

「ばか者、閣下がお乗りなのだぞ？」

「ご無事ですか？誠に申し訳ありません。前方の馬車が急に減速したものですからやむなく……あ、いえ、今はもう止まっているようですが」

御者役の下士官はそう言いつつ、さらに馬車を減速させていった。

「こんなところでなぜ止まる？とにかく状況の説明をしろ」

「ぜ、前方の部隊は全車が停止。間もなくこの車もその後ろで緊急停止します」

「だから何故だ？何が起こった？」

「原因は……うわ、あれはなんだ？」

御者の兵士は突然悲鳴のような声を上げると、絶句した。
夜の街道である。当然ながら視界がいいわけがない。明るい方の月であるアイスの光があればこそ馬を走らせる事ができていたのだが、さすがに細かい状況が遠くから見通せるものではない。
御者兵としても前を行く一隊が停車している地点に近づいてはじめて部隊が停滞した原因を知ることになったのだ。
御者はしばらく声を失っていたが、リーンに急かされると我に返り、行く手に何か大きなものがあると報告した。

「なんだ、これは？」
馬車から降りて「それ」を見たリーンの反応は、まさしく御者の兵と同じだった。
ほとんどの者の第一声は同じであったに違いない。
道が……彼らが進むべき街道が、そこで無くなっていたのである。
大型の馬車が二台列んで楽に走れる程の広さがあるラクジュ街道は、そこで突然行き止まりになっていた。彼らの行く手にあるのは、巨大な岩の壁であった。
まるで誰かが大きな煉瓦を街道の上にめり込ませたように、その岩の壁はラクジュ街道をそこで分断していた。
リーンはしかし、その事態を冷静に分析する時間を与えられなかった。
その壁の裾にある巨大な楡の老木の幹から呼びかける声があった。

「ドライアド王国軍、キャンタビレイ大元帥御一行様、だね？」
上から突然降ってきた声に、親衛隊はどよめき、たちまち混乱状態に陥った。
リーンはしかし、冷静だった。
いち早く矢を番えた兵に対し手を挙げてそれを制すると、彼は楡の木に向かって一歩踏み出し、梢を見上げると大きな良く響く声で問いかけた。

「何者だ？」
だが楡の巨木から聞こえた声はリーンの質問には答えなかった。
しかし声の主は、岩を置いたのは自分であると自ら告げた。
「残念ながら君たちをこの先に通すわけには行かないんだよ」
兵達に再びざわめきが広がった。
「何のつもりだ？」
だが、楡の木からの声はこれにも答えなかった。
「悪く思わないで欲しい。今キャンタビレイ大元帥にこの先に進まれると色々とマズイ事になるんでね」
その言葉の意味を単純に考えるならば、声の主は明らかに敵と言う事になる。
兵士達には一様に緊張が走った。
リーンは想定していた最悪の事態に陥った事を観念した。だがエッダよりかなり手前でこういう事態になるのは想定外であった。
（くそ、こんな事なら！）
こんな事ならば、ガルフを縛り付けてでもノッダに留めておくのだった。
リーンは後悔したが、もちろんそれは後の祭りというものであった。

# 第六話　ニーム・タ＝タン

「念のために訪ねるが、三聖の名は知っておろうな？」
「紳士録の正教会の頁を開けば最初に目に入る三人の名前を知らない大人がいたら俺の前に連れてこいよ。耳元で百回くらいは名前を連呼して覚えさせてやるぜ」
「ふふふ」
「まあ、物語の登場人物を実在の人間よろしく堂々と紳士録に載せ続けるってのはどうよ？って俺はいつも思ってんだけどな」
「なるほど。やはりお前達の認識はその程度なのだろうな。別の意味で安心した」
「何だと？」

ミュゼの市街地の中心部からは少し外れた所にあるエスカ・ペトルウシュカの屋敷では、ドライアド王国軍の新米少将と大佐が円卓を間に挟んで向かい合っていた。
そこは応接間で、エスカの屋敷に同居する事になった彼の幕僚長に任命されたニーム・タ＝タンの部屋の準備が整うのを待つ間、出された軽い食事をとりながらお互いに腹の探り合いをしているところであった。
もっともニームの方はエスカの質問にはあっけないほど簡単に様々な情報を提供していたので、腹の探り合いという形容は不適切なのかもしれない。
だが、どう考えても重要事項……いや機密事項としか思えないような情報まで、問われるままにあっさりと喋るニームに、エスカはかえって不信感を募らせ始めていた。そして話がまさにマーリン正教会の中枢に関する事に及んでいた。だが、この時にはもうエスカの不信感は馬鹿馬鹿しさに変わりつつあった。
そもそもニームの自己紹介にエスカはひっくり返りそうになった

のだ。小柄な少女はいきなり自分は正教会の賢者で、ドライアドには諜報の為に入り込んだのだと告げたのだ。もちろん真顔で、しかも陽気の挨拶でもするかのようにあっさりと、である。
　開いた口がふさがらないと言った表情のエスカに対して、ニームは極めてまじめくさった態度で自らの背景を語りはじめていた。
　そしていよいよ三聖の名が出たのである。

「三聖が架空の人物だと思っているようでは飛ぶ鳥を落とす勢いのエスカ・ペトルウシュカ男爵の器量も底が知れると言うものだぞ。各国の要人ともなれば紳士録に偽りがないことくらい知っているものだ。そもそもこれからの戦いで勝利を得ようと考えているのならば、もっと精度の高い情報源を確保した方がいい。それから相応の知恵者も配下に持つべきだな」
　エスカは頭をかきながらニームの話を止めた。
「あのな」
「なんだ？」
「いや、そのお子ちゃま顔でまじめくさってそういう国際的に見ても重い部類に入ることを言うのは勘弁してくれねえか？」
「だ、誰がお子ちゃま顔か！」
　ニームは目をつり上げると、ムッとした顔でそう言った。
　出会ってからたいした時間は経っていない。だがその間にもエスカはいろいろな言葉を投げかけて注意深くニームを観察していた。そしてどうやらニーム・タ＝タンは子供扱いされる事と身長の低さをからかわれると敏感に反応することを突き止めていた。
「じゃあ何か？お前は紳士録に書かれている青と赤と黒を名乗る三聖ってヤツが実在する人物だっていうのかよ？」
「無論だ」
「ほーお……」
　エスカは紅茶の受け皿をテーブルに置くと目の前の茶色い瞳の少女を値踏みするかのようにわざとじっとりとした眼差しで見回した。

ニームの艶やかな焦げ茶色の髪は癖もなく首筋あたりで切りそろえられている。ただ、左右の耳のあたりの髪だけは長く伸ばし、それぞれを色のついた幅の細い結布（ゆいふ）でまとめてあった。巻き付けられているその紐状の布は一本や二本ではないようで、さらにそこにはエスカが見たこともない文字とも記号ともとれるようなものがびっしりと記されていた。

美しい少女だと言えた。もっともアルヴィンの血が入っているのならそれも納得である。ニームはデュナンにしては造形的に整いすぎた顔立ちで、黙っていると血が通っていない人形の様に見える。やや小柄なのもその血のせいに違いなかった。

そう思ってあらためて見れば、笑いをあまり見せず、総じて表情に乏しい所はアルヴ系の人種そのものである。

アルヴィンの血が入っているとなると見かけ年齢があてにならないのが常である。デュナンの物差しを持ち出すなら、エスカにはまだニームは成人前の少女にしか見えなかったが、ドライアドのバード庁ではその実力故に彼女に逆らえる者は居ないとまで言われている存在だという。であれば素質があったとは言え、それ相当の期間を修練や鍛錬に費やしていなければならない。

そもそもバード庁の重鎮になる者の多くは老人と呼んでいい年齢に達している。二八歳という年齢は特級バードという特権だらけの極めて高い地位にあるにしては異例に、いや異常に若いと言ってよかった。

エスカはニーム・タ＝タンという特級バードの存在を情報としては知っていた。正確に言えば名前とその評判の断片程度を知っていただけである。そもそもバードは国家の秘密兵器のようなものであるから、その名前が一般に漏れることはない。エスカの情報網だからこそ何とか知ることが出来る程のものである。だが、実際に目の前にいるこの十三、四歳にしか見えない少女に自分はニーム・タ＝タンだと名乗られても、これが噂の特級バードなのかとすんなり飲み込めるわけもなく、その時点で名前から何からすべてが半信半疑

の状態だったのである。
　さらに言えばニームが告げた「自分は賢者の一人である」という話にいたっては、いきなり意味不明なホラ話が始まったとしか思えなかったのだ。
　とはいえ先刻五大老との謁見の場で姿を消したままその場に存在し続けていた事はどうやら事実であり、そこまでのルーンが使える高位のルーナーであるらしいことだけは認めざるを得ない状態であった。
　要するにエスカはいまだに軽い混乱の中をさまよっていた。

「本当に居るんだな、三聖は？」
　エスカは冗談ではなく真剣にものを尋ねるときに見せる、相手の目を覗き込むような仕草でニームを見た。
　ニームはエスカのその目でじっと見つめられると、、少し黙り込んだ。
「どうした？」
「い、いや」
　ニームはエスカの前で初めて少しうろたえたような表情を見せると、視線を逸らした。
「急にそんな真剣な目で見るからだ」
「見るから……なんだよ？」
「ともかく、三聖は正教会にれっきとして実在する」
　ニームは語気を少し荒げるとそう言って今度はエスカを睨み据えた。エスカも負けじと目を逸らさずに、自分を睨むニームの顔をのぞき込むように近づいた。すると、ニームはまたもやあっさりと視線を逸らして顔を退けた。
「あ、あまり寄るな！」
「おっと」
　エスカは無意識に身を乗り出して腰を浮かせていた事を認識すると、元の位置に座り直した。

「ちょっと待てよ。お前の言う通りだとしたら、三聖どもは一体何万年生きている事になるんだよ。大昔からずっと紳士録にゃ青と赤と黒の同じ名前が載ってんだぜ？」
「愚か者。そもそも正教会が出来て何万年も経っておらぬわ」
「――冷静なご意見、どうも」
ニームは肩をすくめると、エスカから目を逸らしたままで出された果物の盛り合わせと生ハムと野菜のサンドウィッチをきれいに平らげると、二杯目のジュースに手を伸ばしながら、今度は脈絡のない質問をした。
「それにしても、お前はいつもこんなおいしい朝食をとっているのか？それとも来客用の特別な軽食なのか？」
エスカはニームの子供らしい食べっぷりを感心したように見守っていたが、その言葉を受けて、ふと気付いたように自分の前の皿をニームに差し出した。
ニームは差し出されたフルーツの皿とエスカを見比べた。
「良いのか？」
「ああ。来客用というか、ウチの普通の軽食だな。俺はなんか食欲がねえんだよ。気にせず食え。」
「これが普通か。貴族とは言えどうにも贅沢な話だな。でも、お前も食事だけはちゃんととらなねば、体をこわすぞ」
「いや、食事どころじゃねえ気分になるような話をしてる奴からそんなこと言われてもな」
ニームは馬鹿にしたような目でエスカを一瞥すると、すぐに皿に手を伸ばした。
「やれやれ。予想以上に肝の小さい男だな。だが、せっかくだからこれは遠慮なくいただくことにしよう。掛け値なしにお前の屋敷の果物は質が良い。バード庁の専用厨房が出す食事はそれなりに豪華だし決して悪いものではないのだが、何というかこう、いまひとつ私の口には合わぬのだ。もっともヴェリタスの食事ときたらそもそもお話にもならんがな。あそこのは貯蔵食ばかりで憂鬱きわまりな

い。ミュゼに来て普通の食事を見たときはここは地上の楽園かと思ったものだが、慣れというのは人間の感性を腐敗させるものだということだな」

最後の方は自嘲気味に独り言よろしくつぶやくニームであった。

自分より遙かに若い子供のような女の子に、いかにも相手をバカにした様子で「肝が小さい」と言われようが、実際にエスカは食事どころではなかった。いきなり未知の世界の存在を提示されて「本当の事です」と言われたようなものなのだ。だからニームの話をまともに聞いていると頭痛を覚えてもおかしくない状態と言えた。

「ヴェリタスって言うと、正教会の本拠地のヴェリタスか？」

「私の知る限り、ヴェリタスという地名はファランドールには一つだけだ。ほかにヴェリタスがあれば教えて欲しいものだな」

「まあ、それは俺もだ」

ニームは横目でチラチラとエスカを見ながら食事をその形のいい口に運んでいた。エスカにはそれも自分を馬鹿にしたような顔に思えていた。

「うぇっと、はんのふぁなひらっらか？」

ニームは大きな白桃のシロップ漬けの切り身を口いっぱいに頬張りながらエスカに声をかけた。

「食うかしゃべるかどっちかにしろ。ヴェリタスやバード庁で行儀が悪いって言われた事ねえのか？」

「私を誰だと思っているのだ？私に意見する者など、どこにもおらぬ」

そう言うとニームは胸を張った。

「？？いや、そこは偉そうに言うところじゃねえ」

エスカはまたもや頭をくしゃくしゃとかき回した。

「ああ、まったく。なるほど、わかった。お前はわがままお嬢様よろしく思いっきり甘やかされて育ったって事だな？よし。誰からも意見されないなら、これからは俺が意見してやる。いいか、俺の家

で暮らすつもりなら、今後は最低限の行儀は覚えろ。ヴェリタス風とかバード庁風は忘れろ。俺んちではエスタリア風が正義だからな」

三切れ目の白桃のシロップ漬けを頬張ったまま、ニームが何かを言おうとしたのをエスカは掌を突き出して制した。

「勘違いすんなよ。これは命令じゃねえ。お前の為を思って助言してんだぜ。でないとお前、たぶんひどい目に遭うぞ」

「ひどい目？たぶん？」

ニームは白桃のシロップ漬けを飲み込むと、四切れ目をチラリと目の端で押さえながらも、エスカの顔をみやった。

「まあ、その話は後だ。それより三聖が数千歳の化け物だという話だろ」

「ああ、その事か」

ニームは残りの白桃のシロップ漬けに取りかかった。

「『化け物』とはまた遠慮会釈無く的を射た表現をするものだな……」

「え？」

ニームの視線は白桃のシロップ漬けの皿に釘付けで、エスカの顔はもう見ずに言葉を続けた。

「良いか？三聖もそうだが賢者の名前というのは一般人で言うところの役職名のようなものだ」

エスカは眉間に皺を寄せると、無表情で桃を頬張っているニームを睨んだ。

「役職名だと？」

「うむ。役職名というのは適切な表現ではないかもしれぬが、つまり賢者の名とは『継がれるもの』だ」

「名前は不変で、名乗る人間だけが入れ替わっているってことか？」

「そう言う理解で間違いではないな。まあ正確に言うなら受け継ぐのは名前だけではないのだがな」

「ほう」

「かく言う我が名も、先代から受け継いだものだ」

「そういやあ、お前の賢者の名とやらはまだ聞いてないぞ」
「現世（うつしよ）の人間においそれと名乗るものでもない。だがお前には明かしておく必要があるだろうな」
「もったいぶるような名前なのか？」
「賢者の名は特別だ。全くそんなことも知らぬとは……。まあいい。私の賢者の名は『天色の？（あまいろのくさび）』　ニーム・タ＝タンも真の名には違いないが、我々はそれを賢者になる前の人であった時代の名、すなわち現名（うつしな）と呼び、賢者の名とは区別している」
「あまいろ？」
「そうだ。驚いたであろう？」
「いや、どこが驚くところなのかがさっぱりわからん」
「まったく、困ったものだ」
　ニームはあきれた、という風に心の底からため息をついて見せた。
「なら教えろ。俺はどこに驚けばいいんだ？」
「――私は大賢者「天色の？（あまいろのくさび）」　十二色である「タ＝タン」の王。つまり人の筆頭としての存在だ。よく覚えておけ。ただし不用意に他人にしゃべる事は許さん」
「はあ？」
「ふん。さすがに今度は驚いたか？」
　エスカは頭の上に指で輪を描いて見せた。
「お前は可愛そうなヤツだったんだな、という意味では驚いた」
　ニームは再びため息をついた。
「このボンクラに、いったい何をどう説明すればわかってもらえるのだろうな」
「何をどう理解しろってんだよ？」
　エスカはそう言うとニームと同じようにため息をついた。
「ボンクラというところは否定せんのだな」
「俺の兄貴が『うつけ』だからな。弟がボンクラでも何の不思議もねえ」
「言っている意味が全くわからん」

今度は二人同時に小さなため息をついた。

悪い夢でも見ているのかも知れない、とエスカは思った。

受け入れ難い事象に立ち会った際、現実逃避に走る人間など最低だと常日頃思っていたエスカだったが、いざ自分がその立場になるとそれは無理からぬものだったのだと言うことを理解した。

（今まで、バカにしてスマン）

エスカは誰にともなく心の中で謝った。

もちろん現状把握を放棄してそういう行為に逃避しているだけの話なのであるが。

「面倒な奴だな」

ニームは再度ため息をつくと、少し冷めた紅茶に手を伸ばした。

エスカはそれを見るとニームの手に自分の手を重ねてやんわり止めた。

「え？」

エスカのその行為に、不意を突かれたようにニームは驚いた顔をした。エスカはそれには反応せず、卓の上にある呼び鈴を持ち上げてチリンチリンと二度鳴らした。

「そのまま、ちょっとだけ待ってろ」

その言葉が告げられた十数秒後に扉がノックされた。エスカが入室を許可すると、執事長ロンド・キリエンカが注ぎ口から細い湯気を上げる白いポットを持って足音もなく部屋に入ってきた。

「新しい紅茶でございます」

そう告げるとロンドはまずニームの前にコトンと小さな置物を置いた。それは品の良い枠細工がなされた青い砂時計だった。

「この砂が落ち切ったら飲み頃でございますので、恐れ入りますが今しばらくお待ちくださいませ」

ロンドは心持ち胸を張ってそう言うと柔らかな物腰で一礼し、湯気の立つポットを砂時計の側にそっと置き、さらには冷めた紅茶が

入ったニームのカップを優雅な手つきで取り替えた。
「後は俺がやっとく。お前は皿だけ下げてくれればいい」
「それはそれは」
エスカの言葉に彼の執事長は少し驚いたような顔をすると、改めて小さな客人の顔をチラリと見た。
「――かしこまりました」
ロンドはそう言うと実に素早く、しかも長身のアルヴとは思えない柔らかい身のこなしで空になった食器類を下げると、一礼して部屋を出て行った。

「ふむ。なかなか良い執事のようだな。王宮でもあそこまで品の良い立ち居振る舞いをする者は多くなかろう」
「まあな。俺には出来た家臣だよ」
「今までの話、立ち聞きなどしてはいまいな？」
「それは請け合うぜ。でもあいつと俺は一蓮托生だ。俺としちゃどんな話だろうが、聞かれても何の問題もないがな」
「ふーん。まあいい。では順番に説明するから、できれば一回で覚えてもらいたいものだな」
「記憶力には多少なりとも自信はあるぜ。こう見えても……」
「こう見えてもアカデミー首席卒業、と言う訳か」
ニームの言葉にエスカは眉をぴくりと動かした。
「お前。それ、わざと言っているだろ？」
「さてな。で、正教会が実のところは賢者によって支配されている組織だと言うことは一応でも理解したな？」
エスカは両手を広げて呆れたという仕草をしてみせた。
実のところニームの言うように彼は貴族学校、通称アカデミーを首席で卒業したわけではない。次席だったのだ。
同期の首席卒業はアキラ・アモウル・エウテルペ。エスカはアキラに総合成績でわずかに後れをとっていたのである。
「何だ？次席だった事を気にしているのか？」

「剣技試験の配点が学科に比べて高すぎるってんだよ、あのバカ学校は！」
「学科で首席だったのならばいいではないか」
「内容がどうあれ、次席卒業っていう事実は変えられねえだろ。そこんところが気に入らねえな」
「どうでもいい事であろう、些事だ」
「どうでもよくねえ。俺は今でも悔しいんだよっ」
「やれやれ。そんな些末な結果を悔しがっていてよいのか？」
「どういう意味だ？」
「この先、比ぶべくもないほど悔しい思いをしなければならぬ事になるのであろう？お前はその覚悟をしているのだと思っておったがな」
「ニーム、お前……」
眉根を寄せたエスカを、しかしニームは無視しして話を元に戻した。
「さて、その賢者だが、ファランドールに百五人いると言うのは？」
「ああ、その話は誰でも知ってるだろ」
「誰でも知っているだろうな。しかし、誰しもが知っていることではない。なぜなら、実際に賢者はそんなには存在しておらぬ」
「……」
「百五色。それが賢者の名乗る色の数だ。正しくは『賢者の徴（しるし）』の数。賢者の人数ではない。お前にわかりやすく説明するなら、賢者の名前が全部で百五あるということだ」
「ほう」
「そしてその百五のうち、『庫（くら）』には誰にも継がれる事のない『徴』がまだ三分の一くらい眠っている。それどころかもはや『徴』すらない、失われた名前もかなりある。つまり、ファランドールに存在する賢者の数はざっと五十から六十といったところだ」
「ふむ」
「三聖を除く賢者は全員「賢者会」に所属し、実質的に教会組織の

最終決定権を握っている。もっとも賢者会が正教会の通常運営に介入することは実際問題としてはあまりない」

「それも一般知識として知ってる。表に一切出ないからこそ誰も賢者なんて見た事がないんだろうしな」

ニームはうなずいた。

「その賢者会の上に位置する存在がいわゆる大賢者。いわば賢者の頂点だな。大賢者の言葉は絶対で、たとえ賢者会で定めた事であっても大賢者の鶴の一言で覆せる。大賢者とはそれほどの力を持っておると言うことだ。そしてその大賢者は私を含めて四人いる。いや、正確に言えば今は三人だが」

「一人減ったって事か？」

「お前も知っておろう？現世ではもっとも有名な大賢者《真赭の頤》（まそほのおとがい）が欠落したのだ」

「欠落？」

「本人が死んでも『賢者の徴』が『庫』に戻らない状態を言う。つまり消滅と言い換えてもいい」

「《真赭の頤》って言うと、シグ・ザルカバードってやつか？ヤツは自称じゃなくて、マジで大賢者だったのかよ？」

「そうだ」

「死んだのか？」

ニームは無表情のままうなずいた。

「それで、欠落するとその『徴』ってやつは二度と復活はしねえのか？」

「そう。今は」

「『今は』だと？」

「うむ。昔はそう言うこと……復活もあったという話だ。それこそ神話時代の話だがな。今はもう復活はしない。話が脇道に逸れる。そういう傍流の細々した話はまた今度にせぬか？」

「そうだな」

話をしながらも、ニームは砂時計の事を忘れてはいなかった。
青い砂が全部下に落下し終えると、無表情だった顔が急に崩れた。子供と呼ぶには相当理知的に見えるその整った顔立ちが無防備な笑顔に取って代わったのだ。
ニームはいそいそとその白いポットに手を伸ばそうとした。
だがエスカはそれを制して立ち上がると、ポットを持ち上げて自らニームのカップにゆっくりと濃い蜂蜜色の液体を注ぎ入れた。
白い磁器の壺から解き放たれた熱い液体は、マスカットのような清涼で甘い何とも言えないいい香りを部屋に放った。
「ほらよ」
雑な言葉とは裏腹に、執事長のロンドに負けぬくらいに優雅な手つきで受け皿付きのカップをニームの前に差し出しながら、エスカはどうにもにやにや笑いを抑えられなかった。
おかしかったのだ。
そしてその笑いは楽しいという気分に分類される感情だった。
唯我独尊と言った風情でけっこう偉そうな事を尊大な口ぶりでしゃべっているニームだが、その態度と物言いの割にはロンドの言いつけをきちんと守って砂時計が落ちるまでは決して手を出さない素直さときまじめさを見せた。さらに言えば偉そうな態度をしている割には他人に給仕を命令するようなこともなく、自然に自分で茶を注ごうとしたところを見ると、貴族や特別な家で召使いにかしづかれて育っていない事の証左である。それを見たエスカは先ほどニームに言った「甘やかされて育った」という言葉を心の中で訂正していた。
ご大層な立場と肩書きを考えると、エスカにはニームという少女の行動は見た目とは違って少々庶民的に過ぎるような気がしてきた。
しかしエスカは目の前に行儀良く座っている焦げ茶色の髪をした美しい人形のような少女にはむしろそういう仕草が似合っていて好ましいと感じ始めていた。
五大老との謁見の場で初めて会った時の「強大な存在」とも言え

る近寄りがたい印象がここへ来て大幅に変わりつつあったのだ。言葉遣いは初対面の時からそう変わらないが、感じる雰囲気が柔らかいものに変化しているような気がしていた。

だからこそニーム・タ＝タンという「自称大賢者」が五大老を欺いてまで自分に近づいた意図をはかりかねた。ニームの言う事が全て真実だとすれば、最終的な目的が不明である。

それがいったい何なのか、エスカは早く知りたかった。

「ありがとう」

ニームは素直にそう礼を言うと、エスカが差し出した湯気の上がるカップを受け皿から取り上げ、その香りを深く吸い込んだ。

「このお茶の香りは素晴らしい」

「そりゃ、どうも」

ニヤリとしてそう返すエスカの態度に、ニームは反応した。

「何だ？ひょっとしてこれはエスタリア産か？」

エスカはうなずいた。

「エスタリアの紅茶は産出量こそ少ねえが、質は最高だぜ。良質な茶で有名なシルフィードのエトワール産の最高級茶葉にだって負けちゃいねえよ」

「ふむ」

「もっとも領内の消費で消えちまって市場に回すほど生産量がねえんだ。だから、隠れた名品ってやつなのさ」

「ふーむ。エスタリアの紅茶消費量が異常に多いのは知識としては知ってはいたが、産地としてもこれほどの品質の茶を生産している土地だとは正直言って驚いた。エスタリアはなかなか面白い土地だな」

「エスタリア人の座右の銘は『量より質』だからな」

「また単純な座右の銘だな」

「単純で悪かったな」

「いや、褒めているのだ。含蓄や蘊蓄がありそうな難しい言葉を座

右の銘だと抜かす輩にろくなヤツがいないのはここへ来てよくわかったからな。座右の銘とはそういうわかりやすい言葉こそふさわしいと私は考えている」

「いや……」

「何だ？」

「そこまで素直に褒められると俺の冗談が宙に浮いちまうんだが」

「心配するな。私が敢えてそうしたのだからな。まあお前の下らぬ冗談はさておき、鉱物の精錬でもエスタリアの物は品質については飛び抜けているそうだし、座右の銘はともかく言葉を地で行く地域であることは間違いないのだろうな。しかし量より質というのはシルフィード王国ならともかく、お前のようなデュナン族の治める領地にしては異例だな」

「エスタリアは色々あってドライアドでもアルヴが多い土地だからだろうな。アルヴは骨の髄まで職人って奴が多いんだ。いい職人を見れば後進も育つってもんさ。そこにはアルヴもデュナンもねえよ。俺もほとんどこっちで暮らしてるが、ミュゼの物は高い割に質が悪いものが多くてな。ついついエスタリアから取り寄せちまうのさ。それに、茶の木の栽培に関しちゃ、俺はちょっとした専門家なんだぜ」

「『アルヴもデュナンもない』、か」

「それがどうしたよ？」

ニームはエスカの話を聞くと、クスッと小さく笑った。それはニームがエスカに見せる、初めての少女らしい笑いであった。

「お前のアカデミーの専修論文は読ませてもらった。気候と茶の木の育成について大まじめに研究してあって、けっこう笑えた」

「あれは笑って読むような論文じゃねえよ」

エスカは思わずムッとした顔をしたが、身辺調査の一環とは言え学生時代の論文にまでわざわざ目を通しているという事を知ると、ニームが決して中途半端な思いつきで自分に近づいてきたのではないと言う事がわかった。

「内容がまじめすぎて笑ったのだ」
「はあ？」
「まあ『領主』が領地の経済に関わる産業について熱心なのは良いことだ」
「おい」
エスカはニームの『領主』という言葉に当然ながら反応した。エスカは「まだ」領主ではないのだ。その言葉の意味するところは重いのである。
「わかっている。私を誰だと思っておる？人前で不用意な発言をすると思うか？」
「頼むぜ、おい。俺はこう見えて実は小心者なんだからよ」
「ふふ。五大老アイク・ヘロンではないが、器量の良い男が慌てた顔というのも、なるほどなかなかに良いものだな。さて……と」
ニームは一杯目の紅茶を飲み干すと、エスカを上目遣いに見て、そっと空のカップを差し出した。ポットを持ったままのエスカはその遠慮がちな態度に苦笑を隠しながらもいそいそと二杯目の紅茶を注いだ。ついでに自分のカップにも、ポットに残った残りの茶を注いだ。
それはエスカが紅茶を飲みたかったからではなく、ニームが三杯目を所望した際、うっかり渋みが強すぎる茶を注がなくて済むようにであった。
ニームにエスカの行動の意図が伝わったかどうかはわからない。もとよりそれはエスカの性分のようなもので、敢えてその気遣いをニームに気付かせようなどと言う気持ちは毛頭なかった。
果たしてニームはエスカが自らのカップに注いだ、やや色の濃い紅茶を口に運ぼうとしないのをじっと観察していた。

# 第七話　三つ数えろ

「また話が脱線してしまったな。それで、その大賢者の一人が私だ。そこまではよいな？」
「よかねえ！」
エスカは手にしたままのポットを取り落としそうになった。
「さっきもサラっと同じ事を言ってたよな？お前みたいなチビっ子が正教会の頂点に立つ四人だか三人だかの一人だとかありえねえ」
「あり得ない、だと？」
「ああ」
「エスカ、それではお前も相手を外見だけで判断するその辺の凡百のボンクラ軍人と同じだな」
「なんだと？」
「まったく、お前がボンクラだとしたら、そのお前を選んだ私までボンクラだという事になるではないか。私をがっかりさせるな。でもまあ……最初に正体を見せておいた方が話は早かったのだろうな。そう考えると私がつまらぬ逡巡をした事がそもそもで、責任はこちらにあると言えなくもない……」
「何をぶつぶつ言ってる？」
「わかった。ではお前の言うチビっ子の正体とやらを見せてやろう」
ニームはそう言うと椅子から降りて背筋を伸ばして綺麗な立ち姿を決めると、次に細い右腕を真横に突き出すようにすっと水平に伸ばした。その華奢な手首で、乳白色の腕輪がゆらゆらと揺れていた。
何が始まるのかと思うまもなく、小さな「自称」大賢者はそのままの格好で小さくつぶやいた。

「セ＝レステ」
形のいい桃色の唇からその言葉が発せられた瞬間、ニームの右手には半透明に見える乳白色の儀仗が握られていた。

長い。ニームの身長を遙かに超えているのは間違いなかった。
一見何もないところから儀仗が出現したように見えたが、注意深いエスカは既にあることに気づいていた。
ニームの右手首にあった腕輪が消えていたのだ。
おそらく、腕輪を儀仗に変化させるルーンを唱えたのであろうということまではエスカにも推理ができた。
だが、次に何が起こるのかわからず、中途半端に身構えたエスカに、ニームはニヤリとやや毒のある笑顔で笑いかけると、今度はなぜか俯いた。
「三つ数えろ」
「え？」
「三つ数え終わった時、この世にはお前の知らぬ世界が在る事を知る事になろう」
低い声でニームがそう言い終わると、ほぼ同時にエスカの背筋に得体の知れない冷たい恐怖が走った。全身の毛穴が開き、鳥肌が立った。
理由はわからない。
理解や知識と言った意識下で反応したわけではなく、もっと原始的な何かの感覚、もしくは本能と呼ぶものが未知の恐怖を叫んでいた。
いや。本能が反応したのであれば、それは未知のものではないのかも知れない。たとえエスカにとっては未知でも、彼の遠い先祖達にとっては既知の恐怖だと言う事ではないのか？
恐怖の原因ならわかっていた。
目の前にいる少女。その雰囲気が、今までとはがらりと変わった事により生じたものだったのだ。
エスカはニームを凍り付いたようにただ見つめるしかなかった。
恐怖を呼び起こす程にその場の空気を変化させた原因はそこにあった。
ニームが上げた顔が全てを語っていた。

エスカの視線に向けた顔。その顔を見て、エスカは手に持った紅茶のポットを床に落とした。

鈍く乾いた音を立てたポットは、当然の帰結として大小の破片に姿を変え、床に散らばった。

エスカは床に落ちた磁器の破片と、そして目の前の少女の顔を見比べた。口を開いたが、そこから言葉は出なかった。

エスカの視線の先……そこには澄ました顔で儀仗を持って立つ、人形の様に整った顔をした小柄な少女がいる。だがその少女の瞳は、茶色から赤に変わっていた。それだけではない。前髪にかかって全ては見えないが、その額には在るはずのないものがあった。

そう。賢者である証明、第三の眼が血の色に燃えて、エスカを焼くかのようにじっと見つめていた。

エスカも当然ながら、噂では知っていた。

賢者とは第三の眼を持つ、人を超えた存在である、と。

だが三聖の存在と同じくそれは信徒向けの神秘主義が生んだマーリン正教会の「でっちあげ」だと信じて疑っていなかった。事実、エスカの知っている限り、第三の眼を見たという逸話はあまたあれど、どこぞの湖に住むという龍の目撃談と同様に、どれも眉唾なものばかりであり、信憑性の高い記録など一つも存在しなかったからだ。

とは言え三眼の人間は今まさに、彼の屋敷の応接室という、極めて日常的かつ卑近な場所に存在していた。

勿論、エスカは自分の意識が確かなのかどうかをはじめに疑ってみた。朝が早かった為に、うっかりうたた寝をしているに違いないと思い込もうとしたのだ。

だが夢などではないことはもはや疑いようがなかった。

気付くと目の前の赤い三つの眼を持つ禍々しい気を発する少女は、少し目を伏せたような表情で早口で何事かをぶつぶつとつぶやいて

いた。
それを見てエスカは大きく息を吸い込んだ。まずは気を落ち着けようとしのだが、それを妨げるようにドアを叩く音がした。
続いて自分の名を呼ぶよく知った声に、エスカはようやく我に返る事ができた。
「大きな音が聞こえましたが、いかがなさいましたか？」
ポットが割れる音を聞きつけてロンドがやってきたのだ。相変わらず素早い対応だった。
「――わ、悪りぃな。ドジってポットを割っちまった」
エスカの声は自分でも恥ずかしいほど上ずっていた。たとえ少しでもいい。とにかくもう少し気持ちを落ち着かせようと一度咳払いをすると言葉を続けた。
「二人とも怪我はねえから心配すんな」
今度は普段通りの声が出て、エスカはほっと胸をなで下ろした。
「そのままでは危のうございます。すぐに片付けましょう」
「ち、ちょっと待ってくれ」
エスカがそう言ってロンドの入室を一時保留した時だった。
なにやらつぶやいていたニームが、儀仗の頭を床に向けた。
「入ってかまわぬ」
躊躇っているエスカに代わって、ニームがロンドに声をかけた。
「失礼いたします」
エスカはロンドが部屋に入って来たのを見て、あらためてポットが散らばった床に目をやった。
そしてエスカはカーペットの上にあるものを見て今度は小さく身震いした。手の甲にまたもや鳥肌が立った。エスカは視線を上げるとその「事象」の原因に違いないニームを見た。
彼女はすでに元の顔に戻っていて、茶色い二つの瞳がエスカの青ざめた顔を映していた。
加えて言えば、あの禍々しい程の強い気配もいつの間にかすっか

り消えていた。
「おやおや」
ロンドはエスカの足下に目をやると首をかしげた。
「見たところ、割れてはいない様子ですな。どれどれ」
膝をついて白い磁器製のポットをそっと手にして立ち上がったロンドは、それを頭上にかざすと念入りに状態を吟味した。最後に確認するかのように胴体を人差し指で強めに弾いた。ポットは鈍い音をたてた。それは茶葉が中に残っているからで、鈍いながらも残響はきれいだった。エスカの耳にもそのポットにひびが入っているようには感じられなかった。
「このポットはたいそう運がよろしいですな。華奢な作りなのに落ちてもヒビ一つございません。ここは一つ銘を付けて家宝としましょう」
ロンドののんびりした態度に、エスカは思わず悲鳴を上げた。
「待て。家宝をこれ以上増やすな」
ロンドの提案に、意外な事にニームが積極的に賛意を示した。エスカの悲鳴はその場にいた人間には何一つ影響を与える力は無かったのである。
「いや、よい案だ。差し支えなければ私に銘を付けさせてもらえぬか？」
「特級バードのタ＝タン大佐に銘を授かるとはこのポット、なんたる果報者。是非に」
「そうだな。『びっくり仰天』はどうか？」
「素晴らしいですな！」
ロンドはすかさずそう賛同するとポットをあらためて眺めながら大きくうなずいた。
「銘『びっくり仰天』　しかと頂戴いたしました」
「ああもう、勝手にしろ」
曖昧にそう答えるエスカを見て、ロンドは訝しげに声をかけた。
「エスカ様、顔色が悪いようですが」

「いや」
エスカは手を挙げてロンドに大丈夫だと言うと、礼装の詰め襟を音を立てて外した。
「この忌々しい道化着のせいで息苦しいだけだ」
「恐れながらエスカ様。ご婦人の前でお行儀が悪うございますぞ」
文字通り忌々しそうに詰め襟の留め金具を外し、そのまま第一ボタンまで外して胸を楽にしたエスカに、ロンドは小言を言った。
ニームはそのロンドに声をかけた
「いえいえ、ロンド殿。エスカ殿の言やよし。私の前で堅苦しい態度をとる必要はない。普段通りのエスカ殿でよい」
「はあ、しかし……。ですが……なるほど」
ロンドはエスカではなくニームの方をじっと見て曖昧な言葉をつぶやいていた。

エスカは決して人前で礼装を着崩したりはしない。少なくとも詰め襟の留め金具を外す事はあり得なかった。おそらくロンドのみが知る寝間着姿のエスカはこれ以上ないほどだらけているが、いったん外向きの服を羽織ったならば、エスカはいくら酒を飲もうが決して崩れない事を矜持としていたのである。
つまり詰め襟の金具を外すという行為は、エスカの事を詳しく調べたであろうニームにも知りようのない、エスカとロンドとの間でだけ通じる「合図」だったのだ。
ロンドはエスカのその合図に反応していたのだった。
「このチビもこう言ってんだからいいんだよ。それより、このチビっ子は生意気にも紅茶の味がわかるようだぜ。お前の茶を気に入ったそうだ」
「ええ。『たいそう』気に入った。素晴らしい香りと味だな」
「これはこれは。よろしければお代わりをお持ちいたしましょうか？朝食のすぐ後ではございますが、丁度午後のお茶用の菓子が焼き上がったところでございます。味見などいかがですか」

ロンドの言葉に、人形の様な無表情なニームの顔があっと言う間にほころんだ。そうなるともうエスカにもロンドにも、ニームはただの子供にしか見えなかった。

「それはステキだな。この屋敷の食事はどれもこれも私の口に合う。是非味見をしてみたい」

「それは光栄でございます。今の言葉、料理人に聞かせて励みとさせましょう。申し訳ありませんが、お部屋の用意にはもうしばらく時間がかかりますので、ごゆっくりお過ごしくださいませ」

ロンドはそう言うとカップ類を一式下げて部屋から出て行った。新しいお茶はまた違う器でやってくると言うことである。

「初めて見たのだろう？」

二人きりになると、ニームがいたずらっぽく笑ってそう言った。焼き菓子に反応した先ほどの笑いとは違い、いかにも作ったような笑顔だった。

「当たり前だ」

エスカがさっきまでニームに対して持っていた親近感のようなものはあっと言う間に消え失せていた。

第三の眼が消えると同時に、得体の知れない本能的な恐怖は去ったが、エスカの額には脂汗が浮かんだままだった。

今度は今目の前で学習した事例から導き出された知識が生み出す別種の恐怖が彼を浸食し始めていたのだ。

「ポットを元通りにしたのは、お前だよな？」

「この場で私以外にあんな事ができる者がいるとでも？」

「この場でなくてもあんな事をできる奴なんざ俺は知らねえよ。それより、あれもルーンか？」

「『不滅』という強化ルーンだ。私が生きているうちは、二度とあのポットが割れる事はないだろう。まあ、もっとも無機質に対してしか使えぬルーンだがな」

「そんなものが人間に使えてたまるか」

「それについてはまったく同感だ。どちらにしろ『不滅』を使えるルーナーなどまず居るまい。少なくともドライアドのバードの中にはおらぬ」
「いねえだろうな」
エスカは素直にうなずいて見せた。
「では私が本物の賢者であること、そしてただの賢者ではないということは理解したか？」
エスカは隠しからハンカチを取り出すと額の汗をぬぐった。
「そう言われてもな。俺は『ただの賢者』すら知らねえんだぜ？本当にお前は大賢者なのか？唯一国際舞台に露出しているあの《真赭の頤（まそほのおとがい）》と同じ地位にいるっていうのか？」
ニームはしかし、首を横に振った。
「同じ大賢者だが、同じ地位などではない。言ったであろう？私は『人の筆頭』　タ＝タンは選定十二色の正統なのだぞ。ザルカの傍系を名乗るハゲおやじと同列で語るとは失礼千万」
「その、さっきから言っている十二色ってのはなんだ？」
「選定十二色。単に十二色とも言うが、太古の昔に唯一神マーリンが定めた、世界を統べる事を許された四と八の氏族の事だ。十二の氏族の中でも正統が残っている家はもうほとんどいない。タ＝タンと、そうだな。あと二つくらいだろう。だが正統がいくつ残っていようが《天色》の継承者であるタ＝タンを継ぐ者は人の筆頭なのだ。わかるか？順位が一番上なのだ。さらに言えば正統たる血の濃さにおいても、いかなる人であろうともはや誰も私には敵わぬ」
エスカにはもちろんニームの言う意味は理解できなかった。神話に属する話だとしても、それは一般的なものではない。その話を知る者がいったい何人いるというのだろう。
「十二色ねえ。そんな言葉は聞いたことがねえぞ。ガキの頃さんざ聞かされた神話にも出てこねえし、そういう伝承好きで知識だきゃ豊富なバカ兄貴からも聞かされた事がねえ。つまり俺が知っている限り、そんな単語はファランドールには存在しねえんだが……」

「心配はいらぬ。賢者でさえ十二色の事を知っている人間はそう多くは居ないだろう。ましてや十二色を全て言える人間など数えるほどしかおらぬだろうな」

「さっきザルカの傍系とか言ってたが、あの《真赭の頤》もその十二色の一族なのか？」

「三聖と大賢者は十二色のうち、決まった氏族が引き継ぐ役職みたいなもの。残りの四氏族はそれぞれ大賢者の補佐役となる。つまり三聖と大賢者はすべて十二色の末裔で固められているというわけだ。《真赭の頤》は十二色のうち『朱色（あけいろ）のザルカ』一族の血を引くものだが、さっきも言ったとおり彼は傍系だ。ザルカの正統はとうに断絶している。彼はザルカバード一族。名前からしても傍流の傍流なのだろうな。おそらく『バードを多く排出したザルカ一族』とでも言う意味の後付けの名前であろうから、正統からはいかにも遠そうではないか？」

「ふむ、なるほどな。少しだけわかってきた。お前達のその『賢者の徴』、いや『本名』とやらはその一族が継ぐものって事だな？」

ニームはニヤリと笑いながらうなずいた。

「血族が『眼』と名前を受け継ぐのは百五ある『本名』のうち、十二色のみ。だから十二色は特別なのだ。残る『賢者の徴』は、その能力に見合った者がいれば血筋など関係なく誰にでも『眼』と『本名』を受け継げる」

「つまり三聖と大賢者は太古から連綿とつづく一族が世襲しているってことなんだな。そこまでは理解した」

「ようやく話がしやすくなった」

「文字通り『目は口ほどにものを言う』って奴だ。あれを見りゃ信じないわけにはいかねえよ。それより『人の筆頭』ってのはどういう意味だ？タ＝タン一族ってのは三聖より上の立場ってことなのか？」

だが、ニームはそれには首を横に振った。

「『人の筆頭』とはマーリンが定めた全ての人間の王たる称号。だ

がエスカも知っている通り、歴史上それが行使された事実はない」
「だな。そんな話は聞いた事がねえ」
「でも、マーリンはそう私たちに命じたのだ。もっともタ＝タンは実際に人間を支配しようとは思わなかった。いや、十二色はそもそも人を支配などするつもりはない。だからこそこうやって今ファランドールは十二色以外の一族が様々な歴史を紡いでいる」
そこまで言うと、ニームは手に持っていた儀仗に向かって何かを小さくつぶやいた。するとそれは彼女の手の中で一瞬で形を変えた。
ニームは驚いた顔をしているエスカに微笑むと、腕輪に変わった儀仗を右の手首に填めながら続けた。
「大賢者はあくまでも三聖より下の存在。血の濃さがどうあれ、もともと違う立場に在る者だ。だから血筋が良かろうが悪かろうが三聖だけは関係ない。我々は三聖の僕（しもべ）なのだからな。つまり大賢者である《天色の？（あまいろのくさび）》には僕としての重要な役割があると言う事になる」
「役割？」
「『タ＝タン』とはそもそも太古の昔に三聖の一人《深紅の綺羅（しんこうのきら）》に指名された一族だ。《天色の？》はすなわち三聖《深紅の綺羅》を守護する者。そう定められている。だからタ＝タンの王である私は大賢者であり、かつ『アリス』の王の守護者と言うわけだ」
「その《深紅の綺羅》っていうのはアリスっていう一族なのか？」
ニームはゆっくりとうなずいた。
「十二色のうち《アリス》の一族は《深紅の綺羅》を継ぐ一族だ」
「三聖《深紅の綺羅》の現名（うつしな）がアリスという族名ってことか」
「『クレハ・アリスパレス』　それが賢者ですら知らない彼女の現名。もちろん、これも他言無用だ」
「ふむ」
「ここまではいいな？理解したか？」
「いやまて。ごまかされねえぞ」
エスカは掌をニームに突き出した。
「おや。これまでの私の説明で何が不服があるのか」

「数が合わねえだろ？十二色って言いながら三聖が三氏族、大賢者が四氏族。なのにお前はさっき、『残り四氏族』と言ったろ？」
「へーえ」
ニームはまたもやニヤリとした笑いを浮かべてエスカを興味深げに見つめた。
「やはりただの馬鹿ではないようだ」
「いや、そこはさすがに感心するところじゃねえだろ。子供でもわかる引き算だって」
エスカの抗議に、しかしニームは反応しなかった。代わりに質問で返してきた。
「十二色なのに、合計で十一しかない。大賢者は四人でその補佐も四人。大賢者は三聖が指名するのに、なぜか四人もいる。それはなぜだ？」
エスカは腕を組んで目を閉じた。
単純に考えればいいのか、それとも全く違う意味があるのか、それはわからなかった。だが、ニームはエスカとなぞなぞ遊びをやりたがっているのではないだろう。
だから、単純な答えを告げた。
「全ては四の倍数じゃねえか。だったら本当は『三聖』じゃ……ないってことか？」
ニームはしかし、そうだとも違うとも言わなかった。ただじっとエスカの目の奥を見つめていた。
エスカは今し方見たばかりの三眼ニームの顔を思い出すと、思わずゴクリと唾を飲み込んだ。
ニームが語った事は全て本当の事だろうと、彼はもはや確信していた。だが、それを認めると結局大きな疑問が頭をもたげてくる。
（ニーム・タ＝タンこと大賢者「天色の？」は俺、エスカ・ペトルウシュカに何を求めて近づいてきたのか？）
どう考えても、もはや五大老との駆け引きをどうのこうのと考えている場合ではないとしか思えなかった。

「今までの話は五大老、いやヘロン侯爵にも？」
「まさか」
エスカの問いにニームは首を横に振った。
「こんな話、おいそれと人にできるものか」
「……」
「『じゃあなぜ自分にはそんな話をするのだ？』と思ってる顔だな」
「秘密にしとくのが苦しくなったんで穴を掘ってそこに大声でぶちまけようとしたが、冷静に考えるとそんなことをしている自分がバカっぽい事に気づいてやっぱり誰かにしゃべりたいから俺を選んだ、っていうんじゃねえんだろ？」
「何だ、それは？」
「いや……何でもねえよ」
「そうだな。できるならばこんな話、誰にもしゃべりたくはない」
「じゃあ何故だ？」
エスカの問いに、ニームはすぐには答えず、一歩踏み出してエスカの目の前に立った。
「エスカ・ペトルウシュカ」
そして、ゆっくりとエスカの名を呼ぶと、それにエスカが答える前に続けた。
「エスカ。私はお前を見込んで選んだのだ。それをまず理解して欲しい」
「何だよ、いきなり」
「言い換えよう。いろいろな有力者を吟味した。だがドライアドではどうやらお前しか私の役にはたてそうもない。そう思って近づいたのだ」
「俺がお前の役にたつだと？」
ニームは大きくうなずいた。
「今、私の力の片鱗を目撃したであろう？エスカよ、お前はこの私を受け入れる事で味方としろ。それはお前にとって計り知れない力

になる。公爵を継ぐなど簡単至極。それどころかお前が考えているドライアド王国の乗っ取りさえ現実味を帯びてくる」

エスカはニームのその言葉を聞くと、覚悟を決めた。

なぜかはわからない。だが、目の前の小さな大賢者がエスカの野望を全て見透かしている事に、もう疑問の余地はなかった。

その上で、力を貸そうと言うのである。もちろん大賢者ニームがマーリンの思し召しで自分のところへやってきたなどと考えるエスカではない。

相応の見返りは受け入れよう。そう思ったのである。

つい数時間前に礼服の事で愚痴をこぼしていた事が遠い昔の平和な出来事に思えた。

（おそらく……）

エスカは思っていた。

（今、どう答えるかで、俺の運命が大きく分岐する。そしてその分岐は俺一人の分かれ道ではないに違いない）

しばらく沈黙があった。ニームはしかし、エスカの答えをじっと待っていた。

「条件を聞こう」

それは彼女にとって満足のいく答えだったのだろう。能面の様な顔が少しだけ嬉しそうに微笑んだように見えた。

それは意識が作った笑顔ではなく、ニームの感情に呼応した笑顔だと、エスカは思った。

その笑顔を見て、ニームの背景がまた信じられなくなった。少しだけ嬉しそうに微笑むニーム・タ＝タンの顔は、まだあどけなさが残る少女のそれ以外の何者でもなかったからだ。

「では私からの条件を提示しよう。『私』という武器を与える見返りにエスカ・ペトルウシュカに求めるもの。それは我が主人である三聖《深紅の綺羅》の救出に助力すること。それだけだ」

「《深紅の綺羅》の救出だと？」

エスカは思わず大きな声でそう言った。
てっきり大規模な土地、具体的にはサラマンダ大陸の半分を正教会によこせとでも言い出すのだろうと思っていたのだが、ニームが口にした実際の交換条件はあまりに漠然としており、しかも聞くだにその内容の困難さが推し量れるものだった。
それにエスカは気付いていた。ニームはあえて「私」と言ったのだ。それは「正教会」ではなく、個人ニーム・タ＝タンとして動いているという事を仄めかしているとしか思えなかった。
聞きたい事はまだ山ほどあった。そもそもが簡単に答えられるような内容の話ではない。エスカはだが、頭に浮かんだ全ての疑問を全てたずねることはあきらめ、取捨選択をおこなった
まずは一番聞きたいものから聞くべきだ。そう当たり前に判断した。
「そもそも救出ってえのはどういう意味だ？」

その時、二人の間に張った緊張の糸を断ち切るかのように、扉を叩く音がした。
「お待たせいたしました。お茶と焼き菓子をお持ちいたしました」
エスカは声のする扉の方を睨むと、短く怒鳴った。
「後にしろ」
だがニームがそれを覆すように直接ロンドに声をかけた。
「かまわぬ。私にしては少ししゃべりすぎた。のどを潤すものが欲しかったところだ。入るがいい」
エスカはニームを睨んだが、ニームは意味ありげにニヤリと笑うと言った。
「丁度いい。ここからは彼にも同席してもらおうではないか。お前の腹心なのであろう？」
「いいのか？」
驚いてエスカは尋ねた。
彼としてはニームの為に今の段階ではまだロンドを遠ざけておこ

うと思ったのだ。
「お前のことは調べたと言ったはずだ。ロンド・キリエンカとお前の関係もわかっている。私はこれからお前の片腕になるのだ。そしてロンドもお前の片腕だ。お前にとってなくてはならない両の腕がそれぞれてんでばらばらでは、まともな事はできはせぬ」
「お前は本気で俺の片腕になると言うんだな？」
「もう一度言う。お前の一方の腕の名はロンド・キリエンカ。そしてもう一つの腕の名は、ニーム・タ＝タンだ」
「おい、俺はまださっきの話を承諾したわけじゃねえ」
そう言った時、扉が開いてロンドが台車を押して入ってきた。
「承諾してもらう。それにきっと彼が私の話を聞けば、承知しろとお前に進言するに決まっている」
「お前……」
「ふふふ。ああ、なんておいしそうな！」

《天色の？》　すなわちニーム・タ＝タンを描いた絵は有名無名併せていくつもあるが、中でも最も有名でありながら、もっとも人の眼に触れることのない一枚の絵が、ミュゼの王立美術院に秘蔵されている。
この絵が一般向けに公開されない理由は、エスカの遺言によるものだと伝えられる。
例外として年に一度だけ、ニーム・タ＝タンの誕生日に最も近い白の三月の最初のアイスの望月の夜に希望者の中から抽選で選ばれたもの十二名だけが鑑賞を許されている。

真っ白なドレスを纏った焦げ茶色の髪の少女が、尖塔の頂上で危なげに立っている。
いや、浮いているのかも知れない。
そこに吹く風は強く、その風を受けてその焦げ茶色の髪が乱れて

美しい少女の額があらわになっている。
その額には第三の眼が大きく見開かれており、合計三つの真っ赤な瞳がじっと空を見つめている。
そんな絵である。
その絵の特徴は構図にある。
絵は尖塔の頂上に立つニームが凝視するその視線の先。つまり空中から彼女を見下ろす視点で描かれているのである。
見上げるニームの三つの眼はどれも鮮やかな赤色をした血の涙を流し、白いドレスにいくつもの染みを作っている。
右手に持っているのは彼女の絵によく描かれている乳白色の儀仗ではない。その代わりに、その小さな手は野薔薇の枝を強く握りしめている。薔薇の刺はニームの手を刺し、掌からも血がしたたり、白いドレスを汚す。握りしめる野薔薇の色はその血と同じ暗い赤で塗られており、花の数はペトルウシュカ男爵のクレストと同じく四本である。
絵の木枠には珍しく作者による題字が記されており、そこには『頂の少女』とある。
ミリア・ペトルウシュカの手による美しくも見るものを少々恐ろしい気分にするこの絵は、その構図の大胆さもさることながら何種類もの顔料を配合した赤の絵の具の鮮やかさや今にもしゃべり出すかのようにみずみずしくも生々しいニームの桃色の唇、そして見ている者をいたたまれない気分にする何とも寂しげな表情など、ミリア研究家の間では傑作の一つとされている。
エスカがこの絵の一般公開を嫌った理由は諸説あるが、ミリアが調合した特殊な色の赤絵の具の耐光性が極めて低く、長期間光を当てるような掲示には耐えられないと判断した為だというのが多くの絵画研究家達の通説だが、勿論異説も多い。
もちろん、その真の理由を知るすべはもはや我々にはない。

# 第八話　銀翼の矢の部隊章

「言いたい事があるなら聞いてやる。まず姿を見せろ」
リーンは声のする楡の木の梢に向かって大声で叫んだ。
相手がルーナーであるなら、何よりここは相手にルーンを詠唱する時間を与えてはならない。
それだけではない。リーンには早急に対策を練る為の時間稼ぎとして会話を継続させる必要もあった。
とはいえこのままガルフ・キャンタビレイ大元帥をエッダに入れたくないという点において、リーンと楡の木の「賊」の利害は一致しているとも言えた。
問題は相手がキャンタビレイ大元帥とその親衛隊に対して敵意があり、攻撃する意志があるかないかという事だった。
どちらにしろ、相手が特定できないのでは戦略どころか戦術を立てるにもその精度が上がらない。隠れていると言う事は顔を知っている者なのか、もしくは知らずとも特定されたくはない立場の人間なのか、あるいは単純に自らの居場所を知られたくないだけなのか……。いずれにしろ推測の域を出ないのであった。
「いっそ楡の木ごと焼いてしまいますか？」
リーンの側に控える下士官がそう進言したが、もちろんそれは上官によって即座に却下された。相手はそれを挑発しているのかもしれないのだ。もしくはすでにこの付近一帯に罠が張られている可能性がある。先手を取られてしまっている以上、下手な大動きは一気に事態を取り返しの付かない状態に追い込みかねなかった。
リーンの呼びかけに相手が反応しないまま、しばらく時が流れた。おそらくそれは一分にも満たない時間であったのだろうが、リーンをはじめ極度の緊張を強いられている親衛隊にとっては相当の長さに感じられた。

リーンがガルフの表情を窺うと、彼の上官は泰然とした態度でじっと梢を見つめているだけであった。

相手の長めの沈黙に嫌なものを感じ、焦りはじめたリーンは意を決してこちらから行動に出ることにした。

その時である。件の楡の木とは道を挟んだ反対側にある茂みの方から、枯れ枝を踏み砕くような音がした。

その音に全員の視線が集まった。まるで楡の木から注意を逸らすかのようなあからさまな大きな音に、リーンは「しまった」と唇を噛んだ。つられてしまった後ではそんな後悔など何の役にも立たないのだが、それよりも視線を楡の木に戻せない訳がそこにはあった。

今し方まで誰もいなかったはずの道ばたには、一人ダーク・アルヴと思しき女が片膝をついてガルフの方に向かって頭を下げ、静かに控えていた。

アイスの光に照らされているとはいえ、顔を伏せている為にその表情はわからない。

髪が黒いことからアルヴィンではなくダーク・アルヴであることはわかるが、その髪が短い。髪にはエーテルを集めやすくする力があるとされ、フェアリーが多いアルヴ族は髪を長くする者が多い。従ってそのダーク・アルヴの短髪は珍しいと言えた。特長と言ってもいい。着衣も夜目に目立ちにくい黒っぽい無地の上下服で、いわゆる旅装束や平服とは違う。どうやら軽い兵装のように見えた。ただしリーンの知る限り、それはシルフィードのどの部隊のものでもないはずであった。

その小柄な女ダーク・アルヴが一般人ではなく兵士であると判断し、その服が兵装であろうとリーンが判断したのには訳があった。片膝をつく女の目の前の地面に、短剣と弓が置かれていたのだ。

そしてそれは自らに攻撃の意志がないという事を示していた。

リーンはしかし、その人物がいったい何者なのかという好奇心よりも先に、そもそも誰もいなかったはずの場所に突然人間が降って湧いたかのように現れた事に対して軽く混乱していた。

だがその場における彼の上官であるガルフは若いリーンよりもいくらか冷静であった。

彼はリーンがこの状況に対応する為に考えをまとめるだけの時間を稼ごうとしたのか、単純に興味を持ったのか、リーンよりも先にその謎の女ダーク・アルヴに声をかけた。

「顔を上げよ、ダーク・アルヴの戦士」

「はい」

アプリリアージェに似た黒髪、しかしさらに短く軽快な髪型のダーク・アルヴは涼やかな声で返事をすると、ゆっくりと顔を上げた。

「ご無礼の段、なにとぞご容赦を」

涼やかなその声は最初に耳にした楡の木の上からのものではなかった。そもそも楡の木の声は男の声である。

要するにリーン達の相手は複数である事がこれで判明した。

「我が主に敵意はございません」

白い月、アイスに照らされた精悍な顔立ちの女兵士の顔は、ガルフとリーンをまっすぐ見据えていた。

そのダーク・アルヴを見たガルフの顔色が変わった。

「そちはまさか、ベルクラッセ少佐か？」

ガルフからそう声をかけられた女アルヴの兵士は驚いたような顔をしたかと思う間もなく、その両の目にみるみる涙を溢れさせると、大元帥に向かって深々と頭を垂れた。

「まさか大元帥閣下に顔を覚えていただいているとは……これ以上の喜びはございません」

（ベルクラッセ少佐だと？）

リーンは記憶にある王国軍の兵士名簿からその名を即座に検索し終わると、驚いてガルフとダーク・アルヴの両者を見比べた。

「まさか？」

ガルフ達が驚くのも無理からぬ事であった。なぜならリーンが引っ張り出したフリストという名は、既に鬼籍に入っていたのだ。

リーンの驚愕した表情を見たアルヴの女兵士は涙を拭うと海軍式の敬礼と共に、自己紹介を行った。
「申し遅れました。我が名はフリスト・ベルクラッセ。元シルフィード王国軍海軍少佐です」
「本当にベルクラッセ少佐なのか？」
「ええ。私はル＝キリアの生き残りなのです、アンセルメ少尉」
フリストはそう言うと、上着の一番上のボタンを外し、襟の内側をリーンに示した。白いアイスの光を受け、そこにはシルフィードの兵士であればまず知らぬ者はいない銀糸で縫い取られた部隊章が輝いていた。
リーンは確かに、そこに銀翼の矢の紋章を見た。それこそまさしくル＝キリアの部隊章であった。
そのル＝キリアの部隊章の隣には、海軍少佐を示す階級章が縫い取られていた。

ル＝キリアは王国軍に於ける海軍所属の部隊であることにはなっていたが、通常の部隊と違い、いわゆる軍の指揮系統からは完全に外れた特殊な存在であった。
シルフィード王国には大きく分けて二つの軍がある。一つは近衛軍。そしてもう一つが王国軍で、どちらも指揮系統の頂上は大元帥である。しかしル＝キリアは例外で、名目上は国王の勅命で動く直轄の特殊部隊という事になっている。従ってその特殊性を他の軍に示す為にいくつかの特例が設けられていた。
まずル＝キリアはシルフィード海軍の「ムーンセイルに剣」の軍章を兵装に付けることはない。その代わりに誰が見てもすぐにわかるように独自の部隊章を付けている。ただし階級章ともども内襟に、である。
ル＝キリアは通常部隊として軍の指揮系統に組み込まれる事が無い為、平素は軍隊章や階級章をわざわざ兵装に示す必要がない為である。海軍章や部隊章、階級章などは指揮系統に組み込まれている

もの同士で初めて機能するものなのだ。
　また実質的な側面からの理由もある。ル＝キリアは隠密行動を主とする部隊である。通常、平服で行動することが当たり前の非兵装部隊である。そうなると軍隊章や階級章などを付けることは不自然なのである。
　とはいえ、他の部隊と全く接触がないかというとそう言うわけでもなく、補給や連携作戦なども少ないながらも行われる。その際にはやはり他部隊の構成員に対して階級・所属を示す必要性が出てくる。
　そういうわけで、普段は必要のないものだが、その「必要」な場面に際し身分を示す事が出来るようにル＝キリアは部隊章と階級章を内襟に付けるという工夫をしていた。
　海軍の兵装時なら通常通りでよいが、平服行動時には襟を折り返して外向きに留め、部隊と階級を示す。その為に各自、作戦行動時の平服には折り返した襟を留める為のボタンを別途胸に付けている事が多かった。
　独立部隊であるのに一応海軍所属になっているのは、一つには主に儀式などには礼装が必要になるが、その為にル＝キリア独自の礼装を作るという無駄を省く為にどちらかの所属としておく方が合理的だと思われたからであり、もう一つは、移動に船を使うことが多いという部隊の行動様式上の理由であろう。

　折り返した時に上下左右が正しくなるように縫い付けられたル＝キリアの銀翼の矢の部隊章を、実のところリーンはこの時初めて目にした。
　シルフィード王国軍には四翅のスズメバチの部隊章と同様、銀翼の矢を知らぬ者などいないが、後者を実際に目にした者は少ない。
　しかも、そのダーク・アルヴの階級章は両鈎の錨が一つ。つまりそれはその階級章の持ち主が海軍少佐である事を表していた。対してリーンの右胸に縫い取られている階級章は片鈎の錨が一つ。つま

り少尉である。リーンとフリストとの階級差は三段階もあった。
それだけではない。国王直轄であるル＝キリアの階級は優先特階と呼ばれ、王国軍および近衛軍の二つ上の階級と同等とされているから、たとえ親衛隊とは言え、通常階級であるリーン・アンセルメ少尉から見たフリストは実質的に五階級上の大佐扱いなのである。

「しかし、ベルクラッセ少佐なら顔の傷が……」
ル＝キリアの部隊章を見せられてもまだ、リーンはそれを素直に受け入れられる事ができなかった。
なにしろつい先だってル＝キリアが「本当に」全滅した、という情報を得たばかりなのだ。さらに言えばフリストの部隊はかなり以前に彼女が率いた小隊全員が遺体で発見され、信用に足る筋により本人確認まで行われていたはずである。
それに何より「双黒の左」と二つ名で呼ばれるフリスト・ベルクラッセ少佐には顔に大きな剣による傷があるはずであった。
「傷はなくともこの者がベルクラッセ少佐である事は間違いない。それともリーン、お前は儂の目よりどこの馬の骨ともわからぬ者から受けた情報の方を信じるのか？」
「いえ、それは」
「一言で言うならば『この者は本物だ』」
ガルフはそう言ってリーンの言葉を遮ると、フリストに向かって静かに声をかけた。
「そんなことよりも、今『生き残り』と言ったな、フリスト？」
「はい」
「我々はル＝キリアが全滅したと聞いておる」
「我がベルクラッセ小隊は私を含む四人全員が健在です。しかしながらル＝キリアの他の小隊は一つを除き、間違いなく全滅であろうと思われます」
「お前達以外にも生存している者がいるというのか？」
「はい、キャンタビレイ大元帥閣下」

「その一小隊とは、もしや？」
ガルフの問いに、フリストは小さくうなずいた。
「おそらくは閣下のご想像の通りでしょう。もっとも、私自身がこの目で生存を確認したわけではありませんが、他の小隊の死亡も件の一小隊の生存も信頼できる筋からの確かな情報だとお考え下さい」
「ふむ。いや、その話は後にしよう。それよりもこれはいったいどうしたことだ？風のフェアリーであるお前の仕業だとは思えんが」
ガルフはそう言うと道を塞ぐ岩壁に目を向けた。
「おっしゃる通り、これは大地のフェアリーの能力。現在私が仕えている方の仕業です」
「今、何と申した？」
「我が主（あるじ）の仕業である、と」
「主だと？」
「はい。私をはじめベルクラッセ小隊は実のところ全員一度死んだ身でございます。従って今は全員が、新たな命を与えてくださった方にこの命を預けております。我が顔の傷もその方に消していただきました」
「なるほど、想像以上に複雑な事情がありそうだな」
「我が主はどうにも少々子供っぽ……いえ、悪戯好きなところがございまして。この度の無礼は私が代わってお詫びいたします」
「詫びなどよりもまずはお教え下さい。ベルクラッセ少佐の雇い主とやらは、いったい誰なのです？」
リーンは楡の梢を見上げながら、ガルフとフリストの会話に割って入った。
フリストの態度から、とりあえず相手に敵意が無いと判断したリーンは、しかし辺りの警戒を怠らなかった。だが、警戒を続けていたはずの楡の梢からは、いつの間にか何の気配も感じられなくなっていた。
「我が名と名誉に賭けて後ほど必ずお引き合わせいたします。ですが、まずは急ぎこの場を離れましょう」

リーンとガルフは顔を見合わせた。それを見たフリストが言葉を継いだ。
「私を信じて下さい、キャンタビレイ大元帥。これはシルフィード王国存亡に関わる問題なのです」
その言葉を受けたリーンは、ガルフが返事をするのを待たずに動いた。
「全隊、回頭。ひとまずノッダに向けて移動する。その後の細かい指示は追って行う」
ガルフが何かを言いかけたが、今度はリーンがそれを制した。
「今、この情勢で閣下に対してノッダに戻れという人間は、おそらく味方です。少なくとも私はそう判断します。ひとまずはベルクラッセ少佐の言葉に従うべきかと思います。おっしゃるように何か訳があるのです。それに」
チラリとフリストを見て、リーンは続けた。
「閣下はベルクラッセ少佐の命の恩人とやらに興味がありませんか？」
「むう……」
ガルフは軽く唸ると改めてそびえ立つ壁を見上げた。いったいどうやったらこれほどの事ができるのか想像もつかなかったが、尋常な力の持ち主ではない事だけは確かであった。
「エルネスティーネ姫、いえイエナ三世陛下は大丈夫です。それよりも我々は今のこの情勢を把握することの方が重要です」
「しかし」
「閣下！」
まるで聞き分けのない子供を叱りつける父親のようなリーンの怒鳴り声で、ようやくガルフは意を決した。
「一言で言うなら『老いたる兵はもはや若者に従え』か」
「年寄りの振りをしないで下さい。まだまだやってもらわねばならないことが山積なのですから」
「ふ。そうだな」

キャンタビレイ大元帥には、こういう訳のわからない事態が生じた時には、より冷静な人間の判断に従うべきだという持論があった。

想定外の事態に出くわした場合、当事者に近ければ近いほど視野が狭くなるのが普通である。それを知っているからこそガルフは後に続くものに対し、そう教え込んでいたのだ。

ガルフはマントを翻すと、足早に自分の馬車へ戻った。

その背中を見てリーンは心の中で胸をなで下ろすと、その場に控えたままのフリストに声をかけた。

「少佐殿もご同道いただけるのでしょうな？」

「お許しいただけるのであれば」

フリストはそう言うと目の前に置いた短剣と弓をリーンに差し出した。

だが、リーンはそれを受け取らなかった。

敵意や他意が無いことを示すそのアルヴ族の矜持を、同じアルヴ族であるリーンは重く受け取っていたのだ。

風のフェアリー、フリスト・ベルクラッセが「あの」ル＝キリアにあって単独で部隊を率いて作戦にあたる程の能力のある人物である事をリーンは知っていた。そしてそれがユグセル中将というル＝キリア指令官からの絶大なる信頼を受けている人物であるからこそ任せられている役割だと言う事も。

リーンとてル＝キリアの風評は知っている。他の軍人と同様、実のところ余り良い感情を持っている訳ではない。しかし大元帥の幕僚長という立場にあるだけに、一般の軍人とは違い、より実態に近い情報を知り得る立場にいた。

決して単なる人殺し好きの暗殺集団ではないことはわかっていたのである。

何より、彼は個人的にル＝キリア指令のアプリリアージェ・ユグセルに対して強い興味を持っていた。

つまり、フリストからそのユグセル中将の事を聞きたいという思いもあったのだ。

だが、それよりも何よりもフリストの態度には一片の曇りもない事が同じアルヴ族であるリーンにはよくわかった。

「あっては困りますが、道中いざという時には」

リーンは先にガルフが乗り込んだ馬車の扉を開くと、フリストに乗車を促した。

「噂の弓の腕前を拝見したいものです」

リーンの言葉に表情を少し緩めると、フリストは音もなく軽やかに馬車の中へ消えた。

続いて馬車に乗り込んだリーンは、そこに見知らぬ人間が存在する事を知り固まることになった。

「おやおや。そこに突っ立っていては危ないぞ。とはいえあんまり広くない馬車だけどね。でも、そこだと図体のでっかい君でも座れるだろ」

見知らぬ人間はなれなれしい口調でそう言うと、フリストの隣を顎で示した。そう言う本人は、ちゃっかりガルフの隣に座っていた。

顔はともかく、リーンはその声に聞き覚えがあった。しかも、ごくごく最近に聞いた声である。

そう。楡の梢から発せられていた声そのものだった。

「さあ、早く。馬車が動き出すと危ないよ」

催促されて、リーンは無言でフリストの隣に腰を下ろした。

アルヴがなんとか四人座れるだけの広さしかない馬車の中は確かに狭かったが、その男が言うほど窮屈な造りではないはずであった。

しかもその男はデュナンである。フリストにいたってはもっとも小柄な種族、ダーク・アルヴ。ゆったりとまでは言えないが、充分な広さがあると言って良かった。

リーンのはす向かいに座っている眼鏡をかけたデュナンの青年は、リーンに向かってにっこりと笑いかけていた。

茶色の長い髪を無造作にひとまとめにして束ねている。

身なりはやや派手目な旅の装束で、細かい刺繍や大胆な生地の切り替えなどを見てもシルフィード風ではないのは一目でわかった。
特徴的なのは、眼鏡の奥で笑うその目で、車内を照らすセレナタイトの光に照らされたそれは、茶色というよりはほとんど金色であった。
「いつの間にここに入ったのか？という質問はなしの方向で頼むよ、リーン・アンセルメ少尉」
今まさにそれを尋ねようとしていたリーンは、機先を制されて思わずガルフを見た。この眼鏡の男が乗っているのを最初に見つけたのはガルフのはずであった。
「ああ。大元帥閣下とは一応、知らない仲じゃないんだ」
「知っている仲とも言えませんがな。一言で言うなら、そう『お噂はかねがね』ですかな」
「あはは。そりゃそうですね。一度挨拶をした事があるかないかくらいですから。それももうずいぶん前の話です」
「閣下、この男は？」
ガルフは隠しからハンカチを取り出すとゆっくりと額の汗を拭った。
「粗相の無いようにしろ、リーン。この方はドライアド王国の北方にあるエスタリアの領主、ペトルウシュカ公爵その人だ」
「え？」
リーンはまた頭の中でその名を検索した。
いや、検索するまでもない名前であったのだが、意識が現状理解を放棄することを選んだのだ。
だが、導き出された答えはただ一つであった。
「エスタリアとは、あの『白の国』エスタリアですか？」
「他にどんなエスタリアがあると言うのだ？」
「まあまあ。それにしてもまさか閣下がボクなどの事を覚えていて下さるとは思ってもみなかったからびっくりしましたよ」
ミリアはそう言うとわっはっはと笑った。

対してガルフは苦虫を噛みつぶしたような顔で答えた。
「驚いたのはこっちの方です、ペトルウシュカ公」
「いやあ、閣下が驚いて下さったのならボクもこんな所までやってきた甲斐があったというものですよ。いえ、もちろん驚かせる為だけに来た訳じゃありませんがね」

リーンは混乱していた。
もちろんペトルウシュカ公爵という名前は知っている。何しろドライアド王国の王位継承権まで持っている人物である。
エスタリアはその領土の大きさもさることながら、ドライアド随一の古い歴史がある国でもあった。ドライアド王国にあっても、大陸を南北に隔てるように走るノーム山脈のおかげでドライアド王国の本体とも言える土地とは地理的に隔絶した地域でもあり、別格とされる領土であった。
それに何より、その領主の二つ名が「バカ殿」であると言う事で有名だった。
ミリアの風聞はもちろんリーンの耳にも届いており、ドライアドの腐敗の象徴のように感じていたから、目の前にその本人が現れたと言われても俄には信じられなかった。
それに何より「バカ殿」とあの壁が結びつかない。さらに言えばフリストとの関係も。
いや。「バカ殿」が今回のアプサラス三世崩御、イエナ三世即位という一連のシルフィードの内政にいきなり首を突っ込むような真似をしてくる意味がわからなかった。
リーンは視線をミリアからフリストへ移した。
「少佐の新しい主というのは、まさか」
フリストはバツが悪そうに目を伏せて答えた。
「そのまさかです。私、いえ私たちは今、ペトルウシュカ公爵の身辺警護役をしています」
「なんだと！」

リーンは思わず立ち上がった。
「まさか少佐はシルフィード王国を裏切ったと言うのか？」
「彼女の名誉の為に、その暴言には一応抗議させてもらうよ、アンセルメ少尉」
フリストが何かを言いかけたのを制すると、ミリアは眼鏡の中央部を人差し指で持ち上げながら落ち着いた声でそう言った。
「ペトルウシュカ公のおっしゃる通りだ。熱くなるなリーン。とにかくお話を伺おう」
ガルフにたしなめられ、リーンは渋々とフリストの隣に再び腰を下ろした。
「初対面の君には改めて自己紹介をしておこう。ボクはミリア・ペトルウシュカ。一応ドライアド王国の公爵っていう事になっているけど、まあ「エスタリアのバカ殿」と言った方が我が国同様、シルフィードでも通りがいいみたいだね」
「本当に、ペトルウシュカ公ミリア様……？」
「ミリアでいいよ、アンセルメ少尉」
「わかりました。早速ですが」
「いや、悪いけど最初にボクから一つ質問をさせてくれないか」
ミリアはリーンにそう言うと、隣のガルフを見た。ガルフは何も言わずうなずいた。
「アプサラス三世が崩御された時、大元帥は今はノッダから動くべきじゃないと進言した者は親衛隊の中には誰もいなかったのかい？」
「それは……」
リーンは言い淀んだ。もとよりその本人である彼の口からは答えにくい質問であった。
それを察して、ガルフが代わりに返答した。
「最後まで断固エッダ行きを反対したのが、そのアンセルメ少尉です、ペトルウシュカ公」
「へえ」
ガルフの答えを聞いたリーンを見つめるミリアの眼鏡の奥の金色

の瞳が、一瞬光ったように見えた。
「ガルフ・キャンタビレイ王国軍大元帥には、若いが有能な幕僚がいるとは聞いていて、是非一度会いたいと思っていたんだけど、なるほど君がそうか。それでさっきの強引な回頭指示か。うんうん。合点がいったよ。キャンタビレイ侯爵の軍師として頼もしい限りだね」
ミリアはそう言うとフリストに目配せをした。
「ボクの話の前に、まずはベルクラッセ少佐の話を聞いてもらおうかな」
フリストは二人のアルヴに礼儀正しく発言の許可を得た上で、国王アプサラス三世の勅命を受け『とある賢者の庵』に入った時の事を話し始めた。

「だからフリスト、そこは素直に『ザルカバード文書に書かれていた庵』でいいんじゃないか？」
ミリアがそう言って話の腰を折ったが、フリストは首を横に振った。
「今はミリア様の部下ですが、この件については守秘義務がございます。ドライアドの方に勅命を受けた機密作戦の全容を明かすわけには参りません」
ミリアはフリストの言葉に肩をすくめて見せた。
「この件に関しちゃ、ずっとこの調子でね。こっちは一応その作戦とやらは知ってるって言っても駄目なんです。シルフィードの軍人ってやつがこれほど頑固とは思いませんでした。そう言うわけで話がめんどくさくて往生しているんですよ」
ガルフはミリアの苦笑を受けるとうなずいた。
「ベルクラッセ少佐。王国軍大元帥の名において許す。この場の人間は全てザルカバード文書に関するル＝キリアの秘密作戦については知っているものとして話すがいい。儂も面倒な言い回しに付き合うのは少々疲れる」

「承知いたしました」
フリストはそう言うと満足そうな顔のミリアをチラリと見てから、二人のアルヴに向き直り、ミリアに折られた話の続きを始めた。

# 第九話　双黒の左

フリスト・ベルクラッセの名も、アプリリアージェやテンリーゼンと同様に「雷鳴の回廊」にて難破、死亡したという記録が公式としては最後のものである。

しかし「ル＝キリアの双黒」と呼ばれ、同じ黒髪のダーク・アルヴ、アプリリアージェ・ユグセルと並び称された程の力を持つフリストは、その後もしばし英雄箪には登場している。そのあたりもアプリリアージェ・ユグセルと全く同じである。

フリストとアプリリアージェはしばしば同一視される事がある。同じような短めの黒髪と緑色の瞳を持ち、両者は共に風のフェアリーである。しかも両者ともに得意の武器は弓である事から、混同されやすいのは確かである。

さらに話をややこしくしているのはル＝キリア正史時代のフリストの髪は長く、ル＝キリアの全滅が公式に認められた後の彼女は髪を短く変えている点である。

現在語り継がれ、物語となっているアプリリアージェ箪は多いが、そのうちの何割かはフリストの話でないかと言われている。史実検証において、活躍した場所があまりに突拍子もない場所における逸話はフリストのものとして問題はなさそうである。

アプリリアージェの行動には一貫した道筋があるが、フリストのそれは線で繋がらない。それはすなわちミリア・ペトルウシュカと行動を共にしていたことを証明するものであり、それを前提とする限り「突拍子もない場所」に現れるのはアプリリアージェではなくフリストという事になる。

星歴四〇二六年、黒の六月にシルフィード王国の当時の首都エッダの北東にあるバランツという町で起こった近衛軍の中隊が何者かに襲われて全滅した、いわゆる『バランツ事件』は、当初、親衛隊、つまりキャンタビレイ配下の中隊による反乱だと噂されていたが、

えん罪が証明され、その後は長く犯人が特定できず謎の事件とされていた。

近年の研究により、襲撃の手順や手法などが、ル＝キリアの戦術に酷似している部分がある事が判明している。

つまり、フリストがミリアの岩壁に阻まれてノッダへ向かっている間に、フリストの部下であるル＝キリア小隊がバランツで親衛隊を待ち構えていた部隊を殲滅したと考えられる。

フリストについては、ミリアが数枚の絵を残している。それを見ればアプリリアージェとフリストを見間違える事は無いと言うことがわかる。両者は髪の色と瞳の色以外、全く似ていないのである。

やや太めの眉と極端に下がった目尻が特徴的ないつも笑っているかのようなアプリリアージェとは違い、フリストは端正な顔つきをしているが普通のダーク・アルヴである。両者を並べれば全く違う人物であることは一目瞭然であろう。

また、ミリアの絵を信じるならば、彼女は左利きであったようだ。右利きのアプリリアージェとはそこも違う。

ミリアの残したフリスト・ベルクラッセを描いた数枚の絵は、どれも利き腕が左であることをわざわざ示すように矢を番えている姿ばかりである。

フリストの絵の中で特に印象的なものは、絵を見ている人間に向かって、絵の中の射手が弓を構えているものである。ミリアにしては珍しく自筆の画題が付けられていた絵とされているが、本物は月の大戦後約百年後、所蔵していた美術館の火災により焼失しており、現存するものは、火災当時に美術館の修復担当学芸員であったテレイン・ブールジェの手による模写である。

画題は「射る者。もしくは双黒の左」

そしてこの絵にだけ、フリストの顔に傷がある。顔の左側の眉から左目を通って鼻を斜めに横断し、右の頬まで続く一直線にただれた傷である。

もともと軍の公式な記録には、ある作戦によりフリストが顔に修復不能な傷を負った事が記されており、おそらくこの絵のフリストが実物にもっとも即した肖像と言えるであろう。

しかしそれ以外の、模写ではない真筆のミリアの絵の中のフリストは、どこにも傷のない端正で美しい顔に描かれている。

美術史家の中には、模写にあるフリストの傷はテレインが記録に合わせて書き足したものではないかと言う者もいるが、それはやや突飛な意見に過ぎると思われる。テレイン・ブールジェの日記には作業の進展具合は事細かに書かれているが、手を加えたような節はみられない。さらに彼は自らを芸術家ではなく、職人であると日記で独白している。精緻な複写技術こそが彼の真骨頂で、独自の解釈などそこには存在しなかったと考える方が妥当であろう。

だが、残念ながら彼が残した模写の「元絵」は悉く件の火事で焼失したものばかりであり、彼の仕事を本物と比較する手段がない。

とはいえ当時の美術関係の文献を紐解いても、彼の模写に対する批判が無いことから、彼は自らの仕事の忠実な僕（しもべ）であったに違いないと思われるのである。

フリストの話は続いていた。

「以上の理由で『ザルカバード文書』は我がシルフィード王国から発信されたものである可能性が高いのです。少なくともあの偽の『ザルカバードの庵』にはシルフィードのバード庁の人間が関与している事は間違いないと思われます。そして今回のバランツで閣下を待ち伏せしていたのは近衛軍の中隊。ここから導き出される答えは一つです。すなわち……」

「もういい、フリストよ」

少々長めのフリストの話の最後を、ガルフはそう言って遮った。そう言うガルフの表情が苦しそうに歪んでいるのを見て、フリストは目を伏せた。

「出過ぎた物言い、大変失礼いたしました」

ガルフは何も言わずにただ唇を噛んでいた。

「バランツにいたのは、近衛軍に間違いないのでしょうな？」

リーンはフリストの話が一通り終わったと見て、矢継ぎ早に質問を放った。

彼は自身の「悪い予感」を裏付けるようなフリストの話に、ある種の満足を感じてはいたが、今後の行動指針を導き出す為には、その裏付けに背景を描きかったのだ。

ミリア達はガルフ達親衛隊の動きを予測して動いていた。しかも驚いた事に彼らはまずノッダを訪れたのだという。

既にエッダに向けて出立した後だと言う事を知ったミリアは、馬の補給基地となりうるバランツに戻り、ガルフ達を待ち受けることにしたという。

だが、同じ事を考えていた者がもう一人いたと言う事である。しかももう一方の部隊は、凡そ国家の重鎮である王国軍大元帥を出迎える為にバランツ入りしたとは思えない面々であったという。

「指揮を執っている人間を偶然私は知っておりました。近衛軍中佐、クリヨン・アヨネットです」

「『蛇使いのアヨネット』か」

「はい。付き従うバードが四名おりました。もちろんバランツにはすでに精霊陣も敷かれていました」

クリヨン・アヨネットは近衛軍では珍しく、攻撃を得意とする軍人で、多くのルーナーを使った精霊陣による局地戦を得意とする事で知られていた。

相手を特定の場所におびき出すなり追い詰めるなりした後に、精霊攻撃で撃破するのが彼の常套手段だが、精霊陣を使ったその増幅攻撃が、地を這う精霊光を伴う為に、炎や氷の筋がまるで道を這って襲いかかる蛇のように見えることから『蛇使いのアヨネット』と呼ばれていた。

本人はルーナーではなく、両手剣を得意とすると言われている。

「精霊陣、しかも攻撃系の陣を張った部隊を見て、大元帥の迎え部隊だと思えと言う方がどうかしています」

フリストの言葉に、リーンはうなずいた。

「同じ迎えだとしても、全く別の歓迎でしょうな。しかし、我らがいつまで経っても現れないと知ったら、彼らはどうすると思われますか？」

実のところリーンが一番心配しているのはその点だった。

それなりの機動力がある親衛隊の馬車隊であるが、既にかなりの距離を走り詰めで、馬たちは弱っている。追っ手が馬車でやってくるとは考えにくい。彼らの多くは単騎の騎馬隊であろう。そうなると追いつかれるのは時間の問題であった。

ミリア達がガルフを急かしていたのもその点であったのだ。

だが、リーンの危惧に、フリストは微笑を浮かべて見せた。

「バランツの近くから親衛隊の気配は絶ちましたから、当座は心配ないでしょう。少なくともバランツにはもう、まともに馬に乗れる人間はおりますまい」

リーンはフリストの言葉に眉根を寄せて、そのダーク・アルヴの女戦士を見つめた。

「お忘れですか？我々は元ですが、あの『皆殺しのル＝キリア』。今頃は私の部下達が、シルフィード国王に仇なす輩を襲撃、これを殲滅している頃でしょう」

「なんだと？」

リーンは驚いてフリストの緑色の目を見つめた。今の言葉の真意を探ろうとしたのだが、もとより比喩や冗談ではないことはわかっていた。

フリストの言葉を聞いたガルフはしかし、リーンとは違って表情を全く変えなかった。大元帥はフリストではなく、ミリアに声をか

けた。
「ベルクラッセ小隊は確か全員が健在という事でしたな」
ミリアはうなずいた。
「そんなつもりは無かったんですがね。でも、バランツにやって来た近衛軍の連中はやってはならないことをやってしまったんです。ル＝キリアの連中はフリストはじめ、全員喜んでボクの意見に賛成してくれましたよ」
ガルフはミリアの答えに目を閉じた。
「儂が動いたせい、か？」
ミリアはうなずいた。
「間接的にはそうですね。あなたはこの優秀な軍師の進言に従うべきだった。でもまあ、もう済んだことですよ。無駄になった時間はこのボクが巻き戻しますから、あなたはこの後あなたに出来る事をすべきでしょうね。そしてあなたに出来る事とは、同じ不幸をこれ以上招かないように行動する事ですよ、閣下」
リーンは二人のその会話で、バランツで起こった事を理解した。同時に、ル＝キリアの掲げる部隊憲章を思い出した。
『国王に仇なすものを殲滅すべし』
つまり、ル＝キリアの敵は国王に敵対するもの全て、である。
「アンセルメ少尉はまさかボクがドライアド軍の人間としてシルフィードの部隊を襲わせたなんて考えてはいないよね」
黙っているリーンに、ミリアはそう声をかけた。水を向けられたリーンは素直に従う事にした。
「敢えて伺いましょう。アヨネット中佐は、いったいなぜペトルウシュカ公爵の怒りを買ったのです？」
ミリアは片側の唇だけを曲げて冷たい笑いを作ると、感情を押し殺したような低い声でつぶやいた。
「君たちにはこう言った方がわかりやすいだろう。『バランツはユーラになった』とね」
ミリアの一言は、明らかにその場の空気を変えた。彼の部下であ

るフリストですら、手に持った弓を握る手に力を入れていたほどである。

「我が主の言うことは本当です。私たちがバランツに着いた時に生き残っていたのは、馬だけでした」

「わかりました。それ以上はけっこうです」

リーンはフリストが絞り出した言葉に思わず反応して、それを遮った。それ以上は聞きたくなかったのだ。

アヨネット中隊は、バランツで親衛隊を殲滅する為に、まず村人全員を犠牲にしたのである。

村人を全員殺害した目的はおそらく二つであろう。

一つは近衛軍が親衛隊を殲滅した目撃者を作らない為。そしてもう一つは、その惨劇の罪を親衛隊に全てなすりつけ、その逆賊を退治したアヨネットの部隊、いや、彼を操る黒幕に正義を名乗らせる為である。

フリストの話によるとアヨネットが率いる中隊は全軍で五十人程だという。

「しかし、少佐の部下は三名なのでしょう？」

リーンはそれで大丈夫なのか、と問うたのだ。

フリストは無表情で返した。

「先ほども申しあげた通り、我々は『あの』ル＝キリアなのですよ、少尉」

「しかし……」

「ル＝キリアの実力は味方よりもむしろ敵の方がよく知っておろうな」

ガルフはそう言ってリーンをじろりと睨んでけん制した後、落ち着いた声でフリストに尋ねた。

「念のために聞いておくが、お前の部下とは誰だ？」

フリストはミリアを見て、彼が頷くのを確認してからそれに応え

た。
「イブキ・コラード少尉、クシャナ・シリット少尉、それにシーレン・メイベル中尉の三名です」
「ほう。えらく攻撃的な小隊だな」
「御意」
「なるほど、それならば奇襲をかければ五十人などあっという間であろうな。一言で言うなら『アヨネット部隊に同情する』だな」
フリストは隊員の名を告げただけでガルフがその人物を間違いなく特定している事に内心驚いていた。軍の最高責任者の椅子に座る者が、将校とは言え、たかだか尉官である一人一人の名前を知っている事がそもそも驚きであるが、それだけでなくその特性までも掴んでいるなどとは夢にも思っていなかったのだ。
ミリアはフリストのその気持ちを察していたのだろう。笑いながら部下に声をかけた。
「ボクが言った通りだろう?今度の戦争がばかばかしい三文芝居なのは仕方ない。でもたとえ三文であろうが、芝居が始まる前にこの傑物に役を降りてもらうわけには行かないのさ」
「『役』、だと?」
リーンは思わず敵意を隠しきれずに、そうミリアに詰め寄った。
「先ほどから伺っておりますと、何もかも知ったような物言いですな、ペトルウシュカ公爵」
「リーン!」
「かまいませんよ、大元帥」
部下を叱咤したガルフに、ミリアはそう言って大丈夫だという風に手を挙げて見せた。
「閣下はもちろんの事、ボクはこちらにおられるアンセルメ少尉にお会いする為に来たのです。初対面にもかかわらず、かくも本音でぶつかってもらえるとはむしろ光栄の至り」
余裕たっぷりにそう言うと中指で眼鏡を押し上げて、ミリアは憤然とした表情のリーンににっこりと笑って見せた。

「もちろんボクが何もかもを知っているわけではないけれど、おそらく今回の君達の敵と同じ程度の事は知っていると思うよ」
「私たちの敵だと？」
「ここまで知ったんだ。もう敢えて名を伏せる必要もないだろう？君だってわかっているはずだ。生き残りたいなら彼とは本気で戦う覚悟が必要だとね」
ミリアはそう言うと今度はその顔をガルフに向けた。
「そして、それはあなたにも言える。キャンタビレイ大元帥」
ガルフはしかし、ミリアの言葉に対して無言だった。ただ、その目は異邦人の眼鏡の奥で光る金色の目をじっと見つめていた。
「そもそも当初のボクの読みでは、今度の戦争はサラマンダの東海岸、要するにトリムトあたりでドライアド軍が一斉に拠点制圧を行う事に端を発して勃発するはずでした。もっともそれは閣下も予想していたはずでしょうがね。それがあろう事かシルフィードの指導者の急逝が政変の引き金となり、シルフィード王国から動き始めるとは、全くもって予定外ですよ。元々今度の大戦はシルフィード側には不利な闘いです。圧倒的な兵士の数の差は明らか。国是故に先に攻め込むわけには行かず、かと言って守りに徹するならば広大なサラマンダ大陸がドライアドの手に完全に陥ちる。ドライアドはシルフィードににらみをきかせつつ、じっくりサラマンダ大陸の支配体制を整えた後、準備万端の状態で改めてシルフィード大陸の西と東から一気に同時侵攻を始めるでしょうね」

ミリアの予想はリーンの戦況分析と全く同じものだった。
世間的にはアルヴ族中心のシルフィード軍は、数の差などをものともせず、戦力は事実上互角以上ではないかと思われていた。
しかし、シルフィードには戸籍制度がある事が災いし、ほぼ正確な国民数がドライアドには漏れていたのである。
国民皆兵をうたうシルフィードであるが、そもそもドライアドとは人口差が二十倍以上ある事がすでに事実として判明していた。い

わゆる概算兵力の数の差にいたっては、サラマンダ侯国軍をドライアド側の数に入れるならば、軽く十倍以上の開きがあったのだ。さらに言えば本気で戦争準備を整えているであろうドライアド王国は戦略的にすでにシルフィード王国よりも優位に立っている可能性が高い。

シルフィードと言えば、この時期に法で定められているノッダへの遷都事業に国力を集中させており、軍の最高責任者がその暫定総領事として陣頭指揮を執っている段階であり、世界大戦へ向けての準備を周到に行える余力はないと言えた。

リーンはその事をかねてより危惧しており、ガルフへ進言はしていたが、懸念が簡単に晴らされるとも思ってはいなかった。

彼なりに様々な工作は行ってはいたが、リーンの計算ではそれでも圧倒的に時間が足りなかった。

そこへアプサラス三世急死の知らせである。彼の焦りは頂点に達していた。

「いったいシルフィード、いや首都エッダで何かがあったんだろうね。それが何かはボクにもわからないけど、やっこさん、いや、もう名前を言ってもいいよね。サミュエル・ミドオーバ近衛軍大元帥が時期尚早ながらも動かざるを得ない事態が発生したに違いないと見るべきだろうね。準備不足で、彼としても不本意な時期に事が起こったのは、慌ててこんなところで目の上のたんこぶであるキャンタビレイ大元帥を強引に抹殺しようとしている事が証明している。さらに言えば彼はまだノッダに間者を送り込む前だったようだからね」

ミリアの言葉はリーンにはわからない部分も多々あったが、ノッダ内部にまだサミュエル・ミドオーバ大元帥の息がかかった者が入り込んでいないのは確かだった。

それはもちろんリーン自身がかねてより注意を怠らず、特に人の異動についてはガルフの権限を行使してあからさまにならないよう

に細心の注意を持って制御していたのである。
結界修復を行うバード庁の先遣調査隊のノッダ入りを伸ばし伸ばしにしていたのもその一環で、王宮の修復作業においてもバード庁と近衛軍関連の施設についてはできるだけ先延ばしもしくは問題を多く洗い出した上で修復作業にはまだ時間がかかるという詳細な理由書を提出し続けるなど、リーンも様々な手を尽くしていた。
「もうしばらくは（ノッダ入りの）必要はない」
と言うノッダ責任者であるガルフの署名のある報告書は、ガルフの支配下にある内政官とアプサラス三世を経由した後決定事項として近衛軍大元帥に報告事項として手渡されており、現状ではまだ近衛軍関係者の直接的な介入の前段階であったのだ。
予定では年が明け、北部の雪解けを待ってから近衛軍の駐留部隊がノッダ入りする手はずになっていたから、本来であれば少なくともシルフィードの内部に事が起こるのはそれ以降のはずだったのだろう。

「まあ、だからこそ君達は」
「大戦に臨み、生き残る機会を得たという事はわかった」
ミリアの話をリーンは遮った。
彼にももう充分理解できていた。
もちろんサミュエルに想定外の何があったのかはわからない。しかし、だからこそ彼の計画は前倒しになり、その歪みとして重大なコマを取りこぼすことになったのだ。つまり、スズメバチは何者か、いや何事かによって滅亡を回避できる機会を得たのである。だが、その機会をもすんでのところで失う所を、他国の、おそらくこれから仇敵となる国の重鎮によって助けられたという事実……。
それがアルヴであるリーンの誇りを傷つけていた。

「では話が早い。今から君の『役どころ』について話をしよう」
「役どころ、か」

「大元帥閣下と君は九死に一生を得た。それは逆に相手の優位に立てる機会を得た事でもある。なぜなら、相手は『君達が知っている事をまだ知らない』んだからね」

ミリアはそう言うと、意味ありげな笑いを浮かべて、こう続けた。

「そしておそらく、イエナ三世が『知っている事』も知らないのさ」

ミリアのその言葉に、ガルフとリーンは同時に反応した。

「陛下が『知っている』？」

リーンの問いに、ミリアは素直に頷いた。

「少し前、まだエルネスティーネを名乗っておいでだった頃に二人きりでお会いした。あれはそうだな、誰かさんによく似た少女がサラマンダのウーモスあたりにたどり着いた頃、だったかな……」

ミリアはそう言うと、意味ありげな笑いをガルフに投げかけた。

ガルフは一瞬目を見開いたかと思うとすぐに閉じ、観念したようにため息をついた。

「あなたは本当にいろいろとご存じのようだ」

「恐れ入ります」

「伺いましょう、ペトルウシュカ公爵。我々の演じる『役』というヤツを」

「やはり、ボクが睨んだ通り閣下はご存じ、という事でよいのですね？」

ミリアの問いかけにガルフはうなずいた。

「本当に一部の人間しか知らぬ事なのだがな」

「ご心配なく。おそらく誰も口外などしてはいないでしょう。かく言うボクも全く気づきもしませんでしたよ。本人に会ってもしばらくの間は、ね」

「本人というと？」

「どっちの？とおっしゃりたいのですか？」

ミリアは悪戯っぽい笑いを浮かべると、きょとんとしているリーンを見ながら答えた。

「王宮におられるイエナ三世殿下から、です。当時はまだ王女エル

ネスティーネ様でしたが。風のエレメンタル様の方は旅先でチラと拝見しただけで、まだお会いはしておりません。必要な時期が来れば、いずれお話をすることもありましょう」

「いったい何の話です、閣下？」

リーンはたまりかねてガルフにそう声をかけたが、ガルフは片手を上げてそれを制した。

「陛下とお会いになっていたとは……。いや、もう驚くことはやめましょう。公爵が特殊な方だという事はもう受け入れる事にしました。ちなみにこのリーンはその事については全く知らされておりません。ですが、こうなってしまってはもう知っておくべき事なのでしょうな？」

ミリアはそれには直接答えず、フリストに目を向けた。

「今度の戦争はイエナ三世の存在、いや健在している事が最後の鍵になる。ボクはそう思っているんだ。でも、イエナ三世の事を知る人間はできるだけ少ない方がいい。ボクが言いたいのはそれだけだよ」

「我が主の命に従い、その件については我らは貝になりましょう」

「待ってくれ。いったい何の話だ？陛下がどうしたのだ……」

リーンはそこまで言うと、口をつぐんだ。

「まさか？」

ミリアはいつものように右手の中指で眼鏡をずり上げるようにすると、静かに語りだした。

「はじめに言っておこう。イエナ三世がカラティア家の人間ではない『変わり身』だなんていうのは実に些細な事さ。それよりもボクは今から君に、歴史の講義をしようと思う。このファランドールの『仕組み』を教えてあげるよ」

リーン・アンセルメは生まれてこの方、知らなければ良かったと思った事柄など、一つもなかった。十年戦争におけるシルフィード王国軍が行ったピクシイ虐殺の事実についても、心が潰れるほどの

衝撃を受けたが、知らぬよりも知って良かったと思っていた。
だがその夜、九死に一生を得た後狭い速駆け馬車の中で聞かされた異国の公爵ミリア・ペトルウシュカが行った「歴史講義」は例外だった。
リーン・アンセルメがいまわの際に口にしたと言われている言葉は歴史的名言集に必ず収録されているので有名である。
ご存じの向きも多いとは思うが、敢えてここで引用しておこう。
「人間には知らなくてもいい事が二つある。一つは自分の死期。もう一つは我々の出自だ」
「我々の出自」という言葉が、その夜ミリアから語られた歴史の講義の事を指すのかどうかは、もちろん永遠に謎のままである。
往々にして哲学的な言葉として解釈されているリーン・アンセルメのこの言葉であるが、もともとリーンは実質的な人間であり、哲学的な著述などはない。あくまでも一軍人としてその生涯を閉じた人間である。従ってその言葉に哲学的な意味はなく、文字通り彼の率直な「思い」だと素直に考えるべきではないだろうか。

# 第十話　裁く者

船頭が港に到着した旨の案内をするまでもなく、大型の渡船の乗客達は下船のためにめいめい荷物を持って立ち上がっていた。

一人のアルヴィンの少年が乗客のそんな様子をぼんやりとした表情で眺めていた。

いや、少年と言う表現はアルヴィンやダーク・アルヴには適切なものではないかもしれない。彼らは成人を迎えるまでは普通に成長をしていくが、あとはほぼその姿を維持したままで寿命を迎えるのだ。

デュナンの一般的な常識では少年か、せいぜい青年の一歩手前くらいの年齢にしか見えないのが小型アルヴ一族であるアルヴィンとダーク・アルヴの大きな特徴だった。

だが便宜上ここではそのこざっぱりしたウンディーネ風の旅装束に身を包んだアルヴィンを少年と呼ぶことにしよう。

五十人ほど乗っても、まだ余裕がある大型の渡船の船室には、彼のような商人風の人間が多く乗っていたが、誰もその端正な顔をした緑色の瞳のアルヴィンには注意を向けるそぶりもなかった。

緑色の瞳と金色の髪はアルヴ以外の血が混ざらない純粋なアルヴ族の徴（しるし）なのだが、ウンディーネではそれはもはや珍しい存在であった。

言い換えるならばつまり、緑色の瞳のアルヴィンやアルヴはウンディーネではあまり見かけなくなって久しいのだ。

だが人々はそんな彼を見ようともしない。まるでそこにその少年が存在しないかのようだ。少年もまた航海の間ずっと、船室に余裕があるにもかかわらずわざわざ誰のじゃまにもならないような船室の隅の隅を選んで、小さな体をさらに小さく丸めてじっとしていた。

他の商人達と違い彼の荷物は小さな背負い鞄が一つあるきりで、それだけを見ると、とても商売人とは思えなかった。

とはいえウンディーネは商業の国である。様々な物が交易される。それは手に取ることができる物ばかりではない。人と人とを仲介させる商売なら、契約のための羊皮紙一枚あればいい。そう考えると一概に彼が商人風ではないとは言えなかった。

「グズグズするな、このウスノロっ」

彼のすぐ近くで、品のないダミ声が響いた。目をやるとそこには一人の子供が横たわっており、その子供にもう一人の違う子供が覆い被さるようにしていた。

「さっさと立て。おまえらのせいで船を下りるのが最後になっちまうじゃねえか。さっさと市場でおまえらの買い手を見つけにゃならんのだよ。ほら、早く立て」

二人連れの目つきの悪い中年のデュナンが連れていたのは、まだ七、八歳程度にしか見えない、ほんの幼い二人の子供であった。彼らは航海の間中すすり泣く度に付き添いの中年のデュナンに怒鳴られており、少年のアルヴィンが何となく気にかけていた一行であった。

中年のデュナンは、もう一度早く立てと怒鳴ると、突っ伏したままぐったりとしている子供の腹をごつい革靴のつま先で強く蹴った。

「やめて下さい。弟は夕べからすごい熱で、もう動けないんです」

突っ伏した子供に覆い被さるようにしていた子供がそう言うと、もう一人の中年デュナンが手にしていた儀仗を振り上げて強く打ち据えた。

その容赦のない打撃は抗議をした子供??少女だった??の首に直撃した。少女は嫌な鈍い音を伴い、声も上げずに床にたたきつけられた。

「バカやろう、これから仲買に売りつけるのに足下を見られるぞ、あんまり無茶するんじゃねえよ」

「フン。このガキゃ俺の事を睨みやがったんだぜ。ルーナー様に対

する態度ってもんをきちんと教えてやらねえとな」
そう言うと儀仗を持った方のデュナンは床に倒れた少女の頭を、足でさらに蹴りつけた。

「その辺にしておいた方がいい。今その子の首を打ったときに妙な音がしたぞ」
二人の様子をじっと見つめていたアルヴィンの少年はそう言うとゆっくりと立ち上がり二人の中年デュナンと倒れたままの子供達の間に歩み出して立ちふさがった。
「何だ、お前は」
どこからか目の前に突然現れた少年に二人の中年デュナンは驚いたが、すぐにそう言ってすごんでみせた。儀仗を持たない方の男はアルヴィンの少年の胸ぐらを掴んだ。
「痛い目にあいたくなきゃ、ガキが口を出すんじゃねえ」
「言っておくが、私は子供ではない」
アルヴィンの少年はそう言うと自分の服を掴んでいるアルヴィンの手を払った。それは異様に強い力で、中年のデュナンは一瞬ひるんだほどである。彼の知る限り、それはアルヴィンのものとは思えないほどの腕力だった。
「こいつ、アルヴィンか」
「緑色の目だな、純粋培養のアルヴ族って訳か。ここいらじゃ珍しいな」
二人はあらためて目の前のアルヴィンを値踏みするように上から下まで見回した。
羽織っているのが上等な外套なのは一目でわかった。袷から除く細い首は、深い青色をした石で作られた美しい首輪で飾られていた。その首輪にも小さいがいくつかの宝石が埋め込まれており、こちらも一目で高価な装飾品であることがわかる。人物としての度胸が据わっているのは今の態度であらためて検証するまでもなかった。
相手がそれなりの地位を持っている商人だと判断した彼らは短絡

的な暴力に訴えることを得策ではないと判断したようで、それ以上は手を出そうとはしなかった。
「大人のアルヴィン殿が俺たちに何の文句がある？言っておくがこいつらはちゃんと金で買った俺たちの商品だ。こいつらの手形入りの証文もある。合法ってやつだ。お前さんが誰だか知らねえが、そんなお門違いの文句を言われる筋合いはこれっぽっちもねえんだよ」
アルヴィンはしかし、彼らの言葉にも顔色一つ変えず、無表情なままで訪ねた。
「金で買った、と言ったか？」
「何言ってるんだ、お前さん、耳が悪いのか？」
「子供を金で買ってどうするのだ？」
「どうするってヴォールの市場で仲買に売るに決まってるだろ」
無表情だったアルヴィンの少年の眉間にしわが寄った。明らかに不機嫌な様子に変化したのだが、二人組のデュナンにもそれはわかった。
「仲買は子供を買ってどうするというのだ？」
アルヴィンの言葉に、デュナンの二人組は顔を見合わせた。
「お前、何者だ？」
純血のアルヴィンであることや服装からそうだとは思っていたのだろうが、彼らの常識が通じない相手だとは思っていなかったようだった。
「私の事はどうでもいい。質問に答えろ」
「じゃあ、田舎もんに教えてやるよ。仲買はこいつらを金持ちに売りつける」
「もちろん、多くは慰みものにする為にな。こいつらは見た目の器量がいいから特別いい値段に売れるのさ」
「人身の売買は国際法で禁じられているのではないのか？」
アルヴィンが真顔のままでそう言うと、中年の二人組はそれぞれ同時に声を上げて笑った。
「このご時世に国際法とか杓子定規に守ってるのはシルフィード王

国だけだろうよ」
「ウンディーネじゃ大っぴらじゃねえけど、もうずいぶん前から普通にやってる事さ」
「さあ、わかったろ、そこをどけ。すっかり時間を食っちまった」
そう言うと儀仗を持ったデュナンがアルヴィンを押しのけようとした。だが、アルヴィンの少年はそれを例の腕力で押し戻した。
「何しやがるんだ。俺がいつまでもおとなしくしてると思うんじゃねえぞ」
中年の男が儀仗を構えようとした時、騒動を聞きつけた船頭が客室に入ってきた。そして二人組のデュナンとアルヴィンの少年の双方を見やると、アルヴィンの方に声をかけた。
「お客人、悪いことは言わねえからここは黙って立ち去った方がいい。この人達は委嘱軍のお墨付きを持ってるんでさ」
「委嘱軍のお墨付きだと？」
「出るとこ出たら、あんた無事じゃすまないよ。とっとと目的地に向かった方がいい」
「なるほど」
少年はわかったという風にうなずいた。
「わかりゃいいんだよ。今回だけや見逃してやるから、二度と俺たちの前に現れるんじゃねえよ」
儀仗を持ったデュナンはそう言うと船頭にアゴで合図した。
「そのガキ共を運ぶのを手伝ってくれ」
うなずいた船頭が床に倒れたままの子供に手を伸ばそうとしたその時、アルヴィンの少年の言葉が強く響いた。
「動くな」
その声はそれほど大きな声ではなかった。だが、船頭はその剣幕に凍り付いた。そして思わずつばを飲み込んだ。その言葉にはそれだけの威圧感があったのだ。
顔を上げてアルヴィンの少年を見た。そこにはこちらを横目で睨む端正な顔があったが、それを見た船頭は瞬間的に体中に鳥肌が立

った。訳がわからないが、本能が恐怖で悲鳴を上げているようだった。

アルヴィンの少年の雰囲気の変化は、例の二人のデュナンにも伝わっていた。彼らは一瞬にして吹き出た冷たい汗が、背中を伝うのを感じていた。

何かをしゃべろうとして口を開けたが、カラカラに乾いた口から言葉が発せられる事はなかった。

「出でよ、ルーメア」

固まったような三人を尻目に、アルヴィンの少年はそうつぶやいた。

すると、右手には青白い儀仗が握られていた。よく見ると青い首輪が消えて無くなっている。

そう。アルヴィンはルーナーであった。それもただのルーナーではない。その証拠は忽然と額に現れたもう一つの眼が雄弁に物語っていた。

どう猛な肉食獣の口腔にも似た真っ赤な三つの眼を持つ存在。それが何を意味するのか知らぬ物はファランドールにはいないだろう。

アルヴィンの変化を目の当たりにした儀仗を持った男、ルーナーと自称していたデュナンが思わずその儀仗を振り上げようとしたが、彼は一言もルーンを発することなく動作を停止した。

青白い儀仗を持つアルヴィンのルーナーが短いルーンを唱えたからだ。

「パラス」

儀仗を持ったデュナンだけでなく、その場にいた全員の動きが止まった。

三人の様子を見渡したルーナーは無表情のままで口を開いた。

「本来なら私の仕事ではないが、目の前で堂々と法を犯していることを告げられたのでは見過ごすわけにはいかんのでな」

そう言うと、そのアルヴィンは後ろに横たわったままの子供達をチラリと見下ろしたが、すぐに顔を上げると、抑揚のない声でつぶ

やいた。
「賢者法に則り権限を行使する」
その言葉を聞いたルーナーは目を見開くと何かを言おうともがいたが、口を動かすことが許されていなかった。
「我が名は「蒼穹の台」（そうきゅうのうてな）。我が名の下、この場にてお前達二人を処刑するものとする」
彼らに弁明の余地は一切与えられなかった。
「蒼穹の台」ことイオス・オシュティーフェは間を置かずに短い認証文を一言唱えた。
「イェルナス」
するとどうだろう、イオスの目の前にいたはずの二人のデュナンの体が、白い煙のような物に変わったかと思うと、あっという間に霧散して消え去った。
イオスは後ろを振り返り、床に倒れたままの幼い姉弟の側でしゃがむと、姉の首に指を触れ脈を診ていたが、しばらくしてその頭を優しく撫でてやった。
同じように下になって倒れている弟の首筋に手を触れたが、こちらはすぐにその手を離した。
「すまぬな。私がティーフェではなくエイミイの一族であったなら、お前達を助けることができたのかもしれぬな……」
船底に倒れている二人の幼い姉弟は共にすでに脈を拍っていなかった。粗末な服装だとは思っていたが、よく見ればこの寒い中で服とも呼べぬ薄汚れた布一枚が巻かれているだけであった。既に手足の末端は黒ずんで凍傷にかかりかけており、ひどいあかぎれで肉が除く程の状態であった。そしてその体にはおよそ子供らしい軟らかな肉などなく、枯れ枝のようにやせ細った手足がただついているだけ、そこにも濃淡取り混ぜた多くの内出血による痣や紐や杖で打たれたような細長い傷跡が随所にあった。
姉の言葉から察するに、弟はおそらく風邪の高熱で最後に残っていた体力を全て奪い去られて事切れたのであろう。蹴られても何の

声も発しなかった時にイオスはもしやと感じていたが、まさにその通りで、彼は立ち上がることなど既にできなかったのだ。

姉はまだ弟よりは幾分体力があったのだろう。だがデュナンの男は手入れもいい加減な薄汚れ傷だらけの儀仗を何の手加減もなく少女の首筋に振り下ろした。怒りが手加減を忘れさせたのか、当たり所がそもそも悪かったのか、その衝撃で少女の頸椎は折れていた。せめてもの慰めはおそらくあの瞬間に事切れ、苦しみを長く味わうことが無かった事であろうか。うつぶせに倒れた為、その時には姉の表情はわからなかったが、イオスの目の前に今横たわっている少女の目は開いたままであった。

イオスはそれに気付くと、手を伸ばしてまぶたを閉じてやった。

立ち上がったイオスは一人残った船頭にその三眼を向けると、儀仗を伸ばして船頭の口先に突きだした。

「余の問いにのみ答える為、お前に言葉を許す。このような事はここでは日常茶飯事なのか？」

船頭は目でうなずいた。

「毎日って訳じゃありませんが、この季節はたまにね。まあ、奴らみたいな連中はガキの扱いが荒い奴が多いのは確かでさ。仲買に渡すまでが奴らの仕事ですからね」

恐怖で失神しかかっているにもかかわらず、一切震えもかすれもなく、言葉は明瞭で流ちょうであった。状況を見さえしなければ、まるで世間話をしているかのように思えるほど自然な口調なのだ。

それはおそらくイオスの持つ特殊な力「神の空間」が為せる現象であろう。イオスの問いには偽りなく答えるしかないという絶対服従の力である。あらがおうとしない限り、それは素直な言葉で紡がれるのであろう。

「商品が使い物にならなくなれば奴らも困るのではないのか？」

「へっ、このご時世、あんなガキどもならいくらでも居まさあ」

「そうか」

イオスは「もういい」と言う風に儀仗を小さく振った。
船頭は目の前で振られる儀仗の登頂に埋め込まれている青いスフィアを見るとは無しに見つめた。すると次の瞬間、そのスフィアが黒い光を発したように思えた。黒い光といういい言い方は矛盾しているかもしれない。だが船頭はそう思ったのだ。
そして、次の瞬間には我に返っていた。

「えっと……」
船頭はぼんやりした顔でぐるりと船室を見渡した。
「今回の客はあまり汚してやがらねえな。これなら掃除の人足を頼む必要もねえだろう。ありがてえこった」
そしてそう独り言をつぶやくと、誰もいなくなった船室を後にした。

# 第十一話　港湾都市ヴォール

港湾都市と呼ばれるヴォールは、ウンディーネの北北東の河口部に古くから栄える交易都市である。

氷河痕と言われる深い水深を誇る河口付近は外界から隔絶した穏やかな良港として名を馳せており、海流の関係もあり最北の不凍港でもある。

イオスが上陸した際も、港には大小の船がひしめき合っていた。海路のみならず、ウンディーネ内陸各地からは河伝いにヴォールへ向かえる。

背後を急峻な山で囲まれていることもあって有事にも強いとされている。

また立地がよく、首都島であるアダンに海路でも陸路でもほど近い。とは言え当時の首都島アダンに上陸できる人間は限られていた。一部の「市民権」を持つ者を除くとあとは大統領の招待客のみであり、商人始め普通の人々にとってはここヴォールがアダンの下町のような存在と言えた。

アダンが建設される前にはここに連邦議会の前身である首長座があった。

現在、首長座があった建物は大幅に増築されて港をぐるりと取り巻くように建てられていた。それは商人組合の本部として機能していると共に、港に向かう船の目印となっていた。

その建物内には特殊な交易場所、つまり市場がいくつか存在しており、許された一部の商人しか足を踏み入れることができない仕組みになっていた。そしてそこでは非合法な品物のやりとりが行われているとまことしやかに噂されていたようだ。

多くの商売人と数え切れない商品が集まる場所だけに商店の数も多い。扱う商品の種類も豊富で、遠くからはるばるヴォールを訪れ

る者で町は一日中賑わっていた。
夜も例外ではない。普通の町では夜の八時にはあらゆる店が閉るのが慣例である。それを過ぎるとその日は夕刻から夜という名前に変わるのである。
だがヴォールは深夜まで開いている店が多い。特に港近くの店が軒を並べるいくつかの通りは昼よりも夜中の方が賑わっていると言っても過言ではなかった。

その日、まだ夜と呼ぶ時間帯には間がある時間帯に、比較的こざっぱりした宿の食堂に、一人のアルヴが小柄なデュナンの少女を伴って現れた。
「こっちだ、先生」
その姿をめざとく見つけたデュナンの青年が声をかけた。声のする方に目を向ければ、奥のテーブルから声の主が身を乗り出して少女連れのアルヴに手を振っている。
その姿を見た赤毛の少女が、その豊かな巻き毛を揺らしながら声のする方へ小走りに向かった。
声をかけたデュナンの青年はベック・ガーニー。調達屋と呼ばれる特殊な請負商人である。赤毛の少女はもちろん、ルネ・ルーである。
「ベック！」
彼女はそそくさとベックの反対側に座ると、挨拶もそこそこに気になっていた事を尋ねた。
「シェリルの様子はどうナん？」
「ああ」
ベックはうなずくとにっこりと笑って見せた。それが答えの全てだと言っても過言ではない。ルネはその笑顔を見て、それ以上の笑顔で返した。
「おかげさまで、シルフィードが用意してくれてたのより広い家がすぐに見つかったよ」

そう言ったところに、長身のアルヴがルネの隣に座った。
「本当にリリア達の支援をつづけるつもりなのか？」
ベックにそう声をかけたのは、ハロウィン・リューヴアークであった。
「当初の取り決めだ。シェリルもそうしたいと言ってるしな。オレだってリリアさんには借りがある。何よりエルデにはどっちにしろもう一度会いたい。ここで「はい、それまで」ってわけにはいかねえよ」
ベックは真顔になるとそう言った。
「それよりハロウ先生のくれたあの紙切れ、じゃなくて紹介状、すげえ効き目だな。あれを教会に持って行った次の日、司教様本人がわざわざ挨拶に尋ねてきたぜ。二十人以上お供を連れてさ。こっちはびっくりするやらありがたいやらでオタオタしてると『困ったことがあったら何なりとこの私に直接相談してくれ』って頭を下げて来るもんだからどうしていいかわからずボーっと突っ立てるところに、教会のクレストが型押しされた封筒の束を手渡されちまった」
隠しから十通ばかりの厚い紙で作られた封筒を取り出すと、ベックはハロウィンにそれを差し出した。
「なるほど、これはすごいな」
ハロウィンは手渡された封筒を指でなぞりながらうなずいていた。
「そんなにすごい物なのか？」
「これは『勅封』というものだ」
「勅封？」
「ああ。この封筒に入れられた文書は、厳封・親展扱いの上、最優先で直接司教に手渡される事になっている。一度封をすると司教本人にしか開封できないルーンがかけられた特殊な封筒だ。言葉通り、困ったことがあったら文字通り遠慮無く使うといいだろう」
「ふーん」
ベックは改めて封筒をじっくり眺めた後、ふと気付いたように周りを見渡した。賑やかな店内には誰も三人の事を気にとめている者

はいなかったが、ベックは慌てて『勅封』の束を懐にしまった。
「大丈夫だ」
その様子を見てハロウィンが苦笑した。
「おそらくそいつはベックにしか封が出来ないようになっている。最初に受け取った者の精霊波を焼き付ける仕組みだろうな。万が一盗られたとしても悪用はされまい」
「なるほど」
ベックは感心したようにそう言うとハロウィンの顔を舐めるように見つめながら続けた。
「驚いたな。こう言っちゃ何だが、まさか先生が本当に正教会のお偉いさんに顔が利くとは思わなかったぜ。最初はもらった紹介状も嘘くさいから捨てようかと考えてたんだぜ？」
「おいおい、そいつはずいぶんだな」
「冗談だって」
ハロウィンは苦笑したが、ルネと顔を見合わせると、今度は嬉しそうな笑顔になった。
給仕が注文を取りに来たので彼らはそれぞれ食事と飲み物を注文した。
ベックは彼らが来るまで何も頼んではいなかった様子だった。そんなところからもベックの律儀な所が伺えて、ハロウィンもルネもシェリルをこの青年に預けていれば大丈夫だと思えた。

彼ら一行は、エルネスティーネやエイルがいる本隊と別れた後、シェリルを実兄のメビウス・ダゲットの元に届ける為に、ここヴォールへやってきた。
ヴォールには各国の商業組合の代表府が置かれていた。
アダンでは大使館しか認められず、商業的な交流の場はヴォールが担っていた。いわば各国の出先機関がヴォールに集まっていると言えばわかりやすいだろう。
必然的に各国の軍事的な拠点もヴォールにはそろっていて、メビ

ウスはシルフィードの管理下でこの町に滞留し、シェリルの到着を待っていたのである。

シェリルの精神状態は一行の心配をよそに何の問題もないと思えるほどの安定を保っていた。アクラムの森の事件以来、ほぼ二年ぶりとなる感動の兄妹再会劇の後で、メビウスに面識のあるハロウィンがベックの紹介を兼ねて事の顛末を説明したが、予想に反してメビウスは取り乱すようなことはなく、きわめて冷静に現実を受け止めた。

もちろんエルデがシェリルにかけた複雑怪奇な複合ルーンの集合体のような術の詳細については、たとえ医者の立場にあってもハロウィンが深く知りうるはずもなかったが、幼い頃から育ち、婚約者でもあった相手の記憶だけを都合良く消去して「はいおしまい」というわけには行かないことは容易に想像がつく。

したがって知人の全く居ない環境で暮らしていくことがいいことや、意識を向ける新しい対象が存在した方が好都合なことなど、エイルやエルデの思惑に沿った助言を伝えたが、それにも全く異論を挟むことなく賛同した。

メビウスにとってもルルデ・フィリスティアードという存在は上官の弟であるとか、妹の婚約者である関係を超えた存在であったことは間違いなかった。

特殊な里から預かった、絶滅した人種の末裔と思える謎の多い赤ん坊だったが、彼にとっても弟のような存在になっていた。故人になったとは言えその共通の「家族」であるルルデの話をシェリルとすることは二度とできないという事は端(はた)から想像するよりも深い悲しみを伴う事は間違いない。

だが、戦いの中に長く身を置くことによって、メビウスは一つの哲学のようなものを彼自身の中に確立することに成功していた。

「生きている人間が幸せであるべきだ」

彼の哲学は一言で言うならそう表現できるものであった。

既にこの世にいないルルデ・フィリスティアードの事で一人の人間が不幸になる事など、彼にとってはもはや許されないことだったのだ。

重い悲しみにとらわれて、明日に歩み出すべきつま先を隠し、尻込みを続ける妹を見ることはすなわちもう一人の人間さえ幸せの光に照らされる機会を削がれることに他ならない。

悲しみは連鎖してゆく。その断ち切れない鎖が巡り巡って新たな戦争を呼ぶ事を、彼は兵士として痛いほどわかっていた。だからこそファランドールから争いが無くならないことを。

メビウスが久しぶりに見たシェリルの顔は、はじめから笑顔だった。楽しそうで、幸せそうな笑顔はすぐに涙顔に変わったが、それはただ一人の兄であるメビウスに出会った事であふれ出た感情がそうさせただけで、それは懐かしさが支配している涙である。決して悲しみにとらわれた涙ではない。

その妹の笑顔と涙を見た後では、ハロウィンから告げられた「手術の結果」に感謝することはあっても責めるような言葉は何一つ口をつくことはなかった。

ただ、ベック・ガーニーの件についてはやや難色を示した。

それは兄として妹の交際相手としてベックなる若者が気にくわないというものではない。ベックの迷いのないまっすぐな眼差しと、シェリルに注ぐ暖かくやわらかい視線を感じれば、ウーモス出身のこのデュナンの若者が信頼に足る人間だと言うことはメビウスにはわかっていた。

だがベックの職業を聞くと、メビウスの眉間にしわが寄った。

メビウスとしてはシェリルから恥ずかしそうにベックを紹介された時に、すぐにでも妹と一緒になって所帯を持ってくれるものと思っていたのだ。だがベックの考えはそうではなかった。

彼は見聞を欲していた。

激動の時代の中で、変わりゆく世界を肌で感じたいというのがベ

ックの思いだった。
主要な国を全て見て回りたい。その上でシェリルの下に戻って店を構えて商人として暮らしたいというのが彼の妹の選んだ男の希望だった。
「兄さんからも言ってちょうだい。『側を離れるなら妹とつきあう事は許さんぞ』って」
シェリルはその話になると口を尖らせてベックを批難した、若者は困ったような顔をしてうつむくだけだった。
メビウスもアプサラス三世崩御の件は当然ながら知っていた。サラマンダから出てウンディーネに来てからは、ファランドールの情勢が以前より鮮明になっていた。
それはもはやサラマンダの王権復活などという規模の話が霧散してしまうほどの規模の「うねり」が近く起こるであろう事を示唆していた。
それだけに、彼はもう二度と戦場に身を置く事をよしとしていなかった。フィリスティアード隊が消滅した時に彼は自分の戦士としての役目に終止符を打つことに決めたのだ。
もっともそれが彼らを全滅させたル＝キリアの司令と交わした約束でもあった。妹を民間人としていったんシルフィード王国で保護した後、手続きを踏み、できるだけ早いうちに一緒に暮らせるように便宜を図るという条件との引き替えとして。

ベックとシェリルは、ヴォールへの道中で、既に互いの気持ちを打ち明け合い、結婚の約束を交わしていた。
ただ、その前にファランドールを一人だけで見聞するというベックの申し出には、当初まるでだだっ子のように反対して見せていたシェリルだったが、落ち着き先のイェイガーで結婚式を先に挙げる事を条件に、ようやく折れることに同意した。
結婚して夫婦二人で回りたいというシェリルの提案は即座に却下されていた。理由はもちろん妻を危険な目にあわせられないという

一見正当性のあるものだったが、「では妻にしてみれば夫は危険でも平気だというのか?」というシェリルの切り返しにあってはベックも相当の苦戦を強いられた。

結局結婚とは別にいくつかの条件をベックが呑むことで、一応の決着をみることになったのだが、その条件とは、

一、行きっぱなしではなく、定期的に家に帰ること

二、マメに伝信を寄越すこと

三、結婚後、三ヶ月は一緒に暮らすこと

であった。

ル＝キリアと別れる前にベックがエルデから受けていた注意に、「しばらくの間、一緒にいろ」という項目があった。

しばらくとはどれくらいだと問いかけたら「しばらくはしばらくや」とだけ答え、くるりと背を向けたエルデの真意をベックははかりかねていたが、正確なことなど誰にもわからないからだろうと判断するに止まっていた。

シェリルが出した条件の三ヶ月という期間は、要するに春になるまで、という意味である。冬の間はムリをしないでほしいというシェリルの優しさも見え隠れするし、本当にベックと離れたくないという気持ちが強いのも確かだろう。同時にシェリルの「施術者」であるエルデの処方にも従うことになる。

本音を言えばベックもシェリルと離れたくはないと思う気持ちが強くなっていた。腰を落ち着けて商売をしてもいいのではないかと自らに問いかけることも多くなっていた。

だが、それでも彼は激動のファランドールを自分の足と目で追いかけてみたかったのだ。さらに言えばもう一つ大きな理由があった。

エルデとアプリリアージェには会う必要があると感じていたのである。

彼のカンが、あの二人にはファランドールに影響を与える大きな何かがあると告げていた。

メビウス・ダゲットはしかし、結果としてベックとシェリルの決定を尊重した。もちろん結婚についても祝福の言葉を惜しまなかった。

ただ、ベックと二人だけになった時に念を押した。

「本当にいいんだな？」

ベックは深くうなずいた。

シェリルがこのまま何の問題もなく過ごすという保証はどこにもなかった。そうなった時の覚悟があるのか、さらに言えばシェリルは未亡人のようなものである。婚約段階ではあったが、ルルデとは既に夫婦のように暮らし始めていたのだ。

それら様々な事を一つ一つ言葉に挙げ連ねて確認することはせず、メビウスはただそう尋ね、ベックは何も言わずに頷いてみせた。

それだけだった。

それだけでお互いにお互いを理解できたと確信した。シェリルを通じて二人の人間がつながったのだ。

「よろしく頼むぞ、弟」

「照れるからベックでいいよ、えっと……兄さん？」

「――そうだな。俺も居心地がわるいからメビウスでいい」

二人は顔を見合わせると声を出して笑い合った。そんな二人の姿を、離れたところで優しく見守るシェリル。そのシェリルの様子をみてハロウィンとルネ・ルーはうなずき合っていた。

「で、式の日取りは決まっタん？」

注文を取り付けた給仕が下がると、ルネが早速興味津々と言った顔でベックの表情を伺った。彼女の今の興味はそこに集中しているらしかった。

知人同士、それも旅の仲間同士の結婚である。ルネが子供だからという事は理由にならない。興味を持たない方がどうかしているというものであろう。

ダゲット兄妹とベックは、ヴォール到着の翌日にはイェイガーに向かった。ハロウィン達がル＝キリアと合流する期限までにはまだ時間はあったが、結婚式に出席したいというルネの強い希望もあった。それに彼らには環境さえ整えば式を先延ばしにする理由が見あたらなかった事もあり、急ぐ事にしたのだ。

なすべき事があるというルネ達の事情はメビウスもすぐ納得した。彼は自分の上官であるシエナを殺害したアプリリアージェには複雑な思いを持ってはいたが、その「人物」は深く尊敬していた。ル＝キリアが彼らに対して用意した待遇が全てであった。それがアプリリアージェ・ユグセル中将という人となりを雄弁に語っていたのだ。

捕虜は結局、全員が解放されることになっていた。非戦闘員になる事を誓うという条件付きではあったが、捕虜となった直後もその後も、非人道的な扱いを受けることはなかった。

委嘱軍に捕らわれた反政府組織の人間がどんな悲惨な末路を辿っているかを見聞きしているメビウスだけに、礼節と規律に満ちた対応に終始するシルフィード軍の態度を見ても、当初は裏があると思っていた。しかしそれがアルヴの国のやり方なのだと言うことはすぐにわかった。

恐ろしい噂に彩られていたル＝キリアだが、実際に接してみると彼らが決して悪鬼のような人間ではないと言うこともわかってきた。メビウスの知る範囲では、ル＝キリアは軍隊と言うよりも民間組織のような雰囲気の部隊であった。とりわけその司令官であるアプリリアージェに対する印象はもっとも変化の幅が大きかった。あのアクラムの森でメビウスが見た戦闘事のアプリリアージェの姿はきっと悪い夢だったのだと思うほど、その後に会った司令官の物腰は別人であった。

さまざまな「死の噂」に彩られた特殊部隊の司令官は、おだやかでたおやかで、およそ可憐な少女にしか見えなかった。

とは言えそれはやはり表面上の事。少し会話をすれば、その正体がただの少女ではない事に気付く。それも百戦錬磨のメビウスにして「かなわない」と思わせるほどの存在感を持っていたのである。提督の称号は伊達でも飾りでもないと言う事をメビウスも実感できた。

初対面の際にメビウスは部下の処遇についてアプリリアージェに頭を下げた。

だがアプリリアージェは捕虜の代表であるメビウスの顔をすぐに上げさせると、微笑んだままで想定される最悪の事態と最良の事態を口にした。

すなわち、自軍をあくまで解放軍だと言い張り、それを誇りとし続けるのであれば、取り決めに則り、アクラムの森を管理範囲としているサラマンダ委嘱軍であるドライアドの分隊に引き渡す。

しかし、もし昨今の治安の悪さに備えるために仕方なく武装していた隊商が、軍と賊とを誤認して行きすぎた自衛行為に発展したという事ならば、当該部隊であるル＝キリアの司令官として担当将官に報告した上で、その指示に従うだけで済むという。

その時のアプリリアージェが口にした言葉を、メビウスはいまだに覚えていた。

「反政府組織と交戦した場合、報告書や手続きがとてもやっかいで、正直めんどくさいんですよ」

彼女はそう言って、本当にめんどくさそうに肩をすくめて見せた。

同時にその時、アプリリアージェの横に立っていたル＝キリア唯一のデュナンで、捕虜代表であるメビウスの担当官のような役割をしていた若い兵士が頭をかきながら口にした言葉も克明に覚えていた。

「いや、その報告書を書いたり実際の手続きをするのはオレで、別に司令は面倒でもなんでもないはずなんですけどね」

アプリリアージェがメビウス達に示した条件はそれほど無理のあ

るものではなかった。
　何より彼女から聞かされたファランドールを覆う世界情勢の中に自分たちの状況を置いてみれば、正気の人間であれば示された提案を拒否する選択肢はないはずだったのだ。
「委嘱軍に引き渡されると生き延びられるのは若い女だけですよ。意味はわかりますよね？」
　若いデュナンのル＝キリア。すなわちアトラック・スリーズはメビウスにそう言って結論を促した。
「あ、言い忘れていました。ル＝キリアの担当将官とは私です。一応、海軍中将っていう事になっていますから。つまり、私が決めたことが最終決定事項です。悪い話ではないと思いますよ」
　アプリリアージェのその一言が決め手になり、フィリスティアード隊は隊商と言うことになり、アトラック・スリーズの報告書にはアクラムの森の戦闘はたった一行の報告事項となった。
　なにしろ、ル＝キリアの損害は全くなかったのだから。アクラムの森のあの戦いで、ル＝キリアの中隊はかすり傷一つ負った者さえいなかった。

　メビウスは、ハロウィンには当時のそんな話をして、こう付け加えた。
「ユグセル司令には、本当に感謝しているとお伝え下さい。我々にとっては不幸な事件でもありましたが、幸運であったのかもしれません」
　ハロウィンはうなずいた。
「あの森の一帯は、あの後大規模な掃討作戦の舞台になったという話は聞いていますね？」
　ハロウィンの言うとおりで、あの事件の後、委嘱軍の軍事訓練を兼ねた相当大規模な掃討作戦が行われ、あの付近の反政府組織は壊滅していた。物量によるごり押しのような作戦で、委嘱軍側にも大きな損害が出たというが、サラマンダ中央部の反政府組織は事実上

壊滅状態だという。もちろんそれはドライアド王国が、来るシルフィード王国との闘いに備えた「掃除」であった事は言うまでもないだろう。

ル＝キリアに降伏していなければ、文字通り部隊は全滅していたのは間違いなかった。生き残ることができたのは、ル＝キリアに矢を向けたからだという言い方もできるのだ。

「皮肉なものです」

メビウスはそうつぶやいたが、ハロウィンはそれには何も答えなかった。

メビウス兄妹のそんな背景を、ベックはハロウィンからあらかじめ聞かされていた。その情報をシェリルの記憶とすりあわせる為に、直接聞いて、双方の認識にそれほど齟齬がないことを確認もしていた。

ただ、そこに一人の兵士の記憶が抜け落ちているだけだった。

どちらにしろ、シェリルに昔の話を聞くことをベックは避けることにしていた。

懸念はまだあった。その最大のものは、シェリルとルルデの両方を知る人間、具体的にはフィリスティアード隊の人間がヴォールやイェイガーに居るのではないかと言うことだった。

それればかりは実際にメビウスに会うまで誰にもわからないことだったが、結果としてそれもまた杞憂であった。

ダゲット兄妹には、すでに親族や縁者と呼べる者はいなかった。十年戦争は彼らの住んでいる町を全滅させていたからだ。だが、それはシェリル達が特別不幸だという意味ではない。そんな人間はいくらでもいた。先の大戦はそれほどの爪痕を多くの人に残していたのである。

イェイガーに居を構えることしたのは、そもそもアプリリアージェの設定だった。

反政府組織との接触ができるだけ少ない土地がいいだろうと言う

配慮から選ばれた町であった。

当初はシルフィードで暮らす事を提案されたが、メビウスにとってそれは難しいと思われた。文化が違いすぎる事もあった。何よりデュナンである彼はやはりアルヴ系の人間に対する微妙な距離感をぬぐい去ることは難しいと考えていた。

そこで、ウンディーネの中で候補を探ることになったのだ。

イェイガーはシルフィード軍の拠点がある港湾都市ヴォールから川伝いで半日程度の距離にある比較的大きな町である。正教会の勢力が大きいものの、領主はシルフィード系の貴族の流れをくむ人物で、ファルンガを治めるアプリリアージェ公爵の名前が十二分に通用した。

メビウスには一応、向こう五年は移動の制限がかかっていた。イェイガーとヴォールなど付近のいくつかの町から他へ移動する場合はヴォールのシルフィード軍に許可を得るというものである。

ただし、それは口頭での約束事であった。アトラックが取り出した誓約書を横目で見ると、アプリリアージェは署名の必要はないと言ってそれを下げさせたのである。

「だって、その文書を五年も保管するのは面倒でしょう？」

メビウスの真面目な性格を短期間でアプリリアージェは見切っていたのであろう。つまりそれは誓約書に署名するよりもよほど強い効力のある「約束」として、メビウスの心にきざまれたのだ。

シルフィード軍の紹介で、メビウスには職も用意されていた。

軍関連の物資を供給する商人組合の仕事である。もちろんシルフィード軍の関連組織であるが、民間人、それも主にデュナンで構成されている商人組織であった。

ダゲットはその強面（こわもて）を買われて物資の荷出しや荷入れに睨みをきかせる管理の仕事にあたる事になっていた。

管理とは言ってもその気になれば適度に体を動かせる仕事でもあり、彼自身も気に入っていた。

ただ問題は、正教会への顔つなぎだが、当然ながらシルフィードはそこに太い人脈を持たない。そこでハロウィンが紹介状を持たせたのである。

シェリルの仕事もシルフィード軍が用意してはいたが、町の住民として溶け込むことを考えると、シルフィード軍関連で家族が完結してしまうのは良くないだろうとハロウィンが提案し、ベックも同意した。シェリルも仕事は自分で見つけたいという希望が強かった。

そこでシェリルの仕事探しやダゲット兄妹の町への溶け込みの手助けの為にハロウィンが持っているという正教会に対する人脈とやらに素直に甘えることにしたわけである。

ベックが言った「紙切れ」とはまさにその人脈を行使するための紹介状の事であった。

「我が家はそれほど広くはないけど、先生とルネが泊まる部屋はある。今日は一緒に飲み明かすとして、明日の朝には一緒にイェイガーに来てくれると嬉しい」

「我が家ヤて。なんかこっちが照れくさいワあ」

「妙な言い方はよせ」

「ふふ。うちらは別に用事もなイし、問題あらヘンよ。新婚家庭拝見といきましょ」

一行はお互いに笑い合うと、ちょうど運ばれてきた食事に手を伸ばし、ささやかな酒宴を始めた。

# 第十二話　懸念

ベック達が居る店は相当に賑わっていた。
満員で空いた席はなく、店の扉を開けて肩をすくめて他の店を探す客がひっきりなしだった。
そんな中で、運良くベック達の隣のテーブルに入れ替わって入ってきた新しい三人組の声が彼らのテーブルにも届いた。

「本当だって」
一人の男が真剣そうな声でそう言う。
「炎のエレメンタルの尻尾の先に誓ってもいい。あれは幻なんかじゃねえ」
「待て待て。炎のエレメンタルってのは尻尾が付いてんのかよ？」
「いや、突っ込むのはそこじゃねえだろ」
「そう言や似たような話を、さっきオレも聞いたぜ？」
どうやら一人の男が目撃した奇妙な出来事について、一人が懐疑的な態度をとり、もう一人は別の情報源が存在する事で事実ではないかと見ているようだった。
「だがよ、どこの世界に子供の死体を二つも肩に担いで平気な顔してるアルヴィンが居るんだよ？しかもその状態であの急坂を上ったあ？」
「居たんだからしょうがねえだろ？しかも汗一つかかず、息も切らさず、だぜ」
「そいつはアレだ、フォウからやって来るっていうスカルモールドだ」
「スカルモールドはアルヴの二倍もあるでっかい化け物っていうじゃねえか。違うって」
「オレはそいつが教会の偉そうな服を着た坊さんに恭しく頭を下げられてそのまま建物の中に招き入れられたところを見たって話を聞

いたぜ」
「マジなのかよ？」
「正教会が死体の売買でもやってるのか？」
「バカヤロウ。そんなもん、行き倒れのガキを哀れんだ奇特な人間が教会に弔いを頼みに行っただけだろ。この話のキモはアルヴィンがアルヴ並みの腕力をしてたってところだろ？」
「いや、そこじゃねえって。そもそもがそこはかとなく猟奇的な雰囲気の話だろ？それによ、この話にはまだ続きがあってよ。例の闇市場の知り合いに聞いたんだが、届くはずの荷が、届かなかったそうだ。それが丁度、そのアルヴィンが肩に担いでたガキと年格好が一致するんだよ」
「ほう」
「それだけじゃねえ。その荷を市場に卸すはずだった二人連れの仕入れ商人も姿を現さないって話だ。『荷』と二人組の仕入れ商人が船でヴォール港に着いたって所までは、同乗してた客が何人も見たって言ってたから、間違い無いらしいぜ」
「例の闇市ってのは、人身売買の」
「ばか、声がでけえよ」

その後は少し声の音量が下がり、ベックの耳には会話の中身が届かなくなった。
しかし、デュナンより耳がかなり良いとされているアルヴのハロウィンはまだそちらに聞き耳を立てている様子だった。三人の旅商人風の客が囲む卓はハロウィンの斜め後ろに位置していて、距離も近く声も届きやすい。
「どうした？気になる話なのか？」
ベックがそう問いかけると、ハロウィンは済まなそうに少し目を伏せながら、唇に一本指を立てた。
ベックは調達屋という、いわば裏の世界にも通じた商売人であるだけに、彼らの言う「闇市場」の意味を知っていた。ここ港湾都市

ヴォールで人身売買がされているのは公然の秘密のようなものなのだ。

ベックは商売上の興味もあって、ヴォールに来たら一度その闇市場の取引現場を見ておこうとは思っていた。ヴォールの調達屋組合を通じて顔役への「つなぎ」も依頼済みだった。

だがベックは、別段彼らの話の内容自体にはたいした興味を持たなかった。

確かに額面通りに受け取れば奇妙に符号する話のようだが、その手の話は人の集まる大きな町では掃いて捨てるほどあったし、特に人身売買がらみは人の様々な怨念じみたものが絡んでいる事もあり、奇妙な話には事欠かない。

要するに酒のつまみの一つでしかない。

ベックはその程度の認識で彼らの話を聞いていたのだ。

とは言えハロウィンの興味は引いたようであった。

ベックは思い出した。

ハロウィン・リューヴアークは呪医の肩書きを持ち、ファランドール中を旅していると聞いていた。それも相当長く。

当然ウンディーネ連邦共和国の首都島アダンの実質的な商業区であるヴォールにも何度も来ている様子だったし、それであれば人身売買の闇市場の事も理解しているはずである。それにまつわるうわさ話が酒を飲む店で行われるのも珍しいことではないだろう。

そのハロウィンが同じテーブルにつき食事を共にしているベックの声を封じてまで耳を傾けたくなる話が繰り広げられているらしいことに、ベックは調達屋としての持ち前のカンが働き出すのを自覚していた。

「すまんな、会話を中断させて」

少し経つとハロウィンはそう言って軽く手を挙げてベックに詫びた。どうやら彼らの卓では話題が違う話に移ったようだった。声が再び大きくなってベックの耳にも新しく始まった娼館の噂話が届い

ていた。
「いや、それよりここは普通の食堂で子供もいるってのに、話題としちゃいただけないな。注意してきてやろうか？」
ルネを気遣っての申し出だったが、ルネ本人が腰を浮かしかけたベックを制した。
「気にせんでええヨ。あの程度の話を気にしてたラ、旅なんてでけへンし。ウチなら全然平気ヤ」
そう言って屈託無く笑うルネの、真っ赤な巻き毛が揺れた。
ベックはあらためて腰を下ろした。
しばらく一緒に旅をしていて、ルネにはずっと驚かされていた。デュナンで、せいぜい十二歳かそこらの少女のはずなのに、そうは思えないほどしっかりしている。保護者であるハロウィンに対して子供らしいわがままやおねだりなどは一切しないし、旅の途中で自分から弱音を吐くようなことは一度もなかった。
ベックとそう歳が変わらず、ルネに比べればすっかり大人と言ってもいいシェリルよりも大人びた考えを口にすることも多々あった。さらに、ベックには皆目考えも及ばない、シェリルに対しての様々な気遣いを見せるに至っては、感謝の言葉もないほどだったのだ。
そのことを尋ねると「長く旅をしているからだ」とルネは言った。そうなのだろうは思う。ずっとウーモスに暮らし、たいした旅など経験したことのないベックにとって、ルネは自分の師匠としてふさわしいのではないかとすら思ったほどである。
また、ハロウィンは気づくと注意をしていたが、ルネはそのハロウィンの目を盗んで、ベックとシェリルに時々「癒し」の力を遣っていた。水のフェアリー、いやエレメンタルであるルネは決して回復専門のルーナーであるエルデのような治癒回復ルーンを唱えるわけではない。だがルネの手が胸に当てられ、何らかの力を使われると、体のむくみや足のしびれ、疲労などがすうっと消えていくのである。
体の中の水分、血液や体液の循環に「ちょっとだけ力を貸してあ

げる」という話で詳しいことは不明であったが、結果としていわゆる癒しの力になっていた。
「ウチの機嫌を損ねたら、このまま体中の水分を一瞬で凍らせたり、沸騰させたりもできルんやで」
冗談めかしてルネはそう言って笑ったが、おそらくそれは冗談ではないのだろうと理解もした。
「ハロウはできるだけ使うなっていうンやけど、必要な時には使わんとあかンってウチは思うねン」
そうも言っていた。
「そやないと、ウチはルネ・ルーやのうて、ただの『水のエレメンタル』っていう記号みたいなもんになってまう気がするシね。まあ、口げんかしたい訳でもないし、心配もかけとうないから、二人とも、このことはくれぐれもハロウにはナイショやデ」
ルネはそう言って豊かな赤毛を翻して去っていくのである。
気になっていたハロウィンとの関係は「保護者」とだけしか答えなかった。それ以上を追求しても「ま、ええヤん、そんなこと」と言ってはぐらかす。
もちろん、そんなことはどうでもいい事なのかもしれない。しかしルネは普通の水のフェアリーではない。千年に一度だけ現れる強大な力を持つフェアリー、『エレメンタル』の一人なのである。

「シェリルが……」
そんなことをぼんやりと考えながら、ベックはあることを思い出してルネに声をかけた。
「ルネと一緒に暮らせたらなあって言ってたよ」
「新婚家庭で一緒に暮らすとか、勘弁してヤ」
「まあ、新婚とかそう言う話は別にしてもそれは無理な話だってのは俺もわかってるけどな、あいつはそれだけルネの事が好きなんだって事を知ってほしいんだ」
「うん。ありがト」

「妹みたいにかわいくて、姉さんみたいに頼りになるってな」
「姉さんカあ」
「俺も時々、ルネの事を『お前は俺の母親かよ』なんて思うことがあるぜ」
「ふふふ」
シェリルは幼くして母を失っている。歳の離れた兄に育てられ、母親の実感がない。だから姉という言葉に置き換えたのだろうが、ベックは素直に母親の包容力を時々ルネに重ねる事があった。

「全んブ終わったら……」
「え？」
ルネがふいにそうつぶやいた。
窓の外に顔を向けるルネの視線を追う。
だが、そこには夜の路地が見えているだけだった。
いや。
ルネの視線はその窓の上部にあるステンドグラスに注がれていたのだ。
そこには三人の子を優しい笑顔で抱きしめている慈愛に満ちた女性の姿が描かれていた。
始祖の一人であるドライアドと「三人の子」の図である。
「三人の子」には名前がある。キュア、ユラト、そしてクラン。
彼らはいわゆる「ルート」と呼ばれ、最初のルーナーであり、グラムコールを編み出したと言われている。
ドライアドはドライアド大陸をマーリンに与えられ、精霊波、いわゆるエーテルを統べる存在とされている。
だが、ドライアドはむしろその「三人の子」の図があまりに有名な故に「母神」と呼ばれることも多い。
ルネはその母神、ドライアドを見つめているのであろうか。それとも「三人の子」の方なのか。
あるいはその両方であろうか。

それはわからないが、その時ベックはルネの寂しそうな顔を初めて見たと思った。
だが、ルネのそんな顔はすぐに笑顔に変わった。
アイスクリームが運ばれてきたからだ。
それからしばらく談笑した後で、翌朝ベックの方から宿までハロウィン達を迎えに行く事を打ち合わせると、その店を出た。

三人は、申し合わせたわけでもないのに店を出たところで空を見上げた。建物の隙間から見える夜空に二つの月が姿を現していた。
アイスとデヴァイス。明るい月と暗い月。
両者はほとんど同じ軌道を巡り、常に並んでいる。だが、徐々に重なる事もあり、一部が重なると「重ね月」、完全に重なると「合わせ月」と呼ばれていた。
約千年に一度だけ訪れるという「マーリンの座」から見上げる「合わせ月」。
ベックはその日にいったい何が起こるのかを知っているわけではない。
わかっていることは、ハロウィンの隣でアイスとデヴァイスを見上げている赤毛の少女がその日の為に生きていると言うことだった。
ベックはルネの顔を見て、あることに気づいて微笑んだ。
「そういう顔を見ると子供だよな」
「え？」
ベックにそう言われてルネはきょとんとした顔で声の主を見た。
「いや、時々お前は俺よりよっぽど大人なんじゃないかって錯覚しちゃうんだよな。ホラ」
そういうとベックは手を伸ばして、ルネの頬にそっと触れた。
「さっきのアイスクリーム、ついてるぞ」
「うそ？」
ベックに言われるとルネは慌てて袖で顔を拭った。
「拭いてやったから、もうねえよ」

「おおきニ」
「じゃあ、明日」
ベックは笑いながらそう言うとルネに手を振った。そしてハロウィンにも。
「では、明朝」
ハロウィンも軽くそう返した。
「ああ、この分だと明日もいい天気だな」
そう言って背を向けると、ベックは自分の宿に向けて歩き出した。
「お休み。まっすぐ宿に帰るんやで。くれぐれも結婚前に変な場所に行ったらあかンで」
ベックにはわかった。ルネは笑顔混じりで小さな手を振っているに違いない。
振り向かず軽く手を挙げると、彼はまっすぐに自分の宿に向かうことにした。
明日の朝、船で一緒にイェイガーに向かう。
ファランドール中を見て回る。そう決めたベックの旅は、意外に早く「居場所」を見つけ出すことになった。
だがそこで旅は終わったわけではない。そこからまた始まるのだ。
目的のない旅より、帰る場所がある旅の方が百倍もいい。
ベックはそう思っていた。
そして彼には旅で仲間ができた。特にハロウィンとルネはもう、彼の人生にとってかけがえのない存在になっていた。
その仲間と一緒に、落ち着いてしばらく暮らす事を想像すると、ベックは気分が浮いてくるのを感じていた。

だが……。
あどけないルネの姿をベックが見たのは、その夜が最後になった。

# 第十三話　エウレイ・エウトレイカ

赤毛の魔物

「豊穣の女神」として今日も民衆に親しまれている「水のルネ」すなわち水のエレメンタルであるルネ・ルーは時にこう呼ばれる事がある。

その二つ名がルネに対して使われるようになったきっかけは、王立博物館所蔵のミリア・ペトルウシュカの手になる有名な一枚の絵のタイトルだと推察されるが、果たしてその絵が真にルネ・ルーの事を示しているのかどうかは定かではない。

件の絵に描かれているのは片手で顔のほとんどを覆い隠したデュナン。それは豊かな赤い巻き毛を白い肌に纏う、おそらくは美女である。おそらくと但し書きをつけなければならないのは、顔の全容が描かれていないからだ。顔のほとんどは白い手で覆われ、かろうじて右目だけが指の間から覗いている。そしてその青い瞳は、絵を見る者を射るように注視している。なんとも怖ろしい雰囲気の絵である。

描かれている赤毛のデュナンがルネ・ルーであろうが無かろうが、自分の顔を隠しながら、それでも彼女が見据えようとしたものがいったい何なのかが気になってしまうのは誰しも同じではないだろうか。そしてそのような絵を描いたミリア・ペトルウシュカの胸の内を。

いったいルネの視線の先には何があったのだろうか。

我々はもはやそれを知ることはないだろう。だが、少なくとも彼女を描いた画家は何かを知っていたに違いない。

ミリアの絵を引き合いに出すまでもなく、逸話に登場するルネには一貫性がない。逸話を全て信じるとしたら、ルネ・ルーは一人ではなく数人存在したと言うことになるだろう。

現存する口伝や説話は、およそ一人の人物を語ったものではないとしか思えない。そこで語られているのは少女の姿のルネだけではなく、妖艶な妙齢の美女であったり、成人したての若い娘であったりと、実に様々な姿である。

すなわち四人のエレメンタルの中でも、ある意味もっともつかみ所のない人物が、このルネ・ルーだと言っても過言ではないだろう。必ず系譜が残る王族や貴族筋ならいざ知らず、シルフィード王国以外では戸籍制度が一般的ではなかったこの時代の各国の民間人の出生の特定を研究するのは困難を極める。たとえ少ないとは言えども国家や軍に記録がある人物の方がまだましで、市井の生まれとなると手がかり自体がそもそも伝説の中にしか存在しないという事になるからだ。

何人かの気鋭の研究家は、ルネ・ルーとは実在したウンディーネの行商人パブロ・ルーの一人娘であるとしている。

その説によると、ルネはまだ幼い頃に父であるパブロが旅先のとある町で病没した際、孤児となった。独りぼっちになった彼女はその町にあったマーリン正教会の二種教会、すなわち現在で言う女修道院に預けられ、そこで幼少時代を過ごしたそうである。その説を裏付けるべく調べてみると、確かにパブロ・ルーなる人物の記録はかつては存在したようだ。だが正教会の記録ではそのパブロ・ルーなる旅商人が没したという年代がかなり古く、そもそもルネ・ルーが預けられたという二種教会があった町はこの物語が始まる当時、すでに廃墟となっており物的証拠が存在しない。したがって彼らの説は今となっては証明ができない。

ともあれその説によると、ウンディーネの東部にグレンスという小さな農村があったと言う。そこにかつてマーリン正教会の二種教会が存在していたということである。

だがグレンスという農村は、ドライアド軍の記録によると星歴三九九八年に一夜にして廃墟になったという。

もしもその当時ルネがそのグレンスにいたとするならば、アトラック・スリーズのきまじめなほど正確な日記に記されたルネの推定年齢からはかけ離れ、「合わせ月」の年にはざっと三十代前半の年齢だった事になる。そうなると、そもそもルネ・ルー伝説の多くの逸話を完全に否定する事になってしまう。つまりは、この時点で新進気鋭の歴史学者達の説はそもそもが気鋭過ぎるという事になろう。

また一説では彼女は呪医ハロウィン・リューヴアークの実子であったとされているが、ハロウィン・リューヴアークの娘にしては、どの説話を読んでもなぜかアルヴの特徴が全くない。全ての説話に共通する赤毛碧眼のデュナンというルネの外見の特徴は不変だからだ。ただ間違いないのは幼い頃に発現した水のエレメンタルとしての徴をハロウィン・リューヴアークによって見いだされた後は彼の庇護の下で行動を共にしていたであろう事実である。

一般の伝説ではルネ・ルーは呪医ハロウィン・リューヴアークの連れ子として助手のような仕事をしていた赤毛の少女という事になってはいるが、既述のごとく生没年は不詳である。水のエレメンタルはその大いなる力で並み居る敵をまるで虫けらのように蹂躙し、その赤毛を見た者を恐怖のどん底に陥れたという逸話は数多くあるが、同じように多くの土地で豊饒の女神として祀られていることからもわかるとおり、実際は広く民衆に受け入れられやすい人物であったと言えるだろう。

ひどい干ばつ被害を雨を呼んで救ったという逸話はそれこそ世界各地にあり、枚挙にいとまがないとはまさしくこのことであろう。だがそれらの逸話は語られる時代も使ったとされるエレメンタルとしての力の及ぼす規模というべきものもバラバラで、それ以前にも伝えられていた水のフェアリーによる所作がこの時代以降すべて「豊穣の女神ルネ」の仕業として変遷していったと考えるのが妥当な

見方であろう。

ただし呪医ハロウィン・リューヴアークと供にファランドール各地を旅して回ったという事実は存在する。つまり伝説すべてをルネの仕業ではないと決めつけるのも早計だと言うことである。

ともあれ水のエレメンタルともあろう者が自らの能力をひけらかすような行動をとっていたとは考えにくい事から、各地の伝説が本当にルネが行った行為であるのかどうかの判断をするのは慎重にならざるを得ない。

この物語では便宜上多くの説話で親しまれている姿形を拝借して彼女の活躍を記している。具体的には異世界ファランドール・フォウの住人であるエイル・エイミイがファランドールの地を踏んだ星歴四〇二四年当時、十歳。エイルとルネが出会った星歴四〇二六年には十二歳くらいという設定である。

また矛盾した伝承をすべて嘘だと切り捨てること自体が新たな矛盾に繋がる部分もあり、ここでは最近のフェアリー研究家から発表された論文を多少下敷きにして独自の解釈でつじつまを合わせることにしている。おそらくは当たらずとも遠からずであろう。

ゆるやかに波を打つ豊かな赤い髪と冷たい磁器のような白い肌、よく晴れた日のウィード海にも似た深く青い目をしたデュナンの女性であったとされるルネ・ルーは時には人魚伝説と一緒にされることもある。その伝説はルネの出身が海の国ウンディーネであった事がはほぼ間違いないと言われている為に後付けされたものとも考えられる。ウンディーネの海辺の地域にいまだに古語を使う人々がいるところから、日常的に古語をしゃべっていたと言われるルネの出身地を名乗る地域も複数ある。

古語はそれだけで独特な個性をルネに与えた。性格は明るくおしゃべりで、ハロウィン・リューヴアークの教育によるものなのか幼い外見にもかかわらず知識は豊富で大人びた考えをもち、家事全般

に長けた賢い主婦といった性格を想像してもらえば、多くのルネ・ルーの伝承を知っている方にも素直に受け入れてもらえるのではないかと思う。

ベック・ガーニーの後ろ姿が海側の路地に消えるのを見送ったハロウィンは、顔を反対側に向けた。

そこには丘に向かって続く坂道があった。まっすぐな坂道は途中から急に勾配を強め、道の向こうに見える大鐘楼に続いていた。

ヴォール大鐘楼と呼ばれるその建物には、マーリン教では俗に「無種教会」と呼ばれる大教会が併設されていた。

無種教会とは大規模な街や交通の要衝にあるような町に建てられる、その地域のマーリン教会を統括する役目を担う組織が入っている。

責任者は教主長と呼ばれ、その他の一種から五種と呼ばれる各協会の教主達を束ねる立場にある。

また教主長は正教会の本部組織があるマーリン教の聖地、ヴェリタスの上部組織への窓口である「神官」と直接やりとりができる立場でもあった。

もちろん都会であるヴォールには、このヴォール大教会以外にも大小とりまぜて多くの教会が存在していたが、それらを束ねるのがハロウィンの視線の先にある大教会であることは間違い無かった。

「教主長は確か、ザール・フラットだったな。代わっていなければ話はできるな」

白い月、アイスに照らされて夜空に白くそびえる塔を見上げながらそうつぶやくハロウィンの袖を、ルネが軽く引っ張った。

「ねえ。さっきのお客の話に、何か気になることでもあルん？」

「いや」

ハロウィンはルネの頭にそっと手を乗せた。

「古い知人に会って事の真相を突き止めてやろうかと思ったが、やっぱりやめておこう。ただ、念のために我々はこの町から早めに立ち去った方がよさそうだ」
ルネはハロウィンの言葉に不思議そうな眼差しを向けた。
「ベックが二日酔いになっていなければ、明日は早だろう。そろそろ部屋に戻るか」
「二人きりの時くらい、子供扱いせんでもエエのに」
「まあ、そうだな」
「ふふ」

顔を見合わせた二人が宿に戻るためにきびすを返すと、目の前に見慣れぬ少年が立っていた。
アルヴィンだ。ウンディーネでは珍しい。
耳の先が少し尖っているのでそれとわかる。アルヴ系の種族は男女とも髪を長く伸ばす者が多いのだが、その少年はデュナンのように短い髪型だった。
アイスに照らされた瞳の色は緑色で、純血のアルヴィンであることもわかったが、そうなると年齢は不詳である。アルヴィンとダーク・アルヴは少年少女の姿で老衰してゆくのだから。
ルネはそのアルヴィンの少年に対し、本能的に危険を感じて思わずハロウィンの腕にしがみついた。
しかしアルヴィンの少年はそんなルネなど一切眼中にないといった風情で、ただじっと自分の目の前に立つ長身の男、すなわちハロウィン・リューヴアークを見つめていた。

「ある男を探している」
妙な緊張感の中、口を切ったのはアルヴィンだった。
ハロウィンはしかし、無言だった。
「種族はアルヴ。瞳は緑色。見た目はおそらく青年と壮年の間くらいで、そう、丁度お前くらいの年齢だろう」

ルネは不安そうにハロウィンを見上げた。アルヴお得意の無表情を決め込んでいるようで、ルネにもハロウィンの感情ははかりかねた。

だが、ルネはその時ふと周りの様子が不自然な事に気づいた。まだ宵の口のヴォールの下町の通りは、たった今まで結構な賑わいを見せていたはずであった。現にベックは人の行き交う路地に入っていった。

少年が現れる直前まで、二人の立っている近くでも人々が様々な会話を交わしながら往来をなしていたはずなのに、今はどうだ。少なくとも、今、ルネの視界に入る人間は一人もいなかった。不安になったルネは振り返った。広場につづく通りになら人がいるはずだった。

だが……。

ルネはハロウィンの腕をいっそう強く抱きしめた。

(誰もいない!)

異変を告げようとした時、ハロウィンの重い口が開いた。

「私も各地を旅する者。名前を伺えば思い出す人間がいるやもしれませんが」

驚いたことに、ルネの耳に届いたハロウィンの声は、少しかすれ、震えてさえいた。ルネは今までハロウィンのそんな声を聞いたことがなかったのだ。

極度に緊張しているのか、ただ口が渇いているだけなのか……。

アルヴィンの少年は微動だにせずに答えた。

「その男の名は《銀の篝(しろがねのかがり)》マーリン正教会に所属する者だ」

「『しろがねのかがり』?」

オウム返しに答えたのはルネだった。

初めて聞く名前だったからだ。

もちろん、その名が普通の人間の名前ではないことはルネにもわかっていた。

「その人は、賢者なの?」

ルネの問いかけに、しかしそのアルヴィンの少年は眉一つ動かさず、ただじっとハロウィンの顔を見つめていた。
「お前の名を聞こう」
以外な事に、少年のその問いかけに、ハロウィンは素直に答えた。
「ハロウィンと言う。ハロウィン・リューヴアーク」
「ほう」
ハロウィンのその答えに対して、初めて少年は表情を変化させた。目を細めたのだ。
「その名は聞いたことがある。確かシルフィード王国のカラティア家に関わりのある呪医の一人だ」
少年はハロウィンの答えを待たず、話を続けた。
「その他にも知っているよ。少し前のシルフィード王立図書館長の名がマリオ・ヘラルドという人物だった」
ハロウィンの喉がなるのがルネの耳に届いた。つばを飲み込む音だった。
「ドライアドの王立蔵書館にも司書長としてレヴォン・マンデイという人物がいたらしい。さらに遡ると、サラマンダ王国にはトウォック・マイライという名前の謎の官僚が居たそうだ。何でも彼は文化財や遺跡保護を担当する高級官僚だと言うことだ」
アルヴィンの少年はそこまでで一度言葉を切った。
そしてハロウィンの表情を観察するように再びじっと見つめた。
一分ほどそうしていただろうか。周りの静寂とあいまって、ルネにはそれはとても長い時間に感じられた。
「みんな君くらいの年格好をしたアルヴだったそうだ」
それだけ言うと、アルヴィンの少年は目を伏せて小さなため息をついた。
「じゃあ、質問を変えよう。僕の名前を知っているだろう?」
ハロウィンは、この質問にも即座に答えた。
「イオス・オシュティーフェ……」
その名を聞いた《蒼穹の台》ことイオスは一瞬目を細めると、ほ

んのかすかな微笑を浮かべたようにルネには見えた。
「現名で呼んでくれるのはうれしいな。僕のことをその名で呼んでくれる人間がこの間一人いなくなってしまって寂しい思いをしていたんだ」
イオスはそう言うと小さく肩をすくめてみせた。
「ここで君に会えるなんて僕はかなり幸運だ。長期戦を覚悟していたからね」
これにはハロウィンは何も答えなかった。
ルネはそんなハロウィンの応対にも違和感を覚え始めていた。そしてその違和感の訳が何となくわかった。
ハロウィンはイオスの質問にはためらいなく答えるが、それ以外には口をつぐんでいるのだ。自分から話題を振らず、相づちなども一切打たない。
しかし質問には素直に答えている……。
「君の纏うエーテルがあまりに乏しかったから、もしや人違いかと思っていたんだ」
イオスの声は小さかった。だがその場の二人の耳には明瞭に届いていた。
「久しぶりだね。会いたかったよ、エウレイ・エウトレイカ」
「え？」
イオスが口にしたその名に、ルネはもちろん覚えがなかった。
だが、イオスは間違い無く目の前のアルヴに対してそう呼びかけていた。しかも二人が知り合いであろう事はもう間違いがないとルネは確信していた。
つまり、多くの名を使ってファランドールを渡っているハロウィン・リューヴアークは、このイオス・オシュティーフェと言うアルヴィンに対してはそう言う名前を名乗っていたと言うことなのであろう。
「《銀の篝》ではなく、君に倣って僕も君を現名でそう呼ばせてもらおう、エウレイ」

「ハロウ……」
イオスの言葉でルネはようやく悟った。
今自分が抱いているこの腕の持ち主は《銀の篝》という名の賢者だったのだ。
ハロウィンとは長く一緒にいた。ずっと暮らしてきた。
だが、その相手が三眼を持つ異形の聖者だとは今の今まで知らなかった。知らされていなかった。
まさか、と思う気持ちもある。だがイオスという人物の態度はハロウィンの本当の現名と、その正体が間違い無いものであることを雄弁に語っているとしか思えなかった。
ルネは何か言葉をかけようとしたが、口が動かなかった。思考が停止しているように同じ言葉がぐるぐるとルネの頭の中をただ回っている。
エウレイ・エウトレイカ。そして『しろがねのかがり』
「いいか……」
ルネの頭上から声がした。
それがハロウィンが自分に向かってかけた言葉だと言うことを理解するのに時間が少しかかった。
「すぐにここから逃げろ。お前が頼れる人間がいるはずだ。そこへ逃げろ」
「え？」
「早くっ」
ルネはさらに頭の中がまっ白になった。
何も理解できないまま急かされてもどうしようもない。
だがハロウィン、いや、エウレイ・エウトレイカは考える時間をルネに与えなかった。
つい今し方までハロウィン・リューヴアークだった男は、ルネから腕を振り払うと、彼女の肩をその手で強く突き飛ばしたのだ。
それは思いもかけぬ強さで、ハロウィンの言葉が冗談ではないこ

とを示していた。
だが動く意志のないルネは、当然の結果として地面に倒れ込むことになった。
「立て！立って走れ！逃げるんだ！」
その時になって、初めてイオスの注意が幼い赤毛のデュナンの少女に向いた。
それを見たハロウィンは、片手を頭上に掲げると、ルネが聞いたことのない言葉を発した。
「エマリア！」
？？しかし、何も起きなかった。
代わりに、イオスがルネに声をかけた。
「赤毛の少女よ、そこを動くな」
「くそっ」
「ハロウ？」
ルネは膝をついたまま、初めてみるハロウィンの態度に驚いていた。
頭上にかざした手を強く握ると、その拳を握りしめて悔しそうな声を上げたのだ。
「知っているはずだろう？無駄なことだ」
イオスは再びハロウィンに対峙すると、静かな声でそう言った。
ハロウィンはそんなイオスではなく、膝と手をついたまま放心したようにハロウィンを見つめるルネに顔を向けた。
それは見たこともないような悲しそうな表情で、思わずルネは何かを掴もうとハロウィンに向かって手をあげた。
だが……。
（え？）
動かなかった。手は一ミリも上がらなかったのだ。
手だけではなく、足も一切動かない。四つん這いになったままの格好で自由が一切きかなかった。思わずルネは悲鳴を叫んだ。恐怖が一気にこみ上げてきたのだ。

だが、それすら不可能だった。
それがイオスの持つ「神の空間」と呼ばれる特殊な能力の為せる技であることを、ルネはまだ気付いていなかった。
もちろんハロウィンはそれを知っている。
質問されれば本当のことを答えるしかない。その空間に居ることを知った時に二人の力関係は動かしがたいものになっていたのである。
「君の娘かい、エウレイ」
「実の子ではありませんが、大事な娘です」
イオスの問いかけに、ハロウィン、いやエウレイ・エウトレイカは素直に答えた。
「心配はいらない。僕が彼女に危害を加えないことくらい、エウレイ、君なら先刻承知のはずだろう？騒がれると面倒なので動きを止めさせてもらっただけだよ」
そう言うイオスだが、それでもエウレイの顔には絶望の色が浮かんだままだった。

ルネはエウレイのその表情を見て確信した。ハロウィン、いやエウレイは賢者である。納得するとか納得しないとかそんな感情は後回しにするしかない。イオスと呼ばれたアルヴィンはその《銀の篝》という名を持つ賢者でさえ絶望するしかない程の力を持つ相手なのだ、と。
決心がついたとたん、ルネは混乱を脱した。
やることは一つだからだ。
（ハロウィンを助ける）
その力が自分にはある事をルネは知っていた。
フェアリー、いやエレメンタルの力は体が動かなくても意思で操れるのだ。
できるだけ使わないようにしていた「能力」だが、自分でも恐ろしいと感じるその圧倒的な力を、大切な人のために使わずに、いつ

使うというのだ？

（でも、できるだけ殺さないようにしよう）

ルネにとっては大事な人を傷つけようとする憎い相手だったが、エウレイにしてみれば知り合いでもある。エウレイの優しさをルネは知っていた。相手の命を奪ったりしたらそのエウレイは深く悲しむに違いない。死んだ知り合いに対しても、そして殺してしまったルネに対しても。

だが下手に手加減ができない相手でもあった。

ルーナーの様だが、儀仗も取り出さずに強いルーンをいとも簡単に使っていた。それに、ルーンを詠唱せずに使えるのだ。

（詠唱せずにルーンを使える？）

ルネはそこにある符号を見つけた。

同じく詠唱時間なしにルーンを使える人物を知っていたからだ。

（エルデと同じなの？）

だとすれば本当に手強いに違いない。

そして同時にある事も思い出した。《蒼穹の台》の持つ能力のことである。エルデ・ヴァイスは多くを語らなかったが、《蒼穹の台》に出会ったこと、そしてある一定の範囲に於いて《蒼穹の台》が無敵であることを聞かされていた。

今がその状態なのだ。

相手が動く前に動かなければ、勝ち目はないかもしれない。

ルネは唇を噛むと覚悟を決めた。

（何を迷うの？私の手は、もう血だらけじゃないの）

勝負は一瞬だと判断した。そしてそれはイオスが意識をエウレイに集中した瞬間だと。どちらにしてもイオスがエウレイに何かを仕掛ける前に終わらせなければならなかった。

「さて」

イオスが口を開いた瞬間に、ルネは動いた。それはエウレイにかけられた言葉であった。つまりイオスの注意は今、ルネにないはず

であった。
ルネは意識を集中すると、イオスの首を狙った。
空気中の水分を集め、紙よりも薄い帯を成す。そしてそれを目にもとまらぬ速度でイオスの首に移動させるだけだ。水で出来た鋭利な刃は、イオスの細い首を綺麗に切断するだろう。
順番に書けばそういう事だが、それを一瞬で行える力、それが強力な水のフェアリー、いや水のエレメンタルであるルネの持つ能力の一つなのであった。
他にも簡単に相手を倒せる方法はあった。だが、範囲攻撃はエウレイにも被害が及ぶだろう。一点集中で確実に仕留める方法をルネはとったのだ。

「ぐう」
ルネのうめき声にイオスは反応した。
「ルネっ！」
言葉にならないうめき声を上げるルネに、エウレイは駆け寄ろうとした。だが、イオスがそれを制した。
「動くな、エウレイ」

ルネの力はまったく発動しなかったのだ。
それがその場のエーテルを無効化する《蒼穹の台》の「神の空間」の理（ことわり）なのだと言ってしまえばそれまでだった。だが、ルネはルーンの無効化であり、エーテルそのものがまったく使えないとは思っていなかったのだ。
《蒼穹の台》が作り出す特殊なエアの範囲では、エーテルを利用する力は発動しない。さらに、そこではイオスの言葉に完璧に服従させられるのである。

（なぜ？）
発動しない力に混乱したルネだが、原因を推理する時間などはな

かった。すぐにそれどころではなくなったのだ。
いきなり体が蒸発するのではないかと思う程、熱くなった。
同時に金槌で頭を叩かれているのではないかと疑いたくなる程の頭痛が始まると、それに呼応するかのように耳鳴りが三半規管を大きく揺さぶり、空間把握を困難なものとした。警鐘のような動悸は今まで経験したこともないほどの速度で体中に血液を送り出し、それが急激な体温上昇につながっているようだった。
ルネの視界に広がる自分の手の甲には血管が太く浮かび上がり、それがまるで生き物のようにうごめいているのが見えた。
だが、もうそれがどういう事なのかを考えられる程の意識はルネにはとうに失せていた。
言いようのない痛みが体中を駆け巡り、悲鳴を上げる事しか思い浮かばなくなっていたからだ。
その苦しみの前には我慢などという都合のいい言葉は薄紙ほどの意味も持たなかった。

「質問に答えてもらおうか、エウレイ」
涙と鼻水とよだれにまみれながら苦しみもだえるルネを、ただ絶望的な目で見つめているエウレイに、イオスは例の、まるでそこには何事も起こっていないかのような落ち着いた声で尋ねた。
「できればこの力を頼りに聞き出したくはないんだ。訳がわかればあれを楽にしてやれるかもしれん」
「ごらんの、通りです」

その頃になると、ルネに対するイオスの命令の一部は強制的に解除されており、ルネは四つん這いの格好から一転、地面をのたうち回るようになっていた。そして体には劇的な変化が起こっていた。
「何だ？これは……」
その様子を見ると、さしものイオスも驚きの表情を隠さなかった。
「このままでは服や靴が食い込んで、肉や骨が断裂します。脱がせ

てやって下さい。お願いだ！」
イオスの驚きの視線の先にいたのは、既にルネとは異質のものだった。
地面を転がり回るルネの体が、大きくなっていたのだ。
もう、さっきまでの小柄な少女はそこにはいなかった。地面でもがいているのはどう見ても成人したデュナンであった。
イオスは儀仗を取り出すと、何事かを口の中で唱えた。そしてその青白い儀仗の頭をルネの体に向けると、ルネはあっという間に青白い炎に包まれた。
成長したルネの体には、子供用の服がちぎれんばかりに張り付いていた。炎は服と靴、つまりルネが身につけていたもの全てを一瞬で灰にすると、すぐに消えた。
「フルエ・ウル・サラエ・ラ」
続けてイオスがそう唱えると、今度は青い光がルネの体を覆った。その光が消えるのを待って、自分が着ていた商人風のマントを脱ぎ、それを一糸まとわぬルネの体にそっとかけてやった。
その頃にはルネはもがくのをやめていた。大きな息をしてはいたが、うなり声はもう聞こえなかった。
そのルネのそばに、イオスは光るものを見つけた。
「まさか……」
手を伸ばしてそれを手にしたイオスは、ゆっくりと立ち上がると後を振り返った。
そこにはう《銀の篝》こと、エウレイ・エウトレイカが首をうなだれて立っていた。

# 第十四話　水精の監視者

「君までスカルモールドの実験をしたのか？などと思っていた僕の考えは相当に浅かったということだな、エウレイ？」

イオスは手に持ったプリズムを月に透かしながらエウレイにそう尋ねた。

「れっきとした人間です」

「そうだろうさ。まさか成長する本物の肉体を龍墓に封じていたなんて、いったい誰が想像できる？」

「『宝鍵』は……ルーンでの加工がやりやすいのです」

「まったく。君たちは宝鍵を何だと思っているんだ」

「君たち……と言いますと？」

「《真赭の頤（まそほのおとがい）》……いや、シグだよ。彼は『宝鍵』をいくつかに分解して別々の場所に隠していたようだ」

「その事も……ご存じでしたか」

イオスはうなずいた。

「君も知っていた、と言うことだね」

今度はエウレイがうなずいた。

「エーテルが無効化されるこの空間では『宝鍵』にかけられたルーンも解除され、『龍墓』、いや『時のゆりかご』に通じていた道が閉じられて本体がこちら側にやってきた……と言うのは簡単だが……」

そこまで言ってから一旦言葉を切ると、イオスは改めてエウレイ・エウトレイカの姿をじっと見つめた。

「なるほど、君のエーテルが異常に微弱だったのはそういう事か」

エウレイは唇を噛むとうなずいた。

「殆どのエーテルを『宝鍵』の気体化とその形状の固定に使っていた……そういう事か」

イオスはそうつぶやくと、持っていたプリズム……『宝鍵』をエ

ウレイに手渡した。
「何年だい？」
「優に二十年を超えています」
「なぜそこまでする？」
エウレイはその問いに即座に答えた。
「私は、守りたいのです、彼女を」
イオスはしかしそれには何も答えず再びルネの側に寄ると、青白い儀仗の頭頂部を彼女の腹部とおぼしきあたりに当てた。
儀仗からはぼんやりとした光が放たれ、それは粘度の高い液体のようにゆっくりとルネの体に吸い込まれていった。
「ありがとうございます」
エウレイはそう言うと深々と頭を下げた。治癒の効果があるルーンなのであろう。
「僕の質問に答えてくれ」
イオスはルネを見下ろしたままでエウレイに尋ねた。
「君は今、このデュナンの女を守りたいと言ったね？」
「はい」
「君ほどの人間が、二十年以上もの長きにわたってそのエーテルの殆どをたった一人のデュナンの女の為に費やした……。いったい君はこの女を誰から守ろうとしているんだい？」
「それは……」
少しだけ言いよどんだが、エウレイは覚悟を決めたように落ち着いた声で答えた。
「あなたからです。『水の監視者』ティーフェの王、イオス・オシュティーフェ」
エウレイの答えに、しかしイオスは反応しなかった。予想していた答えだったのであろう。無表情のままで足下に丸まって横たわっている赤毛の女デュナンをただじっと見下ろしていた。
「もう、おわかりなのでしょう？けれどこの子には罪はない。私はこの子と、どこか静かなところで来たるべき日をやり過ごすつもり

でした。そうすれば……」
「無意味だよ」
イオスはエウレイの言葉を遮るようにそう言った。だが、その声の響きには怒気はなく、落ち着いたものであった。
「『水の監視者』の役目を知っているなら、水のエレメンタルを見つけられないまま『合わせ月』の日を迎えた僕がとる行動もわかっているだろう？」
「では、せめてその日までいい。穏やかな日を過ごさせてやりたいのです」
「哀れな」
イオスはそう言うとため息をついた。
「何と？」
「《真赭の頤》、いやシグ・ザルカバードの一件以来、自分で言うのも妙だが、僕はどうも自分自身をもてあましているんだよ」
「え？」
「エウレイ、君のその態度を見てその違和感が何なのかがやっとわかった」
イオスはゆっくりとエウレイに体を向けた。
「僕が知っている君は、そんな顔をして感情を表すような人間ではなかった」
「あ……」
「君とて元々は感情の起伏が大きな『人間』だ。大賢者《銀の簪（しろがねのかがり）》を受け継ぐ過程で感情は抑えられ、理性は磨かれ、法の番人としての意識を強くする存在に変化していったはず」
「それは、その通りです」
「《菊塵の壕（きくじんのほり）》に連れられて君が初めて「前座」に現れた時のことはよく覚えているよ。その当時の四人の大賢者の中でも、君は飛び抜けて感情の波が静かな人間だった。だからあの《黒き帳（くろきとばり）》の守護として実に適任だと思ったものさ」
「私は、三聖の中ではあなたが一番恐ろしかった。あの時は浮かび

上がる恐怖を押さえるのに精一杯だったのでしょう」

「そう、君の静かな胸の奥にかすかに見えたもの。それが恐れの感情だったね。他の大賢者、「菊塵の壕」や《真赭の頤》、それに《天色の？》にはないものだ。それが見えたから《黒き帳》の守護としてふさわしいと思ったのさ。ただ、君は僕の事なんかより《黒き帳》こそを正しく認識し、そして恐れるべきだった。エウレイ、つまり僕が何を言いたいのかわかるかい？」

エウレイはしかし、ゆっくりと首を左右に振った。

「君は恐れるものを取り違えているのさ。さっきの言葉で僕は君に対する自分の印象が正しかったと確信したよ。たとえばこの水精、いや、現名で呼ぼう。ルネ、だったね？」

「はい。ルネ・ルーという名前です」

「君はこのルネ・ルーを子供の姿のままにしておくことによって、水のエレメンタル捜索の目を逸らせようとした。それは『合わせ月』が近づくほどに、加速度的に厳しくなるのは目に見えている。その時捜索者が探すのは、おそらく目撃証言があった当時に幼子であった事から、その長じた姿、つまり今そこに横たわっている成人の姿をした水のエレメンタルだろう。まさか十一歳か一二歳くらいの少女が水精だとは誰も思わないだろう。現に僕ですら全く気づかなかった程だ。君の思惑は功を奏していたと言っていいだろう」

「それが、恐れと何の関係があるとおっしゃるのです？」

「そうだね。君は子供の姿にしておけば世間から、いや正教会をはじめとするあらゆる者から水精、つまり水のエレメンタルを隠せると考えた。そしてそれがすなわち水のエレメンタルである少女の幸せだと思い込んだ。そうだろう？」

「それが、間違いだとでも？」

「間違いか正解かなんて誰にもわからないよ。その髭が少しでも顔を隠すためのものだとして、その髭が君に似合っているかと言うことすら、実は誰にもわからない。そこにあるのはそれぞれの判断だけだ。違うかい？でも僕が敢えて君に尋ねたいのはルネという少女

が果たして二十数年もの間、子供の姿のままで生きていて幸せであったのかと言うことさ。もちろん、人にとって何が幸せなのかは僕にはわからない。そしてその答えも星の数程あるのだろう。だが、エウレイ。そこに横たわっている女の姿を見てよく考えてごらん」

言われるままに、エウレイは意識を失って横たわるルネを見つめた。

イオスのルーンの利き目もあったのだろう。ルネはもう苦しんではいなかった。体の変化も止まり、規則的で穏やかな息をしている。

そしてその姿は成熟したデュナンの女であり、少女であったルネ・ルーとは別人と言って良かった。唯一、白い肌と波打つ豊かな赤毛だけが少女ルネと整合する部分で、顔立ちもルネだと言われなければ気づかないほどであった。

「その年齢ともなれば、普通のデュナンならば結婚し、子を幾人かもうけているのが普通だろう。人というのはそういった成長に伴う環境の変化の中で幸福を得るものだと僕は考えているんだけど、君は僕とは違う哲学を持っているという事なのだろうな」

「それは……」

エウレイはイオスに返す言葉を見つけられなかった。

迫る危険からルネを守る事が、すなわち安全であり続けることが幸せにつながる一番の事なのだと信じていたからこそ、自分の一部分を削り取るようなルーンをかけ続けていたのだ。それはルネと出会ってから安定してかけ続けられるまでに二年もかかったエウレイ渾身のルーンだったのだ。

ルネはその成長を留められていたわけではない。『宝鍵』をルネに同化させる事によって著しく押さえられていただけに過ぎない。ゆっくりとした成長はあった。

エウレイが初めてルネと出会った頃、少女は六歳くらいであった。それから二十八年の歳月が過ぎた時の姿は十一、二歳に見えた。つまり、本当に緩やかながら変化はしていたのである。

本物の『時のゆりかご』であったならば、ルーンが解けようが姿はそのままで、そこから普通に成長が始まるのであろう。だが、『時のゆりかご』につながっているとは言え、『宝鍵』自体は空間ではない。エウレイのルーンはおそらく、成長した「結果」を『時のゆりかご』にはみ出させるような力しかなかったのだろう。仮の姿を『宝鍵』が立体的に写し出していただけなのかも知れなかった。その証拠にルーンの効果が切れたとたん、ルネは本来の年齢の姿に変化したのである。別な言い方をするならば違う空間にあった肉体と同化したと言うことになるのであろうか。

だがイオスはエウレイのルーンがどのように構築されたものかを聞こうとはしなかった。興味がないのだ。

彼からすれば結果を見ればそれが完全なルーンではなかったことはお見通しである。イオス・オシュティーフェという三聖は、より完全な成長抑制ルーンを構築し、使う事ができるのであろう。

ルネの姿を見て、エウレイは小さなため息をついた。そこには自らの力の無さが生んだ結果があった。

横たわっている成熟したルネ・ルーは美しいデュナンだった。実年齢は三十三、四歳であろうか。

イオスの言うとおり普通の生活をしていたならば、異性を知り、結ばれ、家庭を持って子を成し、忙しい毎日に明け暮れている年頃であろう。

だが、エウレイはルネの時間を留めて、ずっと自分の側に置いていた。

もちろんルネがその暮らしに不満を漏らすようなことはなかった。ルネが「ハロウィン・リューヴアーク」と名乗るアルヴを慕い、旅の空で楽しい時間を過ごしていたに違いないという自信もエウレイにはある。

だが、イオスの言葉に彼の心は揺れた。

「正教会の監視下で幽閉しておくよりは……」

その揺らぎを振り払うかのようにエウレイはそうつぶやいた。
軟禁されるよりは、自由な外の世界で暮らす方がよほどいい。その思いには揺らぎはなかった。
「正教会の監視下、ではないよ、エウレイ」
だが、イオスは穏やかな調子のままでその言葉を否定した。
「君は恐れるものを間違っている。『監視者』は『正教会』ではない」
「え？」
「今更言っても詮無いことなんだろうね。でも、相談してくれれば良かったのさ」
「相談？」
「僕を、そして監視者としてのティーフェの王の存在を恐れていた君に、その選択肢はなかったのだろうな」
イオスはそう言うと再び小さなため息をついた。
「シグにしても同じだよ。選ぶ道が一つしかないなど、勝手に決めつけなければ良かったんだ」
イオスは儀仗を持った手を下ろした。すると、儀仗は消え、青い首輪に変化した。
「人はいつも怖れに呑まれて我を失う。だから人の世は争いが尽きない。恐れるあまりに相手を消し去ることしか道がないと考えるんだ。もうずっとその繰り返しだ。そしてまた大きな怖れが殺戮の舞台の幕を上げようとしている。だが、それが人というものなのかもしれないな。人としてはもっとも高みにあるはずの君やシグでさえ同じ事をしでかすんだからね。君は僕を恐れてそのルネという娘のあるべき成長を奪い、シグは何かを知られる事を怖れて賢者四人を手にかけた。マーリンはなぜ僕たちではなく、そんな『人間』を選んだのか……。《黒き帳》でなくてもそう思わずには居られないよ」
「私は……」
「責めているんじゃないさ、エウレイ・エウトレイカ」
イオスはエウレイの言葉を遮った。エウレイがのぞき込んだイオ

スの目は、最後まで話を聞け、と告げているようだった。
「だけどあの時、僕はそれが少しだけわかったような気がしたんだ。シグが最後に僕に託した頼み事を聞いた時にね」
イオスはそこでエウレイに微笑んでみせた。
それは間違い無く、エウレイが初めて見るイオスのなんとも柔和な微笑だった。
長く会わない間に目の前の三聖の一人が何らかの変化を遂げたのは間違いない。エウレイにそう思わせるほどの表情だったのだ。
「想像できるかい？彼は僕に自分の実の娘をよろしく頼む、と言ったんだよ」
「《真赭の頤》に実の娘、ですか？」
「うん。この僕に、ね」
イオスはまたしてもエウレイの知らない、屈託のないおかしそうな笑顔でクスっと笑って見せた。
「人と言うのは全くおかしなものだね。つまらない自分の恐れをぬぐい去る為に何百人、いや何万何十万という他人を殺すことを良しとする一方で、たった一人の人間の為に自分の命を顧みない」
「御意」
「君も知っているとおり、シグは守護の一族ザルカの王でありながら、こんにちでは唯一守護する者が存在しない立場だった。だからこそ顔と名のある賢者として正教会唯一の公式な名代の役もこなしてくれていた。さらに言えば極めて勤勉実直。法の守護者としても申し分ない存在だったんだ。表も裏もない、そんな彼を僕は友と思っていた。それだけに彼が最後のそんな頼みを僕にしてくれたことが妙に嬉しくてね。それからだ。人の感情と言うものに少し興味を持ちだした」
「大賢者《真赭の頤》を断罪なさったと風の噂で聞き及んでおります」
「それはそれ。法は法だ。シグもそれを知っていたからこそ僕に頼んだのだろう。下手をすると親子ともども僕が処分することになる

かもしれない。彼はそう計算していたんだよ」
「それは《真赭の頤》らしい穏やかな判断と言うべきなのでしょうね」
「そうだね」
「では、この私も私らしい判断でルネを守ろうとしたのだとお思いでしょうか？」
エウレイの問いに、イオスはゆっくりと首を横に振った。
「君らしくはないさ。君は確保した水精、すなわち水のエレメンタルを可及的速やかに、かつ極秘裏に僕に引き渡すべきだった。誰にも知られることなく、ね。それが君らしい合理的な判断だ」
「先ほども申し上げましたが……」
「だから、堂々巡りはもうやめよう。もはや過去のことだ。君の恐れは間違っていた。だが、一つだけ正しい事をした。それは褒めておくよ」
「正しいこと、ですか？」
「《黒き帳》に報告しなかったことだよ」
「あ」
エウレイは首をうなだれた。
「《黒き帳》の守護の一族である君の立場なら、まっ先に報告してもおかしくはなかった。だが、別に君のやること全てを報告する義務があるわけではない。だからうかつなことをしなかった事は評価できるということさ。だが、「水精の監視者」である僕に報告しなかったことは法に悖（もと）る」
エウレイはイオスのその言葉を聞いて唇を噛んだ。
法を守ることを第一義とする三聖。中でも《蒼穹の台》は一分の狂いもズレもなく法のみを基準に全てを平らげる存在であった。エウレイはそれを恐れていたからこそ、彼の目からルネを隠す為に自らのエーテルを注ぎ込む特殊なルーンを編み出したのだ。
だが実のところ、三聖《黒き帳》に報告しなかったのは《蒼穹の台》の情報網にかかることを畏れての事で、それ以外の意味はなか

った。

しかし邂逅した《蒼穹の台》はエウレイが知る頃の彼とは違っていた。敢えて言うならば「人間くさい」雰囲気を纏っていた。

（これならば、ルネに対して緩やかな措置を執ってくれるかもしれない）

そう考えるまでに。

だが、それが如何に甘い考えであったのかを、エウレイは今改めて思い知らされた。

三聖は、いや《蒼穹の台》の本質は何も変わってはいなかった。

「ルネには罪はありません。なにとぞ寛大なご処置を」

だから彼は、もはやそう言うのが精一杯だった。

イオスの答えはしかし、そんなエウレイの心に冷たく響いた。

「千人からの、それこそ罪のない人間を惨殺しておいて、その言葉が意味を持つと本気で思っているわけではあるまい？例えその当時の水のエレメンタルがまだ年端のいかぬ幼児（おさなご）であったとしても、だ」

「しかし」

「幼児ならば一国の王、例えばシルフィード国王アプサラス三世を殺しても罪にはならぬ、とでも？」

その言葉はつまり、イオスはアプサラス三世は暗殺されたと断定していると言うことである。そしてイオスにしてみれば人間などはみな「幼児」なのだ。

エウレイにはもう返す言葉がなかった。「法」に則り、三聖《蒼穹の台》はすべきことをするだけなのだ。

納得はできない。感情は認めてはいない。だが、本当にもうエウレイにはどうすることもできなかった。

エアにいる以上、力は完璧に封じられている。水のエレメンタルでさえその力はエアでは通じない。逃げる術もましてやイオスを倒す術などそこには一切存在していなかった。

だが、一つだけ知っておきたいことがあった。

「ルネは、どうなりますか？」
「僕が預かる事になるね」
「預かる？」
エウレイは、この場でルネはイオスに命を奪われるものだと覚悟していただけに、その言葉は意外だった。
たとえイオスと言えども「神の領域」を使わずに覚醒した水のエレメンタルの力を受けきれるはずもない。「監視者」として手にしている、エレメンタルだけに有効な一つの力を除けば。
だからと言って「神の領域」を常に付近一帯に展開しておけるだけの無尽蔵のエーテルを持っているはずもない。
「アダンには僕たちの治領がある。しばらくはそこに置こう。もちろん僕の監視下ではあるけどね」
「あ……」
イオスのその言葉を聞いて、エウレイは全身の力が抜けていくのを感じた。自分の意思とは裏腹に文字通り足の力が抜け、両膝をつくとそのまま地面に崩れ落ちそうになった。
崩れるまま両手をついたエウレイは、その格好のままで頭をさげた。
「ありがとうございます」
だが、イオスの放った言葉はまたしても冷たいものだった。
「勘違いしてはいけないよ。僕は法に則った行動を当たり前にこなしているだけだからね。君に感謝されるいわれなどまったくない。それに」
イオスはそこで言葉を切ると、エウレイに顔を上げるよう促した。
「君と水のエレメンタルとは、ここで別れねばならない。おそらくは、もう会うこともないだろう」
エウレイにはわかってはいた。
ルネの命は長らえたに過ぎないのだ。今この場で命を奪われはしなかったが、それは先延ばしになっただけであった。

その日まではアダンの正教会治領に幽閉、おそらくは冬眠ルーンなどで安置される事になるのだろう。

「それにしても、今日はいい日だ」

無言のエウレイに、イオスは声の調子を変えてそう言った。

「僕はずっと君を捜していたんだよ。かなり時間がかかる事は覚悟していたけど、思っていたよりもずっと早く会うことが出来た。あまつさえ発現報告からこっち、二十数年探し求めていた水のエレメタンルを確保できるとはね」

「偶然、ではありませぬな？」

「もちろんだよ。君も知っているだろう？僕たちはそれぞれ独自に主要な都市には感知結界の為の精霊陣を仕掛けている」

エウレイは頷いた。

人物特定までは不可能だが、ある種の絞り込みまでは可能な精霊陣。それがファランドール中の多くの街に仕掛けられているのである。

三聖達は配下の賢者に、その無数にある精霊陣の補修管理などを命じることがあった。エウレイ・エウトレイカいや《銀の簫》自身、《黒き帳》の命で古い時代に設置した精霊陣の修復を何度か行ったことがあった。

大賢者であるエウレイにも、三聖がそれぞれ仕掛けた精霊陣がいったいどのような機能を持っているのかという詳細までは知らなかった。彼らの精霊陣には、たとえ大賢者であろうとも理解できないルーンが書き込まれているのである。

そして三聖達がそれをどう利用しているのかも又、知らされることはなかった。

「前座に座っていてはさすがに見つけることは敵わないと思ったからね。実際に可能性のある街で君の気配を探しては辿っていたという訳だよ」

「して、私にいったい？」

「水のエレメンタルの事ですっかり後回しになってしまったね。彼女はもう心配いらないだろうから、遅くなったけど本題に入らせてもらおうか」

イオスは自身も片膝を付くと、地面に座り込んだままのエウレイの眼前にその白い顔を突き出した。

「三聖《黒き帳》は今どこにいる？」

それはエウレイにとっては予想された質問だった。だから、その問いに対する答えは既に用意されていた。

「私にも、わかりません」

「神の領域」で《蒼穹の台》の質問に答えたエウレイの言葉に嘘はない。

イオスはそれ以上《黒き帳》についてエウレイに尋ねることはしなかった。

「猊下が『前座』を離れるなど尋常な事ではないと思っていましたが、《黒き帳》に緊急の用件でも？」

「そうだね。では《深紅の綺羅》について、君は何か知っているかい？」

「もう十年ほどもお会いしていませんが、《深紅の綺羅》がどうかされたのですか？」

「いや。そうか」

イオスは立ち上がると少し何かを考えるように目を閉じていたが、すぐに普段の顔に戻った。

「名残惜しいがそれほど時間もない。エウレイ、君に最後に二つ、頼みがある」

「頼み、ですか」

イオスからエウレイに頼みを言い出すなど、まさに前代未聞であった。久しぶりの対面はエウレイにとってはいわば「初めて」づくしであった。

「一つ目は僕に会ったことは他言無用で願いたい」

「心得ました」

「実は僕は死んでいることになってるんだよ」
「何ですって？」
「もう一つはもし《黒き帳》の情報を掴んだなら、僕に知らせて欲しい。どんな些細なことでもかまわない」
「そちらも心得ました。しかし」
「君からの連絡は《菊塵の壕》でかまわない。少なくとも僕は彼は信頼しているからね」
「え？」
エウレイは思わずそう声を出した。
イオスは「彼を信頼している」とは言わなかったのだ。「彼は」と言った。
自らの不動の居場所である「前座」を出てまで急に他の三聖に会おうとしている事と言い、死んでいる事になっていて、生きていることを誰にも知られたくないなどと言われると、さすがのエウレイもイオスの立っている舞台の背景が一切見えなかった。
「僕は君のことも信頼している。ルネという名を持つこの水精を見てもわかる。君を信頼できないなどと僕が思ってはならないと言うことがね」
「いったい三聖に、いえ『あなた達』の間に何が起こっているのですか？」
エウレイはそう聞かずにはおれなかった。もはや彼の知らないところで何かが動いている事だけは確実だった。それも大きく、そして急激に。
だがイオスはエウレイの問いかけに答える事はしなかった。
「頼んだよ。君が今まで成してきたことはもう終わった。守護の一族、トレイカの王である君は、守護すべき三聖《黒き帳》の居場所を知るべきだろう？」
「答えはそこにあると？」
イオスはその問いにはうなずいて答えた。
「少なくとも、僕はそう思っている」

「了解いたしました」
「助かる。《真赭の頤》は消え、最近《天色の？》を継いだ若いタ＝タンの王は、なにやら自分の仕事にかかりきりのようだ。そんなわけで大賢者の仕事は全部《菊塵の壕》が引き受けているようなんだよ」
「返す言葉もございません」
「いや、もういいさ」
イオスはそう言うと別れの言葉を告げた。それはエウレイにこの場を立ち去れという意味であった。そこにはルネに対する措置を見せない方がいいだろうと言う気遣いが込められているのかもしれなかったが、それを知る術は少なくともエウレイにはなかった。
「お別れに際し、私も猊下に一つだけ質問がございます」
「もちろん、答えられることは答えよう」
「《銀の籌》としてではなく、現世に染まったエウレイ・エウトレイカ、いや今はハロウィン・リューヴアークとしての俗な好奇心ですが」
「かまわないさ。言ってごらん」
「《真赭の頤》の実の娘とは？」
「ふむ。それはけっこう難しい質問だね」
そう言うとイオスにしてはこれも珍しく腕組みをして少しの間思案していたが、やがて小さく頷いた。
「君なら問題はないだろう。彼の娘の現名はラウ・ラ＝レイ。ラ＝レイの一族とシグがそのような仲だとはさすがに知らなかったよ。そして……」
イオスは言葉を途中で切った。娘の名を告げた瞬間、エウレイの顔色が変わったからだ。
「まさか？」
「《二藍の旋律》が《真赭の頤》の娘でしたか」
「知っているのだな？」

エウレイは目を閉じた。
そして噛みしめていた。ファランドールに起こっている「何か」が全て一本の糸で繋がっているに違いないという事を。
彼は改めて、一人の賢者の現名を思い出していた。
彼の廻りで世界が一つの糸で繋がっているのだとすれば、もはやその名は偶然でも何でもないに違いないのだ。
「私には《黒き帳》や《深紅の綺羅》の居場所はわかりません。しかし、もう一方の居場所なら存じ上げているやもしれません」
そういうエウレイを見つめるイオスの瞳が、アイスの光を受け、ひときわ輝いたかに見えた。
「話を聞こう」

＞ｉ２３５１１―１８３１＜

## 第十四話　水精の監視者（後書き）

第二部　第一巻　通巻第九巻終了です。
次話から通巻第十巻に入ります。

# 第十五話　モテアの少女（前書き）

第二部　深紅の綺羅　第二巻　通巻第十巻のスタートです。

# 第十五話　モテアの少女

＞ｉ２３４６６―１８３１＜

「なるほど。して、クレハ様はいずこにいらっしゃるのですか？」

一通りの事情を掴んだロンドは、まずはそう質問した。

ニームの話の信憑性については一切の疑問・質問はせず、今後向かうべき課題への情報を求めたのだ。

それはすでにロンドがニームに対して信頼感を持っていたからである。彼の主が胸襟を開いた相手なのだ。こと人を見る目にかけてはエスカ・ペトルウシュカは非凡な才があった。それを知っているからこそロンドはエスカの評価に全幅の信頼を置いていた。その主人が「俺はこいつを信頼する」という合図をロンドに送っていたのである。それは同時に「お前もこの人物を吟味しろ」という意味も含まれていた。

しかしロンドには異議はなかった。出された食事を毒味などする振りもなく本当に嬉しそうに、そして美味そうに食べる姿の邪気のなさに、ニームの本質を見つけたと思っていたのである。

「ちょっと待て、ロンド。お前、このチビの言うこと全部信じたのかよ？」

エスカはさすがに驚いていた。三眼を見せてからロンドを説得する必要があると睨んでいたのである。同時にエスカ自身がまだロンドの事を見くびっていた事を思い知った瞬間でもあった。

「何をおっしゃいます」

ロンドは呆れたような顔をしている主人に、こともなげにそう言った。

「エスカ様が信じているなら、私が疑う点はございません」

「いや、普通疑うだろ、こんな与太話」

「いえいえ。あれほど蕩けそうなお顔をして紅茶をお飲みになる方

に悪人はおりません。それに、そもそもニーム様が尋常ならざるお力を持つバードだと言うことは既に承知しておりましたので、お話を伺った事でむしろ得心しました」
「コイツの力を知っていた？」
「ええ」
ロンドは差もアタリマエだという風に答えた。
「普通のバードごときに、割れた茶器をあっと言う間に元通りにする事など不可能ですから」
ロンドのその答えに、ニームは感心したように尋ねた。
「ほう。なぜ修復されているとわかったのだ？」
ロンドはちらりと主人の顔を見ると、小さく咳払いをしてから答えた。
「がさつな主を持ちますと、茶器の割れる音など飽きるほど聞いております。床に落ちただけなのか、割れてしまった音なのかわからないはずがありません」
「なるほど。ふむ。さすがだな」
「誰ががさつな主だよっ」
「貴重な什器備品がどれだけエスカ様の毒牙にかかったかしれません。この点だけはミリア様のお行儀の良さを見習って頂きたかったものです」
「毒牙って、おいおい」
「ニーム様はさらに素晴らしい命名の才能もおありです。これはもう望外のお味方ではございませんか？」
「いや、だから、命名の才能って……」
「『びっくり仰天』。まさに、でございましょう？」
「もういい。お前達が人の話を聞かない同盟だということはよくわかった」
ロンドは主人の横やりを軽くあしらうと、ニームに真顔を向け本題に戻った。
「それで、アリスの王、クレハ様は何処に？」

「そうだ。そんなすげえ力を持っているんなら、お前一人で十分だろ？俺みたいにフェアリーでもルーナーでもない普通の人間に頼んでも仕方ねえんじゃねえのか？」
エスカとロンドの問いに、ニームは真顔で答えた。
「『普通の人間』には頼まない。お前だから頼むのだ、エスカ・ペトルウシュカ」
ニームのその態度に、主と執事長は顔を見合わせた。
「私一人の力などではもはやどうしようもない。これは国と国との戦いになるのだ」
エスカはニームのその答えを聞くと居住まいを正した。
「詳しく話を聞こう」

エスカがそう言った時、応接間の扉をノックする音がした。
一同はその音に反応して一斉に扉の方を見つめた。
「バード様のお部屋の準備が整いましたので、お知らせに上がりました」
扉の向こうで抑揚のない若い女の声がした。
エスカ・ペトルウシュカは扉からニーム・タ＝タンの方へ視線を戻した。
何も言わず、ニームはそれにうなずいて見せた。エスカは軽くうなずき返すと、今度はロンド・キリエンカに顔を向け、小声で告げた。
「そういや例の話、まだなんだろ？」
「エスタリアへ帰す話ですか？」
エスカはうなずいた。
「いえ、それでしたらとりあえずは手配済みです」
「マジかよ。今朝話したとこだぞ？」
「はい」
「相変わらずやることが速すぎねえか？こっちの心の準備がまだ出来てねえって」

「こう言うことは思い立ったが吉日でございますよ、エスカ様」
「まったく……」
「出来の良い部下を持つと、主は苦労するな」
ため息をついたエスカに、ニームはそう言うと笑いかけた。
エスカは小さく咳払いをすると、扉の向こうで控えている娘に声をかけた。
「入れ」
「はい。入ります」

扉が開かれると、そこには深くお辞儀をした少女が立っていた。
屋敷内にも関わらず、何故か槍を背負ったままで。
少女はゆっくりと顔を上げた。
それに呼応するかのように、甘い香りが仄かに部屋に入り込んだ。
ニームはその香りに覚えがあった。
ペトルウシュカ屋敷の門をくぐる時にむせるように香っていたあの匂いである。
木犀の香り。
その少女はその木犀の香りを部屋に運んできたのだ。
背が高い。
エスカもデュナンの成人としては平均よりも身長が高めだが、その少女はエスカよりもさらに少し背が高く見えた。その背筋の伸びた格好の良い体格と色白で端正な顔立ちはアルヴのようではあったが、耳は先端が細くなってはおらず、デュナンと何らかわりがなかった。瞳の色も青緑で純粋なアルヴではない事がわかる。デュナンとアルヴの血が混じったもの。つまりニームと同じく「デュアル」と呼ばれる混血であった。
その無表情な顔はまだ成人直後といったところであろうか。見ようによっては、やや下がった目尻のせいで、あどけなくも見える。
とはいえアルヴの血が入っている以上、デュナンの感覚で年齢を推定するのはむずかしい。

だが、どちらにしろ若い娘である事には間違いがなかった。
「おお……」
ニームはその少女の姿を見て、思わず声を上げた。侍女と思しきその少女が槍を背負っているのにも驚いたが、それよりもその少女の髪が目を引いたのだ。
そう。現れた少女には一目見てわかる外見的な大きな特徴があった。
ニームの視線は少女のその特異な髪に注がれていた。その特徴はポニーテールに綺麗に纏められた髪型ではなく、その色にあった。
そしてそれはかなり特殊なものだった。

「モテアか」
ニームは少女の髪を見て、うっとりとした表情を浮かべると、そう言った。
「知識としては知っているが、実物を見るのは初めてだ」
赤と金。
少女の髪はその二色が斑(まだら)になっていた。
もちろん、それは文字通り人為的に塗り分けられていたわけではなく、いわゆる地毛の色が二色なのである。
斑の髪(モテア)は極めて特殊な例で、ニームは生まれて初めて目にした。
だから思わず感嘆の声が口を突いたのであろう。

ニームに声をかけられたモテアの少女はすこし驚いた顔をしたが、すぐに元の無表情に戻り、ペコンとお辞儀をした。
「コイツが槍をいつも背負っているのは気にしないでやってくれ。あの『花盗人』はもうあいつの体の一部みたいなもんなんだ」
「はなぬすびと？」
「あの槍の名前だってよ。何、見ての通り刃は木製だし、何にも切れない役立たずの槍だ。だがちょっと不思議な力がある槍でな」
「と言うと？」

「近くにある花の花弁を引き寄せるっつうか、そういう力だ」
「は？」
「嘘じゃねえぞ。要するに変な棒っきれってことだ。見ての通り木の刃で槍としちゃ偽物だから危険物じゃねえ。だから気にするな。ちょっと訳ありでこいつはその槍を気に入ってて片時も離さないのさ。言ってみりゃ装飾品みたいな物だ」
「ふむ。そうなのか」
「ついでに言っとくと、こいつは死んだ爺さんが目をつぶってても避けられるほどの槍の腕前の持ち主でもある」
「ほう？この屋敷では死人が動くのか？」
傍目にはエスカにいいように言われている少女だったが、特にムッとした表情を浮かべるでもなく、「花盗人」という名の木刃（もくじん）の槍を背負い、ぼんやりとした表情のままで佇んでいた。
その表情とその隙だらけの立ち姿を見て、確かに槍の腕前は期待できなさそうだとニームは思った。そもそもその少女からは武器を使う者に特有の鋭さが全く感じられなかった。それどころか積極的に「鈍そう」だと言った方が納得出来る雰囲気なのである。
ただ、エスカの話が本当であれば、たとえ木の刃であろうと間違いなくその槍はルーンが仕込まれている、いわゆる妖槍といわれるものであることは確かだった。
ニームの興味は、その妙な銘のついた槍の方に移った。
気になるところがあったのである。

「『花盗人』、『花盗人』……」
急に腕を組み、眉間に皺を寄せてぶつぶつ言い始めたニームを、もちろんエスカは不審に思った。
「知っているのか？この珍妙な槍の事」
「いや。知っているというか、多分知っているかもしれないというか」
「なんだよ、お前らしくねえな。はっきりしろよ」

「そのビミョウな力と、同じくビミョウな銘……多分、同じ作り手によるものだと思うが」
　ニームはそう言うと、自分の首飾りを指さした。その首飾りは、中央に珍しい大きめの三角のスフィアを配してあり、その左右に大中小取り混ぜた球体のスフィアが列なっているものだった。
「その槍は妖槍というよりもおそらくは呪具だな。この首飾りも実は呪具。多分同じ呪具師によるものだろう」
「ビミョウな銘ってことは、おまえのその首飾りにも『花盗人』みてえなビミョウな銘があるって事か？」
「『蛇の目』」
「『蛇の目』？それが銘か？」
　ニームはうなずいた。
「ほう。で、そいつのビミョウな力ってのは何だ？」
「この首飾りをしていると、雨が降っても濡れないのだ」
「なんだよ、それ？」
「何だよと言われても。そういう能力なのだから仕方ない」
「それが何で『蛇の目』なんだよ？」
「なんでも大昔、どこかに蛇が睨むと雨が止むという言い伝えがあったそうだ。それに因んだのだろう」
「なんというか、確かにビミョウな呪具だな」
「で、あろう？そういうちょっとワケのわからない呪具師の作ったものだ。もっともその呪具師の名前はわからないし、意味合いの本当の事はもう知るすべもない。だが、そもそもその呪具師の呪具というのは、ヴェリタスの賢者会にある「庫」と呼ばれる特別な管理庫で厳重に保管されていて私のような賢者くらいしか所持できぬものなのだ。そのモテアの侍女が所有しているということ自体に興味がある」
「つまりそいつは賢者御用達の呪具師ってことか？」
「簡単に言えばそうなるだろうな。だがさっきも言ったとおり、その者は謎の人物で、もはや伝説となっている。詳細は不明だ」

「ほお」
エスカは感心したようにうなずくと『花盗人』を背負ったアルヴの少女に向き直った。
「なんか、本来は賢者様がお使いになるヤツらしいぞ、その槍」
ニームは珍しい斑の髪をした少女がその槍をいったいどうやって入手したのかが気になっていた。もし『花盗人』がその呪具師の手によるものだとしたら、一般人が手にしているのは異例だった。少なくとも彼女が知る限りでは初例であった。
「あ、先に言っとくが、誰からもらったか聞いても無駄だぞ。それについちゃ、こいつは絶対喋ろうとはしねえからな」
今まさにその問いかけをしようとしていたニームは、飲み込んだ息をため息に変えてゆっくり吐き出した。
「ちょうどいいや。ちょっと教えてくれ。その呪具ってやつだけど、他の人間には使えないのはどういうことなんだ？」
「ああ……」
ニームの話によると、呪具は持ち主と契約をすることによりその機能を発動するのだという。いったん契約を結んだ呪具を未契約の状態にする為には相当な力を持つ解呪師（かいじゅし）に頼んで解呪してもらうしかなく、その伝説の呪具師による呪具の解呪ができる人間はヴェリタス、つまり正教会の中にももはや存在しないのだという。
「契約は持ち主の血を注ぎ、自分の本名と呪具の正しい名前を呼びかけることで成り立つ」
「そうなのか？」
ニームの話はエスカにとってはすべてが初耳だった。振り返って斑髪の少女にそう尋ねると、少女はぼんやりした顔で少し迷うようなそぶりを見せた後小さくうなずいた。そうした、という意味であろう。
それを見て、エスカはそれ以上の追求がニームの口から出される前に話題を変える事にした。いや、本題に戻ったというべきであろう。

「お前が部屋の掃除をしたのか、スノウ？」
エスカは、気安い言葉でその少女の名を呼んだ。
「はい」
少女は顔を上げると、ぼんやりともおっとりとも取れる声で短くそう答えた。
「速いな。お前一人でか？」
「いいえ。私を入れて十八人がかりで」
「そうか……って、屋敷の人間をほぼ総動員かよ」
「最優先事項だと判断したから」
スノウは顔の表情を一切変えず、口だけを動かしてそう答えた。
「アンナばあちゃんまで引っ張り出したのかよ？」
「アンナばあちゃんが皆んなを引っ張り出したの。どうでもいい事をいつまでもネチネチと言うのはエスカの悪い癖よ」
主に対するその容赦のない物言いにも、エスカは不快な表情を一切示さなかった。いつもの事なのであろう。エスカは小さく肩をすくめてニームの方に向かってチロリと舌を出して見せた。
「それで、バード様はどちらに？」
のんびりした調子でそう言うと、スノウは部屋の中をぐるっと見渡した。
つまり、彼女の視点では部屋の中にバードらしき人物の姿は見つからなかったのだ。
「そのお嬢様は？」
目的の人間が部屋の中にいない事を確認すると、スノウは心に浮かんでいた次の問題を解決すべく、ニームの事をエスカに尋ねた。
「エサの匂いをかぎつけて迷い込んできたネコだ」
「え？」
「誰がネコだ！」
「ほう。そっちに突っ込んだか」
「どうやらエストリアの人間は揃いも揃って人を見た目だけで判断

する気質のようだな」
「いや、百人いれば百二十人くらいはスノウと同じ反応をするだろ？」
「むむむ」
「スノウ、すまんがこのチビにおやつのお代わりを頼む」
エスカのその言葉に、ニームは足で床を鳴らして抗議した。
「待て。この私に向かって『おやつ』だと？私をいったい誰だと」
「いらないのか？おやつ」
「そ、それは……せっかくだからいただくが」
「おいおい、マジでまだ食うのかよ」
「私は育ち盛りなのだ！」
「育ち盛りって。おい、ニーム。お前、本当のところ何歳なんだ？」
「じ、十五歳だ」
「？？マジかよ？」
「お前には隠し事はしない。本当に十五だ。でも、子供ではない。背は低いが、体はもう大人だ」
「体って……。いや、ちょっと待て。ヘロンの狸ジジイは信じてるのか、お前が二十八だとかサバ読んでるのを」
「おそらくバレてはいない。十五歳の特級バードなど居ないだろうが？」
「お前、そりゃ嘘つきにもほどがあるんじゃねえか？賢者ってのは嘘はつかねえって聞いたぞ」
「失礼な。嘘ではない。バカにされない為の手段と言え、手段と。私はアルヴィンの血が入っているデュナンではなく、デュナンの血が入っているアルヴィンだ」
「詭弁っていう言葉を知ってるか？」
「そんな言葉は忘れた」
「おいおい」
「アルヴィンの血が入っていると言えば十分通用するのだ。ルーンに対する知識もドライアドのバード庁では誰も私の足元にも及ばん。

まあ、私は賢者だし、それは当たり前なのだが……。だから二十八と言っても誰も疑わなかったぞ。こう言うのは生活の知恵と言うのだ」

「いや、『浅知恵』ならともかく『生活』とかお前が言うな」

エスカは呆れたという風に肩をすくめて両手を上げて見せた。

「あの」

スノウと呼ばれた少女は首をかしげて二人のやりとりを見ていたが、たまりかねて声をかけた。

「よくわからないけど、おやつはお持ちした方がいいのね？」

二人のやりとりをぼーっとした表情のまま眺めていたスノウだが、いつまで経ってもらちがあきそうにないと判断したのか、そう声をかけた。

「ああ、そうだったな。是非持ってきてやれ」

エスカはその存在を思い出したかのように、スノウにそう声をかけた。

だが、ロンドが大きな咳払いをしてその場を出て行こうとするスノウを呼び止めた。

「こちらのご婦人はエスカ様の幕僚長に就任されたニーム・タ＝タン様だ。齢わずか十五歳にしてバード庁では誰も逆らえぬほどのルーナーであらせられ、しかもドライアド軍に於いては大佐の階級をお持ちだ。粗相のないようにしなさい」

悪戯好きのエスカに任せていてはニームをからかうのにかまけてまともに紹介すらしないだろうと判断したロンドは、そう言って自分からニームをスノウに紹介した。

だがすぐに、ロンドはスノウの様子がおかしい事に気付いた。

スノウは、目を見開いて硬直したかのように呆然と立っていた。

「？？タ＝タン？」

スノウはそうつぶやくとゆっくりと視線をロンドからニームに戻した。ニームはそのスノウの反応に眉をひそめた。

「どうした？スノウ」
ニームの反応に妙な気配を感じたロンドは、ニームが口を開く前にそう声をかけた。
スノウは執事長の言葉ですぐに我に返った。
「い、いえ」
そう言うと慌てて再びペコリと頭を下げた。
「大変失礼いたました」
「いたました？」

ニームはスノウの妙な言葉を聞いてロンドの方を見た。こちらもエスカに尋ねてはまともな答えが返ってくるのに時間がかかりそうだと判断したのだ。いや、エスカが口にするどの言葉がまともな答えなのかを考える手間を省きたいと思ったと言う方が正確であろうか。
すなわちニームは短時間のうちにその屋敷における合理的な振る舞い方を身につけたと言えるだろう。まさに「生活の知恵」と呼べないこともなかった。
「申し訳ありません。我が娘は取り乱したり慌てたりすると滑舌が少々悪くなってしまう癖がございまして」
「ふむ。この子は、ロンド殿の娘なのか」
「不肖の娘でございます。お見知りおきを」
「ロンド・キリエンカの娘、スノウ・キリエンカでございます。ご無礼をいたしました。タ＝タン大佐」
スノウは再再度、深くお辞儀をした。
「かまわん。エスカには色々文句を言ったが、子供扱いされるのはいい加減慣れている。実際に子供だしな」
「あ……はい」
「しかし、対外的には二十八歳だ。話は合わせてもらいたい」
「かしこまりました。タ＝タン大佐」
スノウの返事に、ニームは小さなため息をついた。

「その『タ＝タン大佐』と言うのはやめて欲しいものだな。そう……」

ニームはそう言って少し思案すると、顔を輝かせて言葉を続けた。

「『ニームお姉様』というのはどうだろうか？」

「はい？」

反応したのはスノウではなくエスカだった。

「おいおい。お前、スノウの歳を知ってんのか？」

「私は二十八歳だから当然そのモテアの方よりは歳上だろう？対外的には」

「いや、スノウは三十過ぎだぞ」

「何と？この子供っぽい子が？」

「もちろん、ウソだ」

驚いて椅子から立ち上がったニームに、エスカはウインクをしながらそう言うとさらに続けた。

「お前の事は、これでだいたいわかった」

エスカの言葉に、ロンドもゆっくりとうなずいた。

「俺の片腕になれるだけの力を、期待していいんだな？」

「呆れたな。いいように遊ばれている気がして釈然とせぬが……」

ニームはだまされてムッとしたことも忘れて、今度はエスカのその態度にため息をついた。

「でも、私の方も自分の選択が間違いではなかったことを今、確信した」

「ほう？」

「邪な精神を持つ人間に、このような良い色をしたエーテルを纏う娘の父親が心を許す事などないだろうからな」

「エーテル？見えるのか？」

「見える」

「へっ。ガキでチビのくせに口だけは一人前じゃねえか」

「ガキはともかく、チビは禁句だ。アルヴィンの血が強いと、おそらく外見はこれ以上成長せぬ」

ニームはまたもやムッとした顔をエスカに向けたが、エスカはニヤニヤ笑いを瞬時に真顔に変えると、右手をニームにスッと差し出した。

「俺の口が悪いのは性分だ。だから慣れろとは言わん。いちいち反応しない程度に受け流せ。それから俺はお前が考えているより、もうちいっとばかり背負う物が重い。だがそれだけにお前の荷物をもう一つくらい担ごうが大差はない。この際まとめて面倒見てやるさ」

「ふむ。では？」

「おっと。言っておくが、この手を取れば、お前は俺の片腕じゃなくなるぜ？」

「え？」

ニームはのばしかけた手を止めた。それを見たエスカは微笑した。それはエスカが初めてニームに見せる、心からの穏やかな微笑だった。

その微笑を見たニームは、思わずエスカのその表情に見とれた。すぐに我に返ったものの、顔が上気するのを感じた。なぜそうなったのかが自分でも不思議だったが、その事を考える前にエスカが口を開いた。

「この手を取れ。そうすりゃ、お前は片腕じゃなく、俺の家族になる。俺の概念にお前が言うような『片腕と呼べる部下』なんていねえんだよ。お前だって部下なんかになりたいわけじゃねえんだろ？だから家族になれ。お前の願いはそれからの話だな。とはいえ、家族の頼み事を断る奴が俺の屋敷にいるとは思わねえがな」

エスカの言葉はぞんざいだったが、ニームにはこの上もなく暖かく響き、不覚にも動悸が速くなるのを感じていた。それはニームにとっては初めての、いや未知の感覚だった。

ニームは改めて目の前の金髪碧眼の若いデュナンを見つめた。自らのクレストを染め上げた壁掛けを背景にして、エスカは静かに微笑んでいた。

「このニーム・タ＝タン、人の筆頭の名にかけて、お前の力になろ

う。『赤い薔薇の王』よ」

差し出された手をニームはその小さな手で迷わずしっかりと握りしめた。そしてエスカに対して初めて正式なお辞儀をした。

一説によれば、この時エスカはニームと契約を交わし、タ＝タンの家に連なるものになったと言うことになっている。

それを婚儀と呼ぶ者も、兄妹の契約とも、あるいはエスカがニームの養子になった言う者もいるが、どちらにしろその時より「王」を名乗る大義名分と背景をエスカが得たという見解では一致している。

勿論それを証明する物はない。今日確かに伝わっているのはニームが初めて口にしたと伝えられている「赤い薔薇の王」というエスカの二つ名のみである。

「人の、筆頭？」

スノウはニームが口にした言葉を口の中で反芻していた。

「十二色……」

スノウ・キリエンカ。

彼女こそご存じ「フォリーム・キノ」のシンボル的な存在である「スノウの丘」のスノウその人である。

スノウ・キリエンカがモデルだと言われる肖像画はあまりに多い。その理由はもちろん、天才画家の側に居た娘だからである。ミリア・ペトルウシュカがスノウのような特長ある容姿をした娘を題材として選ばないはずがない。

とは言えスノウを描いたのはミリアだけではない。彼女の生き様を伝える物語が人々の心を掴む限り、これからもスノウの絵は新しく生み出される事だろう。

スノウは現在でもほとんど見ることのない「モテア」と呼ばれる二色の髪の持ち主であった。彼女が赤毛と金髪の「モテア」であっ

たことは数多くの肖像画や物語に書かれている通りである。

ミリア・ペトルウシュカにして「髪の色としては、漆黒の次に美しい」とまで言わしめたと言われる髪の持ち主がスノウ・キリエンカなのである。

キリエンカ家は既述の通りペトルウシュカ公爵家の古くからの家臣で、当時は「公爵家執事長」という世襲の役職を持つ家柄であった。

スノウ・キリエンカは父ロンドと母セーニャとの間にもうけられた唯一の娘で、フレクト、フェルンを兄に持つ三人兄妹の末っ子であった。

「月の大戦」時、十九歳であったという記録があるので、彼女がニームとミュゼで出会ったのは十八歳と言うことになる。

キリエンカ家の男は全員執事として何らかの形でペトルウシュカ家に仕える習わしになっていたようだが、女は例外で、比較的幼い頃から主に公爵領の他の有力な家臣筋に仕え、そのまま嫁ぐ事が多かった。これは家臣同士の結びつきを強めるためのキリエンカ家の政略の様なものと言ってよく、しかるにペトルウシュカ家の家臣筋は大なり小なりキリエンカの縁者という事になっていった。

だがスノウは例外で、唯一ミリアのみに仕える事を欲し、他家への奉公を頑として受け入れなかったと言われている。その為、幼い頃からすでに父ロンドの手伝いのような形で公爵家に奉公をしていたようである。

だが、その実態は父の手伝いではなく、もっぱらペトルウシュカ兄弟の身の回りの世話係のような役目にあったと言う事である。

もっとも幼いスノウが同じく子供であった公爵ミリアに、いったいどれほどの世話が出来たのかははなはだ疑問と言うしかない。つまりおそらくはミリア達の遊び相手として過ごしていたと見るのが自然であろう。

「しかし、どう見ても三十歳には見えぬな」
ニームはあらためてスノウをまじまじと見つめると、そう言って感心したようにつぶやいた。
さすがにスノウはその言葉には即座に反応した。
「私は三十過ぎではありやせん。タ＝タン大佐」
「ありやせん？」
「あ、いえ。ともかくエスカの戯れ言をいちいち信じないで下さい。私はまだ二十歳にもなっていないのです」
「スノウは黙ってろ。いいか、ニーム。お前が二十八歳だって言うなら、スノウは三十過ぎでもおかしくねえって事を言いたかったんだよ。わかったか」
エスカはニームに向かってそう言ったが、当のニームはその言葉には全く反応しなかった。彼女はエスカを見ようともせず、スノウに返答した。
「私の事はニームでかまわぬ。スノウ嬢」
「では私もスノウで結構です。ニームお姉様」
「え？」
エスカは肩をすくめると立ち上がった。
「まあ、好きに呼び合えばいいさ。ちなみにスノウは十八だ。お姉さんはどっちだよ、まったく」
「では私の事もただのニームでいいぞ、スノウ。でもまあ、対外的には時々お姉様と呼んでも問題はない」
ニームはそう言うとスノウの側に近づいた。だが、近づくにつれ歴然とするモテアの少女とのあまりの身長差に顔を少し引きつらせると一歩下がった。その時、不意にニームは後ろから誰かに腰をつかまれ、急に持ち上げられた。
「きゃっ！」
持ち上げたのはエスカだった。
彼は「チビ」のニームを体重など存在しないかのように軽々と持

ち上げると、そのまま肩車をした。
「な、何をする！」
ニームは思わず目の前にあるエスカの長い金髪を掴むとそれを引っ張って抗議した。
「ててっ！よせ、チビ。こうしたら近くでもスノウと楽に話せるだろうが」
「そういう事は、まずは本人に了解をとるものだ。びっくりするではないか！」
「バカだな、お前。びっくりさせようとしたんだよ」
ニームはため息をついた。
「三つ数えろ。数え終わった時、この見事な金髪がまだ頭皮にくっついていると思うなよ」
「やなこった。そんな事を言うなら、足の裏をくすぐるぞ？」
「ま、待て。早まるな。足の裏は止めろ！」
「暴れるんじゃねえ。危ねえだろ！」
「足の裏には触らぬか？」
「髪の毛の安全を保証してくれたらな。さもなきゃかじるぞ」
「あ、安心しろ。お前の金髪は私も気に入っている」
「そりゃどうも。俺もお前の足の裏は気に入ったぜ」
「お前と言う男は全く……」
ニームは観念すると再度ため息をついて、今度はエスカの頭をそっと抱くようにして体を支えた。

エスカには怒りを表したものの、実のところニームはさほど怒ってはいなかった。びっくりはしたのは確かで、抗議したかったのも事実だったが、エスカに体をつかまれた事や肩車をされた事自体は別に嫌ではなかった。見た目よりもごつい手の感触が体に触れた時、ニームはエスカの逞しさを無意識に好ましく感じていたのだろうか。
ニームはエスカの手で支えられている足の一部が熱を持っているような錯覚にとらわれ始めていた。持ち上げられてびっくりした時

に高まった鼓動が、まったく収まらない。
「どうした?」
急に黙り込んだニームに、エスカが声をかけたが、胸を押さえてか細い声で何でもない、と言うのがやっとだった。
エスカの肩は思いの外座りがよく、高い位置からの景色は新鮮だった。なによりそうやってエスカが見せる親愛の情のようなものが、ニームに急激な変化をもたらしていた。
「た、高いところからすまぬ。あらためて、よろしく頼む、スノウ」
動悸が収まらないまま、顔を赤くしたニームがそう言って右手を差し出した。
「こちらこそ。ニーム様」
「『様』はいい。私は年下だ」
「ですが……」
「エスカが言っていた。私たちは家族だそうだ。ならば私たちには上下はない。お互い呼び捨てでかまわぬだろう?」
スノウはそう言われて少しためらっていたが、小さくうなずくとニームが差し出した手をしっかりと握った。
木犀の甘い香りがニームの鼻をくすぐる。
「よろしくお願いします、ニーム」
ニームはスノウの言葉を満足そうな笑いで迎えると、アルヴの大きな手をアルヴィンの小さな手で握り返した。

# 第十七話　セッカ・リ＝ルッカ

扉を押す前に、感知ルーンをかけた精霊陣に異常がないかを一応確かめた。

だが、もちろん目に見える場所に精霊陣が記されているわけではない。

ニーム・タ＝タンは小さな掌を扉の中央に当て、何事かを小さくつぶやいた。すると何も描かれていなかった扉に様々な記号や文字を記した同心円状の、いわゆる精霊陣が彼女の小さな掌を中心にして、光りと共に浮かび上がった。

（異常はないか）

そのまま掌に力を入れる。小さいが鈍い音を立ててルーンで閉ざされていた錠が開くと、扉はそのままゆっくりと内側へ開いてニームを室内に誘った。

多くの時間を過ごしたドライアドでの自室に入ったニームは、再びぼんやりとした表情で考え事に戻った。

ニームの考え事は目下のところ二つだった。

一つは別れ際にスノウ・キリエンカが告げた謎の言葉の意味。

彼女はこう言ったのだ。

「あなたに告げるのは心苦しいのですが、それでも伝えておこうと思います。この次会う時は敵同士になるかもしれません」

「え？」

「でも、覚えておいて下さい。そこにはきっと、憎しみも怒りもない。ただ、敵同士という運命があるだけだと思います」

敵という言葉に虚を突かれたニームに、スノウは珍しく無表情な顔を崩して笑顔でさらにこう付け加えた。

「私たちの家族になってくれてありがとう、ニーム。エスカの力になってあげてね」

「それは、言われるまでもない。だが……」
「たぶん、エスカは悲しい選択をしなければならない。我が儘なミリアのせいで。だから誰かが支えてあげないとね」
「どういう事だ？」
ニームの問いに、しかしスノウは目を伏せて首を振っただけだった。
「さようなら」
そしてニームに次の言葉を継がせることなく、きびすを返して用意された馬車へ乗り込んだ。

「スノウ！」
走り出した馬車の窓から見えるスノウの白い横顔に向かい、ニームは思わずそう呼びかけた。
その声を聞いたスノウはニームを見つめると、手に持っていた木槍『花盗人』を顔の前で振るような仕草をみせた。
さよならの合図なのだろうかと思うまもなく、ニームの周りに白いものが舞い始めた。白く小さく薫り高い無数の花……。それはペトルウシュカ屋敷の門の脇に咲き誇っていた木犀の花だった。
ニームは思わず空を見上げた。もちろん空から木犀が降るわけがない。スノウ・キリエンカが持つ呪具『花盗人』の力の事を思いだした。
「いい香りですな。私はどうにもこの香りに包まれた後でないと、冬を迎える気持ちになれません」
呆然としているニームに、モテアの娘の父親が背後から声をかけた。
「今の言葉……」
ニームとスノウの会話はロンドの耳にも届いていたはずだった。
「どういう意味だ？」
単刀直入なニームの質問に、しかしロンドは直接的な返答をしなかった。ゆっくりとニームに近づいた彼は、遠慮がちにそっと手を

伸ばしてニームの焦げ茶色の髪に絡んだ木犀の花びらを取ると、それをそのままニームに差し出した。
「あの子はニーム様をエスカ様の家族として認めたと言いたかったのでしょう」
「いや、しかし」
「ご存じのように公爵家は兄弟仲がよろしくありません」
「知っておる。エスカの野望もな」
「あの子はエスカ様ではなく、兄君のミリア様に命を捧げております。それだけの事でございますよ」
「あ……」
今のミリアに軍事的な力などがあろうか？それでも敢えてミリアを支えるということは……
「ミリア・ペトルウシュカ一人だけでは死なせないということか？追放程度で良いであろう？まさかエスカは本当に兄の命まで奪うつもりなのか？」
だが、スノウは言ったではないか。エスカについている限り、ニームは敵なのだと。さらに言えば、スノウのあの口ぶりからはミリアがエスカに勝てるとは思っていないようだった。
ニームはロンドを強い視線で射た。
「単なる仲の悪い兄弟というわけではないな？」
「さようですね」
ロンドはうなずいた。
「どちらにしろ私は命に代えてもエスカ様をお守りする所存」
「まさかスノウを手にかける事になるやも知れぬという覚悟があると言うのか？」
ロンドは同じように静かに頷いた。
「お前はそれで平気なのか、ロンド？」
「それはもちろん、平気ではございません。さらに言うならば、この屋敷の者はみんなスノウを家族として、友として慕ってくれております。私同様平気でなどいられますまい」

「ならば、なぜだ？なぜ止めぬ？家族であろう？友なのであろう？」
ニームのまっすぐな怒りの混じった視線を、ロンドは優しい微笑で受け止めた。
「エスカ様はご自身の大きな目標の為に生き、スノウは自らの気持ちの赴くままに生きる。ただそれだけのことです。誰もが同じものを見ているわけではございません」
「スノウは、ミリア・ペトルウシュカという男だけを見ている、ということか？それがスノウの生き方だというのか？」
「スノウの気持ちを抑え込んだままで、ここに止め置くのはもう限界でしょう。あの子は籠の鳥ではありません。もっともミリア様はスノウを籠の鳥にしておきたかったようですが」

ニームはそれ以上何も言わなかった。
差し出された木犀の花びらをつまむと顔を近づけ、すっと息を吸い込んだ。強い香りが胸一杯に甘く広がった。
風邪をひくからと、ロンドが部屋に戻るよう忠告するまで、ニームはそのままの格好でぼんやりとスノウの言葉をかみしめていた。
ニームが知識で知っている家族とは、こう言うものではなかった。憎しみも怒りもなく、それでも生死を賭して戦う家族など聞いたことがなかった。
友にしても同様だ。友であるから、いやあったからこそ袂を分かつ時には憎しみや怒りが倍加し、それこそが戦う意味となる。現に兄であるミリアと弟であるエスカのペトルウシュカ兄弟には怒りや憎しみがあると聞いていた。
いがみ合い憎しみ合い、争う当人同士はそれでいい。しかし周りの人間はスノウのような静かな心で家族や友の胸に剣を突き立てられるというのだろうか？

ニームはそんなことを延々と考え続けていたのだ。
ある意味典型的な現世の、それも俗と言っていい問題についてニ

ームがそこまで考える事は初めてだった。
自分の中で何かが少し変わったという自覚があった。そしてその理由をおぼろげながら特定もしていた。
そうなる原因がエスカ・ペトルウシュカという存在であることは間違い無い。
目的のためのもっとも有効な手段。ただそれだけの存在であるはずだった「駒」が、すでに駒でなくなっている事をニームはこの時はっきりと理解した。だがしかしそれについて疑問も否定も沸いてはこなかった。
ニームにしてみれば目的の為の手段であるから、その目的を果たす為にもっとも有効と判断した「縁」で、相手、つまりエスカを取り込むことには当初何のためらいもなかった。
貴族、それも政治的な価値が大きなペトルウシュカ公爵家の実弟であるエスカの正室には、それなりの身分の人間でなければ適当ではない事は常識として理解していたニームは、だから正室など最初から頭にはなかった。さりとてただの側女（そばめ）では意味がない。世間的に一定の身分として認知されている側室が最も適当な立ち位置だと判断すると、その懐に入ることを積極的に働きかけたのだ。人の筆頭と名乗る人間が、側室という言葉に何の拒否反応も示さないのは、そのような順列が彼女の価値観には存在しないからだ。現世の価値観に意味を見出さない……。それが賢者という特殊な存在であった。
五大老を操作することは、それほどの苦労はなかった。そもそもエスカは上官を通してバード庁に対し、自らの部隊に相当なバードの戦力を加えることを再三要求していたし、国王のエラン五世に対しては、「青田買いをされる前に側室にそれなりの人間を入れて、相対的な価値を上げておきたい」つまり青田ではない状態にかさ上げしておきたい旨を、こちらは学友、いや親友という立場を利用して個人的に上申していた。
さらに五大老と元帥庁はそれぞれ自分たちの力が及ぶ配下を、相手の最も近いところに置いておきたいという腹づもりがあった。

元帥庁はエスカを常に監視下に置いておきたいと考えた。だが五大老側の意向は、副官としてよりも、もっと生臭い立場である事を欲していた。それには男では役割があわない。

それら諸々の条件をたった一人で満たす人物、それがすなわちニーム・タ＝タンであったのだ。

バード庁としては「相当数のバード」など、軍に出したくはない。ニームであれば能力は高い。特級であれば一人でもいいだろうという判断が成り立つ。何より特級バードを軍に派遣するのは異例と言ってもいい人事である。エスカに対し恩を着せる事にもなる。そしてニームはそもそもドライアドの人間ではない。バード庁としては人員が減るわけではないのである。

元帥庁との関係を考えても正教会との意思疎通役としてニームはそれなりの役割を果たしており、配下である事を強く印象づけている。正教会からの派遣で実際問題としては煙たい存在ではあるものの、今のところそれなりに従順で、今までの派遣バードよりも「伝手」が多く、かなり役に立つと思っている。そのニームを副官、いや公式な幕僚長として側に付ける事は、エスカに対する監視を強めることにもなり、強いては政治的な態度を決めていないように見えるエスカを囲い込む役にも立つと考えたのであろう。

五大老に対しては、元帥庁よりも上位の教会関係者との橋渡し役を演じており、さらにニームを通じて教会との協力関係を保てば、来るシルフィードとの戦争時には有利に立ち回れるという約束を正教会のしかるべき立場の人間を立ち会わせてまで行っていたのだ。

「側室でよいから私を送り込め。そうすればエスカを取り込んでみせる」

もちろん五大老側がエスカにニームという首輪を付けさせる大義名分が「側室」を持て、で良いはずはない。したがって対外的には幕僚長という肩書きを付けたのである。特級バードならば、大佐という地位を与えることができる。幕僚長に大佐という高級軍人を付けるのも異例なことである。こちらもエスカに恩を売る理由にもな

る。

つまり、エスカに対して複数の貸しを作ることになるニームのその申し出を断る馬鹿は、五大老にはいなかった。ドライアド側に不利になる要件は少ない。ニームを通じて正教会は今度の大戦ではシルフィードの勝利はないと判断している旨を既に伝えてある。さらにある意味捨て身ともとれるニームの申し出は、あくまでもニーム個人の戦略などではなく「正教会」の指示という事になっている。

もちろん裏を取られても問題の無いような工作もニームは周到に行っていた。ニームは大賢者という正教会での立場を効果的に行使して、ニームの意向が表向きの正教会の最高位の立場にある座守（ざしゅ）よりもさらに上の意志決定機関のものである事が別ルートからもそれとなく漏れるようにしてあった。五大老や軍の関係者が正教会のどの人間と通じているのかを調べるくらいはたやすい事なのだ。そこにその手の情報を流すか、もしくは指示しておけば良いだけであった。

正教会でのニームの真の地位を知らないドライアド側の人間が、ニームの工作に気づくはずもなかった。

そもそもニームが《天色の？》と名乗らぬ限り、正教会の人間にもその正体が知れる事はない。賢者の現名などは座守以下、正教会の「表」の人間が知るよしもないことなのだ。

正教会が派遣したニーム・タ＝タンという現名のルーナーは、正教会にとっては単に「賢者会の命で送り込んだ配下のルーナー」以上でも以下でもなく、ただ「不可侵」の存在であるだけであった。

それら全てのお膳立て、つまり段取りは長くドライアドに入り込んでいるニームが、ドライアドの内情を掴んだ上で無理のないように徐々に行ったものである。

彼女は見事に焦らなかった。急く事をすれば、相手に疑心を生じさせる。目的がある潜入だけにもちろん急いではいたが、それでも確実に手順を積み重ねるべく行動をしていたのだ。

正教会、いや賢者会が、大賢者となったニームの部下として与えた賢者はたったの二名、それも末席であったが、ニームは部下が末席であることに対しては一切異議を唱えなかった。異議を唱え、好きに振る舞える大賢者という立場を利用する途を敢えて選ばなかったのである。

ニームはドライアドのバード庁に要請し二人の部下を特別神官として配置すると、お互いに現名で呼び合うように命じた。そしてその二人を効率よく使って思惑を徐々に形にしていった。

つまりは、それほど冷静で沈着、さらに言えば緻密で柔軟な戦略を構築できる分析力と行動力が備わっているという事である。特に頭脳の明晰さにかけては末席とは言え賢者という地位にあるリンゼルリッヒとジナイーダにして「見た事も聞いた事もない」と心底感服するしかないほどであった。

だが、数年がかりで進めてきた計画の大詰とも言えるエスカとの対面で、ニームは自分の中で何かが再構築されるのを感じていた。

再構築されたものはもちろん計画ではない。計画自体はまさに計画通りに進んでいる。いや。エスカとの会見は、むしろ計画以上に事がうまく運ぶ方に転んだとさえニームは思っていた。

だが、どうにも居心地が悪かった。

不安とも焦りとも違う、未知の感情が内側から湧き上がってきては、意味のない焦燥感をあおる。さらに、そのことを考えようとすればするほど意識が希薄化していくような錯覚に陥るのだ。

その事とは、もちろんエスカ・ペトルウシュカの事だった。

スノウの前でエスカに抱き上げられた時からなのか、握手をした時からなのか、家族だと言われた時からなのか、それはもうわからない。それら全てがきっかけだったのかもしれない。

確かな事は、それ以降エスカの事を考えようとすると頭がぼうっとして考えがまとまらなくなっている事だった。

屋敷の中でエスカの姿を見ると、無意識に顔が少し上気する。そ

して嬉しい気分と同時に気恥ずかしい思いが頭をもたげてくる。それなのにエスカの姿を目で追う自分が理解できない。

そして、そもそも一体なぜそうなってしまうのかがわからない。

だから、焦る。不安になる。

そうかと言ってエスカの事は考えまいとすると、今度はスノウの言葉と別れのシーンが浮かんでくる……。

その繰り返しだったのだ。

ニームのその状態は、成人に成り立ての娘としては全く取るに足らない、どこにでもあるありふれた話に過ぎないだろう。しかし、賢者、いや大賢者としては常軌を逸した精神状態であるという見方になる。

つまり、その時ニームは無防備に過ぎた。

ぼんやりとした様子で回廊を歩いていたから、リンゼルリッヒとジナイーダがいつの間にか後ろに控えていた事に気づかなかった。

いつもなら二人の気配を感じたら、ニームの方から報告はないかと問いかけているはずだったから、真後ろを歩いているにもかかわらず、何の反応もしない主人に不審なものを感じてリンゼルリッヒがが声をかけたのだ。

さすがに一瞬で我に返り、その後を取り繕ったニームだが、自室、それも自ら結界を施した閉鎖空間に入った事で、完全に警戒心が失せていた。

「どうした？まるで魂ここにあらず、と言った顔をしているぞ

だからその声が頭上から降ってきた時、不覚にもニームは小さく悲鳴を上げた。

「おいおい、大賢者ともあろう者が『ひっ』はないだろ？本当に一体どうしたんだ？」

思わず両腕で胸を隠してしゃがみ込んだニームに、頭上の声はあきれたようにそう言った。まだ若い男の声だった。少年と言ってい

いだろう。
　ニームはその時着替えの最中で、着用していたバードの白い執務服を脱いだところで、まったくの裸の状態だった。つまり、意識だけでなく体の方も完全に無防備な状態だったのだ。『蛇の目』と呼ぶ首飾りも『セ＝レステ』という名の儀仗を変化させた腕輪も、着替えにじゃまになるだろうと、少し離れた棚の上に置いてあった。

「セッカ・リ＝ルッカ！」
　そう呼ぶニームの声にはあからさまに怒気が込められていた。
「覗きとは、相変わらず悪趣味にも程がある」
「ご挨拶だな。いつも通り俺は気配は消さずにやって来たんだぜ？なのに服を脱いだままあられもない格好でぼんやり鏡を眺めてたのはそっちだろ？うっとりする程自分の裸がお気に入りなのか」
「黙れ、この下衆（げす）。この間は風呂場に現れたではないか。狙っているとしか思えん」
「やれやれ、言っておくが俺はお前の都合なんてどうでもいいんだよ。こっちの都合があるだけだ。そうだ、今度は便所に現れるかもしれないから、あらかじめ言っておくよ」
「な、なんだと？」
「それからこれは重要な事だけどさ」
「――何なのだ？」
「俺、お前の体には全然興味ないから」
「べ、別に私の体は貧弱ではないはずだぞ。確かに背は低いが、それ以外は普通より育ちがいいはずだ」
　ニームがそう言うと、セッカと呼ばれた声はため息をついた。
「いや、そうかもしれないけど、俺はそう言う事を言ってるんじゃないよ」
「では何の話だ。さっさと用件を言え！」
「そうムキになるなよ。大賢者ともあろう存在が、こんなつまらないからかいに全力で憤慨してる図なんて、賢者会の連中が見たらど

う思うかね？」
「賢者会にどう思われようがかまいはせぬ。それより何の用なのだ？」
ニームは相手が誰かを特定できた事でひとまずは動悸が収まった。だが、セッカ・リ＝ルッカの気配を察知できなかった事が不覚だった。
彼の言うとおり、いつものように不意に現れただけなのだろう。そしていつもなら、現れる前に気配でそれと知れるはずだったのだ。
ニームは意を決したように立ち上がると、胸を隠していた手を伸ばし、クロゼットの中に畳んでおかれている白い服に手を伸ばした。
それはバードの執務服でも、祭礼服でもなく、佐官用の軍服だった。胸章で大佐である事がわかる。
その厚手の軍服に袖を通しながら、ニームは努めて冷静な調子で頭上の存在に声をかけた。恥ずかしそうな態度を見せる事は、ニームには屈辱だと思われた。それは相手を強く意識する事と同じだからである。相手の事など意に介さないという態度をとる事が、ニームの精一杯の意地であった。だからできるだけ堂々と着替えを続ける事にした。
「私も暇ではない。年頃の娘の裸をのぞきに来たわけではないのだろう？」
「ご挨拶だな。お前に頼まれてた例の件の報告だ」
「ああ……そうだったか」
「『ああ』じゃないよ。でも、あれだ。ただもんじゃないね、あいつ。俺でも近づけないよ」
「ほう」
セッカの報告に、ボタンをかけていたニームの手が止まった。
「それに屋敷の地下に妙な部屋があって、この俺ですらその中に入り込めない。そこの中に籠もられたら一切感知不能になる」
「お前が手も足も出ないというのは痛快だな」
「それ、ドライアドの佐官用の服か？」

セッカは脈絡なく話題を変えた。
「いつもと同じ白だからわからなかったよ」
「白はバード庁所属である事を表すそうだ。要するに大佐や中佐と言っても実際の軍隊では客扱いで明確に区別されるという事だな。そんな事より前線でこんな服を着ていたら、ルーナーである事を敵にわざわざ教えて的にされるだけだぞ。全くドライアドの軍服は機能性という言葉とは最も遠くに位置していると言わざるをえんな」
「あはは。違いないね。将軍の軍服なんて、真っ赤だしねえ。それにしても、お前のその軍服姿には感心したよ」
「ふん、柄にもない。世辞などよせ」
「いや、勘違いするな。よくそんな小さな佐官服があったな？」
「これはきっちり採寸した専用品だっ！」
「ああ、わかった。合う寸法の服が無かったって事だな」
「お前は私を怒らせに来たのか、報告を持ってきたのか、どっちだ？」
「いや、そう興奮しなさんな。要するに『バカ殿』なんて嘘っぱちだって事だ。油断するなよ」
「――そうか。ただのバカではないだろうと思ってはいたが、単純な方法では排除は難しいということだな。まあ、その辺は実の弟が一番わかっているだろう」
「俺が気をつけろと言ったのはそう言う意味じゃないんだがな」
「どういう意味だ？」
「ぼやぼやしてると逆に足下をすくわれるぞって事だよ。お前達がやろうとしている事なんんか、おそらくあいつは先刻承知だろうよ。それに暗殺なんて正攻法もまず無理だな。正体不明の護衛が四人いるようなんだが、全員が相当なエーテルを纏ってる強力なフェアリーだ。しかもその道の専門のようだよ」
「その道？」
「人殺し」
「……」

「まあ、もっとも噂通りの『バカ殿』ぶりも嘘じゃないけどね。鉱山町の居酒屋の裸踊り大会は見物だったねえ。またそれが、上手いのなんの。その後、抗夫連中と大いびきで床でぐっすりご就寝。で、朝になってもなかなか起き出さないもんだから、店の女将さんに蹴り起こされてたよ」

「その手のうわさ話はよく聞くが、それだけなら憎めないただの愚者なのだがな」

「憎めないかどうかは別にして、事実、領民の人気はたいしたもんだよ。娼館の前を通ろうものなら、綺麗どころが大勢現れて拉致される程だ」

「そちらの人気か。兄弟揃って娼館通いが趣味とはな。まあ、腐っているとは言えエスタリアの領主だ。傾いたとは言え小金はいくらでも持っていよう」

「いや、それが……」

「ん？」

「ヤツは居酒屋じゃ、抗夫に奢ってもらっていた」

「はあ？」

「娼館でも『持ち合わせが無いからまた今度』と言って断ろうとする公爵に女共が言うには『殿様からお金をとる娼館なんて、このエスタリアにはありゃしませんよ』だそうだ」

「公爵ともあろう者が領民にたかっていると言うのか？」

「いや、本人には払う意志は大ありのようだがな。居酒屋でも公爵が金を払おうとしたら、抗夫や店の主人に本気で怒鳴られていた」

「ふむ。どうせ後で始末をしに来る者がいるのだろう」

「俺もそう思ったから、居合わせた店の常連にそれとなく聞いてみたら、『殿様が居るってだけで普段の十倍も人が集まってきて店は大もうけなのに、そんなありがたい人からお代をいただいちゃ、ご先祖様に申し開きが立たねえだろ？』だとさ」

「本当の話か？」

「俺もさすがに我が耳を疑った。しかしそう言われてみればあまり

一つの店に長居はしないし、何件もハシゴしてたのも、バカ殿はその辺、つまり集客を考えてやってるのかもしれないよ」

「ふーむ。そんなおとぎ話の中の登場人物のような領主がこのご時世に本当に居ようとはな……」

ニームはいつの間にかセッカの話に聞き入っていた。

「しかし、お前ならそんな無防備な状態のミリア・ペトルウシュカを仕留めるくらいは朝飯前ではないのか？」

「俺もそう思ったんだけどね」

セッカはそう言うとため息をついて見せた。

「最初に言った通り、そいつは無理だ。あの男は俺が普通の存在じゃないって事を気づいていた。いや、証拠などはないんだが。でも確信はある。間違い無いよ。あんな居酒屋の雑踏の中で、あまつさえしこたま酒を飲んでふらふらなのに、俺だけを特定して視線を合わせると意味ありげに笑うんだぜ。それも素面の目で、だ。俺とした事が、正直あれにはぞっとした」

「ふ。《月白の森羅（げっぱくのしんら）》などとたいそうな名を持つ賢者がただのフェアリーごときにうろたえるとはな」

「まあ、それでも俺はたいそうな名前を持つ大賢者と違って『ひっ！』なんて声は上げないけどね」

「やかましい！そこで三つ数えろ！数え終わる頃にはこの建物もろとも粉塵に変えてやる」

「とにかくそう言うわけだ。ミリア・ペトルウシュカ公爵は曲者だ。まっすぐな気質の弟とは全く異質な人間だという事は間違い無い。エスカに肩入れしてあのミリアという男と戦うつもりでいるなら、簡単な敵だなどと思わず、心してかかった方がいいよ。そうだな、シルフィードのバード長あたりと戦う心づもりで丁度いいんじゃないか」

「何を惚けた事を。こちらはすでに戦争規模の行動に出ようとしているのに、軍隊も持たぬ一人の人間に何が出来る？」

「さあ、それはどうかな」

「だがまあ、その助言は忠告として胸に刻んでおこう」
「勝手にするさ。それから、これは別件だ。正教会で妙な噂を耳にした」
「？？聞こう」
「《蒼穹の台》が前座に存在していないらしい」
「何？」
「《蒼穹の台》の守護、大賢者《菊塵の壕》が必死に隠しているようだが、俺が調べた限りでも前座に人がいる気配がないのは確かだ」
「――お前の事だから裏はとったのだろう？噂などどうでもいい。それを聞かせろ」
「まあ、急かすな。シルフィードの王宮内で客死したようだ」
「なんだと？」
ニームは姿は見えないとわかっていても、声のする天井に顔を向けると一点をにらみつけた。
「という、噂もある」
「三聖が？ばかばかしい。あり得ない」
「そうかな？三聖と言えど、死ぬ事はある」
「いや！」
ニームはセッカの言葉を遮るように強い調子で怒鳴った。
「三聖がたやすく死ぬものか！」
天井を睨み付けるニームの両の拳は、端から見ても痛いほどに強く握りこまれていた。
セッカはわざわざニームに聞こえるように大きなため息をついてみせると、興奮気味のニームに言い聞かせるような調子でつぶやいた。
「お前がそう思う気持ちはわかる。だがあまり興奮するな」
「興奮などしていない」
「忘れたのか？《蒼穹の台》が死んだと言われる場所には《深紅の綺羅》が居るんだぞ」
「何が言いたい？」

「あり得ない話ではないって事さ。あとはお前の想像に任せる」
「三聖同士が？何のために？」
「さあね。だけどもう一つ忠告しておく。お前は人としては類い希な存在と言っていいほどに優秀だ。だけど今の状況を客観的に見てもわかるだろう？動揺の制御がまだまだだぞ。普通の大人にも劣る。それはいつか大きな弱点になるよ。下手をすると大事な場面で取り返しの付かない事をしでかすぞ」
「余計な世話だ」
「余計なお世話なもんか。お前はこちらの思惑通りにちゃんと『性能』を発揮してもらわなきゃ困るんだ。何度も言ってるだろ、一蓮托生ってやつさ」
「一蓮托生などと口にするのは、お前の黒幕の正体を明かしてからだ」
「そいつは出来ない相談だ。言っているだろ、時が来ればわかるって」
「もういい。この話題は時間の無駄だったな」
「まあ、お前のその弱点についちゃ、エスカ・ペトルウシュカに期待しておくよ」
「どういう意味だ？」
「さあね。ただ、凶と出る可能性もあるからな。両刃の剣というやつだ。もちろん、吉と出る事を俺は願ってるよ」
「――話はそれだけか？」
「今のところはね。エッダに行くのならとりあえず《蒼穹の台》の件は頭の隅に入れておくんだね。たとえ噂だとしても、物事には意味がある。ましてや三聖の存在を知っている人間からしか出ない噂だという事を忘れるな」
「一応心に留めておこう」
「素直でよろしい。それより……」
「何だ？」
「下ばき、早く履いた方がいいんじゃないか？風邪をひくぞ。お前

の部下は二人ともエクセラーで、治癒能力は持っていないんだろ」
ニームは上着を羽織った後、ボタンをかける手を止めたままで、まだ下履きすら履いていない状態でセッカとの話に熱中していたのだ。
「い、いらぬお世話だ！」
慌てて棚からひったくるように下履きを掴むと、上着と同じ白いそれに乱暴に足を通した。そしてややダブつく裾を整えた後で、ニームは鏡を見て、細かい部分を点検した。
「さっきはああいったが」
セッカがそんなニームに声をかけた。
「嘘だろ？」
「何の話だ？」
「その服、寸法なんて計ってないだろう？どう見たってぶかぶかじゃないか」
セッカの指摘はまさに常識的な価値観に照らして正しい指摘だった。
ニームが着用した「ちゃんと採寸した」特務佐官用の白い軍服は、どう見ても一回り大きいようで、特に上着の肩は落ち、手を下げると袖は指先すら完全に覆うほどであった。
下履きはもともとゆったりとして足首を紐で締めるような作りになっているため、少々大きくても調整はできたが、体に合わない上着はさすがに借り物のようでみっともない事この上なかった。
「お前、少なくとも軍服を作る人間には歓迎されてないようだな」
「そもそも高級軍人の側女（そばめ）風情のくせにバードというだけで将校待遇だというのが気に入らないのだろうな。狭量な人間がそう思うのは自然なことだ。だがこの程度は何の問題もない。私を誰だと思っている？」
ニームは憤然とそう言い放つと、右手を横に伸ばして儀仗を取り出した。
「セ＝レステ」

そして少しの間何事かをつぶやくと、軍服に変化が起きた。ぶかぶかだった服が、一瞬で縮んだのだ。
「せっかくだ。ついでに『不滅』も施しておくとするか」
ニームはそう言うともう一種類のルーンを唱え、事が終わると姿見の前で一回りして全体を確認した。
「これでよし」
「『不滅』か。とんでもないルーンだな。さすがは《天色の？》を継ぐ者。あっぱれな能力と言いたいところだが」
「何だ？」
「才能の無駄遣い、という言葉を知っているか？」
「どうせこのルーンは私には一日に一度くらいしか使えん、たいして役にも立たぬルーンだ」
「だが、先代の《天色》でも使えなかったルーンだぞ」
「先代の事など私は知らぬ。実の姉とは言え、一度も会ったことがないのだからな」
「あはは。まあいい。じゃあ、今日のところはこれで引き上げるさ」
「ふん。まあ次に会うまで達者でおれ」
「あ、言い忘れた。言っておくが俺はペトルウシュカ男爵の閨（ねや）には一切入らないよ。《月白の森羅》の名にかけて誓おう。大賢者ともあろうお前のふやけた顔なんかとてもじゃないけど見たくもないからな。」
「な、何を言っている？」
「伝えたぞ。じゃあな」
「待て、セッカ！今のはどういう意味だ！」
しかし、うろたえたニームの声はがらんとした部屋にむなしく響いただけだった。彼女以外の人の気配は、既にその部屋から消えていた。
しばらく待ってもセッカの気配が戻らないのを確認すると、ニームは姿見の中の自分の顔を見た。
そこには頬が少し赤くなっている焦げ茶色の髪の小柄な少女がい

た。

# 第十八話　休日の刺客

ニームが公式行事用の軍服を取りにミュゼ王宮に行き、自室に現れたセッカの声と会話をした日から、五日後の事だった。

その間ニームは、出立の準備に忙殺されていたエスカとゆっくり話す機会がなかった。

ニームにはまだエスカに伝えねばならない重要事項が一つあったのだが、それを切り出せずにいた。リンゼルリッヒ・トゥオリラとジナイーダ・イルフランをエスカに引き合わせておこうと思っていたのだ。もちろん二人の正体も包み隠さず伝えるつもりにしていた為、二人きりになれる機会をうかがっていた。

想像以上に多く、そして些末な仕事の為にエスカは寝る間も削って働いていたが、屋敷内に居る限り、どれほど忙しい状態であっても、たとえ人を何人待たせていようとも、アンナばあちゃんが決めた食事の時間になると、エスカは必ず食卓に顔を出した。

ニームがエスカと話ができるとすれば、その時間しかなかったのだ。

食事が始まる十分前には、ニームはいつも必ず席に着いた。

その食事開始をじっと待つ姿勢のいい少女の姿は、既にエスカの屋敷では当たり前の風景の一つとして、使用人達に認知されていた。

彼らはその姿を見て、皆一様に優しい笑顔とともに目尻を下げる。

ニームはいつも決まって食事開始の五分前までは姿勢良くじっと正面の壁を見つめていた。そこには何枚もの絵が掛けられていて、どれもニームの気に入った絵だったから、退屈はしなかった。それらはエスカの兄、ミリア・ペトルウシュカの作品だと聞かされていた。ニームはミリアの筆による絵を見るのは初めてだったが、噂以上の才能を感じていた。どの絵にも生き生きとした人物が描かれていて、特に目に気品があった。

一枚の絵は花蔦が絡まったぶらんこに座る子供のアルヴを描いたものだ。それがスノウ・キリエンカであることは、モテアの髪ですぐにわかった。

ニームはその絵のスノウの笑顔が特に気に入っていた。

だがそれも、五分前になるとニームの様相は一変する。

とたんに落ち着きが無くなり、そわそわし出すと、さかんに壁に掛けられた大がかりな時計に目をやった。

それが食事二分前になると、今度は顔が赤くなってくる。

屋敷の使用人達は、その食事五分前からのニームの様子を伺いに、用もないのに食堂の近くにやってきては、落ち着かないニームの姿や赤くなってうつむいたり天井を向いたりする仕草を見ては、満足そうに仲間同士で囁き合う。

「なんてまあ、可愛らしいこと」

「エスカ様に会うのが本当に楽しみなのねえ」

「かわいそうだよ。仕事が多すぎるんじゃないか？」

「いや、エスカ様一流の作戦だね」

「作戦だって？」

「焦らして焦らして、焦げさせるつもりだろ？」

「おやまあ、あんな若い子にそれは酷ってもんだろ？」

そう言い合って、皆は優しい顔でもう一度様子を伺う。

「俺は単純に忙しいんだよ！」

そして食堂の周りに集まった彼らは、定刻の直前に現れた主人によって解散させられる。

それが、このところのペトルウシュカ男爵の屋敷での日課であった。

エスカが食堂に現れると、ニームは自覚のないまま、顔をパッと輝かせて立ちあがる。そしてすぐにうつむき、少ししてから顔を上げる。

それも、もう日課になっていた。

エスカはそんなニームににっこり笑いかけると、後ろに回って椅子の背を持つ。ニームはあらためてそこで椅子に腰を下ろすのだ。

「質問がある」

ある日の事。

準備がほぼ整った事を告げたエスカは朝食の後、ニームを連れ出した。

これはその時の会話、いや長い沈黙の後にニームがしびれを切らしたように漏らした言葉であった。

「これは面白いのか？」

屋敷の背後にある森の中の開けた場所に池があった。エスカはニームをそこに連れて行ったのだ。

徒歩で三十分あまりの距離にあるその池は、ペトルウシュカ家の所有池だという。比較的大きな池で、流れ出る川が数本あった。水が湧出する池という証拠であろう。そしてペトルウシュカ男爵家はそこでは鱒の養殖をしているのだという。

その池に突き出た桟橋の一つに腰をかけ、エスカは釣り糸を垂れていた。

そのすぐ隣に座っているニームも、同じような格好で釣り糸を垂れていた。

そうやって、すでに数十分が経過していたが、水面に浮かぶ二つの浮きは何の合図も寄越さず、時折気持ちのいい風が水面を撫でる時に、多少揺れるだけであった。

「退屈か？」

ニームは首を横に振った。

「退屈ではない」

「なら、いいじゃねえか」

「面白いからやっているのではないのか？」

「いや、釣れたら面白いんだが、つれないと面白くねえな」
「言っている事がよくわからん」
「釣りは初めてか？」
「無論だ」
「なら、釣れなきゃ今日はメシ抜きだ」
「言っている意味がよくわからん！こっちは初めてだと言っている」
「初めての奴が本気で釣るには、それくらいの危機感がいるんだよ」
「いや待て。私は育ち盛りだぞ」
「だったら二匹でも三匹でも食えばいいさ。さっとオリーヴオイルで焼いて上からジュッとライムの絞り汁をかけると、これが天国的にうまいんだぜ？」
　ニームは思わずその情景を思い浮かべ、ゴクンとつばを飲み込んだが、あわてて首を横に振った。
「初めてなのに、三匹も四匹も釣れるわけがなかろう？」
「お前、四匹も食うのか？」
「そこではないだろう！」
　エスカは気色ばむニームの頭に手を置くと、優しく撫でた。
「ご、ごまかされんぞ。私を誰だと思っているのだ」
「『釣れるわけがない』なんて決めつけたら釣れるものもつれなくなっちまうだろ？」
「あ……」
「俺に言わせりゃ、お前がこれからやろうとしてる事は『四匹も釣れるわけがねえだろ！』の自乗値ってなくらいの大事だぜ。いや、十匹かもしれねえな」
「う……」
「俺がやろうとしてる事も同じさ。時々じゃねえ。いつだってそうだ。『ンなもん、出来るわきゃねえだろっ！！』って大声で叫んでテーブルを殴り壊したい気分になる」
「……」
「出来るかもしれないから、やるんだろ？」

ニームは首を横に振った。
「『出来るかもしれない』ではない。やるのだ」
エスカはその言葉を聞くと、座ったままでニームの肩を強く掴むと、抱き寄せた。
「いい返事だ」
「おい、何を」
突然の事にうろたえたニームは思わず持っていた釣り竿を落とした。
「あっ」
水面に浮かぶ釣り竿に手を伸ばしかけたニームはしかし、エスカにしっかりと肩を抱かれて身動きがとれなかった。
「動くなよ。そして振り返るな」
「え？」
エスカの口調ががらりと変わっていた。それは明らかに異変を伝えるものだ。
「どうやら退路を断たれたな」
ニームは顔をゆがめると唇を噛んだ。
（まただ）
ニームはまた周りの気配を感じる事が出来なかった事を恥じた。だが、すぐに通常の思考力を取り戻したニームは、エスカの警句の意味とその背景を推理・把握した。

エスカには政敵が多い。たいした爵位もないのに、若くして国の中枢に入り込む勢いが強すぎたのだろう。本人の外交手腕の高さも万能というわけにはいかない。ましてや人間の心の中にある嫉妬や憎悪、憤怒といった感情は根源的なものだ。エスカが外交関係を築く前にそれらの感情を育てた人間を全て把握するのは現実的ではない。さらに言えば顔見知りになり、二三度話をしたからと言って、それが確実に友好関係になると考えるのもあまりに楽観的に過ぎるだろう。特にエスカの場合、その才能だけならばまだしも、容姿、

とくにその美貌が友好関係を築く為の障壁になる事も多々あった。有り体に言えば相手がエスカに対して「面白くない」という感情を持つのである。

自分の大切な娘や、ましてや妻が、国王のお気に入りという武器で「伸して」来ている若造に魅入られたりすれば、それを愉快に感じる方がおかしいと言うべきだろう。

もちろんそれらの感情が暗殺行為にまで発展する事はまずない。エスカの人脈と背景にあるペトルウシュカ公爵という血筋と名前だけで、「敵になるよりは味方になりたい」と計算する「大人」が大半だ。

さらにエスカは誰であろうと相手に対しておよそおごった態度をとる事がない。どのような相手であろうと、名乗り合って挨拶をし、その素性がわかった相手の家にはその日のうちに。その日が無理な場合、遅くとも翌日にはペトルウシュカ男爵の屋敷から使いが走る。エスタリアの名産品や、新鮮な鱒などの「ちょっとした」挨拶の品とともに。

エスカの評判がいいのは、その「お近づきのしるし」であるところの付け届けがあからさまに金銀や宝石、豪華な装飾品等ではない事である。身分の上下に関係なく、「ちょっとした」ものが贈られる。鱒などは本人自ら「朝の散歩の途中、供の者と釣ったので」という当たり障りのない社交辞令とともにやってくる事も多かった。

貴族や政治家、高級軍人との関係構築を積極的にはかる者として、それは金額的にはきわめて質素なものと言えるが、効果は意外に大きなものだった。エスカの行為が新鮮であることに加え、彼が持ってくる「ちょっとしたもの」は、どれも高価でも豪華でもないが、良質で、そして多くは口に入って消えるものだから、評価がしやすい。また、簡単に評価出来るものだけに、「評価を聞くためにもう一度会う」という口実をも作りやすいのだ。

周到なエスカである。相手の好みを事前に調査した上で「ちょっとしたもの」を選ぶわけであるから、不興を買う事はまずない。

したがって、次に会う時には良くて笑顔。悪くても社交辞令としての礼の言葉を得ることはできるのだ。

気に入ればよし、気に入らなければさらにいい。なぜならそこから次の話に踏み込めるからだ。ペトルウシュカ男爵家所有の鱒池の鱒が駄目なのならば、どこの地方の鱒が好みなのか？生で駄目なら燻製はどうか？鱒に合うワインであればどうなのか？

相手の嗜好を知る事は相手の素顔や人となりを知る第一歩でもある。どちらにしろエスカは「次」の行動を厭わない。

もちろんそれらエスカの人脈作りはロンドという人物が後ろにいる事が前提であった。いや、ロンドと彼が率いる屋敷の配下全員が主人の「武器」であると言っていいだろう。

そうやってエスカは長くミュゼにあって、多方面から自分の立ち位置を強固なものにしていたのだが、出る釘は打たれるたとえ通り、エスカに危機感を感じる者が少なからず存在する。今ではさすがに「敵」の正体はある程度把握していた。対処についてもその戦略・戦術は既に策定済みの段階であったが、それを実行に移す事については時期尚早と判断していた。

だが、ここへ来て急激な動きがあった。もちろんエスカにとってである。

大佐から少将に二段階階級が上がった事に加え、シルフィード王国前国王、アプサラス三世の国葬といえる「大葬」に参列する重要人物の付き人として任命されたわけである。事を済ませて帰国した暁には、子爵、いや伯爵位を下賜されるのではないかという噂がまことしやかに囁かれていたのである。

伯爵位はともかく、子爵になる事は既定であった。それは過去の事例からも明らかなのだ。

言い換えるなら「五大老が後ろ盾についた」という事を示すそれらの事実は、ドライアドの政（まつりごと）の世界においては大きな事件なのである。

こうなってしまったからには、エスカの政敵が選ぶもっとも短絡

的な手段がエスカという存在そのものを消してしまう事である。

過去にもエスカの周りには暗殺未遂事件が何度もあった事は、ニームもエスカを調査している途上で情報として掴んではいた。

エスカから公安に対しては一切報告が無いために、それらの情報から「噂」以上の信憑性は得られなかったが、ニームは全て事実であろうと判断していた。

そしてその裏付けが今、そこで成されようとしていた。

ニームは右手を水平にして儀仗を取り出そうとしたが、エスカは「よせ」と言ってそれを制した。

「なぜだ。白昼堂々と将軍を暗殺しようという、あらゆる基準を照らし合わせてみても極めて頭が悪いと言わざるを得ぬ輩(やから)だぞ?私がさっさと滅してやろう」

「相手はルーナーだと思うか?」

エスカはニームにそう尋ねた。

ニームは左右に一部だけ長く伸ばしている髪をまとめている細い布に手を当てるようにして周囲の気配を深く読んだ。おそらくその布の一つには気配を探知できる精霊陣が描かれているのであろう。

「ルーナーはいない。フェアリーはわからんが、相手はざっと十人だな」

「そのくらいだったら、お前が出る幕じゃねえよ。ここは俺に任せろ」

「お前がやるよりも私がルーンを唱える方が早い」

「いや……」

エスカはニームの肩に回した手を緩めると、ポンっと頭を優しく叩いた。

「お前は俺の秘密兵器だ。お前が力を使っていいのは俺が死にそうになってからだ。約束しろ」

「なぜだ?ここでお前が戦うのは合理的ではない」

「この場だけを考えると合理的じゃねえように見えるかも知れんがな、どこかで俺達の事を見極めようとしている奴が居たらどうする？俺が連れている女が、ただのバードどころじゃねえ強力なルーナーだとわかると、次は周到な準備をされかねねえだろ？そうなる方が面倒だ」

「そうは言うが、お前が一人で戦おうと言うのか？相手は十人もの刺客だぞ？剣の腕前は次席だったのだろう？」

ニームの頭上に、今度はげんこつが落ちた。

「ぐっ」

「うるせえっ。人が気にしてる事を」

「何をする、この私を誰だと思っているのだ」

「澄ましていると近寄りがたい美人だが、しゃべらせると意外に可愛い、俺の大事なニームだ」

「え……」

エスカの言葉はニームを数瞬間、凍り付かせるのに充分な威力を持っていた。

「余計な心配はするな。安心しろ。俺の剣はそんじょそこらの奴らより数段上の、言って見りゃ規格外の腕前だ」

「だが、次席だったのだろう？」

「主席の奴は規格の桁が違ったんだよっ」

「自信が、あるのだろうな？」

エスカはうなずいた。

「なあに、こんな時に身内一人守れないような人間にこの先なんぞあるものか」

そう言うと、エスカは釣り竿を竿受けに丁寧に据え付けると、無造作に立ち上がった。

「まあ、誰にも気づかれない『おまじない』をかけられる事についちゃ、やぶさかじゃねえけどな」

手をさしのべてニームが立ち上がるのを手伝いながら小さくそうつぶやくと、エスカは背中を向けたまま、よく通る声で桟橋の取り

付きに居る「賊」に声をかけた。
「何の用だ?せっかく甘い時間を楽しんでるところに、無粋過ぎやしないか?」
賊からは返答がない。
エスカは自分が楯になるような格好で、小さなニームを真後ろに隠すと、ようやくその賊達に顔を向けた。
敵の数はニームの言うとおり、十人だった。
服装もばらばらで、なおかつ良い身なりのものはいない。全員が剣を腰に差しており、射手が一人もいなかった。
エスカはそれだけを見て、相手の素性を理解した。
「どうだ?交渉と行こうじゃねえか?」
エスカは両手を広げると、今度はそう切り出した。
賊達は不審げな顔で互いに顔を見合わせていたが、その中の一人が初めて声を出した。
「この期に及んで何のつもりだ?」
「見たところ、お前達は金で雇われたんだろ?俺を殺すために」
エスカの問いかけには、しかし誰も答えなかった。
「まあ、たぶん顔も身分も伏せた『やんごとなき家の従者』あたりにうまい話を持ちかけられたってところだろ?そこで、だ」
エスカは十人もの刺客を前に全く落ち着いた態度で、微笑さえ浮かべながら話を続けた。
「雇い主が誰だかわからない奴にそこそこの金で雇われたんだろうが、俺が思うにおまえら、事が済んだら今度は口封じされるぜ。お前らを雇った奴から、な」
エスカの言葉は賊達の動揺を誘った。
それを見て、エスカは追い打ちをかけた。
「そいつの十倍払おう。もちろん半金だけ前払いなんてケチな事は言わねえよ。お前らもたぶんもう知ってるだろうが、俺の屋敷はすぐそこだ。耳をそろえて先払いって奴だ」
「俺達を雇って何をさせるつもりだ?雇い主を捜して殺せなんての

はお断りだぜ？何処に行けば会えるのかもわからねえんだ」
「おいっ」
一人がそう叫ぶと、誰かがそれを制した。
「いらぬことを言うな」
「はした金で何処かの誰かに雇われて、半金を受け取る前に殺されるのがいいか、その十倍の金を受け取って、これから護衛として三食付きで俺の下に付くのがいいか、考えるまでもないと思うがな？何せ俺はドライアド軍の将軍様だぜ？名前も素性も確かなもんさ」
「惑わされるな。ここで逃がしたら、間違い無くこいつの手の者に殺されるぞ。どこの世界に自分を殺しに来た人間を本気で用心棒に買収しようなんていう奴がいるのだ？」
やや士気が乱れた『賊』の一番後ろにいた体格のいいデュナンは、大きな声でそう言い放つと腰から剣を抜き、その切っ先をエスカに向けた。
エスカはその男をにらみ据えながらも、さらに言葉を続けた。
「なるほど、お前が見届け役か。俺が殺された後、後ろからそいつらを斬り殺す役だな？」
「なんだと？」
エスカの言葉に、賊達全員がその男を振り返った。
その時、背中に小さな手の感触を感じたエスカは、バネがはじかれたかのような勢いで、賊の中央に切り込んで行った。

エスカは早かった。
風のフェアリーでもない『ただの』デュナンだったが、本人が自己評価するだけあって、剣技の方は相当のもののようだった。
剣を抜いたエスカが、桟橋の取り付きにたどり着いた時には、事態の変化に気づいた賊達はようやく剣の柄に手をかけたところだった。
「うぉりゃあああ」
気合い一閃、袈裟懸けに切り下ろした剣は賊の顔面に深い傷をつ

けると、今度は上方に跳ね上がった。その勢いで隣にいたもう一人の脇腹が鈍い音を立て、一瞬でその場に二人分の血しぶきが上がった。

「俺はエスカ・ペトルウシュカ。レナンスと互角に渡り合った事もある人間だ。命が惜しくない奴はかかってこい。長生きしたい奴はこの場を去れ！」

大声でそう叫びながらも、エスカの剣はさらにもう一人の腹をえぐっていた。

あまりの早技で味方が倒されたのを見た賊は、当然ながら混乱した。もとより統率などとれている集団ではない。おそらくはエスカに最初に斬りかかった者にはさらに相応の褒美をやるなどとけしかけられていた程度であろうから。

三人を倒した時点で、エスカは桟橋の方へ一歩退いた。

ニームの楯となる姿勢を見せると同時に、細い桟橋にいる限り、エスカと剣を交える者の人数を絞り込む事ができるからだ。

さらには、いざと言う時にニームの側にいる方が、ニームにとっても都合が良かろうと判断した為でもある。

「ひるむな。敵は一人だ。向こうの女は後回しでいい」

エスカは、自分の持つ最大限の実力を見せつけていた。さらにその剣技に箔を付けるために「レナンス」という言葉を使って見せた。

もちろん彼の言うレナンスとはアキラ・アモウル・エウテルペの事だったが、「互角に渡り合った」というのは真っ赤な嘘であった。

それなりに相手がひるんでくれれば戦いは少しでも有利になるだろうと思って「ついでに」言ってみただけであったが、言った後でエスカの脳裏には憤然としたアキラの顔が浮かんだ。

（この事は内緒にしておくか）

そんな事を考えているうちに、賊が二人、同時にエスカに斬りかかってきた。

桟橋の幅を考えると、大の大人二人が並ぶのが限度である。賊達

は互いの動きを合わせて、エスカに斬りかかってきたのである。
エスカの脅し言葉はあまり効果がなかったと言う事であろう。エスカの剣技を見ても逃げ出そうとしないのは、彼らなりに腕に自信があるというよりは、多勢に無勢という戦力差の為であろう。
斬りかかってきた一人の足を片足で払いながら、エスカは振り下ろされる剣を受けた。勢いをつけて向かってきたものの、エスカに足払いをっくらった男は見事に湖に落ちた。桟橋と水面との距離を考えると這い上がる事は不可能で、いったん岸まで戻る必要があった。
エスカは落ちた賊の事は頭から切り離すと、目の前の見るからに力の強そうな男の剣に押されつつも、隙のある鳩尾を膝で蹴り上げると、思わず下げたその頭へ容赦なく剣を振り下ろした。そこへ新手の二人が襲いかかった。
一人の剣は受ける事が出来たが、もう一人が放った横からの切っ先はよけきる事が出来なかった。
（しまった）
エスカが思ったよりも敵の腕は達者なようで、それはこういう仕事を日常的にこなしている事を証明しているようなものだった。
エスカは賊の剣が脇腹をえぐる感触に、思わず片膝をついた。
そこへ容赦なくもう一撃が、今度は頭上から振り下ろされた。だが、エスカはそれを間一髪でかわすと、相手の懐に飛び込んで剣を突き立てた。
うめく相手を蹴り倒し、その反動で深く突き刺さった剣を抜こうとしたところに、もう一人の剣がためらいなく振り下ろされた。それはエスカの手元を正確に狙っていた。
エスカは迷わず剣を握る手を離すと、後ろに飛び退いた。
懐から懐剣を取り出す。柄に赤い薔薇のクレストが見えた。
「その傷でそこまで動けるのはほめてやろう。だが、もう観念しろ」
目の前の賊はそう言うと、およそ武器になるとは思えない懐剣を構えながら脇腹を押さえているエスカにそう言った。

さすがのエスカも、その時にはそうとうに息が乱れていた。大きな呼吸をしながらも、しかしエスカはひるまなかった。
「六人いっぺんってのは、新記録だぜ。記録更新に貢献したいなら、向かって来いよ」
「ふん。強がりはよせ。その懐剣を捨てて、おとなしく俺達に切られるなら後ろの綺麗なお嬢さんの命だけは助けてやってもいいぜ」
先頭にいる賊はそう言うと、エスカの後ろで仁王立ちになって賊を睨み付けているニームをアゴで示した。
「泣きも叫びもせず、俺達を睨み付けてる気の強そうな顔がいい。せいぜい俺達で可愛がってやるさ」
「くっ、この下郎が……」
「動くなよ、ニーム」
エスカは後ろにいるニームに鋭くそう言った。
「しかし！」
「心配すんな。こいつらの汚ねえ指一本、お前に触れさせたりしねえよ」
「まだそんな元気があるとはな。さすが気位だけは高い貴族の坊ちゃんだ」
男はそう言うと、横にいるもう一人の賊に目配せした。
「いいか、俺が合図したら一斉に斬りかかるぞ。あいつはもう、まともに剣を受ける武器もねえ」
隣の男は眼をぎらぎらさせてうなずいた。
エスカは脇腹を押さえながら、間合いを計っていた。
一人の腹を突いて、その隙に剣を奪うつもりにはしていた。だがその間のもう一人の剣をどうやってかわすかが、問題だった。
だが、もちろんエスカの考えがまとまるまで相手が待ってくれるはずもない。だいたいエスカの息が整うのを待つ方がばかげているのだ。
賊達は、間をおかずに一斉に斬りかかってきた。
（くそ。保つか？）

エスカが相手に合わせ、身をかがめて足を一歩踏み出したその時、エスカの目の前を赤い光が横切った。

勢いを付けて走り出そうとしていたエスカはかろうじて踏みとどまった。

桟橋の上、今確かに存在していた三人の敵は、跡形もなく消えていた。

いや、桟橋の横で何かが落ちる音が聞こえた。間違い無く、賊達は湖に落ちたのだろう。

エスカは一歩、二歩と後退しながら、湖の方へは目をやらず、前方を注視していた。

新手の登場は明らかだった。それも、フェアリーかルーナーであることはエスカでなくともわかった。炎の力により、賊は一瞬でその場から排除されたのだ。

湖に落ちた賊の様子を確認するまでもなく、あの炎が直撃したのなら、無事でいるわけがなかった。岸に向かおうとする水音が聞こえない今、問題は桟橋の取り付きに立つ二人の人物だった。

エスカは彼らが手に持つ儀仗を確認すると、ニームを完全に自分の後ろ側に隠した。

「すまない」

謝る声が、エスカの背後から聞こえた。もちろんニームがつぶやいたのだ。

「え？」

意外な言葉に、エスカは思わず視線を後ろに向けた。

「彼らは彼らの仕事を忠実にこなしただけだ。エスカの意向を伝える時間がなかったから、仕方がないのだ」

エスカはその言葉でほぼ理解した。

再び二人のルーナーの方へ顔を向けると、そこには片膝を付いて頭を下げている男女のデュナンがいた。そして、彼らの後ろには微

動だにしない一人の賊、例の、一番後ろで全員を先導していた大柄なデュナンの男がいた。
「仲間、か」
「紹介しようと思っていたのだが、なかなか機会が無かったのだ」
エスカはため息をつくと脇腹にあてていた手を離した。服が無残に切り裂かれていたが、そこには血の跡はなく、あらわになった脇腹にはかすり傷一つ無かった。それはもちろんニームがかけた強化ルーンのおかげであった。
「正教会賢者《黄丹の搦手（おうにのからめで）》」
「同じく《薄鈍の階（うすにびのきざはし）》」
「また賢者かよ」
片膝を付く二人の前まで近づいたエスカは、名前を名乗る二人の賢者を見下ろしながら大きなため息をついた。
「まずは顔を上げてくれ。礼を言うのはこっちなんだからな。本当に助かった」
エスカの言葉に、しかし二人の賢者はまったく姿勢を変えようとはしなかった。
「よい。顔をあげて立ち上がってくれ。ペトルウシュカ男爵は公式の場以外では市井の民のような応対を好む」
ニームの言葉に、二人は顔を上げ、立ち上がった。
「それから、男爵は正教会での名である賢者の名も自らはあまり口にしたくはないそうだ。現名を名乗るがいい」
「ああ。妙な色のついた名前はどうも、な」
エスカはニームに微笑みかけると、小さくうなずいた。言いたい事を言ってくれた礼であろう。予想以上に繊細に気を回す事ができる少女に、エスカは驚いてもいた。それは既に立派な副官の貫禄であった。
「私はリンゼルリッヒ・トゥオリラと申します。以後、お見知りおきを」

リンゼルリッヒはそう言うと会釈をした。
「私はジナイーダ・イルフラン。我らは今後、お二人の護衛役とあいなります」
ジナイーダが続いた。
「我らは主である大賢者に随行する者。現世では特級バード付きのドライアド特別神官として宮中に入っております。マーリンの名にかけて、ペトルウシュカ男爵の御身をお守りいたします」
「なんだよ、お前にはいい仲間がちゃんといるんじゃねえか」
エスカはニームにそう言った後で、にっこり笑ってリンゼルリッヒに右手を差し出した。
リンゼルリッヒは面食らって差し出された手とエスカの顔を見比べた。
「俺の事はいいからさ、お前達はこれからもニームを守ってやってくれ」
「え？」
「それから、俺の事は男爵とかじゃなくて、エスカでいい。よろしく頼むぜ、リンゼルリッヒ」
リンゼルリッヒはチラリと主人の顔をみやった。驚いた事にニームは微笑を浮かべていた。それも見た事がないような穏やかで、そして少し誇らしげな微笑だった。
その後少し目を伏せたリンゼルリッヒは、大きなため息を一つはき出した。
「リリ、と」
「ん？」
「私の事はリリとお呼び下さい、エスカ様」
そう言うとリンゼルリッヒはにっこりと笑って差し出されたエスカの手を握った。
「それでは仰せに従い、我が主ニーム様を護衛する『ついで』に、全力でお守りすることにいたしましょう」
「私もジーナでけっこうです、エスカ様」

ジナイーダも優しい微笑を浮かべると、エスカにその白い手を差し出した。

今度はニームが少し驚く番だった。二人の部下のそんな笑顔を、彼女が見るのは初めてだったのだ。

エスカは二人の言葉に苦笑しながら肩をすくめると、それでも嬉しそうに二人と握手を交わした。

ドライアドの国王名代の一行が首都ミュゼを発ったのはそれから五日後、年が明けてそうそうの事であった。

# 第十九話　エイルの選択

《真赭の頤》ことシグ・ザルカバードは「心配はない」と言った。
たった一言つぶやいて、そのまま再び意識を失った瞳髪黒色（どうはつこくしき）の少女の手を取り、その名を叫ぶエイル・エイミイに。

「今、こいつは……《白き翼》って言ったのか？」
シグ・ザルカバードはうなずいた。
「それが、この方の真の名だ」
「それがエルデの、賢者の名？」
エルデに何度聞いても教えてはもらえなかった賢者の名。
回避は不能だったとは言え、名乗らなかったが故に結果としてカレナドリィの命を奪う事にもなった、曰く付きの秘められた名前だった。
賢者としての権力を行使する際にその名を名乗ってさえいれば、ラウ・ラ＝レイがエルデに対して偽物賢者の疑惑を持つことはなかったはずだった。
そこまでして執拗に隠し続けた、そのあまりに重いはずの名前が、今あっさりと本人の、いや「本体」の口から告げられたのだ。
エイルは体の力が抜けていくような気がした。
「なんだよ。簡単に言えるんじゃないか。だったらなぜ、コイツは自分の名をあれだけ秘密にしてたんだ？」
シグはじっと黒髪の少女を見つめたままだったが、エイルのその問いには少し間を置いて答えた。
「今となっては決して口にしてはならぬ名だからだ。その名を知ったが為にすでに四人、いや五人の賢者が命を落とした」
「なんだって？」
エイルはアルヴである大柄なシグを仰ぎ見た。
「本来であれば、その名を聞いたお前達を二度と現世（うつしよ）に返すわけに

はいかんのだが、もはやその裁定もこの方に委ねよう」
「一体どういう意味だ？全く話が見えない」
「お前ごときが知る必要はない」
エイルはムッとしたが、シグの表情を見てこれ以上の質問は無意味だと悟った。
シグのそれはエイルが知っている賢者の物言いだった。普通の人間に対して相手の人格というものをおよそ尊重しようとする気持ちが感じられない、無機質な雰囲気が漂っていた。
（後で直接本人に聞いた方がいい）
エイルはそう判断した。

一連の急な展開が一段落ついたことで、エイルの頭の中に、ようやく現状を整理する余裕が生まれてきた。
そうなると頭をもたげるのは、比較的優先順位が低そうなものばかりだった。何故なのかはわからない。重要な事は後で本人に聞こうと思うと、後に残るのは理屈ではなく感情が生み出すものになっていく。
だが、それはエイルにとっては極めて重要な問題であるのは確かだった。
「今更だけど、この子、女の子なんだよな？」
「何を言っている？」
エイルの疑問に、シグは怪訝な顔をした。
「妹の記憶もそうだけど、そもそもこいつはどう見ても女だろ？」
「見ての通りだ」
シグの言うとおり紗（うすぎぬ）を一枚まとっただけの体はエイルには目のやり場に困る物体で……つまりはどこからどう見ても「それ」は女だったのだ。
エイルにとってそれが重大な問題だった。
ある意味どうでもいいような些細な事も全て含めてエイルの頭の中には様々な記憶が噴出し、今まさに混乱の極みにあった。

思い起こせば、確かに男というには妙なそぶりが時々あったような気はする。しかし、それは今になってみれば、と言う話である。今の今までエルデは男なのだと信じて疑わなかったのだから。

だが……。

エイルは思い出していた。エルデは一度たりとも自分の事を男だと言った事は無かった。もちろん女だと言った事も。

彼は頭を抱えて目を閉じると何かを振り落とすかのようにその首を左右に振った。だが、もちろんそれで混乱が振り落とされるわけではなかった。エルデが少女であった事実もそうだが、エルデの意識が体から出ていった後に感じた違和感が、どうにも気持ち悪かった。

「もう一度聞くけど、本当に『これ』が……エルデ・ヴァイス？」

そう言ってエイルは大賢者を振り仰いだ。

「ならばもう一度答えよう。この方はマーリン正教会の賢者、現名をエルデ・ヴァイスと言う」

「この方？」

違和感の一つがこのシグの言葉遣いだった。大賢者の言葉の不自然さに改めてエイルは違和感を覚えた。

だが、それよりも先に確認したいことがあった。

「エルデは本当に眠っているんだよな？」

シグはうなずいた。

「大丈夫なのか？」

エイルはエルデとシグを交互に見比べた。

「大丈夫かと問われれば、まずは何を持って大丈夫というのか、その定義の話からせねばなるまい。だが私はお前とそのような話をするだけの忍耐は持っておらん。少なくとも時間が経てばその瞳髪黒色の少女は再度目を覚ます。それは請け合おう。長く離れていた魂が肉体に戻ったのだ。両者がなじむまでには今しばらくかかろう」

大賢者はそれだけ言うと儀仗で扉を指し示した。

「無駄な話はその辺でよかろう。ファランドール・フォウからの迷い子よ、急ぐがいい。異世界に通じるこの扉はそう長くは保たん。エルデ・ヴァイスの目覚めをのんびりと待つ時間などお前にはないのだ。彼女には私がついておる。お前は己が本来あるべき世界に戻るがよかろう」

エイルはその言葉に、再度扉とシグを見比べた。そして今度はアプリリアージェ達の方へ視線を向けた。

そこには心配そうな顔をした旅の仲間がじっとエイルを見つめて立っていた。

「リリアさん……ファル……」

エイルは視線をシグに戻した。

「少しだけ話がしたいんだけど」

だが、大賢者は首を横に大きく振った。

「何度も言わせるな。そのような時間はもうない。戻りたくば急げ」

エイルは唇を噛んだ。

エイルにとってル＝キリアは、はじめは敵と認識した相手だった。だがその後、運命のいたずらで苦難をともにする事になり、やがて掛け替えのない旅の仲間となっていった。

そう、大事な仲間だった。

別れるのは当然ながら辛かった。しかもその別れはあまりに突然の話で、気持ちの整理などしている余裕すらない。

フォウに戻る前にゆっくりと話したい事が、聞きたい事が、山のようにあるような気がした。

だが、その場でエイルが思いついたのは、つまらないありきたりの言葉だった。アプリリアージェが「誰にでも使えるルーン」と呼ぶ種類の言葉だ。

「ありがとう。今まで本当にお世話になりました」

エイルはアプリリアージェ達の方に顔を向けてそう言うと両腕を体の横にぴったりとつけたまま、腰を深く曲げて深くお辞儀をした。

精一杯の感謝と、言葉にならない気持ちを込めて。
そして彼らの顔を敢えて見る事をせず、エルデが眠る寝台を背に、二つの世界の境界である扉へ向かってゆっくりと歩き出した。
意を決して。

「エイル君」
その姿を見てアプリリアージェはためらいながら声をかけた。シグはそれに対して特に何も言わなかった。
エイルは呼ばれて立ち止まると、少し迷ったようだったが、ゆっくりとアプリリアージェ達を振り返った。
「リリアさん。それにファル。今まで、本当にありがとうございました。オレ……」
アプリリアージェは微笑んで小さくかぶりを振った。
呼び止めてみたものの、実のところアプリリアージェにも今エイルに掛けるべき言葉が思い浮かばなかった。
この「時のゆりかご」と呼ばれる場所にたどり着いてからの展開はアプリリアージェにとってもあまりに急にすぎた。
エイル・エイミイは彼があるべき場所であるファランドール・フォウへ帰る。
その認識すら不確かで、まるで誰かの夢の話を聞いているような気持ちだった。

後のことは……。
だが、アプリリアージェはその感傷にも似た気持ちを振り解こうとした。
そう、後のことはファランドールに残るアプリリアージェ達が考えるべき事だった。剣士エイル・エイミイは去るが、賢者エルデ・ヴァイスというハイレーンはファランドールに残る。
尋ねたいことがあるのはエイル・エイミイではなくエルデ・ヴァイスのはずだった。

で、あれば。
今は旅の仲間が、目的を果たして帰路につくのを素直に見送るべきだと思った。
だが、一方で深い憂鬱も顔をもたげる。
アプリリアージェはエイルを見ながら苦笑を浮かべた。
「ネスティには、なんて言いましょうか」
そして口に出た言葉がそれだった。
エイルはさらに強く唇を噛んだ。

ファルケンハインも、思いはアプリリアージェと同じようなものだった。声を掛けたかったが、様々な混乱と思いが折り重なり、意味を持つ文章として口から出てこないもどかしさにイライラしていた。
なにより状況を全て把握できていない中での別れは、とてもではないがすっきりとしたものではなかったのだ。

エイルは視線を戻し、扉の前まで来ると立ち止まった。
そしてその大きな取っ手に手をかける。
アプリリアージェとファルケンハインが固唾を呑んで見守っている中で、しかしエイルの手はピタリと動作を止めた。
彼は扉の取っ手を掴んだ自分の右手……正確には右手の甲を凝視していた。
(なんてことだ!)
エイルは心の中で絶句した。
そしてその瞬間に、今まで押さえていたものがあふれかえるように、脳裏に様々な記憶が飛び込んで来ては消えて行った。
??突然頭の中に響いてきた別の人格……エルデ・ヴァイスと名乗る声
??まぶたに焼き付いていた「妹」マーヤの姿
??自分の住んでいる世界とは違う、まったく未知の世界の風景

や人々
??訳のわからないスカルモールドという化け物との遭遇
??作り話の世界だけのものだと思っていた「魔法」……いやルーンの存在
??不思議な力を使うフェアリーと呼ばれる異能の人々
??人が人を殺すことが日常の世界
??生き伸びる為に、人を信じる事を止めた日々
??そして、失われてゆく五感

そこまで考えたところで、ふとカレナドリィの笑顔が浮かんだ。
エイルは心が締め付けられ、息が苦しくなった。そして彼はカレナドリィの笑顔にゆっくりと重なるもう一人の少女の顔を思い出した。
同じ顔、違う名前。
もちろんファランドールの人間ではない。フォウでの記憶がまた一つ鮮明に蘇ってきたのだ。
タンポポ色の髪と秋晴れの高い空のような瞳の色。
少し首をかしげながらにっこりと笑う白い顔。
しゃべり出すと止まらなくなって、やがて輝くように笑い出す笑顔。
その少女の顔がカレナドリィの記憶と重なり、屈託のない笑い声が倍音で聞こえて来たと思ったら、今度はエルネスティーネの笑顔が浮かび、カレナドリィとカレナドリィに酷似した少女の笑顔を上書きして胸に残った。
その横にいるのは困ったように照れ笑いをするティアナと、心配そうにこちらを見上げるシェリルの大人びた瞳。ゆらゆら揺れるルネ・ルーの真っ赤な髪と耳触りのいい笑い声。怒り心頭と言った感じの、ラシフのつり上がった眉と真っ赤な顔……。
「どうした?」

しばらく動こうとせず、まだ何かを迷っている様子のエイルに、シグは声をかけた。
エイルはシグを振り返った。
「ほんとにもう時間はありませんか？エルデが目を覚ますまで待っていては駄目ですか？あいつとはどうしても話がしたいんです」
《真赭の頤》は駄目だ、という風に首を振った。
「気持ちはわかる。だが見よ。すでに扉が形をとどめる事をやめて崩れかけている。だからそんな時間はないのだよ」
右手の甲に釘付けになっていた視線を扉全体に向けた。すると確かに今しがたまではっきりしていた扉の輪郭が、なぜかぼんやりしたものに変わってきている。
エイルは目を閉じて頭を小さく左右に振った。
「じゃあ、伝えておいてください。いろいろあったけどけっこう楽しかったって。いえ……すごく楽しかったって。ありがとうって……。それから……」
そこまで言った後で、エイルはもう一度右の手の甲を見た。そして少し躊躇した後でこう付け加えた。
「それから、いろいろゴメンって」
エイルはそう言って振り返ると、エルデの師の瞳を真っ直ぐに見つめた。
大賢者は小柄な黒髪の少年に大きくうなずいて見せた。
「必ず伝えよう」
エイルは黙礼をすると、開いた扉の中に一歩足を入れた。
？？だが、そこで再び立ち止まった。

目の前にフォウの景色が広がっていた。エイルがよく知っている、そして懐かしい風景だ。
そこは大きな施設の中庭だった。
芝生で覆われた中庭の中央に広い通路がある。両側にそびえる白い建物と建物の間に通路はあり、その中央の通路に交差するやや細

い通路が何本も両側の建物に続いていた。
通路にはいくつものベンチが置かれており、若い男女が思い思いにベンチに腰掛けて過ごしていた。
久しく見ていなかった鉄筋コンクリートの建物は、明るい光を反射し、エイルはまぶしさで目を細めた。
そして中庭を見渡す。
中央の通路を大勢の若い男女が行き交っている。昼時なのだろう。芝生で弁当を広げる小集団がいくつもある。中には男女二人だけで一つの弁当箱を分けている図もあった。
やがてエイルは芝生の一角で見覚えのある少女の姿を見つけた。五人の少女が思い思いの弁当を広げている。その中の一人に目を止めた。
波を打つ長いタンポポ色の髪。
空の欠片をはめ込んだような大きな瞳……。
彼女は友達の中で笑っていた。

思わずエイルの口から小さな独り言が漏れた。
「生きていてくれたんだ」と。
金髪碧眼のその少女は、生きて、そして楽しそうに笑っていた。
よかった……。
エイルはその光景を見て、胸に澱(よど)んでいた重くて暗い煤が一陣の風で吹き飛ばされたような気分になった。

「よかった」
再び気持ちが口を突いた。そう口にしたとたん、こわばっていた体から力が抜けるのがわかった。
エイルの言葉に、シグが眉をひそめて反応した。
「何をしている。急げ」
シグがひときわ声を大きくしてエイルを急かした。
「在るべき世界の名を、そして正しいお前の名を告げよ。それで全

てが終わる」
その様子を見て、耐えかねたようにファルケンハインがつぶやいた。
「??エイルは本当に異世界の住人なんですね」
「ええ、本当に」
答えるアプリリアージェの声にも抑揚がなかった。
エイルが扉の向こうに消えるまでが、シグのいう一連の「儀式」なのだという気がした。だから彼女は立会人として静かにそれを見届けるべきだと思っていた。

「急ぐのだ！」
扉の前までやってきて、ためらったままのエイルに一喝するような大賢者の声が轟いた。
エイルは顔を上げて声の主である大賢者《真赭の頤》シグ・ザルカバードを振り返った。
（振り返るのはもう何度目だろう）
自嘲気味にそう思いながらも、エイルは再び視線をアプリリアージェに移し、その横のファルケンハインと視線を絡め、そして最後に再び眠りについた「相棒」だった存在を見つめた。
そして……思った。
（何だよ。オレはもうとっくに決めていたんじゃないか）
エイルは心の中でそうつぶやくと、周りに聞こえるような大きなため息をついた。

その後にとったエイルの行動にはその場にいた全員があっけにとられた。
エイルは巨大な石造りの扉の取っ手に力を込め……全体重を込めて押し閉じたのだ。
「貴様、何をする！」
ザルカバードが狼狽したような声で怒鳴った。

その声に答えるように、エイルは扉を押し込めながら叫んだ。
「我が名は、エイル・エイミイ。ファランドールにある者だっ！」
「バカな！」
「オレはもうファランドールの人間なんだ。オレがやることはここにある。フォウにはない」
「なんだと？」
シグの語気が荒くなった。
だが、エイルは動じなかった。シグをにらみ据え、噛みしめるように言葉を紡いだ。
「フォウでは……妹が、待っているはずだった」
「？？」
「だけど、本当はオレに妹なんていない」
「お前がこの世界にやってきて一体何を思って生きていたのかは知らぬ。しかし、扉の向こうがお前の有るべき世界なのだぞ」
「オレは……もうここで長く暮らしてきて、ここで生きてきて、このファランドールでやるべき事を見つけたんだ。今言ったようにフォウにはオレがやるべき事などない。だったら、今オレがフォウに帰る必要なんかない」
エイルの言葉を受けて、少し間を空けた後、シグはゆっくりと口を開いた。
語気の荒さは消えていた。
「二度と戻れないのだぞ？」
エイルは首を振った。
「そんなことはわからない」
シグは呆れたようにため息をつくと首を左右に振った。
「後悔するぞ」
だが、エイルはそこできっぱりと言った。しっかりと響くその声に、もう迷いはなかった。
「そうかもしれません。でも……ここでフォウに帰ったらきっとその何倍も何十倍も後悔すると思ったんだ」

その覚悟を証明するかのようにエイルは扉を二度と振り返らなかった。だが、たとえ振り返ったとしても、もう扉はほとんど消滅しかけていてゆらゆらとたよりなく揺れて、消え去るばかりになっていた。

「扉の向こうに何を見た?」

「たぶん、俺にとっては大事な風景です」

シグの問いかけに、エイルはそれだけを答えた。

# 第二十話　疑問

「エイル君……」
どうするつもり？
そう声をかけようとしたアプリリアージェはしかし、口をつぐんだ。エイルはアプリリアージェの方は全く意に介さず、そのまま小走りにエルデの方へ駆け寄っていた。
「愚か者同士……という事か」
《真赭の頤（まそほのおとがい）》ことシグ・ザルカバードはそんなエイルの姿を見てそうつぶやいたが、その声は極めて穏やかなものだった。
「もう手遅れだが一応言っておく。エルデ・ヴァイスはお前のことを案じて憑依呪法を解いたのだぞ」
「わかってる」
「フォウに戻ってほしいと思っての事なのだぞ」
「わかっている」
「いや、お前はわかってはおらん」
「どのみち、憑依呪法を解かなければ、エルデも元の体に戻れなかったんだろ？」
だが、シグは大きく首を横に振った。
「やはり貴様は何もわかっておらんな。憑依呪法とは本来解けるものではないのだ」
「どういう意味です？」
大賢者はため息をつくと視線をエイルからエルデに移した。
「そのエルデ・ヴァイスの体は、ある場所で本人が捨てたものなのだ。放置されてぼろぼろになっていたものを余が回収してこの『時のゆりかご』で修復・安置していたものだ。エルデ・ヴァイスの魂を戻す入れ物として保管していたわけではない」
「え？」
「わからんか？お前にあの憑依呪法を使った者が自らの肉体を再利

用するなど、本来ありえないのだ」
エイルはこの大柄な禿頭のアルヴが一体何の話をしているのかわからなかった。
いや、話の意味を掴みかねていた。
「戻るべき肉体ではないだって？」
エイルは不安になって横たわり眠り続けるエルデの小さな顔に自分の耳を近づけてみた。
少女はすーすーという規則正しい寝息をたてていた。上下する胸が呼吸の存在を証明していた。
生きている。
そして、さっきはちゃんとしゃべった。
戻っているのだ。
「戻っているんでしょう？」
「……」
「エルデは、いつ目覚めるんです？元の体に戻ったんじゃ？」

一連のやりとりを見つめていたアプリリアージェは機会をはかっていたかのように、そこで鋭く声をかけた。
「恐れながら大賢者《真赭の頤》に伺いたい事がございます」
その声に、今その存在をようやく認識したといった風情でシグが反応してアプリリアージェの方を見やった。
「おお、すまんな。そち達の事を忘れておった。エルデ・ヴァイスの仲間達よ」
シグはあらためてアプリリアージェの方を向くと、両腕を体から少し開いて歓迎の意を表してみせた。もちろんその動作で一行がようやく少しホッとした気分になったのは言うまでもない。
「その瞳髪黒色の少女が目覚めるまでの時間をお借りして、よろしければ我々の質問にいくつかお答え願えませんか？猊下」
アプリリアージェははじめにエイルにチラと視線を走らせた後、大賢者に向き直りシルフィード海軍式の最敬礼をおこなってそう言

った。
「よろしい。余が答えられる事は答えよう。我が弟子が信頼し、ここまでたどり着いた者への、それが当然の礼儀であろう。ただ、残念ながら残された時間はそれほどないがな」
シグはそう言ってうなずくと手に持った儀仗に寄りかかるように立った。

エイルは静かに寝息をたてるエルデとアプリリアージェ達とを見比べていた。
ファランドールに残る事は決めた。
だがまだ混乱して頭の中が整理できていなかった。
その整理の為にも、エイルとしてはアプリリアージェのシグへの質問はある意味ありがたいものだった。自分よりもより的確な質問と分析をしてくれるに違いない、そう確信していた。
なぜこの少女がエルデ・ヴァイスなのか？
いや、それはいい。
それよりもなぜこの少女の姿を実際は存在してもいない妹だと思いこんでいたのか？マーヤという名前で。
それに……そうだ。なぜエルデは自分が女だと言わなかったのか。ずっと男言葉で話していたのはなぜだ？
それらの疑問は、もちろんエルデ本人に聞くのが一番いい。だが、まだ黒髪の少女はその瞼を再び開ける様子がない。
そして今度はまた自分の右手の甲に視線を落とした。先ほどからエイルが気にしているそこには、彼の知らない痣が浮かび上がっていた。それは彼のものではない。少なくとも初めて見るものだった。
（そして、これが最大の問題だ）

アプリリアージェはしかし、まずは極めて実務的な質問をした。
「我々はこの後どうなるのでしょう？」
アプリリアージェの一番目の質問は、ファルケンハインにとって

最も興味のある話題であったが、それはもちろんエイルの求めていたものではなかった。

だが、エイルはそれでも黙って聞いていた。

アプリリアージェのこの問いに、シグは即答した。

「好きにするが良い」

「と、申しますと？来た場所へ出る通路があるのでしょうか？往路の状況を考えると我々が単独で出られるとは思えないのですが」

だが、それにはシグは首を横に振って見せた。

「悪いがそなた達に帰路を示す事は余にはもはや無理だ。帰り道はそこの小さな黒髪の賢者に尋ねるがよい」

シグのその答えにアプリリアージェは返答しなかった。言葉の真意をはかりかねていたのだ。

エルデでないと出られないのであろうか？

であれば《真赭の頤》はなぜここに出入りできるのか？

もしや《真赭の頤》が可能なのは特定の場所との行き来だけなのか？しかも転移は本人のみ。

特定の結界を張った空間に転移できるルーンがあることは《蒼穹の台》の例でアプリリアージェも実際に見て知っていた。

さらにジャミールで「龍の檻」を操るルーンの存在も知っていた。

エルデであれば外界に通じる通路を知っているということなのだろうか？

ひょっとするとエルデが儀仗に持つ「宝鍵」の力とはそういうものなのか？

そこまで考えるとアプリリアージェは次の質問に移った。

「その点は我らには不明瞭ながら、結果自体は保証されているようなので一応安心しました。では次の質問です。ご存じならお答え下さい。我らがシルフィード国王アプサラス三世宛に大賢者《真赭の頤》の名による密書が届きました。そこには複数の庵の場所が記されており、エレメンタルに会いたくば記した庵に来い、という旨の

内容がしたためられていた由。猊下の手によるものに間違いございませんか？」

シグはアプリリアージェの言ったことを咀嚼しているのか、しばらく返答に間をおいた。

「詳しく話を聞こう。だが簡潔に、な」

アプリリアージェは心得た、という風にうなずいた。だが、アプリリアージェの問いの答えはその時点で出たと言えた。シグがそんな質問をして来るという事は、密書は彼の手によるものではないという証明であろう。

彼女は国王宛に届けられたシグ・ザルカバード署名の怪しい文書について自らが知る限りの内容をシグに伝えた。隠す必要を認めなかったのだ。

本文は見てはいないが聞かされた内容がどうであったか、記されていた庵の場所、国王の命でシルフィードでも選りすぐりのフェアリーの小隊が各庵に向かった事。しかし庵付近で死体で発見された事。自分たちもその小隊の一つである事。そこへ向かう途中でエルデ一行に偶然出会い、事なきを得た経緯。何より賢者シグ・ザルカバードに会いたいが為にエルデと一緒にここにやってきたことなどである。

シグの要望通り簡潔ではあったが、要点を押さえて時系列に沿った内容で、きわめてわかりやすい説明になっていた。

もちろんそれはアプリリアージェの情報処理能力のなせる技、感情を含めない客観性のたまものであった。

だが、その話の中にはエルネスティーネの名前は挙げられてはいなかった。

シグはアプリリアージェの話を一切中断させることなく聞いていたが、「以上です」とアプリリアージェが話の終結を告げると、用意していたかのように回答を告げた。

「結論から述べよう。お前も既に認識しているとおり、それは余が

認めたものではない」
　アプリリアージェはうなずいた。
「だがそれ以上の事はわからぬ。余はすでに二年、現世に下っておらんのだ」
「と、いいますと？」
「そちは聡明な人間のようだ。ならば薄々は感じておろう？この空間は現実の世界とは切り離された場所にある。あの世の一つとでも言えばわかりやすいかの」
「あの世、ですか？」
「そう言うわけだ。ここは現世に対して何も干渉はしておらぬのじゃ」
「なるほど」
「一つ忠告をしておこう。悪いことはいわん。この件には深入りせんほうがいい」
　その言葉を聞くと、アプリリアージェはごくんと唾を飲み込んだ。
「わけをお聞かせ願えませんか？」
「ユグセル将軍……いや提督、じゃったかな」
「はい。我々は海軍籍です」
「たとえそなたが提督だろうと将軍だろうと大元帥だろうと、あるいは国王であったとしても、もはや普通の人間がどうこうできる問題ではないだろうという事じゃ」
　だがアプリリアージェは引き下がらなかった。
「私はその庵といわれる場所に出向いた部下をすべて失いました」
　シグはしかし、アプリリアージェの言葉を遮った。
「この件に拘泥するなら、もっと多くの部下を失うことになろうの。何千倍、何万倍もの、な。そして自らの命も」
「それはどういう……」
「世界は大きく動き出した。しかも動かしているのはもはや人ではない」
「人ではない？」

「この話はここまでだ」
「猊下！」
「もう一度言おう。もはや普通の人間の力が及ぶ事柄ではないのだ」
最後のシグの台詞は強い調子で放たれた有無を言わせぬ一方的な終結宣言であり、アプリリアージェはその口調からたとえそれ以上食い下がっても良い結果にはならないと判断した。

「では違う質問をします。『合わせ月』とは何でしょうか？」
「それを聞いてどうする？」
「知りたいのです」
「知ってどうする？こちらも普通の人間がかかわる事柄ではない」
「我々は関わっております」
「何だと？」
シグは目を細めてアプリリアージェをあらためて見つめた。
「なるほど。シルフィードには風のエレメンタルがいらっしゃるのであったな」
アプリリアージェはうなずいた。
「我らはその露払い」
「露払いだと？」
大賢者はアプリリアージェの言葉に初めての反応を見せた。
声を出して笑ったのだ。
「わっはっは。なるほどなるほど」
アプリリアージェは何も言わず、ただいつものように微笑んでいた。
「あのエルデ・ヴァイスに仲間と呼ばせるだけの器だと言うことか」
「お教えいただけませんか？」
だが、大賢者は首を横に振った。
「知らぬ方がいいこともある」
「それはあまりに上からの物言いと言うものではありませんか」
表情は穏やかだったが、アプリリアージェの口調には厳しいもの

が微妙に含まれていた。それはエイルにも、ファルケンハインにも感じることが出来るほどであった。もちろんシグに向けた「ただ言いなりにになっておとなしく引き下がる人間ではない」という意思表示に他ならない。

シグはそのあからさまなけん制を含んだ言葉を受けて、少し間を置いた。

大賢者という立場であれば各国の情勢にも長けていてなんら不思議はない。シグももちろんシルフィードの秘密部隊の名は知っていたし、その司令官についての一通りの知識は持っていた。だが一般の知識とマーリン正教会の最高幹部が知る事実とは多くの点で違いがあった。つまり、普通の人間とは違う視点、価値観で彼らを観察することがシグには出来たという事は特記しておかねばならないだろう。

シグはル＝キリアの「噂」ではなくル＝キリアが行ってきた「事実」を組織独自の情報網で「得て」いたのである。

「ふん。それにしても『白面の悪魔』とは随分な通り名をつけられたものじゃな、アプリリアージェ・ユグセル提督」

「軍人としては名誉なことだと思っていますし、実は結構気に入っているのです。が……」

「が？」

「訳あってその名前はもう返上しました。今は味方に付けてもらった通り名の方が気に入っております」

シグはアプリリアージェのその言葉を聞いてニヤリとした。

「『笑う死に神』か。確かにそちらの方が多少なりとも気が利いておるな」

アプリリアージェはシグの態度の変化を見て内心ホッとしていた。

相手は普通の人間の価値観などとは全く違った地平に立つマーリン正教会の黒幕の一人である。気に障ったというだけで首を落とさ

れてもおかしくはないだろう。勿論そうなったら精一杯の抵抗はするつもりだが、そもそも抵抗できる余裕があるのかすらわからない。おそらくフェアリー一人ごときでは蚊が刺すほどの痛みすら与えられないであろう。だが一寸の虫にも五分の魂があることは彼女の尊厳の問題として言っておきたかったのだ。彼女の中に流れる血もまた紛う方なきアルヴ系のものだということであろう。

「取るに足らぬ路傍の石には何も話すことはないという態度だと思われたのならばそれはそれで仕方あるまい。賢者とは元来そういうものじゃからな」

アプリリアージェは微笑んだまま何も答えなかった。そのアプリリアージェの態度を見てシグは言葉を続けた。

「だが今、余は提督を友人として認めたからこそ警句を告げたまでじゃ」

アプリリアージェは微笑んだまま少し目を伏せた。

「その気になればそなたらの別の友人が語るやもしれぬ」

アプリリアージェは顔を上げた。

「賢者《白き翼》は全てを知っていると言うのですか？」

だがシグは首を横に振った。

「その名を軽々しく口にしてはならん。本当に命を落とすぞ」

（まただ）

エイルは唇を噛んだ。

《白き翼》という名前が一体どんな意味を持っているというのだろうか？

エイルは全ての謎はそこに収れんされるような予感がしていた。

おそらく同じ事をアプリリアージェも考えていたのだろう。

「では言い換えましょう。賢者エルデ・ヴァイスはそのことを知っているのですか？」

「今はまだ全てをご存じというわけではないであろうが、いずれ知ることになろう」
アプリリアージェの眉がピクリと動いた。
もちろん、師が弟子に対してまたもや敬語を使ったからである。
「『ご存じない』ですか？」
アプリリアージェは新たな質問を投げかけた。
勿論、その意図は《真赭の頤》にも伝わった。
「ふむ……。余はあの方の師であると同時に僕でもある」
「しもべ？」
「遠い昔から我らの家系はそういう関係なのじゃ。そち達が気難しい我が主の機嫌を損ねなければいずれ詳細を知る機会もあるじゃろう」
アプリリアージェは小さくため息をついた。
「主に関係する事を臣下が口にすることは出来ない、ということですね」
「それほど大層な事ではない。むしろ我が主は余の口から語らせようとしているようなのでな。だからこれは余のちょっとした抵抗というか嫌がらせじゃ」
「は？」
アプリリアージェは思わず聞き返した。
「主への、ですか？」
「そうじゃな。では嫌がらせついでにそなた達にもちょっとした嫌がらせをしておこうかの」
そう言うとシグは持っていた儀仗の頭をアプリリアージェに向けた。

それを見たファルケンハインの対応は速かった。エイルが瞬きをする間に大賢者と対峙するアプリリアージェの間に割って入ると、自らの体を楯にすべく、両手を広げて見せた。
ファルケンハインのその様子を見て《真赭の頤》は笑いを堪える

ような表情を見せた。
ファルケンハインとアプリリアージェは顔を見合わせた。
「わっはっは。余の嫌がらせは成功じゃ。思った通りの反応で、愉快じゃのう」
そう言って笑うシグをアプリリアージェは不思議な感覚で眺めていた。
「笑う大賢者」というものを想像もしていなかったのだ。そのあまりの緊張感のない様子に毒気を抜かれた気分だった。同時に自分達が置かれている状況に対する危機感が喪失していくのを感じていた。
「いやいや。前振りだけで満足するところであった。さて、余の嫌がらせは今からそち達に贈る言葉じゃ」
シグは儀仗を静かに下げるとそう言って一同の顔をゆっくりと見渡した。
「言葉？」
「『人として生きよ。しからずんば滅びの道を』」
「マーリン正教会の聖典にある一節ですね。確か第三聖典『プレザン』の中にある……」
アプリリアージェがつぶやいた。
「ほう」
シグは正解が返ってくるとは思わなかったのだろう。意外だという顔でアプリリアージェを見た。
「その様子だともちろん『アヴニル』も知っておろうな？」
「存じております、猊下」

マーリン教にはいわゆる教書として三つの聖典がある。それぞれ「パサト」「プレザン」「アヴニル」と呼ばれている。『アヴニル』とは第三聖典である。

「その内容に余がいま言った言葉の鍵がある」
「『プレザン』に、ではなく？」

シグはうなずいた。
「それからもう一言だけ言っておく。これは警告ではなく情報じゃ。マーリン正教会とは、実はエレメンタルを滅する為に遠い昔より存在している組織だと認識せよ」
「なんですって？」
さすがにその言葉にはアプリリアージェも動揺して、反射的にそう言葉が口を出てしまった。
勿論、ファルケンハインにも、そしてエイルにさえも大きな動揺が走った。
シグの一言はそれほどまでに意外で、言ってみればファランドールの現世界観を覆すような発言と言ってよかった。
「エレメンタルを滅する……そうおっしゃいましたか？」
アプリリアージェの問いには応えず、《真赭の頤》は視線を自ら握った儀仗に注いだ。
「そして新教会はある意味真逆にある存在と言える。エレメンタルを信奉する為に……いやむしろ、マーリン正教会から保護する為に生まれたような組織じゃ。もっとも今は舵が壊れて暴走しているようだがの」
そこまで言うと少し間を空け、今度は言葉を選ぶようにゆっくりと続けた。
「シルフィード王家は過去の経緯でそれを知っているはずなのだが、その方の様子を見ると王国軍の中将という立場にあってもまだそのあたりは聞かされておらぬということだな」
「恥ずかしながら、今、私はいささか混乱しているようです」
アプリリアージェは軽い価値観の崩壊に襲われていた。
だが、持っている情報とシグの言葉との間に、実はまったく相容れない溝が在るわけではないことに、アプリリアージェは気付いた。
果たして口にしてもいい物かどうかの判断に苦しみ、しばし逡巡したが、アプリリアージェは既知の事実だと判断して、尋ねることにした。この場では沈黙よりも疑問をぶつける事の方が正しい行為

だと思われたからだ。
「アプサラス三世が崩御された今、その情報の継承はどうなるのでしょうか？」
「なんだと？」
シグの表情がこわばった。
「今、何と申した？」
アプリリアージェの予想通り、外界と隔絶しているというシグは、この重大な事件の事を知らなかった。
「ご存じありませんでしたか？」
「いつの話だ？」
「我らも情報として得たばかりですが、つい先日の事と聞き及んでおります」
「ふむ」
「病死、と」
シグはアプリリアージェのその説明には何も答えず、眼を閉じてしばらくの間沈黙を守っていた。とは言え誰かが焦れて口を開く前に、大賢者の沈黙は自らの口で破られることになった。そしてそれはアプリリアージェの質問に対する真っ直ぐな回答であった。
「シルフィードの王が知るべき事柄は、『ある物』に封印されて守られておる。新しい王が正式に戴冠された際に、その『ある物』にかけられたルーンが発動し、その内容を認識する事になっているはずじゃ」
「ある物？」
「それを知るのは現王のみじゃろう。戴冠は終わっておるのじゃな？」
「王が誕生した際に宮中の主立った者の立ち会いにより滞りなく王位は継承されたと聞き及んでおります」
「ふむ。ではすでにエルネスティーネ様はその事をご存じであろう。そうじゃ、もちろんエルネスティーネ様はご健在なのであろうな？」
「？？はい」

「ふむ。シルフィードは若い女王の下でこの難しい時代をゆくか」
アプリリアージェはシグの話で、いくつかの謎が一つの糸で繋がった事を確信していた。
「この事を知っているのは、シルフィードの上層部には多いとお思いですか？」
その問いにシグは首を横に振った。
「そこまで余は知るよしもない。少なくとも中将では教えてもらえぬ事のようじゃな。だが、この話はここまでじゃ」
アプリリアージェはシグのその言葉で、満足な答えを得たと思った。それにより深い緑色の瞳に一瞬暗い影がさしたが、すぐにもとの微笑を浮かべた。
「別の質問をします。猊下あるいはマーリン正教会……いえ賢者会と言った方がいいのかも知れませんが……『大地のエレメンタル』の所在はご存じでしょうか？」
シグはアプリリアージェのこの問いには、怪訝な顔をした。
「その問いかけの意味は深いぞ。なぜなら水のエレメンタルの所在をお主達は既に掴んでいるという事になる。さらに炎のエレメンタルの件すら知っていると申すか？」
アプリリアージェは素直にうなずいた。
「我らと同道していた賢者エルデ・ヴァイスもご存じでしょう」
「なるほど。それは驚きじゃな」

エイルはそのやりとりを聞くと何かを言いかけたが、右手の甲を左手で隠すようにすると、喉元まで出かかっていた言葉を飲み込んだ。
幸い彼のその様子は誰の目にもとまらなかった。その場で意識のあるもう一人の人間、つまりファルケンハインはアプリリアージェとシグの会話に意識を集中させていたからである。

シグはアプリリアージェの言葉を聞くと小さくため息をついた。

「おそらく今現在、マーリン正教会、新教会ともにシルフィードの女王であらせられる風のフェアリー以外の三人の所在は掴んではおらぬだろう。中でも大地のエレメンタルはその存在自体がまだ確認されておらん」

アプリリアージェはうなずいた。

「炎のエレメンタルの件は残念です」

「そうか」

アプリリアージェが投げた言葉にシグは無反応だった。その様子からルルデの件が知られているのは想定内のようだった。もしくはアプリリアージェ達に意識が戻る前の間にエルデから道中の話を聞いているのかもしれない。

だが、アプリリアージェにしてみれば、大地のエレメンタルの所在を協会側がまだ知らないであろうという事がわかれば十分だった。

「もう一つだけお答え下さい。エレメンタルは『合わせ月』の日、何の為にマーリンを復活させるのでしょう?」

シグはその問いを聞くと儀仗を持たない方の手で顎の髭を撫でた。

「巧妙な話術じゃな、ユグセル中将。有能な戦略家だとは聞いていたが、どうしてどうして。臨機応変の戦術にも舌を巻く」

「恐れ入ります」

「だが相手によりけりじゃ。会話の波に乗せたと思わせたのであろうが余の立場は不変じゃ。前回と同様『知ってどうする』と言うしかないであろう?」

「御意。私が浅はかでした」

「余の立場は不変じゃが、会話に乗せられたついでに独り言をつぶやくことを自制したつもりはない」

アプリリアージェの下がり気味の目尻がさらに下がったように見えた。

「そもそもエレメンタルがマーリンを復活させた場面など見たものはいない。そもそもエレメンタルが四人揃ってマーリンの座に集った試しはないと言われておる」

「それは、やはり？」
シグは視線をチラリとアプリリアージェに注いだ。
「おや？そちも独り言か？」
「独り言が多いと部下にもよく指摘されます」
部下であるファルケンハインはその言葉を聞いた《真赭の頤》が少し嬉しそうに笑ったように思えた。

「エレメンタルは強大な力を持つ。だが力を己のものとする器としての能力がその力と釣り合うとは限らぬ。自らの力に溺れ自滅したか、マーリン正教会のようにエレメンタルに対する者に倒されたか、はたまたエレメンタル同士で倒しあったか……どちらにしろ四人のエレメンタルが揃ってマーリンの座に集った例は有史以来ないとされておる。マーリンがそうなるようにエレメンタルを『設定した』のか、さもなくばエレメンタルの理（ことわり）がマーリンの誤算だったのかは我らにはわからぬが、な」
「我々は正教会が……四人を揃え、マーリンの座に迎える為に動いていると理解していました」
「表向きはな。だが実のところはさっき伝えた通りじゃ」
「なぜです？」
「そうだな。少なくとも……正教会、いや賢者会はファランドールを救う為だと信じておる」
「マーリンが復活するとファランドールが滅びると？」
「だから何度も申しておる。マーリンが復活した例（ため）しはない。従って誰も答えなど持っておらぬ。さあ、独り言もここまでじゃ」

アプリリアージェは堂々巡りをして核心には触れようとしないシグの態度に業を煮やしてはいたが、それ以上の解が引き出せないのは仕方のない事だとも理解していた。だが、情報はできるだけ得ておきたい。たとえそれが正確な情報ではなくても、である。
しかし気になる事がもう一つあった。

「前言を撤回するようで恐縮ですが、さらに質問をすることをお許し下さい。これは賢者エルデ・ヴァイスが本来の体で意識を回復される前に伺っておきたい事なのです」

「聞こう」

ほんの一瞬だけ思案はしたが、《真赭の頤》はうなずいて見せた。

「先ほどの解呪の術式が行われる前に、賢者エルデ・ヴァイスはいったい猊下に何を懇願していたのでしょうか？我々はお二人の話の途中で目覚めた為に、話の全容がわからずにいるのです」

シグの目に警戒の色が宿ったのをアプリリアージェは見逃さなかった。だが、ここは戦術通り素直に尋ねるべきだと決めた。

「我らは風のフェアリー。耳聡い業を持つ者。聞くつもりではなく聞こえてしまった事に対してどうしても疑問が生じるのはご理解いただきたいのです。賢者ヴァイスのあの態度は尋常な願いではないように思いました。したがって、どうしても気になって仕方がありません。ですからこれは賢者ヴァイスの仲間としての願いです。目が覚めたとしても彼女の口から真実を語ってもらえるかどうかが定かではない以上、その師に伺いたく存じます」

シグは今度のアプリリアージェの問いには少し間をおいて答えた。

「提督は今、瞳髪黒色（どうはつこくしき）の賢者を仲間と申された」

「はい」

「では、その仲間である本人にこそ問うべきではないのか？」

「御意。ですが……」

「その仲間の口から出る言葉こそを信じるべきではないのか？それが出来ないと言うのであれば、それで仲間と言えるのか？」

「それは……」

アプリリアージェは言い淀んだ。

もちろん、シグの言う事は詭弁にもならない、その場を回避する為の言い訳のようなものだった。だが、それをもっともだと思う自分を発見して戸惑っていたのである。

「仲間だから、です。猊下」
たまりかねたようにファルケンハインが叫んだ。
「ファル！」
上官は慌てて部下を制した。
だがシグは逆にそのアプリリアージェを制した。
「かまわん。今、何と申した？」
アプリリアージェの予想に反して大賢者はファルケンハインを無視するような事も、機嫌を損ねるようなこともなく落ち着き払ってそう聞き直した。
「賢者エルデ・ヴァイスは我々の仲間です。おそらくエルデも今では我々を仲間だと思ってくれているはずです。ならばあいつ……いえ、彼女は我々に気を遣って本当のことを言わないのではないのでしょうか？少なくとも我が司令官の言葉はそれを危惧してのものです。かく言う私も全く同じ気持ちです。はからずも先ほど目にした、あのなりふり構わずにあなたに何かを頼み込む姿は日頃の賢者ヴァイスからは想像もできません。あれを見れば誰であろうと尋常な事態ではないと思うでしょう。エルデが……賢者ヴァイスがあまでしてあなたに頼んだことを、仲間として知っておきたいのです。エルデは……いつも我々には自分の弱い部分を見せないようにしています。ですが一緒に旅をしている我々にはもうわかっているのです。あいつ……いやエルデは口が悪く、様々な憎まれ口は叩きますが、結局その本質は自分よりも他人を思いやる事にあるように私には感じられてなりません。ですから我々はエルデがあなたに何を頼んだのかを是非知りたい。司令がそれを尋ねたのは、おそらくその訳が非常に重要な事だと考えているからなのでしょう。それに話を聞かないと我々に力になれる事があるのか無いのかもわかりません。なにとぞ……」
珍しくファルケンハインが一気にそうまくし立てた。
アプリリアージェさえも驚くほど、ファルケンハインの言葉には

感情が乗っていた。
「わかった。なるほど、よくわかった」
儀仗を手にしたシグは、ゆっくりと弟子が横たわる寝台に近づき、その黒い髪をそっと撫でると、静かな声でその眠れる少女に語りかけた。
「師として言わせていただければ、あなたは本当に……賢者には向いておりませんな。今更ながらにエクセラーにもコンサーラにもなれぬと判断した自分の確かさに感心するばかり。間違いなく歴代の我が弟子の中では一番の落第生ですぞ。ですが、仕える者としては、また違う評価にならざるを得ません」

まただ……。
シグの一人語りを聞いたエイルは、また違和感に襲われた。
師匠が弟子に掛ける言葉ではない。ましてや孫程年齢が離れた弟子に対しての言葉としては異常と言えた。
シグは「仕える身」と言った。それが答えなのだろう。だがそれがいったい何を意味しているのかはエイルにはさっぱりわからなかった。

# 第二十一話　移魂の呪法

《真赭の頤》はその優しい視線を寝台の少女から外すと、そのままの表情で振り返った。

「この黒髪の賢者はどうしようもない落第生でな。その話は本人から聞いておるかな？」

それはエイルに向けられた質問だった。

エイルは問いかけにゆっくりと首を左右に振った。

「いえ。あいつは自分を天才ルーナーだとか、師匠ですら自分の足下にも及ばないだろうとか……自分が世界で一番だ、みたいな自慢とも強がりともとれる話ばかりしていました」

エイルの答えを聞いてシグは可笑しそうに笑って見せた。

「余の弟子はそう言っていたのか？」

エイルはこっくりとうなずいた。

シグは今度はアプリリアージェの方を振り返った。

「黒き瞳を持つ我が弟子は、常に誇り高く自信に満ちた態度で事にあたっていたであろうか？」

アプリリアージェ達三人は、その質問に同時にうなずいた。エイルなどは三回もうなずいて見せた。

シグは「なるほど」と言って横たわるエルデの髪を優しく撫でた。

「どこにあろうと、どういう状況になろうと、あなたは相変わらずなのですな」

シグは視線をエルデに注いだまま、なかばつぶやくように後を続けた。だがその言葉はエルデに向けたものではなかった。

「お前の中にいたエルデ・ヴァイスが余に頼み込んだのは『喰らい』の解呪ではなく、はからずも自らがフォウの住人に使ったある呪法の解除じゃ。そもそも『喰らい』は我が小さき弟子ほどの存在であれば、その気になればおそらく自身でいつでも簡単に解けるものだ」

「え？」

エイルはまたもや頭を殴られたような衝撃を受けた。
（俺たちは『喰らい』を解呪してもらう為にあんなに辛い旅をしてきたんじゃなかったのか？）
それなのに、エルデがその気になれば自分でいつでも解けたとシグは言う。
（存在しない妹をでっち上げた件といい、こいつは一体何を考えているんだ？）
エイルは横たわるエルデの顔をじっと見つめた。

「必要なのは『喰らい』の解呪などではなく、『もう一つの別の呪法』の解除？」
無言のエイルに変わってアプリリアージェが口を開いた。勿論彼女達とて話しが違うと思ってはいたが、一番混乱しているのがエイルだと言うことはその表情を見ればわかった。少なくともエイルがアプリリアージェ達に嘘をついていたとは思えなかった。
そして大賢者の言葉に混乱しているエイルが的確な問答には臨めぬであろうということも。
アプリリアージェはここへ来て「時のゆりかご」に入る前にエルデが言っていた『現世とは時間の流れが違う』という言葉を気にし出していた。
できればあまり長居はしたくない。そう判断をして、混乱したエイルの会話を受け継ぐことにしたのである。

アプリリアージェのその問いに大賢者ザルカバードはうなずいた。だが、大賢者はアプリリアージェにではなくエイルに言葉をかけた。
「異世界フォウのピクシィよ。ファランドールでは名をエイル・エイミイと言ったな。その様子だとそちには一切知らされていなかった様子」
エイルはうなずいた。

「説明をしておいてやろう。よいか、お前にかかっていた呪法とは、肉体を共有する憑依呪法などではない」
「え？どういう事だ？」
「余の弟子が使ったのは、自らの魂を相手に移し、そこにある魂を滅し、肉体を支配する為の古代呪法じゃ」
「魂を滅する？」
エイルのつぶやきにシグはうなずいた
「肉体共有なんかじゃなくて、乗っとる呪法だって？」
「左様」
「ちょっと待て。それって」
エイルはつばを飲み込んだ。
「お前にわかるように言い換えれば、あれは相手の肉体を我が者として支配する呪法なのだ」
シグの答えはエイルが想像していたものだった。だが、もちろん納得出来る答えではなかった。
「でも、現にこうしてオレは！」
「今回の一連の問題はそこなのだ、フォウのピクシィ。我が弟子は、お前を乗っ取る事をよしとしなかったのじゃ」
「でも、あいつに体を預ける預けないは、オレの意志でやってましたよ？」
「弟子がそうお前に思わせていただけのことであろうな」
「まさか」
「全てを聞いたわけではない。だからこれは余の想像に過ぎぬが、おそらく余の弟子はお前の意識が消滅してしまわぬよう、あらゆる手段を使い、最大限の努力をもってそれをなしていたのであろう。考えてみよ。思い当たる節があるのではないか？」
「思い当たる節……」
「あの忌まわしい『喰らい』の呪法を自らにかけたのも肉体に呪術的な負荷を与えてお前の意識をそこに向け、薄らぐことなく現在にその魂をつなぎ止める為であろう。特定の呪法は生への執着を何倍

も高める働きがある。もともと『喰らい』は太古において生け贄となった者の魂の力を高める為に使われていたのだ。体の制御を余の弟子の魂に委ねる・委ねないという選択がお前にあると思わせることで、さらに意志の存在を強めることもできたのであろう。思い出してみよ。お前の意図しない時にあの方が体を使えたことがあるはずだ。とっさの危機などはなかったのか？」

言われてみれば思い当たる節が何度かあった。

ラウ・ラ＝レイと対峙した時がそうだった。それに……。

エイルは思い出した。

ついさっきもそれで体の制御を失ったのだ。

「いくら余の弟子が尋常ならざる力をもってその浸食を押さえようとも、古代呪法『移魂（いこん）』は時間が経てばやがてじわじわとお前の意識を滅する事になる」

「その期限が、『合わせ月』だとエルデは言っていたということですか」

賢者シグはうなずいた。

「お前の意識がどれくらい保つかは我が弟子の力とお前の意識の強さ次第であったろうが、さすがに『合わせ月』まで保たす事は出来ぬ相談である事は弟子とてわかっていたはずだ。期限を後側にずらして教えておくのも一つの目標を与える事になる。あまり近いと絶望が勝つ。望みがあればそれはすなわち生きる意志を強める為の薬の役目を持つ。しかし」

「しかし？」

「それももう先が見えておったようだ。お前は本当にもう限界だったのだ。そしてこの『時のゆりかご』に入った時に、その限界が加速度的に訪れた。だからこそ余の弟子は焦っていた。まさに一刻を争っていたのだ」

エイルは大きく息を呑んだ。
ジャミールで意識の底に落ち込み、目覚める事が出来ずにいた事がそれに違いない。あれは消滅の寸前だったという事であろう。エルデが迎えに、いや引き上げに来てくれなければあのまま流れていく雲を眺めながら静かに消えていたのであろう。
（オレに『妹』を設定したのは、だからなのか！）
生きるための目的として「マーヤ」という名の架空の妹をエルデはでっち上げてみせた。エイルの意識に映像としてそれを焼き付けたのだ。
焼き付ける妹の姿はファランドールの価値観で適当な女性をでっち上げては駄目だ。アルヴ族など以ての外である。
同じ種族、瞳髪黒色である必要があった。
そしてエルデ本人がまさにその瞳髪黒色の少女だったのだ。
兄妹にもかかわらず全くエイルには似ていない事など、問題ではなかった。両親の記憶さえ曖昧にしておけばいいのだから。エイルはだから勝手に思い込んでいた。自分は父親似、そして妹は母親似なのだと。
だが、一つだけエルデには誤算があった。
エルデがしたたかなのは、その誤算をも利用したと言う事である。
（オレが約束なんかする事はないということをエルデは知らなかった。
それがマーヤとの重大な約束がある為だと思い込ませたということとか）
「？？なるほど。オレはあいつに感謝しなきゃいけないってことなのか？」
シグはうなずいた。
「でも、そもそもオレはアイツに勝手に肉体を乗っ取られた被害者なんだぞ。いきなりだ！」
「普通ならば被害者などという自覚を持つ間もなく、あっという間

に魂を取り込んで体を我がものにできたはず。『移魂』とは『憑依』ではなく、そもそもそういう呪法だからな。それを敢えてしなかったのは、我が弟子が賢者としては究極の落第生だからであろうな」
「そ、それはわかったけど」
「余が『移魂』の解呪に反対したのは『移魂』を解く事は我が弟子にとって致命的な行為だからだ」
「致命的？」
「だが、我が弟子はどうあってもやれと頼んだのだ。いや、あれはもはや脅しであったがな。それより、我が弟子の真意がお前にわかるか？」
「え？」
「お前を助けたい一心で、だ。理由はそれだけだ。お前を助ける最善の方法を余に請うていたのだ。そして余はそれを反対していた」
「ちょっ、ちょっと待って。よくわからない。えっと……オレからあいつが出て行って、元の体に戻ればいいんだよな？そしたら万事解決だろ？いや、それよりもうソレをやった後だよな？あいつが致命的って……今、そうなのか？」
「我が弟子、いや、あの方は最後には承諾しようとしない余を脅された。我が願いを聞き入れてくれぬ場合は考えがある、と言ってな」
「考え？」
シグはそこまで強い語調でエイルを責めるかのように喋っていたが、それが急に穏やかな雰囲気に変わった。
「ははは。まあ良い。今度こそ落第賢者が久しぶりに本来の肉体で自らのまぶたを開ける頃だ。そして余の方はそろそろ時間切れだ」
「え、ちょっと待ってくれ。時間切れって？」
シグはだが、エイルの言葉を無視した。
「ここまで話したのだ。代わりと言っては何だが、今度は余からお前に一つ頼みがある。いや、約束してはくれぬか？」
約束という言葉に、例によってエイルは固まった。そして、視線を床に落とした。

「？？約束は、できない」
「何と申した？」
「オレは、誰とも約束はしない」
「断る、と？」
「そうは言っていない。ただ、オレは約束という言葉は使いたくないんだ」
シグはじっとエイルのうつむく姿を見つめた。ややあってエイルはゆっくりと視線を戻し、エルデの師の目を真っ直ぐに見つめ返した。シグはエイルと絡んだその視線を外すと、それをアプリリアージェに移した。
彼女は小さくうなずくことでシグの無言の問いかけに答えた。
それを見たシグは、それ以上エイルに対して約束という言葉を使わなかった。
そしてただ、用件を一方的に告げた。

「幸運な事に、我が弟子はとりあえずは一命を取り留めた格好だ。だが、予断は許さぬ状況に変わりはない」
エイルは無言だった。
もちろん、シグの言っている意味がわかりかねたからだ。だが、シグはエイルの疑問に答える事はしなかった。
「では余の願いを言おう。これからしばらくの間、我が弟子は命をつなぎ止める為にお前の助けがどうしても必要になる。だからその時は力を貸してやってはくれまいか」
エイルはその問いかけには即座にうなずいた。
「もちろん、それくらいは当然だろう」
「そう言うが、その実それは簡単な事ではないのだぞ？」
「かまわない。オレはエルデには大きな借りがある」
「そうする事でお前にとっては、辛い結末が待っているやもしれぬぞ？いや、お前がこのファランドールに留まる決意をした時に、お前は企図せず既に茨の道を選択しておるのだったか」

エイルはシグを睨んだ。
「オレが選んだ道だ。エルデにオレの助けがいるならもちろん助けるさ」
「その言葉、確かか？」
「オレを信じろ」
「ふむ」
賢者シグ・ザルカバードは今度は再びアプリリアージェに向き直った。
そこにはすでに彼が予想した通り、ニッコリと微笑む小柄な少女が立っていた。
エイルはそのシグの横顔に続けて話しかけた。
「オレ達は、そうだな……なんだかもう他人とは言えない訳だし。まあ、あいつがどう思っているかは知らないけど」
「そうか。余はこの件に関してはお前を頼るしかないのだ。その言葉を余は信じておるぞ？」
シグは言葉を選んでそう訊ねた。
エルデは間を置かずにうなずくと、それに応えた。
「よし。しかと聞いた。これで余はひとまずの役目を終えることができる」

シグ・ザルカバードがそう言った直後、時を合わせるかのように寝台のエルデが小さく唸った。
その声に、全員の目が一斉に寝台に向いた。そしてそれを待っていたかのように、黒髪の少女は再びそのまぶたをゆっくりと開いた。
「おお、目覚めたぞ！」
最初に声を上げたのはファルケンハインだった。
思わず感嘆詞とともにそう叫んでしまった事に対して、やや気恥ずかしくなったファルケンハインだが、もちろんそれを気にする者など居なかった。
その場に居た全員が、エルデの次の動作を固唾を呑んで見守って

いた。

それは彼らにしてみれば不思議な感覚だった。

今までエイルの中にいたもう一人の人格が、本来の肉体を得て彼らの前に今まさに現れようとしているのだ。エイル以外の者にとっては全く未知の姿で。

中でもエイルにいたってはその思いは誰よりも強いものがあった。だが、あまりにいろいろな思いが頭の中を駆けめぐったあげく、実際に目覚めたエルデに対して何をどう声を掛けていいのかがわからなかくなっていた。

瞳髪黒色の美貌の少女エルデは、小さくむずがるような声を出したかと思うと、体を少し動かしながら、何度か瞬きをした。そしてぼんやりとした視界がはっきりするのを待つかのように、横になったまま自分の掌を目の前にかざした。意識してか無意識なのかはわからない。ただ、それはさきほどと同じ行動であった。

ちゃんと、動く。

そして、見える。

その動作はまるでそう言っているかの様だった。

切れ長の大きな黒い瞳が焦点を自分の手からその向こう側に移した。ゆっくりと頭を動かし、周りの様子を観察しているかのようだった。

# 第二十二話　目醒め

ぼんやりとしていた頭が急速に冴えてくるのをエルデは感じていた。

？？戻った。

意識はまだ一部混濁してはいるものの、元の体に戻ったことをしっかりと認識していた。

とはいえ記憶の回復は緩慢だった。

現状把握すらままならないが、細々（こまごま）とした思い出が徐々に蘇ってくるのは感じていた。

そして何より安心したのは、目の前によく知る顔があった事である。

《真赭の頤》こと、シグ・ザルカバード。

名前も顔もわかる。見慣れた禿頭と右目の火傷の痕。

エルデは心の中でようやく安堵の溜息をついた。

視界にはもう一人の人物がいた。

それは瞳髪黒色の少年だった。

彼は心配そうな、それでいてすこし寂しそうな、さらにはやや困惑した顔でエルデを見つめていた。

もちろん見覚えのある顔だった。だが認識には少しだけ時間を要した。ややあってようやく黒い瞳の少年の名前を思い出したエルデは、その黒目勝ちな目をさらに大きく見開いた。

無表情だったエルデの顔が急に変化した事は、エイルも当然ながら気付いた。何しろエルデに一番近い場所にいるのだから。

目覚めを待ち望んでいた少女の顔はしかし、明らかに何かに驚いているように見えた。いや、何かではない。視線はエイルに注がれているのだ。瞳髪黒色の少女が自分に対して驚きの感情を表してい

ることは明白だった。
しかしエルデは声を出すでもなく、すぐに再びまぶたを閉じた。
だが、それは前回の一瞬の目覚めの後の失神とはちがい、自分の意志で目を閉じたに過ぎないであろう事はその場の誰もが理解した。
エルデが唇をぎゅっと噛みしめるような仕草をしたからだ。
「エ……」
思わずエルデの名前を叫ぼうとしたエイルの口を、すかさずシグが何らかのルーンで塞いだ。
いきなり声を封じられ、批難の顔をシグに向けたエイルだが、逆に自分を睨み返してくる大賢者の鋭い視線にひるんだ。
ここは黙れということなのだろう。エイルは素直にその警告に従うことにした。

待つまでもなく、エルデはすぐに目を開けた。
今度は自分の状況を確認するようにゆっくりとした動作でおそるおそる上体を起こそうと体を動かした。その緩慢な動きを見たエイルはたまらず側に駆け寄ろうとしたが、シグは儀仗をエイルの目の前に突き出してそれも制した。シグ自身はエルデを助け起こそうとする気配もない。ただじっとエルデの様子を見守っているだけだった。
エルデの動きを見て状態を確認しようとしているのだとエイルが気付くのに、それほど時間はかからなかった。
おそらく二年振りにエルデは自分の体を動かすのだ。何よりもまずは様子を観察する事は重要に違いない。
エルデとシグが逆の立場であってもエルデはエイルに対して今のシグと同じ事をしたに違いない。エイルはそう思った。
エルデのハイレーンの名が伊達ではない事はエイル自身がよくわかっていた。そしてシグはそのエルデの師匠なのである。
エイルはここは素直にシグに従うべきだと自分に言い聞かせた。

のろのろとした動作でなんとか上体を起こす事に成功したエルデは、息を整えながら目の前にいるエイルの顔を再び見つめた。
師であるシグ・ザルカバードではなく、エイルを。
その時である。
エルデの体をゆったりと覆うようにかけられていた紗（うすぎぬ）がずり落ちた。当然の帰結として瞳髪黒色の美少女の上半身があらわになった。
自分の体を滑り落ちて行く紗をぼんやりと視線で追っていたエルデだが、その視線を自分の体に向ける事によって彼女はようやく自分がほとんど全裸なのを知った。

「きゃっ！」
エルデは思わずそう声を上げると、ズリ落ちた紗を掴んで急いで引き上げ、それで上半身を隠した。
再び目覚めたエルデ・ヴァイスが放った第一声は、黄色い悲鳴だった。
見ればエルデの顔は今までの無表情と打って変わり、困惑したような表情を浮かべ、その頬は真っ赤に染まっていた。
唇を噛み、紗をぎゅっと抱いたその様は、およそ賢者という肩書きに結びつけるのが困難な図であった。

「ここが何処かおわかりですかな？」
エルデの困惑など意に介さぬといった風に、シグは静かな口調でエルデにそう声をかけた。
エルデは真っ赤になってうつむいたまま、こくりとうなずいた。
そして小さな声でそうポツンと呟いた。
「大丈夫」
続けて答える。
「ここは『時のゆりかご』ですね」
シグは無表情のまま弟子の様子を観察するように見つめながら、続けてたずねた。

「私めがおわかりになりましょうか？」
「無論です」
エルデはこれにも小さくうなずいた。
「わが師《真赭の頤》　いえ、今はもうただのシグ・ザルカバード、でしたね」
エルデの声は落ち着きを取り戻してきていた。その声は細く高く、そしてその場を支配するかのように力強く響いた。決して大きな声ではないはずなのに、エイル達にはしっかりと聞き取る事が出来た。

エルデの「本当の声」を聞いたエイルは不思議な気持ちだった。
ああ、こんな声だったのか、と。
ぼんやりとそんなことを思っていた。
彼の頭の中に響いていたエルデ・ヴァイスの声は、一応声ではあったが、エイルにとっては耳に響く実際の声ではない。頭の中で意志が響くだけなのだ。
今までエイルはその意志に勝手に声を「色づけ」してエルデの声として聞いたつもりになっていたのである。
まさかエルデが女だとは想像もしていなかったものだから、エイルが勝手に作り上げたのはやや軽めの騒々しい若い男の声だった。
それだけにそのあまりに大きな違いに軽くめまいをおぼえた。

「さて、その様子ならばご自分の事もおわかりですな」
続いて投げかけられたシグの質問にも、少女ははっきりとした声で答えた。
「我が現名はエルデ・ヴァイス」
そして一行は再び「その名」を耳にすることとなった。

「継ぐは……《白き翼》」

# 第二十三話　ピクシィの少女

《白き翼》エルデ・ヴァイス。
エルデが再び口にした賢者の名はアプリリアージェの記憶にはない名前だった。つまり、いわゆる「紳士録」には載っておらず、シルフィードが入手している「賢者の名簿」にもそれはない。
とはいえ、それは当たり前だという気もしていた。なにしろエルデ・ヴァイスという名で今し方まで仲間であった人物の賢者名である。既知の名である方が奇妙だと言える。

??こんな時にアトルが居てくれたら……。

アプリリアージェは絶対に口にしないと決めていた言葉を不覚にも心の中でつぶやくことになった。
歩く図書館を自称するアトラック・スリーズであれば、紳士録に記載されている賢者の名前はおろか、過去に判明している賢者の名を全て記憶しているはずだったのだ。
だが、アプリリアージェはすぐに自分の考えを唾棄すべきものだと判断することにした。
アトラックが知っていたからと言ってそれが何になるのだ?
そう結論づけたのだ。
何より本人がそこにいるのだから。
アプリリアージェは頭の中を整理した。
そこにいるルーナー……高位ハイレーンの賢者名は《白き翼》。
そして、現名(うつしな)はエルデ・ヴァイス。
種族はピクシィ。瞳髪黒色(どうはつこくしき)の若い娘である。
正確な年齢はもちろん不明だが、成人と思われる。幼さを感じない面立ちからすると、二十歳か、あるいはそれ以上か。
目で見て入手できる情報はそれだけだった。

想像や予想は自由だが、アプリリアージェには今そうする事に意味があるとは思えなかった。
後は本人から情報を得ればいいのである。

（なんにせよ……すべてはこれからだ）

《蒼穹の台（そうきゅうのうてな）》にしろ《二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）》にしろ、《白き翼》という賢者の名を口に出せば、さすがに知ってはいるだろう。だが男の姿をしたエイル・エイミイの姿にその名を重ねることは不可能だったという事なのである。想像だにできなかったに違いない。
しかし、目の前にいる瞳髪黒色の恐ろしい程の美貌を持つ少女がその名を口にすれば話は違う。《二藍の旋律》が本来の姿の《白き翼》と最初に出会っていれば、ランダールの宿屋の娘、カレナドリィ・ノイエがその若い命を失う事はなかったであろう。
しかし、そこで疑問が同じ輪を巡り出す。
そこまでしてひた隠しにしていた《白き翼》という名が一体どれほどの重さを持つというのか？
つい今し方シグ・ザルカバードが口にした言葉をアプリリアージェは改めて思い出していた。
『その名を知った者を現世に帰すわけにはいかない』
シグは間違いなくそう言ったのだ。そのときの強い調子には冗談のかけらすら感じられなかった。文字通り「そう」なのだろう。
つまりエルデの行動をシグが証明して見せたのだ。《白き翼》がどうやら本当に特別な名前であることを。
（でも、なぜ？なぜ隠す？）
アプリリアージェの疑問は、同時にエイルの疑問でもあった。そしてもちろん、ファルケンハインにとっても。

「色々と驚きの連続ですが《白き翼》と名乗るあの少女を見ても、私にはどうにもピンと来ません。体が全く違うと言ってしまえばも

ちろんですが、それでも古語で大言壮語しているエルデとは雰囲気が違い過ぎませんか？」

アプリリアージェの耳元でファルケンハインがそう囁いた。それはアプリリアージェとて感じていたことではあった。

「態度の是非はともかく、エルデが言っていたことはいつも決して大言壮語ではありませんでしたけれど」

「まあ、そう言われれば確かにそれはそうですが」

「その話はともかく、私もあのピクシィの《白き翼》がエルデの正体だと言われても俄に納得できないものがあります」

そうつぶやくアプリリアージェの前方で佇む少女の姿は、どうみても自分の背丈よりも長い儀仗を振り回し、信じられないような強力なルーンをサラリと唱えて見せる賢者には見えなかった。

だが、ただの少女ではない事も感覚として理解できていた。一見弱々しげに見える少女が纏う強いエーテルが見えるような気がしてならなかった。

アプリリアージェが気がかりなのは、その雰囲気が快いものではなく、むしろ不快と言える種類のものであることだった。

警鐘とまでは言わぬまでも、心の中に生じた不安の種が次々と芽吹く事をどうしても止められない、そんなざわざわと落ち着かない気分がずっと続いているのである。

「さて、お体の具合はいかがですかな？」

エルデはシグにそう問われると、初めて気付いたように腕を伸ばして手を握ったり開いたりして見せた。そこには上体を起こそうとしてもがいた時の、下手な操り人形のようなぎこちなさはもう無かった。

「完全な修復には心より感謝します。今のところ不具合はないようです」

「それは祝着」

「ですが」

エルデは胸をなで下ろしたシグにその美しい顔を向けると、その大きな目をつり上げて睨んだ。ただでさえ目尻が上がり気味の、その美貌が眉根に皺を寄せてにらみ据える様は、相当の威嚇効果があった。エイルなどはそれが自分に向けられたものではないのにも関わらず、息をのんで思わず上体を後ろに反らそうとしたほどである。

「いかがしました？」

「いかがしましたもないでしょう？私のこの体を裸のままで安置してあった納得のいく理由をお聞かせ願いたいものです」

エルデの怒りは少女らしいもっともな理由であったが、それを聞いたアプリリアージェとエイルは拍子抜けしたように肩の緊張を解いた。

「これはしたり」

シグは《白き翼》の指摘に、自分の禿げた額を手でピシャリと打った。

「美しいものをもっとも美しく見えるように安置してあっただけでございます」

《白き翼》はそれを聞くと名前とは裏腹に顔を真っ赤にしたままでシグの軽口とも取れる回答に対して小さくため息をついた。

「まったく」

「まあ、お体に不具合がないようで何よりです。しかしながら私には再会を喜んでいる時間はあまりないようです。つきましては早速」

「早速？」

《白き翼》エルデ・ヴァイスは首をかしげるようにして自分の師を見上げた。

「何の話です？」

「とぼけてもらっては困ります。忘れたとはおっしゃいますな。あなたのわがままを聞き入れた代わりに、今度は我が意志を通す番だと申し上げております」

そう言うとザルカバードはエルデの頭に手を載せ、そのまっすぐな黒髪をそっと撫でた。エルデはそれを嫌がらず、されるままだっ

た。
だが、そこには大きな変化が生じていたのである。
「司令！」
二人の様子を見て、ファルケンハインは思わず声をあげた。
言われるまでもなくアプリリアージェにもその時シグ・ザルカバードに起こった変化が見えていた。
大賢者の姿がどんどん薄くなっているのだ。透けているのである。
その状態でありながらもシグ本人は慌てず騒がず、驚きのあまり目を大きく見開いている目の前の弟子に静かに語りかけた。
「あの後少し考えてみました。結果として私はもう何も言わぬ事にしました。あなたはお好きなようにお生きなさいませ」
「その体……師匠、まさかすでに？」
シグの透けてゆく体に気付いたエルデの言葉に、シグはうなずいた。
「既に滅せられた身です。エーテル体としてこの閉ざされた世界で短い生にしがみつくよりも、我が主の糧となりとうございます」
「バカな！」
エルデは思わずそう叫ぶと、寝台の上に慌てて立ち上がろうとした。だが、まだ自分の肉体を完全に制御できていないのであろう。立ち上がった瞬間に足下をふらつかせると、その場に膝を突いた。
「あっ」
慌てて手をついたエルデは、そのままの姿勢で顔を上げた。その視線の先にいたシグ・ザルカバードはにっこりと微笑むと、透き通る腕を伸ばした。
「この空間を出ても、しばらくの間はお側におります故」
そしてそれがシグ・ザルカバードが発した最後の言葉になった。
大賢者《真赭の頤》は《白き翼》に手を伸ばした姿のまま消え去り、代わりにその場には小さな赤い光が浮いていた。
一同が固唾を飲んで見守る中、エルデは唇を噛むと顔を上げ、意を決した様に小さく、だが力強い声を発した。

「ノルン！」
それはエイルが儀仗を呼び出す言葉の一つ、いや、その三色の儀仗につけられた銘であることをアプリリアージェ達は既に知っていた。それを裏付けるように次の瞬間には見覚えのある三色の長い儀仗がエルデの細い手に握られていた。
いつものように、地面に対して水平に。
その姿を見た誰もがその時に思った。この少女は本当にエルデ・ヴァイスなのだと。

儀仗の主はそれを水平のまま前に突き出すと、目の前に浮く赤い光に向かって静かに語りかけた。
「《白き翼》の名において命ずる。我が糧となり我が求めにより我が道を照らせ、ザルカの王、シグ・ザルカバード」
はっきりとした発音だった。その場の誰もがエルデの言葉を明瞭に聞き取ることができた。言葉は平文で、その意味もわかった。わからないのは何が起こるのか、だけであった。
だがそれもほんの数秒の事であった。変化はすぐに現れたのだ。中空で光っていた赤い光がエルデの言葉に反応するかのように儀仗の頭部にスッと入り込んだ。エルデの唱えた言葉は、赤い光を取り込む為のものだったのだ。
その赤い光はエルデの儀仗の中でしばらく光っていたが、やがてふっつりと消えた。
エルデは光が消えるのを確認すると、ゆっくりと儀仗ノルンを下ろした。

「エルデ！」
シグ・ザルカバードの赤い光の消滅に伴い、エイルの呪縛が解かれた。エイルはすぐに寝台の上でぼんやりとしているエルデに駆け寄った。
「お前、本当にエルデなんだな？オレの中に居たエルデ・ヴァイス

なんだな？」
　そう叫びながら近づいてきたエイルを認めた瞳髪黒色の美しい娘は、驚いた顔を見せるとあわててノルンを持った手を上げ再び前方に突き出し、ごく短いルーンを唱えた。
「パラス！」
　認証文がエルデの口をつくと同時にエイルの体は本人の制御を離れ、何かに塗り込められたように動かなくなった。
「エ、エルデ？」
　エイルは沈痛な声でエルデに訴えた。
　エルデはしかし、羽織った紗の前合わせをしっかり閉じながら胸を隠し、寝台の上をじりじりと後ずさった。顔は真っ赤で、その目は大きく見開かれていた。そしてその吊り上がった目はエイルを睨んでいた。

「誰？」
「え？」

　その短いたった二つのやりとりの後、その不思議な広い空間に、微妙な沈黙の時間が流れた。
　エルデはそこで初めてアプリリアージェ達の存在に気づいたような顔をして、周りにいる人間を観察するようにじっと見つめた。自分以外に三人の人間が存在しているのを確認すると、全員に向けて同じ問いを投げかけた。
「あなたたちは何者です？《真赭の頤》の客人ですか？」
　その言葉を聞いて一歩踏み出そうとしたファルケンハインの肩をアプリリアージェが手をかけて制した。
　エイルと言えば、もちろんエルデの口から出た二つの言葉に混乱していた。認証文と、そして「誰？」と言う言葉である。
　エルデの憑依が解けた。それはいい。

驚いたのは、ずっと男だとばかり思っていたエルデが女だったこと……それにシグ・ザルカバードの謎の言葉……そして消滅。

いや、そんなことよりもなによりも、なぜエルデが自分を覚えていないのかが直面する大きな謎だった。

「エルデなんだろ？現名はエルデ・ヴァイスだってさっきちゃんと言ったろ？本当の名前ってやつは教えて貰ってなかったけど、《白き翼》っていうマーリン正教会の賢者なんだろ？ずっとオレに取り憑いてたのは……オレの頭の中に勝手に入ってきたのは、エルデ、お前なんだろ？」

幸い、声は出せた。

だからピクシィの少女に、エイルはたまらずそう声をかけた。

相手の気持ちを高ぶらせないように、エイルとしてはできるだけ感情を抑えてゆっくりとしゃべったつもりだった。

しかし、エルデはかぶりを振った。

「何の事かわかりません。私は……あなたのことなど、知りません」

その返答に、エイルよりも先にアプリリアージェがエルデに声をかけた。

「賢者エルデ・ヴァイス。いえ、ここは《白き翼》とお呼びした方がいいのでしょうか？」

エルデはアプリリアージェの声にビクリと体を反応させると、ゆっくりと声の主に顔を向けた。

「《白き翼》という名前をもし耳にしたのだとしたら、それは今すぐに忘れて下さい。訳あって口にすることは出来ぬ名前なのです」

エルデのその答えにアプリリアージェの眉が少し反応した。

「？？わかりました。では賢者ヴァイス。我々二人の事も覚えていらっしゃいませんか？」

エルデに呼びかけるアプリリアージェの声はいつもと変わらず優しく穏やかなものだった。二人の間に距離が少しあることもエルデには安心感に繋がったのであろうか、アプリリアージェに対しては

さほど警戒した表情は見せなかった。
だが、エルデが口にした返答それ自体はアプリリアージェにとって芳しいものではなかった。
「？？いいえ。覚えていません」
エルデはそう言って首を左右に振ると、弱々しくうつむいた。
「皆さんは一体何者なのですか？なぜこの『時のゆりかご』に？ここは鍵を持っている人間だけが入れる特殊な場所のはずです」
アプリリアージェは口を開こうとしたファルケンハインの言葉を片手を小さく挙げて封じた。この場は全て任せろという合図だ。
「賢者ヴァイス。お見受けしたところ、あなたは最近の記憶をすべてなくしていらっしゃるようですね」
エルデはその言葉にさらにうつむいたが、何かを思いついたかのようにすぐに顔を上げた。しかしアプリリアージェはエルデが何かを口にするよりも先に話を続けた。
「これは最初に申し上げておきます。私たち……ここにいる者は皆あなたの敵ではありません。そこにいるエイル・エイミイも私、アプリリアージェ・ユグセルも、私の後ろにいるファルケンハイン・レインもすべてあなたの仲間です」
「仲間、ですか？」
「味方」と言わずに「仲間」と敢えて言葉を選んだアプリリアージェは、微笑んでいるような顔をさらにほころばせてとろけるような笑顔を見せた。
「先ほどからここで起こった事は私の理解を超えているのでよくわかりませんが、賢者ヴァイスは訳あって憑依の呪法……いえ、正しくは「移魂」の呪法とやららしいですが……とにかくその呪法でエイル・エイミイという少年に意識を同居させていたようです。その呪法が解かれたと、あなたの師である大賢者ザルカバードがおっしゃっていましたよ」
その言葉を聞いたエルデの眉間に一瞬皺が寄ったのを、アプリリアージェは見逃さなかった。

「『移魂』……ですか」
エルデはそう反芻するようにつぶやくとエイルの方をみやった。
「この人に……私が？」
エイルはエルデをまっすぐに見ていた。エルデはエイルのその顔を見ると、苦しそうな表情になり、すぐに目をそらした。
アプリリアージェはエルデの様子を子細に観察しながら、話を続けた。
「私たちはエルデ・ヴァイスの賢者の名を今ここで初めて知りました」
アプリリアージェはエイルと出会ったいきさつからここに至る道程をかいつまんで説明し出した。自分たちが何者であるのかも包み隠さず。さらには別の場所にいるほかの仲間の事も。
もちろんエルネスティーネやルネの事も含めて。

「私たちは、そうやって《真赭の頤》に会うために、ともに旅をしてきた仲間なのです。あなたのルーンに私たちはずいぶん助けられました。心から感謝しています」
アプリリアージェが話をしている間、エルデは終始無言だった。うつむきがちに自分の手元を見つめてダーク・アルヴの話に耳を傾けていた。
「少しは思い出しましたか？」
アプリリアージェの問いに、しかしエルデは首を横に振った。だが、アプリリアージェはそれを見てもかまわず続けた。
「《真赭の頤》に会うことができて、あなた……いえ、あなた達の目的は達せられたようです。でも実は私の目的は達せられることなく《真赭の頤》は消えてしまわれました。その点が非常に残念です」
「そうでしたか」
エルデはアプリリアージェの話がひと区切りつくと、そうつぶやいた。
そして、今度はもう少しはっきりした声で続けた。

「あなたたちの事はわかりました。では、私の事も少しお話ししておきましょう」

アプリリアージェはエイルと目が合うと小さくうなずいて見せた。話を聞こうと言う合図である。エイルはうなずき返した。

「私は師を探す旅の途中で致命傷を負いました」

エルデは高いよく通る声で静かに話し始めた。

「すでにご存じのようですが、私はルーナーの中でも、治癒の力を持つ者。すなわちハイレーンです」

アプリリアージェはうなずいた。

「そう伺っています」

エルデは小さくうなずいた。

「理由は申せませんが、私は『授名の儀』と呼ばれる儀式の途中で我が師から空間転移にかけられ、遠い場所に飛ばされました。直前に我が師が叫んだ言葉、『我が庵にある宝珠を集めよ』を実践すべくファランドール各地を巡っていたのですが、ある場所でちょっとした罠にかかり、倒れたのです。私の記憶はそこで途絶えています。私が倒れた場所は、特殊で強力な結界が幾重にも複雑に張り巡らされていました。その中で履行された多くのルーンを自動的に解除するという、あまり例のない結界でした。私のルーンもそこではほとんど封じられてしまい、深手を負っていた私はそのままではそこで徒(いたずら)に死を待つばかりでした」

アプリリアージェは今し方エルデの口から出た「修復」という言葉を思い出していた。「致命傷」というほどである。その際、相当な外傷を体に負ったものと推理できた。

「その時の私に出来る事は限られていました。数少ない選択肢のうち、私は生き延びる為の唯一の選択肢……いえ、一つしかないのに選択肢とはいいませんね。ともかく残された唯一の手段である古の呪法を使うことにしました。それは私に与えられた特殊な力の一つで、およそ人が作る結界の影響など受けないものなのです」

そこでエルデはまた目を閉じた。

「そして、その呪法を発動した後、そのまま意識を失い……気付いたらこの場所にいた、という事なのです」
そこまで言うと、エルデはまた何かを唱えた。すると次の瞬間、エイルはバランスを失ってその場に倒れ込んだ。
「あ、ごめんなさい……大丈夫ですか？」
倒れ込んだエイルを助けようとしてエルデはあわてて寝台から起き上った。だが、手を伸ばしたものだから、支えていた紗がまたもや体からずり落ちて、エイルの目の前にあられもない姿をさらすことになった。
「きやっ！」
悲鳴を上げてその場にしゃがみ込んで恥ずかしがる様子は、本当に普通の少女のようだった。
エイルはエルデのその姿を見て、思わず目をそらした。
「み、見てないから」
倒れたままの状態でエイルはそう言うと、腰をさすりながらゆっくりと立ち上がった。
自分にかけられた呪縛ルーンを、エイルは当然ながら何度も目撃していた。今まで自分自身が使っているようなものだったからだ。
だが、そこには大きな違いがあった。エルデはいまだかつて相手を「空中に」固定した事など一度もなかった。
「ごめんなさい。『時のゆりかご』の中はエーテルが少なくて、ルーンの制御がどうにも現世とは勝手が違うようなのです」
ルーンの制御もそうだが、何よりエイルはエルデの性格が自分の中にいた人格とあまりに違いすぎる事に対して混乱していた。目の前の瞳髪黒色の恐ろしい程の美貌を持つ娘がエルデだというのであれば、今まで頭の中にいた人格とは全くの別人と言うしかない。
つまり、今目の前でうすぎぬを纏っている少女に対して、エイルはいったいどう接していいのかが皆目解らなくなってきていた。
（こいつは、どう考えても『あの』エルデじゃないだろ？）
そこのところ、つまり何がどうなっているのかを問いかけたかっ

た。
だがさすがにエイルもこの場はできればおとなしくアプリリアージェの指揮下に入った方がいいと感じていた。聞きたいことは山ほどあったが、それは後でもいい。なによりまずは冷静になる必要があった。頭に血が上って沸騰しそうな程混乱している。冷静になる時間が欲しい。客観的に現状を俯瞰する事が、混乱回避の近道だと自分に言い聞かせていた。そしてもう一つ。エイルは彼自身大きな問題に直面していたのだ。なぜなら彼の頭の中には戻ったフォウの記憶がどんどん流れ込み、それを受け入れるだけで手一杯だったのである。

よろよろと立ち上がったエイルに、エルデは心配そうな顔をして、小さな声で尋ねた。
「あの、どこか痛いところはありませんか？」
大きな黒い瞳で自分を見上げながら心配そうにそう尋ねる様子は、エイルの中にいたエルデとは完全に乖離した存在に思えた。
「あ、うん、大丈夫だ」
「さっきはごめんなさい。怖かったのでとっさに縛ってしまって」
「いいんだ。こっちもいきなり飛びつくようなマネをして悪かった。でもエルデの本体っていうか正体にはちょっと……いや、思いっきりびっくりしたというか、つまりオレは相当混乱してるんだ」
エイルは小さく手を振ってそう言った。
「あ、あの」
エルデはエイルの方を向いておずおず、と言った感じで声をかけた。
「あの、私、本当にあなたの体に意識を同居させていたんですか？」
「うん。かれこれ二年以上も、だ」
「二年も……そうですか」
エルデはまたうつむくと、もじもじとした動作を見せた。
エイルは言葉を待つことにした。

「あ、あの」
エルデは顔を上げてまたエイルに声をかけた。エイルはエルデが真っ赤な顔をしているのを見て少し驚いた。
「は、はい？」
エルデの表情に狼狽したエイルも、思わず赤面してしまっていた。
「そ、その……私、あなたにご迷惑をかけてしまいませんでしたか？」
「迷惑？」
「私は、この見かけと違ってかなりそそっかしいし……迷惑ばかりでしたか？」
「あ、いや、迷惑というか、ひどい目に遭わされたというか」
「やっぱり」
エルデは大きなため息とともに肩を落とした。

エイルは思い出していた。
何度言ったかわからないあの言葉。『いつか絶対ぶっ飛ばす』
同時に、それに答える『ぶっ飛ばせるならぶっ飛ばしてみろ』というエルデの台詞も。
考えてみれば、エイルは今、物理的にエルデを「ぶっ飛ば」せる状況下にあった。それはまさに昔年の恨みを晴らせる絶好の機会と言えた。
（うーん）

「いや、そう言うんじゃないけど……。いや、迷惑っていうのは……うん。なかった」
エイルが言葉を選びながらそういうと、エルデの顔がぱっと輝いた。
「本当ですか？私、ちゃんとやってましたか？」
「あ、ああ。うん、そうだな。いや、どっちかというと」
「どっちかというと？」

「いつも罵倒……じゃなくて叱られてたな、エルデには」
エイルは頭をかきながらそう言った。だが、エルデは小さな口を右手で押さえると目を見開いて驚いて見せた。
「えええ?私が?そんな、叱るだなんて」
「うーん、まあ」
「そんな、私、一体何をやらかしていたんでしょうか」
アプリリアージェはそこまで黙って二人のやりとりを聞いていていたが、こらえきれなくなったようにクスクスと笑い始めた。
「あ、でもまあけっこう楽しくやってたと思う」
エイルはアプリリアージェが笑うのを横目で見ながらも、そう答えた。
「そうですか。良かった。少し安心しました」
「いや、本当に何度命拾いをしたかわからない。エルデのおかげでいつも助かっていたんだ」
「あ、いえ。よくわかりませんがそう言っていただけると、ちょっと肩の荷が下ります」
そう言うとエルデは心底ほっとしたという風にため息をついて肩を落とした。

# 第二十四話　失敗

「あの。いいかしら？」

くすくすと笑い続けていたアプリリアージェが、たまりかねたようにエイル達に声をかけた。そしてそのままゆっくりと二人がいる寝台に向かって近づいていった。彼女が声をかけたのはエイルではなく、視線を追う限りではどうやらそれはエルデのようだった。

その証拠にアプリリアージェはエルデの前で立ち止まった。

目の前の瞳髪黒色の少女を、アプリリアージェは改めてじっくりと見つめた。

黒い豊かな髪は腰までまっすぐに伸び、薄ぼんやりとした「時のゆりかご」の灯りを受け、上等なビロードよりもさらに深みのある艶を放っていた。アプリリアージェは自身がファランドールでは珍しい黒髪であるが、他人の髪の色を多少なりとも羨ましく思ったことはあったが、自分の髪の色を誇りに感じたことは無かった。だが、エルデを見て、初めて漆黒の髪がこれほど美しいものであることを知った。

その髪と同じ色をした闇を塗り込めたかの様に黒い瞳は濡れたような輝きを放ち、アプリリアージェをじっと見つめていた。その大きな瞳を見ていると、深遠に引きずりこまれるような足元が覚束ない錯覚を感じる程であった。それだけではない。エルデの切れ長の目はぞっとするほど美しい顔立ちと相まって、澄ましていると近寄りがたいほどの威圧感があった。

アプリリアージェは、隠そうとしても隠しきれない気品……それは時として長く続く貴族や王族に見られるようなものだったが……まさにそれをエルデの表情から感じていた。賢者と言う存在が只者であるはずも無いのだが、エイルの姿を借りていた時とは比べものにならない程の、それも通り一遍のものではなく、何か特別なものを感じさせる力に満ちたものだった。

だがアプリリアージェは今、その事について詳しい追求をするつもりは毛頭ないようだった。
彼女はエルデのさらに近くまで寄ると、その顔をのぞき込むようにしてにっこりと微笑んだ。それがアプリリアージェの特徴なのだと言うことがわかってはいても、つい警戒を解いてしまうような、そんなすばらしい笑顔だった。
エルデに微笑みかけたアプリリアージェは、次にある行動を起こした。それはその場にいた誰もが全く想像もしないようなものだった。
アプリリアージェは右手をスッと無造作にエルデの方に伸ばした。
そして……
「あ！」
「え？」
それは文字通りあっと言う間の出来事だった。
アプリリアージェの目尻が普段よりいっそう下がったと思ったとたん、彼女はエルデが抱え込むようにしていた紗に手をかけると、あろうことかエルデが素肌を隠す唯一の物であるそれを一気にはぎ取ったのだ。

「きゃあああっ！」
エルデは悲鳴を上げると、反射的にその場に体を丸めてしゃがみ込んだ。
「何をするんです！」
エルデは両腕で胸を隠しうずくまると再び顔を真っ赤に上気させ、自分を見下ろすように立っているダーク・アルヴの顔をにらみつけて抗議した。
だがアプリリアージェは、はぎ取った紗を後ろの方に投げ捨てると、彼女にしては珍しく悪意を含むようなニヤリとした笑いを浮かべ、自らのその、大振りで形のいい胸をわざと突き出すようにしてエル

デを見下ろしていた。
「ふーん」
そしてエルデの体をじろじろと見回す様にした後で、バカにしたような声でつぶやいた。
「なんだ。顔はともかく、胸はティアナ並ですね」
そう言って、その大きさを見せ付けるように胸を反らせて見せた。
それは言ってみれば挑発とも取れる行為であった。
「なっ！」
アプリリアージェのその行為はよほどカンにさわった様で、エルデは顔をさらに真っ赤にすると、アプリリアージェの挑発に即座に反応した。
「失礼なっ。どう見てもティアナよりはウチの方が大きいやろ！」
「へえ」
「あ……」
エルデはそこで絶句するとがっくりと頭を垂れた。それを見たアプリリアージェは、自分のマントをさっと脱ぎ、それをエルデの体にそっとかけてやった。そしてエイル達の方を振り向いて首を傾げる仕種をした。
そこにあったのは、普段の優しそうでおだやかな微笑だった。
「だ、そうですよ」
そのアプリリアージェの言葉に、ファルケンハインとエイルは顔を見合わせた。
「エルデの言うとおり、確かに結構ある方だと思うけど」
エイルはエルデから不自然に顔をそらせながら、そう言って頭をかいた。
「ウチの胸の話はもうええって。このスケベっ」
エルデのその言葉に、エイルはようやく気付いた。
「ああ！エルデ、お前！」
アプリリアージェはうなずいた。
「エルデは記憶をなくした『振り』をしていただけですよ」

アプリリアージェの言うとおりであった。ティアナの事を知らないはずのエルデが胸の大きさを比べられて憤慨する事などあり得ないのだ。確かにアルヴ族の女性は他の種に比べると極端に乳房が小さい。それは種の特性なのだが、会った事もないはずの人間の名前を聞いただけでそれがアルヴだと判断出来る人間などいない。すなわちエルデはティアナの事をよく知っているという事になる。

「完璧な演技やと思てたのに」

エルデはアプリリアージェに掛けてもらったマントを羽織りなおしながら、そうつぶやいた。

「何でわかったん？」

「カン……でしょうか」

「カン？」

「確証はなかったんですが、間違いないとは思っていました」

そう言うと、アプリリアージェはいつもの微笑をエルデにむけた。

エイルは、アプリリアージェのマントをすっぽりかぶったエルデを見てあることを思い出すと、自分が着ている薄茶色のマントを脱いだ。そしてそれをエルデに差し出した。

エルデの長い髪の間からのぞいている耳は、その先端まで赤く染まっていた。唇をきゅっと結んでうつむいて座っているエルデはエイルが差し出したマントをじっと見た。

「お前のマントだ。この後に及んで忘れたとは言わせないぞ」

エルデはラシフのマントを手に取った。

「アホやな。忘れるわけないやろ」

地面に届こうかという程長く伸ばして、丁寧に手入れをしていた美しい髪をラシフは惜しげもなくバッサリと裁ち、それを使ってエルデの為のマントを織り上げたのだ。忘れるはずが無かった。

「さすがにそこまで不義理やない」

ぽつんとそう言うエルデに、エイルはうなずいて見せた。

微笑みながら、そして小さくため息をつきながら。

「さて、一通り落ち着いたところで、続きの話と行きたいところですが、とりあえずここを脱出しませんか？残してきたリーゼ達のことが気になります」
「あ」
エルデは思い出したように顔を上げた。
「そやね。もうずいぶん経ってると思う」
「帰る方法はあるのです……よね？」
アプリリアージェの問いかけに、エルデは力強くうなずいた。
「それを聞いて安心しました。私とファルはそれでいいとして、賢者ヴァイスとエイル君はこの後どうしますか？」
「え？」
アプリリアージェのその言葉に、エイルはハッとした。
そう。シグ・ザルカバードが消滅した時点でル＝キリアにとってエイルやエルデと一緒に行動する理由も同様に消滅したと言えた。
「とりあえずヴェリーユまで行こ。ここから出るのは普通の人間には不可能やから、どちらにしろそこまでは一緒や」
エルデはそう答えたが、もちろんそれはアプリリアージェが望んでいた明確な回答ではなかった。

「オレ、この後もリリアさん達と一緒に行かせてもらえませんか？」
エイルはアプリリアージェにそう言った。
その回答はアプリリアージェとしては予想していたものだった。
自分の居た世界に帰ることを放棄してまでファランドール残留を決意した理由。その一つはル＝キリアと行動を共にするエルネスティーネの存在なのであろう、と。
だがアプリリアージェがエイルの申し出を受け入れる為には一つ大きな問題があった。
「賢者ではなく、ルーナーでもないただのエイル・エイミイがネスティを守れると？」
アプリリアージェはエイルからその申し出があった場合に問うべき

言葉も既に用意してあったのだ。
もちろんそれは一つの部隊を預かる立場として当然の問いと言えるだろう。
その、当然ではあるが厳しい問いかけにエイルは思わず唇を噛んだ。
アプリリアージェが言うようにエルデが離れた今、エイルはルーンが使えない。ルーナーではない、ただのエイル・エイミイだ。剣が使えるだけで、フェアリーでもない。
だがその事はエイルとしてもすでに理解していたことだった。彼はアプリリアージェにそう問われた時の言葉を彼になり用意していた。
「剣士エイルとしてでは……駄目ですか？」
そしてエイルのその答えまではアプリリアージェの予想通りであった。
「そうですね。難しい問題なので少し考えさせて下さい。それでいいですか？」
「はい」
「賢者ヴァイスはもう身の処し方を決めているのですか？このまま正教会に戻られますか？」
エルデはアプリリアージェの言葉に再びうつむいた。
「それは……でけへん」
「――事情がありそうですね。お聞きしてもいいですか？」
「それは……」
エルデはうつむいて迷った様子を見せたが、マントの前をかき合わせると立ち上がった。
「どちらにしろ話は長くなるから、とりあえずここを出ることにしよ」
エルデの提案にアプリリアージェがすかさず賛成した。
あれから現世（うつしよ）でどれくらい時間が経ったのかがわからない。どちらにせよエルネスティーネやティアナが心配しているのは間違いない。
だから、出来るだけ早く戻った方がいい。
そう、彼女の本能が告げていた。

「ウチは、名前を明かしたとたん、正教からも新教からも追われる立場になる。師匠はウチの名前を隠すためにウチを逃がした。それだけやない。ウチの『授名の儀』に立ち会ったばかりにその名を知ってもうた賢者を数人、その場で手に掛けたんや」

エルデの先導で、倉庫、いや『時のゆりかご』の中を一行は歩いていた。エルデはその道すがら、ぽつぽつと今まで一切口にする事がなかった自らの事を話し始めていた。

「大賢者があなたを教会から……逃がした？」

「大賢者が賢者を、殺したって？」

アプリリアージェとエイルの両方の問いに、エルデはうなずいた。

「ウチを教会から逃がす。それだけの為に師匠は命を落としたんや」

そう言ったあとエルデはうつむいた。

「命を……落とした？」

「さっきあそこに居たのは賢者ザルカバードだったじゃないか？」

ファルケンハインが思わず声を出した。

「うん」

力のない声でそう答えると、エルデはすこし間を置いて続けた。

「ラウに話を聞いたからうすうす感じてたんやけど、あれはエーテル体。精霊が作る力に人間の精神や意志を封じ込めて実体化させる事ができる特殊な術や。ウチも始めて見たから、生きてるものやと信じてたわ。あの姿はたぶんこの『時のゆりかご』でのみ維持できる姿と言いかえた方がわかりやすいかもしれんな。おそらくは三聖《蒼穹の台》ことイオス・オシュティーフェがやった事やろうと思う」

「なぜそう言うことに？」

「だから言うてるやん？ウチの名前が原因や」

「名前？先ほど呼ぶなと言った《白き翼》という名前ですか？」

エルデはアプリリアージェの問いにうなずくと、歩みを止めて一行

を振り向いた。
「もういっぺん言うとく。現世（うつしよ）に戻ったら二度とその名を口にしたらあかん」

# 第二十五話　賢者の法則

一行は岩をくり抜いて作られたような薄暗い道を歩いていた。
それは大小のスフィアが浮かぶ不思議な倉庫のような巨大な空間からいくつも枝分かれをしている通路の一つだった。通路には途中にいくつもの岐路があり、先は暗くて全く様子がわからない。水先案内なしに簡単に目的地にたどり着けるような構造ではないという事を誰もが納得するしかなかった。
ラシフの髪を編み込んだ薄茶色のマントを羽織ったエルデは、迷う事なく幾つもの分岐を越えていた。彼女は頭頂のスフィアから光を放つ三色の儀仗を手にして、体の感触を確かめるかのように一行の先頭をゆっくりと歩いていた。

「賢者は賢者になる際、つまり儀式により賢者の徴を得る時に初めて賢者としての名前をつけられるんやけど……」
道すがら、エルデはぽつぽつと皆の疑問に答えていた。
「《真赭の頤（まそほのおとがい）》とか、《二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）》という色の名前が付いた賢者名の事ですね？」
アプリリアージェの問いにエルデはうなずいた。
「そう。そして賢者になった時からその名前が真の名前となり、それまで使ってた名前は現名（うつしな）と呼ばれるようになって、その現名は現世（うつしよ）で行動する場合を除き、賢者同士の間では通常ほとんど使われることはないんや」
「で、エルデの真の名をかたってはいけない理由というのは？」
アプリリアージェの直接的な質問に、しかしエルデは答えなかった。少し間を置くと、彼女は違う話題を口にした。
「賢者の名前の付け方は独特なんや」
アプリリアージェもあえて追求はしない。新たな話題につきあうべく、合いの手を入れた。

「と言うと？」
「賢者の名は、誰かが名付け親になるという現名のようなものとは違うて、それはマーリンの徴が賢者と一体化した後、自らが意識するもの、と言うたらわかるかな？」
「意識する？」
「マーリンの徴、要するにあの三番目の眼の元、やね。それと一体化した時に、『ああ、自分は○○なんや』って自覚が沸いてくる、そんな感じや。そやから賢者になる為の儀式である『授名の儀（じゅめいのぎ）』の立会人は『賢者の徴』を手にした新米賢者に名前を聞いてどの賢者が誕生したのかを確認する役目を負うてる」
「違いがわかりにくいのですが、説明してもらえますか？『賢者の徴』とはスフィアの事ですよね。では『マーリンの眼』とは？」
「スフィアはまあ、『マーリンの眼』の容れ物みたいなもんかな。大昔に三聖が作ったもんや。重要なんは『マーリンの眼』やな。これはそれ自体には実体がない」
「え？」
「そやから容れ物が必要なんや。『マーリンの眼』も『賢者の徴』もおんなじ意味で使われる事が多いけど、つまりはそう言う事や。ま、言葉の定義とかどうでもええんやろけど、本質は違うっちゅう事や」
「なるほど、よくわかりました。容れ物が『賢者の徴』で、スフィアの事。『マーリンの眼』が中身で、重要なのはそちらである、と」
エルデはうなずいた。
「人が『マーリンの眼』と融合する事によって、眼ははじめて実体化する。融合出来たっちゅう証拠やな。『徴』のスフィアは『マーリンの眼』を得た後に儀仗や武器、装飾品みたいなものに好きに填め込めるんや。その後は教会内部では絶対的な権威の象徴になる」
エルデはそう言って手に持った儀仗ノルンの頭頂部に目をやった。
「その眼というのは賢者が持っている力の増幅装置みたいなものですか？」

「表面的な現象としてはそういう理解で基本的には間違ってないと思う」
「微妙な言い方ですね」
「知りたいとこにはちゃんと辿り着くさかい、話は最後まで聞き」
「そうですね。ごめんなさい」
素直に謝るアプリリアージェに、エルデは軽く肩をすくめて見せると話を続けた。
「実は賢者の名は固定なんや」
「固定というと？」
エルデはアプリリアージェの問いかけにうなずいた。話の腰をおられるのは嫌だが、合いの手はむしろ歓迎といった態度である。アプリリアージェもエルデのそんな性格はとうに承知していて、だからいつも敢えて話の途中で声を掛ける事をためらわなかった。エルデがもし脱線を嫌うなら、さっきのように明確にその意思を告げる事が出来る。合いの手に乗ってくるならば、それは彼女自身がそれを許し、あるいは利用としているということであろう。アプリリアージェはエルデのそんな所に自分との類似点を見つけていた。そして同時に、今会話をしている初対面の瞳髪黒色の少女がエルデ・ヴァイスというよく知っている人物と同一の人間である事を実感していた。

エルデの話は続く。
「賢者候補生は、すでにある賢者の名前、ううん、マーリンの眼を受け継ぐ事によって賢者になる。つまり、マーリンの眼は賢者が死んでも消滅せず、また違う人間に受け継がれていくもの……。その眼を受け継いだ多くの人間達の記憶と共に、や」
「記憶が、受け継がれるんですか？」
「勿論、歴代の継承者の記憶が克明に刻まれているわけやなくて、重要な部分だけなんやろうけど。多分マーリンの眼が取り込むべき記憶を取捨選択してるんと違うかな、ってウチは思てる」

「なるほど」
エルデの説明で賢者に対する疑問点が一つ解消した。その場にいた誰もがそう思った事だろう。だがそれは新たな疑問を抱かせる事にもなった。
「という事はそのマーリンの眼が持つ力には個性がある、という事ですか？」
「もちろん。賢者の名がわかれば、その賢者の特性がだいたいわかるし、それぞれの眼だけが持つ固有の力が何かもわかる」
「だからあの時エルデはカレンにかけられた術から能力を解析して《二藍の旋律》という賢者の名前を言い当てられたのですね」
エルデはそういうアプリリアージェに視線を移すと、ため息をついた。
「リリア姉さんの記憶力と観察力にはホンマに舌を巻くわ。姉さんさえおらへんかったら記憶を失った振りをし続けられたのになあ」
「でも、あなたはきっとすぐに耐えられなくなりますよ。そして今度はいつ記憶が戻ったことにしようかってつまらないことで悩んでしまうでしょうね」
「そうかなあ」
「だって、あなたはエイル君にその……あられもない姿を見られたのが死ぬほど恥ずかしかったんでしょう？それにエイル君の中で同居していたときは、エルデ・ヴァイスは男だと思わせていたわけですし。だからいろいろとバツが悪い。だったら無かった事にしよう。とっさにそう思ったのではないですか？」
「もう、その話はええって」
アプリリアージェがそう言うと、エルデはまたもやすぐに顔を赤くした。
その様子を見てアプリリアージェはまた笑いをこらえるのに苦労する事になった。
アプリリアージェの見立てでは、エルデはどうやら感情を隠す事

が大の苦手のようだった。狼狽が手に取るようにわかる。今までは借り物の体を使っていたが為に、こういう感情の深い部分に密接した不随意的な肉体の変化に乏しかったのだろう。もしくは他人の体はそういう部分を「切り離し」できたのかもしれない。

どちらにしろ、本来の体に戻ったエルデは感情を隠すのは苦手のようだった。

アプリリアージェはエルデだけに聞こえるようにさらに耳元で囁いた。

「言っておきますけど、私があそこでバラしてなかったら、ヴェリーユに着いたら、あなたは辛い思いをするかも知れなかったんですよ？」

「辛い思い？」

「忘れてはいませんよね？ヴェリーユにはネスティがいますよ」

「ネ、ネスティとウチとに何の関係が？」

「一人は妹でも何でもないとわかった女の子。しかも今まで一番の親友だと思っていた人物なのに記憶がなくて自分のことを覚えてもいない。方や何かが吹っ切れたのか、最近めっきり積極的になってきたネスティ。エイル君と過ごした時間はあなたと比べると短いかも知れませんが、その絆は浅くないと思います。いろいろな思い出を共有しているのですから。加えて女の私から見てもネスティは相当魅力的な女の子です。そんなネスティがこの先以前にも増して積極的な行動をとる事は間違いないでしょう。さて、そこでエイル君はどう出るのでしょうね」

「何がいいたいんや？」

「私がエイル君だったらどう考えてもネスティになびいてしまうでしょうねえ。それもたぶん、あっと言う間に」

「な！」

「どうしました？」

「そ、そんなん、う、ウチには関係ないもん。だいたい、あんなヤ

ツ！」
真っ赤な顔のまま、いきなりふくれっ面になったエルデをアプリリアージェはニコニコしながら眺めていた。
　こうしているとエルデが目覚めた直後に感じた、あの近寄りがたいような雰囲気は欠片もなかった。
「それにだいたい、ネスティが前よりもっと積極的になるかどうかはわからへん」
「いえ」
　アプリリアージェはエルデのその言葉をキッパリと否定した。
「間違いなくより積極的になりますよ」
「えろう断定的な言い方やな」
「ええ。断定できますよ」
「ぐ……」
「ネスティの事はよくわかっていますからね」
「お姫さまの性格なんて単純でわかりやすいっちゅうことか？」
「あなたはそう思いますか？ネスティの性格は単純でわかりやすいと」
「いや……そう言うわけやないけど」
「あなたが知らなくて、私にはわかっていることもあるということですよ」
　アプリリアージェのその一言に反応してエルデが少しだけ眉根を寄せたが、何も言わなかった。
「そもそもネスティは今まで、会いたい人と長い間会えずに寂しい思いをした経験がありません。そんなネスティがエイル君と再会した時にどんな熱烈歓迎振りを見せてくれるのか実に楽しみです」
　アプリリアージェはそう言うと、意味ありげにエルデにニッコリと笑いかけた。さすがにこれには何かを言わんとして口を開いたエルデだったが、アプリリアージェはその言葉を聞くつもりはないようだった。話題を転じて出かかったエルデの言葉を封じたのだ。

「ところで『賢者の徴』というのは、賢者になる者が好きなもの、つまり特性や能力を選べるのですか？」

それはエルデだけに向けられた今までのヒソヒソ声ではなく、普通の声に戻っていた。

エルデは大きく息を吸うと、こちらも普通の声で答えた。

今回の舌戦では自分の方が劣勢だと認めたのであろう。エルデとしてもその話題を続けたい訳ではなかったのだから、ある意味でアプリリアージェの打切り宣言ともとれる態度は渡りに船とも言えた。

「結論から先に言うと、それは無理や。賢者候補生は『授名の儀』の開始宣言を受けると、まず『賢者の徴』が安置されている『庫（くら）』の前に立って、扉に両手を付ける。『庫』の扉には特殊な精霊陣が組み込まれてあって、そこに両手を突いた人間の能力や特性を『庫』の中に放出するんや。一種のエーテル波変換装置みたいなもんやろな。するとその人物の特性に呼応するスフィア、つまり『賢者の徴』が『庫』から出てくる仕組みや。つまり『授名の儀』っちゅうのは徴を選ぶ儀式やのうて徴に選ばれる儀式やな」

賢者になる為の儀式については一般に全く知られていないことだった。アプリリアージェ達も勿論初めて聞く内容だった。

エルデによると口外無用という決まりはないとの事だったが、あえて賢者がそれを口にする事はない事柄と言えた。

「言い換えると、『賢者の徴』が選ぶ人間が賢者と呼ばれる存在になるわけやね」

「あなたの場合、それが《白き翼》という名の『賢者の徴』だった、と？」

アプリリアージェの問いに、しかしエルデは何も答えなかった。

その態度にアプリリアージェは妙なものを感じた。肯定であればうなずけばいい。だがエルデはそれをしなかった。ならば否定ということになる。そこにまた謎が生まれてしまうのだ。

（賢者になる方法は一つではない、ということ？）

そもそもアプリリアージェはエルデが《白き翼》という名を口にしてはならない理由を説明してくれているものだと思っていた。『授名の儀』はその説明に必要な基本概念ではないのか？　ならば《白き翼》という名は、その基本から外れたものだと言いたいのだろうか？

そこまで考えていたアプリリアージェの脳裏に、ある思いつきが軽い電撃のように走り抜けた。そして今度もまたそれを心にしまっておくことはせず、すぐに口に出すことにした。ここまできたらエルデ相手に駆け引きなど必要ではないと判断したのである。

「これは私の勝手な想像ですが、正教会には三聖以外に重要な地位を持つものがいるのではありませんか？重要という言葉が適切ではないのなら、特殊と言い換えた方がいいのかも知れませんが」

その言葉を聞いたエルデは、ピタリと歩みを止めた。

「なんでそんな事を考えつくん？」

「これは今までの経緯を元に辿り着いた合理的な推理だと自負しています。あなたは三聖……いえ、少なくとも《蒼穹の台》に対しては膝を突き頭を垂れる必要のない立場にいる。そして大賢者《真赭の頤》はそんなあなたに膝をつく立場にいるようですから、簡単な推理です」

エイルはアプリリアージェの意見をもっともだと思った。彼自身も同じ疑問を持っていたのだ。エルデには特に聞きたかった事だった。

賢者としての名前を名乗らないのも、エルデの正教会における「地位」が関係していると考えるのは自然だった。

「その話は、またの機会でええかな。多分、今はまだ知らん方がええと思う」

エルデは否定も肯定もせず、そう言った。

その言葉は質問に対する肯定だとその場の誰もが判断していた。
それもエルデの戦術なのであろう。その話に対して一定の回答をした上でそれ以上の追求を合理的に拒否できる答えだと言えた。
だが同時にアプリリアージェは全く違う考えも持っていた。
（「私たちが知らない方がいい」のではなくて、「エルデが今はまだ知られたくない」のではないのだろうか？）
アプリリアージェはその時ふと「龍の道」でイオス・オシュティーフェ……《蒼穹の台》がつぶやいた一言を思い出した。
イオスはエルデ・ヴァイスという名前を看破した後でエルデをあらためてじっと見つめながら『僕は思い違いをしているのか？』と自問したのだ。
エルデの正体を突き止めてなお、そうつぶやいたわけである。誰あろう正教会の頂点にある人間がそういう名前を看破した後でエルデをあらためてじっと見つめながら『僕は思い違いをしているのか？』と自問したのだ。
エルデの正体を突き止めてなお、そうつぶやいたわけである。誰あろう正教会の頂点にある人間がそういう言葉をつぶやくというのは一体どういう意味を持っているのか……。
あるいは、アプリリアージェ自身も今この時、イオスと同様の「思い違い」をしているのかも知れなかった。
だが、少なくとも目の前の瞳髪黒色の少女が今まで仲間であったエルデという人格を持つ人間であることだけは間違いなさそうだった。
そしてアプリリアージェは、今はそれで十分なのだと思う事にした。
「わかりました。曰く付きの《白き翼》がエルデ・ヴァイスという人物によって蘇った。そしてその名前はたとえ三聖に対してさえ軽々しく口に出してはならない――。我々はそれを守った方が身のためだ、という事ですね」
「――堪忍や。ウチの賢者の名が今のファランドールでは誰にも歓迎されへんものや、とだけしか言えへん」
エルデはそう言うと目を伏せた。
「では、そう言う事で先を急ぎましょう」
アプリリアージェは今はその話題にはこれ以上触れないことを決

めると、そう言って立ち止まったままのエルデを促した。
だが、エルデはアプリリアージェのその言葉に首を横に振った。
「え？」
思わず発したアプリリアージェの声に、エルデは説明をした。
「いや、ここが目的地や。ここからファランドールへ戻れる」

エルデの言葉を受けて、全員が申し合わせたかのように周りを見渡した。
エルデの話を聞きながら、二時間くらい歩いた気がしていた。だがその道は天井の高さが闇でわからず、左右は継ぎ目のないなめらかな岩の壁が続いているだけの、まったく変化がない単調な通路だった。景色とも言えないその光景の中の移動は、距離の感覚を狂わせていた。加えて時間の感覚も希薄な場所である。エイルにはいったいどれほどの距離を歩いたのか、さっぱり見当がつかなかった。
「本当にここなのか？」
何の目印もない、ただの通路の途中だった。その場所を特定させる目印のようなものは一切無い。少なくともエイルの眼には見つける事は出来なかった。
それはあるエイルの記憶と重なった。
エルデのそれは、何の変哲もない山道でいきなり立ち止まって「龍の道」の入り口を告げたメリドと同じような行動だった。

エイルの疑問には答えず、エルデは儀仗ノルンをその場で掲げて見せた。頭頂部にあるプリズム「マーリンの導」がぼんやりとした光を放ち輝いてた。
エルデはゆっくりと振り返ると、黒目がちのその大きな瞳で一行を見渡した。ややつり上がったように見える切れ長の目は、その場に居る全員を刺し貫くかのような鋭く強い力を放っていた。
それがエルデの真顔、いや普段の顔なのだということを、エイルはようやくわかってきていた。少し怒っているような、ややもする

と冷たく近寄りがたい表情を浮かべるエルデの纏う雰囲気は、言ってみれば真顔が笑顔のようなアプリリアージェのそれとはまるで正反対と言えた。
エイルはエルデと対峙するように立っているアプリリアージェをチラリと見やった。もちろん、彼女はいつものように優しい微笑を浮かべて、エルデの視線を柔らかく受け止めていた。

「ここを出たら、ヴェリーユに着く」
エルデはそう言うと、全員にもう少し近くに寄るように指示を出した。
「それから、重要な事やから最初に言うとく。ヴェリーユでは下手にルーンが使われへん」
「それって、まさか」
「いや、エアやない。あれとはまた異質な結界や」
アプリリアージェが言い終わらないうちにエルデは首を横に振って否定した。
「新教会本部の建物の中には擬似的なルーンの無効結界はあるけど、あれはエアと呼ぶにはややお粗末や。それよりヴェリーユは町全体が大きな精霊陣で囲まれてて、町中でルーンを使うとすぐに感知される。感知専門のルーナーが年中見張ってるんや」
「ふむ」
「そやから言うて、ここであらかじめ強化ルーンをかけるわけにもいかへん」
「何故だ？」
エイルはまさにそれを提案しようとしていたのだ。それというのもエルデはエイルの中にいる時、『念のため』の強化ルーンにかなりこだわっていたからだった。
「何度も言うたけど『時のゆりかご』は現世とはちょっと違う空間やから、ここでルーンを掛けても空間を移動したら全部剥がれる。だから体力と気力の無駄やねん」

「なるほど」
エイルはそう言って納得したが、アプリリアージェはエルデの言葉の中にある矛盾に気付いた。
「それはおかしいですね」
「おかしい？」
「こちらへ来る時、エルデは私達に体力をかさ上げする強化ルーンを掛けてくれたではないですか」
エイルはアプリリアージェのその言葉を聞くと、冷ややかな表情を崩してニヤリと笑った。
「あの話はネスティ達をここに来させへん為の脅しや。ウチが用意したのは仮死状態からでもまずは間違いなくちゃんと回復するように作った薬やねんから。でも端（はな）からそんなこと言うたら全員来ることになりかねへんやろ？でもまあ、リリア姉さんは何を言うても来ると思ってたけどね」
「全員来るとまずい事でもあるのか？」
これはファルケンハインだ。
「あの時点では『時のゆりかご』から確実に帰れる保証はなかったんや。ウチの本来の計算やと、帰れる可能性は文字通り一割くらいやった」
アプリリアージェは合点がいったという風にうなずいた。
「わかりました。我々がこうしてエルデの先導で帰れるのは実に幸運だということですね」
エルデはうなずいた。
「エイルはフォウへ帰れるから問題ない。でも師匠には『時のゆりかご』に入った人間を外に誘う術（すべ）はない。ウチがエイルと別れて別の形で意識を取り戻す可能性は低い……とまあそういうわけや」
「意識を取り戻す可能性は低かった？」
アプリリアージェは訝しげにエルデを見つめたが、エルデはふと何かを思い出したかのように顔をエイルに向けた。そして目をいっそうつり上げるとエイルを怒鳴りつけた。

「忘れてた！」
「え？」
「エイル、アンタが何でここにおるねんっ！」
「は？いまさら？」
唐突なエルデの言葉に、エイルは面食らった。
「いの一番に言いたかった文句や！記憶喪失の振りとか色々あってすっかり忘れとったわ！」
「いや、そのまま忘れてくれてもよかったんだが」
「やかましい！せっかく例の呪法とアンタにとっての異世界、ファランドールから解放されたのに、何でフォウに帰らへんかったんかって言うてんねんっ」
「いや……オレはフォウじゃなくて、ファランドールの人間になろうかなって……」
「何で？何でそんなスカポンタンな事考えるねんっ？」
「何でって言われても、こっちに居たかったって言うしか」
エルデは儀仗ノルンをドンっと床に突き下ろして、いらだちを表した。その態度とつり上がった目、そして纏う怒気は、怒られている当事者ではないファルケンハインが思わず一歩後ずさる程の迫力があった。
「ふん、おおかたネスティと離れたくないから、とかそういうスケベ心からやろ」
「なんだと」
「まったく、人がせっかく元の世界に帰れるように苦労してお膳立てしたったのに。だいたい……」
「待てよ。ネスティの事もあるけど、それよりオレはお前と直に会いたかったんだ」
くどくどと続きそうだった繰り言を遮るようにエイルがそう言うと、エルデの表情が一瞬で柔らかく変化した。
「え……ウチに？」
エイルはうなずいた。

「オレはお前とちゃんと会って、じっくりと話したかったんだ。聞いてみたい事も山ほどあった」
「エイル……」
「それに、本当にオレはファランドールにはもう未練はないんだ。《真赭の頤》が呼び出した扉を開いた時、フォウの世界が、オレの暮らしていた場所が少し見えた。それを見てオレは思ったんだよ。オレは自分のいた世界にはもう何の未練もないんだって。お前に連れてこられたこのファランドールで生きようって」
エイルのその言葉を聞いたエルデの顔がさらに柔和なものに替わると、今度はすぐに頬が上気していた。
エルデはエイルに何かを言いかけたが、先にエイルが口を切った。
「それに」
「それに？」
オウム返しにそう尋ねる長い黒髪の美しい少女に見つめられて、エイルは思わず目をそらすと、敢えてぶっきらぼうな声で言った。
「それに、お前をぶん殴らないと、数々の罵詈雑言にただただ唇を噛み続けてきたオレの気が収まらないじゃないか」
その言葉を聞いたエルデの顔はまたしても一瞬で変化した。紅潮した頬はそのままだったが、目尻が一気につり上がった。
「な・ん・や・て！」
「だってそうだろ」
「ちゃうちゃう。エイルはさっき言うたやろ？もう怒ってへんからって。せやからぶっ飛ばされるいわれはもはやないはずや！」
「あ……。汚えぞ、お前。あれはお前が記憶喪失だって思ったから不憫になって思わず口にしてしまった心にもない言葉であって、だな」
「男に二言はないはずなんやろ？エイル、いっつも言うとったやん」
「いやいやいや、汚え。お前はマジで汚えぞ。根性が腐り切ってる！」
「切ってるんか？完全腐敗か？泣き虫ウジ虫のくせによう言うた！

一体どの口が……」

その時。

「あはははは」

エルデの怒鳴る声に重なるように、アプリリアージェの笑い声が響いた。

「あはははっ。もうだめ。苦しい……助けて……」

見ればアプリリアージェは座り込み、腹を押さえて笑っていた。下がった目尻からは涙があふれている。

「あはははは」

アプリリアージェがそこまで真剣に笑う様を二人が見たのは、後にも先にもその時だけだった。アプリリアージェはそれほど可笑しそうに心の底から笑っていた。

その姿に毒気を抜かれたエルデは顔を赤らめたまま元の表情を取り繕い、とまどった表情のエイルと互いに顔を見合わせた後、助言を仰ぐかのようにファルケンハインの様子をうかがった。

ファルケンハインとしても、自分の上官のそんな姿を見るのは初めてのことだった。いくら助けを求められようと、彼に出来たのは何とも言えない微妙な顔をして小さく肩をすくめて見せる事だけだった。

「――やめよか」

「――そうだな」

「というか、リリア姉さん、何がそんなにおかしいねん！」

エルデの怒りの矛先は、今度はアプリリアージェに向かった。

「だって、これが笑わずにいられますか。ふふふ。あなたたちは真剣なんでしょうが、私たちからすると微笑ましいやら見ていて恥ずかしいやらで、何と言っていいか……あははは」

「なんの事だよ」

エイルもさすがに少々ムッとした声で尋ねた。

アプリリアージェは笑いすぎて溢れる涙をぬぐいながら、その優

しい笑顔をエイルに注いでこう言った。
「答えなんて始めから決まっているのではないですか？」
「は？だから何のことだよ」
「あなたたちの仲が良すぎてうらやましい、という話です」
「な、何言うてんねん！」
エルデは例によって瞬間的に顔を真っ赤にするとエイルを指さしながらアプリリアージェをそのぞっとするような美しい顔でにらみ付けた。
「誰がこんなめんどくさいヤツと仲良しやねん！」
「なんだと。オレだってお前みたいなわがままで傲慢なヤツとこれっぽっちも仲良くなんてしたくねえよ！」
「よう言うた」
「ああ。何度でも言ってやる」
エイルとエルデはにらみ合った。アプリリアージェはその様子を見てまた笑い声を漏らした。

その場で唯一、多少なりとも冷静な状態にあったファルケンハインは、事態の収拾をどうするべきかしばらく悩んでいた。そして少なくともその状態がアプリリアージェの戦術や戦略とは何の関係もなさそうだと判断した。すなわち、自分の思ったことを口にしてもよいだろうという判断だった。
「ご歓談中のところ申し訳ないのだが」
小さな咳払いのあと、ファルケンハインは切り出した。
「『ここ』とファランドールとの間に時間のズレがあるというのなら、あまりゆっくりしていられないのではないのか？」
ファルケンハインの感覚では、この「龍墓」、エルデの言う「時のゆりかご」に来てからほんの数時間しか経っていないように感じていた。勿論気を失って意識が途絶えていた時間があるため「現世（うつしよ）」から離れて実際にどれくらいの時間が経過しているのかは不明だったが、それでもエルデがここに来る前に言った「三十日」という言

葉が気になっていた。だから、帰れるものなら出来るだけ早く帰りたい。そう思っていたのだ。

「そうですね。ごめんなさい。おかしすぎてすっかり取り乱してしまいました。でも、ああ可笑しい」

アプリリアージェは副官の注進に素直に賛同したが、まだ笑いが収まらない様子だった。

ファルケンハインにしてみればアプリリアージェが笑っている原因を頭では理解できていたものの、そこまで大笑いするような事柄ではないと思っていた。

仲の良い者同士が真剣にけんかをしている。それが年頃の男女であるということがその全てで、確かに微笑ましくもばかばかしい話なのだが、その二人の姿のさらに向こう側にアプリリアージェは別の何かを見ているのかも知れないと感じていた。だが、勿論それを今追求する気はなかった。

「ファランドールに戻る前に、エイルにはこれだけは言うとく」

エルデはファルケンハインの申し出に素直にうなずいた後でエイルに向かってそう言った。

「今やから言うけど、ウチらがここまでたどり着けたのは奇跡やと思う。本来ウチは一回死んでたようなもんやし、エイルと旅をしてもいろいろあったしな。何より宝鍵を回収する作業が命がけやった。アンタにかけた移魂の呪法の効力も、実のところ、もう限界やったんや」

エルデにそう言われて、エイルは改めてファランドールに降りたってからのことを反芻した。

誰も信じるな……目立つな……どんな些細な事件にも絶対巻き込まれるな。

エルデはずっとエイルの中でそう言っていた。

くどいほどに。

道で横たわっている老人に手を差し伸べようとした時、目の前で

転んだ子供を助け起こそうとしたとき、路地で女が男達に嬲られているのを目撃した時、手や足のない戦争の難民達が物乞いにまとわりついた時……いつもエルデは激しい口調でそう言った。

【無視しろ】
【捨てておけ】
【耳を塞げ】
【目を閉じろ】
【口を開くな】
【関わるな】
そして
【誰も信じるな！】

それは思わずおびえるほどの強い口調の時もあった。
すべては……ここにただ辿り着く最短距離の道を見失わないための決めごとだったのだろう。
それとは別に賢者の名前を名乗らない、いや名乗れない事も原因の一つではあるのだろう。
エイルは改めて思った。
考えてみれば、関わってしまったカレナドリィの時もそうだった。何かに関わると結局大きな問題がエイル達以外の人間にもふりかかった。賢者の権力を行使すれば賢者に関わることになった。エルデがうまく立ち回らなかったら《二藍の旋律》の手に落ちていたかも知れない。
名乗れないから目立てない。なのに賢者として振る舞わねばならない時もある。
今になって思えば、エルデは賢者会の人間であるにも関わらず他の賢者と会うことを恐れていたのだ。それなのに賢者としての最低限の義務は果たそうとしていた。
エイルの大反対を受けながらも「賢者としての義務」の名の下に

何人もの人間を……エルデの言葉を借りるなら「ごみ掃除」をしてきた。

そこまで考えてエイルはハッとした。

ある事に思い至ったのだ。

そしてそれは奇しくもアプリリアージェが投げかけた疑問そのものでもあった。（エルデはこの先、いったいどうするのだろうか？）

エルデが目覚めたにも関わらず、今の今まで考えが及ばなかったことだった。エイルにはそれ以外に考えることが多すぎた。また、徐々に蘇ってくる元居た世界、「ファランドール・フォウ」の記憶の処理にも負われていた。

――だが、エルデが続けて口にしたのはエイルにとっては意外な言葉だった。

「でも、もうそれも終わり。エイル・エイミイは自由や。せっかく拾った命なんや。こっちで生きていくって言うんやったら、この先は自分の思う通りに生きたらええ。もう、ウチのわがままに嫌々従う必要もなくなったんや。喜んでええで」

「エルデ」

「ウチからはそれだけや。この先、ファランドールは戦争になって、多分乱れに乱れるやろ。でも、出来るだけそんなことに巻き込まれへんよう、自分の幸せを大事に生きるんやな」

そう言って目を伏せるエルデの顔はさっきまでとは打って変わって寂しそうで、エイルはそれを見るとなぜか少し胸が痛くなった。

「なぜ今そんなことを？」

だから、思わず口について言葉が出た。

「本当のこと言うと、ウチも……もうやることはないんや」

「え？」

「話はここまで」

エルデはエイルの疑問に満ちた眼差しを無視すると、にっこりと

笑って見せた。
だが、その笑顔はエイルだけでなく、誰が見てもわかる無理に作った笑顔だった。
そのぎこちない笑顔を見て、エイルは追求するのをやめた。
彼にはわかっていたのだ。こう言う時のエルデに何を言ってもそれ以上の事は教えてもらえないことを。
そして、エイルは初めて知った。
エルデがそんな事を言う時には、こんな顔をして苦しそうにつぶやくのだということを。

「ほなら、戻ろか。ウチらの在るべき場所、ファランドールへ」
エルデは改めて一同にそう言った。三人はそれぞれ無言でうなずいた。
「行き先はヴェリーユ。用心していこ」
そう言ってエルデが掲げた儀仗の頭頂にある「宝鍵」　またの名を「マーリンの導（しるべ）」という名のプリズムはその光をどんどん増して、やがてそこにいた四人を包み込んだ。

## 第二十六話　客船グェルダン

「今こそ俺はあの闇の女王、アイスに誓うぜ」
脂汗を額に浮かべながら、エスカは小さなニームに体重を半分ほど預けながらうめいた。

大型客船グェルダンは、エキープ港を出てからしばらくの間はまるで氷上のような海面を滑るように西へ進んでいた。つまり航海は快適なものだと言えた。エスカ以外には、という但し書きは必要のようではあったが。

エスカとニームは、そのドライアドが誇る大型船の、彼らにあてがわれた船室にいた。

その船室にいるのはは二人だけである。

グェルダンはシルフィード前国王、アプサラス三世の国葬にあたる「大葬」に参列する使節団を運ぶ船であった。

もちろんエスカにとって「大葬」参列が主たる目的ではない。ドライアド国王の名代の付き人として参列することにはなるだろうが、任務は「護衛官」である。

それがニーム経由で下された、五大老からの指令であった。

少将としての最初の指令が軍を率いての戦闘ではなく国家の代表であるペシカレフ公爵の護衛だと知らされたエスカは、拍子抜けする間も惜しんで、すぐに戦略を組み直した。

ドライアドを離れるということは、同時に兄であるミリアの動向把握にも遅れが生じる事になる。エスカはしかし、その機会を逆に利用して監視を強化することにしたのである。

さらにそれに加え、首都ミュゼの体制強化の機会とした。

彼の領地、すなわち「白の国」エスタリアの首府ソリュートに駐留する、彼の息がかかった配下をごっそりとミュゼへ移動させる事

にしたのである。

留守居役であるロンド・キリエンカがどれだけ優秀な人物であろうと一人で出来る事には限りがある。またロンドは、見た目がアルヴであるという問題も抱えていた。純粋なアルヴではなく、デュナンとアルヴの混血であるデュアルとは言え、外見がアルヴそのものロンドは、ミュゼに於いては人々の前に出て主人のいない間の外交役を勤める人物としては適さなかった。故郷であるソリューでは考えられないことだったが、それだけミュゼでは反アルヴ……いや、アルヴに対する嫌悪の念が根強いのである。

エスカの持つ人的・財的な資産をミュゼに集中し、行動に対する基盤を文字通り盤石にしておく事。それがやがて勃発する大戦を見越した彼の出発前の個人的な準備であったのだ。既に構想として持っていたものではあったのだろうが、シルフィード行きの指令がそれらを一気に推し進める引き金になった。

エスカは故郷に帰るスノウに随行させた人間には既にそれを含ませていた。準備が整い次第、エスカの命を受けたフレクト・キリエンカ、つまりロンドの長子でスノウの兄がミュゼ入りして後は万事上手くやってくれるはずであった。

首府ソリューからはけっこう離れている山間の町、エイビタルに封じられている格好のペトルウシュカ公爵、すなわちエスカの兄ミリアの押さえは、本人の意志にかかわらず、スノウが負うはずであった。

スノウがミリアの行動の、大きな「重し」になってくれると踏んでいたのだ。スノウを故郷へ帰した目的は、もちろんスノウの意向に沿ったものではあったが、それだけで済まさないところがエスカのそつのなさと言えた。

だがそれがエスカの誤算であった事は、しばらくして判明する事になる。エスカは自分の甘さを思い知ることになるのである。

どちらにしろ、エスカとロンドは短期間で驚く程の大量の準備をこなして見せた。その疲れが一気に出たのかもしれない。乗った船が湾を離れて外洋に出たとたん、たいした揺れがないにも関わらず、エスカはあっという間に船酔い状態に陥っていた。

船室はニームと同室だった。もちろん一行に二人の関係を印象づける為の措置だったが、ニームもそれはもとより了解していた。

エスカとニームはグェルダンの自室で、出港当日に催される晩餐会の為に夜会服に着替えたところだった。

（明月アイスも暗月デヴァイスも、まだ出てはいないではないか）

円い窓から空を見上げたニームがそう思ったすぐ後に、エスカはうめき声を出して長椅子から立ち上がり、少し離れた場所にあるベッドに向かい、そのまま崩れるように倒れ込んだのだ。その顔面は蒼白であった。

ニームは慌ててエスカの肩を支えるように隣に座った。

「シルフィードに着きゃこっちのもんだ、金輪際船なんぞにゃ乗らねえぞ」

悪態もいつもの口調とは違い、弱々しい。

「あなたはシルフィードに永住するつもりか？それにだいたいアイスは闇の女王なんかではないだろう？しっかりしろ」

ニームはそう言いながら、手に持った汗取りでエスカの額の汗を拭ってやった。

「そうそう。闇の女王はアイスじゃなくてデヴァイスの方だったな。それより俺は何て幸運なんだ。海軍じゃなくて陸軍所属だぞ？これはもうマーリンの祝福を独り占めしてるようなもんだな」

「アイスもデヴァイスも闇の女王などではない。それにマーリンの祝福を独り占めしているような奴がそもそもこんなひどい船酔いなどするものか。訳のわからない事を言わずに早くこの酔い止めを飲め」

「あと五分くらいで到着するんだろ？だったらそんな得体の知れねえ薬なんか飲まなくても大丈夫だ」
懐から取り出した粉薬の包みをエスカが弱々しく払いのけたのを見て、ニームは大きなため息をついた。
「まだ出帆して半日と経っていないのだぞ。それともシルフィードはミュゼのご町内にあるおもちゃの王国なのか？」
「いや。俺の計算だと間違い無く半日と五分で着くはずだ」
「着くものか！それは計算ではなく妄想だ」
ニームはあきれたようにそう言ったが、その手は言葉とは裏腹に優しくエスカの頭を抱いてやっていた。
「しかし、エスカ。お前がこれほど船に弱いとはな。この先『事』が始まっても、お前は海戦など出来ないではないか」
ニームはエスカの金髪を細い指でゆっくりと梳ってやりながら、そう言った。
「おまけに極端な薬嫌いときた。まるで子供ではないか。いや、子供より始末が悪い」
「うるせえ。子供に『子供』とか言われたかねえ」
エスカの声は消え入るように細かったが、それでも口の悪さだけは健在だった。ニームはこれなら大丈夫だという確信を持っていて、つまり内心ではそれほど心配はしていなかった。
「私を子供と言うな。私はドライアドの法ではもうれっきとした成人だ。それに何度も言うがそもそも公式には二十八歳だ。あまつさえ一応お前と婚儀もしていることになっているんだぞ。不本意ながら、な」
「不本意なのか？」
エスカは目を開けると、その青い眼で自分をのぞき込むようにしているニームの顔をじっと見つめた。
「どうなんだ？」
「こ、言葉の綾だ。いや、話の流れに沿った必然的な予定調和と言うべきものだ」

見つめられたニームは一瞬で顔を赤くすると、あからさまに目をそらした。
「俺の方はあてがわれたのがお前で良かったと、本心から思ってるんだぜ？」
「ほ、本心とか、あてがわれたとか、少女趣味だとか、メロメロだとか、そう言う事をサラっと言うな！」
ニームはさらに顔に血を昇らせると、髪を撫でていた手で、エスカの頬をつねった。ただし、優しく。そしてすぐに、慌てたようにつねったその場所を同じ手でそっと撫でた。
「色々と突っ込みてえんだけど、あいにく今は何も考えられねえ……」
エスカは再び目を閉じると、そう言った後で小さなうめき声を上げた。そんなエスカに、ニームはおそるおそる尋ねた。
「？？メロメロという所は否定しないのか？」
「否定して欲しいのか？」
「ば、馬鹿め。薬がいやなら安静にしておれ。ほら、とりあえず横になるのだ」
ニームはそう言うと、エスカの頭を慎重に自分の膝の上に下ろした。エスカは体に全く力が入らないようで、ニームにされるままに詰め物がしっかり詰まった、つまり固めのベッドの上に横たわった。

ドライアド王国の首都、ミュゼの西方にあるエキープの港はドライアドの海の玄関とも言える大規模な港だった。
ドライアド国王エラン五世の名代であるペシカレフ公爵の一行は、そこで海軍の大型軍艦三隻の護衛のもと、海路シルフィードを目指していた。
一行は総勢三十名ほどで、当初は軍籍の要人輸送艦に乗り込む予定だった。しかし、ペシカレフ公爵の意向で、エキープ港にある最も豪華な客船を使うことに急遽変更されたのである。
軍籍の船と違い、グェルダンの船室はゆったりと豪華で広間や食

堂の装飾にも贅が尽くされていた。ペシカレフ公爵が何より重要視したのは、毎日の食事を優雅に過ごせる場所と装備と料理人の存在だった。

そしてたった三十人の為に、その三倍の人員が付随することになった。

エスカが出発の準備作業でもっとも頭を悩ませていたのが、その船の手配だったのだ。

「なにせ私は国王陛下の名代だからな。それ相応の格式の船でないといかん。軍船などもってのほかじゃ」

エスカの又従兄弟にあたるマルク・ペシカレフ公爵は、一行のとりまとめ役であるエスカにわざわざ直接会いに来ると、そう釘を刺して帰っていった。急な命令で、それでなくとも準備作業に追われて眠る暇もないエスカに、ペシカレフ公爵は思いつくだけの我が儘を言い放った。

困惑するエスカの事などおかまいなしで、最後には出発当日の迎えの馬車に用意しておくべきワインの銘柄とそれに合うチーズを二〇種類程。ついでにつまみとなる好みの料理を数種類伝えると、ようやく満足した顔で名代マルクはペトルウシュカ男爵屋敷を後にしたのである。

その話をロンドから聞いたニームは、頬を真っ赤にして、文字通り烈火のごとく怒り狂った。

「度し難い！」

その夜の食事が始まる前に、眉をつり上げたニームが口にしたペシカレフ公爵に向けた悪態と呪詛の数は、おそらく公爵がエスカに要望した項目を上回っており、その場にいた者は既にペシカレフ公爵は呪い殺されているに違いないと確信する程であった。

「だいたいエスカ。お前はあのような事を言われて平気なのか？そもそも何だ、その腑抜けた顔は？」

怨念のたっぷりこもった悪態が終わると、矛先が今度はエスカに

向けられた。
「お前は腹が立たないのか?文句の一つも言うべきであろう!」
「いや……」
エスカはいきなり始まったニームのペシカレフ公マルクに対する罵詈雑言大会をあっけにとられて眺めていたのである。その矛先が自分に向けられるとは思っても居なかった。
「いや……、何つーか、別にもう腹は立ってない」
そう言ってエスカは苦笑いを浮かべた。
「はあ?」
ニームは普段見せないような鋭い眼光でエスカを射た。
「あの愚かしい自分勝手な要望を聞いて平気なのか?」
「いや、怒り心頭だった」
「だった?」
ニームは訝しげな表情でエスカを睨んだ。
「ああ。さっきまではな。でも、もういいんだ」
「なぜだ?」
「俺の代わりにお前が全部言ってくれたじゃねえか」
「え?」
ニームはきょとんとした顔でエスカを見た。次に横合いに立っているロンドの表情を伺った。あっけにとられていた二人だが、今は嬉しそうに微笑んでいた。
「お前が俺の言いたい事を全部言ってくれたから、スッとした」
「まさにエスカ様のおっしゃるとおりです。このロンドの気持ちも、ニーム様のおかげで今はもう晩秋の空のようにすっきりと晴れ渡りました」
「いや、まったくだ。これからも頼むぜ、ニーム」
エスカとロンドはそう言うと、顔を合わせて笑い合った。
「訳がわからん!」
ニームは今度は二人の態度に腹を立ててふくれっ面をしたが、笑いやまないエスカとロンドに釣られて、いつしか自分も声を出して

笑っていた。

ともかく、そう言う事があったためにニームはマルク・ペシカレフ公爵という人物がどういう人間かをあらためて理解できた。それは、大葬が終わりシルフィードを無事に後にするまでのエスカと自分の役割を再認識する事に大いに役立ったのだ。

マルクは虚栄心の固まりのような典型的な小物である。しかしながら歴史の転換機とも呼ばれる重要な場面では、しばしば傑物と呼ばれる人物よりもマルクのような存在が鍵を握る事がある。それは浅考で軽薄であるからこそとれる行動による。

エスカとニームはそれを恐れた。

マルクはなまじ公爵という家柄であるだけに始末が悪い存在であった。大のアルヴ嫌いとしても有名である。そんな男が国王の名代としてアルヴの国に行こうというのである。どんな楽天家であろうと、まともな神経の持ち主であれば、ドライアド国王エラン五世が「正しい」人選をしたとは考えないであろう。

今回に限っては、エッダ滞在中につまらないごたごたを起こされると、それは『「小物」ペシカレフ公爵の馬鹿な所行』では済まされない。

なにしろ国王名代なのだ。

ペシカレフ公爵の失態は、すなわちエラン五世、ひいてはドライアド王国の「態度」ととられかねない。

いや、この間のファランドール情勢を踏まえて考えるならば、少なくとも何よりも矜持を重んじるシルフィード王国にとってそれは宣戦布告に等しいものととらえられてしかるべきであろう。

当初エスカは五大老がそれを狙ってペシカレフ公爵を名代に据えたのではないかとも考えたが、およそ政治には向かないただの人情家のエラン五世の指名であったことを国王本人から聞くに及んで、腹をくくった。五大老も実のところ国王が決定した人選の対処に苦慮して、最善策としてエスカに白羽の矢を立てたのだという事が判

明したからである。
　落ちぶれたとは言え姻戚であるペシカレフ公がエラン五世に対して、それはそれは聞くも涙語るも涙の物語を聞かせたのであろう。国家的な仕事をしてそれをこなせばそれ相当の褒美を合法的にペシカレフ公爵へ与える事ができる。人の良いエラン五世は単純にそう考えたのだ。言い換えるならば、ドライアドの政治や財政を五大老が実質的に握っているという体制はドライアド王国にとってはこの上もない幸運なのである。人が良いだけの君主は、時に最悪の存在でしかないのである。

　ドライアドがシルフィードに牙をむくには、まだ少し時期が早い。特に先王アプサラス三世が崩御した直後だけに、ここでドライアド側が戦争の口火を切ることにでもなろうモノなら、シルフィード王国は新王の下にかつて無いほどの結束を見せる事になりかねない。アルヴ族の気質を考えるとそう判断せざるを得ないであろう。熾烈な戦闘になると、自軍の被害も相当なものになる。戦後処理の事を考えても自軍の疲弊は最小に押さえておきたい。で、あればその時期は今でよいはずはない。
　少なくとも五大老はそう考えたからこそ、出来るだけこの時期に事を荒立てることを防ごうとしているのである。
　それはエスカの見立てでもそうだった。
　とは言え、五大老側としても最悪の場合の保険も同時にかけておきたい。その最適解がエスカ・ペトルウシュカという人物であったのだ。
　万が一失敗した場合、ドライアドは二つの公爵家を「処分」することによって対シルフィード王国への詫びとし、今ひとときの時間を稼げると計算した。
　力のないペシカレフ家は問題なくつぶせる。ペトルウシュカは強大だが、公爵本人は実質的な当主によって幽閉されており、その実質的な当主は口頭ではあるが、国王への領地献上を約束している。

大義名分はすでに存在しており、公式な文書はどうとでも作れる。国王の名でミリアから爵位を取り上げたあと、エスカを公爵の後継とし、それを罰して領地の一部もしくは全部を没収すれば良いだけの事だ。

ただ、実際にそうなると様々な軋轢が生じる事もまた容易に想像ができる。

だからそれは最後の手段としてとっておき、できればエスカにお目付役を全うして帰国してもらいたいというのが本心ではあろう。言わば保険の保険がミリアという人物の持つ器量そのものと言ったところであろうか。

ミュゼからエキープへは陸路で二日ほどの行程だったが、豪華客船グェルダンがエキープを出港するにはそれからさらに五日も要した。

ペシカレフ公がエキープで連日の夜会を催したからである。

ある程度の行事を催せる特権を有しているとは言え、自分の財を1サインも減らすことなく贅の限りを尽くせる事を知ったマルクは、いわばやりたい放題であった。

五日というのは、エキープ到着初日に採寸した服が仕立て上がるのに五日かかったからである。

「国の代表としてドライアド王国に乗り込むのだ。それなりの身なりでなければエラン五世陛下の沽券に関わる」

マルクはそう言って金糸・銀糸をふんだんに使った恐ろしく重い服を十数着もエキープで用意させたのである。

エスカはその行為にもちろん顔をしかめていた。

マルクがミュゼで出発前に同じ理由で夥しい服や装飾品を用意させていた事を知っていたからだ。準備資金としてエスカが国庫から預かった金額の多くはマルクの私腹に化けていた。しかもマルクの服はエスカに言わせると「地獄の道化師のなれの果て」と表されるほどの趣味の悪さを誇っており、それはニームが馬車一台を使った

衣装部屋を検分した際、ずらりと並んだその服を見て不覚にも軽いめまいを覚える程の見事さであった。

「目的は大葬であろう？あのゴミ屑の様な男はあれを着てドライアド国王の代行として国の執り行う葬儀に列席するつもりなのか？」

ニームは目をつり上げてエスカにそう抗議したが、エスカは自分の馬車で既に頭を抱えており、ニームに皆まで言わせなかった。

文句を言うニームの両肩をいきなり掴むと、懇願するような目でエスカはこう言ったのだ。

「ニーム、お前を大賢者と見込んで頼みがある」

「い、いきなり何だ？」

思い詰めたようなエスカの態度に、ニームは怒りを忘れてしまった。

「長時間眠らせるルーンはあるか？出来ればいびきなどもかかないようにしてほしいんだが」

「おやすいご用だ。何なら永遠に眠り続けるルーンもある」

「いや、それは睡眠と言えるのか？」

「まさかマルクにかけるつもりか？眠っていては列席できんぞ」

「ジーナに石化を頼んでもいいんだが……」

「いや、あれこそ永遠の眠りだぞ？」

「眠らせておいて添え木で立たせておく。まぶたに目を書いておけば起きているように見える」

「正気か？」

「これが正気でいられるか！お前も見ただろう、あの服を？」

「見た。見てしまったというべきだが」

「とにかく、妙案が浮かぶまで見なかった事にしよう」

「それが賢明と言えるかもしれんな」

そんなやりとりがあってわずか数日後に、彼らはエキープで同じ光景を見る事になったというわけである。

だが、彼らの心配は杞憂に終わった。

なぜなら、それら数十着の服は客船グェルダンには積み込まれなかったのだ。
マルクはそのばかばかしいほど悪趣味で瀟洒な服を、秘密裏にミュゼにある自分の屋敷に運ばせていた。
エスカ自らが積み荷の検査をしてそれが判明した。
マルクの荷は封印されていて、いち官吏に開封する権限はなく、仕方なくエスカが世話役権限で荷箱を開けた際に発覚した事だった。
「文字通り着服、というヤツだな」
マルクの服や装飾品の荷箱の中が空なのを見て、ニームはそう言ったが、声にはホッとしたものが混じっていた。
「そこまでして金に執着するほど困窮しているとはな」
エスカの語感にも怒りはなく、むしろ哀れみが込められていた。

2010

# 第二十七話　設計図

「気持ちいいな」
「え？」
ニームの膝に頭を預けたまま髪をそっと撫でられていたエスカが、目を閉じたままでそうつぶやいた。
「普通に母親がいる奴らは、みんなこういう快感を知ってるって事なんだろうな」
「エスカ？」
ニームは手の動きを止めて、エスカの表情を読もうとした。しかし、エスカは目を閉じて気持ちよさそうな微笑を浮かべているだけであった。もっとも、顔はまだ青ざめたままであったが。
「不公平だよな。俺もあの馬鹿兄貴も、母親の膝枕の感触を知らねえんだぜ？」
青ざめているとはいえエスカの呼吸は穏やかになっており、表情が和らいでいるのがニームにはわかった。
「すまぬな。私はコンサーラだし、リリもジーナも生粋のエクセラーだ。治癒系のルーンを使える者がいない」
「そりゃ、おまえがハイレーンを連れて行くのを反対したからだろ？」
「あ、あれは……」
そう指摘されると、ニームは思わずエスカの髪を握りしめた。
「痛い痛い」
「あ、すまぬ」
「お前があのハイレーンを親の敵を見るような目で睨んでたから、迫力に押されて同意したが、そういやなんであのハイレーンはダメだったんだ？」
「そ、それは、その……」
「何だ？」

「あのハイレーンは背が高くて、髪もまっすぐだし、いつも胸元を開けて……ではなく、たいした治癒力もないのだ。役に立たぬ人員を増やすのは経費圧迫であろう？」
　ややしどろもどろになりながらそう言うニームに、エスカは思わず苦笑した。だが、ニームはそれを苦悶の表情だととらえたようだった。
「苦しいのか？我慢できないなら業腹だがペシカレフ付きのハイレーンを呼びに行くぞ？」
「いや」
　エスカはすぐに首を横に振ると、頭を撫でてくれているニームの小さな手の上に、自分の手を置いた。
「必要ない。お前にこうされていると治癒ルーンとやらをかけられているようなもんだ」
　エスカのその言葉に、ニームは過敏に反応した。
「わ、私に、そ、そういうおべっかを使っても何にも出ぬぞ」
「何を動揺してんだ？」
　エスカは片目をあけてニームの顔を見た。だが、視界はニームの掌ですぐにふさがれた。
「動揺などしていない。だが、アレだ」
「アレ？」
「お、お前が気持ちがいいのなら、気の済むまでこうしてやってもいい」
　エスカは目をふさがれたまま、にっこりと笑って見せた。
「助かる。でも重くねえか？」
「重くはない。それより……」
「ん？」
「わ、私がこうしていたいのだ」
「そうか」
「そ、そうだ。文句があるか？」
「文句なんかねえよ。それよりお前に一つ、いい事を教えてやろう」

「いい事？それは何だ？」
「どっちも母親の膝枕の感触を知らない同士だが、馬鹿兄より俺の方が幸福だって話だ」
「それがいい話なのか？」
覆いがとれた目を、エスカはそっと開けた。そこには怪訝な目で自分を見つめているニームがいた。それを見て、エスカはいつものいたずらっぽい笑顔を浮かべて見せた。
「馬鹿兄貴は知らないのに、おれはニームの膝枕の感触を知っているって事だ」
？？案の定であった。
エスカは自分がそう言ったらニームの顔がどう変化するのかがわかっていた。もちろん、みるみる顔を赤くしたニームは、目を泳がせてエスカを叱責するのだ。
「ば、ば、馬鹿な事ばかり言うな。まったく、船酔いというヤツは始末が悪いな」
そう言いながらニームはエスカの頭を痛くないように小突いた。だが、すぐにそこをそっとさするようになで回した。
「お前は誰にでもそんな心にもない事を言っておるのだろうな」
そうつぶやくと再び指でエスカの金髪をすきながら、ため息をついた。
「私は自らの目的を果たす為に適当だと思われる相手をお前に絞ると、リリとジーナを使ってペトルウシュカ男爵という男について色々と調査させていた」
ぽつりぽつりとしゃべり出すニームの言葉を、エスカは黙って聞いていた。自分の事を相当なところまで細かく調査していたであろう事くらいは容易に想像が付く。何せ相手はマーリン正教会の賢者達だ。その調査には間違いはないだろう。もし存在するとしたら、エスカは自分の調査報告書をじっくり読んでみたいと思った。それは興味深いだけでなく、間違い無くその辺の有名な小説よりもよほど面白いに違いなかった。

ニームは続けた。
「そこに『女たらし』だという報告があったが、私にもその意味が今、なんとなくわかった気がする」
前振りから、何の話になるのか興味津々だったエスカだが、その言葉を聞くと、船酔いの苦しさが消えて、笑いがこみ上げてきた。エスカは自分の胸に去来したその感情に抵抗することなく、声を出して笑った。
「何がおかしい？」
「心配するな。俺は誰彼かまわずこんな台詞を吐いてる訳じゃねえよ」
「そ、それはそうだろうが……」
「娼館で遊んでた俺だ。いろんな女の膝枕を知ってるさ。でもよ、心底これほど気持ちいいと思った事はない。それは本当だ。それに、今さっき言った事は本心なんだぜ」
そう言ったエスカの頭を、ニームが今度はげんこつで少し強く叩いた。
「そ、それが『女たらし』だというのだ」
「痛えよ」
「え？」
もちろん痛くなどなかった。エスカはむしろそのげんこつを快く思っていたくらいである。
「ここか？痛いか？すまぬ。思わず叩いてしまった。本当にすまぬ」
ニームは慌てて自分が叩いたであろうあたりを両手でさすり始めた。エスカは何も言わず、真っ赤になりながらも心配そうな顔をしているニームを穏やかな表情で見つめていた。
ニームのその慌てぶりを眺めていたエスカは、ふと漠然としたもやのようなものが胸の奥の方から生まれてくるのを感じた。エスカに対するニームのその姿は、もはや大賢者などという大そうな肩書きとは完全に無縁の、言ってみればただの若い娘のそれであった。
五大老との謁見の場で初めて出会った時の不敵な眼差しはエスカ

の前では完全になりを潜めていた。こうしていると年齢からはおよそ想像も付かないほど冷静で頼りがいがありそうだった「将軍の有能な副官」という面影もない。

特に二人だけになるとそれが顕著になる。本人には自覚がないのであろうが、二人になるとニームは顔を上気させる事が多く、時には目を潤ませるようにもなり、視線が絡むとうつむく事すらあった。

もちろん……。

もちろんエスカにはニームの態度の理由はわかっていた。

それだけに不安なのだ。

ニームに芽生えた感情は、彼女自身の目的とエスカが抱く野望の両方にとって、大きな障害になりはしないかと、その時初めて思ったのである。

ニームが自分の目的を達成する為には、ある時点で彼女にとっては「駒」であるはずのエスカ・ペトルウシュカを切り捨てる、あるいは犠牲として使う時が来るかも知れない。いや、その可能性は高いと言える。

その時ニームは、大賢者《天色の？》（あまいろのくさび）として、揺るぎなく目的に対して適切な行動がとれるのだろうか？

リンゼルリッヒとジナイーダから聞いた限りでは、ニームは彼らの言う「現世（うつしよ）」すなわち世間をあまり知らないという。それはエスカの予想通りであった。

タ＝タンの王となるべく人里から隔絶されたところで暮らし、姉を継いで《天色の？》という大賢者になると、すぐにドライアドに潜入。そのまま特級バードとしてドライアド宮中の、それも世間に隔絶された「奥」の部分にこもっていたのだ。

エスカが想像するに、おそらくはニームの今の感情は彼女にとって生まれて初めてのものだろう。それがどういうものかを教えてくれる人間も周りにいないまま、彼女はその感情をもてあまし始めている。ニームの計画には、今の状況は織り込まれていない事は間違いないと思われた。

つまり、ニーム・タ＝タンという砦に張り巡らされた堀の水は引き、隙間無く高く積み重ねられていた石垣には穴が開いている状態だと言えた。

砦自体には兵力も火力も兵糧も十分にあるに違いない。しかし、城の強さはそれだけでは語れない。隙のない堅固な守りと、何より味方の士気の高さが勝敗を左右するのである。

今のままではニームは「その時」に迷い、そして時を逸し、あまつさえ決断を誤る可能性があった。理性に抗う対抗勢力を自らの内に生んでしまったのだから。

エスカはそこまで考えて、思わず苦笑した。

（俺は、いったい誰の事を言っているんだ？）

一枚の設計図があった。

大きな設計図である。

それを初めて渡された時の事を、エスカは忘れはしない。

その中心には自分の名前、つまりエスカ・ペトルウシュカという文字が記されていた。

綿密で緻密で、だからこそ秘密にしなければならない設計図は、しかしながらこの世に実在する物ではない。

だがエスカの頭の中にはそれは確かに存在し、いつでも隅々まではっきりと見直す事ができる確かな「物」であった。

ニームに膝枕をしてもらいながら、エスカは目を閉じてその設計図を眺めた。

いったい何千回、いや何万回眺めたことだろう？そんな事を考える事すら無意味なほど、つまりは自分のまぶたの裏側を見た回数を数える事に意味があるのかという議論に匹敵する程の頻度で脳裏に映し出されるその設計図には、ニーム・タ＝タンの名前はない。

もちろん《天色の？》という賢者の名前もない。

所々に「正教会」という文字は見える。そのうちのいくつかが賢者である可能性は、ニームという本当の賢者の存在を知った今、新

たに生まれた解釈である。しかし、その解釈をもってしてもそのうちの一つがニームである可能性はなかった。

そう。ニーム・タ＝タンという女性はエスカが人生をかけて作り上げようとしている「或る物」の設計図には存在しない部品であった。その設計図を作った人間にとってはすなわちニームは異物である。そこに存在してはいけない部品なのだ。

綿密な計算を基にして作られた緻密な設計図に異物を無理矢理はめ込んだら一体どうなるのか？

しかし……

エスカは心の中で大笑いをしていた。

痛快だったのだ。

エスカにその設計図を示した人物、設計図を描いた人間の眼前に今すぐにでもニームを連れていきたかった。顔を赤くして目を潤ませているこの綺麗な少女を。

そしてこう叫んでやりたかった。「これはいったいどの『部品』なんだ？」と。

とはいえ、エスカにはもうわかっていた。

アプサラス三世急逝の報を受けた時、設計図と現実がズレ始めたのだという事を。

おそらく、設計図を描いた人物は既に修正版を作りはじめているに違いない。いや、優秀な設計者である。すでに新しい設計図はできあがっているのだろう。

だが、それがどうしたというのだ。

もし新しい設計図を渡されたとしても、そこにはニーム・タ＝タンの名前はないだろう。少なくともエスカのそばにいてはならない「部品」であることは間違いない。設計者ではないエスカにも、それだけはわかっていた。

そんな設計図には、エスカはもう用がないような気がしていた。

そしてこの先、ニームの名が記されていない設計図のどこか……それはおそらく極めて重要な部分に違いない……に於いて、迷い、

そして時を逃し、あろう事か決断を誤るに違いない事も。
だが、だからといってその設計図を投げ出すつもりもなかった。
もう、自分だけの話ではないからだ。

「そろそろお時間ですが、お加減はいかがですか？」
ふいに扉の外から女の声がした。
ジナイーダの柔らかい声だった。
エスカ達は晩餐の宴に出席する事になっていた。そのために二人は夜会服に着替えていたのだ。
「起きられそうか、エスカ？」
ニームは優しい声でそう尋ねた。だが、エスカは力なく首を横に振った。
「今夜は無理だ。悪いがお前一人で行ってくれ」
「とりまとめ役のお前が出席しないわけにはいかぬであろう？」
「大丈夫だ。俺がいったい何の為に急いでフェルンを呼び寄せたと思っているんだ」

フェルンとはロンド・キリエンカの息子である。ロンドの第一子はフレクト。フェルンは第二子である。ちなみにスノウは第三子になる。
彼はエスカの故郷であるエスタリア領の首府ソリュートで兄のフレクトと共にペトルウシュカ公爵家の執務を任されている人間で、主に財務や内政を担当するフレクトに対し、外交の顔として交易や近隣の領主との関係構築の役を担っていたのが弟のフェルンであった。
キリエンカの家の者であるから、兄弟ともにアルヴとデュナンの混血となるデュアルである。兄のフレクトは父と同じく外見がアルヴに近く、反対に弟はアルヴの特徴がほとんどない。それだけの理由ではないが、エスカは内政を兄に、外交を弟に分担させたのである。エスカの英断というよりは、嫌アルヴ国であるドライアドでは

適切な判断だと言えるだろう。
　国王名代となったペシカレフ公爵の付き添いとしてシルフィードの首都エッダに向かう事を五大老命令としてニームから告げられた後、エスカは手持ちの人材のミュゼ参集を故郷に戻るスノウ・キリエンカ一行を通じて急がせていたが、とにもかくにも最優先事項として弟のフェルンに大急ぎでミュゼに来るように命じていた。
　フェルンは正式な手続きを経て公式な少将付きの特別事務官としてドライアド政府に登録され、国王名代随行団の一人として同じ船に乗っていたのである。
　内部の手続きがこれほど短時間で済んだのはエスカの人脈と、ニームの特級バードとしての特権のたまものと言えた。

「フェルンか。私にはおべっかが上手く調子がいいだけの若者にしか見えん。お前に似て人懐っこそうではあるがな」
　ニームにしては気を遣った言い方をしているのだろうが、本人が聞いたらムッとするだろうなと思うと、エスカは自然に口元が緩んだ。
　エスカのこれまでの見立てでは、ニームはとにかく人見知りが激しい。最初から疑ってかかると言った方がいいかもしれなかった。打ち解けていない人間に対しては、飾り面のように無表情で、かわす挨拶や会話にも人間味が無く、微笑どころか眉一つ動かさない。何だかんだでミュゼからの出発には間に合わず、エキープの港で合流したフェルンと出会って二日目のニームが、相手に自分の感情を見せる事はまだなかった。
「大丈夫だ。ああ見えてフェルンはけっこうしたたかで腹黒い。小物のペシカレフ公爵を手玉にとるくらいは朝飯前さ」
「ふーん。信頼しておるのだな」
「信頼もあるが、確信だな」
「確信？」
「狙った女は確実に落とす。それがフェルンだ」

「はあ？マルク・ペシカレフは男だぞ。……まさか……」
「大丈夫だ。お前の考えている『まさか』はない」
「べ、別に私は何も考えてはおらぬ……」
ニームはそう言うとまたしてもエスカの頬をつねった。もちろんそっと。
「さっきのお前の言葉を借りるなら、だ。オレが『女たらし』ならフェルンは『女殺し』だ」
「どう違うのだ？」
「お子ちゃまにもわかるように言い換えてやろう。マルクが頭の上がらない相手を意のままに操れる男。それがフェルンだ」
「？？」
「わかったか？」
「誰がお子ちゃまだと？」
「そっちに反応かよ！」

「あの、いかがいたしますか？」
船室の扉が開かれた。
エスカとニームは同時に声のする方を見た。そこにはジナイーダが遠慮がちに顔を覗かせている図があった。
エスカとニームはすっかりジナイーダの存在を忘れていたのだ。
「エ、エスカは船酔いがひどくて出席は出来ないそうだ」
エスカに膝枕をしながらその髪を撫でているところを見られたニームは、そう言うと顔を赤くしてジナイーダの視線から逃げ出すように、顔を背けた。
ジナイーダはすぐにいつもの冷たい表情に戻ると、努めて冷静な声で答えた。
「かしこまりました。エスカ様についてはフェルン様にその旨申し上げておきます。それでニーム様はいかがなされますか？」
「行ってこいよ。使節団の面々にはお前の顔を売っておく方が何かとやりやすくなる」

「そうは言うが」
ニームは本人も自覚せずに、口を尖らせると少しすねたような声でエスカにそう言って駄々をこねた。
「私が夜会に出ると、お前は膝枕を失うのだぞ？」
ジナイーダはさすがにそれを聞くと表情を崩さずにはいられなかった。めざとくそれを見つけたエスカは、ジナイーダに目配せをして見せた。
「心配すんな。お前の代わりにジーナが膝枕をしてくれるさ」
エスカのその失言に、ニームは即座に反応した。
「痛てっ！」
ニームのげんこつが再びエスカを襲ったのだ。しかも今度は大きく振りかぶられ、勢いまで付けられていた。さらに今度はエスカが痛がっても、ニームは慌ててぶった場所をなで回したりもしなかった。
「こ、この！」
目をつり上げてさらに振りかぶってもう一発お見舞いしようとしているニームに、ジナイーダが慌てて声をかけて、来るべき惨劇を止めた。
「おやめ下さい、ニーム様」
「止めるな、ジーナ。この男は、私ではなくお前を」
ニームは拳を振り上げたままの格好でジナイーダを睨んだ。しかし、ジナイーダの顔はおかしそうに笑っていた。
「エスカ様の言葉を真に受けてはなりません」
「なんだと？」
「エスカ様もエスカ様です。今のはさすがに冗談が過ぎます」
「ジーナの言うとおりだ。さすがのオレも言った瞬間に『しまった』って思ったぜ」
エスカはそう言いながらニームに殴られた場所を手で押さえていた。
「ニーム様はエスカ様が思っていらっしゃる以上にその手の冗談に

免疫がないのですよ。それよりも自分の気持ちをどうしていいのかわからずもてあまし気味の娘を相手に、今のはほめられた行為ではありませんね。意地が悪いにも程があります。」

「だな」

エスカは素直にうなずいた。多少の反論があるかと思っていたジーナにとっては拍子抜けも甚だしかった。要するに本当に反省をしていると言うことであろう。

「『だな』ではありませんよ。エスカ様の冗談でニーム様に睨まれるこちらの身にもなって下さいませ」

「じ、冗談にも程がある」

振り上げた拳は納めたが、怒り心頭と言った顔のまま、ニームは今度はエスカの両方の頬を引っ張った。

「私は……私は……」

ニームは頬をつまむ指に力を入れた。その目にはうっすらと涙がにじんでいた。

「ひはいひはい」

エスカはさすがに身をよじって抗議した。ニームはすぐに手を離したが、まだ怒りが収まっていないようだった。

膝枕をしてもらったままの格好でエスカはそんなニームを見上げた。自分を睨む茶色の目が潤んでいるのがわかると、そっと手を伸ばしてニームの焦げ茶色の髪を撫でてやった。

「心配すんな。金輪際、俺はお前以外の女に膝枕なんてしてもらわねえよ。何なら、オレの四輪の赤バラのクレストに賭けて誓おう」

エスカのその言葉は、まるで劇薬のようにニームに作用した。今も怒りで顔を紅潮させていたニームだが、エスカの言葉は顔だけでなく、夜会服からのぞく首筋から胸あたりまでを一瞬で真っ赤に染め上げた。

「だから、お前も俺が死ぬまでは、俺以外の頭を膝に乗せないと誓え」

ニームの怒りの表情は一瞬で霧散すると、今度は今にも声を上げ

て泣き出しそうな顔に変化した。
「こんな柔らかくて気持ちのいい膝枕、俺は誰にも渡さねえぞ」
「ジ、ジーナがいるのだぞ。人前でそんな恥ずかしい事を口にするものではない」
「俺は本当の事を言ったまでだ。別に恥ずかしい事なんてねえよ」
「そ、そう言う言葉が恥ずかしいというのだ。この『女たらし』め」
ぺちん。
ニームの平手が、エスカの頬に入った。だが、それは全く痛みを伴わなかった。ただ、掌がエスカの頬にあてがわれただけだった。
ジナイーダは笑いを押さえるのに必死だった。
そこへ背後から声がかかった。
いつまで経っても戻らないジナイーダの様子を見に来たリンゼルリッヒである。
「おい、ジーナ、何をしているんだ？フェルン様が心配なさって…？」
ジナイーダはリンゼルリッヒを振り返ると唇に指を立てて黙れ、と合図した。そして目で船室の中を示した。
リンゼルリッヒはジナイーダに促されるまま、怪訝な顔でそっと船室をのぞき込んだ。そして膝枕をしながら、真っ赤になってうっとりとエスカを見つめているニームの姿を見つけると、頭をかいた。
「これはこれは、ごちそうさま」
「ばか」
ジナイーダはリンゼルリッヒに目配せすると、そのままそっと船室の扉を閉じた。
「男爵『ご夫妻』は、お二人とも船酔いで出席敵わず。後の事はよしなにと、フェルン様にはご報告を」
「合点承知」
リンゼルリッヒはそう言うときびすを返した。
が、すぐに立ち止まってジナイーダを振り返った。
「いいのかね？あれで」

だが、その顔は微笑んでいた。
「とても、いいんじゃない？ただ……」
「ただ？」
だが、ジナイーダは首を横に振って見せた。
「ううん。たがが外れて暴走しないかなってちょっと思っただけ。でもニーム様に限って、それはないでしょう」
リンゼルリッヒは何も言わず小さく頷くと、報告のためにその場を後にした。

一人残されたジナイーダの耳には、船室の中でまだ少し拗ねているニームと、それをなだめているエスカの声が小さく聞こえていた。
二人のやりとりが聞こえなくなるまで扉から距離を取ると、ジナイーダは小さく一つ、ため息をついた。
「妹。いえ、あんな娘が、欲しいな」
思わず口をついて出た自分の言葉にジナイーダは驚いた。そしてそのままそっと手を胸に当てると、リンゼルリッヒが走り去った方へぼんやりと視線を向けた。

＞ｉ２３５１２―１８３１＜

# 第二十七話　設計図（後書き）

第二部　第二巻　通巻十巻終了です。
次話より通巻第十一巻スタートです。

2025

# 第二十八話　海蛇のスタンセイル（前書き）

合わせ月の夜　第二部　深紅の綺羅　第三巻
通巻　第十一巻のスタートです

2026

# 第二十八話　海蛇のスタンセイル

＞ｉ２３４６８―１８３１＜

夜明けがほど近い時刻になって、ジナイーダ・イルフランは目を覚ました。いつもなら浅い眠りから覚めた時には、決まって特有のけだるさが襲ってくるのだが、その朝は妙にすっきりした気分で、体も軽く感じた。

ゆっくりと頭を上げると、くるまっていた羽布団を少しめくった。

「起きたのか」

眠っているとばかり思っていたリンゼルリッヒ・トゥオリラの声が隣から聞こえた。

「ごめん、起こした？」

「目を覚ましたらお前が起き上がったんだ。たぶん同時に目が覚めたんじゃないか？」

その言葉を聞いたジナイーダは小さな声でくすくす笑うと、目を閉じたままのリンゼルリッヒの頬に軽く口づけた。

「あなたのそういうところが好きよ」

「何の事だ？」

「さあね」

リンゼルリッヒは目を開けると、ゆっくりとした動作で上体を起こした。ジナイーダはそれを見て遠慮無くシーツをむしり取ると、体に巻いてベッドをから降りた。

「部屋へ戻るわ」

「その悩ましい格好でか？」

「あら、これならちょっとしたドレスよ」

「おいおい」

「着替えは私の部屋だから、仕方ないわよ。一度脱いだものを着るのは性に合わないのよ」

ジナイーダはそう言ってにっこり笑うと、昨夜脱いだ自分の服を拾い集めた。
「それにこんな時間、誰も廊下にいないわよ」
「《天色》、いやニーム様がドアの前にいたりしてな」
「まさか。今頃はたぶん、エスカ様の腕の中でとびきりいい夢を見てるでしょう」
ジナイーダの嬉しそうな声を聞いても、リンゼルリッヒは真顔のままだった。そして独り言のようにつぶやいた。
「エスカ・ペトルウシュカ男爵、か」
シーツを体に纏ったままの姿で床に散らばっていたリンゼルリッヒの服を畳んでいたジナイーダの手が止まった。
「今更どうかした？」
「いや、そう言うんじゃないんだ」
リンゼルリッヒの視線はテーブルの上に置かれていた。その視線をジナイーダは追ってみた。視線の先には昨夜の食事の後がそのままで残されていた。

ニーム・タ＝タンの護衛役である二人は、昨夜は早々にその役目を放免されていた。
具体的には、リンゼルリッヒがフェルンにエスカとニームが晩餐会に出席できない旨を伝えた後であった。
後は任せてゆっくり養生しろというエスカへの伝言と同時にフェルンから託された「キリエンカ家特製の酔い止め薬」を携えて戻ったリンゼルリッヒは、エスカから「本日に限り護衛の任を解く。よって二人ともゆっくり休め」という「命令」を受けたのだ。
エスカのその心遣いに、ニームも即座に賛同した。
二人は逡巡したが、エスカの目配せを見て承諾すると、そのまま主人「夫妻」の部屋を後にした。
リンゼルリッヒもジナイーダも、当然ながらそれぞれに一部屋ずつあてがわれていた。要人の警護役というよりはドライアドの特別

神官という立場である彼らに与えられた部屋も、それなりに広くて豪華なものだった。

だが、二人の部屋には大きな違いがあったのだ。

自室の調度を検分していたジナイーダの部屋の扉が叩かれたのは、二人が別れてから二分と経っていなかった。招き入れられたリンゼルリッヒはジナイーダの部屋の中を一瞥すると、すぐに自分の部屋を見に来るように言った。

「シャワーを浴びてからじゃ駄目なの？」

「とにかくすぐに見せたいものがあるんだ」

何事かと思ってリンゼルリッヒの部屋に入ったジナイーダは、部屋の中央にあるテーブルの上に用意された豪華な食事に目を見張った。

すぐに食事が出来るように、二人分の席が作られていたのである。

「これは……」

「さすがにこれにはちょっと驚いた」

リンゼルリッヒはそう言うと、皿の一つに手を伸ばして中の肉を一切れつまんで口に入れた。

「やっぱり雉のソテーだ」

その声に、ジナイーダも皿の一つに手を伸ばして、リンゼルリッヒと同じように一切れつまみ食いをした。

「豚肉のラズベリー煮……」

それらはそれぞれ、二人の好物だったのだ。

ジナイーダは記憶の頁をめくった。

エスカと初めて挨拶をかわしたあの日で、ページをめくる記憶の手が止まった。それは無理矢理夕食のテーブルに同席させられた二人が、食事をしながら何気ない世間話をしていた時の事である。

話の流れでそれぞれが確かに口にした好みの料理のことを、どうやらエスカはちゃんと覚えていたようだった。

食事をとりながら、別の料理や食べた事のある珍しい料理の話になる事は自然な流れだろう。初対面の相手との当たり障りのない共

通の話題としてはまさにうってつけである。そんな何気ない会話の中で得た情報を、エスカ・ペトルウシュカという人間はちゃんと活用するのだということを、二人の末席賢者はこの時認識したのである。

「それだけじゃないんだ」

覚えているか？と言ってリンゼルリッヒが持ち上げたのは、赤ワインの瓶だった。

「まさか……」

そのラベルを見たジナイーダは困ったような顔をしてポリポリと指で頬を掻く仕草をした。ちょっと驚いた時に彼女が見せるクセである。そしてリンゼルリッヒが知る限り、それは嬉しい驚きの時だけに見せる仕草であった。

ジナイーダは再び記憶の中の同じ日の頁をめくった。

ミュゼのペトルウシュカ屋敷の地下にはワイン倉があった。

ドライアドの貴族の屋敷にはたいがいワイン倉があって、そこに所蔵されているワインを友人知人に見せびらかして自慢する者も多い。だから貴族であるエスカの屋敷にワイン倉があってもそれは別に珍しい事でも何でもない。だがエスカは所蔵しているワインを二人に自慢する為にワイン倉に案内したわけではなく、自分達が夕食で飲む為のワインを、食事の支度が整うまでの待ち時間を利用して客人に選ばせようと案内したに過ぎなかった。

ジナイーダの見たところエスカにはワイン収集の趣味は無いようであった。彼のワイン倉には普通に評判がよく、よく言えば実用的、悪く言えば廉価なワインが置かれていただけであった。ただ、ワインは味の傾向ごとに整然と分類されていて、かつその種類も豊富だった。ざっと見たところおよその料理に合うワインは一通り揃っているようであった。

ワイン倉を見れば、その屋敷の主の性格がわかるとはよく言われ

る事である。そのワイン倉を見る限り、ペトルウシュカ男爵の屋敷の主の性格は素朴で実直な人間のように思えた。つまりそれは社交界で派手な活動をする華やかな容姿の若き貴族のものとはとても思えなかった。

そういうわけで他人に自慢するような特別なワインなど並んでいなかったペトルウシュカ男爵屋敷のワイン倉だが、二人はその倉の隅で妙なワイン棚を見つけた。

そこだけ別あつらえの小さな棚には、なぜか一本も瓶がなく、代わりにかつてその場所に保管されていたと思われるワインのラベルがそれぞれの場所に貼り付けられていた。

数は少ないが、特別なワインはここに置いておく、と言うことなのであろう。

興味本位に貼られたラベルを一つ一つ吟味していたジナイーダは、あるラベルを見て思わず声を上げた。

「プレロースコフの三九八〇年ものですって？」

そのワインは一部の愛好家の間で幻の銘酒とされているものだった。クセがありすぎて味の評価としては賛否両論ある。しかしその個性の強さ故に「一度は飲んでみたいワイン」として名高い。幻とされるのは、もともと生産量が少ないドライアド南部のワイン産地、プレロースコフ地方の、数百年ぶりの凶作の年三九八〇年に仕込まれたものであるからだ。つまり、世に出た数が少ないのである。加えてここ二十年ほどは市場には一切出てくる事が無く、「飲んだ」という人間も「見かけた」という人間もおらず、既にファランドール中を探しても存在していないとされていた。

「ここに『それ』があったのですか？」

思わずそう尋ねたジナイーダに、エスカは申し訳なさそうな声で答えた。

「すまんな。そいつはちょっと前に飲んじまったんだ」

「ちょっと前？それはいつ頃の話です？」

三九八〇年もののプレロースコフワインの話題に食いつくジナイ

ーダに、エスカは苦笑した。
「味の感想はそこにいるちびっ子大賢者様に聞いたらどうだ？」
「え？」
その幻のワインは、ニームの歓迎会の折に開けられていたのだ。
ニームは突然自分にワインについての話題の矛先が向けられて首をかしげた。
「恐れながら、ニーム様」
ジナイーダはきょとんとした顔のニームに詰め寄った。
「な、なんだ？」
自分を見るジナイーダの顔が、まるで怒っているように見えたニームは、その迫力に思わず後ずさった。
「お聞かせ下さいまし。どのようなお味でしたか？」
「は？」
「是非にお聞かせ下さいまし」
「急にそう言われてもな……」
ニームはジナイーダに問われても、彼女が望むような回答を持ち合わせていなかった。
「飲んだような、飲んでいないような」
そもそもニームはまだワインの味を云々する歳としては若すぎた。
成人ではあったが彼女にはそもそも食事の時にワインをたしなむという習慣がなかった。せいぜいバードとして参加せざるを得なかった王宮内の晩餐会で、勧められるままに何度か飲んだ程度である。
件のワインの件にしても歓迎会で出されたから口をつけたものの、彼女にとって赤ワインの味の感想など「すごく渋い」「かなり渋い」「けっこう渋い」くらいの種類しか思いつかかったのだ。ましてやその時に飲んだ銘柄と味の記憶が一致しているものがあろうはずもない。
ジナイーダは誰が見てもわかる程度にがっかりした顔をエスカに向けたが、彼は首を横に振った。
「いや、俺が飲む前に、そいつ、一本全部開けちまったからな」

「ええ？」
「その日は合計五本くらい開けてたかな。最後まで顔色一つ変えずに、な」
　ジナイーダはその時初めて知る事になった。ワインの味もわからない成人になりたてのニーム・タ＝タンという十五歳の少女が、実はとんでもないウワバミだった事を。
「いやあ、あんなに気持ちのいい飲みっぷりをするヤツは久しぶりに見たぜ」
「あ、あの時はなぜか喉が渇いていたからな。そうか、最初に飲み干したあの瓶がそのプリマロースハムとかいう特別なワインだったのか」
「プレロースコフ、三九八〇年ものです！」
　ジナイーダはピシャリとニームの言葉を訂正した。
「ジーナよ、お前は何を怒っているのだ？」
「お、怒ってなどいません。ただ、どんな味がしたのかが気になるだけです」
「そうか。すまん。一気に飲んで、すぐにスープにとりかかったので、味の方は全然おぼえておらん。不味くはなかったとは思うのだが」
「そうですか……」
　そう言って今度はあからさまに肩を落としたジナイーダに、エスカが慰めの言葉をかけた。
「まあ、それくらいにしてやれ。それよりそのラベルにそこまで反応するってことは、ジーナはけっこうなワイン通なんだな」
　エスカはそう言った後で、後ろについていたニームを振り返った。ニームはしかし、首を横に振った。
「ジーナがそこまでのワイン好きだと言う事は、私も今初めて知った」
「そうか」
「いや」

ニームはもう一度首を横に振ると、うつむいた。
「私は……考えてみればジーナの事を何も知らぬのだな」
その言葉はやけに寂しそうに、ワイン倉に響いた。
「なに、心配には及びません。ニーム様」
すかさずリンゼルリッヒが口を挟んだ。
「ニーム様は私の事もよくご存じないはずではありませんか」
そう言われたニームは、顔を上げてリンゼルリッヒを見つめた。
いつもの微妙な嫌みかと思ったのだ。
だが、ニームの視線の先にあるリンゼルリッヒの表情は彼お得意の皮肉っぽい作り笑いではなく、おそらくニームが初めて目にする優しげな笑顔であった。
「つまり私たちはニーム様に平等に扱ってもらってるってことですからね。ジーナの事だけご存じだったりしたら、きっと私はヤキモチをやいてしまうでしょう」
ニームはリンゼルリッヒのその言葉の真意を測りかねた。ただ、その言葉が嫌みではないと言う事だけは頭ではなく気持ちで理解した。そんな事もまた、彼女にとっては初めての事であった。
リンゼルリッヒに返す言葉を探しているニームの頬をエスカが指で突いた。
「な、何をする？」
「俺もこいつらの事はよく知らねえから、これでおあいこだな。何、これから知っていけばいいさ」
「知っていく？」
「何も知らない仲間っていうのも、確かにある」
エスカはジナイーダに無言で手を差し出すと、彼女が抱えていたワインが入ったバスケットを受け取った。
「だが、相手を知った方が、楽しみは増える」
「楽しみ？それは何だ」
「うーん。そうだな」
ニームの素朴な問いかけに、エスカは少しの間考える様子で間を

空けた。
「難しい質問だな。まあ、適当に答えとくと、気持ちがいいって事だろう」
ニームはそれには何も応えず、エスカが抱えるワインのバスケットと、ジナイーダとを見比べていた。

思わぬ事で発覚したジナイーダのワイン好きだが、本人の言い訳によるとワイン通という程ではない、という事であった。「通」ではないのかもしれないが、ジナイーダがどれだけワイン好きなのかと言う事は、エスカが抱えるバスケットの中を見れば一目瞭然だった。
プレロースコフの三九八〇年物が水の代用品として、あっという間にニームの胃に消えていった事を知った彼女は、その反動でそれまでの遠慮が嘘のように、倉のあちこちから目を皿のようにしてワインを選び出していたからである。
それは言葉より行動の方が雄弁にその人を語ると言う事を、ニームが目の当たりにした瞬間でもあった。

リンゼルリッヒが示したワインのラベルを見て、ジナイーダはその時の事を鮮明に思い出していた。
「まさか、ねえ」
「シャワーなんて浴びてる場合じゃなかっただろう?」
ジナイーダは素直にうなずいた。
そして、ワインの瓶を持ち上げると、うっとりするような表情で部屋の灯りにすかして中の液体の色を眺めた。
そしてあの時は賢者になってから一番がっかりした瞬間だったかもしれないな、と思い返すと妙におかしな気分になった。
「エスカ様という人は、私たちの想像の上を行く人ね」
そう言うジナイーダに、リンゼルリッヒはいたずらっぽい笑顔を

向けた。
「何？」
「エスカ様が想像以上の人物だって事には同意だ。ただし、あの人はジーナが思っているよりずっと上を行っていると、俺は思う」
「もったいぶってないで教えてちょうだい。何か知ってるんでしょう？」
リンゼルリッヒは隠しから畳まれた小さな紙片を取り出すと、ジナイーダにそっと手渡した。
「危ないから、瓶を置いてから読め」
「何よ」
ジナイーダはしかし、リンゼルリッヒの忠告を無視してプレロースコフの三九八〇年ものを抱いたまま、差し出された紙片をひったくるように奪うと、すぐに開いた。
小さな紙片である。書かれている内容は当然ながら一目で読める分量でしかない。だからジナイーダは、紙片を開くと同時に中に書かれていた文章を一目で読むことになった。そしてあろう事か、その瞬間に抱いていた大事なワインをその腕から落とした。
「おおっと」
予測していたから間に合ったのだろう。リンゼルリッヒは倒れ込みながら大事な大事なワインが床の染みになる寸前に、無事受け止める事が出来た。
「何よ、これ」
夢にまで見たかどうかは定かではないが、あれほど飲みたかったワインの事など忘れて、ジナイーダは紙片を振り上げてリンゼルリッヒを睨み付けた。
「このワインの下に敷かれてた」
「そんなことを聞いているじゃないわ。だって、こんなの……」
そう言うとジナイーダは思わず鼻と口を手で覆った。
「これは、ちょっと反則じゃないの……」
ジナイーダは鼻声になっていた。見るとその青い眼から、大粒の

涙があふれている。
「言わんこっちゃない。ワインを先に置けっていっただろう」
ワインをそっとテーブルに戻すと、リンゼルリッヒはそう言いつつ紙片を見つめて泣いているジナイーダを後からそっと抱きしめた。
その紙片には、まるでお手本のように美しい文字で、こう書かれていた。
「これはワイン好きのジーナこそが飲むべきものだ。
リリと二人で、今宵はのんびりと食事を楽しんで欲しい」
きっちりとした隙のない筆跡で綴られたその短い文章は、紛れもなくニームの直筆であった。
ジナイーダとリンゼルリッヒが感動したのは、もちろんその達筆が故ではない。ニームの書く文字が印刷物のように美しい事は彼らは当然知っている。
だが、それは公務である文書に記されたものでしか見た事がなかったのだ。つまり、二年以上行動を共にしてきて、初めてニームから受け取った手紙がそれだったのだ。
ついこの間まで、血の通ったような会話すらしようとしなかった大賢者が、まるで友人か姉妹にあてたような文面をいきなり寄越してきた。
しかも、とんでもない贈り物と一緒に。
ジナイーダは希少品のワインよりも、その小さな紙片の方が何千倍も価値があると思った。
「ねえ。これ、私がもらってもいい？」
これ、とはもちろん紙片の事である。
「たった二行の、それも何てこと無い文章なのに、なんで私、こんなに嬉しいんだろう」
リンゼルリッヒは
「お前もそれだけ情が深いってことだろうな」
「『も』なのね？」

「ああ、俺もさっき自分で気がついた」
二人にはもちろんわかっていた。ニーム・タ＝タンという特殊な少女が、普通の少女のような一面を持ち始めたのは、誰がなんと言おうとエスカ・ペトルウシュカとの出会いが原因なのだと言う事を。
その紙片が、ニームの自発的な行動なのか、エスカの助言によるものなのかはわからない。また現存すら危ぶまれているような希少なワインを、いったいどうやって調達したのかも謎である。ニームがワインの流通に明るいとは思えないから、おそらくはエスカが手配したものであろう。ひょっとしたら、この演出は全てエスカ・ペトルウシュカという油断のならない策士が、部下を完全に籠絡させるべく計画したものかもしれない。
だが、たとえそうだとしても、もうそんな事はどうでもいいと、ジナイーダは思った。ニームとエスカをひっくるめて全力で守るだけなのだと。
「陰謀を企てていた俺達が、陰謀にはまったのかもしれないな」
リンゼルリッヒは苦笑しながらそうつぶやいた。
その言葉は、自分が今考えていた事と同じで、そしてリンゼルリッヒの表情は、自分が今決心した事と、きっと同じなのだとジナイーダは思った。
「そうね」
ジナイーダは改めて紙片を開くと、その文字を指でなぞった。
「やるべき事がはっきりするって、気持ちがいいわね」
「そうだな。やらされていると思うより、やりたいと思う方がいいに決まってるさ」

リンゼルリッヒの服をたたみ終えると、ジナイーダはテーブルに近寄った。その上に丁寧に畳んで置かれているニームの言づて書きを見つけると、そっとつまみ上げて大事そうに手の中に包み込んだ。
「なんか、さ」

ジナイーダは背中を向けたままで、そうつぶやいた。
「ん？」
「ニーム様の事、なんだかものすごく可愛く思えてきてしょうがないんだけど、どうしよう？」
「おいおい、笑いの沸点だけじゃなくて、そっちの方もずいぶん低いんだな？」
「そうみたい。だって、あなたに対しての沸点も低いもの」
「いや……。まあ、気持ちはわかるが仕事は冷静に頼む。ニーム様だけでなく、お前まで暴走したら、俺はどうしようもないぜ」
「でも、今日会ったらいきなり抱きしめちゃうかもしれないわ」
「わかった。その時は全力で引っぺがしてやる」
「その時、ムカっとして、あなたを石化させたりしたら、ごめんね」
「おいおい」

二人が同時に笑い声を上げた、その時だった。一定の周期の揺れで、安定した航海を続けていた大型帆船グェルダンが、急速に速度を落とした。
それが尋常ではない急制動である事は、立っていたジナイーダが床に膝を突いた事でも知れた。船が何かにぶつかったのだろうか？それにしてはそれらしい音もしない。
さりとて帆船が急に止まれるはずもない。
「何事だ？」
「まさか錨を降ろしたの？」
「ばかな。急にそんな事をしたら転覆する」
二人は顔を見合わせた。
ジナイーダは体に巻き付けていたシーツを脱ぎ捨てると、手に持った着替えに袖を通し始めた。自室に戻っている時間などなかったのだ。見ればリンゼルリッヒも既に自分の服を着ながら、窓の外に目をやっていた。
「海賊か」

夜がうっすらと明けようとしていた。まだ明るくなり始めた瞬間と言えたが、それでもその窓の外に広がる異様な景色が判別できた。

無数の帆船が並んで航行していた。ただし、グェルダンが急停止したためにまさに追い抜いていこうとしているところだった。

もちろんそれは護衛の軍船ではない。護衛は合計三隻。だが窓の外に見える船影は十隻や二十隻ではなかった。そしてそれらが普通の商船ではない事は、薄暮の中でも一目瞭然だった。グェルダンを追い抜いていく全ての船には、火矢を装填した弩(いしゆみ)があったのだ。

「アナクラだ」

リンゼルリッヒはうめくような声で海賊の名を告げた。

「わかるの？」

「これ見よがしに海蛇のスタンセイルを掲げている」

「アナクラがなぜ、こんな南に？」

「そんな話は後だ」

リンゼルリッヒは既に儀仗を手にしていた。

「そうね。とにかくニーム様のところへ急ぎましょう」

そう言ったジナイーダの準備も整った。二人は扉を開くと、主人の下へ向かった。

リンゼルリッヒに続いて部屋を出る際、ジナイーダはチラと窓を振り返り、外の様子を窺った。そこには確かに見慣れぬ複数の船影がグェルダンを追い越してゆく様が見えた。そのメインマストの横に付きだしたスタンセイルは真っ黒で、そこには確かに海蛇の紋章が染め抜かれていた。

「黒？」

ジナイーダはそう呟くと立ち止まった。しかし、急ぐように促すリンゼルリッヒの声に応えると、きびすを返した。

海賊アナクラ。

それは当時、ファランドールの北方の海域を拠点とする海賊の名

前であった。アナクラと言うのは北方海域では最大の勢力を誇っていた船団組織の首領の名とされている。

アナクラは統率された高速な船団を持っており、まともに戦えば各国の海軍組織すら太刀打ちできない戦闘力を備えた、もはや軍隊組織と言っても過言ではない勢力を有していたようである。

ただ、月の大戦の頃には特筆するほど大きな事件や犯罪行為をしたという記録はなく、小規模な襲撃や略奪の記載がある程度である。

海賊は一般的に通常は商船に偽装しているが、ひとたび事に及べば相手への威嚇の為にその紋章を染め抜いた帆を掲げる事があった。有名な海賊になればなるほど、その紋章の効果は絶大であり、彼らは戦わずして相手の降参を勝ち取ることが出来たという。

許しを得て主人達の船室に入ったジナイーダとリンゼルリッヒは、緊急事態であるにもかかわらずニームの様子を見ると軽い失望感を禁じ得なかった。わざわざ護衛二人をたっぷり一晩自室から遠ざけたにも関わらず、そこにはいつもと特に変わらぬ表情のニームが一人で身繕いをしている最中だった。

クロゼットにはニームが昨夜着ていた夜会服が丁寧に掛けられてある。

エスカのベッドは使った様子が無く、長椅子の横にブランケットがきちんと畳まれていた。床に散らばる衣服などは皆無だった。

要するに二人の間には、特に何事もなかったようだった。

姿見を前に着替えをしているニームの顔の両脇の長い髪には、まだ例の精霊陣が描かれた布が巻き付けられておらず、後頭部にはほほえましい寝癖もある。こちらはまさに起き抜けと言った風情だった。

「エスカは先に船長室へ行った。私も後で向かう」

ニームは白い佐官服のボタンを止め終わると、短くそう言って二人へ先に行くように命じた。

「ニーム様は？」
とりあえずリンゼルリッヒを先に向かわせると、ジナイーダはそっと櫛を手渡しながら尋ねた。
「見ての通りだ。私の方はもう少し準備に時間がかかってしまう」
姿見で髪をとかしながら、ニームはそう答えた。寝癖がどうにも上手く収まらないようであった。
「エスカ様は何かおっしゃっていましたか？」
ジナイーダの問いに、ニームは手を止めた。
「急に船を止めるヤツがあるか、と大いに叱られた」
「あの急制動はニーム様の仕業でしたか」
「仕業、とは人聞きが悪いな」
「お許し下さい。つい」
ニームは小さなため息をついた。
「とりあえず保護ルーンを使いたかったのでな。何はなくとも座標軸の固定だけはしておかねばと思って『？』の精霊陣を発動させたのだ。
「後方に船がなくて幸いでした」
「エスカも同じ事を言っていた。確かにそうかもしれん。だが私の優先順位は決まっている」
「それで、エスカ様はお怒りになって部屋を出て行かれたのですか？」
その質問に対しては、ニームは大きく頭を振った。
「叱りはしたが、エスカはもともと怒ってはいなかった。海賊が現れたと私を起こしてくれた時も、先に出て行く時もいつもの優しい声のままだ。寝床から出られぬ私を見て、掛け布団を直してもくれた」
この寝癖のせいで起きられなかったのですね、とはジナイーダは言わなかった。それよりも眠っているニームを見た時のエスカの気持ちを想像すると、笑いがこみ上げてきた。
エスカはおそらく、この寝癖を見て笑いを堪えながらも、ぐっす

り眠っているニームをとりあえず起こし、事の次第を手短に告げたに違いない。
「海賊か。やっかいな事にならぬといいがな」
そう言って再び髪をとかそうとし始めたニームの手からやさしく櫛を奪うと、ジナイーダはニームの寝癖直しに取りかかった。
「ニーム様は精霊陣の結布(ゆいふ)を」
ニームは何も言わずに頷くと、懐から何本かの細い布を取り出し慣れた手つきで耳横の長く伸ばした一房をそれでまとめ始めた。
「海賊が出たと言うのに、ジーナは楽しそうだな？」
鏡に映るジナイーダの笑顔に気付いたニームはそう言った。
「そうですね」
ジナイーダは少しバツが悪そうに苦笑した。
ニームが気付いているのかどうかは分からなかったが、ジナイーダがニームの身繕いの手伝いをするのは、その時が初めてだったのだ。ニームはいつも一人で何もかもこなしてしまう。彼女たちには業務上必要な事柄しか要求をしてこない。そう言う意味では仕えるには楽な相手と言えたが、それがお互いの距離感を埋められない原因にもなっていたのである。
その日、ごく自然に髪をすく手伝いが出来たことが、ジナイーダには嬉しかったのだ。とは言え、こんなことならばもっとずっと早くできていたのかもしれないとは思わなかった。ここに至るまでには間違いなくお互いの変化があった。だからこそ今この時に繋がったのであろう。
「ところで、エスカ様の船酔いは治まったのですか？」
「フェルンが寄越した丸薬がよく効いたようだ」
「あの特効薬とか言っていたものですか」
「エスカは嫌がっていたが、マルク・ペシカレフ付きの医者の薬が気に入らなかったのではないようだな」
「なるほど。粉薬が飲めない、と言うわけですか」
ニームはうなずいた。

「まったく、どっちが『お子ちゃま』だ」
ジナイーダは笑い声が漏れそうになるのを苦心の末に堪えると、できるだけ感情のこもらない声で尋ねた。
「つまり、昨夜もエスカ様はニーム様を子供扱いされた、と？」
もちろん言葉の意味はニームに伝わったのだろう。ニームの顔が少しだけ赤く染まった。
「ゆ、夕べはその丸薬のおかげでエスカの食欲が戻った事もあって、安心してついつい食べ過ぎてしまったようなのだ」
「それでおなかがくちくなってすぐに眠ってしまったと？」
ジナイーダの問いに、ニームは憮然とした顔をしながらも、小さくうなずいた。
「まあ、お話し相手がそんな状態だと、長い夜はエスカ様もご退屈でしょう。さりとてこの船にはさすがに娼館もございませんし……。ならばここは一つ、ニーム様がご命令下されば、この私がエスカ様の夜伽役を買って出てもよろしいですよ」
「な……」
ニームの手から結布精霊陣が滑り落ちた。
「そ、それは絶対だめだ」
後ろのジナイーダを振り返ろうとしたニームは、しかしそのジナイーダに体を拘束されて身動きが出来なくなった。
ジナイーダが後ろからニームを抱きしめたのだ。
「ジーナ？」
「いま言ったことは、もちろん冗談です」
そう言うジナイーダの穏やかな声に、ニームは抵抗を止めた。
「冗談にしてはタチが悪いぞ」
「ご安心下さい。エスカ様がどれだけ魅力的でも、私はリリに夢中ですから」
「え？」
「お気づきではありませんでしたか？」
「いや……かなり驚いた」

「エスカ様は既にお気付きだったようですよ」
「そうなのか？」
「ええ。一切そんな素振りを見せてはいない自信があったのですが、本当に不思議なお方です」
ジナイーダは昨夜リンゼルリッヒの部屋に準備されていた椅子の並びで、気付かれていることを確信していた。
二人の卓は、テーブルを挟んで向かい合って用意されてはおらず、並んだ状態だったのだ。敢えて指示しなければそう言う並べ方はしないものである。
「そうか」
説明されて、ニームはうなずいた。
「ニーム様とて、エスカ様に対しては私がリリに対するものと同じお気持ちをお持ちなのでしょう？」
「……」
「迷っておいでですか？それとも悩んでおいでですか？」
ニームはしかし、首を横に振った。
「むしろ悩むことも迷うこともない自分に驚く。おそらく、私はどうかしてしまったのだ」
「いいえ」
ジナイーダは即座に否定した。
「ニーム様だけではありませんよ。みんなどうかしてしまうものなのです」
「みんな？」
「みんなです。たまにそうではない人もいます。でも、そうならない人は私は人とは認めません」
「ジーナもリリに対して、どうかしてしまったと言うことか？」
ジナイーダは思わずクスっと笑いを漏らした。
「私だけではありません。リリもきっと、私に対してどうかしてしまったのですよ」
「そうか……」

ニームは目を伏せた。
「エスカは……」
「はい？」
「エスカは優しくはしてくれる。頭がぼうっとするような事を言ってくれる時もある。だが『お子ちゃま』としてしか見てはくれておらん」
「それは……」
ジナイーダは言いかけた言葉を飲み込んだ。
「こういう事については、たとえニーム様が四人の大賢者の頂点に立つお方であろうと、末席賢者である私の方が経験が豊富です。もしお望みとあらば、助言出来ることもございますよ」
「それは何だ？」
ニームは顔を上げると、姿見を通して後ろのジナイーダの目を食い入るように見た。ジナイーダはニームと目が合うとにっこり笑って見せた。
「こういう事には決まりがあるのです」
「決まり？」
ジナイーダは力強くうなずいた。
「『どうかしてしまった』しまったからには、それ以上どうにかしたいと思うのならば、『どうかしてしまった』方が思い切って相手にぶつかる事が、人の世、いえ、大人の世界では決まり事になっているのです」
「？？ぶつかる？」
「ぶつける、と言うべきでしょうか。言葉でその思いの丈をぶつけるか、行動で示すか、です。相手がどうだとかいう話はその後ですよ」
「？？ぶつける、か」
自分に言い聞かせるようにそう呟くニームを、ジナイーダはようやく開放した。もちろん思い切り抱きしめていた訳ではない。そもそもニームはジナイーダの抱擁を嫌がってはいなかったのだから。

腕をゆるめると、ニームはようやくジナイーダを振り返った。
「気持ちよかった」
「え？」
「お前の抱擁は心地よかったと言ったのだ。私には経験がないが、母親に抱かれるとはこのような感じなのかもしれんな」
その言葉を聞いたジナイーダは、今度はそのまま正面からニームを抱きしめた。
「ジーナ？」
「お許し下さい、ニーム様……」
「ジーナ……」
「非常時を承知でお願いします。ほんの少し……。もう、ほんの少しだけ、こうしてニーム様を抱きしめる事を、お許し下さい」
どうして良いのかわからずしばらくそのまま動かなかったニームは、ジナイーダが自分を抱擁しながら涙を流しているのに気付くと、自らの両手をそっとジナイーダの背中に回した。
そうすることによってジナイーダの頬がさらに濡れることになるとは知らずに。

# 第二十九話　爵位返上命令

船長室に入ったニームとジナイーダは、マルク・ペシカレフ公爵の耳障りな叫び声に出迎えられた。

「いったいどうするのだ？そもそも我が方に軍船がたったの三艘しかないとはどういうつもりだ、男爵？」

「いや、面目次第もございませぬ」

「国王名代の護衛ともなれば、百や二百の軍船に守られているのが当たり前ではないのか？お前は儂を守るのが務めであろうが？いったいどうしてくれるのだ、この役立たず」

膝を床に突き、マルクに頭を下げているエスカの姿を見たニームは、思わず手に持っていた儀仗セ＝レステを思い切り床にドンと突き立てた。

その音に、船長室にいた全員が入り口の二人組へ顔を向けた。

「これはこれはタ＝タン大佐。いち早いご活躍にこのフェルン・キリエンカ、感服いたしましてございます」

ニームが言葉を発する前に、大きな声でフェルンがそう声をかけた。

「いやはや。誰もまだ海賊の来襲に気づかぬうちに防御陣を敷かれるとは、さすがは我がドライアド王国が誇る特級バード。お噂通りの凄腕に名代であるペシカレフ公爵も一安心されていらっしゃいます」

フェルンはそこまで一気にまくし立てると、眉間にしわを寄せて自分を睨んでいるニームに目配せをして小声で告げた。

（『ゴミのような男に短気を起こすな。ここはひとまず俺に任せろ』とまあ、血相を変えたあなたが現れたら、真っ先にそう伝えるように指示されております。要するに『騒ぎを起こすな』ということです）

改めてよく見れば、マルクは実にひどい格好であった。
よほど慌てて部屋を飛び出したのであろう。しかもそれが昨夜の晩餐の格好のままなのがマルクのだらしなさを如実に表している。上着の首や腕周りに豪華な金糸レース飾りが付いているのはいいのだが、それがしわくちゃになって一部はほつれてぶら下がっていた。中途半端に脱いで眠り込んでいたところをグェルダンの急停止で目を覚まし、慌てて着直したのか、はたまた昨夜のらんちき騒ぎで飲み過ぎ、食い過ぎてはち切れたのかは不明である。だが上着からのぞく真っ赤なチョッキのボタンが掛け違っていて、そもそも二、三カ所しか止められていないところを見ると、どうやら前者であろう。ズボンは止め帯が外れて垂れ下がり、裾を止める紐はほどけたままで床を引きずっていた
対してその前に立っている軍服姿のエスカの隙のない様はどうだ。ニームは惚れ惚れとするような我が「夫」の姿を見て冷静さを取り戻した。憮然とした表情でマルクを一瞥する事は忘れなかったが、すぐに頭を下げて辞儀をした。
フェルンが言うとおり、ここでかんしゃくをぶつける事は簡単だったが、それではニームの上官であるエスカの立場がなくなる。とは言ったものの、そもそもニームは当然それをわかった上でマルクを恫喝しようと思っていたのだ。その後の収束案も構築済みだった。だが敢えてエスカがフェルンにニームの制御を言い含めてあったという事を考えれば、それを尊重するのが補佐官としての当座の役目であろう。
ニームはそう自分を納得させることにしたのである。
そうなると、ニームとしてはエスカのこの後の立ち居振る舞いに興味が移った。
大型客船グェルダンは南回りでエッダに向かっていた。
途中、ツゥレフ島の首府レナンに寄港して護衛の軍船を三艘とも

大型の快速船に入れ替えた後は、何事も無ければ一気にエッダまで航海をする予定だったのだ。

南回りの航路を選んだのにはいくつか理由がある。

一つは北回りよりも遙かに距離が短く、時間が稼げる事である。ツゥレフ水道を抜けて南海に出れば、季節風に乗ってあっという間にエッダに到着するはずであった。

もう一つの理由が、海賊の回避である。南海には海賊達が隠れ住める場所が少ない。そもそも島が少なく、あったとしても単純な海岸線の島ばかりで、逃げ込むべき場所の確保が容易ではないのだ。

問題もある。常に強い季節風が吹いている関係で、相当に大型な船でないと安定した航海ができない。また、暴風雨の頻発地帯でもあった。

どの商船も海賊の少ない南回りの航路を取りたいのは山山だが、力の強い風のフェアリーが乗務員としていない限り、安全な航海が保証される航路ではないのだ。したがって多くの船は護送船団方式をとり、比較的穏やかな北回りの航路を選ぶ事が多かった。

つまり、この海域で海賊、それもここまで大規模な船団が活動している事がそもそも不可思議であった。少なくとも近年海賊がツゥレフ水道付近に出没したという情報は事前の調査でも全く出てこなかったのだ。

しかも中型とはいえ軍船が三艘も護衛しているのは、たった一隻の客船である。戦闘による海賊自身の損失を考えると、差し引きして彼らが得るものはほぼ皆無なのではないかと思えた。

そうなると次に考えられるのは、圧倒的な数の船団にスタンセイルを掲げるという示威行為により、相手の戦意を喪失させ、早期の降伏を目論んだ軍船三艘の奪取という皮算用だが、そもそも相手は軍船である。三艇のみとはいえ、そのムーンセイルにオオワシの旗を掲げた軍船が、いったいどういう素性なのかは海賊とてよくわかっているはずであった。

オオワシの旗、すなわちファルナ朝ドライアド王国の威信を掲げ

ている船団である。一戦も交えず降伏する事など、まず考えられないのである。

つまり相手の海賊、アナクラには船や武器・財宝の略奪といったものとは別に、何らかの意図があるに違いないと考えられる。この船に乗っている人物に用があると言い切ってもいいだろう。

海賊に襲われた事を認識した後、ニームは即座にそこまでは考えを巡らせていた。問題は目的である。身代金を狙った拉致か、あるいは怨恨か。

どちらにしろたいした話も出来ないままエスカが部屋を出たものだから、その点についてエスカがどう考えているかまでは、ニームにはわからない。

ただ、事に当たろうとするエスカにとって、場違いで珍妙な格好をしたマルクの存在が好ましいものではない事だけは確かだった。

「特級バードというのは、船の上でルーンが使えるのか？」

グェルダンにはニームによって大規模な防御ルーンが既にかけられているというフェルンの言葉に、マルクは反応した。もちろん、今初めて知ったことであった。

彼の疑問はもっともであった。

それはマルクやフェルンのみならず、エスカにとっても常識を越えたものだった。エスカは改めてニームの能力に脱帽するしかなかった。

水に浮かぶ船上ではルーンは使えない。それは常識であった。

ルーンの決まり事の一つである「詠唱中は座標軸を固定しなければならない」という項目が満たされないのである。そう。水の上に浮いている状態の船は揺れていて、たとえ床とルーナーの固定関係が築かれていようが、そもそもその床が動いていてはルーンは発動しない。

今日では廃れたが『船上のルーナー』という古い言い回しがある。

「宝の持ち腐れ」と同義で使われる事が多いが、もともとは「ご大層な名目の割に、まったく役に立たないもの」と言ったような軽い侮蔑が入った言葉である。

だが、その常識をニームが根底から覆したというのである。

いや、そうではない。依然として船上でルーナーが使い物にならないというのは間違いのない事である。「ニーム・タ＝タンに限ってのみ、それは当てはまらない」と特記するべきであろう。

もちろん、ニームとてファランドールの理（ことわり）に反する事はできない。船上で普通にルーンを唱える事はできないのだ。だが、彼女の特技である「精霊陣」はそれを可能にした。

グェルダンに乗り込んだニームは、あらかじめ取り寄せていたグェルダンの設計図と見取り図を手に、グェルダンに最も詳しいと思われる「船長代理」と「機関長」を引き回して、まずは船内をくまなく歩き回った。その後は一般の人間を遠ざけると、今度はリンゼルリッヒとジナイーダの二人だけを引き連れ、またもや船内の探索に出向いた。その際にニームはグェルダンの要所要所に精霊陣を描き付けていたのである。航海中に想定される事象を洗い出し、その対処法を供の二人と打ち合わせながら。

共同で何かを行う……それも、ニーム達三人にとっては初めての作業だった。

その精霊陣の一つに、ニームが「？（くさび）」と呼ぶルーンが仕込まれていた。自らの「賢者の名」の由来となる特殊な、おそらく【天色の？（あまいろのくさび）】のみが使えるルーンである。

精霊陣を発動させる為には様々な方法がある。精霊陣を発動させる為にルーンを用いる事もあるが、多くの場合はその必要は無い。当然ながらニームもそういう「ヘマ」はしなかった。彼女は自室の中、具体的にはベッドに、仕掛けた精霊陣を発動させる為の鍵となる精霊陣をいくつも用意していた。その精霊陣の中心を指でなぞるだけで発動する方式をとっていたのだ。

複数用意していたルーンのうち、船上でルーナーとして行動する

為の「鍵」とも言えるルーン、すなわち「？」のルーンを発動させる精霊陣が出帆の翌朝にさっそく役に立ったという事なのである。

エスカはニームが自分の指示を受け入れ沈黙を守った事を確認すると、マルクに再度頭を下げた後、事態の説明を始めた。

「もとより名代の身を第一に案じ、過去においても海賊の出現報告がもっとも少ない海域を通るように計画を立てておりました。今回不幸にもこのような事態に遭遇したわけですが、そうなった場合でも名代の身の安全を最優先で確保する為の準備も万端整えてございます。特別高等事務官のフェルンがいみじくも申し上げたとおり、御身の護衛部隊に最適であるとしてドライアド国王エラン五世陛下が指名あそばされたのが、我が後に控える特級バード。普通のルーナーが船上では無力となるところ、我らが特級バードにその常識は当てはまりません。すでにご存じの通りこの通り船を止め、海賊の船団をはるか追い越させたおかげで、我らはこうして体制を整える時間を稼ぐ事ができたのです」

「なるほど。そうであったか」

エスカはニームがエラン五世の指名で同道しているという事を念押ししたのである。案の定、マルクの怒りの何割かは行き場を失ったようで、文句の矛先はエスカにほぼ絞られる事となった。

「ルーンが使えるという事は、海賊など恐るるに足らず、という意味であろうな？」

マルクはニームにではなく、エスカに対してそう質問を投げた。マルクは慇懃無礼な態度しかとらない特級バード、ニーム・タ＝タンに対してはあまりいい印象を持ってはいなかった。子供にしか見えないのはアルヴィンの血が入っているからだと聞かされていたが、その情報はアルヴ嫌いのマルクにとってニームに対する印象を悪くする作用しかなかったのだ。

だが、同時にマルクはなぜか本能的にニームに対して妙な苦手意識のようなものも持っていた。理屈ではなく、ニームと目が合うだ

けでそわそわと嫌な気分がして、嫌みを言う事よりも近づきたくないという気分になってしまう。それもあって今までは儀礼的な挨拶程度しか会話がなかった。エスカにとっても二人が直接に対立する場面が生じないその雰囲気は歓迎すべき状況であったのだ。

ただそれでも懸念は常にあった。小狡いマルクは些細な事でもニームが何か粗相を働ければ、そこを突いて相手に上下関係を認識させてやろうと腕まくりをしているに違いない事はわかりきっていたからである。

今回の件はマルクにとってニームを吊し上げる意味では格好の機会になる可能性があった。ニームの強引とも言えるルーンの発動が成功すればよし。しかしそれが原因で少しでも失策につながるような事態が起きれば術者を叱責する理由ができる。

何せマルクは国王名代なのだ。護衛の生殺与奪の権利は全て自分にある……失敗すれば床に手を突かせ、泣いて謝らせてやる。その時、人を見下したような特級バードのあの小さな白い顔が歪むのが楽しみだ……。

マルクはそんな事を本気で心の中に思い描いていたのである。

「もちろんです。どうかご安心を。ペシカレフ公爵」

ニームは直接問いかけられたエスカよりも先に、マルクに対して答えるとまさに慇懃無礼を絵に描いたような大仰でわざとらしく実に丁寧な仕草で深々と礼をした。

エスカが敢えて「名代」という言葉を使いマルクの自尊心をくすぐっているのはわかったが、ニームはそれだけでも抵抗してやろうと思ったのである。それは自分の発言と行動を牽制したエスカに対するささやかな抵抗でもあった。マルクやその場の人間には通じないかも知れないが、エスカには間違い無く自分の不満が伝わる事を、ニームは確信していた。

「こう見えて、実のところ私はエラン五世のお気に入り。もちろんバードとしての能力の高さ故にでございます。このグェルダンは既

に我が強化ルーンを纏い、火矢であろうが瓦礫の投擲であろうが、一切受け付けませぬ。ペシカレフ公爵におかれましては、事が済むまで安心して自室にて寛いでいただいてけっこうです。なに、海賊船が何十艘あろうが首領が指揮する旗艦を消滅させれば、あとは有象無象の輩。混乱した船団など我が国精鋭の軍船三艇の驚異にはなりますまい」

はっきりとした自信に満ちた口調で、ニームは一気にそれだけをまくし立てた。

体に似合わぬ、そのよく通る大きな声は揺るぎのない強い眼差しとともにマルクを射貫くかのように見えた。

ニームの迫力に押され言葉を失ったマルクは、思わず一歩後ずさった。目の前にいる小柄な少女にしか見えないルーナーが持つ見えない圧力のようなものを、またもや感じたのである。

そうこうしているところへ、海賊船団の使者からの書状が届けられた。白い休戦旗を掲げた高速艇がグェルダンに近づき、矢文を寄越したのだ。

現在でも同様であるが、当時も船の上では船長が最高責任者であることは、国際海洋法で定められていた。たとえ名代が居ようが国王が居ようが、グェルダンも法的にはその例に漏れない。

その書状はグェルダンの船長が開く事になった。

「な、なんと書かれているのだ？」

書状の文面をひと目見た船長が、眉間にしわを寄せて難しい顔をしたのを見たマルクは、その書状を船長の手から無遠慮に奪い取った。彼にしてみれば最初に読まなかったという事で船長の顔を立てたのだから、後は「一番偉い」自分が見るべきだという論法であった。

もちろん、それらの一挙一動がその場にいる彼以外の心証をどんどん悪くしているなどという考えは彼の頭には存在しなかった。

「な、なんだ、これは？」

見るなりマルクは顔を真っ赤にして興奮すると、グェルダンの船長にその書状をぶつけた。
「わしは行かんぞ。我が方には特級バードもいるのだから、無敵であろう?従うことなどない」
そして、
「お前、得意のルーンでさっさとあの海賊を始末してしまえ。これは名代としての命令だ」
そう言って冷ややかな眼差しのニームに指をさした。
「公爵!」
そのままずかずかとニームに近づこうとしたマルクに船長がそう声をかけたが、かまわず進むと、腰を手にしてニームの目の前に立ち、小柄なその特級バードを見下ろした。
そこへ、フェルンが割って入った。
「ペシカレフ公爵。今は有事でございます」
「それがどうした。名代のわしが命令しておるのだ。すぐにルーンで敵を蹴散らせ」
「いえ、有事下では、ペシカレフ公爵は軍の指揮系統に組み入れらる事になります。ドライアド船籍のグェルダンでは、当然ながらドライアドの法律が有効なのです」
「だからそれがどうしたというのだ?国王は軍の最高司令官であろうが?」
興奮して甲高くなっているマルクの声とは対照的に落ち着いた低い声で、フェルンは諭すようにゆっくりと告げた。
「ドライアドの法律では、『外交を目的とする名代は、有事に於いては本来の階級に戻るものとし、その場の指揮系統に編入される』という項目があるのです」
「なんだと?聞いておらんぞ、そのような話」
フェルンに食ってかかったマルクは、今度は自分の付き人に顔を向けた。今回のお目付役として使わされているマルク付きの王宮執務官は「その通りでございます、ペシカレフ公爵」と言って恭しく

頭を下げた。
　マルクが持っている軍の階級は、少佐である。公爵は最低でも少佐の肩書きを持っているが、通常国家に対して何らかの功績を上げたり軍部に賄賂を贈ったりして、少しでも上級の階級を買っているものだが、マルクの場合、公爵とは名ばかりで、没落貴族と言っていい人間である。まず役にもたたない軍部での階級など、大金を積んで買う余裕などはなかった。
「ただし、ここは地上ではなく外海の船上。国際法が上にきますので、船長が最高責任者となり、軍事行動についてはペトルウシュカ少将が指揮官となります」
「わしが、エスカの部下になるというのか？」
「はい」
「いや、たとえ少将命令であろうと、わしは行かんぞ」
「上官の命令に背くと、処刑ですよ、公爵」
　フェルンのその一言は、マルクの興奮を最高潮にした。コメカミをけいれんさせながらも、しかしマルクはそれ以上言葉は発しなかった。
「一応申し上げておきますが、ごらんの通りタ＝タン様は大佐待遇の特級バードです。公爵の上官になります。よって、命令するのはタ＝タン大佐であって、公爵は命令される立場という事になります」
「フェルン、言葉が過ぎる。その辺にしておけ」
　グェルダンの船長は床に落ちた書状を拾い上げながら、中尉待遇の特別高等事務官のフェルンに厳しい口調で声をかけた。とは言えフェルンをすぐには止めず、しばらくそのままにしたのはマルクに対する彼なりの仕返しの意味もあったのだが、この場であまり心証を悪くするのは彼の望むところではなかった。
「マルク様」
　船長は相手をペシカレフ公爵と呼ばず、少し親しげな声でそう呼びかけた。
「ご心配には及びません。このエスカ、マルク様を海賊に差し出す

ような真似はいたしません。ご安心下さい」
そう。
実のところグェルダンの船長は、エスカ・ペトルウシュカであった。もちろん本当に船長としての業務に就いていたわけではない。本来の船長は船長代理という肩書きの下で本来の自分の仕事を全うしていた。
これはエスカの懐刀である特別高等事務官であるフェルンがエキープで行った機転であった。もちろん海賊が襲ってくる事を予想していたわけではない。ただ、「もしもの時」の想定の中にはそれもあったのであろう。名代という、あやふやでありながら忌々しい事に相当の権力を有する事になっている立場を無力化する方策の一つだったという事である。
ニームが仕込んだのが精霊陣なら、エスカはフェルンに法解釈による実務的な「陣」を仕込んでいたのである。ただし、お互いに出帆した翌朝に早速その仕込みが功を奏すとまでは考えていなかったに違いない。
もっとも一行が乗り込んだのが客船ではなく、予定していた軍船であれば話はもっと早かったのである。船長でなく艦長は、軍の階級に組み込まれるべき役職であり、今回の護衛部隊の総指揮官はエスカ少将なのである。要するに面倒な事をせずともエスカがその場の指揮権を掌握するのに何の問題もなかったはずなのであった。

「ほ、本当か？」
客船の船長職を臨時に乗っ取った形になっているエスカを、マルクはすがるような目で見あげた。
「本当にわしは安全なのであろうな？」
「もちろんです。しかし、問題も多い……」
エスカはマルクに改めて恭しく礼をすると、すぐに腕を組んで難しい顔になった。
「問題だと？」

マルクは一瞬安心した顔をすぐにまた曇らせた。
だがエスカはそんなマルクに一礼すると、船長代理、すなわち本来の船長に海賊船の現在の状況を確認した。
急制動したグェルダンを追い抜く事になった海賊船団、いや海賊船団と味方の護衛艦は、遙か前方にあるという。既に停船状態にあるものの近づく様子はなく、グェルダン前方に等距離、上から見ると丁度扇形に散開した状態になっているとの事だった。味方の軍戦は左右に大きく回り込み、側方に近づいている最中だという。

「奴らは近づいて来ないのか」
エスカはなるほど、とうなずき、今度はニームに声をかけた。
「タ＝タン大佐」
「なんでしょう、ペトルウシュカ将軍」
タ＝タン大佐と役職名で呼ばれたニームは、同じように事務的に返した。
ニームの見たところ、エスカはこの非常事態の中にあってなお、何か考えがあるように見えた。何より落ち着き払っている事がその証明と言えた。ここはフェルンの言うとおりエスカの行動に合わせる事が最善であろうと改めて判断したのである。
「船の上で将軍と呼ばれるのは妙な気分だな」
「では、ペトルウシュカ少将」
「あ、いや。まあどっちでもいい。それよりこの船にかけてもらった防御ルーンだが、どのくらいもつ？」
「大型船の石弓の掃射を三回ほどは防げます」
「再度かけ直す事は？」
「無論、可能ですが、そう言った戦況下にある場合、そのルーンは余り意味を成さなくなります」
「つまり、長時間は保たないということだな？」
「その間に攻撃ルーンで相手を叩くので、石弓が三回も掃射される事はない、という意味です、ペトルウシュカ少将」

「なるほど。それでその攻撃ルーンだが、この船が動いていてはかけられない。そういう理解で間違い無いか？つまり、ルーンを使うには固定されているこの場から一切動けないという事だな？」
「ええ。その通りです」
「ふむ。それでここが一番重要な点だが、この船を完全に固定しているルーンはいったいどれくらい保つのだ？」
「……」
ニームは黙った。
ここまでの会話で、エスカが何を言いたいのかが理解できたのである。
少し遅れてフェルンもそれを思いついたようだった。
つまり、グェルダンの座標軸固定が解除された時が、グェルダンの最後の時なのである。
「どうした、タ＝タン大佐」
「四時間、いえあと三時間程度でしょう」
「何だと！」
ニームの答えに、マルクが再び吠えた。だが、エスカはそれをやんわりと制した。
「名代。敵はこちらの事をよく調べた上で周到な戦術をもって襲ってきたと考えられます。こちらに一定以上近寄ろうとしないのも、この船に高位のルーナーが乗っている事を知っているからでしょう」
「お、お前はさっき、必ず助けると言ったではないか」
「もちろんです。このエスカ・ペトルウシュカ、自らの宣言を翻すつもりはございません。ただ、こうなった以上、名代のお力に頼るしかございません」
「だから、わしは絶対に行かんぞ。相手は海賊だ。行ったら殺されるに決まっておる」
ニームはその時になってようやく海賊の書状の中身に目を通した。
そこには簡単に

「交渉役として公爵を寄越せ。それ以外は一切認めない。期限は今から一時間」

とだけ記されていた。

海賊としても味方の無駄な血は流したくないのであろう。出来れば戦闘は避けたいに違いない。ただ、問題は「公爵」とわざわざマルク・ペシカレフを名指しで書いている事であった。エスカが言うように、どう考えてもこちらの事を調べた上での計画的な犯行であることは間違い無い。そもそも視界の効かない夜のうちに近づいていた事からも、グェルダンの航路を知って待ち伏せていたとしか思えなかった。

「まずは落ち着いて下さい。名代も海賊のやり方についてはご存じでしょう？この書状に書かれているとおりにしないと、彼らは何をやってくるかわかりません。ここは書かれている通りにしなければならないでしょう」

「嫌だ。絶対にわしは行かん」

「ですから、名代のお力を使えば、この書状の指示に従いながら、かつ名代はこの船から出ず、事が終わるまで安全な場所でお待ちいただく事が可能なのです」

「わしの力だと？」

「名代でなければ使えぬ力です。その力を使っていただければ、このエスカ、先ほどの言葉をそのまま実行してみせましょう」

「ほ、本当か？本当に本当か？」

「無論です」

「よし。何だ、その力とやらは？」

マルクのその言葉に、エスカはまずは深々と礼をして見せた。

正面にいるマルクには見えなかったが、しかしニームはエスカの顔がしてやったりといった風にニヤリと笑っているのを見逃さなかった。

顔を上げたエスカはすでに真顔に戻っていた。

「私、すなわちエスカ・ペトルウシュカを、エスタリア領を納める公爵に任じていただきたい」
「な、何だと？」
さすがのマルクも、エスカのその言葉には我が耳を疑った。いや、マルクだけではない。その場にいた全員が息を呑んだ一瞬であった。
「お、お前は自分が何を言っているのかわかっておるのか？」
しかし、エスカの顔は真剣であった。
「無論です。名代もごらんになられたでしょう？書状には『公爵』と書かれていましたが、ペシカレフ公爵とは書かれていなかった。公爵であればいいのです。しかしながら我らには現在公爵はお一人だけ。ならばもう一人、誰かが公爵になればよいのです。法的に今ここでそれが可能な人間は私一人」
「お前が、公爵？」
「ええ。私が公爵にさえなれば、問題解決。『公爵』とだけ書かれている呼び出し状です。ペトルウシュカ公爵が折衝の場に向かって何の問題がありましょうや？」

いや、問題はそこではないだろう、と心の中で突っ込みかけて、しかしニームは愕然とした。ドライアドの貴族法を頭の中で無意識に検索していて、ある記載を見つけたのだ。
「爵位を持つ貴族がその領地を維持する能力に著しく欠け、これを当該爵位に不適当な人物であると判断された場合、その爵位は国王の名において剥奪され、しかるべき継承権を有する者に与えられる」
そう言う一文が確かにある。エスカはそれを「国王名代」の名の下に今この場でやって見せろというのである。有事下で本来の役職にあるとは言え、それはどうとでもなろう。儀式の間だけ有事を解除するとエスカが宣言すればいいだけの話である。いったんその場の最高指揮権を得た者が持つ特権と言えた。
ただし、この法は俗に伯爵法と呼ばれるものであり、男爵はおろか上位である侯爵に適用される事すらほとんど例がない。主語も曖

昧で解釈の余地が多すぎる事も問題であろう。ましてや特権でガチガチの鎧を纏った公爵に通じる法とは言えなかった。そもそもこの法が公爵に対して使えるのであれば、五大老はとっくにドライアドの貴族名鑑からペトルウシュカではなくペシカレフ公爵の名を消しているに違いないのである。

「なに、名目だけでいいのですよ。実際に公爵に対して有効な法であるかどうかなどという法解釈はこの際必要在りません。今回の交渉に臨むにあたり、法の上で私が公爵になったという手続きが行われているかどうかが重要です。もちろん、ドライアド王国にとってではなく、相手に対して、です」

エスカはあくまでも冷静な態度でそう言った。既に誰もそれが冗談で言っているのではない事はわかっていた。

「しかし、高級爵位の生前譲渡は出来ぬはず」

「それとて不文律です、名代。私は成文化された法律についてのみ申し上げております」

「しかし……」

「名代。『方便』という言葉をご存じですか？」

「？？わかった」

うなずいたものの、マルクはさすがに怖じ気づいていた。当たり前である。「振り」とは言え、本人の全くあずかり知らぬ場所で、公爵という貴族の最上位である爵位を剥奪しようというのである。それも本人であるミリア・ペトルウシュカはその場に不在である。しかも酒の席でのお遊びではない。正式な外交団の面前で、である。軍の高級将校に加え王宮の事務官も政府の事務官も同席している手前、国の記録にも残る。「その場限り」とはいえ、「事実」は残るのだ。

しかし、自分の命の方がそんな事よりも何倍も大事なマルクは、エスカの言う「方便」という言葉に逃げ込む事で、自らの行為が妥当であり緊急事態を回避するためにはきわめて正当なものであると

思い込む事にした。

「諸君、聞いたとおりだ」

マルクが一連の公爵交代……いや、正確に記すならば爵位返上と下賜の命令というべきであろうか……を告げた後、エスカはその場に居た人間を見渡して宣言した。公式な文書に記されたエスカの言葉は次の通りであるという。

「このエスカ・ペトルウシュカ、国王名代より下賜された公爵として、アナクラとの会見に臨む」

# 第三十話　交換条件

「月の大戦」に関する歴史書は星の数ほどあるが、どの本を繰ってもエスカがペトルウシュカ公爵を名乗った正確な時期がわからない。まちまちなのである。決定版が無いという状態だ。こういう事は風聞よりまず「公式記録」が重要なのだが「月の大戦」後の混乱期に肝心なその公式文書が焼失してしまっている。では何をよりどころにするのか？

実は公式な記述における「エスカ・ペトルウシュカ公爵」の初出はドライアドではなく、シルフィード王国の文献に見ることができる。果たして外国であるシルフィード王国の、それも文官の一人が報告書の為の下書きとして遺したという「行事覚え書き」が公式な文献なのかという問題があるにせよ、それが文献としてエスカ・ペトルウシュカを『公爵』と記述した最初の公的な記録なのは間違いがない。

その記述を信じるならば、星歴四〇二七年黒の一月に行われたアプサラス三世の大葬の為にエッダ入りしたエスカが、公爵を名乗っていたというのである。しかもこの「下書き」を書いた文官は「エスカ本人が名乗っていたというのを聞いた」という話を「聞いた」と書いてあるだけである。自分が直接エスカの口から聞いたわけではないのである。真偽のほどは既に確かめようもなく、歴史学者は聞き間違いか、エスカ一流の冗談をそのまま「冗談めかして」その下書きを書いた文官に伝えたかのどちらかであろうと決めつけている。

しかし「公」に関係しない「文書」には、その下書きの記述を裏付けるような「逸話」が存在するのである。この章はその「逸話」を再現したものである。

エスカは、ようやく戻ってきた護衛艦の総司令がグェルダンの艦

橋に姿を見せるのを待って、海賊アナクラとの会見に臨んだ。有事であるから、後を託す人間が必要なのである。

その際、一悶着があった。

当然のように同道しようとしたニームに、エスカは船に残るように命じた。彼はフェルンと二人で会見に向かうつもりだったのだ。しかしニームはエスカが「命令」という言葉を持ち出しても、それに服従する気は毛頭ないといった剣幕で、断固として同道すると言い張った。

ルーンにより座標軸を固定されているグェルダンを離れてしまえば、ニームはルーナーではなくなる。ニームからルーンを取ると、そこにいるのはただの小柄な少女ということになる。エスカはその会見にニームが同道する合理的な理由がない事を論理的に指摘したが、逆にニームは感情論で異議を唱えた。

最初は「副官」としての義務だと言い、それが「副官ならばこそ、留守を責任を持って守れ」と拒否されると、今度は「妻として夫の側に居るのは当然だ」と主張した。だがその論法は「大事な人だからこそ海賊の船になど連れて行けない」というエスカの主張が、その場にいた全員の賛意を集め、失敗する事になった。

さすがにあきらめるだろうと思っていたエスカだが、ニームの方が一枚上手だった。

彼女はエスカが全く予想していなかった行動に出た。

エスカの腰に抱きついて、わんわん泣き出したのだ。

これにはさすがのエスカも思考が停止するほど驚いた。驚いたのはもちろんエスカだけではない。その場に居た全員がニームの行動に声を失った。

「絶対に嫌だあ」

泣き出したニームは、言葉遣いも普通の少女の……いや、幼児のそれに変わっていた。

「嫌だ嫌だ。離れたくない。連れていってくれないと私はここで死

んでやる」
泣く子と何とやらには勝てないという諺どおり、ニームの捨て身の作戦が発動した時に、その勝負は終わりを迎えた。
エスカは弱り果てたという表情をフェルンに向けたが、さしものフェルンも苦笑して方をすくめるしかなかったのである。
「あなたの負けです」
そして腰に抱きついたまま離れようともしないで泣き続けるニームを抱えるようにしてエスカはグェルダンを後にすることになった。

「いい加減にしやがれ、このクソガキめ」
グェルダンがかなり小さくなった頃、ニームはようやくエスカの腰から離れた。
「チョロイものだな」
顔を上げたニームの頬には、涙の跡はなかった。
「だが、クソガキとは失礼だ」
「あんな見え透いた三文芝居をするのはガキ、それもクソがつくガキだけだ」
「文句はあるまい？私はあの場にいた全員の賛同を得て今こうしている。お前がペシカレフ公爵に対してとった、あの無理矢理なごり押しと一緒にするな」
「はいはい、参りましたよ、ニームさん」
エスカはそう言うと、大げさに肩をすくめて見せた。
「しかし、知識として知ってはいたが、乙女が泣くというのは、これほど効果的な戦術だったとはな。さすがはジーナと言うべきか」
「ジーナの作戦かよ！」
「うむ。言葉で丸め込まれそうになった場合の起死回生策だと教えられた。乙女だけが持つ最終手段だそうだ。勝率は驚くほど高いと言っていたが、まさかこれほど……」
「待て。お前の理解には根本的な齟齬がある」

「どこがだ？」
「？？いや、もういいや。リリが完全にジーナの尻に敷かれてるって事がわかっただけでもよしとするか」
「何の話だ？」
「いや、なんでもない。だが約束しろ。あんなアホ芝居、二度とやるんじゃねえ」
エスカはそう言ったが、ニームはぷいとそっぽを向いた。
「芝居ではない」
「泣いてねえじゃねえか」
「そっちではない」
「まさか、マジで死ぬつもりだったのか？」
「そっちでもない！」
「じゃあ、何だよ？」
「？？離れたくないと言ったのは本当の事だ」
「おい、言っとくがな……」
「皆まで言うな。言いたい事はわかっている。だが、私は感情の赴くまま突っ走ったわけではない」
「嘘付け」
「嘘ではない。お前は忘れたのか？私はお前の武器なのだぞ。丸腰でのこのこと、あからさまな敵の罠に飛び込むヤツがあるか。以前の湖での件といい、お前は少々無防備で無鉄砲に過ぎるきらいがある」
「いや、お前。グェルダンから離れちまったら、ただのガキだろ？なら、お前を連れて行く事には戦術的には何の意味もねえだろ？」
「お前は私を過小評価しているようだな。小さいのは身長だけだ」
「まあな。それについちゃ、オレもちょっと驚いてる」
「何の話だ？」
「いや、まさか大賢者ともなると揺れる海上でルーンが使えるのか？」
エスカは「大賢者」というところだけをニームの耳元で小さく囁

いた。操船兵に聞かれないようにとの気遣いだが、風下でもあり距離もある。その心配はないと言えたが、それでも念には念を入れるエスカのその態度を見て、ニームは今回の海賊騒ぎで心の中に浮かんだ小さな違和感が再び浮上するのを感じていた。

ここまで繊細で慎重なエスカが、何の策もなく海賊の首領に単身会いに行くと言う行為に、である。

先ほどからずっと顔色をうかがっているが、これから命の危機にさらされるかも知れない人間の落ち着きようではない。

「さすがに大賢者だろうが三聖だろうが、この世界の法則を無視できるわけはない」

「じゃ、やっぱり無能なガキじゃねえか」

「私の髪に巻き付いている結布（ゆいふ）を見ろ」

エスカはそう言われて、改めて耳のあたりだけ長く伸ばしたニームの髪に巻き付けられている布に書かれている文様を見つめた。

「全てが一つの精霊陣だ。ある条件を与える事によって発動する」

「さっきの『？』（くさび）とかいう座標軸固定ルーンみたいにか？」

ニームは頷いた。

「あの「？」のルーンはタ＝タンの王に伝わる特殊なルーンだ。我が名の由来でもある」

「《天色の？（あまいろのくさび）》か。なるほどな。お前達の名前は適当に色と物の組み合わせで作られている訳じゃねえって事か」

「これでわかっただろう？お前は私を常に側に置いておかねばならん」

「うーん……」

「何だ？」

「いや、『スノウが去って、またニーム』とか考えてたんだが、イマイチ語呂が悪いな」

エスカはそう言うと大あくびをした。

「意味がわからん」

「ありがてえな、って話だよ、まったく、でも、アレだな。海賊っ

てのは不健康の象徴みたいなモンじゃねえのか？夜は遅くまで酒を飲んで騒いででろんでろんになって眠りこけてるはずだろ？それがこんな早起きだったとはな。どんな健康的な海賊だよ。おかげでこっちは寝不足だぜ」

「？？緊張感がないな、お前は。我々はどう考えても窮地に陥っているのだぞ？」

ニームはそう言うと、自分の手を見つめた。無意識ではあったが、いつの間にか拳を強く握りしめていたのだ。それが何を意味するのか、ニームは自分でよくわかっていた。

「一つ約束しろ」

そんなニームの仕草を見ていたエスカは、改まった表情でニームに声をかけた。

「俺の許し無く人を殺すな。絶対にだ。自分の身を守る場合でも、お前ほどの力があれば殺す必要はねえはずだ」

ニームはそう言うエスカの真意を計りかねた。

この後すぐに、「そういう状況」になってしまうかもしれない。だから今ここでそう言う話が出る事がおかしいと感じたのだ。

だが、今ここだからこそ話題にできる事でもあった。

「戦争をするつもりなのであろう？」

「そうだ」

ニームの問いかけに、エスカはためらいなく即答した。

「戦争とは、人を殺す行為であろう？」

「そうだな」

「私に戦争をするなと言うのか？お前の幕僚長なのだぞ？」

「そういう細かい話はまた今度だ。もう、すぐ着いちまう。とりあえず約束しろ。さもねえと俺はお前をここに置いて、一人で行く」

「は？一人？」

「操船兵にお前を連れて帰るように命令する」

「お前はどうするのだ？まさか……」

エスカは満面に嬉しそうな笑みを浮かべて見せた。

「もちろん、泳いで行くさ。お前は知らねえだろうがな、俺は競泳ではアキラより速いんだぜ?」
ニームはやれやれと言った風にため息をついた。
「お前はよほどアキラ・エウテルペとやらに主席卒業された事が悔しいのだな」
「断じてそんな事はねえぞ」
「嘘を付け。どっちがクソガキなんだか」
「で、どうなんだ?俺はここから泳いだ方がいいのか?」
エスカの問いかけに、ニームは肩をすくめて降参した。
「言ったであろう?お前は私を側に置かねばならん。そして私の目的の為にはお前の力が必要だ」
「じゃ、決まりだな」
「わかった」
「言っとくが、この約束を破ったら、その瞬間から俺はお前を家族とは認めねえからな。ただの他人だ」
エスカはそう言うと、いきなりニームの手を引いて抱き寄せた。
「い、いきなり何をする?」
海賊の首領の乗る旗艦に到着したのだ。エスカはニームをそのまま軽々と抱きかかえると、差し出された渡し板を慎重に渡った。

甲板に出る前に、エスカは自らの短剣を部下の一人に渡していた。ニームはそれを見て懐から精霊陣が描かれた結布をこっそり取り出して、それを右の手首に巻き付けた。
短剣を素直に受け取った部下は、言葉だけはぞんざいだったが、特に手荒な事もせず、見方によっては客人を招き入れたような態度で甲板に連れていったのだ。
(船長室や艦橋ではなく、なぜ甲板なのだ?)
ニームの疑問は甲板を出た瞬間に解決した。
一言で言えば、そこは人であふれていた。
そこにはおそらく旗艦の全乗組員と思える人数が集まっていた。

つまり、船長室には入りきらない程の人間がこの会見に立ち会うという事を意味していたのである。

「俺は公爵本人が顔を出せと書いたつもりだったんだが、ドライアド軍にはちゃんと文字が読める奴ぁ、居ねえのか？」

人でごった返す甲板の中央に、その声の主はいた。大げさな飾りのついた椅子に深く腰をかけたまま二人を出迎えたその男は、椅子の横に控える副官のような男となにやらひそひそと話すと、二人に正面に来るようにアゴで合図をした。

首領とおぼしき男の椅子の前には空間が確保されていて、二人は人垣が途切れた通路を通ってそこへ進んでいった。

声の主はひげ面をした壮年のデュナン。髪の一部分が白髪の巣のようになっていたが、それ以外は暗褐色だ。髪は長く伸ばされて、後ろで一つにまとめられている。肌は日に焼けてこれも褐色に近く、高い鼻の頭にはなぜか絆創膏が貼られていた。

瞳の色は灰色に近い茶色で、まるでこの世に恐れる物は何一つ無いと言った落ち着いた視線を二人に投げかけていた。

脇に控えている副官は、首領と同じデュナンだが、見るからに線が細く人のいい商人のような風情で、およそ海賊の旗を掲げる一団に所属する人間には見えなかった。年の頃はエスカと同じくらいであろう。金髪と青い瞳で、こちらもエスカと同じであった。違うのは肌の色だ。日に焼けていて、そこだけは間違い無く海の上で暮らしている人間であることを示してた。

ニームはその時、海賊というものを生まれて初めて見た。海賊というものはおしなべて薄汚い「なり」をして、何日も風呂に入らず悪臭にまみれていてとても近くに寄れたものではないと聞かされていたが、少なくともその旗艦の甲板に集まった海賊達は、臭くもなく、薄汚い「ナリ」もしていなかった。灰色の目をした首領の男は、派手ではあったが船長服と呼べる物を着込んでいたし、乗組員達にしても、制服のような物はなかったが、黒を基調とした思い思いの

格好は、どれも動きやすそうなもので、そもそも彼らは全員、こざっぱりとして見えた。
つまりニームの目には、きちんと統率された義勇軍の様に映ったのだ。
「文字が読めたからこそ、こうして公爵たる私が自ら乗り込んだ。用件を聞こう」
エスカの言葉に首領は目を細めると、探るようにドライアドの軍人二人を見比べた。
「お前は男爵だろ？エスタリアの次男坊」
「知らぬのも無理はない。つい先ほど国王名代から爵位をいただいたばかりだからな」
エスカがそう言うと、ニームはここぞとばかりにその発言を補佐してみせた。
「それについては私が立ち会った。間違いない。ドライアド軍、陸軍大佐の地位にかけてその言葉に嘘がない事を誓おう」
「ほう……」
二人の言葉に、首領はしかし大した動揺を見せなかった。それだけにエスカにもニームにも、二人の言葉を首領が信じたのかどうかを探る事は困難だった。
ニームにはここへ来てもまだこの会見に何の意味があるのかがわからなかった。海賊ならさっさと襲うか、のこのこやってきた丸腰の人質を確保して、次の段階に移ればいいだけのはずだ。乗組員のほとんどを甲板に集めて公開会見の場を設けるのは海賊達にとって大事な事なのだろうか？
「なるほどな。とりあえず大義名分は取り付けるタチってことか」
少し間を置いて独り言のようにそう言うと、首領は表情を崩し、ニヤリと笑って見せた。
「これだけの短時間で男爵から公爵に出世しちまうとはな。こんな奴は聞いた事もねえ」

そして甲板にいる乗組員達を見渡した。
「だろ、お前ら？」
首領のかけた言葉には、張り詰めた雰囲気で成り行きを見守っていた海賊達に少しだけ緊張を解く効果があったようだ。ほんの少し、ざわめく声がした。だが、それだけだった。大きなヤジも積極的な応答も何も無い。基本的にその場の成り行きを無言で見守る、その雰囲気は崩れてはいなかった。
「私の補佐官がおびえているようなので、出来れば手短に済ませてもらいたい」
エスカはそう言うと周りの人垣を見渡した。
「彼女はこういうところに慣れていないのだ」
（別におびえてはおらん）
ニームは表情は変えず、小声でそう抗議したが、エスカはそれについては無視を決め込んだ。黙っていろという事なのだろう。ニームは心の中でため息をつくと、右の手首に巻き付けた結布を確かめるようにそっと触った。
「せっかちは嫌われるぜ、公爵さんよ」
首領はそう言ったが、エスカが全く表情を変えないのを見ると、つまらなさそうな顔に戻った。
「公爵様はあまりおしゃべり上手じゃねえようだな。じゃあ、用件に移ろう」
「助かる」
「そうだな。そこにいる特級バードを俺達に寄越せ。そうしたらお前達の船には手出しはしねえ」
「何だと？」
あまりにその場の思いつきのような狩猟の申し出に、エスカは思わずそう聞き直した。
「いやあ、実はこいつがそっちのバードの娘をエキープ港で見かけて一目惚れしちまってな」
首領がこいつ、と指をさした先には、先ほど耳打ちをしていた副

官らしき青年がいた。彼は首領がそう言うと、にっこりとニームに笑いかけた。
「な……」
「それで皆が助かるなら、喜んで」
ニームが抗議をする前に、エスカが即答した。だが……
「と、言いたいところだが、こいつだけはやれねえな」
そう言うと、エスカはニームの肩を抱き寄せた。
「調べは付いてるんだろ？こいつは俺の女だ」
「エスカ……」
ニームは自分の顔が瞬間的に上気したことを悟ると、思わず下を向いた。

「おやおや」
首領は芝居がかった仕草で両手を広げてみせると困ったような顔をした。
「断るとどういう事になるのかわかって言っているんだろうな？」
「どうなるんだ？」
「その特級バードがかけたルーンが解けるのをまって、総攻撃に移るだけだ。ついでに言うとお前らは俺の合図で一瞬で惨殺死体に変わる」
「ふん」
ニームは肩に置かれたエスカの手をそっと外すと、首領に向き合った。
「私が残れば襲わないと約束を守るんだな？」
「もちろんだ。海賊の掟を知ってるだろ？」
海賊の掟、それは宣言した誓いを守らない場合、それが首領であろうが幹部であろうが、仲間から制裁を受けるというものである。つまり、首領が誓いを破った場合、部下に命を狙われる事になる。誓いを守らなかった海賊の首領は、たとえ部下から命を狙われなくとも、その事が知れた場合、他の海賊から制裁を受ける事になる。

つまりは海賊同士の抗争に発展するのである。
それは「血の掟」と呼ばれ、海賊達が古くから守り続けている彼らの憲法であり信じる神の言葉のようなものであった。
「私をここに残してどうするつもりだ?その男の慰み者にでもするつもりか?」
「お嬢ちゃん、俺達を見くびってもらっちゃいけねえな。俺達ゃ、慰み物にする女は奪う事にしているんだ。だいたいなぜここにこんなに人が集まってると思ってるんだ?」
首領はそう言うと改めて周りを見渡して見せた。
「会見を聞くためではないのか?」
ニームの言葉に、初めて甲板の人間が大きく反応した。多くはせせら笑いで、それは一瞬でどよめきに変わったが、首領の合図で再び静寂が訪れた。
「知らねえようだから教えてやろう。海賊が持ち場を離れて全員甲板に集まる行事はたったの二つだ。そのうちの一つは船長が変わった時だ。そりゃわかるな?」
ニームは頷いた。確かに船長が替わった時は乗組員全員に顔見せをして宣言する儀式が必要だろう。
「もう一つは何だ?」
おそらくニームがそう問いかけるのを待っていたのだろう。首領は嬉しそうに笑って見せた。
「そりゃお前、結婚式に決まってるじゃねえか。だろ、おめえら?」
首領がそう呼びかけると、乗組員達は一斉に「おう」と答えた。
何人かは口笛を吹いたが、それらは例によって一瞬で止んだ。
「私は既にこのエスカと婚儀を上げている状態だ。重婚になる」
ニームはしかし、冷静にそう返した。
「それでもいいのか?」
ニームがそう言うと首領はもちろんだ、と言って頷いた。
「そんな事は俺達には関係ねえ。仲間の前で海賊式の結婚の儀をすりゃあ、俺達が認めた夫婦って訳だ」

ニームは無意識に右手の手首の結布を左手でそっと撫でた。それを見ていたエスカが小声で囁いた。
（馬鹿な事を考えるなよ。ここは俺に任せておけ）
だが、ニームは何も聞こえなかったように自分を見初めたという青年と、首領を見比べた。
「参考までに先に聞いておこう。海賊式の結婚の儀式とはどのようなものだ？」
「何、海賊式と言ってもそれほど風変わりなものではありませんよ」
首領ではなく青年がそう答えた。微笑したままで、何も知らなければただの優しげな青年にしか見えない。
「ここに集まっている皆さんの前で夫婦の誓いを立て……」
「誓いを立てて？」
「皆の前で口づけを交わす」
「む……」
その一言でニームの顔色が変わった。
「それも、五分だ。それが海賊式だ」
首領が後を受けてそう言うと、ニームは動揺を隠せなかった。
「ご……五分だと？」
「ええ。五分間、周りの盛大なヤジに耐えられる、いえ、周りのヤジが聞こえない程口づけにのめり込めて初めて夫婦と認められるのですよ」
「口づけの間は無礼講でな。どんな罵詈雑言をぶつけてもいい事になってるんだ」
首領がそう補足したが、その時にはニームの顔が再び上気していた。
「いやあ、一目惚れでしてね。是非我が妻に」
「いや、それは……」
「それに、特級バードが私たちの仲間になってくれるなら、戦力としてこれほど頼もしい事もありません。船を一瞬で岩のように動かなくできる程の力を持つルーナーなど、聞いたこともありませんか

らね」
デュナンの青年はそう言うと恭しくニームに礼をして見せた。
「ちなみに、私はあなたと違い、まだ独身です。ご安心下さい」
青年がそう言って顔を上げると、ニームは思わずエスカの袖を掴んだ。
「残念ながら、その条件は飲めねえな」
エスカはそう言うと再びニームの肩を抱いた。
「俺達ゃ新婚なんだ。寄越せと言われてハイそうですかって妻を差し出せるわきゃねえだろ」
「ほう。ではここで仲良くあの世へ行きたいと？」
「あの世へ行くのはお前達かもしれねえぜ？」
エスカはそう言って睨んだが、副官の青年は微笑を崩さないままで肩をすくめて見せた。
「これはこれは。何か企んでいらっしゃるというわけですか？」
「別に企んじゃいねえよ」
「ふむ。であれば、あなたを始末した後、ゆっくりとバードのお嬢さんを懐柔することにしますか」
「やめろ」
ニームは低い声を絞り出すようにそう言った。
「お前の慰み物になるくらいなら、舌を噛んで死んでやる」
「おやおや」
自分を睨み付けるニームを見て、青年は困ったような顔をした。
「いや、あなたの夫は、そもそもあなたと結婚しちゃまずいんですよ。だからここは私が助け船を出して、筋書きを元通りに……」
「黙れ！」
エスカはその言葉を遮ると、青年に向かって一歩足を踏み出した。だがその足はすぐに止まった。
片手剣の切っ先が素早くのど元に突きつけられたのだ。その鈍い輝きを放つ剣の柄を握っていたのは、首領だった。
「エスカ！」

ニームの悲鳴は甲板に反射し、明けたばかりの空に吸い込まれていった。

# 第三十一話　アルカナ・アナクラ

思わず叫んだニームの右手を、エスカはすかさず押さえた。こわばった表情のニームとは対照的にエスカの表情は実に落ち着いたものだった。

エスカはニームに小さく頷いてみせた。落ち着けという合図である。ニームは開きかけた口を閉じると、結布に伸ばした手をゆっくりと下げた。エスカはそれでいいという風にもう一度小さくうなずくと海賊アナクラの首領に向き直った。そのまま自分に突きつけられた剣を素手で掴んでそれをゆっくりと押しのけると、ゆっくりと一歩進み出た。

「あぶねえあぶねえ。お前ら、今、命拾いをしたんだぜ？俺に礼を言ってもらいてえもんだな」

エスカの一言に、その場にいた全員が低くどよめいた。

「どういう意味だ？」

「言葉通りだ。このちっちゃい美人を本気で怒らせたら、エライ事になっちまう。そうなる前に茶番はそろそろ終わりにしようや」

「茶番だと？」

これは海賊から出た言葉ではなかった。ニームが不信感あふれる目でエスカを見上げてかけた言葉だった。

「やれやれ」

ニームの言葉に反応したのは、これも意外な事に首領の副官らしき青年だった。

青年はそう言って肩をすくめると、首領に向かって短く告げた。

「剣をおさめろ、イーフォック」

副官であるはずの青年に呼び捨てにされた首領は、無言で剣を下ろすとそれをそのまま鞘にしまった。そしてなんと今まで自分が座っていた椅子の前を空けて、その脇に片膝を着き、羽織っていた船

長服を脱いでうやうやしく掲げて見せた。それをデュナンの金髪碧眼の青年が受け取ったのだ。

「すまなかったね、エスカ・ペトルウシュカ少将」

青年は船長服を羽織ると、エスカに向かってそう言った。

「ようこそ、我ら『黒のアナクラ』の旗艦、オイアーヴへ」

驚いて目を見張っているニームににっこりと笑いかけた後、「副官だった」青年は改めてエスカに向き直り、右手を差し出した。その掌には鮮やかな海蛇のクレストの入れ墨があった。

「私が首領のアルカナ・アナクラだ」

「エスカ・ペトルウシュカだ。改めて条件を伺おう」

エスカは素直に右手を出し出すと、アルカナと名乗った本当の首領の右手を握った。

「どうしてわかった？」

右手を握ったままで、アルカナはエスカにそう尋ねた。

「まず、有能な副官というのは首領の動きを注意深く観察して、補佐するべきところを見極めるものだ。お前は首領を一切見ようとせず、終始俺達二人だけを観察していた」

「なるほど。だが私が有能な副官ではない可能性もあるだろう？」

「その若さでアナクラの首領の副官だとすると、無能な訳がないだろ」

「ふむ。他には？」

「その逆だ」

「逆？」

エスカはやれやれという風に肩をすくませた。

「ここにいる乗組員の注意は、そこにいるイーフォックさんとやらじゃなく、副官の方に集まる事が多かった。それがどういう事かくらいは子供でもわかる」

「ほう」

エスカの言葉にアルカナはにっこりと笑ってみせると、その笑顔

をニームに向けた。ニームは少し顔を赤くするとアルカナをにらみつけた。
「だからコイツを挑発するなって」
今度はアルカナが肩をすくませた。
「オイアーヴはグェルダンと違って『固定』されてないんだがな」
「コイツは規格外なんだよ」
エスカはそう言うと懇願するように続けた。
「頼むからこれ以上ニームを刺激しないでくれ」
「エスカに指一本触れてみろ。私が合図したとたん、グェルダンに居る仲間がこの船に向かって一斉に攻撃ルーンを放つ事になる」
アルカナとエスカの会話に、たまりかねたようにニームが口を挟んだ。アルカナは待ってましたとばかりにニームが向けた話に乗ってきた。
「ここはルーンの射程外だ。たとえ強化されて射程距離が伸びても的が小さすぎて当たるわけが無いだろう?」
「嘘だと思うならやって見せるか?」
「面白い。出来るモノならやってみるがいいさ」
「三つ数えろ。数え終わる頃にはこの船のマストは無いものと思え」
「やめやめ。そこまでにしとけ」
エスカはそう言うとニームの頭に手を乗せて軽くポンと叩いた。
「ニーム、俺との約束を覚えているだろうな?」
エスカの言葉に、ニームはハッとした様な表情を浮かべたが、すぐに目をつり上げてエスカを見上げた。
「しかし」
「『しかし』も『かかし』もねえよ。とにかくお前は落ち着け」
エスカはニームの頭をくしゃくしゃとかき回した後で、そっと撫でつけてやった。
「俺を信じろ。この場は全部任せるんだ」
エスカはそう言うと改めて優しいまなざしをニームに注いだ。エスカは実のところつい今し方ニームが口にした言葉に、驚いていた。

ニームは無意識に口にしたのだろう。だが、無意識だからこそエスカはその言葉の持つ意味は重いと感じていた。
ニームはリンゼルリッヒとジナイーダの事を「仲間」と呼んだのである。

「さっきの話だが、決定的だったのは、俺に突きつけた今の剣だな」
「と言うと？」
「そのおっちゃんは、なかなかいい部下だな。俺が貴様に敵意を向けて一歩踏み出してみせると、思わず剣を突きつけた。貴様を守ろうととっさに体が動いたんだろうが、そのおっちゃんが本当の首領ならそんな動きはしねえだろ？」
「なるほどね」
アルカナはそう言うと控えているイーフォックを見た。当のイーフォックは申し訳ありません、と小さく呟くとうなだれて見せた。
「部下を褒めてくれてありがとう」
アルカナはエスカに向き直るとそう言ってにっこり笑った。
「こういう部下を持っている事を誇りに思うよ」
「条件を聞こう」
エスカはそれには答えずに、真顔で再度促した。
「いや、目的を聞こう」
アルカナはエスカがそう言い直すとうなずいた。
「二つある。一つ目はどうしてもお前に聞きたい事があった」
「なるほど」

アルカナの言葉で、エスカは何かを納得したようだった。その様子を見たニームの中に、小さな違和感が顔を出した。
「どうしても直接会って聞いておきたかった」
「聞こう」
「俺達はどうなる？」
アルカナは穏やかな微笑を消すと、その青い瞳でエスカを睨み据

えた。それと同時に言葉遣いが変わった事にニームは気づいた。
「戦争が終わった時、俺達はいったいどうなるんだ？」
エスカはアルカナにそう問われると、周りの乗組員達を改めて見渡した。
「俺にそれを聞くのか？」
「お前の考えをお前の口から聞く。その後で俺は決める事にした。オフクロの決めた事に素直に従える程、俺は大人じゃないんでね」
ニームはたまらずエスカの袖を引っ張った。
「いったい何の話をしているのだ、エスカ？」
だが、エスカはそっとニームの頭を撫でただけだった。
「今は聞くな」
エスカは短くそれだけ言うと、大きく息を吸い込んだ。
「では答えよう」
そこに集まっている全員が息を殺してエスカに注目した。
「俺が知るか」
エスカのその言葉に、海賊達はお互いに顔を見合わせた。だが、騒ぎが起こる前にエスカは続けた。
「そんなものは、お前達がお前達自身で見つけるもんだろ？与えられる事がお前達の生き方なのか？違うだろ？」
エスカの言葉に、ざわめき始めていた海賊達は再び静かになった。
「戦争が終わったら、また略奪の海賊に戻るつもりか？それともお前達は俺のお墨付きでも欲しいのか？どっちも違うだろ？」
エスカはそこまで言うと、アルカナと目を合わせた。海賊の首領は、無言でエスカの次の言葉を待っていた。エスカは残りの言葉をアルカナに向かって告げた。
「だったら、お前達がやる事は一つ。やるべき事をやれ。そうすれば戦争は終わる。戦争が終われればお前達は自分たちが次にする事を理解できるはずだ。その時、もしもまだ俺が生きていたら、お前達が向かおうとする道先を少しだけ見せてやれるかもしれない。俺に出来るのはそこまでだ」

ニームはエスカの話す言葉を、ぼんやりと聞いていた。
「だからその先が見たい奴だけでいい、俺を信じて生き抜いて見せろ。細々としたつまらん話はそれからだろ？」
ドライアドの少将が、海賊を相手に何を言っているのだろう？これはまるで……
「だったら見せてもらおうじゃねえか」
これはアルカナだった。部下である海賊達に向かって放った言葉だ。
「野郎ども、こんなもんでどうだ？」
すっかり柄の悪い言葉遣いになったアルカナがそう呼びかけると、静まりかえっていた甲板が急に賑やかな市場のような喧噪に包まれた。
「この男、エスカ・ペトルウシュカは、俺が出した嫌がらせの招待状を無視することなく、短時間で合法的に公爵になって正々堂々と現れやがった」
アルカナの言葉にうなずく者、隣となにやらお互い話し出す者等、思い思いではあったが、彼らはエスカが甲板に現れてから初めて自らの意見を表現していた。
「俺の意見を一応言っとく」
ひときわ大きな声でアルカナが叫んだ。
「俺はこいつに付く。オフクロに従うわけじゃねえぞ。俺が俺の目でこいつを見て俺の頭で考え、俺の意志で決めた！」
その言葉に、『黒のアナクラ』の旗艦オイアーヴの甲板は怒号に包まれた。怒りでも批難でもない、彼らはアルカナの言葉に賛意を表していたのだ。
「俺も付く」
「俺もだ」
「最初から俺は首領に付く事にしてた」
「バカヤロウ、自分で判断しろって言われたのを忘れたのかよ」

「そうだ、その為に俺達全員ここに集まったんだろうが？」
「うるせえ、このやろう！だから俺は自分の意志で首領に付く事に決めてたんだよ！」
「首領が認めたんなら俺も同じだ」
「よし、俺も」
アルカナは部下達の賛意の怒声にしばらく耳を傾けていたが、エスカに向き直ると元の穏やかな微笑を浮かべた。
「まあ、こんなものじゃないかな？」
そしてエスカに目配せをすると、腰にさした細身の片手剣を天に向かって突き上げた。
「よし、わかった。だったらお前ら、その目をおっぴろげてよーく見ておけ」
アルカナは言うが早いが肩に羽織っていただけの装飾過多な船長服を脱ぐと、エスカの後ろに回ってそれを羽織らせた。
怪訝な顔のエスカに、アルカナはさらなる行動に出た。手に持っていた剣の上下を持ち変えると、柄の方を差し出したのである。
「誓え」
アルカナはそう言うとその場で片膝を突いた。それが合図のようにざわめいていた甲板が再び静まりかえった。
ニームは次の瞬間、我が目を疑った。なんと甲板にいた乗組員全員が、アルカナと同じように一斉に片膝を突いたのだ。
「ここで誓え、エスカ・ペトルウシュカ」
アルカナは部下達を満足げに見渡すと改めてそう言った。
「細けえ事はいい。ただ、こう言ってくれ。俺達を決して裏切らないと」
エスカはためらうことなく差し出されたアルカナの剣の柄を掴むと、その切っ先を黒く染め抜いた海蛇のスタンセイルに向けた。
「お前達のクレストに誓おう。このエスカ・ペトルウシュカ、アルカナ・アナクラとその仲間を、我が生涯の友とする事を」
それはエスカがアナクラの首領になった瞬間であった。

ニームはただ、あっけにとられてエスカを見上げているだけであった。

海賊アルカナ・アナクラとエスカがこの時接触した事は、ほぼ間違い無い事実である。しかしながら残念な事に、その時の会見の内容はドライアド側には一切残っていない。

ただ、アナクラの乗組員の口伝として、二人のやりとりが物語として伝わっているのみである。

それによると「黒のアナクラ」と名乗る海賊アナクラのアルカナ部隊は、ペシカレフの大葬参列の為の船団に一切手を出すことなく海蛇のスタンセイルを下ろすと、そのままエッダまで同行したという。

商船を装った船団は、しかしエッダに上陸することなく南へと船首を向けたのだ。

その際、ドライアド側の人間からは何も詳しい話は聞けなかったという。

ただ一人、エスカ・ペトルウシュカをのぞいて。

エスカはグェルダンに戻ると、事務官であるフェルンに対し、開口一番こう言ったという。

「いやあ、何だかよくわからないが、奴らはどうやら道に迷ったみたいで、エッダまでの案内を頼まれちまった」

そう言って笑う上機嫌のエスカとは対照的に、ニームは青ざめた顔でエスカに抱かれ、ぐったりとしていた。

心配顔でやってきたジナイーダとリンゼルリッヒに意識のないニームを預けると、エスカは「大丈夫だ、船酔いして眠ってるだけだ」と言って目配せをした。

「部屋で休ませてやってくれ」

ジナイーダとリンゼルリッヒは顔を見合わせた。

それはそうだ。エスカが平気なのに、ニームが船酔いをするなど信じられなかったのだ。

もちろんそれには訳がある。

話を遡ろう。オイアーヴの甲板で起こった出来事は、少なくともニームにとっては人生の一大事となったのだ。

海賊達から首領としての承認を受けたエスカは、そこでアルカナにある事実を告げられた。アルカナの言う「エスカを呼び出した二つ目の目的」を聞いた時の事である。

「実は、これは冗談でも何でもないんだが、オフクロからはお前の側に居るバードを始末するように命令されてる」

冗談めかした口調ではない。それはエスカだけでなくニームにもわかった。

アルカナとエスカが何かの縁でつながっている事はすでに理解していた。それはエスカを調べ上げても出てこなかった新事実である。だからこそ生じた疑惑と疑問で考えがまとまっていなかっただけに、アルカナのその言葉でニームの混乱は頂点を極めた。

大きな目をさらに大きく見開いたニームを見て、エスカはその小さな肩にそっと手を置いた。

エスカは険しい表情でアナクラに問いかけた。

「確かにサララ・アナクラがそう言ったのか？」

「ああ。それもかなり本気でな。そのお嬢さんが相当やっかいなルーナーだって事もわかってるから、無効化対策もいくつか入れ知恵されている」

アルカナの言う「オフクロ」とは、全アナクラの首領であるサララ・アナクラという女海賊の事であった。サララはアルカナの実の母親で、その名を知らぬ軍人はいない。

アルカナは後継者ではあったが、正式にはまだサララ・アナクラを継いで首領となっているわけではなかった。だが彼は「黒のアナ

クラ」という自らの艦隊を編成して、独自に動いていたわけである。とは言うもののそれはサララの認めるところであり、お目付役として副官のイーフォック・ムイメルプを側に付けた。

本隊ではないが、アルカナはアナクラとしての行動はできる。故にそれを示す為にサララが掲げる真っ赤な海蛇のクレストではなく、黒い海蛇をスタンセイルに染め抜いていたのだ。

エスカは掲げられた黒いスタンセイルを見て、サララの本隊ではない事を予想済みだったとも言える。

だが、エスカにとってサララがアルカナに下したという命令は衝撃的だった。無効化対策とやらも気になった。

「だが心配するな。俺はその女を見ていてオフクロの命令に従う気が失せた」

そう言ってニームを見るアルカナの顔には微笑が戻っていた。

「あの時、そのお嬢さんが俺と結婚の儀式をすると言ってたら、オフクロの言ったとおりにしたかもしれんがな」

「なぜサララはニームを殺せと？」

エスカはしかし、険しい表情を崩さず、重ねて問いかけた。

「さあね」

気色ばむエスカに、アナクラは大げさに首をすくめて見せただけだった。

「とは言え、ただ解放しただけじゃ、俺達としてもちょいとばかり……いや、かなり体裁が悪い。わかるな？」

海賊の上下関係は軍隊のそれよりも遙かに厳しい。たとえ親子であっても甘えは許されない。すなわちアルカナは、首領であるサララの命令を単純に無視するわけにはいかなかったのだ。命令を実行しいだけの理由付けが必要であった。ようするに、彼らなりの大義名分というものである。

「そこで、だ」

アルカナがそう切り出すと、周りの海賊達がニヤニヤしだした。それはここまでのところ、アルカナの筋書き通りに事が運んでいる

事を示していた。
「お前達、ここで婚儀を上げろ」
アルカナは笑顔のまま、そう告げた。
「はあ？」
それまで黙っていたニームだが、さすがにその言葉には反応した。
「もちろん、さっき言った海賊式じゃねえとダメだぜ？でないと俺達はお前らの結婚を認められねえ」

エスカにはアナクラが言わんとする意味がわかった。
サララがアナクラに対し「認めて従え」と命じた相手……エスカのことである……が、彼らの目の前で、彼らの流儀に則った結婚式を挙げたなら、その相手は自分たちの上位にある存在となる。彼らのしきたりでは、そんな相手に手を出すわけにはいかないのである。

「いいぞ」
「待ってました」
「その為に豪華なメシも用意してあるんだぜ、エスカ首領！」
「早くしねえと料理が冷めちまわあ」
彼らの態度を見たエスカは、苦笑するしかなかった。
最初から全てそういう計画だったのだ。
その為に彼らはここに集まっていたのである。何しろ二つの儀式が同時に行われるのだ。こんなことは初めてであろう。
「俺はそのちっちゃいけど目がでっかいお嬢が気に入ったぞ」
「俺もだ。ちっちゃいけど、どうしてどうして。立派なもんだ」
「海賊の嫁として、将来有望だぜ」
「サララ様との女同士の対決が楽しみだぜ」
「楽しみか？俺はちょっと勘弁して欲しいぜ」
「俺もそれはちょっと……」
「だが、俺はお嬢に付く」
「よし、俺もだ」

「俺も」
「俺もだ！」
ヤジが方々から飛んでいた。ニームは突然自分自身に降りかかった「大事（おおごと）」に、何か言おうと口を開けかけた。だが、あまりのヤジに言葉を口にするきっかけすらつかめず、口をぱくぱくするだけであった。
「よし、わかった」
混乱するニームを尻目に、エスカはにっこり笑ってアルカナの申し出を快諾した。
「え？待て、五分もか？」
ニームはたまりかねてアルカナにそう問いかけた。
「そっちかよ」
「重大な事だ」
そう言って目をつり上げたニームの顔は真っ赤になっていた。それを見たアルカナとエスカは同時にうなずいた。
「もちろんだ。五分間しっかりと口づけをするんだぜ？いくら気分を出してもらってもかまわないが、途中で口を離すような事があったらお前達の仲はその程度だったって事で、俺達はお前をオフクロの命令から守る理由を失っちまうからな」
ニヤニヤと笑うアルカナを睨み付け、さらに抗議をしようとしたニームをエスカが腰に手を回して抱き寄せた。
「エ、エスカ？」
エスカの顔を間近にしてあっという間に首まで真っ赤に染めたニームは、目を見開いて固まった。エスカはその形のいいアゴの先にそっと手を当て、ニームの顔を上げさせた。
「俺とじゃ嫌か？」
エスカがそう尋ねると、ニームは慌てて頭を振った。
「嫌ではない。しかし……！」
エスカはニームに皆まで言わせなかった。その口を一気にふさいだのだ。

ニームの鼓動が跳ね上がった。
「よーし、誰か時間を計れ。今からかっきり五分間、この二人が夢中になり続けられるかどうか……」
アルカナのその言葉を合図に、抱き合う大柄なエスカと小柄なニームに一斉にヤジが飛んだ。ほとんどが冷やかしだったが、敵意のある言葉はなかった。からかいの中に祝福の気持ちがこもっている事を、遠ざかる意識の中で、ニームは感じていた。

そう。
ニームは口づけの間は息を止めているものだと思い込んでいたのだ。
生まれて初めての口づけが、衆人環視の中、そして五分間と聞かされ、必死で息を止めていたのである。しかもいきなり唇をふさがれ、あらかじめ肺に空気を吸い込む暇もないままに……。
エスカがニームの異変に気づいたのは、しがみつくように背中に回された手から、スッと力が抜け、そのままだらりとずり落ちた時だった。ずっと息を我慢し続けた小さな大賢者が、ついに失神したのである。

当然ながらニームは五分も息を止めてはいられなかったに違いない。だが彼女はどんなに苦しくなっても息をしようとはしなかった。それよりも失神する事を選んだのである。
しかし時間が短い事をとがめるものはそこにはいなかった。その場にいた全員が目の前で起こった事を理解していたからである。
その時アルカナに時間を尋ねられた計時係は、迷わず高らかにこう宣言した。
「五分二十秒経過」
甲板に歓声が沸き上がった。
二人はアナクラに認められた海賊の夫婦となったのである。
だがニームはその歓声を聞くことなく、グェルダンでようやく意

識を回復する事になった。盛大な頭痛とともに。

海の男達の間では、この逸話は有名である。

今でも皆に認めてもらおうと、息を止めたまま必死に夫にしがみつき、失神するまで口づけを続けた若い妻の話が語り継がれている。

彼らはその話をした後に必ずこう付け加える。

「失神するほど苦しくなっても口を離そうとしないなんて、男としちゃ女にそこまで惚れられてみてえもんだよな」

その話には、残念ながらニーム・タ＝タンという名前は出てこない。しかしながら、その妻が若く小柄で、とても魅力的なルーナーであった事は必ず語られている。

# 第三十二話　再会

すでに年が明けてしばらく経っていた。

新年は星歴四〇二七年。ファランドールの歴史上、大きな意味を持つ年、すなわち「月の大戦」勃発の年である。

「龍の道」でエイルやアプリリアージェと別れた一行、すなわちエルネスティーネとティアナ、テンリーゼン。それにアキラとメリドの四名のヴェリーユ滞在がそろそろ一ヶ月になろうとしていた。

ヴェリーユに到着してからしばらくの間は落ち着いていた一行だが、二週間を過ぎたあたりでエルネスティーネが音を上げた。

どだいあの状況で心配するなという方が無理なのである。エルネスティーネの大事な「仲間」はただ分かれたわけではない。突然現れた敵か味方かもよくわからない三聖【蒼穹の台（そうきゅうのうてな）】が作り出した闇のような得体の知れぬ空間に入ってしまったのだ。

闇の空間に入っていった仲間の中で唯一、一連の事情を知っているであろうエルデが決めた期限が一ヶ月である。それまでにまだ十分時間があるのだという事も頭ではわかっていた。

だがエルネスティーネの心の中には、彼女自身ではどうしようもない「もの」がすでに存在していたのである。ジャミールの里で「龍の檻」と呼ばれる空間に閉じ込められた時、窮地に陥ったメリドを助けた時に、冷静で的確な判断を下せる逸材の片鱗を見せたエルネスティーネではあったが、内なる「それ」を制御できるほど老成しているわけではなかった。ましてやおそらく彼女が初めて知った感情である。冷静に対処どころか経験すらないのだから、的確な対処など望むべくも無い。ただもてあますだけの日々であったことは想像に難くない。

彼女の内に生じた新しい感情とは全く別の要素も問題であった。実の父親であるアプサラス三世の死という大きな衝撃もまた確実に何らかの変化をエルネスティーネにもたらしていた。

今までに比べ極端に涙もろくなった事はその一つであろう。以前も涙もろい事には違いはなかったが、今程ではない。なにしろ今のエルネスティーネは、何かの拍子に表情を変えぬまま、突然涙を流す事すらあった。

朝、目を覚ますと枕が濡れている事が何度もあった。

食事をとっていても、無意識が自身を支配している事が多々あった。お茶を飲もうと伸ばした腕に、ふと熱い雫が落ちるのだ。

エルネスティーネのそんな様子を見ても、ティアナは何も言えなかった。エルネスティーネは、弱音を吐いたり声に出して泣いたりしているわけではないのだ。むしろ弱音は全く口にしなくなっていた。

悲しい事や嬉しい事を感じたままに口にするのが今までのエルネスティーネだとすると、それもまた一つの変化であると言えた。

エルネスティーネの語彙から「悲しい」と言う言葉は消えていた。

涙を流した時には、

「あれ？」

と言いながら目尻をそっと拭うだけなのである。どうかしたのかとティアナが尋ねてもにっこり笑って「何でもない」と言うだけだった。

そんな少女にいったいどんな言葉をかければいいのか？

ティアナには憂いに満ちた表情のエルネスティーネにどう接していいのかすらわからなかった。

いや、実のところ泣きたいのはティアナとて同様だった。彼女も待つ事に焦りを感じ始めていたのだから。

待っていればたとえ何年かかろうとも必ず会えるという保証があれば、これほど辛い思いはしなかったであろう。会える確証の無いままにただ待つ、という状態がこれほど辛いものだとは思わなかった。

その状態で三週間が過ぎ、そしてそろそろエルデ自身が期限と定

めた一月になろうという日の午後。
「その日」は突然訪れた。

エルネスティーネ達の部屋の扉が、前触れもなくまさに唐突に開かれた。
ノックもない。そんな事はその部屋に滞在中、一度も無かった事だった。
「皆さん！」
長椅子に腰をかけて窓からヴェリーユの通りの様子を眺めていたエルネスティーネは、扉の外に並ぶ面々を見るとそう叫び、はじかれたように立ち上がった。
そして、小走りに駆ける。もちろん、無事な姿の仲間のところへ。
だが……。
伸ばしかけたエルネスティーネの手は、空中で動作を止めた。

久しぶりに無事な顔に出会えた。
その嬉しさと懐かしさに背中を押され、いや、会いたかったその人の胸にその思いを込めて体ごと飛び込もうとしたエルネスティーネは、次の一歩を踏み出す事が出来ずに固まった。
視線の先には彼女が一番会いたかった人がいた。会いたくて会いたくて、無意識に涙まで流すほど切ない思いをしたエイル・エイミイがいたのだ。
だが、その視界にはエイルとともに見慣れない顔が一緒に入り込んだ。
エイルの隣にぴったりと寄り添うように立つ影。それは見知らぬ少女で、その姿にエルネスティーネの足は凍り付いたのである。

「えっと……」
だから「お帰りなさい」という言葉よりも、「エイル」という名前よりも先に、少女に対する疑惑と不信ともう一つのありふれた感

情がエルネスティーネに素直な挨拶をさせる事をよしとしなかったのである。

エイルの横に立っているのはただの少女ではない。それは一目でわかった。

瞳髪黒色（どうはつこくしき）。

エイルと同じ。

同じ種族。

ピクシィの少女。

さらに言えばアルヴィンであるエルネスティーネが思わず声を失う程、そのピクシィが美しかった事も付け加えないわけにはいかないだろう。

王女であるエルネスティーネは「佳人」や「美人」と賞される多くの女性を見てきていたが、少なくともエイルの隣にいる少女のような、目を合わせた瞬間に背筋が凍り、鳥肌が立つほどの美しさを纏った人間ははじめてだった。

少なくとも同性が思わず声を失うほどであるという点をとってみても、エイルに寄り添う未知なる少女が、生半可な美しさではないことがうかがい知れる。

自分をじっと見つめる漆黒の瞳を見て、不意に『この世のものとは思えない』という言葉がエルネスティーネの脳裏に浮かんだ。つまりそんな陳腐な言葉に逃げ込むしか手がないほど、少女の美貌に圧倒されていたのである。

エルネスティーネは小さく深呼吸をした。自分を落ち着かせるための無意識の行動であったが、それは功を奏し、相手をもう少し細かく観察する余裕ができた。

少女はエイルより背が少しだけ高い。

エルネスティーネには他種族であるピクシィの年齢を推測する事は難しかったが、二人が並んでいる様子から、少女はエイルよりも歳上のように見えた。

次にエルネスティーネはピクシィの少女が羽織っている薄茶色のマントに気がついた。その少女とは初対面であったが、そのマントには見覚えがあった。それは間違いなくエイルがジャミールの里でラシフから餞別として受け取った特別な、いや、エイルにとってこの上なく大切なはずのマントだった。

エイル自身はマントを羽織っていない。

標高が高く、すでに雪に覆われたヴェリーユで外套に類するものを着ていないのは不自然だった。

視線を下に向けると、寄り添う二人の出で立ちがいっそう不自然な事に気付いた。

エイルは裸足だったのだ。

そしてどうやらエイルの物と思われるごつい革の旅靴(りょか)を件の瞳髪黒色の少女が履いていた。ただし、マントから覗き見える足は素足で、下履きを履いていないようだった。その様子は見るからに寒々しい事この上ない。

それはどう見ても、何らかの事情でまともな着衣を持たない少女の為にエイルが自分のものを無理をして貸し与えたとしか考えられなかった。

よく見ればマントの袷(あわせ)からのぞく少女の胸や腹も素肌のままのようだ。ひょっとしたらマントの下には何も着ていないのではないかとエルネスティーネは推理した。

(エイルは裸の女の子を拾ってきたというの?)

エルネスティーネがそんな突拍子もない事を考えたのも無理からぬ様子……いや状況だという事だった。

現にエルネスティーネの後ろにいるティアナも、会いたかったファルケンハインに声をかける事も忘れて、おそらくはその場で圧倒的な存在感を持つその美貌のピクシィの少女の姿を見て声を無くしていた。

未知の少女と睨み合うような格好でその場に棒立ちになっていたエルネスティーネが、実のところ一番気になったのは、その少女が

エイルの上着の裾をしっかりと握りしめていたことだった。
それはまるで外出時に子供が親とはぐれるのを不安がって、服の裾を掴むような、そんな姿に見えた。
見る者を凍り付かせるような鋭利な視線で自分を見据える少女の、その尊大とも思える表情と、その左手の不安げな行為との落差があまりに大きすぎて、エルネスティーネの思考はそれ以上の推理を続ける事を放棄した。

「あらあらまあ。予想以上の反応ですね」
氷付けのルーンがかかったようなその場の沈黙を最初に破ったのはアプリリアージェのゆったりした柔らかい声だった。
「皆さんには私から紹介しましょうか？」
瞳髪黒色の少女、つまりエルデ・ヴァイスを見つめたまま、固まったように動かないエルネスティーネとティアナを見て、苦笑しながらアプリリアージェがそうエイルに声をかけた。
エイルはエルデと顔を見合わせるとうなずいた。
二人のその何気ない様子を見て、エルネスティーネは胸の奥に何か小さなとげがチクリと刺さるような痛みを感じた。それはさっき感じた、彼女にとって未知の感情が生む痛みだった。

「こちらは剣士のエイル・エイミイ君です」
アプリリアージェは少し悪戯っぽく微笑みながら、そう言って部屋の中にいるヴェリーユ滞在組を見渡した。
「はい、それは知っています」
ティアナはまじめな顔でそう言った。
「私が知りたいのはそちらの、その」
「ふふふ」
アプリリアージェはティアナが口ごもるのを見て、楽しそうに小さく笑った。
「皆さんにとっては見知らぬ姿をしたこちらのお嬢さんですが、実

は皆さんもよく知っている人なんですよ」
　アプリリアージェがもったいぶったようにそう言うと、今度はティアナとエルネスティーネが顔を見合わせる番であった。
「いえ。私は瞳髪黒色の人間はエイル以外に存じません」
　ティアナは怪訝な顔をアプリリアージェに向けるとそう言った。
しかし、アプリリアージェの回答はさらにティアナ達を疑問の渦の中に突き落とすものだった。
「いえいえ、今はここにいないようですが、メリドさんやアモウルさんもあなたたち同様、きっとよくご存じの方なんですよ」
　アプリリアージェはそう言うと再び小さく声を出して笑った。
「リリアさん、楽しんでいるのはよくわかりますが、もうその辺にしておいてあげてはどうですか」
　混乱しているエルネスティーネを見かねて、ファルケンハインがそう声をかけた。
　アプリリアージェがもったいを付けている間も、瞳髪黒色の少女はエイルにぴったりと寄り添ったまま離れようとせず、左手はずっとエイルの服の裾を掴んだままだったのだ。心優しいファルケンハインは、その様子がエルネスティーネにもたらす感情を思いやっていたのである。
「すぐにわかると思ったんですが、意外に辿り着かないものですね。では改めて紹介しましょう。実はこちらのお嬢さんは……」
　アプリリアージェは意味ありげにそこで言葉を溜めた。その間に耐えきれず、エルネスティーネがゴクリとつばを飲んだのが、喉の動きで皆にはわかった。
「実は、エイル君の妹さんのマーヤさんです」
「ああ！」
　芝居気たっぷりにそう告げたアプリリアージェの言葉を聞くと、ファルケンハインは思わず手で顔を覆い、エルネスティーネは目を大きく見開いて、納得がいったという風に手を叩いた。
　しかし、

「ちゃう！」
「違う！」
瞳髪黒色の二人は同時にアプリリアージェの説明を強く否定した。
エルネスティーネはハッとして呪縛から解かれたように息を吸い込んだ。
彼女は一瞬、つまりエイル達が否定するまでのほんの短い時間だったが、アプリリアージェの言葉をそのまま信じたのだ。それは理性ではなく、耳から入る音に感覚が反応したような理解の手順だった。何がどういう理由でそうなっているのかはわからなかったが、エイルと同じ瞳髪黒色の少女が彼がずっと会いたがっていた妹だと説明されるとむしろ納得がいった。
だが、もちろんその納得は一瞬で否定された格好になった。
そもそもマーヤはフォウに居るはずなのだから。
「出でよ、ノルン」
マーリン正教会の賢者エルデ・ヴァイスは業を煮やしたように右手を前方にまっすぐ突き出すと、そう小さく告げて儀仗を取り出した。
その台詞と一連の仕草に、エルネスティーネはもちろん見覚えがあった。
目の前の瞳髪黒色の少女の手には一瞬で黒・茶・白の三色の木で撚られた儀仗が握られた。つまり、それが視覚的な自己紹介のようなものだった。
儀仗ノルンを呼び出す者。
エイル以外にそれができるのはただ一人である。
しかしそれでもまだヴェリーユ滞在組があっけにとられてたまま口をぽかんと開いている様子を見て、その怜悧な顔の美少女は口を切った。

「二人とも、鏡を見た方がええで。額に入れて飾っときたい程に見事な間抜け面や」
「え？」
その毒舌にティアナが反応した。
「マーヤやない。ウチの名前はエルデ。エルデ・ヴァイスや」
古語でエルデがそう自己紹介した後に訪れた一瞬の沈黙を、エルネスティーネとティアナが一斉に悲鳴のような声を上げて破った。
「えええええええ？」
エルデは一同の反応に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべてため息をつくと、すぐ横のアプリリアージェを睨んだ。
「リリア姉さん、笑い過ぎや。人を遊びのネタに使わんといて欲しいな」
エルデの声に一同がアプリリアージェに視線を移すと、そこには腰を曲げてうつむき、笑い声をこらえているダーク・アルヴの姿があった。
勿論、ティアナはアプリリアージェが涙を浮かべるほど無防備に笑うそんな姿を見るのは初めてだった。
「『時のゆりかご』でエルデの本体が目を覚ましてからこっち、リリアさんはずっとこんな調子で、ずいぶん楽しそうなのだ」
ファルケンハインがそう説明にならない説明をした。
「まったく」
エルデも呆れたようにそう言った。
「ちょっと待ってください。エルデって、お、女の子だったのですか？」
エルネスティーネはそれだけ言うと頭を抱えた。
「聞いてません。初耳です。だって……」
そしてキッと目の前の瞳髪黒色の少女を睨んだ。
「確かに、これは驚きの事実です。失礼ながら私はエルデはぶしつけな少年だと思い込んでいました。瞳髪黒色の、その……こんなに美しい女性が『あの』エルデだと言われても俄には信じられません」

ティアナもうなずいた。
エルネスティーネは改めてエルデの姿を頭の先から足の先まで見回した。
「でも、儀仗は確かに賢者エルデが手にしていたものですね」
「信じられないのも無理はないが、この子は間違いなくあのエルデ・ヴァイスだ」
ファルケンハインがそう念押しをした。
「と、言うことは」
ティアナはエルデをまじまじと見つめると尋ねた。
「貴様、男を装っていたという事なのか？」
「そう言うことみたいだな。それについては体を貸していたエイル本人が一番驚いていたくらいだ」
ティアナの問いに、ファルケンハインはそう答えると、肩をすくめて見せた。
エルネスティーネは一歩エルデの方に近づくと、尋ねた。
「本当に本当に、あのエルデ・ヴァイスなのですか？」
「『あの』が『どの』かはわからへんけど、ウチはエルデ・ヴァイスや。コイツの頭の中に入ってたけど、『龍墓』、つまり『時のゆりかご』にあった自分の体にやっと戻れたっちゅうことや。そやからええ加減珍獣を見るような目でウチを見るのはやめて欲しいもんやな」
エルデは『コイツ』と言う時に右手に持った儀仗の頭頂部をぞんざいにエイルの方に向けた。だが、左手はそれでもエイルの服を掴んだままだった。
「は……」
「は？」
声を出しかけて止めたエルネスティーネに、エルデは反応した。
目は普通にエルネスティーネを見ただけだったが、当のエルネスティーネは、エルデに睨まれたように感じて上体を思わず引いた。

はっきりとした大きな目をしているエルデだが、目尻が少し上がっている事もあって、普通にしているだけで相手を睨んでいるように見える。さらに、エルネスティーネからすると、澄ましているエルデは機嫌が悪いようにしか見えなかった。だが、エルネスティーネが感じたのはその顔の造作だけではなく、エルデが纏っている空気の持つ力のようなもので、ただそこに立っているだけで気圧されてしまっている自分を発見して驚いていた。

「初めまして、でいいのでしょうか？」

「いや、それは」

エルデは眉根に皺を寄せると、目を閉じてふうっとため息をついた。

「ええっと」

目を開けたエルデは小さく咳払いをするとヴェリーユ組を交互に見比べて、口を開いた。

「ウチはエルデ。エルデ・ヴァイス。顔かたちは前と違うけど、中身はエルデやから、今まで通り『エルデさま』でよろしく頼むわ」

「『エルデさま』のどこが今まで通りなんだよ」

エイルがすかさずそう突っ込んだが、エルネスティーネの耳には届いていないようだった。

「こ、こちらこそよろしくお願いします、『エルデさま』」

エルネスティーネはそう言うと、左手をエルデに差し出した。

「いや、『さま』は冗談やから」

エルデが少しばつが悪そうな声でそう言うと、ティアナが反応した。

「冗談なのか？」

「冗談に決まってる。だいたい今まで『エルデさま』とか呼んだことないやろっ？」

「ふむ。言われてみればその通りだ。とにかく驚いたが納得した。こちらこそ今まで通りよろしく頼む」

ティアナはエルネスティーネと違って手は出さず、そう言うと軽

く会釈をした。もちろん、キャンセラがルーナーに触れる事を避けたのだ。
エルデはそれを見て、ティアナに同じように軽く目礼で返すと、エイルの服を掴んでいた手を離し、エルネスティーネの手をそっと握った。
「ま、こんな姿形になったけど、中身は変わってへんから、改まらんでもええんやけど、とりあえずよろしゅうな」
だが握手を終えると、エルデはすぐにまたエイルの服を掴んだ。
エルネスティーネは先刻からやはりエルデのその態度がどうにも気になっていた。

「とりあえず」
アプリリアージェがいつもの微笑みを浮かべながら一同に声をかけた。
「説明は省きますが、ごらんの通りエルデはエイル君に借りたマントと靴以外、自分のものを何も持っていない状態なので、急ぎ必要な着替えや装備を一通り買いそろえに行きたいのですが、他の皆さんは今どこに?」
「アモウルさんとメリドさんはいつものように町に出てシルフィードの情報収集をされているようです。情勢が慌ただしくなってきているのです」
エルネスティーネの言葉にアプリリアージェはうなずいた。
「リーゼは?」
それにはティアナが答えた。
「この時間はマナちゃんと風呂です。この宿には個室風呂があって、リーゼはえらく気に入っているようです。その……マナちゃんも」
ティアナの説明に、アプリリアージェは眉根を寄せた。
「マーナートってお風呂好きなんですか?」
「そのようです。私も驚きました。まあ、そう言うわけで毎日この時間には彼らはそこでのんびりしていますから、今日もたぶんそこ

でしょう。マーナートもそうですが、私はここへ来るまでリーゼが風呂に入るのを見たことがありません。ですから、てっきり風呂嫌いだとばかり思っていました。だから二重の驚きです」

「きっと二人とも恥ずかしがり屋なんですよ」

アプリリアージェはそう言うとチラリとファルケンハインの方を見やった。

「そう言えば俺もリーゼと一緒に風呂に入ったことはないな。直属の副官だったアトルならその辺の事情も知ってるかもしれんが、まあ、人にはいろいろ言いたくない事情もあるだろう。あまり詮索はしてやるな」

エイルはそのやりとりを聞いて、ジャミールの迎賓殿で真夜中に時々耳にした水音のことを思い出していた。

（リーゼはあんな時間に一人で入っていたということか）

だが、テンリーゼンと風呂の話題はそこで終わった。アプリリアージェが話題を変えたのだ。

「ハロウ先生達はまだ合流していないのですか？」

問われたティアナはうなずいた。

「まだです。情勢が急変しましたから、交通の手段などが混乱しているようです。だから少し遅れているのではないかと思われます」

アプリリアージェはそこまで聞くとわかったという風にうなずき、今度はエルネスティーネをエルデの横に並ばせた。そしてしばらく見比べていたが、うなずくと全員に指示を出した。

「エルデの服の買い出しにはティアナとファル、それにネスティの三人でお願いします。服の寸法はネスティより一回り大きめの物を買っておけば合いそうですね。靴は着替えた後で本人を連れて靴屋に行きましょう。買い物の途中でここから最短距離で向かえる靴屋の確認をしておいて下さい。ファルは途中、伝信の確認を。私はここでリーゼとアモウルさん達が戻るのを待つ事にします」

いいですね？という風にアプリリアージェが一同を見渡すと、全

員がうなずいた。
「では、日が暮れる前に事をすませて、今夜は久しぶりに大勢でゆったりと食卓を囲みましょう」
「あ、お遣いを頼みたいんやけど」
エルデはそう言うとティアナにペンと紙を用意させ、頼みものを書いてそれを渡した。
「ゲルダモーデ、キャラダグナ、タベンポーレ、ダグナザンドル、チューカレッタルート、ダダグモラン、ガダリクレンド……って、なんだ、これは？」
そこにはティアナにとっては脈絡のない、いや殆ど見た事も聞いた事もない品物が列記されていた。それぞれいくつかの項目ごとにひとくくりにされていたが、半分以上ははじめて見る名前で、いったいどこで手に入れればいいのかわからなかった。
「とりあえず、コイツの髪の毛を茶色に染めとこうと思って。その染料を作る為の材料や。売ってるところは……」
エルデはそれぞれの材料を売っている場所ごとに纏めて記載していた。それを説明すると、ティアナは一応うなずいてみせたが、怪訝な顔のままでエルデを見た。
「ひょっとしてルーンが使えなくなったのか？」
エルデは首を横に振ると、簡単に説明した。ヴェリーユではルーンを下手に使えない事を。
「そもそもウチがエイルの体に同居するようになったんは、ここヴェリーユで不用意にルーンを使ってもうた事が発端なんや。二年振りに来たけど、忌々しい事この上ないわ。今でもあの時の事を思い出すとはらわたが煮えくり返るほどムカつく！」
「そ、そうなのか」
エルデの結構な剣幕に、ティアナは思わず一歩後ずさった。
「頼んだで。目の色はルーンを使わんとムリやけど、髪の色だけでも目立たんようにしとかんとな」
エルデの言葉にうなずいたティアナと一緒に部屋を出て行こうと

するエルネスティーネに、エルデが思い出したかのように声をかけた。
「あ、それからネスティには重要な事を言い忘れとった」
「何でしょう？」
「服の事やけど」
「はい。お好みの色とか柄はありますか？」
「いや、そっちやなくて寸法の事やけど」
「ええ」
「他のはネスティの一回り上でもええけど、上の方の下着はネスティより二回り以上大きいヤツにしといてくれるかな」
エルデはそう言うとニヤリと笑って見せた。
「ウチ、窮屈な下着はいややねん」
エルネスティーネの顔が見る見る赤くなった。と思うまもなくその表情は憤然としたものに変わった。
「私より二回り以上大きかったら、ブカブカになりますよ。それでもいいんですか？」
「へえ。ウチの、見たんか？」
「見なくても、そのマント越しで充分わかります。いたって普通じゃないですか。私だって普通くらいです」
「ウチは普通よりちょっと大きめなんやで。ウソやと思うなら、エイルに聞いてみ」
「え？」
エルデは意味ありげにニヤリと笑うと、エイルの方に顔を向けた。
「エイルはウチの裸は見慣れてるもんな？」
「いやいやいやいや」
エイルは慌ててかぶりを振った。
「誤解するような事を言うんじゃねえ！」
「全然見てへんとでも？」
「そ、それを言うならリリアさんだって、ファルだって……」
「その辺にしておけ、エルデ」

自分におはちが回ってきそうになったファルケンハインが慌てて取りなした。
「裸に近い形でエルデの体が保管されていただけだ」
ファルケンハインはエルネスティーネにそう言った後で、チラリとティアナの方に目をやったが、当のティアナは興味深げにエルデの胸の辺りを注視していた。

「わ、わかりました！ブカブカでも文句言いっこなしでお願いしますね」
エルネスティーネは引きつった笑いを浮かべると、かなり伸びてきた髪を翻して部屋を出て行った。ティアナが慌ててそれに続くと、ファルケンハインがアプリリアージェに黙礼をしてその後を追った。

「あのさ」
その様子を見ていたエイルはすぐ横にいるエルデに声をかけた。
「ん？」
「なんか、ネスティって様子が変わったと思わないか？」
「どうかな……」
エルデは一行が出て行った扉に目をやると、ぽつりとつぶやいた。
「変わったっちゅうか、あれが本来のネスティなんかもしれへんな」
「本来の、ネスティ？」
「言葉に力がある。眼差しに熱がある。纏うエーテルも強うなった」
「そうか」
エイルはそう言って小さなため息をついた。エルデが同じような事を感じていた事がわかって、少し嬉しかったのだ。
「あ、そうだ」
「ん？」
「実はずっと気になってたんだけど、その手」
エイルが指さす先は、エルデの左手だった。エイルの服の裾をしっかりと握っている。

「あ」
エルデは自分の左手を見て、小さくそう叫ぶと、エイルの服から手を離した。

# 第三十三話　交錯のヴェリーユ

図らずもアプリリアージェと別行動をとった事は、アキラ・アモウル・エルテルペにとっては歓迎すべき事態と言えた。

もちろん、仲間との連絡がとりやすくなったという意味であるが、なにより能動的に情報の収集活動がしやすくなった事がアキラにとっては重要であった。とは言え、さすがにこれ見よがしに行動するわけにも行かなかった。ティアナの存在があったからである。

だが、アキラのそれは杞憂と言えた。

共に「龍の道」を通って先にヴェリーユ入りした一行にあって、ある意味で唯一の軍人らしい軍人とも言えるティアナだったが、彼女は少なくともアキラを自分達と別の陣営の人間だとは露ほども考えていなかった。ヴェリーユでアキラが単独行を行う事を全くとがめる事がなかったばかりか、そもそもヴェリーユに共に留まってくれている事に感謝の念を隠さない程であった。疑い深い性格ではあったが、一度信じてしまうと今度は二度と疑う事をしない気質でもあったのだ。

そんなアキラ達一行はヴェリーユで想像もしなかったような待遇を受けていた。

アキラの持つ「エスタリア公爵符」の効力はティアナやエルネスティーネの想像を遥かに超えて、ヴェリーユで絶大な効果を発揮していたのである。

実のところその効力には持ち主であるアキラですら舌を巻いていた。

ウンディーネ連邦共和国の中央南端、ノーム山脈の麓にあるヴェリーユは、いわゆる新教会の本山が置かれている一大聖地である。

新教会の聖地ヴェリーユはマーリン正教会の聖地であるヴェリタスと同様、ウンディーネ連邦共和国内に位置するが、共にただの街

ではない。どちらも自治国家の形をとっていた。つまり領土が存在するのである。

そう言うわけで国境線でもある町の全ての出入り口には物々しい関が設置され、出入りが厳しく監視されている。町は広大であるにも関わらず、その周りは全て頑強な石の壁で囲まれていて、街全体が難攻不落の要塞のようであった。まさに要塞都市である。

独立自治国家であること、砦のような長い石積の壁と並び、ヴェリーユには大きな特徴がある。それは冬に街を訪れる者はいやでも目にする事になる光景である。

ヴェリーユは冬季に入り気温が下がると、町全体が常に白い蒸気で覆われるのである。

それはこの町の融雪設備の仕業であった。豊富にある温泉を町の道路の下に流している関係で、方々でその湯気が地上に漏れる。結果として町の至る所で白いもやが発生しているような状態になり、別名「冬霧の町」とも呼ばれている。

宗教そのものが維持・運営する街であるから、いわゆる軍隊は存在しないが、その代わりに「僧兵」と呼ばれる出家信者による訓練された武装部隊が警察組織として町の治安維持を一手に掌握している。

僧兵達はそれぞれ腰に片手剣を下げ、手には長槍を握り、町中の角という角に立って睨みをきかせている。彼らはすべて目の部分だけを切り取った黒い布で顔を隠しており個人の特定を困難にしている。それが意味するのは僧兵達には警備以外に顔を見せる業務に就く事があるという事であろう。アキラはそう推測していた。

決して排他的ではない新教会だが、さすがに新教会の最高権力者である堂頭（どうとう）のお膝元では、それなりの「示威行為」は必要なのであろう。

アキラやエルネスティーネ達は「龍の道」からヴェリーユにほど近い山中に出ると、一番近い門からヴェリーユ入りしたのだが、そ

こではまず懐剣以外の武器と呼べるものは全て没収された。
　両手を上げさせられ体を探られたティアナは憤然とした顔で抗議したが、エルネスティーネに窘められたおかげで大きなもめ事になる事はなかった。
　それは形式的なもののようで、エルネスティーネとテンリーゼンに関してはマントを脱ぐように命じられたのみで、エルネスティーネが腰に懐剣をぶら下げているのを見ても、特に何もとがめられる事はなかった。
　むしろ、エルネスティーネの喪の徴を見て、その意味を知る門番達は軽く礼をし、悔やみの言葉を告げた程であるから、ティアナの興奮もすぐに収まる事になった。
　没収された武器は門の横にある保管庫で預かる事になっており、出る際に返されると説明を受けた。つまり大きな武器を持つものは、入った門からしか出られないような決まりになっていたのである。ヴェリーユの街に続く門は全部で三つあるが、それぞれは石の壁に沿って掘られた運河を兼ねた堀で行き来する事になっていた。入ってきた門からしか出る事は出来ないが、違う道に通じる門へは、その堀を使って連絡されていたのである。

　初めてヴェリーユに来たアキラはだいたいの様子と仕組みを確認すると、そこでようやく公爵符を門番の中でも責任者と思しき男に恭しく差し出した。
「我らはこういうお許しを持っておりますが、何かの役には立ちませんかな？お預けしたものは、実は恩人の形見の剣。できれば常に我が身の側に置いておきたいのですが」
　門番は差し出されたペトルウシュカ家のクレスト入りの公爵符を隅から隅まで眺め回した末、アキラ達に最敬礼をするとしばらく待てと言ってどこかに姿を消した。そしてティアナが眉間に皺を寄せる前になんとか戻ってくると、新教会の天真星紋が縫い取られた光沢のある青い布を広げ、それで今没収した剣を一振りずつ丁寧に包

んで金の紐でしっかりと結び閉じ、その状態でアキラ、ティアナ、メリドにそれぞれ返した。
「堂頭様の賓客とは知らず失礼をいたしました。ただ、これは決まり事ゆえ、ヴェリーユ滞在中はその紐を解くことなく、そのままお持ちくださいますよう」
制限を設けられはしたものの、公爵符を見せただけで、倉庫行きになるはずの武器は返ってきた。
「言って見るものだな」
「ええ。さすがに驚きました」
あらためて公爵符の効力に関心しながら、アキラ達一行は門番達に会釈をして立ち去ろうとした。しかし彼らは慌てた門番に止められた。
「しばしお待ち下さい。じき、迎えの馬車がまいります」
公爵符はアキラの想像を超えた効力を発揮しており、その後の展開に一行はただあっけにとられるだけであったのだ。
迎えの馬車は、天真星の意匠、すなわち新教会のクレストを大きく掲げた大型の馬車で、それなりの位にあると思われる僧服姿の案内を伴って現れた。
案内役はデュナンの青年で、クランス・アライバルトと名乗った。彼ら一行の滞在中、専属案内係を勤める旨を告げると、市街地の中心部にある、見るからに特別な人間の為の建物といった風情の石造りの重厚な造りの宿に一行を案内した。
部屋の準備が整うまでしばし待つようにと言われた一行は、一階の大広間にあるゆったりしたソファに案内され、透かし模様が入った瀟洒な磁器のカップで薫り高いお茶が振る舞われた。
「アモウル殿。これはいったいどういう事だ?」
あまりに慇懃で仰々しい歓迎振りに面食らってそう尋ねるティア

ナに、アキラもしかし的確な答えを持っている訳ではなかった。
「おそらくペトルウシュカ公爵は、新教会に寄進をしているんでしょうな。しかもこの厚遇振りからすると、並の額ではなさそうだ」
だからアキラはそう言って頭をかくしかなかった。
ドライアドの有力な貴族は、国教である正教会にはもちろんそれなりの寄進をしているものだが、ミリア・ペトルウシュカはそれに加えて新教会にも「それなり」の心付けを行っていたのだという事をアキラは一連の対応で初めて知る事になった。
（いや）
色が薄いにもかかわらず、甘みの濃い上等なそのお茶を飲み干す頃、クランスが部屋の準備が出来た事をつげに来た。案内されるままに足を踏み入れた客室を見回したアキラは、そこでさらに頭を掻く事になった。
（訂正だ。これは「それなりの額」などではなさそうだ）
ヴェリーユ大聖堂を正面に眺める事ができる最上階のその部屋には大小取り混ぜて十ほどの独立した扉がある部屋があった。うち五つには附室が設けられていると言えばその広さの程がうかがい知れるだろうか？　それぞれの部屋に通じる通路は居間に通じ、部屋の主同士が顔を合わせる場所になっていた。いや、そこは居間と言うよりはむしろ広間と呼んだ方がいいほどの広さがあった。
「アモウル殿……」
通された部屋を見渡した後でそう声をかけてきたティアナに、アキラは両手を振って皆まで言わせなかった。
「部屋代なら心配無用です。どうやら一エキュも払う必要はないようです」
アキラは、ここへ来る途中で部屋付きの世話係にその旨を尋ねた際の事情をティアナに説明した。
相当上等な宿であることは出されたお茶の質でわかっていたから、アキラは気になっていた部屋代について世話係にそれとなく尋ねたのだ。すると彼は立ち止まり極めて慇懃に一礼した後で「一切のお

気遣いは無用でございます」と答えたのだ。さらに続けて、
「アライバルト様からはくれぐれも粗相の無いようにと言い含められております。どうぞ我が屋敷のようにごゆるりとおくつろぎくださいませ」
ども。
「いや、そうではなくて……いや、それも気にはしていたのだが」
「わかっています。私とてあまり目立った事になるのは避けたいと思っています。だが、まさかこんな事になるとは露ほども思わなかったもので」

ティアナの心配をよそに、エルネスティーネは見慣れない飾り棚や家具、掛けられた絵画などを目を輝かせながら眺めていた。だが一カ所にはじっとしておらず、気付くと既に別の部屋の扉を開け放ってそれぞれ違う調度にいたく感心していた。
この状況を素直に受け入れているのはどうやらエルネスティーネだけのようだった。

「驚きを通り越しています。もはや呆れてものも言えません」
「不可抗力だ」
「まったく、肝を冷やしましたよ」
「実は私もだ」
「？？」
「いや、続けてくれ」
「？？それにしても大佐は妙なものをお持ちですね。紙切れ一枚で国賓級の扱いとは」
「これも役得と言うやつなんだろうな」
「ペトルウシュカ男爵ですか？」
「いや。変人の方だ。さすがに男爵程度では国賓とはいくまい。あれはエスタリアの公爵様がこのしがない旅芸人に下さった褒美のよ

うなものだ」
「？？開いた口がふさがらないとはこの事です」
「ふむ。彼女ならこのような場面では『書いた鯨にブタが鳴く』とでも表現するのだろうな」
「何の話です？」
「いや、続けてくれ」

ヴェリーユは宗教の本山がある街である。それはつまり巡礼者の街でもあると言う事になる。そこには当然ながら多くの人が集まる。従ってヴェリーユは観光都市としての側面も持ち合わせていた。
もちろん異教徒は大聖堂をはじめとする宗教的な建物に入る事は制限されるが、開放的な新教は異教者に対して比較的鷹揚で、いわゆる観光客を普通に街には受け入れている。巡礼自体を観光として捉えている者も多く、新教側もそれを咎めるどころか、各地の教会では巡礼の団体旅行を企画するなどという事もすでに行われていたようで、その受け入れ体制をヴェリーユがちゃんと行っていたと伝えられる。秘密主義・排他主義とも揶揄される正教会に比べると、それだけ間口が広く懐が深い宗教であるとも言えた。
アキラは言わば純粋な観光客であるから、巡礼の列に並ぶ事はない。しかし多くの観光客の中に紛れる事はいともたやすい事だった。
ティアナにはそれなりの警戒をしていたものの、アキラは提督を名乗るテンリーゼン・クラルヴァインに対してはあまり問題を感じていなかった。少年提督はたとえそれが仲間であっても自分の容姿を人前にさらす事をよしとしないようで、ヴェリーユ入りしてからは一歩もあの瀟洒な部屋から外に出ようとはしなかった。アキラがティアナに行く先を告げて出かける時にもまったく姿を見せようとすらしないほどで、あまりあからさまな行動をとらない限りは気にしなくて良い存在だとアキラは判断していたのである。総合的な判断として、既にヴェリーユ入りをしていたミーヤ・ブライトリング大尉との情報交換には何の障害もなかった。

（それにしても）

アキラはその日のミヤルデの私服姿を見て感心していた。観光客として不自然でない程度の、言ってみれば普通の年頃の娘の姿なのだが、ドライアドの陸軍の軍服姿か、そうでなければ一切飾り気のない旅装のどちらかの姿しか見た事がなかったアキラにとって、いかにも年頃の娘といった格好をしている副官は新鮮に映った。

それにはさらにその服装が本人に実によく似合っているという点を強調する必要があった。

アキラの記憶によるとミヤルデは幼い頃に母を亡くしてから、父親と数人の兄に育てられていた。その生い立ちもあってお洒落や化粧っ気というものを今まで感じた事がなかったのだ。

だがその日のミヤルデの出で立ちは念が入っていた。服だけでなくちょっとした髪飾りや装飾品、さらには手回り品にも不自然なところが無いどころか、一見何の変哲もなさそうに見えて、わかる人間には品の良さを感じさせるようなものばかりで揃えられていた。

おそらくそれらの見立ての全てはもう一人の副官であるセージ・リョウガ・エリギュラスによるものだろうとアキラは確信していた。

「その化粧は？」

「お、おかしいでしょうか。なにぶん不慣れなもので」

アキラが唐突にそう言って化粧について触れると、それまで無表情を装っていたミヤルデの顔が一瞬で真っ赤に染まった。

「いや。よくもまあそこまで上手に出来たものだと感心した」

「これは、その……」

どうやら化粧もセージの手によるものらしかった。

アキラはその時の様子を想像すると、笑いがこみ上げるのを押さえるのに苦労した。苦虫をかみつぶしたような不満顔で鏡に向かい、セージに紅を引いてもらっているミヤルデの姿は普段の彼女を知っている者には相当な見物に違いなかった。

「いやいや。ミーヤ、君が社交界に現れてもおかしく無いどころか、

ダンスの申し出を断るのに苦労する事になるだろうという事は請け負うよ」
「お、お戯れを」
「ミーヤも知っている通り、私は世辞など言わぬ男だ」
「……」
「だが、ダンスの相手には是非中尉を選んであげるべきだろうがね」
「は？」
「いや、そうすればエリギュラス中尉が喜ぶだろうという話をしている」
「それは、どういう意味でしょう？」
「いや……」
アキラは嘆息した。
「この話はここまでにしよう。あまり長居しても妙に思われる。それよりそのペトルウシュカ男爵の新しい幕僚長についての情報はどうなっている？」
「ここは思ったよりも検閲が厳しくて、我々も下手な動きができなかったのですが、暗号伝信が何とか機能し始めましたので、続報は来ています。エスカ様……いえペトルウシュカ男爵はペシカレフ公爵の供としてエッダへ向かわれたようです。もちろん新しい幕僚長連れです」
「ペシカレフ公だと？五大老はあのマルクを国王の代理として大葬に列席させるというのか」
「公爵とは名ばかり。資産どころか借金まみれで既に領地も全て五大老の息のかかった連中が担保として抑えていると聞き及びます」
アキラはうなずいた。
「マルク・ペシカレフという男は人格的にも問題がある上、女にだらしが無いことにかけては知らぬ者もいない。さらに嫉妬心と名誉欲だけは一人前以上という絵に描いたような小物だ。そんな人間を名代に据えたのには訳がありそうだな」
「ペシカレフ公爵家はペトルウシュカ公爵家の縁戚にあたる家柄で

すが、五大老がペトルウシュカ男爵を護衛に指名したのはその関係もあっての事でしょうか？」

「エスカはあの性格だからな。口ではマルクをなじってはいるが、何度となく資金の援助をしていたはずだ。とは言え戦略的に言えば、この時期エスカが自ら進んでエッダ行きを志願するなどあり得ん。断ろうにも断れない命令だったのだろうな」

アキラはアプサラス三世崩御後の自陣営の情報が少なすぎる事に苛立ちを募らせた。もちろん原因はミリアの指令を遂行する為に本来の立場を放棄している事にあるのだが、既に大きな動きを始めたファランドールを俯瞰できないのは辛かった。

「私見ですが」

アキラが黙り込んだ所へ、ミヤルデが声をかけた。

「かまわん。言ってみろ」

「おそれながらペシカレフ公は体のいい捨て駒なのではないでしょうか？」

「捨て駒？」

「政治的にも軍事的にも、また内政的にも外交的にも全く必要のない駒であるペシカレフ公を名代としてアプサラス三世の大葬に列席させる事でシルフィード側を挑発しようとしているのではないかと」

「シルフィードがそんな幼稚な挑発に乗るものか」

「そこです。捨て駒は幼稚な方がいいのではないでしょうか？」

「ほう。面白い意見だな」

「セージ……いえ、エリギュラス中尉と組むようになって、アルヴ族の持つ気質というものがわかってきたと申しますか……」

「アルヴ族の気質？」

「気位だけが高く、攻撃的な性格と評判のペシカレフ公が幼稚で単純であれば、エッダでアルヴの気質と対立しやすいのではないかと」

ミヤルデの説はこうだ。

大葬に参列するペシカレフ公爵は名代という大役を仰せつかって得意になっているはずである。何せ、国王の代理である。シルフィード王国では文字通り自らを国王としてもてなしてもらわねば彼の虚栄心は満足しないだろう。そしておそらくアルヴ族はそんな底の浅い人物を必要以上に丁重にもてなす事などはなく、そこにペシカレフ公爵の気に入らない対応が一つでもあれば……。

「ちょっとした小競り合いや言い争いが生じるのは必定かと」

つまり、そのつまらない事件とも言えぬ事柄を問題視して高圧的な外交の口実、いやきっかけにしようとしているのだというのがミヤルデの説だが、アキラは首を横に振った。

「君の推理は間違ってはいないと思うが、五大老はもう少し狡猾で冷酷だ。そしておそらく偶発など期待してはいないだろう」

「と、言いますと？」

「エスカの手勢はどうなっている？」

「ペシカレフ公爵の世話係を別にすると、ペトルウシュカ男爵と共にミュゼを出たのは幕僚長と下士官を含め、総勢三十名程度のようです。その辺りについても報告書に詳細にまとめてあります」

「わかった。まずそれを読ませてもらおう」

「いつもの花屋でカラーを注文して下さい。その際『黄色いのがあると嬉しい』と申し添えて下さい。それから大佐には副司令からの矢のような帰投要請が来ています。そちらについては左隣のパン屋の……」

「そっちはいい」

「私が叱られます」

「すまんが読みたくない」

「大佐！」

ミヤルデは思わず上官を責める言葉を発したが、一拍おくと小さなため息をついた。

「わかりました。サンサ副司令に叱られるのは慣れています」

「いつもありがとう、ミーヤ」

スプリガンの実質的な運営をしている堅物で有名な老副司令官、ヤリキィ・サンサ中佐の苦虫を噛み潰したような顔を思い浮かべると、アキラは心の中で深々と頭を下げた。

「それから、私の伝信はミュゼにはいつ頃届く？」

「そうですね。おそらく明後日には」

「いいだろう。どちらにしろぐずぐずしてはいられないようだな。人待ちで滞在が延びているが、どうやら限界のようだ。私への返答を待って次の動きを決める」

「了解しました」

その時、午後の礼拝が始まる鐘の音が街に響き渡った。ヴェリーユの市街地にある鐘楼という鐘楼の鐘が一斉に五分間鳴り続ける、ヴェリーユ名物の「鐘の唱和」が始まったのだ。

「では私はこれで。明日は中尉を寄越します」

背中合わせに座っていたミヤルデ・ブライトリングは、それを合図にすっと立ち上がった。

「どうした？大尉は何か別の用事があるのか？」

「いえ」

ミヤルデは背中を向けたままで小さくつぶやいた。

「こういう服装はどうも苦手です。化粧にも時間がかかりすぎて……」

「そういう理由では許可できない。命令だ。明日も君が来い」

「大佐！」

「いつまでもそんなところに突っ立っていると目立つぞ」

「むむ……」

アキラとミヤルデは通りに面したカフェの、別々のテーブルに背中合わせに座って会話をしていたのである。アキラはヴェリーユの観光案内の小冊子を広げ、ミヤルデはテーブルで手紙をしたためる振りをして、小声で話し合っていたのだ。

寒気が入り込む窓際の席は人気が無い為に客の姿もなく、二人の

会話が誰かに聞かれる心配はなさそうだった。

アキラは憮然としたミヤルデの足音を背中で聞きながら小さく微笑むと、テーブルの上で冷え切ってしまった紅茶のカップに手を伸ばし、一口すすった。

予想以上にそれは不味かった。

アキラは花屋に向かう前に熱い紅茶で口直しをしておこうと顔を上げた。給仕に注文しようと思ったからだ。

だが、給仕はすでにアキラの目の前で恭しく礼をしていた。

よく見れば、手には紅茶のポットとカップが乗った盆を持っているではないか。

「頼んではいないが？」

当たり前のようにそのポットをテーブルに置こうとした給仕を制するとアキラは尋ねた。

「あちらのお客様からです。紅茶が冷えているようだから換えて差し上げろと」

給仕はそう言ってチラリと後ろを振り返ったが、すぐにテキパキとテーブルの上のカップ類を新しいものに取り替えて去っていった。

アキラは白い湯気が盛大に立ち上る熱い紅茶の事はすっかり意識の外に飛んでいた。

その視線は二つほど離れたテーブルに座ってこちらに微笑みかけている「あちらのお客様」に釘付けになっていた。

## 第三十四話　四冊の本

視線の先にいる人物は、アキラが口を開こうとすると唇に人差し指を立て、その言葉を封じた。そしてそのまま席を立つとゆっくりとアキラのテーブルに歩み寄り、当たり前のように正面の椅子に深く腰掛けた。

「どうする？先に読んでおくかい？」

アキラの目の前のデュナンの青年はそう言うと、テーブルの上に分厚い一通の封書を置いた。

「これは？」

眼鏡の向こう側に見える金色の瞳が特徴的な青年は、苦笑混じりに答えた。

「この季節にカラーを売ってる花屋はないな。しかも黄色だって？」

「売っている花だとまずいだろう？」

「まあ、そう言う意味じゃ合い言葉としてはまあまあかもしれないけど、君の部下にしちゃ、ちょっと油断しすぎじゃないのかな？受け取りに来るはずの人間の特徴も相手に伝えておくべきだね」

男の言葉に、アキラは頭を抱えたいのをじっとこらえてうなずいた。

「労せずして手元に来たのだから、悪くないとも言えるだろう？」

「ボクの出現が君の想定の範囲内であるなら、ね」

アキラはため息をつくと、紅茶の入ったカップに手を伸ばした。とりあえずは落ち着きたかったのだ。それには間が必要であった。

「読んだのか？」

「君は読まないのかい？」

アキラはテーブルの上の封書を見つめた。だが、手は伸ばさなかった。

「白状すると、私はとても君に会いたかった。会いたくて会いたく

てたまらなかった。まさか私が男にここまで恋い焦がれるとは思わなかったよ。あまりに会いたいものだから、ミュゼにいる君の窓口係に宛てて呼び出しの伝信を送ったところだ」

「君のような粋人にそこまで思われるなら、男女の壁など些細な問題だな。まさに光栄の極みだね」

「心にも無い事を」

アキラはあくまで茶化そうとする金瞳（きんどう）の青年に、あえて不機嫌な声色でそうなじった。だが相手は一切動じる様子はなかった。

「まあまあ。手間が省けて良かったじゃないか」

アキラは不機嫌な声色のままで続けた。

「あれほど会いたかったにもかかわらず、だ。いざこうやって君を前にすると、なぜかむかついてくるんだが、これはどうしてなのだろうな？」

「いや、いろいろ大変だとは想像してたけど、まあ君の事だから無事だとは思っていたさ」

「スカルモールドと一戦やり合ったんだぞ？」

へらへらとした相手の態度に業を煮やしたアキラは、テーブルを拳で音が出る程叩いてみせた。勿論、激高したわけではない。だが抗議の意志を強く表したかったのだ。

「ほう。そりゃ興味深い話だね」

本気で怒っていないのは相手はわかっているはずだ。だが、それでも抗議の意志に対しては何の頓着もない様子に、さすがのアキラも本気でムッとしだしていた。だが、それはすぐにため息になって外部に放出されて消えていった。

何を言っても無駄な相手である事を思い出したのだ。

「君には報告する事が山ほどあるが、それと同じくらいの文句があるという事だけは認識しておいてほしいものだな、ミリア」

アキラは紅茶のカップを受け皿ごとそっとテーブルに戻すと、金色の瞳を持つ長い茶色の髪をした目の前のデュナンを睨み据えてその名を呼んだ。

「ボクの方からも先に言っておくけど、ル＝キリアの総司令が生きていたのはボクのせいじゃないぞ」
「総司令だけじゃなくて、二人いる副司令もだ」
青年は声を立てずに、それでいておかしそうに笑って続けた。
「まあまあ。それにしてもあの完璧な死亡偽装には敬服するしかないね」
アキラの目の前でそう言って笑う人物は、誰あろうペトルウシュカ公ミリアであった。

「一人か？」
ミリアのくすくす笑いが収まるのを待つと、それとなく周りに注意をしながらアキラはそう尋ねた。
ミリアがこういったお忍びの遠征をする場合、ほぼ単身なのは間違いないとは思っていたが、念のために訪ねてみた。それはほんの気まぐれだったのだが、ミリアは意外な返答をした。
「いや、今回の旅行は側室が一緒なんだ」
アキラは再度辺りをゆっくりと見渡して、それらしい人影が見つからないのを確認してから口を開いた。
「今の冗談に私が気の利いた返答をすると思うか？」
「そこか？」
ミリアはやれやれ、と言う風に両手を広げた。
「こういう場合はだな、『正室より先に側室をもらったのか？』とか。あるいは『新婚旅行にしては妙に抹香臭いところにきたものだな』とか、さもなくば……」
「わかった。もういい」
「なんだ。いいのか？」
「いいんだ」
「つまらないな」
アキラは思い出していた。ペトルウシュカ兄弟と会話する場合の注意事項である。

『相手の話題を追いかけるべからず』

外見も性格もほとんど似たところのないミリアとエスカだが、双方をよく知るアキラはそれでも二つの共通点を発見していたのである。一つはいたずらっぽく笑う時の目尻の下がり具合。もう一つは切り出そうとする話が重要であればあるほど、話の導入時に全く関係のない冗談ばかりが続く事である。

つまり、ミリアはアキラに重要な話があるのであろう。もっとも、エスタリアで幽閉されているはずの人物がヴェリーユにまで遠征している時点で、事の重大さは理解しているつもりであった。

「まず、こんなところまでやってきた君の用件を聞こう……と思ったがやめた。とりあえず君は私の話を聞け」

ミリアはまたもや苦笑をすると肩をすくませた。

アキラはそんなミリアを見て、改めてその能力の理不尽さに思いを巡らせた。

ファランドールのどこにいても前触れもなく現れる事ができるのがミリア・ペトルウシュカという男なのだ。ウーモスの件でアキラはそれを受け入れる事にした。だから突然こんなところに現れた事については敢えて質問をしなかった。

何がどうなっているのかわからないが、ミリアにはアキラの行動が手に取るようにわかっているらしかった。それもまた、アキラにとっては理不尽と思う点であった。

ミリアが拒否しないのを見ると、アキラは簡潔に、しかし多少の嫌みを込める事は忘れずにル＝キリアに同道して見知ったこれまでの事をミリアに報告した。

アキラの話の腰を折る事無しに時々うなずきながら黙って聞いているミリアの表情を、アキラは冷静に観察していた。だが事が賢者やスカルモールドとの遭遇や架空と思われていた三聖が存在していたという話になっても、眼鏡の奥の金色の瞳は全く揺れる事がなかった。

当然ながらアキラは、そんなミリアに違和感を覚えた。
まるですべてが既知の事のように、目前の異能の青年は落ち着いているのだ。

「ふーん。一月経ってその賢者が『龍墓』から戻らなかったら、今後の事は合流予定の呪医とやらに従えという事なんだね？」
アキラの話を一通り聞き終わると、ミリアはそう念押しした。
「そうだ。あれからもう一月経つ。そろそろ呪医殿もヴェリーユ入りする頃なのだが」
「なるほどなるほど。それで君がこれからどう動くべきか、ボクに何か考えがあるのか無いのか、それをたずねる為にミュゼに連絡をいれたってわけだね？」
アキラはうなずいた。
ミリアの命で動く事はこれまでに何度もあった。しかしさすがに今回は長く公務を空けすぎていた。ヤリキィ・サンサ副司令が本部にいれば業務の遂行には問題はないものの、政治的には限界であろう。
そもそもサンサはミリアの息がかかった人物である。だからこそアキラの行動に幅がとれているわけである。すなわちミリアとて、もとよりその辺りは理解しているはずであり、諸々の要因を複合的に吟味した上で、今後どうするかというミリアとしての考えを聞きたかったのだ。

「いやいや。ありがとう、アキラ。お姫様……いや、今は女王様と言うべきかな。彼女の観察だけで良かったんだけど、君は実に有能だな。とても有意義な調査をしてくれたよ」
ミリアはねぎらいととれる言葉をアキラにかけた後、ニヤリと笑ってこう続けた。
「でも、もう充分だ。あとはこちらで引き受けよう」
アキラはミリアのその物言いに引っかかるものを感じた。ミリア

は一人称の代わりに「こちら」という言葉を使ったのだ。
ふいに先ほどのミリアの言葉が脳裏に甦った。
『側室を連れいる』
ミリアは確かにそう言ったのだ。
『こちら』とはいったい？
着々と増やしていた「同士」の事なのだろうか？
いや。だとしたらアキラも「そちらがわ」にいるはずだった。
それよりも、なぜミリアはアキラの報告に対して驚いた様子を見せないのだろうか？もともと喜怒哀楽をムリに隠す性格ではない。アキラの報告内容はどれも驚愕するに値する内容のものばかりのはずであった。
全てが既知の事だというのだろうか？

疑問をミリアに直接的にぶつけるべきかどうかを逡巡している間に、ミリアの方が口を開いた。
「君の話は一段落したようだから、今度はボクがここに来た理由を言おう」
「うむ」
ミリアはアキラの報告に対して、さしたる興味を持っていないようであった。たいした質問をしてこないのがその証拠である。ミリアは興味がある項目についてはかなり深くしつこく質問をする人間なのである。要するに今のミリアの興味は自分がアキラに会いに来た理由だけだという事なのであろう。アキラとしてはもはやそれを聞くしかないのだ。
「簡単に言うと、君にはさよならを言いに来たのさ」
あっさりと告げられたその言葉を、アキラの意識はすんなりと受け入れる事を拒絶した。
「何だと？」
思わず口を突いた言葉の後で見つめたミリアの表情は、アキラが息を呑むほど冷たいものだった。そこにはアキラの知る柔和なミリ

ア・ペトルウシュカはいなかった。
「君は急ぎドライアドに戻り、今後はエスカを守れ」
「待て。なにを言ってるんだ？」
ミリアの言葉に反射的に腰を浮かせて小さく怒鳴ったアキラは、しまったと舌打ちをすると、素早く辺りを見渡した。
もともと賑やかな場所である。それが幸いして、アキラの事を気に掛けている人間はいないようだった。
「興奮するな」
ミリアは軽くアゴを上げてアキラに席に着くように促した。
「言葉の通りだよ。君はあの気の強そうな副官からエスカがアプサラス三世の大葬に列席する事は聞いているだろう？」
アキラはうなずいた。
「マルクがフェリックス……いやエラン五世の名代で列席することになって、そのお供に指名されたんだろう？五大老に」
ミリアはペシカレフ公爵をマルクという名で呼んだ。又従兄弟にあたるペシカレフ公マルクとミリアは旧知の仲なのだ。
「ミリア。君は何が言いたい？」
「いやだなあ。君ともあろう者がわからないのかい？ならば教えてやろう。いいか、エスカの幕僚長になった特級バードのタ＝タン大佐の正体はマーリン正教会の人間で、しかも五大老と裏で取引をしている節があるんだぞ」
「何だと？」
それは勿論、アキラには初耳であった。
「この際、はっきり言おう。タ＝タン大佐は五大老の犬だ。マーリン正教会は今度の戦争でドライアド、いや五大老と手を組んだという事さ。タ＝タン大佐は五大老がエスカにつけた首輪というわけだ」
「ばかな。バード庁は五大老と対立していたはずだろう？」
「だから情勢なんて一晩で変わるのさ。もっとも、今回の動きはどうにも早すぎる。だからボクも焦っているのさ」
「焦っている？」

「いや、ボクの話はどうでもいいんだ。いいかい、タ＝タン大佐の件は、マーリン正教会がファルナ朝ドライアド王国に対して興味を無くした徴（しるし）と見るべきだ。ドライアドだけじゃない、新しい枠組みでこの世界を治めようと言うことなのだろうね。アプサラス三世の死はファランドールの歴史を急がせる調べ矢だったのさ」

ミリアはそこまで言うとテーブルの上の封書を指で弾き、それをエスカの目の前に滑らせた。

「次いでと言っては何だけど、多分……いや間違いなくその中には書かれていないタ＝タン大佐のさらなる情報を君には教えておこう」

「情報？」

「このままだと君はエスカの下で彼女と同列の扱いになる。いや、タ＝タン大佐はエスカと閨（ねや）を共にする訳だから君よりもより近しい存在となるのは明らかだ」

「閨？」

「何だ、そんな事もまだ君のところには届いてないのか？」

「ニーム・タ＝タンという名前と、特級バードである事くらいだ」

ミリアは大げさに肩をすくめて見せた。

「せめて、この封書の中身にはそれについての記述があると信じておくよ」

「私もそう願いたい」

「もっとも、それはどうでもいい」

「と、言うと？」

「そちらはこのボクが手を打っておく。とはいえ正体は知っておいた方がいい。いいかい、ニーム・タ＝タンはマーリン正教会の人間だと言ったが、ただの手先や末端じゃない。もちろん高位ルーンが使える数少ないルーナーというだけでも大した物だが、彼女はそれ以上の存在だ。本来五大老の先棒を担ぐような役回りをするような小物じゃないのさ」

アキラは眉根を寄せた。

「まさか？」

「そのまさか、だよ。エスカのお相手は賢者だ。しかもただの賢者じゃない。あの《真赭の頤(まそほのおとがい)》と同列にある者、と言えばわかるだろう？」

アキラにはミリアに切り返す言葉が見つからなかった。目の前の金色の瞳を持つ青年が喋る言葉は、アキラの体をすり抜けてどこかに消えてしまうような不確かな空気のように思えた。それはまるでヴェリーユの町に漂う蒸気のようにつかみ所が無く、今までアキラが確実なものとして構築してきた世界そのものの輪郭をあやふやにさせるのに充分だった。

ル＝キリアとの旅で得た想像を絶する程の事実をもってしても、驚愕はしたがアキラを放心させるほどの出来事はなかった。

とはいえミリアの言葉を信じないという選択肢はアキラにはない。ミリアの態度ですでにアキラにはわかっていたのだ。彼が知り得た情報はミリアにとってはすでに興味の対象ではなかった。なぜならその証拠に、ミリアは大賢者の名、それも賢者名ではなく現名(うつしな)を当たり前のように口にした。知っていたからこそ言えたのだ。ドライアドのバードの中に賢者が紛れ込んでいるなど、諜報組織の中心にいるアキラにさえ届いていない事だ。

だが、ミリアをもっとも理解していたつもりのアキラである。冗談なのかそうでないのかの違いはわかる。ただし理解していたと思った範疇がアキラの予想よりも大幅に狭かった事実も同時に認識する事になった。

「いつからだ？」

アキラは絞り出すような声でようやくそうミリアに言葉を投げた。

「私が言った事は全部知っていたんだな？」

だが、ミリアはそれにはなにも反応しなかった。

「今まで私に嘘をついていたのか？その口ぶりだと君はこのファランドールの事を、実はかなり深く知っているようだ。だからあんな

計画を考えたんだな？」
そこまで口にして、アキラの脳裏にある言葉が浮かんだ。
「いつか言っていた『神名の欠落（しんめいのけつらく）』も、実はもうあの時君は解決していたんだな？」
ミリアはアキラの問いかけには答えず、寂しそうな顔をして視線を外し、通りをゆく人々を眺めながらつぶやいた。
「ボクにとって、君は無二の君だから、敢えて話そう。あれは君を試したんだ」
「試した、だと？」
ミリアはうなずいた。
「君が持ち主、もしくはその関係者でないことを最終的に確認させてもらったようなものかな」
「わけがわからん」
憮然とするアキラをじっと見つめながら珍しく躊躇したような表情をしたが、それもすぐに普段の微笑に戻った。そして声の調子を落としてぽつんと告げた。
「？？実はボクの手元には、一冊の本がある」
「本？」
唐突に口から出た「本」という言葉にアキラはさすがに混乱しかけたが、考えてみればそれはいつものミリアの調子であった。脈絡のない話題がいくつも出るかと思うと、話の最後にはそれが全てつながっている……それがミリアの思考形態なのであろう。
ミリアは続けた。
「そこには、ファランドール中の歴史学者や考古学者、民俗学者といった連中が知りたいと思う事は凡そ書かれている」
「え？」
「もちろん、『神名の欠落』と言われる神話の空白部分についてもね」
「ならば」
「だからこそ、さ」

少し強い調子でアキラの言葉を遮ると、ミリアは視線を親友に戻した。
「勘違いしないで欲しいが、その本は歴史書でもなければ伝承本でもない。少なくとも学術的な検証は一切されていない、創作物語とでも呼ぶべきものなんだ」
「物語だと？」
ミリアはうなずくと、両肘をテーブルについて、アゴを手の上に載せた。
「まあ、物語と言うにはあまりにつまらない話だけど、少なくともマーリンがファランドールを作るところから、新教会が誕生する所までの歴史が書かれているのは確かだよ。それも、誰も信じないだろうって言う、ばかばかしい話が延々続くのさ。いや、ばかばかしいと言うよりは、ボクらが幸せに生きて行こうとするなら知らなくていい話、というべきだろうね」
「……」
「その本は作者と名乗る人物から直接手渡された。残酷な事にその時ボクはまだたった六歳だった」
「いったい何の話をしている？」
「まったく、子供に妙な本を与えるもんじゃないね。おかげでボクはこんな人間になっちゃったんだからね。まあ、あの本を読んでなければ貴族学校なんかには行かなかったろうから、見方に依っちゃあ、あの本は君に巡り会わせてくれた恩人だといえなくもないけど」
「何が、書かれているんだ？」
「そうだな。近い話では正教会が何の目的で生まれたのか、そもそも三聖とは何者か、さらに言えば賢者とは何なのか……」
「それが、全部真実だと？」
「ボクはね。その本は頭のおかしいヤツが妄想で書いたと思いたかったんだ……」
アキラの質問に、ミリアはそう答えた。いや、ミリアの言葉がアキラの求めた問いに対する答えになっていただけである。彼はアキ

ラの目をじっと見つめながら、寂しそうな表情で淡々と「本」についてしゃべっていただけだった。

「いやあ、後頭部を石鎚で打たれるとはまさにあのことだろうねえ。??最初はペトルウシュカ家の図書館だ。知っての通り古い家柄だからね。文献の古さにも定評がある。だからボクはまずは手近なところからその本の考証をおこなった。もちろんその本に書かれている内容をすべて考証できる程の資料はない。だいたい本に書かれている事の検証を本に書かれているものでやろうっていうこと自体が愚鈍な行為だろう?だから検証する為の切り口は多ければ多い方がいい。それも歴史書みたいなものだけではダメだ。そもそもボクに言わせれば過去に起こった事実なんていうものは歴史書には書かれていないものだからね。だからボクは世界中の主要な書庫を探って回る事にしたのさ。わかるかい?まだおねしょが治らないガキの頃から、ボクは人殺しの歴史を調べて回ってたんだ」

「誰なんだ、その本を書いた人物とは?」

ミリアはこのアキラの質問には首を横に振って見せた。

「知らないアルヴのお兄さんさ。いや、お爺さんかもしれないな」

「なんだと?」

「名前もわからない。そいつは突然目の前に現れて『お前に面白い本をやろう』と言ったんだ。そしてこうも言った。『この本に書かれている事は全部事実だ。この本をお前がどう使うのかはお前の好きにしろ』ってね。そして消えたのさ。それきり会っていない」

「それだけを言ったのか?」

「いや」

ミリアは意味ありげに唇の端だけで笑った。

「ファランドールにその本は全部で四冊あるそうだ。本の表題は全て同じだが、副題がそれぞれ違うらしい。内容については基本的なものは全て同じ。だが、それぞれ記載されていない事柄がある。それから、読むにあたってはいくつか決まり事も言い渡された」

「決まり事?」

「知らないお兄さん曰く、
一、一般に検証・考証されている事柄以外については、本の内容を他人にしゃべってはならない。
一、本は絶対に他人に見せてはならない。また見られてもならない。
一、本を焼却、破壊、あるいは遺棄するなど、自発的に手放してはならない。
一、以上の決まり事に違反した場合、持ち主の最も大切な人が死亡、もしくは死んだ方が幸せだと思える程の不幸になる」
「なるほど。いかにもな話だな。ますますその作者に興味が湧いてくる。ただの酔狂ではなさそうだ」
「いや、酔狂なのかもしれない」
「何だと？」
「いや、それはまあいいさ。どちらにしろ巧妙ではある。自分の命はどうなってもいいと思う時はあるだろうが、自分にとって最も大切な人間が死ぬかもしれないと言われると、従わざるを得ないだろう？何せ、それがいったい誰なのかは本人にもわからないんだからね」
アキラはうなずいた。
それはそうだ。一番大切な人だと本人が思っていても、それが果たして本当にそうなのかという保証はない。
だが……。
「その、一番大切な人の判定は誰がやるんだ？」
「本だろうね」
ミリアは即答した。
「いろいろ考えたけどそう言う結論に達したんだ。ボクはまず本を所有する際に、血を使って本と契約させられた。なにやら妙なルーンなり呪法なりがかけられた本なのは確かだ。つまり普通の本じゃないってことさ」
「君は、本の作者だという人間にアタリがついているんじゃないの

か？」
「もちろん候補者はいるさ。相当高位のルーンか、あるいは複雑で強い呪法を本に練り込める人間が、そうそういるわけじゃないだろう？」
「それはそうだが」
「でも、そこまでさ。本人に再び会うまでは単なる推測に過ぎない。それよりも問題は別の所にある」
「問題？」
「言っただろう？記述内容が少し違う本がファランドールには四冊あるんだぞ？」
「つまり、ミリアのような人間が四人いる、という事か？」
「正確にはボクを入れて八人だ」
「本は四冊じゃないのか？」
「その作者が酔狂でやっていると思ったのはそこさ。彼は何の為に四人の人間に本を手渡したんだと思う？」
「自分の知識を誰かにひけらかしたい、という事ではなさそうだな」
「当たり前だ。それだったら普通に学会などに発表すればいいのさ。本にして流通させてもいいだろう。そうすれば考証資料なんかなくとも話題にはなるだろうし、多くの人の目に触れさせることもできる。つまり、作者はその特別な本を手にした人間が、その内容を知った後にいったいどういう行動をとるのかを眺めて楽しんでるのさ」
「まさか」
「まさか、かもしれない。では良いように解釈すればこうなる。彼は事情があって自分では行動できない。だから本を渡した相手に何かをして欲しいと思っている」
「ふむ」
「どちらにしろ本を手渡された人間にとっては同じ事さ」
「なるほど。では、本の持ち主ではない、後の四人とは？」
「その特殊な本の持ち主が誰かを知らされている人間が一冊の本につき一人ずついる」

「え？」
「わかりやすく言おう。本の作者は本をボクに手渡した。次にその作者は自分の本をミリア・ペトルウシュカに手渡した事を一人だけに教えているんだ。だが、本の持ち主にはそう言う人物が一人いるとだけ知らされて、誰だかは教えてもらえないのさ」
「いったい何の為に？」
「監視なのか、本の持ち主に常に精神的な圧力をかける為なのか、それはわからない。まあ、本をただ与えるだけじゃ面白くないと思ったのかもしれない。一つ言えるのは、その人間にもそいつは同じ「決まり事」を押しつけているだろうって事さ」
「君は、そのもう一人を知っているのか？」
「それは君には関係の無い事だよ、アキラ。言ったろう？アプサラス三世の死が、ボクの想定を超えて急激に情勢を変化させてしまった。だから君とボクの関係はここで終わりにしないといけないんだ」
ようやく話が元に戻った。アキラはそう思った。だが……
「しかし」
「君はエスカを守れ。エスカが知らない事を君はもう知っている。それはエスカにとって大きな武器になる。エスカの代わりに君はいろいろと経験をしたようなものさ」
「おい、まさか最初から……」
「ともかく、これからボクはボクのやりたいようにやる。それだけだ」
「待て、他の、あと三冊あるその本の持ち主は誰なんだ？」
ミリアは首を横に振った。
「わからない。わかればこんな苦労はしないさ。言い換えるなら、ボクの事も誰にも知られていないはずだよ。本の作者が何を基準に持ち主を選んだのかがわからない限りはね。もっとも、何らかの力を持っている人間を選んでいるのは確かだろう。僕自身がいい例だ。問題はその『力』がどんな力なのか、さ」
「もう一つ教えてくれ。その本には表題と副題があると言ったな？

何という物語なんだ？」
　アキラのその問いには、ミリアはあっけなく答えた。
「その本の表題は『合わせ月の夜』　そしてボクが持っている本の副題は『深紅の綺羅』　知っての通り三聖の名だよ」
「『合わせ月』だって？」
　ミリアはうなずいた。
「その本を読めば、『合わせ月』とは一体何なのかがわかる仕組みになっているんだ。ただし、一冊に書かれているのはすべてじゃない。完全に知りたければ四冊揃える必要がある。つまりボクは四分の一を知らされているだけさ。こうなると残りの謎とは一体何なのか知りたくてたまらなくなる。どうだい？巧妙な遊戯だと思わないかい」
　アキラは息を呑んだ。ミリアの言葉の意味するところを悟ったのだ。
　そう。ミリアはその四冊を全て手に入れようとしているのである。それはアキラがミリアに聞かされていた「計画」とは全く違う目的であった。

「ボクは君とはもう少し今までの関係を続けていたかった。この気持ちは嘘じゃない。何せ君を話し相手に呑むビールほど旨いものはないからね。君との時間はボクにとって心底くつろげて、楽しめる時間だったよ」
「ミリア」
「でも、ボクもそろそろ動き出す時が来たみたいだ。いや、もう動き始めている。だからここへは君にさよならを言いに来たんだ」
　アキラは慌ててミリアの言葉を遮った。
「ちょっと待て」
　ミリアはしかし、徹頭徹尾、己の都合で動く人間だった。
「今言った通りだ。大葬でマルクは必ずつまらない事を『やらかす』だろう。もしやらかさなければ、誰かがムリにでも仕向けるだろう

ね。マルクがどうなろうと知ったことじゃあないが、そうなれば絶体絶命になるのは護衛の役を仰せつかったエスカだ。さらに言えばすでに大賢者に懐に入られた段階で彼の命は五大老側に握られたも同然だろうけどね。だから君はこれから、その目で確かめなくちゃいけない」

「確かめる？」

「大賢者《天色の？》（あまいろのくさび）ことニーム・タ＝タンが本当に五大老の刺客としてエスカの側で牙を隠しているのか、あるいは犬の振りをした狼なのかを、だよ」

ミリアの語り口は終始静かなものだった。通りを行き交う人々を眺めながら、降り始めた雪の積もり具合の話をしているような、極めて日常的な話題を口にしているようにしかアキラの目には映らなかった。

アキラはその口ぶりで理解した。ミリアはニーム・タ＝タン、いや大賢者《天色の？》の本当の目的すら知っているのだろうと。

「まあ、さっきも言ったように《天色の？》にはボクの方が先に会うことになるだろうから、場合によっては君は彼女の顔を一度も見ることはないかも知れないけれどね」

それは理屈ではなく、ミリアならば知らぬはずはないという根拠のない思い込みでしかなかったが、「本」の存在を知らされた今では、そう考えなければ自らの道化振りが助長されるようで、惨めだと思ったのだ。

「タ＝タン大佐が実はマーリンの大賢者だと言う事を、五大老側は？」

アキラは敢えて《天色の？》という名を口にしなかった。賢者の名を口にすると、その先入観が持つ力に気圧されるかもしれないと思ったのだ。だが、口にした瞬間にアキラは自分がまだまだ弱い心の持ち主だと言うことを思い知り、心の奥から苦いものがこみ上げてくるのを感じていた。

「知るものか」

ミリアはそんなアキラの思惑を知ってか知らずか、吐き捨てるようにそう言った。
「誰が誰に何の目的を持って利用されているのか、利用しようと企んでいるのか。君がエスカの片腕を名乗るなら、それを早急に見極める事だよ。それにはいつまでもこんなところにいては駄目だ」
そこまで言うと、ミリアはふいに柔和な表情に戻った。
「話は変わるけど、せっかくだから餞別代わりにボクの側室を紹介しておこう」
「え？おい、側室というのは冗談じゃないのか？」
「ボクがあのエスカのようなつまらない冗談を言うものか。君の後ろをよく見たまえ」
ミリアは穏やかな声でそう言った。
ミリアに翻弄されっぱなしのアキラは唇を噛むと、それでも言われた通りにゆっくりと後ろを振り向いた。
そこは先ほどすでに特に変わった人物が居なかった事を確認したばかりだったが、それでもミリアがそう言うのだ。人の気配はないが、アキラはそこに誰かが居ると確信してもう一度辺りを見渡した。道を行き交う巡礼者や観光客にも、通りを挟んだ向こう側のカフェにもそれと思しき人物の姿はなかった。
「誰もいないぞ」
アキラはやはりミリアにかつがれたのだと合点すると、ため息をつきながら視線をミリアに戻した。
だが……。

「お久しぶりです、アキラ様」
アキラは凍り付いた。ミリアの横には長身のアルヴの少女が立っていたのだ。
誰しも一目見れば忘れる事のない特徴的なその髪の色を見て、アキラは声を失った。
後ろの高い位置で一房にまとめた長い髪……その金と赤の二色が

斑になった『モテア』の少女をアキラはよく知っていた。
「スノウ！」
驚いたのはスノウ・キリエンカの存在だけではなかった。アキラが後ろを振り向いていたのはほんの一、二秒のはずで、一人の人間が、それも大柄なアルヴが隠れる場所などそこには無いはずだった。
（これが、ミリアの特殊な能力だというのか？）
時間の概念を無視するように、ファランドールのどこにでも現れるミリア・ペトルウシュカの尋常ならざる能力……それは本人以外の人間に対しても使う事が出来るようだった。
だがその能力がどういうものなのか、アキラはいまだにそれを知らされてはいない。
（つまり、そう言う事か）
アキラはその事実に思い至り、自分でミリアの無二の腹心だと思い込んでいただけなのだとあらためて理解した。
明かす事の無かった秘密を、目の前のモテアの少女は知っていて、自分は知らないのだ。
「なぜ、スノウがお前と一緒にいるんだ？」
ミリアはその問いかけに一切答えず、かわりに見た事もない冷たいも表情で吐き捨てるようにつぶやいた。
「エスカに会ったら伝えてくれ。どんな理由があろうと、スノウの事は絶対に許さないと」
アキラはなにも答えられなかった。そんなアキラに、スノウはいつものぼんやりとした表情のまま口を開いた。
「ミリアが今言った事は伝えなくてもいいです。エスカには、私がミリアに無事に会えて喜んでいたとだけ伝えて下さい」
スノウはミリアの元に戻るという望みが叶った事を感謝し、そのミリアは呪詛の言葉を同じ人物に対してアキラに託した。
「それから」
スノウは視線をテーブルの上の封書に注ぎながら続けた。

「ミリアが言った側室というのは正しくはありません。私達はまだ閨をともにはしておりませんし、そもそも当分その予定はありません。正室が決まらぬうちに先に側室が来るなどあり得ません」
「あ、ああ……」
二人の一連の話は聞いていたのだろう。だが、スノウにとって大切なのは「側室」という言葉の訂正だけのようだった。
「さて、そろそろボク達はおいとまするけど、君も早めにあの忠実な部下達と一緒にヴェリーユを出た方がいい。急がないとここは閉ざされる」
ミリアは空を見ながらそうつぶやいた。
ヴェリーユに本格的な冬が訪れると、その降雪量の為しばしば外界との交通が断絶する事が知られている。ミリアにはその天候の崩れがわかるのだろう。
「それからこれはちょっとした余興だ。さっき振り返った時、君は通りの向こうのカフェにアルヴの二人連れがいたのを見たかい？」
アキラは怪訝な顔をするともう一度振り返って通りを挟んだはす向かいのカフェに視線を向けた。
確かにアルヴの二人連れがテーブルを挟んで珈琲を飲んでいた。丁度給仕がそのテーブルにやってきて、なにやら折りたたんだ紙片を手渡しているところだった。
「彼女たちは二人ともマーリン教会の賢者だよ。若い方が《群青の矛（ぐんじょうのほこ）》、もう一人が《二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）》という名だ」
「なんだって？」
「さて、ボク達はこれで失礼しよう。君はもう少し向かいの店を見ているといい。正教会の『賢者』と新教会の『僧正』との闘いが見られるかもしれない」
「え？」
「興味深い余興だろう？さてさて、ヴェリーユという特殊な場所ではどっちが勝つんだろうね」
「ミリア、君は一体？」

「ほら、始まるよ」
ミリアに促され、アキラは再び視線を向かいのカフェに移した。
賢者だという二人のアルヴはどちらも女で、年長のアルヴは手渡された紙片を広げた瞬間、明らかに動揺した表情に変わった。彼女は紙片を持ってきた給仕を呼び止めようと中腰になったが、そこを数人の男達が囲んだ。
二人のアルヴを囲んだ連中は、見たところ教会の警備役として街角に立っている僧兵のようだったが、その中に一人だけ橙色の僧服の男が居た。見れば手には剣ではなく儀仗を持っている。ルーナーに違いなかった。
「橙色の服の彼はシーン・ジクス。僧正と呼ばれる新教会の高位ルーナーの一人で、どうやらここヴェリーユの守備役としては上位の人間らしいよ」
ミリアの説明にアキラは視線を戻した。
が……。
そこにはもうミリアの姿はなかった。もちろん、スノウの姿も。

# 第三十五話　十年戦争

部屋の中をうろうろと歩き回るエルデに、さすがのアプリリアージェも業を煮やしたのか、座って待つように懇願した。

「そんなにイライラして眉間に皺を寄せていると、せっかくの器量良しが台無しですよ」

その言葉を聞いたエルデは、ただでさえつり上がっている目尻をさらにつり上げると、アプリリアージェをにらみ据えて口を開きかけた。だが何も言わずに両肩を落とすと、深いため息を一つ、ついた。

「あらあら」

その様子を見たアプリリアージェもやれやれという風にため息をついた。

アプリリアージェはエルネスティーネ達の帰りを待ちながら部屋付きの給仕に運ばせた紅茶を楽しんでいた。勿論アプリリアージェだけでなく、紅茶はエルデの分も用意されていた。だがエルデは用意されたカップに手を付けようとはしなかった。それどころか椅子にもソファにも座らずに、ただ広い居間を、熊よろしくうろうろと歩き回っていたのだ。

ただ歩き回るだけならいい。アプリリアージェも特に干渉せずに放置していたに違いない。だがアプリリアージェが耐えかねたのは、エルデの持つエーテルであった。

エルデは自らのイライラした気分をエーテルに変換して部屋中にまき散らすかのように、部屋の空気をかき乱していたのである。

さらに言えば、ただのイライラであれば、アプリリアージェも何とか許容したであろうが、エルデ自身が纏うエーテルの雰囲気は相当に良くなかった。いや、簡単に言えば「かなり」悪かったのである。

「時のゆりかご」もしくは「龍墓」と呼ばれるあの特殊な空間で目覚めてから、エルデがこれほど周りの空気に影響を与えるエーテルを纏うのは初めてだった。

それは「居心地が悪い」「不快だ」などといった言葉で表せるような生やさしいものではなかった。まるで何が出てくるのかわからない真っ暗な部屋に置き去りにされたような気分なのである。体中の産毛の先に何かが触れている。その何かはザワザワとぜん動しているが、正体が見えない。何しろ真っ暗なのだ。そしてまるで方向がわからないのに何我が近づいている音がする。それは聞いた事も無いような音で、低いかと思えば高く感じ、耳を澄ませるとぼんやりとする。時折風も吹くが、それは真下からも真上からもやってくる。しかも一定の力でなく、グニャグニャと体を撫で回るようにして纏わり付くように感じる。感覚の全てを不快にさせるような一つ一つの未知の事象に対して、人間はそうそう耐えられるものではない。自分ではどうしようもない夢のただ中にいて、得体の知れないものにもてあそばれているような不安と焦燥が入り交り、恐怖の一歩手前で立ち止まるような、そんな気分にさせているのである。エルデのエーテルは。

そして実のところアプリリアージェはさっきから高まる動悸を抑えられずに閉口していた。少なくとも閉塞された空間とは言え、そんな雰囲気を充満させるような強いエーテルを持つ人間にアプリリアージェはこれまで出会った事がなかった。

「こうして二人だけになるなんて滅多にない機会ですから、じっくりお話しませんか？」

もちろん、その精霊波がエルデのイライラした気分により醸し出されているというのはアプリリアージェの推理でしかなかったが、それはまず間違いなかった。だから推理が正しいかどうかの検証をする時間があるならば、とにかくこの得体の知れない不安を紛らせる為に、発生源であるエルデを何とかするべきだと考えたのだ。具

体的には相手の気分を和らげる事が出来れば手っ取り早く、かつ確実。いや、ひょっとすると唯一の方法かもしれないと感じていた。それにはまずは会話で相手の思考をこちらに引き込む事である。

そう考えて声をかけたのだが、実は声を出さなければその不快感に押しつぶされてしまいそうになっていたからかもしれなかった。

アプリリアージェに声をかけられたエルデは立ち止まった。そして文句を言わず、意外に素直にその提案に従い、傍らのソファに腰を下ろした。

とはいえその所作にさえ、エルデのいらだちは見て取れた。

「二人だけって……ここに居るんは二人だけやないやろ？」

そう言うエルデの視線はアプリリアージェの隣に座っている小柄なアルヴィンの少年に注がれていた。黒い面を被ったテンリーゼン・クラルヴァインである。エルネスティーネ達と入れ替わりに風呂から上がって来たのだ。

「でもまあ、二人きりみたいなもんかな」

エルデは自分でそう言って納得すると、今度はあらためてアプリリアージェの顔をじっと見つめた。

マントの下は紗一枚（うすぎぬ）の姿であったエルデは、とりあえず部屋に用意されていた夜着に袖を通していた。裸同然の姿にマントを羽織っただけというあられもない格好からようやく脱していたが、用意されていた夜具は成人デュナン、それも男性用のもののようで、デュナンより小柄なピクシィの女であるエルデには、あらゆる基準から見ても大きすぎた。

手を伸ばしても指先すら見えない上着の袖をまくり上げては見たものの、上質の細い絹糸で織られた薄手の生地は、たいした抵抗を見せずにするすると元の形に戻った。最初のうちこそそれを再びまくり上げ、ずりおちてはまくり上げるという不毛な格闘を続けていたが、さすがに今はもう白旗を掲げたようだった。勿論その闘いはエルデの敗戦で終結したのだ。抵抗を止めたエルデは所存無げにそ

の余った袖をぐるぐると回しながら、ソファの上で相変わらず落ち着かない様子を見せていた。

「エイル君は一時間ほどかかると言ってましたね。だとするともうあと半時間ほどですよ。その間、紅茶でも飲んでゆったりとした気分で待ってはどうですか？」

アプリリアージェの言葉に、エルデはふてくされたような顔で返した。

「リリア姉さんには今のウチの気持ちはわからへんと思う。なんせ味のある食べ物なんて、二年振りなんやで？なんかこう、その時が早よ来いひんかなって、そわそわしてどうにも落ち着かへんねん」

「だからですよ」

アプリリアージェは微笑んだまま、子供に言って聞かせるようにゆっくりと声をかけた。

「おいしい紅茶を飲めば、そのそわそわした気分もきっと落ち着きますよ」

自分の中に次々と沸き上がっては霧散していく不安は紅茶ではとても抑えられない事を思い知らされていたアプリリアージェは、微笑みの裏で苦笑していた。

だが、エルデは即座にその提案を却下した。

「それはでけへん相談や」

「え？」

「考えてみ」

エルデはソファから立ち上がると、裸足のまま再び部屋を歩き始めた。全く落ち着きのない事この上ない。

アプリリアージェは軽く呆れながらもエルデのその様子をつぶさに観察した。

女のアプリリアージェから見ても一見近寄りがたい程の美貌と侵しがたい気品を纏っているエルデだが、その大人っぽい雰囲気とは裏腹に行動は本当に子供のようで、とらえどころがない。目覚めて

から『時のゆりかご』を出るまでの取り澄ましたエルデとはまるで別人で、ヴェリーユに入ってから……いや、この部屋に入ってからはまるで壊れた人形のようにあてもなく、くるくると動き回るだけである。

いや、違う。

アプリリアージェはあらためてエルデに関する最近の記憶を紐解いた。

落ち着きがなくなった原因は明らかだったのだ。

「二年振りに口にする味のする食事なんやで。それがヴェリーユの宿で出される抹香臭い紅茶とか、ありえへんやろ？」

本人は「そわそわ」と言ったが、明らかに「イライラ」した態度を隠さずにどうにも落ち着かない様子になったのは、エイルがエルデを残して部屋を出て行ってからなのだ。

言い換えるなら、エイルと離れたとたんにエルデは落ち着かなくなり、イライラし始めたという事なのである。

それはマナちゃんを伴ったテンリーゼンがティアナの言う「個室風呂」から部屋に戻った時の事で、アプリリアージェ達と再会した珍しく素顔……と言っても顔半分は例の入れ墨だったが……の「人形」が、素顔を隠しながらエイルの前を走り去り、いくつかある部屋の一つに入り込んだかと思うとすぐに仮面をして戻ってきた。無言でその小さな手から渡された袋が、原因の元と言えた。

テンリーゼンがエイルの目の前に差し出してきた大きめの麻の袋は、調達屋のベック・ガーニーからエイル宛てに託されていた品物だった。ヴェリーユの調達屋組合に日参しているというティアナが持って帰って来たものだと言う。

エイルは袋に入っていた手紙を読むとぱっと顔を輝かせた。大袋の中に別に包まれていた穀物袋の口を縛る紐を解くのももどかしいといった様子で中身を検めると、エイルは急に「やったぞ」と叫んだ。そしてその隣で同じように麻袋を覗き込んでいたエルデにその

まま抱きついた。エイルのそのあまりに開けっぴろげな感情の発露に、アプリリアージェは驚いた。もちろん、そんな風に喜びを表現するエイルを初めて見たからに他ならない。

だが一番驚いたのは抱きつかれた当のエルデだったのかもしれない。

「な、なんやねん……」

しかしそのエルデの抗議の言葉を無視して、エイルはエルデに抱きついたまま、こう言ったのだ。

「一時間待ってろ。以前に言ってたヤツを作ってやる」

その一言はまるでルーンの認証文のような効果を持っていた。エルデの表情があっという間にかわったのだ。

エイルに抱きつかれ、おそらくは恥ずかしさで頬を真っ赤に染め上げていたエルデの顔が、その言葉を聞いたとたんにエイルと同じくらい、いやそれ以上に嬉しさいっぱいという笑みでぱっと輝いたのだ。

それまでも、抗議を唱え抵抗している様子を見せてはいたものの、アプリリアージェの目にはエルデが本気でエイルの腕から逃げようとしているようには見えなかった。そしてエイルの言葉でエルデの抵抗は完全に止まり、今度はエルデの方からエイルの両手を握りしめたのである。

「ホンマか？」

「嘘なんか言うもんか」

「やったー！」

その子供っぽい快哉に、アプリリアージェはただただ呆然と成り行きを見守るしかなかった。

手伝いの申し出を頑なに拒み「一時間だけ待っていろと」言って部屋を出て行ったエイルを、その時は満面の笑顔で見送ったはずのエルデなのだが、そのわずか数分後には今のようにイライラと落ち着きを無くしていたという訳であった。

「姉さん、聞いてるんか？」
そんな事を考えていたアプリリアージェのすぐ横でエルデの声がした。
「あ、えっと。何でしたっけ？」
エルデはあからさまに大きなため息を吐くと、肩をすくめて両腕を広げて見せた。
「それより聞こうと思っていたんですが、エイル君は部屋付きのあの小さな厨房で一体何を作っているんですか？」
エルデのイライラの原因の謎を解く鍵の一つが「それ」なのは明白だった。
「状況から判断すると、それは以前から二人で『食べたいね』と話し合っていた食べ物と言う事ですよね？そしてそれはベックに頼んで調達してもらうようなものですから、どこででも手に入るような材料ではないもので作られる食べ物だと推理できます。さらに言えばエイル君はファランドールではなく、フォウの人間です。つまり、その食べ物には私もとても興味があります」
エルデはアプリリアージェの言葉を聞くと、ニヤリと笑って見せた。
だが、
「秘密や」
そう嬉しそうに言うと、悪戯を企むような笑顔を見せて回答を拒否した。
その子供っぽいエルデの態度に、アプリリアージェはやれやれという風に目を伏せると、三杯目の紅茶をカップに注いだ。
「残念ながらこのお茶は高級品です。ちっとも抹香臭くありませんよ」
「ふふん」
その言葉をきいてなお、エルデは嘲笑を含んだ目でアプリリアージェを見下ろした。
「紅茶は味覚を微妙に狂わせる成分が入ってるんや。特にそんな香

りの強い茶葉のエキスを先に飲むとか、そんなもったいない事できるかいな」
「はいはい」
アプリリアージェも対抗上「呆れました」という態度を隠さずにそう言うと、何かを思い出したように、口を開いた。要するに話題を変えたのだ。
「それはそうと」
「ん？」
「エルデはネスティと戦うつもりなのですか？いえ、既にさっきから戦闘は始まっている感じですね……」
「は？」
「いえ。ちょっと聞いてみただけです。ふふふ」
最後は挑発するかのように、わざと声を上げて笑って見せた。エルデから視線を逸らしたままで。
「当のエイル君はいったいどっちを選ぶんでしょうね。野次馬としては興味津々です」
「ぐ」
エルデは口から出かかった言葉を飲み込んだ。アプリリアージェが顔を上げると、そこには頬を赤く染めて自分を睨む瞳髪黒色の少女がいた。
「か……」
「か？」
「関係あらへん！」
「何がです？」
「え？」
「何が何と、いえ、誰が誰と関係ないんですか？」
「そ、それは……」
エルデは顔を真っ赤にしたまま言い淀むとうつむいた。
「まあ、少なくとも私には関係無い事なのは確かですけれど」
アプリリアージェがそう言うと、エルデは拳を握りしめて顔を上

げて、キッとした顔を向けた。
「いらんことを……」
「え？」
「エイルの前でいらんことを言うんやないで」
「ふーん。基本的な事は否定しないんですね」
「全力で否定や！」
「まあまあ。で、さっきの言葉は私に頼んでいるんですか？それとも命令ですか？」
エルデは再び顔を床に向けた。
「ぐ……」
「ぐ？」
「――いらん事を、言わんといて……下さい」
アプリリアージェはエルデのその言葉を聞くと、思わず吹き出した。
「何がおかしい！」
エルデは即座に反応すると、食ってかかった。
しかしアプリリアージェは目尻に溢れる涙を拭いながら、反対側の手を挙げてエルデを制した。
「ごめんなさい。『あのエルデ』は実はこんなにもかわいらしい女の子なのか、なんて事を思ったら、つい」
「な、なんやて！」
アプリリアージェはチラリとテンリーゼンの様子を見たが、案の定無表情のままで二杯目の紅茶をすすっているだけだった。
「いえ、正直に言いますと、初めてエルデの姿を見た時には女の子というよりも、ネスティやエイル君に比べてもずいぶんと大人っぽいと感じたものですから。あなたの今の、言葉は悪いですが幼い態度との間に、どうにも違和感があって背中がもぞもぞするんです」
「知らんがな！」
「実のところ一体あなたは何歳なんですか、エルデ・ヴァイス？エイル君の前では今後一切『いらん事』は言わないと誓いますから、

そのかわりに本当の所を教えてくれませんか？」
　エルデはその形のいい眉をつり上げたままで下唇を噛んだ。
「私はどっちでもいいんですよ。実のところあなたの年齢に対する興味より、あなたが狼狽える所を何度も見る方が楽しそうですし、つまり私の趣味にとってはお得な取引とは言えないんです。だからこれは大奉仕の提案です。でも」
　アプリリアージェはそこまで言うと自分を落ち着かせる為に紅茶を一口含み、ゆっくりと鼻孔から出る紅茶の香りを楽しんだ。
「さっき言ったようにあなたと腹を割った話をしたいという気持ちは本当です。それに正直に言うとあなたに対する興味を隠す事ができません。つまり、あなたについて色々知りたい。でもエイル君に知られたくないという事ならば私はダーク・アルヴとしての誇りに賭けて貝のように口を閉ざし、聞いた事は一切喋らない事を約束しましょう」
　エルデはしばらく頬を赤く染めたままアプリリアージェを睨んでいたが、やがて観念したように口を開いた。
「まあ、早いうちにリリア姉さんには話をせんとあかんやろなって思ってた事やしな」
「では？」
「ウチは……自分の正確な年齢は知らん」
　エルデはそう言うとアプリリアージェと向かい合うようにテーブルを挟んだ反対側の椅子にゆっくりと腰を下ろした。その何気ない仕草に、アプリリアージェは目を奪われずにはいられなかった。気品という言葉にすればそれまでだが、本物の王女であるエルネスティーネとて、そこまで優雅な仕草で座る事が出来るだろうかと思えたのだ。それを本当に自然にやってしまうエルデに対する疑問は深くなるばかりであった。
　一応アプリリアージェはエルデの前に紅茶の入ったカップを受け皿と共に押し出したが、エルデは小さく首を横に振った。
　アプリリアージェの勧めは失敗に終わったが、エルデがそれなり

に頑固なのを再確認することには成功した。
「単純に星歴から逆算すると……三千歳以上なのは間違いないんかな」
「は？」
アプリリアージェは人ごとのようにそう言ったエルデの言葉に、手に持ったカップを落としかけた。
それを見たエルデが鋭く念を押した。
「嘘やない」

アプリリアージェは一瞬で思考を切り替えた。記憶の書棚から年表を取り出すと、三千年前の出来事を指でなぞった。
「十年戦争……が、確かざっと三千年前でしたね」
目の前の瞳髪黒色の少女から目を逸らさず、そう言った。
それは彼女の年表には大きく朱が引かれた出来事で、アプリリアージェの声はのどの奥から何かを絞り出すような苦しさを含んでいた。

ファランドールの歴史を知る者にとって、いや、シルフィードの歴史を知る者にとっては極めて重要な出来事、十年戦争。
特にシルフィード王国のアルヴ族にとっては重い意味のある出来事であり、負の歴史と呼ぶべきものなのである。彼らの祖先が嫌悪と憎悪に支配され、一つの人種を絶滅にまで追い込んだとされる忌むべき言葉だった。
絶滅した種とは他の人種から「瞳髪黒色」と呼ばれた、デュナンよりやや小柄なデュナン系人類、すなわち「ピクシィ」である。
ピクシィの血を引く事は間違いない目の前の少女は、その時から存在しているというのだろうか？
それとも、アルヴ族とピクシィの歴史を引き合いに出して自分を精神的に追い詰めようとしているのだろうか？
しかしアプリリアージェは脳裏に浮かんだ最後の考えを即座に否

定した。
　エルデがそんな事をする人間ではないことは、彼女がエイルの中に同居していた時代から「肌」で理解していたからだ。

　エルデはアプリリアージェが口を開く前に続けた。
「今更言うのも何やけど、ウチはピクシィや。それも歴史から消える前のピクシィなんやそうや」
「ひょっとすると、時のゆりかごの力……ですか？」
　アプリリアージェの問いにエルデはうなずいた。
「さすがやね」
　エルデは素直に「感心した」という顔でアプリリアージェを見た。エルデにそういう風に見つめられると妙に気恥ずかしい気がするのが不思議だった。だが、それほどエルデの表情のちょっとした変化がアプリリアージェの心の琴線を大きく揺らすのだ。エイルの中にいた時と今との一番の違いはそれだとアプリリアージェは思っていた。言葉にはしにくいが、エルデの存在感の大きさが全く違うのだ。
「なんとなく、そう思いました。あなたの体を《真赭の頤（まそほのおとがい）》が二年間も保管していた話や、そもそも『時のゆりかご』という妙な名前、そしてあなたが言った『現世（うつしよ）と時間の概念が全く違う』という言葉、そして今の話……それでもしや、と。でも、『もしや』より『まさか』という気持ちの方が強いのも確かです」
　アプリリアージェの言葉にエルデはうなずいた。
「『時のゆりかご』は外界とは全く時間の流れが違う。師匠によると、あそこの一日は現世の数年から数十年にも相当するかもしれんって言うてたな。ウチはそこで現世で言うざっと三千年の間眠ってたんや。いや、ルーンで封じられてた、という方が正解やな」
　アプリリアージェはエルデの体が安置されていたあのスフィアを思い出していた。
「ウチらの氏族はピクシィの中でも特殊な一族で、純血種であることを守り、王と呼ばれる家系の人間に代々ある秘術が受け継がれて

た。血統第一っちゅうことやな。一番能力が高い人間に受け継がれるジャミール族とはそこが違う。まあ要するにウチはそのルーンを受け継いだ者やっちゅう事や」

「なるほど。あなたはその一族の『王』と呼ばれる存在であり、受け継いだ『秘術』が『名前』を名乗れない原因というわけですか」

アプリリアージェの問いにエルデは苦しそうにうなずいた。

「それもある。あの忌まわしい戦争の混乱の中でシルフィードの軍隊の目を盗んで、誰かがウチをあの『時のゆりかご』に匿ってくれたみたいなんやけど、幸か不幸かウチはその辺の記憶がないんや。あのスフィアに閉じ込めた誰か、あるいはウチをあそこで見つけてくれた師匠が記憶を消してくれたんやろな。時代背景を考えたら多分、思い出したくもないおぞましい記憶なんやと思う。そうは言うても学習した知識や基本的な記憶は全部あって、抜け落ちた部分との整合性が曖昧になると時々微妙にちぐはぐな気分が頭をもたげるけどな」

「では記憶を消したのが《真赭の頤》であれば、彼がその気になれば記憶を戻す事も？」

エルデはだが首を横に振った。

「それはどうやろ。シェリルの事、覚えてるやろ？」

アプリリアージェはうなずいた。

エルデがシェリル・ダゲットに対して行ったルーンは、確か記憶を「封じる」のではなく「消去」するもののはずだった。

「封じたんか、消去したんか、それは当事者のみぞ知る、や。でも、ウチは思い出しとうないと思ってる」

「怖い……ですか？」

エルデは思いがけず素直にうなずいた。

「ウチの名前を知ったという理由だけで、たぶん簡単に人が死ぬ。現に師匠は賢者を四人も手に掛けたそうや。しかもそうする事で自分自身の命まで失う事を知ってたのに、や。そやから、できたらウチはそんな事に関わりとうない」

そう言ってテーブルに突っ伏したエルデの表情はわからない。いや、たとえ表情が見えたとしてもそれがエルデの心を映しているとは限らない。だが、たとえ感情がそのまま表情に出ていたとしても、アプリリアージェはエルデの顔を見る事はできなかっただろう。

そもそもアプリリアージェにはエルデにかけるべき適当な言葉が見つからなかった。

まだ幼い頃、王立図書館の特別室で歴史に関する文献を片っ端からひっくり返していて見つけたもの……初めて知った自国の血塗られた過去を見いだした時の事をアプリリアージェは思い出していた。

気高く美しい我が祖国を心から誇りに思っていたアプリリアージェにとって、あの時の衝撃は大きかった。生涯忘れられない出来事だと思った。

今、まさにその時代の生き証人が目の前にいるという信じがたい出来事に、心の一部が凍り付いて麻痺しているような感覚に陥っていた。

三千年前の人間がまだ生きていると言う事が俄には信じられない話ではある。しかし、エイルとエルデという不思議の巣窟のような相手に出会い、道を共にして彼らを中心に経験した様々な出来事を振り返るなら、エルデの言葉は素直に腑に落ちた。むしろエルデの言葉を嘘だと言える根拠の方が希薄だった。

シルフィード王国の軍人であるアプリリアージェと、ピクシィのエルデ。言ってみれば虐殺者の末裔と、虐殺された一族の生き残りが、三千年の時を超えてテーブルを挟んで対峙している格好なのだ。

とはいえ、アプリリアージェ自身はその事について語る言葉など持ってはいない。

もちろん彼女の一族が犯した過ちではあるが、それは断じて彼女の罪ではない。

三千年も前の事なのだ。

だが、それを割り切る事ができない気質、それこそがアルヴ族の

血に流れている「業」のようなものなのである。
それはアプリリアージェ程の精神力を持つ人物であってもなお、逃れる事は困難だった。いや、ダーク・アルヴとしての血が濃いからこそ、呪縛する茨の棘は堅く鋭く、そして深く心臓に食い込んでいた。
そんな縛り付けられるような息苦しさの中で、アプリリアージェは突然ある事に思い至った。
「それで」
そう発した言葉がしわがれているのを耳にして、アプリリアージェは自分でも驚いて思わず言葉を呑んだ。いつの間にか口の中がカラカラだったのだ。
慌ててカップの紅茶を全て飲み干すと、あらためてゆっくりと言葉を紡いだ。
「それで、『時のゆりかご』に避難できたピクシイは、あなた一人だったのですか？」

エルデはその言葉に顔を上げた。
微笑むように見えるアプリリアージェの顔が青ざめているのを認めると、エルデは努めて穏やかな声で答えた。
「言うとくけど、リリア姉さんが背負うものとか、今更何にもないんやで」

その短い言葉に、アプリリアージェは不覚にも胸の奥からこみ上げて来るものを感じていた。
（まただ）
それほどエルデの感情の変化は直接的に心の深い部分を鷲づかみにするのだ。
アプリリアージェはそれに必死に抗おうともがいていた。
「結論から言うと、『時のゆりかご』で発見されたピクシィはウチだけや。そやから長い間、忘れられてたんやろな」

いわゆる『十年戦争』について、ここで簡単におさらいをしておこう。

当時ファランドール最大の国土を誇っていたグレイン二世時代のサラマンダ王国が、弱体化していたウンディーネ王国連合の領土に武力侵攻を始めたのが星歴一〇一一年で、この年が「十年戦争」勃発の年とされている。

しかし、それより以前から十年戦争の呼び水となる争いはウンディーネ王国連合内で続いていた。

当時のウンディーネは元々あった王朝が断絶した後、正統を名乗る有力諸侯が各地で独立し各々が国王を名乗り、長く「王国」が林立した状態にあった。戦争勃発時には征服・併呑・合国などが進み、二十ほどに減っていたとは言え、統一された国家とは言い難い状況であった。ただし、大国からの干渉を避ける為に便宜的に「王国連合」を名乗り、外交窓口などを一本化する「場」の様な仕組みが存在していたようである。

ウンディーネ内部で小競り合いが続く中、いくつかの国で家臣に反乱が起こった。

いつ終わるとも知れぬ小競り合いに疲弊した家臣達は狭窄な視野しか持たぬ王を追放、あるいは殺害し、大陸北部進出を伺っていたグレイン二世と通じた。いや、歴史考察的にはグレイン二世側の暗躍が先にあったというべきかもしれないが、どちらにしろ双方の利害が一致してウンディーネ王国連合内に戦争が広がっていった。

サラマンダ王国は、友好関係にある国家の援護という名目でウンディーネ領内に軍を進めた。

それを予測していたウンディーネ王国連邦の他の小国は、それぞれサラマンダの敵対国であったドライアド王国もしくはシルフィード王国と同盟し、大国の軍隊をウンディーネ領内に招き入れた。

三勢力に区分されたウンディーネ領内での戦争は、当初サラマン

ダの優位で進められた。周到に準備をしていたサラマンダ王国は最初の一年でウンディーネの領土の半分を勢力下に置く事に成功した。しかしドライアド王国がウンディーネではなく直接サラマンダ王国の領土に侵攻し始めると情勢が変わってきた。

元々、早期にいくつかの領地を飲み込み、そこに軍隊を駐留させる事がグレイン二世、すなわちサラマンダ王国側の目論見であった。一度橋頭堡を気付いた上で、機を見て次の段階に進む予定が、ドライアド・シルフィード両国との停戦外交が思いの外難航し、想定よりも戦線が広がってしまったのだ。

ウンディーネからの完全撤退を主張するシルフィードとウンディーネ領内に自軍の駐留を主張するドライアドはサラマンダに対して共に一歩も引かず、闘いは長引いた。

そんな中でドライアド軍に自国を侵されたとするサラマンダは、報復としてまずドライアド王国領土に兵を進めた。また、シルフィードと同盟下にあったウンディーネの小国がサラマンダ領に侵攻したのをシルフィード側による自国侵略だとし、グレイン二世はシルフィード大陸にも軍隊を差し向けた。開戦から三年目の事である。

その頃になるとウンディーネ領内で今度は同盟関係にあったドライアド軍とシルフィード軍の小競り合いが始まり、三つどもえの様相を呈して戦争は泥沼化をたどる事になる。

にらみ合いと小競り合いの繰り返しの中、シルフィード大陸でその悲劇は起こった。

それは星歴一〇一八年の出来事で、十年戦争はすでに七年目に突入していた。

シルフィード大陸南部にある古都スッダの北方五十キロメートルほどの盆地に「ユーラ」という町が当時は存在していた。そこがサラマンダの特殊部隊に襲われたのだ。

ユーラは軍事的にも産業的にも特に重要な町ではない。三方を山に囲まれてはいるものの比較的開けた盆地で、拠点にできる自然の

要害とも言えない。有り体に言えば「ただの田舎町」である。
強いて言えば大都市スッダの近郊にあり、豊富な湧水に恵まれた農作物の収穫に適した土地であった。
その非戦闘員だけで構成された町が、一夜にして全滅したのである。

理由は今もって明らかにはなっていないが、出先から戻ったユーラの住民が見た物は、全てが黒い煤にまみれた集落の残骸と、村の広場に高く積み上げられた住民の死体だったという。
そしてそれはただの死体ではなかった。四肢と頭が胴から悉く切り離され、それぞれの部位ごとにまとめられていたのだ。
目撃者にとって唯一救いがあるとすれば、それらは殆ど人物の特定ができないほど焼かれた後だったと言う事くらいであろうか。

ユーラの事件は始まりに過ぎなかった。
第二報はスッダにほど近い港町「アドラ」、そして第三報はその隣に位置する「ログメイ」からもたらされた。アドラはユーラと同様に全滅したが、ログメイには生きて逃げ延びる事に成功した者が居て、犯人がサラマンダの軍隊であることがようやく判明したのである。

町を襲ったのは特殊な能力を持つ、つまりフェアリーとルーナーからなる中隊規模の軍隊で、全員がピクシィで構成されていたという。表現が曖昧なのはあくまでもそれはシルフィード側の文献にそう書かれているからであり、ドライアド側にはそのような部隊が存在した記述は一切見つかっていないのである。
彼らは口々に「アルヴ族は皆殺しにしろ」と叫びながら、とても正気とは思えない殺戮を行っていたのだという。
その痛ましい情報は瞬く間に全シルフィードに広がった。主な情報伝達経路は、当時シルフィードの準国教として王宮内部まで力を伸ばしていたマーリン正教会だった。
彼らがシルフィードの人々に説いた内容は「サラマンダ軍がシル

フィード大陸に侵攻してきた」ではなく、「ピクシィがアルヴを皆殺しにしてまわっている」という極めて刺激的なもので、事件の背景や全貌などを飛び越した恐怖と危機を煽るだけのものであった。

ユーラやアドラ、そしてログメイの惨状も、神職にある者が「神を畏れぬ行為」だとして尾ひれをつけ、憎しみと恐怖をあらん限りに煽った。

実際はその後のシルフィード軍の大規模な掃討作戦により、件の特殊部隊は壊滅させられた事になっているのだが、その頃にはもはや誰も冷静に真実を吟味する心の余裕はなく、噂は一人歩きをはじめていた。

多くの町や村がどんどんピクシィに襲われ、言葉にするのもおぞましい程の陵辱を受けて皆殺しにされ続けているという話がまことしやかに、そして風のような速度で広大なシルフィード大陸に広がっていった。

その間、王宮に入り込んでいた神官達は執拗に要人を煽り続けたという。アルヴ族の軍人が、その噂を聞いて冷静で居られるはずなどはなかった。

いや、冷静に真実を見極めようとした人間もシルフィード王国内部には少なからずいたのは確かであろう。しかしシルフィード軍はユーラの事件に端を発した事件により、ピクシィに対する憎悪に取り込まれ、耳元で囁かれるマーリン教会の神官の言葉でその憎悪を定着させたのだ。彼らは言わば集団催眠のような状態の下で作戦行動を遂行していったのである。

シルフィード内のマーリン正教会がなぜそのような扇動行動を執ったのかは謎である。それというのもサラマンダの特殊部隊と同様、そのような事実は少なくとも正教会の文献には記されておらず、あくまでもシルフィードの公式文書による「言い分」しか残っていないからである。

アルヴ系人類のピクシィに対する憎悪は、当然ながら全ての戦場

に伝播した。
ピクシィ虐殺の始まりである。
それでもはじめの頃のシルフィード軍の行動はまだ何とか戦争と呼べる範疇にあった。敵軍の中にピクシイの兵を見つけると、シルフィード兵は危険をものともせず、闇雲にその兵目がけて攻撃をかける程度であったが、その後だんだん常軌を逸した行動が目立ち始めた。
ある部隊は相手にピクシイが所属する小隊を認めると、要衝の確保を放棄してその小隊目指して一個大隊を動かした。
降伏の意思表示は当然ながら無視されたのであろう。
その後は軍事行動の目的が拠点確保や補給路の寸断・保持などはそっちのけで、ピクシィの殲滅にすり替わって行くのに時間はかからなかったという。その為に全滅したシルフィード部隊も少なくはないと伝えられている。
その狂気が軍全体を覆い尽くす頃には、相手が兵士であろうが非戦闘員であろうが、ピクシィであれば無条件に殺害する事をためらわなくなってゆく。
シルフィード軍がそのような状態になってしまうと、相手の軍隊も相当な狂騒状態に陥っていたであろうと容易に想像がつく。ピクシィが所属する部隊では、その「的」を即除隊させるのは当然の行為になっていたし、上層部もそれを軍規違反としなかった。シルフィード以外の国にはピクシィの上級士官も存在していたと思われるのだが、彼らが一体どうなったのかはどの国の歴史にもいっさい記されていないのは不自然であるし、軍隊を強制除隊させられたピクシィは、味方の後ろ盾すら無くした状態で戦場に捨てられるわけであるから、生き延びる術はその時点でたたれた事になる。
もちろん除隊に際しピクシィからは様々な抵抗があったに違いない。
記録はもちろん残存せず、現時点でも公式には否定され続けているが、シルフィードのアルヴ部隊の狂気の闘い振りを畏れた他国軍

の中には、自軍内部で秘密裏にピクシィの兵を「始末」していたという状況証拠はいくらでも存在する。そしてそれは「軍隊」だけの話ではないのである。多くの村人や町の住民を「狂気の暴力」から守る為という大義名分が彼らにはあったのだから。

従ってピクシィという種の虐殺行動についてシルフィードばかりをせめるわけには行かないという説を唱える者も少なくはないが、そうせざるを得ない状況を積極的に作り出していたのは他ならぬシルフィードなのである。

それはもはや報復攻撃でも何でもなく、まさに「大虐殺」としか形容のしようがない忌むべき黒い歴史となった。

当時のカラティア朝シルフィード王国の国王はフェイトンで、彼は結局シルフィード軍の暴走を抑える事はできなかった。彼がやった事は、暴走し戦略的には瓦解し始めた自軍を立て直す為に戦線に投入する援軍の徴兵命令を出す事だけであった事は当時の記録からもうかがい知れる。

記録によると国王フェイトンは「ユーラ」以降、なんとそれまでの十倍の兵を戦線に投入していたのである。国民皆兵制をとっているシルフィード王国ならでは、いやアルヴ族の国であるから可能だったとは言え、常軌を逸した物量作戦には違いなかった。

「ピクシィを倒す」という旗印の下、多くのシルフィード国民が我先にと争うように剣を手に集ったという。

それは一か八かの賭けだったのか、狂気が生んだ文字通りの狂騒だったのかはもはやわからない。だが、軍需産業を除くシルフィード王国のあらゆる産業が停滞し、麻痺し、内部から国が崩壊する寸前まで追い込まれた頃、ファランドール全人口の四分の一とも三分の一とも言われる犠牲者を出し、地上のありとあらゆる国と地域を巻き込んだ人類未曾有の惨劇はようやく幕を下ろした。

サラマンダ国王グレイン二世がついに降伏し、ウンディーネからの完全撤退とドライアド王国のウンディーネ駐留を認めたのだ。

シルフィード王国はサラマンダ大陸のみならず、ドライアド大陸にまで及んだピクシィの虐殺行為について同盟国を含む諸外国から強く非難され、サラマンダ大陸からの無条件完全撤退と講和条約不参加を求められた。

その要請をシルフィード国王フェイトンが受け入れたのが、星歴一〇二一年白の三月三日。戦争が終結したとされる日である。

当時のシルフィードの首都であったヴェッダでそれが告げられたのは、戦争開始からすでに十年もの時が過ぎた蒸し暑い日の事であったと伝えられる。

シルフィードは戦争終結後も諸国からの非難を浴び続けたが、それだけでは終わらなかった。

戦後数年後に、ファランドールにピクシィが一人も居なくなっているという驚くべき事実が明らかになったのである。

実際には「ユーラの惨劇」と呼ばれる事件から一年と少し後にはピクシィの目撃証言はなく、シルフィード以外では唯一軍籍簿が整っていたドライアド軍の名簿にもピクシィを表す文字がいっさい見あたらなくなっていたという。

すなわち戦争終結の一年以上前の時点で、すでにひとつの人種、いや人類がファランドールから消えて無くなっていたのである。

狂気の憑きものが落ちていたシルフィード王国が、その事実を知ってから執った政策はご存じの通りである。

『国外侵略戦争の永劫禁止』

『少なくとも向こう百年間、サラマンダ王国の復興に人事・経済面で惜しみない援助を行う』

『シルフィード王国領内での例外のないいっさいの宗教活動の禁止と国教の廃止』

『カラティア朝シルフィード王国は国王に未来永劫「フェイトン」という名を用いてはならない』

残念な事にその後もファランドールから戦争は無くなる事はなかったが、時の流れはウンディーネを緩やかな独立国家共同体から、共和国連邦政府という形式に変化させた。サラマンダはごたごたしながらも王政を維持していたが、「十年戦争」から数えて三千年後に勃発した世界大戦「千日戦争」でドライアド・シルフィード連合軍によってついに王政の終焉を迎えたのだ。

そして何より、『十年戦争』後の歴史に「ピクシィ」の文字が刻まれることはなかった。

重苦しい沈黙が部屋を支配していた。

突っ伏したままのエルデからは、今は精霊波の異常な揺らめきは感じない。逆にエーテルの流れが止まっているかのようで、肌寒さえ感じていた。

アプリリアージェは無駄な事だとは思いながらも、気分を変える為に紅茶の残っているはずのポットに手を伸ばした。

その中には、すでに冷めてしまった渋い液体が入っているはずだった。

それを口に含んで、頭をすっきりとさせたかったのだ。

アプリリアージェは上品な白磁のポットを手に取ると、中の液体を自分のカップに注ごうとした。だがその時、不覚にも手を滑らせた。

無意識のうちに手に汗をかいていたのだろう。白磁のポットはアプリリアージェの手をツルリと離れるとそのまま床に落ち、乾いた衝突音をたてた。結果として大小の破片と化したポットは、毛足の長い絨毯の上に散らばる事になった。

その音に反応して、エルデは顔を上げた。

それを見たアプリリアージェは、何て寂しそうな顔をしているの

だろうと思った。
いや。
長い黒髪を持つ少女に、表情はなかった。
エルデが纏ったエーテルをアプリリアージェが肌で感じたのだ。
寂寞とした、肌寒い感情を。
「ごめんなさい」
アプリリアージェはそう言うと慌てて床に膝をつき、ポットの破片を拾い集めた。この宿で使っている磁器製のポットは見た目が美しく繊細なのは良いのだが、上品な造りにしたかったのか肉厚がない。そのせいか多少厚みのある絨毯の緩衝力程度では破壊を免れなかった。

「あ」
アプリリアージェは小さな声を上げた。
破片の一つで指先を切ってしまったのだ。
細心の注意を払っていたはずだったが、またしてもつまらない失策をしでかしたアプリリアージェは、小さくため息をついて赤い血が流れる指先を見つめていた。
異変は次の瞬間に起こった。
その場の空気が沸騰したかのようだった。
アプリリアージェは今まで感じた事がないほどの精神的な圧迫を感じて顔を上げた。その気配もこの場の熱も、全てはエルデが発しているエーテルのせいだと確信して。
果たして視線の先にはエルデの顔があった。
いや……。
そこにいたのはもはやエルデではなかった。
少なくともアプリリアージェの知るエルデでは……いや……それはもはや人と呼べるものではなかったのだ。

かつてエルデであった「それ」を見てしまったアプリリアージェ

は瞬時に自らの全ての機能が凍り付くのを感じていた。
体が硬直しただけではない。同時に思考も殆ど停止した。
そしてただ感じていた。
全身に走る寒気と、全身に泡立つ鳥肌。
早鐘のように、文字通り警鐘を鳴らず鼓動。
それなのにどんどん引いていく血の気。
それは今まで感じた事のない恐怖だった。
本能が感じる強い恐怖が、意識を失わせる事があると言う事をアプリリアージェは混濁し出した意識の中で感じていた。
体温の下がった頬に、熱いものが伝った。
涙だ。
理屈で規定できない恐怖は生理機能さえ意識下にはおいてくれないようだった。

高まる恐怖に押しつぶされそうになりながらもそれにあらがい、その整った顔を引きつらせながら、アプリリアージェはようやく口を開く事に成功した。
だが、その口から発せられた言葉は、決して彼女の意志から出たものではなかった。本人の意識はどうあれ、もはや理性はその制御を失っていたのである。声帯は本能に支配され、心の中に響き渡る悲鳴をただわかりやすい言葉にして相手にぶつける事しかできなかったのだ。
おそらく本能は大声で叫びたかったのだろう。
だが、あまりの恐怖はそれさえ許さなかった。しわがれた震える声で、たった一言を絞り出すのが精一杯だった。

「化け物……」

# 第三十六話　雲隠れ

ラウ・ラ＝レイは手に持った紙片を握りしめた。
誰が寄越したのかわからないその紙片には、クセのある文字で短く「気を付けろ、僧正にバレている」とだけ記されていた。
（気を付けろも無いものだ）
ラウは文句を言いたい気分だった。もっとも誰に向かってそれを言えばいいのかがわからないのが癪に障る。なぜならその紙片を読んで顔を上げた時には、既に回りを新教会の僧兵に囲まれていたからだ。要するにその短い文は警告の体をすでに成しておらず、ただの現状報告に堕していた。

特に誰に確かめなくともわかった。
ただ一人素顔をさらしている橙色の僧兵服を着た青年が、その僧正であろう事を。
（さて、どうする？）
ヴェリーユではルーンを使わない。これは鉄則であった。
ひとたびルーンを使ったが最後、この城塞で囲まれた町中に張り巡らされている結界を通して探知専門のルーナーが、それこそ瞬く間に感応する仕組みになっていた。一度感知されたが最後、そのルーナーはヴェリーユにいる限り居場所は高精度に特定され続ける事になるのである。さらに言えば、ここヴェリーユではたとえルーンを使ったとしても、同じく結界の働きでその力はほとんど削ぎ落とされる事になっていた。特定の場所ではルーンそのものが発生しない程強力な結界が張られているとも噂されている。無エーテル地帯、いわゆる「エア」のようなものであるが、自然現象である「エア」と区別するために、「疑似エア」等と呼ばれていた。だが言葉自体は存在しても、実際に疑似エアを体験したという人間、いやルーナーの話を聞いたものはラウの知る限りは誰一人いなかった。

どちらにしろヴェリーユとはすなわち、ルーンを縛る巨大な罠のような場所なのである。

もちろんその結界の効力が及ばぬ場所もある。

それはヴェリーユ大聖堂の背後の山の中腹にある本殿と呼ばれる複数の建物を回廊でつないだ造りの建物の中で、いわば新教会の防御中枢にあたる場所である。ルーンの探知機能を担当するルーナーが詰めている場所こそが、その場所である事は間違いがない。だが、その場所がいったいどこにあるのかまではラウの知識にはなかった。ヴェリーユ大聖堂から、まだ先の奥深く入り込んだ場所であろう事を漠然と理解している程度であった。

とはいえ場所がある程度特定されているとしても、そもそもまともにそこまでたどり着ける人間がいるはずもなかった。ましてや正教会の人間がその場所へ足を踏み入れる事が出来るとは思えない。??ラウは僧正率いる新教会の僧兵集団を前に、そんな事を考えていた。

「ヴェリーユへようこそ。私は大聖堂巡礼守備隊をとりまとめるシーン・ジクスと申します」

シーン・ジクスと名乗った僧正はそう言うと恭しく頭を下げた。

「これはご丁寧に、どうも」

対してラウは気のないような返事をした。落ち着いた声だった。いきなり仕掛けられなかった事で、気持ちに多少の余裕が生まれていたからだ。

相手は大聖堂巡礼守備隊の長だという。ラウの知識では、それは新教会において相当の地位にある人物のはずだった。一国の近衛隊の隊長のようなものである。であるならば、まずは相手の出方を伺う程度の会話は出来ると踏んでいた。要するに打開策を練る時間稼ぎが可能だと考えたわけである。

「わざわざ正教会（ヴェリタス）からお越しいただいたのに恐縮ですが、あいにく

と堂頭はエッダへ参っております。代わりに留守居の副堂頭がお二方に是非お会いしたいと申しております。つきましては私がその命を受け、こうしてお迎えに上がりました」

唯一かぶり物をせず、素顔をさらしている橙色の僧兵服の青年は、邪気のない笑顔でそう言った。

「堂頭」とはヴェリーユ大聖堂の頂点に立つ者の名である。つまり新教会を束ねる存在であった。正教会での「座主」がこれにあたる。

エッダに行っていると言う事は、すなわちシルフィード王国の前国王であるアプサラス三世の大葬に列席するためなのであろう。ヴェリタスも座主が招かれていた事は、ラウの持つ情報にもあった。

邪気のない笑顔が、かえってラウの癇に障った。余裕があると言う事だ。慇懃無礼な態度も同じ。ラウには全てが上から見下されているように感じられたのだ。

ラウは改めて一見礼儀正しい目の前の僧正、シーン・ジクスを観察する。

シーンは薄茶色の髪と青い瞳を持つ、長身のデュナンである。僧正を名乗る者はデュナンだけだと聞いていたが、少なくともシーン・ジクスはその噂通りであった。

武器は持たず、彼はイチイの木で作られた儀仗だけを手にしていた。そもそも僧正とは高位ルーンが使える者で無ければならないはずで、シーン・ジクスはすなわち間違い無くルーナーであろう。

「食事なら間に合っているが」

少し間を置いてめんどくさそうにそう答えた。

「おや。ソレは少々残念ですね。ドライアド南部からお越しになった信徒様より珍味の寄進物があったのですが……。ふむ、それならば夕餉の楽しみにされるとよろしいでしょう」

顔色一つ変えず、眉一つ動かすことなく、僧正シーン・ジクスはそう切り返してきた。

（考えろ、《二藍の旋律》）

ラウは自分自身を心の中で叱咤した。

町全体が新教会の結界の中にある。どのような呪法、あるいはルーンが仕掛けられているのかまではラウにはわからない。下手に動けば相手の思うつぼにはまる可能性が高い。抵抗に対しての拘束とはすなわち彼らにとっては大義名分であろう。

ラウとて最近の賢者会で囁かれている新教会の僧正の噂を知らないわけではない。

「僧正は賢者狩りを行っている」

それが噂の根幹であった。理由は単純で、賢者会と長期にわたって連絡が付かなくなっている賢者が後を絶たないのである。賢者会との定期的な連絡は賢者に課せられた最も基本的な義務である。それを長期間ないがしろにする事はあまり考えられなかった。

連絡できない理由はいくつか考えられたが、その最悪の事態が噂の内容なのである。

一人二人であれば不慮の死などの要因も考えられるが、この数年で二十名以上の賢者が行方知れずだというのは明らかに異常である。

マーリン正教会には『庫(くら)』と呼ばれる部屋がある。そこは賢者会でもごく一部の者しか入れないと言われている特殊な場所で、様々な曰く付きの呪具や『マーリンの眼』とも呼ばれる『賢者の徴』が安置されている場所としても知られている。

その『庫』にまつわる噂では、最近そこに入った者が『賢者の徴』の数が増えていると漏らしたらしい。

賢者は『授名の儀』で『賢者の徴』を受け継ぐが、死亡すると『賢者の徴』だけは『庫』に戻り、新たに『継ぐ者』が現れるまで再びそこで眠りにつくと言われている。その『賢者の徴』が増えていると言う事は持ち主、いや宿主と言うべきか……の死を意味する。

短期間にそれほど多くの賢者が命を落とす事など考えられない事から、何らかの陰謀によるものだという考えに至るのも無理からぬ事である。

陰謀と一言で言うのはたやすいが、賢者ともあろう者がそうやす

やすと普通の人間の手にかかる事は考えにくい。
少なくとも賢者と対等の力を持つ者と闘い、敗れたと考えるのが妥当な所であろう。賢者と同等と言われる能力を持つ者と言えば、各国の高位のバードか、僧正と呼ばれる『新教会のバード』しか考えられない。各国の高位バードは王宮から滅多に外に出る事はないから、消去法として僧正が犯人とされているわけである。付け加えるならば、各国のバードが消去法で消されるのにはさらに意味がある。

ドライアドはマーリン正教会が国教である。表向きはどうあれ、バード庁はマーリン正教会の人間が把握している組織である。同様にウンディーネの首都島アダンにあるバード府にも影響力があった。

シルフィード王国はバード庁と宗教団体との関係はなく、国家体制を考えても賢者を狙う理由が希薄である。サラマンダはそもそもドライアドの属国と化しており、バード庁も名ばかりとなっている。

残るは新教会の僧正、という事なのだ。

そして今まさにラウとファーンの身の上に起こっている事態こそが、噂を証明するかのような出来事。すなわち僧正による『賢者狩り』に違いなかった。

ラウは打開策を見いだせないまま、取り合わず会話を伸ばす事にした。

「そもそも何の話をされているのかが私にはわかりかねます。見ての通り我々は旅の吟遊詩人。先般多少の小金を稼いだ事もあり、以前より興味のあったここ、ヴェリーユに観光がてら立ち寄っただけなのですが」

見え透いた台詞である。無駄だとは思いつつも考える時間を稼ぐ為、ラウは一応シラを切ってみた。

案の定シーンと名乗った橙色の僧兵服のデュナンは、その屈託のない爽やかな笑顔を苦笑に変えると、言って聞かせるような口調で同道を促した。

「あなたが《二藍の旋律》様、それにそちらの若い方は《群青の矛》様ですね。我々が正教会の賢者様のお顔を知らぬとでもお思いでしたか？」

シーンの言葉には既に駆け引きも、相手の出方を窺おうとする気もないようだった。ある意味事務的な人物なのだろうとラウは判断するとともに、これ以上シラを切っても意味がない事を認める事にした。

シーンの言う通りだとするとマーリン正教会側、少なくともラウやファーンが新教会の僧正の名前を知らないのに、向こうは全て知っていると言う事になる。それはつまり情報戦では正教会は後れをとっている状況だと言えた。

（賢者会の諜報担当は普段いったい何をしている）

ラウは唇を噛んだが、ここで賢者会の上席のお歴々に文句を言っても始まらない。

「再確認しておく」

ラウはそこまで言うと言葉を一度切り、チラリとファーン・カンフリーエの方を見た。つまり、その言葉はファーンに向けてかけたものだ。

同じように唇を噛んでシーンをじっと睨んでいたようだが、ラウの言葉を受けて、ファーンはラウに視線を向けた。

「ファーン」

「はい」

「私の言う通りにするのよ」

「了解です。《二藍の旋律》」

「ラウっちでいいわ」

「合点でさ。ラウっち」

「『了解』まで変えなくてもいいんだけど」

ラウは苦笑と共にファーンに軽くうなずいて見せた。だがすぐに

真顔に戻り、視線をシーンに戻す。
口調もファーンに対した物とは違って、これも外向けのものに変わっていた。
「一応尋ねておきたいのだが」
「何なりと。ただし私でお答えできるもの以外はご容赦を」
「もし副堂頭猊下の申し出を固辞した場合、我々はどうなるのか？」
シーンはラウの言葉を想定していたのだろう。笑顔を崩さずにすかさず返答した。
「お忘れですか？ヴェリーユに入る際に署名をしていただいたはずです。堂頭の招聘があった場合は例外なくこれに従わねばならない、と。先ほども申し上げたとおり、あいにく堂頭は不在中。故に今は副堂頭が堂頭の権限を有しております」
ラウはシーンに指摘された文書の事を思い出していた。細かい文字が書かれた書類に確かに署名をした。宗教の拠点など特殊な町ではよくある事で、書かれている事も通り一遍の決まり事のようなものばかりの、よくある文書である。
一応目を通したものの、特に妙な条文も無く、ルーンで改変されている様子も見えなかったので、その場では何も言わず、もちろん何の細工もせず、素直に署名をした。勿論、現名で。
「なるほど。言われてみれば確かにごもっとも。どうやら我々に拒否権はないようだな」
ラウは一つため息をつくと、椅子の上に置いてあったつばの広い帽子と丸い胴を持つダラーラという弦楽器を手にし、ファーンにも支度を促した。
「我々を招聘する理由を尋ねたら、ジクス僧正殿はお教え下さるのかな？」
帽子を被り、その位置を微調整しながら、ラウはシーンに尋ねた。
シーンはしかし、残念そうに首を左右に振った。
「私はお二方をお招きするよう命じられた、ただの使いです」
「だろうな」

「老婆心ながら一応申しあげておきますが、妙な気は起こさない方が御身の為です。衆目もございますし、そもそも事が起こると掃除や報告書など後始末が色々と面倒ですので」
「後始末、か」
その言葉が何を意味するのかわからないラウではない。邪気のない爽やかな笑顔でそう釘をさすシーンに、ラウは内心で舌打ちをしていた。
（笑っているがいい。いまいましいその顔を、すぐに引きつらせてやる）

多少の迷いがあったが、シーンの「老婆心」がラウを決心させた。手に持ったダラーラを抱きかかえると、突然大きくかき鳴らしたのだ。
同時に後ろにいたファーンに呼びかけた。
「逃げるよ、ファーン！」
「合点！……じゃなくて、了解？」
「どっちでもいい、急いで！」
ダラーラの不協和音が響いたかと思うと、一瞬にしてその場が真っ白な煙に包まれた。
いや、それは煙ではなく湯気のようなもので、水が細かく個体化したものであった。熱くはないところから、言ってみれば雲のようなものなのだろう。
だが、その濃度は濃く、その雲の中にいる人間の視界を奪うには充分であった。
ラウはファーンの手をしっかり握りしめると「こっちよ」と声をかけ、駆けだした。
逃げる経路は予め決めていた。視界がないのはお互い様であったが、経路を定めていたラウの動きは新教会の僧兵達のそれとは違い、直線的で速かった。

ラウに確信があったわけではない。だが、新教会の深部に連れ込まれたらそこでは完全に手も足も出なくなる事態は予想できた。町の中であれば、まだ逃げられる機会はあると踏んだのだ。

ルーンの力が削られている状態は相手も同じ。ここで相手との間に距離を稼いで、後は町を出る事に全力を尽くす。

ラウはそう考えた。

とりあえず移動さえしていれば相手のルーンが届く事はないはずだった。精霊陣で感知され、的を絞られさえしなければ、遠隔ルーンが命中する事はあり得ないからだ。

だが、そうなると今度は単純に腕力や武力といった身体に関係する能力の差が全てになる。さらに多勢に無勢の状態でもある。相手がいったいどれほどの人員を割いて追跡にあたるかはわからないが、無事に逃げ延びられる可能性は高くはない。

そもそも、ルーナーであるラウもファーンもいわゆる白兵戦においてはただの素人である。そして共に攻撃が得意なエクセラーでもない。敵との接触は敗北を意味していた。

逃げ切れる可能性は……

ラウはおおざっぱに計算した。その計算にいったいどれほどの意味があるのかはこの際どうでもよかった。逃げ切れる可能性を自分で認める事が重要なのだ。

（五分五分と言った所かしら？）

そう思ったすぐ後に、自分は実は相当な楽観主義者だった事を知って、ラウは苦笑した。

雲が覆う範囲はラウ達がいたカフェを包み込み、道を隔てた反対側にある別のカフェの店先にまで及んでいた。

通りの向かいで繰り広げられていたラウとシーンの短いやりとりを、腰を浮かしたままで眺めていたアキラ・アモウル・エウテルペは、隠しからつまみ出した五エキュ銅貨をテーブルに叩きつけると、大急ぎで視界の無くなった店を出て、耳を澄ませた。二人の足跡を

追おうと思ったのだ。だが、突然の異変に驚いた人々の喧噪が大きすぎて二人の賢者が向かった方向を特定するのは不可能であった。

（こうなればカンだな）

アキラはそうつぶやくと通りの右手に向かって走り出した。

「ジクス様」

突然湧いた雲に驚いた僧兵が、大声で隊長に声をかけた。

「騒ぐな。一時的な現象だ。視界はすぐに戻る。毒性もなさそうだし、ただの目くらましだ。それより無駄に動いて混乱を助長させるな。参拝の信者を巻き込む恐れがある。全員ひとまずその場で待機しろ」

「しかし……」

まだ何かを言おうとする僧兵を、シーンはじろりと睨んで黙らせた。

そこへ、別の僧兵がやってきて指示を待つ為に片膝を付いて控えた。シーンはその僧兵に苦笑混じりで声をかけた。どうやらその僧兵は彼の補佐役のようで、先ほどの僧兵に対するものとは、シーンの態度は明らかに違っていた。

「驚いたな。さすがヴェリタスの賢者だけはある」

「同感です。しかし、感心している場合ではございません」

「案ずるな。このヴェリーユの結界を忘れたか？やすやすと逃げられはせんよ」

シーンとてさすがにラウが突然出した雲には驚いたが、その声にはまだ余裕があった。

（このシーン・ジクスが何の策もなくのこのこと目の前に現れたとでも思ったのか？）

独り言のようにそうつぶやくと、ジクス僧正は儀仗を握りなおし、低い声でルーンを唱え始めた。

短い詠唱が終わると、その場にさほど強くない風が吹き渡った。ラウが出現させた雲はそれにより散り広がり、やがて回りの様子が

わかるほどに視界が戻ってきた。
「後はセラティ達に任せる。この場の混乱を納めた後、いったん帰投せよ」
部隊の全員に聞こえるような大きな声でそう言った後、シーンは側に控えている補佐官に対しては、小さな声で別の指示を出した。
「我々はいったん本部へ引き上げ、『陣廊』を使って各部隊に遠隔送達を行う。だが、念の為にそれぞれの部隊には別途伝令も出しておけ」
シーンはそれだけ言うとラウ達が走り去っていったであろう大通りに背を向けた。

「ラウっち、今の煙は？」
「煙ではなくて雲よ」
その雲を出たところで路地を見つけたラウとファーンは、迷わずそこへ入り込んだ。入り組んだ路地裏の道を、辺りに気を配りながら二人は並んで走っていた。
「あれはルーンでは、ありませんね？」
「もちろん」
ラウはそもそも何も唱えてはいない。ただダラーラをかき鳴らしただけなのだ。雲を出したのはそのダラーラの能力だった。いわゆる呪具である。
「便利なものですね」
ファーンは感心したようにそう言ったが、ラウは眉間に皺を寄せて苦笑した。
「便利なんだか、どうなんだか」
ラウはダラーラを背負いなおしながら独り言のようにそう言った。
「あの現象は三日に一度しか発生しないわ。だからあの手は今日はもう使えないのよ」
説明を聞いてファーンは思い当たる事があるように手を打った。
「なるほど。例の妙な呪具の一つですか……。銘は？」

「『雲隠れ』よ」
「そのまんまですね」
「そのまんまね。まあ、例の呪具だからね。私はこれが楽器として機能してくれさえすればそれでいいんだけど、正直言って今回は助かったわ」
「助かったかどうかを結論づけるのはまだ早いようですよ」
「そのようね」
二人は前方に槍を構えた一団を見つけると、走るのを止めた。

ラウとファーンは、ヴェリーユの町に入った際、すぐに町の様子をつぶさに調べて回っていた。エルデがエイルに命じてやっている事と同じ事だが、その調査は当然ながら事があった際の逃走経路の確認作業という意味合いも強い。
つまり彼女たちはカフェでシーンを「雲」で足止めしているうちに逃走経路に入って走っていたのだ。
だが、今回は何の準備もできていなかったラウが後手に回っていたようだった。
シーンはラウ達の逃走経路の先にあらかじめ待ち伏せの部隊を配していたのである。確信してこの場所で待っていたのではなく、おそらくは想定される経路の全てにこうして部隊を配置していたのだろう。自らの本拠地ならではの物量作戦と言った所であろうか。
ラウのその推理を裏付けるように、目の前の部隊から、呼び子の音が高く響いた。短く二度鳴った呼び子の音は、少し間を置いて同じようにもう一度続けて二回吹き鳴らされた。二番隊が見つけた、というほどの意味なのであろう。配置場所がわかっていれば、ラウ達がどこで見つかったのかがすぐにわかる寸法である。
(いろいろと手回しのいいことね)
ラウはため息をついた。
「おっと、下手に動くなよ。できれば手荒な真似はしたくない」
一団から橙色の僧兵服を纏った青年デュナンが、そう言って進み

出た。シーンとは別人だが、同じ僧正であろう。
「お前がルーンの詠唱を始めるそぶりを見せたら、すぐに座標軸をズラしてやる。この部隊には風のフェアリーがいる。どんなに短い詠唱でも、唱え終わる前に突き飛ばされるぞ」
ラウが見たところ、敵との距離は目測で百メートル程度だと思われた。お互いの通常ルーンの射程外である。その距離だと確かに短い強化ルーンであっても、速度に長けた風のフェアリーならば数秒で到達できる距離である。ルーンを唱え終える時間などなかった。
「私が壁になりましょうか？」
躊躇っているラウに、ファーンが提案をした。だが、ラウは首を横に振った。
「フェアリーが二人いたら終わりよ」
「私の方がラウっちより早口です。ラウっちだけでもお逃げ下さい」
ファーンはそう言うと髪留めに手をやろうとした。しかし
「なんでやねんっ」
ラウはそう言うとファーンの手を取った。ファーンは髪留めに触るのを止められた格好だ。
「いらんこと考えたらアカン」
ファーンは少し驚いたような表情をすると、腕の力を抜いた。
「ラウっちは時々古語になります」
「あ……」
ファーンに指摘されて、ラウは少しばつが悪そうな表情になった。
「普段は使わないようにしているんだけど、つい出るのよ」
「あの瞳髪黒色の上席賢者様も古語使いでしたね」
「我々の師匠が妙な人でね」
ラウはファーンの腕を放した。
「最初の修行は古語を習得する事、なのよ。その後は古語以外使用禁止。だからあそこでは古語でしかしゃべれなかった。そのせいで今でも時々、ふとした拍子に口をつく」
「瞳髪黒色様はずっと古語ですね」

「エルデは古語が気に入ってるみたいね。ツッコミ易いとかで。あの性格にはある意味似合っている言葉だわ」
「全身全霊で同感です」
「あなたはそもそも言葉をもっと勉強した方がいいわね」
「意味がわかりません」

「何をごちゃごちゃ相談してる？つまらない考えはよせ。ケガしたくないだろ？」
じれたような声が二人の会話を中断させた。
「言っておくが、俺はジクス様と違って、紳士じゃないぜ」
相手を馬鹿にしたような色が、その声には含まれていた。相手が袋のネズミだと確信しているのだろう。だが、それがあながち慢心でないということは、ネズミ役である当のラウにはわかっていた。
「ちっ」
このままでは万事休すと言えた。正体がわかっているルーナーの力を封じるのは非常に簡単な事である。ラウとファーンは観客にタネを知られている手品師のようなものだった。手品師とルーナーの違いは、タネを包み隠す技術を研鑽する事で、それでも素晴らしい舞台を演じる事ができる手品師と違い、ルーナーはそのタネが全てと言っていい存在なのである。
座標軸を固定し、できるだけ速くルーンを詠唱し終える事。
それがルーナーの仕事の全てである。発動したルーンの効果の多少や強弱など、ルーンを唱え終わった後の話である。だからこそルーナーは詠唱時間を確保する為の手段として信頼できる剣士や戦闘力のあるフェアリーの能力を持つ者と行動を共にするのが常であった。
もっとも、これが普通の場所であればラウやファーンとてここまでの窮地に陥る事は考えられない。なぜなら普段から強化ルーンを纏っていればいいだけの事である。不意の攻撃を受けても、それがあれば次の手を打つ為の時間を稼ぐ事は容易である。そもそもラウ

ほどの高位ルーナーであれば、様々な感知ルーンで、ある程度は事前に敵の存在に気付く事ができる。準備に時間がとれるということは、ルーンを唱える時間を確保できる事を意味する。

しかし、ヴェリーユである。ルーンを使えない、いや使わない状況で相手との距離を失ってしまうと、もう後はない。首筋に剣を押し当てられ「動けば切るぞ」と脅されているに等しい。

ラウもファーンも兵士ではない。白兵戦の能力も、ましてやたいした経験もない。敢えて無理矢理に気休めを挙げるとすれば、二人とも腕力のあるアルヴ族である事だろうか。

相手がデュナンやアルヴィン系であれば、二倍とも三倍とも言われる腕力の差がある事になるが、武器すら持たない状況ではやはり気休めにもならないであろう。

ましてや戦闘の訓練をしている専門家のデュナンと素人のアルヴでは腕力の多寡などそもそも大した問題にはならないと言えた。

「後ろも塞がれました」

苦し紛れながら、反転して逃げることを考えたとたん、ファーンがそう告げた。

文字通り手詰まりの状態に歯ぎしりをするラウに、橙色の僧兵服の男が声をかけた。

「まあ、あれだ。おとなしくしてもらえればこちらは危害は加えない。ご婦人には申し訳ないが猿ぐつわだけ付けさせてもらえれば、手鎖などという無粋な事もせんよ。俺はさっきも言ったように紳士じゃないが、そういう指示は受けているんでな」

ラウはその言葉通りの状況を想像し、思わず心の中で突っ込みを入れた。

（なんでやねん！）

続きは声に出した。

「手鎖の方がましだ」

「徹頭徹尾、同感です」

ファーンもうなずいた。
「ただし」
男は続けた。
「逃走したり抵抗するそぶりを見せた場合は生死の別は問わないとも言われている」
そう言って僧正と思しき男が手を挙げて合図をすると、十人ばかりの兵が長弓をラウ達に向けて構えた。
「つまり、だ。殺す必要は無いが、仲間内でも性癖が異常だと評判の俺の手慰みの相手として生かしたままいたぶるのも自由という事だ。どうだ？さすがにこれは想像するだけで猿ぐつわよりもぞっとする話だろう？」
「冗談にしても品がなさ過ぎるわね」
「こんな時に質問ですが、評判になるほど性癖が異常とはどういう事でしょうか？」
「？？想像できないあなたがうらやましいわ、ファーン」
「恐縮です」
ルーンの射程外である。つまり相手も物理的な攻撃しか手はない。ラウ達にとってはそれが唯一の救いと言えたが、さりとて事態が逼迫している事実は変わらなかった。

「やはり私が壁になります。後生ですからなんとかラウっちだけでもここを脱出して下さい」
「いや……」
「私は《蒼穹の台》にもラウっちを守るよう命じられています」
「ファーン」
「はい」
「いつかあなたが私に言った事は嘘だったの？」
「と、申しますと？」
「ファーン・カンフリーエは三聖《蒼穹の台》の部下なのか？それとも三席《二藍の旋律》の部下なのか、どっちなの？」

「あ……」
ラウの指摘にファーンは言葉を呑んだ。
「あの時、『今は《二藍の旋律》だけが主だ』と言わなかった？」
数秒の沈黙があった。
「どうなの？《群青の矛》」
「私は！」
ファーンは短くそう叫ぶように告げると、ラウよりも一歩前に出て正面の僧正に対峙した。そして両手を後ろ手に回し、今度は迷わず髪留めを解いた。
「あ！」
ラウが止める暇はなかった。すでに右手には儀仗が握られていたのである。
エルデの持つノルンが普段は指輪の形を成しているのと同様に、ファーンの儀仗は普段は髪留めの役を与えられているらしかった。
髪留めでまとめられていたファーンの長い髪が、山から吹き下ろす冬の風を受けて大きく広がり、すぐ後ろに立っていたラウの視界を半分ほど奪った。
「私は《群青の矛》。三聖《蒼穹の台》の部下です」
「ファーン！」
「すみません、ラウっち。時間を稼ぎます。お逃げ下さい」
「やめろ！」
手を伸ばしてファーンの肩を後ろから掴もうとしたラウの手が止まった。
時を同じくして敵からどよめきがあがった。
遠目にも見えたのである。ファーンの額に第三の眼が現れ、赤く燃えさかる様が。
ファーンはラウを無視するとそのまま儀仗を高く掲げ、大声でルーンの前文を唱え始めた。
ただし、なぜかゆっくりと。
「我が名はファランドールに抱かれしマーリンの血族、《群青の矛

≫　古の理により君臨する十二の王の末裔なり。我が一つの王フリーエと我が真実の目をとくと見よ……」

それはおそらく的の注意を自分だけに向けさせる為に行った挑発行為だったのだろう。

ラウはしかし、逃げなかった。

おそらくかつてのラウであれば、部下であるファーンを捨て駒として盾にする事に何の迷いもなかったであろう。賢者とはそういうものであり、そう訓練もされていたからだ。

だが、カレナドリィ・ノイエの一件を境に彼女には微妙な変化が生じていた。直接的な変化はジャミールの近くでエルデと再会してからだと言えるが、それ以前に賢者として精神的にやや不完全とも言えるファーンと心が通じあった頃から、心情に微妙な「ブレ」が生じていたのである。

当初は《蒼穹の台》がなぜこうも「不完全」な、それもあまり役に立たないと思われる「ハイレーン」を自分の部下に据えたのかを疑問に思っていた。

大賢者《菊塵の壕（きくじんのほり）》の妹という触れ込みを聞いた時には、ラウは大いに期待していた。だが、やってきたのは妙に杓子定規な物言いをするわりに、稚拙な感情をしばしば見せる、言葉遣いが微妙な、まさに子供のルーナーだったのだ。

もっとも子供ながら賢者を名乗っているのであるから、ハイレーンとは言え相当のルーナーであることは間違いない。しかもラウの知る限り、エルデを除くと現状の賢者の中では唯一人のハイレーンである。はっきり言ってしまえば、賢者としてはラウよりもファーンの方が先輩であり、エーテル制御に関しては上だと判断できるのだ。

だが、それでもハイレーンの常で治癒系以外で使えるルーンは極端に少なく、ラウが持つダラーラのような特殊な呪具を持ち合わせている様子も特になく、要するにあまり見所もないように思えた。

それだけにいったい《蒼穹の台》は何を思ってこんな子供を敢えて自分の下に付けたのだろうとずっと疑問を感じていたのである。

しかし、最近はそんなファーンとの旅を楽しんでいる自分に気付く事が多くなっていた。

普段は基本的に無表情なファーンではあるが、それを言えばラウとて同様である。そんな二人が、そのときに生じた感情を隠さず顔に出して語り合う事がだんだんと増えている事に戸惑いを覚える事もあるほどであった。

ある街の宿で食事をしていて、とある皿に盛られた料理の味が好みだった事があった。それをあまりに自然に感想としてファーンに告げ、彼女も全く同感だと言って二人で微笑みあった時には愕然としたものである。同じ感情を共有できる空間を所有する小さな幸福感を漠然と感じた瞬間であった。

それからはうまいものを口にした時に、ファーンが素直に笑うようになり、その感想を告げる事が普通になった。そしてそのファーンの笑顔を見て、自然と自分にも笑顔が浮かんでいることを自覚していたのである。

さらに言えば、そんな状態が心地よいと感じていたのだ。

とはいえ確実に以前とは変わってゆく、いや賢者になるずっと以前の頃に戻りつつある自分に、ラウは疑問を持っていた。賢者としては、重要な特性がどんどん低下しているのではないかと感じたからである。

??ラウのその危惧は的を射ていたのかもしれない。

なぜなら現に、今こうして二人揃って窮地に陥っている。それはとりもなおさず賢者として二流である証なのではないか。

で、あれば。

賢者として、ラウはファーンを積極的に盾として使うべきであった。三席であるラウを末席のファーンがかばうのは至極当然のことであり、そこにそれ以外の感情を挟み込む余地などないのだから。

正教会としても賢者を二人失うより一人失う方が好ましいはずで

ある。ましてや自分ではなく《蒼穹の台》が主だと言ってのけたファーンに対して何を迷う事があろうか。

そこまで考えた上で、ラウはある決心をした。

待ち伏せ部隊の僧正は、ファーンがマーリンの眼を開きルーンの詠唱を始めるのを見ると、すかさず合図をした。もちろん、長弓隊に掃射命令を下したのだ。迷っていたら部隊の全滅に繋がりかねない。

同時に風のフェアリーと思しき僧兵が三人、ファーンに向かって駆けだした。

「敵のルーンに怯むな。あれは強化だ。この距離では攻撃ルーンは届かん」

その声が終わらぬうちに、長弓から放たれた矢は緩やかな弧を描いてラウとファーンの頭上に降り注いだ。ファーンのルーンが強化だろうが攻撃だろうが、詠唱を終えぬうちに何本かの矢がファーンの体に突き刺さるのは明白だった。

《群青の矛》は相手の行動に一切動じることなく残るルーンの後半は早口で唱えた。自慢するだけあって、その気になったファーンの詠唱は異常に速かった。

「トレプ・ルーメ・バルクオドシム！」

ファーンが唱えたルーンの認証文は短いものだった。多くのルーンに精通している賢者であれば、ファーンの唱えたルーンがどういうものであるかは誰でもわかった。もちろん、ラウもよく知るそのルーンは「柔らかな石化」と呼ばれるものだった。

対象である単体にのみ有効な強化ルーン。いや、正確には治癒系のルーンである。相手の皮膚をその柔軟性を損なうことなく石のような強靱さを持たせつつ、内部を活性強化して自己治癒力を増幅させる類のもので、「石化」と呼ばれるものの、かけられた人間は普通に動くことが可能である。

強化ルーンと間違えられる事が多いのは、その石化が一定の物理

衝撃に耐えられる事に由来していた。
そう。ファーンはそのルーンをラウにかけたのである。
いまからでは避けようのない無数の矢と風のフェアリーによる剣の攻撃を一定量無効化し、筋肉を活性化するルーン。つまり、攻撃を防ぎつつ逃げる為の羽のような鎧を身にまとったようなものだった。
ハイレーンであるファーンが唱えることのできる、おそらくこの状況ではもっとも短く効果的なルーンがそれだったのだろう。
そしてファーンが唱えたルーンの正体を知ったラウは、ファーンの「読み」に気付いて何とも言えない気持ちになっていた。なぜならファーンは単体、すなわちラウにだけ効果があるルーンをかけたのだ。つまり、ファーンはラウが逃げずにその場に、少なくともルーンが届く範囲内に居る事を前提にルーンを唱え始めたという事になる。ラウが逃げようとしない事を悟っていたのだ。
「ファーン！」
ファーンの予想通り、ラウは敵に背を向けなかった。それどころか降り注ぐ矢がまさにファーンに刺さろうとした瞬間に、彼女に覆い被さるようにして一緒に倒れ込んだ。
「ラウっち、何を」
「それはこっちのセリフよ。いいからこのまま外傷治癒系のルーンを唱えて。範囲でいい！」
「え？」
「早く！」
言い終わらないうちに二人の上を何本かの矢通り過ぎた。しかし、遅れて発射された何本かの矢は真上から降り注ぐように二人の賢者に突き刺さった。
「うぐっ」
ラウの命を受けてルーンを唱えようとしていたファーンは、そのルーンを唱える前に鈍い悲鳴を上げた。ラウ自身は背中にいくつかの衝撃を感じたが、痛みはない。「柔らかな石化」が矢をはじいた

のだ。しかし体に感じる衝撃から、複数の矢がファーンの体のどこかに突き刺さったのは間違いなかった。

だが、ラウはファーンの傷を確認する事よりも先に、ある行動を起こしていた。ダラーラを取り出して、糸巻きを強く巻き上げていた。

その作業をするラウの目に、血が筋を付くって地面を流れてゆくのが見えた。確認するまでもない。ファーンの血であることは間違い無かった。だが、ラウは弦を巻き上げる手を止めなかった。

ブチンと言う大きな音がして、強い張力に耐えきれず弦が切れた。ラウはかまわず二本目の弦も巻き上げた。

「観念しろ」

すぐ背後で僧正の声がした。

二本目の弦が切れた。敵にはかまわず、ラウは最後の弦も巻き上げ始めた。

矢の雨は既に止んでいた。ラウ達は周りを完全に包囲されていた。すでにもうなすすべはない状態と言えた。

ラウの目に映るファーンには、意識がなかった。長い髪が地面を覆うように広がり、そこに折から降り始めた白い雪が舞い降りていた。

突然、背中に衝撃を受けた。

僧兵の一人が槍でラウを突いたのだ。

幸い、その攻撃もファーンの保護ルーンがはじいた。ラウはそれにかまわず、弦を巻き上げる作業を続けた。最後の弦は低音を受け持つ太い弦で、なかなか切れないようだった。

兵は怪訝な顔で何事がおこったのかと自分の剣を確認した。

「バカ者、何をやっている」

槍を刺した僧兵を、橙色の服を着た僧正が止めた。

「もう逃げ場はない。殺すな」

攻撃の手を止めた三人の風のフェアリーに、隊長が怒鳴った。

「しかし、こいつ、妙なまねを」

僧兵が声を出したのと同時に、ダラーラの三番目の低温弦が大きな音を出して切れた。ラウはそのままファーンを抱きしめるように覆い被さった。

次の瞬間。

橙色の服を着た僧正が僧兵達に一斉に飛びかかって拘束するように合図をしようとした、まさにその瞬間であった。二人の賢者がその場から忽然と姿を消した。

それはまさに煙が消えるように跡形もなく。

彼らの目の前で起きた一連の出来事が幻でない事は、石畳の地面に存在する赤黒い血だまりが証明していた。数本の矢に体を貫かれたファーンの血は、固まりきらずに、まだ広がりつつあった。

「ガーデル様」

「騒ぐな。ヴェリタス、いや正教会の賢者が二人もいると、さすがに易々とは捕まらんというだけの事だ。まあ、どっちにしろあの傷では一人はもう死んでいる。残る一人も、ルーンを使ったからには「陣廊」からはどこにいるのか手に取るようにわかるだろう。逃げられはせんよ」

それだけ言うとガーデルと呼ばれた橙色の服を着た僧正は地面に広がるファーンの血に向かって何かをつぶやいた。

そしてしばらくすると彼は手に持った儀仗の頭頂部を血だまりに向けて小さな声でルーンの認証文を唱えた。

青白い炎が血だまりを覆い、それはあっという間に血液を灰に変えた。

「よし、我々は次の指示があるまで逃走経路の警戒を続ける」

ガーデル僧正の声で、僧兵達は数人一組になり、それぞれがあらかじめ与えられた場所へ散っていった。

「《二藍の旋律》と言ったか」

ガーデルは彼を補佐する二名ほどを残して僧兵達が去った後も、その場にたたずんでいた。

「はい。賢者三席と聞き及んでいます。絶命した方が末席の《群青

の矛》ですね」
「楯である末席をあそこまでしてかばう賢者が居るとはな」
「は？」
「いや。最後のあれは果たしてルーンだったのか、と思ってな。このメラク・ガーデル、あのようなルーンを見るのは初めてだ」
「確かに」
「しかも自分だけでなく、仲間もろとも消えるとはな」
「もしや空間転移ルーンならば、すでにヴェリーユから逃げ出したのでは」
一人の補佐役の僧兵が慌てたような声でメラク・ガーデルにそう尋ねたが、彼は首を横に振ってそれを否定した。
「空間転移ルーンなど、三聖にしか使えんと聞いている。それに、そんな事ができるのなら、とっくに逃げ出しているだろう」
補佐役の二人はメラクのその言葉にお互い顔を見合わせた。
確かにその通りだった。背に腹は替えられずに切羽詰まって使ったものと思われた。
「そう遠くへ行ける訳はない。ともかく探すぞ」
そう言うとメラクは橙色の僧服を翻し、その場を後にした。

# 第三十七話　天敵

??化け物。

その言葉は無意識下で口にされたものであったのだろう。

アプリリアージェは、言葉が口から出た瞬間に心の中で舌打ちをした。

だが、おそらくはこれほど適切で当を得た表現はない。同時にそれは、この場で口にするもっとも不適切な言葉でもあった。

既にその言葉を口に出してしまった事を後悔しながらもなお、アプリリアージェはそう感じていた。

しかし、それを理性の力を借りてなんとか訂正しようとしても、口が動かない。舌は縮み上がり、喉の奥に巻き込まれたようで息苦しくさえあった。

言葉が出せないのであれば態度で意志を現さねばならない。そう思って手を動かそうとして愕然とした。動かないのだ。

アプリリアージェは自分の体全体が金縛りにあったような状態になっている事にようやく気付いたのである。

アプリリアージェの目の前に立っていたのは、断じてエルデ・ヴァイスではなかった。

少なくとも「それ」は　彼女の知る「人間」とは違う生物だという事を理屈抜きに感じていた。

額に第三の目があるとか無いとか、もはやそういう問題ではなかった。もちろん、額に目がある事が正常だと思っているわけではない。賢者が持つ第三の赤い眼には謎がある。しかし、ラウ・ラ＝レイにしろファーン・カンフリーエにしろ、そこに人間ではない何かを感じる事はなかった。

第三の目の存在など、些細な事に思えるほどの違和感、いや拒絶感がアプリリアージェの本能から湧き出していた。目の前にいるこ

の存在を、人間だと思えと言う方がどうかしているとさえ思える。
かつてアプリリアージェが知っていた「エルデ」であったその存在は、そこまで異常なエーテルを発していたのである。
それだけではない。
エルデ・ヴァイスが自らの体で目覚めてから、アプリリアージェが初めて見る第三の眼の禍々しさはどうだ？
額にある三番目の目だけではない。大きく見開かれた二つの漆黒の瞳にも殺気がみなぎっているのだ。
いや。
正しく形容するなら、それは殺気ではない。
そんな生やさしい言葉で今感じている恐怖を言い表すのは、自らの矜持に悖（もと）るとアプリリアージェは本気で感じていた。
邪気とでも言おうか。おぞましい気で構築された存在。そんな陳腐な言葉しか出てこないのである。目の前に居るその恐ろしい生物は、今まさにアプリリアージェを生きたまま容赦なく捕食しようとしていた。
だが、それに抗う術がない……。体は全く動かず、思考もほとんど働かないのだ。
蛇に睨まれたカエルの気分とはまさにこの事なのだろうと、妙なところで納得する自分がいた。かつて天敵を前に動けなくなるというカエルを、アプリリアージェはばかばかしい存在だと思っていた。たとえ敵わぬとしても、なぜ抗わないのだ、と。逃げられないのなら戦うべきだ。全てを放棄してなすがままなどと、アルヴの血が巡る彼女には全く存在しない選択肢だったのだ。
だが、動けず、ただ呑まれるだけのカエルの気持ちを今、嫌と言うほど実感している自分を見つけてしまった。そこにはもう悔しいとか、ましてや矜持などと言う言葉は何の意味も持たない、ただ暗い深淵があるのみで、アプリリアージェはただ底知れぬ絶望に落下していくだけだった。

それほど……エルデの顔は完全に面変わりしていた。
ある種神々しささえ感じるほどの美貌はそのままだが、つり上がった三つの目でアプリリアージェをにらみ据える様子は、まるで巨大な猛禽のようだった。
そしてその少し開いた口の端からは、明らかに他の歯よりも鋭い犬歯が毒々しく覗いていた。つまりアプリリアージェは体の自由がきかないまま、ただエルデに襲われるのを待っているだけの状態だったのだ。
その時のアプリリアージェの脳裏に浮かんだのは「私は喰われるのだ」という覚悟の言葉だった。
そう。アプリリアージェとエルデは、旅の仲間から一瞬にして捕食者と被捕食者の関係になった。そしてこれは信じがたい事だが、少なくとも被捕食者の立場にある者は自分の立場を納得すらしていたのだ。
すでに比喩や修辞が入り込む余地はない。まさにそこにいたのはヘビとカエルだった。

エルデの呼吸は荒く、大きく見開いた三つの目はじっと「獲物」を見据えていた。
しかし、なぜかなかなか次の行動……すなわち捕食行為に移ろうとはしなかった。
見れば彼女は、左手で自分の左膝を鷲づかみにしていた。足の動きを止めるかのように。
さらに獲物に伸ばすはずの右手は、服を……胸の辺りを力一杯掴んでいた。
「隠せ……」
やがてエルデは濡れたように光る黒い瞳を伏せると、絞り出すような声でそう言った。
アプリリアージェにはその言葉の意味するところがいったい何なのかが全くわからなかった。思考力など、すでにアプリリアージェ

にはなかったのだ。
「そのケガを隠せっちゅうてんねん！」
小さな悲鳴のような声でそう言うと、エルデは全ての目を閉じた。
「お願いや。その血を、早く消して……」
「え？」
エルデの視線が外れたかだろうか。アプリリアージェは何とか一部の体の自由を意識下に取り戻す事ができた。考えようとする気持ちも少し復活したようだ。
麻痺したような脳髄にムチを入れると、アプリリアージェはエルデの言葉の意味を必死で考えた。
『ケガ』
彼女は確かにそう言った。
そして、それを『隠せ』と。

底なし沼から脱したダーク・アルヴの歴戦の勇士は自我を取り戻した。そして指からしたたる赤い滴を認めると、隠しから取り出した布ですぐにそれをくるんだ。強く。そして幾重にも執拗に。
（これだけではない）
無意識が意識に告げる。
絨毯に目をやる。そこには染みこんだ赤黒い染みがあった。アプリリアージェは急いでポットの破片に残っていたその香りの強い茶葉を掴むと、血で出来た染みの上に散らし、さらに靴の底でその上を踏みしめた。
そこまでしてようやくアプリリアージェは息を吐いた。そして隣に座っているはずの小さなテンリーゼンに気付いた。不思議だった。なぜ今までその存在を忘れていたのだろうか、と。
小さなテンリーゼンは震えていた。自分で両肩を抱いて、そして俯いていたのだ。
アプリリアージェもテンリーゼンも普通の人間と比べて精霊波に

対する感受力が数倍から数十倍も過敏だと言われる高い能力をもつフェアリーである。その場を支配するエーテルの波動を感知する能力が強いということは、すなわちそれだけ影響を受けやすいとも言える。こうなると彼女たちの能力は言わば両刃の剣のようなものなのだ。

フェアリーとしての能力だけを比較するならば、アプリリアージェよりも上だと言われるテンリーゼンである。アプリリアージェと同様、いやそれ以上の恐怖に押しつぶされそうになっていたに違いない。

アプリリアージェは視線をテンリーゼンからエルデに移した。味方から敵へと。

本能はいまだにエルデを「敵」だと警告し続けている。

敵であれば戦うべきである。しかもそれが命に関わる敵であるならなおさらである。そして今、その敵は俯いて鼻と口を手で覆い、苦しそうに肩で息をしている。

隙だらけと言ってよかった。今こそ反撃の好機なのである。

だが……アプリリアージェはその状況にあってさえ「何も出来ない」己に愕然としていた。

攻撃の態勢すらとれなかったのである。

いや、攻撃しようという意気がまったく湧いてこなかった。

ただひたすらこの場を逃げ出したかった。まるでエルデに睨まれた瞬間に人格を成す要素の大部分が停止してしまったかのようだ。

体の機能が止り、意識が凍り付き、それがようやく解凍を始めだした状態なのだろう。凍てついた理性と尊厳がじれったいほどゆっくりとではあるが、手の内に戻りつつあった。

浅く速い呼吸が続いていたせいだろう。動悸が尋常ではなかったアプリリアージェはゆっくりと数回深呼吸をすると、理性に活を入れて現状を客観的に認識する作業にとりかかった。

エルデは特にルーンを使ったわけではない。
ただ、目を三つ見開き、眉をつり上げて睨んだだけなのだ。
なぜか？
やっと、それがわかった。
エルデはアプリリアージェの「血」に反応したのである。
それが何を意味するのか、まだ凍り付いたままではあるものの、
アプリリアージェはその答えが自らの記憶の倉庫の奥にある事に気付いていた。

「一応……隠しました。これで……良いですか？」
おそるおそるそう声をかけた。自分でも情けないほど、しわがれた声しか出なかった。
恐怖は幾分和らいでいたが、動悸はまだあまり収まっていない。

「？？堪忍や」
エルデは顔を覆ったまま、荒い息づかいの中でそう言った。
「悪かった。さすがに怖かったやろな」
「あなたはエルデ……なのですよね？」
アプリリアージェがそう問いかけると、エルデは力のない笑い声をたてながら、深くうなずいた。
「あははは……。確かに『化け物』やな。ウチに対しての適切きわまりない普通名詞や」
気付くと第三の瞳は閉じられていた。黒い前髪の間から見える形のいい白い額には、少女の異形を現すものはもう何もなかった。同時に部屋を満たしているエーテルから急速に敵意のような感覚が抜けていくのを感じた。
「血の匂いが駄目なのですか？」
アプリリアージェはいつだったかエイルが口にした言葉をこの段階になってようやく思い出していた。
『エルデは血が苦手なんだ』

間違い無くそう言っていた。その時は単純に、血を見るのを苦手とするような、よくいる人間の一人なのだとしか認識していなかったのだ。

しかし、さに非ず。『苦手』などではない。

おそらくは、まったく逆……。

アプリリアージェは確かめずにはいられなかった。

「エルデ、あなたはもしや……」

その言葉に、エルデの眉がぴくりと上がった。

「??やっぱり、知ってたんやな」

エルデはアプリリアージェにその顔を向けると、あきらめたような、そして悲しげな表情でそういった。そしてすぐに目を伏せると、さらに寂しそうな声でつぶやいた。

「『ウチら』の事が記された文献はもう殆ど無いはずやのに、リリア姉さんくらいになるとどこからかそういう知識も得られるんやな」

アプリリアージェは頷いた。

「偶然でした。昔の事です。王立図書館の特別閲覧室で……」

「そうか……」

再び顔を上げたエルデの表情は元に戻っていた。顔には汗がうっすらと浮かんではいたが……。

その頃になると部屋に蔓延するエルデのエーテルもほぼ正常な状態に戻ったようで、アプリリアージェの体の……いや、随意筋に対するエルデの呪縛はすでに完全に解けていた。

「幼い頃に見た文献に、『あなたたち』の事が載っていました。当時の図書館長に私は『ここに書いてある事は本当か』と尋ねたところ、彼は私が掲げる本の頁を食い入るように見つめた後、荒唐無稽な作り話だと言って笑っていました。でも、私はむしろ図書館長の態度で『本当の事かもしれない』と思いました。とはいえ、その後は殆ど思い出す事はありませんでしたが……」

アプリリアージェはエルデに問われる前に、自分からぽつぽつと

しゃべり出した。
　緊張が尾を引いていたのだろう。声帯はまだ本調子ではないようで、聞こえてくるかすれた声は自分のものとは思えなかった。
「その文献は？」
　エルデはアプリリアージェの言葉に形の良い眉を上げた。だが、それにはもう恐怖心を覚えなかった。エーテルは安定していたのだ。
「もう一度よく読んでおこうと思って翌日になって確認したのですが、その文献はもう元あった場所からは消えていました。特別閲覧室を隈無く探し回りましたが見つかりません。図書館長に尋ねても知らないということでした。つまり、おそらくはご想像通りでしょう」
　アプリリアージェはそう言って首を振った。
「そうか。摘発に『漏れ』た本を発見されて、慌てて闇に葬ったってなところやな」
「ええ、そうだと思います」
「念のために聞きたいんやけど」
　エルデは穏やかな口調を変えず、しかし強い調子で尋ねた。
「そんな事をするその図書館長は、一体何者なんや？どう考えてもマーリン正教会の関係者としか思われへんねんけど」
　アプリリアージェは、その問いに思わず目を伏せた。
　いつもの彼女であれば、適当な言葉をつなぎ合わせてごまかす事も可能だったであろう。もしくは「機密事項だ」とでも言って突っぱねる事もできたに違いない。
　しかしその時のアプリリアージェには、エルデの問いに抗うという選択肢は存在していなかった。たとえそれが国家の機密などというものであろうと、彼女はもはやそんなものはどうでもいい些末なことのように思えていた。それはアプリリアージェの内部に於いて短い時間で価値観が大きく変化した事を示していた。
　本能が感じていた生命に対する危機感はすでに去った。しかし、萎えた気持ちはまだ完全には元に戻ってはない。だが、たとえ元に

戻っていたとしても、隠す必要は感じなかっただろう。
「当時の図書館長はマリオ・ヘラルドと名乗るアルヴです。調べてもらえばわかると思いますよ。我が国の公式記録にもおそらくそう記述されて残っているでしょう」

エルデはアプリリアージェの答えを聞くと、顔を曇らせた。
名前に心当たりがあったわけではない。むしろ心当たりが無かった事を訝ったのだ。
「証拠」の隠滅作業はマーリン正教会のごく上層部……要するに賢者会の仕事であった。つまりエルデの知識の中にある名簿に記されている名前が告げられるなら、話は早かったのだ。
アプリリアージェはしかし、驚いた事にエルデが請わぬうちに自らが知る重要な情報を口にした。
「マリオ・ヘラルド。それは図書館長であった時の名前です」
そう告げるダーク・アルヴの青ざめた表情を見て、エルデは目を細めた。
「??ちゅう事は、今は違う名前を名乗ってるって事か?」
「そうです。あなたも知っている名前です」
エルデの表情が驚きに変わった。
「ウチと姉さんの共通の知人で、アルヴって……まさか!」
アプリリアージェはうなずくと、続けた。
「たぶん、ご想像通りです。そのアルヴは今はマリオではなく、ハロウィンと言う名前を名乗っています。呪医ハロウィン・リューヴアークと」
エルデが少なからず持っていたハロウィンに対する疑惑は、思わぬ形でその答えを得る事になった。だが、その回答は決して無条件で歓迎できるものではなかった。
エルデが口を開く前にアプリリアージェは続けた。
「今まで私の中にあったいくつかの疑問が一つに繋がりました」
それはまるでエルデが考えていたような言葉だった。

「ハロウィン先生はカラティア家の非公式な主治医でもあると聞いています。ネスティを取り上げたのも先生だそうです。あなたの……いえ、あなた方の事を歴史から抹消する役目も請け負っていたということは、あなたの言うとおり、そのマリオという人物、つまりハロウィン先生は正教会の関係者と言う事なのでしょうね。つまり、シルフィード王国は、少なくとも一人の正教会関係者と裏で繋がっているという重大な事実が判明した事になりますね」

エルデはうなずいた。

「これで辻褄が合うた。『宝鍵』、いや『マーリンの標』の事を言い当てた時にもっと考えを巡らせるべきやったかもしれへんな」

「と言う事は？」

「『風のエレメンタル』の誕生に関わっている事からも、ハロウィン・リューヴアークなる人物が正教会の人間なんはまず間違いないやろ。そやけど、今のところウチとは全く関係のない人間や。言い換えると、ウチがその存在を知らへん教会関係者っちゅう事や。それに今までの様子やと、向こうもウチの事を知らんはずや。気付いてないと言い換えてもええかもしれへん。幸運な事に、な。まあけど、もっともこの先どう利害が絡んでくるかはわからへんけど」

「先生は、その……本当にあなたの事を？」

「絶対気付いてへん。幸いな事に今まではエイルの体で会話してたからな。この姿やったら、ひょっとしたらあっという間に気付いたかもしれへんな」

「でも、あなたの……いえ、初めてエイル君の族名、エイミイという名前を聞いた時は驚いていましたよ」

「へえ」

「でも、あなたの名前はエルデ・ヴァイス。だからそっちの謎はまだとけていません」

「なるほど」

エルデはアプリリアージェに対してというより、何かを納得したようにうなずいた。

「マリオ・ヘラルドにハロウィン・リューヴアーク。どっちもウチの知らん現名（うつしな）やからマリオもハロウィンもどうせ現世で使う偽名なんやろな」
「本当の名前は別にある？」
「当然やな。それに正教会の人間のくせに水のエレメンタルを連れて回ってる事がそもそもおかしいんや」
「というと？」
「正教会が何の為に存在しているのか……それを知ってたらわかる」
アプリリアージェは、エルデの言葉の裏を探そうとした。だが、その努力をすぐに放棄した。
「教えてはいただけませんか？私たちには風のエレメンタルがいるのです。知る権利……いえ、そんな偉そうな事を言う立場にはありませんね。そうですね。守る為には知りたい。知っている人が目の前に居るなら、教えてほしい。偽らざる私の気持ちです」
「風のエレメンタル……か」
エルデはそう言うと目を閉じて腕組みをした。
「姉さんは、それでもウチをだまし続ける訳やな」
「え？」
「いや、ええわ。今の言葉はなし。ウチが知ってもどうしようもないんやし」
「……」
「わかった。教えたる。正教会はもともとエレメンタルを狩る為に作られた組織や」
「まさか」
「前にもそれとなく言うたと思うけどな。ま、正確に言うと、その役を負っているんや、賢者会の人間やけどな」
アプリリアージェは言葉を失った。
これでは……。
エルデの言葉が本当であるならば、彼女は二重の意味でアプリリ

アージェ達の敵だという事になる。命と、守るべき存在を脅かす政敵。

だが、エルデは自らの言葉を一蹴した。

「ま、そんな事はどうでもええねん。それより問題はハロウィンや。今の話でわかったと思うけど、ただの正教会関係者やない。あいつは間違いなく賢者会の人間や。知ってる事も知らん振りしたり、そもそも自分がルーナーやっちゅうそぶりも見事なほど見せへん。賢者らしゅうない振る舞い……いろいろ疑問はあるけど、まあ、なかなかのタヌキなんわかった。で、リリア姉さん？」

「はい？」

「姉さんが見たっていうその文献にはそもそもウチらは何て書かれてたんや？」

エルデの口ぶりは、正教会の設立の本当の理由や深い部分には今はこれ以上言及しないという意思表示ととるべきであろう。ここは逆らわない方がいい。アプリリアージェはそう判断した。

「それは……」

口ごもるとアプリリアージェは目を伏せた。

「目の前におる本物が事実を教えたる。さっきの怯えようからすると、相当えげつない事が書かれてたんやろ？『化け物』大いに結構。でも、変な化け物やと誤解されたままなんは本物の化け物としてはほっとかれへん。それに、そっちのお人形さんも、一体ウチらが何の話をしてるのか、ええ加減に教えろって思ってるで」

アプリリアージェはエルデがアゴで示したテンリーゼンに顔を向けた。

震えはとまっていた。そしてその視線はエルデに向けられたままで、アプリリアージェには反応しなかった。

だが……。

テンリーゼンは体ではなく、違う手段で反応した。

「知りたい」

そう耳元で囁く声があった。

テンリーゼンの精霊会話（エーテルトーク）だった。
アプリリアージェはそれを聞くと覚悟を決めた。

おそらく、エルデと共にいればいつかはこういう時がやってきたに違いない。それは早いか遅いかの違いだけで、考えようによってはいい形で「その時」が来たのかもしれないのだ。
その場には三人以外、他に誰もいなかった。仲間の誰かが恐怖にかられ反射的にエルデに攻撃を加えるような事態になっていたとしたら、悲惨な情景を目にする結果になっていたかもしれない。現に沈着冷静で通っているアプリリアージェにして、その一歩手前にいたのだ。で、あるなら、他の人間であれば、恐怖に飲み込まれ何をしでかしてもおかしくはなかった。
アプリリアージェの見立てでは、エルデはどうやら自分達をすぐにどうこうする様子はなさそうだった。つまり、今ここでエルデの事を知った事で、アプリリアージェ自身が他の仲間との緩衝材として機能する体制ができたと言える。
（それに……）
そこまで思いを巡らせてから、アプリリアージェは一つのことに考え至った。
この場面は、ひょっとしたらエルデが適当と思われる機会を狙って仕組んだ事なのかもしれないのだ、と。
そうであれば、アプリリアージェはエルデに信頼されていると言うことに他ならない。それも、かなり深くである。言葉で説明を受けてからあの恐怖を感じるよりも、先入観なしで実感することで他の仲間の感情を把握しやすいのは確かだろう。それについての対処をより深く真剣に考えることも可能だ。エルデはそれをアプリリアージェに託した、いや願ったのかもしれなかった。
エルデには、そもそも怒気や敵意など、本当はなかったのだ。
そう考えると、ようやく動悸が完全に収まった。

## 第三十八話　赤い眼の謎

アプリリアージェはテンリーゼンに小さくうなずくと、記憶にある「化け物」についての既述を感情を抑えた口調で羅列した。
「マーリンは、ヒトの上に別の種を造った、と言った事が書かれていました。そして『それ』は『ヒト』の天敵であり、捕食者であると」
アプリリアージェは淡々とした語り口でそう話し始めたが、「捕食者」という言葉が出ると、テンリーゼンはアプリリアージェの方へ面を付けた顔を向けた。
テンリーゼンが誰かの会話にそういう反応をすることは珍しい。
アプリリアージェは「本当だ」という風にうなずいて見せた。
「なるほど。他には？」
エルデは横目でテンリーゼンの様子を興味深げに観察しつつ、アプリリアージェには続きを催促した。いつもと様子が違うテンリーゼンを見てエルデなりに多少の警戒をしているのかもしれなかった。
「『それ』はヒトと同型。しかし極めて長寿。さらにヒトと違い三つの目と恐ろしい力を持つ……そう書いてありました」
「ふん。それだけ？」
「？？そして、はるか昔。人がそろそろ思い出す事を面倒に思うほど大昔、つまり有史以前に『それ』はヒトによって滅ぼされた、と」
「十年戦争でアルヴがピクシィを滅ぼしたように、か？」
「……」
アプリリアージェはエルデの問いには何も答えなかった。答える言葉がなかったからだ。彼女が答えるべき質問ではない。それは問いかけたエルデにも、そしてアプリリアージェにもわかっている事なのである。エルデは答えを求めているわけではない。ただ、そう言わずにはいられなかっただけなのだ。
少し間をおいてから、エルデは口を開いた。

「天敵で捕食者ね。簡潔な表現やな。でも残念ながら全部事実やしな」

エルデの一言にアプリリアージェとテンリーゼンに微妙な緊張が走った。だが、さっきの本能の悲鳴が再び心に湧いてくることはなかった。理性がエルデを認め始めていたのだろう。だが、エルデの口から否定する言葉が出なかった事実は、二人にとって大きな衝撃であることに間違いなかった。

文献の既述は、ヒトを超えた存在である「モノ」に対する「比喩」表現なのだと理性は主張していた。だがそれを「比喩」ではなく「実在したもの」だと本人であるエルデは認定してしまった。

つまり今この状態は、テーブルを挟んで、カエルとヘビ、リスと鷹、あるいはネズミとネコが対峙しているようなものなのである。

エルデはゆっくりとした動作で額に垂れている前髪を片手でかき上げた。形の良い白い額が見えたと思った次の瞬間には、そこにマーリンの眼、つまりあの血の色に染まった第三の眼が再び現れた。

それがエルデの「本来の姿」であった。

アプリリアージェは沈黙に耐えられなかった。今は何か会話をしていたかったのだ。自分の理性をつなぎ止めておけるもの。アプリリアージェはその時にはエルデとの会話しか思い浮かばなかった。恐怖に溺れる事は無くなったものの、ともすれば頭の芯がしびれたようになる。それは自分自身の放棄につながる。アプリリアージェはエルデではなくそれを恐れた。

アプリリアージェはゴクリと音を立ててつばを飲み込むと、エルデの顔をまっすぐに見て口を開いた。

「賢者が持つその目は、もしや？」

「ご想像通り『ウチら』　つまりヒトの天敵の力の象徴みたいなものやな。命の一部と言うてもええ。ヒトにこれを埋め込み一体化させる事によって、賢者が生まれる。ヒトから見たら賢者は擬似的な

天敵やな」
　エルデは「これ」と言う時に、自分の額に指先を当てて示した。
もちろん、あの禍々しい赤に染まった第三の眼に、である。
「あなたは以前、賢者の修行について話してくれましたが、その中にはその第三の目と適合させる為の調整なども含まれている、と言う事ですね」
　エルデはうなずいた。アプリリアージェにすれば、今まで持ち越してきた多くの謎がこれでいっぺんに解決したようなものだった。
　エルデは続けた。
「ウチは……ううん、ウチらはヒトを喰らう存在や。ウチ自身も信じとうないけど、それはどうやら本当や。でも、ウチはまだヒトを喰ろうてへん」
　アプリリアージェはエルデの言葉に対してどう答えていいかわからなかった。「そうですか」と相づちを打つ訳にもいかない。むしろ「今から喰うぞ」と言われた方が答えやすいだろう。エルデはそんなアプリリアージェの気持ちはわかっているのだろう。さほど間を置かずに話を続けた。
「リリア姉さんは、ウチだけやのうて、もう何人ものマーリンの眼を見たやろ？ほんなら、何か気付かへんかったか？ウチと、他の賢者とでは明らかに違う点が在るはずや。エイルの体を借りてた時も外見上は同じ特徴やから、注意深い姉さんやったら違いがわかるやろ？」
　アプリリアージェは目の前の三眼を持つ黒髪の少女をじっと見つめた。本来の眼が開いている今の姿の方が、そのぞっとする美貌によく似合っているとさえ思われた。まさにこれこそが本来の姿なのだ、と。
　そして、あらためてその三つの眼を見て、エルデの言う「違い」についても理解した。いや。気づいたと言うべきだろう。
「瞳の色、ですね？」
　エイルの第三の眼は他の賢者と同じで血のように赤かったが、元

々の二つの眼は黒いままだった。目の前のエルデもエイルの体を借りていた時と同様で、瞳髪黒色のままである。二つの黒い瞳に赤い眼が一つ加わった状態であった。

アプリリアージェが出会った他の賢者、《二藍の旋律》や《群青の矛》、それに三聖《蒼穹の台》も第三の眼が現れた状態では、「ヒト」の時と違い三つの眼が全て真っ赤に染まっていたのだ。

「ウチらは一度でもヒトを喰らうと、全ての眼が赤くなるんや。意味は違うかもしらんけど、一種の成人証明みたいなモノかもしれん」

エルデは事も無げにそう言うと、髪を上げた手を放した。同時に第三の眼は閉じられ、額にはもうまぶたさえ無くなっていた。

「本当はこんなおぞましい事は誰にも知られとう無い。でも、リリア姉さんは第三の眼の秘密にはきっといつか気付くやろなって思うてた。そやから……」

「だから、あのとんでもないエーテルをまき散らした、と？」

「お二人さんは人一倍感覚の鋭いフェアリーやから多分気付くとは思うてたけど、ウチの予想を超えて効き過ぎたみたいで、さっきはちょっとこっちの方が肝を冷やしたわ。もうちょっと制御出来ると思てたんやけどな」

アプリリアージェはこの部屋で唐突に生じた恐怖の数分間がエルデの計算だという事をこれで確信した。

「正直言うと、この体に戻ってからエーテルの制御がどうも上手くいかへん。そやから出し過ぎたかも知れへんな。あの時リリア姉さんに雷を落とされてたらと思うと今更ながらマジでゾッとするわ」

エルデはそう言うと乾いた笑いを浮かべた。

「もしも」

そう口にしたアプリリアージェの顔にようやく微笑が戻っていた。

「もしもあの時、私が恐怖に飲み込まれてとっさに落雷を発生させていたら、どうなっていたんでしょうか？」

エルデは苦笑して見せた。
「ウチは自分がしでかしたヘマを恨みながらこの先ずっと生きていくことになったやろな。そうなったらもうエイルには顔を合わせられへんかったと思う」
「なるほど」
アプリリアージェは首を横に振った。
「私はもっと自分の冷静さに磨きをかける必要がありそうですね」
エルデはしかし、寂しそうな表情で首を横に振った。
「話は元に戻るけど、エイルには『いらんこと』は言いっこなしで頼む。それから、これでリリア姉さんは心置きなくネスティの応援ができる理由ができたっちゅうわけや」
エルデの最後の言葉を聞いたアプリリアージェの眼が大きく見開かれた。
「？？あなたは……」
「エルデでええ。ウチの本質はエイルの中でリリア姉さんと出会った時も元の体に戻った今も変わってへん。そやからたとえウチの正体がわかったからっちゅうてお互いの関係を変える必要はないやろ？」
「わかりました」
アプリリアージェは普段の顔に戻ると頷いた。
「あなたは……いえ、エルデはそれでいいのですか？」
「それでええ、とは？」
「さっきも言いましたが、エルデが何もしなければ、おそらくエイル君とネスティは」
「うん……」
「気のない返事ですね。エルデとしては進んで身を引く、と？」
「そやからそんな話やないって言うてるやろ？リリア姉さん達にとってはそもそも人間と化け物がどうこうなるなんてあり得へんっちゅう話とちゃうんか？」
強い調子でエルデはそう言ったが、それはアプリリアージェには

どうにも寂しそうな声にしか聞こえなかった。
そのエルデの態度を見ても、確かに何も変わっていないのかもしれないと思った。「知る」前と後での、少なくともエルデの態度は全く変わらなかった。
そう。変わらずに、エイルの話になると寂しそうで、辛そうで、そして恥ずかしそうな態度を見せていた。図らずもアプリリアージェが口にしてしまった「化け物」という言葉を自嘲気味に自ら使う姿は痛々しくさえあった。
そんなエルデの姿を見ると、アプリリアージェはその言葉を口にしてしまった事を一生の不覚だとさえ思えてきた。おそらく、それを言わせたのがエルデ本人だとしても。

「話してくれてありがとう、エルデ」
アプリリアージェはそう言うと、テーブルの上に両手を乗せて、続けた。
「ついでと言ってはなんですが、後学のために教えてくれませんか？『喰らう』とは、文字通り、その……むしゃむしゃと人間を食い殺すという事ですか？スカルモールドのように。それとも」
「ちゃんと屠殺して、熟成させてシチューとかステーキにするとか思てるんか？」
エルデはその質問を予想していたのだろう。アプリリアージェの言葉を途中で遮った。
「？？血、や」
「血？」
「ウチらが食らうのは人の血。そやから正確には食らうというより飲むとか、すするとか表現すべきなんやろな。どちらにしろそれがウチらがヒトの天敵と言われとった所以や」
「血、ですか」
エルデはアプリリアージェから視線を逸らすと、頬杖を突いてエルデが出て行った厨房へ続く廊下側の扉をぼんやり眺めた。

「生物学的に言うと、ウチらには胃か腸かしらんけど、そこにヒトと違う特殊な消化酵素があるんやろな。とにかくヒトの血はウチらにとって極めて良質な栄養源らしい。もちろん普通に人と同じモンも食べられるから、人の血なんかすすらんでも基本的には問題はないんや。でも……」

「でも？」

「亜神がヒトの血を呑むのは本能みたいなもんや」

「え？」

アプリリアージェは再び血が逆流するようなおぞましい気持ちに支配された。しかしそれは今までと違い、エルデの纏う雰囲気に反応した恐怖から生じていたものとは違う。自らの想像と妄想が作り出した恐怖が生んだ感情だった。

「さっきのウチのみっともない姿を見たやろ？ああいう衝動が、あるんや」

エルデは絞り出すようにそう言うと、テーブルに顔を突っ伏した。

「そやからウチに……できるだけ血を見せへんようにして欲しい」

「やはり、血でしたか」

アプリリアージェはケガをした指を包んだ布を見つめるとそっとその上にもう片方の手を重ねて隠した。

「今まではエイルの借りもんの体やったから、感覚そのものがそうとうに鈍かったし、何より嗅覚が消えとったから理性が勝っとったんやけど」

エイルはそう言うと自分の長い黒髪を一束つまんで所在なげにくるくると振った。

アプリリアージェはエイルの後を補足するかのように続けた。

「元の体に戻った今では、刺激が強すぎるという事ですね。そういえばエイル君と一緒の時は嗅覚もダメだったみたいですから、それが戻ったという事は、相当な衝撃があったと言う事ですね？」

エルデは顔を伏せたままでうなずいた。

「やっかいなことにウチらの五感は、人よりかなり敏感なんや。そ

やから、これはウチのお願いや。そういう場面をできるだけ排除する手助けをして欲しいねん。ウチの正体をリリア姉さんに教えたのもこれを頼みたかったからなんや。でも、まさかあそこで姉さんがケガして血ぃ出すとは思わへんかった。？？白状すると、けっこう危なかってん。堪忍や……」

エルデは顔を伏せたままで、そう言った。

他の誰に知られてもかまわない。でも、エイルにだけは知られたくない秘密。

それがエルデのイライラのそもそもの原因だった。あれはエイルを待つイライラではなく、どうやってこの話を切り出そうか逡巡しているイライラだったのだ。

エルデの目論見では、目覚める事ができた時、エイルは既にフォウへ帰っているはずだった。そうであれば本来の体を使ってアプリリアージェ達を現世に戻した後、おそらく自分は「時のゆりかご」に残り、現世の事など忘れて長い眠りにつくつもりだったのであろう。

だが、思惑はものの見事に外れた。

エイルはファランドールに留まる事を選んだ。

事情を知った後で改めてエルデの立場になってみると、エルデの気持ちが少しわかる。目覚めた時、まだエイルがそこにいるのを見てさぞや驚いた事だろう。

アプリリアージェはその時の記憶を探ってみた。確かあの時、エルデはエイルを見ると目を見開き、次いで何かを言おうとした。確かにそんな表情だったはずだ。あれはエイルを認知していた目であった。だからこそ、その後の記憶喪失の演技が嘘だと気づいていたのだ。

ファランドールにエイルが残った理由はわかっていた。それはエイルの可能性の引き出しの一つに予め記されていた事だからだ。

アプリリアージェ達に同行して、エルネスティーネの助けになろ

う。

そう考えて残る事を決めたのだ、と。

ファランドールにエイルが残るのであれば、「責任を取ろう」とエルデは考えた。意図してやった訳ではないとはいえ、ファランドールというエイルにとっての異世界に引きずり込んだのはエルデであり、その世界を征くと決めたエイルの助けをしなければならない。それがエルデの責任のとり方なのであろう。

でも、それは……。

アプリリアージェはいつの間にかテーブルに行儀悪く突っ伏しているヒトにとって危険な存在を、改めてじっと見つめた。

今ここでその正体を明かさなければならない事になったのは不本意な事だったろう。ヒトの天敵「亜神」と呼ばれる伝説の種の生き残りは「時のゆりかご」で文字通り「伝説」のまま人の目に触れることなく、時のはるか向こう側へ静かに旅立っていくはずだったのだ。

だが、自分の失策を償う為に「現世」へ下るという。

別に下る必要などないに違いない。エイルはファランドールに来てからもう二年あまり、エルデと共に暮らしていた訳である。おそらく普通に生きていく知識は持っているはずであった。それなのに、その異世界人の行く先を見届ける為にわざわざ「ヒトの世界」へ現れる事は、問題が多すぎるように思えた。ヒトにとっても。亜神であるエルデにとっても。

そしておそらくエイルにとっても。

それでも人の世界である現世に止まることを敢えて選んだ亜神の気持ちは簡単に理解できた。

エルデは、エイルとただ一緒にいたいのだ。

本人はすでにそれを自覚している。そして記憶喪失の振りをして、エイルとは距離を置こうと試みたのだ。もっともその思惑はアプリ

リアージェの悪戯心が台無しにしてしまったわけであるが……。
それにしても、エルデの行動は矛盾しているとアプリリアージェは思った。
エルデはエイルと一緒にいたいと思っているはずである。だが記憶喪失の振りといい、さっきの話といい、エイルとエルネスティーネの仲を微妙に後押ししている。
そのくせエルネスティーネの前ではエイルにぴったりと寄り添い続けて、相手に近寄るなと告げているかのような態度をとる。それはまるでエルネスティーネに挑戦しているようなものだと言えた。
??揺れているのだろうか?

「変な事をお聞きしますが」
アプリリアージェは長い沈黙の後で、そう尋ねた。
「私たちと、いえ、その……つまり『ヒト』と『亜神』は生物学的な見地ではどれくらいの隔たりがあるのでしょうか?」
「え?」
思いがけないアプリリアージェの問いに、エルデは思わず顔を上げた。
「有り体に言います。ヒトと亜神の男女が仲良くなり、思いを重ねた後、体を……その……つまり、子供をもうける事は出来るのか?と言う事です」
アプリリアージェの言葉を聞いたエルデは一瞬で耳まで真っ赤になり、慌ててまた顔をテーブルの上に伏せた。
「と、突然何を言いだすんや」
「あらあら、まあ。エルデはこういう話になるとすぐに真っ赤になるんですね」
アプリリアージェは意識して、からかうような言葉を投げかけてみた。
普通に接する事を求められているのであれば、そしてこの先この「生物」と行動を共にするのであれば、そうしなければならないか

らだ。そうでなければ、お互いが辛すぎる。そしてアプリリアージェにそれが出来なければ、誰にも出来ないであろう。
「私の言う意味はおわかりですね？」
普段通りの表情に戻って喋っているはずだ。声ももう元通りに響く。
アプリリアージェはそう自分自身を分析していた。

「結論から言うと、問題はない」
エルデは突っ伏したままでくぐもったような声でそう答えた。
「身体的な特徴は第三の眼があるかないかくらいで、肉体の造りは同じや。身体的には三眼を持つ賢者とそのまんま一緒やと思ったらええ。何しろ「亜神」はマーリンがヒトを自分に似せて改造した種やそうや。「亜神」やのうて「亜人」って言うべきかも知れへん」
「そうですか」
「事実、そういう事例はいくらでもあった。ついでに言うと、ヒトと亜神の間に生まれた子は、亜神の特徴を受け継ぐ事はない。亜神やのうてヒトとして生まれてくる。そやから、亜神は長い時間の中で静かに滅亡していったんや」
「ひょっとしてヒトが亜神を滅ぼしたというのは？」
「意識しようがしまいが、ヒトは亜神と交わる事で一つの種を途絶えさせる事に成功した、っちゅうことやろな。これ以上平和的な滅亡はないやろ。もちろん亜神狩りの事実もあるそうやけどな」
アプリリアージェの心に引っかかっていたいくつかの疑問が解消した。
「なるほどわかりました」
「さっきも言うたけど、ウチは亜神やのうてエルデ・ヴァイスでいたいんや」
「わかっています」
アプリリアージェは即座にそう言うとうなずいた。
「エルデがそれを希望するなら、私も今まで通りに行動しましょう」

「おおきに。やっぱりリリア姉さんはウチが見込んだ通りの人間やな」

エルデは顔を上げ、上目遣いにチラリとアプリリアージェの顔を伺うと、ペコリと頭を下げた。まだ頬は赤いままだった。

「あら」

アプリリアージェは不満そうにそう声を上げた。

「三千歳のおばあちゃんに姉さんと呼ばれるのは妙な気分です。あなたの年齢を知ったらラシフ様も真っ青でしょうね」

その言葉に対してエイルは目をつり上げて抗議した。

「し、失礼な！現世の暦の計算で生まれてから三千年経っているだけで、実際はまだ十六か十七か、行ってても十八か、十九くらいや！」

「ずいぶんと幅が広いですね。うーん。では自己申告の真ん中あたりをとって十七くらいの娘さんという事にしておきましょう」

「うん」

「でも、同じピクシィの姿だとしても、エルデとエイル君が同い年には見えませんね。あなたはエイル君よりお姉さんに見えますよ」

「個性や」

「はいはい。そう言う事にしておきましょう」

「おおきに」

「それからいい機会です。誤解を一つ解いておきましょう」

「誤解？」

「ええ。私はもともとエイル君の事でネスティを応援しようなんて言う気はさらさらありませんから」

「え？」

「正確に言うとネスティ『だけ』を応援するつもりはないと言うことです。確かにせっかくこうして世間を知る機会を得たネスティには、普通の年頃の娘が経験するような事をして欲しいと思っていました。いえ、今でも思っています。エルデとエイル君が同一人物だった時からです。あの時からエイル君とネスティなら歳も近く、そ

もそもいい感じですし、ネスティがその気なら見守ってあげたいと思っていた事も事実です」

アプリリアージェはそこまで言うと、隣に座っているテンリーゼンの方を見た。エルデもそれに釣られるように黒い面をして微動だにしない「人形」を見つめた。テンリーゼンも、もう普段通りに戻っているようであった。

同じ年頃という事ならば、エイルよりもテンリーゼンの方がよりネスティに近い存在であることは確かだった。ネスティと同じアルヴィン、しかも同じファランドールの人間で、さらにはシルフィード王国の同胞である。

だが……。

「リーゼは問題外ですよ」

アプリリアージェはそう言うとにっこり笑った。

何をもって問題外と言っているのかは不明ではあったが、エルデはそれに対して何も答えなかった。様々な意味で、エルネスティーネのお相手とするには障害が多そうな事は理解できたからである。

「私は中立です」

アプリリアージェは視線を戻すと続けた。

「いえ、違いますね。そんないいものじゃありません。野次馬と言い換えましょう。ネスティがどうしたいのか。エイル君が何を思っているのか。そしてエルデ、あなたが自分の気持ちを一体どうするのか。私はそれらの事に興味津々です。だから、そんな三人をじっとを見守るだけですよ」

「そやかてウチは」

「ふふ。基本的な前提は否定しないのですね？」

アプリリアージェはエルデの言葉を遮った。

いつもの調子が戻っている事をアプリリアージェは自覚していた。エルデからはもうさっきのようなエーテルの渦は感じない。制御がまだ不完全だと言いながらも、エルデも「普通」を取り戻しつつあるのだろう。

「もしあなたとエイル君がそうなったとして、そこに何か恐ろしい事があるのかどうか、それは私にはわかりません。それでもあなたは『時のゆりかご』を出た。それはエイル君と一緒にいたいから。違いますか？」

エイルはアプリリアージェに問い詰められると視線を落とした。

「恥ずかしながら私はこの年になっても殿方とお付き合いした経験がありません。したがってこういう事は得意分野ではないのですが、正直どちらかに肩入れするのは私にはできないんですよ。もちろん冷静に考えるならば、あなたを応援する事はヒトとしてどうかと思います。でも、私はアルヴィンとピクシィであるとか、ヒトと亜神であるとかよりも、あくまでもネスティとエルデの問題……いえ、エイル君の意志を忘れていましたね。まあ、ともかく、みんな同じ仲間です。依怙贔屓はできません」

「ウチは……そんなんやない」

俯いたままで、エルデは小さくつぶやいた。

「それだけやないんや。ウチは……エイルが側におらへんと、多分……そう保たへんのや」

「え？」

「お待たせーっ！」

二人の会話を破る声と共に突然扉が開き、エイルが大きな銅の鍋を抱えて部屋に現れた。

「出来たぞ、エルデ」

そう言うエイルの顔は、アプリリアージェが見た事もないような、何の屈託もない嬉しそうな笑顔であった。

そしてエルデも同様の事を感じていた。

二年間、同じ体を共有していた相手がそんな眩しそうな笑顔を持っている事を初めて知ったエルデは、無意識に右手で胸を押さえていた。

# 第三十九話　黒い豆スープ

「これが、『それ』ですか？」
「いや、ウチに聞かれても……」
テーブルについた四人の目の前に置かれた白い磁器のスープ皿には、彼女たちにとって未知の、黒っぽい豆のスープがなみなみと注がれていた。
黒というわけではない。どちらかというと薄い紫がかった灰色のような、それでいて少々赤みのある、微妙な色合いのものだった。それはその中に入っている子供の小指の爪ほどの大きさをした豆そのものの色だった。
スープの中には豆以外にも親指大程の、油でカラリと揚げられたパンが三つほど浮かんでいた。
「色が濃いめの豆スープ、と言ったところですか？」
アプリリアージェはエイルが作った目の前の料理を視覚と嗅覚で吟味していた。エルデも同様だった。もっともエルデは期待が大きすぎたのか、出された料理がただの豆のスープ状のものである事がわかると、傍目に見てわかるほどがっくりと肩を落としていた。
「予備知識は無し。とりあえず熱いうちに食べようぜ」
エイルはそう言ってスプーンをとろうとしない他の三人を促した。
「ネスティ達が戻ってきてから一緒に食べませんか？」
アプリリアージェは微量の困惑を浮かばせた笑顔でエイルに提案した。
「大丈夫。たっぷり作ったからみんなの分はあるさ」
エイルがそう言うと、またもやエルデとアプリリアージェは顔を見合わせた。
「何だよ。別に嫌なら食わなくてもいいんだぜ」
二人の態度をとがめると、エイルは自分の目の前にあるスプーンをとった。

「先に食べるぞ」
そう言うと即座にスプーンを皿の中に入れ、濃度の高い灰紫色の豆のスープをすくい、口に含んだ。
「熱ちち」
息を吹いて冷まさずに、いきなり口に放り込んだスープで、エイルは味よりも先に熱さを感じる羽目になった。
「でも、うまい。と言うか、甘い」
そしてすかさず、今度はスープに浮かんでいる揚げパンと共に口に放り込んだ。
「ちょっと風情は違うけど、これはこれで合う」
咀嚼しながら、そう感想を述べた。
固唾を呑んでエイルの様子を見守っていたエルデは、その独り言の意味する所の背景まではわからなかったが、少なくともエイルの味覚的には大丈夫なのだという最低限の保険を得た。そして視線を自分の皿に移すと一匙すくってふうっと息を吹いて粗熱を取り、おそるおそる口に運んだ。
最初に熱さが広がった。だが、すぐに何とも言えない豆の香りが口から鼻に抜け、次いで口中に強い甘さが溶けていった。だがそれは単純な砂糖の甘さというわけではなく、豆の持つ独特な甘みを拡張するような、ふくよかで丸い甘みであった。そして破れた豆の皮の食感が歯と舌を刺激して、一口目は喉の奥に消えていった。
エルデは、続けてもう一匙、同じように口に運んだ。
今度はもう少し長く口の中でそのスープを味わった。

エルデのその様子を、エイルは不安そうに見つめていた。その視線を意に介さず、エルデは無言のまま一口、また一口とスプーンを口に運んでいた。
その様子から吹き出す程不味くはなく、少なくとも口に合わない出来ではない事にひとまず安心すると、アプリリアージェは自分もスープに取りかかる事にした。

だが、アプリリアージェの一口目は、エルデの叫びで中断された。
「何や、これは！」
エルデは突然そう怒鳴ると、いきなり拳で机を叩いたのだ。
それはもちろんエイルに向けられたものだったが、驚いたのはアプリリアージェも同様だった。
「エイル！」
エルデはテーブルを挟んで向かい側に座っているエイルを、その美しい目を吊り上げて睨み据えた。
「な、なんだよ」
「ウチを殺す気か？」
「はあ？」
「ウチは、こんなおいしいモン、食べた事ない」
「いや……って、ウマいのかよ？」
「おいしい……めっちゃ甘くて、でも優しい味や」
「だったら、何で死ぬんだよ」
「あんまりおいしすぎて、『もう死んでもええわあ』って思ってもうたやないかっ！」
「ウマいからって睨むんじゃねえ。お前はおかしな子か！」
「うるさいっ」
エルデはエイルから目を逸らすと残りのスープをあっと言う間に平らげて、呆れた様にじっと見つめているエイルに空の皿を突きつけた。
「おかわり！」
「おかわりで威張るなよ！」
「美味しいからおかわりや。文句あるんか？」
「いやそれは、作り手としてはまったく文句はない」
「そやったら、ええやん」
「いや、おまえなあ……」
「お・か・わ・り」
「だだっ子か！」

エイルはエルデとやり合いつつも、側に置いた大鍋からいそいそとお代わりを注ぎ入れて、エルデの前に置いた。
「??きに」
エルデは置かれた皿を見つめると、すぐには手を出さず、少し俯いて何かをつぶやいた。あまりに小さな声だったのでエイルはさすがに聞き取れなかった。
「何か言ったか?」
「??おおきに」
「え?」
そう言って顔を上げたエルデの顔は真っ赤だった。
「嬉しい。美味しい。それになんか……」
「エルデ?」
「と、とにかく、おおきに。お世辞やのうて、ホンマに美味しい」
「そ、そうか」
エイルは照れ隠しのように頭をかいたが、一言を付け加えるのは忘れなかった。
「どうでもいいけど、睨みながら褒めるのは止めてくれ」
「睨んでへんわ」
「ほら、睨んでるじゃないか」
「これは地顔や!」
「どんな地顔だよ」
「こんな地顔や」
「だったら地顔を変えろよ、世界的に迷惑だ」
「むちゃくちゃ言うな」
「ほら、また睨む」
「ぜんっぜん睨んでへん!」
「嘘付け!」
「賢者は嘘はつかへんねん!」
「いやいやいやいや!」
「まあまあ」

口げんかを始めた二人をアプリリアージェはそう言ってなだめると、ようやく自らもスプーンをとって、エルデが絶賛するそのスープを一匙、口に運んだ。

「あら」

衝撃的な味が口中に広がった。

甘いと言っていたが、それはスープの料理としての甘さだと思っていたのだが、口にしたそのスープはまるで砂糖水に豆を入れたような代物だったのだ。

「これは、料理なんですか？」

顔を上げてエイルにそう尋ねると、かわりにエルデが得意そうに答えた。

「いや、これは『おやつ』や」

「『おやつ』？」

「間食みたいなもんらしい。甘いもの好きのあこがれの一品やそうや」

「いや、これにあこがれてるヤツがいるなんて聞いた事はない」

「ウチがあこがれてたんや！　文句あんのんか？」

「何だとこの逆ギレ女！」

「誰が逆ギレや。それに女とか言うな、逆ギレ美少女とか言え」

「逆ギレは否定しないのか？」

「なるほど」

エイルの説明で合点がいった。スープの形をとってはいるが、その実は菓子のようなものなのだ。

そう考えると瞬間的に異様な食べ物だと判断した自分の味覚を調整できた。

続けてもう一匙、口に含む。

一口目はただ甘いだけの妙な食べ物だと思ったが、二口目は違った。確かに甘いが鼻孔に抜ける独特の豆の風味が妙に後を引いた。

破れて残った豆の皮の感触が歯にざらついて繊細さは欠く。その

点だけは好きにはなれなかったが、甘さが去った後のすっきりした豆の残り香は悪くないと思った。

だが……。

（いくらなんでもこれは甘すぎる）

もともと甘い物が苦手なアプリリアージェである。大量の砂糖と蜂蜜を投じて煮崩された豆のスープを一皿平らげる事を考えると気が遠くなりそうだった。

ふと思い出して隣を見ると、テンリーゼンは黙々と赤黒い豆の灰紫のスープを口に運んでいた。

どうやらテンリーゼンの口には合ったようだ。

基本的には出された物は、もちろん文句一つ言わず残さず食べるテンリーゼンではあったが、普段は食事をしていてもどこか上の空という感じで、食事を終えるのにはけっこう時間がかかるのんびりした匙運びなのだが、今のテンリーゼンは一心不乱に皿に取り組んでいるように見えた。

油断していると珈琲や紅茶に角砂糖や氷砂糖をいくつも入れてしまうので甘い味が好みだと言う事は知ってはいた。しかし、あまり菓子類には手を出そうとしなかった為に、甘い菓子自体はそれほど好きではないのだと思い込んでいた。しかし、どうやらそう言うわけでもなさそうだった。

「おいおい、大丈夫かよ」

エルデから六杯目のお代わりの皿を突きつけられたエイルはさすがに心配になった。

「頭が痛くなったり、気分が悪くなったりしないのか？」

「この『おやつ』にはそんな副作用があるんか？」

「いや、これに限らず甘いもの食べ過ぎたら胸焼けとかしないのか？」

「全然。それよりおかわりや」

「はいはい」

エイルは呆れた顔で皿を受け取ったが、作った人間としてはここまで手放しに気に入ってもらえると嬉しさでいっぱいであった。
「こちらもお代わりをいただけますか？」
意外な事にアプリリアージェからもお代わりの注文が来たと思ったら、それはテンリーゼンのものだった。
顔を上げたエイルに、アプリリアージェはにっこり笑ってテンリーゼンの皿を指さして見せたのだ。
当のテンリーゼンと言えば、黒面を被っているせいでその表情は相変わらず掴みかねたが、空の皿を前にしてテーブルに置いた右手にスプーンを握りしめている図はエイルには微笑ましいものに思えた。

「この食べ物はフォウでは何と言うのですか？」
「うーん……」
二杯目を注いだ皿をテンリーゼンの前にそっと置くと、エイルはアプリリアージェの問いかけに腕組みをして考え込んだ。
「何や、名前は無いのか？ひょっとしてエイルの創作料理なんか？」
「いや、名前は『ぜんざい』だ」
「『ゼンザイ』？」
「古くからある食べ物だから、地域によって呼び方に違いがあるんだ」
「なるほど」
「『汁粉』とか『田舎汁粉』なんて呼ぶところもあるし、それ以外にも色々ある。オレの住んでいた地域だと、豆がそのまま残っているのが『ぜんざい』で、豆の殻をとりのぞいて中の部分だけにしたのを『汁粉』って呼んでるんだが、違う地域に行って店で注文すると思ってもみないような物が出てきたりして戸惑う事も多いな。まあ、それだけこの豆と砂糖で作る素朴な『おやつ』が文化に根付いた食べ物って事だ」
「なるほど。地域によって同じ名称で違う料理が出るというのは、

ファランドールでは考えられませんから、やはりフォウは興味深い所のようですね」
「それは、オレにはよくわかりませんが」
「『ぜんざい』、お代わり！」
「お前はまだ喰うのかよ」
「なんか悔しいが、うまい。気絶するまで食べたる」
「まったく、何が悔しいんだか」
エイルは文句を言いながらも、いそいそともう一杯注ぎ入れた。
「そんなに気に入ったんなら、今度はさらに本式のヤツを作ってやるよ」
「本式？」
「今日は具に代用としてちぎった揚げパンを使ったんだけど、本当は『餅』っていうのが入るんだ」
「餅？」
「蒸した穀物、たとえば餅米とかヒエとかアワなんかを蒸して潰して団子のようにしたもんだ。今まで観察してたんだけどこっちの米はパラパラ過ぎてフォウのとは違うんだよな。これもまた今度ベックに会ったら頼んでおくさ」
「本式か。楽しみやな」
エルデはそう言うと、初めてにっこりと笑った。
「そうだな。オレもだ」
エイルもその笑顔につられるように笑い返した。

そんな二人のやりとりを、アプリリアージェは微笑みながらも複雑な思いで見つめていた。
エイルが厨房から戻る前にエルデが言っていた事は、アプリリアージェも一人の「人」としてよくわかった。
もとよりアプリリアージェは自分が口にした言葉、つまりどちらも公平に応援するという宣言に嘘は込めていないつもりだった。
だがエルデ・ヴァイスという少女の正体を知ってしまった後では、

何の先入観も持たずにエルデを見る事はもうできないだろう。

ならば人であるエイルが二人のうちどちらかを強く抱きしめたいと思った時、手を伸ばす相手はエルネスティーネであるべきではないだろうか？少なくともそうなる方が自然である事に間違いはない。

だが、たった今エルデがエイルに対して見せた無防備な笑顔を目にすると、アプリリアージェは胸が詰まった。

これほど平和で他愛ないやりとりが出来る二人ならば、相手が人だとか亜神だとか、そんな事はどうでも良い事のように思えてくるのだ。人と亜神はいったい何が違うのかわからない。そう「錯覚」してしまう。

アプリリアージェはさらに思った。

エルデのこんな飛びきりの笑顔を、これからもずっと見ていたいと、エイルが欲するのであれば、私は心からその選択を祝福したいと。

もちろん、エイルはエルネスティーネの優しいエーテルに満ちた、あの暖かい笑顔の方を選ぶかもしれない。

だが、エイルはエルネスティーネの事を本当はまだ何も知らないのだ。知っているのはネスティという名の、旅の少女の笑顔だけだろう。

だからこの場合、すなわちエルデかエルネスティーネかという二者択一の場合に限っては、エイルが「人ではないもの」ではなく「人」を選ぶ事は、自然であるとしても正しいとは言い切れない。少なくともエイルにとってその選択は必ずしも幸福を約束するものではないからだ。

それはもちろん、エルネスティーネが人ではあるものの、「ただの人」ではないから、である。

エルデの存在も、もちろん特別である。しかしエルネスティーネは「人」として「人」の中で特別な存在なのである。それは全ての人が等しく特別視せざるを得ない「天敵」であるエルデの特別さとはまったく違う意味を持っていた。

アプリリアージェがエルネスティーネの護衛としてアプサラス三世から指名されたのは、その能力ゆえではない。エルネスティーネの正体とその存在の意味を知る人間だからである。だから、エルネスティーネとエイルの間に特別な関係が生じても、それが長続き出来ない事を危惧していたのである。人と短く過ごすのか、人でない者と長く一緒に過ごすべきか。

どちらにしろそれはアプリリアージェが決める事ではない。なるようになるべきなのだろう。だからどちらにも肩入れはしない。決めるのはエイルであり、エルデであり、エルネスティーネなのだから。

つい数十分前までその部屋を支配していた恐怖と絶望に満ちた暗黒のエーテルは、今はもうその片鱗も感じられなかった。

そこに流れるのは穏やかでゆったりとした空気で、まるで休日の昼下がりに一つの家族が揃う日当たりの良い居間のような居心地の良さに満ちていた。

もちろんそれは今同じ部屋に集う四人が纏っているそれぞれの平和な精霊波が同調し合って作り出している空気なのは確かではある。だが肌に触れるこの暖かさは意識・無意識の別を問わずもっとも影響力のあるエルデの気持ちからにじみ出た精霊波が支配・制御した温度なのだと、アプリリアージェは確信していた。

そしてそのエルデの精霊波に影響を与えているのは「人」であるエイルなのだ。

（ならば……）

アプリリアージェは思いを巡らす。

ならば「亜神」とは何の為に生まれたのだろう？

エルデを見ていると「亜神」という種は滅びの道をまさに目ざしている気がするのだ。人と融合して滅びる運命にあこがれさえ抱いている存在ではないのか？

マーリンはなぜそのような存在をわざわざ「人」の後に作ったの

だろう？
人と交わり、人に紛れて溶け消える可能性が大きな種を。
アプリリアージェのその純粋な探求心を、エルデはいつか満たしてくれるのだろうか？

そんな事をぼんやりと考えながら、ゆったりとした気分に意識を任せていたアプリリアージェの五感が覚醒したのは、エルデがついに八杯目を平らげて降参の白旗を揚げた時だった。
部屋の外に数人の足音が響き、アプリリアージェの表情に緊張が走った。
テンリーゼンは既に懐の懐剣を手にして走り出していた。おそらくは武器を置いている自室へ向かったのだろう。
エルデも顔を上げて扉に顔を向けた。
エイル達は互いに声を掛け合う時間も与えられなかった。すぐに扉が開いたのだ。

「メリドさん？」
入ってきた人物が見知った顔である事を認めたアプリリアージェの声にはさすがに安堵の色があった。
「これは！お戻りでしたか！」
「いったいどうしたんです？」
扉を開いたメリドの後ろには二人のアルヴがいた。
アプリリアージェは怪訝な顔をそのメリドの連れに向けた。
二人のアルヴは同じような黒っぽい旅装をしており、うち一人はもう一人のアルヴに背負われている格好だった。
「大けがをしているのです。事情があってお連れしました」
「事情？」
アプリリアージェはエルデ達を振り返ったが、エルデの状態を見て内心で舌打ちをした。
（しまった！）

エルデが片手で鼻と口を覆い、目を閉じてうずくまっていたのだ。
それを見かねたエイルが、まさに今エルデの肩を抱こうとしていた。
またしても部屋に邪気の渦が広がろうとしていた。
けが人の血の匂いが、エルデを刺激したのである。
「エルデ、大丈夫か？」
声をかけたエイルがエルデの肩に手を当てた瞬間、その手はエルデによって掴まれた。エイルはエルデが尋常な状態ではない事にすぐに気づいた。
手を掴むエルデの力が異常に強かったのだ。
「え？」
気付いた時には、既に遅かった。およそ人間とは思えない程の圧倒的な力によって、エイルは大きな衝撃を背中に伴って床に押さえつけられていた。
何が起こったのかわからぬまま、エイルは天井が視界にあるのを認めた。
「だめです、エルデ！正気に戻りなさい！」
現状把握も出来ないまま、エイルの耳にアプリリアージェの怒鳴り声が聞こえた。焦って取り乱しているかのような、いや、むしろ悲鳴に近いその声は、彼の知るアプリリアージェから発せられたものとは思えなかった。
珍しい事もあるものだという考えが、ようやく異常事態を告げる警報に変わったのは、その直後だった。エイルは部屋に充満している言い表しようのない邪気のようなものをようやく肌で感じた。だが、それは気づいたのと時を同じくしてすぐに消えていった。
その場で起こった一連の状況を全て把握できている人間はいなかった。
それぞれがそれぞれの持つ情報の中で混乱をきたしていただけだった。
部屋の中の様子を見たラウ・ラ＝レイは、床にうずくまる黒髪の

少女をエルデと呼びかけるアプリリアージェの声を聞き、久しぶりに見る彼女の姉妹弟子であるエルデの姿を認めた。だが、ラウの認識ではエルデであったはずのエイルもその側で倒れている。いや、目の錯覚でなければ、いままさにエイルはエルデによって床に組み敷かれていた。

「エルデか！？それに、エイル？」

「ラウか」

エルデは声の主を見上げると、のろのろとエイルの上から離れ、口と鼻を手で隠したまま答えた。

「エルデ？」

アプリリアージェはおそるおそる声をかけたが、邪気が消えた事で一応の安心はしていた。

「おおきに。リリア姉さんのおかげで助かったわ。今は一応、大丈夫や」

エルデの言葉を受けて、アプリリアージェはすぐさま次の行動に移った。すなわち、その場の混乱の収拾に乗り出したのである。

「ラウ・ラ＝レイさんでしたね。とにかく怪我人を一番奥の部屋へ運んで下さい。メリドさんはここに残って事情の説明を。エイル君はそんなところにいつまでも寝ていないでラウさんを案内してください。それから、これは重要ですが、何か匂い消しになるものを探してきて下さい。例の付き人に気づかれても面倒ですし、刺激が強い人もいるようです。この部屋から血の匂いは消しておきましょう。それからリーゼは扉の外の哨戒を」

アプリリアージェの言葉が終わらないうちに、すでにテンリーゼンは扉の脇に立っていた。アプリリアージェはそれを見てにっこりと微笑んだ。

アプリリアージェのその指示を聞いて、エイルはある重要な事を思い出した。

「そうか、嗅覚が戻ったから……でも……」

「ぼんやりしない！急いで！」
仰向けになったままのエイルに、アプリリアージェの鋭い声が刺さった。エイルは反射的に起き上がると、扉の近くにいるファーンを抱きかかえたラウと目が合った。
「こっちだ」
そう言って二人を先導して居間を後にしたが、チラリとエルデの方を振り返る事は忘れなかった。
組み敷かれた時、一瞬だったが額にかかる黒い髪の間から、エルデの三番目の赤い目が見えたのだ。
いや、その事よりも、なぜいきなりエルデに組み敷かれたのかが不明だった。しかもそれは圧倒的な腕力差によるもので、エルデに掴まれた右手の痛みがまだ消えない事がそれを証明していた。下手をすると手の骨が砕けていた可能性もあった。いや、その前に腕の関節が抜けるか、悪くすれば筋肉がちぎれていたかもしれない。それを免れたのはエイルに体術の心得があったからである。とっさの事ではあったが逆らわずに投げ飛ばされる方向へ体を向けたのだ。それはほとんど無意識による反射だった。長く続けてきた稽古が彼の体を動かしたのであろう。
（二度と剣など手にしないと決めていても、俺は骨の髄まで剣士だって事か）
エイルはほぼ完全に戻っている記憶のとある場面を思い出すと顔を歪ませた。勿論エイルの表情を見た者はいなかった。同様にエイルの自嘲気味の独り言を聞いた者も。
エイルは小さく頭を振ると、自らの使命を果たすべく奥の部屋に急いだ。

# 第四十話　離散

エルデ・ヴァイスとの再会の少し前。

ラウ・ラ＝レイが暗転した視界を再び我がものにしたのは、大きな石造りの建物が建ち並ぶ大通りを一本外れた路地の上だった。

抱きかかえていたファーン・カンフリーエに、弱々しいながらもまだ脈がある事を確認すると、ラウは周りを見渡した。

「けっこう、飛んだな」

自分がいる場所を特定できたラウは、ひとまずため息をついた。全くの運任せとも言える呪具の能力に過度の期待はしていなかったが、直線距離で一キロメートル程度は移動していたようだった。ラウにしてみれば上出来、いや望外と言えた。

路地はかなり狭く、幸い辺りに人影はなかった。普段から人通りなどはほとんど無い場所なのだろう。とはいえ、ぐずぐずしている時間はない。

なぜならルーンを使ったファーンの場所は、新教会の結界感知部隊には既に知られているはずだからだ。

ラウがいる路地は、大聖堂近くの厳めしい作りの大きな宿屋がいくつか並ぶ地区で、その路地はある一件の宿の裏側を抜けるように作られていた。

位置関係という点では少々難しい状況にあった。ラウ達はヴェリーユの外ではなく、中心部に移動していたのである。

小さく舌打ちをすると、ラウは自分のマントを脱いでファーンの体を慎重に包み、再びそっと抱きかかえた。ファーンには意識はない。手も首もだらりと垂れ下がったままだった。治癒の力がないコンサーラの自分を、ラウはこの時初めて呪った。治癒専門のハイレーンの方が負傷すると、こういう時にはどうしようもないという、当たり前の事実が恨めしかった。

その時である。ラウの死角から声がした。
「貴殿はもしやラウ・ラ＝レイ殿か？」
名を呼ばれたラウは絶望の中で唇を噛んだ。
（一息つく暇もないのか）
だが、その声はすぐに意外な言葉を続けた。
「話は聞いている。お連れの状態は？」
ラウは訝しげな顔を、声のする方へ向けた。
そこにはダーク・アルヴの少年、いや少年に見えるダーク・アルヴが一人立っていた。その探るような目とラウの視線が合うと、ダーク・アルヴはすぐに両掌をラウに向けた。手に獲物はなかった。敵では無いとう合図であろう。ラウにはそのアルヴがとりあえずは僧兵には見えなかった。ましてや僧正にも。
そもそも正教会（ヴェリタス）の情報では、新教会（ヴェリーユ）の僧兵はデュナンで固めた部隊という事になっている。ダーク・アルヴが居るなどと聞いた事もなかった。それに冷静になってよく観察すれば、ダーク・アルヴは旅の人間という出で立ちであった。
「話とは？」
「ここに来ればあなたともう一人、けが人が居ると言われた」
ラウの疑問はその答えでは何も解けなかった。
「誰に聞いたのだ？」
だが、ダーク・アルヴは首を横に振った。
「私も知らぬ人間だ。若い女アルヴで、モテアの髪をしている」
「モテアの女アルヴだと？」
ラウにはまったく心当たりがなかった。そもそもモテアの人間などこれまで見た事がなかった。
「だが貴殿がラウ殿であれば、私の連れにゆかりのある人間であることは確かです」
「あなたのお連れ？」
「あなたが賢者ラ＝レイであればご存じのはず。我が連れは同じく賢者。名はエルデ・ヴァイス」

「なんやて？」
ラウは驚いて思わず古語が口を突いて出た。そしてすぐにばつが悪そうに口をつぐんだ。
「おお。我が連れも同じ古語を使います。さてここで長話もなんです。表は何か物々しく僧兵が動いています。私が先導しますので、とりあえずは我々の宿へ。手当をするにせよ、こんなところでは無理です」
ダーク・アルヴはそう言うとゆっくりと駆けだした。ラウは迷いながらもその後を追うことにした。そもそも選択肢などラウは持っていなかったのだから。

メリドからいきさつを聞いたアプリリアージェとエルデは、それぞれ違う立場で頭を抱えていた。
「モテアの女の子……ってお知り合いなんですか？」
アプリリアージェの問いかけに、エルデは首を横に振った。
「そんな珍しい髪の毛のお姉ちゃんなら絶対忘れへん自信はあるけど、残念ながら記憶にないわ」
「その話が本当だとすると、我々の事を未知の第三者が知っていると言う事になりますね」
アプリリアージェの頭痛の種はそこであった。
「念のためにいうとくけどエイルも知らんはずや。まさかフォウの知り合いって言うわけはないやろ？」
「そうですね」
アプリリアージェはモテアの少女に皆目見当がつかなかった。わかっているのは自分達は誰かの監視下にあると言う事であった。勿論、一番可能性が高いのは新教会の人間である。とはいえ、賢者《二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）》こととラウ・ラ＝レイとの接点を知っているとは思えないのだ。
「お知り合いではないのですか？」

珍しく眉間にしわを寄せて難しい顔をしているアプリリアージェを見て、不思議そうな顔でそう問いかけたのはメリドだった。
「ま、リリア姉さんの疑問はもっともやけど、そっちの話は後にしよ。とにかくファーンを見てくるわ」
エルデがまず立ち上がった。
「もう大丈夫なのですか？」
「なんとか、な。さっきは無防備やったから意識が飛んでもうたけど、そのつもりやったらある程度は堪えられる」
「ある程度、ですか」
アプリリアージェの問いかけに、エルデは苦笑するしかなかった。
「ある程度、やな。でもそうなる前に退散する」
「是非そうして下さい」
アプリリアージェとエルデのやりとりを聞いていたメリドは我慢の限界を超えたようで、会話に割って入った。
「その、こちらの瞳髪黒色のご婦人は？」
「え？」
アプリリアージェとエルデは顔を見合わせた。
「かなり親しげに話されているようですが、古くからのお知り合いですか？」
エルデは苦笑しながら、何も言わずに部屋を後にした。それを見送ったアプリリアージェがメリドの疑問に答えた。
「そうでしたね。でも、あの人のことはメリドさんもよくご存じのはずですよ」
「いえ、瞳髪黒色のご婦人にお目にかかるのは初めてです」
同じくエルデの後ろ姿を目で見送ったメリドは首を横に振った。
「何をおっしゃいます。あの人はラシフ様の親友ですよ。お別れの時に抱擁されてマントを受け取ったのを、あなたはすぐ近くでご覧になっていたでしょう？」
「え？」
「その時は訳あってエイル・エイミイと名乗っていましたけどね」

「は？……ええ？」
「まさかメリドさんはあの時眠っていたとでも？」
「いや、まさか。しかし」
メリドはエイルが向かった廊下の方に顔を向けた。
「間違い無くあの賢者様ですよ。龍墓で本来の体を取り戻したのです。それよりも細かい話は後にして、あなたに頼みがあります」

エルデは二人を残してファーンが入った部屋に向かった。当たり前のように廊下にも点々と血痕が残っていた。その量もそれなりに多い。だがそれはファーンの体から落ちたものではなく、血を含んだ服から滴ったものであろう。言い換えるならばそれほどの出血があるという事だ。それだけでファーンが重体である事はわかる。
エルデを悩ませていた問題とはそこであった。治療にはどう考えてもルーンを使う必要があったからである。
命に別状が無く傷が浅ければ、近くで材料を手に入れ薬を調合して手当てする方法もとれる。エルデの豊富な薬の知識があれば、ヴェリーユで手に入る材料だけでも相当な治療が可能なはずだった。しかし、ファーンの外傷はそんな生やさしいものではない。どう考えても一刻を争うものだろう。若い賢者の命を救うつもりならば、ルーンを使う必要があるのだ。それはつまり新教会の感知網に引っかかることを意味し、そうなると今度はエルデの存在と場所が特定されてしまう。
彼女たちがいる立派なその宿は町の中心部に位置していた。大聖堂からの距離を考えると、無事に逃げる事は難しい。姿を消すルーンや足音を消すルーンを唱える事はできる。だが位置を特定されてしまうヴェリーユという巨大な結界の中では、追尾系ルーンをかけられればそれで終わりである。
（ここはファーンを見捨てるのが正解、だろう？）
エルデは自問した。

ラウは自発的にここに来たわけではない。メリドが案内したものなのだ。

エルデは突然の血の匂いにも理性を失うことがないように、意識を強く保つべく予め気持ちの準備をすると扉をゆっくりと開いた。寝台に横たわったファーンの姿がまず目に入った。次いで意識のないファーンの側に座り込んで、エルデを見上げるラウの顔が見えた。エイルはすでに部屋を出ていたようで、気配はない。

「エルデ！お願いです。《群青》を、ファーンを助けて下さい」

エルデの姿を見つけたラウは、はじかれたように立ち上がった。ファーンの顔にはすでに生気がなかった。失血のせいで体温が下がっているのだろう。震えがある。

だがそれは重篤ではあるが現時点ではまだ命がある事を証明しているとも言えた。

エルデは自然に体が動いていた。滑るようにファーンの隣に張り付くと脈を取り、額や首筋に手をあてて現状を精査し始めた。

その顔はすぐに曇った。

「こんな状態の人間を動かすとか、むちゃくちゃやな。いったい何があったんや？」

「矢傷です。私を庇うために何本も刺さって……」

そう言うラウの目に突然涙があふれて来た。それまで無表情だったラウの顔がいきなり崩れ、嗚咽が部屋に広がった。

「この子は私をかばったんです。私を逃がすために！」

「落ち着け、ラウ。お前も賢者を名乗る存在やろ」

「？？はい」

「いったい誰にやられたんや？」

「新教会の……僧正に……」

エルデに叱責され一瞬で我に返ったのはさすがというところであろう。小さな悲鳴のような声は影を潜め、いつもの感情を押し殺した声でラウはそう告げた。その言葉はエルデの表情を強ばらせるの

に充分だったが、黒髪のハイレーンはしかし、ファーンを看る手は止めなかった。
「面が割れてたっちゅう事か？」
エルデはメリドが言っていたモテアの少女の事を思い出した。
「そのようです。でも、元から正体が知れていた訳ではないと思います。《蒼穹の台》の指示により、この町であなたが現れるのをもう二十日も待っていたのですが、今日になって突然ですから」
ラウは妙な紙片をもらった時からこの部屋に至る一部始終をかいつまんで話した。
「ルーンは？」
「ファーンが、私に『柔らかい石化』を……」
ラウのその言葉に、さすがにエルデの手も一瞬だけ止まった。
それではもう、既にここは新教会の目と耳とも言うべき感知機関「陣廊」の感知網下にある事になる。
「すみません。あなたがすでにお帰りだとは知らず、巻き込んでしまいました」
「？？しゃあないな。で、どうやってその場から逃げたんや？」
エルデの問いに、ラウは側に置いてある弦の切れたダラーラを手に取った。
「これのおかげです」
エルデはダラーラを怪しいものを見る目つきで眺め回した。
「それって……ひょっとしてひょっとすると、『庫』にある、例の怪しい呪具か？」
ラウはうなずいた。
「糸巻きを巻き込んで三本の弦を全て切ると、ごく近距離ですが空間転移ができるのです」
「へ？」
「ご存じの通り、例の呪具には特殊な効果が二つあります。この呪具の場合は空間転移と、もう一つは濃い霧を発生させる力です。今日はその両方を使って逃げました」

「ふーん。呪具か……」
エルデは目を細めて少しの間ダラーラを見ていたが、我に返ったように視線をラウに戻した。
「ここに来る間、敵に追尾されている様子は？」
「何とも言えませんが、あのジャミールの兵士長、メリドはかなり上手に敵を回避していたと思います。目視的には、ですが」
「そうか」
エルデは一通りファーンを調べ終わると、立ち上がって儀仗ノルンを取り出した。
そしてラウの顔をじっと見て、低い声で尋ねた。
「助けたいか？」
ラウはその問いに、少し間を空けてからうなずいた。
エルデの言葉が持つ裏の意味を噛みしめていたのだ。

ルーンを使った人間だけが感知される仕組みである。つまりファーンをここにおいて今逃げれば、ラウ達は感知される事はない。犠牲は一人だけで済む。
だがエルデが言った意味はそれを前提にしているわけではないとラウは思っていた。
簡単に治療ができるのであれば、ハイレーンたるエルデならすでに何らかの手当を始めているはずだった。だが三年ぶりにラウの前にその素顔を見せた黒髪の少女は何もせず、儀仗を取り出しただけなのだ。
それはルーンを使わないと治せない状態だということを暗に意味していた。そしてこの場所でルーンを使うという事がどういう事なのかを知っている者同士に通じる覚悟を尋ねられているのだという事も。言い換えるならば、エルデはファーンの為にルーンを使う事を前提に、ラウの覚悟の程を聞いているのだ。
それはここにいる他の人間をも巻き込んでまで助けたい人間なのか、という重い問いかけであった。

「本来、私の立場なら従者は切り捨てるべきでしょうね」
「そうやな。でも三席に名を連ねる程の賢者なら、そもそもこんな状態になった従者をここまで運ばへんやろな」
「私がハイレーンであれば、間違いなく既にルーンを使っていました」
ラウはエルデを射るような眼差しで見つめると、そう言った。
その言葉に自分の覚悟を込めたつもりだった。ルーンを使ってから新教会の手の者がここにやってくるまで、どれだけ時間がかかるかはわからない。いや、ファーンがここにいるだけで既にこの部屋は危険にさらされている。そこでさらにエルデにルーンを使わせると言う事は、エルデに向かって敵の標的になってくれと言っている事に他ならない。
さらに言えば、たとえ治療ができたとしてもファーンが生きている限り、その場所は感知され続ける。ともに逃げるとして、事を全て済ませた後エルデとラウがヴェリーユを出るまでに追尾力のある攻撃ルーンをどれだけかわせ続けられるかも不明だった。
いや。治癒中に攻撃を受ける可能性も高かった。
だがエルデが治癒のルーンを使った瞬間に、ラウは自らの持つ強化ルーンを使って、最大限の防御を施すつもりでいた。ヴェリーユでは結界でそのルーンが弱体化されていると言うが、いったいどれくらい弱体化されているのかはわからない。しかし、自分の知る最高位のルーンを惜しげ無く使うつもりでいた。
エルデはそんなラウから視線を逸らすと、取り出した儀仗の頭頂部にはめ込まれているいくつかのスフィアを見つめながらつぶやいた。
「今のラウならわかるかもしれへんな」
「え？」
「今のお前はエイルと同じや。あの時の……」
「あの時？……あ！」
エルデのいう「あの時」がいったい何を指すのかに思い至ると、

ラウは顔を伏せた。
「どうにもならへん事を今更責めてる訳やない。ただ、お前がラウに対して抱いている思いと、あの時のカレンに対するエイルの……いや、正直に言うとエイルとウチの、やな。その気持ちをちょっとでもわかってくれると嬉しい」
「私は……」
「まあ、押しつけるつもりも、恩に着せるつもりも毛頭ない。そこのところは誤解せんでほしい」
「……」
「？？なあ、ラウ？」
「はい」
「お互い今更遅いんやろけど、ウチらは賢者の価値観だけを持ち続けとくのが一番楽なんやろな」

エルデの言葉に、ラウは何も言えなかった。
遅まきながらではあるが、ジャミールの里に入る前に出会ったエイル・エイミイがぶつけて来た思いを自分のものとして理解してしまったからだ。
「改めて聞くで。ウチがファーンにルーンをかけた瞬間、ここにおる仲間全員が敵の標的になるんやで。一人を助けたらその何倍もの人間が窮地に陥るんや。それでもお前はファーンを助けたいんか？」

「そんな言い方はないだろ、エルデ？」
入口から声がした。
エルデは声の主に背中を向けたまま、目を細めてにっこりと笑った。振り返らずともエルデにはその声が誰のものかはわかっていた。そしてその声の主がこの話を聞けば必ずそう言うであろう事も。
だがラウは、入口に立つエイルの顔を見ると肩をがっくりと落とした。エイルの顔を見る事が出来なかったのだ
「それでも……ファーンを助けて欲しい」

「何か他に手はないのですか？」
今度はエイルの後ろから違う声がした。ゆったりと優しい声は、もちろんアプリリアージェのものだった。
「これを」
アプリリアージェは部屋に入ると、手にした木綿の袋をエルデに差し出した。
「あなたの言う抹香臭い紅茶の葉です。私は良い匂いだと思うんですけどねえ」
エルデは驚いた顔でその袋とアプリリアージェを見比べていたが、すぐににっこり微笑むとその袋を受け取って鼻に充てた。
「おおきに」
それはエイルが厨房を色々探って、匂い消しの代わりに持ち出したものだった。アプリリアージェの指示で居間の絨毯に染みこんだ血痕に、飲み終わった茶葉を散らす作業を終えたところだったのだ。
「リーゼとメリドは？」
エルデがアプリリアージェに問う。
「私の後ろにいますよ」
「よし」
エルデは小さくうなずくと手招いた。
「ほな、全員部屋に入ってくれ」
ラウは顔を上げてエルデの顔を不思議そうに見つめた。
「では？」
「ああ」
エルデはうなずいた。
「ファーンはリリア姉さん達の命の恩人らしいしな。そのリリア姉さんに世話になっている手前、ウチがファーンを見捨てるわけにはいかんやろ？」
「エルデ！」
立ち上がって自分の所に飛んでこようとしたラウをエルデは慌て

て制すると、エルデはエイルと視線を絡ませた。
「さて、体も戻った事やし、ホンマもんのハイレーンの力をいっちょ見せたるかな」
「助かるのか？」
エルデの問いかけに、エルデは力強くうなずいた。
「ウチを誰やと思てんねん。絶対に助ける。でも、残念ながらみんなとはここでお別れや」
「え？」
エルデの言葉にアプリリアージェとエイルは顔を見合わせた。
「それはどういう意味ですか？」
「治療の前に、まず強化ルーンをみんなにかける。例の足音を消すルーンと姿を消すルーン、ついでに物理攻撃をある程度和らげるルーンの三つや」
エルデはこの後の手順を説明し始めた。簡単に言えば各種強化ルーンをかけた上でエイルとル＝キリア組を先に逃がすというものだった。
顔が知られているラウはファーンと共に別行動でヴェリーユを離れ、エルデはルーナーとしてヴェリーユ側から特定された後は、単独行動をとるという。
懸念していたファーンへの感知だが、これはエルデによれば追尾される事は無いという事であった。
「そこもちゃんと考えた。ファーンには仮死ルーンをかける。死んだ人間は感知外のはずや。たぶんそれで大丈夫やろ。ただ、ラウは意識のないファーンをずっと背負って逃げなあかんから、筋力の持続力を強化するルーンをかけといたる」
「仮死。その手がありましたね」
だがエルデのその作戦に最初に疑問を投げかけたのはエイルだった。
「ちょっと待て」
「なんや？ウチの完璧な作戦にケチ付けるつもりか？」

「ああ。それでお前は助かるのか？」
それはその場に居た全員が知りたい質問であり、同時に全員がエルデの自信満々な肯定を期待していたのだ。
だが、その美しい顔に不敵な微笑みこそ浮かべたものの、エルデは自信に満ちた言葉を口にはしなかった。
「ウチがこの体を失うてエイルに憑依する羽目になったんは、そもそもここヴェリーユでルーンを使うたからやっていう話はしたっけ？」
エルデのその一言は、場に沈黙を生んだ。
ラウはもちろん初耳だったが、その言葉の意味するところを知っても、かけるべき言葉を見つけられなかった。
エルデほどのルーナーでさえ、助からなかったと言う事なのだ。

エイルはこみ上げる感情をまとめ上げるのに必死だった。口を開ければエルデを止める強い言葉を浴びせ続ける事が自分でわかっていたからだ。だが、それは同時にファーンを見捨てろと叫ぶ事と同義であることも理解していた。
だから他にいい手がないかを模索しようともがいていた。
アプリリアージェはエルデの戦術、いや戦術とも呼べない手順がファーンを助けるという事を大前提にしており、なおかつ味方の損害を最小にする手法としては最善であると同時に、現在の状況ではそれが唯一無二の選択肢である事が理解できていた。だからこそ、エルデの作戦を肯定する事も否定することも彼女にはできなかった。

メリドはこの時点で、部屋に戻った時に初めて目にした瞳髪黒色の不気味に強い精霊波を放つ美貌の娘が、ジャミールの里で族長ラシフをいつもカンカンにさせていた人物であることを素直に受け入れていた。
ごく短時間でここまでの手順を組み立てて見せた冷静で明晰な頭脳。古語の調子や自信に裏打ちされているであろうその尊大な態度、

その物言い。それは姿形こそ変わっているものの、あの時の賢者そのものであった。

そして、その賢者が告げる作戦は他に選択肢が無い物なのだと言う事を彼も悟っていた。

だがメリドには一つだけ後ろ髪を引かれる思いがあった。彼はエルデ達と再会する為に滞在を延ばしていた訳ではなかったのだ。彼は呪医ハロウィン・リューヴアークを待っていたのである。

だがメリドの存在はティアナやエルネスティーネにとってもありがたかった。もともとジャミールの里の情報収集役としてウンディーネやサラマンダの各地に足を伸ばしていたメリドである。世界各地から聖地ヴェリーユに集う人々の持つ様々な情報を町に出て拾い集めていた。ただでさえ長身のアルヴであるティアナはデュナンが多いヴェリーユでは目立つ上に、珍しい白髪は人物特定にあまりにうってつけで、目立つ行動をとるわけにもいかなかった。さらに言えば彼女は情報収集の訓練など一切受けておらず、要するにその目的においては無能だという事を自覚していた。

エルネスティーネは論外であり、テンリーゼンに至っては問題外。アキラにその役目を頼むのはお互いの立場の問題もあって難しいとなれば、メリドがその役を喜んで引き受けてくれていたのは国の体制が大きく変化したばかりのシルフィード人としてありがたかったのである。

もちろんシルフィード人の巡礼者は多くはなかったが、外国からみたシルフィードの情報だけでもティアナ達にはありがたかった。

ガルフ・キャンタビレイにまつわる妙な噂をティアナ達が知ったのも、メリドの活躍によるものだった。

「どっちにしろ、オレはお前と行く」

ややあって、エイルはそう言った。

「え？」

「ルーナーを剣士が守るのはファランドールの戦法としては普通なんだろ？それにオレにはお前に色々と聞かなきゃならない話がある」

もちろんエルデはびっくりした顔でまじまじとエイルを見つめた。

瞳髪黒色の少女の前に立つエイルは珍しく、いや少なくともアプリリアージェの記憶では初めて腰に差した短剣の柄に手を置いていたのである。

剣士という言葉と共に、それを示す態度をエイルがとっていた。

腰に差しているのはエイルがラシフから託された妖剣ゼプス。しかし彼がその剣を鞘から抜いた姿をアプリリアージェ達は一度も見たことがなかったのである。

その剣に手を掛けて口を出たエイルの言葉は、おそらくエルデが考えている以上に重いものなのだろうとアプリリアージェは感じていた。

だがエイルの言葉を受けたエルデは、ただでさえ上がり気味の目尻をさらに吊り上げ、あからさまに不愉快そうな表情を浮かべると即座に同じピクシィ族の少年の申し出を却下した。

「冗談やない。お前はネスティを守る為にわざわざ扉を閉めてまでファランドールに残ったんやろ？フォウに戻る機会を捨ててまで選んだ事なんやったら、それを貫くべきやろ？」

エイルはしかし、エルデのその言葉にも全く動じなかった。

「オレが何を言ってもお前は今度はこう言うんだろ？『はっきり言うて足手まといやねん』ってな。足手まといになろうがお前がどう言おうがオレはお前と行く。いいか、これはオレが決める事だ。お前の指図なんか受けてたまるか」

それは半分怒鳴り声で宣言された。

その声にひるんだエルデに、エイルはさらに一歩近づき、ほとんど眼前に立った。そうやって近くで向かい合うと、やはりエイルよりもエルデの方が少し背が高いと言う事がわかった。

エイルはアプリリアージェ達全員に背を向けた格好でエルデに対

峙すると、右手を胸の高さに掲げ、手甲と言われる薄い金属板の入った指出しの保護手袋を取ると、裸の手の甲をエルデに見せた。
つまりエイルはそれをエルデ一人だけに見せる為にわざわざ全員に背中を向けてエルデに近寄ったのだ。計算による行動であった。
「逃げるなよ、エルデ。オレはお前にいろいろと教えてもらう事があるんだ」
エイルの右手の甲にエルデの視線が落ちると、その切れ長の大きな目が見開かれた。そして思わず出かかった言葉を飲み込むように手で口を覆うと、見開いたままの目でエイルの顔を凝視した。
「文句あるか？」
エイルはそう言うと、再び手甲をつけた。
エルデはエイルを睨んでいた顔を、ゆっくりと地面に落とした。
「何でやの？」
そして絞り出すよう小さくつぶやいた。
「あれはもう、終わったはずと、ちゃうのん？」

アプリリアージェは二人の様子を細かく観察していた。そして『時のゆりかご』でエイルが自分の右手を気にしていた事を思い出していた。
（あの時エイル君の右手に何かの変化があった。そして彼はそれを隠す為に、それまでしていなかった手甲を填めるようになった。それも右手にだけ）
その時からアプリリアージェはその変化をおかしいと思っていた。だがそれを確かめる時間もなく、この部屋に辿り着いたのだ。
わかっている事は、同じ体を共有していたエルデがそれを知らなかったということ。
そしてそれはエルデを大きく動揺させるほどのものである事。
『終わったはず』というエルデの言葉。
それらの一つにまとめ上げるもの……。それはひょっとするとエイルをファランドールにつなぎ止めた本当の原因になるものかもし

れなかった。
（あ！）
アプリリアージェはその時、突拍子もない事を思いついた。だが、すぐに心の中で首を横に振って自らの推理を否定した。
（さすがにそれはない）
「時間がないんだろ？急ごうぜ」
うつむいたエルデにエイルがそう声をかけた。
「助からないなんて決まった訳じゃないだろ？」
だが、エルデはすぐには顔を上げなかった。
アプリリアージェはそれを見て声をかけた。
「そういえば、ラウさん達は《蒼穹の台》からの伝言を持っているのではないですか？」
だが、エルデは言下に告げた。
「ファランドールの情勢とか、ンなもん、この際どうでもええわ。そんな事よりウチらの情勢や」
「あらあら、さしもの三聖もあなたにかかると形無しですね」
アプリリアージェはそう言って苦笑したが、それ以上追求はしなかった。
「では無事にこの町を抜けられたら、我々はハイデルーヴェンで待っています。あそこはけっこうな規模の町ですし、紛れるのにも適当でしょう」
ハイデルーヴェンとは、ヴェリーユにほど近い学校都市と言うべき町であった。神学や精霊波をはじめとする様々な研究機関や学校が建ち並び、世界中から学究の徒が集う場所としてウンディーネでも有数の賑わいを誇る。
またヴェリーユへの巡礼者の為の宿場町の機能も有する。ヴェリーユの宿は巡礼者を全て受け入れるだけの許容量がない。それどころか全く足りないと言った方がいいだろう。水路を使えば一時間程度で行き来出来るハイデルーヴェンは絶好の立地と言えた。

ヴェリーユと同様に世界中から人々が訪れる町であるハイデルーヴェンは国際都市と言っていい。ならばデュナンだけでなく、そこにはアルヴ系の人間も多く滞在しているだろう。紛れるにはアルヴの姿が少ないヴェリーユよりも適している可能性が高い……アプリリアージェはそう考えてハイデルーヴェンを待ち合わせに指定したのである。

そこならば自分たちを訪ねてくるはずのハロウィン達と会える確率も高いだろうという事も、もちろん計算に入っていた。

アプリリアージェはラウとエルデににっこりと笑って見せた。

「我々と落ち合うつもりがないのであれば、少し遠いですがヴェリタスという手もあります。我々もしばらく待ってあなたたちが現れなければそちらへ向かいましょう」

ヴェリタスとはもちろんマーリン正教会の本山がある独立都市ヴェリタスである。ヴェリーユとヴェリタスは直線距離で約五百キロ以上も離れている。ただし、間には湿地帯と山地があり直通路はない。陸路である街道を使うとその三倍はかかる計算である。ヴェリーユからは水路を併用しても二週間以上かかる距離にあった。

だが、それまでにある町や都市はどういうからみで新教会の息がかかっているのかがわからない。面が割れていないアプリリアージェ達だけであればそのおそれはないだろうが、ラウとファーンはそう言うわけにはいかない可能性もある。

もとより彼女たちはアルヴである。さらに賢者でもあり、たとえ距離があろうと雪の季節であろうと本山であるヴェリタスへの経路は心配ないだろうというのがアプリリアージェの計算であった。

彼女にしても、エルデからはもう少し情報を引き出しておきたい事があった。それだけでなく、エルデは手元に置いておきたい「武器」でもあったのだ。それも相当強力な兵器である。すなわち第一候補と第二候補を提案することはアプリリアージェにとっては、それを確実にする為の、つまりエルデとの関係を絶たない為の当然の戦術であった。

「リューヴアーク先生とはどう連絡をとりましょう？ハイデルーヴエンで必ず会えるという保証はありません」
メリドは心配していた事を口にした。
「それについては念のために調達屋組合を通じてベック宛に連絡を入れておきましょう。彼ならどうにかしてハロウィン先生に連絡をつけてくれるでしょう。そこは彼の調達屋としての力の見せ所でしょうから、信じていいと思いますよ。それよりメリドさんはアアクに直接向かった方がいいかもしれません。そろそろイブロドが寂しがる頃でしょう？」
「いえ」
メリドは首を横に振った。
「リューヴアーク先生から精霊石を使った治癒法をうかがうまでは戻れません」
「そうね。そうでしたね」
アプリリアージェはうなずくと、あらためてエルデに告げた。
「決まりましたよ、エルデ」
エルデはその言葉を受けて、ようやく顔を上げた。
いつも以上に吊り上げた目でアプリリアージェを睨んだエルデだが、しかしその怒気あふれる表情のわりには、精霊波にまったく乱れのようなものはなかった。
「まったく、どいつもこいつもアホばっかりや」
そして独り言のようにそれだけつぶやくとノルンを掲げ、それを例によって水平にして突き出し、そのまま極めてあっさりといくつかのルーンを唱え始めた。
その態度にはもはや何のためらいも迷いも見られなかった。
唱えたのはエイルにはもうおなじみの強化ルーンだ。相変わらず認証文のみを早口で唱えるだけの反則とも言える詠唱だったが、本来の姿でエルデがルーンを唱えるのを見るのは初めてだった。エイ

ルがいつも聞いていたのは自分の声だったが、瞳髪黒色の少女のすんだ声による詠唱を耳にするのは不思議な気分だった。

しかし、詠唱が終わった瞬間、エイルのそんな些細な物思いは消し飛んだ。その部屋に出現した「あるもの」が、そこにいた全員の度肝を抜いたのだ。

それはエイルが今まで一度たりとも目にした事のない現象だった。光の帯が作る輪。

一言で表現するならば、そう言うしかない。エルデがルーンを唱えた瞬間、部屋全体を包むかのような大きな光の帯が発生し、それはルーン詠唱者であるエルデを中心にした輪のようなものだったのだ。光の帯はエルデを軸に光の粒を振りまきながら、ぐるぐると回っていた。帯にはエイルが今まで見た事もない未知の記号、もしくは文字と思しきものが描かれていたが、帯の回転が速すぎて詳細には読み取れなかった。

（これは）

エイルは記憶を探った。これににたものを見た事があるような気がしたのだ。

「空中に……精霊陣？」

それはラウのつぶやきだった。

エルデを知っているはずのラウでさえ初めて見る現象だという事だ。

そう。それは光の帯に描かれた神痕と呼ばれる文字と記号の羅列で、まさに光る精霊陣の帯であった。

「どや？ウチが本気で強化ルーンを唱えると結構ハデな事になるやろ？」

エルデは何のしかけも準備もせず、ただいつもの通りのルーンを唱えただけだった。

本来の体で、つまり本来持っている力で、そしてそれを制御せずに開放すると、意志の力で大気中のエーテルで陣を描き、力をさらに増幅させるというのだろうか？

同じシグ・ザルカバードに師事していたはずのラウですら初めて見るエイルの無制御のルーン詠唱が、いったいどれだけの能力を発揮するのか想像できなかった。

「なぜあなたがこんなものを？」

姿が消えたラウの戸惑うような声が部屋に響いた。

「これが格の違いっちゅうヤツや」

同様に姿の見えないエルデの声が答えた。

「しかし、これは……まるで」

だがエルデはラウの言葉を途中で止めた。

「話は逃げ延びた後にしよ。それより強化ルーンは終了や。できるだけ急いでここを離れるんやで、リリア姉さん！」

今までエルデがかけたルーンとは全く違うルーン光と言うべきなのだろうか。初めて見る空に浮いて回転しつづける光の精霊陣に不覚にも目を奪われていたアプリリアージェは、エルデの声で我に返ると、周りを見渡した。

残念ながらエルデのルーンで、全員の姿が見えなくなっていて、テンリーゼンとメリドの表情はわからなかった。だが、やる事は一つだった。

「行きましょう。まずは一気に東の階段を降りて正面玄関から外に出ます。正面の通りを左側に少し行ったところ、最初の角で落ち合って様子を見ましょう。その後、ネスティとティアナを見つけます」

急いで指示を出したあと少し間を置き、アプリリアージェはメリドに手順を復唱させた後で、一言付け加えた。

「それから、できればアモウルさんも」

「了解」

メリドは声で、テンリーゼンは精霊会話で同時に反応した。

部屋を出て行く足音はなかった。エルデは三人が部屋から消えた事を気配で判断すると、口元だけで小さく笑った。もっとも誰もそ

の顔を見る事は出来なかったのではあるが。
「さて、待たせたな、ファーン。もう少しの辛抱や」
そうつぶやいた後で、エルデは何かを口の中だけで唱えた。すると消えていたエルデの体がぽっかりと部屋に現れた。不可視ルーンを解除したのだ。
次にエルデは水平に突き出したままの儀仗ノルンに変化を命じた。
「ヴェルザンディ！」
三色の木で撚られていた儀仗ノルンは、エルデの呼びかけに応えて瞬時に茶色一色の儀仗に変化した。その一瞬の変化ももどかしいように、エルデは儀仗ヴェルザンディに向かって短い認証文を唱えた。
「エリヤ・フルエ・ユラデ・サラネート・ファウーデ」
詠唱が終わると、またもや空間に異変が生じた。今度は空中で回転する光の精霊陣の代わりに、部屋の上部に白いものが発生して広がっていった。
エイルはそれを見て、最初は局地的な雲の様なものだと思った。発達する様は積乱雲のようだ。だがよく見るとそれは、雲ではなくごく細かい羽毛が舞っているのだと理解した。
もちろんそこに羽毛が存在していたわけではない。エーテルの発光がそう見せているだけなのだろう。
だが、そのエーテルは、まるで羽毛と見分けが付かない形で部屋をひらひらと舞い、ファーンの上にふんわりと落下した。
姿の見えなかったファーンは、最初の羽毛が触れた瞬間に不可視ルーンが解除され、その姿を現した。細かい羽毛は次々とファーンの体に降り注ぎ、触れた瞬間にぼうっと淡い光を発し、煙のように空気に溶け込んでいった。
出現した全ての羽毛が消えたのを見届けると、エルデはさらに何事かを唱え、もう一度光の帯を一本、部屋の中で回転させた。ファーンへの仮死ルーンであろう。
「よしっ」

エルデはうなずいてエイルに顔を向けた。それはまるで彼女にはエイルの姿が見えているかのようであった。
「さあ、行こか」
「ファーンは？」
「もう大丈夫や」
「そっか」
「後の事はあんじょう頼んだで、ラウ」
ラウはファーンとエルデを見比べて、改めてエルデに声をかけようとしたが、時はすでに遅かった。
エルデは改めて不可視と無音、そして防御のルーンを続けて唱え、三本の精霊陣の光の帯をまばゆく、そして盛大に回転させるた後、すぐに部屋から気配を消した。
ルーンのせいでラウには見えなかったが、エイルが伸ばした不可視の手をエルデは迷わず握り返し、二人はそのまま軽やかな足取りで部屋を後にしたのである。

「ハイデルーヴェンで」
二人が出て行った部屋の扉を見つめながら、ラウは声に出してつぶやいた。
「必ず会いましょう。エルデ。あなたには伝えなければならない事と、どうしても聞きたい事があります」
そして両手を伸ばし、手探りでファーンの手を探り当てると、それをそっと握った。
冷え切っていたはずのファーンの手は、少し暖かく感じられた。

＞ｉ２３５１４―１８３１＜

## 第四十話　離散（後書き）

「合わせ月の夜」ｗｅｂサイトにて毎週月曜日に連載中です。
少数ですがイメージイラストもあります。（申し訳ありませんが、ケータイ未対応です）
ｉＰｈｏｎｅ等、スマートフォンもしくはＰＣ環境をお持ちの方は一度お越しください。

ｈｔｔｐ：／／ｅｉｒ－ａｍｙ．ｃｏｍ／

当サイトでは毎週火曜日に連載予定です

## 第四十一話　繋いだ手（前書き）

合わせ月の夜　第二部　深紅の綺羅　第四巻
通巻第十二巻のスタートです

# 第四十一話　繋いだ手

＞ｉ２３４６９―１８３１＜

きわめて当たり前の事ではあるが、こちらの姿が相手には見えないという事は実に便利な事だと、改めてエイルは思っていた。

逃げる時には特に。

なにせ敵に見つかる事に怯えながら物陰から物陰へ移動する場合に、細心の注意力を要求されたり、神経をすり減らす事が無い。目的地に向かってただ最短距離を走ればいいのだ。

（まったくここは、便利な世界だ）

ルーンという力の存在……エイルが居た異世界「フォウ」では一口で魔法と呼ばれている、合理的・論理的な価値観では解明できない不思議な力……が、ここでは当たり前のものとして存在している。

そして今、こうやって手をつないで一緒に走っている少女は、その不思議な力を事も無げに操る使い手、それも大いなる使い手なのだ。

エイルは自分の姿が自分でも見えなくなっている状態になかなか慣れず、とまどいつつもそんな事を考えていた。

（でもエルデをフォウじゃどう呼べばいい？『ルーナー』じゃ通じないしな。いろいろ説明も面倒だ。だとすると、やっぱり『魔女です』って言えばいいのか？）

とはいえフォウの価値観で『魔女』という言葉を当てはめるのにも抵抗があった。エルデは箒に乗って空を飛べるわけでもなく、妙な瓶で怪しい材料を煮詰める訳でもない。つばが広い、先の尖った帽子も被ってはいないし、いかにもな黒いマントに身を包んでいるわけでもない。

（いやいやいや）

そこまで考えてエイルは己の価値観の貧困さを自嘲した。

ただ、先が尖った帽子と怪しげな黒い服は、神秘的で美しい容姿を持つエルデにはとても似合いそうだとは思った。

（服と言えば……）

そもそもエルデは今、裸足で、着ているものは怪しい魔女の服どころか男物のダブダブの寝間着のままのはずだった。その上にラシフの髪をルーンを使って織り込んだマントを羽織っているのだ。

「ああもう！」

エイルがそんな事を考えていると、突然エルデが癇癪を起こした。

「この寝間着、ダブダブでめっちゃ走りにくい！」

その声を聞いて、エイルは思わず笑いがこみ上げてきた。

「何がおかしいねん！」

小さく漏れた笑い声に、エルデが耳ざとく反応した。

「いや……」

さっき聞いた話では、今は二人とも絶体絶命とも言える状況のはずだった。だが、エルデの言葉を聞いていると、むしろ緊張からはもっとも遠い状態にあるような気がした。そして信じたくはないものの、エイルはそんな今の状況を楽しんでいる自分に気付いていた。

「オレが思うに、あの姿は意外に似合ってたぞ。正直に言うと、お前がその服に着替えてきた時は不覚にもちょっとドキッとした」

だからエイルはそう言ってエルデをからかってみた。悲壮感のある話をするよりも、今はそんな軽口を叩いていたい気分だったのだ。

エイルの軽い挑発に、エルデはしかしすぐには返してこなかった。そしてエイルが不安を覚え始めた頃に、ようやく聞こえにくい小さな声でつぶやくのが聞こえた。

「？？か？」

「はあ？」

お互い走りながらの会話である。小さな声は聞き取りにくいのだ。空気の中の振動をかなり細かく感じ取れる風のフェアリーの能力があればたやすい事なのだろう。アプリリアージェ達ル＝キリアの面

々ならいざ知らず、あいにくエイルには風の属性の力はない。
「ホンマかって聞いたんや！」
ふてくされたような声で、エルデがそう言い捨てた。はっきりした発音で、聞き逃す事はむしろ不可能なくらいだった。
「え？」
思いもかけないエルデの言葉に、エイルは思考力をしばし失った。言葉の意味するところがわからなかったのだ。エイルがエルデに求めていたのは、『似合ってる訳ないやろ、人をおちょくってんのか？』という方向の切り返しだったのだから。
「ああ！でも……」
エルデはエイルの言葉を待たず、また独り言に戻った。
「やっぱり先にちゃんとした服だけでも調達しとくべきやったなあ。というか、ティアナとネスティの帰りが遅すぎや。リリア姉さんがちゃんと近くの店で手早く済ませろって釘を刺してたのに、まったく使えん連中や。とっくに成人してる連中ばっかりやのに、まったくもって子供の使いやな」
「そうだな……」
そういって曖昧に相づちをうったものの、エイルは確信していた。エルネスティーネの性格を考えると、エルデの為に一所懸命なはずである。一番エルデに似合いそうなものは何か？黒髪と黒い瞳に映える色はこれでいいのか？旅の中で動きやすいか？保温は？通気性は？などと、ほとんどどうでもいい点にまで一つ一つ厳しい吟味をしているにに違いない。そうやって夢中になっているのに反比例して時間が経つ事への関心が希薄化しているのだろう。
いや。それはちょっとエルネスティーネやティアナを買いかぶり過ぎで、単に買い物という行為が楽しくて、時間の事はすっかり頭から抜け落ちているだけなのだろう。きっとエルデのいう事が正しいのだ。エイルの知る限り、「女同士の買い物」という上の句に対して「手早く済ませる」という下の句が続く事はあり得ない。どうやらそれはフォウでもファランドールでも同じようだった。

エルネスティーネとエルデが初めての対面した時には二人の間に妙な緊張感を感じたが、実のところは旅の道連れとして、もう三ヶ月にもなろうかという間柄である。エルデの方ではエルネスティーネをなぜか多少苦手に思っているような節が見られたが、決して嫌っているわけではない。それにエルネスティーネの方はエルデに対して好意を持っているとエイルは認識していた。

それになにより、王女というにはやや不釣り合いとも思える妙に世話好きな性格が見え隠れするエルネスティーネの事である。エルデに気に入ってもらえるものを買おうと張り切っている事だけは間違いはない。エイルとしてはそれを考えると二人を責める気持ちは湧いてこなかった。

「そう考えると」

「は？」

今度はエイルの独り言のようなつぶやきに、エルデが反応した。

「いや。リリアさん、買い物の人選を間違ったのかもしれないな、って。まあ結果論だけどさ」

「まったくや。ウチが思うにネスティは服一着選ぶのに二時間はかけるタイプやな。帰ってくるのは夕食前かもしれへんな。ああ、こんな事やったらファルに頼んだ方が良かったなあ。あ、でも下着とかあるしなあ」

「そっちはティアナがいるだろ」

「ティアナか……」

「ティアナだと何か問題でもあるのか？」

「ティアナはアルヴやから、ウチらの寸法の見当がつかへんような気がする」

「寸法？」

「なんでもない、このスケベ！」

「いやいやいや。違うだろ」

「せめて下着だけでも着ときたかったなあ……」

「……」
「今、いやらしい想像したやろ？」
「してない！」
「姿も見えへん事やし、いっそこのまま先に服屋に寄って、適当な服を失敬しよか」
「それはやめとけ。っていうか、賢者がそんな事したらマズイだろ？」
「それもこれも師匠が悪い。服、着せとけっちゅーねん」
「確かに……。でも長期間安置する場合は皮膚に布が触れている状態は良くないからって話だったろ」
「今、またスケベな想像したやろ？」
「し、してないって！」
「ああもう！人前に引き出す時くらい、気を遣えっちゅーねん。師匠のアホ！！」
「いや、それよりお前、どこに行くつもりなんだ？」
「本山。ちゅーか正確に言うと目的地は《陣廊》やな」
「え？」
「こうなったらヴェリーユに敷かれてる精霊感知の中枢をぶっ潰したるんや」

エルデの作戦は極めて単純で直線的だった。
逃げる為に城壁に向かうより、中心部の方が圧倒的に距離が近いからこっちに来たという理屈なのだが、その中心部たる大聖堂の内部構造が頭に入っているから大丈夫だという。
「なんせウチは一度、実際にここに入り込んでるからな」
エルデはそこで致命傷を負い、仕方なく体を放棄して憑依の呪法……いや、移魂の呪法を行い、エイルの体に精神を飛ばしたのだという。
言ってみれば本山たる大聖堂深部はエルデだけではなく、エイルにとっても因縁の場所なのだ。エイルにしてみれば、全てはそこか

ら始まったようなものなのだから。
「なあ」
エイルは横にエルデの気配がある事を確認すると、走りながら声をかけた。
「なんや？」
「前から聞こうと思ってたんだけどさ」
「ん？」
「なんで移魂の呪法を使ったら、俺の頭にお前の意識が入ってくる事になるんだ？しかもこっちはお前のところからすると異世界なんだろ？」
「うーん……」
それはエイルの後方から聞こえた。
エルデがいきなり立ち止まったのだ。繋いだ手が離れて、エイルはエルデを追い越していた。
「おいおい、そんなところで考え込むなよ。止まるとまずいんだろ？」
「ウチにもわからへんねん」
あきれて戻ってきたエイルに、エルデは済まなさそうにそう言った。声色の雰囲気で、それが嘘ではなさそうな事はエイルにも何となくわかった。
「術をかけたのはお前だろ？そもそも移魂の呪法って……」
「まあ、仮説は構築済みや。たぶん合ってると思うけど」
「じゃあ、それを聞かせろ」
「そう言うけど、アンタに言うてもわかるかどうか……」
「そんな事はオレが決める事だ。聞かせろよ、その仮説ってやつ」
「いや」
エルデはしかし答えなかった。
「ややこしい話はまた今度や。そんな事より警戒は怠ったらアカンで」
それだけ言うと、エルデはエイルの手を取って再び奥へと走り始

めた。
　エイルは軽くため息をつくと、素直に従った。はぐれたらそれこそえらい事になる。それに、落ち着いてからゆっくり聞く方がエイルにとっても都合がいいのは確かであった。その疑問に対する答えはエイルが時のゆりかごからずっと持ち続けている違和感を解きほどく大きな鍵だという予感、いや確信があった。
　??そうじゃない。違う。
　エイルは時のゆりかごで初めて違和感を覚えたのではなかった。ずっとくすぶらせてきた違和感という「種火」が、時のゆりかごでの体験を経て、小さな炎に変わったのだ。
　エイルは消えて見えなくなっている右手の痣の事を思い出していた。
　エルデが意識の中に入り込んでいる時には存在していなかった痣だ。もちろんフォウに居た時にもそんな痣はなかった。
　時のゆりかごでマーヤだと思い込まされていた少女の姿を見た時、初めて気づいた痣だった。
「ぼやぼやしなや。こっちや」
　脇にある通路に入り込んだエルデが、強い力でエイルを引っ張った。勢いで通り過ぎようとしていたエイルは危うく転びそうになりながらも、エルデに手を引かれるままに少し細くなった通路に入り込んだ。

　気がつけばそこはもう敵……果たして新教会を敵と呼ぶべきかどうかはエイルにはまだわからなかったが……の本拠地に入り込んでいた。二人は誰にもとがめられることなくヴェリーユ大聖堂の中心部を通り過ぎようとしていた。エルデは何の迷いもなく広大な伽藍の中央通路を走り抜け、さらに奥へと突き進んだ。その先には大聖堂は別に「本山」と呼ばれる関係者以外は入れない建物がある。
　そこまではきわめて順調だった。
「変やな」

エルデは大聖堂最奥にある石造りの上り階段を前に立ち止まり、ぽつりとそうつぶやいた。そこは本山へ続く長い回廊のとっかかりといった場所である。

「攻撃どころか、警戒もないな」

「うん」

感知されて、しかも位置を特定されているのであれば、ここまで何事もなくたどり着けるわけがなかった。しかもヴェリーユ大聖堂の中にいる警備兵らしき者達にはまったく異変らしきものがない。礼拝の信者とにこやかに語らう者すらいたくらいで、要するに普通だった。

少なくとも二人の目には大聖堂が非常事態下にあるようには見えなかったのだ。

「罠か？」

「あり得るな。もしくは、そもそも感知されてへんのか」

「それって、どういう事なんだ？」

「それればっかりはウチに聞かれてもなあ」

つないだままの手を通じてエルデの戸惑いがエイルにも伝わっていた。彼女の思惑としては攻撃があった方が対処に迷いが生じないだけ、やりやすかったのかもしれない。とはいえエイルにしてみれば争いが起こらない事に超した事はない。

だが……。

その時不意にエイルの目前にエルデの姿が現れた。ルーンが解けたのだ。

かなり長く続いていた不可視の効力がここへ来て切れた。だがここでもう一度ルーンを使って良いものかどうかはエイルにはわからなかった。エルデの表情からは、彼女自身も迷っているのが見て取れた。

「よし」

エイルは何かを決心したようにそうつぶやくと、握っていたエル

デの細い手をぐっと引き寄せ、正面に立った。
「エイル？」
突然のエイルのその「らしからぬ」態度に、エルデは戸惑いの色を浮かべた。
「安心しろ」
「え？」
「お前はオレが守ってやる」
「はあ？」
エイルは左の腰に差した短剣の柄を握って見せた。青い鞘に収まるそれは、ジャミールの里でラシフが別れる際に手渡してくれた妖剣ゼプスであった。
「エイル、アンタ……」
「ルーンはできるだけ使うな。どうしても必要になるまではな。それまではオレがこいつで何とかする」
「な、何やねん、いきなり」
エイルの真剣な眼差しに、エルデはたじろがずにはいられなかった。今までエイルから感じた事のないような殺気がそこにあったからだ。
「さっきのは何かの都合で感知が働いてなかっただけで、今は戻っているかもしれない。そうだろ？」
「ま、まあ、そう考えることもできるな」
「だったらオレ達はまだ見つかってない可能性がある。見つからなかった時間、つまり感知の空白時間はほんのちょっとの間の事で、今は元に戻っているかもしれない。つまり今、下手に試してご丁寧にこっちから居場所を知らせてやる必要はないだろ？」
「うん……そうやな」
エルデは歯切れが悪くそう言うと、エイルに握りしめられたままの手をじっと見つめていた。身長は同じくらいの相手に自分の手がすっぽり包まれてしまっている様を見て、小柄だと思っていたエイ

ルの手が、実は意外に大きかったのだという事をエルデはこの時初めて知った。
「でも」
エルデは口ごもりながら呟いた。
「急にどうしたん？」
「今まではお前に守られてばかりだったからな」
「いや、あれはホラ、自分の体を守ってるようなもんやし」
「それでも、お前はオレを守ってくれていた」
「……」
「だから今度はお前を守らせてくれよ。こんな時でもないとお前を助ける機会なんてないだろ。だって、お前は一人で何でも出来ちゃう奴だからな」
その言葉を聞くと、エルデはエイルの手をそっと握り返し、静かな口調で尋ねた。
「できるんやろな？」
「やるさ」
即座にエイルはそう答えると、もう一度妖剣ゼプスの柄に手を置いた。
「オレは競技の為の剣士だったけど、真剣を扱った事がない訳じゃないんだ」
「ふーん？」
「オレの家庭はフォウでは特殊なほうでさ。ガキの頃から稽古は全部真剣でやってたんだ。オレが居たのは剣が必要ない国だったのは確かだけど、ファランドールがオレに剣を握る理由を突きつけるなら、剣を使えるオレはそうするまでさ」
エルデはその言葉を聞くと、目をゆっくりと細めて微笑んだ。鋭い目つきが優しさをたたえると、エイルは眩しそうにして目を逸らした。それは今まで見た事もないようなエルデの表情だったからだ。
「で、どうする。この先に行くのか？」
エルデはエイルのその態度を見るとますます目を細め、その握っ

た手をぐいっと引っ張ると、エイルの胸に自分の胸をそっと合わせた。
「エルデ？」
不意にエルデに抱きしめられた格好のエイルは、戸惑いの声を投げた。
エルデは薄い夜着を一枚着ているだけである。柔らかい体の感触が無造作に押しつけられた状態に、エイルは思考が一瞬停止した。
「ナマイキな事言いよって……とか思わへん。アンタの剣の腕前は知ってる。頼りにしてるで」
エルデは熱を持ったエイルの真っ赤な耳元に小さくそれだけ囁くと、すっと離れた。エイルの鼻孔にはエルデの長い黒髪の残り香がほのかに漂っていた。

ぼうっとした状態のエイルは、しかしすぐに覚醒した。
遠くから足音が響き渡るのが聞こえたのだ。
まだ姿は見えないが、近い。
エイルとエルデは目を合わせると、無言でうなずき合い、躊躇わずにすぐ側にあった小部屋の扉を開けて中に転がり込んだ。
その部屋は通路脇にいくつかある部屋の一つだったが、幸い人の気配はなかった。二人は中に入り込むと、そっと扉を閉めて外の様子を伺った。無言で走り去る足音が複数聞こえたが、やがてそれも遠ざかっていった。
エイルは足音が聞こえなくなると、小さくため息をついた。

「あの……」
そのため息に反応したように、すぐ横でエルデが声をかけてきた。
「そろそろ、放してくれへん？」
「え？」
部屋に入る際に、エルデの細い体を抱きかかえるようにして転がり込んだエイルは、そのまま片腕をエルデの腰に回し、二人は密着

した格好で外の様子を伺っていたのだった。
「あ！」
エイルはエルデを抱えていた腕を放すと、慌てて後ろに飛び退いた。
「痛てっ」
二人が逃げ込んだのはかなり狭い部屋だった。後ろを見ずに飛び退いたエイルの後頭部は、必然的に壁に当たった。

「アホ」
エイルが頭を抱えてうずくまるのを見て、エルデはそう言ったが、顔は柔和に微笑んだままだった。心持ち上気しているようにも見えたが、俯いているエイルの目には入らなかった。
二人は改めてその部屋を見渡した。
大人二人が横になってようやく眠れるくらいの狭さで、壁の一方がすべて棚になっていた。天井からつるされたルナタイトの灯りは充分で、暗くはない。
「いつまでもタンコブさすってる場合やないで」
めざとく壁にある棚を観察していたエルデが、エイルにそう声をかけた。
エイルにはそう言うエルデの声色に聞き覚えがあった。それは何かいいことを思いついたか、あるいは何かいい物を見つけた時のちょっと嬉しそうな声だったのだ。
「巡礼者用の着替えがいくつもある。多分ここは懺悔待ちの巡礼者の宿舎やな」
「着替え？」
「行動するにしろ、目立つより目立たへん格好の方が都合がええやん？ウチもこの格好のままっていうのはあんまりやし」
「そうだな」
エルデは棚にきちんと畳まれている灰色の着替えをいくつか物色すると、一つを抜き出してエイルの方へ放ってよこした。

「着てみ。それで多分寸法は合うはずや」
「おまえは？」
「ウチら、背があんまり変わらへんし、エイルが着てからウチのは選ぶ」
「なるほど」
「とりあえず急ご。誰か来たらマズイし、ラウとファーンを取り逃がした連中が体制を立て直す前に引っかき回して注意を逸らしてやらなアカンしな」
「そうだな」

エルデの選んだ服はエイルにぴったりだった。その灰色の巡礼服姿のエイルをマジマジと見つめると、エルデは突然吹き出した。
「なんだよ」
「懺悔する事があるなら言うてみ？ウチはこれでも正教会の最高位にある賢者やで。今日は特別に無料で聞いたる」
「よせよ。新教会の本山で正教会の人間が勝手なことしていると叱られるぞ」
「誰に？」
「そうだな……」
エイルは腕を組んで少し考え込んだが、すぐに苦笑を浮かべると思いついた人物の名前を挙げた。
「ラシフ様、かな」
「確かに、叱られそうやな」
二人は顔を見合わせてひとしきりクスクスと笑うと、やがてうなずき合った。
扉を開ける前にエイルは耳をあてて外の様子を伺った。
人の気配はない。さっき通り過ぎていった複数の足音の後には何も音はしなかった。巡礼者の懺悔の為の準備室という割りには辺りに人気が全くないのが不思議だったが、エルデの話では懺悔を受け付ける日が決まっているらしかった。

「いくぞ」
エイルがそうつぶやくとエルデはうなずいた。
「目的地はもうすぐそこや。この回廊の先に忌々しい《陣廊》がある。覚悟はええな？」
「ああ」
「ウチの事、しっかり守ってや」
その言葉にエイルは答えなかった。差し出されたエルデの手を取り、その黒い瞳を見つめただけだった。
合図の代わりにエイルはそのつないだ手を強く握った。エルデの返事も同じで、つないだ手に少しだけ力を入れた。

## 第四十一話　繋いだ手（後書き）

「合わせ月の夜」ｗｅｂサイトにて毎週月曜日に連載中です。
少数ですがイメージイラストもあります。（申し訳ありませんが、ケータイ未対応です）
ｉＰｈｏｎｅ等、スマートフォンもしくはＰＣ環境をお持ちの方は一度お越しください。

ｈｔｔｐ：／／ｅｉｒ－ａｍｙ．ｃｏｍ／

当サイトでは毎週火曜日に連載予定です

# 第四十二話　沈黙の陣廊

メラク・ガーデルが標的を取り逃がしたという報告を受けたシーン・ジクスは、補佐官にいったん全部隊を撤退させるように命じると、《陣廊》と呼ばれる部屋から外へ出た。その表情には苦々しいものが浮かんでいた。だがそれは逃げられたという賢者、つまりラウ達に向けられたものではなかった。

とは言えシーンとしてもまさか逃げられるとは思ってはいなかった。それだけにメラクからの報告にはもちろん驚いたが、不思議な事に悔しいという感情はさほど湧いてこなかった。それよりも周到な包囲網を敷いていたにも関わらずそれを破って見せた相手に対して、むしろ痛快なものを感じていた。だから二人の賢者のうち、若いアルヴには致命傷を負わせたという報告が残念に思えていたほどである。

「《二藍の旋律（ふたあいのせんりつ）》、それに《群青の矛（ぐんじょうのほこ）》という名だったな」

あぶり出しの役とは言え、あっと言う間に煙に巻かれたシーンの部隊は、ラウ達と直接対決したわけではない。だが、全く無防備な状態からルーンを使わずその場を切り抜けた機転には素直に感心していた。

「密書にはそう書かれておりました」

側近がシーンの質問にそう答えたが、それを聞いたシーンはため息をついた。

「あれは密書ではない。怪文書と言うのだ」

「はあ」

「で、なければ密告書だな。いったい誰が寄越したものか……」

シーンが単身、隠密行動でヴェリーユの下町を巡回しているところに、突然一人の巡礼の旅人が近づいて差し出してきたのは、金箔が押された見るからに贅沢な封筒だった。

その中に入っていたのが、シーンの言う怪文書である。
封筒同様、品のいい金箔の装飾が施されてある便せんには癖のある筆跡で、簡単な言葉が記されていた。

『毎日午後三時頃、南三番街のカフェに正教会の賢者が珈琲を飲みにやってくる。
どちらもアルヴの女で年長者の名は《二藍の旋律》。年下が《群青の矛》
だがおそらくそれも今日が最後。
彼女達が出立する前に、挨拶などいかがか？』

もちろんシーンは、差出人を訪ねた。だが封筒を持参した信者の言葉は要領を得ない。気がついたら封筒を持っていて、シーンに渡さなければならない事だけを覚えていたのだという。
（怪しい）
およそ普通の人間ならそう思うだろう。シーンも当然ながらその内容には眉につばを付けて当たるべきだと考えた。
そもそもこれは陰謀ではないのか？シーンには外部ではなく内部に敵が多い。出世にはやる輩が、何か事があれば、すぐさまシーンの足を引っ張ろうと手ぐすねを引いて待っているのである。下手な失策をすればそれこそそこにつけ込んで愉快ではない事態にしばらくつきあう羽目に陥るだろう。
きな臭いものを感じつつも、違和感もあった。
シーンは今一度封筒を吟味した。
封筒も便箋も、その辺で手に入るような実用本位の安物ではない。しっかりとした厚みがある白い紙は庶民がおいそれと買うような値段ではなく、ましてや箔を押している揃いの封筒と便箋など、シーンの常識では高級商人や一部の政治家、もしくは金に困っていない貴族くらいしか使わないはずであった。
思いついて少し封筒に顔を近づけたシーンは、そこに仄かな香り

を見つけた。どうやら香が焚きしめられているようだった。近づけないとわからない程度ではあるが、息を吸い込むと確かに花の香りがするのだ。シーンも知っているそれは、まさにバラの花の香りであった。

しばらく思案した後、シーンは挑発に乗ってみる事にした。彼が知る限り、手紙一枚にここまでの粋を凝らす「敵」はいないはずであった。この手紙に記されている内容が本当であれば、それを知りながら見過ごしたと言われる方がよほどやっかいであった。

守備隊の隊長という立場を利用して、シーンは行動を起こした。小隊を率いる人間には、彼の息のかかった人間、つまり信頼できる部下だけを投入した。本来ならば逃走経路と思われる場所に人員を配するにしても、より密度を高くしたかったのだが、後々の事を考えると数よりも質を選ぶ方がいいだろうと判断した。懸念があるとすればそこであったが、そもそも体制を万全にするほどの余裕はない。そもそもシーンでなければ短時間であれほどの部隊配置を終える事は出来なかったであろう。

なんとか準備を整える事が出来たシーンは、南三番街のカフェが見渡せる向かいの宿の一室からまずは様子を見る事にした。

果たして指定した時間になると、それらしい二人組がテーブルに着いた。

少し観察をしたが、二人の女アルヴは特に何をするでもなく、時折会話を交わしながら通りを行き交う観光客や巡礼者を眺めているだけのようだった。ただ眺めているだけではなく、それは行き交う人々の中から目当ての人物を探している風にも見えた。

念の為に周りを観察したが、特に怪しいと思える人影もない。手紙の主がどこからか観察しているはずだとシーンは確信してはいたが、どこから見ているのかまでは当然ながらつかみようがなかった。

いったい誰があの「怪文書」を届けたのかは大いに気になるところではあったが、手紙に書かれた内容がどうやら全くのでたらめで

はないとなると、彼の立場としては行動を起こす必要があった。要するに腹を決めたのである。

回廊を通り大聖堂へと向かいながら、シーンは今し方までの出来事を回想していた。

シーンがもし失敗したとするならば、それは人員配備や作戦そのものではなく、事前に副堂頭に事の次第を報告しておかなかった事であろう。

もとより怪文書である。事の真偽を確認した後、つまり賢者とおぼしき人物を確保した後に事後報告とするつもりだったのだ。

だが、それがシーンにとって思いがけない事態を引き起こす事になってしまった。つまりそれこそがシーンの苦り切った表情の原因であった。

そう。シーンの機嫌の悪さは副堂頭に向けられていたのだ。

だが、シーンのいらだちは筋が通ったものではなかった。副堂頭がシーンのやっている事を知っているわけではなかったのだから。

そもそもシーンは、突然現れた新しい副堂頭が最初から気に入らなかった。

いや、彼に言わせれば副堂頭などという役職が突然降って沸いたように設置された事からして異常なのだ。

堂頭自らがアプサラス三世の大葬に出席するためにシルフィード王国に行幸する間、ヴェリーユの一切を代行する人間が必要だと言われればそういうものかと思わないでもない。しかも堂頭自ら指名した副堂頭である。

だが、それならばヴェリーユの事をよく知る人物で、かつ多くの人間が納得できる人物が留守居に当たるべきであるはずだった。

つまり大神官の立場にある人間が指名されてしかるべきだと思っていたのである。いや、今でもシーンはそう思っていた。

なぜなら副堂頭として指名された人物のやり方が、シーンはどう

にも気に入らなかったのだ。
カテナ・ノルドルンドと名乗る、すなわち堂頭と同じ族名を持つその青年の事をシーンははじめから好きになれないでいた。
ヴェリーユでは様々な噂が飛び交った。
もとよりノルドルンドという族名はそう珍しいものではない。ウンディーネの西部に広く分布している古い一族に端を発する族名である。堂頭のミンツもその地方の出身であると聞き及んでいる。
だが、僧正達の間では、カテナはミンツの血のつながった息子ではないかという見方が大勢を占めていた。神官達ならばそのあたりの事情を知っているはずであったが、彼らは決して僧正達に対して上層部の秘密に属する事柄を話す事はない。
シーンの中でくすぶっていたその不満は《陣廊》に足を踏み入れ、その中の変わり果てた様子を見て、その原因がカテナ・ノルドルンド副堂頭に在ると知らされた時に頂点に達したと言える。

「こんな時に、副堂頭は何を考えていらっしゃるのだ?」
既に述べたとおり、カテナの言う「こんな時」という行動は副堂頭の知らぬ話であった。現在、陣廊に関する全権が副堂頭にある。シーンの怒りはある意味的外れだという事も出来た。
とは言えヴェリーユの目であり耳であり口でもある陣廊は、守備隊の行動には無くてはならないものだった。その守備隊隊長であるシーンに一言もなく、精霊陣感知にあたっている高位ルーナー達をごっそり連れ出す事は看過できる事ではなかった。
「それで、副堂頭はそれほどの人数のルーナーを連れだって、いったい何処へ向かわれたのだ?」
陣廊にわずかばかり残っていたルーナーの一人に、シーンはそう尋ねたが、その初老の女デュナンは首を横に振るだけだった。
彼女たち数人は陣廊に残るように指示されただけで、それ以外の事は何も告げられていないという。ただ、副堂頭本人が複数名の神官と大僧正を伴って突然現れ、緊急かつ重要な任務が発生したとい

う名目で、陣廊役である多くのルーナーを引き連れていったという。
「カテナ様はそこまで大人数のコンサーラを何に使われるおつもりなのだ？」
もちろん残ったルーナー達がそれを知るはずもなく、皆首を横に振るばかりだった。
陣廊役と呼ばれるルーナーは高位のコンサーラで固められていた。感知・追尾・遠隔ルーンの照準といったルーンは、強化ルーンを専門とするコンサーラの得意とする分野である。そのコンサーラ達が根こそぎ連れて行かれたのだから、もはやシーンは《二藍の旋律》や《群青の矛》を見つけるどころではなかった。そもそもヴェリーユにとって緊急事態なのである。陣廊が機能を停止してしまったのだ。
感知が機能しないどころではない。あらゆる精霊陣はそれを機能させるルーナー達を失い、ヴェリーユは今、丸裸と言っていい状態になっていた。
ヴェリーユに敵対する者が存在していないこと、たまさか存在していたとして、この事実をすぐに気取られない事を祈ると、シーンは心の中で舌打ちをして、沈黙してしまった陣廊を後にしたのである。

こうなってしまった以上、ここで文句を言っていても始まらない。シーンはやるべき事を頭の中で整理した。
副堂頭を見つける事と、並行して城壁の重点警備の指示。
そして……。
「急ぎハイデルーヴェンに向かうよう、メラクに伝えてくれ。隠密で、とな」
「ハイデルーヴェンに、ですか？」
命令を受けた補佐官はシーンの意図を探るように尋ねたが、シーンは詳細を何も語らなかった。
「俺が行くまではおとなしくしているように、念を押しておくんだ」

それだけ言うと、返事を聞く前に自身は足早に大聖堂を後にした。

エイルとエルデが扉が開け放たれたままの《陣廊》に足を踏み入れたのは、その直後だった。

あらかじめやる事を決めていたエルデの行動は早かった。陣廊の中をのぞき込んだ瞬間に何の迷いもなく動きを止めるいつものルーンを早口で唱えた。

「パラス！」

認証文を唱える声と同時に、長い黒髪の少女の体の周りに光の帯が出現すると、くるくると回転して消えていった。自分の体でルーンを唱える時にエルデが発生させるエーテル光は、まるで精霊陣が書かれた光りの帯である。ルーンの唱者であるエルデを中心に、幾何学模様と文字を浮かび上がらせながら高速で回転するさまは、何度見ても幻想的であった。

エルデの詠唱と同時にエイルは陣廊に飛び込んだ。妖刀ゼプスの柄に手をやり、体を低くして内部の状況を把握すべく素早く辺りに目をやった。

だが、予想に反して陣廊の中には五、六人のルーナーがいただけだった。しかも一カ所に集まって不安そうになにやら話し合っていた様子だ。どう見ても感知ルーンの制御をしているという状態ではない。辺りを見渡してみても、彼ら以外に人影もなく、陣廊内に人が隠れるような場所も見当たらなかった。もちろん陣廊の近くに護衛兵などが居ない事は確認済みであるから、エルデが唱えたルーンが陣廊内を制圧した事は確かだった。

ルーナー達を固まらせたエルデは、今度は比較的ゆっくりとした調子で別のルーンを唱えた。いくつもの帯がルーンを唱えるたびに現れ、回転し、消えていった。

「眠らせた。しばらくは起きへんやろ」

エルデに従い、エイルはゆっくりと陣廊と呼ばれる大広間の中央

に足を向けた。陣廊は通常の部屋とは違い、高さがずいぶんあった。構造はすり鉢状で、中央にある広い床がもっとも低く、それを囲むように階段状に床が作られて部屋の端へ向かってどんどん高くなっていた。つまり部屋の一番端は相当の高さになっていて、もっとも低い中央部を見下ろす構造である。それぞれの階段からは前の人間の陰で遮られること無く、全てを下を見渡せる仕組みである。反対に部屋の一番低い中央部からは、これも同様に各階段にいる人間の顔が見渡せるという具合である。

改めて陣廊の中を見渡したエイルは、傾斜構造の各階段に大小無数の複雑な精霊陣が描かれた「盤」が小机のように整列して設置されている様に、既視感を禁じ得なかった。

「これは……階段教室みたいだな」

「階段教室？」

「あ、いや。オレがいたフォウの学校では教室がこんなすり鉢状になってて、丁度こういう風に一人一人が席に着いても、前の人間の頭で遮らずに先生の顔が見えるように机が並んでいるんだ。先生からも学生の顔が見えるわけだけどな。で、ここはその教室を二つくっつけたような感じだ」

そして中央にある、教卓にあたる大きな机を指さした。そこにも精霊陣が書かれた一際（ひときわ）大きな「盤」があった。エイルはそこに立つと、すり鉢を半分に割ったような形状になっているフォウの学校の教室の形をエルデに説明した。

「その、すり鉢の底にあたる部分に教卓をおいて先生が講義をする。まあ、ここは完全なすり鉢状になってるけど、階段教室の場合は、その先生の場所の向こう側は壁で、壁の向こうはだいたい対称構造になってる別の階段教室がある、という感じだ。言ってみればこの辺に壁を作って二つの教室にしてるって感じかな」

だが、その説明にエルデはたいした興味を示さなかった。

「なんや。それやとファランドールの学校と全く同じ作りやん」

「そうなのか？」

「そういうたら、エイルはこっちの学校って見た事なかったな」
「いや、何度も見ただろ?ランダールでだって、カレンに『ここが通っていた学校だ』って案内してもらったじゃない……か……」
エイルは自分で口にしたカレンという言葉に反応して言葉の途中で口をつぐむとうつむいた。エルデはそんなエイルの横顔を見ると不機嫌そうに唇を曲げたが、カレンの事には触れなかった。
「ああいう町の学校やのうて、いわゆる高級学校と言われる学校の事や。よっぽど大きな町に行かんとないんや。あ、そう言えば」
エルデはポン、と手を打った。
「ハイデルーヴェンに行くんやったな。あそこは学校の町やから、エイルにこっちの学校を見せてやれるわ」
「高級学校?」
「ウンディーネ連邦共和国の場合、学者や政治家、それに高級役人になりたかったら、高級学校に通う、というのが通例やな。まあ、道筋と言った方がええかも知れへんけど」
「ふーん」
「まあ、その話は後にしよか」
エルデはそういうと、盤と盤の間の通路をジグザグに歩き出した。よく見ると床にはめ込まれている木のタイルにも、全て精霊陣が施されてあった。
「なるほど」
一通り眺め終わったエルデは立ち止まって腕を組むとそうつぶやいた。
「仕組みがわかったのか?」
エイルの問いかけに、しかしエルデは首を横に振った。
「全然わからへんっちゅう事がわかった」
「おいおい」
「こんな複雑怪奇で意味不明、かつ冗長な精霊陣は初めてやな」
エルデは一つの盤の前に立つと、描かれている精霊陣の外周を指でなぞった。エルデ自身が描いた精霊陣は、そうする事によって淡

い光を放つ事があったが、陣廊の精霊陣は何の変化も見せなかった。
次にエルデは儀仗ノルンを呼び出して、その頭頂部で盤に軽く触れた。
しかし、同様に何の変化もなかった。
儀仗ノルンを持つ手を離したエルデはもう一度腕組みをすると、今度はしばらく盤上の精霊陣をじっと見つめていた。やがて何かを思い出したようにノルンの頭頂部を見上げて、そこに埋め込まれているスフィアをじっとみつめた。
儀仗ノルンはエルデが手を離しても、倒れることなくその場で垂直に立ったままだったのだ。
その自立する不思議な儀仗に、エルデは突然声をかけた。
「出でよ《真赭の頤》（まそほのおとがい）」
儀仗の頭頂部に向かって、エルデはそう言った。確かに『真赭の頤』と。
「え？」
エイルが驚くのも無理からぬ事だったが、エルデに疑問をぶつける前に、回答は得られる事になった。エルデからではなく、儀仗ノルンによって。

「いかがされましたかな？」
そこにはエイルも知る大賢者の姿があったのだ。
ただし、それはどう見ても本人、いや実物ではなかった。ノルンの頭頂部のさらに上の方に、かなり小さな《真赭の頤》ことシグ・ザルカバードの姿があり、それは向こうが透けて見えるような空中映像とも呼ぶべき状態だった。
「エルデ？」
「後で説明するから、ちょっと黙っといて」
エイルに一瞥をくれてそう言うと、エルデは師匠であるシグに質問を投げかけた。
「この精霊陣が解けへんねん。師匠はこれを知ってるか？」

「どれどれ」
小さなシグの映像は、そう言うと自分の足下の方向をしばらく眺めていたが、首を横に振った。
「マーリン教が使う精霊陣の計算式に似ているところもありますが、これは全く別物ですな」
エルデはその隣の盤の一部を指さした。
「でもここのとか、なんとなく伝送ルーンの記述っぽく見えへんか？」
「ふむ、確かに……」
指さされたところを見ながら、しかしシグの回答は歯切れが悪かった。
「部分部分はマーリン教のものを使っている、程度ですな。しかし、ここはいったい？」
シグは自分たちが今居る空間が気になったようだった。
「ヴェリーユの……陣廊や」
「まさか……」
「そのまさか、や」
「もぬけの殻ではございませんか」
「そのおかげでどうやら感知されずにここまで来られた訳やけど……」
「それより、お体の方は？」
「そっちは今のとこ問題ない。でもそうか、師匠でも知らん精霊陣か」
「面目ありません。ただ、あまり美しい精霊陣とは言えませんな。よくはわかりませんが、無駄や無理が多いように見受けられます」
「ふん」
エルデは改めて陣廊をぐるりと見渡した。
「そらそうやろな。おそらく一つ、もしくは二、三個の盤に対してそこそこの能力を持った強化系ルーナーが着いて、情報を読み取った上で、さらにその情報を元に別系統の精霊陣にその情報を送って『何か』をしてるんやろな。いわば物量作戦っちゅうか人海戦術み

たいなもんやな」
「エルデ」
エイルはたまらず声をかけた。
「どうするつもりだ？」
その問いかけに、エルデはニヤリと笑って返した。
「精霊陣の中枢部分を破壊したらええかなって思ったんやけど、解読でけへんし、もう面倒や。部屋ごと焼き払お」
「えええ？」
「心配せんでもええ。そこに眠ってるルーナー連中には強化ルーンかけとくから」
「いや、そういう問題じゃなくて、だな」
「時間稼ぎにはなるやろ」
「付け火だぞ？放火なんだぞ？それって賢者がやっていい事か？見つかったら絶対おこられる」
エルデは方をすくめて見せた。
「誰に怒られるんや……」
「いやいやいや、ちょっと待てって。ヴェリーユの中枢を焼き払うつもりなんだろ？そんな大それた事をするのはさすがに」
「さすがに、やのうてさすがやな、と言うべきとこやろ？」
「いやいやいや。言わねえよ。オレの話を聞けって」
「はいはい。話なら後でウチが眠ってからじっくり聞いたる。ほなら、行くで」
エイルの次の抗議を待たずに、エルデは空中に浮いたままの儀仗ノルンを掴むと、早口にいくつかのルーンを唱えた。
「シュダルムサラノスタクラチ・ヴァイアル！」
無数の光りの精霊陣の帯を纏いながら最後にそう呟いたエルデが、手に持った儀仗ノルンをゆっくりと頭上で一周振り回すと、陣廊の壁が一斉に炎に包まれた。
その様子に目を見張っている間に別のルーンがエルデによって唱えられた。再び精霊陣が周りをぐるぐると回り、ルーン光と呼ばれ

る光に包まれた二人は、不可視ルーンにより姿を消していた。
「よし、行くで！」
エルデに手を取られ、エイルは走り出した。
説明を求める時間などはなかった。ただ「どこに行くんだ？」と尋ねたのみである。

エルデが何を考えているのかがわかるのは、おそらくアプリリアージェだけだろうな、とエイルは改めてその事を思い出すと、今起こった事をただ受け入れる事に決めた。詳細は落ち着いた時にまとめて聞けばいい。ただし、エルデが起きている間に。
（今はただ、エルデが向かおうとする場所へ急ごう）

「リリア姉さん達と合流するに決まってるやん」
「どこへ？」というエイルの問いかけに、エルデはそう答えた。
顔は見えなかったが、エイルはそう言ったエルデがニヤリと笑っているに違いないと思った。
「それにアンタ、ネスティにも会いたいんやろ？」
「え？」
エルネスティーネの名前がエルデの口から突然出て、エイルは虚を突かれた。
「別に、オレは……」
「会いとうないんか？」
「いや、そういう訳じゃないけど……」
「はっきりせん奴やな。まあええわ。お前が会いとうなくてもウチは会わんとアカンからな」
「どういう事だ？」
「ちゃんとした服がないんや！」
「ああ……」
そういう事か、とエイルは苦笑した。
「お前さ」

「何やねん」
「本当に素直じゃないのな」
「はあ？」
エルデはそう言ってとぼけて見せたが、エイルはそれ以上追求はしなかった。
「まあええわ。そんな事よりここで問題です」
「はあ？」
今度はエイルがそういう番だった。
「ネスティやリリア姉さん達はいったい今、どこにいるでしょうか？」
そう。闇雲に走っていても見つかるわけはなかった。
エルデはおそらくアプリリアージェ達に合流して、ヴェリーユの精霊陣の効力が切れている事を情報としてできるだけ速く伝えたいと思っているはずである。
手当たり次第に探して歩くなどという効率の悪い事は、エルデのやり方ではなかった。
エイルは考えた。
アプリリアージェ達は部屋を出て、エルネスティーネ一行を捜しているはずであった。そして事態を知らないエルネスティーネ達は、買い物の途中か、買い物から宿へ向かう途中にあると思われた。
記憶を辿ったエイルは、エルデが言ったある文句を思い出した。
（女の服選びは時間がかかる、だっけ？）
正確な言葉は忘れたが、確かそういう事を言っていたはずである。
予想よりも帰りが遅いエルネスティーネ達が時間を食っているとすれば、それはエルデが処方した髪染め用の材料調達、ではなく服選びだろうとエイルも思った。
だが服屋で既にアプリリアージェ達と合流しているとすれば、服屋を当たっても意味はなさそうだった。
（考えろ）
エイルは自分がアプリリアージェの立場だったら、エルネスティ

ーネ達と合流した場合、次にどういう行動を起こすかを考えた。おそらくエルデもそれを考えて、すでに結論に達したからこそなぞなぞの様に問いかけたのであろう。

だとすると……。

「どこにいるかはわからない」

エイルは少し経ってからそう答えた。

「なんや。そんなんやったら……」

エイルの答えを聞いてエルデはあからさまにがっかりしたようにそう言った。だが、エイルはエルデに皆まで言わさず、すかさず切り込んだ。

「でも、もしオレがリリアさんだったら」

この言い方はエルデに対して効果があった。エイルの考えているとおり、エルデはアプリリアージェという名前を出すと反応する。

「へえ。エイルがリリア姉さんやったら？」

「宿に戻る……かな」

その答えを聞いたエルデは、エイルの手を強く握ってみせた。

エイルはその時になって、エルデと手をつないだまま走っている事に気づいた。だが、自分からは離さなかった。

「ご名答。いや、正解かどうかは別にして今の段階やと、ウチと同意見やと言っとこか。おそらくリリア姉さんがウチらの立場でもそういう結論に達すると思う」

エルデの言葉を聞いたエイルは、少し嬉しい気分になっている自分に苦笑した。

だからエルデの手を少し強く握ると、足を速めた。

「急ごうぜ」

「うん」

そう言うエルデもエイルの手を、ぎゅっと握り返した。

# 第四十三話　逡巡

結果として、エルネスティーネとティアナ、そしてファルケンハインの三人組はすぐに見つかった。ヴェリーユの人混みの中で、彼らは実に目立っていたからだ。

彼女たちは中央広場から続く目抜き通りをゆっくりと歩いていた。いくつかの大きめの紙袋を持つファルケンハインを従えた二人が楽しそうに談笑しながら歩く姿を見つけることはそれほど難しい事ではなかったのだ。

とは言え、当初は途方に暮れるところだった。デュナンが多いヴェリーユとは言え、全世界の信者が詣でる本山である。さすがにアルヴやアルヴィンの姿が皆無というわけではない。

そもそもアプリリアージェには土地勘がない。「時のゆりかご」から「龍の道」を通りヴェリーユ入りした時も下見どころではなかったのだ。なぜならあられもない格好をしたエルデを人目に触れさせないようにする為に人通りの少ない場所を選んでとにかく早くエルネスティーネ達が投宿している宿、それも直接泊まっている部屋までたどり着く事に注力していたからである。そして町の踏査などする時間もないまま、ラウの事件に巻き込まれて町中に放り出された格好なのだ。つまりアプリリアージェはほとんどヴェリーユの街の雰囲気を把握しないままで飛び出した、いや放り出されたようなものだった。

そしてそこで見たものは想像以上の雑踏だった。祈りの時間を外れた昼下がりの時間帯の人混みに、アプリリアージェは絶望感に襲われた。

さらに彼女には物理的な問題もあった。

ダーク・アルヴの血がそれである。成人女子のダーク・アルヴやアルヴィンは、百五十センチにも満たない。成人男子で百五十セン

チあると背が高い部類に入ると言えば想像しやすいだろう。つまりアプリリアージェはその身長の低さが災いし、デュナンばかりで構成された人混みの中ではほとんど視界がきかなかった。そしてそれは他の二人、テンリーゼン・クラルヴァインもメリド・ジャミールも同様であった。つまりアプリリアージェ一行は、ただ一本の木を見つけようとして鬱そうとした森の中に入り込んだようなものだった。

「簡単に見つかると思っていたのは大きな誤算でしたね」

エルデがかけた不可視、すなわち姿が見えないルーンを纏っている三人は当初の予定通り、ともかく宿の建物を出て左に曲がり、宿の建物の角で落ち合っていた。

その場所でメリドの気配を感じたアプリリアージェは、自分の存在を示すために片手でメリドの体に触れると、それをたどって肘を軽く掴んでいた。

「確かにこれではすぐ近くに居てもわかりませんね。でも、大丈夫でしょう」

「え？メリドさんには何か妙案でもおありですか？」

「ええ、たぶん」

メリドはアプリリアージェの戸惑った声に落ち着いた声で応えた。

「姿が誰にも見えないという利点を活用しない手はありません」

「と、言うと？」

「簡単な事です。遠慮は要りませんので、私の肩にお乗り下さい」

姿が見えない事と身の軽さを利用して建物の屋根伝いに人混みを見下ろす事を考え始めていたアプリリアージェに、メリドは全く別の提案をした。

身軽な小型アルヴ、しかもアプリリアージェは風のフェアリー。そこまではアプリリアージェと同じ前提である。違うのはメリドの案は小回りが効くという事、そしてメリド自身が一行の中で足手まといにならないという二点だった。

ほとんど考えるまもなく、アプリリアージェはメリドの案を採用する事にした。それほどメリドの提案は状況に即した極めて的確なものだと言えた。

「お言葉に甘えます」

アプリリアージェはメリドにだけ届くような小さな声で一声かけると、頼もしいジャミールの兵士長の背後に回った。そして躊躇せず両手でメリドの肩に手を置くと跳躍し、音もなくその肩に足を乗せた。それは本当に一瞬の動きだった。なにしろ両手でメリドの肩の位置を確認した瞬間には跳躍をしていたのである。

メリドは大した衝撃もなくふわりと肩に乗る重さを感じただけであった。それは彼が初めて知る感触であった。ドスンでもドンでもなく、すっと足の感触が肩に乗り、その後でそこに体重を感じただけなのだ。

自分の里にはここまでの身のこなしをする兵は存在しなかった。メリドは改めて鍛えられた高位の風のフェアリーの能力に舌を巻いた。

果たして開けたアプリリアージェの視界の先にアルヴ二人、アルヴィン一人からなる三人組の姿があった。　想像していた以上にティアナの白髪はいい目印になった。

三人の位置を確認したアプリリアージェは、メリドの肩から降りて音もなく着地すると小さくテンリーゼンの名を呼んだ。

「十時の方向。三人ともこちらに向かっています」

アプリリアージェは小声でそれだけをテンリーゼンに伝えた。

その声には何も答えなかったが、小さな風を残して仮面のアルヴィンがその場を離れたのは気配としてメリドにもわかった。細かく指示をするまでもなく、その一言だけでテンリーゼンはアプリリアージェの考えている事を理解し、実行に移したのだ。

しかしメリドは感心している余裕は与えられなかった。間を置かず、アプリリアージェは今度はメリドの耳元に囁きかけたのだ。こ

ちらはテンリーゼンに対するものと違い、より具体的なものだった。
「あなたはあの三人を視界に入れながら、単独で船着き場に向かって下さい。メリドさんには不要な注意でしょうが念のために言い添えておきます……ルーンが切れて姿がいつ現れても不自然にならないような経路をとって動いてください。その後は普通に通りを歩いても大丈夫でしょう。あの三人にはテンリーゼンが精霊会話で事情を伝えて船着き場へ向かわせます。私はいったんここを離れてアモウルさんを探した後、合流します。それから蛇足ながら船着き場では私が合流するまでの間はファルの指示に従ってもらいます」
「了解した」
アプリリアージェの指示にメリドは何も質問をしなかった。彼には色々と尋ねたいことがあったが、後でまとめて聞くことにしていた。ジャミール一族の兵士長という立場は伊達ではない。何にしろ非常時に要らぬ手間をかける事は基本的な禁忌なのである。
彼はそれを忠実に守っているに過ぎなかったが、一連の行動でアプリリアージェの中のメリドの株は上がっていた。本人は無論知るよしもなかったのではあるが。

メリドが間を置かずに行動を起こしたのを確認すると、アプリリアージェは改めて周りの様子を吟味した。特に変わった気配はない。兵士や警備の人間が宿に出入りする様子もなく、人通りの多い通りからは殺気も喧噪も感じなかった。視界に入るのはよくある昼下がりの……ただし、人通りがやけに多い賑やかな通りでしかなかったのだ。
エルデのルーンが感知されていないのか、ヴェリーユ側の行動は考えているよりも鈍重なのか、さすがに情報が少なすぎてその時点ではアプリリアージェにも結論を出すことは不可能だったが、どちらにしろエルデ達に余裕が出来るのは歓迎だった。
とにもかくにも今は安全な状態だという事を確認すると、アプリリアージェはアキラの探索へ頭を切り換えることにした。

アプリリアージェは宿からあまり離れなかった。通りを隔てた反対側にテーブルを広げているカフェを見つけると、その隅の椅子に腰を下ろし、行き交う人々を注意深く観察する事にした。

ティアナやメリドから聞いた話では、外で情報収集をしているアキラは普段であればこの時間までには宿に帰って来ているという。ならばこちらから動くことはせずに少しの間ならばここで待っている方が合理的だと考えたのである。

カフェの目立たない一隅ならば姿が突然現れてもさほど目立つまいと計算もしていた。

ハイデルーヴェンへの渡船の時刻を確認できなかった事が悔やまれたが、どちらにしろそう遅い時間に出航する船があるとは考えにくい。三十分だけ待って現れなければあきらめて船着き場に向かうつもりであった。会わずに別れるのは不本意ではあったが、そもそも既にアキラと同道する理由は無くなっていた。ただアキラの持つ情報には興味があった。

つまりアプリリアージェはその妥協点を三十分と決めたのである。

しかし自らの体温で椅子を暖める間もなく、アプリリアージェは立ち上がることになった。アキラが現れたのではない。通りの向こう側で喧噪が聞こえたのだ。それは船着き場へ向かう方向、すなわちエルネスティーネ達が向かったはずの方向から聞こえてきたものだった。

（しまった！）

アプリリアージェは反射的に立ち上がると、文字通り風のように駆けた。

喧噪の中心部へ向かって。

アプリリアージェにかけられたエルデのルーンはまだ効力を残していた。個人差があるかもしれないが、テンリーゼンもメリドも、

おそらくラウもファーンもまだ姿は消えたままに違いない。
エルデの言葉を信じるなら仮死状態に置かれたファーンは既に感知外となっているはずである。
で、あれば……。
アプリリアージェは残る選択肢を頭に描いた。喧噪の発生場所がエルネスティーネ達ではないか、と。
冷静に考えれば、その可能性は低かった。エルネスティーネ達はヴェリーユ入りしてから三十日近く経つ今日の今日まで特に問題なく観光者としてこの町で過ごしているわけである。ルーンを使える人間がいるわけでもない。つまりルーンがらみで「当局」に目を付けられる事は無い。
残る可能性の一つはエルデとエイルだ。確保、いやおとなしく確保されるような二人ではない。つまり捕り物が騒ぎになっている可能性である。
だが、それにもアプリリアージェは自ら首を振って否定した。アプリリアージェの知るエルデは、まっすぐ船着き場に向かって大通りを行くとは考えられなかったからだ。
結論としてアプリリアージェが導き出した喧噪の原因は第三者説であった。しかし何か事が起こるにしろ、あまりに間が合いすぎていた。まるで彼女たちが出てくるのを待って騒ぎが起こっているようではないか。
走りながらアプリリアージェは仲間を分散させたことを後悔していた。
こういう突発的な自体が生じた時に姿が見えない状態で仲間と合流する事の難しさに考えが及ばなかったのだ。だが無理もない。今までそんな便利な強化ルーンを使った作戦など経験したことがないのだから。
だがこうなるとその便利なルーンを出来るだけ早く解除する方が得策に思えた。だがそれにも問題があった。アプリリアージェは強化ルーンの解除法を知らないのである。

ある種の強化ルーンを上掛けすれば強制的に解除されるという話をかつてエルデからは聞いていたが、今ここにルーナーはいない。

こんなことならその場でルーナーでない人間が自分にかかったルーンを解除する方法を聞いておくのだったと思っても後の祭りであった。

全速力で風のルーナーが走ったのだ。すぐに目的地に達し、アプリリアージェは喧噪の元を知る事になった。そして同時に、またしても自分の考えが及ばなかったことを思い知らされることになった。

宿に面した大通りをヴェリーユ大聖堂と反対側、つまり南大門へとしばらく下ったところに、その南北の通りと直角に交差する東西に延びる大通りがある。そこは南三番街と呼ばれるヴェリーユでも指折りの繁華街で、大規模な宿屋が何件も並び立ち、各建物の一階はカフェや商店が軒を並べる地域であった。

奇しくもそこはラウ・ラ＝レイとファーン・カンフリーエがエルデの到着を待ちながら毎日午後の珈琲を楽しんでいたカフェがある場所だった。だがもちろんアプリリアージェはその事を知るよしもなかった。

今、その交差点は完全に封鎖されていた。

最初にアプリリアージェの目に入ったのは、新教会の僧服を着て儀仗を持った一団であった。彼らは人垣を組み、それぞれ四方の道を塞いでいた。それにより人々の通行が遮断されてそもそもの喧噪の原因となっていたのである。だが勿論彼らはただ交差点を封鎖していたのではない。封鎖する目的がその場所にあったのだ。

囲いを作っていた人垣はおそらくルーナーであろう。彼らの数はざっと見積もって二十人。交差点をぐるりと囲み、既になにやらルーンの詠唱を開始していた。

彼らとは別の一段がその前後にいる。儀仗の代わりに槍を掲げた、いわゆる僧兵だ。彼らは詠唱中のルーナー達を守るような形で、ルーナーの輪の後ろと前にそれぞれ同心円を描くように配されていた。

ルーナーと僧兵を合計すると、百人を数える。部隊ではなく立派な軍隊と言えた。百人と言えばシルフィード王国軍では二個中隊と言っていい規模である。

それはあらゆる価値観に照らし合わせても異常な事態で、要するに物々しい事件がそこに勃発している事を示していた。

次にアプリリアージェは、その騒ぎの首謀者とも言える人物を認めた。南へ続く道を塞ぐ兵士の壁の中央に、白い服を纏った男が、四人の従者を従えて立っていた。

口から下の部分を覆う仮面のようなものを装着しているが、口元を読まれない為の覆いと言っていいもので、素顔を隠すつもりはないようだった。

その証拠に男の顔を見た群衆から、その正体が聞こえてきた。

「副堂頭様だ」

封鎖された交差点を注視するアプリリアージェの耳元に、野次馬達の声が届いた。声に釣られてその白い僧服を着た人物の顔を注視したアプリリアージェは、我が目を疑った。

「カテナ・ミドオーバ！」

驚愕が思わず声になった。

「違うわよ、カテナ・ノルドルンド様よ」

周りのものには姿が見えないアプリリアージェの声を、すぐ横のデュナンの巡礼者が訂正した。初老の女デュナンはそう言った後で声の主を咎めるべく探したが、それらしい人物を見つける事ができなかった。声のした方向をいたずらにきょろきょろと眺めてみたが、結局誰が口にしたものかがわからないまま、肩をすくめて視線を白い服を纏った副堂頭、カテナ・ノルドルンドに戻した。

アプリリアージェは自分の失態に気付いた瞬間に、既に場所を移していた。とは言えもちろん初老の女デュナンの訂正は聞こえていた。

（ノルドルンド？新教会堂頭の族名が確かノルドルンド……。いっ

たいどういう事？）

どちらにしろ見間違いようがなかった。近衛軍大元帥の実子であるカテナ・ミドオーバは王国軍の佐官である。言葉を交わしたことはなかったが、面識はあった。そもそもあの特徴的な鷲鼻を見間違うわけがなかった。

しかし、その謎を深く考えている余裕は今のアプリリアージェにはない。問題はカテナの反対側、つまり大聖堂を背にして「副堂頭」と対峙している人物の方だ。

誰あろう、それはエルネスティーネとティアナ、ファルケンハイン、そしてメリドの四人だったのだ。

状況は把握した。

布陣も俯瞰視できた。

しかし、現時点ではまだアプリリアージェには打開策が見つけられなかった。

状況はどう見ても対決の構図である。

副堂頭側がエルネスティーネ達に何かしらの用事、それもエルネスティーネ達にとってはあまり愉快ではない用事がると言った図である。当然ながらその用事は、あまり友好的なものとは言えないようであった。

状況は一目でわかった。しかしどういう事態でこの状況が生まれたのかはさすがのアプリリアージェでもわからない。

その時、アプリリアージェの脳裏につい十数分前のラウの話がふと浮かんできた。

「誰かわからない人物から情報を渡された」

確かそういう内容だったはずだ。

その「誰か」はラウ達だけでなくエルネスティーネ一行の動きをも俯瞰していたという事ではないだろうか？

それも単なる憶測にすぎない。

確かな情報が一切ない。

そもそもそれがわかったからと言って事態を打開できる方策が思い付くわけではない。とは言うものの、一つだけかなりの精度で確かだと言える事柄もあった。メリドの存在である。

彼は既にエルデの強化ルーンを解除して姿を現していた。いや、解除したのではなく解除されたに違いない。

理由はすぐにわかった。

メリドがいるのは交差点の中。つまりルーナー達の囲いの内側である。交差点を包囲しているルーナー達は何らかのルーンを今も唱え続けていた。つまり別のルーンに干渉したことにより、メリドにかかった強化ルーンは全て解除されてしまったに違いない。

アプリリアージェはそのルーナー達の「囲い」の外側にいた。だからまだ姿が消えたままなのだ。

ルーナー達がいったい何のルーンを唱えているのかはわからない。しかしそれでも推論は可能だ。彼らが「囲い」の中の音が外に漏れないような結界を張っているのは間違いなかった。それが証拠にカテナはなにやら言葉を発しているし、ファルケンハインも同様に何かを言っている。だがその声が一切聞こえてこないのだ。

おそらくその場にいる一般の人間には聞かせたくない内容なのだろう。だからこそカテナは唇を読まれない為の覆いを顎につけているのだ。カテナの用心深さがうかがい知れる。

（どうする？）

あまりじっくりと考えている時間が無いことは明白だった。それは敵意を丸出しにしているティアナを見てもわかる。さらに驚いたのはエルネスティーネの表情である。溢れる怒気を押さえようともせず目をつり上げたその表情は、見る者に恐怖を抱かせるほど険しく厳しいものだったのだ。唇を噛んで目を見開き、腰に吊した喪の徴である懐剣を今にも鞘から引き抜こうとしているエルネスティーネは、怒りに支配されたアルヴの狂戦士に見えた。

「あくまでもとぼけるつもりか？カテナ・ミドオーバ」
ファルケンハインの唇をアプリリアージェはそう読んだ。言い回しでわかる。ファルケンハインは会話を続けて時間稼ぎをしているに違いなかった。
アプリリアージェとテンリーゼンがこの場を何とか打開するその時間を必死にひねり出しているのだ。
だが……。
アプリリアージェは逡巡していた。
それはどの方法でエルネスティーネ達を助けるかという迷いではなかった。彼女はもう少し根源的な問題を前にして、揺れていたのである。
助けるべきか、それとも見捨てるべきか……その選択で悩んでいたのである。

時を同じくして、まったく同じ事で悩んでいた人物がアプリリアージェの近くにもう一人いた。
アキラ・アモウル・エウテルペである。
彼はラウ達とシーン・ジクス率いるヴェリーユ守備隊とのやりとりの後、しばらくラウ達を探したが見つからず、仕方なく事件が起こった場所に戻ってきたところでこの場面に出くわしたのである。
アキラはアプリリアージェよりも少しだけ具体的な推理をしていた。もちろんアキラの方がこのヴェリーユでの出来事に関する情報を多く手にしていたからそれが可能だったのだ。
（まさかこれもミリアの仕業か？だとしたら奴はいったい何をしたいのだ？）
アキラにはエルネスティーネ達を助けなければならない義理はない。当然ながら義務もない。何しろ敵国となる事が確定しているシルフィード王国の人間である。
だがアキラの中では急激な価値観の変化が生じていた。もちろん直前のミリア・ペトルウシュカ公爵との会見がその直接の原因であ

る。

彼自身は密かにミリアの右腕と自負していた。少なくともミリアの重要な「駒」であると信じていた。その前提に立った上でエスカと懇ろな関係を築いていたのである。それは彼にとって自分自身の存在意義を成す大きな要素であり、肉体を巡る血液の大半がそれによって染まっていると思い込んでいた。

だが、相手のミリアはあろう事か「状況が変わった」というたった一言でそれを否定して見せたのである。

アキラは再び降り始めた雪を見上げながらミリアとの短い会見を反すうしていた。

そして肩に積もり始めた雪を無意識に払った時に思わずその手を止めた。

（俺はこの雪のようなものか）

ミリアはアキラを肩に降り積もった雪を無造作に払うように切り捨てたのである。

いや。

「捨てた」という表現は適切ではないだろう。捨てるつもりなら文字通りアキラの命を断てばいいのだ。

ミリアなら簡単にそれができるはずであった。たとえアキラがレナンスを名乗る剣の使い手であったとしても、そんなものがミリアには通じないことは彼自身が一番よく知っていた。

だがミリアはそれさえしなかった。あまつさえ「敵」である弟のエスカの本当の腹心となり、その道行きを支えてやれとまで言い残したのだ。

アキラの立場からすると、これ以上の屈辱はない。

ミリアの考えについても同様だった。彼から聞かされていた話はまるで表層だけでありそれが雪崩を打って消え去った後にあるものこそがミリアの「本当」であるとすれば、彼は何一つ知らぬままに全身全霊をかけてこの時代を走り続けていたのである。ミリアのた

めに。

そう思えばラウ・ラ＝レイとシーン・ジクスをわざわざぶつけて、それを寸劇さながらにアキラの目前で披露して見せた事にも納得がいった。

あれはまさしくただの遊びだったのだろう。賢者の存在もヴェリーユの状況も俯瞰しているものだけができる舞台設定である。アキラ自身もあれと同じだという、ミリア独特の比喩なのだ。

ミリアが用意した舞台に立ち、彼が作った台本を読む役者。いや、役者ですらないかもしれない。舞台に立つことすらないただの観客になれと伝えたかったのではないだろうか。

アキラの気持ちの根底にミリアに対する否定が生まれ始めた。

だからこそムリにでもその「舞台」に介入しようとしてラウ達の行方を追ったのだ。

知り合いとは言いにくい。だがアキラにとって知っていると言うだけでも充分な理由になった。ラウを助ける理由としては。

だが高位のルーナー同士の対決はアキラが考えているよりも普通の人間にとってつかみ所のないものだった。ミリアの合図によって開幕した寸劇は、その舞台のある場所をあっという間に変えてしまったのだ。それはアキラの手の届くような空間になく、つまりはその寸劇に役者として上がるだけの力すらアキラにはないと言い渡されたようなものだった。

呆然として戻った元の場所で、もう一つの「寸劇」の幕が上がっていようとはさすがのアキラにも想像だに出来なかった。だから目前で対峙する「旅の仲間」と「ヴェリーユの兵隊」の図は短絡的にミリアの名前を連想させるに充分だったのだ。

「アモウルさん、私です。アプリリアージェです」

自分がどう行動するかを逡巡していたアキラは、自分を呼ぶ懐か

しい声をすぐそばで聞いた。
声のする方を見下ろしたがアプリリアージェの姿はなかった。
ファルケンハインがエルネスティーネ達と一緒にいることから、「龍の道」で別れた一行がようやくヴェリーユにたどり着いたのであろうことは理解していた。だが、そのアプリリアージェをはじめとする他の仲間の姿がないことに対して不信に思っていたところだった。
「私とリーゼはエルデのルーンで姿を消しています。不審に思われますのできょろきょろしないで下さい」
「――了解した」
アキラは視線をエルネスティーネ達に戻すと、小さな声でそう呟いた。
「手短にお答え下さい。アモウルさんはこの状況に至った原因をご存じですか？」
「いや、私も今初めてここでこうして驚きつつ、戸惑いながらもどうすべきか悩んでいる」
「次の質問です。あなたの持つ例のエスタリアの公爵符ですが、こういう場合でも役に立つと思いますか？あなたの意見で結構です。お聞かせ下さい」
アキラは再びミリアの姿を思い浮かべていた。目の前で繰り広げられている「事件」が彼の仕組んだものだとしたら、そして彼が望む結末があるとすればその結末に対して当然ながら公爵符は何の力も持たないだろう。
いや、それよりも……。
アキラはアプリリアージェのその言動に不信感を覚えた。アプリリアージェやテンリーゼンはその立場を考えるなら、たとえどんな手を使ってでもエルネスティーネを守るべきではないのだろうか？姿を現して対峙し、この状況を打開すべきではないのだろうか？王女、いやもはや王女ではない。シルフィード王国の正統な王位継承者であり真の「イエナ三世」であり、かつエレメンタルでもあるシ

ルフィード王国にとって最重要人物と言っていいエルネスティーネの窮地を前にして、アプリリアージェはなぜこんなところでただ眺めているのだ？

公爵符という「他力」でこの場を収めようとする戦術はアキラの知るアプリリアージェの考えとはおよそ思えなかった。

アキラはアルヴではない。デュナンである。それでもアキラがアプリリアージェの立場ならば、今のアプリリアージェとは全く違う行動をとっていたはずである。

自らの命を今投げ出さずにいつ投げ出すのだろう？

アプリリアージェが自らの命が惜しくて救出を躊躇っているとはさすがに考えられなかった。で、あれば、なぜ躊躇っているのかがわからない。彼女にとってこれ以上の危機などありはしないはずではないのか？

それが証拠に、これほど焦っているアプリリアージェをアキラは初めて見たのだ。

「私があなたなら……」

アキラは少し間を置くとアプリリアージェが望むものとは違う形の回答を口にした。

「どこの馬の骨ともわからぬ男のつまらぬ私見など聞く前に、持てる力を全てぶつけてこの包囲網を外から崩し、血路を開くことに時間を割くでしょう」

アキラにはその時アプリリアージェの舌打ちが聞こえたような気がした。

そう思えるほど今の彼女からはまったく余裕が感じられなかった。姿が見えなくともアキラにはアプリリアージェの焦りで乱れたエーテルの波動が伝わってきていたのである。

事実アプリリアージェ自身、これほどまでに焦燥を感じた事は記憶になかった。来るべき時が突然やってきた事に意識が追いついていないのだ。

彼女はつまり、ある決断を突然迫られていた。アプリリアージェにとってその決断が意味する重さはおそらくその時誰にもわからなかったであろう。

アキラの言う単純な戦術など、アプリリアージェにとっては最初に握りつぶした、作戦と呼ぶにも値しないものだった。

間違い無くルーンで強化されている兵士に対して、アキラの戦術が無意味であることはルーナーの持つ力の恐ろしさをエルデを通して嫌と言うほど知ってしまった今ではわかりきったことだった。

副堂頭が引き連れているルーナー達である。ヴェリーユの高位にあるルーナー達がこれだけ多く集まって築いた包囲網を、たとえ風のフェアリーの持つ「速度」という武器を行使しようが一ミリも崩せないばかりか、ぐずぐずしているうちに例の麻痺ルーンをかけられ、何も出来ないまま犬死にをするのは明らかだった。「雷帝」と呼ばれる彼女の持つ大いなる落雷の力とて、ルーンで強化された人間には無力なのだ。

（エルデがいてくれたら！）

アプリリアージェは思わずそんな言葉を心の中でつぶやいた。

「一瞬で強化ルーンをはぎ取るルーンがある」と、ウーモス脱出の折にエルデが言っていたことをまた思い出したのだ。

だがすぐに自らの言葉の呪縛を解くかのようにアプリリアージェは首を横に振った。

（アトラックがいてくれたら、エルデがいてくれたら、か）

自分はいったいいつから他人に依存する事を覚えたのだろうか……アプリリアージェはただの自嘲ではなく自らを軽蔑する気持ちを奮い立たせようとした。

だが、意に反してそんな強い気持ちに切り替える事自体が出来なくなっている自分を見つけて呆然とするだけであった。

アキラはアキラでアプリリアージェが作った短い沈黙に業を煮やしていた。あそこにいるのがエルネスティーネではなくミリアであ

ったとして、そしてアプリリアージェが自分であれば、一瞬たりとも躊躇うことはないだろう。

アキラは自分がそう思ったからこそ、同じ兵士であるという価値観でアプリリアージェを計っていたのである。

人となりを構成する大部分が武人であるアキラと、本来は武人などではないアプリリアージェのもっとも大きな違いがここで出ていた。

だがアキラの疑問はもっともだと言わざるを得なかった。

アプリリアージェがいかなる戦略家であろうが風のエレメンタルであるエルネスティーネという砦が落ちれば、それでこの勝負は「詰み」なのである。

未だ発現には至っていないエルネスティーネではあるが、強大な「兵器」である事実は動かしようがない。

相手がエルネスティーネの正体を知らない人間ならまだしも、あろうことか「敵」はエルネスティーネをよく知っているどころか、本来は味方であるはずのカテナ・ミドオーバである。

本物の風のエレメンタルであることを知った上で身柄を確保しようとしているのである。

いや……

アプリリアージェはそれほど単純にこの事態を分析してはいない。

カテナの「向こう側」にある計略を見据えていた。すなわち父親であるサミュエル・ミドオーバ近衛軍大元帥の「たくらみ」を。

アプリリアージェがサミュエルの立場であったなら、そして自らがシルフィード王国を意のままにしようと企図していたのならば、本物の女王は正統でも風のエレメンタルでもないほうが望ましいのではないか？

ましてや自らが制御出来ない可能性がある「兵器」を中途半端な状態で手に入れるよりも、敵対する勢力に利用される前に亡きものにした方がよほど好都合ではないのか？

つまり、これは極めて逼迫した事態に違いないと確信していたのである。

何の力も持たない「変わり身」のイース・イスメネ・バックハウスの意識を意のままに操るなど、大ルーナーであるサミュエルには朝飯前であろう。

だが、アプリリアージェには自らの推理を揺るぎないものにする為の鍵、すなわち解けない大きな謎が一つ残っていた。

「なぜ、今なのか」という疑問である。

エルネスティーネを拉致するにしろ始末するにしろ彼女はヴェリーユでほぼ一ヶ月ほど過ごしていたのである。

（エッダでいったい何が起こっているのだろう？）

手持ちの情報が圧倒的に少ないことに対する焦りが、今この時点での決断を鈍らせていた要因でもあった。

だが、それでもこの場に及んでのアプリリアージェの及び腰には不審な点があると言わざるを得ないだろう。動いても動かなくても終わりなのであれば、当然動くべき存在、それがアプリリアージェの立場というものであろう事はアキラでなくとも疑問に感じるはずであろう。

だが、それでも彼女は逡巡していた。

アキラはもうアプリリアージェの事は考えないことにした。おそらく憤懣とした気分が湧き上がってくるに違いないからだ。怒りは冷静な判断を狂わせる。剣士・武人と名乗る者がもっとも陥ってはならず、そしてもっとも陥りやすい感情である。レナンスはそれを克服することをまず第一義としていた。

もっともアキラはまだその「一切の怒りを洞窟の奥に眠る湖のような状態に制御する」という境地には達していないことは自覚していた。

だからこそ、彼は瀟洒な布に包まれた自らの剣に手を置いたのだ。

そしてもう一方の手を懐に忍ばせた。そこには彼の「切り札」があったからである。

その行為が意味するところは明白だった。アプリリアージェが動かないならば、「友」を助けるのは己しかいないだろうと言う、アプリリアージェ曰く「極めて短絡的な作戦とも呼べぬ行動」をとろうと言うのである。

彼の立場を考えるならば、それはただの愚行と言えた。彼の正体が知れればドライアド王国とてあまり愉快な状態にはならないだろう。アプリリアージェの推測通り、そもそも事を起こした後の彼自身の命が無事である可能性は極めて低い。

しかし、後にわかったことではあるが、実は彼にはわずかながら勝算があった。アプリリアージェにすら考え及ばなかった驚くべき「奥の手」つまり懐にあった「切り札」の存在である。

「龍の檻」と呼ばれる場所でメリドを助け上げた時、懐から深みへと落ちていった精霊石。

もともとメリドが持っていたものをアキラが取り上げ、懐にいれていたのだ。

全て落ちたとアキラはメリドに言った。だが……。

そう。アキラは一つだけ石を持っていたのである。

アキラの想定ではその石を使うべきは別の相手であった。だがこの場でその「切り札」を行使しようとしていたのである。

アキラが口を真一文字に結び懐に入れた手に力を込めた時であった。事態が大きく動いた。

「あれを見ろ！」

人混みで誰かが大声で叫んだ。

# 第四十四話　新たなる敵

「上だ！」

続いて声がした。違う方向からだ。アプリリアージェよりも早く、複数の人間が事態の急変に気付いていた。

群衆はその声に釣られるように一斉に空を見上げた。

アプリリアージェとアキラも例外ではなかった。こういう緊迫した場面での強い指示は驚くべき誘導効果を持つ。人は知らず知らずに言葉に操られるのである。だがそれは確かに釣られるべき情報であった。

空を見上げた群衆は一瞬固唾をのむと、たちまち恐慌に陥った。悲鳴を上げながら、てんでばらばらに、まさに蜘蛛の子を散らすかのごとく、逃げるようにその場から走り去っていった。

いや、群衆は文字通り「逃げた」のである。

「何だ、あれは」

空を見上げたアキラは、思わずそう声を出した。

口々に悲鳴を上げながら、お互いにぶつかり合い、転び、わめき、踏みつけられ踏みつけながら、その場にいた多くの人々がその場を離れていく中、アキラだけがそこで立ちすくんでいた。

彼の視線の先、すなわちその南三番街の南北二つの大通りが交わる交差点の上空に「それ」は浮かんでいた。

いや、浮かんでいたという表現が適切かどうかはわからない。

少なくとも遠くからはるばるやってきたものではないのは確かだった。徐々に近づいていたのなら事前に察知できたにちがいないのだ。すなわち「それ」は交差点の上空に忽然と現れたとしか考えられなかった。

それを裏付けるかのようにその存在を認知したアキラの周りに、ようやく「それ」の影響がではじめた。すなわち周りの空気が動き

始めたのだ。

「竜巻だ！！」

人々はそう叫びながら逃げ散っていった。

アキラも当然ながら一目で「それ」が竜巻であることは理解した。

だから彼が口にしたのは「それ」の名称を尋ねたのではない。なぜ竜巻がこの場所に突然現れたのかという問いかけであった。

だが、アキラにはそんなことを考えている時間はなかった。急に夜が訪れたように辺りが暗くなっていく。それに呼応したかのように髪の毛だけでなく眉や睫が静電気で逆立つのを実感した。

本能が危機を、恐怖を叫んでいた。

すぐに頭上で稲光が走り、その後ゴロゴロという雷の音が聞こえた。そしてついに強い風が巻き始めた。それが普通の風、ただの強風でないことは自分の体が軽くなったかのように思えた事でそれとわかる。

鼓膜もおかしくなっていた。気圧がどんどん変化していたのだ。

体がまるで見えない手で持ち上げられているかのような感覚に襲われると、アキラは迷わず地面に突っ伏した。

すでに不用意に動けばあっという間に巻き上げられそうなほど風は強くなっていた。アキラがとった行為が正解かどうかはわからない。チリやゴミがどんどん吸い上げられ、上空に舞い上がるのを目の当たりにして、思いついた回避方法はそれだけだったのだ。

上着の裾がばたばたと強くはためくのを感じると、上着を脱いでおけば良かったと思ったが、今，不用意に上着を脱ごうとしたら、おそらくそのまま見えない手で上空に連れ去られるのは間違い無いと思われた。

何事もなかった場所に忽然と竜巻が現れるなどと言う事は考えられない。すなわち自然現象で無いことは明白であった。

アキラは道に積もった雪と砂とゴミで煙っているようになってい

るあやふやな視界を通して、交差点を封鎖していたヴェリーユの僧兵達を見やった。

予想通りそこにまともに立っている者など、もう一人もいなかった。

いや……

竜巻の直下、つまりほぼ中心となる場所にいた一団は、何事も無かったかのように、その場に立ち尽くしているではないか。

アキラは目を凝らした。

不明瞭な視界を通して、その一団がエルネスティーネ達であることをなんとか認めると、この変異の原因がわかった気がした。

エルネスティーネ・カラティアとはすなわち風のエレメンタルである。彼女がついにその力の一端を示したに違いない。

アキラはそう考えたのだ。

だとすればこの圧倒的な力を持つ「風」の出現も説明が付く。

しかし、アキラのその推理に一つの異分子が入り込んでいた。見慣れない一人のダーク・アルヴの姿がエルネスティーネ一行とともにアキラの瞳に映っていた。

少女だ。しかも弓使いであった。髪を風で乱しながら矢を番えた姿で竜巻の直下に立っていた。

いや。ダーク・アルヴだから見た目通りの少女とは限らない。少なくともその顔つきにあどけなさは全くなかった。アキラにわかったのは、違和感のある弓の構えから、その少女がおそらく左利きであろうという事くらいであった。

短めの黒い髪と褐色の肌はダークアルヴに間違い無い。端正な顔立ちもアルヴ族の特徴である。雪で固まった石畳に伏したまま混乱状態にあるカテナ達を見つめるその目の厳しさは、少なくとも少女がカテナの味方ではない事を示しているに違いない。

冷たい眼差し……瞳は深い緑色であった。

黒髪のダークアルヴという特徴から、一見するとアプリリアージェのようではある。しかし髪がアプリリアージェよりもやや短く、

考えてみれば顔つきがかなり違う。混乱していたとはいえ、アキラもそのダーク・アルヴの少女がアプリリアージェではないことはすぐに理解した。そしてその少女が敵ではない……おそらくは味方であろう事も。

「フリスト！」

アキラのすぐそばでアプリリアージェが叫んだ。声がする方に顔を向けると、今まで姿が見えなかったアプリリアージェがアキラと同様に雪の地面に突っ伏し、爪先を堅い雪の路面に突き立てて巻き上がる風に抗っている姿が目に入った。そしてその視線はアキラと同じく、未知のダーク・アルヴに向けられていた。

アプリリアージェが名を呼んだと言う事は、知り合いであることが確定した事になる。アキラの予想は当たったのだ。その少女が仲間に違いない。

アプリリアージェの声はその黒髪のダークアルヴに届いたようだった。フリストと呼ばれたその少女は、声に反応してアプリリアージェの方に顔を向けた。

「大丈夫。この人は仲間です」

アプリリアージェはすぐにフリストに声をかけた。冷静な判断だと言えた。面識のないアキラを敵と判断した瞬間、構えた弓から矢が放たれていた可能性があった。もっともこの強風で矢が機能するのかどうかは疑問であったが。

フリストはうなずくと、弓の構えを解いた。次いで矢を掴んでいた左手をアプリリアージェの方へ伸ばした。

するとどうだろう。体ごと上空へ持ち上げようとしていた強烈な空気の流れが、嘘のようにかき消えた。

「この隙に、急いであの子のそばへ」

アキラは考えている時間を与えられなかった。風が消えた瞬間に迷うことなく立ち上がったアプリリアージェがそう言って手を差し

出したのだ。伸ばされた手をそのまま掴むと、アキラは言われるままにフリストという名のダーク・アルヴの元へ走った。

「話は後よ」

何かを言いかけようとしたアプリリアージェにフリストはそう言うと、道の向こう、つまり城壁の方へアゴを向けた。

「一気に突っ切る」

言うが早いが駆け出したダーク・アルヴに一行は続いた。

「フリストから離れるな」

声と同時にアキラは強い力で手を引かれた。声と手の持ち主はファルケンハインだった。

アキラはそこで考える事を止め、短めの黒髪を揺らす小柄な少女の背中をひたすら追う事に集中した。前方にはエルネスティーネがいつの間にかティアナの肩にしがみついている姿が見えた。

それは時間にしてほんの三分弱。極めて短い時間に起こった出来事であった。

アキラには行く先の見当は付かなかった。

いや、同じように全速力で走るアプリリアージェやエルネスティーネ達の中にも、フリストがどこに自分達を誘おうとしているかを理解している者は一人も居なかった。ただ、フリストの指示の下、彼女を信じて後を追っているだけであった。

アキラにわかっているのはフリストと呼ばれる黒髪のダーク・アルヴはアプリリアージェの旧知であること、そしてそのフリストにエルネスティーネ達が助けられたことの二つだけであった。

（いや、違うな）

アキラは自嘲した。

人ごとではないのだ。自分自身もフリストに助けられたようなものである。あの時アキラは腰の剣の覆いをはぎ取り、懐に入れたジャミールの精霊石……疑似エアを作り出すあの石を地面に投げつけてルーンの檻を無効化した後、そのままルーナーと僧兵が作り上げ

たあの包囲陣めがけて突進する決心をしていた。すなわちあとほんの一秒竜巻に気付いた野次馬の叫び声が遅れていたならば、間違い無くあの交差点は戦場と化していたに違いない。精霊石が発動しなかったら、発動しても範囲がごく狭く、効力もあっという間にきれていたとしたら……。

ルーナーではない人間が精霊石を使ってもたいした効力は期待できない……メリドがそう言っていた事はよく覚えていた。だからアキラにしてみれば、どのみち勝算の無い戦いだったのだ。

勝ち目がないとわかっている闘いに進んで向かうなど、いったい何年ぶりであろうかとアキラは考えていた。少なくともミリア・ペトルウシュカと出会ってからは記憶にない。勝つ手法を構築して、それを実行することをアキラはミリアから学び、また強く要請されていた。

だが、アキラは自分のその思いがいかにばかばかしいかをすぐに悟った。なぜならアキラは、つい今し方、勝ち目のない相手に戦いを挑む立場に立たされていたからだ。

それは勿論、ミリア・ペトルウシュカの事であった。何があっても戦って勝てる相手ではない。それがアキラがミリアに対して下していた結論だったのだ。

そんな相手にエスカ共々戦いを挑もうとしているのである。それに比べれば、カテナが率いるルーナー軍団など、取るに足らないものに思えてしまう。どちらにしろ勝ち目はないのだろうが、それでも可能性が少しでもある事と、絶望という言葉しか浮かんでこない相手とでは、意味が全く異なるのだ。

勿論、絶望を背負ってなお、相手に剣先を向けるのがレナンスである。ミリアに対して逃げようとは全く思ってはいなかった。そしてアキラはその時になって初めて、己がレナンスであり続ける限り、レナンスである己を誇りに思う限り、ミリアがアキラの事を、表面上ではなく……その細胞の一つ一つに至る深さまで信頼する事は無

かったのだろうと、思い至った。

ミリアはレナンスを尊敬する態度を示しながらも、その気質がアキラを飲み込むことを好まなかった。剣技にのめり込む者が、自らの存在意義を剣技の中に見る様になることを恐れているとミリアはアキラに言っていた。その道を究めようとする者に取り憑く亡霊に負けることはならぬと言うのが、ミリアと知り合った当初に彼がアキラに求めた事だった。

強い者と戦いたいという思いにともすれば陥りがちになる自分の気持ちを第三者に指摘されたことは初めてだった。貴族学校で好敵手であり親友であったミリアの弟、エスカにも同様の言葉をアキラは突きつけられた事があった。他人から見えて自分には見えないもの。その存在を認めた時が、アキラが自分自身の正体を知った時であったのかも知れない。

ファランドールに動乱が起こるであろう事は貴族学校時代にすでにアキラも肌で感じていた。だがその動乱のただ中に、それぞれが別々の陣営を構築し、進んで戦いに足を踏み入れようとしている兄と弟が存在するのを知った。兄弟両方に関わる事になったアキラは、やがて兄であるミリアに心服していくことになるのだが、そのミリアから動乱の駒の一つとして動く事を求められる事になった。

ミリアの命令はアキラにしてみれば我が意を得たりではあった。心服した者に命を投げ出す事はレナンスの美徳なのだ。だが、ミリアが求めたのは美徳ではなく違う価値観であった。

ミリアが求めたもの。それはすなわち、守るべき者の為に生きるという事である。

ミリアの片腕として生きる事とは何か？命を投げ出す事と違う明確な解がそこにあるのか？　当然ながらミリアは具体的な説明はしない。アキラに与えた具体的な使命と言えば、ミリアの計画のためにエスカの片腕になれというものであった。ミリアの計画を知っていたからこそ、アキラは喜んでその任についていた。なぜならアキ

ラはエスカ・ペトルウシュカという人間が大好きだったからだ。
ミリアがアキラに示した彼の計画は、アキラが自らの命を投げ出すに値するものだと思えるものだった。その計画を実行しようとしているミリアに対し、アキラは己の魂が震えるのを感じたのだ。だから、ミリアの陣営を死に場所と定めたのである。だが、やがては敵と味方に分かれる事になるはずの弟を兄は守れと言う。「その時が来るまで決して死なせるな」というのが、ミリアがアキラに下した命令だったのだ。
だがミリアという「たが」が外れたこの日、いやミリアによってたがを外されたアキラはそのまま本当の意味でのエスカの片腕という立場を「生」を賭けてまっとうする事を求められたのである。ミリアの計画を知っている限り、彼がエスカから離れる事はないだろうと言うミリアの計算は透けて見えた。そしてそれはアキラがレナンスである限り、間違いのない判断だったのだ。

だがその大きな変革を受け入れ咀嚼するだけの余裕がないままに、アキラはエルネスティーネとヴェリーユの僧兵達が作り出した「死」の匂いがする事件に早くも出会ってしまった。
だがそこでアキラは、思いもしなかった希望を見つけたのかもしれなかった。僧兵達に囲まれた絶対絶命の場所でアキラの目に映ったもの……それは不安そうな表情でファルケンハインの影に隠れる、か弱いエルネスティーネの姿ではなかった。
彼女は、アキラが初めて見るような厳しく凛とした表情で、背筋をぴんと伸ばし胸を張り、なんと一行の先頭で仁王立ちしていたのだ。
エルネスティーネがシルフィードの本物の王女であるという事を予め知っていなければ、あの場面で堂々とした態度をとる少女の事を、計り知れぬ力を持つ剛胆な戦士だと思い込んだに違いない。
さらに言えば普段の明るくて賑やかで、ちょっと外れたところのあるエルネスティーネしか知らなければ、ただ驚いただけであった

ろう。

そこにいた「希望」は、それほどまでに強い立ち姿をしていたのだ。

ミリアではなく、エスカでもない別の力……。エルネスティーネにアキラはそれを感じていた。

彼はジャミールの里付近でスカルモールドと対戦した際、「龍の檻」と呼ばれる空間に落ちた時のことを思い出した。思えばあの時、突如発生した地震でできた地割れに飲み込まれたメリドを助けたのは誰あろう、一番頼りない存在だと思っていた小さなアルヴィンの少女ではなかったか？

窮地で人はその本当の器を見せるという。

であれば、エルネスティーネという少女の持つ器の大きさは、軽く自分を超えているに違いない。そうアキラは感じていた。

アキラはミリアにも似たようなものを感じていたのだ。自分はこの人間には敵わないと。それは理屈を超えた心の共鳴とも言える感情であった。理性ではミリアを唯一無二の存在だと崇拝できた。だが感情ではエスカやエルネスティーネが作り出す世界に解け込みたいと思う自分を発見する。

エスカとエルネスティーネは持っている雰囲気がまったく違う。だがカテナを射るように見つめていたエルネスティーネの姿は、その存在感においてはミリアにも劣らぬ者、いわば特別なエーテルを纏うという意味で同じ高さに立つ人間に思えてならなかった。

だからアキラはあの時、心を決めたのだ。

アプリリアージェが動かないのならば自らの命を賭して事を起こそう。つまり、自分の命よりエルネスティーネのそれが上位にあると認識した瞬間であった。

レナンスの気質は強さを求める気質。そしてその強さを捧げる相手を見つけたなら、命を投げ出して守ろうとする気質である。

だからアキラは走りながら思っていた。

フリストが現れず、たとえ自らの剣が相手に傷一つつけることが出来ぬまま空を切り、そのまま絶命することになったとしても、そこに後悔などという言葉が入る余地はまったくなかったであろうと。自らをレナンスと自称する者達には「犬死に」という概念はない。第三者から見て犬死にであろうとなかろうと、彼らは信じること、信じる者のために剣を抜き、信じた戦いをなし得た事だけが重要なのである。彼らの生の結果を評価できるのは、彼ら自身の心だけなのであろう。

フリストは曲がり角という曲がり角を、それはもう曲がりに曲がった。

目的地に直線的に向かっているのではなく、でたらめなジグザグ模様を描いて進んでいるようだった。しかも目的地まではけっこうな距離があった。そしてその間、風のフェアリーを主とする集団は、その走る速度を緩めようとはしなかった。

当然の帰結として、ほどなくアキラの息が上がってきた。

既に最後尾になり、遅れ気味であった。

彼はここで、自分がデュナンであると言う事を思い知らされていた。

走る、跳ぶ、といった速度と身軽さに於いては、鍛えているとはいえさすがのアキラもアルヴ族の持つ基本的な身体能力とは比ぶべくもない。

彼らは息を切らすこともなく、雪交じりの石畳の上を走ると言うよりは半分飛ぶように駆けていた。

いまだその風のエレメンタルとしての能力が発現していないエルネスティーネだけはティアナの背中にしがみついてはいたが、アルヴィンである彼女とて、持久戦にならなければアキラより早く移動できる基本的な能力を有しているはずであった。

ただ直線を走るだけならばまだしも、全速力で走りながら角を曲

がるのは不可能である。しかし、たいして速度を落とすこともなくひらりひらりと角をこなすフリスト達の軽やかな足取りにくらべ、速度をいったん落として曲がり、曲がりきった後で再び加速するしかないアキラは、そろそろ限界が近く、すでに足がもつれだしていた。それは意志とは無関係で、もはや「転倒してくれるな」と祈るくらいしか、彼に出来ることはなさそうだった。鼓動もまた心臓の耐久限界を訴え続けており、主であるアキラに悲鳴のような警鐘を鳴らし続けている。

その頃には既に思考能力は極度に低下して、アキラはただメリドの後ろ姿をひたすら負う事しか頭にない状態であった。

（もうだめだ）

アキラがその人生に於いて初となる完膚無きまでの敗北を認めた時だった。いきなりメリドの背中が大きくなった。

もちろん、メリドとの距離が近づいたのである。それはつまり、一行がようやく目的地に着いた合図であった。

そこはヴェリーユの城壁に近い、倉庫街と思しき一角であった。件のダーク・アルヴは煉瓦造りの古めかしい倉庫の前でアキラの到着を待っていた。

倉庫と言えば、本来であれば建物ごとに倉庫番がいそうなものだが、見渡してもその区域の倉庫には、それらしき人影はまったくなかった。

「フェアリーではない、ただのデュナンがいたのは計算外でした」

膝を突き、そのままその場所に倒れ込んで休みたいのを何とかこらえながらも、もはや制御出来ない状況で大きな呼吸音をたてて肺に酸素を送る作業に没頭しているアキラの耳に、フリストの吐き捨てるような声が届いた。

声に反応してのろのろと頭を上げたアキラは声の主に顔を向けた。フリストの言葉が自分に向けられたものかどうかを確認しようとしたのだ。勿論アキラ以外に該当者はいないが、そういう判断が当たり前に出来るほどには、まだ彼の脳はその機能を回復してはなかっ

たのだ。
　声のする方向に目をやると、そこには鋭い目つきのダーク・アルヴの少女が、もう一人の穏やかな微笑をたたえた少女と視線を絡ませている図があった。それを見たアキラは、耳にした言葉はアプリリアージェに向かって告げられたものだと理解した。ある意味でそれはアキラに対するあからさまな侮辱だが、当の本人はもはやそんなことなど、どうでもいいとしか思えない状況であった。
　だが、これで二人が見知った者同士であることがはっきりとした。つまり「フリストと呼ばれたダーク・アルヴは敵ではない」という事が確認できただけで彼はもう充分だった。

「生きていたのか」
　おそらくル＝キリアの誰しもがその黒髪の少女、フリストの姿を見た時に心に浮かんだ言葉がそれであろう。
　そしてその言葉を最初に口にしたのはファルケンハインだった。
「生きていたというのは正確ではないな、ファル」
　フリストは即座にそう答えた。そう聞かれるのは予めわかっていた事なのであろう。ファルケンハインがその言葉に対して新たな質問を投げかける間もなくさらに言葉を続け、ファルケンハインの次なる質問を封じた。
「どちらにしろその話は後よ。とりあえずは安全なところまで移動します」

　一行はフリストの先導でその古びた穀物倉庫の地下へ続く階段を下っていた。倉庫の奥の床板を引き上げると、そこが地下に続く階段になっていたのだ。
　フリストは何も言わずに懐から取り出したセレナタイトを掲げ、目で「着いてこい」と合図をすると、風のフェアリーらしい軽やかさで、デュナンの大人が充分歩けるだけの幅がある階段の奥に吸い込まれて行った。

ル＝キリア一行にためらいはなかった。まるで予め指示されていた予定行動のようにフリストの後に続いた。

ティアナとエルネスティーネも、同様に無言で階段に吸い込まれていった。

「我々も続きましょう」

互いに顔を見合わせていたのはメリドとアキラだけであった。

いったい何が起こっているのかわかっているのはこの中ではおそらくフリストだけであろう。アキラとシルフィード人との違いはその少女の正体を知っているか否かだけであって、彼らとてフリストがこの場にいることは異常だと認識している。「生きていたのか？」というファルケンハインの質問がその根拠であるが、それならばアキラとさほど変わらない状況のはずである。つまり彼らにとって既知のフリストという人間は、信頼に値する人物だという結論になるのだ。アキラとしてはもう黙って従うしかなかった。

メリドに続いて長い階段を注意深く下りながら、アキラは既に別の事に思いを巡らせていた。前を行くエルネスティーネの事である。アキラにとって、フリストよりもエルネスティーネの方が重要な存在なのである。

こういう非常時にあって何も言わず、さりとておびえることなく慌てず騒がず決断をするエルネスティーネに彼はここでも感心していたのだ。

（人の上に立つ人間か……）

アキラは考えをまとめながらも一行に遅れまいと歩を速めた。何しろ真っ暗である。灯りは先頭を行くフリストが掲げるセレナタイトただ一つだ。あまり離れると足下不如意で転落でもしようものなら大けがをしかねない。

（ミリアは別格として、エスカもそうだが人の上に立つという人間は纏うエーテルがそもそも我々とは違うものだ。そしてあの少女の正体は間違い無くそのエーテルを持つ者ということか）

アキラは今、エルネスティーネに「我が僕（しもべ）になれ」と命じられたら、喜んで膝をつき頭を垂れるに違いないと思っていた。

しかしそれは今に始まった事ではない。あのヴェリーユ南三番街の交差点で剣を抜きかけた時に心は決まっていたのだ。

そしてそのきっかけがミリアにある事も確かであった。彼が翻したマントの裾が起こした小さな風が、アキラの心の向かう先を新たにさせた事も理解出来ていた。

まさかミリアがそうし向けたとはさすがに考えられなかったが、ミリアが姿を現してからアキラを取り巻く全ての事象が急激に変化したことは認めざるを得ない。

ミリアがこの先いったい何をしようとしているのかを見失ったアキラが、その直後に見つけたものがエルネスティーネという風のエレメンタルの持つ強い存在感であった。だが彼にはエスカという「守りたい主」が別にいる。そしてそのエスカとエルネスティーネは、事が起こってしまえば互いに敵と味方に分かれる存在である。両方を同時に守る方法などあろうはずもない。

（いや……）

アキラはその両方を守る方法が一つある事を思い付いた。それは非現実的な話ではない。だが、アキラは理性ではなく感情で自分の首を横に振らせた。エルネスティーネを自分ではない誰かにゆだねる事が出来ないと思ったのである。

それは主従の関係を結んでもいいとたった今思った感情とはまた別のものであった。

アキラは思わず胸の辺りを握りしめた。

（なんという事だ）

アキラは自分のその感情の正体をすぐに理解した。そしてその大それた欲望に対してただ愕然とするばかりであった。

階段を下りると小さな通路に出た。坑道のような横穴である。

「これは？」

思わずアキラはそう声に出した。
「抜け道のようだな。しかも相当昔からあるようだ」
メリドは壁の岩を手で触ると、表面の状態を確かめた。
「表面がそれなりに風化している。十年や二十年でこうはならない」
坑道の高さはファルケンハインが普通に立って、さらに上方に半身分の余裕がある。左右はかなり広く、両手を広げたアルヴが横に三人並んで手を繋いでも壁に届かない程度はあった。デュナンなら五人がゆったりと横一列に並んで談笑しながら歩ける幅である。
坑道内はカビ臭がかすかに漂ってはいたが、それに混じってほのかに別のいい匂いが鼻をすり抜けたような気がした。
「この匂いは……確か」
アキラは気付いたことをメリドに確認しようとしたが、続きを口に出せなかった。フリストが強い調子で一行を手招いたからだ。

「こっちへ。ここは封鎖されます」
「封鎖？」
アプリリアージェの問いかけにフリストはうなずいた。
「ほんの気休めですが、それでも多少の時間稼ぎにはなるでしょう」
アプリリアージェはフリストのいう「封鎖」という言葉の意味を計りかねていたが、それよりも「封鎖される」という言葉尻に興味があった。
「誰が封鎖するのですか？」
その質問がアプリリアージェの口から出た瞬間だった。まるでアプリリアージェの問いかけに答えるかのように一行の背後に大きな地響きがおこった。その、何かが崩れるような轟音に、一行は思わず今来た道を振り返った。
セレナタイトの淡い光でよくは見えなかったが、今来た道が何か大きなもので塞がれているようだった。
「分厚い岩で坑道を塞ぎました。ここは当分使えないでしょう」
フリストはそう言うと自分の言葉を確認するかのように岩の壁を

見つめた。
　時を置かず、音がした方向からやってきた緩やかな風が一行を包んだ。その風は坑道にはおよそ似合わぬような、ほのかな甘い香りを含んでいた。それはアキラがついさっき感じていた香りと同じものだった。
　アプリリアージェは鼻腔を撫でるその香りの名称を知っていた。だがアキラ同様、坑道と香りとの組み合わせに妙なものを感じていた。少なくとも今塞がった……いや、塞がれた岩の壁に関係する香りであろう事は確実だと思われた。
　フリストからの香りではないのだから。

「さあ、留まっている時間はありません。行きましょう」
　そう言って歩き出したフリストを真っ先に追いかけたのはアプリリアージェだった。
「聞きたい事がたくさんあります、フリスト・ベルクラッセ」
　アプリリアージェはフリストと並んで歩を合わせるとそう言った。
「お気持ちはわかりますが、実のところ私に答えられることはそう多くはありません」
「ベルクラッセ少佐……」
　フリストはアプリリアージェのかけた言葉に首を横に振って答えた。
「元少佐です、ユグセル提督」
　そう言って一度言葉を切ったが、すぐに続けた。
「少佐どころか、私は今はシルフィード王国の人間ですらないのです」
　それは一行がこの日初めて耳にするフリストの寂しげな声だった。
　言葉の意味がすぐに理解出来なかったアプリリアージェに代わって、意外な事にエルネスティーネが後ろから声をかけた。
「あなたは私の事を知っているのでしょう？だから助けてくれたのではないのですか？シルフィード王国の人間として……」

その問いかけは少しの間その場に沈黙の時間を作り出した。誰もがエルネスティーネの問いかけに対するフリストの答えに聞き耳を立てたのだ。

フリストは少し間を置くと、さらに寂しげな声でエルネスティーネに呼びかけた。

「カラティア朝シルフィード王国の王女、エルネスティーネ様……だった方」

「きさま！」

聞きようによっては毒を含んだように思えるフリストの言葉にティアナが即座に反応した。

「ベルクラッセ少佐と言ったな。本物の姫に向かってその言い様は無礼千万……」

「黙りなさい、ティアナ・ミュンヒハウゼン中尉」

アプリリアージェは後ろを振り向かずにぴしゃりとそう言った。いつにないアプリリアージェの強い調子に、ティアナは思わず出掛かった言葉を飲み込んだ。短い一言だったが、ティアナに対する威嚇効果は満点であった。

普段の優しくのんびりしたアプリリアージェの雰囲気とその声色、さらにはやわらかい言葉遣いに慣らされているだけに、今のような有事になると、その格差は想像以上に感じる。まるでこういう状況で効果を上げるために普段はわざと優しげな振る舞いをしているのではないかという考えがティアナの頭を一瞬よぎった。

もちろんすぐに、心の中の否定と言う名のゴミ箱に捨て去られたことは言うまでもない。そんな事を普段から行っているような人間など、少なくともティアナの常識の世界には存在しない「はず」だからだ。

「フリストはル＝キリアの人間です。まず私に話をさせて下さいな」

続けた言葉はすでにいつものアプリリアージェに戻っていた。ティアナはわかりましたという返事もできず、アプリリアージェの後ろ姿に小さくうなずいた。

「まずは先ほどのファルの質問に答えましょう」
アプリリアージェに問われる前にフリストは自ら進んで話し始めた。
「簡単な事です。生を受けたのがシルフィードではないからです」
「どういう意味だ?」
質問の主であるファルケンハインが反応したが、アプリリアージェは制止しなかった。
「我々は一度死んだのです。比喩ではありません。文字通りの意味です」
「まさか、一度死んで生き返った……とでもいうのか?」
「『生き返らせてもらった』と言った方が正確でしょう。本当に息もなく心臓も止まり、文字通りの死体だったようですから、自分の力で蘇生できたわけではないのです」
「生き返らせてもらっただと?そいつはいったい誰だ?」
「それは今は答えられません」
「今は?」
「我が主(あるじ)の許可が出ていないからです。でもすぐにわかりますよ。事が始まれば、ね」
「主だと?」
ファルケンハインが言いよどんだ隙を見て、アプリリアージェが質問を挟んだ。
「顔の傷はどうしました?」
「我が主が消して下さいました。ご存じのように私はあの傷を疎んではいないのですが、目が覚めたら消えていたのです。さすがに元通りの傷跡を付けろとは言えませんでした」
「あなたが言うその主とは、ルーナーですか?高位ハイレーン……」
「それもお答えできません。主の能力に関する情報を口にする事は許可されていないのです」
アプリリアージェはその件にはそれ以上追求せず、質問を変えた。

「フリスト、あなたは『我々』と言いましたね？あなたの小隊は全員が助かったのですか？」

その問いにはフリストは素直にうなずいて見せた。

「ありがたい事に全員です。そして全員が主の僕として新しい『生』（せい）を生きています」

そしてアプリリアージェの笑ったような顔に負けじと微笑んで見せた。そうやって深く笑っているとアプリリアージェに似ていると言えなくもなかった。

「コラードとシリット両少尉の元気な声は、先ほどお聞きになったはずですよ」

アプリリアージェはフリストの笑顔をあまり見た事がなかった。

フリストには、その端正な顔を斜めに横切る程の醜くただれた大きな刀傷があった。ある作戦時に負ったその傷は、本来の端正な顔を台無しにしてしまった。その傷がフリスト・ベルクラッセから笑顔を奪ったとは考えたくはなかったが、少なくとも傷を負った作戦以降、フリストは一度もアプリリアージェに笑顔を見せることはなかったのだ。だがフリストはそれを任務に引きずるような弱い心の持ち主ではなかった。それまでと変わらず、いやそれまで以上に風のフェアリーとしてのその高い能力を完璧に制御し、ル＝キリアの高級将校を名乗るにふさわしい働きと態度を示し続けた。

射手としてのフリストとアプリリアージェの能力は「ル＝キリアの双黒」と並び称されるほど拮抗していた。アプリリアージェはともかくフリストの方では明確にル＝キリア司令を好敵手と見なして技と能力の研鑽には寸暇を惜しまなかった。

真面目と一言で言ってしまうには軍人としてあまりに一途に過ぎるフリストを、アプリリアージェは危うく感じることもあったが、彼女にはそれを補う良い部下がついていた。もちろん部下の性格を把握し尽くしているアプリリアージェがフリストの下に付けるのだから、その点を考慮しての人選である。

フリストの口から出たのは三人の部下のうち、二人の男性兵士の名前であった。アルヴのコラードとシリット。どちらも中尉で大気の動きを操る力に優れた風のフェアリーであった。

二人はル＝キリアきってのお調子者と言った性格で、アトラックから生真面目さを剥ぎ取って二十年ほど熟成させたような風格さえ備えた筋金入りの軽口名人だった。

性格が違いすぎる部下を前に、最初はあからさまに空回りをしていたフリストだったが、もう一人の部下の存在が小隊全体に変化をもたらし、程なくル＝キリアでも一番と言われる強力な攻撃力を持つ小隊へと昇華していった。

だが、それでもフリストは、たった今アプリリアージェに見せた、まるでいたずら好きな少女の様な笑顔を浮かべる人間ではなかったはずだった。

それはフリストの中で何かが変わったのだという徴なのであろう。生き返ったというのは比喩ではないとフリストは言った。おそらく全ての意味でフリストは新しいフリストになったに違いない。

アプリリアージェは横に並んで歩く黒髪のダーク・アルヴが、本人の言うとおり、もはやル＝キリアのフリスト・ベルクラッセ少佐ではなくなった事を飲み込むことにした。そして彼女の言葉を元に記憶をたどった。

群衆で最初に大声で異変を告げた声、続いてそれを肯定し、さらに煽った声。その二人がフリストの部下だったのだ。

「なるほど」

アプリリアージェはそう言うとうなずいた。

「シーレンはいないのですか？」

シーレン・メイベル中尉。フリストの三人目の部下である。

アルヴィンの女兵士であるシーレンは、大いなる問題児としてル＝キリアに流れてきた。原因はわからない。だがシーレンは心に大きな傷を抱えており、ひとたび戦闘体勢に入ると自我を失った。シーレン・メイベルは白兵戦になると殺戮に没頭する凶戦士に変貌す

るのだ。表情が凍り付いたようになって戦い続けるシーレンを止める事が出来る人間はそうそういない。自分に向かってくる者には敵・味方の区別なくその剣を振り下ろす。そして彼女に敵う剣術を持つ者はほとんどいなかったのである。それだけ剣士としての能力が高い証拠ではあるが、それは歓迎される能力とは言い難かった。

普段は良くしつけられた良家の箱入り娘と言った風情だけに、その変貌を初めて見た者は誰しも言葉を失う。

味方からはアプリリアージェやテンリーゼンよりもよほど忌み嫌われ、その名を口にする事すらはばかられていた兵士、それがシーレン・メイベルなのである。

そんな壊れた兵士が普通に軍に居続けられるわけがなかった。軍法会議で長期の禁固刑となって牢に繋がれていたシーレンを、王国軍の提督が持つ特権を行使してアプリリアージェがル＝キリアに招聘したのである。

シーレンの禁固刑に恩赦を与え釈放するにあたり、アプリリアージェはその時内示されていた中将昇進を対価として支払う、つまり辞退したと言われているが、実のところは定かではない。

シーレンはル＝キリアでも失敗を繰り返した。そのシーレンをフリストの下に付けることにしたアプリリアージェの計画は図に当たったと言うべきであろう。

フリストの元で、シーレンは自分を失い凶戦士に変貌することは二度と無かったのだ。

「シーレンもあの場にいましたよ。私の離脱を合図に、おそらくル＝キリアの部隊章が入った矢をカテナ・ミドオーバのくるぶしに命中させた後、他の二人と一緒に次の行動に移っている事でしょう」

楽しそうにそう言うフリストの言葉に眉を寄せたのはアプリリアージェだけではなかった。同じ疑問を持ったファルケンハインが先に声をかけた。

「『銀翼の矢』の部隊章が入った矢などないはずだが？」

フリストはファルケンハインを振り返ると、笑顔で言った。
「ええ。だからわざわざ作ったのですよ」
そしてそのままクスクスと笑い声をたてた。
「カテナ・ミドオーバ。あの裏切り者が矢に記された部隊章に気付く程度の頭があるなら、今頃さぞや恐怖に打ち震えていることでしょう。慌てて『お父上』の元に馳せ参じる姿が目に浮かぶようです。もっとも……」
フリストはそこで言葉をいったん句切ると、いきなり立ち止まった。
「あの男がエッダに戻った頃には、頼りの『お父上』はそれどころではないでしょうがね」
「フリスト、あなた……」
アプリリアージェは思わず声をかけたが、フリストはその言葉を皆まで言わせなかった。
「名残惜しいのですが、私の案内はここまでです」
「え？」
「実のところ皆さんを助けたのは主の意思ではありません。我らの懇願は主にはにべもなく否定されてしまいましたから」
「どういう事ですか？」
「私たちが介入できたのは、我らの願いを聞き入れ、主に取りなして下さったある方のおかげなのです。ですがこれ以上の肩入れは主にもあの方にも迷惑がかかりますので」
「主」とは別に「あの方」と言う存在がフリストの上、もしくは陣営に居ることがわかっただけで、謎はかえって深まった。アプリリアージェは即座にその謎を解くべく口を開いたが、声を発する前にフリストが話の続きをかぶせてきた。
「この道は新教会が作ったヴェリーユ大聖堂から続く各方面への抜け道の一つで、このまま先に進むとハイデルーヴェンの町外れの倉庫に通じています」
アプリリアージェとメリドは顔を見合わせた。エルデ達との合流

先がまさしくそのハイデルーヴェンだったからだ。
「そういうわけで、残念ながら私に許されている介入はここまでです」
それだけ言うとフリストは立ち止まったアプリリアージェ一行をその場に残し、ヴェリーユ側に歩き出した。アプリリアージェはその背中に、普段よりも強い調子で声をかけた。
「別れる前に一つだけ教えて下さい」
フリストは歩みを止めた。だが振り返りはしなかった。
「なんでしょう？」
「あなたが『主』と呼ぶ人物と、『あの方』と呼ぶ人物、どちらも名前は教えてはもらえないのでしょうね」
「意に沿いかねます」
「ならばもう一つだけ。その『主』とやらは我々の敵ですか？味方ですか？」
フリストは少しの間無言だった。それは答えを躊躇っていると言うよりは、どう答えるべきかを考えているようであった。
「我々の主は……そうですね。この先はおそらく全ての陣営の敵となるでしょう。つまり……」
少しの間をとってそう言ったフリストは、小さい声でこう続けた。
「次にお会いする時は、我々は敵同士、という事になるのでしょうね」
「どういう意味ですか？」
「意味も何も……。それよりご存じでしたか？私はこれまでずっと、あなたと真剣に戦う機会が来ることを待ち望んでいたのですよ、『笑う死に神』さん」
「フリスト……？」
しかし、アプリリアージェの呼びかけに、フリストはもう何も答えなかった。足早に歩き出した背中をファルケンハインが追いかけようとしたが、それも物理的に遮られることになった。
先ほどと同じような轟音とともに、フリストとファルケンハイン

の間を塞ぐように岩の壁が出現したのである。
ファルケンハインはその壁に取り付いた。
「フリスト！」
壁の厚みがどれだけあるのかはわからない。果たして向こう側に声が届くのかどうか。
だが、ファルケンハインは呼びかけずにはいられなかった。
「お前達が敵になるとはどういう事だ？お前の主とはいったい誰なんだ！」
岩の壁の向こうからは、しかし何の答えもなかった。
「なぜお前が司令と戦わねばならない？答えろ、フリスト！」
彼は拳を握りしめると強くその岩を叩いた。何度も、何度も。
ファルケンハインの叫びの後は、坑道に響くのは岩を叩く鈍い彼の拳の音だけだった。
岩に頭を付けたまま立ち尽くすファルケンハインの鼻腔に、再びあの甘い匂いがかすかに香った。
（これは……木犀か？）
香りの正体を記憶の引き出しからたぐり寄せたファルケンハインだったが、すぐに背後から別の香りを纏う少女の気配を感じた。

「ファル……」
背後の気配はそう声をかけると、岩におしつけられていたファルケンハインの拳にその小さな手を重ねた。
白い小さな手。自分の大きな手に重ねられたその手のぬくもりを感じたファルケンハインは思わず振り返った。
そこには金髪を揺らして微笑む緑色の瞳の少女がいた。
「ネスティ……」
エルネスティーネは自分の手をファルケンハインの拳の上に置いたままで長い睫を伏せた。
「私はフリストさんとは初対面ですが、まったく邪気を感じない人でした。それどころか、優しいエーテルを纏っていらっしゃいまし

たね。ベルクラッセ少佐と言えば怖い人だとうかがっていましたが、どうしてどうして。笑うととっても可愛らしい人ではないですか」

ファルケンハインはエルネスティーネが何を言い出すのかわからず、次の言葉を待った。

「部下があんな笑顔で笑えるのですよ？私にはフリストの言う主（あるじ）という方が悪い人であるとは思えないのです」

エルネスティーネの言葉に虚を突かれたのはファルケンハインよりもアプリリアージェの方だった。

先ほどからずっと感じていたもの。心の奥で無意識に確信していたものの正体をエルネスティーネが口に、いや言葉にしてくれたのである。

生き返ったフリストは笑顔で笑える場所を手に入れたという事なのだ。いや、フリストだけではない。彼女の口ぶりではシーレンをはじめとする小隊全員が同じ気持ちに違いない。

そうであれば……。

フリストが言った「敵」という言葉の意味を文字通りとらえる必要は無いのではないか。

根拠はないが、そう思える明るさをエルネスティーネはくれたのだ。

「『ホラ貝煎じてフグとなる』です。ハイデルーヴェンではきっといい事が待っているに違いありません」

「え？」

何か言おうとしたファルケンハインはそこで固まった。口に出そうとした言葉が霧散すると、エルネスティーネが言った言葉の意味を探し出そうとして思考が迷路に沈み込んでいくのがわかった。

「ネスティの言うとおりです。どちらにしろ私達は向こうへ行くしかないのですよ、ファル」

アプリリアージェはそう言うと、フリストに似た黒い髪を振って

真っ直ぐに伸びる坑道の先へ歩き出した。

# 第四十五話　二人旅

推論は外れた。
エイル達が戻った宿の部屋には誰もいなかったのだ。それでもエルデはあきらめず、テーブルや椅子をひっくり返すとその裏に書き置きがないかと確かめて回ったが、少なくとも彼らにはそれを見つけ出す事は出来なかった。
エイルはそこでまたもや違和感のある風景を目にすることになった。
エルデの力……この場合は物理的な腕力の事であるが、それが異常に強いことをもはや見間違いなどと思う事もなく確信していた。
重そうな大理石の一枚板を天板にしたテーブルなどは、おそらく大人のアルヴでも二人で抱え上げるのがやっとであろうと思われたが、エルデはそれをまるでレース編みの敷物をつまみ上げるように片手で軽々とひっくり返して見せたのだ。

「あ……」
ひっくり返した二つ目のテーブルをひょいと片手で引っかけて元に戻した時、エルデは自分をじっと見つめるエイルの視線を感じた。
思わず声を出したエルデはばつが悪そうにすぐに視線を逸らした。
「エルデ、お前さ」
「言わんでもええ！」
「いや……」
「今まで見た事もないような美人で可愛くてか弱い素敵な女の子のエルデがなんでファルもびっくり仰天する怪力女なんや？とか思ってるんやろ？」
「いやいやいや」
エイルは即座に返すべき言葉を失った。エルデの言っていることは全てが……綺麗で可愛くて一見か弱そうに見えるという部分も…

…真実だったが、自分の口からあっさり言われるとまず最初にどこに返事をしたものか答えが出なかったからだ。

（いや）

だが彼はかろうじてエルデの言葉の中に否定できる部分を見つけた。

（可愛くは、ないな。ぞっとするほど綺麗だけど、可愛らしい感じはしないんじゃないか？憎らしいならわかる。ああでも、コイツも笑う時だけは可愛いんだよな……）

当初からの自分の思考がどんどん目的から離れていこうとしている事に対しての疑問は感じなかった。それはむしろエイル自身も心の中では望んでいた方向だったのだろう。エルデの正体に関わるような事は、本能的にあまり触れてはならないような気がしていたからだ。いや。触れたくなかったのかもしれない。

エイルは思わずそっと自分の首をさすった。《群青の矛（ぐんじょうのほこ）》ことフアーン・カンフリーエが部屋に現れた時の事をふと思い出したのだ。あっという間にエルデに組み敷かれた際にも、恐ろしいほどの腕力をエルデに感じていた。あの時は火事場の馬鹿力のようなものだと思い込もうとしてそれ以上は考えなかったが、どうやらエルデが普通の人間では考えられないような腕力を持つ存在なのは、もう明らかだった。

強化ルーンのせいだと言って誤魔化されるかもしれない。今のテーブルの件はそれでつじつまを合わせることはできるだろう。しかしルーンを使えないこのヴェリーユに着いたすぐあとのあの事件の前に、しかもあの場ではおよそ意味があるとは思えないような腕力強化ルーンを使ったなどという言い訳が通用しない事をエルデも承知しているはずであった。

「ついでに言うとくと、力仕事は今後ウチに任せようとか思てるんやったら、それは即撤回した方がええで」

エルデはひっくり返した椅子を元に戻しながら、エイルの方は見ずにそう言った。
「人間がまだオタマジャクシやった時代から、力仕事は男がするもんやって決まってんねん。特にウチみたいなお年頃の女の子にそんな事をさせたらアカン。まあもっともアンタがどうしようもない時には手伝ってやらんでもないけどな」
エルデは努めて普通の調子でそう言った。自分の不自然な腕力については何もごまかしの言葉を使わなかった。
エイルはそれが嬉しかった。疑問の解決には至らなかったがエルデは誤魔化す事はしなかった。それは信頼されているという妙な快感となってエイルの心を躍らせたのだ。
「人間ってオタマジャクシから進化したのかよ？」
「……いや、そやのうて」
エルデの顔が急に赤面した。
「なんだよ？」
「その……あれや。お母さんのおなかに入る前の状態……とか？」
エルデはそう言うとエイルから視線を逸らせた。何の事を言っているのかをようやく理解したエイルはがっくりと肩を落とした。
「あのな……その時点じゃ性差とかないだろ？」
「た、例えや、例え。話の流れ読んで、それくらい酌み取れっちゅう事や」
エルデは逸らした目を再びエイルに向けると、にらみつけるように目をつり上げてそう言った。
「ああ、はいはい。それより、これからどうする？」
エイルは話題を変えた。エルデの言葉を借りるならば、ここは話の流れを読まないといけないのだ。つまり話したくなさそうなエルデから今は無理矢理聞くことはない。信頼には思いやりで答えるべきだとエイルは決めた。
「さっきも言うたけど、その、すぐに人に頼ろうとするクセもそろそろ改めた方がええな」

「いやいやいやいや」
「いや、敢えて言わせてもらお。たとえここファランドールがお前さんにとって異世界であろうが、や。ファランドール側でお前さんが異世界の人間やから言うていろいろ手加減してくれると思うか？」
「そりゃあ……」
エルデの指摘にエイルは唇を噛んだ。確かに正論だった。今までは心の中に頼れる「案内役」が存在していたこともあり、未知なことに出会う度その「声」に頼ることが当たり前になっていたのだ。
だがもう心の中で別の声はしない。その声は恐ろしいほどの美貌を持つ少女に姿を変えて目の前に存在している。会話をするためには声に出して考えを告げなければならない、普通の一人の人間として。

「とりあえず、姿と足音を消すルーンをかけて、町中を一通り回ってみないか？買い物をしているネスティとティアナはまだリリアさん達と合流していないかもしれないし、アキラも別行動だっただろう？上手くすれば合流できるかもしれない」
「見つからへんかったらどうするつもりや？」
「時間を決めよう。ハイデルーヴェンに行くのなら水路だと言ったよな？連絡船があるのか？いや、連絡船だと足がつきやすいか。お前は目立つからな。船を調達するのに三〇分程度かかるとして、あとは水路でハイデルーヴェンまでどれくらいかかるかの逆算だ」
「五〇点っちゅうとこかな」
まとめ上げた考えを一気に告げたエイルに対して、エルデが即座に下した評価がそれだった。
「けっこう不満な点数だな」
「とりあえず連絡船乗り場で待つ。それが一番合理的やろ？」
エイルは抗議した。
「でも、連絡船なんかだと他人の目があるじゃないか？目立つだろ？」

「よう考えてみ？『陣廊（じんろう）』は機能してへんかった。つまりラウやファーンと違うて面が割れてへんリリア姉さんたちはヴェリーユ側からいまだに特定されてへん。ここまではええか？」
「ああ」
「それを確認したリリア姉さんは即座に次の行動をとる。それは宿に戻ることやなかった。としたら」
「打ち合わせをしてたハイデルーヴェンに向かう、だな？」
エルデはその黒目勝ちの大きな瞳でじっとエイルを見つめたままうなずくと、短くつぶやいた。
「木の葉を隠すなら森の中」
「あ……」
「下手に船を調達したり盗んだりしたらかえって目立つ。普通の旅人の中に普通の旅人として紛れ込む方が自然やろ？」
エイルは確かにそうだ、と思った。
無言でうなずいたエイルにエルデは続けて言った。
「闇雲に町中をうろうろするよりも効率は高い。リリア姉さん達がもうとっくにヴェリーユを出発してこっちの船着き場で出会えへんとしても、それならこっちはこっちで時間を切って最終のハイデルーヴェン行きの連絡船に乗ればええ。それに、これが肝心やけど」
「リリアさんも同じ事を考えていると言う事か？」
エルデは今度はにっこりと笑った。
「こっちの船着き場やのうても、向こうの船着き場では待っててくれる可能性もあるっちゅう言う事や。少なくとも船着き場に落ち着き先の合図は残してくれてるはずや」
エルデの言うとおりだろうと思った。

エルデの言葉でエイルはヴェリーユに入った時にアプリリアージェがすんなりと見つけた「落ち着き先の合図」の事を思い出していた。
『龍の道』で別れる際にアプリリアージェとテンリーゼンは予めヴ

ェリーユでの落ち着き先を知らせる手段について打ち合わせをしていた。もちろん相手がテンリーゼンだからアプリリアージェが一方的にテンリーゼンに指示を出したという方が正確かも知れない。

それはル＝キリアが普段使う方法で、彼らだけにわかる特殊な記号をその町の中心部、多くの場合は広場の噴水あたりに記すというものだった。暗号を用いるやり方は秘密部隊のル＝キリアらしいとエイルは思ったものだった。

暗号はともかくファランドールの町の構造を考えると合図を置く場所としてはそこが一番合理的だとエイルも思っていた。待ち合わせもそこが一番わかりやすいはずだ。町の大小にかかわらず中心には間違い無く広場がある。巨大な町には多くの広場が存在するが、その場合中央広場という名称で行政関係の建物が面しているので特定できるし、小さな村の場合は共同の水くみ場を噴水に見立てた広場が必ずと言っていいほど存在していた。

大きな広場には間違い無く噴水や泉があり、旅を重ねて行くにつれファランドールでは水が人間の生活の中心なのだと言う事をエイルはしみじみと感じていたものだった。

かつてのフォウがきっとそうであったように。

その中央広場に記される「合図」だが、記すと言っても落書きのように誰の目にも触れるような手法は当然ながら用いない。

おそらくその町の広場に合わせた手法がいくつかあるのであろうが、ヴェリーユの中央広場の噴水でアプリリアージェが見つけた「合図」は比較的わかりやすいものであろう。

アプリリアージェはまず昼星を見上げて方角を確認した上で噴水の東側に目星を付けた。その上で噴水の縁に腰をかけて周りを何気なく見渡すと、やがて足下にあった石畳の小さな石をつま先でファルケンハインに示した。

ファルケンハインはうなずくとアプリリアージェの隣に座り、何食わぬ顔をしてつま先でその石をほじくるようにしてあっという間

にひっくり返した。
　果たしてそこにはアプリリアージェ達ル＝キリアにだけわかる記号が釘のようなもので記されていた。
　それを見たアプリリアージェは宿の名前と部屋のある階と部屋番号を告げたのである。
「なぜ一つだけの石を簡単に特定できたのか、ですか？」
　エイルの素朴な疑問にアプリリアージェはそう言うとファルケンハインと顔を見合わせた。
「宿を求めて町に入る人間は朝に町に入るのか？」
　アプリリアージェの代わりにファルケンハインが逆にエイルにそう尋ねた。
「いやまあ、そう言う旅人も居ると思うけど、普通は夕方だろうな」
　エイルがそう言うとエルデがポンと手を打った。
「なるほど」
　それだけの会話でエルデはすでにアプリリアージェ達が石を特定した法則を見つけてしまったようだった。
「夕方は太陽が西に沈む。つまり噴水の東側が影になるから、その陰になる所は比較的目立ちにくい」
「正解です」
　エルデの回答にアプリリアージェはにっこりと笑ってそう答えた。
「東側に来てまずは辺りを見渡す。ここは小さめの石で敷き詰められた石畳やからひっくり返しやすい。とすれば石畳の石に刻んでる可能性が高い」
「またまた正解です」
「地面の石やとすると、あんまり噴水から離れているわけはない。さすがに石をひっくり返したりすると目立つしな。そこで座ったまま足をそう動かさずにいじれる範囲で、最近ひっくり返された可能性のある石を探した」
「大正解。まさにドンピシャですね。ただしそれだけだと九十点です」

アプリリアージェがにこにことしてそう言うとエルデはムッとした顔をした。本人は百点だと思っていたのだろう

エルデの推理は完璧だったかもしれないが、エイルとしてはさすがにそんな無防備な合図を置くのはどうかと思った。だいたい石畳の石を剥がしてそこに釘で記号を刻んでいるのを見られたら怪しすぎるはずだ。

「まあでも、こんなに簡単で大胆な方法はあまりやりませんけどね」

エイルの心の内を透かして見たかのようにアプリリアージェはそう言った。

「今回はわかりやすいのが一番ですからね」

「残り十点は何や？」

エルデの方は満点回答が出来なかった事にこだわっているようだった。

「ひっくり返した跡は意外に特定しにくいものなんですよ」

「あ……」

言われてみればそうだった。エイルは合点した。

雨が降るとすぐにわからなくなりそうだ。さらに今回のように一ヶ月近く経つと雨が降らなかったとしても目地の差を見つけるのはたやすくはない。さらに言えば中央広場の石畳の目地改修が行われる可能性だってある。

だとしたら、正解とは？

「私は柔らかそうな石、そしてその中で一番小さいものを選んだんです」

エルデはアプリリアージェが告げた正解を聞くと唇を噛み、あからさまに悔しそうな表情になった。エルデ程の美貌がそう言う顔をすると恐ろしさが増す。エイルはそんなエルデを見て肩をすくめた。

「それにこれくらいの柔らかさだとリーゼならあっという間に記号を記すことができたでしょうね。ヴェリーユのこのエーテルの薄さでも、これくらいなら手を使わずにできたんじゃないかしら」

もちろん合図は一つではなく念のために最低二つは記されている

という。だが二つ目の合図の場所をアプリリアージェはエイルには教えなかった。
「これ以上は秘密事項ですよ」
そう言ってあのとろけるような微笑を向けるのだ。

今になって思えば、何かの折に役に立つ可能性があるから、一番簡単なものだけをエイル達に教えたのかも知れない。
だからハイデルーヴェンの船着き場に迎えの影がない場合、エイルは中央広場に真っ直ぐに向かってみようと決めた。
「ハイデルーヴェンの中央広場は石畳や」
そんなエイルの胸中を読んでいたのかどうかはわからないが、エルデは小さくそう呟いた。
「さ、長居は無用や。さっさと行くで」
「行くのはいいが、お前のその髪と目の色は目立ちすぎるんじゃないのか？」
既に髪だけはルーンで茶色に染めてもらっていたエイルはそう言ってエルデの腰まで伸びた真っ直ぐな黒髪を指さした。
「髪だけでも茶色か金髪に染めとけよ」
「絶対嫌や」
エルデはそう言うとラシフのマントを羽織り、フードでその頭をすっぽりと覆った。
「いや、それでもよく見たら髪は見えるって」
「言うとくけど」
エルデはエイルを振り返るとその美しい黒い目でじろりと睨んだ。
「ウチはこの髪の色を変えるつもりは毛頭無いから」
「いや、だけど」
「やかましい。さ、そうと決まったらさっさと行動や」
「わかったよ」

空の異変をエイル達二人が認めたのは、船着き場について少し経

ってからだった。
丁度連絡船が乗船を開始した頃に急に空が暗くなってそれとわかった。
竜巻を見つけた船着き場の人々はたちまち大騒ぎに陥ったが、エルデは即座にエイルの手を引くと乗船を促した。
エイルは急な作戦変更にも逆らわずに従うことにした。大きな変化があった。おそらく最終便まで待っている余裕はないとエルデが判断したのだろう。それにエイルには予感があった。
「おい、あれってひょっとすると」
「間違い無い、あれは自然現象やない」
「風のフェアリーか、高位のルーナー、それもエクセラーが何かやらかしたのは間違い無い」
「あの真下って町の中心部じゃないのか？もしかしてリリアさん達が」
「わからへん。でも下手すると抜け出されへんようになるかもしれへん。さっさとここを離れた方がええ」
「でも、みんなが……」
「リリア姉さん達なら心配ない」
「いや、でも」
「知っているやろ、あの姉さんがすごい人物やってことは」
「そりゃ……」
「別行動をとったんや。後は信じるしかない。それにあの竜巻はリリア姉さんやない」
「何でわかるんだよ」
「リリア姉さんがジャミールで雷を使たん、覚えてるか？」
エイルはそう言われてラシフと最初に出会った時のことを思い出した。
威嚇としてアプリリアージェがごく小規模な雷を落として見せた事があったのだ。
エイルがうなずくとエルデは真顔で宙に浮かぶ真っ黒な竜巻に目

をやった。
「あの竜巻の周りにあるエーテルの渦の色が姉さんのものとは全然違う」
「はあ？そんなものが見えるのかよ？」
エイルの問いに、エルデは真顔で短く答えた。
「見える」
「マジかよ」
「うちらには見えるんや」
「『うちら』？って、賢者の事か？」
思わずエルデが口に出した一人称複数形に対して、エイルは違和感を持った。それは自分とエルデが一人の体を使っていた時にエイル自身が思わず口に出してしまったことがある言い回しである。
その言葉が一人であるエルデの口から出たことがどうにも引っかかったのだ。
だが、エルデはそれには何も答えなかった。

船室の隅に二人分の場所を確保すると、エルデはさかんに船頭達が居る操舵室の様子を気にしだした。乗客が全て乗り込んでもいっこうに舫い綱が解かれる様子がない。
「ええい、何をグズグズしてんねんっ」
やがていらだったようにそう呟くと、エルデは立ち上がった。そしてそこに残るようにエイルに告げると、大胆にもそのまま船頭の方へ近づいていった。
できるだけ目立たないようにすべきであるはずなのに、わざわざ自分から目立ちに行ったエルデの考えはわからなかったが、ここまで来るとエイルは開き直りの気分になっていた。
それに自信たっぷりに行動するエルデには何らかの考えがあるのだと言う事をエイルは知っていたのだ。
果たしてエルデは船頭の元で二言三言何かを話したかと思うとさっさと戻ってきた。

船室の片隅に座っていたエイルの隣に元通りエルデが腰を据えると同時に、船頭が出港の合図をした。
「お前、まさか」
エイルは澄ました顔で船頭の動きを見ているエルデの長い睫の動きをまじまじと見つめて絶句した。
間違い無い。エルデは二言三言会話を交わしたのではない。ルーンを唱えて来たのだ。
「大丈夫。ちょっとお願いしただけや。影響は皆無」
「いやいやいや」
「ぐずぐずしてると交通網閉鎖の『お触れ』が来てまうからな。ここは時間との勝負や」

連絡船は河川を航行する船としては大型で、船側（せんそく）に外輪を使った蒸気船であった。
船頭は船室から出たところにある一段高い場所に据えられている大振りな梶を握り、伝声管を通じて機関室と思われる別の場所にいる人間に指示を送りながら船体を器用に操り、桟橋から離れて川下に向かって船首を振っていった。
エイルは振り返り、離れ行くヴェリーユの上空を見上げた。しかし、もうその時にはあの黒い凶悪な風の力の固まりのような渦は跡形もなく消えていた。

「さて」
そう呟く声に、エイルは視線を隣の少女に戻した。
「初めてやな」
「え？」
「二人旅、や」
そう言うエルデは微笑を浮かべながら船室を見渡していた。
「一時間程度の船旅やけど、上陸後も気ぃ抜かれへんから今のうちにエイルもちょっと眠っといたらどうや？」

エルデがそう言って初めて、エイルは周りの異変に気付いた。エルデの視線を辿って船室を見渡す。なんと、そこにいる全員が目を閉じて眠りに落ちていた。

間違い無い。エルデは乗客にもルーンをかけたのだ。

「お前……」

「ふふふ。さて、うちもちょっと休ませてもらうわ」

エルデはそう言うと船室に備え付けの分厚い大振りな毛布を引き寄せ、鼻までそれを被ると目を閉じた。

それはエイルに対して「小言は一切聞かないぞ」というあからさまな態度であった。

エイルは目を閉じたことによってその長さがいっそう際立つエルデの睫に少し見とれていたが、やがて小さなため息とともに、エルデにならって毛布を首元まで引き上げた。そうすると蒸気の暖房が床下に施されている船室は俄然快適になるのだ。

エイルのため息を最後に、船室は静寂に包まれた。

あまりの静寂に船頭が船室の様子を見に来たが、全員が寝込んでいるのを見ると肩をすくめて持ち場へ戻っていった。

風のない真冬のヴェリーユ地方の水上を行く外輪渡船は、さながら幽霊船のような静寂に包まれながら、一路ハイデルーヴェンを目指していた。

# 第四十六話　学校都市ハイデルーヴェン

学校都市ハイデルーヴェン。

現在、特別大学市として名高いハイデルーヴェン＝サダンドル市を当時はただハイデルーヴェンと呼んだ。

ハイデルーヴェンとは現代の言葉になぞらえるなら「ルーヴェン川のほとり」と言う程の意味だが、ことこの街の名称についてはその解釈は間違っている。そもそもハイデルーヴェンはルーヴェン川などには面していないからだ。さらに言えばルーヴェン川などファランドールには存在しない。

ヴェリーユからハイデルーヴェンを通って港湾都市ヴォールへ下る川はルプレヒト川という名であり、ハイデルーヴェンの近く流れる川は昔も今もその一本のみである。

この場合ルーヴェンとは川の名前ではなく古語の「ルーヴァン」つまり「おおいなる源（みなもと）」という言葉を持ち出すと意味が理解できる。

つまり「大いなる源の近くにある場所」とでも訳せばいいだろう。意訳すれば「真理の側（そば）」と言う事である。学校都市と呼ぶにふさわしい名前と言えるだろう。

そもそもハイデルーヴェンは、統一した大国としての体を成さないウンディーネ連邦共和国が、アダンを首都として国家体制を整備し始めた頃に、自国の教育制度の遅れを憂いた当時のヴォール市長ギュンター・ケーヴが提唱して設立した商業専門学校が母体と言われている。

当時のいわゆる知識や教育については、正・新問わず、教会がその中心であった。そこでケーヴ市長が両教会とアダンの議会に働きかけ、主にヴェリーユ側、つまり新教会の協力の下に拓かれた計画都市がハイデルーヴェンであった。

ヴォール商業実戦学校はそのままハイデルーヴェンに移転し、その学校を中心に学究施設を増やして、街はだんだんと大きくなって

いった。

ケーヴ市長は相当の外交手腕を持っていたのであろう。すぐにハイデルーヴェンはウンディーネ共和国中から認知され、当初こそ商業関係の研究及び研修施設が多かったようだが、すぐにあらゆる分野の知識と研究の中心地としての地位を固める事になった。

ヴェリーユにほど近いのは、当初の金銭的な供出先、つまり「金づる」であった新教会の意向に他ならない。

とは言え当初の「教授」陣はほとんど教会の上位僧であった事を考えると合理的な場所だと言えた。さすがにヴェリーユの中に学校区のようなものを作ってしまっては、もはやウンディーネの学校とは言い難い。ましてや正教会の僧を招く事にも問題が生じてしまう。では地理的な不公平のないように正教会の本拠ヴェリタスと新教会の本拠の間に作ろうにも、ヴェリーユとヴェリタスの間には険しい山が連なり、地形的な意味合いにおいて現実的ではなかった。

で、あれば。そこはすなわち新教会側からの補助の多さと、ウンディーネ連邦としての利便性、つまりヴォールとの間で交通が便利な事を理由に現在の場所に落ち着いたのもうなずけるというわけである。勿論交渉力に長けていたケーヴの尽力があったのは想像に難くはない。

ルプレヒト川はウンディーネでも水量の多い河川の一つで、距離は一番ではないものの、特徴としては川幅が広く、深さも相当あった。なにより不凍で大型の船を航行させるのに極めて都合がいい天然の運河なのだ。すなわち首都島アダンの玄関口とも言える港湾都市ヴォールからは水路で簡単に行き来できる上、辺りにはヴェリーユを除き大きな街がなく、適度に俗世から隔絶された立地という事もあり、腰を据えて学問を能くしようとする場所としては実に好都合と言う事であろう。

その気になれば二日も船で揺られれば首都に行ける簡便さもあって、ウンディーネ連邦共和国の高等教育は次第にハイデルーヴェンに集中しだし、結果として一大都市に発展していった。

とは言えウンディーネ共和国にはシルフィード王国やドライアド王国のような学校制度が確立されているわけではなかった。そこで政府は計画都市としてケーヴが立ち上げたハイデルーヴェン構想を後押しするように「準備学校」という名前の大規模な学校をいくつか作る事にした。そこは高等教育を学びたいと思う志がある者を基礎的なところから教育する機関である。現在の幼年学校・中等学校が一緒になった様なものだと言えばわかりやすいだろう。

ただし、そこに集まる者の多くは金を持っている商人の子供達である。寄宿舎制で相当な「学費」が必要だった事もあり、基本的には一般に開放されていたとは言い難いが、言葉を換えれば貴族関係者しか教育対象として見なされないドライアドのアカデミーなどと違い、必要な金さえ払えば小難しい事を言われずに誰でも入学ができる開放的な学校なのだ。

もちろん例外もある。金持ちでなくとも入れる方法が用意されていた。当時もっとも進んでいたのは、学問の内容ではなく、この仕組みであったかもしれない。

飛び抜けた頭脳を持つと認められた者には「奨学生」として全ての学費を免除され、言わば国費で学べる途があったのだ。

ただしそれは非常に狭い門で、しかも評価基準はかなり曖昧のようであった。

具体的には相応の立場の人間の紹介状を得る事と、ハイデルーヴェンの「教授会」と呼ばれる組織の面接を合格する事が必要だったからである。

「相応の立場の人間の推薦」を得る手段は人によっては至極簡単な事かも知れない。だが「相応の能力」がないと教授会の許可は下りない。

また相応の能力がある者であったとしても相応の立場の人間からの推薦を受けられない者も多かったであろう。ましてや少なくともハイデルーヴェンまでの旅費は自腹なのだ。街までたどり着けないような貧困層にとっては、どちらにしても高嶺の花のようなもので

あった。
「奨学生」になれたとしても、一般生と違い、彼らには厳しい日々が待っていた。もちろん、定められた成績を維持し続けなければ、容赦なく街から放り出されるのである。
それが嫌なら相当の成績をとるか、学費を払って一般生になるかのどちらかを選ぶしかない。

「ふーん」
エイル・エイミイはエルデ・ヴァイスによる学校都市ハイデルーヴェンの説明を一通り聞くと、そう言って改めて石造りの建物が並ぶ様を眺めた。
「『ふーん』って、イマイチ乗りが悪いな」
「何だよ、ノリって」
「いや、もっと驚くべきやろ？『そりゃ大変だな』とか『厳しいんだなあ』とか『オレには縁がなさ過ぎて泣けてくるぜー』とかやろ？」
エルデの言葉に、エイルは思わず苦笑した。
「何やねん？」
「いや……実はオレはフォウで似たようなところに居たんだ。しかもオレはそこで、お前が今説明した通りの完全奨学生だったんだ」
「完全奨学生の完全ってなんや？」
「衣食住すべて組織持ち。おまけに友達付き合いやちょっとした趣味を我慢しなくていいように充分な額のお小遣いが支給されるし、年に二回、研修という名目の旅行まで用意してくれて、両親というか保護者には研究協力費とかいう名目で礼金みたいなものまで支給されるんだ。勿論いっさい返却義務はない」
「ほう。そうなると学問やのうて、アンタの場合はその特殊な剣技が買われた、っていう事なんか？」
「？？まあ、そうかな」

「ふーん」
エルデはそう言うと隣に座っているエイルの顔をのぞき込んだ。
「何だよ」
さらに顔を近づけるエルデに、エイルは慌てて立ち上がった。
「な、何だよ……」
「逃げる事はないやろ」
「お前がどんどん近寄るからだ」
「失敬なやっちゃな。こんな美少女が寄り添ってんのに逃げるとかあり得へんやろ」
「いやいやいや、だから逃げるんだろうが……って、そう言う話じゃなくてだな……」
「とにかく、目立つからはよ座れ」
「目立つのはお前の方だろ」
思わず腰を上げかけたエイルは、エルデの指摘にしぶしぶながらも従った。元通り「目立つ」少女の隣に座ったのだ。

ハイデルーヴェンは計画都市らしく中央の行政機関を中心として、放射線状に整然とした区画で構成されていた。
だが例外もある。広場から見える高台には市街を見下ろすかのように古めかしい城がそびえていた。それは旧新教会府と呼ばれる建物で、街が出来た当時、新教会の関係者の宿舎になっていたと言われるものであった。その後市街地に設備のいい教員用宿舎が用意され、それに伴って新教会府も街の中心部に移るのに合わせ、新教会の倉庫のようなものに使われているという。街の中心部からもひときわ目立つ厳めしい造りのその建物を見たエイルは、妙に落ち着かない気分を味わっていた。
「あの旧新教会府が気になるんか？」
「旧なのか新なのか、どっちなんだよ」
「そこか？気になるんはそこなんか？」
「いや、そこも気になるけど、なんかアレ、禍々しい感じがしない

か？」
「ああ」
エルデは視線をエイルから外すと、街外れの高台にそびえる黒い城を眺めた。
「なんか、感じるんか？」
「殺気なんかはないけど、あんまり近づきたくない形とか色じゃないか？」
「ふーん……」
「お前は気にならないみたいだな」
「いや、妙にエーテルが濃いのはわかる。アンタはそれを感じてるんやろ。まあ、古い建物にはようあるこっちゃしな」

そんな会話を交わしているエイルとエルデの二人はハイデルーヴェンの中央にある第一広場と呼ばれる大きな広場にいた。広場の中央には噴水があり、その周りにぐるりと据え付けられた石のベンチに肩を並べるようにして座っていたのである。
二人が座るベンチの前には、同じく石造りの時計柱がそびえていた。街で一番広い広場だけあり、大きな時計柱で、それが夕刻を示していた。
第一広場には学校都市という成り立ちを示すかのように様々な仕掛けが施されていたが、二人の目の前の時計柱もその例に漏れなかった。柱の上に設置された時計が時計柱たるゆえんだが、さらにその柱自体が昼星時計の針の役目を担っていて、長い影が数字を彫った石の板にかかる事によって時刻がわかる仕組みになっていた。
冗長とはまさにその時計柱の為にあるような言葉だとエイルは思いながら影が示す数字をたどったが、もちろん時計柱の上に設置された時計の針とほぼ同じ時を示していた。

時計柱を眺めるエイル達の前を、多くの学生達が行き来していた。エイルはそれがいたたまれなかった。ベンチに座っている少女を見

た者は、みんな一瞬立ち止まる。すぐに立ち去りはするのだが、必ずと言っていいほど数回振り返るのだ。

そう。そこに座っている少女は夕暮れの広場にあって、特別に目立っていた。

少女、つまりエルデ・ヴァイスが目立っているのは、エルデが自分で言うように目にした者を一瞬凍り付かせるほどの美貌のせいではなく、それ以前に瞳の色と髪の色のせいであった。

瞳髪黒色。それはその時代では、もうほとんど目にする事がない存在だったのだ。

同じ瞳髪黒色の種族であるエイルはと言えば、既に茶色の髪と瞳に変わっていた。もちろん以前のようにエルデがルーンで変えたのだ。

エイルの髪と瞳の色は変えたものの、エルデは自分自身の髪と瞳の色を変えようとはしなかった。エイルが指摘しても理由は言わず「嫌や」の一点張りだった。

「ウチは絶対髪の色も目の色も変えへんからな」

隣で居心地が悪そうに視線を泳がせるエイルに、エルデは改めてそう宣言した。

「やれやれ……。オレにはあれほど目立つなとか言っときながら、自分はそれかよ。面倒が起きても自分で責任とれよ」

「ええ？ウチの事を守ってくれるって言うたんちゃうの？」

「そ、それはあの時の……」

「ふーん。あの時だけええかっこしたんか」

「あ、いや、そういう訳じゃ……」

「まあ別に、ええけどね」

二人はおしゃべりを楽しむために漫然と広場のベンチに座っていたわけではない。

ハイデルーヴェンで落ち合う予定の二組、ラウ達とアプリリアージェ一行を探していたのである。正確にはアプリリアージェ達が残

しているかもしれない合図を探していた。
「見つかったのか？」
あまりきょろきょろすると怪しまれるというエルデの注意を守り、努めて何気なく周りを観察していたエイルは、その日何度目かの同じ質問をエルデに投げかけた。
「これはたぶん……」
エルデはそう呟くと立ち上がった。
「うちらの方が早く着いたみたいやな」
それがエルデの出した結論だった。エイルはうなずいた。まったく異議はなかった。
「だな。オレ達の方からなにか合図を残しておくか？」

ハイデルーヴェンの第一広場は建物の長い影に覆われていたが、その影を濃くしつつあった。既に夕暮れは夜に変化しようとしていたのだ。
第一広場の大きさはエイルの感覚ではちょっとした競技場ほどのもので、中央にある噴水から正面に見える巨大な石造りの建物の入り口付近まではかなりの距離があり、建物の側にいる人間の顔の判別は勿論、人種の区別も不可能だった。石を投げたらなんとか届くかも知れない……そんな距離であろうか。
正面にある建物の方向には道はない。だが残る三方向にはそれぞれ広い通りが延びていた。正面、すなわち北側にある五階建て建物の奥行きがどれだけあるのかは、座っている場所からはわからない。ただ、エルデによると中央高級学校と呼ばれるハイデルーヴェンで最も規模の大きな学校舎で、選りすぐりの学生だけが集まる場所であるという。
夕方の終わりを待っていたかのように、その建物から今まさにそこで学んでいるであろう学生達が広場に繰り出して来た。談笑しながらゆっくりと並んで歩く団体。あるいは書物のようなものをのぞき込みながら真剣な表情で何かを語り合う二人もいる。だが大半の

学生は皆、足早に広場を横切っていた。彼らは銘々、それぞれの目的地に向かって歩いていたのである。

エルデに依ればハイデルーヴェンは全寮制の学校ばかりだという。おそらくはあてがわれた宿舎へ帰って行くのであろう。

その場所を離れようとしていたエイルは、その学生の流れの中にあって、風変わりな一行に目を止めた。それは藤色のお揃いのローヴを纏った十名程の集団で、彼らはきちんと整列して中央高級学校の門から出てきたのだ。

気がつけば皆、手には儀仗を握っていた。

「ルーナーの団体か？」

思わずエイルはそう問いかけたが、エルデには既知のものであるらしかった。

「灯火隊やな」

「灯火隊？」

「説明するより見た方が早いやろ」

エルデはそう言うと足を止めた。

なるほどエルデの言うとおりだった。

藤色のローヴの学生集団は、真っ直ぐにエイル達が座っていたベンチの前にある時計柱を目指してやってきた。そしてぐるりとその時計柱を取り囲むと、一人の学生が儀仗を掲げてルーンを唱え始めたのだ。

それは極めて短いものだった。

ルーンの詠唱が済むと、エイルには彼らの目的が何であるのかを理解する事ができた。時計柱の天辺が光ったのだ。

「あ……」

「ルナタイトや。しかも精霊陣付きで、簡単な発動ルーンで光るようになっているみたいやな」

「灯火隊ってのは街灯に仕込まれたルナタイトに灯りを付けて回る

連中の事か」
　藤色のローブの一行は、チラチラとエイル達の方へ視線を投げかけてはいたが、無言でその場を後にし、次の街灯へと向かった。
「ん？」
　灯火隊が目の前を通り過ぎた後、エイルがそう声を漏らした。
「どうした？」
　エイルの問いかけに、エルデは首を横に振った。
「いや、妙な匂いがしたから気になっただけや。おおかた学生が調薬実習でもしてたんやろ」
「ふーん」
「それより灯火隊はルナタイトを灯してまわってるだけやないで。この町にある有力学校が実力のあるルーナーを選出して組織した合同治安部隊でもある」
「治安部隊？」
「自警団みたいなもんやな。ハイデルーヴェンは軍の駐留が御法度なんや」
「へえ」
　エイルはランダールの自警団を思い出していた。
「別にちゃんと武装した自警団はおるけど、その予備隊みたいなもんやろ。ここの学生は自分の町の自治に参加しているという自覚を持ってるからな」
「ふーん」
「ここはヴェリーユのごく近くで、巡礼者の宿泊地の役目も担ってるから、人の出入りは結構多いんや」
「なるほど、それで治安部隊か」
「そういうわけで灯火隊は優秀な学生で構成されている事はみんな知っているから、藤色のローブは、この街ではあこがれの的っちゅう事になってる」
「なるほど」
　広場にある全ての街灯に灯りを付けた灯火隊が、南側の大通りに

入っていくのを見送りながらエイルは思っていた。彼らは役目を終えた時、時計柱の前、噴水のベンチの側にいた瞳髪黒色の美貌の少女について語り合うに違いないと。

「さて」
エルデはそういうとエイルの服の裾をひっぱった。
「行こか」
「それで、合図はどうするんだよ」
エイルの問いに、エルデはニヤリと笑って返した。
「そっちはもう終わった。そやしウチらはとりあえず宿を探そか」
エルデはそう言うと、ラシフのマントのフードを被って髪を隠し、目を伏せるようにして歩き出した。
エイルは慌ててエルデを追う。
「お前、座っていただけだろう？いつのまに合図を残したんだ？」
「やっぱり、アンタはまだまだやな」
エルデは小さなため息をつくといったん立ち止まり、短いルーンを唱えた。
エイルはそのルーンを何度も聞いていた。存在感を薄めるルーンであった。

「黒い髪をした風変わりな美少女が第一広場にいた」
再び歩き出したエルデは唐突にそう言った。
「は？」
「と言う噂が、さぞやあちこちで立ってるやろな」
「あ……ああ！」
存在感を消すルーンや姿を消すルーンを使わず、敢えてフードも付けずにその姿を晒していたエルデは、結構な人々の注意を惹いていた。それは間違い無かった。
それはわざとそうしたのだと言う。それでエイルも、ようやくエルデの意図が理解出来た。

「どうせこの町に長居はせえへんねん。そんなに待たんでも噂を聞きつけた姉さんやラウが向こうから探してくれるやろ。そっちの方が手間が少ない」
「瞳髪黒色が居たなんてことになったら面倒な事にならないのか？」
「この町にはかなり風変わりな人間も集まってくる。瞳髪黒色も希には来る事もあるやろ」
「そうなのか？」
「たぶん……」
「おいおい」
「ほんなら聞くけど、アンタはどんな合図を残すつもりやったんや？」
「そうだな。赤いぬぐいを部屋の窓からぶら下げるとか」
「はあ？」
「赤い風車を窓から出しておくとか」
「何やの、それ？」
「いや、なんでもない。忘れてくれ」
エイルは苦笑しながら頭をかいた。それを見たエルデは小さなため息をついただけで、深く詮索はしなかった。
「まあ、結局は瞳髪黒色ごっこをしていた変な女の子がおった、っちゅう結論に行き着くやろな。仮装みたいなもんや。人を驚かして楽しむ罪のない愉快犯。ただし美少女。それが今日の夕方、第一広場におった瞳髪黒色の正体。それでええ」
「なるほど……」
「そんな事よりウチはちょっとおなかが減ったな」
「おいおい、冗談だろ？あんなにぜんざいお代わりしたのに、もう燃料切れかよ」
「甘いもんは別腹やって言うやん？」
「ファランドールでもそれ、言うんだ？」
「なんや、フォウでも使うんか。そんなら全然問題なしや」
エルデはにっこり笑うと、軽やかな足取りで人通りの多い目抜き

通りに向かった。

「陰気くさいヴェリーユと違うて、ハイデルーヴェンは賑やかでおしゃれな店が多いしな。宿は後回しにして、まずはお茶でも飲んで暖まろ」

そう言って手を引くエルデは、実のところエイルの目には先ほどから極めて上機嫌に映っていた。

機嫌がいい原因はエイルにもなんとなくわかっていた。

服である。

ハイデルーヴェンに入って、ようやくちゃんとした服や靴を身につける事が出来たのだ。やはり若い娘としては嬉しい事なのだろう。

（いや、今までがひどすぎただけかな……）

エイルは薄茶色のラシフのマントを翻すエルデを見て、その下に着ている服を買った時の事を思い出していた。

エルデはまず二人に姿を消すルーンをかけた。そのままめぼしい服屋を見つけて中に入ると、色々と物色してまわった。

そうやって五、六軒も回っただろうか。

さすがに下着を売っている場所には一緒には行かなかったエイルだが、服選びにはついてくるように強要された。

靴は比較的すぐに決まった。服の方はかなり悩んだ末に三つほどに候補が絞られ、最後はエイルに決断が委ねられたのだ。

「なんでオレが？」

「ええやん。どれも気に入ったし、ウチが決められへんねんから。アンタが決めへんといつまで経っても次の行動に移られへんやろ？」

そんな意味不明な理由で、結局はエイルが気に入ったものを選ぶ事になった。

紺色の地にサクランボの花をあしらった服が彼の目を惹いた。その色柄だと、手触りがいいという理由で先にエルデが選んでいた砂色の下履きにも合う。

エイルの目にとまったその上着は比較的大胆で派手な柄と言えたが、エルデにはかえってそれが似合うと思われた。
「ふむふむ。アンタの趣味はこういうのか」
「趣味って言うか、お前が着ると映えると思ったんだ」
エルデに指摘されて照れ隠し気味にそう答えたエイルだったが、その言葉は本心からのものだった。エルネスティーネに同じ事を尋ねられたとしたら、桃色に小花柄をあしらった、壁に飾っている店のお勧めと思える別の上着を選んでいただろうとエイルは思っていた。たとえその小花柄の淡い色の服であっても、エルデにはよく似合うだろう。だが、エルデを引き立てるにはその色と柄では力不足に感じたのだ。
（引き立てるって……オレは何を言ってるんだ。目立たない方がいいんじゃないのか？）
そう自問したが、正直に言うとエイルはその服を着たエルデの姿を見たいと思っていたのである。
服を買うのはエイルの仕事だった。いったんルーンを切って、何食わぬ顔で目的のものを買って戻ってくるだけだが、女物の服を買うという行為はエイルに予想以上の緊張をしいる事になった。エルデはエイルのその様子を見て、ニヤニヤと笑っていた。
エルデが選んだ靴とエイルが選んだ服を手にしたエルデは、姿を消したままでまずはそれらに着替えた。そしてフードを被ると、今度はエルデが自分自身の下着を買いに行った。もちろん、その買い物はエイルが断固として断ったからだが、エルデにしても本気で頼むつもりはなさそうであった。
エイルの選んだサクランボの花が描かれた紺色の服は、予想以上にエルデに似合っていた。あまりに似合いすぎていてエイルは思わず目を逸らした程だった。
「なんや微妙な反応やな。似合わへんの？」
エイルのその態度に、エルデは不安そうにそう言うと自分の着て

いる服を見回した。
「ち、違うって。すっげえ似合ってるよ」
「そ、そう？」
目を逸らしたままでそう言うエイルの顔をエルデがのぞき込んだ。
「そやったら何で顔を背けるんや？」
「や。ちょっとな……その」
「何やの？」
「ええい、うるさいな。ちょっとドキっとしちまったんだよ、悪いかよ！」
エイルの返事に一瞬きょとんとした顔をしたエルデだったが、それからずっと機嫌がいいのだ。なにせ時折鼻歌まで聞こえてくる程である。
エルデの機嫌がいいのはエイルにとっても悪い事ではなかったが、それにしても少し浮かれすぎではないかという思いもあった。
まだアプリリアージェ達と合流出来たわけではない。
まだラウとファーンの無事な姿を見られたわけではない。
それに、ヴェリーユで落ち合う予定だったハロウィン・リューヴアークやベックと会えるかどうかもわからなくなってしまった。
エイルはつまり、先行きの不透明感の為に胸が不安で埋め尽くされていたのである。
だが、エルデの方はそんなエイルの胸の中はお見通しのようだった。

「合流できたとして、アンタはその後どうするつもりなんや？」
二人は賑やかな目抜き通りを、手を繋いだままでしばらく歩いていた。エルデの言う「洒落たカフェ」とやらを物色していたのだ。
「え？」
不意を突かれたエイルは、思わず立ち止まってエルデを見つめた。
「早う合流せんとアカンなあ、なんて考えてたんやろ？」
図星であった。だが、それに対する答えを持っていない事にエイ

ルはその時初めて気づいた。
「いや……違う事を考えてた」
エイルはごまかした。答えを用意していない試験を受けるのを避けたかったからだ。
「違う事？」
「エルデも結局自分の服を選ぶのには相当時間をかけてたなあ。ネスティの事は言えないよなあって事を、さ」
「な！」
エイルのその一言はエルデの矜持をいたく傷つけたようだった。顔を真っ赤にすると早口で言い訳を並べ始めたのだ。
確かに何年ぶりかにちゃんとした服が着られるとなったら、できるだけ気に入ったものをと思うのは人情だろう。エイルもそれまでひどい状態だったエルデがちゃんとした服を身につけるのは嬉しかったし、出来れば本人が気に入ったものを選んで機嫌良く着てくれたらいいなと思っていた。
だからエルデの言い訳には苦笑しながらいちいち相づちをうった。
「わ、わかってるんやったら別にええんやけど……」
エルデの剣幕が終息を迎える頃にエイルは悪かったと素直に謝った。謝られたエルデはそう言うしかなく、今まで並べ立てていた言い訳に対する言い訳をし出した。
「た、確かに服選びとか、真剣にやると時間がかかるもんやなって言う事がようわかったわ」
「いや、オレは嫌みを言ったんじゃなくて、だな。何というか楽しそうなお前を見てると、良かったなって思っただけなんだ」
「良かった？」
「うん。何がいいんだかわからないけどさ。なんか良かったなって思ったんだよ」
「ふーん……」
どうやらそれでエルデの機嫌はなおったようだった。もちろんエイルはその場を誤魔化したわけではなく、本心でそう思っていた。

ただ、合流出来ない事に対して焦っていたのも事実である。

エイルは改めてエルデの指摘を思い出した。

『合流してどうするのか？』

言われてみれば確かにその通りだった。

エイルと、そしてエルデにも、当初の目的は無くなっているのだ。

ファランドールに残ったのはエルデに尋ねたい事が山ほどあったからだが、それが目的という訳ではない。

とは言え、やる事は決まっていた。問題は、それがかなえられるかどうかである。

今のエイルはルーナーのエイルではなく、ただの剣士エイルだった。

アプリリアージェは高位ルーナー、しかも無類の治癒力を誇るハイレーンであるエルデの事は、仲間として欲しがるだろう。何せルーナーといっても普通のルーナーではないのだ。賢者という肩書きはその辺の貴族より頼りになるはずなのだ。いや、むしろ敵に回したくはないからこそ、手元に、つまり仲間にしておきたいという計算が働いていいはずだ。

翻ってルーンが使えなくなったただの剣士は必要とされるのだろうか？

剣士、いや戦士ならば既に必要数が揃っている。

ただ剣技に長けているというだけでは、留まる理由として必要十分ではない事をエイルは冷静に判断していた。

自分がアプリリアージェであれば、おそらく足手まといの可能性があるエイルをこの先の旅の仲間としては選ばないだろうと。

アルヴィンやダーク・アルヴのような機敏さがあるわけではない。アルヴのような桁外れの腕力も体力もない。風のフェアリーではないから、いざという時の移動は遅い。

剣技も……。

剣技についてもジャミールの里でちょっと「試合」をしただけあり、アプリリアージェがそれを実戦で使えると判断するかどうかはわからなかった。

だが、だからといってエイルはそこで「はいそうですか」とあきらるつもりは毛頭なかった。

ティアナと同じではないか。相手はアルヴで強力な力を持った戦士だが、エルネスティーネを自分の剣で守り、その志を遂げさせてやりたいという思いおいて、エイルのそれと変わりはないはずであった。

そう。エイルはエルネスティーネを守る剣士としてファランドールに残ろうと決めていたのだ。

その事はおそらくエルデもとうに気付いているに違いない。

だが、敢えてエイルに理由を尋ねたのには訳がある。エイルはエルデの問いかけの向こう側を理解していた。

エイルは右手の甲を見つめた。

エルデはこの事を言っているのだ。

「合流した後、いったいどうするのか？」

その問いはすなわち右手の事を打ち明けるのか？という問いであろう。

その手の甲にある痣の理由、いや痣の持つ意味を既に知っていた。いや理解していたと言い換えよう。エイルはわかっていたのだ。自分の持つ数奇な運命を。

エルデに聞いたわけではない。そもそも落ち着いて聞く時間などなかったのだから。

だが、エルデは絶対に知っているはずである。聞けばおそらく答えてくれるだろう。だがそれを聞くことにはまだためらいがあった。

それを察して、エルデは遠回しに問いかけてきたのだ。

「なあ？」

お互いしばらく沈黙していたが、エルデから声をかけてきた。
「何だ？」
「この先は二人だけで旅してもええんとちゃうかな？」
「え？」
「えっと、いや……」
エルデは首を左右に大きく振った。
「うそうそ。今のは無しや。忘れて」
「エルデ……」

ヴェリーユの宿でエルデに右手の甲の痣を見せたのは、エイルのちょっとした戦略だった。エイルはそれが何を表すものかという答えを既に見つけていたから、その推理が正しい事をエルデの態度で証明しようとしたわけである。エイルの見立てでは、エルデもその痣の意味を知っているはずだった。とは言え確信はない。だからあの時、つまり虚を突いてあれを見せる事でエルデがどう反応するかを見て最終的な判断しようと考えていた。もとよりエルデには問いただす必要のある重要事項である。エイルにとってあの場面は良い機会であったと言えるだろう。
果たしてエイルの考えは正しく、その徴を見たエルデは、エイルの同道を断ることはできなかった。

「その痣を見せたら……」
エルデは声の調子を落とした。
「間違い無くエルネスティーネと同行できるやろ。リリア姉さんもアンタを側に置く事を躊躇わへんはずや」
エルデに言われるまでもなくエイルにはそれがわかっていた。だが、それは最後の手段としてとっておくべきだとも考えていた。先に手の内、いや手の甲を見せてはならない。
そしてそれはエルデにしても同じ意見のようだった。
二人だけで旅をする。つまり出来れば痣のことを誰にも知らせず

におくのが一番いいと、エルデはエイルに言ったのだ。
「でも、言わない方がいいんだろ？」
エイルはそう言ったが、エルデはそれには答えなかった。痣の事はまだ……いや、出来ればこの先もずっと誰にも言わない方がいい。それはわかりきっている事だった。
「それよりさ」
エイルは話題を変える事にした。
「お前こそ、これからどうするつもりなんだ？」
エルデは多くを語らないが、おそらく相当訳ありの存在であることは《真赭の頤（まそほのおとがい）》ことシグ・ザルカバードの話からも、もう間違いがない。
プリズムの欠片を集めるという目的も達成してしまった。シグにも会った。そもそも自分の体を取り戻したのである。
ならば賢者としての役目を全うする為にヴェリタスへ戻るのか？
だが、賢者には会いたくないと言うのがエルデの口癖である。正教会に戻る事はあり得ないという言葉も何度も聞いていた。
では、どうするのだろう？
エイルが抱えている大きな気がかりのもう一つがそれであった。
「ウチは……」
エルデはしばらく黙っていたが、意を決したようにエイルに真剣な顔を向けると口を開いた。
「二人旅の話やないけど、アンタと一緒にいたらアカンか？」
それはエイルが予想していた言葉であった。だがエルデの口から素直にそんな言葉が出るとはまったく思っていなかった。つまり、その問いに対する答え……言葉が用意できていなかったのだ。
「アカン……ことはないだろ？」
だから一瞬の間をおいてそういうのがやっとだった。
「そやね。何せアンタにはしばらくはウチが必要なはずや。その痣の事を隠すのも手助けをする人間が必要やろ？今のところその事を知っているんはウチとアンタだけやし、ウチは一応、この世界では

アンタが持ってない知識を相当持ってる」
「そうだな」
おそらく、このままだとアプリリアージェはエルデを仲間として欲するのは間違いないだろう。同道する条件としてエルデがエイルを一緒に連れていく事だと言えば、それはすんなり許可が出るのではないか？
エルデは暗にそうも言ってくれているのだろうと、エイルは考えた。エルデの言うとおり、側に居てこれ以上心強い味方はいないだろう。
だが……。
「いつまで経っても、オレはお前に頼ってばかりだな」
そんな言葉がつい口をついた。自嘲だった。少なくともエルデに対して口に出していってはいけない言葉のはずだった。
だが、そんなことを口に出してしまうくらい、エイルは自分の為にエルデの行動を制約したくなかったのだ。
一緒に居たくないのかと言われれば、そんな事はない。もう二年も一緒に旅をしてきた間柄である。もちろん二人としてではなく、一つの体を共有する存在として、ではあるが。だからエルデのいない日常など、エイルは考えられなかったのだ。

「気にする事はあらへん」
しかしそんなエイルの心情を、エルデはお見通しであった。
「アンタが何を考えてるかくらいは、わかるわ。何せ長いつきあいやしな」
そう、長いつきあいなのだ。
だがエイルはエルデほど相手の事をわかってはないと思っていた。
「ウチの事とかで気に病む必要はないで。ウチにもアンタとは離れられへん理由があるねんし」
エルデはそう言うと繋いだままの手を強く握ってきた。
「え？」

エルデの態度に思わずどぎまぎしたエイルがそう声を上げた。
「え？」
エルデはエイルのその声で、自分が口にした言葉の意味を理解した。
「あ、ちゃうちゃう。誤解や誤解。そう言うんやのうて、別の意味や」
「別の意味？って言うか何が誤解なんだよ」
「いや、そやから……ええっと……ああもうっ」
エルデは一人でなにやら葛藤をしているようだった。そう言うところを隠しもせずに頭を抱えるエルデの姿を見ると、賢者と言う名前がおよそ似つかわしくないとエイルはいつも思うのだ。エイルの体を借りて居る時と、エルデは何も変わっていなかった。
「これは言いたなかったんやけど……」
葛藤の結果、エルデは何かを告げる決心をしたようだった。
「なんだよ」
「実を言うと、ウチはまだ不安定なんや」
「不安定？」
エルデはうなずくと自分の掌を広げて見つめた。
「自分自身に違和感があるんや。精神と肉体が元通り完全に定着した訳やないっちゅう事やろな」
「え？」
「つまりウチの精神がいつこの体から抜けて、アンタの頭の中に戻ってしまうかわからへんねん」
エルデは吐き出すようにそれだけ言うと、続けて「かんにんや」とつぶやいた。何に対してエルデが謝ったのかはわからない。いらついた声でエイルの気分を害したと思ったからか、もしくは再びエイルの体を奪う事になるやも知れない事への詫びか……。
だが、どちらにしてもエイルはそういう事かと合点する事ができた。
「側に居ないとマズい、って言うのはそういう意味か？」

エルデはうなずいた。
「ルーンや呪法と違うて勝手に離れるわけやから、それまで入り込んでいた体、つまりアンタとの距離が離れてるとどうなるかわからへんかなって……」
「ああ、そんな事か」
エイルはそう言うとため息をついて見せた。それはややわざとらしく、少し大げさなものだった。
「そんな事って……」
エルデは気色ばんだ。
「わかってるんか？師匠に聞いたんやろ？下手したらアンタは私の精神に……」
「別にそうなったらそうなったでかまわないさ」
「え？」
「何があろうとファランドールに残るって決めた時に覚悟してるさ。だからお前もオレの事は気にするな」
「いや、さすがにそう言うわけにはいかんやろ？」
「はい、この話はここまで」
エイルはそう言うとフードの上からエルデの頭をポンっと叩いた。
「せやかて……」
「お前が必死にオレの意識が消えないように色々がんばってくれてたって話はシグ・ザルカバードから聞いたよ。だからオレはこう見えてもけっこうお前に感謝してるんだぜ。だいたい、お前も知ってるんだろ？」
「え？」
「オレの記憶は戻ってるんだ。本当ならオレはもうこの世には居ないはずの人間だった」
エイルはそういうとエルデの頭を、今度は拳で軽く小突いた。
「って……何すんねん！」
「ありがとな」
文句を言おうとしたエルデの言葉はエイルの一言で空中分解した。

言葉を飲み込んだエルデは、真っ直ぐに前を向くエイルの横顔を見つめた。
「色々忙しくてちゃんとお礼を言ってなかったろ」
エイルはそう言うとまた頭をポンっと叩いた。
「これはお前に拾ってもらった命だ。いや、再生してもらった命って言った方がいいな。だからオレは今度はこの命を誰かの為に使いたいって思ったんだ」
「そやから、フォウに帰らずファランドールに残ったっちゅうんか？」
「オレの力はファランドール向きなんじゃないかなって考えたんだ。……いや、違うな。守りたい人がフォウにはいなかったから、なんだろうな」
「そうか……」
エルデはそういうと口を閉ざした。

それ以上はもう何も聞かなかった。そしてエイルがそれ以上何かをしゃべろうとしたら、それを止めようと思っていた。
フォウには守りたい人はいなかった……そうエイルは言った。
言い換えるなら、ファランドールにはいると言う事である。ファランドール向きというのは剣技の事であろう。既に剣など競技以外には必要がなくなっているというフォウでは、その競技に対しての興味がないというエイルは、本人の言うとおり居場所がないのであろう。
その剣技で守るもの……。
それはさっきまでの話に戻る事になるのだ。
「ウチには選択肢は無いっちゅう事やな」
しばらくの沈黙のあとで、エルデはそうつぶやいた。
「ネスティを守るエイルを、ウチは守るしかない訳やしな。自分の寝床になるかもしれへん体やし」
「エルデ……」

その言葉に立ち止まったエイルの唇を、エルデが人差し指で塞いだ。そして左右に首を振った。
「もう何も言うな。ちゅうか、聞きとうない」
つり上がったエルデの目は、真剣そのものだった。その目には有無を言わさぬ脅迫めいた恐ろしさが込められていた。時々見せるエルデのぞっとする程の闇の成分を帯びた雰囲気を、エイルはその時感じていた。

エイルとしても本音ではエルデと離ればなれにはなりたくはない。だが自分の勝手な我が儘に巻き込みたくはなかっただけなのだ。だが、自分の体がエルデの役に立つのならば、これほど嬉しいことはなかった。それがわかっただけでエイルはもう満足だった。
だから逆らうつもりはなかった。
「アンタの方から言うたんやで。『この話はこれでおわり』や」
エルデの言葉に小さくうなずいたエイルを見て、瞳髪黒色の少女は吊り上げた目尻を少し下ろして柔らかい表情を見せた。そしてエイルの唇に置いた指をそっと離した。
「さ、早いとこ宿を決めな」
そう言って歩を速めたエルデを、エイルは慌てて追いかけた。
「おいおい、洒落たカフェはどうなったんだ?」
「そやかて、もうすっかり暗くなってもうたやん」
エルデが見上げる空はいつの間にか藍色に変わり、雲の間にいくつか星が見えていた。気がつけば通りの街灯はほとんど灯されていた。
エルデの言うとおり、時刻はそろそろ宵であった。

このあたりに宿屋はあるだろうかと視線を通りに向けると、丁度藤色のローブの一団が最後の街灯に灯りを付け終わったところだった。
「灯火隊だ」

「さっきの連中やな。一通り割り当て区域を回って、ここが最後っちゅうわけか」
目抜き通りの街灯を担当する灯火隊の一団は、確かに第一広場の街灯のルナタイトを灯していた集団のようだった。全員が藤色のローブを纏い、儀仗を手にしている。そして中に一人だけ飛び抜けて小柄な人間がいた。エルデはそれで灯火隊を特定したのだろう。
「あれはアルヴィンやな」
エルデはそう言った。灯火隊はフードを下ろしていて、顔がよく見えた。エイルが目を凝らすと確かに小柄な隊員の耳の先が少し尖っているのがわかった。だが、同時にそのアルヴィンの様子が少しおかしい事にも気付いた。
彼らはエイル達が見守る中、最後のルナタイトが光り出すのを確認すると、すぐ近くの路地に入り込んだ。

「なあ？」
「言うな」
エイルの言葉は即座に封じられた。灯火隊のアルヴィンの様子がおかしい事についてエイルが口にしようとした事をエルデは是としなかったのだ。
それはつまり、エルデもアルヴィンの様子がおかしい事に気付いていると言う証拠であった。
「うちらには関わり合いの無い事や」
エイルはエルデのその台詞を何百回、いや何千回も聞いたような気がしていた。
見るな。
関わるな。
近づくな。
そして『誰も信じるな』
だが、エイルはエルデの忠告を無視するように歩を早めると、灯火隊の消えた路地へ足を向けた。

「エイルっ」
エルデの制止はしかし、効果がなかった。

# 第四十七話　灯火隊の少年

エルデはとっさに小声で何事かを唱えた。その場にごく薄くルーン光が広がった。回転する精霊陣の帯が出ないことから、相当制御したものであろう。エルデは忌々しそうに小さく舌打ちをした上で、しぶしぶエイルの後を追った。だが、エイル達が飛び込んだ時には、その路地にはもう誰の姿もなかった。

とは言え路地は一本道ではなく、そこからさらに横に入り込む通路が無数にあった。そしてエイル達は何本目かの通路に件の灯火隊を見つけた。

そこには藤色のローブを纏い、儀仗を手にした隊員が二名、フードを目深に被って路地を塞ぐように立っていた。

「何の用だ？」

明らかに敵意を持った声がエイル達を迎えた。

だが、エイルは声には応えず、その通路の奥に視線を向けた。

果たしてそこには、先ほど見かけたアルヴィンが地面に倒れていた。藤色のローブは着ていない。濃い灰色の上下服姿のアルヴィンは地面に広がったその長い金色の髪の房を一人の灯火隊員に踏まれて体の動きを封じられており、他の数人が周りを囲んでそのアルヴィンを足蹴にしていた。

アルヴィンは起き上ろうともがくが、髪の毛を踏まれていては頭を上げる事ができず、地面に倒れたままの状態で為す術もなく容赦のない足蹴を受け入れるだけであった。

「薄汚く腹黒いアルヴ族め。のこのこと灯火隊に出仕してるんじゃねえよ」

「もう二度と巡回には来るんじゃねえぞ」

「おい、顔は止めとけ。学校にバレるぞ。蹴るなら腹を狙えよ」

「ふん、アルヴィンの言う事なんざ、もう誰も取り合ってくれるかよ」

「そうだ。そんな先生がいたら、今頃はもう粛正にあってるさ」
「だいたいこいつ、そのアルヴィンご自慢の顔がすでにボコボコじゃねえか。いまさら鼻くらい折っても対して変わらないぜ」
「目もつぶしてやれ」
灯火隊の連中は口々そんな事を言いながら、たった一人を蹴り続けていたのである。靴越しとは言え体を使う者はまだましな方かも知れなかった。数人は自分の手足すら使わず、儀仗を叩きつけていたのだ。
蹴られ殴られ、一方的にいたぶられている当のアルヴィンはしかし、叫ぶでも騒ぐでもなく、ただくぐもった悲鳴を上げるだけだった。抵抗もしない。起き上がろうともがきはするが、基本的にはただなすがままと言った風にエイルには見えた。

「止めろ！」
エイルは叫んだ。一瞬で状態を把握し、どんな理由であれ、アルヴィンをそのまま私刑にさらして置くわけにはいかないと判断したのだ。
通路に入り込んだエイルを制止しようとあわてて二人の見張り役が立ちふさがった。だが、エイルはその二人の動きの逆を付き、難なくその脇をすり抜けた。
「何だ、こいつ」
闖入者の存在に気付いた残りの灯火隊員は、自分達に向かってくる旅装束の茶色い髪の少年を迎え撃つべく、儀仗を構えた。
エイルは彼らに対峙すると、腰に下げていた剣の柄に手をかけた。
「灯火隊の粛正中だ。部外者は手出し無用だ。何の用かは知らんが、我々の邪魔立てをすると、たとえよそ者と言えども容赦しないぞ？」
隊員の中で一番大柄なデュナンがエイルに向かってそう怒鳴った。道に倒れたアルヴィンの髪の毛を踏みつけている青年だった。
だがエイルはその脅し文句に眉一つ動かさなかった。
「放してやれ、仲間なんだろ？」

「仲間だって？こいつが？」
相手のデュナンはそう言うと、これ見よがしにアルヴィンに向かって唾を吐いた。
「アルヴやアルヴィンが俺たちの仲間なはずがないだろ。この、よそ者め！」
エイルはアルヴィンが唾を吐いた時点で剣を鞘から抜きかけていた。柄に手をかけた事はあったが、エイルが妖刀ゼプスを鞘から抜こうとしたのはこの時が初めてだった。
だが、抜きかけた剣は、ほんの数センチほどでその動を止めた。いや、動きを封じられたのだ。
「パラス！」
背後からそう声が響いたかと思うと、エイルの体は動かなくなった。
「アホ！」
続いてエルデの声がした。
エルデはゆっくりと歩いてエイルの横に立つと、大きなため息を一つついた。
「こんな半人前にも届かへん程度の低位ルーナー連中相手にアンタがわざわざ剣を抜くとか、めちゃくちゃやな」
動きが封じられていたのはもちろんエイルだけではなかった。その場に居た全員が固まっていた。
「まったく。弱い者いじめにも程があるわ」
エルデはそう言うとエイルの肩に手を触れ、小さく何かをつぶやいてルーンの拘束を解いた。
「まずは、剣から手を放し」
エイルは言われたとおりに剣の柄から手を離した。それを見届けたエルデは、改めて相棒を睨み付けた。
「とりあえず、この場からは逃げるで。お説教は後や」
そしてアルヴィンの髪の毛を踏んでいるデュナンを突き倒すと、うずくまっているアルヴィンを軽々と抱き上げて肩に担いだ。

「右手は大丈夫なんやろな？」
「え？」
エルデの言う事が即座には理解出来なかったエイルだが、言われて右手の甲に目を落とした。革の手甲で肌は直接見えなかったが、特にそこに何か変化があったような感覚はなかった。
「行くで」
エルデはエイルの表情を見ると少しだけ目尻を下げた。そして答えを聞く前にさっさと歩き出した。
エルデのその一連の動きに考えが付いていかないままだったが、エイルはとりあえず妖剣ゼプスが鞘に収まっている事を確認すると、辺りに目をやった。
エイルの足下にはアルヴィンの少年が着ていたものと思われる藤色のフード付きローブがうち捨てられていた。側に同じ少年のものと思われる儀仗もあったが、こちらは見事にへし折られていた。
エイルはローブだけをそっと拾い上げると、遠ざかるエルデの後を足早に追った。

エイルの目からは、エルデは楽々とアルヴィンの少年を肩に担いでいるように見えた。歩みも一人で歩いている時と変わらず軽やかで、とても大きな荷物を肩に乗せているようには見えなかった。
だいたい、肩に担ぎ上げる時も、エイルは道に落とした紗（うすぎぬ）を無造作に拾い上げているようにしか見えなかったのだ。
アルヴィンが小柄だとは言え、デュナンの平均的な十四、五歳程度の大きさはある。確かに身軽な種族だとは言え、体重がないわけではないのだ。
エルデの腕力が尋常ではない事は既に本人も認めているところなので、エイルの前ではそれを隠す事を止めたのであろう。
エイルはその時、ヴェリーユの宿でエルデに組み伏せられた事を再び思い出していた。
無意識に首をさすりながらエイルは考えていた。自分が持ってい

る常識的な「女性」の先入観というものは、少なくともエルデに対しては通じないという事を。

路地に出て、別の通路に入り込むと、そこでエルデはルーンを唱えた。今度は存在感ではなく姿を消すルーンだった。

「とりあえずは落ち着く場所が必要やな」

エイルもその意見には賛成だった。

「このアルヴィンの学生はここで放り出したいとこやけど、関わってもうた手前、そう言うわけにもいかへんやろからな。それにこいつ、思ったより重傷や」

エイルは口に出かかった言葉を飲み込むと、何も言わずにうなずいた。エルデの意図を理解した今、ここは一刻も早く何処か治療できる場所に移動するべきだと判断したのだ。

二人ははぐれぬように手を取り合うと、とりあえず姿を消したまま大通りへ出た。そして適当な宿を見つけると部屋を確保した。

エイルの常識からするとやや高い部屋だったが、交渉をしている余裕はなかった。事件の場所からそこそこ離れた場所で、大通りの角にあるその宿は、おそらく立地条件から相場よりやや高いことは予想されたし、何より早くアルヴィンの少年の手当をする必要があった。

透明化ルーンを解除したエイルがとりあえず一人で広めの部屋を確保、その後透明化したままの二人を部屋まで誘うという手順である。

エルデの指示は規模が大きめで立地が良く、一階が賑やかな店をと言う事であった。

その頃のファランドールの宿は通常一階が食事を饗する場所でいわゆる飲み屋や食堂となっており、二階以上が宿泊部屋という作りになっているのが普通だった。その一階の飲食店部分が賑わっていた方が何かと都合がいいというのだ。

当然ながらアプリリアージェやラウ達との合流を考えての事だが、

エイルもその辺りはだんだん理解しつつあった。

軽々と三階の部屋までアルヴィンの少年を担ぎ込んだエルデは、早速ベッドに寝かせると、服を脱がせ始めた。

「オレがやろうか？」

それを見てエイルは声をかけた。エルデは不思議そうな顔でエイルを振り返ったが、すぐにエイルの言葉の意味を理解して顔を赤くした。

「全部は脱がさへん。変な事いいなや！」

エイルはしまったと思った。

その時のエルデは完全なハイレーンになっていたのだ。相手を治療する事に専念していたから、服を脱がすという行為を治療の準備としてしか考えていなかったはずだ。エイルの一言はそれに水を差してしまったと言う事である。

まさに要らぬ世話、余計な一言であった。

「う……」

肌着を脱がされ、その肌をあらわにしたアルヴィンの少年の体を見た二人は異口同音に小さく声を出した。

痣だらけだった。大小取り混ぜた紫色や赤黒い痣が、それこそ隙間無く体中にちりばめられていた。

エルデは少年の泥と一緒に顔に張り付いていた金色の長い髪を払った。

そこには端正なはずのアルヴィンの面影はなかった。

つぶれて腫れた両目、どう見ても折れたように曲がっている鼻、数センチも裂けて、肉が盛り上がり、その上からかさぶたが張り付いている口。こびりついた血は一部が耳の中から出てきたもののようだった。左耳などは半分ちぎれたようになっていた。

「ひどい……」

エイルはそれを見て拳を振るわせた。改めて怒りがこみ上げてき

たのだ。
「大丈夫や。ここはウチに任せとけばええ。アンタの仕事は、絶対怒りにまかせて興奮せえへん事や」
エルデは静かな声で諭すようにエイルに向かってそう言った。
当初エイルがその少年の後を付けようと思ったのは、そのむくんでつぶれた顔を見たからだった。彼はその少年のような顔に見覚えがあったのだ。
もちろんそのアルヴィンが知り合いだと言う事ではない。
「フォウの学校でも、集団には同じような顔をしたヤツが必ずいたんだ」
エイルがそう言うとエルデは首を横に振った。
「わかってる。何も言わんでええから、とりあえず水を汲んできてもらおか」
エルデはそう言ってエイルの話をそこで終わらせると、儀仗を取り出した。
「ノルン！」
前方に突きだした手に三色の木で撚られた儀仗が現れた。エルデはそのままの格好で続けて違う名を告げた。
「スクルド！」
手に握られた儀仗は一瞬発光すると、真っ白に変化していた。エルデがハイレーンとして力を使う時に、ノルンはスクルドという白い儀仗に変化させられるのだ。かつてエルデがエイルに説明した話では、スクルドは全ての属性の精霊波と等しく「交信」出来るのだという。エルデはそれを「全く同じ量の精霊波を精密に入出力するように調整した儀仗」と表現した。指定した一種類の精霊波のみを純粋に取り出すように調整したのが、黒い儀仗ウルド。指定した二種類の精霊波を等しく扱えるのがヴェルザンディという茶色い儀仗の名である。基本形のノルンはエルデの意志に反応して自動的に必要量の精霊波をやりとりする事が出来るもので、その分効力が低いのだという。

エイルの知る限り、エルデはほとんどをノルンでまかなっていたが、ここぞという場合には特化した儀仗を使う。ウルズでは呪法と攻撃系のルーンを。ヴェルザンディでは強化ルーンを、そして治癒はスクルド。

ヴェリーユの宿でファーンを治療する時同様、そのスクルドを出したという事は、ノルンよりも強力で繊細なルーン制御が必要だという事であった。

エルデが何事かを唱え始めた。治療の開始である。

エイルとエルデの会話はそれで途切れることになった。ここからしばらくはじゃまは出来ない。エイルも口にはしてみたものの、それは決して進んでしゃべりたい話ではなかった。だからエルデが治療を始めた事は彼にとっても助け船のようなものだった。

エイルとしては自分の衝動的な行動に対する言い訳を始めようとしていたのだが、それについてはもうエルデからのおとがめはないという事のようだった。

もちろん、容認しているわけではないだろう。だがエイルはエルデのその一言に「気持ちはわかる」と言われたような気がして心が少しだけ軽くなった。

「ホンマにひどいな」

一通りの詠唱が終わると、エイルはそう言って儀仗ノルン……いや、真っ白な儀仗スクルドを下ろした。治療の間中、鈍く光っていたスクルドが詠唱の終了に伴って発光を止めた。それはつまり、治療が終わったという合図であった。

ベッドに横たわるアルヴィンの少年は、さっきまでとは別人のような端正な顔立ちで横たわっていた。骨の折れた鼻は元通りになっており、裂けた口も、腫れてただれた肉も全て元通りで、強いて言えばまだ多少目の周りが腫れぼったい、といった感じではあるが、体中にあった痣にいたっては影も形もなくなっていた。

「すごいな……」

運び込んだ時とはまるで別人のように回復したアルヴィンの少年を見下ろしながら、エイルは感嘆の言葉を偉大なハイレーンに告げた。それは感心ではなく、もはや尊敬の念が込められた言葉であった。

「はん。ウチを誰やと思てんねん」

「いや……お前は本当にすごいよ」

いつものように胸を反らして冗談めかすエルデに、しかしエイルは真顔でそう言うしかなかったのだ。それほど見事にアルヴィンの少年は回復していた。

「そ、そやな。まあ、やっと感覚が戻ってきてファーンの時よりもルーンの繊細な制御がそこそこできるようになってたしな」

エルデはエイルの真剣な言葉を受けて少し顔を赤らめると目を泳がせながらそう言った。

「でも、あのままやったらたぶんコイツ、本当に死んでたで。内出血がひどかったわ。あと、一番心配したんは目やけど、何とか失明はとりとめた。眼球破損がひどうて、網膜はなんとか元通りになったけど、形状修復にはもう少し時間をおいて様子を見た上で、再度施術して微調整する必要がある。それでも状態が悪かった左目の視力回復にはしばらく時間がかかるやろな。だいたい内臓損傷させるまでいじめるか？普通」

そう言うエルデの気配が一瞬だけゾッとするものに変化したが、すぐに収まった。

「それから、気になることが一つ」

「気になること？」

「妙な匂いがするんや。初めは服に移った何かの匂いかとおもてたんやけど、このアルヴィンの髪と皮膚に染みこんでる匂いやな」

「匂い？」

エルデは眉根にしわを寄せると、声を低めた。

「ウチの知らん匂いや。複数の果物が腐る寸前のような、すえたようで、甘いようで……」

「オレには匂わないけど……」
「せやろな。うちにも微かに匂うだけや。ただ、ちょっと胸がザワザワする匂いなんや」
「ふーん」
「それより！」
エルデは何かを思い出したかのようにエイルを睨むと、その胸ぐらをいきなり掴んだ。
「あんな事、もう二度としたらアカンで！」
「あ……ああ」
「なんや、その生返事は！」
「わ、わかったよ。わかったから離せ。息ができないって！」
「わかってへん！怒りに任せたら、アンタは暴走してまうかもしれへんのやで？ウチはそう言うたはずやろ！」
「わかった。悪かった。気をつけます。すまん。ごめんなさい。もうしません。だから放して……」
冗談めかしたわけではないが、エイルはそう言うのがやっとだった。それほどエルデの締め付けは強かったのだ。
「まったく……」
「ホンマにさっきは肝冷やしたわ」

キアーナ・ペンドルトン。
それがアルヴィンの少年の名前だった。
しばらくして目を覚ましたキアーナは、エイルの顔を見て「あっ」と声を上げた。
彼はエイルが自分を助けようとして近づいたところまでは記憶があったようだった。
起き上がって自分が寝ていた部屋を一通り見渡すと、キアーナはようやく状況を把握したのか、すかさず礼を述べ、すぐにベッドから降りようとした。

エイルは慌ててそれを止めた。
「これ以上ご迷惑をおかけするわけには参りません。それに……」
しかしキアーナはそう言うと、そのまま不安げな視線を窓の外に向けた。雨戸を閉めていない窓からは、ルナタイトの光で浮かび上がっている目抜き通りの建物の一部が見えた。
「早く宿舎に帰らないと、舎長に叱られてしまいます」
「帰るって……」
エイルはその言葉を聞くと、ますますキアーナを帰すわけには行かなくなった。
「君はあんな奴らが居るところに帰るつもりなのかよ？」
「ええ」
「ええ、じゃないだろ？死にかけてたんだぞ？いや、エルデが居なかったら死んでたんだ。そんなひどい事をされて、それでも帰るなんておかしいだろ？」
「死にかけていた？」
キアーナは不思議そうな顔で自分の体を見渡し、次いで思い出したように顔を撫でさすった。
「あれ？」
ようやく不思議な事が起こっている事に思い当たったキアーナは、部屋の中を改めて見渡し始めた。
そこへぬっと言う表現そのままに、手鏡が差し出された。
いや。
キアーナには、手鏡が空中に突然出現したとしか思えなかった。だが、驚いた後にもう一度よく見ると、手鏡を持つ手が見えた。細いながらもやわらかそうなその指は、女性のものだと直感でわかった。その指の続きを目で追うと、そこにはその部屋に今まで存在していなかった女性が自分を睨むようにして立っていた。
「うわっ」
キアーナは思わず声を上げてベッドの上で後ずさった。反動で背中が壁に当たる。

「痛っ」
「忙しいやっちゃな」
手鏡を差し出した髪の長い女性、すなわちエルデはそう言うとため息をついた。
「だいたい、こんな超絶美人を見て『うわっ』はないやろ？」
「超絶美人って……」
エイルは思わずそう突っ込みを入れた。
もとより澄ましているとエルデはどう見ても相当な美人である。
ただしそれは恐怖が伴うような、恐ろしい美しさと言っていい。ある意味キアーナの反応は本能に従順だと言えた。
エイルは心の中に作られた映像としてその姿形を長い間見てきただけに、さすがに免疫があった。とはいえ自分の心の中で「妹」だと思い込んでいたエルデの実物を目の当たりにした時はさすがにその恐ろしい美しさに息を呑んだのも確かである。

だが、キアーナにはエイルのような免疫はなかった。
目が合った時から、自分からは視線を逸らす事が出来なくなった。そしてもはや身動きも出来ない。同時に背中に冷たいものを突っ込まれたような、ゾッとする感覚に苛(さいな)まれた。
「瞳髪……黒色？」
あまりの驚きのため、思考が停止していたわけでもないのだろうがキアーナが目の前の少女、つまりエルデの持つ身体的な特異性に気付いたのは少し経ってからだった。
「見るのは初めてか？」
思わず声を出したキアーナに、エイルは落ち着いた声でそう尋ねた。
キアーナは首を横に振った。
「プロット先生……正式には統括教授長って言うんですけど、その先生のところで昔、一度。ああ、でも生きたピクシィを見るのは初めてです」

キアーナのその言葉は、エイルとエルデの目を見開かせるのに充分な力を持っていた。

二人は顔を見合わせた。

キアーナはしかし自分が口にした事をすぐに後悔していた。慌てて口を塞ぐと、ようやくエルデの視線の呪縛から逃れて、うつむいた。

「その話、もう少し詳しく聞かせてもらおか？お前は死んだピクシィなら見た事あるんやな？」

エルデの声が詰問調に変わった。だがキアーナはうつむいたままで、顔を上げようとしなかった。返事もない。

「言うとくけどな」

エルデはドンっと一度だけ床を踏みならした。キアーナはびくっとして、思わず顔を上げ、結果として再びエルデの顔を見る事になった。そこには目を吊り上げた、さっきよりもよほど恐ろしい雰囲気を纏う少女が立っていた。

「それだけの治療をさせといて、タダでここから帰れると思てへんやろな」

「おい、エルデ」

「うるさい、アンタは黙っといてんか」

エルデはそう言うと持っていた手鏡をキアーナに放って寄越した。キアーナは救われたように視線を膝元に動かすと、手鏡をとってそこに映る自分の顔を眺めた。

「ええ？」

またもや思わず顔を上げたキアーナにエルデは畳みかけた。

「ウチは慈善事業家やないんやで。口の裂傷の治療と形成、ちぎれた耳の縫合、折れた鼻骨の修復、全身にあった内出血の解消と一部内臓の修復、眼球の修復に眼窩形成、併せて施した増血の為の細胞活性化治療等々、いったいいくらすると思てんねん？」

「いえ、それは……」

キアーナは口ごもると、改めて手鏡に映る自分の顔をのぞき込ん

だ。あれほどひどい状態だったものが、完全に元通りになっているのを視覚的にも確認した。
キアーナは自分の鼻をつまんでみた。感覚がある。
「僕はどのくらい眠っていたんでしょうか？」
「一時間ほどだ」
「えええええ？」
「ウソじゃない」
キアーナは再び鼻をつまんだ。どう考えても作り物ではなさそうだった。そして次に彼がした事は、頬をつねってみせる事だった。
「痛てて」
「夢とちゃうわ！」
キアーナのその仕草を見て、エルデは業を煮やしたようにそう言うと、キアーナの側に寄り、いきなり胸ぐらを掴んだ。
「金は持ってるんか？」
キアーナは必死でかぶりを振った。
「ほんなら、違うもので払ろてもらうしかないやろ」
「ち、違うものって？ごらんの通り僕は貧乏学生で……」
「誰もお前のケチな持ち物を巻き上げようなんて思てない」
「と、おっしゃいますと？」
「話せ」
「え？」
「情報や。ウチらはハイデルーヴェンに来たばっかりで、最近の情報に疎い。そやからお前の知っている事を教えてくれたら、治療代は勉強したる」
「勉強って、タダにするんじゃないのかよ？」
エイルはまたもや突っ込みを入れざるを得なかった。
「だから、アンタは黙っとき！」
そう言ってエルデは振り返るとエイルを睨み付けた。
「へいへい。でも、あんまりそいつをおびえさせるなよ。ただでさえお前は黙ってるだけでも充分怖いんだから」

「人を化けもんみたいに……」
エルデはムッとしてそう口にしたが、そこで言葉を止めた。そしてエイルが怪訝な顔をすると目を逸らし、キアーナに視線を戻した。
「何で集団リンチなんかに遭うてたんや？何かやらかしたんか？」
エルデは直接的な言葉でいきなり核心に触れてきた。勢いで言わせようという魂胆だろうな、とエイルは思った。
そもそもエイル達とキアーナや他の灯火隊の連中とは何のつながりもない。利害関係がなく、言わば恩人であるエルデに対しては理由を話してくれるだろうと言うエルデの戦術なのかも知れなかった。もしそうならば、確かにこの場はエイルは黙っていた方がよさそうだった。
「見たとこ、お前は頭はよさそうやけど気は弱そうや。試験でいっつも上位やから妬まれてんのか？」
試験の上位にいるからと言ってあそこまでの仕打ちをするとはエイルには思われなかったが、それもエルデはわかった上での質問なのだろうと思った。「違う」と答えたら「じゃあ、何だ？」と問うて、しゃべり出すきっかけにすればいいだけの話だ。
果たしてキアーナは少しの間逡巡した後で、素直に質問に答えた。だが、その答えは予想だにしていなかったものだった。
「理由なんて……そんなの決まってるじゃないですか」
「決まってる？」
「そうです。見ての通り、僕がアルヴィンだからです」
エイルとエルデは思わず顔を見合わせた。
「アルヴィンだって言うだけの理由なのか？」
エイルの問いに、キアーナは不思議そうな顔を向けた。
「そう言うたら……」
エルデはエイルの肩を掴んだ。
「さっきの第一広場にも、目抜き通りにも、デュナンしかおらんかった事ないか？」
「え？」

エルデにそう言われて、エイルは記憶をたどった。
もともとサラマンダもウンディーネもデュナンが主体の国である。
だからこの大陸に居る限り、アルヴ族が少なくても気にはならない。
それでもヴェリーユではまだごく少数だがアルヴの姿を見た。
だが……。
アルヴが少ない事と、まったくいない事とは意味が違う。
エイルはエルデの指摘で気付いた。
渡船の中にもアルヴィンやアルヴらしい姿はなかった。
そしてここ、ハイデルーヴェンでも。
目抜き通りでキアーナの尖った耳を見た時に、アルヴィンだととっさに思って注視したのは、この町に入って初めてアルヴィンを見つけたからかもしれなかった。

「どういう事や？」
エイルの沈黙はエルデの問いかけを肯定するものだった。
エルデは改めてキアーナに面と向かうとそう問いかけた。
「ウチらはそういう事情をまったく知らんよそ者や。わけを話せ」
キアーナにとっての常識はエルデ達にとっての常識ではなかった。
だがキアーナは自分の常識が広範なものだと思っているようだった。
だとしたらハイデルーヴェンだけの話ではない。この先ウンディーネ国内を移動するつもりなら、知っておかねばならない重要な話だった。
「本当に知らないんですか？」
キアーナはエイルとエルデを交互に眺めた。そしてその顔に冗談めかしたところがない事を確認するとがっくりと肩を落とした。
「まだウンディーネ中には広がってないんですね……良かった」
「良くない！というか、早よ説明せい！」
エルデは苛立ちを隠さずに、キアーナにぶつけた。
エイルはエルデのその様子を見て、思い当たった。
「おい、ひょっとしたらリリアさんやネスティが危ないんじゃない

のか？」
「気付くんが遅いわ。連中だけやのうてラウやファーンもやな」
「頼む、訳を話してくれ。俺達の、アルヴやアルヴィンの仲間がここに来るんだ」
エイルの声に反応して、キアーナは顔を上げた。
「本当ですか？」
「お前に嘘言うて、ウチらに何の得があるんや？」
エルデは再びキアーナの胸ぐらを掴むと、今度はそのままその体を持ち上げた。宙づりにされたキアーナはさすがに小さな悲鳴を上げた。
「エルデ！」
目尻を吊り上げて吊り上げたキアーナを睨み据えるエルデに、エイルはたまらず声をかけた。
「ウチは気が短いんや」
エルデはそう言うと手を離し、キアーナをベッドに落とした。
「お前がいじめられる理由はともかく、アルヴ叩きの訳を先に話せ。お前の知ってる範囲でええから！」
もともと抵抗するそぶりのないキアーナは、エイルとエルデが本当に何も知らないのだと認識すると、素直に事の次第を話し始めた。

事の発端はキアーナにも定かではないという。
もともと学生達には根強い種族間の対立があって、それはキアーナがハイデルーヴェンにやってきた時からそうだったという。
「僕がここのルーン解析研究科に入った時には、既に学校の中で種族ごとの派閥のようなものが出来ていて、ことあるごとに対立していました。それからもう五年になりますが、数で圧倒するデュナンのアルヴ叩きがだんだんあからさまになってきて、今ではもうアルヴ族は一人では外も歩けなくなってしまいました」
アルヴに対する差別や迫害は学校側、つまりは体制が黙認しているようなものだとキアーナは言った。

当初はケガをしたアルヴ族がいても見て見ぬ振り程度であったものが、最近ではたとえ大けがを負ったとしても、医師すらあからさまに診察拒否をするまでになっていた。

そしてついに去年くらいからは、ケガによる死人まで出るようになった。

だが、当然ながら自警団は動かない。

不注意による事故だと処理された者はまだいい方で、最近では事件そのものが無かった事になっているという。

「僕の友達も、先週階段から落ちて頭を打ったとかで……医者もハイレーンも来てくれず、そのまま……」

アルヴの中でもハイレーンはエルデの想像通り真っ先に狙われたという。

「お前はコンサーラか？それともエクセラーか？ウチには結構力のあるルーナーに見えるんやけどな」

「それは……」

キアーナはまたもやうつむいた。だが今度はエルデが叱咤する前に顔を上げた。

「プロット先生のおかげなんです。元々はたいしたことはなかったんですが……あ、いえ、今のは忘れて下さい。とりあえず人前では絶対にちゃんとしたルーンを使うな、と強く言われています」

「元々はたいしたことがなかった？」

エルデは「忘れろ」と言った部分を敢えて復誦した。だが、エルデの興味はそこにはなかったようだった。

「その、さっきから名前の出てるプロット先生というのはどういう人物なんや？アルヴか？」

エルデの問いにキアーナは首を横に振った。

「デュナンです。でも、教授は今でも自分の学生には分け隔て無く接してくれます。先生の取り計らいもあって、多少の嫌がらせはありましたけど、なんとか今まで無事に過ごしていたんですが……」

「そのプロット先生のご威光も効かへんくらいの状況になってきた

っちゅう事か？」
　キアーナは悔しそうにうなずいた。
「町がそんな状況やのに、灯火隊に入って外に出てたんは何でや？」
　エルデの疑問はもっともだった。
　アルヴ族であるアルヴィンは耳を隠せば遠目にはデュナンと見分けがつかないとは言え、灯火隊はキアーナの正体を知っているわけである。キアーナの話が本当だとしたら、彼が灯火隊と行動を供にする事は自殺行為と言えるだろう。
「灯火隊はそれに選ばれる事自体が名誉な事ですが、僕のような貧乏な推薦学生にとっては、授業料と寮費が免除される、言ってみれば生活の糧でもあるんです。一日休むとデュナンの隊員にはズル休みだと報告されて、除隊させられてしまいます。
「いや、そもそもそんな状態やったらなんとでも理由は付けられて結局除隊させられるやろ？」
　エルデは不快な感情を隠さず、キアーナにその苛立ちをぶつけた。
「ちょっと考えたらわかりそうなもんやろ？死んだら寮費とか学費とか言うてられへんやろ？」
「おい、エルデ」
　あまりの剣幕にエイルが口を挟んだが、エルデの憤慨は収まらなかった。
「だいたい、そのプロットという学者、確か教授長って言うてたな？お前の言うようなできた人物やったら、困ってる自分の学生を何とかしてくれるんとちゃうんか？」
「そうかもしれません」
「わかってるんやったら……」
「僕のせいでプロット先生に迷惑をおかけしたくないんです！」
　エルデの剣幕に、キアーナは大声で抗した。そのあまりの剣幕に、さすがのエルデも毒気を抜かれたかのように一瞬言葉を失った。
「プロット先生は素晴らしい人です。ルーンの解析については、お

そらくファランドールでも一、二を争うんじゃないでしょうか。少なくともシルフィードやドライアドのバードより、ルーンの事は深く理解されている方です。僕が頼ったら何とかしてくれるかもしれません。いや、先生の事ですからきっと何とかして下さろうと各方面に強く働きかけるかもしれません。でも、最近は本当に異常なんです。この町はもう、アルヴ狩りと言ってもいいような雰囲気になってしまってます。だから僕なんかをかくまったりしたら、いくらプロット先生でもただでは済まないかもしれないじゃないですか？そうでしょう？」

そう言うと、キアーナは声を立てずに肩を震わせた。涙を流しているのは、膝に置いた手に落ちる滴でそれとわかった。

自分の意志も気も弱くて、ただされるがままのおとなしい学生だと思っていたキアーナがエルデ達に初めて見せた激しい感情だった。

「反アルヴ運動の首謀者は誰や？」

エルデはキアーナの震える肩をじっと見つめていたが、ややあってそう尋ねた。

「首謀者……？」

キアーナはエルデの問いかけの意図をはかりかねたようで、ぼんやりした声で聞き直した。

「おるやろ？実行部隊をとりまとめてるヤツが」

「いえ、僕はふだん研究室にこもりきりで、あまりそういう事には詳しくないんです」

「なんちゅうか、ホンマに使えんヤツやな。首謀者やのうてええから、煽動したりしてる声の大きいヤツ知らんか」

「ちょっと待った」

エイルがたまりかねたようにそう声をかけた。もちろんエルデに向かってである。

「今度は何や？」

うるさそうにそう言うと、エルデはじろりとエイルを睨んだ。

「念のために聞くけど」

「そやから何やねん？」
「その首謀者だか声が大きいヤツだか知らないけど、そいつの事を聞いて、お前は一体どうするつもりなんだ？」
「決まってるやろ」
エルデはつまらない事を聞くな、とでも言いたげに鼻を鳴らした。
「ぶっ殺す」
「えええええ？」
悲鳴を上げたのはキアーナだった。
「そんな物騒な事は止めて下さい」
「何言うてんねん！」
エルデはそう言うと今度はキアーナを睨み付けた。
「お前がやられた事やろ？目には目を、や。こうなったらまずはお前をこんな目にあわせたさっきの灯火隊の連中をぶっつぶしたるっ」
「いやいやいや」
またもやキアーナの胸ぐらを掴んだエルデをエイルは慌てて制した。
「ちょっと待てって」

まるで自分の事にように怒りをぶつけるエルデを見て、エイルにはそれが本気だと言う事がわかった。
そのままでは本当にすぐにでも部屋を出て行きそうな勢いだった。だからこそ止めたのだが、エイルはキアーナの件に対するエルデの行動に戸惑っていた。
「どうしたんだよ。お前らしくないぞ？」
「ウチらしゅうない、やて？」
エイルの制止を比較的素直に受け入れたエルデは、すんなりとキアーナの服を掴んでいた力を緩めた。
「そうだろ？そもそもお前はこういう事をするなっていつもオレに言う立場だったろ？」
「あ……」

エイルのその一言は予想以上に効果があった。
エルデは目を見開くと絶句した。
「ついさっきもオレのした事を止めたじゃないか。お前がオレになってどうするんだ？」

エルデの激高はエイルにも予想外のものだった。
煮え切らない態度のキアーナに腹を立てるのはわかる。それはいつものエルデに他ならない。だがキアーナの話を聞いた後は、完全に怒りの矛先が変わっていた。そもそもキアーナの言う事を完全に真に受けすぎている事がどうにもエイルは気になった。
これではまるで……
「今のお前は、まるでオレみたいじゃないか」
エイルの言葉を聞くと、エルデはゆっくりと、そして深く息を吸った。自分の激高を認識して落ち着こうとしているのだろうか。エイルにはその考えが正しいのかどうかはわからなかったが、深呼吸の後に少しうつむいたエルデの顔がひどく寂しそうだったのが気になった。
「ウチが……アンタみたい、か」
目を伏せたままそう言うと、エルデはそのまますとんとベッドに腰を下ろした。
「知らん間にアンタに感化されてもうてたって事かな」
「感化？」
「アンタの中に入ってた時間が長すぎたんかもしれへん。いつもは先に動く……ううん、いつもやったら今のウチの台詞は全部アンタが言うはずのもんやな。まったく……」
エルデはそう言うと頭を抱えた。
「あ、あの」
「何？」
おそるおそる声をかけたキアーナにエイルは顔を向けた。
「今の『中に入っていた』って、どういう？」

「何でもあらへん。こっちの話や」
エイルが答える前に、エルデがぴしゃりとそう言った。何もしゃべるな、という意味だろう。
エイルは素直に従う事にした。
「なあ、エイル？」
「なんだ？」
「逆に尋ねるわ。いつもやったらさっきみたいに後先考えずに動こうとするアンタが、今は妙に冷静なんは何でやのん？」
エルデの指摘はある意味でもっともだと思われた。
いつもはエイルが感情を爆発させて、エルデがそれを強力に制御する役目だった。だが、今は完全に逆転している。
「気になる事があるんだ」
「気になる事？」
エイルはうなずくと、顔をキアーナに向けた。
「君にちょっと聞きたいんだけどさ」
「はい」
「その、プロット教授って言う人の名前だけど、それは本名なのか？」
「え？」
「妙な質問だとは思うけど、訳は聞かないでくれ。ルーン研究の第一人者だって言ってたけど、若い頃からずっとその研究をしているのか？」
キアーナに質問するエイルを、エルデが怪訝な顔で見つめていた。エルデはそれを視界に感じながら続けた。
「教授は普通のデュナンなのか？君の常識から見てでいい、何か変わったところはないか？風変わりなクセとか言葉に妙な訛りがあるとか、あとはそうだな、常識では考えられないような事を知ってたり、やってのけたり……何かを隠そうとしたり……」
キアーナは最初はエイルの言っている意味をはかりかねるようなポカンとした表情で聞いていたが、すぐに眉をひそめてエイルの顔

をじっと見つめた。
「あなたはプロット教授の事を、ご存じなんですね？」
「いや。さっきも言ったとおり初めて聞く名前だし、そんな人がここにいる事もオレ達は知らなかった」
エイルはそういうとエルデの方へ顔を向けた。エルデはそれに小さくうなずいて答えた。
エイルが何を気にしていたのかがエルデにはもうわかっていたのだろう。止めようともしないところを見ると、このまま続けても大事ないという意味だとエイルはとらえる事にした。
「どうなんだい？」
「確かにそこまで著名な学者やったら、ウチの知識にあってもええはずやな。一体何もんや？」
エルデの後押しのような質問は、注意深い人間ならちょっとした疑問を持ちかねないエイルの質問を補完、いや希釈する効果があると言えた。
「ペンドルトン君？」
キアーナは三人しかいない事がわかっているはずの部屋を、まるで他に誰か居ないか確かめるように見渡した後で口を開いた。声を潜めて。
「プロット先生にはおっしゃるように謎が多いんです。僕も詳しく知っているわけではありませんが、なんでも十年ほど前に首都島アダンの偉い人だか資産家だかの紹介という事でこの町に突然現れて、最初から研究棟をあてがわれたって聞いています。ハイデルーヴェンに来る前の事はほとんど知られていませんし、実はアダンには教授長を知る人はあまり居ないという噂もあります。その件について一度直接尋ねてみた事があるんですが、普段は穏やかな人なのにその時は厳しい顔で『二度と聞くな』と強く言われて……それっきりです」
その言葉を聞いたエイルは思わず目を見開いた。同時に鼓動が早くなってくるのがわかった。

「何しろすごい人です。それまで曖昧であまり知られていなかったエーテルとルーンの関係を次々に解明して、いくつかの精霊陣を開発されました。ご自身はルーナーでもフェアリーでもないのですが、教授の作り出した精霊陣はルーナーには非常に効果的なものでした。その功績ですぐに特待教授になって、今ではルーン解析学と応用エーテル学では教授長です」

「プロットは……偽名じゃないのか？」

エイルの問いに、しかしキアーナは首を横に振った。

「僕にはわかりません。さっきも言ったとおり、あまり教授の事は詮索できないんです。噂は色々ありますけど、どれもただの憶測ですよ」

肩をすくめてそう答えるキアーナに、今度はエルデが質問を投げた。

「名前は？プロットは族名やな？名前は何て言うんや」

「名前は、キセンです。教授はキセン・プロットと名乗っています」

そう言ったキアーナの目の前で、大きく唾を飲み込む音がした。

それはエイルのものだった。

「なんだって？」

絞り出すような声でエイルはそう言うと、キアーナの両肩を掴んだ。

「もう一度言え」

キアーナの細い肩を揺すりながら、エイルはそう怒鳴った。

「エイル？」

今度はエルデがエイルを止める役だった。キアーナが教授の名前を告げたとたん、エイルの形相が一変したのだ。

「もう一度言え、キセン……プロットだって？」

自分が一体何をしでかしたのかがわからない哀れなキアーナは、エイルに揺すられるまま、おびえた顔をしてうなずくだけだった。

# 第四十八話　芽生える疑惑

倉庫街には人通りがなかった。
夜になっていた事もあるが、そもそもその一角は倉庫街でも古い区画のようで、今後改築か、あるいは大幅な改装が為されなければ使い物にならない状態の、つまりは倉庫としての役をすでに終えているような建物が多かった。
メリドの話では、十年程前に街に運河が掘られ、運河に沿って新しい倉庫街が誕生したのだという。この辺りの倉庫街は、ハイデルーヴェンという街を作り上げる為の基地として生まれ、その使命を全うしたのである。ある意味で廃墟街と言えたが、年内にも新しい研究施設に生まれ変わる計画があるという。
ヴェリーユからハイデルーヴェンまで続く地下通路は、この倉庫群が今後取り壊され、この区画が再開発される中で発見されることになるのか、あるいは地下通路を使う何者か、それは新教会の人間、もしくはそれにつながる者達の手により、いっさい表に出ることなく新たな建物の地下で引き続き利用される事になるのか。
ちらりとそんな思いが脳裏をよぎったが、アプリリアージェはすぐに思考を切り替えた。とりあえずはそんな先の話はどうでもいいことである。

アプリリアージェ一行は、とりあえず宿を求めて夜の市街へ向かう事にした。
用心の為に二手に分かれ、先遣隊が先に落ち着き先を確保した上で待機隊を迎えに来るという提案もあったが、アプリリアージェはそれを却下した。
エルネスティーネは二手に分かれた上で、宿の確保よりも先にエルデやラウを探す事を提案したが、それも「最優先事項とは言えません」という一言で退けられていた。

アプリリアージェの考えは、自分達の落ち着き先を確保する事が現時点での最優先事項であるというものだった。

追っ手がこの町へやってくる可能性は極めて高い。カテナ・ミドオーバに面が割れているエルネスティーネ、ファルケンハイン、ティアナ、そしてメリドの四人を残し、アプリリアージェとテンリーゼン、アキラの三人で宿を確保する方が安全なように思えたが、そうしなかったのにはアプリリアージェなりの理由があった。

単純に嫌な予感がしたのである。

それはカンとしか言いようのないものだった。

（今はばらばらにならない方がいい）

地下道から地上に出て、ハイデルーヴェンの空気を吸った時に最初に感じたのは、重苦しい街の雰囲気だった。彼女の戦士としての感覚が「何かある」と告げていたのだ。

二手に分かれたら、どちらかがこの夜の闇に迷い込み、そのまま二度と会えなくなる……そんな予感である。

「腕の立つ剣士に質問します。何か感じませんか？」

二、三人ずつに固まり、少しだけ間隔を置きながら目抜き通りを中心に向かって一行は歩いていた。

倉庫街からすでに三十分ほどは歩いている事になる。

その間、特に追っ手の存在などは感じなかったが、アプリリアージェはどうにも肌がざわついたような感覚がぬぐえないままであった。

「おっしゃる事はなんとなくわかる」

一行の一番後ろでアプリリアージェの隣に並んで歩いていたアキラは質問にそう答えた。

「何となく落ち着かない、夜だからではなく、纏わり付く大気が黒い。そんな雰囲気が漂っているな」

アプリリアージェはうなずいた。彼女が感じていたこの町に対する感想はまさにアキラが口にしたものだった。

「アモウルさんは、ここには？」
来た事があるのか？という問いだった。
メリドがだいたいの町の概略図が頭にあるというので案内を任せていたが、諸国を漫遊する音楽家であれば、アキラもヴェリーユの宿場町の機能があるハイデルーヴェンに来た事があるだろうというのがアプリリアージェの予想であった。
果たしてアキラはうなずいた。
「何度か訪れた事はある。しかし……」
「こんな雰囲気の町では無かったはずなのだが」

一行は目抜き通りに入ると、めぼしい宿を物色し始めた。
人気のない旧倉庫街で適当な場所を拝借する事もできたが、人気がない場所では灯り一つ灯すのにも気を遣う。声もそうである。エルデがいれば「結界」を使う事も可能であろうが、いまはそのエルデ達と合流する為にも、アプリリアージェとしては町外れの倉庫街で息を潜める事は避けたかった。
そもそもあの倉庫街はヴェリーユから続く坑道の出口であり、追っ手が真っ先に出現する可能性が高い場所とも言えた。もっとも、あの岩の壁をそう簡単に排除出来るのかどうかはさだかではなかった。素直に水路を辿れば二時間もかからずハイデルーヴェンに着く。移動速度の速い風のフェアリーで固めたアプリリアージェ達ならいざ知らず、わざわざ水路よりも時間がかかる坑道を通るとは考えられなかった。とはいえ、念には念を入れる事も必要であった。
アプリリアージェ達ル＝キリアは人混みに紛れる事を常としていた事もある。木の葉を隠すのは森の中、と言ったところであろう。

「目抜き通りの外れに近い、大きくて比較的賑やかな宿」
それがアプリリアージェがメリドに与えた宿の条件であった。
中央付近が行動拠点としては理想的だが、何かあった時に町の出口に遠く、中心部には公的な機関も多いという。ならば少し外れた

ところで、と言うのは常識的な判断であろう。寂れた宿では客も少なく、宿の人間を始め他人に詮索されやすい。規模が大きく、流行っている方が紛れやすいという判断である。

「それなら、私が常宿にしている宿がいいでしょう」

アキラがアプリリアージェの条件に合うという宿の名を挙げて提案すると、メリドもそれに賛成した。

「条件にぴったりだし、何より私が建物の勝手を知っている」

「私はこの町では宿を取った事はありませんので、ここはアモウル殿の推薦の方が確実でしょう」

目標の宿を目指して通りを歩きながらもなお、アプリリアージェは気持ちがざわつくのを抑えられなかった。さっきまでの落ち着かぬ雰囲気とは別に今度は別の居心地の悪さがピリピリと皮膚を刺激するのだ。

その原因が何なのかはわからなかった。それとなく人の流れに目をやるが、敵意をこちらに向けている人間がいる様子はない。

だが、戦場を何度となく経験したアプリリアージェにとってはその感覚が決して好ましいものではないと確信できていた。そしてそれは目的の宿に到着しても、収まることがなかった。

アキラが常宿だと言うその宿は、外れというより、むしろ中心に近い位置にあったが、確かに規模も大きく、一階にある食堂は広く賑やかで、紛れるには理想的だと思われた。

アプリリアージェがうなずくのを合図に、アキラは大きな扉を開けた。弾けそうな喧噪が、開いた入り口から飛び出してきた。

一行はそのまま中に入り、運良く空いていたテーブルに着いた。そこで彼らはハイデルーヴェンに着いて初めて羽織っていたマントを脱ぐと、ようやく一息入れる事ができた。

だが……。

その店の様子は、どうにもおかしなものだった。

まず一行のところに注文を取りに来た給仕の様子がおかしかった。手前に座っていたアキラに愛想笑いをした後、他の面々に目をやった給仕の笑顔が引きつったような笑いに変わった。

一通り注文は取って行ったものの、アプリリアージェは給仕のその変化を見逃さなかった。

給仕が去ると、代わりに隣のテーブルの話し声が耳に入ってきた。

「そのクナドルの事件って、確か委嘱軍の小隊が皆殺しにされてたっていう、アレか？」

「もう一年も前の話だろ？あれって犯人捕まってなかったのか」

「ああ。当時は目撃情報で犯人は子供だって事だったらしいんだが……」

「最近の情報だと、なんでも薬物を使ったらしいぜ」

「何だよ、薬物って？」

「それがどうやら禁忌に絡む薬物だって話だ」

「ほう、それは初耳だな」

「それだけじゃないんだぜ。これは本当にここだけの話だけどさ、その禁制品の出所が、どこあろう、この学校都市だっていう噂があるんだよ」

「なんだよ、それ」

「まさか」

「そのまさかさ。『奴ら』が関わってるに間違いないよ」

どうやらそれは一年以上前に起こった惨殺事件についての噂話のようであった。アプリリアージェの記憶によれば「クナドル事件」とは、サラマンダ侯国の西部にあるクナドルと呼ばれる小さな山村で起こった惨殺事件の事である。村といっても数十人程度の集落で起こったその事件は、ほとんどの村民と、そこに駐留していたと思われるドライアドの委嘱軍の小隊が惨殺死体で発見されたというものであった。数人の生き残りの証言によると、犯人は子供という事であったが、なにぶん証拠もなく、そもそも目撃証言の主も何らか

の原因による精神混濁を起こしており、証言そのものに疑問があるという理由でその後はまともな調査もないまま「未解決事件」となっていたはずである。

だが、彼らのその噂話に割り込んできた知人と思われる別のテーブルの青年の一言がアプリリアージェの眉を吊り上げた。

「子供じゃねえよ。アルヴィンに決まってるだろ。薬物だってアルヴの『つて』で手に入れたのさ」

隣のテーブルの青年はそれにうなずくと、さらにそれを補足するように

「その犯人が昨日、ハイデルーヴェンで見つかったっていう話だ」

そう続けた。

「やっぱりあんな事をやるのはアルヴ連中だと思ってたぜ」

「目撃情報じゃあ、金髪の女アルヴィンだっていう話だ」

「様子がおかしいな」

当然ながら同じ話を聞いていたアキラは、片方の眉を吊り上げたままのアプリリアージェにそう言うと、それとなく店内の様子を伺った。

アキラとアプリリアージェはのテーブルを挟んで向かい合って座っていた。つまり、二人は頭を動かさないで、両方が互いの死角を補う形になっていた。

二人だけでなく、もちろんティアナやファルケンハイン達も既に気付いていた。ただ、エルネスティーネだけは、アプリリアージェ達の警戒を意に介さず、席に着いてから、首を伸ばして店内を物珍しそうに見渡していた。

アプリリアージェがそんなエルネスティーネを制止しようとした時、彼女はアプリリアージェに顔をむけて、

「この店のお客様はデュナンばかりですね」

そう言った。

その言葉はアプリリアージェの脳を突き抜けた。さらに脊椎を通り、全身に電撃のような衝撃を走らせた。

この町の雰囲気はともかく、目抜き通りを歩いていた時の違和感の理由を、やっと理解できたのだ。

ここへ来るまで、少なくともアプリリアージェはアルヴ族とおぼしき人間を一人も見なかった。エルネスティーネの言葉は、まさにその違和感の原因を見事に示したと言ってよかった。

そしてアプリリアージェには一つ思い出した事があった。「クナドル事件」の被害者は村人も委嘱軍の兵士も全てデュナンであった。注文をとりに来た給仕の様子を思い出すと、アプリリアージェは二つの現象から一つの仮説を導き出した。

『アルヴ族が排除されている町』

ハイデルーヴェンはそういう町なのだ。

理由はわからない。だがその仮説を証明する一つの事象が今ここにあった。アプリリアージェ達の耳に次のような言葉が飛び込んできたのだ。

「今までのデュナン殺しの多くはアルヴ族だって言ってるだろ。あいつらはフェアリーなんだぜ?デュナン殺しは得意なんだよ」

以前はそうではなかったはずだ。そうでなければアキラやメリドが知らぬはずがないのだ。

こんな異常な町を。

そしておそらく、この変化はフリストも知らなかったに違いない。もちろんフリストの言う「主(あるじ)」とやらも。

ハイデルーヴェンは何かをきっかけに急激に変わったのだ。

そして、もし本当に急激に変化したのだとしたら、それは極めて危険な状況であると言えた。

急激な変化とは、すなわち激しい変化である。過激な変化だと言い換えてもいい。

どう考えても、平和的にアルヴがこの町を去ったとは想像できな

かった。

（去ったのか？）

アプリリアージェは最悪の事態を想定した自分に愕然とした。

「アモウルさん……」

一刻の猶予もない。

アプリリアージェが数秒で出した結論がそれだった。

「うむ。とりあえずここは早々に出た方が良さそうだ」

アキラもほぼ同時に同じ結論に思い至ったに違いなかった。言い換えるならば、エルネスティーネの何気ない言葉が、危機が現実のものだと認識させる為の引き金となったのだ。

エルネスティーネは物珍しさからこの町を行き交う人々一人一人を熱心に観察していたに違いない。だからこそ気付いた程の些細な違和感は、目立たぬように神経を注いでいた「専門家」達には見えなかったものである。

アプリリアージェとアキラ。その二人が交わした視線に、そんな会話が込められていたかどうかはわからない。とにもかくにもアキラはアプリリアージェの一声で全て合点したという風にうなずくと、そっと立ち上がった。

無言で立ち上がったアキラに一行の目が集まると、アプリリアージェは全員を見渡しながら小声で告げた。

「とりあえずマントを。それから髪で覆うなりして、できるだけ耳を隠して下さい」

隣のテーブルにも聞こえない程度の小さな声ではあったが、その言葉はその場の人間には極めて明瞭に聞こえた。高位の風のフェアリーが使う例の話し方であった。

自分の言葉に全員が集中している事を確認すると、アプリリアージェは続けた。

「これは命令です。質問は後でいくらでもききます。非常事態と認

識して下さい。何事もなく店を出られたら目立たぬように今来た道を戻ります」

『何事も無く出られたら』という部分を、アプリリアージェは声を落として告げた。それは突然の「命令」が意味する危険性を表現するのに充分な効き目を持っていた。いつもなら必ず何かを言いかけるティアナですら、何も言わず頷くとエルネスティーネの手をとり、ギュッと握りしめた。

「『食い逃げ』扱いされると面倒ですから、私は勘定を済ませてから後を追いましょう」

そう言うアキラにアプリリアージェは、再びうなずいた。

勘定などは卓の上においておけばいいはずだった。つまりアキラは皆の最後尾の壁になる。そう言ったのだ。いや、少なくともアプリリアージェはそうとったのである。

デュナンのアキラがその役を引き受けてくれると言う事は、いろいろな意味でありがたかった。

「感謝します」

アプリリアージェはその一言でアキラの意図を理解した事を伝えると、ファルケンハインに向かい、先導を命じた。細かい指示をせずとも簡単な合図で素早く次の行動に移る事ができるファルケンハインとテンリーゼンの動きは、長い時間を供にしているル＝キリアの仲間ならではであろう。

アプリリアージェはジャミールの里で既に白面を捨てていた。しかし、今はその捨てたはずの「白面の悪魔」に戻っていた。

突然襲ってきたピリピリとした雰囲気の中、ティアナはエルネスティーネの手を引いてファルケンハインの背中を追った。彼女には店の奥まったところにあるテーブルから、店の出入り口までのほんの数メートルが、もどかしいほど遠いものに思えた。

マントについたフードで髪を隠しているが、店にいる全員が自分を見ている気がした。「耳を隠せ」と言ったアプリリアージェの一

言で、ティアナもその含むところは合点していた。耳、すなわちアルヴ族の特徴であるやや細く、先が尖った耳はデュナンの丸いそれとは一目で違いがわかる部分である。それを隠す。すなわちデュナンの振りをしなければならないと言う事。

しかもアプリリアージェは普段使わない「命令」という言葉を敢えて使った。説明する時間的な余裕など一切無いと言う事であろう。ただ「従え」と言う訳である。

それはつまり、命に関わるかも知れないと言う事なのだ。

ティアナは音をたててゴクリと唾を飲み込むと、思わず早足になり出入り口へ駆け出す格好になった。

アプリリアージェは急げと言ったが、走れとは言わなかった。ファルケンハインも走ってはいない。大股ではあるが、逃げ出すような雰囲気ではない。だが速い。

ティアナにはファルケンハインに遅れまいという意識が強く、それが無意識に歩みを走りに変えさせてしまったのである。

「おわっ」

ティアナは何かにぶつかった。正確に言えば何者かがティアナにぶつかってきた。その誰かがぶつかった際に、その大きな声を出した。

そこに人が来るとは思わなかったのだろう。店の中で走る方がおかしいのだ。

ビールを両手に持ち、普通に歩いていたデュナンの若者は、ティアナとぶつかった拍子に、手に持っていたビールのグラスを床に落とした。

ティアナも衝突の衝撃で体勢を崩した。倒れる体を支える為に反射的に手を出したが、その先には客のいたテーブルがあり、運の悪い事にティアナの手はテーブルの上に置かれていた陶器製の大きなビールジョッキを数本、まとめて払い落とす事になった。

ティアナに引っ張られていたエルネスティーネもただでは済まなかった。突然止まったティアナの背中に顔ごとぶつかると、その場

に尻餅をついて倒れる事になった。その衝撃で、懐から丸い茶色の物体が飛び出して、エルネスティーネの頭に昇ろうともがいた。

「マナちゃん」である。マナちゃんにはしかし、残念ながらアプリリアージェの命令は届いていなかったようだった。可愛そうなマーナートは突然の事に驚き、慌ててご主人の頭によじ登ろうとして、その拍子にエルネスティーネの被っていたフードを脱がしてしまったのだ。

店の中はその偶発的な事件により生じた複数の食器の割れる音で、静まりかえった。もちろん注目は音のした方に集まる。

続いて悲鳴があがった。

「うわあ」

「冷てえ」

「す、すまん」

これはビールジョッキをなぎ払ったティアナと、そのテーブルの客とのやりとりだった。

「大丈夫ですか？」

続いてかけられた心配そうな言葉は、近くにいた学生風の少女が尻餅をついているエルネスティーネにかけた言葉だった。

「あら、珍しいわ。マーナート？」

エルネスティーネのフードを剥ぎ取った「マナちゃん」はちゃっかりエルネスティーネの頭を占領していた。手をさしのべた女子学生はその先にいる茶色く丸い小動物を見て、思わずそう言うと微笑んだ。

だが、その微笑みはすぐに凍り付き、伸ばした手も止まった。そして次に発せられた言葉が、店の中に緊張を走らせる事になった。

「アルヴィンよ！」

女子学生の言葉に、近くにいた全員が声のする方へ目を向けた。床に座り込んでいる状態のエルネスティーネの姿が見えたのはもち

ろん周りにいた人間だけだったが、エルネスティーネの顔を見ずとも、数人が口にした言葉こそが彼らにとっては重要だった。
「アルヴィンだ！」
「純血だぞ。目が緑色だ」
まるでその言葉が合図であるかのように、店の客は全員が立ち上がった。
だが、そこまでだった。
エルネスティーネとティアナを囲むようにしていた客達は、その場で全員が尻餅をつく格好になった。誰かがぶつかったのだ。
「うわっ」
「きゃっ」
「痛っ」
尻餅をついたり、倒れ込んだ客が、体制を立て直した時、そこにはもうマーナートを頭に乗せた、短い髪のアルヴィンの少女の姿はなかった。

「あれ？」
最初にエルネスティーネの耳を認めた女子学生は、立ち上がると誰も居ない床を見て呆然として隣の仲間の顔を見た。
「どうなってるんだ？」
仲間の学生も狐につままれたような顔をして、そういった。
何かがぶつかったのはわかるが、それが何だったのかがわからない。ただ、白っぽい影が目の前をよぎったような気がしたと思ったら、膝の裏に軽い衝撃を受け、尻餅をついていたのである。
「おっと、大丈夫ですか」
一人のデュナンの青年が、そう言うと床に倒れたままだった客の一人を助け起こした。
「ど、どうも」
「いえいえ」
もちろんこれはアキラである。

かれは助け起こした客に会釈をすると、開いたままの扉から、店の外へと歩み出た。

店に混乱は残るであろう。しかし彼らがエルネスティーネ達を追いかける様子はないと、アキラは判断した。

見渡した限り、視界にエルネスティーネ達アルヴ族の姿はすでになかった。だが、アキラは確信を持っていた。

だから、店を出てもすぐに扉から離れず、ルナタイトの街灯に照らされた店の看板を見上げると、頭を掻いて肩をすくめて見せた。

そう。

アプリリアージェか、もしくはル＝キリアの誰かがその姿を確認しているだろう事をアキラは信じていたのである。最後に店を出たアキラの仕草から、その後の店内の様子を予想する。アキラならそれをやってくれるだろうし、アプリリアージェならばそう考えるだろう。それが二人の間にあった暗黙の了解事項であった。

（やれやれ）

だが、アキラは自嘲していた。

（レナンスの賞金稼ぎとは言え、ただの吟遊詩人がこういう事を自然体でこなしていいものかな）

まるでそういう訓練をされている人間、それはつまり戦闘組織に属する人間がとる行動ではないのか？そしてそれはせっかく勝ち得た信頼にキリで突いたような小さな穴を開ける事になりはしないか？疑いという名の穴を。

そこまで考えて、アキラの頭にある考えが浮かんできた。

これはアプリリアージェの仕掛けた巧妙な罠ではないのか？と。

あの状況で、余裕がない事態の中でこそ出る「根源的な正体」　それを確認しようとしたのではないか。

（まさかな）

あの時は間違い無くアプリリアージェは焦っていたはずであった。

アプリリアージェの焦燥感が空気を伝播してアキラの肌を震わせた

のである。
もし、あの状況でそこまでの計算をし、一発勝負とも言える賭に出たのだとしたら、その人物に対して、アキラはもう太刀打ちが出来ない相手であると脱帽するしかないのである。
（そのまかさであれば……認めたくはないが、役者が違うと言う事だろうな）
アキラは心の中でそう呟くとハイデルーヴェンの夜空を見上げた。ルナタイトが埋め込まれた街灯の柔らかな光の向こう側には、しかし星は見えなかった。
厚い雲が空を覆っているのだろう。アキラがそう思う間もなく、街灯が作る光の結界の中に、白い光芒がいくつもいくつも降りてきた。
雪である。
「こちらです」
その時、横合いから声が聞こえた。
空を見上げるアキラの横を、灰白色のマントのフードを被った声の主が早足で通り過ぎて行った。聞き覚えのあるその声はメリドのものであった。
アキラは努めて自然を装い、その小柄なマントの人物の後に続いた。
メリドは風のフェアリーではない。風のエレメンタルのエルネスティーネやル＝キリアと違い、移動する速度が異常に速いわけではない。
だが、小型アルヴ族が本来持つ身体能力がある。さらにジャミール一族の兵士長と呼ばれる戦士である。鍛えられたその身のこなしはデュナンのアキラとは比べるのもばかばかしい程に軽やかで敏速であった。
前方を滑るように移動するメリドの姿を見失わぬようにしながら、行き交う人を縫うように歩くアキラはしかし、そのまますんなりとアプリリアージェ達と合流する事はかなわなかった。

「リリアさん」
アキラが店の前に留まって、頭を掻いているその姿を離れた位置から観察していたファルケンハインは、横にいる笑顔のダーク・アルヴに声をかけた。
「何ですか？」
「アモウルは本当にただの賞金稼ぎでしょうか？」
アキラが懸念していた事は、現実になっていた。アプリリアージェが仕掛けたのではなくとも、起こった事は反すうできる。そして相当の分析能力を持っている人間がいるとすれば、それはアプリリアージェである必要もなかった。
もちろん、アプリリアージェ自身も分析官たり得るわけであるが。
「彼がただの賞金稼ぎなどと思った事は一度もありませんよ」
ファルケンハインはうなずいた。
「私の見立てでは、それ相応の組織の中で行動していた経験がある戦士にしか見えません」
「あるいは『行動している』のかもしれませんね。ずっと」
アプリリアージェは微笑を崩さずそう言うと、残念そうに付け加えた。
「ですが、今の我々には彼の素性を探る術がありません」
「で、どうします？」
「あなたならどうしますか？」
「そうですね」
ファルケンハインは、アプリリアージェの使命を果たす為にアキラに近寄っていくメリドの姿を視界に置いたままで答えた。
「先の事はリリアさんに任せますが、少なくとも今は我々に必要な人間ですね」
アプリリアージェはうなずいた。
「これだけは言っておきます。彼が何者であろうと、私は彼が持つ公爵符だけでなく、彼自身も好きですよ」

ファルケンハインはその言葉を聞くと、思わず顔をアプリリアージェに向けた。
「あら、意外そうですね」
「正直に言って、そうです」
アプリリアージェはファルケンハインの答えが気に入ったのか、クスクスと小さな笑い声をたてた。
「ファルは知らないでしょうが、ヴェリーユでカテナ・ミドオーバが作った結界にあなたたちが捕まっていた時、私は見捨てる判断を下すべきかどうかで迷っていました」
「え？」
「本当の事です。こちらにエルデ・ヴァイスというルーナーがいない状況で、あの場面はそれほど絶体絶命な事態だと判断していたのです。ですがアモウルさんは、迷っている私の横であなたたちを助けるべく、勝算などないまま、まさに飛び出そうとしていました」
「アモウルが……」
「ええ。フリストの竜巻がもう少し遅かったら、間違い無くあの結界を崩そうと、剣を抜いていた事でしょうね。無駄だと知りつつ、せずにはおれぬ。彼はそういう気性の人間です。なんでも計算ずくで動く私より、よほど信頼できる人ではないかしら」
アプリリアージェはそう言うと、にっこりとファルケンハインに笑いかけた。ファルケンハインはしかし、その笑顔に返す表情が思いつかなかった様子で、強ばったままの顔で問いかけた。
「一つ、確認したい事があります」
「ええ」
「あの時、我々を見捨てるという選択肢が、本当にリリアさんにはあったと言う事ですか？」
ファルケンハインの言葉に、アプリリアージェは垂れた目尻をさらに下げるように微笑みを深くした。
「勘違いしてはいけません、ファル。私の使命は風のエレメンタルを命をかけても守り抜く事。ただそれだけです。その為なら、どん

な犠牲も払います」
　ファルケンハインはしかし、アプリリアージェの言葉の意味をはかりかねた。
　アプリリアージェはさらに続けた。
「ジャミールで先王崩御の報を聞いた後で、私は貴方達に言いましたね。この先私と行動を供にするなら、捨て駒になる覚悟でついてこいと」
「もとより、その覚悟です」
「私の言葉に嘘はありませんよ、ファル。でも、あなたが自分自身の命と、そしてティアナの命を守りたいと言うのなら、今からでも遅くはありません」
　もちろん、今から離脱して、自由に生きてもいい、という意味である。
　しかしティアナがエルネスティーネの側を離れる事は考えられず、そのティアナを置いたままファルケンハインが一行と行動を別にする事など考えられない事くらいはアプリリアージェも織り込み済みのはずである。
「あなたが離れるわけなど無い事は先刻承知で、私はそれでも敢えて問いかけるような、そんな人間です。いざとなったら、私よりアモウルさんの方が信頼できるかもしれないのですよ？」
　ファルケンハインはアプリリアージェのその言葉を聞くと、彼にしては珍しく小さな笑いを漏らした。
「ふふふ。忘れていましたよ、リリアさん」
「と、言うと？」
　アプリリアージェが首をかしげると、ファルケンハインは微笑を返した。
「あなたはそういう人です」
「――そうですね」
「だから私はル＝キリアにいるのです。駒でけっこうです。あなたの揺るぎない信念に私は付いていく事を決めたのですから。ティア

ナは関係ありません」
　アプリリアージェはその言葉を聞くと、微笑したままでファルケンハインの分厚い胸板に手をあてた。
「覚えておいて下さい。私は風のエレメンタルを守る為なら、例えあなたでも容赦はしません。体を楯にしろと、平気で言える女なのですよ」
「望むところです」
「エルデ・ヴァイスの首をはねろと言うかもしれません」
「――喜んで背後から、もしくは離れた場所から隠れて襲いましょう」
　ファルケンハインが口にしたその言葉は、アルヴ族の価値観としては間違い無く軽蔑の対象となるものだった。だからこそファルケンハインは口にしたのだろう。それは敢えてアプリリアージェがエルデの名前を出した事に対する同価の返答のつもりであった。
「エイル君の右腕を切り落とさねばならないかもしれませんよ」
「彼には剣を抜くヒマも与えません」
　アプリリアージェはまだ何かを言おうとして口を開いたが、それを中途で止めると目を伏せた。
　ファルケンハインはアプリリアージェが次に上げようとした人物の名前を知っていた。アプリリアージェがその名を告げなかった事は、だからファルケンハインにとっては「甘さ」に思えた。
　だから避難を込めて、ファルケンハインはアプリリアージェにこう言ったのだ。
「それがティアナだとしても同様です。あなたの命令があれば、私は一瞬たりともためらいはしません」
　アプリリアージェはファルケンハインのその言葉を聞くと、目を伏せた。
「もしそうなれば、事が全て終わった暁には私の首をあなたに差し上げましょう」
　だが、ファルケンハインはそれには首を横に振った。

「最後まであなたがあなたでいらっしゃる事、それが私の……いえ、ル＝キリアにいる人間は皆そう思っているはずです。私も、そしてリーゼも」

「私があなたを、いえ、貴方たちをずっとだまし続けているのだとしても、ですか？」

さすがのファルケンハインもこの一言の裏にあるアプリリアージェの真意は測りかねた。意味を探ろうとする意識が、会話の始まり、つまり振り出しに戻ると、ある考えがその脳裏をよぎった。

「これは今思い付いた想像ですが、『マーリンの知恵の冠』を頂いた人物が、本物のエルネスティーネ様で、我々の仲間のネスティこそ、実はイース・バックハウスだったとしても、それ自体は私にはあまり関係の無い事ですよ、リリアさん」

ファルケンハインの考えはそこにたどり着いていたのだ。

その言葉に、アプリリアージェは目を細めた。

アプリリアージェはそういう謎かけをしたのだろう。少なくともファルケンハインはそう結論を出した。

今から思えば、ではあるが、エルネスティーネは風のエレメンタルとして、いやそれ以前に風のフェアリーとして、その力が弱すぎると感じていたのだ。発現前だからだ、と説明されればそれまでかもしれない。だがエルネスティーネは既に成人して久しい。同じエレメンタルであるルネ・ルーは幼少時に発現済みだという。あまりに遅すぎると指摘するのは的外れであろうか。

おかしな事はまだある。たとえエレメンタルとして発現せずとも、風のフェアリーとしてはどうなのだろうか？

少なくともファルケンハインの前に姿を現してから、エルネスティーネは風のフェアリーとしての普通の力さえ、一度も使って見せたことがない。

だが、それでも一つだけ確かな事があった。

「例えそうであったとしても、我々のネスティには間違い無く王者

の血が流れている。そうは思いませんか？」
　ファルケンハインが今考えていた、まさにその事をアプリリアージェが言ってのけた。
「そうですね」
　アプリリアージェはファルケンハインの疑問に直接は触れなかった。だが、その心の中は読んでいたに違いない。
「私も最近強く感じています。ネスティは変わりました。成長したと言い直す方がいいのかもしれません」
　ファルケンハインはうなずいた。
「最初に会った時は、もっと自信なげな少女でしたね。それに当初見せていた引っ込み思案なところが無くなりました」
　ファルケンハインの言葉に、アプリリアージェは小さく笑い声をたてた。
「そうでしょうか？ネスティは最初からエイル君には積極的だったような気がしますよ」
「確かに、言われてみればそっちの方は……」
「ああいうのは理屈ではないと言いますからね。彼女にとっては運命の出会いだったのかもしれません。今のネスティの原点はエイル君との出会いがきっかけだったのかもしれませんが、明らかに変化したのはジャミールの里に居る時からでしょうか。自信のなさのようなものが消え失せて風格の様なものを感じるようになりました。あれはきっと、陛下の崩御がきっかけなのでしょうね」
「いえ。いや、それも当然あるのでしょうが」
　ファルケンハインはアプリリアージェの推測は少し違うと思っていた。
「私はネスティが子供から大人に、いえ、守られる者から守る者へと変貌する瞬間に居合わせたと思っています。それはジャミールの里に入るより少し前の事です」
　その言葉で、アプリリアージェはファルケンハインのいう出来事に思い当たったようで、小さくうなずいた。

「なるほど、メリドさんの件ですね。窮地は人を劇的に成長させる、ということですか」
ファルケンハインはうなずいた。
「成長させることもある、と言った方がいいでしょうね。私など、もう成長の兆しも見られません」
「ふふふ。それは私も同じですよ」
メリドの救助の際、一番冷静で的確な行動をとったのは誰でもない、エルネスティーネだったのだ。あの後から、エルネスティーネは何事にも積極的になっていった。自らの意見と主張を遠慮無く口にするようになった。エイルについてはやや積極的になりすぎているきらいもあったが、それすらもファルケンハインは好ましいと思っていたのである。
「ファルが言わんとしている事はわかりました」
アプリリアージェはそう言うときびすを返して歩き出した。メリドやアキラと合流する場所に移動する為である。
「この話はここまでにしましょう」
「一つだけ教えて下さい」
アプリリアージェの後に続きながら、ファルケンハインはそう声をかけた。
「我々のネスティは……エルネスティーネではなく、イースなのですか？」
その問いかけに、アプリリアージェは立ち止まった。
「あら？」
そう言うと振り向き、長身のファルケンハインの顔を見上げた。
それは全くいつものアプリリアージェだった。
「ネスティはネスティです。あなたがそう言ったのですよ」
微笑が深くなった。
ファルケンハインはそれにはもう何も答えず、再び歩き始めたアプリリアージェの後を追った。

# 第四十九話　案内人

それはアキラとメリドがハイデルーヴェンの目抜き通りを目立たぬように人の流れに乗って歩きだしてから、すぐの出来事だった。
前方から藤色のローヴを纏った一団が近づいてきた。
それを灯火隊と知っているアキラは、前を往くメリドに声をかけた。
「すぐ横の店に入れ」
「え？」
驚いたメリドが思わず振り返った。だがその時にはアキラは既に目の前にある酒場の扉をくぐっていた。メリドは一瞬迷いはしたものの、選択肢が無い事を認めるとその後に続いた。何か意味があるのは間違い無かった。メリドの戦士としての本能がアキラに続けと指示を出したのだ。

アキラは灯火隊がルーナーでまとめられた集団であることを知っていた。そして、ルナタイトに灯りを点けるだけではなく自警団として機能している事も。
前方からやってくる灯火隊を一瞥したアキラは、そこにデュナンしかいない事を確認すると、大事を取ってすれ違う事を避けたのだ。
ここがアルヴ族を排除する街であるのかどうかはまだわからない。だがエルネスティーネの言うとおり、やはり外にもアルヴ族はおらず、灯火隊にもいなかった。自警団としての灯火隊はひょっとするとアルヴ族の摘発も行う可能性が充分にある。
アキラはそう判断したのだ。
ルーナーならば近くのアルヴ族を見つ出すようなルーンが、例えば手に持つ儀仗に付加されている可能性がある。
アキラは以前どこかの市で、見た目はまったく同じ三つの瓶の中から、水の入った瓶を的確に選び出す事ができる見世物士を見かけ

た事があった。後で捕まえて尋ねてみると低位ながらもルーナーで、儀仗に水を感知するルーンを仕込んであるのだという。

水と違って人種を選び出せるルーンがあるのかどうかまではアキラにはわからなかったが、灯火隊がそれぞれ持つ儀仗を見た時、その時の記憶が蘇ったのだ。

大事をとってやり過ごす方がいい。そういう判断であった。

そしてアキラにはそれとは別にもう一つの思惑があった。

アキラは店の中をさっと見渡し、出入り口から死角になる席がある奥まったテーブル席を見つけ出すと、不自然にならぬ速さでそこへ向かった。メリドもそれに続く。二人とも、もちろんフードは被ったままだった。

アキラは顎でメリドの席を指示すると、続いて自分も席に着き、それとなく入り口の様子をうかがった。灯火隊が入ってきたら、相手が構える暇も与えず即座に打ち倒して突破する気でいた。

やりたくはないが、やらざるを得なかった。店の奥の席は死角ではあったが、隅に位置していて逃げ場がない。向かうしかないのである。

それを承知で選んだ席なのだ。

アキラはここに来てミヤルデ・ブライトリングとセージ・リョウガ・エリギュラスの二人の部下とヴェリーユで別れてしまった事を後悔しだしていた。

だが、あの状況下ではアキラに出来る事は何もなかった。連絡を取る時間はもちろん、合図を残すような余裕もなく、ただ力一杯走り続けるしかなかったのだから。そもそも向かう先すらわからない状態だったのだ。

だが、ヴェリーユに異変があった事については二人とも知っているはずである。広場の事件を目撃していなくともあの竜巻は見たに違いない。

だとすれば、翌日の定時になっても待ち合わせ場所にアキラが現

れなければ、ミヤルデは事件との関連性を疑うはずであった。いや、ミヤルデの立場とすれば既に異変との関連性の確認作業に入っていると考えるのが妥当であろう。

ミヤルデ達がアキラの異変を確認した場合、ヴェリーユを去ったアキラの行き場所を当然推理するはずである。

素直に考えれば、ヴェリーユから手近な、ここハイデルーヴェンにたどり着くはずであった。少なくとも最初に確認に訪れる事は間違い無い。少なくともアキラがミヤルデの立場であれば、ハイデルーヴェンを外す事はしないはずである。

たどり着いてくれるはず……。どちらにしろアキラは部下を信じてそう思うしかないわけである。

ならばいったん安全確保ができた今こそ、アプリリアージェの隙を見てミヤルデとセージに何らかの合図を残しておきたいと考えた。

灯火隊との遭遇はアキラにとってはある意味で窮地でもあり、そして好機でもあったのである。

店の中ならば、アプリリアージェの目は完全に遮断されている。目の前にいるのはメリドだけなのである。

そのメリドはそもそもアキラに対する疑惑などは一切持っていない事は間違い無い。アキラはメリドにとって命の恩人の一人であり、ジャミールの里に留まっていた際にもお互いは交流を深めていた。さらにその後は一ヶ月近くもの間、ヴェリーユで共に過ごしてきた仲である。アキラにしろメリドにしろ、互いにある程度の情や信頼と言った深い感情で構築されたつながりがあった。

いや。

アキラは今ならば相手がティアナであろうと信頼で油断させるだけの自信を持っていた。

「メリドはここにじっとしていてくれ」

アキラはそう言うと目立たぬように席を立ち上がった。

「給仕が来るより前にカウンターで飲み物をもらって来よう。つい

でに外の様子を見てくる」
　メリドはうなずいた。
　アキラの意図は既に理解していた。彼もまた灯火隊の存在を知る人間である。それだけに、遭遇回避の為にとっさにこの店に入るよう指示したアキラの機転に感心はしていたが、その行動には一切疑いを持っていなかった。
　灯火隊をやり過ごしてから、通りに出ればいいのだ。幸い店に入る時にも特に見とがめられる事はなかった。外は雪が舞い始めており、フードを被ったままで店の中に入り込んでも、特に怪しまれる事はなかった。
　出る時にフードを被っている事は入る時よりも自然であろう。さらに、ダーク・アルヴであるメリドならばその軽い身のこなしで、出口まではあっという間に違いない。
　メリドの席からはカウンターや外が見えない。兵士長という立場上、こういう場合に下手に様子を伺う事は失策に繋がる事をよく知っていた。
　つまりメリドは店内でアキラがとる行動を目にする事はなかったのである。
　そのアキラも、メリドが待ちくたびれる前に席に戻ってきた。手にはビールが入った陶器製のゴブレットが二つあり、もちろん一つはメリドの前に置かれた。
「落ち合う場所はどこになったんだ?」
　あの短い間でアプリリアージェが決めた場所である。ハイデルーヴェンの地理に明るくはない人間が決める場所といえば、今まで通ってきた道沿いで、しかも記憶に残る場所であるはずだった。
　だが、メリドの答えはアキラにとっては意外な場所であった。
　ドライアド王立貴族学校付属ハイデルーヴェン研修所。それがメリドが口にした場所であった。
「ふむ。確かにそこならば……」
「そこでアモウル殿に、例の公爵符を使っていただきたい、と」

アプリリアージェがドライアド王国の施設の存在を詳細に知っていたわけではない。だが、土地勘のあるメリドに思いついた事を尋ねる事はできたであろう。

「ハイデルーヴェンにはドライアドの公的な機関はあるのか？」

そう尋ねればいいのだ。

メリドが知っていて、真っ先に口にするところがあれば、それはそれなりの機関という事になる。ならば、エスタリアの公爵の力が及ぶ場所ではないのか？

利用できる物は利用する。それこそが合理性を重んじるアプリリアージェの真骨頂でもあった。

アキラが公爵符を使い、建物内にそれなりの場所をまず確保させる。その後、隙を見て残りの仲間を招き入れればいいわけである。ドライアドの公的機関ならば外向きの「壁」も厚いに違いない。物理的にも、政治的にも。

アプリリアージェのその考えは間違ってはいなかった。

少なくともメリドにその話を聞かされたアキラは、心の中でアプリリアージェに脱帽していたのだ。

味方としては実に頼りになる黒髪の小さなダーク・アルヴ。だが、それがいったん敵に回ったらとことん厄介な存在になるに違いない事も改めて感じていた。

アプリリアージェの全貌を知っているとは言えないアキラですらそう思うのである。シルフィード王国で彼女をよく知る人間はより強くそう思うはずであった。

アキラはここに来て、ようやくアプリリアージェ達の「立ち位置」をおぼろげに理解しつつあった。

それは極めて複雑な立ち位置に違いない。

ファランドールという世界全体に関わる問題を優先するという、アルヴ族らしい考えがあるとは言え、一国の、それも大国であるシ

ルフィードの王女を王宮から外に出すという国としての意向がそもそも理解出来てはいなかったアキラだが、一つの仮説を構築しつつあった。

シルフィード側、この場合は先王アプサラス三世には、娘でありカラティアの唯一の直系後継者であるエルネスティーネを王宮から「逃がす」必要があったのではないのか、という仮説である。

そう思えば、一見絡まりあって複雑な関係にあるように見えるアプリリアージェ一行は、それぞれ目的のはっきりした一本の糸で繋がっていると理解できる。

エルネスティーネの王宮脱出はそもそも国としての意向などではない。限られた人間だけが知るまさに極秘事項である。

逃避行ともなれば、当然ながらそこにはそれなりの力を持つ護衛の存在が必要である。

そこでまず選ばれたのが、ハロウィン・リューヴアークという呪医と、強い力を持つ水のフェアリーという触れ込みのルネ・ルーの二人である。

アキラは直接この二人の「力」を垣間見たわけではない。しかしハロウィンとルネの纏う精霊波が常人とは違うという事は常に感じていた。

「事」が起こったならば、その力を目にする事ができたのであろうが、その前に彼らはいったん行動を別にしている。

とは言え、彼らの代わりにエルネスティーネを守る為に合流した「ル・キリア」の精鋭による小隊がいた。

彼らの実力については、その全貌ではないにせよ、ジャミール一族の出発の祭典の席で、アキラは自分の目で確認している。疑いようもなく、小規模な戦闘であれば王女を守る事など造作もない実力を持っていた。

そして一行の指揮を執る事になった小さな女司令官の能力の高さについては、もはや疑いようがない。アキラは同じ兵力同士でぶつかった場合、アプリリアージェ達に勝利する事は難しいと感じてい

た。いや、認めたくはなかったが、おそらく敗北するに違いないと計算していた。要するに指揮官としての能力は自分よりも上であろうと推量していたのである。

「敵に回せばもっともやっかいな存在」

その人物をエルネスティーネの側に付けた事の意味は大きい。

すなわちアキラはこの時点でこう想像した。

「アプサラス三世は自らの死期を知っていた」のではないか？　そして、

「王宮がエルネスティーネにとって危険」な場所になっていたのではないか？　と。

そこまではいい。

しかしそうなると一番大きな問題が未解決である。

エルネスティーネは、どこに向かっているのか？という事だ。

エレメンタルがどこに居るともわからない別のエレメンタルを探して闇雲に動いているというわけではないだろう。しかし、身の危険を顧みず、その為の情報を得る為に「未知の空間」へ向かう必要があったのもまた事実である。

つまり、アキラの考えはこうである。

「エルネスティーネは別のエレメンタルと同盟を組む事で、それを自らの勢力・軍事力とし、シルフィードに帰還の後、これを改めて統べる」

それは果たしてこれからはじまるであろうドライアドとシルフィードの戦争の前になるのか、はたまた戦争が終わった後に、つまりシルフィード王国の敗戦後、カラティア朝の嫡子として相当の「領分」を主張しに出てくるのか……。

伝説通りエレメンタルが相当な数の軍隊に匹敵する圧倒的な力を持っているというのであれば、可能であろう。しかも一人ではなく二人以上のエレメンタルがいるとなれば相当な軍事力と考える事ができる。

人臣の求心力という点ではエルネスティーネは申し分ない存在であるし、そうなると戦争の大勢が決するまで安全な場所で身を潜めている方が得策と考えられなくもない。ただし、交渉すべき相手にエレメンタルが合力しているとなると話は別である。

エレメンタルは四人居ると言われている。そのエレメンタルの全部、あるい過半数と同盟が結べれば、思惑が成功する確率が高い。その逆となれば、今度は排除される事になろう。

要するに、エルネスティーネは他のエレメンタルを探し出し、そこで同盟がならなければそのエレメンタルを「排除」する用意もあるという事になる。

いや、エルネスティーネ本人にその意図がなくとも、亡き王の命を受けたアプリリアージェであれば、間違い無くそうするのではないだろうか？

アキラの考えはそこにたどり着いた。

しかし彼の考察には決定的な材料が欠落していた。

ドライアドとの戦争でシルフィードが敗北する事を決めつけている点もさることながら、水精、すなわち水のエレメンタルは既にエルネスティーネ達と同盟下にある事実である。

アキラの考えを借りるならば、既に半数の勢力となった風と水のエレメンタル同盟は、過半数を目指すべく後一人のエレメンタルを捜索している事になる。

地精、大地のエレメンタルと、炎精、すなわち炎のエレメンタルである。

アキラは炎のエレメンタルと思しき人物、ルルデ・フィリスティアードが、三年ほど前にアクラムの森で既に滅した事を知らされていない。それを知っているアプリリアージェが探しているのは、唯一大地のエレメンタルである事は知るよしもない。

もっとも、なまじ知っていたとしてもそれは大した問題ではないだろう。アキラにはどうしようもないのだから。

アキラの立場からすれば、ここでエルネスティーネ達を亡き者にしておくという選択肢がある。旅の仲間として、一行の事を好きになっていたアキラにしてみれば、保護という名の確保・幽閉が望ましいのは確かだが、エレメンタルという強大な力を持つ特殊な人間をそもそも「確保」など出来るとは思えなかった。

アキラはそこまで考えてハッとした。

ヴェリーユでの事件を思い出したのだ。

夥しい数のルーナーによる過剰とも言える精霊陣に入り込んで身動きが取れなくなっているエルネスティーネ達の姿である。

（ヴェリーユも、確保出来ないから滅しようとしたという事か……）

同時にアキラはヴェリーユで自身に起きたもう一つの事件の事も思い出していた。

ミリア・ペトルウシュカの事である。

ミリアは「今の事は放っておいて、とにかくエスカの力になれ」と言ったのだ。

わざわざそんな事を言う為に、ヴェリーユくんだりまでやってきたわけである。言い換えるならば「風のエレメンタルには（今は）手を出すな」という事であろう。

だが、ハイデルーヴェンでこういう事態になる事まで想定してはいないに違いなかった。アキラの援助はエルネスティーネに、風のエレメンタルにとって今は救いになるのである。

エルネスティーネがいざとなれば、エレメンタルの力を解放して自らが助かる事は可能であろう。だがそれは同時にハイデルーヴェンのデュナンの命を相当数奪う事になる。

生きる為には殺さねばならない。それも大量の命を奪わねば生き残れない状況になるであろう事は容易に想像がついた。

エルネスティーネという少女が、それを望むだろうか？

アキラが知る限り、エルネスティーネはそれを良しとする人間ではなかった。メリドの命を助けた時に見せた、あの気高く凛々しい

光に満ちた強い意思こそがエルネスティーネの本質だろうとアキラは確信していたのである。

彼女を生かし続けようとするならば、今は周りの力に頼らざるを得ない。

つまり、アプリリアージェ達ル・キリアの戦闘力と言う事になろう。ル・キリアの三人それぞれの戦闘力の高さはアキラも認めるところであるが、その戦力差がある閾値を超えた場合、もしくはヴェリーユの件を見ても明らかなように相手にルーナーがいて、その罠にかかった時点でエルネスティーネを守るべき「壁」は消滅する事になろう。ヴェリーユで精霊陣にとらえられた一件はそれを証明して見せたと言える。

（俺は何をしたいのだ？）

アキラはそこまで考えた上で、そう自問した。ミリアの件もある。一刻も早くエスカと合流し、今後の対策を話し合う必要があった。いや、エスカにも大きな変化がある事は間違い無いだろう。アキラの合流はエスカ自身も待ち望んでいるはずであった。

それなのに、エルネスティーネ達にこの先も関わろうとしている、いや関わりたいと願っている自分を見つけて驚いたのだ。

どちらにしろ、アキラには自分の「駒」が必要だと考えはじめていた。それにはどちらにしろ早期にミヤルデとセージに接触し、新たな指示を与える必要があった。

「了解した」

アキラが思案していたのはほんの短い時間だった。メリドに不信感を抱かれるような長考の末の答えではない。

「期待は出来ないが、一応この店の人間から情報をもらっておこう」

すぐに戻ると告げて、アキラは目立たぬように席を立った。メリドの答えを待つつもりはないという態度である。もとよりメリドにはアキラを疑う気持ちはない。小さくうなずくとアキラの背を見送

った。

言葉通り、数分も待たずにアキラは戻ってきた。

「大した情報はない。当たって砕けるしかなさそうだ」

メリドにそう告げると、立ち上がるように促した。

「外の様子を見てきたが、灯火隊の姿はない。おあつらえ向きに雪も少し強くなってきた。今なら大丈夫だろう」

二人はうなずき合うと目立たぬよう、店を出た。

アキラの言うとおり、雪が強くなっていた。風はない。メリドの目にはゆっくりと、しかし間断なく降り続く細かい雪がハイデルーヴェンの目抜き通りを徐々に白く染めてゆく様が映っていた。

「目立たぬように、しかし出来るだけ急ぎましょう」

周りを確認して特に異常がないと判断したメリドは、落ち着いた声でそう言った。アキラはそれに軽くうなずくと既に歩き出したメリドの背中を追った。

だが、その前にアキラは少しだけ不審な動きをした。メリドが背中を見せた一瞬の隙を突くように、隠しに手を忍ばせ、何かを上方に投げたのである。

それはとっさの出来事で、アキラはすぐに何事もなかったかのように早足で歩き出した。おそらくアキラをじっと見ていた者が居たとしても、何をしたのか理解出来る人間は少ないと思われた。

アキラは今出た店の軒に、小型の剣を突き刺したのである。手が届かず、そして目立たぬ場所に。

もちろん、ミヤルデとセージに向けたお互いだけでわかる合図であった。

この店に情報を置いた、という程の目印である。

アキラ達はこういう合図をいくつも決めてあった。

アプリリアージェの前ではこういったあからさまとも言える行動をけっしてとらなかったアキラだが、相手がメリドであれば何の疑いももたれないだろうと踏んだのである。

大胆な行動とも言えたが、メリドはアキラの思惑通り、小型の短剣が軒に刺さるかすかな音に何の反応も示さなかった。

事が問題なく成った事に安堵しつつ、アキラは短剣を忍ばせていた隠しに手を入れた。そこには公爵符を来るんだ布の感触があった。

（それにしても……）

アキラは改めて思った。

アキラがアプリリアージェの立場であっても、公爵符を逆手にとって敵国の「治外法権」を緊急の避難場所にしようとは考えなかったに違いない。

いや……。

アキラは自分がアプリリアージェ達の「敵」であることを知っているから考え至らなかったのだ。それはつまり、見方を変えれば現時点でアプリリアージェがアキラをまったく疑っていない、いや完全に信用しきっている可能性が残されているという事になる。

アキラはしかし、今はその事について深く考える事を良しとしなかった。現時点では、考え得る最善の手を打つだけなのだ。下手な勘ぐりは自ら思いもしないほころびを生む恐れがある。

彼らはヴェリーユからハイデルーヴェンに続く地下通路の出口にある建物付近に広がる、人気のない夜の廃倉庫街に入り込んでいた。メリドはアキラに目的地を告げなかった。アプリリアージェが適当と思える時に向こうから接触して来るという。

果たしてメリドの言うとおり程なく横合いの路地から複数の人影が現れ、アキラの後ろ側に付き従うように合流した。アプリリアージェ達だった。

振り返ると、小さなエルネスティーネが屈託のない笑顔でアキラに小さく手を振って見せた。見ればその小さな肩には一連の騒動の元凶とも言える茶色く丸い小動物がしがみつくように乗っていた。

そんなエルネスティーネの横にはいつものようにティアナがいた。

そしてその後ろには気配のない人形の様な影が少し間をおいて付いてきていた。
アプリリアージェとファルケンハインも当然ながらそこにいた。
五人と一匹。
全員が無事でいる事を確認すると、アキラは安堵を覚え、思わず小さくため息をついた。
「無事で何よりでした」
横に並んだアプリリアージェがそう声をかけてきた。
別れたのはほんの少し前の事である。それなのにアキラにはその声が妙に懐かしいものに思えた。そしてそんな自分の心理状態に今度は思わず苦笑を浮かべた。
（これが「情が湧く」と言う事か。俺は自分がまだまだ青いと言う事を自覚すべきだな）
「どうしました？」
声をかけたアキラが、苦笑を深くしたのを不信に思ったアプリリアージェが反応した。
「いえ」
アキラは素直に胸の内を吐露して見せた。
「さっき別れたばかりだというのに、ネスティの笑顔を見てあなたの声を聞いたとたん、なんだかとても懐かしい気分になってしまいましてね。そんな自分が自分でおかしくて、つい」
その言葉を聞いたアプリリアージェは特に何も答えなかった。ただ、こちらは微笑を深くしただけである。
アキラのもう一方の脇、つまりアプリリアージェとは反対側に、長身のアルヴが並んでいた。
「この先に適当な場所を見つけてある。雪と寒さが多少なりとも防げるだろう。そこでいったん落ち着こう」
「それはありがたいね」
アキラとメリド以外は、アルヴスパイアという特殊な織物で作ったマントを羽織っていた。これは寒さや暑さを遮断する優れたもの

だ。だがメリドとアキラはそういう便利なものを羽織っている訳ではない。特にアキラは旅装を全て宿に置いたままの軽装で騒ぎに巻き込まれた格好である。夜になり、しんしんと冷えてきたハイデルーヴェンの町をそぞろ歩くにはいささか軽装に過ぎた。

「アルヴスパイアがあるとは言え、我々はもともとエッダの気候に慣れている体ですから、この地の寒さがこたえるのはアモウルさんと同様ですよ。要するに寒いのは苦手なんです」

アキラの心の中を読んだかのようにアプリリアージェがそう言う。

「これはこれは。北の海の海賊と渡り合う事が主な任務と言われる海軍所属の大提督が寒さに弱いとは面妖な話ですな」

「リリアさんは……」

ファルケンハインはいったん言葉を切り、咳払いをすると続けた。

「寒いと短気になってしまうんだ」

アキラはまさか、という顔でアプリリアージェの様子をうかがった。アプリリアージェはそれを受けてにっこりと笑って首をかしげて見せた。

「本人には自覚はないんですが、みんなそう言うんですよね」

冗談なのか本当なのかはアキラにはわからなかった。だが、「時のゆりかご」から戻った面々がヴェリタスやヴェリーユの寒さを歓迎していない事だけは確かだろうと考える事にした。

そもそもアキラとて赤道直下にある南国のツゥレフ出身である。寒さが好きな訳がない。ただヴェリーユで一ヶ月近くを過ごした事で多少なりとも寒さに対して慣れとあきらめのようなものが備わっていた。

そんな事を考えながら歩いていると、アキラの脇を固めるように並んで歩いていたアプリリアージェとファルケンハインが同時に立ち止まった。ファルケンハインが手を上げて、後ろに居る一行に合図をした。

「こちらから仕掛けないで」

続いてアプリリアージェが鋭く指示を送る。おそらく後方に居るメリドとテンリーゼンに向けたものであろう。

アキラは周りを見渡した。そこでようやく路地に人の気配を感じた。

灯りの届かぬ路地に、人の存在を強く感じたのだ。アキラは懐に手を入れて短剣の柄を握った。

だが、路地の影には殺気を感じなかった。だからアプリリアージェも様子を見る事を選択したのであろう。さもなければこの状況では躊躇わずに先手を打つべきなのだ。

一行の視線が一つの路地影に集中した。そしてさほど待たされることなくその「気配」は姿を見せた。

「あの……」

姿を見せたのは声から判断して若い女性のようだった。身長が高い。おそらくはアルヴだろう。顔かたちはマントについた深いフードで見えない。

「この辺も安全ではありません。こちらへ」

それだけ言うと路地に戻ろうとした。ついてこいと言う事なのだろう。

「待って下さい。どういう意味でしょう?」

アプリリアージェがそのマントの女アルヴを呼び止めた。

「さっき、見ていました」

少女は立ち止まるとそう答えた。店での事件の事を言っているのであろう。

「この町は今『アルヴ狩り』をしています。例え旅の人であっても襲われる可能性があります」

「そのようですね。びっくりしました。それで?」

「安全な場所がいくつかあります。私達はそこに避難しています。そこにご案内します」

少女は……フードをとって顔を見せたそのアルヴはまだ若い娘だ

った……日増しにひどくなるアルヴへの風当たりがこの数日で急に過激化して、昨日から集団で暴行を受け始めた事、以前から危機感を持っていたアルヴ族が密かに用意していた隠れ場所に、夕べあたりからアルヴが避難し始めた事、ハイデルーヴェンに残っているアルヴ族を助ける為に、能力のあるものが町に出ている事、自分もその一人で、偶然アルヴの旅行者の団体を見つけて後を付けていた事などを手短に話した。

「このあたりはダメです。複数の灯火隊が毎晩やってきて空き倉庫をしらみつぶしに点検してまわっているんです」

当然ながら罠の可能性があった。アキラはしかしその少女から敵意や殺気のようなものを一切感じなかった。それよりもその少女の言うように灯火隊が大挙して見回りに来るとなると面倒な事になる。おそらく同じ事をアプリリアージェも考えていたに違いない。

「ここはひとつ、アルヴ同士助け合いという方向ですかね？」

アプリリアージェの指示が出る前に、アキラはそう言って自分の意見を告げた。

気配は一つだけである。つまり今のところ「むこう側」は少女一人だけであった。いきなり路地裏で前後を塞がれる事はなさそうだった。

「こんな時に……」

アキラの耳に、小さなつぶやきが聞こえた。アプリリアージェの声である。

「え？」

アキラは思わず聞き直した。だが、それは独り言だったのだろう。

「いえ。なんでもありません」

「どうします？」

「そうですね。今、我々には雪を防ぐ屋根と、そして情報が必要です」

「決まりですな」

突然現れたアルヴの少女の後を追って、一行は路地へと足を踏み入れた。

# 第五十話　不思議な図書室

「ここで待っていて下さい」
キアーナ・ペンドルトンはそう言うと、エイルとエルデを残して部屋を出て行った。
彼に依ればキセン・プロット教授長の居る研究棟には誰もが入れるというわけではなく、来客と会う際、まずは二人が通されたその場所を使うのだという。

エルデはキアーナが扉を閉めると、足音を忍ばせて閉まったばかりの扉に近寄った。そしてそっと扉を開け、あたりの様子を伺った上で、そっと扉を閉めた。
「どうした？」
その様子を不審に思い声をかけたエイルに、エルデは不機嫌そうな表情を向けると、唇に人差し指を立てて見せた。
ただでさえきつい顔立ちのエルデである。そのつり上がった目でそれをやられると、エイルは叱られているような気分になった。
もっとも、エルデにはそんなつもりはないようだ。
しゃべるな、と言う事だろうか？
エイルがそう思っているとエルデの方から口を開いた。
「ここは個人的な蔵書を貯めとく小さな図書館、まあ図書室、と言ったところやな」
それは結構大きな声だった。エルデはそう言った後であたりを一通り見渡していた。
まるで何かを探しているようなそぶりだな、とエイルは思った。
だがそれよりも……
「え？」
エイルは思わず声を出した。
さっきのエルデの合図は、黙れという意味ではなかったのか？

「応接室というより、ここは本だらけやしな。倉庫兼図書室。どうでもええ初見の客はまずはここで待たせる、ちゅうことなんやろな」
エルデの言葉の意味は理解したものの、エイルはエルデの行動の意図をはかりかねていた。とは言え、すぐに『一人で考えていてもわからない』という当たり前の結論に達した。
エルデの様子を見る為に少し間を置いたが、エイルは思い切って言葉を発する事にした。
「図書室だって？ここが？」
エルデの放った言葉に対して普通の会話を行う事にしたのだ。エルデの意図を探る意味もあった。
「図書室っていうのは、普通はもっとこう、整理されてるもんだろ？書架は分類別になってて、整然と整理されてて……」
エルデはそれを受けて普通に会話を続けてきた。
「ああもう、わかったわかった。アンタの言いたい事はようわかる。図書室でも図書館の倉庫でも、別に呼称はなんでもええわ」
どうやらエルデは部屋の名称についてエイルと議論をするつもりはないようだった。彼女にしても図書室とは口にしたものの、単純にそう見えるとは思ってはいなかったのだ。

二人は本の山の中に申し訳程度に作られた空間に居た。
そこには文字通り本が溢れていた。それは書架だけでなく、床にうず高く積まれ、書架と書架の間の通路などは存在しないのと同じだった。これではまともな人間が目的の本にたどり着くには不可能に思えた。まさに「倉庫」と言った方がいい有様だったのだが、エルデが敢えて「図書室」と言ったのには、別段根拠がないわけではなかった。
エルデは部屋の有様を見てとっさにエイルと同じ事を思った。だが観察眼に優れる彼女は、倉庫にしては様子がおかしい事にすぐに気づいていたのである。

「でもな、見た目はどうあれ、この部屋の機能は、たぶん図書室やと思うで」

エルデはそう付け加えると、少し奥にある平積みの本の表紙を指で撫でた。エイルはその様子を不審げな顔で眺めていたが、振り向いたエルデの指先が綺麗なままなのを見て、その言葉の意味がやっとわかった。

この乱雑に本を放り込んだだけのような部屋は、どうやら手入れが行き届いているようだった。本に埃が一切無い。それは近くの本だけでなく、奥に積まれている本の山であっても同様で、見たところ全ての本はチリ一つ無い状態のようだった。

人が歩いて入り込めない場所の本まで手入れが行き届いている状態は奇異と言えたが、その理由はどうあれ、ここは手入れがされている場所なのである。

倉庫の手入れをここまでする事は考えられない。それにキアーナは言ったではないか。

「キセン・プロットはいつもここで客と会っている」と。

応接間代わりに使っている部屋がホコリだらけでいいわけはない。待合時間が長くなる事が多く、客に退屈をさせまいといろいろな本を置いているのだろうかとも思ったが、それにしては秩序がなさ過ぎる。待っている間、勝手に本に手を付けていい物かどうかの案内もキアーナからはなかった。

さしものエルデもその謎をすぐに解く事は出来なかったが、ひょんな事からその部屋の仕組みの一つが判明した。

周りの本を見渡していたエルデが、一つの本の背表紙に目を止めた事がきっかけだった。

「聖典パサト……」

革製の表紙のその本を見てエルデがそうつぶやいた直後だった。

その「聖典パサト」が独りでに動き出したのだ。

正確には平積みになっていた本の間にあった「聖典パサト」が、

まるで誰かが手で抜きだしたかのような動きで平積みの中から滑り出て、、そのままエルデの手の上まで近づいて空間で静止したのである。

「きゃっ」

さしものエルデもそれには小さく悲鳴を上げた。

だが「聖典パサト」はまるでエルデが自分を手にするのを待っているかのように、空中で静止したままであった。

エイルと言えば、口をあけたまま何も言えず、ただその様子を眺めているだけだった。

「ここはルーン仕掛けの部屋なんか……」

冷静さを取り戻すと、エルデはおそるおそる手を伸ばし「聖典パサト」を手に取った。しっかりと握られた事を本が認識したわけでもないだろうが、空中に留まっていた本はしっかりとした質量をもち、エルデの手の中に収まった。

「表題を口にすると、その本が飛んでくるっちゅう仕掛け……やな」

「いやいやいや」

エルデの分析に、しかしエイルは突っ込まずにはいられなかった。そんな非常識な話があってたまるか、と言った顔で何かを言いかけたエイルを、エルデは手を上げて制した。

そして、再びその形のいい桃色の唇に指を立てたのだ。だが、それはしゃべるな、という合図ではなさそうだった。なぜならエルデの方からすぐに会話をしかけてきたからだ。

「今起こった事を冷静に判断した結果の考察や。何ならアンタも何か言うてみたらどうや？」

「え？オレが？」

「そや。推論が正しいかどうかは、まずはその推論を試してみるのが常道やろ？」

「いや、まあそうだけど……」

エイルはエルデの言う事はもっともだと思ってはいた。だがあまりの事に頭が理解しても気持ちが拒否するのを止める事ができなか

ったのだ。部屋の仕掛けもそうだが、エルデが何の意味で唇に人差し指を立てるのか……。

だが、エルデが手に持つ「聖典パサト」に目をやると、エイルは記憶の隅にあったある事を思い出した。すっかり忘れていたが、調べてみたいと思っていた事があったのだ。

「聖典アヴニル」

エイルはどこにあるともわからない本の名を告げた。

するとどうだろう。部屋の奥で何かが擦れるような音がしたと思うと、あっという間にエイルの目の前に古びた革表紙の本が飛んできたのである。

「ほう……」

それを見て自分の推理がほぼ正しい事を確信したエルデはしかし、エイルが「聖典アヴニル」と口にした事の方に、より興味を持ったようだった。

「アヴニルとか、よう知ってたな。ウチ、アンタに正教会の三大聖典の話をした事あったっけ？」

そして、そう言うと三度唇に人差し指を立てた。

「あったっけ？」

そして直後にエイルに答えを強要するかのようにそう言った。

（間違い無い。あれはしゃべるな、という合図じゃない）

エイルはそう確信すると、質問には素直に答える事にした。

「いや、お前から聞いたんじゃなくて……」

エイルがそこまで言った時、エルデは口元に指を持ってきた。思わず言葉を切ったエイルはしかし、エルデの指がまだ唇にかからない事に気がついた。

制止の準備をしているが、まだ制止はされていない。

「ええ加減気付け」

エイルのその様子をみたエルデは目を吊り上げて不機嫌さを表すと、口元にあった左手の人差し指を右手の中指に移動させた。そこには白・黒・茶の三色が捻れたような螺旋を描く指輪が填められて

いた。
　指輪に触れた指は、再びエルデの唇に運ばれると、今度はその唇を押さえるように立てられた。
「あ……」
　エイルはエルデの意図がようやく理解できた。
　キアーナが部屋を出た後で見せたエルデの態度で推理出来た事かも知れなかった。
　要するにエルデはキアーナを完全に信用していないのだ。いや、この部屋、もしくはキセン・プロットという人物をと言い換えた方がいいだろう。
　エルデは自分達の正体に繋がるような話題を口にするなとエルデに伝えていたのである。離れたところから会話を聞き取るルーンが存在する事はエイルも知っていた。エルデはそれをおそれていたのである。
（わかった）
　エイルはそういう代わりに自分も唇に指を立てるとゆっくりとうなずいた。
　それをみたエルデは満足そうな微笑を浮かべると会話を続けた。
「どこで聞いたんかはしらんけど、アヴニルに気になる話でもあるんか？」
　エイルはうなずいた。
　そうだった。
　エイルは手にした本を目的もなく開いた。闇雲に読んでも答えにたどり着けないのはわかってはいたが、かといってエイルの中にはとっかかりすらなかった。
　あるの「時のゆりかご」で《真赭の頤（まそほのおとがい）》が意味ありげに告げた言葉だけだ。
　エイルは少し考えてから、その言葉を口にする事にした。聖典の中の一説である。誰かに聞かれても特に問題はないはずだった。
「『人として生きよ。しからずんば滅びの道を』」

果たしてエルデはすぐに反応した。
「確かにそれは聖典の中の言葉やけど、アヴニルやのうてプレザンの中の言葉やな」
さすがに正教会の賢者を名乗るだけあって、エルデは間を置かずにそう答えた。
そしてそう言った後、エルデはエイルから視線を逸らし、再度部屋の中を見渡した。エイルも同様に部屋の中をうかがった。これと言って部屋に変わった様子はない。だが、エイルにはエルデのその仕草の意味がわかった。
本の名前をただ口にするだけではその本は反応しないようだった。
エイルはエルデのやっている検証作業にに荷担する事にした。
「聖典プレザン」
エイルはどこにあるともわからない本の名を、適当に当たりを付けた書架の一つを見ながら告げた。
すると……。
「ほう」
エルデがまたもや感心した様な声を出して空中に浮かぶ三冊目の本を眺めた。
「言葉に単純に反応するわけやのうて、言葉が持つ方向性が必要みたいやな」
「方向性？」
エルデの分析にエイルがそう尋ねると、長い黒髪の少女はうなずいた。
「意志、あるいは意思が口にした本の表題に込められてないとアカンっちゅう事や。例えば最初みたいに本そのものを視認して特定してたり、そういう表題の本を欲しているという要求みたいなものもそれに入るやろな。そういう人間の意志みたいなもんは、空中に漂ってる精霊波、エーテルに伝播するしな」
そう言いながら、空中に浮いている聖典プレザンを手にすると、エルデは頁を繰っていった。

「ついでに今やった考証結果を言うとくと、心の中で強う思っただけではやっぱり反応せえへんな。言葉が鍵になるのはルーンも同様やし、予想通りではあるけどな」

そう。

それはエイルも既に試していた。目の前に積まれている本の背表紙を読んでみたのだ。ダメだった。だからただ読むだけでなく強く念じてみた。だがまったく反応がなかった。

「これやな」

パラパラと頁をくっていたエルデが、目的の記述を見つけたようだった。もちろんエイルが口にした一説が記された部分である。

「その言葉の意味するところの鍵が、聖典アヴニルにある、って、昨日、禿げたアルヴの爺さんが言ってた」

「鍵？」

怪訝な顔をするエルデに、エイルはうなずいてみせた。

「あんまりいろんなところに首を突っ込むな、って言われてさ。その後にその意味はその言葉にある、とかなんとか」

それだけの言葉でエルデに細かい内容が伝わったかどうかはわからない。いや、伝わるかどうかはわからないが、伝わって欲しいという願いはあった。そしてエルデならわかるのではないかとも。

エルデは小さなため息をつくとエイルが持っている聖典アヴニルを指さした。

「目次を見てみ」

言われたとおりに目次を開く。

「『ミトと犬』とか言う章があるやろ？」

エルデが言う章は、確かにあった。大して厚くはない聖典アヴニルの半ばくらいに記述されている話のようだった。

顔を上げるとエルデは複雑な微笑を浮かべていた。エイルはその表情の意味をはかりかねた。当然である。内容を知らないのだから。

「ウチが説明するより、まずはアンタが自分で読んで考えてみ」

エイルは何も言わずに視線を聖典アヴニルに落とすと、「ミトと

犬」の章を開いた。

アヴニルとはマーリン正教会の開祖と言われるミト・ツーペが四始祖と交わしたとされる会話を集めた会話集のようなものである。もちろんただの会話集が聖典と呼ばれるわけもなく、その会話には多くの正教会的世界観・道徳観に立った教訓や含蓄が含まれている。その中の一説がエイルの探し求めているものだとエルデは言うのだ。

聖典の内容を敢えて記述するのも冗長に過ぎるように思うが、話の流れをより明るくする為に「ミトと犬」について簡単に説明をしておこう。

あるときミトは「人はどこから来ていったいどこに向かっているのか」と始祖の一人であるノームに問うたところ、ノームは同じく始祖の一人であるウンディーネに聞けと答えた。

ノームに言われたとおり、長い旅をしてミトがウンディーネに同じ事を問うたところ、彼女は始祖の一人であるシルフィードに問えと答えた。

大陸を渡り、やっとの思いでシルフィードに会ったミトは、彼女に同じ質問をした。するとシルフィードは、ドライアドに会えとだけ言って姿を消した。

またもや大陸を超え、大変な旅のすえに最後の始祖ドライアドのところにやって来たミトは、四たび同じ質問を投げかけた。

ドライアドは三人の子に乳を与えながらしばらく思案していたが、やがて足下を指さして言った。

「我が犬に聞け」

ミトはその犬に同じ質問を投げた。

「我は犬に問う。人はどこから来て、この後どこに行こうとしているのだ」

犬はミトの質問を聞くと大あくびをした。そして後足で耳の後ろをかきながらミトに問いを返した。
「犬は犬であることに満足しているから犬なのだ。では人は人であることに満足してはいないのか？」
それを聞くと、ミトはむっとして答えた。
「人はさらなる高みを目指すもの。犬と人とは違うのだ」
犬はまたもや大あくびをしながら、それに答えた。
「ならば人よ。我はさらに問う。高みとは何ぞや？人は神と対等になろうとしているとでも言うのか？では神となったらその後はどうするのだ？次は大神であるマーリンを見下ろしたいと思うのか？」
ミトは返答に窮した。だが、しばらく考えた後でこう答えた。
「マーリンに列ぶ事は望まぬ。だが近いところには行きたい」
すると犬はそれに答えてこう言った。
「ならば我はお前が歩む道を二つ作ろう。一つは人へ向かう道、一つはマーリンに続く道だ。一つの道の先には明日を与えよう、だがもう一つの道の先には必ず滅びが待っている。人よ、好きな道を選ぶがいい」
犬はそう言うと後足で立ち上がり、金色に輝いたかと思うと、たちまちマーリンの姿になった。
ミトは慌ててその場にひれ伏したが、しばらくして顔を上げるとマーリンの姿はもうそこにはなかった。
ミトは三人の子に乳を与え続けているドライアドに尋ねた。
「人は犬と同じなのでしょうか？」
だがドライアドは首を横に振ると告げた。
「それは私が決める事でもマーリンが決める事でもない。人が決める事だ。だが、汝が人でありたいのであれば人として生きよ。しからずんば滅びの道を歩むであろう」
単純に読めば、神に近づこうと考える行為は傲慢であり、神の怒

りに触れやがて滅びの道を歩む事になるという戒めのような話である。
エイルは短いその説話を読み終えると顔を上げてエルデを見た。まるでドライアドに助言を請うたミトのような気分だな、と苦笑しながら。
「意味がわからん」
エイルに助けを求められたエルデは、手に持っていた聖典パサトとプレザンを近くの本の山の上に積んだ。
「ま、そやろな」
エルデはそう言うとソファに腰を下ろして続けた。
「アンタは『禿げのアルヴ』にからかわれただけやろ」
「そうなのか？」
エルデは深く座り直すと、視線を天井に向けた。ルナタイトを封じた硝子の管のようなものが、何本も天井に埋め込まれていた。それはエイルがファランドールでは今まで見た事もない形の室内照明だった。
そう。「ファランドール」では。
エルデの視線を辿って天井を見上げたエイルは、目に入ってきたその硝子の管状の照明を、懐かしい思いで眺めていた。
その時のエイルはもう、完全にフォウの記憶は戻っていた。

「アンタが『訳がわからん』と言うっちゅう事は、この『ミトと犬』の話の本質が『人が神に近づくなど恐れ多い。罰が当たるぞ！』と言うわけやない、というのはわかるやんな？」
天井を見上げたままでエルデがそう尋ねた。
「え？違うのか？」
単純だが、そういう視点もあるだろうと思っていたエイルは思わずエルデを見た。だが、冗談を言っているような表情ではない。
「この話のキモは、『犬やと思てバカにしてたらエライ目に遭うで』っちゅう事やろ？」

「いやいやいや」
エイルはさすがにそれはないだろうと思った。
「それはあまりに単純過ぎるだろ」
よくは知らないものの「聖典」と名が付いているものにそこまで表層の、そのさらに表層のような訓話をわざわざ取り上げているとは考えにくい。フォウで暮らしている時でも宗教に興味もなく、大した知識もなく暮らしていたエイルにもそれくらいは予想がついた。
だが、エルデはエイルのそんな反応は予想していたように表情を一切変えずに続けた。
「聖典なんて読む人間が勝手にありがたく解釈したらええ事や。教会に行ったら神父が聖典の一部を抜き出して、したり顔でありがたい訓話を垂れてくれるやろ?あれは教会の神父的に申し合わせた価値観で理由付けしているだけやん」
「いや……まあ、そりゃそうかも知れないけど、それを言ったら解釈なんか人それぞれで正解なんてないって事になるじゃないか」
「そう言う事や」
「はあ?」
エルデは視線をエイルに戻すと怪訝な顔をしているエイルの目の前にスッと掌を指し出した。「聖典アヴニル」を渡せと言っているのだろう。
エイルは素直にその手に聖典を載せた。
「複数の解釈が成される場合、共通項目は単純なものやないとアカンっちゅう事や。アンタが『禿げ頭のアルヴ』にかけられたナゾナゾの場合は、文字とその一番表層的な表現やろ?」
「文字か……」
言われてエイルは改めてエルデの手にある「聖典アヴニル」という文字を見つめた。
エイルにとっての異世界、ファランドール。その異世界でエイルが普通にしゃべり、かつ文字も読める事がエイルにとっての最も大きな違和感だったのだ。異世界なら全く違う言語が使われていてし

かるべきだった。
　だがファランドールの共通語と言われる「南方語」とは、エイルが自分の世界である「ファランドール・フォウ」で普通に使われている共通言語と同じだったのだ。「フォウ」でアルファベットと呼ばれる文字で綴られた発音記述系の単純化された言語である。そしてその書かれている言語が理解できるということはすなわち、単語や文法がほぼ同じだと言う事に他ならない。
　アルファベットの数は、ファランドールの南方語の方がかなり多いとエイルはエルデに説明したことがあった。だがそれはエイルの知識にある別の言語の事を考えると単純なもので、例えばファランドールではＮを重ねる場合、フォウにはない別の文字が使われる。Ｓを重ねる時もＳＳではなく別のアルファベット一文字が使われる。つまり、覚えるのも極めて簡単だった。
　一番違うのはＬとＲの扱いで、ファランドールではＬとＲは同一のもので、文頭や単語の頭に使われるのがＬで、単語の途中にはＲしか使われない。
　母音の数もフォウでエイル達が使う言語よりも少なく、ある意味簡素化されていた。
　もちろん細かい違いは多々ある。だが、それはエイルにしてみればちょっとした方言程度の違いであり、「ここはフォウにあるファランドールという田舎の町だ」と言われれば、今でもそのまま信じられる程であった。
　もちろん今では全く違う世界であることは理解している。だが、違和感はぬぐえていない。異世界なのに「似すぎている」事に。
　次元の違う場所同士などそう言うものだと言われればそれまでだが、エイルがエルデに対していつも口にしていた違和感はそう言う事ではなかったのだ。おそらく同じくらいの広さがあるファランドールとフォウだが、ファランドールは多くのものが単一化されすぎていた。言葉も一つ。エルデやルネ、そして時たまラウが口にする「古語」と言われるものは別の言語ではなく、それこそ言い回しが

違うだけの方言だと考えた方が適切である。使う文字も同じ。度量衡も太古より同じものを使用しており。通貨すら統一されていた。

エイルの価値観では、国の垣根とは物理的な土地の境界ではなく、すなわちその土地土地の独自の言語や文字、通貨などの違いによるものに対して感じるものだった。だがファランドールでは国が変わってもその感覚が希薄に過ぎた。だだっ広い国を移動しているだけのような感覚に襲われるのだ。

衣装や習慣などが違う場合はあった。だが、それら「文化の礎」となるものは根底がまったく同一である。

違うと言えば……。

フォウには存在しないような人類が居ることであろうか。

アルヴ族……アルヴとアルヴィン、そしてダーク・アルヴと言った人間はフォウでは空想上の人類と言っていい。それがここには普通の人間として存在しているのである。

「聞いてるんか？」

エルデにそう声をかけられたエイルは我に返った。

「あ……ああ、聞いてるさ」

「――考えてた事はなんとなくわかる。でもソレは今は聞きたない」

エルデはそう言って軽く目配せをした。唇に指を当てる代わりなのだろう。エイルはわかったと言う風にうなずいた。

「つまり、や」

エルデは手に持っていたアヴニルを一度開いて、すぐにまた閉じた。

「犬は犬の形をしているように見えるけど、それはホンマに犬なんか？」

「は？」

「ウチはこんな美少女やけど、美少女やなかった時もあった。それでも、ウチはウチやった。ちゃうか？」

エルデが何の事を言っているのかはわかる。エイルには伝わる言

葉を選んで伝えようとしている事もわかる。
だが、それでもやはりエイルには「ナゾナゾ」の答えはわからなかった。
「まだわからへんの？　しゃあないなあ。そしたらここにゆで卵が一つあったとしよ」
「ゆで卵？」
「そこは突っ込むとことちゃう。黙って最後まで聞いとき」
「わかったよ」
「よろしい。で、おいしそうなゆで卵やから食いしん坊のエイルは早速それを食べようと口に入れました」
「誰が食いしん坊なんだよ、ぜんざいを七杯も八杯も平らげたヤツに言われたくないね」
「そこも突っ込むとことちゃうから。というか、教えて欲しいんか欲しないんかどっちやねん？ウチは別に教える義務はないんやで」
「すみません。オレが悪かったです」
「よろしい。で、強欲なエイルは……」
「今度は強欲かよっ！さっきよりひどくなってるじゃないか！」
「鬼畜のようなエイルは……」
「すみません。オレが悪かったです」
エイルはそういうと今度は同時に頭も下げた。それを見たエルデは嬉しそうににっこりと笑うと話を続けた。
「食いしん坊のエイルは誰にも邪魔されないうちに一人だけで食べてしまおうと、一口でそのゆで卵を飲み込んでしまいました」
エイルはその言葉にも断固として突っ込みを入れたかったが、かろうじて耐えた。
「でも、その卵を食べたとたん、口の中が燃えるように熱くなったかと思う間もなく、哀れ『ごうつく』エイルはあっさりとあの世に行ってしまいました」
「……」
「……」

「ちゃんちゃん」
「いやいやいやいや！」
にっこり笑って首をかしげて見せたたエルデに、エイルは抗議を訴えた。
「さすがにそれには突っ込まざるを得ない」
「なんでや？」
「誰が『ごうつく』なんだ？」
「そこか？突っ込むのはそこなんか？」
「敢えて言えば全部だよ。聖典がゆで卵の話になって、あげく食べたら即死かよ？しかも丸呑み？」
「ふむ」
「何だよ？」
「この話の本質には気付いた様やな」
「えええ？」
「ま、ええやろ。アホな奴には解説せなわからんちゅうことがわかっただけでもよしとしよか」
「いや、だから」
「この話のありがたいところは、その『即死』したところやな」
「――は？そこかよ？」
「そこや」
「余計わからんわ」
「ええか？もしも世の中のゆで卵のうち、百個に一個、や、もっと割合は少なくてもええな。そやな、一千万個に一個そういう卵がある、って知ってたとして、それでもアンタはゆで卵を何の疑問も持たずに幸せそうに食べる事ができるか？」
「いや……いやいやいや！」
「同じ事やろ。犬やと思ってたらマーリンやった。ミトはその後、犬に限らずあらゆるものがマーリンの化身やないかと思わずには居られへん」
「そ……そりゃ、そう言われたらそうかも」

「でも、知らんかったらミトは一生犬は犬扱いしかせえへんやろ？」
「……」
「ゆで卵にそんな危険なものがあるって知ってまうと、次から人はゆで卵にある種の恐怖を感じるようになる。いや、ゆで卵自体が食卓から消え去るかもしれん」
「いや……だからそれは」
「人間は、認識しているものが認識している通りのものである事を望む生き物や。アンタの目の前におる超絶美少女は超絶美少女以外のモノやと認識したら不幸になるで、っちゅう事や」
エイルはうすうす、これは絶対に不毛なやりとりだとは思っていた。そしてそれは最後のエルデの台詞を聞いて確信に変わった。
本人が言うとおり、いや、言わなくてもエイルはエルデを超絶美少女だと認識していた。それは事実で、その容姿については異議を唱えようにも不可能であることも認めていた。認めたくないが、認めざるを得なかった。エルデはそれほど美しかったのだ。
だが本人がそう言って自慢すると、それが事実だけに異性であるエイルが聞いてもムッとするところがある。冗談にならないからだ。大金持ちが「私は大金持ちだから。わっはっは」と言っているようなものなのだ。
だが……。
だが、エイルはその考えを停止させた。
エルデの表情が一瞬寂しそうな影を帯びたのだ。いつもならそういう台詞を吐く時に感じる勝ち誇ったような、偉そうな雰囲気がまったくない。
ひょっとすると、これは告白のようなものではないのか？
エイルはそう思いついた。
ゆで卵の話はエルデなりに事の本質をばかばかしくぼかそうとしたものではないのか？
最後の台詞は本当に答えそのものではないのか？

シグとの会話の一部始終を覚えているエイルは、その「ナゾナゾ」が出た前後の会話を反すうしていた。
（まさか、エルデに関わると、命がないとでもいうのか？）

「えーっと……もしもし？」
「何だよ？」
「何やの？なんで黙りやの？ここは素直に突っ込むところやん？」
「お前が超絶美少女じゃなかったら突っ込んでるところだ」
エイルの言葉に、エルデの頬に一瞬で朱がさした。
「な、何をサラっと小っ恥ずかしいこと言うてんねん！」
「いや……わかった、ような気がするんだ」
エイルがそう言うと、エルデは視線を逸らした。
「要するに知らんでもええ事もあるっちゅう、単純な話やんか」
「？？そうだな」
エイルは短くそう言うと、口を閉じた。それ以上、かける言葉が見つからなかったのだ。エルデが目を逸らしたのは、エイルの口から美少女だと言われて恥ずかしくなったからだけではないと確信できた。恥ずかしい時にエルデが纏うエーテルの感じを、エイルはわかる様になっていた。だが、その時エイルの肌で感じたエルデのエーテルは、もう少し違うものだった。
それがどう違うかは言葉にはしにくい。だが強いて言えば「痛い」ものだった。皮膚も肉も骨も通り越して、大事に守られている何かに直接針が刺さるような、そんな痛みだった。

「エルデ……」
（お前は本当は何者だ？）
言おうとした言葉を、しかしエイルは飲み込んだ。
エルデはエルデだ。
エイルはそう自分に言い聞かせた。
エルデにそれを尋ねたら、体から光を放ち、マーリンになってそ

のまま天に昇って消えてしまいそうな錯覚に囚われたのだ。
（それはイヤだ）
心からそう思った。
だが、今度は新たな疑問が心に浮かび上がってきた。
オレはいったい何が嫌なんだ？
エルデが消える事か？
エルデがマーリンになる事か？
それとも……。
もどかしさを振り切る為に、エイルは思わず手を伸ばしてエルデの肩に触れようとした。
その時だった。
扉の開く音がエイルの手を止めた。

「やあ、お待たせ」
未知の声がする方に、二人は同時に顔を向けた。
「君たちがキアーナ君の言う『不思議な友人達』だね」
そこには予想に反して、青年と言った方がいいような若々しい男のデュナンが笑顔で立っていた。
「プロットです。さすがにここでは落ち着かない。私の部屋で話をしましょう」
キアーナに聞かされていた「エーテルとルーン解析の第一人者」という言葉から、二人が勝手に想像していた人物像と、実際に現れた人物との差があまりにかけ離れすぎていた。勿論、二人は勝手に気むずかしそうなやぶにらみの老博士を想像していたのである。
その驚きを確認し合うかのように、『不思議な友人達』は思わず互いに顔を見合わせた。

# 第五十一話　教授長キセン・プロット

キセン・プロット。

ファランドール史に突然現れ、そして突然消えたこの高名な学者が残したものと言えば、実のところ謎だけではないだろうか？　調べれば調べるほど、そしてそれが詳細になればなるほど、この人物には何一つ確かな事が無いのだという事を思い知るだけであろう。

だが、この人物を知る最も正確な資料が、王立第四図書館、すなわち俗に言う秘密文書館に所蔵されているとある人物の口述筆記録にあると決めてしまえば話は早い。

歴史学会ではそこに書かれた人物とキセン・プロットを結びつける事はしていない。そもそも人物の名前が違うからである。だが、その「とある人物」がエイル・エイミイである事を忘れてはならない。

エイル・エイミイとはフォウから招かれた異世界の住民なのだ。彼にはエイルと言う名とは別にフォウでの名前があった。すなわちエイル・エイミイはキセン・プロットと言う名を敢えて使わなかったとすれば、彼の口述筆記録にかかる霧は晴れるのだ。

一般にはアダンの高官の特命でハイデルーヴェンに教授待遇で突如赴任したとされるのが、キセン・プロットの最初の公式な記録である。それ以前の記録は全くない。

「月の大戦」でほぼ消失したウンディーネ共和国首都島アダンの記録が現存していれば、そこにこの名が刻まれた資料があるに違いないというのが大方の学者の言い分であるが、それはもはや確かめようがないのだ。

それにしてもキセン・プロットは頑として過去を語らぬ人物であったようで、この人物に関する記述はハイデルーヴェン時代の業績についてと、キセン・プロットに対する様々な憶測が書かれた関係

者の日記や走り書きだけである。
本人は学者と言うには極めて寡筆で、研究成果を文章で残すと言う事を敢えて避けていたとしか思えないところがある。
その分、弟子達がキセン・プロットについてその人物象と研究について多くの文献を残しているわけだが、どれもが今日では検証すら困難なものばかりである。そもそも既述している弟子達がキセン・プロットの研究を理解できていなかったからである。
キセンは精霊波、つまりエーテルおよびルーン解析の第一人者と言われている。
エーテルの持つ力を具体化しようとした人物と言えば理解しやすいかもしれない。
小難しい理論や研究成果を挙げ連ねる事は容易であるが、それらはキセン・プロットという学者が研究した本質を表さない。
一言で言うならば、キセン・プロットは『普通の人間がエーテルを利用する方法』を研究していたのである。
そしてその研究成果を極めて効果的に検証、いや利用および活用していた事も特筆すべきキセン・プロットの特徴と言えるだろう。
キセン・プロットは自らの研究の成果としての論文を記さなかった代わりに、それを実践してみせることで示したとされる。すなわち、ルーナーではない普通の人間が使える精霊陣を作って見せたり、その精霊陣をさらに進化させ、不思議な動作や効果をもたらす「物」を作り出したのだという。
残念ながらそれらは証拠として残存していない。中には荒唐無稽としか言いようのない発明品などもあったとされるが、噂の一部は真実なのであろう。最も共通した認識は一つの目的に沿った発明品が当時確かに存在したであろうという事である。
有り体に言えば、キセンは『エーテル兵器』を開発していた人間だと言われている。
しかも驚くべき事に、それはドライアド王国とシルフィード王国という、敵対する二国相手に供給されていたというのである。

ドライアド王国はデュナン中心、いやデュナンの国である。エーテルの力を先天的に制御できる能力を持つ「フェアリー」と言われる能力者の割合が非常に低い。ほとんど無いと言い換えてもいいくらいである。

フェアリーとはアルヴ系の遺伝子を持つ者に多く存在する特性のようで、ドライアドはシルフィードとの戦争に臨み、兵士一人ずつの戦闘能力の差を最もおそれていた。一説によるとドライアド兵三人がシルフィード兵一人と同等の戦力であると唱えていた軍事関係者が居た程である。

兵力ではなく兵士としての戦闘力の差を考慮するのは当然だと言える。大局的に勝利を収めようとも、局地的な敗北が多くなればやがてそれは大きな綻びに繋がる。

局地的な戦闘においても相手と自国との一兵あたりの兵力の比率を出来る限り一対一に近づける為の「戦略」を怠るわけにはいかなかったのだ。そこに現れたのが、キセン・プロットのエーテル兵器だったというわけである。

一方シルフィードにしてみれば、属性に囚われぬエーテルの力を自在に使う事ができる「ルーナー」の不足が深刻であった。

ルーナーの素養はデュナン系にあり、先天的にフェアリーの能力を有するアルヴ族にはほとんどない。数多くの高位ルーナーを生み出したダーク・アルヴ族で形成されたジャミール一族は例外中の例外と言っていい。勿論それには訳があるのだが、それはまた後の話にしたい。

エーテルとの親和性が高いアルヴは、そもそも全ての属性を制御する必要があるルーナーには向かない種族と考えるのが今も昔も一般的な解釈である。

フェアリーの能力と違い、ルーンは応用の幅が広い。それも圧倒的である。

その絶対能力についても自らの持つ力だけでなく精霊陣などを使って拡張・増幅も可能である。複数のルーナーを用いて、複合的なルーンを使ったり同じルーンを増幅するなどという事も可能である。

もちろんフェアリーと違い、ルーナーには一定の詠唱時間と空間座標軸の維持という弱点はあるが、ルーナーを相当数確保出来るのならば、運用でそれを補う事は可能である。

フェアリーが居て、さらにルーナーがいれば、戦力としては万全で、たとえ数の上では圧倒的な差があり劣勢が確定していようと、局地的な勝利を得ることは難しくはない。

すなわち、シルフィードはルーナーの代わりとしてのエーテル兵器を欲したのであろう。

要するにプロット教授長はどちらの陣営からも喉から手が出るほど欲しい「物」を持っていたという事である。

だが、もちろん双方を相手にする事は大きな危険を孕む事になる。なぜならば、そのエーテル兵器の取引に対して、キセン・プロット側にはまとまった組織の影がないからである。

大国の軍を相手に一人の研究者が渡り合うだけでもその困難さは想像に難くない。

だがキセンはそれをやってのけていた。二国以上を相手に、である。

おそらくそこには秘密とも呼べぬような単純な「もの」の存在……つまりキセンは強固な結界を張り巡らして、そこから一歩も出なかったに違いない。多くの記録を見ても特定の建物以外には顔を出すことはいっさい無かった人物であるとされている事から、その考えはほぼ間違いないと思われる。

エイルは勝手に、自分達の面会相手は初老のデュナンであると決めつけていた。

彼の固定観念に於ける「教授」とは、すなわち初老の男だという事なのであろう。

考えてみればキアーナ・ペンドルトンはキセン・プロットの容姿については一切何も語らなかった。

（それにしても……）

とは言うものの、エイルがそう思ったのも無理はないだろう。何しろ彼らの前に現れたキセン・プロットは、「教授長」という肩書きを持つ人間にしてはあまりに若すぎた。

エイルはプロットの年齢と、そしてその風貌があまりに想像と違い過ぎた事による混乱を必死に修正して飲み込もうとしていた。

こざっぱりした品のいい上下服を着込み、櫛が行き届いた短い茶色の髪のデュナンの青年には、教授と言うよりも良家の若旦那と言った一見して育ちが良さそうな風情があった。少なくとも研究に没頭するあまり、無精ひげで髪の毛も伸び放題、染みの付いたヨレヨレの上っ張りを羽織って、不健康そうに目の下にクマを作り、野暮ったいメガネをかけてやぶにらみにこちらを見て、ぶっきらぼうに挨拶する……そんな雰囲気は微塵もなかった事は確かである。

（いやいやいやいや。オレはどれだけ貧困な固定観念を持っているんだか）

エイルは目の前に突きつけられた事実を素直に受け入れ、本気で自分の思い込みについて深く反省すべきだと考え始めたが、プロットの人の良さそうな表情とは裏腹にその灰色の目が鋭く自分達を観察している事にすぐに気付いた。

エルデが、エイルの服の裾を引っ張った。その部屋でもエルデはずっとエイルの服を掴んで離さなかったのだ。

その合図を、エイルは理解していた。もちろんエルデからの警告である。とは言えそれはプロットの視線の鋭さに対してのものではなさそうだった。

それはその向こう側、つまりプロット教授長に続いて現れた三人

のデュナンに対するものであった。
キセン・プロットの後ろに立つ三人の大柄なデュナン。
それはいい。
だが、その服装にエルデは警鐘を鳴らしたのだ。
彼らが着用していたのは橙色の僧服であった。それはもちろん新教会の「僧正」と呼ばれる地位にある者だけが着る事を許された、特別な色の僧服であった。
賢者に匹敵するとも噂される新教会の高位ルーナーが、なぜここに居るのか？
キアーナ・ペンドルトンの話が本当であれば、プロットの研究はエーテルに関するものだ。だとすればルーナーに関係は深い。そう思うと彼らの存在もあながち場違いとも言えないが、こういう研究機関であからさまに「僧正」であることを誇示しながら、まるで護衛の様に付き従う事には違和感を覚えるのが普通であろう。
エイルはこの場に僧正が三人もいる合理的な理由を考える前に、この部屋でエルデがとった予防策に賛辞を送っていた。
（何も疑われる事はないはずだ）
この図書室に来てからの行動を思い出しながらエイルは自分にそう言い聞かせていた。
会話が聞かれていたとしても……いや、今ではエイルも間違いなく聞かれていたと確信していた……そこに不自然なものはなかったはずである。少なくとも二人の正体に疑問を持たれるような会話はない。

「まさかとは思っていましたが、まさに瞳髪黒色。しかも髪は豊かで長く、そして艶やか。瞳は全ての光りを拒むかのように反射し、その色は深い。これほど見事な漆黒の髪と墨黒の瞳は純血種のピクシィとしか思えませんな」
まじまじとエルデを見つめていたプロットは「純血種」のエルデにそう言った。

だが、エルデはそれには反応しなかった。
「キアーナは？」
エルデが口にした言葉はそれであった。
紹介者がこの場にはいない。代わりに新教会の高位ルーナーが三人も現れたのである。ヴェリーユで「しでかした」事を考えると、エルデの警戒は当然であった。
「あの子なら私の研究室にいますよ。調度いいところに来てくれたのでちょっと手伝いを頼んでしまいました」
プロットは自分の投げかけた言葉にエルデが反応をしない事をまったく気にする様子も見せず、にっこり笑ってそう答えた。
そしてそこに控える三人の僧正を振り返った。
「この者達はご想像どおり護衛です。色々と物騒な世の中ですからね。それにこのご時世、特に去年の暮れにシルフィードのアプサラス三世陛下がお隠れになってからはこのハイデルーヴェンもすっかり物騒になりましてね。それで新教会の堂頭様が私に気を遣って、彼らを派遣されているのですよ」
そう言ったプロットは大げさに肩をすくめてみせた。
「言い訳じみた事を申しますと、私はお断りしたんですがねえ。まあいかんせん、新教会はハイデルーヴェンの大きな後ろ盾です。やってきた彼らを無下に追い返す事も出来ないと、まあそういう訳ですから、あまり身構えなくてもよろしゅうございますよ」
「私は……」
何かを言いかけたエルデをプロット教授長は手を上げて止めた。
「キアーナから聞いております。ハイレーンのエルデ・ヴァイスさんと、その護衛の剣士エイル・エイミイさんでしたね」
エルデはあからさまに警戒している様子を隠さない。だがプロットはそんな事は意に介さず、笑顔のままで自分の後についてくるように促した。研究室はここから少し離れたところにあると言う。
「ハイレーンも珍しいですが、キアーナの話だと名ばかりのハイレ

ーンではなく相当な力をお持ちとか。ルーナーである彼が舌を巻いたと言う程ですから間違いないでしょう。相当な力を持ちながらどちらの教会にも属さず、さりとてバードとして取り立ててもらっているわけでもないルーナーが居るとは正直驚きましたよ。しかもこうして会ってみれば思わず声を失うような美貌で、しかも見た目はピクシィ。あまつさえとてもお若い。それほど目立つ要素をお持ちの方なのに今まであなたの噂をまったく耳にしなかったのが不思議でなりません。まるで今までどこかにずっと隠れていらっしゃったかのようだ」

　プロットは回廊を歩きながらも話を続けた。

「いえいえ、出自を疑っているだとかあなたが嘘をついていると責めているわけではないのですよ。ただ、あなたとの邂逅を心から驚き、日常離れした出来事だと感動しているだけです。お気を悪くされぬよう」

　だが会話をしているわけではない。エイルとエルデが何かを話そうとするとそれを制するのだ。つまり、一人でしゃべり続けていた。

「ヴァイスさんもそうですが、私はそちらのエイミイさんにも非常に興味があります」

　プロット教授長がそう言うと、エイルの服の裾を掴んでいたエルデの手に力が入った。エイルは警戒しろというエルデからの合図にとった。

「エイルというのはまあ、失礼ながら女のような名前ですな。からかわれたりしませんかな？いやいや、私はそんなつもりはございません。それよりそんな優しい名前を持っているのに実は剣士だという相反したところが興味深い。いやいや、失敬失敬。重ねて申しますが決してエイミイさんのお名前をけなしているわけではありませんよ」

　よくしゃべる男だ、とエイルは思った。

（キセン・プロットと名乗る人物は、ひょっとすると……）

出会う前。そんな思いがエイルにはあった。もちろん、フォウで暮らしていた時代に知っている人物ではないか?と言う期待があったと言う事である。

だが、実際に目にしたキセン・プロットにエイルはまったく見覚えがなかった。

そもそもファランドールには「異世界ファランドール・フォウ」という概念があるのだ。そしてその異世界の住民だった自分自身がファランドールにこうして存在している。

ならば自分以外にもフォウの住民がいてもおかしくはないと考えるのが普通であろう。いや、普通ではないかも知れない。だが、フォウとファランドールが繋がっている扉をエイルは『時のゆりかご』で実際にその目で見ていた。

例が一つあるのだから、「他」の可能性がないわけはない。

その話にはエルデも積極的ではないが賛同していた。

歴史上、不思議な人物、すなわちファランドールの常識に照らすとあまりに風変わりな人物が時々存在するのだとエルデは言った。そしてそれはフォウの人間なのかもしれない、と。事実そういう噂も昔から少なからずあるのだと言う。

理解出来ないものは「あの世」のものとする風潮はファランドールもフォウも似たようなものだとエイルは苦笑しながらその話を聞いていたが、エイル以外の『異世界人』の可能性を、それも極めて強い可能性をエイルはキセン・プロットに対して感じていたのである。もちろん、名前に反応して、である。

とは言えエイルはキセン・プロットという名前の人物を知っているわけではなかった。そうではなく、その名前は「信号」なのだと思っていた。いや「合図」と言った方がいいかもしれない。

それはその名前を知っている人間にはピンと来る、そういう物なのだ。

キアーナが居た手前、エルデにその事を説明する暇がなかったのが悔やまれたが、どうやらエイルは自らの期待が大きすぎた事を認

識し始めていた。
注意深くキセン・プロットなる人物を観察した。だが、エイルは記憶の隅という隅をつついてもその顔をほじくり出す事が出来なかった。
だが……失望はしなかった。確信はそのままだったのだ。
キセン・プロット。
エイルにとっては、その名は、意味深い、いや深すぎる名前だった。本人でなくともその親はどうだろう？　そのさらに親は？

「さて、着きました」
しゃべり続けていたプロットは、一方的に話を切り上げると目的地に到着した事を告げた。
キセンは回廊に掲げられていたハイデルーヴェンの歴代領事官の肖像について、古い物はその絵の具の成分が悪くてそろそろ褪色し出しており、自分にはそれを防ぐ手立てがあるが、誰も取り合ってくれず失望している事を述べ、しかしその画期的な手法には自信があり、是非聞いて欲しいと言いつつ、その解決策とやらの三つ目の選択肢について語り始めたところだった。
褪色を防ぐ為に塗布する上薬の鉱物とニカワの調合割合についてプロット教授長の持つ私見をこれ以上聞かなくていいのだと知ると、二人はほっとした表情になった。
エイル達は回廊をおそらく大きなコの字型を描いて歩いてきたようだった。
相当広い建物のようで、歩き出して優に五分以上経っていた。
階段は通っていない。したがって同じ階層、同じ回廊がそれほどの長さを持っているということである。
「どうぞ、お入り下さい」
回廊から奥まったところにある扉を二人に指し示した後、キセン・プロットは付き従っていた僧正に合図をした。三人の僧正のうち、二人がそれぞれ扉のとってに手をかけ、その両開きの扉を開いた。

「どうぞ、お先にお入り下さい。警戒は無用です。大丈夫。罠などございませんよ」

エルデが警戒をしている事はプロット教授長も当然認識しているに違いなかった。だから敢えてそう言って入室を促した。

エイルは部屋を一通り眺めるとエルデに小さく呟いた。

「大丈夫だ。入ろうぜ」

既に何度か既述しているが、エイルにはエルデにはない力があった。

殺気を感知する力である。それはフォウに居た時代から持っていたエイルの特殊な力である。エルデはその事をもちろん知っている。つまり、エイルの一言でこの部屋に殺気を持っているような人物は居ないという情報を共有した格好である。

エルデはエルデで人間の存在、そしてルーンや結界を感知する。

エイルにはわからない事とエルデにわからない事がある。その二人が揃えば警戒精度は極めて高くなる。

エルデはエイルのその言葉を聞くと、扉の脇に立つプロットに一瞥をくれた後、部屋に一歩を踏み入れた。エイルはそれを見て遅れぬように自身も部屋に入る。そもそも服の裾を捕まれているエイルは、エルデに引っ張られる格好になるのだ。

エルデは最初の一歩こそゆったりとした足取りだったが、部屋に入り込んだあとはそのまま二歩、三歩とずんずん入り込んだ。

開かれた扉の向こう側には大きな机と、そして背もたれの高い肘掛け椅子がある。椅子は後ろ向きに置かれていた。見えない部分の細かい意匠は当然ながら不明だが、背面にはこれと言った特徴もないことから、頑丈そうなだけの素朴な作りの椅子のようだった。

机にもおよそ装飾と呼べる物がない。教授長という立場の人間が使う机ならば、それなりの厳めしさがあってしかるべきだとエイルはここでも先入観を持ち出してしまっていたが、その部屋の調度はすべて装飾性というものとは無縁のような佇まいで、実用一点張り

といったものばかりであった。
あの待合に使われている図書室のような雑然とした部屋と比べると、この部屋は想像以上にこざっぱりしており、しかも広大であった。
壁一面に書架があり、研究者らしくそこは書物で埋まっていたが、きちんと整頓されており、検索性・閲覧性がともに高そうだった。
そんな無人の部屋を興味深げに見渡している二人の背後で扉の閉まる音がした。
振り向くと、しかしそこにはキセン・プロットの姿はなかった。もちろん三人の僧正の姿もない。
エイルが思わず腰を落とし、妖剣ゼプスの柄に手をかけた時、背後、つまり大きな机が置かれた方向から声がした。
「ようこそ、私の研究室に」
女の声だった。
二人ははじかれたように同時に振り向いた。
果たしてそこには背の高い肘掛け椅子に深く腰をかけたデュナンの女が座っていた。
忽然と現れた様に思ったが、誰も座っていないと思っていた椅子は、実のところ大きすぎて、後ろ向きになっているとその女の姿は見えなかっただけのようだった。
「おい」
「いや、確かに誰も居らんかったはずや」
エイルとエルデは小声でそんなやりとりをした。エルデはエーテルの流れが見えるのだ。だから人間がいれば気配を見落とすはずがなかった。つまり、椅子に座っている女は、こことは違う場所から突然現れたという事になる。
しかし……。
「初めまして」
二人の混乱をよそに、女はそう言うと椅子から立ち上がった。

「私がキセン・プロットです」
「え？」
エイルは思わず入ってきた扉を振り向いた。誰も居ないのはわかっていたのだが……。
「ごめんなさい。だますつもりはなかったの。でも貴方たちが私の事をまったく知らないと言う事はこれでわかりました」
「手の込んだ歓迎やな」
エルデはそう言うと目を細めてじっとキセン・プロットを名乗る女を見つめた。
肘掛け椅子の横に立つデュナンの女は、年齢は三十がらみであろうか。肩までの長さの暗金色の髪と灰色の瞳を持っていた。
エルデがそんな表情で相手を見る時は、機嫌が悪く相手に対して嫌悪を感じている場合だと言う事をなんとなくエイルは理解していた。つまり今、エイルは怒っているのだ。
もちろん、一杯食わされた事に対してであろう。
特に思惑がない限り、エルデは感情をあまり隠さない。いや、感情表現を選んで、敢えてわかりやすい態度をとる事が多い。その方が相手の本心もわかりやすいというのが彼女の理屈だったが、相手からは微塵も殺気を感じないこの場合はどうだろうかと、エイルは思っていた。
だが、エルデは意外な事を口にした。
「今のは、人間やないな？」
エルデの一言は、それまで軽い作り笑いをしていたキセン・プロットの表情を変化させるのに充分だった。その白い顔に驚きの表情が広がったかと思うと、やがてそれは満面の笑みに変化した。
「ヴァイスさん。あなた、面白いわ。実に興味深い人物ね。アレがマーリン素粒子合成疑似生命体だって見破った人は初めてよ」
「マーリン素粒子合成疑似生命体？」
エルデはプロットが口にした耳慣れない言葉をオウム返しに口にした。

「あなた達の言葉ではエーテル体と呼ぶようね。さっきのは私が付けた正式名称」
「いや、エーテル体って、あれが？」
エイルがエルデにそう尋ねたが、エルデもプロットも共にその言葉を無視した。二人はじっと互いを探るように見つめ合っていた。
「そんな正式名称聞いたこともないな。キセン・プロット教授長…アンタ、ホンマに一体何もんや？」
そう問われたキセン・プロットは、自分の机の側からゆっくり脇にあるソファの方へ移動して、応接用の長いソファを二人に勧めた。
近くに寄るとプロット教授長が明らかにエイルやエルデより大柄なのがわかった。とは言え成人のデュナンとしては取りわけて大柄というわけではない。そもそもピクシィはデュナンより小柄な人類であり、加えてエイルはその男性のピクシィとしては小柄だっただけである。そのエイルとあまり変わらぬ身長のエルデもまた、キセン・プロットと比べれば相対的には小柄になってしまうだけのことだった。
「私の方こそ聞きたいわね。あなたは何者？古語を操る瞳髪黒色のハイレーンさん」
二人がソファに腰掛けるのを待って、プロット教授長は口を開いた。
「旅芸人一座の用心棒……とでも言うとこか」
エイルはエルデの言葉に突っ込みたいのを、ぐっと堪えた。よくそんな事がいけしゃあしゃあと言えるものだな、と。
だが、あながちウソというわけでもない。ヴェリーユでは会い損ねたが、まだアキラとの契約は続いているはずだからである。ただ、芸人は横笛奏者であるアキラ一人である。
（芸人「一座」はさすがにどうなんだ？）
エイルは心の中で指摘した。
「なるほど旅芸人の用心棒ねえ。でも、あなたはハイレーンでしょう？」

エルデは横に座っているエイルを指さした。
「コイツが用心棒。ウチはコイツがケガしたら治療する。そやから多少のケガでもへっちゃらな丈夫で長持ちする用心棒って事で地味に稼がせてもろてる」
エイルはまたしても突っ込みたいのを拳を握りしめてじっと我慢した。この場面では口を挟まない方がいいのは明白である。エルデとやり合っていてはいつまで経っても核心にたどり着かない。
「お二人はいつも一緒という事？」
キセン・プロットはエイルの様子を見て水を向けた。
「まあ、そうだな」
これくらいはいいだろうと、エイルはそう答えた。あまり黙り込んでいても不自然に思われるかもしれないと判断したのだ。
「まあ。じゃあお二人はご夫婦？もしくは夫婦同然の間柄ってところ？」
プロットの一言にエイルとエルデは思わず顔を見合わせた。だがエルデはすぐに顔を赤らめてエイルから視線を逸らせた。
「ちゃうちゃう。ウチらはそんなんやない」
「あらあら、軽くからかっただけなのに、効果覿面ね。顔に答えが全部書いてあるわよ」
プロットがそう言うと、エイルの頬はさらに赤さを増した。
「何言うてんねん！ちゃうわっ！！」
そう言って慌てて「夫婦疑惑」を否定した時には、拳が強く握られて、ソファから軽く腰が浮いてさえいた。それは言わばエルデの「素顔」の反応だった。

異変はその時起きた。
異変と言っても、鈍い人間なら気付かないほどの小さな変化である。
プロット教授長の机の一部に、赤い光がともったのだ。どうやらスフィアのようなものが埋め込んであったらしかった。

さすがにエイルもエルデもその変化には気付いた。当然ながら部屋の主人も。

その灯りにちらりと目をやったキセン・プロットの顔色が大きく変わった。

「本当に……あなた達は何者なの？」

そう言うとゆっくりと立ち上がり、そのまま後ずさった。

「私をどうしようというの？」

エルデはそのプロット教授の様子を見ると、苦虫を噛みつぶしたような顔で目を伏せた。

「今の光は……ひょっとしたら精霊波の強さを測る精霊陣みたいなもんか？」

「よくおわかりね。さすがと言っていいのかしら。感応機がこんな色反応をするなんて、本来はありえないのよ」

キセン・プロットの態度は、明らかに狼狽しているように見えた。

エルデは顔を上げてプロットの一連の動作をじっと観察するように追っていたが、スッと立ち上がった。

「言うとくけどウチらには教授に対する敵意は全くない。ただ、ちょっと話がしたいだけや。教えてもらいたい事がある」

エルデはそう言うと右手を前方に突き出し、小さく何事かをつぶやいた。直後、その手には三色の木を撚って作られた儀仗が握られていた。

それに呼応するように、先ほどの赤い光が光量を増した。

「そやから」

エルデはそう言って儀仗の頭をプロットに向けた。

「どこかで見てるんやろ？いい加減にエーテル体やのうて、本人と話をさせてくれへんか」

「え？」

エルデの言葉に、エイルは思わず声を出した。

「コイツも、そうや」

エルデはそう言うとさらに儀仗を付き出した。

「さっきのも何となく違和感があってもしかしたらと思たんやけど、こっちのエーテル体は違和感がさらに微少やな。ウチでも相当注意深う観察せえへんと気づかへん位、よう出来たエーテル体や。そもそもこの部屋に入った時、人間は誰もおらへんかった。それは間違いない。そやのに忽然と現れるとかあり得へん。エーテル体なら話は簡単や。文字通り降ってわかす事が可能らしいしな。ちゅうか、ウチらみたいな人畜無害な二人連れ相手にどんだけ用心深いんや！」

言うまでもなくエイルの目にはエルデの言う「エーテル体」と人間本体との区別はまったくつかなかった。そもそもエイルは「エーテル体」と言うものに初めてお目にかかるのである。

いや、例外があった。シグ・ザルカバードである。確かエルデはあれもエーテル体だと言っていた。

（エーテル体には触れるのか？触れば本物の人間と違いがあるのだろうか？）

だが、当のエーテル体であるキセン・プロット教授長は後ずさりをしながら部屋の奥へと向かい、二人との距離を広げつつあった。

「あかん！」

思わずその後を追おうとしたエイルを、エルデが止めた。

「そっちには罠があるに決まってるやろ」

エルデの言う事はもっともだった。ここまで用心深い人物である。罠の一つや二つ、普通に仕掛けられているに違いなかった。

「信じて下さい」

エイルはプロットを追うのはやめたが、代わりにそう声を出した。

「オレ達はあなたに危害を加えようと思って来た訳じゃないんです」

エイルがそれ以上しゃべるのを止めようとしたエルデに、エイルはしゃべらせてくれと目で合図した。睨んだわけではない。懇願の目だ。エルデはその目を見ると何も言わず、エイルの顔の前に付きだした儀仗ノルンを下げた。

「すまん」

エイルは短い言葉で感謝の意を表すと、続けた。

「オレ達はこの街でアルヴ系の人達が迫害を受けて、命まで狙われているのがなぜなのか知りたいだけなんだ。たまたまキアーナ……キアーナ・ペンドルトンを見かけて……お節介だって言うならそうかもしれない。でももう関わっちまったんだから、しょうがないだろ？『ふーん、そうなんだ』とかで見過ごせないんだよ。だから何か原因とか知ってたら教えて欲しいんだ」

エルデの言葉に、プロットは立ち止まった。だが、決してそれ以上近づこうとはしない。

「その言葉を素直に信じろとでも言うの？剣の柄に手をかけた剣士と、何も無いところから儀仗を取り出してみせるような相当に高位のルーナーが揃ってやってきて『話が聞きたいだけ』ですって？このご時世、そんな言葉を信じろと言う方が無理というものよ」

「そっちこそ、似たようなもんやろ？ホンマは会うつもりなんか無かったくせに、二人のうち一人が瞳髪黒色やと聞いて、そんなら実物かどうかを見てみよか、っちゅうところやろ」

「私も命は惜しいわ。でも、瞳髪黒色と聞けば科学者としては確かめずにはいられない。つまりこれは当然の行動ではなくて？」

「『これ』っちゅうのはエーテル体で応対した事か？」

プロットはうなずいた。

「私は臆病な人間なのよ」

「わかった。二人ともやめろ」

エイルがやりとりに割って入った。

「こちらに敵意が無い事を証明する。だから信じてくれ」

「証明ですって？」

エイルはうなずいた。

「エルデは儀仗を収める。オレも剣をテーブルの上に置く。そっちはそこにいてもかまわない。本体が出なくてもいい。だからちゃんと冷静に話だけはさせて欲しい。そして嘘は言わないで欲しい。それでもだめか？」

エイルは言い終わるとすぐに提案を実行に移した。剣を腰のベル

トから外すと、それを目の前のテーブルの上にそっと置いたのである。
「ああもう。わかったわかった」
エイルに目で促されたエルデはふてくされたようにそう言うと、小さい声で格納ルーンを唱え、儀仗ノルンを元の指輪に戻した。

「言うとくけど」
エイルに促されてそのままソファに腰を下ろしたエルデは、エーテル体のプロットを睨んだ。
「そっちから何かされたら、ウチらは自分達を守る為に最大限の力を行使するで。要するにこっちから手は出さへんけど、黙ってやられるタマやないっちゅうことだけは覚えといてもらおか」
キセン・プロットのエーテル体は二人の様子を見ながら、しばらく沈黙していた。
「エイルが言うたように別に話はエーテル体でもええ。あんたのエーテル体は結構な別嬪さんや好青年に仕立ててるようやけど、本体は人前に出るのが恥ずかしいような容姿なんやろ？ウチらもブスやブ男は敢えて見とうはないし、話し相手はそのオバハンの姿で結構や」
エイルはいつもの毒舌でそう言ったが、プロットのエーテル体は特に動じる様子はなかった。
「お前がそういう台詞を吐くと、なんだかオレの方がものすごく腹が立ってくるのはなぜなんだろうな」
「アンタが好青年でも美男でもないからに決まってる」
「オレは確かに目つきが悪いかもしれん。でもお前が言うほど不細工じゃないと思ってるんだが」
エイルがそう抗議すると吊り上がった目でエルデが睨んできた。
「ウチと比べたらアンタはどう見ても不細工やろ？」
「いやいやいや！オレとお前を比べるなよ！比較対象がおかしすぎるだろ！」

「ウチの顔がおかしいやて？」
「ンなこたあ言ってない！」
「ああもう、アンタが不細工とか目つきが悪いとか、そんなんは別にどうでもええっちゅうねん」
「はいはい。悪うございましたね、不細工で。オレの顔がイヤなら、アルヴだかアルヴィンだかの美男子を見てりゃいいだろ」
「アホ。顔が不細工かどうかと、好きか嫌いかは別問題やろ」
「――え？」
「な、なんでもないっ、このスカポンタン！」
「スカポンタンって何だよ！」
「やかましいっ！」
エルデはそう言うとぷいっとエイルから顔を背けた。
そのやりとりを聞いていたプロット、いやプロットのエーテル体が、ようやく口を開いた。
「ずいぶんと安い売り言葉で挑発してくれるわね。あなたを見ていると美人に性格のいい人は居ないっていう法則が俄然信憑性を帯びてくるわね……でも」
そこまで言うと、プロットのエーテル体はエルデの顔を見て相好（そうごう）を崩した。
「ぷっ」
「人の顔見て、何吹いてんねん！」
自分の顔を見たプロットが小さく吹き出したのに、エルデはすかさず反応した。
「アンタに笑われるような顔やないはずや！」
「あははは、そんな真っ赤な顔をして、よく言うわね。まったく仲のよろしい事で」
「なんやて！」
エルデは思わず立ち上がった。
「あ、それとも一方通行？私にも経験あるけど、そりゃ辛いわよねえ」

「やかましい！訳のわからん事いうな！」
「わかってるくせに。ほら、また赤くなった。つついたらはじけて血が噴き出しちゃうんじゃない？」

エルデはもちろん、プロットがからかっている意味がわかっていた。この手の感情を制御出来ない自分の性格も理解していた。エイルの体を借りていた時と違い、感情が体に直に伝わる感覚が数倍、いや数十倍も敏感に思える。
「おい、エルデ？」
黙ったままのエルデにエイルがそう声をかけた。だがエルデは「うるさい」とだけ言うと、エイルには顔を向けず、そっぽを向いたままでソファに座り直した。
「性格は相当悪いみたいだけど、敵意がないというのはどうやら本当のようね」
エルデの様子を見ていたプロットのエーテル体は微笑んだままそう言った。
「わかったわ。ちょっとだけ信じましょう」
その言葉にエイルは身を乗り出した。
「じゃあ？」
「実のところ、こちらにもあなたたちに尋ねたい事があるのよ。このまま帰ってもらっては困る程の、ね」
キセン・プロットはそう言うと、意味ありげな笑いをエルデではなく、エイルに注いだ。
「いいでしょう。特別に会いましょう。疑似生命体でもいいんだけど、これほど精巧になると長時間実体化させるのは体力を使いすぎるのよ。それに……」
そこまで言うと言葉を切って、今度は視線をエルデに移した。
「つまらない挑発に乗るのは癪だけど、私の本体を見せておかないとそっちのお嬢さんは後でさらに、私の事をさんざんバカだ！ブスだ！オバハンだ！　と言いそうだし」

その言葉が終わると、プロットのエーテル体に変化が起こった。体全体がほんのり白く発光したかと思う間もなく、その場からその姿が消え去ったのだ。それは瞬きをしている間もないうちに生じた現象だった。

シグの時はだんだんと薄くなっていったが、キセン・プロットはあっという間に掻き消すように居なくなった。

エイルは思わず一歩踏み出そうとしたが、そのままの姿で固まった。エーテル体が座っていた椅子の向こう側、つまり壁に設えられた書架の一部が動くのが見えたのだ。

書架はまるで扉のようにゆっくりと開いた。

「隠し扉か」

エルデが言うまでもなく、まさにそれは隠し扉で、開かれた隙間から一人の人物が現れた。

長めの白衣を纏ったその人物はもったいぶっているのか何か意味があるのか……とりあえずエイルには意味がわからなかったが、手に持った大きな扇で顔どころか、頭部全てを覆い隠していた。

つまり基本的な容姿はわからなった。

「相当な恥ずかしがり屋さんやな」

エルデがぼそっと嫌みを言ったが、相手は反応しなかった。

「いや、突っ込むのはそっちじゃないだろ」

エイルは顔を隠していることよりも、相手の髪の事が気になっていた。

二人がその状態で目の前に現れた人物に対して確認出来る事はさほど無い。

だが、特徴的な髪の持ち主である事だけはすぐにわかった。エイルが真っ先に気になった事がそれである。

高いところで左右に振り分けられている長く豊かな髪が、見た事もないような青緑色をしていたのである。

長さも相当なもので、そしてそれはくるぶしに届こうかと言うほどであった。

頭の左右の上方でまとめず、そのまま下ろしたらおそらく地面すれすれであろうと思われた。
エイルはその長い髪を見て、同じく長い髪が特徴だったラシフ・ジャミールを思い出した。ジャミールの族長であるラシフの薄茶色の髪はほとんど床に着こうかという程の長さを誇っていたが、ラシフは小柄なダーク・アルヴである。一方目の前に居る青緑色をした髪の女はエイルやエルデよりも少し身長が高く、おそらくはデュナンと思われる人物である。つまり、こと絶対的な長さという点ではラシフを遙かに凌いでいると言えた。

「それより」
「うん」
エイルはエルデに短い合図で尋ねた。
「間違い無い」
エルデはうなずきながら答えた。
「今度は本物の人間や。――たぶん……」
「たぶんって、おい？」
「そやかて、ウチは青緑色の髪の毛の人間とか見た事ないし。おかしいやろ、あれ？」
「そりゃそうかも知れないけど……」
二人のやりとりを黙って聞いていたキセン・プロットとおぼしき「人間」は、クスリと笑った。
「お」
その声は間違い無く女性のものだった。
エルデはそう言いたかったのだろう。
だが、次の言葉を口にするよりも早く、件の人物が扇の向こうから二人に声をかけた。
「ではその『本物の人間』とやらをよく見てもらいましょうか」
扇の向こうの声の主はそう言うと、ゆっくりと扇を持つ手を下げた。

>i2351 5—1831<

# 第五十二話　もう一人のマーヤ（前書き）

合わせ月の夜　第二部　深紅の綺羅　第五巻
通巻第十三巻のスタートです

# 第五十二話　もう一人のマーヤ

＞i23459—1831＜

エイルとエルデは固唾を呑んでキセン・プロットの素顔が露わになるのを待っていた。

扇はゆっくりと下げられ、ついにその顔が二人の前に晒される事になった。

「う……」

露わになったキセン・プロットの顔を見て、エルデは絶句して嫌な物を見るように眉根を寄せた。一方エイルは目を見開いている。

「まさか……いや、でも……」

エイルはそこまで言うと、次の言葉を飲み込んだ。

「あら。私の顔に何かついてる？」

エイルとエルデの表情、つまりそれぞれの驚いた顔を見て、キセン・プロットとおぼしき人物はそう声をかけた。

「あ、これ？目立つけど、これはれっきとしたほくろよ。化粧じゃ消せなくて。言っておくけどゴミじゃないわよ」

プロットはそう言うと左目の目尻の下あたりを指さして見せた。そこには二つの泣きぼくろが並んでいた。

「どうやらそこの彼氏は私の顔に見覚えがあるようね。それとも私がご覧の通りかわいらしすぎて見とれているのかな？」

エイルはしかし、自分を落ち着かせるようにゆっくり大きく息を吸い込むと、キセンの冗談に真顔で答えた。

「いえ、それはありません」

「ずいぶんな言いぐさね。少年は社交辞令という言葉を知らないの？」

「いやいやいや、そう言う意味じゃなくて……驚いたのは本当ですが、それはこっちの事です。気にしないで下さい」
「私のかわいらしさに驚いたのではないの？」
「かわいらしい……かもしれませんが、可愛らしさに驚いたのではなくて、その……髪の色とかがちょっと珍しいもので……」
エイルはそう言って頭を下げた。
「すみません」
「謝るところやないやろ！」
エルデは頭を下げたエイルの服の裾を引っ張った。
「なんだよ」
エイルが問いかけると、エルデの耳元でささやいた。
「何でも無いことないやろ？あいつはいったい何やねん、髪の毛が青緑やん」
「そうだな」
「そうだなって……髪の毛だけやのうて瞳の色まで青緑やん？」
「そうだな」
「そうかもな」
「そればっかりやな」
「――瞳が緑系やのに耳は尖ってないからアルヴやないし……遺伝学的にデュナンやデュアルにあんな色の瞳は生まれへん」
「らしいな」
「髪の色は染めてるんやろけど、そもそもあんな悪趣味な色に染める人間がこの世におるとも思えへん」
「だな」
「だな……って、さっきから妙に冷静やな。いや、上の空なんか？　とりあえずここは興奮してええとこやろ？　アレはあり得へんやろ？　デュナンの外見で青緑の髪とか目とか……おまけに左右にお下げ？　しかもあんな高い位置で？　コイツ、ホンマにデュナンっちゅうか、そもそも人間なんか？」
「エーテル体じゃなくて人間だって言ったのはお前だろ」

「そういう事を言うてるんやのうて！」
「そういう事を言っただろ？」
二人の口論はひそひそ声から始まった物だったが、いつしかお互いに大声に変わっていた。もちろんその場にいる人間であれば誰にでも聞こえる大きさだった。つまりは彼らが話題にしている当人の耳にも聞こえているという事である。

「はいはーい。私を無視して私の部屋で勝手にけんか始めないでくだサーイ」
青緑の髪と目の女デュナンはそう言うとパンパンと手を叩いて注意を喚起した。
「あなたたちの疑問にお答えしマース。もちろんこの髪はもともとの色じゃなくて特殊な方法で染めているし、瞳の色も元の色じゃなくて、色つきコンタクトレンズよ。髪の色とおそろいにしてみましター」
もちろんエイルとエルデは会話を中断して、抑揚無く話す声の主に顔を向けた。
「ですよね」
「いや、ですよね、とか……それよりコンタクトレンズって何やの？」
青緑の髪の女性の答えはエイルが想定していたもののようだった。だが言葉の中にあった未知の言葉にエルデはすぐに反応した。
キセン・プロットという人物は当初からエルデの知らない言葉をいくつも口にしていた。エルデにしてみれば、それは持っている知識・常識を当てはめて距離を測れない存在のように思えた。言い換えるならば、要するに得体の知れない人間なのだ。
だが、エルデの疑問に対する答えは、思わぬ方向から得られた。隣のエイルからである。
「コンタクトレンズっていうのは直接眼球、瞳の上にかぶせる小型で薄いレンズだ。本来は視度調整の為のもので、メガネの代わりに

なるっていう矯正装置なんだが……」
「え？」
「――しまった！」
エイルはエルデに対する説明の途中で自分の大失策に気付いた。
しかしもちろんそれは後の祭りであった。
「あらあら、最初の一言で引っかかるなんて、拍子抜けね。と言うか、君は絶対悪人にはなれないわね。なってもせいぜい使いっ走りか小物止まりね」
耳よりもかなり高い位置で左右それぞれに束ねられた長い髪を自分でなでつけながら、キセン・プロットはエイルにそう言うと、邪鬼のない笑顔を見せた。
髪と瞳の色を覗くと、その左目の目尻の下にある二つのほくろはキセンを特定する大きな特徴だと言えた。
「エイル……」
エルデは不安そうにエイルを見ると、その服の裾をギュッと握った。エイルと目の前の青緑色の髪の女の会話は、エルデにとっては未知の部分を共通点としていたからだ。
一連のエイルの態度はつまり、キセン・プロットの素顔に見覚えがある、と言う事に違いない。扇が下げられてその顔が現れた時、エイルは確かに言ったのだ。
「やっぱり」　と。
ならばそれはつまり、キセン・プロットがフォウの人間だという意味になる。エイルがこの世界に入り込んでからこっち、エイルだけが知っていて、その体を共有していたエルデが知らない人物など基本的に存在しないはずなのだから。
エルデにしてみればその日出会った三人目となるキセン・プロットである。本体は結局のところ若い女デュナンであった。
自然には存在しない派手な髪の色・髪型、そして瞳の色と裏腹に、使い込んで所々スレやシミのある白衣を羽織っているだけの出で立

ちが異彩を放っていた。肌は白く透き通るようで、静脈まで見える。顔も同様で、色素が薄い事もあり鼻の周りにはそばかすが浮いているのが見える。髪と瞳を除けば、デュナンらしいと言えばデュナンらしい女性と言える。

はっきりした輪郭の大きな目と、さほど高くはないものの、こじんまりした形の良い鼻、ほどよく膨らんだ唇を配した卵形の顔は、エルデから見ても美人という意見に積極的に反論はできない程であった。だが、美醜よりもむしろエルデはその表情に生気があまり感じられないのが気になっていた。

派手な化粧をしているように見えて、それは主に眼と口に限られている。具体的には目の下の隈を隠す為の頬紅と同じく唇に引く、口紅である。それ以外は素肌に近い。だから顔色が悪いのがよくわかるのだ。元々青白い肌なのも確かであるが、ハイレーンであるエルデには気になる部分と言えた。

直接手で体に触れば体調は詳しくわかるだろう。だが、それを許すほど相手は自分達に心を開いてはいないのは確かだった。

つまりキセン・プロットについてエルデがはっきりとわかっているのは、自分達に会う為にエーテル体を二体も使う程臆病な性格の持ち主であろうという事だけである。

「私って自分でも結構美人だわって思ってたんだけど、さすがにこの世のものとも思えないような、妙な存在感があるその子と比べちゃどうしようもないわね」

刺すような視線でエルデが自分を観察しているのを見て、キセン・プロットは自嘲とも軽い非難ともとれるような言葉を口にした。

「化粧の乗りも悪いから、最近はすっぴんなのよ。ここのところの睡眠不足がたたってるわねえ」

本物のキセン・プロットはそんな他愛ない事をいいつつも、意味ありげな笑いをエイルに投げた。

「そんな事より君」

「な、何です？」
「さっきの続きだけど、白状しちゃう？」
「白状って、いったい何を？」
「あら、しらばっくれるの？」
「な、何の事だかさっぱり……ははは」
「じゃあ聞くけど、知り合いに私に似た人がいるの？それともあなたが想像していたよりもキセン・プロットが若かったから驚いたのかしら？まあもっとも……」
キセンはそう言うといったん言葉を切った。すでに青白い顔からは笑顔が消えていた。
「コンタクトレンズを知ってるのよね？」
「い、いや、あれは……その、どこかで誰かから聞いた……かな？」
「言っておくけど私のコンタクトレンズは直接眼球に触れるタイプじゃなくて、涙を介して浮くタイプのものよ。ま、君は眼がよさそうだし、必要ないからそんな詳しい事しらないでしょうけどね」
「……」
「で？」
「え？」
「もういいでしょ？　お互い、正体がわかっちゃった、ってところなんだけど」
エルデは無言でまたエイルの服の裾を引っ張った。
何か言え、という合図だろう。
だが、エイルは逡巡していた。
言葉を選んでいたのではない。自分の失策を呪っていたのだ。さらにここはそれでもしらを切り通した方がいいのか、ざっくばらんに話をするか、それを迷ってもいた。
（いつもならこんな時……）
そこまで思って思わずエイルは首を振った。
そう。今まで、つまり頭の中にエルデが居た時には、声に出さずに相談ができた。それもかなり頼りになる相談相手とである。

エイルは今更ながら、頭の中の会話というものがいかに便利なものだったのかを思い知らされていた。エルデと分離した後も、つい頭の中で会話を構築する癖が抜けきっていなかった。そのたびに自嘲するわけだが、自分が今までいかにエルデに頼っていたのかを思い知って、自嘲に拍車がかかるのが常だった。

エルデに頼る事はエイルにとってそれほど「楽」だったという事であろう。ファランドールに於ける異邦人であるエイルは、最終決定をその世界の人間に委ねる方が気持ちを切り替えやすく、何より悩む時間が短くて済む。

特にこういう駆け引きや判断はエルデが得意とする分野であろうと思われた。

だが……。

そうは言ってはいられない事をエイルは自覚していた。いや、自分自身に課したと言うべきだろうか。

エイルは決めたのだ。それも自分の意思で。フォウの人間ではなく、ファランドールの人間として生きてゆく事を。

心の中で密かに誓っただけではない。時のゆりかごで《真赭の頤（まそほのおとがい）》ことシグ・ザルカバードに向けて既に言葉にして宣言していたのだから。

例え今、横に頼れる相棒たるエルデが居なくとも、自分の足でこの世界の土を踏みしめ歩むと決めたからには、判断すべき事や決めなければならない事がいくらでも出てくるという事に他ならない。そして今が「その時」なのだ。

だが実際に分岐路にさしかかると、自分の決心が実はその言葉の響きよりもずっと重いものだという事に初めて気付いた。ある程度は自覚していた事ではある。だが、それぞれの道の向こう側を見越してどちらか一方の道に向けて足を踏み出す事が、どれだけ苦しい事なのか、それを実感としてはわかっていなかったのだ。

とは言え、いつまでも悩んでいてはいられない。時機を逸すると道は二つともふさがってしまう可能性も充分にある。前に向かって

進むつもりならば、とりあえず踏み出さねば次の一歩すらおぼつかない。戻るべき扉を大見得を切って自分自身の手で塞いだからには、エイルはもう自分の考えを、いや自分を信じて歩くしかないのである。

エイルは改めて強く唇を噛んだ。自分が今までいかにエルデに甘えていたのかを、第三者に突きつけられたようなものだった。

逡巡する情けない姿を指摘され、バカにされ、罵倒された方がいいと思えた。決心の無さを思い知ったあげく、自分自身に対して失望する事に比べたら、それはどれだけ楽だろうか。だがそれはある意味で自分自身で自分自身が存在する意味を否定するようなものだ。

エイルは内なる抗いようのない「もの」に中から食い破られそうになっていたのだ。

自分自身に多少なりとも誇りを持っている人間にとって、それは受け入れたくない感情の一つであろう。たがエイルにとっては超えなければならない、そしてこれを超えなければこの世界で本当の明日は来ないのかも知れないとまで思い詰めるほど重大な事柄だと言えた。

（決めろ！）

エイルは自分の心にムチを打った。

（お前が、いや、オレが、オレ自身を支配しろ）

そのムチは物理的な痛みを伴わないかもしれない。だが、エイルは確かに体が熱を持って来るのを感じつつあった。

自分で考えて判断すること。たったそれだけの事を今まで放棄していたのだ。

今この場で判断を放棄する事があれば、エイルはこの世界に存在する意味すら失う可能性があった。

ただ、求められた事を行っていたフォウでの生活から、自分自身の手で世界に関係する事を選んだのである。それは困難な事だとわ

かっていたはずなのだ。
（これ以上考えすぎてもいい結果になる可能性は低い）
エイルはまず一つの結論を導き出した。
（オレはエルデとは違う）
そしてそう言い聞かせた。
（だから初めからエルデやリリアさんと同じような判断をしようなんて思う事自体が間違いなんだ）
エイルは、キセンと対峙している短い時間の中で自分自身を認める旅をしていたようなものだった。
（オレはオレの判断をすればいい）
自分に出来る事を今やる。そんな簡単な結論を自分のものにする為に。
そしてエイルが出来る事は最初から決まっていた。自分の決めた事を嘘にしない事。それこそがファランドールで生きていく上でエイルが守るべき「誇り」だと言えた。

「その前にオレから一つ質問させて下さい、プロット教授長」
やや間をとってから、エイルは口を開いた。
プロットはエイルのその言葉に右の眉を少し上げた。エイルの雰囲気が少し変わったように思ったのだ。
「教授長はつけなくていいわよ。その肩書きあんまり好きじゃないのよ」
エイルはプロットのその言葉は「どうぞ」という合図だと判断した。
「では、プロット先生」
「まあ、それならいいわ」
「これはただの確認です」
「前置きはいいわ。質問は何？」
「わかりました。じゃあ、前置きや前振りはなし。単刀直入に聞きます。プロット先生の出身地はどこですか？」

「はあ？　いったい何？　唐突ね」
エイルの質問に、キセンは眉根を寄せた。警戒の表情ともとれる。
エイルは慌てて言い訳をした。
「変な質問だと思われるかもしれません。でも、オレにとっては今一番知りたい事なんですよ」
その問いかけがキセン・プロットにとって想定の範囲内であったのか、それとも虚を突いたものであったのかをエイルは測りかねた。
だが、エルデにとっては、それは意外な問いかけだったのだろう。反射的にその美しい顔をエイル向けた。
エイルはしかし、エルデには反応しなかった。視線を感じてもそれを受け止める事はしなかったのだ。もちろん、エイルの視線の先はキセンの顔であった。
キセンはエルデの態度に対して反応し、少しだけ眉根に皺を寄せたが、すぐに普通の表情に戻ると視線もエイルに戻した。
「それがあなたたちのいう『聞きたかった事』なの？」
「いえ」
エイルは大きくかぶりを振った。
「これはオレがあなたに『会いたいと思った理由』です」
「意味がわからないけど、あなたは言質が欲しいってことね」
「あ、いや。そういうわけじゃ……」
「まあいいわ。うーん、そうねえ……」
キセンは腕を組むと、考え事をするように少しうつむき、ゆっくりと部屋の中を歩き始めた。
「言っても君はきっと知らないわよ。私の生まれたところなんて、すごい田舎だもの」
「それでも！」
エイルは引かなかった。
「絶対教えて欲しい。重要な事なんです。オレにとっても、そしてたぶんあなたにとっても」
「私の方はもう確信してるんだけど」

「オレはまだ確信してないんです」
「じゃあこの意味不明な質問は、君にとっては何かを確信するために必要な、いえ重要な事なのね」
キセンは立ち止まるとエイルの視線を正面から受け止めた。
「じゃあ、こうしましょう。私が出身地を言ったら、君も自分の出身地を言う。お互い嘘はつかない。それでどう？」
「オレはそれでかまいません」
エイルは即答した。
「エイル！」
たまらず、エルデが裾を引っ張った。
「いいんだ」
「そやかて……」
「心配するな。オレはこう見えても地理はかなり得意だったんだぜ？子供の頃は地図帳とか大好きでさ」
「いや、そう言う事やないやろ！」
「とにかくオレはこの人をある意味で信じてる。だったらオレが嘘をつくわけにはいかないだろ？」
「そんな勝手なこと言うて……。半日前に『お前の事はオレが守る』ってウチに大見得切ったのにこれかいな」
「あれは……」
「あれはヴェリーユ限定、っちゅう事？」
「いや……」
エイルは小さくかぶりを振った。
そして……。
「えっ？」
エイルの行動にエルデは驚いたように思わず小さな声を上げた。
いや、実際に驚いたのだ。
エイルはエルデの手を取ると、それを両手で包み込んだ。
「オレに出来る精一杯でお前は守る。だから安心しろ」
たったそれだけの事だったが、エルデの体は固まった。エイルに

はにもちろんそれが伝わったが、包み込む手の力は緩めなかった。
エルデも預けた手を引き戻そうとはしなかった。
「ヴェリーユ限定とかじゃないからさ。ファランドール限定でもない。もし一緒にフォウにいけたら、そこでも当然オレがお前を守る」
「そ、そんなん……」
手を預けたまま、しかしエルデはエイルから顔を背けていた。エイルの視線を避けていると言い換えた方がいいだろう。

自分を見ようとしないエルデに、エイルは少し不安を覚えたのか
「もちろん、お前がイヤだって言うんならオレは……」
そう声をかけた。だが、エルデはこの言葉には即座に反応した。
「イヤやとか一言も言うてへんやろっ、このスカポンタン！」
そう言うと背けていた顔をエイルに向けたのだ。そして吊り上げた目でエイルを睨んだ。ただしその顔は見た者がびっくりするほど真っ赤に染まっていて、それを見たエイルは思わず吹き出しそうになった。
（お前の賢者名は《白き翼》より《完熟のトマト》の方がいいんじゃないのか？）
その言葉がのど元までかかったが、かろうじてこらえた。言ってしまうとまたしばらく収拾がつきそうにないと判断したからだ。だから慎重に言葉を選んでから口を開いた。
「なあ、エルデ」
「なんやねん」
「オレはお前にそれだけ世話になってるって事だよ。だから恩返しだ。力一杯、命がけで守ってやるさ。だから、ここはオレに任せてくれ」
「嫌や！」
「え？」
「恩返しとか、そんなん思いっきりお断りや！」
「え？でも、オレはお前に本当に感謝してるんだぜ？こうやって今

オレが生きていられるのは誰がなんと言おうとお前のおかげだろ？だから……」

「あほ！感謝とか恩返しとか、そんな理由で守ってもらいとうないっちゅうてんねん！」

エルデはそう言うとエイルの手をふりほどいた。

「エルデ……」

「ああもう！好きにしたらええやん。スカポンタン！」

「そのスカポンタンって何だよ？……って、オレはだな」

再びそっぽを向いたエルデをなだめようとして手を伸ばしたエイルだが、エルデはさらに顔を背けてすねて見せた。

黙って二人の会話の成り行きを見守っていたキセンだが、それを見てたまらず声をかけた。再び手を叩きながら。

「はいはーい、それまでそれまで」

エイルは我に返り、伸ばした手を止めてキセンに顔を向けた。同様にエルデもその切れ長の大きな目でキセンを睨んだ。

「まったくあきれるわね。いちゃいちゃするのは勝手だけど、よそでやって頂戴。お姉さんはそういうの見せられると、なぜかとーってもイライラするのよ」

「いちゃいちゃって……オレは」

「はいはーい。瞳髪黒色ちゃんがあなた相手に苦労……じゃなくて苦戦してるのはもうよくわかったから。それはほっといて私と君はさっさと色気のない話を進めるとしましょう」

エイルはキセンの言葉に対していろいろと突っ込みたい衝動に駆られたが、それをぐっと飲み込んだ。話が進まないという指摘は事実であり、もっともだと思ったのだ。

「そうですね。とにかく話を進めましょう。プロット先生の出身地を教えて下さい」

エイルはエルデに向けて伸ばした手をゆっくり下ろすと、改めてキセンに向き合い、そう言って軽く頭を下げた。

キセンはエイルの態度に苦笑するとうなずいた。そして、はっきりとした発音で短い言葉を口にした。
「ジリナ」
エルデはキセンが口にした地名を聞くと、エイルの顔を見やった。当のエイルは珍しく微笑を浮かべていた。
「エルデ」
エイルは自分を見つめるエルデに問いかけた。
「何？」
「ジリナって町、知ってるか？」
「ううん」
エルデはかぶりを振った。全く未知の地名だったのだ。
「現在のファランドールにはそういう名前の町や村はない。ついでに言うとくとウチの知っている限り、過去にそういう名前の集落が存在した記録もあらへんな」
「ありがとう」
「こんなん、おやすいご用や」
「いや、今の礼はプロット先生に言ったんだ」
「え？」
「お前の記憶力がすごいのは今更じゃないか。それに言っただろ、地理はオレの得意分野なんだ」
「はあ？」

エルデは改めてエイルとキセンを見比べた。少しではあるが、それなりに満足そうな顔を浮かべているエイルと、本心の読めない作ったような微笑をたたえるキセン。
「君の番よ、エイル・エイミイ君とやら」
キセンはエイルを促した。
「オレが生まれたのは、キョウトです」
エイルは迷わず即座にそう答えた。
キセンの微笑が、エイルの答えを聞くと満面の笑みに変わった。

「瞳髪黒色ちゃん」
プロットはエイルではなく、エルデに声をかけた。
「気に入らん呼び方やな」
「じゃあ、ピクシィちゃん？」
「そこやない。成人女性に対して『ちゃん』はないやろ？」
「じゃあ、美人のピクシィさんって呼べばいい？」
「わざとやな？要するにウチにけんか売ってるんやな？けど、安い挑発やな」
「あら、そう取られるとは心外ね」
「ああもう、面倒やからもうどうでもええわ。何やのん？」
「さっきはエイル君が質問したから、今度は私から同じ質問をするわ。あなたは知ってる？『キョウト』っていう地名。それとも彼から何か聞いてる？」
エイルの口から聞いているはずがなかった。エイルの持つそういう固有名詞を含む多くの記憶はエルデ自身が封印していた項目である。
エルデはゆっくりと首を横に振った。
「知らん。『ジリナ』も『キョウト』も、過去・現在問わず等しくファランドールにはない地名やな」
「ふむふむ。で、あなたはこの少年の事をどこまで知っているの？不思議なルーナー、エルデ・ヴァイスさん？」
キセンの問いかけに、エルデは答えなかった。
警戒しているという訳ではない。同様に答えたくないわけでもない。エルデは彼女なりにエイルの気持ちを汲んでいたのだ。
エルデは自分からキセンに答えるかわりに、横に立っているフォウからの異邦人、エイル・エイミイの服の裾を引っ張ると、その名を呼んだ。
「エイル」
そしてそっぽを向いた。
私はこれ以上しゃべらない。だからこの場は任せる……。

それはそういう合図だった。少なくともエイルはそう受け取った。
「オレは地理が得意なんです」
エイルはエルデに向かってうなずくと、キセンに向かってそう言った。
「それは何度も聞いたわ」
「『キョウト』に比べれば、そりゃ『ジリナ』は人口は少ないでしょうが、州都にもなっている都市の名前を田舎というのはどうですかね」
エイルの言葉に、キセンは満足そうな微笑を浮かべて答えた。
「なるほど。地理が得意かどうかはともかく、私の故郷の名前は知っている、という事ね」
エイルはうなずいた。
「それにオレはプロット先生、あなたの事も知ってます」
「へえ？私の何を知ってるの？興味があるわね。もっとも私の名前に興味を示したっていうところで、知っていても不思議ではない、のかしら？」
キセンの言葉を受けて、エイルは話し始めた。まるで自分に完全に記憶が戻っている事を証明するかのような、それは詳細な説明だった。
「わずか八歳で発表した素粒子論とそれを元に組み上げた斬新な細密機械工学の論文で、一躍学会の寵児となる。その後十二歳まで複数の大学で基礎研究を行い、あまたの論文を発表。その後突然研究の最前線から姿を消したかと思われたが、十五歳の時国連が提唱していた地球外移民計画の実行組織の中枢に名を連ね、再び世界の表舞台に現れ、その翌年、日本で二番目の地球外移民計画特別地域の最高責任者として赴任。現在に至る……」
エイルの説明を聞いたキセンの表情は劇的に変わった。
「驚いたわ。よく知ってるわね」
「ファランドールに来るまで通っていたオレの学校の案内に書かれていたんです。本文はもっと長いけど、それを端折っただけですよ」

「ふーん。あんなものをちゃんと読んでるのも驚きだけど、そこに書かれてた言葉を覚えてて、結構的確にまとめる能力があるのには正直言って驚いたわ」

キセンの評価には皮肉や冗談は混じっていないようだった。素直にエイルをそう評価したのだろう。

だがエイルは肩をすくめた。

「もっとも『現在に至る』の現在って、こっちに来ちゃったらいつなんだかわかりませんけど。あと、エルデにわかりやすいようにもっと短く説明もできますよ。『天才科学者』ってね。本文には書かれていないけども補足するところがあるとすれば、あなたはオレがいた学校の特別理事でもあった。そしてオレがいた町の特別評議委員。ついでに、公の場に出るときには、いつも妙な色に髪と瞳を染めて、およそマトモなオトナなら出来ないような派手な格好で主催者や関係者のひんしゅくを買い頭を抱えさせる問題児……って児じゃないですね。まあ、そんな感じでしたよね」

エイルの説明をキセン・プロット苦笑しながら聞いていた。

「やっぱり君、本当にそうなのね」

そしてエイルにそう尋ね、エイルはその質問を待っていたように素直にうなずいた。

「あなたは死んだ事になってる」

「でしょうねって、やっぱりオレ、死んでる事になってるんですね」

「そりゃ死体もあるし、普通人が死んでたら葬式出すでしょ？」

「まあそう……かな」

「だいたいあなたの告別式には私も参列させられたわ。忙しかったのに」

「そりゃ、光栄です。わざわざいち生徒の葬式なんかに……」

「いち生徒、ねえ……」

「……」

「私みたいなのがいちいち生徒が死んだからって告別式に並ぶ義務があると思う？」

「それは……」
「よく言うわね。その子には本当に何も話してないのね」

「ちょっと」
エルデは又もやそんなエイルの服の裾をひっぱった。
「この青緑の髪のお姉さんはホンマにファランドール・フォウの人間、なんやな？」
「ああ」
「知り合い、なんやな？」
「いや。正確に言うとそれは違うな。『知り合い』じゃない。オレが一方的にこの人を知ってるだけだ。葬式に来てくれてたってのには驚いたけど。というか、フォウの人間でこの人の姿を見た事がないヤツは少ないと思うぜ。何しろ飛び切り有名で偉い人だからな。オレみたいな一般人にとっては雲の上の人だよ。だから顔は写真やテレビで知ってるだけで、実際にこの人に会うのは今日が初めてだ。初対面が異世界って、何の冗談だよ？って思うぜ」
「えっと、写真？テレビ？」
「いや……その、何というか、ファランドールにはない、複雑なからくり物でさ、びっくりするくらい実物そっくりな絵を一瞬で写し出す機械とか、その絵が動く機械とか……」
「はいはーい。その子にとって未知の単語説明はまとめて後で二人切りの時にでもやってちょうだい。それより君、エイル君。この期に及んで今の言葉は聞き捨てならないわね」
「え？オレ何か変なこと言いましたっけ？」
「そうじゃなくて、ずいぶんなご謙遜ぶりねって言いたかったのよ」
キセンがそう言うと、エイルの顔が心なしか曇った。
「そもそも『プロット・フォー』の住人が自分の事を一般人呼ばわり？」
「……」
「それに君は大きな思い違いをしてるわよ」

「思い違い？」
オウム返しにそういうエイルに、キセンは大きくうなずいた。
「君が私の事を知っているように、残念ながら私も君の事を知っているのよ、剣道少年」
「え？」
エイルは虚を突かれた。最後の言葉はまさしく自分を言い当てるのにこれ以上はないほどふさわしい言葉だったのだ。それはとりもなおさずキセン・プロットがエイル・エイミイの事を特定できているという証拠であった。
「ケンドウ少年って？」
写真、テレビ、剣道。どれもエルデの知識にはない言葉だった。もちろんプロットの言葉を聞くまでもなく、それがフォウにあってファランドールにはない「モノ」を指す言葉であることはもうわかっていた。
「まさか。本当にオレの事を知ってるんですか？」
エイルはエルデの質問をとりあえず先送りという名目で無視し、キセンへ質問を投げかけた。
「もちろんよ。『プロット・フォー』の主立った人間の中に君の事を知らない人がいると思ってる方がどうかしているわ。だって私の記憶が正しければ『人殺し』を『プロット・フォー』に三顧の礼を持って招いたのは君が初めてだもの。ああ、『三顧の礼』は君に直接した訳じゃなくて、君のおじいさまにしただけだけど」
キセン・プロットはいくつかの言葉をわざわざ強調するように発音すると、目を細めてエイルの様子をうかがった。自分が口にした挑発に対してエイルがどういう反応をするのかを観察しようと言うのだろう。
エイルも当然ながらそれはわかっていた。
わかってはいても、湧き上がる熱のような感情は抑えようがない。既に覚悟はしていたが、それでも押さえきれないものがこみ上げてくる。

さらに何も知らないエルデにとって、キセンの言葉は不意打ちにも似た衝撃だった。だが同時に、フォウの人間と思しきキセンと対峙した時に、エイルがお互いの出自を確認し合う事を相当に躊躇っていた理由を理解した。理解して、そして唇を噛んだ。エルデにしてみれば、「何をグズグズしてるんだ」と内心イライラしていたのだ。

つまりエイルの質問に対するキセンの答えは、その場の空気を一瞬で張り詰めたものに変えるだけの力を持っていたということである。

「エイル……」

エイルの体が緊張で強ばったのを敏感に感じ取ったエルデは、裾を握る手に力を入れ、心配そうにそう声をかけた。

「大丈夫だ」

エイルのその言葉はエルデ対して答えたものか、はたまた自分自身を落ち着かせる為に口にしたものかは不明であった。その視線はじっとキセンに注がれたままだったからだ。

エルデはそれでもその言葉に反応できるのは自分なのだと示すかのように、エイルの手を取り、それを両手でそっと包むように握りこんだ。

「大丈夫だ。ありがとう、エルデ」

エルデの思いは通じていた。

今度ははっきりとエイルはエルデの名を口にした。

エイルは今まで、エルデに自分の過去をほとんど話してはいない。もちろん記憶を封じられていたから話す事があまりなかったからだ。そしてそれをエルデはわかっていた。だから次にキセンが告げた揶揄を含む言葉は、二人の動揺を誘う事はできなかった。

「あらあら。その様子じゃやっぱり彼女には話していないのね、自分の事。君について一番重要な項目じゃないの？」

キセンの目的が果たして何なのかはエイルにはわからなかった。

だがキセンはエイルに対する挑発を続けていた。エイルの反応で何かを分析しようとしているかのように。
「普通、深い仲になったらお互いに自分の事は話すものなんだけどねえ」
「ちょっと待ち」
エイルが言葉を発する前に、たまりかねたエルデがキセンに対して横やりを入れた。
「二人の話を聞いてて、キセン・プロットがどうやら仮名やっちゅう事はわかったわ。エイルがお前の名前に反応したのも『キセン』や『プロット』に反応したからやな。それが二人にとって共通の、それぞれ意味がある単語やっちゅうのもおおかた見当が付いた」
「ふーん、で？」
「そやけど、ここでエイルの過去に塩を塗り込むような真似をして嫌な気分にさせる意味がわからん。単にエイルを怒らせたいんなら、ウチの方が得意やから代わりにやったるけど、どうや？」
「エルデ」
咎めるように呼びかけたエイルを、エルデはしかし一蹴した。
「いいや、黙らへん。ウチはこういう性格が破綻しているヤツ見ると無性に腹が立つねん」
「オレは大丈夫だ」
「いいや。アンタがようてもウチが大丈夫やない」
「エルデ、お前……」
「後生やさかい、ここは言わせてんか？」
エルデはそう言うと答えを待たずにキセンに向き直った。
「言うとくけどその挑発がウチに向けられたもん……例えばウチとエイルの間に感情的な溝を作ろうとか思てるんやとしたら、お門違いも甚だしいで。というか、完全に無駄な行為や。エイルが人殺しや言うんならウチは殺人鬼……いやそんなええもんやないか。ただの大量虐殺者やな。そやからそんな話、今更聞いても何も驚かへん。ウチらの間に不信感や亀裂を生じさせたろと思うなら、もうちょっ

と気の利いた事した方がええんちゃうか」
エルデがそう言って睨むと、プロットは一瞬だけたじろいだ表情を見せたが、すぐに笑みを浮かべた。
「気の利いた事？」
「その小汚い白衣と、その下も全部脱いですっぽんぽんになって言葉やのうて体で挑発したったらええんちゃうか？もっともエイルが青緑の髪の年増女が好みとは思われへんけどな」
エイルはさすがのキセンもエルデの今の挑発には激高するのではないかとハラハラして成り行きを見守ったが、キセンは眉間に少しだけしわを寄せただけだった。
「たいそうな自信よね。自分が誰にも負けない美貌の持ち主だから、他人に負ける事はないとでも思っているってわけね？」
「そんな事は……まあ、それなりに思ってるかもしれんな」
「エ、エルデ！」
「やかましい。この女のやり方は気に入らんねん！」
「オレは大丈夫だって。だからオレに話をさせてくれ。頼む」
エイルの声は静かだった。エルデに対しては怒鳴って制するよりもそちらの方が有効であることをさすがにエイルも学習したのであろう。
案の定エルデはその言葉を聞くと不満げに唇を噛んだものの、それ以上キセンに言葉を投げようとはしなかった。
「ありがとう」
「フン。ウチに礼なんか言わんでええ」
エルデは小さくそう言うとふてくされた顔をエイルから背けた。
だがキセンはそのエルデの背中に言葉の不意打ちをかけた。
「事の発端は試合中の事故だから『人殺し』はさすがに言い過ぎね。私の言葉が気に障ったのなら謝るわ。私は研究者であって政治家でも交渉人でもないから相手に気を遣って立ち回るとか出来ないのよね」
プロットはそう言うとわざとらしく大げさに肩をすくめて見せた。

「でも、敢えて言わせてもらうわよ。君は自分の力を知っていたはず。だから本気を出したら普通の人間が君に敵う訳がないのはわかっていたんでしょ？いいえ、質問するまでもないわね。わからないはずがないものね。三歳児がオトナと真剣にけんかして勝てる？そういう話でしょ？」

エイルはプロットには答えず、エルデに語りかけた。

「オレがやっていた『剣道』というのは、競技剣技の名称だ」

「そんなん、説明されんでもわかるわ。アンタにかかったら小枝ですら剣になるんや。そやからそこら辺の剣士相手やったらアンタに本物の剣なんか必要ないこともわかってる。つまりアンタが本気になったら普通の相手はひとたまりもないっちゅう事も、青緑女が言うまでもなくウチにはとっくにわかっている事や」

「そうか。そうだったな」

「ウチを誰やと思てんねん」

「うん。あれは大きな大会とかじゃなくて、急に決まったただの練習試合だったんだ。相手は聞いたこともない学校でさ」

「言わんでもええって」

「いや、いい機会だから聞いてくれ。いや、是非聞いてほしい。ルーチェの兄貴、ユートだっけ？お前とユートとの一件をオレはラウ・ラ＝レイから聞いた。だからオレだけがお前の事を知っているのは嫌なんだ。お前にもオレの事を知って欲しい」

「エイル……」

「細かい事は省くけど、要するに相手は学校の生徒でもなんでもなくて、その競技ではかなりの腕前の大人だった。オレ達がやってたのはこっちの剣技とはちょっと違って、竹を割って組み合わせた筒状の競技用の剣を使ってやる模擬剣技みたいなものでさ。『胴』って呼ぶ鎧みたいな防具も着ける。顔も『面』って言って兜みたいなので隠すんだ。でも、それは通常、試合直前まで装着することはないんだけど、試合が始まるずっと前から相手が胴も面を付けたままだから妙だなとは思ってた」

エイルがそこまで話したところでキセンが割り込んだ。
「その辺りも報告書で全部知っているわ。相手は君の味方であるはずの監督が、どこからか集めたでその道でも有名な社会人の選手達。それもマトモな選手とは言えないような『札付き』の連中ばかり。片や君たちは君と、それから普段は正選手として試合に出る事も出来ない控えのその控えくらいの選手ばかりだった事もね」
「その時は変則の団体戦だった」
エイルはエルデにキセンの説明の補足をした。
「プロット先生の言うとおり。『こちら側』はオレを除くと、残念ながら腕前はそれなりの連中ばかりだった」
「何やねん、それ？そんなん、もともと試合なんかにならへんやろ？」
「だな。まあ要するに監督やウチの正選手達は、オレを潰したかったんだ」
「え？」
「そういう事さ」
「それって……」
「まあよくある話だろ？それでオレの側に選ばれた選手は、オレと仲が良かったり、普段からオレにちょっと親切な言葉をかけてくれるような奴らでさ。実はオレ、所属していたその競技の団体ではあんまりなじめなくて、ずっと浮いた存在だったんだ。本当のところ、オレはやりたくはなかったんだ、剣道なんて。でもオレの家系って特殊でさ。それを専門でやっているような家柄なんだよね。それで色々あってイヤイヤながら、な」
「……」
「いつか言ったろ？戦争はしちゃいないけど、だからってフォウだって楽園じゃないのさ」
「可愛そうに、選ばれた選手は見せしめみたいなものよね。相手の先鋒にひどくやられたという事だけど？」
「あいつは声が出なくなった。『突き』で声帯をつぶされたんだ」

そう言うエイルの言葉に今までにない怒気が含まれているのを感じて、エルデは思わずエイルの手を少し強く握った。
「あいつらは容赦なかった。実力が違いすぎるのに手加減するどころか……ひどくやられる仲間を見て……最後のヤツは泣いて謝りながら……逃げ出したのに、監督や学校の連中は無理矢理に試合に引きずり出して……戦意なんか全くない奴の喉を、相手は……力一杯突いたんだ」
「……」
「四人目の奴は声どころじゃない。命を落としたんだぞ？戦う気なんて全くないそいつの喉を……叩きのめした後でわざわざあいつは……薄ら笑いを浮かべて力一杯突いたんだ！」
「エイル……」
いつしかエイルの声は震えていた。だがそれでもエイルは絞り出すように話を続けていた。そこへキセンがさも他人事のように口を挟んだ。
「彼は即死じゃないわよ。もっとも治療の甲斐無く翌日、病院で息を引き取ったそうだけどね」
その言葉に反応したエイルは、怒気を含んだ視線でキセンを睨み付けた。
「ウソだ！　病院だって？　あなたは……先生はいったいどんな報告書を見たんだよ？　あいつはあの時即死してたんだぞ！　あんなの誰でも見たらわかる。首の骨があの時もう折れてたんだ。変な方向を向いたまま目を開けたまま泡と血を吐いて倒れて……痙攣してるあいつの体を、連中はその場所から蹴り出したんだぞ？――邪魔だって言ったんだ」
エルデの手を握るエイルの手に力がこもった。汗ばむエイルの掌を、エルデはもう一つの手を重ねて包んだ。
「ふーん。だから君は仕返しにその先鋒を殺したわけね」
「あいつらと同じ事をしてやっただけだ！」
エイルの声は既に叫びに近かった。だがそんなエイルを見つめる

キセンの表情は落ち着いたままだ。まるでエイルの表情や声色、そして心理状態を分析しているかのように目を細めてじっと見つめていた。

「そうね。でも連中と同じ事をやったのよ、君は。実力が圧倒的に違う相手をなぶり殺した」

「でもオレは……」

「一人だけじゃないわよね。次の選手も。そしてその次の選手も。みんな同じ様に一撃で倒したそうね」

「でも、相手もオレを殺す気で来てた」

「でも君は、腕の差がありすぎる事がわかっている相手に手加減などしなかった。違う？私が読んだ報告書にはそう書かれていたわ。その記述は間違ってるの？」

「手加減は……」

「あの報告書はよーく覚えているわよ。そりゃあ凄惨な事が列挙されていたんですものね。後にも先にも、あんな殺人状況を具体的に既述してある報告書付きの推薦学生なんて君一人よ。確か二人目までは突き。三人目は袈裟懸けに切り裂いたそうね」

「……」

エイルは細かく震えながら、しかし怒鳴りそうになる声を抑えて唇をかんでいた。

「竹刀で人間の体が真っ二つになるなんて、私はあの報告書を読んで初めて知ったわ。異常な能力としか言いようがないわね」

「もうええ！止めや！」

澄んだ怒声がキセンを貫くようにエルデから発せられた。エイルとキセンの会話に、たまりかねたエルデが割って入ったのだ。

キセンを睨み据えるエルデの目は吊り上がってた。その形相にさすがのキセンも、思わずたじろいだ。

「そうだ。プロット先生の言うとおりだ。オレは相手と同じ事をやったんだよ……」

「エイル、しゃべるな」

「オレは自分の剣技が、周りとは全く違う事を知ってた。集中すると、ただの小枝で落ちてくる枯葉を綺麗に切断する事が出来るんだ。オレは手にしたものを何でも刃物にできる」
「もうええ！」
「ガキの頃からそうなんだ。それに、エルデも知ってるだろ？　オレには相手の動きが全部わかるんだ。だから一対一なら相手が大人でも負ける事はなかった。まったく、ずるいよな。だってやる前から相手の手が読めるんだぜ？　それじゃまるで後出しじゃんけんみたいなもんだろ？」
「もうええ！　もうええって」
エルデの制止の声は小さな叫び声に変わっていた。だがエイルは言葉を続けた。
「だからオレは約束をさせられてたんだ。父さんと」
約束という言葉がエイルの口から出ると、エルデの体が緊張した。
「そうね。君は父親との約束を破って、自分の力を普通の人間にぶつけてしまった」
「ああ、そうさ。オレはあの時、父さんとの約束なんてもう関係無いと思ったんだ。こんな状態で約束を守れって言われても無理だって思ったんだ」
「約束って……」
エルデはエイルが「約束」という言葉に過剰に反応していた理由に、期せずしてたどり着いてしまっていた。握りしめた掌を通じて、エイルが執拗に避けていた「約束」という言葉の持つ重みを。
記憶をなくしていたはずなのに、その言葉はエイルを縛り続けていたのだ。
「あの時『プロット・フォー』の監察官が踏み込まなかったら、あの後君はあの場所で彼らに殺されていたでしょうね。さすがにいくら剣の腕前がすごくても多勢に無勢。銃を持っている人間もいたそうじゃない？」
「そこまでは……知りませんでした」

「じゃあ、まさに危機一髪、危ないところだったというわけね」
キセンがかけた言葉は、エイルをいたわるような声色ではなかった。少なくともエルデには押しつけがましいものしか感じ取れなかった。
エイルも同じ気持ちだったのだろう。悔しそうな気持ちを隠さず表すと、あいた方の手で拳を握りしめた。
「踏み込むなら、奴ら、もっと早く踏み込めばよかったんだ……なのに！」
「ああ、それは無理」
キセンはこともなげにそういった。
「原則として監察官は観察対象が重大な危険に陥らない限り、非干渉が義務づけられているのよ。彼らは通常、文字通り観察するだけ。だから彼らの介入の多少の遅れを非難するのはお門違いね。でも確かにもっと早く決断して試合を終わらせていれば、君があそこで都合十人もの人間の命を奪う事は防げていたでしょうね。それとも三人殺すも十人殺すも一緒？」
キセンの言葉にエイルは一瞬目を見開いたが、すぐにその視線を床に落とした。
「あら、いけない。報告書には君の動揺を抑えるために、死亡は四人だけだって伝えてたって書いてあったわ。まあ、これは嫌みでも何でもなくて客観的な見解だけど、ああなったら四人も十人も同じようなものでしょうね」
「同じやないやろ！」
エルデは再び鋭くそう叫ぶとキセンを睨み据えた。
「もうその話はええ。お前はエイルをそうやって追い込んでいったいどうしたいんや？」
キセンは肩をすくめた。
「別に、追い込むとか追い詰めるとかそんなつもりは無いわよ。お互いに自己紹介しているだけよ」
エルデの怒気に多少は気圧されてはいたが、キセンはそれでも余

裕を感じさせる苦笑いを浮かべ、肩をすくめてみせただけだった。
「何様か知らんけど、性悪な女やな」
「あらあら。そりゃあ、どうも」
「エイル」
エルデはエイルに柔らかい声で呼びかけた。キセンに対するものとはあからさまに口調を変えていた。
「もうその話はせんでええ。ウチはこれ以上聞きとうない」
「オレの正体を知って、驚いたろ？いや、呆れただろ？お前にむやみに人を殺すなって説教してたオレ自身が、怒りにまかせて何人もの人間を殺すような男なんだぜ」
自嘲の混じったようなエイルの言葉に、エルデはしかし大きくかぶりを振った。
「いや、むしろ逆や」
「え？」
「アンタが人を殺めたくないってしつこく言うてる訳がこれでわかったわ。ようわかった。腑に落ちた。得心がいった。アンタの事、『甘えた坊ややな』とか言うたウチが恥ずかしい。ごめんな。堪忍や」
「エルデ……」
エイルは落としていた視線を隣の少女に向けた。そこには自分を見つめる大きな瞳があった。
「なあ、エイル？」
「うん？」
「教えてほしい」
「え？」
「ウチは今のアンタに、何て言うて声をかけたらええ？」
「エルデ？」
「ウチは今、アンタを心から慰めたいんや。でもなんて言うてええんかわからへん……」
エイルは感じていた。繋がれたエルデの手が熱くなっている事を。

エイルは潤んだエルデの瞳を思わずのぞき込んだ。自分を見つめる大きな黒い瞳の中に、眉間に皺を寄せて泣き出しそうな顔をしている自分を見つけた。
再び視野を広げると、そこには今にも泣き出しそうな顔をしたエルデがいた。
つり上がったその目は今、優しさをたたえているようにも感じた。

「いや……」
エイルは繋いだ手を強く握り返した。
「その言葉で充分だ」
「え？」
「いや、違うな。オレは今、お前に結構強力なルーンをかけられたと思う。だから大丈夫だ」
エイルのその言葉に嘘はなかった。記憶と共に鳩尾にこみ上げてきていた吐き気が綺麗に消失しているのがその証拠だとエイルは思った。
「今の言葉は効いた。本当にもう大丈夫だから」
エイルは重ねてそう言うと、顎を上げて再びキセンを見据えた。
「オレ達の話の続きをしましょう、プロット先生。いや……」
そこで言葉を止めたエイルは改めて白衣を着た「同胞」の顔をじっと見つめた。
「ヴェロニカ・ガヤルドーヴァ先生って呼んだ方がいいですかね？」
「そうね」
キセン・プロットはエイルが呼びかけた自分自身のフォウでの名前を聞くと、微笑を浮かべた。そして、そのまま両手を広げた。
「改めて、初めまして。ミナヅキ君。いえ、プロットで名乗っているミナヅキは事件隠蔽の意味もあって母方の姓だそうね。正しくは、えっと……」
「糺野……です」
「そうそう。タダスノだったわ。ようこそ、ファランドールへ。マ

ーヤ・タダスノ君」
エイルはしかし、長い間耳にしなかった自分の本名を、他人事のように聞いていた。
「え？」
エルデは思わず声を出した。
見つめる先、ファランドールではエイル・エイミイと名乗っている、いやエルデがそう名付けた瞳髪黒色の少年の本当の名前が今、初めて告げられたのだ。
だが、エルデが驚いたのは本名を初めて知ったからではない。「マーヤ」という名前がそこで登場したことに、であった。
「マーヤ……？」

# 第五十三話　アトリ

エルデが見つめるエイルは胸に手を当てて自分の鼓動を確認するような仕草をしていた。

興奮を抑えようと無意識にしたものなのか、何かを思い出す仕草なのかはわからない。ただ、その手甲で隠れた向こう側、つまり手の甲には、複雑な紋章のような痣が浮かび上がっているのは確かだった。

「『あの』ガヤルドーヴァ先生に名前を覚えてもらってるなんて、友達に自慢できますよ」

「言ったでしょう。そもそもマーヤ・タダスノは特別なのよ。さらに添えられていた君の付帯情報自体が興味深かったから、じっくり読ませてもらったわ。だから名前だけじゃなくて色々と覚えてるわよ。たとえば出身地、遺伝子優性順位、成績、血液型、交友関係や女性関係……って、うそうそ。彼女、そんなに睨まないで。だいたいあなたはわかりやすすぎ」

「女性関係」という言葉を口にした時に目を吊り上げて睨んできたエルデに、キセン・プロットことヴェロニカ・ガヤルドーヴァはそう言って肩をすくめてみせた。

「冗談抜きに言うとマーヤ・タダスノの交友関係は寂しいものよね。ファイルによると君には仲の良い友達と呼べるような相手はいなかった。剣道部で時々しゃべる相手が居た程度ね。それがマーヤ君の言う友達なら、数人の友達がいた、ということね。それとも『プロット4』では仲のいい友達が百人くらいできたのかしら？」

「オレはマーヤ・タダスノじゃありません」

「え？」

「オレの名はエイルです。エイル・エイミイ。オレはもうファランドールの人間なんです。だからマーヤ・タダスノじゃない」

「ふーん。まあいいわ。じゃあ私もヴェロニカ・ガヤルドーヴァじゃなくて、キセン・プロットで通しましょう。こっちはそれでずっと通してるんだし、お互いにそういう事にしましょうか。それにしてもエイル君、君の名前って……」

「どっちにしろ女の名前みたいだって言うんでしょ？元の世界でも、このファランドールでも、その言葉はもう聞き飽きました」

「いえ、そっちじゃなくてファランドールでの族名の方なんだけど……」

「え？」

「その様子だと何も知らないようね。ううん、今のは忘れて。知らないなら別にいいのよ。それよりその名前は自分で考えた訳じゃないんでしょ？」

「ええ、そりゃもちろん。この名前は……」

エルデの名前を告げようとしたエイルにエルデが合図を送った。握っていた手を痛いほど強く握りこんだのだ。

「あ、いや……」

その様子を見て、キセンは目を細めた。

「まあ、その話は今はいいわ。どうせ後で思い知ることになるでしょうからね」

「は？」

「それより私が君に聞きたい最重要項目について隠さず答えて頂戴」

「最重要項目？」

「ええ。それこそが私が一番知りたい事。いったい君は、どうやってこの世界にやってきたの？」

エイルとエルデは思わず顔を見合わせた。

キセンの言うとおり、二人の異世界人が邂逅したのだ。それは確かにその場合における最優先項目に間違い無かった。そもそもエイル自身、キセンが何の目的でこのハイデルーヴェンに、いや、ファランドールに居るのかを知りたくない訳がない。

「この際、嘘やごまかしはなしで行きましょう。私は元の世界に帰りたいのよ。帰る方法をここでずっと探し続けているの。君だってこんなところにいるより、早くプロットに帰りたいんでしょ？君がここにやってきた理由がわかれば、帰る道筋が見えるかも知れないのよ。君が見つけられなくても、君が持っている情報があれば、私ならそれがわかるかもしれないわ」

「いや、それって……」

エイルは自分が持っている思惑が的外れであったことをそのときに知った。

キセン・プロットを名乗るフォウの住人、ヴェロニカ・ガヤルドーヴァは、自分の意思でここにやってきたものだとエイルは思い込んでいた。だからキセンは二つの世界を自由に行き来できる存在なのだと勝手に決めつけていたのだ。

ならば、キセンはどうやってファランドールに来たというのだ？やってきた方法がわかれば、その逆で帰れるのではないのか？

少なくともエイルは「時のゆりかご」でファランドールとフォウが繋がる「道」を見た。ファランドールに移動した時の事は記憶に無いが、おそらく同じような「道」が通じたのだろう。そしてその道は一人のルーナーによって作られたものだ。つまりエイルはエルデが使った呪法で強制的に異世界に召喚され、その呪法が解けた時に召喚路とも言うべき「入り口」もしくは「道」が開いた。出現したあの通路に足を踏み出していれば、エイルは今ここにはおらず、本来の糺野真綾という名前の人間としてフォウに存在しているはずであった。

エイルはしかし、いつしか異世界であるファランドールとフォウの通路は意外に多く存在するものだと確信していた。

自分が簡単に来られたのだ。そしてそもそもファランドールには「フォウ」という異世界の概念が存在する。それ自体が「異世界」の存在を証明するものであるし、エイル以外の、おそらく複数の「

異世界人」が過去に確認されていたと考えるのが自然であろう。
果たして過去に何人の「異世界人」がファランドールに存在していたのかエイルには知るよしもない。しかし自分だけではないはずだという確信はあった。
だから時のゆりかごでシグ・ザルカバードに「二度と帰れなくなる」とは言われたものの、本心から「帰りたい」と思いさえすれば、可能性がないなどとは思っていなかったのだ。
エイルにとってその一つの回答、いや証明とも言えるのがキセン・プロットの存在であり、キセンの正体、すなわちその研究内容を知れば、彼女が二つの世界を行き来していたとしても驚くには値しないと考えていたのである。
だが、それはどうやら都合のいい思い込みで、キセン自身、エイル以上の「迷子」である事が判明したのである。

「プロット先生は自分の意思でやってきたわけじゃ、ないんですか？」
エイルは念のためにそう尋ねた。
「じゃあ聞くけど、あなたは自分の意思でやってきたとでも言うの？」
「いえ、それは……」
「そうよね。あなたが『アトリ』でもさすがにそれはないわね」
「アトリ？」
キセンが口にした言葉に、エイルは聞き覚えがなかった。だが、それが自分の事を指す言葉である事だけは言われなくてもわかった。
キセンはしまったと言う風に小さくため息をついた。おそらくフォウ、いや「プロット４」では機密事項か、それに準ずる何かなのであろう。フォウに居た時、特殊な場所、つまり「プロット４」という閉鎖された都市空間で囲い込まれて暮らしていたエイルは、そんな「秘密」にはもう慣れっこだった。
秘密と機密を編み込んで構築された町、それが「プロット４」で

ある。いや「プロット４」だけではない。フォウの各地に点在していた全ての「プロット」は例外なく「秘密」というシナプスが絡み合った場所なのだ。

通っていた学校でさえ様々な噂が飛び交っていた。エイル自身はそんな噂話にはさほど興味を持たなかったが、耳に入ってくるものは仕方がない。表向きの「プロット４」の目的とは明らかに違う「真の目的」やら「裏の目的」等々もったいぶった名称で呼ばれるそれらの憶測は枚挙に暇がない。そこにはまた別途様々な名称が付随しており、それぞれもっともらしい理由で修飾がなされていた。

だが、エイル……いや「プロット４」で暮らしていた学生、糺野真綾の知る限り「アトリ」という言葉がそんな秘密の記号の一つとして学生達の口の端に上がった事はなかった。

「仕方ないわね。こうなったら守秘義務も何もあったものじゃないものね」

もう一度ため息をつくと、キセンはエイルの疑問に答える形で「アトリ」という言葉の持つ意味を説明し出した。

「『プロット』の表向きの目的は知ってるわよね？」

キセンの問いかけにエイルはうなずいた。

「フォウの人間なら誰でも知ってますよ。『宇宙移民計画』それが『プロット』が作られた目的ですよね。でもそれって『表向き』なんですか？」

キセンはしかし、首を左右に大きく振った。

「『プロット』の目的は裏も表もなく、それよ。でも私や君がいた『プロット４』だけは違った。それこそ私がそこにいた理由でもあるし、私がいたから『プロット４』が作られたとも言えるわね」

キセンはそこで言葉を切ると、青緑の目を大きく見開いてエイルを見つめた。まるで答えをエイルに求めているかのように。

いや。

その目はこう言っていたのだ。

「もうわかっているのでしょう？」
と。
「まさか、『プロット４』だけは宇宙じゃなくて、異世界への移民計画を？」
「ご名答」
「ちょ、ちょっと待ち」
これにはたまらず、エルデは言葉を挟んだ。
「移民って……フォウの人間がファランドールに大挙してやってくるっちゅう事か？」
「ええ。でもただの移民じゃないわよ」
まるでエルデの横やりを待っていたかのようにキセンはうれしそうな声で答えた。
「全部やってくるのよ。八十億もの人間が、ね」
「何やて？」
目を吊り上げたエルデにキセンは両手を突き出してみせた。
「そっちの話はちょっと待って頂戴。あなたの相棒からも聞ける話だしね。ここは順番に行きましょう」
そう言われたエルデはエイルの顔を見た。
知っている事は教えてやる。エイルはそういう意味を込めて小さくうなずいて見せた。
「さっきの続きね。アトリという言葉を聞いたことがないとすると、『混信点』もしくは『移動混信点』という言葉はどう？」
「コンシンテン？」
「ええ」
キセンは言葉の意味するところを説明したが、それを聞いてエイルは首を横に振った。どちらも初めて聞く言葉だった。
「君のような特殊な存在をプロット４ではそう呼ぶのよ。『混信点』ってね。その通称が『アトリ』よ」
「それだけじゃ話が全く見えませんよ」
「まあ順番にいきましょう。君の事を正確に記述すると『移動混信

点候補』ね。確定してないから君の場合『候補』だったんだけど、どうやらこうしてここに居るって言う事はもう『候補』じゃないようね」

「えっと、あの……」

「はいはい。説明するから。『混信点』って言うのは簡単に言うと二つの世界が交わりやすい場所の事よ。だから単に混信点って言うと、それは土地を指す言葉なの。『プロット4』みたいな場所を、ね」

「え？『プロット4』は異世界と繋がってるんですか？」

「まだ話の途中よ」

「あ。すみません」

エイルがそう言って頭を下げると、横合いからエルデの肘鉄が飛んできた。

「痛えな」

「こんなやつに謝ることない」

エルデは真剣にそう思っているようだった。エイルはため息をつくと頭をかいた。エイルの価値観に照らしても、確かにキセンの言動はほめられるべきものではないどころか、非難されてしかるべきものだと思えた。だがエイルはキセン、いやヴェロニカ・ガヤルドーヴァという人物のフォウにおける行動を多少なりとも知っていた。人格がある程度破綻していると思われることも含めてである。

だから多少は腹は立ったが、そう言うものだと思い込めば、会話は成り立つと信じていた。現に今こうしてエイルが知りたかった情報が語られているのだ。

だがエルデにとってはそういった固定概念がない。目の前の奇天烈な格好をした若い女デュナンがいかにも偉そうにしているのが気に入らないのだ。気に入らないだけではなく、明らかに挑発ととれる行為が含まれている。考えてみればキセンという人物はエルデがもっとも反発しそうな典型的な存在だと言えた。

「異世界と混信、つまり交わる場所というのは、昔から世界中にた

くさんあると言われているわ。『プロット４』のある山の周辺はそのうちの一つに過ぎないわ。そこに君のような『アトリ』いえ、アトリとおぼしき人間を集めてみたというわけ。ここまで言えばわかるわよね？『移動混信点』というのは人間に対して付けられる名称。つまり『移動混信点候補』の君は『プロット４』から『異世界』とどこかしら繋がっている人間だと思われて観察されていたと言う事よ。あ、言っておくけど『移動混信点候補』、我々の符丁で言うところの『アトリ』はもちろん君だけじゃないわよ。『プロット４』というのは、つまりはそういう場所なの」

エルデは眉根に皺を寄せると再度肘でエイルの脇を突いた。

「今度は何だよ？」

「念のために聞くで」

「ああ」

「この青緑やけど、フォウでの評判としては、頭の出来『だけ』はマトモって事になってるんやろうな？」

「たぶんな」

「たぶんって……頼りない答えやな」

「言ったろ、実際に会うのは初めてなんだ。世間の評判が当てにならないのはフォウもファランドールも一緒だろ？」

「ふん、正論やな。でもウチは青緑から説明されるとどうもムカムカするんや」

エルデは不機嫌そうにそう言うと改めて問いかけた。

「で？『アトリ』ってどういう意味なん？」

「いや、そこは心配するところじゃない」

エイルはそう言ってエルデの頭を軽く叩いた。

「オレには何の事かさっぱりだ」

「使えんやつやな」

「この人が今言った事はオレにもほとんど何の事やら意味不明なんだよ。全部初めて聞いた事だぞ。噂じゃお化けの研究をしている場所だとか死人を生き返らせる研究をしている建物とか、そんな事を

色々言われてる機関が石を投げたら当たるくらい存在してるんだぞ。かくいうオレだってそこに住んでるにもかかわらず、そんな噂の一つや二つあってもぜんぜんおかしくないって思ってるほどだ」
「いや、そらないやろ？アンタは何か確信があって、つまりその話について詰めた会話をしよう思てわざわざ正体バラすことにしたんやないのん？」
「いやあ……そこまでは考えてなかった」
「いやあ…って、おい！」
「オレはフォウから来た人間がオレ以外にも居るなら会って話したいと、ただそう思っただけなんだよ。まさかそれがこんな雲の上の人だなんて思ってなかったんだ」
「ちょっと待った。そんなら、キセン・プロットと言う名前に反応したんは、人物特定が出来てたんとはちゃうっちゅう事か？」
「この人も言ったろ、プロットって言うのはオレが居た町の名前で、キセンって言うのは……」
「お茶の名前、ね」
「お茶……やて？」
「ええ。もっとも本来は土地の名前だけど、そこでとれるお茶が高級品として昔から有名で、地名よりお茶の名前としての方が通りがいいのよ」
キセンは二人のやりとりに割って入った。
「本当にお茶……なん？」
「そうよ」
「そうだよ」
エイルとヴェロニカの二人は同時にそう答えた。
「いや。いやいやいやいや。二人してそんな当たり前みたいにうなずき合ってもろてもこっちは一体何の事やら」
「品質の高さで定評のあるお茶の銘柄と言ったらわかるかしら？キセンはそのお茶の産地名。まあ、今はキセンで作っているわけではないけれど。だって『プロット４』の中央研究所がある場所が『キ

セン山』なのよ。そこにはもう茶畑はないわ」

エルデはエイルの行動に緻密な計画性がなかった事に対して多少混乱しつつも、一方で冷静に情報整理を行っていた。今までの二人の会話に加え、キセンのその説明で大まかな背景を察したようだった。

「なるほど……」

そう言うと隣のエイルの頬をつねった。

「痛い痛い痛い！」

「ファランドール・フォウの人間やったら、『キセン・プロット』っちゅう名前には必ず反応する。そういう事やな？」

それはエイルに向けられた質問だったが、キセンが代わりに答えた。

「単純にあなたたちが言う『フォウ』の人間だという事を知らせるつもりなら、別の名前でも良かったんだけどね。ただ私は『プロット４』の関係者である事を知らせた方がいろいろと面倒がないと思ったのよ。私、こう見えて面倒な事は嫌いなの」

キセンはそう言うと長い青緑の髪を手櫛ですいて見せた。

エルデはしかしキセンには目もくれず、エイルの頬をつまんだままでさらに尋ねた。

「アンタが他人との約束が出来へんっちゅう本当の理由は『プロット４』とやらに行くきっかけになったその事件のせいなんやな？」

エルデに頬をつねられたまま抵抗もせずにいたエイルは、その言葉を受けて自分の頬をつねっているエルデの手首をとった。強く抵抗したわけではない。だがエルデはエイルに逆らわず、素直に頬から手を離した。

そしてエイルが口を開く前に、今度はそっとその頬に手を置いた。

「そうか……アンタも色々あったんやな」

口を開きかけたエイルは、エルデのその言葉を聞いて言葉を飲み込んだ。自分を見つめる瞳髪黒色の美貌の娘の目が再び潤んでいる

ように見えたのだ。
「続けてもいい？」
キセンはそう声をかけると返事を待たずに言葉を継いだ。
「『アトリ』はフォウではどこにでも居る小さな鳥の名前よ」
その言葉を聞いて、エルデは思い出したようにキセンに声をかけた。
「『アトリ』は符丁やっちゅうとったな。さすがにフォウの事はようわからんし、多少業腹なんは確かやけど、エイル自身も知りたいやろうしウチも意味が不明なままで符丁を口にするのもキモチワルイから、『アトリ』っちゅうその鳥の名前が符丁になった訳を出来たら教えて欲しいな」
エイルもうなずいた。
自分の事を指す言葉である。知りたくないはずがない。
フォウで暮らしている間、自分の知らないところでそう呼ばれていた言葉だとしたら、なおさらだった。
「ファランドールのお嬢さんは知らないと思うけど、フォウでは無数の言語が普通に使われているの。ほとんど単一言語で成り立っていると言ってもいいこのファランドールとは全く違う状況にある世界なのよ」
その言葉にエルデはうなずいた。
「その話は聞いてる。不便なこっちゃな」
エルデの答えに、キセンは苦笑を浮かべた。
「むしろこの広い世界中、しかもフォウより多い人種、いえ複数の人類がいるのに言語が一つしかないなんて、あなたはおかしいと思ったことはないの？」
「え？」
「まあ、その話は別件ね。いいわ。とにかく『混信』という言葉をとある言語では『チャーム』と言うの。そしてその『チャーム』と言う言葉には同じ綴りで全く別の意味があって、それが『アトリの

群れ』　まあ、全く違うという事はないわね。連想される別の言葉、たとえといった方がいいかしら」

「なるほど」

　移動混信点……アトリは生き物で動き回る。しかも漂鳥である。確かに移動する混信点の符丁としてはわかっている人間にはわかりやすく、普通の人間に聞かれてもおよそ本来の意味合いにたどり着くことはないであろう言葉だとエルデは納得がいった。

「ここ、ファランドールに居るってことは、先生もその『アトリ』なんでしょ？」

　エイルはそう問いかけた。

「ようやく話が元に戻ったわね。でも不正解。言っておくけど私はただの人間。君みたいな特殊な存在じゃないわ」

「だったら、どうしてここに……」

「だからそれは私がはじめにした質問よ、マーヤ君、いえ、エイル君」

　キセンはエイルにそう言うと、すかさず視線を移しエルデを一瞥した。黙っていろと言う合図であろう。だがそんな制止や脅しをエルデが意に介するような事は無いだろうと言うこともキセンはすでに了解はしていた。

　どちらでもいいのだ。黙っていてくれれば手間が省けるが、口を挟んでも主張は曲げない。キセンはそういう意味を込めてエルデを見たのであろう。

「呪法だ」

　エイルは短くそう言った。だが、エルデの意向を伺うようなそぶりは見せなかった。

「呪法ですって？」

　エイルはうなずいた。

「ここであなたに嘘をついても仕方がないと思うから、嘘はないです。正直に言ってる」

エイルは気がついたらファランドールの大地に横たわっていた事をキセンに説明した。彼にとっての異世界であるファランドールで初めて目を覚ました場所は、海が見渡せるウンディーネ連邦共和国内の、とある丘であった。

「夜でしたよ。だから最初は自分がどういう状況なのかもまったくわからなくて」

目を覚ました時の状況や感覚も覚えている限り言葉にして伝えた。

エイルは覚えていた。この世界で目覚めた時の妙な感覚を。大気が肌に圧力をかけているような、かと言って空気が重くまとわりつくようなものではない。それが元の世界との重力の微妙な差である事を知ったのは、ずっと後の事だったが、それも含めて説明をした。

「ちょっと待って」

初めのうちは黙ってエイルの話に耳を傾けていたキセンだが、ある時点でその話を途中で遮った。エイルが近くの町に入った時の感想を口にし出した時だった。

「さっき呪法と言ったわよね？」

エイルはうなずいた。

「ええ」

「なぜそれがわかったの？だいたい、異世界かどうかの認識はともかく、今まで居た場所と全く違う事はわかっているはずなのに、話を聞いていると君は精神状態も行動も、どうにも落ち着きすぎているわね」

「ああ……」

その事か、と言わんばかりにエイルは説明を付加した。

「目を覚ました時、側にコイツがいましたから」

コイツ、と呼ばれたエルデは片方の眉を少し上げただけで、何も言わなかった。

「呪法って、その子があなたをその……ここに召喚したとでも言うの？」

「そういう説明でした」
その一言でキセン・プロットの興味はエルデに移ったようだった。
目が少し見開かれたようにエイルには見えた。
「エルデ。あなたは我々の世界から人間をこちらに移動させる能力を持っているとでも言うの？その割には我々の世界のことはあまり知らないようだけど？」
「異世界から人間を召喚する呪法とかはそもそも存在せえへん」
エルデは自分に向けられた質問にそう答えた。
「エイルがこっちに来たのはいろんな偶然が重なったんやろな。そやからもう二度と同じ事はできへんと思う。いや、絶対に無理やと断言しとくわ」
「偶然、ねえ……」
キセンは納得がいかないという風に腕を組んでじっとエルデの表情を伺っていたが、やがてエイルに視線を戻した。
「それで、この子と一緒にいるという訳ね」
エイルはうなずいた。
「呪法……呪法ねえ……」
キセンは独り言のようにそうつぶやき、やがて誰が聞いても落胆しているとわかるような大きなため息をつくと、自分の椅子にゆっくりと腰を下ろした。
「私にはルーンの解析はある程度は可能なのよ」
浅く椅子に座った姿勢で、キセンは問わず語りにしゃべり始めた。
「この世界ではいろんなルーナーに会ったわ。子供だましのルーンしか使えないえせルーナーからバードと呼ばれる国家のお墨付きルーナーの連中にも、新教会の僧正とか大僧正なんかのいわゆる高位のルーナーにもね。元々私の研究分野の一つだったから、方程式はある程度わかっていたのよ。だからいくつかのルーンを構築することは私でも可能になったんだけど……」
そこで言葉を切ると、キセンはまたもやエルデをじっと見つめた。
「ルーンはわかるわ。でも呪法というものがどうにもわからないの

よ。術者の血液を増幅装置として使うルーンの一種というところまではわかってる。それらしい事も何となくできる。でも、呪法に使うその血の種類が問題なのよね」

エイルはそこでようやくエルデの方をみやった。エルデはエイルと視線を合わせると一瞬だけ睨んだが、眉尻を少し下げて見せた。

エイルはそれを見て場違いではあるが、妙な発見をしたと思った。エルデの眉がかなり自由に動く事を知ったのだ。表情付けが眉でかなり自在なのだ。

（いやいやいや。さすがに感心するのはそこじゃないよな）

心の中でエイルは苦笑した。エルデはおそらくエイルと二人で一つの体を共有していたことに触れなかった点を評価してくれているに違いないのだ。今はそこが重要である。もとよりエルデの事についてはエイルは貝のように口を閉ざすつもりでいた。その部分はエルデ自身に任せるべきだと思ったのだ。色々と「理由（わけ）あり」なエルデである。そもそもエルデの全容を知らないエイルが語れる事は少ないのだ。で、あれば本人に丸投げするのが合理的であり、エルデの都合に最も沿ったものだろうと判断していた。

「一応尋ねるんだけど」

キセンはエルデに声をかけた。

「あなたが使った呪法って、どんなものなの？」

キセンの問いかけは当然ながら想定されたものであった。エルデはだからすかさず答えた。

「ウチの魂と共鳴する人間を見つける呪法や」

キセンは答えを聞くと口をぽかんと開けた。だが彼女の目に映ったエルデの表情は厳しいものだった。

「それ、冗談よね？」

「ウソやない」

「何の役に立つ呪法なの、それ？」

「そやな。こういう下僕が見つかる」
エルデのその言葉に、エイルは苦虫を噛み潰したような顔をして見せた。だが、言葉にして否定はしなかった。
「おやおや」
それを見たキセンは呆れたような顔をしてため息をついた。
「そんなただの下僕君に、あなたはたいそうな名前を付けたものね。つまりあなたは知ってるのよね？エイミイという族名が持つ意味を」
エイルの名前をエルデが付けたという事は、キセンには話の流れでわかっていた事なのであろう。エルデもそこはもう否定しなかった。
だが、エイルは自分に付けられた名前……族名に特別な意味があるなどという事は教えてもらってはいなかった。いや教えなかったというべきなのだろうか？
「あの」
エイルはキセンに声をかけた。
「さっきもちょっと気になったんですが、先生はオレの名前に結構反応してましたよね？オレの使っている族名ってそんなに特殊なもんなんですか？」

エイル・エイミイ。
言うまでもなく、自分の名前すら覚えていなかったエイルのためにエルデ・ヴァイスと名乗る頭の中の声が付けた名前である。「語感がいいから」というのがエルデの説明だった。エイルという聞き慣れない名前がファランドールでは女性名であることを知ったのは少し後だったから、それまではエイルもエルデの言うとおり語感がいい名前だと感じていたし、結構気に入っていた名前だった。そもそも自分の事を思い出せない人間にとって自分に名前があると言う事は大きなよりどころになる。
その名前がどうやらただの語感で選ばれたものではないかも知れないという事にエイルはここに来て初めて気付かされたのだ。

「君は地理が得意だとは言ってたけど、歴史や神話にはあまり興味がないようね」

キセンはそう言うと意味ありげな微笑をエルデに投げかけて立ち上がり、椅子の後ろ側の壁、つまり隠し扉になっていた壁に設えてある書棚から一冊の分厚い本を抜き出した。

「ファランドール唯一の紳士録よ。君はこれを見た事がある？」

「いえ。でも名前だけは知ってます」

「本当に不思議よね、この世界の文字って……おかしいと思わない？」

頁を開けて指で文字を辿りながら、キセンがそう問いかけると、エイルはすぐに答えた。キセンが口にした疑問は、エイルが感じていた疑問とまったくおなじものだったのだ。

「アルファベットが四文字多い事を除けばほぼ同じ。数字は基本的にはローマ数字だけど、それにゼロの概念を取り入れてある。そして言葉は……」

「そうね。あまりに似すぎているわね、フォウに」

キセンはエイルの説明を途中で遮ってそう言うと、今度は違う話題を口にした。

「三聖って知ってる？」

突然の質問に、エイルとエルデは思わず顔を見合わせた。

「そちらのお嬢さんは当然として、君も言葉くらい知っているわよね」

キセンのその言葉に、エイルは跳ね上がった心臓の鼓動がいくらか落ち着くのを感じた。キセンの口ぶりでは自分達と三聖とのつながりを知っている訳ではなさそうだと判断できたからだ。そもそもエルデが賢者であるという事はキセンは知らないはずであった。

だが、そのキセンの次の言葉はいったん下がったエイルの心拍を再び跳ね上げるのに充分なものだった。

「さっき瞳髪黒色のお嬢様が言ってた時空や次元を飛び越えるほど強力な呪法っていうのはね、存在しないのよ」

「存在……しない？」
「あり得ない呪法。フォウで言うオーパーツみたいな存在なのよ」
「オーパーツ？」
「いや、そう言う単語にいちいち反応するな。後でまとめて解説してやるから」
エイルはエルデにそうささやいた。キセンは相手が同じフォウの人間だとわかると既に何の遠慮なくフォウでのみ通用する単語を口にするようになっていた。当然ながらそれにいちいち反応するエルデに語句の説明をしていては話が前に進まないこと甚だしい。
エルデは不満そうな顔をしたが「了解」とつぶやき返してきた。
「言い方を変えるわ。そんな呪法を発動させることができるのは、私の知る限り、賢者でも無理ね。でも三聖と呼ばれる生物の血液が持つ力を使えばなんとかなるかもしれない……くらい特殊なものなのよ」
「三聖の血……だって？」
エイルは思わずそう声に出すと、キセンの言うその特殊な呪法を使ったと言う美しい少女の表情をうかがった。
だがそれはエルデが呪法を本当に使ったかどうかを訝しんだからではない。エルデが普通の賢者ではないことはエイルもとうに気がついていた。エイルが反応したのはキセンが口にした妙な表現、いや言葉だった。フォウからやってきた青緑の髪の風変わりな学者はこう言ったのだ。
「人間」ではなく「生物」と。
科学者であるキセンが敢えてそういう言葉を使った意味を、エイルはもちろん感覚としてわかっていた。それが正しいか間違っているかは別の問題として、少なくともキセンは三聖を「人間」だとは認めていないという事なのだ。
「三聖の血液は特殊なの。それもとんでもなく。そこまではわかってるのよ。実に興味深い存在だわ」
キセンのその一言は、部屋の空気を変えた。冷凍庫に足を踏み入

れたかと錯覚するような冷気が皮膚を覆ったのだ。どんな空調設備であっても、これほど短時間に部屋の温度を一気に冷やすことなど出来ないだろう。それはまさに一瞬だったのだから。

もちろん空気を変えたのはキセンではない。キセンは引き金を引いたに過ぎないのだ。冷気の元……それはエイルの横に立っている滅亡したとされる瞳髪黒色の種族、すなわちピクシィの少女であった。

「三聖の血って言うたか？お前はそれが特殊なんがわかってるって言うたんやな？」

絞り出すような声でエルデはそう問いかけた。もちろんキセン・プロットに呼びかけたのだ。

エルデがその溢れ出す感情を、なんとか抑えようとしているのが隣にいるエイルにはよくわかった。そしてその感情が憎悪と呼ぶ種類に属しているものであることも、感覚でわかった。

「お前がなんで三聖の血の事を知ってるんや？」

少し間を開けてそう続けた言葉は、最初のものより声がかなり落ち着いていた。見ればエルデは少しうつむいて、空いている方の手で額を押さえていた。三眼が開かれたのかどうかエイルにはわからなかった。だが、冷気がゆっくりと消えていく様子は肌でわかる。

キセンももちろん同様に冷気の訪れと消滅がエルデの心の動きに反応したものであることは既にわかっているのだろう。多少は驚いたようだが、すぐにいつもの相手を値踏みする、あるいは観察するような目でエルデを見つめていた。

「エイル君に続けて質問するわね」

「なんです？」

エイルも努めて落ち着いた声で答えるようにした。三眼が現れたエルデはエイルの声に耳を貸さない事がよくあった。その状況ではエイルはエルデを制止する役目だったが、額面通り聞き入れられたことはほとんどなかったのだ。おそらく興奮状態が三眼を開かせ、

三眼状態になったエルデはあらゆる感情が拡張したような尊大さが目につく。それはそのときに使う力が普段よりも強い為に相乗効果としてそうエイルが感じているだけかもしれないが、あえて三眼状態にする必要もないのだ。冷静な状態でいてもらうに越したことはない。そもそもエルデは多くの場合、エイルとは比べものにならないほど冷静なのだ。そのエルデが本当に興奮するということはそれ相応の理由がある。だが理由があれば仕方がないと言うものでもない。そして興奮状態になる前に制止できる可能性がある人間は、その場にはエイルしかいないのだ。だからエイルはまず自分が興奮しない事を最優先に考えねばならなかった。声が上ずらないようにする為にしゃべる前に深呼吸をするだけでもいい。そうでなければこの先に無造作にキセンが口にし続けるであろうまるで挑発のような言葉、あるいは話、説明の前に翻弄されるに違いないのだから。

「君は『深紅の綺羅』と言う名前を知ってる？伝説でも架空でもなく、実在する三聖。その中の紅一点よ」

エイルは握ったままのエルデの手をまた強く握った。するとエルデも握り返してきた。大丈夫だという合図であろう。事実、部屋の空気、つまりエルデが纏うエーテルに急激な変化はなく、感情の制御は充分で、キセンが口にした今の一言に過敏に反応する心配はなさそうだった。

ただ、この先どうなるのかはエイルには皆目わからない。キセン・プロットと名乗る人物は予想以上にファランドールという世界の核心に触れているような気がしてならなかった。さらに心配なのはエイルが風聞で知っていたヴェロニカ・ガヤルドーヴァよりも実物の方がよほど始末に負えない性格の持ち主だとわかったからだ。フォウでも相当に好戦的な物言いをする人間だとは聞いていたが、実際に目の前にいる本人はエイルの予想を遙かに超えた毒舌をよりにもよってエルデに向かって平然と放っているのだ。

エイルの知る限り、いや理解している範囲では、エルデ・ヴァイ

スもまた相当な毒舌家であった。毒舌家とは毒舌を浴びせることを旨とするものだ。決して毒舌を吐かれることを好むものではない。要するに今は冷静でも、いつエルデが感情を爆発させるかわかったものではないということなのである。

しかしながらエイルはエルデと出会ってからこっち、実のところエルデが激情に任せて行動したところを一度も見た事はなかった。だが自らの肉体を取り戻したエルデは、エイルから見ても感情の変化が普通の人間以上に激しいように思えてならなかった。ヴェリーユの宿でエルデに突然組み伏せられた一件も、理性が及ばなかったが故の行動であろう。あの時と同じ事がもし起こったとして、そしてそれが自分でなくキセンに向けられたとしたら、どうだろう？あの時は体術の心得があるエイルだからこそ、受け身でとっさに体を守る事が出来たのだ。

エイルはエルデの手を握りしめたまま、その部屋の床に目をやった。赤茶色のおそらくは大理石の床はむき出しで、絨毯などの緩衝材はない。キセンがあの恐ろしい力で押し倒され、そのまま後頭部から床にぶつかったとしたら、果たして無事でいられるだろうか？何よりあの時のアプリリアージェの様にエルデの行動を制止する事が自分に出来るのだろうか……。

エイルは短い時間でそんな事を考えていた。

だが、もちろん当のキセンはそんなエイルの胸中など知るよしもない。その間、やや不敵な微笑を浮かべて二人を見つめていた。

それを見て、エイルは微妙な違和感を覚えた。

エイルにしろアプリリアージェにしろ、エルデの纏うエーテルの乱れにはかなり敏感だ。すぐにその影響を受けてしまう。言い換えるなら空気の変化がわかるのだ。それだけエルデの感情が周りのエーテルと融合しているのであろう。しかしエルデの引き起こすエーテルの変化に対するキセン・プロットの反応は、かなり鈍いように思えた。多少ひるんだ様子は見せるものの、それだけである。体が

震え出すような悪寒に襲われる様子はない。
つい今しがた、部屋が凍ったかとさえ思えたエルデのエーテルの支配力の大きさは、実のところキセンにはあまり感じられていない様子なのだ。
感受性の差により、反応の違いは大きいと理由付けは可能だろう。
だが……

エイルの思考はそこで途切れた。キセンの机に埋め込まれているスフィアの一つが、また点滅を始めたのだ。
「あらあら」
その光を見たキセンは嬉しそうに微笑むと、そのままの表情で二人を見た。
「面白い客が来たわよ」
そう言うとキセンは立ち上がった。
「丁度いいわ。あなたたちに紹介しておきましょう」
「面白い客？」
エルデの問いにキセンはうなずいた。
「簡単に説明するとハイデルーヴェンの『偉いさん』の一人よ。新教会陣営のね」
「ええ？」
エイルとエルデは、異口同音にそう言うと、奇しくも同時にお互いの手を強く握り合っていた。

# 第五十四話　魔法の鏡

ヴェロニカ・ガヤルドーヴァ、いやキセン・プロットはエイルとエルデの横を通り過ぎると、その向こう側にある壁の一部に手を触れた。

キセンの行動に反応するように、部屋の灯りが一斉に輝度を下げた。

エルデに解説してもらうまでもなく、エイルにもわかった。部屋の灯りはセレナタイトではなくルナタイトで、その光量を制御する精霊陣のようなものが壁に取り付けられているのだろう。

それもキセンのルーン解析の成果の一つなのだ。

「ああ、構えないで。紹介するとは言ったけど、大丈夫。実際に会ってもらう訳じゃないから。こっちへ来てちょうだい」

エイルとエルデは顔を見合わせた。

「安心して。私は君たちを彼らに突き出したり密告したりするつもりはないわ。特にエイル君とは同じフォウの住民ですもの。敵対どころかこれからはいろいろと協力してもらわなくちゃならないし」

キセンに促されて、二人はゆっくりとキセンが立っている書架の前に近づいた。

二人が書架を前に立つと、キセンは書架に手を触れた。すると音もなく書架は横に移動した。書架の向こう側にはなめらかな黒っぽい大理石の一枚岩で出来た壁があった。

「これは……」

壁を一瞥すると、エルデがうめいた。

「精霊陣の見本帳みたいな壁やな」

目を細めて壁を検分するエルデを見るキセンの表情が少し険しくなった。

「ねえ、エイル君」

そしてエルデではなくエイルに声をかけた。
「何です？」
「この子、本当に何者なの？さっきの呪法の話じゃないけど、ただのルーナーじゃ不可視精霊陣が見えるはずがないのよ？それともあなたにも見える？」
エルデ・ヴァイスがただのルーナーではないことは改めてキセンに言われるまでもなくエイルにはわかっていた。本人が言うように多くのルーナーを知るキセンだからこそ、そう思うのは無理からぬことであろう。だが、エイルはもちろん多くを語るつもりはなかった。
「オレはルーナーじゃありませんからね。何も見えませんよ」
「まあいいわ。私の仮説が正しいかどうかはそのうちわかるでしょう」
「仮説？」
「だからその話は後ね。まずは、来客の紹介といきましょうか。正体を知ると、たぶんびっくりするわよ」
キセンはそう言うと壁の一部に掌をあてた。どうやらキセンは掌を触れる事でルーンを発動させる精霊陣を構築しているようだった。エイルが以前エルデから説明を受けた話によれば、もっとも基本的で初歩の精霊陣構造だということだった。とは言え構造が初歩なだけで、精霊陣の力の大小には関係はない。あくまでも発動方法の話なのだ。
精霊陣はすぐに発動した。大理石の壁が書架に続いて横に滑り、今度はそこに壁に代わって大きな一枚の窓が現れた。大きな硝子がはめ込まれた一枚の窓だ。エイルとエルデが並んでくぐり抜けられるほどの大きさがあった。そしてその硝子窓越しに向こう側が見えた。
そこは独立した部屋のようで、三人が居る部屋との間には扉はない。窓があるだけであった。それほど広くはない。大きめの机を挟

んでソファが両方に置かれ、それだけでほぼ部屋はいっぱいであった。書架もなく飾り絵も置物もない。殺風景な部屋だったが、機能としては応接の為の室であろうことはわかった。いや、むしろ人と会う為だけの部屋なのだろう。あまりの殺風景ぶりは歓迎したくない来訪者専用の特別室なのか、単にキセンの趣味なのか……。さすがにエイルにはそこまではわかりかねた。

その殺風景な応接室に、黒光りする木製の儀仗を手にした黄色い僧衣の人物がいた。

落ち着かない様子であたりを見渡した拍子に、その客の背中が見えた。そこに染め抜かれた紋章は誰しもよく知るものだった。

「僧正……」

思わずエルデがつぶやいた。

昼星の紋が染め抜かれた黄色い僧衣。それがどういう人物であるかはエルデが口にするまでもなくエイルにもすぐにわかった。

思わず後ずさろうとしたエルデに、キセンはおかしそうに声をかけた。

「大丈夫よ。この窓は向こうからは鏡にしか見えないわ。ついでに言うとこちらの部屋の音は一切向こうには聞こえない。でも向こうの部屋の様子と声や音はこちらには筒抜け。ファランドールにはない面白い仕掛けでしょう？」

キセンの説明でエルデは警戒を解いたのか、一歩下がっただけで留まった。

エイルはキセンの説明で合点が言った。

「フォウにはよくあるんだ。『魔法の鏡』とか呼ばれてる」

「ルーンを使うてる……わけやないんやな？」

「たぶん。でも、音は……」

「音も鏡も、どっちもエーテルを利用しているわ。ルーンで作ったもの、と言った方がいいわね」

キセンはエイルの頼りなげな言葉をそう言って訂正した。

「フォウの『魔法の鏡』の理論的な構造や仕組みがわかっていて、

かつファランドールに満ちているエーテルの利用方法がわかっている人間にかかれば、おもしろいものがいろいろと作れるのよ。フォウでは理論だけで実物がつくれないものも、ファランドールでは実現できたりするわ」

「なるほど」

エイルの知るフォウの『魔法の鏡』と完全に同じものではない、という事をキセンは言いたいのだとエイルは理解した。それはフォウと同じものをファランドールの人間が作ろうとしても製法が困難である事を説明している様でいて、もっといろいろと「すごいもの」を持っている、と仄めかしているようなもので、要するにこれもエルデに対する一つの挑発であり牽制と言っていいだろう。

それが真実であれば、目の前の青緑の髪と瞳を持つデュナンの女性は、ファランドールの勢力図を簡単に塗り替える事が出来る存在であるかもしれない。たとえばファランドールにはなくフォウにはある大量殺戮兵器などをもし作っていたとしたらどうだろうか・

エイルはそれを想像して思わず唾を飲み込んだ。

「挨拶しなきゃいけないからちょっとの間失礼するわね。あなたたちはここで見物していてちょうだい」

キセンは二人にそう言うと懐から鶏の卵大のスフィアを二つ取り出すと左右の掌でそれを握り込み、すぐに目を閉じてうつむいた。そして両腕で自分を抱きしめるような仕草をすると、そのままの格好で立ち尽くした。

失礼するというのは、どうやらその場を辞すという意味ではないようだった。

「エーテル体を使うんやろ」

エイルが疑問を投げかける前にエルデがそう口にした。

「ヴェリーユの偉いさんでも、駐在僧正に対しては、青緑女史は本体を晒さへん、ちゅう訳やな」

エルデの言葉を裏付けるかのように、二人が眺めている「来客室」

の扉が叩かれる音がして、扉がゆっくりと開いた。

現れたのは女性だった。

それはエイルとエルデも見た事がある人物、キセン・プロットの二人目のエーテル体であった。

新教会の僧正服の男はキセン・プロットのエーテル体に対して深々と礼をすると、通り一遍のご機嫌伺いの口上を述べた。

キセンはと言うとにこやかな表情でしばらくぶりの会見を喜ぶ言葉を告げ、来訪をねぎらった。

挨拶を見る限り、二人は顔見知りのようであった。ただ、それほど親しいという間柄でないことも雰囲気でわかった。お互いの挨拶のよそよそしさもさることながら、相手の僧正の表情が基本的に硬かった。とても旧知の友の顔を見に来た、という友好的な態度ではない。

「久しぶりじゃない。ヴェリタスへはなかなか顔をだせないけど、堂頭様はお元気なの？」

挨拶の後、すぐには本題に入ろうとはせず、ハイデルーヴェンの情勢や信者数の推移など、通り一遍の話題を続ける僧正を相手にせず、キセンは自分からそう言って水を向けた。

話を途中で遮られた僧正はムッとした表情一つ見せず、素直に質問に答えた。

「おかげさまで息災と聞き及んでおります。もっとも今頃はエッダへ向かう旅の空にあらせられます」

「エッダ？」

「『大葬』でございます」

「――ああ、大葬ってアプサラス三世の葬儀、国葬ね」

「左様でございます」

「その堂頭様がお留守の間に、ハイデルーヴェンの要であるあなたが私に直接会いに来るなんて、一体どういう風の吹き回し？」

新教会（ヴェリーユ）の『僧正』に対するキセン・プロットの物言いにはあからさまとは言えぬものの、聞きようによってはやや剣呑ともとれる調子が含まれていた。

変な話だとは思ったが、エイルはキセンのその態度をハラハラしながら見守っていた。

いや……

そもそもキセン・プロットとヴェリーユ、つまり新教会との関係は決して良いものだとは言えないのかも知れなかった。

つまり、こういう事である。

「確かに政治には向いてないようやな」

エルデがまさにそれを指摘するようにぼそりとつぶやいた。

「え？」

「あからさまに不機嫌な態度を、それ相応の地位にある人間に対して隠そうともしてへんやろ？」

「不機嫌ってほどでもないような気もするが……たしかに友好的とは言えないな」

「ふん。ウチらに、いやウチに対してもそうや。たいそう頭のいい学者かしらんけど、少なくとも外交手腕というか人付き合いの才能はあんまりなさそうや。参謀にすらでけへんやろな。都合のええ便利道具扱いが関の山、か……」

エイルは無言だった。

エルデの物言いはキセンを見下だしているかのようだが、それはとりもなおさずエルデがキセン・プロットという人物をあまり、いや全然好ましく思っていないと表明しているようなものであった。

もっともそれは相手が誰であろうとエルデにとってはいつもの事である。それよりもエルデの言うとおり、エイルの知っている「ヴェロニカ・ガヤルドーヴァ」という有名な学者は称賛と同じくらいの批判を浴びている人物だ。称賛はもちろん彼女の能力と、それによって成し遂げられた数々の成果についてであり、批判は奇抜な行動

と相手を敬う事をしない物言いに対してであった。
「いくら有能な学者や言うても、ファランドールでは人物が人脈を動かすもんや。それ相応の地位に就こうと思うたら、能力だけでは難しい。とくにデュナンの国であるウンディーネやドライアドではな。それとも、フォウは完全な能力主義なんか？」
「いや」
それは絶対違うとエイルは言った。
社会の仕組みや政治の内情などを深く知るにはエイルはまだ若すぎた。だが、それでもそれくらいの問いに即答できるだけの常識はあった。
「この人はフォウでもかなり異端な人だよ。ただ、フォウではそんな逆風をものともしない強力な後ろ盾があるという噂もあったな。たぶんそのせいでずいぶん偉い人になったんじゃないかな」
そこまで言って、エイルはキアーナ・ペンドルトンの言葉を思い出した。彼はこう言っていたのではなかったか？
「アダンの偉い人の紹介で突然やってきて、最初から研究棟を与えられていた」と。
フォウと同じように、キセン・プロットことヴェロニカ・ガヤルドーヴァはここ、ファランドールでも確固たる「後ろ盾」を手にしていたと考えるべきだろう。
だからこそハイデルーヴェンでも『偉いさん』と呼ばれるかなりの影響力を持つはずの相手に対して自分の不機嫌を隠さぬような態度がとれるのであろう。いや、むしろ相手の方がキセンに対してご機嫌を伺っている風に見えた。立場はキセンの方が上なのかもしれない。
もちろん、同じ事はエルデも考えているだろう。
「後で本人に聞いてみたらどうだ？」
「何をや？」
「お前も同じ事考えてるんだろ？ウンディーネの首都島、アダンの『偉い人』がいったい誰なのか、だよ」

「キアーナの言葉を真に受けて、か？」
「あいつが嘘を言っていると思うのか？」
「それはわからへんけど、キアーナにはちょっと気になるところがあるんや」
「気になるところ？」
「いや、ウチの勘違いかもしれへんけど……」
「どっちにしろ情報はあった方がいいんだろ？お前の知っている奴かもしれないじゃないか」
エイルがそう言うと、エルデは大きな黒い目でじろりとエイルを睨んだ。いや、睨んでいる訳ではないのだろうが、目尻が上がったエイルの目で見つめられると睨まれているのとあまり変わらない気分になるのだ。
エルデに睨まれながら、いや見つめらる度に同じ事を思う。
（せっかくのきれいな顔なのに、こいつは相当損をしている）と。
だが、同時に思うのだ。この顔で微笑まれたらそれはそれで薄ら寒い気分になるかも知れない。エルデを知らぬ人間なら【こんな美人が自分に微笑みかけてくれるわけがない】と思うだろう。いや【二心があるに違いない】と言い換えてもいい。柔和に微笑んでいるようなアプリリアージェとの違いは目尻がつり上がっているか下がっているかという造形の差だけではないのだ。エルデの纏う雰囲気には、そもそも他人を寄せ付けようとしない暗い物質がまとわりついている様に感じる。それをファランドールではエーテル波や精霊波と呼ぶのだろうが、エイルにとっては「気」と言った方がしっくり来る。
その「気」に当てられるとゾッとして鳥肌が立つのである。
エルデを知っているつもりのエイルにしてそういう気分に襲われるのだ。エルデに気を許そうと思う人間がそうそう存在するとは思えない。
エイルはしかし、その方がいいような気がしていた。エルデの本質を自分一人が知っていたらそれでいい、と。

だが、そこまで思い至ると、我に返った。
（おいおい、オレはこんな状況でいったい何を考えているんだ）
エイルは亡失していた事に気づき思わず頭をかいたが、エルデは特に見とがめる風はなかった。
「アダンにおるっちゅう、青緑女史の『後ろ盾』か……」
エイルの心中を知ってか知らずか、エルデは普段通りの一見取っつきにくそうな冷たい表情でそう言うと、キセン・プロットの青緑色の長い髪に視線を移した。キセンはうつむいたままの状態で自らが作り出した人間にしか見えない見事なエーテル体を制御していて、動きがない。
「素直に教えてくれるかどうかはわからへんけど、後学の為に聞いとく方がよさそうやな」
「まあ、こうやって普通に声に出して話してるし、この会話は聞いているだろうけどな」
「いや。それはどうなんかな」
うつむいたままエーテル体を操作中のキセン・プロットを、エルデは改めて観察した。
「ウチは自分ではエーテル体を作った事が無いからようわからへんけど、あそこまでの精巧なエーテル体や。意識のほとんどを注ぎ込まんと制御出来へんのとちゃうかな」
「そうなのか？」
エイルも改めてキセンの様子と『魔法の鏡』越しの部屋にいるエーテル体のキセンを見比べた。どうやって制御しているのかはわからないが、エーテル体のキセンはエイルが見る限り、きわめて普通の人間だった。
「ほんなら試しに、その青緑の髪の女の服を脱がせてみよか？」
「え？」
邪気たっぷりにそう言って笑うエルデにエイルは驚いた。
思わずキセンに目をやる。白衣は着ているが、その下がどうなっているのかはわからなかった。あの奇抜な髪の色にあわせた奇抜な

服装を着ているのだろうか。フォウではエイルの価値観では「とんでもない」姿で公の場に登場していたヴェロニカ・ガヤルドーヴァである。その可能性は大いにあった。

それとも……。

「やっぱり微動だにせえへんな」

エイルがキセンの白衣の下の具体的な想像に入る前に、エルデがそうつぶやいた。

「あ……ああ、そうだな」

どうやらエルデは本気でキセンの服を脱がす気などはなかったのだ。普通の女性であれば思わず身構えてしまうような台詞をあえて口にして反応を試したのだ。しかしエルデの言う通り、確かにキセンはその言葉が聞こえているはずなのに微動だにしていなかった。

「エイル」

「何だ？」

「今、ウチが言うた言葉に動揺したやろ？」

微妙な安心感から小さなため息を漏らしたエイルに、エルデの追及の手が伸びた。

「え？いやいやいやいや」

エイルは慌てて目の前で手を振ってエルデの疑念を払おうとした。

「オレはお前が本当にそんな事をしようとしたら、すぐに止めるつもりだっただけだ」

「ふーん……」

疑いの目をエイルに向け、しばらく表情を観察していたエルデだが、しばらくすると、今度はふくれっ面になった。

「ウチだけ裸を見られてんのに、コイツはダメなんか？」

「いやいやいや、お前、何をいってるんだよ。意味がわからんぞ」

だが、エイルの言葉はエルデの耳には届いていないようだった。

いや、最初からエイルの返事などに反応するつもりはなかったのだろう。

「くそ、こうなったらみんなと合流した暁には、全員ルーンで空中

に貼り付けて、そんでもって一人一人順番に裸にひんむいたる。せやな……まずはリリア姉さんで決まりやな。あの人を小馬鹿にしたような微笑が羞恥に歪んで涙を流しながら許しを請う様を思う存分楽しんだる。それから次は……って、いや、姉さんはあかん。後の事を考えるとあれはちょっといろいろマズい事が多すぎるな……こなくそ」

「いや、だからやるなよ」

「かと言うてティアナをひん剥いてもあの胸や。本人は恥ずかしいやろけど、見てる方は楽しゅうも何ともないなあ。いや、ああいうのが趣味嗜好に合う人間もおるか。ちゅーか、よう考えたらアルヴの男は全般にそういう趣味やいうことやな」

そこまでぶつぶつと独り言を口にしたかと思うと、エルデはじっと値踏みするような視線をエイルに投げた。

「アンタは無い方が好みなんか？」

「何の話だよっ」

「まあええ。やっぱりティアナの胸を笑いものにするのはちょっと洒落にならんな。わざわざファルの不興を買うのも今後の事を考えると得策とは言えんしな。ふむ。こうなったらやっぱり最初はネスティしかおらん！よっしゃ、それでいこ。ネスティやったらエイルも大興奮やろ？エイルの目の前で脱がせたったらネスティのやつ、一人阿鼻叫喚状態で、さぞや見物やろな」

「いやいやいや！だからオレは……というか、どう考えてもお前は正義の敵だろ」

「そんならアンタはやっぱり貧乳趣味なんか？でもウチはファルに恨まれとうないしなあ」

「だから、オレはそんなもの見たくないんだよ！」

「ほう？」

エルデの顔がまた邪気に満ちた笑顔に変わった。

「ホンマに見とうないんか？ぜんぜん？天地神明にかけてか？この先一生やで？」

「あ、いや……」
「どやねん？はっきりしいや！」
「まあ、一生とか言われるとオレだってそういうわけじゃないけど……」
「な、なんやて！」
エイルの答えを聞いたエルデの顔から笑みが消えた。代わりに目尻がこれまでにないほどにつり上がった、いや、エイルにはそう見えた。
エルデのその表情を見たとたん、エイルは自らの失敗を思い知った。
「いや。待て。これは何かが変だ。だいたいさっきからいったいお前は何がしたいんだよ」
しかしエルデはエイルの言葉など耳に入っていないようだった。
「このスケベ！」
「違うだろ！というか、来客室の話を聞けよ。お前はそんな顔してるくせに緊張感ってやつがないのかよ？ほら見ろ、なんか本題に入るみたいだぞ」

エイルの言うとおりであった。
話をしながらも来客室の様子は聞こえていたが、相手の答えを聞く前に、今度はキセンが脈絡のない質問を次々に投げ、相手がそれに翻弄されていたようなのだ。しかしそれも長く続かず、その相手である僧正があたりを見渡して声を潜めたのだ。
「プロット教授長。申し訳ありませんが私もいろいろありましてあまり長居もできません。そろそろ本題に入ってもよろしいですかな？」
「よく言うわね。さっさと切り出さなかったのはそちらでしょう？」
「これは面目ない。ただ、あなたの前にでるとなぜかいつも妙な気分になるもので。あ、妙な気分と言っても、誤解なさらぬよう。頭痛のようなものです。なぜか集中力も欠けるようでして。それで自

分を落ち着かせる時間が欲しくて最初は当たり障りのない会話をするのが常になってしまいました」

ハイデルーヴェンの駐在僧正とやらは、今目の前で自分と会話をしているキセン・プロット教授長の正体が、実はエーテル体だとは夢にも思ってはいないだろう。だがさすがは僧正と言うべきであろう。それでもある種の違和感を覚えているようであった。

とはいえキセンは僧正の指摘にも似た言葉を顔色一つ変えずに受け流し、話題を逸らした。

「――あなたは話し相手としては面白みがない人ね」

僧正はキセンの嫌みを含んだ言葉には反応せず、小さく咳払いをして、ようやく本題と呼べるものに言及し始めた。

「これは第一級の秘匿事項ですが、ここハイデルーヴェンに手配犯が逃げ込みました」

僧正のその言葉には、さすがにキセンも興味を示した。

「手配犯って、つまりお尋ね者って事？」

僧正は小さくうなずいた。

「それもあろう事かヴェリーユで取り逃がした賊なのです」

キセンのエーテル体はそれを聞くと眉をひそめた。

「詳しく教えていただけるかしら？」

僧正はうなずいた。

「族の侵入の報がもたらされた後、すぐに手は打ったのです。それも実のところ副堂頭御自らが手勢を率いて、確保寸前まではいったようなのですが……」

「ドジったのね？」

「いえ。何と申しますか、相手はこちらの想像をはるかに超える力を持つフェアリーだったようです」

「お尋ね者は高位フェアリーって事？」

「おい」

「そやな。リリア姉さん達の事かもしれん。と言うかそれしか思い

つかん」
「だな」
エイルとエルデはいつの間にか『魔法の鏡』に張り付くようにして内部をのぞき込んでいた。
「逃げたって事は無事ってことだな」
「とにかく情報や。話は最後まで聞いとこ。ただし、あいつがプロット教授長に真実を報告してるかどうかはわからへんけどな」
エイルはエルデの言葉に唇を噛んだ。
『誰も信じるな』
ファランドールに来て、最初にエルデから教えられた言葉をエイルは苦い思いでかみ締めた。

僧正の説明によると、確保しようとしていた「お尋ね者」とやらは強力な風の力を持つフェアリーと、そのフェアリーの護衛とも言える数名の仲間からなる集団だという。
首謀者の風のフェアリーを捕らえる為に、新教会側はバード級のコンサーラを多数投入した。用意していた精霊波を減衰する精霊陣の中に追い込んだまでは良かったが、相手はその精霊陣の力を破って見せたのだという。
賊である風のフェアリーは、その後服堂頭達の頭上に竜巻を巻き起こして新教会の僧兵を無力化した上で、地下の隠し通路を使ってハイデルーヴェンに向かった。
「ご丁寧な事に彼らは行きがけの駄賃として地下の通路上に巨大な岩石、いや、あれはもう岩盤ですな。ともかく途方もない大きさの一枚岩を妨害壁として置いていきました。追っ手は地下通路を塞がれ水路を使わざるを得なくなった為に、準備に手間取ってしまいまんまと逃げられてしまったという次第です。地下通路であればそのまま追いかける事が出来たのですが、水路ですとどうしても兵装のままで上陸できませんので」
「岩盤ですって？風のフェアリーが？」

「いえいえ、ですからやっかいな事に賊の一行の中には風のフェアリーだけでなく相当な力を持つ地のフェアリーか、もしくはバード級の高位ルーナーがいるものと思われます」

岩盤で塞がれた場所の真上は川底で、その先は山になっていて通路へ降りる竪穴を掘るのには時間がかかりすぎる。水路は水路でヴェリーユの埠頭付近の川面が大きな氷塊によって全面閉鎖状態になっており、追っ手が乗った船の出航にかなり時間がかかったのだという。

「不凍の川じゃなかったの？」

キセンの問いかけに僧正は苦笑いで答えた。

「それもおそらくは水のフェアリーか、ルーナーの仕業でしょうな」

「お前だよな？」

エイルの問いかけにエルデはうなずいた。

「思い付きで簡単な時限ルーンをかけといたんや。まあ、気休めや」

「それって、下手をするとネスティ達も閉じ込められてたかもしれないんじゃないのか？」

「川面を凍らせたらアレやけど、氷塊を浮かべてるんやで？　風のフェアリーが何人居てると思てんねん。それにだいたい高位ルーナーが居てたらそれほど時間稼ぎにはならへんやろ。たぶん追っ手の指揮系統が今ひとつしっかりしてない事のいい訳やろな。要するに準備の方に相当時間がかかった、っちゅう事や」

ハイデルーヴェンはウンディーネ共和国連邦の街である。新教会とウンディーネには当然ながら協定があり、新教会といえども武装した人間をおおっぴらにハイデルーヴェンに入れるわけにはいかない。僧服での団体行動も目立ちすぎるとあって、部隊は平服で隠密に行動をする必要があるのだ。

「それにしても、リリア姉さんが岩盤動かしたとかありえへんやろ

？」

エルデが思わず独り言を漏らした。

「地のフェアリーだって？……ましてやルーナーはいないぞ？」

これはエイルである。

「まさかメリド？あいつはルーナーだよな？」

「知ってるやろ？ルーチェやったらまだしも、メリドにそんな強力なルーンは使えへん。せいぜいコップに水を満たすくらいや」

「じゃあ、いったいどういう事なんだ？」

「うーん……そうか！」

「わかったのか？」

「きっと新しい仲間が増えたんや」

「……オレは時々、お前がただのバカなんじゃないかと思う時がある」

「なんやて？」

とはいえハイデルーヴェン駐在役である僧正の話を信じるならば、エルネスティーネ達はエイル達の知らない人物と行動を供にしている事になる。エルデの言う「新しい仲間」という言葉はあながち出任せとは言い切れない。だが、彼らと別れてからそんなに時間は経っていない事を考えるとそれは少々強引な推測であろう。だとすればそもそも賊とはエルネスティーネ達の事ではないのかもしれない。

だが、二人でそれをここで議論しても始まらない。

エイルは自分をにらみつけながら恨み言を唱えているエルデに合図をして『魔法の鏡』の向こう側にいる黄色い僧服を着た僧正を指さし、次いでその指で自分の耳を指した。別に言葉にしてもよかったのだが、行為で示す事により「らしさ」を演出したつもりだった。つまり、ここはともかく話を聞こうという合図である。

これ以上ここで会話を続けると、話の途中で重要な情報を聞き逃す事にもなりかねない。エイルはそれをおそれたのだ。

もちろんエルデとしてもそれは重々承知である。最後の一瞥をエイルにくれると、何も言わずに視線を僧正達に戻した。

「そういうわけで、つい先ほどその報告が届いたところです。私は急ぎハイデルーヴェン中に捜査網を敷いたところなのですが……」
「とは言えここはヴェリーユではなくハイデルーヴェン。捜査網を敷こうが何をしようが結局おいそれと手が出せない。だから研究所の責任者である私に何とかして欲しい。つまりはそういう事ね？」
「さすがプロット教授長。話が早くて助かります」
そういう僧正の顔に、初めて小さな笑みが浮かんだ。だが、その笑みはすぐに消える事になった。
キセンが即座に協力を断ったのだ。
「ダメよ」
「え？」
「少なくともこの建物は絶対にダメ。捜査とかとんでもないわ。あなたもノルドルンド堂頭からそのへんの話は聞いてるでしょ？」
「この建物には一切の手出し無用、と言う事はもちろん存じ上げております。しかし……」
僧正側もダメだと言われて「はい、そうですか」と引き上げる訳にはいかないようだった。そもそもハイデルーヴェンに於ける新教会の総責任者の立場にあると思しき人間が、先触れや代理を送るではなく本人が直接面会に来た事でもその本気度がわかる。
「まさか私を疑ってるんじゃないでしょうね？言っておくけどここにはそんな人間は迷い込んでないわよ」
「しかし、この建物は学生が自由に出入りできるではありませんか？そこで私たちも学生の扮装で……」
「誰でも入れるわけじゃないわ。私が許可した人間しか建物の中には入れないようになってるの。それはあなたもよく知っているでしょう？」
「ふーむ。では、本当にここにはいない、と？」
「私はまどろっこしい話は大嫌いなのよ。腹の探り合いや駆け引きも勘弁願いたいわ。そこのところ、そろそろあなたにもわかってい

ただきたいものね」
「と、申しますと？」
「訪問の主旨はそれだけ？最初からムリだとわかっている事を聞きに来ただけなの？」
キセンの問いかけに、僧正は苦笑いを浮かべた。
「相変わらず察しがおよろしいですな」
「そういう、人をバカにしたような物言いは気に入らないわね」
「これはとんだ失礼を。もとよりそんな気持ちは毛ほどもございません」
「だいたい、その風のフェアリーって一体何者なの？ただの強力な風のフェアリーごときに、天下の新教会が大がかりな追跡部隊を編成するなんて普通じゃないわね」

キセンの言い分はもっともだとエイルも思った。だがエイルとしても追われているのがエルネスティーネ達なのかどうかを早く確かめたくて、固唾を呑んで僧正の返答に聞き耳を立てた。

「用件のみで事を済ませてはいただけぬようですな。仕方有りません、お話しましょう。ただしこれは……」
「はいはい。機密は守るわよ。それとも今まで私が機密を守らない事があったとでも言うつもり？」
「いえ、失礼しました。では申し上げましょう。実はその者は風のフェアリーではなく、風のエレメンタルでして……」
「はあ？」

エイルとエルデは顔を見合わせた。
「やっぱり、っちゅうかバレてたんやな」
「なぜだろう？追尾や感知ルーンは関係無いはずじゃ？」
「うーん……目をつけられてたんかもしらんな」
「それはもしかして、ヴェリーユにネスティ達の誰かの顔を知って

いる人間がいたって事だよな？」
「新教会の人間に顔を知られてる人物がおるってか？」
「単純に考えるとそうなるだろ？」
「アンタはいっつも単純に考えすぎや。でも、その可能性はあるかもな」
「そんな事より追われてるのがネスティ達だとして、じゃあさっきの話の『地のフェアリー』っていったい誰だよ？」
「ウチが知る訳ないやん」
「オレも知らないよ」
「フンっ」
「何だよ？」
「これでおあいこやな」
「いやいやいやいや、何が『おあいこ』なんだよ。意味がわからん」
「しっ」
エイルの突っ込みはしかし体よくかわされた。僧正が説明を始めたのだ。追求するのは後回しにして聞き耳を立てざるを得ない。

「エッダは大葬の最中なんでしょ？なのになぜ風のエレメンタルであるイエナ三世がヴェリーユなんかにいるのよ？」
追っている相手の名前が風のエレメンタル、つまりシルフィード王国の現国王である女王イエナ三世だという説明は、キセンにしてみてもさすがに冗談にしか思えなかったようであった。だが、わざわざ新教会の僧正という地位にある者が単身、おそらくはお忍びでわざわざやって来たあげく、つまらない冗談を口にすると考える方が不自然である。
すぐにキセンもそこに考えた至ったのだろう。
「お忍びで物見遊山……まさかね。だとしたら新教会との同盟……って事も無いわよね。それよりさっきあなたは一国の王を捕まえて『手配犯』なんて言葉を使ってたわよね？」
「――実はエッダには女王イエナ三世はちゃんとおられます」

「何ですって？」
キセンの目が大きく見開かれた。
「それって、つまり」
「そうです。つまり、エッダのイエナ三世は『変わり身』でございまして……」
キセンは僧正のその一言に、さすがに言葉を失ったようだった。
「ほとんど誰にも知られていなかった事なのです。エルネスティーネ王女には変わり身が用意されていたのですよ。即位したのが変わり身だという事が明るみに出ると、シルフィード王国だけでなくフアランドールには混乱の波が津波のように襲いかかる事になるでしょう。もちろんこのご時世ですから混乱を望む者は多いでしょうが、まだその時期ではございません。この件はくれぐれもご内密に」
「『変わり身』を置いて、本物は何の為に……いえ、そんな事はどうでもいいわね。新教会はそもそも本物のイエナ三世を捕まえてどうするつもりなの？」
「いえ……」
キセンの質問に、しかし僧正は口ごもった。
「何よ？お尋ね者なんでしょう？」
「いえ、そう言う事ではなく、その……アレです。『捕まえる』のではなく……ここまで言えばおわかりでしょう？我らが必要としているのは本物ではなくエッダで玉座に着いている『変わり身』の方なのですよ」
キセンのエーテル体の目が大きく見開かれた。
それに呼応するようにエルデの精霊波が再び揺らぐのがエイルには感じられた。とっさに身構えたエイルだが、すぐにエルデがつないだままの手を握ってきた。
それ以上に激しく乱れる事がなさそうだと判断すると、何も言わずにまたキセン達の会話に耳を傾ける事にした。
「まさか、新教会は本物を『暗殺』するって言うの？」

「ヴェリーユでは捕らえる事に失敗いたしましたので、こうなったら仕方がないと。もはやこちらの損失なしに確保するのは困難でしょうから」
「ちょ、ちょっと待って」
キセンは頭を抱えた。
「ヴェリーユの高位ルーナーが作った精霊陣が風のエレメンタルには役に立たないんでしょ?そんなの、そもそもどうやって……」
「その点は大丈夫なのです」
「大丈夫って……」
「捕らえるのは困難です。しかし命を奪うとなると話は別。事は簡単なのです。『あの方』はいざというときの為に、ちゃんと周到に手を打っておかれたのですよ」

「おい」
エイルはたまらずエルデに声をかけた。
エルデは険しい顔をしていたが、冷静さは保っているようだった。
「まさか、な……」
「お前、まさか心当たりがあるのか?」
「ずっと前やったけど、ちょっと気にかかった事があったんや。けど今はとりあえず、あいつの話を聞いとく事が先決や」
エイルは鼓動が高まってくるのを感じていた。僧正の言葉は嘘でも何でもない。エルネスティーネは本当に危険なのだと直感で肯定していた。
そもそもエルデに何か思い当たる節があるということは、肯定の判断材料になる事はあっても否定できる情報ではない。つまり新教会の僧正の言葉が、口から出任せでない事は確かに思えた。
「『あの方』って、ミドオーバ大元帥の事ね?手を打っていたって、どういうこと?」
キセンの問いに、僧正は意を決した様に答えた。

「ご協力を仰がねばならぬ立場ですから、この際全てお話ししておきましょう。ですが、くれぐれもご協力は……」
「いいから、何なのよ？」
「『あの方』はずいぶん以前から今度の計画を立てておいででした。様々な準備をされていたのです」
「知っているわよ。私はその手伝いの一部をやらされたんだから。【深紅の綺羅（しんこうのきら）】の一件では私はミドオーバ大元帥に跪いてあがめてもらいたいくらいよ。なのに未だに挨拶にも来ないわ」
「色々とお忙しくてなかなかこちらまでは……ともかくその準備の一環として『あの方』はいざというときの為に、風のエレメンタルを確実に抹消する為の武器を育てておられました」
「武器？育てた？」
「ご想像通りです。武器と言っても要は人間です。常に風のエレメンタルの近くにあり、もっとも献身的な人間……風のエレメンタル自身が自分の背中を預けておけると思える存在です。これほど確実な『押さえ』がありましょうや？『あの方は』もう何年もかけて準備されていたのですよ」
「なるほど、子飼いを側に置いてたって事ね。確かに周到な事ね。でも、相手は人間でしょ？長くその人物の近くで仕えていれば、心変わりしかねないわ。今じゃ本当に向こうの『味方』になっている可能性があるんじゃない？」
キセンのその言葉を僧正は待っていたような節があった。なぜなら、彼はその言葉を聞くと笑みを浮かべたのだ。
「その点は問題ございません。なぜなら当の本人は心の底から風のエレメンタルを守る役に命をかけておりますゆえ」
「どういうこと？」
エーテル体は眉間に皺を寄せた。
「何、簡単な事です」
僧正は肩をすくめてみせた。種を明かせばなんと言う事はない、とでもいう意味であろう。

「決められた有る言葉を耳にすると、予め命令された事を無意識のうちに実行に移すような呪法があるようでして」
「呪法ですって？」
「おいっ！」
「わかってるっ！」
エイルとエルデの思いは同じだった。おそらく間違いはない。
二人は僧正の言う『武器』なる人物を簡単に特定できたのだ。
エルネスティーネの事を慕い、守る事に命をかけている白髪の女アルヴ……。そして彼女がその役目にまたとない程ぴったりな特殊能力を持っている事に思い至った。
もはや間違いようがなかった。
「その者は先天的に特殊な能力を持っておりましてな。それが為にその役に選ばれたようなものでして。もっとも本人はたゆまぬ努力と忠誠心の高さに運が加わって今の役目をいただいたと、心から喜んでいるようですが、まったく哀れなものです」
僧正はキセンが問いかけずとも、饒舌にサミュエル・ミドオーバが作り上げた暗殺者についての説明を喋りはじめていた。どうやら暗殺が確実である事をキセンに理解してもらう事が今は重要であるらしかった。それはつまり、僧正の「真の用件」はその先に有るという事になるのだろう。
「先天的な特殊な能力ですって？」
キセンが反応すると、僧正は我が意を得たりとばかりに笑みを浮かべた
「さようでございます。プロット教授長は『キャンセラ』という存在をご存じですかな？」
「エルデ！」
エイルの声は悲鳴に近かった。悪い予想が的中したのだ。

キャンセラという言葉は、その暗殺者の名と同じ意味を持っていた。

少なくともエイルとエルデにとっては。

# 第五十五話　無意識の暗殺者

エイルはいつの間にかエルデの両肩を掴んでいた。
自分がどんな顔をしているのか……わからなかった。そして何を口にすればいいのか、それすらも。
「落ち着け」
そんなエイルの肩を、エルデはそっと叩いた。
「何やねん、その顔は……男の子がそんな情けない顔したらアカンやろ？」
エルデはそう言ってエイルをなじった。それはいつもの事だ。だがその声には普段のエルデらしからぬ柔らかな響きがあった。
エイルは自分が唇を噛んでいることだけは自覚していた。そしてエルデが、精一杯自分を落ち着けようとしてくれている事も。
怒りに我を失わなかったのは、そのエルデの声があったからに違いなかった。
「落ち着け」
肩を掴んだ手の力を抜こうとしないエイルに、エルデはもう一度そう言った。

「これが落ち着いていられるかよ！早くネスティ達のところへ行かないと。このことを教えないと」
エイルは耳から聞こえる自分の声がずいぶん上ずっているのを感じた。エイルはその声を聞いて初めて、自分が今いったいどういう顔をしているのかを理解した。
間違い無く、泣き出しそうな顔をしているのだろう。ベソをかきそうな顔と言われる、あの顔だ。
だが涙はまだ流れてはいない。なぜなら必死でこらえていたからだ。怒りに我を忘れなかったのは、あるいはそのせいだったのかもしれなかった。

僧正の言葉はエイルの知っている事柄の全てを、有機的につなぎ合わせていた。

近衛軍に於いてサミュエル・ミドオーバの弟子とされ、若くして特別に王女付きの護衛官に抜擢されていた人物。

サミュエル・ミドオーバを師と呼び、尊敬の念を持っている人物。

王女エルネスティーネに自らの命を捧げ、表裏なく献身する人物。

強力なキャンセラ能力を持つ人物。

エルネスティーネのすぐ側に居る人物。

そして、エルネスティーネが何のためらいも疑問も疑いもなく、背中を、首筋を、そして寝顔すら見せる相手……。

それら全ての要件を満たす人物はこのファランドール中探してもたった一人しかいないはずだ。

「オレは嫌だ」

エルネスティーネが傷つけられるのも、ティアナが仲間を傷つけるのを見るのも。

そしてもちろん、そのティアナが間違い無くアプリリアージェの手にかかる事も。

エイルは胸に渦巻く全ての感情をただ一言に凝縮してエルデにぶつけたのだ。

エルデにはそれだけで通じる。いや、何も言わなくても通じているはずだと信じながら。

「あいつらは仲間なんだぞ。冷静になんて、なれる訳がないだろ！」

「あかん、怒りで興奮するな。押さえろ、エイル」

エルデにそう言われて、エイルはいつの間にか体全体が熱病にかかったように熱くなっているのを感じた。だが、本人よりも先にそれに気付いていたエルデは、すかさずエイルの右手の甲を押さえた。

「まだ時間はある。僧正がキセンのとこに来た意味を考えるんや。あいつらはティアナを『使う』為に、何か準備が必要なんや。そし

てそれはキセンの持ってる『何か』やとウチは思う。それが手に入るまで『切り札』は使わへんはずや。いや、使われへんのかもしれへん。そもそもネスティ達の居場所自体、あいつらに特定できてへんのは間違いない。たぶん、ううん、きっと猶予はまだある。ウチらは最善の手を打つ為に、とにかく情報を集めるべきや。ええか？ここは逆転の発想で、これは絶好の機会やと考えるんや。そもそもティアナの事を教えてもろた事には感謝してもええくらいやろ？そやからこれを逃す手はあらへん」

確かにエルデの言う通りだった。

ここで僧正の話を聞かなければ、知らぬ間に全てが終わっている可能性があった。アプリリアージェ達と再会した時、そこには笑顔の出迎えはなく、血に染まった短剣と、かつて仲間だった「もの」が、それも複数転がっているだけだったのかもしれなかった。

そもそも治外法権が存在するという建物に捜索協力の為にやって来たという事は、相手もネスティ達の居場所をまだ知らないという証明なのだ。

「それに怒りにまかせてここであいつを殺しても、意味はない。あの僧正はハイデルーヴェンの駐在役なんやろ？つまりここに、あいつに情報をもたらした人間は別におる。要するに追っ手や。実行部隊はそっちやろな。そやからのこのこやってきた情報源をみすみす潰すような愚かしい事も絶対にしたらあかん」

エルデの言葉を聞きながら、エイルはこみ上げてきた怒りの炎をなんとか押し戻す事に成功した。体の中で最も熱くなっていた右手の甲からも熱が引くのがわかった。

「ついでに、気休めを一つ言うとく」

エルデはエイルが落ち着いてきた事を手の甲の熱で確認すると、そう付け加えた。

「気休め？」

「リリア姉さんの事や」

「え？」
「ウチが観察したところ、リリア姉さんはたぶん、ティアナを全面的には信用してへんと思う」
「まさか？」
エイルはその言葉で怒りが一気に吹き飛んだ。
だが、エルデは真剣な顔で首を横に振った。
「さっき、ウチも言うたやろ？思い当たる節があるって」
確かにエルデの言うとおり、エイルがティアナにたどり着くよりも早く、エルデには答えがわかっていたようだった。
「どういう事だよ？」
「ウーモスで、ティアナにウチが触られた時の事、覚えてるか？」
「ああ」
もうずいぶん以前の事のように思えた。ウーモスを脱出する時にうっかりティアナがエルデに触れたのだ。その時の会話はエイルも覚えていた。
エルデが引き合いに出したのは、サミュエル・ミドオーバというシルフィード王国きってのルーナーが、エルデよりも相当回復に時間がかかったという話だった。
エルデはティアナのその言葉に違和感を覚えて、エイルに確かこう言ったのだ。
『サミュエル・ミドオーバを信用してはいけない』と。

「おそらく、リリア姉さんもウチと同じ事を考えたはずや。さらにジャミールでアプサラス三世崩御の知らせを受けた時、姉さんは状況証拠を構築したと思う」
「状況証拠？」
「アプサラス三世が病死なんかやのうて、実はサミュエル・ミドオーバ大元帥に暗殺されたっちゅう事の、や」
「まさか」
「まさか、とか言えへんはずや。少なくとも今は」

「あ……」
今、そのサミュエル・ミドオーバがエルネスティーネの命を亡き者にしようとしているという話を聞いたばかりだったのだ。
「でも、何の為に？」
「そこまではわからへん。でも、一枚岩に見えたシルフィードに何かが起こってる。いや、もうずっと前から起こってたっちゅうことはわかる。芽はあった。それが密かに育ってた。誰も知らんうちにな。で、や。それに気づき始めたリリア姉さんが、その反逆者の弟子を頭から信用する程うかつな人間やと思うか？」
エイルには返す言葉がなかった。
確かにエルデの言うとおり、アプリリアージェがサミュエル・ミドオーバに疑いを持ってもおかしくはない。
そもそもエルネスティーネを王宮から外へ出したのは誰か？
どこにいるともわからない他のエレメンタルを見つけ、合流し、マーリンの座へ向かう計画は誰が立てたのか？
計画の中心人物ではないかもしれない。だが少なくともエルネスティーネ、いや風のエレメンタルのシルフィード脱出作戦に国家の政治を司る人間として、近衛軍大元帥が荷担していないはずがない。エルネスティーネの出発の日はある程度予定されていたのであろうし、サミュエル・ミドオーバならばそれに合わせた長期の計画を立てるのはきわめてたやすいことではないのか？
こうなると、別の問題も解決する可能性がある。
同じ時期に例の『ザルカバード文書』に記された偽の庵に自軍を派遣させるように進言したのもサミュエル・ミドオーバではないか？進言せずとも、実施案に賛成の態度をとるだけでもいい。それはおそらく実行に移されるに違いない。
だとすれば、ザルカバード文書を「でっち上げた」のはサミュエルだと考えるのが自然であった。
エルネスティーネを強固な城から追い出して、旅先で客死させれば風のエレメンタルでも何でも無い、力を持たない「変わり身」を

操り実権を持つ事ができる。
　混乱時に重要になるのは強力な「力」である。瞬発力のある局地的な戦闘力と言い換えてもいい。当然ながら首謀者はその「力」を準備した上で「事」に取りかかるのは間違い無い。しかし敵対勢力に「力」があるとどうか？　勿論、混乱は長引き、思惑の達成に困難が伴うだろう。そうなると彼が考える事は一つ。目の前に立ちふさがる可能性のある「力」が邪魔になる。制御できる力ならば取り込めばいい。だがそうでない力、そうできない力、その可能性のない力がシルフィードにはあったのだ。すなわち国王直属で、近衛軍とは接点がなくサミュエルでは制御が難しい存在、つまりル＝キリアがエッダにいてもらっては困るのだ。
　邪魔になるから遠ざけるだけでは心もとない。出来れば潰しておくに越した事はないという考えに至るのは、何もサミュエルでなくてもたどり着く当然の答えであろう。
　そしてサミュエルの思惑通り、ル＝キリアはほぼ壊滅した。だが完璧ではなかった。誤算が生じたのだ。ル＝キリアは全滅しなかったのだ。少数だが精鋭が、それも司令官と副司令官が二人とも生き延びて、エルネスティーネの護衛についているのだ。
　サミュエル側とすれば、考える事は一つ。エルネスティーネもろとも、邪魔なル＝キリアの残党を確実に始末する手段である。
　サミュエルはつまり、事が起こった場合、ル＝キリア……いやアプリリアージェならば真っ先に自分に疑いの目を向けるだろうと考えていたのだ。
　万が一そうならなくとも、可能性があるならば、その芽は摘んでおこうと思うのは、当然であろう。

「それにしても」
　エルデは機嫌が悪い時によくやる仕草、すなわち目を細めて僧正を見やりながらつぶやいた。
「新教会がシルフィード……いやサミュエル・ミドオーバ大元帥と

通じてたとは正直言うて驚いた」
エイルもその点に行き着いていた。
僧正は「準備を進めていた」と言った。サミュエルの事を「あの方」とも。
さらに言えば、サミュエルはシグ・ザルカバードがこの世に存在していない事を知っていた事になる。一般にはまったく知られていない事である。蛇の道は蛇という。つまり新教会のごく上層部ならばその手の情報を入手できても不思議ではないだろう。
そうなるとサミュエルは単なる駒や同盟相手ではなく、新教会にとって相当重要な位置を占める存在かもしれないのだ。少なくとも僧正の口ぶりから察するに、サミュエルは敬うべき存在である事は間違い無いのだろう。
アプリリアージェが果たしてそこまで読んでいるのかどうかはエイルにはまだわからなかったが、ヴェリーユでティアナとエルネスティーネを一緒に買い物に行かせた事を考えると、さすがに新教会とサミュエルの結びつきにまではたどり着いていないと考えるべきであろう。
とは言え確かにエルデの言うとおり、アプリリアージェはティアナに対して用心をしている可能性が高かった。

エイルはそこまで考えると、ある事に思い至った。
「そうは思いたくないけど、まさかリリアさんはファルをティアナの監視役にしているのか？」
エルデはしかし小さく首を横に振った。
「ヴェリーユではネスティとティアナを一緒にさせて、護衛はファルに任せた格好やから、可能性はあるな。でも、少なくともファルにそれを含ませてるようには見えへんかったな。ただ、ティアナとファルをできるだけ一緒に居させようとしているのは確かや。それより、今のはええ線を突いてる。アンタらしゅうないけどな」
「オレらしくないっていうのは余計だろ」

「でも、後一歩やったな」
「え？」
「リリア姉さんは、ファルよりもうちょっと確実な網を張ってると思うで」
「確実な網？」
「移動している時の位置関係を思い出してみ？必ず、やないけどティアナの後ろを定位置にしている奴がおるやろ？」
「……リーゼか」
記憶を辿れば、すぐに答えが出た。エルデの言う通り、いつもではないが、テンリーゼンはティアナの後ろを歩く事が多かった。そしてさらに記憶を辿ると、テンリーゼンがティアナより前に行く時は代わりにアプリリアージェが後方に下がっていた事を思い出した。
「リリア姉さん達が合流してたとしても、ティアナの後方にはいつでも動けるように恐ろしい人形さんが待機しているっちゅう事や」
「いや、待てよ」
エイルはエルデの言葉に大きな穴を見つけた。
「それじゃ、事が起こったらティアナはリーゼに……」
それはエイルが望む結末ではなかった。
エルネスティーネだけが助かればいいわけではない。彼の望みはティアナ「も」助かる事だったのだから。そうでなければならない。エイルにとってはティアナも「仲間」なのだ。
エルデはさらに抗議しようとしたエイルの口に、すらりと形の良い人差し指をあてた。
「そこや。たぶん向こうもそれに気付いたんやろ。つまり、ティアナとリリア姉さんは一緒におる」
「ああ、そうだな」
「そやからこそ、確実にティアナを『使える』ようにしたいんちゃうか？つまり」
「さっきお前が言った通りで、オレ達にはまだ時間はあるって事だな」

エイルの言葉にエルデは大きくうなずいた。
「聞いて、それから考える。今ウチらに出来る事をやらなアカン」
エイルはその通りだと思った。
いや、言い聞かせた。何しろ体はまだ、じっとしている事に焦っているのだ。動悸が完全には収まらない。
こんなことはファランドールに来て初めての事だった。

「キャンセラ？」
キセンは僧正の言葉に少しだけ記憶を漁る様子を見せた。先の千日戦争で、ある特殊な能力を有する者が無理矢理狩り出されたあげく、全員が戦火の中で散り、既にこの世には存在しなくなったという話は知識としては知っていたのだ。
だが、もちろん例外はいくらでもある。ティアナ・ミュンヒハウゼンがその例である。
絶滅したと言われるピクシィですら、エイルやエルデの様に実際にまだ存在しているのだから。

「ああ、あれね。ルーナーの天敵。確かルーンがまったく通じない、触れられるとルーンが使えなくなるっていう……」
「ええ。そのキャンセラです」
「なるほどなるほど。確かキャンセラが触れると、かかったルーンも全部剥がれてしまうのよね」
「その『なるほど』です。例え目標がどんなに強固なルーンで体が守られていようが、彼女が触れるだけで全てが無効になる。どうです？これほど確実な『暗殺者』はいないでしょう？」
「ミドオーバ大元帥はキャンセラを密かに育てていたって事？その為だけに？」
「その通り。例え風のエレメンタルの周りにルーナーが居ようと、風のエレメンタル自身にコンサーラによる強化ルーンが施されていようと、キャンセラが触れれば全て無効となります。そして本人に

は相当の武芸・剣技を習得させておく。これすなわち、確実に使命を全うする事ができる力を持つ暗器という事です」

キセンは僧正の説明をそこまで聞くと、腕組みをして首をかしげた。

「あなたの言うそのキャンセラが完璧な暗殺者だとすると、私にいったい何の用なの？」

ようやく本題、いや僧正が訪れた確信部分にキセンが触れた瞬間であった。

キセンは僧正の訪問の真の目的を理解した。平たく言えば本物のイエナ三世の暗殺に手を貸せという事である。

だが、手を貸せとはどういう事なのか？

僧正が完璧な作品だと称える暗殺者は既に「的」の側にあり、準備が整った状態であるという。ならば僧正はいったいキセンに何を求めてきたというのだろうか？

キセンならずともエイルやエルデの疑問はそこに集約されていた。

「かかる『大事』はより完全な状況下において成したいとおっしゃるのものですから」

「いったい誰が『おっしゃった』の？」

「むろん副堂頭猊下です」

「猊下、ねえ……」

キセンのエーテル体は僧正の使った言葉を反芻するようにつぶやくと、視線を一瞬だけ「魔法の鏡」に注いだ。エルデに合図をおくったのか、無意識のうちにエルデの様子を見ようとしたのか、そこまではわからない。

僧正はキセンのその態度には気付かない様子で、協力要請の為に訪れた理由を説明し始めた。

「ヴェリーユに於いて副堂頭さまが風のエレメンタルを取り逃がした話はしましたな？」

「捕まえるつもりだったという話は聞いたわ」

「その時に、付き人に厄介な人間がいる事がわかりまして」
厄介な人間とは高位の風のフェアリーだと、僧正は言った。まさにエルデの予想通りである。ただ、ヴェリーユで副堂頭カテナ・ノルドルンドが出会った風のフェアリーとはアプリリアージェ・ユグセルではなく、ファルケンハイン・レインであったのだが、そこまでの詳細をもちろんエイル達は知るよしもなかった。
「教授長もご存じの通り、フェアリーの能力はキャンセラで相殺できません。そこで……」
僧正がそこまで話すと、キセンはめんどくさそうに手を振った。
「なるほどね。全部わかったわ。つまりアレが欲しいって言うのね」
「そうです。『アレ』さえあればこの計画は完璧となりましょう。風のフェアリーだけでなく、坑道を巨大な岩盤で塞ぐ程の力を持つ高位ルーナーか、もしくは地のフェアリーまでいるようですから」
そう言ってニヤリと笑う僧正に、キセンはしかし腕組みをしたままで険しい顔を向けていた。
「でも、仮にも一国の王の暗殺に手を貸すっていうのはさすがに寝覚めが良くないわ。大体この間のことも私は報告を一切……」
「いえいえ、教授長が気に病む事はございません」
キセンに皆まで言わせず、僧正は笑みを崩さないままでそう言葉をかぶせた。
「いつもの通り使用理由は聞かなかった事でよろしいでしょう？私も今回は少ししゃべりすぎました。ここでの話は一切ご内密にしていただかないと色々と面倒になります。どちらにしろ使用目的とその背景をお伝えしないとあなたは何もお譲り下さらないのですから、ここはいつもの通りのお取引と言う事でひとつ」
キセンは僧正の言葉に対してあからさまに機嫌の悪さを表した。
「『アレ』は今、在庫がほとんどないのよね。時間と手間がかかって次にまた作るのも大変だし、前回と同じ額って訳にはいかないわよ」
話は既に値段の交渉に移っていた。

「『アレ』って……」
エイルがそういうと、エルデがすかさず再び人差し指をエルデの唇にあてた。
「こっちから聞きたいんやけど、アンタはウチが『アレ』だけでわかると真面目に思てるんか？」
「……思ってる」
「んなわけないやろっ」
「オレはそれくらいお前がすごいヤツだって思ってるという事がいいたかったんだ」
「え？」
「マジでそう思ってるぞ」
「そ、そんな事言われたら……ア、アレやな」
「なんだよ？」
「何でもないっ」
「感心してほめたんだから、素直に喜べばいいじゃないか」
「アンタに褒められても別に嬉しゅうも何ともないわ」
「ああそうですか」
「ああ、そうですよ。ウチがわかってるのは青緑女が、なかなかの商売人やっちゅう事や」
「ああ、それは言えてるな」
確かにそうだと、エイルは思った。国王暗殺に関われと言われたのだ。対価はいかほどのものかエイルには見当もつかなかった。だがそれ以前にエルネスティーネの命の値段のやりとりをしているようで、嫌悪感が先に立っていた。

「私からこういう事を申し上げるのは気が引けるのですが、今回は副堂頭様とのお近づきのしるし、という事でそれなりに勉強をしていただけると、新教会側としてもプロット教授長へのこれからの覚えも一層めでたくなるのではないかと」

「あら……」
僧正はしかしキセンの言いなりにはならない様子だった。
「副堂頭に点数稼ぎをしたいのはあなたでしょ？いつまでもハイデルーヴェンの新教会駐在所、じゃなくてハイデルーヴェン新教会府の府長さまでは面白くないのではなくて？」
「いえいえ、何をおっしゃいますやら」
「元賢者《淡黄の扇（たんこうのおうぎ）》たる実力者が、こんなところでシルフィードの要人の相手に揉み手ばかりしてるなんて、賢者会のお歴々が知ったらさぞやお嘆きになるでしょうねえ」
キセンはそんな僧正に、名前らしきもので初めて呼びかけた。
だがそれは普通の名前ではなかった。ある法則に則った、エイルもよく知る特殊な立場の人物達に与えられる名前に類似するものだ。

「プロット教授長」
名を呼ばれた僧正は、険しい表情で抗議をした。
「その名は口にせぬようにとお願いしておりましたのに」
「あらあら、私とした事がごめんなさい。ええっと、府長さまは何という名前でしたっけ？」
「ランディでございます」
「そうそう。ランディ・アルオマーン府長だったわね。覚えておくわ」
「よく言います。毎回同じ会話を交わしておりますぞ。まったく教授長は人が悪いというか、お戯れが過ぎますな。副堂頭との会見の場ではお控えくださいませ。あの方はそういう態度を特にお嫌いになるようですからな」
「面白みの無い人間ね。ランディ、あなた知ってる？人の上に立つ人物は星の数程いるけど、尊敬と憧憬という言葉と共に歴史に名を残す指導者っていうのは砕けた話が好きな人物ばかりよ。これは歴史が証明しているわ」
「はあ。さようですかな？」

「ま、そんな事はどうでもいいわ。それはそれとして、これははっきりさせておくけど、私はあなた達の陣営に荷担している訳じゃないのよ。私のお買い得価格が気に入らないというのなら、他に売る宛てはいくらでもあるわ。何なら販路をさらに拡大してもいいくらいよ」

「エルデ」

「わかってる」

エイルはエルデの顔は見ずに声をかけた。エイルに代わって今度はエルデの感情が高ぶっているのは気配でわかっていた。もちろん、キセンが僧正の「名」を告げた時からである。その感情の高ぶりが収まらない様子に、注意を喚起する為に声をかけた格好だった。

「やっぱり、そうなのか？」

新教会どころではない。正教会の人間であれば……いや「あった」のならば、《真赭の頤（まそほのおとがい）》の処刑、いや死を知っていてしかるべきである。サミュエルはだからこそ、安心してシグ・ザルカバードという既にこの世に存在しない人物の名を騙った文書を出す事に成功したのだ。正教会と関係がある他国で怪しまれようとも問題はないのだ。シルフィードで「偽物」だと断定されなければ目的は達するのだから。なぜなら「ザルカバード文書」とは、ル＝キリアをおびき出せればそれでいいからだ。

「《淡黄の扇（たんこうのおうぎ）》……三席の賢者や。強力なエクセラーで、確か炎を使う範囲攻撃が得意やったな……」

「ここは『正教会の賢者が、新教会の僧正を名乗るのはなぜだ？』って聞いてもいいのか？」

「聞いてもええけど、ウチに答えられると思たら大間違いやで。ウチも大混乱中や」

「だよな」

「でも、一つだけわかった事がある」

会話の途中でエルデの感情の揺らぎが徐々に収まるのをエイルは

感じていた。理性が強く働き出したのだろう。
「青緑女史は、わざと相手の賢者の名前を口にしたんやな」
そう言われてエイルも思い当たった。
確か、相手の僧正の名を口にするのを止められているようなやりとりがあった。そんな重要な事を忘れているなんて、妙に白々しい言い訳だと思ったが、それは相手に対する嫌みではなく、エイル達に相手が僧正でありながら、その正体が賢者であることを知らせていたという事なのであろう。少し前にチラリと「魔法の鏡」に視線を向けたのも、その前振りのようなものだったのかもしれない。
「青緑はウチら……いや、ウチの正体を推理して、アレでカマでもかけたつもりなんやろな。あるいは、単純に相手の名前を知らせてくれた親切な人なんかもしらんけど……。アンタはどっちやと思う？」
「親切心……だと思いたい。オレがフォウの人間だから、かもしれない」
「そやな。かもしれん。でも、違うかもしれん。まあ、今のところはこっちに敵意はないと思っとこ」
「うん」

「では、いかほどなら？」
「そうねえ……」
値段交渉はどうやらキセンの勝ちのようであった。
そもそも話の流れから察してもこの取引は完全な売り手市場といっていい雰囲気である。それなりの理由がない限り、キセン側に値下げをする理由は見つからないと言っていいだろう。
「前回の五割増し。嫌なら帰っていただいて結構。出口はいつもの通りよ」
元値がいくらなのかエイル達には知るよしもない。五割増しが高いのか安いのかも判断はつきかねた。そもそも「アレ」とは何なのかがわからないのだ。ただ、ランディという現名のハイデルーヴェ

ンの新教会府の府長は恭しく礼をすると、二つ返事でそれを受け入れたのである。

その様子をみたキセンの表情が一瞬「しまった」という風に変化したのをエイルは見逃さなかった。

もちろん、エルデも。

「そうとうな『ごうつく』やな」

「かもしれないな」

「その割には本人、別にガラクタのような宝石で着飾るでもなし、ゴミのような飾りの付いた瀟洒な服を身につけているわけでもなし……」

エルデはそう言うと、エーテル体を操作中でうつむいたまま動かないキセンの本体を眺めた。

「カネを集めるのが趣味なんか、根っからの研究者なんか……」

「あの人はたぶん、根っからの研究者だよ」

エルデの独り言にエイルが反応した。

「少なくとも、フォウではそういう人だった。そう言われていたしオレもそう思ってた」

「ふーん……」

「じゃあ、明日の朝にまた来て頂戴。用意しておくわ」

値段交渉がまとまったところで、キセンがそう告げた。

「明朝ですか？」

「アレは仕上げに時間がかかるのよ。嫌なら私は別に」

「わ、わかりました。では明朝に参ります」

「七時には仕上げるから、いつもの通り現金と引き替えでお願いね」

「承りました。受け取りは私自身が参ります」

「そうして頂戴」

ハイデルーヴェン新教会府府長ランディ・アルオマーン。またの

名を《淡黄の扇》と名乗る僧正が来客室を出ると、部屋の中に残ったエーテル体は動きを停止した。そしてその停止状態のまま存在が薄くなり、やがて消えていった。それは「時のゆりかご」でシグ・ザルカバードが消えていく様と酷似していた。

ややあって本体である青緑の髪と瞳を持つキセン・プロットが顔を上げた。

「ふー」

辺りをはばからず大きなため息を一つつくと、その青緑の髪を翻して、部屋の主はエイル達を見つめた。

「どうだった？」

エーテル体の制御から離れたキセンが最初に口にした言葉はエルデに対する質問だった。それも、かなり漠然としたものだ。

自分でも答えにくい質問だという事はわかっていたのだろう。エルデがまだ何も答えないうちにキセンは質問の内容を変えた。それはおそらくはじめから用意されていた質問であった。つまり、本当の問いである。

「あなたはひょっとして、あの男の事を知っているんじゃないの？」

今度の質問はかなり具体的かつ、回答者にとっては究極とも言えるものだった。具体的な質問とは「はい」か「いいえ」で答えられるものを指す。キセンの質問はある意味でエルデに「はい」か「いいえ」という簡単でありながら決定的な情報を引き出す可能性もある、究極の質問だと言えた。

エイルは一つの言葉、いやファランドールに流布する通説を思い出していた。それは「賢者は嘘をつかない」いや、「嘘をつけない」というものだ。

要するにキセンは、エルデが賢者であるか、少なくとも賢者と何らかのつながりを持っている人物だと推理していたという事である。

つまりエイル達の予想は当たっていたのだ。ごく短時間の面接時

間しかなかったにもかかわらず、キセンはそこまで推理していたのである。

「面識はない」

少しだけ間を置くとエルデはそう答えた。

答えは「はい」でも「いいえ」でもなかったが、キセンは満足そうな笑顔を浮かべた。賢者が嘘をつかない風聞が事実だと確信したのであろう。それはすなわちエルデが賢者だと確信したという意味でもある。

「でも、知っている？」

「名前は知ってる。遭うた事はない。つまり知り合いやない」

「なるほど」

言葉を選ぶようにゆっくりと答えるエルデを無遠慮に観察しながら、キセンはそれでも満足そうにうなずいた。

「基本的に俗世、ここでは現世（うつしよ）って言うんだっけ？、つまり一般の社会と隔絶して暮らすなら、あなたのその目立ちすぎる容姿でも問題はほとんどないという事ね。だって、いくら情報伝達網が原始的なファランドールとは言え、あなたみたいに目立つ姿の人間がいる、なんていう情報がこの街に伝わってこないなんてことはないわ」

キセンの質問とも独り言ともとれる言葉に、エルデは答えなかった。

「そんな事より」

そう。

エイル達にはキセンに尋ねなければならない事がいくつかあった。それも急いで。

「さっきのは見過ごされへんというか聞き捨てならへんというか、そんな会見やったな。とりあえずこっちの質問にいくつか答えてもらいたい。そもそもあの賢者崩れが欲しがってた『アレ』って何や？」

まず知りたい事、いや知っておかねばならない事がそれだった。

フェアリーの能力を封じるもの、もしくはそれに近いものであろうというところまでは、話の流れから二人にも想像ができていた。
「うーん」
キセンはその質問を待っていたようにわざとらしく困った顔を作ると、腕組みをして首をかしげて見せた。
「あなたが何者かがわからないとちょっと答えられない代物なのよ」
「何でや？」
「じゃあ、もう少し詳しく言うと、正教会側の陣営に立つ人間には言えないものなのよ。まあもっとも……」
キセンはそこで言ったん言葉を句切ると、エルデに近づき、向き合った。二人の間の距離は短く、お辞儀をすると相手の頭に当たる程であった。
エルデはしかし、キセンがそこまで近づいても、微動だにしなかった。
「正教会の関係者でも正教会側の陣営に属さない人間はいくらでもいるようだけど、ね」
そう言うとキセンは無遠慮にエルデの髪を一束、そっとつまんだ。
「やっぱりルーンや薬液で染めた訳じゃないのね。どう見ても本物の黒髪と瞳ね」
髪を触られる事を拒否はしなかったが、エルデは不快な表情を隠さなかった。しかし間近でそのエルデの不機嫌な顔を見ても、キセンは特に動じた様子はない。
「長い睫毛ね。それに化粧もしていないようなのに見栄えのするこの肌の色と艶。このきめの細かさはピクシィならではと言ったところね。デュナンだといくら若くてもなかなかこんな肌をした女の子はいないわ。そしてそもそもこの美貌……。あなたを見たらほとんどの女はきっと自分の容姿に劣等感を持っちゃうわね」
「……」
「綺麗ね。とても綺麗。だけどあこがれる美しさじゃない。あなたの顔は怖いわ。そしてあなたの顔は綺麗過ぎて、なんだかこの世の

ものとは思えない感じがする……」
　無言だったエルデは、最後のその言葉には反応した。だが、恫喝でも怒鳴り声でもなく、低いつぶやきであった。
「おおきに。最高の褒め言葉や」
　キセンは小さく肩をすくめた。予想していた反応ではなかったのだろう。だが、エルデの顔を間近で観察する事は止めなかった。
「種族は違うけれど、同じような美貌を持っている女性を私はもう一人知ってるわ」
「《深紅の綺羅(しんこうのきら)》か？」
　キセンはそう答えたエルデにうなずいてみせた。ためらう事すらしなかった。
「でも《深紅の綺羅》はあなたとは真逆。あの人は実に慈愛に満ちた、柔らかい美しさに溢れていたわ。あなたが氷だとすると、彼女はまるでその氷さえ溶かす春の日だまりのようだった」
《深紅の綺羅》という名前が再びキセンの口から出た。エルデは眉を大きくひそめた。
「『だった』って？」
　キセンの言葉尻を捉え、そう尋ねたのはエルデではなくエイルだった。
　エルデもエイルと同様に、その言葉に反応したに違いない。だが、たまらず声に出したのはエイルだった。
　同じ事を思いながらも口に出さなかったエルデと思わず口を突いたエイルの違い。ここではそれは性格の差ではなく持っている余裕の差で生じた結果であった。それだけエイルは焦っていたと言えるだろう。ここであまり時間を食いたくなかったのだ。やるべき事、いや知るべき事をさっさと処理して、一刻も早くエルネスティーネ達と合流したかった。その焦りが考慮を浅くし、反射的に言葉がでてしまった。焦るがあまり、かえって話を脱線させる可能性もあった。だが三聖が絡む話である。すでに三聖の一人《蒼穹の台》と出会い、ある種の関係を持ったエイルにとって他の三聖の情報を聞か

ずにはいられなかった。
キセンが「アレ」とやらを《淡黄の扇》に手渡すまでにはまだ半日程度の余裕があった。それまでは相手が動かないと言う事である。その間に合流してこの街を脱出すれば、当面の危機は回避できる。
思わず口にしてしまった行動に対して、エイルはその考えを当てはめて正当化した。
だが、エルデの考えはエイルとは少し違っていたようだった。
「その話は後にしよ」
キセンが答える前に、エルデはエイルに対してそう言ったのだ。
しかしキセンはエイルの質問に対する返答らしきものを口にした。
「君、妙なところに過剰反応するのね。過去形なのが気になる？単純な時系列。以前見た時の話だと、私が答えたら終わりでしょ？それとも、君たちは《深紅の綺羅》についての何かを知っているとでも？」
エルデは首を横に振った。
「《深紅の綺羅》の話はもうええ。それより」
「そう。それより、あなたたち、いえあなたがいったい何者かを正直に教えて頂戴。実は私は腹の探り合いってやつが大嫌いなの」
「奇遇やな。ウチもや」
エイルは「うそ付け」という言葉が反射的に口をつきそうになったが、何とかこらえる事に成功した。
「あなたは嘘はつかない。それはもう確認済み。だから私はあなたが答えた事を信じるわ。それでどう？」
「どうって、どういう意味や？」
「あなたの答えで私のあなた達に対する態度が決まる。そう言う意味よ」
それだけ言うとキセンはエルデから離れ、そして今度はエイルの側に立った。
「これを見てくれる？」
そう言ってキセンが白衣の下にある服の隠しから取り出したもの

は、何の変哲もない平らな白い石だった。
「もちろん、ただの石じゃないわよ。これには特殊な仕掛けがしてあって、こうすると……」
キセンはそう言いながらその石をかざした。当然ながらエイルは後ずさる。
「大丈夫。危害は与えないわ」
そういうキセンの目を見たエイルは、覚悟を決めてじっとする事にした。
キセンは手に持った白い石をエイルの髪にそっと当てた。
それを見たエルデの目が大きく見開かれた。エイル自身には何が起こっているのかは一切わからなかったのだが……。
「はい、どうぞ」
キセンはそう言ってエイルにある方向を指さした。その先に目をやると、そこには大きな姿見があり、エイルは期せずしてそこに自分の姿を見つける事になった。
「え？」
エイルは自分の姿を見て思わず声を上げた。
黒髪と黒い瞳に戻っていたのだ。
ハイデルーヴェンに着く前にエルデのルーンが施され、茶色の髪と瞳のデュナン風の姿になっていたはずである。つい今し方も同じその姿見で、髪と瞳が茶色であることを確認したところだった。
「簡単なルーンなら、これで解除できるのよ。今は直接石を触れたけど、これはしばらく握っておくとその掌を触れるだけで弱いルーンなら解除できるの。直接色をいじるルーンはもちろん、染料を作るときにルーンを使ってあれば、それも消せる。もっともこれは効果はかなり弱いやつだけどね。まあ、商売する時の商品説明用の見本ってところね」
キセンはそう言うと、あっけにとられているエイルに目配せをして見せた。ついさっきエルデの髪をそうやって触って確かめたのであろう。本当に黒髪かどうかを。いや、黒髪が本物である事を確認

したに過ぎないのかも知れない。それはキセンを科学者たらしめているといえた。

キセンは改めてエルデに向き合った。

「さ、私はここまで手の内を見せたわ。あなたの正体を教えて。言っておくけど『正教会陣営ならどうするつもりか』なんていう、質問に質問で返すようなまねは無しよ」

キセンが見せた石と似たものをエイル達は既に知っていた。ジャミールで擬似的な「エア」を作った精霊石と呼ばれる石がそれである。

ラシフ・ジャミールが「精霊石」で作りだす「精霊波」のない空間は相当に広く、直接キセンの石とでは効力がかなり違うようだが、その機能は酷似していた。

エイルの記憶が正しければラシフは「精霊石」を《深紅の綺羅》からもらったと言っていた。そして奇しくもキセンはその《深紅の綺羅》の名を口にした後で「石」を取り出して使って見せたのだ。関連があると思う方が素直であろう。

さらに言えば、キセンと僧正《淡黄の扇》がやりとりしていた「アレ」とは、おそらくその石の効力を高めたものであろうと推測ができた。

キャンセラの力はあくまでもルーンにしか効果がない。しかし精霊石と同じ機能を持つものであれば、それはフェアリーの能力をも剥ぎ取る力がある。

空間を切り取るかのような圧倒的な移動速度を誇るテンリーゼンの風の力も封じる事が出来るのである。例え風の精霊の力がなくとも、もともとアルヴィンやダーク・アルヴはそれ相当のすばしっこさを誇る種族とは言え、すぐ側にいるエルネスティーネの首を掻くティアナを瞬時に止める事は限りなく困難になるだろう。

「ウチの名はエルデ・ヴァイス。想像通り正教会に属する者や。た

だし……」
　エルデはそこでいったん言葉を区切ると、右手を正面に突き出した。丁度目の前にいるキセンに拳を突きつけるような格好だった。そしてそれはエルデがある事を行う時の姿でもあった。
　そう。エルデが手を突き出した空間には、一瞬後に儀仗が出現した。三色の木を撚り合わせて作った儀仗「ノルン」が、術者エルデの右手で水平に握られていたのである。
「正教会に属してはいる、言うたけど、ウチは、いやウチらは二人とも『正教会陣営』やない。それから、これは重要な事やから先に言うとくけど、ウチらは《淡黄の扇》が追ってる連中の仲間や。あくまでも陣営は関係ない。人間と人間の繋がりの意味での仲間や」
「え？」
　エルデの言葉、特に最後の言葉にキセンは驚いたようだった。
「ちょ、ちょっと待って。あなたたちはシルフィード王国の人間……だったの？」
　だが、もちろんエルデは首を横に振った。
「それはちゃう。言うたやろ？陣営は違うんや。というかウチとエイルは陣営とか関係ない。あの連中とは旅の途中で偶然知り合って、まあ色々あって今は旅の連れになってるだけや。そやから……」
　エルデは儀仗を垂直に持ち変えると、その尻で床をドンと突いた。
「陣営とか関係なしや。仲間を守る為なら、相手が誰であろうと何でもやったる」
「ちょ、ちょっと待って。あれあれ？私、何かどっかで間違った？ええっと……」
　キセンは頭を抱えだした。確実だと思っていた推論が、最後の最後でどんでん返しにあった……そんな慌てぶりだった。
「何を間違ったか知らんけど、まだウチらはアンタ……教授長の敵やない。そやけど仲間を助ける為にこの建物を破壊するのが合理的かつ効果的やと思たら、迷わず実行する用意はあるで」
「ちょっと待ってって。何？あなたは正教会の賢者で、本流とは外

れて何かを企んでる一派で、私に会うためにペンドルトン君をダシにして、さらにはどこかで拾ったこのフォウの男の子をエサに、私と何か取引をしに来た訳じゃないの？」

「はあ？」

エルデの眉間に縦皺が走った。もちろん顔は最上級の不機嫌仕様になっていた。

「そうじゃなければ、正教会を離脱して新教会の僧正になっている連中を始末しに来た刺客で、私からその情報を仕入れようとしてた……んじゃないってこと？」

キセンの慌て振りにエルデの厳しい顔が今度は歪んだ。

「なあ？」

エルデはエイルに呼びかけた。

「アンタの話やとこの人、フォウではものすごーく頭のええ人とちゃうん？」

「いや」

エイルもキセンの推理には呆れていたが、ある意味で無理からぬ事でもあると思ってもいたから、まだ真顔であった。

「オレも学会とかそういうのはよくはわからないけど、この人はたぶんフォウでも一番上に位置する頭脳の持ち主……のはずだ。少なくともそういう評判だった」

エルデは肩をすくめると、改めてキセンに顔を向けた。

「ウチらは正教会とか新教会とか、どうでもええんや。そもそもエイルには信心のかけらもないしな。それどころか宗教を毛嫌いしとるくらいや。さらに言うと、二人ともその、さっき言うてたシルフィードの思惑とか内紛とかにも一切関係してへん。かと言うてドライアドでもないし、当然ながらウンディーネのどの勢力にも恩義はない。ウチらが恩を感じてるんは、ウチらの仲間だけや」

キセンはしばらく頭をかいていたが、すぐに推論を再構築したようで、ものの一、二分で落ち着きを取り戻した。

「あなたたちの言う事を全部信じるのはいいとして、でもそれはち

ょっと違うんじゃないの？」
「違う？」
「どこの陣営にも属してないとは言えないでしょう？本物のイエナ三世の仲間だって言うんなら、少なくとも新教会陣営の敵であることは間違い無いわ。あなた達が無所属だと叫ぼうと、周りや相手はそうは見ないでしょうね。要するに陣営がどこかなんていう本人の意思はこの際問題じゃないわ。相手がそう見なしたら、そうなるっていう事よ」
「そういうキセン・プロット教授長はどうやねん？話を聞いてると全方位外交を決め込んでるようやけど……戦争が始まったら、そうも言うてられへんようになるのは火を見るよりも明らかやろ？」
「ああ、それ？」
キセンはエルデの指摘を受けると不敵に笑って見せた。
「私は大丈夫よ」
「なんでそう言い切れるんや？」
「だって私は《深紅の綺羅》の力を持っているんだもの」

キセンがまたもや口にした『三聖』の名に、さすがに今度はエルデも反応した。
「さっきから思わせぶりにその名を口にしてるけど、『三聖』の一人がフォウの人間と組んでるとでも言うんか？言うとくけどウチは《深紅の綺羅》の名前ごとき出されてもビビったりするようなタマやないで」
「あなた、本当に面白いわね」
キセンはそう言うと自分の机に戻った。そして引き出しからぼんやりとした緑色の光を放つ物体を取り出して、それをそっと机の上に置いた。
それは赤ん坊の頭ほどもある、極めて大ぶりなスフィアだった。緑色の光は外側ではなく中心が光っているようで、まるでスフィアの中心にルナタイトかセレナタイトを埋め込んであるような光り方

をしていた。
「ねえ、瞳髪黒色ちゃん？」
「なんや？」
「私がその《深紅の綺羅》に会わせてあげる、って言ったらどうする？」
「なんやて？」
エルデはエイルと思わず顔を見合わせたが、すぐにキセンのいる方に視線を戻し、机の上に置かれた薄緑色に発光するスフィアに目をやった。
「あなたの賢者の名を教えて頂戴。教えてくれたら《深紅の綺羅》に会わせてあげるわ」
「ウチは賢者やとは一言も言うてないやろ」
「あら？今更しらを切るつもり？さっきも言ったけどそういうのは止めましょう。賢者でもない人間が《淡黄の扇》なんていう小物の賢者の名前を知っている訳がないでしょ？ああ、ダメよ。名簿を見たから知っている、なんて見え透いた言い訳をしても無駄よ。正教会の相当上の人間でも賢者の名前を全部知っている人は居ないってことくらい、私は知ってるのよ」
「……」
「その緑色に光ってるスフィアは何です？」
エルデに変わって、エイルがキセンに質問を投げかけた。エルデに少しでも考えをまとめる時間を与える為にとったエイルの苦肉の策だったが、そういう目的がなくとも、そのスフィアに興味があるのは確かだった。
「あなたにわかる様に言うと『ウソ発見機』ね。もちろん私がこっちの世界で作ったものよ」
「はあ？」
またしてもエルデはそう反応したが、エイルは「フォウには本当にあるんだ」と、キセンに代わって答えた。もちろん、キセンに説明させるとかえってややこしい話になると考えたからである。

「彼の言うとおりよ。違いは妙なセンサと怪しいアルゴリズムを使ったフォウの機械より、エーテル制御で直接感情を反応させるこっちの方がよほど高性能だと言う事ね。これも結構高く売れるのよね」
「せんさ？あるごりずむ？」
「いや、用語の説明は、今は無しの方向で頼む」
未知の単語に反応するエルデを、エイルはそう言って制した。
「後でまとめて説明してやるから」
「ふん」
キセンは大切なものを扱うように緑色に光るスフィアを優しくなで回した。キセンがそうやっている間、緑色の光は息をしているかのように光量を規則正しく明滅させていた。
「で、その『ウソ発見器』とやらで、いったい何をするつもりなんです？」
「この子が賢者の名前を言う時に使ってもらうのよ。もちろんその名前がウソか本当かを知る為にね」
「でもさっきはエルデの言う事は全部信じるって言ってたじゃないですか？」
「言ったわよ。だからこれはいわば保険よ、保険」
「先生、それは詭弁というヤツでは？……でも、それってつまり……」
エイルはちらりとエルデを見やった。エルデは無表情のままでスフィアを見つめていた。
「その通り。だいたい賢者の名前って三聖を除いて百五もあるそうじゃない？でも残念ながら私が知っているのはせいぜいその半分よ。だから知らない名前を言われてもそれが本当かどうか判断できない。つまりそう言う事よ。信じる事を前提にしているわ。詭弁じゃないでしょ？保険なの」
キセンの言葉が終わると、エルデは机に歩み寄り、そのスフィアの上に手を置いた。
「エルデ」

思わず声をかけたエイルを一瞥すると、すぐにエルデはキセンに向きなおった。
「これでええんか？」
キセンは満足そうに頷いた。
「くどいようやけど、本当に《深紅の綺羅》に会えるんやろうな？」
「女に二言はないわ」
「よう言うた」
エルデがそう言った直後だった。
鈍い音がキセン・プロット教授長の部屋に響いた。音の出所はごく近く。キセンの机の上であった。
「え？」
確実に目撃したにもかかわらず、目の前で起こった事が理解出来ない、という風にキセンはそう声を上げた。
キセンの机の上……そこには無数の水晶の欠片が散らばっていた。そして机を挟んだキセンの反対側には、掌から血を流しながらも無表情に佇む美しい瞳髪黒色の少女が立っていた。
そしてキセンは、「それ」が今までそこにいた恐ろしい程美しい「だけ」の少女でないことを一瞬で理解した。

「ファダーリュ・ユーヴ」
ルーンの理（ことわり）を無視し、前文も詠唱文も唱えず、ゆっくりと認証文だけを唱える黒髪の少女。その少女の額に真っ赤な眼が出現していたのだ。
スフィアを……その華奢な手で確かに握りつぶしたエルデ・ヴァイスと名乗る少女。その少女が付き出した掌に確かについていた無数の切り傷。それがルーンの詠唱文が終わると同時に消え去ったのだ。掌の傷が幻ではない証拠に、机の上には今までなかった数滴の赤い染みが存在していた。
エルデはさらに続けて短いルーンを唱えた。すると今度はその血の滴が蒸発するように消え去った。

一連の出来事を黙ってみていたキセンは、のどを鳴らして唾を飲み込んだ。部屋にいたエイルの耳に届くほど大きな音をたてて。
「青緑の髪の分際で、ウチを試そうとか、三千年早いわ」
三つ眼だった。
キセンを睨み据えるエルデは、額に第三の目を出現させていたのだ。
「二度とウチを試そうとかするな。こんなもん無うてもウチはウソは言わへん」
そう言うとエルデは突き出した手、つまりスフィアを粉々に握りつぶした手を、ようやく引っ込めた。
キセンは目を見開いたままゆっくりと頷いた。それは本体が初めて見せる恐怖の表情だった。
「一度しか言わへん。そして絶対に他言したらあかん。この誓いを守れるか？」
続けて投げたエルデの質問にも、キセンは瞬きもせずただ頷くだけだった。
エイルは満足そうにうなずいた。
「《白き翼》」
「しろき……つばさ？」
「……それがウチの名や」

エルデ自身が他人には決して告げてはならないと言っていたその名を、エルデはあっさりと口にした。
エイルはその名を聞いた時のキセンの表情の変化を見逃さなかった。大きく見開かれていた目が、さらに大きく見開いた様に見えたのだ。しかもその目の奥で何かの火が点ったように光ったのをエイルは感じていた。
つまりそれは、その名に心当たりがあるという風にとれた。少なくともまったく未知の名前というわけではなさそうだった。
だがそれ以上の表情は読めなくなった。即座にキセンが眼を閉じ

たのだ。

「……いいでしょう。その名前が本当の名前だと信じるわ」

キセンは眼を開けるとそう言ってきびすを返した。

「案内するわ。《深紅の綺羅》がいるところへ」

キセンはそう言うと、何かを思いついたかのように動きを止めた。

「先に言っておくけど、『私じゃない』わよ」

背を向けたままそう言うと、キセンは書架の一部を押して隠し扉を開いた。

もちろんエイルとエルデはキセンが告げた言葉に反応して互いに見やった。だが、そんな二人をキセンは急かし、奥を指した。

「どうぞ。ただし、ここから先で見たものは他言無用よ。あなたの名前を口にしない事に対する私からの交換条件」

「ちょっ……」

エイルは声をかけようとした。「ちょっと待って下さい」そう言いかけたのだ。

キセンは気になる事を口にした。「私じゃない」そして「この先で見たものは口外無用」

それはいったいどういう意味なのだと尋ねたかったのだ。

見ればわかる。それは確かで当たり前の事だった。見ればいいのだ。それが一番話が早い。

しかし、エイルは直感していた。

この先にあるものを見てはいけない、と。いや、エルデに見せてはいけないと。

扉が開けられた瞬間、エイルは全身が総毛立っていた。こんな事は珍しい。そもそもキセンの言葉が怪しすぎた。

この人物とこれ以上関わってはいけない。エイルはそう感じていたのである。

だが、エイルの言葉は途中で止まった。エルデがエイルの手を強く引いたのだ。

「ここまで来たら、行くとこまで行こ」
エルデがそう耳打ちをした。
「悪い予感がする。でも、イザとなったら……」
エイルはエルデに手を引かれた事で鳥肌が収まっていた。同時に覚悟をきめた。
そして今度は自分がエルデの言葉を遮った。
「イザとなったら、オレが守る」
エルデはエイルの言葉を受けて優しい微笑を浮かべた。
「行こか」
「行こう」
キセンが誘う薄暗い隠し部屋への入り口に、二人は同時に足を踏み入れた。

# 第五十六話　ロマン・トーン

アプリリアージェ達は息を潜めて暗い地下道を歩いていた。
地下道と言えば聞こえがいいが、そこは水路脇の作業通路で、人が並んで歩けるほどの幅もない、狭く、そして一歩足を踏み外せば水路に転落するほどの危うい通路であった。
地下水路はハイデルーヴェン中に張り巡らされているかのようで、道中、分岐や脇道が無数に存在していた。
水路に灯りはもちろんない。アルヴの少女がかざすルーンに反応するルナタイト、それにアキラが持っていた衝撃を与えると光るセレナタイトの前後からの淡い光りだけが頼りであった。
水路に流れる水は温度変化の少ない地下水で、この時期には水面から湯気が立ち上っているのがわかる。地上よりずいぶん温度が高い地下通路ではあったが、それなりに気温は低いのであろう。

「今日は何と言うか、地下道ばかりでモグラにでもなったような気分だな」
アキラは途中でおどけたようにそう言ったが、案内役のアルヴの少女に強くたしなめられた。それは目的地に着くまではできるだけしゃべるなという指示でもあった。
「そういう大事な事は最初に言ってもらえればうれしいんだが」
確かにその通りではある。だがそれを指摘したアキラの返事に、少女は言い訳すらしなかった。
「ひそひそ話ならかまいません。しかしあなたの声は大きすぎます。地下の通路ではどこでどう反射するかわからないのです。それに集音ができる感知用の精霊陣が張られている可能性もあります」
（だから、そういう事を始めに言っておいて欲しいと言ったのだがな）
アキラはしかしその言葉は心の中にしまう事にした。こんなとこ

ろでつまらない問答をするつもりはさらさら無かったのだ。

「ここです」

少女が立ち止まってそう言った。石組みの壁が続く場所だった。

アキラは辺りを注意深く見たが、特別なものはなにもない。いや、それどころか目印になるようなものすら見つけられなかった。何を持って「ここ」だと言い切れるのかが不思議だったが、おそらく少女には何かが見えているのだろう。もしくはかんじているのかもしれない。

アキラがそんなことを考えていると、少女はそこで小さな声でルーンを唱えた。ごく短いルーンで、すぐに詠唱は終わり、少女は次に石組みの壁を力一杯押した。すると壁の一部が音もなく消え去り、向こう側に空間が見えた。そこは大人のデュナンが十人ほど立って入れるほどの木張りの四角い部屋であった。

促されるままに一行はその部屋に入った。

「この部屋は昇降機になっています」

質問される前に少女はそう言うと、今入ってきたばかりの扉を押し戻してルーンをかけた。要するに部屋はこれから上か下へ動くという事である。

部屋を見渡したアキラは、少女が昇降機と呼ぶ箱状の部屋の天井の一角から一本の綱がぶら下がっているのを発見した。それは床の隅にある穴を貫通してさらに下に向かって垂れている。

アルヴの少女はまさにその綱を掴んだ。そして無造作に二三度引っ張った。

一行が何が起こるのかと身構える間もなく、部屋全体が一度だけ小さく揺れたかと思うと、部屋がゆっくりと下がるのがわかった。

どうやらこの昇降機は人の力で動く仕組みのようだった。綱は合図の為にあるのだろう。

どの程度の速度で下がっているのかはわからなかったが、一行は沈黙を守ったまま結構長い間、降下する感覚を味わった。つまり部

屋はけっこう深いところまで降下しているという事である。
アキラは綱が貫通している床の穴から下をのぞき込もうとして少女にたしなめられた。
「お願いですから、じっとしていて下さい」
（そう言う注意は部屋に入った時にしていてもらえないだろうか？）
アキラは心の中でそう言うと、頭を掻いた。
少女の言葉からは敵意のようなものは感じられないのだが、暗くて様子がわからない状況は不安であった。そしてそれはアキラだけではない。

ティアナは部屋が動き始めるとすぐにエルネスティーネを抱き、部屋の壁に背を付けて自らの体を固定させ、揺れに備えた。そんなティアナの心配をよそに、大きく揺れる事もなく部屋の動きが止まった。昇降機という事でそれなりの着地の衝撃を予想していた一行は、あまりの衝撃のなさに拍子抜けしたほどであった。

「この昇降機はとてもよくできていて、昇降軸に沿って上下し、停止の際も緩衝器というものを取り付けて衝撃を吸収する構造になっています。だからさほど揺れないのです」
まるで一同の心を読んだかのようなアルヴの少女の説明に、アキラ達は顔を見合わせた。
「お見受けすると、あなた方には相当な技術と技を持った仲間がいるようですね」
アプリリアージェがささやくようにそう言うと、
「もう普通の大きさの声を出してもかまいません。目的地に着きましたから」
アルヴの少女はアプリリアージェの質問をはぐらかすようにそう言った。アプリリアージェもそれ以上追求するつもりはないようで鷹揚にうなずいて見せただけだった。
答えられる質問であれば、少女は答えただろう。アプリリアージ

ェはそう考えたのだ。今のアプリリアージェの質問について、少女は答える事を許されていないか、もしくは判断できないでいるのだろう。ならばそれ以上の追求は無意味であり、下手をすると少女に要らぬ敵意をもたれかねなかった。現在アプリリアージェ達は保護された難民のようなものだ。とりあえずは最終的な目的地に着くまで、もめ事を起こす必要はないと判断した。

もともと少女の事を完全に信用している訳ではなかったアキラは、今の少女の態度を見て、アプリリアージェとは逆にその疑惑を少し深めた。そんなアキラの心の中を見透かしたようにアプリリアージェがポンとアキラの肩を叩いた。

「ん？」

やや厳しい表情をしていたアキラは、自分を見つめる穏やかな微笑を視界に捉えた。

「目的地につけばそれなりの人物が我々の疑問や質問をまとめて聞いてくれるという事でしょう」

アプリリアージェのその言葉が聞こえたのか聞こえないのか、少女はそれには何の反応もしなかった。だが部屋の扉を開ける前に一つの指示を出した。

「あなた」

少女はファルケンハインを指さすと、その指先を今度はアキラに向けてこう言った。「あなたのそのマントを、この人に着せて下さい」

簡単な指示だったが、その場に居た全員が少女の言葉の意図を理解した。アキラはデュナンである。つまりそれがバレないように頭を隠せという事である。アキラはマントを着用しておらず、アキラが着る事ができるマントはファルケンハインのものしかなかった。つまり少女の指示はこれ以上ない程的確と言えた。

ファルケンハインから差し出されたアルヴスパイアのマントを受

け取りながら、アキラは少し苦笑した。
もちろん自分の立場がついさきほどと完全に逆転した事に対して、である。

「大丈夫ですよ」
アキラであってもアルヴであるファルケンハインのマントは大き過ぎた。体に合わないマントを羽織ったアキラが裾の具合を気にかけているところへ、今まで口を閉ざしていたエルネスティーネがそう声をかけた。
それはいつもと変わらぬエルネスティーネらしいのどかで柔らかで、そして優しく響く澄んだ声だった。
「なかなか似合っていますよ。ねえ、ティアナ？」
そう言ってティアナを見上げる表情も穏やかな優しさに満ちていた。アキラは思わずカテナ・ノルドルンドと呼ばれる副堂頭と対峙していたあの厳しく険しい表情をしたエルネスティーネを思い出していた。とても同一人物とは思えない面変わりであった。
だが、どちらもエルネスティーネなのであろう。誇り高きカラティア家の血は、必要とあらば甘い菓子を思わせるような笑顔を、相手を眼差しで射殺す事も可能と思える程の形相をした鬼神の面に置き換える事ができるのだ。
「そうでしょうか？私にはアモウルさんにファルのマントは少々大きすぎるように思えますが」
ティアナはエルネスティーネに賛同しなかった。
「ティアナ」
エルネスティーネは笑顔のまま、低い声で白髪のアルヴの名を呼んだ。
「何でしょう？」
「あなたは私よりもよほど世間というものをもっと勉強しなければなりませんよ」
「はあ……？」

「もう一度尋ねます。あのマントはアモウルさんにも『それなり』に似合いますよね？」
「どうでしょうか。あのマントがそれなりに似合っているとすれば、アモウル殿ほどの器量があればたとえ毛布でも掛け布団でも体に巻き付けていれば似合っていると言っていいかもしれません。……こんな答えでいいのでしょうか？」
エルネスティーネは小さくため息をつき、正攻法でティアナを攻略する事を断念した。
「確かにファルよりは似合わないかもしれませんね」
つまり搦め手から責める事にしたのである。
「そ、それはもう当然です」
ティアナの態度に、エルネスティーネは呆れたという風に肩をすくめて見せた。
「でも、アモウルさんが着ると、ファルとはまた違う風情がありますよね？こういうのを『アゴにお化粧』と表現するのですよ」
「……」
もちろんティアナは絶句した。
「もうその辺にしてやってくれませんかね」
二人のやりとりを聞いていたアキラは苦笑しながらも裾を気にするのをやめる事にした。要するにエルネスティーネもティアナも、自分が思っている以上におかしな格好だと言い合っているだけなのだ。アキラとしてはもうそれ以上今の格好について言及して欲しくなかった。

一方のファルケンハインは、チラリとアルヴの少女の様子を見た。今、口にしたエルネスティーネのことわざを聞いて、どう反応しているかを確かめたかったのだ。
案の定、無表情な少女もさすがに怪訝な顔をエルネスティーネに向けていた。その言葉を投げかけられた当のティアナとエルネスティーネを交互に見比べている。

明らかにおかしな表現なのにも関わらず、エルネスティーネを除く一同はまったくそれについては言及しない。言及しないのではなく、努めて反応しないようにしているのだが、少女の目にはその様子は異様に不自然に映っていたに違いない。完全に無視できているアプリリアージェやメリドと違い、ティアナは少女と目が合うと、あからさまに視線を泳がせた。

ファルケンハインは緊張の糸が緩むのを感じていた。少女のそのやや戸惑ったような表情を見て、単純に敵対する人間ではないと思えたのだ。

エルネスティーネの一言は、アキラだけでなく、間違い無く一行全体の雰囲気を変える力を持っていた。アプリリアージェでさえ、緊張をほぐすようなかすかなため息をついたほどである。

「アモウルさん、気にされる事はありませんよ」

アキラに改めてそう声をかけると、エルネスティーネは今度は少女にその視線を向けた。

「あなたはきっと、私たちを悪いようにはしない。そうですわね？」

自分の言葉がアルヴの少女にどういう影響を与えたのかを知ってか知らずか、エルネスティーネはそう言って微笑みかけた。

「だって、私達はもうお互いに、仲間ですから」

アルヴの少女はしかしそれには何も答えず、眩しいほどの笑顔を向けるエルネスティーネから目を逸らすと、入った方向とは反対側にある扉を開いた。

「もうすぐです。離れないように私についてきて下さい」

その言葉を合図にアキラはフードで頭を覆うと、少女の後に続いて真っ先に昇降機から外へ出た。マントを着けていないファルケンハイン以外は皆、アキラに倣ってフードを被るとそれに続いた。もちろん、アキラだけがフードをかぶっていては不審がられると判断したからである。アプリリアージェが敢えて言わずとも、すでに一行は彼女の行動の意味を理解していたのである。エルネスティーネ

でさえ。
アプリリアージェはそんなエルネスティーネをチラリと視界の端に捉えると、いつもの微笑を少し深くした。

少女に案内されたのは、ちょっとした規模の教会の礼拝堂がすっぽり入るほどの広さがある文字通りの広間であった。礼拝堂と明らかに違うのは天井が低い事である。それなりに圧迫感があるが、とはいえ長身のファルケンハインが頭をぶつけるほど低くもない。
考えてみればそもそもアルヴ族の隠れ場所なのである。自分達が常に中腰にならねばならぬような作りにしているはずはないと言えた。見方を変えると、例えばアルヴィンやダーク・アルヴには余裕のある空間であった。
アキラがざっと数えてみたところ、広間にはアルヴ・アルヴィン取り混ぜて百人程のアルヴ族がいた。皆は等間隔に並べられたテーブルを囲んでいた。それぞれのテーブルで思い思いに会話をしているようだが、その表情には不安の色が濃い。
少女が「房」と呼ぶこの場所には避難してきた人々だけでなく、そんな人々の世話をする役目を負うひとも居るようだった。彼らがその場所に現れた時には数人のアルヴ達が各テーブルを回っては声をかけ、お茶の入れ替えなどを行っていた。
近くのテーブルに目をやったアキラは、そこにスープや紅茶といった暖かい飲み物類やチーズを挟んだライ麦パンなど、ちょっとした食べ物が置かれているのを見つけた。それらに手をつけている人間はあまりいなかったが、それでも大きな喧噪や混乱はない。すなわちその房は表面上ではあるが、平静が保たれている状態と言えた。
「宿の食堂の朝の光景、に見えないでもないな」
アキラはそんな事を口にした。だが、そう言った自分の言葉に対して苦笑せざるを得なかった。決定的に違うものがあるのだ。
「その宿には、俺はあまり泊まりたくはないな」
すぐ隣に立って同じようにその「房」を観察していたファルケン

ハインがアキラに反応してそう言った。
宿の朝の光景と全く違うもの、それは朝の宿だけが持つあの独特の活気に満ちた喧噪の存在である。
この房にあったのは不安と恐怖と憎悪に満ちた、きわめて静かな喧噪だったのだ。活気という言葉はここにはない。

「こちらへ」
立ち止まってあたりを見回している一行に少女が先を促した。
一行が広間に入っても、その場に居た人々はちらりと視線を投げかけるだけで、あまり関心を持たない様子だった。
新しい客はおそらく次々とやってくるのだろう。人は物珍しく無いものには注意を払わない。何より自分が置かれている状況、自分がこの場所に至った経緯を咀嚼するのに精一杯なのに違いない。要するに混乱と不安で、他人どころではないのだろう。だから彼らは、アルヴの少女が新たに保護してきた人々の中に「知り合いがいるかどうか」以上の興味は持たない。知らない相手だとすぐに視線を自分の手元に落とすだけだ。フードをかぶっていようがいまいが、そんなことを気にする者は皆無だった。
今ちらりと一行を見て、すぐにうつむいたアルヴィンの親子にしても、つい今し方ここに案内されてきたのかもしれなかった。

「旅の人達です。この町の事情を知らずに迷い込んだようです。逃げているところを見つけて声をかけて連れてきました」
アルヴの少女は一番奥に座って広間を見守るようにしていた初老のアルヴにそう報告すると、恭しく頭を下げた。
「それから、申し上げにくいのですが……」
少女は顔を上げると振り返り、広間の様子をざっと見渡した。
「どうしました？」
少女の様子をみた初老のアルヴは訝しげに声をかけた。
少女はその部屋にいる人々がこちらに注意を向けている人間がい

ない事を再確認すると、初老のアルヴに向き直り、声を潜めて続けた。

「この人達には多少事情があります。出来れば詳しい話は別室にて」

初老のアルヴは静かに少女の話を聞いていたが、最後の一言で顔を上げ、そこで初めてアプリリアージェ以下、一同の顔を順番に眺めていった。

初老のアルヴはこの房の責任者もしくはとりまとめ役といったところであろう。少なくとも少女が頭を下げるだけの人物である事は確かだった。

初老のアルヴは最後にフードから少しだけ覗くアキラの顔をじっと見つめ、少し考えた後で独り言のように小さくつぶやいた。

「なるほど」

その言葉が何を意味するのかは、おそらくその場の全員がわかっていた。もちろん緊張が一行を駆け抜けていった。だが、初老のアルヴはそれ以上何も言わずにすっと立ち上がると、そのまま歩き出した。その先には通路があり、さらに奥へと向かったのだ。

「私についてきて下さい」

既にフードを下ろしていた少女のアルヴはそう言って一同を促すと、返事を待たずに初老のアルヴの後を追った。それを見たアキラが何も言わずにその後に続くと、一行も無言でアキラに倣った。

別室というのは通路脇にいくつもある部屋のうちの一つで、狭い空間に三段式のベッドが二つ置かれていた。宿泊用というよりは仮眠用の施設と言ったところであった。

通路脇に等間隔にある扉のそれぞれがこの部屋のような作りになっているに違いなかった。

「どうしました？」

一行が部屋に入った後、最後尾にいたアプリリアージェが入り口の扉の側で立ち止まっているのを見て、少女は声をかけた。

「いえ。この壁は土壁なのですね。うまく作っているものだと関心

していたんです」
「堅焼き煉瓦の上にしっくい代わりの粘土を塗りつけて固定してあります。そう簡単には崩れませんから安心して下さい」
　要するに少女は入り口で扉を開けたまま立ち止まっているアプリリアージェに早く扉を閉めろと促したのである。
「ごめんなさい。私はけっこう臆病なのです」
　アプリリアージェはそう言ってにっこり笑うと、すぐに扉を閉じた。
　全員が部屋に入った事を確認すると、初老のアルヴは少女のアルヴに目で合図した。少女はうなずくと入り口に向かい、何かのルーンを唱え始めた。
「ゾフィーは体術と剣技を相当にこなせます。ちょっとした護衛には適任なのです。さらにご覧の通り促成ですが、ルーナーでもあります」
　剣技と体術を能くするルーナーは珍しい。初老のアルヴの説明を受け、ルーンを唱える少女を一同は改めて怪訝な顔で見つめた。
「促成ルーナーとは何でございましょうか？」
　真っ先に反応したのは、意外にもエルネスティーネだった。
「促成とおっしゃいましたね？ルーナーになるには相当な修練が必要と聞き及んでおります。それなのにここハイデルーヴェンでは、その能力が促成で身につく方法がある、という事なのでしょうか？」
　エルネスティーネはエイル、いやエイルの体を借りていたエルデからルーナーの修行について色々と話を聞かされていた。それは彼女の想像を絶する過酷なもので、そうまでしてなぜルーナーになるのだろうと真剣に考えていた事があったのだ。エルデが使う高位ルーンを目の当たりにして、ルーナーが軍事的に極めて重要な戦略兵器であるという事を理解してしまった後は、ルーナーのあり方そのものに彼女なりの疑問を抱いていた。膨大な犠牲……エルデの言葉を借りるならばそれは淘汰と呼ぶものらしかった……の中で生まれる強力な兵器。一人の少女が今更声高にそれを否定しても始まらな

い事はエルネスティーネにもわかっていた。だからこそそのルーナーが「促成」されているという事実は衝撃だったのだ。

思わず口にした疑問にエルネスティーネは自分でも驚いていたが、それでも出過ぎた発言だとは思わなかった。むしろ自分は知っておかねばならないと感じていた。

「その前に自己紹介をさせていただけますかな。凛々しき瞳の少女よ」

初老のアルヴは穏やかな表情をエルネスティーネに向けて静かにそう言った。

対してエルネスティーネは、自分が今険しい表情をしている事に気付いた。

「ごめんなさい。失礼をお許し下さい」

赤面すると、慌てて頭を下げ、詫びを入れた。

確かにお互いに自己紹介がまだであった。だがもはや誰もがそれを重要な事だとは考えていなかったのだ。だからこそ初老のアルヴの穏やかな調子のその一言は一行の緊張を解く効果を持っていたと言えるだろう。

「私はロマン・トーン。ハイデルーヴェン第二精霊波研究所に所属しておりますが、第一高級学校で教鞭も執っております。今はこの房のとりまとめ役と言ったところです。そして彼女は……」

ロマン・トーンと名乗った初老のアルヴはそう言うと手を上げてルーンを唱え終わった少女のアルヴを示した。

「彼女はゾフィー・ベンドリンガー。少し前まで私の下で呪法を専攻しておりまして、まあ教え子ですな。もっとも今はさるお方の特別助手という立場なのですが……まあ、お許しを得まして、その能力でこの町のアルヴの救助を行なってもらっています」

ロマンの紹介に、ゾフィーと言う名のアルヴの少女は小さく頭を下げた。

アプリリアージェは設定通りに自分達は吟遊詩人とその護衛だと

いう説明をおこなった。順番に名前を紹介した後、改めてロマンに向かってこう付け加えた。
「と、言ったら信じてもらえますか？」
終始穏やかな顔でアプリリアージェの紹介を聞いていたロマンは、その一言を聞いても表情を変えなかった。
「私は呪法を研究する学者です。人の詮索は私の領分ではありません。それに肩書きや出身などこの房では意味はありません。互いに呼び合う名前がわかれば、それでいいのです、リリア殿」
「殿は結構です、トーン教授」
本名ではなく、族名もないただのリリアとだけ名乗ったアプリリアージェがそう言うと、それにはゾフィーが反応した。
「トーン先生は一等教授です。ただの教授ではありません」
アプリリアージェは生真面目なゾフィーの訂正を受け、いつもの微笑みを深めた。
「トーン先生の正確な肩書きがわかりました。ありがとう、ゾフィーさん」
訂正が入るかどうかはわからなかったが、とりあえず適当と思われる肩書きを言えば、何らかの反応があるだろうというアプリリアージェの目論見は見事に当たった。
「なるほどなるほど」
そんなアプリリアージェの微笑を見つめながら、ロマン・トーンは自分も微笑を浮かべた。
「私もあなたがただ者ではないと言う事がわかりましたよ、リリア。そして肩書きや出身など関係ないと言った舌の根の乾かぬうちに恐縮ですが、正直に申し上げると私はあのお嬢さんにとても興味がある」
そう言うロマンの視線はエルネスティーネに向けられていた。
「私に質問があるのでしたな、ネスティ殿。いやネスティ様とお呼びした方がよろしゅうございますかな？」
ロマンの一言は当然ながら一行に緊張をもたらしたが、表情や動

作にそれを表してしまったのはティアナだけだった。彼女は思わず隠しに忍ばせていた懐剣に手を伸ばしたのだ。

「これは失敬。自分で言っておいてこれですからな」

ティアナの変化にロマンは敏感に反応した。彼はわっはっはと初めて声に出して笑い、自分の頭をピシャリと叩いて見せたのだ。

「あえて尋ねずとも、それに私でなくともネスティ殿が普通の娘さんでない事は一目でわかりますよ。特に私ほどの年寄りともなればいろんな顔を見てきておりますからな。瞳の光を見ればその人間が持っている心根の様なものが嫌でもわかってしまうのです」

ティアナの態度は、要するにエルネスティーネが「それなり」の家柄を背負った存在だという事を証明して見せたようなものであった。そのお嬢様が「吟遊詩人の護衛団」と名乗る一行に加わっているという時点で「尋常ではない」状況に置かれている事も簡単に想像ができた。

「失礼をしました」

ティアナは自分が失策をしでかした事を悟ったのか、そう言って謝った。だがそれはロマンの想像を肯定するようなものであった。ファルケンハインは心の中で頭をかいたが、もはや後の祭りであった。どちらにしろティアナが選択したのは、自分の失策を深く頭を下げて謝る事だった。

「私は口が堅い人間だと自負しております。そこにいるゾフィーも無口で無愛想な娘で通っております。ですから案ずる事はありません、ティアナ殿」

下げた頭を上げようとしないティアナに、ロマンは優しい声でそう言葉をかけた。

「顔を上げて下さいな、ティアナ」

隣のエルネスティーネがそう言ってティアナの背中に手を置いた。

「申し訳ありません」

ティアナはもう一度謝ってから、その強ばった顔をなんとか上げると、アプリリアージェの視線を探した。すぐにそれは見つかった

が、そこにはいつも通りの優しい微笑を浮かべる小柄な黒髪のダーク・アルヴがいた。
いつも通り……ティアナはそう思ったが、一瞬ではあるがその垂れた目の片方だけだが瞬きをしたように見えた。

ティアナが微妙に表情を変えるのを確認すると、アプリリアージェはゾフィーに声をかけた。
「一つ伺います。この扉はゾフィーさんのルーンで塞がれているのでしょうか？」
狭い部屋は見渡すまでもなく出入り口は一行が入ってきた入り口だけであった。
「いえ」
ゾフィーは首を横に振った。
「私が唱えたのはこの部屋の音や声が外に聞こえない結界を張るルーンです。扉には何もしていません」
「なるほど。あなたは道中扉を開けたり塞いだりするルーンを使っていたように見えますが、その扉を開けられなくするルーンも使えますか？」
アプリリアージェはそう言うとにっこり笑って今度はロマンに向かった。
「これから少し込み入った話をしたいと思います。出来れば不用意にこの部屋に人が入るのを防ぎたいのですが」
ロマンはアプリリアージェの意図を汲むとゾフィーに扉を封印するように指示した。
「ありがとうございます」
ルーンの詠唱が終わるのを待ってアプリリアージェはゾフィーに頭を下げた。そして今度はロマンに右手を差し出した。
「改めて、よろしくお願いします。友好的な会見になる事を願っています」
ロマンはためらいなくアプリリアージェの小さな右手を自分の大

きな手で包むように握った。
「ティアナ。あなたもいつまでもそんな怖い顔をしていないで、トーン先生と握手をしましょう」
名指しで呼ばれたティアナは、戸惑ったような顔をしたものの、素直にロマンの前にやってきて、右手を伸ばして握手をした。
それを見届けると、アプリリアージェは次にゾフィーに顔を向けた。
「ここまでの案内ありがとうございました。本当に助かりました、ゾフィーさん」
そして同じようにゾフィーに手を伸ばした。アルヴの少女はためらわずに手を伸ばし、アプリリアージェの手を握った。
「呼び捨てで結構です。リリアさん」
そう言うゾフィーにアプリリアージェはとろけるような微笑で返すと、ティアナをゾフィーの前に引っ張りだした。
そしてゾフィーにこう言った。
「あなたの事を一番疑っていたのがこのティアナです。友好のしるしに是非握手してあげてくださいな」
この時点で、ティアナにはようやくアプリリアージェが何を目論んでいるのかがわかった。さっきの瞬きに見えたようなものはやはり合図だったのだ。
その合図がなければ、ティアナはここでまた失敗をしでかす可能性があった。
最悪の場合、
『この子はルーナーですよ?私が触ってしまっては大変な事になります……』
程度の事は平気で口にしそうだった。
そう。
アプリリアージェはこのゾフィーというルーナーの力をティアナの力で封じる事をこの場の戦術として選んだのだ。
思えばこの部屋に入る時に入り口の周りを感心した様子で眺めて

いたのはルーンで扉が開けられなくなっても内側から破壊が可能かどうかを吟味していたという事なのであろう。

ティアナは改めてアプリリアージェと自分との間にある果てのない海原のような隔たりを思い知る事になった。

それはエルネスティーネを守る「能力」に圧倒的な差がある事を意味していた。少なくともティアナ本人にはそう思う事しか出来なかった。

アプサラス三世から命じられた、いや「頼まれた」のはエルネスティーネの「護衛」として側にいる事ではなく、友として旅をする事である。だが生真面目な軍人であるティアナにはそれを額面通り受け取る事はどうしてもできなかった。

だから今の一件でも引け目を感じてしまう。

それは「自分でなければ」という自負から「自分でいいのか?」という疑問へとゆっくり姿を変える遅効性の毒のようにティアナの心を蝕んでいた。

疑惑は迷いの母である。そして迷いの継続はティアナのような根っからの軍人にとっては大きな欠点となる。いざと言うときに生じる隙は、今まで守ってきたものを全て失う文字通りの隙間になりかねない。

ティアナはそれが恐ろしかった。

旅の仲間として目の前にいる黒髪のダーク・アルヴは、ティアナの基準においては普通の人間ではなかった。アプリリアージェのような存在は極めて特別なのだ。

いや……。

そう言って自分で自分を完全に説き伏せておかなければ、ティアナは自分の存在意義が果たしてあるのか?という疑問を押さえる事ができなかったのだ。

だがそれでも、ティアナにはエルネスティーネを守る存在として自分が一番で有りたいという欲望があったに違いない。それはおそ

らく無意識であろう。だが、無意識こそが最も重い鎖になる。
アプリリアージェに畏敬の念を抱きつつも、エルネスティーネに関しては自分がそれを上回りたいという「願望」と、教育係の一人として長い間エルネスティーネの側にいたという「自負」がティアナにはある。それこそが、自信喪失という強敵に対抗しうる勢力になっていたのである。
だが、ヴェリーユでカテナ率いる新教会の僧兵達に囲まれた時に思い知っていた。
すなわちいざとなっても自分が戦力としてはまったく役立たずな存在である事を思い知ったのである。つまりその時のティアナは最後の砦であった「自負」すら揺らいでいた状態であった。もしあの時フリスト達に助けられていなければ、ティアナの自我はどうなっていたのかわからない。今頃は悔しさで正気ではなかったであろう。
アプリリアージェはそんなティアナの気持ちすら俯瞰して理解した上で、掌の上に置いていたのかも知れない。つまり他の誰も持っていない彼女の類い希な能力を、今ここでエルネスティーネだけでなく一行全員の為に敢えて使わせる事で、自分の存在意義というものをティアナに再認識させようという意図があったのかもしれなかった。
もちろんそれだけでなく、抜け目のないアプリリアージェが一石二鳥を目論んでいた事は明白である。
ティアナの考えがそこまで思い至ったところで、彼女はようやく現状を素直に受け入れる事ができたように感じた。
それは単純な事である。自分がアプリリアージェでもエルデ・ヴァイスでもない以上、ティアナ・ミュンヒハウゼンとして自分でできる事をするだけなのだ。
手を差しだそうとした時、ティアナの肩に誰かが手を置いた。
「俺も握手をさせてくれ。君のおかげで要らぬ争いをせずに済んだよ、ゾフィー」

肩に置かれた手の主はファルケンハインであった。
ティアナが固まっていたのは、おそらくはほんの短い時間だったに違いない。だがそんなティアナの様子を見たファルケンハインは彼女の中の「迷い」を敏感に察知したのであろう。
「いえ。これは私の役目ですから」
そう言いつつも差し出されたファルケンハインの手をゾフィーは握り替えした。
それを見たティアナには、もう迷いは無かった。
「ティアナ・ミュンヒハウゼンだ。私からも礼を言わせて欲しい」
「あなたは、まるで軍人さんのような言葉遣いですね」
差し出されたティアナの手を握りながら、ゾフィーはそう答えた。だが、ティアナはそれには動じなかった。
「ああ、その通りだ。私は昔、軍にいた。その時の癖で言葉遣いがどうも直せないのだ。不快かもしれないが許して欲しい」
「なるほど、そうでしたか。お気になさらずに。どうぞよろしく、ミュンヒハウゼンさん」
「ティアナでいい」
二人のやりとりをじっと見ていたアプリリアージェは、満足げに目尻を一層下げると、ロマンに向き直った。
「ロマン・トーン一等教授。是非我々に力をお貸しいただきたい」
そう言ったアプリリアージェの口元が、少しだけ曲がったようにロマンには見えた。同時に緑色の瞳が少し見開かれたように大きく開いた。微笑する黒髪の少女の雰囲気が、なぜか少し変わって見えた。
「ふむ」
ロマンは一拍おくようにそう言うと、腕を組んでじっとアプリリアージェの緑色の瞳を見つめた。
「と、申されますと？」
「我々をできるだけ安全にこの町から逃がしていただきたいのです」

アプリリアージェは悪びれずにそう言った。
「それはもちろん、できるだけの事は」
「それだけではありません」
ロマンが言い終わらないうちにアプリリアージェは言葉を被せた。
「おそらくこの町には、我々の仲間が二人、もしくは四人います。二人ずつ二組に分かれている可能性が高いと思います。私達はまずはできるだけ早く彼らと合流したいのです」
「ほう」
「一組は若い男女。もう一組はアルヴの女性二人組なのですが……」
「ふむ。その言い振りからすると、男女の方は訳ありのようですね。アルヴではない……のですな？」
ロマンがそう問いかけると、すかさず少し離れたところから声がした。
「二人ともピクシイです！」
声の主はエルネスティーネだった。
「うそではありません。ピクシイなのです。目立たないように今はデュナンの振りをしているかもしれませんが……でも、私にとってはとても大事な方達なのです」
「私達にとって、です」
エルネスティーネの言葉を訂正する声はファルケンハインのものだった。
「なるほどなるほど」
ロマンはアプリリアージェにっこりと笑いかけた。
「その二人はとても良い仲間をお持ちのようだ。しかし、ピクシィとは……これは驚かずにはいられませんな……」
「彼らがなぜピクシィなのか、という質問はご遠慮下さい。それよりも」
「ちょっと待って下さい」
そこまで沈黙を守っていたアキラがたまらず声を出した。
言葉と同時にフードを下ろした。もう隠す必要はないと判断した

のだろう。どこからどう見てもデュナンでしかないその姿をロマンの前に晒した。

だが、アキラの言葉と視線はロマンではなくアプリリアージェに向けられていた。

「大事な話に割り込んで申し訳ないが、ピクシィ二人が仲間というのはどういうことです？エイル君以外にもう一人ピクシィがいると？」

アプリリアージェは珍しく微笑を崩して目を見開き、少しだけ驚いたような顔に変化したが、すぐに元の顔に戻った。

「まだお伝えしていませんでしたっけ？」

「聞いていませんよ」

「そう言われてみれば、知らぬのはもうアモウル殿だけのようですね」

メリドがそう言うと、アプリリアージェはさも今思い出したようにポンと手を打った。

「私とした事が……てっきりヴェリーユで一度顔合わせしているものだと思い込んでいました」

もちろんそれはアプリリアージェ一流の「おとぼけ」であることは明白であった。少なくともファルケンハインには理解が出来ていた。もはや隠すつもりはない話なのだが、ヴェリーユ入りしてからアキラと落ち着いて話をする時間などはなかったのだ。そもそもアキラとエルデは出会う事なくヴェリーユを後にしたのだから。

アプリリアージェとしてはアキラが声をかけてくれた事で二人の説明を一度で済ませる事ができる機会に恵まれた事になる。

だが、果たしてアプリリアージェが二人についてどこまでを口にするのかは不明だった。ファルケンハインとしてはただ黙って見守るしかなかった。

だが……。

「エルデです。エルデ・ヴァイスがもう一人のピクシィです」
説明を始めたのはエルネスティーネであった。アプリリアージェはその声に眉をひそめたがすぐに真顔に戻り、何も言わなかった。
「エルデって……」
「エイルがただの二重人格だと思っていましたか？」
エルネスティーネはアキラとの会話をアプリリアージェから完全に奪う事を決めたようだった。いや、自分の言葉でアキラに伝える事を決心していたに違いない。
その証拠にエルネスティーネはアプリリアージェの顔色をうかがうような様子を一切見せなかった。
「どういう事です？」
アキラの問いかけはアプリリアージェに向けられていた。しかしアプリリアージェは沈黙を守った。
一拍おいたエルネスティーネが言葉を続けた。アプリリアージェが何も言わない事で自分の発言が容認されたものとここで完全に判断したのだろう。壁際から進み出て、ロマンとアキラの近くに寄ってきた。
その拍子に懐から茶色い塊が飛び出すと、エルネスティーネの肩で止まった。マーナートの「マナちゃん」である。
それを見たゾフィーの視線が「マナちゃん」に釘付けになったが、それには誰も気付かなかった。
「ロマン様もご一緒に聞いて下さい。これはとても重要で、そして秘密にすべき話なのです」
アプリリアージェとの会話が中途半端に途切れた形ではあったが、エルネスティーネの様子から、これはどうやらアプリリアージェが語ろうとした話に繋がるものだとロマンは判断した。一応確認の為にアプリリアージェに目をやったが、その微笑が動かないのを確認すると大きく頷いた。
「伺いましょう。そしてその秘密を守る事を誓いましょう。マーリンの名にかけて」

アキラもロマンに続いてうなずいた。
あのジャミールの里から続く地下道「龍の道」で別れた後のアプリリアージェ達に、何か重大な出来事があったのだということはわかった。だが、エルネスティーネが自らそれを説明する事に対しては少し違和感を覚えていた。要するに「龍の道」に入る以前からエルネスティーネの言う「秘密」が存在していたという事なのであろう。エルネスティーネはそれを今ここで明かすと言っているのである。
今は非常時と言えた。なぜその「今」、この重要な会見の場でエルネスティーネが一行の司令官であるアプリリアージェを差し置いて自分の意思で秘密を暴露しようとしているのか。それがアキラには理解できないでいた。
だがその謎はすぐにエルネスティーネ自身の口から明かされた。
「私達は今、とてもずるい事をしています。見方によっては卑怯と言われても仕方のない事です」
エルネスティーネはそう言ったが、ロマンもアキラもその意味をはかりかねた。
「我々は今ここで確実な安全を確保したいのです。だから謀によりまずはこの部屋で圧倒的な優位を築きました」
そこまで言われてもまだ意味がわからない二人は、思わず互いに顔を見合わせた。
「我々はこの部屋の出入り口をルーンで封じてもらった上で、あなたたちからその扉の鍵を奪いました」
もちろん、ティアナがゾフィーと握手をした事を言っているのである。エルネスティーネはアプリリアージェがそうし向けたのをちゃんと知っていたのである。
だがカラティア家の最後の直系であるエルネスティーネにとって、その行為は「ずるい」事であると認識されていた。

「ティアナはキャンセラです」
「キャンセラですと？」
エルネスティーネの説明に、さすがのロマンも驚きを隠せない顔でゾフィーを見た。
「え？」
じっとエルネスティーネの肩、つまり「マナちゃん」を凝視してたゾフィーは自分に注がれる視線を感じてようやく我に返った。どうやらエルネスティーネの話は耳に入ってはいなかったようだった。
「ごめんなさい、ゾフィー。あなたはしばらくの間ルーンが使えなくなってしまいました」
エルネスティーネはそう言うと頭を小さく下げた。
「臆病な我々を許して下さい。けれども我々は今ここで囚われる訳にはいかないのです。念には念を入れる為に行った事です。もちろん私や私の仲間達にはあなた達に対する敵意はありません。つまり本題に入る前に、我々には二心がないという証明をしたかったのです。ですから、敢えてその行為をお伝えする事にしました」
「ネスティの言葉が嘘だと思うのなら、扉を開けてみて下さい、ゾフィー」
アプリリアージェは顔色一つ変えず、微笑したままでそう言った。エルネスティーネを制する様子もない。むしろ打ち合わせをしたかのような口ぶりだった。
だが、そうでない事は明白であった。
「いつもの」状態ではないのだ。エルネスティーネが交渉役になる事など今まで一度もなかった。それはファルケンハインでなくともティアナも、そしてアキラでさえ理解していた。エルネスティーネ・カラティアとは、守られるべき存在として常に護衛達の後ろ側に立つ存在であったのだ。
ゾフィーはロマンが頷くのを確認すると、壁に向かってルーンを唱えた。長いルーンではなかったから詠唱はすぐに終わった。

「え？」

それは詠唱者だけが感じる「手応え」の差であろう。いつもと違う感覚にゾフィーは小さく声を上げると、確認の為に扉を押した。

しかし、扉はびくともしなかった。

それを見たロマンはエルネスティーネに問いかけた。

「このルーンで閉ざされた扉をあなた方はどうやって開けるおつもりですかな？鍵をもたないのはお互い様、ではありませんか？」

エルネスティーネはファルケンハインを振り向いた。自分を見つめるエルネスティーネの表情がいつもの柔らかい「ネスティ」そのものだった事にファルケンハインは内心で驚いていた。今のエルネスティーネはきっと厳しい表情をしているものだとばかり思い込んでいたのだ。しかし、そこにはいつも通りの柔らかい笑顔が似合う「ネスティ」がいるだけだった。

「先ほどここに入る時に確認したのですが、あの程度の厚さの煉瓦ならファルの力を使えばおそらく破壊は可能でしょう」

ロマンに向き直ったエルネスティーネはそう言った。

「この部屋に入るときに、リリアさんが壁の厚みを確認していました。その上でルーンで扉を閉ざしたのですから、間違いありません。私がファルの力を知っているわけではありませんが、リリアさんが大丈夫だと判断したのですから、間違いなく破壊できます」

エルネスティーネの言葉を聞いたアプリリアージェの微笑が深くなった。感情に変化があった証拠である。だが、彼女の中に去来する感情がいったいどういうものなのかは誰にもわからなかった。

「なるほど」

ロマンは深呼吸をすると続けた。

「こう見えて実は私も簡単なルーンを使えるルーナーの端くれなのだが、あなたは私のルーンについては何も言わないのだね？」

この問いかけにもエルネスティーネが答えた。

「それは簡単な話です。リリアさんはティアナにロマン様と握手をさせましたが、それはその後のゾフィーとの握手を自然に見せる為

だったのです。いきなりティアナをゾフィーに握手させるのは不自然ですから。それにそもそもロマンさんは嘘をついています」

「というと？」

「ロマンさんはルーナーではありませんね？」

「ふむ。どうしてそう思う？」

「私は何人ものルーナーを見てきました。ですから何となくですが、わかるようになりました。ロマンさんは儀仗を持っていません。拝見したところスフィアも身につけていないようです。儀仗を装飾品に変えることができるのは相当高位のルーナーだと聞きました。儀仗もなくルーンの力を溜めておくスフィアも持っていないルーナーはたぶんいないと思いました。ゾフィーも儀仗は持っていませんが、スフィアの首飾りをしていますね」

エルネスティーネの説明にロマンは納得したようにうなずいて見せた。

エルネスティーネとロマンとのやりとりを冷静に見守っていたアキラだが、実の所多少混乱していた。まるでアプリリアージェがエルネスティーネの体を借りてしゃべっているかのような錯覚に陥ったのだ。

そのアキラの心中を察したかのようにエルネスティーネはアキラに顔を向けるとにっこりと笑いかけた。

「そう言う事なので、そろそろ本題に入りましょう。簡単に説明すると、エイルの体の中には実は二人分の魂が入っていたのです。一人はエイル。そしてもう一人がエルデです」

「え？」

あまりにあっさりとエイルとエルデの事を告げたエルネスティーネの言葉に、アキラは内容を全て聞き逃してしまったような錯覚に陥っていた。

「体はエイルのもの。エルデの体は『時のゆりかご』にあったのでしょう。彼女はそれを見つけて自分の魂を本来の体に戻したのです。

そしてエルデの体はエイルと同じピクシィだった。そういう事です」
「彼女？そういえば男女と言っていたな」
「ええ。エルデ・ヴァイスはピクシィの女の子です。そして」
エルネスティーネは一度言葉を句切ると今度はロマンと向き合った。
冗談の類を口にしようとしているわけではない事は、真っ直ぐに注がれるエルネスティーネの眼差しを見ればロマンにもわかった。
だが次に告げられた言葉は、さすがに俄には信じがたいものだった。
「そして、これが重要な点ですが、そのエルデ・ヴァイスなる者は正教会の賢者なのです、ロマン・トーンさま」
「なんと」
緑色の目を大きく見開いて口を真一文字に結び、ロマン・トーン一等教授を見据えるようなアルヴィンの少女の表情には一点の曇りもない。
加えてエルネスティーネの言葉の信憑性を高めているのはアプリリアージェ達の表情だった。そこには「手に負えないお嬢様が突拍子もない事を口にしている」という雰囲気は全くない。その表情は静かなものだった。ティアナでさえこの場でエルネスティーネにかける言葉はないと決めているかのように冷静であった。
アキラはここに来てエルネスティーネが口にした事実よりも、むしろそれを告げる彼女の姿に感動を覚えていた。とてもただの十七才の娘が持つ存在感ではなかった。
エルネスティーネがシルフィード王国の王女である事を知っているからではない。そんな先入観などが入る余地もないほど、エルネスティーネが纏う「精霊波」はその場を完全に支配しているように見えたのだ。
アキラは思った。エルネスティーネは今までは王女という「本質」を敢えて隠していたのだろう、と。だが、同時にその考えが間違っ

ている事も、旅を共にしたアキラにはわかっていた。
いくつかの経験がエルネスティーネを「王女」にしたのである。
いやアプサラス三世亡き今は嫡子であるエルネスティーネを「女王」と呼ぶべきなのだろう。戴冠したのはあくまでも変わり身であり、本物は「こちら」なのだから。
まさに今、王の血族という「種」を内に持っていた少女は、ここへ来て自らそれを「発芽」させて見せたのである。

「賢者、ですと？」
エルネスティーネが口にしたあまりの事実に、絶句していたロマンがようやく唸るようにそう言った。「賢者」という言葉の意味を記憶の奥から引きずり出す事に時間がかかったわけではない。ましてやエルネスティーネの口から出た言葉の真偽を吟味していた訳でもない。目の前のアルヴィンの少女の言葉に嘘はない事はその長い人生に於いて多くの人間と接してきたロマンにとって、確かめるまでもない事だった。
言葉を口にした後で、ロマンは賢者とエルネスティーネの関係に改めて思いを巡らせた。
エルネスティーネがアルヴの国、シルフィード王国の要人である事はもはや間違いないと思われた。だが、そのシルフィード王国の要人と賢者という繋がりがわからなかった。
国内での一切の宗教活動を禁じているシルフィード王国の人間が賢者を「大切な仲間」だと言う。それでは正教会とシルフィード王国の一部の貴族が裏で関係を築いている事になる。
ロマンとてアプサラス三世の急逝については彼なりに疑問を持っていた。あまりに唐突な話だからだ。そこへ現れたシルフィードのおそらくは高位の爵位を持つ貴族が能力の高そうな護衛を伴って「外国」それも緩衝地帯とも言えるウンディーネ共和国連邦にいる。
それが何を意味するのか？
ただ、逃げてきたのか、それとも……。

ロマンの中では結論は出ていなかった。

「嘘ではありません。残念ながら今までは我々の方に嘘と駆け引きが確かにありました。しかしここからは嘘はなしです。私は駆け引きもいたしません。ただ、二人を捜す手助けをして欲しい。それが願いです。なにとぞお聞き入れ下さい」

具体的な話がエルネスティーネの口から出た事で、ロマンもようやく現実に立ち返る事が出来た。彼は小さく息を吸い込むとそれをゆっくりと吐き、呼吸を整えるようにしてから落ち着いた声で答えた。

「しかし、その者がおっしゃる通り賢者であれば、ましてやアルヴ族でないのならばご心配には及びますまい？」

「ピクシィでも、ですか？」

「ルーンで髪を染めたり目の色を変えたりはしていないのですか？」

「エイルはともかく、エルデはきっと瞳髪黒色のままでしょう」

「なぜです？なぜ敢えてそんな目立つような」

「それは……」

エルネスティーネはそこで初めて言葉を濁すと目を伏せた。王者のようにその場を支配していた彼女の「精霊波」が急にしぼむのをロマンは感じ、怪訝な顔になった。

それを見たアプリリアージェが、エルネスティーネに助け船を出した。

「彼女の連れであるエイル君がエルデ……つまり賢者ヴァイスについて、ネスティにある事を言ったのですよ。ネスティはその『ある事』をずっと覚えていたのでしょうね」

「ややこしいお話のようですが、その『ある事』、と申しますと？」

「エイル君はネスティの前でこう言ったのです。『エルデ・ヴァイスには長く黒い髪と漆黒の瞳が他のどの色よりも似合っている』、と」

それを聞いてアキラはあっけにとられたが、浮かんだ苦笑を隠す

為にとっさに片手で顔を隠した。
アキラに少し遅れはしたが、ロマンもアプリリアージェの言葉の意味が理解出来たようだった。目の前の少女が、なぜ必死に二人を案じるのかを。
顔を伏せていたエルネスティーネだが、ロマンが言葉を口にするより先に顔を上げて続けた。
「急がねばならないもう一つの重要な理由があります。私達は追われているのです」
「む……」
「エイルとエルデがアルヴ族ではない事はこの際問題ではないのです。私達は訳あってファランドールを旅しておりますが、人待ちで滞在していたヴェリーユで突然、新教会の僧兵達に襲われたのです」
その一言がまたもや沈黙を生み出した。
この先、エルネスティーネが何を言うのか？いや、どこまでしゃべるつもりなのか？　ファルケンハインもティアナも固唾を呑んでそれを見守っていた。彼らにしてみれば必要であればアプリリアージェが制止するはずであると考えていた。一任である。だから見守る事しか出来なかったのだ。
アキラはアキラで自分の中の情報を整理しながらエルネスティーネが言葉にする「情報」の整理に必死だった。
ヴェリーユでミリアと出会った事でアキラの思惑が大きく変化する事になった。今考えれば、ミリアは何らかの行動を起こす覚悟を決めのだ。そしてそれをわざわざ伝える為にヴェリーユに来たのであろう。アキラを自分の計画から完全に切り捨てるつもりであれば放っておけばいいはずである。黙っていてもアキラは状況を把握したならばとりあえずはエスカの元へ向かう予定であったのだ。
それなのにわざわざ会いに来たという事は、そこにはアキラが危惧するミリアの甘さが働いたとしか思えなかった。
それだけではない。一緒にヴェリーユからハイデルーヴェンまで

やってきた一行の中で、唯一アキラはあの窮地を助け、坑道に自分達を誘ったル＝キリアの「双黒の左」ことフリスト・ベルクラッセの「新しい主」が誰かを理解していた。

姿を見せぬまま坑道で道を塞いだ人物。そんな事をいともたやすくできる人間が誰なのかをアキラはよく知っていたのである。経緯は不明ながらル＝キリアの残党を配下に得た事で、ミリアは自分の護衛役としてのアキラを開放する事にしたのであろう。

護衛役が外されるのはいい。しかしル＝キリアがミリアの助言者や話し相手になるとはアキラは思えなかった。自分以外の誰がミリアの側で彼の荒唐無稽とも思える「夢」の話を聞けるのだろう。アキラは今でもそう自負していた。

だが……。

エルネスティーネが口にするアキラにとって未知の話。それを聞くに及んで、彼はミリアの思惑が違うところにあるのではないかと考えはじめていた。

言い換えるならミリアはエルネスティーネと賢者エルデの事を「知っている」という事である。

ならば自分も知りたい。賢者エルデという未知の人物がエルネスティーネ、いやこの世界にどう関わろうとしているのかを。

エスカと合流するつもりならばなおさらその情報は重要であった。ミリアの話ではエスカの懐には「大賢者」が入り込んだという。ならば「こちら側」にいる「賢者」からその情報を得るべきであろう。

「くれぐれも勘違いなさらないで下さい」

短い沈黙を破ったのはエルネスティーネ自身だった。アプリリアージェは何も言わない。いや、言うつもりがないようだった。見れば彼女はいつの間にか目を閉じていた。この場はすべてエルネスティーネに任せたかのように。いや「任せた」のではなく「お手並み拝見」といったところなのかもしれない。どちらにしろ積極的にエルネスティーネを制御する様子はなさそうであった。

「政治的な事を色々とお考えなのかもしれませんが、それは違います。私は政治や国益といった物事を背負うことなく、違う価値観の旗を仰いで旅をしているのです。先ほども言ったとおり、私は今、大切な人……大事な人ともう一度会いたいだけなのです。ここで合流しなければ二度と会えないかも知れません。なぜかそう思えるのです」

エルネスティーネの言葉は次第に熱を帯びていた。いつしか両手を広げ、その小さな体を一杯に使って大柄なアルヴのロマンに懇願していた。

「どうか」

ロマンは自分を見上げる少女と同じ高さまで視線を落とした。その場に膝を突いたのだ。

「どうかご安心下さい、気高き姫よ」

そしてそれだけ言うと、恭しく一礼した。それはまるで臣下が王に対してとる態度であった。

「あなたの目に何の迷いも無い事はよくわかりました。私もアルヴ族の人間です。あなたの為に出来る限りの事はいたしましょう」

そして今度は視線をアキラに向けた。

「このデュナンの青年の件もご安心下さい。あなたの大切な友人は、等しく我が友人。悪いようにはいたしませぬ。滞在場所なども考慮いたしましょう」

「感謝します」

エルネスティーネはそう言うとロマンに深々と頭を下げた。

「さて、そうなると込み入った話をするにはここはいささか狭い。椅子のあるもう少し広い場所でお茶でも飲みながらこれからの事を相談いたしましょう」

エルネスティーネはうなずくと、アキラに声をかけた。

「アキラさんもそれでいいですね？それから、エルデの件は隠していてごめんなさい」

アキラは両手を挙げてとんでも無いと言うと、アプリリアージェ

に水を向けた。
「今まで賢者だとわかっていて同道していたと言う事ですかな？」
アプリリアージェはにっこり笑ってうなずいた。
「色々と複雑な事情が絡んでいるのですよ」
「でしょうな」
「それに、ネスティはエルデの事しか話しませんでしたが、実はエイル君もすごい存在なのですよ。聞けばきっと驚きます」
アプリリアージェのその言葉には、アキラとエルネスティーネ、両方が同時に反応した。
「え？」
「なぜならエイル君はフォウの住人ですから」
アプリリアージェが告げたその言葉に対して、今度は何の反応もなかった。その場に居た全員が絶句していたのだ。
アプリリアージェは微笑んだままでネスティに向き合った。
「ネスティ。あなたが何をしゃべろうとかまいません。ですが、私がいる事を忘れてはなりません。どんな場合でも私は私のやるべき事を遂行するのみ。それが例えあなたであっても、です」
微笑みながらそう言うアプリリアージェの瞳の中で、部屋の照明であるセレナタイトの灯が小さくゆらゆらと揺れていた。
その言葉でエルネスティーネは誰が見てもわかる程表情を強ばらせた。しかしアプリリアージェから視線を逸らしはしなかった。
「無論です」

アキラはそのやりとりを見て、ヴェリーユで感じた妙な気分を思い出していた。
エルネスティーネとアプリリアージェの関係に対する疑惑である。ヴェリーユで僧兵と対峙していたエルネスティーネ。あの場面にあって護衛であるはずのアプリリアージェはその身を挺してまでエルネスティーネを救おうとはしていなかったのだ。
それは大きな違和感をアキラにもたらした。そして今、その時と

同じ違和感が再びアキラの中で頭をもたげていた。
アプリリアージェの口から告げられた「エイルはフォウの住人である」という衝撃の事実よりも、アキラはその違和感の方が重要事項だと感じていたのである。
しかし、ロマンは当たり前のように「フォウ」という言葉に反応した。
「フォウ、とおっしゃいましたか？」
アプリリアージェはロマンに向き直ると「ええ」と答えた。
「正確にはファランドール・フォウ。いわゆる異世界ですね。エイルはそこの住人です。本人もそう言っていますし、賢者エルデもそれについては本当の事だと言っています」
「なんと……」
「トーンさま」
その時沈黙を守っていたゾフィーが声をかけた。
「それが本当なら、もしやあの噂も？」
ゾフィーのその言葉にロマンはうなずいた。
「そうじゃな。噂は本当なのかもしれん」
「噂？」
エルネスティーネはロマンにそう尋ねた。
「フォウに関する噂があるのですか？」
ロマンは少し思案していたが、エルネスティーネの顔をじっと見つめると口を開いた。
「この施設はある方のお力添えで作られたものでしてな」
ロマンはそう言うと部屋の壁を手でペタペタと叩いた。
「あなた方もここへ降りてくるのに昇降機を使われたでしょう？あの仕組みもその『ある方』が考案したものなのです」
「『ある方』とは？」
これはアプリリアージェだった。
「その人がフォウと関係がある、と？」
ロマンはうなずいた。

「デュナンですが、この町では例外的にアルヴに協力的な方でしてな。とは言え出身その他、正体は不明です。突然このハイデルーヴェンにやって来て、ある意味で歴史を変えてしまうような発見や発明を次々と行ってみせたのです。陳腐な言葉を使うなら、いわゆる天才学者ですな。しかも相当に若い。私もこういうところで教鞭を執っていますから、天才と呼ばれる人間をずいぶん知っているつもりです。しかし、あの方はそんな生やさしいものではない。だからいつしかこう噂されるようになったのです。『まるでフォウから来た異世界人だ』と」

ロマンのその言葉はアプリリアージェの表情からいつもの微笑を剥ぎ取る程の力があった。なぜなら、ロマンの話が本当であれば、異世界人かどうかはともかく、少なくともその特殊な人物がこの場所を作ったのだとしたら、アプリリアージェ達は今、その人物の掌の上に乗っているようなものだからだ。

「その人の名は？」

例え名を聞いてもアプリリアージェが知っている名前ではない事はわかっていた。そんな特殊な人物の話を聞いていたら知らないはずがないのである。

「その方の名は、キセン・プロット。ハイデルーヴェンの統括教授長という地位にあるのですが、その名がふさわしくない程若い、男のデュナンです」

キセン・プロット。もちろん、誰も知らぬ名であった。

アプリリアージェはアキラと、そしてメリドに顔を向けたが、二人とも小さく首を横に振るだけだった。

# 第五十七話　深紅の綺羅

エイル達が通された「隠し部屋」は「部屋」と呼ぶにはいささか広すぎた。

いや、勝手にエイルが「隠し部屋」と思っていただけである。誰もそこが部屋だとは言っていないのだ。

「部屋と言うより工場の中みたいだな」

エイルがつぶやいた独り言にキセンが反応した。

「その直感はある意味正しいわね。ここは大規模な実験施設でもあるから」

最初にエイルとエルデが足を踏み入れたのは部屋ではなかった。書架の向こう側は階段室になっており、平均的な宿の寝室程度の空間に下りの階段が一つあるだけの場所であった。壁に埋め込まれていたルナタイトに灯が入り、はじめてそれがわかった。

そしてキセン・プロットの先導で二人はその「工場のような空間」を見下ろすような形で薄暗い階段を、それもかなり長い階段をゆっくりと下っていた。床までの距離が長いということは、それだけ天井が高くとられた部屋であるという証拠である。

階段の途中に踊り場があった。そこの壁に精霊陣が仕掛けられていたのだろう。全員が踊り場にたどり着いたのを確認すると、キセンは壁に手を触れ、その空間に取り付けられたルナタイトを一斉に灯して、薄暗かった部屋全体を見渡せるようにした。

「ようこそ、私の秘密工房へ。ここにお客様が来るのは久しぶりよ」

キセンはそう言って芝居がかった仕草で両手を広げた。

この部屋を見てエイルが工場という印象を持ったのも無理もない。キセンは工房と呼んだが、そんな言葉が似合わない程の広さがあっ

た。規模の大小を工房と工場という言葉で表すとしたら、そこはまさに工場であった。

キセンの後ろ側には金属でできた大小とりまぜた円柱型の貯蔵槽のようなものや、その貯蔵槽同士を繋ぐ為の磁器か陶器製の、これも様々な太さの管が所狭しと這い回っていた。

貯蔵槽の前にはそれぞれ小さな教卓のようなものがあり、管がつながっていた。

ひときわ目立つのが、キセンの背後、部屋の中心部分にある一際大きな貯蔵槽であった。

エイルの目測では全体の高さはデュナンの身長の三倍ほどで、幅、すなわち直径が三メートル程度であった。そしてそれだけは他の貯蔵槽と明らかに形が違っていた。

その主貯蔵槽らしきものは黒っぽい布で覆われていて、外からは正確な形はわからない。だが上部の丸みから察するに、他が円柱なのに対し、それはどうやら球形の貯蔵槽と思われた。外壁の厚さは不明だが、成人のアルヴが槽の中に入っても、楽にくつろげる大きさではないかと思われた。

キセン・プロット教授長の部屋から続く巨大な空間は、位置的には地下室と呼ぶべきものであった。ただし単純に地下室と呼ぶには巨大過ぎた。なにしろ外から眺めた建物の規模を考えると、その地下室は上に建つ建物をすべて飲み込んでもまだあまりある程の容積を誇っていたのだ。

「そもそもここは、いったいどこやろ？」

それに気付いたエルデは思わず天井を見上げた。

「え？単純にあの建物の地下じゃないのか？」

だがエルデは首を横に振った。

「あの建物の直下やないな。ここに来るまでに何度か空間転移させられてたんかもしれんな」

「え？まさか」

「今思えば、やけどな。ここに来るまでに何度か違和感があったんや」
「空間転移って……」
「ま、そのうちはっきりするやろ」
エルデはその疑問に関する話題をそこで打ち切った。
空間転移や所狭しと設置された不思議な貯蔵槽、無数に林立する教卓などもすべて謎ではある。だがエイルにはそれとは別に気になっていた事があった。
「何だろうな、この匂い」
エイルのつぶやきはキセンに向けたものではなく、もちろん隣のエルデに問いかけたものだった。
エイルがその少し甘い匂いに気付いたのは階段室に入ってすぐだった。ルナタイトが灯された後くらいである。階段を下りるに従い、その匂いはほんの少し強くなっていた。つまり、匂いの「元」に近づいているのだ。それはエイルにとっては未知の香りであったが、ほんの少しだけ似たものを知っていた。そしてその「似たもの」が大きな問題だったのだ。それがエルデに関係する事だからである。
問いかけた後、エイルはエルデの様子を横目で探った。しかしエルデは無表情で、特に変わった様子は無かった。
エイルはそれを見ると作戦を変える事にした。
「さっきの傷、もういいのか？」
エイルはエルデがスフィアを片手で握りつぶした時に負った怪我の事を言ったのだ。キセンが「嘘発見器」と呼んだ小型の西瓜ほどもあるスフィアは見事に粉砕されたが、その時にエルデは破片で手を切っていた。それなりの出血も伴っていたから、かすり傷とはいえないだろう。
もちろんエルデはハイレーンと呼ばれる回復専門のルーナーである。あの程度の傷はその後唱えたルーンで跡形もなく治っている事はわかっていた。
だから、実の所そう呼びかけたエイルの心配は別のところにあっ

たのだ。
「痛かったんじゃないのか？治癒ルーンは……」
そこまで言った時、隣のピクシイの少女はあからさまなため息をついてうつむいた。
「相変わらず回りくどいやっちゃな。『血を見ても大丈夫か？』とか、『お前、血を見ても平気になったのかよ？』とか、直接的な質問が何でできへんねん？」
言われてみればその通りであった。何をためらっていたのだろう。
エイルは改めて問い直した。
「……大丈夫なのか？」
「一つ」
「え？」
「聞け」
「あ、ああ」
「一つ。ウチは自分の血を見ても大丈夫や。匂いも同様や」
「なるほど、そうか。他人の血がダメって事か。俺はてっきり自分の血も駄目なのかと思ってたんだ。だからさっき血を流してても平気そうだったんで、あれ？って……」
「二つ」
エイルの言葉をエルデはうるさそうに遮った。
「最初の質問の答え」
「え？」
「アンタが想像している通り……この部屋に充満している……この匂いのうちの一つは、たぶん、いや間違い無く血の匂いや」
「わかるのか？」
「ウチの五感はアンタなんかより優秀に出来てるんや」
「そりゃどうも」
「もっとも、かなり希釈された感じやけどな」
「やっぱりそうか。で、オレにはわからなかったけど、血以外の匂いもあるってことか？」

「あるけど、そっちは不明や。もう一つのはウチにとっても未知の匂いやさかいな」
「そうか。なるほど」
「三つ」
「まだあるのかよ？」
「これが一番重要や」
「わかった」
「この匂いやったら、ウチは大丈夫や」
怒ったような口調でそう言うと、エルデはつないでいたエイルの手に力を入れた。
「四つ」
「さらに？」
エイルの反応を無視してエルデが次に口にしたのは、エイルがまったく予想していなかったもの……いや、予想できなかったものだった。
エルデはそれまでとは一変して、普段ですら聞いた事がないような柔らかな口調でこう言ったのだ。
「気にかけてくれておおきに、な」
「え？」
エイルは反射的に聞き直した。
口調と雰囲気がそれまでと違い過ぎて、今エルデが何を言ったのかがわからなかったのだ。
いや。わからなかったのではない。自分の耳を疑ったという方が正しいだろう。
あわててエルデの表情を確かめようと顔をのぞき込んだエイルだが、エルデは既にそっぽを向いていて、いったいどんな顔をしてその言葉を告げたのかを確認する事は出来なかった。
長く嗅覚を失っていたエイルは、その間でも想像で匂いを「感じ」ている場合も多々あった。時折感じないはずの感覚を記憶がでっち

上げるのだ。中でも血の匂いについては驚くほど巧妙に再現してみせる。エイルは夢の世界に居ても、無意識下でも、「記憶」が構築する血の匂いを嗅いでいた。忘れたくても忘れる事などは出来ない感覚の一つと言い換えた方が適切な表現かもしれない。

図らずもキセン・プロットが暴露したフォウでエイルが起こした惨事。あの時、自分の体が文字通り血に染まった瞬間から、血の匂いはエイルの体の一部になったようなものだった。

ファランドールにやってきて記憶をなくしたはずなのに、こびりついた記憶の残滓が血の匂いと縁を切る事をエイルに許さなかった。血を見る度に、嗅覚でも味覚でもなく、自分で制御できない別の感覚器官が反応するのだ。

もっともエルデが極端に血を嫌う事を知ってからは血を流さない闘いが多かったのだが、ラウの一件をきっかけにまた血を見る事が多くなっていた。

嗅覚を取り戻した今、脳裏にこびりついているその匂いに似たものがあると、ついついエルデの事が心配になってしまう。

だが確かにエルデの様子を見ても、取り巻くエーテルに乱れは感じられない。現時点では本人が言うように「大丈夫」らしかった。

自分の血は大丈夫だというエルデの理屈はわからないでもない。自分の血でも駄目だという人間の方が多いだろうが、自分の「匂い」と他人のそれとは全く違うものに感じる事はよくある事だろう。エルデの場合はそれにあたるのだ。

だが、この部屋に充満する匂いが血に似ている事を認めつつ、でもこの匂いは大丈夫だというエルデの言葉には多少なりとも違和感を覚えていた。いや、軽い疑問のようなものと言った方が適切だろうか。

それよりもこの匂いが血だとするなら、いったい何の血なのか？そしてなぜキセン・プロットの研究施設に血の匂いが充満しているのか。

そちらの方が気になってエルデの言葉はすぐに意識の向こう側へ

すり抜けていった。

「エイル……」

長い階段がようやく尽き、キセンに続いてエイルが地下の巨大空間の床に足を下ろした時だった。エルデは最後の一歩を踏み出さず、階段に留まったままエイルの手を引いたのだ。

振り向くエイルにエルデはささやいた。

「やっぱりこの女は信用できへん」

「どうしたんだよ？」

今更？という思いを込めてエイルがそうささやき返すと、エルデは首を小さく振って目を伏せた。

「ここはなんか変や。強力な結界が張ってある。それになんか嫌な感じがする……」

「何だって？まさか『エア』か？」

エイルが思わず発した声は、ささやきと言うには大きなものだった。案の定キセンがそれに反応して青緑色の長い髪をなびかせながら二人を振り返った。

「そうそう。言い忘れてたけど、ここではあなたのルーンは発動しないわよ」

キセンの言葉に敵意のようなものは感じなかったが、エイルは一応周りを見渡した。

だが人の気配、いや、少なくとも敵意や戦意を持つ意思の存在はまったくなかった。エイルが感じる限り、広い空間にいるのはおそらくキセン・プロットとエイルとエルデの三人だけのようだった。

「白状するとエアを作り出すスフィアや石を製造する事は出来ても、私にはなぜそうなるのかという仕組みがわかっていないのよ。実に興味深いと思わない？」

キセンはそう言うとその空間をぐるりと見渡した。

「だからこの空間がなぜエアになっているのかを私に尋ねてもムダ

よ、瞳髪黒色のルーナーさん」
「作り方はわかってるけど、仕組みはわからへん、やて？」
「そうよ。正確に言うと『どうすればそうなるかはわかるけれど、その現象を論理的に説明できない』と言う事ね」
キセンはそう言うと大げさに肩をすくめて見せた。
「さっき私が使って見せたエーテル体も同じよ。私はあれを作り出せるし訓練したからかなり精密に動かせる。でも、なぜそんなものが存在できるのかなんて理解は出来ていないのよ……。正直言うと、研究者としてはこれ以上の屈辱はないわ」
キセンがそこまで言ったところで、エルデはようやく床に下りた。上から見ると土のように見えた床は、暗い茶色をした石のタイルが敷き詰められていた。その表面は綺麗に平らになっており、まるで磨き込まれた硝子のようになめらかであった。

「くどいようだけど、もう一度だけ言うわ」
キセンはエイルとエルデに向き合うと、腰に腕を当てて胸を反らした。
「私は被害者。ええ。敢えて被害者面をするわ。そして『これ』があるから、私はここから動けないのよ」
エルデは目を細めてキセンを見やった。キセンからすればゾッとするような冷たい視線だったろう。教授長はその視線を長く受け止めている事ができず、すぐに目を逸らせると踵を返した。

「こっちよ」
そう言ってキセンが二人を案内したのは緞帳のような分厚い黒い布がかけられた、例の球状と思しき主貯蔵槽のような構造物の前だった。貯水槽を覆う布は一部が天井から吊られているようで、まるで舞台の緞帳のように上下動が出来るように仕掛けが施されていた。
「今からこの覆いを引き上げるけど、何を見てもくれぐれも冷静に頼むわよ」

キセンがそう言って近くにある棒に手を伸ばそうとした時であった。鋭い声が部屋に響いた。
「動くな！」
エルデだ。
彼女は短くそう怒鳴ると、次に早口でルーンの認証文を唱えた。
「ディファーダル・クリュナシフ・キュリク！」
「え？」
エルデの詠唱は相変わらず早口だった。しかも例によって前文や詠唱文は唱えない。エルデが操るのは認証文だけのルーンである。
つまりそれはキセンにとっては一瞬の出来事であった。
球状の貯蔵槽を覆っていた覆い布が緑色の炎を上げて空中にふわりと浮いたかと思うと、即座に細かい灰になって辺りに散っていった。
「なぜ？」
キセンはそれを見てあっけにとられていた。それはそうである。キセンの理解ではこの空間は『エア』のはずであった。ルーナーがルーンを使えない空間。それだけではない。フェアリーすらその能力を失う……あらゆる精霊波が存在しない空間。それがエアであるはずだったのだ。
しかし、現に瞳髪黒色のピクシィが唱えたルーンは発動したのだ。
その事実を目にして驚きを隠せないキセンは、目を大きく見開いてエルデの姿を凝視していた。だがそのエルデは、キセンの姿を見てはいなかった。エルデと、そしてエイルの視線の先はキセンを通り越したその向こう側……すなわち覆いが取られ、姿を現した球状の貯蔵槽と思しき物体に向けられていたのだ。
「うぐぅっ……」
エルデは言葉にならない声をのどの奥で発した。おそらく何かを叫ぼうとしてそれを押し殺したのだ。
だがエイルはこみ上げてきた言葉を飲み込む事はしなかった。す

ぐさま視線をキセンに移すと、睨み据え、そして怒鳴った。
「これは何です?!」
エルデを見つめたまま呆然としていたキセンだが、エイルのその怒鳴り声で我に返る事が出来た。キセンはすぐに目を閉じて少しうつむくと、数秒間静止したが、すぐに顔を上げ、エイルに向かってはっきりとした声で叫んだ。
「もう一度言うわ。私じゃない!」
「だったら!」
エイルも同じく叫び返した。顔を歪め、球体を指さして。
「だったらこれは……こんな事をいったい誰がやったんだよっ」

そう言ってエイルが指し示す先。そこにあったものは、まさしく硝子でできた貯蔵槽であった。水槽と言い換えた方がよりふさわしいのかもしれない。
この施設に設置されている他の貯蔵槽はすべて円柱で、どれも中が見えない金属で出来ていた。だが唯一の球体貯蔵槽だけは硝子で出来ていたのである。硝子自体にいったいどれくらいの厚みがあるのかはわからない。確かな事は球体には何らかの薄桃色の液体で満たされおり、その中に一人の人間がいるという事であった。
硝子の球体の中にいる人物は動かない。そもそも空気がない。容器にあたる硝子の球体全体が薄桃色の液体で満たされているのだ。
その球体に浮遊している人物は何一つ纏ってはいない。腰あたりまである長い金髪と白い肌を持つデュナン。それも若い女性だという事は、ガラスを通してもわかった。そして目を閉じてはいるが、その人物が相当な美貌の持ち主であることも。
――目は閉じられている。
だが、眠っているのではない。
意識が無いだけの状態でもない。
死んでいるのだ。
なぜそう確信するのか?

もちろん二人が瞬時にそう結論を出したのは、そこにわかりやすい理由があったからだ。ガラスの水槽に満ちた薄紅色の液体越しでもわかるそのふくよかな均整を描く肢体の持ち主は、自分の身長よりもいくぶん長い一本の槍で、背中から心臓を貫かれていたからである。

いや。

それは槍ではなかった。

若いデュナンの女を貫く棒の先には刃がない。ただ先に向かって細くなっているだけの木の棒であった。そして反対側、つまり上部には彫像のような物が取り付けられていたのである。大きな翼を広げた獅子が、その鋭い爪で球……おそらくスフィアと呼ばれる水晶を掴んでいる彫像であった。

それを見たエイルはその棒状の物体が何であるかを理解した。

儀仗。

それは間違い無くスフィアを取り付けた長い杖、ルーナーが持つ儀仗であった。

「あなたでなければ、いったい誰がこんな事を……」

エイルの叫びは、絞り出すような声に変わっていた。だが、その言葉は途中で止まった。

エルデがエイルの前に腕を出して遮ったのである。

エイルの言葉を引き継ぐように、エルデはキセンに向かって問いかけた。

「答えろ、キセン・プロット……いや、フォウからの異世界人ヴェロニカ・ガヤルドーヴァ！」

エルデの声はエイルの予想に反して低く静かだった。だが決してそれは冷静な状態を表していない事はエイルにはわかった。エイルを制した腕の先で握られている拳が、小刻みに震えていたのだ。

「言え！《深紅の綺羅》を背中から刺した虫けらの名を今ここで余に告げよ」

「あれが……《深紅の綺羅》？」
エイルの問いに小さくうなずいたエルデは、次の瞬間、自らの儀仗であるノルンを取り出した。そしてその頭頂部をキセンに向けると続けた。
「教えへんならウチがこの忌まわしい施設もろとも焼き払うたる！三聖《深紅の綺羅》の亡骸をお前のような虫けらの手元に置いとくわけにはいかへん。お前もこの設備も、この建物も何もかも、ウチが一瞬で全部灰にしたる」
エルデは言い終わると手にした儀仗ノルンをくるりと一回転させ、その尻で床をドン、と強く突いた。分厚い石のタイルという頑丈な床材が敷き詰められた床ではあったが、エルデの力に抗うほどの強度は無かったようで、音と同時にノルンを中心に大きなヒビが三方に走った。
「ちょ、ちょっと待ってって。早まらないで。ちゃんと説明するわよ」
石のタイルを簡単に割って見せたエイルの力に怯えたのか、あるいはルーンが使えないはずの場所で何の苦もなく覆い布を灰に変える力に危険を感じたのか、はたまた詠唱文のみでルーンを発動させる異能ぶりに驚いたのかは定かではないが、そう言ってエルデを制するキセンの顔は引きつっていた。
「ここを破壊しては絶対に駄目よ」
こわばった顔のまま、続けてキセンはそう叫んだ。
「この場所があるから、今この世界は……ファランドールは何とか平静を保っていられるんだからっ！」
キセンの言葉はエルデの表情をさらに険しくした。
「ファランドールがどうなろうとウチの知った事やない。とっととウチの質問に答えーやっ！」
一転、エルデは大声でそう叫んだ。さっきの低く静かな声は鳴りを潜めていた。

エルデは儀仗ノルンの頭頂部をもう一度キセンの目の前に突きつけ静止させた。おびえるキセンにかまわず今度はそのまま振り上げると、力を込めてそれを床に叩きつけた。さっきとは比べものにならない音と衝撃が広い部屋に響き渡った。タイルが割れるどころではなかった。ノルンが叩きつけられた場所を中心に大きく陥没したのだ。今度はヒビなどではなく、タイルは粉砕され、その場にかるく粉塵が舞った。その埃の下に出来たすり鉢状に凹んだ穴の直径は、ゆうにキセンの身長ほどあり、エイルは床の陥没の端で体勢を立て直す必要に迫られていた。

「おい、危ないだろ！」

思わず文句がエイルの口を突いて出た。だがエルデはそれを無視して刺すような視線をキセンに向けたままだった。

「ず、すいぶん丈夫な杖ね……」

引きつった笑いでそう言うキセンには、エルデは反応した。そのこめかみに血管が浮かぶのがエイルには見えた。

「今度は頭の上に落としたる！」

エルデは言うが早いか再び儀仗ノルンを振り上げた。キセンはそれを見て両腕を突き出して制した。

「話す。話すってば！」

だが、エルデは既に儀仗を振り下ろしていた。そしてそれは引きつった顔で制止するキセンの足下に打ち下ろされた。

「きゃああ！」

悲鳴と共にキセンは陥没した床で足下を掬われ、その場に尻餅をついた。

「話すんやったら早よ話せ。そやないと次はお前のその自慢の青緑の髪が血で真っ赤に染まる事になるで」

頭上でエルデのその声を聞いたキセンは、部屋の空気が変わるのを肌で感じた。ある予感をもっておそるおそる顔を上げると、そこには三眼で自分を見つめる恐ろしい程美しい顔をしたピクシィが自

分を見下ろしていた。
「は、話すって言っているじゃない」
思わず口にしたその言葉はほとんど悲鳴に近かった。
だが、エイルはそれでもキセンが人並み以上に度胸が座っている人物であることを認める事についてはやぶさかではなかった。
なぜならキセンはその状況でなお、エルデに文句を言うだけの「意地」があったのだ。ファランドールには、エルデのあの顔を見てなお、突っかかる強さを保てる人間はいないだろうと思われた。
「こっちの訳も聞かず、いきなりひどいじゃないっ！私は最初から全部話すつもりだったのよ。だからここに案内したんじゃない！」
「せやったらもったいぶらずにとっとと話せ。《深紅の綺羅》を刺したのは誰なんや？」
「――『星を呑む獅子』」
キセンが発したその一言は、エルデの動きをぴたりと止めた。
「『星を呑む獅子』やて？」
「知ってるのか、エルデ？」
「いや、知らん」
「知らないのかよ！」
「知らんけど、ちょっと思い当たる節はある」
エルデはそう言うと改めて球状の貯蔵槽、いや密封された金魚鉢のような水槽に目をやった。いや、水槽ではない。薄い紅色の液体にゆったりと漂う《深紅の綺羅》の背中に突き刺さった、翼を広げた獅子の彫像に視線は注がれていた。
エイルもエルデの視線を追うようにその儀仗に目を向けた。
「ひょっとして、あの儀仗の名前なのか？」
エルデはその問いに答えるようにうなずいた。だが顔はエイルではなく尻餅をついたままのキセンに向けた。
「今からウチがお前に三つの質問をする。そのよう出来たおつむを使うて、簡潔に答えてもらおうか」

「いいけど、私の弁明を聞いてくれる時間はちゃんととってくれるんでしょうね？」
「一つ目」
エルデはキセンの言葉を無視した。
「『星を呑む獅子』はあの儀仗の銘やな？」
キセンが見上げる目の前のエルデの額には三番目の真っ赤な目が開いたままだった。無表情なエルデからは感情や思惑は一切読み取れなかった。
「私の正当な要求を認めてくれないなら答えないわよ」
エルデはキセンの目の前に突きつけていた儀仗の頭頂部を振り上げた。無表情のままで。

「やめろ、エルデ！」
それを見たエイルが大声で怒鳴った。それはキセンも思わずびっくりするほどの叫びで、切羽詰まった感情が込められていた。
エイルは知っていたのだ。こういう状態のエルデに譲歩の余地は全くない。つまりエイルはエルデを止めなければならなかったのだ。
幸いな事にエイルの声にエルデは反応した。振り上げた儀仗ノルンを頭上でぴたりと止めるとエイルに顔を向けた。
「止めるな、エイル。余の問いに答えるつもりのないこの虫けらには、もはや用はない」
「待てって。今はとにかく情報収集が必要だって言ったのはお前だろ？その情報源を自分で潰してどうするんだよ」
エルデの声は必死だった。
そしてそれはキセンにも伝わった。たった今、自分がどういう状況に置かれたのかを理解した瞬間、背筋に冷たい物が走った。同時に全身の毛穴という毛穴が開くのを感じていた。
キセンの目の前の異形の少女は、本当に儀仗を頭に振り下ろすつもりだったのだ。
「プロット先生、あなたもここは素直に答えてくれ。こうなったコ

イツに冗談や駆け引きなんて通じないんだぞ。先生の言う弁明とやらはオレがこいつに土下座してでも頼んで、絶対聞いてやるから。だから……」

「わ、わかったわ。答える。答えるわ」

「頼みます」

「答えは『その通り』よ。正確に言うと『星を呑む獅子』はあの儀仗の頭頂部にある彫像の名前で、儀仗そのものじゃないわ」

「二つ目や」

エルデはそういうとゆっくりと儀仗を下ろした。だがその場から立ち上がれないように、尻餅をついたままのキセンの目の前に頭頂部を突きつける事は忘れなかった。

「『星を呑む獅子』は呪具の銘やな？」

「そ、そう聞いているわ。真偽の程までは私は知らない」

「三つ目の質問や。持ち主は誰や？所属と正式な名前を言え」

キセンは蒼白な顔をエイルに向けた。

「知らないって言っても駄目……よね？」

「死にたいんですか？」

エイルはエルデの代わりにそう言った。キセンはその声を聞くと観念したように目を閉じた。

「持ち主の名前はサミュエル・ミドオーバ。シルフィード王国の近衛軍大元帥にして、バード長の地位にある人物よ」

キセンが口にした最後の答えに、エルデは反応しなかった。いや、全ての答えに対して一切表情は動かしてはいなかった。

ただ変化もあった。最後の答えを聞いた後、少し間を置いてからであるが、キセンの眼前に付き出していた儀仗を収めたのだ。

それを見てキセンはほっとため息をついた。だが立ち上がろうとはしなかった。おそらくは立ち上がれなかったのだろう。

「この私が脅しに屈するなんて。おまけに不覚にも腰が抜けてて体に力が入らないわ。この始末、いったいどうしてくれるつもり？」

文句とも脅しともとれるそのキセンの言葉にもエルデは何も答え

なかった。
「その弁明とやらを聞こか」
静かな声にキセンは思わず目を懲らした。もう目の前に三眼の賢者はいなかった。
長く黒い髪の少女が、底が見えない程深い黒をたたえた瞳で自分をじっと見つめているだけであった。

「エイルも、落ち着いたか？」
エルデはそうエイルにも声をかけた。
「え？」
「いや、ええねん」
エイルはその時初めて、エルデの意図……一連のエルデの行動が持つ意味を理解した。
もちろん自分からキセンに質問がしたかったのだろう。だがそれよりも激高したエイルの感情を抑える為にエルデは自らが前に出たのである。
エルデは心配……いや、それもあるが、エイルが激高する事自体をおそれているのだ。確かに「冷静になれ」と言われて「ハイそうですね」と冷静になれる人間は少ない。エイルも例に漏れず、そんな事を言われても素直に従うどころか逆に血圧を上げる可能性の方が高かった。
人それぞれであろうが、エイルの場合は誰かが同じように激高すればかえって落ち着きを取り戻す性格のようだ。長く体を共有していたのである。つまりエルデはエイルの性格をかなり把握していたという事であろう。
加えて、キセンとエイルでは交渉力という舞台に於いて、その役者が違いすぎた。それら全てを文字通り冷静に計算……いや勘案してエルデは今の威嚇行動を見せたのだ。
結果として短時間でキセンから核心を引き出す事に成功したエルデに、エイルは改めて底知れぬ恐ろしさと、同時に頼もしさを感じ

ていた。

「さっきも言った通りよ。私は《深紅の綺羅》の殺害に一切、関与していない。だから弁明と言う表現は正確じゃないわね。でも、この話を続ける前に、私からも一つ質問があるわ」

「何や？」

この申し出には、エルデは素直に反応して見せた。

「あなたはあの水槽の中の人間が本物の《深紅の綺羅》かどうかを敢えて尋ねないのね」

「そやな」

エルデの答えはそっけないものだった。

「あなたは《深紅の綺羅》と面識があるという事ね？」

だが、エルデは即座に首を横に振った。

「だったら、なぜ？普通最初に確認しそうなものだわ。他の誰でもない、三聖の一人がこんなところにある水槽の中で死体になって浮いてるなんて、普通は信じないわ」

そう言うキセンの顔には生気が戻ってきていた。

「そうやな。間違い無いとは思うけど、言われてみたらその通りや。ほんなら念のために確認しとこか」

「確認？」

怪訝な顔をしたキセンには例によって反応せず、エルデは儀仗の頭頂部に向かって声をかけた。

「エルデ・ヴァイスの名に於いて命ずる。出でよ、シグ・ザルカバード」

「え？」

キセンはエルデが口にした人物の名を知っていた。だからこそ我が耳を疑ったのだが、すぐに今度は目をも疑う事になった。

空中に、禿頭のアルヴの姿が浮かび上がっていたのである。

「話は聞いてたやろ？」

エルデは現れたシグに向かって問いかけた。

「あれは《深紅の綺羅》か？」
シグ・ザルカバードのエーテル体は丁度エルデとキセンの間に浮かんでいた。エルデとは向かい合っている格好だ。つまり、水槽を背にしていたのである。
だが、シグはエルデの問いに対して《深紅の綺羅》が浮かぶ水槽を振り返る事はしなかった。
「間違いありません。体を貫く儀仗が『星を呑む獅子』と聞いて事の経緯を納得もしました。ただ……」
「ただ？」
「死んでいるという表現が正しいかどうか」
「どういう意味だ？」
「正確には入れ物である肉体は生きていると言えます。もちろん心臓は動いてはいません。しかし肉体を形成する細胞はまだ生きている、と言ったところでしょう」
「……血か？」
「左様です。《深紅の綺羅》の肉体は自らの血液の中にあって消滅せず、形を維持しているのでしょう」
「おおきに。詳しい話はまた聞くわ。この場所ではエーテルの消費が激しいやろし、長居は無用や」
エルデの言葉が終わると同時に、シグの姿はかき消えた。

エイルはシグの言葉よりもエルデの最後の一言が気になった。つまりこの場所がエアであることを思い出したのである。そのエアでエルデがルーンを使っていた事も。
「エルデ、お前はエアでルーンが使えるのか？だったらジャミールで……」
そのエイルの言葉をエルデは遮った。
「その話は後や。アンタの想像通り、今のウチならあそこでもルーンが使える。でも、あの時は無理やった。今はそれだけ言うとく」
そして再びキセンに向きなおった。

「本人を直接知る人間に確認した。改めて弁明とやらを聞こか」
「あなたは……」
今目の前で起きた出来事に声をなくしていたキセンは、それだけ言うとゴクリとツバを飲み込んだ。その先を続けるためには二、三度深呼吸をする必要があった。
「あなたは《真赭の頤(まそほのおとがい)》を眷属か使い魔にでもしてるっていうの？」
「はあ？」
「だって、大賢者《真赭の頤》は確か三年くらい前に処刑されたと……」
「ふん。そう言う情報源は持っているみたいやな。新教会から仕入れているってところか？」
「情報源は新教会だけじゃないわ。私はもう一人の三聖《蒼穹の台(そうきゅうのうてな)》も、もうこの世にはいないという情報も持っているのよ」
「え？」
キセンのその言葉には、さしものエルデも驚きの顔を隠せなかった。もちろん、《蒼穹の台》を知るエイルも。
さすがにそれは驚くべき情報と言えた。
「その様子だとこの話はまだ知らないようね」
「確かなんか？」
「私が見たわけじゃないから確かかどうかはわからないわ」
「誰が、いつ？いつだ？」
エイルは思わずそう問いかけた。
無理もなかった。現世の時間で一月ほど前に、ジャミールからヴェリーユへ伸びる「龍の道」と呼ばれる横穴ににた空間で、二人はその《蒼穹の台》に会っているのだ。
キセンの言う事が本当ならば、龍墓に入っているほんの少しの間に、ファランドールは何かが大きく変わってしまったと考えざるを得なかった。
「アプサラス三世が崩御するのと同じ頃よ。亡き者にしたのは《深紅の綺羅》の時と同じ人間、と言えばわかるでしょ。皮肉にも《蒼

穹の台》は行方不明だと思い込んでいる《深紅の綺羅》の行方を尋ねに来てまんまと罠にはまってやられたそうよ」

「え？アプサラス三聖の崩御って……」

エイルが口にしかけた言葉を、エルデは儀仗を目の前に付き出して制した。

エイルの疑問はエルデも当然持ったはずである。なぜならエイル達が《蒼穹の台》と最後に出会ったのは、アプサラス三世が崩御してしばらく経った後の話だからだ。

キセンの持っている情報は、時系列に矛盾がある。

考えられる理由は二つ。

死亡時期についての情報が明らかに間違っているのか、情報自体は正しいが、真実ではないか、である。要するに後者は《蒼穹の台》が死んだふりをしているという事になる。

だが、エルデはそれよりも殺害したという相手に興味があるようだった。

「三聖を次々と亡き者にするサミュエル・ミドオーバっちゅう奴は、そんな事をして、いったい何をするつもりなんや？」

キセン・プロットとサミュエル・ミドオーバとの間に何らかの繋がりがあるのは、もう間違いがなかった。その口ぶりから察するに、エルデはキセンの情報は誤報であると結論づけているようであった。ここで《蒼穹の台》の情報を問いただすよりもその向こう側にある人物について知る事の方がよほど重要……エルデはそう瞬時に切り替えたのだ。

事実サミュエルが自ら儀仗をその背中に突き立てて殺害した《深紅の綺羅》の体が、キセンの研究施設に存在しているのである。そこに繋がりがないと考える方がおかしいと言えるだろう。ましてや罠とはいえ三聖を手にかける事ができる人物である。かつてはエルデ自身が「信用できぬ人間」と評したその危険な存在についての情報は多い方が良かった。

「言え、キセン・プロット。お前はミドオーバ近衛軍大元帥に何を頼まれてるんや?」
キセンはそこで唇を噛むと、エルデを睨み付けた。
「それをさっきから言おうとしているんじゃない!いい?私は頼まれたからやってるんじゃないのよ。死にたくないからここでこうやってこの体を生かしているのよ」
「どういう意味や?」
「《深紅の綺羅》の体を、私がこうやって維持しているのよ」
エルデとエイルはお互いに顔を見合わせた。
「死ぬのは私だけじゃないわよ。《深紅の綺羅》の肉体が滅びたら、いったい何が起こるかわかってる?いえ、わからないでしょうね。きっとわかっているのはほんの一握りの人間だけ。いい?言うわよ?《深紅の綺羅》が消滅したら、ファランドールから人間がいなくなるのよ。どう?こんな話信じられないでしょ?でも、ほぼ間違い無いわ」
そう叫ぶキセンの目には、いつの間にか涙がにじんでいた。冗談や強がりではなく、心の底からその言葉を絞り出しているかのようだった。
「だから、あなただったら、この話を信じると思ってここに案内したのよ。打開の為に役に立ってくれるかも知れないって思ったのよ。わかる?私の気持ちが?」
儀仗の戒めがなくなっていたキセンだが、この時になってようやく立ち上がった。そしてエルデに向かって一歩、いや二歩踏み出した。
「不幸なのか幸運なのかわからないけど、私が機会に恵まれているのは間違いないわ」
「何の話や?」
「偶然もここまで行くと仕組まれたものかと勘ぐってしまう程よ。まさか本当にあなたのような存在に出会えるなんて……」
「さっきから何をごちゃごちゃと……」

キセンはエルデに皆まで文句を言わせなかった。
「私を普通の人間と思わない方がいいわよ。だって私はあなたが何者か知っている。だから……」
そう言うとさらに一歩進んだ。そして儀仗を持つエルデの右手を両手で握りしめた。
「だから、助けてよ。お願い……」
それだけ言うと、キセンはその場に膝を突いて崩れ落ちた。
エイルの行動は早かった。慌ててキセンの側に走り、前屈みになっているキセンを助け起こした。
「教えて下さい。あの体が滅したら、いったいどうなるって言うんです？」
「結界が、消えるのよ」
「結界？この部屋のか？」
これはエルデだった。
キセンはうつむいたままでゆっくり首を左右に振った。
「何の結界や？」
「《深紅の綺羅》が封じているのは……《黒き帳（くろきとばり）》よ」
「え？」
「《黒き帳》を《深紅の綺羅》が結界に閉じ込めていたのよ。その結界は彼女が死ぬと消滅するの。だからサミュエル・ミドオーバは肉体だけを生かしておくよう、私に頼んだのよ」
キセンのその言葉を聞いたエルデの手から、弧を描いてゆっくりと儀仗が離れた。思わず儀仗を握る手を緩めたのだ。それはつまり、エルデが大きな動揺を受けた事を意味していた。
普段なら手を離しても空間に留まっているはずの儀仗ノルンはしかし、主の制御を完全に離れ、重力の法則に従って床に落下した。
大きな音と共に床にぶつかったノルンは、辺りのタイルを粉砕し、弾むこと無くそのまま床にめり込んだ。
無言の三人は、その轟音が壁を反射し、やがて広い空間に吸い込

まれて消えていくのを聞いていた。

# 第五十八話　もう一つの秘密

「《黒き帳（くろきとばり）》やて？」

エルデは絞り出すような声でそうつぶやいた。

エイルはエルデの顔をのぞき込んだが、その表情は今までになく険しいものだった。

「《黒き帳》って、三聖の一人だよな？」

エルデはうなずいた。

「ファランドールで、絶対関わったらアカン人間選手権があったら、ダントツで一等賞総取りや」

「わかりやすいのかわかりにくいのかわからん例えだな。だいたい総取りって何だよ？」

「それ以上の例えが思いつかんくらいその例えの通りの存在や」

「お前でも全く歯が立たないとか言ってた、あの《蒼穹の台（そうきゅうのうてな）》よりヤバいっていうのか？」

エルデはそこで表情を崩した。苦笑とも嘲笑ともとれない笑いを浮かべ、エイルの質問に小さく鼻を鳴らした。

「《蒼穹の台》より力の強いルーナーがおったらお目にかかりたいもんや」

「いやいやいや。オレはお前が何を言っているのか全然わからねえよ。整合性とか自分の言葉に責任を持つとか、そういう概念がお前にはないのかよ！」

「《黒き帳》とか《蒼穹の台》の話題の前ではそんなもん、些細な問題や」

「いやいやいや！」

「ほんなら、アンタにわかりやすいように赤ちゃん言葉で言うたるわ。《蒼穹の台》は最強。《黒き帳》は最悪や。単純でわかりやすいやろ？」

「だ・か・ら！全然わからねーって！最強とか最悪とか、ガキの形

容詞だぞ？そもそもそれ、比較じゃないよな？」
「これよりわかりやすい言い方は森羅万象を全て漁っても存在せえへん」
「森羅万象とか、バカ言ってんじゃねえよ」
「バカはアンタや！」
「オレはアホじゃないのか？」
「アホでバカでスカポンタンや！」
「だからスカポンタンって何だよ！」
「ああ、うるさいうるさい！あんた達はガキんちょか！」
キセンはそう叫ぶと手を叩いて言い争うエイルとエルデを止めた。
「最強とか最悪とか、私たちがいくら稚拙な順列つけても、そんなのあいつらには意味はないのよ。どっちにしろ、結界がなくなったらこの世界がとんでもないことになるっていう事だけは確かよ」
「確かなのかよ？」
キセンの言葉を受けて、エイルはエルデにそう訪ねた。だがエルデは首を横に振った。
「《黒き帳》には会うたこともないのに、ウチが知るわけないやろ。というか、結界に封じられているっちゅう話も初耳や」
「だったら名前を聞いただけでなんであんなに驚いたんだよ？というか、なんで最悪とかわかるんだよ」
「それは……」
エイルの問いかけに、エルデは口ごもった。
「その子の口からは言いにくそうだから、私が教えてあげるわ」
キセンはそう言うとエルデとエイルを見比べた。
「長く一緒にいるって言うわりに、あなたは何にも教えてもらってないのね」
これはエイルに対しての言葉である。
「そんなに秘密にしたい？どうせいつかバレるのよ？」
そしてこれはエルデに向けて投げられた言葉であった。
「言っちゃうわよ？いい？」

そしてこれもエルデに向けたものだ。
「そんなに知りたいんか？」
エルデはしかし、キセンではなくエイルに顔を向けてそう言った。
「言っておくがな」
エイルはため息をついた。
「オレはお前達が何をもったいぶってるのか全くわかってないからな」
「ほんなら教えたる。知った後に『もうイヤー！記憶を消してー』とか泣き叫んでも知らんからな」
「いやいやいや。何だよそれ」
「三聖は人間やないんやっ」
エルデはエイルの言葉を無視してそう叫んだ。

「え？」
虚を突かれたエイルは言葉を飲み込んだ。
「比喩やない。文字通りの意味や。種族として人間、アルヴやデュナンやピクシィとか言う人間の種とは全く違う生き物なんや」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。いきなり何の」
「人間は三聖の種をこう呼ぶんや。『化け物』っちゅうてな」
「正しくは亜神、だけどね」
怒鳴るようなエルデとは対照的に冷静な低い声でキセンが補足した。
エイルはエルデが突然何をしゃべり出したのか理解できなかった。だが、合いの手のようにキセンがそう告げたせいで、エイルの言葉の意味を徐々に現実のものとして咀嚼し出している自分を見いだしていた。
エイルが実際に出会った三聖は《蒼穹の台》ただ一人である。だが、その人物がほかのルーナーとは明らかに違う存在感を持っていた事は間違いなかった。空間転移や『神の空間』と呼ぶ圧倒的な理不尽さを誇る力場を作り上げる事も身をもって知っている。一見す

るとただのアルヴィンの少年にしか見えないその姿形の向こう側には、他を圧する力がある。誰がなんと言おうと、エイルにとって三聖が持つ力が人間のそれと同列に語れない程強いものだという事については、もはや何の疑いも持っていなかった。

しかしそれは飛び抜けたルーナーとしての能力の高さから来るものではないのか。修行とやらで勝ち得た成果ではないのか？

なぜなら……

「でも、あいつはどう見てもアルヴィンだったじゃないか。それにあそこの女の人、あれが《深紅の綺羅》だっていうんなら、あれもデュナンだろ？化け物って言われても……」

エイルはスフィアに満ちたうす紅色の液体の中に浮かぶ《深紅の綺羅》を指した。

「……」

指さす先を、エルデの視線は追わなかった。エイルをじっと見つめる黒い瞳には、さっきまでの怒りに変わり、言いようのない悲しみが浮かんでいるように感じられた。

「あははは。あなた、正気で言っているの？」

キセンは乾いた笑い声を響かせた。

「どこの世界に三眼を持つ人間がいるのよ？」

その言葉は、あまりに単純な問いかけであった。だがそれは、エイルの心の奥底を針のような鋭さで貫いた。

「ファランドールだろうがフォウだろうが、三眼は人間じゃないのよ。そうだわ。エイル君だってフォウで三つの眼を持つ存在を見たことがあるでしょう？」

キセンの指摘に、エイルは絶句した。

キセンの言う通りである。フォウにも三つの眼を持つ人に似た存在がある。

そう。人に似てはいるが、それは人ではない。

それは「神」であったり「天」と呼ばれることもある。そして「化け物」と呼ばれるものもまた多く存在した。

ただしすべては架空のものである。宗教や伝説が作り上げた本当には存在しない、事実を超越した観念とも言うべきものである。

それが、ファランドールでは存在している。

簡単な事だった。キセンの言葉を受け入れてしまえば全てがすっきりする。

賢者は人とは違う異形の存在。化け物なのだと。

「賢者は全員人ではない、亜神っていうヒトとは違う種だっていうのか？」

キセンの言葉を認めてしまうと、もちろんそうなる。

「ラウやファーンも化け物だって言うのか？」

エイルはそれは認めたくなかった。なぜなら、それを認めてしまうと、大事なことを素通りするわけにはいかなくなるからだ。ラウやファーンという人物をキセンが知っている訳はないのだが、エイルにとってはそんな事はどうでも良かった。認めたくない事を言うキセンに、ただ言葉を投げつけたいだけだったのだ。

「ラウやファーンって言う賢者の事は知らないけど、君の問いに対する答えは『否』よ。賢者と三聖は全く違う存在なのよ、エイル君。まあ、私から見たらどっちも同じ。あの能力はただの化け物だわ」

「あなたの感想を聞きたいんじゃない」

エイルはそう言ってキセンに一瞥をくれると、目の前の「相棒」の肩に手を乗せた。

「人間なんだよな、賢者は」

キセンは「三聖」は化け物だと言った。だがそれは賢者を指すものではないという。そうなると三眼は人ではないと言う前提は崩れる。

エイルにとってファランドールは異世界である。当然自分の居た世界と大きな違いがあってもおかしくはない。現にフォウには存在していない人類、アルヴ族がいる。アルヴもアルヴィンもダーク・アルヴもフォウではおとぎ話にしか登場しない種なのである。

だから三眼という存在も受け入れていたのだ。
異世界なのだから、と。
キセンの言葉はその考え方をいわば初期化する一言だった。さらに言えばそもそも化け物という言葉を使って、人と違う存在を肯定したのはファランドールの住人であるエルデ・ヴァイスなのだ。
つまり……

「賢者はもともとは人間や。それは間違いない。ウチがアンタに話した修行云々も嘘やない。それは信じて欲しい」
エルデはそう言ったが、言葉に力がなかった。勢いをつけてしゃべり始めたのはよかったのだが、ここに来て声に力がなくなっていた。
「賢者になるまでは間違いなく人間や。でも確かに三眼に……賢者になった者が果たして人間かどうかは……定義としては……」
後半は消え入りそうな声だった。
言いにくいというものではない。なぜならエルデは自分自身のことを言っているのだ。だが、キセンが告げた一言が、エイルのその考えをも吹き飛ばした。
「まあ、確かに賢者については議論の余地はあるかもしれないわね。でもその子が言ったのはそもそも三聖達の種族の話よ。人間が化け物になるとかはまた別の話。そうよね、エルデ・ヴァイス？」
「そやからそう言うてるやろ？三聖は人とは違うんや。人からみたら化け物なんや！」
「ちょっと待ってくれ」
エイルはそう言ってエルデとキセンに向かって両手をつきだして見せた。
「ちょっと整理させてくれ」
「どうぞ。間違いを指摘するのは得意よ」
キセンは片方の眉を上げてそう言った。方やエルデは何もしゃべらなかった。

「三聖《黒き帳》は結界に閉じ込められている。そして《黒き帳》を結界に閉じ込めているのはここにいる《深紅の綺羅》の力。でも《深紅の綺羅》はすでに死んでいる。そうだよな？」
「そうね」
キセンはこともなげに答えた。
「でも《深紅の綺羅》の遺体をここから動かしたり、埋葬したり火葬にしたりすると結界が破られる。つまり《深紅の綺羅》は死んでも結界を維持する力があり、あなたはその力の維持を担当している。要するにこの部屋の維持管理」
「合ってるわよ」
「死してなお、三聖の一人を閉じ込める程の結界維持力……聞いただけでもとんでもない力だって思うけど、そもそもその力の持ち主である《深紅の綺羅》自身が人間じゃない。そして《深紅の綺羅》と同じ三聖の《蒼穹の台》も《黒き帳》も人間じゃない。三人とも亜神と呼ばれる存在」
「言った通り」
「じゃあ、あなたはその亜神のうち《黒き帳》が、もし結界を破ったとして、何をしでかすかを知っているって事だよな？」
「そうだとも言えるし、違うとも言えるわね」
「あなたはまたそういう事を言う。知っているなら教えてくれ」
「《黒き帳》が何をするかなんて私にはわからないわ。でもね、亜神が三聖を残してほぼ絶滅した理由を知れば、私とその子がなぜ《黒き帳》を恐れているのかがわかるわ。いい？亜神を絶滅に追い込んだのは人間だけど、黒幕というか張本人は《黒き帳》かもしれない」
「何だって？」
「経緯はどうあれ、ここまで言えばもう想像がつくでしょう？　《黒き帳》が次に絶滅させようと狙うのは人間じゃなくて？」
キセンは簡単に言うが、エイルには簡単に想像がつかなかった。亜神を全滅に追いやったなどという話がそもそもわからない。それ

以前にエイルは亜神という存在を知ったばかりなのだ。
そこまで考えて、エイルは隣の「相棒」をみやった。キセンの言葉はエイルではなくエルデに向けられたものだと気付いたのだ。
エルデの表情は、果たして苦渋に満ちたものだった。
「まさか？」
エイルの問いかけには様々な感情が込められてた。それはエイル自身でも言い表せないような複雑な思いばかりだった。
だが、その「まさか」なのだ。
エイルは改めて瞳髪黒色の少女を見つめた。
例え三千年間現世を離れていたとしても、十年近くは現世で育ってきたのだ。星歴四千年代の世情を知らぬはずがない。ましてやエルデが師事したのは大賢者《真赭の頤（まそほのおとがい）》である。市井に暮らす一般の人々とは比べものにならない程の知識を有した人物である。
エルデが知らないわけがないのだ。だから《黒き帳》の名前に反応した。「最悪」だと評価したのだ。

「《黒き帳》の一族が持つのは滅びの力なんや」
エルデは仕方がないといった風にゆっくりしゃべり始めた。
「三聖にはそれぞれ役割がある」
「それは普通に正教会関係の仕事の事じゃないのか？」
エルデは首を横に振った。
「もう少し根源的な話や。司る力、と言うた方がわかりやすかもしれんな。つまり《深紅の綺羅》の一族は『破壊』　《蒼穹の台》の一族は『維持』　そして《黒き帳》は『消滅』　それが、亜神の中でも選ばれた一族だけが与えられ、受け継ぐ特殊な力や」
「『消滅』と『破壊』と『維持』だって？与えられたって？いったい誰にだよ？」
「そんなの、マーリンに決まってるじゃない」
その問いに答えたのはキセンだった。
「そもそも亜神っていうのは人間を抑制する存在としてマーリンに

よって作られた、人間より新しい種なのよ」
　キセンの言葉を受けて、エイルはまたもやエルデを見た。沈鬱な表情を浮かべるエルデは何も言わずにうなずいた。全面肯定である。
　エイルはふいに自分の足下が頼りない感触に変化したような錯覚にとらわれた。完璧に信じ込んでいた価値観が、全く別のものに置換される瞬間、人は精神的な混乱と共に肉体的な感覚にも狂いを生じるのだろう。
「何だよ、マーリンって？そんなもの、想像上の神様なんだろ？それとも今度は観念の話か？哲学とかオレ、苦手なんだぜ」
　エイルが頭を抱えているのを見て、キセンはバカにしたように鼻を鳴らした。
「頭が固いわね。科学者の私が言ってるんだから哲学や観念論や神話じゃないわよ。もっと単純に考えなさい」
「単純に？」
「だ・か・ら、あなたが言うようにマーリンさえ存在していれば、話は全部繋がるわけでしょ？」
「そこですか？」
「この一連の話に、他に核があると思うの？」
「まさかとは思うけど……居るんですか？先生は見たんですか？」
「残念ながら私はまだお目にかかったことはないけど、居るというか、在るというか……どっちでもいいけど間違いなく存在しているわよ。科学者の私が自信満々でこう言うんだから、あなたはその言葉を信じるしかないんじゃない？」
「信じられませんよ。だったらマーリンはどこにいるんです？実際に会えばオレも信じますけど、さすがに神様とかは」
「だったらおとなしく『合わせ月』の日を待てばいいんじゃないの？エレメンタルだって『合わせ月』の為に生み出され、存在しているようなものなんだし」
「また『合わせ月』ですか。それはただの伝説で……」
「じゃあ、教えてくれる？マーリンや合わせ月の日がただの伝説な

のに、エレメンタルだけはこの時代に本当に存在しているのはなぜ？あなたも知っているしょう？風のエレメンタルは確かに存在していると正教会が確認しているのよ」

「それは……」

エイルはそのエレメンタルをよく知っていた。しかもキセンがまだ知らない水のエレメンタルをも知っている。さらに……。

エイルは右手を強く握りしめた。

「自分が信じられるかどうかだけで物事を白と黒に塗り分けるような事は、バカな大人がやる事よ。事象と現実をただ受け止めて、それを元に証明する事により導き出されるものを認めない人間は結局何も見えない人間なのよ。それはファランドールでもフォウでも同じ。いろんなものをそうやってねじ曲げて、自分の思う通りにならないものを全部排除していくんだわ。それがねじ曲がって重なって、戦争にだってなる」

エイルは返す言葉が思い浮かばなかった。

キセンの顔を見ればわかる。人をからかうような物言いはするが、嘘をついているようには見えなかった。さらに言えば、目の前でうつむき加減に唇を噛む黒髪の少女の態度は、キセンの言葉を何一つ否定しようとしていなかった。そのそぶりすら見せない。いや、沈黙を守ることで肯定の態度をとっていただけであろう。

エルデは口にはしない。だがエイルの、いやアプリリアージェ達でも知らない事をかなり知っている事は確かである。それはエルデと長く一緒にいれば嫌でもわかる事だ。賢者という立場は様々な事を知る事ができるはずで、一般の人間が知らない多くの事をエルデが知っていてもおかしくはない。いや、それが自然であろう。

キセンとの一連のやりとりをエイルは反芻してみた。

言葉を手繰る中でエイルは自分自身で口にしたある言葉を思い出した。いや、その言葉に引っかかったと言う方が正しいだろう。それは本題とも彼がそもそも知りたいと思っていることでも、この場

で解決する必要性があるようなものでもなかった。
違和感を覚えたある事に対して、感覚が反応し、思わず疑問を口にしただけなのだ。
「『滅びと破壊と維持』……これって、妙じゃないか？」
「妙？」
キセンはエイルのつぶやきに、目を輝かせた。
「こういう言葉って、フォウにも神話や伝承で似たような概念のものがありますけど、フォウのは均衡がとれているというか、言葉の組み合わせに納得できるんですが、三聖の役割、司る力がこれって、すごく違和感があります。妙な組み合わせじゃないですか？」
エイルの言葉はキセンの視線をエルデに向けさせ、そのエルデの表情を歪ませる力を持っていた。
それを見たエイルの違和感は、ある確信に変わった。エイルの指摘はある部分を確かに突いていたのだ。それが穴なのか、くぼみなのかはわからない。だが他にも何らかの説明が成されなければならない組み合わせであろう事は確かに思えた。
しかし、エイルの問いかけにはキセンもエルデも何も答えなかった。いきなり訪れた重苦しい沈黙は、その場に深い澱みを作り上げているかのようだった。
その澱みに石を投じ水面を揺らしたのは、部屋の壁に埋め込まれているスフィアの点滅だった。
キセンの部屋の壁には規則的にいくつかのスフィアが並べて埋め込まれていたが、机にほど近いスフィアのうちの一つが不意に黄色く点滅し出したのだ。
その光に救われたようにキセンは視線を二人のピクシィから外すと、その光ったスフィアに近づき、掌全体で包むように触れた。
「私だ。どうした？」
スフィアに向かってしゃべり出したキセンを、エルデは目を細めて観察していた。
口調がきわめて事務的な男言葉に変わっていた。変声機能もあり、

エイル達が出会った最初の男のエーテル体として会話をしているのかも知れなかった。

「エルデ」

まるで獲物の動きを追うようなエルデの目つきを見て不安を感じたエイルは思わず声をかけた。

その一言でエイルの気持ちが伝わったのだろう。エルデは小さくため息をつくと苦笑しながら答えた。

「心配せんでもええ。あいつを今どうこうしようっちゅう気はない」

「また脅しに入るのかと思った」

「なんか、面倒になってん」

「そうか」

「それにしても不思議な装置をいろいろと考えるやっちゃな。フォウの技術……こういう本物の学者の知識がファランドールに入り込むと、この世界の根本的な力学が崩れる気がする。あれは音声伝達のルーンやろうけど。ああやって壁にはめ込んで通信装置として完全に活用、いや運用できてる。ああいうのを見ると、珍しさより危機感を覚えるな。しかもルーナーでもない人間がそれをやってるっちゅうのが驚異やな」

「あの人は、フォウでも常識外れな人間だって事で有名なんだ。『この世界とは違う世界が、微細なズレで相互に存在している』だったかな。そういう理論で世界に物議を醸したり、な」

「異世界存在論はどこの世界にもあるっちゅうことか」

「それをあの人は、誰も間違いを指摘できない証明理論ってヤツと一緒に発表したらしい。おかげで学会は大騒ぎだったらしい。もっともオレみたいな一般の人間には関係のない世界の話だけどな。いや……そう思っていただけだったんだな。今考えると」

「さもありなん、やな」

エルデとエイルの小声の会話を尻目に、キセンはスフィアに向かって誰かと会話を続けていた。

「……わかった。そうだな。少しの間、君はそこで待機していろ。すぐに指示を出す。時に君、体調は？……そうか、すばらしいものだな。わかった。では切るぞ」

会話を終えると、スフィアから手を離し、キセンはエイル達を振り返った。

「ペンドルトン君からよ。どうやらあなたたちのお仲間の居所がわかったわ」

エルデとエイルは顔を見合わせた。

キセンの言う事は嘘ではなさそうだった。

「いろんなことを想定して、私はこの町のあちこちに地下房を作ってあるのよ。そのうち、アルヴ系の連中に開放してるいくつかの房のうちの一つに、アルヴとアルヴィンとダーク・アルヴのいる旅の一行がつい今し方かくまわれたそうよ。どう思う？」

エルネスティーネ達一行は、確かにキセンのいう通りの種族構成だった。キセンのいう旅の一行が本当にエルネスティーネ達であれば、ひとまずは無事を喜ぶべきであろう。

だがエルデは怪訝な顔をキセンに向けて、冷ややかな声色で訪ねた。

「地下房、やて？」

キセンはうなずいて説明を始めた。

「効率的に地中を掘削できるルーンが使えるようになったから、試しに地下通路の壁をぶち抜いて、ちょっとした空間を作ったのよ。もっとも、あまり堅い岩石までは掘削できないから、小部屋同士を通路でつないでいるような空間だけど」

「アルヴ連中に開放した房っていうたな？」

エルデは表情を変えずに追求した。

「デュナン連中に開放してる房とやらもあるんか？それとも新教会用に解放している房か？そんなもん作って何を企んでるんや？」

キセンは肩をすくめるとエルデから視線を外してめんどくさそう

に頭をかいた。
「何かあったときの隠れ場所に決まってるでしょ？私はこう見えて、結構危ない立場にいるのよ。戦争が始まったらここもどうなるかわかったもんじゃないし、さっきはああ言ったけど最悪の自体になったら《深紅の綺羅》を捨てて逃げ込もうって思ってるわけ」
「ふん。数を作ったんは、そのときの状況に応じて逃げ込める場所の選択肢を増やすためか？」
「それ以外に何があるの？」
「で、その一部をアルヴに解放したっちゅうんか？」
「ここ一両日で、このハイデルーヴェンの街はおかしなことになってるみたいだしね。もっとも以前から不穏な動きがあったから、あらかじめ私の知り合いに一部の房を預けておいたのよ」
「知り合い？」
「ハイデルーヴェンで教授っていう名前が付いている職業の人間の一人よ。種族がアルヴだし、彼には守るべき家族はいない。相当の年齢で、実にいい感じに枯れた性格だから、この町のアルヴの尊敬を集めてるわ。そういえば正教会系の牧師だか神父だかとも懇意にしているそうだから、彼に任せるのが一番いいって判断は妥当だと思わない？」
「確かに家族がいないなら、避難してきた人たちに注力できるな」
「確かに任せるには都合のええ人材やな。おまけにキセン・プロットの名前はデュナンであるにもかかわらず、アルヴの連中からしたらその名前だけは特別扱いされるやろな。ついでに言うと、正教会にもええ顔が出来る可能性も高いっちゅう事か」
そう言ってくってかかろうとするエルデを、キセンは愛想のいい作り笑いで受け流した。
「多方面に顔を売っておくのが私なりの処世術なの」
「エルデ。その人が誰にいい顔しようと、そんなことはどうでもいいじゃないか。それより早くティアナのところへ……」
エイルがそう言ってエルデをなだめようとしたが、それは失敗に

終わった。
「こいつはアルヴがその秘密の房に全員入ったところを見計らって閉じ込めて、今度はその情報をデュナンの知り合いとやらに売るつもりかもしれへんねんで」
「え？」
エイルは虚を突かれたように固まった。
「さすがに鋭いわねえ。外交のための手札は多いに超した事はないものね」
しかしエルデの言葉を聞いても、キセンはシレっとしてそう言ってのけた。
「まさか」
さすがにエイルはその言葉には反応した。
「そんな事をして、一体何のつもりなんだ！」
「ああ、うるさいうるさい。そう怒鳴らないでくれる？」
にじり寄ろうとしたエイルを手上げて制すると、キセンはやれやれといった風に首を左右にゆっくり振った。
「私は自分の保身の為なら考えられる事は全部やるわ。こんな異世界で死んじゃったらたまったものではないでしょ？でもね、さっきも言ったとおり、今はあなたたちと組もうって言っているのよ。そもそもこの根本的な前提がないと話は進まないわよ？」
「どうやったら打算と裏切り前提で生きてるようなお前の言う事をウチらが信じられるっちゅうねん？」
「ずいぶんな言い方ね。まあ、そんな表現方法の是非はこの際いいわ。そうね、この場合、物的なものを保険、あるいは担保、もしくは証拠として見せろと言われてもムリね。私の最大の切り札はアレだもの」
キセンはそういうと視線を《深紅の綺羅》に向けた。
「あれ以上のものはないと思うんだけど。だいたい、あらかじめあなたたちと会える事がわかっていたなら、それ相当の用意もできたかもしれないけど、まさに降って湧いたような話だし、正直私も舞

い上がったり混乱したりしてるのは確かだし……。そもそも私には特にエルデ、ご覧の通りあなたを敵には回したくはない理由があるから、できるだけ友好的な関係を築きたいと思っているのよ。これは本心」

「……」

「うーん。そうね。じゃあ、こうしましょう。これをあなたたちにあげるわ」

キセンはそう言うと、机の引き出しから小さなスフィアを二つ取り出して、それぞれを左右の掌に乗せ、エイルとエルデの目の前に差し出した。

「これは？」

「私が作った似非結界の通行手形よ」

「通行手形？」

「鍵みたいなものね。わかりやすく言うと、それがあればハイデルーヴェン中の地下房と、それらを結んでいる地下道を通れるわ。地下道はこの部屋にも通じているから、ここにも自由に出入りできるっていう事よ。本来、地下房や地下道に入り込むにはそれぞれ別の鍵が必要なんだけど、そのスフィアは最上位のものよ。それがあれば私が作った結界ならどこでも通れるわ」

エイルは差し出された小さなスフィアをつまみ上げた。直径が親指の爪ほどの大きさで、白っぽく濁った半透明なスフィアだった。

「なるほど。マスターキーってやつか」

「マスターキー？」

エイルのつぶやきにエルデが反応した。

「フォウではそう言う何でもあり、の鍵をそう呼ぶのよ。主人の鍵っていう意味よ」

「ふーん」

エルデもエイルにならってスフィアを受け取ると、それを注意深く観察した。

しばらくそれを観察した後、エルデは呆れたような顔で小さくた

め息をついた。
「ひどい文法やな」
その一言にキセンは目を細めた。
「あなたは、そのスフィアに私が焼き付けたルーンが見えるっていうの？」
「三聖の正体を知ってる程、ファランドールやルーンに精通しているお前が言うな！」
エルデは憤然とそう言うと、右手を突き出した。
口の中で何かを唱えたのだが、聞き取れない程小さな声だった。
口の動きは突きだしたエルデの拳で視界が遮られて、それも見えない。つまりキセンは床にめり込んでいた儀仗ノルンが、一瞬でエルデの手に移動した事実を見ただけである。
エルデはそのまま儀仗ノルンの頭頂部にスフィアをあてがった。
すると白濁した小さなスフィアは、まるで沼に沈む石のように木製の杖の中に沈み込んだ。ノルンに飲み込まれる途中でスフィアの体積はどんどん小さくなり、やがて待ち針の頭程度の大きさにまで縮むと、そのまま固定された。エルデの儀仗ノルンには同じように多くの小さなスフィアが埋め込まれていた。おそらく今のようにして様々な力が込められたスフィアを圧縮・小型化して埋め込んでいったのだろう。今ではシグ・ザルカバードの庵で集めた「時のゆりかご」への通行手形である宝鍵もそのうちの一つなのだ。
「儀仗って、使うルーナーによってはそういう風に使えるのね。残念ながらそんな便利な能力は初めて知ったわ」
「ほんなら聞くわ。いったいお前はどこまで知ってるんや？お前の言うその『不思議な本』には何が書かれてるんや？」
「不思議な本、じゃなくて、表題は『合わせ月の夜』よ。でも残念ね。本の中身はしゃべっちゃダメって言われてるのよ」
「ほう？えらい都合のええ話やな！」
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
エルデとキセンが再び口論を始めようとした時、たまらずエイル

が割って入った。
「その本の話だけど、その前にオレの根本的な混乱を解決してくれないか？オレにとっては話はそこからなんだ」
「根本的な混乱？」
「具体的に言うと亜神とか人間とかってヤツだよ……その話は本当に本当なんだな？オレはエルデにその大前提を確認しておきたいんだ」
それはエルデに向けた質問だった。
エルデは唇を噛んでエイルを見つめた。否定はない。それは要するに真実だと肯定していると言ってよかった。
その様子をみていたキセンが声をかけた。
「なんなら私が今ここで全部話しちゃいましょうか？私、たぶんあなたの事を正確に特定できてるわよ。さっき話したあの『本』のおかげでね」
キセンのその一言にエルデは即座に反応した。額にまた、あの第三の眼が現れたのだ。だがそれはエルデの無意識が成せるものだったのだろう。眼の出現に気付いたエルデはすぐに血の色をしたそれを閉じた。つまり、エルデはキセンを威嚇して制止しようとする意思を持たないという事である。エイルが見たところ、いったん儀仗を引いた後のエルデは、キセンに主導権を奪われつつあるように思えた。それはエルデ自身もわかっているはずである。だが、その流れを変えようとする行動にエルデは出ようとしなかった。今も感情ではそうするつもりだったのだろう。だが理性がそれを抑え込んだ格好である。そしてそれはキセンもわかっているに違いなかった。
エイルはそれをキセンの次の言葉で推し量る事が出来た。
「私の事を性格の悪い女だと思ってるんでしょうけど、それは正確な表現ではないわよ、エルデ・ヴァイス」
その言葉に反応してキセンの顔をにらみつけるエルデに、しかし青緑の髪の女デュナンは臆することなく言葉を続けた。
「あなたが後生大事にしている秘密に、あなたの相棒はもう随分近

づいているのよ？エイル君のさっきの質問を聞いたでしょう？」
キセンがそう問いかけても、エルデは黙ったままだった。
「私はまどろっこしい事が大嫌いなのよ。さらに言えば気に入った人間に対してはこう見えても結構お節介」
「――意味がわからん」
エルデの反応に、キセンはクスッと小さく笑いを漏らした。
「じゃあ、さっきのあなたの言葉を借りて赤ちゃんにでもわかるように言ってあげましょうか？いい？私にはエルデ・ヴァイスと名乗る瞳髪黒色の女の子と、エイル・エイミイと名乗る同じく瞳髪黒色の少年の正体がわかっている。そしてその二人を観察して、二人の関係というか、現状もわかっちゃった。お互いの事を、それも重要な事を知らないままに、かなり深い仲になってる。ま、年頃の男と女だもんね、それは仕方ないわ」
「いやいやいや！」
「ふ、深い仲とか、なってへんわっ」
同時に反応した二人を、キセンは両手を挙げて制した。
「でも、その状況をみたらこっちはイライラするしかないじゃない？」
「はあ？」
「いや、イライラって……」
キセンはもちろん、二人の反応は無視した。
「でもそんなの仮初めの関係だわ。お互いもう一歩踏み込めないのは、両方がお互いに秘密を胸にしまっているからでしょ？だから順番として、まずはエイル君の事をあなたに教えてあげたのよ。じゃあ、今度は同様にエルデ、あなたの事をエイル君に教えようかなって思うのは当然でしょう？そしたら二人にはもうわだかまりはなくなるわ。これで晴れてめでたしめでたし。私もイライラせずにすむ」
「何がめでたしめでたし、や！」
「そうね。あなたがエイル君に話していない秘密は大きく分けて二つ。一つ目はさすがにあなたの口からは言いにくいでしょうから、

成り行きで私から言ってあげてもいいわ。でも、二つ目の秘密はあなたが自分で言うべきね」

「他人の秘密を勝手に言うな！」

エルデは目をつり上げて叫んだ。だが、エルデに対してキセンはもう全くひるまなかった。

「そのまま何も知らせずに過ごすつもり？これからもずっと？一生？本当にそれでいいの？それともふさわしい時が来たら言おうと思ってた？」

「そ、それは……」

「言っておくけどそんな都合のいい『時』なんて来ないわよ。これは私の人生経験から言える事よ。私は何もせずに自分から逃げる奴が大嫌いなの。いい？あなたにとってふさわしい時は今！　あなたは私にここで出会った事を感謝するべきなのよ」

「勝手な事を。ええか、もし言うて見ろ。その時は！」

エルデの怒気はエイルにも伝わった。儀仗を握る手に力が入るのを見たエイルは、思わずエルデとキセンの間に両手を広げて割って入った。

「待て、エルデ」

「エイル……」

キセンをにらみつけていた恐ろしい形相が、戸惑いに変わった。

「オレから頼む。教えてくれ」

「あかん！というか、嫌や！」

エルデは大きく首を左右に振った。

「オレは知りたいんだよ、お前の事を！お前が普通じゃない事なんか、もうみんな知っているし、オレはみんなよりもずっと前、お前と初めて出会ったときからわかってる。だから今更だろ？ちょっとやそっとじゃ驚かない自信がある。いや、ちょっとやそっとじゃないっていうのはもうわかっている。覚悟は出来てるんだ。それよりもオレはお前の事をもっと知りたい。そうじゃないとオレはファランドールに残った意味がないんだ」

「ファランドールに残った……意味やて？」
「ああ。言ってなかったか？」
エルデは首を横に振った。
「あれは……その……手の甲の事を別にしたら……ネスティの役に立ちたい為……なんやろ？」
エイルは頷いた。紋章や痣という言葉を使わず「手の甲」という表現を選んだエルデの意図をもちろんエルデは察していた。下手な事を言えば、ファランドール人以上にファランドールの「からくり」に詳しいキセンに要らぬ情報を与える事になる。現時点ですら、エイル達は多くの事を知られすぎていた。これ以上いたずらに情報を与える必要はないのだ。ましてやエイルの右手の甲に突如浮かび上がった痣は、些細な情報ではないのだから。
「手のケガの事はまだよくわかってないし、ネスティの事はお前の言うとおりだ。でもそれだけじゃないんだ」
「ほんなら何……やの？」
「言った通りだ、オレはお前の事を知りたいんだよ」
「エイル……」
「お前はオレの助けなんか要らないかもしれないけど、それでもオレはお前の役に立ちたい。放っておけないんだ。それに、オレはこの世界はいろんな事が腑に落ちないんだ。ここは不自然でおかしい。なぜそうなのか、フォウとファランドールの関係は何なのか、オレはそれが知りたいんだ。それにはお前の力が要る」
「アンタが役に立たん事なんかない。それはもう話したはずや」
「だったら頼れよ。いや、頼ってくれよ。頼られたいし守りたいし役に立ちたい。オレとお前はその辺にいるただの他人同士のつきあいじゃないんだぜ？二人がわかり合って一つになるとか、そんな普通の関係じゃない。一つが二つに分かれたようなもんだろ？たった二年かもしれないけど、お前を他人だと思えってほうがオレにとっては不自然なんだ。お前の事をもっと知りたい、謎を明らかにしておきたい、秘密を教えて欲しい……そう考えるのは自然だろう？い

や、当然だと思う」
　一気に言葉をはき出したエイルに、エルデはすぐには返す言葉が見つけられない様子だった。
「言いたくない理由はきわめて単純。あなたは怖いのよね。知られてしまったら、大好きなエイル君に嫌われてしまう……それが怖い」
　キセンがそう冷たく言い放った。さすがにそれにはエルデはすぐに反応した。
「やかましい！黙れ！うるさい！今度しゃべったらその減らず口を一生開かれへんようにルーンで縫い付けたる！」
「エルデ！」
　エイルは懇願するような顔で小さくそう叫んだ。
「オレはそんなに信用ないか？何があっても動揺……はたぶん多少……いやけっこうするだろうけど、お前の事はオレなりによくわかってるつもりだ。何がどうあってもオレにとってはエルデはエルデだ。それは変わらない」
　その言葉を聞いたエルデの顔からは、キセンに見せた厳しさや怒りの表情は消えた。代わりに今にも泣き出しそうな表情をエイルに向けた。
　エイルはそんなエルデにさらに付け加えた。
「それに一つ言っとくがな。オレはお前が思ってる程バカじゃない。さすがにもう、ある程度の予想はついてるんだ。でも予想が外れようが当たろうがどうでもいい。おれはお前の口から本当の事を知りたいんだ。お前もさっき知ったように、オレだって人に言えないような過去がある。だからって訳じゃないけどお前に何があろうとオレはお前を受け入られると思う。いや、受け入れてやる」
　その言葉を聞いたエルデは、エイルから視線を外すと上方に顔を向け、目を閉じた。

# 第五十九話　四聖

「青緑のセンセの言うとおりや」
エルデは目を閉じたままで、ぽつりとそう言った。
「え？」
「ウチは怖いんや」
「エルデ……」
「ふふ……」
エルデは力なく笑うと眼を開いた。
「見てみ」
そう言ってエイルに見えるように、エルデは左手を差し出した。
細長い指が小さく震えていた。
「おかしいやろ？ウチが震えてるとか、しかも相手はアカンタレでスカポンタンで泣き虫の、アンタときた」
エイルは目の前に差し出された白い手を掴んだ。
「エイル？」
突然の事に驚くエルデを、エイルはさらに驚かせる行為に出た。
掴んだその手を引っ張るとそのままエルデを引き寄せ、その体をしっかりと抱きしめたのだ。
「え？」
戸惑いの声を残してエルデの長い黒髪がたなびき、エルデはエイルにしっかりと抱かれていた。
「これだと泣き顔をオレに見られなくてすむだろ？」
「エイル……」
「信じろ。お前が何を言ってもずっとこうしててやる」
「ア……アホ……」
「アホはお互い様だ」
エルデにはエイルの、エイルにはエルデの鼓動が伝わっていた。
どちらの鼓動も早い。触れ合う頬は熱く、体中でお互いの熱を感じ

ていた。

「亜神は……」

少しだけ間を置いて、エルデはしゃべり出した。

「人の天敵や」

「天敵？」

「人を食らう存在。それが亜神に与えられた存在意義。まあ食らうっちゅうても血を吸うだけやけどな。骨とか肉とかはさすがに食わへん」

「なんだ、そんな事か」

エイルの声は落ち着いていた。そしてエルデの腰に回した腕にさらに少しだけ力を込めた。

「待て。それだけやない。問題は次や……」

エルデはそこまで言っていったん言葉を切った。

だが、次の言葉がなかなか続かなかった。

エイルはエルデが口を開くのを待った。だがエルデの口が開くよりも先に、エイルは頬に流れる熱いものを感じる事になった。

エイルにはそれは唐突に思えた。声も、震えも、前ぶれがおよそ何もなかったからだ。だが、エルデが言葉を切ったのは、そして言葉をつなげられなかったのは涙を抑えられなくなったからだという事に気付いたエイルは、やがて告げられる言葉を想像して、緊張で体を少しだけ硬くした。無意識に身構えたのだ。だが、エルデを抱く腕の力は緩めなかった。

「ウチはな……ウチは……」

エイルにはエルデが次の言葉を継ごうともがいているのが、その小さな震えで痛い程わかった。頬はもう、エルデの涙でびしょびしょになっていた。

エイルは腰に回していた右手を緩めると、今度はその腕でエルデ頭を抱きかかえて、耳元でささやいた。

「わかってる。お前は亜神なんだろ？」
エイルのその一言はエルデの体を硬直させた。エイルの体を引き離そうと小さくもがくエルデを、しかしエイルは離さなかった。
「逃げるな。そんな事くらい、とっくに想像がついてたさ。それより気持ちいいからもう少しこうさせておいてくれ」
エルデが本気でエイルを引きはがそうと思ったなら、それはいともたやすい事だろう。なぜなら亜神の腕力は人とは比べものにならない程強いのだから。
エイルはもうそれを知っていた。
ヴェリーユの宿にラウとファーンが現れた時、エルデがとった行動。あれはルーンで腕力を強化しているのではない事は間違いない。あの段階でエルデがヴェリーユでルーンを使う事は考えられない。
床に組み敷かれた時に感じたエルデの雰囲気はエイルには未知のものだった。だが今ではよくわかった。あれはエルデの本能が彼女を支配した瞬間であった。すなわち捕食行為と呼ばれるものである。
「でも、残念だったな。そんな告白じゃオレは全然驚かないぜ」
「――エイル」
「だいたいオレはずっと前からお前が普通の人間じゃないって事くらいはわかってたさ。いや、普通のルーナーじゃない事もわかってた。だからさっき亜神の話が出た時は、ああそうか、ってな」
「でも、ウチらは人の血が……」
「ああ、それはまあ、正直に言ってちょっと驚いた。でも、これでお前ができるだけ血を見ないようにしてた理由がわかって、かえってすっきりした」
「アンタはウチが怖わないんか？」
「お前以外の亜神は怖いな。《蒼穹の台》なんて、何も言わなくても、ただそこで立ってるだけで怖い。まあ、あいつは亜神とかそういうのを知る前から怖かったからなあ。でもオレはお前の事は全然怖くはない。嫌いでもない。というか、お前、結構可愛いじゃないか。そうやって泣いてるとことかさ」

「な、泣いてへんっ」
「オレの顔、お前の涙でびしょ濡れなんだけど？」
「そ、それは鼻水や！」
「鼻水かよ！」
「よだれもけっこう混ざってる！」
「けっこうかよ！汚えな、おい？……というか、亜神ってのは眼から鼻水とかよだれが出るのかよ？」
「亜神はヒトと違うて眼から汗とか鼻水とかよだれとかが出るんや！」
「くっ……」
エイルは思わず吹き出した。
「な、何やねん」
「やっぱりお前は思いっきりエルデじゃないか。他の誰でもない。そう言うところが正真正銘エルデ・ヴァイスだ。お前の正体が人だろうと亜神だろうとミジンコだろうと、そんな事で変わるわけがないだろ？」
「はあ？どさくさに紛れて何言うてんねん！ウチはミジンコなんか？」
「いや、そうじゃなくて」
「わかってる」
エルデはエイルの体に回したか腕に力を入れた。
「……おおきに」
それだけで充分だった。エイルはエルデが抱えていたいくつかの重荷の一つがその瞬間に消えた事を確信した。なにより自分にその手伝いが出来た事が嬉しかった。
「それにさ、オレだけじゃないだろ？リリアさんはもう気付いてるんだろ？」
エイルはアプリリアージェがエルデの衝動をすかさず止めた事を例に出した。もちろん、エイルをエルデが組み敷いたあの時の事である。

「リリア姉さんとリーゼを死ぬ程おびえさせてもうたけどな。そもそもアンタにウチの事がばれへんようにあんじょうしてもらう補助要員を頼もうと思ってたんやけど」
「そうか。だったら仲間のみんなにも言うべきだな。きっとみんなお前を受け入れて守ってくれるさ」
「いや、それはアカン」
エルデはそれには首を横に振った。
「そうね、それはやめておいた方が賢明ね」
しばらく二人の会話の聞き役に回っていたキセンが会話に割って入った。
「三聖以外に亜神が存在している、という事が漏れたらあなたたちはそうとうマズい事になるのは間違いないわ」
「青緑女史の言う通りや」
エルデはそう言うと、エイルの抱擁を解くようにそっと体を離した。
「ウチの存在は今の世では知られたらアカンものなんや」
手の甲で涙の跡をぬぐいながら、エルデは続けた。
「どうせ疑問に思うやろうし、そこの女先生はそもそも気付いているやろし、アンタにはここで言うとく。もう一つ、ウチには大きな秘密がある」
エイルはうなずいた。
「今更何を言われても驚かないさ。いや、驚くかもしれないけど大丈夫だ。言ってくれ」
「アンタはたぶん、気付いてると思う」
「オレが？」
「ウチの正体や」
「それは亜神とか人間とかじゃなくて、職業というか役目とか身分とかのことか？ただの賢者じゃない……って事だよな？」
エルデはうなずいた。
「人の天敵。ピクシィの姿に似せた亜神。ルーナーの中でもハイレ

ーン。それやのに、一応マーリン正教会関係者……ここまで嘘はない。賢者会の関係者っちゅう事も大局的には嘘とは言えへんはずや」
「そうか。そうだよな。お前は大賢者である《真赭の頤（まそほのおとがい）》が膝を折る存在だったな」
「そや」
「お前は治癒が専門のハイレーン。死にかけてたファーンにかけたルーンが一体何なのかはオレにはわからない。だけど、あんな事ができるルーナーがそうそう居るとは思えない」
「治癒に関しては、ウチは確かにずば抜けてるやろな」
「そうだよな。たぶん、なんとなくわかってきた。さっきの話で出てきた三聖の特性『滅びと破壊と維持』　お前はこのパズルを完成させるためのピースってヤツだな」
「ピース？」
　ファランドールにはない言葉に、またもやエルデは反応した。
「フォウでは破片や部品の事をピースって言うんだ。お前は三聖だけでは完成しない、何かを持ってる存在っていう事だろ？」
　エルデはその質問には答えず、エイルの手を取った。そしてそのまま、今度は自分からエイルの胸にゆっくり飛び込むようにして自分と同じ瞳髪黒色の少年をそっと抱きしめた。
「こうしてると、なんか落ち着く。エイルはウチを嫌わへん……そんな根拠のない安心感に包まれる気がする」
「エルデ……」
「アンタはアホやけど、ウチはアンタをホンマにアホやと思った事はない。アホがとっさにあんな事できるわけがない。あの時、ウチはアンタに何かを見つけた気がするんや」
「あんな事？」
「記憶はもう、ほとんど戻ってるんやろ？」
「ああ」
「フォウでの最後の記憶は？」
「お前……見てたのか？」

「あの時……ウチはフォウに干渉できへん場所からアンタを眺めてた。ウチの意識はフォウとファランドールの間の通路みたいな空間に漂ってて……。そこでアンタと、そしてウチがマーヤと思い込んでた女の子が事故に合う一部始終を見てもうたんや。変な馬に二人乗りしてたエイルが、馬のない馬車にぶつけられる寸前、振り向いて後ろに乗ってたマーヤを突き飛ばしたやろ？あれでマーヤは無事やったんや」

エルデの話を聞いたエイルは一瞬だけ緊張を走らせた。だがそれはすぐに弛緩した。

「そうか……あれを見てたんだな」

「アンタはそのまま馬車と馬の間に挟まって引きずられてもうて……見るも無惨な状態やった。人間、ああいう時は反射的に自分をかばうもんや。でもアンタは違うた。とっさに後ろの人間の事を考えてた……たぶん、アンタにとっては自分より大事な人やったんやろな……」

「なあ？」

「なんや？」

「なんで後ろに乗ってたのがマーヤって言う名前だって思ったんだ？」

「アンタもマーヤも、顔全部を覆うカブトをかぶってたやろ？そのカブトに名前が書いてあったやん？」

「ああ……」

「フォウもファランドールも、同じ文字使てるんやな、って思た」

「『だいたい同じ』　だけどな。でも、お前が勝手にオレに妹を作って、その妹によりによってマーヤっていう名前をつけた訳がこれでやっとわかった」

「安心し。アンタの大事な『元』マーヤは、たぶん大丈夫や。アンタが命がけで守ったからや。誇ってええ。あんなもん見せられたら、アンタがただの泣き虫のアホやなんて思えるわけがないやろ？」

「そうか……。でも、お前はオレが思ってたより、ずっとアホだな」

「は？」
「あの子が無事だったのは『時のゆりかご』でファランドールとフォウの間の扉が開いた時に元気な姿が見えたからわかってた」
「そ、そうか……。そやのに、なんで戻らへんかったんや？その……ウチがマーヤって思ってた娘はその……アンタにとって特別な、っちゅうか大事な女の子なんやろ？フォウに帰ってマーヤと幸せになったらよかったんや。そやのに、最近知り合うたネスティがちょっと可愛いらしいからいうて、フォウの女を捨ててファランドールに残るとか、フォウの人間は薄情にも程があるんとちゃうか？」
だんだん声に熱を帯びてくるエルデの頭を、エイルは苦笑しながら叩いた。
「そういうところがアホだって言うんだ」
「なんでや？」
「そもそも、あの子はオレにとって別に特別な女の子じゃないし」
「え？」
「ほとんど他人というか、プロット４の……同じ学校に通っているだけのただの知り合いだぞ」
「へ？」
「まったく。お前ってさ、舌を巻くような分析力とか記憶力があるくせに、時々勝手な先走りで妄想の世界に入るよな？」
「な……なんやて？」
「そういう事だよ……って、ひょっとしてお前、あの子の事があったから必死でオレをフォウに帰そうとしてくれてたのか？」
「そ、そやかて！あんな場面見たら誰でもそう思うわっ！」
「――そうか……」
「何やの？……あの子がただの知り合いとか……そんなん、ウチが一人で勝手に焼き餅やいてたん、アホみたいやん」
エルデのそのつぶやきは小さすぎてキセンの耳にまでは届かなかった。だが、エイルにはしっかりと聞こえていた。
「えっと、それってもしかしてヤキモチ？」

エイルの言葉に、エルデははじかれたように体を反らして反応した。
「えええええ？」
「驚きすぎだ」
「いやいや、何でやねんっ！ちゃうちゃう！そんな事言うてへん言うてへん。絶対言うてへんっ！」
エルデはとっさにそう否定するとエイルの体に回した手に少し力を入れた。
「そっか……」
エイルの頬は先ほどと同様にエルデの頬が触れている。今のやりとりでそのエルデの頬が熱を持ったのがわかった。エイルはエルデの顔が今、真っ赤になっていると確信できた。そしてそれはつまり……
「正解や」
エイルがエルデの顔を見ようと少し体を引いた時、エルデがそうつぶやいた。
「え？」
「ウチはあの三聖と同列にある存在。ウチの名前を誰にも言うたらアカンって言うのはそういう事や」
「ああ、そうか……」
話は元に戻っていた。
それを聞いたエイルは少し離れたエルデの体を自分に密着させるように、腰に回した手に力を入れた。
エルデはそれを嫌がらなかった。それどころか自分でエイルに回した手に力を入れた。
「だいたい、色が足らんやろ？」
エイルはうなずいた。
「青と赤と黒だもんな。確かに中途半端だ」
「そういう事や。ウチが三千年前に現世から姿を消して『時のゆりかご』で眠ってる間にファランドールからは『四聖』っちゅう言葉

は消えて、『三聖』になってもうた。いや、消されたっちゅうわけや」

「それって、正教会がしらみつぶしに消して回ってたって事か？」

エルデはうなずいた。

（何のために？）

エイルがそう尋ねようとした時、キセンがたまりかねたように声をかけた。

「あのねえ。仲がいいのは結構だけど、あなたたち、いつまでそうしてるつもり？」

「え？」

その声に、二人はキセンの存在を忘れていた事に気付き、お互いにお互いを突き放すようにして抱擁を解いた。

「あ、これは……その」

「そうじゃなくて、次があるでしょ、次が」

「次？」

「抱擁の後にやる事よ」

キセンの言葉に、今度はエイルが顔を赤くした。ついさっき自分がやろうとしていた事に思い至ったのだ。

「な、何ヲイッテルンデスカ？」

「声、上ずってるわよ」

妙に高い声で否定したエイルに、キセンは一瞥をくれると、

「なんか盛り上がった割には結果は今ひとつね」

そう言ってやれやれといった風に大げさに肩をすくめて見せた。

「まったく、なんと言うか、こう……もっと、アレでしょ？」

「アレ？」

怪訝な顔で問いかけたのはエルデだった。

キセンは頭をかいた。

「アレよ、アレ。若い男女が思いの丈をぶつけあって抱きしめ合った後は、いいムードの中で熱い口づけって相場が決まってるでしょ？」

「えええ？」
「いやいやいや。オレ達は別にそう言うんじゃないですから」
エイルは手を振って即座に否定した。だがその態度に一瞬エルデが顔を曇らせたのに気づいたのはキセンだけだった。
「そ、そ、そや。ウチらは別に」
キセンは苦笑すると今度はため息をついた。
「はいはーい。つまんないけどそれじゃ今日のところはそういう事にしときましょう。それより急ぐんでしょ？」
エイルとエルデは顔を見合わせると、うなずき合った。
「いい加減、私の事は信じて欲しいものね。少なくともここを死守しないといけない立場にある私としては、ここの事を知っているあなたたちを敵に回すなんていう選択をすると思う？」
「あなたの事はまだよくわからないけど、少なくともオレはプロット先生から悪意は感じていませんから、ティアナの件では本当の事を言ってくれてると信じてます。それに俺達の味方になってくれるといいって思ってます」
「ありがと。やっぱり同郷だと気持ちが伝わりやすいわね。そっちの飛んでもないお嬢さんより話がわかるから助かっちゃうわ」
そう言ってチラっと自分を見たキセンに、エルデは咳払いを一つしてから呼びかけた。
「キセン・プロット」
「改まって、何？」
「ウチはお前を完全に信用でけへん。でも、結果としてウチは今、胸のつかえが取れて相当気分がええ」
「はいはい。よござんしたね。言ったでしょ？私は初々しい若者達が仲むつまじくしているのを見るのが大好きなのよ」
「あの、一言もそんな事は言ってませんけど？」
エイルが突っ込んだ。
「あら、そうだっけ」
「なんでそんなものが好きなんですか？」

「あら、それも言ってなかった？」
「言ってません」
「そうかなあ。まあ、君がそう言うのならそうなのかもしれないわね。」
キセンはそう言うと小さく肩をすくめたが、それは特に反省を表す仕草ではなく、むしろエイルに対してがっかりしたと言った風情を醸し出していた。
「白状するわ」
「白状、ですか？」
「そう。実は私って、男女の甘いやりとりを描いたドラマが大好きなのよね。世間じゃ同じ種類のドラマでも、不倫とか禁断とかでドロドロ、滅滅、修羅場満載っていうのがはやりみたいだけど、私は断然純粋で胸がキュンってなるヤツがいいのよね。でもこっちに来てからそう言う娯楽ものは一切見られないし、挙げ句の果てにこの場所からあまり離れられなくなっちゃったしで、禁断症状が出る寸前なのよ。だからあなた達のような初々しい……」
「あ、そこまで」
エイルはそう言ってプロットの言葉を途中で切った。
「プロット先生の意外なオバサン趣味には驚きましたけど、おっしゃる事はよくわかりましたから」
「ドラマ？」
キセンはオバサンという言葉に眉根を寄せたが、エルデは例によって未知の言葉に反応した。
「演劇みたいなものだな。フォウでは好きな時に見たい演劇を一人でも鑑賞できる仕組みがあるんだ」
「ほう？」
チラリとエルデの表情に目をやったエイルは、そこにキセンと同じように目を輝かせている少女の姿を見つけると、反射的に目をそらした。エルデの一面をまた一つ知ってしまった事はいい。だが、そういう話はエイルが最も苦手とするところだったからだ。だから

その話はそこで打ち切りにしたかった。
「落ち着いたら、フォウの話をいろいろしてやるから」
「ドラマというヤツの話も詳しく頼む」
「いや、悪いけどオレ、そういうのってほとんど見た事ないから……」
「なんやて？」
「で、話は変わるけど、エイル君？」
キセンは再び長い脱線に入りそうな二人の会話に割って入った。
「こ、今度は何ですか？」
「あなたにはまだいろいろと話があるの。だから、用事を済ませたらまたここへ戻ること。そっちの四聖ちゃんも言ってた通り、君って思っていたよりバカじゃないみたいだから、ある程度話相手になりそうだしね」
「どういう意味ですか？」
「あなた、さっき言ってたわよね？この世界の法則には違和感がある。この世界はおかしいって。さっきの文字の話もそう」
「ああ……確かにそう言いました」
「その辺りについての話よ。長くなるから日を改めた方がいいわ。君は戻りたくないのかもしれないけど、私はできればフォウに戻りたい。でもこの世界の仕組みを知っちゃったから、実はすぐには戻れないのよ。その辺の話。もちろん……」
そこでキセンはエルデに視線を投げた。
「あなたも一緒にね」
「ふん。お前みたいな得体の知れんやつのところにお人好しのエイル一人で行かせるわけ無いやろ」
「あら。私は善人に対しては人畜無害な存在よ」
「よう言うた。この毒女。お前のせいでウチは……」
「ドラマのお話、たっぷり聞かせてあげるわよ。今まで見た中で私の一番のおすすめはね……」
「いやその話、今はいいですから、ガヤルド……じゃなくてプロッ

ト教授長」
「あらそう？」
「まあ、お前がそこまで言うんなら……来てやらん……っちゅう訳でもないで」
エルデのその言葉を聞いて、エイルは小さくため息をついた。意外に趣味が合う二人かも知れないと思うと、なぜか憂鬱な気分がこみ上げてきた。
「ともかく、お互いに秘密が減って良かったじゃないの。亜神のお嬢ちゃんにとっては特に、彼氏にだけは知られたくないなんて思ってたんでしょうけど、秘密のベールがほとんどはがされちゃって、もうほとんど真っ裸よね」
「いやいやいや、教育者として、その表現はどうかと」
エイルはまた言い争いが再開しないかと内心ひやひやしながら、キセンの言葉がそれ以上過激にならないようにいさめた。だがその表情はいさめるというよりはむしろ懇願に近いものだった。
キセンはエイルのその顔を見ると、小さく吹き出した。
「誰が教育者なもんですか。ま、あなたに免じてこの反則的に綺麗な子猫ちゃんをからかうのはこれくらいにしといてあげる。とは言ってももう脱ぐものがあんまり無いんでしょうけど」
からかわないと言いつつもあくまでも挑発的な言葉をやめないキセンを見て、エイルは悟った。これはもう悪気とかそう言う問題ではないのだと。無意識にそういう言葉が口を突くのだ。ヴェロニカ・ガヤルドーヴァという、エイルにとって雲の上の存在と言える歴史的な科学者の普段の姿は、ただ口が悪く、ドラマ好きの「お姉さん」に過ぎないのだ、と。
それが大きな間違いだった事にエイルが気付くのは後の事だが、ある意味ではキセンの本質なのかも知れなかった。
エイルには一つの持論があった。それは「口が悪くても本音を言う女に、本当の悪人はいない」というものだ。
もちろんそれはエイルがエルデの本体と出会ってからごく短時間

の間に身につけたものだったのだが……。そしてその持論は全ての人間に当てはまるものではないという事を思い知ったのは、キセンに出会ってからであった。

「言わせておけばこの青緑……」

「はいはーい、あなたはそっち方面の話に耐性がなさ過ぎ。亜神なら亜神らしく、こんなフォウの人間ごときにいちいちムカっ腹たてないで、もっと堂々としてらっしゃい」

「やかましい！」

「まあでも、四聖に名を連ねる程の亜神なのに、同じ年頃のデュナンの娘なんかより、よっぽどウブなところとか、私は嫌いじゃないわよ」

「……」

キセンのその言葉はエルデの眉間にしわを寄せ、口をつぐませた。

「なによ？黙っちゃって。調子狂うじゃない」

「――まあウチもお前にはいろいろ聞きたい事がある。《黒き帳》の事とか『合わせ月の夜』っちゅう本の事とか」

「あ、私、それも言ってなかったっけ？」

「何をや？」

「『合わせ月の夜』の本に書かれた内容を他人に話したり、本を見せたり捨てたり焼いたりしたら、その罰としてその本にかけられている呪いが発動。結果として私、エラい目に遭うみたいなのよ」

「え？それはどんな呪いなんですか？」

『喰らい』の呪法で長く苦しんだエイルが「呪い」という言葉に敏感に反応した。

「なんでも私は持っている記憶を全てなくすそうよ」

「ほう……」

呪いの内容を聞いたエルデが目を細めた。

「ウチの勘違いかもしれへんけど、お前はもう随分ウチらに本の内容を話してるんと違うか？『四聖』とか、ウチの事とか、その本に

書かれてたから知ったんやろ？」
　エルデの指摘はもっともだった。エイルもキセンの言葉を聞いた時、そこに矛盾を感じた。それとも呪いはしばらくたたないと発動しないのだろうか？いや、その前に記憶が全部無くなるというのなら、キセンが禁を破って本の内容を他人に話す事などあり得ないと考えるべきだろう。
「いい質問ね」
「なんかお前に『いい質問』と言われるとムカっとするのは何でやろな」
　エイルはその言葉に反応して、独り言のようにつぶやいた。
「相手を見下したような言い方……同族嫌悪だな」
「何やて？」
　案の定、電光石火の速度でエルデは反応した。
「冗談だよ、冗談。それより、プロット先生。オレも同じ疑問を持ったんですが？」
「ふふん」
　キセンは意味ありげに笑うと、小さく首を振った。
「それは秘密。《黒き帳》に関係する大きな秘密よ。どう？そう言われるととっても気になるでしょ？だからそれも含めて再会時のお楽しみにしましょう」
「ホンマに食えんヤツやな」
「いい？必ず顔を見せるのよ。ピクシィの姿をした亜神のお嬢ちゃん、それに私の同胞、アトリの剣士君」
　キセンは今度こそ話を切り上げると、ようやく灯火隊にいたアルヴィンの少年、キアーナ・ペンドルトンからもたらされた情報を提供した。
　キアーナによるとエルネスティーネ達と思しき一行の居場所へは、ハイデルーヴェンに張り巡らされた地下道と、新たにキセンが作った地下房と呼ばれる居住可能な空間群とをつないで移動すれば、三

十分もかからずにたどり着けるという。
「その場所は私の……と言ってもエーテル体の私だけど……部下の一人でロマン・トーンという学者が掌握しているはずの房だから、悪いようにはなっていないはずよ。彼は私と違って結構な人格者だしね。むしろ学者というより悟りきった宗教人のような人だから。そういうわけで、そこで私の名前を出せば話は早いはずよ」
キセンはそう言うと机の引き出しから、新たなスフィアを一つ取り出してエルデに手渡した。通信用のスフィアだという。
「ファランドールという世界は実に便利だわ。連続したエーテル域さえあれば、ルーンを使って雑音のない通話ができるんだから。しかも機械や動力も要らなくて、ただエーテルを制御する言葉を仕込むだけ」
「ツイフォンを、触媒なしのスフィア同士で実現してるんか？」
さすがにそのスフィアの機能にはエルデも驚いたようだった。
「まあ、触媒がないからツイフォンみたいに大陸またがっても通じる、なんてことはムリだけどね。本当のツイフォンは亜神か、強大なエーテル術者が、それも自分の配下にしか使えない本当に特別な術だから。ま、理論を真似していろいろやってた成果のひとつというやつね」
「亜神の配下って？」
エイルはキセンの説明の中に気になる言葉を見つけて、尋ねた。
だがキセンはすぐには答えず、エルデに顔を向けた。不機嫌そうな顔をしたが、エルデが口を開いた。
「亜神の配下……亜神は自分の血を人に与えて、それを触媒に人に能力を授ける能力があるんや。たとえば今の説明にあるようにツイフォンみたいな自分とのつながりを前提にした呪法なんかがそうやな。要するに配下っちゅうのはそういう手足というか道具みたいな存在なんや」
エルデはもはや隠す事もないと観念したのだろう。キセンに代わり、そう説明をした。

「血を吸うんじゃなくて、血を与えるのか？」
「吸ってどうすんねん？それは亜神が普通に食事してるだけやろ？」
エイルの質問にエルデが不思議そうな顔をした。
「いや、フォウにある伝説や言い伝えだと逆なんだ。血を吸われた人間が配下というか僕になるという……」
エイルの説明に、エルデは眉根に皺を寄せた。
「フォウにも亜神がおるんか？」
「いや、亜神じゃなくて血を吸う化け物……悪い、そうじゃなくてそういう人型生物がユーラシア大陸の中央から西に寄ったあたりにあるトランシルヴァニアという地域に生息しているっていう伝説があってだな。そもそもトランシルヴァニアって言う地名からして『森の向こうがわ』なんて意味なんだ。いかにもそういう種族がいる不可侵地域みたいな感じだろ？森っていうのはある意味で結界の象徴みたいな言葉で。そしてそのトランシルヴァニアと言ってもそれが意味する地域は時代と共にいろいろ変遷があるんだ。肝心のその人型吸血種族が存在しているというのは一般には広義の意味でのトランシルヴァニア……」
「はいはーい。そこまで」
キセンは説明を始めたエイルの目の前に掌を突き出し、それを制止した。
「話が長くなりそうだから、あなたの地理の講義はまたにしましょ」
エルデは不満そうだったが、文句は言わなかった。
「エイルが地理が得意やというのは聞いてたけど、その得意な分野やと、けっこうおしゃべりになるっちゅうのは新発見やな」
「……すまん、つい」
エイルは指摘されて恥ずかしそうに肩を落とした。
「ま、要するにあなたたち亜神のような存在がフォウにもいるという説はいろいろあるのよ。吸血もそうだし、三眼を持つ種族とか、いろいろね。妙な符号でしょ？」
「ふーん。なかなか興味深い話やな」

「という事で、その辺は時間ができたらゆっくりエイル君に語ってもらったらいいとして……」

キセンはそう言うと再び机の引き出しを開け、今度は羊皮紙を筒状に丸めたものを取り出した。それはかなりの大きさで、長さが一メートル以上あった。

「美人すぎる亜神さん、あなた、記憶力も相当のはずよね？」

「それがどうした？」

「さすがにこれは渡せないから、ここでしっかり覚えてちょうだい」

そう言ってキセンが広げた羊皮紙には、しかし何も書かれていなかった。白紙だったのだ。しかしエイルが顔を上げようとした時、突然表面に絵が浮かび上がった。いや、絵ではなく、それは何かの見取り図のようなものだった。

「これは……」

「ハイデルーヴェンの地下房とそれをつなぐ地下道の地図よ。ただし、大まかなもの。さすがに私も忙しくて正確な測量までは手が回らなかったから、大体の位置関係だと思ってちょうだい。でも、これがあるのと無いのとでは雲泥の差よ」

見ると、キセンは手に小さなスフィアを握って、それを羊皮紙の真上に掲げていた。どうやらキセンのルーンは全てスフィアを使って発動させるもののようだった。

エイルは精霊石、あるいはルーンストーンと呼ばれる石のことを思い出していた。仕組みはあれと同じものなのだろう。だが単純な事しかできないと言われているルーンストーンとキセンのスフィアを使ったルーンとは、比ぶべくもない性能差があった。

「ここがあなたたちのお仲間が居る場所ね。この部屋からはここへ出るから、最短経路はこういう感じね」

キセンはそう言いながら、それぞれの場所の位置関係を指で示して見せた。

「これはありがたいな。素直に礼を言うとく」

珍しくエルデがそう言うと、キセンはにっこり笑った。

「とは言っても、水先案内なしでは確実に迷うから、ペンドルトン君に案内を頼んでおくわ。彼なら顔見知りだし、あなた達を恩人だって思ってるから、いろいろと、たぶん必要以上に力になってくれるわよ。力は弱いけどルーナーでもあるしね」
「それや！」
エルデはキアーナの話が出ると、思い出したようにポンと手を叩いた。
「キアーナ・ペンドルトン。あの子は何者や？」
「何者って？」
涼しい顔で聞き返すキセンにエルデは食い下がった。
「この期に及んでとぼけんどいて欲しいな。ウチの事を知ってるんやったら、その辺のごまかしがきかへんくらい、わかってるやろ？」
「どういう事だ？」
エイルはそう言うと、どっちに質問を向けていい物やら決めかねる様子で、エルデとキセンを見比べた。
「治療してる時にちょっと言うたやろ？キアーナは普通のルーナーやないんや。どこがって言われへんけど、ルーナーやのに平常時に纏ってるエーテルが多すぎる。しかもその量が不安定や。フェアリーやったら話はわかる。けど、フェアリーが纏うのは単一の属性を持つ精霊波だけ。キアーナの周りには全属性のエーテルが取り巻いてるんや。これがおかしないわけがないやろ？」
「なるほど、そう言えばお前、『妙なルーナー』だって言ってたな」
「あと、あの匂い……あの匂いが何か関係あるんちゃうのか？」
「あの、腐った果物みたいな妙な匂いか？」
エルデはうなずいた。
「ウチには未知の匂いや。ひょっとしたらキアーナの能力に何か関係があるのかもしれん」
エイルとエルデは同時に視線をキセンに移した。
「プロット教授長。オレはまだいいですけど、エルデはあやふやな態度をする人間を信用しませんよ。知ってるなら教えて下さい」

キセンは不機嫌そうに頭をガリガリとかくと、二人から視線を逸らすようにして話し始めた。

# 第六十話　人と亜神と科学者

「彼は……ペンドルトン君は、私が作り上げたルーナーよ」
キセンのその短い言葉を、しかしエルデは理解できなかった。
「はあ？」
そして思わずそう言ったが、エルデはキセンが沈黙を守る間に、ある事に気付いていた。漆黒の瞳を大きく見開くと、その視線を部屋の奥にある大きなスフィアに向けた。それは薄桃色の液体の中に浮かぶ《深紅の綺羅（しんこうのきら）》の棺とも呼べるスフィアだった。
「まさか……」
「私は促成ルーナーって呼んでるわ。言ったでしょ？《深紅の綺羅》の血液には様々な特性があるって」
「まさかお前は……人間に死んだ亜神の……血を飲ませたんか？」
キセンは頷いた。
「それだけじゃうまくいかなくて、私がルーンを記述した小さなスフィアを体に埋め込んで触媒にしてるの。そうする事で一部のルーナーは驚異的に力を増幅できた……」
「こ、この女……」
「やめろ、エルデ！」
わずか一瞬で儀仗ノルンを取り出したエルデの、その腕にしがみつくようにしてエイルが黒髪の亜神の動きを制した。額には既に真っ赤な三つ眼が見開かれ、それは怒りに燃えていた。
「離せ、エイル！」
「お前、さっき亜神の配下の話をしたろ？あれと似たようなものじゃないのか？」
「ぜんぜんちゃうわ！」
「違うのか？」
エイルのきょとんとした表情を見たエルデは黒目がちな切れ長の目をつり上げると怒鳴った。

「配下は、亜神が自らの血に特定の機能を持たせて相手に与える、言ってみれば一種のルーンサークル、つまり精霊陣みたいなもんや。主である亜神の意思が込められたエーテルがあるからこそ、正確に精密に、間違いなく機能するんや。何の意思も込められてへん亜神の生の血を飲んだりしたら……」

「どうなるんだ？」

エルデは眉根を寄せると、表情を曇らせた。言いたくはない事なのだろう。

そのエルデの様子を見て、キセンが代わりに答えた。

「亜神の血を飲んだ人間の話、亜神の肉を喰らった人間の話。もうこのファランドールからはほとんど消去されているけど、大昔にはそういう話は伝説としてこの世界には数多く残ってたのよ」

悪びれずにそう言ってのけるキセンに、エイルは思わず顔をしかめてつばを飲み込んだ。

「それって、ひょっとすると……」

「ひょっとしなくてもどこの世界の人間でも同じ。人の感覚では信じられない程の長寿を誇る亜神の力、人とは桁違いの能力……血を飲み、肉を喰らえばそれらが得られるんじゃないかって思うのはまあ、自然な流れよね？フォウじゃ人魚伝説なんかが有名だわ」

「不老不死……だって言うのか？」

「少なくともそういう行為をした人はそう思っていたんでしょうね。亜神狩りが行われた背景は天敵排除というよりも、むしろそっちの方が理由としての割合は大きいのかもしれないわ。もっとも亜神は死ぬとすぐに灰になっちゃう場合が多いから実際に肉や血を食らえた人間なんて、そう多くはないと思うわ」

「下衆どもめ！」

エルデはそう言うと儀仗ノルンを高く持ち上げようとした。だがエイルによってそれは再び阻止された。もっともエルデのとんでもない膂力を考えると、ただのピクシィであるエイルの制止など、枯れ草程の重りにもなりえない。つまり、エルデはまだ自制が充分効

いているという事に他ならない。エイルはそれを知ってひとまずは安堵していた。

「でもね。血を飲んだ者は内臓が溶け、肉を喰らった者は体が破裂して皆死んだそうよ」

「え？」

まるで今朝焼いたパンの焼き色の感想を言うような、つまりはきわめて淡々とした普通の声の表情でそう言ったキセンの言葉に、エイルは一瞬動きを止めた。その言葉の持つ意味を理解するのに少しの時間が必要だったのだ。

「まさか、あなたは！」

形相を変えたエイルがそう言ってキセンに飛びかかろうとしたのを、今度はエルデが肩を掴んで引き留めた。

「だから、私は科学者だって言ってるでしょ？本当に毒かどうかを確認するためにとんでもなく希釈したところから実験を始めたわよ。それも最初は人体じゃなくてネズミから実験を始めたわ。次に猫。その次は豚。どれも安全そうな限界点を見つけたから、ようやく人間の臨床実験に取りかかったの。言っておくけど私は科学者だから、不老不死なんて信じちゃいないわ。私がやりたかったのは普通の人間や力の弱いルーナーが亜神の血を使って自分の能力を拡張できるんじゃないかっていう実験なのよ」

「そんなの、学者の勝手な言い分だ。どう考えても人体実験じゃないですか」

「人体実験なのは間違いないわね。でも実験は本人の了承済みよ。同意を得てやったのよ。もちろん亜神の血だなんて言ってないけどね。特別なルーンを練り込んだ増幅薬。でも死ぬかも知れないっていう説明をしたわ」

キセンはきわめて普通の口調で、自分の実験の経緯をしゃべった。いや、その時のキセンの顔はむしろ嬉々とした表情であった。

それを見たエルデとエイルは毒気を抜かれたような気持ちになっ

た。

いや、改めて悟ったというべきであろう。キセン・プロット……いやフォウでヴェロニカ・ガヤルドーヴァと言う名で知られるその女性科学者は決して普通の人間などではない、という事をである。少なくとも普通の人間の感覚で生きているとは思えない。

フォウでまともでない人間は、ファランドールに在ってもまともであるわけがなかったのだ。キセンは人間である前に、ある意味で純粋な科学者だった。

科学と言えば聞こえがいいが、それは一つの宗教の名称と言っていい。優秀な科学者とはすなわち科学という宗教に帰依した狂信者のような者だろう。そんな人間の心に、全く違う価値観を持つエイルやエルデの言葉が響くと思う方が間違いなのだ。

「あなたにはフォウとかファランドールの道徳とか、とにかくそういう普通の価値観をぶつけても無駄なんでしょうね」

「そもそも人として外れ過ぎや。賢者に知れたら、問答無用で処刑対象や」

「知れたら、ね」

キセンはそう言って不敵に笑って見せた。

「ウチがその処刑権を持ってるっちゅう事を忘れたらアカン」

「あら怖い。じゃあ、ここで私を殺すの？」

「気持ちはわかる。オレだってさっきは変な衝動に駆られた。でも、やめるんだ」

エイルはエルデをそう言ってなだめると、キセンに顔を向けた。

「あなたも、そのわざとオレ達の神経を逆なでするような言い方はやめるべきだ。エルデが本気になったらオレくらいの力じゃ止められないんですよ？」

エイルの語気に押されたのか、キセンは肩をすくめて見せた。

「でもね、これはもう科学者としての業なのよ、業。亜神の血液が特殊な素材だって事はわかっていたから、私としてはいろんな仮説を立てたわけ。そうやっていろんな可能性を追求していった中で彼、

ペンドルトン君は偶然『そうなった』のよ。もちろん仮説だけで人体実験を行ったのはあなたの言う通りだけどね」

「こいつ、シレっと……」

「押さえてくれ、エルデ。ここでこの人をどうにかしても何にもならないだろ？それより、プロット先生」

「何、アトリの少年？」

「お願いですからエルデに誓って下さい。これ以上その、促成ルーナーを作らないって。あなたがそれを誓えば、エルデはそれをきっと信じます。今までの事も聞かなかった事にしてくれますから」

「あらそう？なら、誓うわ」

「即答か？軽すぎるやろ！」

「あら、誓えって言われたから誓ったのに」

「こいつ……」

エイルにはエルデの歯ぎしりの音が聞こえてくるようだった。

「正直に言うと、そっちの研究はもうやめたの。促成ルーナーが生まれたのは本当に偶然よ。そもそも成功したのは二例だけ。それだって適合したというだけで、ルーンの能力は不安定過ぎる。後は全部失敗。相性ってヤツがありすぎるのよ。そしてその相性を定量的に解析する程、実験の回数を増やせるわけでもない。だからもうやらない。誓うわ」

キセンの言葉が終わるとすぐ、エイルには儀仗ノルンが消えたのがわかった。

「エイル、もうええ。手を離してくれ」

そういうエルデの額から、あの赤い瞳は消えていた。

エイルの提案をエルデは受け入れたのだ。もちろん納得はしていないだろう。だが、妥協はしたという事であろう。

「一応、聞いとく。適合せえへんかった人間はどうなった？」

「……」

「プロット教授長？」

エルデの質問に口をつぐんだキセンに、エイルが怪訝な顔で声を

かけた。
「ご想像の通り、死んだわ」
淡々とした声だった。エイルは我が耳を疑った。
「え？」
「わかった。お前はそういう事をもみ消せるだけの力を持ってるって事やな。この町の上の人間だけやのうて、さっき見たように、外部の有力者にも相当のコネがあるっちゅうことや」
「そうね」
「本人の同意と覚悟の上、やな？」
「嘘じゃないわ。意味はないけど、一応本人自書の念書もあるわ。見たいなら見せてあげるけど」
エルデはそれには及ばないと首を横に振った。
「それで、成功した二例について、問題はないんか？」
エルデの声は落ち着いていた。怒りが収まったのか、あるいは怒りを通り越してしまったのか。さすがに表情だけではエイルにはわからなかった。
「問題って、副作用の事ね？」
「それを含めて、わかってる事を教えるんや」
「一言で言うと、できあがったのは不安定なルーナー。力を制御できないルーナーと言った方がわかりやすいかもしれないわね。だからできるだけルーンは使わないように言ってあるわ」
キセンの話を聞いたエルデの顔が歪んでいるのをエイルは見逃さなかった。力の制御ができないルーナーとは、幼い頃のエルデ自身の事でもあった。そしてシグ・ザルカバードの下で共に学んだ多くの仲間を失う事になった出来事、すなわちユート・ジャミールが放った制御不能のルーン……。全てはルーンに翻弄された者が生み出す悲劇であった。
「それから、だんだん感情の起伏が無くなってきてるわね。ペンドルトン君は施術してまだそれほど経ってないから大丈夫だけど。ああ、それから血の効き目は永続しないのよ。だから定期的に補充が

必要。完全に切れたら……」
「切れたら？」
「それはまだわからないわね。怖くてまだ試してないから。それともう一つ」
「なんや？」
「時々、体中に我慢できないくらいの激痛が走るらしいのよ。発作は数時間続いて、放っておくと自分で自分を傷つけちゃうの。いろいろ試したけど普通の鎮痛剤じゃ効かないから、特別な薬でそれを抑えているわ」
「特別な薬？」
「ニアレーよ」
エイルはその名の薬を知らなかった。だが……
「……とんでもない事をしてくれたもんやな」
当然ながらハイレーンであるエルデはその名に反応した。いや、反応したという生やさしい状態ではなかった。エルデを一目見れば、それがわかった。エルデの露出している肌が、全て鳥肌になっていたのだ。
「シンセミアも試してみたけど、そっちはダメでね。そもそもファランドールに自生している大麻ってそういう特性がないみたいね。で、例の本に載っていた薬を作ってみたってわけ」
「外道が」
エルデは吐き捨てるようにそう言った。
「ニアレーって？」
「この世のものとも思われへんような快楽をもたらすといわれてる禁断の薬や。そうか、あの匂いはニアレーやったんか……」
「市井の文献からは製法どころか、もう名前すら消えているわね。四聖という言葉もそうだけど、正教会の仕事って言論統制というか言葉狩りみたいね」
「麻薬……なのか？」
「フォウではそう言うわね。ファランドールでは麻薬という言葉が

そもそもないの。でも、ニアレーがないともう彼らは生きられないわ」

「なんて事を……」

ニアレーの正体を聞いて、エイルはさすがに絶句した。

「実験もええけど、亜神として一つ忠告しといたる」

エルデは薄桃色の、自らの血液が含まれた液体の中でたゆたう《深紅の綺羅》を見つめながら言った。

「ルーンをもてあそぶな。ルーンは本当に操る力がない者が手を出してええもんやない。ましてやエーテルは理屈で完全制御できるもんやない。ルーナーが能力以上のルーンを制御でけへんのと同じや。ましてや自らの体でエーテルを纏って、一体化し、意思を乗せるルーナーと違うて、単純に結果を得るためだけにその力を持つ触媒をいじくり回すような真似は、危険すぎる。アンタはこの場所を守る事に専念したらええんや」

「守るだけではダメなのよ」

「やかましい。部外者風情が勝手な事を言うな！」

「部外者ですって？その言葉は聞き捨てならないわね」

「これは、ファランドールの住民、つまりウチらの問題や。妙な事になる前に、ウチがきっちり話つけたるさかい、お前はそれまで誰もここに近づけんようにしっかり守ってくれたらそれでええ。これ以上いらんことすんな！」

「話をつけるって……まさか《黒き帳（くろきとばり）》に遭うって事？それで話合いをするって？」

「ウチに考えがある。ガタガタ言うな」

「そうか……。ルーンって言うのは、まるでフォウでオレ達がもてあましてる核みたいな物って事なんだな」

「『核』？」

「ああ、使いようによっては毒にも薬にもなる技術の事だ。ただ、その毒も薬も桁違いに強すぎて、その気になればあっという間にフォウを壊滅する事だってできるんだ。オレ達はそんなモノがある世

界で、なんとか均衡を保ちながら細い尾根道をふらふら歩いてるようなものさ」

「ふ……確かにね」

キセンはそう言うと小さくため息をついた。

「例えは今ひとつだけど、確かにルーンと核は似てるところがあるわね。いえ、エーテルと核、なのかもしれないわね。制御ができないという点ではルーンだけど、兵器になり得るという意味ではフェアリーもそうだわ。そもそも人間が扱ってはいけないもの、という点では全く同じね」

だが、その言葉を聞いたエルデは憮然とした表情をキセンに向けた。

「本来エーテルは人と渾然一体になって人を形作るべき要素の一つや。扱ったらアカンとか、そういうモンとちゃう」

「あなたはこの世界、つまりファランドールの人間だから、いえエーテルの存在を否定できない亜神だものね。そうとしか言えないわ」

「なんかムカつく言い方やな」

エルデはそう言うとエイルを見た。同じフォウの人間であるエイルはキセンの今の言葉をどう思っているのか。そんな視線をエイルに投げたのだ。

「核とエーテルを同じように考えるのはどうかな。核は人間が弄くりまわして作り出したものだけど、エーテルは大気と一体化した目に見えない世界の構成要素みたいなものだろ？だったら全く違うモノだとオレは思う。ただ……」

「ただ、何？」

「エーテルもしくは精霊波というヤツの力を使える人間と使えない人間がいる。いや、使える人間の方が圧倒的に少ないじゃないか」

「そうやな。フェアリーはどんどん減ってるし、ルーナーは保護動物みたいなもんやしな」

「オレはここに来てまだ二年だけど、この世界で一番気になってるのはそこなんだ」

エイルはそう言うと顔を曇らせた。その変化をエルデは訝しんだ。
「どういう意味や？」
「エーテルの力を使えない人間が、エーテルの力を自由に使う人間を見て、どう思う？単純にすごいとかうらやましいとか、それだけか？」
「それは……」
「お前の立場だと、そう言う人間がどう思ってるかなんて考えた事がないのはよくわかる。オレだって剣を扱うのが下手な人間を見て、なぜこんな当たり前の事がもっとうまくできないんだって思っていたからな……」
エルデはその一言でエイルが顔を曇らせた意味を理解した。同時にエイルの言いたい事も想像ができた。
「わかった。もうええ」
だがエイルは首を横に振った。
「気を遣ってくれてありがとな。でもオレはたぶんもう、あの事は乗り越えてると思う。この剣を抜く決心ができたのは、そういう事だと思うんだ」
「でも、アンタは実際にまだ抜いてへんやろ？」
「抜くさ。そして剣を剣として使う。そもそも枝や棒は使ってたろ？あれは要するに言い訳だったんだ。剣じゃなきゃいいんだって自分をごまかしてたのさ。わかっちゃいたけど、認めたくなかった。一線は越えてない……オレは本当は人殺しじゃない、もう剣では人を殺さないって。剣で殺さなきゃ人を殺した事にならないなんて、オレもたいがい卑怯な性格だよな。……情けなくて死にそうだ」
「別にええ。ムリに剣を抜く必要はない。ウチがその気になったら人間とか一瞬で灰にできるんや。アンタがムリして……」
「それが嫌なんだ！」
エイルはエルデの言葉を遮って叫んだ。
その剣幕にさすがのエルデも一瞬ひるんだ。
「すまん。お前を怒鳴る事なんてなかったな」

エイル自身も自分の声に驚いていた。すぐに我に返るとうなだれた。

「エイル……」

「お前には……エルデにはこれ以上人を殺して欲しくないんだ。お前の力は圧倒的過ぎる……。それはやっぱり核と同じだよ。強大すぎる力は……誰も幸せにしないと思う」

エルデは開きかけた口をすぐに閉じて、口を突いた質問を飲み込んだ。聞いても意味のない質問だった。たとえそれがどんな答えであったとしても、エルデはそれをエイルから聞きたくはなかったのだ。

だが、飲み込んだ答えをエルデは反芻していた。

（……誰が？幸せになれないのは一体誰？）

「アトリの少年」

二人のやりとりをじっと聞いていたキセンがエイルに声をかけた。

「君の言いたい事はなんとなくわかるわ。でもね、科学者はそこに可能性があれば試さずにはいられない。そこに力があれば使わずにはいられなくなるのと同じ事ね。それはみんな人間の性みたいなものよ。でも、君は一つ大きな勘違いをしてるわ」

キセンの言葉にはエイルだけでなくエルデも反応した。

「え？」

「勘違いやて？」

「だから、こういう話をすると長くなるって言ってるでしょ。今の一言は君がその件について気になって気になって仕方なくなるように私がかけた呪いの言葉よ」

「プロット先生……」

「ゆっくり時間がある時に尋ねていらっしゃい。エーテルが大気と一体化しているこの世界の『当たり前』について、君の考えが根本から間違ってる事を教えてあげるから。でも……」

「なんです？」

「あなたとはファランドールではなく、もっと早く……そう、フォウで出会いたかったわね。そんな気がするわ」

そう言ったキセンの顔に、いつものにやにや笑いはなかった。

真顔のキセンはそれだけ言うとエイルの問いかけを遮るように部屋の一隅を指さした。

「さ、いくら夜明けまでに時間があるからってのんびりしてたらお仲間の方が動き出して会えなくなるかもしれないわよ。私はなんだかんだいって保身の為に、ヴェリーユの連中の要求に応えないわけにはいかないしね」

キセンの指さす方向、そこには彼らがこの部屋に入ってきた時に使ったものとは別の扉があった。

「あの扉は私の部屋の一つ……第一高級学校の教授棟につながっているわ。ペンドルトン君がそこで待っているはず。扉の向こうはルーンで作った隠し通路だから、例のスフィアを持っている人間だけが通れる仕組みよ。ペンドルトン君にはあのスフィアは渡してないから、道中の扉はあなたたちのスフィアを使ってね」

当然ながらキセンの言う「呪い」の言葉はエイルにとって気になるものだった。できれば今ここで多くの疑問を解決しておきたい。いや、解決するに超した事はないはずだった。エイルの知らないファランドールの事、いやフォウとファランドールの関係を、キセン・プロットは少なからず知っている。いや、核心部分を握っていると言ってもいいだろう。それを知った上でファランドールを往くに越した事はない。

だが彼女自身が指摘しているようにエイル達にあまりぐずぐずしている時間がないのもまた事実である。新教会の人間をティアナと対峙させるわけにはいかないのだ。ティアナに会い、サミュエル・ミドオーバがかけた理不尽な呪法を解く。それが当面のエイル達の目的であった。

「最後に一つだけ答えて下さい」
エイルは全くの別件を口にした。
「若い女性のアルヴの二人組がハイデルーヴェンに入り込んでいるっていう情報が耳に入ったら、オレ達に情報が来るように配慮してもらえませんか?その二人もオレ達の仲間なんです」
エルデがそれに付け加えた。
「先に言うとく。両方賢者や。三席と末席。プロット教授長側から要らん事は何も言わんといてもらえると助かる。むしろ接触とか、一切せんといて欲しい」
ラウ・ラ＝レイとファーン・カンフリーエがあの後ハイデルーヴェンに入ったかどうかはわからない。しかし逃げ込んでいたとしたら、アルヴ狩りを避けるために地下へ潜む可能性が大きい。
「若い女性二人組のアルヴね。了解。気にしておくわ」
キセンは肩をすくめて見せたが、ほぼ二つ返事で請け合った。
「どちらにしろ、君はいつも誰かの心配をしているのね」
「……助かります」
エイルはキセンの情報に対して頭を下げた。それを見たエルデはさすがに頭は下げなかったが、目を伏せて黙礼をした。
「相手は賢者でしょ?だったら私の方を心配して欲しいくらいだわ」
そうつぶやくキセンを後に、エイルはきびすを返した。
だが、エルデはエイルに続かなかった。

「エルデ?」
その場を動こうとしないエルデに気付いたエイルはすぐに立ち止まると振り返った。
「ちょっとだけ待っといて」
エイルを振り返らずそういうと、エルデは右手をまっすぐ前に突き出した。儀仗ノルンを呼び出すいつもの格好だった。
「ノルン」
予想通りエルデはノルンを呼び出すと、そのままノルンを白一色

の儀仗に変化させた。
「スクルド」
その変化を見ていたキセンの青緑色の瞳が見開かれた。儀仗を変化させる賢者は見た事があっても、その儀仗をさらにもう一段階変化させるルーナーを見るのは初めてなのだろう。
「何のつもり？」
自分と対峙し、じっとにらみつけているエルデに、さしものキセンも不安を感じたのかそう声をかけた。
「先生は相当無理してるやろ。体調も悪そうや」
エルデはそういうとつかつかとキセンのすぐそばまで歩み寄った。その言葉でエイルにはエルデが何をするのかがわかった。伸ばしかけた手を下げると、自然と口元に笑いが生まれた。
エルデは左手を伸ばして身構えるキセンの肩にそっと乗せた。
「な、何よ？」
キセンの戸惑いなどお構いなしにエルデは数秒間そのままじっとしていた。やがて目を細めると儀仗スクルドの頭頂部をキセンのもう一方の肩にそっと乗せた。
「セリダ・アルダ・キュリーユ」
それは短いルーンだった。
「え？」
キセンにもそれがルーンである事だけはわかったようだった。
「お前は酒の飲み過ぎや。肝機能がちょっと低下してるで」
「えええ？」
「あとは寝不足による疲労やな。こっちは思ったよりはたいしたことないから、今のですっきり元通りやろ。ま、お前さんも色々あるんやろけど、あんまり無理しなや。フォウに元気な体で帰りたいんやろ」
エルデはそれだけ言うとキセンには何も答えず、改めてきびすを返した。
「ちょ、ちょっと待って」

キセンはその後ろ姿に向かって手を伸ばした。
「あ、あの……」
呼びかけた声で立ち止まったエルデの背中に、伸ばしたキセンの掌が触れた。
その時だった。キセンの視界に白いものが映った。それを見て、出かかった声が思わず止まった。
「これは……羽毛？」
キセンはそうつぶやくと、ふわふわとした小さな白いものが舞い落ちて来た方角……つまり天井に目を向けた。
そこにはまさに今、キセンめがけて降り注ごうとする無数の小さな羽毛の群れがあった。同時に自分の体に触れた羽毛が鈍い光を放って吸収されるかのように消えていくのが見えた。
エルデがキセンに施した治癒ルーンは即効性だった。
その効果はまさに劇的で、キセンからすれば自分の頭がいつになくすっきりしているのをはっきりと自覚できるほどの効果があった。さらには岩のように張って、凝りに凝っていた肩が嘘のように軽い事にもすぐに気付いた。あまつさえ、エルデが指摘したように酒量の多さによる反応でむかついていた胃が、その抗議を取り下げたかのようにおだやかだったのだ。
「すごい。こんなに強力で即効性のある治癒ルーンが存在するなんて聞いた事もないわ」
それは独り言だった。キセンが無意識に頭の中の言葉を口にしたのだ。
キセンは自分の体でエルデの治癒の力……それが例えエルデの本来の力のほんの片鱗であったとしても……を体験し、かつてない程の興奮に包まれていた。だからこそ、心に浮かんだ感嘆が声として漏れ出たのだ。しかし、その事を自覚したキセンは、すぐ後に続いた次の言葉を声に出さぬよう制御できるだけの理性を取り戻す事に成功していた。
（やっぱり、手に入れたい……）

二人は完全に無防備だった。
エルデの背中を見つめるキセンの目が、怪しく光った事に、遠ざかるエルデも、その隣を歩くエイルも、当然ながら全く気付かなかった。

だからそれは、突然訪れた。
エイルとエルデが扉の前にたどり着いた時だった。
部屋を辞する前にキセンに別れの挨拶をしようとエイルが振り返ろうとした瞬間。
その時初めてエイルは気付いたのだ。
「エルデ！」
エイルがそう叫ぶのと、両手でエイルを突き飛ばしたのはほぼ同時だった。エルデは身構える時間もエイルが何をしようとしているのかもわからないまま、横合いからエイルによって強い力で思い切り突き飛ばされた。
だが、エイルの腕がエルデの体に触れるよりも速く、何かがエルデの背中に当たっていた。

「エルデ！」
エイルがもう一度その名を呼んだ時、エルデの体は石の床にうつぶせに倒れていた。
「ぐあっ」
倒れたまま動かないエルデのそばに駆け寄ろうとしたエイルは、そのままその場に崩れ込んだ。足を動かそうとしてそれが敵わず、思わず倒れ込んだのだ。
同時に激痛が走った。左の肩と、そして右の太ももから。
いったい何が起こったのかをエイルが理解する前に、後方で大きな、そして鈍い音がした。同時にすぐそばでカランという軽い音が二つ。

だが音の正体よりも自分の痛みの原因よりも何よりも、エイルの視線はエルデの姿に釘付けになっていた。

俯せに倒れたまま、ピクリとも動かない瞳髪黒色の少女。腰まである髪は乱れて床に広がっていた。そして

「エルデ！」

エイルは叫んだ。

叫ばずにはいられなかったからだ。

呼びかけて、答えを聞かずにはいられなかった。

「答えろ、エルデ！」

だが、横たわったエルデの体は反応しなかった。代わりにエルデの体から赤黒いものがしみ出すように床に流れ出るのを見つける事になった。

エイルから見えているのはエルデの後頭部で、顔は向こう側を向いたままである。だからエルデの表情はエイルからは見えない。泣いているのか、苦しがっているのか……。

だが見えなくてよかったのかもしれない。いや、エイルは本能的にエルデの顔を今は見たくないと思っていた。恐れていたと言った方がいい。

だからその恐れを払拭する証拠が欲しかった。言葉でなくてもいい。言葉にならなくてもいい。エルデの声が聞きたかったのだ。

「頼む。何か言ってくれ……エルデ……」

エイルは今自分がどんな表情をしているのかがわからなかった。

視線の先にあるのは、今まで言葉を交わしていた恐ろしいほど美しかった少女の姿だ。

紗（うすぎぬ）を纏い、質素な寝台で目を閉じて横たわっていたエルデ。

暗い龍の道を一緒に歩き、だぶだぶの寝間着の袖をまくってできたてのぜんざいを何杯もお代わりしていた笑顔の少女の姿が脳裏に浮かんだ。

手には、姿を消して、はぐれないようにとしっかりとつないだ細

い指から伝わる暖かみがまだ残っている。
自分の正体が知られる事をおそれて、エイルの腕の中で涙を流していた時に鼻腔をくすぐった甘い香り。エイルの頬にはその暖かい涙の感触がまだしっかりと残っていた。
それなのに……。
今エイルの目の前に横たわっているのはその少女なのだ。
だが、もはやそれは少女とは呼べなかった。
動かず、声も出さない……エイルでさえ、それはただの人形にしか見えなかった。
そもそも目の前で横たわるエルデの姿は普通の少女と呼ぶにはあまりに異常な姿だった。在ってならないものが……見た事もないものがその背中から生えていた。それは決してエイルの知っているエルデ・ヴァイスの背中にあってはならないものだった。

「それ」が何なのか、エイルには一目でわかった。
儀仗だった。
まっすぐな木製の儀仗。
頭頂部は握り拳大に太くなっているが、ただそれだけだ。スフィアや特別な飾りなどはない。ただのまっすぐな細い儀仗だった。
普通の儀仗と違う点があるとしたら、らせん状に溝が掘られていることであろうか。
エイルはそれに似たものに見覚えがあった。フォウで見たものだ。
それは木製の長く、そして巨大なネジ釘の形を成していた。

エイルは横たわるエルデから視線を逸らすと、そのネジ釘型の木槍が飛んできた方向に顔を向け、声の限り叫んだ。

「キセン・プロットォ！」

＞ｉ２３５１６―１８３１＜

# 第六十一話　亜神を滅するもの（前書き）

合わせ月の夜　第二部　深紅の綺羅　第六巻
通巻第十四巻のスタートです

# 第六十一話　亜神を滅するもの

＞ｉ２３４６０―１８３１＜

叫ぶと同時に、エイルは妖剣ゼプスの柄に手をかけた。
だが、剣を鞘から抜く事はできなかった。急に体が硬直して動かなくなったのだ。
「くっ」
その感触をエイルは知っていた。時のゆりかごでエルデにかけられたものと同じ、空間固定ルーンだった。要するにエイルは体の自由を奪われたのだ。
もちろん、そのルーンをかけた人物は明白だった。怒気でつり上がったエイルの目が見つめる先……そこに平然とした顔、いや、それはもはや無表情と表現した方がいいだろう……で仁王立ちになっている青緑の髪の女性だった。
「だましたな？　最初からオレ達をだましてたんだな」
幸い言葉はしゃべれるようだった。ほとんど叫び声と言っていい大声で、エイルは自分を見下ろすキセンに問いかけた。
いや、問いかけたのではない。怒鳴り声を投げつけたと言った方が正確であろう。
だがキセンは眉一つ動かさなかった。
「心外ね。そんなつもりは全くなかったわ。だってこれはついさっき思いついたんだもの」
その声はしかし無表情な顔とは違い、どこか嬉しそうな響きを持っていた。
「何だって？」
エイルは信じられないといった表情でキセンを見つめた。信じられないのはキセンの言葉の内容だけではない。その明るい口調に対しても強い違和感を覚えたのだ。

「エルデはお前をルーンで治療してやったじゃないか。なのになぜだ！」
「だからなのよ」
キセンはそう言いながら横たわるエイル達の側に近づいてきた。
「え？」
「ペンドルトン君の説明を聞いてまさかと思ったけど、自分で体験してみると文字通り聞きしに勝るすごい回復力だったわ。あの治癒の亜神の力はすごい。それにどう考えてもあれでも最高出力じゃない。それどころか指先をちょっと曲げただけの、言ってみればあの子にとっちゃ朝飯前程度のルーンなのに、私はまるで生まれ変わったかのように体が軽くすっきりしたのよ。物心ついた時から私は肩こりには悩まされていたから、今はそりゃあもう生まれ変わったようなスッキリした気分だわ」
エイルにはキセンの言っている事がまったくわからなかった。
「だったら」
「そんな力を見せられたら、普通は自分のものにしたくなっちゃうじゃない？」
「何だって？」
キセンはエイルのすぐそばまで歩み寄ると立ち止まった。無表情だったその表情が変化しているのをエイルは認めた。無表情だったキセンの顔は、一転して何かを成した遂げたような満足感あふれた笑顔に変わっていた。そこには人を殺したという罪悪感のかけらすら存在してはいなかった。
「でも、これがこんなことに役立つとは思わなかったわ」
キセンはそういうと足下に転がっているネジ釘状の儀仗を拾い上げた。放たれた三本のうちの一本で、エイルの体をえぐるようにかすめた二本の内の一本だった。儀仗の長さはちょうどキセンの身長ほどだった。
「的を正確に狙ったのはいいとして、まだ精度が完全じゃないわね。それに稼働は三本。二本も不発があったというのは考え物ね。再調

整が必要だわ。まったく面倒ねえ」
　キセンは独り言のようにそう言うと、その儀仗の先についている血を見つけてエイルに視線を戻した。
「『そっち』はどんぴしゃだったけど、君は運が良かったわね。確かあの時、君はとっさに動いたように見えたけど、まさかこれに気付いたの？」
「あんたは、オレの事をよく知ってるんだろ？」
「ああ、そうかそうか。『敵の動きがわかる』ってやつ？でもあなたは私を敵だとは思っていなかった。だって本当にこれを作動させる直前までは敵じゃなかったしね。だから気付かないはずよね？それより『先生』から『あんた』に格下げ？　まあ、無理もないわね」
　キセンはもう興味を失ったといった風に手に持っていた木製の儀仗を無造作に床に放り出した。儀仗は床で弾むと、そのまま惰性で壁に向かって転がっていった。顔が固定されているエイルは、見るともなしにその動きを視界に捉えていたが、その視界に別のあるものを見つけ、鼓動が高鳴った。
「私は『これ』が手に入ればよかったから、君を殺すつもりは全くないのよ」
　あごでエルデを指しながら、キセンはこともなげにそういった。
「それにしても君、よく見ると結構な大けがね。でも運がいいわ。君には最初の実験台になってもらうつもりよ。もちろんこの亜神の治癒能力の効果確認の為のね。この子の体液や組成物の持つ潜在能力はいったいどれほど私を驚かせてくれるのかしらね。今からドキドキするわ」
「外道め」
　その言葉を聞いたエイルは思わず唸った。
　そして同時に悟ったのだ。
　キセン・プロット、いやヴェロニカ・ガヤルドーヴァという希代の科学者がなぜフォウであれほど敵が多かったのかを。ガヤルドー

ヴァ博士の功績を称える人間は居ても、功績を成した「人物」に焦点が当てられる事はあまりなかった。それどころか、天才科学者「ガヤルドーヴァ博士」という人物についての評価はお世辞にも偉人を称えるものばかりとは言い難く、妙な噂の方が多かったのだ。それも圧倒的に、である。

エイルはそれを現象だととらえていた。あまりに偉大な人物に対する妬みや嫉み、つまり嫉妬が高じて、世の中をしてそうさせるのだろうと。

だが、エイルは自分の考えこそが大間違いだったという事を思い知った。違うのだ。

エイルを見下ろす青緑色の髪の科学者は、つまり本当に純粋に自らの好奇心以外には何の価値も見いださない、いや見いだせない特異な人間なのだ。

言い換えるならば、それは価値観の相違というものだ。キセンにとって自分の好奇心を満たす行為は是であり、道徳も宗教も、あまつさえ法律さえ防波堤として機能する事はないのである。

天才と狂人は紙一重という言葉を、エイルは自分の体で実感する時が来るとは思わなかった。だが、まさに目の前に立っている人物はそれを地で行く究極の「人でなし」だった。

「科学者に外道も内道もないわ。事実があり、その事実を知ろうとする欲望があるだけよ」

「狂ってる」

「フォウではよく言われたわね。でもこっちでその言葉を聞くのは久しぶり。懐かしいわね」

エイルの言葉はキセンの感情を揺らす事は出来ないようだった。それどころか、もうその話には興味がないといった風に話題を変えてきた。

「ねえ、君は知ってる？白木の杭」

よほど気分が高揚しているのだろう。それまで見せた事もないよ

うな笑顔でキセンはエイルにそう尋ねた。
「白木の杭？」
「そうよ。あなたも聞いた事があるでしょ？吸血鬼の伝説に必ずついて回る、奴らが苦手なもの、つまり弱点よ」
一般にフォウでは吸血鬼は不死とされているという。だがその強大な力の反動として数々の弱点があるとも言われる。その一つが白木で心臓を貫くと不死の化け物も息絶えるというものである。
それはまさに今、キセンがこの場で実証したものであった。もっともファランドールの亜神は、圧倒的な腕力と回復力があり、相当な長寿であるとされるが、フォウの吸血鬼とは違い、もともと不死ではない。
「他にもいろいろあるわよね。十字架、流水、太陽光線、炎、ニンニクなんていうのも」
キセンは得意げに語りだした。
彼女に依れば、フォウの吸血鬼の弱点のうち亜神に対して効き目があるのは唯一白木の杭だけなのだという。
「まあ、そもそもフォウでも十字架やニンニクなんていうのはでたらめみたいなものでしょうしね。十字架はキリスト教の最も重要なアイコンで、それが魔物に恐れられているというのは宗教の宣伝を考えると効果的で、まさに宣伝効果をねらったご都合主義の権化みたいな例だし、太陽の光については神の力の象徴で、人間には御利益があるけど、化け物は闇の世界にしか生きられない、なんていう単純でわかりやすい明暗系道徳観ね。ニンニクは臭いの代表ってだけで、そもそも嗅覚が人間より発達している彼らは、においが強いものに対して人間より刺激が強くて、クサいものを嗅ぐと参っちゃう、ってだけでしょうよ」
キセンの話を聞きながらも、エイルの視線は声の主の向こう側に向かっていた。
エルデが倒れた瞬間に、エイルにはキセンに対する明確な殺意を持った。だが怒りで我を忘れそうになる前に固定ルーンで体が動か

なくなってしまった事が、頭に上った血を冷ます機会をエイルに与えた。しかし冷静さを取り戻したにも関わらず、それは殺意の喪失にはつながらなかった。むしろエイルは確実にキセンの命を奪う方法を考え続けていたのだ。もしあの時、闇雲に切りつけていたならば、まだ隠されている可能性がある仕掛けによって返り討ちに遭っていたかもしれないのだ。

おかしな話ではあるが、冷静に計算する時間を与えてくれたそのキセンに対し、エイルは感謝すらしていた。

エイルとしては、キセンにはいろいろと聞きたい事があった。その口ぶりからしてもファランドールとフォウ、いやプロット4との間に何らかの関係があるのはもはや間違いない。キセンはその点についてエイルに正確な説明ができるはずだった。

フォウに戻る術についても同様だ。おそらくキセンはいくつかの方法を考えているに違いない。キセンの事である。既に実践して失敗したものは数多いだろう。だがそれでも現状のキセンの持ち駒では試す事すらかなわない方法が、まだいくつもあるに違いない。

エイルは『アトリ』なのだ。移動混信点と言われる特異な存在である。それがフォウ側ではなくファランドール側にあるという事は、二つの世界を結ぶ為の経路を開けるための鍵になりはしないか？少なくともエイルの存在はキセンにとっては新たな可能性のはずだ。おそらくキセンは頭の中で既にその為の実験をいくつも構築しているに違いない。

そしてキセンから要請があれば、エイルとしては迷わず協力するつもりだった。ほんの一分前までは。

だが今のエイルの胸に去来するものは、キセンに対する憎しみのみであった。フォウに戻る道筋など、エイルにとってはもはや何の価値もなかった。エイルにとって大切な存在であったエルデを実験材料としてしか見ない青緑色の髪の女を、両方の世界から消滅させる事が自らの生まれてきた意味に違いないとさえ思い込んでいたのだ。

「さて、おしゃべりはこれくらいにして、先に『これ』の処理をしておかないとね」

人間と違い亜神はその命が尽きると、あまり時間を置かずに灰になって消滅するのだという。それを防ぐ方法は、その亜神の血で体表面を覆う事。それが《深紅の綺羅》の事例に依ってキセンが得た亜神の特徴の一つだった。

エイルは自分が得た知識を得意げに話すキセンに対し、思わず怒鳴り声をあげた。

「エルデを『これ』とか『化け物』とか呼ぶな！」

亜神の持つ特性など、どうでもよかった。そんな事よりも何よりもエルデの遺体を物扱いする言葉を、エイルは許すわけにはいかなかった。

しかしその叫びは、二人の価値観に埋められない広く深い溝がある事を浮き彫りにしたに過ぎなかった。

「あなたにとっては大事な人の亡骸でしょうけど、普通の人間にとって化け物の死体なんて、モノ以下よ。そして私にとってはただの素材」

キセンは小さく鼻を鳴らすと馬鹿にしたような調子でそう言い、まるでエイルを挑発するかのように横たわるエルデの頭を靴のかかとで軽く蹴って見せた」

「やめろ！」

エイルは押さえていた怒りが再びみぞおちあたりからこみ上げてくるのを感じた。

「その汚れた足でエルデに触るな！」

「あらあら。あなたがどう思っているかしらないけど私はこう見えても血も涙もある人間よ。今、その証明をしてあげようとしているのに」

そう言うキセンの顔からは、先ほどまで見せていた感情的な部分が再び消え去っていた。

（証明だと？）
エイルは口に出しては答えなかった。既にキセンと会話をする事自体に嫌悪を感じていたのだ。
「ほら、ごらんなさい。そっぽを向いてるあなたの大事な人の顔をちゃんとあなたの方に向かせてあげるわ」
キセンはそういうともう一度、今度は強くエルデの頭をつま先で持ち上げるようにして蹴り、エルデの顔の向きを変えた。
「ぐぅ……」
エイルは言葉にならない声を漏らした
そこには認めたくなかった残酷な事実があった。
目の前に、エルデの顔があった。
それは自らの血で顔の半分を赤黒く汚した小さな顔だった。白かった頬には赤黒い血と共に長い黒髪がべったりと張り付いている。
そして……
そして、黒目がちの目が開かれていた。
それはただ、開かれたままだった。
開いてはいる。だが、儀仗が背中に突き刺さった瞬間から、おそらくその瞳には何も映ってはいないのだろう。

「く……」
慟哭がこみ上げてきた。
だが、エイルは歯を食いしばって耐えた。
エイルにはたった今目的が出来たのだ。新たな目的を果たす為には感情にまかせて泣き叫んでいる時間は無かった。
「ふん」
キセンはそんなエイルには目もくれず、エルデの状態を確認した後、軽くため息をついた。彼女自身もエルデの死を確認をしておきたかったのだろう。固定ルーンはエルデの体にもかかっていたはずである。術者だけが固定対象物を操作、つまり動かす事が可能なのだ。エルデの体を固定したあとで、その死を確認する為に近づいて

きたのだ。そして万が一息があったとしても、そこでとどめを刺すつもりでいたのだろう。
どこまでも周到なキセンの態度に、エイルはもはや何の迷いも持たなかった。
エルデの死をエイルは受け入れはしなかった。だが、死の事実を認識してしまったのだ。それは憎悪と怒りによる殺意を加速させるのに充分だった。
そう。エイルの今の目標はキセンを殺す事だった。

無駄だと知りつつも、なんとか手を伸ばそうとエイルはもがいた。もう何も映していないエルデの目を閉じてやりたかったのだ。そしてその美しい顔についた血をぬぐってやりたかった。
だがそれがかなわぬ事を知ると、こみ上げる嗚咽をこらえながら、涙でぼやけつつある視線を再び部屋の奥へと注いだ。
エイルの視線の先……そこにあったのは儀仗ノルン、いや、白のスクルドだった。そのスクルドとエイルを結ぶ直線上には、キセンの足があった。
エイルは唇を噛んだ。
（まだだ）
エイルはさらに強く唇を噛むと、はやる心を落ち着かせる為にいったん目を閉じた。まぶたの開閉と声を出す事だけが、今のエイルに出来る事だった。
悔しさと憎悪と怒りで醜く歪んだ今の自分自身の顔をエイルは容易に想像が出来た。そしてそれがさらに醜く崩れようとかまわないと自らに言い聞かせた。
そして少し鼓動が収まるのを待って、ある言葉を口にした。
「一つだけ、頼みがあるんだ」
それは全ての感情を押し殺したような、低く、そして弱い声だった。
白衣を脱ぎ、床に流れた血をそれに染みこませる作業をしていた

キセンは、エイルの問いかけに反応した。
「なあに？」
「こうなったらオレはあんたに協力する」
「へえ……」
意外そうな声を上げて、キセンはエイルの言葉に手を止めた。
「まったく信じられないわね、その言葉。それに私は君の意思がどうあれ、協力してもらうつもりつもりだから」
「だから、儀仗を……」
「儀仗？」
「ああ。あそこにあるそいつの儀仗を、形見として、オレにくれ。頼む……」
エイルは絞り出すようにそれだけ言うと、目を伏せた。
「ああ、あの儀仗ね。二段階に変形する儀仗なんて見た事も聞いた事もないわ。不思議な儀仗だから、後でよく調べさせてもらうつもりでいたのよ。えっと……」
エイルの願いを聞き入れるつもりなどさらさら無いのだろう。キセンが興味の対象物を他人に渡すはずがなかった。だが反対に、調べ上げた末、興味を無くしたなら、惜しげもなくうち捨てるに違いない。
だが、エイルはそれを狙っていたわけではない。エイルには「今」しかなかったのだ。
だから、これは賭であった。キセンがどう動くかの。
果たしてキセンは、エルデの体を赤黒く染まった白衣で包み終えると、立ち上がってあたりを見渡した。明らかに意識はエイルではなく、違うものに向かっていた。
そう。次の興味が儀仗に移ったのだ。
エイルの事よりも先にキセンの意識を儀仗に移す事。それがエイルの戦術だった。
それは見事に成功した。

「あんなところに転がっていったのね」
貯蔵槽にぶつかって、そのままそこに横たわっている儀仗スクルドを見つけたキセンは、エイルに背を向けると、ゆっくりとそちらへ向かった。
エイルはその様子を鋭い視線で注意深く追っていた。その時キセンがエイルを振り返ったなら、そしてエイルの表情を見たならば、エイルの思惑を感じ取っていたに違いない。
エイルの瞳はそれほどの殺意を宿していたのだ。
だが、キセンは自分の興味の対象に向かって直線的に移動していた。その時のキセンには、既に重傷を負っているばかりか、ルーンがかかって動けないエイル・エイミイという人間など存在していなかったのだろう。
何の迷いもない歩みで、キセンが一歩、また一歩と儀仗スクルドに近づいていった。
エイルの鼓動は早鐘のように高まり、吐き気がこみ上げてきた。しかしそんな事にかまってはいられなかった。吊り上げた目はキセンの後ろ姿を瞬きもせずに凝視して……そして……

「ノルン！」
ひときわ大きな声で、そう叫んだ。
それはキセン・プロットがしゃがんで儀仗スクルドに手を伸ばそうとした時であった。その時キセンはエイルと儀仗スクルドを結ぶ直線上にあり、エイルには完全に背中を向けた状態であった。
エイルが儀仗の名を叫んだ次の瞬間、「それ」はエイルの右手にあった。
同時にエイルの前方で二度、あまり大きくはない鈍い音がした。
それだけだった。それがその瞬間に起こったエイルの企てとその結果であった。
キセン・プロットの実験場とも言える広大な部屋にあるのはエイルの荒い呼吸音と、すすり泣く声だけだった。

エイルの作戦は成功した。
エルデがもし生きていたとしたら、完璧だと言ってくれるに違いない。
だが、今のエイルには喜びはない。当然ながら達成感などあるわけがなかった。
キセンを殺してもなお、エイルの心の中にはキセンに対する殺意がくすぶったままだったのだ。
儀仗ノルンはエルデ・ヴァイスの声に反応する。
儀仗ノルンはエイル・エイミイの声にも反応する。
そして儀仗ノルンは空間を「跳躍」しない。
儀仗ノルンは空間を「移動」する。
エイルが思いついた「手」はそういう事だった。
思惑通り、儀仗ノルンが転がっていた場所にキセンはいた。ノルンと入れ替わるかのように床に横たわって。
エイルは右手に伝わるぬるりとした感触を認めると、目を伏せた。
視界にあったキセンはもう動かなかった。
エルデと同じだ。
そしてこれもエルデと同様に、うずくまった体から大量の血が床に流れ出していた。

最初の鈍い音は、儀仗スクルドが命令に反応してエイルに向かって移動する際に、間にあった「壁」を突き破った音。
二回目の鈍い音は、その「壁」が床に崩れ落ちた音だった。
「壁」とはもちろんキセン・プロットの体である。
命じられれば、ただひたすら直線的に主の下へ目では捉えられない程の高速度で移動する儀仗ノルンは、間にある物理的なモノを意に介さない。キセンが文字通り岩で出来た壁であったならば話は違っていただろう。だが、人間の体程度の柔らかさではノルンの移動を妨げる壁の役にはたたなかったのだ。

エイルの作戦の成功の鍵は、キセンの胴体がエイルの右手と儀仗ノルンとの間に引いた直線上に存在する事にあった。脚でも腕でもなく、胴体が、である。

体を動かせないエイルの右手の位置は低い。たとえ直線上にキセンが立っていたとしても、足をもぎ取る事しかできなかっただろう。もちろんそれでも重体には違いない。放っておけば失血死するだろう。だがキセンはルーンを使えるのだ。即死させなければ、少なくとも意識を奪わなければ即座に反撃がある。

エイルは自分の命など惜しくはなかった。差し違えてもいいと思っていたのだ。

だが、出来れば生き延びていたかった。エルデをここにこのまま放置したくなかったからだ。自分の手で弔ってやりたかった。

だからエイルは生き残る必要があった。少なくともエルデを埋葬する間の命が欲しかったのだ。

キセンが作り上げた「エア」という特殊な空間でエイルにできる事は限られていた。そしてその限られた手段を有効に使い、目的を果たす事が出来た。

エイルがやり遂げた仕事は、誰も見ていないのだから誰にもほめられはしない。ただそれでも、エルデならばほめてくれるに違いないという思いは、彼の心をほんの少しだけ満たす事ができた。

おそらくキセンは何が起こったのか理解するまもなく絶命したであろう。

儀仗スクルドはノルンに姿を変えながら横向きに飛んできた。

その動きはおそらく……いや間違い無くエルデがそう設定したのだ。エルデはノルンを取り出す時はいつでもまずは水平に持つようにしていたから、自分のその好みに合わせて調整したのだろう。

エイルは当然それを知っていた。だから利用したのだ。

問題はエイルの呼びかけに対し、果たしてノルンが反応するかど

うかだった。だが、ジャミールの里で入り込んだ「エア」の中では眠りについていたエルデに変わってエイルがノルンを取り出す事ができた。

考えてみればジャミールの里が使う精霊石の多くは、族長であるラシフに《深紅の綺羅》が託したものだ。精霊石とは大まかに言えば術者の血を使って神痕（しんこん）と呼ばれる文字を記述する事により呪法やルーンが施されるものと聞いていた。

つまりそれは、キセン・プロットが《深紅の綺羅》の血を使って作り上げたルーンが使えないというこの空間と条件が酷似している。エイルはそう考えた。

だからエイルの作戦には、彼なりに裏付け、つまり勝算があったのだ。もちろんそれでも一か八かには違いない。

そしてエイルの計算通りに……キセン・プロットの体は腹のあたりでノルンによって無理矢理二つに切断された。断裁と言った方がいいかもしれない。おそらく切断という言葉で想像するような綺麗な分離ではないはずだった。細い木の棒が恐ろしい速度で腹に当たるようなものである。つまりはとんでもない力で内臓や肉や骨がぶった切られたようなものだ。およそ綺麗な傷口であるはずがない。

だが、もちろんエイルはキセンの哀れな骸に意識を向けてはいなかった。

正確に表現するならば、エイルは意識自体を保つ事が困難になりつつあった。

負傷による失血に寄るところが大きかったが、疲労と睡眠不足もある。何せジャミール一族が里を離れる事になった朝から、エイルの一日は終わっていないのだ。

「現世（うつしよ）」と呼ばれる普通の世界の時間では一ヶ月が経過していたが、「時のゆりかご」を経由したエイル達にとってはそれほどの時間ではない。だが、感覚的には二日程度は過ぎている感じがしていた。

その間エイルが瞬き以外でまぶたを閉じたのはヴェリーユからハイデルーヴェンに向かう渡船の中のほんの数分だけだった。エルデは

眠れと言ったが、あのような気が張った状況で眠れる程の精神制御力を持たなかった。

精神が興奮状態にあるという点では今の状況の方がより強いのは確かだった。だが、目的を果たしたというある種の安堵の気持ちは、肉体と精神の疲労を喚起するには充分だった。

それでもエイルは混沌に溶け込みそうになる意識に鞭を打った。早くエルデの亡骸に近づきたかったのだ。だが、キセンの精霊陣による「固定」はまだ解けなかった。

ルーンであるから永続性はない。解除される条件はいくつもあるが、どちらにしろ時間が経てばいつかは解ける事はわかっていた。だがそれが「いつ」なのかがわからない。

負傷による衰弱と疲労、そして安堵に加え、そのどうしようもない事態が生む絶望が上乗せされ、エイルはついに抗う力を失った。

それはもはやこらえようとしても困難な状態にまで陥っていた。いきなり目の前が真っ暗になったかと思うと、エイルはそのまま全ての感覚を失った。

# 第六十二話　躊躇と任務

促成ルーナー。

その言葉の持つ意味を、エルネスティーネはロマン・トーンに問いかけた。

いや。端から見れば、それは質問などではなくむしろ詰問に近かった。それほど強い調子だったのだ。

ことルーナーという存在に対して促成という言葉を使う場合、その言葉の持つ意味が、決して良いものだとは思えないのはエルネスティーネならずとも誰しも同じであった。

もちろん、ロマンとて心の奥に流れるものは同じ気持ちであったろう。

だが、さしものロマンもエルネスティーネが感情を露わにして問いただしてくるとは考えもしなかったろう。

「答えて下さい、ロマン・トーン一等教授！」

エルネスティーネの剣幕はアキラ達をも驚かすに充分で、アプリリアージェすらその眉を上げる程であった。ティアナにいたってはどう対応したらいいのかわからず、かわいそうなくらいおろおろとしていた。

「その促成ルーナーという存在が、この町の異常事態に関係しているのではないのですか？」

ロマンは目を伏せた。そうやって自分をまっすぐににらみ据えるエルネスティーネの真っ直ぐすぎる視線を外すと首を力なく左右に振った。

「残念ながら私には詳しい事はわかりません」

それだけ言うとロマンは視線を上げ、傍らに控えているゾフィーを見やった。

「この子も自分がいったい何をされたかはほとんど知らんのですよ」

ロマンの言葉はエルネスティーネだけでなく、アプリリアージェの眉も再び動かした。
「それは……」
「それはさっきおっしゃったプロット統括教授長しか詳細は知らない、という意味ととってよいのでしょうか？」
そう尋ねたアプリリアージェの声は落ち着いていた。続いて対照的な熱っぽい声でエルネスティーネが質問を重ねた。
それはエルネスティーネらしい、駆け引きの隙すらない直線的な質問であった。
「お話だけを伺っていると、プロット統括教授長は人体実験をしているように思えます」

（なるほど）
その言葉で、アキラはエルネスティーネが纏った険しい空気の原因がわかった。
医学的・科学的問わず、シルフィード王国では人体実験を固く禁じている。もちろんそれはシルフィード王国だけではない。表面上はどの国であっても人体実験をやっているなどと公言する所はないだろう。人体実験はいわゆる国際法で古くから禁じられており、マーリン正教会が厳しくこれを監視していると言われている。
現世（うつしよ）に混ざりながら、人々の前に現れることのない存在である「賢者」
正教会の裏側に属する彼らは、国際法で定められたそれらの「禁忌」違反者を発見・処理する事も仕事の一つだと言われていた。
つまりロマンの言う「促成ルーナー」が何らかの人体実験によるものだとしたら、それは大罪にあたるのだ。
だがエルネスティーネは賢者ではない。罪を糾弾し、処分しようとしているのではない。ただ単純に、彼女の持つ倫理観が内なる叫び声を上げているのである。

「我々には一切わからんのですよ、ネスティさま。プロット統括教授長は徹底した秘密主義を貫いておられまして、自身の実験内容は一切他人に漏らしません。下に着いている研究生達は大勢いるようですが、彼らはみな教授長の実験の一部だけを任されているようで、いったい自分が何の実験のどの部分を行っているかという事は一切知らされないそうです」

「なるほど。しかし学校側はそれで黙っているのですか？研究成果などは定期的に文書で報告したり、論文の発表を行ったりと、持っている地位を維持し続ける為にはそれなりの評価を得る為の提出物が必要なのではないのですか？」

アキラは自分の中に浮かんだ疑問をロマンに投げかけた。

「むろん、普通はそうです。しかしあの方は作り上げた『もの』で黙らせてしまうのです。誰にも出来ない事をやって見せる事で自らの能力の高さを証明するのです。一度や二度ではなく、それが継続して居るものですから、今ではこの町の上層部の人間でプロット統括教授長に対して意見を述べる事ができる者などいない状況なのです。それにその……これは同じ教育に携わるものとして言いにくいのですが……」

言い淀むロマンに、エルネスティーネがすかさず声をかけた。

「おっしゃって下さい、ロマンさま。悪いようにはいたしません。いえ、私にどうこう出来る問題ではないのは百も承知です。それでも私はこの異常な状況を理解しておきたいのです。知りたいのです。よそ者だからといって見て見ぬ振りはできません」

ロマンは再度ゾフィーを見た。そこには小さくうなずくゾフィーがいた。それを見たロマンは、エルネスティーネに対すると、ゾフィーと同じようにうなずいた。

「幸いこの部屋には我々しかおりませんし、他のものに聞かれる心配もないでしょう」

「お願いします」

ロマンが話し始めた促成ルーナーについての説明を受けた一同は、

ロマン本人があらかじめ断った通り、事の詳細についてはほとんど何も知り得なかった。
ただ、ゾフィーについての話は興味深いものであった。

ゾフィー自身はルーナーとしては元々は大した力を持ってはいなかった事。
ある日高額の報酬を餌に、大量の「手伝い」をプロット教授長が求めている事を知ったゾフィーは、それに応募した事。
資産家の娘であるゾフィーは報酬よりも一度プロット教授長に会ってみたいと思って参加した事。
そこで睡眠ルーンをかけられて意識のない状態に陥った事。
目が覚めたらプロット教授長に「お前にはルーナーとしての高い潜在能力がある」と告げられた事。
そのルーンの力を高める修行法があるが、試してみないかと尋ねられた事。
一も二もなくそれを承諾した事。
それは暗示による呪法の様なもので、眠っている間に行われると説明された事。
そして眠りから覚めた後、プロット教授長から手渡されたルーン書を詠唱しろと言われた事。
そのルーンはゾフィー自身は今まで使った事もない中位の強化ルーンで、花瓶の花を硬化させるものであった事。
初見にもかかわらずルーンは発動し、効果確認の為にプロット教授長がその花を剣でなぎ払おうとしたが、花は無傷で、剣の方が刃こぼれしてしまった事。
ただ、能力は上がったものの、不安定な部分もある事。
急激に力をつけたので、副作用がある事。
などであった。
つまりゾフィー自身、キセン・プロットに何をされたのかを基本的には一切理解していないという事なのである。

「副作用というのは？」
　エルネスティーネの質問は、その話を聞いた誰もが最も気になった点だった。一見する限りでは特にゾフィーには変わった様子はない。少なくとも目で見てわかるようなものではないのだろう。
　だがアプリリアージェは少し前にロマンがゾフィーについて漏らした言葉を覚えていた。副作用という言葉を聞いて最初に思い出したのはその事であった。
「感情の起伏が少なくなった、という事ですか？」
　ロマンはアプリリアージェが投げかけた質問に大きなため息とうなずきで答えた。
「以前のゾフィーを知っている者に今のこの子を見せて同一人物だと言っても、おそらく誰も信じますまい」
「そんなに？」
　エルネスティーネの驚きはもっともであった。確かに無口、いやぶっきらぼうな口調ではあったが、ゾフィーはテンリーゼンとは違い、会話自体は普通に成り立っていたように感じていたからだ。
　ロマンはそんな疑問に答える為に補足した。
「何せこの子は、その居場所がすぐにわかるほど賑やかな娘だったのですよ。父親の影響なのでしょうが、人を笑わせる事が何より好きな陽気な子でした。この子が居るところには笑い声が必ず同居していましたからね。冗談好きなだけでなく、この子に会うと教授陣が思わず身構える程のいたずら好きでもありました。要するに活発でころころと本当によく笑う子だったのです。それはまるでほろ酔い気分のデュナンのように陽気で、アルヴ族とは思えない程でした」
　ほろ酔いのデュナンが誰しも陽気であるはずはないが、ロマンの表現は今のゾフィーが確かに劇的な変化を起こしたのだと理解するには十分であった。
「そうそう、一つ言い忘れておりました。この子は定期的にプロット先生の元で何らかの投薬をしてもらわないと……」

ロマンがそこまで話したところで、部屋に振動と共に大きな音が響き渡った。
ティアナはそれが地震と一瞬判断してエルネスティーネの側に寄り、その肩を抱いた。しかしそれは地震ではなく、扉が何かで叩かれているのだとすぐに理解した。
音は一度では無かった。それはドン・ドン・ドン・ドンと四回続いた。
その場の誰もがほぼ同時に音のする方向……部屋にある唯一の扉に視線を集めた。
一度鳴り止んだが、少し間を開けて扉は再びドンと四回鳴った。
「これは緊急の連絡があると言う合図ですな」
ロマンが一同に説明した。
確かに規則的な音は何らかの意図のある合図であろう。
「互いの声は聞こえないのでしたね」
エルネスティーネは思い出した様にそう言うと、ファルケンハインに扉をたたき壊すように頼んだ。
だがその必要が無い事を、すぐにその場の誰もが認識していた。
すぐに扉が開いたのだ。
「開きました」
そう言って扉に手をかけているのはゾフィーだった。

アプリリアージェはいつもの微笑を崩して、眉根に皺を寄せていた。
「あれからどれくらいですか？」
もちろんアプリリアージェがティアナに尋ねた「あれ」とは、キャンセラであるティアナがゾフィーと握手をした時の事を指していた。
「正確にはわかりませんが、十分程度……でしょうか？」
ティアナの答えにアキラも同調した。
「私の感覚でもそれくらいだ。それほど時間は経っていない」

アプリリアージェは小さなため息をついた。
「促成ルーナーというのは、私が想像していた以上に相当な力を持っているようですね」
「どういう事です？ティアナのキャンセラの能力とは、本来そう言うものではないという事ですか？」
アキラの問いかけにアプリリアージェはうなずいた。
「賢者エルデでさえ五分間はルーンを使う力を消失していたのです」
「なんですと？」
「私など、三週間もの間、全く力が戻りませんでしたけどね」
ゾフィーが扉を開けたのを見て驚いていたのはアプリリアージェだけではなかった。
その場に居たもう一人のルーナーであるメリドも目を見開いてゾフィーを見つめていたのだ。
「そういう事です。ちなみにシルフィード王国のバード長、ミドオーバ大元帥でも四時間程は無能なルーナーになったそうですよ」
そう言うアプリリアージェはすでに普段の笑顔に戻っていた。
アキラはそれを聞くと改めてティアナとゾフィーを見比べた。だがその事に対してのアキラの感想が述べられる事はなかった。全ての会話を中断させるべく、音の主が扉から顔を覗かせたのだ。アキラは慌ててフードを被ると顔を背けた。
「やはりここにいたか、ゾフィー」
一行の前に姿を現したのはアルヴの青年だった。金髪と緑の目。純血種のアルヴ族である。その服装から、シルフィード王国の人間であろうと思われた。
学生かそうでないのかの区別はつきかねたが、部屋の中にロマンの姿を認めると慌てて恭しく礼をしたところを見ると、単なる知り合いというわけでもなさそうであった。学生の可能性が高いと思われた。だが、シルフィードでは国費で留学を支援する仕組みはない。全寮制が原則のハイデルーヴェンで長期間学ぶ為には、相応の実力で奨学生になるか、高額な授業料を支払う事ができるかなりの富裕

層の市民もしくは貴族の子息に限られる。
アプリリアージェはそれとなく、だがつぶさにその青年の顔を観察した。だが、そこに既知の有力者や貴族の面影を見つける事はできなかった。

「突然の無礼をお許し下さい。ゾフィーが房に居るはずだと聞いて探しておりました」
「気にするな。また見つけたのだな？」
ロマンの言葉にアルヴの青年はうなずいた。
「情報が入ってきたものの、能力者は皆出払っておりまして、血気に逸った者達が武器を手に自分達が助けに向かうと息巻いておりまして。でもあの剣幕ではただ助けに行くと言うよりは、その……」
ロマンはそれを聞くとゾフィーに目配せをした。
「急ぎなさい」
ゾフィーは頷くとアルヴの青年に情報の内容を聞き、そのまま小走りに部屋を去った。入れ違いのように大広間の方角から何やら騒ぐ声が部屋に届いた。それは青年の言葉を裏付けるように、武器を集めろだの、志願者は居ないか、など同調者を募る呼びかけであった。
「すみません、先ほどの話は落ち着いてから後ほど」
その声を聞いたロマンは、それだけ告げると慌てて部屋を後にした。

アキラはアプリリアージェの様子を伺った。無言ではあったが、どうするつもりなのかを尋ねたつもりであった。
だが最初に言葉を発し、同時に行動に出たのはまたしてもエルネスティーネであった。
「私たちも行きましょう」
「え？でも」
ティアナはエルネスティーネの言葉に驚き、そして彼女を止める

べきかどうかを逡巡した。当然ながらティアナはエルネスティーネを危険な場所に向かわせたくはないのだ。

「他人ごとだと思ってはいけない」

エルネスティーネはそうつぶやいた。それはティアナに向けた言葉ではなく、自分に言い聞かせるような口調だった。

「しかし、ネスティ」

「私は行きます。争いに向かおうとする暗い気持ちを、ここに居る人々の間で増幅させてはなりません。憎しみに憎しみで対抗しても、新たな憎しみを生むだけです。人々は、いえ私たちはいったいどれだけ同じ過ちを繰り返せばすむのでしょうか」

今度は明確にティアナに向けて投げられた言葉だった。

「行ってどうするつもりですか？」

ティアナの代わりにアプリリアージェがそう尋ねた。その表情は穏やかで微笑はいつもよりも深い程であったが、声の調子には冷ややかなものが含まれていた。

「わかりません」

そう答えたエルネスティーネは、しかしひるまなかった。

「でも私が……」

言いかけてエルネスティーネは首を横に振った。

「いいえ、私に出来る事をやるだけです」

「『ただのネスティ』に何が出来るのです？」

アプリリアージェの声の調子はさらにその温度を下げていた。「ただのネスティ」という言葉を強調しさえした。それを挑発と捉える人間がいたとしても不思議ではない。そんな口調であった。

「私は……」

エルネスティーネはアプリリアージェに向き合うと、優しく微笑しているかのようなその顔に挑むように目を見開いた。

「私はもう、本当の自分を隠すつもりはありません」

拳を握りしめながら強い口調でそう言い放つと、視線を切り、エルネスティーネはロマンの後を追った。

あっけにとられたのはティアナだった。
「今のはどういう……」
エルネスティーネの言葉はどういう意味かと、中途半端な言葉でアプリリアージェに問いかけた。だが、アプリリアージェは堪えきれずに笑い声を漏らした。顔も微笑ではない。笑っていた。
「ふふふ……ククク……」
エルネスティーネの行動をあっけにとられて見送った一同は、今度はアプリリアージェの笑い声に同じ反応を繰り返した。
「ティアナ」
「はい」
「それにファル」
「はい」
笑いながらアプリリアージェは二人の部下の名を呼んだ。
「あの子がいよいよ妙な事を口走ったら、ためらわずに眠らせなさい」
「え？」
「あなたたちが少しでも躊躇したら、私がやります。ただし私が手を出した場合、この狭い空間では手加減ができませんから、下手をすると取り返しがつかない事になってしまうかもしれません」
ティアナはアプリリアージェの言葉を聞いて、冗談だろうと思った。だが、その笑顔の向こう側に黒いエーテルが見えた気がして、出かかった言葉が喉元で止まった。次いで、嫌な感じが胃の奥からこみ上げてきた。
ティアナはその時、改めてアプリリアージェという人間の持つ暗い部分に触れた気がした。それは初対面の時に感じた畏怖に似た感情よりも、もっともっと絶望的なもので、アプリリアージェは冗談など言っていないのだと確信できるものであった。
「行くぞ」
ファルケンハインが肩に手を置いて、ティアナは正気に戻った。

そして萎えきった気持ちを再度奮い立たせる事に成功した。
（そんな事はさせない）
ティアナは頷くとファルケンハインに続いて部屋を後にした。
（私がネスティを守るのだ）
そしてそう自分に言い聞かせた。

アプリリアージェは無言で部屋を後にした。他の一行もそれに続く。

アキラは被ったフードを確認した上で、最後に部屋を出た。そして広間に向かうアプリリアージェに後ろから声をかけた。
「あなた方は一体どうなっているんだ？」
その問いかけにはヴェリーユでエルネスティーネ達がカテナに囚われそうになっていた時のアプリリアージェの行動に対する疑問も含まれていた。
「私は任務を忠実に遂行しているだけですよ」
アプリリアージェは振り向かずにそう答えた。
「任務だと？」
「ええ。あなたはどうなんです、アモウルさん？」
「え？」
アキラはアプリリアージェが口にした思わぬ言葉に絶句した。同時に鼓動が跳ね上がった。
だがアプリリアージェはアキラのその様子を見てもそれ以上何も言わなかった。そして振り向きもせずに房の大広間へと足を運んだ。

# 第六十三話　イオスの使者

「くそ。いったいどうなってるんだ？」

暗い路地で一人の男がいまいましさを吐き出すようにそう言った。

ハイデルーヴェンの外れにある狭い路地。そこは明月アイスと暗月デヴァイスの光が図らずも作りあげる闇に覆われた場所だった。

男が迷い込んだその路地には、廃資材が乱雑に置かれていた。声はその陰から聞こえてきた。広い通りからは見えないが、声の主は廃資材の陰で身を丸めているのだろう。

悪態をついた事で、その声の主には深呼吸をするだけの余裕が出来たようだった。

「いやはや、参ったね」

今度の声には多少なりともその余裕が反映されているように聞こえた。

「まったくだな」

その声に呼応するように、その陰からもう一つの声が聞こえてきた。二つの声はすぐ近くで、しかも地面に近いところから聞こえていた。おそらく二人は建物を背にして座り込んでいるのだろう。

「さて……」

二人目の声がそう言うとあたりにほのかな光が生まれた。

掌の上で、小さな石が頼りない光を放っていた。ルナタイトかセレナタイトか……。

「おい、ちょっと先生！」

「大きな音を立てなければ大丈夫だ。それよりこの建物はどうやら廃工場か廃倉庫のようだな」

光を持った男がその手を差し出す方向には、路地に向けて穴がいくつか開いていた。全貌はわからないがどうやら男の言うとおり、荒れ果てた建物であるのは間違いなかった。

「ここは工房街区じゃないようだな。川沿いだから倉庫街区か？」

最初の声の男がほのかな光に照らされた建物の壁を見上げてそうつぶやいた。
「ご丁寧に穴まで開けて我々を歓迎してくれるそうだ。どうだい、ここよりは落ち着けそうじゃないか？」
二人目の男の声に、一人目の男は黙ってうなずいた。

案の定、その建物はかつて倉庫であったと思われる構造だった。壁と屋根だけの広い空間。どうやら吹き抜けではなく二階構造のようだが、一階から見上げた二階の床、つまり一階の天井は穴だらけであった。
二人は足音を忍ばせて倉庫の隅に申し訳程度に区切られたいくつかの部屋のうち、扉が閉まる部屋を選んで、そこに入った。
「ここにいても問題の解決にはならんが、雪がやんだとはいえあのままだと凍え死ぬのを待つだけだったろうな」
二人目の男はそう言うと、部屋にあったほこりだらけのコップを拾い上げ、光る石をそこに入れて地面においた。
そうやると光の方向を一方に制御できる。また光の漏れも最小限にとどめられる。
「ちくしょうめ」
最初に声を出していた若者は若いデュナンであった。小さな光でも認識できるほど、その白い顔には多くのそばかすが見えた。
向かい合って胡座をかいている人影は、デュナンの青年よりも一回り以上大柄だった。いや、背が高いと言い換えた方がいいだろう。長い髪の間から覗く耳の先がやや尖っている。すなわちアルヴ、もしくはアルヴの血が濃いデュアルであろう。
「いったい何なんだ？」
問いかけると言うよりも、混乱を押さえるための自問のような口調でデュナンの青年はつぶやいた。
アルヴの男がそれに答える。
「さっきの連中が叫んでいた内容こそ、君のその問いに対する唯一

の答えだろうな」
「本当にアルヴ狩りをやってるって言うのか？」
今度の言葉はアルヴに向けられた問いかけだった。アルヴの男はうなずいた。
「あの様子じゃ信じるも信じないもない。私はここで夜を明かす。君一人ならここから出ても町を歩けるだろう？」
アルヴはひげを撫でながらそう言った。
デュナンの青年が怒り心頭と言った苛立ちを隠さないのに対して、アルヴの口調は静かなものであった。
「おいおい、ここまで来てバカな事言わないでくれ、ハロウ先生よ」
そういって大きなため息をついたデュナンの青年の名はベック・ガーニー。調達屋である。
そして彼がハロウ先生と呼ぶアルヴは、ベックの前ではいまだハロウィン・リューヴアークと名乗る自称呪医であった。
ハロウィンとベックがハイデルーヴェン入りしたのは、まさにエルネスティーネ達がヴェリーユで一暴れしてハイデルーヴェンに逃れた、その日の夜であった。
彼らもここに来る途中で情報収拾の為に立ち寄った小さな町で、ハイデルーヴェンでは最近アルヴ族に対する排斥行動が表面化しているという噂は確かに聞いていた。酒場で近くに座った男達が、アルヴであるハロウィンを見て声をかけてきたのだ。
「噂だから実際どうなのかわかんねえがよ、一応気を付けなよ」
情報を提供した毛皮の行商人は、そう言うとハロウィン達にだけ聞こえる程度の小声でこう付け加えた。
「オレのばあちゃんがアルヴなのさ」
もちろん、ベックだけでなく、ハロウィンもその男の話は信じなかった。話半分程度にも思っていなかったのだ。
だが結果としてハイデルーヴェンは、その男の話の数倍はひどい状況になっていた。

「まさかとは思ったが、いきなり襲われるのは想定外だった」
ハロウィンは改めてそう言うと帽子を被りなおし、ため息をついた。
「のんきな事言ってる場合じゃねえよ、ハロウ先生。明るくなったら余計に面倒じゃないか？ここにいてもじき見つかるだろうしな……」
ベックはそういいながら頭を抱えた。
その様子を見て、ハロウィンが口を開く。
「もう一度言うが、君は正真正銘のデュナンだ。だから一人だけなら、これから調達屋組合に行くなりすれば安全じゃないか？　そこで改めて宿を紹介してもらうなりすればいい」
「だから、そんな事できるわけねえだろって言ってるんだよ。『アルヴ狩りに遭ったので、ハロウ先生を捨てて一人で安全地帯に逃げ込みました。おかげでこうやってぴんぴんしています』　なんて家に帰ってシェリルに言えると思うか？」
「合理性を重んじるデュナンの中でも、君はその権化とも言える調達屋じゃないか。どっちが得か損かは考えなくてもわかるだろう？」
「そもそも得か損かなんて考えてたら、もう一度あのきな臭い連中と合流しようなんて思わねえよ」
ベックの言う『きな臭い連中』とは、もちろんアプリリアージェ達一行の事である。きな臭かろうが無かろうが、ベックにはアプリリアージェ達と合流する必要があったのだ。
そしてもちろん、ハロウィン・リューヴアークにも。
「こうなったら仕方がないな」
少し間を置いてそう言うと、ハロウィンはくるまっていたマントの一番上のボタンを握りしめて、小さくつぶやいた。
「エマリア」
「え？」
ベックは驚く暇もなかった。

ハロウィンがつぶやいた瞬間、片方の手に儀仗が握られていたのだ。

ベックはその意味を知っていた。ルーナーの証である。だが、彼が知るハロウィン・リューヴアークがルーナーであるなどという事実は彼の知識の中にはなかったことだ。

「先生、あんたまさか？」

まさかではなく、もはや疑う余地はない。ベックの前に座っているアルヴの正体はルーナーだったのだ。

「言っておくが、私は嘘をついていたわけではないよ」

「え？でも」

「ベック、君は私に『おまえはルーナーか？』と尋ねた事があるのかい？」

「そりゃあ……いや……待て待て待て！」

ベックはさすがに混乱していた。

ハロウィンが呪医だとは聞いていた。だが呪医とは必ずしもルーナーである必要はない。精霊石が使えて医療の知識があればいいわけである。精霊石とはルーナー以外でも使える物が多い。医療用の精霊石はまさにそれである。医療用精霊石については専門に生産しているハイレーン組合があり、呪医は通常そこから調達する事になっている。

そもそもハロウィンはベックの、いや誰の前でもルーンを使った事は一度もなかったし、当然ながら今やったように儀仗を取り出して見せた事もなかった。

必ずしもルーナーである必要のない呪医だが、当時はそれでも多くの場合、呪医とはルーナーであった。だから見方を変えればハロウィンがルーナーであってもなんらおかしくはないという事になる。

要するにベックが混乱したのは、ハロウィンがどう言い訳しようと自分がルーナーであることを明らかに隠していた事と、そもそも単なる「そこらへんにいる」ルーナーではなく、相当高位のルーンが使えるルーナーである事を知ったからである。

儀仗を違う形に変形して格納できる力を持つ者は、バード級のルーナーくらいであるという知識はベックも持っていた。そしてベックは実際にそんな事をやって見せたルーナーをたった一人しか知らなかった。そもそもベックは、エルデが実際に儀仗ノルンを取り出して見せるまでは、本当に儀仗の格納などができる人間がいるとは実は信じていなかったくらいなのだ。

「まあ、敢えて言わなかった事はすまなかったとは思う。必要が無かったと言うよりはご想像通り隠しておきたかった理由があったからだ」

「だったら聞くが、俺が『あんた、実はルーナーだろ？』って尋ねたら正体バラしたか？」

「『君はいったい何を言っているんだね？　この私がルーナーに見えるかい？』　と答えるだろうね」

「だよな」

「だがどちらにしろお前さんの言う『きな臭い連中』に会って頼み事をする為には、私も正体を隠しておけない。いや、進んで明かす必要があるんだよ」

「う……いや……だったら、何で？」

ベックは口にしようとした言葉をそこで飲み込んだ。『その高位のルーナーの力を使えばルネ・ルーを助けられたのではないのか？』と言おうとしたのだ。だが同時に、ヴォールを発つ時に聞いたハロウィンの言葉を思い出した。

『私では歯が立たない』

ハロウィンはそう言ってうなだれていた。あの時の表情が演技だとはベックには思えなかった。

『どうしてもあの子の力がいる』

ハロウィンはそうも言った。『あの子』とは、もちろん賢者エルデ・ヴァイスの事。そしてもちろんアプリリアージェ達ル＝キリアの力が加わればそれに超した事はない。

彼らの協力を得る事。それこそが彼らがやってきた目的であった。

「私は君をここで数分間眠らせる事もできるんだが……」
「おいおい！」
ハロウィンの言葉に、ベックは思わず大きな声を出すとその場で立ち上がった。
「しーっ」
ハロウィンは人差し指をたてて合図すると、座るように促した。
「大丈夫だよ。どちらにしろお互いあの連中には会わないといけないわけだから」
「頼むよ、先生。そういう笑えない冗談は言いっこなしにしてくれよ」
ベックはそう言ってがっくりと肩を落とした。
「言っとくが、先生の冗談はいつも滑ってるぜ」
「私がルーナーだというのは冗談ではないんだが……」
「そこじゃねえって」
「いや、ルネならおかしいといって笑ってくれるぞ」
「まったく……」
ベックはもう一度ため息をついた。だが何かを思いついたのか、顔を輝かせてハロウィンを見やった。
「でも、あいつらが先生の正体を知った時の顔は見ものだろうな」
しかしハロウィン・リューヴアークは首を横に振った。
「いや。たぶん瞳髪黒色の彼はもうとっくに気付いていると思うよ」
「え？まさか？先生はヘマでもしたのか？」
ハロウィンはさらに首を横に振った。
「彼が私の想像している通りの人間なら、気付いてもおかしくはないという事だよ。それだけじゃない。リリアが感づいている可能性もある」
「おいおい、本当かよ？」
「もちろん、私としては相当うまくやっていたつもりではあったんだけどね。でも、あの二人は特別だ。いや、あの二人が揃ったから

こそ、お互いの影響で普段以上の物が見えてくる状況になっていった、と言えるかもしれないが」

ハロウィンに言われるまでもなく、アプリリアージェとエルデがただ者ではない事はベックも身をもって理解していた。だが彼が見たものはほんの一部、特にエルデにとっては余技のようなものだとハロウィンは言うのだ。確かにベックが知る限り、ルーナーであるそぶりを毛ほども見せなかったハロウィンの正体を見抜いているとしたら、ベックに見えないものがあの二人には見えているという事に他ならない。素直に信じたくは無かったが、考えられないことではないともまた思っていた。

「オレは見落としてたんだろうな。そしてハロウ先生も自分では気付かないようなヘマをしていたって事か」

だがハロウィンはまたもや首を横に振った。だがそれは肯定の意味であった。

「そう言う意味ではヘマだらけだったようだ。私は自分で考えているよりも相当なヘマ男のようだね。もう少し早くそれを自覚しておくべきだった。なぜならあげくの果てにルネをさらわれるという最大のヘマをやらかしてしまう事になったんだからね」

自嘲混じりにそう言うハロウィンに、ベックはかける言葉を持っていなかった。ルネの話題が出ると、ベックには言葉が見つからなくなるのだ。

だからベックは無理にでも話題を変える事にした。

「ところで儀仗を出して、どうするつもりなんだ?」

ベックに言われてハロウィンは手に持っていた銀色をした、細くまっすぐな儀仗を少し持ち上げて見せた。

「不可視ルーンと足音を消す消音ルーンをかける。君にはおなじみのルーンのはずだが?」

「お馴染みっていうほどかけられちゃいないよ」

ベックはウーモスで突然事件に巻き込まれ、逃げるためにエルデに強化ルーンをかけられた時の事を思い出した。

「私がかけるのはもう少し強力なヤツだから、調達屋組合にたどり着くくらいなら問題なく効果が持続するだろう」
その言葉でベックはハロウィンの意図を理解した。
「とりあえず宿と飯を確保して、後の事はそこで考えるってか？」
「さすがに察しがいいな。調達屋組合に行けば、この騒ぎについて君もいろいろ情報が得られるだろう？とにもかくにも調達屋組合だ」
「わかった。そうと決まれば善は急げだな」
ベックはそう言うと立ち上がった。ハロウィンもそれに続く。
だが、そこで二人は同時に凍り付いた。

人の気配があった。
それもすぐそこに、である。おそらくは二人が入った小部屋の外。扉の向こう側であろう。
（誰だ？）
そう思うまもなく、扉のすぐ向こう側から声がした。
「残念ながらこの町の調達屋組合は今夜はまともに機能していません。代わりに私がお二人を安全な所へ案内します」
それは少女の声だった。
冷静で落ち着いているというよりは、抑揚のない無感情な声だった。少なくともハロウィンを見て「アルヴがいたぞ！」と叫んだ群衆の、あの狂気に彩られた高揚感はそこには微塵も見られない。それはすなわち会話が成り立ちそうな相手である可能性を示唆していた。同じ言語を話しているのに言葉が通じない相手程始末に負えないものはない。二人はこの町でまさに今その事を体験したところであっただけに、意思の疎通が出来る相手というのはありがたかった。
もちろん、まだ敵とも味方とも決まったわけではないのだが。
突然現れて声をかけたのである。相手はハロウィン達が当然抱くであろう疑問を承知していた。
「怪しいと思われるかもしれませんが、怪しい者ではありません。私はハイデルーヴェン第一高級学校で呪法を専攻する学生です。今

はこうして同族であるアルヴ族の救出にあたっています」
「ここの学生……なのか？」
「ただの学生じゃないだろ。第一高級学校って言うと、ハイデルーヴェンでも選りすぐりの学生だけが学べる最高学府だぜ、先生」
「ふむ。その相当な秀才が我々を助けに来た、という事か？」
「秀才凡才はこの際関係ありません」
扉の向こう側の少女はそう言ってハロウィンとベックの会話を遮った。
「それにここには私一人だけで、周りには誰もいません。安心してください」
「いや……それは……安心するための必要条件じゃねえだろ？」
ベックは思わずそう反応した。
「そもそも呪法専攻って聞いて安心しろっていう方がムリだろ」
弛緩しきったところへ人の気配を感じたベックは、一瞬凍り付いた後、爆発しそうなほど高速度に鼓動が跳ね上がっていた。だが、耳にした声が少女のもの、それも一人だけだと聞かされて、その心拍数はなんとか下がりつつあった。そもそも普段の軽口が口を突くという事は、動揺が収まって来ている証拠であろう。
「先ほども言いましたが、私はこの町に残っているアルヴ族を避難所へ誘導するのが役目です。追われているアルヴがいるという情報を聞いて探しに来たのです」
「なぜこの場所がわかった？」
ハロウィンは身構えたままで、少女にそう問いかけた。
少女の言い分はわかった。つじつまも合っていて話を聞く限りおかしいところはない。だが少女が何かしようと動いたら、すぐに対処するつもりでいた。
「ルナタイトはうかつでしたね。ある種の感知ルーンが使えるルーナーにかかれば簡単に見つかります」
「なるほど。ハイデルーヴェンはルーンの研究拠点だったな」
ハロウィンはそれで合点がいったようだった。

ルーナー、それもおそらく強化ルーンを得意とするコンサーラである少女は、この街区でルナタイトの反応を見つけると、強化ルーンで足音や気配を消して様子を見るために近づいてきたのだろう。

ハロウィンの合図で、ベックは慎重に扉を開いた。

そこにいたのはまさしくアルヴの少女だった。デュナンのベックにはアルヴの娘の実際の年齢はわかりかねたが、それでも彼が知るアルヴ、ティアナ・ミュンヒハウゼンより若い事くらいはわかった。

少女は部屋に入る前に一礼すると、

「ゾフィー・ベンドリンガーと申します。ベンドリンガーは借り物の族名なので、私の事はゾフィーと呼んで下さい」

そう名乗った。

「ベンドリンガーって、あの資産家のベンドリンガーか？」

ベックは少女の族名に反応した。

「お前の言う資産家のベンドリンガーとは、首都島アダンの実質的な支配者と噂されるショウ・ベンドリンガーの事か？」

「資産家のベンドリンガーってのは俺の知る限りそいつだけですよ」

「あまり表の社会に名を出す事のない義父の事をよくご存じですね。さすがは調達屋というところですか。ベック・ガーニーさん」

「え？」

少女の呼びかけにベックが反応した。

「そちらのアルヴがハロウィン・リューヴアークさんですね。ファランドール中を旅している呪医とうかがいました」

続いてゾフィーはそう言った。つまり彼女は二人を特定していたのだ。

「先ほどハロウ先生という名前が聞こえましたので、お二人に間違いないと思って声をかけたのです。ええ、もちろん初対面です。お二人の事をよくご存じの方から名前を伺っていましたので」

質問しようとした事を先回りして説明された二人は、思わず顔を見合わせた。

「ハロウ先生、それって……」
「ああ」
ハロウィンはうなずくと、顔をゾフィーに向けた。
「ゾフィー、君は我々の連れを知っている、という事だな？」
もちろんゾフィーはうなずいた。続けて問われる前に自分からアプリリアージェ達との出会いの経緯をきわめて簡潔に説明した。
話を聞いたハロウィンは、ゾフィーに対する警戒を完全に解いた。
「という事はエイル達はまだ別行動ですかね」
「彼はデュナンだ。問題はなかろう。どちらにしろリリアに会えば彼らについてもう少し詳しい話が聞けるはずだ」
ハロウィンはそういうと何事かをつぶやいて、手にしていた儀仗をボタンの姿に格納した。
「では、お言葉に甘えよう」
ハロウィンの言葉に、ベックもうなずいた。
「こちらです。大丈夫だとは思いますが、念のために周りの警戒は怠らないで下さい」
そう言ってくるりときびすを返すゾフィーの後に、二人は続いた。

ハイデルーヴェンでアプリリアージェ達と合流できたのは、ハロウィン・リューヴアークことエウレイ・エウトレイカにとっては幸運と言えた。
それはもちろん彼としては出来る事なら新教会の本拠であるヴェリーユに足を踏み入れずに済ませたかったからだ。
エウレイの目論みとしては、自分自身はハイデルーヴェンに滞在し、ベック・ガーニーをヴェリーユに使いとして遣るつもりであった。
もっともベックを連れてきたのはそれだけが目的ではない。彼が持っている調達屋としての知識、その立場で得られる情報、組合を通じて享受できるいくつかの特権など様々な点で便利な存在なのは確かだが、それよりも、エウレイがこれから行おうとしている交渉

に有利になる駒だと判断したからである。
エウレイの交渉相手とは、エルデ・ヴァイス。
エウレイは既にエルデ・ヴァイスと名乗る賢者の正体にたどり着いていた。
それはヴォールで《蒼穹の台（そうきゅうのうてな）》こと イオス・オシュティーフェに出会った時に閃いた「解」であった。勿論、謎のルーナー、エイル・エイミイ、いやエルデ・ヴァイスの正体についての、である。一度ひらめいた答えを元に、旅の途中で得たエルデに関しての情報を照らし合わせれば合わせるほど、導き出した答えに間違いはないという確信を深めていった。
その導き出した答え、いや推測を聞いた時の三聖《蒼穹の台》の驚いた顔を、エウレイは一生忘れないだろうと思った。
イオスを驚かせる事ができる人間などいないとエウレイは信じ込んでいたからである。ましてや目を見開いて口を半開きにしたイオスの顔を見た者など、おそらく自分以外はこの世にいないのではないかと思われた。
エウレイが提供した情報のほとんどは、イオスにとっては未知のものではなかった。だが、彼をして「ありえない」事だと思っていたのだ。だが、旅を共にしたエウレイの口から別の視点で語られるエルデ・ヴァイスの姿は、イオスがたどり着いた答の先にあるもう一つの答えを確定させるに足る状況証拠になった。それを決定付けたのは、どう考えてもエルデ・ヴァイスが賢者ではないという説明であった。
エウレイも、そしてイオスもそれを目にしながら気にもとめなかった事。すなわちエルデ・ヴァイスは三眼になっても元の瞳の色が変わらないという点において、この世の全ての賢者とは異なった存在であった。
それはもうあまりに昔の話である。
イオス自身、自分の幼少時の事に思いをはせる事などはなくなっ

ていた。だからエルデのちぐはぐな色の目を見ても、すぐには「そう」だと気付けなかったのであろう。

亜神は人の血をすする事で、本来の力を得る。そしてその力を得たという証拠が瞳の色の変化なのだ。人が『賢者の徴』すなわち亜神の魂の結晶体とも言えるあの眼と合体する事で生まれる賢者という『種族』は、三眼全てが赤くなる。

つまり、左右の瞳が黒いままのエルデ・ヴァイスは亜神の生き残り。それもまだ本来持つ亜神の力を得ていない、すなわちかなり若い亜神と言えた。

いったんエルデが亜神だとわかれば、イオスにとってその正体を特定するのはたやすい事だった。

《真赭の頤（まそほのおとがい）》ことシグ・ザルカバードが自らの命を省みることなく守ろうとした存在である。シグが『身内』であるはずの賢者達を手にかけたのも、三聖であるイオスに嘘をついたのも全てエルデ・ヴァイスの正体を知られない為なのだ。

「今上の《白き翼》か」

イオスの口を突いて出たエルデのその名こそ、ザルカが守護するべき存在であったからだ。文字通りの守護者であるシグ・ザルカバードは、《白き翼》を自らの命を賭して守護して見せたのである。

かつてファランドールには、亜神の筆頭である四柱の王が居た。彼らは四聖と呼ばれた。そして彼らは彼ら自身がマーリンと交わしたという法に則り、それぞれの役割をこなすために存在していた。

だが三千年前に勃発した十年戦争がその柱の一角である《白き翼》の一族を滅ぼした。なぜなら《白き翼》の一族は、姿形が瞳髪黒色のピクシィであったからだ。

とは言え普通の兵士達に簡単に滅ぼされるほど亜神である《白き翼》の一族が弱いわけはない。つまりそこには、ピクシィ狩りに乗じたなんらかの大きな陰謀があったと考えるべきであろう。そうでなければ圧倒的な腕力と知力、そして強力なルーンを持つ亜神の、

それも一族郎党全てを消し去る事などできるはずがないのである。
残された他の三つの王達は手を尽くして《白き翼》の一族の生き残りを捜したにちがいない。だがその痕跡はまったくなく、やがて「神が欠けることはまかりならん」との判断で「四聖」の名を歴史から抹消し、「三聖」がそれに代わったのだ。
《白き翼》が生き残っていたからといって今更「四聖」という言葉が蘇るわけではないだろう。だが亜神達にとって《白き翼》の名はそんな些細なこととよりも、もっと大きな意味を持っていた。
それをエウレイは知っていた。当然である。彼自身、長くファランドールを旅しながら、「歴史」を抹消もしくは改ざんしていた張本人の一人なのだから。

イオスがエウレイに《白き翼》エルデ・ヴァイスを自分の元に招くように指示したのは当たり前と言えた。
イオス自身が向かう方が確実であろう。だがエルデと落ち合う場所がヴェリーユである事に併せ、イオスには水精、すなわち水のエレメンタルであるルネ・ルーを封じておくという使命があった。
正教会の本山であるヴェリタスに行けばそれなりの設備があるのだろうが、イオスには賢者会には自分の姿をしばらく隠しておきたいある理由があった。
そうなると後はウンディーネ連邦共和国の首都島アダンにある正教会の治領を使うしかない。アダンには大賢者や三聖しか知らない空間が存在すると言われている。
アダンならば常駐している正教会の関係者も人数はたかがしれている。身を隠しながらルネを匿うには都合が良かったのである。
エウレイにエルデを連れてくる事を命じるにあたり、イオスはエウレイの目の前に大きなエサをぶら下げて見せた。それは「エルデを連れてきたら、褒美にルネに会わせてやる」というのものである。
イオスがそんな取引、いや譲歩をする事はきわめて異例だと言えた。つまりは《白き翼》という名の存在とはそれほどの「もの」な

のである。
もちろんエウレイには選択肢などはない。まるで断ることが可能であるかのような「依頼」という形式をとってはいるが、三聖の命令を大賢者であるエウレイが断れるはずがない。だからそこに「褒美」があるのは望外であると言えた。
イオスはそういう条件を出すことで、しばらくの間は水のエレメンタルをどうこうしようという意思はないのだとエウレイに対し暗に伝えたかったのかもしれない。イオスが自らの約束を守る為には、少なくともエウレイがエルデ・ヴァイスをつれて戻るまでの間はルネは生かされていなければならない事になるからだ。
であれば、エウレイにとってその依頼はむしろ進んでやり遂げるべき仕事であった。

しかしその話を受けた時に、エウレイはある計画を思いついていた。
対面の機に乗じてルネを取り戻す方法である。それにはどちらにしろ、とにもかくにもエルデをアダンに連れて行く必要があったのだ。そしてアダンで亜神《白き翼》ならではの力を使ってもらわねばならなかった。
エルデ・ヴァイスはルネの事も、もちろんハロウィンと名乗っていたエウレイの事も知っている。さらに言えば《蒼穹の台》とも既に面識がある。
ならばここでエウレイが小細工を使う必要はなかった。自らの正体を明かし、素直に囚われたルネの奪還を願い出るだけでいい。
エウレイの見立てでは、《蒼穹の台》との関係を見る限り、エルデが盲目的に三聖側に立つ亜神ではないはずであった。
エルデはまだ本来の力を得てもいない若い亜神である。かつて四聖の一つの柱であった先代《白き翼》程の能力はないと考えていいだろう。人からも亜神からも隠れながら生きている事実が、それを証明していると言える。

その存在が明らかになってしまうと《白き翼》の持つ能力を知る人間は、間違いなくエルデを確保しようとするに違いない。

男の姿でエイル・エイミイを名乗る剣士がルーナーとは気付かれないのは確かである。エルデの隠れ蓑としては悪くないのかも知れない。だがいったんその存在が明らかになってしまえば、疑わしい者はとにかくまず確保されるだろう。確保した上で本物かどうかを見極めればいいだけの話なのだ。

逃げられるくらいならば、とにかく捕らえる。そして本物かどうかを確認する。そこには多くの犠牲が生まれるに違いない。だが、捕らえようとする側にとって、犠牲などどうでもいい事なのだ。手にする事が出来る「力」の前では……。

そしてエルデ・ヴァイス本人は、そんな事など百も承知なのだ。

エウレイの計画の鍵はそこにあった。

つまり、取引である。

エウレイの計画に乗るならば、《白き翼》の痕跡を彼の名にかけてファランドール中から抹消すると約束をしよう。

その代わりに……

そう。その代わりに、持っている力の一部をエウレイに貸し、《蒼穹の台》ことイオス・オシュテーフェという亜神をファランドールから抹消する……。

エウレイはルネを取り戻し、エルデは身の安全を確保できる。

エウレイの計画自体はとんでもないものであったが、勝算はあった。

彼にはまだいくつかの切り札があり、その切り札を《蒼穹の台》は知らないのだ。

たとえば風のエレメンタルの所在を《蒼穹の台》は知らない。いまだにエッダの王宮の奥にいると信じている事だろう。

いざとなれば風のエレメンタルを交渉の道具として使うこともいとわぬつもりであった。

イオス自身は水精の監視者であり、空精、つまり風のエレメンタルの監視者ではない。なぜなら空精の監視者とは《白き翼》の名を持つ亜神の事だからだ。

空席となった風のエレメンタル監視の役は、現在では三聖全員がこれに当たることになっていた。だが、《白き翼》再降臨ともなれば、エルデにも三聖と同様の監視義務が生じる。奇しくもエルデは今、風のエレメンタルの近くにあり、本人同士の意思はどうあれ、形としては空精は監視下に置かれていると言えるのだが、今のところ言葉としての《四聖》制度は存在しない。すなわち「法」としては、エルデにその義務はないとも言えるだろう。そうなれば杓子定規に法を重んじる《蒼穹の台》としては、自らが空精の監視者としての義務を負う事を否定できないはずである。

ならば、空精を手の内に駒として持っている事は有利にこそなれ不利になることはあり得ない。

もちろん風のエレメンタルを水のエレメンタルの代わりとしてルネを解放してもらう事は不可能だ。エウレイが狙っているのはそうことではない。

実際に《蒼穹の台》イオスの前に出た時、交渉する時間を稼ぐ為の道具として使おうとしていたのである。

首都島アダンは天然の「エア」　つまりエーテルと呼ばれる精霊波が存在しない特殊な空間にすっぽりと包まれている。正教会の治領の一部にエーテルのある空間を作り上げ、そこでイオスはルネを軟禁状態にしているわけだが、いったんその空間を出れば亜神であろうがなかろうが、エーテルを使った能力が使えないことは間違いがない。

で、あれば。

治領内のエーテルを全て消費するか、治領から《蒼穹の台》を引きずり出せばいい事になる。だが実際問題として治領内からイオスをおびき出す事は困難であろう。だからエウレイは治領内にあるエーテル空間の中にあるエーテルというエーテルを全て消費するつも

りでいた。それそこがエウレイの作戦の要旨であった。
とは言えそれは簡単な事ではない。大賢者を名乗ってはいても、エウレイ一人の能力ではとうてい不可能だと推測はしていた。エーテルを消費するには相当に強力なルーンを一気に使う必要があるが、エウレイがルーンを使ったとしても、途中でイオスの妨害に遭うことは間違いがない。賢者ではあるが人であるエウレイには高位ルーンの詠唱を端折る事など許されないからだ。
そもそも《蒼穹の台》の『神の空間』内では彼の命令が絶対になる。
だが亜神なら話は別だ。
ルーンを発動させる為に全文を詠唱する必要が無い。彼らは既知のルーンであれば、低位高位に関係無く、認証文のみでルーンを発動させることが可能だからだ。
エウレイとてそれを知識として知っていたわけではなかった。亜神にそんな反則とも言える能力が在ると知ったのは、いや気付いたのは、ヴォールでイオスと対峙した時だった。
亜神が目の前でルーンを唱えるのを見て、初めてエウレイは亜神の異常なルーン詠唱能力に気付いた。そしてエルデとイオスの特性を合致させる事ができたのだ。エウレイがエルデ・ヴァイスが亜神であると確信したのも、実はその時であった。
そんな謀をハロウィンという名の仮面の下に隠したエウレイにとって、エルデより先にアプリリアージェ達と合流出来たのは、ある意味で幸運だと言えた。
エルデとアプリリアージェの二人を一度に丸め込むよりも各個撃破の方がエウレイにとっては楽だからだ。
まずはベックという感情に訴え得る存在を使ってエルネスティーネを情で落としさえすれば、ティアナはそれに従うであろう。その上でエウレイは自分の正体を明かしアプリリアージェの信頼を勝ち得る算段だった。

そもそもエウレイにはアプリリアージェに対しての切り札があった。もちろん、風のエレメンタルを確保に準じた形で掌握している事である。

イオスにそれを秘匿していると言えば、アプリリアージェはエウレイとの取引に応じざるを得なくなる。だがエウレイとしては取引ではなく本心としてのルネ・ルー奪還に協力して欲しい。だから風のエレメンタルの事は匂わす程度でいいのだ。いや、アプリリアージェならば何も言わずとも察するに違いない。

だから取引というよりはむしろ参加条件である。

エウレイ・エウトレイカ、いや大賢者《銀の篝（しろがねのかがり）》として風のエレメンタルの件をこの先秘匿し続けるだけでなく、ルネ奪還の後は共に行動し協力を惜しまない事を伝えるだけでいい。

問題はエルデである。

エウレイの見立てでも、《白き翼》という亜神は感情の起伏が激しく、しかも気まぐれだった。《真赭の頤（まそほのおとがい）》にかけられた呪法を解除するという目標以外にこれと言って拠り所とする目的を持ってはいない様子にも見えた。

正教会の法にはある程度従った行動はとっているようではあるが、エレメンタルやファランドールの動向に関心がある様子もない。風のエレメンタルを前にして何の行動も起こそうとしないのが、その証拠と言えるだろう。

そんな相手に対し、もうほとんどこの世に存在していない同族を倒す手伝いを申し出ても、すんなり承諾を得られるとは思えない。

それは言い換えるならばアプリリアージェの協力を得る為の条件の一つが解決していない事を意味する。

アプリリアージェ達の協力の前提条件、つまり「エルデ・ヴァイスという亜神の同行・協力がある」ことは絶対であった。

それには事前にエルデの承諾を得ておく必要がある。

一種の二律背反がそこにあった。

だがそれでも、エウレイはエルデ・ヴァイスは必ず承諾するだろうと確信していた。

もちろん根拠のある自信である。

エルデでもアプリリアージェでもない、ある人物がその鍵を握っているのである。

「ここです」

そういうと、不意にゾフィーが立ち止まった。

ただゾフィーの背中を追って夜のハイデルーヴェンの人気の少ない路地を足早に歩いていた一行は、比較的大きな建物の壁の前にいた。

場所を把握しようとあたりを見回す余裕は、しかし与えられなかった。

「急いで下さい。誰にも見られないうちに」

そういうとアルヴの少女ゾフィーは、その建物に扉を出現させた。

いや、扉というには取っ手も飾りもなにもない。ゾフィーが壁を押と、そこに空間が口をあけただけだった。

「さ、早く」

ゾフィーの催促に、エウレイは迷わずその空間に脚を踏み入れた。

不安顔のベックもそれに続く。

最後にゾフィーがその空間に入り込むと、数秒後に壁は元通りの姿に戻り、辺りは静寂に包まれた。

# 第六十四話　夢と希望

「ゼプスは夢」

薄茶色の髪の少女が微笑みながら涙を流している。
首のあたりで切り揃えられた髪が、黄色い朝陽を透かしてふわりと揺れ輝く。

「ミュインモスは希望」

きめの細かい、張りのある褐色の肌。
若葉を溶かし込んだような明るい緑色の瞳。

「それらはルーンで鍛えられた羽のように軽い短剣」

少女はとても小柄だ。
だが、その笑顔は母親のような慈愛に満ちていた。

「どちらも妖剣」

ゆったりとした、そして鮮やかな黄色の服を身に纏った少女。
今その少女の大きな瞳から、涙が溢れた。
溢れた涙はなめらかな頬を伝い、丸いあごの先からぽつりと落ちていった。

「お前は夢を、その手でしっかりと掴むがいい」

少女はそう言って手を伸ばした。

「私はこの胸に、この両腕に希望を抱こう」

少女の顔を知っていた。
そしてその笑顔も。
流れる涙も。
その鼓動すら。
小さな体に流れるぬくもりさえも。

「夢と希望はいつか繋がる。二つは一つになり、光を導くだろう」

視線はその小柄なダーク・アルヴの少女が落とした涙の後をたどった。
漠とした暗い闇に包まれた足下に、虹色の滴が落ちていく。
エイルは少女の名を知っていた。

『……さま』

少女が遠ざかる。
闇を背景に、微笑みながら。
それはいつしか寂しげな笑顔になっていて、だんだん小さくかすんでいく……

『ラシフさまっ！』
【なんでやねんっ！】
『え？』

エイルは我に返った。
ぼんやりとした灯りが所々に灯っている。
だがそれでも辺りは薄暗く、頬にあたる床が冷たい。どうやらエイルは床の上に俯せの状態で意識を失っていたようだった。

覚醒に少し遅れて、甘い独特の匂いが鼻腔をくすぐる。
それに続いたのは激痛だった。
「くう」
起き上がろうとして無造作に左手で体を支えた瞬間だった。
思わずそのまま倒れ込んだ。
そしてその痛みが全ての記憶を思い出させた。

エイルは倒れ込んだままの格好で目を閉じた。
夢の中で、エイルはとても心地よい気持ちでいたはずだった。少しだけ悲しい気分も混ざってはいた。しかしそれは決して慟哭を誘うような類の感情ではなく、暖かい布団から抜け出さねばならない冬の朝にも似た、穏やかな寂しさと形容すべき感覚だったのだ。
目を閉じたまま、エイルは耳を澄ませた。
物音はしない。
強いて挙げるならば骨と血管を伝わってくる自らの心臓の鼓動だけであった。もちろん耳で聞こえてくるわけではない。だが同じ事だった。
全ての感覚が、この広く薄暗い部屋に存在しているのが自分一人であることを告げていたのだ。

現実に戻ってきていた。
このまま目を閉じていれば、また優しい夢が見られるというのなら、そのまま二度と目覚めなくていいとさえ思う過酷な現実がそこにあった。
だが……
エイルは意を決してまぶたを開いた。
それでもやらねばならないのだ。
現実と向き合い、受け入れ、自分が今できる事を。
エイルはゆっくりと顔を上げた。
視線の先に「それ」はあった。

覚悟をして顔を向けたつもりだった。だが「それ」を目の当たりにすると一瞬で体中の血が逆流するような感情に襲われたのだ。
そこには、エルデ・ヴァイスの遺体がそのまま横たわっていた。開いたままの目に命の気配はない。ただうつろな表情が空を向いているだけであった。
エイルは頭を振って気を落ち着かせた。
体が動くという事は、キセンが発動した精霊陣の効力が既に消えていることを示していた。
どれくらい意識を失っていたのだろうか。
窓も何もないこの部屋では時間がわからない。
エルデの体はもう冷え切っているのだろうな。
そうだ、ティアナの元へも急がねばならない。
エイルはそんなことを考えながら、左手をかばうようにゆっくりと上体を起こした。

【あんまり、じろじろ見んといて】
『仕方ないだろ。見ないと何もできないじゃないか』
【そうは言うても、誰でもこんな情けない姿、人前に晒しとうないやろ？】
『そうだな……って、え？』
エイルは思わず辺りを見渡した。
【ウチらの他には誰もおらへんわ】
『え？　えええええええ？』
【ああもう、ホンマにやかましいやっちゃな】
『エルデ？　お前、エルデなのか？』
【はいはい。ラシフさまやのうて悪うございました】
『いやいやいやいや』
【まあ、とりあえず礼を言うとく。こうして居られるのは幸運やない。完璧にアンタのおかげやからな】
『オレのおかげ？』

【生命に関わる程の急激で重度の肉体的損傷が、ウチの『心』を元の入れ物に飛ばした要因やな。そんでもっておあつらえ向きに元の入れ物はウチの体のすぐそばにあった】

『入れ物って……オレのことかよ』

【他に誰がおるねん。もっともアンタの体で覚醒したんはついさっきやけどな】

『亜神って、そんなことが出来るのか？』

【いや、普通に考えたらたぶんでけへんやろな。ウチの場合はたまたまや。そもそも亜神にとっては致命傷やないから、これが他の亜神やったらあのままあの中に『心』も留まってたはずや】

『あれで致命傷じゃないだって？』

エイルは改めて目の前に『転がっている』エルデの亡骸を見た。

背中から入り、腹を突き破る程に深々と刺さった儀仗。血溜まりに浸った体。そしてどこにも焦点を結ばず、開かれたままの瞳……。

この状態から助かる人間などいるはずがなかった。

（いや。人間じゃない……から、助かるのか？）

【だからあんまり見んといてって言うてるやろ！】

『あ、ああ、スマン』

【アンタのおかげやって言うたんは、アレや。アンタはあの時とっさにウチを突き飛ばしてくれたやろ？】

エルデに言われてエイルは記憶をたどった。

何の前触れもなく背後で急激に殺気が立ち上がったのを感じたエイルは、その殺気の向かう先がエルデの背中にあると一瞬で判断したのだ。そしてその道筋をずらす為、つまり飛んでくる儀仗を避けようとしてエルデを突き飛ばした。

いや、正確に言えば突き飛ばそうとしただけだった。

ほんの少し間に合わなかった。儀仗は目標に達し、キセンの目的は成されたのだ。

だからこそ、今こうしてエルデ・ヴァイスは目の前に横たわっている。

『でも……』
【間に合うたんや。ほんの少しやったけどズレたんや】
『ズレた？』
【儀仗はウチの心臓を外れた】
キセン・プロットの言葉をエイルは思い出した。白木で心臓を貫く……それが亜神を滅する方法であると。
【正確にはニアレーで燻した白木の剣、やな。もちろん先が尖った物やったら儀仗でも何でもええんやけど。要するにそういうもんで心臓を貫けば、即死する】
エイルは何も言えなかった。
エルデ・ヴァイスの体は、エイルからすればどう見てもその「即死体」以外の何物でもなかったからだ。
『これが致命傷じゃないのか』
【修復できる】
その言葉を聞いたエイルは、その場に座り込んだ。
【おいおい、どないしたんや。あ、そうかケガしてるんやったな】
「は……はは……はは」
力の入らない笑い声が、音としてエイルの口から発せられた。
【おいおい、エイル】
『これが……』
【これが？】
『これが笑わずに居られるかよっ。エルデ・ヴァイスが生きてたんだぞ？』
【エイル……】
『よかった……本当によかった……まさか、夢じゃないよな』
エイルはそういうと、左肩をどんっと叩いた。
「イテテテっ」
儀仗は三本発射されたのだ。一本はエルデに突き刺さったが、残りの二本はエイルの体をえぐっていた。かすめた程度ではあった

が、それでも相当な傷を受けた左肩である。不用意な衝撃を与えて、ただで済むはずがなかった。
エイルは悲鳴をあげると激痛でうずくまった。
【アホ！】
『アホで結構。何とでも罵ってくれ。オレはこんなに嬉しい思いをしたことがない。痛いけど、すごく痛いけど……それよりも嬉しいんだ』
【アホ……ホンマにアホやな】
エルデは優しい声でそう言った。
その時、エイルはようやく気付いた。以前と違う事に。
頭の中に響くその声は、瞳髪黒色の少女の声であった。
それは当然と言えば当然だった。エルデの事を勝手に男だと思い込んでいた頃とは違うのだ。エイルは既にエルデの肉声を知っている。そんな当たり前の事がエイルにとってはとてつもなく嬉しい事のように思えた。

【あ、そやそや。あやうく忘れるとこやったわ】
エルデは声の調子を変えた。
【アホなだけやない。ウチは今日程アンタをひどいヤツやと思たことはないで】
『え？何の話だ』
【ウチがあれだけ呼びかけたったのに、さすがに『ラシフさまっ！』は無いやろ！】
『あ……』
エイルはその時初めて目覚める直前に見ていた夢を思い出した。
そしてラシフだと思っていたのが実はエイルに呼びかけるエルデの声だった事を知ると、なぜか後ろめたい気分に襲われた。
【まったく、どんな夢見とったんや……って、まあそんな話はええ。と言うか、他の女の話とか聞きとうない】
『いや、他の女って、お前……』

【とにかく、や。まずはウチの体を修復させてくれるか。そやからちょっとの間、体を貸して欲しいんや】

エルデはいちいち指示をするのが面倒だから体の制御をしたいと申し出た。

エルデがその気になればいつでも体を自らの支配下に置くことが可能であることを、すでにエイルは知っている。だが勝手にそうせず、エイルの意思を尊重してくれる事が少し嬉しかった。

いや。エイルはただ、エルデ・ヴァイスがまだ存在していたことが何よりも嬉しかったのだ。

【って、また泣いてるし】

エルデの体の全ての感覚を自分のものにしたエルデは、エルデの顔が既に涙と鼻水でぐしゃぐしゃであることを知ってそう言ったが、その言葉は文句と言うには響きが優しすぎた。

『修復って……あの体だよな？』

【あのガレキか残骸かに比べたら、充分修復の余地があるように見えるやろ？】

エルデがチラリと視線を向けた方角、そこにはかつてキセン・プロットだった物体が二つに分かれて重なるようにうち捨てられていた。

【何をどうやったらああなるんや？】

エルデの疑問ももっともだった。

エイルから顛末を聞いたエルデは大きなため息をついた。

【その方法はウチでは思いつかんかったかもしれへんな。ウチの都合でこの体の声に反応するように調整してただけやのに、それが回り回ってアンタの窮地を救う為の手段になっとったとはな】

『つまり、お前は自分で自分の体を守ったって事だな』

【どっちにしろ、修復より先にあっちやな。自分以外の血の匂いはちょっとつらい】

エルデはそう言うと儀仗ノルンを取り出し、その儀仗を黒一色に変化させた。そしてその頭頂部をキセンの死体に向けると、即座に

短い詠唱を唱えた。
　青白い炎がキセンの体を包んだかと思う間もなく、それはひとかたまりの灰に姿を変えた。辺りにたまっていた大量の血や体液も全てがただの白っぽい粉のような物に変わり、もはやその原型すら想像できなかった。
【これで良し】

『灰か』
【なんや、同じフォウの住人としては、同胞はきちんと埋葬したかったんか？】
『いや、そうじゃないさ。相変わらずあっけないもんだな、と思っただけだ』
【あっけない、か。ウチもあんな風にあっけなく灰になるところやったけどな】
『灰？あいつはお前の体で実験をするつもりだったみたいだぞ』
【ふん】
　エルデはキセンだった灰から視線を自分の右脚に移した。
【亜神は死んだら灰になるんや。人間ごときに利用されてたまるか】
『だから、お前の血で体を包もうとしてたんじゃないのか？』
【《深紅の綺羅（しんこうのきら）》みたいにか？　あれはまだ生きてるウチに血で出来た布に身をくるんでたから出来たことや。偶然が重なったんやな。いや、ひょっとしたら《深紅の綺羅》は最初からそのつもりで準備をしてたんかもしれんな】
『準備って、いつ死んでも肉体は残るようにしてあったって事か？』
【あくまでも推測や。本当の事はもう誰にもわからへん。どっちにしろ普通の亜神は、即死したらその時点で灰になる】
『そうなのか』
【言い換えるなら、灰になってなかったら回復中って事や】
　エイルと会話をしながらも、その合間を使って短い詠唱を唱え、エルデはまずはエイルの体の修復を始めた。

「あれ？」
　最初の治癒ルーンを唱えた時、エルデは思わず声を出した。
『どうしたんだ？傷がひどいのか？』
【いや】
　エルデはそう言うと辺りを見渡した。
『いったいどうしたんだ？』
【既にルーンで治療されてるんや。言うても、大した回復やないけどな】
『え？って事はまさか』
【いや、やっぱり気配はない。でも、けったいやな】
　気配はないと言ったものの、エルデはそれでも納得がいかない風で、今度は自分の体をゆっくりと触り始めた。エイルの装備を吟味しているのだろう。
【え？】
『え？』
　エルデの視線で自分の腕の先を見たエイルは、短剣の柄に置かれた右手を認めた。
【妖剣ゼプス】
『え？』
【ウチの意識がない間に、何かやったんか？】
『いや、抜いてもいない。抜く前に空間固定ルーンが発動した』
【でも、間違いなくこれや。精霊波の漏れを感じる。それもこれは、まるで精霊陣そのものや】
『剣が、精霊陣？』
【妖剣にもいろいろあるっちゅう事やな】
　エルデの言う通りだった。微弱とはいえルーンの残滓があれば、エルデに感知出来ないはずがない。遠く離れているならいざ知らず、時のゆりかごに入るまではエルデ自ら手にしたこともある剣だった。それが精霊陣であればその時にわかっていたはずである。
【何にもなかったはずの剣が、何らかの条件で精霊陣化した、ちゅ

う事か。けったいな話やな】

『妖剣もいいけど、特に問題がないならそいつの事は後回しでいいんじゃないか』

【そやな】

本来の目的は体の修復である。もっともエルデはそれをないがしろにしているわけではなかった。黒のウルドを今度は白いスクルドに変化させ、その登頂部をエイルの脚に当てて、治療はずっと続けていたのだ。

しばらくして脚から痛みが引くと、次に左肩にとりかかった。

『なあ？』

エイルはそんなエルデの作業に違和感を覚えて、思わず声をかけた

【どうした？】

『なんで治癒ルーンを使わないんだ？　これくらいならいつもの、オザ……なんとかっていうルーンを唱えれば、あっという間じゃないのか』

【忘れたんか？時のゆりかごで師匠に聞いたんやろ？】

『え？……あ』

もちろんエイルは時のゆりかごで《真赭の頤》ことシグ・ザルカバードと交わした言葉を覚えていた。

エルデが治癒ルーンを使わず、儀仗ノルンのスフィアにあらかじめ封じてあった治癒の精霊陣をゆっくり解放している訳もわかった。

【状況は変わってへん。ウチがこの体にアンタと同居する事はアンタの自我を消滅させる事になる。ウチの自我の影響を極力押さえ込むと、そもそもルーンに使う力がほとんど無くなるんや】

既にエイルは理解している。エルデが普通の人間ではなく亜神だという事を。自我というものにそれぞれ力があり、その力が人によって様々だというのなら、おそらく亜神の自我というものは人間とは比べものにならない程強力なものなのだろう。

本来ならば、エルデが憑依した時点で人間であるエイルの自我などははじけ飛んでいたはずだという。そう告げたシグの言葉の重さ

が初めてわかった。人間と亜神とはそれほど力に差があるのだ。
それを知っているエルデは、あの手この手を使ってエイル自身の自我の強さを底上げしながら、同時に自らの自我の強さを低く低く制御していた。
今にして思えば、それはエルデにとってとてつもなく力を使う事だったに違いない。その上でルーンも使っていたと言う事は、ルーンを使うたびにエイルの自我が削られていたのかもしれない。ゆっくりとではあるが、エイルは確実に消滅の日に近づいていたのだ。
エルデはその日が来る前にエイルを時のゆりかごに連れて行く必要があったのだ。さもなくば、エイル・エイミイという人格は消え、エイル・エイミイの体をもつエルデ・ヴァイスが存在するだけになっていたのだろう。
そして時のゆりかごへの扉を開く為の鍵、すなわち宝珠と呼ばれるプリズムを手に入れる必要があったというわけである。

『今更だけど、聞きたい事がある』
【なんや、改まって？】
『お前さ、時のゆりかごに自分の体があるってわかってたのか？』
【質問の意図がわからへんな。なんか罠の匂いがする】
『いや、何を警戒してるんだよ』
エイルはかいつまんで説明した。
つまり、二人で時のゆりかごにたどり着いたとしても、そこにエルデの体が無ければエルデ自身はいったいどうするつもりだったのか、という問いかけなのだ。
体があるならそれでいい。だがエイルが聞いた限り、エルデにも確信は無かったはずなのだ。
【ああ……】
そんなことか、という風にエルデは答えた。
【肉体がなければエーテル体になるんやろな】
『え？』

エーテル体という言葉を、エイルはその日は何度も聞いたように感じていた。
キセン・プロットが操る本物と寸分違わぬ人間をその目で見た。
だが、維持には相当な精霊波が必要だという。
そもそもエーテルを供給する本体のないエーテル体は……
エイルはシグ・ザルカバードの事を思い出していた。自らをスフィアに変えた自立エーテル体とも言える存在。
存在するには自らの持つエーテルを消費しなければならないと言う。
つまり……
【時のゆりかごの中やったら、しばらくはもつやろな】
『もつって、お前』
【その話はここまで。九割方ウチの体は師匠が確保していると踏んでたし、実際あったんやから、もうええやん？】
『もうええやんって……』
そう言ったものの、エイルもエルデにかける次の言葉を見つけられなかった。
【しかし、ヴェリーユは鬼門やな。ウチが最初に体を放棄したのもヴェリーユなら、今度はヴェリーユから逃げてきた先でこれやもん。もう二度とごめんやな】
『そうだな』
明るい調子でエルデがそう言うならば、エイルももう何も言わないことにした。

【さて】
エルデはとうとう自分の体の修復に取りかかった。
自分自身の体に近づくと、まずは無造作に背中に突き刺さったままの儀仗を引き抜いた。
『お、おい』
エイルは思わずそう声をかけて制止しようとしたが、すぐに意味

がないことに気付いた。
【客観的には死体やから、抜いて失血が増えても、これ以上は死なへんし】
『いや、そうなんだろうけど』
【それに抜いても吹き出る血はもうあんまりない。ほらな】
エルデの言う通り、引き抜いた傷口から血は出なかった。
儀仗スクルドを構え、赤黒い穴のようになった傷口に頭頂部をかざしながら、エルデは口調を変えた。
【さて、ここからは説教の時間や】
『説教？』
【ウチは、アンタに出会うて最初にこう言うたな。『ファランドールでは誰も信じるな』】
『しゃべりながらでいいのか？』
【やかましい。ウチの話をちゃんと聞けっ】
エルデは首を横に振りながら心の中でそう言った。
【いつもそうや。アンタはウチの言う事に逆らう。『誰かを信じられない世界なんか、オレはいらない』『今あいつを助けられるのはオレ達だけだろ？』『お前は誰も信じずに生きていけばいいさ。でもオレは誰かを信じて生きてみせる』】
『エルデ……』
【キアーナの時もそうや。ウチは止めたやろ？で、その結末がこれか？】
エルデは「これ」という時に儀仗スクルドの頭頂部を横たわったエルデの体に触れてみせた。
【心臓を少しずれてるっちゅうても、こんなん、人間やったらほとんど即死やろな】
エルデの言う事に誇張はない。心臓を貫かれていなくとも、人間ならあの傷、あの出血で生きていられるはずはないだろう。おそらく出血ではなくその前に意識を失い、そのまま目覚めることなく生命の維持機能は停止するに違いない。

【急性末梢循環不全症候群っちゅうところかな。案の定血中カリウムの濃度も異常値や。ウチもそれで意識が飛んだんやろ】

エイルの心の中を見透かしたようにエルデは目の前に横たわる遺体の死因を冷たくそう特定した。

エイルにとって、エルデの言葉は全身を刺し貫く細い針同然だった。それはもう数え切れない程悔やんだ事なのだ。

だが。

『――すまん。でも……』

たぶん、これからも自分は同じ過ちを犯すだろうとエイルは思っていた。おそらくはエイル・エイミイという人間が生きている限り。そして自分の選んだ行為が他人、いや大切な人々を傷つける事になるのなら、この先は一人だけで生きていくしかないのだ、とも。

【アホ。アンタはホンマにアホやな】

『え？』

【なんで謝るんや？】

『は？』

【アンタは何も悪ないやん】

『え？エルデ……？』

エルデは儀仗を右手から左手に持ち替えると、空いた右手を左の肩にそっとあてた。

【けっこうな傷やったな。痛かったやろ？】

『……』

【いつもそうや。アンタは誰かの為に行動する時、自分の身の安全を完全に放棄する……。フォウでウチが見たアンタの姿……あの時も妙な金属の馬の後ろに乗ってた女の子をかばう事に全部の意識が集中してた。アンタのあの精霊波の色は今でも目を閉じたら思い出すんや……】

『エルデ……』

【そしてアンタはさっき、ウチの為に、同じ事をやってくれた】

『当たり前だろ』

「当たり前とちゃうわ！」
エルデはその言葉を声に出した。怒鳴り声は誰も居ない部屋に吸い込まれ、響くことはなくすぐに消えた。
『あんなことを当たり前とか、そんな簡単に片付けんといて……』
そしてその後は声に出した。
「ウチがアンタの特別やって思いたいんや」
『エルデ』
【ああ、今のは無しや】
『――そうか』
【そうや。あと、これだけは言うとく。ウチはキセン・プロットを恨んでへん】
『え？』
【けたくそ悪いヤツやとは思うけど、アイツからは一貫して悪意を感じへんかった。アイツは本当に自分の興味に支配された人間やったんやろな】
『意外だな』
【ふん。ある意味亜神なんて、アイツみたいな存在やしな】
『え？』
【亜神にもそれぞれ個性はあるやろけど、ウチが知る限り、亜神は自分の興味があること、自分に与えられた仕事以外の事はまるで他人事みたいなやつが多かったらしい】
『なるほど』
【キセン・プロットは頭脳の優秀さが故に、興味に殉じたようなもんやな】
『だったらオレもそうだな。オレはオレのやったことを後悔してない』
【プロット教授長を殺した事を、か？】
『守りたいものを、自分が出来る事で守ったことを、さ』
【そうか】
『聖典プレザン』

【ん？】
『禿のアルヴから言われた一節さ、オレ、何となくわかった気がするよ』
【『人として生きよ、さもなくば滅びの道を』　か。なるほど、キセン・プロットは人として生きようとしなかったっちゅう事やな】
『それもあるけど、あれはオレの姿かもしれないって思ったんだ』
【え？】
『オレも人のことは言えない。剣技については同じかもしれない』
【いや、全然ちゃうで】
『エルデ？』
【キセン・プロットは己の欲望を恐れへん。忠実や。でも、アンタはずっと剣を手にする事を恐れてる。いや、恐れてたって言うた方がええのかな？】
『――そうだな』
【それも再び剣を持とうと思ったんが、強さを……ちゃうな。強い相手と戦いたいという欲望やのうて、超絶美少女を守ろうっちゅう目的やしな。それは剣士としては思いっきり王道やん？】
『ははは。そうだな。確かに美しいお姫様の為に剣を抜いて立ち上がるのは、剣士としては王道だな』
【そやからアンタとキセン・プロットは全然ちゃう。胸を張ってええ】
『……ありがとうな、エルデ』
【あ、いや……何を改まってんねん】
『いや、本当にそう思った。オレはいつもお前に救われてる』
【あ、アホな事いいなや。それよりウチは気が気でなかったんや】
『何だよ？』
エルデが視線を落とすと、右手の甲に複雑な文様状の痣が見える。
【ウチがアンタの中で目覚めた時、エライ事になってるんちゃうかなって思っとってん。でも、アンタはウチが思ってるよりすごい人間なんかもしらんな】

『それって、どういう意味だ？』
【わからんでもええ。それよりここから先は少しルーンを使わんとアカンから、少しの間、意識を強うもっといてくれるか？】
『そう言われてもな。どうしたらいいんだよ？』
エイルが言い終わらないうちに、太ももに痛みが走った。
『テテテッ。何するんだよ』
どうやらエルデが自分で太ももを強く抓ったようだった。
【太ももの感覚を共有できるようにした。ウチも痛いんやから、男の子やったら我慢し】
痛みや苦痛は魂……意識を強く保つ一番簡単な方法だとエルデは説明した。同じ事をエイルは時のゆりかごでシグ・ザルカバードにも聞いたことがあった。要するに納得したのである。
【余が認め名を授けた人間ならば、しばしの間、堪えてみせよ】
照れ隠しなのだろう。
エイルはエルデの取って付けたようなその台詞を聞いてそう思った。
『了解。痛てて……』
エルデは声に出してクスリと笑うと微笑を浮かべたままで儀仗スクルドを掲げ、治癒ルーンの認証文を唱えた。
それは今までに何度もエイルも耳にしている、エルデのいつものルーンだった。
「オザ・イニピエタ・エミ」

# 第六十五話　結びの儀

エルデ・ヴァイスが詠唱文を唱えた瞬間に、エイルの意識は急激に遠のいた。
深い闇に心地良く、しかも加速しながら落ちてゆくのを、エイルはぼんやりと認識していた。
（このままゆっくりと眠りたい……）
そんな思いに頭の先まで浸かりかけた時、安らかな気分を阻もうとする異物が現れた。
いや、物ではない。それは人だ。
誰かがこの安楽な落下を阻止しようと手を伸ばし、力が入らぬ腕を強く掴んでいた。
（やめろ）
エイルはその腕を振り解く為にもがこうとした。だが、それすらおっくうで力がまったく入らない。
（このままずっと落ちていたいんだ。だって……）
だが腕を掴んだ「者」はその力を緩めようとはしない。
それどころかまるで腕を引きちぎろうとするかのように、ゆっくりとではあるが抗いようもない強い力で引き上げられようとしていた。

【エイルっ！】
『え？』
声に反応して、エイルは目を覚ました。
そこには闇ではなく、鈍いながらも光に照らされた視界があった。
【はー……】
深く長いため息が頭の中で響いた。エルデの声だ。
『エルデ？　あれ、オレは……』
【うーん、参ったな。通常の治癒ルーンを弱めにかけても、もう危

ないんやな】
『ひょっとして、オレ……』
【うん。『落ち』かけてた】
『そうか。すまん、助かった……』
【いや。謝るんやったら、それはウチの方や。それより冗談抜きで困ったなあ】
エルデはそう言うと儀仗スクルドの頭頂部を再び横たわる自分の体にある胸の傷口に向けた。
今詠唱したルーンで、見たところ表面の皮膚は修復されているようだった。
【様子見に使ったルーンやったんやけど、アレでアカンとなると、精神力と集中力を消費する治癒系ルーンはもう使われへんな】
『その儀仗のスフィアの力だけではムリなのか？　さっき亜神はその程度のケガなら放っといても治るって言ってなかったっけ』
【時間がかかりすぎるんや。間違い無く治るんは治るんやけど】
『どのくらい？』
【経験はないんやけど、たぶん放置やと十日程度やろな。スクルドのスフィアで半日にまで短縮されるくらいやな】
『それじゃ……』
【うん。例の僧正がキセン・プロットに『ブツ』とやらを受け取りに来る時間を過ぎる事になるな】
『それじゃダメだ』
【そやな。この体はいったんここに放置しとくか】
『いや、それはしたくない』
【わがままなやっちゃな】
『何とでもいえ。お前の体を、いや、お前をこのままにしとくなんて絶対いやだ。でも、ティアナ達のところにも行く』
【出来へんって言うてるやろ。アンタはガキんちょか】
『うるちゃいやい』
【開き直っても可愛ないで。みっともなさ過ぎてハナも出えへんわ】

『要するに、だ』
【ん？】
『お前が強力なルーンを使えばいいわけだろ？』
【だから、それは出来へんって……まさか、アンタ？】
『いや、オレは消えてもいいから、なんて言わないよ』
エルデはゆっくりと息を吐いた。
【またアホな事言い出すんかと思たわ】
『まさか、オレだってここで消えたくはないさ。でも、オレ次第って事だよな？』
【まあ、簡単に言うとそうやな】
『だったら、オレに考えがある。ちょっと体を返してくれ』
【嫌や】
『え？』
【何をするか、先に言え。そやないと返せへん】
『お前なあ……』
【こういう場合、アンタは信用できへん。どうせ自分が何か被るつもりなんやろ？そんなんハイそうですかって黙ってみてられるわけないやろ】
『はあ……。わかったよ』
エイルの説明はこうだった。
抓（つね）る程度の痛みでは意識を確保するのが難しいというのなら、実際に命には関わらない程度の傷をつけるのはどうか、と言うものである。
具体的には、短剣で体の一部を刺すなり切るなりするというのだ。
『歯の神経とか痛そうだぜ』
【痛さで失神するわ！】
『だったら、指とか掌とか、足かな。爪の部分なんかも神経が集中してそうだ』
傷をつけるのは何か刃物が必要だったが、ちょうど腰に短剣があった。

【妖剣を使うつもりか？】
『丁度いいじゃないか。本番前にいったいどういう剣か一回試しておくのも悪くないだろ？』
【そう言えば、せっかくラシフからもろたのに、アンタ、いっぺんも抜いてへんな】
『錆びまくってたらどうしようもないな。そんな剣で切ると破傷風に罹るかも知れないけど』
【でも、ウチは反対や。自傷行為やで？　大ケガするんやで？】
『お前はファランドールで一番のハイレーンなんだろ？オレはもうその自称を疑ってないぞ。だからお前が自分の体に戻ってから、思いっきり強力なルーン使って、ビシっと治してくれればいいじゃないか』
【……】
『どうした？』
【――以前は疑ってたんやな？】
『そっちかよ』
【アンタみたいな失礼なヤツ、知らんわ】
『いやいやいやいや、普通は疑うだろ？　信じないだろ？　いきなり【オレはこのファランドールで一番のハイレーンや。参ったか】とか言われても参らないだろ？』
【アンタの気持ちはようわかった】
『だから、今は信じてるって言ってるじゃないか。もうこれっぽっちも疑ってないから』
【いや、そやからもうわかったって言うたやろ。ほら、体を動かしてみ】
『あ』
エイルは手を動かした。エルデの言う通り、既に体の制御はエイルのものになっていた。
【アンタの気持ちは受け取った。でも無茶はアカンで。アンタが痛いと、ウチも痛いんやから。あんまり痛かったらこっちが何にもで

けへんようになる】
　エルデに言われて、エイルは掌を握ったり開いたりしていたが、ふと思いついたように言った。
『なあ』
【今度はなんや？】
『オレが強烈に意識を保っていられればいいんだよな？』
【そやな】
『だったら体を傷つけるんじゃなくてさ、死ぬ程すごい匂いを嗅ぐ、という案はどうだ？　この世のものとは思えないような……そうだな、何かが腐ったにおいとか』
【どうやって作るねん、そのニオイ？　ルーン使われへんねんで？】
『あ、そうか』
【というか、そんなん死んでも嫌や。そんな匂い嗅ぐぐらいやったら、サクっと手首切り落とせや！】
『おいおい』
【言うてへんかったけど、この体の状態でもアンタより五感が鋭いねんで。そんなんでアンタが死にたくなるようなニオイとか、どんだけウチが悶絶せなアカン思てんねん】
『わかったわかった。においは冗談だ』
　エルデはわざとらしく大きなため息をひとつつくと、壁の扉を眺めた。
【どっちにしろ、キアーナをあんまり待たせる訳にはイカンやろな】
　エルデの言葉でエイルも思い出した。
　扉の向こうでは、アルヴィンの少年、キアーナ・ペンドルトンがキセンの命を受け、彼らが部屋から出てくるのを待っているはずであった。ティアナ達のところへの水先案内をする為である。
【キセン・プロットが嘘をついてなかったら、やけどな】
『オレは嘘はついてないと思うぞ』
【どっちにしろ、この扉を開けんと埒があかへんし、要するに時間はあんまりないのは動かしがたい事実っちゅう事やな】

『さっさとやるか』

エイル・エイミイは妖剣ゼプスの柄に手をかけると、ためらうことなく鞘から剣を抜き放った。

ジャミールの里で黄色い布に包まれた状態で族長ラシフより授かってから、一度も抜かれた事がない妖剣。その刀身が初めてその姿を見せようとしていた。

「え？」

【ええ？】

エイルは思わず声を出した。同時にエイルの目を通して妖剣の姿を眼にしたエルデも心の中でそう声を上げた。

『なんだよ、これ』

【さすがにこれは……想定外やな】

エイルが握る妖剣ゼプスの柄の先、本来刀身が在るべき場所には、何もなかったのだ。

そう。つまり妖剣ゼプスとは柄と鞘だけの「剣であって剣でないもの」であった。

だが……

戸惑ったエイルが悪態をつこうとしたその時だった。

エイルの頭の中に、第三の声が響いた。

エイル自身でもエルデでもないその声は、低く、こだまするようにぼんやりと頭の中に広がった。

（我が名はゼプス。我は問う。汝は我の正当なる所有者か否か）

それは手に持った柄だけの剣、いや柄の声のようだった。

そう認識するとエイルの混乱は収まった。

何しろ妖剣である。これくらいのことはあるのかもしれないと思ったからだ。

とはいえエイルはその問いにどう答えたものかを迷った。

正当か？　と尋ねられると、それにどう答えたものなのだろうか？

ゼプスとミュインモスの正統な所有者がジャミール族だとすると、

その族長であるラシフから「一族の総意だ」と言って手渡されたものだから、正しく手に入れた言っていい。それは「正統」ではないが「正当」ではある。

そうだ、とエイルが心の中で答える前に、ゼプスの言葉が再び頭に響いてきた。

（我はマーヤ・タダスノを正当な所有者と認めよう。我はこれから汝の剣となりて、共に夢を目指さん）

「は？」

エイルは思わずそう声が出た。だが、声に出していいものかどうか迷った末、心の中でゼプスの声に反応しなおした。

『えっと、ゼプス……さん？』

エイルが何も言わぬうちに、ゼプスは勝手にエイルを所有者として認めたようだった。

『もしもーし、何も言ってないけど、いいんスか？』

エイルが頭の中でいくら呼びかけても、二度とゼプスの声は聞こえなかった。

『自分で質問しといて、こっちが答える前に自己完結しやがって』

【さすがは妖剣。用件のみっちゅう事か】

『上手いなあ……』

【や、やかましいっ】

『褒めただろ？』

【思いっきり哀れみのこもった声やったわ！】

『わかってるんならつまんねえダジャレを言ってるんじゃないよ。それよりどうするんだよ、これ。柄だけだぞ？　さすがにこれじゃ、何しても大して痛くなさそうだなあ』

エイルがそう言って再びゼプスを握る手元を見た時である。握った柄が光を放った。

それは真っ白でまばゆい光芒を放った後、形を作り始めた。

数秒後。エイルの視線の先にあったのは、白く輝く細身の片手剣であった。いや、柄の長さを考えると双手剣であろうか。

どちらにしろそれはファランドールでは見たこともない形状の剣だと言えた。

【なるほど。そう言う事か】

本当の剣になったゼプスを見て、最初に声を出したのはエルデだった。

『いや、一人で納得せずにいったいどう言う事か教えてもらおうか』

【人にものを尋ねるのに、偉そうな物言いやな】

『何というか、ちょっとムっとしてるんだよ』

【それにしても変わった片手剣やな】

『刀身は細いけど、これは片手剣じゃないぞ』

エイルは妖剣ゼプスを高く掲げると、手首を返して剣の表裏を吟味するように眺めた。刀身はさして長くない。エイルの身長の半分以下である。

エルデの言う「変わった剣」という表現は確かに的を射ていた。エイルが握る妖剣ゼプスの刀身はまっすぐではなかったのだ。それは緩やかに弧を描き、ファランドールの剣の常識に照らし合わせると全体に細身できわめて繊細な切っ先を持つ片刃の、つまりは特殊な剣だった。

【刀身の細さは懐剣並みやな。それに片刃か。表にも裏にも溝がある。それも二本。薄い剣を補強する為なんかな？　それに刃がある側の山脈型の不規則な模様はなんや？　それにも何か意味があるんか？】

『これは研ぎの跡だ』

【なるほど研ぎ跡か……よう見たらそれ、中心と外側の材質がちゃうんやな。それにしても刃が薄すぎへんか？】

『フォウではこの形の剣を『カタナ』って言うんだ。刃の部分が薄いのはカタナの特徴だけど、これはカタナの中でも薄い方なのは確かだな。その分切れ味も抜群で、ちゃんと手入れしてあるカタナだとヒゲも剃れるんだぞ』

【なんやそれ。物騒な髭剃りやな。どうでもええけどフォウの剣っちゅうのは弱々しいな】

エルデは見慣れないその剣の形が、エイルの、つまりフォウで使われてる剣の形なのだとすぐに理解していた。

【要するにコイツは、持ち主が一番使いやすいと思う剣の形になるんやな。この剣を作ったセロドニってルーナーはいったい何もんやろな】

『とんでもない人だって事はわかる。オレの頭の中をよっぽどほじくってくれたんだろうな』

【お前の本当の名前を言うてたしな。さすがにあれには驚いたわ】

『だな。でもこの剣、本物のカタナと比べて一つだけ大きく違う点がある』

【それは何や？】

『これ、重さがないんだ』

エイルはそう言うと、剣を垂直に立てたまま、小指の先に柄の尻を乗せてみせた。

【なるほど、妖剣やな】

エイルはその剣を両手で握ると、正眼に構え、そのまま気合い一閃、袈裟懸けに空を切った。

【なるほど双手剣やな】

『基本はそうだけど、リーゼのように両方の手で一本ずつ持って二刀流って人も結構いる。まあ、流派によるんだけどな。どっちでも使える剣って事さ。柄が長いから、握り方の自由度が高いんだ』

【へえ……って】

『あれ？』

エイルがゼプスを掲げて、改めて刀身を吟味しようとした時、そのゼプスの刀身が透明になった。

いや、刀身が消えたのだ。

気がつけば柄も元のゼプスの基本形に戻っていた。

『どういう事だ？』

【ウチに聞かれてもな。ただ……】
『ただ？』
【今思い出したけど、このゼプスっちゅう妖剣は単独の剣やなかったやろ？】
『そうか。ラシフさまは『対の妖剣』って言ってたな。確かゼプスは夢、ミュインモスは希望……か』
【ああもう、あのクソ族長、使い方とか仕組みくらい知っとけっちゅうねん。まともに使われへん剣を大層なご託つけて押しつけるとか、あり得へんやろ？】
『いやいやいやいや。ラシフさまだってまさか普段は刀身が無いとか思わないだろ？　悪気なんてないさ』
【もはや悪気とか、そういう問題やないやろ。いざという時にアンタがこの剣を抜いてたとして、や。刀身無かったりしたら場がしらけるやろ？】
『いやいやいや。しらけたりしないって』
【そやな。相手は馬鹿にされたと思て逆上するやろな。って、アカンやろ？　かえってややこしなるやん】
『いやまあ、そうかもしれないけど、単に不安定なだけなのかも。オレの体調とか気分とかに連動してるのかもしれないだろ？　使う気満々なら現れるとか』
【うーん……こんな微妙なモンやのうて普通の剣をくれたら良かったのになあ】
『まあまあ。ダメ元でいろいろ試してみようぜ』
【いや、そんなおもちゃで遊んでる場合やのうて、ウチは早いとこ自分の体を治したいんやけど……】

同日、同時刻、シルフィード大陸。
ユグセル公爵領であるファルンガ地方南東にあるアアクと呼ばれる集落の一角で、ちょっとした事件が持ち上がった。

それは夜明けまでにまだ相当な時間がある未明と呼ばれる時間帯の事であった。

集落の中心にある一つの家から、悲鳴が聞こえた。イブロド・ジャミールの悲鳴である。

まだ辺りが真っ暗な時間に、家の中の物音で目を覚ましたイブロドは、とっさに身構えると、周りの様子をうかがいつつ、母親の部屋の扉を開いた。音はそこからしたように思えたからだ。

「お母様？」

そう声をかけると、部屋の中からはうめき声が聞こえてきた。

慌てて扉を開けたイブロドは、部屋の様子を見て思わず叫んだ。

「お母様っ」

それが悲鳴の正体であった。

部屋には寝間着姿のイブロドの母親が、何かを抱きしめたまま倒れていた。

寝床が乱れていないところを見ると、起き出したあとに倒れたようだった。

「お母様、どうしたのです？」

部屋に飛び込んだイブロドは、そう呼びかけると母親の頬に手を当てた。

「冷たい！」

ラシフ・ジャミールの頬からは体温が感じられなかった。だが生きているのは確かである。目を閉じたまま、今も苦しそうにうめいているのだから。

「お母様、しっかりして下さい」

イブロドは両肩を揺すってラシフを覚醒させようと試みた。

だが、その必要はないようだった。

「取り乱すでは、ない……イブロドよ」

消え消えではあったが、ラシフはそう声に出した。意識はしっかりしているようだった。

「どうなさったのです？　何があったのですか？」
イブロドは薄く眼を開けた母親の顔をのぞき込もうとして、その腕に抱いている物に気付いた。
「それは……」
ラシフが胸にしっかりと抱いていたのは鞘に収まった短剣だった。
「まさか、ミュインモス」
イブロドがジャミールの里に妖剣として伝わる短剣を見るのは、これが二度目であった。
一度目はラシフの命を受けてジャミール一族の里の倉から封印されたそれを取り出した時である。
その時取り出したのは対になるゼプスとミュインモスの二振りだったが、一方のゼプスはジャミール一族の恩人である賢者に贈り、残った一振り、ミュインモスはその後ラシフが布にくるんだまま、肌身離さず側に置くようになった。だがそれ以降、覆われた黄色い布が解かれる事はなく、剣の姿どころか鞘すら一切人の眼には触れていないのだ。
だがラシフは今、鞘に収まった状態のミュインモスを胸に抱きながら、苦悩の表情を浮かべている。
体温が異常に低い事から、ラシフの体調がまともではないのは確かだった。
「私は大丈夫だ。騒ぐでない」
「しかし……」
イブロドはとりあえずラシフの上体を抱き起こした。そうされることについてはラシフも抵抗はしなかった。
「さすがにこういう物だとは想像もしていなかったが……」
イブロドに支えてもらいながらなんとかその場に座り込んだラシフは、のろのろとした動作でミュインモスを目の前に掲げ、その姿をしげしげと眺めた。
「何があったのか、お話しいただけませんか？」

イブロドはたまらずそう頼んだ。
「結びの儀というヤツじゃ」
「結びの儀？」
「ミュインモスがそう言うとった。ゼプスと繋がる儀式を執り行う、とな。あの小童（こわっぱ）、ようやくゼプスを抜いたとみえる」
「剣が……しゃべったのですか？」
イブロドは母の頭がおかしくなったのかと一瞬疑ったが、すぐに自らの考えを否定した。
「いろいろとわかった。この一対の剣の持つ力はまさに妖剣と呼ぶにふさわしいものじゃ。しかし……」
「しかし？」
「ゼプスをあの小童に与えたのは我ながら大正解と言える。しかしミュインモスは族長が持つものではないな」
「それは……」
どう言う意味かとイブロドは尋ねた。
族長が持つものではない。そうつぶやいたラシフの表情が、やけにすがすがしいものに思えたのだ。
ラシフはまだ体に力が入らないようで、イブロドに全ての体重を預けてぐったりとしている。体温も異常に低いままである。大丈夫だと止められた為にハイレーンを呼びに行くのは思いとどまったものの、体調が普通でないのは間違いない。だが、それなのにラシフ・ジャミールの表情は穏やかなのだ。
倒れ込んでいた時の苦悩の表情はもう跡形もなく消えていた。

「里の整備が終わり、ある程度落ち着くまではと思っていたが……どうやら急いだ方がよさそうじゃな」
イブロドの問いには答えず、ラシフはそうつぶやいた。
「ルーチェと……そうじゃな、連れ合いもいた方がいいじゃろう。疲れ果てて眠っているところを悪いとは思うが、無理にでも起こしてつれて来てはくれぬか？」

「今すぐに、ですか？」
ラシフはうなずいた。
エイルがゼプスを鞘から抜き、二つの妖剣が結びの儀によって繋がった以上、一刻も猶予は無いのだという。
「心配するな。皆が揃ったらゼプスとミュインモスが持つ力を全て話そう。『夢』と『希望』とはセロドニもよく言ったものだ」

確かにルーチェも、その夫となったアトラックも、疲れ果てて泥のように眠り込んでいるに違いない。だが、一番疲れているのはラシフ当人であろうとイブロドは思っていた。
イブロドだけではない。ルーチェもアトラックも、いや、ジャミール一族と、ユグセル家から派遣された入植支援部隊を含む全ての村人がそう思っているに違いないのだ。
そんなラシフの招きである。たとえ夜中であろうがルーチェ達は喜んで馳せ参じるだろう。
イブロドは何も言わずラシフをそっと布団に横たえると、急いで身支度をして外へ出た。
見上げた空には二つの月がいつも通りに浮かんでいた。

アプリリアージェが腹心を通じてジャミール一族の為に用意していた土地はアアクと名付けられた。
ラシフの命により、ルーチェとアトラックが二晩悩んだ末に考え出した名前である。
アアクとは「歩く図書館」を自称するアトラックによると、古代ディーネ語でカササギを意味する言葉だという。
カササギは古来より、大切な人への思いを乗せて運ぶ鳥と言われている。
始祖の一人であるシルフィードが自らの気持ちを、遠く離れた思い人に届ける使者として指名されたのがカササギであるとされる。
その神話に因んだ命名であった。

ルーチェとアトラックは、ジャミールの里が長い年月を経て、再び故郷のシルフィード大陸に戻ることになった土地をその鳥になぞらえたのである。

アプリリアージェとの約束で、ジャミールはもう閉鎖した一族ではなくなった。アアクに住む限り、ファルンガ領民として、ひいてはシルフィードの国民の一員としての義務を負う事になる。それは「外」との交流で一族のあり方が大きく変わるであろう事を意味していた。

今後は里を出る者も増えよう。同時に里へ来る者もあるだろう。ジャミールの里は、好むと好まざるとに関わらず、変わらざるを得ないのである。

だが変わることのないものもある。

ジャミール一族がシルフィードに戻った日。

その日の喜びと感動は長く後世に伝えたい。それは文章や歌ではなく、土地の名前に込めておこう。

カササギの名にその「思い」を。

一族の思いが込められたアアクという名の村では、新しい村の形作りが休まず行われていた。

族長から村長と外向きの肩書きを変えたラシフ・ジャミールは、当然のように毎日ありとあらゆる事に振り回され、文字通り忙殺されていた。

アプリリアージェの話の通り、アアクの村にはユグセル公爵家の計らいでファルンガ公領から、多くの兵士や技術者、医師、それに流通を受け持つ商人までが入り込んで、ジャミールの里人と協力して村作りを進めていた。

物資の調達は公爵家とゆかりの深い三人の商人があたり、生活物資などに不自由することはなかったし、大半をアルヴで編成されたファルンガの州兵達は、ダーク・アルヴのジャミール族が口をぽかんと開けるしかない程の力強さで森の開墾作業を順調にこなしてい

た。

ジャミール一族がアアクに到着した時には、驚いた事に彼ら入植支援部隊によっていくつかの施設は既に完成を見ていた。共同宿舎と、それに併設された病院がそれである。

そこにはファルンガ州でも指折りのハイレーンと、ユグセル家に使える優秀な医師達、そして看護役の衛生兵が居た。彼らはサラマンダ大陸からはるばるやってくるジャミール一族の到着を万全の体制で待っていた。

ラシフの主な仕事はアプリリアージェの入植支援部隊とジャミール一族との調整役である。特に物資や資財の調整や日々変わる人員配置の見直しなど、現場を動かしながら、その仕事を円滑に管理できる体制そのものを築き上げる必要があったのだ。

アプリリアージェが派遣した人員は総勢で約五百人程であったが、その調整役がいなかったのだ。それはアプリリアージェが敢えてそうしたのだろうとラシフ達は理解していた。

村を作るのはジャミール一族なのだ。

「指揮はラシフ様に」

アプリリアージェの言葉をラシフ達はかみ締めながら、日に日に変わってゆく村の姿に「希望」という言葉を重ねていた。

その肝心要の組織作りがいよいよ佳境に入っていた。

嬉しい誤算と言うべきなのだろうが、アプリリアージェが手配した入植支援部隊の多くが、ジャミールへの永住を希望していたのだ。

中にはすでに入植支援部隊の一員と将来を誓うジャミールの若者がラシフのところへ報告に訪れていた。

入植支援部隊と最初に会合を持った際、男女の比率が見事に半々だった事は、つまりはそういう事を見越した編成だったのだと、今ではラシフもイブロドも理解していた。

もちろんそれもアプリリアージェの「お節介」なのであろう。

ジャミールの里を出る際に「仮」の合同婚儀を上げたものの、正

式な婚儀をそうそう先送りにもできない状況になっていた。
幸いアアクは温暖な土地で、雪解けを待って事を起こすという必要が無い気候だった。その気になれば季節の都合に合わすことなく行事を執り行える。
春を予定していた合同婚儀も前倒しにする必要があるという意見も多かった。
要するにラシフは日々そういう仕事に追われていたのである。少し時間が空けば、食事の時間も惜しんで村の中を歩き、里人や入植支援部隊の人間の話を拾い、その道中では子供達の顔を一人一人のぞき込んでは抱き上げたりあやしたりするものだから、執務室に戻るとまた山のように案件がたまっているという具合である。
そんなこんなで、補佐役のイブロドが見たところ、ここ最近はほとんど眠っていない様子だった。禁止してもラシフはこっそり自分の家に仕事を持ち帰るのである。業を煮やしたイブロドは、結局ラシフの家に押しかけて共に寝起きをする事にして、強制的に睡眠時間を確保させた。
イブロドは村ができあがる前に、過労で母親を失いたくはなかった。だから嫌がるラシフを羽交い締めにして医師に診察をさせ、そのままハイレーンに睡眠の導入をさせたこともあった。その後数日間恨み言を言われ続けたが、イブロドには柳に風であった。
診断によると寝不足による疲労の蓄積はあったが、幸い体調に不安を感じさせる兆候はないという。
つまりイブロドは一安心したところだったのだ。
だがそのほんの数日後に、ミュインモスがラシフの生気を奪っていった。
そう。間違いなくラシフの力はミュインモスに奪われたに違いないのだ。
あの瀕死とも思える状況を作り出したのがミュインモスである事に間違いないだろう。
ラシフは大丈夫だというが、イブロドは嫌な予感をぬぐい去るこ

とが出来なかった。
大したことがないのなら、こんな夜中に「急いで」ルーチェ達を呼び寄せる理由がわからない。
そんなことを考えながらイブロドは足を速めた。

# 第六十六話　族長の交代

アアクは夜明け前であった。

すでにほとんどの「お役目」が村の中央部にある八角形の建物に集合していた。ラシフのいう「講堂」である。

講堂はジャミールの里にあった「精霊殿」を模した形をしていた。違うのはその規模である。簡単に言えば精霊殿の直径を十倍にしただけであるが、それだけで容積が千倍になっている。つまり似て非なるものなのだ。

とは言え講堂はまだ建築中であり、骨組みがなんとか完成した程度であった。簡単な竹葺きの屋根と油をしみこませた目の粗い布で周りを覆ってあり、風雨はなんとかしのげる村状態にあった。避難所を兼ねる全天候型の集会所が欲しいというラシフの希望で最初に形を見せた大型の公共建築物であった。

形を精霊殿に似せたのにはもちろん訳がある。もともと精霊殿はその名の通り精霊陣を張る為に合理的な形をしていたのである。

平面的には正八角形を成す精霊殿は、ジャミールが得意とする正方形を二つ重ね合った八角形を基準とした精霊陣と同じ形なのだ。建物の大きさはルーンの強さには関係がない。形と中心部の位置がわかれば大きさは問題にならないのである。

特定の人間だけしか入れない宗教的な精霊殿をアアクに作るわけにはいかない。しかし同じ機能は欲しい。で、あれば、もっとも公共的な建物に精霊殿の機能を付加すればいい。それがラシフの考えた合理的で簡単な解決法だった。

その大きな精霊殿が後に大いに役に立つ時がくるとは、設計時にはラシフ自身も考えてはいなかったに違いない。

講堂の中心部は盛り土がされていた。そこは直径が五メートルほどの円形の舞台のようになっており、地面から一メートルほどの高

さがあった。周りは緩やかな傾斜になっていて、四方に階段が作られており、上り下りがしやすいようになっていた。

その舞台の中央部にラシフはいた。

ラシフの足下、つまり舞台にはやはり精霊陣が描かれており、ラシフは一振りの小さな剣を携えてその中心に目を閉じたままで立っていた。

講堂内には多くの人々がいたが、驚くほど静かであった。だが講堂の内部に満ちている空気はどこか熱を帯びていた。そこに集った者達は皆固唾をのんで、ラシフが言葉を発するのを今や遅しと待ち構えていたからだ。

同様にラシフも何かを待っていた。

やがて微妙な緊張がみなぎる講堂に、音が響いた。

足音である。

その足音に反応するかのようにラシフは目を開けると、音のする入り口へ視線を向けた。同時に、その場に集まった全員の視線が足音の主に注がれた。

足音の主は薄い黄色の布で仕立てられた正装を纏ったダーク・アルヴの少女であった。その後ろに長身のデュナンの青年が従っている。

ラシフが待っていたのはその二人であった。

「遅いぞ、ルーチェ」

ラシフは言葉とは裏腹な穏やかな声で少女に声をかけた。

「申し訳ありません、ラシフ様」

ラシフの孫、イブロドの娘ルーチェ・ジャミールは優雅な仕草で頭を下げると、ラシフが立っている精霊陣の縁まで進み、そこで正座をしてラシフに対した。

精霊陣の中央部にいるラシフと向かい合う形になったルーチェは、装束に着崩れたところがないか吟味するように一通り眺めた後で、

特に問題がないと判断したのか再度頭を下げた。
「正装になれておりませぬ故、着替えに少々手間を取りました」
「なに、嫌でもすぐに慣れよう」
ラシフはそう言って孫娘に微笑を向けた。
ルーチェの到着で準備が整ったのであろう。ラシフはその場にいた二十人あまりの「お役目」と呼ばれる人々に合図を送った。「お役目」達はルーチェの後ろ側に整列すると、ルーチェに倣う形で正座した。

「お役目」とは、暫定的にラシフが編成した各組織の責任者もしくはそれに準ずる者の呼称である。暫定的とはいうものの、アアクではその後も長く村の主立った人間の事を「お役目」と呼び習わすことになった。
この時の「お役目」には支配的な意味合いはない。作業分担の伝達経路と組織化の為に適当と思われる人間をラシフが指名しただけである。そしてそこにはジャミールの里の人間だけではなく、入植支援部隊の人間、つまり「よそ者」も含まれていた。

「皆も既に認識しておろう。ここには我がジャミール一族ではない、入植支援部隊の者も含まれている」
イブロド達いわゆる四人組の誘導で、「お役目」の全員が正座し終わっていた。衣擦れの音が止み講堂に静寂が訪れると、ラシフはそれを待っていたかのように、静かに語りだした。
「だが、それでこそアアクで行う儀式にふさわしいと私は考える。だが、このやり方に異議のある者は今ここで遠慮無く申し立てをするが良い」
数秒の間をあけ、ラシフはゆっくりと全員を見渡した。
皆には予めこれから何が行われるのかは含んであった。だが意見のとりまとめをした訳ではないから異議や質問が出ても当然と考えていたラシフだが、そこにあるのは水を打ったような静謐な緊張感

だけであった。
　ラシフは再び口を開いた。
「今後、様々なものが変わり、あるいは新しくなるであろう。その過程というにはあまりに大きな儀式であるが、だからこそあえてここはジャミール式を通させていただく。その点入植支援部隊のお仲間にはご承知おきいただきたい」
　これは入植支援部隊へ向けた念押しである。
　数名の人間が無言でうなずくのを見たラシフは、小さくうなずいてその場ですとんと正座をした。そしてずっとその手に持っていた短剣、すなわち妖剣ミュインモスを膝の前にそっと置いた。

「かつて我が一族にセロドニという大いなる力を持ったルーナーがいた」
　背筋を伸ばし、美しい姿勢でラシフが語り出すと、皆の視線がラシフから短剣に移った。
「セロドニは剣を作る能力に長け、生涯にわたりジャミールに良質な剣をもたらすべく精進していたという。そしてある日、セロドニはマーリンに出会ったという」
　それはジャミールの里の人間で、ある程度の年齢のものなら誰でも知っている昔話であった。
「セロドニはマーリンの命を受け、一対の剣を鍛え上げた。それがゼプスとミュインモスという一対の剣だ。だが、私の知る限り、妖剣が特定の剣士に使われた記録はない」
　そこまで話すと、ラシフは膝の前に置いたミュインモスを手に取り、膝の上に置きなおした。
「だが先日、初めてゼプスが主を持った。里の者は知っていよう。我らが恩人である剣を持たぬ若い剣士だ。同時に彼は大いなるルーナーでもある」
　ラシフは名前を口にしなかった。もちろん敢えてそうしたのであろう。里人は皆その名を知っている。知らぬ入植支援部隊の人間に

は敢えてその名を言う必要もない。
　重要なのは里の恩人がゼプスを所有しているという事実なのだ。
「一方、対になるミュインモスは族長である私が預かった。その結果、本日未明にゼプスとミュインモスは、『結びの儀』により初めて一対の剣となった」

　イブロドは族長補佐集団である「四人組」の筆頭としてラシフの後方に控えて講堂の様子をうかがっていた。
　気になったのは「お役目」以外の同席者が予想よりも多いことであった。ラシフの指示では「お役目」とその補佐役、並びにそれに準じる要職を担う者がこの場に招集されたはずだった。イブロドの概算では「お役目」が約二十人、補佐がその二倍、要職と見なされる人間が補佐と同数程度として、せいぜい百人足らずのつもりだったのだ。
　だがルーチェの後ろに控える「お役目」のさらに後ろにいる人数は、どう少なめに数えても二百人を下らない。
　招集を担当したのはルーチェの夫、アトラックである。シルフィード海軍を退役し、同時にスリーズの名を捨てジャミールを名乗る事を選んだ元ル＝キリアの隊員が何かを画策したと思えなくもない。
　イブロドは注意深く参加者の顔ぶれを確認していった。多くはジャミールの人間で、すなわちイブロドが見知っている人間である。そして彼らが「要職」でない事もイブロドは知っていた。
　イブロドは参加者の最後尾にいる娘の夫に視線を移した。
　アトラックはまるでイブロドが自分の方を向くのを待っていたかのように、視線を絡めてきた。そしていつものさわやかな笑顔で目配せを送ってきたのだ。
　イブロドはルーチェの夫であるアトラックを好ましい人間だと思っていた。もとよりルーチェが選んだ男であるというその一点でイブロドはアトラックを認めていたのだ。　イブロドは自分の娘が自分より、また母であるラシフよりも頭の回転が速いとかねてより

思っていた。だからそのルーチェがあっという間に心を許した人間が、悪い人間であるはずはないと信じていた。

だが、今この時この場所で明らかにアトラックが何らかの意図を持って本来招く必要が無い人間を、それも大量に招いた事は紛れもない事実であった。

しかし、目配せに続いてアトラックが唇に人差し指をそっと立てて見せた時、一瞬浮かんだ疑いの心が綺麗に霧散していった。

アトラックのいたずらっぽい無邪気な微笑みの意味が少しだけわかったからだ。

イブロドは講堂にいる面々に視線を戻すと、自分の判断を信じることにした。

イブロドは再びアトラックに向かうと、微笑して見せた。アトラックはそれを見て、目を細めて小さく会釈をした。

「一対であるという事には意味がある。ミュインモスは遠く離れた場所にあるゼプスにルーンを送る仕組みを持っているのだ」

ラシフの話は続いていた。

ゼプスとミュインモスの剣の秘密に話が及んでいたが、参加者はいやに静かだった。驚く顔一つ浮かべる者がいないのだ。まるで聞き知った話を再度聞いているかのような反応である。

ラシフもさすがに変だと気付いたのか、そこで話を切ると講堂を改めて見渡した。もちろん人数がやけに多いことには気付いたに違いない。

だがラシフは何も言わなかった。

儀式の途中でもある。人数が多いからといってその事を今更とがめても仕方がない事である。

腑に落ちないものはあるにせよ、夜明け前に招聘をかけたのはラシフ自身である。

ラシフは出かかったため息を飲み込むと、粛々と儀式を進めることを選んだ。

「ゼプスは主の感覚と繋がり、その情報をミュインモスに渡す。ミュインモスの主である私はゼプスの使い手の身体的な状況を知ることが出来る。すなわち私は必要に応じて強化ルーンを我らが恩人にかける事ができるのだ」

それはすべてミュインモスが、ラシフに対して伝えた機能なのだという。

ゼプスとミュインモスを「繋げる」時に、相当な力がミュインモス側の持ち主に求められる事も。

つまりもともとミュインモスは高位ルーナーが持ち、ゼプスは剣の使い手が持つもので、剣士を離れた場所からルーナーが支援できるという仕組みのものだったのだ。

ただゼプスにしろミュインモスにしろ、誰もが使えるというものではない。ゼプスは正当な持ち主である事を主に求め、ミュインモスは一定以上の能力を有するルーナーである事を主の条件とする。

それはイブロドがルーチェとアトラックを連れて戻った際に、ラシフに聞かされた話だった。

ミュインモスは剣を抜いたラシフに「命を賭してゼプスの正当な主を守る覚悟があるか」と問うた。そして「ゼプスと初めて繋がるには、相当な苦痛を伴う」とも。

ラシフはもちろん二つ返事で応じ、結果として失神寸前のあの状態に陥ったのだ。全身を釘で打ち貫かれるような痛みが襲ったという。痛みに耐えられず、もうダメだと思った時に、イブロドが部屋の扉を開けたのだ。ラシフはそれによってかろうじて意識を保っていられたのだという。

「私はもう若くはない」

ゼプスとミュインモスの仕組みを話し終えたラシフは、最後にそうぽつりとつぶやいた。

その声には、さすがに寂寥感が漂っていた。

「村は今、このような状況じゃ。族長としては、そちらに全身全霊を注がねばならん。だが、ゼプスとミュインモスが繋がった以上、私は今この時より、この命を恩人の為に使おうと思う。いや、使いたい」

それは最初に呼び寄せたルーチェとアトラック、そしてイブロドの前で告げた言葉と同じだった。ラシフはそう言った後、イブロド達に深々と下げたのだ。

「かねてより」

ラシフは声の調子を強めた。

「我が娘イブロドの長女、ルーチェが次期族長と定められていた事は皆も知っての通りじゃ」

その言葉で、初めて講堂の中の空気が動いた。だがそれはざわめきや驚きではない。ラシフが次に何を言うのかは既にわかっている。その言葉を謹んで待とうとする、そんな雰囲気が講堂全体に漂ったのである。

「ジャミール族の族長ラシフの名において宣言する。本日今この時より、族長の座をルーチェ・ジャミールに譲り渡す」

それはきわめて簡単な「宣言」であった。

イブロドはラシフが族長を移譲された儀式に立ち会ってはいない。すなわちそれが初めて見る族長移譲の儀式であった。

おそらく本来の儀式は宗教色の強い、もう少し格式や手順が複雑なものだったのだろう。だが、ラシフはアプリリアージェとの約束を守り、儀式から宗教色を廃したのだ。

廃するに当たって形式を残す事も考えたのであろうが、そこはラシフらしい合理化を採ったという事であろう。

おそらく族長移譲の儀式はこれが最後になるだろう。

ジャミールは閉鎖した一族の社会ではなくなり、アアクという開かれた村へと変わるのだ。

族長は同時に暫定的な村長の役にある。この儀式はあくまでもジ

ャミール族としての儀式であり、村としての公式のものは村長の交代になるだろう。

だが、一つのけじめとしてまずはジャミールの族長を交代させた。つまりラシフは「手順」を踏むことにしたのである。

ルーチェは若い。まだ二十一である。

「だからこそじゃ」

ラシフは駆けつけたルーチェ達を前にそう言った。

新しい土地。そこで生まれたばかりの新しい組織。そこに必要なものは若い力であろう。その若い力をを率いる者は、年寄りではないはずだ。

ラシフはそう言った。

アアクには若いルーチェがふさわしいのだ、と。

イブロドもそれは同感であった。だがそれはもう少し先の事だと思っていたのである。

一族に敬愛されるラシフが旗を振り、自ら先頭に立って作り上げる村を、次の指導者としてルーチェが支える。そして村全体が落ち着きを見せた頃合いを見て新しい体制に変えるものだと信じていた。

しかし、封じられていたジャミール一族はもういない。里人は「社会」いや「世界」と繋がってしまったのだ。自分たちの時間だけをただ守っていればよかった日々は過去のものなのである。

簡素ともいえる指導者交代の儀式は、そんな大きな変化を象徴しているかのようであった。

ラシフは良く通る声で短い宣言を終えると、座ったままゆったりとした動作で礼服を脱いだ。

美しい光沢を放つ黄色い族長の象徴でもある礼服の下には、白い下着をつけているだけである。ラシフの下着には何の飾りもない。もはや質素と言ってもいい程の素朴なものであった。それはまるで今回の族長移譲の儀式のように。

着衣を脱いだことで、座ったままではあるが、ラシフが小柄なが

らも均整のとれた体つきをしていることがわかった。
ラシフの象徴とも言えた髪は短く切りそろえられ、以前の面影はすっかり無くなっていた。エイルとエルデをごまかすために両耳の一部だけを長いままにしてあったが、アアクに向かう途中でそれも切っていた。
かつてのラシフは、座ると周りに薄茶色の絨毯が広がるような豪華な正座姿で見る者をうっとりさせていた。
しかし今のラシフはまるで少女のような髪型だった。
動くたびに首の周りで揺れるラシフの髪を見ると、イブロドはそれが自分の母ではなく、まるで娘のルーチェに思えてきた。
短い髪のラシフの姿は、イブロドの胸を突く。
それがルーチェならば、母も父も、そして今は伴侶もいる。
しかしラシフはその姿のままでもう二十年以上も一人きりなのだ。
もちろんイブロドという娘はいる。だがそれは見守るべき対象であって見守られる対象ではない。決して包むような眼差しで愛撫してくれる存在ではない。
いや。
それはイブロドの感傷かもしれない。ラシフ自身は誰かにそうして欲しいなどとは思っていないのかもしれない。
族長であるラシフは厳しいだけではない。その深い情を一族全員が知っているからこそ、まるで肉親のように敬愛されている。ラシフの幸福はそこにあるのではないのだろうか？
だが、イブロドはそれでもラシフの姿に寂しさを感じるのだ。
そしてそれは突然現れた一人の賢者との出会いを境にしていることは間違いなかった。
違う。
イブロドは心の中で首を振る。
出会いではない。別れが変えたのだ。
あの日……サラマンダ北西部の山間にあったジャミールの隠れ里を後にした日から、ラシフは背中に寂しさを纏いはじめたのだ。

瞳髪黒色の一人の若者に別れを告げ、背中を向けた母ラシフの横顔をイブロドはいまだに覚えていた。

涙を堪えて無理に笑おうとするその顔は弱々しく寂しげで、頼りなく辛そうで、そしてそれでもうつむかずに前を向いていた。

見ているイブロドの方が耐えきれずにうつむいてしまった程だ。

ラシフがルーチェの立場であったなら、間違いなく違う選択肢を選んだに違いない。だが現実は、個人の単純な、いや純粋な感情など意に介すこと無く重い鎖で容赦なくラシフをがんじがらめにしている。

もちろんラシフは娘のような感情に流され続けることはない。その証拠にアアクについてからは族長らしく、いや、ラシフ以外の誰であろうと不可能と思える程の大車輪で「公事」をこなし、まるでそこには私人など存在しないかのような働きぶりを見せていた。

だが、イブロドは知っていた。

食事時、あるいはちょっとした空いた時間ができると、ラシフは時々イブロドにだけはつぶやくのだ。

「あやつらは今頃どうしておるかのう」

もちろんイブロドがそれを知るはずもないことは百も承知の上で、ラシフはそう言って頬杖を突く。答えを求めている問いかけではない。それはラシフとイブロドの二人が共有する思い出を反芻する儀式なのだ。

「きっとお元気でお過ごしでしょう。今頃はきっと母上の悪口を言っているに違いありません」

だからイブロドはそう答える。

「悪口か……ふふ、そうかもしれんな」

その答えが気に入っているのだろう。ラシフは目を細めて微笑すると、決まってそう言って遠くに焦点を結ぶのだ。

思い出を振り払うかのように仕事に埋没するくせに、その合間には思い出をたぐり寄せようとするラシフを見ていると、さすがにイブロドはいたたまれなくなる。

ミュインモスがゼプスを維持する為に一人のルーナーの全身全霊を必要とする、とんでもない剣だと知った時、だからイブロドは戦慄したのだ。

ラシフが喜んでその役目を負うだろう事が間違いないからである。しかしそれはラシフの命を削り続ける事に等しい。

そんなことを族長に、いや母親にさせる訳にはいかないと思うのは娘としては当然だった。

だが、たとえイブロドがどう思おうと、ラシフにとってはそれは幸せな事なのかもしれない。だから死んでもラシフを止めるなどという事は、イブロドにはできそうにもなかった。

ならば誰がそれを止められるだろう？

少なくともそれはイブロドではない。ならばルーチェか？

いや。

ルーチェはイブロド以上に反対するだろう。だが同時にイブロドよりも深くラシフに共鳴するに違いない。なぜならルーチェはイブロドよりもラシフに似ているからだ。母親が感じている事である。間違いはないと思われた。

幸いにして、おぼろげながらではあるが一族の新しい里の方向性は見えてきた。ラシフ自身が自分以上の人材だと認めるルーチェも伴侶を得て、しかもその伴侶も一族の人気者だ。もちろん人気だけではなく、実に優秀な人材であることはもはや疑い用はなかった。

そう考えると多少早いのは確かだが、今ならばルーチェを族長に据えることも無茶ではない。

そもそもゼプスがいったいいつ発動するのか一切わからない以上、ラシフの言うとおりミュインモスの主が族長という責任ある公の人で居られる訳がないのだ。

ラシフが大賢者ほどの力をもつルーナーであれば、あるいはそれも可能かもしれない。しかし、ミュインモスとゼプスの「結びの儀」を受けたラシフのあの状況を見れば、そんなことは夢のまた夢である事はまちがいない。

ラシフの話では「結びの儀」とはすなわちミュインモスの主となる者がゼプスを維持するルーナーとしてふさわしいか否かの資質を問われる儀式だという。同時にそれは精神的な消耗だけでなく肉体的な苦痛をも伴う。

能力の高さを調べるのは当然として、肉体の苦痛については腑に落ちない。だが、こう考えると納得もいく。つまり「結びの儀」の意味するところは、その苦痛に耐えてなおゼプスの持ち主を支援したいかどうかを問いかけているのだ。その上で維持に必要な力を持つルーナーかどうかを調べ、両方に合格したものだけが認められるのだ。

かろうじてではあろうが、ラシフはミュインモスに認められたのである。

その苦痛が想像を絶するものだったことは、直後のラシフの疲弊ぶりを見れば言葉にする必要すらないだろう。体温を奪われ、しかもしばらく体に力が入らなかったのは、ゼプスを維持するルーナーとしてはラシフはぎりぎりだと言うことだ。

だからラシフにとってミュインモスの主であり続ける事は比喩でも何でもなく、文字通り身を削る事になろう。

あの時イブロドが部屋に入ってこなければ、ラシフは意識を保っていられなかったと口にした。それはミュインモスの試験に対する不合格を意味し、持ち主の資格を失っていたであろう。つまりイブロドがラシフをミュインモスの主に仕立て上げた張本人と言っても差し支えがないのである。

イブロドは今更ながら、自分の行動を悔やんでいた。

だがイブロドやルーチェ、そしてアトラックを前に「結びの儀」で主に選ばれた事を話すラシフの、あの満ち足りたような表情を思い出すと、悔やむ事自体が間違いであるとも思えてくる。

――誰も止められない。

ルーチェもすぐにそれを悟ったのであろう。止める言葉を一切口にせず、イブロドをチラリと見てかすかに目を細めただけだった。

そしてラシフに対しては「おめでとうございます」と、ただ一言だけを告げたのだ。

もちろん、ルーチェとて言葉通り手放しで祝福している訳ではない事は、強く結んだ唇と、その厳しい眼差しが物語っていた。

ルーチェの夫、すなわちすでに家族であるアトラックもその場にいたが、彼は何も言わなかった。

その後ラシフは族長をルーチェに譲ることを告げ、アトラックにルーチェの補佐をする事を命じると、そのまま族長の交代の儀式についての大まかな段取りを済ませて見せた。

ルーチェやアトラックを呼んでその事を伝えてから、実際に族長交代の儀式が行われるまで、要したのはほんの四時間程度である。

日を改めて行うべき重要な行事を、なぜそこまで急ぐのか？　イブロドは口に出しかけた言葉を飲み込んだ。つまりそこまで緊急を要する程、ミュインモスの主としての「役目」がラシフにとっては重い事なのだ。次の発動までに事を済ませ、たとえば自らのルーンの弱さを補う為の精霊陣を作るなど、ラシフには急ぎやらねばならぬ事が頭の中にあふれていたに違いない。

だがラシフが急げば急ぐほど、イブロドの胸の中の不安は黒く濃くなっていく。

もしもこの先ゼプスが「発動」する度に、ミュインモスを通じてラシフが力を奪われ続けるとするなら、イブロドは近い将来間違いなく母親を失うことになる。

（そんな事はさせない）

だがどうすればいいのか。イブロドにはその答えがみつからないのだ。

気負うようなそぶりもなく、自然な美しい姿で正座するラシフの穏やかな表情を見ながら、イブロドは複雑な気持ちで唇を噛んだ。

一同の見守る中、あられもない姿のラシフは族長の礼服を流れるような美しい仕草で丁寧に畳むと、それをそっと脇に置いた。

そして目の前に置いた妖剣ミュインモスを手に、音もなく軽やかに立ち上がるとそのまま精霊陣の中央から外に出た。

ルーチェから向かって左側、精霊陣の枠の外まで行くと、改めてそこに正座した。

それがジャミールの里の族長ラシフの、文字通りの退陣となった。そしてそれは主役がラシフからルーチェに移る合図でもあった。

前族長の指名を受けたルーチェは、ラシフに一礼すると、こちらも軽やかに立ち上がった。髪の色と長さこそ違うが、背格好がそっくりなルーチェは、まるでラシフの分身のように見えた。

ルーチェはまっすぐに精霊陣の中央まで進むと、そこで周れ右をして参列者に対面した。

その場に参列していた人々が驚いたのはそのすぐ後であった。

二十一歳と言うが、ダーク・アルヴとしても規格外の小柄なルーチェは、十二歳だと言われてエイルが信じたほど幼く見える。だがルーチェは、その外見からは想像できないような厳かな声で堂々たる族長宣言を行った。

「前族長ラシフの指名により、本日今この時より、ルーチェが長(おさ)を受け継ぐ」

そしてその場に正座すると、ルーチェはラシフと同じように自分の礼服を脱いだ。

ルーチェが着ていたのは礼服ながらラシフの鮮やかな黄色とは違い、同じ黄色でも相当に薄い色の服であった。

ジャミールでは黄色は最も尊い色とされ、鮮やかな黄色は族長しか着ることが出来ない決まりであった。例外としてその家族のみ黄色系統の礼服を着用することになっていたが、色は相当に薄いものとされていた。

ルーチェは今、その薄い黄色の礼服を脱ぎ、ラシフと同じように下着姿になると、脱いだ自分の礼服をラシフの礼服とは逆の位置に置いた。

それを合図に二人のダーク・アルヴの少女が立ち上がった。彼女

たちは新しい族長に向かって深々と頭を下げると左右から回り込むような形でルーチェの後方に立った。
一人の少女が純白の礼服を手に持っていた。
ルーチェが両手を地面に水平になるように真横まで挙げる。するとその少女は恭しい仕草で純白の礼服をルーチェに羽織らせ、もう一人の少女が同じく純白の帯を巻いて、細部を整えて着付けを済ませた。
二人の少女はそれぞれラシフとルーチェが脱いだ礼服を手に、精霊陣の外に出た。

（本来ならば……）
イブロドは純白の礼服姿のルーチェを見て訝しんでいた。
そう。
本来ならば、ルーチェは真新しい黄色い族長服に袖を通すはずだったのだ。族長の徴である鮮やかな黄色にジャミールのクレストが緑色に染め抜かれた礼服を着ることで、新しい族長であることを皆に示すはずであった。
だが、その理由はすぐにわかった。
少女達が去った後、ルーチェは目を閉じるとルーンを唱え始めた。
「ラシフの娘イブロドの子、正しくジャミールの血を受け継ぐルーチェ・ジャミールの呼びかけに答えよ。この場に集いし全ての精霊達よ」
前文に続く短い詠唱文を聞いたイブロドはルーチェが仕込んだ「演出」に気付いたのだ。
「ツキネレイレフ・アイオライト」
ルーチェが認証文を唱え終えると、精霊陣が鈍く光った。その光に呼応するかのようにルーチェの体が発光したかと思うと、すぐにそれは消えた。
しんと静まっていた講堂が、この時ばかりはざわめきの波に包まれた。

列席者の視線の先、発光が収まった精霊陣の中央には、鮮やかな黄色の礼服に身を纏ったルーチェが目を伏せて立っていた。

ルーチェが唱えたのは、染色のルーンであった。

だが、ラシフやイブロドはもちろん、ジャミールの里人達も今までルーンだけでこれほど鮮やかな色を染め抜いて見せたルーナーを知らなかった。

さらに驚くべき事には、礼服は単に黄色に染まっただけではなかったのだ。二本の矢をあしらった緑色のジャミールのクレストが、鮮やかな黄色の中に正しく染め抜かれていた。

下準備はあるにせよ、一度のルーンでそれをやってのけるには研鑽も当然だが、基本的に相当な能力が求められる。

平然とした顔でその高度なルーンを使って見せたルーチェが、当時のジャミールで一番の力を持つ者であることはもはや疑う余地がない。その事を、儀式に参列した一族の人々は改めて認識したことであろう。

最も力の強い者が族長となるジャミールにおいて、ルーチェの持つ力に異を唱える者など皆無であったに違いない。

ルーチェはざわめきの中、ゆっくりと目を開けると自分の袖に視線を移した。そしてそれが黄色に染まっているのを認めると顔を上げて正面を見た。

そして族長となったルーチェは、改めて宣言した。

「我が名はルーチェ・ジャミール。一族の長として、我が命を皆に捧げる事を今ここに誓う」

その言葉を受け、脇に正座していた白い下着姿のラシフが、ルーチェに向かいゆっくりと、そして深くその頭を下げた。

それは参列した人々に、族長の交代が行われたことを深く印象づけるものであった。

族長交代の儀式自体はそれで終了であった。

だが、族長交代に付随して決めておくべきいくつかの事項があり、

ルーチェはそのまま族長としての初めての仕事に取りかかった。
すなわち、自分の補佐役の指名と今後の体制の発表である。
補佐役は「四人組」と呼ばれ、力の強いルーナーが選ばれる。
ただし「四人組」は二人の族長に仕えることは出来ない。つまりイブロド達「旧」四人組はルーチェの補佐役にはなれず、引退する習わしであった。
引退後も旧四人組は一族の重鎮として尊敬を集める。補佐役ではなく、今度は相談役となるわけである。しかし「ご隠居様」と呼ばれることになる前族長ラシフの補佐役はお役ご免となり、既存組織に組み入れられる事になっていた。
もっとも旧四人組は一族でも力の強いルーナーでまとめられているだけに、新しい四人組が組織されようと、一族にとっては要人であることに変わりはない。

ルーチェは厳かに新しい四人組の名を告げた。それは若い四人のルーナーで、イブロドもよく知っている面々であった。
四人は全てコンサーラで、若手では一番力が強い。つまりルーチェの人選は誰もが納得するものだったのである。もっとも既に次期族長としてルーチェがラシフから指名された時点から四人組候補とされていた者達であるだけに、こちらも改めて異論などあるはずがなかった。
ルーチェは次に兵士長と副兵士長を任命した。これも族長の役目である。
こちらは四人組とは役目の意味合いが違う為によほどのことがない限り留任が常である。
その場には居ないメリドの扱いが気になるところであったが、結局そのまま兵士長を引き継いだ。変わった点としては、暫定であったアトラックの名が正式に副兵士長として告げられた事であろう。
ただしルーチェは兵士という言葉は使わなかった。告げたのは守備隊長と副隊長という名称である。

これもアアクに入り、シルフィードの住民として生きていく為にアプリリアージェと約束した呼称の変更であり、村に入る以前に既にラシフが暫定的に変更していたものを受け継いだ格好であった。

そこまではイブロドの想定下の役指名であったが、続いてルーチェが口にした言葉に愕然とした。

ルーチェは少し間を置いて列席の一同を見渡すと、新しい役の設置を宣言したのだ。

「次に、これは今までになかった役職であるが、急遽必要が生じた為、新たに設置する。暫定的にその名称を『伝統文化財管理局』とし、初代局長にラシフ・ジャミールを任命する」

これにはさすがに会場がざわめいた。もちろんイブロドは目を見開き、ラシフは下げたままにしていた頭を反射的に上げてルーチェに顔を向けた。

「ミュインモスの守り役、正式にお願いしますね、おばあさま」

ルーチェはラシフににっこり微笑みかけると、普段の優しい柔らかい声でそう言った。機先を制されたラシフは口を開けたまま、告げる言葉を失った。

「ついては只今から管理局に所属する者の名を告げる。呼ばれた者は壇上に集まれ。まずはアヤカ・ジャミール」

「はい」

呆然とするラシフとイブロドを尻目に、ルーチェは次々と管理局員となる一族の名を告げた。名を呼ばれた者達は返事をして立ち上がると、おのおの講堂の両側からゆっくりと壇上を目指した。

その様子を見ていたイブロドはある事を思い出して、アトラックに視線を送った。そこにはまたもや、まるでイブロドが自分の方を向くことを予想していたかのように笑顔でイブロドを見つめる長身のデュナンの青年がいた。

イブロドはその時初めてルーチェが遅れてきた訳を知った。

改めて会場を見渡して見ると、ざわつく「お役目」とは別に、泰然としている人間が何人もいる事に気付いた。その者達はルーチェが言い出したことを予め知っていたのだ。だから何も驚かない。

列席者が予想以上に多い事の説明もそれで付く。

つまり、ルーチェとアトラックは、短時間の間に「伝統文化財管理局」という名の組織を「でっちあげ」ると、彼らの計画に参画してくれる者達を集めて回っていたのだ。

「イブロド・ジャミール」

不意に娘が自分の名を呼んだ。

イブロドはびっくりして壇上中央にいるルーチェを見た。

「どうしました？　お返事を、お母様」

柔らかい声でそう母親に呼びかけると、ルーチェはラシフに似た優しい顔で続けた。

「お母様で一応最後です。こちらへ並んで下さいな」

「は、はい」

イブロドは慌てて返事をすると、壇上に集まった三十人程の「伝統文化財管理局」の局員達の一番後ろに並んだ。

「ラシフ局長」

ルーチェは局員が全員壇上に上がるのを見届けるとラシフの前に歩み寄った。

「この者達が、交代であなたにお仕えします」

イブロドにはルーチェの意図がもうわかっていた。だが、当のラシフは自分の孫が何をしようとしているのかを読みかねていた。

「おばあさまだけでミュインモスを維持するなど、どだい無茶です。そもそもその仕事はジャミールの仕事であり、おばあさま個人の仕事ではありません。ですから我々にも手伝わせて下さいな」

「え？」

ルーチェが新しい「役」いや組織を編成した意図を、ラシフはようやく飲み込んだ。

ミュインモスを通じてゼプスを所有する人間に強化と治癒・治療のルーンを送り込むという、妖剣ゼプスとミュインモスの「からくり」を知ったルーチェとアトラックが考え出した対処法がこれであった。

ラシフ一人では負担が大きすぎる。それは誰もがわかっていたことである。ラシフ自身も含めて。

どうやらミュインモスからゼプスに送られるのはルーナーの持つルーンの力であってルーンそのものではないようだった。何しろラシフはルーンを唱えてなどいないのだから。ただ、気力と体力が根こそぎ奪われるような感覚なのだ。ミュインモスから送られてきたエーテルを、ゼプスはその持ち主の意志に沿った力に変換するのではないか……ラシフはそう考えていた。

その考えが正しいとすれば、ラシフ一人の力ではゼプスに送れる力には限界がある。

だが……。

「しかし、これは私のわがままのようなもの。お前達に負担をかけるような事は……」

ラシフはしかし、そう言ってルーチェの提案を固辞した。

「ミュインモスと繋がるのは相当な負担になる。お前達にそれを託す訳にはいかん。お前達の力はこの村の発展にこそ使うべきであろう？」

そう言うと、ラシフは手に持ったミュインモスを握りしめた。

「恐れながらラシフさま」

ルーチェの右後方に控えていた局員が口を開いた。ルーチェに最初に名を呼ばれたアヤカという若い女ダーク・アルヴであった。ルーチェに副局長を指名された娘である。

イブロドはアヤカの事をよく知っていた。ハイレーンの若手の中では最も能力が高いと言われている人間で、ジャミールでは軽視されがちなハイレーンながら、その研究熱心さで里の引っ越し準備作業の際、エルデにつきっきりで薬の調合や治癒ルーンを学んでいた。

そのあまりの熱心さに、エルデに一目置かれていた程である。
エルデ自身がハイレーンだという事もあるのだろうが、熱心なアヤカに出来るだけ時間を割いて手ほどきをしていた光景も思い出した。
ルーチェも当然それを観察していたのだろう。イブロドとしては納得の人選であった。
「お話を伺った限り、ミュインモスの番はラシフさまだけが背負うものではないと考えます」
「しかし、私が勝手にやった事じゃ。責任は私にある」
「それは違います！」
「そうです。アヤカの言う通りです、ラシフさま」
アヤカに続き、別の局員達もラシフに声をかけた。
「ラシフ様が恩人だと思うあの方は、私にとっても恩人です」
アヤカはそこに居並ぶ局員が自分と同じ気持ちである事を確信したのだろう。声に俄然熱がこもった。
「私だけではありません。ここにいる全員、いえ、おそらくジャミール一族全てがあの方を恩人だと思っているに違い在りません」
「そうだ！」
「そうです！」
壇上の局員達が口々にアヤカの言葉に賛同した。それに呼応するように講堂にいた参列者からも声が上がった。
「アヤカの言う通りです、ラシフさま」
ぽつぽつとした声は、やがて講堂全体を包んだ。列席者にもルーチェがやろうとしていた意図がようやく理解できたのだ。
「俺も力になりますよ」
「俺だってそうです」
「私もです」
「そこにいる局員だけで足りないのであれば、いつでも声をかけてくれ」
局員がラシフの補佐をする事は、すなわちラシフの負担を抑え、

かつゼプスへ届けるルーンの力も増す。
それは一族が敬愛してやまないラシフを救う事になり、同時に自分たちを故郷へ送り返す手助けをしてくれたあの「賢者」への恩返しにもなるのである。おそらくその場にいた誰もが、出来る事なら自分も喜んでその力になりたいと願っていた。
「お前たち……」
ラシフはその声を聞くと声を詰まらせた。
「言っておきますが、これは族長命令ですよ、おばあさま」
ルーチェがいたずらっぽい声でそう言うと、ラシフは小さくすすり上げた。
「謀ったな、ルーチェ。こんな見え透いた事をする娘に育っていたとは少々遺憾ではあるがな……」
ラシフはそこまで言うと、何かを思い出したかのようにハッと顔を上げ、視線を講堂の入り口に立つルーチェの夫に向けた。
「あの男の入れ知恵か」
「人聞きが悪いですよ、おばあさま」
ルーチェはそう言うと頬を膨らませた。
「命令という言葉を使いましたが、これはもう一族の総意です。それから、あの人の事を悪し様に言うのはいくらおばあさまでも許しませんから」
ラシフは小さくため息をついた。ルーチェがアトラックに「ぞっこん」なのは周知の事実であったが、そう言う場面ですら臆面もなく口を突くのはさすがにどうかと思ったものの、もはや意見をするのもばかばかしくなったのだ。
だが、ラシフにはいかに一族の総意でも承伏できない点があった。
「皆の気持ちはわかった。しかし、ミュインモスは一人の人間、しかもそれなりの力を持つルーナーとしか契約は出来ぬ。そもそも契約を解除する方法を私は知らぬ」
だが、ラシフのその言葉をルーチェは待っていたようだった。ルーチェの合図を受けたアヤカは歩み出るとラシフの目の前で片膝を

突いた。
「どうぞ」
そして畳んだ鮮やかな黄色い布を両手でラシフに差し出した。
「これは？」
「精霊陣を施した布です」
ルーチェはそう言って手に取るようにラシフを促した。
「精霊陣じゃと？」
「ご存じの通り、我が夫アトラックは実に有能でして、これも我が夫の知識があればこそ作れた精霊陣なのですよ」
夫自慢にも程があると言ってしまうとそれまでだが、事実アトラックの持つ「一度読んだ事柄は滅多に忘れない」という能力には、誰もが舌を巻いていた。当のラシフですら「とんでもない拾いものをした」と嬉しそうにイブロドに漏らす程だったのだ。もちろん今以上に舞い上がらせる訳には行かないので、ルーチェの前では決して口にした事はない。
アトラックは自身の持つそれまでの「知識」を基盤にジャミールに古くから伝わるルーンに関する様々な記録を読み、調べていた。その中にはラシフ達が既に忘れてしまっていたルーンが数多くあり、精霊陣にまつわる記述も数多く残されていたのである。アトラックはそれを現代に蘇らせる事に成功していた。
もちろんルーナーではないアトラックには解読自体が困難な精霊陣が多かったが、それはルーナーであるルーチェの知識と能力が補う形となった。つまりルーチェとアトラックは二人揃った事でジャミールにとってはすばらしい伝道者となったのである。
「発見した精霊陣の一つに、ある程度の能力を持つルーナーを中継役として、複数のルーナーがルーンを伝送するものがありました。私なりに整え直して実験もしましたが、充分使える形になっています。その精霊陣をミュインモスの鞘に巻き付けて、それをおばあさまが抱いていれば、別のルーナーがおばあさまを通じてルーンをゼプスに流し込む事ができるに違いありません」

ルーチェの説明は明快であった。仕事の合間を見つけては、ルーチェがアトラックと一緒に様々な精霊陣の研究をしている事はイブロドも知っていた。ルーンが伝送できる精霊陣を見つけた事も聞いてはいたのだ。だが既に実用になるほど習得していた事は意外であった。

だがどちらにしろこれでラシフには断る理由がなくなってしまった。

「本当に良いのか？私のわがままなのだぞ」

「おばあさま。まだ言いますか？」

「しかし」

煮えきれない態度のラシフを見て、ルーチェはあからさまに大きなため息をついて見せた。

「やれやれ。賢者様がおっしゃっていた事がよくわかりました」

「なんだと？」

「賢者様はおばあさまの事をこうおっしゃってました。『自分は他人に喜んで何でもするくせに、他人が自分に何かしようとすると、いきなりものすごくめんどくさい女になる』　と」

「な！」

ルーチェの言葉にラシフは思わず唇を噛んだ。

「でも、そう言った時の賢者様のお顔はとても優しそうでしたよ」

「え？」

ルーチェの言葉に、ラシフは心のどこかを掴まれたような気分になった。不機嫌な顔が一瞬で崩れ、今度はそのまま子供がベソをかくような顔になった。

「あの小童め……」

「ですから、これ以上私達を困らせないで下さいな」

ルーチェはラシフの目に涙を認めると、優しくそう声をかけた。

「そうです、ラシフ様だけで賢者様を守ろうなんてズルいですよ」

アヤカが続いてそう言うと、ラシフは細い指でそっと涙をぬぐい、

捧げられた布を受けとった。
美しい黄色い布を広げると、その幅は広げた親指と小指がかろうじて隠れる程度のものだったが、長さはラシフの身長程もあり、ミュインモスの鞘を何重にも巻く事ができた。
「綺麗な布じゃな」
鞘を巻き上げたラシフはそう言うと、再び袖で涙をぬぐった。
「どうした事か、最近、涙腺が緩くなっていかん」
言い訳のようにそうつぶやくラシフを、講堂にいた面々は暖かい眼差しで見守っていた。ラシフが人前で涙を見せる事など、以前には考えられなかった事である。だがジャミールを出る際に行った儀式で大泣きして以来、ラシフはたびたび涙を見せていた。だから今ではむしろラシフを涙もろい人間だと認識する里人もふえていた。
そしてもちろん、人々はそんなラシフもラシフらしいと感じていた。

「謹んで拝命します。族長殿」
ミュインモスの鞘に巻かれた黄色い布をじっと見つめていたラシフは、もう一度涙をぬぐった。そしてくしゃくしゃになった顔を上げてそう言うと、ルーチェに深々と頭を下げた。
講堂の至る所から安堵のため息と、そして鼻をすする音が聞こえた。
そんな中、一人が拍手をした。そしてそれに呼応するように拍手の音が講堂に広がり、やがて割れんばかりの音となり、講堂と、そしてラシフの胸を震わせた。
ジャミールの里に拍手という習慣はない。それを持っているのはシルフィードの人間である。だが、これを機に、アアクの人々は拍手で何かを称えるという習慣を持つようになった。
鳴り止まぬ拍手の中で、イブロドは確信していた。
会場の後方で最初に拍手をしたのは、アトラックに違いないと。

# 第六十七話　エルネスティーネの覚醒

アキラ・アモウル・エウテルペは我が目を疑っていた。

目の前にいる緑色の瞳をした少女……アルヴ族にしては短い金髪を揺らしながら、その少女は整った顔で広間にいた全ての人間を見渡すように、小柄ながら精一杯背筋を伸ばして立っていた。

その姿を見たアキラは「堂々とした」などという簡単な形容しか思いつかない自分を恥じていた。エルネスティーネはアキラの目を細めさせる程のまぶしさをいつの間にか身にまとっていたのである。

アキラは再度、目の前のエルネスティーネの姿を表現するのにふさわしい言葉がないかと頭の中を家捜しした。

だがそれはアキラにとっては都合のいい逃げ道を探しているだけの行為なのかもしれない。アキラはすでにその語彙の中にある言葉を見つけていたのだ。いや、感じていたのかもしれない。それはある感情を表す言葉で、そしてアキラはあまりに俗っぽいその名称を自分の感情を表す名詞だとは認めたくなかったのである。

自分よりも十歳近くも年下で、しかも世間知らずのかごの鳥だと思い込んでいた少女に、瞬間的に心を完全に奪われてしまったことを。

だからその感情にふさわしいもっと別の言葉を模索していたと言った方がいいのかもしれなかった。

澄んだ翡翠を陽に透かしたらああなるのだろうかと、エルネスティーネの目を見てアキラはいつも思っていた。

その美しさを認めることについてはアキラもやぶさかではない。だが、アルヴィンの少女は、デュナンから見ればその小柄さ故に、まるで子供のように見える。

そんな少女に己が見惚れてしまった事を素直に認めるには、アキラの心はいささか世間の澱が溜まりすぎていた。

つまりその時のエルネスティーネは、アキラにそんな少年めいた悩みを抱かせる程の強いエーテルに包まれて、いや、自ら纏っていた。

緑色の目で、

ぐいっと引いたあごで、

そして凛とした立ち姿で、その場にいた多くのアルヴ族に対峙していたのだ。

「だったらお前は、俺達アルヴはただおとなしくデュナンにやられればいいって言うのか？」

エルネスティーネに正対する形で寄り合っている集団は、もちろんエルネスティーネに対して友好的な態度をとっているわけではなかった。

彼らは二十人ほどだろうか。

皆一様にその手に槍や剣、中にはツルハシやスコップ、ただの木の棒といった何らかの武器もしくは武器に準じた得物を手に持ち、中にはそれを誇示するかのように振り上げてエルネスティーネを威嚇していた。

房にいた人々は、この騒ぎでほとんどがその大広間に集まっていた。

彼らは中央に立っているエルネスティーネと武装したその二十数名の集団を取り囲むような形で立っていた。もちろん全員がいったいどうなるのかといった不安そうな面持ちで、口をつぐんだまま両者のやりとりを聞いていた。

エルネスティーネは本当に一人だった。

いつもすぐ後ろに控えているはずのティアナは、アプリリアージェの厳命で近づく事を許されなかったのだ。

ティアナはアキラのすぐ近くにいた。白髪のアルヴは珍しいから

すぐにわかる。おそらくエルネスティーネにもティアナの場所はすでに特定できているはずである。ティアナのその横にはファルケンハインが立っていた。彼は不安を隠さない、いや隠せないティアナを守るかのように肩にそっと手を置いていた。

アキラ達は皆、エルネスティーネの正面、ただし遠巻きする人々全体を見渡せる広間の壁近くに位置していた。

房内には背が高いアルヴが多い。いきおい小柄なダーク・アルヴのアプリリアージェやメリド、それにアルヴィンのテンリーゼンは椅子の上に立ってそのやりとりを見守っていた。

そのテンリーゼンの足下を見たアキラは、緊迫した場の雰囲気にもかかわらず、思わず笑みを浮かべ、その後すぐにバツが悪そうに視線を逸らせた。

テーブルの上にいるテンリーゼンがきちんと靴を脱いで、テーブルに上がっていたからである。アキラはそんなテンリーゼンの育ちの良さを時々発見しては妙な気分になるのだ。

何も知らなければ、そしてテンリーゼンの異様な顔の入れ墨を見なければ、その振る舞いは良家の子息風にしか見えない。

だが、ジャミールで一度見たテンリーゼンの戦闘力は本物である。そこに両家の子息といった一種間延びしたかのような隙は存在していなかった。

アキラにしてみればアプリリアージェ程度の動きまでは、なんとか受け入れる事ができると考えていた。だがあの試合で目にしたテンリーゼンの移動速度は、もはや人間業とは思えなかったのだ。

あの後、アキラは何度も何度も頭の中でありとあらゆる場面を想定したテンリーゼンとの模擬戦闘を行っていた。もちろん戦うとなった場合に勝利をもぎ取る為である。

だが、ジャミールの里で直感した結論は全く覆らなかった。

一対一では勝てる気がしないのだ。それは誇り高きレナンスを名乗るアキラには認められない事であった。

だからいまだに思い出した様に模擬戦闘を続けては、唇を噛んで

いたのである。
頭の中ではあるが、何度も何度も命のやりとりをしているそんなテンリーゼンの微笑ましい姿を見ると、「この子とは戦いたくない」と思うのだ。しかし同時に、一度は剣を交えたいとレナンスの血が騒ぐ。
アキラはテンリーゼンに対しての、そんな矛盾だらけの感情をもてあましていたのである。

「そんな事は言っていません！」
芯が鋭いながらも、耳に涼しい声が大広間に響き渡った。
それは対峙する武装部隊の怒鳴り声よりも、房の隅々までよく届いた。
アキラは一瞬現状から逃避していた事に気付いて、慌てて視線をエルネスティーネに戻した。
アキラはエルネスティーネの声が好きだった。そしてその時初めて、その理由がわかった気がした。エルネスティーネの声は耳障りがひどくいいのだ。
頭の中にスッと入り、心地良く染みこんで消えていく。それは緊迫したこの場でも同じだった。
そしておそらく、この場にいる人間の多くはアキラと同じくエルネスティーネの声を好ましく感じているに違いなかった。
この声の持ち主の言うことなら、聞いてみよう……そんな声なのだ。

強い調子でエルネスティーネは語っていた。
だが決して怒鳴らない。そして悲鳴にならない。緊張しているには違いないが、上ずったりかすれたりしない。その声はつややかに朗々と響いていた。
「冷静になって下さいと言っているんです。やられたらやり返す、それが今までどれだけ多くの悲劇を生んできたのかをもう一度考え

て下さい。私はそう言っているのです」
「おとなしくしていろって言うんなら、そう言う事だろう」
一人がすかさず反論する。それに対してそうだそうだ、と賛同する声が多く、武装部隊は一歩も引かない。
「何人も死んでるんだぞ？」
別の一人が怒鳴る。同じくそうだそうだと同調する声が続いた。
「何人亡くなったのですか？」
エルネスティーネは少し穏やかな調子に変えると、言葉を投げたアルヴに対してそう問いかけた。
「五人ですか？　十人ですか？　それとも百人？　千人？」
「そ、そりゃあ……」
もちろん混乱の中、命からがら逃げ延びた人々ばかりである。誰も正確な数など把握しているはずがない。
エルネスティーネは言葉が返る前に畳みかけた。
「五十人殺されたら、私たちアルヴ族はデュナンを五十人殺すべきなのですか？百人殺されたら仕返しに百人殺せば、残された私たちは気が晴れるのでしょうか？　そしてそんな私たちアルヴ族がした事を、デュナンの人々は『仕方のない事』だと思ってくれるでしょうか？」
「詭弁だ！」
一人のアルヴが、剣を掲げて一歩前に出た。それを見た人垣から複数の悲鳴が上がった。
見かねたアキラが思わずその男を止める為に駆け寄ろうとしたが、行動を予測していたアプリリアージェに止められた。アプリリアージェがアキラの肩をつかんだのは、足を動かそうと筋肉に力を入れた瞬間であった。すなわちアキラは一歩も動けなかったのだ。
全く同じ反応をしたティアナは、同様にファルケンハインに止められていた。
「大丈夫です」
いつもの優しげな声で、アプリリアージェはアキラにささやいた。

「本当にいざとなったら私が動きます」
それはいざとなってもお前は動くな、と言っているようなものであった。
「あなたは本当に動くのか？」
アキラは口から出かかったその言葉を、寸前で飲み込んだ。
アプリリアージェの顔を見たからである。
その褐色の顔から、いつもの微笑みが消えていたのだ。
笑みが消えたアプリリアージェの表情はまるで作り物のようで、アキラではなくただまっすぐにエルネスティーネを見つめていた。そこからは何の感情も読み取れなかったが、アキラはそのまま視線を落とし、思わずつばを飲み込んだ。
落とした視線の先にアプリリアージェの左手があった。そこにはいつの間にか折りたたみ式の小型の弓が握られており、その小指には細く短い、特殊な弓が二本握られていた。アキラはそれを見てある事に気付くと、斜め後方にいるテンリーゼンを振り返った。入れ墨が顔を覆い、いつもの通り表情からは何もわからない。だがその右手は懐に入れられたままの状態であった。

緊張感に支配されているアプリリアージェ達を尻目に、当のエルネスティーネはしかし、アルヴ達の威嚇にも微動だにしなかった。
いや、それどころか、剣を掲げたその男に向かって一歩近づいたのだ。
「その剣で私を刺せば、あなたの憎しみが少しでも癒えるのであれば、そうすればいいでしょう。でもそうすると、きっとあなたにはさらに深い悲しみが訪れます。それを癒す為にあなたはさらに誰かを傷つけるつもりなのですか？」
そう言ってエルネスティーネはさらに一歩近づいた。両腕はいつの間にか大きく広げられていた。
「ち、近づくな」
男が怒鳴った。

だがエルネスティーネがさらに一歩踏み出すと、今度はたまらず後ずさりをして、剣を下ろした。

「これは、デュナンの総意ではありません」

男が剣を下ろすの見届けると、エルネスティーネは前進をやめた。

「同様にあなたたちの憎しみも、アルヴ族の総意であってはならないのです」

エルネスティーネはそう言うと対峙した部隊から視線を外し、遠巻きにしている全員をゆっくりと見回した。

「ここにいるのは、アルヴとアルヴィン、ダーク・アルヴ。そしてデュアル……」

そこで言葉を切ると、エルネスティーネは再び戦闘部隊に対峙した。

「あなたたちがデュナンに対して同胞の敵を討ちたいと言うのならば、ここにいるデュアルも、半分だけ殺めるのですか？」

「そ、そんな事は言ってない」

「同じ事です！」

ピシャリと言い放つエルネスティーネに、男は怯んだ。声にではない。おそらくはその眼差しに射貫かれたせいであろう。エルネスティーネの声はきつい一言でさえ、人を刺すような要素がないのだ。

冷静に考えるまでもなく、エルネスティーネの言う事は戦闘部隊の一人が指摘したように、詭弁と言われても仕方の無いものであったろう。

だがその場の誰一人として、もうエルネスティーネに対してその点を指摘する人間はいなかった。

エルネスティーネの話はますます熱を帯びていった。両手を広げ、短いながらも昼星の光を凝縮したかのような軽めの金髪をなびかせ、緑の瞳で広間全体を見渡しながら、その小さな体をいっぱいに使って訴えた。

種族同士が憎み合い、争い会う事の悲劇を。

そして後に残るものが味わうであろう長い長い痛みを。
「皆さんは考えたことがありますか？　ファランドールには、いったいなぜこんなにも多くの種族がいるのかを。私はそれをずっと考えていました。いえ、今も考えています」
広間には一種独特な静寂が広がりつつあった。武装した二十名ほどのアルヴ達はもう何も言わず、そこにあるのはエルネスティーネの心地良い声だけとなっていった。

エルネスティーネはピクシィについての話題に触れた。
皆が一様に胸に抱いていたアルヴ族の多くの人間が知っている黒い歴史。それはアルヴ族の国シルフィード王国が犯した消える事のない罪である。
エルネスティーネは敢えてその事実を取り上げたのである。
「その黒い歴史をぬぐい去る方法は大きく分けて二つあると私は考えます」
一つ目は戦いだとエルネスティーネは言った。
「このファランドールをアルヴ族だけの国にすればいいのです」
その言葉の持つ意味に、静まりかえっていた広場が再びざわめき始めた。だがエルネスティーネはそのざわめきが声に変わる前に、話を継いだ。
「デュナンを皆殺しにしてしまえば……ファランドールを私達アルヴ族だけにしてしまえば、我らはもう二度と後ろめたい思いをする事はないでしょう。なぜならアルヴ族は憎むべき相手を滅ぼしただけなのですから」
それだけ言うとエルネスティーネは再び両手を広げ、その場でゆっくりと一回りして広間にいる全員を改めて見渡した。
「一つ目の選択肢は実に単純で簡単です。子供でも思いつく事でしょう。ただ戦えばいい。そして全員を殺せばいいのですから。でも二番目の選択肢はとても困難です」
二番目の選択肢。

エルネスティーネが考えたというアルヴ族の胸に澱のようにこびりつき、そして受け継がれていく後ろめたさ。デュナンがアルヴを罵る時に最後に引き合いに出す傷。

それを洗い流せるものがあるなどとは誰も信じてはいなかった。

だが、当然ながら第一の選択肢が誰も正しいとは思ってはない。戦闘部隊の二十数名も自分たちに正当性はあると考えてはいても、それが人として正しい行いだとは思ってはないはずである。

だからエルネスティーネの『二番目の選択肢』を、その場の人々は耳を凝らして待った。もちろん視線は広間の中央に立つ小柄なアルヴィンの少女に釘付けだった。

「二番目の選択肢。それはこのファランドールに生きとし生ける者全てが、解け合い、混ざり合い、繋がり会う事です」

エルネスティーネの言葉は、ある種の力をもって房の広間を支配した。

アキラはふと、すぐ側にいるアプリリアージェの様子を横目で見た。弓と矢をそれぞれの手に持っていたアプリリアージェは、両手をだらりと下げ、そして目を閉じていた。その表情にはいつもの微笑が浮かんでいる。

アプリリアージェにはエルネスティーネの言葉がどういった形で届いているのか、アキラはそれを知るよしもない。だが目を閉じてほほえむ褐色の肌の美しいダーク・アルヴの表情には、見るもの全てを安らかな気分にさせる、そんな穏やかな気持ちしか感じ取れなかった。

翻ってその広間にいたアルヴ族達はどうか？

アキラが見渡したところでは、多くは戸惑った表情を隠しきれずにいた。それはアキラとて同じである。エルネスティーネが言っている事は荒唐無稽なのだ。「困難」どころではなく、まさに絵に描いた理想なのである。

だが、エルネスティーネとてそう思われる事は百も承知であった

ろう。
　少し間を置くと、話を続けた。
「先ほども私はこう言いました。なぜ、ファランドールにはこんなに多くの種族がいるのだろう、と」
　再び語り出したエルネスティーネに、もう対峙する者はいなかった。
　戦闘部隊の二十数名も、手に持った獲物を皆だらりと下げている。その視線はエルネスティーネに注がれているが、そこに敵意は見られない。ただ目の前の少女の話を聞こうと耳を澄ましているだけであった。
「木や花や大地。星や海や鳥。それに空、雨、風。そして私たち人間。なぜファランドールにはこんなにも多くのものが溢れているのでしょう。もちろん私はそれら全てが一つに解け合えるとは思ってはいません。でも、人間だけならそれが可能だとは思いませんか？」
　エルネスティーネは言う。
「ここにいる方々はいろいろな国から集まっていらっしゃるようですね。私はシルフィード王国の人間です。誤解があるようですから説明させていただくと、シルフィードは確かに宗教を排除する国ですが、一人一人の信仰まで否定していません。宗教そのものを弾圧しているわけではないのです。私自身はマーリンを信じていますし、尊敬しています。先王アプサラス三世陛下、その周りの要人の方々も同様だと聞き及んでいます」
　そこで言葉を切ると、広間には少しだけざわめきが広がった。シルフィード王国は全ての宗教活動を禁止しているが、信仰を禁止してはいない。それは真実であったが、他国には当然ながら宗教を禁じている国、という単純な認識を持っている人間の方が多い。
　だから国王がマーリンを信じ、敬っているという話は初耳も初耳。むしろ寝耳に水のような情報だった。
「マーリンを信じています。ですが、教会に属しているというわけ

ではありません。正教会の人も新教会の人も、ここには大勢いらっしゃるのでしょうね。ですが、皆同じマーリンの子供という点では同じはずです。ならば、私は皆さんに問います。マーリンが創りたもうたこの世界を疑問に思った事はありませんか？」

なぜマーリンは複数の人類を作ったのか？

なぜマーリンは属性ごとのエレメンタルを作ったのか？

そしてなぜマーリンは男と女を作ったのか？

「異質なもの、全く違う存在における最小単位が男と女。そこにこそ大神マーリンの問いかけがあると考えるのは間違いでしょうか？」

エルネスティーネの話は続いた。

それは人間を男と女に分けた事と、複数存在する人類との似て非なる「違う存在」をエルネスティーネなりに解釈し、その上でファランドールの未来を示す意見、いや夢でもあった。

アキラはエルネスティーネの話を聞く内に、自分の体が熱くなってきている事に気付いた。だがそれはエルネスティーネの話に感動したという単純な理由からではなかった。

同じ話を彼は既に知っていたからである。

もちろん、全く同じ話ではない。エルネスティーネの話はかなり大ざっぱで、夢の占める部分が大きい。そして決定的な違いはそこに政治と経済という概念が入っていない事であった。

だが、思い描くファランドールの姿として、その話はアキラの知る話と酷似していたのだ。

そう、その話は彼がアカデミーと呼ばれるドライアドの貴族学校で出会った一人の風変わりな少年から聞いた話と同じだったのだ。

アカデミー始まって以来の劣等生。好きな絵を描くだけで勉強・軍事教練・剣技などには全く興味を示さなかった公爵家の長子。

もちろん、ミリア・ペトルウシュカの事である。

「最小単位はすなわち、最大の問題に対する鍵なのです」

エルネスティーネは語る。

最大の問題とは多くの人類が同じ世界に同居している事。すなわちアルヴ、アルヴィン、ダーク・アルヴ、デュナン、ピクシィ。

エルネスティーネはそれらをマーリンがヒトに与えた試練ではないかと言うのだ。

マーリンが、自分の作り上げたファランドールという世界を本当に人間に任せていいものかどうかを考えた末、ヒトに託した最大の試験なのだと。

「試験を、私たちはいつの間にか試練にしてしまいました。それはとても単純な答えだったはずなのに、私たちの意識は外へは向かわず、内へ内へと向かい続けたのです」

マーリンはそれぞれの人種に、特徴を持たせた。

アルヴには強靱な肉体と長寿を。

アルヴィンとダーク・アルヴには、老いる事のない外見と、素早い身のこなしを。

アルヴィンは寒さに強く、ダーク・アルヴは暑さに耐える力がある。

デュナンはバランスに優れた体格に併せ暑さにも寒さにも強い。さらに繁殖力も一番である。

そしてピクシィには全人種で一番強い生への欲望と他の追随を許さぬ手先の器用さを与えたのだ。

「それはなぜでしょう?」

エルネスティーネは再び周りを見渡し、その場の人間に問いかける。

アキラは答えをもっていた。ミリアからの借り物ではある。しかし、共鳴したからにはそれはもうアキラの答えでもあった。

「マーリンは全ての人類で争い合い、生き残った一つの人種にファランドールにすむ権利を与えようと考えたのでしょうか?」

違う、とアキラは心の中で首を振った。

「そう言う考えを持つ人もいるでしょう。私も、あなた方も、そし

てこの町にいるデュナンの方々も、さらにこの街の外にいるファランドールの全ての人々も、きっと正解には辿り着かないでしょう。それは大神マーリンのみが知る事。ならば……」

エルネスティーネが辿り着いた一つの答えはミリアがアキラの前で披露した一つの夢と同一であった。

最初にエルネスティーネが呼びかけた言葉。それこそが答えなのだ。

「全ての個性を混ぜ合わせ、一つの人類になりましょう」

エルネスティーネの言葉はこうだ。

だがミリアはエルネスティーネとは違う言葉を使って、おそらくは同じ到達点をアキラに伝えた。

『人類は外に向かうべきか、内に向かうべきか？　それを考えるべきだとは思わないかい？　だって種族という単位は顕在する一つの実例に過ぎないんだよ？　その下に国という単位があり、その下には街という単位がある。一族という単位もそうだし、家族だってそれぞれが異質の単位だ。この世に自分と、自分達とは異質な者が存在する限り、結局心理的な壁による争いはなくならないだろう。ややこしいことにそれに加えて人間には欲望というやっかいな業がある。人は自らの欲を満たす為に異質なものを争いの道具に仕立て上げるだろうさ。だったらまず、異質なものを減らそうじゃないか。婚儀は二つの家族を繋げ、溶け合わせる可能性を秘めた最小の欠片だ。そして最小の鍵は目的に向かって伸びる真っ直ぐな道へ繋がる最短扉を開ける事ができる。その鍵こそが種族という大元の壁に開いた鍵穴にはまる唯一のものだとは思わないか？』

ミリア・ペトルウシュカという存在を知らないエルネスティーネは続ける。ミリアとは違う言葉を使って。

「私は混ざり合いたい。溶け合いたい。デュナンだアルヴィンだとお互いをまず種族で振り分けてしまう私自身の価値観を変えてしま

いたい。私もそれは難しい事に違いないと思っていました。閉ざされた家の中だけで、頭だけで考えていたからでしょう。けれども、それは本当に簡単な事だという事がわかりました。そしてとても簡単なだけに、難しいのだということも痛い程わかっています」

エルネスティーネの言葉はアルヴやデュナンという種族を完全に否定しているわけではない。アキラにはわかる。だが完全に否定しているミリアの理想の方がより強いとも思うのだ。

「理想論だろう？」

静かな声が広間に響いた。

エルネスティーネは言葉と言葉の間に少し間を置き全体を見回す。それはおそらくそういう意見を受け入れようとして敢えて作った「間」なのであろう。そこに声が答えたのだ。

「お嬢さん、あなたは肉親や親友を殺された私達の憎しみが本当にわかってるのか？」

その声は戦闘部隊ではない、遠巻きの人々の中から発せられたものだった。

「そうだ。俺は昨日まで一緒にいた同室の友人を失った」

これはまた違う声だ。同じく遠巻きの人々の中からの声である。

「わ、私は兄を殺されました」

女性の声だった。

エルネスティーネはそれらの声に小さく頷いていたが、顔を上げると少し大きな声でこう言った。

「私は父を、デュナンに殺されました」

それはとても強い声で、アキラは一瞬ではあるが耳を射られたような気分になった。エルネスティーネが初めて見せる、怒気、あるいは嫌気が混じった声であった。

「父だけではありません。私の事を思って下さる大切な人々が大勢デュナンの手によって命を落としました」

継いだその言葉には、もう怒気はなかった。ただ、悲しみと寂し

さに満ちた沈んだその声は、耳に長く残った。

アキラはエルネスティーネのその言葉を聞いてハッとした。

広間に居る人間は中央で語り続ける少女の正体を知らない。だがアキラはそれが一国の王女、いや今は女王である事を知っていた。つまり娘であるエルネスティーネは父王であるアプサラス三世の死因がデュナンによる暗殺だと公衆の面前で暴露したのだ。

いや、それよりその言葉が本当なのかどうかがわからない。

アキラは思わずアプリリアージェを見た。

「あの子が自分で辿り着いた結論でしょうね。私は何も言っていません」

アプリリアージェは視線をエルネスティーネから動かさずに、小声でアキラにそう告げた。

それはつまり、エルネスティーネの言っている事が正しい……少なくともアプリリアージェはエルネスティーネと同じ意見だと言っているに等しい言葉であった。

「何だって？」

思わずそう口をついた。続いていったいシルフィードの内部はどうなっているんだ？と言おうとしてアキラは慌てて口を閉ざした。

シルフィード王国内部に現体制を転覆しようとしている勢力があるとするならば、首都エッダはかなり不安定な状況にあると言えるだろう。

先王アプサラス三世の大葬はその中で行われるのだ。アキラが急ぎ合流すべき相手であるエスカ・ペトルウシュカはそれとは知らずに動乱の渦中に足を踏み入れる事になるやも知れぬ。

アキラの鼓動は一気に跳ね上がった。焦りと不安が血流を氾濫させる。何よりアキラが落ち着かないのは、ミリアから聞かされたエスカの「副官」に収まったという正教会の賢者の存在だった。エスカの最も側にいて、手を伸ばせば常にその首筋に届く立場の人間が、あろうことか正教会の中枢にある人物。その人物が凡庸な人間でな

いことは、ミヤルデ・ブライトリングの情報からも明らかである。なにしろ五大老を凋落した上で堂々とエスカの首の鈴という立場を得たのだから。

そこまで考えて、アキラはもう一人の側近の事を思い出した。セージ・リョウガ・エリギュラスである。彼はアルヴィンだ。ハイデルーヴェンに入っていたとして、この混乱である。まさかとは思うものの、生まれた不安の種火を完全に消す事はできなかった。

「私はウンディーネで生まれ育ったアルヴですが、一度シルフィード王国の首都であるエッダに訪れた事があります」

いつの間にかアキラの横にたっていたロマン・トーンの声であった。

「エッダに滞在中、王室のある式典が行われたのです」

ロマンは小声でそうしゃべりながら、ずれかけていたアキラのフードを直した。うかつな事にアキラは自分が今、アルヴ族の中に只一人いるデュナンであることを忘れていた。だが、それ以上にロマンが言おうとしている事に興味を抱いた。

ロマンはアキラが目で会釈をするのを見ると小さくうなずいた。話を続けていいという合図ととったのだ。

「私は野次馬としてその式典を見ておりました。その式典というのはシルフィード王国の宝石と呼ばれる王女様の生誕記念式典でした。王宮前広場は人で溢れていて、外国人の私などはお近くには寄れず遠巻きにただ見とれていただけでした」

アキラはロマンの言葉を聞きながらアプリリアージェの様子をうかがった。もちろんエルネスティーネの正体に辿り着いてしまったこのアルヴにいったいどう対応するつもりなのか、興味があったからだ。

いや。アキラが知るル＝キリアの司令官であれば、秘密を知る人間は容赦しないはずである。つまり不安の目でアプリリアージェを見たのだ。冷静に考えればアキラにはロマンを守る義理はない。だ

がデュナンであるアキラを最初から色眼鏡で見ることなく接してくれた器量を持つ人物である。この房にいるアルヴ族達にも知名度が高く人望があついという。アプリリアージェがそんな人物を簡単に抹消しようするのを、黙って捨て置けるアキラではなかったのだ。

だが、アキラのそんな不安は杞憂に終わった。

アプリリアージェは微笑を浮かべたまま、その視線はエルネスティーネに固定されていた。

もちろんロマンの声はぎりぎりであろうが、聞こえているはずである。アキラの視線も当然ながら感じているだろう。その上で微動だにしないのだ。

（許容しているのか？）

それだけではアプリリアージェの心情を把握する事はできなかったが、それでもすぐにどうこうするようすは感じられなかった。

「長い金髪をした王女様は、それはそれは愛らしい笑顔で祝福のために集まった大勢の人々に澄んだ声でお礼の挨拶をされていました」

アキラはそれでもロマンの話が核心に近づくにつれ、緊張が増してきた。

ロマンは柔らかいため息を一つつくと続けた。

「髪型こそ違いますが、あのお嬢さんのお顔は、王女様にそっくりですな。でも……」

「でも？」

思わずアキラは聞き返した。

ロマンが小さく首を横に振ったからだ。

「人違いでした」

「……」

「エルネスティーネさまは笑顔が素敵な、ただただかわいらしいだけのお姫様でした。ですが、あそこにいるお嬢様は厳しくて悲しくて、そして何より強く気高い。他人のそら似でございました」

ロマンの言う事はアキラにはよくわかった。初めて出会った時の印象と、まさに今そこでロマンが形容した通りの存在感を持ってい

る短い髪の少女に対する感情は全く違うものになっていた。
「ただ守られる立場の人間と、普通の人間は考えもしないような大きなものを本気で守ろうとする人間とは、纏っているものが根本的に違うでしょうね」
アキラはそう言って相づちを打った。そのままもう一度アプリリアージェの表情を伺うと、そこには目を閉じて静かに笑っているダーク・アルヴの少女がいた。

「私たちの世代から憎しみや嫌悪、固定されてしまった誤解などを消し去る事はできないかもしれません」
エルネスティーネは続けてた。
「けれど、消せないからと言ってそのままでいいのですか？ご存じの通り私の、いえ私たちの祖先はかつて一つの種族をこの世から消し去ってしまいました。私たちアルヴ族はその事実を深い心の傷としてずっと引きずっています。でも、ピクシィを滅亡させたのは私ですか？あなたですか？あなたの両親ですか？」
三千年前の話である。だが、ほとんど全てのアルヴ族は、その事を一生負い目として背負っている。デュナンがアルヴを徹底的に罵倒する時、必ず引き合いに出すのもその「傷」であった。これを引き合いに出されたアルヴは、少なくとも暴力に訴える事はできなくなる。それほどの力を持つ「戒め」なのだ。
「あなた方がここを出て、報復と称して何人かのデュナンの命を奪ったなら、それは本人の傷になる事はもちろん、次の世代にも傷として残っていくのですよ。すでにハイデルーヴェンでアルヴ族が襲われ、多くの人が傷つき命を落としたという事実は作られてしまいました。それは貴方たちの傷となり、その事実は同時にデュナンの傷にもなります。アルヴとデュナンがケンカをして『ピクシィ殺し』と罵られた際、同様に『アルヴ殺しのくせに』と言い返す理由ができてしまったのです。でも、それを貴方たちは子供に、孫に引き継がせるつもりですか？本人にそのつもりはなくても、傷は人間の心

から心に伝わってしまうものです。そしてその傷が悲鳴を上げたときに、また新たな傷を生んでしまうのです。そうやって私たちは生きてきました。私たちはそんな争いを続けるために生きているのですか？お互い争い合い、一つの人類だけが生き残れば、全ての傷が解放されるのですか？」

房の人々はエルネスティーネの呼びかけにただ、集中していた。確かにエルネスティーネがかざす将来の世界は理想的かも知れなかった。だが、その理想で今の憎しみが消されるものではないのも事実である。

しかし、エルネスティーネが小さな体を一杯に使って……両手を、眼差しを、時に大きく、そして時にささやくような声を使って呼びかけ続けるうちに、人々は自ら飲み込み、そして心の内に深く食い込んだ暗いくさびがもたらす痛み……その痛みが、徐々にではあるが和らいでいるのを感じていた。

そこへ、ある人物が声をかけた。

「なるほど、私たちは今、目の前の敵を討つより、そのすばらしい将来に命をかける方がいいのかもしれませんな」

それは、アキラのすぐ隣にいるロマン・トーンその人であった。

房の人々は一斉に声のする方へ顔を向けた。それがロマンの発言であるとわかったからだ。

この騒ぎに際しても沈黙を続けていた房の実質的なとりまとめ役であるロマンが初めて声を出したのだ。注目は当然であった。

房内は静まりかえったまま、まるで一つの意思であるかのように全員がロマンの言葉を待った。

それはエルネスティーネも同様であった。

「しかしながら、お嬢さん。私はあなたに一つ問いたい」

「何なりと」

エルネスティーネは背筋を美しく伸ばしたまま、柔らかな表情で応えた。

「我々が今ここであなたの描くその将来に賛同したとして、それが

無駄にならないと言い切れますかな？」

ロマンの言葉に、アキラは唇を噛んだ。

まっとうな反応であった。大人の反応だと言い換えてもいいだろう。エルネスティーネの話には当然ながら何の保証もないのだ。

世の中の情勢を知るものであれば誰でも、この先二つの大国の間で勃発する戦争によってファランドール全体が混乱の時代に入る事は予想している。ハイデルーヴェンのような国際的な街の人間ならばそう考えないものは居ないはずであろう。

そんな混沌を目の前にして、一人の少女が語るただの理想、ただの夢に本気でつきあおうとする方がばかげている。

とは言え、エルネスティーネとてそれは百も承知であろう。ただし、憎しみと怒りが生んだ衝動的な暴動を収める事には成功したと言える。少なくとも多少なりとも冷静な話し合いが出来る空気を作ったのだ。ここでロマンが出て場を収めればそれでいい。つまりエルネスティーネの当初の目論見は成功したと言えるだろう。

だが、そうであればロマンの問いかけはいささか対決姿勢が強いようにアキラには思えた。

話を引き継ぐような形で場を譲り受ける方がいいのではないだろうか？

あるいはエルネスティーネの前に出て彼女の持論をたたえた後、実質的な指示なり願いなりを伝えた上で収束を謀る方がよかったのではないのか？

アキラであればそうしたであろうし、アキラがロマンの参謀であれば、そのように提言したに違いない。

しかし、ロマンは房の責任者という立場でなく、一人の大人のアルヴとして、直接的な思いをそのまま少女にぶつける事を選んだのだ。

それはアキラがデュナンであり、ロマンがアルヴであったからだろう。

その事をアキラが理解するのは少し先の話になるのだが、どちら

にしろその場の主役は二人ともアルヴ族であった。命よりも自らの誇りを上位に置くその気質が、ロマンをしてそうさせたのである。

そしてまたエルネスティーネも紛う方無きアルヴ族であった。

ロマンの言葉を正面で受け止め、自らの矜持で返したのだ。

「ならばお尋ねします。あなたは保証がない事柄に関しては一切行動を起こさないのですか？」

尋ねる、と言いながら、エルネスティーネはしかし、ロマンに回答を求めているのではなかった。間を置かず、言葉を継いだのだ。

「それこそ我々アルヴ族が嫌う、矜持を持たず損得という価値観で物事を判断するデュナンの論法なのではありませんか？」

その言葉はその日で一番強く、人々の耳に届いた。

まるでエルネスティーネの裸の意志が、そのまま胸にささるような、一番大きな声でもあった。

「デュナンができないのなら、アルヴがやるべきです。アルヴが出来ない国作りはデュナンがやればいい。我々は共存できるのです。そして今ある隔たりは溶け合ううちに互いに理解し合えるのです。人類が文字通り種族の壁を越え混ざり合い、ファランドールが一つの人類おそらくは『デュアル』と呼ばれる単一種に辿り着くのには、気の遠くなる程の時間がかかるでしょう。もちろんそこには保証などありません。少なくとも私たちが生きている間には実現しない考えです。でもその世界に踏み出せるのは、今この時代に生きている私たちだけなのです。いえ、私たちが最後の可能性にちがいありません」

エルネスティーネはそこで少し間を開けたが、ロマンは、何も応えなかった。

「アルヴの血が流れている人間であれば、心のどこかに過去の痛みを持っている事でしょう。そして同時に二度と同じ事を繰り返してはならないという誓い、さらに将来を担う新しい世代には、痛みではなく希望を抱いてほしいという願いがきっとそこにある。そう私は信じています」

声の調子は落ちた。だが、込められた意思はますます強くなっているようにアキラには思えた。

「それでもまだ昔の痛みに怯えると言うのならば……拠り所が欲しいというのならば、私がそれになりましょう」

一転、強い調子に変わる。

その生まれと育ちから考えても、エルネスティーネが多くの人々を前にした際の語り方について優秀な教授陣から教育を施されているのは間違いないところであった。だが、それは予め準備されたものに対してである。アキラ自身もその教育についてはドライアドの例ではあるが、内容は知っていた。しかしエルネスティーネは用意された、あるいは用意してきた文面に計算された表現を上乗せしているわけではない。突発的に生じた群衆心理を収める為にいわば即興で行っている事である。しかももはや一部の好戦的な群衆の興奮を収めるという当初の目的を通り過ぎ、ある意味でこの世界のあるべき未来を説きはじめているのだ。即興という表現を使ったものの、それはもちろんエルネスティーネがずっと考えて来た事なのだろう。だからこそ、その思いは本物だ。その本物の思いを、自らが実現できると信じながら語りかける声に、教育によって培われた発声方法は確かに役に立つに違いない。だがそれよりも何よりもエルネスティーネが訴える言葉と声は、天性のものだと考えた方がアキラには理解しやすかった。

アキラですらそう感じるのである。その場にいた多くのアルヴィン達に、エルネスティーネの持つ言葉と声の力が作用しないはずはなかった。

「私は約束しましょう。見ての通り、私はちっぽけなアルヴィンですが、それでも私には普通の人が持ち得ない、強い力を持っています。私なら、その未来を少しだけこじ開けて皆さんにお見せする事ができるでしょう。その隙間からは、きっと誰にでも今話した未来の世界が見えるはずです」

人々はすでにロマンの存在を忘れ、その意識は再びエルネスティ

ーネだけに注がれていた。
その場の中心に立つ、少し顔を上気させた可憐なアルヴィンの少女に。
「見えないかもしれないと思うのなら、耳を澄まして下さい」
「聞こえないかもしれないとおそれるのなら、そこにきっとあるのだと感じて下さい」
「感じられないのなら、今ここで手を伸ばして、この私に触れて下さい」
「触れてもなお駄目なのなら、ただ信じて下さい」
区切り区切り、短い言葉を続けながら、いつしかエルネスティーネは目を閉じていた。
「私の事が信じられないのならば、自分自身が描く理想の世界を願うだけでもかまいません」
「恐怖や恐れは人が自ら生み出す病。私はそれを治す薬になりたいのです」
「私は今までも、そしてこれからもアルヴ族だけではなく、デュナンも含めた我ら人間全体の未来を祝福する鐘を鳴らし続けたいのです」
エルネスティーネはそう言うと、その場で短い金髪を揺らして深々と頭を下げた。

「俺は」
ティアナの横に寄り添うように立っていたファルケンハインが、小さくつぶやいた。
「勘違いをしていたようだ」
頭を下げたままのエルネスティーネを見守る群衆は沈黙を守ったままだった。
だが、やがてゆっくりと顔を上げたエルネスティーネに誰かが声をかけた。
「シルフィードの宝石！」

それがエルネスティーネ・カラティアというシルフィード王国の王女に付けられた呼称だという事は、例え外国に住む者であってもアルヴならば聞き覚えのある言葉であった。

その言葉を受けて、人々は改めてそこにいる小さなアルヴィンの少女を見つめ、そして各々の感情でその言葉を理解した。

まさに王女の様な存在である、と。

誰からともなく拍手がわき上がったのは、そのすぐ後であった。

「え？」

ファルケンハインの言葉がざわめきに消され、ティアナは聞き直した

「ネスティは、実はイースさまではないかと疑っていた、という事さ」

そう言うとファルケンハインはティアナの肩を軽く叩いた。

「ネスティには間違いなく王の血が、カラティア家の血が流れていると確信した」

ティアナはしかし、ファルケンハインとは違う思いが胸に去来していた。

それは「これが本当に私の王女さまなのか？」という単純な疑問だった。ティアナの知るエルネスティーネ姫はこんなに強い少女だったろうか？むしろ別人なのだと言われた方がティアナにとっては納得しやすかった。

言葉を探すようなティアナに声をかけたのはファルケンハインではなく、後方にいたアプリリアージェだった。

「子供はいつか大人になるように、ネスティに流れるカラティアの血が、今ここで覚醒したのですよ」

それは彼女の風のフェアリーとしての能力で、その場にいた特定の人間だけが聞こえるように発せられた声だった。

思わず振り返ったファルケンハインとティアナは、そこに珍しく微笑を浮かべていない黒髪のダーク・アルヴを見つけた。

「ティアナ、私達は今、ここで王の誕生に立ち会ったのです」
ティアナは改めてエルネスティーネを見た。
並び朔月の夜にエッダを後してから、わずか三ヶ月程度である。だが、視線の先の少女はすでに彼女の知る王女エルネスティーネとは違う顔に見えた。
それはエルネスティーネの精神的な成長にともなって顔つきが変わったという感覚的なもの以外に、もっと別の物理的な変化があるように思えた。
三ヶ月どころではない。この数十分で、物理的に面変わりをしたとしか思えない変化だった。

「顔が違って見えるのではないですか？」
アプリリアージェの言葉は、もちろんティアナに向けて投げられたものだった。だが、その言葉にアキラも反応した。
アプリリアージェに言われて、アキラは全身に鳥肌が立つのを感じた。
確かに顔が少し変わっているように見えた。大人っぽくなったと言えばいいのだろうか。少女らしい愛らしさがやや影を潜め、少し影を感じるような厳しさを帯びた顔立ちになっていると思えてならなかった。
（どういうことだ？）
アキラがそう自問した時、ティアナが小さくつぶやいた。
「エッダを出る夜、私はイース様とエルネスティーネ様を初めて同時に見ました」
アキラはでかかった言葉を飲み込んだ。
「その時、ミドオーバ大元帥がおっしゃったのです『ルーンを使って似せている部分がある』と」
「それが切れたのでしょうね」
アプリリアージェがティアナの言葉を継いだ。
「かけられたルーンもしくは呪法は弱くなっていたのでしょう。そ

こへ彼女の強い意志や思い、願いといった精神的な波動が高まって、何らかの解除効果をもたらしたのでしょうね。私にわかるのはその程度です。ここにエルデがいればもっと正確な説明をしてくれるのでしょうが……」

アプリリアージェはティアナとファルケンハインを交互に見つめ、さらに付け加えた。

「でも、それで私は確信しました。私達のネスティはエルネスティーネ・カラティアです。間違いありません」

「わかるのですか？」

これはファルケンハインである。

少し前にアプリリアージェと交わした会話をずっと気にしていたのだろう。あやふやな言い方をしていたアプリリアージェが断定できる物が何かを知りたかった。

しかしファルケンハインのその願いは叶わなかった。

「ええ、私にはわかるのです。でも、理由は聞かないで下さい」

アプリリアージェがそう言った時は、問い直しても無駄だという事をファルケンハインは知っていた。だからティアナがまだ何か訪ねようとするのを、その手をそっと握って制した。

理由はわからないにせよ、これで胸のつかえが取れた気がした。だが、そんなファルケンハインの心を突き放すような言葉をアプリリアージェはぽつりとつぶやいたのだ。

「もっとも、そんな事はどっちでもいい事ですけどね」

それは本当に小さな声で、ファルケンハインにもほとんど聞き取れない、独り言のようなつぶやきだった。

思わず振り返ったファルケンハインはしかし、もうそこにアプリリアージェの顔を見つける事は出来なかった。

## 第六十八話　囚われ人

後に「ハイデルーヴェンのアルヴ族襲撃事件」と称されるいわゆるアルヴ狩り事件の原因については諸説あるが、考証の結果現在では一部の過激分子が催眠性の薬物を用いて集団を操ったものだという説が有力である。

首謀者が誰であったのか、その薬物がいったい何であったのかは未明に起こった正教会と新教会による小競り合いで生じた混乱で多くの建物が証拠と共に消失したために一切謎のままだが、その薬物とはキセン・プロットが一部の学生を使って流通させていたと言われるニアレー麻薬であろうと言うのが大方の見解である。

目的はもちろんアルヴの排除であるが、そこには単なる学生のデュナニズム（ファランドールは最も正当で優秀な人類であるデュナンだけで統治すべきだという主張）だけではない、別の思惑が見え隠れする。

今では周知の事実となっているが、正教会と違い新教会はそもそも戦争を否定していない。僧兵と呼ばれるそれなりに強力だとされる組織された軍隊を有していた事からもそれがわかる。

それら僧兵を組織化して率いていたのが僧正と呼ばれる存在である。そして記録に残っている僧正はその全てがデュナンだったのだ。

対する正教会は基本的に種族の偏りはない。とは言えルーナーがデュナンに多いので賢者の構成比率はデュナンが一番多かったと伝えられているが、賢者についてはあまりに記録が少なく、実際のところは不明である。

だが、少なくとも正教会の「表」の組織の幹部・上層部にはアルヴをはじめアルヴィンなどのアルヴ系の人間も多い。つまり比率としてのデュナンの優位はあるものの、偏ったものとは言い難い。

そう考えるとデュナニズムを具現化しようとしていたのは新教会で、ハイデルーヴェンでのアルヴ狩りの影で暗躍していたのは急進

派の一部の僧正達であったという噂もあながちでたらめな考えとは言えないであろう。
「一部」と但し書きがあるのは、未明に起こったと言われる小競り合いは正教会と新教会の間でのものではなく、新教会同士の争いであったという説が伝えられているからである。

「どうだ?」
「快調や……とはいいにくいな。正直言うて芳しゅうはないな」
そこにはあまり光量がなかった。
しかもだだっ広い工場のような空間に居ながら、少年と少女は部屋の隅の、壁沿いに座っていたのだ。
声をかけたのはエイルで、応えたのはエルデである。
エルデの意識は、すでに自分の体に戻っていた。
徐々にではあるがエルデの体の修復が進むと、頃合いを見て意識を移したのだ。戻したといった方がいいのだろうが、客観的にはどちらにしろ移動に違いない。
「芳しくないどころか、どう見てもへろへろじゃないか。ドブにはまった酔っ払いでも、もう少ししっかりしてるぞ」
「その例えはケガで弱ってる若い娘に対して浴びせるには、ちょっとひどすぎへんか?」
「それどころか、全然足りないな」
「ふ……むかつくのに、おなかに力が入らへんわ……」
エルデとしてはエイルの意識を消滅する可能性がある為に、その体を長く共有するわけにはいかないという思いがあった。
エイルにしてみれば、エルデのその思いがわかっていただけに、自分が腹立たしかった。自分の体にまだほとんど力が入らない状態なのに、エルデが早々と元の体に戻った事に対して、だ。だからエイルはその小さな怒りを声色ににじませてエルデにぶつけてしまった。

エルデはエイルに抱きかかえられるような姿勢で上体を起こしていたが、自分ではまだ体を支えることができなかった。エイルが言うとおり、芳しくないどころではない。ほとんど死体だった状態からみれば、確かに回復はしている……いや、動いてしゃべっているのだから、もはや奇跡のような回復といっていい。しかし今エルデの現状を見た人間は、百人中、百人全員がエルデがそろそろ死の淵に立とうとしていると信じて疑わなかったであろう。エルデはそれほどひどい状態だった。

外見上は胸に開いた傷は既にふさがれて、傷跡すら、もはや無いようだった。だが出血が激しかった為に、造血にかなり手間取っているのだという。

「そう言えば、血は作れないって言ってなかったか？」

「作れへんわけやない。造血ルーンはあるにはある。そやけどそれは高位ルーン、それも相当強力なルーンを使わなあかん。つまりアンタの体におるウチは使われへんかった、というんが正しいかな。そやから最低限の生命維持が出来るようになったから自分の体に移って、それをやってるところや」

仮であるエイルの体を使う場合と本来の体とでは、エルデが使うルーンの効果が相当違う事はエイルも既に理解していた。そもそも亜神がまともにルーンを使うと、周りのエーテルが反応して自ら精霊陣を形作るのだ。エイルは空中に舞う羽毛や光の帯の出現にいまだに驚いていた。

「これはウチがまだ未熟な証拠やけどな。いちいちルーンを唱えたらこれやもん。ちょっと目立ちすぎるやろ？」

他の亜神、つまり三聖達はその光る精霊陣を発生させないように制御できるだろうと、エルデは言った。

ここまでくるとエイルにもシグ・ザルカバードがエルデに強化ルーンや攻撃ルーンを教えなかった訳がわかっていた。使うと普通のルーナーで無いことが知れるから……だから何も教えなかったのだ。ただ、力を制御することだけを教えたのだ。そう考えると、すべて

に納得がいった。
　ユート・ジャミールのルーン暴発事件からラウを救った際に放ったという炎のルーンの時は、おそらくすべてがとっさの事で、ラウには何が起こったのかを把握する余裕さえなかったに違いない。
「師匠の話やと、三聖は皆相当の年齢みたいやしな。ウチとは習熟度からして違う」
「いやいや、お前の実年齢は三千歳以上なんだろ？だったら最年長じゃないのか？」
　その言葉にエルデの右の眉が大きく吊り上がったのをエイルは見逃さなかった。それは大きな声で辛辣な言葉が矢継ぎ早に飛んでくる合図だった。だがエルデはそこまで回復していたわけではなかった。
「体に力が入ったら、その口を帆布用の糸で縫い付けたるから、覚悟しときや」
　その言葉を聞いたエイルは少し安心した。もちろんわざとからかったのだ。もしもエルデがこの他愛ない挑発に無反応なら絶望感に襲われたかもしれない。だが、声に力はなかったものの、軽口をたたける気力はあるようだった。
　あとは時間をかければいい。そう思えたからだ。
　だから次の言葉には、素直な気持ちが込められた。
「お前がそこまで回復するなら、オレは正直嬉しいさ」
　エルデはその言葉を聞くとため息をついた。
「まあ、ウチはそもそもがハイレーンを能くする亜神の一族やし、どっちみち攻撃とか強化とか、そっちの細かい制御は不得意なんや」
　いつか聞いた話、エルデがハイレーンとして修行したというのは、本質を語ったのではない。そもそもがエルデは治癒の力を司る亜神の一族なのだから。
　エイルはもう、そんな事もすべて理解している気がした。
「イオス・オシュティーフェ……《蒼穹の台》はコンサーラ。《深

紅の綺羅》はエクセラーの一族らしい」
「それはシグ・ザルカバード情報か？」
エルデはうなずいた。
「そもそもお前とあの《真赭の頤》とはどういう関係なんだ？お前はその……亜神だし、シグは人間で、大賢者なんだろ？　どう考えてもただの師匠と弟子じゃないって事はさすがにオレにもわかってきた」
「ザルカバード……いや、ザルカ族は、もともとウチを守護する一族や」
「守護？」
「師匠はファランドールで最も古い十二の家系の末裔や。正確に言うとザルカバードはザルカというその最も古い十二の家系の一つで、まあ、言うたら正統な傍系っちゅうところかな」
「正統な傍系……って、かなり微妙な立場だな」
「ザルカの本家筋はとっくに滅亡してるらしい。でも、それはザルカに限らへん。残ってる方が少ないんや。そもそも亜神の家系も傍系で成り立ってるしな。《蒼穹の台》を名乗るイオスはティーフェの傍系、オシュティーフェ一族、《深紅の綺羅》を名乗ったクレハ・アリスパレスはアリス一族の傍系や」
「そうか。何千年も前からの話だもんな」
「千やない。万の単位や」
「え？万？マジ？」
「マジや」
「ほえーっ」
エイルはため息をついた。フォウにはそんな家系など存在しない。そもそもそれなりの文明が出現してからせいぜい数千年と言われているのだ。
「むしろ直系が残っているって事の方がすごいと思えてきた」
そのもっともなエイルの問いかけに、エルデはうなずいた。
「残ってるのは二つか三つくらいやな。《黒き帳》の一族と、大賢

者《天色の？》を受け継ぐタ＝タン一族とかやな」
「三聖《黒き帳》はなんていう一族なんだ？」
エイルの疑問はもっともだった。エルデは《黒き帳》の現名だけ、告げなかったのだ。
「……」
しかしエルデは問いかけに答えなかった。
「え？またそこに何かややこしい秘密とか謎とか恐ろしい何かとかがあるのかよ？」
「いや……」
エルデは眉間に皺を寄せて目を閉じると首を横に振った。
「なんだよ、今更オレに秘密とかなしにしてくれよ」
「悪いけど、これだけは無理や……」
「エルデ……」
エイルが顔を曇らせると、エルデはそれを見てニヤリと笑った。
「絶対無理。理由は単純に知らんからや」
「はあ？」
「あはは。今のアンタの悲しそうな顔、なかなか可愛いかったで」
「おまえなあ！」
今度はエイルがエルデにからかわれた格好だった。だがエイルはムッとするよりも嬉しさがこみ上げてきた。間違いない。エルデは回復しているのだ。
「冗談みたいやけど、《黒き帳》の現名は師匠ですら知らんそうや。《深紅の綺羅》の現名を知っている人間もほとんどおらんそうやけど、《黒き帳》はもっと徹底してて、知ってるのは三聖と守護の一族だけらしいな」
「三聖って……《深紅の綺羅》はもう居ないし、そのうちの一人は本人だし……って事は」
「そやな。《黒き帳》の現名を知ってるんは本人を除くとイオスだけやろな」
「《黒き帳》の守護の一族っていうのは？」

「大賢者《銀の篝（しろがねのかがり）》レイカ一族の傍系の人間らしいけど、こいつが大賢者のくせに全然正教会（ヴェリタス）に姿を見せへんらしい。少なくともウチが『時のゆりかご』から目覚めてからは誰も姿を見た事がないらしい」
「行方不明か」
「まあ、《黒き帳》の特命で暗躍してるんちゃうか、という憶測はできるけど、所詮憶測や。もしも会うたら《黒き帳》の現名を教えてもらおか」
「キセンはどうだったんだろう？」
「え？」
「本だよ。『合わせ月の夜』って本には書かれてたんじゃないのか？」
「まさか。……あ」
エルデはある事に思い当たったようだ。
エイルはうなずいた。
「《白き翼》というお前の名前の事はたぶん書かれてるんだろ？だったら可能性があるよな」
「よし、家捜ししてみるか……って、まあ無駄やろな」
「無駄？」
「呪法が込められた本らしいから、おそらく本人以外には見られへんくらいの仕掛けが込められてるやろし、そもそも見つけ出すのに時間がかかりそうや。興味はあるけど、ウチらの目的やないしな」
「あの部屋で表題を口にすればいいんじゃないのか？」
エイルはキアーナ・ペンドルトンに案内された最初の図書室のような部屋の事を持ち出した。
だがエルデは首を横に振った。
「これも憶測やけど、今となったらあの部屋の意味もわかる。あれは部屋自体が青緑女の力を誇示するための見本……つまり販促物みたいなもんや」
「なるほど。確かにあの仕組みを見ると普通は度肝を抜かれるよな」

「そんな大事な本を、呼んだら飛んでくるようにしてると思う？」
「してたら笑うな」
エルデはうなずいた。
「大笑いやな」

エイルは話題を元に戻した。
「それはそうとさっきの《黒き帳》の話だけど、亜神が現名を隠す必要、いや理由が何かあるのか？」
「あるっちゅうたら、ある」
「どんな？」
「名前はある意味で魂に渡す架け橋みたいなもんやからな。そもそもルーンを唱えるのには前文で自らの名前を名乗る必要があるんは知ってるやろ？」
エイルはうなずいた。
それはルーンの決まり事の一つである。
最初に本名を名乗り、自分がそのルーンを使用できる事をエーテルに対して宣言する必要がある……確かそういう風にエルデから聞かされた事があった。
「まあ、最初に名乗るんは《黒き帳》っちゅう賢者の名でもええんやけど、そもそも色の名はそれぞれの家系、一族の長……王って呼ばれるんやけど……が継ぐものであって固有の名前とは言いにくい。でも、現名はその人間を特定する固有のもんやろ？」
「どう違うんだ？使うルーンの威力に差が出るのか？」
「その辺はややこしい話になるから細かくは説明せえへんけど、要するに感情により密接に繋がるのが現名っちゅう事や。感情がない人間には意味はない」
エイルはエルデの言わんとする意味を理解しようと努めたが、正解に辿り着くのはどだい無理というものだった。だが、感覚的にある事に辿り着く事はできた。
「よくわからんが三聖《黒き帳》は他人に現名で呼ばれたくない、

という事なのか？」
「ウチにもわからへん。でもウチも同じような事を考えてる」
エルデはそう言うと左手を弱々しく動かして自分の胸に当てた。
「もしそうなんやったら、これだけはわかる。《黒き帳》にはまだ感情がある、っちゅうことや」
それがどういう意味なのか。それもエイルにはわからなかった。
だがその話はそこで途切れた。エルデは十二色の話の続きをしたがっていたからだ。

「この話はこのへんにしとこ。思いっきり横道に逸れてもうたしな。って、考えてみたらウチら二人はいっつもこんな感じやな」
「お前が妙なところに突っ込むからだろ？」
「アンタが話の腰を折る名人やからやろ」
エルデは饒舌だったが、楽な様子で話しているわけではない。声を出す事自体が辛そうなのだ。
しかしエイルは止めなかった。
話に興味があって、聞きたくてたまらないという理由ももちろんある。だがそれよりもエルデ自身が話したがっているように思えたからだ。
「伝説ではマーリンに初めて族名をもらったのが、その十二の一族やって言われてる。それぞれの種族には、名乗るべき族名と、他の一族と区別する為の、種族を表す色が与えられたそうや。そやからその十二の家系は別名十二色って言われてる」
「なるほど、十二色っていうのは文字通り色の事なんだな」
「まさかとは思うけど、色とか聞いて別のこと考えてたんとちゃうやろな？」
「訳がわからんが、お前が思ったより元気そうだってことはわかった」
「ふん、まあええけど。で、そのうちの四種族が亜神や。あとの八種族はマーリンにそれぞれ亜神を守護する事が義務づけられてる。

まあ、担当やな」
　自分の正体が知られてしまったエルデは、もうエイルに対して隠す事もないと思っているのだろう。自分を、つまり亜神を取り巻く太古から連綿と続く「人」が知らない物語を語り始めていた。
　もちろん、その合間合間に回復のルーンを唱える事は忘れなかった。
　エルデの想定よりは回復に時間がかかっているのだろう。だがエイルは自分の腕の中にいる少女の体温が、急激に戻っていくのを感じていた。まるで氷の人形のように冷たかった肩も腕も指も、今は人のぬくもりがする。エイルはそれが嬉しくて、エルデに回した腕に力を入れた。もっとその体温を感じたいと思ったのだ。
「あんまり強うしたら痛いやん」
　エルデは抗議したが、
「あ、悪い」
　そう言ってエルデが腕の力を緩めると、
「なんで緩めるねん！」
　と、また抗議をした。
「訳がわからん」
「訳がわからんとか言うてるあんたが訳がわからんわ」
「はあ？」
　エルデは大きなため息を一つついた。
「もうええ。それはそうと、今は何時くらいやろ？」
　あの出来事から、相当な時間が経っているのは確かだった。だがエイルには正確な時間を知る術はない。
　エルデはある程度動かす事が出来るようになっていた右手を動かし、儀仗の頭頂部を掲げて小さく何かをつぶやいた。
「まずいな」
　そしてその直後にそう言うと、エイルの胸からその背中を離した。立ち上がろうとしたのだ。
「おい、大丈夫なのか？」

「もうすぐ七時や」
エイルはその言葉でエルデの言わんとしている事を悟った。《淡黄の扇(たんこうのおうぎ)》という賢者名を持つ新教会の僧正、ランディ・アルオマーンがキセン・プロットとの取引のためにあの「魔法の鏡」で見ていた部屋にやってくる時間だった。
もちろんキセンは《淡黄の扇》と会う事はない。そうなると、昨日の様子からして《淡黄の扇》側はこの建物全体を捜索する可能性があった。取引をしていた「物」は、彼にしてみればどうしても欲しい物であるはずだからだ。
「早くここを離れよう。オレに負ぶされ」
そう言って背中を向けたエイルの後頭部を、エルデは手に持った儀仗ノルンで軽く小突いた。
「痛てっ」
「うそつけ！これくらいで痛いはずないやろ」
「いや、そこはお約束の反応だろ？と言うか、お前歩けるのか？」
「悔しいけど、まだまともには歩けへんな」
「だったら」
「悪いけど……」
エルデはそう言うと目を伏せた。今までの冗談めかした会話で作られていた場の空気が一変した。
よく見ると、エルデは目を伏せているだけではない。エイルに対して少しだけ頭を下げている。
「ここはウチのわがままを通させてくれへんか？」
「わがまま？」
「これは、ウチの仕事なんや」
突然のエルデの態度に、エイルは混乱した。
出来るだけ早くここを去り、エルネスティーネ達に合流する事が二人の目下の共通した目的だと認識していたからだ。
「仕事って、お前」
「悪いけど、アイツだけは見過ごすわけにはいかんのや」

「アイツって……まさか《淡黄の扇》っていう府長か？」
エルデはうなずいた。
「どうするつもりなんだよ？」
「賢者の処刑はその上の人間、いや人間やない、亜神やな……が行う。そやから、それがウチの仕事や」
「仕事って、お前は正教会の人間じゃ……」
「悪い、エイル」
エルデはそう言うと首を横に振った。
「ウチが亜神である限り、いや、現世におる限り、正教会の不始末を見過ごす訳にはいかへんねん」
エイルは言葉を失った。
エルデの決心は堅い。いやエイルの出る幕がない事はエルデの口ぶりで理解した。いわばこれはお家騒動のようなもので、部外者であるエイルには踏み込む余地が無い事柄と言えた。
「なんやかんや言うて、ウチが正教会に所属しているのは間違いない。そうなるとウチは自動的に大賢者の上、要するに三聖と同じ地位にある事になる」
「四聖……」
エルデはうなずいた。
「ウチを入れて四聖。誰ももう覚えてへんやろけど、三千年前までは確かにあった呼称や。そもそも《白き翼》を継いだ亜神が存在してるっちゅうことは、四聖が復活したっちゅう事やからな。誰にも知られとうはなかったんやけど……」
だから止めるな。
エルデの言葉はそう言う意味だった。
「なにより、娘が亡き母親の跡を継ぐのは、自然なことやろ？」
エルデはそう言うとエイルの言葉を待たずに儀仗ノルンを掲げ、ある人物の名を告げた。
「出でよ、シグ・ザルカバード」
儀仗ノルンのスフィアの一つとなったシグ・ザルカバード。

エイルはその存在をすっかり忘れていた。
「極力呼び出しとうないんやけど、この際、背に腹は代えられへん」
それに、とエルデは続けた。
「我が同胞、クレハ・アリスパレスの体をここにこのまま残すわけにはいかへん」

呼び出されたシグ・ザルカバードは無言だった。一連の事情はスフィア化されていても感知出来ているのであろう。エルデは何も説明しなかった。
「続けざまに呼び出して堪忍や。でも師匠の消耗を承知で、頼みがある」
「心得ております。何なりとお申し付けを」
シグはチラリとエイルを見たが、何も告げずに視線をエルデに戻し、深くお辞儀をした。
「まずは治癒や。師匠の知っている限りでええ。ウチの体を治癒ルーンで回復して欲しい」
そこから先の話はエイルには理解不能だった。聞いた事のない言葉のやりとりだったからだ。ただ、それがルーンの打ち合わせであることだけはわかった。エルデとシグは、最も効率的な治癒ルーンの使い方を打ち合わせしていたのだ。
エイルはそれよりも、エルデがいつになく早口で焦っている様なしゃべり方になっている事が気になっていた。いや、おそらく焦っているのだろう。だが口を出すのはためらわれた。エルデの集中を切らしたくはなかったのだ。エルデが焦っているというのは、つまりは焦るだけの意味があるという事なのだ。じゃまをするわけにはいかなかった。

打ち合わせはすぐに済んだ。
シグは空中に浮いたまま、エルデが突きだした儀仗ノルンの頭頂部を掌で包むようにした。すると儀仗は淡く発光を始めた。

それを合図にシグがルーンを唱え始める。はじめにシグが短めのルーンを唱え終わると、今度はエルデが短いルーンを唱える。そして間髪置かず、シグがまたルーンを唱え、唱え終わるとエルデが詠唱文を詠む。そんなやりとりが五回くらい行われたあと、今度はエルデが真っ白な光に包まれた。

いや、エイルにはエルデ自身が発光したように見えた。それも、まぶしすぎて目を開けていられないほど強く。

「次や」

エルデの言葉にエイルは目を開けた。

そこには、青白い光を体中に纏ったエルデがいた。

声をかけようとするよりも早く、エルデはその場に儀仗ノルンを残したまま、まっすぐにエイルに近づいてくると、そのままエイルに抱きついた。

「お、おい」

驚いたエイルがそう声を上げるのと同時に、エルデは言葉を発していた。

「ネルタスワードヴ・ダドリエ・アウ・リューズ」

「え？」

それがルーンの認証文だと言う事はわかった。だがエイルが驚いたのはエルデがその認証文をエイルに抱きついて唱えた事に対してだった。

エルデが唱えたルーンの認証文は、エイルは初めて聞くものだった。だがそれが治癒系のルーンである事はすぐにわかった。

既に痛みを感じていなかった右肩が、急に焼け付くような痛みに襲われた。

だがそれはほんの短い時間で、すぐに痛みはひいていった。まるで大きな炎が風でかき消されるような、そんな感触だった。痛みは去ったが、火照りのようなものが残っているので、傷がそこにあったという感触がある。

その火照りもどんどん下がるのがわかった。一分も経たぬうちに肩の傷の熱よりも、エルデと体を密着させている部分の方が熱くなっていた。

火照りは痒みへと変化し、しかし不快感が募る前にそれも消えていった。

いつものとおり、エイルの傷はエルデの治癒ルーンで完璧に修復されたのだ。いつもと違う事があるとすれば、それは完治に至る時間が今までよりも圧倒的に短い事だった。

この力がエルデの本来の力だとすると、エイルの体でルーンを使っている時のエルデが、いかにその能力を封じられていたのか……エイルはそれを今、身をもって知ったのだ。

力を自分の体の修復にあてるために、エルデはエイルの傷に対しては最低限のものしかかけなかったのだろう。いや、痛みを麻痺させるルーンだけをかけたのかもしれなかった。

エイルの肩の傷も相当な重症だったはずだ。それを、文字通りあっという間にエルデは治癒してみせた。キアーナ・ペンドルトンの傷を修復した時にもその片鱗を感じてはいたが、自らの体で「差」を感じる方が実感として理解しやすいものなのだ。

「すげえな」

「ん？」

エイルは思わずそうつぶやくと、小さくため息をついた。

自分以上のハイレーンは存在しない……口癖のように自慢していたエルデのその言葉を、エイルはもはや疑う事ができなくなってしまったのだ。しかもおそらく……今のルーンでさえエルデの全力ではないはずなのだ。

なぜなら三眼も使わず、大気中のエーテルから治癒の最大効力を引き出す為にルーナーが使う儀仗を手に持ってもいない。愛用の儀仗ノルンは、手にすることなく空中に放置したままだ。

そう。エイルは普通のピクシイの少女の姿のままでただ詠唱文を

唱えただけなのだ。
「あ……」
そんな事を考えていると、今度は今までの治癒ルーンとは違う現象がエイルの目を見晴らせた。
空……ではなく、天井から無数の白い羽毛が舞い降りて来たのだ。
いや……。
それは羽毛ではなかった。その証拠にエイルが伸ばした手に舞い降りたそれは、体の内部に吸い込まれるように消えていったのだ。
羽毛といよりは牡丹雪のようなものなのだろうか。それにしては冷たくもなく、もちろん水に変化するわけでもない。
羽毛に包まれる……それはエイルにとっては不思議な体験であり、端から見れば異様な光景であったろう。
エイルはその羽毛状のものを三度目にしていた。ヴェリーユの宿でファーンに治癒ルーンをかけた時が最初で、二度目はキアーナを治療した時だ。そしてついさっきエルデはキセンにも羽毛が発生する治癒ルーンをかけていた。
そして今度はその羽が自分に降り注いでいた。羽毛が体に当たってもその感覚はない。目には見えるが果たして本当にそこに存在しているのかどうかがあやふやな程である。
これはエルデの詠唱に呼応し具象化したエーテルなのだろうか？
エイルが考えられるのはその程度の事だった。
羽毛に似た何かは、エイルとエルデの体にいくつもいくつも降り注いでは、その姿を消滅させていた。

「他に痛いとことかないか？」
全ての羽毛が降り止んだところで、エルデはようやくエイルから体を離した。その瞬間に熱が全て奪われてしまうようで、エイルは思わずエルデをもう一度抱きしめたい衝動に駆られた。エルデと自分の間で生まれた暖かいものを、もう一度味わいたかったのだ。
だが、自分の目をのぞき込むエルデの黒い瞳を見ると、体が動か

なかった。抱きしめてしまうとエルデの顔を見られなくなる。そう思うエイルの心に逡巡が生まれたのである。

しかし、それよりも何よりもエイルは嬉しかった。

今まで自分の腕の中で衰弱し、文字通り虫の息のような状態だったエルデは、見たところもうすっかり以前の様子に戻っていたのだ。

自分の肩の傷など、実のところすっかり忘れていた。エイルの全ての意識は、エルデに注がれていたのだから。

じっと自分を見つめているエイルの頬を、エルデの指先が触れた。

「堪忍や。ウチの為に……ウチがあの青緑に気を許してもうたばっかりに……痛い思いさせてもうたな。そやのに完全治癒はウチより後回しになってもうた」

エイルは頭(かぶり)を振った。

「オレの事はいい。あんな傷なんかどうでもいい。お前が……オレはお前を守れなかった……完全に信用してて、相手の気が感じられなかった……殺気に気付いた時には間に合わなかったんだ」

「ふふふふ」

エルデはおかしそうに声を出して笑った。

「なんちゅう顔してんねん、エイル」

そう言って笑うエルデの顔は、エイルには妙にうれしそうに見えた。

「うるさい。この顔は生まれつきなんだよ」

「アンタは生まれつきべそかきなんか？」

「え？」

指摘されて、エイルは思わず自分の目に指を当てた。

「べ、べそなんてかいてないだろっ」

エイルはそう言うと、袖口で涙をぬぐった。エルデに言われるまで自分が泣いている事に気づいていなかったのだ。

「あれ？」

いつから泣いていたのだろうか？

バツの悪さを感じながらも、エイルは自覚がない事をいぶかしん

だ。
「ふふ。そや、なんて言うたかな、あれ」
「あれって？」
「アンタが昔言うてたやろ？フォウの母親はみんなルーンが使えるって。子供がケガした時に治すルーンやったっけ」
「ああ」
エイルはそう返事をすると、もう一度涙をぬぐった。
「そんな事言ったっけ？　でもあれはケガを治すルーンじゃない」
「伝統的な治癒ルーンやって言うてたやないか」
「痛みを緩和するだけだ。傷は治らない」
「ふーん。でも、治癒のルーンなんやろ？」
「そうだな」
「そのルーンの認証文を教えてくれへんか？」
「認証文というか、オレが知っているフォウのルーンは認証文しかないんだけどな」
「うん。それでええ。それをウチに教えて欲しい」
「ここで、今、言うのか？」
「なんや？問題でもあるんか？」
「いや……じゃあ、一回だけだぞ。二回は言わない」
「充分や。ウチの記憶力をなめたらアカン」
「――『痛いの痛いの、飛んでいけ～』かな」
エイルが意を決したようにそう言うと、エルデは腹を押さえてかがみ込んだ。
「ふ。ふふふふ……あはははは」
「笑うんじゃねえ！結構恥ずかしいんだ」
「か、堪忍や。でも、うふふふ……ふふふ。なるほどええ認証文やな。確かに今、ウチは結構癒されたわ」
「ああ、もういい。それ以上しゃべるな。ってあれ？　変だな、オレ……」
そういうエイルの涙はまだ止まってはいなかった。それどころか

流す涙の量が増え、視界が歪む程になっていた。まぶたから溢れた熱い液体が、ぼろぼろと頬を伝い、あごから、鼻先から床へ向かって落ちていくのが自分でもわかった。
それを見たエルデは、飛び込むように再び正面からエイルを抱きしめた。
「ええ年して、相変わらず泣き虫やな」
「うるさいよ」
「よしよし」
「よしよしじゃねえよ、お前はオレの母親か」
「年上なんは確かやな。ウチは何しろ三千歳やからな。母親っちゅうか、ご先祖様？」
「血は繋がってねーだろ」
「ふふふ。とりあえず元気やな。ええ事や。たぶん安心して、緊張が緩み過ぎたんやな。でも、もう大丈夫や。ご覧の通り、ウチの事は心配いらん」
その言葉のすぐ後に、エイルは頬に触れるものを感じた。
「え？」
一瞬の事だったが、エイルは確かに感じたのだ。
エルデの唇の柔らかさを。

「さて、と」
エルデはそうつぶやくとエイルから体を離した。その拍子に長い黒髪が翻り、エイルの鼻先をくすぐった。
エイルから離れたエルデは、じっとある方向を見つめていた。
確かめるまでもない、その先には《深紅の綺羅》が眠る硝子か水晶で出来た貯蔵槽があった。
エルデは空中に浮かべたままだった儀仗ノルンを手にした。
「何をするつもりだ？」
エイルは思わず強い調子でエルデの後ろ姿に向かって声をかけた。
儀仗ノルンを手にした瞬間、エルデの纏う空気が大きく変化した

のを感じたのだ。
嫌な予感がエイルの脳裏をよぎった。エルデが今、間違いなく第三の目を開いた事がわかったからだ。
「《深紅の綺羅》……いや、アリスの王、クレハ・アリスパレスを囚われの姿のままにしておくわけには行かへん」
「何をするつもりだ？　まさか……」
エイルは振り返ったエルデの顔を見て、そこで言葉を失った。
血の色に燃える第三の目を大きく見開いたエルデの顔は、さっきまでエイルに注いでいた優しい表情とはほど遠いものだったのだ。
（亜神……）
キセン・プロットから聞かされた、人類とは違う生物の呼称が頭をよぎった。
自分の言葉が、果たしてこの生物に対して通じるのだろうか？
そんな不安に満ちた疑問が当たり前のように湧き上がってくる。
そんな厳しく冷たい表情がそこにあった。
「キセン・プロットの言うた事はおそらく嘘やない」
エルデは表情を崩さずにそう言った。
「それでもこれは、ウチがやらなあかん事や」
言葉遣いや声はエルデのままであった。だからエイルにはかろうじてそれがエルデであることがわかる。
しかしエルデの答え自体は、エイルの望むものではなかった。エイルとてエルデの考えには賛成だった。クレハ・アリスパレスという名を持つ女性をこのままの状態で放置する事は忍びない。
だがキセン・プロットの言葉が呪いのようにエイルの心にのしかかる。
《深紅の綺羅》をここから動かす事は、すなわち《黒き帳》の戒めとしての機能を消滅させる事になる。
それがたちまちどういう状況を生み出すのかはエイルにはわからない。エルデすらわからないと言ったのだ。
だが、エイルもエルデも、キセンの言葉が嘘ではないことは確信

していた。
　ここにこうして《深紅の綺羅》の体が存在している事が、《黒き帳》の動きを制限する結界になっているのだとキセンは言う。
　クレハ・アリスパレスを触媒とした結界の崩壊は《黒き帳》を解き放つ。そしてその、エイルにとって未知の三聖は、名前を聞いただけでエルデの顔色を変える程の存在なのだ。
　であれば、少なくともその戒めを今解いてはまずいのではないか？
　エイルはそう思ったのだ。
　さすがに今ならわかる。
　キセン・プロットが「工房」と呼んだこの空間。エルデが「嫌な感じがする」と言って最後の一歩を踏み出す事をためらったこの場所は、巨大な一つの回路として機能しているのだ。
　中央にひときわ巨大な丸い貯水槽があり、その中には《深紅の綺羅》がいる。それとは別に周りには無数の貯水槽があり、それらは磁器製と思われる様々な太さの管で互いに繋がっている。
　それはもう回路と呼ぶよりは人体と言っても過言ではないものに思えた。《深紅の綺羅》を心臓として臓器と器官とを磁器性の血管でつないだ擬似的な人体の血液循環模型のようなものだった。《深紅の綺羅》の貯蔵槽に満たされている薄桃色の液体は全ての管を通じてこの場全体に張り巡らされており、それは間違いなく《深紅の綺羅》の血液を何らかの液体で希釈したものなのだ。
《深紅の綺羅》を心臓とする擬似的な肉体を結界化したもの……それがこの「キセン・プロットの工房」の正体と言えた。
　そしてキセン・プロットは自分自身が作り出したその結界の虜囚とも言えた。
「囚われ人、か」
　エイルは小さくそうつぶやいた。エルデはその言葉に反応してエイルを見たが、何も言わず、ただ小さく頷くと目を伏せた。おそらくその一言で、エイルの言いたい事が伝わったのだろう。
　心臓であるクレハの体、すなわち回路の核をなくすということは、

その結界の無効化と同義だということはエイルでもわかった。
「さてさて。時間も無いし、はじめよか」
エルデは顔を硝子の貯蔵槽に向けた。
「鬼が出るか、蛇が出るか」
そう言ってまっすぐに《深紅の綺羅》を見つめるエルデを見ると、エイルにはもう、かけるべき言葉が見つからなかった。
エイルの考えている事など全てわかった上で、それでも敢えて行おうと言うのだ。残り少ない亜神の一族としてのエルデの心情はエイルもわかった。エイルがエルデの立場であれば、迷うことなく同じ事をするだろうと思った。
「言うとくけど、責任はとられへん。けどどちらにしろ、ウチは同族をこのままにしておくわけにはいかへんのや」
エルデはそう言うと手にした儀仗ノルンを正面に突き出すように掲げ、そして目を閉じた。
シグの力を借りて輻輳させ、威力を増幅したという治癒のルーンは上手く作用したのだろう。本人がエイルに告げたように、その立ち姿には少し前の弱々しい雰囲気は微塵もなかった。服の破れや、染まった血の跡がなければ、数時間前の出来事は夢だと思ったに違いない。

ほんの少しの間の沈黙の後、エルデは目を伏せたままでルーンの詠唱を始めた。
それはいつもの短い認証文だけのルーンではなかった。いや、よく聞けば、認証文だけのルーンをいくつもいくつも組み合わせているのだという事がわかった。
詠唱までの短い間は、これから行う作業の為に必要な複雑なルーンの構築を行っていたのであろう。
例によってルーンが発動する度に空中には発光する立体精霊陣の帯が生成され、無数のそれらが詠唱者であるエルデの周りをぐるぐると回転し始めた。

ともすれば禍々しさを感じるエルデのルーン詠唱だが、その時は違った。エイルは初めて、光の帯に包まれるエルデの姿を心から神々しいとさえ思っていた。

そして思わずつぶやきが口から漏れた。

「亜神……」

# 第六十九話　クレハが守ったもの

瞳髪黒色の少女を中心に回転する、無数の光る帯。
それぞれが一つの精霊陣で、しかもそれはエルデが意図的に作り出したものではなく、精霊波が術者に感応して自らが陣形を形作るものだという。
ルーナーは一つの精霊陣を我がものにする為に、文字通り命をすり減らしながら、もがき苦しむという。
しかし人ではないエルデは違う。彼女が強化ルーンや攻撃ルーンを唱えれば、望みもしないのに精霊波が自発的に光輝く陣を作りあげ、術者であるエルデのルーンを増幅・拡張してしまうのだ。
普通のルーナーがエルデの事を知ったなら、その胸に去来するのは羨望か、はたまた嫉妬か……。
ルーナーではないエイルには、実感としては何も湧いてこない。わからないと言ったほうがいいかもしれない。
だが多くの場合、そんな時には嫉妬が勝るのではないかという想像はできた。なぜなら目の前のエルデは、フォウでの自分自身の姿と重なったからだ。
自分に敵意や殺気を向ける相手の動きが手に取るようにわかるエイルの能力は、努力して得たものではない。物心がついた時にはすでに「見えて」いたのだから。
それだけではない。不幸なことにエイルの家は古よりある流派の剣技を伝える特殊な家柄であった。そこには一子相伝と言われる特殊な剣技である「奥義」を始め、相当な修行を重ねる事によってはじめて会得できるようなきわめて高度な「技」が数多く伝えられていた。
だがエイルはごく幼い頃にそれらを全て会得してしまっていた。
それもすべて初見である。
型を見せる者が達人であればあるほど、熟練者であればあるほど、

エイルはその「型」の持つ深い意味あいまで見通せたからだ。これも彼の特技であった。

周りの大人達がそんなエイルに心からの敬意を持ち得るだろうか？フォウもファランドールもない。努力しないで力を得てしまった天才を、人は畏敬と羨望と嫉妬が混じり合った感情を通してしか見る事が出来ないのだ。

その中でどの感情が突出するかは人によるだろう。だが同じ道を歩む者ほど、同じ舞台に立つ者ほど、嫉妬の台頭を抑える事が難しい事は想像に難くない。

そして多くの場合、嫉妬はやがていわれのない憎悪に変わる。それが人間の弱さであり闇の一つなのだ。

「この状態のままクレハ様をスフィア化すれば、結界はそのまま稼働するかもしれぬ」

エルデの詠唱を無言で眺めているエイルに、いまだに現世に留まっているシグのエーテル体が珍しく自分から声をかけてきた。

エルデのやろうとしている事を、本人に代わってシグがエイルに説明して見せたのだ。

「スフィア化？」

エイルはすぐに反応した。

「そんな事ができるのか？」

思わずそう訪ねたが、シグは首を横に振った。

「できる。とは断言しかねる。これは可能性の問題なのでな」

「可能性って……」

「勘違いするな。《白き翼》は十二色に名を連ねる一族の直系。しかも亜神の一族だ。正しくその名を継ぐ者ならば、例え初めてであっても亜神をスフィア化する力は持っている。それだけの知識もある。そこには問題はない」

じゃあ、どこに問題があるんだ？　とエイルが問いかける前にシグが続けた。

「三聖《黒き帳》がこの地に封じられている訳ではないのは、その気配が全くないことから間違いない。あのフォウから来た女が作ったこの結界が、地形や地脈に関与しない独立型であることも明らか。要するにクレハ様のお体の存在そのものが結界維持の為の鍵だという結論であろうな。私も言われて得心した」

「なるほど。だったら……」

生体をスフィア化するなどというエイルにしてみれば突拍子もない事が実現可能なのであれば、確かにそれは合理的な手法だと言えた。

その規模故にキセンには動かす事ができなかっただけで、もとより「場」に固定される事のない結界だったのだ。

シグはうなずいた

「まったく若いほど頭は柔軟とはよく言ったもの。突拍子もない事を思いつかれる」

「ガヤルドーヴァ先生……キセン・プロットにそれができていれば、もっと違った結末になっていたのかもしれないってことか……」

「後悔しておるのか？」

シグの言葉に、エルデは即答できなかった。

だがシグはエルデの答えを待たずに、言葉を継いだ。

「後悔はするな。いやしてはならん。お主はそのまま前を向いていればよい」

シグは目を伏せたエイルにそう言うと、視線を再びエルデに移した。

そこには無数のルーンを詠唱し続けるエルデがいた。

「こう見えて、儂はお主には心から感謝しているのだからな」

「え？」

「儀仗に埋め込まれたスフィアの一つとなっている我が身は、自らの意思で封を破る事はできん。この意味がわかるか？」

「え？　ええ……」

「つまり、守りたくても守る事ができんというわけじゃ」

エイルはシグの言いたい事がわかってきた。
「あの時、もしもお主がとっさに動いていなければ、我が主はクレハ様と同じように道具として利用される事になっていたであろうからな」
「あなたはスフィアの状態でも、外で起こっている事は全て見えているんですか？」
「全てではないが、大体の事は把握している。我が主の心を占拠する力を持つフォウの少年よ」
「占拠？」
「いや、口が滑った。何でもない。今の言葉は忘れるがいい」
「え？　ちょっと待ってくださいよ」
「とにもかくにも、じゃ。お主は我が恩人ということじゃ。ついでと言ってはなんだが、勝手な願いと承知で頼む。今後とも我が主の良き守護者であってほしい」
「それは……」
もちろん、と言いかけた時に、工房全体に赤い光が満ちた。エイルはその光で再び視界を失った。まるで赤い闇である。
だがそれは長く続かなかった。
光が弱まると同時に視界が戻った。戻った視界が見つけたものは、儀仗ノルンを掲げるエルデと、空中に浮かぶ赤いスフィアだった。
はじめは人間の頭ほどの大きさに見えた赤いスフィアは、みるみるその体積を無くしていき、やがて小指の爪ほどの大きさまで縮むと、ゆっくりと儀仗ノルンの頭頂部に吸い込まれていった。
「お見事」
それを見届けたシグがそう言うと、それが合図であったかのようにエルデが目を開けた。
エイルは視線を貯蔵槽に向けた。《深紅の綺羅》の水槽である。
だが……
当たり前の事なのであろうが、そこには何も無かった。ただ透明な液体が詰められているだけである。液体が入っているのは上部に

空気の層が見えるのでそれと知れる。
いや、あった。
貯蔵槽の上部に、あの木製の儀仗が浮かんでいたのだ。

「ルーンをかけてみてわかったけど、どうもあの『星を飲む獅子』はまがいもんやな」
「本物じゃ、ない？」
エルデはうなずいた。
「おそらく後になって、青緑女が頭頂部に模造品を付けたんやろな」
それにどういう意味があるのか？
エイルはそう尋ねようとしたが、それよりも先にシグが解答を口にした。
「なるほど、誰かに発見された際、犯人を示す徴を付けておいたという事ですな」
「保険のつもりって事か」
キセン自身も口にした「保険」という言葉をエイルもつぶやいた。

「さて、と」
エルデはそう言うと工房内を見渡した。
クレハ・アリスパレスという名の女デュナンの体が消え、貯蔵槽に満たされていた液体の色が抜けた事を除くと、その場にある構造物は何一つ変わっていなかった。
もし精霊陣が解かれたとすると、何らかの変化が生じる可能性があった。しかしエイルは現時点では何の変化も感じなかった。
それはエルデも同様だったのであろう。小さなため息をつくとシグに一礼した。
「助かったで、師匠。おかげでなんとか元通りや」
しかし、シグは厳しい声で返した。
「いやいや、元通りではありませんぞ。そもそも……」
「わかってる！」

エルデはシグの言葉をピシャリと遮ると、儀仗の頭頂部をシグに向けた。
「戻れ、シグ・ザルカバード」
エルデの声はシグというエーテル体にとってはあらがうことのできない命令ルーンそのものなのだろう。何の抵抗もないままにシグ・ザルカバードのエーテル体は空中からかき消えた。
「元通りじゃないって、どういう事だ？」
「ああもう、アンタからこっちの体に移って間もないから、まだ本調子にはほど遠いっちゅう事や」
「本当か？」
「嘘ついてどうすんねん。全く年寄りっちゅうのは小言が多いわ」
「そりゃ心配するだろ。オレだってそんな事言われたら心配しちまうよ」
「へえ？」
エルデは嬉しそうにニヤリと笑うと、エイルの言葉尻を捉えた。
「ウチの事、心配してくれるんや」
「そ、そりゃそうだろ。だいたいあんな事があったばかりだし」
エイルはエルデの顔から視線をゆっくりと下に移した。ほんの数時間前にエルデの言う「小洒落た服屋」で買ったばかりのサクランボの花を大きくあしらった服には、ひどい破れがあった。それよりも何よりも、エルデの血で赤黒く汚れて当初の美しさは見る影もない。
「せっかくエイルが選んでくれたのに、台無しにしてもうたな」
エイルの視線に気付いたエルデは、そういうと破れた胸の辺りを手で隠した。
「その服、店にもう一着あったじゃないか。後でまた買いに行こうぜ」
「そやな……」
「それにしても……」
エイルはエルデが手で押さえている胸の辺りを見つめたままつぶ

やいた。
「ん？」
「照準がいやに正確だったな、って思ってさ」
今更ながらだが、こうして落ち着いたからこそ思い出される事がある。射出装置がそれなりに精密なルーンで制御されているとは言え、的はおそらく壁の扉であったはずだ。そう考えるとエルデの心臓をああまで正確に狙えたのは驚異であった。
だが、エルデはエイルの疑問を事も無げに鼻で笑ってみせた。
「ああ、あんなもん」
「え？　何かからくりでもあるのか？」
エルデはうなずいた。
「青緑女に血行回復と疲労物質の分解ルーンをかけたときやけど」
「あれって、そういう細かい機能があるルーンだったのか」
「ふふん、回復・治癒系なら相当細かい機能のルーンも使えるで。たとえば朝起きたときに目やにができにくくする為に涙腺付近にかける涙サラサラ濾過ルーンとか」
「いや、そう言うのはいいから照準が正確だった理由を教えてくれ」
細かい制御ができるルーンの話を得意げに始めたエルデは、エイルに話の腰を折られて少々ムッとした顔をしたものの、すぐに真顔に戻った。
「ウチがルーンをかけたあと、あの女はウチの背中を触ったんや」
「あ」
エイルもその時の事を覚えていた。
確かにキセンはエルデの背中に触れていた。エイルには去ろうとするエルデを呼び止めようとして思わず体に触れたとしか見えなかったのだが、エルデは間違いないと言った。
「今思えば触られたのは背中の左側、まさに心臓の真後ろやった」
エイルは納得していた。あの時に何らかの方法でエルデの背中に的を記したのだ。もちろん、あの木製の儀仗をそこへ誘導する為の。
「知り合いが一人も居ない異世界にあって信じられるのが自分だけ、

っちゅうのは想像以上に過酷なんやろな。使い途があるかどうかもわからへんようないろんなものを『もしもの時の為に』考えてたんやろな。たぶんあいつは、そういうのを無数に持って歩いてたんや」

エルデは想像して思わずつばを飲み込んだ。それはおそらく筆舌に尽くしがたい苦痛の日々であったに違いない。

少なくともエイル自身はそんな生活には何日も耐えられないだろう。それは確信を持って断言できた。

そして同時に、そういう状況にはならなかった自分を幸運だと確信もできた。

だからエイルは、その気持ちを言葉に出した。

「オレには、お前が居てくれてよかった」

「な、なんやねん」

「そう言いたい気分になったんだ」

「ふん」

エルデは顔を赤くすると目を逸らした。

「ウチかて、アンタのおかげで文字通り一命を取り留めたんや。礼を言うのはこっちの方や」

そっぽを向いたまま不機嫌そうな声でそう言うエルデを見て、エイルは思わず笑みがこぼれた。

「やかましい」

「オレ、何も言ってないぜ」

「その笑い顔がやかましいんや！」

「むちゃくちゃだな、おい」

「まあ、あの時は全く気付かへんかったから、アイツがいかに恐ろしい女かって事をしみじみ感じるわ。今思えば昔ヴェリーユでウチがやられたんは、あの青緑が入れ知恵したか売りつけたかした、ルーンの効果を吸い取る呪法入りの武器やったんやろな。それもたぶん、クレハの血を使った呪具やろ。なにしろ亜神のウチの治癒力が追いつかへんかったんやから。おおかた解析中の不完全なエアの術

式でも仕込んでたってとこやろな」
「なるほどな」
そう言われるとなんとなく納得ができた。ヴェリーユで自らの体を放棄しなければならない事態に陥ったのは「陣廊」の力だけではなかったのだ。
エルデはいったん言葉を切ると、しゃがんで血が付いたまま床に放置されている儀仗を手に取った。
「不幸中の幸いっちゅうやつかもな。ウチを貫いたこの儀仗にはそれがない。理由はいくつか考えられるけど、今言うたようにそんなもんが必要ないくらい正確に的に当てられるっちゅう自信があったからか、この装置を取り付けたんはもっとずっと以前で、呪法を編み出す前やったか、あるいは……」
「あるいは？」
「いや……何度も使えへんかった呪法なんかなって思て」
「それって……、材料とか原料に限りがあった、とか？」
「今になっては正解はわからへんけど、どっちにしろあんまり深う考えると不愉快な気分になるわ」
「そうだな」
エイルは材料という言葉を出した事を後悔していた。
それが何を意味するのかはわかりきっているからだ。
だから話題を転じる事にした。
「その儀仗はまるで『グングニルの槍』だな」
「ぐんぐにるの槍？」
「フォウの神話に出てくる大神が持つ槍でさ。どんな的でも狙いを外さないって言われてるんだ」
「ほう」
「あ、でも神の持ち物だから違うな。忌まわしいという事で言えば、むしろ『ロンギヌスの槍』か」
「それも神話か？」
「神話というより伝承みたいなものかな。フォウで一番有名な宗教

上の聖人が時の為政者の陰謀で死罪になった時、本当に死んだかどうかをその槍で突いて確認したっていう話があって……」
「その槍を使ってたヤツがロンギヌスっちゅう名前なんか？」
「まあな。でも、そんなものは後世のでっち上げさ。フォウの宗教なんてでっち上げ話の集大成みたいなもんだからな」
「でっち上げ話の集大成なんはマーリン正教会も同じ様なもんやな、少なくとも表の正教会は」
「でも、どっちにしろその儀仗は槍じゃないし、何よりお前は死んでない」
「そやな。なら、変なでっち上げ話が後世に残らんようにしとこか」
エルデはそう言うと、手に持った儀仗を無造作に放り投げた。儀仗は大きな風切り音を残し、一瞬後には部屋に立ち並ぶ貯蔵槽の一つに見事に突き刺さった。
貯蔵槽は見た目よりも薄い金属で覆われていたのだろう。エルデが投げた木の儀仗が深々と突き刺さっていた。
もっともいくら金属が薄いとは言え、エイルが投げつけた程度では貯蔵槽に弾かれて終わりだったろう。エルデの持つ力の強さがそこでも証明された事になった。

突き刺さった儀仗は、すぐに炎を発して燃え上がった。エルデが唱えたルーンが発動したのだ。青白い炎はしかしすぐに収まり、気がつけば儀仗は全て灰と化していた。

「さて時間も無い事やし、とっとと次の仕事の準備でもしよか」
「仕事って……」
エルデの言う「仕事」の意味はエイルにはわかっていた。ティアナ達がいる房に行くよりも先にエルデがやらねばならない事。
だがエイルの中には、それを許せない自分がいるのだ。
「賢者を処刑できるのは賢者やない」
そんなエイルの心の中をわかっているエルデはエイルの次の言葉

に先んじた。
「大賢者でもない。それは三聖、いや四聖に与えられた任務や。いや、義務やな。つまり、ウチがやらなあかんっちゅう事やろ？」
「《蒼穹の台》に知らせたらいいんじゃないのか？」
「どこにいるんかもわからへんイオスを探すんか？」
「それは、ラウに聞けば……」
「そのラウはどこやろな？　ハイデルーヴェンにいるとは限らへん」
「でも、いや、きっといるさ」
「居たとしよ。で、《淡黄の扇》が悪さしてるさかい、あとはイオスにあんじょう言うといてくれるかな、とか伝えたらええんか？」
エイルは言葉に窮した。それでいいじゃないかという思いと、そんな事は出来ないだろうという思いが交錯するのだ。自分がエルデの立場だったら……それを考えると頭から否定できなくなる。
「その間に、どんだけのニアレーがばら撒かれるんやろな？」
「ニアレーをばら撒く？」
「アルヴ狩りとか、あいつの暗示やろ。ニアレーを使って扇動してるんや」
「……」
「何の為なんかはウチにもわからへん。でも、そうとしか考えられへん。プロットは誰にニアレーを売ってたんや？　考えろ、エイル。ああいう麻薬を一番欲しがる奴は誰や？　どんな立場の人間が欲しがるんや？　どんな組織が欲しがるんや？　依存性の高い最悪な薬を使うて、いったい何をするんや？」
エルデのいう事は決めつけであった。だがエイルはそんなエルデを否定できなかった。しかし、それでも止めたかった。
「でも……」
何かを言いかけたエイルの唇を、エルデの人差し指がふさいだ。
「アンタは、ウチが何者かもう知ってるやろ」
そう言うエルデの顔は珍しく微笑んでいた。
「アンタがウチの名前……《白き翼》という名を知ってるだけやっ

たら、それでも良かった。でも、その名前の意味を知られたら、やるべき事はやらなあかんのや。ウチが現世に留まってるっちゅうのはそういういろんなもんに縛られる事でもあるんや」

そう言われてもエイルは腑に落ちなかった。

「ここまで言うても納得でけへん…っちゅう顔やな」

いつものようにエイルの気持ちを見透かしたエルデがそう言った。

「だって、そんなの理不尽だろ？　お前はお前じゃないか。誰に任命されたわけでもないのにわざわざ自分からそんな役目ひっかぶる必要なんてないじゃないか？　正教会とか、四聖とか、そんなの全部捨てて、自由に生きていいんじゃないのか？」

エイルの言葉に、エルデの笑顔は深くなった。

「アンタはホンマにやっかいな性格やな。何事も腑に落ちるまで追求して、納得せえへんと収まらへん。あまつさえ自分のかざす正論が唯一の正解やと信じて疑わへん」

「誰だってそうだろ？」

当たり前だ、という代わりにエイルはそう答えた。

その唇にはまだエルデの指が当てられたままだった。振り払う事は可能だろう。だがエルデはこの件についてエイルには何もしゃべって欲しくはないのだ。そしてそれは黙って聞け、という意味ではない。そういう意味なら、遠慮せずにエルデはそれを口にしているはずだった。それをせず、あえて指を柔らかく唇に当て言葉を制止する意味……エイルはそれをエルデの懇願だと受け取っていた。

できれば黙っていて欲しい。

エルデはそうエイルに頼んでいるのだ。エイルに対して口に出して素直にものを頼めないエルデの、精一杯の意思表示に違いなかった。

つまりそれはエルデ自身、自分が口にしている事を理不尽だとわかっているという証明のようなものなのであろう。

エルデのいつになく穏やかな表情は、彼女の諦念を表しているかのようであった。そしてそこにはエイルがまだ入り込めない「何か」

があるのだ。
「アンタが納得する様に言わなあかんみたいやな」
「納得させてみろよ。オレはお前が人を処刑する場面は見たくないんだ」
エルデは微笑んだままでつぶやいた。
「アンタがウチなら、きっと同じ事をするはずや」
「え……」
エイルは虚を突かれて絶句した。だがエイルの様子を見たエルデは、その話の続きを敢えて避けるかのように話題を元に戻した。
「ウチが四聖なのは決まり事や。ウチの意思は関係ない。ウチがやめた言うても、周りは……ファランドールはそんな事認めてはくれへん。そんなウチが四聖の身でありながら《淡黄の扇》を見逃した事が他の三聖……たとえば《蒼穹の台》に知られたら……どうなると思う？」
どうなるかと問われてもエイルにその答えがわかるはずもなかった。エルデとてそんな事は百も承知であろう。
エルデは美しい顔を近づけ、エイルの瞳の奥をのぞき込んだ。
「ウチは間違いなく《蒼穹》に粛正される。それが四聖同士の決まり事や」
そしてエルデはすぐに首を左右に振った。それはまるで次にエイルが口にしようとした言葉を先回りしたかのような仕草だった。
「残念ながら一対一では……ウチでは蒼穹……イオス・オシュティーフェに歯が立たへん。イオスにしてみれば、ウチなんか赤子の手をひねるようなもんやろな。ああ、言うとくけど、亜神はウチと同じ。みんな認証文だけでルーンを操る事ができるからウチに速度の優位性はないで」
その言葉は、エイルが持っていた謎の一つを、また消し去る効果があった。
エルデが特別なのはその通りだ。だがそれはエルデだけが特別なのではなく、亜神が特別だという事だったのだ。

違う言い方をするならば、認証文だけでルーンを操れる存在を亜神と呼ぶのだ。そう考えれば納得しやすい。

エルデが持つ異常さは、それがすべて亜神のもつ能力であるという事ならば、全ての疑問が解決する。

認証文だけで発動するルーン。

恐ろしいほどの腕力

並外れた回復力

そしておそらくは知能の高さも人間と同じであるはずがなかった。

理由はもちろん、エルデが人間ではなかったからだ。人を見下すような性格だったのは、本当に人を見下す立場にいたからなのだ。

空間と空間、つまりフォウとファランドールをつなぐ道を開くほどの呪法が使えたのも、神と名のつく存在ならばこそ可能だったのだろう。

異世界の人間を引きずり込む事ができたのも、人など超越した存在だったから可能だったのだ。

エイルは改めて目の前の恐ろしいほどの美貌を持つ少女の顔を見つめた。

エルデがこれほどまでに美しいのも、あるいは人ではないから……？

だがそれにしては、エイルの目の前のエルデの顔は、妙に弱々しくてその微笑は頼りなかった。

「亜神ってのは、座標軸も固定しなくていいんだな？」

エイルはふと浮かんだもう一つの謎を投げかけた。ルーンの法則に真っ向から反旗を翻すかのような無法っぷりの最たるものである。

「ああ、それ」

エルデは忘れていた、という風に目を見開いた。

「あれは確かにものすごい優位性ではあるな」

「亜神っていうのは本当にすげえな」

「いや……ちゃうちゃう」

「え？」

「あれはたぶん、いや間違いなくウチだけやな」
「おい、じゃあそれって……」
「嬉しそうな顔やな。でも、早まったらあかん」
エルデは片手を上げてエイルを制した。
「あれはウチがアンタの体の中にいた時だけの効果や」
「どういう事だ？」
「アタマ悪いやっちゃな」
「いや。いやいやいやいや」
「アンタの体がどんだけ動いても、『ウチの体』は微動だにしてへんかった、っちゅう事やん？」
「えっと……」
その説明でエルデが言いたい事はエイルにもわかった。
要するにファランドールのルーンという力の法則ではエルデの体はエイルの体ではなくあくまでも「本来の体」の事だということなのだろう。魂や意識がどこにあろうと、本体の座標軸が動かなければルーンが発動するというのだ。
「いや、それって……」
「結果が全てや」
「そうだけど」
「本人が一番驚いたんや。すぐにああそうか、ってわかったけど、実に便利やったわ」
確かに便利ではある。だが、だからといって普通のルーナーが真似して出来るようなものではない。そんな事ができるのも亜神と呼ばれる存在の持つ力が強大だからであろう。
「まあ、便利やったけど思いっきり力を使えるわけでなし、そもそも他人の体やと威力っちゅう点では今ひとつやったしな」
宿主の体でエルデが強いルーンを使い続けたら、本来の体の持ち主であるエイルの意識は強い意識に飲まれて消滅する。だからエルデにとって利点はあるにせよ、本来の体で制御に神経を使わず思う存分ルーンを放てる自分の体の方がいいといっているのだろう。

それはエイルに気を遣わせまいとするエルデなりの言い方なのかもしれなかった。

二人の間では、その後も何度か処刑に対する問答が行われたが、エイルはエルデの意思が曲がらない事を再確認したようなものだった。

エイルは最後に、うんざり顔のエルデに短い質問を投げた。

「確認しておくけど、お前にとってはこれが最後じゃないって事なんだな？」

《淡黄の扇》のような賢者が一人だけではない事はエイルにも容易に想像ができた。ランディと名乗る元賢者《淡黄の扇》は氷山の一角なのだ。

エルデはその質問を待っていたかのようにうなずいた。

「それがウチの役目の一つや」

言葉の強調があった。

「役目の一つ」

他にも四聖としての役目があるとエルデは言ったのだ。そしてエルデはそれを避ける事はないのだろう。

「なあ？」

「今度はなんや？」

「何かが根本的に変わったら、お前達がその役目とやらをやらなくて良くなるのか？」

言っている事がわからない。エルデはそんな表情でエイルを見た。

「オレにはやっぱりわからないけど、お前達が『そう』なんだとしたら世界が『そう』じゃない仕組みに変わればいいんじゃないのか？」

「アンタは時々突拍子もない事を言うなあ」

エルデは呆れたような顔をしたが、すぐに微笑を浮かべた。

「マーリンとやらがいて、そいつがそんな『決まり事』を作ったって言うなら、オレはマーリンに会ってやめさせてやる」

エイルが真顔でそういうと、エルデは思わず吹き出した。
「おかしいか？」
ムッとした声でエイルが抗議したが、エルデは笑ったままで頭を振った。
「大言壮語って言葉を知ってるか？」
「……そう思うのか？」
最初から取り合おうとしないエルデに向けるエイルの顔は、しかし真剣そのものだった。
「出来ないって決めつけてたら何も出来ないだろ？」
「あはは。そらそうやな。でも」
「『でも』何だ？　人間にはムリだって言うのか？」
「エイル……」
人間、という言葉にエルデの笑顔が固まった。
「亜神から見たら人間なんてつまんない存在なのかもしれないけどな」
「そんな事は言うてへん！」
エルデの形相が一変した。目を吊り上げたそれは、最上級の怒りをエイルに向けていた。
「ウチは！」
「わかってる」
エイルは気色ばんだエルデから目を逸らすと、視線を落とした。
「でも聞いてくれ」
うつむいたままでエイルがそう言うと、エルデはそのエイルの視線を追った。
「マーリンが本当にいるなら、機会があるって事じゃないのか？」
エイルが言わんとする事をエルデは理解した。エイルは本気なのだと。
「ホンマにマーリンがおると思てるんか？」
エルデの声に、怒りの色はもう見えなかった。

「オレってさ、その為にここに来たんじゃないかなって、今思ったんだ」
顔を上げたエイルは、そういうと右手の甲をエルデに向けた。
「ふん。まるで運命論者みたいな口ぶりやな」
「そんなんじゃないさ。ここにはオレがやりたい事がいっぱいあるって事さ」
「ふん。制御でけへんかったら、どうなるか知ってるんか？」
エルデは手甲を外されたエイルの右手の甲を注視したままつぶやいた。
「四聖のもう一つの仕事、まだ言うてなかったな」
「ああ」
「この際や。今話しとこか」
そういうと、エルデはエイルに歩み寄り、その右手の甲を両手で包み込むようにした。
「四聖の最も重要な仕事。それは監視や」
「監視？　何の？」
「ホンマにとことんニブいやっちゃな。『四聖』は『四精』の監視者なんや」
エイルはそう言われても、まだ何の事かが理解できなかった。
「それぞれに担当があってな。たとえば《蒼穹の台》は水精を、《黒き帳》は地精を監視するんや」
「水精……地精って……それってつまり？」
エイルはようやくエルデの言葉の意味を理解した。
「エレメンタルを監視し、場合によっては消滅させる。それが四聖、ひいては正教会が作られた理由や」
エルデの言葉の後、沈黙が流れた。
エイルは、エルデに握られた右手の甲が熱くなってくるのを感じていた。右手の向こう側には美しい黒髪の少女がいて、射るような眼差しでエイルを見つめている……。
「まさか……」

エイルの声はかすれていた。もちろんエルデはエイルの心の中はお見通しだったのだろう。すぐに首を横に振った。

「ウチが監視するんは風のエレメンタルや。アンタと違う」

そして包んでいたエイルの手から離した。

エルデのその言葉が持つ意味は大きかった。そしてそれがわからぬ程、エイルは馬鹿ではなかった。

「それって、オレの担当はいないって事か？」

エルデは改めて自分の手の甲に目をやった。

エレメンタルの徴。

そこには複雑な文様が痣のように浮かび上がっていた。

「時のゆりかご」で自分の手の甲に浮かび上がっている痣を見つけた時、不思議な事にエイルはすぐにそれが「エレメンタルの徴」なのだと悟った。

だからファランドールに留まる事を決めたのだ。

これは誰にも話してはいない理由である。話せる訳がなかった。だから違う理由を口にして相手を納得させていたのだ。だが、もっともらしく口にした理由も、また本心だった。とは言え一番大きな理由は自分が「エレメンタル」である事を知ったからなのだ。

「教えてくれ」

エイルの呼びかけに、エルデは何も言わずただエイルを見つめ返した。

「《深紅の綺羅》はルルデ・フィリスティアードが炎のエレメンタルだって知ってたんだな？」

エルデはゆっくりと首を左右に振った。

「ウチは《深紅の綺羅》やない。そやからそんな事はわからへん」

「エルデ」

「話は最後まで聞き」

「……そうだな」

「いつか話してくれたアンタの夢の話を聞いて、ルルデがエレメン

タルやったんやろな、っちゅうのはなんとなくわかってた」
　エルデがいう夢の話とは、アプリリアージェとテンリーゼンがルデと戦った情景を夢で見た、という話である。エイルが説明したルルデの最期の場面を、エルデは「発現」と言っていた。
「《深紅の綺羅》とルルデに関係があったっちゅう事をジャミールで初めて聞いて、ルルデが炎のエレメンタルに違いない、とは確信したけどな」
「《深紅の綺羅》がルルデ・フィリスティアードをジャミールに預けたのは、そういう事だったんだな？」
「そやな。《深紅の綺羅》、いやクレハはルルデを隠れ里に預けて、文字通り現世から隠そうとしたんやろな。それはある意味成功したし、失敗したわけやけど……。いや成功なんか？」
「この徴はクレハ・アリスパレスという亜神に守られていたって事か」
　そう言ってやや困惑した色を浮かべるエルデに、エイルはもう一つ浮かんだ疑問をぶつける事にした。
　いや。それはもう疑問ではなく、エイルにとっては事実の確認作業に過ぎなかった。
「ついでにもう一つ教えてくれ」
「……」
　エルデは答えなかった。
　もちろんだからといってエイルは続く言葉を止めるつもりはなかった。
「教えてくれ。オレはいったい誰なんだ？」
　エイルの声は静かだった。だが二人を囲むエーテルがエルデに呼応して、瞬間的にその色を変えたかのように張り詰めた気が充満した。
　改めて確認するまでもなかった。エルデ・ヴァイスの形相は緊張で強ばり、その目はさらに吊り上がってエイル・エイミイに注がれていた。

# 第七十話　ルルデの秘密

もうわかっていた。
エイル・エイミイは知っていたのだ。
認めたくはない。
だが散らばった欠片を一つ一つ繋いでいくと、できあがるものはただ一つのものなのだ。形を取り戻した「それ」を目の前にして本来とは違う名で呼び続けるには、エイル・エイミイ、いやマーヤ・タダスノの性格は真面目に過ぎた。
そして何より、それは今初めて気付いた事ではない。
だからエルデの口から出るであろう真実を受け入れる準備はできていた。
いや、もうとっくに受け入れていたのだ。

「エイル・エイミイ」
エイルが噛みしめるように、なぞるように自分の名をゆっくりと口にした。
「これはお前がオレに付けてくれたファランドールでの名前だ。ここではみんなその名前で呼んでくれる」
エルデは無言だった。
「そしてフォウでのオレはマーヤ・タダスノ。どっちの名前もオレを特定してくれる。そしてオレをその名前の人間だと認めてくれる名前だ。好き嫌いじゃなくて、それはオレを呼ぶためのたった一つのルーン……認証文なんだとオレは思ってる」
落ち着いてそう口にするエイルの視線を、エルデは自ら切った。
そしてまるで無防備に戸惑いとも恐れとも怒りともつかない気配を部屋中にまき散らしていた。
要するにエルデの情緒はきわめて不安定だったのだ。
エルデが纏うエーテルは、ファランドールに暮らす普通の人間、

つまりエーテルを敏感に察知できる者達なら、おそらく一秒たりとも耐えられない程の嫌気に満ちていた。

エイルはだんだんわかっていた。フォウの人間とファランドールの人間は、エーテルに対する感受性が全く違う。エルデのいわゆる気当たりに耐えられるエイルがその証拠とも言える。さらにエイルと同じもう一人の異世界人であるキセン・プロットがエルデのエーテルの変化に耐え続けられたのもその根本的な感受性が鈍いからに違いなかった。

おそらくエーテルに対する感受性が平均よりかなり高いと思われるフェアリーがこの場にいたとしたら、絶望的で暗澹たる気分に押しつぶされるに違いなかった。

すでに長い時間をファランドールで過ごしたエイルはそれなりにエーテルの影響を受けるようにはなっていた。だからエルデのエーテルのその時々の気分はもうはっきりとわかる。

もちろん逃げ出したいとは思わなかった。エルデの反応はエイルの予想通りなのだ。そしてなにより、どんな気をまき散らそうが、エイルにとってエルデは特別な存在に変わりない。逃げ出す事などあり得ないのだ。

言葉に出して何も答えないエルデだが、エイルにとってもはや饒舌とも言えるエルデの反応だった。

「でも、この体はオレのものじゃない」

エイルはそういうとゆっくりと自分の体を見渡した。

左腕。

左手。

その指の先。

そのまま視線を落とすと、それをつま先から徐々に上方に移動させ、右腕を通して右手に行き着いた。

そして……右手の甲。

そこにあるのは「エレメンタルの徴」と呼ばれる複雑な文様を成

す痣。
「『時のゆりかご』でオレが記憶を取り戻した後、自分の体に対してけっこう違和感があってさ」
エイルの声はエルデを責めるようなものではなかった。むしろ普段の軽口のような明るい調子と言ってよかった。
「お前は元々オレの体にあった傷や痣なんかを全部治したり消したりしてくれたって言ってたけどさ、手相や指紋までいじらなかっただろ？」
エイルはそう言って両手の掌をエルデに向けた。
「プロット・フォーの学校には変なヤツが多くてさ。頼みもしないのに無理矢理手相を見ては、別に知りたくも聞きたくもないその日の運勢を告げるのが趣味っていう、結構はた迷惑な知り合いがいたんだ」
エイルはそういうと思い出し笑いをした。
「くくく。そいつが初めてオレの手相を見た時になんて言ったと思う？『あなたは相当長生きします』だぜ。それを真面目な顔で言うんだ。おかしいだろ？　だって、オレはその数日後に死んだんだぜ？　あいつ、それでも懲りずにまだ手相占いとかやってるのかな」
本当におかしそうに笑うエイルに、しかしエルデはいまだ反応しなかった。
「それからさ、オレって元々利き目は左なんだよ。でもこの体は右目が利き目でさ。ついでに言うとこの顔はオレが持っている記憶の中の自分の顔とは微妙に違うんだよな。正直言ってフォウのマーヤ・タダスノの方がちょっとだけ男前だと思うぜ。まあ、こっちの方は気のせいかも知れないけどな」
エイルはそう言いながら左右の目を指さしたり頬を抓ったり眉をなぞったりしておどけた様にそう言った。
「でも、勘違いしないでくれ。この体がマーヤ・タダスノのものじゃなくて、ルルデ・フィリスティアードのものだとしても、オレはもうそんなのどうでもいいんだ。いや、どうでもいいって言うのと

は違うな。なんというか、オレが言いたいのはつまり、本当にお前には感謝しているって事をだな、改めて言いたいというか、その……そもそもオレの体は事故でめちゃくちゃだったんだろ？」

エイルはそこまで話すと、間を置いてエルデを見つめた。

エルデはそれを受けて観念したのだろう。小さなため息の後で、ようやく口を開いた。

「ウチの魂の器たるフォウでのアンタの体は、修復不能やった」

そこに感情の高ぶりは感じない、普通の調子の声だった。

エルデもようやく自分の中にある様々な思いに折り合いをつけたのだろう。

「アレを有り体に言うと即死体やな。そりゃもう見事に死んでたな。お嬢ちゃんのネスティが見たら一週間は食事がのどに通らへんくらいの惨状やった」

エイルは慌ててエルデに手を突き出すと、両手を振って制した。

「あ、オレとしても自分の事故現場の状況説明を詳細にされるのはちょっと……」

「ふん。まあ、要するに事故の瞬間を見てたから、アンタがそもそも助からへんのはすぐにわかった。いくらウチでもけが人は直せるけど、完璧に損傷した死体を生き返らせる事はできへん。そもそもウチ自身が体のない意識体みたいな状態やったからできることは限られてたんやけどな」

「それで、オレはその後どうなったんだ？」

エルデは難しい顔をして腕組みをすると目を閉じて見せた。だがすぐに首を横に振った。

「やっぱりウチにもわからへん。気がついたらウチはもう、アンタのその体に入ってたんや。で、頭の中で呼びかけてたら、アンタの意識が目を覚まして、気がついたらウンディーネの海岸近く……エルミナのあの丘におったっちゅう訳や」

「何だ、お前がルルデの体とオレの意識をそれぞれ引き上げてくっつけてくれたわけじゃないのか」

「アンタの体がルルデ・フィリスティアードのものやとウチ自身が認識したんはアンタの夢の話を聞いてからや。その夜に、ウチは慌ててアンタの体中の傷やほくろや怪我や痣を徹底的に消しまくった。そもそもそういうもんから違和感を感じへんように記憶は封じてたんやけど、何かの拍子に気づかれるとマズイ思て、念のためにな」
「オレが真実を知って絶望でもすると、意識が消滅しかねない、って事か」
エルデはうなずいた。
「ありがとな。オレの知らないところで相当気を遣わせたようで、悪い」
「べ、別にウチは……」
「まあ。そのおかげで、その翌日シェリルに会った時に事なきを得たんだよな」
「そういうことやな。何が幸いするかわからへんな」
「そうか……」
エイルは小さくそうつぶやくと目を閉じた。

「エイル？」
急に黙り込んだエイルに、エルデはおそるおそる声をかけた。
その頃には、エルデの混沌とした気は収まっていた。だがエイルの態度に今度は不安が頭をもたげてきたのだろう。今度はあっという間に部屋中が不安という気分の苗床に変化した。
「よしっ」
かけ声と共にエイルは目を開いた。
「え？」
「これで、もやもやしてたものが全部綺麗に取っ払われた」
「エイル？」
「だから、これからはつまらない事を考えずに、思う存分ファランドールで生きていけるって感じだ」
そういうとエイルはエルデに向かってニヤリと笑いかけた。

「都合のいい話だけどさ、生まれ変われたような気分になった」
エルデの表情がゆっくりと緩むのが、エイルにはわかった。
唇を噛み、目が潤み……
そんなエルデを見てエイルは改めて思う。エルデ・ヴァイスの本質は普通の少女と、いや普通の人間と何も変わらないのだと。
「そういう事で、オレはやれるだけの事を思いっきりやってやる」
エイルが何を言おうとしているのかをエルデは思い出した。
「まさかとは思うけど……」
エイルの一言がエルデの表情を曇らせた。
「炎のエレメンタルの力でファランドールを自分の思うとおりに制圧出来る、とか思てるんやないやろな？」
エイルはしかし、エルデの質問を待っていたかのように不適な笑い顔を見せた。
「だってオレの監視者はもう居ないんだろう？もっとも監視者っていうのが何をするのかわからないけど、大体想像は付くからな。守護者や保護者じゃなくて『監視者』だもんな」
「確かに」
エルデは素直にうなずいた。
「炎精の監視者《深紅の綺羅》はもうこの世にはおらん」
「だったらオレの力を制御できるヤツはもうファランドールにはいないって事だろ？」
「その口ぶりやと、本気でそう思っているわけやなさそうやな」
当たり前だとエイルは言った。
「他の三聖、いや四聖が補助的にその役目につく、とかそんなところだろ？」
エルデはうなずいた。
「今現在やと、クレハの死を知っている四聖はたぶんウチだけやろから、ウチが炎精の監視者の代理人ってわけや」
「だったら余計に好都合じゃないか」
「もっともウチは空精の監視者やから、風のエレメンタルの監視が

最優先やけどな」
「そうか。そうだったな……って、考えてみるとお前ってネスティがエルネスティーネ王女だってわかった瞬間から、監視してないとダメだったんじゃないのか？」
「そやから、そういうのはもう無しの方向で、アンタをフォウへ返した後は時のゆりかごから出んようにしよ、と思てたんや」
「それって四聖としては思いっきり怠慢じゃないのか？」
「そやからウチは《白き翼》とか名乗らへんかったやろ？　四聖とか、もう存在してへん事になってるんやからええねん。ちゅーか、アンタの体を借りてる時はそれどころや無かったしな」
「そう言えばそうだな」
「風のエレメンタル……空精の監視なんかより、そっちの方がウチとしては優先事項、いや、最優先事項やったんや」
エルデは憤然とした口調で一気にまくし立てていた。
「それに《白き翼》を口にでけへん理由はそれもあるけど、そやのうてウチの持ってる能力の……」
そしてそこまでしゃべったところでエルデは目を見開き、驚いた表情で自らの口を両手で覆った。
「何だよ？」
あからさまに「しまった」という顔のエルデにエイルはすかさず突っ込んだ。
「また秘密か？　秘密なんだな？　オレにも言えないようなとんでもない秘密なんだ」
「そ、そやないけど……いや、まあ秘密なんやけど、アンタに隠すとかそういうつもりやない……んやけど、今は言いとうない」
エルデはそう言うとエイルから顔をそむけた。
「まあいいさ。その気になったら言ってくれ」
エイルはそう言って肩をすくめた。
「どっちにしろオレは力に任せてごり押しするつもりはないぜ」
「ほな、どうするつもりや？」

「オレ達には仲間がいるじゃないか」
エイルの言葉に、エルデは眉をひそめた。
「シルフィード王国の王女……いや、実質国王やな……要するにエルネスティーネを利用するっちゅう事か？」
「利用とか言われるとちょっと後ろめたい気分になるけど、それでもネスティならオレの考えに賛同してもらえるような気がするんだ。だとしたらこれって力や武力で強引に世界を変えるんじゃなくて、政治力をつかって平和に大きなことができるんじゃないか？　オレ一人じゃどうにもならない事でも、二人のエレメンタルの力に加えて一国の国王やその側近がみんな一緒になって本気で動けば……」
「あのな……」
心底呆れた、という感情を大げさに表す為に、エルデはわざとらしいため息をついて首を横に振った。
「アンタはアホか？」
「アホで悪かったな！　このまま何もしないよりいいだろ？」
「一つ！」
ムッとした顔のエイルに、エルデは人差し指を立てた右手をその眼前に突きだした。
「な、なんだよ。またかよ」
「一つ。ウチのために世界を変える必要とか、ない」
エイルの突拍子もない考えに呆れながらも、エルデはエイルのやろうとする事の根本の目的を見失ってはいなかった。
「いや、オレは」
「二つ」
「おいおい」
「『お前が良くてもオレがいやなんだ～』とかいう台詞は禁止や」
「う……」
エイルの反応を見たエルデの大きな目がさらにつり上がった。エルデとしてはまさかと思っていたのだが、図星だったのだ。
エルデの声は一段と大きく、そして厳しさを増した。

「三つ。アンタの考えは甘すぎる。武力やろうが政治力やろうが上から抑えるような『力』を使てエイヤで世の中の仕組みを大幅に変えるっちゅうのは同じ事や」
「いや、違うだろ？」
「人が死なへんからか？」
「それは、そうだろ？　一番重要な事じゃないか」
エイルの抗議はエルデの想定の範囲内であろう。それほどエイルの素案は単純な動機で語られたものだという事である。
「人が死なへんかったら何してもええんか？」
「いや、それは話が違うだろ？　すり替えるなよ」
「同じ事や。考えてみ？　今まで白かったもんが明日から黒になります、とか言われて文句を言わへんヤツが居るか？　たとえば横行してる贋金（にせがね）対策を根本的に変えるために、貨幣単位や流通できる貨幣自体を変えるとする。単純に貨幣を交換するにしても、善意の人間が掴まされた贋金は普通に考えて換金とかでけへん。むしろ疑われる。新しい貨幣を作っても、またぞろ新しい贋金が生まれるだけやしな。そんなんを避けるために今度は頭のいい奴が貨幣経済自体を根本から変える仕組みを考え出したとしよ。たとえば物理的な貨幣を廃して、今ある貨幣はもとより、本位制の元になってる金とか銀とかを無価値にするんや。宝石なんかにも貨幣価値を持たせる事を禁止する。ただやったらええけど金額つけて取引するのは御法度とかな。これぞまさに白から黒に、やろ。それってすぐにできると思うか？　そんなん考えるまでもないな。何の準備期間もないのに五年や十年でそんな事ができるわけがないやろ？　すぐにやるには今の経済の仕組みをいったん全部『無かった事』にして、一からやったらええ。圧倒的な権力なら簡単にできるかもしれんな。で、それは混乱なしにできるんか？　誰も不幸せにならず、何の事件も起こさず、けが人も死人も出ず、粛々と変わると思うか？」
「いや……思わないけど、その例えはどうなんだ？」
「一事が万事や、言うたやろ？　世の中の仕組みを変える？　価値

観だけが一瞬で変わると思うか？　マーリン教は廃止します、で人々の信心がなくなるんか？　それとも宗教弾圧を厳格にやるんか？　それは戦争にはならへんかもしれんけど、争いは生まへんのか？　人は死なへんのか？」

「……」

「四つ」

「まだあるのかよ」

「さっきと一緒や。何度でも言う。それにこれは一番大事な事や」

「なんだよ？」

「それでも……それでもウチはアンタのその気持ちだけは、ホンマに嬉しいと思てる……」

まさにそれはさっきのやりとりと全く同じ展開だった。

違うのは、さらにもう一つエルデが付け加えた事だった。

「五つ。アンタのその気持ちは否定せえへん。アホな考えやけど、その行き着く先自体は、たぶん多くの人間が望んでる未来でもあると、ウチも思う。いや、思いたい」

「エルデ……」

「せやから、どっちにしろリリア姉さんらには合流はせなあかん」

そう言うとエルデは床に落ちていた自分のマントを見つけ、そっと拾い上げた。

はらりとそれを纏う。薄茶色の軽いラシフのマントは、赤黒い血で染まったエルデの服をすっぽりと覆い隠した。

「そうだな」

「で、その前に今やる事はやる」

エイルはそれには答えなかった。

エルデの決心は誰にも変えられないだろう。長いつきあいである。エイルはもうそれを受け入れる事にした。

ならばエイルもやる事は一つだった。今は戦おうとしているエルデを全力で守りきる事だけである。

今が未来に繋がるのだ。その未来を引き寄せるためにもエルネス

ティーネ達と合流しなければならない。その前に障害があるなら排除するだけである。
やる事を済ませて、出来るだけ早くティアナの事を知らせなければならない。

だが、そこまで考えたところでエイルは愕然とした。
（誰に何をどう説明したらいいんだ？）
「先の事は後で考えたらええ」
エイルの心の中を読んだようにエルデが声をかけた。
「今から、ウチと一緒に戦ってくれるんやろ？」
「ああ」
エイルは頭に浮かんだ悩ましい問題を振り払った。先送りではあるが、これは積極的な先送りだと自分に言い聞かせて。

「あ」
キセンに教えられたあの忌まわしい扉の前でエルデは立ち止まると、何かを思い出したようにそう声を出した。
「何だ？」
「肝心な事を言うのを忘れとった」
「だから何だよ？」
「うーん。今言うべきかどうか……」
「いや、そういう思わせぶりな事を言われて聞かずにいられるか！」
「そやかてアンタ、この話聞いたら、また悩みの種が増えるで。ハゲるで？」
「いやいやいやいや。そんなすぐにはハゲないから」
「ハゲるってところは否定せえへんのやな？」
「いや、だからそう言う話じゃなくてだな」
「今までの流れでアンタは気付かへんのか？」
毎度毎度の事ではあるが、軽口の流れの中でエルデがぽつりと告げる重い言葉に、エイルは虚を突かれた。

「え？」
「《深紅の綺羅》クレハ・アリスパレスは、ルルデ・フィリスティアードの母親かもしれへん……ちゅうことに、や」
「……なんだって？」
「もちろん確信はない。単なる可能性の問題や。本当のとこはウチにもわからへん。最後の方はクレハと一緒に行動してた節があるエロハゲ師匠に聞いたらわかるかも知れへんけど、どうする？」
「シグ・ザルカバードはクレハと仲がいい、というか、親交があるってことか？」
「アンタはホンマにボンクラやな。ジャミールでの話、聞いてへんかったんか？」
「え？」
エルデに言われて思い出した。
確かに三聖《深紅の綺羅》と大賢者《真赭の頤》の二人がルルデをジャミールの隠れ里に預けて、その後も何度か訪れてルルデの様子を見たり養育の見返りとして里にいろいろと援助したという。その後すぐにクレハ側に何らかの事件とも思える緊急の事情が発生し、ルルデはあろう事かシエナ・フィリスティアードという反政府ゲリラ組織の指導者の下に預けられた。
戦いの方法と剣技を学べる人物の元へ、という強い要請があったとは言え、我が子を守る為の場所としてふさわしいとは思えない。
だが、エイルのその考えはエルデの賛同を得られなかった。
「ルルデが炎のエレメンタルやとわかってたら、それも『あり』やとウチは思う。そもそもクレハは亜神や。人間の母親が子供に注ぐ普通の慈しみと全く同質の価値観で子育てをするかどうかは疑問やろ？」
エルデの言う事はもっともではあった。何より亜神が亜神について語るのだ。人間が想像するよりも本質に迫る意見である可能性は高い。
「まあでも、当初ジャミールに隠したのはあらゆる外敵から守る為

やろうな。でもそれがうまくいかへんとなると、今度は守るよりも積極的に『発現』へ仕向けたっちゅう事やと思う」

エルデが時々使う言葉、エレメンタルの「発現」とは、本来持っている力の最初の起動の事を指している。過去の言い伝えによれば「発現」には決まった発動条件などはなく、多くは感情の高ぶりが頂点に達した時や、大きな危険に遭遇したり窮地に陥った時に本人の意思とは関係なく思ってもみないような、つまりは制御不能の力が生まれる事だという。

エイルの見た夢が、ルルデの体に刻まれた記憶なのだとしたら、ルルデは発現と同時に命を失った事になる。

発現後は強大な力を得る事にはなるのだが、その制御が問題なのだという。それはまさに個人差が大きく、制御出来ぬまま自己崩壊するエレメンタルも少なくないという。

エルデがそんな話をするという事は、つまり正教会は連綿とエレメンタルを追い続け、相当緻密に把握している事を意味する。

そしてその記録を知るものは賢者と呼ばれるほんの一握りの「表」に出ない存在なのである。

「エレメンタルにとって、生き伸びるにはいくつか試練がある。最初の関門は文字通り『徴』の存在や。生まれた時には痣がある。そこで妙な人間に見つかってしもたら、ある意味悲劇やな。痣はしばらくすると消えるけど、高熱が出たり感情が高ぶったりすると浮かび上がる。まあ、成長したら隠すのは比較的容易やけどな」

「これ消せるのか？」

エルデはうなずいた。

「たぶん。ま、その辺の力加減についてはウチがおいおい教えたるわ」

「頼む」

「で、次の関門が『発現』や。アンタも夢でルルデが『発現』する現場を見たんやったら想像つくやろけど、たいてい『発現』は悲劇を伴う」

エルデの言う事はエイルにもよくわかった。あれほどの力が膨らんだら、周りに居る人間はただでは済まないだろう事は容易に想像できる。

「ルネ・ルー……」

エルデは唐突にルネの名を口にした。脈絡がないわけではない。ルネは水のエレメンタルだと言われているからだ。もっとも水のフェアリーとしての力は相当強いものを持ってはいるが、これぞエレメンタルという程の強大なものをエイルはまだ目の当たりにはしていない。

「ルネは水のエレメンタルなんだよな？」

エルデはその問いには答えなかった。

「水精、水のエレメンタルの発現と言われる事件が、ウンディーネで二十年以上前にあったんやけど……」

「二十年って、そんなに昔の話なら、あのルネは違うって事か？」

「違うやろな。どっちかが」

「え？」

「ルネが水のエレメンタルやないか、水のエレメンタルの『発現』と言われている事件が『発現』やなかったかのどっちかや」

「なるほど。お前はどう思ってるんだ？」

「わからへん。ルネが持ってる力が相当に強いっちゅうところまではわかるけど、エレメンタルかどうかの判断はウチにはでけへんな。あの子のエーテルには乱れがないし、波動がきれいすぎるのは確かや。エレメンタルの力を完全に自分のものにして制御できてるんか、そやなかったら……」

「そうじゃなかったら？」

「まあ、どっちにしろハロウィン先生が何かを隠してるのは間違いない」

「え？」

「どう考えてもうさんくさいおっさんやろ？」

エルデは呪医という触れ込みのハロウィンが、色々と知りすぎて

いる事を指しているのだ。そもそも単なる呪医が水のエレメンタルと同道している事が謎と言えば謎なのだ。

「話がルネの事に逸れてもうたけど、ウチが言いたいんは、アンタはクレハが母親やとして、複雑な気持ちやないのんか？という事や」

エイルはエルデのその言葉を聞いて、心にズキンと響く痛みを感じた。だがそれは辛い痛みではない。何か言葉にできない、そしてとても大切なものに触れたような感覚だった。

エルデは思い出した様にクレハ・アリスパレスがルルデの母親かも知れないという話を口にしたが、それはエルデ一流の嘘で、全ては計算の上だったのだろう。

今まで謎だった事が次々とエルデの口から告げられた。エイルは心の中にあったもやもやしたものが、それでほとんど綺麗に消失するのを感じていた。

そしてその上で最期に「母親説」を告げたのだ。現時点では答えがないままに。

シグに聞けばすぐに答えが見つかるかも知れない。だがエルデはそれをしない。つまりエルデはエイルに考える時間を与えたいのだ。少なくともエイルはそう感じた。

いや、考える時間ではない。感情を整理する為の時間がエイルには必要だろうと言うのである。言い換えるならば、エルデが口にした可能性、つまりクレハがルルデの実の母親であるかもしれないという話は、可能性ではないのだということである。

複雑きわまりない思いがエイルの頭の中を駆け巡った。

クレハ・アリスパレスがルルデの生みの親であったとしても、それはエイル・エイミイことマーヤ・タダスノの母親ではない。

だがエイルの体はルルデのものである。その母親はエイルにとって赤の他人と言い捨てられるのか？

クレハの体をスフィア化するにあたり、エルデは《黒き帳》をどこかにつなぎ止めている結界を維持したまま持ち運ぶためだといった。

だが、それだけではないのだ。
その時が来て、望めばエイルが母親と対面できるようにと、その体だけでもスフィアに封じ込めようとしたのである。

「ほんとにお前ってヤツは……」
しばらく考えた末、エイルの口をついて出た言葉はそれだけであった。
エルデは片方の口の端だけで笑うと、扉の前で小さなスフィアをかざした。キセンが二人に渡した通行の為の鍵となるスフィアであった。
「この話は落ち着いた後でじっくり考えよか」
「そうだな」
エイルはうなずいた。
「ほな行こか」
思うところは色々ある。だが、エイルはもう迷ってはいなかった。
「キアーナが待っているって言ってたけど？」
「あれから結構経ってるしな。ペンドルトン君、相当待ちくたびれてるやろなあ」
エルデはそう答えたが、エイルが心配しているのはそういう事ではない。
キアーナにキセンの事を尋ねられたらどうするつもりなのか？
エイルはエルデにそう聞こうと思い、口を開きかけたが、すぐに閉じた。
エイルとエルデが事の顛末を告げる必要はない。キセンはただ消えた。それだけなのだ。エルデがラシフのマントで体を覆い隠したのもつまりはそういう事だ。
黙っている事。
おそらくそれが二人が選ぶ最良の道であろうと思われた。

果たして「そこ」にキアーナ・ペンドルトンはいた。
さすがにソファにもたれて眠り込んではいたが……。
エルデはキアーナの姿を見ると、すぐに駆け寄ってその腕をとり、目を閉じて何かをつぶやいた。
回復ルーンをかけたわけでないことは、例の羽毛のようなものが降ってこない事でエイルには想像がついた。
「ちょっと体調を調べさせてもろただけや」
怪訝な顔をするエイルに、エルデはそう説明をすると、首を横に振った。
「かわいそうやけど、たぶん完全に汚染してもうてる」
エルデの言葉が意味するところを、エイルは瞬間的に理解した。
エイルがすっかり忘れていた事をエルデは覚えていたのだ。おそらくキアーナが寝ていようと起きていようと、エルデは真っ先にそれを調べたに違いない。
「ニアレー……か」
エルデはうなずいた。
「お前ほどのハイレーンなら、元に戻せるんじゃないのか？　その、ニアレー麻薬の中毒症状を」
だがエルデは力なく首を横に振るだけだった。
「正教会がなんでニアレー麻薬を血眼になって撲滅したか……その理由がこれや」
エルデは「これ」と言いながらもう一度キアーナの手をとった。
「実は半信半疑やったけど、嘘やなかった。ルーンや呪法では元に戻せへん麻薬。それがニアレーなんや」
エイルは唇を噛んだ。
「歴代の四聖がいろいろ試みても治癒の方法が見つからへんかったっちゅう噂は本当やったな。かくいうウチでもこれはホンマに無理や」
「無理って……」
「見たところ、悪いところが全く見つからへんねん」

「え？それって」
「悪いところが見つからへんのに、治療ができるんか？　どこをどうしたらええのかわからへんねんで？」
　わからない……。そんな言葉がエルデ・ヴァイスの口から出ようとは、エイルは夢にも思わなかった。
「キセン・プロットが言うとった話は嘘やないと思う。クレハの血と体組織の一部を人間に移植して、たまさか何かが合致した場合に不安定ながら能力がかさ上げされる。でもそれは相当な苦痛を被験者に与え、それを抑えるためにはニアレーをある意味薬として投与し続けるしかない」
「それじゃ……」
「それでも……それでも一つだけ、キアーナを助ける方法がウチにはある」
　エルデはそう言うと立ち上がった。
「助かるのか？」
　エルデの一言で、エイルは絶望の淵から浮かび上がったような気分になった。
「心配はいらん。ウチが助けたる」
「やっぱりお前はすごいな」
　そう言うエイルの顔はうれしさで輝いていた。だがエルデはエイルと視線を合わせようとはしなかった。
　エルデは逸らした視線を部屋中に巡らせた。それはキアーナの件にはもう興味がないと言った風情であった。つまり「この話題はここまで」とエルデは無言で宣言したようなものである。
「さて」
　一通り部屋の内部を見渡したエルデは自ら話題を転じた。
「それより、ここはどこやろな」

　キセン・プロットの鍵スフィアを使って工房の「扉」を開いたエイルとエルデは、殺風景な小部屋にいた。

扉とは名ばかりで、やはりエルデの言う「空間転移」のようなルーンでつながれた部屋のようだった。
木の床、途中まで腰板が貼り付けられた白っぽい漆喰塗りの壁。殺風景だが重厚な造りの部屋である。窓はなく、扉も一つしか無い。おそらくその扉はキアーナが入ってきた扉であってエイル達がそれを開いて部屋に入ったわけではなさそうだった。
「一方通行やな」
鍵スフィアをかざしながら壁を一当たり吟味していたエルデはそう結論づけた。
「プロットの工房には最初のエーテル体に通されたあの部屋からしか入れないって事か」
「出口は複数作ってるけど、入り口は一つ。まあ、用心深いアイツらしい仕組みやな」

エルデ達がそんな話をしているうちに気配を感じたのか、キアーナが目を覚ました。自分がうっかり眠り込んでいた事に気付くとキアーナは平謝りに非礼をわびた。
根が真面目な性格なのであろう。気にするなと言うエイルに対して執拗に詫びを重ねるキアーナに、とうとうエルデが小さな雷を落とした。
「ああもう、鬱陶しい！　夜中に何時間も待たされて眠うならへんヤツが居ったら、このウチが綺麗さっぱり灰にしたるさかい、ここにつれて来ぃや！」
エルデの剣幕に押され、キアーナはようやく口をつぐんだ。
「ちゃんと起きて待ってるヤツをなんで灰にするんだよ？」
「そこまでして待たれてても、何か鬱陶しいやろ？」
「え？　城や砦の見張りとか、お前にかかったらみんな灰かよ！」
「……灰やな」
「いやいやいやいや」
「ともかく、や。キアーナ！」

「はい」
「さっそくやけど案内してもらおか」
「そ、それはもう」
言うが早いか懐からエルデ達と同じような鍵スフィアを取り出すと、キアーナは部屋に一つだけある扉に飛んでいった。
「あ、言うとくけど地下房はあとや。その前に連れて行って欲しいところがあるねん」
エルデはそうキアーナに声をかけると、エイルに目配せをした。
「え？」
振り返ったキアーナに、エルデはこう告げた。
「プロット教授長から頼まれて、ある人に会わなあかんのや。新教会の偉いさん、っちゅうたらわかるか？」
キアーナはうなずくと木製の扉に手をかけた。
「それならこちらです」
先導してくれるということであろう。
エルデはエイルに小さく目配せをするとその後に続いた。
キアーナがキセンとランディの会見場所を知っている事をエルデがわかっていたわけではない。だが、エルデはほとんど確信していたに違いない。
もちろん可能性の問題であるが、もしキアーナが知らなかったとしても、違う手を考えていただろう。
わかっていた事ではあるが、エイルはまたしてもエルデの機転に苦笑せずにはいられなかった。だがそれは相手に向けた苦笑ではない。キアーナに会った時に打つ手を、何も考えていなかった自分に対して苦笑してみせたのだ。
エイルは軽く唇を噛んで笑いを止めると、長い黒髪をなびかせて歩く少女の後ろ姿を追った。

# 第七十一話　ヴィーダ

「実際問題、この建物はいったい何なんだ？　オレ達はどこに出たんだよ？」

キアーナ・ペンドルトンが開いた扉はやはり特殊なものだった。どうやら彼ら三人が再び空間を跳躍したのは間違いなさそうだった。

キアーナの先導で回廊を歩くエイルとエルデは、改めて周りを見渡すまでもなくそこが未知の場所である事を認識していた。少なくとも最初に案内された不思議な図書室があった建物、第一高級学校教授棟とキセンが呼ぶ新しく機能的な建築物の内部ではない事は確かだった。

三人が歩く通路は第一高級学校教授棟のそれよりもかなり広く、天井も相当に高かった。回廊の床も大理石貼りで、壁に取り付けられたランプも実用一辺倒なものではなく、凝った飾りが施されていた。要するに無駄とも思える空間や装飾に溢れており、教授棟とは明らかに異なる価値観によって作られた建物なのだ。

その建物には、回廊に沿って同じような部屋がいくつもあった。各部屋の扉には数字が書かれたタイルが貼られていて、それが部屋を特定する番号であるらしかった。「らしい」という表現を使うのは、その番号が一定の法則で並んでいないからだ。四桁の番号があったかと思うと、一桁もあり、空白をあけて二桁と三桁の数字が並んで表記されているものもある。それが何を意味するのかはわからなかったが、およそ「順番」という法則に従っていない事だけは確かであった。

「ここはハイデルーヴェン城です」

エルデの問いに、キアーナはためらう事無くそう答えた。

「城？　ここが？」

「ええ」

キアーナはこともなげにそう答えたが、エイルにとって「城」という言葉は驚き以外の何ものでもなかった。
「いいのかよ、勝手に城の中とか……」
「アホ。うろたえるな」
城という単語に過剰反応したエイルをエルデが軽く肘で突いた。
「ハイデルーヴェン城には、とっくに城主はおらへん。忘れたんか？　ここは学校都市やで。言うてみればここは城跡、廃墟みたいなもんや」
「いやいやいやいや。廃墟じゃないだろ、どう見ても」
「確かに廃墟は言い過ぎですが、長い間放置されていたのは確かです。プロット先生が資金を出して改装されるまでは倉庫として使われていたようですが手入れが行き届いていなくておっしゃるように廃墟になってもおかしくない状態でした」
「資金か……なるほど」
何が「なるほど」なのかエイルにはわからなかった。文化財の保護にキセンが私財を供出した訳ではないだろうが、少なくともそれにより結果として無駄に満ちた建物が維持されている事は間違いない。
「書庫か機材置き場か実験場所かはたまた秘密の会見場所か……そういう場所は公共の教授棟には作りにくいっちゅうわけやな？」
エルデの問いかけにキアーナはうなずいた。
「お察しの通りです。上階は学校関係の古い方の記録庫になっていますが、地下と一階の、この東側部分がプロット先生専用の蔵書庫になっています」
キアーナはそう言うとちょうどさしかかった部屋の前で立ち止まった。
そこは回廊の角にある部屋で、その部屋だけ扉に番号を記したタイルがなかった。だが違いはそれだけで、その以外は他の部屋と全く同じ扉だった。
「そしてここが秘密の応接間です」

「秘密？」
「関係の無い人間が開けようとしてもここの扉は開きません。外から中の音は聞こえないし、中からも外の様子はわからないようになってます。ここに入るには……」
エイルの疑問に答えるべく、キアーナは得意げに例の鍵スフィアを取り出した。
「これが必要です。プロット先生が特別にこれを渡した相手だけが入れる部屋なんです。そうは言っても一度も入った事はないんですけどね。今回は特別にこれをしまってある場所をプロット先生が教えてくれたんです」
エイルはそれを見ると「なるほど」と頷き、自らも懐にいれてあった鍵スフィアを取り出した。
「やっぱり先生はあなた方を特別な客人としてお認めになったんですね」
キアーナは感心したようにエイルの掌に載る鍵スフィアをしげしげと眺めたあとで、視線を瞳髪黒色の少女の方へ移した。
「何や？　ウチもちゃんともろてる」
エルデはそう言うと、キアーナには聞こえないほど小さな声で儀仗ノルンを呼び出した。
「うわっ」
瞬時に現れた儀仗の頭頂部を突きつけられたキアーナは小さな悲鳴を上げて思わずのけぞった
「ウチはこの中に埋め込んである」
そう言われてキアーナはしげしげと鼻先の頭頂部を眺めた。一見すると何もないように見えたが、目を懲らすとそこには涙の粒ほどの小さなスフィアが無数に埋め込まれているのがわかった。
「スフィアを小型化出来るんですか？　あなたは本当にすごいルーナーです」
「わかったやろ。ウチらは場所さえわかればプロット教授長が作った扉なら、どこでも通行可能なんや」

「了解です」
そう言って儀仗を見つめるキアーナを見てため息を一つつくと、エルデは儀仗を元の指輪に戻した。
「うわ」
「こんな事でいちいち驚かんといて欲しいな。それより、忘れてたけど、エイルに一つ頼みがある」
「頼み？」
怪訝な顔をするエイルの前で、エルデは妙な行動をとった。
自分の左手を口元に近づけると、人差し指の付け根あたりを歯でガリリと噛ったのだ。
「おい、何を」
自傷行為をするエルデを止めようとしたエイルだが、エルデがとった次の行動に言葉を失った。
エルデは噛った左手を、エイルの前に突きだしたのだ。
「何も言わんと、ウチの血をなめて欲しい」
「え？」
「えええ？」
エルデだけでなく、キアーナもびっくりしたような声を出すと、エルデとエイルを見比べた。
「いや……いやいやいやいや。お前いったい何をやってるんだ。というか、何を言ってるんだ？」
「うるさい、黙れ、やかましい」
エルデは鋭くそう怒鳴ると、突きだした右手をさらにエイルに近づけた。静脈を的確に噛んだのであろう。傷はほとんどわからないが、人差し指の付け根あたりから溢れた血はエルデの細長い指を伝い、床に点点と赤い染みを作り出していた。
「これから先の『会見』に必要な準備や。ジャミールの里にさしかかった時に会ったファーンの事を思い出すんや。それでもウチの言う事がわからへんのやったら、後で理由は嫌っちゅう程教えたる」
エイルはそう言われて改めてエルデの指を見つめた。

「早よしてくれな、治療もでけへんのやけど」
エイルはエルデが例にだしたファーンの事を思い出してみたが、残念ながら答えにたどりつけなかった。
だが、エルデがやろうとしている事が無意味な事ではないのは間違いがない。
「それとも、ウチの血をなめるのは死んでも嫌か？」
ためらうエイルに、エルデは悲しそうな声でそう言った。
「い、いや、そう言うわけじゃない」
エイルは意を決すると、差し出されたエルデの右手をとり、流れる赤い液体に唇を付けた。
鉄さびのようなしょっぱくて少しだけ甘い味……そう思ってエルデの血をなめたエイルだが、舌が触れたエルデの血は、それとは全く違うものであった。
「え？」
エイルは手を離すと、思わずそう声を上げた。
「しっ」
エルデは黙れという風にそう言うと、唇に人差し指を立てた。
エイルはそれを見て無言でうなずいた。
キアーナがその場に居る事を忘れるな、という事であろう。不用意な発言は相手に不信感を与えるのだ。

初めて味わう亜神……いや、エルデの血。それはほのかに花の香りが漂っていて、甘い蜜のような味がした。
「どんな味やったか、後で教えてな」
エルデは意味ありげな笑いを浮かべながら小声でそうつぶやくと、すぐに真顔に戻ってルーンを唱え、指の傷を治した。強い治癒ルーンではないのだろう。いつもの羽毛のようなものは出現しなかった。
続けてエルデはいくつかのルーンを唱えた。これはエイルにもおなじみのもので、つまり防御系の強化ルーンである。いつもと違っていたのは、儀仗をノルンのままではなく、茶色のヴェルザンディ

に変化させてから強化ルーンを唱えた事だ。
黒のウルドは単一の精霊波を操る場合に用い、主に攻撃ルーンを増幅させる。同様に茶色のヴェルザンディは複数の精霊波を調合する場合に具合がいいように調整された儀仗で、主として強化ルーンを増幅させる必要がある場合に用いる。そのベルザンディにわざわざ変えたという事は要するに、エルデは自らの持てる力を惜しむことなく最大限に引き出そうとしたのである。
もう見慣れた光の精霊陣がエルデ達三人を大きく包み込むようにいくつもいくつも回転して、そして消えていった。
これから対峙するのはルーナーである。しかもただのルーナーではなく、三席を名乗る正教会の賢者である。
いや、「元」賢者と呼ぶべきだろうか。
肩書きはともかく退治する相手が相当強力なルーンを使う相手なのは間違いない。だがエイルはひとかけらの不安も覚えなかった。
大気中のエーテルが自ら精霊陣を形作って増幅させた力を渡そうとするルーナー、エルデ・ヴァイスに、相手がいくら強力なルーナーであろうと敵うわけがないと確信していたのだ。
一通り強化ルーンをかけ終えると、エルデはエイルに小さくうなずいて見せた。エイルも同様にうなずき返す。
「アンタはここでしばらく待っとき」
キアーナに一言そう告げると、その返事を待たずにエルデは儀仗の頭頂部を扉にかざした。

《白き翼》と《淡黄の扇》の最初の、そして最期となるであろう対面は、エルデ・ヴァイスの挨拶から始まった。
「待たせたな、ランディ・アルオマーン新教会府長」
音もなく開いた扉を開けて部屋に一歩入ると、果たしてそこにはランディの姿があった。
エルデは自分からまず声をかけると、相手が言葉を発する前にエイルを促して部屋の中央に進むと、ややあって開け放たれていた扉

は音もなく閉じた。
「我々はプロット教授長の代理だ」
会見の部屋は、一見すると何の変哲もない応接間だった。低い楕円形のテーブルを挟んで、木製の簡素なソファが三方に置かれていた。
ランディはソファには腰掛けず、その脇に立ってプロットを待っていた。その手には細身の儀仗が握られている。
「私の名はエルデ、そしてこっちはエイル……どうした？　瞳髪黒色がそんなに珍しいか？」
エルデはランディが何かをしゃべろうとすると先に口を開いて出鼻をくじいていた。古語ではない。ファランドールの標準語であるいわゆる南方語だ。
「安心しろ。我々はプロット教授長から全てを含まされている立場の人間だ」
ランディは警戒した表情でエルデとエイルを見比べていた。エルデは体をマントで覆ったままの姿、そしてエイルにはマントはなく、その代わりに腰に短剣が下げられている。
そもそも秘密の会談の場所に突然現れた面識のない二人組である。しかも二人ともデュナンでもアルヴ系でもない、瞳髪黒色である。安心しろと言う方が無茶であった。
だがさすがは三席の賢者である。驚きはしたし警戒もしてはいるが、目の奥には不敵に落ち着いた光が宿っていた。
「まあ、安心するなと言っても、そっちとしてはそうもいかんだろうがな」
「約束が違いますな」
ようやくランディが口を開いた。いや、やっとしゃべらせてもらえたという方が正しいだろう。
「約束だと？」
エルデは不機嫌そうにそう言うと、尊大な口調で尋ねた。
「言ってみろ。どう約束が違うというのだ？」

エルデの口調や態度には、初対面の相手に対して礼を重んじる、もしくは気を遣うなどという概念がまったく感じられないものだった。そもそもエルデは平和な話し合いをしに来たわけではない。最初から「処刑」を執行するために登場したのである。最初から相手の都合を考えたり立場を尊重したりなどというそぶりすら見せないのはもっともだといえたが、それでも敢えて警戒されるような態度をとらずとも良いのに、とはエイルの偽らざる気持ちであった。

「たとえ本人がプロット教授長の代理だと名乗ろうと、この場所では本人同士でしか取引をしない、というのがプロット教授長自らが決めた約束事。そもそもその前提からして反古になっている。約束は約束。お互いにそれをきちんと守ってこその取引でございましょう？」

「ほう？」

エルデはしかし動じなかった。

いや。動じたのだろうか。形のいい眉がはっきりとつり上がるのがエイルにはわかった。

「どの口が『約束は約束』とか言えるかな、この下衆！」

一喝。そう鋭く言い放つと、エルデは一瞬で姿を変えた。右手に持った儀仗ヴェルザンディを前方に突き出してそれを今度は黒のウルドに変化させ、同時に額に隠した第三の目を開いたのだ。

エイルは姿を見なくてもエルデの変化がわかった。部屋の空気があっという間に変化したからだ。それは今まで暖かだった部屋の窓を同時にすべて開け放ち、吹雪を招き入れたような劇的な変化であった。

エルデのその変化に、さしものランディも驚愕の表情を隠せなかった。慌てたわけではないだろうが、反射的にその額に第三の目を出現させた。

「マーリン正教会賢者会所属《淡黄の扇》よ。『法』の遵守義務違反により謹んで我が裁きを受けよ」

エルデはそう言い放つと、儀仗の頭頂部をランディの眼前に突き

つけた。
エイルはそこでふと違和感を覚えた。エルデの雰囲気がいつもと違うのだ。いつものエルでならば、ここで逃げ出したくなるような薄暗い怒気を纏っているはずである。だがその時は三眼を開いてなお、周りにあるのは普段よりも静かな精霊波であった。
確かに部屋の気温が急激に下がるほどの変化はあった。だがその姿には威圧感がないのだ。エイルの体を借りて三眼を開いていた時のエルデの方が、よほど恐ろしい雰囲気を持っていたはずである。
ランディは突然現れた瞳髪黒色の少女が三眼であったことには驚愕したようだが、ただそれだけのようだった。そうでなければエルデに突きつけられた儀仗を自らの儀仗で振り払おうなどという敵意溢れる行為ができるわけがない。
だが力を込めて本気でなぎ払おうとしたランディの儀仗を受けても、エルデが片手で持つ黒い儀仗ウルドは、微動だにしなかった。亜神とデュナンでは蟻と象のようなもので、膂力（りょりょく）が違いすぎるのだ。
だがランディはそれを強化ルーンによるものだと判断した。目に宿った敵意に揺らぎが見えない。
「その目……お前も賢者か？　ならば知っていよう。賢者が賢者を裁くなどあり得んのだよ。お前こそ法を遵守しておらんではないか」
「笑止な。法は我にあるのだよ、三下賢者！」
「何だと？」
そう言われて、ランディは目の前のエルデの顔を改めて見つめた。そしてそこにある奇妙な事実に気づいた。
「赤いのは額の瞳だけだと？」
思わず口に出したランディの独り言は、まさにエルデと他の賢者との大きな差を言い当てていた。同時にランディは相手が未知の……有り体に言えば奇妙な存在であるという直感を得たのであろう。
大きくつばを飲み込む音がエイルの耳にも届いた。
「お前は何者だ？名を名乗れ！」
「名乗っていいのか？我が名を聞けばきっと後悔するぞ？」

エルデは不敵な笑いを浮かべると、ランディの答えを待たずにその名を名乗った。

「我が名は《白き翼》　その名に於いて異端に墜ちた《淡黄の扇》を滅する」

そもそも賢者は賢者としての「特権」を行使する場合、その名を名乗る事が義務づけられている。もっとも一対一で対峙し、その相手を処刑する場合に賢者が相手にきちんと自らの名を名乗ったかどうかを検証する術はない。多くの場合、賢者が通常の行動において複数の部下を伴っているのは詠唱中に自らを援護・護衛してもらう為だけではなく、そのような、言ってみれば賢者としての違法行為を無くす為の監視を兼ねていたという説がある。執行者の立場で言い換えるならば、部下の存在とは遵法の証人である。

とは言えもちろん一対一の場面は皆無ではない。だからこそ正教会は何千年にもわたってこう言い続けているのだ。

「賢者は嘘はつかぬ」　と。

賢者が一般の人間を裁く場合はそうであろう。だが四聖が賢者を裁く際にその名を名乗る義務があるのかどうかはエイルには知るよしもない。

しかし、現に今エルデは、あれほど口にするなと言っていた自分の名を請われるまま相手に告げたのだ。

「異端とは失敬千万。そもそも賢者が賢者を裁くなど賢者の法では禁忌とされている。お前は今、禁忌を行うという宣言をしたのだぞ？」

賢者を裁けるのは三聖のみ。《淡黄の扇》はその事を言っているのだ。そしてそもそもエルデは《淡黄の扇》が異端であるかどうかの検証すら行っていない。

エイルはランディの言葉を聞いて、初めて一つの懸念を持った。

彼には実は罪はないのではないのか、と。《淡黄の扇》は実のと

ころ賢者会の命を受けて新教会に潜入し、キセンに近づいているだけかもしれないのだ。

そしてエルデはもちろん、ランディに対する疑惑の裏を一切とっていない。「魔法の鏡」でキセンとの会談を見聞きし、第三者であるキセンに少し話を聞いただけなのだ。

だが……

「我が名を知らぬとはな。三席ごときが余に意見など片腹痛い。問答無用だ。《淡黄の扇》という名と共にこの場で滅びるがいい」

（問答無用かよ！）

そう思ったが、エイルはもちろん声には出さなかった。

出せなかったのだ。

その一言を受けたランディの憤懣が爆発し、それが殺気となってエルデに注がれた。

それはまさしく一瞬の事で、エイルはそれにすかさず対処する必要があったのだ。

エイルが妖剣ゼプスの柄に手をかけるのと、エルデがルーンを唱えるのがほぼ同時だった。そしてほんの一瞬遅れてランディが儀仗を振り下ろした。

「ナダーヴォ・サ・ディテルゼン！」

エルデのごく短い認証文の途中でランディのルーンが発動した。詠唱はない。それは儀仗に封じ込めたルーンが、ある条件を与える事で発動する一種の精霊陣による自動詠唱のようなものであった。高位ルーナーだけが使える発動法である。

ランディが儀仗を振り下ろした瞬間、エイルには部屋全体が真っ赤な闇に染まったように見えた。

だが、エイルはそんな事に意識を割く事はしなかった。その赤が何かを考えるのではなく、殺気に向かって抜き放った妖剣ゼプスを真上から切り下ろした。

ランディのそれは、エイルに向けられた殺気ではない。全てはエルデに向けられていた。だが、そもそも剣士ではないランディを一刀両断する事などはエイルにとって問題ではなかった。例え目を閉じていても一瞬で袈裟懸けにする事はできたであろう。

だがエイルはそれをしなかった。妖剣の握りをくるりと反対に向け、刃のない方を相手に向けて振り下ろしたのだ。

裁くのはエイルであってはならない。相手の動きを止め、次のルーンを放てないようにする事。それがエイル自身が自分に課した戦い方だった。

しかし……

「ほう」

すぐ横でランディの落ち着いた声がした。

エイルの剣はむなしく空を切っていたのだ。

確かにそこに存在していたと感じたランディの体を金属の板で打ちのめしたという手応えがない。刃ではないために致命傷にこそならないだろうが、刃がなくとも剣撃を受けて平気で居られるはずがないのだ。

「パラス！」

間髪を入れずエルデが叫ぶ。その声は元居た場所からではない。随分離れた場所に移動しているようだった。

長い一瞬が過ぎた。真っ赤な闇は去り、エイルに視界が戻った。

そしてエルデの声を追って振り返ったエイルが目にしたもの……。

それは全く想定していなかった状況であった。

全く無傷のランディ・アルオマーン……そしてまるで投げ飛ばされたかのように、部屋の隅にうずくまるエルデ・ヴァイス。

「エルデ！」

エイルは思わず叫んだ。

「逃げるんや！　エイル」

エルデがそう叫ぶのと、ランディが儀仗を再び振り下ろすのは同

時だった。

（連続使用が出来るのかよ！）

賢者でも上席に名を連ねる者であれば、ルーンを精霊陣に封じ込めて一瞬で発動させる事ができる。エイルもそれは知識としては知っていたが、これほどまでの攻撃系のルーンを、それをも連発できるとはさすがに思っていなかったのだ。

そもそもエルデがいくつも重ね掛けした防御系の強化ルーンはどうなっているのだろうか？

だが、そんな事を考えるのは後だった。

エイルは身を翻しながら、再び妖剣の柄を握り替えた。そして今度はためらわずに刃をランディに向けて、その胴をなぎ払った。だが再び白刃は何の手応えもなく持ち主を中心とした不正確な円軌道をむなしく描いただけだった。

再びその部屋を覆い尽くした赤い闇の中、エイルには再び訪れたその違和感を味わっている余裕などなかった。二度同じ事をやったのだ。相手が防御ルーンで身を包んでいるのは明らかだった。

エイルの物理攻撃はランディには通じない。

つまり、その時点で剣士としてのエイルの存在意義は消滅したのである。

エルデが逃げろと言ったのはエイルよりも早く現状を理解したからだろう。そしてエルデがそんな事を言うということはつまり、エルデが自分自身で、ランディからエイルを守る事ができないと判断したという事でもある。

「嘘だろ？」

赤い闇の中で、思わずそんな声が口をついた。今まで圧倒的だと思っていたエルデのルーンが、効かないのだ。

「ほう。認証文のみでルーンを発動させられるのか？　お前も精霊陣使いか？」

ランディのそんな声が聞こえたかと思うまもなく、エイルは誰か

に手を引かれた。
「こっちや」
エルデだった。
赤い闇の中で目が利くのはさすが亜神、と妙な感心をしたエイルだったが、エルデの声に余裕がないのが気になった。
（もしかしたら、負けるのか？）
「おっと、動かないでもらおう、《白き翼》だったか？」
再び赤い闇が晴れた。
改めて見渡すと、部屋の様相が一変していた。壁や調度の表面が白っぽくなっている。それは表面の一部が灰になっている状態なのだという事がわかるまでに時間はかからなかった。一部からは小さな炎が上がっていたのだ。
「動くな。お前がルーンを唱えた瞬間、もう一度『火炎の舞』をお見舞いする。連続使用が出来るのはもう理解しているのだろう？」
エイルは無意識にエルデをかばうように後ろに隠した。ランディはそんなエイルをさげすんだような目つきで眺めた。
「剣士風情がルーナーをかばうとは笑止千万だな。だが、我がルーンを二射も喰らってまだ無傷とは正直言って驚いている」
ランディはそう言うと視線をエイルの後ろのエルデに向けた。
「賢者会ではついぞ見かけぬ顔だが、賢者には違いないようだな。高位のコンサーラを失うには忍びないが……」
「駄目なのか？」
ランディをにらんだままでエイルはつぶやいた。もちろんエルデに向けた言葉である。
「三席の賢者をなめたらアカン。しかもエクセラーが使う本気の攻撃ルーンや」
エルデはそう答えた。ルーンを唱えようとしないのは、本当に状況が悪いのであろう。相手の言う事に従うしかないのだ。
「よくわかっているではないか。だが、お前は基本的にわかっていない」

「何をや？」
「さっきから聞いていれば三席三席と。失礼にも程がある。私は三席ではない。次席だ」
「え？」
「おい、話が違うじゃないか？」
「いや……雑魚賢者の事はあんまり……」
「その雑魚賢者にこれかよ」
「いやあ。さすが次席やな」
「感心するなよ」
「大したもんや。想像以上やな。正直言うてなめてた。すまんなエイル」
「謝ってる場合じゃないぜ。お前らしくもない」
エルデとエイルのやりとりに、ランディが割って入った。
「おしゃべりはそこまでだ。観念したか」
「観念はしてへん。でもハイレーンとしてはさすがに悔しいな」
ランディはエルデのその言葉に眉根を寄せた。
「ハイレーンだと？」
そう言ってエイルとエルデを眺めたが、二人の堅い表情が変わらないのを見て、小さなうなり声を上げた。
「ばかな。ハイレーンごときの強化ルーンに、我が『火炎の舞』を二度も防がれたというのか？」
殺気に揺らぎが見えた。少なくともエイルには。
それは動揺という言葉に置き換えた方がエルデにはわかりやすかったろう。エイルには殺気が見え、エルデにはエーテルが見える。二人が見えているものはそれぞれ違えど「ハイレーン」というエルデの一言が《淡黄の扇》に隙を作らせたのは間違いなかった。
（くそ、防御ルーンさえなければ！）
しかし殺気の揺らぎが見えたとしても今のエイルにはどうしようもなかった。そもそも物理攻撃が効かない相手に隙があろうとなかろうと問題ではないのだから。

回数系の防御ならば、連続した打突を与えればすぐにはがれ落ちるだろう。だが一定の強度を防ぐルーンであれば、エイルの打突の衝撃程度では破れない。時間制限のルーンであれば、その時限を待つしかない。

だがランディがどの防御ルーンを纏っているのかがわかったからと言って、それが大した意味を持つとは思えなかった。

そもそもエルデが相手の防御ルーンを剥ぎ取れないのだ！

最初に唱えようとしたルーンはランディの「火炎の舞」とやらで中断され発動しなかった。座標軸をずらされ中断された「ルーンの逆行現象」は自らにかけていた防御ルーンで防げたのだろうが、その後もエイルの知る限り、エルデは二度、たった一言で唱えられるごく短いルーンを唱えていた。それらは成功したはずである。だが《淡黄の扇》には効果がなかった。

エルデが唱えた短い二つのルーンはエイルもよく知るもので、一つは相手を空間に縫い付けるルーン、もう一つは相手の口を封じるルーンで、そのどちらも成功していない。

それが意味するところをエイルは認めざるを得なかった。それはエルデ自身から直接聞いた法則だった。

「ルーンの力関係に相当な開きがある場合、上位に対する下位のルーンは無効である」

例の得意げな調子でエルデはそう言ったのだ。

現状を分析すれば、まさにそういう事なのだ。

エルデのルーンは……少なくとも強化ルーンと攻撃ルーンは《淡黄の扇》には通用しない。それが残酷な結果であった。

亜神であろうがなかろうが、ルーンの力の強弱に関係はないのだろう。

エルデ・ヴァイスは亜神であるが、ルーナーとしてはハイレーンである。本来ハイレーンは強化ルーンや攻撃ルーンは使わない。ハイレーンは特殊なルーナーで、単一もしくは二種類程度のエーテル

を制御すればいいだけの他のルーナーとは違い、全属性のエーテルを精密に制御する能力が求められる。そして高位ハイレーンになれるものは、天性でその能力を持つ者だけなのだとエルデは語っていた。

その代償として、単属性のエーテルの力を突出して増幅する力を持たないのだとも。

だが、それでもエルデの攻撃ルーンや防御ルーンは突出して強力だとエイルは思っていた。いつしかファランドールでエルデを越えるルーナーは存在しないのではないかとさえ思い込むほどに。

だが考えてみればわかる。

エルデは今まで自分より下位にあるルーナーとしか対決していなかった。ランディよりは下席ながら三席の席次にある賢者《二藍の旋律》ことラウ・ラ＝レイとの対決の場合は、そもそも相手がエルデをなめきった、言ってみれば丸腰のような状態でカレナドリィを操っていたのだ。だから素直にエルデのルーンや呪法を喰らってしまったに過ぎない。

そんな相手の防御ルーンを剥ぎ取る……それが簡単ではないことをエイルは絶望でめまいがする程理解していた。

どちらにしろ下手に攻撃に移れば不利になるのはエイル達であるのは火を見るよりも明らかだった。

だからこそ、エイルは構えたままの妖剣ゼプスの柄を握りしめながら強く願った。

（ランディの防御ルーンを剥ぎ取りたい）と。

それが出来れば、認証文だけでルーンを発動できるエルデの力が及ぶ可能性もあるだろう。強化系も攻撃系も通じないのであれば、治癒系のルーンを使えばいいだけである。治癒系のルーンであっても、使いようによっては相手に痛手を与える類のものが必ずあるはずだった。

かつてエルデ自身「ルーナーの中でもっとも恐ろしいのはハイレーンだ」と言っていたではないか。

エイルはそれを信じ、その機会を掴み取りたかった。
「なんやウチ、元の体に戻ってからやられっぱなしやな」
自嘲気味にエルデがそうつぶやいた。
「日頃の行いってヤツだろ？」
「何やて」

「黙れ！」
ルーンを唱えてはならないとランディは言ったが、無駄話をしてはならないとは言っていない。
まさかそんな屁理屈を掲げてエイルとエルデが言葉を交わしていたわけではないが、ランディとしてはそれを容認するわけにはいかなった。
一見すると無駄話とも思えるやりとりだが、それがルーンでないとは言い切れない。警戒して当然であろう。
だが二人のそれは、本当に無駄話だった。エルデのムッとした顔でランディにもそれとしれた。
「無駄話をしている暇があったら、私の質問に答えてもらおう」
ランディはそう言うと、実にもっともな質問を投げてきた。
「プロットはどうした？　もっとも今ではお前のその格好を見れば大方の予想は付くが」
ランディの言うその格好とは、もちろん血で赤黒く染まったエルデの服の有様を指していた。儀仗が貫通していた胸と背中が一部破れているが、そこにはもう傷はない。すなわちランディには服を黒く染めているその血の汚れはキセン・プロットのもの、具体的には返り血だと判断したのだろう。
それは当たらずとも遠からずであったが、さすがにエルデにもエイルにも事の次第を詳細に語る義理はなかった。
「言うとくけど、これはウチの血や」
「何？」
「プロット教授長は……そやな。今頃はフォウでのんびりしてるん

とちゃうかな？いろんなしがらみから解き放たれて、な」

「何だと？」

フォウという言葉に反応したのか、エルデの答えが気に入らなかったのかは定かではない。ランディがそう気色ばんだ時に異変は起こった。

エイルが構える妖剣ゼプスが黄色く輝き始めたのだ。

それを見て、そして手の中の感触が明らかに変化したのを感じたエイルは確信した。

根拠はない。ただ妖剣ゼプスを全面的に信用しただけである。

「あとは、任せたぞ」

エルデに聞こえる程度の声でそれだけ言うと、返事を待たずにエイルは行動に出た。構えた妖剣ゼプスを振りかざすと、そのままっすぐ……それは全く無造作に……ランディに切りつけたのだ。

ランディとてバカではない。エイルが自分に向かって攻撃を仕掛けたのを見ると警告はもうしなかった。同じように儀仗を振り下ろし、辺りが真っ赤な闇に包まれるほどの例の火炎放射……《淡黄の扇》いわく「火炎の舞」を放った。

同時にエルデが短く防御ルーンを唱えたのがわかった。

エイルはそのルーンを知っていた。それは範囲ルーンではない。術者であるエルデ一人のみを防御するルーンであった。範囲ルーンにしなかったのはランディにもそのルーンが及んでしまうからであろう。そしてもちろん、エルデの剣の能力を信じていたからでもあった。

動き出してすぐにエイルの目の前は三度目の真っ赤な闇に包まれた。既に二度の攻撃ルーンを受け、防御ルーンが全て剥ぎ取られていたエイルは、体中が一瞬で沸騰するかのような痛みに襲われた。

だがエイルはかまわず、ゼプスをランディめがけて振り下ろした。

体中が燃え上がるような熱の中、エイルは今度こそ確かな手応えを感じていた。

ランディのうめき声が部屋に響く。同時に背後からエルデの声が

響いた。
「エル・エリフ・ソグ・ダード！」
エイルもエルデが使うルーンのうち、いくつかはどんなルーンであるかを理解していたし、さすがにつきあいも長くなってくると、たとえ初めて聞く認証文のルーンであっても、それがどういう傾向の、あるいはどのような性格のルーンであるかを推測できるようになっていた。
エルデが唱えたそのルーンを聞いたエイルは、それが炎を使った攻撃系のルーンで、しかも的を絞った単体へ向けた指向性のあるルーンではなく、周りのありとあらゆるものを対象とした……要するに爆炎のルーンだと推理した。
その推理は正しく、エルデのルーンはその場に白っぽい闇を招くと同時に大きな爆発音を響かせた。
エルデはかまわず、おそらくは自分自身がこの場で使え、最大の効果を期待できる破壊ルーンを唱えたのだ。《淡黄の扇》とエイル・エイミイ、そして扉の向こう側にいるはずの、キアーナ・ペンドルトンをも巻き込んで。
背中に受ける熱圧で吹き飛ばされながらも、エイルの耳には、爆炎ルーンに続けてエルデが唱えた短いルーンが届いていた。
「ヴィーダ！」
それはエイルがその系統すら推測できない、初めて耳にする未知のルーンだった。
同時にエイルは自分の体が何者かに拘束されるのを感じていた。爆風か熱圧で体が浮き、まさに吹き飛ばされようとしていたその瞬間に何かが体に巻き付き、強い力で強引に引っ張られた。
一連の出来事は、ほんの短時間に生じたものだった。おそらく瞬きにすると一、二度というところだろう。
後ろに引っ張られ、その勢いで尻餅をついて倒れ込んだエイルの目に映ったそこは、既に「部屋」の様相を呈していなかった。

（寒い）

最初に感じたのは目から入る感覚ではなく、肌で感じる気温の変化だった。今まで灼熱を浴びせられていたのだ。どんな気温であっても相対的に「寒い」事には違いはない。だがそういう比較ではなく、絶対的に温度が低いのだ。しかも肌に感じるのは空気の動きである。

風？

そう、まるでそれは真冬のハイデルーヴェンの夜の通りのような……。

「ええ？」

エルデが破壊系のルーンを唱えた事は承知していた。

しかし自分のいた部屋がただの空き地になっているとは、さすがにエイルにも想像できなかった。

エイルの置かれた状況を正しく表現するならば、そこは空き地ではなかった。建屋を全て取り払い、解体工事がそろそろ終了する直前と言った風情の床の上だったのだ。

エルデの爆炎ルーンは彼らがいた部屋どころか、建物、すなわちハイデルーヴェン城のほぼ全体が吹き飛ばされていた。何をどうしたらそういう事になるのかがわからないが、熱を伴う爆圧が、頑強で巨大な城を跡形もなく吹き飛ばしたのは事実である。

当たりを見渡したところ、とりあえず炎は一切上がっていない。緊急避難の必要はなさそうだった。

夜明け前でまだ暗い中、エイルが周りの様子を確認できたのは、妖剣ゼプスが放つ黄色い光がまだ消えておらず……いや、ランディに斬りかかった時よりもさらに光の強さは増しているようだった……加えてエイルの頭上に強めの赤い光源が一つあったためだ。

その時になってようやく、エルデは自分の体に蔦のようなものが巻き付いているのを確認した。

記憶をたどれば、確かその蔦によって体が確保・固定され、爆風

に体を持って行かれずに済んだのだ。
エイルを確保したのはもちろんエルデ・ヴァイスだった。
尻餅をついたままの体勢で、エイルは隣のエルデを見上げた。そこには三眼のエルデ・ヴァイスが立ち尽くしていた。
エルデの手には儀仗が握られていたが、よく見ると蔦はその儀仗から生えているようだった。そして頭頂部にはひときわ大きなスフィアが一つ浮かび出て、そこから真っ赤な光が放たれ、当たりを照らしていたのだ。
「そうだ、キアーナは？」
ランディの気配がない事を確認したエイルはようやくキアーナの事を思い出し、慌てて立ち上がった。
「大丈夫や」
エルデがそう言うと、エイルを拘束していた蔦がまるで自ら意思を持つ生き物のように動いた。蔦はエイルを解放するとエルデの周りで静止した。その様はまるで次の命令を待つ異形の従者のようであった。
大丈夫だと告げたエルデの視線の先をエイルは追った。
見ればすぐ近くでキアーナは倒れ込んでいた。
「心配ない。気を失ってるだけや」
エルデはそう言ったが、ピクリとも動かないキアーナを見ると、エイルには不安がこみ上げてきた。
「本当に気を失っているだけなのか？」
その質問には「建物のこの有様を見ては、大丈夫だと言われてもハイそうですかとは思えない」という意味が込められていた。
エルデも当然それを汲んだのであろう。すぐにこう続けた。
「正気やったのを、ウチがわざわざ気絶させたんやから間違いない」
「気絶させたって……」
「こんな状況で下手に意識があっても、こっちとしては色々と面倒やさかいな」
エルデの声に冗談じみたものを感じなかったエイルは、近場だけ

ではなく付近の様子がぼんやりとではあるが把握できる程度に目が慣れてきていた。
ランディはおそらく今の熱と爆発で灰化して消滅したに違いない。少なくとも近くに気配がない事はエイル以上に敏感なエルデなら把握しているはずである。
だが三眼を閉じず、険しい表情で少し向こう側を見つめたままのエルデの様子にはただならぬものがあった。
（なるほど）
そしてその理由はエイルにもすぐにわかった。
相当離れてはいるが、二人、いや三人を囲むように多くの人間がいたのだ。
そして彼らがエイル達の味方である可能性はきわめて低かった。
夜明け前のこの時間である。町はずれとも言える古城の周りに一般の人間が大勢いるとは思えない。
ならば考えられるのは、ランディの護衛として付き従ってきた彼の部下達の存在である。
付近で待機していたとすれば、建物の崩壊に伴ってそれなりの被害が出ていることは容易に想像がつく。
彼らもそのうち目が慣れるだろう。そして爆心地付近に平然とした姿で立つ二人の人影が、ともにランディ・アルオマーン新教会府長の姿ではない事を知った場合、彼らは次にどのような行動をとるのか……。
そんなことを考えているうちに、エイルは自分達に退路がないことに気づいた。全方位に友好的とは思えない気配が漂っていた。エイルとエルデは完全に包囲されていたのである。
「エルデ……」
「さて、どないしたもんかな」
もとよりエルデはエイルよりも先に状況を把握していたのだ。だからこそ三眼のまま緊張を解かず、儀仗の一部を変化させた触手の

ような蔦をすぐに動かせるように待機させていたのだろう。
「ランディの部下か？」
「それはわからへんけど、高位のルーナーがいるのは確かやな。しかもご丁寧に前後左右、くまなく囲てくれているわ」
「何だって？」
エルデは唇の端を少しだけ持ち上げて笑って見せた。
だが、それはいつものエルデの、あの余裕のある笑いではない事は確かだった。

# 第七十二話　黒い翼のエルデ（前編）

無言の時間がしばらく続いた。いや、正確に言うとその間にエルデは誰にも聞こえないような小さな声を一度発していた。儀仗ノルンを攻撃ルーン用の真っ黒なウルドに変化させていたのだ。

相手はこちらの出方をうかがっているのだろう。動く様子がない。建物が一瞬で崩壊したにもかかわらず、浮き足だった様子が無い部隊。

こちらが何者かを判断するまで手を出さない慎重さ。

相手は相当に鍛えられた部隊だとエイルは判断した。そしてその部隊を統率する人間も凡庸な人物ではないであろうということも。

（敵、また敵か……。しかも全部強敵と来た……）

エイルは自嘲気味に心の中でそうつぶやいたが、その時になって少し前の記憶がよみがえった。

「なあ？」

「何や？」

「お前さ」

「何やねん？」

「さっきの《淡黄の扇（たんこうのおうぎ）》を、証拠すら調べずに有罪みたいに決めつけてただろ？」

「は？　いきなり何の話や？」

「いや、なんでかなって思ってたんだけど、今思い出した」

「話が全く見えへんねんけど？」

「《蒼穹の台（そうきゅうのうてな）》の情報があったからなんだよな？」

「……ふん、唐突に何を言い出すかと思えば、三週遅れやっちゅうねん、スカポンタン」

確かに脈絡はないかもしれない。だがエルデは相手を敵と決めつけた行動をとっている。そして確かに相手はエルデの敵としてふさ

わしい存在のようであった。だが、エイルとしては、もし間違っていたら、という思いが胸の奥底からどうしても消えなかったのだ。

敵である事はいい。だが、エルデの判断基準を共有して、そのほんの少しのわだかまりを消せるなら、それに超した事はないと考えていた。そして今、その答えにたどり着いたというわけである。

エルデが自ら証拠を確認しないままランディを断罪対象とし、問答無用で排除行為に出た理由……。

それはイオスがあらかじめエルデに与えていた情報のせいだったのだ。

龍の道でイオスに出会った際、彼はこう言ったのだ。

『ファランドールが今、どうなっているのかを知れ』　と。

ラウに会って、その情報の詳細を聞けと。

謎めいていて、そしてあやふやすぎる表現である。だがエルデはそのあやふやな部分にキセン・プロットの言葉を加える事で、何らかの形を掴んだのだ。

後追いではあるが、そう考えるとエイルにもおぼろげながら見えるものがあった。そしてそこにさらにイオスの言葉を重ねればいいのだ。

イオスはアプリリアージェにこう言ったのではなかったか？

『正しいものを探そうとするのではなく、信じるものを決めるんだ』

ファランドールが今、大きく動こうとしている事はエイルも気づいていた。その情勢下で価値観の絶対値など求めようとしてはいけないのであろう。エルデはおそらくイオスの二つの言葉を実践したのだ。ファランドールは動いている。それは正教会に於いても同様なのだ。賢者が新教会に寝返る。信じたくはないが、嘘をついているとは思えないキセンの言葉を信じるならば、正しい「はず」だという価値観を見直さねばならない。

そしてエルデは素直に自分の信じるものを選んだ。

そういうことだったのだ。

ならば、答えは単純である。

エイルはエルデを信じるだけなのだから。
「誰も信じるな」
そううそぶくエルデを信じる事が、ファランドールにおけるエイルの存在意義そのものだと言ってもよかった。
エイルは小さくため息をついた。吐息とともにほんの少しのわだかまりが体から抜けていくのがわかった。
「オレはお前を信じる」
「はあ？　いったいどうしたん？　悪いもんでも食うたんか？」
「いや、今食べ物の話はやめろ。どんだけ腹が減ってると思ってるんだよ」
「あ、ウチも今、めっちゃお腹がすいてきた」
この緊急事態に於いて空腹を感じるというのは、落ち着いている証拠なのだろう。エイルはそう思うとおかしさがこみ上げてきた。窮地が窮地に思えないのだ。おそらくそれはエルデと一緒にいるからなのだろう。そしてエイルは、エルデも同じ気持ちであればいいと思った。
「ぜんざい、また食べたいな」
「まだ食うのかよ！」

「お前達は何者だ？」
小声でしゃべっていた二人の声は相手には届いてはいないだろう。相手にしてみれば、沈黙を最初に破った形である。
その声はエイル達の正面から響いた。
大して大きな声を出しているわけではない。だが鋭く、そして明瞭に、声はエイル達の耳に届いた。
フェアリーかルーナーか。どちらにしろいずれかの能力を持つ者である可能性が高いと判断すべきであろう。どちらにしろ声をかけてきたということは、会話の余地はあるという事だ。少なくともいきなり攻撃を仕掛けてはこないと思われた。
「我々は争いをよしとしない。要らぬ戦いはしたくない。ここは素

直に道を空けて通してはもらえないか？」
エルデは良く通る澄んだ声でそう答えた。普段の古語ではなく、標準語である南方語で。
「と言うてハイそうですか、と通してくれるアホはおらんわな」
続いてエイルにだけ聞こえるように、そうぼそっとつぶやいた。
「この状況下に於いて、そう言われたからと言って『わかりました。はいどうぞ』と通してもらえる可能性があると本気で思っているのか？」
相手からは、まさに今エルデの想定したとおりの答えが返ってきた。
「勘違いするな」
予想通りの相手の反応に対して、エルデはあらかじめ用意していた台詞を披露した。
「余はお前達のために言っている。何人いる部隊かは知らんが、ここで全滅したくなければ、何も見なかった事にしてさっさと立ち去る事だ」
エルデの声はきわめて落ち着いていた。そこにはランディとの戦いで見せた焦りはない。かと言って必要以上に自分を鼓舞するような力も込められてはおらず、まるで日常の挨拶をするような淡々とした静かな声だった。
「全滅だと？」
対して相手は声の調子を変えた。
「聞こえなかったのならもう一度言おう。全滅だ」
すかさずエルデがそう答えると、相手は声を出して笑った。
「こりゃ傑作だ。百人以上ものフェアリーとルーナーで固めた俺達の部隊が、小娘と小僧のたった二人相手に全滅させられるとはな。後世に残る事件になるぜ」
「今思いついた事を言おう」
笑いながら答える相手に、エルデはしかし、同様に淡々とした口調で返した。

「何だ？」
「これは経験上感じた事だが……こういう状況で高笑いする輩は、相手の事をよく知りもせずに自分が絶対優位にあると信じて疑わぬ雑魚と相場が決まっている。名を尋ねようかと思ったが、その気も失せた」
「何だと？」
エルデの挑発に、相手は素直に乗った。それをみたエイルも相手が予想以上に小物ではないかと感じはじめていた。
とは言え、エルデはこの状況をいったいどう打開するつもりなのか……。ランディ一人であれほど苦戦を強いられたのだ。相手が上席賢者に匹敵する高位のルーナーであった場合、例えエルデが亜神であろうと、ハイレーンである限り、戦いに於いては相当に不利である事は既に自明といえた。
相手がランディの護衛かどうかはわからない。ランディより上位のルーナーではない可能性は高いが、そうは言ってもあの自信ありげな態度から察するに、雑魚ではあるまい。それなりの実力を持つ相手である事はもちろん想像がつく。
そしておそらく……
「貴様の考えを当ててやろう。例えこっちがいくら強いルーナーやフェアリーであろうと、予めこの場に仕込んでおいた精霊陣があるから万全と考えているいるのだろう？　加えて自分の力は相手が高位ルーナーであろうと、それを凌駕する程強いとでも思っているのだろうな。我らが例え正教会の賢者であろうが、はたまた新教会の僧正であろうが、な」
エイルの考えていた点もそこだった。相手は精霊陣を敷いているに違いない。エイルが相手の立場であったなら、そして自分が率いている部隊にルーナーがいるのであれば、間違いなくそうするだろう。
だが、エルデの口調から察するに、精霊陣の存在など、歯牙にもかけていないかのようだった。

「ふ。俺もなめられたもんだな。そっちには聞く気がないようだが、そこまで言われて名乗らぬ訳にはいかねえな。そっちが賢者だって言うならこっちはお前が今言った僧正だ」
「お前の名前とか、どうでもええ！」
エルデは相手に名乗らせなかった。そう叫ぶと同時にルーンを唱えた。
「オルデ・ヴェントス・メダージェ！」
詠唱と共に手に持った儀仗を大きく振り抜くと、エルデは一陣の風をその場にもたらした。次いでエルデが真っ黒な儀仗ウルドを振り下ろすと、その体の周りに大きな光の精霊陣が現れて回転した。
繰り出したのは、もちろんただの風ではない。エーテルが見える力があれば、そこに一匹の巨大な蛇がうごめいていたのが見えたに違いない。
もちろんそれは蛇ではなく、空気のムチとも言えるもので、エルデが持つ儀仗ウルドを中心として波状に広がっていった。
しかし……
その空気のムチは見えない壁のようなものに当たると、強化した硝子が砕けるように粉々になって消滅した。
二度、三度。
さすがエルデと言うべきだろう。一度だけではなく連続して三回打ち出されるルーンを唱えていたようだが、全てが見えない壁で粉砕された。
「珍しいルーンだな」
僧正を名乗る相手は、エルデの攻撃ルーンを見ても落ち着いていた。
「だが無駄だ。全く無駄だ。ここじゃあ、お前のルーンは通じんよ」
僧正はそう続けると、はっはっはと高笑いをした。
「だが正直に言って結構驚いた。お前はルーンを短縮詠唱できるようだな。しかも空間に精霊陣を張る奴ははじめて見たぞ。いや、そ

んな事ができるとは今の今まで知らなかった。ふーむ。正教会には常識外れな精霊陣使いがいると聞いているが、お前がその本人か？」

「ふん。精霊陣使いやて？　誰のことや？」

エルデは相手に向かってはそう言ったが、すぐに小さな声で独り言を続けた。

「ウルドを使うても、こんなもんか」

精霊陣の壁。

それはエイルの予想を超えて、エルデの攻撃ルーンでは敗れないほどの強度を持っていた。いや、予想は超えていないのかも知れない。あまり残念そうにしていない様子からして、念のために強度を測ってみたのであろうか。

ハイレーンとエクセラーがエクセラーの土俵で戦うことの不利を、ランディとの戦いで知ったばかりだったが、どうやらハイレーン対コンサーラであってもその構図は変わらないようであった。いや、相手がコンサーラだと決めつけているわけではないが、精霊陣を張ったのが相手の僧正だとすれば、その性能の高さからコンサーラだと判断しただけである。どちらにしろこの場にはランディに匹敵するか、もしかするとそれ以上の力をもつコンサーラが最低でも一人はいると考えていいだろう。

「どうするんだ？」

さすがに心配になったエイルは小声でそう尋ねたが、当のエルデは、やはりランディ戦の時よりも明らかに落ち着いていた。

いや。落ち着いているどころではない。顔が笑っているのだ。

その笑みも苦笑いなどではない。いつものエルデの、例の人を馬鹿にしたような顔つきで笑っているのだ。

「想定の範囲内や。ちゅうても相手は既に我が術中やけどな」

「え？」

「このあたり全部が『神の空間』に入ってる」

エルデはそう言うと唇の端を上げて笑いを深くした。

「『神の空間』って……あの《蒼穹の台》のアレだろ？」
「あれは《蒼穹》の『神の空間』　今ここにあるんはウチの『神の空間』や」
「なるほど。そう言う事か」
エイルは合点した。
亜神はそれぞれが『神の空間』を作り出せる。そしてそれはおそらくそれぞれの特性を生かす空間になっているに違いない。
《蒼穹の台》が『神の空間』で使う能力は『絶対服従』　ならば《白き翼》が自らの『神の空間』で使う能力とは？
「ひょっとしてさっきの僧正との戦いの時、『ヴィーダ』って唱えてたのは、それか？」
「そう言う事や。四聖はそれぞれ独自の『神の空間』を持ってる。たとえば《蒼穹の台》のアレはアスローヴェ。『絶対服従』とでも言う意味やろな」
エルデはエイルの予想通りの解説をした。
「ついでに言うと《深紅の綺羅》のはアクリュス。　言葉の意味あいは『凍てつく時間』とでも言うんかな。その空間に入った人間は全ての動作が停止するらしいで。もっとも、師匠の受け売りやけどな」
エルデはそこで言葉を句切り、エイルをみてニヤリと笑った。
「そしてウチのは……」
「お前の『ヴィーダ』は？」
エイルの問いに、エルデは目を閉じて首を横に振った。
「恐ろしすぎて口にでけへん」
「なんだよ、それ。もったいぶらずに教えろ」
「ま、見てたらわかるわ。でも、一つだけ問題がある」
「何だ？」
「初めてやから、やり方がようわからへん」
「えええええ？　何だよ、それ」
「アンタ、今日はそのセリフ、多ないか？」

「お前が言わせてるんだよ」
「とにかく、や」
そこでエルデの口調が変わった。
「ウチは初めて試すんやから、ちょっと集中する時間が欲しい」
エイルはうなずいた。そして真顔になったエルデが手にしている儀仗がいつの間にか黒いウルドから茶色いヴェルザンディに変化しているのを見ると、自らも改めて緊張を纏った。
「任せろ」
そう言うとエイルは、妖剣ゼプスを無造作に鞘から抜いた。
「お望みのままに稼いでやるさ」
エルデはエイルのその言葉に目を細めると、自らも儀仗ベルザンディを水平に構えた。「ククリュタス・アーデ・オーデ・フィム」
聞いたこともないルーンが、つぶやくように唱えられた。
ひときわ大きな精霊陣が二人を包み、そしてはじけた。
「何回だ？」
状況を考えると、強さでなく回数を防ぐルーンだとエイルは判断した。少なくとも自分ならそうすると思ったのだ。
「六回までや」
案の定の答えがエルデから返った。
「で、稼ぐ時間は？」
「一時間」
「いやいやいやいや」
エイルは思わず構えた妖剣を下げた。
「ウチもわからへんねん。そやからできるだけ長う頼むわ」
「注文が無茶過ぎないか？」
「アンタが望みのままに、って言うたんやろ？」
「ああ、わかったよ。男に二言はないらしいからな。やってやるよ」
「ふふふ」
「何だよ、うれしそうだな」
「そやかて、これっていわゆる一つの『初めての共同作業』ってヤ

ツとちゃうん？」
「な、何だよ、それ？」
「あ、また言うた」
「いや、お前、わざと言わせてるだろ」
いつも通りのエイルの反応に、エルデはくすりと笑った。
「何だよ」
こんな時に……とは続けなかった。
エイルは「神の空間」と呼ばれる、亜神それぞれが作る独自の結界に流れるある種の大気のようなものにある意味「あてられて」いた。
それは満たされたような気分で、不思議と恐怖や怒りと言った感情が湧き上がってこないのだ。なにより必要以上には気持ちが高ぶらない。加えてエルデの気持ちが何の障壁もなく伝わってくるような気がしていた。
それに、今のエルデの笑いは嬉しい時の笑いだった。
おそらく彼女にしてみれば「こんな時」なのにすぐ側にいるエイルがいつも通りの反応をしてくれたことが嬉しかったに違いない。
いや……。
エイルはまたもや、ある事に気づいた。
エルデは「神の空間」内であるにも関わらず、何の迷いも疑いもなくエイルに強化ルーンをかけた。すべてのルーナーやフェアリーの力が使えなくなる場所、かけられた効力がはぎ取られる場所。それがいわゆる「エア」に準じる「神の空間」の特性であるはずなのだ。
本来ならば空間の支配者ではないエイルにルーンの効力が生じる訳がない。
だが……。
そこでようやくエルデの言葉に合点がいった。
ジャミールの里で遭遇したエアの中で、ただ一人ルーンを操る人物がいた。それが《群青の矛》ことファーン・カンフリーエである。

エルデは言ったのだ。ファーンを思い出せ、と。そしてようやく腑に落ちた。

エルデが自らを傷つけてまで、自分の血をエイルになめさせた事を。

おそらくファーンは、イオスの血をなめていたのだ。もしくは違うものに形を変えて飲まされていたのかも知れない。同じ亜神であるエルデはそれに気付いていたのだろう。

「そやな」

エルデの声で、エイルは我に返った。

「ほんなら大負けに負けて五分でどうや？」

「大安売りだな、おい」

「絶賛大売り出し中やからな」

「何をだよ？」

エイルが稼ぐべき時間が一時間から五分に大幅に減った。それさえも今の二人にとっては軽口の対象になっていた。

エルデのいう『初めての共同作業』という言葉がエイルの脳裏をかすめると、自然と苦笑いが唇に浮かんだ。

（『初めての共同作業』なんていう桃色っぽい言葉の割に、それが戦闘っていうのはどうなんだろうな）

だが、そんなことを考えている暇はなかった。

五分の時間を稼ぐ。

それがエイル・エイミイがこのファランドールに存在する為に必要な「今」の目的なのだ。

エイルは片手に持った妖剣ゼプスの切っ先を独特の無造作な仕草で下方に垂らすと、そのまま早歩きで「敵」の指揮者と思われる目の前の僧正に向かって距離を詰めた。

歩き出すと、すぐにエーテルの渦のようなものを背中に感じた。

エルデが「力」を使い始めたのだ。詠唱する小さな声も届いた。

「森羅万象を司る王の一人、白き翼の名において今この場に繋がる全ての精霊に命ずる。一に我が意思となり、我が世界の全てを閉鎖せよ。二に我が吐息となり我が世界の全てを満たせ。三に……」

エイルはエルデの詠唱を背中で聞きながら早歩きになっていた。だが、今度はまっすぐには動かない。

右にスッと体重を逃がしたかと思うと、そのまま立ち止まり、すぐに左へ走る。そうかと思うと左へ飛び、後方へ一度退いて、さらに軸足の力を抜いて左へ傾く。

それはエイル・エイミイ、いやフォウのマーヤ・タダスノという人格が持つ特殊な能力による危険回避行動であった。

紙一重、というのはこのことを言うのだろう。

エイルが動いたすぐ後にその場に「何か」が起こった。

槍や矢の攻撃はない。どうやら全てがルーンによる攻撃だった。

真っ赤に燃える槍は、炎の噴射であろう。

地面から突き出た杭は土壌を操るルーナーによるものだ。

上体を逸らしたエイルの髪を揺らしたのは、空気の鎌に違いなかった。

「ガーデル様！」

「うむ」

全ての攻撃を回避するエイルの様子を見ていた敵の指揮者は、補佐官と思しき部下の叫びに応じて、即座に対応した。目標を自分に向かってくる剣士から、その向こう側で儀仗を構えているエルデに切り替える事を命じたのだ。

「後ろのルーナーを狙え！　妙な剣を持った小僧は放っておけ。どうせ結界から出られはしない」

だがメラク・ガーデルのその指示は二重の過ちを孕んでいた。

すなわちエイルが避けるべき攻撃を減らしてしまった事、その一方でルーンを自らのさらなる防御に回す事を考えなかった事である。

新教会のルーナー達はメラクの命令で即座に攻撃対象を変えた。

だが、予め仕込んであった攻撃ルーンと違い、新たに目標を定めてルーンを唱え出すという事は、次射、すなわちルーンを詠唱し終えるまでに時間がかかるということである。そしてそれはエルデにとっては大きな時間稼ぎになる。

（六回……）

エイルは心の中で確認するようにつぶやいた。

六回まで攻撃に耐えられる防御ルーン。おそらくそれはエルデが使える最高位の防御ルーンであろう。そしてその六回の防御ルーンが必要なのは、実のところエイルではなく、エルデであった。六回というのは、エルデが耐えられる防御回数。ただし、エルデが言うように「格が違いすぎる」ルーナーの攻撃は回数にすら入らない。ランディほどではない、それなりの高位ルーナーのルーンであれば六回防げるという意味である。

すなわちエルデが口にした「六回」という回数は、エルデ自分が耐えられる回数であると考えるべきものであった。

もちろんエイルに対して与えられた猶予も六回である。メラクに辿り着くまで一度も消費しなかったのだから、六回まで敵の攻撃を無効化できる。それまでにゼプスの切っ先が届けばエイルの勝ちである。

勿論メラクにはメラクなりの勝算があった。精霊陣の壁と、自らにかけた防御ルーンに対する自信である。

万が一精霊陣の壁を破られたとしても、彼には堅固な防御ルーンがかけられているのだ。むしろエイルが自分の近くに来ることで、引き連れている護衛剣士の餌食にする事ができる可能性が増える……。

だが護衛の剣士達の剣は、エイルの服を掠める事しかできなかった。向かってくるエイルに挑んだ剣士達は誰一人として目的を遂げる事はできなかった。ある者は手首を叩かれて剣を落とし、またある者は渾身の力で振り下ろした剣を地面に深々と叩きつけ、その反

動で自らの足を傷つけた。そしてある者は足下に受けた痛撃で転げるようにして倒れていた。

エイルは笑みが消え、余裕が無くなったメラクの顔を見据えると、メラクをかばうように立ちふさがる三人の剣士の存在を全く意に介すことなく、妖剣ゼプスを上段に構え、勢いを付けて迷うことなく、メラクに飛びかかった。

# 第七十三話　黒い翼のエルデ（後編）

最初の思惑である精霊陣は、エイルにとって壁でも何でもなかった。何の抵抗もなくエイルはメラクの目前まで近づけていた。

そう。既に精霊陣などの効力は失われていたのだ。

（神の空間、か）

手応えのない相手の「結界」に、エイルはその原因を特定していた。

（ご大層な名前だけのことはあるな）

メラクの二番目の思惑である自らにかけた防御ルーンも、エイルにはそれが存在していようが、あるいはエルデの神の空間の範囲に入っていようが、どちらにしろ用をなさないであろうという確信があった。

なぜならランディとの戦いで、妖剣ゼプスには敵の纏った防御ルーンをその一振りで無効化する力があることを知っていたからだ。

まさに今、エイルの手の中にある妖剣ゼプスは青白く光輝き、その刀身にはエーテルの力がみなぎっている。持ち主であるエイルには、握りしめる妖剣ゼプスの内包する力が尋常でない事が理屈抜きにわかっていた。

エルデの神の空間がここまで届いていなかったとしても、ゼプスの一振りはガーデルが纏う防御ルーンを全て剥ぎ取るだろう。そして返す一振りでその無防備な首をはねることができるのだ。

「ガーデル様！」

部下達の悲鳴が響いた。

メラクの盾となってエイルを迎え撃つはずであった剣士達は、自分達が繰り出した剣がエイルの体をすり抜けるのを見たのだ。

胸と首と腹をとらえたはずの剣はしかし、なんの手応えも与えなかった。高位ルーナーの護衛となる剣士達である。その手応えの意

味するところは承知していた。
六回のうち三回を消費して盾となっていた攻撃を文字通り無効化したエイルは、思わず儀仗を構えて防御しようとしたメラクめがけ、上段から大きく一太刀を浴びせた。儀仗と妖剣がぶつかる際、メラクの体が黄色く光り、それがはじけた。
エルデに尋ねるまでもなく、それはメラクの防御ルーンを全て剥ぎ取った証拠であった。衝撃によろけるメラクに、エイルはしかし、二振り目となるゼプスの切っ先をその喉に向けることはしなかった。代わりに体制を崩したメラクの顎を剣の柄の底で正確に狙うと、素早く、しかし思い切り打ち据えた。

「ぐわっ」

たたき落とされるようにしてその場に倒れるメラクの周りに、指導者の盾であった三人の剣士が集まってきた。
エイルはかまわず、いつもの無防備な構えで剣士達に向かっていった。
一人目の剣を避けたものの、二人目の剣はまたしてもエイルの腹に、三人目の剣先は左腕に届いていた。だがそれらもすべて空を切った。エイルは敵の剣にたじろぎもせず、最小限の動きで三人の動きを封じていた。ゼプスで全員の首筋を打ち据えていたのだ。ただし、剣を持ち替えて。
刃ではなくその反対側、棟の方で打ち据えたのだ。エイルの能力を持ってすれば棟側であろうが刃側であろうが物を切断する事はたやすい。しかしエイルはそれをしなかった。
切れば、そして刺せば当たり前だが血が出るだろう。しかし、この場に充満する血の匂いと色はエルデの本能を刺激する。それを避けたかったのだ。
そしてもちろん、一番の理由はこの期に及んでもなお、エイルは人の命を奪いたくはなかった事である。

エイルは一連の動きを止めると、エルデの様子をみやった。そして大きく息を吐いた。多少の心配はしていたのだが、それが杞憂である事がわかったからだ。

エルデは自らは詠唱をしながらも、同時に防御を行っていた。いや、それは防御ではなく、ほとんど攻撃といって良かった。

エイルには、儀仗ノルンが長く伸びているように見えた。だがよく見るとそれはノルンから生えた蔦のようなものだった。

その蔦が長く伸び、ムチとなって精霊陣の外側で攻撃ルーンを唱えていたルーナー達を打ち据え、なぎ払っていたのだ。

まるで細長い蛇が自らの意思でルーナー達をうちすえているかのようだった。もちろんエルデの意識のうちの何分の一かをそちらに割いて、ノルンを制御しているのであろう。

エイルは視線を地面に横たわるメラクに移すと自分の仕事に戻った。

「部隊を撤退させろ」

右手、すなわち儀仗を持つ手を踏みつけ、妖剣ゼプスの切っ先をのど元に当てると、エイルはできる限りぞんざいな声でそう命じた。

「何度も言わせるな。すぐに命令しろ」

その頃になると第二陣とも言える敵の剣士が集まってきていた。もちろんエイルとメラクの様子を見て、遠巻きにしているだけで手を出そうとはしなかった。

エイルが動き出してから、まだ一分も経ってはいなかった。だが形勢は逆転していた。

たった二人が、数十人以上の部隊をほぼ制圧していたのだ。

（よし）

エイルがそう思って気を緩めた時に、それは起こった。

真っ白な光……光線と呼ぶにはあまりに太すぎるとエイルは思っ

た……上半身を全て飲み込むほどの直系のある白い光の筒、いや柱のようなものが真横からエイルを直撃すると、そのまま後方にいるエルデさえも飲み込んで反対側へ突き抜け、大きな音を立てて消えた。

エイルにもエルデにも衝撃は伝わらなかった。

二人ともエルデがかけた六回まで防御できるルーンで守られていたのだ。だがその光の衝撃が持つ力が尋常でないことはあまりに太い光の束が着弾した場所を見れば、誰の目にも明らかだった。

つい今し方までそこにあったはずの建物……おそらくはハイデルーヴェン城の離れのような付随建築物なのだろうが……そこに穴があいていた。

何かを切り取ったような大きな穴は、構造物の強度限界を超えた損壊であったのだろう。エイルが視線を変える前にさらに大きな音を立てて瓦解し、大量の埃をあたりにまき散らした。

「私の部下の手を踏んでいる、その小汚い足をどけろ」

光の束が来た方向から大きな声が飛んだ。

エイルは反射的に声のする方へ顔を向けた。もちろん剣の切っ先は微動だにせず、ただし自分の一瞬の油断にギリギリと歯噛みをしながら。

エイルが言葉で反応する前に、声の主が続けた。

「奇妙な結界を作ってるようだが、私はその外にいる。試しに今ルーンを放って見たが、ここからならそっちを狙い放題のようだな。迂闊なのか油断していたのかは知らんが、どちらにしろ今現在、お前達の生殺与奪は私の手の中にある」

エイルとエルデが防御ルーンを纏っている事は今の一射で相手には把握されている事は言うまでもない。まともな指揮官であれば、おそらく次に発するのは強化ルーンを剥ぎ取るルーンだろう。もっとも、エイルの防御ルーンの限度である六回は、今の光の柱による攻撃で、すでに使い切っていた。

「おっと、妙な動きをするなよ。私も聖職者のはしくれだ。無駄な殺生は本意ではないからな」

相手の声からその性格を把握するのはエイルにはまだ荷が重かったが、その声が落ち着いたものなのはすぐにわかった。さらに本人の言うとおり今は優位に立っているはずだが、それでも注意深さを失っていない……そんな「感じ」すら伝わってきた。

もっとも防御ルーンがかかっていなければ、さきほどの一射でエイルもエルデも消滅していたことは間違いない。警告にしては相当に手荒である。

つまりそれは新たな相手が必要であれば容赦のない攻撃を仕掛ける性格である証明といえた。

消滅したらそれでよし、防御ルーンをかけていたならば充分な脅しになる。おおざっぱではあるが、相手の力量がわからない場合はきわめて効果的とも言えた。

中途半端にただの警告程度のものを仕掛けたならば、相手であるエイルの不興を買いメラクの首が胴体と分離した上に、とりあえずの反撃が行われる可能性が高いと判断したのであろう。そうなれば結果として戦いに勝ちはしても、味方も無傷とは行かない。

要するに新手の指揮官はそれなりに「切れ者」なのだ。少なくともメラクより指揮官としての器量は上であろうと思われた。

そこまで考えた時、エイルの予想通り何かのルーンが放たれ、エイルは体全体に軽い衝撃を受けた。

エルデではないから確実な事はわからないが、それが防御を剥ぎ取るルーンであろうという想像はできた。どちらにしろエイルはすでに防御ルーンを纏っていなかったから、それによる落胆や失望感は無かった。

「さ。これで『詰み』だ。後ろのルーナーともども、おとなしく投降しろ」

エイルの視線の先、声のする方角には五人ほどの集団がいた。そ

してその先頭に儀仗を持つ黄色い僧正服姿の男がいた。
「作法だ。一応名乗っておこう。私はハイデルーヴェン守護隊隊長のジクスだ。お前達の名は？」
エイルは妖剣ゼプスの柄を握る手の力を抜かず、そのままの格好で答えた。
「オレはエイル。エイル・エイミイ。連れはエルデ・ヴァイスだ」
「む……お前は瞳髪黒色か？後ろの黒髪の女もひょっとして……」
エイルに向かってゆっくりと近づいてきた指揮官シーン・ジクスは敵であるエイルが思ってもいなかった種族だった事に気付くと、さすがに戸惑った様子を見せた。
エイルはそこにすかさず言葉を重ねた。会話が続けば時間稼ぎになるからだ。
「俺達は二人とも瞳髪黒色……ピクシィだ。そんなに珍しいのか？」
「珍しいのか、だと？」
シーンは改めてエイルとエルデを見比べた。うすら灯りで少し距離がある為、瞳や髪の本来の色がわかりにくい。だが近くのエイルはほぼ特定できる。エルデについても髪の色が「言われてみれば」黒いという事くらいはわかる距離にいた。ただし、目を閉じているエルデの瞳の色までは判別不能であった。三眼の持ち主である事も。
シーンはある程度まで近づいたところで立ち止まった。おそらくそこがエルデがヴィーダと呼ぶ「神の空間」の一番外側なのだろう。外からはおそらく「神の空間」が特殊な状況にある事が「見える」のだ。
さらにヴィーダの外側からは内部に向かってルーンの攻撃が可能である事もわかっていた。
亜神が作り出す絶対的な結界である「神の空間」だが、少なくともエルデが作り出すヴィーダについては、防御の結界としての能力はさほど高くはなさそうであった。
「珍しいさ。それともお前達はピクシィだらけの隠れ里にでも住んでいるのか？」

シーンが話に乗ってきたのを見たエイルが「しめた」と思ったのもつかの間、相手はエイルの予想よりも少々上手であった。
「だがそんなことは後でいい話だ。とりあえず警告はしたぞ。エイルと言ったな？お前はその妙な剣を捨てて投降の意思表示をしろ。後ろのルーナーは、危ないムチ付きの儀仗を捨てて、ゆっくり歩きながらエイルの近くへ来い」
「ジ、ジクス様……」
エイルの足下でメラクがうめいた。

突然現れた声の主はヴェリーユの守備隊の長、シーン・ジクスであった。ハイデルーヴェン入りした彼は、メラクが命令に反して行動を起こしている事を知ると、急ぎその後を追い、この場面に遭遇したのである。
実のところエイルの予想通り、エルデのヴィーダは外からはぼんやりとした光を放つ空間として視覚的に捉えられていた。エーテルの流れが見える特殊な人間だけでなく、それは誰の目にも明かなものであった。
だからこそシーンはその結界から距離を取り、陣形を整えた上で外側から内部に攻撃を仕掛けたのだ。
大がかりな結界をたった一人の少女が作り出している事に驚いた彼は、とにかく自分の持つ最大の攻撃ルーンを放つことにした。それで効果があればよし、無ければ即座に撤退するつもりだったのだ。
果たして効果があった。不意を突かれたエイルとエルデは攻撃ルーンをまともに受け、少なくともエイルは大きな驚きをもってシーンを見ていた。

だが、エルデの作り上げた「神の空間」ヴィーダが呼び寄せたのはシーン・ジクスだけではなかった。
正確にはヴィーダと言うよりはハイデルーヴェン城の爆発・倒壊による大音響と地響きが、多くの人間を呼び寄せたと言うべきであ

ろう。
もちろんシーンはそれも計算済みであった。大音響があった場所に人々が詰めかける前に事態の収拾を図りたかった。
「今から十数える。数え終わる前に行動に移せ。言っておくが私は例え子供だろうが女だろうが希少な生き残りであるピクシィであろうが、容赦はしない」
そうだろうな、とエイルは思った。最初の一射でそれはよくわかっていた。
「一……二……三……」
エイルはエルデを振り返った。
（まだか？）
エルデが何をやろうとしているのかはわからない。そもそもその力がヴィーダの内側だけに有効であるなら、エイル達はシーンの言うとおり既に「詰み」であろう。
だが、エイルは確信していた。根拠はない。いや、それはエイルがエルデを信じる力であろう。
この状況下にあっても目を閉じたままのエルデを見て、エイルは迷いを捨てた。
エルデは最期までやるつもりなのだ。ならばエイルも自分の仕事をやり抜くだけであった。
「四……五……」
エイルは右手の甲に視線を移すと、心の中である人物の名を叫んだ。それは出会ったことのない、しかし他人とも言えない人物の名前だった。
（ルルデ・フィリスティアード！　オレに力をくれ！）
エイルの体の持ち主であるルルデに向けて、力一杯叫んだ。
（お前の得た力を、オレが代わりに使ってやるっ）
確信はなかった。
だが、迷いもなかった。

エイルは内なる、そして未知なる力を今こそ使うと決めたのだ。
《白き翼》を名乗る、瞳髪黒色の少女を我が身を賭して守りたいと心から念じながら。
「六……七……」
だが……
エイルは右手に何の変化も感じなかった。
（ちくしょー！）
「八……」
時間が無かった。だがもう次の手を考えている暇はない。エルデは右手の妖剣ゼプスを掲げると、力の持ち主である少年の名を今度は声に出して叫んだ。
「バカやろう、お前は二度も死ぬつもりかよ、ルルデ・フィリスティアード！」
エイルのその叫びが終わる前に、いくつかの現象が同時にその場に生じた。
一つ目はエイルの握る妖剣ゼプスが炎を出して真っ赤に燃え上がると、天空を貫くように大きな炎の柱を発射したこと。
それをみたシーンが十を数え終わる前に攻撃ルーン掃射の合図を出したこと。
そしてその二つの現象のほんの少し前に、あたり全体に弦楽器の奏でる音が鳴り響いたことである。

エイルは体全体が燃える様に熱くなっていることに気付いた。
だが、自分自身が燃えているわけではない。熱くなっているが耐えられない程でもない。同時に今、自分が大気の一部と融合しているような拡張感のようなものを覚えていた。それはエイルにとって全く未知の感覚で、燃えるように熱い自分の腕が世界中に存在しているかのような空間支配感とでも呼ぶべきものであった。
力を手にした事は瞬時に理解した。エイルはルルデが覚醒させた炎のエレメンタルの力を継承したのだ。

シーンが攻撃ルーンを放つ合図をした事を認識していたエイルは、とにかくまずはエルデの体を守りたいと考えた。

なぜか今の力を使えばそれができる、という確信があった。

エイルはエルデがいる場所まで、自らの力を拡張させたいと願った。エルデを力の結界の中に入れてしまおうと考えたのである。

エイルは炎の塊のような半球状の結界を頭の中で思い描いた。それは瞬時に実体化し、エルデの体に届く大きさに拡大した。

外から見れば真っ赤な火球にしか見えないその力場の内部にあって、エイルもエルデも燃える事はなかった。

次にエイルはそのままの状態でシーン達に向かって妖剣ゼプスを振り下ろした。

互いの間に相当な距離があるのはわかっている。だからもちろん物理的な剣先が届くはずはない。しかし、振り下ろされたゼプスの刃からは、炎の筋が伸び、それは楽々とシーンに届いた。

事態が急変した事を受けて、シーンは今まさに退却の命令を出そうとしていたところであった。

かけていたはずの防御ルーンは発動しなかった。

シーンにはその理由はわからなかった。突然強大なフェアリーの力を解放したエイルが、ルーンを無効化する何らかの能力を発動したためか、あるいはシーンの予想に反して、ある種の強化ルーンが発せられたのか。

だが、そんなことをゆっくり推測している場合ではなかった。エイルの炎の刃が目の前の地面に打ち下ろされると、その衝撃で後方に吹き飛ばされたのだ。同時に熱で目を開けていられない状態になった。さらに昨夜積もっていた雪が熱で蒸発し、あたりは一瞬で水蒸気の作り出す濃霧に包まれた。

ほぼ数秒の間に、いったい何が起こったのかを正確に把握できている者はそこには誰一人いなかった。

だがその中でもおそらくもっとも状況を把握していたのは、二人

のアルヴであったと思われる。

長い髪を持つ二人の女アルヴ。一人はダ＝ラーラと呼ばれる楽器を抱え、一人は細長い儀仗を手に、風景に溶け込んでいるかのように静かに立っていた。

それは二人の賢者。《二藍の旋律》ことラウ・ラ＝レイと《群青の矛》ことファーン・カンフリーエであった。二人はエルデの結界を挟んでシーン・ジクスの部隊の向かい側にある建物の脇に位置していた。つまりもっとも遠くから全体を眺めていた格好である。

「ラウっち？」

儀仗を下ろしたファーンがそう尋ねると、ラウは首を横に振った。

「今はまだ近づかないほうがいい。なに、大丈夫だ。奴らの動きは封じてある」

エイルが作った水蒸気の霧が徐々に晴れてきた。次第にあたりの様子が明らかになる。

そこはラウの言うとおり、およそ戦闘可能な人間など存在しているとは思えない有様であった。

「仲間が居たのか」

「くそ、どうなっている？」

「立てないぞ。体が言う事をきかない」

「感覚器官が狂わされているんだ」

視界が開けるにつれ、口々にそんなことを叫ぶ声も聞こえてきた。

その場に居た新教会陣営の全て……それはシーン・ジクスをも含む全ての人間が地面に倒れ込んでいた。そしてもがいていたのだ。

立ち上がろうと四肢を動かすものの、立ち上がる動作ができない。たまさか立ち上がれた者がいてもすぐに倒れ込む。

体勢を維持する事ができないようであった。

ファーンがシーン達の防御ルーンを剥ぎ取るルーンを唱えると、それに合わせるようにしてラウが何らかの範囲ルーンをかけてシーン達を一気に無力化したのだ。

「貴様、何をした?」

もがきながら、シーンはそう怒鳴った。もちろんエイルに向かってである。

エイルもその場の状況を見て混乱していたのだ。そう尋ねられても答えられるはずがない。身に覚えがないのだから。

だが彼はシーンとは違い、その場に第三者の力が働いたことだけはわかっていた。確かに聞こえた弦楽器の音。それが関係しているのだろうということも。

しかし戦いの舞台は小康状態を長く続けることを許さなかった。

エイルとエルデ以外で唯一、その場で自由に体を動かすことができる者がいた。

「おのれ、化け物ども。これでも喰らえ!」

声はメラク・ガーデルのものだった。

メラクはキアーナと共にエイルの結界内にいたために、ラウのルーンの影響を受けていなかったのだ。

叫び声と同時に、メラクは何かをエイルに向かって投げつけた。

エイルはそれを石の様なものだと認識する前に、ゼプスの柄に当てて防いだ……つもりだった。石は思いの外脆く、ゼプスの柄に当たった瞬間に崩れるように砕け散った。

メラクの思惑はそれであった。エイルの体に当たろうが当たるまいが、いや、エイルから遠く離れた場所に落下しても良かったのだ。石が何かに、そう地面でもいい。何かに当たって崩壊しさえすればいいのだ。それほど脆い石なのであり、砕く事が目的であったのだ。

事態は相変わらずエイルに考える時間をほとんど与えてくれなかった。足下に崩れ落ちた石とメラクを見比べようとした時に、それは起こった。

悲鳴。
いや、咆哮といった方がふさわしい、何かの叫び声が空気をふるわせた。
それはこの世のものとは思えぬようなまがまがしくも恐ろしい声であった。
そして……。
エイルは我が目を疑った。
咆哮の主がそこにいた。
全身が土色の人間……いや、人間と呼ぶにはおぞましすぎる五本の腕、見上げる巨躯、虚ろな眼窩。
それは人型をした悪趣味な土人形そのものであった。
エイルは突如として現れた、小山のような大きさをした、不気味な土人形に見覚えがあった。

「スカルモールド！」
ファーンが思わず叫んだ。
「あいつ、何という事を。味方も巻き込むつもりか」
ラウが歯噛みするのも無理はなかった。
メラクはスカルモールドを封じ込めた精霊石、いや、もはや呪石と呼ぶほうがふさわしい石つぶてをエルデに叩きつけ、封じられた力を解放したのである。
それがジャミールの里人達が持つあの忌まわしい石と同じ物である事を、エイルはすぐに思いついた。
メラクは石を投げつけたあと、スカルモールドが背にした方角へ脱兎のごとく走り去る途中であった。
しかしその目論見はあえなく潰えた。エルデの儀仗から生えたツルが伸び、その槍のように尖った先端がメラクの背に突き刺さったのだ。
哀れなメラクは背中からの衝撃でもんどり打ってその場に倒れ込み、そのまま意識を失った。

広場に立っていたのは三人だけであった。
エイルとエルデ。そして仁王立ちのまま、うつろな眼窩で目の前のエイルを見つめる小山のような土色の巨人。
エイルにしてみれば何度か戦ったことのある相手である。たやすい相手とは言えないが、戦い方は知っていた。シーン達ルーナーに比べればたやすい相手だと言っていいだろう。それよりもエイルは、むしろ新教会の僧正がスカルモールドを封じ込めた精霊石を持っていたという事実に衝撃をうけた。
その出所がジャミールのものと同じであるならば、それは《深紅の綺羅》が作り出した精霊石である。だが正教会の最上位であり、三聖と呼ばれる《深紅の綺羅》が新教会にそれを供給していたとはさすがに考えにくい。
エイルは別の可能性をすぐに思いついた。
（キセン・プロット……）
今となっては全ては闇の中である。エイルの推理は本人に確認することはできない。だが《深紅の綺羅》の体細胞や血液を「所有」していたキセンであれば、そしてスカルモールドを封じ込める精霊石の製法を知っていれば、それを生み出す事は不可能ではない。ならば可能性の最上位にあると言っていいだろう。
キセン・プロットという人間の持っている頭脳、いや知識と飽くなき探求心に対して、エイルは言葉に言い表せない恐ろしさを今更ながら噛みしめることになった。
エイルは唇を噛むと、まさに自分をつかみかかろうとしているスカルモールドに意識を集中した。とりあえず目の前の脅威を取り除く事が先決であった。
スカルモールドに向かうと、ゼプスの刀身をその土色をした体全体に向けて迷わず振り下ろした。
だがエイルは切ったのではない。刀身を触媒のようにして、振り下ろす動作とともにそこから熱の塊をぶつけたのである。炎の塊は

スカルモールドの体を覆い尽くす程の大きさに爆発するように拡大すると、一瞬で消滅した。

エイルは手に入れたエレメンタルの力の制御を理解しているわけではなかった。だが、こうやればこうなるだろうと言う映像が頭の中に浮かぶのだ。そして、いまもまさに描いた通りの力がスカルモールドに向けて放たれた。

おぞましい咆哮を上げ、エイルを、いや目の前の餌を喰らおうと五本ある手を無秩序に伸ばしてきたスカルモールドは、前屈みの姿勢で熱の球体に包まれた。そして次の瞬間にはその熱で蒸発し、あっという間に広場から姿を消した。

立て続けに起こる想像もしていなかった出来事に、もはやシーン達は言葉を失っていた。ただ呆然とスカルモールドが消滅した空間を眺めているだけであった。

しかし、それで事が終わったわけではなかった。彼らは間を置かずにさらなる脅威を体験する事になった。

さすがにシーンは自分達が戦おうとしていた相手が、普通の剣士やルーナーではない事にもはや何の疑いも抱かなかった。そして今の自分達に出来る事は唯一、この場からの離脱であることも。

だが相変わらず体は言う事をきかない。

シーンはせめて自分の置かれている状況をもう一度把握しようと、首を曲げてあたりを見ようとした。

次の異変はその時に起こった。

一日の始まりを象徴するかのように、白み始め、輝きを増していた空が急に暗くなったのだ。それはまるで時間が夜の方向へ巻き戻ったかのようであった。

同時に体が重くなり、意のままに動かない四肢から力が抜けていくのを感じた。

今までは自由に動かないだけで筋肉に力を込めようとする事はできた。しかし、今度は力そのものが入らない。それどころか、何か

に力を込めようとしても、どんどんだるくなっていくのだ。
そして意識が混濁を始め、やがて何も考えられなくなった。
それはシーンだけでなく、その場にいた新教会全員に等しく訪れていた現象であった。
（これは何だ？）
さっきまでその場に立っていた人間は、エイルとエルデだけであった。今度はその場で動いている、いや意識のある人間が二人だけと言う状況になっていた。
そのほかの全員……今までもがき、わめいていた新教会の全員が、もうぴくりとも動かなくなっていた。

ラウとファーンはこの時、単に幸運だったと言うべきであろう。
エルデがラウとファーンの居た場所を意識していたとは考えにくい。エルデからそれなりの距離があった為に、単純に「神の空間」の及ぶ範囲ではなかったのだ。
最初にエルデが作った「神の空間」は、その真の機能の発動に合わせて範囲を拡張した。その範囲からはギリギリで外れていたのだ。
だから彼女たちは目の前で起こった事を、克明に観察する役を得た。

その時……つまり明けかけていた空の時間が逆戻りしたかのように暗くなった時、彼女たちは頭上に浮かぶ二つの大きな渦を見つけた。
それほど高い地点に存在していたわけではない。だがその真っ黒な渦は、ぐるぐると回転しながら大きくなり、明け始めた空を包み込むように覆っていった。
「翼？」
ファーンがそうつぶやいた。
一方ラウは言葉が出なかった。ただ、心の中で同意した。
二つの黒い渦は、まるで水に絵の具が溶けるように広がっていき、

やがて一対の翼のような形を作っていた。そしてその翼は、地上のエルデに繋がっていた。

見ようによってはエルデはその場で巨大な黒い翼を広げたような格好であった。

翼の完成に呼応するかのように周りにいた新教会陣営と思しき集団がその動きを完全に止めた事もラウ達は認めていた。

「あれが上席様の力？」

独り言とも、問いかけとも取れるファーンの言葉に、しかしラウは回答を用意できないでいた。ラウとて初めて見る現象であった。エルデが潜在能力としてとてつもない力を有している事は知っていた。

だが、空間をすべて飲み込んでしまうようなこんな力の発現は初めて見た。しかもそれはどう見てもハイレーンが使う治癒系のルーンとは言いがたかった。治癒や治療といったものとは真逆にあるかのような、まがまがしく絶望に満ち、深い闇にも似た恐ろしい翼がそこには広げられていたである。

声が飛び交っていたその場に、重苦しい沈黙が流れていた。いや、静寂と言った方が正しいであろう。そもそも声を発する事ができる者はほとんどいなかったからだ。エルデとエイル以外には。

ラウとファーンが息を呑んで見守る中、エルデの黒い翼はまたしてもその形を変えた。

一対の翼は互いにねじれるように絡み合うと、今度は一本の渦を成した。しかしそれはほんの短時間で、あっという間にかき消えてしまったのだ。

ラウは我が目を疑った。

今そこにあった闇の帳が一瞬でその姿を消すと、次にその空間を満たしたのは、真っ黒な無数の羽毛のようなものであった。

無風の空間をゆっくりと舞い降りる黒い羽毛は、落下の途中で色を白く変えていった。っそして全ての白い羽毛は、ある地点に向か

って降り注いでいった。
ある地点とは、一人の小柄な人間が横たわる場所であった。
ラウからはよく見えなかったが、その人間とは誰あろう意識を失ったままのキアーナ・ペンドルトンであった。
白い羽毛は柱のように一カ所に集まると、横たわる一人の少年、キアーナの体に次々と吸収されていったのだ。

「エルデ！」
瞳髪黒色のルーナーの現名を呼ぶ声に、ラウは我に返って声のする方へ視線を向けた。
そこには儀仗に寄りかかって、やっとの事で立っているエルデ・ヴァイスの姿があった。
エルデは瞳髪黒色の少年が自分の名を呼びながら駆け寄ってくるまで、何とか堪えていたようだった。だがエイル・エイミイがすぐ側に来た時、自らの体を支えていた力が尽きた。
エルデはエイルに全てを預けるかのようにして、その胸に倒れ込んだ。
「おい、エルデ！　しっかりしろ！」
エイルの声が再びあたりに響いた。
ラウとファーンは顔を見合わせるとうなずき合い、自分達もエルデのもとへ駆けだした。

西暦四〇二七年黒の一月十七日にハイデルーヴェンでおこったとされるハイデルーヴェン城消失事件は、前触れもなく始まり、そして瞬きする間に終わった。
この時消失・倒壊した建物は旧ハイデルーヴェン城を含んで十とも二十とも言われており、その原因は現在も不明のままとなっている。
もっともごく少数いたとされる目撃者の証言などから、一般的に

は正教会と新教会に属する高位ルーナー同士の小競り合いによるものと認知されており、多くの人々は「その事件」を当たり前のようにそう認識している。

そしてもちろんこの事件はこの後始まることになる第三次大規模世界大戦、通称「月の大戦」と呼ばれる大きな戦いの呼び水の一つとなった事件としてあまりにも有名である。

しかしこの事件は地方で起こった初めての紛争らしい紛争という意味合いに捉えられているに過ぎない。

だがこの時の戦いは、実のところ一地方の街で起こった二つの陣営からなるただの小競り合いなどではなかったのである。

エルデ・ヴァイスが「神の空間」を作り上げ、エイル・エイミイがエレメンタルの結界を構築し、四聖《白き翼》がその力を解放したこの事件は、ファランドールに様々な影響をもたらしていた。

最も近いところでは、もちろんアプリリアージェ一行に。

少し離れて、同じウンディーネ連邦共和国の首都島アダンに。

そして、サラマンダとは別の大陸の内陸部にある小さな湖の畔に。

そう。

感知出来る者が居たのである。

彼らにとってこの事件は、次なる行動を起こす為の大きな鐘響（どうきょう）となった。

ある者は四番目の亜神の存在を知り、またある者は四番目のエレメンタルの存在を認識した。

そして最も遠い場所にいるある者は、自らを閉じ込めていた戒めが綻びたのを感じ、その重いまぶたをゆっくりと開いた。

# 第七十四話　エスカの誤算（前書き）

合わせ月の夜　第二部　深紅の綺羅　第七巻
通巻第十五巻のスタートです

# 第七十四話　エスカの誤算

＞ｉ３２０２６―１８３１＜

エッダの王宮に併設されている迎賓館は、各地からの来訪者で賑わっていた。

いや、「賑わっている」という表現はこの場合、適切ではないかもしれない。なぜなら彼らはすべて翌日に迫った「大葬」の為に訪れているのである。ここでは便宜上「賑やか」ではなく「その場は喧噪に満ちていた」とでも表現すべきなのであろう。

どちらにしろ迎賓館にいた多くの人間が、翌日の「大葬」を前にして多少の興奮状態にあったのは確かであったろう。

大葬とはすなわち、カラティア朝シルフィード王国前国王、故アプサラス三世の公式な葬儀の呼称である。

シルフィード王国の首都エッダにはその大葬に参列する者が内外から相当数集まっており、その中でも国王名で出された公式招待客の一行は迎賓館に集中していたのである。

その大葬を翌日に控え、迎賓館では晩餐の宴が執り行われていた。

行事の内容が内容だけに、当然ながら歌や踊り、芸能付きのきらびやかな晩餐会というべきものではない。だが招かれた人数は相当な数に上る。宴の規模は自然に大きくなるのは避けられない状況である。厳かな雰囲気ながらも大広間には豪華な食事とふんだんな酒の用意がされていた。

そもそも迎賓館という一つの建物に内外の賓客が集っているのである。。参列客は企図せずとも夕食の為にその場所、その時に一同に顔を合わせることになる。それこそが重要な事であった。

二ヶ月も前に他界したアプサラス三世はすでに王宮内での密葬が終わっている。当時の混乱も収まり、表面上は落ち着きを取り戻し

たこの時期に開かれる儀礼的な行事である大葬を第一の目的としている参列者は少数であろう。

すなわち大葬当日の行事には「参列した」という事実のみが必要であり、行事自体に興味を抱くものはさほど多くはない。重要なのはむしろ前日の晩餐の宴であり、多くの参列者の主たる目的はまさに参列者同士の情報交換であると言っても差し支えがないのかも知れないのだ。

少なくとも晩餐の宴に顔を出す者は、間違い無く晩餐の宴を目的にする者達であった。

そこには旧交を温める者、腹の探り合いをする者、自らは一歩引いて参列者の様子を観察する者など様々な人間がうごめいていたのである。

彼らの話題は一見多種多様でありながら、どちらにしろいくつかに絞られていた。

一つはアプサラス三世とは直接関係の無い話。すなわち世界情勢に対するものである。混乱がまだ収束しないサラマンダ侯国に対するドライアドの干渉は大きな火種と言えた。昨今ではあからさまな軍事干渉も散見されるが、シルフィードはだんまりを決め込んでいる。つまり、両国の思惑を探る、あるいは探り合おうとしているのである。

それとは別に表面上最も多いのはうわさ話である。それも醜聞に属する話題である。

アプサラス三世の逝去があまりに突然だった為に、発表された病死という死因に不信感を持つ者は多い。そんな状況にありながら、シルフィード王国の中枢にあるガルフ・キャンタビレイ王国軍大元帥が、依然として新都となるノッダから帰還していないことについて様々な憶測を話し合っていた。

それはつまり現在のシルフィード王国の国家体制が一枚岩ではないことを表しており、それに対するドライアド王国の出方を含め、

今後の世界情勢を俯瞰しようとしているのである。
参列者の多くは軍での階級は所有していても純粋な軍人ではない。勿論主賓ではなく随行のものには軍人もいるが、多くの場合彼らは迎賓館に部屋はあてがわれず、市中に別途用意された宿舎に分散していた。だから彼らは彼らなりに市中で情報交換を行っていたのであろう。
各国、各勢力の代表参列者以外に招かれた列席者は、儀式の内容が内容だけに、カラティア家と関係の深い者で占められていた。
たとえ国が分かれていようと、貴族同士は何かしらつながりがあるものだ。
ドライアド王国に所領がある伯爵が、実はシルフィードの侯爵筋であることなどはもはや珍しくもない。
サラマンダの貴族の多くはドライアドとシルフィードの貴族の血縁であるし、サラマンダでの貴族同士の交流も考えるとファランドール中の貴族はお互いになにかしらのつながりがあると言っても過言ではないだろう。
ウンディーネの豪商にしてもカラティア朝とだけ取引があるわけではない。
政治家もしかり。
従って彼らにとってここは、葬儀の場ではなく、ファランドール中の情報が一堂に会する重要な情報収集の場であったのだ。
つまりこの「大葬」には、多くの人間が参列したがっていたという事である。果たして想像を絶する人間がエッダに集い、情報の量もそれにつれて増えていくことになった。
「いやいや、俺なりに予想はしてたが、それを上回るすごい人数だな」
エスカ・ペトルウシュカはこの期間中大食堂として使われている迎賓館の広間の様子を見てため息をついた。

戦争の噂がささやかれる中という特殊な事情もあるだろうが、その年が特別な年である事を参列者のほとんど……いやすべての人間が認識しているだけに、話題もそれに関する者が多いようであった。

勿論「合わせ月」の年だからである。

それはそこかしこの立ち話の中に「イエナ三世」と「エレメンタル」いう言葉が頻繁に出てくることでもわかる。

そして情報やうわさ話や伝説に関する見解合戦などとは全く別な価値観を、参列者は共有していた。

それは大葬の目玉とも言えるものである。

そう。彼らはシルフィードの新しい女王を一目見ようと期待してエッダ入りしたのである。

しかし当のイエナ三世は、体調が優れないという理由で来賓の前には未だに一度も顔を見せていなかった。

参加者が最も多くなる大葬前日の晩餐の宴にはさすがに顔見せを行うだろうというのが大方の予想だったが、その日もイエナ三世の姿を誰も拝めずじまいであった。

「なにせエレメンタルが国王ですからな。これはファランドールの歴史が始まって以来の出来事ですぞ。強気のドライアドも、実のところはうかつに手を出すのは躊躇われるところでしょうな」

エスカの耳にそんな声が届く。

「しかも国王自らが戦線に参加するのがカラティア王朝のならい。ドライアドとしては、その力をいかに封じるかが鍵になるでしょうな」

「私の掴んでいる情報では、ドライアドは未だエレメンタルを一人も確保できていないようですしね」

エスカは声のする方を見やった。

どちらもデュナンだ。一人は貴族風の服装だが、もう一人はこざっぱりした平服である。おそらく商人であろう。二人ともエスカが

見知った顔ではない。という事はドライアドの貴族筋ではない。サラマンダの人間か、あるいはウンディーネ共和国の者であろうと思われた。

「私なら、エレメンタルがいる部隊には、できるだけ被害が少なくて済むような部隊をあてがいますな」

「と言うと？」

「傭兵や雑魚で固めた部隊ですよ」

「それではいたずらに消耗するだけでしょう。何度も同じ事をやっていては、ドライアドが不利になってしまう」

「その間に違うところから一気に攻め込むのですよ。そう、たとえばすでに完成しているという噂の新都ノッダあたりを占領してしまえば、戦局はほぼ決まってしまいそうですな」

「これこれ、声が大きい」

声が大きいと言う割には、あまり周りに気を遣うそぶりもない面々が多かった。

さすがに警護に当たっている近衛軍兵士が立つ近くではそのような話は交わされていなかったが、それでも至る所で戦争の仮定話は花盛りと言って良かった。

エスカはそれらの話が耳に入るたびに、心の中でため息をついていた。

「ここに集う大葬の参列者はどうして、そうそうたる面々と言っていいな。私でも知っている重鎮が何人かいる」

エスカのすぐ横にいるニームが、そう素直な感想を述べた。エスカが見ると、ニームの手には大降りのワインのグラスが握られていて、それは既に空であった。

会場中を影のように回っている給仕達の一人が、ニームの空のグラスをめざとく見つけ、音もなく近づくとワインが入ったグラスがいくつも並ぶ盆を掲げた。

同じ赤ワインでも微妙に色が違う事にニームは興味を持っていた。

おそらく全て違う種類なのであろう。よく見ると、グラスも全て違う物のようだった。相当こだわりのある人間がワイン係なのだろうとニームは思っていた。

ニームは手に持ったままの空のグラスを給仕に渡すと、一番濃い色のワインが入ったグラスを持ち上げた。飲み口が百合のように広がった形のグラスだった。

「ありがとう」

ニームのねぎらいの言葉に対し給仕は無言で礼をすると、近づいてきた時と同様に音もなくその場を離れた。

取り上げたワイングラスの中身をぐいっと一口で飲み干したニームは、去っていくその給仕の背中をしばらく目で追っていたが、すぐにある事に気づいた。

どうやらその広間にいる給仕は全て、アルヴのようだった。シルフィードでなければ見られない光景だと言える。

「気付いたか。身のこなしといい、おそらく全員が近衛軍の兵隊だろうな」

ニームの視線を追ったエスカは、先回りしてそう答えた。

「だろうな。こんな場所で不謹慎かつ無神経な話を得意げに口にしている連中は自分たちが情報収集の対象になっている事に全く気づいてはいないようだが」

「情報収集ってのは大げさだな。まあ、国や国王を侮辱する言葉でも口にしないウチは大丈夫だろう。そしてお前の言う不謹慎かつ無神経な連中も一応はここに招かれる人間だ。さすがに一線というものを知ってる。つまみ出されるほどバカじゃねえよ」

「だといいがな」

ニームはそう言いつつ、再び現れた給仕から新しいグラスを受け取ると、それもまた水のように飲み干した。

エスカはそれを横目で見ながら頭を掻いた。

「喉が渇いているなら水にしておけ。ワインはかえってのどが渇くんだぞ」

「そうだな。だが、ジーナがこれを大好きだと言っていただろう？色々な種類を飲んでいればなぜこれが好きなのかという理由が少しでもわかるかと思ったのだ」

ニームはそう言うと、飲み干したグラスに残った赤い液体を壁に所狭しと取り付けられたのセレナタイトの灯台（あかりだい）の光にすかして眺めた。

「で、少しはわかったのか？」

エスカはそう尋ねたが、ニームは少し悲しそうな顔をして首を横に振っただけだった。

「私にはワインの味はわからん」

「だったらその辺にしておけ。お前の飲み方はさすがに目立つ」

エスカはそう言うとニームの肩に手をやり、部屋の片隅へ顔を向けさせた。そこには近衛軍の兵士が扮しているとおぼしき給仕が三人、顔を寄せ合ってニームの方を見ていた。ニームの顔がそちらを向くと慌てて散開したが、それはどう見てもニームの事を話題にしていたとしか思えない態度だった。

「忠告に従おう」

ニームはエスカの顔を見上げてそう言うと、合図をして空のグラスを近づいた給仕に渡した。

ニームとエスカはアルカナ・アナクラ率いる「黒のアナクラ」船団の護衛のもと、無事にエッダ入りをしていた。

エスカは関係者に対して「ドライアド王国国王に恐れを成している海賊アナクラが、保身の為に是非国王名代の護衛をしたいと申し出たのでこれを受諾した」と説明していた。

あの物騒な呼び出し状の文面については「海賊はあの手の言い回しを使わないと仲間からバカにされるそうです」と、これまた見え透いた事を言っていたが、もちろん周りの人間はその事について触れようとはしなかった。マルク・ペシカレフ公爵にいたっては、天

下に名高い、いや、悪名高い海賊を従えてエッダ入りできるとあって、上機嫌であった。

事務官で、ほとんどマルクのご機嫌取り要員と化していたフェルン・キリエンカの巧みな「おべっか」もあり、一行はその後は平穏な船旅を過ごし、無事にエッダ入りする事ができていた。

ただ、エスカには一つ気がかりがあった。

キス事件での失神後、意識を取り戻した後のニームの様子が少しおかしかったのだ。

数日間、ニームは別室を用意させてそこに籠もりきりになった。エスカが面会を求めてもジナイーダを通じて「会いたくない」の一点張りだった。

ジナイーダに訳を尋ねても、不機嫌そうに「ご自分の胸に聞いて下さい」ととりつく島もなかった。

ジナイーダが駄目だとわかったエスカは当然もう一人の付き人に頼る事になったのだが、そのリンゼルリッヒはと言えば、意味ありげに目を伏せて「ご容赦を」と言うばかりで、そうなるとさすがのエスカもお手上げ状態だった。

フェルンに助けを求めても見たが、彼は一通りエスカの話を聞いた後、首を横に振るだけだった。

「私に特級バード様の気持ちなど、わかるわけありませんよ」

確かに多少強引だったとはエスカも思っていた。ニームにしては初めての事だろうという事も理解していた。

だが、あの場面では二人の間が偽装である事を知られるわけにはいかなかったのだ。既に婚儀を終えていると宣言したのである。海賊のしきたりではああいう公の場で嘘を言う事は死を意味する。もとよりエスカの言葉には嘘はなかったが、あれやこれやと詮索されると面倒だと判断したまでである。そもそもあの場面はそれをニームに説明するような悠長な雰囲気ではなかったと言える。

結果としてニームは見た目通りまだ経験の浅い子供だと言う事は知られてしまったようだが、予想外な事にあの場にいた人間は全員、

そこを笑うどころかニームの意志の強さに脱帽さえしていたのだ。
「もし夫婦げんかをしたら、オレは奥方に着くぜ」
異口同音に彼らは言ったものだ。
失神したニームの耳にはその言葉は届いていない。だからエスカは言い訳を添えて、そのあたりの話をきちんとしておきたかったのである。
だが、一切会えないとなるとどうしようもなかった。

「身分が高いお姫様に一目惚れした農夫の若者の話を知っているか？」
その後のエスカは、夜中になるとワインを両手にフェルンの部屋に押しかけ、無聊を慰めるのが日課になっていた。
その夜もエスカはワイン庫からこっそり上等なワインを数本持ち出してフェルンの部屋にある大振りの揺り椅子に深く腰をかけてくつろいでいた。
「なるほど……」
エスカが昔から伝わる説話の事を口にするとフェルンはそれを見て合点がいったようにそうつぶやいた。
「何が『なるほど』なんだ？」
二本目のワインをフェルンのグラスに注ぎながら、エスカは怪訝な顔で尋ねた。
「ジーナとリリかもしれません」
「お姫様がジーナで、農夫はリリか？　いや、あいつらはどっちかというと豪商の次男坊と役人の一人娘ってな感じだろ？」
「――やけに具体的な設定ですね」
「まあ、本人達には子供の頃の記憶はないそうだがな」
「おや、そうなんですか？」
「あ、いや。今のは忘れてくれ。人に話していい事じゃなかった」
「珍しく飲み過ぎ、ですか？」
「そうだな。三本目はやめとくか」

「今日は三本も持ってきたんですか？」
「ここに置いとく」
「勘弁して下さいよ。掃除をしに来る侍女に私は毎朝つまらない言い訳をしてるんですから」
「言い訳？」
「誤解するな。私は『そっち』ではないぞ、と」
フェルンの言葉にエスカはがっくりと肩を落とした。
「お前は相変わらず何をやってるんだ？」
「気立てのいい、私好みの器量よしなんですよ、これが」
「フレクトの気苦労がわかる気がするぜ」
「ご冗談を。あの兄が気苦労などするものですか。数字が書かれた帳面さえ与えておけば、恍惚の世界に入り込む人ですからね」
「わかったわかった。さすがに俺もそこまで野暮じゃねえ。今日はこれで戻るさ」
「そいつはありがたいですね。それはいいんですが……」
「ジーナとリリの話か？」
フェルンは「ええ」と頷くと三本目のワインをエスカに手渡した。
「エスカ様はジーナとリリにはめられたのかも知れませんね」
「はめられた、か」
「あんなに懐いていたではありませんか。私が思うに、今回の事はニーム様の意志ではないでしょう。たぶん、ですが」
「なるほど……」
「そして、彼らの善意からくる陰謀はそれなりの成果があったようですし、どちらにしてもこの辺にしておいてもらいますよ」
「そうか」
エスカは三本目のワインを抱きかかえると、椅子から立ち上がった。
「俺とした事がなあ」
「そうですね」
フェルンはうなずいた。

「向こうはともかく、エスカ様ともあろうものが本気になってしまうとは、ね」
エスカはそれには答えず、フェルンに軽く手を挙げて見せると、その事務官の部屋を後にした。

「ん？」
エスカは扉を開けた時、廊下を走り去る人影の後ろ姿を見つけた。それは彼の記憶が正しければ、その階層の部屋の掃除を担当している、グェルダン付きの侍女であった。
「なるほど」
エスカは所在なげに髪をボリボリとかくと、自室とは違う方向へ足を向けた。
そしてその夜、ワインを抱いてニームの部屋を訪れたエスカに、ジナイーダはにっこり笑いながら尋ねた。
「何のご用でしょう、閣下？」
エスカは苦虫を噛みつぶしたような顔でジナイーダの顔を見つめながら答えた。
「わかった。俺の負けだ。会いたくてしかたねえんだよ」
ジナイーダはさらににっこりと笑いかけると、黙って大きく扉を開き、エスカを招き入れた。
「お前達にはまんまとしてやられたよ」
「あら」
横を通る際、ワインを手渡しながら小さくそうつぶやいたエスカに、ジナイーダも同じように小さくつぶやき返した。
「お忘れなく。我々はあなた方お二人の味方です」
エスカはそれには答えず、ただ小さくうなずいた。
部屋に入ったエスカに、いきなり飛びかかってくる焦げ茶色の影があった。
とっさの事でエスカはなすすべもなかったが、よく見ると焦げ茶色は結布（ゆいふ）を解いたニームの髪だった。

エスカは懐に飛び込んできた小さなニームをしっかりと抱きしめた。同時に背中で扉の閉まる音を聞いた。もちろんジナイーダが部屋を出て行ったのである。

「会いたかったぞ、ニーム」

エスカが先に口を開いた。

ニームはその言葉を聞くと顔をあげて、エスカを見上げた。

「本当か？」

その目は真剣だった。

おそらく一週間振りに見るニームの顔は、エスカにはやけにまぶしく見えた。結布を解いた髪型のせいもあるのかも知れないが、普段よりも大人びて見えた。

「本当だ」

エスカがそう言うと、ニームは満面の笑みを浮かべてその胸に顔を埋めた。

「私もだ」

そんなグェルダンでの一件を思い出しながら、エスカはニームの肩を抱いたまま、ゆっくりと広間の中心部へと移動していた。

「ファランドールで爵位を持ってる貴族連中は、全員ここに集まってるんじゃねえのかってなくらいのそうそうたる眺めだな」

エスカにニームが相づちを打つ。

「まあ、そこまでは大げさだとしても私が知った顔もかなりいる。ドライアドの王宮で見かけた事があるウンディーネの領主どもも結構来ているようだな」

エスカはそう言うニームに顔を寄せると耳元で囁いた。

「向こうの壁際で美女を従えてふんぞり返ってる青服のじいさんが誰だかわかるか？」

「いや。だが、一癖ありそうな人物だと言うことはわかる」

「ウンディーネのノスデの首領、メラール候アレクシスだ」

「ほう、あれが『豪商貴族』か」
「驚くのはこれからだ。メラール候の後ろの美人だが……」
「む。側室ではないのか？」
「に、しちゃ気品ありありだろ？ありゃ、タルガの首領、リュック・ラジアー男爵の正室、アレット・ラジアーだぜ？」
「えええええ？」
「声がでけえよ」
エスカはニームの口を慌ててふさいだ。
「メラール侯爵の事は、女好きで有名だからお前でも名前くらいは知ってるだろ？」
「それはそうだが、まさか堂々と他の首領の正室とこんなところで逢い引きとは……」
「気の毒な事に旦那のリュックは病弱でな。巷じゃアレットが毒を盛ってるんじゃないかっていう話もまことしやかにささやかれてるらしいぜ」
「まさか」
「まあ、メラールもアレットに毒を盛られなきゃいいがな」
「それより、あそこでさっきから偉そうに自説をぶってるハゲは？」
「ああ、ありゃサラマンダの東部のクニルド地方にちょっとした領地を持ってる奴で、エズモンド・ゲーヴ。ドライアドのゲーヴ子爵って言やあ、わかるか？」
「つまらない事にいちいち軍やバードを派遣しろと言ってくる口うるさいゲーヴ子爵とはあんな奴だったのか」
「きっとサラマンダの委嘱軍がクニルドにあんまり派兵されてないとか言ってるんじゃねえか？　あいつにかかれば、クニルドが世界の要衝なんだろうさ」
「なるほど。じゃあ、あっちのテーブルにいる飾り立てたご婦人は誰だ？　さっきからこっちをチラチラ見てるようで落ち着かん」
「ありゃ、お前、ベルマン伯爵夫人だ。って、おいおい、そんな顔して伯爵夫人を睨むんじゃねえよ、後がうるさいぞ」

「ベルマン伯爵というと、ミュゼの中心部に無意味にでかい屋敷を建てて付近の公園の日当たりを蹂躙したという、あのベルマン伯爵だろう？」
「あの屋敷はカルロス・ベルマン伯爵の家じゃなくて、あのルイズ用の別宅だ。旦那のカルロスの家は町外れにあって、あれの三分の一もない」
「奥方専用の屋敷だと？」
「ルイズはもともとドライアドのアサンダ公爵の娘で持参金も多く、カルロスは頭が上がらないらしいな。で、わがままいっぱい、好き勝手やってるっていう噂だ。あっちの方の噂も後をたたん」
「あっちの方の噂？」
「俺はいろいろと理由をつけられてベルマン伯爵家に招聘されてるんだが……」
「ふーん。で、いろいろと理由をつけて断り続けている、と」
「人気の楽師や俳優などを呼びつけて何日も帰さないってな女だぞ？　たかが男爵風情の俺が行ったら、立場の違いをかさに着て何をされるかわかったもんじゃねえからな」
「なるほど。ルイズ・ベルマンの名はよく覚えておこう。エスカがあの屋敷に向かうような事があったら……」
「いや、だから頼むから睨むなって」
「さっきから失敬だぞ。これは地顔だ」
「勘弁しろよ。それより、見たところ教会関係者も結構来てるんじゃねえのか？」
「さすがに座守は来ていないようだ。あそこにいる一団が座守代行だろう。導師会から命を受けた一団のようだな。だが、知っている顔は一人いるきりだ」
　ニームが顔を向けた方角には二十人ばかりの団体があった。黒い僧服に交差する蛇と儀仗の正教会のクレストが縫い取りされているので、所属組織は一目瞭然だった。
「なんだ、正教会の重鎮なら全部顔見知りかと思ったぜ」

「大賢者に謁見できる導師長などいないし、こちらから顔を見るような相手でもない」
「表と裏は距離が遠いって事か。ということは」
「もちろん、私のことを知っている者はいない」
「そりゃ何よりだ。だがよ、護衛に賢者がいるってな事はねえのか？」
「見たところ賢者は一人もいない。だいたい座守代行の行事に賢者が関わるはずがない。一国の冠婚葬祭は協会の正式な対応行事だから、賢者が出る幕はない」
「賢者は正式な存在じゃない、と言う事か？」
「正教会の公式の組織図に賢者なんていないだろう？」
「言われてみりゃ、そうだが」
「新教会の連中も正教会の座守代行のすぐ側にいる」
ほぼ隣り合わせの場所に、橙色の昼星、つまり新教会のクレストをつけた白い僧服の一団があった。
「見知った顔は？」
「いない。そもそも新教会の人間など誰一人知らん。そもそも私がヴェリタスに居たのは三日間だ。《授命の儀》の後、すぐに三聖の一人に会って大賢者に指名され、賢者会に顔見せをした翌日にはドライアドに移動したのだからな」
「なんだと？」
その時である。
新教会の一団が急に整列すると、近くにいた参列者がざわめき始めた。それはすぐにその広間全体に伝わり、何事かと思う間もなく広間に続く廊下の一つから、ある人物が姿を現した。
真っ赤な僧服の縁には金糸で豪奢な縫い取りがされてあった。つまりは一目で彼らの中でも位が一際高いことがわかる。
「堂頭、ミンツ・ノルドルンド！」
その姿を見たニームが、小さく唸った。
「なんだと？」

「さすがに新教会の堂頭の顔くらいは私でも知っている。あちらは代表者が自らお出ましというわけか。これでは正教会側は差を付けられた格好だな」
「あれが新教会の天辺、堂頭様か。俺の知っている肖像画とは似てねえな。あれだとその辺の道で出会ったらわからん」
「安心しろ。そのへんの道などで出会うものか」
「まあ、そうだがな」
軽口に真面目に答えるニームに苦笑すると、エスカは近くを通りかかった給仕から白い発砲ワインが入った細長いグラスを二つとり、そのうちの一つを恭しくニームに差し出した。
「俺は全般的な事にけっこう詳しく、お前は要所要所が的確だ。こりゃちょっと似合いの夫婦だとは思わないか？」
ニームはグラスを手にすると、うつむいて小声でつぶやいた。
「こ、こんな時に何を言っておる」
エスカはそんなニームの頭をぽんと優しく叩いた。
「あっはっは。お前がそうやって恥ずかしがるところが見られるなら、他にも色々言ってやるぞ」
ニームはため息をつくと、少し赤くなった顔でエスカを見上げた。
「まったく、あなたと言う人は……」
エスカはウインクすると発砲ワインが入ったグラスを少し持ち上げた。
「無理すんな。別に『お前』でも俺はかまわねえんだ」
「そ、そういう訳にはいかぬ。もはや私は、その……あなたの」
「『私は』、俺の、なんだ？」
「知らんっ！」
ニームはあっという間にふくれっ面になると、照れ隠しにグラスを一気に飲み干そうとしたが、エスカがそれを止めた。
「なんでもかんでも一息に飲むんじゃねえよ。試しにこの一杯は一口ずつ味わって飲め」
「え？」

「ジーナを見てみろ」
エスカがアゴで示す方向に、ジナイーダがいた。彼女はドライアドの神官として正式に晩餐の宴に招待されており、その華やかな出で立ちで、ちょっとした人気者になっていた。
見るとそのジナイーダが今まさに一口飲んでいる発砲ワインは、どうやらエスカがニームに渡したものと同じもののようだった。特徴のある細長いグラスが同じものだったのだ。
その発砲ワインを、ジナイーダは一口飲み込むと、うっとりとした顔でグラスを見つめている。
「彼女がお気に召した味を、じっくり味わってみたらどうだ？」
エスカに言われて、ニームは改めてワインを持ち上げて、その麦わら色の液体を光にすかして見た。きめの細かい気泡がグラスの底から二筋、立ち上がっていた。
グラスに小さな唇をつけると、すっと一口だけ含む。
口に広がる泡の感触を楽しみながら、口全体に含んで味わうと、今までより複雑な味を感じる事が出来た。酸味が少しある。だが、それよりもさわやかな甘みが勝り、やがて液体は豪華な感触で喉を通り過ぎた。そして飲み終わった後に鼻孔にのこるのは、サクランボともブドウとも決められない、あやふやで艶やかな果実の香りだった。
「なるほど」
「一気に飲むとわからねえが、ゆっくり飲めばわかる味も香りもある。人間も似たようなもんかもな」
「そうだな。それにしてもこれはうまいな」
そう言うとニームはもう一口ワインを口に含んだ。
「俺もお前の事をもっと知りてえな。この先、ゆっくりとな」
「ぶっ！」
ニームは口に入れたワインを一気に戻した。
「おい、大丈夫か？」
むせかえってうずくまる連れ合いの背中を撫でながら、エスカは

驚いて自分たちに注目している周りの人間に、なんでもない、と手を挙げて見せた。
異変に気づいて即座にリンゼルリッヒが駆けつけたが、もちろんエスカは苦笑いで追い返した。

「アルヴどもが多いな」
そんな二人からから少し離れたところで、不機嫌そうな声がした。
ペシカレフ公マルクである。
場所をわきまえずにあからさまにそんな事を口にする時点で、もはや名代失格といっていい。
それまでの甘い気分から一転して、エスカは頭を抱えたい気分になった。

エスカとニームもそうだが、エッダ入りしてからは国王主催の名目で歓迎行事が目白押しであった。体よく迎賓館と王宮の一部に軟禁されているような状況である。勿論それはドライアドだけでなく他の重鎮も同じなのだが、エッダの花街で羽目を外そうと手ぐすねを引いていたマルクにとって「まことにもってけしからん」状況と言えた。
いきおい機嫌の方はよろしくなく、暇さえあれば周りの人間にシルフィードに対する愚痴と文句を並べ立てていた。フェルンとエスカはそれをなだめるのに神経をすり減らしていたのだ。
大葬を翌日に控えたその日の朝食時が一際ひどかった。
起き抜けからマルクはたいそうなお冠状態で、床を踏みならす場面すらあったほどである。その時はニームがエスカの頭痛の種を取り除くべく、マルクの食事に一服盛って対処した。
一服盛る、というと聞こえが悪いが、彼女は精霊陣を裏側に描いた皿にパンを盛り、普段のニームからは想像できないような飛びきりの作り笑顔でマルクにそれを差し出した。
つまり精霊陣の効力で、その皿の上に乗ったパンには遅効性の倦

怠ルーンがかかる仕掛けになっていた。
　マルクは「これだからシルフィードのパンは」とパンの堅さに文句を言いながらもエッダ風と言われるバターたっぷりで甘みのある丸パンを五個も平らげたものだから、数十分後には興奮も収まり、文句を口にする気力さえ無くしていた。
　皿の裏に描かれた精霊陣の存在を気にしたエスカだが、ニームによると十分もすれば消えて無くなるものだという。その精霊陣自体、ルーンがかかった特殊な塗料で描かれているらしく、ニームの言うとおりマルクの食事が終わる頃には綺麗さっぱり消え失せ、証拠などは一切残らないようになっていた。
　その周到な戦略と何より手際の良さに、エスカは心から感心して、ニームをたたえた。彼女にしてみれば、そちらを褒められる方が「さすがはドライアドの特級バード、いや大賢者だな」などと肩書きを褒められるよりも、実のところ何倍も嬉しかった。

　精霊陣については今日に於いても様々な研究書が図書館の書架に並んでいる。歴史的に見てもルーン研究における主題の一つで在り続けている。
　だが、決定稿などと言うものは存在しない。
　精霊陣を自由自在に操れる人間が記述しているのならまだしも、ルーナーでもなく、まともに精霊陣の計算式を読み取れない者が研究者という肩書きを掲げて推論を綴っているにすぎないからだ。
　ルーンというものが緩やかに廃れようとしていく中にあっては、今後も我々が真相に触れる機会はないのかもしれない。

　精霊陣と一括りにされているが、実際には様々な形態のものがあり、目的も様々である。
　エルデのような例外はあるにせよ通常のルーナーの最大の弱点は、その詠唱時間の長さと、詠唱中は一切動けないという、どうしようもない「法則」にある。

たとえ大賢者と言えどもその法則からは逃れられない為、ニーム・タ＝タンというルーナーはその弱点を克服するために実に様々な工夫を凝らしていた。

エスカはミュゼの屋敷でニームが見せた茶器を修復したルーンには心底驚いたが、ニームを知るにつれ、彼女のルーナーとしての力の強さよりもむしろ、ルーナーが持つ弱点を補う為に考えられた数々の工夫の方に舌を巻いていた。

精霊波、すなわちエーテルの増幅装置としての側面が取りざたされる事が多い為、エルデを含む一部の頭の固いルーナーからは邪道だと言われている精霊陣は、増幅だけに使われるわけではない。

ヴェリーユの《陣廊》もそうだがルーンを深く理解している者であれば、精霊陣をルーンの外部制御装置としても使いこなす事ができていたのである。つまり、ルーナー最大の弱点を克服する手法として彼女は精霊陣を積極的に利用していた。

エスカが一番驚いたのは彼女が描く精霊陣が彼の常識としては冗談とも言える程極めて簡素なものでありながら、それが信じられないほど大きな効果を発揮することだった。

エスカだけではない。複雑に入り組んだ図形と文字が所狭しと描かれているような精霊陣ばかりを知識として持っていた普通の人間は全て同じ感想を持つだろう。

ニームが並のルーナーでは無いことはエスカにもわかっていた。だが、見た目通りまだ十五歳で成人になりたてだという少女が賢者、それも賢者の上に君臨する四人の大賢者の一人だと言われると、当初は腑に落ちてこないものがあったのは仕方のないことであろう。

だが、彼女が操って見せる精霊陣と、複雑で多岐にわたるルーンを見るうちに、見た目と言うものが如何に人間の目を曇らせるのかと言う事をつくづく思い知った。そして自らもその曇った目の持ち

主であることを改めて自覚し、深く自戒していたのである。

ニームの精霊陣に話を戻そう。

通常の精霊陣は幾何学的な模様と曲線・直線、数字、それに神痕と呼ばれる古代文字やディーネ語の「音」をファランドール文字に置き換えた単語等々が複雑に描かれ暗号化したものが多い。その精霊陣を描く為には、例えばドライアドの上級職にあるバードでも数時間から場合によっては半日以上もの時間を掛けるのが普通であったが、ニームはいつも懐に携行している特殊なインクが詰まったペンで、ささっと、それも簡単なものではものの数秒で描くだけで完成させた。

精霊陣を描く物も、多岐にわたる。マルク・ペシカレフに施したような効果を持たせるには、パンを乗せる平皿に。遠隔で効果を発生させる場合は、たとえば船の甲板に仕込んだ。あるいは隠し効果を狙う場合は扉に感知ルーンを封じた陣を書くと言った風に。

片やニームは詠唱文を短縮する為の精霊陣という物も開発していた。「結布（ゆいふ）」と彼女が呼ぶ「呪符（じゅふ）」の一種である。それは自分の髪の毛を織り込んだ特殊な木綿の布で、ニームの言う「特製の墨」で独自の精霊陣を描いてあった。

呪医であるハロウィン・リューヴアーク、いや本名エウレイ・エウトレイカやメリドをはじめとするジャミールの里人達が使っていた神痕石、ルーン・ストーンとの違いは、ルーナーであろうが無かろうが、それを使う物が単体でルーンを発動させることができるルーン・ストーンと違い、ニームの結布はルーナーにしか、いやそれを作成した本人にしかその効果が得られない点であろう。

つまり、ルーン・ストーンは自己発動できる単純なルーンを封じ込めたものであるのに比べて、ニームの呪布はいかようなものでも（ニームの能力に応じて）用意できるという違いがあった。

その「結布」をニームはいくつも懐に隠し持ち、必要に応じてそれらの布を取り出して使用した。場合によっては何枚もの結布を腕

に巻き、儀仗をそれにあてるようにして発動させる事もあったという。

「そうだな。多分……」

以前ニームは、精霊陣に関するエスカの質問に自信満々と言った笑みを浮かべながら答えたものだ。

「これほど精霊陣を深く理解して使いこなしているルーナーはいないだろう」

その言葉を、エスカは額面通りに信じることにした。

ジナイーダとリンゼルリッヒ以外の賢者を知っているわけではなかったが、少なくとも彼の知るドライアドのバードとは存在する世界自体が違うのだと思えた。それ程の格差がある事をニームを知れば知るほど思い知る事になっていたのである。

マルク用の「倦怠パン」を作る際も、皿の底の精霊陣はたったの十数秒で描かれたものだった。単純とはいえ、完璧な真円といえるほど美しい円や綺麗に整った二等辺三角形などの図形を丁寧に書こうと思えば、エスカだと五分やそこらは最低でも必要だった。

「慣れだ」

描き上げた皿の底の精霊陣を満足げに眺めた後、それに軽く口づけをしながら、ニームは事も無げにそう言ったが、エスカはもうその時にはニームの言葉の背景を理解していた。

ニームはそれなりの努力をして、その類い希な描写速度と精度を手にした事を。

一緒の館で暮らし始めてから、ニームが天賦の才を持ちながら意外にも努力家の一面がある事はすぐにわかった。本人はそれを人に見られるのを極端に嫌っているようではあったが。

いくつか記憶に残る場面があるが、中でもエスカが忘れられないのは、シャツのアイロン掛けの件である。それはエッダへの出立準備が整うのを待つミュゼの屋敷での出来事であった。

本来そんな仕事をニームがする必要など全くなかった。当然ながらニームにもシャツのアイロン掛け、いやアイロン掛けという作業

自体の経験などあろうはずもなかったのだが、スノウ・キリエンカが毎日やっていたと聞くと、俄然興味を示し、執事長のロンド・キリエンカがそれ以上は曲げられないと言うほど腰を曲げ頭を下げて「後生ですからやめて下さいまし」と哀願したにも関わらず、ニームは「やる」と言って頑として譲らなかった。

その話を聞いて、子供が興味本位で思いついた事だからすぐに飽きるだろうとタカをくくっていたエスカは、

「まあ、この屋敷は皆何かしら仕事を割り振られて成り立っている小所帯だからな。ニームにしても食って寝るだけというのも気が引けるんだろう。気が済むまでやらせてやれ」

そう言って間を取りなした。

案の定、ニームのアイロン掛けは吹き出すのもはばかられるほどひどいものだった。

長くロンドの部下の一人としてエスカの館の家事を預かっていた老アルヴのプルク・ダリアコヴがニームのアイロンの師を買って出たが、彼女はニームが一枚、また一枚とエスカのシャツをダメにしていく度に、悲鳴を上げるのをこらえるのに必死だった。

その夜の事である。

出発前にやっておかなければと、たまったていた書き物をようやくまとめ上げたエスカが自室の壁の時計に目をやると、あと一時間程度で夜明けを迎える時刻だった。

喉が渇いたエスカは既に空になっていた水差しを片手に厨房へ向かった。そこで厨房横の支度部屋に灯りが点っているのを見つけたのだ。

さすがにそんな時間に灯りがあるのは珍しい。何事かと興味を持ったエスカは足音を忍ばせてそっと中の様子を伺った。

するとそこには、アイロン台に向かう小柄なニームの姿があった。

自分がダメにしてしまったエスカのシャツを練習台に、アイロン掛けの練習を行っていたのである。

見ればアイロンの熱でニームの額には玉のような汗が滲んでおり、

着ていた服も脇の下や背中は汗でびっしょりだった。
思わず声をかけようとしたエスカだが、丁度仕上ったシャツを吟味しながら、ニームが口にした独り言を聞いてそれを思いとどまった。
「よし。もう少しだ。明日は絶対あの男を驚かせてやる」
そして袖口で額の汗を拭うと、今仕上げたばかりのシャツに霧吹きで水をかけ、グシャグシャに丸めて皺だらけにした上で、再びアイロン台の上に広げた。
「もう一度だ」
エスカはできる限り音を立てないようにそっとその場を離れると、衣装室に向かい、寝間着を普段着に着替えた。それから手近にあった外套を掴んで羽織り、そのままそっと屋敷の表に出た。外に出る際、もちろん主人の姿に驚いた当番の夜警に見咎められたが、唇に指を一本立てて黙らせると、エスカはそのまま明けやらぬ町へ出て行った。
果たして朝食の為に食堂に現れたニームはいつものすまし顔ながら、どう見ても得意満面な風情で綺麗に畳まれたシャツを抱えていた。
エスカはしかし、差し出されたシャツを直接は受け取らず、ロンドにプルクを呼びにやらせ、彼女にその仕上がり具合を直接吟味させた。
エスカのシャツが煙を立てて炭になった時にも悲鳴一つあげなかったプルクだが、ニームから差し出されたシャツを広げたとたん、堪えきれずに悲鳴を上げた。
「なんて美しく仕上がっているのでしょう！」
シャツの仕上がりが美しいだけで悲鳴を上げるほど感激屋のプルクである。その一枚のシャツと、ニームの目の周りの隈を見比べていったい何が起こったのかを瞬時に理解すると、こみ上げる思いを行動に現さずにはおれなかった。そのアルヴの大きな体で、小さなニームを思い切り抱きしめたのだ。

「あなたはファランドール中どこに出しても恥ずかしくない、立派な家政婦になれるわ」
プルクに抱きしめられたニームが、「ぐえっ」という潰れたカエルのような声を出したのを確かに耳にしたエスカは、慌てて声をかけた。
「おいおい、オレの副官を勝手に家政婦にしてもらっちゃ困る。それよりはやくそいつに好物の果物でも出してやれ」
エスカの言葉で我に返ったプルクは腕の中でぐったりしているニームを椅子に座らせると、既に皺だらけになっているエスカのシャツを手にして慌てて食堂を後にした。
ロンドにニームがテーブルに着いた事を伝えに行ったのだろう。
「あ……」
自分がアイロン掛けしたシャツが本人の手に渡る前に部屋から消えていったのを見送りながら、慌ててニームが小さく声を上げた。
「安心しろ。ちゃんと見せてもらった。プルクの言う通り、完璧だったぜ」
エスカはそうニームに声をかけると、目配せして見せた。
「マジで驚いたぞ。スノウでもあそこまで完璧にはいかねえよ」
その言葉にニームは嬉しそうな顔をしたが、すぐに真顔になってエスカをじっと睨んだ。
「まさかルーンを使ったとでも思っているのではないだろうな？」
エスカは首を横に振った。
「お前の事が少しわかって来た。お前はこういう事にルーンは使わねえよ」
ニームはエスカにそう言われると、不思議そうな顔でエスカの本心を探るようにじろじろと見つめていたが、ロンドが新しく果物の皿を目の前に置くと、興味の対象はそちらに移った。
ロンドがテーブルに置いたニームの為の一皿は、旬を誇る秋の果物の見事な盛り合わせだった。
「それを食べたら、今日は昼過ぎまでは部屋でゆっくりしとけ」

果物の皿に目を輝かせているニームに、エスカはそう声をかけた。
「え？」
「溜まってた書き物をやっつけてたら、結局徹夜になっちまったんでな。悪いが俺は昼まで眠らせてもらうから、その間、お前も好きにしろ」
「そ、そうか？」
エスカのその言葉を受けて、ニームが一瞬ほっとした表情を浮かべたのを、そこにいたロンドもエスカも見逃さなかった。
ロンドはエスカの気遣いにほっとしていた。エスカが気付いた事である。当然ながら屋敷の全般を預かる彼がニームの徹夜を知らないはずがなかったのだ。
ニームの前に置かれた果物は、エスカがその日の早朝に業者向けの朝市へ出向いて自ら仕入れてきたものだった。使用人に命じて、あるいはロンドを通じて仕入れさせれば事は済んでいたのだが、ニームのあの姿を見たエスカは、自分の思いを他人に任せる気にはならなかったのだ。もちろん、その事をニームには知られぬよう、ロンド達には強く口止めをしていた。

「悪かったな。ちょっと外の空気にあたろうぜ」
咳き込むニームを抱きかかえるようにして、エスカは広間から続きになっているテラスの一つへと出た。
そこは中央広場に面する迎賓館の裏側、つまり広場とは反対側に面したテラスで、美しく手入れされた造形的な中庭の向こうに王宮の「右翼」と呼ばれる建物が見えた。
テラス自体も相当に広く、しゃれた花壇がしつらえてあり色とりどりの花で飾られていた。黒の一月とはいえ、冬のないエッダである。花に困る事はないのだろう。広間に通じているテラスは四カ所あったが、そのどれもが毎日鉢植えを入れ替えて違う造形を楽しませてくれていた。

「大丈夫か？」
エスカは、腕の中のニームに声をかけた。軽々と抱きかかえられたニームは、まだ少し苦しそうにむせていたが、かなり収まっているようで、エスカに恨み言を言う元気があった。
「あなたはいつもそうだ。狙ってわざとやっているとしか思えん」
「いやあ……」
エスカは何かを言いよどむように言葉を切った。
「どうした？」
「悪いが手が塞がっててな」
「それがどうした？」
「頭をかいてくれ」
「――え？」
「こういう時は『いやあ』って言って頭を掻くのがお約束じゃねえか。だから」
「訳がわからん人だな」
「どら、もう大丈夫そうだな。立てるか？」
エスカはニームをそっと立たせようとしたが、ニームは両腕を首に回して、嫌だという風に頭を振った。
「おーい、ニームさん？」
「この格好が気に入ったのだ。もう少しこのままでいたい」
ニームはそう言うと、エスカの首に回した両手に力を入れて、エスカの顔に自分の顔を近づけた。エスカは微笑むと、ニームの小さな唇をそっと塞いだ。
「おや」
その時、横合いから野太い声がした。
「これは失礼」
「いえ」
ニームから顔を離したエスカは、一瞬で相手の正体を把握した。
「場をわきまえずお見苦しいところをお見せしました。まだ新婚ゆえ恥ずかしながら……。平にご容赦を、カイエン提督」

「ほう」
すぐに立ち去ろうとした巨漢の老アルヴは、見ず知らずの外国の貴族が自分の名を呼びかけた事に興味を示したようで、立ち止まるとゆっくりと振り返った。
そこには礼儀正しく最敬礼するエスカとニームの姿があった。
軍服ではなかったので気づかなかったが、カイエン提督と呼ばれた老アルヴは、そのドライアド式の最敬礼で二人が軍属の人間である事を知った。
「広いテラスです。我々が独占するなどもってのほか。よろしければご挨拶などもいたしとうございます。是非お留まり頂けますよう」
カイエン提督は改めて二人を見比べると、付き従っていた側近を二人とも追いやり単身でゆっくりとエスカ達の方へ近づいた。
カイエン提督を引き留めたのは、エスカにとっては何気ない情報収集のつもりであった。
トルマ・カイエン。それはシルフィード王国の海軍大将を頂く重鎮中の重鎮と言っていい存在である。そんな相手と周りの雑踏から離れて話ができるとは願ってもない機会であった。本音は聞き出せないまでも、会話を交わせば何かしら見えてくるものもある。そんな機会を逃すエスカではなかった。
しかしカイエン提督をそこで呼び止めてしまった事が、ニームとの関係に大きな亀裂を生じさせるきっかけになるとは、エスカは無論、その時は夢にも思っていなかった。

# 第七十五話　ニームの誤算

トルマ・カイエンはシルフィード王国の海軍元帥の一人である。
シルフィード軍としては、重鎮中の重鎮で、政・軍一体政治のシルフィードにおいては一国の中枢を担う程の存在と言えた。
海軍生え抜きで、艦隊の布陣戦術論にかけては一家言を持つ人物である。歴史に名を残す多くの人材を育て上げた事でもよく知られている。
ただ《月の大戦》前夜には老齢により第一線を退く事が噂されている段階であった。
一般には「縄張り意識が強い石頭」という風評が流れており、近衛軍とは反りが合わないのは当然として、同じ王国軍の陸軍の同僚とも冷めた関係であったという。
会議などではカイエン元帥を如何に丸め込むかが焦点になる事も多く、要するにお歴々からは相当に煙たがられていた存在と言える。
逆にガルフ・キャンタビレイ大元帥に対する忠誠心は相当のもので、ガルフもまたトルマの公明正大な人となりを信頼していたので、二人の関係は良好と言えた。
ガルフ不在のエッダにあってアプサラス三世の崩御を深く嘆き悲しんだ事は想像に難くない。かねてよりの持病もあり、しばらくは床から起き上がれない状態が続いた。
そんな彼がようやく王宮に出仕した時には、元帥会議の雰囲気ががらりと変化している事を知って愕然とした。
簡単に言えば、いわゆる近衛軍側の勢力に王国軍側が完全に押さえ込まれていたのである。
それまでは元帥会議には純粋に元帥である人間しか出席出来ない事になっていたが、国王の勅命という事で、大将が出席することが許されていた。

表向きは国王が変わった事によって生じた山のような業務を効率的にこなすため、と言う事であった。確かに元帥会議にはノッダの総領事として赴任した為、王国軍大元帥であるガルフの不在が長く、決定機関としての処理能力が低下はしていた。さらに言えば、アプサラス三世と違い、新国王のイエナ三世は父親の急逝にまだ正気を取り戻しておらず、会議には一度だけ出席して形式ばかりの挨拶をしただけだという。国王の判断も仰げず、とはいえ処理する業務は増えるばかりとなると、処理に当たる人間を直接会議に加えて効率化を図るという判断には異議を唱える隙はないように思えた。

しかし、トルマが目の当たりにしたのは、近衛軍の人間に完全に掌握された会議の実態であった。

そもそも近衛軍と違い、王国軍の大将の多くは来るべきドライアド対策として、国内の各地の軍備増強のためにエッダを空けていたのだ。

トルマにとって不運だったのは、彼が出仕できなかった期間に、新しい元帥会議運営などの骨子が既にできあがっており、それによって最重要とも言える議題が決定されていたことであった。

もっとも変わったのは、会議の進め方である。

以前は国王の前で懸案が議題として報告された後、参加者であり評議者でもある元帥達が意見を言い合い国王の意見を仰いだ上でさらに議論を重ね、合議の上元帥会議として納得したものだけを決定事項としていたのだが、新体制では会議はただの報告の場と化していた。

多くの議題は会議の前に根回しによって既に決定されているようなもので、元帥会議はほぼ形骸と言って良かった。

多くの場合、議長役の近衛軍元帥が議題を読み上げた後、おきまりの台詞を告げる。

すなわち、

「以上の懸案については、既にご承知おきの通り処理すべく手配済みである。これには国王陛下の血書を頂いており云々」

等である。

「これは一体どうなっておるのだ」

久しぶりに出仕したその日、トルマは余りに様変わりした会議の進め方に椅子を蹴って立ち上がると、大声で吠えた。

もちろん、同僚である他の王国軍元帥達になだめられその場は納まったが、会議後トルマは陸軍元帥であるラオカ・ゾスを捕まえると、とって食おうかという形相で事の次第を問い詰め、その変化の経緯を聞かされたのである。

事の次第を了解したトルマは、自分の不徳を恥じた。

と言うのも、自宅で伏せっている間にそれほどの変化があったのであれば、その事について知らせてくれる仲間が一人もいなかった事実を、同時に知る事になったからである。

旧元帥会議においても、自らの主義主張を曲げぬ態度を貫こうとするトルマは既に浮いた存在であったのだ。その事を本人も多少なりとは自覚はしていたため、引退の時期を模索していたところだった。その前に一度ガルフにあって相談し、決定しようと思案していた。そこへアプサラス三世急逝の報が舞い込んできたというわけである。

「会議を強引に止めようとするものは、議長権限で退席を命じられる」

ラオカにそう釘を刺されたトルマは、自分がシルフィードの国政から「外された」事を告げられたようなものだった。

「イエナ三世国王陛下直接の命ですからな」

大元帥サミュエル・ミドオーバが、国王直筆の命令書を皆に示したと言う。

「今はシルフィードにとってのいわば一大事。暫定的ながら様々な変化があるものですよ、カイエン殿」

そう言ってトルマの肩を叩くラオカの顔は、何かを言いたげに曇

っていた。

そしてその曇った顔の訳もすぐにわかった。

それは王国軍の元帥達が会議でほとんど壁のように無言で存在感がないという状況に通じていたものである。

アプサラス三世の病死疑惑と、それに関連した一連のガルフに対する不穏な噂がそれであった。

知り得た限りの情報をトルマ自身が見ても、ガルフ・キャンタビレイ大元帥の動向には首をかしげるところが少なからずあった。

大元帥とはシルフィード王国にとっては国の要である。各省庁の上部組織である元帥会議をまとめるべき立場であり、かつ会議の結果の拒否権すら持っている人物。それが大元帥なのだ。

現在、二人いる大元帥のうちの一人が存在しない会議は、もう一人の独裁下に置かれる可能性がある。大元帥同士にどれほど信頼関係があろうと、国王崩御の報を受けた直後に王宮にはせ参じなければならない立場である。信条や感情よりもまず、組織への示しがつかない。

エッダ入りしない公の理由が重度の体調不良という事もトルマは信じていなかった。ガルフには腰痛の持病があったが、それを移動できない理由にするにはいささか無理がある。

さらに妙な噂に拍車をかけたのが、いわゆる「バランツ事件」と呼ばれる「蛇遣いのアヨネット」率いる近衛軍の中隊が村人ともども全滅していた凄惨な出来事の犯人の正体である。

もちろん正体など判明してはいないのだが、「大元帥に二心あり」という噂に蓋は出来なかった。

トルマはもちろんその噂は端から信じなかったが、そのような噂がシルフィードの重鎮達が囁く事に危機感を覚えていた。

近衛軍と王国軍、海軍と陸軍、元帥同士、それぞれが反目し合うのはシルフィード王国の上層部の常ではあったが、それは全てお互いの信頼と守るべきものが同じという目的とが一致した一枚岩の上に立った価値観の齟齬によるものだと思っていたのだが、どうやら

ここへ来てその一枚岩が揺らぎ始めているのを感じざるを得なかった。

そこまで来ると、トルマは噂とは逆に一つの疑惑が生じるのを禁じ得なかった。ガルフはエッダに来ないのではなく、来る事が出来ないのである。そしてガルフを悪者にする事で利を得るものは誰なのかを考えると、あまりにも単純な構図に愕然とした。

トルマは晩餐の宴に顔を出すのは気乗りがしなかった。

体調があまり優れない事も理由の一つだったが、晩餐の宴の直前まで行われていた元帥会議で内定した議題の事を考えると、虎視眈々とシルフィードの内実を探ろうとして手ぐすねを引いている参列者達と言葉を交わす気にならなかったのだ。

そもそも、晩餐の宴で自分に付けられた護衛が気に入らなかった。

王国軍所属の者ではなく近衛軍のアルヴの将校が二人である。

晩餐の宴に参加できるシルフィードの人間が佐官以上と決められていた。それは護衛であっても例外ではなく、通常トルマの補佐官を勤めている二人の尉官は、迎賓館の控えの間で宴の終わりまで待たされる事になっていた。

ばかばかしい会場の喧噪からしばし逃れ、セレナタイトで照らされた中庭の見事な夜花でも眺めて考えをまとめようとテラスに足を運んだトルマは、そこで二人のデュナンの男女が仲むつまじく口づけを交わしている場面に遭遇することになった。

さすがに忌ま忌ましさがこみ上げた。

晩餐の宴とはいえ、翌日に大葬を控えた晩である。男女が睦む場所としてはふさわしいはずがない。

これがアルヴ系の人間であったら、絶対にあり得ない光景であった。さらに言えばシルフィードの人間がとる行為ではなかったのだ。

つまり、二人のデュナンは他国の人間だと言う事は瞬時に判断ができた。

賓客相手に騒ぎを起こしてしまったとあってはシルフィードにとっても、もちろん立場が微妙になっている自分にとっても得になる事は何もなかった。

トルマは喉元までこみ上げた相手に対する怒りと侮蔑の言葉を飲み込むと、別のテラスに向かうべく、無難な言葉をかけてきびすを返した。

だが、即座にぶしつけな態度を詫びるとともに正確な名前で相手を呼び止めた人物に対して、トルマは興味を持った。

彼はあてがわれていた近衛軍の補佐官にその場を外すように命じた。テラスに三人だけの状況を作ろうとしたのである。だが、ふと何かを急に思いついたようで、背中を見せていた補佐官を呼び止め、ある人物を呼ぶように伝えた。

声が小さく、エスカにはその人物の名前までは聞き取れなかった。

「ご挨拶が遅れました。私は」

「いや、けっこうです」

自己紹介をしようとしたエスカを、トルマは制した。

エスカとニームは同時に顔を見合わせた。

「いや」

トルマは柔和な顔を作ると、補足した。

「こんな夜です。名前を聞いてしまってはいらぬ先入観であなたの言葉の持つ本当の色までが闇に解ける」

その言葉に、エスカも表情を少し崩した。

「御意」

エスカは素直に従う事を決めると、即座に微笑んで礼をした」

「失礼ながら、奥方はかなりお若いようですな」

「ええ」

エスカはニームに微笑みかけてから、トルマにうなずいて見せた。

「妻はアルヴィンの血が入っているデュアルです。そのせいで実際の年齢よりは少し幼く見えますが成人にはなっておりますから、妻

としては特に若いという程でもありません」
「そうでしたか。アルヴィンやダーク・アルヴが多いシルフィードではあまり気にも留めませんが、デュナンの国ではすこし珍しいのでつい興味本位でおたずねしたまで。たいへん失礼をいたしましたな」
トルマはそう言うとニームに向かって丁寧に頭を下げた。
ニームはトルマに会釈した上で、改めてスカートの裾をつまみ上げ優雅な挨拶を返した。
「お気遣い痛み入ります。夫は私を妻と呼んでくれましたが、実のところ私は側室です。その点、お含み下さいませ」
トルマに対し、ニームはそう言って妙な挨拶をした。
「ほう」
トルマはさすがに少し面食らった。
自分から側室だと名乗るばかりか「間違うなよ」と念押しまでするニームにとたんに興味を覚えた。
女癖の悪いデュナンが、気に入った子供を身の回りの世話役としてわざわざ外遊に同行させ、いいようにもてあそんでいるだろうと決めつけて心の中で鼻を鳴らした第一印象は綺麗さっぱり消え失せていた。
焦げ茶色のそれほど長くない髪と茶色い瞳はデュナンそのものだが、よく見ると顔立ちはアルヴ系によくある整った造形で、無表情の時の作り物のようなたたずまいはアルヴィンの血が入っていると言われるとなるほどと思えるものだった。瞳が緑色で耳が少し尖っていれば、その小柄さもあって確かにアルヴィンと言われても納得してしまうだろうと思われた。
「これも興味本位で申し訳ないのですが」
トルマはそう言うと二人を見比べた。
「正室にあたる方はご都合でもお悪いのですかな？」
そう言うとトルマはわはは と声に出して笑い、頭をかいて見せた。
「この年になってもそういう事には興味津々の俗なジジイで申し訳

ない」
　ニームはトルマの笑い声に、少しだけ表情を崩した。その笑い声に敵意や警戒と言った背景を感じなかったからである。エスカの屋敷でエスカの事を友好的にからかう使用人達の笑いに近いものを見ていたのかも知れない。
「まだ正室はおりません」
　ニームは先ほどより柔らかい口調でそう答えた。
「力のある札はその時が来るまでとっておくのがドライアド風なのです」
「なるほど」
　ニームの言葉にトルマはうなずいた。
　政治的に利用できる武器の一つだから、という答えであるが、シルフィードの人間に対してそれだけ答えたとしたら、トルマは鼻白らんでいたところであろう。だが、ニームはそこを読んでいた。先回りしてドライアドではそう言うものだと言う事を言い添えたのである。
　その短いやりとりで、トルマはニームがただの貴族の寵愛を受けたか弱い美姫ではない事を認識した。そうなると今度はニームの相手の方にさらに興味が沸いた。自分の事も一目で言い当てたそつの無さといい、ただの美貌の青年貴族ではなさそうだとかんじるものがあったのだ。
　さっきはああ言ったが、名前を聞いておきたい欲求が頭をもたげてきた。もちろん今聞く必要は無い。エスカほどの目立つ容貌をしていれば、後で誰かに尋ねればすぐに判明することである。とは言えトルマとしては相手を認めた今、無粋を承知で前言を翻してでも直接聞いておきたかった。
　だが、そのトルマの思惑は無粋な闖入者によって妨げられる事になった。
「まったく、アルヴ臭くて敵わんわ」

宴の広間とテラスとは、カーテンで仕切られていた。そのカーテンを乱暴に開きながら、不穏な台詞を吐いて現れたのは、誰あろうドライアド王国の国王名代、マルク・ペシカレフ公爵であった。

「マルク様。このような席で間違ってもそのような事を口にされてはなりません」

慌ててマルクの言葉を叱責しながら続いてテラスに現れたのは、ここでもマルクの守役を買って出ていたフェルン・キリエンカだった。

「臭いものを臭いと言って何が悪い。それにこんなところには誰もおらん……」

テラスの出入り口から少し離れたところに立っていた元帥服姿のトルマの姿を見つけたマルクの言葉が、空中分解よろしく夜の空気に消えていった。

「アルヴは臭うございますか」

そう言ったトルマは今までの柔和な表情とは打って変わってマルクを見下ろすその目にはあからさまな怒気が宿っていた。

「あ、いや……これは」

トルマの姿を認めたフェルンもその場に凍り付いた。

シルフィード王国の元帥と言えば、国策の中枢たる存在である。マルクはその立場ある人間に対して人種を愚弄する言葉を吐いたようなものである。

マルクがペシカレフ公爵個人としてこの場に居たのであれば、それは酔った上での戯れ言として個人的な処罰を受ければいい事であろう。しかし今のマルクは国王名代である。

それは既に晩餐が始まる前に全体の前で紹介されていた事実なのだ。

つまり、トルマがマルクの立場を知らないはずはなかった。

「元帥閣下」

この一大事に、エスカはすかさず声をかけたがトルマはそれを制した。

「この場ではお控え願おう、美しい姫のご主人殿」
「しかし」
「お黙りあれ！」
食い下がろうとしたエスカはしかし、トルマの一喝により発言を禁じられた格好になった。
さすがのマルクも自分がしでかした事の重大さに気づいたのであろう。震え出していた自分を落ち着かせようと、手に持ったままの白い磁器のワイングラスに入っていた赤い液体を一気に飲み干した。
「まさか、あれは……」
ニームは思わずそう呟くと唇を噛んだ。
トルマが手に持っていた磁器のグラスはシルフィード側が客のために用意したものではなかった。その白い磁器には透かし焼きの技法で水晶が埋め込まれており、それは大鷲のクレストを形どっていたのである。
大鷲のクレストは誰でも知っているファルナ家のクレスト、つまりファルナ朝ドライアド王国の紋章と言う事である。
そのワイングラスはニームがあらかじめ用意していたものだった。もちろん、マルク用にである。
その磁器のワイングラスのうたい文句は「気持ちが落ち着き、よりいっそう気品に磨きがかかる効用がある特別のもの」。すなわちそのグラスに注いだワインを飲む事によってそういう効用が得られると伝えたものだった。
大鷲のクレスト入りと言うだけで特別なものである事は十分伝わるが、そのうたい文句が気に入ったマルクは、食事時には欠かさずそのワイングラスを使っていた。いわばお気に入りだったのだ。
ニームがそのワイングラスを見て驚いたのにはもちろん訳がある。まずはこのような席でわざわざ持参のワイングラスに酒を注がせていたマルクの常軌を逸した行儀の悪さにである。信じられない行為といっていい。
しかし彼女の本当の誤算は、その場にいた全員にそれが晒された

後に起こった。

「おやおや。アルヴのにおいを消すおまじないですかな？」

ワイングラスの底が、トルマとエスカ、それにニームに向けられていた。そこには定規で描いたように美しい図形の組み合わせが黒々と描かれていた。

誰が見てもすぐにわかる。それは精霊陣もしくはルーンサークルと呼ばれるものだった。

「え？」

マルクはトルマの指摘に慌ててワイングラスの底を確認した。

「こ、これは何だ？」

（消し忘れたのか？）

（ワインに反応して発動する精霊陣だ。毎回こっそり描くのが面倒なのであらかじめ仕込んでおいたのだが、裏目に出た）

さすがにマルクとて精霊陣とニームとの関連は真っ先に思いつくだろう。だが、この時点ではまだエスカは精霊陣とニームの関係についてしらを切る腹づもりにしていた。

だが、そこへ現れたもう一人の人物がその思惑を根底から覆す事になった。

「これは、お取り込み中でございますか？」

妙にゆっくりとした口調で現れたのは、アルヴの将校だった。

一同の視線は一斉に声の主に向かった。

テラスへ降りる階段の上に立ち、会釈をする人物は一目で軍人とわかった。その服装ゆえである。

エスカはその黒い軍服が王国軍、それも海軍のものである事を知っていた。

「私の心の声が『まずいぞ、ズラかれ』と警鐘を鳴らしているのですが、帰ってもよろしいですか、閣下？」

軍人はのんびりした口調でトルマにそう声をかけた。

「馬鹿な事を申すでない」

トルマはあからさまに怒気を含んだ声で不愉快そうにそう怒鳴った。

「ふむ。まあいいでしょう。それより私は早く来すぎましたか？それとも遅きに失しましたか？」

アルヴの年齢は計りかねたが、その若い声からエスカはその将校がそう自分と変わらないであろうと推測した。

怒鳴る元帥などものともせずに間延びしたような声でそうトルマに尋ねる様子を見ても、その将校がテラスでの様子を事前に観察しており、現れる機会を探っていたのであろうとエスカは確信していた。同時に先ほど追い払った側近が二人とも近衛軍の軍服であった事をこの時になって思い出した。

つまりそれは海軍所属のこの佐官が、トルマに呼ばれてやって来た事を意味していた。腹心、そこまで行かずとも自らが信頼する部下を敢えて呼んだのであろう。

トルマは近衛軍の補佐官をよしとしなかったのである。

「いや、丁度良いところに来てくれた。少し面倒な事になりそうだったのでな」

「私も閣下にお伝えせねばならぬ重要な案件がありましたので早々にお会いしたいと思っておりました。何しろ私はこの宴席に呼ばれておりませんからね。どちらにしろ大葬の前にお会いできたのは幸運です」

そういうアルヴの軍人に怪訝な顔を向けたトルマだが、それよりもこの場の収集を計る事が最優先であった。

「重要な案件はここにある」

トルマはそう言ってそのアルヴにテラスに降りるように命じた。

――それが契機となった。

テラスに一歩踏み出した将校の腰のあたりがまず光った。それは喪の印としてぶら下げていた懐剣の柄の部分が赤く光ったていた。

だが、その場の異変はそれだけでは収まらなかった。

マルクが手にしたままの磁器のワイングラスの底が同様に、いやほぼ同時に赤く光り出していた。そして……。

そして、エスカの隣にいる小柄な少女の髪をまとめている結布が同じように赤い光を放っていたのだ。

「お前か！」

その異変をみて最初に声を上げ行動を起こしたのはマルクだった。

「お前が何か仕込んでいたのだな？」

その声と同時にマルクはワイングラスを持った手を振り上げた。

「この、薄汚いバードの小娘が！」

言うが早いかマルクは振り上げたワイングラスをニームめがけて投げた。

その場で起きた現象に、実は一番驚いていたのはニームだった。

彼女は目を大きく見開いて、青年佐官の腰にある懐剣の光を凝視していた。不幸な事にマルクの行動は彼女には認識されておらず、投げつけられたワイングラスは正確に呆然と立っているニームの額に向かっていた。

マルクが振りかぶった時にそれを予見していたエスカは、ニームにグラスがぶつかる前に間一髪、自らの体で覆う事でかばう事が出来た。

ワイングラスはエスカの体にあたるとそのまま床に落ち、乾いた音をたてていくつかの破片に姿を変えた。

「エスカ？」

我に返ったニームは、結布を光らせたままで自分を助けてくれた男の顔を見上げた。

「かばい立てする気か、ペトルウシュカ男爵！」

ワイングラスがニームに当たらなかった事で、マルクは逆上していた。

勢いを付けてエスカの前まで来ると、そのままエスカが抱きかかえたニームめがけて足を上げたのだ。

エスカはニームを優しく突き放すと、自分はよけずにマルクの足

蹴をそのまま受けて、後ろに倒れ込んだ。
「なりません、公爵」
ようやく我に返ったフェルンの制止の言葉は、しかしマルクの耳にはとどいていなかった。
自分の足蹴もニームに届かなかった事でマルクはさらに腹を立てたのだろう。脇に飛ばされて呆然としているニームに向き直ると、懐から懐剣を取り出して鞘を抜き放った。
「そこへ直れ、小娘！この国王名代マルク・ペシカレフに働いた無礼、身をもって償うがいい」
エスカは懐剣を引き抜いたマルクに後ろから飛びかかった。
「お収めを、公爵！」
「まだ邪魔立てするか？これ以上はたとえお前でも許しはせぬぞ」
「剣をお収め下さい！」
フェルンもエスカにならってマルクに飛びかかり、ニームに近寄ろうとするマルクの動きを止めた。
怒りで訳のわからないうめき声を上げて懐剣を振りかざしたその手元をエスカが拳で付くと、ようやく懐剣がマルクから離れた。
金属音が鳴り、マルクの懐剣は床を滑ると、磁器のワイングラスの破片に当たって止まった。発光していたワイングラスの底は、その精霊陣が割れて破壊された際に発光を止めていた。
だが、ニームの結布と少佐の懐剣は光ったままであった。
「冷静におなりください、マルク様」
エスカはまだ暴れようとするマルクを押さえるのに必死だった。デュナンにしては大柄で腕力もあるエスカだが、思いの外マルクの力が強く、押さえるのに難儀をしていた。それほどマルクが逆上していたと言う事なのだが、その時のエスカはその場をどうやって納めるかに意識が行っており、つまりマルクに対してかなり油断があったと言わざるを得ない。
エスカにはマルクが懐剣を二本持っているという想像が働かなかったのだ。

マルクに回した腕が激痛を訴え、エスカは反射的にマルクの拘束を解いた。

エスカから解放されたマルクは、驚いた顔をしているフェルンをふりほどくと、そのままエスカに対して振り向き、手に持った二本目の懐剣を振り上げた。

「無礼者め、その小娘をかばい立てするなら、お前も同罪だ」

そう言うとそのまま懐剣を振り下ろそうとした。

その時、それまで呆然と立ち尽くしているだけと思っていたニームが何かをつぶやいた。それが何を意味するのか、エスカにはわかっていた。しかし、エスカにはニームのルーンを止める時間は与えられていなかった。

そもそも一連の出来事はごく短時間に行われ、その場をとりまとめるだけの手立てを企てる事ができるだけの余裕がその場の誰にもなかったのだ。それを考えるとニームがもっとも早く対処行動を起こす事が出来たのだと言う事も出来た。

「パラスディフィーリュ！」

エスカにはニームがそう口にしたように聞こえた。

そのルーンが何を引き起こすものなのかまではわからい。しかし、目の前で懐剣をふりかざしているマルクに向けられたものであろうと言う事は直感的にわかった。

「ぐうう」

うなり声を上げたマルクだが、振り上げた懐剣はそこから動かない。

いや……。

マルクの体全体がその場に固定されたように全く動く気配がなかった。自分の意志で留まっているのではない事は、今まさにエスカにむかって一歩踏み出しながら懐剣を振り下ろそうとして前向きにやや傾いた不自然な姿勢でわかる。

「三つ数えろ！この下郎」

ニームの目は怒りでつり上がっていた。手にはいつの間にか乳白

色の石で出来た儀仗が握られていた。既に腕輪を変化させていたのだ。

「数え終わった時、お前は自分のしでかした罪にふさわしい罰を知るだろう」

「やめろ、ニーム」

エスカは短くニームにそう叫ぶと、次にフェルンに向かってテラスに誰も入れぬように早口で命じた。

「止めるな、エスカ」

「いや、駄目だ。絶対に駄目だ。手を出すんじゃねえ」

「しかし、こいつのやる事はもはや常軌を逸している。あまつさえあなたの事を殺めようとしたのだぞ？許されるわけがない」

「駄目だ。これは命令だ」

「エスカ……」

その間マルクはそのままの姿勢で唸っているだけであった。その目は何かを言いたそうにしていたが、それはエスカに対してなのか、付き人役のフェルンに対してなのか、はたまた自分に麻痺のルーンをかけたニームに対してなのかは誰にもわからなかった。なぜなら顔の向きは正面に固定されていたからだ。

「さすがにこれは見過ごせませんな」

トルマが低い声で一同にそう告げた。

事の成り行きを見守っていたというよりは、口を挟む時機を逸していたと言っていた方がいいのだろう。

だがバードの少女がルーンを行使しさらにこの後、別のルーンで人を傷つけようとしていると知れば、強引にでも介入して事態を収拾するしかない。彼にはその権利があり、その場を考えるならば彼がそれをやらねばならなかった。

「まず、王宮の敷地内でルーンの使用が禁じられているのはご存じのはず」

ニームに向けられた言葉だった。

「儀仗を戻せ、ニーム」
「うう……」
ニームは悔しそうな表情を隠そうともせず、唇を噛んだ。
「カイエン元帥の言うとおりにしろ。頭を冷やせ、これは国家間の問題になるんだぞ！」
一際大きなエスカの叱咤を受けて、ニームは小さな肩を落とすと何かを呟いて儀仗を腕輪に戻した。
エスカにしては見慣れた光景だったが、その場に居たそれ以外の人間にしてみれば、高位ルーナーしか使えない儀仗変化ルーンはさすがに珍しいものだった。
「まあ、この男はしばらくこのままでもよいでしょう。それともこれは肉体的な負荷があるルーンですかな？」
トルマはニームの行動を止めた。彼女は掌をマルクに向け、ルーンの解除を行おうとしていたのだ。トルマとしても衝動的な行動に出そうな名代というやっかいな肩書きを持つマルクには、事の収拾のめどが立つまで出来ればおとなしくしていて欲しかったのだ。
彼は麻痺のルーンは見慣れていたので、肉体的な負担が無いものであろう事はわかっていた。だが、体が斜めのままで重力に反したまま倒れず固定されている事が不思議だった。それは初めて見る光景だったのだ。
（よほど強いルーナーか、はたまた別種のルーンか……）
事が重大な事はもちろんだが、トルマはそれよりもドライアドのバードと名乗るアルヴィンの血が混じった少女に興味が沸いていた。ニームが幼いながらも理知的で聡明な事はトルマには顔つきですぐにわかった。しかも掛け値無しに高位ルーナーのようなのだ。
その少女をして自らの立場を顧みることなく感情をむき出しにさせる程の魅力が彼女の夫にはあるという事なのだろうか？
（いや……）
それは若さゆえであろうとトルマは考えた。衝動は若者の武器であり、最大の欠点にもなる。ニームはその武器を間違って使ってし

まったのだと。

トルマの言葉を受けてニームは右手を下ろした。もちろん、そこにはほっとした表情が浮かんでいた。

「さて、困った事態になりましたな」

トルマはエスカに向かってそう言った。その声色には他意はなく、まさしくトルマ自身が困惑の極みに立っている事を表していた。

エスカはそこに一縷の望みを見いだした。この醜態をどう始末するのかを模索しているトルマに、よい落とし所を提示できる可能性があると言う事である。

王宮の一部、それも大葬の前夜の宴の席で懐剣の鞘を抜き、それをつかって斬りかかろうとしたら一体どうなるのか？

エスカはドライアドでもしそうなったらどういう罰が下されるかを知っていた。

もちろん、裁判すら行われずに死罪である。名誉を何より重んじるシルフィード王国もそれは同様であろう。縛り首相当であるドライアドよりも死罪の内容がより重い可能性すらある。打ち首か、肉食の猛獣による公開獣殺か……。

話をややこしくしているのは相手が国王名代という立場にある人物だと言う事である。単純に死罪を宣告できるほど単純な話ではないはずだった。それこそ開戦の合図にしかならないであろう。

ニームはどうか？

トルマの言うとおり、王宮内でルーナーが許可を得ずルーンを唱える事は剣士が剣を鞘から抜く事と同義である。

そしてニームには国王名代というややこしい肩書きはない。

国王名代の付き添いであり護衛官でもあるエスカの随行員としての立場でしかないのである。

つまり、ニームの処罰については間違い無く死罪が適用されるはずだった。

エスカは唇を噛んでいた。

儀仗を取り出しただけならばまだ言い訳は立ったかもしれない。しかし詠唱が異常に早いニームの特異性が今回は裏目に出た。気づいた時には詠唱が終わっているのである。普通のルーナーであれば詠唱途中、前文の段階で解除させる事が可能だった。前文の段階であれば、いわゆる精霊逆行現象は起きないからである。

唯一可能性があるとするならば……。

「元帥閣下」

エスカはその場に片膝を突くと頭を深く垂れた。

「この場の失態は全て護衛役たる私の不始末。持病の癇癪を押さえる特効のある精霊陣を我が補佐官が名代の為に各食器に仕込んであったのですが、ペシカレフ公爵は繊細な方ゆえ、そのような効能を知らされるとかえって利きが悪くなると私が判断して告げておりませんでした。小細工の嫌いな誇り高きペシカレフ公爵が不幸にもこの場でそれを知ることとなり、思わず持病の癇癪の発作を起こされた次第。すなわち私の浅考が生んだ不始末とご理解下さい。そのペシカレフ公爵をルーンで止めたのは、補佐官である彼女が上官である私の命を救わんが為の、いわば我が命令を忠実に遂行したにすぎません。これもすなわち我が指示の不徹底。ただし、そのおかげでこの美しい王宮を我が血で汚すことなく事を収められた次第。以上、事情をご勘案いただき、なにとぞ不徳の我が身には相応の罰を。ペシカレフ公爵、タ＝タン大佐の両人にはご厚情賜りたく」

言い終わって頭を下げたエスカに、間髪入れずに声をかけたのはトルマではなく、光る懐剣の持ち主であった。

「失礼ながら、見え透いた言い訳が見事すぎてあきれて物も言えませんな」

「控えろ、スリーズ少佐」

見え透いた言い訳と都合のいい申し出なのはお互いにわかっている事であった。トルマはここでエスカの言葉を全否定する前に、とりあえずエスカと話をしようと思ったのだ。ニームの存在を含めて、エスカという人物はそれだけ彼の興味を引いていた。

この場の状況で自らが全ての罰を背負おうとする人物がドライアドという国にいた事がまず興味深かった。デュナンの王国は彼にとっては利己主義の権化であった。エスカがアルヴであれば、まだ理解ができる。しかし彼は典型的なデュナンであり、トルマにとっては自らの欲望が最優先である種族のはずだった。

そのデュナンが、まるでアルヴのように自分を楯として上の人間を守護し、かつ部下をも守ろうと口にする事があると言う事実はトルマには新鮮な驚きであった。

しかもエスカが守ろうとしているのは使えている人間とはいえ自分を今まさに衝動的な怒りで傷つけようとしたその相手である。

口先だけの交渉上手か、それともエスカの言葉は彼の本心なのか、それをトルマは知りたかった。それは彼が押さえようとしても押さえられぬまでに成長してしまった自分の国の中枢に対する不信感を、別の「清いもの」で紛らわせようとする逃避行為そのものであったが、トルマ自身はもちろんそれを自覚しての行動であった。

トルマがわざわざ呼び寄せたスリーズ少佐の言葉をとっさに封じたのには訳があった。スリーズ少佐はアルヴであるにもかかわらず、厳格で杓子定規な規律をことごとく嫌い軽んじるところがあったからである。

この場でスリーズ少佐が介入してしまうと、一大事を一大事とも考えない彼の価値観によって、結果として何事も無かった事にされかねない。それではさすがにこの一大事の目撃者、いや当事者と言っていいトルマ・カイエン元帥としては責任の追求を逃れられない。ただでさえ立場を追われつつある今、それは致命傷にもなりかねなかった。

そしてそんな事をおそらくは百も承知のはずの彼の腹心、スリーズ少佐はしかしそれでもあえてそうするに違いないからである。

彼はそもそもかねてよりトルマを引退させたがっていたのだ。

そもそもトルマがスリーズ少佐を自分の手元にしばらくおかなかったのは、その引退話でいつも口論になってしまうからであった。

だが、そんな経緯があろうと無かろうと、肝心な時には晩餐の宴に呼ばれていないスリーズ少佐をわざわざ呼びに行かせる程である。トルマにとってもっとも気の置けない人間である事は間違い無かった。

「今回の件、ただでは済まぬ程の相当な不始末だと言う事は承知しておられるようですな？」

「御意」

「ふむ。で、この場にいるのが王国軍大元帥の儂だと知った上で、ご自分の命一つで二人分の罪を不問にして欲しい、とこう言われるわけですな？」

「いえ」

その問いにはエスカはすかさず首を横に振った。

「違うのか？」

「もちろん、私はまだ死にたくはございません」

「なんと申した？」

「こう見えて私もまだやりたい事が色々とございます。ここで命脈尽きるのは何とも口惜しい限りです」

「正直な心情であろうが、それは先ほどあなたがご自身で口にした言葉とは矛盾しませんかな？」

「相応の罰、とは申し上げましたが、命まで差し上げるとは申し上げてはおりません。正直に申しますと、一から百までカイエン元帥の、我が矜持に対する温情頼みでございます」

「矜持だと？」

エスカの口にした一言でトルマの口調が変わった。

「小賢しい事を口にするでない。デュナンの小僧」

その言葉を聞いたスリーズ少佐の顔色がにわかに曇った。エスカはそれを見逃さなかった。だが、彼は既に覚悟は決めていた。トルマがどう出ようとやる事は一つだと。

「まさに私は小僧ではあります。しかし、小賢しいとは思ってはおりません。元帥閣下」

「その物言いが小賢しいと言うのだ。そもそもお主は矜持を示してはおらんではないか。二人の人間を口でかばうだけなら、赤子でもできるわ」

「これはしたり」

エスカはそう言うと、またもや深々と一礼し、そのまま懐から懐剣を取り出して目の前に置いた。

柄に描かれているのは四連の赤い野薔薇。ペトルウシュカ男爵のクレストであった。

トルマはそのクレストにもちろん見覚えがあった。だが、彼が知っているのは白い四連薔薇のクレスト、すなわちペトルウシュカ公爵家の紋章である。同じ意匠で色が違うその紋章を見て、トルマは初めてエスカの素性をおぼろげに知る事になった。

「何の真似だ？」

「恐れながらシルフィードの元帥職は超法規的な措置をとれる場合があると聞き及んでおります」

「それがどうした？今はお前の矜持の話をしておる」

「そしてシルフィードは矜持を尊ぶ国。特にカイエン元帥はシルフィード王国の国風に厚く尽くしておられる方と、遠くドライアドでも聞き及んでおります」

「もうよい」

「そこで、この場の不始末、我が体に今その罰を下す事によって不問にしていただけますようお願い申し上げます」

「何だと？その懐剣でお前を刺して罰としろと申すのか？」

「御意。ただし、このような事で元帥のお手を汚すわけには参りません。私が自らに罰を与えましょう」

「面白い。では耳でも削ぐと申すか？」

「耳ですか。それも良い考えですが、さすがに耳では罪に対して罰が軽すぎましょう。ここは一つ、我が右目をもって贖いとさせていただきたく」

トルマは一連のやりとりでエスカに対して興味を失っていった。

ドライアドで広大な領地を有する名家、ペトルウシュカ公爵家のゆかりの人間であることをわざわざ示した上で、およそ出来もしない代償の申し出をするなどということは、彼にとっては馬鹿にされた事と同義であった。

「小芝居はもうよいわ」

トルマはそう言うと、エスカから視線を外した。

「デュナンの口上など所詮は軽い口先の戯言」

吐き捨てるようにそう言うと、スリーズ少佐に声をかけた。

「シュクルよ、すぐに警護の近衛軍の将校を呼べ」

シュクル・スリーズ少将は即答はせず、トルマとエスカを見比べていた。彼はこの場をどう収めるかをずっと彼なりに考えていたのだが、彼の目にもエスカの言動はトルマが言うように全てが逆効果をもたらせているようにしかに映らなかった。

「これは心外でございます、閣下。シルフィードの元帥ともあろうお方が、このエスカ・ペトルウシュカの矜持を、こともあろうか小芝居とは」

「何？」

再びトルマの視線を手に入れたエスカは、無言で懐剣を手にすると鞘を抜いた。

「エスカ？」

ニームもここまでの事は当然ながら全てエスカ一流の芝居、いや計略だと思っていた。交渉にたいする自信があるのはエスカの落ち着いた雰囲気でわかっていたので、敢えて何も口を挟まなかったのだ。

いや、正確には彼女はそれどころではなかった。それよりもなによりもずっとシュクルの懐剣に意識を奪われていたからである。

とはいえ、さすがにエスカが懐剣を鞘から抜いた時に、ニームは我に返った。そしてその大きな肩に手をかけようとしたが、しかしその伸ばした手が届く前に、エスカは行動を終えてしまっていた。

その行為はニームにも、いや、その場にいた誰も止める事が出来

ないほどに速く、全くためらいがなかったのだ。
「エスカ！！」
ニームの悲鳴がその場を凍り付かせた。そして同じ空間を共有していたニーム以外の面々は、叫び声すら上げることなく硬直していた。
「バカものっ！何をしている！！」
ニームがぶつかるようにエスカに飛びついた。いや、エスカが持っていた懐剣に向かってむしゃぶりつくように突進し、自分でもびっくりするくらいの力でその手から懐剣を奪い取った。赤黒い血で濡れた、四連の薔薇のクレストが刻まれた懐剣を。

# 第七十六話　血の記憶

ニームは懐剣を庭に投げ捨てると、右目を押さえてうずくまっているエスカを後ろから抱きかかえた。
「医者を、いや、それよりハイレーンを！　一番能力のあるハイレーンを呼べ！」
ニームの顔は自分でもわからないうちに涙でくしゃくしゃになっていた。だがそれでもトルマを睨み据えるように見上げながら、叫びながら懇願した。
「早くしてくれ。頼む！　エスカが、エスカが死んでしまう！」
それが限界であったのだろう。ニームはそれだけ叫ぶと、つかえて後はもう言葉が出てこず、大声を上げて泣き始めた。
「俺は大丈夫だ。心配するな、ニーム」
エスカは叫び声一つ上げずに痛みを堪えていた。いや、声を出したくともそれが悲鳴になる事を恐れて、目だけではなく自分の口をも押さえていたのである。
ニームが泣きじゃくり始めてようやく口を覆った手を離し、呼吸を整えた上でようやく口を開く事ができたのだ。
「エスカ、エスカ、エスカ！」
涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながら、それでも自分の名前を連呼して大声で泣き続けるニームの手の上に、血で汚れていない左手をそっと重ねると、エスカは右目を押さえたままでトルマに礼をした。
「なんということを……」
トルマもようやく我に返った。
トルマを見上げるエスカの顔面は蒼白、いや土気色になっていた。眼球を突いた時に目の周りも同時に傷つける事になったのであろう

か、血がいまだに右手から伝って床に落ち続けていた。
「シュクル、何をしている。奥方が言った事を聞いていただろう？医者とハイレーンを急いで呼べ」
トルマはエスカから目を話さずそう言ったが、すぐにその言葉を翻した。
「いや、この中庭からなら、私の部屋が近い。医者とハイレーンはそこに呼べ。できるだけ周りに気取られぬようにな」
シュクルは金縛りから解けたように大きな息をすると、うなずいてきびすを返そうとしたが、それをエスカが止めた。
「お待ち下さい」
「その状態で何を言う。一時も早く手当を」
「私は、いえ我々はまだ閣下からお返事を頂いておりません。私の覚悟、お見届け頂けたと存じます。なにとぞ」
トルマは深く頭を下げたエスカに走り寄ると膝を突いてその肩を支え、顔を上げさせた。
気丈に振る舞っているが、言葉に力がない。このままでいいはずがなかった。
「悪いようにはせぬ」
そしてエスカに取り付いて震えながら泣き続けているニームに視線をやった。
「このままではあなたの奥方も心配だ。だから今はどうか、一刻も早く治療を受けては下さらぬか」
「ありがたきお言葉……」
「もうしゃべるでない。すぐ部屋に運ばせよう」
「自己紹介が遅れましたが、私はドライアド王国　陸軍少将、エスカ・ペトルウシュカと申します。以後、お見知り……おきを……」
「もうしゃべるな。目を閉じてじっとしておれ」
トルマが敢えてそう言う必要はなかった。エスカの意識はそこで途絶えたのだ。
「エスカ！」

エスカの様子がおかしいのに気づいたニームが力が抜けて前に倒れ込んだエスカを抱き起こそうとしたが、トルマにやんわりと肩をつかまれ、その行為を止められた。

「奥方様は今の将軍の顔は見ない方がいいでしょう。大丈夫、おそらく気を失っただけです」

ニームはトルマのその言葉を聞くと、その場に座り込んで両手で顔を覆ってまた泣き始めた。

目を覚ましたエスカが最初に目にしたのは、真っ青な顔をして赤くはれぼったい目で自分を心配そうに見つめているニームだった。

その顔がエスカに安堵をもたらした。側にいてくれたという安心感と感謝と、そして……。それらの感情は言うまでもなくエスカにとってニームの存在がいかに大きくなっているかの証であった。おそらくはニーム以外の誰であっても、これほど心が穏やかで嬉しい気分にはならないだろうと思われた。

顔の両脇だけを長く伸ばしているニームの特徴的な髪が乱れていた。結布が全て取り払われているからだろう。それが何を意味するのか、いやどういう状態なのかはエスカにはわからなかったが、自分をのぞき込むニームの頬には涙の跡とおぼしきものがいくつもあった。

それを見て、エスカは一連の騒動と自分がなぜここで横になっているのかをようやく思い出した。

「エスカ！」

エスカが目を覚ました事にいち早く気づいたニームは、一瞬で両の目に涙をあふれさせるとその首に飛びつくように抱きついて、またもや声を上げて泣き始めた。

「エスカ、エスカ」

エスカはたまらずニームの肩を叩いた。
「痛えよっ、ニーム。怪我人にいきなり何しやがるっ」
ニームはその言葉ではじかれたように飛び退くと、しかし今度は胸に顔ごと飛び込んできた。やる事は同じでエスカを抱きしめて泣いている。
「目が、目が……ここのハイレーンでは駄目だったのだ……」
泣きながらも途切れ途切れにそう言って涙でひどい事になっている顔でエスカを見上げるニームの髪を、彼女の夫は大きな手でそっと撫でてやった。
「おれは大丈夫だ。心配ねえよ」
「大丈夫じゃない！　あなたの右目は……」
「何、加減はしたから剣先は脳には行ってないぜ」
「そう言う事ではない！」
「左目があるからお前の顔はそれでちゃんと見分けられる。だからもう叫ぶな。そして泣くな。ああ、ほらほら。涙と鼻水でぐしゃぐしゃじゃねえか。それじゃせっかくの綺麗な顔が台無しだろ？」
エスカがそう言うと、しゃくり上げるニームの声はかえって大きくなった。
「私の顔などどうでもいい。そんな事より、私のせいで……私が愚かだったせいで……ううう」
ニームの声が聞こえたのだろう。隣の部屋に控えていたリンゼルリッヒが扉を叩いて入室の許可を請うた。エスカの許しを得たニームの護衛役である二人の賢者が部屋に入って目にしたものは、苦笑しているエスカと、その胸にとりついてベソをかいているニームであった。しかしエスカの顔が思いの外明るい様子だったので、二人は互いに少しだけほっとした表情で顔を見合わせた。
エスカは自分に覆い被さるようにして泣き続けているニームの背中を片手でそっと抱いてやりながら、リンゼルリッヒとジナイーダに現状報告を求めた。
「いや、そう言う事ならあの場に居合わせた私の方から申し上げた

方がよろしいでしょう」
リンゼルリッヒとジナイーダの後方から知っている声がした。
シュクルであった。
「挨拶が遅くなりました。私はシルフィード王国軍、海軍少佐シュクル・スリーズと申します。もっとも少佐とは名ばかりで今は閑職ですがね。まあ元帥の使いっ走りの様なものです。まるで給料泥棒ですな。わっはっは」
シュクルは笑顔でそう言うとドライアドの貴族風の礼をした。
それを見てエスカはベッドから起き上がろうとしたが、上に覆い被さって自分の動きを拘束しているニームの存在に気づいて苦笑して見せた。シュクルはもちろんエスカが起き上がる事を即座に禁じると、歩み寄って片手を差し出した。
エスカはその手を取りながら改めて自己紹介をした。
「スリーズ少佐はカイエン元帥の補佐官という訳ですか？」
「いえいえ、そんな聞こえのいいものではありませんよ」
エスカが尋ねるとシュクルは大げさに肩をすくませた。
「以前は文字通り正式な元帥付き補佐官の一人だったのですが、ものの見事に左遷されましてね。さりとて別の軍務が与えられたわけではなし。所属も何も告げられずに宙ぶらりんです。大葬が終わって内部のゴタゴタが落ち着くまで私の処遇など誰も顧みないでしょうね。ですから最近はこれ幸いとばかり、もっぱら自宅で読書三昧です。それにも飽きたらこうやって元帥のお手伝いをしているような次第です」
シュクルはそう言ったが、その目は笑っていた。あまり深刻に考えてはいないという意思表示なのだろうが、アルヴにしては陽気で、少々くだけた雰囲気のある男だとエスカは思った。
短いやりとりではあったが軍服のシュクルを見て、彼がテラスで会った時と同じ服装でいる事にエスカは気付いた。ニームも同様である。と言う事はそれほど長い時間気を失っていたわけではなさそうだと想像した。さらに見れば、シュクルの腰には変わらず例の喪

章代わりの短剣がぶら下げられている。ただし、その柄はもう光ってはいなかった。

エスカはそこでニームの結布が外されている事を思い出した。懐剣の柄に呼応するように光っていたのは、懐剣を除くとワイングラスの底の精霊陣とニームの結布だったからだ。

だがエスカはその事に思いを巡らす事を止めた。さすがにまだ頭がややぼうっとして考えがまとまらない。加えて頭だけでなく体が少々熱っぽい事にこの時ようやく気づいたのだ。おそらく、いや間違いなく目の傷のせいなのだろう。

そこで今度は考える事ではなく、周りを観察する事に切り替えた。部屋はさほど広くはない。落ち着いた焦げ茶色の調度でまとめられている寝室はどうやら元帥の仮眠用の部屋らしかった。左右に扉があるが、その片方が開けられて明るめの執務室の一部が見えた。だがそこには人の気配はなく、つまりこの部屋にいる五人が面子の全てということのようだった。

フェルンがいないと言う事は、事の始末で忙殺されている最中に違いなかった。

シュクルの話によると、あれから三時間程度しか経っていないという。エスカが目覚めたのは、丁度治療に当たっていた医者とハイレーンが部屋を出て行ったところであった。「なにぶん、我が国にも高位のハイレーンはもうおりません。バードを名乗る者は皆エクセラーとコンサーラのみ。彼らも医師も、できるだけの事はしたのですが」

エスカの右目は回復ルーンを使っても元に戻るような状態ではなかったという。

「奥方にはたいそうお叱りをうけてしまいました。力及ばず本当に申し訳ございません。元帥からもくれぐれもお詫び申し上げるとの事です」

そう言ってシュクルは深々と頭を下げた。

それは少佐という立場にいる軍人としては異例の辞儀と言えた。軍服を着た軍人は、軍隊式の最敬礼を行うものなのだ。

エスカは自分の目の事を告げられているにもかかわらず、シュクルという人物を客観的に観察している自分に少し驚いていた。それはおそらく優秀なハイレーンの治癒のおかげで痛みを感じていない事に起因しているのであろうと、これまた冷静に分析している自分に内心苦笑した。

シュクルの礼になぜエスカが違和感を覚えたのかというと、規律にうるさいシルフィードの軍人であれば軍服着用、つまり公務の間は厳格なまでにその格式に則るはずであると思い込んでいたからだ。

エスカは文官が行うような礼をしたシュクルに、シルフィードらしく、いやアルヴらしからぬ気質の持ち主である事を感じ取っていた。

一方でトルマの態度を見れば、シュクルに対して彼の信頼が厚い事は確かである。その信頼はある意味シュクルのそういった気質に起因しているのかも知れないとおぼろげに思った。

「我々の仲間にも、まともなハイレーンは今、たった一人しかおりません」

リンゼルリッヒはそう言った。「我々の仲間」という言い方をしたのは、もちろんその場にシュクルが居たからである。実際にはドライアドのバード庁には数名のハイレーンがいる。しかし全員が中位の治癒ルーンすら満足に使えない下級バードである。シュクルがドライアドのバードの構成を全て知っているならばリンゼルリッヒの言葉に多少の疑問を持つかもしれないが、彼は「まともなハイレーン」という微妙な言い回しをして見せた。それなりに考えての発言なのだ。

エスカはリンゼルリッヒの機転と状況判断力に満足していた。同時にやはり賢者は凡庸な人間ではないと言う事を肝に銘じる事も忘れなかった。

「残念ながら特殊な任務に就いており、我々からは連絡が取れません。ですが我々と同列にある彼女の力では、将軍の右目を元通りに戻す事は……」

これはジナイーダである。

賢者を名乗るハイレーンは一人。そしてそれは女で、ジナイーダ達と同じ末席賢者であることがエスカにはわかった。

「いや、右目はそもそも交換条件で差し出したもんだぜ。元通りになっちまったら反則だろ？」

エスカは神妙な顔で側に立つ二人の賢者にそう言うとにっこり笑って見せた。包帯で片目を隠されていてもなお、豊かな金髪を持つエスカの美貌は衰えておらず、その笑顔は二人にはまぶしく映った。

「特殊な呪医ならば、眼球の移植ができるという話だ。必ず見つけ出して私の右目をあなたに……」

「バカ」

急に会話に加わるように顔を上げそう言ったニームに皆まで言わさず、エスカは優しくその頭をコツンと叩いた。

「すまぬ。確かに私のこの茶色の目ではあなたのあの綺麗な碧眼の代わりにはならんな。だが、光彩の色を変えるルーンはある。研究してその左目と同じ色が出るようにルーンを調整して、必ず我がものとしてみせる。それを使えば……」

コツン。

エスカは再びニームの頭を小突いた。

「そんな事してお前の右目はどうなるんだよ」

「私の目などどうでもよい。だって、だって……私のせいで……私のせいだ……」

大粒の涙がまたあふれ出したニームの言葉を遮るように、エスカはその細い腰を抱きしめた。

「心配するな。おれは左目だけでも十分だ。さっきも言ったろ？片目さえ使えれば可愛いお前の顔をちゃんと見られるんだからな」

エスカがそう言うとニームは大きな嗚咽を漏らして、また泣き始

めた。エスカはその焦げ茶色の髪を撫でてやった。
「『だって』か。お前はそういう言葉もちゃんと使えるんじゃねえか。せめておれと居る時くらいは気を張るのはよせ。いつもの凛々しいお前もいいが、俺はふにゃふにゃになったお前も大好きなんだぜ？」
ニームはそれには何も答えず、嗚咽を上げるだけだった。
「この状態で悪いが、続きを頼む」
二人の様子をぼうっと眺めていたシュクルだが、エスカにそう促されると決まり悪そうに咳払いを一つすると説明を続けた。
あの後トルマ・カイエン元帥は、我を失っているニームを苦心して正気に戻させると、拘束はそのままにして、まずはマルクの口だけをきけるようにした。
彼はその場でマルクに誓わせた。エスカとニームに対して国王名代の立場を使った命令を一切行わない事を、である。
「あなたの為に彼は自らの右目を差し出したのですぞ？　名代にとってこの金髪の勇者は命の恩人同様」
「それは……」
マルクは言葉の拘束が解かれても、もう汚くニームをののしる事はしなかった。衝動が去ってしまえば、ただの小心者なのだ。むしろ自分が引き起こした事の顛末におびえていると言った方が良かった。
トルマはそこに畳みかけるように脅迫としか取れない言葉を投げつけていた。
「敢えて言わせていただきましょう。本物でも何でもない名代のあなたの為に、ここまで体を張れる臣下が他にいるとお思いか？　矜持と忠義の国のシルフィードにも、これほどの覚悟を持ち、かつ潔く行動に移す者など、今はそうそうおりませぬ。おわかりか？」
マルクはトルマと目を合わせる事が出来ず、地面を見つめてうなずいた。
「では今この場で、ここにいる全員の前で誓っていただきましょう。

あなたが自分の国に無事に帰るまで、この男の指示に従うと。従えないのならばここの忠臣には申し訳ないが、名代の行動はシルフィード王国の法に則って私がしかるべき処置を行うことになりますぞ」

そう言ってわざわざ威嚇するようにテラスの分厚そうな床板をドシンと踏みならして見せた。

「わ、わかった……」

マルクは即答した。

もとよりマルクに選択肢などはなかった。彼はただ一刻も早くこの場から逃げ出したい一心であった。それがかなうならばロバに頭を噛まれてもいいとさえ思っていたのである。エスカに従うくらい何でもなかった。

「一同、お聞きの通りです。よろしいですかな?」

トルマはそう言って一同を見渡すと、ようやくニームにマルクの拘束を解かせた。

リンゼルリッヒとジナイーダはそこでようやくその場に姿を現したが、その場の惨状を見てただ絶句していた。

「その後、元帥と打ち合わせてあなたをここに運ばせていただきました」

シュクルは一通りの経緯を話し終えるとそう言って、話は以上だと言う風に軽く会釈をしてみせた。

「ご心配なく。あの騒動は一切他には漏れてはおりません。それにここはルーンの結界があるので可愛い奥方があなたを心配していくら泣こうが騒ごうが、一切外には漏れません」

エスカはシュクルにそう言われて改めて胸の上に突っ伏している焦げ茶色の髪をした小さな大賢者に目をやった。

「心配かけたな。すまん」

ニームはエスカにかけられたブランケットに顔を埋めたままで頭を振っただけで、何も答えなかった。嗚咽は小さくはなっていたが、

まだ収まってはいなかった。
「私は同門の人間として、ニーム様を心から尊敬しています」
エスカ達を見守っていたリンゼルリッヒが、ぽつりとそういうつぶやいた。
「それほどの方です。ですがエスカ様、私も今夜思い知らされました。ニーム様がニーム様である時には、ただの十五歳の女の子なのだと言う事を」
リンゼルリッヒの言葉にジナイーダも頷いた。
「長くお仕えしていますが、ニーム様の涙を私達は初めて見たのです。この方は泣く事などない特別な人なのだと勝手に思っておりました。それがいかに愚かな考えだったのかを、今夜は嫌と言うほど思い知りました」
「そうだな。でも、もともとけっこう子供っぽいところのあるやつじゃないか」
「いえ」
エスカがそう言うとジナイーダは首を横に振った。
「それもエスカ様と出会ってからの話なのですよ」
「そっか」
エスカは小さくうなずくと、いつも隙なくきちんとしているニームからは考えられないほど乱れている髪を、手櫛でそっと整えてやった。
「俺もそうなんだぜ」
その言葉はニームに向けられたものだった。
懸命に嗚咽を堪えながら、その言葉を聞いたニームは顔を上げ、泣きすぎて腫れぼったくなった目でエスカを見つめた。
「俺もお前に出会ってから子供みたいな大人になっちまった気がするよ」
エスカの言葉の意味するところがニームにはわからなかったのだろう。何も言わずに次の言葉を待つニームの頭をそっと撫でると、言い聞かせるような口調でエスカは続けた。

「俺はこう見えてもけっこう素直な人間でな。ここまでは自分のやるべき事をかなり真面目にこなしてきたつもりだ。文句を言いながら、な。だがニームという不確定要素が突然目の前に現れた」
「不確定……要素？」
ニームの言葉にエスカはうなずいてみせた。
「ああ。ここまでのところは俺がこなすべき計画は驚くほど完璧だったんだぜ。まあ、そのまま最後までいけるとは思っちゃいなかったが、それは全く別のところで生じる困難だろうと思ってた。だが、まさかこんな形で現れるとはな」
「意味がわからない」
「だろうな」
エスカは寂しそうに苦笑すると、たった今自分が手櫛で整えてやった焦げ茶色の髪をくしゃくしゃにした。
「わかりやすく言うとだな」
「うん」
ニームはいやがるそぶりも見せずエスカにされるままでそう言ってこくんと頷いた。
その言葉と様子には大賢者という名前を連想させるものは、もはや微塵もなかった。
「それでいい」
エスカは眼を細めると優しい微笑を浮かべてニームの頬に手をあてた。
「俺の計画じゃ、一応正妻にすべき女の候補は挙がっている」
エスカはそこで言葉を切ってニームの表情の変化を観察した。ニームは何も言わなかった。だが、その茶色い瞳が少し揺れたように見えた。
「だがな、俺はそんな計画はうっちゃってお前を正妻にしたくて仕方ねえんだよ」
エスカがそう言うと、ニームはこみ上げる感情を抑えきれずにエスカから顔を背け、再び大声を上げて泣き始めた。

「エスカ様、おそれながら今の言葉はあまりに残酷ではありませんか？」

ジナイーダは怒気を隠さずそう言ってなじった。だがエスカはそれには反応せず視線を天井に向けると呟くように言葉を続けた。

「それが出来たら俺自身は満足で幸せだろうなって思ってるよ。不思議なもんだぜ。人間ってのは長年死にものぐるいで築き上げてきたものをこんなに簡単に捨てちまおうって気になるもんなんだな」

「駄目だ」

嗚咽の合間に、ニームがそう言った。

「あなたは……エスカはこれ以上私の為に……何かを失う事があってはならぬ。失ってほしくない」

「ニーム……」

「なぜ？　なぜ、こんなに苦しいのだ？　辛いのだ？　エスカ・ペトルウシュカは私の目的の為の手段にすぎぬはずなのに」

エスカはニームをそっと抱き寄せた。

「俺たちゃ所詮、人間だってことだろ。それに、家族だしな」

エスカは家族という言葉を強調すると、リンゼルリッヒとジナイーダの方へ顔を向けた。

「知らん顔してるが、お前らも家族なんだぞ。俺の屋敷でそう言ったろ？」

エスカにそう言われてジナイーダはハッと目を見開いた。

「だからこいつがつまんねえ事を言ったら俺と一緒に叱ってやれ。もちろん、さっきみたいに俺の事も叱ってくれればいい。だいたい、お前達の方が俺より年上みたいだしな」

エスカの言葉を受けたジナイーダは、緩やかに笑顔を作ると腰に手を当ててエスカを優しく睨んだ。

「若い女性にその言葉は失礼と言うものですよ、エスカ様」

「さっそく叱られたか」

エスカはそう言うとククっと笑って見せた。

「それから『様』はいらねえよ」

「では、エスカちゃん？」
「――いや……」
「冗談ですよ、エスカ様」
「わかったよ。好きに呼べばいいさ。ジーナ姉さん」

ジナイーダはついさっきニームの事でエスカを非難した自分の言葉が話を逸らされて体よくごまかされた事を認識していたが、それについては何も言わなかった。自分が言わずともエスカ自身がそれを痛いほど感じている事がわかったからだ。

エスカは葛藤している最中なのだ。いったい彼が最終的に何をしたいのか、正妻にしようとしている相手が誰なのか、それはまだわからない。そしてそれを今尋ねるべきではないだろう。だが、それは彼が今まで全身全霊をかけて積み上げてきた計画の一つの到達点であり、おいそれと譲れるものではないと言う事だけはわかる。

そこまで考えて、ジナイーダは自分の考えが全く的外れだったのかもしれないと思い至った。

エスカは自らの計画の修正を試みようとしているのではないだろうか？ニームを正妻として、それでも最終的な目的にたどり着く道筋を探しているのかも知れない。

だがそれは……

それは賢者《天色の楔（あまいろのくさび）》であるニーム・タ＝タンの目的を妨げる事にはならないのだろうか？

ジナイーダも、そしてリンゼルリッヒとて大賢者が一体どういう存在なのかを全て知らされているわけではない。むしろ大賢者と賢者会に所属する普通の賢者とは隔絶しすぎていて想像すら及ばない。もともと大賢者は賢者会には属していないのだ。賢者会の上に独立して存在している者達なのである。

ジナイーダ自身、大賢者全員に会った事はない。《真赭の頤（まそほのおとがい）》と《菊塵の壕（きくじんのほり）》は見かけた事がある。が、ニームの先代……彼女の実の姉と言われているが……にあたる《天色の楔》には結局会えずに

そのままニームに代替わりした。そう言う意味では三人の大賢者の姿形は知っていると言えるだろうが《銀の篝(しろがねのかがり)》にいたっては現在の賢者会の構成員から見たという話を聞いた事すらなかった。

もちろん大賢者とはさらにその上に君臨する三聖の側近であると言う事は知識としては持っていた。だがその伝説の三聖とやらには一度としてまみえた事がないのだ。

賢者という立場にありながら三聖が本当に存在するのかと問われたら確信を持って首を縦に振る事は出来ないであろうと感じていた。

ジナイーダとリンゼルリッヒが仕えている大賢者《天色の楔》は、そもそもその三聖の一人《深紅の綺羅(しんこうのきら)》の側近である。その大賢者の当面の行動目的は自分が仕えるべき存在を自らの手で見つけ出す事であるという。

ニーム・タ＝タンというルーナーの少女が《授名の義》を経て賢者となり、時を置かずそのまま大賢者に任命された後、間もなくドライアドのバード庁に入り込む事になったわけだが、ジナイーダとリンゼルリッヒが彼女の護衛役に任命されたのはニームが《天色の楔》になったわずか数日後だったと知らされた時は心の底から驚いたものだ。

ドライアドに入り込んで情報収集を行う事、そのために必要な手続きなどは全てニームが一人で決めて実行した。

そしてはじめは冗談だと思って聞いていた事だが、本当に護衛は末席賢者が二人きりであった。

三聖の捜索に割く人員はたった三人なのである。

しかしリンゼルリッヒとジナイーダも当初から自分たちの真の目的、いやニームの目的は知らされてはいなかった。最初に告げられたのは「ドライアドの王宮に入って情報収集にあたる」という単純なものだった。大賢者自らがそのような地味な仕事に従事するとは思えないので曰く付きの任務である事は承知していた。しかしマーリン正教会の本拠であるヴェリタスを発ってしばらくしてからニー

ムにその目的を告げられた際、俄に信じられなかった程である。曰く付き、どころか末席賢者には荷が重すぎる任務だと思ったからである。

そもそも三聖の一人《深紅の綺羅》が行方知れずになっているという話自体が衝撃的な事実だったが、その捜索に当たるのが大賢者とは言え当時十三歳になったばかりの子供と末席の自分達二人だけだという事にめまいを覚えたものだ。

《深紅の綺羅》の一件が事実だとしたらマーリン正教会としては一大事のはずである。一国の出来事に当てはめて考えればわかりやすい。王妃、あるいは王子・王女の一人が行方不明になったようなものなのだ。その捜索に一人の未熟な大臣が部下を二人だけ引き連れて捜索に出るようなものである。

これほどの一大事は国を挙げて事に取りかかるべき問題ではないのだろうか？　つまりマーリン正教会の賢者会こそが全賢者を動員し、最優先事項として取り組むべき事柄なのでは？

いや、そもそも他の三聖や三聖の側近である大賢者達はその為にこそ動かなくてはならないのではないのだろうか？

だがヴェリタス……つまりマーリン正教会の本当の上層部の考えている事は、賢者という高みにあるリンゼルリッヒやジナイーダであってもわからない事だらけなのだった。

目の前で肩を振るわせて泣いているニームを見ていて、ジナイーダは久しぶりにそんな事を考えていた。

（なぜこの子だけがそんな重い使命を負わなければならないのだろう？　側近の役を負う者だからか？　だいたいこの子は大賢者という役目を担わねばならぬ存在なのだろうか？　エスカ・ペトルウシュカと一緒になって幸せになればいいのではないのか？　三聖の捜索はヴェリタスが組織として行うべき問題ではないのか？）

そしてそんな疑問が頭をもたげていた。

少しの間その場を支配していた沈黙を、ノックの音が破った。
「私だ。お邪魔してもよろしいかな？」
落ち着いたその声はトルマ・カイエン元帥のものだった。
声にすぐに反応して、シュクルがドアを開け、本来の部屋の主を招き入れた。
「あ、いや、そのままそのまま」
エスカが起き上がろうとしたのを慌てて制するとトルマは神妙な顔をして詫びた。
「幸い、この老いぼれ、長く生きているおかげで国王陛下に特別に直接お目通りがかなう立場でして、勅命でこの王宮に居るもっとも高位のハイレーンを寄越したのですが……」
「その件はもう言いっこ無しで願いたい、カイエン元帥。無礼は我にあります」
慇懃な挨拶をするトルマの言葉を途中で遮ると、エスカは黙礼した。
そう言われてしまうとトルマとしてもそれ以上言及する理由はなかった。
彼はうなずいてエスカの言葉に対して承諾の意を表した。
「さて」
トルマはそう言うと改めてその部屋にいる面々を見渡した後、シュクルに側に来るように合図した。それを見たニームの顔にわずかに緊張が走った。見舞いとは別のトルマが持っているであろうもう一つの目的を思い出したのだ。
「私にはどうしても気になる事がありましてな」
そら来た、とエスカは思った。だが、トルマの期待に添える回答をエスカ自身は持っていない。むしろエスカはトルマと同じ立場と言って良かった。
答えるべきはシュクルと、そしてニームに違いないのである。
「先ほどはそれどころではありませんでしたからな」
エスカは委細承知という風にうなずくと、まだ顔を埋めたままで

いるニームの肩に優しく手を置いた。
「短剣が……いや、お前の結布とグラスの精霊陣もだな。あの訳は話せるか？」
エスカのその様子を見たトルマはエスカ自身がその理由を知らぬ事を悟った。
「実のところ私もかなり驚いてるんです」
これはシュクルだった。腰にぶら下げた懐剣を手に取ると、両手でトルマに差し出した。
「あんなことは初めてです。この懐剣はまさか妖剣と呼ばれる類のものなのでしょうか？」
差し出された懐剣を手にすると、トルマは子細に吟味した。そして少しだけためらった後、鞘から剣を抜いた。
引き出された白っぽい刃は、それがリリス製である事を示していた。刃の形状は単純にまっすぐなよくある懐剣であった。
「元帥が見てわかる様なら私がとっくに気付いていますよ」
熱心に吟味を続けるトルマにシュクルは冷たくそう言い放った。
「持ち主だから気づかぬ点もあるやもしれぬだろうが」
トルマは憮然としてそう言い返したが、素直に剣を鞘に戻した。
「華やかではないが、軽くてよい姿をした懐剣だな。どこで手に入れた？」
そのトルマの言葉に、ニームが反応した。
「私もその剣の出自を知りたい」
顔を上げたニームはいきなりそう言うと視線をトルマの持つ懐剣に注いだ。
「やれやれ、剣が光る理由より先に入手先の尋問ですか」
シュクルはそう言って苦笑したが気分を害した様子もなく、素直に手に入れた経緯を話し出した。
「ミドオーバ殿から頂戴したものですよ」
ミドオーバという名前をシュクルが告げたとたん、トルマの顔色が変わった。エスカとニームはもちろんそれを見逃さなかった。

「ミドオーバというと、近衛軍大元帥の？」
エスカの問いに、しかしシュクルは首を横に振った。
「同じミドオーバでもカテナ・ミドオーバ陸軍中佐の方ですよ」
「倅の方か。そう言えばお前達は確か士官訓練所で同期だったな」
「ご存じないかも知れませんが、シルフィードでは士官訓練所を卒業しても士官になれるわけではないのが特徴でして」
シュクルはエスカに向かってそう言うと肩をすくめて見せた。ドライアドでは貴族学校を出て軍人に志願すれば無条件で准尉の階級章が与えられる。そして一度実戦か、実戦訓練を行えば少尉にはなれる仕組みになっていた。
その背景を考えるとシュクルの言動はエスカに対する皮肉とも取れるが、そういう邪気はシュクルには一切ないようであった。

シルフィードにはそう言った仕組みはなく、士官訓練所とは文字通り訓練を積むための場所であり、それを生かして結果を出し、評価されたものだけが階級を勝ち取る事ができるのである。言い換えるならば士官訓練所が必要のない者も大勢いると言う事である。むしろ士官訓練所は軍内部での顔合わせや人脈作りの場という側面が大きい。
「まあ、同期と言っても机を並べたのはたったの一年ですからね。でも陸軍と海軍の軍人がじっくりとつきあうには実にいい場所です」
エスカはシュクルの言葉にうなずいた。
「シュクル殿はさぞや優秀であったのでしょうな」
エスカのその言葉はおべっかでもなんでもなかった。シュクルの若さで少佐という階級を持っている事がシルフィードでは異例であることは知識として知っていたからだ。
「いやいや、私が優秀などと思われてはシルフィードの軍力を過小評価していることになりますぞ、ペトルウシュカ将軍」
シュクルはおどけてそう言ったが、トルマが横から口を挟んだ。
「いや、あの年の優秀賞は、確かスリーズという名前ではなかった

かな？」

それは実のところトルマとシュクルの間だけで時折交わされる定番の嫌みだったのだが、もちろんエスカ達には意味は通じなかった。

シュクルは大げさに肩をすくめて苦笑して見せると、エスカに説明した。

「同期と言っても訓練所は一般的な学校とは違いますから参加している人間の年齢は様々なんです。ミドオーバ中佐は私よりも五つも年上ですし、その年の優秀賞をとったスリーズという人間は私よりも三つも年下でしてね」

スリーズという族名がシルフィードでは多いのか少ないのかはエスカには知るよしもなかったが、要するに同じ歳に同じ族名を持った別人が優秀賞を取った事でシュクルは揶揄られているのである。

「従兄弟なんですが、ここの出来がちょっと普通じゃなくて」

シュクルはそう言って指で頭をさした。

「お気の毒な方？」

エスカのつまらない突っ込みにシュクルは小さく笑って反応した。

「いやいや。まあそうかも知れません。何しろ奴は一度読んだ本の内容は完璧に記憶しているんですよ。『歩く図書館』って呼ばれてましたっけね。正教会や新教会の聖典や経典は全部覚えてますから、いつでも高僧の代理で説教ができますし、便利この上ない」

「それは……」

大したものだと言おうとしたエスカだが、すぐに側にいる焦げ茶色の少女の事を思い出した。エスカの価値観からすると記憶力に関してはニームも充分に異常と言えた。

「まるで賢者のようだな」

そう言ったのはニームだった。

シュクルはニームの言葉に一瞬顔色を変えたが、すぐに元の柔和な笑顔に戻った。それは本当に一瞬の変化で、さしものエスカも気にとめる事はなかった。それよりもエスカはニームが「賢者」という言葉を口にした事が気になった。

「従兄弟殿はさぞや出世したのでしょうな」
エスカはニームの口からでた物騒な単語についてお互いが言及する事の無いよう、あわてて話の流れを元に戻した。だが、そうする必要があったのかどうかという疑問がすぐに浮かんでは来たのだが……。
「大佐ですよ。今のところ一族で一番の出世頭です」
シュクルはそう言うとうつむいた。エスカはシュクルのその態度で「大佐」の意味を理解したような気がした。
――従兄弟とやらは既にこの世にないのであろう。二階級の特進で大佐になったのかもしれない。

「おっと、湿っぽい話はなしでいきましょう。まあ、従兄弟は変わり者でしたから普通の上官の下ではなかなか出世は出来ませんでしたよ。私の方が常に階級は上でしたから。ま、そんな話はおいといて、中佐殿から私がこの懐剣をせしめた話でしたね」
「せしめた？」
トルマは怪訝な顔で懐剣とシュクルを見比べた。

シュクルの話をかいつまんで説明するとこういうわけである。
訓練所でシュクル・スリーズとカテナ・ミドオーバが知り合ったきっかけは、「ゴダン」というマス目と丸い駒を使う古来よりシルフィードで盛んな対戦将棋であった。
シルフィードの軍人はゴダンをたしなむ者が多い。訓練所に集まった軍人達も例に漏れず宿舎では毎夜対戦が行われていたのである。そこで圧倒的な強さを見せていたカテナに勝負を挑んで勝ったのがシュクルだったのだ。
「実のところ、私の師匠はその従兄弟でして」
棋譜として残っている過去の名勝負・珍勝負を全て暗記しているその従兄弟にとって、ゴダンで勝負に勝つのは簡単な事であった。
そこに目を付けたわけでもないのだろうが、幼い頃よりシュクルは

その従兄弟の手ほどきを受けており、自身が相当の腕前だったのだ。
「まあ、その従兄弟はもはやゴダンなどには見向きもしてませんでしたから、ミドオーバ中佐を破った私が一席棋士になってしまいましてね」
いざ勝負となると熱くなるものの、その勝負の結果をあまり引きずることのないアルヴとは違い、カテナ・ミドオーバはデュナンであった。相当ゴダンについては自信があったのであろう。その後はシュクルをまるで目の敵のようにして幾度も勝負を挑んできたのだという。
訓練所を出た後もシュクルとカテナのゴダンの勝負は連綿と続いており、不定期ではあるがカテナの都合で呼び出されては勝負を挑まれ続けているのだという。
「最近は三回に一回は負けるようになりましてね。ただ負けず嫌いなだけでなくてけっこう勉強をして研鑽を積んでいるようです。まあ、真面目なのでしょうね」
件の懐剣は、丁度一年ほど前にミドオーバ中佐の部屋で勝利の報酬として受け取ったのだという。
「丁度私が少佐になった時でした。昇進を聞きつけたミドオーバ中佐が祝いに何かをくれるというのです。私はちょうどその時、よい懐剣を探していた事もあって、一つそれを頼むという話になったんです。それでその時ふと顔を上げて中佐の応接間の壁を見ると、いくつか姿のいい懐剣が飾られていましてね。その中で一目で気に入ったこれをくれと頼んだところ、やりたいところだが、自分のものではないのでダメだと言う事になりまして」
「自分のものではないというと？」
「いえ、彼自身が父親の屋敷からめぼしいものを勝手に持ちだして飾っているのだと」
「大元帥の懐剣？」
ミドオーバの父親はシルフィードの両翼の一人、サミュエル・ミドオーバ大元帥に他ならない。

シュクルと、そしてトルマを除いた四人は互いに顔を見合わせていた。トルマは目を伏せて唇を固く結んだままであった。

「それで？」

エスカが続きを促した。

「ご想像通りですよ。勝手に持ち出しても何も言われないものですから大元帥にとっては大したものではないでしょう？　ミドオーバ大佐もそれはわかっておいででしたからね。とは言えハイそうですかと言う訳にもいかないのもわかります。そこで……」

「ゴダンの勝負で勝ったらやる、と？」

エスカの問いにシュクルはうなずいた。

「まあ、そんな賭をしなくてもゴダンの勝負はやる事になっていましたし、中佐はああ言ったものの私に懐剣を与える口実が欲しかったのでしょうから、おそらく勝っても負けても理由を付けてこの剣は手に入れる事が出来ていたとは思います」

「カテナ・ミドオーバ陸軍中佐か。勝負事にこだわるということだが、少佐の話を伺うと人となりはそれなりの人物とお見受けする」

エスカは社交辞令でなく、思ったままの分析を感想として告げた。彼にとってカテナという人物については未知だった。もちろん大元帥の息子であるから名前や概略だけは情報として知ってはいたが人物そのものに迫るものはなにもなかった。事が起これば対峙する相手になるかも知れない。情報は多い方が良かった。

シュクルはそんなエスカの思惑を当然ながら理解していたのだろうが、隠し立てする様子も見せずに友達を紹介するような口調でカテナの逸話をいくつか披露して見せた。

それによるとカテナ・ミドオーバは理想に燃える熱い戦士と言った人物に思えた。勝負事にこだわるのはシルフィードでは取り立てて特別な気質ではないだろう。それよりも父親の威光を全くあてにせずに出世していった功績には目を見張るものがあった。

「ただ、これはまあ私の独り言みたいなものですが……」

最後の方にシュクルはそう断って一言だけ付け加えた。

「軍隊を率いる立場の人間としては当たり前の事なので責めるのはお門違いでしょうが、兵士をもう少し大事に扱わないと消耗戦では厳しい采配を強いられるでしょうね」
　独り言と断ってはいるが立派な上官批判である。だがトルマは止めるでもなく、ましてやとがめるそぶりも見せなかった。
　エスカはその言葉でシュクルの人となりをまた一つ理解した気がした。
「さっきお話しした私の従兄弟ですが、その能力を買われてミドオーバ中佐の補佐官に抜擢された事があるんですが、結局折り合いが悪くて冷や飯を食わされていましたっけ」
　エスカはシュクルがそう言うと、ぽつんとつぶやいた。
「かなうなら、その従兄弟殿にお会いしたいものだ」
　だがシュクルは大きく肩をすくめてハナを鳴らした。
「いやあ、きっとムカつきますね。そしてどうやって軍法会議で合法的に亡き者にしてやろうかって考え続けると思いますよ」
「ほう？」
「ここが特別なだけじゃなくて、兵士としても高位フェアリーの能力を持つ者ですから、まあ特別な人間です。根はいい奴なんですが自分より能力が低い人間の下に付くのが我慢ならないという子供のようなやつでね」
「なるほど」
「そう言うわけで結局あいつは落ち着くところに落ち着いたって訳です」
「落ち着くところ？」
「高位フェアリーだけで構成されている特殊な部隊です。ご存じでしょう？」
　シュクルはそう言うとニヤリと笑った。
「シュクル」
　さすがにシュクルの口からル＝キリアという名前が出る前にトルマはなめらかすぎる彼の口を止める事にした。

だがエスカにはそれで充分だった。ル＝キリアの噂は彼もよく知っていた。いや、避けて通れない相手として、それなりに詳しく調査をしていたのだ。詳細な構成人員などは不明だったが、同じような特殊部隊を持っている身としてはその話を聞いただけで、シュクルの従兄弟が飛び抜けて異質な存在である事がわかった。さらにシルフィードの軍内部ではル＝キリアは忌み嫌われる存在であるという事も知識として知っていた。シュクルとてその従兄弟を手放しで持ち上げる事には抵抗があるのだろう。

「失礼しました。私が余計な事を尋ねたようです」

シュクルを睨み付けるトルマにエスカはそう言って詫びた。もっとも当のシュクルはトルマの視線などどこ吹く風といった風情であったが。

「懐剣について私が知っている事はそれが全てです。もらってから何度も丁寧に手入れをしましたし、細部も詳細に調べましたが特に変わった事のない懐剣だと思っていましたが……」

懐剣の事に話が戻ると、ニームが口を開いた。

「触らせてはくれぬか？」

その言葉に小さなニームは全員の注目を浴びる事になった。これから先は彼女の知っている事が告げられる番になるからだ。

「私はかまいませんが……」

シュクルはそう言うと横目でトルマをみやった。好き勝手に振る舞っている様に見えるが、要所はきちんと押さえる人間だという事であろう。さすがに異常な現象があった張本人とその原因の二つが揃うとなると許可の決断は上官に委ねる事にしたのである。

「それから、簡単な感知ルーンを使う事を許してもらいたい」

シュクルに続いてニームもそう言ってトルマをその茶色い瞳でじっと見つめた。

「確認したい事があるのだ。それが終われば訳を話す」

トルマは腕組みをして少しの間思案していたが、ゆっくりと首を

縦に振った。

「わかりました。ですがここは王宮ゆえ派手なルーンは困りますぞ」

ニームは頷くとシュクルが差し出した懐剣を両手で受け取った。

一体何が行われるのかと一同が固唾を呑んで見守る中、ニームは寝台脇の小さな円卓の中心に剣を置くと懐から例の携帯用のペンとインク壺を取り出し、何の迷いもなく剣の周りに精霊陣を描き始めた。

何度となくニームが精霊陣を描く様を見ているはずのエスカだが、描き出されるあまりに整った図形とその描く速さには改めて舌を巻いていた。トルマとシュクルにいたってはニームが精霊陣を描くのを見るのは初めてである。その完璧と思える円や微塵も曲がらぬ直線、定規を当てたわけでもないのに寸分違わず出会う交点、さらに多くの記号や図形は揃いの判で押したような見事な相似を保っていた。それはまるであらゆる法則が均整を保ち続ける一つの世界のようなたたずまいすら見せていた。

そして……その複雑な精霊陣が描かれる速度が尋常ではなかった。あまたの精霊陣を見慣れているはずのトルマをして思わず感嘆の声を漏らすほどだったのだ。

ある種神聖なものを見守るような雰囲気の中、おそらくはものの一分程度でその見事な精霊陣を描き終えると、ニームはペンとインク壺を隠しにしまい、腕輪の名を呼び、それを一瞬で儀仗セ＝レステに変えた。

何が行われるのかはわからない。しかし一同は得体の知れぬ不安と期待の混じり合った感情でニームの一挙一動を見守っていた。

ニームはルーンを一切唱えなかった。

一度大きく息を吸い込むと、意を決したように右手に握った儀仗の頭頂部をシュクルの懐剣にそっとあて、左の掌を描いたばかりの精霊陣の端に置いた。

するとどうだろう。精霊陣全体から光が立ち上った。
まるで円卓の一部が光っているかのように。そしてその光はまっすぐに上に向かって放たれていた。

「これは……」
誰もが息を呑む中、トルマは思わずそう声を出した。
「これは一体誰だ？」
トルマの指摘は無理もなかった。その真っ直ぐ立ち上る光芒の中に、ぼんやりと姿が浮かんでいたのだ。
エスカは光の中に浮かぶ顔に見覚えがあった。
いや、正確にはその顔に似た人物を知っていた。
「ニーム！」
光の中の人物は女性だった。デュナンの成人。
そして……。
エスカはニームの様子を見たが、そこには彼ら同様、いやそれ以上に驚いたような表情のニームが居た。
「似ている」
リンゼルリッヒがそう呟くまでもなかった。光芒の中にぼんやりとではあるが浮かんでいる顔は、ニーム・タ＝タンに面影が似ていた。
だが、はっきりと別人であるとわかる。似て居るのは面立ちだけで、髪の色も目の色も違う。何よりも一目で年齢が違うのがわかる。
「母上……」
ニームがぽつりとそうつぶやいた。
そしてまるでその言葉が聞こえたかのように、光芒がかき消えた。
もちろん、光の中でぼんやりと浮かんでいた金髪碧眼の美しいデュナンの女性もその姿を消した。

「母親だと？」
トルマはじろりとシュクルを睨んだが、もちろん少佐は肩をすく

めて首を横に振るだけであった。
「今のは何なんだ？　その懐剣とお前の母親が何か関係があるのか？」
光が消えた後もそのままの格好で虚空に焦点を合わせているかのようなニームにエスカはそう声をかけた。
一同は再び固唾を呑んで、ニームがその問いかけに答えるのを待った。

「彼女の名前は、クレハ。またの名を《深紅の綺羅（しんこうのきら）》　私の母だ」
ニームは静かにそう答えた。
だが、一同がその言葉の意味を理解する為には、しばし時間が必要であった。

# 第七十七話　怪文書

三聖《深紅の綺羅(しんこうのきら)》は紅蓮の炎を自在に扱うエクセラーであると伝えられているが、それ以上の事は何も伝わっていない。

外見は金髪碧眼の若い女デュナンをなぞった亜神として描かれており、多くは優しく穏やかな表情をしている。それは炎の亜神という言葉からはおよそ連想しにくい顔立ちと言っていいだろう。

十二色の一つ、アリスを名乗る最後の一人と言われているが、どちらにしろ信憑性の高い逸話が何一つ存在しない人物である。

大賢者である《真赭の頤(まそほのおとがい)》と、同じく大賢者《天色の楔(あまいろのくさび)》の二人を従えた輝くばかりの肖像を描いた様式絵が多く残されているにもかかわらず、その存在は曖昧なままである。

もとより正教会の公式な文書には「月の大戦」の十年も前から《蒼穹の台(そうきゅうのうてな)》以外の三聖の存在を匂わせるような記述がない。

三聖自体が実在しない人物であるという説を主張をする人間が今でも少なからず存在するのは無理もないが、状況証拠としては間違い無く存在した人物だと考える方が妥当であろう。

炎のエレメンタルやニーム・タ＝タンの誕生に関係した事は間違いないところであるし、サミュエル・ミドオーバの日記には当たり前のように《深紅の綺羅》という記述が数多くある。確かな物証が無い為に存在しないと言う事はたやすいが、彼女が存在していたと考える方が様々な事柄が自然に繋がる。

言い換えるならば、《深紅の綺羅》は「失われた鍵」とも言える存在なのである。

いい例がニーム・タ＝タンの存在である。

いくつもの公式な文書に母親としてクレハの名が存在する。中には《深紅の綺羅》と記述されているものもある。

これを後世のねつ造とするにはあまりに無理があろう。なぜなら

ばそれらの文献や文書に書かれている別の項目はほとんどが事実であることが検証されているからだ。母親にカンする記述だけがねつ造であるとするには無理がある。

ニームの存在を相対的に高めるための脚色と捕らえてしまうのは簡単であるが、ニームがそもそも十二色のうち「人の筆頭」という存在であると言うのであれば、それをさらに嵩上げする必要性は少ない。無駄な脚色の上塗りは逆効果でもある。

つまり、それらの事柄を包括すれば自ずと答えが見えてくる。

クレハ・アリスパレスはかつて実在した人物なのである。ニーム・タ＝タンを生んだ亜神として。

ミリア・ペトルウシュカの手による膨大な作品の中にはクレハ・アリスパレスという名も《深紅の綺羅》という名も見られない。もともと表題を付けない事が多いミリアの絵の場合、後世の人間が誰を描いたものかを検証して「であろう」としているだけである。

しかし残念ながら同時代を生きたであろうクレハ・アリスパレスを描いた絵であるとされるものはまだ見つかってはいないし特定されてもいない。

ミリアの場合は自らが出会った人物しか描いていないと言われており、つまり彼がクレハに出会わなかったと言う事が素直な、そして納得できる推理であろう。

ただし「クレハの絵ではないか？」と議論の俎上に上がる絵は存在する。

幼い金髪の乳飲み子を慈愛に満ちた表情で胸に抱く若いデュナンの母親の姿を描いた暖かい色調の穏やかな絵がそれで、これも収蔵していた美術館が火災に遭い現在は模写が残るのみである。

絵の題は「より新しき地図を描け」

美術館の記録によれば、珍しくミリア直筆で絵の裏にそう記されていたという。

しかし我が子を抱く母親は金髪でも碧眼でもなく、焦げ茶色の髪

と茶色の瞳で描かれている。それでもこれがクレハ・アリスパレスであると唱える者がいるのには訳がある。

模写した人物そのものが特定されていない為もあり「元絵は金髪碧眼だったものが、粗悪な絵の具を使っていたために褪色・変色により後世の補修段階で目の色も髪の色も変化した」というのがその根拠である。確かに当時の絵の具にはそのような変色をする粗悪品があったのも確かだが、そもそもがありふれた農家の居間とおぼしき場所が背景であることから、信憑性を語るのはきわめて苦しいと言わざるを得ない。

だが、その絵の元となったミリアの真筆が残っていたならば、また別の推測も可能であったに違いない。それもこれも「失われた鍵」なのであろう。

舞台をエッダの王宮、トルマ・カイエン元帥の部屋に移そう。

《深紅の綺羅》の名前はその場の誰もが知っていた。

もちろん知っている事と理解している事は同義ではない。ましてやその名で呼ばれる存在とまみえた事がある者は誰一人いなかった。

当のニーム・タ＝タンですら出会った記憶はない。

もちろん母と言うくらいであるから、生まれた時には同じ空間を共有していたに違いない。しかしその記憶がニームにあろうはずもない。

「そうか、エスカもクレハが私に似ていると思うのだな」

ニームの問いに、エスカはうなずいた。

「そっくりとは言わねえが、並んで立っていたら親子然としすぎて俺はたぶんニヤついちまうだろうな」

「そうか……そうか」

ニームは精霊陣に手を置いたままの状態で懐剣を見つめ、噛みしめるようにそうつぶやいた。
「私の聞き違いでなければ、奥方は今《深紅の綺羅》とおっしゃったのか？」
ニームはトルマの方には顔を向けず、しかし大きくうなずいて見せた。
「冗談ではない。これはエスカはおろかリリやジーナも知らぬ事だ。いや……私も大賢者を拝命するまでは母親については詳しい事は何も知らされていなかった。それどころか三聖の一人が我が産みの母だと聞かされた当時もその後も、ずっと私自身が疑問に感じていたくらいだ。だが、さっきの事件でどうやら本当の事らしいと感じ、それはたった今確信に変わった」
ニームの言葉は静かだった。今し方までエスカの右目の事で感情を爆発させるように泣き叫んでいた少女とはとても同一人物とは思えない程、堂々としたエーテルを纏っていた。
「そうだな……」
ニームはそうつぶやくと、ようやく精霊陣から手を離し、懐剣をそっと持ち上げた。
「論より証拠と言う。まずはこれを見てもらった方が話が早いだろう」
静かな声でそう言ったニームは、リンゼルリッヒとジナイーダに顔を向けた。
「私の後に続け。これは命令だ」
リンゼルリッヒとジナイーダは何の事かがわからず互いに見合った後、ニームに問おうとしたが、その必要は無かった。
ニームの言葉の後、部屋の温度がほんの少しだけ下がったような気配があった。
トルマは何かを見せると言ったニームの雰囲気が変わったと思った。

だがそれはほんの一瞬の事で、すぐにそのわけを理解した。乳白色の儀仗を手にした小さなデュナンの少女はほんの一秒前とは完全に面変わりしていたのだ。

瞳の大きな茶色い目をした少女はそこにはいなかった。そこにいたのは血のように赤く、禍々しく光る目でトルマを射殺そうとしている猛禽のような目であった。

そしてその目は二つではない。額にさらに一つ赤い眼が開かれていたのだ。

「うお……」

「ま、まさか」

トルマとシュクルはそれぞれとっさに声が出た。それは反射であった。

脳で構成された理性が紡ぐ言葉ではない。感情が口を借りて音を出したのだ。

ニームは二人が次の言葉を発する前に口を開いた。

「我が名を告げよう。真の名は《天色の楔（あまいろのくさび）》。マーリン正教会の賢者会を統べる立場にある者だ」

そして視線をトルマから外すことなく、儀仗の頭をリンゼルリッヒとジナイーダの方へ向けた。

「彼らは我が眷属。賢者会所属の者達だ。男の名は《黄丹の搦手（おうにのからめで）》女は《薄鈍の階（うすにびのきざはし）》という」

トルマとシュクルは儀仗セ＝レステが指し示す方へ同時に顔を向けた。

そこにいたのはニームと同じく三つの真っ赤な目を持つ異質な人間だった。

「論より証拠と言うかなら。見ていただく方が早いだろう。ただし、我が名を含め他言無用で願いたい」

ニームは儀仗を構え直すと床に立て、無造作に手を離した。支えを失った儀仗セ＝レステはしかし自立したままだった。

トルマとシュクルは不思議なものを見るような目でその儀仗を見つめた。ニームの顔を見るのが辛かったのだ。ニームの赤い眼を見ると不安で恐ろしい気持ちに支配されていくような、心に闇のような空洞が広がるような気分に襲われるのである。

だから自立する儀仗を凝視する事でニームの視線から逃げていた。

「二人とも、もう良いぞ」

ニームはそう言うと自分も顔を元に戻した。

「賢者を見るのは初めてか？」

シュクルはもちろん初めてであったが、トルマは小さく首を振った。

「かつて大賢者《真赭の頤（まそほのおとがい）》と名乗る人物にお会いした事があります」

「なるほど、そうか」

「しかし、伝説の三眼を見たのは初めてです」

さすがに元帥という立場に長くいるトルマである。かつてマーリン教会の非公式な外交官として各国の中枢と直接やりとりをしていた《真赭の頤》ことシグ・ザルカバードと会見を持った事があっても不思議ではなかった。

「正直に申しまして、賢者の存在は疑ってはおりませんでしたが三眼伝説はおとぎ話の類であろうと思っておりました……いやはや」

トルマはそう言うと額の汗を拭った。

そして汗を拭いながらリンゼルリッヒとジナイーダの方をちらりと見やった。二人とも元の顔に戻っているのを確認すると、ようやく大きなため息をついた。

「最初に申し上げておく。我々は政治的・宗教的な意図をもってエッダの王宮に入り込んだのではない。私は単純にエスカ・ペトルウシュカの補佐官として、そこにいるリリとジーナは護衛として大葬に参列する国王名代に付き従っているに過ぎぬ」

ニームの言葉に裏も嘘も無い事はその声色と表情で疑いもない事

だとトルマは思っていた。だが……

トルマは質問をしようと口を開いた。だが、その部屋に響いた声はトルマのものではなかった。

「しかし、なぜ大賢者が一介の軍人の妻になど？」

シュクルが話に割って入ったのだ。

おそらくトルマのやり方ではまどろっこしいと思ったのであろう。つまり単刀直入な質問を投げられるほどにシュクルの精神は回復していたと言う事である。

「我が夫、ペトルウシュカ少将を捕まえて一介の軍人呼ばわりとはずいぶんご立派な事だな、スリーズ少佐？」

ニームは落ち着いた声でそう言ったが、そこには明らかに怒気が含まれていた。

最後の「少佐」というところをゆっくりと念押しするように言った意味を、シュクルも理解していた。

国は違うがニームは大佐扱いである。少佐とは階級が違う。失礼な事を言うとその階級差を笠に着るぞと言う、それはニームの警告であった。

シルフィード軍人としては珍しく階級差や身分の違いなどを意に介さず思った事をズケズケと言う事が持ち味のシュクルであったが、ニームのその「言葉」の意味するところには素直に従う事にした。だがシュクルはニームの脅しに従ったつもりはなかった。

《天色の楔》ではなくニーム・タ＝タンが夫の身を案じて気が狂わんばかりに取り乱していた事を思い出したからである。

あれは嘘や演技ではない事はシュクルにも、いや誰にでもわかることだった。政治的な思惑や陰謀で王宮に来たわけでもなく、単純にドライアドの公務をこなしているだけだと告げたニームの表情にもいっぺんの曇りもない。

人物を見る目に長けている事が自らの持つ一番の能力だと自負していたシュクルは、ニームの階級ではなく自分の能力が見たニーム

の思いに従ったのである。
そう言う考えを持つ事自体が、シュクルが負けん気の強いアルヴの性格を色濃く持っている事の証拠と言えたが、本人はアルヴらしくない事を自らの矜持としていただけに、自覚がないのであろう。

「ニーム……」
エスカが堅い空気が支配する静寂を破った。
「何？」
「偉そうな事を言う前に、鼻水を拭け」
「え？」
ニームは堅かった表情を一気に崩して真っ赤になると、袖口で顔をくしゃくしゃと拭った。
ニームの顔にはエスカが指摘したような鼻水の跡はなかったが、その指摘の意味はその場にいたニーム以外の全員に伝わった。
シュクルがまず口を開いた。
「さて、カイエン元帥閣下。どうされます？」
「む？」
「私はこの小さな美人の言う事を全部信じますよ。もっとも昨日までの私なら別な事を色々と考えていたところですがね」
「何がいいたい？」
もったいぶったような言い方をするシュクルを、トルマはいらだったような声でなじった。
「今朝、私の元に怪文書が届きましてね」
「怪文書だと？」
「いや、正確には怪文書ではないですね。怪文書というのは匿名で出される事が多い。だが今朝の怪文書にはちゃんと署名がありました」
「この場では言えぬ事か？」
もったいぶった言い方からトルマはそう考えたが、シュクルは思ってもいなかった答えを返した。

「実は先ほど言いそびれましたが、この怪文書の件で閣下に早急にお目通りしたかったのです。ですがお許しを得ずに、敢えてこの場で内容を申し上げようかと思います。何しろ客人がたいそうな秘匿事項を惜しげもなくお話下さったのですから」

「わかった、聞こう。で、その差出人は誰なのだ？」

「その前に閣下に確認しておきたいのですが」

「何をだ？」

「ル＝キリアが全滅したという情報はご存じですか？」

唐突なシュクルの問いに、トルマは眉根にしわを寄せてあからさまに不快な表情を作った。特殊部隊の話は国家的な機密事項である。なによりそもそもル＝キリアは既に全滅したという公式発表はとっくに済ませていたシルフィード王国軍である。

エスカもその事は知っていた。だからつまりシュクルが今口にした事がきわめて重要な軍の秘密だと理解した。

「その様子だと私のいう意味はおわかりで、かつその件についてはご存じのようですね」

トルマの答えを待たずシュクルは一人うなずくと話を続けた。

「その怪文書は、死んだはずの人間から届いたものです。差出人の名前はアトラック。閣下もご存じでしょう？　アトラック・スリーズ。私の従兄弟です」

もちろんトルマはかつて「陸軍の問題児」として有名だったシュクルの従兄弟の名前は知っていた。知っているどころか、彼が直々に陸軍の元帥に頼んで海軍に引き抜いた人材であった。

頼んだと言ってもトルマ自身が欲した人材ではない。彼の唯一の上官である王国軍大元帥、つまりガルフ・キャンタビレイ侯爵から直々に依頼された案件だったのだ。

アトラックはその優秀な頭脳と高い風のフェアリー能力で若くから名を馳せてはいたものの、どこの部隊にあっても上官に疎まれて、陸軍内の部隊を転々としていた。

トルマが海軍に引き抜いた当時、アトラックは自ら進んでスカルモールド討伐部隊に志願していたものの、その最前線の部隊では指揮官と一悶着をおこしたあげく、軍隊内で「試闘」と呼ばれる軍人同士の勝負を繰り返して、同じ階級にある兵士を全て使い物にならない状態するなどなかなかの悪名をとどろかせていた頃であった。

「人と人には必ず相性というものがある。一言で言うなら適材適所と言う奴だ」

ガルフは陸軍からの移籍に難色を示すトルマにそう言って頭を下げた。誇り高く、公明正大を旨とするシルフィード軍人ではあるが、その気質が裏目に出て彼らは縄張り意識が異常に強いのも特徴であった。つまりもてあましているとは言え「そいつが欲しいからくれ」と言われて簡単に手放す事は考えられなかった。

まず彼らは誇りを傷つけられる事を嫌う。アトラックの件がそのまま表沙汰になれば海軍の人間からは「陸軍は手に負えないので降参した」と思われる可能性がある。彼らはそれを何よりも嫌がるであろうことは容易に想像できた。

さらに縄張り意識の強さという側面からは「陸軍の問題児に対して海軍が口を挟む事は越権行為である」と思われる事がこれも火を見るよりも明らかである。

そもそもトルマ自身が逆の立場、つまり海軍ではなく陸軍の元帥であり海軍の元帥からそういう申し出があったとしたらとりつく島もなく言下に拒否するに違いないと思っていたからである。

大元帥であるガルフの命令として事を行えれば話は早いのであろうが、それでは元帥の立場がない。尉官と佐官の人事に関しては少将以上の将軍・提督の管轄であったが、移籍に関しては元帥権限となっている。かと言ってそれを大元帥の鶴の一言で頭から決めてしまうと元帥の矜持を尊重しない事になる。

ましてや戦時下でも何でもない平時の、たかだか尉官の移籍に大元帥がしゃしゃり出るなどまずあり得ない事であった。

だからこそガルフは元帥の中でももっとも高齢で、かつ歩く軍事総覧とも言われる程「堅い」事で一目置かれているトルマにその件を任せたのであろう。

問題をさらに複雑にしているのがその問題児を寄越せと言っている部隊が、そもそも軍の厄介者的な存在であった事である。

組織図を見れば一目瞭然であるが、本来大元帥から一人の軍人の移籍について元帥に話が降りてくる事はあり得ない。まずは下から元帥に上がってくるはずである。それが組織というものだ。

だが森羅万象あらゆるものに例外が存在するように、シルフィード王国軍にも例外はあった。

国王直轄特殊部隊「ル＝キリア」

名目上は国王直轄。実質的には大元帥直下の部隊である。

それは元帥から連なる一連の組織のどこにも存在しない文字通り特殊な部隊であった。

階級も王国軍の同じ階級より二階級上とされていた。つまりたとえ少佐同士であったとしても、王国軍の少佐からするとル＝キリアの少佐は大佐と見なさねばならないのである。

実質的に大元帥直轄となっている部隊にはもう一つ「親衛隊」という部隊が存在しているが、こちらは運用については大元帥の指揮下にあるが、部隊としては組織図にその名前がきちんと組み込まれており、階級ももちろん軍と同価である。ル＝キリアとは全く違う。

さらにル＝キリアは王国軍だけでなく近衛軍からも忌み嫌われている存在であった。

もちろん彼らが目的の為には手段を選ばない闘いをする集団であったからである。たとえ戦争と言えども正々堂々を旨とし、矜持にもとる闘いは行わないのが古代よりつづくシルフィードの軍人のありようと言えた。彼らはそれを誇りとしていたのである。その誇りを持たない闘いをよしとし、時には人道に外れる行為すら厭わないと言われているル＝キリアに良い感情を持てと言う方が無理であろ

う。

便宜上海軍に所属している事になっているだけで、海軍の組織図にはない部隊である。海軍元帥ではあってもトルマ自身、ル＝キリアによい印象などを持った事はなかった。

だが大元帥が頭を下げるという異例の申し出を、トルマが断れるはずがなかった。ただの命令であれば固持したに違いない。しかし国家の最高為政者の一人に頭を下げられたとあっては断る選択肢はない。

トルマは思案したあげく、同じ手法で陸軍の元帥に素直に頼み込む事にした。

すなわち深々と頭を下げて「願った」のである。

元帥同士の間ではトルマはいわば一頭地を抜いた存在であった。軍の組織図に中元帥という階級があったとしたら彼は元帥の一つ上のその地位に存在していたであろう事は間違い無い。少なくとも他の元帥から一目置かれる重鎮であった事は確かである。

そのいわば「目上の人間」から最初に深々と頭を下げられ、非礼を詫びられ懇願されてはこれまた断る理由を探す事は困難であった。

そもそもが人材とはいえ、もてあましている人間である。有効活用する事ができるのであれば、それは王国軍という大きな器にとっては好ましい事である。

それが見えていて知らぬ振りを通すだけの愚かさはさすがにシルフィードの元帥を名乗る人間にはあってはならない。意地を張る理由もないのであれば素直に事を進めた方が得策なのである。

もちろんトルマとしては暗に一つ借りを作っておくと言う意味も込めた辞儀である。

つまりアトラックの移籍はものの数十秒で決まってしまった。

アトラックを欲したのは言うまでもなくル＝キリアの司令である

アプリリアージェ・ユグセル中将。その彼女からの強い要請が大元帥と海軍元帥の頭を下げさせたのである。

ユグセル中将、すなわちアプリリアージェの部隊はアトラックのようなその手の「問題児」で溢れていた。

ちなみに一つ例を挙げておくと、戦闘力には一目も二目も置かれながら戦果の多寡よりも頑なに戦闘による味方兵士の被害を最小にする作戦ばかりを立てる「腰抜け副官」として冷や飯を食わされていたファルケンハイン・レインもその一人である。

「言っておきますが今になって遺言が私のもとに届いたという話ではありません」

シュクルがそう言うとトルマは苛立ちを隠さずに早く話の核心に入れと催促をした。こういう事になるとシュクルが普段以上にもったいぶった態度を示す事に辟易していた事もあるが、それよりも彼にはある予感があった。いや、自分が感じている事に対する裏付けを期待していたのかも知れない。だから一刻も早くそれを知りたかったのだ。

「彼は生きています。いえ、ル＝キリア自体が壊滅したのは本当の事のようですが、彼が所属していた小隊に限っては全員健在だそうです」

「本当か？」

「おっと、それを私に尋ねられても返答に困ります、閣下」

イタズラっぽくそう笑うとシュクルは怒鳴られる前に話を続けた。

「少なくともアトル……アトラック・スリーズという署名があるその怪文書にはそう書かれていました。さらに彼らを全滅から救ったのがヴェリタス、つまりマーリン正教会の賢者だそうです」

シュクルはそこまでしゃべるとトルマの様子を伺った。しかし彼が驚いた顔をしただけで何も言わない事を確認すると、小さくうなずいて続けた。

「彼が出会ったヴェリタスの賢者は一人ではないそうです。複数の

賢者と遭遇しているということですね。さらに彼らは驚くべき人物とも遭遇しているようです」

シュクルはそういうと今度はニームの方に顔を向けた。

少しだけ眉根に皺を寄せたニームに、しかしシュクルは首を横に振った。

「残念ながら《深紅の綺羅》ではありません。しかし彼は別の三聖と出会ったと書いてありました。名は《蒼穹の台(そうきゅうのうてな)》」

「《蒼穹の台》だと？」

「三聖と出会ったと申すか？」

ニームとトルマは同時にシュクルに質問を投げかけたが、シュクルは掌を見せて続きを話させろと合図した。

「敵として相対したわけではないようですが、三眼で見つめられるだけで身も凍るような気持ちになったと書いてありました。それは我々が今感じた気分に似ているのではないでしょうか」

そう言ってニームとエスカをちらりと見た後で、シュクルはようやく核心に触れた。

「アトルが寄越した手紙の内容については実のところ半信半疑、いや七三で疑っていましたが、ここで賢者の存在を目の当たりにして、ほとんど全部信じる気になりました。だからこそ今ここで閣下に我が従兄弟からの警告をお伝えしておこうと思います」

シュクルはそう言うといったん言葉を句切ってその部屋にいる全員の顔を改めて順番に見渡した後で、声の調子を一段落として衝撃的な一言を告げた。

「これはアトラックの推理ではなくル＝キリア司令の推理だそうです。こう書かれていています『お前がもっとも信頼するただ一人の人間に、ル＝キリア司令の推理として伝えて欲しい。《ザルカバード文書の差出人はバード長である》と。それが何を意味するのかはお前の信頼する人物であれば理解出来るだろう』」

シュクルの目の前に立つ海軍元帥の顔面は、すでに蒼白だった。

シュクルはその状態にある上官に向かって自らの質問を投げかけ

た。
「教えて下さい。『ザルカバード文書』とは一体何です？」
トルマはしかしシュクルの問いにはすぐには答えなかった。
「その手紙はどうした？」
シュクルは肩をすくめた。
「いらぬ嫌疑をかけられるのは私の好みではありませんからね。もちろん読んだ後は灰にしましたよ」
「そうか」
トルマは隠しからハンカチを取り出すと、額に浮かんだ冷や汗を拭った。今日は冷や汗を拭ってばかりだな、とつまらぬ事を考えながら。
「今、ザルカバード文書と聞こえましたが？」
沈黙を守っていたエスカがシュクルにそう声をかけた。
「ええ。ペトルウシュカ少将はご存じなのですか？」
エスカは頷いた。
事の詳細はアキラ・アモウル・エウテルペから聞かされていた。そちらの方が怪文書と呼ぶにふさわしいものだった。そこにはいくつかの場所が記されており、そのうちのどこかに大賢者《真赭の頤》が居て、彼のもとにたどり着いた者だけにエレメンタルの居場所を教えるという内容が書かれているという。
ドライアド上層部、つまり五大老は元帥庁と計って念のために特殊部隊の「スプリガン」をファランドール中に点在するその「ザルカバードの庵」に派遣する事にしていた。もちろん調査結果は予想通りどこにも大賢者など存在しないというものであった。
シルフィードではごく一部の人間にしか漏洩されていない情報のようだったが、機密扱いとは言えドライアドでは佐官級の将校であればほぼ知らされている話であった。
「なるほど」
シュクルはエスカの話を一通り聞くと静かに頷いた。エスカには意味がわからなかったが、シルフィードの内部が一枚岩ではないと

いう事を示す興味深い話であることだけはわかった。

「実のところ私はこのところ自分の中に浮かんでくる一つの考えに自己嫌悪を感じていた」

トルマはそう言うとエスカに向かって一歩近づいた。

「ペトルウシュカ少将。いや、ペトルウシュカ男爵。貴殿に一つ聞いておきたい事がある」

何でしょう？　とエスカは目で尋ねた。改まったトルマの態度に一方ならぬものを感じていた。

「ファランドールは早晩大きな戦争を経験する事になるだろう」

エスカはトルマのその言葉に静かにうなずいた。

「貴殿は大軍を統べる立場のドライアド軍人として、どう戦うつもりか？」

トルマの問いかけは要点を得ない漠としたものであった。少将という肩書きを持っているとは言え、ドライアドに於いて軍人は所詮五大老の駒に過ぎない。そしてトルマ・カイエン元帥ともあろう人物であればドライアドの政治形態くらいはよく知っているはずであった。

その上で敢えて「ただの将軍」であるエスカにそう尋ねるのには彼なりの意味があった。つまりそれはトルマにとってはそれほど重い問いかけであると言う事なのだ。

「シルフィードを打ち破り、サラマンダを属国とした後、広い領地を我がものにせんとお考えか？」

トルマは敢えて即物的な問いかけをした。

「そして機を見てシルフィードをも呑み込み、ファランドールをドライアドだけのものとされたいか？」

エスカはその整った顔に微笑を浮かべると小さく首を横に振って見せた。

「ドライアドとしてはまさにそう考えているでしょう」

「ほう。貴殿は違うと？」

エスカはその問いかけには応えず、トルマから視線を外すと側に立つニームの顔を見つめて、その焦げ茶色の髪をそっとつまんだ。
「五大老としてはそうでしょう。しかしながら私はそんなつまらない世界に興味はない。それよりもこの閉塞したファランドールに、全く新しい地図を描きたいのです、閣下」
エスカがつぶやいたその言葉にトルマだけでなくシュクルも反応した。
二人に同じ種類の緊張が走ったのがリンゼルリッヒとジナイーダにも伝わった。
彼らと同様に末席賢者達もエスカのつぶやいた言葉が含んでいる物騒な意味を理解していた。

「エスカ……」
ニームが何かを言おうとしたが、それをエスカは遮った。
「トルマ・カイエン伯爵が今から相当恐ろしい話を明かしてくれるって言うんだぞ？　俺がここで腹を割らないでどうするんだ？」
そう。
まさにエスカは今、自らは第三勢力であるという宣言を行ったのだ。
その部屋にいる人間にとってエスカの言葉がどういう風に捕らえられたかはわからない。しかし客観的に判断するならば、エスカのその言葉は計り知れない重みと底知れない闇を意味するものであった。

# 第七十八話　新しい地図

「しかし参ったな」
ニームの言葉を遮ったエスカは苦笑しながら頭を掻いた。
「お前に会ってからこっち、俺は一体何回人生最大の決断を強いられてるんだか知ってるか？」

それは近い将来間違い無く敵となるはずの人間を前にしてとんでもない事を口にした将軍の言葉とは思えない程穏やかで、そして優しげな声色だった。もちろんトルマではなくニームに投げかけられたものだ。それは自らが口にした人生最大の決断と言う言葉に対する照れ隠し、もしくは日常茶飯事の冗談と同格に堕す事によって誤魔化すためのものともとれた。
しかし言葉そのものは冗談ではないことをニームは当然ながらわかっていた。
だがその事についてニームは何も問いかけはしなかった。代わりに少し顔を赤らめて口ごもりながらつぶやいただけであった。
「あなたは意識していないかもしれないが、私もあなたと出会ってから人生最大の決断を何度か経験した。それもああいうことは相当の決断が必要なのだぞ」
ニームが何の事を言っているのかはエスカはもちろん、リンゼルリッヒとジナイーダにもわかった。だが、エスカとニームの出会いからこっちの出来事を知るよしもないシルフィードの二人にはもちろんわかりようがない。もっともトルマは、ニームの顔がどんどん赤くなっていくのを見て『新婚』という言葉と二人と初めて出会った時の状況をもとに、ニームの微笑ましい羞恥の向こう側を想像することができていた。
どちらにしろトルマとシュクルは、エスカの言葉が嘘ではないと

確信できた。そんな二人のやりとりであったのだ。

「男爵、いやペトルウシュカ将軍は勝算があると申されるか？」

先ほどと違い、トルマの声色にはもう気色ばんだものは含まれていない。むしろ穏やかであった。

エスカはそんなトルマの問いかけに対し首を横に振った。

「ならばなぜそんな無謀な……」

エスカの態度にシュクルの方が固い声を出した。だがエスカは強い調子のその問いかけに対して穏やかな声で応じた。

「シルフィード軍は勝てるとわかっている闘いしかしないのですか？」

「そ、それは」

エスカの迷いのない言葉。それは問いかけに対して問いかけで答えたものであったが、シュクルは虚を突かれて言葉を失い、トルマは反対に相好を崩した。

「わっはっは。シュクルよ。見事に一本取られたな。どうやら役者は将軍の方が一枚どころか数枚上のようだ」

腹の底から出るようなトルマの笑い声に、シュクルはのど元でつかえていた言葉を外に出す事なく飲み込んだ。

トルマがここまで屈託無く笑うのを見るのは実に久しぶりだったのである。いや、シュクルは実はもうトルマがこんな豪放な笑い声を上げる人物であった事などすっかり忘れていた自分に気づいて愕然としたと言った方が正しいだろう。彼は楽しそうに笑う上官を見る自分の中に、穏やかな気持ちになる感情が生まれてくるのを噛みしめていた。

トルマは今、手放しで楽しいのであろう。それはもう間違いない。そしてトルマに単純な感情をもたらした人物を、彼自身も認めざるを得なかった。

一方、双方の状況を見て、どちらにせよ険悪で取り返しの付かな

い事にはならないようだと感じたリンゼルリッヒは胸をなで下ろしていた。

とんでもない、いやあまりに不用意な事をさらりと言ってのけるエスカに対してはもはや驚きを通り越して呆れるしかないと思っていた。

本気なのか嘘なのかわからない。

いや、おそらく本気なのだろう。だがその大それた目的を大それた目的だとは思っていないようなエスカのあまりにも平然とした態度に対し、賢者であるリンゼルリッヒは普通の人間に対して初めて心からの敬意が湧き上がるのを感じていた。

歴史上いわゆる傑物とされる人物とは、まさにエスカ・ペトルウシュカのような人間なのだろうと腑に落ちたのだ。そしてそのエスカを全身全霊で認めるかのようにいかにも楽しげに笑うトルマ・カイエンという人物もまた同類なのであろうと。

そういう人物を実際に目の当たりにした時、そこには好きだとか嫌いだとか、幾重にも理性の扉をくぐり抜けてようやくたどり着くような手垢の付いた感情よりも先に「目が離せない」という裸の衝動が先に立つ事をリンゼルリッヒは初めて知った。

「シルフィードは……いや、私も腹を割らないとならんのだったな」

ひとしきり笑ったトルマは、嬉しそうな顔でエスカに声をかけた。

「さしあたって私は新しい地図というものにはさほど興味はないが、貴殿の描く地図とはまさかデュナンの持つ欲に彩られどぎつい色をし、我々からすると目を覆いたくなるようなそれではないでしょうな？」

エスカは静かに首を横に振った。そしてニームの小さな手を取ると残った左目で強くトルマを見つめて口を開いた。

「おそらく欲にまみれた地図にはなるでしょう」

「ほう」

エスカのその言葉はしかしトルマを挑発するようなものではなか

った。トルマ・カイエンという人物をよく知るシュクルは、自分の上官が腹の底から相手を認めた以上、例えシルフィードそのものを侮辱するような言葉をエスカが口にしようと、もはや全く動揺しないであろうと確信していた。

エスカはまるで壊れ物でも扱うように慎重に、そして手にしたものを二度と離さぬと言わんばかりに力強く、小さなニームの手を包み込んで、ゆっくりと口を開いた。

「私はコイツと面白おかしく暮らせる国を、誰でもないこの手で作ろうと考えています。まあ、正直申し上げてこいつと出会う前までは、お堅いお歴々が満足するようなもっともらしい理想論を、極彩色の修辞で彩っていたものです。ですが今では私の究極の目的はそれだけです」

エスカの言葉にニームの目が見開かれ、そしてその顔はすぐに崩れた。だが、かろうじて泣くのは堪えたようだった。

「ふうむ」

トルマは腕を組むとまじまじとエスカを見つめた。

「私もいろいろな人間を知っておりますが、あなた程の女たらしは見た事も聞いた事もありませんな」

ため息混じりのその言葉には、エスカをからかうような響きはなかった。

(同感だ)

トルマの言葉に、リンゼルリッヒは頷きながらそう囁いた。もちろんジナイーダに宛てたものだ。

(私もあんな言葉を言われてみたいものね)

(無理言うな。あんな台詞はそれなりの人間が言うからこそとんでもない力を持つのさ)

(それもそうね)

ジナイーダはそう頷くと、必死に泣くのを堪えているニームをいとおしそうに見つめた。

（それにしてもバカねえ）
（え？）
（ニーム様よ。ここは思いっきり泣いてもいいところなのに）
（ああ……そうかもな）
（でもダメだわ。今ニーム様が泣いたら私もきっともらい泣きしちゃいそう）
（おいおい）

「人聞きの悪い事をおっしゃいますな」
トルマの言葉にエスカは肩をすくめてみせた。それが照れ隠しである事はその場の誰にもわかっていた。
「そうですな。私がドライアドの軍人であったなら」
トルマはゆっくりと微笑を真顔に変えながら言葉を選ぶようにゆっくりとした口調で続けた。
「貴殿の今の言葉を耳にしたならば、すべてをなげうち、間違い無くペトルウシュカ将軍の下に馳せ参じるでしょうな」
トルマの言葉を受け、エスカは目を伏せて会釈をした。
「実はここだけの話、私は船が大の苦手でして」
「ほう。提督でなく将軍なのはそういう理由でしたか？」
エスカは苦笑しながらうなずくと、話を続けた。
「そういうわけなので、海をお任せできる人間が居ると大いに助かります」
「聞いたか、シュクル？」
軽い冗談ともとれるエスカの言葉を受けて、トルマは己の参謀を振り返った。
「海軍はこの老いぼれに一任してくださるそうだ」
トルマの声は上機嫌であった。シュクルは微笑すると軽口で応えた。
「祝着至極に存じます。ついては、地図だけでなく新しい海図も描かねばなりませんな」

トルマはシュクルの台詞に満足したように、再び破顔大爆笑の状態に陥った。

シュクルは実のところ陣営や主義などといったものに対してあまり興味を持てない人間であった。正義や大義名分と言ったものよりも自分が気に入った特定の人物に対して忠誠を誓う型の人間である。シルフィードでは珍しいと思われそうだが、実のところこれは典型的なアルヴの気質なのである。

シルフィードではその体系が結果として国王、ひいては国に連なるものになっているだけなのである。外側から見ると国の正義を第一義としているようで実のところ自分の上官や主人と言った人間に対して自らを捧げる事が出来る性格の人種により成り立つ国なのである。

アルヴにはあまり二心を持つ人間が居ないところから、綺麗な組織体系がそのまま有機的に繋がり、国を守るという目的の為に強く機能しているのだと言えた。

もちろんそれは長い歴史の中で組織に対する忠誠に変化して、シルフィード王国を形作っている事は間違いのないところであろう。

言い換えるならばシュクルはアルヴという人種の原種の気質を強く持って生まれてきた人間なのである。彼にとってその対象は言うまでもなくトルマ・カイエンであり、そういう彼の気質をよく理解しているのもまたトルマであると言えた。

トルマは改めて自分に対するシュクルの忠誠を確認し、さらに自分が今から話す事がシルフィードに於いて二人だけで共有すべき秘密である事を匂わせたのであろう。

「実は私はシルフィードではいらぬ人間でしてな」

大笑いを収め完全な真顔になったトルマは、今から話す事が冗談ではないのだと表情で告げつつ、言葉を続けた。

「怪文書に書かれている事はおそらく本当でしょう。つまりユグセ

ル中将の推理と私の漠然とした疑問は同じものだったと言う事です。いや、今でも信じたくはないのですが……」

そこでトルマはいったん言葉を切り、部屋の中を一通り見渡した後でニームに声をかけた。

「失礼ですが、大賢者様は結界を張る事はできますかな？」

「結界？」

トルマはうなずいた。

「この部屋は一応我が国のバードに命じて声が外に漏れない精霊陣を張らせておりますが、そもそもバードは近衛軍の配下でしてな」

ニームは頷いた。

「わかりました。より強い結界を張っておきたいと言う事ですね？」

ニームの問いにトルマは頷いた。

「お願いできますか？」

「私はコンサーラ。そういった結界ならおやすいご用」

結界を構築する作業はニームの得意技と言えた。そもそも結界というよりは精霊陣について極めて造詣が深いルーナーである事をエスカは既に理解していた。

リンゼルリッヒやジナイーダの言葉を借りるなら

「様々な賢者を知っておりますが、ニーム様ほどの結界使いは少なくとも我々は知りません」

と言うほどである。

そもそもニームが描く精霊陣の意味は、リンゼルリッヒやジナイーダをしても一切理解出来ないのだという。

「ニーム様の精霊陣はどれ一つとっても、いわゆる定石に沿って描かれるものや精霊陣の決まり事からなるそれとは似て非なるものです。少なくとも私達にはそうとしか思えません。たとえそれが極めて簡単な、たとえば皿の裏に描いて睡眠を誘う単純なルーンであってもです」

賢者であるリンゼルリッヒがそう言うのであるから、普通の人間

であるエスカはニームが描く精霊陣が相当特殊でそして高度であるらしいことだけは認識していた。

さらにその精霊陣が発動した際にいつも見せるリンゼルリッヒとジナイーダの驚きの表情から、ニームのそれは、自分の考えている以上のものである事は想像に難くなかった。

トルマの依頼にニームはうなずくと、すぐに懐からインク壺とペンを取り出し、部屋の壁を汚す許しを得た。トルマが快諾すると、ニームはあっという間に四方の壁に美しい円を基本とした精霊陣を描ききった。例によってそれはエスカの見立てではどう見ても円は真円であり定規を使ったわけではないのに直線の湾曲や歪曲は皆無。文字や記号は完璧な縦横比で構成され、手習いの教本でさえこれ以上の美しさを持つものはあるまいと思われた。

エスカにしてみれば何度見てもほれぼれとするほど造形的に美しい精霊陣が、あっと言う間に完成した。

翻って、二回目とは言えニームが精霊陣を描く様を今日初めて目にするトルマは、精霊陣というものに対する自分の価値観がひっくり返るのを感じていた。

「賢者とは、かような精霊陣が描けるものなのですな」

思わず口をついて出た言葉にジナイーダは嬉しそうに微笑むと首を横に振って答えた。

「いいえ、閣下。ほとんどの賢者は閣下がご存じのような精霊陣しか描けません。この部屋でテーブルに先ほど、そして壁に今描かれた精霊陣は、極めて特別なルーナーの手になるものだとお考えいただいた方がいいでしょう」

「例外的なもの、という訳か」

嘆息混じりにそう言ったのはシュクルだ。

「見た目もそうだが、これほど速く描ける事が驚異ですな」

シュクルの言葉にトルマもうなずいた。

直径三十センチほどの精霊陣を四つ。見事に書き終えるのにニー

ムが費やした時間はせいぜい五分であった。トルマの驚きを計る基準として、トルマがバード庁に依頼して精霊陣の再敷設を行う場合にようする時間を紹介しておこう。

数人がかりでまる一日。

それがバード庁に対してトルマが部屋を明け渡さねばならない時間であった。

ニームは精霊陣を描き終えるとエスカの側に戻り、儀仗セ＝レステを取り出して真横に突き出した。空いた左手には普段は髪と一緒に編み込んでいる結い布（ゆいふ）がいつのまにか巻き付けられていた。

間を置かず、聞き取れないほどの小さな声でルーンが唱えられた。すると壁の精霊陣が一斉に光り、そしてすぐに跡形もなく消えた。

「これで一ヶ月ほどはこの部屋の音は一切外に漏れません」

トルマとシュクルが互いに顔を見合わせるのを目の端にとらえると、ニームは儀仗セ＝レステの頭頂部を扉に向けた。

「お疑いとあればシュクル殿に扉の外に出てもらった後で、私がここで雷（いかづち）を落として見せますが？」

「いや……」

トルマは片手を挙げてセ＝レステを下ろすように頼んだ。

「大賢者殿のルーンを疑っていたのではなく、せっかく描いていただいた美しい造形が消えてしまったのが惜しいと思っておっただけです」

シュクルも「まったくだ」という風に大きくうなずいた。

ニームは不思議そうな顔で精霊陣が消えた壁に目をやった。

「精霊陣は消耗品。消してしまうのが一番です。長く残しておくと、ろくな事はありません」

ニームの言う事ももっともだったが、彼女の描いた精霊陣は下手な絵画よりよほど美しく、そして長い鑑賞に堪えるものに思えていただけにあっという間に消失した事にトルマは寂しさを覚えていた。

「閣下はご自身の為に調理された食事を、見事な作りだからと言っ

て飾っておく事を好まれますか？」

ニームの言うとおり、精霊陣は手段であって目的ではない。ましてや鑑賞するものであるわけがなかった。つまりはそれだけニームの精霊陣が見事であったというわけだが、記録によるとトルマ・カイエンは後々もその日に目にした四つの見事な精霊陣について、ことあるごとに人に話して聞かせたという。

「私は、近衛軍大元帥に疑いを持っております」

結界が張られた後に語り出したトルマの第一声がそれだった。さしもの大賢者やエスカもその言葉には目を見開いた。

何かを尋ねようとするエスカを目で制すると、トルマは続けた。

「証拠などはありませぬ。したがってどうひいき目に見たとしても冷や飯を食わされている年寄りが誹謗中傷を口にしているだけ。いわば酔漢の醜い愚痴と言われても仕方のない事でしょうな」

シルフィード王国近衛軍大元帥。それは国王を除くと王国軍大元帥と列ぶシルフィード政権の最高権力者の一人である。

忠臣が実のところ逆臣であったという話は歴史を紐解けば枚挙にいとまがない。言ってみれば極めて陳腐であり、また政権闘争という名の舞台にあっては合理的とも言える立場での普通の出来事とも言えた。しかしそれは他国での話である。

シルフィードでは……少なくともカラティア朝シルフィード王国ではその手の話は皆無であった。単一王朝で四千年とも五千年とも言われる長きにわたって一つの大陸を治めている国家体制が、逆臣の存在で揺らいだという話は存在しないのだから。

他国では当たり前の事がこの国では異常事態になる。

だが、その異常事態が起きる背景はあったのかも知れない。

エスカはトルマが最初に告げた言葉に心底驚いた。驚いたから彼らしく思い切り驚いた表情になった。しかしそのエスカの表情はすぐに落ち着いたものに変わった。本人が意識しない限り感情が素直

に表情にでるエスカのその変化を、彼の何倍もの年月を生きている老アルヴは既に見切っていた。それだけに驚きがさほど持続しなかったエスカの感情に少し違和感を覚えた。

本来であればトルマが口にした「大それた推理」に対し、エスカは驚きを持続しなければならなかったのだ。

つまり簡単に言ってしまえば、エスカはトルマの説に対しもっともだと納得したという事になる。それも彼が大した説明をしないうちに。

トルマは先人が残した格言を思い出していた。

「近すぎて見えぬ事も離れて見ればよく見える」

この言葉には様々な切り口から複数の解釈が存在するが、今回の場合は文字通りトルマ自身が導き出した「とんでもない」推理を他国の人間は「それも充分あり得る」と感じていると言う事なのだ。

生涯の忠誠を誓った我がシルフィード王国とは外から見るとそれほど脆弱な存在なのであろうか？

トルマは無意識のうちにそう自問していた。

もちろん答えなどはない。ただ、今まで持っていた自信という堤に針の穴が空いたかもしれないという薄ら寒い感情が残っただけである。

「証拠はありません。とはいえ私は出来事の舞台の中心に近いところに居たわけです。しかしながらその私とは比べものにならないほど遠く離れ、手にしたその少ない情報から全く同じ結論を導き出した人間が居る事で、私は自分の考え以外の答えが見えなくなっております」

エスカはトルマが言葉を切るのを待っていたかのように口を開いた。

「失礼を承知で申し上げます」

シュクルがそのエスカの言葉に敏感に反応して眉をひそめたが、トルマはうなずいた。

「伺おう」
彼はエスカの驚きがすぐに収拾した事に興味を持っていたのだ。むしろ彼の方からエスカに意見を尋ねようとしていたところだった。
「では、お言葉に甘えて」
エスカはそう言うといったん言葉を切って、ゆっくりとベッドから上体を起こした。ニームはそれをとめようとはせず、無言で補助をしてやった。
上体を起こし、乱れた長い金髪を手櫛でざっと整え直すと、エスカはトルマに向かってにっこり笑って見せた。
「いやあ、実に陳腐な話ですな」
「な……」
シュクルが思わず口を開きかけたが、エスカは手を挙げてそれを制した。その時は真顔になっていた。
「問題は誰がやったかではない。何しろ泣こうがわめこうがアプサラス三世はもうこの世にいない。そうではありませんか？」
「何を言いたいのですかな？」
そのトルマの言い回しに微妙な不快感が含まれているのを感じつつも、エスカは微笑を浮かべていた。
「要するに、閣下は大元帥につくのかつかないのか。生きている人間は死んだ人間と違い、考える事ができる。考えるのは行動するためです。閣下の行動や如何に？　私としては、出来ればそれを伺いたい」

リンゼルリッヒのハラハラが再び始まっていた。
何を言い出すのだ、この男は……。
エスカ・ペトルウシュカとは渡世に長けた人物ではなかったのか？
自分たちの調査は間違っていたのだろうか？
相手を不快にさせず、かつ自らに好印象を与える洒脱な会話と気の利いた話題提供、一歩身を退く腰の低さに併せて相手の矜持を決して逆なでする事のない細心の注意力による耳障りのよい話しぶり

……。

彼らの調査では、エスカ・ペトルウシュカとは基本的にはそう言う男であるはずだった。

だからこそエラン五世、いや五大老は大葬の特使として彼を抜擢したはずなのだから。

いや。

下心だけはあまり隠そうとはしないところは確かに多々あった。しかしそれも時と場合、つまり適時を熟考した上での計算と決断によるもので、相手にその下心に乗ってやろうと思わせるような場合に限られていたはずである。

しかし、この場面は一体何なのだ？

少なくともここまであからさまに挑戦的な態度を、それもいわば敵陣と言っていい場所でとる必要性をリンゼルリッヒは考えつかなかった。エスカにとって益になる態度とは到底思われなかったのだ。

「私が今ここで申し上げたい事は二つです、閣下。どちらも『鍵』です」

エスカの話は続いていた。

「一つはおそらく閣下もまだ計りかねているのでしょうが、イエナ三世陛下のお立場がどうなのか。平たく言えばすでにミドオーバ近衛軍大元帥の傀儡なのか否か」

「うむう……」

「二つ目はもう一人の大元帥の存在でしょう？」

エスカはそう言いながらシュクルの方に顔を向けた。

「シュクル殿もその『怪文書』とやらを受け取った時にまずそう思いを巡らしたはずだ。そして次にこう思った『これが本当ならば閣下はどうされるのだろうか』と」

「む……」

「それは私も知りたい。カイエン元帥閣下がどの道を選ぶのかをね。でも言っておくが、閣下がどう動かれようと私がやろうとする事に

変更はない。多少なりとも影響はあるだろうけれど、ね」

意地の悪い言い方だと、シュクルは思った。

エスカの言葉は、自分は何があっても信念を貫くつもりだが、そっちはどうなんだ？　と言っているようなものだからである。いや、お前の信念はどこにあるのだ？　と突きつけられているのだ。

他国の重鎮に対していち軍人が信念を問うのであるから失礼千万な物言いと言ってもいいだろう。しかしシュクルとてまさに同じ事をトルマに問おうとしていた事に思い当たり、彼は愕然として自らの信念の対象である老元帥を見つめた。

何の事はない。エスカはシュクルの代弁をしただけなのだ。

とはいえこの場、つまり敵になる人物の前で一国の重鎮が軽々しく答えていい内容とは思えなかった。もちろんシュクルは既にトルマの発言を止めるつもりはないにしろ……。

（敵だと？）

シュクルは自らの心の言葉に疑問を投じた。

（この男は本当に敵なのか？）

敵という言葉がひっかかったのだ。

では味方とは誰なのか？

シルフィード王国？

もちろんそれは正しい。しかしシュクルにとってそれは漠然としすぎていて到底「味方」として想定できる存在ではなかった。つまり彼にとっての味方とは、トルマが貫く信念の向こう側にある存在なのだ。

トルマがサミュエル・ミドオーバにつくとは考えにくい。しかし一方でたとえ傀儡だとしてもアプサラス三世の嫡子であり、現国王のイエナ三世に剣を向ける事はどう考えてもあり得なさそうであった。

ではシルフィード王国という大きな「もの」にただ飲み込まれて

いくのだろうか？

「質問に質問で返すのは失礼だと重々承知をしておりますが」

トルマは少し間を置いてそう口を開いた。

「貴殿の描く地図にイエナ三世陛下は存在しますかな？」

エスカは大方の予想を裏切り、即答した。

「もちろん存在しません。閣下」

その言葉を聞いたリンゼルリッヒは思わず目を閉じた。

決して自分が小心者だとは思わなかった。エスカは頭がおかしくなったのだと確信したのだ。

だがリンゼルリッヒの予想に反してシルフィード王国軍の元帥は冷静だった。

「では質問を変えましょう。貴殿の描く地図を統べる者は貴殿ただお一人か？」

エスカはこれにも同じく間を置かずに答えた。

「私は自分の器にそれほどのうぬぼれを持ってはおりません。むしろ我が器の小ささを日々悩んでいるほどです」

「ほう？」

「新しい地図を今ここで語るにはいささか時期が悪いと言うもの。しかし一つだけ。閣下がこの『合わせ月』の年にどのような道を往かれるにせよ、私からこれだけはお伝えしておきたい」

「是非に伺いたい」

冷静なまま、トルマはそう尋ねた。静かで低い声だった。

エスカは嬉しそうな表情で頷くと、その微笑をさらに深くして、こう言った。

「新しい地図はそれを描く者の為にあらず」

「その心はいかに？」

「我々は様々な事を清算する時なのですよ、閣下。こう見えて私も若輩なりに色々と勉強をいたしました。結果、私が清算者を見つけ出し、その臣となるよりも自らの旗を掲げるべきだと判断したに過

ぎません。そして既に多くの犠牲の上に私はこうして生かされているのです」

「清算するにふさわしい人間がいれば、貴殿はその人物に従う用意があると？」

「ふさわしい人間はいくらでもいるでしょう、閣下。問題はその人物が自ら新しい旗を掲げる決意と覚悟を持っているかなのです。何しろファランドールの地図を一から描くのですから、たかだか一国を精算する程度の覚悟では務まりません」

「そこまでの人物はいないと言う事ですな？」

「残念ながら」

そのやりとりでトルマ・カイエンがエスカ・ペトルウシュカの思いを正確に受け止めたのかどうかは定かではない。

トルマはそれ以上何も聞かなかったしエスカもそれ以上話す事はしなかった。それはその場に居た者は、皆それぞれ違った事を考えている可能性を孕んでいた。しかしそれでもエスカは具体的な事は何も告げず、ただ自らの内にある野望が小さなものではない事のみを示して見せたのだ。同時に、持っている覚悟の大きさも。

少なくとも彼が描くファランドール地図にカラティア朝シルフィード王国は存在しないのだろう。シルフィード王国は存在するかも知れない。しかしイエナ三世が王座にいないということは、そのシルフィードはカラティア朝ではない。そしてそれはもはやトルマが守るべき国なのかどうかも怪しかった。

いや、そもそもトルマはカラティア朝に忠誠を誓ったわけではなかった。彼は元帥として国王であるアプサラス三世にその人生を捧げる事を誇りとして生きてきたのだ。

優しげな微笑を浮かべるエスカを見つめていると、トルマは自分自身が穏やかな気持ちになって行く事を感じていた。エスカが美貌であるからという理由ではない。感情が素直に表情に出る人間は、

その感情を力として纏う事が出来る。おそらくエスカの穏やかな気持ちに呼応したエーテルを、トルマが纏ったのに違いない。

つまり、そういう事なのだとトルマは思った。

王は王として生まれるものだと今の今まで信じていた自分の価値観が覆るのをトルマは感じていた。

王という立場にはなくとも王である人物が存在する事を知ったからである。

影響力という言葉でそれを置き換えるのは簡単だが、それを似て非なるものなのだと言う事がわかる人間とわからない人間がいるのだろうと。

早晩敵になる存在であろうがなかろうが、彼はエスカ・ペトルウシュカという人物に出会えた事を自らの誇りに思っていた。

「シュクル」

「はい」

「お前はノッダに友はおるか？」

トルマは敢えて知り合いでも知人でもなく「友」という言葉を使った。シュクルはその意味を心の奥に落とし込みながらうなずいた。

「好きな人間ではありませんが、尊敬している人物が一人。向こうも私を好いてはおりませんが、信じてくれてはいます」

「『スズメバチ』の近くの者か？」

この問いにはシュクルはニヤリと笑って答えた。

「その気になれば王国軍大元帥の首を簡単にはねる事ができるくらいど真ん中の人間ですよ」

トルマが何を考えているのかまではさすがにまだシュクルには見当がつかなかったが、自らが忠義を誓った人物が一つの決断をした事が彼にはわかった。

「連絡はとれるか？」

「それが……」

ノッダとの連絡がうまくいかないという話はトルマも知っていた。事実彼自身が病気療養中と伝えられる大元帥宛てに送った見舞いの書簡の返事さえ滞りがちで、返ってきたものも極めて事務的な事柄だけが綴られたものだったのだ。シュクルも果たしてトルマと同様であることを確認できただけであった。

「つまり、ノッダに異常ありと言う事だけはわかっています」

「そうだな」

「閣下は例の噂についてはどう思っていらっしゃるのですか？」

シュクルの問いかけをしかしトルマは一蹴した。

「是非もない。私の考えはさっき言ったとおりだ。おそらく大元帥閣下も同じお考えなのだろう。今ではそれがわかる」

「だからキャンタビレイ大元帥はノッダから動かない、と？」

トルマはうなずいた。

「どちらにしろ私は無為に時を過ごしすぎたようだ。今からでは遅すぎるかもしれんが、それでも私にできる事はやっておこうと思う」

トルマはそれだけ言うとエスカに向き直り、深々と礼をした。

# 第七十九話　右目の代価

いつの間にかエスカの眠るベッドにもたれかかるようにしてうとうとしていたニームは、ある気配で覚醒した。

眠る前に張り巡らせていた感知用の精霊陣が反応したのだ。

だが、その気配そのものはニームにとっては既知のものであった。

それは敵ではないが、さりとて味方と言うには不確定要素が多すぎる相手の気配だった。

（セッカ・リ＝ルッカか）

ニームにしてみれば気配と声だけの存在である。

賢者《月白の森羅（げっぱくのしんら）》を自称するものの、大賢者の名を使ってもニームの命には従わぬばかりか、決してその姿を見せようともしない不敵な存在であった。

新米賢者の為の情報提供者を気取っていて、事実ニームは多くの情報、それも全て事実と言えるかなり際どい情報をセッカから得ていた。その中でも最も重要なものが《深紅の綺羅（しんこうのきら）》についての情報であった。

ニームがエスカに近づいたもともとの理由が《深紅の綺羅》の気配は、エッダの王宮の奥にある、ある場所で途絶えているというセッカの情報によるものなのだ。予定では戦争の終盤のどさくさで入り込む予定であった場所であり、今回の「大葬」による偶発的な訪問は想定外であった。従ってニームはまだセッカの言う「王宮の奥にある場所」にはたどり着いてはいなかったが、夕べの事件により、もはやその情報は間違いはないと確信していた。少なくともエッダの王宮にはニームが母と呼ぶ《深紅の綺羅》の痕跡があるのは間違いないだろうと思われた。

セッカは情報を提供するだけではなく、ニームの依頼をいくつかこなしてもいた。もっともニームの部下であるリンゼルリッヒやジ

ナイーダとは違い、セッカに対してなんでも自由に依頼を頼めるというわけではない。ほとんどの場合、依頼はセッカから申し出て、ニームがそれにうなずくという形で行われていた。要するにセッカは自分のやりたいことしかしないわけである。言い換えるならば自分に都合の良いこと、もしくは自分にとっても興味がある事柄についてはさらなる調査で情報を確かにする為に動くと言う事である。

セッカは自らを《月白の森羅（げっぱくのしんら）》という賢者であると名乗った。名に聞き覚えがなかったニームはそれとなく賢者会に確認をとったところ、確かに存在する名前ではあった。だがその名は大昔に途絶えた名であるという。少なくとも賢者会が現在把握している賢者の名簿にはその名がないという事なのだ。

しかしセッカが賢者であろう事をニームは大して疑ってはいなかった。ヴェリタス、つまりマーリン正教会には表と裏がある事をニームはすでに理解していた。賢者会そのものが裏なのだが、その賢者会にさらに表と裏があると言う意味である。

大賢者であってもなりたての自分にはまだ見つけられない「裏」が存在してもおかしくはない。むしろあってしかるべきだとニームは思っていた。

少なくともセッカがヴェリタスの内部に通じている人間であることは確かである。そしてそこまでできる存在は賢者以外であろうはずがないのである。

「賢者の徴」と数々の呪具が眠るヴェリタスの再奥にある庫（くら）と呼ばれる場所を視察した際に手に入れた「蛇の目」という名の呪具は、そもそもセッカの助言によるものだった。

セッカは呪具については特に詳しかった。

大賢者になりたてのニームにふさわしい呪具があると「蛇の目」を勧めたのが誰あろう《月白の森羅》を名乗る声だけの賢者だった。それがセッカとニームの最初の出会いで、特定の呪具の推薦はセッカが自分の言う事が真実であることを証明するために提供した情報

の一つであった。

半信半疑ながら、自分の能力をもってしても目の前に正体を引きずり出せない力を有する存在にニームは興味を持った。何の目的があって近づいてきたのかは未だにわからないが、自分に情報を提供すると言い出した人物の言葉に対する裏付けはとっておく必要があると感じたニームは、セッカの助言に従って「庫」へ赴いた。

果たしてセッカが言うとおり「庫」に指定した呪具は存在した。

一見ただの首回りの装飾品である「それ」は分厚くほこりを被り、長きにわたり人の手に触れていないことは一目でわかった。だがセッカの言に従い呪具の名を「蛇の目」と唱え、指先に針を刺して絞り出した血を一滴したたらせると、その首飾りを構成する複数の石のうちひときわ大きな三角柱の形をしたスフィアがまばゆい光を放った。ニームにはそれがまるで呪具が新しい主との出会いに喜びの挨拶をしているかのように思えた。

以来、ニームの首にはその首飾りがかけられている。

呪具には二つの効果があるとされている。

そして多くの呪具はその効果自体が不明である。いきおいそれは自分で見つけなければならないことになるが、セッカはそれについても一つの効果だけはニームに告げていた。

例の「雨に濡れない」という効果であった。

当初、ニームはヴェリタスの庭にある噴水の近くに立って効果を確かめたが失敗に終わった。セッカに言わせれば「蛇の目」は文字通り「雨」にしか効果がないからだという。

そして検証の結果、それは事実である事が判明した。たとえ同じように頭上から降り注ぐ水であっても噴水のそれには効果がないが、雨には全く濡れないのだ。周りに結界がはられたように、降り注ぐ雨を少し離れたところではじいてしまう。

便利だといえなくもない効果だが、ニームにはセッカがそれを自分に勧めた意図を計りかねていた。

「俺は小さな助言をするだけだ。それをどう理解し、利用もしくは行動するのかは自分で考えるんだな」

セッカはこともなげにそう言うと楽しそうに笑った。

その笑いにはいつも邪気は感じられなかった。ニームはそれもあってセッカの情報には注意を払うことに決めたのである。

セッカの一番の問題は、ニームからは連絡は取れない事であった。賢者会すら存在を掴んでいない賢者である。新参者のニームに連絡のすべがあるわけがなかった。ましてや姿形を知らないとなれば自分から声をかけるのは絶望的である。いきおい向こうからの訪問を待つことになる。

そしてそれはいつも唐突で、時間や場所を選ばない。ニームにとっては忌々しい限りであるが、それももう慣れてきていた。

それよりも今、ニームにはセッカに聞きたい事がいくつかあった。そのうちの一つは極めて重要な事だ。

ニームは眠っているエスカを起こさぬようにそっと立ち上がると、気配のした部屋の外へ向かうべく扉の方に裸足のまま忍び足で向かった。廊下に出てから、小さな結界を張るつもりだった。

さすがにエスカがいる部屋の中でセッカと話し込むことは躊躇われた。熱を冷ますために今はエスカにはできるだけぐっすりと眠って欲しい。起こすことがあってはならない。さらに、エスカに対してやましいことは何もないものの、セッカの事を説明するのも躊躇われる部分があった。何しろニームはセッカにエスカの調査を依頼した事があるのだ。

もちろんエスカにそれを話したとしても決して腹を立てたりニームを責めたりはしないだろう。それはもう確信があったが、ニーム自身が知られたくないと思ったのだ。

なぜか？　と問われると一言で、いやいくつの言葉を駆使しようが明瞭な回答などできないに違いない。それにも確信があった。

今までこんな感情を抱え込んだことがなかったニームにしてみればエスカと出会ってからの自分はそれまでの自分とは別人のように感じていた。

（こんなことなら、もっと早くに思い切ってセッカ・リ＝ルッカの事を話しておくべきであったな）

そんな事を重いながらも、ニームは違和感を覚えていた。

いつもなら気配がしてから少し経てば、セッカの方から唐突に声をかけてくるはずであった。しかしその夜のセッカはいつもよりのんびりとしているようだった。

あるいは……

ニームは思い出していた。

セッカは「エスカとの閨（ねや）には入らない」と言っていたのではなかったか？

確かにエスカとニームが二人だけで過ごす夜の部屋を閨と呼ぶのは正しい判断かもしれない。セッカは自ら口にした約束を律儀に守っていると言う事なのだろうか。

そこまで考えてから、ニームは「閨」という言葉の意味するところに思い当たり、思わず顔が熱くなるのを自覚した。

だがすぐに顔の上気は収まった。

ニームが扉に手をかけた時にセッカの気配が消えたのだ。今までニームに声をかけずに消えることはなかったはずなのに。

（まさか、私達に気を遣ったとでも言うのか？）

一瞬浮かんだ自らの考えをニームはすぐに否定した。

セッカ・リ＝ルッカは目的があって訪れる。その目的を遂行することについては極めて真面目な人間であることもニームは知っていた。つまり目的のない来訪などあり得ないのだ。

ニームは妙な予感がしてそっと扉を開いて廊下を伺った。

夜の廊下に人がいるとは思えなかったが、そこはニームに限らず無意識にとる行動というものだ。

案の定廊下に人の気配はなかった。ルナタイトが等間隔に置かれて廊下を足下がなんとか見える程度に照らしていた。だが、廊下全体を見渡すには充分で、結果として王宮の片翼でありながらこの階層の廊下には衛兵も、それ以外の人間の姿も無い事が確認できた。

ニームはそっと部屋を出ると、後ろ手で扉を閉めた。首に「蛇の目」があるのを確認するかのように首飾りの主玉である三角柱型のスフィアをそっと握ると、ゆっくりと歩き始めた。もちろんセッカの気配があった方向へ。

あまり出歩かないようにとトルマ・カイエン元帥からは釘を刺されてはいたが、この際そんなことを言っている場合ではない。ニームはなぜかそう思っていたのである。

「まさか、衛兵にでも捕らえられたのか？」

足音を立てないように歩を進めながらニームが小さな独り言をつぶやいた時だった。

何の気配も前触れもなく、背後から男の声がした。

「ボクは衛兵じゃないけどね」

「え？」

聞き覚えがない声だった。

セッカではない。ましてやシュクルやトルマでもない。

ニームはとっさに身構え、声のする方を振り向こうとした。しかし……

「……」

振り向く事はできなかった。体が動かなかったのだ。

それどころか、即座に強化ルーンを唱えようとしたが、声が出なかった。

いや、声が出ないという表現は結果のみを表層的に捕らえただけで本質を表してはいない。なぜなら声が出ない事がニームに生じた異変ではない。ニームは一切体を動かすことが出来ない状態になっていたのだ。

手や足だけではない。唇、喉、声帯すら動かない。
試しに瞬きをしようとしたが、それさえ不可能だった。
（しまった）
こんな単純な空間固定ルーンに自分がかかるとは思ってもいなかったニームは、歯ぎしりをした。いや、歯ぎしりすら出来ない自分に心の中で呪詛の言葉を吐くしなかった。
しかしニームの持つ基本的な能力があれば、下位のルーナーのルーンなどが効くはずがない。ニームはすぐに冷静さを取り戻すとその事に気付いた。
大賢者である自分よりも強いルーンを持つ存在など限られているはずだ。ニームはそう考えると声だけの相手に目星を付けた。
（《蒼穹の台》……ではないな。声のする場所が私よりも上方だった。相手がアルヴィンの《蒼穹の台》ならば同じくらいの身長のはず）
そんなことよりそもそも《蒼穹の台》なら、ニームを「固定」する必要はない。
そうなると消去法だった。
ニームが名前を挙げる事ができる候補はあと二人だけである。男性でしかもまだ出会ったことのない人物、すなわち大賢者《銀の篝（しろがねのかがり）》と三聖の一人《黒き帳（くろきとばり）》のみ。
新教会の人間である可能性も、もちろんあった。しかし大賢者であるニームには新教会に大賢者以上の力を持つルーナーが居るとは思えなかったのだ。
「たぶん君は今……そうだね。ボクが誰なのかを考えているんだろう？」
声の主はそう言うと愉快そうに小さく笑った。
「でも、君が用意している答えはたぶんどれも不正解だよ。そうだね、君はたぶんこう思ったんだろう？　『大賢者もしくは三聖かもしれない』　ってね」
図星を突かれてニームは即座に違う候補を探った。何しろ体が全

く動かないのだ。ルーンが使えないニームは言ってみればただの小柄な少女以外の何者でもない。言葉をしゃべれないなら蓄積した膨大な知識は何の役にも立たず、強い効果のある呪具でさえもただの飾りに堕す。

ニームははっきりと後悔していた。

強化ルーンを一通りかけてから部屋を出るべきだったのだ。

同時に愕然とした。

エスカといるとそういう、いわばルーナーとしての基本的な作法とも呼べる事すら忘れてしまう自分に対して。

（これでは私はまるで……無能な、ただ愚かなだけの小娘と一緒ではないか）

自分をあっという間に拘束したということは、ルーナーである事を知ってその能力を封じたということであろう。加えてすぐに大賢者や三聖という単語が口から出たことからもニームの正体を相手は正確に知っていると言う事になる。

そして味方ではないという事も明らかであった。味方ならニームを拘束などする必要は無い。不意打ちはまだしも、まともに用件を告げればいいだけだ。

ニームは生まれて初めて自分の命が相手の手に握られている事実を認識すると、恐怖とともにやり場のない怒りに支配されていった。

エスカと二人きりになって濃密な時間を過ごす時も、全く違う意味で自分の命がエスカの思う通りに握りしめられているという思いに駆られることはあった。しかしそれは甘美な感覚であり、喜びの感情だ。このやり場のない負の感情とは全く違うものだった。

「ボクが誰か、いや何者なのかという事にもたどり着いていないんだろう？おそらく君は今ボクに対する恐怖とも怒りとも憎しみともつかない、もてあますような、そして溺れそうな程強い感情に振り回されているんじゃないかな？」

声の主は相変わらず人を見下したような物言いでそう言った。ニ

ームの命を自分の支配下に置いているという確信があるからこそ、そう言う態度が取れるのであろう。ますますもって味方であるはずがなかった。

「つまり君はまだまだガキだということさ。人里から隔離された場所で特殊な育てられ方をした上、その血筋と能力で子供のうちに大賢者になったはいいが、ヴェリタスで人間関係に揉まれる前にドライアドの特級バードに収まってしまった。誰もまともに君とつきあう人間などいなかった事を考えると人としては哀れとしか言いようがないな」

確かにそうかも知れない。

声の主の指摘は間違いではなかった。しかし他人に言われるとこれほど感情がざわめく事をニームは初めて知った。

「そんなネンネが人の筆頭を名乗り、エスカ・ペトルウシュカを掌握できると、本気で考えていたのか？」

ニームが答えようのない状況にある事を知っていて、声の主は一方的にしゃべり続けた。

「側室というものを知識では知っていただろう。その場所に自らを収める事が実際にはどういう行為に至るかも頭ではわかっていたろうね。そしてそれらはどちらも自分にとっては感情を揺さぶられる事などありえない、つまりは取るに足らないつまらぬ行為だとタカをくくっていた。違うかい？」

違わない。

エスカと肌を合わせてしまった今では、自分がよくもそんなことを考えていたものだと呆れるしかなかった。

声の主は全部を知っているらしかった。

「圧倒的な経験不足による力の無さ。それが今の君だ。まだボクのことがわからないくらいだから、持ち前の図抜けた頭脳というのも怪しいものだな」

声の主はそう言うと背後からニームの頭にそっと手を置いた。体は動かないが、その感覚は伝わった。

「落ち着け。そしてよく考えろ。君はボクがルーンを唱える声を聞いたのか？」
　言われてニームはハッとした。
（ルーナーではない！）
「そうさ、ボクはルーナーじゃない。だからしゃべりながらこういう事も出来る」
『こういう事』が何なのか、ニームはすぐにわかった。目が動かせるのだ。瞬きが出来るようになった。
　眼球が乾いて辛い状態になっていた。ありがたいことに『敵』は瞬きを許すことでニームの目を保護してくれたことになる。
　だがもちろん、事態が好転したわけではない。むしろルーナーではないことがわかったからには、この状態ではルーナーであるニームに勝ち目はほとんど無いことが確定したようなものである。
　フェアリーはその力を使う時、何も唱える必要は無いのだ。ルーナーと違い座標軸の固定を求められることもない。力の発動は多くの場合一瞬で、それを全力疾走しながらでも行えるのがフェアリーなのだ。
　ニームは絶望の淵に沈み込む意識を気力で引き上げると、『敵』の特定に集中した。敵がわかったところで何の動きも出来ないのならどうしようもない。しかしそれでも何かが起こった時に有利になる要素は一つでも多い方がいい。それに何よりそうすることで正気を保つことが出来そうだった。
　ルーナーではないという事は相手の特定に対する選択肢が無限大に広がった事を意味しそうだが、むしろニームには絞り込みがたやすいと思われた。
　エスカ・ペトルウシュカの事を知る人間。しかも気安く呼び捨てる事が出来る立場の人間である。ニームとエスカの仲をも知っている人物。
　おそらくはエスカに近しい人間であることは間違い無い。
（フェルン・キリエンカか？　いや、あいつとは声は違うし、何よ

り漂うエーテルが異質だ）

声を作ることは簡単にできるだろう。だがその人間が纏う本人にも気付かない気、つまり纏わせるエーテル波は人により全て違う。ニームはエーテルを操るルーナーの常で、人が纏うエーテルを感じる能力が常人よりも高かった。

（フェルンはもっと赤い色を意識させるが、コイツのエーテル波はまるで……）

ニームは自由になった目を大きく見開いた。少しだけ似ているエーテルを彼女はよく知っていたのだ。普段はほとんどエーテルの波動を感じさせない人物だが、ニームを抱きしめる時には明確なエーテルの色と波動を見せてくれる存在であった。

同じではないが背後から感じるエーテル波は、そのエスカのものに符合する部分があった。

（まさか……）

「ご名答」

何も口に出来ないはずのニームに、背後の声はそう答えた。それはニームの心の声を全て聞いているかのような応答であった。

いや……。

ニームは改めて今までの敵の言葉を辿ってみた。するとそのすべてがニームの心の内に反応したかのような的確な言葉になっているではないか。

（心が、読めるのか？）

それは相手に対する問いかけのつもりだった。それに答えたなら、もう間違いはない。

だが、『敵』はあくまでニームの思惑とは違う方向を見ているようであった。

「君としゃべれないのはつまらないな。どうだい、君が大声で叫んだり間違ってもルーンを唱えたりしないと約束するなら口の拘束を解いてあげるよ」

（わかった……）

即座にニームは心の中でそう答えた。頭の中に浮かんできたいくつかの事柄が言葉になる前にそうしたのだ。
「いいだろう」
『声』はそう言った。
ニームはそれを受けてため息をしてみた。声が出る。
「アックム・フェ・ダラ……」
いきなり認証文を唱え始めたニームの声が止まった。約束を一瞬で破ったニームは元通り声を拘束されてしまったのだ。
（くぅ！）
あと一音節だった。
こんなことがあった時に使うための緊急避難用のルーンだったのである。ほんの一秒で詠唱が終わるはずであった。ルーンを唱え始めた事を理解しても、拘束される前に発動するはずだったのだ。
それが一瞬で止められた。
「ほらね。君はそう言うところが子供なのさ」
落ち着いた「声」がそう言う。驚きも、そして怒りも感じないその声を聞いてニームは目を閉じた。
そして確信した。
相手はニームの行動を完全に予想していたのだ。
「君は今まで大きな失敗などしたことがなかったんだろう？　でもその安直で直線的な行動が大きな悲劇を生むんだ。時にそれは取り返しのつかない結果になる。だいたい君は数時間前にそれについて身が割かれるような思いで反省したばかりじゃないのか？」
『声』が言っていることが何を意味するのかをニームはもちろんよくわかっていた。文字通り体が引き裂かれるような思いの中で自らの行動の稚拙さを呪い続けていたではないか。
いや、今もその気持ちは変わらない。
「まったく、ひどいにも程があるとは思わないか？ボクの可愛い弟の右目は、頭に血が上った君によって奪われたんだからね」
（やはり、ミリア・ペトルウシュカ公爵か！）

エスカを弟と呼ぶ人間はファランドール中探してもただ一人である。

だが、ペトルウシュカ公爵はその弟であるエスカに故郷の森の町エイビタルに軟禁されているはずではなかったのか？

「どうしてくれるつもりだい？君もよくわかっていると思うけど、弟はあの美貌が武器なんだ。特にあの空をそのまま宝石にしたかのような青い瞳はあいつの最高の売り物なんだよ。それを君は側室の分際で奪ってしまった」

ミリアの声はニームの胸をえぐった。

流せるのならば血の涙が流れているはずであった。悔やんでも悔やんでもおそらく一生悔やみ続けるに違いない。ミリアに言われるまでもなく誰がなんと言おうとエスカの右目を奪ったのは自分なのだと思い続けていたからだ。

「君は償いをするべきじゃないのか？　罪に対して、いやこの場合はエスカの右目の代価を支払うべきじゃないのかい？」

冷たさを増したミリアの声が耳に届いた。

床にぽつぽつと何かが滴るのが、おぼろげな視界に映っていた。それが自らの流した涙だと理解もしていた。だがニームはもう自分を拘束する敵の前で涙を見せるなど許し難い事だと感じる気持ちも失せていた。

再び、ただ自らが犯した取り返しのつかない過ちに押しつぶされていたのだ。

「そうだな。同じ右目でもいいけど、それだと鏡を使わなければ自分の冒した罪を確認できないな。じゃあ、嫌でもその二つの目に映るこの部分なんてどうだろう？」

今度はニームのすぐ後ろでミリアの声がした。それは息がかかるほどすぐ近くからの声だった。

だがそんなことを意識する暇をミリアはニームに与えはしなかった。

ミリアはこれまでと同じように何の迷いもためらいも、さらには

前触れもなくニームの右手首を掴んだかと思うと、ニームが心で何かを叫ぶ前にその手首から先を思い切りねじ曲げるようにしてちぎり取ったのだ。

誰もいない夜の廊下に、何かが折れるような鈍い音が響いた。骨と皮膚と肉が一瞬で折られ、引きちぎられたのである。

ミリアはそれをいとも簡単にやってのけた。相当な腕力がなければ片手でそんなことができるはずがない。しかしミリアはこともなげにやってみせたのだ。

どうやらニームはミリアの未知の「能力」により体を硬化させられている様だった。しかも相当もろい……風化寸前の枯れ木のような硬化なのがミリアの仕草でよくわかった。

不思議と痛みはなかった。衝撃もない。ニームはまるで他人の腕が切り落とされるのを見ているかのように自分の小さな手首から先の部分が、見知らぬデュナンの手に握られているのをぼんやりと見つめているだけであった。

ニームは目に映る光景が信じられないと言うよりは、見たものがあまりに衝撃的でほとんど思考が止まっていた。

何の威嚇も前触れもなく、いきなり少女の手首を引きちぎるような人間がこの世に居ると言う事を彼女は受け入れる事ができなかったのだ。

ニームを正気に戻したのは床に何かがぶつかる硬質な音だった。半透明で乳白色の石で出来た環状の物体が床に落ちる事によって生じた音であった。

（セ＝レステ！）

それはニームの儀仗、セ＝レステであった。普段、右手首に腕輪として填めているものだ。

その音がしたと言う事は、すなわち手首から滑り落ちたと言う事である。

なぜだ？

ニームは頭を働かせて考えた。
なぜ、セ＝レステは床に落ちたのだ？
ちゃんと手首に填めていたではないか？
手首？
「！！」
正気になったニームは残酷な現実を受け入れる事になった。
本当に手首から先が無くなっているのである。
そしてそれは、夢ではないのだ。

自分の体が「壊されている」事を認識すると同時に、ニームは思わず叫んだ。心の中で泣き叫んだ。
だが……当然ながら声は出なかった。
まるで錆びたぼろぼろの槍の穂先を断ち落とすように、もしくは細長いつららの先を手折るように無造作に、ミリアはニームの手首をいとも簡単にちぎり取って見せたのだ。
警告も前触れもなく、いきなり事は行われた。情け容赦がないとはこの事であろう。

「そうだ。そうやって声にならない声で泣き叫べ」
涙を一杯溜めた目から、ぼろぼろと熱いものがあふれ出ていた。つまり涙腺は活動しているようだった。
ミリアは床の染みが増え続ける様を見て冷たく鋭い調子でそう言い、続けて押し殺したような低い声で短い言葉をニームの耳元でつぶやいた。
「絶望を噛みしめろ」
それはニームにとっては忌まわしい呪詛の言葉そのものであった。
耳元から聞こえるミリアの声に反応するかのように、ニームの両の目からはさらに涙が溢れてきた。自分でも、もうそれは制御が出来ないほどの勢いで涙は頬を伝い、染みの数が増え、それは小さな水たまりのようにその面積を増やしていった。

「でも、この程度じゃ足りないな」
ぼたぼたという音が聞こえるかのように涙を流し続けるニームに、しかしミリアはさらなる絶望の言葉を投げつけた。
「左手も差し出せ。エスカの右目の代価としてはそれでもまだ足りないくらいだ」
言うが早いか、ミリアは背後から今度はニームの左の手首を掴むと、右手の時と同様に無造作にねじるようにした。
ニームは今度も目を閉じることが出来なかった。そして今度は自分の左腕の肘から先が無理矢理ねじ切られる様子を自分自身の目でつぶさに見る事になった。

（うわあああああ）
心の中で、これ以上ない程の悲鳴を上げたニームはしかし、そこで意識を保つ事を放棄した。気を失ったのだ。
視界が狭くなった。そしてすぐに目の前が暗くなると、ニームの意識は漆黒の闇に落ちていった。

# 第八十話　黒猫の飼い主

「おやおや、お目覚めかい？」

自分の膝の上で眠っていた黒い猫がうっすらと目を開けて動き出すのを見ると、男はネコに向けてそう声をかけた。

「久しぶりじゃないか、セッカ」

黒猫は男の膝の上で立ち上がり、大きく口を空けてあくびをしながら背中を伸ばした。「この場合、一ヶ月以上の期間を指して『久しぶり』と定義しているわけだが」

話しかけながら、男はその黒猫の背中をなでてやった。

胸に三日月型の白い模様がある以外は見事に全身真っ黒な猫は伸びを終えると自分を膝に乗せている男のさらに上に視線を向けた。その先、つまりはるか頭上には輝く二つの天体が一人と一匹を夜の景色の中に浮かび上がらせていた。

月の光を受け、黒猫の瞳が輝き出す。まるで二つの月の滴のようにその色が左右で違う。左目は金。右目が青。

男は黒猫がもう一つ大きなあくびをするのを見ながら、さらに続けた。

「私が見たところ、君には別段、身体的な損傷はないようだな。にもかかわらず私の元に舞い戻ってきた。これはつまり君に何か外的ではない重篤な事態が発生したと考えて間違いないということだね。私からすればこれはそれなりに興味深い現象だよ。何しろ初めてのことだからね。ついては君の身の上に一体何が起こったのかを、考察しやすいように出来るだけ順を追ってつぶさに説明してはくれないか？」

黒猫を膝に置いた男は、そう言うと猫の背を再びそっと撫でてやった。それを受けて黒猫は気持ちよさそうに目を閉じてごろごろと喉を鳴らした。

男はアイスとデヴァイスという名の月をその水面に鏡のように映し出す、静かな湖の畔に座っていた。
露避けの黒っぽいマントを羽織り、猫を膝に乗せて一人で月見としゃれ込んでいるように見える。
頭上と眼下。合計四つの月に照らされた湖の畔で、その男は異彩を放っていた。タダの人間ではないのだ。
そう。その男の額には三番目の目があった。
それは真っ赤な目で、血の色をしていた。
残り二つの目も同様に真っ赤である。夜の湖の畔で、三つの赤い炎が燃えていたのだ。
三眼の持ち主である男は、座っていても背の高さは隠せなかった。アイスの光で浮かび上がる端正な顔立ちと、髪の間から見え隠れする少し尖った耳。それらは男がアルヴ族である事を証明していた。

「どうもこうもないさ。まったくひどい目にあったよ。いい加減に教えて欲しいな。いったいあいつは何者なんだ？」
男の呼びかけに対して、驚いたことに黒猫は人間の言葉で答えた。
「だんまりを決めつけてるけど、お前さんはあいつのことを詳しく知っているんだろ、クロス？」
クロスと呼ばれたアルヴの男は、彼がセッカと呼ぶその黒猫の頭と背中を撫でてやりながら、静かな口調で答えた。
いや、それは質問に対する答えではなかった。
「全く君は何度言えばわかるんだ？　そもそも『あいつ』とは『どいつ』なんだい？　まずはその個体特定を私と共有してからでないと基本的な会話すら成り立たない事を理解するところから始めないといけないのじゃないか？　それに『何者』という質問も曖昧すぎるね。名前なのか職業なのか、地位なのか特徴なのか、種族なのか、もしくは相対的な立場を表す言葉を返せばいいのか、ではいったいその相対する相手は誰なのか。君はそれすら特定出来ていないじゃ

ないか。そんな前提で、あまつさえ『知っているのか？』と問われても、私は一体何をどう答えていいのかわからないよ」

黒猫セッカはクロスのその言葉を聞くと、わざとらしい大きなため息を一つついた。

「相変わらずめんどくさい奴だな。そんなだから『最悪』なんて枕詞を付けられて嫌われるんだぞ」

「そいつは心外だな。これでも私は誰からも好かれる存在で居ようと努力しているつもりなんだよ。だからこそこうやって相手の意図に反する答えをしないように、正確な答えが用意できるように、あやふやな言葉だらけの質問を掘り下げて精度を高めようと努力をしているんじゃないか」

「それが嫌われるところだって言ってるんだ。普通の人間というものは、あやふやな会話を重ねながら関係を深めていくものさ」

「これはしたり。猫に普通の人間についての定義を教示されるとは。これは歴史上まれに見る奇っ怪な光景だと言えるね」

「その一言にもムッとするんだけどな」

「私に悪気などはないぞ？」

「だから余計に腹が立つのさ。お前さん、普通の人間の事も、ついでに言葉をしゃべる黒猫の事も全然わかってないよ」

「心外だ。私は君の望む答えをできるだけ正確に提示するために、曖昧な部分を極力排除しようとしているだけだというのに」

「ああそうかい。お前さんが『あいつ』について言及するのを先送りしたいんだってことはよくわかった」

「まあまあ。そんなことよりもセッカ、私は君に早急に報告しなければならない事があるんだ。それはきわめて重要な事柄で、君が察した通り『あいつ』の話より確実に重要度は高い。まずは私の重要な話を聞くところからしばらくぶりのおしゃべりを始めないか？」

セッカは再び大きなため息をつくと、抗議の色が混じった声で返した。

「俺のこの怒りよりも優先順位が高い出来事が引きこもりのお前さ

んの周りで起こるはずがないじゃないか？」
「私は好きでこんなところに引きこもっているわけではないよ」
「お前さんの好き嫌いなんぞどうでもいいよ。俺はお前さんの状況を客観的に述べているだけだ」
「ふむ。一理ある。いや、的確な分析における簡潔で的を射た表現だと言えるね。いや、この場合は当を得たという表現の方がより聞くものの心の琴線に触れる可能性が高いかもしれないね」
「どっちでも好きな方を使えよ。どうせまた、目を付けていた蜂の巣が熊に先を越されて駄目になったとか、カケスの子供が無事に巣立ったとか、陸封された鮭の新種を見つけたとか、その魚を焼いて食ったらすこぶる美味だったとか、味付けにたまにはバターを使ってみたい、とか、要するにそんな話だろ？」
「これは驚いた。君はまるで私の行動を見ていたかのようなことを言う。猫になってもさすがは一席に居た賢者と言うべきところだろうか？」
「勘弁してくれよ。こっちはお前さんと言葉遊びをしているような気分じゃないんだ」
セッカの剣幕に、クロスは困った顔をして頭を掻いた。
「確かに目星を付けていた蜂の巣は三つともまた熊に先を越されて、ここのところ蜂蜜には縁が無いし、カッケーの雛は三羽とも無事に巣立ったよ」
「カッケーって何だ？」
「カケスのカッケーだ。約一年と二ヶ月前に、僕は彼女を指をさしてちゃんと君に紹介したじゃないか？」
セッカは弱々しく首を振ると、クロスの膝に突っ伏した。
「カケスだからカッケーだったっけ。そういや亀のカメーヌは元気なのか？」
「息子のカメリーノは元気なんだが、哀れなカメーヌの話をすると少々長くなる。ここは先に私が最も君に伝えたい話からすべきだと思うんだが、どうだね？　そもそも……」

「ミリア・ペトリュウシュカ」
セッカはクロスの話を途中で遮るように、ぼそりとそう言った。
「俺はあのバカ殿にやられたんだぞ」
「ほう」
「それもお前さんの見立て通りだ。肉体的に損傷を受けて殺されたんじゃなくて、どうやら精神に直接攻撃を受けたようなんだ」
話の腰を折られたことに特に憤慨するでもなく、クロスはセッカの言葉に反応した。
「君の言葉を借りるとすると、順列的に君はバカよりもダメな位置関係、つまり大馬鹿、という事になるね」
「ならねえよ！　何でだよ？」
「ふむ。じゃあ、バカの下というところか？　下バカとでも呼ぶのか？　それともう少し上がって中バカか？　そうだ、君はこれからチューバッカーと名乗るといい。セッカ・チューバッカー・リ＝ルッカだ。ツゥレフ風でなかなかいい名前だよ」
「名付けなくていい！　下とか上とか中とかじゃない。そもそもバカに順列があるのか？」
「いや。物事には程度というものがついて回る。今後の事を考えるとバカについては明確な順列を付けておいた方がいいね。いい機会だからここで君と私との間でバカという概念に対する暫定的な位を複数個、策定しようじゃないか。そうすると君の立場がお互いに明確になるし、今後の……」
「クロス・アイリス！」
セッカは立ち上がると、クロスをにらんで毛を逆立てた。
「なんだい、改まって。でも嬉しいな。私の名前を族名まで含めて正式に呼んでくれるのは、もうこの世界では君とイオスくらいだからね」
「いやいや。今はそんな事はどうでもいいって言ってるんだよ」
セッカは憮然としてそう言った後で、すぐに表情を変えてクロスを見上げた。

「え？　今、何て言った？」
「おや、気付いたかい？　なら、大バカは返上だな」
セッカはゴクリと音をさせてつばを飲み込んだ。
「だから、私の話を先にきいてもらえないだろうか？　それよりセッカ、あんまり私の膝に爪を立てないでくれないか」
「まさかクレハが……消えたのか？」
クロスは視線を黒猫から天空の双び月に移すと、ぼんやりと明暗に別れた月を眺めた。
「おい、クロス！」
「君の言う消えるという言葉の定義がまたしてもあやふやだな。ファランドールから一意の存在として特定できなくなる程にその形状を変化させる事を消えるというのなら、そうなのかもしれない。意思や感情が多少なりともあり、自発的行動を起こせる個体がその役目を終えた瞬間をもって『消えた』と呼ぶのであれば、クレハはもうずっと前に消えている事になる。そういう意味ではクレハの状態についての本質は変わっていないともいえるね」
「何も変化がない……わけじゃないんだよな？」
クロスは月を見上げたままで小さくうなずいた。
「彼女が作った結界が弱まった。今の状態ではほとんど無きに等しいね。そのおかげで、私は初めて彼女の所在を把握する事ができるようになった」
「俺が目を付けてたタ＝タンの小娘が役に立ったって事か？　だとしたら俺の働きも無駄にはならなかったって事だな」
「ふむ。では一つ質問するが、君がクレハを救出する為の道具にしたタ＝タン最後の生き残りは、アリス一族の最後の『個体』を携えてハイデルーヴェンからヴォールに移動していると言う事なのかい？」
「ハイデルーヴェン？　ヴォール？」
「結界が弱まった直後、私がクレハの気配を感知したのはハイデルーヴェンだよ。そしてその気配は移動して、今はヴォールにある」

「詳しく聞かせてくれ、クロス」
そう言ってさらに爪を深く立てるセッカにクロスは一瞬顔をしかめたが、すぐにやれやれといった風に一つため息をつくと、首を横に振った。
「だから私はさっきからまず私の話を聞きたまえ、と言っているじゃないか」
「お前さんはいつだってめんどくさいんだよ。回りくどいんだよ。結界が消えたなら消えたって最初に言えばいいだろう？　もしくはクレハ・アリスパレスが誰かに連れ去られたとか。そう言われたら俺だってあの忌々しいバカ殿の事よりお前さんの話を優先させてるさ」
「私はそう言ったつもりだったんだが、何事においてもまずは双方の理解度を一定の基準で平均化する必要があるからね。すなわち意思疎通の確認作業を行おうとする前に君がミリア・ペトルウシュカに関して何やら興奮しだしたんだよ」
その言葉を聞いたセッカは、両前足の爪を思い切りクロスの太ももに突き立てた。
「痛い痛い。これは程度の問題ではなく、明らかに一般的な我慢の限界を超える痛みだ」
「最初から『あいつ』がミリアの事だってわかってるんじゃないか！」
「そりゃあ君、君が関係しているであろう人間の中で、仮にも元一席賢者である君を出し抜ける人間など、私が知る限りではペトルウシュカ公しかいないじゃないか？」
「相変わらずお前さんは話し相手としては最悪だな」
「待ちたまえ。最悪というのは言葉の定義上、最も悪いという意味だが、それは相対的な上下を表すものではなく、絶対的な位置を指すものだよ。そもそも単独で使うにはきわめてあやふやな言葉の一つだ。何しろ君の言葉には限定すべき範囲がないんだからね。範囲を限定して使わないと、森羅万象の中で最も悪い、という意味にな

ってしまうだろう？　だからわかりやすい様に言わなければいけないよ。この湖の畔にいるアルヴの男の中で最悪なのか、黒猫を膝に抱いている亜神の中で最悪なのか、はたまた……」
「やかましいっ！」
「心外だな。私は平均的な成人男子のしゃべる速度より二割もゆっくりと、加えて四割程静かな音量で語っているはずだよ。これでやかましいと言われると……あ、そうか。私とした事が猫の聴覚という要素を加えた解釈をするのを忘れていた。こいつは悪かった」
「いや……もういいから本題に入ってくれないか？　この調子だと話し終わる前に夜が明ける」
「まさか。この地点の夜明けまでにはまだ五時間以上あるよ。君が心配するほど私の話は長くはないんだ。そうだな。まだ一度も計測してはいないが、平均的な成人アルヴが話す速度で概ね一分程だ」
「短かっ。だったらさっさと話してくれ」
「そうしたいのは山々だが、既に私は君との会話の中で言いたい事の全貌は話してしまったような気がするよ」
「え？」
「クレハ・アリスパレスは我々が想定していたエッダには存在せず、ハイデルーヴェンにいたこと。そしてクレハは何者かによってハイデルーヴェンから連れ去られ、現在はヴォールにいること。それによって私を閉じ込めていた彼女の結界がほぼ無効化したこと。話というのはそれだけだからね」
「お前さんと話していると、なんだか全部がどうでもよくなってくるな」
「これはしたり。私の話は黒猫には面白くないかね？」
「そこは黒猫限定じゃなくて、それこそ森羅万象がそう感じるだろうさ」
「やれやれ」
「やれやれじゃないよ。なんでお前さんは結界が消えたって言うのにまだこんなところにいるのさ？　さっさとここを出て、やりたか

ったことをやればいいじゃないか。俺はそう言う身も蓋もある話を聞きたいんだ」
「君は私の言ったことをちゃんと聞いていなかったようだね」
「なにがだ？」
「結界は消えたのではなく、弱まったんだよ」
「移動は出来ないのか？」
「この世界を認識する力は戻ったよ。でも結界から外の空間には出られそうもないね」
「そこは重要だろ？　お前さんのさっきの説明だと消えたも同然って捉えるだろ？　普通の人間は！」
「君は猫じゃないか」
「やかましい。それはどうでもいいんだよ」
「ふむ。じゃあ、結界の話はどうでもいいという事にして、まずさっき君が言った身と蓋についてだが……」
「そこもいいって言ってるんだよ！　頼むよクロス。俺にこれ以上爪を立てさせないでくれよ」
「爪は君の意思で立てるものだろう？立てたくなければ立てなければいいだけじゃないか。めんどくさいのは君の方だよ、セッカ」
「お前さんをぶん殴ったらさぞかし気持ちがいいだろうな、って今思ったよ」
「それは物騒な思考だな。しかし……」
「しかし？」
「殴るなら優しく殴ってくれないか？　あ、爪は無しの方向で頼むよ。顔の傷は治りにくいんだ」
「優しく殴ったらスカッとしないだろ？　俺はこのやり場のないイライラを解消したいんだよ。爽快な気分を味わいたいんだよ。気持ちよくなりたいんだよ」
「では君の気が済むように、今度私そっくりのクロスちゃん人形を作っておこう。それなら私には痛みが伝わらないから思う存分スカッとしてもらえるよ」

「いつも思うんだが」
「何だい？」
「お前さんと話していると、クロス・アイリスという存在をここに封じたクレハの気持ちが実によくわかる気がするよ」
「ふむ。私には到底理解が及ばないが、君にはわかるというのかい？」
「聖人クレハに一度も会えなかったのが実に残念だ。まさかとは思うけど亜神の男はみんなお前さんみたいな会話をするわけじゃないよな？」
「論より証拠だ。現存するもう一人の亜神の男、イオス・オシュティーフェと話してみればいいじゃないか。もっとも君のような怪しい存在は彼に出会った瞬間に灰にされるだろうけどね。私と違って彼は不言実行を地で行く亜神だから」
クロスの言葉にセッカは身震いした。
「イオスに会うのはごめんだね。お前さんですら怖がってる相手と俺がまともにやり合えるわけがない」
「じゃあ、もう一人の亜神に会えばいい」
「え？」
「クレハをスフィアに変えたのはタ＝タンの小娘などではない。亜神だ」
「人間……いや亜神をスフィアに変える？　そんなことが出来るのか？」
「そんなことが出来るのは人じゃない。亜神だけだよ」
「イオスの仕業じゃないのか？」
「君はイオスを全くわかっていない。彼がそんなことをするものか。彼なら一瞬たりとも迷うこと無く灰にかえるだろうね。そうなっていたらここの結界は文字通り消え去っていたところさ」
「お前達の他に亜神の生き残りがいるって言うのか？　スフィアに変えたのは、あのタ＝タンの小娘じゃないのか？　あいつも人間とは思えないほどのエーテル『倉庫』だぞ」

「ふむ。私としても驚きの事実なのさ。君の言うとおり、不思議な事にクレハの娘でもあるタ＝タンのあの子は人間のくせに亜神であるクレハの特性をかなり受け継いでいる特殊な『合いの子』だけど、それでも人間には違いない。亜神の肉体そのものをエーテルに還元した上でスフィアに変成するなんていう『神業』は使えないさ」
「亜神の生き残り……イオスはその事を知っているのか？」
「知っていたかどうかはわからないけど、現時点では彼も私同様、もう感知しているはずだよ。どちらにしろ、君にはその亜神を連れてきて欲しいのさ。この場所にね」
「――わかった」
「アヴスルータ（終末）は本来四聖の総意で使うべきものなんだ。だからそれを使う前に、最後の亜神の意思を一応知っておきたい。返答によっては私の子供達の行く末を見守る必要もなくなるだろう」
「子供達？　まさかお前さんに子供が居るのか、クロス？」
「君の言う子供という言葉の定義を遺伝子的な繋がりのある第二世代を指すとしたら、その質問の回答は過去形になる。つまり『居た』さ。しかし君、私が今言った子供というのは君の考えるものとは違って比喩表現としての子供さ。具体的には私が本を託した四人の事だよ」
「本？」
「知らないのか？文字が書いてあって……」
「――本の定義はいい」
「なんだ、いいのか」
「いい。それよりその話は初耳だな。『本』て何だ？」
セッカの問いかけに、クロスは手を伸ばすと、脇から一冊の古ぼけた本を取り出して見せた。
「これだよ。正確にはこれの写本と言うべきだけどね。これを読んだ人間が、果たしてどういう行動をとって私を楽しませてくれるのか……そう思って作った本さ」
クロスはそう言うと、皮装丁の分厚い本を開き、そしてすぐに閉

じた。
「『合わせ月の夜』……？」
本の表題をセッカが声に出して読んだ。
「合わせ月の仕組みについて解説してあるのか？」
セッカの質問に、しかしクロスは首を振った。
「そんなことを書いてもどうしようもないじゃないか。これは歴史書さ。ただし普通の歴史書じゃない。これは事実しか書かれていない歴史書なんだよ、セッカ」
「事実ねえ。誰も知らない事を事実と言われても信じてはもらえないだろ？」
「読み手の真実と本に書かれた事実との違いを、読み手がどう吸収し、行動に生かすか。それこそが書き手の意図というやつだよ、セッカ君」
「書き手って、お前さんの事だろ？」
「そうとも。これは退屈の中で死んでいく事に飽きた私が、いまわの際にちょっとした楽しみが欲しいと考えて思い立った余興だよ。この台本を手にした人間が、いったいどんな寸劇を見せてくれるのかと思うと少しは気が紛れるんじゃないかと思ったのだよ」
「そんな本が流布したら混乱する奴もいるだろうな。でも、そんなものを見てお前さんは楽しいのか？」
「いや、流布などしないよ。読むことが出来るのは四人だけだ」
「と言うと？」
「そんなことが出来ないような仕掛けを施してあるからだよ。それに、知っている人間が居ないという背景こそがこの遊びの重要な点なのさ」
「なるほど。でもそんな怪しげな本なんて、読んでも普通は無視して終わりだろ？　お前さんが喜ぶような事をしでかす可能性は低いんじゃ無いか？」
「セッカ、君はその点で私に抜かりがあるとでも言うのかい？」
「お前さんの性格の悪さなら、それにも何か仕掛けがあるんだろう

な」

「私の性格の悪さについての君の感想はこの際無視して話を続けると、行動を起こすに違いないと私が目星を付けた人間に渡した、と思ってくれればいいだろう」

「ふーん。お前さんに目を付けられるとは、実にかわいそうな連中だな。冗談は抜きにして、心から同情させてもらうよ」

「まあ、そう言うわけでね。もう二十年も前になるかな。当然ながら私がここに封じられる以前の話だからね。私は当時この計画に夢中でね。ファランドール中を散歩しながら、面白そうな人間をなんとか四人見つけ出して、この本を手渡した。もちろんただ手渡すだけじゃなくてちゃんと宿題を伝えておいたよ。その宿題の提出期限がついにやってくる」「それはいつなんだ？」

「もちろん『合わせ月』だよ」

「なるほど」

「まあ、もっとも一人は既に提出を終わっているよ。この本はその子の本さ」

「へえ。そいつの答案はどうだったんだい？　お前さんを楽しませてくれるようなものだったのか？」

セッカにそう問われると、背表紙に書かれた表題を指でなぞりながら、クロスは少し寂しそうにつぶやいた。

「いや。少なくともあまり愉快な答えではなかったよ」

「そうか。これは俺の興味本位から尋ねるんだけど、宿題とやらを提出したそいつは今どうしてるんだ？」

セッカの問に、その日初めてクロスは微笑を浮かべた。

「解答としてはある意味で素晴らしいものだったけど、いくら素晴らしくても正解でないと合格はできないね。さらに言えば知ってか知らずか出題者の意図を完全に無視して私欲へとまっしぐらに進むものだったからねえ。いくら私が寛大な亜神でも、限度というものがあるんだよ」

「なるほど。じゃあ……」

「うむ。私の食事に取り立てる事になったよ」
「あちゃー」
「敬意を払ったつもりなんだがね」
「まあ、お前さん達にとっちゃそうだろうな。残るは三人って事か」
「いや、二人だよ」
「二人？」
「もう一人は途中棄権したようだね」
「棄権？」
「事故か、誰かに殺されたか。どちらにしろクレハの結界が消える寸前に、その子の気配が消えた」
「死んだという事か？　まさか……そいつはクレハと関係があるのか？」
「今はまだその子がクレハと同じ場所にいたという事実しかわからないよ。でも、関係が無いわけがないだろうね。ついでに言うと例の亜神の生き残りともね」
「なるほど。会うのが楽しみだ」
「一瞬で灰にされる可能性が高いよ。イオスより恐ろしい亜神の可能性も否定できない」
「今の助言は素直に肝に銘じておくよ。それで、本の話に戻るけど、持ち主が死んだら本はどうなるんだ？」
「僕が取り上げる前に持ち主が死んだら、本も灰になるよ。そういう風に仕掛けてあるんだ。だから持ち主が不慮の死を遂げても、本人以外の目に触れることはないんだよ」
「教えてくれないか？」
「本の持ち主かい？」
「俺はクロス・アイリスに作られた人造生命体で、こうやって自分の意思はあるものの、なんだかんだいってもお前さんの意思に従う僕（しもべ）だ。お前さんが命じることなら俺は何でもやってやるよ。でも俺にももう少し世界を俯瞰する楽しみをくれてもいいんじゃないか？　知っているという事はやっぱり楽しいことだからな」

「ふむ。まあ、君は謙遜して僕（しもべ）という言葉を使ったけど、私からすれば無聊を慰めてくれる大切な友人だからね。私のじゃまをしないという約束で教えてもいいだろう。もちろん他言は無用だが」
「わかっているとも」
「まず、棄権した子は、ハイデルーヴェンのキセン・プロットという名前の、今では何やら偉そうな肩書きを持ったデュナンだよ」
「ああ、その名前なら知ってる。ハイデルーヴェンの統括教授長だな。確かに知識欲の権化のような人間なら、少なくとも本に書かれていることが事実かどうかを確認しようとするだろうな。そして一つでも事実だという裏がとれれば……」
「まあ、そうだね。でも、それよりも何よりも、このキセン・プロットという子は、フォウからやってきた異世界人だと言う事が重要なんだよ」
「なんだって？」
「驚くことはないさ。セッカ、君だって知っているはずだろう？フォウとファランドールは繋がっているんだ。不確かで不安定だけどね。何らかの原因、それはおそらくマーリンの気まぐれと言った類の現象だろうけど、こちら側へ迷い込む人間もいるんだよ。彼女はただ迷い込んだだけでなく、君の言うとおり知識欲の権化、本物の学者だったんだ」
「なるほど。何となくわかってきたよ。本にマーリンや始祖、亜神について書かれているとするなら、プロット教授長がクレハと関係があってもおかしくはないというわけか」
「二人目はシルフィードの政治の中枢に居る人間だよ。だから当然君も知っている名前だ」
「まさか……近衛軍大元帥……バード長のサミュエル・ミドオーバか？」
「ご明察だ。さすがは《月白の新羅（げっぱくのしんら）》天色と競っていただけはあるね」
「いつの時代の話だよ。今のリ＝ルッカの王は大した力も使えない

黒猫だぞ」
「私の力を押さえる結界が無くなったんだよ。君の力も少しは復活しているはずさ」
「ふむ。しかしサミュエルは君の旧知じゃないか。しかも子供の頃から目をかけてやってたという話じゃなかったか？」
「だからこそ、さ。彼は人間としては相当な存在だ。賢者連中と違って亜神の目を借りずにあそこまでルーンを極めるのは希少な能力だよ」
「賢者に推挙せず、あえて人間のままでいさせたという事かい？」
「そもそもこのお遊びを思いついたのは彼がいたからだよ。人間は一体どこまでやれるのかを見たかったのかもしれないね」
「人間に絶望したんじゃなかったのかい？」
「今も絶望しているさ。でも合わせ月までは可能性を与えてみようと思ったんだよ」
「なるほど。ただ突き放してみるだけではなくて積極的に行動を起こさせるための本っていう事か」
「まあ、君がどう考えようとかまわないけどね。ともかくサミュエルは私が予想していた以上に大胆な、いや過激と言ってもいい行動をとっているようで、これからが楽しみだよ。何しろ『観察者』を特定して抹殺してみせるんだからね。彼はある意味で徹底しているよ」
「『観察者』？」
「ああ、説明がまだだったね。ちょっとしたいたずら心でね、本の持ち主の関係者の中から一人を選んで『私はこれこれこういう本を○○に渡した』『でも、その事を本人に言っては駄目だ』『その上で君は自分で正しいと思う事をしろ』って言ったのさ。ついでに本の持ち主にはそう言う役どころの人間がいるという事も話してある。もっとも誰が『観察者』なのかは教えなかったけど。つまり『観察者』は両方を特定できているけど、本の持ち主には誰が観察者かはわからないという仕組みだよ」

「おいおい……それって本の持ち主を」
「その気になれば殺せるね。行き過ぎた事をしていると『観察者』が判断すれば最悪そうやって止められる。言い換えるなら、私はそんな立場にいる人間を選んだわけだよ」
「クロス、お前さんは本当に性格がひどいな」
「何を言う。私は中立だよ」
「さっき、サミュエルは『観察者』を見つけ出して抹殺したって言ったよな？」
「言ったよ」
「まさかとは思うけど、サミュエルの『観察者』って言うのは」
「君の想像通りだと思うよ」
「シルフィードの前の国王『アプサラス三世』が『観察者』か？　やはり噂通り殺されたのか……」
「目的の為には手段を選ばない。例えそれが心から慕っている国王であろうとも。いや、まさにあの子は不世出の人物だよ。それに比べるとドライアドのあの子がやっていることはきわめて周到だけど相当に回りくどい。ただ、そうは言っても立ち回りに関する機転が今のところは功を奏しているようだけどね」
「ドライアドの子？　それが三番目の持ち主だな。誰なんだ？　まさかエスカ・ペトルウシュカか？」
「惜しい。けれど違うよ。三番目の本の持ち主は君の大嫌いな『あいつ』こと、ミリア・ペトルウシュカ公爵だ」
「なんだってええ？」
「驚いたかい？」
「驚いたというか、腹が立った。思いっきり腹が立つ。そう言う事は最初に言ってくれ。頼むよ。お願いだよ。この通りだよ」
「いやあ、タ＝タンの子がらみの件にミリアがそれほど関わるとはさすがの僕も想像していなかったからね。結果としてタ＝タンの子には悪い事をしたけどね。我々に振り回されたあげく、ミリアに目を付けられてしまったわけだけどね。もっとも今となっては用済み

だから、我々はミリアのおかげで手間が省けたわけだけどね。それにしても、実に面白いよ、エスタリアのバカ殿君は」
「俺はアイツに殺されたんだぜ？　少なくともただのバカ殿じゃなくて、要注意人物だ、って事くらい言ってくれてもいいだろ？　それならこっちだってもう少し警戒してたさ」
「ふむ。予備知識があれば回避できたという事かい？」
「――いや、危険人物だという予備知識があってもあれは無理かも。と言うか、そもそもミリアを選んだ理由は何だ？」
「力さ。私は力を持っている人間に本を与えたんだからね。持っている力をどう使うのかが見たかったんだよ。それぞれ、その力を使えば世界を動かせる可能性がある子供達だ」
「だから、ミリアの力って……」
「あの子は地のフェアリーだよ。それも千年に一度現れる特殊なフェアリーなんだ」
「え？」
「そうだよ。彼は地精、大地のエレメンタルだよ。そもそも地精の監視者である私が大地のエレメンタルを認識下に置かないはずがないじゃないか？」
「正教会も新教会も必死に探している最後の四精が、あのバカ殿？」
「ただのバカじゃない事は君自身が一番よく知っているんじゃないのかい？」
「それで、ミリアの観察者は？」
「ああ。幼なじみの、名前は何と言ったかな。髪の色が赤と金に分かれている特徴的な外見の女の子でね」
「スノウ・キリエンカか。いつも木の槍を背負ってぼうっとしている変な女だ」
「そう、それだ。その木の槍は私があげたものだけどね」
「もしかしてお前さん、観察者に自分で作った例の呪具を渡してるのか？　ニーム・タ＝タンの時のように？」
「うん。せっかくの作品だから、あんなかび臭いところに寝かしと

くのはもったいないじゃないか。それに渡してるのは観察者だけじゃないよ。本の持ち主にもそれぞれ一つずつ呪具を渡してある。しかもみんなとびきりの出来の良いものばかりだよ」

「なるほどね。興味本位で聞くけど、ミリアには何を渡したんだ？」

「『君に熱視線』」

「は？　いや、呪具の名前じゃない。どんな外見の道具かを聞いてるんだよ」

「『君に熱視線』　は眼鏡だよ」

「なるほど……ミリアが普段かけている眼鏡は呪具なのか」

「あれは実に強力な武器だよ。私が作った呪具の中では一、二を争う恐ろしい力があるんだ。『蛇の目』や『花盗人』、それに『星を呑む獅子』など、他の子達に渡したものとは比べものにならないくらいにね」

「確かに比べものにならないほどひどい名前だな」

「相変わらず君には美的感覚が希薄だね。すばらしい名前じゃないか」

「いや……まあ、いいさ。お前さんと議論すると後悔しか残らないからやめておこう。それで、その『君に熱視線』とやらはどんな機能が付いているんだ？　俺には『星を呑む獅子』が最高に『イカシてる』呪具だと思うんだけどね。お前さんが作った唯一まともな呪具と言ってもいいくらいだ。その場の精霊波、エーテルを吸い込んでルーナーの能力を増幅するなんて反則きわまりない。力の弱いルーナーに預けるならともかく、ドライアドのバード長に渡すなんて、えこひいきや肩入れととられても仕方ないんじゃないのか？　いつも思ってるけど、それこそイオスに知れたらまずいことになるんじゃないの？」

「え？　イオスは知っているよ。でも彼は私の呪具をおもちゃとしか捉えてないからね。大丈夫だ。だいたい『星を呑む獅子』に対する君の認識は間違ってるよ、セッカ」

「と言うと？」

「『アレ』はそれほど都合のいいものじゃない。発動条件が限られているからね。たとえば夜しか発動しないし、並び朔月には発動しない。そもそもあれは全ての属性の精霊波を増幅させる事なんかできないんだよ」
「ふーん。相変わらず不完全な出来映えだな。で、『星を呑む獅子』の持ち主の監視者であるアプサラス三世には何を渡したんだ？」
「ああ、彼はどこまでも誇り高きアルヴ族だったね」
「ん？」
「唯一、彼だけは呪具を受け取らなかったよ。まるで私の思惑を見透かしたかのようにね。あれは少し悔しい気分になったね」
「クロス……お前さん、渡した呪具に何か仕掛けてるんだな？」
「当たり前の事を聞くものじゃないよ、セッカ。だってそうだろう？　仕掛けがないと面白くないじゃないか。私は慈善事業家ではないんだよ」
「いや、お前さんは仮にも正教会の関係者だろうが？」
「マーリン正教会？　馬鹿を言っちゃいかんよ。宗教など人身を束ねる為の方便じゃないか。私は方便などどうでもいいんだ」
「はいはい。まあ、わかっちゃいるけどさ」
「要するに退屈を紛らせるための道化達には道化に徹してもらわないといけないわけだからね。私の意に沿わぬ行動をとってもらっては困る、という事さ」
「お前さん、やっぱり最悪だな。正確に範囲を限定するなら、ファランドール中の膝に黒猫を乗せていない人間と乗せている人間の中で最もひどい性格だ」
「おいおい、それは範囲を限定しているとは言わないぞ」
「限定してないんだよ！　気付けよ」
「まあ、それはともかくミリアに渡した『君に熱視線』はとっても危ない武器になるんだよ。ただ、それを使いこなせるかどうかは彼次第だよ。そう言えば『裏機能』についてはセッカ、君が身をもって体験しているはずだよ」

「裏機能？ああ、おまけで付けている機能ってやつか。俺が体験している？」
「君は以前、ミリアは一目見て君のことを特定したって言っていたじゃないか」
「ああ、そう言えば。それがおまけ能力か？」
「あの眼鏡は、その人間が纏っているエーテルの色や強さがわかるようになっているのさ。そりゃ、君のように特殊で強いエーテルをまき散らしてたら嫌でも目立つことになるだろうね」
「だから、そういう情報をなんであらかじめ俺にくれないんだよ。それじゃあ、シルフィードのエッダ王宮でアイツが俺を特定するなんて造作もないじゃないか。かなり気配を消していたつもりでいたのにやられた訳がやっとわかったよ」
「まあいいじゃないか。私がこうして生きている限り君は死なないんだし」
「そう言う問題じゃないんだよ」
「そうかもしれないけど、今度の相手もミリアと同じだよ」
「未知の亜神、か？」
「亜神は人間と違うんだ。エーテルの色や強弱は普通に見えるからね。真っ白なエーテルを垂れ流している黒猫なんか、一キロメートル先からでも特定されてしまうだろうね」
「じゃあ、どうやって近づけばいいんだよ？」
「既に私は君にその為の情報を与えたじゃないか」
「え？」
「私の話を面倒な奴の戯れ言だと思っているから、重要な事柄であっても気付かないんだよ。君はその私に対する誤解を全面的に改める事から始める必要があるのではないかな？　どちらにしろ急いで欲しい。その亜神が万が一にもイオスと結託するような事があると、私としてはちょっとやっかいな状態になる」
「急げって……あ、そうか」
「思い出したか？　やり方はいつもの通り君に任せる」

「俺の能力が強くなっている、という部分だよな？」
「私が知っている最後の《月白の森羅》はそれは見事な変装家だったよ」
「それこそ、夜だけだけどな。そもそも俺は作り物だ」
「それよりも何よりも何度も言うが相手は人間じゃない。後は君が考えればいい。私からはそれだけだ」
「相変わらずだな。まあいい。それじゃあさっそくヴォールへ向かうとするか」
セッカはまたもや伸びをすると、クロスの膝から降りようとした。だがそんなセッカをクロスは後ろから両手で持ち上げた。
「何だよ？下ろしてくれ」
「いやいや、そんなに急がなくてもいいじゃないか」
「急げって言ったのはお前さんだぞ？」
「新種の陸封鮭を燻製にしてあるんだ。この間迷い込んできた解呪の客がいいワインをたくさん持ってきてくれたからね。それを肴に今夜は久しぶりに一杯やろうじゃないか」
「それは願ってもない話だが……俺のワイン皿はちゃんと洗ってあるんだろうな？」
「大丈夫さ。ちゃんと熱湯消毒して、秘密の保存ルーンをかけてあるよ」
「保存ルーンって何だ？　と言うか秘密のってのが引っかかる」
「秘密のルーンだから、秘密に決まっているじゃないか。いいかい、秘密というのはね……」
「秘密の定義はもういい！」
クロスはセッカの抗議を無視すると、意味ありげな含み笑いを浮かべ、椅子代わりにしていた岩から降りた。
「さて、そうと決まったら我が家へ戻ろうか。今夜は楽しい事になりそうだ。わっはっは」
「いや待て、クロス。やっぱりその保存ルーンってのが気になる。それから、俺を下ろせ」

「何を言ってるんだ。さっきまで君は死体だったんだ。体もなまっているに決まっている。主人としてはいたわってあげないとね。あっはっは」
「あっはっは、じゃない。お前さんが声を出して笑うとろくなことが無いんだ。早く下ろせ！」
「あっはっは」
「だから、その凶悪な笑いはやめろ！」
クロスは上機嫌な笑い声をたてながら湖を背にすると、セッカを抱き上げたままゆっくりと森の奥へと消えていった。

## 第八十一話　大葬の朝

史実ではガルフ・キャンタビレイ王国軍大元帥とリーン・アンセルメ少尉は、アプサラス三世が崩御した後、二週間の間は首都機能整備中のノッダから一歩も離れていないことになっている。

そもそもその当時の首都エッダではそれが問題となっていた。『親衛隊』が治安確認の為にノッダ近郊に数日間出動したという記録はあるが、ノッダ側の大きな動きはそれだけである。

その証拠に、ガルフは毎日のようにやってくるエッダからの使者に謁見しており、なにより公文書に対しては自筆で返書を行っている。

そもそも現存する使者達、つまりエッダの役人の日記には、その当時のキャンタビレイ大元帥との謁見の様子などが事細かに書かれたものが存在している。そしてそれは一つや二つではないのである。

ただしアプサラス三世崩御の数日後にノッダを訪れた使者の報告書には、謁見が叶わなかったという記述がある。いわゆる空白の二日である。報告書の文章は実に単純で

「ノッダ最高司令官（キャンタビレイ大元帥）過労との由。我、謁見叶わず」

とあるだけである。

この二日間の間に起こった出来事がバランツ付近でのミリア・ペトルウシュカ達との遭遇であったと正確に記述する資料はもちろん存在しない。

だが、少なくともサミュエル・ミドオーバとその息のかかった者達は六翅のスズメバチのクレストを掲げた快速馬車がバランツ付近に迫っていると言う情報を握っていたのは間違いのないところだと思われる。

少なくとも哨戒の為に「蛇使いのアヨネット」ことクリヨン・ア

ヨネット中佐が中隊を率いてわざわざバランツくんだりに出向くことはあり得ない。

そこには何かの意味があったと考えるべきで、それ相当の相手を迎撃する為であったと考えるのが自然であろう。そしてその「それ相当」とおぼしき相手をその当時のシルフィード近衛軍の諜報部は把握していなかったことは記録からほぼ間違い無い。後に近衛軍大元帥サミュエル・ミドオーバの勅命でアヨネット中隊が動いたことが問題になった事からもそれは近衛軍という組織が決めた作戦ではなく、サミュエルの独断で行われた出兵なのである。

ともかくこの件については史実は実に簡潔な事柄しか残してはいない。

ガルフ・キャンタビレイ大元帥がエッダに帰還したのは星歴四〇二六年、黒の一月最初の双び朔日。つまりアプサラス三世の大葬当日であった。

それだけである。

その大葬前のエッダには不穏な噂があった。

アプサラス三世の急逝という衝撃は様々な噂を産み、ガルフがエッダになかなか姿を見せないという事実は、その噂に尾ひれを付けて一人歩きさせる原動力になったのは間違いない。

要するにシルフィードはかつて無いほどに浮き足立っていたという事が言えるだろう。

その中にカラティア朝シルフィードの歴史上きわめて珍しい噂が一つあった。

噂の内容はガルフ・キャンタビレイ大元帥が何者かと組んでシルフィード王国の実権を握ろうとしている、というものである。

もちろん噂の発生源、すなわち背景になる出来事が、あるにはあった。

エッダとノッダという二大都市を結ぶ陸の大動脈、ラクジュ街道にはバランツという軍の簡易補給基地が置かれた宿場があった。現

在のバランツ大斎場はその町の焼け跡に立てられたものである。
そのバランツが何者かに襲われたという情報を受けたクリヨン・アヨネット近衛軍中佐率いるバードを擁した中隊は急ぎ防衛に向かったが、善戦むなしく全滅。
それだけではない。あろう事か非戦闘員である村人全員が「敵」の手により惨殺されたという大事件が、キャンタビレイ大元帥陰謀説に効果的な彩りを付けていたのである。
すなわち夜陰に紛れてガルフ・キャンタビレイの軍隊がエッダに侵攻しようとしたが、それを察知した近衛軍がバランツで迎え撃ち、命を賭してこれを阻止。最後の一兵卒まで戦い抜き、キャンタビレイの親衛隊に大打撃を与え撤退を余儀なくさせてエッダを守りきったというものである。
そう。
エッダでは『蛇使いのアヨネット』ことクリヨン・アヨネット近衛軍中佐は名誉の死を遂げた英雄だと称えるものもいたのである。
しかしノッダから帰った使者は、エッダ警護兵からその噂を聞くときょとんとした顔をした後でその噂を一笑に付したと言う。
「私はその翌朝、遠く離れたノッダの地で親衛隊全員が見守る中、大元帥閣下に謁見したのだぞ？　その場で署名を頂いた文書を今ここに携えているのだ。お前達、このような時期に滅多なことを口にするものではない」
スズメバチ、すなわち親衛隊全員がノッダに居たという目撃証言は重要である。
バランツからノッダへは、どんなに速い馬を使っても三日近くはかかる距離である。少なくともバランツ事件があった翌朝にガルフがノッダで使者に会う事など不可能であった。バードも含む五十人もの兵を全滅させるほどの戦力を持つ軍隊が、一夜でノッダへ帰ったという設定はどう考えてもムリがある。さらに言えばクリヨンに「大打撃」を与えられたはずの「親衛隊」が全員傷一つ無く健在で

ある事は噂そのものを否定するのに十分な状況証拠と言えた。
バランツの一件がキャンタビレイ大元帥本人が手を下したものではなさそうだとなると、今度はエッダの中に国家転覆を謀る者がいるという別の噂が生まれた。もちろんそれはノッダのキャンタビレイ大元帥に通じた者、つまり息のかかった配下の仕業だというのである。

「お前はどう思うよ?」
エスカ・ペトルウシュカは、王宮にあるトルマ・カイエン元帥の執務部屋に繋がる寝室で長椅子に腰掛けていた。
右目の怪我から来る発熱も治まり、もうすっかり元気な様子のエスカであったが、右目の包帯はもちろんそのままで、すべてが元通りというわけではなかった。
エスカは右目を負傷した大葬の前夜から、そのままトルマ・カイエン元帥の部屋に留まる事になった。

マルク・ペシカレフの例の事件はドライアド側にちょっとした人事の変更を余儀なくさせた。
大葬にはフェルン・キリエンカを代理に立て、エスカ自身は欠席する事になった。
表向きは怪我が原因の発熱によるものであるから、自己管理能力の欠如と捕らえられる。立場上は明らかに減点対象であり大きな失策ではあったが、少なくとも名代自身は出席するわけであり、この人事は対外的には何ら問題はないと言えた。
そもそもその診断を行ったのはシルフィードの医師なのである。これ以上筋が通る話もないと言うものであろう。
一方エスカ付き幕僚長であるニーム・タ＝タン大佐も同様に参列を控えた。
体調には問題のない彼女の場合は単純にニーム自身の都合である。

エスカの側を離れたくないと頑として譲らなかったので、シュクルは医師に含ませて「感冒」と嘘の診断をマルク・ペシカレフ名代宛てに提出させて取り繕うことにした。

もともとマルクの件があろうと無かろうと彼女の場合はエスカの横が定位置である。さらに幕僚長としてだけではなく、非公式には側室であることは少なくともドライアド王国の名代随行のお歴々には既に印象づけられていたので、誰しも気持ちでは当然の事と認識した事であろう。事実、ニームの件が問題視される事はなかった。

どちらにしろニームが大葬に参列しないという事実は結果としてマルクにとってはエスカにもニームにも顔を合わさずに済む事であり、心情的に実にありがたい話であった。彼は二つ返事で二人の参列欠席を承諾し、珍しい事に見舞いの言葉まで伝えたという。

彼にしてみれば重圧を感じずに式に出る事で感謝の一言も言いたかったのであろうか。

そのニームの代わりにはリンゼルリッヒとジナイーダの二人がバード庁の代表という名目をもってあたり、名代補佐であるフェルンをさらに補佐する形になった。

一方でエスカ達を預かる形になったトルマは彼が信頼する人間を二人の世話役としてあてがい、食事や雑事についても二人は不自由の無い環境を得ていた。エスカの代理として大葬に出席し、マルク・ペシカレフの面倒も見なければならないフェルンには彼らの世話までは無理であったし、そもそも王国軍元帥の部屋に他国の、それも軍の人間を泊める事自体が問題なのである。さらにそこに他国の人間を自由に出入りさせて身の回りの世話を任せる事など出来るわけがなかった。

「ニーム？」

エスカは返事をしないニームを不審げに振り返った。そこにはぼんやりとうつむいてしっかりと組んだ自分の手を見つめているニー

ムがいた。
「どうした、ぼんやりして？　お前らしくないな」
「え？」
まるで心ここにあらずと言った感じのニームが、ゆっくりと顔を上げた。
ニームはその日、エスカが目を覚ました時からこんな調子だった。ともすれば何かあらぬ事に思いを巡らしているようで、まるで心ここにあらずと言った風情だったのだ。
少なくともエスカはそんなニームの姿を見るのは出会ってから一度たりとも無く、そこに妙なものを感じていた。

「すまぬ。何の話だった？」
少し腫れぼったい目をしたニームがそうたずねた。微笑みはない。その白い顔がいっそう白く見えた。
「参ったな」
エスカは頭を掻きながらも、しかしそれ以上ニームの状態を問いただすようなことはせずに今投げたばかりの質問を繰り返した。

「どうもこうも」
エスカの質問の内容を聞いたニームは、つまらなさそうにぽつんと答えた。
その日のニームは平服であった。
本来ならば大葬に参列はせずとも式典用に用意されたドライアドの特級バードだけが着ることのできる、ある意味名誉な礼服を着用するべきであった。しかしニームの姿はタ＝タン大佐でもドライアドの特級バードでも、ましてやマーリン正教会の賢者らしくもない、年頃の娘がよそ行きとして着そうな白いドレス風の出で立ちだった。
「シルフィードらしくない話だと思う」
少しだけ間を置くとニームは続けた。
「そのような噂が立つ背景が怪しいな」

エスカはふむ、とうなずくと気のない顔のニームを注意深く、しかしそれとなく観察しながら会話を続けることにした。
「『信義の国、シルフィード王国』としては、か」
ニームはうなずいた。
「昨日のトルマ・カイエン元帥の話ではないけれど、その噂にはどう考えても陰謀の影を感じる」
「正教会側じゃアプサラス三世の崩御の件については、どういう見解を持ってるんだ？」
ニームの様子がおかしいのは、正教会から何らかの情報がもたらされたからかも知れない。エスカはそう考えていたのだ。それで話を正教会に持っていき、ニームの反応を伺うことにした。
「正教会に一国の国王の死因についての見解などはない。そもそも私にそういう情報は届かない」
ニームはそう言うと立ち上がり、窓の下に広がる光景に目をやった。
特におかしな反応はない。正教会という言葉に取り立てて感情が波打つそぶりもなかった。
（外れか）
原因と思われる「元」の候補が一つ減ったエスカは次の手を考える必要があった。
「とはいえ、だ。言われてみればこの件について賢者会の誰からも、私に対して一切報告がないのは不自然かもしれない」
「そうか」
「うむ。まあ私は大賢者となってわずか数日でヴェリタスを出たわけだからな。彼らにしてみれば存在しないのと同じ事なのだろう。それにそもそもヴェリタスには有能な大賢者がいる」
「有能な大賢者ねえ」
「三聖《蒼穹の台》の守護の者だ。縁があればあなたと相見（あいまみ）える事もあるかもしれない」
「《蒼穹の台》ねえ」

その後は少し沈黙が続いた。

さすがに元帥の部屋である。眺めは良い。窓からは王宮前の広場が手に取るように一望できた。

おそらくトルマはこの展望もあってエスカにこの部屋に留まるように勧めたのであろう。参列できずとも大葬の一部始終を見渡せる特等席と言えた。

いや、出席するよりもむしろ全体を把握しやすい場所と言えるだろう。

ニームが立ち上がり、その窓のそばに寄ったのには実はわけがあった。窓の下、つまり広場に変化があったのだ。その大葬の会場である広場、俗に王宮前広場と呼ばれるエッダ中央広場には、まさに今ちょっとした緊張が走っていたのである。

部屋で大葬の儀式が始まるのを待っていた二人の前で、式次第に載っていない、ある儀式が執り行われようとしていた。

開放的な王宮前広場にしては珍しく、その日の広場は物々しい警備兵に完全に封鎖された状態であった。一般の人間はもちろん一切立ち入り禁止であり、新しい国王の姿を一目見ようと集まった群衆は、武装した近衛軍兵士が三重いや四重に固める包囲陣の外側で儀式が始まるのを今や遅しと待ち構えていた。

方や物々しい警備陣の内側、つまり広場中央には一個中隊規模の兵士が王宮を背にして一糸乱れぬ見事な列を作っていた。

シルフィード近衛軍の隊列の美しさはファランドール中に知れ渡っていたが、エスカは実際にそれを目にするのは初めてだった。

「聞きしに勝る隊列だな」

自身も立ち上がってニームの背後に立つと、眼下の様子を眺めながらエスカがそう呟いた。

その隊列にはニームも感心したようで、エスカの言葉に素直に反応した。

「実は奴らは全てルーンで動くからくり人形なのだと言われても信じてしまいそうだな」

そう言った後で、小さなため息を一つついた。

だがその場に訪れた変化は、見事な隊列に微妙な乱れを生じさせていた。

それは闖入者の存在である。

広場正面に革の鎧兜に身を包んだ二騎の騎馬がそれぞれ旗を掲げ、並足で近づいて来ていた。

一騎が持つ旗は黄色い四翅のスズメバチ。外国人であるエスカもよく知っている、有名な親衛隊旗である。

そしてもう一騎が持つのは赤い六翅のスズメバチの旗章。すなわちキャンタビレイ侯爵のクレストであった。

六翅のスズメバチのクレストと四翅のそれが列んで掲げられていると言う事はつまり、キャンタビレイ大元帥自らが率いる親衛隊がエッダに到着した事を示していた。親衛隊旗のみの場合は大元帥は同道していない事を示すのである。

通常の部隊であれば、エッダの町の城壁の外で近衛軍の出迎え、つまり検察を受ける事になっているが『親衛隊』だけは無条件でエッダの城壁を通過することが許されている。親衛隊を検察できる権限を有しているのは王宮の入口だけなのである。

エッダ広場中央の近衛軍の隊列は一瞬崩れたように見えたが、すぐに川の流れのような秩序を取り戻し、軽く五百名を超える兵がその二騎の先遣の行く手を塞ぐような壁を構築した。

「ある意味、これは主役の登場の前触れと言えるな。先ほどの噂話の」

ニームの言葉通り二騎の騎馬は先触れであり、部隊が程なく王宮に到着することを告げに来たのである。

「来るとは思っていたが、ギリギリかよ」

「私は来ないと思っていた」
「そうか。どっちにしろいよいよ噂の真相がわかるわけだな」
エスカはそう言いながら夕べのトルマの言葉を思い出していた。
彼自身が決めた「自分の往く道」を具体的に聞けたわけではないが、おそらくそれを含め全ての鍵を握る事になるのはガルフ・キャンタビレイ大元帥の出方次第であろうと思っていたのである。
つまり、彼が舞台に上がらなければ他の役者が動き出せないと言う事である。だからこそエスカはガルフの登場を確信していたのである。ガルフ自身が物語の登場人物であるならば、舞台を放棄するわけがないのだ。

先遣の騎馬の到着を受けた近衛兵のうち、いわゆる槍兵と呼ばれる者達が彼らの眼前に長く厚い壁を作った。その壁が築き上げられた後、間を置かず広場中央から一人の人物がゆっくりと進み出た。
それは白っぽい近衛軍の軍服に、特徴的な頭頂部の長い儀仗を手にした初老のデュナンであった。
近衛軍大元帥であるサミュエル・ミドオーバ。
彼が「壁」に近づくと僧兵で築かれた壁に扉、いや隙間ができた。中央にぽっかりと空いた通路をゆっくり歩いて、彼は先遣の二人の騎兵の前に歩み出た。

「これはミドオーバ大元帥閣下、お久しぶりでございます。お元気そうで何よりですな」
四翅のスズメバチの旗を掲げる先遣兵の一人は革兜を脱いで一礼すると、騎乗したままでそう声をかけた。
槍兵の正体は誰あろう、ガルフ・キャンタビレイの腹心。リーン・アンセルメ少尉であった。
「それにしても大葬とは言え、やけに物々しい検察ですな」
リーンは額に手をかざしてわざとらしく広場を見渡す振りをするとそう続けた。

「大葬だから、と言っておこう。なあに、見せ物の様なものじゃよ。他国の要人がいらっしゃる手前、形だけでも整え、かつ大仰な警備体制を敷いておく振りをしておかねばな」

サミュエルは騎馬兵の一人の正体は既に知っていた。同時にリーンが自分に対して胸襟を開かぬ人間であることも。もっともそれはお互いに織り込み済みと言えるもので、取り立ててここで何かが違うと言う事ではなかった。違うのはリーンが手に持っている旗の種類である。サミュエルはそちらの方がむしろ気になっていたのである。

つまり、普段ならばリーンが持つはずの六翅のスズメバチの旗章を持っているもう一人の騎馬兵の存在である。

おそらくはリーンの「仕掛け」であることは間違い無いと思われた。だがその仕掛けが今の段階ではサミュエルには見当が付いていないのだ。

とはいえサミュエルの言葉には戸惑いや敵意などはまったく感じられない普段通りの落ち着いたものであった。

「なるほど。『振り』ですか」

リーンは軽い嫌みともとれる口調で『振り』を強調すると槍兵の外側にいる弓兵を一通り眺めると軽い嘲笑のようなものを浮かべて見せた。

サミュエルはリーンのその表情を見て少しだけ顔を強ばらせたが、それはほんの一瞬の事で、すぐに元の柔和な顔に戻ると話題を転じた。

「時にリーン。我が盟友にして賢兄、ガルフ・キャンタビレイ大元帥は息災か？　ノッダの気候は持病に辛かろう。後で神経治療に秀でたハイレーンを向かわせると伝えておいてくれ」

「それは我が主も喜びましょう。このところ毎朝のように腰をさすって辛そうにしていらっしゃいます故」

四翅のスズメバチの親衛隊旗を掲げた騎上のリーン・アンセルメはそう言うと、初めてにっこりと笑って見せた。

サミュエルは満足そうに彼に対しうなずくと、今度は視線をもう一人の騎馬の兵に向けた。

六翅のスズメバチの侯爵旗を持つのは背中に長い槍を背負った槍兵で、革兜のせいで顔はわからなかったが体つきからまだ若い女のアルヴのようだった。どちらにしろその槍兵はサミュエルの既知の者ではないのは確かで、その人物自身がリーンの仕掛けであると判断していた。

どういう仕掛けをしてきたのかは知るよしもないが、それならその仕掛けに素直に乗ってみようと決めたようで、サミュエルは革兜を被ったままのその槍兵に声をかけた。

「侯爵のクレストである六翅のスズメバチの旗章をリーン以外の人間が掲げるのを見るのは初めてだが、そなたは親衛隊の者か？　できれば顔を見せて欲しいのだが？」

サミュエルの問いかけには答えず、その槍兵はゆっくりとリーンに顔を向けた。判断を下すのはリーンなのであろう。少なくともサミュエルは謎の槍兵が独断でこの場を支配するような存在ではないと判断した。

リーンがうなずくのを見て、件の僧兵はようやく顔全体を覆っていた革の兜（かぶと）を脱いだ。

そこに現れたのは、サミュエルが想像していた勇猛な女兵士からは、およそもっとも遠いところにいるような戦意のかけらも感じられない、ぼんやりとした表情のまだ若い女アルヴだった。

いや、アルヴではない。女の瞳は緑ではなかったのだ。

兜を脱ぎさると同時に、中でまとめていた長い髪が一気に降りた。直後、それを見た近衛兵の口から、ため息とも感嘆ともいえる声が一斉に漏れた。

素顔を見せた槍兵はどよめきにも何の反応も示さず、さらに言えば視点が定まっているのかどうかすらわかりづらい顔をリーンからサミュエルに移した。

# 第八十二話　木刃の槍兵

「ぶっ！」
「な、何をするっ！」
窓から一連の様子を眺めていたニームの背後に立ち、同じく事の次第を見守っていたエスカが、口に含んでいた紅茶を盛大にニームの頭に吹き出したのだ。
「ズ……」
「ズ？　……っていうか、エスカ、あなたハナが出ているぞ、まったくみっともない」
「ハナなんざどうでもいい。そ、それよりよく見ろ！」
「え？」
鼻水を垂らしたままの間抜け顔のエスカが顎で示したのは、今までずっと眺めていた先触れの騎馬兵士である。
その長い槍を背負った女兵士がサミュエルと何かやりとりをしているのが見えた。
「あの槍兵がどうかしたのか？」
「お前、今日はぼんやりしすぎだぞ。とにかくあの槍兵の顔をよーく見ろ。いや、顔を見る必要すらねえだろ！」
ニームは言われるままに、そのアルヴの女兵士を目を凝らして見つめなおした。
「ぶっ！」
「汚えぞ、ニーム。窓にしぶきを飛ばしてるんじゃねえ！　まったくみっともない」
「う、うるさい。それより元帥に無許可で悪いが、ルーンを使う」
「え？」
「エスカ。あなたはあいつらがいったい何をしゃべっているのかを聞きたくはないのか？」

「おお、もしや？」
「その『もしや』だ」
ニームはそう言うが早いか儀仗セ・レステを取り出した。

リーンともう一人の鞍上の槍兵は相手を見下ろす格好でサミュエルと対峙していた。少尉という階級でしかないリーンにとって、大元帥を見下ろしたままで会話を行うという行為は現在の価値観では奇異に映るが、当時のシルフィード王国では騎乗・着兜（ちゃくとう）のまま使命を遂行する事は先触れだけに許された行為であったという。それだけに先触れの役を一兵卒に任せるなどという事は無く、通常は幕僚級の立場ある者がその任にあてられていた。それも現代とは異なる作法である。
ガルフの場合は階級より何より誰もが知る腹心のリーンを先触れとしたのであるから、近衛軍に対しては最大の礼を尽くしていると言えるだろう。

侯爵家のクレストを掲げた槍兵に興味を持ったサミュエルの一挙一動をリーンは注意深く観察していた。本来なら先触れの顔が既知であろうが未知であろうがさほど気にする者は居ない。階級が高ければ高いほどその傾向があるものだが、サミュエルはその例からは漏れていたと言う事である。そしてそれは同時にサミュエルが未知の者を警戒する立場にあると言う事を白状している行為ともとれた。
（事が事だけに用心深いと言うべきなのだろうな）
リーンは表情を変えずサミュエルに改めて一礼すると、槍兵の紹介をした。
近衛兵のざわめきはさすがに完全に収まっていた。訓練された彼らにして思わず感嘆の声が出てしまったのは、兜をとった際に肩に流れ落ちた槍兵の髪の色にあった。
金と赤の斑髪。その少女はモテアの髪を持っていた。
長く豊かな髪が扇状に眼前の少女の肩に広がったのである。おそ

らくその場に居た全員が生まれて初めて見るモテア、それも日の光に透けて輝く金と赤と昼星の光が織りなす妙に思わず見惚れたとしてもさもありなんと言うべきであろう。

近衛兵に一瞥を与えてしかるべきサミュエルも一瞬声を失うほど、その少女は見事な髪を持っていたという事である。

「この者は実はキャンタビレイ侯爵家の客人でして、我々がエッダに帰るというと、どうしても名にし負う近衛軍大元帥閣下を一目だけでも拝したいと申すではありませんか。侯爵もさすがにそれは出来ぬと一度は申し上げたのですが、ご婦人は海を渡り遙々遠方より来られた客人でもあり、たっての願いを無下に断り追い返す事はキャンタビレイ家としては如何なものかと考え直した末、何かいい手は無いものかと案じました。そこで私がない知恵を絞り一計を案じたわけでございます。すなわち、キャンタビレイ侯爵と家督権のない『義養子』の縁組を行いました。仮ではございますが作法上は侯爵の娘を名乗れる立場を得て、こうやって先触れの役を負っております。紹介が後になった無礼、なにとぞお許し下さい」

サミュエルは柔和な表情でリーンの話を聞いていたが、紹介が終わると改めて件の槍兵に声をかけた。

「そうまでして私に会いたいとは嬉しい話じゃな。名を聞こう、モテアの娘よ」

騎上の槍兵は相変わらず焦点が合わないようなボンヤリとした表情のまま、サミュエルにぺこりと頭を下げた。

「スノウと申します、ミドオーバ大元帥閣下」

「スノウか。族名も聞いておこう」

「キリエンカ。スノウ・キリエンカと申します。閣下」

「キリエンカ……シルフィードでは聞き慣れぬ族名だな」

サミュエルの記憶に、キリエンカという族名は記されていなかった。もちろん彼にはモテアの少女が口にしたキリエンカという族名

が本名かどうかはわからない。しかし少なくとも目の前のアルヴ…いや、耳が細く尖っていないところを見ると、間違いなくデュアルであろうが……の少女が危険な存在だとは思えなかった。背に負う槍も一目で木刃とわかる。スフィアが埋め込まれた華奢な柄の細工を見ても、それが戦闘用の武器というよりは観賞用のそれであろうと思われた。

姿を見て名を聞いてもなお、サミュエルにはリーンの「仕掛け」の意図がわからなかった。

思案をしている様子のサミュエルに、リーンは補足した。

「スノウ殿は我が国の方ではなくドライアドはエスタリアの出身です。供を連れ諸国を旅し、見聞を広めているとのことです。話によればキリエンカ家では嫁入り前の娘には必ず一年間、諸国を旅する事を課し、自らの視点を磨かせ、視野を広げさせるのだそうです。なかなか面白い話ではありませんか？」

サミュエルは顎のヒゲに手をやり思案をするような仕草を見せた。

「ふむ。エスタリアでは確かにそのような風習があるように聞き及ぶ。なるほど」

リーンの話はあながち出任せではない。エスタリア地方には現在でもその風習は存在する。もっともそれは親の決めた婚姻に従う事を前提に行われる猶予期間のようなもので、意に沿わぬ結婚を娘に強要する親の詫びとも言える。

与えられた一年という猶予を親元を離れてどう使うかは娘の自由であるが、通常は供、つまり親が選んだ監視役を数名連れて行くのが普通で、完全に自由な旅と言う訳にはいかないようだ。

シルフィードではもともとドライアドのように娘が親の都合で結婚相手を強要されるという風習が存在しない。故にエスタリアのその風習はリーンにとって奇異に思われたが、デュナンの国、つまりシルフィード以外では当たり前の話であった。そして殆どの場合は

そのまま親に従うか、さもなくば騒動を覚悟で抵抗するかという選択肢しかない所であるが、エスタリアには執行猶予とも緩衝材とも呼ぶべき風習が存在していたのである。

「スノウがなぜこんなところにいるんだよ？　あいつはエスタリアに帰ったはずだぞ？」

エスカはニームを睨み付けるととがめるように言葉をぶつけた。

それを受けてニームは小さなため息をついた。

「あなたはバカなのか？　私に聞いてもわかるわけがない」

「お前は賢者だろ？　しかも大のつく賢者だろうが？　意味は『すっげえ賢い奴』なんだろ？　だったらそれくらいちゃっちゃと答えろ」

「まったくバカ殿の弟だけあって、あなたにもバカの血がたっぷり流れているようだな」

「そのバカがいったい何を考えてるかが問題だろう？」

「悪いがバカの考える事など私にはわからぬ。それよりなぜスノウは親衛隊の兵装をしているのだ？」

「あれは親衛隊先触れの正装みたいなもんだろ。それにしても四連の白野薔薇のクレストを掲げているならまだ話はわかるが……」

「六翅のスズメバチ……。確かキャンタビレイ家のクレストであったな」

トルマの部屋でそんな会話が行われている間にも「現場」では話が進んでいた。

「ほう。これはこれは。あの『白の国』からの客人でしたか。しかし先触れ役などという回りくどい事をせずとも、キャンタビレイ侯爵家の客人であれば喜んでお会いしたものを。それにあなたにはそのようなむさ苦しい格好よりもたおやかな衣装の方が百倍も似合うことでしょう」

サミュエルは人の良い笑顔でそう言うと両手を広げて歓迎の意を

表した。騎乗のスノウはそれを見ると慌ててぺこりと頭を下げた。
「お、おろせいります」
「？」
「お、おそれいります」
挨拶を失敗したスノウは、そう言い直すと慌てて再びペコリと頭を下げた。
「スノウ殿は緊張すると滑舌が意に沿わなくなる事が多いそうで」
「なるほど。そう緊張せずエッダではごゆるりとお過ごし下され」
リーンの説明にサミュエルは眼を細めて苦笑すると、話を続けた。
「『白の国』エスタリアと言えば、大葬にご参列予定のドライアドの国王名代ペシカレフ公爵様のお側付きとして、エスタリア領主の弟君がちょうどお越しですぞ」
「エスカが……」
スノウのボンヤリした表情が一瞬だけ崩れた。片方の眉が少し持ち上がったのだ。
「左様。エスカ・ペトルシュカ男爵がお越しです。遠く離れたエッダで故国のご領主家と巡り合うとは実に奇遇ですな。ぜひスノウ殿も今宵の晩餐に……」
「いえ」
スノウはサミュエルが皆まで言わぬうちに、招待を即座に断った。
「閣下にお目にかかれただけで僥倖でございます。これ以上望んでは父に叱られてしまいます。それに今夜はできればエッダの町を遊山したいと思っております」

「なんだ。晩餐会でスノウには会えんようだな」
残念そうにそう言うニームに対し、エスカはその後ろでため息をついていた。
「いやあ、どうやら刺客じゃなさそうで良かった」
「刺客？」
ニームは怪訝な顔でエスカを見上げた。

「ノーム山から吹き出す溶岩もかくや、って具合に怒り狂ったバカ兄の命令で俺を刺し殺しに来たのかと思ったぜ」
「何だと？」
ニームの表情が一瞬でこわばったものに変わった。
それを見たエスカは、ニームが出発前の桟橋での事件を思い出しているのだと勘違いした。
ニームの頭にポンと手を置くと、髪をくしゃくしゃとかき回しながら静かな口調で言い聞かせるようにつぶやいた。
「今のは冗談だが、実のところスノウをバカ兄の元に戻すっていうのは、そうされても文句を言えないくらい重い事なんだぜ。俺達兄弟にとっては、な」
それはニームの不安を払拭しようと口に出した言葉だったが、ニームが見上げたエスカの苦笑は寂しげな色に染まっていた。
そして何よりその言葉はニームにとっては慰めにはならなかったのだ。兄の怒りはエスカが考えている以上のものだと、すでにニームは知っていたからである。
「まあその辺の事情はそのうち話すさ」
エスカは自分を見上げるニームの視線に気付くと、そう言ってにっこり笑いかけた。
「あなた達が……いえ……」
「ん？」
「ミリア・ペトルウシュカが妙な人物だと言う事はわかっているつもりだ」
ニームはそう言うと視線を下ろした。その先には自分の両手があった。ニームは意識せずにその両手を握ったり開いたりして感触を確かめていた。確かにそこに存在している自分の手を確認するように。
そのニームの仕草を見ても、エスカは特に何も感じることはなかった。ただ、いつもより塞ぎ気味な事が多少の気がかりではあったが。

「そんな事より、そろそろお出ましのようだぞ」
エスカの声にニームは中央広場に顔を向けた。リーンとスノウの先触れ二人の後ろに、ちょうど二十騎ほどの騎馬兵がずらりと並び終わったところだった。
「あれが有名なシルフィードの親衛隊か」
誇らしげに四翅のスズメバチの旗章を掲げる騎馬兵は、その存在感だけなら眼前に包囲網を敷く近衛軍の中隊を圧倒しているように見えた。中でも中央の一際大きな騎馬にまたがるがっしりとした体躯のアルヴは別格であった。
その手に持つ長い槍は優にニームの身長の三倍以上の長さがあった。刃の根本には真っ赤な六翅のスズメバチの旗章がくくりつけられていた。
「あれがそうか。俺もこの目で見るのは初めてだ。なかなか威圧感がある。」
「よく見ておくとしよう。敵になるか味方になるかはわからぬが、どちらにしろシルフィードの軍の顔だ」
「いや……」
「何だ？」
「うむ……」
「まさかエスカ・ペトルウシュカ少将ともあろう人物が伝説的な人物を前に怖じ気づいたのではあるまいな？」
「いや、元々俺は怖じ気づいてるんだが……って、そうじゃなくてさっきの台詞（せりふ）だ」
「台詞？」
「キャンタビレイ大元帥がシルフィード軍の顔かどうかは今や微妙になったと見るべきだな」
「なぜだ？　シルフィード王国の王国軍大元帥と言えばシルフィードでは軍務大臣であろう？　軍の最高責任者だ。国王であるイエナ三世はまだ若輩だ。夕べのトルマ・カイエンの話が真実で、たとえ

あの近衛軍大元帥が暗躍しているとしても、今現在はまだこの国の軍事はあのガルフ・キャンタビレイが握っているのではないのか？」
「近衛軍大元帥がウスノロでトンマな男なら、な」
ニームは再びエスカを見上げた。その表情はすでに戦場にある指揮官のそれであった。ニームはそこにエスカの覚悟を垣間見た気がした。
「俺がこの事件の首謀者なら、目の上のたんこぶをつぶす手はずは整えてあるがな」
「ほう、例えば？」
「軍事的に自分より強力な立場の人間をそのまま元の椅子に座らせると思うのか？　まず、すでに軍務大臣の座るべき椅子はこの王宮にはないはずだ。その辺は根回しをして今日を迎えているに違いない。お前も夕べのカイエン元帥の奥歯に物が挟まったような言い回しをきいていたろ？　それにあの人は何かを決心するとも言っていた。決心すなわち体制からの離脱ってことだろ？」
「しかし傀儡の王を据えて実権を握る為にアプサラス三世を暗殺したなどという噂をまさかこの国の重鎮達が信じているわけではあるまい？」
「信じていようがいまいが、非常時にエッダの実権を握れるヤツは一人しかいねえだろ？」
「軍事力としては、近衛軍など王国軍に比較すればとるに足らないのだぞ？　ガルフ・キャンタビレイがその気になれば、近衛軍など……」
「聡明すぎるほど賢いくせに、そう言うとこ、お前はまだ子供だな」
「え？」
「お前は本当に頭がいい。だがまだまだ人間の本性を知らねえな」
「しかし、ここは義の国、アルヴの王国シルフィードだぞ」
「近衛軍大元帥はデュナンだぜ」
「あ……」
エスカの指摘に、ニームは今まで自分が極めて重要な事を綺麗に

見過ごしていた事に気付いて愕然とした。
「俺ならここにたどり着く前に蜂退治は終えて、大葬を側臣交代の場にしようとするだろうな」
「バランツの件は、それだと言うのか？」
「ミドオーバ大元帥は失敗したんだよ。だが、あれをやったのはノッダにこもってた親衛隊じゃねえ」
「すると、どういう事になる？」
「そこなんだ。だがお前と話をしてて、少し読めてきた」
「読めてきた？」
「スノウがわざわざ親衛隊の兵装までして先触れ役に『された』意味がわかったぜ」
「え？　え？」
エスカは右手の親指をかじり始めた。
それは考え事をする時のエスカの癖で、多くの場合、頭の中に閃いた事象をまとめようとする時に見られる行為だった。
「ふん、第三勢力でもなんでもねえな。たぶんこりゃあバカ兄貴からの挑戦状だ。それも、サミュエル・ミドオーバでなく、おそらく俺に対する挑戦状だ」
「エスカ……」
「詳しい理由はまだわからねえが、バカ兄があの四翅のスズメバチの旗を掲げる親衛隊の大将と何らかの密約をしたことは間違いねえよ。バランツの件はバカ兄の仕業だ。スノウはそれを暗に俺に知らせる為に、いや、その為だけにあそこに姿を見せたに違いねえ。俺達が大葬に列席している事は当然バカ兄は把握しているって事だ」
エスカのその言葉を待っていたかのように親衛隊の脇に控えていたスノウが、ゆっくりと顔を上方に向けた。
「え？」
ニームにはスノウが自分達の方をじっと見つめているように見えたのだ。

「たまたまだろう。さすがにそこまで……」
それを告げられたエスカは一笑に付したものの、背中に寒いものを覚えた。
「そうだな。でも……」
どういう事？　という疑問に満ちた目で、ニームはエスカを見上げた。それは今し方エスカが告げた「スノウが来た意味」についての問いかけであった。
「とはいえまだ謎だらけだが、一つだけわかったことがあるぜ」
「わかったこと？」
「ああ。キャンタビレイ大元帥は、やはりアプサラス三世の暗殺には無関係だ」
「それじゃ？」
「あ、それともう一つだ。今回の国王交代劇の裏には何らかの陰謀があるのも、もはや間違いないな」
「エスカ……」
「ん？」
「改めて尋ねる。あなたの兄とは、いったい何者なのだ？　いったい何をしようとしている？」
「ふん」
エスカは鼻を鳴らすとあからさまに不機嫌そうな顔をして、窓からスノウの姿を見下ろした。
「ただのバカさ」
「ただのバカが一国の重鎮と組んであなたに謎かけをしてるとでも言うのか？」
「謎かけじゃねえよ」
エスカは再度ニームの頭に手をやると、今度はそっと撫でた。
「さっきも言ったようにこれは多分、宣戦布告だぜ」
「エスカ……」
「見ろよ、ありゃ尋常じゃねえ。いよいよ始まるのさ、ファランドールを根底から変えちまう戦争がな」

ニームは真顔で広場を凝視するエスカの視線を追った。
武器を構えた近衛軍の中隊とまるで対峙するかのように四翅のスズメバチの旗をなびかせた親衛隊が二十騎ほど横一列に並んでいた。
ニームはそこで目を見開いて驚く事になった。景色が一変していたのだ。
親衛隊だけではなかった。
気がつけばその後ろに伸びる大通りがいつの間にか兵で埋め尽くされていたのだ。
それは一個中隊の近衛軍を圧倒、いや一蹴するに足る王国軍のの兵士の数であった。
「これは驚いたな……」
ニームは素直にそう感嘆の声を漏らした。
よく見れば広場に続く大通り四本全てが同じ光景であった。見渡す限りの大群である。数は千や二千ではない。十万の単位に違いなかった。
通りを埋め尽くした王国軍が掲げていた旗は二種類。
一つは『麦と剣』をあしらったシルフィード陸軍の軍章。そしてより大きなもう一つの旗に描かれていたのは『二輪の桜花』のクレスト、それはすなわちカラティア朝シルフィード王国を示す旗であった。

# 第八十三話　二人の大元帥

中央広場は、いやエッダは今、かつてない緊張に包まれていた。
押し殺されたどよめきが生む異様な沈黙が支配する中、一人の男が堂々とした所作で自らの役目を演じようとしていた。

「長く留守にしてすまなかったな、サム」
大柄な馬から降りたガルフ・キャンタビレイは、同じく馬から降りた二人の側近、すなわちリーン・アンセルメとスノウ・キリエンカを従えてサミュエル・ミドオーバの前に歩み寄った。
対峙する二人を見守っている数万の「観衆」全員に緊張が走った。
その場には物音一つ立てる者はおらず、それどころか呼吸することさえ躊躇われるほどの静寂が王宮前のエッダ中央広場を支配していた。
普通に考えれば王国軍の最高司令官が国家行事の為に王宮に帰ってきた事が緊張を呼ぶわけはない。問題はエッダ中に蔓延していた噂にあった。それはもちろん「バランツで哨戒にあたっていた近衛軍の中隊を、住民もろとも皆殺しにした」とされる真犯人がガルフ・キャンタビレイ大元帥率いる親衛隊ではないかという噂である。
もちろん証拠はない。むしろ噂を否定する状況証拠しかなかった。しかし近衛軍の一個中隊を全滅できる部隊が王国軍以外に果たして存在するのかと問われると誰もが口を閉ざすのである。
外国の軍隊が首都エッダの近くに侵攻しているなどという事は考えにくい。
エッダ周辺には私兵、州兵と言われる軍隊などを持つ貴族はもともといない。
ファランドールでは例外的に治安のいいシルフィード王国では、いわゆる賊の類も考えられない事だった。

ましてや全滅したのは数多くのバードを要し、近衛軍でも一目置かれている『蛇使いのアヨネット』ことクリヨン・アヨネット中佐の部隊である。相手は相当の手練れ、かつ組織的な大部隊であろうと思わざるを得ない。そんな統率の撮れた「賊」が居るなどと考える方がどうかしていると言うものであろう。

要するに王国軍犯人説が生じたのは消去法によるもとも言えたが、その黒幕があろう事かシルフィード王国にとっては歴史的な忠臣であり前王アプサラス三世の側臣であるキャンタビレイ侯爵、すなわち王国軍大元帥ではないかという憶測は、さすがに消去法だけでは根拠としては弱い。

だが、噂を補強する根拠はあった。話をきな臭い方向へ誘う出来事、すなわち新しい国王が自ら選んだ名前がそれである。

新王の名前は、公式に発表される前から「エルネスティーネ一世」に内定している事が広く認知されていたからである。

それはアプサラス三世の存命中に自身の口から非公式ながらではあるが、発表されていたものだからだ。

アプサラス三世は次代を任せる者には過去にない名前の王であって欲しいと願っていたと言う。ご存じの通りエルネスティーネとは「花咲き乱れる草原」という意味である。遷都と合わせ月という大きな二つの出来事を乗り越えた新しい時代を、まっさらな名前の王が統べる。その王の名として「エルネスティーネ」がふさわしいとアプサラス三世は考えたのだ。

幼名をそのまま王になって受け継ぐ。引き継ぐのではなく自らが切り開く役を負う。それが「一世」の持つ重みであり、エレメンタルである王の名としてふさわしいのだと。

アプサラス三世が自らの娘の誕生に臨んで付けた名前の背景を、シルフィードの国民は皆しっていたのである。そしてもちろん、王女エルネスティーネ自身も。

だからこそ『イエナ』という封印された女王の名を敢えて継いだエルネスティーネ王女に、当初国民の多くは疑問を持つとともに大

きな衝撃を受けた。イエナ二世の伝説を知らぬシルフィード国民はまずいない。従って国民の戸惑いは無理からぬものだと言えた。

その後で起こったのが件のバランツでの怪事件である。まるでエルネスティーネの行為に意味を持たせたかのように。

常にイエナの名と対になるのがキャンタビレイ家である。しかもご丁寧な事に伝説のキャンタビレイ家の当主の名は奇しくも大元帥と同じガルフである。

人々はそこに言葉に出来ない国王の意図があるのではないかと考えた。

エルネスティーネはキャンタビレイ家を連想させる王の名を敢えて名乗ったことで、国家に迫り来る危機とその黒幕を示したのではないか、と。

もちろんこの風聞には何者かの思惑が入っている事は想像に難くない。しかし臣・民の別なく多くの人々は、並べられた数々の出来事がまるで符号のように疑問という鍵穴にぴったりとはまるその噂を、頭ではなく心の底で信じないまでも、納得し始めていたのである。

噂の信憑性を嵩上げしたのはガルフ本人でもあった。

イエナ三世の名で出された公式のエッダへの帰還要請に対し、ほぼ一月もの間にわたり様々な理由をつけて帰還を伸ばし続けていた事は紛れもない事実である。

王国軍大元帥は軍務大臣という国家の重鎮でもある。本来ならばアプサラス三世崩御の報を受ければ即座に王宮に戻るのが自然な行動であろう。

しかし人々が耳にしたのは健康上の理由や不慮の怪我、あるいはノッダの工事の重大な事故の発生などの理由で、大元帥がまるで何か後ろ暗い事が在る為に様々な言い訳を使い、帰還を渋っているとしか思えない話ばかりであった。

とは言え他国の要人も参列する一大国家行事といえるアプサラス

三世の大葬には、いかなる理由があろうと帰還するであろう事も予想済みであった。

果たして親衛隊を先頭にノッダ駐留の王国陸軍の中隊が二つほどエッダに向かったという情報が駆け巡った。人々はそれを聞くと大元帥の帰還をそわそわとした気持ちで今や遅しと待ち構えていたのである。

結局大葬の当日になってやっとエッダ入りしたガルフであるが、人々がまず度肝を抜かれたのは彼が従えていたその部隊の数であった。

事前の情報では親衛隊を除き、随伴するのは中隊が二つだけのはずであった。

しかし今現実にガルフ・キャンタビレイ王国軍大元帥が率いていたのはユリスカラント通りをはじめ、王宮前広場に続く四つの大通りを全て埋め尽くすほどの大軍隊であった。

それは中隊が二個などという平和な数ではなく、優にその百倍の規模があった。

もちろん王宮前広場になど入りきれるはずも無いほどの非常識な兵の数なのである。

単純に言ってしまえばたとえ軍務大臣と言えど、要人がただ帰還するだけには明らかに多すぎる部隊であり、見方を変えれば近衛軍が守るエッダ城を王国軍が圧倒的な兵力で包囲している状況だといえた。

道の両脇に退いて通りを埋め尽くす兵士達を見ながら、人々は不安に包まれていた。

もちろん「あの噂」が本当かもしれない、という不安である。

ただでさえ敬愛されていたアプサラス三世の、アルヴィンとしては夭折ともいえる若すぎる年齢での唐突な崩御により国民は動揺を隠しきれずにいた。そこへ持ってきて盤石と思われていた国家体制が覆るかもしれないような黒い噂の蔓延である。

もっともらしいが信じたくはなかった噂が、ここへ来て真実味を帯びた展開を見せ始めたのである。

「こ、これは何事だ？軍隊が我々を取り巻いているのではないのか？」

それまでおとなしかったマルク・ペシカレフがそわそわしだした。

「まさか奴ら、ここに集まった各国の要人を皆殺しにするつもりではあるまいな？」

「大丈夫ですよ。冷静になられよ、ペシカレフ公爵」

エスカの代理としてマルク・ペシカレフの側付きになったフェルン・キリエンカ少尉待遇事務官は大きめの声でドライアド国王名代をたしなめた。

浮き足立っていたのはマルクだけではなかった。だからフェルンとしては大きな声を出す事で周りに対して同様の注意を喚起したつもりであった。

「心配は無用です。これは軍事国家であるシルフィード流の演出でしょう」

フェルンの言葉に黙りはしたものの、それでもマルクは不安そうな顔で椅子から立ち上がったまま落ち着かぬ様子で二人の大元帥の方を見ていた。遠すぎて声が届かないだけに余計に不安を感じているようだった。

同じくマルクの側付き役であるリンゼルリッヒ・トゥオリラとジナイーダ・イルフランの両神官はお互いにうなずき合うと、いつでもルーンを唱えられる体勢を整えた。

作法として会場には儀仗を持ち込めない。だから強力で精密なルーンは唱えられなかったが、名代マルクとフェルンをできるだけ安全に会場から逃がす為の方策は事前に考えてはいたのだ。その点二人は長く一緒に居た為に段取りなどに綻びはない。小さな声で二言三言話すだけで事が起こった時にお互いが受け持つ役割を再確認した程度である。

静まりかえった王宮広場にガルフの掛け声が響き、怒濤のような鬨の声を上げながら王国軍の兵達が近衛軍に斬りかかり付近一帯があっと言う間に血の海に変わってしまう前に、活路を開く自信が二人にはあった。

「久しぶりに顔を見せたかと思えば、さすがに少々演出過剰であるな、ガルフ」

「随行は二個中隊程だとでも思っていた驚きようだな、サム？一言で言えば『想定外の事態』であろう？」

ガルフはサミュエルが表だっては動揺を見せていない事に満足したような顔でそう言った。

それはつまり王宮回りには間違いなく堅固な精霊陣が張り巡らされており、サミュエルが儀仗を一振りすれば親衛隊であろうが五個大隊であろうが恐るるに足らずという万全の体制は敷いているという事である。

そうだとしても、もちろんそれはガルフの想定通りであった。

おそらくは精霊陣の要所と思われる場所にはサミュエルが選りすぐったバードが配置されているのであろう。

ガルフはそれをわかっていて自らサミュエルの罠の中に入っていったと言う事である。もっとも罠があれば、ではあるが……。

サミュエルはガルフの皮肉ともとれる言葉に肩をすくませると、広場に続く大通りの兵を順に眺めた後で答えた。

「二個中隊か。そう言えば確か、そのような情報を受けていたな」

「それでわざわざ一個中隊もの兵を広場に配備して我々を出迎えてくれていたというわけだな。一言でいえば『大歓迎』か」

聞きようによっては皮肉ともとれるガルフの言葉に、しかしサミュエルはいつもの高笑いで応えた。

「フォッホッホ。何、先ほどリーンにも話したが各国の賓客の方々に対する我が王国の宣伝のようなものじゃよ。王国軍大元帥率いる

親衛隊の検閲式は軍の公式行事だと言う事で、大葬参列のお歴々には少しの間余興として楽しんでいただくつもりだったのだ。行事自体は見栄えの良いものにして差し上げんと周りから色々と文句を言われてかなわんのでな。特にデュナンは儀式にあたっては派手な演出を好むからの」

そう言うとサミュエルは持っていた儀仗の頭頂部「星を呑む獅子」を参列者のいる広場中央へ向けた。

「時に、陛下のご様子はどうだ？」

懐から取り出した何本かの結布を手首に巻き、その手で握られた儀仗に耳をあてていたニームは儀仗から耳を離さないようにしてエスカの方に顔を向けた。

とはいえ、同じように儀仗に耳をあてていたエスカの顔は目の前にあったのだが……。

「あ……」

あまりにエスカとの距離が近い事にその時はじめて気付いたニームは、思わず儀仗から頭を放した。

「今更驚くなよ。本当にお前、今日はちょっとぼんやりし過ぎだ。だいたいお前が儀仗のこの部分でしか聞こえねえって言ったんだぞ」

「そ、それはそうだけど……」

有視界、そして近距離であれば離れた任意の場所の声や音を儀仗を通じて増幅して聞くことができる何とも便利なニームのルーンを使って、二人はガルフとサミュエルのやりとりを全て聞いていた。だが、その声が聞こえる場所は儀仗の一部分に限られていて、二人は顔を触れあうほど寄せ合ってそこに耳をあてていたのである。

ニームは真っ赤な顔でエスカを睨むと、渋々元の場所に耳をあてて目を閉じた。

「おい」

「な、何？」
「こんな近くでそうやって目を閉じられると、そのかわいらしい唇をもらっちまう事になるぞ」
「な・な・な・な！」
ニームは弾かれたようにエスカから遠ざかった。それを見てエスカは肩をがっくりと落とした。
「おいおい、この程度の冗談にいちいち過剰反応するんじゃねえよ。聞こえねえだろ、早く杖をよこせ」
「じ、冗談だと？」
ニームの目は今まで見たこともないほど吊り上がり、エスカを睨み据えていた。そうしているニームはいつも通りだと言えた。
「冗談じゃねえ方がいいのか？　俺はどっちでもいいんだが」
「ぐ……」
ニームはさらに目を吊り上げると、突然第三の眼を開いた。
（あちゃ。からかいすぎたか）
エスカはニームの赤い三つの瞳を見て「しまった」と思ったが、すでに後の祭りだった。その部屋の空気がニームの第三の眼の出現と同時に一瞬で入れ替わった気がした。
エスカの目の前にいた真っ赤な顔をした可憐な少女の姿はなく、そこにはもはや禍々しい気を纏う異質の人間がいるだけであった。
「わかったわかった。俺が悪かった。だからその眼を早くしまえ」
「あなたという人は！」
顔を赤くしたまま、真っ赤な三眼を見開いた少女はエスカをまっすぐに見つめながら続けた。
「あんまり私を刺激しない方がいい。自分の意思ではなく、外的要因により興奮させられた状態で無意識にこれが出ると、自分でも抑えられるかどうか自信がないのだ」
「抑えるって、何を抑えるんだ？」
怪訝な顔のエスカがそう問うと、ニームはハッとしたように目を逸らし杖を持たない方の手で額の目を隠した。

「この際だから、言っておいた方がいいのであろうな……」
独り言のようにそうつぶやくと、ニームは改めてエスカをじっと見つめた。第三の眼を隠したままで。しかし、残る二つの目は燃えるように真っ赤なままだった。
「私のこの眼は……その……血を欲しがるのだ」
その一言に、エスカの顔色が明らかに変わった。
ニームが冗談でそんなことを言っているのではないことがわかった。そして三眼になった時に感じる得体の知れない恐怖の意味が、その言葉を聞いて彼には感覚として理解出来たような気がしたのである。
「それは人を切って血が出るのが見たい、という意味じゃないんだな？」
ニームは辛そうにうなずいた。
「まさかニーム、お前は……人の血を吸って生きてきたのか？」
エスカの声に、ニームは首を横に振った。
「信じてくれ。私は一度もそんな事はしていない。でも……」
エスカはそう言うニームの声が変わったのに気付いた。
涙声なのだ。
そしてそれを裏付けるように隠しきれない二つの赤い眼から涙が頬を伝うのが見えた。
「本当はこの事はあなたには知られたくなかった。だが今のような突発的な興奮状態になると、眼の支配力に私の心の制御が追いつかないのだ。特に今は私が不安定なせいで本当に乗っ取られそうで危なかった。だから」
エスカはニームに躊躇わずに近づいた。そして全てを語らせなかった。
「あ……」
片手で額を押さえたままの小さなニームの体を自らの広い胸に抱き寄せると、エスカはそのたくましい両腕をニームの小さな背中にまわし優しく力を入れた。

「俺の血でよければいくらでもお前にやるさ。だから遠慮するな」
「エ、エスカ……」
「言ったろ。俺達はもう他人じゃねえんだぜ？　お前が俺の想像を超えているようなものを背負い込んでるのはよくわかった。だからこれからはもう水くさい事は言うな」
その言葉を聞いたニームは、顔をエスカの胸に押しつけてすすり泣き始めた。
「おいおい。大賢者様がめそめそ泣くんじゃねえよ」
エスカはニームのその態度で、ようやく恐怖を呑み込むことに成功した。だからこそ、そんなからかいの言葉が口を突いた。
「私は『化け物』のようなものなのだぞ？」
「そうかもしれんな。だが、同時にお前は俺の可愛いニームであることにも違いないんだろ？」
ニームは何も言わず、素直に小さくうなずいて見せた。
「だったら俺は大した奴だってことだ。若くて別嬪なカミさんと、人がおそれる力を同時にこの手にしたようなもんじゃねえか」
エスカはそう言うとニームに回した腕に力を込めた。
「それに加えて大賢者の肩書きまで味方に付けてるんだからな。断言するが、ファランドールでも一人でここまでの大勢力を持っている奴は俺以外にはいないね」
ニームは大賢者という言葉に反応したようだった。
「大賢者だろうと私はやはりまだ子供なのだ。気をつけてはいてもとっさに感情が爆発してしまう事がある。そうなってしまったら、偉そうな事を言っていても本当にただの子供なのだと言う事が夕べの件でよくわかった」
「何度も言わせるな。もう夕べのことは気にするな」
だがニームはエスカの腕の中で大きく首を左右に振った。
「こんな私では、あなたの妻として幼すぎる」
「うーん」
ニームからは依然として強烈な「気」が発せられていた。顔を確

認するまでもない。まだ三眼のままなのであろう。だが、エスカはすでにその「気」に慣れていた。いわば「素」の状態のニームが垂れ流すエーテルである。ある程度耐性ができていたのであろう。

「なあニーム。お前《深紅の綺羅(しんこうのきら)》……じゃねえや、母親にどうしても会わなくちゃならないのか？　このまま俺とずっと一緒にいればいいだろう？」

その言葉にニームは一瞬体をこわばらせた。

「その言葉、そっくりそのまま返す。あなたもエスタリアで好きな茶葉の研究をなぜしない？　きっと平和で楽しいに違いないぞ」

わかっていた事だった。エスカは言ってみただけなのだ。お互いにやるべき事があるのだ。その為の協力関係が、思ったよりも深くなってしまっただけなのだ。

「そうだな」

エスカは短い沈黙の後そうつぶやいた。

「わかった。もう聞かねえよ。だが耐えられなかったら我慢せずに俺の血を吸え。というか、俺以外の血を吸うな。いいな？」

ニームはエスカの胸の中で頷いた。

「でも、いつまでもコイツに振り回される私ではない。リリやジーナは当初から完全にマーリンの瞳を自分たちの制御下に置いてたと言っていた。私にもきっとできる」

「お前らしいぜ。その意気だ」

エスカはそう言うと抱きしめた腕の力を抜き、片膝をついて自分の顔をニームの顔の高さに合わせた。

そして間を置かずにそっと手を伸ばして目の前の濡れた頬を持つ少女の顎の下にあて、やさしく顔を持ち上げるようにした。

「ま、待って」

ニームはエスカが唇を重ねようとするのを知ると、そう言って制した。

「何だよ」

「三眼の……ままなのだぞ？　悪いが消えないのだ。どうにもまだ

興奮が収まらぬ……」
「三眼だろうが二つ眼だろうが、お前はニームだろ？」
「あ、あたりまえだろう」
「じゃ、何か？　包帯をしている俺とじゃ嫌か？」
ニームはエスカがそう言うと、ものすごい勢いで首を左右に振った。
「そんなわけはない！　嫌なんかであるものか。嫌じゃないけど……」
「けど？」
「恥ずかしいのだ……」
ニームはそう言うと三眼のまま顔を真っ赤にした。
エスカが顎を支えていなければ、俯いていたに違いなかった。
「心配するな」
エスカはそう言うと片方の手でニームの頭を優しく撫でてやった。
「俺も三眼のお前とするのは妙に興奮して恥ずかしいぜ」
ニームはエスカの言葉を聞くと目を細め、真っ赤な顔で苦笑した。
「あなたと言う人は本当に……」
言葉はそこで途切れた。エスカがニームの唇を塞いだのだ。

「『本当に』何だって言うんだ？」
短い口づけの後、エスカは唇を今度は耳元に寄せてそうニームに尋ねた。
「――性格が最悪だと言おうとした」
「そりゃ良かった」
「何がだ？」
「そこまで言われてたら、お前のその可愛らしい鼻をかじるところだったぜ」
「なっ……あ」
ニームが抗議のセリフを何か言いかけたが、またしても開こうとした口はエスカに塞がれた。

だがニームは一切逆らおうとはせず、目を閉じて両手をしっかりとエスカの背中にまわし、エスカの求めに応えた。
その日二度目の口づけは、ニームにはとてつもなく長く感じられた。
いや。長かったのか短かったのかもわからなかった。時間の概念が消えてしまうほど、ぼうっとしてしまったからだ。
論理的な事象構築を司る機能が麻痺すると、あとはなし崩しだった。ニームはすぐにエスカとの口づけに夢中になり、そのうち自分がいったい誰なのかと言う事さえ、もうどうでもいいことのように思えてきた。
「あ……」
長い口づけが終わり、唇が少し離れた時に、エスカが何かを思い出したようにそう声を出した。
「何？」
閉じていた目を薄く開けて、ニームはエスカの顔を見た。既にニームの三眼は閉じられ瞳の色は快活そうな茶色に戻っていた。
「いや、もし血を吸われたら、俺はいったいどうなるんだっけ？」
ニームはエスカの背中に回した手に力を入れてエスカを引き寄せると、今度は自分からエスカの唇にそっと口づけた。
「大丈夫。死なない程度で我慢するから」
「すると貧血状態ってわけだな」
「普段から血になる物を食べるようにしておくといい」
「承知した」
そう言うエスカに、ニームは再び自分から唇を重ねた。

「さて。お前さんも忙しいだろうから本題に入るとしよう」
「本題だと？」
ガルフは訝しがるサミュエルに鷹揚にうなずくと、リーン・アン

セルメ少尉に合図をした。
リーンはガルフの側に寄ると改めてサミュエルに一礼した後、懐から筒状にした紙を取り出して恭しく差し出した。
サミュエルは六翅のスズメバチのクレストの封蝋がある書簡とガルフを交互に見比べた。
「かくも盛大に近衛軍挙げての出迎えをしてもらったせっかくの場で、このような事を申し出るのはまことにもって心苦しいのだが、是非受け取ってくれ、サムよ」
ガルフに急かされたサミュエルは、リーンの手から筒状の書簡を受け取った。
「これは？」
サミュエルには書簡の内容がいったい何なのか、見当がつかなかった。予想外の事が起こりすぎている事にさすがに警戒感が生じていた。だから安易に書簡を開ける前にそう尋ねたのであろう。
実際問題として五個大隊もの隊軍がエッダの中心部を埋め尽くす事態が想定外であった。
事前に情報はなかった。さりとてこれほどの大軍が降って湧くわけがない。
いや……。
降って湧きでもしなければ、これほどの人間の移動に気付かないはずがない。
エッダの回りには近衛軍の兵士がくまなく、文字通り四六時中哨戒にあたっている。
それだけではない。
エッダに続く街道という街道、集落という集落には充分な警備網が整えられている。
それらの情報網から寄せられていた情報はすべて「二個中隊を率いた王国軍大元帥閣下」がエッダに向かっているというものだったのだ。それ以外の情報は皆無だった。
つまりサミュエルの想像が及ばない何か、それもとてつもない何

かの力が働いていることは確かだった。
彼は一瞬、自らの罠をもって灰燼に帰した三聖《蒼穹の台(そうきゅうのうてな)》の顔を思い出したが、慌ててそれを振り払った。
それはあり得ない事だ。それにたとえ《蒼穹の台》が生きていたとしても、三聖である彼が一国の内政に関与する事は考えられなかった。

「いやなに。年末あたりから持病の腰痛が特にひどくてな。このところ床に伏せることが多く、貴様も知っての通り公務にも支障をきたすようになってしまった。それでよい機会だからここで退役しようと決めたのだ。イエナ三世陛下には我がキャンタビレイ家の若き勇の者を側臣としてお仕えさせる所存。従ってそれには我が後任の推薦も記してある。が、まあ、あれだ。あとは陛下ご自身がお決めになる事であろう。そう言うわけであるからここで陛下に直接お渡ししたかったのだが、時期も時期。大葬の儀もそろそろはじまるとあらばこれはサム、貴様に預けるのが筋であろうと思ってな。ま、一言で言うならこれは『詫び状』だな」
「なんだと？」

「ニーム」
儀仗を通じてガルフ・キャンタビレイ大元帥の引退宣言を聞いたエスカは、思わず顔を上げてニームに声をかけた。
「聞いたか？」
だが、ニームは長い口づけの余韻で目も開こうとしなかった。
「おいこら、ニーム」
エスカは、心の中で苦笑しながらニームの柔らかいほっぺたをグイッと引っ張った。
「帰ってこい」
エスカの呼びかけにニームはようやくうっすらと目を開け、そし

て目の前のエスカの顔を認めると、恥ずかしそうに顔を背けた。そして何も言わずにそのままエスカの胸に顔を押しつけた。
「おいおい。しっかりしろ」
「え？」
「聞いてなかったのか？　たった今、キャンタビレイ大元帥が引退宣言したんだよ」
「誰が？」
「キャンタビレイ侯爵だ。シルフィード王国軍大元帥の！」
「それは偉い人？」
ボンヤリとした目で自分を見上げるニームの頬は真っ赤に上気したままだった。
エスカはその様子を見て頭を描いた。
「しまったな」
そう言うと、顔を胸に埋めるニームの頭を撫でてやった。
「お子ちゃまには、刺激が強すぎたか」
そうつぶやくエスカはしかし、心の中では自嘲していた。口ではそう言ったものの、自分とてニームとの口づけに夢中になっていたのである。エスカはニームから香るいい匂いの中で、時を忘れて若い妻の唇をむさぼっていたのだから。
エスカはニームにどんどん夢中になっている自分の感情を自覚していた。年齢が離れている事や相手が特殊な立場の人間だという事実など、どうでもよかった。ニームと唇が、そして肌が触れ合う度に、相手を思う気持ちが大きくなっていくようであった。
しかしながら幾ばくかはまだエスカの方が冷静であったのだろう。儀仗を通じて伝わるやりとりは頭の中に入っていたのだ。
興奮でのぼせ、ぐったりとしているニームを胸に、エスカは窓の下で繰り広げられるシルフィードの大きな政変の現場に目をやった。
これから先は何があっても一言も聞き逃すまいと、心の中で自分に叱咤しながら。

# 第八十四話　エッダ包囲網

ガルフの言葉に、さすがに広場の近衛軍にも動揺が走っていた。
一糸乱れぬ見事な静と動が売り物の近衛軍精鋭部隊だが、彼らにとって突然の王国軍大元帥の引退宣言は敵国の首都急襲よりも大きな衝撃であった。
群衆は言うに及ばずである。
それまで、もしや一触即発かと固唾を呑んで様子を伺っていたところに、大群を背後に従えて登場した注目の人物がとった行動は、意外にも自らが大舞台から降りるという宣言だったのだ。
その場が大きな混乱に至らなかったのは、広場周辺の構成人員の大部分を占めていた王国軍の部隊が全く動揺せず、沈黙したまま佇んでいたからであった。
言うまでもなく彼らにとっては大元帥の行動は既知のものであったようだ。つまり、王国軍にとってガルフの引退宣言は式次第に記された項目の一つに過ぎないのであった。

「五個大隊をあえて引き連れてここに参上したのは、直接この手で王国軍を陛下にお返しする為。それにエッダでアプサラス三世前国王陛下をお見送りしたいと言う彼らのたっての頼みもあっての事だ。一言で言うなら『これぞ大葬の理念』であろう？」
ガルフはそこまで言うと、後ろに控える親衛隊を振り返り、頷いて見せた。
それが合図だった。
親衛隊と呼ばれるガルフ・キャンタビレイの手勢、総勢約二十名はそれぞれ四翅のスズメバチの旗を手にガルフの左右横一列に並ぶと、片膝をついた。
その場に居た誰もが言葉を無くし、いったい何が始まるのかと、

その様子をじっと見守っていた。いや、見守らざるを得ない事態であったと言うべきであろう。

片膝をついた彼らはまず、手にした親衛隊旗を地面にそっと置いた。続いて上着を脱ぎ、簡単に畳んで旗の横に置いた。

その中には、俄親衛隊のスノウの姿もあった。

上着を脱いだ彼らは全員が黄色い半袖のシャツ姿になった。彼らはそのまま近衛軍に向かって一礼すると、元の場所まで下がった。

その間じっと動かなかったリーン一人を残して。

彼らがとった行動の意味は、シルフィードの軍人であれば誰でも理解していた。

それは部隊からの離脱を示す行為である。

それを証明するかのように、代表の宣言が行われた。

「リーン・アンセルメ王国軍少尉以下、親衛隊二十三名、本日この時をもって部隊章と階級章を返上、同時に王国軍を退役いたします」

リーンはそう言うと、自らも片膝をついて上着を脱いで丁寧に畳み、それをそっと地面に置いた。

シルフィードの退役の儀式は簡素で、多くの場合上司の机の上に階級章を返却する事で完結するが、今回の場合は王宮前広場の石畳の上がその机に相当した。

そもそもシルフィード王国の価値観としては生涯一軍人であることが名誉とされていた。命を賭けて国を守る軍人は国民のあこがれの職業である。自らその職を手放すという選択肢は一般的には信じられない行為であったのだ。

もちろん加齢や傷病による退役はあるが、それ以外の理由で自ら職業軍人という立場を退くことは異例と言えた。

そういう背景がある為にシルフィード軍には退役式などというものが存在しない。自主退役に関する詳細な軍規すらなく、前述の怪我や障害などによりやむなく退役せざるを得ない兵の処遇が所属部

隊の長に任されているだけである。
そしてそこには「委細は軍務大臣へ報告のこと」という単純な報告義務しか存在しない。
当時のシルフィードの軍務大臣とは、すなわちガルフ・キャンタビレイである。従って親衛隊の兵士の退役についてはガルフの裁量で許可が下り、同時に報告義務も終了する。
要するにリーン達親衛隊は極めて合法的に退役手続きを済ませていたと言える。
大元帥については「あらゆる処遇は国王に一任」と憲法で定められており、これだけはガルフの一存で単純に決められることでは無かった。

サミュエルはガルフの思惑を計りかねていたが、手続き上の問題点に思案を巡らせると手に持った書簡に改めて目を落とした。
イエナ三世の正式な受諾が無い限り、大元帥と言えども勝手に自らの処遇を決めることは出来ない。

「念のために言い添えておこう。彼らの退役の申し出は既に私が受理して承諾済みだ。儀式的には私の退役宣言の後になっているが、まあそう言うわけで手続き上は何の問題もない」
機先を制して先にガルフがサミュエルに言葉をかけた。
「新しく就任するであろう王国軍大元帥が、新たな親衛隊を組織すれば良いだけだ。何の問題もないだろう？」
サミュエルは苦虫を噛みつぶしたような顔をすると深くため息をついた。もちろんそれはわざとらしい演技であったが、彼にはそれをする必要があった。少なくともこれだけの衆人環視の中「はいそうですか」と言う訳にはいかない立場にあった。
そもそもそのような場で国家の基幹を担う役目の者が自らの口で辞意を表明するという事自体が一大事であった。
その一大事をもう一人の重鎮がどう受け止め、対処するのか。

群衆はそこに全神経を集中させて注目していたのである。

「ガルフ。お主の気持ちはわかった。先の国王陛下の急逝の折りにも王宮に駆けつけることが出来ない程の体になっているとはさすがに私も驚いた。だが、イエナ三世陛下の許可もなく先走った行動は如何なものか？　積もる話もある。ともかくは大葬の儀が滞りなく終了した後、改めて元帥庁に顔を出されよ」

サミュエルの言葉に、しかしガルフは悲しそうな顔で首を横に振って見せた。

「既に王国軍軍人ではなく、ただの侯爵となったこの身。元帥庁の大扉を開く立場にはない」

「ガルフ、くどいようだが……」

「貴様は勘違いしておるようだ、サム」

ガルフはサミュエルの言葉を遮ると、リーンに目配せをした。彼の副官はうなずくと、後ろに控えていたスノウ・キリエンカに声をかけた。

「キリエンカ殿。例のものを」

スノウはいつもの何を考えているのか解りづらいボンヤリとした表情のまま、背負っていた小さな背嚢のようなものから、先にリーンがサミュエルに渡したものと同じ様子の筒を取り出し、リーン・アンセルメにそれを手渡した。

それは丸められた羊皮紙であった。

リーンは開いて内容を検めると、満足そうな顔で一歩進み出てその文面が見えるように両手で広げてサミュエルに示した。

そこに記された文字を目で追っていたサミュエルの表情に、明らかな動揺の色が浮かんだ。

「既に事は済んでおるのだよ、サム。いや、今まで本当に世話になった。一言で言うなら『後は頼んだ』だ。これからも『エッダ城の守り』は頼んだぞ」

「ま……待て」
リーンが持つ書状を見て立ち尽くすサミュエルにそう声をかけたガルフはマントを翻した。が、もちろん近衛軍大元帥はそれを止めた。
「これは……いつの間にこんなものを？」
ガルフはしかしサミュエルの方へは顔を向けず、背中を向けたままで答えた。
「言っておくが本物の署名、本物の印影だ。特にイエナ三世独特の二重署名は一部の高官しか知らぬはず。要するに貴様だけだ。それでもまだこの証書の真偽を疑うつもりか？　で、あれば陛下ご自身に問い合わせれば良かろう」

イエナ三世は特殊な署名をしていたことで知られている。
通常国王は自らの名のみを署名し、書面の内容によってはそれに印影、すなわちカラティア朝のクレストである二つの桜花の紋章を溶かし落とした蝋に型として押す。
だが現存するイエナ三世の印影付き署名は全て二重署名と呼ばれるものが記されている。
署名は上段と下段に別れ、上段には通常のイエナ三世と読める署名が繊細な筆致で記されている。そしてさらその下段に判読不明な記号のような文字が見事な崩し字で並行して記されるのだ。
今日ではそこに記された文字が神痕の一種である事がほぼ定説となっているが、内容は諸説あり完全な判読には至っていない。
神痕による署名は「イエナ三世」という表記だとする説が大勢を占めてはいるが、そもそも神痕自体が体系的な文字として解読されていない状況では真実は闇の中と言えよう。
当時の逸話としては次のようなものが伝えられている。
その署名について側近から尋ねられたイエナ三世はこう答えたと言う。
「これもまた我が名なり」

その未解読の文字は「イエナ三世」であろうか？　はたまた「エルネスティーネ」と書かれているのであろうか？　それともイース・イスメネ・バックハウスと読むのであろうか？

少なくともその二重署名をイエナ三世が気まぐれで使っていたとは考えにくい。そこには何らかの意味が込められており、彼女の謎を解く一つの鍵にもなっていると言えるであろう。

イエナ三世戴冠後、少なくとも大葬に至る期間にガルフは一度も謁見をした事が無いはずであった。それどころかイエナ三世への書簡という書簡は全て近衛軍大元帥自ら目を通して処理していたサミュエルである。在ってはならぬその文書の存在は、さすがの彼をも混乱させるのに充分な効果を持っていたのである。

その書状とはガルフ・キャンタビレイ大元帥の申し出に対する、国王の親書による返答文であった。

『王国軍大元帥ガルフ・キャンタビレイの申請について吟味した結果、軍に関するあらゆる役職を辞する事をカラティア朝シルフィード王国国王イエナ三世の名において無条件に許諾する』

大きくそう記された筆跡を見れば、それが偽の文書でないことはサミュエルにはすでに解っていた。

それは紛う方無きエルネスティーネ、いやイエナ三世の筆跡であった。今更ガルフの言う二重署名などを敢えて吟味する必要すらなかった。

「腑に落ちぬ顔をしておるようだな。言っておくがこの文書は私の使者が直接国王陛下に謁見し、我が文書に目を通された上で御自ら文章を認めお渡し下さったものだ。貴様の検閲もずいぶんザルという事のようだな。陛下の警護の長としてはいささか心配になるぞ。まあ一言で言えば『しっかりしろよ』　だ」

ガルフのそのあからさまな挑発に、しかしサミュエルはほんの少し唇を歪ませただけであった。既にずいぶんとガルフの計略の中にはまり込んでしまっている事を認識していた。賢明な彼はそれを甘んじて受け入れる事にしたのである。

否定しても始まらない。先手を打ったつもりが思ってもみなかった相手の大逆転を目の当たりにしているこの状況では、打開策を立てるにもまずは冷静に現状、つまり相手であるガルフの罠を把握しておく必要があった。

「近衛軍大元帥の許可なく国王陛下に謁見してはならぬという法はない。別に目くじらを立てることもないと言えばそれまでだが、それにしてもこの所作はいささか水くさいのではないかな、ガルフ？」

「ほう。水くさいとは？」

「お主と儂の仲ではないか。退役するにせよ一言相談なりしてくれても良いと思うのは儂の甘えかな？」

「ふむ、そう来たか」

ガルフは顎をさすりながら少し間を空けると、全く脈絡のない事をサミュエルに問いかけた。

「水くさいと言えば、カテナ殿は息災か？」

いきなり我が子の名前を出されたサミュエルは今度はさすがに狼狽の色を見せた。その様子をガルフはもちろん見逃さず、畳みかけるように続けた。

「この件についての貴様との伝達役として我が軍に所属する彼に是非頼みを聞いて欲しかったのだが、突然休暇を申請した後、どうにもまともに連絡が取れぬようなので少々心配しているのだが」

「……」

「父親にも告げぬままとは、ますます心配になってきたな」

「ガルフ、貴様」

「おっと、忘れるところであった」

ガルフはサミュエルの言葉を遮るようにそう言うと、手を挙げて後方に控える王国軍の幹部達に合図をした。
親衛隊の後方には、五個大隊を率いる提督や将軍をはじめ、高級士官達が並んでいた。
その名前を聞けばシルフィード王国の人間であれば誰でも知っている有名人ばかりである。
その中でも中央に並んでいた軍礼装と呼ばれる格式の高い服を着た二人のアルヴが歩み出て、ガルフの両脇を固めるように並ぶと、近衛軍大元帥に向かって最敬礼を行った。
その二人はそれぞれ「方面軍」の指揮を執る将軍であった。
「お久しぶりでございます、ミドオーバ大元帥閣下」
大声が広場中に響いた。
静まりかえっていた広場に、その大音声は巨大な銅鑼を雷(いかづち)が打ったように響き渡った。

「ぐわっ」
「ひっ」
迎賓館の最上階の窓から遠隔拡声ルーンを使って広場の会話を聞いていたエスカとニームは、その大声を聞いたとたん、ほぼ同時に弾かれたように部屋の床に尻餅をついた。
「大丈夫か？」
あの後ようやく覚醒したニームは、エスカの膝の上に抱かれて顔を真っ赤にしつつも大きな懐に頭をもたれさせるようにして広場の様子を伺っていた。そこへその度外れた大声で耳をやられて転げ落ち、目を回して床に転落した。
エスカもまだ頭の中に金属音のような残響が鳴り響いていたが、とりあえず床にぺたんと尻餅をついたままの小さなニームを軽々と抱き上げると、そのまま窓際に立てかけられたままの儀仗のもとに戻った。
「これって、自動的に音量の調整ができたりしないのか？」

「そんな都合のいい複雑なルーンは、さすがにない」
「参ったな」
「あれは確かシルフィードの名物将軍の一人だな。確か『大音声のティルト』」
ニームの言葉にエスカはうなずいた。
「スカルモールドもあの声を聞くと一瞬たじろいで立ち止まるそうだぞ」
「でも、あれでは味方の兵士もたじろいでしまい、あまり意味はないのではないか？」
エスカはニームの返事に頭をかいた。
「どちらにしろあれだ。俺はシルフィードと戦争になってもあのオッサンとだけは戦いたくねえな」
「ふふ。確かにどういう状況でもあの声で味方を鼓舞されたら、こっちは勝ってる気がしないかもしれぬな」
ニームはまるで自分の場所はそこに決まっていると言わんばかりに、当たり前のようにエスカの膝の上に収まっていた。エスカはそんなニームを見下ろしながら目をスッと細めると、その頭を撫でた。
「あ……」
「さて、どうする？　このままじゃ耳が持たねえぞ」
小さく体を強ばらせたニームの反応を無視すると、エスカは窓の外に視線を戻した。
「ちょっと思いついた事がある。じっとしてて」
ニームはそう言うと自分の頭に置かれたエスカの手の上に自分の手を一度だけそっと添えてすぐに放した後、懐から精霊陣が描かれた例の結布を一つ取り出した。それを手首に巻き付けるとすぐに小さな声でルーンを詠唱し始めた。
ニームのルーンはどれも短いものだった。あまりの早口で唱えるものだからエスカはいつも認証文すら聞き取ることが出来ないでいた。しかしその時は辺りが静かで、心なしかいつもよりニームの声が大きかったこともあって、最後の認証文だけは耳に届いた。

（いや）
エスカは苦笑した。
ニームの声が大きかったのではなかった。ニームとの距離が殆ど無かっただけの事である。懐に抱きかかえて座っているような格好のままでいることに今更ながら気付いている自分に少し驚いてもいた。

「ウェクラニャデ・ルーアファウラン・ソラ・ダーナシンリュ・ダダコウ」
エスカの苦笑と自嘲に気付かないニームが認証文を唱え終わると、結布は一瞬だけ淡い光に包まれたように見えた。
ニームは自分の頭の上にあるエスカの顔を見上げ、ルーンの説明をした。
「ある一定以上の音が聞こえない強化ルーンをかけた。時限ルーンだから体に影響もないし、これであの大声に対処できるはず……って、きゃっ」
説明の途中でエスカはニームの頭をくしゃくしゃとかき回し始めた。それはエスカの親愛を示す表現だったのだが、ニームにもすぐにそれは伝わった。最初は驚いた様子だったが、それに気付くと体重をすっとエスカに預けた。
「まったくお前はすごいヤツだな。凄すぎて言葉が出ねえよ」
「一応大賢者だ。これくらいはできる」
「それでも、すげえんだよ。褒めさせろ」
「ふふ。そうだな。じゃあ、褒美を所望したい」
ニームは上をむくと両手をエスカに伸ばした。その手に届くように下げたエスカの両頬をその手で挟むとそのまま顔を自分に引き寄せた。

サミュエルから向かって、ガルフの右側に立つ隻眼の提督の大声は広場を囲み込むように立つ王宮や、それに並ぶ迎賓館などの建物

の壁で跳ね返り、その場に居た全員の腹に響いた。
そして同時にその声の持ち主を誰もが認識することになった。
声の主は『大音声のティルト』こと、ティルトール・クレムラート陸軍少将であった。
彼は子爵の爵位を持つ旧家の当主で、当時の彼はサラマンダ侯国へ派遣した委嘱軍の総指揮をガルフから一任されていた人物である。
アルヴらしい堂々とした体躯とその唯一残っている見開かれた大きな碧眼は見る物を圧倒する威圧感に満ちていた。
焦げ茶色の髪とデュナンに比べて少し尖った耳はアルヴそのものであったが、その瞳が緑色ではないことから多少デュナンの血が入っていることがわかる。
サミュエルの記憶ではティルトール・クレムラート少将はサラマンダの首都トリムトに駐在していなければならないはずであった。
なぜならティルトールは委嘱軍統括司令とは別にサラマンダ首都方面軍総司令の肩書も持っているからに他ならない。
だがサミュエルはティルトールばかりに気を取られているわけにもいかなかった。
ティルトールの隣に控えていたもう一人が口を開いたのだ。

「私は昨年の国王陛下の生誕祭の宴にてご挨拶だけさせていただきました、ヘルルーガ・ベーレントです。今年から陸軍准将を拝命し、シルフィード大陸南方方面軍の司令を努めております。よろしくお見知りおきを。近衛軍大元帥閣下」
そう言って再度丁寧に頭を下げた女性将軍は見事な金髪を一つに結わえ、サミュエルを真っ直ぐに見つめる大きな瞳は深い緑色に輝いていた。それは彼女が生粋のアルヴであることを示すものだ。
ベーレント准将は簡単な挨拶を終えると改めてサミュエルを正面に見据え、よく通る澄んだ声で改めて五個師団の王国軍の部隊の到着の報告を行った。そしてその上で、受け入れ役のサミュエルに指示を一つ仰いだ。

「して、我ら五個師団はいずれに控えておればよろしいのでしょうか？　エッダ受け入れ責任者の近衛軍大元帥閣下」

ヘルルーガの嫌みともとれる発言にあるように、首都内での王国軍受け入れは近衛軍の重要な役割の一つであった。

つまりヘルルーガの問いかけは事務的には至極まっとうなものであると言えた。ただし、いきなりやってきた五個師団の受け入れ場所をすぐに教えろという要請がまっとうなものと言えるのかどうかはまた別の問題ではあったが。

しかしサミュエルには事態を整理する時間は与えられなかった。シルフィード大陸南方方面軍司令官であるヘルルーガ・ベーレント准将はもっと大きな問題を口にしたのだ。

「五個師団。約六万五千名がエッダに馳せ参じております。宿営地のご指示も併せてお願いします。できれば早急に」

ヘルルーガが急かすように続けたその言葉に、サミュエルは思わずガルフを睨んだ。

ヘルルーガの言葉でその日エッダの四つの大通りを埋め尽くした兵士の数が初めて判明した。六万五千人はもちろん、サミュエルの「二個中隊」の予想を大きく超えた数字であった。

六万五千という事は同時に大通りを埋め尽くしたおびただしい数の兵が、全体からすれば一部に過ぎない事も意味していた。立錐（りっすい）の余地無く兵士を並べたならばあるいは全員がエッダに入ることが可能かも知れなかったが、さすがにそれは不可能である。半数以上はエッダの城壁の外で待機している状態であろう。

内と外に合計六万五千人の兵。要するに陸軍は完全にエッダを占拠していると言って良かったのである。

「おや。エッダには宿営地の用意はございませんかな？」

ヘルルーガに対する対処を考える前に、今度はティルトール・クレムラート少将の大声が広場に響き渡った。

「だとすれば近衛軍の仕事について、私は思い違いをしていたという事になる」
少将の言葉に、近衛軍の兵士達は色めき立ってざわめき始めたが、サミュエルは儀仗を持ち上げてそれを制した。

「むう。用意がないとは想定外」
二人の提督の言葉を受け、芝居がかった声でそう言ったのは他ならぬガルフであった。
「ミドオーバ近衛軍大元帥閣下のご様子を見ると、どうやらエッダにはお主達を受け入れるだけの用意はないようだぞ。一言で言えば『迷惑な客』扱いであろうな」
「僭越ながら私の方でも一応宿をあたってみましたが、本日の大葬の関係でどこも一杯のようです」
サミュエルが言葉を挟む前に、すかさずリーンがそう補足した。
「これは弱りましたな。我らは王国軍大元帥の命により馳せ参じたに過ぎず、普段通りこちらの受け入れ準備は万全だとたかをくくっておったので、野営の準備すらもしておりませぬぞ」
ティルトール・クレムラート少将の、広場中に響き渡るかと思える程の大音声で発せられる、これまた芝居がかったいかにも「困った」という台詞を受けて、ヘルルーガ・ベーレント准将も自らの台詞を澄んだよく通る声で続けた。
「私も同様。兵達には今宵の携帯食すらありませぬ。このままエッダの外で野宿するにしても、六万五千もの兵の食事や手洗いなどの準備をいったいどうすればよろしいのでしょうな？」

「ニーム」
「なあに？」
エスカに名を呼ばれたニームは、自分でも無意識で甘えたような声色になっている事に気づいてバツが悪そうに顔を赤らめた。

「あの猿芝居はいったいいつまで続くと思う？」
「さ、猿芝居だと？」
ニームは咳払いをして今の甘えた声を誤魔化すと、できるだけ平静を装った声でそう答えた。
「そろそろ目を開けて窓の外を見てみろ」
ニームはそう促されるとエスカの膝に抱かれたまま首を伸ばすようにしてのエスカの視線を追った。窓の外では対峙する近衛軍と親衛隊、いや近衛軍一個中隊と王国軍五個師団の一部……の様子を伺った。
「ええっと……」
「いい加減にこっちへ帰ってこい、ニーム。いくら俺に夢中だと言っても、この場はしっかり見ておけ。こりゃあ多分、後世に残る歴史的な事件になるだろうぜ」
「なん……」
「何だよ？」
「だ、誰が誰に夢中なのだ？」
「お前が俺に夢中なんだろ？今更格好つけるなよ、ふにゃふにゃになってたくせに」
「だ、誰が！」
真っ赤な顔になったニームは興奮してエスカの腕の中から飛び出そうとしたが、エスカはその両腕で抱えるようにしてそれを妨げた。
「よせ。暴れるな。そういう俺も恥ずかしながらどうやらそのお子ちゃまに夢中なんだからよ。ま、おあいこだ」
エスカのその台詞はニームの動きを凍らせるのに充分な力を持っていた。
「ズルいぞ」
「何が？」
「あなたは、いつもそうやって私を何も言えなくしてしまう」

「天賦の才能ってやつかな。天は兄上には絵の才能とスノウを、俺にはお前と、お前によく効く力を持ったを言葉を与えてくれたんだろうさ」
「まったく……女たらしだという事は調べがついていたが、まさか自分がそのようなものに影響されるとはつゆほども思ってはいなかったのだが……」
「だが？」
「そこまで言われてあなたに夢中にならない人など、きっとファランドールにはいないだろうな」
「そりゃどうも。今のはなかなか赤裸々な告白で良かったぜ」
「あ……」
「暴れるなよ」
「暴れるものか。子供扱いするな。私はもう十五歳。成人なのだぞ」
「なあ、ニーム？」
「こんどは何？」
「今更こんなことを聞くのもどうかと思うが、大賢者という立場にある人物がだな」
「何よ？」
「つまり、そういう浮世離れした存在がフェアリーでもルーナーでもない俺みたいな人間と、その、あれだ。世間、お前らの言う現世（うつしよ）にありがちな『関係』を持ってもいいのか？」
「だ、大賢者は何をしてもいいのだ」
「は？」
「ふん。今のはなかなか赤裸々な告白で良かったぞ」
「コイツ……」
「言ったはずだ。タ＝タンは人の筆頭。あなたが差し出した手をとった時に、タ＝タンはあなたのもの。そしてタ＝タンとは今は私自身の事。タ＝タンを……私を縛る者は誰もいないのだ。正教会や賢者会にもそんな権限はない。ただ一つの例外をのぞいて、な」
「《深紅の綺羅（しんこうのきら）》、か？」

「あなたはいつか私に尋ねた。『なぜそこまでして《深紅の綺羅》を助けるのか』と。私がアリス、すなわち《深紅の綺羅》の守護であると同時に実の母親であるという理由はもう知っている通りだ。だがもう一つ大きな理由がある」

「大きな理由だと？」

「簡単な話だ。《深紅の綺羅》が私を縛る唯一の者だからな」

「縛る？」

「そうだ。だから私は許しをもらいに行かねばならぬ。『いい加減にタ＝タンを、私をつまらぬ因習から開放しろ』とな」

「ニーム、お前いったい」

エスカは改めて若き大賢者の大きな茶色い瞳を見つめた。最初に出会った時に感じた、妙に浮世離れした深く遠い目付きに戻っていた。

それはしばらくニームの表情に浮かんだことのない、むなしさを誘う瞳の景色だった。

「十二色に掛けられた呪いは、そろそろ誰かが解かなくてはならん。《深紅の綺羅》　の件もある。今は良い機会なのかもしれぬ」

そう言いながら王宮前広場を見下ろすニームの目は、しかしもっと遠くを見ているかのようであった。

この手の話を始めたニームは、決して確信に触れるような具体的な説明をしてはくれないことをエスカは既に知っていた。そして同時にすぐ側にいるはずのニームの存在が希薄になっていくような錯覚に囚われるのだ。

今も腕の中にあるこの確かなぬくもりが、どうにもあやふやなもののように思えて仕方がなかった。

エスカは無意識のうちにニームを強く抱きしめていた。

「お前がやる必要があるのか？」

「――そうだな」

ニームはそういうと一度言葉を切り、エスカに体重を預けてから言葉を継いだ。

「アリスの守護であるタ＝タンの王は《深紅の綺羅》が命じた事には逆らえない事になっている」
「どういう事だ？」
「言葉通り。そのままの意味だ。この額の眼を受け継いだ時から、そういう呪縛下にあるのだ。私は」
ニームはそう言うと形の良い額の真ん中あたりを指さした。
「そういう風になってるって、どういう風になってるんだよ？」
「例えば《深紅の綺羅》がエスカ・ペトルウシュカを殺せと本気で私に命じたら、私には逆らえない。私は《深紅の綺羅》の文字通りの僕（しもべ）。いえ。私の意志ではどうにもならない事なのだから、もはやただの道具に成り下がるのだ」
「《深紅の綺羅》の言葉には守護の人間を操る力があるということか？」
ニームは曖昧にうなずいた。
「そう言われている。真実は知らぬ。何しろ私はまだ《深紅の綺羅》に会ったことがないのだからな」
「そんな物騒な奴には絶対合わせねえと言ったら、お前はどうする？」
エスカのその言葉を聞いたニームは目を閉じた。
「いや、私にはもう一つだけ《深紅の綺羅》に会わねばならない……いや、違うな。会いたい理由ができた」
そうつぶやくニームの目尻から、涙が一筋伝うのをエスカはみとめた。
「どういう意味だ？」
エスカの心にざわめきが走った。思わず尋ねた声に、しかしニームは反応しなかった。
「ニーム？」
何も答えないニームに、ざわめきは不安に転じた。何かはわからない。しかし心を覆い尽くそうとする嫌な感じにエスカは思わず強い声をニームに投げかけた。

「答えろ、ニーム」
ニームはようやく目を開いた。長い睫から落ちた涙の粒が、腰に回していたエスカの腕に落ちた。
「ありがとう。もう十分だ」
「何を言ってるんだ？」
だが、ニームの答えを待つ時間はエスカには無かった。
広場に動きがあったのだ。
どよめきが上がった広場をエスカと、そしてニームも注目した。

＞ｉ３２０２７―１８３１＜

# 第八十五話　第七条

＞i31937—1831＜

広場に響き渡った大きなどよめきの原因はすぐにわかった。新国王、イエナ三世が初めて来賓の前にその姿を現したのだ。

ニームも、そして当然エスカもイエナ三世の姿を見るのは初めてだった。

もちろん彼らはイエナ三世がエルネスティーネと名乗っていた王女時代にも会った事はない。正真正銘、全くの初対面といえた。

いや。

二人にとっては「対面」ではない。「姿を見た」だけにすぎないのだが。

「あれが新しいアルヴの王、イエナ三世か」

エスカはそう言うと、固唾を呑んで事の成り行きを見守った。

王宮から広場の中央に設置された舞台まで、まっすぐに緋色の敷物が敷かれ、それはすなわち女王イエナ三世の通り道となっていた。

イエナ三世はどよめきの中をゆったりと歩み、舞台の上に上がった。

そして広場全体を見渡す。

真っ黒なドレスの上に白いマントを纏い、その上に豊かな金髪を流した姿に、人々は先ほどとは違うどよめきをあげていた。イエナ三世の金色の頭の上にはカラティア朝にいにしえより伝わる『マーリンの知恵の冠』と呼ばれる古めかしい王冠が載っていたのだ。それは紛う方無き新しいシルフィード王の姿であった。

イエナ三世が優雅な手つきをマントを脱ぐと、側付きの一人がそれを持って下がった。

それを見た王宮広場には再び水を打ったような静寂が訪れた。
マントを脱いだという事は、これからが女王としての公式な行動になるからである。
次にイエナ三世はゆっくりと目を伏せると、両腕を左右に水平に挙げた。その合図を受け、側付きの二人のアルヴは恭しく一礼すると、それぞれイエナ三世の左右の袖を掴み、お互いにうなずきあい、一気に左右から引っ張り合った。
すると黒いドレスは音もなく真ん中あたりで破れ、側付きによりイエナ三世からはぎ取られるような格好になった。
どよめきが再びおこる。
そこには緑から青に変わりゆく、深い色のドレスを纏うイエナ三世の姿があった。
人々はそれを見て、大葬の意味を改めて知る。
喪に服していた新王が、纏っていた深い悲しみを振り切り、文字通り新しい王として自分の色を纏う。新王は自分自身の色を前王と国民に披露して、決意を示すのである。
通常、新しい礼服の色は単色である。だが、イエナ三世は裾の緑色から肩の暗い青に続く二色を自らの色とした。それが何を意図するのか本人以外には知りようもないが、横紙破りの女王であることはその場の列席者の誰もが感じていた事であろう。

側付きが舞台を下りた。いよいよである。
水を打ったような静寂がその場を支配した。新しい女王の言葉を一言も聞き漏らすまいと身構え、その場にいる全員が息をすることさえ止めたかのようであった
「我が名はカラティア朝シルフィード王国の王、イエナ三世である」
若い女王の第一声は自らの名乗りであった。
その耳障りの良い声はアルヴィンである小柄な体からは想像も出来ないほど良く通り、エスカやニームのいる場所でもその肉声がきちんと聞き取れるほどであった。

「風のフェアリー、いやエレメンタルならば、あの声の訳もわかる」
イエナ三世の第一声に驚いたようなエスカに、ニームはそう説明をした。腕の中のニームはしかし、エスカではなくイエナ三世の姿を追っていた。
「私は今日この時をしっかりとまぶたの裏に焼き付けよう。あなたもしっかりと覚えておくといい」
静かな調子でそうつぶやくニームに、エスカはまた心の中がざわめくのを感じた。だがエスカはまたしてもニームに声をかける機会を逸した。イエナ三世から次の言葉が告げられたのだ。

「前国王であり我が父であるアプサラス三世の『大葬』に参列の方々に申し願う。『大葬』を執り行う前にこの場で一つ二つ国事を執り行う事をお許しいただきたい」
イエナ三世のその言葉に会場はいきなりざわつき始めた。だが間髪を開けず続けたイエナ三世の良く通る声はその場を再び支配した。
「さて、国王として問う。近衛軍大元帥サミュエル・ミドオーバよ、答えよ」
広場のもう一方の端で片膝をついて突然の国王の登場を迎えていたサミュエルはいきなりの指名に我が耳を疑った。
「この異様な状況は何だ？　まず説明せよ」
そう言うとイエナ三世は両腕を広げて見せた。それが広場に続く四本の大通りを埋め尽くした王国軍の兵と近衛軍の兵が対峙しているかのような様を指している事はその場の誰もがわかっていた。
頭を下げたままのサミュエルは唇を噛んでいた。
それは彼がこの大葬に併せて準備をしていた計画が崩壊しつつあることを証明している行為だと言えた。順調に回っていたと思っていた歯車が思ってもいない回転を始めた事をもはや彼は認めざるを得なかったのであろう。
「どうした？　返事が聞こえぬぞ、バード長。我が名においてこの

場でルーンを唱える事を許す。ここまで通る声で疾く答えよ」

サミュエルと会話をしたければ近くに呼べばよいだけのことであった。だがイエナ三世はそれをせず、広場の端と端という距離で会話をせよと申しつけたのである。

もちろんそれには彼女の意図があった。二人の会話をその場の全員に聞かせる為である。

「立て。自慢の儀仗を使って良い。我が力と対等の声で答えよ」

サミュエルはいったん深々と頭を下げた後に立ち上がると、イエナ三世の周りを注意深く観察した。彼の理解では『変わり身』であるイース・バックハウスは風のフェアリーとしても極めて微弱な力しか有していないはずだった。つまりあれほどよく通る声を出せるわけがないのである。

だとすれば強化ルーンを扱うルーナー、つまりコンサーラの存在がなければならない。

だが国王の周りに配備したバードは皆彼の配下であるはずだった。なぜなら彼はそれだけの「仕掛け」をして大葬当日を迎えていたのだから。

しかしイエナ三世の近くにはルーナーらしき人物の姿は見えなかった。

彼は自分の側近である高位のバードの一人にチラリと目で合図を送った。バードは国王に向かって一礼するとサミュエルの側に近づき、片膝をついて指示を待った。

「バードの管理はどうなっている？」

声をかけられた上級職のバードは首を横に振った。

「抜かりはございません。どういう事か私にもさっぱり……」

彼はサミュエルの言葉の意図するところを理解していた。つまりイエナ三世が替え玉のイースであるという事をである。だから同じく彼女が使う力に同じように驚いていたのである。

「外部のバードではないのか」

「閣下の張った結界を超えられる者が居るとは思われません」

誰も王宮の深部には近づくことができない。そう言う仕掛けを作ったのはサミュエル自身である。誰にも……いや少なくとも彼に気付かれずにイエナ三世に近づけるルーナーが居るわけがないのだ。

だが……。

サミュエルは思わず後ろにいるリーンを振り返った。

（現にあの文書を陛下に手渡した男が存在するではないか）

そんな事ができる者がいるのだろうか？

いや、いる。

ただしサミュエルが即座に思いついたのは三人だけであった。

三聖。

彼らならばやってのけるだろう。サミュエルにしても三聖の真の能力については未知の部分が多い。可能性は大いにあった。

しかしそれは同時にその可能性を否定する事でもあった。

三聖のうち、筆頭とも呼べる能力の持ち主である『蒼穹の台』は彼自身が倒していた。《深紅の綺羅》は「そんなこと」ができる状態にないことを彼は知っていた。そして三聖の末席に名を連ねる『黒き帳』が『封じられている』事を彼は知っていたのである。

ではいったい誰がファランドールでも類をみない程の強力な結界の中に入り込めるというのだろう？

サミュエルはゆっくりと深呼吸をするとイエナ三世に顔を向け直した。

彼の目に映る小さなアルヴィンの女王はしかし、彼の知る穏やかな表情に柔らかく優しい性格がにじみ出るような「よく知っているはずの少女」では、もはやなかった。

アプサラス三世崩御後に不安におびえる無力な王女で合ったはずの「変わり身」エルネスティーネであるイース・イスメネ・バックハウス。

それは彼の計画に必要不可欠な「傀儡」であるはずの無力な風のフェアリーで、文字通り言いなりにこれまで動いていたはずであっ

た。

たった一つの例外を除いて。

それはもちろん女王の名前の件である。

記録では王女エルネスティーネはエルネスティーネ一世を名乗ることで各方面が了解していたと言う。

しかし、王の名を決める戴冠の儀において彼女が口にしたのは「我は本日この時よりシルフィード王国国王、イエナ三世である」という一言だった。

打ち合わせとは全く違う行動をとったイースは、戴冠の儀の後その事を側近に責められると青ざめた顔で自らの失態を詫びる言葉を口にした後で失神し、それ以来床に伏せることが多くなったと言われている。

戴冠の儀で国王が自ら定めた名前はそれが正式となり、訂正は行われない。イエナ三世の名は確定したのである。

サミュエルは即座に治癒専門のルーナーであるハイレーンを数名伴ってイエナ三世を見舞い、事の真相を探ろうとしたが「私はあの時、どうにかしていました」という言葉以上の成果は得られなかった。

その時の心細そうで不安げな少女の面影が、今目の前で舞台の上に立つイエナ三世には微塵も感じられないことに、サミュエルは違和感を覚えていた。

（これではまるで……）

まるで、別人。

そう思った瞬間に、サミュエルの頭の中である仮説が構築された。

（おのれ、アプサラス三世。私を謀ったな。本物は『こっち』であったか！）

長い間に築いた信頼の裏で計画し、そして自ら本物の「風のエレメンタル」の旅立ちにも立ち会ったサミュエルに、その選択肢はあり得ないものであった。

だが眼前の王が纏う圧倒的なエーテルはどうだ？
まるで当たり前の王のように、イエナ三世は壇上で凛と立っていた。
そこには少女などというはかなげな言葉は一切似合わない強靱で強大な存在感を纏った「国王」が君臨していた。

エレメンタルであれば、たとえ三聖が張った結界であろうと破ることはたやすいであろう。
いや。破れるか破れないかはわからない。誰も三聖の真の力を知らないのと同じようにエレメンタルの真の力を知る者はいない。
だからこそ可能性を否定できないのである。
「どうした？　サミュエル・ミドオーバ！」
まるで巨大な槍に貫かれるかの様に、鋭さを増したイエナ三世の声がサミュエルに突き刺さった。

その場に居合わせた大葬列席者のほとんどは、大軍がエッダの城塞の中に入り込んだ事により生じた混乱を、国王が単純に叱責していると感じていに違いない。
しかしより深いところを知る一握りの人間にとって、これは極めて重大な場面であることがわかっていた。
公式行事前だとは言え、各国のお歴々が出席する場所で国王が重鎮の叱責を行うなどという事はどちらにしろ異常事態である。
要するにそこにいた誰もが「いったいこの後どうなるのだろうか」という不安の中、固唾を呑んで事の成り行きを見守っていたのである。

その時のサミュエルの心中を推し量るすべはないが、その場で一番混乱していたのはおそらく彼であったろう。
つまらない言い訳は出来ない。
王国軍が五個師団も引き連れて、それも突然にエッダに入り込む

などと言う事は一切聞いていないし、そもそもそんな大軍を動かしてエッダに入るのは非常識だ。だからキャンタビレイ大元帥がみんな悪い、などと言えるはずもない。

そもそも流れをみればわかる。イエナ三世とガルフは「通じて」いるのだ。

少なくとも示し合わせた行動であることはもはや疑いようがなかった。

罠に填めたつもりが、いつの間にか自分自身が罠にはまっていたのである。もはやそれを認めないわけにはいかなかった。

つまり彼にとってここが正念場であると言えた。

彼には大葬の参列者という味方がいる。いや、味方につけることができる可能性があると言った方がいいだろう。

たとえ自国の内政の問題であろうと、国王が強引に下手な事をすれば各国を敵に回す事にもなりかねない。ましてやサミュエルが他国側の思惑に沿った政治を目指している立場であることを示せば、それに相対するイエナ三世はファランドール全体の敵という単純な図式を構築しかねない。

不安定な情勢、しかも準備不足が囁かれる今のシルフィード王国にとって、全世界を敵に回すのは得策ではないことは誰の目にも明かである。イエナ三世が本物の存在感を示しているからこそ、軽はずみな行動は取るまいと思われた。

で、あれば自身の理をはっきりさせておく必要があった。

その為には……

「お待ちあれ」

その時、参列の席から大きな女性の声が上がった。もちろん人々は一斉に声のする方へ顔を向けた。

声のする方……そこには白い正装に身を包んだ一団がいた。

イエナ三世も同じく声のする方へ顔を向けた。そして顔色一つ変えず、ただ沈黙した。

それを見た声の主は、続いての発言を促されていると判断したのであろう。自らの名を告げた。

「南方マーリン教会の堂頭、ミンツ・ノルドルンドでございます」

通称マーリン新教会。正式名称を南方マーリン教会という、いわゆる新教会の代表であるミンツの声もイエナ三世やサミュエルと同じく、会場に綺麗に届くものになっていた。つまり、ルーンを使っていたのである。

「これはこれは。新教会の頂様（いただき）が直々に大葬にご参列とは。国王として心よりお礼を申し上げます」

「いえ、それは当然のこと。それよりこの事態、いささか……」

「しかし、思い違いをされては困ります、ノルドルンド堂頭」

ミンツは意見を言う前にその言葉を遮られた。その声の調子は極めて強く、ファランドール中に信者を持つ大宗教の頂上にあるミンツをして思わずゴクリと唾を飲み込む程の威圧感があった。

「宗教家が一国の国王に意見するのは、まあ良いとしましょう」

強い音圧でイエナ三世の声が広場中に響いた。だがその口調には明らかに不快感を表すものが含まれており、新たな緊張が広場中に走った。

「ですがそれも時と場合によりけり。ここはシルフィード王国。そして今は国儀の最中です。他国の人間が口を挟むなど一切無用。あまつさえ」

そこまで言うと言葉を句切り、イエナ三世はその右手を真っ直ぐ天に伸ばし、そして振り下ろした。

すると会場に一陣の風が吹き抜けていった。それも、かなり強い風であった。

人々は吹き抜ける風に舞い上がり乱れた服と髪を直しながら、イエナ三世が風のエレメンタルであることを思い出していた。

「国王に無断で王宮にてルーンを使うとは非常識も甚だしい！」

右手を下ろしたイエナ三世は吹き抜けた風の影響が収まるのを待ってそう言った。その後に少しだけ訪れた「間」に、しかしミンツ

は言葉を発する事が出来なかった。
　国家に所属しないルーナーは、エッダの城壁内に於いて許可無くルーンを使うことは許されていない。
　それは外交というものに少しでも関係する人間の間では常識中の常識であった。もちろん入国の際に形式的ながら申し伝えられることでもあった。
「一国の決まり事をたとえ新教会堂頭と言えど軽々しく破れる法はない！」

「ヒュー」
　エスカが軽く口笛を吹いた。
「新教会の堂頭に向かってあんな啖呵が切れる人間がこの世にいるなんてな。男前だな、あの女王さまは」
「信じられない。あれでは新教会にけんかを売ったようなものだぞ？」
　賛辞を送るエスカを、ニームは険しい顔でそうたしなめた。
「子供だと思っていたが、本当に子供ではないか。衆人環視の中で恥をかかせて本人の溜飲は下がったのであろうが、いらぬ敵を作ってしまったのだぞ？　しかもこれは遺恨を残す」
　だが、エスカはニヤニヤした顔を変えなかった。
「いいねえ。宗教に例え一部でも政治を売り渡していない国は」
「え？」
「あの女王さまだって、自分がドライアドの女王なら、あんなことは言わないさ。シルフィードのてっぺんだから、シルフィードの矜持を示しただけだ。褒められこそすれ批判されることは無いだろう？」
「しかし」
「お前の言う事はわかる。だが、シルフィードは情勢を見てシルフィードである事をやめる事はしないということさ。俺もあんなことが言えるような国を作りてえもんだな」

「だが、国を失っては元も子もないのだぞ？　そもそも事が始まれば味方になる可能性があったかもしれないのだぞ？　それをわざわざ自分から可能性の芽を摘んだ愚かな王と言えなくはないか？」
「そんな事をするくらいなら、滅んだ方がまし」
「え？」
「と、イエナ三世は思ってるんじゃないのか？　いや、イエナ三世だけじゃねえ。少なくとも王国軍の連中は今の国王の言葉で勇気千倍って感じじゃねえか？」
　そう言われてニームは広場に目を転じた。
　確かにその場を支配する空気に変化があるように感じた。四つの街道を埋め尽くした王国軍の兵士達は、一言も口にはしないものの、明らかにその顔つきが引き締まっている。
「それに、そもそもあの女王さま、新教会とは同盟の可能性なんてハナからねえよって思っているんじゃないかと、俺は思うぜ」
「それは……いいのか？」
「敵に回しても、という意味か？　そうじゃねえよ。味方になる可能性がないって事なんだろうさ。だったらなあなあの態度をとるよりも、ああやって自軍の士気を高めた方がよほど良いだろ？」
　ニームはエスカの話に納得はしていなかったが、すぐにイエナ三世の覚悟がエスカの言うとおりである事を知った。

「ご理解いただけたようですね。では二度と私に手間をかけさせないように願います」
　二の句が継げないミンツにイエナ三世は吐き捨てるような言葉を投げつけると、もうこの件には興味を失ったと言ったふうに視線をサミュエルに戻し、そのまま今度はやや低い声で呼びかけた。
「仲の良いことだな、サミュエル・ミドオーバ」
　それは不快感を隠そうともしない言葉だった。そしてそれはシルフィードの宝石と呼ばれた王女エルネスティーネ時代には誰も目にしたことのない険しい表情から出たわかりやすい毒が塗り込められ

た言葉であった。

「いったい何の事でしょうか？」

今度はさすがにサミュエルもすぐに反応せざるを得なかった。この状況に於いては、黙っていることは肯定に等しいからである。

しかしイエナ三世はその答えがまるで聞こえないかのように全く違う話題を口にした。

「そう言えばカテナは元気か？」

サミュエルはイエナ三世が投げかけたその短い言葉に反応する事はできなかった。

ガルフ・キャンタビレイと同じ事をイエナ三世も口にしたのである。

「この場でまだ私にしゃべらせたいか、サミュエル？　それとも私がどこまで知っているのかを聞いてみたいか？」

南方マーリン教会、すなわち新教会の組織の頂上に位置するのが堂頭ミンツ・ノルドルンドである。彼女については女であると言う事以外にはあまり記録が残っていない。したがって残念ながらその容姿や年齢は謎のままである。

口伝によるもの、つまり噂としては彼女には一人の息子がいて、それが月の大戦の直前に副堂頭として突然登場した「カテナ・ノルドルンド」であるという。

同時代に同じような年格好のカテナという人物がシルフィード王国に居た。もちろんサミュエル・ミドオーバの息子、カテナ・ミドオーバである。こちらは公式な記録としてその存在は間違い無いところである。

ヴェリーユの副堂頭カテナという人間の噂が本当であるとするならば、つまりはそう言う事である。

シルフィード王国の政治をになう重要人物の一人は、新教会の指導者と通じていたのである。それもただの仲ではない。

もちろんカテナがサミュエルの実子ではなかったと言う説もある。

だがサミュエルとカテナの親子は文字通り「親子のように」似ていたという記述が多い。

似ているからと言って必ずしも実子とは限らない。血縁であれば容姿が似通った人間が生まれる可能性はある。

だがそれは問題ではない。大元帥が新教会の指導者と「関係がある」事が問題であった。関係の深さに幅があろうが無かろうが、宗教活動を一切禁止しているシルフィード王国の重鎮が一大宗教を率いる人間とつながりがある事、それが『大』問題なのである。

イエナ三世はカテナの名を出す事で「その事実」を知っていることをサミュエル・ミドオーバに突きつけたのだ。

それはサミュエルを衆人環視の中、糾弾する為ではない。おそらくイエナ三世はサミュエルに対してこう告げて見せたのだ。

『私はファランドールの動きを知っているのだ』と。

なぜならこの段階でカテナという名前の副堂頭が現れたことは、まだどの陣営にも伝わるはずがないからであった。

サミュエルの計画では彼が新教会においてその姿を現すのは大葬の後。そういう手はずになっていたからである。

新教会内部でもカテナの名を知るものはほんの一握り。そしてそれはサミュエルの息のかかった「安全」な面々のはずであった。漏れる事は無い。

それを、イエナ三世は知っていると言うのだ。

これほど饒舌な背景紹介があろうか？

シルフィードのエッダを、いや王宮の自室をほとんど出ることなく、遠く離れたヴェリーユの極秘事項であるカテナの事をいったいどうやって把握していると言うのか？

いや……

そもそも「いつ本物のエルネスティーネとすり替わったのか？」が問題であった。

今し方見せた風のフェアリーの持つ突風を生み出す力は彼が知る

イースにはない能力だった。
あれほどの力を出せるとしたら、それは風のエレメンタルである本物のエルネスティーネの方であるはずだった。
そして本物のエルネスティーネはサミュエルにとって極めて都合の悪い「真実」を知って帰ってきたのである。
（私が付けた保険も、役には立たなかったと言う事か）
どちらにせよ、サミュエルが次に本物のエルネスティーネと遭うとしてもそれは生きている姿ではないはずであった。
その為に時間をかけて仕組んだ「エレメンタル捜索の旅」だったのだ。だから今こうして生きてこの場に現れ、鍵になる言葉を投げつけてきたと言う事はサミュエルにとって少なくとも一部の計画が根本的な失敗に終わったことを意味していた。

「意味がわかるか？」
固唾を呑んで様子を見守っていたエスカとニームだが、イエナ三世の行動にはさすがに奇妙なものを感じていた。
ニームは首を横に振った。
「カテナという名は私の知るところではない」
「近衛軍大元帥の息子の名前だったと思うが……。ああ、トルマの爺さんが居てくれたら解説してもらえるだろうによ」
「カイエン元帥なら舞台の後方で鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしているな」
「やっこさんにとってもこれは異常な事態だって事だな」
ニームが言うように舞台の後ろ、つまりイエナ三世の後方にある元帥達の席で、トルマ・カイエン元帥は青ざめた顔でイエナ三世の後ろ姿と、そして広場の端にいるサミュエルとをしきりに見比べていた。
他の元帥や文官の大臣達も似たようなものだった。それでも彼らのアルヴ独特の矜持は国王の背後を守る人間として見苦しいひそひ

そ話などは一切許さないようだった。だが不安な表情までは隠せない。いや、エスカの場所からは詳しい表情などわかりようがないが、そこから立ち上る不安に彩られたエーテルがわかる気がしたのである。

サミュエルとガルフ達王国軍、そしてサミュエルとイエナ三世との一連のやりとりはニームのルーンでつぶさに聞くことが出来ていた。エスカがそこから導き出したのは、王国軍と近衛軍の大元帥同士はもはやシルフィードの一枚岩ではなくなっているという事実と、イエナ三世は非常識な規模の軍隊を首都エッダの城壁に入れたガルフよりも、それに難色を浮かべるサミュエルに対して不快感を示しているらしいと言う事だった。

そして昨夜のトルマ・カイエン元帥の言葉から、もう一つの重大な推論を導き出していた。

前王アプサラス三世の崩御から「バランツ事件」までのシルフィードらしからぬ異変の黒幕が、実はサミュエル・ミドオーバなのではないかと言う事である。

少なくともイエナ三世とガルフはサミュエルを警戒していることは確かなようだった。

さらにややこしい事に新教会の指導者が絡んでいるかも知れないのだ。

「一つ、気付いた事がある」

ニームが顔を上げてニームにそう言った。

「何だ？」

「全てがデュナンだ」

「え？」

ニームが言うには、今回の事件をサミュエル対ガルフという対立と考えるとわかりやすいと言うのである。

サミュエル側とおぼしき人間は全てデュナンで構成されていると

いうのである。
エスカは言われてみればなるほどと思った。
サミュエル・ミドオーバはデュナンである。シルフィードに於いてアルヴの血が入らないデュナンが国王を除く国家の最高の地位にまで上り詰めていることは珍しい事であった。
バランツ事件についても、その指揮を執っていたクリヨン・アヨネット中佐もデュナンである。さらに言えばバードは基本的にデュナンが多い。
何らかの関係があると思われる新教会の堂頭、ミンツ・ノルドルンドもデュナンだ。
「そう言えば新教会は圧倒的にデュナンが多いと聞いている」
「ルーナーはデュナンが多いものだ。賢者も例外ではない」
エスカはアルヴにフェアリーが多いことを思い出していた。フェアリーはルーンを使えないのだ。アルヴ族の持つフェアリーの力に対抗する力を得るために、デュナンとピクシィがルーンを編み出したと言われているくらいである。
「結局そうなるのか……」
エスカの言葉は思わず口を出たものだった。ニームはちらりとエスカを見たが、何も言わずに広場に視線を戻した。

「失態であるな、ミドオーバ大元帥」
イエナ三世の声が広場に響く。サミュエルが口を開こうとするとイエナ三世が詰(なじ)るような言葉を投げつけて行くのである。どう見てもイエナ三世はサミュエルの弁明を聞こうとはしていないようだった。
「失態とは言い過ぎでございます」
見かねた大臣の一人が背後からイエナ三世にそう声をかけた。文官の大臣だったが、そもそも彼らはエルネスティーネが打ち合わせを無視して戴冠の儀の際にイエナ三世を名乗った事をずっと問題視

していたのである。
もともと戦士としての修養をほとんどしていない国王であるイエナ三世は、国の主要な地位にある者からはシルフィードの王としてはまだ一人前だとは認められていない節があった。
大葬の前になって各国のお歴々が表敬に訪れても体調不良を理由に一切会おうとしない態度にも業を煮やしていたと言えるだろう。
つまり、彼らは国王に意見する機会をうかがっていたとも言える。
大葬の前に打ち合わせにもない国儀を行うなどという専横な動きは、相手がたとえ国王であろうと彼らにとっては許し難い行為と言えた。
「どう考えてもキャンタビレイ大元帥……いや、もうただの侯爵ですかな。まあどちらでもよろしいが、彼の者の行動が非常識である事は明白。今、陛下が叱責するべきはむしろ王国軍でありましょう」
もう一人の文官の大臣が呼応した。
国王自身が国儀だと言ったのだ。国儀ならば彼ら大臣が発言するのは当然と言って良かった。
「左様。大葬の前にこのような臨時の国儀が行われるのだとすれば、それは前任者の身勝手な理由で欠席となった軍務大臣という極めて重要な椅子を誰に与えるのかという指名会議であるべきですな」
そう発現したのは近衛軍の元帥である。
彼もまた、デュナンであった。

イエナ三世はゆっくりと背後の臣下達を振り返った。
見つめる国王の緑色のその瞳は濡れるような鋭く深い輝きで彼らを貫いた。彼らですら今まで見た事もないような険しく、厳しいイエナ三世の表情に気圧された大臣連中の中には思わず一歩その足を後ろに引いた者も居た。
エルネスティーネという名前の少女からは今まで感じた事のない精霊波であった。国王になった瞬間に性格が変わったわけではない。
彼らは思った。国王という立場が王女時代の頼りなさを全て払い落としたのであろうか、と。

いや……。

彼らも先ほどその目で見てその体で感じたはずである。強い風のフェアリーが操る力を。

つまり、彼らは同時にこう考えたのである。

『イエナ三世は、ついに風のエレメンタルとして発現したのだ』と。

エレメンタルの発現がどのようなものであるかを知るものは誰もいない。

だが今まで人前で風の力などを一切操る事が無かった王女が、その纏う雰囲気をがらりと変えて現れ、怒りを力に変えて示して見せたのである。

「確かにお前達には理がある」

てっきり恫喝の言葉が飛んでくるものと思っていた臣下達は、イエナ三世の口から発せられた穏やかな一言にかえって違和感を持った。お互いに顔を見合わせるが、もちろんひそひそ話などは出来ない状況である。

そんな中、先ほど発言した近衛軍の元帥が敬礼すると一歩前に出た。

「では元帥としてご提案申し上げます」

彼はそう言うといったん後ろ側、つまり元帥と大臣達を一通り見渡すようにした。何かの合図でもあったのだろうか。大臣達の中には小さくうなずく者もいた。

「前王アプサラス三世がお倒れになり、その後戴冠したイエナ三世陛下は非戦闘員。さらに今回の軍務大臣の突然の辞任。これはまさに国家的な一大事と申し上げていいでしょう」

近衛軍元帥のその言葉に、横やりが入った。

トルマ・カイエンである。耐えかねたのであろう。

「国王陛下に対し、その言葉はあまりに失礼であろう！」

トルマの発言はほとんど怒鳴り声であったが、近衛軍元帥は微動だにしなかった。

「国儀とはこのようなもの。近頃国儀の席には着いておいでては無いカイエン閣下の言はまさしく的外れ。我が忠言に口を挟む方がよほど失礼千万」

「何だと？　きさま！」

「よせ、トルマ。場をわきまえよ」

思わず握り拳を突き出したトルマに、イエナ三世が鋭く制止の言葉を投げた。

「お主は黙っておれ。ウーレンハウト元帥の言うとおり、今は彼が発言している」

トルマは自分を睨むイエナ三世に敬礼をすると、唇を噛み絞るようにしてうつむいた。

ウーレンハウトと呼ばれた近衛軍元帥は口の端に小さな嘲笑を浮かべると、改めて顔を正面の舞台に立つ、自分の半分ほどの背丈しかない小さな女王、イエナ三世に向けた。

「これはまさにシルフィード王国の緊急事態。このような時においては、間違いのない能力と実績こそが軍を司る者には肝要と言うもの。すなわち……」

「すなわち元帥会議ではサミュエル・ミドオーバ大元帥の軍務大臣就任を決定した、か？」

イヤバス・ウーレンハウト近衛軍元帥の言葉を今度は国王自らが遮った。

「トルマよ」

イエナはそのまま今度はイヤバスの後ろに控えるトルマに声をかけた。うつむいていたトルマは国王が自分を呼ぶ声に思わず顔を上げた。

「ウーレンハウト元帥はそう言っておるが、お主は同じ元帥としてそれに同意したのか？」

「元帥会議は満場一致でございました」

話の腰を折られたイヤバスは負けじと口を挟んだが、イエナ三世はすかさずそれを叱責した。

「黙れ、ウーレンハウト！　余はトルマと話をしておるのだ」
相変わらず睨み据えるイエナ三世の表情は険しい。緑色の瞳でイヤバスに一瞥をくれた国王は、改めてトルマに視線を戻すと再度たずねた。
「どうなのだ？」
「私は……」

トルマは腹を決めかねていた。
いや、腹はとうに決めていた。だがそれはガルフに対する態度であって、イエナ三世がこのような行動に出るとは夢にも思っていなかったのだ。だから口にすべき言葉を決めかねていたと言った方が正しいだろう。
「質問を変えましょう」
数秒だけ待って、イエナ三世はそう言った。トルマに言葉を選んでいる時間を与えなかったと見るべきであろう。
「トルマよ。シルフィードの法律をお前は知っているか？」
「は？」
質問の内容が変わるにも程があった。少なくともトルマとイヤバスはそう思ったに違いない。
「まったく、揃いも揃って国の重責を担うべき輩がその守るべき国の法を知らぬとはな」
イエナ三世はそう言ってわざとらしいため息をつくと、今度はイヤバスに口を開く権利を与えた。
「面倒だから『はい』か『いいえ』で答えよ、ウーレンハウト」
「は、はい」
「よし。では聞こう。お前は元帥会議で軍務大臣の後継、いや正しくは軍務大臣代行だが、とにかくそれを内定したと言ったな？」
「――はい」
「ふむ。それはシルフィード王国の法律に沿った決定か？」
イヤバスは眉をひそめた。イエナ三世が言わんとしている事をす

ぐには理解出来なかったからだ。この年端もいかぬ子供が、法律等という言葉を取り出して何を説教しようとしているのか……そう思わざるを得ないような愚問だと思ったのだ。

「疾く答えよ。余は決して難しい質問はしておらん」

イエナ三世が時折挟むこうした大声の強い調子の叱責は、その場の雰囲気を支配するのに大きな効果を持っていた。

普段から怒鳴り散らす人間の大声などというものは、やがてはただの騒音に堕す。しかし反対に普段は穏やかで優美な姿形の少女がこれをやると、普段のイエナ三世、いやエルネスティーネ王女をよく知る者ほどその格差に戸惑い、その雰囲気に呑まれてしまっていた。

「も、もちろん、法に則った選定です、陛下」

「『はい』か『いいえ』だ、ウーレンハウト」

「は……はい」

イヤバスの答えを聞くと、イエナ三世は彼ににっこり笑いかけた。それは彼がよく知る王女エルネスティーネの「シルフィードの宝石」と呼ばれるゆえんたる、なんとも言えぬ優しい笑顔そのままであった。

イエナ三世は間違い無く王女エルネスティーネが即位した姿なのだと、頭ではなく心が感じた瞬間であった。

だが、その顔はすぐに真顔に戻った。

イエナ三世はイヤバスを見つめたままでその場に居るはずの違う人物の役職名を呼んだ。

「法務大臣！」

いきなり呼ばれた内政官は慌てて返事をした。この場の異様な雰囲気に気をもんではいたが、彼は観客の立場でやりとりを聞いていたものだから、その舞台にいきなり引きずり出され、いったい何を叱られるのかと既に気持ちは受け身であった。

「ウーレンハウトは合法的に軍務大臣の後任を元帥会議で内定したと申しておるが、そのとおりか？」

各大臣が出席する閣議はシルフィード王国では元帥会議の下に位置する。文官である内政官が担当する法務大臣は元帥会議には出席資格はない。実態がどうあれシルフィード王国の構造が軍事国家のそれである事がこれでよくわかる。

とは言え手続き上、元帥会議での決定事項はまず最初に軍務大臣の精査を受け、法的に問題がないかを法務官に諮った上で閣議に報告される事になっている。

つまりイヤバス・ウーレンハウトの言う事が本当、つまり元帥会議でサミュエル・ミドオーバの軍務大臣指名が正式に決定、いや内定しているとするならば法務大臣が知らぬはずはないのである。

つまり法的な手続きの確認をイエナ三世が行ったと言う事である。これはある意味極めて自然な事であるが、問題はその国家的に重要な事柄を国王が今初めて知ったと言う事であろう。

その件で今国王に問い詰められてはたまらないが、とりあえずの質問に対する答えは簡単なものである。

突然指名された法務大臣は少しだけ胸をなで下ろすと、当然だという口ぶりで答えた。

「ウーレンハウト元帥のおっしゃるとおり、空席になった軍務大臣の後継は元帥会議で内定もしくは決定ができることになっております。ついでに申し上げるならば閣議への報告も済んでおります」

法務大臣のその答えを聞くと、イヤバスは「そらみろ」という風に自分を見据えるイエナ三世を少しだけにらみ返すようにして見せた。

だがイエナ三世は眉一つ動かさなかった。

「ふむ」

彼女は法務大臣の報告を受けると表情は変えず腕を組むと独り言のようにつぶやいた。

ただし、その独り言は相手に聞こえるような独り言であった。

「では、私の記憶違いか」

そう言ったイエナ三世に対し、イヤバスはここぞとばかりに口を

開いた。
「左様でございます。我が国の法的にはそう言う段取りになっているのです」
イエナ三世はその言葉を聞くと、再びイヤバスに笑いかけた。ただし、今度は明らかに冷ややかな笑いであった。
「バレニー法務大臣！」
「は」
「シルフィード王国大臣法『軍務大臣代行の指名』を読み上げてみよ」
「え？」
何を言われるかと思えば、法務大臣としての知識をこの場で試験でもするつもりか……。
バレニー法務大臣は新王であるイエナ三世にやや失望を感じていた。自分の立場が弱くなると、つまらない課題を与えて相手が困るのを見て溜飲を下げようとしているのだと思ったからである。相応以上の能力がなければ大臣職に付く事など出来ないのがシルフィード王国である。もちろんバレニーはシルフィードの現行の法律など全て暗記していた。
バレニーはこう思ったのだ。
イエナ三世は自分が法律を全て暗記しているとは思っていないに違いない、と。
だからこそ、そこで即答出来ないバレニーにつまらない言いがかりでもつけるつもりなのであろう。
イエナ三世に対抗してそこで完璧に暗唱してみせる事はたやすい事だった。
だがバレニーは少しだけ意地を見せてやろうと一計を案じた。
彼は少し離れたところに居る従者に法全書を持ってくるように伝えた。
イエナ三世がそこでその行為を咎めれば、即座に暗唱して見せ、

法全書は自分の暗唱した分に間違いがないかを確認してもらう為に、つまりイエナ三世のために持ってこさせたのだというつもりであった。

だがイエナ三世は何も言わず、法全書がバレニーの手元に届くのをじっと待った。

長くはかからなかった。ほんの一分ほどで分厚い法全書がバレニーの手に握られていた。

その場に居た誰しもがバレニーが該当箇所を開き、そこを読むものだと思っていた。だが彼は法全書を閉じたままで条文を暗唱し始めた。

「第七条……」

だが、そこで声が止まった。

バレニー法務大臣は口をつぐむと、一度イヤバス・ウーレンハウト元帥の方へ顔を向けたが、再びイエナ三世に視線を戻した。

「どうした？　バレニー」

ワサン・バレニー法務大臣は隠しからハンカチを取り出すと、額の汗を拭った。

「しかし、陛下……」

「さすがは我が国の法務大臣。法律を完璧に暗記しておるようだ」

「ですが、法というのは……」

「お前の法解釈などどうでも良い」

イエナ三世はピシャリとそう言うとバレニー法務大臣の口を塞がせた。

「それともお前は一大臣の分際で余が心から尊敬する偉大なるイエナ二世が制定された大臣法がおかしいとでも言うつもりか？」

バレニーは何も言えなかった。

事態が思わぬ方向に転びそうなのを見て、イヤバスの顔に戸惑いと焦りの表情が浮かんだ。何がどうしたのだ、と言う問いをワサン・バレニー法務大臣に対して投げかけたかったが、おそらくそれはイエナ三世が叱責するだろうと言う事は想像がついた。

そもそもワサンの様子を見れば事の結果は明かである。
つまり、サミュエル・ミドオーバの軍務大臣内定は合法ではないと言う事である。
「そんなばかな」
思わず言葉が口をついた。
「トルマ！」
「は」
「バレニーの持っている法全書をウーレンハウトに渡してやれ」

おそらくこの場に自称「歩く図書館」であるアトラック・スリーズが居たならば、彼はイエナ三世が演出している寸劇の「落ち」を自分の司令官であるアプリリアージェに既に伝えていた事であろう。
だがその日大葬に参列したシルフィードの政府要人は一握りの人間を除き、この時点でもまだ若き女王が「切り札」を持っているとはつゆほども思っていなかった。
だが同時に、女王と法務大臣との間では既に勝負が付いている事もわかってはいた。
自信満々で内定した事を告げ、それを合法であるとみとめた法務大臣。だが一度合法である事をみとめた当の法務大臣が、法の専門家でも何でもないはずの女王の「条文を読め」というたった一言に青ざめ、あわてて弁明に走ろうとした事は事実であった。

# 第八十六話　遷都宣言

第八十六話　遷都宣言

「『第七条』……」

イヤバス・ウーレンハウト元帥は、探し当てた大臣法の条文を読み始めた。

「『常態ならざる何らかの理由により軍務大臣が不在と認められる場合、国王は元帥会議を招集し、元帥会議は軍務大臣代行の指名を行う。国王は元帥会議の指名に基いて、軍務大臣代行を任命する』」

イヤバスは条文を全て読み上げた後も、そこに法務大臣の顔色を変えさせるほどの事柄が記されているとは思えなかった。

「そう言う事だ、ウーレンハウト元帥」

イエナ三世はしかし、腰に手を当てると勝ち誇ったような顔でそう言い放った。

法全書から顔を上げたイヤバスは、怪訝な表情で女王をみやった。

「わざわざ条文を読ませてやったにもかかわらず、何の事かさっぱりわからぬといった顔だな、ウーレンハウト？」

しかし条文が読み上げれらた事で、イエナ三世が言わんとしている事を理解出来た人間も多くいた。おそらくイヤバスとて実際に女王と対峙して居る状態、つまり極度の緊張下でなければ思い至ったかも知れない。

少なくともトルマはイエナ三世が何を「切り札」にしたのかに気付いた。そして、その「切り札」が存在する事ををたった今思いついたのではないであろう事にも。

つまり、ウーレンハウトの言葉は想定されていた事なのだ。さらに言えばサミュエル・ミドオーバが代行とはいえ軍務大臣に就任する事をイエナ三世が望んでいない事も。

では、なぜガルフ・キャンタビレイ大元帥は「辞任」したのだろうか？

「ミドオーバ大元帥！」

イエナ三世はイヤバスに背中を向け、広場の反対側にいるガルフに向かって再び呼びかけた。

「お主は何か言う事があるか？」

サミュエルは目を伏せて唇を噛んでいた。

もちろん彼はイエナ三世の意図がわかっていた。そしてこの勝負に関してはイエナ三世の勝利が動かない事も。

「いえ……」

サミュエルはゆっくりと首を横に振った。

「私からは何も申し上げるべき事はございません、陛下」

「で、あろうな」

だが、イヤバスは自分の理解の外で事が終わる事をよしとしなかった。

「お待ち下さい。理由を、理由をお教え下さい」

「ほう」

イエナ三世は再び振り返るとウーレンハウト近衛軍元帥を見つめた。

「ならば敢えて問う。余がいつ元帥会議を招集したと言うのだ？」

「え？」

その言葉を受け、イヤバスは開いたままの法全書に目を落とした。条文を追う……。

「――あ！」

イエナ三世は声を上げたイヤバスを見ると、満足そうに微笑んで顔を広場に向けた。

「念のために余から二つほど説明しておこう、ミドオーバ近衛軍大元帥」

サミュエルに呼びかけたが、それはその場にいた全員に対する説

明であることは明かであった。
人々は息を潜めてイエナ三世の言葉を待った。
狐につままれたような話であった。
大葬前に突然始まった国儀、その中で元帥から軍務大臣代行がサミュエルに内定している事を告げられたのも驚きであったが、その内定が法に則ったものではないという。
「ミドオーバ大元帥は二つの理由で軍務大臣代行ではない。一つ目は軍務大臣代行を指名すべき元帥会議は国王が招集すべきものであるにもかかわらず、国王である余はその為の元帥会議を招集した覚えはないからだ」
会議の構成員である元帥達は複雑な思いで国王の言葉を聞いていた。
法の条文には確かにそう記載されているかもしれない。だが今までも元帥会議というのは敢えて国王が招集して開催されるものではなかった。
既に慣例化していたのである。彼らが知る限り、アプサラス三世の時代においても敢えて国王が元帥会議を明示的に招集した事はなかった。
バレニー法務大臣はその事を言って釈明しようとしたのであろう。だが、イエナ三世はその慣例についても自説を正当とするだけの根拠を持っていた。
「既に元帥会議の招集は議長が行うという慣例があり、慣例は条文と矛盾しないという法解釈があると主張する者もいるだろう」
そういうイエナ三世の言葉に、何人かの大臣はうなずいた。
「確かにそれで問題は無いと余も思う。それを踏まえた上で、余は敢えてもう一度問う。その慣例とやらで招集される元帥会議に国王の出席はあったのか？」
この言葉には全員がハッとした顔になった。
イエナ三世の言わんとする事はその問いで伝わった。
国王が出席しているのだから、元帥会議は敢えて招集という形式

的な手続きをとる必要がないものになっていたのである。アプサラス三世時代、確かに元帥会議には国王は必ず出席していた。

だが近衛軍大元帥を軍務大臣代行に指名する元帥会議にイエナ三世は出席してはいなかった。

いや、イエナ三世は戴冠後は一度も元帥会議に出席していなかったのである。

国王が出席している状態であれば慣例と言えよう。しかし国王不在だとすればどうだろう？　それは慣例にもあたらない。国王が招集もせず、会議に出席もしていないとすれば、もはや合法と呼べるだけの根拠は欠落していたと言えるだろう。

「もう一つの理由も言っておこう。それも第七条に書かれている。しかも冒頭だ」

第七条の冒頭、それは

「常態ならざる何らかの理由により軍務大臣が不在と認められた時」

という文言である。イエナ三世はその前提がそもそも間違っていると告げた。

「辞任はそもそも『常態』である」

一際大きな声でそう言うと、イエナ三世は右腕を前方に突き出しサミュエル・ミドオーバを指さした。

元々「常態ならざる何らかの理由」とはほとんどの場合は戦死を想定した言葉である。辞任については正式の手続きで後継者を選ぶ事になっているのだ。

イエナ三世はそれ以上の説明はしなかったが、ここでガルフが予め辞任していた事が重要になってくるのである。

つまりサミュエルは「国王崩御という国家の重大時に、正式な招聘にも応じず帰京しないガルフ・キャンタビレイ軍務大臣は、意図的に不在期間を作っている」と判断し、それを「常態ではない何らかの理由」だと判断、それを根拠に軍務大臣代行の指名を行ったのである。国王が同席しようが招聘しようが、元帥会議が何を決めようがそれは「前提」が間違っている為に効力を発揮しないのである。

イエナ三世はその為にわざわざ署名入りの辞任承認書まで用意していたと言う事になる。元帥会議以前の日付を記入して。

サミュエルは考えていた。

さすがにここまでの脚本をイエナ三世が書いたのではあるまい、と。

では目の前で繰り広げられている寸劇の作者はいったい誰か？

横目で後ろに控えるガルフを見やった。

だが、彼が知る限り六翅のスズメバチの旗章を掲げる誇り高き侯爵はこういう狡知を良しとしない人物であった。敢えて言えば最後は正々堂々と正論と剣を掲げる人物である。

次にガルフの知恵袋であるリーンの顔が浮かんだ。彼であればやりかねない。しかしどちらにしろガルフもリーンもこの間ノッダにいたことは間違い無く、ここまで周到なお膳立てを用意できるとは思えなかった。

さらに言えばたとえリーンの戦略であったにせよ、どうやって女王を本物と入れ替える事ができたのであろうか？

疑問は結局そこに行き着くのである。

つまりサミュエルは、イエナ三世達の背後にいる人物もしくは勢力の正体がまったくわからなかった。

「話を元に戻すぞ、ミドオーバ近衛軍大元帥」

列席した各国の要人達は一つの事柄について長く考える暇を与えられなかった。

考えてみればイエナ三世が登場してから行ってきた一連の事柄は、国儀という名前を但し書きに使い、言わば「内輪の話」という形を取りながらも実のところ彼らが興味を持っていた事柄に対する回答になっていた。

その事に気付き始めた人々は、そうなるとイエナ三世が作り始めた流れに身を任せる事を積極的に選びつつあった。

「『はい』か『いいえ』で答えよ」
例によってイエナ三世は相手にあまり余裕を与えない作戦で打って出た
「遠方よりはるばるエッダにはせ参じた我らが王国軍隊の受け入れ体制はあるのか？」
サミュエルはしかし、群衆の予想を裏切って冷静な声で答えた。
「はい」
イエナ三世が用意した陽動作戦にまんまとはまったとは言え、彼としてもそのままほぞを噛んだままで終わりという訳にはいかない。
イエナ三世がウーレンハウト近衛軍元帥とバレニー法務大臣とやりとりをしている間に、彼はこの場を切り抜ける脚本を書き上げていたのである。
しかし……
「この期に及んで陳腐な比喩は要らぬぞ、ミドオーバ大元帥。見よ」
イエナ三世はそう言うとミドオーバの背後、つまり大通りを埋め尽くす王国軍の兵士達を指さした。
「彼らに必要なのは休息の為のベッドと、汗と泥を流す風呂、それに腹を満たす食事だ」
そしてひときわ大きな声で件の王国軍の兵士達に呼びかけた。
「そうであろう？　兵士諸君！」
「おおー！」
女王がそう言うと、四つの大道理を埋め尽くした王国軍の兵士達は一斉に手に持った槍や剣を空にかざし、怒号を上げた。
その大音声に広場にいた大葬の参列者や近衛軍の中隊は思わず耳を塞いだ。だが兵士達のそれは地鳴りのようなもので、耳を塞いでも体を震わせて腹の奥に響き渡った。
イエナ三世が右手をすっと横に下げると、その怒号は波が引くように静まった。
「おっと、私とした事が肝心なものを忘れていた」
静けさが戻った広場で、イエナ三世の大声がさらに響いた。

「食事だけでは申し訳ない。彼らに必要なのはうまい食事と、それに合ううまい酒だ！」

イエナ三世がにっこり笑いながらがそう言うと、「シルフィードの宝石」と呼ばれるその笑顔に呼応するかにように兵士達が今度は銘々の言葉で歓声を上げた。それは先ほどの鬨の声とは桁違いの大きさで、通りに面した建物の窓という窓は文字通りびりびりと震える程であった。

その窓の側で事の成り行きを見守っていたエスカとニームは思わず窓から体を離して互いに見合ったが、一連の出来事にあっけにとられ、交わす言葉を失っていた。

「比喩やつまらぬ頓知では彼らの腹は膨らまんのだぞ、サミュエル」

一度上げた手を下げ、再び兵士達に沈黙を求めたイエナ三世は胸を反らしてサミュエルにそう問いかけた。

「余をやり込める言葉遊びや、この場に居るお歴々を煙に巻く美辞麗句をいくら唱えようとも、そこに実際に存在する五個師団の兵達の腹は膨れぬし、喉の渇きを潤す事も出来ぬぞ？」

さすがにサミュエルにはその問いに答える言葉はなかった。いや、答えられないように誘導されていたのである。彼に許されているのは「はい」か「いいえ」である。それ以外の言葉を発したとたん、イエナ三世はその言葉を遮るであろう。そして「はい」や「いいえ」で答えられない言葉に対して沈黙を守っているならば、ここにいる人々はサミュエルには答えられないのだと思ってしまうだろう。理不尽な話ではあるが、人間の心理をついた単純だが巧妙な作戦と言えた。この場に於いて、唯一王ならばこそ使える「手」である。

サミュエルはイエナ三世と、自分の背後にいるはずの人物に対して唇を噛んでいた。

答えがないとみると、イエナ三世はすぐに次の行動に移った。

「バングル総務大臣」
イエナ三世が呼びかけたカラミティ・バングル総務大臣はサミュエル・ミドオーバ近衛軍大元帥の幕僚である。近衛軍が関係する宮廷催事などの実質的な段取り全般を司る立場にある人物であった。
「は」
自分に声をかけてきたイエナ三世の小さな背中をぼんやりと見つめていたカラミティは背筋を伸ばすと返答をした。
「実務の事を大元帥に聞くのは酷だったかもしれぬ。そちに尋ねるが、今余が言った事柄はもちろん準備済みなのであろうな？」
カラミティは全身の毛穴から汗が一気に噴き出すのを感じた。
彼は思わず周りを見渡した。もちろん救いをさしのべてくるような人間は居ない事など百も承知だったが、そうせずにはいられなかったのだ。
「余は気が短い。さっさと答えよ。言っておくが五個師団分である」
カラミティ・バングルは遠く離れた場所で長い儀仗を手に立っているサミュエルの顔をちらりと見ると、観念したように首をうなだれた。
「私の方ではまだ準備は整っておりません」
「『まだ』だと？」
カラミティの言葉を聞いて振り返ったイエナ三世の表情は厳しかった。大きく見開かれた緑色の目は明らかに怒りの色を帯びていた。
「では聞こう。それはいつ整うのだ？　具体的に申せ。一時間後か？　三時間後か？」
哀れな総務大臣は首をさらにうなだれた。もうまともにイエナ三世の顔を見る気力は彼にはなかった。
「申し訳ありません……　一両日程度では、準備は不可能でございます」
そもそも無理な事がわかっていて聞いているのである。カラミティはそれでも「『まだ』などというあやふやなごまかしの言葉で自らの立場を弁解しようとしてしまったのだろう。それは彼が純粋な

アルヴではなく、デュナンの血が入ったデュアルであったからかも知れない。

「これは困った」

膝をついて詫びたカラミティに一瞥をくれたイエナ三世は広場に視線を戻すと、腕組みをして自分に注目している数万人に向かってそう独り言を告げた。

「王国軍の兵士と言えばシルフィードの要（かなめ）。国王としては尊ぶべき存在。たとえ元帥会議が主催した大葬とはいえ、我が父との別れのために集った彼らを居場所が無いから出て行けなどとはさすがに言えぬ」

その言葉もまるで独り言のような調子であった。

次にイエナ三世は腕を組んで舞台の上をゆっくりと歩きながら行ったり来たりを繰り返した。もちろん全ての言葉は明瞭で広場中隈無く届いていた。

「バングル総務大臣に不可能であるというならば、それができる人間に任せるしかないということか」

イエナ三世はそう言うとポンと手を打った。

「バングル」

再び指名を受けた総務大臣は顔を上げた。

「は、はい」

「お前の方で無理だというのならば、その仕事、余が引き受けよう。そもそも彼らに対して責任をとるべきは近衛軍大元帥ではなかった。国王が責任をとるべきなのだ。よいな？」

イエナ三世の言葉は、先ほどと違い極めて優しい響きが込められていた。それは針のむしろに座っていたようなカラミティ・バングルにとってまさに渡りに船のような甘い響きであった。

しかし、その言葉を聞いて、カラミティとは逆にその顔に緊張を走らせた人物が二人いた。

サミュエル・ミドオーバとバレニー法務大臣である。

「はい。それはもう……」

「よし」
しかしサミュエルがカラミティを制する時間はなかった。
「皆の者、今のやりとりを聞いたであろう？　総務大臣は余に王国軍受け入れの全権を委任するそうだ。これだけの証人がいる。敢えて書面に残す必要も無かろう」
イエナ三世のその言葉を聞いたサミュエルはがっくりと肩を落とした。完全にしてやられた事を悟ったのだ。

「ガルフ！」
イエナ三世は今度はガルフ・キャンタビレイ侯爵に声をかけた。
「は」
「ひょっとすると侯爵は五個師団の王国軍の受け入れに関して、解決策を持っておるのではないか？」
少数ではあるが、広場にいた人間のうち何人かは、登場してからこっち、イエナ三世が周到に積み上げてきた「芝居」の顛末がおぼろげながらわかりかけていた。
シルフィードの法では王国軍の受け入れの指揮権は総務大臣が握っていたのであろう。その法務大臣を始めとする文官の内政大臣は近衛軍大元帥の指揮下にあり、しかもサミュエルの幕僚である。つまり手の届きにくいところに置かれていた鍵を、イエナ三世は手にしたのである。
要するにイエナ三世は一時的ではあるが王国軍を合法的に直轄下に置いたのである。軍務大臣不在というあやふやな期間をそのまま放置しておけば、たとえ法的にサミュエルの内定を無効化したとは言え並ぶ階級が存在しない大元帥という地位が持つ「権力」が実質的に王国軍を掌握するのは時間の問題であろう。王国軍はあくまで軍務大臣を頂点とする組織であり、国王自身は軍を直轄しないのだ。唯一、ル＝キリアを除いて。しかしそのル＝キリアは既にない。
イエナ三世の術中にまんまとはまったのは総務大臣であるカラミティ・バングルの浅考に依るものだと言い捨てるのはたやすい。し

かしたとえ誰が総務大臣であろうと同じ結果であったろう。イエナ三世が踏んだ手順はそれだけ巧妙だったのだ。

そして王国軍の指揮権を合法的に手に入れたイエナ三世は、その王国軍の指揮官を辞任したガルフ・キャンタビレイに声をかけたのである。

それはある意味で国王が演じた壮大な茶番劇とも言えた。

辞任したガルフ・キャンタビレイ大元帥は名目こそ違うとは言え再び王国軍の指揮権を手にすることになったのだから。

「国王が是非にとおっしゃるのならば、このガルフ・キャンタビレイ、五個師団であろうと十個師団であろうとお引き受けいたしましょう」

「キャンタビレイ侯爵の言や良し」

相変わらず間を置かず用意してきたような芝居がかった台詞でその場を支配するイエナ三世に、観衆はある意味釘付けであった。

多くの人々は、この常識外れな言動をとる女王が次にいったい何を言い出すのか……それを期待して待っているような気分になっていた。

「ですが、一つだけ条件がございます」

ガルフもまた、会話の間を置かず自身の台詞を正しく口にした。

「陛下のお申し出をそのままお受けするには、いささかエッダは狭もうございます。総務大臣に確認するまでもなく、王国軍師団の全兵を受け入れるだけの受け皿はここには存在せぬでしょう」

「余は回りくどい言い回しは好かぬ。端的に申せ」

「おそれながら、一言で言うなら『我が準備はエッダの外にあり』でございます」

「そんなことは当然であろう。かまわぬ。承知した」

そう言うイエナ三世に法務大臣であるカラミティ・バングルがたまらず声をかけた。

「お、おそれながら、それは権限外でございます」

バングルの声は掠れていたが、これだけは言わぬ訳にはいかぬ、という決意がその表情ににじみ出ていた。

「我が総務大臣の王国軍の受け入れに関する諸事権限は首都エッダに限ったもの。エッダ以外の王国軍についてはその権限の外となります。すなわち……」

「すなわち余がキャンタビレイ侯爵に委譲した権限はエッダを一歩出ると無効だとでも言いたいのか？」

そう言って睨み付けるイエナ三世に、しかし総務大臣も負けてはいなかった。

「私は法的に正しいことを申し上げているだけでございます」

イエナ三世は眼を細めると、今度は法務大臣であるバレニーに声をかけた。

「一応確認しておく。バングル総務大臣の言う事は確かか？」

バレニー法務大臣は頷いた。

「明文化されている軍法にそう書かれてございます。ご指示があれば条文を読み上げますが？」

「いや、無用だ。法務大臣がそう言うならば敢えてその必要はないだろう」

イエナ三世は手を上げて条文の暗唱を制した。

動きをエッダに制限されたイエナ三世が困惑するであろう事を想像していた元帥や大臣達はしかし、満面の笑みを浮かべた女王の顔を見る事になった。

その後イエナ三世がとった行為、それこそが後世に伝わる一連のイエナ三世伝説の始まりであった。

その最初の伝説、有名な「イエナ三世の三宣言」の始まりである。

イエナ三世はまずガルフに向かいこう告げた。後に「軍務大臣再任命宣言」と言われる内容の命令である。

「カラティア朝シルフィード王国国王イエナ三世の名において命じる。首都内に於ける王国軍諸事権限をガルフ・キャンタビレイ侯爵に一任する」

続いてイエナ三世は大勢の列席者に顔を向け、こう言い放ったのだ。

「これにて国儀を終え、引き続き大葬の儀に移る。参列の方々はご起立いただきたい」

それは突然の大葬の儀の開始を伝えるものだった。

大葬には事前に式次第というものが決められていた。そしてもちろんイエナ三世の行動はその式次第には一切ないものだった。

これにはさすがにシルフィード王国の政府関係者が混乱状態になった。

だが彼らが参列者の前でその醜態を晒す前に、イエナ三世は自分の行為の正当性を告げたと言う。

記録にはこうある。

まずイエナ三世は「大葬」の意味に触れた。

大葬とは国王が主催するものであること。

式次第については明文化されたものはなく、ただの慣例であること。

とは言え、慣例をないがしろにしているつもりはなく、大切なのはその趣旨であるという事を、簡潔に順を追って説明した。

すなわち、自分のやっていることは法律上も大葬という趣旨から見ても間違った行為ではないことをはじめに参列者に示したのである。

その上で彼女は実の父である故アプサラス三世の代表的な功績をいくつか上げ、敬意を示し、深い追悼の意を表した。

そしてその後にいよいよ例の「宣言」が告げられたのである。

「シルフィード王国国王、イエナ三世の名に於いてここに宣言する。本日をもってシルフィード王国は遷都を執り行い、ノッダを首都とする」

淡々とした言葉だった。

人々はイエナ三世がいったい何を言ったのかを理解するのに少し

の時間を要した。
「これこそが遷都事業に粉骨砕身していた前王の悲願。それをこの大葬での一番の手向けとする」
イエナ三世の三宣言の一つ、「遷都宣言」は大葬の儀の中でアプサラス三世への「餞（はなむけ）」という形でなされたのである。
予定では遷都は二年先のはずであった。
「お待ちください」
大声で人々を我に返したのは、サミュエル・ミドオーバ大元帥だった。
「非常識にも程があります」
「左様、お戯れにも程があります」
呼応したのは近衛軍元帥、イヤバス・ウーレンハウトだった。
ただただあっけにとられていた大葬の参列者達も、さすがにざわめき始めた。
だがここへ来てイエナ三世は敢えて事態収拾の為の言葉を発することなく、ざわめきが広がるのを平然とした表情で眺めていた。
「さすがにここまでめちゃくちゃですと、陛下は何かしらよからぬ病気でご乱心あそばされたと思われますぞ」
これは法務大臣のワサン・バレニーだった。
バレニーの声は普通の大きさだったが、部隊の前列にいた参列者の耳には達していた。その言葉に多くの参列者が心の中でうなずいていた。
確かに「陛下ご乱心」と言われても仕方のない発言と言えた。
国儀とやらでおこなって見せた、王国内部の乱れをわざわざ外向けに披露した行為も前代未聞の行為には違いなかったが、五個師団もの兵士の収拾が付いたと言う事では参列者もほっとしていたのも事実である。だが、その後いきなり始まった大葬の儀はわずか数分で、イエナ三世の弔いの言葉のみが式次第の全てであった。参列者からの弔辞や、そもそも公式な外交の場には初めてその姿を現す新しい王と、彼女を補佐する国の重鎮の紹介を兼ねた弔文朗読が一切

割愛されるのは異様としか言いようがない。
最後の最後まで「意図はわからないが、凝りに凝ったシルフィード風の演出なのではないか？」と思っていた心の広い参列者もさすがに遷都宣言に至っては「これはおかしい」と考えるしかなかったであろう。

参列者の中でもとりわけドライアドの名代一行、いや、名代以外の補佐官達は混乱の中に居た。エスカがこの大葬の参列の席にいない事を気にしていたのである。
おそらくこの様子は見ているに違いない。この場にいない事が凶と出るか吉と出るか……その判断が出来なかった。
まさかイエナ三世にしろサミュエル・ミドオーバにしろ、各国からの参列者に危害を加える事はさすがにないだろう。だが、国際的な異常事態であることは確かである。
フェルン・キリエンカは賢者《黄丹の搦手（おうにのからめで）》ことリンゼルリッヒ・トゥオリラの服の袖を引っ張ると耳元で囁いた。
（まさかとは思いますが、正教会が一枚噛んでいる、と言う事はありませんよね？）
そう問われたリンゼルリッヒは肩をすくめて見せた。
（一枚噛んでいるとしても、さすがにこんな面白展開にはならないでしょう）
（でしょうな）
フェルンは頷くともう一つの懸念の方をつぶすことにした。
（エスカ様の事は放っておくとして、我が国の名代が騒ぎ始めたら……）
（即座に眠っていただきますよ。ご安心あれ）
リンゼルリッヒはフェルンに皆まで言わさず、そう言うと目配せをして見せた。
だが、フェルンにはそう言ったものの、リンゼルリッヒには一つ引っかかる事があった。その日の朝、エスカに付いているために大

葬には参列しない旨を告げたニームの態度が少しおかしかった事を今更ながら思い出していたのである。

エスカと出会ってからはほとんど見せなくなっていた昔の表情になっていたのである。

いや、昔のような単なる無表情とは違い、無理矢理無表情を作っているような雰囲気が漂っていた。言い換えるなら精神状態が平穏ではなく、それを隠すために無表情という表情を選んでいると言った風情であった。

心の動きを悟られたくない時に、人が良く見せる行為ではあった。

リンゼルリッヒは隣の同僚を肘でつついた。

（ニーム様の事でしょ？）

《薄鈍の階（うすにびのきざはし）》ことジナイーダ・イルフランはリンゼルリッヒが言いたいことを既にわかっているようだった。

（関係があるとは思えないわ。ましてや裏で糸を引いているわけもないでしょう？）

賢者が他国の内政に関わることは賢者法で重罪とされる行為である。大賢者がそれを行うはずがない。彼らは大賢者《天色の？（あまいろのくさびら）》ニーム・タ＝タンが極めて生真面目な性格であることを知っていた。

エスカ・ペトルウシュカに肩入れする事は立派な内政干渉ではないかとも考えられるが、今のところそもそもエスカも政治的な動きは見せては居ないし、ニームもエスカ自身にはこれでもかと干渉しているものの、シルフィードの内政に干渉するような行為には及んでいない。

そもそもドライアドに入り込んでバードとしての役割を演じながら他国の内部を調査する事は問題がないのである。その延長線であると判断されればそれは内政干渉ではない。さらに言えば賢者や大賢者はある目的を果たす事が優先される。その為には内政干渉などという「些事」は問題にならない。すなわち《天色の？》には三聖《深紅の綺羅（しんこうのきら）》を救い出すという大義名分が最上位にあるのである。

ではその大義名分の為にイエナ三世を抱き込んだという考えはどうだろう？

だがリンゼルリッヒもジナイーダもニームがイエナ三世やサミュエル、ガルフと言った面々とは一切接触がないことを知っていた。まさか昨夜のうちに出会い、何らかの密約が交わされたとは到底考えにくい。

問題は、この出来事がニームにとって都合がいいのか悪いのか、である。

《深紅の綺羅》の痕跡がエッダの王宮にあるとすれば、そのエッダが遷都によって放棄された方が都合がいいように思える。しかし、そう簡単な事なのであろうか。そもそも国王が遷都すると宣言したから「はいそうですか」と本日、今日、今からいきなりノッダが首都になってエッダから要人がいなくなる、と言うわけではないだろう。

とは言えニームとエスカは彼らの場所からは離れたところでこの成り行きを見守っているに違いない。

そう、つまりはリンゼルリッヒにしろジナイーダにしろ、今のところはどちらにしろ成り行きを見守るしかないのである。

同じ事はエスカ自身も考えていた。

この事態は果たしてイエナ三世の乱心と言う事で収拾するのか、そうなった場合、シルフィード王国のこの後はどうなるのか？　そしてそれはニームの目的にとって歓迎すべき事なのか、はたまた……。

エスカはあらゆる可能性に対して考えを巡らしていた。

「シルフィード王国の王位継承権の第二位はアプサラス三世の弟、ヴァンダラー・カラティア公爵だったな」

生前に王位継承はないシルフィード王国の場合、ヴァンダラーが国王になると言う事はすなわちイエナ三世の逝去を意味する。つまりエスカはそこまで考えを巡らせていたと言う事である。

ヴァンダラーに関しての情報ももちろん彼は持っていた。彼の見立てではもしヴァンダラーが王位に就いたなら、少なくとも求心力に関してはアプサラス三世やイエナ三世に及ばない国王になるはずであった。

「どうした?」

独り言の様につぶやいたものの、それはニームに対して呼びかけた言葉であった。「イエナ三世の次の王」という極端な発展を口にすることでニームの考えを聞こうと考えての事であった。

だが、ニームは沈黙を守っていた。

ニームの様子が今朝からおかしいのはエスカも既に気付いていた事だ。だからこそ言葉を交わしたいと考えたのだが、ニームはいつの間にか拳を握りしめてただイエナ三世を注視していた。

「ニーム?」

エスカは今度は直接その名を呼んだ。直感がそうさせたのだ。ニームは何かを知っている、と。ニームのその態度は、何かを待ち構えているような仕草だと思ったのである。

いったい何を?

「おい、ニーム」

二度目の問いかけで、ニームはようやく自分が呼ばれていることに気付いた様に小さくビクンと肩を揺すってから、ゆっくりエスカに顔を向けた。

「どうした?」

「本当みたい……」

ニームは小さな声でそう言った。

「え?」

「夢でも何でもない。夕べのことは本当に本当」

「おい、ニーム?」

意味不明な言葉を口にするニームに対し、エスカはさっきから漠然と感じていた不安が黒く広がるのを嫌な気分で認識していた。

だがエスカはゆっくりとニームと話ができる状況にはなかった。

イエナ三世の、いや王宮前広場で繰り広げられている「舞台」から目を離すわけにもいかなかったのだ。

「陛下はお疲れのようだ。玉間へお連れしろ」

ざわめきの中でなお無言のイエナ三世に対し、行動を起こしたのはイヤバス・ウーレンハウト近衛軍元帥であった。彼はそう言うと、舞台の脇に控えているイエナ三世の世話係である数名のバードに声をかけた。

彼女たちは顔を見合わせるとおずおずとイエナ三世に近づいたが、それを見てイエナ三世はそれを拒絶する言葉を口にした。

「余に近づくな！　成敗いたすぞ」

だが、その言葉を聞いたサミュエルがそれに反応した。

「女王陛下はやはりご乱心だ。かまわぬ、お連れしろ」

大元帥の命令を受けた近衛軍の一部が、イエナ三世のいる舞台の方へ移動を始めた。

さすがに広場は喧噪状態になった。

いくつかの小隊がイエナ三世のいる演壇に移動するのに併せて他の小隊は大葬参列者をぐるりと囲んで壁を作り、慇懃な言葉遣いで緊急事態に付きその場を動かないようにと告げ回った。中隊の残りはガルフ達王国軍に対峙するかのように横に広がり、広場と……いや、つまりはイエナ三世との間に壁を作り上げた。

だがそれを見ても親衛隊やティルトール・クレムラート、ヘルルーガ・ベーレント両将軍ともに一切動きを見せようとはしなかった。

一方、いったんイエナ三世の恫喝にひるんでいたバード達も動いた。

バードはもともとサミュエル・ミドオーバ大元帥の指揮下にある組織だ。サミュエルはバード長をも兼ねており、むしろ平時はバード長としての役割の方が大きいと言って良かった。彼らがバード長の指示に従うのは当然であった。

バード達がサミュエルの命でイエナ三世の立つ演壇に規則的な配

列で囲い込みを始めようとした時である。イエナ三世は腰にぶら下げていた儀式用の剣を素早く抜き放ち、それを天にかざすと、驚くほどの大声で「全員その場を動くな」と叫んだ。

それは小柄なアルヴィンの体のいったいどこから出たのかと思う程の大きな声で、さしもの「大音声のティルト」も顔色無しと言えるほどであった。もちろん特殊な力を使った増幅があるのだろうが、とにかくその声はその場の空気を振るわせた。

一瞬耳を塞いだ人々が、次に行ったのは当然ながらイエナ三世が掲げた剣が指す方向に目をやることであった。つまり空である。

「見よ」

イエナ三世が敢えて告げるまでもなく、その場に居たほとんど全員が空に顔を向けていた。

トルマ・カイエンの執務室の窓から様子を伺っていたエスカとニームもまた例外ではなかった。

そして人々はそこにあってはならぬものを目にした。彼らがその次に取った行動は息を呑むこと、続いて悲鳴を上げるか、叫ぶか唸るかであった。

「静まれ！」

イエナ三世の大音声が再度響いた。

「余をこれ以上怒らせるな！　吹き飛ばされたいか、ミドオーバ大元帥！」

人々が顔を向けた先、そこはエッダの上空であった。

良く晴れ渡った空の一部に、暗い穴が空いていた。いや、穴ではない。そこには王宮一体を完全に飲み込む程の竜巻が、まるで生き物のようにぐるぐると回りながらうごめいていたのである。

サミュエル・ミドオーバはそれを見て確信した。

風のエレメンタルはいつの間にか自らの力に覚醒していたのだ。

そして変わり身であるはずのイエナ三世はこれまたサミュエルの知らぬ間に本物と入れ替わっていたと言う事を。

静まりかえった広場の中央に、一陣の風が走った。それは広場の端からイエナ三世に向かって吹き付ける風であった。

腰までである長い金髪をなびかせたイエナ三世はその風を受けながら演壇を降りると、ゆっくりと風が作った通路を歩き始めた。その通路の先にはサミュエルが近衛軍を率いて立っていた。

頭上に真っ黒な竜巻を従えて泰然と近づいてくる女王の気に圧したのか、誰も何も命じないのに近衛軍はイエナ三世の為にその壁を崩して道を空けた。

「いつです」

その顔を見向きもせず、ただ前を向いたままで横を通り過ぎようとしたイエナ三世に、サミュエルはたまらず声をかけた。

「いつ入れ替わられたのか？」

イエナ三世は自分にだけ向けられた小さな声に反応して立ち止まった。

「何の話か？」

「確かにあの夜、風のエレメンタルは……」

「何の事を言っておるのかわからぬな。余はただ一人の余じゃ」

「まさか……儂は初めからアプサラス三世にだまされていたと言うのか？」

「ふ。さあて、な」

イエナ三世はかすかに笑うと、もうその話題には興味がないといった風に再び歩き出した。結局サミュエルには一瞥もくれぬままに。そして彼女を待つ太古からのカラティア家忠臣、キャンタビレイの末裔の前で立ち止まると息を大きく吸い込んでエッダでの最後の号令をかけた。すなわち「出城宣言」である。

「皆のもの、往くぞ！　エッダを後に、我らが新しい首都、ノッダへ！！」

それはまさにエッダ中に響けと言わんばかりの、大きく、そして澄んだ良く通る声であった。

通りを埋め尽くしていた王国軍の兵士達は女王の声に答え、手を振りかざして鬨の声を上げた。

その大歓声の中、イエナ三世は大きなガルフ・キャンタビレイに手を差し出した。ガルフは恭しくその手を引いて女王の体を抱き上げるとそのまま騎馬に乗せた。

「出発だ、リーン。我らが新しき都へ」

リーンは控えていた親衛隊の一人に合図をした。親衛隊の号令係は手にしたラッパを空に向け、高らかに進軍の旋律を奏で始めた。

勇ましい旋律が吸い込まれてゆくシルフィード大陸東部の空はいつの間にか竜巻が消え、元通りの抜けるような青空であった。

現在の、主に政治形態による分類歴史学に於いて第四次ファランドール大戦と命名されている戦争が開戦されたのはドライアド王国フェリックス五世に依るサラマンダ侯国に対する宣戦布告日、すなわち星歴四〇二七年黒の一月二九日となっている。しかし、いわゆる「月の大戦」と呼ばれる、エレメンタルを巡る伝説の闘いの開幕はイエナ三世の遷都宣言が行われたこの日であるというのが各方面で了解された事項であることはここに改めて記しておこう。

ファランドールの歴史は今ここに、小さなアルヴィンの行動によって大きなうねりを生もうとしていた。

# 第八十七話　ニームの選択

「つまり、こういう事です」

周りを近衛軍の兵士達に囲まれた上、抗議の叫びも封じられて怒りの矛先を「身内」に向け、その鬱憤を発散しようとしているドライアド国王名代、すなわちマルク・ペシカレフ公爵に、フェルン・ペトルウシュカが、今起こった事の顛末を説明していた。

大葬は突然終わった。

イエナ三世の「エッダからの退場」とともに。

あっけにとられたとはまさにこのことであろう。

要するにイエナ三世は突然遷都宣言をしたかと思うと、壇上を降り、辞任したはずの大元帥を今度は王国軍の受け入れ役に任命し、そのままエッダの王宮を後にしたのである。

まさに着の身着のまま、である。荷物らしい荷物と言えば、頭に頂いた古めかしい王冠と、儀式用の短剣のみであった。

侍女や側近といったいわゆる「女王守護」の誰一人、イエナ三世に付き従う間もなかった。

イエナ三世とガルフ・キャンタビレイ侯爵が乗る騎馬が回れ右をしてその鼻面をエッダの大西門に向けベオラ大通りを目指して進むのを見届けると、ヘルルーガ・ベーレント准将の合図で王国軍が動いた。近衛軍とイエナ三世との間に兵隊の壁を作ったのである。

もちろんそこで衝突が起こるということはなかった。

王国軍は手に武器を持たず両手を後ろに回した状態で並んで人垣をつくっていた。デュナンが比較的多い近衛軍とは言え、主体はアルヴである。丸腰の兵相手に武器で蹂躙する事は考えられなかった。もとより近衛軍側には何の命令も下されていなかったから、両者は

つまり、そこでにらみ合うだけであった。

だがそれは王宮前広場の参列者には強い緊張をもたらした。

「一触即発」

両者の態度から、誰しもがそう思っていた。

しかしながらサミュエル・ミドオーバには今ここですぐに事を起こそうという気は毛頭なかった。

彼はこの場面における自らの「負け」を認めていたのである。ここで下手に王国軍に手出しをすれば、それはどう考えても失敗を重ねる行為であった。恥の上塗りとも言える。

「陛下乱心」などと言ったところで自らが仕える国王に武器を上げた事には変わりはない。そもそも数が圧倒的に違う王国軍相手に近衛軍の中隊が仕掛けても戦闘にすらならないであろう。そして近衛軍の中にはイエナ三世に対して剣を抜くような行為を是としない兵も少なからずいるはずである。サミュエルが例え命じたとしても、その命令がそのまま遂行されるかどうかすら怪しいと言えた。

そもそもがイエナ三世の行動は全てがサミュエルに対するあからさまな挑発の様なものであった。

登場してからのイエナ三世は既に自分の態度を言葉で明確にしていた事にサミュエルは今更ながら気付いていた。

イエナ三世は自分の味方に対しては名前で呼び、そうでない者は肩書きと族名でしか呼ばなかった。はっきりと「区別」していたのである。

故アプサラス三世は戦場以外で臣下を呼ぶ際は分け隔て無く族名でなく名を口にしていた。イエナ三世にしてもエルネスティーネ王女時代には父に倣って臣下に対しては名を呼ぶ事を常としていたのである。距離を置くものとそうでない者を呼び方であからさまにする事で自分の態度をサミュエルに示していたとも言えるだろう。

少し気付くのが遅すぎたかもしれない。

サミュエルは素直に反省する事にした。イエナ三世を見くびっていた事と、自分の計画が予想以上に脆弱であった事に。要するにおごりがあったのだ。最大の脅威だと決めつけていた《蒼穹の台》を自らの手で亡き者にしたと思い込んでいた事が彼に無意識の傲慢を生んだのかもしれなかった。

ここでサミュエルがとるべきは次善の策である。

アルヴ兵が作る壁の向こう側でイエナ三世を乗せた騎馬が小さくなっていくのを、サミュエルは黙って見送っていたが、誰にも気付かれないほどの小さなため息の後で王宮前広場に向き直った。

計画は完全に狂ったが、それでもなお彼には最終的な目的の為の修正案が既に用意されていたのであろう。

だが、とりあえずやるべき事はこの場の収拾である。

彼は口を開くと、広場中に響き渡る声で参列者に緊急事態を告げた。

彼はまず大葬の参列者を王宮の離れである迎賓館に誘導した。

広場からの移動は極めて短い距離ではあったが、静粛にするように強要されたマルクは憤然としてフェルンに食ってかかった。

「さっぱりわからん、我々はばかにされたのではないのか？」

そう息巻くマルクに、フェルンはやんわりと諭すような口調で答えた。

「私もシルフィード王国の法律を子細に知っているわけではありませんが、要するにイエナ三世は途方もなく頭がいいという事ですよ」

フェルンはそう言うと怪訝な顔をしたマルクににっこり笑いかけて続けた。

「シルフィードに限らず我が国の法律でも似たような『穴』や『隙間』があるものです。イエナ三世はその『隙間』をうまく突いて、今回まんまと近衛軍、いやミドオーバ大元帥が掌握しているこのエッダから脱出したと言う事です。国の主導権だけでなく、この場所から首都という肩書きまで奪って」

イエナ三世は最初からサミュエル・ミドオーバがシルフィードの軍事に関する全権を掌握しようとしている事に気づいていたのである。アプサラス三世の逝去と何らかの関係があろうと無かろうと、イエナ三世はサミュエル・ミドオーバとは最初から袂を分かつつもりであったのだろう。

だが国王とは言え後ろ盾のないままではただの飾り物である。そこでイエナ三世はサミュエルに対抗する者としてガルフ・キャンタビレイを選んだのである。それは誰の目にも自然な成り行きとして映った事であろう。

そもそもキャンタビレイ侯爵家は居並ぶ公爵家を差し置いてもっとも国王に対する忠義が深く、そして厚いと言われる家柄である。

ノッダにいたガルフと王宮内におそらくは軟禁されていたであろうと目されるイエナ三世がどうやって意思疎通を図っていたのかはこの際差し置くとして、二人は共謀して綿密な計画を立てた上でこの日、つまり大葬の日を待っていた。

まずガルフが元帥会議で軍務大臣を「罷免」される事を回避した。元帥会議は満場一致に限り、大臣を罷免する事が可能なのである。そこには国王の意志は反映されない。

罷免となると「常態ではない不在」に当てはまってしまう。国王が不在でかつ国王が招集していない元帥会議ではあっても「慣例」で元帥会議が開催されるのはもはや間違い無い「常態」である。既成事実が正義となることは多々あり、イエナ三世側にはそれを防ぐ必要があった。

既に何者か、いやサミュエル陣営の暗躍により王国の中枢はほぼサミュエルの思惑通りに動く事は間違い無かった。トルマ・カイエン元帥と言えど、ガルフがこの非常時に再三の、それも国王の正式な帰都要請に従わないならば罷免動議に反対する理由を見つける事は出来なかったであろう。たとえそれがイエナ三世自身が自署した帰都要請書ではなくても、である。

帰都要請書はサミュエルがでっち上げたものだと主張する事はたやすいが証拠は何も無い。証拠がないままで大元帥に対してそのような大それた誹謗中傷ととられる行為を働けばトルマは元帥職を剥奪されるおそれすらあった。トルマ自身が元帥職にこだわっているわけではないにしろ、元帥という肩書きを持っている方が何か事が起こった時には都合がいいのも確かであろう。

大葬の前夜、それも夜半に緊急招集された元帥会議で、案の定ガルフの罷免は成立した。同時に次期軍務大臣代行にサミュエルを推す大勢にも彼は口を閉ざしていたのである。

大葬の直前にそれら重要事項が急遽決められたのも、サミュエルの戦術であった。

ガルフがエッダに乗り込んだ時には、すでに大臣ではなくなっているという筋書きであったのであろう。

だが、そのサミュエルの戦術をイエナ三世の戦略が上回った。「常態ならざる事態」を作らぬ為に、いったん「常態」である「辞任」を受け、それを了承したという事実を作り上げていたのである。ご丁寧に辞任を認めるという国王自筆の文書まで作成して。

注目すべきはこの戦略は相当以前から練られていたのではないかという点である。

理由はイエナ三世の特殊な二重署名である。

記述の通り、イエナ三世の署名は風変わりな二重署名になっている。彼女は単純な署名と二重署名を作る事で署名に序列を作る事に成功していた。つまり二重署名を通常署名よりも格上とする事に成功していたのである。

イエナ三世は戴冠した当初からこの二重署名を使っていた事がわかっている。つまり、戴冠時にすでにそういう事を見越した「手」を打っていたと考えられるのである。

それは早速ガルフの辞任承認書の署名という形でその効力を発揮した。

サミュエルには一目見てその署名が真筆であることはわかったに

違いない。その時点でイエナ三世とガルフ・キャンタビレイが彼の知らないところで「通じて」いたという事実を知り、混乱する事になった。それは彼が自らの計画を遂行する上に於いて未知の勢力、いや力が存在する事を初めて知った瞬間でもあった。

そういうわけで「常態ならざる事態」は存在せず、罷免も、軍務大臣代行の指名もそもそも前提が覆り成立しないことになった。

さらにその上でイエナ三世はおよそサミュエル側では対処不可能と思える事態を作り上げた。五個師団もの人数をエッダに引き連れ王宮を取り囲んだ挙げ句に、受け入れ体制はどうなっているのだ？というあの理不尽きわまりない要求がそれである。

当時のシルフィードの法律では首都における王国軍の受け入れに関する全権と言うのは、想像するよりもかなり大きな権力であった。簡単に言えば平時である限り王国軍の制御に関する最上位の実験を握る事になるのである。

正確には有事以外と記されているが、有事とは国王が宣戦布告を行った後の事態の事と定められている為、戦争下でないかぎりは受け入れ役である総務大臣の権限は絶対と言えた。それをほぼ全員が理屈としては納得いく形で取り上げた上で、既に軍務大臣ではなくなっている「キャンタビレイ侯爵」に委譲することで、「首都」に限ってではあるが、ガルフの権限は全王国軍に対して有効になった。つまり、元に戻ったというわけである。

そして、ここで重要になってくるのが、法の表記である。

「首都」とはあるが「エッダ」とは書かれていない。遷都が行われるシルフィードでは当たり前ではあるが、イエナ三世の陣営はそれを最大限に解釈し、利用した。

それがあの『遷都宣言』である。

シルフィードの遷都法によれば、国王が遷都宣言をした瞬間から、新しい首都が首都となる。すなわちノッダが首都になってしまったのである。エッダは「前都（ぜんと）」と呼ばれる事になる。

また、特例として国王が新しい首都の王宮へ入り、戴冠して玉座に座るまでの期間中は、前都エッダと首都ノッダを繋ぐ街道は遷都道と呼ばれ、首都と同じ場所とされる。

要するに王国軍はノッダに入るまでも入ってからも、ガルフが全軍の総指揮を執れる事になったのである。

遷都法に記された「遷都」とは、国王が自ら新しい首都に遷都する旨を宣言した時に効力を発揮する事になっている。特に様式も書式もなく「宣言」のみによって成されるところが「古代法」と呼ばれる遷都法の特徴であろう。だが遷都法を定めたとされるイエナ二世から数千年の後もそのまま運用されていた。そもそもが極めて簡素な法律であり、五百年に一度行われる事と、遷都可能な都の場所と名称、そしてそれについてまわる特別な暫定的国家体制について大まかに記述されているに過ぎない。

ただ遷都宣言が成されてから実際に新しい首都で遷都体制の終了が同じく国王の口から告げられるまで、多くの権限が国王に集中する仕組みになっていた。

様々な行政機関が臨時体制となり、その体制の「長」を指名するのは国王であったからだ。

五百年に二年程足りずに遷都を行う事についても実のところ問題ではなかった。

もともと遷都法は「月歴」と呼ばれた時代に作られた法律であり、その時の一年は星歴よりも少し短い。すなわち星歴を基準に五百年に足らずとも月歴換算では五百年を超えていたのである。さらに言えば過去の遷都もきっちりと五百年ごとに行われているわけではなかった。つまり法解釈としては「約五百年」とされていたのである。

つまり、イエナ三世がその日行ったことは全て法律に則った行動だという事である。

公式でありつつ、しかも同時に対外告知も可能な日を選ぶとすると、大葬は実に都合の良い儀式であった。非常識な大軍の参集も、

国王がエッダからノッダへ安全に移動する為に欠くべからざる護衛として必要なものであった。一見大げさな「しかけ」に見えたが、結果から帰納して吟味すれば、全ては実に適切な処置であると言えた。

ガルフ・キャンタビレイの事である。ノッダにも相当数の兵を集めて守りを固めた上で国王の入城体制を整えているのであろう。

「つまり」

フェルンは最後にこう言って説明を締めくくった。

「幸運な事に名代様はさらなる手柄を立てる機会を得たということでございます。ここはできるだけ速やかにドライアドに戻り、事態を陛下にご報告せねばなりません。シルフィード王国は、いやファランドールは今、大きく動き始めたのです。今回この場にいてこの事件を目の当たりにされた名代自らの言葉で報告されればさぞや陛下はお喜びになるでしょう。ドライアドとしても今後の軍事体制に大きな影響を及ぼす出来事でございますゆえ」

マルクは事の次第の説明はともかく、手柄という言葉に大いに反応した。そうなると態度はころりと変わり、それまでの苛立ちはどこへやらである。

帰国したら名代職に対してどの程度の褒美がもらえるかという実務的な話題に転じたフェルンに満面の笑みで応じると、フェルンが挙げる規定額にいちいち文句を付け、相応以上の褒美を羅列し出したのである。

その二人の様子を表情一つ変えず、しかし苦り切った気分で眺めていた二人の特別神官、すなわちリンゼルリッヒ・トゥオリラとジナイーダ・イルフランは目配せをして宮殿右翼の部屋、つまりエスカとニームが居るはずの部屋の窓にそれとなく視線を向けた。

今現在は下手に動けないが、隙を見て自分達が本来仕える主（あるじ）の下へ急ぎ駆けつけようと考えていたのである。マルクの様子を見る限

り、フェルンに任せて置いて大丈夫だという判断であった。
二人はフェルン・キリエンカという男には心底感心していた。これほど邪気や本心を表に見せず、心にもない事を言葉や表情だけでなく体中で相手に表現できる人間を見た事がなかったのだ。普通に考えれば大げさな仕草や物言いであっても、フェルンがやると不自然どころか相手は知らず知らずにその影響を受けて舞い上がってしまうのである。
賢者である二人が脇から見てもそう思えるのだ。虚栄心が人一倍強く、ある意味心が隙間だらけのマルク・ペシカレフ公爵のような人間にとってはより効果が強く働くようで、最近ではマルクは引き連れてきた綺麗どころを侍らすよりも普段はフェルンを側に置く事を好んでいたくらいである。
二人が見上げた先の部屋の窓には、既にエスカとニームの影はなかった。事の次第は全て見ていたはずである。だが既に次の行動に移るべく準備中か、はたまた行動を起こした後かの判断は付きかねた。

王宮右翼のトルマ・カイエン元帥の執務室、つまりエスカとニームが王宮前広場の事件を眺めていたその部屋では、今まさに別の事件が持ち上がっているところであった。
「何のつもりだよ？」
そう抗議するエスカは、ベッドに横たわっていた。
「すまんな。少しの間辛抱してくれ」
それに答えるニームはエスカの枕元に儀仗セ＝レステを手にして立っていた。だがその声には抑揚が無く、エスカを見下ろす顔は今にも泣き出しそうに歪んでいた。
「どうしたって言うんだ？　今日はお前、朝から少し変だぞ」
ニームはゆっくりと手を伸ばすと、指でエスカの頬にそっと触れた。人差し指をつっと滑らし、エスカの唇をなぞるように動いたかと思うと、次に右目を覆う包帯へと移動した。

「ニーム……」
見れば、いつの間にかニームの額に第三の眼が現れていた。そして茶色の瞳が濡れたような赤に変化している。
明らかにおかしいニームの様子に、エスカはようやくただならぬものを感じ始めていた。
「あなたはたぶん、私を引き留めようとするであろうからな」
そういうニームの声は涙声だった。気持ちを抑えきれなくなったのだ。
「今の私は、あなたに抱きしめられたら抗えなくなってしまう。だから拘束するしかないのだ。許せ」
ニームはエスカをベッドから動けないようにルーンをかけたのであろう。エスカが必死に動こうとしている様が表情から伺えるが、もちろんその体はぴくりとも動かなかった。
「約束を違えてしまうが、あなたとはここで別れなければならない」
涙声の主の赤い瞳から落ちた涙の粒が、床にいくつもの染みを作っていった。
「訳がわからねえぞ。とりあえず理由を説明しろ。何があったんだ？」
エスカは考えを巡らしていた。昨夜の事件が直接的な原因で今の状態になったとは考えにくかった。しかし、今朝のニームは夕べとは明らかに違う雰囲気であった。
つまり、エスカが眠っている間にニームに何らかの心境の変化があったのは間違い無いと言えた。
「何があった？　俺が眠っている間に誰かに会ったんだな？」
ニームは鼻をすすり上げるとかすかなため息をついた。
「まったくあなたは鋭い人だ……」
「誰だ？　誰に会った？　いや、誰でもいい、そいつに一体何を言われたか知ったこっちゃねえが、俺の側を離れる事は許さねえぞ。絶対にダメだ」
「悪いがそうも行かぬ。色々と約束をさせられたのだ」

ニームは大きく首を左右に振ると、堪えきれなくなった涙を袖口で拭った。

「私とて……あなたと別れたくはない。あなたにかわいがられて、私は心地よくて、嬉しくて、恐ろしいほどの幸せに溺れて、もうあなたの虜なのだぞ？　だから私はもう、あなたから離れられない女になってしまった。別れたくない、離れたくない。ずっと側で抱きしめ合っていたい。そんな事は当たり前ではないか」

「だったら」

「でも……すべては詮無き事。もうどうしようもない……仕方がないのだ」

嗚咽混じりにそれだけ言うと、ニームは隠しからハンカチを出してハナを噛んだ。

「どうして涙と鼻水は一緒に出るのだろうな」

そう言って力なく笑うニームを、エスカは必死の形相で睨み付けた。

「おいこらチビ助、勝手に鼻水垂らしてないで、ちゃんと説明しろ。説明したって納得はしねえが、説明されずにハイさようならなんて俺は絶対認めねえぞ。俺にはお前が必要だ。お前に俺が必要でなくても、俺はもうお前がいないと……」

エスカの言葉が途切れた。ニームの指がエスカの口を塞いだのだ。

「ありがとう、エスカ。その言葉を聞いただけで私の胸は熱で燃えて灰になってしまいそうだ。いや、体全部が溶けて無くなりそうなくらい幸せだ」

エスカが何かを言おうとする前に、ニームは続けた。

「それ以上引き留めるなら言葉も塞がねばならん。私はあなたの声も大好きだ。その声で引き留められたら私の心は挫けてしまうではないか」

その言葉を聞いたエスカがため息をつくと、ニームはそっと指を離した。

「私はまだまだ子供で、大賢者などとたいそうな肩書きを持つくせ

に、実のところ大した力もない事を思い知った」
「誰に会ったんだ?」
エスカは努めて静かな口調でそう尋ねた。どうあろうと何も知らせられないまま事態を受け入れるわけにはいかなかった。
「勘違いするな」
ニームはその言葉には反応した。
「言って置くが自分が大した力がないというのはあなたに出会って感じた事だ。夕べの相手の事ではない」
「夕べの相手?」
エスカは素早くニームを観察したが、特に動揺は見られなかった。思わず漏らしてしまったというわけではないようだ。
「あの者は私を滅することは出来ても、私を支配する事などは出来ぬ。そう言う意味で私にとってあなたより強い人間などこの世には存在しないのだ」
これほど色気のないつまらない言葉の羅列はない、とエスカは思った。
だがニームの口からこぼれるその「つまらない言葉」の羅列が、エスカには狂おしい感情が込められた言葉に感じられた。
それだけに、ニームが遭ったという「夕べの相手」という人物が気になった。気になると同時に胸騒ぎがした。それも、まるで胃が口から出そうになるほどの吐き気を伴う胸騒ぎだった。
「私は……すっかり思い違いをしていたようだ」
ニームはそう言うと両手でエスカの手を包み込むようにした。
「この大きな手も大好きだ。この手で触られると気持ちが良すぎて意識が飛ぶ。もう自分が誰なのかすらわからなくなってしまう」
エスカの手は小さなニームの両手を使っても包みきれないほどだったが、その手を何度も何度も撫でるようにしながら話を続けた。
「最初からあなたに近づくべきではなかったのだ。私があなたに対してこんな気持ちになってしまうなどとはつゆほども考えた事がなかった。そんなものは現世の人間達にだけ存在する感情だと信じて

疑わなかったのだから、とんだ阿呆だな、私は」
「ニーム……」
「それに、あなたに出会わなければあなたはその大事な……美しい目を失う事もなかった」
「お前のせいじゃ……」
「もう何も言うな、エスカ。あなたが本心で私のせいではないと思ってくれていたとしても、私の中ではこの気持ちは変わらぬ。この先、未来永劫、な……」
ニームの言葉はそこでいったん途切れた。顔を伏せたニームが嗚咽を堪えようとしているのが、背中の震えでわかった。
「私はなまじ強い力を持って生まれた事もあって、今まで心底恐ろしい目にあった事は無い」
少しして落ち着いたのか、ニームは再び口を開いた。
「だがな、私はあなたの兄者が恐ろしい」
エスカはニームのその言葉で、全身に鳥肌が立った。
（やはりか……）
おそれていた予感、胸騒ぎの先……それがまさに現実のものとなった瞬間であった。
「あいつに、会ったのか……」
エスカは絞り出すような声を出した。
ニームはうなずいた。
「会ってしまったと言うべきだろうな。底の知れぬ未知の力を持つ人間……いや、あなたの兄は……あれは人間なのか？」

ニームはそう言いながら自分の手をじっと見つめていた。エスカの手をなでさする暖かい感触がその手から確かに伝わってくる。間違い無く自分の手だ。
だが昨夜、ニームはその手をエスカの兄、ミリア・ペトルウシュカによって奪われていたのである。
それもまた確かな事だった。

その時の事を思い出すと、ニームは思わず目を閉じ、ゴクリと喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

前夜。ミリア・ペトルウシュカはニームが気絶する事すら許しはしなかった。すぐに覚醒させられたのだ。

一瞬の闇から現実の世界に呼び戻されたニームは、否応なく絶望的な自分の姿をその目で確認する事になった。

手首から先がもぎ取られて、存在しない両の手。もとより動く事はできないが、当然ながら手指からの感触はない。せめてもの慰めは痛みを伴っていない事であろうか。

ニームはまた叫びそうになるのをかろうじてぐっと堪えた。

その気配を感じたのだろうか、背後に居るはずのミリアが声をかけた。

「そうそう、これは君のモノだろう？一応返しておくよ」

そう言ってニームの足下に、黒い物体が放り出された。

（これは？）

猫であった。

全身が黒い毛に覆われていたが、胸のあたりに一部特徴的な白い毛がある。それは三日月の形をしていた。

ニームはその猫に見覚えがなかった。

「おや、君の手下じゃないのか」

またしてもニームの心の中を読んだかのように、ミリアは怪訝な声でそうつぶやいた。

「ふうむ……」

ニームは後ろに居るはずの人物に、初めてかすかな動揺が生じたように思えた。それよりこの猫が一体何だというのだろうか？

できるだけ自分の手を見ないようにしながら、ニームは猫を観察した。ぐったりとして微動だにしないところを見ると、既に事切れ

ているようであった。腹も動かないのだから、つまり息をしているとは思えなかったのだ。

体が固定されているニームでさえ、呼吸にあわせて胸の動きはあった。

「？？大声を出さないと約束するなら、もう一度だけ口をきけるようにしてあげるけど、どうだい？」

どうだい？　と言われてもどうしようもない。口がきけないのだ。しかも動く事すらできない。心の中で承諾するしかないのだが……おそらくそれでいいのであろう。

ミリアはニームの心の動きを読めるに違いないと言う事はすでにわかっていた。だがそれなら敢えて口をきけるようにする必要は無い。

つまり……。

ニームはようやく少しだけ回復した理性を使って判断した。

ミリアはニームの心を完全に理解するわけではないのだと。

感情の動きから推測はできるが、複雑な「会話」はさすがに不可能なのだろう。

ニームは考えた。「大声を出さない」という条件を呑む事に自らの矜持は傷つく事はないはずである。納得が出来る。

「よし、約束だ」

承諾の意思が伝わったのであろう。ミリアはすぐにそう言った。

「あ……」

小さく声を出してみた。自分の声が耳に届いた。なぜかわからないが、懐かしさがこみ上げてきた。そして悔しい事に同時にまた目頭が熱くなった。

「この猫は君の手の者じゃないんだね？」

ニームが声を出せるようになった事は当然ながらミリアにも伝わっていた。すぐに冷たい声で質問が飛んだ。

「違う。初めて見る猫だ。……死んでいるのか？」

自分の声が涙声なのが、ニームは悔しかった。涙だけなく、情け

ない事に鼻水も出ていた。ミリアにそんな声を聞かせたくはない。顔を見られたくない。ニームにとってそれを許せるのはファランドール中でただ一人、エスカ・ペトルウシュカだけなのだ。

「ただの猫じゃないよ。ボクの言う事を聞かず、いきなり何かのルーンを唱えようとしたからね。相手の正体がはっきりしないし、何かあっても面倒だから念のために息の根は止めさせてもらったよ。でも君の手下ではないとするといったい……」

ニームはそこである事を思い出した。

そもそも彼女が部屋を出る原因になったもの。その気配の持ち主の事を。

（まさか？）

改めて足下の猫を見た。

どう見ても猫だった。

だが、ミリアは言ったではないか。『ルーンを唱えようとした』と。

「じゃあ質問を変えよう。この猫はセッカと名乗ったんだけど、その名前も心当たりは無いかい？」

（！）

ニームの予想は当たった。

「セッカ・リ＝ルッカが猫……だと？」

床に横たわる黒い物体。それは何度見ても猫だった。少なくとも人間には見えない。

セッカ・リ＝ルッカ。

それは現名である。本当の名は《月白の森羅（げっぱくのしんら）》だと名乗っていた気配だけの賢者の姿が、人間ではなくてこの猫だというのか？

「悪い冗談だ」

思わずそう口をついたニームに、ミリアは言った。

「ボクがなぜ君に、そんなつまらない嘘をつく必要があるんだい？」

ニームはハッとした。その通りだと思った。

そもそもセッカは自らの姿をニームの前に現した事がない。ニー

ムのルーンの力をもってしてもその姿をあぶり出す事が出来なかった為、彼女はそれが《月白の森羅》という賢者の特異な能力の一つだと考えていた。

だが、敢えて姿を見せない理由がもう一つ理解出来なかった。賢者同士であれば姿を隠す必要などはない。

それについてニームは様々な仮説を頭の中で構築してはいたがどれも腑に落ちるようなものではなかった。だが、少なくとも人間ではないなどと思った事も無かったのだ。

だが相手が猫だとしたら今まで一度も姿を見せなかった事も十分に納得のいく話であった。

（いやいや）

納得などできない。

猫が賢者になどなれようはずもない。大前提がおかしい。明らかに間違っている。

だが……。

「《月白の森羅》」

ミリアは次にセッカの賢者の名を告げた。

「この猫はそう名乗ったんだけど、ボクの知る賢者の名簿にそんな名はないんだよ。《天色の？》としてはその名を知っているのかい？」

ニームは素直に首を横に振った。彼女にしても《月白の森羅》とは未知の賢者名だった。セッカのもたらす情報は正確で彼女にとって有益なものばかりだったし、賢者でなければ知る事の出来ない事情まで知っていたところから《月白の森羅》とは「欠落した名」であろうと考えていた。

何らかの事情でその欠落した名前が復活する事もあるのであろう。その辺りについてはニームも深く知っているわけではない。不明な部分はあやふやな理屈を使って自分自身を納得させていただけである。

それよりも驚くべきはミリア・ペトルウシュカである。彼は「賢

者の名簿」と言ったのだ。賢者会の一員でもない限り、そんな物を所有しているはずがないのだから。

いや。

賢者会の一員であっても名簿そのものを所有する事などできない。名簿を閲覧する権利を持っているだけなのだ。賢者会では備忘録として名簿を個人的に作成する事すら禁じられている。記憶というあやふやな紙に記す事ができるだけだ。

もちろんミリアも所有しているとは言っていない。「ボクの知る賢者の名簿」と言っただけである。

だが、どうやって見たのだろうか？

ミリアに対する謎は、会話を交わせば交わすほどその数がどんどん増していくばかりであった。

「大賢者《天色の？》ですら知らぬ賢者か。しかも猫とはね。不思議な話だね」

「不思議なのはお前だ」

ニームは思った事を遠慮無く口にした。怒鳴っているわけでも騒いでいるわけでもない。咎められるいわれはないはずであった。

「ボクの事を不思議だと言っている間は君はボクの敵にすらなれないよ。まあ、もっとも……」

ミリアはそう言うとニームの背後から気配を消した。なぜなら、初めてニームの正面に立ったからである。

「ミリア……ペトルウシュカ……」

ニームは思わずその名を口にした。

初めて見るエスカの兄の姿だった。

派手だが、品のいい旅装束のデュナンの青年は、意外な事に穏やかな表情でニームを見つめていた。

「義理の兄の顔くらいは知っておいても罰は当たらないだろう？」

エスカはそう言うとニームの顎に手を当て、上を向かせた。

動かないはずの首が普通に動く。ミリアが今首から上の拘束を解いたのだ。

ニームは焦げ茶色の長い髪をした青年の眼鏡の奥の瞳の色を見て、その男がミリア・ペトルウシュカ公爵であると認識した。

金色の瞳。それがニームの知るミリアの特徴であった。

およそほとんどの人間が美男だと認めるエスカと違い、端正ではあるが、兄は弟ほど容姿が優れているわけではない。だがニームは、その金色の瞳を見つめているうちに吸い込まれそうな気持ちになる自分を不思議に感じていた。

一連の所作から、狂気に彩られた表情の人間だと思っていた。だがその姿を見せたミリアは、どこかはかなげな影のある普通の青年貴族と言った風情だったのだ。

「なるほど。エスカはこういう顔が好みなのか」

ミリアはそう言うとニヤリと笑ってニームの顎に当てた手を離した。

「エスカの好みなど私は知らん」

ニームは精一杯の不機嫌さを声に乗せてそう言ったが、頬が少し上気するのを制御する事は出来なかった。

「おやおや。君はエスカの事になるとてんでダメダメだね。大賢者が聞いて呆れる」

ミリアのその言葉はニームの顔をさらに赤くした。だがニームは抗議の言葉を許されなかった。

「もう一度聞く。この猫の正体を君は知らないんだね?」

ミリアは微笑を消すと、ニームを再びのぞき込んでそう尋ねた。

「名は知っている。何度か話をした事もある。いろいろな情報を私に伝えてくれていた事も確かだ。だが正体は知らん。それは私の方こそ知りたいくらいだ」

「なるほど」

ミリアはニームの答えを聞くと右手の中指で、ずり落ちてもいない眼鏡を押し上げた。

「嘘ではないようだね。だとすると厄介だな」

何もかもを知っているような口ぶりだったミリアが、その表情に

浮かぶ困惑の色を隠さなかった。
「セッカはあなたが殺したのか？」
ニームの問いにミリアはこともなげにうなずいた。
「さっき言ったとおりだ。もっとも息の根を止めようとしたらもう動かなくなったと言った方が正確だけどね」
そう言うとミリアはかがんでセッカの背中の首の部分をつまんで持ち上げた。
「これは仮死状態じゃない。完全に死んでいるんだよね」
「その死体をどうするつもりだ？」
黒猫を胸に抱きかかえるようにしたミリアにニームは思わず声をかけた。
「どうもしないさ。ここに捨てていくわけにもいかないだろう？それとも君の死体と一緒にここに積み上げておこうか？」
穏やかな口調でそう言うミリアに、ニームは何も言わずに唇を噛んだ。
「この猫の事はまあいい。それより話を元に戻そうか」
ミリアはそこで少し言葉を切ると、再びニームの顎を手で持ち上げた。
「ボクはね、別に殺生が好きな狂人ってわけでもないんだよ」
ニームはそれには応えなかった。ただ、睨み付けただけである。
「その目。嘘付けって思ってるね？　いやいや。その証拠に慈悲深いボクは君に一つ提案があるんだ」
「提案？」
ミリアははうなずくと、ニームに笑いかけた。
「ボクの言う通りにすれば命だけは助けてあげるよ」
その傲慢な物言いにニームは思わず反応しそうになったが、開いた口をすぐに塞いだ。
「いい子だ」
それを見たミリアは、ニームの頭を撫でた。
「今叫んでいたら、君はもう二度とボクの顔を見る事は無かったと

思うよ」
　静かな口調だが、その言葉はニームの背筋に冷たい物を流す力を持っていた。
「提案を呑むか呑まないかは君が決める事だ。ボクの言う事には一切聞く耳を持たないなどと言わず、聞くだけ聞いてみないか？」
　ニームは悔しさを隠さず唇を強く噛みながらも、首を立てに振った。それを見たミリアは満足そうな微笑を浮かべて口を開いた。
「エスカから離れろ。そして二度と近づくな」
　ミリアの出した条件は、今のニームにとっては「死ね」と言われるのに等しいものだった。たとえ体が引き裂かれても離れたくはない相手になってしまっていたからだ。
「君がエスカに夢中なのはわかってるさ。だからこういう条件をつけよう。『ボクの提案を断ったら、君より先にエスカを殺す』」
「なんだと？」
　少し強い声が思わず口をついた。
　だがミリアはそれを咎めなかった。
「君の目の前であいつの首を千切り折ってやる。そう。君の両手を引きちぎったようにね」
　ニームは音を立てて唾を飲み込んだ。そして見るまいと思っていた自分の両手に視線が移るのを制御する事が出来なかった。何度見ても両腕の先に手はない。手首から先は無残に床に転がったままだった。
　ニームはその手がエスカの首に見えて思わず目を閉じた。
　閉じた目尻から自分でも押さえきれない涙が溢れた。
「敢えて言っておこう。これは命令だ。実は明日の大葬でイエナ三世がちょっとした事件を起こす……」
「え？」
「事件について、君はその内容を知る必要はない。とにかくその事件が合図だ。君はエスカの下を去らなくちゃならない」
　？？お前は何者だ？

ニームはそう言いかけて言葉を呑んだ。同じ質問を一体何回心の中で叫んだろうか。ニームだけではない。目の前の金目の青年はイエナ三世に直接会い、そして何かを画策をした事はもう聞くまでもない事のように思われた。

「言っておくけど、ボクは嘘はつかない男だ」

どこかで聞いた台詞だとニームは思った。

エスカであればこう続けるところだ。

『冗談は言うけどな』　と。

だがその兄はまったく違う台詞を口にした。

「一度ボクの力に冒された人間の行動は、手に取るようにわかるようになっているんだ。君が約束を守らない場合は君を動けなくした上でエスカを無残に始末するよ」

それは胸の奥を冷たく強く突くような声だった。

「その時は君の瞬きさえ許さない。泣く事も叫ぶ事も出来ない。君はただエスカの胴体と首がちぎれて離れていく様を見つめる事になるだろうね」

ミリアが言葉にした光景を想像しまいとすればするほどその場面が克明に脳裏に浮かんだ。思わず目を閉じても無駄な事だった。自分の手首がもぎ取られたようにエスカの首もいとも簡単にちぎり捨てられるのだろう。金色の眼を持つ目の前の男には、それが出来るのだ。身をもって体験しているのだから。

「ボクの意に沿わない駒など邪魔なだけだからね。その駒に力があるほど邪魔な度合いが強い。排除は早めに行わなければならないのさ。掌の上で踊ってくれているエスカが君にこだわるようなら用無しだ。本来ならこんな条件など出さずに有無を言わさず縊(くび)り殺したいところなのさ。でも、君さえ居なければ彼はまた自分のやるべき事を思い出すだろう。それに今ならまだ修正は効く。そうなればあいつも死ぬ前にボクのためにもう一働き出来るというわけだ」

それはすなわち「もう一働き」したら用無しだと言う事なのか？

少なくともニームはそう捕らえる事にした。

「わかった。従おう」
ニームはそう言うと閉じた目をゆっくり開けて、その茶色い瞳で金色の目を真っ直ぐに見つめた。
生きて、それを止める。
エスカを守る為にはニームは生き延びる必要があった。たとえ両手が無くとも命さえあればまだ何とかなる。義手をルーンで付ける事も可能だ。無意識のうちにニームはそのルーンを構築しつつあった。
そもそも生きていなければエスカを守る事もかなわないだろう。
「賢明な判断だね」
ミリアは満足したようにうなずくとニームの顎から手を離した。
「長居をしすぎた。ボクはこれで失敬するけど、今の約束を努々（ゆめゆめ）忘れぬようにね」
そしてそう言うと、再びニームの背後に回った。
「君はこの後いったん気を失う」
ミリアはニームの背後に回るとそう声をかけると、その手を伸ばしてニームの後頭部を掴んだ。
「だがすぐに目を覚ます。その時にはボクはもう居なくなっていて、君は自由に動けるようになっているよ」
ニームの後頭部を掴んだ指に少し力が入った。
「あ、一つ言い忘れていたよ」
ミリアはそう言うとニームの頭から手を離した。
「ボクが君に使っているこの力は、君たちのルーンと違ってかなり相手の肉体に負担をかけるみたいでね。人によっては重い後遺症が残る。体力のないアルヴィンなら確実に障害が残るが、それは覚悟しておいてくれ」
「後遺症？」
「ああ。どうも内臓のどこかがいかれるらしい。呪医やハイレーンでも治療できないようだよ。まあ、要するにどちらにしろ君は長生

きは出来ないかも知れないね」
「長生きなど望んではいない」
ニームがそう言うとミリアはフンっと小さく鼻を鳴らした。
「アルヴ族はみんな平気でそう言うんだよ。デュナンの前で、ね」
「え？」
ニームにはアルヴィンの血が流れている。血の濃さにも依るのだろうが、おそらく普通のデュナンよりは長命であろう。ミリアはその事を知っていて、敢えてそう言う台詞を吐いたのだろうが、意図がはかりかねた。
「君もそのうち知るだろう。今度の戦争が持つ意味をね」
「戦争の意味だと？」
「ま、せいぜい長生きする事だ」
「ま、待て。待って……」
ミリアの言葉の中に、ニームは一瞬何かを見つけた気がした。ひらめきと言った方がいいだろう。言葉や文字ではなく映像が流れていったのだ。それは彼女が出会った今までの人々の顔であった。そこにはアルヴもアルヴィンもダーク・アルヴも、そしてもちろんデュナンもいた。その流れていく多くの顔を見て、ニームは何かに気付いた気がしたのである。
だが……。
閃いたその感覚を確かな物に置き換えようとする前に、全てが闇に転じた。

気付いたのは本当にそのすぐ後だったのだろう。
目を開けたニームの視界に映ったのは王宮右翼と呼ばれる建物、つまりトルマ・カイエンの執務室のある建物の高い天井であった。場所は廊下である。今までミリアに捕らえられていたその場所であった。
うつぶせでなく仰向けに横たわっていると言う事は、おそらくミリアがそうしたからであろう。服も乱れていないところを見ると、

それなりに気を遣ったと言う事なのだろう。
ニームはのろのろとした動作で立ち上がった。手を床について体を起こす……。
手を突いて……。
（え？）
当たり前のように立ち上がった後でニームはようやく気付いた。
手首の先には手があった。
右手も、そして左手も。
一瞬。本当に一瞬だけニームはミリアとの出会いが夢だったのだと思おうとした。
だが、あの悪夢のような出来事が現実に起こった事なのだと言う事はすぐにわかった。
なぜなら、ニームから少し離れたところにぐったりした黒猫の姿を認めたからである。
それはまるで何かの印のように捨て去られていた。
ニームはもう一度両手に目を落とすと、強く握りしめた。痛いと思うまで握りしめると、目から涙が溢れてきた。
ニームは慌てて涙を拭うと置き去りにされたセッカ・リ＝ルッカの遺体をそっと抱き上げて、中庭に降りる階段へ足を向けた。

「そうか……」
エスカはそう言うとため息をついた。
「兄上、いやバカ兄に会ったんだな？」
ニームはうなずいた。
「皆までは言えぬが、あなたと別れるという約束をミリアと交わしたのだ」
エスカはそれには何も答えなかった。
「だが安心しろ。私は《深紅の綺羅（しんこうのきら）》に会い、彼女からあなたの右

目を元通りにする術(すべ)を会得する」
「ニーム……」
「まあ、あれだ。《深紅の綺羅》に会ってどうするのか、と色々考えていたのだが、具体的な目標が一つできたと言うわけだ……」
ニームは努めて明るい口調でそう言ったつもりだった。
だが、本人の意志などお構いなしに、涙はどんどん溢れて来た。
最後の方は嗚咽で言葉が途切れてしまっていた。
「？？だから……それまで……体にはくれぐれも……」
「もういい、しゃべるな」
エスカはニームの言葉を遮った。
だが、その声にはいつもの力がなかった。見ればエスカの目にも涙が浮かんでいた。
「エスカ？」
ニームがエスカの涙を見たのは、それが初めてだった。
エスカの涙……それが何を意味しているのかを、ニームは改めて思い知った気がした。
ミリアという名が出た時点で、エスカはあきらめたのだ。
ニームを引き留める事が出来ないと言う事を。
エスカの言葉が途切れ、憮然とした表情に変わった事がその証明でもあった。つまりミリアの持つ力を弟はいやと言うほど知っていると言う事である。
おそらく彼はミリアがニームにさせた「約束」の意味を理解したに違いない。細かい内容などはどうでもいいのだ。ミリアの意志はエスカとニームが一緒にいる事を拒否したと言う事がわかってしまったのである。
「さらばだ、エスカ」
ニームはそう言うとエスカに背を向けて扉を開けた。
だが小柄な少女は、そこでを肩を振るわせて立ち止まった。
「ニーム！」
エスカは意を決したように大切な名を呼んだ。

その声に反応したニームは、振り返るとはじかれたようにエスカの胸に飛び込んだ。

ニームとしては力一杯抱きしめたつもりなのだろう。

だがエスカにとっては弱々しい抱擁に感じられた。もっと強く抱きしめて欲しいという思いがこみ上げてくるのだ。動けないエスカは自分の腕でニームを掻き抱く術がない。強く密着したいと願ってもそこまで届かないニームの小さな力に、もどかしさを感じて仕方がなかった。

だがニームはエスカの心の内を知ってか知らずか、すぐに抱擁をとくと、何も言わずにエスカの唇に自分のそれをそっと重ねた。

だが、甘い口づけにはならなかった。触れた唇は一瞬後にはもう離れていたからだ。

「ごめんなさい」

ニームはそう小さくつぶやくと目を閉じた。そして溢れた涙がエスカの頬を濡らした。

エスカがニームの名をもう一度呼ぼうとした時、ニームの形のいい桃色の唇が少し開いた。だがそれはためらったように止まると、言葉を発することなくそのまま閉じられた。

ニームはそのまま背をむけたのだ。

「エノ・ズーグ」

ニームはそう言ったのだろうか。

エスカが耳にしたニームの最後の言葉がそれであった。

声をかける事は出来なかった。口を開く前に意識が遠のいたからである。

完全に意識が消える前に、エスカはしかし、ある人物に対して呪詛の言葉を呟いていた。ただ、それは声にはならなかった。その証拠に、その場で肩を振るわせているニームの耳には届いてはいなかった。

（覚えていろよ、バカ兄貴……）

リンゼルリッヒ・トゥオリラとジナイーダ・イルフランの二人が、トルマの計らいでエスカ達のいた部屋にたどり着いたのは、ニームが部屋を出た直後だった。

儀仗を手に持ち、顔をくしゃくしゃにしたニームが、袖口で涙を拭っているところへ現れたのだ。

ニームは二人の姿を見ると、目を逸らして駆けだした。

まるでイタズラをした子供が現場を目撃されて慌てて逃げるような様に、思わず二人は顔を見合わせた。

ただ事ではないのはすぐにわかった。こういう時には迷っている時間が無い事を彼らは経験上知っていたと言っていい。

お互いに無言でうなづき合うと、ジナイーダがニームを追った。

リンゼルリッヒはジナイーダの背中が廊下の曲がり角で見えなくなるのを確認すると、トルマ・カイエンの執務室の扉をゆっくりと開いた。

# 第八十八話　もう一つの別れ

「ついてくるな！」

小さな後ろ姿が、悲しそうな背中がそう言った。いや、叫んでいた。

だがニーム・タ＝タンのその言葉は、ジナイーダ・イルフランに対してはまったく何の効果ももたらさなかった。命令は意味を成さなかったのだ。むしろ涙が混じった声は、ジナイーダの決心をむしろ固める事になった。

「初めにお断りしておきます。今の私は命令には従いませんよ」

逃げる小さな背中に向かってジナイーダは自分の覚悟をぶつけた。こういう事は先に言った方が「勝ち」である。自称「大人」で「人生経験が豊富」なジナイーダはそう思っていた。

対してまだ「子供」で「世間知らず」なニームは、ジナイーダの「宣言」をなぜか既定のものだと思い込んでしまった。

（命令では止められないのか）

そう思ったニームは決心すると立ち止まり、即座に振り返って追ってくるジナイーダに正対した。ジナイーダはそれを見ると、自分も走る速度を落とし、ニームの前で立ち止まった。

ジナイーダは結構走ったと思った。追いかけながらも自分の位置は完全に把握している。二人は今、シルフィード王国の首都エッダの中心部にある宮殿に繋がる建物の回廊にいた。

そこでわずか三メートル程の距離をあけて見合っている格好だ。

ジナイーダはニームを見て顔を曇らせた。幼い雰囲気が残りながらも美しく整っているはずのニームの顔は、その面影もない。白い顔は赤く上気し、涙と鼻水でぐしょぐしょで表情は歪んでいた。もちろんジナイーダは自らが仕える大賢者《天色の？（あまいろのくさび）》のそこまでひ

どい顔を見るのは初めてであった。だが、それよりも何よりもニームのその表情があまりに悲しそうで、かけるべき言葉を失っていた。

直前に何かがあった事は間違い無い。エスカ・ペトルウシュカが休んでいたはずの部屋から飛び出してきたニームの様子が尋常ではなかった為に、それこそ反射運動のように後を追いかけてきたのだが、目の前の小柄な少女の有様を見て自分の行動が極めて的確であったという事しかジナイーダにはわからなかった。

だが、打ちひしがれたように肩を落とし、悲しそうな目で自分を見つめている少女を哀れんでいる時間はジナイーダには無かった。なぜならその少女は「とんでもない」ルーナーなのだ。

つまりそのルーナーに力を使わせてはならないのだ。まずはそれを止めねばならない。

だがここで小細工はいらない、とジナイーダは思った。ニームと心を通わせた時の事を思い出していたからだ。こういう時に必要なのは策ではない。裸の気持ちなのだと。

「お願いです」

だからニームが次の動作をするより前に声をかけた。

「ルーンを使わないで下さい」

思っている事を、そのまま。

結布に触れるだけで、ニームはいくつかのルーンを発動させる事が出来る。ジナイーダは同じルーナーにもかかわらず、その仕組みをニームから何度聞いても理解出来なかった。しかし現実に発動するのだからニームの理論は正しいのだ。信じる信じないの話ではなく認めるか認めないかである。認めないのは勝手だが「それ」は実際に存在する「力」なのである。

ニームに麻痺や睡眠のルーンでも使われてしまってはもう二度と会えないかも知れない。いや、絶対会えないだろう。ジナイーダはそんな切羽詰まったものさえ感じていた。だからまずはニームと一緒にいられるだけでいいと考えていた。その権利を掴みたかったの

だ。
　ニームが「そうなった」理由はおいおいわかる。だからここでそれを聞く必要は無い。いや、聞いてはならない。
　――それがジナイーダの「大人」としての判断であった。
「どこに行くにしても一人より二人の方が色々と便利です。私を連れていって下さい」
　ニームは流れる涙と鼻水を拭おうともせず、小さく首を横に振った。
「もういい。これから先は私は一人で……」
「駄目です！」
　ジナイーダは大きな声でピシャリと言った。普段は優しい顔が、今は険しい表情でニームを睨んでいた。
「いいですか？　今ここで私を振り払ったら、私はニームさまについて行けなかった事を生涯悔やみ続ける事でしょう。それは長く苦しい拷問のようなものです。きっと私は、もう二度と笑う事すらできないでしょう」
「ジーナ……」
　まさに今ルーンを発動させようとして結布に伸ばしたニームの手が、ジナイーダのその言葉でゆっくりと下がった。
「ニームさまは私達の事を『仲間』と呼んで下さいました。あの時、私もリリもどれだけ心が震えたかしれません。あれは末席とは言え賢者である我々の麻痺しつつある感受性をたたき起こし、思わず目頭を熱くする程の力を持つ言葉でした」
「だが……」
「付け加えるなら、その言葉が他の誰から告げられても我々の心は躍らなかったでしょう。ニーム様の言葉だからこそ、我らはその言葉が尊いと感じるのです」
　ジナイーダの口調は最初は厳しく、そしてだんだんと優しいものに変わっていった。
　ニームはようやく、あらゆる基準をもってしてもみっともないと

しか言いようのないその顔を袖口で拭った。
「あらあら、綺麗な服がぐしょぐしょになってしまいますよ」
ジナイーダはそう言うと、無造作にニームに歩み寄った。ニームはそれを見ても、もう何も言わなかった。
「それに、一人ではこうしてくれる人もいないではないですか」
目の前まで近づいたジナイーダは、そのままニームを抱きしめた。ニームはまったく抵抗を見せないどころか、自分からジナイーダの腰に手を回し、そっと抱きしめた。
「ご存じないかも知れませんが、私はニーム様に時々こうしてもらわれなければ、死んでしまう体質になってしまいました」
「馬鹿な事を言うな。ジーナにはリリがいるではないか」
ニームはジナイーダの胸に顔を埋めたまま、涙声でそう言った。その声には明らかにジナイーダを非難する感情が含まれていた。詰るような物言いと表現した方がいいのかもしれない。
「あらあら、そんな言い方をなさるとは。もしや、やきもちですか？」
そう言いながらジナイーダは少し強くニームを抱いた。
「ニームさまとリリを比べられる訳がありません。私にとってはどちらも大切な人です。自分の命よりも、です」
「……だから私を守るというのか？」
「いえ。ニーム様はお強い。私は大した力にはなれないでしょう。そのかわりに私はニームさまを叱ったり、からかったり、抱きしめたり、一緒に泣いたりして差し上げられます」
「駄目だ。お前達はエスカを守ってくれ」
「え？」
「私はもう、それが出来ぬのだ」
ニームのその一言は核心に通じるものだとジナイーダは直感した。
「大丈夫。エスカさまにはリリが付いています。むこうは男同士。ならばこちらは女同士でいいじゃないですか」
「だが……」

「それよりも目的地があるのでしたら参りましょう。ご存じだと思いますが、この王宮は今混乱しています。逃げ出すにしろどこかに向かうにしろ、どちらにしろ急いだ方がいいと思います。何なら私が負ぶっていきましょうか？」

「ばか者……エスカのような事を言うでない」

「エスカさまは肩車ではありませんか？」

ジナイーダはエスカが事あるごとにニームを肩に乗せて遊んでいる光景を脳裏に思い浮かべながらそう言った。いつも突然抱き上げて肩に乗せるものだから、ニームはいつもエスカの頭を叩いて必至に抗議する。しかしそれはうわべだけ。抗議しながらも、その実まんざらでもない様子で、ジナイーダにはニームがエスカの大きな肩の感触を楽しんでいるように見えた。要するにお気に入りなのだ。エスカもおそらくそうと知ってやっているのだろう。そうでもしなければニームから肩車をねだるなどという事はなさそうだった。

「そうだな……そうだな……」

おそらくニームも同じ情景を思い出していたのであろう。そうつぶやいた。

だが……

「うっ……うっ」

ジナイーダの腰に回したニームの手に力が入った。嗚咽と同時に。エスカに肩車をしてもらえる事は、もうないというのだろうか。いったいなぜそうなったのかはジナイーダにはわからない。わかっているのはニームが今、悲しみで全身を震わせながら泣いているという事だけであった。

一方リンゼルリッヒ・トゥオリラもまた、ジナイーダと同様に「初めて」のものを目撃していた。

流れる涙を拭おうともせずに、片腕で目を隠して肩を震わせているエスカ・ペトルウシュカの姿であった。

部屋に入った瞬間にその光景を目の当たりにしたリンゼルリッヒは、「何があったのですか?」という言葉を飲み込んだ。
それはあまりに間抜けな質問に思われたのだ。その部屋に漂うエーテルは相当に重く、そして排他的な雰囲気を纏っていた。

「リリか?」
リンゼルリッヒが部屋に入って、二分程経った頃、エスカがようやく声をかけた。
「はい。ここに」
「ジーナはどうした?」
「ニームさまを追いかけました」
「そうか」
エスカは安心したようにそう呟くと、ようやくベッドから上体を起こして、リンゼルリッヒに顔を向けた。
「みっともない姿を見せた。俺はいいからお前もリリと一緒にニームについてやってくれ」
リンゼルリッヒにとって、それは予想された言葉だった。
「いえ」
だから首を横に振ると、既に考えていた事を告げた。
「私はエスカ様のおそばにおります」
「いや……」
「でないと、私はジーナにぶっ殺されます」
「え?」
「たぶんこの後、のこのこと追いかけて行って『ニームさまの側にいるように言われた』なんて言ったら、その場で石化ルーンをかけられて、私の人生は一巻の終わりですよ」
リンゼルリッヒはそう言うと眉を上げておどけたように笑い、大げさに肩をすくませた。
「何があったかは知りませんが、私もまだ死ぬ訳にはいきませんので我が儘を通させてもらいます。それに……」

リンゼルリッヒはそう言うと窓に歩み寄り、広場の様子を確認した。
「ご存じだと思いますが……」
エスカはうなずいた。
「情報収集はしたいが、ここはいったん急ぎシルフィードを離れた方が得策だろうな」
「フェルン様がそちらの方は任せておけ、と。エッダだけでなくノッダ方面にも手配をするそうです。すでに代行様始め、主だった方々は広間で待機されています」
リンゼルリッヒがそう言うと、エスカは初めて笑顔を浮かべた。自嘲気味のやや引きつった笑いではあったが。
「ここで怒りと悲しみに任せてわめき散らす時間も、オレにはもらえないって事か」
「おそらくこの混乱に乗じて各地で争いが始まるでしょう。急ぎミュゼに戻り、体勢を整え、大戦に備えられるべきかと」
そう言うとリンゼルリッヒは恭しく頭を下げた。
「私はこの先もおそばで将軍をお守りします。友として」
リンゼルリッヒの言葉に促されるかのようにエスカはゆっくりとベッドから立ち上がると、鏡に自分の姿を映して身繕いを始めた。
「カイエン元帥は？」
「他のお歴々とともに宮殿の奥へ」

近衛軍の元帥と政府上層部はトルマ達王国軍の元帥達と共に事態の把握と今後の対策の為の長い長い会議に入ったとの事だった。
イエナ三世一行が引き上げていった現場である中央広場では、大元帥サミュエル・ミドオーバの命を受けた近衛軍の将校が動揺する部隊の掌握に奔走していると言う。
とにもかくにもノッダへ向かう王国軍を追跡する部隊を編成し、すぐに後を追わせる事が最優先事項となっているようだった。編成や補給手段の構築など、文字通り降って湧いたような大仕事は怒号

と悲鳴が交錯し、エッダの中枢部はまさに大混乱としか言いようのない状態であった。
　対して、ノッダに向けて出立した大部隊は、実に整然とした隊列で首都を後にしつつあるという。

「同行ならともかく、後を付けてどうするつもりなんだか」
　リンゼルリッヒの報告を一通り聞いたエスカは、ため息をついた。
「と、言うと？」
「俺なら最後尾の部隊を思いっきりゆっくりと行軍させるぜ。カメにすら追い越されるくらいにな」
「――なるほど」
「どうせ街道幅一杯に展開して行軍するんだ。追い越しなどできねえよ。イエナ三世がノッダ入りしたら、残りの部隊はノッダに入る必要もないだろう。いや、ノッダに向かう必要すらないな」
「本来の持ち場へ戻る、と言うところでしょうか」
　エスカはそこで身繕いの手を止めた。そして側に控えるリンゼルリッヒの顔を見てその名を呼んだ。
「リリ」
「はい」
「お前がイエナ三世……いやガルフ・キャンタビレイ大元帥なら部隊を『戻す』のか？」
　リンゼルリッヒはエスカの表情から、その問いかけに含まれた裏の意味を悟った。それは自分がつい今し方口にした言葉に対してエスカが寄越した一つの試験なのだ。考え過ぎかも知れない。だが、ニームとエスカの間に起こった何らかの事件は、エスカの覚悟を改めて問うものであったに違いない。その証拠にエスカは今、ニームではなく、ファランドールの情勢に向き合おうとしていた。
　それはつまり、エスカには今現在、ニームを追いかけるという選択肢は無い事を意味していた。リンゼルリッヒの目にもニームとエスカの仲は極めて良いものに映っていただけに、突然訪れた別離の

光景が理解出来ずにいた。だがそれを言うならば先ほどエッダの中央広場で繰り広げられた一連の出来事の方がより劇的で急激な「事件」であった。エスカとニームの間に生じた「事件」は二人にとっては大きいが、ファランドールにとってはおそらく矮小なものであろう。だが少なくともエスカはそうは思っていないようだった。エスカ・ペトルウシュカにとっては、ファランドールの情勢と関わる程の「事件」にちがいなかった。

で、なければエスカがニームを手放す訳がない。リンゼルリッヒはそう思っていた。自分にとって涙を流す程に悲しみ、あるいは後悔するほどの存在である。それを追いかけようともせず、現れたリンゼルリッヒにそれを命じもしなかったのだ。ニームと感情的ないさかいがあったとも思えない。利害の問題はあるだろうが、突発的にそれが浮上して問題化するとも考えにくい。

リンゼルリッヒはニームの顔もチラリと見ていた。二人とも泣きながら別れた事はそれでわかっていた。ニームの泣き顔にしろエスカの態度にしろ、そこにあったのは別れの悲しみであって相手に対する憎しみや怒りではなかった。

エスカは言った。「リリもジーナと共にニームの側に行き、守れ」と。

つまり……

リンゼルリッヒは自分をじっと見つめているエスカの眼差しをその目でしっかりと受け止めながら一つの結論を得ていた。

二人が別れねばならない何らかの事態が生じたのだ。それは想定されていたものではなく大葬が行われている間に生じたもので、そしてそれはエスカとニームの二人がかりでも攻略の術がない「もの」なのだ。

リンゼルリッヒは目の前に姿良くすっと立つ、男が見てもハッとするほどの美貌を持つ金髪碧眼のデュナンの青年を改めて観察した。

ニームとの関係を完全に断とうとしていない事は明白であった。

なぜならリンゼルリッヒを側に置く事について、頭から否定はして

いないのだから。むしろ側に置けるならば置いておきたいと考えているのであろう。それはエスカがいやがるニームを無理矢理肩に乗せ、その報復として豊かな金髪をぐしゃぐしゃにされ、困った顔をする日が再び来る可能性を捨てたくは無いという意思に違いない。

だが、それだけの理由でリンゼルリッヒを側に置こうとしてはいないのも、またエスカ・ペトルウシュカという人物の持つ厳しさであった。

「どうした？」

少し長い沈黙に焦れたように、エスカが促した。

「当然ながら既に戦略は整った上での今日の大葬を迎えたのは確かでしょう」

「ふむ」

「ならば、既に戦略的な軍隊の展開も考慮に入れているはず」

「だろうな」

「私がキャンタビレイ王国軍大元帥の立場であれば、少なくとも今日を基準としてそう大きくズレのない期日を定め、既存の王国軍を戦略的に配置させるでしょう。もちろん、来る内戦と、避けられぬドライアドとの闘いを見据えた配備の為に」

「それで？」

「エッダに集めた戦力は、その戦略的配備とは別の部隊。おそらくは途中で海路をとることになるのでしょう」

「なぜそう思う？」

「サラマンダとウンディーネの領内では、数の面では圧倒的にドライアド軍が優勢です。おそらくは駐留している王国軍の上層部にも今回の事変、いや混乱は予め伝えられている可能性がありますが、それでも彼らの不安を拭う為には、直接その場で役を演じた部隊が援軍に来るのと来ないのでは士気に大きな差が出るのではないかと思います。内乱が生じたら、間違い無くドライアドはサラマンダで動き始めるでしょう。シルフィード王国の外には近衛軍は存在しま

せんから、サラマンダでは王国軍は本来の王国軍としての行動が可能でしょう。その為にも頭数が必要。すなわちエッダに集まった軍隊の本来の目的地はサラマンダであり、行きの途中でエッダに寄り、女王から激励と重要な役割を受け取った上で戦略に沿った各目的地に向かったのではないかと」

「シルフィード王国は国是として国外侵略は行わない事になっているんだぜ？」

「侵略でも出兵でもありません。補給と交代という名目で事足りるでしょう」

「そうだとしても、ドライアド側への報告の義務はあるはずだろ？」

リンゼルリッヒはそこでにっこりと笑って見せた。

「『ノッダはきちんと手続きを踏んだはずだ。おそらくエッダが何らかの混乱でその手続きを停滞させていたのではないか？　重要な報告が成されなかった事はまことに遺憾である。ノッダは今後このような事の無いように、政府内組織強化に励むと共に、ドライアド王国との対話を一層密にしたい。ついてはこちらは遷都直後の混乱でノッダを離れられない。よろしければしかるべき人物を国賓としてノッダにお招きした上で、国王自ら謝罪し、懇親の意を伝えたい……』こんなところでしょうか。フェルン様ならばもう少し気の利いた文章にして下さると思いますが」

「招きに応じればそれでも良し。来たら来たでドライアドはノッダのイエナ三世を認めた事になり、外交的に遷都は完成する、か」

「来てもらう方がいいですね。もし近衛軍、いやエッダ側と言った方がいいのかもしれませんが、ノッダとの間に内乱が勃発していたとすれば、ノッダに従わないミドオーバ大元帥側が『反乱軍』であるという外交的な大義名分ができます」

「ふむ」

エスカはリンゼルリッヒの「見立て」を一通り聞くと、腕組みをして少し考える様子を見せた。

「ミドオーバ大元帥っていうのは相当なルーナーだそうだな？」

「正教会ではサミュエル・ミドオーバはおそらく賢者、それも相応の席次を持つ賢者と同等の力を持つと言われています。要するに私やジーナより強力なルーナーという事です」
「しかもシルフィード王国の双璧の一人だ。政治的には実質的に国の中心と言ってもいい。そんな人間が『反乱軍』の汚名を着せられてこのまま意地を張ってずるずると負け戦に向かって落ちていくと思うか？」
「いえ」
実のところリンゼルリッヒが一番気にしているのもそこだった。
「ノッダ側の弱点は、ルーナーがほとんど戦力として存在していない事でしょう。言い換えればエッダ陣営には近衛軍の傘下であるバード庁がそのまま残っています。それだけでも驚異と言っていいでしょう。ですがミドオーバ大元帥にはもう一つ隠し球がありそうです」
「お前もそう思うか？」
リンゼルリッヒはうなずいた。そしてエスカも同じ事を気にしている事を知った。
「新教会と繋がっているのは確かだと思われます」
「だな。堂頭と何らかの関係があるのはまず間違いねえな。正教会側じゃそういう情報を掴んでないってことか？」
「恥ずかしながら」
リンゼルリッヒはそう言うと目を伏せた。
「賢者会は特殊な組織で、一つの意思を共有するような存在ではないのです。そういう情報を掴んでいるものもいるのかもしれませんが、末席、つまり上席にとっては言わば捨て石のような立場にある私やジーナにはそんな情報は伝わってきません」
「そうか。というか、大賢者のニームも知らねえって事だろう？賢者会ってのはいったいどうなっているんだ？」
「残念ながらニーム様は何も知らされぬままに使命を帯びてヴェリタスを出られました」「確か大賢者を拝命して三日くらいしかヴェ

リタスにはいなかったって言ってたな」
「今考えると、何らか、いや誰かがそう仕向けたのかもしれません」
「大賢者であるニームを正教会の本流から排除しようとする意思があるって事か？」
「わかりません。ただ一つ言える事は、ニーム様が帯びた使命は、本来大賢者という立場の人間が自ら行うようなものではありません。我々が、相当数の配下を使って情報収集した後、実際の行動はそれこそ賢者会に諮るべき問題でしょう」
「なるほどな……」
エスカは腕組みを解いた。
「母親なんだからお前が探せ、か」
だが、リンゼルリッヒは首を横に振った。
「賢者には母親だの父親だのという価値観はありません。つまり、それを理由にする事は出来ないはずなのです。ですが……」
「ニームはまだガキで、それを自らの使命だと思い込んだ」
「その通りだと思います。《天色の？》、いやニーム様は大賢者となり、同時に守護するべき三聖《深紅の綺羅》が行方不明だという事を知りました。大賢者の行動を縛る物はヴェリタス……正教会の仕組みにはありません。賢者会も同様です。ですから表面上、いやニーム様は自らの意思で自らのやるべき事を見つけ、それを素直に行っていただけなのです」
「そんなお膳立てが出来るのは誰なんだ？」
「おそらくは他の大賢者、あるいは三聖のみでしょう」
「そうだろうな。いや、そのはずだ……」
エスカのその物言いに、リンゼルリッヒは微妙な違和感を覚えた。
「何か心当たりでも？」
「いや」
エスカは即座に首を横に振った。
「それはいい。問題はリリ、お前だ」
「私ですか？」

「俺の側にいると言ったな？　俺は火を噴くだけの、しかも正教会の坊主を側に置くわけにはいかねえんだ」
「御意」
「だが、すぐ側で火を噴いたり火球をぶっ飛ばしたりする仲間がいてくれると、実に頼もしいのも正直なとこだ」
「もとより、それがニーム様の意思でもあり、私自身の願いとも合致するものです」
エスカはその言葉を聞くと、リンゼルリッヒに歩み寄った。
「人を殺さずに、俺を守れるか？」
エスカのその突然問いかけは、リンゼルリッヒにとっては想定外のものだった。
「どうした？　意外そうだな」
言葉に窮して困惑した表情のリンゼルリッヒにそう言うと、エスカは視線を窓の外に向けた。
「おそれながら……」
リンゼルリッヒはエスカの視線を追いながら口を開いた。
「甘い事をおっしゃるのですね」

エスカは窓の下の中央広場を眺めていた。いつの間にか大きな柵が置かれ、王宮を一般市民から閉鎖した上で、近衛軍と思しき多くの兵士達がその中を動き回っていた。いや、留まる兵の方が多かったかも知れない。多くは広場の途中で出会うと互いに何事かを話し合い、別れてはまた違う兵士と何かを話している。話し終わる度に、兵士の向かう方向は変わり、一定の目的地があるようには見えない。それは一見してわかるほど、統制がなく合理性に欠いた状況であった。
名にし負うシルフィード王国の近衛軍がこの様である。大葬が始まる前に見せた、名人が織った布目のような美しい整列を成していた部隊とは思えなかった。
「甘かろうがヌルかろうが、それが俺の戦い方だ。このファランド

ールを飲み込む為にゃ、それが必要なんだよ」
「それはまた困難な戦術ですね」
エスカは広場に落としていた視線を再びリンゼルリッヒに向けた。
「もう一度聞く。そしてこれが最後の質問だ。出来るのか、できないのか？」
リンゼルリッヒは目を伏せるとそのまま片膝を付いた。
「ジーナだと即座に『わかりました』と答えるでしょう」
「そうか」
「『あれ』はエスカ様を守る為なら、平気で約束を破れる女ですから」
「――なるほど」
「ですが私は実のところエクセラーとしてはジーナほどの力がありません。つまり……」
「つまり？」
「力がない分、頓知と謀略は私の方が長けています」
「俺はお前のその頓知とやらに期待していいのか？」
エスカは実のところ、リンゼルリッヒが何を言い出すのか、まったく予想が付かなかった。ましてやジナイーダよりも力が劣っているという話をなぜここで出すのかが理解出来なかった。
そんなエスカに追い打ちをかけるようにリンゼルリッヒはいきなり話題を転じた。
「グェルダンで、我々に用意して下さった食事の事を覚えていらっしゃいますか？」
「ああ、あれか」
リンゼルリッヒは航海初日の夜にエスカが二人の為に用意した、二人の好物とジナイーダが呑みたがっていた「幻のワイン」の食事の事を指していた。もちろんエスカがそれを忘れている訳はなかった。
「私はあの時、《黄丹の搦手（おうにのからめで）》ではなく、リンゼルリッヒ・トゥオリラという名前で生きていきたいと思うようになりました」

「ほう？」
「なぜだかおわかりですか？」
「うまい飯を食って、俗世いや、お前達の言葉だと現世（うつしよ）か。ま、どっちでもいいが、そっちに興味が沸いたってことか？」
エスカの答えに、リンゼルリッヒは苦笑の声を漏らした。
「あなたと言う人は、ざっくばらんなようでいて、どこまでも本音をさらけ出さない人だ」
リンゼルリッヒはそう言うと顔を上げた。
「ニーム・タ＝タンとエスカ・ペトルウシュカ。私はこの二人をすでに主と決めています。主が人を殺すなと命じるのならば、私はだた従うのみ。ただし」
「ただし？」
「出来れば教えて下さい。賢者《黄丹の搦手》であれば盲目的に命に従う事になんの問題もありません。しかし人間リンゼルリッヒ・トゥオリラは、あなたの向こう側にある未来こそが、戦う意味なのです」
リンゼルリッヒはそこまで言うと顔を上げた。真っ直ぐにエスカを見る。
「正教会（ヴェリタス）の犬でいるよりは断然面白そうだぞ、と思わせてはもらえませんか？」
「平たく言うと『エサが欲しい』ってことか」
「御意。口当たりの良い食べ物が欲しいわけではありません。口も舌も胃も腸も、ただれて溶け出すような、そんなエサが欲しいのですよ」
「聞いちまったら、ニームのところには戻れねえかもしれねえぞ？」
「それは、戻れるかも知れないと言う事ですね？」
「こいつ……」
「エスカさまがいったい何を知り、何をなさるつもりか存じません。いや、私なりの推理はあります……いや、どちらにしろ一人では何かと物事を決めつけてしまいがち」

「お前の頓知と陰謀が役に立つかも知れない、と？」
「頓知と謀略です」
「そりゃ、どうも」
「ついでに言わせていただくなら」
「なんだ？」
「私は火は噴きません。大道芸人じゃないんですから」
「ああ……」
エスカは頭をかいた。
「とは言え、必要であれば大道芸人のまねごとも出来ますし、水芸もやれと言われればできます。それから言い忘れましたが」
「まだ何かあるのかよ？」
「先ほど私はジーナよりエクセラーとしての力は弱いと言いました」
「ああ、聞いた」
「エクセラーとしては確かにそうですが、ルーナーとしてはそうではありません」
「は？」
「私は末席ながら賢者の力を持つ者です。エスカ様をお守りする為の強化ルーンも使えます。そんじょそこらの駆け出しコンサーラなどとは格が違います。その点ではジーナでさえ私の後塵を拝する事になります。もちろんニーム様は別格のコンサーラですから比較にはなりませんが」
「なるほどな。エクセラーだが、簡単な強化ルーンくらいはお手の物だという事か」
リンゼルリッヒはうなずくと、再び頭を下げた。
「お側においても後悔はさせません。なにとぞ……」
「わかった」
エスカはさらに深く頭を下げたリンゼルリッヒの言葉を途中で遮るようにそう言うと、自らも片膝を突き、腰をかがめた。同じ高さに顔を持っていく為である。
「話してやるさ。そろそろ側近に『全てを知っている人間』が必要

な頃合いってやつだろう。その相手がお前なら、これもまた『設計図』にはない展開だがな」

「設計図？」

顔を上げ、オウム返しにそう言うリンゼルリッヒに、エスカは大きくうなずいた。

「その『設計図』の事を、お前に話してやる。小便チビるんじゃねえぞ」

一瞬、大きく目を見開いたリンゼルリッヒは、すぐに相好を崩した。

「耐えますよ。チビったりしたら、あなたに一生話のネタにされてしまうのは間違いなさそうですから」

「だな」

エスカはうなずくとリンゼルリッヒの手をとって立ち上がらせた。

# 第八十九話　金の三つ編み

「ミリア・ペトルウシュカはかなり特殊なフェアリーのようですね」
ジナイーダ・イルフランはそう言うと、そっとニーム・タ＝タンの背中に手を当てた。
表情は硬い。眉間に皺まで寄せていた。
「血を分けた兄弟でありながら、エスカ様とペトルウシュカ公爵は特性も姿形も全く違う。似ても似つかないとはこのことでしょうね」
「そうだな……。私も姉上とは全く似ていないとよく言われた。そもそも基本的に姉上と私は母親が違う。似なくとも納得できるが、エスカとあの金目の男は両親とも同じ本当の兄弟だというのにな」
「そうですね。けれどそっくりであればそれはそれでお辛いのではありませんか？　ならば似ていない方が楽なのかもしれません」
ジナイーダは懐から平たい石を取り出すと、それでニームの背中をさすりだした。呪医がよく使う内出血を感知するとぼんやりと光り出す精霊石（ルーン・ストーン）と呼ばれるものだった。治癒の特性を持たないジナイーダやリンゼルリッヒは学んだ知識と、この手の特殊な精霊石を使ってある程度の事までは対処ができる。
だが、ジナイーダの掌の精霊石は何の反応も示さなかった。
「内臓に副作用が出ると言ったそうですが、自覚症状は？」
ニームは首を横に振った。
「大丈夫だ。しばらくの間は強い吐き気がしていたが、それは内臓の調子云々ではなくて、忌々しい話だが、あまりの恐怖で胃が縮み上がっていたからだろう。幸い、今はだいぶよくなってきた」
ニームの答えにジナイーダは安堵のため息を漏らした。
「それならば一安心と言ったところですね。ですが……」
「そうだな。内臓の損傷は必ずしも自覚症状を伴う訳ではないし、すぐに失血や障害が顕在化するわけでもないであろうからな。そも

そもあいつの言い方では、失血があるような障害ではないのだろう」
うなずきながらそう言うニームの口調はかなり普段の状態に戻っていた。ニームに落ち着きが出てきたのは良い兆候と言えた。
「ええ。ご気分が悪くなったりしたらすぐにおっしゃって下さいね」

ニームとジナイーダは、存在感を消すルーンを纏って王宮の回廊を足早に歩いていた。
「指定された場所に、その者は現れるのですか？」
ジナイーダの声に心なしか緊張が含まれるようになってきた。その者、とはもちろんミリア・ペトルウシュカの事を指していた。これから対峙するとなると、さすがに平静ではいられないのであろう。
ニームは問われるままにミリアとの一件をジナイーダにすべて話していた。そもそも口止めをされている訳ではなく、ただエスカから離れる事だけを強要されたのである。つまらないウソをでっち上げてジナイーダを誤魔化すよりもそのまま全てを話した方が面倒がないとニームが考えたのも当然であろう。もっともニームにはその場を取り繕うようなウソを考え出すという習慣がなかった。ニームの能力をもってすれば、つじつまが合う素晴らしい虚言を作り上げる事などは造作もない事にも思える。しかしそちらの方面の学習はしておらず、そもそも訓練も未経験な状況で、感情が不安定なままそんな芸当が出来るニームではなかった。そもそも賢者は嘘をつく必要のない存在なのだから。
ニームの話を聞いたジナイーダは、怒りよりも恐怖が先に立っていた。今までその存在すら想像だにしなかった強力な未知なる「力」に、である。
彼女自身が心から畏怖する力を持つニームが、まったく歯が立たなかった相手である。たとえ待ち伏せの罠であろうと、そんな事は些細な問題であった。纏っているエーテルが強大なルーナーの前では、中途半端なルーナーのルーンは効力を発しないし、フェアリーのエーテルを利用した力も同様である。強大な精霊波は、弱い精霊

波など飲み込んでしまうのである。
つまり、ミリアの持っている精霊波はニームを軽く飲み込んでしまうほど強大だという事になる。
だが、そんな存在をジナイーダは知らなかった。おそらくニームですら知らないであろう。
だからこそ恐怖なのである。正体がわからない強大な力ほど恐怖心をかき立てるものはない。
「わからぬ。だがおそらくあいつはいないだろう。『明日の大葬で大きな事件が起こる。それが合図だ。すぐに指定する場所に行け』と言われたのだからな」
「なるほど」
「来い」ではなく「行け」という事は、おそらく本人はそこにいないだろう。それはジナイーダもニームと同じ考えだった。

「ここだ」
半歩先導して歩いていたニームが突然立ち止り、そう言った。
「ここは……？」
回廊が尽きる場所。要するに壁であった。
正確には王宮の「右翼」と呼ばれる建物の地下一階の回廊の一番端であった。
「そこではない。この部屋だ」
壁を見渡しているジナイーダに、ニームはそう言った。手にはいつの間にか儀仗セ・レステが握られていた。
「ジーナは意外に早とちりだな」
ニームはそう言うとくしゃくしゃな顔に小さな苦笑を浮かべて見せた。それを見たジナイーダは優しい眼差しで小さな主の手をとると、そのまま引き寄せてそっと抱きしめた。
「ようやく笑って下さいましたね」
「ジーナ……？」
「大丈夫です。相手が例え神だとしても、全てが相手の計算通りに

運ぶわけではありません。そもそもニーム様の存在が計算外だったわけですからね」

ジナイーダが言いたい事はニームに伝わっていた。扉の方を向いて立ち止まったニームを尻目に、わざわざ壁が目的の場所なのかと尋ねたジナイーダの小さな戦術も。

「駄目だ、ジーナ」

ニームはそう言うとジナイーダの腹に顔を埋めた。背が低すぎて、胸に顔を埋められないからである。

「そんな事をされたら、また泣いてしまうではないか」

ジナイーダはそんなニームの髪を愛おしそうに撫でた。

「涙と鼻水でぐしゃぐしゃのニーム様もまた愛らしくてたまりませんん」

「バカを言うな」

「あら、本当ですよ。でも……」

ジナイーダはそこでニームの体を離した。

「エスカ様にはちょっとお見せできませんね」

「……そうだな」

「今度お会いになる時はまぶたの腫れていない、いつも通りのすっきりとした愛くるしいお顔でなくてはなりません」

「私は愛くるしいのか？」

「ええ。私が見てもそうなのですから、エスカ様がごらんになるニーム様はきっと食べてしまいたいくらいのすてきなお顔です」

「そうか。それはなんというか、うれしいな。うん。ジーナの言うとおりだ」

ニームはそう言うと念を押すようにもう一度袖で顔を拭った。

「私も、ニーム様に負けぬよう、今度リリに会う時はとびっきりの笑顔を身につけて、ハッとさせてやるつもりです」

「え？　今何と言った？」

「ニーム様がエスカ様にお会い出来るようになる日まで、私もリリには会いません」

「それはいかん、ジーナ……」
ニームは言葉はそこで遮られた。ジナイーダに再び思い切り抱きしめられたのだ。
「駄目ですよ、ニーム様。私はニーム様と同道するとお約束したではありませんか」
「……」
口と鼻を塞がれているニームがもがくが、ジナイーダは知らぬ振りをしてさらに強く抱きしめた。
「だから、自分一人だけでここに入ろうなどというお考えは捨てて下さい」
「ぐ……」
少しの間、言葉にならいような声を漏らしていたニームだが、やがて観念したように体の力を抜いた。それを見たジナイーダの顔には安堵の表情が浮かんだ。
「同じ目的がある女同士じゃないですか。仲良くやりましょう。私はニーム様の母であり姉であり、時には憎たらしい喧嘩友達としてずっと側にいます。同様にリリは私に会うまでエスカ様の微妙な頓知袋として側にいてくれるはずです。彼は性格がとびきりいいわけではありませんが、あれでなかなかどうして、ニーム様のご想像以上にエスカ様のお役に立てるはずですしね。つまりニーム様と私がたどり着く先は同じなのですよ」
「ジーナは母で姉で友人なのに……リリは微妙な頓知袋なのだな」
涙混じりながら、ニームの声には穏やかさが戻ってきているのがジーナにはわかった。
「まあ、微妙ですね。でもそれは実戦を経験していないからでしょう。賢者としては末席ですが、それはエクセラーの能力の順列。あの人のけっこうな悪巧み能力を知れば、きっと参謀として欲しがる権力者は多いはずです」
「エスカはあれでもそう言うところには妥協はしないと思う。実績がないのだとしたら、側近として取り立てるのは判断材料がないだ

けに難しいのではないか？　いくらリリが求めてもエスカが必要ないと判断すれば、申し出をあっさりと断るはずだ」
「本当にそう思われますか？　一番近くでエスカ様を見ていたニーム様らしくもないご意見ですね」
「と言うと？」
「私の見立てでは、ルーナーでもフェアリーでもないエスカ様が持っている一番の力はあの美貌だけではなく、人を見る目にあるという結論です。それは唐突に現れたニーム様を受け入れ、心から大事にされている事ですでに証明されています。ですからエスカ様がリリを手放すことはないでしょう」
「人を見る目か……」
ニームはぼんやりとした声でそう返した。
「それこそがエスカ様の本質ではないでしょうか」
「確かにな。だからこそエスカは実の兄であるミリアの恐ろしさを知っているという事なのであろうな」

抱き合って囁き合っていた二人だが、ゆっくりしている時間はなさそうであった。
二人のいる地下右翼の再奥部は、王宮内でも特定の人間しか入れないような場所になっていた。それはここにたどり着く途中に、二カ所も通関所があった事でそれと知れた。ルーナーの中でも強化の専門職、コンサーラであるニームの「存在感を消すルーン」は相当に強力のようで、二人は堂々とその二つの通関を突破していたのだ。
だが、二人の耳には複数、それも相当数の靴音が届いた。ある程度指揮系統の混乱が落ち着き、内部の警護による再探索が始まったのかもしれない。どさくさに紛れたノッダ側の密偵が内部に潜んでいないとも限らない。徹底した捜索は味方の士気の為にも必要なものだと言えた。
捜索の手を逃れるために継続時間の長い「存在感を消すルーン」に変えて「姿を消すルーン」をかけ直す事も可能ではあったが、ニ

ームはそんな「間抜け」ではなかった。もちろん感知を恐れたのだ。
通関時と違い、相手がいるかも知れないという前提で捜索隊は動いている。つまり、強化解除のルーンを使えるルーナーが捜索隊ごとにいてしかるべきであった。高位にあるニームの強化ルーンが、並のルーナーの解除ルーンで無効化される事は考えにくかったが、感知ルーンはルーナーの高低に関係無く「感知」できる。むしろ相手のルーンが強ければ強いほど感知しやすいのだ。
そうしている間にも足音が大きくなっていた。最深部にも彼らの手が回る可能性は高い。
つまりは彼女たちのとるべき道は一つであった。

二人は無言でうなずき合うと、目の前にある、アルヴでも余裕を感じる大きさに作られた、要するにかなり大きな扉に手をかけると音をたてないようにゆっくりと開き、まずはジナイーダが部屋の中の様子を伺った。
地下の部屋である。窓はない。代わりに天井に備え付けられたルナタイトと思われる大きめの発光石が一つだけ光り、あまり広くはないその部屋の様子をぼんやりと浮かび上がらせていた。
一見してその部屋が武器庫であることがわかった。
いや……。
「これは……呪具の類か」
ジナイーダの背後から部屋をのぞき込んだニームが扉の正面にある壁に掛けられた手斧と、その横にある薄い金属板でできた楯を見てそうつぶやいた。
「曰く付きっぽい場所にしては、扉に鍵がかかっていないのが私は気になりましたが」
ニームはゆっくりと首を横に振った。
「しっかりルーン錠がかかっておった。ただし、私のような存在には意味を成さぬ」
「なるほど」

二人のルーナーの間に相当の力の差がある場合、低位のルーナーが使うルーンは高位のルーナーによって無効化される。いや、強制的に破壊されると表現した方が適切だろう。それは攻撃ルーンだけではなく、もちろん精霊陣や仕込まれた施錠ルーンなどにも当てはまる。

ルーンの存在を知った上で、ニームはそれを何ら特別な事をせずに普通に解除してみせたのだ。いや、無視したと表現した方がいいかもしれない。つまり施錠ルーンをかけたルーナーとニームとの間にはそれほどまでの大きな能力差があるという事であった。

もちろん「呪具庫」のような場所の施錠を任されるルーナーが「低位ルーナー」などであるはずはない。まさしくシルフィードのバード達の中でもそれ相当の力を持つルーナー、それもコンサーラであろう。

それが証拠に賢者を名乗るジナイーダは精霊陣の存在すら認識出来ていなかったのだ。ジナイーダが攻撃ルーンの専門であるエクセラーだという事もあろう。だが、末席賢者とは言えルーナーとしては相当の高位にある。要するに生半可なルーンで施錠されていた訳ではないのだ。

だがニームは大賢者。しかもコンサーラであった。

ルーナーの能力としては底が知れない……。ジナイーダは頼りなく泣きじゃくる子供のようなニームと、その持っている能力の大きさの対比にめまいがする思いだった。

「誰もおらぬようだな」

手早く一通り部屋の中を見渡した二人は部屋に入ると扉を閉めた。ジナイーダはその時ニームが手に持った細長い布紐を扉の取っ手に素早く巻き付けるのを見た。おそらくそれは施錠の精霊陣になるのであろう。その方法だと感知ルーンには引っかからないのであろう。そしてこの強力なコンサーラが施した精霊陣を破れるルーナーはシルフィードには存在しないだろうと素直に思った。

可能性があるとすればただ一人。もちろんサミュエル・ミドオーバだが、シルフィードのバード長とは言え、さすがにこの混乱である。自らが探索の指揮を執る暇があるとは思えなかった。すなわちしばらく時間稼ぎが出来るという事である。

ニームの言うとおり、ジナイーダもその部屋に人の気配を感じなかった。

「ここで、間違いないのですね？」

「わからぬ。だがここしか考えられん」

「とりあえずは待つしかなさそうですね」

「そうだな」

二、三言葉を交わすと、ジナイーダは少しだけ警戒を解いた。

だが、まるでその瞬間を狙っていたかのように「それ」は二人の目の前に現れた。

「え？」

ニームとジナイーダは異口同音に口の中で小さく叫んだ。

目の前に人がいたのだ。

一人だ。

ニームとジナイーダは一瞬の隙を付かれた格好だった。

「騒ぐな」

声を出したのは目の前のその小柄な人物だった。

小柄……いや、やや尖った耳と緑の瞳。少女のアルヴィンであった。少女と言っても背格好は成人したアルヴィンのそれである。ニームやジナイーダには少女に見えるが、例によってアルヴィンやダーク・アルヴは年齢がわからない。

もちろん、ただのアルヴィンの少女でない事はすぐにわかった。

二人はその少女に矢で狙われていたのだから。

長い金髪を後ろで三つ編みにした少女は、一つの弓で二本の矢を番え、それぞれが二人の喉をピタリと狙っていた。

剣でなく矢を使っているのは一人で二人を一度に狙うには都合が

いいからという理由であろうが、それでも一つの弓で二本の矢を制御できる人間はあまりいない。相当な熟練が必要だからである。もしくは特殊なフェアリーの能力があるのか……。

少なくともこのアルヴィンの少女が弓を得意にしている事だけは確かであろう。

しかも戦闘員である。それは纏っている服でわかる。

「私は使いだ」

ニーム達がすぐに動かない事を確認する為の短い間を与えた後に、少女は改めて口を開いた。

「おとなしくしていれば危害は加えない。そう命令を受けている。だがルーンを使ったり攻撃的な態度を見せた場合、始末していいとも命令されている」

アルヴィン少女の抑揚のない声からは、その言葉がどれほどの重さを持つものかを判断するのが難しかった。

まるで書き付けの文字をただ発音しているかのような、さらに言えば下手な役者が台本の台詞の文字をただ読んでいるだけのようで、奇妙な空気をその場に生んだ。

「念のために言っておこう」

三つ編みの少女はさらに続けた。

「私を普通の兵士だと思うな。お前達のその目が普通に機能していて、それなりの観察眼と知識があればすでに理解しているだろう。それともさらなる説明が必要か？」

言い終えた少女の瞳が、ルナタイトの光を反射して濡れたように光った。

「――ニームさま」

「わかっている」

二人は三つ編みの少女の襟元で鈍く輝く階級章のようなものに、既に気付いていた。少女のいう「観察眼」とはそれが目に入っただろうという事であろう。そこには銀糸で、翼のある矢が縫い取られ

ていた。その階級章はどの国であろうと軍に関わる者であれば、いや、ファランドールの情勢に興味を持つ人間ならば知らぬ者はいないある特殊な軍組織の部隊章であった。

「ル＝キリアは全滅したと聞いているが？」

ニームはそう言うと改めて金髪三つ編みの少女の様子を子細に観察した。

驚きはしたが、矢を突きつけられていても不思議と恐怖は長続きしなかった。最初はもちろん思わず息を呑んだが、突きつけられた矢から殺意は伝わってこなかったからだ。もっとも体は正直で、最初に感じた恐怖により背中は冷たい汗でびっしょりだった。一瞬だが、昨夜の恐怖が脳裏に蘇ったのだ。だがそれは本人が認識するよりも早く消えていったのではあるが……。

ニーム達の目の前の少女は敵意や殺意というものとは無縁の存在として、そこに静かに立っていた。立ち姿が矢を番える格好であったというだけである。微動だにしないその姿は少し離れてしまえばそういう「人形（ドール）」と見間違う可能性すらあった。

敵意が無いという事は、少女の言うとおりおとなしくしていれば危害を加えられない事は確かであろう。そもそも殺すつもりなら有無を言わさず矢を放てばよかったのだから。

ニームが施錠ルーンを解除した際に、ルーンの法則によりあらかじめ自分達にかけていた強化ルーンは全て剥がれている。感知を恐れてかけ直す事もできなかったのだから、射られていればひとたまりもなかったであろう。

アルヴィンの少女は間違い無くルーンの決まり事、いやルーナーの持つ弱点を熟知した人間だと言えた。もしもニームが部屋に入る前に強化ルーンをかけようとしていたなら、その時は詠唱を開始しようとした時に姿を現したに違いない。

ジナイーダはもてる情報を駆使して目の前に忽然と現れた「ように見える」アルヴィン少女の特定を急いでいた。

ル＝キリアとはフェアリー、それも風のフェアリーだけで構成された特殊な戦闘集団である。目の前の少女が本当にル＝キリアの一員だとすると風のフェアリー、それも高位のフェアリーである事は決定事項である。ならば、目の前の少女が例え誰であろうと、おそらくその移動速度は二人の比ではないだろう。最も短いルーンで相手を攻撃しようとしたとしても、そのルーンの前文を唱え終わる前に視界と意識がなくなっている事はジナイーダにも容易に想像が付いた。

だがそれでも、人物特定は重要である。名前がわかれば特性などがある程度把握できる可能性がある。賢者会が掴んでいる情報が果たして役に立つかどうかはわからないが、少なくとも無駄になる事はないはずだった。

「私はル＝キリアの名前は知っているが、さすがにそっち方面には詳しくはない。だが、まさかコイツがあの『ドール』なのか？」

ニームがジナイーダにそう尋ねると

「いえ」

ジナイーダは即座に首を振った。

「私の持っている情報では、『ドール』は顔に醜い入れ墨が施されているそうです。それにドールは銀髪のはず」

「そうか」

ニームは目の前のアルヴィンの金髪を見つめて納得した。

「そういえば『ドール』は喋れないと聞いていたな」

「ええ、さらに言えば……」

ジナイーダもニームに倣って目の前の少女の顔を改めて見つめた。

薄い緑色の大きな目が、今は細められている。作り物のような整った顔だが、アルヴィンらしく無表情だった。しかし、もしもこの少女が笑顔であったなら、見とれてしまう事だろうと思えた。

「そもそも『ドール』は少年です」

「ふむ」

ニームは目の前の三つ編みのアルヴィンが「ドール」と呼ばれ、恐れられているアルヴィンとは別人だと知って、少しばかり安心した。だが同時に不思議な気持ちを自分の中に見つけた。それは軽い失望であった。悪名高い「ドール」に一度は会ってみたかったという思いがあったのだ。

そんな自分を客観的に観察したニームは、思ったよりも動揺していない事に微かな誇りのようなものを感じていた。それもまたニームにしては不思議な感情だと言えた。

それもすべては相手から殺気をまったく感じない事に起因するものだ。もちろん神経はピリピリと張りつめてはいた。だが危機感がそれほど湧いてこないのだ。

翻って昨夜の相手、ミリア・ペトルウシュカはどうだったのか？同様にミリアもあからさまな殺意をむき出しにしてその場に「存在」していたわけではなかったのではないのか？

そこまで考えると、急にその時の恐怖と絶望が頭をもたげた。ニームは思わず唇を噛んだ。生まれて初めて、なりふりなど構っていられない恐怖心に呑まれた自分が惨めで悔しかった。以前ならば何があっても決してそうはならない確信のようなものがあった。だが、今の自分は外界に対して予想以上に反応してしまう。

（ああ、そうか……）

ニームはここに来て初めてその訳を知った。全てはエスカに対して特殊な感情が生まれてからではないか。

だが、ニームはそのことによって自分が弱くなったとは思いたくなかった。それでは自分だけでなくエスカも否定してしまうように思えた。

今の自分は弱い。この恐怖に飲み込まれるのは簡単だった。だが、やるべき事ではなく、やりたい事を見つけた自分は、それを否定せず飲み込む事が出来るはずだ……。

ニームは一つ大きく息を吸い込むと努めて目を大きく開き、目の前の三つ編みの兵士を睨み据えた。

別人とは言うものの、目の前の少女の登場は「ドール」と呼ばれるテンリーゼン・クラルヴァインの噂そのものだった。気配がまったくないのに忽然と目の前に現れるアルヴィン。圧倒的な移動速度を誇るル＝キリアのアルヴィン……。

「一応、名を聞いておきたい」

あれこれ不確実な推理を働かせる事がばかばかしい事に、すでにニームは気付いていた。何しろ目の間に本人がいるのだから、本人に聞くのが手っ取り早い。

ニームが三つ編みの少女を睨むようにしてそう言うと、予期せず二人を狙っていた矢がスッと下りた。狙いが解かれたのだ。

照準が外された事に二人が少なからず驚いていると、少女が口を開いた。

「シーレン・メイベル」

少女は静かにそう告げた。

「メイベル……あの『凶兵』か」

ジナイーダは絶句した。メイベルの名は忌み言葉として知れ渡っていた。当然ながら情報があった。

ひとたび人を殺し始めたら、その場にいる全員が動かなくなるまで戦闘を止めることのない、殺戮者。狂気の光をその緑色の目に宿し、時には戦闘を止めに入った味方すら何のためらいもなく切り捨てる暴走ぶりに、シルフィードが自ら処刑したと伝えられている。

「なるほど。表舞台では抹殺されたが、その実はシルフィード軍の裏とも言えるル＝キリアで生き延びていたという事か。いや、裏で使う為に表を消したと言うべきか？」

ジナイーダの説明を聞いたニームは、感想ともとれる言葉を直接「凶兵」に向けた。そして相手の答えを待たずに続けて次の質問を投げかけた。

「お前はペトルウシュカ公ミリアの使いなのだな？」

シーレン・メイベルはうなずくと、手を首筋にやって、襟を止めていたボタンを外した。それはル＝キリアの部隊章を隠す事になった。

「そうだ」

それは二番目の質問に対するものだとニームは解釈した。

「面妖な話だな。ペトルウシュカ公はドライアド王国の人間であろう？　なぜシルフィード王国直轄と言われるル＝キリアがあやつの使いをしているのだ？」

「部隊章は自己紹介用だ。私は今、ル＝キリアでもシルフィード海軍でもなく、ミリア様に従っている」

「どういう意味だ？」

「それについて答えるようには命じられていない」

「『凶兵』が、ただの使いで現れたのか」

ニームが挑発を込めてそう言った瞬間、視界からメイベルが消えた。いや、消えたというのは正確ではない。三つ編みにされた金髪がなびく残像が網膜に残っていた。右に回り込んだものと思われた。だが顔をそちらに向けるよりも速く、首筋に冷たいモノがあてがわれていた。

それはあまりに速い移動であった。ニームが息を呑む間もなく、後ろから感情のこもらない声が聞こえた。

「人でもない三つ眼（みつめ）の分際で、二度とその忌み名で私を呼ぶな」

「金の三つ編み」

三つ眼という言葉にムッとしたニームが口を開く前に、ジナイーダが横でそうつぶやいた。

「え？」

「ル＝キリアはニーム様もご存じの通り、表に出る事のない部隊です。兵達は名前ではなく二つ名で呼ばれています」

「それがコイツの二つ名か？」

ニームは今し方自らが体験したシーレンの残像を思い出していた。

「なるほどな」

ニームは小さなため息をついた。
「私もなるほど、と思いました」
ジナイーダは似たようなため息をついた。おそらくニームと同じ残像を見たのであろう。
「だが、凶兵と呼ばれた程の兵士の新たな二つ名が『金の三つ編み』とはどうなのだ？」
「どうなのだ？と言いますと？」
「拍子抜けする程穏やかな名前ではないか？」
「そもそもル＝キリアの隊員の二つ名に強い兵士を想像させるものはあまりありませんよ。『ドール』、『金の三つ編み』、『双黒の左』、『夢の織り手』、『日和見』　どれも強そうではありませんね」
「そうだな。司令だけは例外のようだがな」
「『白面の悪魔』、確かにそうですね」
ニームとジナイーダの無駄話を、シーレンは制するそぶりを見せず黙って聞いていたが、会話が一段落付くとニームの首元に当てていた短剣を収め、ゆっくりと二人の前に戻った。
最初に口を開いたのはシーレンだった。
「『金の三つ編み』はル＝キリアの名だ。今の私はただのシーレン・メイベルだ」
ニームはわかったという風にうなずいた。
「ならばシーレン・メイベル。お前の主が私をここに呼び出した訳をききたい」
「私は道案内だ」
「道案内だと？　どこへ行くのだ？」
「？」
その時、シーレンの表情に初めて感情らしきものが浮かんだ。
「聞いていないのか？」
ニームは頷いた。
「我が主からはニーム・タ＝タンには伝え済みと聞いている」

そう言われてニームは思い出したくなかった昨夜のあの記憶をたどった。ミリアとの会話は全て記憶しているわけではない。所々で意識が飛んでいたのだ。

ニームの体に再びその時の感覚が蘇り、体中の汗腺からどっと汗が出るのを感じた。

「正直に言おう。所々で記憶が飛んでいて、その目的地とやらの事は覚えておらん」

シーレンはそう言うニームの様子を目を細めて眺めていたが、やがて小さなため息をついた。

「主のいう通りだな。お前では弱すぎる」

「何の話だ？」

「弱い」という言葉に反応し、眉を吊り上げたニームだが、シーレンはそれは無視すると隣のジナイーダに視線を注いだ。

「ジナイーダ・イルフラン。間違い無いか？」

「ええ……？」

シーレンは視線をニームに戻した。それはまるで確認作業のような動きだった。

「しかもあまり賢くもない」

「なんだと？」

「ルーナー二人の組み合わせでは無理がありすぎる」

シーレンの言葉はある意味戦闘時限定の定説と言えるものであった。詠唱時間がかかるルーナーは先頭においては機動力がない。とは言え、強化ルーンさえ施していればその弱点も回避出来る。強化ルーンを得意とするコンサーラのニームほどルーナーであれば、そんな定説や常識は通じないと言っていい。

だが……

「強化ルーンを剥がす方法、無効にする方法などはいくらでもある」

シーレンは冷ややかにそう言った。確かに今、そのコンサーラである大賢者が、たった一人のフェアリーに命を握られるという場面を演じたばかりだった。

ニームは反論しようとしてその事に思い当たり、口をつぐんだ。
（まさか、今のはそれを実演して見せたという事か？）
ニームの顔が少し青ざめるのを認めたシーレンは、そこであろう事かにっこりと笑って見せた。
「え？」
その表情を見たニームとジナイーダは、またしても異口同音に声を上げた。
それほどその変化は驚愕に値するものだったのだ。無表情で感情がまったく読めない、言ってみれば研ぎ澄まされた武器が服を着ているかのように見えたシーレンが、まさかそんな笑顔を見せるとは思いもよらなかったからだ。

ジナイーダにしてみれば、ついさっき想像した事が現実になった訳ではあるが、実際にその笑顔を見た感想は、美しいとか可愛いという感情ではなかった。適当な言葉が思い浮かばなかった。それはジナイーダが知らない表情だったのだ。
「ロンドが……」
「え？」
ニームが突然まったく脈絡のない人物の名を挙げた。ジナイーダは驚いてニームを見た。
「スノウを見て、時々ロンドがああいう顔をする」
ニームがぽつんとそうつぶやいた。おそらくニームもジナイーダと同じように、シーレンの笑顔の種類を策定していたのだ。
ジナイーダはニームの一言で理解した。
（これは、親が我が子を見守る時の……いや、慈しみの笑顔だ）
それは過去の記憶が消去されているジナイーダも、生まれた時から一度も肉親と触れ合うことなく一族とは言え他人の手で育てられたニームも知らない笑顔である。だが、そうだろうと確信ができた。それはシーレンの笑顔が作り物ではないからではないかと、ジナイーダは考えていた。

だが、なぜシーレンがそんな笑顔を見せるのか？
次にそんな当然とも言える疑問が湧き上がってきたが、それをじっくりと考える時間はなさそうだった。
シーレンは微笑んだまま短剣を鞘に収めると、そのままくるりと二人に背中を向けた。
「行くぞ、この部屋は地下通路に通じている」
ニームとジナイーダはその背中を見て思わず見つめ合った。
無防備な背中は、二人の胸に一瞬浮かんだ考えを見透かしていた。
「ああ、言っておくが」
シーレンは立ち止まると、振り向かずにそう声をかけた。その声も今までとは違い、極めて普通の、言ってみれば血の通った人間が発するそれであった。つまり、表情がある生きた言葉だった。
「さっきも言ったように……」
シーレンは両手を広げて肩の辺りまで上げた。まるで何も手にしていない事をニーム達に見せるかのような動作だった。
ニームはその背中に向けて言葉をかけた。
「お前をルーンで攻撃をしたり、反抗するなら殺せと命令を受けている、と言うのであろう？　心配するな。賢者……いや、お前の言う『三つ眼』は約束は守る存在だ」
だが、その言葉に対する反応は思ってもみないものだった。
「いや……」
シーレンは首を小さく横に振った。
「違うのか？」
「お前は理解力も低いな。ミリア様の言う通り、やはりまだまだ子供だ」
「なんだと？」
「殺してもいい、と言われているが、殺せとは命じられてはいないのだ」
「はあ？」
ニームに答えたシーレンの声は楽しそうだった。

「お子様は大人が使う言葉の持つ意味あいもわからないのか？　要するに私の気分次第という訳だ。とにかくお前を目的の場所に送り届けるのが私の主からの本来の命令だ。それまでは護衛と思ってもらった方がやりやすい」
「え？」
　ニームとジナイーダが同時にそう小さく叫ぶのは、この部屋に足を踏み入れてから、これでもう三回目であった。
「考えてもみろ。ルーナー二人に加えて疾風の能力を持つ風のフェアリー。しかもそれは訓練された兵士だ。確かに相当変則的ではあるが、これはこれで相当に強力な小隊だとは思わないか？　どうだ？　人の筆頭、ニーム・タ＝タン？」
　驚きで思わず半分口が開いたままになっていたニームだが、すぐにその顔に不敵な笑顔がゆっくりと広がった。
「面白い。正直に言えば、私はミリア・ペトルウシュカは許せない。今回は約束した事に従いはするが」
「いつか殺してやる？」
　シーレンはニームの言葉を途中で継いだ。
「いや……」
「かまわないさ。この先、あの人を殺したいと思う人間がファランドール中に溢れる事になるだろうからな。だからそう思ったとしてもたいしたことじゃあない。ニーム・タ＝タン。お前はその中の一人になるだけだ」
「どう言う意味だ？　いや、あいつ、ミリア・ペトルウシュカはいったい何をするつもりなのだ、シーレン・メイベル？」
　背中越しにかけたニームのその言葉を聞くと、シーレンはくすっと笑い声を漏らした。
「知りたいか？」
「もちろんだ」
「ならば生き残る事だ。この先に起きる動乱はおそらく全てをひっくり返す事になるだろう。その中で生き延びて見せろ。生きていれ

ば知る事も出来るだろうさ」
　ニームは悟った。シーレンは具体的な事を答える気はなさそうだと。
　いや、答えてはならないと命じられているのであろう。
「ならば質問を変えよう」
「答えられるかどうかはわからんぞ」
　ニームはシーレンの言葉を無視して続けた。
「お前が案内するその目的地とやらは、私を生かす為の場所か？」
「んー……」
　珍しくシーレンが悩むそぶりを見せた。
「いい質問だ」
「答えてくれ」
「そうだな。お前次第だと言っておこう」
「私はここエッダの宮殿で調べたい事があったのだが、少し時間をもらえる事はできないのか？」
　ニームのその質問に、シーレンは振り返った。
「ふむ。そういう意味では、目的地はまさにお前が望む場所だ」
「何だと？」
　シーレンはだが、何も言わず部屋の奥に向かって歩き出した。狭い部屋だと思ったが、おそらくどこかに隠し通路があるのであろう。そしてシーレンはそこへ入る手段を知っているのだ。
　今はついていくしかない。
　ニームはそう決断すると、ジナイーダの手をとった。
「行こう」
「ええ」
　ジナイーダはニームににっこりと微笑みかけた。だがそれを見上げたニームの顔に困惑の表情が広がった。
「どうしました？」
「いや……」
　ニームは視線をシーレンの背中に向けると、ジナイーダと手を繋

いだままゆっくりと歩き出した。

ニームはジナイーダに、シーレンと同じ種類の笑顔を見つけたのだ。いや、初めて気付いたのだ。シーレンがなぜあんな笑顔を浮かべたのか、それはわからない。だが同じようなジナイーダの笑顔を見ると、すっかり忘れていた感覚が蘇ってきた。自分ではどうしようもない感情と生理現象。

目頭が熱くなる。鼻水が出る。奥からこみ上げてくるものに反応する喉を制する事が出来ない。

今のところは、何がどうなっているのかニームにはさっぱりわからなかった。

だがわかった事が二つあった。

一つはニームには今、二人の味方が居るのだという事。もう一つはミリア・ペトルウシュカが思っているような人間ではないという事だった。

ニームは大きな音をたてて鼻をすすると、袖で顔を拭いた。

ジナイーダはニームのその様子を見ると、何も言わずに繋いだ手に力を入れた。

# 第九十話　油断

「ここまで来ればもう大丈夫でしょう」
一際大きな馬にまたがったガルフ・キャンタビレイはそう言うと、手綱を少し引いて速度を緩めた。
「ご立派でした。不詳このガルフ、大いに感銘いたしましたぞ」
馬が並足まで速度を落とすと、ガルフにしがみついていたイエナ三世の手から力が抜けた。
緊張の糸が切れたのだろう。一度脱力すると今度は自分自身をも支えられなり、そのまま落馬してしまいそうなところを、ガルフがなんとか支え起こした。
「ありがとう……」
イエナ三世はそう言ったものの、その顔は真っ青で、もう体に力が入らないようだった。ガルフは手を上げて後方に合図を送ると、ゆっくりと馬を止めた。併走していたアルヴ兵の馬がそれぞれ左右の脇を固めると、そのすぐ後に馬車が近づいてきた。

エッダ郊外の森。
出城宣言をしたイエナ三世一行はエッダの城塞を抜けるとそのまま馬を走らせ、一気にそこまでやってきていた。
イエナ三世を囲むガルフの親衛隊は速度を上げたまま先行し、後方の部隊の速度を遅らせる事で追っ手との間に王国軍による分厚い壁を築いていたのである。
ガルフがその場所で速度を緩めたのには訳があった。少し開けたその場所は格好の休息場だったのだ。
「ごめんなさい。力が入らないのです。それに『あれ』はぴったり合わせて下さったからこそであって、私の力ではありませんし……」
「陛下が謝る事などございませぬ。それに謙遜など無用です。本当

にご立派でした。竜巻が発生した時のサムのあの顔、今思い出しても痛快です。簡単に言えば『溜飲が下がった』ですな」

ガルフはそう言うと、小柄なアルヴィンであるイエナ三世を軽々と抱きかかえたままで六頭立ての比較的大きな客室付き馬車の中へ入った。

それを見て、二人が後に続いた。リーン・アンセルメ少尉とフリスト・ベルクラッセであった。

「このまますみません、体に力がはいらなくて……。本当に情けないですね。膝の震えも止まらなくて、まるで自分の体ではないようです」

極度の緊張から解放された反動で、イエナ三世はぐったりしていた。体に力が入らないのはもちろん、膝が笑うのを押さえられない。腕も指も小刻みに震えたままだ。喉はからからに渇いており、外の音が聞こえにくい。自分の声すら他人の声のようで、それも遠くから聞こえた。

イエナ三世のいかにもすまなそうな声に最初に答えたのはフリストであった。

「申し訳ありません。我が主（あるじ）は人に無理をさせるのが趣味のようなものでして……失礼します」

フリストは断りをいれるとイエナ三世の膝を優しくさすり始めた。

「それは趣味でなく悪趣味というものですな」

これはリーンである。

「まったくだ。だが儂はフリストの竜巻にも大いに感心した」

ガルフの言う竜巻とは、大葬の際、風のエレメンタルであるイエナ三世が場を威嚇する為に発生させたあの竜巻の事を指している。

「ええ。あれには私自身が驚きました。話には聞いておりましたがあそこまで恐ろしいものだとは思わず、危うく表情が崩れるところでした」

イエナ三世がガルフの言葉を継いでフリストをいたわるように声

をかけた。
リーンも大きくうなずいた。
「打ち合わせ通りとは言え、ああも見事に思い通りに現れると誰も陛下以外の人間が竜巻を操っているとは思わないでしょう。からくりを知っている私でさえ、あの瞬間に陛下がまさに巨大な風の力を使っていると錯覚してしまいました」
「あれこそがサミュエルを混乱に陥れた決定打であったな。フリストよ、まったくお前の新しい主のペテン師振りには感心させられる」
ガルフの声は久しくリーンが聞いた事のないくらい、上機嫌であった。無理もない事であろう。ここまではまったく「手はず通り」なのである。

リーンは安堵のため息をついた。ここまで来ればこその一息である。そう思ったとたん、今まで肩に相当力が入っていた事を自覚した。
自分自身に苦笑すると、リーンは思わず「あの時」の事を思い出した。同じようにノッダに向かう馬車の中の一コマである。そう、突然現れたミリアとフリストによって命を拾ったあの晩の事である。

夜のラクジュ街道をノッダへ向けて走る馬車の中にいたのは、ガルフ・キャンタビレイとリーン・アンセルメ。国王直属の遊撃部隊「ル＝キリア」のフリスト・ベルクラッセ。そして他国の公爵であるミリア・ペトルウシュカの四人であった。
バランツを目前に反転した親衛隊、その中でも六翅のススメバチの赤い旗を掲げる快速馬車の中のその四人によって、イエナ三世の救出作戦が企てられたのである。
ミリアはガルフとリーンに、エッダにいるイエナ三世をノッダに連れてきて匿(かくま)うだけでは駄目だと解いた。
まずは、世界的にはまだ認知されていないイエナ三世の存在感を

確立する必要があった。それも相当に強く、である。
そして出来るならばやや拙速に見えるサミュエルの計画に対し、何らかの打撃か混乱の種をまいておきたいという思惑も告げた。
とは言え今回の遷都宣言はミリアだけの計画ではなかった。シルフィードの法律に精通していたリーンという優秀な知恵袋の存在なくしては成り立たなかったであろう。
ミリアはガルフのみならずリーンも含めたノッダ側の全面協力を引き出す為に、彼の知るファランドールの歴史の裏側をそれなりの時間をかけて披露した。それはリーンをして「知らなければ良かった」と言わしめた内容であった。

ミリアが語る話のうち、前半については当時のシルフィードの裏側をもっともよく知るガルフ・キャンタビレイという検証役の存在と相俟って、リーンにも疑いを入れる余地がなかった。
巧妙なミリアは、時系列に話をつなげるようなことをしなかった。まずは近いところにある「常識」を覆すところから始めた。ル＝キリアが派遣された「ザルカバード文書」の罠の話が最初の謎解きだった。検証役は当事者であるフリスト本人である。
ザルカバード文書に記されていた全ての庵は、サミュエル・ミドオーバが配下のバードを使った「呪陣（じゅじん）」と呼ばれる強力な精霊陣であった。中に踏み入れた者を遠隔操作の攻撃ルーンで倒す為の仕組みを持つ罠である。
庵に施された呪陣の恐ろしいところは、視覚では一切それとわからない事、通常の精霊陣と違い、それは正多角形もしくは円ではなく、いかなる感知ルーンでも見破れない仕組みになっているところであった。言い換えるならばそれほどの特殊な精霊陣を構築できる人間は極めて限られるという事である。
呪陣の構築が普通のバードでは無理であろう事は、ルーナーではないリーンにも容易に理解出来た。では誰が設置したのか？　となると、消去法で簡単に絞り込まれるのだ。

シグ・ザルカバードの偽の庵に施された呪陣は誰にでも反応するわけではない。ある程度の力を持つフェアリー、それも風のフェアリーのみに感応するように調整されていた。そこに該当する人間が陣に踏み込むと、その場所にある呪陣と、別の場所にある対となる呪陣が反応し、空間を超えて両者の場が接続する仕組みになっていた。

だからこそ各国の捜索隊は「庵」を見つけてもただの空洞と見なしたのだ。

なぜなら呪陣はそもそも特定の人間「だけ」狙ったものだったからである。

特定の人間……すなわちル＝キリアである。

ル＝キリアの一員であるフリストはまんまとその罠にはまった。そしてその庵の仕掛けを知ることになった。空間と空間を結ぶ仕組み。それが呪陣の単純な機能であった。

フリスト率いるベルクラッセ小隊は、庵と繋がった空間、つまり「向こう側」を目撃していたのである。歪んだ空間を通して目にしたもの、それは十数名の人間であった。フリストの知る限り、それはシルフィードのバード庁に所属する高位のバードのみが着る服だった。

シルフィードでも機密事項となっている上位バード達は、外部には姿や名前は秘匿されていた。要するに目撃はしたものの、フリストでは人物特定は出来ないという事である。

状況把握をする間も与えられず、ベルクラッセ小隊は遠隔地から複数のバードによるルーンで完全に動きを封じられ、反撃の隙すら与えられず全滅したのである。

ミリアがフリスト達と出会ったのは全くの偶然であった。

ザルカバード文書の存在をいち早く入手していたミリアは、フリストとほぼ同時に偽の「庵」に到着した。一足違いで庵に到着したミリアが見たもの、それはル＝キリアのベルクラッセ小隊の無残な

姿であった。
　仮死……とはミリアは言わなかった。フリストは自分の横にいたシーレン・メイベルの最期を目にしていたから、あれで仮死状態だと言われても首を振るしかなかった。動きを止められた後に後ろから飛来した短剣で心臓を貫かれ、鮮血が互いの体を朱に染め上げていく一部始終を目にしていたのだ。同じようにシーレンも他の隊員のその姿を見たことであろう。彼ら自身がその道の専門家である故にわかるのだ。それは間違い無く即死を意味する負傷であるということが。
　ミリアが使ったのは「生き返らせた」という言葉だった。方法やその他については笑って「ボクの持つ能力だ」としか語らない。
　ミリアはしかし、その話を手短に切り上げた。ミリアの能力についてあれこれ議論する事が目的ではないからだ。
　その話は、リーンが持っていた漠然としたサミュエル・ミドオーバ近衛軍大元帥に対する不信感と同調することになった。

　次にミリアは、ある意味核心を突いた話に移った。
　エッダにいるイエナ三世が風のエレメンタルではない、という話である。
　さすがにリーンは俄に信じられなかった。だがミリアはさらに驚くべき事を口にしたのである。イエナ三世が風のエレメンタルでないばかりか、アプサラス三世の実子エルネスティーネ・カラティアですらないという話であった。要するにエッダで王冠を戴いているのは赤の他人だという話である。
　リーンは荒唐無稽な話だと一笑に付そうとした。彼はイエナ三世の姿を、まだ幼い王女時代からよく知っていた。国民の前にその姿を露出する事が比較的多い姫であったのだ。
　だが、ミリアはそれこそが戦略だと言い放った。
　反論を口にする間も与えられず、リーンは彼が最も信頼する人物、すなわちガルフ・キャンタビレイ王国軍大元帥の口からミリアの話

が全て真実である事を告げられる事になった。リーンは初めてそこで自分の知り得ぬ大きな伏流がこの世界に流れていることを受け入れざるを得なかった。そして自らの置かれている複雑で奇妙な立ち位置に焦燥感を覚えた。

思惑は違えど、ミリアの口から語られたのは自国の大きな二つの陰謀である。

目的が知りたい……リーンがそう思えば、未知の事柄を受け入れる姿勢ができる。何しろ自分の常識だけで世の中が成り立っていないことを自覚してしまったからである。

エルネスティーネには相当以前から偽物が用意されていた事は衝撃的ではあったが、不思議とだまされたという悔しさはこみ上げてこなかった。

ましてやそれが王女ではなくエレメンタルの保護という、アプサラス三世の高潔な意思の元に設定されたものだと知らされるにいたり、全てを全面的に肯定する事に、もはやためらいはなかった。

剣を能くする戦士とは言えなかったが、リーンもまたアルヴの気質を色濃く受け継いでいたのである。

何より現在イエナ三世を名乗る人間の素性を知らされた事で、彼の記憶がそれに当てはまったのだ。荒唐無稽だと思っていた不確かな扉は、そこにある鍵穴に小さな鍵を差す事で明確な形をリーンに見せることになった。

イース・バックハウス。

リーンはバックハウス家最期の一人が幼くして病死した事をよく知っていたのである。カラティア家に極めて誓い血筋である事も知識として持っている。それにルーンの力を添えれば「変わり身」を作るのは簡単だと思えた。ましてや幼い頃から相手を研究し合って同じ部屋で寝起きするとなれば、持っている情報やその仕草に至るまで補完し合い、共有することも可能であろう。

ミドオーバ近衛軍大元帥の謀反の心と、その本人が関わっている

エルネスティーネの「変わり身」の存在。
この二つの鍵があれば、アプサラス三世急逝の疑惑は一つのところに行き着く。加えて戴冠にあたり「イエナ」という名を選んだ事が意味するものも。
もともとリーンが持っていた漠然とした疑惑にこれほど綺麗に合致する要素はなかったのだ。
リーンがそれらの前提を受け入れた事を確かめたミリアは、次にファランドールの生い立ちを語って聞かせた。ミリアは「歴史の勉強」という言葉を使ったが、それはむしろ「価値観の総入れ替え」を強いられる拷問のようなものだった。

ミリアが話をする間、フリストは終始落ち着いていた。それは既知の事柄ばかりだからであろう。教えられ、説明され、すべてを納得したからこそ自発的にミリアの手伝いをしているのだ。忠誠を誓った王が倒れたからといって、国を捨てるようなアルヴはいない。だがミリアの話を信じるならば彼の元で闘いたいと考えるのはむしろ自然のように思えた。フリストがリーン達に告げたように、一度死んで新しい命を得たのだという話は、それがたとえ真実であろうと比喩であろうと、後ろめたさをぬぐい去る為の拠り所になったに違いない。

ではガルフはどうであったか？
彼はミリアの話の半分程度を受け入れる事ができた。そもそも表の歴史以外の「事実」をそれなりに伝え聞き、エルネスティーネの「変わり身」計画の数少ない共謀者という立場にもあったから、ミリアの話を信じる下地はリーンよりも整っていたに違いない。
イース・イスメネ・バックハウスを変わり身にする事を提案したのはサミュエル自身なのである。
そういえばイースの両親も急死だった事をガルフは思い出したと言った。当時は不幸な事故だと思っていたが、不自然だと思えばい

くらでもそう思える。最初からそれもサミュエルの計画だと考える事が出来るのだ。もちろん今となっては本人に直接尋ねるしか方法がない。だが、確実に疑いは深くなっていった。

バード庁が今ほど秘密裏な存在になったのもその頃からだとガルフは言った。名目はもちろん変わり身の保護で、高位ルーナーの部門を強化・機密化する事でそれらを一部の人間だけの秘密に留めるという大義があった。

バード庁の責任者をサミュエルが兼務したのもまさにその時からで、エルネスティーネの変わり身計画を補完する為の措置として、シルフィード王国のバードの中でも最も能力の高いルーナーであるサミュエルがその忍に着くという流れは極めて自然であった。

だが、事がいわゆる神話時代の話に至ると、さすがにリーンと同じ様な反応になった。ミリアが当たり前のように語るそれらの話はまともな見識を持っている人間にはおよそ信じがたい、いやまともな価値観を持っているからこそ受け入れがたい内容だったのだ。

だが、それでも彼らはミリアのいう事を呑み込む事にした。ミリアの話した歴史を丸呑みしたわけではない。ミリアという人間の言葉を信じる事にしたのである。

それはミリアの次の一言が決め手になった。

『ミドオーバ大元帥は、ボクと同じ本を持っている可能性があるんですよ』

ミリアは一通りの話が終わると、なぜそんな話を自分が知っているのかという種明かしをする必要があった。つまり、ファランドールの成り立ちに関する情報の出自は全て一冊の本に端を発する事を告げ、その上で、そう言ったのだ。

世界に四冊しかない、得体の知れない人物が記した信じられないような内容の本。

曰く付きのその本を手にする事が許された人物はたったの四人。そのうちの一人がミリア・ペトルウシュカ。そしてもう一人が誰在

ろうサミュエルであると言うのである。
　確かにミリアの話を聞くとサミュエルは相当以前から周到に準備をしていたふしがある。リーンもガルフと「そういえば」と思う事が次々と記憶から蘇っていた。
　ガルフはサミュエルの昔を知っている人間である。二心がない国王の僕（しもべ）としてアプサラス三世の前王であるウナー二世時代から近衛軍大元帥の座にある文字通り国家の中枢と呼べる人物である。その人物が世界の成り立ちを知ったために、今まで自らのすべてを捧げていたシルフィード王国という国家をも蹂躙するような価値観の転換があったとするならば、ミリアの言うことはまんざら的外れではないのかもしれない。
　だが、それだけではサミュエル・ミドオーバの「目的」はわからなかった。だが、とにかくサミュエルが何かを焦っているのは間違いがない。計画を綿密に進めるつもりであれば、あの時期にアプサラス三世を暗殺し、ノッダに居るガルフに疑惑を持たせるような真似をしたことが腑に落ちないのだ。彼の立場であれば、六翅のスズメバチの旗を掲げる親衛隊をガルフ共々一網打尽にする事などは容易であったろう。
　ミリアはしかし、サミュエルの目的までは知り得ないと言う。ミリア自信もサミュエルが動き出したからこそ、「対抗上」自らの目的準備を前倒しにして動き始めたと言うのだ。

　リーンとガルフがそこまで納得した時点で、ミリアは最後にこう言って一連の話を締めくくった。
「さすがに僕にも彼の目的はわからない。でも、ミドオーバ大元帥を脇で固める人材を思い起こしてみれば、それは予測のための鍵になるんじゃないのかな？」
　そこまで言うとミリアはガルフとリーンを見比べるながら言葉を切った。二人はそれぞれシルフィード王国の組織図を頭の中で思い浮かべているに違いなかった。

だが、少し待っても二人の口からは何も言葉は発せられなかった。
ミリアは苦笑しながら解答を告げた。
「ほとんどがデュナンだよ」
まさにその一言が決め手になった。
自分たちが想像しているよりも、ひょっとしたら問題は悲惨な方向に行く可能性を感じたのだ。
「公爵。私はあなたの言うことをすべて信じる事にした。簡単に言えば『無条件降伏』だ」
ガルフはうなるようにそう言った。

無条件降伏……
リーンもまさにそう感じていた。ミリアの話を否定する材料が彼らにはないのだ。翻ってミリアの話には物的証拠は少ないものの、説得力という最大の材料が揃っていた。しかもその最大の材料が彼らの同胞であるはずのサミュエル・ミドオーバの反乱。そして「同胞」が「同胞ではない」と突きつけられた事実。
そもそもドライアドの一貴族がシルフィード内部の、それもごく一部しか知らないはずの重要項目を知っている時点で……いや、リーンですら知らない国家の「影」の部分を知っているミリアを否定する事など出来なかった。
だからこそ、リーンにはどうしても知っておきたい事が一つあった。
「一つだけわからない事があります」
リーンはミリアにそう声をかけた。
「あなたはなぜエルネスティーネ様の『変わり身』の事を知っていたのですか？　それは『本』に書かれている事項ではないはず。大元帥の話ではその事実を知る者は片手にも満たぬと言うではありませんか」
リーンはそう言うと、ガルフに視線を移した。ガルフは首を横に振った。自分は話してはいないという合図だ。

「ああ」
リーンの質問に、ミリアはさも当たり前という風にあっさりと答えた。
「そんなの、簡単さ。だってボクは本人に『変わり身』だって聞いたんだから」
さらにミリアは続けた。これから話す計画の基本は既にイース扮するエルネスティーネ、いやイエナ三世と話は出来ているというのだ。
ガルフとリーンにとって、おそらくその日一番の驚きであったろう。
「彼女の寝室で結構長く話をさせてもらったよ。ついでに、仲良くなって絵も一枚描かせてもらった」
もはやリーンには挟むべき言葉が見つからなかった。いや、むしろ開いた口がふさがらないとはこのことであった。
ミリアはイースをきわめて高く評価していた。ミリアの計画を彼女は一度で理解したのだ。そればかりか、ミリアの計画を補完する計画をその場で提案してきたというのだ。
「イエナ三世という名前は彼女の提案なんだよ」
すばらしい機転だとミリアは言った。
有名な歴史箪であるハンネ＝ローネ回廊の伝説はミリアももちろん知っていたから、二つ返事で取り入れたのだという。
「彼女はすこぶる頭がいい。周りの人材に恵まれたならば、間違い無く歴史に名を刻む賢王になるだろうね。しかるに本物のエルネスティーネ様はイースの話だと人の心に響く言葉を紡ぎ、その言葉よりも早く体が動く人物らしいですから、私に言わせるなら二人が王になればシルフィード王国はこの時代に最も輝くのは間違いないよ」
ミリアのその言葉に、リーンは思わず胸をドンと叩いてこう返した。
「いかにも。必ずそうなりますとも！」
リーンのその態度を見て、フリストが目を細めた。

「冷徹な策士と聞いていましたが、どうしてどうして。実に熱い男ではないですか」
それはフリストからガルフに向けられた言葉であった。もちろんリーンに対する評である。
その言葉にリーンははっと我に返ったが、ガルフはうれしそうに声を上げて笑った。
その時、馬車の小さな窓から夜が明けようとする空が見えた。

「現時点で、我が方の勢力はどの程度ですか？」
ぼんやりとミリアと出会った時の事を考えていたリーンに、イエナ三世の言葉が届いた。
「え？」
思わず顔を上げると、目の前にはすでに居住まいを正したイエナ三世が、フリストの隣に座っていた。
「見苦しいところをお見せしました。ですがあまりのんびりもしていられません。現状把握をさせてください」
イエナ三世の口調は丁寧だった。だがそこには侵しがたい厳しさと威厳が漂っていた。だが、リーンは即座に口にする言葉を見つけられなかった。
「私の正体はご存じですね？」
イエナ三世は言葉の調子を変えた。
「え？　あ、はい。ペトルウシュカ公より聞き及んでおります」
それだけ言うとリーンは深々と頭を下げた。
「大事なことなので最初に聞いておきたいのです。あなたはイース・バックハウスを助けたのか、それともこれからノッダの玉座に座るイエナ三世を戴くのかを」
リーンは突然突きつけられた言葉に困惑した。
だが、考えれば無理もない話であった。目の前にいるのは本物の

エルネスティーネ・カラティアではない。『変わり身』たるバックハウス家のイース・イスメネという娘なのだ。

この計画を実行するまで、リーンはシルフィード王国の為という名目を自身の行動の根幹としていた。もちろん無意識に、である。だが改めて根本的な、しかし簡潔なその質問を突きつけられると、今までその事について考えていなかったことに愕然とした。

だが……

馬車の中に居た全員の視線が注がれる中、少しの間を置いて、リーンは座したままではあったが陸軍形式の最敬礼をした。

「これは異な質問を承ります」

そしてまっすぐにイエナ三世の緑色の瞳を見つめて答えた。

「我が身は常にシルフィード王国の為にあり。御身がシルフィード王国の国王であらせられるならば、すなわち我が命は御身のもの」

「なるほど」

リーンの答えに、イエナ三世は眉をひそめた。だがリーンの言葉にはまだ続きがあった。

「ならばこそお答えください。御身はイース・イスメネ・バックハウス様なのか？　あるいはシルフィード王国国王、イエナ三世であらせられるのか？」

今度はイエナ三世が口をつぐむ番であった。

だがそれもほんの少しの事であった。

「リーン・アンセルメ少尉。あなたはミリアさまから聞いた通りの方ですね」

それはほんのりとのんびりした調子を含む優しい声だった。リーンが知るエルネスティーネ王女の声。シルフィードの宝石と言われた少女が蘇ったようであった。

だが、その声は一瞬で変化した。

「我が名はイエナ三世。シルフィード王国の国王である」

それは大葬で初めて人々の前に現れ、同時に堂々たるその存在感を見せつけた新しき国王の声であった。

その声にリーンだけでなく、ガルフも同時に最敬礼をした。
「頼りにしています」
二人の態度を見てにっこり笑う笑顔は、もはや少女エルネスティーネではなく、女王の微笑みだとリーンは思った。
人は王として生まれるのではない。王になるのだとリーンは改めて思った。
そう、人は……。
そこまで考えてリーンはミリアに教えられた様々な「真実」思い出した。だが、それを振り払うと改めて自分の新しい「主」をまぶしそうに見つめた。

一行は早速リーンが把握している情勢を共有する作業に入った。
実のところミリアの話を聞いてから時間があまりなかったこともあり、ノッダ陣営としての「勢力」は、シルフィード王国全体から見ると、たいしたものではなかった。
ノッダの守備を任せている一個大体を除くと、現時点で「味方」と言える兵力は、エッダに集合した戦力が全てであったのだ。
出し惜しみをせず最大の勢力を見せつけることによって大葬参列者の度肝を抜くというのはミリアの作戦であった。とは言ったものの短時間で、それもエッダの近衛軍側に察知されることなく同時にあの場所に集合するのは不可能であった。
だがミリアはそれができると言ったのだ。そして事実それを実行して見せた。
もはやリーンはミリアに対する疑いを持続することが困難になっていた。同時にミリアの常識を大きく外れた能力に恐怖してもいた。
ミリアがその気になれば、シルフィードどころか、ファランドール全体を手に入れることなど実に簡単な事に思えた。
だがミリアはそれをしようとはしない。
素朴なそのリーンの疑問に答え、ミリアは目的があるからだと言ったが、その目的については最後まで言及しなかった。ただリーン

はうすうす感じてはいた。ミリアのような力で無理矢理に作り上げた世界は、おそらくは虚構なのだと。

だからリーンは自分たちでやれることをやるのだと決めた。

何らかの思惑があり、ミリアは今回リーン達に手を貸した。だがこの先はリーン達が築き上げるしかないのである。

フリストに加え、親衛隊に同道してイエナ三世が乗る馬車の近くで待機している二人のル＝キリアの兵士は、イエナ三世がノッダに入場するまでの護衛として派遣された、ミリアの最後の「手助け」であった。

そのフリストがにわかに馬車内の会話を遮った。

「どうされました？」

「部下から緊急の合図がありました」

普通の人間には聞こえなかったが、自分を呼びかける声を聞いたという。

「とりあえず馬車を止めろ！」

フリストに強く促されて、リーンは御者台に面した壁にある小さな鎧戸に手をかけた。

それはリーンがその鎧戸を持ち上げるのとほぼ同時だった。

開いた窓から、不気味な風切り音を響かせて何かが室内に飛び込んできた。

「え？」

リーンがそれがいったい何かを認識するよりはやく、フリストが動いていた。

彼女がやったこと。それは隣に座っているイエナ三世を突き飛ばしたことであった。その次には鈍い音とともにフリストがうめき声を上げた。

「フリスト！」

「少佐！」

二つの叫びはガルフとリーンが同時に発したものだった。

彼らの視線の先……フリストの脇腹には、深々と矢が突き刺さっていたのだ。矢が刺さった部分を中心として染みがみるみる広がっていた。黒っぽい服を着たフリストだったが、矢を中心として濡れた部分がさらに黒さを増していた。

「窓を塞いで！」

イエナ三世が悲鳴のような声を上げた。

「早く！」

呆然としていたリーンは慌てて鎧戸を下ろした。

その時点で何が起こったのかを理解していた者は誰一人いなかった。だが、それが敵襲である事だけは間違いのない事実であった。

「フリストさん！」

イエナ三世が倒れ込んだフリストを抱きかかえながら、大声で呼びかけた。フリストには意識がないのだ。もちろん呼びかけに反応しない。だから声はどんどん大きくなる。

「目を開けて、フリストさん」

気丈なイエナ三世の目からは、涙が流れていた。リーンと、そしてガルフでさえ初めて見る女王の涙であった。

「お願い！　死なないで！　目を開けて！」

必死で呼びかけるイエナ三世を横目に、リーンは血が出るほどに唇を噛んでいた。

だが、彼が非凡な点はこういう緊急事態にあって感情に流されることを制御できる能力を持っていることであった。

彼にはフリストにそれ以上かまっている時間はなかったのだ。脇腹から心臓を貫いている矢……すでに床に溜まったおびただしい血。すなわちフリストはおそらくもう助からないであろう事は誰の目にも明らかだった。だからこそイエナ三世は身も世も終わりとばかりに叫んでいるのだ。

で、あれば自分がやることは一つ。短時間で現状を分析し、現有戦力でできる最大の戦術を構築すること。リーンは常にそう自分自身を訓練していたはずなのである。

リーンは隣のガルフの顔を見た。
おそらく同じ方向を向いているであろう尊敬する上官は、リーンの目を見て頷いた。
今やるべき事はイエナ三世を守りきる事である。守りきり、どうにかしてノッダの新王宮へ入城する事。
なりふりは構わない。
自らの失策はこの窮地を脱した後でいくらでも償おう。
イエナ三世が築く新しいシルフィード王国は、ノッダでの号令から始まるのだから。

## 第九十話　油断　（後書き）

毎週月曜日更新予定

ＰＣ用ですが、Ｗｅｂサイトもご覧下さい。
まとめ読み用ＰＤＦファイルやイメージイラストなども掲載しています。

ｈｔｔｐ：／／ｅｉｒ－ａｍｙ．ｃｏｍ

# 第九十一話　事実と真実

確かなことがあった。
馬車が止まらないのだ。
走り続けている。
ただ、やや速度が落ちているのはわかる。

ちょうど彼らは平坦で長い直線部分にさしかかっていた。広大な森をまっすぐに抜ける比較的広い街道である。
矢は前方から射られたものだ。馬車に矢が当たったような音はしなかったが、状況から考えて御者はすでに絶命している可能性が高かった。
「こちらからは何も見えん」
ガルフは窓から右側の様子を見てリーンに伝えた。リーンも用心しながら自分が座っている左側の様子を観察したが、小さな窓からの視界は限られている。
リーンは意を決して扉に手をかけた。
様子を見ながら御者台に出て、場合によっては馬車を止め、反転する必要があった。
近くにいたはずの護衛の騎馬や馬車から何の合図もないのが不自然であった。どうやら現状はこの馬車だけが孤立している可能性が高い。要するに丸裸同然なのである。

扉を開くのとほぼ同時に、騎馬が一騎、並んだ。それを見てとっさに身構えたリーンだったが、騎上の人物に見覚えがあった。
「敵襲だ」
リーンと比べても見るからに頑丈そうな体格。金褐色の髪が特徴

的なアルヴである。
「状況は？」
リーンはそう訪ねたが、そのアルヴは
「そっちに移る」
とだけ言い放ち、前方へ馬を進めた。リーンが見守る中、そのアルヴは何の苦もなく、軽やかに乗っていた馬から跳躍して御者台に降り立った。
リーンはそれを見届けると馬車の中に戻った。制動に備えるためである。
果たして馬車はリーンの予想以上に穏やかな停止を迎えた。御者台に移ったアルヴの制御が巧みだったのだ。

金褐色の髪を持つアルヴは、馬車を停止させるとすぐに車内に姿を見せた。そして泣きじゃくるイエナ三世に抱かれたフリストの姿を見ると、顔を歪めて唇を噛んだ。
「陛下にお怪我は？」
だがフリストには触れず、真っ先にそう訪ねた。
「見ての通り、ベルクラッセ少佐のおかげでご無事だ」
「そうか」
言葉とは裏腹にほっとした様子は一切見せず、そのアルヴはリーンとガルフに向かい、簡単な礼をした。
「どうなっている？　コラード少尉」
「は。森に入ったあたりで両脇と後方から襲われました。ですが、敵の特定はできておりません」

イブキ・コラード少尉。
正確には少尉ではない。なぜなら彼はル＝キリアの生き残りであり、隊長であるフリストと共にミリア・ペトルウシュカの配下となり、すでに自らシルフィード王国軍の籍を返上していたからである。
彼は現状で知り得た限りの情報を報告した。

その途中でもう一騎が第二報を携えて合流した。
そのアルヴもまたフリストの配下であったが、彼は単身ではなかった。彼の後ろには長い木槍を背負ったアルヴとおぼしき長身の少女がいた。
少女は甘い香りと共にリーンの前に降り立った。モクセイの香りである。リーンはその香りだけで、現れた少女が何者かがわかった。
それはアルヴではなく、デュアルの少女。モテアの髪を持つスノウ・キリエンカであった。異変を察知した騎馬のアルヴが、後方にいたスノウを自分の馬に乗せて連れてきたのであろう。
スノウはフリストを見ると馬車内に飛び込むようにして側についた。
少しの間フリストの様子を見ていたスノウは、膝の上でフリストを抱きかかえたまま泣き止まないイエナ三世をそっと抱きしめた。

「イブキ」
スノウは、イブキ・コラードに声をかけた。
その場の誰も、フリストについて何も聞かなかった。すでに聞く必要のない状態であることがわかっていたのだ。
「何だ？」
「馬を借ります」
スノウはそれだけ言うと、返事も聞かずにすぐ近くでのんきに草を食み始めた栗色の馬の手綱をとった。
「どうするつもりだ？」
「ミリアを呼んで来ます」
「え？　大将はまだエッダだぜ？　手はず通り部隊の最後尾を安全に……」
「だから、あなたのこの馬を借ります」
「待て待て待て」
慌てて止めに入ったのは、スノウを後ろに乗せてきたアルヴだった。スノウの肩にそっと手を置いて、そのアルヴはスノウから手綱

を奪った。
「私は行かなくちゃ」
「いや、無理だろ。後は戦闘中だぞ？　戦場のど真ん中を突っ切るつもりかよ？」
「無理でも行きます。急がないとフリストが……」
スノウの言葉を聞いたル＝キリアの二人は思わず互いに顔を見合った。
後から来た茶色の髪のアルヴは、手にかけたスノウの肩が震えているのに気づいた。
「気持ちはわかる。だがな、今お前を一人で行かしたら、俺達ゃ二人ともミリアの大将から殺されちまうんだよ。スノウはこれ以上犠牲を出したいのか？」
その言葉は淡々とした口調だった。だが、スノウの心には深く響いたのであろう。肩の震えが大きくなったかと思うと、こらえられずに声を上げて泣き始めた。
それはある意味でその場の全員がフリストの死を認めた瞬間でもあった。

しかし現実は待ってはくれない。彼らにはスノウとと共にフリスト・ベルクラッセの死を悲しむ時間はなかった。
後で思い切り嘆き悲しんでやる……。二人のアルヴは互いに目と目でそう言葉を交わし合った。
ル＝キリアは選りすぐりの「戦士」で構成された部隊である。今やらねばならぬ事は互いにわかっていた。
スノウを乗せてやってきた二人目のル＝キリア隊員である茶色の髪のアルヴは、クシャナ・シリットであった。ル＝キリアでの階級はイブキ・コラードと同じく少尉。ル＝キリアは通常部隊とは二階級の特差がある為に大尉相当となる。どちらもリーンより上の階級の人間だが、イブキもクシャナもリーンが拍子抜けするほどざっくばらんで外向的な性格であったため、階級の差などあまり気にせず

に接する事ができる相手であった。
フリストに紹介された時から、二人はリーンに対して友好的で、リーンは当初は戸惑ったものであった。
だが、そんな彼らをリーンはそのときほど頼もしい、いやありがたい存在だと思ったことはなかった。部隊の隊長であるフリストを失った事に対し、一切の言及なく状況把握して何も語らない。それはリーンですら冷たすぎるのではないかと思うほどきっぱりとした態度で、戦力でない者に対して見向きもしないル＝キリアの恐ろしさを垣間見た気がしたものであった。

戦況は不明であったが、いくつか明らかになっている事があった。敵はノッダ軍……あえてノッダ軍という呼び方をしよう……を完全に分断した。先頭を行く部隊と、それに続くイエナ三世を乗せたガルフの馬車の間に少し間が開くのを待っていたかのように分断したのだ。
脇を固めていたはずのイブキとクシャナが後方に異変を感じて下がった、そのほんの短い隙をついてきたのである。
親衛隊はすぐに合流するはずだとクシャナは言った。親衛隊に加えて一部の部隊がそれに続き、イエナ三世の守備につくはずであった。こちらから来た道を戻り、できるだけ早く合流するという選択肢は、馬車を牽く馬が二人の御者同様に矢で傷ついている事から、無理であろうと判断された。むしろ今この場所は周囲を見渡せるだけに、敵や味方の動きを把握しやすい。
最悪の場合は元ル＝キリアの二人の風のフェアリーにイエナ三世を預け、なんとか落ち延びる方法を残しながら、ここはクシャナの情報を信じて自軍の到着を待ち、厚い守りを強いた上で移動する方が安全だというリーンの判断が採用された。

そもそもできるだけ早くエッダを離れたかったが為に軍の最前方で長く走りすぎた。もともと後方から追ってくるであろう近衛軍に

対する壁を築く為に自軍を龍にみたてて長く展開する事は織り込み済みだったが、想定よりも早期に自軍の隊列ががそれほどまで伸び切っていた事には全く気づいていなかったのは参謀としては大失策であった。

つまり、リーン達はそこまで完全に油断しきっていたと言うことである。

今回の計画は誰も知らない電撃的な大作戦であった。そもそもラクジュ街道に待ち伏せが居るなどとはまったく考えていなかったのだ。

失策と言えば、馬車の客室から御者台に続く窓の鎧戸を不用意に開け放った事も同様であった。狙って射られたものか、偶然飛び込んできた流れ矢かはわからない。おそらくは御者を狙った矢がたまたま逸れたものだろうが、それにしても鎧戸のほぼ正面にイエナ三世を座らせたままにしていた事は万死に値する愚かな行為としか言いようがなかった。

イエナ三世は間一髪助かった。だがそれは、犠牲の下に手に入れたものだ。幸運でもなんでもない。本来であれば失うべき命は一つもないはずであった。

戦って死ねなかったフリストはさぞや無念だろう。それは同じアルヴ族の血が流れるリーンには我が事として痛いほどわかる。

しかしそれでも感謝せずにはいられなかった。よく助けてくれたと。

戴冠式のドレスを着たままのイエナ三世は腰から下をフリストの血で染め上げてはいるものの、無傷なのだ。

リーンは改めて拳をきつく握りしめて唇を噛んだ。

この失策に対する罰は命をもって償おう。だが、今はフリストの、常人ではおよそ不可能な反射神経が救ったシルフィードの、いやファランドールの未来に続く「芽」を守り抜く事こそが第一義。それをただ力の及ぶ限りやり抜くだけなのだ。

当面の作戦が決まった。各(おのおの)が自らの役割を全うする為に動き出した。

ル＝キリアの二人は自分たちが乗ってきた馬を傷ついた馬車馬と交換する作業に入った。

リーンは一人で佇んで泣いているスノウをチラリと見た。彼には作戦が決まった事を国王、すなわちイエナ三世に報告する役目があった。だが、すぐに馬車の中に踏み入れる勇気がなかったのだ。

それを見かねてガルフがリーンに声をかけた。自分がイエナ三世に報告する役目を負うというのである。

だが、それはリーンにとって納得できる申し出ではなかった。本音はイエナ三世にもフリストにも合わせる顔がなく、できるならば逃げ出してしまいたい気持ちでいっぱいだった。だが彼はアルヴである。矜持にかけてそれはできない。ここで逃げては自分の名誉だけでなく、自分を取り立て重用してくれている大叔父、ガルフ・キャンタビレイの顔に泥を塗る事にもなる。

「いえ、これは私の仕事です」

ガルフもそれ以上は何も言わなかった。

スノウから視線を外し、意を決してイエナ三世の嗚咽が収まらない馬車に体を向けたその時であった。後方から思いもしなかった声が聞こえた。

「ボクの大事なスノウを泣かせたのはいったい誰だい？」

忘れもしない、その声。

「公爵！」

「ミリア！」

リーンとスノウが同時に叫んだ。

リーンの後方、森の切れ目のようなその場所に一本だけあった大きなケヤキの根元に、めがねをかけたデュナンが立っていた。特徴的な金色の瞳の持ち主は笑っていた。

リーンが振り向くよりも早く、弾かれたようにスノウがミリア目指して飛び込んでいた。
「フリストが！」
「む？」
顔をくしゃくしゃにしたスノウの尋常ではない様子に、ミリアの顔から微笑が消えた。ミリアが現れた事で感情がこみ上げ、嗚咽で満足に言葉が出ないスノウの頭を、ミリアはそっと撫でた。
「馬車の中か？」
ミリアの言葉に、スノウは泣きながら頷くばかりだった。
ガルフもリーンも言葉が出なかった。忽然と現れるミリア・ペトルウシュカに対する驚きと、ミリアがいったい何をするのか並行的に思考している間に、当のミリアは彼らに目もくれずに馬車の走り込んだ。
その時になってクシャナとイブキもミリアの登場に気づいた。
「大将が来たのか？」
彼らは文字通り風のように飛んできた。
ミリアは扉を開け放つと、膝をついてフリストの胸に手を置いているところだった。
「ミリア様」
それを見たクシャナが走り寄った。
「隊長が……」
クシャナの声はそこで途切れた。
リーンはミリアを見上げるクシャナの顔を見て息をのんだ。今の今まで淡々と作戦計画を聞いていたクシャナの顔が涙で濡れていたのだ。
ミリアはクシャナと、その後ろに立つイブキに顔を向けると黙れというように手を上げた。
「想定外だ」
ミリアは真顔だった。初めてリーンがミリアに会った時に見た、余裕のあるどこか人をなめたような雰囲気はみじんもなかった。

「ここまでひどいと少し時間がかかる。それにたぶんボクは使い物にならなくなると思う」
ミリアの言葉にクシャナとイブキは顔を見合わせた。
「フリストは助けたい。でも、ボクはここで死ぬわけにはいかない」
リーンはミリアが何を言っているのかわからなかった。だが、イブキとクシャナにはそれで伝わっているようであった。
その時、リーンは思い出した。ミリアは言ったではないか「ル＝キリアの小隊を生き返らせた」と。
「死人を……生き返らせるというのか？」
フリストは死んでいる。それは間違いない。おそらく即死に近かったであろうと思われた。脇腹に刺さった矢は一目見て誰でもわかる程深く突き刺さり、おそらく肺と心臓を破っているに違いない。
その「死体」を生き返らせると言うのか？
今ここで？
だから、その疑問が思わず独り言のように口をついた。
だが、誰もその言葉には反応しなかった。

「守れるか？」
ミリアは短く、イブキとクシャナにそう尋ねた。
ほんの少しの間を置いて、合図でもしたかのように二人は同時に答えた。
「絶対に守ります！」
「――わかった。じゃあ、急ごう」
ミリアは二人の言葉を受けて、ようやく普段の微笑を浮かべた。
「アンセルメ少尉」
そして今度はリーンに呼びかけた。
「は、はい？」
「悪いけど、このひどい顔をした小さなアルヴィンのお嬢さんを馬車から追い出してくれないかな。作業の邪魔になるんでね」
ミリアはそう言うと一国の女王を指さした。ほぼ半狂乱といった

感じで泣き続ける女王イエナ三世は、その肩書きさえ知らなければ、なるほどミリアの言葉の通り「ひどい顔をした小さなお嬢さん」という形容どおりだった。

「いや。それは私の仕事でしょうな」

リーンが答える前にガルフが一歩踏み出し、リーンを一瞥した。

何も言わずミリアが場所を空けると、軽やかに馬車に乗り込んだ。

「失礼いたします」

最敬礼を一つ行うとそう一言告げた。

だが、その後はきわめて強引であった。いやがるイエナ三世を有無を言わさず、要するにむりやりにフリストから引きはがすして抱きかかえ、そのまま外に連れ出した。

イエナ三世のドレスを真っ赤に染め上げていたフリストの血がガルフの軍服も同じ色に変えていった。

「ボクの仲間の為にありがとう」

ミリアはそう言って軽く頭を下げた。それはガルフに向けたものかイエナ三世に向けたものなのかはわからなかった。だが一つだけわかった事があった。ミリアはフリストを自分の仲間だと敢えて告げた事である。「部下」ではなく「仲間」と。

ミリアは扉を閉めようとして、止まらない涙をぬぐっているスノウに声をかけた。

「スノウは一緒に来い」

馬車に入れという事である。だが、スノウは頭を振った。

「いいえ。私もみんなと一緒にミリアを守ってここで戦う！」

しかし、そのスノウの申し出は間髪入れずにイブキとクシャナによって拒否された。

「だめだめ！」

「お前は全く役に立たん」

「そうとも。むしろ俺達の足を引っ張るだけだ」

スノウはしかし引き下がらなかった。涙で濡れた赤い顔で二人を

にらみつけ抗議した。
「そんな事は！」
しかし、
「ある！」
全てを言い終わらないうちに異口同音に遮られた。
スノウは皆まで言わせてもらえないばかりか、イブキとクシャナによって無理矢理馬車に押し込まれた。もっともその際に抵抗まではしなかった。
「スノウはボクの近くでボクを守れ。最終防衛線だ」
ミリアはそう言うと優しくスノウの手を取って招き入れた。

「お、お待ちを！」
馬車の扉を閉めようとするミリアに、リーンは声をかけた。
自分が掌握できていない事態がこのまま続く事に焦りを覚えたからではない。すでにリーンは冷静さを取り戻していたのだ。ミリアも手を止めてリーンを見た。
「襲ってきた敵の正体かい？」
ミリアの問いにリーンは頷いた。
「それがわからねば対策が立てられない……いや、対策は必ず立てる。だが情報があればありがたい。それはあなたにとっても有利になるはずだ」
「そうだね」
ミリアは鷹揚に笑ったが、すぐに真顔に戻り、短く敵の名を告げた。
「新教会だ」
「なんだと？」
「ボクも完全にしてやられたよ。新教会はすでにこの国に入り込んでいるってことだね。ルーンを使えれば馬よりも早く指示を伝達できる」
「新教会が？　しかし……」

「ボクには君とこの件についてこれ以上問答をしてる時間はない。君の対策とやらに期待してるよ、女王の軍師殿」
最後の一言は本心からの激励だったのか、はたまたミリア独特の嫌みだったのか。リーンにはわからなかった。だが一つだけはっきりしている事があった。
（この場は私に任されたのだ）
自分の、いや自分の部下を含めた命を任せる……。アルヴ族にとって、それ以上の名誉はなかった。

閉じられた馬車の扉を見つめるリーンの肩を、イブキがポンと叩いた。
「大将が期待しているってさ。指示を頼む」
リーンはイブキの顔を見つめた。その向こうにはクシャナの顔もあった。小さく頷くクシャナを見たリーンは、大きく頷いた。
もとよりイエナ三世は死んでも守り抜く。いや、ここで死んではノッダにたどり着くまで守る事ができなくなる。だから必ずこの場を生き抜く必要がある。
「我が陣営には予想以上の戦力がある。任せておけ」
リーンの言葉に、ル＝キリアの二人は微笑で返した。

「一応聞いておきたいのだが、中では何が行われているのだ？」
イブキとクシャナが手持ちの武器を点検している様子を見て、リーンは好奇心を素直に口にした。
フリストの死で悲壮感を全身で表現していた二人だが、ミリアの登場でわかりやすい程明るい顔に変わった。それが意味するところをはっきりさせたかった。要するにミリアがやろうとしている事が、まだ信じられなかったのだ。
「ペトルウシュカ公爵は本当に死者を生き返らせる事ができるのか？」
「たぶんな」

イブキは簡単にそう答えた。だが、それはリーンが望んでいた答えではなかった。
「何者なのだ？」
質問を変えた。
それは根本的な疑問であった。ただのデュナンではないことはわかっていた。地のフェアリーであることも聞いている。いや、その力の一端はこの目で見た。だが、エッダに居るはずの人間がまるで瞬間移動するように忽然と現れるわけがない。さらに一度死んだ人間を生き返らせる事ができる力など……。
「それが本当なら、公爵はまるで……」
「まるで神だとでも言うのか？」
クシャナの言葉にリーンは口をつぐんだ。まさにそう言おうとしていたのだ。
「神は別にいるらしい。簡単に言えば、あの人はその『神』とやらに対抗する力を持っている人間だ」
リーンは眉をひそめた。
（神がいるだと？）
「別に口止めはされていないが……他言無用で頼む」
クシャナがそう言うと、イブキがそれを制した。
「おい」
しゃべるなと言うのだろう。だが、クシャナは首を横に振った。
「この軍師様がいらぬ事で頭がいっぱいになったら、それこそそんな話どころじゃなくなるだろ？　ここはすっきりしてもらった方がいい。それに」
そこまで言うとクシャナはリーンの肩を軽く拳で叩いた。
「アンセルメ少尉はミリア様が有能だと認めた人材だ。俺達を有効活用してもらう必要もある」
イブキは肩をすくめたが、それ以上は止めなかった。
リーンが見たところ、二人の力関係はクシャナの方がやや上にあるようだった。階級は同じだが、おそらくクシャナの方が年齢が上

なのだろう。もしくはル＝キリア入隊が早いか、である。軍にはル＝キリアのまともな記録などは存在していないからリーンには自分の想像が正しいかまではわからない。だが確信のようなものはあった。

「ミリア様が何者かは一端置いておこう。そのうちわかる事だ。それより死者を生き返らせると言う話だが、正確にはそうじゃない」

「そうじゃない？　だが、現にお前達は……」

「どうしようもなく死んでしまっているものはいくらミリア様でも無理だ。つまりは蘇生の可能性の問題だ」

クシャナの説明は衝撃的だった。

ミリアは相手の体の組成部分に自分の意志を反映できる能力を持っているのだという。具体的には、自分の神経系を他人に同化させて支配下に置く。つまり、開腹などせずとも外科手術ができるというのだ。しかも道具の必要性がない。組織を癒着、つまり傷口を塞いだり止血したりなどは簡単にやってしまえる。

これから先は想像の話だと断った上で、ミリアが馬車の中でフリストに施している施術をクシャナが説明した。ミリアはまずフリストの内臓部分に入り込み、傷口を塞いだ上で、心臓が自ら再び鼓動を打つまで強制的に動かし続けるのだという。

「そんな事が？」

「できるのさ。現に俺達はそれで蘇生した。わかるだろう？　何でもかんでも生き返るというものじゃないんだ」

信じられないような話だったが、もし可能であればなるほど、きわめて高度な外科手術を施しているのだから、可能性がないわけではない。

「しかし……」

リーンはケヤキの根元で横たわるイエナ三世の血に染まったドレスを見つめた。

それだけではどう考えても成功するとは思えなかった。

「血はどうするんだ？　あの失血では……」
そこまで口にして、リーンは自ら理解した。
「まさか？」
「たぶん、正解だ。その『まさか』さ」
リーンはミリアがイブキとクシャナに告げた言葉を覚えていた。
自分の事を施術後は「使い物にならなくなる」と言ったのだ。
最初はその能力を使う事が激しい消耗を伴うものなのだと思っていた。だが、フリストの状態を見てミリアは違う事を覚悟していたのである。
「自分の血を与えると言うのか」
クシャナは頷いた。
「だから、隊長が生き返るかどうかはまだわからない。下手をすると両方助からない可能性もあると言う事だ」
リーンは絶句した。
何をどうやったらそういう能力が使えるのかはわからない。ミリアがそういう存在であると言う事を受け入れるしかない。
だが……。
リーンには新たな疑問が浮かんだ。なぜミリアはそこまでするのか？　今は部下とは言え、話を聞けばそう長い関係ではない。そもそも別の国の兵士である。
「もう一つ聞かせて欲しい」
少し考えて、リーンはクシャナに尋ねた。
「前王、アプサラス三世がお亡くなりになったとは言え、ル＝キリアはシルフィードを捨ててまで、何故ペトルウシュカ公爵の部下になったのだ？　イエナ三世に忠誠を誓うという選択肢もあったはずだ」
リーンの質問にクシャナとイブキは顔を見合わせた。そしてお互いに苦笑を浮かべた。
「そうだな」
クシャナではなくイブキが口を開いた。クシャナは何も言わない。

答えは同じと言う事であろう。
「ミリアの大将の話が面白そうだったって理由じゃどうだ？」
「それはベルクラッセ中佐から聞いた。だが」
「だけど、それだけじゃ納得できない。その程度でル＝キリアともあろう者が主をホイホイ変えるなんて信じられないって事だよな？」
リーンは頷いた。
イブキとクシャナだけではない。フリスト・ベルクラッセと、この場にはいないがもう一人のル＝キリア、シーレン・メイベルもそうだ。全てが自分の意志でミリアに従う事にしたと言う。
「さっきの話だが、洗脳されていると言う事も考えられる」
「なるほど、そう来たか」
イブキは「ははっ」と小さく声に出して笑った。
「そうかもしれないな。ま、それでもいいさ。どっちにしろ関係ない」
「意味がわからん」
「元々俺達ル＝キリアは国王直轄と言うものの、心情的には司令に命を預けてる」
「司令と言うと、ユグセル中将の事だな？」
リーンはアプリリアージェ・ユグセルという名前はもちろん知っていた。だが、その詳しい人となりまではわからない。味方からは「笑う死に神」、敵からは「白面の悪魔」と呼ばれる存在。シルフィードの闇の代名詞のようなル＝キリア。その司令官とは実際はどういう人物なのか？
リーンはフリストが率いるル＝キリアの小隊の四人としか面識はない。だがその短い間にも自分が持っていた既成概念が崩れているのを意識していた。残虐な殺人集団を構成する人間としては、普段の彼らは明るすぎた。
――リーンの言葉にイブキとクシャナは同時に頷いた。
「まあ、アレだ。ミリアの大将はそのユグセル司令に似てるんだよ」

「……」
似ていると言われてもリーンにはわからない。イブキもリーンの顔を見てそれに気づいたのだろう。すぐに補足した。
「危ういんだ」
「え？」
それは意外な一言であった。
「あんたら王国軍が俺達の事をどう思っているかは知ってる。そしておそらくそれは表層的には間違いないだろう。だがな、事実と真実は違う」
「真実は、お前達しかわからないと言いたいのか？」
だが、イブキは大きく頭を振った。
「逆だ。お前達が知っているのが真実。俺達にはただ事実があるだけだ」
クシャナがイブキの言葉をさらに補足した。
「真実など見方によってどうとでもとらえられる結果に過ぎない。そこには都合のいい解釈や思想、あるいは思惑といったものが介入している。だが事実は違う。事実はただそこにある。そこで起こった事が全てだ。俺達は事実だけを作り上げ、お前達はそこに真実を作り上げる。それだけの話だ。まあここでお前と言葉の定義について議論しようとは思わん。要するにル＝キリアの連中は大なり小なり司令の危うさを感じていた。うちの隊長なんかはそれが元で司令にちょっといろいろ思うところがあるようなんだが、だがそんな隊長も含めて、危うさのある司令の元だから働きたいと思っていたのは確かだ」
リーンはアプリリアージェを知らない。だからイブキとクシャナの言葉をすんなり飲み込めはしない。
だが彼らの言葉に虚飾がない事はよくわかった。「司令」という言葉と「ミリア」という名前。彼らがその二つを口にするときに見せるすがすがしい瞳の色が、リーンにとっての事実であった。真実はまだわからない。わからないがわかった事もあった。

「そうか」
リーンはそうつぶやくと改めて馬車の扉を見つめた。

## 第九十一話　事実と真実（後書き）

毎週月曜日更新予定

ＰＣ用ですが、Ｗｅｂサイトもご覧下さい。
まとめ読み用ＰＤＦファイルやイメージイラストなども掲載しています。

ｈｔｔｐ：／／ｅｉｒ－ａｍｙ．ｃｏｍ

# 第九十二話　共通点

クシャナはリーンに声をかけると、手に持った片手剣を放ってよこした。

「その短剣では役に立たん。得意不得意とは関係なく持っておけ。相手の剣を受け止めるにしろ、短剣だけではあっという間に死ぬぞ」

クシャナの言葉はもっともであった。両手剣を使う程の腕前はないが、片手剣ならば訓練は続けている。

「ああ、それから最初に断っとくけどな。悪いが俺達は大将の馬車を守るのに手一杯で、女王様にまで手が回らないかもしれない。それからもう一つ。これは愚痴なんだが……」

イブキ・コラードはそう言うとミリアが現れたケヤキの根元に顔を向けた。

そこにはリーンが敷いた御者用の毛布の上でイエナ三世が横になっていた。気を失っているようであった。それを見守るようにガルフが控えている。

「俺達ル＝キリアは知っての通り強襲専門の部隊だ。言い換えると護衛や防衛要員じゃない。つまり、今の状況はお前が片手剣を使うようなもの……不得意分野だってことだ。わかるな？」

リーンは手渡された剣の重さを確かめるようにそれを軽く振ってみながら頷いた。この状況ではお互いに持っている力、いや特性を生かす戦い方ができないという事はよくわかっていた。

ル＝キリアは攻撃部隊である。短時間に目的を果たし、長居はせずその場を離脱する。それが彼らの持ち味なのだ。拠点を守備するような戦い方を訓練されているわけでもなければ、そもそもそういう特性のフェアリーで構成されていない。

圧倒的な速度。

ル＝キリアの司令官が自らの部隊に求めた最大の特性がそれである。様々な欠点や短所を補い合うような人員構成など一切無視してただ一点の長所を生かす戦い方を目指した部隊である。だからこそ高位の風のフェアリーだけで固めているのだ。

リーンはイブキやクシャナのもつ能力を知らない。唯一フリストが強力な竜巻の使い手である事はあらかじめ知らされていたし、事実つい数時間前に目撃している。大葬の最中に、さもイエナ三世が作り出したかのように適時に竜巻を操って見せたのだから。

あれは打ち合わせ通りではあった。だがからくりを知っているリーンでさえ、イエナ三世が出現させ、そして消し去って見せたようにしか見えなかった。フリスト・ベルックラッセとはそれだけ見事な「使い手」なのだ。

つまり同じル＝キリアの構成員であるイブキやクシャナも驚くべき力を持っている事は間違いないと思われた。だが竜巻もそうだが、破壊には最適でも拠点の守備には使えない、あるいは使いにくいものである可能性がある。竜巻などは遠方の敵には効果があるが陣の近くで使われてはたまったものではない。

「だが、もちろん戦術は任せる。俺達は武器で、言ってみれば道具だ。道具の使い方を考えるのはお前の仕事だ」

クシャナがそう言った時である。複数の馬が駆ける音が耳に届いた。

二人が同時に音の方角へ顔を向けると、スズメバチの旗を掲げた騎馬の一団がこちらに向かって走っているところだった。

「状況が変わったな。どうする？　そっちは陛下を連れて先に進むか？　さっきも言ったとおり、戦術はお前に任せている。つまりその判断もありだ」

向かってくる部隊を見たイブキの問いかけに、リーンは首を振った。

「態勢を整えないまま先に進むのは愚か者のやる事だ。それに、公爵とベルクラッセ少尉が乗る馬車をここに置き去りにしたなどと陛下に報告するだけの勇気は私にはない」
リーンのその言葉を聞いたイブキは、拳の甲を向けて、そのままリーンの胸にコツンと当てた。
「女王陛下の軍師にあるまじき発言だな」
そういうイブキの表情は穏やかだった。
「馬鹿を言え。目的の為なら私は情などかけん。老体とは言え、我らには相当な力を持つ炎のフェアリーもいる。あの道具は防御にも使える。私はお前達はもちろん、あの方も最大限利用するつもりだ。陛下をお守りする為にな」
リーンがそう言って顔を向ける先、そこにはガルフの姿があった。もちろんリーンの言葉が届く場所にいる。聞かせるつもりで言ったのだろう。
「存分にやれ。ノッダにつくまでの作戦総司令はお前だ。儂の能力を利用せぬなどとほざくなら、今ここで丸焼きにしてやるわ。簡単に言えば『久しぶりに腕が鳴る』だ」
ガルフの太い声が響く。イブキは苦笑したが、リーンは辛辣な言葉を上官に投げた。
「大元帥閣下。この場の総司令官は私です。それも含めて、私が考える事。要らぬ口出しは無用で願います」
「うぬ……」
ガルフは苦虫を噛み潰したような顔を見せたが、すぐに満面の笑みを浮かべた。
そんなやりとりをしているうちに、ようやく親衛隊の一隊が到着した。
彼らはその場の状況を見て、いったいどういう状態にあるのかを把握しかねていた。
道ばたで横たわる御者役の兵が二人。珍しく片手剣を携えたリー

ン。その後ろにいるのは作戦開始時に「大元帥の客人」とだけ紹介された身元不明のアルヴの戦士が二人。

馬車は道の端に止められていて扉はふさがっている。その反対側には大きなケヤキの木があり、彼らが護衛するべき主（あるじ）であるガルフ・キャンタビレイ大元帥が仁王立ちで自分たちをにらんでいる。

だが、その様子が少々様子がおかしい。軍服が黒っぽく汚れている。いや……赤黒い。

その汚れの原因を想像するのと、ケヤキの根元で横たわるイエナ三世を見つけるのが同時だった。

シルフィード王国の女王は、大葬の時のままの緑から青に変化する色合いのあのドレスを着て木の根元に横たわっている。そしてその服は胸の下がほとんど赤黒く染まっていた。その状況は当然の誤解を親衛隊に与えた。

「こ、これは？」

一瞬の間の後、一人が声を絞り出した。視線と視界の動きの間に認識した情報が出させた声だった。

「騒ぐな。陛下はかすり傷一つない。眠っておられるだけだ。ワシも同様だ」

「しかし、その血は？」

「一人の勇敢な戦士が自らの命を賭して陛下をお守りした。それだけの話だ。馬車の中でその者の治療をしておる」

「それより戦況は？」

リーンは敵が誰かは聞かなかった。それにこちらの状況説明をするより、後方の状況把握がしたかったのだ。

親衛隊の隊長格の男はリーンの険しい表情を見て我に返ると、本来の目的を果たすべく即座に頭を切り換えた。

「残念ながら味方は総崩れ状態です。相手はどうやらルーナー、それも相当の使い手を複数。正確な数はわかりませんが十人は軽く超えるエクセラーを擁している部隊のようで、我が軍は遠隔の、それも広い範囲の攻撃を受け続け、部隊は完全に分断されています」

こういう事態に陥った場合、あらかじめ親衛隊には、戦闘には参加せず情報の収集を優先するようにリーンが指示を出していた。
まさかそれがすぐに役に立つとは誰しも思わなかった。むしろそんな準備など的外れなものであった方が良かったのだ。
だが、結果としてリーンの用心深さが功を奏し、窮地に陥る事で彼の評価がまた上がる事になったのだ。だが自分自身がその用心深さを無くすという失策をした事を嫌と言うほど後悔しているリーンにとって、その評価は皮肉にしかならないに違いない。

とりあえず、状況は予想以上に悪かった。
相手はもともと部隊の分断が目的のようで、先頭地点を挟んで、リーン達先頭部分の戦力は全体の十分の一にも満たない状況であった。
本来ならば大軍隊の中に飛び込むなど自殺行為と言える。
だが、彼らは地の利を使っていた。道がもっとも狭くなり、左右から回り込む事が不可能な場所に罠を仕掛けていたのだ。
部隊同士が直接ぶつかる部分は狭い。最前線の兵がある程度踏ん張れば、中にいるルーナーが遠隔攻撃を仕掛け、逃げ場のないノッダ軍を徐々に殲滅して行けばいいだけである。
しかも聞けば分断地点のエッダ方面にはルーンによる強固な岩の壁が築かれ、味方はそもそも相手にほとんど手出しができないままエクセラー達による遠隔攻撃を受け続け、撤退を余儀なくされているのだという。
「それで居てノッダ方面には岩の壁を作らず、我が軍と交戦をしつつゆっくりと後退、つまり敵はこちらに向かっています」
つまり後方へ壁をつくり、こちら側を追い詰めようという作戦という訳である。
その話を聞いたリーンはミリアと初めて出会った時の事を思い出していた。街道上に突如現れた強固な岩の壁。それにより部隊は足止めを食らった。

おそらく敵も似たような壁を作り、味方部隊の前進を阻んでいるのであろう。物量に優れる自軍とは言え、あのような壁を幾重にも張られたら撤去には時間がかかる。しかも話を聞けば近づくとルーンで攻撃される為、攻撃ルーンの射程外でにらみ合いの状態だという。

こうなると、このまま先に進まずここで留まっていたのは正解であったと言わざるを得ない。分断して弱体化した部隊を待ち伏せる罠があるはずである。前方から敵が現れないのは文字通りの「罠」が仕掛けられているからであろう。すなわちそこには精霊陣が敷かれており、一行がその場所に来るのを待っているに違いなかった。

だが、そうは言ってもここにいつまでも留まるわけにもいかない。ノッダ軍を分断した敵は、おそらくこちらを追ってくるであろう。壁の維持にはそれほどのルーナーは必要ない。数人を残し、本隊は移動を始めるはずである。少なくともリーンならばそうするはずだった。

親衛隊の隊長から一通りの状況報告が終わると、ガルフやイブキ達の視線がリーンに集まった。

リーンはそれを受けてチラリと馬車を見た。だがあれから全く変化がなかった。

事が終わればあの扉が開くはずである。あとどのくらい時間がかかるのかはわからない。わかっているのは状況がどうあれ、現時点でここを動けないという事だけであった。

「お客人」

近衛軍の手前、イブキとクシャナの名を呼びかける事をリーンは避けた。

「何でしょう？」

委細承知と言う顔で、丁寧な礼をしてクシャナが答える。

「先ほどの伺ったお話では、あなた方は守るより攻める方が性に合

っていると伺いましたが、私の聞き間違いではございませんな？」
リーンの言葉に、イブキはニヤリと笑てうなずいた。その一言でリーンの作戦の概略がわかったのだ。クシャナも同様にうなずいて見せた。
「我らとの雑談を覚えておいでとは、光栄の至りでございます」
リーンはそれを聞くと膝をついてイブキとクシャナに一礼した。
「御両名が我が軍に同盟していただけるとは。これを幸運と言わずに何を幸運と言えましょうか」
「あなた方と私達は戴く主（あるじ）は違えど、ここでアルヴの王、イエナ三世のお力になれるのは我らが本懐。顔をお上げください、軍師殿。そして我らにご指示を」
その芝居がかったやりとりは、もちろん親衛隊に向けた一つの「型」であった。外国からの客人とはいえ、自分たち親衛隊を差し置いてガルフや女王の側に居る事に対し、少なからず疑問や不満もあるはずである。もちろん親衛隊ほどの結束力のある部隊の人間でそれを口にする者は皆無であろう。しかし心の中はごまかせない。リーンはその心を利用して、それを団結力に転化させようとしたのである。
なぜなら「客人」はこれからシルフィード王国の為に最前線に向かうのだ。
「あなた方はすぐに引き返し、最前線で相手方ルーナーの殲滅をお願いしたい。やり方はお任せしますが、できれば敵軍の将は口がきける状態で確保していただきたい」
「最善を尽くします」
「お任せを」
ルーナーが居るとはじめからわかっていれば、それなりに戦いようがある。しかもこちらから仕掛けるのだ。それはル＝キリアにとってはいつもの戦いであった。
クシャナとイブキがリーンに深々と一礼すると、親衛隊の一人が、部隊の騎馬から元気のある二頭を選び、その手綱を彼らに渡した。

馬を連れてきた親衛隊の兵士は、手綱を受け取ったル＝キリアの二人に大きく頷いて見せた。イブキとクシャナも敬礼でそれを受ける。リーンはそれを見て芝居の効果を確信した。

リーンは親衛隊を見渡すと一人の兵に声をかけた。そしてイブキ達の前に招き、そのまま彼らに紹介した。

「この者を大元帥閣下の勅令を伝える伝令としてお連れください。前線のベーレント准将にはこの者が話を通します」

こちら側に残った部隊がどの程度の人数なのかはわからないが、女王のすぐ後ろに位置していたのは女丈夫、ヘルルーガ・ベーレント准将のはずであった。中央広場でサミュエル・ミドオーバに挨拶をした将軍の一人で、ガルフ・キャンタビレイがもっとも信頼する部下の一人でもある。運良く部隊が分断されていなければ、敵の接近を阻むべく奮闘しているはずであった。

「途中には、まだ罠や精霊陣が存在する可能性もある。お気を付けて」

リーンから親衛隊のスズメバチの旗章を渡された三人は、リーンに一礼を、そしてガルフに最敬礼をすると、すぐに出発した。

走り出してすぐにイブキがクシャナの横に来て声をかけた。

「おい」

「なんだ？」

「ベーレント准将の名前を聞いた時、お前、いやな顔をしてなかったか？」

「あれは不覚だった。お前に感づかれるくらいだ。アンセルメ司令官殿には間違いなく悟られていただろうな」

「ひょっとして？」

「ああ」

クシャナ・シリットがル＝キリアに配属される前にいた部隊。それを率いていたのがヘルルーガ・ベーレントであった。

「なんだお前、あのおばさんに面が割れてるのか。准将様と面識が

あるとはお前も隅に置けんな」
「これはお前の為を思って言うんだが、おばさんなどと准将の前で言って見ろ」
「どうなるんだ？」
「わからん……」
「なんだそりゃ？」
「その言葉を口にしたヤツの姿を、その後一度も見かけた事がないんだ……」
「うは……」
「興味が出てきた。お前、試しに言って見ろ。そしてその後どうなったか教えてくれ」
「――いやあ、しっかし、いつ見てもベーレント閣下は美人だよな。何というかこう華があるな、うん。アルヴにしちゃ笑顔が可愛いし、可憐な少女の微笑みと言ってもあながち……」
「お前はベーレント准将が少女のように笑っているのを見た事があるのか？」
「お前は？」
「高笑いと嘲笑なら……」
「……そいつは可憐な少女なこって」
「思い出すと今でも背筋が凍る。その点、少女のような微笑なら、我らには可憐なユグセル司令がいるじゃないか」
「ある意味、ベーレント准将の高笑いの方がわかりやすくていいかもしれんがな」
「どうした？　司令に会いたくなったか？」
クシャナのからかいに、しかしイブキの眉間に皺が寄った。
「俺が会いたいのはフリストだ」
「今は言うな。きっと大丈夫だ」
「そうだな。すまん。とりあえず今は准将についての助言に感謝しておく」
「うむ」

クシャナのその助言は想定よりも早く役立つ事になった。
彼らはすぐにヘルルーガの部隊に合流できたのだ。
正確に言うならば、こちらに向かうベーレント遂と出くわしたと言うべきだろう。
ヘルルーガの旗章……イチョウの葉をかたどった文様が染め抜かれた旗に気づいたイブキ達は馬を止め、部隊が近づくのを待つ事にした。対するヘルルーガの部隊もスズメバチの旗章に気づき、少し離れたところで止まった。
そのヘルルーガの部隊を観察していたイブキがクシャナに声をかけた。
「おい」
「うむ」
クシャナもイブキと同じ事を考えていた。
部隊の兵の数が少なすぎるのだ。
本来ベーレント准将が率いているのは、二千人の騎馬という話だった。
だが、イブキ達の目の前にいる騎馬は、わずか数十。おそらく百には満たないだろう。
やがて一騎がこちらに進んできた。
「俺が行こう」
それを見たクシャナはイブキにそう言うと、伝令役の親衛隊の兵士とともに馬を走らせた。交渉ごとはクシャナの方がイブキよりも得意なのであろう。
「キャンタビレイ閣下のご様子はどうだ?」
ヘルルーガの部隊からやってきた騎馬がそう言う。
「陛下共々ご無事だ。親衛隊が合流し、ベーレント准将をお待ちしている」
親衛隊の伝令役の兵士がそう答えた。

「それは何よりだ」
「准将にお会いできるか？」
クシャナはそう言うとヘルルーガの部隊に視線を向けた。中央最前列の白い馬に、ヘルルーガの姿を認めた。
「貴様は？」
明らかに親衛隊ではない兵服のクシャナをいぶかしげに見た兵士に、親衛隊はクシャナとイブキがキャンタビレイ大元帥の客人で、要請に応じて合力の為にやってきた事を告げた。
ヘルルーガ側の兵はうなずくと、クシャナの問いかけに答える形で、手に持った旗章を高く掲げた。後方への合図であろう。すぐに全ての騎馬がこちらに向かってやってきた。クシャナもそれに習い、イブキへの合図とした。
イブキは駆け足でクシャナの元に集うとすぐに馬を下りた。クシャナはすでに降りてヘルルーガ部隊の到着を待っていた。
「幕僚長からの作戦連絡です」
最敬礼をした親衛隊の兵は、そう言うとリーンの作戦についてヘルルーガに説明を始めた。だが、半分程聞いたところでそれを遮った。
「趣旨はわかった。だがこの戦力では……」
ヘルルーガはそう言うと忌々しそうなため息をついた。
「我が方の残存勢力はこれで全てですか」
不躾に言葉を挟んできたクシャナに、ヘルルーガは冷ややかな視線を向けた。
その言葉は肝心の作戦の核心に触れる前に伝令の言葉を遮ったヘルルーガに対する、クシャナのちょっとした嫌みのつもりだったのだ。同時に自分に注意を向けさせる作戦でもあった。
案の定、クシャナの顔をにらみつけていたヘルルーガの表情が、すぐに驚きに変わった。
「貴様、もしや……」

だが、クシャナはヘルルーガに皆まで言わせなかった。幼稚な意趣返しだと自覚していたが、そもそもその件についてクシャナはヘルルーガと言葉を交わすつもりはなかったのだ。

「私とこのイブキは、他国よりキャンタビレイ大元帥閣下の元へ参った客人でございます。お間違いなきよう」

少しの間、その場を沈黙が支配した。ヘルルーガはしばらくクシャナとイブキの姿を睨み付けるように眺めていたが、やがて「フンッ」と小さく鼻を鳴らしただけで、それ以上彼らの正体については言及しなかった。

それを見て、クシャナは口を開いた。

「我らは幕僚長から作戦を銘じられております。もちろんベーレント准将にご協力を仰げ、と釘を刺されておりますが……」

ヘルルーガはクシャナの言葉にため息を一つついた。

「リーンのヒョウロク玉が作戦だと？　まあいい。聞こう」

クシャナは親衛隊の伝令をちらりとみた。伝令はうなずく。それを受けてクシャナは会積まんで作戦の内容をヘルルーガに告げた。

「なんだと？」

案の定、ヘルルーガ気色ばんだ。

「お前達は本気であのとんでもない連中に二人だけで立ち向かうつもりか？」

そう言うとヘルルーガは長い髪を翻すようにして後方に顔を向けた。

「ルーナーが複数居るのは間違いない。それも軽く十人を超える数だ。間断なく攻撃ルーンが飛んでくる。時間差で詠唱しているのだろう。まったく豪勢な事だ」

「我が主（あるじ）によれば相手は『僧正』であろう、と」

クシャナがそう言うと、ヘルルーガは忌々しそうに舌打ちをした。

「賢者と同等の力を持つと言われるあの『僧正』か？　それが本当であれば我が軍がまともに立ち向かってもかなわぬ事も納得できるが……いや、その前に、お前達の主とは誰だ？」

クシャナは深々と頭をたれた。
「訳あって名を明かす事はかないませんが、王国軍を異様な方法で移送した者、その能力を持つ者とだけ申し上げておきます」
ヘルルーガは目を細めるといぶかしげにクシャナを見下ろした。
「あの気持ちの悪い移送を行ったのがお前の主だと言うのか。とある協力者で、能力の高い地のフェアリーとは聞いていたが……ふむ。そう言えばお前は先ほど己を外国からの客と言ったな？」
「閣下のお察しの通りです。我らが主はシルフィード王国の人間ではありません」
「そうか……」
ヘルルーガは高ぶりかけていた声の調子を落とすと、腕を組んでほんの少しの間思案をした。もちろんじっくり考えている時間などあろうはずもない事はヘルルーガとて重々承知である。その上で、大きな判断をしなければならない事に迷いがあるのも仕方のない事であった。ヘルルーガは准将という立場ではあるが、反骨精神の塊のような性格である。例え作成総司令官であると言われても、己が納得しない内容であれば、例え大元帥の勅令であっても盲目的に従う事はしない人間であった。
わずか一分ほどであったが、目を閉じて熟考していたヘルルーガが口を開いた。
「わかった。作戦を実行しよう。大元帥が許容し、女王陛下のお心をも動かした人間が、まさか敵国の密偵とも思えんし、ここは信頼しておこう。まあ、そっちの方は後でアンセルメ少尉の首を絞めてでも聞き出すがな」
「お手柔らかに」
そう言って苦笑するクシャナに、ヘルルーガは一転して穏やかな声で告げた。
「格好のいい事を言って突っ張ってはいるが、我らは見ての通り敗軍だ。多くのかけがえのない兵を失った私は万死に値する。このままおめおめと陛下の前に出るわけにもいかん。お前達があの僧正部

隊を何とかできると言うのであれば、いや、何とか出来る可能性があるのなら、私は協力を惜しまん」

そこまで言うと、ヘルルーガは言葉を切り、今度はイブキに向かって声をかけた。

「貴様はこの者と同じ『例の部隊』にいた者か？」

「はい、閣下」

「ではその力については私が疑う事もあるまいな」

「この後で論より証拠ってヤツをお見せしますよ」

「よく言った」

ヘルルーガはそれだけ言うと改めてクシャナに告げた。

「我らはここに留まり、後方からの援護に回る」

「閣下と共に戦える事を誇りに思います」

「ふん」

ヘルルーガは回頭すると、残存する兵達に向かって大きな声で呼びかけた。

「聞け、誇り高きシルフィード王国の強者達よ」

迎えに来たと思しきスズメバチの旗章を掲げる親衛隊の男と准将が何やら話し込んでいるのを見て、王国軍の残存兵達にはそろそろ不安が広がりつつあった。ヘルルーガの一言はそんな彼らの背を正した。

「喜べ、我らがイエナ三世国王陛下はご無事だ」

おおっと歓声が上がる。

「だが安心はできない。私は今、陛下をお守りしているキャンタビレイ大元帥より、正体不明の強力な敵に対抗しうる、一つの策をいただいた」

歓声はすぐに沈黙に変わった。誰しもこれで安心などとは思っていなかった。こんなに短時間に数百人以上の兵を失う戦いを彼らは知らなかったのだ。相手が強大な事は間違いない。自分たちが戦ったからこそそれがわかる。ヘルルーガは暗に「このままでは危ない」

と言っているのである。
　敗走しているとは言え、シルフィード王国軍の兵である。ヘルルーガの撤退命令が出なければ、たとえ最後の一人になろうと、敵がどれほど強力であろうと、その手に握った剣を捨てて敵に背を見せる事などあり得なかったであろう。
　撤退命令が出た際も、安堵を持ってそれを聞いた者は一人もいない。
　一度目の命令には誰一人従わなかった。
　それを見たヘルルーガの、精一杯の怒気が込められた「退かねば私がおまえらのその首を叩き切るぞ！」という二度目の命令を耳にして、ようやく無念の撤退を始めたような戦士達なのだ。
　つまりヘルルーガのその一言に対し、弱気になる者は一人もいなかった。何より自分たちが守るべき女王イエナ三世が無事だという知らせが、疲労困憊であるはずの彼らに新たな活力を与えていた。

「作戦を発表する」
　ヘルルーガのその一声で場は静寂に包まれた。
「ここに二人の戦士がいる。この者達は女王陛下の信頼厚い、高位の力を持つ風のフェアリーである。これより彼らは能力の限りを尽くし、敵のルーナーを打つ。我ら部隊は敵ルーナーの放つ攻撃ルーンの射程外の距離を保ちつつ、敵部隊を弓で攻撃、彼らの強襲の援護をする」
　ヘルルーガの説明をそこまで聞いた時点で、イブキとクシャナは馬を走らせた。細かく打ち合わせたわけではない。しかし、ヘルルーガが自らの役目を示した事で、彼らは彼らの仕事を果たすべく、駆けだしたのである。
　二人の背中を見送った後、ヘルルーガは細かい作戦指示を行うと、自らも長弓を手にした。
「今こそ我らの戦いだ！　シルフィード王国軍の誇りにかけて女王

陛下の盾とならん！」
「おおっ！」
ヘルルーガのかけ声に遅れること無く、生き残った精鋭達の怒号が響いた。

「落ち着け、リーン」
ケヤキの根元に横たわるイエナ三世の側に立つガルフは、部下にそう声をかけた。
「言われずともそれが正しい事など、私にもわかっております」
いつになくトゲのある言葉を直接的に投げつけてきたリーンに、アルヴの老将は目を細めた。
「しかし拒否します」
リーンの言葉の真意をはかりかねたガルフは、視線をイエナ三世に戻すと普段よりもゆっくりとした口調で語りかけた。
「ワシの火力を侮るな。こう見えてもルーンの射程に入る前に大きな火炎の掃射がまだ数回はできる。戦力としてあてにしろ」
リーンはその言葉を聞くとわざとらしくため息をついた。
「失礼ながら、そんなものはすでに想定済みです。さらに言えば強化ルーンがかかった敵には落ちぶれた線香花火など、ほとんど無力であろう事も織り込み済みです」
「ほう。このワシの炎はあまり戦力にならぬと言うのか？」
「『あまり』ではありません。この戦いでは閣下はおそらく『戦力外』です」
「なんと。言い換えるなら『役立たず』と言う事か？」
「言い換える必要を認めませんな。しかしその通りです。彼らを前に閣下の火力などろうそくの火の役にもたちますまい」
ガルフは苦笑いした。
「いつも以上に手厳しいな」
ガルフとて本心はリーンと同意見であった。リーンが落ち着かな

い様子なのも十分理解していた。だが、それにおぼれさせてはならないと思い、リーンと会話をすることを目的に口を開いたに過ぎなかった。

「ではお前とワシは剣で立ち向かうか？」

リーンはしかし大きく首を横に振った。

「たとえベーレント准将の部隊が加わったとしても、私は敵と戦うつもりはありません」

「ほう。シルフィード王国の軍人が敵を前に戦わぬと申すか？」

「のんきに戦っている暇などありません」

リーンには一つの作戦があった。

だがそれを実行に移す為には、是非ともミリアの力が必要だったのだ。ミリアがリーンの頼みを聞いてくれる保証はない。しかしリーンはミリアという人間を彼なりにとらえており、受け入れてもらえるという確信のようなものがあった。

だから、ガルフが釘を刺しても動じなかった。

「ペトルウシュカ公爵のお力で、陛下を直接ノッダに移送しようとしても無駄だぞ」

「もとより承知しております」

リーンが落ち着かないのは、ミリア達が馬車からいっこうに姿を現さない事であった。馬車の扉を見ながら行ったり来たりしている訳であるから、ガルフもリーンがミリアを待っている事はわかっていた。

同時にミリアに対してイエナ三世の移送を頼んでも無駄であろうという事も。

ミリアは一から十までは彼らに手を貸そうとはしなかった。

ミリアの移動能力を使えば、大葬で遷都宣言をした後、ラクジュ街道を馬で走らせるのではなく「力」を使って直接ノッダに移動させてしまえる。

今回の作戦を立てる際、リーンがなぜそうしないのかをミリアに尋ねた事がある。その時ミリアはこう言ったのだ。

「シルフィード王国は、一人の人間の力に頼り切って国を成り立たせたいのかい？」　と。

ミリアは彼らの手助けはする。

最大の手助けは、大軍隊を移送した事である。

次にイエナ三世がエレメンタルである事を各国の来賓だけでなくサミュエル・ミドオーバ近衛軍大元帥に印象づける為、部下のフリストが持つ竜巻の力を提供した。

だが直接イエナ三世をエッダからノッダへ運ぶ事はしなかった。

そもそもイエナ三世の身柄を確保するだけならば、ミリアはいつでもできたのだ。ミリアの力があれば、イエナ三世の自室にいつでも入り、そのまま安全に連れ出して、ノッダに連れて行けばいいだけである。

だが、ミリア・ペトルウシュカはそれをしなかった。

ガルフはミリアのもう一つの言葉を思い出していた。

「ボクがその気になれば、そうだね。小一時間もかからず、この場所にサミュエル・ミドオーバ大元帥の首をぶら下げて戻ってくる事もできる」

それが大言壮語でない事は今ならわかる。だがミリアはこう続けた。

「でも、ボクがそれをやってもファランドールは何も変わらない」

シルフィードではなく、ファランドールとミリアは言った。

ガルフはその言葉に思わず問いかけずにはいられなかった。

「あなたはファランドールを変えたいのですか？」

ミリアはしかし、首を横に振ったのだ。

「それはボクの役目じゃない。ボク以外の、変えるべき人が変えるのさ」

ガルフにはミリアの行動原理は理解できなかった。この世界の成り立ちを知り、深い知識と洞察力を持っているばかりか、彼のフェ

アリーの能力は世界を短期間で変えるには最適なものだと思われた。
だが、イエナ三世をエッダから救出する手助けはしても、それ以上はガルフ達の仕事だとミリアは言ったのだ。
「その後は、シルフィード王国が決める事だ。ボクじゃない」
ミリアは宝箱の鍵の場所を教えるだけなのだ。自分で宝箱を開けようとはしない。もちろん宝を手にする事もない。そして鍵のある場所への案内すらもしないのだ。
だからたとえ窮地に陥ったとしても、ここからイエナ三世をノッダに移送する事はないだろうとガルフは考えていた。そしてそこまではリーンも同じ考えなのだと言う。
ではリーンの思惑は何なのか？
ミリアの力を借りようとしている事は確かだ。だがガルフの考えでは断られる公算の方が大きい。
しかし、落ち着かない様子こそ見せてはいるが、リーンの言葉には自信のようなものが込められている。
現時点ではガルフにはリーンの考えが読めなかった。リーンの作戦が荒唐無稽なものでないとすると、すでにリーンはガルフを超えた戦術家である事が確定する。
それはガルフにとっては何ものにも変えられぬ喜びであった。
そもそもリーンが荒唐無稽な作戦を立てる訳がない事を知っているのはガルフである。つまり、有効と思われる作戦が立てられなかったこの時点ですでにリーンは彼の手を離れていた。イエナ三世の知恵袋の一つとして、この先自分自身より役に立つことだろう。
窮地の中でガルフは少しうれしい気分になっている自分に驚いていた。

リーンとガルフの会話が途切れて少したった頃だった。
二人が待ちわびていた事が起きた。馬車の扉がゆっくりと開いたのだ。
二人が固唾をのんで見守る中、小柄なダーク・アルヴが大柄なス

ノウに支えられて降りてきた。
その光景を目の当たりにしたリーンは絶句した。
（本当に……ベルクラッセ中尉は生き返ったと言うのか？）
とは言え、目の前の光景を見れば、もはや疑問の余地はなかった。
土気色で全く生気がないとは言え、確かにフリスト・ベルクラッセは自らの足を地に着け、浅いながら呼吸をしていたのだ。
「状況……説明を」
フリストは苦しそうな声でリーンにそう声をかけた。足を地につけているとは言え、自力では立てないようで、体重のほとんどをスノウに預けていた。
スノウは涙でぐしょぐしょにしてずいぶんひどい顔だった。焦点の定まらないぼんやりとした顔でいる事が多いその少女が、ここまで感情を表に出している事が新鮮でもあった。それだけフリストに対する情が深いのであろう。
「時間がない。急げ少尉」
フリストに促され、リーンは我に返った。

「そうか……」
一通りの説明が終わると、フリストは少し離れたところで待機している親衛隊を見回し、一番体格がいい兵を指さした。
「あの兵と馬を借りたい」
「その体でいったい何をするつもりですか？」
「敵の部隊を押さえる」
「え？　いや、それは」
「少尉とここで言い争っている時間はない。訳は全部あとだ。私が出立したらイエナ三世を率いてベーレント准将と合流せよ」
フリストは苦しそうにそれだけ言うと、リーンの返事は聞かず、スノウに指示して横たわるイエナ三世の側にむかった。

「陛下」

声をかけても目を覚ます様子が無いのを見ると、フリストはためらわずにイエナ三世の頬を叩いた。
二、三度頬を叩くと、イエナ三世はうっすらと目を開けた。
「え？」
目の前にフリストがいるのを見て、イエナ三世は飛び起きた。
「フリスト！」
抱きつこうとするイエナ三世を制すると、フリストは膝をついて頭を垂れた。
「ご無事で何よりです」
「フリスト。傷は？　すごい血……大丈夫なの？」
「おかげさまで。ですが陛下。長話をしている時間はありません。私は一仕事ございますので、いったんおいとまします。あとはアンセルメ少尉の指示に従って下さい」
「え？　でも、フリスト？」
「では、後ほど」
ふらふらと立ち上がろうとするフリストをスノウが支えようとしたが、そこへスノウよりも二回り大きな手が差しのべられた。
フリストが指名した親衛隊の兵士だった。
「ご指示を」
フリストはうなずいた。
「最初の指示だ。こんな状態ですまんが、私をベーレント准将のところへ運んでくれ」
「承知いたしました」

短いやりとりのあと、フリストは大柄なアルヴの兵に軽々と抱きかかえられ、馬上の人となった。
イエナ三世は何も言えずにその様子を見ていたが、馬が走り出す際にチラリと振り返ったフリストの顔を見ると、思わず立ち上がり、追いすがるように手を伸ばした。
フリストの顔色は悪かった。だが、そこには穏やかな……優しい

笑顔があったのだ。
だがその顔はあまりにはかなげで、イエナ三世は思わず胸を押さえた。

## 第九十二話　共通点（後書き）

毎週月曜日更新予定

ＰＣ用ですが、Ｗｅｂサイトもご覧下さい。
まとめ読み用ＰＤＦファイルやイメージイラストなども掲載しています。

ｈｔｔｐ：／／ｅｉｒ－ａｍｙ．ｃｏｍ

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2757o/

合わせ月の夜

2011年10月10日03時14分発行